24時間戦う人たち

竹内すくね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２４時間戦う人たち

【Ｎコード】
Ｎ０６８０Ｄ

【作者名】
竹内すくね

【あらすじ】
今や世界中に、何処にでもあって当然のコンビニエンスストア。そのコンビニで働く人たち（主に女の子）が、地球に突如現れた『ソレ』と呼ばれる災厄と２４時間戦う羽目になってしまった後のお話。――美食。暴食。悪食。三つ首の竜。悪の根源、その眷属。不死者、再び。郷里を焼かれ、家族を食われ、豚と蔑まれ、餌と見下されながらも、破滅主義だった彼女の世界は終わらない。ザッハーク編、第三話更新――

箱

その中には気が遠くなるほどの絶望が詰まっていた。
絶望はやがて世界中を埋め尽くす。
病、飢饉、異常気象、戦争、感情の爆発、人間が思いつく限りのマイナスイメージは全てその小さな箱の中に入っていた。
今、この地球上に生きている人間には想像がつかないであろう。
人類が長い歴史を経て、それなりに機能している平和の名の下に生活している世界には、未だ絶望が溢れている事に。
絶望が、溢れていた事に。
しかし人間は、人間は悲しんではいけない、諦めてもいけない、喜んでもいけない、足掻いてもいけない、何もしてはいけない。何も考えずに苦しめばいい。
誰が開けたのかその箱を。誰が創ったのかその箱を。
人間は、遠い昔の神様の怒りを今も受け続けている。これからもずっと受け続ける。
しかし人間は、人間は悲しんではいけない、諦めてもいけない、喜んでもいけない、足掻いてもいけない、何もしてはいけない。
ただ待つ事しか出来ない。最後に残った箱の中身を待つ事しか出来ない。

「パンドラの箱」

人類にとっての悪意と絶望を吐き出した箱。
最後には希望が残っていると言われる箱。
世界には、最後の希望が残っている。
ならば待とう、最後の希望を。

「それじゃ、最後に。君は何故ウチにアルバイトしようと思ったのか、聞かせてくれ」

そう言って、目付きの悪い女は煙草に火を点ける。煙を吐き出すと意見を促すように男を見た。

「はい、僕はつい最近まで、えっと……別のコンビニでバイトしていたので、こちらの採用資格にも合ってると思いましたし……あー。……そんなところです」

男、というより少年と言ったほうが正しいだろうか。体もあまり大きくはなく、大抵の人はその少年から頼りない印象を受けるだろう。

茶色の癖毛を頭で掻きながら、少年はぎこちなく答えた。

「緊張しなくていいよ、履歴書にはもう目を通させてもらったし。ま、ウチの現状だと採用は決まったようなものですからね」

黒のスーツを着た細身の男が、少年へ優しそうに話掛ける。眼鏡を中指で押し上げてから男が女に、そうですよね、と同意を求める。

「堀。余計な事言うな、ソイツ調子に乗るぞ」

女が煙草を乱暴に灰皿へと押し付ける。苛々した様子で、男を椅子に座ったままで睨む。

すいません、と軽く謝る優男。居心地が悪そうに少年が尋ねる。

「あの、どういうことでしょうか？」

「ああ、ウチの現状の事？　頗る悪いよ」

にこやかに、堀と呼ばれた男が答えた。少年の履歴書に目を通しながら堀は続ける。

「二日前に一般の子が二人、勤務外が一人辞めちゃったからね、人手不足なんだよ」

「もう一人一般がいたろ。死んだけど」

女が話に割り込む。ああ、と堀がわざとらしく返事をする。

「え？　お亡くなりになったんですか？」
少年が恐る恐ると言った感じで堀に聞く。どうもこの店長は、面接が始まる前から不機嫌で話し辛いなあ、と少年は思っていた。
「ああ。勤務外の仕事を覗きに行ったらしくてな、巻き込まれて死にやがった。家族が居なかったのがラッキーだな、面倒な手続きとかしなくて助かる」
「ルーキーを脅かさないでくださいよ、店長」
分かってる、と手をひらひら振って、女は偉そうに煙草に火を点ける。
煙を天井に向かって吐くと、店長と呼ばれた女は少年を見た。
「君の採用は確定と思ってもらっていい。で、だ。一応、希望は一般になってるんだが、君、使えるのか？」
――使える。
まるで人間を道具とでも勘違いしているんじゃないか。
少年は腹が立ったが、顔には出さないように気をつけてハッキリ「使えます」と答えた。
店長は少年を鼻で笑うと、次にシフトやちょっとしたハウスルール等を少年に教えていった。随分と駆け足な説明を少年は頭に叩き込む。
「それじゃ合否は、あー、そうだな。明日の昼ぐらいにまた連絡するから」
「お昼ですね、分かりました」
少年は安っぽい作りのパイプ椅子から立ち上がると、今日はありがとうございました、とお辞儀をして、バックヤードから立ち去った。

少年が出て行くのを見届けると、店長は履歴書を手に取る。
「ま、これでとりあえずはシフトが回せるな」
「かなりキツイですよ？　さっきの子に全て押し付ける気ですか？」

堀が顔を顰めると、店長は冷ややかな視線を質問の主に浴びせた。
「ならお前がシフトに入るか？」
遠慮します、と眼鏡の位置を直しながら堀は答える。
「そういえば店長。さっきの子の名前は何と読むんでしたっけ？」
「ああ、珍しい名前だったな。あ、こいつ履歴書にふりがな振ってない。コンビニを舐めてやがるなあのガキ。っと、一が二つでなんて読むんだっけ？」
不備の有る履歴書を指で弾きながら、店長が新しく火を点けた煙草から、紫煙を吐き出す。
「確か、店長の名前と似てましたね。にの……なんとか。うん、私にとっては貴女も同じくらい珍しい名前ですよ」
それで店長は頭に閃きが走った。
「――ああ、思い出した」

少年は住宅街を抜けるように歩いていく。その格好は上下黒のジャージで、コンビニと言えども、面接に行く、というには不釣合いというか不適切ではないかと思わせるラフな格好。
ポケットから赤い箱を取り出すと、少年は煙草を摘み上げた。火を点けて美味そうに煙を吸い込んで、吐き出す。
既に太陽は沈んでいた。
確か、コンビニに入った時はまだ日が昇っていたよな、たかがコンビニのバイト面接に。
馬鹿か。少年は溜め息とともに煙を吐き出した。

少年の住む街は、日本と呼ばれている国の、駒台と呼ばれる街である。
その街の、最近建てられたばかりの家々が軒を連ねる住宅街。
少年はそこを歩きながら、厭世的な視線を向けた。

視線の先。真新しい家。辺りには何かの工事だろうか、金属を金属で叩くような音や地面を重機で慣らすような音も聞こえてくる。
また金持ちが引っ越してきたか、と。
少年は何の罪も無い工事現場の作業員を睨むと、歩を進め住宅街を抜け出た。
何か巨大な物に踏み潰されたかのような廃墟が広がっている。
その一角に少年の家はあった。
築十余年、二階建てのアパート。
春からの新社会人や、大学生といった新しい入居者の殆どを、近くのマンションに取られたおばさんが大家を務めるアパート。
傍から見るに朽ちかけた、というより朽ちているオンボロアパート。そう言われても、住人にすらその通りだとしか思えないような建物。
少年は今にも足場が抜けそうな階段を、音を立てて上っていく。
表札に「一」と書かれた部屋の鍵を開ける少年。擦れた字で２０２と辛うじて見えるのが彼の部屋らしい。
トイレ有り、風呂無し、カビが生えかかった畳が敷かれたワンルーム。
我が家に帰るなり、少年は大の字になって寝転んだ。
先程の面接で貰った書類に手を伸ばして、目を通していく。その中の、やけに存在感の有る一枚に目を奪われた。
『明るい職場！　優しい上司！　みんな仲良しの愉快なコンビニで働いてみませんか？』
「詐欺だよなあ」
面接の為に訪れたコンビニを少年は思い出す。挨拶をしない店員。面接中に威圧的な態度で煙草を吸いだす店長。優しいと言うより、軽い雰囲気の社員らしき男。もう一度、手書きの紙を少年は覗き込む。
『明るい職場！　優しい上司！　みんな仲良しの愉快なコンビニで働いてみませんか？』

必要以上にカラフルな色彩が少年の目に飛び込んでくる。
騙された、としか思えない少年は、そのまま明日の昼まで不貞寝を決め込む事にした。

オンリーワン北駒台店。
少年が今日の午前から午後にかけてアルバイトの面接へ行ったコンビニ。
日本でも数少ない、『勤務外』サービスの導入されたコンビニでもある。
二年前から実施されている勤務外サービスは今や地域住民に欠かせないものになった。
アルバイトをするなら楽だし辞めやすいし仕事も簡単、その代名詞ともいえるコンビニはもう無い。苦だし辞められないし仕事も困難、二十四時間三百六十五日、店員はお仕事と戦わなければならなくなった。
その分、自給も他の仕事とは比べ物にならないほど上がった。コンビニのアルバイトになるのですら難しくなった弊害もあるが、お金の魔力には、いつの時代のどんな人間でさえも打ち勝てないものだ。
辛くとも、死ぬような目に遭おうとも、このご時世を生き抜く為に通常業務時間外店員――勤務外――を志願する者も多い。

静かな部屋に、突如電子音が響き渡る。携帯電話を持っていない少年の唯一ともいえる連絡手段。
「何だよぉ……」
寝ぼけ眼を擦りつつ、舌打ち。受話器に手を伸ばしてお決まりの文句。
声の主は、先刻少年が「嫌」と言うほど聞いた物だった。

全世界にチェーン店を展開する程の、急成長を遂げたコンビニエンスストア、『オンリーワン』の北駒台店店長の物である。
『今から来てくれ。欠員が出た。レジを打ってればそれでいいから五分で来い」
「は？　連絡は、明日の昼じゃないんですか？　ていうか僕採用ですか？」
受話器の向こうから、様々な気持ちを込めた舌打ちが聞こえる。
少年は店長の話の変わり様、言葉遣い、舌打ち、全ての事について怒鳴りつけてやりたい気分だったがなんとか抑えた。
『今からだ。そして君は採用だ。四分で来い』
一分減っている。無茶苦茶過ぎる要求でも少年にとっては雇い主。バイトの身分では従うしかない。
少年は肯定の意を伝え、取るものも取らずコンビニへと走る。
辺りは暗かった。もう夜だ。
どれ位寝ていたのだろうか？　何でいきなり採用されて呼び出されるんだ？
少年の疑問は尽きなかったが、息を切らして走っていても考えなんて纏まらない。
片道十分はかかる勤務先へと少年はひた走った。

少年が北駒台店に着くと、店内には客どころか、店員すら居なかった。
不審に思った少年だったが、「欠員が出た」らしい事を思い出すと、一人で納得してバックヤードに入っていった。
「お早うございまーす」
遅刻だが、端から店長の指定した時刻には間に合う筈も無かったので、悪びれる様子も無く少年は挨拶をする。
中にはスーツ姿の細身の男、堀が立っているだけであった。
「店長は？」そう少年が尋ねる前に先手を取られる。

「お早うございます。突然の呼び出しで申し訳無いですが、制服に着替えてからの通常業務をお願いできますか？」
本当に申し訳無さそうに堀が言う。しかし、あくまで下手には出ているが、少年にとっては納得いかない説明だった。
「あの。詳しい理由を教えてもらえますか。いきなりでイマイチ状況が掴めないと言うか」
「……あの人は理由も言ってなかったんですか」
はぁ、とため息を漏らすと眼鏡を指で押してから堀は口を開いた。
「実は、深夜シフトの一般の子が襲われましてね。多分……今日、というか明日から来なくなるでしょう。相方は勤務外でしたし、一般業務をやれるバイトが居なかったので、他の子にも連絡を取ったんですが、生憎と都合がつかず、君を呼んだという次第です。納得して頂けましたか？」
笑顔で無茶苦茶な理由を押し通そうとする堀。
「納得出来ると思いますか？」
笑顔で無理も道理も蹴っ飛ばす少年。
「ですよね。ですがお願いします。こんな事は今日だけなので」
自分よりも年上の大人に、頭を下げられては仕方ない。
そう思って少年は渋々、斜めに『ＯＮＬＹ　ＯＮＥ』とプリントの入っている、赤地の制服に袖を通す。
「いやあ、似合ってますよ」
堀が少年を褒める。
コンビニの制服が似合う、ね。どういう意味だ、と思っても、少年は口答えせずにふと湧いた制服についての疑問を口にする。
「あ。誰かの名札付いてますね、別の制服取ってもらえますか？」
「いやあ、そのままで結構です。名札の方を取ってもらえますか？」
どういう意味か分からずに、訝しげに堀を見る少年。
「それは先日亡くなった一般の方の物ですね。まだ新しい制服発注してないんですよ」

店内に立っても一の疑問は残るし湧き続けるだろう。
無茶苦茶な店の回し方。勤務外サービスの無いコンビニでアルバイトを続けてきた少年にとっては、全てがどこかおかしいと感じてしまう。
「それじゃ、私も出ます。簡単ではありますが、レクチャーもしていきますね」
「ハイ」
何年も前からこの世界はどこかおかしくなってきている。
それともおかしいのは自分自身だろうか？
堀の説明も少年の耳には、まともに入ってこない。
「あっと、忘れていました。私はオンリーワンのスーパーバイザーをやらせてもらっている堀と申します。所謂社員ってヤツですね」
面接時にも、自己紹介は済ませたのだが、礼儀正しい人なのかな。少年はそう思うことにした。
「あ、面接の時にも言いましたが、えーと」
考え事をしていたので咄嗟に答えられずに詰まる少年。挨拶は大事だ。
「今日から一般としてお世話になります。一一（にのまえはじめ）です。お願いします」
「よろしく。えーと、にのまえ、君？」
「ハイ。数字の一で『にのまえ』です。下は一で『はじめ』です」
「珍しいですねぇ、初めて聞きましたよそんなの」
子供の頃から名前だけは覚えられていたっけ、一が二つで簡単だからな、と一は心の中で苦笑した。
「それじゃ、行きましょうか。レジや接客も、他のコンビニと大体同じだから」
一は頷いて、店内に通じるドアに手をかけた。
制服を着ると店の中はまた違う物だな、と一は改めて思った。
疑問はある。けど今は店員として仕事をこなせばいい。
一は頭をいつものように切り替えていく。

「いらっしゃいませ」
一にとっては、実に半年振りの懐かしくもある言葉だった。

「緊張してます？」
「あんまりしてないですね。一応、別のコンビニでバイトしてたんで」
「そういえば履歴書にも書いてましたね、いやあ、頼もしい」
「今は、他のバイトはいないんですか？」
「勤務外の方なら、そろそろ出るとは思うんですが……」
堀が時計に目をやると、バックヤードのドアがけたたましく音を立てて開いた。
不機嫌というより怒りの表情を浮べて、真っ赤なジャージを来た小柄な女性が現れる。
「お早うございます」
堀が笑顔で挨拶を女性に向ける。対して一は固まっていた。
「お、お早うございますっ」
社員の堀に遅れてアルバイトの一も挨拶をする。
赤いジャージ。短い金髪。三白眼。異様な雰囲気。
金髪だ、ヤンキーだ。一は久しぶりに、この手の不良を見た。
「……」
女性は一を睨むと、手ぶらで店を出て行った。
完全に視界から女性が消えたのを確認してから、
「何か怖そうな人ですね」
一は躊躇いがちに言う。
「そうでもないですよ？　まあ、初めての方はそう思っちゃうらしいですけどね」
思い出すように堀が目を瞑る。
「勤務外が行ったって事は、またソレが出たって事ですよね？」
「ええ。と言っても、ここから結構離れてますから」

大丈夫ですよ、と堀が言う。
「お客さん、来ますかね？」
「近場の方だと、たまに来ますね。いやあ、慣れってのは恐ろしいのか、素晴らしいのか」
多分、恐ろしい。一は少しばかりの不安を抱えて、そう思った。

「お、君は制服が似合うな」
店の長が、店内で堂々と煙草を吸いながらレジに向かってくる。制服が似合うとはどういう意味だ、と思うのも一にとっては二度目だった。
「店内は禁煙じゃないんですか？」
禁煙と書かれたポスターを指差す一。
「私は店長だ」
灰を床に落としながら、店長が実に偉そうに言う。
「別にお客が居ないから良いですけどね」
堀が当たり前のようにそんな言葉を放った。
一は頭が痛くなりそうだった。
「あの、店長。何時まで居ればいいんですか？　明日大学あるんですけど」
「うーん、とりあえず三森が帰ってくるまでは居てもらう」
「みつもり？　さっき出てった人ですか？」
「ええ。勤務外専門の方です」
店長の代わりに堀が答えてくれた。
「難しい質問ですが、三森って人は、後どれ位で帰ってくると思いますか？」

「分からないですね」「分からんな」

若干の間の後、堀と店長がほぼ同時に声を発した。

「今日は数が多いらしいからな。場所も遠いし。まあ、日が昇る頃には帰ってくるだろ」
一は目眩がした。明日は後期の必修科目が一時限目にあるのに。せっかく大学に入れたのに、留年なんてしたくない。
そんな一の願いも、店長には届かない。
「使えるんだろ？　突っ立ってないで仕事しろ」
「別に良いじゃないですか、初日の深夜だし」
「堀。新人を甘やかすと為にならないぞ」
「店長は少し他人に厳しいと思いますよ？」
悪夢だ。一はただ、そう思った。

一は高校生になる前に、生まれて初めてコンビニエンスストアでアルバイトを始めた。
そこでのアルバイトは一にとって、楽しかった。お金を得る事だけじゃない、ここで働く事にも意味はあるんだ、数年前の一はそう思っていた。
しかし、仕事を続けていく内に、楽しい事以外にも辛い事、悲しい事がある事も一は知っていく。そして三つの誓いを一は立てた。
「仕事、しますよ」
そう言うと、一は凸凹になって置かれている弁当を並べ始めた。
「店長がキツイ事言うから」
「キツくないぞ。フェイスアップぐらいさせとけ」
三つの誓い、その一。無駄口を叩かない。
勤務中に口をなるべく開けない、余計な事まで喋ってしまいそうになるから。
三つの誓い、その二。シフトは絶対に変わらない。
一度変わってしまうと、味を占めた怠け者が調子に乗るから。
三つの誓い、その三。全力は出さない。
この人たちのペースに巻き込まれてすっかり忘れてたな。

一は誓いを忘れた自分を戒めるように、フェイスアップだけに自分の意識を預けた。

時計の短針は五を指していた。午前の。

「いやあ、眠いですねぇ」

「そうですね」

「店長は裏で寝てますし。腹立たしいですねえ」

そう言いながらも、堀は微笑を絶やさない。

「深夜シフトは体に悪いですよねぇ、いやあ、ホント一君。すみません」

「別にいいですよ」

表情を変えずに一が答える。

静寂が店内を満たしていく。

あれから客は数える程しか来なかったので、只管に一は商品を綺麗に並べていた。

フェイスアップやレジでの接客など、堀はその仕事振りを褒めてくれていたが、一は何も思わなかった。

それが一にとっては当然の事だったのだから。

どういう店だよホント。一は早く帰りたくて仕方が無かった。

そんな一の願望を察したのかは知らないが、赤いジャージを来た女が店にやってきた。

「おや、三森さんが戻ってきましたよ」

あくびを噛み殺しながら堀が言う。

勤務外店員の三森が仕事を終え、帰ってきたらしい。

――やっと帰れる。

一は安堵の混じった溜息を漏らした。

「あ、お帰りなさい。どうでした?」

「しんどいっつーの」

三森は適当に堀に返事をすると、レジ前のホットコーヒーを取っ

て、蓋を勝手に開けて飲み始める。
「あ、お金は。良いんですか？」
「勤務外の方は、まあ、許されているんですよ。そういう事も」
そういう事をしている三森を、一は複雑そうに眺める。
一仕事してきたんだし、大きくは言えないな。
まだ新人の一はそう思い、何とか自分を納得させた。
「裏で寝とく、クソ疲れた」
「ええ。ああ、いや、店長が寝てますけど？」
「退かす」
堀の心配は一言で吹っ飛んだ。
「……あの、じゃあ僕も帰って良いですか？」
嬉しさを隠しながら一がたずねる。
「ええ、お疲れ様でした。今後の事は店長に聞いておいて下さい」
堀に頭を下げて、一もバックヤードに戻る。
制服を椅子にかけてから軽く体を伸ばすと、一の体から乾いた音が鳴った。
煙草でも吸って、一服といきたいところだったが、着の身着のまま飛び出してきた事を一は思い出す。
今は亡き、先輩だった筈の一般アルバイトのロッカーを開けて、一はハンガーにその制服をかける。
故人の名札は、制服のポケットに何となく入れておいた。
一人につき一つずつ用意されているロッカー。
今頃は、店長が三森に立ち退きを要求されているであろう仮眠室。
普通のコンビニに比べれば、中々に設備は調っている。流石は世界に名を知らしめた、オンリーワン、といったところだろうか。
「上がりか？」
店長が仮眠室の扉を乱暴に開け放って出てくる。
「本当に退かされたんですね」
一が憂さを晴らすように笑った。
「……次は今日の昼だ」

「いきなりじゃないですか？」
「元々はその時間だったじゃないか。頼むぞ」
このヤロウ。一は早く帰りたいと心底思った。

遡る事、数年前。ソレは突然姿を現した。
何故もっと早く、ソレを察知する事が出来なかったのか。
世界は火に包まれ阿鼻に包まれ叫喚に包まれソレに包まれた。
情報や交通は完全と言っていいほど遮断され、人類は絶望に身を捩った。
親が子を殺し、男が女に殺され、ソレが人を殺し、親が子に殺され、男が女を殺し、ソレが人に殺された。
地獄を数年続けて、各国の軍隊がソレに対処して、人類とソレに甚大な損害を与え合った後、一先ずの沈静が地球に訪れた。

――ソレ。
幻獣とも、妖怪とも、怪物とも、幾らでも形容出来る異形のモノ。
恐怖に駆られた人の生み出した神話の概念とも、妄想の産物とも言えるし、中には造られた機械だと説を唱える人もいる。
しかし、ソレが何であれ、人に害を成す災厄である事に変わりは無かった。
誰もが一度は、絵本やテレビ、様々な媒体からその情報を得た事があるだろう。
この世に現れて欲しい、誰もが一度はそう思ったことがあるだろう。
もしくは、本当に誰かがそう願ったから、ソレはこの世に現れたのかもしれない。

世界は今、線を失っている。
現実と夢。

過去と未来。
生と死。
ソレが現れてから数年、人類は散発的なソレの被害に悩まされながらも、混沌とした時代を生き延びている。

世界は、いつからおかしくなったのだろう。
「分かりましたよ。それじゃお先に失礼します」
「ああ。お疲れ」
何にせよ、一一の初陣は事なきを得た。
地獄みたいな夜も明けて、日も昇ってきた。
ずっとそうやって人間は生きてきた。
これからもずっとそうやって人間は生きていく。
一は店を出ると、噛み締める様に昇る太陽を見た。
その光は一にとって、人間にとって、どのように映ったのか。
「お疲れ様」
早朝で誰も居ないのは分かりきっていたが、自分にしか聞こえないように一は呟いた。

二の前の数字

「お早うございまーす」
少し間の抜けた一の声がバックヤードに響く。
一が昨日、というより今朝店長に指示された時間、つまりお昼ごろにオンリーワンへやって来た。
お昼とは何とも曖昧だが、十二時なら間違いは無いだろうと一は踏んでいたのだが。
店の何処にも店長は居ない。
店内には立ち読み客の他には誰も居ない。
一は仕方なくバックルームへ入っていく。
「お、おはようございます」
金髪で小柄で赤いジャージを着た女性が煙草を吹かしていた。
その女性、三森は一に挨拶を返す事も無く、パイプ椅子に座って携帯を弄りながら、一に背中を向けていた。
――気まずい。
無視されるし、店長は居ないし、一はただただ気まずいとしか思えなかった。
仕方なく、一は店員専用の休憩室を抜けて、ロッカールームへと足を伸ばす。
ロッカールームには、店長やＳＶ（スーパーバイザー）が触るであろうパソコン、アルバイトが勤怠の登録をする為のパソコンと合計二台置いてあった。
普段なら、店長はそこのパソコンと睨めっこする様に座っている。
仕事をしているかどうかは本人にしか分からないが。
一は部屋を軽く見回して、シフト表を探した。
この店の状態からして、まともな物が置いてあるかどうかは分からないが、運が良ければ店長のシフトが分かるかもしれない。
待つのも出直すのも、シフトを見てからだ。
そう判断した一はシフト表らしき物を探す。

机に置かれていないか、壁に貼られていないか。
色々と探し回ったが、そんな物は見つからなかった。
「何チョロチョロしてンだ？」
「え？」
一が店についての不審を抱いていると、三森が煙を吐きながらやって来た。
「えっと、シフト表を探していたんです」
「シフト？　あンだろ？」
言うなり、三森は机の引き出しを漁り始めた。
――シフト表、探してくれるのか？　案外良い人じゃないか。
一は見た目で人を判断するのは良くないな、と思った。
尤も、一の最初の挨拶は三森に無視されていたのだが。
「シフト確認に来たのか？」
「いえ、店長に呼ばれてたんですけど、その店長が居ないので」
なるほどね、と煙草を灰皿に置いて三森は納得する。
そのまま会話も無く、三森が整理されていない引き出しの中を探していると、お目当ての物は現れた。
「ほらよ」
「あ、ありがとうございます」
手渡された小さな紙を見ると、穴だらけのシフト表と言う事が一には一目で分かった。
一ヶ月はおろか、その日のシフトを埋めるので手一杯と言ったシフト。
「見てもしょうがねェと思うけどな」
「みたいですね。……無茶苦茶過ぎるなあ、これ」
三森はそのまま、店長がいつも陣取っているパイプ椅子よりかは上等な椅子に腰を下ろす。
「店長ならまだ来てねェぜ。私が起きた時には店に誰もいなかったしな」
一はそういえば、と店内を思い出す。立ち読み客は居たが、店員

は一人として表に出ていなかった事を。
「やばいんじゃないですか？　万引きとか」
「いいンじゃねぇの、上が来てないんだからさ」
落ち着いた様子で携帯を弄る三森。
「……信じらんねぇ」
一はただ立ち尽くした。
コレが店か、コンビニか、二十四時間営業どころか、営業すら何処吹く風。
「三森さんは仕事しないんですか？」
三森の三白眼に睨まれる一。
「一般の仕事か？　できねェよ。私は勤務外専門で雇われてンだ」
「勤務外、専門ですか」
一は、様々な感情が入り混じった目で三森を見る。
「お前も勤務外は嫌いらしいな」
その中の感情の一つ、嫌悪と言った物を、三森に見抜かれてしまったらしい。
「いや、そもそも勤務外の事を良く知りませんから」
「ハッ、要するに化け物を殺す化け物だよ。勉強になったか？」
「何もそこまで言わなくても。俺らを助けてくれてる訳なんだし……」
そうかよ、と一の涙ぐましいフォローを突っぱねると、三森は立ち上がり仮眠室へ向かう。
それ以上、一は何も言えずに、必要以上に音を立てて閉まる扉を見つめる事しか出来なかった。
――何なんだよ……。
暫くすると、店長がやっと店に顔を出した。

「勤務外の事？　あまり詳しくは話せないな」
「……ですよね。情報も殆ど僕らには公開されてないですし」

本題である話は直ぐに終わる。
一は今日の夕方シフトに入れと、ただそれだけ言われた。
なので、一はさっさと帰るだろう、そう思っていた店長が、意外そうに一の顔を眺める。
「一。希望は一般だったよな」
「そうなんですけど、せっかくここに雇われたんだし、知りたい事もやっぱあるじゃないですか」
ふーん、と店長が今日二本目の煙草に火を点ける。
「まあ、暇だし別にいいけどな。何から聞きたいんだ?」
店内の状況が見渡せる防犯用のモニター。
この店には必要無い事が判明した。
「えっと、まず勤務外の仕事内容についてです」
「そうだな、一。パンドラ事件を覚えているか?」
ハイ、と返事をしてまだ高校生になりたてだった頃を一は思い出す。
「酷かったですよね。今生きてるのが不思議なくらいです」
「正確に言うと、酷いですね、だ。過去にはなっていない。まだ何も解決しちゃあいない。一時的な小康状態に入っただけだ」
疎ましげに、机の上に置かれた朝刊の一面を睨みつける店長。
新聞には、ヨーロッパでまたソレが現れた事について書かれていた。
「……そうでしたね。アレが全滅した訳じゃないですもんね」
「そうだな。それで勤務外の仕事内容だが、ソレの対処。この一言に尽きる」
対処。
ある事柄や状況に対して適切な処置を取る事。
「ソレに合わせて、殺しても良いし、逃げても良いし、殺されても良いし。つまり何をしても良い。それが仕事の中身だな」
「その、何をしても良いんですか?」
「力が無いと勤務外には選ばれないって事だ。ソレを殺せる力、ソ

レから逃げ出せる力、ソレに何をしても良い力。お前にはあるか？」
首を横に振る一。
とてもじゃないが、自分は化け物になんかなれない。
そう言おうとしたが、ギリギリのところで飲み込んだ。
「うん。だから勤務外は破格の待遇なんだよ。一般人はもう口出しできないんだよな、ソレが出たらなんとかしてもらうしかないから。自分らじゃ解決出来ない」
三森の行動を思い出しながら、一は納得する。
店の商品を勝手に飲んだり、仕事にも出ない。
一般のバイトじゃ許されない事を、勤務外は平気で行う。
「その分、他の人間より命を張ってるとは思うけどな。シフトもお前らよりエグイぞ」
「そうなんですか？」
「ああ。担当地域にソレが出たら、いつ何処に居ても呼び出し食らって何とかして来い、だからな」
成る程。そりゃ捻くれもするか、と先程の三森との会話を一は思う。
そしてまた一つ疑問が浮かんだ。
「何で勤務外サービスなんて始めたんでしょうか？」
「あのなあ、一。ウチを否定する気か？」
「だって、国の偉い人が直接力を持った人を集めて、特別な物を組織すればよかったんじゃないですか？　わざわざコンビニにそういう人材を配置させるなんて、変、じゃないですかね？」
短くなった煙草を灰皿に押し付けて、新しい物に火を点ける店長。
「店長とは言え、私も雇われだからな。正しい情報は入ってきづらい。だから、仮説しか立てられないけど、それでもいいか？」
一が頷く。
「力を一箇所に纏めるのが怖いんだろうな。だからオンリーワンを作って、各地に力を分散させている、と私は見ている」
それと、各地に散発的にソレが出現している事も店長は指摘する。

後手に回るのは人間にとっても苦しいので、ソレに対応出来る力のある者が、勤務外サービスと言う形で各地に点在するコンビニに配置すれば、迅速な対処も出来る、と。店長は言う。

「ああ、成る程。で、誰が勤務外を怖がってるんですか？」

煙を天井に向かって吐くと、店長は逡巡。少し困ったような表情を浮べた。

「そりゃ、上の人間だろ。集団で叛乱でもされて噛み付かれたら堪らないからな」

上。ああ、政府の事か、と一は納得する。

「けど、そういうのを創めたウチの社長は、何者でしょうかね。パンドラ事件をビジネスチャンスとでも思ったんでしょうか」

「そりゃそうだろ。支店も碌に出せない弱小店が勤務外サービスでここまで伸びてるんだ。それ以外無いな」

オンリーワンの社長。

メディアにも顔を出さず名前すら知られていない。

勤務外サービスを始めた人物。世界の人々はそう捉えている。

地球の危機に、一人だけ金儲けの事を考えた人物。

恨まれる事も日常茶飯事。

素性がばれるのを恐れているのか、殆ど何も知られていない人物。

それが、オンリーワンを一代で叩き上げた社長である。

「ま、そのおかげで私たちは飯を食えてる訳だけどな」

「はぁ。そうですね」

沈黙が場を支配する。

店長の吐く、メンソールの煙草の煙だけが揺ら揺らと動いている。

「こんなもんでいいか？」

「あ、はい。ありがとうございます。それじゃ夕方まで家に戻ってます」

「うん。また後で頼む」

一が席を立つと、仮眠室の扉が目に入る。

同時に、三森の事が少し気になった。

「あの、最後にいいですか？」
何だ、と店長がパソコンのマウスを動かしながら答える。
「勤務外の、えと、力の事なんですけど。例えば、三森さんとか。どういう風に力なんて身に付いたんでしょうか」
「何だ？　アイツが気になるのか？」
楽しそうに店長が聞く。
――勘違いされてる。
一は嫌な予感がしたが、構わず話を続けた。
「少なくとも俺らの周りじゃ、そういう人たちは居なかったもので。やっぱ、特別な訓練とかしてるのかなー、とか」
「まあ、確かに勤務外の中には、頭のおかしい家に生まれた所為で、色々な訓練を受ける奴も居ると聞くがな。三森は違うぞ」
「後天的なもんですか？　まさか、ソレの影響で……」
「一。私は別に三森の事について喋っても良いが、プライバシーに関わる事だ。そろそろ遠慮してはくれないか。三森怒らせると怖いし」
確かに。だが、思った事を口に出さない一。
「……ソレが出てきたから、力を持つ人が勤務外になれてますけど、もし。ソレが出てこなかったら、訓練を受けてた人や、力を持ってた人はどんな扱いを受けてたんでしょうね。あー、やっぱ僕には分かりませんけど」
あはは、と取り繕う様に一が笑う。
「……今と何も変わらないだろ」
冷たい声。
吐き捨てるように店長が言った。
異質な物、普通とは違う物。
世間からは迫害され、疎まれる。
あぁ、そうか、と一は理解する。
初めて勤務外、三森を見たときの事を思い出す。
怖い、と感じた時の事を思い出す。

金髪で態度も悪く、まるで不良みたいだから。
……違う。まるで、ソレと同種の怖さ。
――化け物を殺す化け物――
三森の言葉は正鵠を射ていた。
ソレが現れ、勤務外が現れ、何の力も持たない普通の一般人は何をどう思っただろうか。

「お早うございまーす」
一の間の抜けた声がバックヤードに響く。
返事は無い。
店長がパソコンと睨めっこしている。
至極、当たり前な風景。
店内に店員が居ない、と言う点を除けば。
「お早う。早く入ってくれ、客がレジで待ってる」
「じゃ、店長がレジ打って下さいよ」
着替えながら一がぼやく。
答えは無言。店長はマウスをカチカチ押している。
「登録はしといてやったから入っていいぞ。それと、客怒ってるからな」
もう、どうでもいいけどね、そう思いながら一は店内に出る。
「いらっしゃいませー」
レジまで向かうと、五、六人の客が怒りを顔に浮べて、一を睨みつける。
一は先頭の客を一瞥して、商品を確認。
ペットボトルが一つ。
一がバーコードを通す為に持ち上げると、ウォークインで冷えていた筈の炭酸飲料は温くなっていた。
「百五十円になります。ありがとうございましたー」
小銭を台に叩きつけるようにして、スーツを着た男が店を出て行

く。
「お待たせしましたいらっしゃいませー」
客の苛立ちなど気にすることなく、マイペースに商品を読み取り、袋に詰めて、お金を貰い、御釣を返してお礼を述べる。
「ありがとうございましたー」
程なくして、店内からは客が消えた。
――相変わらず汚いなあ。
ダスタークロスを手に持って、一は店内を見回す。
埃、客の靴の裏から落ちた砂、レシート。
要するにゴミと呼ばれる物が、何の疑いも無くフロアに鎮座していた。
ダスタークロスをかけながら、一は特に目立つ箇所をフェイスアップしていく。
何で賞味期限の古いのが奥にあるんだよ。売り場ボコボコなのに、商品は補充しておけよ。といった小さな怒りが一に生まれていく。
まさか、昼から今まで誰も仕事してないんじゃないのか。
前のバイト先では有り得ない、有り得てはいけない事が次々とこの店に起こっている。
一は何だか悲しくなってきた。
「中々働いてくれるじゃないか……」
店長が、まるで人様の家に初めて上がりこんだ様にキョロキョロと店内を動き回る。
「どうも。……銜え煙草で出てくるのは辞めて貰えますか。灰が落ちるんで」
「気にするな。どうせ掃除なんて二日に一回ぐらいしかしないんだし」
えっ、と一が驚愕の声を上げる。
何で驚いてるの、と言った感じで一を見る店長。

一が溜息を吐く。
「だってなあ。一般殆ど辞めたし」
「は？　あの、辞めたって、何人ぐらい、ですか？」
店長が煙草を持っていない右手を広げる。
「……五人、ですか？」
そのまま頷く店長。
「……ちなみに今、一般は何人居ますか……？」
店長は、親指をグッと突き出す。
大丈夫？
何だそれと、一は会話を流そうと顔を背けた。
「一人だ」
「……えっ、そういう意味だったんですか？」
少し遅れて、一が反応。
うん。と頷いてから「お前一人だ」と更に店長が続ける。
「僕も辞めていいですか？」
「駄目に決まってるだろう！」
「ふざけてる！　馬鹿じゃないんですか！？　店が回るわけ無いですよ！」
もう一度、親指をグッと突き出す店長。
「堀がいる時は何とかなる。後は、お前が来るまで店は放っておく」
一は絶句した。

半ば、放心状態で作業を続ける一。
無茶苦茶な店の営業方針、一般のバイトが自分しか居ないという悲しい事実が、次々と明るみになっていく。
客も大して来ない事がこの二時間で判明した。
住宅街のほぼ真ん中、十字路のほぼ真ん中。
店の中から外を見ると、信号待ちをしている人や、自転車を飛ばす人。

人通りは多い様だ。
それなのに、まるでオンリーワンを避けて通る様に人々は道を歩く。
コンビニというより、ソレと同じくらい怖い勤務外が居る所、といった感じなんだろうな、と予てから自分もそう思っていた事を、改めて一は感じた。
――化け物。
これから自分も化け物の巣で働く事を考え、一は憂鬱になる。
外の様子を見ていると、ゴミ箱が目に付いた。
――忘れてたな、外の方。
ゴミで一杯になっていたら、袋を代えないとならない。
中身を確認するために店外に出ると、やはり暖房の効いた店内と比べて肌寒い。
空が暗くなるのも早い、そんな季節になった事に一は気づかされた。
行き交う人の様子を眺め、少しぼうっとする。
気を取り直して、ゴミ箱を開けると、袋から飛び出すぐらいのゴミが大量に詰まっていた。
箱から袋を取り出して、袋の口を縛る。
しかし、量が多すぎてどうしても上手くいかない。
幾つかに分けないとどうしようもないな、そう思った一は中に戻って、袋を探す。
カウンターの近くや、棚を開けてもそれらしき物は出てこなかった。
また溜息を吐いて、今度はバックルームへ足を向ける。
「すいません、ゴミ袋って何処に置いてるんですか？」
「ゴミ袋ぉ？」
そんな物は知らないとでも言う様に、店長が煙草を吹かしていた。
「無いんですよ」
「店に有る奴勝手に使っといてくれ。それと、纏めたゴミは道路を

挟んで向かい側のゴミ置き場に置いておけよ。ああ、信号はちゃんと守れ。最近警察がうるさいんでな」

一は曖昧に返事をして、再び店内へ。

雑貨売り場に陳列してあった袋を持って外へ出ると、ゴミを纏める作業に一は移る。

「きったねぇ……」

誰に言うでもなく、独り言。

独り言も出てしまう有様。

辺りには分別のされていない、缶や生ゴミが店前に散らばっている。

通り過ぎていく人々の視線に晒されながらも、やっと一の作業が終了した。

――確か、道路を挟んで向かい側、だったよな。

店長の言葉を思い出して、一は信号の先に視線をやった。

ゴミ置き場、と言うより倉庫のような物が、オンリーワン北駒台店の駐車場の一角に見える。

そして視線をゴミに戻す。

「持ってくのは、俺だよなぁ……」

限界まで膨らんだポリ袋が四つ、転がっていた。

ワガママな炎

一がゴミを纏めているのと同時刻。
一本の電話がオンリーワン北駒台店に掛かってきた。
またクレームか？
だったら面倒だな、なんて思いつつ。長いコールの後、店長がやっと受話器を取る。
「もしもし？」
『……電話での応答を勉強してください。二ノ美屋（にのみや）さん』
「……で、用は？」
二ノ美屋。店長の名前である。
尤も、店長をその名で呼ぶ者など殆どいない。
『そちらの担当地域に出ました。数は三、釣瓶落（つるべおと）しと呼ばれる妖怪です』
「釣瓶落とし？　随分古いのが来たな。場所は？」
電話の相手はオンリーワン近畿支部の情報部からだった。
ソレが出現すれば、支部は迅速に察知し、支店に連絡を取り、指示を伝える。
『それが、そっちの、その……北駒台店の駐車場ですね』
「駐車場？　ウチの？」
ええ、と電話から声が聞こえる。
「マズイな。とりあえず堀を遣してくれ」
『分かりました。細かい物や追加のデータは堀さんに渡しておきます。被害者は今の所……無い様ですね。迅速な処置を期待してますよ』
電話を切ると、店長は店内へ急ぐ。
ソレが出現すれば、勤務外とミーティングの後、勤務外を出勤させ、一般は待機。
その一般、一一。

アイツ、確かゴミ出しに行くとか抜かしてやがったな。
一の言葉を思い出し、嫌な予感が二ノ美屋店長の体を走る。
店長の予想通り、一の姿は店内に無かった。外に出ると、ゴミ袋が二つ転がっている。
向かいの駐車場に店長が目を向けると、太陽が沈んだ後の冬の夜の中に、巨大な顔らしき物体が三つ、ゴミ置き場代わりの倉庫を取り囲んでいた。
「……まずい」
舌打ちして、バックヤードへと駆ける店長。
躊躇せずに、仮眠室の扉を店長は蹴り開けた。
「三森ぃ！」
「……何スか？」
ソファーの上で寝転がっていた三森が、無愛想に返事をした。

釣瓶落とし。
日本に伝わる妖怪の一つで、釣瓶下ろしとも呼ばれる。
木の上に棲む生首、顔だけの妖怪。
人が近くを通ると、「夜鍋済んだか、釣瓶おろそか、ギイギイ」と言い、上から落ちてくる。
大抵は、落ちてくるだけで何もしない。
稀にだが、落ちてきて、そのまま人を食べるタイプも存在する。
そして、北駒台店の駐車場に現れた三体のソレこそが、そのタイプである。

何でこんな事になったんだ！？　俺は唯、ゴミを出しに来ただけなのに！
三つの首、釣瓶落としに囲まれた倉庫の扉を必死で押さえながら、一は数分前の行動を思い返す。

四つもあったゴミ袋。
一は二回に分けていこうと思い、両手で一つずつ袋を持って、倉庫の前までやって来た。
引き戸を開けると、中からは異臭がした。
流石にゴミ置き場となっているだけはあった。
今までに置かれていたゴミの臭いが、倉庫の天井や壁に染み付いているのだろう。
一は鼻を押さえながら、袋を投げ捨てた。
外に出て、新鮮な空気を取り込もうと深呼吸。

「夜鍋済んだか、釣瓶おろそか、ギイギイ……」

「は？」
何処からとも無く、しゃがれた声が一の耳に届く。
人が周りに居なかったし、車は一台も停まっていなかったので、最初一は声と思っていなかったが。
風の音か、と。
――それにしては随分ハッキリと聞こえてきたような……。
それとも、倉庫の中だろうか。
そう思った一は閉めかけていた戸を開け、中に戻る。
倉庫に足を踏み入れた瞬間、一がさっきまで立っていた場所のすぐ近くに、何かが降ってきた。
丁度何かが、倉庫から落ちてきた様な音と一緒に。
一が振り向くと、落ちてきた物と目が合った。
――顔。
顔が、大きな顔だけがそこにある。
幾分か、その目は一の物より大きかった。
顔だけでも、一の体より大きな物がそこにいた。

「夜鍋済んだか、釣瓶おろそか、ギイギイ……」
一が状況を掴めずに倉庫の中で突っ立っていると、再び先程と同じ声が聞こえた。
今度は空耳じゃない。
――やばい……。
そう思っても、一の体は動かなかった。
叫び声すら出ない。
真の恐怖に相対すると、蛇に睨まれた蛙のように、身動き一つ取れないものだ。
「夜鍋済んだか、釣瓶おろそか、ギイギイ」
三度、同じ声が聞こえると同時に、既にいる物体と同じものが二つ、一の頭上から現れた。
合計三つ。
生首の妖怪が一の前に姿を見せる。
三つの顔、六つの目が一斉に獲物を値踏みする。
瞬間、やっと動いた右手で一は戸を閉めた。
内側には武器になりそうな物も無い。
力押しで来られれば、こんな古い倉庫なんて簡単に打ち破られるだろう。

そして、先刻の一に戻る。

三体の釣瓶落としが、一が隠れている倉庫を体、と言うより顔で当たる。
三つの顔がそれぞれ、違う場所を揺らす。
倉庫の中に居る一は、泣いていた。
生まれて初めて、まともに自分の目の前に現れた『ソレ』と呼ばれる物。

そして初めてまともに、自分の身に危機が迫る。
何年も前から、ソレが出てきた事は頭では理解していた。
理解していた気になっていた。
新聞やテレビでは毎日のように、ソレの被害が報道される世の中。
交通事故や人間同士の傷害事件と同じレベルで一はソレを捉えてきた。
だが、実際に自分の番になると、怖いものは怖い。
まだ死にたくない。
「嫌だ、嫌だ、嫌だッ！」
泣き叫んで、必死で外からの攻撃に抵抗するが、抵抗にすらなっていないというのが一の現状だった。
力の無い一般人が、運悪くソレに出会うとどうなるか。
一は身を持って、知りたくも無かったであろう事を知ろうとしていた。
もう、終わりだ。終わりなんだ。一は短い生涯を振り返る。楽しい事悲しい事腹が立った事悲しい事空しい事死にたくなった事死にたくなくなった事楽しい事楽しい事。
「やっぱり死にたくないよ！」

「オイ、生きてるかァ？」

声がする。
恐怖で冷たくなっていた一の体が熱くなった。
――三森さん？
外から三森の声が聞こえる。
勤務外――化け物を殺す化け物――の声が聞こえる。
何はともあれ、この場は助かった。
一が涙を手で拭う。
「生きてますっ！」
「ちょっと待ってろ」

三森の言葉と同時に、遠くで声が上がるのを一は聞いた。
その声は、一にとっては酷く耳障りな物。
「野次馬が来てるのかよ……」
一般人の好奇心に一は嫌気が差した。
直後、響き渡る断末魔。
その後にパチパチと、何かが燃えるような音。
それまで規則的だった、倉庫の振動が収まる。
「うわっ！？」
だがそれも短い時間で終わった。
突然、倉庫に強い衝撃が走る。
今までで一番強い振動が一を襲う。
衝撃の後は、凄まじい音が一の鼓膜を襲った。
真っ暗だった倉庫に月光が差し込む。
一の目が光によって眩んだ。
差し込まれた光に目が慣れてくると、倉庫の扉が壊れている事に一は気づく。
「ギイギイ……」
「ヒッ――」
釣瓶落としが倉庫に侵入して来る。
一は腰を抜かして、目を瞑った。
――もう駄目だ。
「てめェで終わりだ」
次に目を開けた時、一の網膜に焼きついたのは赤。
赤い炎が生首を捕らえていた。
赤に身を包んだモノが首を焼く。
真っ赤な炎が意思を持っているかのように、釣瓶落としを灼熱に包む。
この世のものとは思えないモノが、この世のものとは思えない声を上げる。
「死ね」

赤かった炎が白い焔に変わった瞬間、捕らえられていた首が真っ黒な灰に成果てる。
その間、一はずっと燃え盛るモノに魅せられていた。

「大丈夫か？」

その声に一は正気を取り戻す。外に出ると、倉庫は何とか原型を留めている様子だったが、今の一にはそんな事どうでも良かった。
道路を挟んで向かい側の店の周辺には人が集まっている。
皆、口々に何かを叫んでいる。
その叫びは、人間一人の命を救った英雄への賛美の歌ではなく、異質な力を持った勤務外店員、三森への呪詛のようだった。
「消えろ」「死ね」「化け物」
何かに取り付かれた様に、老若男女関係なく、そこにいる全ての人々が呪いを吐き続ける。

――なんだよ、こいつ等。

一の目には、そこで燃えている三つのソレの灰と、向こう側の人間が同じに見えた気がした。
「……おい、帰るぞ」
「……はい」
三森が差し伸べた手を、一は受け取る事が出来なかった。

信号を渡ると、店の前に人だかりが出来ている。
人だかり、と言うより、まるで壁だった。人の壁。
オンリーワンに帰ろうとする一と三森を阻むかのような壁。
「退けオラッ」
三森が一の手首を掴んで、人垣を強引に掻き分ける。

圧倒的な呪詛の中、一は倒れそうになった。
確かに、勤務外が一般人にどういう扱いを受けているかも、どういう風に思われているかも、一は知っていた。
知っていただけだった。
でも、その人を、自分を助けてくれた人を。
――そこまで言う事無いじゃないか……。
崩れ落ちそうになる一の体を、無理矢理に三森が引っ張っていく。
「痛ッ」
甲高い音の後、一が頭を、掴まれていない方の手で押さえる。
三森が立ち止まると、まだ少し中身の入ったジュースの缶が、コンクリートに転がって染みを作っていく。
三森が転がっていく缶を睨んでから、そのまま視線を人込みに移す。
「投げたのはどいつだ?」
大勢の人の罵声が飛び交う中、異常に良く通る声で三森が言った。
「あの、俺は良いですから……」
これ以上騒ぎが大きくなっても面倒だと思った一は、今にも火柱を上げそうな三森を宥める。
店長は何をしてるんだ、とも一は思ったが、この騒ぎでノコノコ出てくる訳にもいかないだろうな、と無理に自身を納得させた。
「誰だって聞いてンだよ! ぶっ殺すぞ!」
だが三森は一の説得に耳を貸さず、一片たりとも納得していない様子だった。
その恫喝まがいの言葉に、先程まで煩かった場が静まる。
チッ、と舌打ちして三森は踵を返した。
「……やってみろよ、化け物が……」
一人の男が群衆の中から、一歩前に踏み出している。
その顔は恐怖と憎悪で無茶苦茶に歪んでいた。
三森は振り向いて、声の主に視線を突き刺す。
「しっかり殺してやるよ。どっから焼かれたい?」

「三森さん!?　人ですよ!?」
一が三森の肩に触れる。
止めようと、同じ人間を殺すなんて馬鹿げた真似を止めさせる為に触れる。
――熱ッ!?
触れた瞬間、一の手が三森から発せられる熱によって反射的に飛びのく。
「知ってるか？　私らは勤務中に人を殺しても罪にゃ問われないンだよ」
熱くなった手を押さえながら、一がしきりに止めて下さい、と懇願する。
「や、やれよ……化け物め。死んじまえ!」
「死ぬのはお前だ」
三森の体を炎が包む。
それでいて、三森本人や、着ている物には何の影響も与えていない。
持ち主と同じく何とも自分勝手な炎。
熱の所為で、周りを取り囲んでいた人々は距離を取る。
人の円の中心に、三森と男。
円の外から一が呼びかけた。
一が居る方に、三森が視線をやる。
――同じ人間、だと？
「違う……」
三森は歯を食い縛り、男を睨んだ。
――こんな力を持ったイカレた奴、人間じゃない。
一瞬。
一瞬だった。
三森が顔を伏せたその時、
「えっ？」
一の体が自由を失う。

振り向けば男。
三森に啖呵を切ったのとは別の男。
その男が一を羽交い絞めにして、一の首元に刃物を当てている。
「動けばこのガキを殺すぞ！」
「なンだと？」
男の方へ歩を進めようとする三森。
「動くなっ、つってんだろ！」
一の後頭部を男が強く殴る。
今日はツイてない、なさ過ぎる。
一は心底そう思った。
「うわあッ」
「あっ、テメェ！」
さっきまで虚勢を張っていた男は、三森が別の男に気を取られている内に、どこかへ走り去ってしまった。
しかし、これで三森の目標が絞られる。
「イイから、そいつを放せ。マジで殺すぞ」
「やれよ、クソが」
一の首に刃物を当てたまま、男は視線を三森から動かさない。
一方の三森は、右手の指先から火炎を見え隠れさせている。
店の前に、数十と人が居るのに、辺りは嘘のように静まり返った。
一は冷やりとした刃の感触に腰を抜かしそうで、どうにか力を込めて地に足を付けるので精一杯だった。
――ソレよりかは、マシだろ。
もはや諦めに近い。とにかく一は自分に言い聞かせる。
「殺せよ、俺が死ぬ時は、このガキと一緒だけどな」
「はっ、やれよ」
言った傍から、三森の手から火花が上がる。
男がたじろいで、手元を狂わせてしまった。
刃物の切っ先が、一の皮を軽く切り裂いていく。
「やりやがったな！」

「あっ」
誰の口から漏れたかは知らないが、まさにあっという間。
あっと言う間に一の首からは血が流れ、三森の体からは赤が飛び出た。
燃え盛る周囲。逃げ去る人。
その隙に一が店内に飛び込む。
「三森さん！　早く中に！」
だが、一の声は届かない。
怒り狂ったかのように、炎が際限なく三森から溢れ出る。
「一！　裏に戻れ！」
店長がやっと姿を見せる。
流石に店長も焦っている様子だった。
「でも三森さんが！」
「……一、お前じゃどうする事もできない。そして私にもな」
「え？」

「オーバーヒートだ」

三森が、火に包まれたまま、地面に倒れこむ。
――オーバーヒート？　何だそれは、そんなのどうでも良いからあの人を助けてくれよ。俺を助けてくれた人なのに。何一つ出来ないのか。
一はそう言いたかった。
「ああなると、三森は手が付けられない」
「したり顔で！　助けようともしないんですか！」
「無理だ。アイツが死ぬまで誰も近寄れないさ」
今にも掴み掛かりそうな一を冷たく見つめ、店長は落ち着いた様子で煙草を銜える。
――死ぬまで。
一の中の、酷く深いところまで突き刺さる言葉。

それでいて、中々現実味を帯びない言葉。
流れ出る血もそのままに、一は店内に設置されている消火器を持って外に出た。
「そんなんじゃどうしようもないぞ！」
「だからって！」
今度は店長に羽交い絞めされる一。

――もう良いよ、気にすンなよ。
店長に取り押さえられている一の姿が、三森の目に入る。
視界は、三森自身の炎で陽炎の様に揺れていた。
三森が倒れこんだ道路の真ん中、アスファルトが熱で融け始めている。
既に人々は蜘蛛の子を散らす様に走り去っていた。
徐々に、三森の体温が上がっていく。
オーバーヒートの所為で、制御しきれなくなった炎が好き勝手に暴れ始めている。
自分の意識から離れた火は、自身をも焼却のターゲットとするべく、周囲に熱を撒き散らせながら、三森を襲う。
もう死ぬ。
三森は全てを諦め、目を瞑った。

「離して下さい、何もしないよりマシです」
「馬鹿！　良く見ろ地面を」
体を束縛されたまま、一は意識を三森から周辺に広げる。
「グズグズに融けてるだろうが、近寄ったら足ぐらい持ってかれるぞ。それでも行くのか？」
店長が一の体から手を離す。
自由になっても一は、その場から動けずにいた。

消火器を落として、嗚咽を漏らす。
「何も……出来ないんですか？」
一はしゃくり上げながらも、必死で言葉を紡いだ。
紡いだ言葉は、誰にも届かない。
何の意味も成さない。
店長は押し黙ったまま、火柱を上げる三森の体を見つめる。
赤色の炎から、徐々に灰色が混じってくる。
周りの物が煙を上げて燃えているらしい。
その時、遠くで悲鳴が聞こえた。
ハッとして、一がその方角へと頭を上げる。
法廷速度を軽々と超えた様なスピードで、一台の黒っぽいワゴン車が此方に向かってくるのが見えた。
逃げ惑う人々を気にせずに、むしろ轢きそうな勢いで走るそれ。
人々の悲鳴を連れて、荒っぽい運転をされた車が、店の手前に停まった。
「本部か……」
店長が呟く。
「本部？　応援、ですか？」
店長の返事を待たずに、その車の中から堀が現れた。
「お待たせしました！　状況は！？」
ノートパソコンを手に、堀が慌てた様子で一達に駆け寄って来る。
「悪いが、三森がオーバーヒートで死ぬぞ。それと一がナイフで首を切られた」
「……まあ、何となく。着いた時に嫌な予感はしてましたよ」
「俺はいいから、三森さんを！」
分かってます、と堀が眼鏡を人差し指で押し上げる。
ワゴン車から、新たに人が降りてきた。
一がその姿を見て、驚く。
「ナース……？」
「炉辺（ろばた）さんを連れてきました。彼女なら三森さんの応援には最適で

しょう」
炉辺、と呼ばれた看護服の女性が堀に続いて近づいてくる。
「お待たせ。そっちの子の傷は？」
親しげに炉辺が店長に語りかけてくる。
「多分、大した事ない」
店長が答えると、炉辺が一の傷口まで顔を近づける。
「うん、大丈夫そうね。はいっ」
と、明るく一の傷口を手で叩くと、次に三森の方へと歩いていく。
専門家っぽい人が言うなら、間違いないか。とも思ったが、自分で傷口を確認するべく、一が箇所に手を遣る。
掌には真新しい血が付いたが、不思議と、さっきまで熱を持って疼いていた傷跡がなくなっていた。
――そんな馬鹿な。
「……なんですか。神様ですか、あの人は？」
ああ、と店長が答えた。
「神様だよ」

炎が空気を燃やす。
アスファルトを融かして、周りのガードレールも小さく爆ぜる。
全てを焼き尽くす勢いで、炎が場を支配していく。
燃え盛る炎を気にもしない様子で、看護服に身を包んだ炉辺が歩いていく。
「久しぶりね、ふゆちゃん」
炉辺の問いに答えられず、目だけで意識があることを三森は示した。
「あれだけ言ったのに……。まだ自分の感情を制御できないのねー」
まるで三森の姉の様な、優しげな笑みを浮べて手を翳す。
「初期状態ね、まだ助かるわよ。気をしっかり持っててね」
やがて、炉辺の手から光が漏れ始める。

その人の性質を受け継いだような、白くて、優しい光。
三森を、地面を、ガードレールを、全てを光が包んでいく。
その光景を見ていた一達の視界が完全に白で塞がれる。
何だコレは、魔法？
自分の考えを馬鹿らしくも思ったが、一はそれ以外にこの状況が示す物を思いつく事が出来なかった。
「あ……」
一が声を漏らすと、さっきまで感じていた熱さが周囲から消えた。
「堀くーん、ふゆちゃん運ぶの手伝ってー」
炉辺が手を振っている。呼ばれた堀は苦笑しながら三森に駆け寄った。
軽々と抱え上げると、そのままワゴン車の後部座席に三森を乗せる。
炉辺は店長の近くまで行くと、やはり、優しそうに語りかけた。
「あのね、ふゆちゃんね、二、三日は休ませてあげて。一応、こっちで様子を見たいの」
「……仕方ないか。勤務外が抜けるのは痛いが、ま、ウチのを宜しく頼む」
煙を吐きながら、店長が毒気を抜かれた様に炉辺に返した。
「君も。今度からは気をつけてね」
項垂れていた一にそう言って、炉辺もワゴン車に乗り込む。
堀が運転席から店の方に頭を下げると、エンジン音が響く。
程無くして、行きとは打って変わった、ゆっくりとした速度で車が走り去っていた。
店長が吸殻を投げ捨てて、店に入っていく。
一は本当に、さっきから一歩も動けないでいた。
「おい、戻るぞ」
見かねた店長が声をかけるが、一は何の反応も示さなかった。
小さく舌打ちした後、一の肩に手をかけて、もう一度声をかける。
「俺、何も出来ないんですね」

消え入りそうな声が一から発せられた。
「泣いて、騒いで、ぼっとしてただけでした、俺」
困ったように、店長が頭を掻く。
あのな、と前置きして。
「それが普通なんだよ。お前はただの、普通な人間なんだ」
店長がそれだけ言って、バックヤードまで戻っていった。
さっきまでの喧騒が夢だったかのように、店の前はソレが現れる前の静けさを取り戻した。
人々が居なくなって、ソレがいなくなっても、一は店の外に座り込んだままだった。

赤の約束

『いいから、さっさと来い。もう三日も休みやがって！　本部（あいつら）に応援頼むのがどれだけ面倒な事か分かってんのか！』

電話越しから店長の怒声が聞こえてくる。

一は酷く面倒くさそうに返事をした。

『あのな。こないだの事がしんどいのは分かるけど、それでもバイトをサボっていい理由にはならないからな！　早く来い。三森も待ってるからな』

「え」

そして電話が切られる。

殺風景な部屋に置かれた電話を呆然と見つめる一。

オンリーワン北駒台店が釣瓶落とし出現の後、撃破してから三日経つ。

命を狙われ、救われ、何も出来なかった自分。

初めての経験ばかりで、一はショックを受け、三日引き篭った。

否、未だ引き篭っている。

――三森さんが居るって言っても、何を話せば良いんだよ。

命を救ってくれた事への感謝？　何も出来なかった事に対しての謝罪？

アレコレと思考を巡らすが、自身を職場へと奮い立たせる理由は一には見つからない。

出たとこ勝負はしない主義。

何か一つの行動に対しても、常に逃げ道を作ってから動いてきた一にとっては非常に悩ましい事態であった。

――それでも。

バイトを辞めるにしても、あの人にお礼だけは言いたい。

一つの思いを胸に秘め、一は生まれて初めて無策の勝負に出るべく、立ち上がった。

北駒台店に着いても、一の足は中々進まなかった。
いつも以上に重く感じられた扉を開く。
店内には相変わらず誰も居ない。
フロアにも埃が散らばっているし、フェイスも揃っていない。
一の足取りは重く、そして鈍かった。
それでも二つ目の、バックヤードへ通じる扉に手をかける。
――お礼を言って辞めれば良いんだ、猿にだって出来る。やってやる。
覚悟を決めて一は進んだ。
「お早うございます」
聞き慣れた舌打ちの後、早くねぇよと店長が奥から現れる。
いつも通りの煙草と服装、いつもどおりの顔。
尤も、店長の顔は不機嫌その物に染まっていたが。
「店長。怒ってます？」
「お前……私をこれ以上怒らせたいのか……」
煙草を指で挟んだまま、店長がそのままそれを圧し折った。
ビビるな俺、と自分に言い聞かせて、平静を装う一。
「あの、三森さんは？」
何も言わず、仮眠室を指差す店長。
一は歩いていって、そこのドアノブに手を置く。
一捻りすれば、仮眠室へと開かれる。
それが一には中々出来なかった。
「言いたい事があるならさっさとしろ。どうせ三森もお前が来たのは知ってるよ」
「分かってますよ」
深呼吸して捻る。
一が思っていたよりも、ずっと軽く扉は開いた。

仮眠室に一は今まで入った事が無かった。
と言うより、普通のコンビニにはそんな部屋なんてまず無いだろう。
仮眠室に備えられた三つのソファ。黒光りしていたソファが一の目には安っぽく映った。
ブラウン管型の小さいテレビ。テレビの配線は数あるゲーム機のケーブルに繋がっていて、テーブルにはトランプが散らばり、整列とは程遠い形で本が積まれた棚、ハンガーには適当に上着がかかっていて、仮眠用のベッドは隅に追いやられている。
ここで睡眠と言う休息を取るものは、果たしているのだろうか。
一にはとてもじゃないが、仮眠室とは名ばかりの物にしか思えなかった。
娯楽室と呼んでも差し支えないような部屋の、唯一の窓を開けて、三森が煙草を吹かしている。
――お礼を言わないと。
しかし一は扉の近くに立ち尽くしたまま。
頭が真っ白になって、シミュレートしていた言葉も、全て一の頭からは飛んでしまっていた。
三森も、一が入って来た事に気づいては居たが、お互い一言も口を利かないまま。
点けっ放しのテレビからは賑やかな笑い声が、痛いほど静かな部屋に流れ続けている。
沈黙は金、雄弁は銀。
「あのさ」
先に銀を取ったのは三森だった。
今まで何も言えずに俯いていた一が顔を上げる。
「あ、はい……」
しかし三森は、「あー」や「えー」と唸って、何を言うべきか迷っているらしい。

煙草を銜え、やがて決心したかの様に煙を外に吐き出した。
ごほン、と喉の調子を調えて。
「……あー、その、な。ありがとな」
と、三森はそれだけ言った。
後は、顔を窓の外に向け、一の方を見ないように努めている。
「何で、ですか？」
何で。
その台詞は。
その言葉は。
その「ありがとう」は。
「……俺が言うべきです。俺が言われる言葉じゃないんです……」
ソレからも、人間からも救ってもらった命。
俺が居た所為で、燃えるほど苦しんだのに、死ぬとも言われたのに。
なのに。一はそれ以上、もう何も言えない。
「私を助けてくれようとしたろ？」
一は確かに三森を助けようとした。
――助けようとはしたが、俺は何も出来ませんでした。
「あン時な、熱くて辛くてゲロ吐きそうでさ。周りはぼやけて何も見えなかったし、気分悪くて、もう何も聞きたくなかったんだけどよ」
三森は依然、窓の外を見つめたままで。
「お前がさ。消火器持って店長に怒鳴ってンの、見えてたし聞こえてた」
「……でも、俺に出来たのは、それだけです……」
外をぼんやりと眺めていた三森の瞳が、一の瞳を真っ直ぐに見据える。
「それだけで良かった、嬉しかったンだよ。だから、ありがとな」
瞬間、一の何かが音を立てて壊れた。
ああ、この人のこんな表情は初めて見る。

何だよ、出たとこ勝負も良いもんじゃないか。
心配する事なんて無かったのか、な。
自分の事なんてどうでも良くなってきた。
一の悩みを吹き飛ばす程に、三森の笑顔は嬉しそうで、楽しそうで、眩しかった。

「言いたい事は言ったんだろ？　なら掃除でもして来い」
店長が仮眠室から出てきた一を睨みつけながら、モップを突きつけてそう言った。
「あ、でも俺三日も無断で休んだし……」
一は言いよどむ。
「……休んだし、あんな目に遭うのは嫌だから。辞める、か？」
一の脈が速くなる。
「あー。やっぱ分かりますか？　俺の言いたい事」
「今までお前みたいな奴は何人もいたからな」
「なら、俺もやっぱり辞めたいです」
「駄目だ」
バックルームに、先程の仮眠室の二人とは違う種類の沈黙。
お互いの意見だけを、何も考えずにぶつけ合う。
見えない糸が部屋中にピンと張られている感覚。
一も、店長も、そこから何も話せず動かない。
いや、話そうともせず、動こうともしないのだろうか。
アクションを起こせば、その糸で自身が縛れそうで、絡まりそうだからだろうか。
「なら理由を言えよ」
そんな物関係無いとでも言うかのように、三森が糸を無理矢理引き裂きながらやって来た。
張り詰めた空気を読んでいないのか、読んだ上での行動なのだろうか。

とにかく赤い女が蛮勇を奮って飛び込んできた。
一は三森に気圧されながらも、唾を飲み込んで喉を潤す。
「そ、その、俺じゃ、この店の役に立てないからです。……怖いからってのも有りますけど」
一が躊躇いながらも、何とかそれだけ口にした。
静まる場。
「あのなあ、一。……何か勘違いしてるだろ。お前は充分役に立ってるぞ」
やがて店長が呆れ顔で口を開く。
「でも、俺……」
「お前は一般だろが、勤務外の仕事にまで気を回すんじゃない。それとも、あの時の自分が情けなくて気に入らなかったか？　格好悪い自分をもう見られたくないのか？」
一気に捲くし立てる店長に、一は反論したかった。
が、言う事全てが一々当て嵌まってもいた。
故に一は情けなくも、黙る。
馬鹿ヤロウと、三森が一に追い討ちをかける様に迫った。
「オイ、イイか？　お前がビビるような思いは二度とさせねェ。私が全部何とかしてやる」
だから辞めンな、と三森が付け足した。
「え？」
一は三森に何を言われたのか分からない。
クッ、と店長が笑いを噛み殺す。
「良かったな、一。三森がここまで言ってくれるなんて、私も思ってもみなかったぞ。いや、全く」
「……はい？」
「オイ勘違いすンなよ！　別に深い意味は何も無ェんだからな！」
堪え切れずに店長が笑う。
――クソ、何だよこの人たちはよ。チクショウ。
「三森、照れてるのか？　顔が赤いぞ？」

「うるせェな！　顔が赤いのは元からだよ！」
――これがバイトって呼べるかよ。あー、でも。
一が深々と頭を下げる。
「……もう辞めるとか言いません。スイマセンでした」
「分かれば良いんだよ、お前は立派なウチの戦力なんだからな」
店長が美味そうに煙草の煙を吸い込む。
「人には向き不向きがあンだ。私は勤務外、お前は中」
三森が顔を赤くしながら、一から顔を逸らす。
――糞が付くほどしんどいけど、もう少しここで頑張ろう。
「良し。分かったなら掃除して来い、二日分の汚れがお前を待ってる」
灰を床に零しながら店長が扉を指差し、一にモップを再度突き出した。
一は躊躇いながらも、モップを受け取る。モップの形をした『何か』を受け取る。
さあ、働け若人。

かまいたちは夜に出る

「寒いなあ」
「まだ十一月だぜ」
「いや、もう十一月、じゃないか？」
「そうかあ？」
薄暗くて薄ら寒い夜道を、作業服を着た男二人が談笑しながら歩いている。
男たちは駒台の工事現場からの帰りだろうか。
突然、強風が吹き出す。
うわっ、と男たちから声が上がる。
突風が過ぎ去ると、道の左側を歩いていた男が転んだ。
「あ？　おいっ」
「あれ？」
立っていた男が声をかける。
意識はある様だが、何故か立ち上がることが出来ない。
仕方なく、倒れた男に肩を貸す、もう一人の男。
「おい、寄り掛かりすぎだぞ」
「あ、ああ。悪い……」
謝るが、どうやっても右に重心が傾いてしまう。
男はどうしても左足に力が入らないようだ。
「おい、本当にどうしたってんだよ？」
分からない、と首を振る倒れた男。
その時、ふと、後ろを振り向いた男が情けなく、短く声を上げた。
「何だよ？」
「お前、足……」
暗くて見え辛いが、男たちが目を凝らす。
すると確かに、後方に足らしき物体が落ちているのが確認できた。
そして、視線を倒れた男にずらしていき、再び声が上がる。

「あ、俺の足」
倒れた男の左足が無かった。
ズボンの生地ごと、脛辺りから下の部分が付いていなかった。
にも関わらず、傷口からは血も出ていなかったし、男は痛みすら感じていない。
だが、間違いなく男の足は失われていた。
痛みが全く無い事や、血が一滴すら流れ出ていないためか、青褪めてはいたが、冷静な様子の男。
むしろ五体満足の方の男が取り乱している。
「まだ間に合うかもしれないから！　足取ってきて氷で冷やすぞ、お前はそこで救急車呼んどけっ」
そう言って男が駆け出す。
残された男が座り込んで、携帯電話を取り出す。
そうか、俺の足取れたのか。
意外にもこういうもんなのか。
男は酷く落ち着いている。
やがて、コール音が聞こえると同時、男が持っていたタオルに足だったものを包んで戻ってきた。
「電話は！？」
「今掛けてる」
少し安心した男の手から力が抜け、包まれていたモノが地面に落ちる。
――あ、これ、俺の足？
『災害庁。火事ですか、救急ですか、ソレですか』
「あ、あ、あああああ！」
『は！？　もしもし！？　もしもし！？』
「おい！　どうしたんだよっ」
「俺のっ俺のっあしがあっ！　いてぇえぇえ！」
男の左足の欠けた所から血が噴出す。
歪んだ表情からは、やっと男に痛覚が戻ってきた事が窺い知れる。

火事、救急、ソレに対応する災害庁へ一本の連絡が入ってから数分。電話が途切れるまで数分。
その間、男の苦悶に満ちた叫び声が途切れる事は無かった。

オンリーワン北駒台店。
駒台の住宅街の、ほぼ真ん中に位置するコンビニ。
パンドラ事件と呼ばれる出来事が地球に起きてから数年。
世界に災厄を撒き散らすべく、むしろ自体が災厄である「ソレ」が現れてから数年。
政府は法を曲げ、作り、変え、ソレに立ち向かうべく様々な策を立てた。
そして今も新たな希望は生み出されている。
事件は収まりつつあるが、未だ世界各地で散発的に現れ、人類に害を与えるソレ。
ソレという人外を殺す為、世界各地に人外を派遣して対処させるのがその希望の内の一つ。
通常業務時間外店員、勤務外と呼ばれる人材を派遣させる勤務外サービスを生み出したオンリーワン。
何故、一コンビニチェーンであったオンリーワンがこのようなサービスを思いつき、更にそれを採用されたのかも詳しく分かってはいない。
今や、地球上のどこにあってもおかしくないコンビニという気安さ、フットワークの軽さ等理由は多々思いつくが、答えではない。
答えが無くとも、ソレに一方的に怯えるだけの力の無い人間にとっては、救いのあるシステムである。
そしてまた、別の点でも救われる。
人間というのは、しっかりとした足場が無いと上手く立てないものだ。
自分より体力で、学力で、容姿で、様々な角度から弱い人間を探

し出し、自分より低い立場にいる者を見つけて、やっと人は安心できる。
安心しては行動を起こし、徒党をなして弱者に襲い掛かる種類の生き物。
そうしなければ人間は生きていけないものだ。
ソレが出てからは状況が変わったが。
状況が変われば、状況を変えるのも人間の知恵。
今度は誰を貶めて虐めればいい？

オンリーワン北駒台店。
駒台の住宅街の、ほぼ真ん中に位置する勤務外サービスを導入された唯一のコンビニ。
アルバイトは、コンビニの仕事のみをこなす一般と、ソレにも対処しなければならない勤務外に分けられる。
勤務外店員はソレと場合によっては戦闘を行い、命も危険に晒されるので、アルバイトとしては破格の待遇を受ける事が出来る。
まず、時給。同じ時間働けば、通常のコンビニの時給よりも良いと言われるオンリーワンの一般からですら、二、三倍近く月給に差が出るといわれ、一般業務をしなくても、オンリーワンの各店舗に用意されているであろう仮眠室などで惰眠を貪っていようが何をしようが給料は出る。
また、自分が属している店の商品は全て無料で獲得でき、ソレが現れ、対処する勤務中では勤務外が仕事の邪魔と判断さえすれば、器物の損壊、全く関係無い人への殺傷行為、その他の行為も不問となる。
他にも多数の恩恵を勤務外は受けているが、良い事尽くめという訳では無い。
デメリットは大まかに二つ。
一つは、ソレの対処。ソレ出現後は、如何なる行動を取っても良

いが、大抵はソレとの戦闘になる。
命の奪い合いの果て、勤務中に死んでしまう者も多い。
そしてもう一つは、同じ人間から迫害に近い扱いを受ける事である。
弱い人間が集団で襲い掛かるのが、人外。普通とは一線を画したモノを持った強い勤務外に他ならない。
だからと言って、むやみやたらに弱い者を手に掛ける事も、勤務外と言えど普通は出来ない。
ソレと命を掛けて戦い、守るべき人々には疎まれる。
一体、今の世の中でどうすれば、どんな人間が幸せになれるのか？
混迷を極めた地球上で、それを知っているものはいない。

「おはようございまーす」
今、その店のバックヤードで挨拶をしたのが一般のアルバイト店員である、一一（にのまえはじめ）。
先日、北駒台店に採用された新人。
新人とは言っても、オンリーワンに来るまでは他のコンビニで働いており、一般としては『使える』部類に入る人材である。
「おはよう」
誰かがバックヤードのパソコンと睨めっこしながら煙草を吸っている。
短く切った黒髪が似合う、吊り目のきつそうな印象を受ける女性だ。
何を隠そう、この人物こそ北駒台店を取り仕切る女店長である。
「三森さんは？」
「何だ？　やっぱり気になるのか？」
違いますよ、と詰らなさそうに返す一。
「アイツは夕方からだよ。それまでは一人でレジでも打っといてくれ」

「っていうか、レジ打つのはいつも俺ですけどね」
ジャージから制服に着替えながら一が不満げに言う。
「だって、面接希望の電話ですら掛かってこないんだぞ？」
知るかよ。
一般が一人。勤務外が一人。社員が一人。店長が一人。
このままでは合計四名で二十四時間を三百六十五日回さなければならない状況。
一は溜息。
「なら誰か紹介してくれ。面接だけで採用してやるよ」
「残念ですけど、俺にそういう知り合いは居ませんよ」
既に短くなった煙草を、中身の少ないジュースの缶に放り込む店長。
消えかかっていた火が弾ける様に消える音。
「一、ここに来てからどれ位経つんだ？」
思案。
「一年ちょっとですね」
「一人ぐらい居るだろ……？」
居ません、と念を押す一。
「そういえばお前、携帯持ってないんだったな」
「それが何か？」
いや、と店長が一の目を見ないで返す。
「友達居なくて悪かったですね」
「別に悪くないさ。そもそも、私は友達なんて言ってないぞ」
ダスタークロスとモップを手に取り、一がそうですか、とバックヤードから立ち去る。
店長が新たに煙草を取り出し、火を点ける。
「……悪くないさ」
床掃除を済ませ、商品の補充やフェイスアップでとりあえずの体

裁を整えると、一は裏から肉まんの袋を持ってきた。
今日は寒いから、いつもよりは売れるだろ。
スチーマーに肉まんを仕込んでいく一。
「おっ、肉まん。一個貰うぜ」
金髪の小柄な、赤のジャージを来た女性が当たり前の様に店の商品を掴み取る。
「おはようございます三森（みつもり）さん。つうか肉まんは、出来てないですよ」
いいよ、と言いながら、三森はカウンターの中に入ってきて、棚から芥子を一袋摘んだ。
出来てないんですけど。
そのまま中へ消えていく三森の後ろ姿を見届ける一。
――意味分からねぇ。
客も居ないので、掃除用具を片付けにバックヤードへと入る一。
ふわりと、鼻を擽る香りが漂う。
一が不思議に思いながら、辺りを見回す。
三森が、どう見ても出来立てといった肉まんを美味しそうに頬張っていた。
「え？　何で？」
口に肉まんを入れたまま、人差し指を振って、三森が一を呼び寄せる。
何ですか、と一が開けた口に煙草を押し込まれた。
手を広げて、動くな、と合図している三森。
三森が右手の親指と人差し指を指の腹で擦り合わせると、そこから空気が燃える音とともに、小さな火柱が上がる。
は？　と面食らう一に、口の中の物を飲み下した三森が吸え、と言う。
仕方なく、煙草を銜えなおし、三森の指に顔を近づけていく。
火に煙草の先を浸すと、一がいつも吸っているように何の苦も無く、バックヤードに紫の煙が立ち込めた。

「分かったか？」
「え？　ああ、そういう事ですか」
一が釣瓶落としに襲われた時の事を思い出す。
あの時助けに来た勤務外、三森の姿を。
赤い炎に身を包み、熱い炎でソレを焼き尽くす三森。
思い出しすぎて吐きそうになったが、一は何とか堪えた。
今の様に三森は、ライター代わりに小さな火柱を上げる事も出来れば、カチカチに冷えた肉まんに火を通せるぐらいの高熱も自在に操れるのだろう。
なるほど、納得する一。
「便利だろ？」
そう言って、三森は笑う。
一は煙を吐きながら、改めて勤務外と言うのはどのような人間かを思い知った。
「何やってんだ、とっとと仕事に戻れっ」
店長の檄がサボっていた一に飛んだ。

店内で働く一。
仮眠室でだらける三森。
パソコンと睨めっこする店長。
オンリーワン北駒台店にいつもと同じ時間が流れる。
そして、その平和とも言える静寂を破るのは、電話のコール音。
ややあって、店長が電話に出る。
「毎度。オンリーワン北駒台店です」
『……。二ノ美屋さん、ソレが出ました』
またか、店長は煙草を灰皿に押し付けて、煙をだるそうに吐き出す。
「数と種類と場所は？」
『場所は駒台二丁目の住宅地、工事現場近辺です。それ以外は分か

っていません』
「分からない？　情報部は何やってんだ」
面目ないです、と、申し訳無さそうにオペレーターが弁解した。
『目撃者の話では、強い風が吹いた、とだけ。犠牲者はその目撃者の友人で、工事現場からの帰りだったそうです。昨晩、連絡が来て調査しましたが、ソレらしい物は……』
「無かった、と。そんな物どうすればいいんだ、ウチが現場まで出向くってのか？」
『ええ、まさにそうです。それじゃお願いしますね』
そう言って、電話が切れる。
――どうしろってんだ。
店長が受話器を力いっぱいに叩き付ける。
「出たンすか？」
その音を聞きつけ、仮眠室から三森がやって来る。
「ああ、しかも全くのノーデータだ」
「はあ？　私はどうすりゃいいンだよ？」
うーん、と唸る店長。
「お疲れ様でーす」
「ああ、お疲れ」
唸る店長を尻目に、悠々と一がバックヤードへと帰ってきた。
既に、今日の夕方シフトが終わる時間になっていたらしい。
一がパソコンで退勤の処理を済まし、制服からジャージに着替える。
「それじゃ俺帰りますね。んで、次はいつ来れば良いんですか？」
「朝から」
「学校あるから無理です。それと、いくら人が居ないからってシフト表ぐらいどうにかして下さいよ。後、ポリッシャーも支部に頼んどいて下さい。ポリッシャーが無いなんて有り得ないですよ。それから肉まんの発注は多めにお願いしますね、最近売れ行きが良いんで、在庫切らさないで下さいよ」

頭を抱えながら、店長がうるさいっと怒鳴った。
「何で店長怒ってるんですか？」
「正体不明のソレが出たんだってよ、そンでさ」
三森が答える。
店長が苛立ちながら、三森の言葉を遮るべく口を挟んだ。
「おい、一般に余計な事言うな」
「……別に良いですけどね。それじゃお先に失礼します」
バックヤードから一が出て行くと、店長はまた頭を抱える。
三森は正直、この場をどうしていいか分からずに煙草を吸い始めた。
「あ、そうだ。三森、一と一緒に帰れ」
「ハア！？　何で！」
一の履歴書をファイルから取り出して、その住所を指差す。
「一の家はソレが出たって場所の近くだ。……前みたいな事があっても困るからな。調査の序にボディーガードでもしてやれ」
「だから、何で私が」
「アイツは私が守るって言ってただろ？」
口元を弛ませながら、店長がおかしそうに言った。
「ンな事言ってねェよ」
「まあ、それはどうでも良いとして。仕事だ、行け」
三森の舌打ちが聞こえた後、バックヤードにけたたましい音が響いた。

暗くなりかかっている道に影が二つ伸びている。
「ああ、そういう事だったんですか」
「そうだよ」
一は後を追ってきた三森と合流し、事情を聞かされた。
説明していた三森の顔が、何故か赤かった事に一は、またこの人怒ってる、と少し怯えていたが。

「にしても。俺んちの近くにソレが出たんなら、店長教えてくれても良かったのに……」
「しゃあねェだろ、お前は一般だから。あの人もそういう事は言い辛いンだよ」
そこから会話が途切れる。
少し歩くと、件の工事現場が見えてきた。
今の時間ならまだ工事の音が聞こえてきても良さそうなのだが、どうやら作業員達が仕事を早く切り上げたらしい。
人の気配は周囲に全くと言って良いほど無かった。
「あ、この辺で出たんですよね」
一の体が硬くなる。
先日のソレをどうしても思い出してしまう。
「つっても、正体が分からないンじゃ話にもならねェよ」
薄暗い夜道に街灯の光が差さる。
一と二人で歩いていた事に、気まずさを感じていた三森の背中に悪寒が走った。
突然の遭遇？
確証も何も無かったが、勤務外として、人外としての勘で三森は一を道の端っこに蹴りやってから。
「伏せろっ」
と叫んだ。
一は何が起こったかも分からずに、その場に蹲った。
風が木の葉を引き連れて奔ってくる。
音でそうだ、と分かる程の強い風。
それが三森に襲い掛かる。
目を瞑りそうになりながらも、三森はその正体を見極めるべく、堪える。
――当たりかよっ。
いきなりのターゲットとの遭遇に焦ったが、三森も勤務外だ。
心を落ち着かせて、風が奔る一瞬の内に炎を身に纏わせた。

しかしソレは、炎を三森の左肩ごと切り裂いてまた奔り去る。
一が目を開けると、血を流している三森の姿が映った。
風らしき物はそこに居ない。
「三森さん！」
「そのままそこでジッとしてろっ、アレはまた来るぞ！」
その言葉どおり、先程とは反対側から風の音。
距離は若干離れてはいるが、三森との邂逅まで数秒もかからないだろう。
三森はソレを確認するべく、目を凝らした。
本当に風なら目に見えない筈だが、遠くの枯葉が不自然に宙で舞っている。
葉の中から、一瞬だがソレの姿が見えた。
小動物の様な姿。
その手には鈍く輝く刃物。
「三匹か！」
向かってくるソレは一列に隊列を成す。
生半可な炎では自分の体ごと切り裂くだろう。
そう判断した三森は右手に意識を集中させる。
体に火を纏わせたのでは、広い範囲をカバーできるが威力は落ちる。
その逆、右手のみに火を集中させて威力を高めるのだ。
そして邂逅。
突っ込んできた先頭のソレを、三森の右手が捉える。
三森の炎で周りの物が燃え出した。
その光に照らされ、動きを止められたソレの姿が露になる。
細長く、しなやかな胴体。
短い四肢。
丸く小さな耳に、尖った鼻を持つ顔。
「イタチ？」
一が呟く。

昔読んだ動物図鑑のページを一は思い出す。
だが、そこに載っていたイタチと呼ばれる物より、随分とソレは大きかった。
空中に浮いたまま、炎で体を焼かれながらも、ソレは前進を図り続ける。
だが、やがてソレは短くて高い、獣特有の悲鳴を上げると灰に姿を変えた。
――まず一匹。
直ぐにソレらは軌道を変え、上空に逃げるように飛び去る。
三森が標的を変えるべく、後ろのソレにも手を伸ばす。
が、後少しというところで届かない。
ソレの手には鈍く輝く鎌。
先頭のソレは空手だったのか、どうやら二匹目のみ武器を持っているらしい。
「何処行きやがった！」
一は上へ逃げ去るソレを目撃したが、距離の近かった三森には何が起こったか分からない。
ソレは上昇を止め、二匹目が鎌を構えなおし、落下。風の行く先は三森。
「上です！」
ソレの攻撃より、声を掛けた一が少し遅れた。
獣ではなく、人間の短い悲鳴が聞こえる。
赤い飛沫が風で舞い上がる。
「三森さん！？」
「心配ねェよ！」
上がった飛沫は真っ赤な炎と肩口からの血液。
出血量自体は大した物では無いが、ダメージを受けた三森の意識が乱れる。
さっきまで一定の大きさを保っていた三森の、右手の炎が風で揺らぐ。

――集中できねェ！

三森の右手が、ソレの鎌を掴んではいるが、掴んでいるだけ。

一匹目と違い、鎌を盾に三森の右手を掻き切ろうと遮二無二突っ込む二匹目。

三森はソレの勢いに押されつつあった。

応援を呼ぶ携帯電話も所持していない、ソレに対抗する力も持っていない。

一はあまりの不甲斐無さに、三森に掛ける言葉すら思いつかず、声も出なかった。

黙ってその場に突っ立って、見ている事しか出来ない。

人通りの全く無い住宅街。

作業員がここでソレに襲われた、その情報が流れてからは、家から誰も出ようとしない。

そもそも人が居るかどうかですら怪しいぐらいだ。

その道のど真ん中で三森が血を流しながら、ソレと戦闘に入っている。

三森は右手のみに炎を集中させようとするが、傷口に走る痛みで集中できずに形が安定しない。

イタチに似たソレは、両手に持った短い鎌で三森を掻っ切るべく、襲い掛かる炎に焼かれる事も構わず、前進を止めようとしない。

何とか三森が抑えているが、それも紙一重と言った所だろう。

先程から黙って見ている一だったが、ある事に気付いた。

――何で三匹目はジッとしているんだ？

一人と一匹の膠着状態を打開するには、第三者の介入が必要になる。

――何で仲間を助けようとしないんだ？

その第三者は鎌を持った二匹目の後ろで、まるでその背に隠れる様にして大人しくしていた。

三匹目も一匹目と同じく、何も持っていない。
そして二匹目は三森に全ての意識を注いでいる様だ。
今ならアイツの意識を反らせるかもしれない。
でも、出来るのか？　体は動くか？　化け物に立ち向かえるか？
言い知れぬ不安が一の足を止める。
ソレとは違う、一際強い風が一の体を撫でる様に吹き去っていった。
体中から吹き出る冷汗が更に冷える。
転がってきた木の枝が、一の近くで止まった。
どっちにしろ、このままじゃ二人とも死ぬ。
鎌を持った人外相手には、頼りの無い不安定な武器。
木の枝をしっかりと掴んで、一が目標とするソレを確認する。
掌には汗が、背中には冷や汗が、頭には恐怖が浮かぶ。
――でもやるしかない……！

――いい加減にしろよッ！
三森が力任せにソレを押す。
が、炎が上手く右手から出ずに刃先を素手で掴む羽目になる。
右手からは炎ではない赤い物が流れ出る。
鎌の大部分は熱によって溶かされていたが、まともに斬られれば致命傷になりかねない。
野生の獣の一番恐ろしい所は無知な所だ。
獣はマナーも知らないし、言葉も話せない。
皆、本能のみで行動する。
食べたいから食べる、寝たいから寝る。
殺したいから殺す。
獣は自身が、いくら傷を負えば死ぬか分からない、故に止まらない。
死ぬまで相手と闘い続ける。

三森は自分のある程度の限界を知っている。
知らない獣と知っている人間。
差が出るのはまさにそこだった。
「――っ！」
じわじわと三森の体が押され始める。
ソレが鎌を持つ手に力を込めた。

三森がソレに、ソレが三森に気を取られている隙に事が動く。
それは奇跡か、偶然か。
誰にも邪魔される事無く、気付かれる事も無く。
一の握った木の枝が、三匹目のソレの頭に叩きつけられた。
弱弱しい声を上げ、そのまま三匹目のソレがバランスを崩し、地面に落ちる。
仲間の声に、二匹目が思わず振り返る。
仇を討つべくソレの鎌が、奇襲の成功に喜ぶ間もなく一に襲い掛かった。
何も考えずに、咄嗟に一はしゃがみ込む。
鎌が空を切り裂いて行き場を失う。
――熱い。
一がそう感じるのと同時に、ソレの鎌が、握っていた部分と一緒に音も立てずに消えてなくなった。
黒い灰が風に流される。
一は身の危険を感じ、その場から距離を取る。
両の手を失った獣が聞き苦しい声で叫んだ。
「消えろッ」
暗い夜道が明るくなる。
街灯の様な、小さい光の所為ではない。
散らばっていた真っ赤な炎が三森の両手に集束していく。
獣の叫びを掻き消す様に、炎が酸素ごとソレを呑み込む。

右手にソレを、左手にソレを握った三森が力を込めた。
一瞬の静寂の後、爆発音とともにソレは跡形も無くなる。
握った拳を開いて、三森がその場に立ち尽くした。
不自然な炎の明かりが消え、元の暗さが住宅街に戻る。
一は前回の釣瓶落としと同様、火に魅せられていた。
「……あ、その三森、さん……」
動こうとしない三森に一が話しかけるが、反応は一向に帰ってこなかった。

オンリーワンの職場の事情

太陽が、雲一つない空の真上に位置している。
本格的な寒さがやって来る前の、和やかな暖かさが駒台に広がっていた。
和やかな街、和やかな人。

「ソレと戦ったのは、み……この人です」
右の頬を真っ赤に晴らした一が、三森を一瞥してからハッキリと言った。
この人、と呼ばれた三森の眉が吊り上がる。
「……じゃ三森、どんな奴だったか教えてくれ。情報部がデータ欲しがってるんだ」
煙草を銜えた店長が、三森の方を見ながら言った。
「コイツの方が知ってンじゃないですか？　ずっと後ろで見てやがったから」
三森が一を横目で見ながら皮肉っぽく言う。
昨晩のソレとの戦いから一夜明けた今日。
店長が新種のソレのデータを情報部に送る為に、ソレと遭遇した二人を呼び出したのだが。
「あのな、お前ら……さっきから何なんだ？」
少し間を置いてから。
「別に」「何でもねェよ」
ソレと遭遇した二人が同時に呟いた。
何故か二人とも機嫌が悪い。
「まあ、話だけ聞いてりゃ鎌鼬（かまいたち）っぽいけどな」
「かまいたち、ですか？」

一が興味有り気に店長に尋ねる。
「ああ、早い話がイタチの化け物だ。三匹で行動して人を襲うアレだよ」
アレ、と言われても。
昨日のソレは、実物よりかは大きかったが、確かにイタチに似て三匹で行動していた。
一が昨晩を思い出してみる。
「あれ、でも、一番後ろの奴は何もして来なかったんですけど？」
「確か三匹目は、斬ったヤツの傷口に薬を塗って行くんだよ。だから鎌鼬に体を切られても痛みを感じないで居られるって訳だ」
「……私は切られても痛かったけどな」
舌打ちする三森。
そりゃ良かったですね、心の中で三森に相槌を打つ一。
「とりあえずだな、今日は堀が来るからお前らはもう帰って良いぞ」
「えっ？　店どうするんですか？」
知るか、と店長が煙を吐き出した後。
「堀が何とかする」と付け加えた。
じゃあな、と手を振る店長。
「店長、私の装備は？」
「ああ、忘れてた」
装備？
現実世界では、余り聞き慣れない単語に一が不思議に思う。
「今すぐにでも必要だよなあ、じゃあ支部まで取りに行って来てくれ」
「ハァ！？　嫌だよ面倒くせェな！」
「なら仕方ないな、当分は大人しくしてろ」
店長が我関せずといった感じで、食い下がる三森をあしらう。
「ソレが出たらどうしろってンだよ」
「そんときゃ堀が支部から無理矢理にでも持って来るだろ。どっちにしろ、もう堀こっちに向かってるらしいから、今欲しいなら自分

で取りに行け」
「分かったよ、取ってくるよ！」
三森が店長に怒鳴りつける様に声を荒げた。
そして出て行こうとする三森と、さっきから蚊帳の外だった一の目が合う。
「そうだ、お前ちょっと行って来い」
意味が分からない、と一が視線を外して言った。
無理矢理に、一の外した視線の先に入り込んで三森が続ける。
「昨日の借りを返すと思って。私の装備を取りに行けって言ってンだ」
「何で俺が。しかも俺はあなたに借りなんて作ってません」
再び睨み合う二人。
その様子を見ていた店長が提案。
「じゃ、二人で行って来い」
何で、と声を揃える二人。
「三森は装備を取りに、一は見学って事で良いだろうが」
「コイツと行くなら死ンだ方がマシだ！」
「え？　死んでくれるんですか？」
テメェ、と三森が一に掴み掛かった。
店長が止めようかどうか迷っていたその時、扉が開く。
「お早うございます。あれ？　何してるんですか？」
何も知らない堀がやって来た。

バックヤードが和やかな雰囲気に変わる。
まるで、外の暖かさをそのまま連れて来たかの様な空気。
「やっと静かになったか」
店長が缶コーヒーの蓋を開ける。
「賑やかで良かったじゃないですか」
堀がファイルの中から書類を取り出しつつ、にこやかに語り掛け

る。
「お前はたまに来るから良いかもしれないけどな、私はずっとコレだぞ」
「はは、それもそうですね。……あれ、そういえば。そもそも三森さんがうるさかった事ってありましたっけ？」
「……いや、無い……よな」
「彼女も長いですよね、私より先に北駒台店（ここ）に居ますから」
ああ、と店長が答える。
堀がオンリーワン北駒台店にＳＶとして来たのは、店がオープンしてから半年ほど経ってからだった。
つまり、三森はそれより長くこの店に勤務外として働いている事になる。
「残ってるのはアイツだけだからな」
店長が、空きの多いロッカーを見ながらそう言った。
「……失礼ですけど、三森さんってあんな顔できるんですね。彼女の楽しそうな顔を見るのは初めてでしたよ」
堀が書類から目を離して言った。
「楽しそうかあ？」
「ええ、楽しそうでした」
「……そうか、そうだな」
ややあってから、私もだよ、と店長が付け足す様に呟く。
そこからバックヤードには会話が無くなった。
店長と堀。
お互い黙ってはいるが、決して気まずくは無い空気。
そしてお互い、赤いジャージを見事に着こなす女性の様子を思い出していた。

「……お前ってさ、バイクの免許も持ってねェのな」
「……三森さんって、いつもそのジャージですよね」

平日の昼下がり。
人通りの少ない道を、一と三森が少し距離を空けて歩いている。
目的地はオンリーワンの近畿支部。
この辺りのオンリーワンの支店を統括、管理する場所。
目的の物は三森の装備だ。
「あ、ジャージ破れてますよ。着替えなかったんですか？」
「お前髪の毛はねてンぞ。少しはそういうトコ気にしろよ」
歩いてから十分は経っただろうか。
その間、お互いに口から出るのは互いの悪口のみ。
一としては、支部に何の用も無いのだが、三森と店長の圧力によって半ば強制的に同行させられている。
行きたくない所に、好きでもない人と一緒に行く。
三森も店長の圧力により、連れて行きたくも無い人間と一緒に行動している。
ふと、昨日自分が一を殴った事を思い出す。
何故急に手が出たのか、三森本人にも分からない行動。
ソレを倒した後、駆け寄って来た一の頬を、拳を作って殴った事を思い出す。
――何でだろな。
理由が分からぬまま、三森は考えるのを止めて歩く。
――何で俺を殴った女と一緒に歩かないといけないんだ。
一が昨日、三森に殴られた事を思い出す。
何故急に殴られたのか、一には全く理解の出来ない行動。
ソレが消えた後、立ったままの三森に駆け寄ると、思い切りグーで殴られた事を思い出す。
答えが分からぬまま、一は考えないようにして歩く。
二人が煙草に手を伸ばすタイミングは殆ど同時だった。

オンリーワン近畿支部。

世界に幾つかある、支部の内の一つ。
ちなみに、堀もこの支部の社員として属している事になる。
北駒台店からは、徒歩で十五から二十分の距離。
外からは、何階建てになるか分からないぐらいの巨大なビル。
駒台の街でも有数の高さを誇る建物だ。
「じゃ私は行くからな」
「俺はどうするんですか？」
歩き掛けた三森の足が止まる。
「一人が嫌なら付いてくりゃ良いだろ、私に聞くんじゃねェよ」
そう言って、正面玄関に向かっていく。
仕方なく、一も三森の後を追った。
建物の中に入ると、一の目には広いホールらしき空間が飛び込んだ。
真っ直ぐ行くと、エレベーターが三基ほど設置されている。
三森は目眩がするほどのだだっ広いホールを通り過ぎて、エレベーターに向かう。
一も小走りで更に後を追う。
「遅いンだよ、早く来い」
「スミマセン」
三森がボタンを押すと、暫くしてから扉が開いた。
乗り込んで、地下三階のボタンを押す三森。
――地下？
一は少し気になったが、さっきから自分たちの格好が、何だかこの高級そうなビルには似合わない気がして、気疲れし始めていたのもあって押し黙っていた。
数秒、殆ど密閉された空間で過ごすと、再び扉が開く。
エレベーターから降りた先は薄暗く、照明の行き届いていないフロアだった。
――上はあんなに明るいのに。
一が不審に思っていると、奥からつなぎを着た男性がやって来た。

一と同じか、若しくは小さい体だ。
「何か御用でしょうか？」
「北駒台店の三森だけどさ、火鼠（ひねずみ）ってまだ残ってる？」
三森が一の耳には聞き慣れない単語を口にすると、男が待ってて下さい、と言ってまた奥に引っ込んでいった。
ふぅ、と三森が安心したように息を吐いた。
「あの、ここは一体……」
「オンリーワンの技術部だよ、ソレとやり合うモン作ってンだ」
「ああ、装備ってここで貰うんですね」
一が成る程と、納得する。
「装備が貰えるのは、私らだけだぞ」
「……別に俺は欲しくないですけどね」
だろうな、と三森が呟く。
「お待たせしました」
男がビニールで包装された服らしき物を持って現れた。
三森がそれを受け取る。
中身は上下揃った、赤いジャージ。
「後どれくらい残ってる？」
「在庫はそれで御終いですね、次に入るのは一週間後と聞いてますが」
そっか、と頷くと三森が礼を言って踵を返す。
男が奥に戻っていくのを見届け、一もまた三森を追いかける。
エレベーターの『開』ボタンを押すと、扉は直ぐに開いた。
二人して中に入る。
ゴウン、と二人を乗せた箱が動き出す。

支部から二人が出ると、陽が少し傾いていた。
三森が左手に抱えている物を見て、一が口を開ける。
「それが装備ですか？」

ああ、と煙草に火を点けながら三森が答えた。
装備。
一の目には、今、三森が着ている赤いジャージと同じ様に見える気がしたが。
「ジャージ、ですよね」
分かり切った事を一が尋ねると。
ああ、と煙を吐きながら三森が答える。
「今、着てるヤツと……」
「おンなじだよ」
「何か、凄い効果とかあるんですか？」
「……お前には関係ねェだろ」
この間の「ありがとう」はなんだったんだ。
一があの時の、三森の自然な笑顔を思い出す。
煙草を不味そうに吸っている女を見ると、とても同一人物とは思えなかった。
思いたくなかった。
「俺、先に帰りますね」
一が靴紐を弄りながら三森に聞いてみた。
「勝手にすりゃいいだろ。一々聞くンじゃねェよ」
答えは返ってきた。
一はお疲れ様でした、と感情を込めずに言って、来た道を戻って行く。
三森は近くのベンチに腰を下ろす。
――すげェイライラする。
貰ったジャージを叩き付ける様に置いて八つ当たり。
ストレスを解消する為の煙草を吸っても、ストレスが溜まって行く感じがする。
昨日からの、自身でも分からない様な感情に三森は振り回されていた。
――どうしたってンだ私は。

今まではこんな事なかったのに。
ぼうっと遠くを見る。
知らない間に、煙草の火は先まで上ってきていた。
短くなった煙草を地面に投げ捨て、近くにあった空き缶を思い切り蹴飛ばす。
誰も居ない昼下がり。
三森は得体の知れない気持ちに吐き気まで覚えていた。
高く蹴り上げられた空き缶は、気持ち良さそうに空を泳いでいた。

あぶないデカ女

走る。
夜の闇を走る。
長い髪を靡かせて影が走る。
影は息を切らせて、影は切られて。

二つの影が影を追って走る。
二つの追撃者が影を追う。
路地を抜け、ビルとビルの間を抜け、狭い道を抜けていく。
影は息を切らせて、影は影を切って。

三つの影が月明かりに照らされる。

狭い我が家で一が頭を捻っている。
彼が頭を悩ませているのは、今年の冬の事だ。
外れかかった、部屋の古い窓からは、時折隙間風が吹き込んでくる。
「寒い……」
一の部屋に暖房器具は無い。
正確に言えば、無くなった、になる。
一が引越し当初持ってきていたストーブは、アパートの階段から落としてしまい使い物にならなくなっていた。
「あったかい物が欲しい」
そう言って、一はゴロンと畳に転がった。
悪い事を一度考え出すと、頭の中に良くない考えばかり過ぎって

くる。
――コンビニ辞めようかな。
時給は良いが、その他で言えば、オンリーワン北駒台店の環境は一にとって劣悪その物と言えた。
店員の数も少なく、唯一の店員と言っても過言ではない三森と一は反りが合わない。
店長も自分勝手、社員はこの事態を重く見ていない。
殴られた一の頬がまだ痛む。
三森に殴られた理由も、一には全く分からなかった。

オンリーワン北駒台店仮眠室。
その部屋のソファに寝転がっているのは、赤いジャージに小柄な体。
短い金髪を弄る勤務外店員、三森。
三森は瞼を閉じてはいるが、中々眠りにつけない。
彼女もまた、一を殴った理由を分からないでいた。
一を殴った張本人。
彼女が分からない理由を、一が分かる筈も無いだろう。

そして夜は更けていく。

翌朝、一は窓から吹き込んでくる冷たい風で目を覚ました。
「さみぃ……」
去年より確実に寒い今年の冬。
流石に、暖房器具も無いこの部屋じゃ死ぬな。
比喩ではなく、一は本気でそう思った。
――今日の仕事は夕方からだったな。

ストーブでも買いに行こう。
思い立ったら早く動くに越した事は無い。
一は決心して、布団からモソモソと起き出した。
顔を洗い、歯を磨き、一は身支度を済ませていく。
財布を持って、コートを羽織ると、一は靴を履いて部屋の戸を開けた。
部屋よりも外の方が遥かに寒く、吐き出す息は白くなる冬の朝。
アパートの二階から外を見下ろせば、慌しく会社員が走っていたり、学生が自転車を軽快に飛ばしていくのが一の目に映る。
朝の空気は透き通っている様に感じられ、それだけで一の心は躍った。

住宅街を抜け、コンビニへ向かう道を外れていき、駅の方へと一は足を向ける。
駅前には百貨店やデパート、ディスカウントストアなど、駒台の街の中では、割と大きな店が軒を連ねている。
――ストーブぐらい直ぐに見つかるだろう。
一は軽い気持ちを更に軽くして、思わずＣＭソングでも口ずさみそうな程楽しく、良い気分だった。
少し歩くと、すれ違う人々は忙しそうな学生や会社員といった人々から、犬を連れて散歩する、特に用事の無さそうな主婦などに変わっていく。
この街の通勤、通学ラッシュの時間帯は越えたらしい。
歩いていた一からはやっと駅が見えた。
とは言っても、駅前の店が開くのにまだ一時間は掛かるだろう。
ジーンズのポケットから煙草を取り出すと、落ち着く様に一は火を点けた。
紫煙を吸って、まだ明るくなったばかりの冬の空を一は見上げる。
一は煙を愛しむ様にゆっくりと吐き出しながら、高架下の方へ何

となく目を遣った。
視線の先には別段変わった物は見られない。
まだ灯りの付いていない家の窓。
のんびりとした速度で走っていく車。
ヒッと小さく呻いて、足早に通り過ぎていく中年の女性。
――何だ？
その女性はゴミステーションへ持っていたゴミ袋を投げ捨てると、早歩きで来た道を戻る。
女性の視線は一の方へと向いていた。
一は訳も分からず、複雑な感情に襲われた。
自分は何もしていないのに、何で？
「ねぇ、アンタ」
何処からともなく声がする。
驚いた一が振り返っても、誰も居ない。
再び視線を戻すと、殆ど目の前に女が立っていた。
冷たい雰囲気を纏わせた女。
一よりも高い背、長い黒髪、整った顔立ち。
顔だけ見ると、誰が何処からどう見ても完璧な美人だとしか言えない。
薄汚れて、切り裂かれたスーツを着ている以外は。
「えっと、なんでしょうか？」
――あのオバサンはこの人を見てたのか。
おっかなびっくり一が答える。
一の双眸は、女の小汚い服装と、飲み込まれてしまうんじゃないか、と思わせる程の綺麗な瞳に釘付けだった。
「お金、貸してくれる？」
一の視線などお構いなしに、女が淡々と言った。

オンリーワン北駒台店、バックルーム。

三森と店長が煙草を吸っている。
北駒台店にとっては、いつも通りの平和な光景。
「店の中に貼っとくだけで良いから」
「ヤ」
二人が、丸めたポスターを押し付けあう。
「今お前しか居ないんだからさ、仕事しろ」
「ンな事一に頼めばいいじゃねェか」
店長が三森に見せ付けるようにポスターを広げる。
「支部からやれって言われてるんだ、やれ」
「自分でやればイイじゃねーか」
三森がポスターを鬱陶しそうに手で払い除ける。
「その店長がやれって言ってるんだ。クビにするぞ、やれ」
「やれば？」
気にもしないで煙を吐き続ける三森。
「もういい。一に頼むから」
「初めっからそうすりゃ良かったンだよ」
三森がそう吐き捨て、店長がポスターを苛立たしげに丸めて投げ捨てた。
床に叩きつけられた衝撃でポスターが広がる。
そこには「指名手配犯」と大きく赤字で印刷されていた。
真ん中には、犯人と思われる人物の写真がこれまた大きく印刷されている。
長い黒髪、整った顔立ち。
顔だけ見ると、誰が何処からどう見ても完璧な美人だとしか言えないような女性。
糸原四乃（いとはらしの）
ポスターの下部には、犯人と思われる女性の名前が書かれていた。

一が歩く。

女が歩く。
一が駅前へと向かう。
女が駅前へと向かう。
一が右へ曲がると、女が右へ曲がる。
一が止まると、女が止まる。
つまり。
「どうして俺の後を付いてくるんですか？」
迷惑そうに一が後ろの女に言う。
「私困ってんのよ、困ってる人を助けてくれても良いんじゃない？」
「……要は物乞いですか？」
一が見下す様に女を見る。
だが女は物乞いとは思えないほどの威圧的な態度で。
「私を助けなさい」
偉そうに、完全に上からの目線で一に言い切った。
――何処の国の姫様だ。
一は、その女の気高さに一瞬ひるんでしまうも、相手をしていてもしょうがない事に気づいて人通りの多い方へと歩くペースを早める。
そのスピードに遅れる事無く、女が一の後を付いていく。
一定の間隔を空け、二人が揃って同じ方角へと歩く。
すれ違っていく人々に奇異の目で見られ、一に精神の限界が近づき始める。
後ろを歩く女を、一は一瞥する。
女は周りの視線など素知らぬ風で、こっちを見た一にヘラヘラと笑いかけた。
溜息を吐く一。
前方には信号。
一が渡ろうとする前に、青い光が点滅して赤に変わる。
信号に捕まった。
交通ルールを無視しようにも、横断する車があっては仕方ない。

そして一は女に捕まる。
「ね、お願い！　私ホントに困ってるの、ちょっとで良いからお金貸して」
ここがチャンスだと言わんばかりに女が捲くし立てる。
一は観念して、財布を後ろのポケットから取り出した。
「うわ、安っぽい財布ね……」
一は財布を仕舞った。「冗談よ」と女が慌てながら言う。
「お金渡したら付き纏わないで貰えますか？」
「オッケオッケ、お姉さんを信じなさい」
そう言って、女は軽そうに笑った。
財布の中身を確認して、一が尋ねる。
「……幾ら欲しいんですか？」
「有るだけ全部。後は身分証明書、キャッシュカードとか。免許証とかあったら色んな意味で便利かなー。ああ、もう面倒だからその財布ごと渡してくれない？」
信号が青になったと同時に一は脇目も振らず走った。

「で？　この女は何やらかしたンだよ？」
ポスターを店内の壁に貼り付けながら、三森が店長に尋ねた。
客に挨拶もせずに、店の中で煙草を吸いながら店長が壁にもたれている。
「タルタロスから逃げたそうだ」
「ハァ！？　絶対嘘だなそれ」
「二日前に脱獄して逃げ回ってるそうだ。まだ近くにいるかもしれないな」
長くなった灰を床に落として、店長が煙を吐く。
脚立から降りて、三森が訝しげにポスターの女を睨む。
「あのケームショから逃げられるヤツがいるのかよ……」
「そんな奴がいるから、私らがこんなポスター貼ってるんだぞ」

「貼ってるのは私だけどな」
三森がポスターから店長に視線をスライドさせる。
店長は気にせずに吸殻を床に放ってバックヤードへ戻っていく。
脚立を担いで、三森も店長と同じように戻る。
店内には、レジに並んだ客と静寂だけが残った。

「結構持ってんじゃないのよ」
安っぽい作りの財布から一万円札が何枚か見え隠れしている。
首根っこを掴まれた一。
掴んでいる長い髪の女。
女は片手で一を捕まえて、一に財布を開けさせている。
「……ホントに勘弁して下さい……」
半泣きで一が女に懇願する。
逃げようとしてどれだけもがいて足掻いても、一の拘束は解けない。
女は一から手を離して財布を引っ手繰ると、中身を確認しながら、
「駄目よ」とだけ口にした。
一は今日一日の行動を思い返す。
朝早く起きて、ストーブでも買おうと部屋を出た。
――ああ、そこから。
そして女に捕まった。
略奪者を撒く為に、良く知りもしない、入り組んだ裏路地に入っていったのが運のつき。
一は自分から袋小路に飛び込んでしまい、あっと言う間に追いつかれてしまった。
おまけに辺りには人も居ない。
一はまさかこの年でカツアゲに遭うとは思いもしなかった。
「アンタ大学生なんだ。ふうん。あ、免許証は無いの？」
一の学生証を観察しながら女が好き勝手に喋っている。

答えが返ってこなくても構わないと言った様子で、女が一万と書かれた札を数え始めた。
「うーん、学生じゃあこんなもんかな。あ、そだ携帯電話も寄越しなさい」
一は只管に耐えていた。
「それと家の鍵も。ああ、寒いからその上着も置いていってちょうだい。私寒いの苦手なのよねー。男ならそれぐらい我慢できるでしょ、ほら早く！　あー寒い寒い」
「分かりました。でもお守りだけ返してもらえませんか？」
静かに、一が女に言った。
「お守りぃ？　神様なんかに頼っても無駄よ、現にアンタお守り持ってても悲惨な目に遭ってるじゃない」
「身内の形見なので。小銭入れの後ろに入ってます」
えー、と言いながら女が財布に注意を向ける。
その瞬間、一が一目散に逃げ出す。
あっちょっと、などと後方から聞こえてくるが、構わず一は入り組んだ路地を、正確な位置を把握できていないまま走り抜ける。
――さっきの女の顔は覚えた。
どんな手段を使ってでも、絶対に金は取り戻す。
悔し涙を堪えながら、一は固く決心した。

オンリーワン北駒台店の扉を豪快に蹴り開けて、一がバックヤードにやって来た。
「店長！」
肩で息をして、鬼気迫る表情の一に、店長が何事かと身構える。
「どうした？」
三森も、一の尋常でない声を聞き付けて仮眠室から飛び出してきた。
息を整え、一が店長を真っ直ぐに見据える。

「カツアゲされました」
何も言わずに店長が黙って煙草に火を点ける。
三森は開けっ放しだった仮眠室の扉から、さっきまで居たソファに寝転がった。
「何とか取り返してください、じゃないと俺死にます」
「一、お前な。自分の事は自分でどうにかしろ」
頭を掻きながら店長が面倒臭そうに答えた。
「じゃあ俺、今日は仕事しません。掃除もレジも全部店長がやって下さい」
「おい、お前の財布とウチの仕事とは話が別だ。いいから早く働け」
嫌です、と一がそっぽを向く。
「大体、俺は今日夕方からです。財布取り返してくれないなら絶対働きません」
店長の表情が、徐々に怒りで歪んでいく。
「お前な……いい加減にしとけよ」
「俺が死んでも良いんですか！？」
「仕事しないと今殺すぞ」
鋭い眼光が一に襲い掛かる。
たじろぐ一。
「じゃあ働いたら財布取り返してくれますか？」
「あのなあ、相手も分からないのに何をどうしろって言うんだお前は」
「犯人の顔なら覚えてますよ」
店長が一の方に椅子をクルリと傾ける。
「どんなヤツだった？」
「女です。すげぇ美人でした」
椅子から立ち上がると、店長は一へ歩み寄ってから、持っていた筒状の物で一の頭を豪快に引っ叩いた。
店長はそのまま、凶器を一の顔に投げつける。
何するんですか、と目で抗議する一。

「もう私は何も知らないからな」
「ああ、そんな……」
一が投げつけられた凶器はポスターだった。
そこには、指名手配犯、と大きく文字が書かれている。
「へぇ、捕まえれば謝礼が出るんですか」
考え込む一。
「お前じゃ無理だ。なんせタルタロスからの脱獄犯だからな」
「……脱獄犯なんてまだ存在したんですね。ところでたるたろすって何ですか？」
吸い掛けの煙草に口をつけようとした店長の動きが一瞬止まった。
「知らないのか？」
ええ、全くと返す一。
「二年ぐらいアメリカに居ましたから。俺が日本に戻ってきたのは、えーと、事件が落ち着いて、大学に受かってから何ですよ」
「成る程な、アメリカじゃソレの被害は少ないと聞く」
「はい、だからソレ関係の話はイマイチ分からないんですよ」
ふーん、と店長が煙草を吸う。
一もつられる様に煙草に火を点けて、煙を吸う。
「一。ソレを直接見たのは、その、こないだのが初めてだったのか？」
一が頷く。
――道理で。
釣瓶落としが出現した時の、一の言動を店長は思い出す。
必要以上に騒いで、恐れて、悲しんで。
ソレを間近で見るのが初めて。
そんな人間を店長はその時初めて見た。
「……タルタロスってのは、ソレ絡みの犯罪者が送られる場所らしい」
「刑務所って事ですか？」
「ああ、言い方が悪かったかな。一般の刑務所は裁判の結果、犯罪

者になった奴らに刑を執行するトコロなんだが」
はあ、と一が相槌を打つ。
「タルタロスは裁判所も兼ねてる。事件を起こした人間がいきなり裁判もナシに連れてかれるんだよ。そこで死刑やら懲役何年やら決められる訳だ」
「へえ、手っ取り早いじゃないですか」
「確か正式名称もあった筈なんだが……まあ、タルタロスでも充分通じるだろ」
適当な事を言って、店長が灰を落とす。
「あ、床汚さないで下さいよ」
そう言って一が箒と塵取を持ってくる。
一は灰の序に、バックヤードの床も掃き始めた。
「……何だかんだ言って仕事するんだよな」
「何か言いましたか？」
「私はお前が好きと言った」
一はああそうですか、と無視してゴミを一箇所に纏める。
その時、持っていた箒がポスターの丸まっていた部分を広げた。
「あ」
そのポスターの真ん中には、犯人と思われる人物の写真が大きく印刷されている。
長い黒髪、整った顔立ち。
顔だけ見ると、誰が何処からどう見ても完璧な美人だとしか言えないような女性。
糸原（いとはらしの）四乃。
ポスターの下部には大きく犯人と思われる女性の名前が書かれていた。
「お疲れ様でーす」
「おう、お疲れ」

今日の作業の全工程を終え、一が帰り支度に移る。
「……一。あの女な、オンリーワンにも捕まえろって指示は来てる。金の心配はしなくていい、だから次に会ったら何とかして逃げろ」
店長がパソコンのディスプレイを見ながら言う。
は？
と、一が呆けた。
「あの、色々聞きたい事はあるんですけど、カツアゲ女は何をして捕まったんですか？」
「知らん。知らんがあのタルタロスに入れられるくらいだ、どうしようもない人間に決まってる」
はぁ、と一が服を着替えて、退勤の登録をする。
「と言うかですね、何でコンビニにそんな指示が来るんですか？」
「……タルタロスはオンリーワンの子会社。そう考えれば分かりやすいな」
「へ？　嘘でしょ、何でコンビニが刑務所なんかと、えーと、ああ。提携なんかしてるんですか？」
一の表情が変わる。
「提携とは少し違うが、まあ色々あるんだよ。と言うかだな一、お前本当に何も知らないんだな……」
「悪かったですね。馬鹿を雇って後悔してますか？」
いや、と答えながら店長がマウスを弄る。
「お前の仕事振りに関して言えば、後悔してないさ」
「さいですか。じゃ俺帰りますね」
「今日は三森を連れて行かなくていいのか？」
楽しそうに店長が笑う。
――嫌らしい笑いしやがって。
一がなるべく、仮眠室の方を見ない様に気を付けながら言った。
「知らないですよ。それよりお金の心配しなくて良いって事は、なんか保険とか効くんですか？」
「効かん」

「じゃお金貸してくれるんですか？」
「絶対に貸さん」
絶対、を店長が強調するようにして答えた。
一が呆れて黙り込む。
「三森が飯奢ってくれるって、店の好きな商品持って帰っていいぞ。良かったな」
一は何も言わずにバックヤードを、そして店を出て行く。
外はすっかり暗くなっていた。
そしてすっかり寒い。
体が凍る程に寒い自分の部屋を思い出し、一は憂鬱になった。

寒さに身を縮めながら、一がアパートの前まで帰ってくる。
門扉をくぐって、ポケットの中の家の鍵を取り出す。
「あれ？」
取り出そうとしたが、入っていたはずの鍵がそこには無かった。
別のポケットも探ってみるが、鍵は発見できない。
「財布……」
午前中に出会った女に財布を取られた時にでも落としてしまったのかもしれない。
一は落ち込むと共に、益々カツアゲ犯への恨みを強くしていった。
とりあえず、と言った感じで部屋の前まで行こうと階段を上る。
廊下を少し進むと、一の部屋の電気が点いていた。
――消し忘れたかな？
一は無駄とは知りつつも、ドアノブに手をかけて回す。
ノブは途中で止まることなく、きれいに回った。
「はあ？」
鍵まで掛け忘れたのか？
一は不審に思いながらも扉を開ける。
開いていた鍵。

点いている灯。
そこにいる人。
「あ、おかえりー」
「……ただいま……」
汚いスーツを着た女がそこに居た。

またまたあぶないデカ女

アパートの一室。
そこに男と女が二人。
時刻は夕方を過ぎた頃。
そこでやる事は一つしかないだろう。
一が靴も脱がずに玄関に突っ立ったまま、女に声を掛ける。
「警察を呼ぶぞ」
「あっ、それは勘弁して。何もしないからさー」
「どうして俺の家を知ってるんだ?」
「学生証に住所書くアンタが悪いのよ。それとお守りなんて入って無かったんだけど?」
一が部屋のドアを開ける。
「とにかく、俺の財布を置いて出てってくれ」
「……薄情ねえ」
そう言って女が一をジト目で見る。
「俺に犯罪者を匿う趣味は無いから」
「私がこんなに頼んでるのに?」
何時に無く一が強気な口調で女を責める。
そんな一の態度を気にも留めず、女は寝転がりながら媚びた視線を送り続ける。
一はドアのノブに手を掛けたまま、侵入者をよく観察した。
見れば見るほど、店のポスターに「指名手配犯」として写っていた人物にそっくりな女。
――タルタロスからの脱獄者。
一は警察を呼んで、さっさとこの女を引き渡したかったが、相手はその警察の居る刑務所から逃げてきたのかもしれない犯罪者。
下手に行動を起こせば何をされるか分かった物ではなかった。
「とりあえずお金を返して下さい。困ります」

一は口調だけでも下手に出ておくことにした。
「うーん、返してあげたいのは山々何だけどなあ。雀の涙も今の私にとっては必要だからさー。ちょっと無理かな？」
雀の涙と言う発言に一の眉が反応する。
「無理ですね。金が無いと俺も年を越せません。……ストーブが欲しいんですよ」
「すとうぶ？」
カツアゲ犯に何言ってんだ俺は、と一が少し後悔した。
一は女の軽い口調、性格に乗せられてしまっている。
「この部屋にはストーブも無いの？」
見れば分かるでしょ、と一が女に言い放つ。
「だから返してください。お金を奪うなとは言いません、俺以外から奪って下さい」
「アンタってホントに薄情ね、それでも人間？」
少なくともアンタよりは。
一はその言葉を飲み下した。
「埒が明かないわね」
「なら電話使わせてください、埒でも何でも明けますよ」
一が靴を脱ぐ。
「駄目よ。余計な事したら金だけじゃ済まないんだから」
女が凄みを利かせた。
冷たい目。
その瞳は黒く、そして暗い海を思わせた。
何処までも深く、冷たい海。
一の心臓が止まりそうになる。
「……じゃあどうしろって言うんですか？　言っておくけど、金は渡せませんよ」
気力を絞って、何とか言葉を繋いだ。
一の言葉に、女が黙って腕を組む。
何か考えているらしい。

「一緒に住もっか」
女は考えた。

「何時まで付いて来るんですか？」
一が振り向きもしないで、背中越しの人物に声を掛ける。
「いつまでもー」
その人物が適当に答えた。
長い髪を指で弄りながら、辺りを見回している。
「その服、俺のですよね？」
「うん、アンタってセンス無いわ」
冬の夜道を二人が歩く。
一人は一。
一人は名前も知らない、名前を言おうともしない女。
一は益々、女に対する不審を募らせていった。
そして店で見たポスターの顔写真を、頭の中で反芻する。
「ね、何処に行くの？」
女がやけに親しげに、一に話し掛けてきた。
一はそれを無視して、目的地である駅前の電器店へ黙々と足を進める。
「答えなさいよ」
女の口調に殺気めいた物が入った。
鳥肌が立ち、一は心底嫌そうに答える。
力の無い者の精一杯の抵抗。
「……電器屋です」
「何買うの？」
「……何でも良いでしょう」
一がぶっきら棒に答える。
「ルームメイトに向かって随分な口の訊き方ね、お姉さんキレそう」
「誰がルームメイトですか」

わたしー、と一の後ろから能天気な声が聞こえてくる。
――何なんだコイツは。
一は煙草に火を点けると、溜息と一緒に煙を吐いた。
「で、何買うの？」
「ストーブです」
「えー、私こたつの方が良いなー。こたつに入ってみかんを食べるっ。あー、この国に生まれて良かったって感じしない？」
一は返事をしないで、煙を吐き続ける。
このまま警察に向かうのも、北駒台店に向かうのも一の自由だ。
面倒なこの女をどうするか。
一は悩んだ。
悩んだ結果、店が閉まる前に暖房器具を購入する事に決めた。
警察にもオンリーワンにも、その後で充分に足を延ばせる。
二十四時間開いているのは、一にとっては心強い。
考えを纏めると、一の足が速まる。
少し行くと、信号に捕まった。
この信号は。
「あ、朝通ったトコロね」
女がヘラヘラしながら、一を見る。
――虫唾が走るなあ。
一は煙草をコンクリートに落とすと、スニーカーの裏で残っていた火ごと踏み潰した。
信号機の光が赤から青に変わって一が歩き出す。
「待って」
女は歩かない。
「待ちません」
一は女の言葉を無視して歩き続ける。
歩道の真ん中まで来たところで、一はしょうがないなと思い足を止めた。
振り返ると、女が一を睨み付けていた。

真っ暗に近い冬の夜。
その闇の中でも分かる位、分からされてしまう位の凍える様な鋭すぎる視線。
シン、と辺りが静まり返る。
「死ぬわよ」
女が憎憎しげに言い放つ。
言われた方は、体の芯まで冷える様な怖気の走る言葉。
「何で！」
一が叫んだ。
――突然過ぎる。だけどやっぱり。
夕方店長に言われた事を、一は思い出す。
ああ、ちょっと良い女だったから。
とてもとても罪を犯した人間に見えなかったから。
少しでも気を許してしまったから。
――逃げられませんでした。
一はこちらに疾駆する影を確認してから目を閉じた。

長い髪の女が何かを蹴っ飛ばす。
蹴られた影は、低く唸って地面を転がった。
だが、直ぐに体勢を立て直すと四つの足で地面に立つ。
その姿は夜に良く似合っていた。
黒い毛を並べた体に、血走ったような赤い瞳が一際目立っている。
黒と赤の色合いが実に美しい。
「犬？」
一が呆然としながらも、やっとそれだけ呟いた。
女が一を庇う様にして前方に立つ。
「退いて、そのまま逃げなさい」
そう言って、女が『犬』を見た。
その犬は子牛ほどの大きさをしており、口からは赤い息が見え隠

れしている。
犬の中でも、ドーベルマンに良く似ているだろうか。
それを大きくすれば、今、一たちの目の前に居るソレになる筈だ。
――ホント最悪過ぎる。
一が逃げる間も無く、ソレが二人に襲い掛かる。
涎を垂らしながら、犬の姿をした異形が爪を伸ばす。
その爪を女が紙一重で避け、がら空きの脇腹に足を伸ばした。
鋭い蹴りがソレに突き刺さる。
痛みに声を上げる事も無く、ソレが地面を滑って行く。
訓練された盲導犬は吠えないと聞くが、ソレも近いものがあるらしい。
犬は飛ばされた意識を取り戻す為に、毛を散らしながら首を振った。
警戒心を強めたのか、一気に飛び掛ろうとはせずに足踏みをして様子を見ている。
「あ、あの、アレは？」
小声で一が聞く。
「黙っててよ、気が散るから」
片手で一を制止し、女が真っ赤に光る双眸を睨んだ。
――しつこいっ。
女は昨晩に仕留めた、ソレの片割れを思い出す。
大方、復讐にでも来たんでしょうけど。
そうは行かない、とばかりに女が先手を取る。
走って距離を詰めると、女は履いていた靴をソレに向かって蹴り飛ばした。
靴はソレの顔面に命中する。
ダメージこそ無いが、ソレの注意が完全に散った。
その隙に女が、ソレの足の付け根をトーキック。
四つの内の一つの足が、バランスを崩す。
崩れ掛けたソレの体に女が追い討ち。

再度、脇腹に蹴りを入れると、犬のソレは体を浮かせた後、コンクリートに倒れこんだ。
打ち所が悪かったのか、濁った色の泡を吹き、四肢を痙攣させる。
「すげぇ……」
流れる様な女の姿に、一は見惚れた。
――勤務外？
一は目の前でソレと戦う女と、三森がダブって見えた。
だが、どうにもこの女は人間らしい。
三森の様に炎を使った――つまりは人間から外れた能力を使っていない。
あくまで、人間として戦っている。
現に、女は肩で息をして、相当に疲弊している様子だった。
並みの人間ならば、肉体的にも精神的にも大幅に力を削られる状況。
果たして、この女は人間なのか、そうでないのか。
倒れているソレと女を交互に見ながら一が思った。
――赤い、赤い目。
一が女に声を掛けようとしたその時、その目に捉えられる。
目の主はソレ。
地に臥しながらも、赤い眼は一の目を掴んで離さない。
ソレと視線がほんの少し交わっただけで、一の体は嘘の様に動かなくなった。
まるで自分の影を地面に縫い止められた感覚。
一の体のどの部位も、指一本ですら言う事を聞かない。
「な……で」
声を出そうにも、喉からは潰れた音が吐き出されるだけ。
やがて呼吸も苦しくなる。
一は動けない。
ソレも動けない。
女は一の方を見て、嫌らしい笑みを浮べて動かない。

「ね、アンタ助かりたい？」
その笑みを顔に張り付かせたまま、女が一に尋ねた。
一が縋る様に女を見る。
見る事しか出来ない。助かりたいと首を振る事も、返事をする事も許されていない。
「じゃあさ、私の言う事を一個。何でも絶対に聞きなさい、分かった？　ああ、分かってても分かって無くても返事は出来ないわよねー」
――クソ女が。
目の前が真っ白に塗り潰され、にきびの様な物々が点々と視界の隅に転がる、そんな気持ちの悪い感覚に襲われ、一の意識が段々と薄れていった。

「落ち着いたー？」
声を出さずに、一は首を動かすだけで返事をした。
一はどうやら、歩道の脇にいつの間にか移動させられていたらしい。
「そ。なら良いけどね」
冷え切った地面に膝を突いて、一はゆっくりと空気を取り込んでいく。
一は深呼吸を何回かして、やっと落ち着いた様だ。
「さっきの犬は？」
「そこらに転がってるわ」
一は辺りを見回した。
道路に、ガードレールに、歩道に。
所構わず、細切れになった肉片らしき物が散らばっている。
パズルみたいに元通りにしないと分からないが、おそらくソレのモノなんだろうと、一は吐き気を堪えながら納得し、気を持つ。
飛び散っているソレの血はまだ乾いておらず、付着した箇所に広

がって赤い染みを作り続けていた。
一が何かを見るような目で女を一瞥する。
「……あなたが？」
笑う。
女が笑う。
「そ、私が」
「どうやって？」
女は指を口元に当てて。
「秘密よ」
――気持ち悪い。
「……慣れてますね」
「え？」
「殺す事です。慣れてますね」
一が立ち上がり、女に言った。
「どういう意味？」
「一応、ですが。助けて貰った事に関してはお礼を言います」
そう言って一は頭を下げる。
ありがとうございます、と付け加えて。
「糸原、四乃さんですよね？」
「違うわ」
「オンリーワンのバイト何ですよ、俺」
「へえ、羨ましいわね。あそこって時給良いんでしょ？」
良くご存知で、と一がシニカルに笑った。
「タルタロス、でしたっけ？　そこを脱獄したから指名手配犯になってますよあなた。因みに、あなたを引き渡せば謝礼が貰えるらしいですね」
「アンタ頭オカシイんじゃないの？」
「まあ、お金は返ってきたので、今更謝礼なんて欲しくありませんけど」
一が何食わぬ顔で言う。

「……仮によ。仮に私が糸原四乃だったとして。アンタは糸原四乃に何をして欲しいワケ？」
「思いつきませんね。金も要らないし、俺に危害さえ加えなければ別にどうでもいいです。タルタロスに引き渡すのも面倒そうだし」
何度も何度も。
女が爪先を地面に当てる。
遠まわしな一の発言にイライラしているのは、女の仕草から直ぐに見て取れた。
「じゃあどうしたいのかな？　アンタは」
「あなたは何をして捕まったんですか？」
は？　と女が固まる。
ややあって、顔に掛かる長い髪を女が掻き分けた。
「気になるの？」
「答えて下さい」
一が正面の女を見据える。
「仮によ？　えー、と。……詐欺、盗み、違法賭博」
女がゆっくりと答えていく。
「それだけですか？」
「そうよ。失礼ねアンタ」
「いえ、それだけでタルタロスに連れてかれるんですか？」
ソレ絡みの犯罪者が送られる場所。
詐欺と言った犯罪が、ソレにどう結びつくのだろうか。
一は頭を捻った。
「アンタ、あそこについて誤解してない？　送られる奴にソレがどうとかなんて関係ないわよ」
「でも、ウチの店長は確かに」
「ま、その事は別に良いでしょ？　とにかく、私はお金が好き、そんで捕まったのオッケー？」
「……じゃあ人を殺した、とかそんなんじゃないんですか？」
何よそれ、と女が眉を吊り上げる。

「言っとくけど、私はそんな事してないし、するつもりも無いわよ」
「何で逃げたんですか？」
「馬鹿じゃないの、あんなトコに居たら一年経たない内に死んじゃうわよ。詐欺ぐらいで無期懲役なんて聞いた事無いわ。ああ、仮の話だけど」
――犯罪者の考えだな。
一は言い出したいのをぐっと堪えた。
「やっぱイマイチ話が繋がらないんですけど。タルタロスってのはヤバイ所で、あなたは詐欺で捕まって、そんで逃げてきたって事で良いですか？」
「ま、そんなトコロねー。ああ、けど仮よ仮なんだから」
分かってます、と一が頷く。
「じゃあ何でソレと戦えるんですか？」
何かを殺した訳でもない、唯の詐欺師がソレと互角以上に戦い、殺しきるなんてでたらめな話。
一はそのでたらめな話を信じる事が出来なかった。
「私の邪魔をするからよ。ソレだろうと人だろうと関係ないわ」
「いや、そういうのじゃなくて。勤務外でも無いあなたが何で？」
女は少し考え込む。
「別に勤務外だけがソレに太刀打ち出来る、って事じゃないのよね、きっと」
「はあ、そうですか」
「あ、信じてないわね？」
詐欺師の言う事を一体誰が如何して信じられるだろうか。
一は溜息を吐く。
「いや、やっぱその辺りの話は俺にとってはどうでも良かったみたいです」
「何よそれ。まあ、アンタが信じようがどうでも良いけどね」
けどね、と女が更に付け足す。
「仮によ？　仮に私が糸原四乃だとして。これだけ言えるわ。いや、

言いたい」

「私は地獄を見てきたのよ」

暗い部屋。

照明に乏しく、唯一の光源はテーブルの上の粗末な蝋燭。

部屋にあるのが豪奢なテーブルなだけに、その蝋燭との組み合わせは酷くアンバランスに感じられるだろう。

装飾を気にする人間は居ないのだろうか。

「結局、脱走者はどうするんだ？」

「犬に追わせた」

「フフ、優しいのね。ここを抜けるニンゲンよ？　ヘルハウンドなんかに追跡者の任が勤まると思って？」

広い部屋。

空っぽな部屋。

テーブルに敷かれた真白いテーブルクロスが、暗がりの中一際輝いて見える。

「……彼女には泳いでもらう。その為に逃がしたのだからな」

「ではオンリーワンに協力を申し出たのは何故ですか？　みすみすあのニンゲンが捕まる様な事になれば……」

「ポーズだよ」と誰かが笑いながら言った。

「ニンゲン？　ニンゲンには捕まらないわ」

最後に発言した人物が、椅子から立ち上がり自らの右手を掲げる。

その手が蝋燭の灯りに照らされると、周囲から驚きの声が上がった。

右手は歪に、醜く継ぎ接ぎされている。

肘から下に、縫い合わせた後が何箇所、何十箇所と痛々しげに残る腕。

「私にここまでの事をしたのよ？　ニンゲンなんかに捕まらないわ、捕まえられて堪るものですか」
語気を荒げて影が感情を露にした。
「不様ね」
「何ですって？」
止さないか、と卓の上座に位置する人物が諫める。
「我々は仲間だろう。目的を達する為に一時的でも同盟を結んだ者同士、詰らない事で中から崩れるのは望まない。そうだろう諸君？」
チッと舌打ちした後、右手に傷を負った人物が席に着く。
「それで？　脱走者は放っておくとして今後は？」
「待つ。只管な。なあに、今までも我々はここでずっとそうして来たんだ、我慢できるだろう？」
「フフ、それに私たちが心配しなくても、上が勝手に動き出すわ」
場が静まる。
他の意見は無しと判断したのか、上座の人物が解散を宣言した。
一人、また一人と部屋を出て行く。
残るのは上座の人物、唯一人。
それが口元を歪める。
「最後に残るのは我々タルタロスだ。それまで待っていろゼウス」
部屋に響き渡る哄笑。
やがて、蝋燭の火も消え、何もかもが暗闇に包まれた。

「私を助けなさい」
「……それがお願いですか？」
そうよ、と女がふんぞり返る。
「本当に何度も言いますが、お金は貸せません」
「別にアンタのはした金なんか要らないわよ」
――このアマ……。
「俺の部屋に住むってのも、ナシで。ややこしい事この上ないです」

「何で!?　それがベストじゃない！　おまけにこんなきれいなお姉さんも付いてくんのよ！　もれなくよ、もれなく！」
「きれいなお姉さんは好きですが、良く考えてみると、犯罪者を匿ったら俺共犯者になっちゃうんですよね」
一がにべも無い態度で言う。
「カンケーないわよそんなの、何でも言う事聞くって言ったじゃない」
「一言も言ってないんですけど……」
「うるさいわね、良いから聞きなさい」
女は只管にゴリ押してくる。
正直、一はもう女の攻勢に限界を感じていた。
城の外堀、いやもう本丸にまで敵兵が乗り込んできたイメージが浮かぶ。
「分かった、分かりました。一ヶ月です。一ヶ月なら俺の部屋に居ても良いです」
「一ヶ月ぅ？」
女が一を睨む。
「俺は危ない所を助けて貰いました。で、俺は危険を冒して犯罪者であるあなたを匿う事になります」
「交換条件？　ナマイキねぇアンタ」
「俺に出来る最大で最高の譲歩です。一ヶ月の間、あなたには駒台から逃げる準備、お金とか。それと他に住む場所を探して貰います」
「ふうん。お金と家ね」
そうです、と一が力強く首を振る。
「じゃ、とりあえず仕事ね。当分は危ない橋渡りたくないからバイトでも探すわ。あ、アンタが探しても良いけど」
「ヤです。……俺の条件、呑んでくれますか？」
仕方無さそうに、首を縦に振り女が肯定の意を示す。
「それじゃ行きましょうか」
「何処へ？」

「電器屋です。あんな寒い部屋じゃ死んじゃいますよ」
「もーう。寒かったら私が暖めてあげるのにー」
急にご機嫌になる女。
一が鬱陶しいです、と寄り掛かる女を手で除けた。
「ヒドイわねー、お姉さんの好意を無駄にするなんて……」
「掌ひっくり返す様な人は嫌いです」
一の歩幅が、女を引き離すように広がっていく。
「ごめん」
女が立ち止まって言った。
「……あなたって突然ですよね、ホント」
「うん、ごめんね。今更だけど、流石にちょっとは悪いかなーとは」
女が上着のポケットに手を突っ込みながら、下を向く。
――泣く女も死ぬほど嫌いなんだよなあ。
一は癖のある髪を掻きながら。
「あなたって、付き合ってた女の子に似てるんですよ」
女は下を向いたまま。
言葉を慎重に選ぶように、一がゆっくりと話し始める。
「別に、あなたに脅されたからとか、助けて貰ったとか、借りを返す、みたいな物であなたを住まわせる訳じゃありません。それと、家やお金が無くて可哀想だなーで、助けてあげようって気持ちもありません。その子に似てるから、それだけです。そんで女の人と一緒に住めたらちょっとラッキーかなとか。うーん。あー、つまり完全に俺の自己満足です」
だから、と一が言葉を止める。
自分でも何を言ってるか分からない。
それでも、必死に続きを考えた。
「……一。一一(にのまえはじめ)です。数字の一が二つで一一」
「は？　それ、アンタの名前、よね？」
女が顔を上げる。
変わってるでしょ、と一が笑う。

「早い話が俺はもう何も気にしてません。だから、自己紹介です」
「自己紹介って、今更？　初めて会った訳でも無いのにさ」
「なんて言うか、あー。俺はついさっき、やっとあなたに初めて会えた気がしました」
気恥ずかしさを漂わせつつ、一が視線を逸らせて言う。
白い息を吐いてから、馬鹿じゃない、と女が鼻で笑った。
「私は糸原四乃。タルタロスから脱獄した、美人できれいな指名手配犯にそっくりでしょ？　ま、これから一ヶ月宜しくね」
宜しく、と一も返す。
「あーあ、瓜二つだなあホントに」
一はこれから本当にどうするか、考えるだけで胃が痛くなる気がした。
「良し、後は家に帰ってからにしよう？　こたつ買お、こたつ」
糸原が楽しそうに一の隣に並ぶ。
「こたつか……うん。こたつも良いかも知れないですね」
「決まりね。そんで帰りにみかん買ったらもう最高じゃない？」
「いえ、アイスですね」
アイス？　と糸原が訝しげに一を見つめる。
「こたつに入りながら食べるアイスは別格ですね、譲れません」
「アンタって趣味悪いわね……。あ、アンタってのも変かな？」
いえ、と一が答えた。
「好きな様に呼んで下さい、糸原さん」
「……私は好きに呼べとは言ってないわよ」
「じゃあ何て呼べば？」
「二号で良いわよ、二号で」
――悪趣味なのはどっちだよ。
ま、いっか。
煙草を箱から摘み上げ、一は火を点ける。
「あ、私にもちょうだーい」
「ヤです」

一は美味そうに煙を吸い込むと、今夜は星が綺麗に見える事にやっと気が付いた。

風と共に去れ

「一、良く来たな。コーヒーでも飲むか」
店長が蓋の開いた缶を持ちながら言った。
「結構です。しかも飲み掛けじゃないですか」
その缶を素通りして、オンリーワンの制服に着替えながら一が言う。
店長は缶を机に置くと、溜息を吐いた。
目は充血し、隈も出来ている。
明らかに疲労が溜まっている様子だ。
「堀が来れなくなってな。久しぶりにレジ打ったぞ」
机の上に突っ伏しながら店長が呟く。
「へえ、店長が？　何日振りだったんですか？」
興味津々と言った様子で一が尋ねる。
店長が人差し指を立て、溜息と一緒に「一年」と短く返した。
「ああ、それは、何かもう災難でしたね。それにしても、堀さんがシフトに来れないなんて珍しい、っていうか初めてですね」
「支部に呼ばれたらしい。どうせタルタロス絡みだろ」
タルタロス。
その言葉に一の心拍数が上がる。
喉を通り越して、口から心臓が飛び出るかと一は思った。
こたつに入り、みかんを頬張りながらテレビや求人誌を眺めている居候。
糸原四乃。
「ああ、なるほど」
一はなるべくその同居人を思い出さないようにして、平静を装いつつ相槌を打った。
「それはもう良い。今日は三森も居ないし、私一人で仕事してたから疲れた。後は任せたぞ、一」

ハイハイ、と適当に返事をして一は店内へ出た。
冷たい汗が背中を伝い落ちる。
足取りもどこか重い。
ダスターを握り締めていた一の手はじっとりと汗ばんでいた。
――とんでもない事をしたんじゃないのか、俺。

駒台の公園にある木製のベンチ。
真昼間から、そのベンチで気持ち良さそうに、スーツ姿の女性が寝そべっている。
今日は天気も良く、昼下がりの雲はゆっくりと、静かに流れていた。
ベンチの上の長い黒髪が大きく揺れる。
今まさに寝起きです、と言った様子で、女がだらしなく髪の毛を掻き分けていく。
傍に置いてあったコンビニの袋から、コーヒー牛乳を取り出し、蓋を開ける。
女はその蓋を指で弾いて、離れた地面に落とした。
ふう、と一息ついてから、女が立ち上がって伸びをする。
「朝はやっぱコレよね」
タルタロスから脱獄した指名手配犯、糸原四乃の一日はコーヒー牛乳から始まった。
空き瓶を袋に詰め、公園内のゴミ箱へと狙いを付ける。
片目を瞑って距離を測ると、手を高く上げて重りの入った袋を投げ捨てた。
袋は中空に美しい弧を描くと、ゴミ箱の縁に当たってガラスの割れる様な音を響かせる。
糸原の姿を、子供を連れて遊びに来ていた近所の主婦たちが遠まきにして見ていた。
反対側のベンチに座りながら、井戸端会議に耽っていた主婦たち

の話題は、最近値上がりした野菜の事から近所に出没する不審者に摩り替わっている様子。
　子供たちをなるべく不審者から遠ざける為、砂場から離れる様に母親たちが声を上げると、えー、と言う不満な声が砂場から漏れ出す。
　糸原は自分が「不審者」として見られている事にはとっくに気付いていたが、警察を呼ばれない程度にちょっかいでも掛けてやろうと、子供たちの様子を距離を取って眺めていた。
「もっと遊ぼうよー」
　子供特有の、舌足らずで甲高い声が公園に響く。
「でもお母さんがー」と、一人の男児が喚いている子供に返した。
　母親たちが次々と、糸原が居る方とは逆の出口から公園を立ち去っていく。
　――つまんないの。
　帰っていく人々の姿を見送って、糸原も踵を返そうとした。
「遊んでくれないとヤダよ！」
　先程から喚いていた子供が、更に声量を上げて駄々をこねる。
　糸原は砂場で一人騒いでいる子供を観察した。
　緑色の、ワンポイントで羽の付いた小さな帽子。
　小さな子供の所には大きな親が迎えに来る気配は一向に無い。
　やがてその子供は小さな足を目一杯使って砂を蹴り上げる。
　舞い上がった砂の多くは、風も無いのに宙に浮き続けていた。
　現代の物理、科学法則をこれでもかと無視し続ける物体。
　糸原が自分の目を疑い、何度も瞬きをした時、一陣の風が公園中を吹き抜けた。
「つまんないよ！　バカァ！」
　帽子を被った子供がそう叫ぶと、立ち去っていこうとする数組の親子らに、砂を伴った強風が襲い掛かる。
　風の勢いにより、軟らかい砂が、固い石の様に重たそうに飛来する。

母親と子供、親子の悲鳴が辺りに耳障りな程広がっていく。
子供を庇う様に、母親が覆いかぶさって地面に伏せる。
突然自身を襲った恐怖から、母親の手から離れて走り去る子供。
何も出来ずに立ち尽くして、ただただ泣き尽くす子供。
――どうする？
ポケットの中の「得物」の感触を確かめながら、糸原が子連れのグループを確認する。
砂が宙に舞い続け、飛礫となって人々に襲い掛かる。
人知を超えた異常な出来事。
間違いなく、ソレの仕業だ。
そして、そのソレは帽子を被ったあの子供。
糸原はそう確信するも、目立ちすぎる行動を控えるべき人物である。
指名手配犯、この肩書きが糸原の足を止めた。
せめて誰かに連絡だけでもと、公衆電話を探すがそんな物は何処にも見当たらない。
糸原は焦燥感に追われてしまっている。
そんな糸原を尻目に、公園には緑の帽子を被った子供――おそらくソレ――が、相変わらずの金切り声で叫んでいた。

駒台の住宅街を目的も無く、勤務外店員、三森は歩いていた。
三森にとっては久しぶりに貰った休みだ。
職業柄、遊びや生活する為の金には不自由していない。
突然与えられた休暇をどう消化しようかと、ずっと部屋で思案していた三森だったが、考えている内に一日が終わってしまいそうだったので、仕方なく外へ足を伸ばしたと言う次第だった。
昼下がりの平和な通りに、真っ赤な服装と、金色の髪が調和しているとはどうにも思えないだろう。

毒々しい取り合わせをした色の女が煙草を吹かせながら、公園へと続く通りを闊歩する。
朝から何も口にしていなかった事に気付いた三森は、目に留まった自動販売機でホットの缶コーヒーを購入した。
喉を潤すと、やっと落ち着いてきた気がする。
三森が欠伸を一つして、太陽を見上げた。
――今日はまだ暖けェな。
ぼんやりとしていた三森の耳に、少し先の方から声が聞こえた。
気のせいかとも思ったが、その声が余りに切羽詰っていて、おまけに竜巻らしき物も視線に入ってしまったのだから信じるよりしょうがない。
三森が駒台の地理を少しずつ思い出していくと、公園がその場所に当て嵌まる。
今日は休みだったンだけどな、と心の中でぼやくと三森は公園へと走り出した。

公園の敷地を縦横無尽に子供が飛び回っている。
風を引き連れ、空を当たり前の様に飛び回る子供。
さっきまでの癇癪も収まってきたのだろうか、親子連れに襲い掛かる飛来物は目に見えて少なくなっていた。
それでも原因であるソレは、未だに射程距離を維持して飛び続けている。
何事かを喚き散らしているが、公園内に残っている糸原は甲高い声を聞かない様に耳を塞ぎ続けていた。
指名手配犯である為、力を振るう事も出来ず、かと言って被害者を見捨てる訳にも行かず、ただそこに立っているだけの糸原。
――さっきからうるさいのよ。
だが、それも我慢の限界に達し様としていた。
後先考えず、得物を振るう事を糸原は決意すると、糸原はスーツ

の内ポケットから、黒く塗り潰された、キーパーグローブの様な物を取り出し、装着した。
「そこのアンタ！　降りて来なさいよ！」
準備の整った糸原は、空を飛んでいるソレに向かって叫んだ。
ソレは瞬きを繰り返してじっと糸原を見つめている。
「なんでさ？」
やがてソレが、至極当たり前の事を尋ねた。
「ムカつくからよ。ほら、ボコボコにして上げるからとっとと私の前に跪きなさい」
「降りるわけないだろー！」
ソレが糸原に気を取られている間に、蹲っていた人々が逃げ出していく。
公園の出口に悲鳴が折り重なる。
「あー！　逃げちゃったじゃんかよ、どうしてくれんのー？」
ソレが足をバタバタさせながら、不満を口にする。
「うっさいわね、早く降りて来なさいって言ってんでしょ」
糸原が砂場を踏み荒らしながら言った。
「もーいいや、そんならあんたに遊んでもらうから」
そう言うと、ソレは糸原の立っていた足場から砂を巻き上げ始める。
風の影響でバランスの悪くなった砂場から糸原が飛び退く。
巻き上げられた砂はソレの周りを回転し始めた。
バラバラに回転していた砂が一つに纏まる。
「まずは鬼ごっこだよ！」
手を翳すと、糸原を狙って砂の弾丸が唸りを上げた。
「クソガキッ」
悪態を吐きながら、糸原がサイドステップを大きめに踏んでそれを避ける。
ソレの手の動きに合わせて、弾丸と化した砂が地面に痕を残した。
糸原が自身に投げられた砂を避けつつ、身を隠せそうな物を探す。

が、公園には砂場とベンチ、ブランコや滑り台と言った比較的ポピュラーな物しか設置されていなかった。
遮蔽物となりそうな物は見つからない。
楽しそうに笑いながら、ソレは糸原を少しずつ公園の端へ追い詰めていく。
――ここから逃げても良いんだけど。
ガキ一匹相手に、この私が？
有り得ない――
糸原のプライドが逃走を許さなかった。
追い詰められながらも、一発として被弾はしていない。
雨の様に浴びせられる飛礫を掻い潜る。
糸原は少しずつ、本当に少しずつではあったが、再びソレとの距離を縮めだした。
「もうっ、しつっこいなー！」
雨よ槍よと振っていた攻撃が止む。
好機と見て、糸原が距離を一気に詰めるべく脚に力を溜めた。
降りて来ないなら落とすまで、糸原は武器を取り出すべく、ズボンのポケットに手を突っ込む。
「あっれえ？」
思わず糸原自身でも疑ってしまう様な声が飛び出した。
ポケットに何も入っていない。いや、正しく言えばコーヒー牛乳を買ったときのレシートしか入っていない。
おっかしいなあ、などとぼやきつつしゃがみ込んで辺りを手探り始める。
糸原が立ち止まっている間に、ソレは先程まで小さかった砂を大きく纏めていた。
攻撃力を上げれば、敵を一発で倒せる。
子供の外見をしたソレの子供じみた考え。命中率を上げる為の小さな砂でさえ糸原には一発の被弾すらしなかったのだ。
その武器を大きくした所で、いくら殺傷力は上がっても、先刻よ

り楽に避けられてしまうのは誰の目にも明らか、だった筈。
だが、武器が無い事に対して焦っている糸原に。
注意力散漫で上を見ようともせず、ソレの取って置きの存在にすら気付いていない糸原に。
一撃必殺の砲弾が当たる可能性はどれ位のものなのだろうか。
「当たれえ！」
何が、と聞き返す間も無く、砲弾は不可視の大砲から発射された。
ソレの言葉に顔を上げた糸原の視界が、巨大な土の塊で覆われる。
人間の子供程の大きさをした塊だったが、風の力でスピードが乗っている分破壊力は計り知れない。
ソレの視界からは糸原の姿が大きな砂の塊の影で完全に消える。
「ストライクー」
どこで覚えたのか、野球の審判の様に手を上げ、楽しくて堪らない事をアピールしながらソレが言う。
「惜しいわ、ボールね」
え、とソレから驚きの声が発せられた。
糸原が右足一本で砲弾を、衝撃を受け止めている。
「うっそぉ！？」
そのまま糸原は右足に力を込めると、衝撃を殺し切り斜め後ろへ弾丸を蹴りやった。
砂の弾丸は地面に激突すると、若干の形を残しながら周りの土に同化していく。
糸原は右足を摩りつつ、砂の混じった唾を吐き、ソレを睨みつける。
「次は私が鬼？」
ソレよりもソレらしい、冷え切った視線が子供に突き刺さった。
「うっさい！　砂はまだまだあるんだからな！」
ソレが今居る位置よりも、更に高く上昇していく。被った帽子がゆっくりと地面に落ちていくと、帽子とは反対に、大量の砂が風によって巻き上げられ出した。

先程とは比べ物にならないぐらいの、大きな大きな塊が形を整えられていく。
一つ、二つ、三つ。
合計三つの砂の塊が宙に浮くと、ソレの瞳がターゲットである糸原を捉える。
「今度は当たれえ！」
そう叫んで、ソレは手を下に振った。
その合図を皮切りに、三つの砲弾が風と共に空を走る。
――早い……！
今度は避ける事も、止める事も出来ない。
立ち尽くす糸原だが、視線だけはしっかりと空中のソレを捉えていた。
砲弾が空を走ってから、糸原へたどり着くまで五秒は要らないだろう。
一つ目の砲弾が糸原を襲う。
糸原が腕を交差させ、防御を固めると衝撃音が辺りに走り、塊によって徐々に砂地に何かが這った様な痕を付けつつ下がっていく。
一つ目の塊は勢いを失いつつあったが、その代償は大きかった。
糸原の腕がダラリと垂れ下がっている。
服の上からでは分からないが恐らくは大きく腫れているだろう。
「いったあ！」
声を上げ、気を紛らわし痛みを反らすも、それも一瞬の気休め。
続いて二発目が糸原へと向かう。
「伏せろ！」
突然糸原でも、ソレでも無い声が公園に響く。
言われなくても、立ってられないわよ。頭の中で声の主に毒づき糸原が倒れこむ。
塊が目標を捕らえようとした瞬間、真っ赤な炎に包まれて一瞬で灰にまで成って果てた。
炎を操った人物が、倒れている糸原の前に割って入り、三発目の

塊をその視線で捕らえる。
声を上げ、右手を塊に向けて突き出す。
掌からは眩いほどの赤い光。
その光に照らされ、包まれ、最後の魔弾も塵となる。
「オマエ！　オマエ何なんだ!?」
高度を下げ、ソレがそれに問いかけた。
真っ赤なジャージに、金髪の女が煙草に火を点ける。
「今日は休みだってのに……」
オンリーワン北駒台店、勤務外店員三森がソレを睨みつつ自嘲気味にそう呟いた。
「もーいい！　次はオマエに遊んでもらうよ」
「あ、次は何だ？　飯事でもやンのか？」
お互いを見据え、お互いが距離を取る。
両者とも動かず、乾いた風だけが静寂をよしとする公園内に騒ぎ続けた。

「あれ、三森さん。珍しいですね、休みの日に公園で散歩？　意外っすね」
この場に相応しくない、暢気な声を上げて一が現れた。
突然の乱入者に、ソレと三森が目を丸くする。
「何してンだ、退けっ」と三森が一を叱り付ける。
その言葉を右の耳から左の耳へ受け流す様に、一が三森より一歩前へ出た。
「次はオマエが遊んでくれるの？」
「そうだよ」と答え、更に一がソレへと近づく。
あはは、と高く笑い、ソレが腹部を手で押さえる。
「何して遊ぶ？　弱そうなお兄ちゃん」
「お飯事でもしよっか。ほら、これ上げるから降りといで」
そう言って、一が何かを掴んだままその手を掲げる。

「その手には乗らないよニンゲン。セーレーはそこまでバカじゃないのさ」
「言っておくけど、俺はホントに弱いから戦う気なんて無いよ。と言うか、戦いたくないし。君を助けに来ただけだから」
ほらほら、と手を振って一が言った。
「何だと？」「何ですって？」
一の耳に、後方から二つの声が同時に届く。
振り返れば、怒った顔の三森と糸原。
「糸原さん？　何やってんですか、こんなとこで」
やっと倒れていた糸原の存在に一が気付く。
同時に、しまった。とも一は思った。
糸原が顔を隠す様に地面に伏せる。
「……本当に何だってンだ。説明しろ」
三森が怒りを通り越して呆れた、と言う様な表情を浮べる。
「あー、その……。えーと」と、一が言葉に詰った。
「……そこの女。あの女に似てるよな。名前まで同じってェのはただの偶然か？」
答えを急かす様に、三森が一を問い詰める。
「同一人物、です」
「ちょっとぉ！」
一は三森の視線に耐えられず、白状した。
「良し一個終わった。もう一つは」
「無視すんなよ！」とソレが割り込む。
「ソレは？」と三森が火を点けていた煙草の煙を吸い込んで言った。
一が掌の中の物を広げて見せる。
「すぐに分かります」
そう言って、一が飴玉を握りなおしてソレに向かった。
「ほら、飴食べよう。何もしないからさ」
「うそつけ、ニンゲンはうそつきだ。さっきの子供もそうだったぞ、遊んでくれるって言ったのに途中で帰ろうとした！」

ソレが喚いて、小さな腕を振り回し、空中で暴れる。
「へえ、そうなんだ。ま、子供だからね。俺は嘘は付かないよ。ほら、甘い飴だぞー」
年下の子供に言う様に、一が優しい声を掛ける。
そして手の中の包み紙を開いて、透き通った水色の飴玉を口に放り込んだ。
一はコロコロと、舌の上で飴玉を転がす。
――飴なんて食ったの久しぶりだな。
舌の上に広がる甘みを感じて、一は懐かしく思った。
「甘いの？　おいしいの？」
お菓子に興味を惹かれ、ソレが警戒しながらだが、ゆっくりと降りてくる。
「甘いし美味しいよ」
一がポケットの中から適当に飴の入った小さな袋を掴む。
広げた手からは零れんばかりの色とりどりの飴玉。
その中から一つ摘み上げ、ソレに差し出す。
ソレは一と緑色の飴を何度も見比べ、素早く一の手から包み紙を引っ手繰った。
引っ手繰った包み紙をそのまま口に入れようとする。
「違うって」と、慌てて一がソレの手を止めた。
包みを開け、一が改めてソレに飴を差し出す。
今度はしっかりと受け取る様に、小さな手が飴を手に取った。
「ほんとだ」
飴玉を頬張りながら嬉しそうにソレが言う。
あれほど吹いていた風はいつの間にか止んでいた。

「……シルフ、ですか？」
「ああ、風の精霊って奴らしい」
店長が電話を置いて、一の問いに答える。

「ソレとは違うんですかね？」
「いや、要は同じだろ。ただ対処し辛いのは確かだな」
店長が煙草を吸いつつ、目線を上に向けた。
「ガキらしい」
はあ、と一が訳が分からないと言った表情を顔に出す。
「だから、シルフってのはガキらしい」
「意味が分からないんですが」
一が店長の顔を見る。
店長の顔は真面目そのものだった。
「勤務外が動く程の被害は出ていないんだよ」
一が疑問を口にする。
「一応、シルフって種類のソレが出てきたのは確かなんですよね？　で。何で勤務外が動いてくれないんですか？　人間が襲われたりしたら遅いと思うんですけど」
そうだな、と店長が答えた後。
「シルフは今ガキと遊んでるらしいな」
ああ、と一が納得する。
「そんなタイプのソレもいるんですね」
「ああ。いるらしいな。それで私らに仕事が来た」
「え？　だって勤務外が動くまでも無いって」
いやいや、と店長が楽しそうに否定する。
そして回転式の椅子をクルリと一の方に向けて。
「だから一般（おまえ）の仕事だよ、一」
これまた楽しそうに笑った。
「俺が？　ソレ相手に何をしろって言うんですか？」
「簡単だ。帰れっつって人間の世界からお引取り願うだけで良い」
どうやって、と一が呆れ顔で尋ねる。
「知るか」と答えが返ってくるまで時間は大して掛からなかった。
「相手はガキだ。気分でも良くして帰ってもらえ」
「だからどうやって！　嫌ですよ怖いですよ！」

一が見っとも無く喚く。
「うるさい！　どうせ害も悪意も無い子供が相手だ、菓子でもくれてご機嫌伺ってれば良いだろ。それと嫌でも怖くても仕事だから行って来い、私は嫌だし面倒だから行かないぞ」
「……いつか辞めてやりますよ」
一が店長をジト目で見る。
「駄目だ。それと、失敗したら時給下げるからな」

既に四つ目の飴に手を伸ばしているソレ――シルフ――を見ながら一はつい三十分前の事を思い出していた。
一は三森と糸原を横目で見ながら、この先どうしようかと頭を捻る。
「気に入ったぞオマエ、良いニンゲンだな」
シルフが飴を両手に持ちながら言った。
そして手の中の飴玉を嬉しそうに眺める。
一が「それはどうも」と、見た目は子供、中身も子供のシルフに会釈。
「あのさ、飴のお礼に俺からも一つお願いを聞いてもらっていいかな？」
と、一が恐る恐ると言った具合に口を開ける。
シルフは返事をせずに、「なんでさ？」とでも言うかのように首を傾げた。
「とりあえず、人間の近くに出てくるのを止めてくれないかな？」
一が目を泳がせながら何とかそれだけ口にした。
――ド真ん中過ぎ。
そのやり取りを見ていた糸原は片手で顔を覆う。
「だから、なんでさ？」
シルフの顔色が明らかに変わる。
手に持っていた飴玉を遊ばせながら、不機嫌そうに一に返した。

「うーん。俺は君に飴を上げた。だから君も俺に何かして下さい。ギブアンドテイクって知ってるかな？　大人の常識。君は頭が良いし、非常に紳士的だから知ってるとは思うけどね」

大人の部分を強調するように一が言う。

「ぎぶ……。ま、まあね、もちろん知ってるさ。何たってシルフ様はオマエとおんなじで大人だかんね」

一から目を逸らせてシルフが言った。

「いやいや、俺はまだまだガキだよ。大人ってのは君みたいな人の事を言うんだよ」

「そうかな、そうだね、そうだよね！」と、シルフの視線が徐々に一へ向いていく。

シルフの顔は喜びに満ち溢れていた。

「なら俺のお願い聞いてくれるかな？」

腕を組み、目を瞑ってシルフがうーん、と唸った。

――後一押し……！

一は拳を固く握った。

「さっきのだけじゃ割りに合わないなー、やっぱやだなー」

シルフが空中で回りながら呟く。

聞こえない様に一が小さく舌を打つ。

「言う事聞いてくれるんなら、今度俺と会った時にはさっきの飴に、チョコレートとキャラメルも付けるよ。知ってるかなー、すっげえ甘いんだよチョコは。飴より断然美味いね」

ピタリとシルフの動きが止まる。

「ちょこれーと？　きゃらめる？」

「うん」

「飴よりおいしいの？」

「飴よりおいしいよ」

「甘いの？」

「甘いよ」

目を輝かせてシルフが一に尋ねる。

一があくまでにこやかに答えた。
やがて沈黙が公園に訪れる。
誰も声を発さないまま、雲が流れ、穏やかな風が吹く。
「……シルフは大人なんだぞ」
下を向いてシルフが言う。
「そうですね」と一が相槌を打った。
その相槌は酷く適当な物だったが、打たれた本人は気付いていない。
「特別だぞ、今日は特別だかんな！」
そう言いながら、シルフが柔らかな風を起こした。
その風を使って浮き上がって行く。
「ニンゲン、絶対だかんな。また来るからな」
「うん、またね」
一がそう返すと、シルフは高度を上げていく。
地上に居る人間からは、段々とその姿が小さくなる。
砂埃が上がる程の強い風が吹き、一は思わず目を瞑ってしまう。
しばらくして一が目を開けると、風の精霊は完全に見えなくなった。
「やるじゃない。どっか行ったわよソレ」
糸原が、服に付いた砂を払いつつ一に近づく。
「所詮はガキですね」
勝ち誇る様に一が言った。
「っていうかアンタ意外と度胸あんのね」
瞳を少し大きくして、糸原が一を眺める。
「度胸も何も、相手は子供ですよ。危険なんて無いって聞いてましたし」
「は？　あのガキのした事見てないっての？」
一が目を丸くした。
――どういう意味だ？
考え込む一に三森がゆっくりと近づいて来る。

全てを悟った様な、いつもよりはほんの少しだけ優しい表情を浮べた三森が一の肩に手を置いて、「騙されたンだよ」と同情するように言った。

「え？　あの、誰にですか？　何をですか？」

「とりあえず店に帰ンぞ、テメェもだよ犯罪者」

まだ悩んだ様子の一と、反対側から逃げようとしていた糸原に三森が声を掛ける。

冷たい風が公園内を吹き抜けていく。

木枯らしだろう。

本格的な冬が駒台に迫っていた。

背中は蹴られた

駒台の古びたアパート。そのアパートの一室、２０２号室。表札には「一」とプレートが貼られている。

その部屋は一人で住むには狭く、二人なら尚狭い。

薄型テレビが普及している今の時代には古めのブラウン管型のテレビ。適当に積まれた敷布団と掛け布団。部屋中に散らばる雑誌。小さな冷蔵庫。流し台の周辺には汚れの取れきっていない炊事用具。

一の部屋には家具と呼べるものは必要最低限しか置いていないようだった。

その狭い部屋の真ん中に陣取るこたつを陣取る居候、糸原四乃。

糸原は、大人二人がギリギリ足を伸ばせるような大きさのこたつを独り占めして寝そべっている。

うつ伏せの体勢で欠伸をしながら、さも退屈そうに求人誌のページを捲り続けていた。

「バイト先は決まりましたか？」

一が壁に背をもたれながら口を開く。

うーん、と返事にならない声を発し、糸原は求人誌を読み進める。

小さく溜息を吐き、一は壁に掛かった時計を見上げた。

一のアルバイトの時間まで、後三十分を切っている。

家からオンリーワン北駒台店までは歩いて十分は掛かる。オンリーワンでは、時間までに出勤すれば問題は無いルールだったが、一はいつも十五分前にはアルバイト先に到着するようにしていた。

――準備して、そろそろ出ないとな。

そう思う一だったが、なかなか腰は上がらない。この部屋にさっきから漂う気だるい雰囲気の所為だろうか。

一はぼうっと、規則的に動く時計の針を見続けていた。

「ねえ。まだ行かなくて良いの？」

一が視線を下げると、糸原がこっちを見ているのに気付く。

声を掛けた糸原は求人誌を閉じると、水平に手首のスナップだけで投げる。積まれてあった雑誌の山の一番上に、ページを開けてそれは落ちた。

「そうですね、そろそろ行きます」

ゆっくりと立ち上がり、一は流し台に向かってから蛇口を捻る。流れ出る水に手を浸すと、指先が痺れるほど冷たかった。顔を洗わずとも目が覚めた気がして、手だけタオルで拭いて一は上着を羽織った。

何も持たず、一は玄関で靴を履く。

「何時ぐらいに帰ってくんの？」

糸原がテレビのリモコンを持ち、番組表の載っている情報誌をこたつの上に広げながら言った。

「十時過ぎには」と、靴紐を弄りながら一が答える。そのまま何も言わずに一が扉を開け、閉めようとした。

「いってらっしゃーい」

糸原がワイドショーに視線をやりながら、手だけ上げてそう言った。

少し遅れて、戸惑う様に一が「行ってきます」と言う。

扉が閉まる音。

やがて２０２号室には作り物の笑い声だけが流れる。

「え？　新しいバイトですか？」

一が驚いた様に店長を見る。

「ああ、しかも二人もだぞ」

顔を綻ばせながら、店長が言った。

「いつから来てくれるんですか？」

「一人はいつでも良いとさ。もう一人はこっちに来てから面接をして採用する」

一の顔が少し歪む。

「どういう意味ですか？」
だからな、と店長が前置きする。
「一人は昨日面接して採用。一人はこっちに来てから面接して採用。何でも九州から態々駒台まで来るらしい」
「九州かあ。へー、色々といつの間に。けどこれで俺らの負担も減りますね」
良かった良かった、と一が鼻歌交じりに制服に着替え出す。
「二人ともコンビニ、と言うかバイトするのは生まれて初めてだそうだ。色々と教えてやれよ。レジとか接客とか掃除とか品出しとか」
「殆ど全部じゃないですか。ヤですよ。新人の教育ぐらい店長がやって上げて下さい」
理不尽な提案をあしらって、一が店内へと足を向ける。
「私は絶対にしないぞ」
店長が煙草に火を点けながら、パソコンのディスプレイへ睨む様に目を向けた。
――頭おかしいんじゃないかこの人は。
一はダスタークロスとモップを乱暴に掴むと、ドアを足で押し開け店内に立つ。
我侭な店長に対して怒りもしていたが、それ以上に新しい店員が入ってくる喜びの方が勝っていた。一がカウンターの中に着く頃には、さっきまでの仏頂面がすっかり直っていた。
一は掃除用具をカウンターの奥に立て掛け、レジ前に置いてある、少なくなった煙草の補充作業に移る。
少なくなっている銘柄の名前を、置いてあったレシートの裏に書き込んでいく。
ふと、店内に誰かが入ってくる気配を一は背中越しに感じた。
作業を中断し、入り口の方に振り向く。
ああ、お客さんだ。一はそう判断して「いらっしゃいませ」といつもの様に挨拶した。
「店長さんは居ますか？」

店に入ってきたのは女の子。一は自分よりも小さい背丈の『お客様』を見て思う。

ショートカットに揃えられた黒に近い髪。その瞳も同様の色をしている。スカートを穿いていて、一を見上げている女の子。

その小さな女の子がハッキリと一に告げた。

「え？　店長、です、か？」

一は切れ切れになりつつも言葉を紡ぐ。

――何でこんな子供が店長を？　クレーム？　店長の妹、娘？　誰何だ？

困惑する一に追い討ちを掛ける様に女の子が言った。

「良いから店長を出しなさい。ほら、馬鹿みたいな顔してる前にさっさと動いてよ」

訂正しよう。

女の子の肩に止まっている鳥が翼をバタつかせながら言ったのだ。

バックルームには煙草を吸う店長、椅子に座る女の子、仕事を終えた一、飛び回る鳥が居た。

その鳥の目は顔の前面に位置しており、鷲の様な嘴を持っていた。体毛は雪が積もったかと思えるほど真っ白で、首をクルクルと回している。

一言で表すならば、それは梟だった。

「で。北駒台は如何するつもりなの？」

等と。威圧感の無駄にある声が一の耳に聞こえてくる。話の内容をなるべく聞かない様にして一は制服をロッカーのハンガーに掛け、上着を着た。

お疲れ様です、とすら言えない険悪な雰囲気。

――でも黙って帰ったら店長うるさそうだしなあ。

だが、この場に留まっていてもどうする事も一は出来ないと感じていた。

一は意を決し、途轍もなく不機嫌な顔をしている店長の目を見ない様に「お先に失礼します」と何とか声を出した。
返事も待たずに、若干早足で一はその場から立ち去り、店の外に出て、気持ちを落ち着かせるために一服する。
紫煙をゆっくりと吸い込み、吐き出す。
店の照明が届いていない距離から、何かが見える。
落ち着き始めていた一の視界に赤い物が飛び込む。
一は、ああ、しまったなあ。と思いつつ、その場から動けないでいる。
「……よう」
目を合わせないで、北駒台店にやってきた三森が一に声を掛けた。
「……おはようございます」
入り口の前の灰皿に、煙草の灰を落としながら一が返す。
三森が煙草を銜え、指と指を擦り合わせた。指の腹から小さな炎が揺らめく。そこに顔を近づけ、火の点いた煙草から煙を吐き出した。
「今日は終わりなンか？」
「ええ」と一が三森の問いに短く返す。
お互い何も言わないで、時間が過ぎて行く。
三森が、水の張ってある灰皿に吸殻を落とし、扉に手を掛けた。
「あ」と思わず一が声を発すると、三森の動きがピタリと止まる。
「あンだよ？」
「今、中入らない方が良いっすよ。店長と偉そうな人たちが話してるんで」
と伝えた一だったが、喋る梟を思い出し、人たちでは無いよなあと思い直した。
「関係ねェよ。どうせ支部の連中だろ」
三森がぶっきら棒に返す。
折角の忠告を無下にされ、一が気分を害した様に、感情を込めず「ああ、そうですか」と更に返した。

「……最近やけに私に突っ掛かるじゃねェか、自分の立場分かってンのかお前」
三森が開け掛けていた扉から手を放し、一を睨みつける。
「突っ掛かって来てるのは三森さんじゃないですか。俺は普通に喋ってんのに、そっちはああだりぃって感じで返してくるし」
「ンなの全部お前の勘違いだろ」
「違いません」と尚も一は食いつく。
一の態度に業を煮やした三森が、一歩踏み出した。
そして一の襟元を片手で掴み上げる。
ある程度は覚悟して発言していたが、三森の拳が振り下ろされた時は流石に目を瞑った。
勢いづいた拳は一の顔面に届く前に、何かによって止められる。
「邪魔よ。通れないわ」
何者かがその拳を一の眼前、片手で食い止めていた。
長い黒髪を空いている方の手で優雅に梳くと、「や」と一に声を掛ける。
「糸原さん」と、一が安心した様にその人物の名前を呼んだ。
「テメェ、こないだの女じゃねェか。あン時は店の前まで来て逃げ出しやがって、今更何の用だってンだ」
三森が握った拳に力を込めながら、糸原に問い掛ける。
「田舎のヤンキーには関係無いわ。それより、早くその手を退けて」
問いには答えず、糸原が蔑む様な視線を三森に送った。
間に挟まれた形の一は又もや動けないでいる。
――助かったけど情けねぇ。
「お前こそ退けやがれ。大体テメェは一の何なンだ」
シルフ戦の時に聞こうと思っていた事を三森は改めて尋ねた。
指名手配犯とコンビニの一般店員。
この二人が知り合いだと言う事に三森は訳が分からないでいた。
拳を重ねたまま、糸原が一を見る。
再度三森を見据えて。

「一つ屋根の下で暮らす仲よ」
と、愉快そうに言い放った。
「え」と、その言葉に三森の力が弱まる。
その隙を見逃さず、糸原が掴んだ拳を腕ごと捻る様に回転させた。背中を向かされた三森の顔を再び見る事は無く、糸原が体勢の崩れたその背を押すが如く右足を踏み込む。
蹴られた背中を押さえて、三森が少し離れた所にしゃがみ込んだ。
あっはっは、とわざとらしく笑って、糸原が店内に入っていく。
それと入れ替わる様に先程の女の子と梟が現れた。女の子は一に頭を下げ、梟は何も言わないで一を値踏みするかの様にジッと見る。
「……お疲れ様です」
一がそれだけ言うと、二つの影は暗闇にそれごと溶かす様に姿を消していった。
残されたのは一と地面に座り込む三森。
糸原が何故この時間、この場所に来たのか一にはようとして知れなかったが、一つだけハッキリしている事があった。
「あー、その三森さん……」
一は声を掛けるが、三森は顔も上げず、返事もしないでただ黙り込む。
「糸原さんが言ってた事は、まあ、半分。いや二割はホントなんですけど八割嘘ですから。あの人は口から出任せって言うか、適当に口開けて生きてるんで。あー、す、すいませんでした」
――何弁解してんだ俺は。
自分の発言に呆れながらも、一が話を続けようとする。
「すっかり仲良しだな」
「は？」
一が聞き返すが、三森はそれ以上何も言おうとせずに立ち上がった。
三森は店に入ろうとせず、来た道を戻ろうとする。
今からバイトじゃないんですか、と一は聞く事も出来ずに、その

背中を見送った。
後ろ向きだったので、三森の表情、気持ちを窺い知る事は出来なかったが、それでもその後姿からハッキリしている事が一つだけあった。
「絶対怒ってるよな……」

「糸原四乃です、宜しく」
「うん、よろしくな」
店長が返事をする。
「マジかよ……」
一が信じられないと言った顔で、オンリーワンの制服を着ている糸原を見る。
「糸原は一般から始めるから、一。頼むぞ」
「え、はい。あ、じゃなくてっ。何で？」
糸原と店長が首を傾げた。
一が何に驚いているのか分からない、とでも言う様に四つの瞳が一が見る。
「だって、その。糸原さんはオンリーワンが追っ掛けてる指名手配犯じゃないですか。何でいきなりそこの店員になってるんですか？」
「いきなりじゃないぞ。面接も済ませたし、ちゃんと店に挨拶にも来たからな」
店長が偉そうに言った。
「違います、いきなりの部分は良いんですよ。だから、何で指名手配犯の糸原さんが」
「ああ、同姓同名だよ」
と、一の言葉を遮る様に店長が口を開いた。
「何言ってんのよ、私が悪い事する人間に見えんの？」
ジト目で糸原が一を見る。
「と言う事なんですよ。一君、宜しくお願いします」
眼鏡を掛けたスーツ姿の男性が笑顔でそう言った。
「堀さん、ホントもう、これはどういう事ですか？」
「んー、実はですね。タルタロス（あちらさん）が指名手配の件を撤回して来たんですよ。三森さんにも連絡したんですが、都合が付かないので早急

に伝えなければいけないんですけどね」
堀がのんびりとした口調で言う。
――嘘だろ？　タイミング、良すぎじゃないか……？
一が未だに呆然としている。
「お前の気持ちも分かる。正直言って私たちも今回の上からの命令には疑問を感じてる。でもな、使える奴は使いたい、手元に置いておきたい。それが私の気持ちだ」
突っ立ったままの一を見据えながら店長がハッキリと物を言う。
「犯罪者って肩書きが消えた私を雇わない店なんて無いって事よ」
言って、糸原が意味も無くにやけた。
「それって、この前に来てた鳥を連れてた女の子と関係あるんですか？」
一が何気なく、誰に聞くでもなく、声を発する。
だが、その問いに答える者は一人としていなかった。
堀だけが困った様な笑顔を浮べている。
何かがおかしい、一はそう思わざるを得なかった。

小さな部屋。
その部屋には、扉と窓と机と椅子が一つずつあるだけで他には殆ど何も無い。窓からは何処までも広がる荒野が見える。空は暗く黒く、地には草木一本も生えていない。隆起した土と転がる岩だけがオブジェクトと成り果てている。
荒れ果てた大地を、椅子に座りずっと眺めている人物がいた。
それ以外何もしようとはせずに、いや。それ以外何も出来ないのだろう。何も無いこの部屋、この世界では。
退屈そうに溜息を吐く事も、今居る世界を恨む事も無く、そこにいるのが当たり前とでも言う様に、時間が過ぎて行くのを待っている様子だった。
そうして、どれだけの時間が流れていったのだろう。

閉じられていた扉が開かれる、ゆっくりと。
椅子に座っていた人物が、振り向きもせずに声を掛ける。
「何かしら？」
その声は良く透き通り、脆く壊れやすいガラス細工の様な危うさがあり、美しかった。が、同時に冷たくもあった。
声から察するに、その人物は女性と思われる。
黒いローブを身に纏う細身の体。部屋の中だと言うのに、ローブに付いているフードを深く被っていて、顔は確認できない。
使い古された表現だが、ミステリアス。女性の雰囲気はこの一言に尽きた。
女性の声を聞いて、やっと扉を開けた人物が口を開く。
「仕事をして下さい」
そう言った人物の声は、少しばかり震えていて、目も泳いでいた。
細く、頼りない声。
「嫌よ」と、ローブを着ている女性が短く答えた。
声は先程と同じく美しかったが、ハッキリと拒絶を示す強さもある。
女性は白い指先を口元に当てた。
「あのニンゲンはどうしたの？　もうずっとここに来ないじゃない」
「は、はい。あ、あのその……」
声を掛けられただけで、その人物が落ち着きを失くした様に、更に声を震わせる。
「男ならしゃんと物を言いなさい」
扉を開けた人物は、どうやら男だったらしい。だが、どうにも頼りない印象を受ける。
冷たい声の持ち主に視線を送られていた男が、唾を呑み込み、意を決し声を絞り出した。
「あ、その、死んでしまった様です。その後、向こうからは後任をどうするかの連絡もして来ない、次第でして……」
それだけ言うと、男は一仕事終え溜息を吐く。

「それで？」
女性が男に問い掛ける。
予想していなかった答えに「は？」としか男は返せなかった。
口元に当てていた指を、こめかみに移すと、女性は呆れた様に口を開ける。
「私は如何すれば良いのかしら？　仕事、しなくて良いの？」
「い、いえ！」
言いながら、慌てて男が首を横に振った。
「じゃあ連れて来なさいな、新しいのを」
「し、しかし……。現在は三名しか雇っていないらしく……。正直な話、こちらに人材を回すのは無理かと」
男がゆっくりと、遠まわしに無理です、と否定する。女の顔色を伺うと、取り立てて機嫌を悪くしている素振りは見られなかった。
「正直な人は好きよ」女性が窓の外を見ながら呟く。
良かった、と男が胸を撫で下ろした。
「あなたは嫌いだけどね」
「あれ？」
撫で下ろした胸が掻き消えていた。
まるで魔法でも使ったかの様に、そこだけ神隠しに遭ったかの様に。
血も出ておらず、ぽっかりと穴が開いている。男の体を通して、向こう側の景色が覗けた。
上半身と下半身は、見えない何かで繋がっているみたいに微動だにしない。
「もう一度死になさい」
指だけ動かして、視線は窓に向けたまま女性が言う。
小さく男の声が漏れると、その姿は跡形も無くなり消え失せた。
女性が指を振ると、開きっぱなしの扉が軋んだ音を立ててゆっくり閉まる。
二人入れば息苦しくなる小さな部屋、そこに静寂が帰ってきた。

女性は椅子に深く腰掛け、視線を窓にやる。
いつまでも、どこまでも荒野が広がっている窓の外。
「退屈ね」
そう言うと、女性は目を瞑った。

「あ、また客層キー押してないですよ」
「うっさいわね」
オンリーワン北駒台店内にはレジスターが二つ設置されている。
その内一つを半ば貸しきって一と糸原が何かやっている。
「ほら、こうすればいいんでしょ？」
「はい」と一が疲れた風に返事をした。
糸原はレジに付いているボタンをさっきから何度も押している。
「何でそこで十代の客層押すんですか。煙草買う人のは二十歳以上でしょう」
一が冷ややかに言うので、「うるさい馬鹿」と語気を荒げて糸原が喚く。
やっと、レジに並んでいた客を捌いて店が静かになる。
糸原の手にはマニュアルらしき物も握られているが、そのマニュアルは丸められていて、読まれた様子はまるで無かった。
「まあ、初めてにしてはそこそこ良いんじゃないんですかね」
一がどこか、上からの目線でそう言った。
「アンタ、人よりレジが打てるからって得意気になってんじゃないわよ」
糸原がジト目で一を見る。
冷たい視線を気にする事も無く、一がレジ内の札を数えて分けていく。
「何やってんの？」と、糸原が聞いた。
一が、札を指で弾きながら「十枚に纏めてこっちに置いておくんですよ。一万出す客も居ますし。一々バラになった状態から数える

より早いでしょ」と返す。
「まめねえ」
「もう癖になってますから。あ、それより、何で糸原さんここで働こうと思ったんですか？　あなたにしたら元々は敵地なのに」
一が聞く。
糸原が腕を組み、考え込む姿勢を見せた。
一が纏め終わった札の束をレジに仕舞い込み、丸まったマニュアルを何気なく捲る。
「アンタが働いてるから」
長い髪の毛を弄りながら、糸原がそう言った。
「……俺がいれば少しは楽が出来るかな、と？」
「そんなつもりは無いわよ」
嘘だな、と思いつつ、一が糸原の言を流す様にマニュアルを読み進めていく。
「レジは覚えたみたいですし、次は掃除教えますね」
「掃除ぃ？　私そういうの嫌いなのよねー」
糸原が本当に嫌そうな顔でひとりごちた。
一が掃除用具を取りに行く為、バックヤードに入る。
何となく、糸原が置いてあるマニュアルを手にとって、読んだ。
――ビール券とか面倒そうね。アイツにやってもらおう。
扉の開く音がし、糸原が顔を上げる。
掃除用具を持った一と、険しい顔の店長が居た。
一は心底困った、と言う表情を浮かべている。やがて、カウンターまで二人がやってきて、店長が言った。
「タルタロスから電話が来た」
そして、制服のポケットから煙草の箱とライターを取り出す。
「吸ったら怒りますよ」一が釘を刺す。
構わず、店長が煙を吐き出した。
「糸原さん？」
糸原は何も答えず、何も言わないで皺くちゃになったマニュアル

に視線を落とし続けている。手には力が入っており、どこか、顔色が悪くなった様にも思われる。

その様子を見て、店長がああ、と納得した様な素振りを見せた。

「心配するな、糸原。お前じゃない。いや、お前でもあるのか？」

「何言ってんですか？」

一が訝しげに尋ねた。

「向こうの偉い人から電話が来てな、早く差し入れを持って来いだと」

店長が灰を、店に備え付けられているゴミ箱に落としながら言う。

「差し入れ？　何でよ？」と、糸原が聞いた。

「何か知らんが、決まりになってる。そういや忘れてたな」

と、遠い目をして店長が呟く。

「忘れてたって……。で、誰が差し入れをタルタロスまで持って行くんですか？」

発言した一から、糸原が目を逸らせた。

「それをどうしようかと思ってる。適任は三森だが、あいつ顔も見せないしな」

「田舎のヤンキーの癖に」糸原が小さく舌打ちした。

一が首を傾げる。

「へ、三森さんが適任なんですか？　あー。そもそも、タルタロスって何処にあるんすか？」

店長が一を見る。うるさい奴だな、とその目が語っていた。

「三森の家は支部の近くの寮だ。タルタロスは支部の近くにある」

ああ、と一が納得する。

「そりゃ適任過ぎるわね。早く連絡取ってよ、私は嫌だからね」

「電話は掛けてるんだが出ない。だからな。お前らのどっちか、今から行って来い」

店長が、吸殻を床に捨てて言う。

「差し入れを前まで届けてた人は？　辞めちゃったんですか？」

「そんな事聞いてもしょうがないだろ」と、店長が面倒くさそうに

言う。
いやいや、と一が頭を振る。
「その人の後任って言えば、話は早そうじゃないですか」
店長が目を細め、「それもそうか」と呟いた。
「で、名前は？」と話を聞いていた糸原が尋ねる。
「すずき、たなか、いや、さとうだったっけな」
店長が頭を掻いて、名前を挙げていく。
「平凡そうな名前ねぇ」と、馬鹿にした様に糸原が言った。
ふと、一が制服のポケットに手を入れる。
一の背中を冷たい何かが走った気がした。何かをその手が掴む。
「あの、もしかして」と一が声を弱弱しく発する。
「サトウさんですか？」
と、ポケットの中に入っていた名札を手に持ちながらそう言った。
「ああ、そうだ。そいつだよ」と、名札に指差しながら店長が答える。
「決まりだな。一、お前が行って来い」
ええ、と不満の声が一から上がった。
「何で俺なんですか？　名札が偶々入っていただけなのに」
「運命を感じるわ」
「うん。前任のサトウが、次はお前だ、と言っている様だ」
「すごく……不吉です」
そして店長が、仕事は終わったと踵を返す。
糸原も、安心した様に内心胸を撫で下ろした。

一が財布の中身を確認する。
既に制服から私服に着替え終わり、店内で『差し入れ』を物色していた。
一の近くには店長と堀がいて、横からアドバイスとも、非難とも言えない言葉を浴びせかける。

「ああ、お酒は辞めておいた方が良いですね」
「菓子を見るな。馬鹿かお前は」
「店長うっさいです」
そもそも、と一が口を開いた。
「何で俺の自腹なんですか？」
「なにぶん、突然の事でして。次回からはお金を用意しておきますから、今回だけは」
堀が眼鏡の位置を直し、申し訳無さそうに言う。
かごには、おにぎりやサンドイッチ、パックのジュースなどの単価が低めの商品ばかり入っていた。
店長がガムと飴をかごに突っ込んで、買い物は終わる。
「これはお菓子じゃないんですか？」
一が尋ねると、「それはお前のだ」と店長から返ってきた。
――俺の金なんだけどなあ。
疑問に思いつつも、これ以上深くは考えないようにして一はレジへ向かう。
かごをカウンターに置くと、雑誌を読んでいた糸原が「いらっしゃいませー」と、至極ダルそうに言った。
「もっとしっかりして下さいよ」
「……だってさ、アンタが出てったら新人の私だけで仕事してなきゃなんないのよ？　それってどうなのよ？　今から体力温存しておいてなんか悪い？」
捲くし立てる糸原だったが、しっかりと手も動いていた。
商品を手に取り、リーダーでバーコードを読み取っていくその姿は、すっかり慣れた物だった。
「じゃあ、糸原さんが行きますか？」
と、一が商品を見ながら自嘲気味に言う。
糸原は何も言わずに、読み取った商品を袋に詰め込んでいく。
「あ、重い物から先に詰めてって下さい。ああっ、パンの上にジュース入れたら潰れるじゃないですか」

「ホントうるさいわね」
糸原の顔が不機嫌に染まる。
しょうがないな、と前置きして。
「じゃ、今日の晩御飯は何か良い物にしましょうか」
一が札をカウンターに置いてから言った。
「外食？」と、札を手に取り糸原が尋ねる。
「たまには良いですね。やっと働き手が増えた事ですし。つっても、そんな高い店駄目ですけど」
御釣を掌で受け取りながら一が言った。
「別に。ファミレスでも何処でも良いわよ」
「あれ、意外ですね」
「もっとお高い女だと思ってた？」
楽しそうに糸原が笑う。
一が苦笑いで返した。
「それを言うなら私の方が意外よ」
「何がですか？」と、一が聞く。
「アンタが私をデートに誘うなんて、って事が」
一が袋詰めされた商品を受け取り、財布を仕舞う。
「そういう風に受け取ります？」
「お姉さんは感激ね。そんじゃ行ってきなさい」と、一の目を見ずに糸原が言った。
行ってきます、と一が扉に手を掛けて、そう返す。

オンリーワンを出てから数分。始めのうちは、得体の知れない焦りに急かされる様に足を進めていた一だが、どうせならゆっくり行こうと思い直し、煙草に火を点け、ダラダラと、と言う表現が似合う程の速度で歩き始めた。
時刻は夕刻。冬の太陽はもう沈みかけ、背の高い街路樹が道に影を落としている。その影に溶け込む様に一が歩く。

――支部って前に行ったトコだよな。

一はゆっくりと変わる目の前の風景と、以前三森と歩いた風景を頭の中で比べていく。

分かれ道に来る度、どちらへ行くか迷う一だったが、持っていた荷物の重さに負け、正しいかどうかも分からない道を選ぶ。

初めて見る景色に焦燥感が募るも、何とか正しい道へと修正していき、十数分で一の目には記憶にある建物が見えた。

前回はまだ、日が沈みきっていない昼頃に辿り着いたので、暗闇の中に浮かぶ支部と、頭の中の支部とで、一は違和感を覚える。

確認の意味を含めて、一は辺りを見回した。近くに寮があると聞いていたので、それを探す。だが、近くには如何にも金持ちが住んでいる、と言った大きなマンションぐらいしかなかった。

「まさか……」

思わず独り言が出てしまう。

――これが寮？

ま、どうでもいいけど。そう思い、一は支部へと足を向けた。

タルタロスも支部の近くにある。支部の人に聞こうと、自動ドアが開くのを待ち、受付へと進む。

一は「すいません」と、受付の女性に声を掛けた。

何でしょう、と女性が笑顔で返す。

タルタロス、と言い掛けて、一は止まった。

――タルタロスって正式名称と違うよな……。

どうしようかと、そのまま一は固まってしまう。女性はそんな一を明らかな作り笑顔で見ていた。

「タルタロスって何処にあるんですか？」

一はそのまま聞いてしまう。

女性が言葉を詰らせた。しまったな、と一は思う。

「タルタロスの人に、差し入れを届けろって言われてて。あ、僕オンリーワンのバイトなんです」

決して怪しい者ではありません。とは言えなかった。

完全に女性の顔から笑みが消えた。変質者でも見る様な目付きで一を観察している。

――最悪過ぎるだろコレ。

「タルタロスの場所を知りたいのかい？」

「え？」と一が振り向くと、車椅子に乗った、大柄の老人がそこに居た。

髪の毛は薄く、スーツを着ている。老体にしてはやけに体つきがよく、一は少しひるんだ。

「どうした？　知りたくないのかね？」

老人がしゃがれた声で尋ねる。

「あ、はい。えと、僕は」

「いや、いい。事情は聞いていたからね」

そう言って老人は微笑んだ。

見ると、受付の女性が頭を下げている。

どうやら、この老人はオンリーワンの偉い人らしい、一はそう思った。

「ありがとうございます。教えて頂けますか？」

「うん。礼儀正しいね、君は」そう言うと、老人は車椅子の向きを器用に変えて、外を指差した。

「支部を出て、右手に進みなさい。殺風景な建物があるから、そこが君の言うタルタロスだよ」老人が言う。

一は頭を下げ、老人にお礼を言うと、支部を後にした。

外はすっかり暗くなっている。

――あの爺さんのお陰で助かった。

一が、車椅子に乗った老人の言ったとおりに進むと、確かに、真っ白に塗り潰され、色気の欠片も無い殺風景な建物が見えてきた。

白一色で塗装された大きな建物。冷たい雰囲気を纏わせた建物を覆う壁の上に、鉄条網が張り巡らせられ、正面には重たそうな門が腰を下ろしている。

どうやらここらしい、一が正面の門へと進んだ。警備員らしき服

装の男が二人いる。
一の予想通り、近づいていくとその内一人に呼び止められた。
「何か御用ですか？」
口調こそ丁寧その物だが、そこに一を歓迎しようと言う気持ちは一切感じられない。
「オンリーワンの者です。指示されたとおり、差し入れを持ってきたんですが……」
一がそう言うと、男二人が顔を見合わせる。
ややあって、無線機を持っていた男がどこかに連絡を取り始めた。
無線機からは聞き取り辛い声らしき音が流れる。
――話、伝わってねぇのかな。
一が不安げに警備員の動向を見つめた。
不意に、ノイズが聞こえなくなる。
「あの、もしかしてあなた。サトウさん、ですか？」
警備員が一を見ながら、自身が無さそうに聞いた。
それを聞いて一は。
「ああ、僕はサトウさんの後任で一（にのまえ）と言います。サトウさんは、その、亡くなられてしまった、ので」
警備員の顔に、驚きと言った類の感情が一瞬浮かぶ。が、直ぐに平静を装った風に「そうなんですか」と呟いた。
「分かりました。どうぞ、中にお入りください。途中までは私たちが付き添います」
「あ、どうも」と正直、一は訳も分からずに頭を下げた。

小さな部屋。
その部屋の前まで案内され、一はそう思った。
門を潜って直ぐに、本館と思われる建物から離れた棟へ連れて行かれ、一は警備員二人に付き添われて階段を降りていった。
階段はやけに段数が多く感じられ、どこか遠い地面の下の国にで

も行ってしまうんじゃないか、と一は思っていた。が、長い階段を下りきると、照明の薄暗い廊下に着く。

一応は人間が居てもおかしくない場所。

――ビビってたのが馬鹿みてぇ。

そうして一はこの扉の前までやってきたのだ。

「それでは、私たちはこれで。帰る際には申し訳ないんですが、お一人で先程の正門の方までいらして下さい」

警備員の片割れがそう言った。

「分かりました」と小さく一が頷く。

二人の男が背を向け、先程まで下ってきた階段を登っていった。

規則的な足音が、やがて小さく、遠くなるのを感じ、一はドアのノブに手を掛ける。

ノブを捻ろうとした瞬間、扉が独りでに開いた。

開いた、と一はおかしくも、そう感じた。なぜなら、扉は独りでに開かないからである。

――何で？

建て付けでも悪いんだろうか、一はそう思い込む事にした。

良く見れば、廊下の壁にひび割れ。床には染みがこびり付いて、フロアにも細かな傷が無数に入っている。

オンリーワンと提携している割には、支部の建物とは違って古臭く、お世辞にもきれいと言えた環境では無い。

「入ってきたら？」

戸惑っていた一に、声が掛かる。

部屋の中からしい。

一はいつの間にか握っていた拳を解き、扉を開いた。

心配してやったってのに

荒野。
荒れ果てている野。人けもなくて寂しい野原。
窓から唯一見える景色を眺め、一はそんな事を思っていた。ぼんやりと。
「座らないの？」
一はその声に、やっと我に返った。
「いや、僕はこれを持って来ただけですし」
そう言って、掴んでいたビニール袋を女性に見せる。
女性は部屋の中だと言うのに、フードを深く被っていた。どんな事を考えているのか、表情も、顔ですら分からない。フードからは、鮮やかな赤で彩られた唇だけが薄っすらとそれを覗かせている。
黒いローブ。白い肌。細い指。硝子の様に脆く美しい声。
一は参っていた。
――まるで魔法使いだな。こういう人苦手だ、早く帰りてぇ。
「見せてちょうだいな。何を持って来てくれたの？」
「失礼します」と、小さな机の上に袋を乗せる。
サンドイッチ、おにぎり、ジュースと言った商品が並べられていく。
並べていく最中、一は何か違うな、と思った。
まさか、差し入れを欲していた人物がこんな女の人だったとは、一は思いもしなかった。
食べ物ばかり、と言うのは不味い気がしてならない。
「成る程ね」
女性が囁く。
「何か、こういうのばっかですいません。あんまり詳しい話を聞いてなかった物で。てっきり、僕の中ではもっとこう、厳つい男の人をイメージしてたんで……」

一が弁解する。
目を泳がせ、耳まで真っ赤にさせて喋る一を見て、女性が小さく笑った。
「別に良いのよ。何も言わなかったのはこっちなんだから。私はてっきり……」
女性が詰った。まるで、自分でも思っても見なかった事を言おうとしたみたいに。
「あ。サトウ、さんですか？　店長が連絡してなかったみたいで……。これじゃ完全にウチの手落ちですね」
一が申し訳無さそうに口を開く。
「今度は期待してるわね」
優しく、励ます様に女性が言った。
――また来なきゃなんないのかよ……。
一が苦笑で返す。
「じゃあ、僕はもう帰って、その。良いですかね？」
「あら」と女性が短く声を発した。
「もう帰るの？　来たばかりじゃない」
そう言って、一の方へ顔を向ける。
「いや、お仕事のお邪魔しちゃ悪いですし」
一が帰っても良い雰囲気へ展開させようとした。
「私は仕事してないから良いのよ」
「……さいですか……」

――退屈。
カウンターに頬杖を付きながら、糸原はそう思った。
北駒台店は、住宅街の傍にあり、立地条件は悪くない。
筈、だが。得体の知れないソレと戦う勤務外が在籍する為、客足は多くない。
皆、恐れて近づかないのだ。

それでもやって来る客と言うのは、物珍しさからくる好奇心が恐怖より優先される人間、勤務外に対して何も考えていない神経の図太い人間くらい。

店にある目ぼしい雑誌も粗方読み尽くしてしまい、糸原は怠惰な時間を過ごしていた。

「宜しいですか？」

「ああ、ども。堀、さんでしたっけ？」

堀が缶コーヒーをカウンターに持ってきた。

「やっぱり退屈ですか？」

笑顔を絶やさず、堀が言う。

「私は忙しいよか良いと思うけどね」

糸原がバーコードを読み取りながら、軽そうに言った。

「私は一旦支部に戻りますので。お先に失礼します」

「お疲れ様ー、です」

堀が商品を受け取って、ドアの方へと足を向ける。

「差し入れって誰にですか？」

「はい？」

突然の質問に、堀が振り返った。

「一が届けに行った相手。誰かな、って」

「ああ、タルタロスの方ですか。そうですね、名前は存じ上げませんが、立場は上の人でしょうね。提携している店の人間を使い走りに出来るくらいですから」

と、シニカルに堀が笑う。

「……ヘルって奴じゃない？」

糸原が淡々と呟いた。

堀が眼鏡を中指で押し上げる。

「心当たり、と言うか。なるほど、先日まではそこに居たんですよね」

「まあね」と言いつつ、糸原が髪を手で梳いた。

「実は、タルタロスに勤務する人の名前。私には一人も分からない

んですよ」
缶コーヒーの蓋を開け、堀が言う。
糸原が訝しげに堀を見つめた。
「そもそも、知っている人が居るかどうか危ういですね。提携をしている、と言ってもどこまでの情報を教える物か、線引きも曖昧なんでしょうね」
私は下っ端だから、情報も入ってきづらい。と堀は付け加える。
「ふーん。流石に名前くらいは教えると思うけどね」
「そうですねえ。確かに百パーセント信用する事も出来ないです。まあ、お互いに害を成す存在とも思えません。現に、一君の前任の方は何事も無く勤めていましたしね」
堀が相変わらず顔に笑みを張り付かせたまま答えた。
「なら、良いんだけど」と糸原が独りごちる。
それでは、と頭を下げ、堀が扉を開けた。既に蓋の開いているコーヒーで喉を潤し、一分も掛からずそれを飲み干した。
ゴミ箱に空き缶を投げ入れ、車のキーを手探る。
「今の所はね」
そう呟いた堀の顔からは、先程までの穏やかな笑みが完全に消えていた。

「それで三森さんって人がですね」
「ええ」と女性が相槌を打つ。
小さな部屋に、一と女性が二人。
一が今までの事を思い出しながら、拙くも、必死で話す。
楽しそうに、怒りながら、悲しく。表情をコロコロと変え、一が話す。
「楽しい話ね」
女性が口元に手をやる。
上品な仕草だなあ、一は女性を見ながらそう思った。

「地上の話は聞いているだけで心が躍るわ」
「？　地上？」
一が首を傾げる。
「こっちの話よ。それで、続きは無いの？」
腕を組んで、一が考え込む。
「今の話は終わりなんですけど、ちょっと話題を変えましょうか」
「良いわよ」と、女性が返す。
ややあって、一が口を開けた。
「あなたの名前は？」
女性が小さく、肩を震わせた様に見える。
「何だと思う？」
透き通る声で、女性がそう言った。
また一が考え込む。唸ったり、髪の毛を弄ったりして、思考を巡らす。
「わっかんないですねー。俺こういうの苦手なんですよ」
一が困った様に笑った。
「付けてよ、名前」
一は自分の耳を疑った。
女性は窓に視線をやっている。
「え、俺が？　そんな、犬猫じゃ無いんですから」
「フフ、それもそうね。名前は秘密よ。貴方の好きな様に呼んで」
一に視線を移して、女性が愉快そうに言った。
「そうですか？　じゃ、まあ『あなた』で」
「詰まらないわね」
「……俺の名前は何だと思います？」
意趣返し、とでも言うのだろうか。今度は一が質問した。
「ハジメ」
女性が直ぐに答える。
一の顔が不審の色に染まっていった。
――下の名前は、言ってないよな……。

「外れです」と、一が笑う。
「ニノマエ。ニノマエハジメ、合ってるでしょう？」
女性が、自身有り気に微笑んだ。
「……エスパー？」
「エスパー？　ああ、超能力者の事ね。違うわ、知っていたのよ」
「何で？」と、一が目を丸くして、震えを隠しながら声を発する。
一の全身に嫌な気持ちが走った。
「何でだと思う？」
女性がそう言った後、沈黙。
部屋には、ピンと張り詰めた空気が流れた。先程までの、不自然なくらいの穏やかな雰囲気は既に流れ去っていた。
――ソレ？　違うよな。じゃあ何なんだこの人は？
「冗談よ」
笑った。
「え？」
「連絡した時に、貴方の店の事、色々聞いていたのよ。サトウが居ない事は聞かされてなかったけどね。驚いたかしら？」
女性が笑う。
曖昧な返事をして、一が苦笑いした。
「中々楽しませて貰ったわ。そろそろお開きにしましょうか」
「そうですね」と一が席から立つ。
「今度はもっと良い物をお願いね」
女性が一を見上げ、言った。
相変わらず、フードの下の顔は見えないまま。
「じゃあ、名前。次来た時には教えて下さいよ」
「そうね、考えておくわ」
女性の口元が弛んだ。
「遅かったじゃない」

糸原が、店のドアを開けた一に声を掛ける。
一が店を出て、帰って来るまでに数時間。
とっくに今日の勤務時間は終わっていた。
「すみません」と、一が頭を下げる。
「で？　あー、その」
言葉を詰らす糸原。
らしくないな、と一が不思議に思った。
「何ですか」と一が声を掛けるも、糸原は頭を下げ、人差し指をこめかみに当てて返事をしない。
やがて、黙ったままの糸原を放って、一がバックルームへと足を向けると、背中に何かがぶつかった感触。ややあって、床に何かが落ちる音。
一は不思議に思って視線を落とす。
――煙草だ。
包装された状態の、恐らく商品であった煙草を一の手が拾い上げる。
振り向くと、糸原が神妙な顔をしながら手招きをしていた。
「だから、用があるなら言って下さいよ」
「あー、だいじょう、ぶ。だったの？」
顔は下げたまま、糸原が声を絞り出す。
だいじょうぶ。
大丈夫。
「えっと、だから……何がですか？」
可哀想な人へ接する様に一が声を発した。
「……何もされてない？」
「されてませんよ」
「変な事言われなかった？」
「言われてませんよ」
「気分とか悪くなってない？」
「なってないです」

一は矢継ぎ早に質問する糸原を、怪訝そうに見た。
「アンタが差し入れを届けに行った奴。どんなだった？　その、あー。怪我とかしてなかった？　腕とかに」
――怪我？　して、ないよなあ。
「してませんでしたよ」
「それなら良いけど。ほら、さっさと仕事終わらせてごはんよ、ごはん。ファミレスでも立ち食い蕎麦でもどこでも良いわもう。すっごいお腹減ってるんだから。あー、お姉さん心配して損したー」
と、捲くし立てて糸原が溜息を吐く。
その様子を、一が黙って見つめていた。
「何よ？」と、ジト目で糸原が睨む。
言い難そうに、一が視線を逸らした。
「心配、ですか？　糸原さんが。何か有難いってか珍しいですね」
あはは、と一が笑う。
「フランスよ」
「は？」一が固まる。
「フランス料理よ」
顔を赤くした糸原がそう言い切った。
「無理ですよ。しかもどこでも良いって言ってたじゃないですか」
「フランス料理が良いの」
一の顔を見ないまま、糸原がバックヤードへ向かう。
「無理ですって」
「無理じゃない。私はワイン飲みたいしシャーベットもチーズもエスカルゴも食べたいの。凄く。凄く食べたい。私の言う事が聞けないっての？」
背中を向けて、糸原が喋る。
「持ち合わせも無いですし、店がどこにあるのかも知らないですし、俺はそんな場違いなトコ行きたくないです」
「じゃあどこに連れてってくれるっての？」
糸原の表情は分からない。

「お金の掛からない所が良いなあ、なんて」
「アンタモテないでしょ」
一が素直にはい、と頷いた。
そして思案する。
「……学校の、ゼミの奴から聞いたんですが、駅前に新しくファミレスが出来たらしいです。ファミレスにしては、まあ、食べられる方だと」
ゆっくりと一が話す。
「それで？」と、糸原が続きを促した。
――くっそ。ムカつくな、なんか。
「ファミレスじゃあ今日の糸原さんには不満かもしれないけど。晩御飯、俺と一緒に食べてくれませんか？」
フランスとは遠く離れた所ですが、と一が付け足す。
「……今日はそれで許したげるわ」
それだけ言うと、糸原はバックルームに入っていった。
やれやれ、一が大きく伸びをする。
ふと、棚を見ると、商品が滅茶苦茶に陳列されていた。
――フェイスアップ教えてなかったっけな……。
一はこれからの事を想像し、一人溜息を深く吐いた。

「ん？　何だ糸原、やけにご機嫌だな」
「別にー」

朝に殺すな

鳥が飛ぶ。
まだ日の昇りきっていない空を飛ぶ。
朝焼けが白い羽を照らしている。
空を行く者の姿を、少女が地上から見上げた。
綺麗だ、と。
幾千、幾万と繰り返し思い続けた事を飽きもせず思う。
鳥を見つめたまま、少女が歩いている。
のそり、と。
何処から現れたのか、少女を覆い隠す程の影が道の先から現れた。
黒に近い色を持つ瞳が、それを捉える。
先を進む白い鳥が気付き、少女の下へ飛んだ。
鳥が少女の肩に止まるより先に、少女が喉から悲鳴を絞り出すより前に。
黒い影が容赦なく、小さな命を薙ぎ払うべくその手を振り下ろした。

「勤務外ぃ？　嫌よ」
オンリーワン北駒台店、仮眠室。
その部屋のソファで寝転ぶ糸原が気だるそうに答えた。
「三森が来ない。一は無理。なら糸原、お前しか居ない」
店長が煙草を吹かしながら糸原を見据える。
「ヤンキー連れてくりゃ良いんじゃないのー？」
「無理矢理連れて来ても役には立たないからな」
「私はどうなのよ」と、糸原が疑問を投げた。
吐き出した煙と一緒に、「知るか」と店長が返す。
深く息を吐き出し、糸原がテレビのリモコンに手を伸ばした。

「時給は上げてくれるんでしょうね？」
「お前が生きて帰って来れれば」
雑音が仮眠室から消える。
「一は？」と、糸原が制服を脱ぎ、スーツに着替えだす。
「あいつはこのまま一般業務だ。お前には駒坂近くまで行って貰う」
糸原が眉を顰めた。
「駒坂？　どこよそれ」
「……大学の入り口にあたる坂道の事だ。ここじゃ皆そう呼んでる」
店長が間を空けた後、淡々と答える。
「ソレの数は？　強そうな奴だったらパスよ。私素人も良いとこ何だから」
「数は二。土蜘蛛。昔から出るポピュラーなソレだ。場所は駒坂付近。お前は使える」
情報を店長が列挙していく。
「あー、分かった、分かったわよ」

――また出たのか。
一が床をモップで磨きながら、そう思った。
糸原がバックルームに入ってから十分近くは経つ。
恐らくは店長に説得されているんだろう、と一は考えていた。
フロアの殆どをモップで磨き終わった頃、スーツ姿の糸原が姿を現す。
「ソレが出たんですか？」と、一が声を掛けた。
「行ってくるわ」
糸原が冷たく言い放つ。
う、と一が詰った。
「勤務外、ですか？」
と、それでも声を更に掛ける。
「そうよ。これで時給が上がるわね」

「……スーツ。新しいの何ですから、汚さないで下さいよ」
質問に答えないまま、糸原が一の姿を眺める様にして見た。
「しっかり留守番してんのよ」
「はい。あ、あの、お気をつけて」
歯を覗かせて、糸原が笑った。そして扉に手を掛け、店を出て行く。
その姿を一は黙って見送った。
「行ったか？」
店長が店内へとやって来る。
「糸原さんも勤務外になるんですか？」
一がモップを握ったまま尋ねる。
「一般もやって貰うけどな」
紫煙を吐き出しながら店長が返した。
「……大丈夫ですかね」
「心配か？　まあ、話を聞いてる分には問題無いと思うがな。ヘルハウンド二体を仕留めたらしいじゃないか」
蜘蛛ぐらいじゃ問題無いと、店長が愉快そうに付け足す。
一は何か違和感を覚えた。その正体が何か分からないまま、気持ちの悪さを払拭するために口を開ける。
「あれ？　俺、そんな話しましたっけ？」
「いや、糸原本人からだ。自己申告だが、嘘では無さそうだったぞ」
――あの人は……。
しかし違和感も晴れたし、店長の口ぶりからすると今回のソレは糸原の敵では無いらしい。ほっとして一はモップに体を預ける様に姿勢を変えた。
「三森が来ればもっと楽なんだがな」
「あ、それって、あの。糸原さんが原因じゃないんですか？　仲悪そうだったし」
一が先日の二人の小競り合いを思い出しながら声を発する。
「そうなのか？　私は三森から糸原の事を聞かされてたんだがな。

『使える』奴がいると。そうか、仲悪かったのか……」
私もまだまだだな、と独り言の様に店長が呟いた。
――どういう事なんだ？
三森さんが来なくなったのは、糸原さんと喧嘩したからじゃないのか？　あれ？
「どうした？」
店長の言葉も、一の耳に入らない。
一は首を傾げ、迷宮とも言える思考に耽るしかなかった。

朝焼けが照らす街中を、スーツ姿の女が歩く。
車道だろうと、歩道だろうと、お構いなしに闊歩する。
反対側からトラックが走ってこようが、大男が群れを成して歩いてこようが、彼女――糸原四乃――には関係無い様に思えた。
尤も、この時間帯に出歩く人は少ない。
おまけにソレが出たとの情報も伝わっている頃だ。
進んで外出する人間がいればそれは、自殺志願者か度を越えた野次馬ぐらいのものだろう。
駒坂、と呼ばれる坂へ脇目も振らず歩き続ける糸原。
先日まで一般業務に従事していた彼女の新たな役職。
勤務外。
あえて言うならば、先程の二つの例に勤務外を付け足しても問題は無い。
その勤務外店員糸原の視界の端に何かが飛び込む。
――アレね。
倒すべき、殺すべきモノだと判断した糸原が駆けた。
長く、美しい黒髪を風に揺らされながら。
ポケットに手を突っ込み、自分の得物をしっかりと握る。
道路を走りながら、敵の正体を見極めるべく目を遣った。
距離が近づくにつれ、その姿が大きくなり、ハッキリしたものに

変わっていく。
多足、赤い目玉、グロテスクな体つき。
「蜘蛛だわ、こりゃ確かに」
誰に言うでもなく、糸原が呟く。
長い足を忙しなく動かし、ソレが道を闊歩する。
蜘蛛は二体いると聞いていたが、一体しか確認する事が出来ない。
糸原はもう一体を探すため、辺りを見回す。
だが、先に蜘蛛の方が糸原を確認する。
蜘蛛の体の前面、無数に付いている赤い目がぐるり、と回転した。
その異様な光景に、糸原の背筋が冷たくなる。
乱れていた息を整え、キーパーグローブの様な物を両手に嵌めた。
ポケットに手を入れ、掴んだ得物をゆっくりと引き上げていく。
蜘蛛の姿をしたソレが器用に足をクロスさせながら近づいてくる。
最初はゆっくりと、そして次第に速度を増し糸原に襲い掛かろうと
巨体を揺らして走る。
――来たっ。
焦りもせず、騒ぎもせず、その巨体に糸原が立ち向かう。
糸原が腕をしならせ、両手を交差させ、振るった。
それはまるで調教師が獣に対して鞭を振るっているかのような手
捌き、もしくは劇場で優雅にタクトを振る指揮者の如く。
どちらにせよ、糸原の動きは熟練した物であると見て取れた。
だが、その手には何も握られていない様にも見える。
空手で空気を切り裂くだけの行為。
それだけで蜘蛛の動きが鈍くなった。
明らかにスピードが落ちている。いや、むしろ止まっている。
突然のアクシデントに驚いたみたいにソレが足を止めている。
「オッケ」
糸原が呟くと、蜘蛛の足に切れ目が走った。
切り傷にも見える痕から、濁った様な、色彩のバランスを何も考
えずに全ての色をぶちまけた様な緑色が薄っすらと見え隠れする。

やがて、蜘蛛の足の切れ目から液体が沸々と湧き出てきた。
蜘蛛の体液、それとも血液だろうか。
どちらにせよ、ソレの動きが止まった事だけは確かだ。
「まずは一匹っ」
糸原はそう言って、もう一度手を動かす。
空気の壁を越えて、そのままソレにまで何かを届かせた。
届いた何かは、更に切れ目を深くさせていく。
肉の裂ける音が聞こえ、液体が吹き出た。
そして地面に落ちる塊。
足だ。糸原の動きに従って、次々とソレの足が落とされていく。
最後まで自らの体と地面とを繋いでいた蜘蛛の足が落ちる。
一際大きな落下音が聞こえた。
先程までの俊敏な動きが幻だったのではと思えるぐらい、地面に這い蹲る様に蜘蛛の体が動かなくなる。
――何よ、楽勝じゃない。
糸原は上がった息を整えず、顔を下げる。
荒い呼吸を何度も繰り返しながらも口元が綻んだ。
「誰か！　この子を助けて！」
叫び声に糸原の顔が上がる。
羽をバタつかせて、必死に喚く姿。
中空で旋回しながら、助けを求める白い姿。
「アンタ、店に来てたフクロウじゃないの」
その声に梟が反応した。
「オンリーワンの……」
それだけ言うと、羽の動きが若干遅くなる。
一瞬だけ高度が上がると、梟は地に吸い込まれる様に落ちていった。
「ちょっとっ」
そう叫んで糸原が走るも、激突には間に合わない。
梟と地面の距離が縮まっていく。思わず目を瞑る糸原。

固い地面との衝突音は聞こえてこなかった。柔らかなクッションに包まれた様な優しい音が糸原の耳に届く。

「嘘」

糸原が目を開けると、あの時店に来ていた飼い主らしき少女が倒れていた。

その上に梟は運良く落ちたらしい。

――何よコレ……。

糸原は長く、深い溜息を吐く。髪を弄ろうと手を伸ばしたが、グローブを外してない事に気付き、喉の奥で小さく笑った。

真昼の葛藤

「で？　もう一体は逃がして厄介な物を持ち帰ってきた訳か？」
店長が冷たく糸原に言った。
表情こそいつもの店長だが、言葉には棘がある。
「しょうがないでしょ。逃がしたのも持って帰ったのも。むしろ一体はヤったんだからそこを褒めてよ。いや、褒めなくても良いわ、お金頂戴」
糸原が悪びれず口を開けた。
あのな、と店長が頭を掻く。
「コイツが何だか分かって連れて来たんだろうな？」
と、仮眠室で眠っている少女と梟に指を指した。
少女には毛布が掛けられていて、梟は近くで目を瞑っている。
「知らないわよ」
糸原が大袈裟に肩を竦めた。
「……詳しくは言えないが、面倒なんだよ。コイツらはな」
「何よ、訳ぐらい話せば良いのに」
射抜く様な視線が糸原を襲う。
店長の鋭い目付きに糸原はそれ以上軽口を叩けなくなった。
あーあ、と体を伸ばして椅子に腰掛ける。
「人間じゃ無いんでしょ？」
声のトーンを落とし、糸原が呟いた。
さっきまでの軽い感じが嘘の様。
「分かってるなら余計な事をするな。私が頼んだのは土蜘蛛二体を仕留める事だけだ。厄介事を持ち込んで来いなんて一言も言ってない」
「仕方ないって言ってるじゃない」
仮眠室にまで聞こえるぐらい、大きく店長が舌を打った。
パソコンの前の椅子に乱暴に座って、受話器を手に取る。

静まり返ったバックルームに受話器の向こうからコール音が小さく鳴った。
二度目のコールの後、誰かの声が聞こえる。
「北駒台の二ノ美屋です。はい、先日のソレを保護しています。ええ、今後の対応を指示していただきたいのですが」
普段の店長にしてはやけに改まった応対だった。
「蜘蛛は片方だけです。そうです、少なくとも一体は駒台にいる筈です。ウチのがやらかしたみたいですね、はい、申し訳ないです」
電話の相手は声からすると男らしい。
男が何を言っているかは聞き取れないが、今朝の事について説明を求めている様だった。
それから数分の会話の後、店長が受話器を置き、煙草に火を点ける。
緩慢な動作で煙を吐き出し、火の点いた煙草を空き缶の上に器用に乗せた。
「何なの？」糸原が聞く。
映画のワンシーンみたく、店長が椅子を回転させた。
「何とかして残りの蜘蛛を倒せ」
「はぁ？　そんな当たり前の事を聞く為に電話したっての？」
馬鹿じゃない、と糸原が漏らす。
「もしくは」
と、店長が先程言った言葉を繋げる様に呟いた。
「ソレを引き渡せ」

「どちら様でしょうか？」
一が、思い切り自分を睨みつける女にそう尋ねた。
女は親の仇でも見る様な目付きで一に声を掛ける。
「……堀、は？」
それだけ言うと、鋭い視線を一に浴びせ続けた。

コンビニの店内に相応しくない雰囲気を醸し出す女。
「堀さんは今日来ませんが、何か連絡があるのなら僕が伝えておきます」
――何で怒ってんだよこの人。
一は何とかそれを女に伝えると、自身を睨む人物の姿を観察する。
明るい緑色の髪。染めているのだろうか、それにしては地毛の様に彼女の白い肌と、紺のコートが良く似合っていた。
女が長くも短くも無い髪を退屈そうに弄びながら、一から視線をそちらに移す。
意地悪そうな笑みを少しの間浮かべ、一を再び見据えた。
「ふ、ふ。そう……死ねって伝えて、くれる？」
「は？　あの……」
女が物騒な台詞を捨ててコートを翻すと、店から足音一つさせず立ち去った。
死ね。
――誰が？
自分が言われたのか。不思議に、不安に思う一だったがそんな理由は無い筈だ。
さっきの女と一は正真正銘の初対面。
何か連絡があるなら。自分で言った言葉を一は思い出す。
――堀さんへの伝言？
一には、堀の人間関係など知る由も無かったが、『堀が誰かに恨まれている。それも死ぬほど』というのが一つだけ理解出来た。
だが、常に微笑を絶やさない堀を思い出してみて、彼がそこまで人に言われる事をしたと言うのを想像できない。
あんな優しい顔を出来る人が何故。
一は暫くの間呆然としていて、上手く頭が働かなかった。
さっきの女の憎しみが篭った顔と声。
まるで一自身に向けられたみたいに重く、深く心に突き刺さっていた。

「やってみなさい」
突如、糸原でも店長でもない声がバックルームに朗々と響いた。
弾かれる様に店長が椅子から立ち上がる。
「起きていたのか」
店長が憎憎しげに言って、煙草を床に捨てて踏みつけた。
糸原は訳が分からず椅子に座ったまま。
「ニンゲン如きが私たちを好き勝手出来ると思って？」
白い羽を優雅に広げ、梟が囀った。
まるで少女を守る様な体勢。梟はソファの縁に強く爪を食い込ませて、店長を丸い目で見上げる。
「出来るさ。手負いのガキに、高が知れた鳥一羽ぐらいならな」
そう言って、店長は梟を睨み返した。
バックルームに得体の知れない緊張感が張り詰める。
鳥と人が睨めっこしている。傍から見ればこの上ない滑稽な光景だろう。
睨めっこをしていた店長が、やがて視線を逸らす。
「馬鹿か」
と、誰に言うでもなく独りごちた。
椅子に座り直すと、机の上に突っ伏す。
「何のつもり、ニンゲン？」
「蜘蛛を倒すか、お前らを引き渡すか。蜘蛛は一体、お前らは二体。私は楽が好きだ。好きでしょうがない」
店長がそう言って、そのまま顔を上げない。
「恩を売っているつもり？」
「私は商売は嫌いだ、向いてない」
その言葉を聞いて、梟が戦意を殺がれた様に翼を畳んだ。
「アレはまた来るわ。しかも此処にね」
「何でよ」と、傍観を決め込んでいた糸原が思わず声を上げる。

梟が糸原をジッと見つめた。
「匂いよ。私の匂いを追ってきているの。アレは私を狙っているのよ。訳あってこんな姿になっているから応戦する事も出来ない。逃げるか、助けを求めるしか出来なかったから近くのオンリーワンを回ったのだけれど」
ああ、と糸原が話の途中で相槌を打つ。
「こないだ来てたのはソレ絡みの話だったのね」
「だから嫌だったんだ、ソレを殺す私たちが何でソレを助けないといけない」
店長が愚痴を零す様に呟いた。
「……この有様よ。お陰で私とこの子はここで眠っていた訳。誰も助けてくれないから、あんなのに襲われる始末」
梟が皮肉っぽく言う。
「あの」
バックルームに居た全員の視線が一点に集中する。視線の先には一。
「さっき、堀さんの知り合いの方が来てたんですけど」
「その話は後だ。一、とっとと表で仕事して来い」
店長がぶっきら棒に口を開けた。一を追い払う様なジェスチャーも付け加える。
「あ、はい。分かりました」
そう言って、一が扉に手を掛けた。
「あなた、珍しいわね」
出て行こうとする一に、梟が声を掛ける。
その声に一の動きが止まった。
「はい？　俺、ですか？」
「そうよ。面白いわ、もしかしたらそういう素質があるのかも」
面白い。素質。そういう。
並べられた単語の意味を一つずつ、一が確認して整理していく。
「えっと、どういう」

「一！」
意味ですか、と言おうとした所で店長の大声が割り込んできた。
「……何ですか？」
「仕事に戻れ」
店長の有無を言わせぬ物言い。
一は頭を掻きながら店内に戻っていった。
隠し切れない、その様な類の笑い声がバックルームに響く。
「あなた、部下思いなのね」
梟が笑いを噛み殺せないままで店長に言った。
「黙れ」
「それよりどうすんのよ？　この後、残りのソレを何とかするのに異論は無いわよ。で、そこのソレはどうすんの？」
糸原が発言する。
そうだな、と店長が前置きして。
「蜘蛛を殺す。これは決定事項だ」
「殺すのは私だけどね」と、糸原が話の腰を折る。
仮眠室の扉を一瞥してから、店長が重たそうに口を開けた。
「彼女らは見逃す。だが今回限りだ、次は無い」
「充分よ」と梟が声を発する。
「具体的には？　蜘蛛が出たり、ここにお目当てのが居るって事がバレたら偉い人達が動くんじゃないの？」
店長が煙草に火を点ける。
「今回、オンリーワン支部の援護は期待できない。と言うか、無視する。完全に北駒台の独断専行で動く訳だからな。いつもの勤務外業務とは違う、蜘蛛が出たら支部は無視してこっちだけで勝手に仕留める。ソレが出たらその隙に彼女たちには逃げて貰うしかない」
ゆっくりと、店長がこれからの事を説明した。
「あー。それってさ、命令違反とかそういう方面、大丈夫なの？」
不安そうに糸原が尋ねる。
「ソレさえ仕留めれば問題ない。後は私が何とかする」

「ふーん。まっ、私は構わないけどね。ああ、それより特別ボーナスとか出ないの？　ちゃんとした仕事の内に入らないんでしょ？　タダ働きは死ぬほど嫌いなのよね」
煙を苛立たしげに吐きつつ、店長が糸原を睨んだ。
「この厄介事を持ち込んだのは誰だ？」
「さあ誰でしたっけ？」
糸原が店長から顔を反らせながら言う。
「……時給分ぐらい出すさ。それより、しっかりしてくれ、お前だけが頼りだ。三森は来る気配無いし、今回は堀にも頼れん」
分かってる、と糸原が呟いた。
「話は纏まったのかしら？」と、梟が声を掛ける。
「ああ。お前らはソレが出現したと同時に姿を隠せ。後の事は知らん」
「恩に着るわ、優しい店長さん。そうそう、私を追ってる蜘蛛は夜に現れるわ。陽が沈んだ瞬間かもしれないし、草木の眠る頃かもしれないわね」
梟はそう言って、仮眠室で寝息を立てる少女の傍で羽を休めた。
「どうかしてる、全く」
舌打ちして、店長が再度突っ伏す。
「一には？」
「は？」と店長が突っ伏したままで答えた。
「だから、一には何て説明すんのよ？」
糸原が声に苛立ちを含ませて言う。
「ああ、そうだな。後で適当に説明しておく。それより、蜘蛛が出るまでにはまだ時間がある。お前も仮眠を取るなりして体を休めておけ」
「じゃあ家に帰って寝る。夕方には戻るから」
そう言って、糸原がバックルームを立ち去った。

「ウチの鍵、ですか？」
糸原から鍵を渡せ、と言われた一が口を開けた。
一は簡単な事情を聞いて、納得。と言うか渋々制服のポケットから財布を取り出し、中に入れておいた鍵を糸原に渡す。
「サンキュ」
糸原は短くお礼を言って、紐の付いた鍵をクルクルと、指を軸にして振り回す。
「やっぱりソレの話だったんですね」
「うん。まあ、アレよ。アンタは心配しなくていーから」
不安そうな一に糸原が声を掛けた。
「じゃ、私は家帰って寝とくから」
そう言って、鍵を振り回しながら糸原が店外へと足を向ける。
「戸締りだけは忘れないで下さいよ」
「分かってるわよ、ガキじゃないんだから」
糸原が出て行った後、客の居ない店内が静かになった。
暫く何もしないで突っ立っていた一は、店内をうろつく。
焦り。不安。
言い知れぬ、ハッキリとしない感情が一の中で渦を巻いている。
――何か変だ。
「一。ちょっといいか？」
店長が扉から顔を覗かせて一に声を掛けた。

「俺はバイトです。店長の言う事なら従うしかありません」
一がバックルームの椅子に座りながら、淡々と呟いた。
なるべく感情を込めずに、一が話を続ける。
「糸原さんなら大丈夫ってのも信じます」
「そうか」と、言った後、店長が煙草に口を付けた。
椅子に腰掛けたままで、一が仮眠室へ目を向ける。
「あの人たちはどうするんですか？」
「逃がす」
「上からは何も言われないんですか？」
「知らん」
「俺は、いつもみたいに中で仕事してれば良いんですか？」
「ああ」
簡潔過ぎる店長の答えに、一が苛立ちを覚える。
「……三森さんは？」
「お前もしつこいな、来ないって言ってるだろうが。電話にも出やしない奴をどうやって呼び出せと言うんだ」
店長が煙草の火を灰皿に押し付け、語気を荒げた。
堆く積まれた吸殻が、今の衝撃で崩れていく。
「家まで行くとか」
「馬鹿か。勤務外と言ってもな、所詮はアイツもバイトなんだよ。休みたい時もあるし、辞めたいって思うときもあるだろうが。社員と違って、無理に拘束出来ないんだよ」
一が席を立つ。
「出過ぎました。俺はもう仕事に戻ります」
「頼むぞ。奴らは夜に来るらしい。……それまでは仕事、ヤバくなりゃ支部にも連絡付けるし、一般のお前に危ない橋は渡らせん」
その言葉に、返事をしないまま一は店内へ入っていく。

――絶対イラツいてやがんな。
そう思うも、一に対して何もしてやれないのが店長の現状だった。
ゆっくりと椅子に体を預けながら、体を伸ばしていく。
体を戻すと、パソコンのディスプレイに視線を遣り、マウスを弄くる。
やがてマウスからも手を離し、虚空を見上げた。
「頼むよ……」
頭を抱えて、店長は声を震わせながら呟いた。

オンリーワン、勤務外専用マンションの一室。
「寝れねェ」
ベッドの上で三森はそう呟いて、体をゴロリと回転させる。
三森はもう何日も自室から出ていない。
バイトにも行かず、遊びにも行かず。ベッドの上で緩やかに時間を潰すだけでいた。
灯りの消えた薄暗い部屋。沈みかけた太陽の、潰れたオレンジの様な色が窓から入ってくる。それを照明の代わりに、三森が壁に掛けられた時計を見上げる。
時刻は四時を回っていた。だが、時刻など今の彼女にとっては何の意味も成さない。
「だりィ……」
三森は何度もバイトを辞めようと考えた。携帯電話に何度も手を伸ばす。が、中々踏ん切りがつかなかった。
変化の乏しい自分の部屋で、携帯の着信履歴と、自室の電話の留守番履歴。それだけが時間の移り変わりをまざまざと三森に見せ付ける。
柵の様な物を吹っ切る為に、現実から目を背けようとする為に。
夢の世界へ逃げ込もうと瞼を閉じるが、眠りには就けないでいた。
眠れても精々二、三時間。寝ては起き、起きては寝て。生活リズ

ムもクソも無い現状。
定期的にやって来る頭痛が酷く、鈍く三森を覚醒させ続ける。
そして、意識が覚醒し、頭が回る度に繰り返される光景。
得体の知れない女――糸原四乃――にいともたやすくいなされてしまった自分。
背中を蹴られ、嘲られた自分。
同情、軽蔑、それらの種類の情けを掛けられた自分。
――畜生ッ。
掴んでいた枕を壁に投げ付けるが、三森の気は少しも晴れなかった。
三森は起き上がると、ベランダへ出て、煙草に火を点ける。煙草の箱を握り潰し、指で弾いた。弾かれた箱は風の影響を受け、ゆっくりと下の道路へ落ちていく。
何日ぶりの喫煙だろうか。そんな事を考えていると、突然強い風が吹いた。
軽く銜えていた煙草が三森の元から離れていく。
「あっ」と声を上げ、手を伸ばすも、火の点いた煙草は強風と一緒に何処かへ流されていく。火の粉と紫煙を振り撒きながら、中空を揺らぐが、やがて煙も昇らなくなる。
三森は音が鳴るかと思わせるぐらい、強く奥歯を噛み締め、拳を握った。
ベランダから部屋に戻り、窓を乱暴に閉める。無造作に散らばる物の中から真っ赤なジャージを拾い上げ、それに袖を通す。
――煙草を店まで買いに行くだけ。それだけ。
言い聞かせる様に何度も心の中で呟いて、三森は部屋を飛び出した。

「堀君」
オンリーワン近畿支部の長い廊下を歩いていた堀が振り返る。

「ああ、炉辺さん」
こんにちは、と堀が笑顔で返した。
その堀にも負けない位の笑みを炉辺が浮かべる。
「最近調子はどう？」
「何とも言えないですね。新しい子は入ってきたのですが」
堀の表情が苦味を帯び始めた。
「あー、タルタロスの子ね。けど、どうにかなったんじゃないの？」
炉辺が腑に落ちない、と言った様子で尋ねる。
「三森さんが店に来ないんですよ。もう何日も」
「ふゆちゃんが？」
炉辺が驚く。そして心配そうに目を細めた。
「大丈夫なのかなー。また体調が悪いとか？」
「いやあ、何て言うか。若いって事は素晴らしいですね」
堀が言い難そうに言葉を濁す。
だが炉辺は、何かを悟ったらしく、ははーん、と楽しそうに呟いた。
「心の方なのねー、そうかー、ふゆちゃんも恋とかしちゃうんだー。嬉しいなー、今まで妹みたいに接してきた子が大人になるのって」
「あー、いや……まあ。そうですね」
否定しようとした堀だが、余りに楽しげに炉辺が言うので適当に場を流す。
「ふゆちゃんは心配ないよ、直ぐに戻って来るって」
「……そうですね」
「んー？　何か他にもあるの？」
いえ、と堀が首を横に振った。
「唯、定時の連絡がまだ来ないんですよ」
と、携帯電話を見せながら堀が口を開ける。
「定時連絡って、お店の？」
ええ、と堀が頷いた。
「何かあったのかな？　様子見てきた方が良いんじゃない？」

「まあ、以前にも連絡を忘れていたケースもありましたし、忙しい時期でもありますから、店長が忘れてるだけだとは思いますが……」

そう言って堀が携帯を内ポケットに仕舞い込む。

「そ？　なら良いんだけど。うーん、もし様子を見て来てくれるなら、ふゆちゃんも序に見てきてくれない？　もし、で良いんだけど」

炉辺が堀の目を真っ直ぐ見ながら発言した。

「もし、ですね。分かりました。それじゃ私は会議があるので、失礼します」

「うん、頑張ってねー」

手を振って見送る炉辺へ最後にもう一度だけ頭を下げ、堀が大きめの部屋に入っていった。

駒台の古びたアパート。

２０２号室。主は一一（にのまえはじめ）。

主の居ない部屋で、足を伸ばす女が一人。

一の同居人、糸原。

その同居人がこたつを伸び伸びと使い、暖を取る。

午後、夜。少なくとも今日中に現れるソレとの戦闘に向けて体を休ませるため、仮眠を取ろうとしていた糸原だが、全くと言って良いほど眠れなかった。

今朝、勤務外として始めての戦闘を彼女は経験した。

ソレとの戦闘は、今までにも幾度かこなした事はあったが、全て自分の身、自分のみを守る為だけの物。精神的に気楽と言うには軽すぎるが、負担は一人分で済む。

だが、今回は違う。

自分が倒れれば、生き残ったソレが確実に他の人間にも危害を加えるだろう。

背負った事の無いプレッシャーが彼女に圧し掛かっていた。

目を瞑れば、想像したくも無い光景が、まるで経験した事の様に、

異常なまで鮮明に浮かび上がってくる。
流れる血。零れる悲鳴。動かない体。異形のソレ。
断片的に頭を掠める数々の結末。
全ては幻、夢。想像の事。
それでも、糸原は安心する事が出来ずに、実体の無い悪夢と戦い続けている。
一人きりで気楽だった彼女の軽い肩は、自身でも信じられないくらい重かった。

時間は止まらない。
常に速度は変わらない。
緩んでもくれない。
一年、一ヶ月、一日。
一時間、一分、一秒。
毎日毎日決してそれは揺るがない。
楽しい時は早く過ぎ、悲しい時は遅々として進まない。
時として。時は残酷な物であり、寛容でもある。
厳しくもあり、優しくもある。
だが、時間は往々にして人間に平等なのだ。

太陽は時と共に動く。
朝になれば陽は昇り、月は消える。
夜になれば陽は沈み、月が現れる。
それとも。
陽が昇り、月が消えるから朝なのか。
陽が沈み、月が現れるから夜なのか。

ソレの姿が現れる。
駒台の街に現れる。
蜘蛛が動く。群れを成して蜘蛛が歩く。
障害を薙ぎ倒し、障害を踏み潰し、夜の街を闊歩する。
群れの中でも、群を抜いて大きな蜘蛛が先頭を進む。
恨みを、嫉みを晴らす為に。
復讐者が自分の為に歩く。
闇夜に浮かぶ真っ赤な瞳は何を浮べて、何を見るのか。
北駒台店へと、復讐の矛先を向けるべき所へと、只管に行進を続ける。
目標の臭いは強くなりつつあった。
あと少しだ。
蜘蛛の足に力が入る。
一層力強くなった行軍がその速さを増した。

心せよ人間。
長い夜が来る。

くる！

「確認しておくぞ、糸原は蜘蛛を仕留める。一は店内で一般業務。お前らは蜘蛛出現と同時に支部から出来るだけ離れる。分かったか？」

バックルームに集められたメンバーを一人ずつ見ながら、店長が声を掛けていき、一同はその発言に頷く。

時刻は既に午後六時を回っていた。

「ま、今更確認するまでも無いコトだと思うけどー」

髪を弄りながら、糸原が軽そうに言う。

「俺も中に居ときゃ問題無いですし」

一が糸原に意見を合わせた。店長が二人をジト目で見る。

ふう、と息をつき、梟が発言した。

「頼むわね、蜘蛛の気配も近づいて来たわ。ギリギリまで引き寄せて、私たちが逃げられる様にね」

ハイハイ、と糸原が手で返事をする。

「それと。何度も言うようだが、今回支部の援護は受けられん。下手すりゃ邪魔される可能性もある。手早くな」

店長が糸原に念を押す。

梟にした様に、糸原が店長にも適当そうにジェスチャーを送った。

「……今更だけど、彼女一人で大丈夫なのかしら？」

糸原の後姿を見ながら、梟が誰に言うでもなく口を開く。

「どういう意味だ？」

梟の独り言じみた物に、店長が疑問を抱いた。

「相手は土蜘蛛一匹だろう。現に糸原は今朝一体を仕留めているんだ。大丈夫も何も無いだろう」

「ニンゲン一人じゃ安心出来ないのよ」

「今更ですね」と、一が苦言を呈する。

グルリ、と梟の顔が回転し、一を睨みつけた。そして徐に嘴を開

ける。
「考えがあるのだけど」
「……何ですか？」
「あなた、勤務外にならない？」
突然の言葉に、一が絶句した。この鳥が何を言っているのか、訳が分からない。その手の種類の感情を顔に張り付かせたまま凍りつく。
「おい」「ちょっと」
店長と糸原が同時に声を発した。二人が顔を見合わせ、店長が頭を手で押さえたまま続ける。
「そいつは一般だ。勤務外にさせる訳にはいかない」
「それなら、彼女はどうなのかしら？　話を聞けば、勤務外と一般、両方こなすらしいじゃない」
糸原が梟を鋭く、視線で射抜いた。
「カンケー無いでしょ」
バックルームに気持ちの悪い空気が張り詰めていく。
戦闘前の緊張感の様な、異質と言った空気が濃さを増していく。いや、それはもはや戦場の物ではないだろうか。
やがて、息苦しさに耐え切れなくなった一が口を開く。
「……そもそも、俺にそんな心算は無いですから。ソレと戦うなんて考えただけで体が震えますよ。冗談は止めて下さい」
そう言って、一は苦笑した。
一の引き攣った様にも見える顔を、梟が冷ややかに眺めている。
「そうかしら？　本当は興味有るんじゃなくて？」
「いい加減にしろ、それ以上ウチのバイトにちょっかい掛けるんじゃない」
そう言うと、店長が一歩踏み出した。火の点いている煙草を持ち、梟を見下ろす。
「そうね。それに私が力をあげる時間も無い様だしね」
「何？」

店長が梟を訝しげに見つめる。
刹那、仮眠室の扉が音を立て、盛大に開け放たれた。
店長を除く全員がそちらに視線を遣る。
「くる！」
そう叫んで現れたのは少女。酷く落ち着かない様子で、面々を見上げる。
「そう。なら行かなきゃね、準備は？」
梟が優しく、愚図っている赤ん坊をあやす様に声を掛けた。
母親の様な存在に、「できた」と、少女が誇らしげに返す。
その様子を見て、糸原が椅子に掛けていたスーツの上着を掴み取った。
袖を通しながら、「近いの？」と梟に聞く。
「この街には今来たらしいわ。ここに来るまで時間は掛かると思うけどね」
その言葉を聞き、糸原がグローブを右手、次に左手に装着する。
部屋の照明を受け、糸原の得物が嫌らしく光った。
「んじゃ、行ってきますか」
「ああ、相手は一体だが気を付けろよ」
口を開いた店長に対して頷くと、次に糸原は一を睨む様な視線で見つめだした。
「何ですか？」と、一が声を掛けると、「何でも」とぶっきら棒に返事が来る。
ふと、糸原の挙動を凝視していた梟が興味深そうに尋ねた。
「あなた、珍しいモノを使うのね。何処で手に入れたのかしら？」
「んー？」と、糸原が指をこめかみに当て、思案する。やがて、「へへー」と間の抜けた笑い。当てていた指を床に向けて。
「地獄よ」
一言。
「へぇ、成る程。レージングかしら？　何にせよ良い物を持ってるのね」

「心配無いでしょ？　じゃねっ」
そう言うと、バックルームから糸原が駆け出していく。
店内に軽い足音が響く。それが数回聞こえると、店の戸が開く音も聞こえた。
「行ったか。ま、何とかなるだろう」
「そうかしらね」と、店長に梟が意地悪く返す。
またもや、異様にバックルームが静まり返った。
「あ、あの。さっきのレージングって何ですか？」
またもや、空気に耐え切れず一が発言を試みる。
「魔法よ。魔法のロープね」
魔法。
飛び出してきた言葉は何とも、非日常で、非常識な物だった。
平生では、滅多に聞かない単語に一が自分の耳を疑った。
「えっと、魔法ですか？　映画とか、漫画で杖振ったりして炎が出てくる、アレ、ですか？」
「あなた、中々偏ってるわね。まあ、今じゃそういう風に伝えられてるから仕方の無い事だけど。魔法といっても、種類はあるのよ」
一は自分の知識を総動員して話したが、何だか馬鹿にされただけで終わった気がした。
いつに無く、偉そうに梟が話を続ける。
「彼女の持っていたのは、私の見たところ……北欧のレージングと呼ばれる物ね。使い方は、多分間違ってるけど」
「使い方、と言うか形すら分からないんですけど……」
一が学校で先生に質問する様に手を上げた。
「レージングは本来、魔を拘束する魔の紐なのよ。何故か彼女の持っていたのは、それより細かったけどね、まるで糸みたい。今朝見させて貰ったけど、それで彼女は蜘蛛を切り裂いていたわ」
「へえ、糸」
そう呟いた一の脳裏に、細切れになったソレの姿が思い浮かぶ。
初めて糸原に付き纏われた日の事。夜道に犬の姿をしたソレに襲

われた事。ソレを糸原がどうにかした事。
そして「ああ」と納得したように独りごちた。
「御高説はそこまでだ。一、そろそろ仕事に出ろ」
店長が煙草を指で挟みながら、扉を指した。
「あ、はい……」
ダスタークロスとモップを掴み、一が店内に出て行く。
後姿を見届け、店長が煙を吐いた。
「そんなに彼が大事なの？」
梟が少し、ほんの少しだけ愉快そうに、店長に声を掛ける。
答えずに、店長が淀みない動きで自分の席に着いた。
「お前らも行け。良い頃合だろう」
「そうね。それじゃ、お世話になったわ、と言って置こうかしら？」
梟が羽ばたく。
その姿を少女が追い掛け、追いつき、店へと通じる扉に手を掛け、開く。開いた扉を梟が抜け、最後に少女が店長に向かって小さくお辞儀をした。
そのまま、少女と梟がレジ前のカウンターまでやって来る。
何もせずボケッと突っ立っていた一に、梟がまた声を掛けた。
「本当に良いのね？」
その言葉の意味を理解できずに、一が「何がです？」と梟に言う。
「勤務外の話よ」
「その話したら店長や糸原さん、何か怒ってたし。大体、ソレと戦うなんて俺には無理ですよ。正直、時給が上がるのは魅力的ですけどね」
一が身振り手振りを交えて梟に意見を伝えた。
「私はね、あなたには素質が有ると思ってるの」
「はあ、それはどうも」
と、一が曖昧に返す。
「信じてないわね。無理も無いわ、確かにあなたは生まれつき普通のニンゲンだもの」

「……じゃあ何で？」
そんな事を言うのか、場を荒らしたかっただけじゃないのか、と一が言おうとする。
「あなたは後天的な、もっと別のモノを持っているのよ」
一が言葉を詰らせた。
――俺が？　勤務外になれるモノを持ってる？
「冗談は止めて下さい」
「嘘じゃないわ。私はニンゲンがあまり好きじゃないの、けど勇ましいニンゲンは好きよ。勇者には嘘をつかないわ。例えば勤務外みたいな、ね。あなたには勤務外の素質が有るわ。私が保証する」
梟は尚も、詰め寄る様に一に話を続ける。
「私が居なくなれば、そういう機会はもう来ないでしょうね。私の力も無限では無いから、今だけよ？　力をニンゲンに与えるなんて事は」
「何で俺に？」
「気に入ったからよ、あなたが」
簡潔に、梟が答えた。
「力を、くれるんですか？」
ええ、と梟が頷く。
力。ソレと対等になれる力。
一の目の前の梟はそれをくれると言っている。
あまりにも甘く、美しい誘惑だった。
意味も無いのに、一は白い梟に手を伸ばそうとする。
ふと、一の脳裏に握り拳が浮かんだ。
一よりも小さくて、傷だらけの。
その拳が自分の頬に減り込むイメージが一を襲った。
身震いして、一が伸ばした手の動きを止める。
「……一瞬、欲しいと思っちゃいました。けど、俺には必要無い物です。何だか勿体無い気もしますが、お断りしておきます」
その手を隠す様に、ズボンのポケットに一は仕舞った。

「本当にね」
そう呟くと、梟と少女は一に背を向ける。扉に向かって片方は羽ばたき、片方は歩き出した。
――やっと行ってくれるか……。
「まって」
突然の少女の一言で、梟が動きを止め、脆く壊れそうな程小さい肩に爪を置いた。
「どうしたの？」
「きた。たくさん」
「たくさん？」
一が少女に近づいていく。
「どういう意味？」と、なるべく優しく一が声を掛けた。
肩を震わせた少女が、怯えた様に声を上げる。
「くもがここにくるの！　たくさん！」
そんな分かりきった事に少女は今更何を怯えているのか。
「あいつが来るって、もう知ってたじゃない？　どうしたの？」
梟が少女を気遣うが、全く効果は無かった。
少女の声に悲壮感が増していく。
「ひとつじゃないの！　たくさんくるの！」
一は声も出なかった。
と言うより、一の声は誰の耳にも届かなかった。
一が驚きのあまり出そうとした声より先、少女の甲高い声が店内に響いたからだ。
その叫びに意味は無い。言葉にはなっていない。
理性を保ち、意味の有る言葉を伝えるより先に、少女の感情の何かが、理性をいともたやすく崩壊させたのだろう。
それは恐らく、恐怖ではないか。
怖いから泣いているのではないかと、一は考えた。
「何が来るの？　何が怖いの？　何で泣いているの？」
問いかけた言葉は、少女の喚きに掻き消されていく。

「……不味いわ！　敵は群れだったのよ、少なくとも一体じゃない！」

掻き消されない様、声を張り上げ梟が叫んだ。

少女の叫びと、梟の叫び。

――気持ち悪ぃ……。

恐怖と焦燥に塗り潰された叫喚の中、彼女らの声の間を縫う様に電話の着信音が店内に響いた。間違いなく、ソレを探知したオンリーワン支部、情報部からの物だろう。

この異常事態に店長が現れないのは、その電話の応対をしている為だと、一般の一でも分かった。分かってしまった。

やがて、店内に店長が駆け込んでくる。

駆け込んでくるなり、怒声。

「どういう事だ！　蜘蛛は一体じゃないぞ！」

「店長、どうするんですか？」

「黙ってろ！」と、一に対して声を荒げ、店長が泣き叫ぶ少女の襟元を掴んだ。

掴んだ襟元をきつく握り締める。

「お前ら、嵌めやがったな……」

尚も少女は泣き止まない。

「やめて！　私たちも今知ったのよ！」

梟が羽を広げながら発言する。

「うるさい！　クソッお前らなんか助けようとするんじゃなかった！　信用なんかするんじゃなかった！　やっぱりお前らは私たちの敵だ！」

梟が止めようとするが、店長は言う事を聞かずに、まるで子供の様に叫び続ける。

その光景を見ていた一が店長に歩み寄っていく。

「店長」

「黙れ！」

一が何を思ったか、店長の肩を思い切り掴み、体を無理矢理自分

のほうに向けさせた。
「落ち着いて下さい」
そして気持ちの悪いくらい静かに告げた。
視線は店長の瞳を見据えたまま、睨むでもなく、見下すでもなく。
ただ見るだけ。
そんな一に気圧されたのか、店長が仕方なくと言った風に少女の体を解放する。
「この人たちは嘘を言ってないと思います」
「……どうでも良い」
舌打ちして、店長はそう吐き捨てた。
「それより、さっきの電話……」
「……支部からだ。蜘蛛が駒台に確認されたらしい、数十匹もな」
数十。その言葉を聴き、一の思考が完全に止まる。
「どうするんですか？」
一がそれだけ、恐る恐る店長に尋ねる。
「退却だ。正直今の戦力じゃ手に負えん。支部からの応援も期待出来ん」
「え、なんでですか？　もうこの子たちを助けるとか言ってる場合じゃないんですよ？」
「支部の戦力も殆ど出払ってるらしい。別件で大物が入ったなんて言ってやがった」
店長が声を震わせながら言った。
その声に一は、不安感を覚えてしまう。
今までの、過剰な程自信のある口ぶりだった店長。
腹が立つ位のいつもの店長。今、声を震わせていた人物からは、ついさっきまでの彼女とは欠片も結びつかなかった。
「何とかならないんですか？」
「……今、支部から駒台に投入できる戦力は無い。居たとしても下っ端だ。土蜘蛛の群れに突っ込んで、帰って来れるレベルの奴はいない」

店長はそう言って、カウンターに背中を預けた。
「……糸原さんは？」
一がそう言った瞬間、少女が嘘の様にピタリと泣き止んだ。
梟が驚きを隠せないまま、少女の顔を覗き込む。
「どうしたの？」
「とまった。くもがとまった。たくさんとまったよ」
はっきりと、そう言って少女は口を閉ざした。
「止まった？」
一が不思議そうに梟に尋ねた。
「……確かに、蜘蛛の気配が近くも、遠くもなってない。止まってるのよ、そして、それは多分……」
梟が言葉を濁す。
その様子を見て、一の全身が一気に総毛だった。
寒いモノが体中を一気に走り抜ける。
鳥肌も立ち、知らず知らずのうち、背中に汗が流れた。
店長が何事か喚きながら菓子を積んでいたカートを蹴り飛ばす。
恐らく。
大群の蜘蛛が止まった理由。
それは。

Tough Girl

――どうするかな。

目の前に広がる光景。

ソレを見ながら、糸原はそこに足を踏み入れた事を後悔していた。

だだっ広い二車線の道路。

行き交うのは車ではない。

オンリーワンへとひた走る土蜘蛛の群れ。

既に駒台の街に避難勧告が出されている事だろう。

深呼吸。

糸原が踏み入れた先は、もはや唯の車道ではない。

戦場。

ソレとニンゲンとが殺し合う、とびきりの戦場なのだ。

数え切れないほどの、数えるのも面倒なほど点在する目玉が、糸原を捉えている。

辺りは黒に塗り潰され、道を照らすべき街灯は蜘蛛の足に踏み潰されて。

まるで蜘蛛たちの赤い目玉が、それの代わりになっている様だった。

糸原が蜘蛛と対峙してから数分。蜘蛛は何故か、一匹たりとも一向に動こうとはしない。数で押せば高が人間一人。勤務外とは言え、糸原は新米もいい所だ。更に言えば、新米だろうが、ベテランだろうが、何だろうが、雲霞の如く押し寄せる土蜘蛛にゴリ押しされて、無傷で居られるなんて事はまず有り得ない。押し切れる事は誰のどんな愚図な頭でも、容易に想像がつく。

蜘蛛にそこまでの知能が無い。とは、思いづらい。

知能の無い虫が徒党を組んで、勤務外の巣であるオンリーワンに襲撃を掛けるとは想像し辛い。想像も出来ない。

切れるとは言わないが、回る頭を持っていて、何故糸原に襲い掛

からないのか。
――今朝の生き残り？
ふと、何の根拠も無いが、そのような疑念が糸原の脳裏を過ぎった。
蜘蛛同士が会話などを駆使してコミュニケーションを取るなんて話、糸原は聞いた事が無かった。そもそも、そんな事例があったのかどうかですら定かではない。
とにかく、蜘蛛が何らかの手段を用いて、糸原の事を、仲間を殺した人物だと認識して、警戒しているのではないか。
だから動かないのではないか。
「だったら……」
自然と、声が零れた。
少なくとも、その場に居た黒髪の、見た目だけは美人の女はそう思った。
最初に蜘蛛の群れを見た時は、そのまま物陰でやり過ごそうと糸原は思った。
一匹だから、楽勝だから。
――冗談、まさか私が騙されるなんて。
予想外、予想以上。
とてもじゃない、この数を相手になんて出来ない。
割に合わない、やってられない。
だが、幾らそう思っても、考えても、足は勝手に動いてしまっていた。
蜘蛛の前に立ちはだかり、時間だけが過ぎる。
動かない影ども。
その中で、一つだけ伸び縮みする影があった。
赤い光の中、ゆっくりと、糸原が真白い手を、真白い指を動かしていく。
見蕩れる様な、見惚れる様な動き。
尤も、その動きの美しさを理解できるのは人間だけだ。

そして、その舞を眺めるのは人間ではない。
風を切る音。
一瞬の静寂の後、鈍い音が走る。
得体の知れない液体を撒き散らせながら、蜘蛛の足が胴体から離れていく。
一秒掛かったか、掛かっていないかでそれは音を立てて地面に落ちた。
結果に喜ぶ事も無く、糸原は指を動かし、得物であるレージングを器用に指揮していく。
一本、二本、三本、四本、五本、六本、七本、八本、九本、十本。
血を滴らせた足が落ちる。
バランスを崩したモノから、アスファルトに倒れこんでいく。
先頭の数体が、動きも、音を立てることもしなくなった。
完全な沈黙。
ふう、と糸原が息を吐いた。
先程まで微動だにしなかった蜘蛛たちだが、次々と切り落とされて行く同胞を見て、やっと前進を開始する。
影が動く、動く。
体の小さな蜘蛛が、自分よりも体の大きな蜘蛛の上に、その蜘蛛よりも大きな体の蜘蛛の上に。
さながら、それは小規模な山のようだった。
そして山が崩れていく。
崩れていく蜘蛛たちは、先頭のモノから順に敵対者へ襲い掛かる。
糸原は一番自身と距離の近いソレに狙いを変え、足を落とす。
二度と動けない様に、距離の開いている内に念入りに痛めつけていく。
「あっ」
糸原が声を上げた。
指が引っ張られる感触。
さっきまでとは違って、スムーズに指が滑らない、動かない。

良くは分からないが、ソレの体の硬い部分に引っかかってしまったらしい。
その隙に蜘蛛の波が糸原に向かって襲う。
波打ち際の糸原は、指に力を込めて、何とかレージングを引っ張りあげた。
だが、もはや糸原の眼前にまで蜘蛛は迫って来ている。
その内、一体の蜘蛛が前足を上げた。
そのまま、ギロチンを思わせるかの様な勢いで振り下ろして来る。
咄嗟に、糸原が腕を交差させた。
腕の動きと一緒に、レージングが幾重にも交差する。
紙一重の所で、張巡らせた糸の盾がそれを防いだ。
首元に異物感。
糸原はクロスした腕を斜めにして、真っ直ぐ縦に向かってくる力を受け流す。
少しだけ、糸原の腕に蜘蛛の全体重がのしかかった。
骨の軋む音が煩いな、と糸原は思う。
糸原が腕に力を込めると、寄り掛かる場所を失った蜘蛛の足は、拉げながら地面に突き刺さる。骨や血を辺りにこびり付かせながら、蜘蛛は動かなくなる。
続いて、
二本目、三本目と襲い掛かるギロチンをバックステップで避け、距離を取る。
指揮者は再び指を動かし、自身に襲い掛かる凶器を仕留めていった。
糸原が息つく間も無く、動かなくなった同胞を蹂躙しながら別の蜘蛛が襲い掛かる。
死体となったソレを踏み台にして、蜘蛛がガチャガチャ音を立てて跳んだ。
万人が万人、何ともグロテスクな光景と、そう思うのではないか。
しかし、戦っている糸原はそんな事を気にもせず、徐に両手を掲

げてから、思い切り腰の辺りまで振り下ろした。
暗闇の中、ソレの眼球の光と月明かりに照らされて、銀の閃きが何本も奔る。
その閃きは、飛び掛る蜘蛛の四肢に重なった。
瞬間、蜘蛛が空中で分解されていく。
液体とバラバラにされた固体が落ちてきた。
次に蜘蛛の胴体らしきパーツが落下してくる。
その光景を見て、他の蜘蛛たちがやっと動きを止めた。
糸原も動きを止め、だらりと腕を下げる。
――重い……。
動いている内はそうでもなかったが、今は息が苦しく、血の巡りも悪い。
糸原は肩で息をしながら、蜘蛛の動きに対応する為、耳だけを澄ませた。
糸を使った遠距離、中距離からの攻撃が糸原のスタイルらしいので、突進してくるだけの蜘蛛からは、まだ傷を負わされてはいない。
だが、それも時間の問題だろう。
現に、数で攻めてこられると、先刻の様なギリギリの攻防も増えてきてしまう。
その全てを無傷で切り抜けるのは非常に難しい。
そんな事は、当の本人が一番良く分かっていた。
この場を逃げ切る力はまだ残っている。
生きて帰るだけの力は未だ残されている。
それでも彼女は逃げなかった。
――重い……。
再び山の様なシルエットを作る蜘蛛を糸原は見据えている。
普通の人間が見ていれば、既に壊れていてもおかしくない光景。
蜘蛛は何を望んで、何を希望にして走るのか。
オンリーワンに何を求めているのか。
あの白い梟か、寡黙な少女か。

関係ない。関係なかった。
そんな事は今の彼女にとってどうでもよかった。
蜘蛛どもの、若しくは糸原自身の狂気と、絶望と、希望の中。
その中で。
完全にイッている中で。
人間である糸原が正気を保っていられるのは何故なのか。
――背中が重い……。
何も背負っていない。
それでも自分の背中を摩りながら、糸原は自嘲気味に呟いた。
「……馬鹿みたい……」

「あの子が止めているのよ、それしか考えられないわ」
梟が、自分でも信じられない、と言った風に発言する。
「そんな……だって、土蜘蛛の群れに突っ込んで帰って来る人なんていないって」
一が至極不安気に口を開いた。
そうだ、と店長が重そうに言う。
「戦えるさ。新米の糸原だって戦える。だがな、生きて帰って来る事とは、それとは別なんだ。今だけだ。少しだけ、ほんの少しの時間稼ぎ。何にもならん」
店長が、まるで自分に言い聞かせるようにしながら喋る。そのまま、視線を梟に向けた。
「誰の為に稼いだ時間（もの）だと思ってるんだ?」
「……一体だけだと、誤解していた事は謝罪するわ、御免なさい」
ちっ、と店長が舌打ちする。
「そして、一つだけ方法が有るわ。あの子を救う方法がね」
「えっ！　有るんですか?」
一が嬉しさを隠し切れないまま声を上げた。
ええ、と慇懃に梟が返す。

「あなたが、勤務外になれば良いのよ」
「また、それですか……」
「それしかないのよ」
梟が力強く言い切った。
その意思の強さに、憎まれ口や、皮肉の一つでも叩いてやろうと思っていた一が何も言えなくなる。
「俺が、あなたから力を貰えば、本当に」
梟が頷く。
「一、耳を貸すな」
店長が咄嗟に割り込んだ。
「店長。でも、それしか方法が無いって」
「馬鹿が。お前が勤務外にならなくても、糸原が助かる方法は幾らでもある」
ふうん、と梟が愉快そうに囀る。
「もう一度支部に連絡とって、現場まで堀に迎えに行かせても良いし、私が行っても良い。
この状況だ。連絡さえすれば少なくとも何かしらの援護は出るだろう。情報部も嗅ぎ付けた事だし、住民が避難してるのを見れば三森も姿を現す。対策は幾らでも立てられるんだ、早まるな」
「そう上手く行くかしら？」
「何？」と、店長が怒りを露にする。
店長の痛いほど睨む視線も流しきり、冷ややかに梟が話を続けだす。
「時間は？　支部とやらの応援を頼んだところであの子が持つのかしら？　こうしてる間にも事態は刻一刻と悪化していくのよ」
「お前は、お前は何がしたいんだ？　謝りたいのか、怒らせたいのか？　何が目的なんだ？」
店長が梟へと向きを変え、歩み寄った。
いつ爆発してもおかしくない、そんな状態で。
そして睨み合う一人と一匹。

――俺は。
「あのぅ」
一が手を上げ、遠慮がちに口を開いた。

蜘蛛の攻撃を受け、糸原が地面を転がる。
いや、転がされる。
先日、糸原が一に買ってもらった新しいスーツ。
汚れて、傷ついて、破けて。
そのスーツをボロボロにしながら、情けなく転がされる。
糸原は受身もろくに取れず、背中と後頭部を強かに打ちつけた。
激痛が背中から全身に広がっていく。
苦悶の表情。
混濁する意識。
死への恐怖、焦り、疲労感、次の攻撃は何処から来るのか。
様々な感情を綯い交ぜに。
まともに働こうとしない頭を切り捨て、本能のみで体を動かす。
背後からは気味の悪い音が聞こえてくる。
糸原は引き攣る足に鞭打って、倒れこみそうになりながらも必死で走った。
電信柱の影へ咄嗟に隠れる。
足が縺れて、バランスを崩し、座り込んだ形になった。
柱を背にして一息吐く。
身を隠した刹那、何かが砕けるような音。
霞の掛かった、未だ元通りにならない薄ぼんやりとした視界。
首がゴキリと、酷く耳障りな鈍い音を立てた。
骨まで疲れてやんの、なんて呑気な事を思いながら、糸原は後ろを見遣る。
蜘蛛の足が、糸原の直ぐ後ろの電信柱の半ばまで食い込んでいた。
背筋に氷か何かを入れられた感覚に襲われる。

振り向かずに再び走った。
予感。
轟音。
糸原の立っていた地面が揺れる。
「うっそ……」
――地震……？
激しい振動に不意を衝かれ、糸原は踏鞴を踏む。
視界の端に、二つに折れ曲がった電信柱が見えた。
視認して、そのまま座り込む。
どうやら、蜘蛛の内の一匹がやったらしい。
柱の根元に刺さった足を抜こうと、蜘蛛が力任せに動いている。
奇声と言うのか、異質な音を出しながら蜘蛛が上下に、左右に揺れる。
その間、喉の渇きを癒そうと、糸原は唾を飲み込もうとした。
が、喉を潤すどころか、舌を舐める程度の水分も残ってはいなかったらしい。
糸原は諦めて、髪をかき上げてから、小さく喉の奥で笑った。
顔を上げ、眼前に広がるモノを確認する。
既に動かなくなった土蜘蛛は十にも上っていた。
動ける蜘蛛はそれ以上にいるらしいが、その半分近くも、糸原に足を切り落とされたり、目玉を潰されたりで何かしらの手傷を負っている。
それでも、敵は今だ意気揚々。
糸原を縊り殺そうと、突き殺そうと、食い殺そうと。
暗闇の中、怪しげに光るアカイモノ。
その全てが自分を見ているのではないか、糸原は身震いした。
ゆっくり瞼を閉じる。
糸原の頭の中を支配していた、恐怖といった類の昂ぶりが、少しずつ収まっていく。
喉の渇きも、死への恐怖も少しずつ薄れていく。

――これならいけるわ……。

糸原が目を瞑ってから、どれ位の時間が経っただろうか。

一分、一秒、それとも一瞬。

何にせよ。

目を開けると、そこは蜘蛛だった。

見渡す限り、視界の限り、蜘蛛の限り。

四方八方全方位、糸原の周りを蜘蛛が囲んでいた。

蜘蛛たちは糸原から一定の距離を置いて、得物の逃げ場を塞いでいる。

数匹の蜘蛛の口から、白いものが見え隠れしていた。

だらしなく垂れ下がったそれは、蜘蛛自身の体にくっ付いている。

粘着性、伸縮性に優れた糸。

蜘蛛が巣を張ったり、獲物を捕らえる時に使うそれだ。

そして、今回の糸の使い道は確実に後者の方だろう。

唾でも飛ばすような気安さで、蜘蛛が糸を飛ばした。

蜘蛛にとっては当たり前の様に使うべき道具だが、引っかかればあっと言う間に餌になってしまう糸原にとってそれは凶器だ。

白かった指は土と埃とソレの体液と、自身のそれによってすっかり色を変えてしまっていた。その指を巧みに動かし、必要最小限の動きで吐かれた糸を切り落としていく。

全身がだるい。重い。鈍い。気持ち悪い。痛い。死にたくない。楽になりたい。

指を動かすのをやめ、大の字になって寝転がったらどうなるだろう、少なくとも、今よりは楽になれるかな。何でこんな事やってるんだろ。糸原はそんな事を考えながら、半分は無意識の内に糸を迎撃していく。

だが、その抵抗もいつまで続くか分からない。

囲む蜘蛛は数十。

囲まれる人は一。

時間の問題だと言う事は、当の本人が一番良く分かっていた。

それでも。
それでも彼女は抵抗を止めようとはしなかった。

ああ、女神様

滑り台。ブランコ。シーソー。ベンチ。
広場に点在する遊具。
ここは紛れもなく公園だった。
太陽は青空の天辺に位置している。
蝉が鳴いていた。
その鳴き声に、公園の傍を通りかかる人は、皆耳を手で塞いだり、顔を顰めたりしていた。
全ての人へと、平等に降りかかる容赦の無い光。
公園に居る人たちは、ハンカチや、シャツの袖等で、汗を拭う。
想像するに、今の季節は夏だと言える。
雑草と石が散りばめられた広場。
そこで子供たちが声を張り上げ、草野球に興じている。
体の大きさや、顔つきからして、せいぜい小学校低学年ぐらいだろう。
流れる汗や、襲い掛かる紫外線なんて物ともせずに、ただただ白い球を追いかけている。
しっかりしろよ、なんて声が外野、内野問わず上がっていた。
子供の人数は、そう多くない。
野球本来の九対九でなく、その半分ぐらい、と言ったところか。
守備側は、ピッチャー、ファースト、サード、外野が二人。
キャッチャーは、順番が回ってこない攻撃側の子供がやっていた。
適当に、決めてもいないサインらしき手真似をして笑っている。
外野の二人は、どうせここまで飛んでこないだろうと、高をくくってでもいるのか、センターに固まって次のバッターに対して野次を飛ばしていた。
攻撃側の子供たちは六人、守備側より一人多い。
赤い帽子を被り、白いTシャツを着た、バッターボックスに入っ

ている男の子。
他の子供たちより、一回りは体が小さく、どこか頼りない印象を受ける。
金属バットを何度も握りなおしていた。緊張して、手汗でもかいているのだろう。
その小さな子の斜め後ろ。大きな体の男の子が、歪な形の円の中――恐らく、ネクストバッターズサークル――で、片膝を立て、バッターボックスで構える打者に声を掛けていた。
「ビビッてんじゃねぇぞ！　しっかりバット振れよ！」
体に負けず、大きな声だった。
公園内の、誰よりも大きく、誰よりも響く声。
バッターボックスの少年は、声の主に振り向いて、歯を見せて笑ってからピッチャーを見据える。
まるで返事の代わりをするかのように、帽子を深く被りなおした。
塁上には子供が二人。
一塁、三塁、本塁と、塁は三つしかない。
どうやら三角ベースだったらしい。つまり、満塁だ。
アウトカウントが幾つかは分からないが、満塁。
絶体絶命。そんな状況ながら、子供たちが、砂を盛り上げて作った手製のマウンド上、そこに陣取る背の高いピッチャーは不敵に笑う。
打てるものなら打ってみろ。
やけに高く足を上げ、ピッチャーの男の子が白球を放った。
中々に速い。
キャッチャーミットにパン、と乾いた音が響く。
ピッチャーの気分を良くさせてくれる、魔法の音だ。
それに遅れて、バットが空を切る音。
味方から溜息。落胆の声。
「ワンストライクー」
と、間延びしたキャッチャーの声。

ピッチャーは小さくガッツポーズを作ると、キャッチャーからボールを受け取る。
バッターは肩を少し落とし、足場を慣らした。
夏場の、真昼の太陽は体力をじりじりと奪う。
流れる汗もそのままに、バッターはピッチャーを睨んだ。
その視線を軽くいなす様に、ピッチャーがまた足を上げた。
グッと、バットを握る手に力が篭る。
かっ飛ばしてやる。
そう思った男の子の目に飛び込む速球。
一球目よりも速いストレート。
うおっ、とベンチからどよめきが起こった。
さっきよりも高く、乾いた音を響かせ、ボールがミットに収まる。
今度は一瞬遅れてからスイングの音。
スイングの速度も中々の物だが、当たらなければ何の意味もない。
頼れるようでいて、頼れない。何とも空しい音だった。
「ツーストライクねー」
と、気落ちするバッターに軽くキャッチャーが声を掛ける。
攻撃側の子供たちが座るベンチが、何ともいえない悲壮感に包まれだす。
たかが子供の遊び。
たかが子供同士の草野球。
……たかが。
だが、彼らにとって、それは世界だ。全てだ。
テレビの中のプロ野球選手。
憧れ、尊敬し、畏怖の対象。
父親と一緒にナイター中継を見ながら思う。
俺たちもああなりたい。
プロではない、大人でもない、金も何もそこにはない。
そこには夢だけがある。
打って、走って、投げて、守って、声を出して。

打てばヒーロー、勝てばヒーロー。
狭い箱庭の小さな出来事。
だが、彼らにとっては、大きな出来事なのだ。
勝ちたい。勝ちたい。
でも、バッターは駄目だ。ピッチャーのほうがやっぱり強い。
バッターボックスに、子供の、汗以外の雫が落ちた。
その子は泣いていた。
――ああ、俺じゃ駄目なんだ。打てないし、期待も応援もされてないんだ。
「いいぞー！　次は当たる当たる！」
ハッと、泣いている少年が顔を上げる。
一番良く通る声。
その声の持ち主がバッターを励ます。
その声につられるように、ベンチのチームメイトも声を張り上げる。
行けるぞ、打て、やっちまえ。
男の子が、うん、と高く声を上げ、手を上げ、袖で涙を拭う。
さっきまでの悲壮感は何処へやら。
バッターの、みんなの笑顔が公園に戻った。
これだから子供なんだ、と。馬鹿にされるかもしれない。
そんな、ワンシーン。
まだ男の子の視界は滲んでいた。
それでも、負けるものかとピッチャーをその無垢な瞳に捉える。
マウンド上の男の子は、その様子を見て、面白く無さそうに唾を吐いた。
グローブの中の白球を、しっかりと握りなおす。
――俺が、
バットを短く持ち、ボールを待つ。
やがて、ピッチャーが足を上げた。
高く、さっきより高く。

ツーストライク、ノーボール。
だが、ピッチャーを務める男の子は逃げる気など毛頭無かった。
こんな奴に打たれてたまるか。
バッターの男の子は、ボールだろうが、ストライクだろうが関係無かった。
投げられたボールを、渾身の力を以ってして打ち返すだけ。
つまり、ラスト一球。
ピッチャーは、今までで一番の、最高のストレートで勝負するつもりなのだろう。
それならば、バッターは、今までで一番の、最高のスイングで勝負するだけなのだろう。
「ハジメェ！　ホームランだ！」
「かっ飛ばせ！」
「勝とうぜ！」
一球目よりも、二球目よりも速い球。
それが、キャッチャーミットを目掛けて奔る。
バッターボックスの男の子が、応援に背中を押される様にして足を踏み出す。
腰を回し、スイング。
応援の声に掻き消されまいと、負けないように高い音が響く。
金属バットがボールを捉えていた。
バットから伝わる重たい感触。
小さい体を目一杯使って、負けないように力を振り絞る。
真っ直ぐな打球が外野に飛んだ。
ベンチからは歓声。
ピッチャーは溜息。
バッターは叫んだ。
叫んで、喜びを体全体で表現するかのように、大きく飛び跳ね、塁を回る。
打球の行方を今までサボっていた外野が追うが、それも無駄な徒

労に終わるだろう。
公園の一番端。
低い並木が連ねる公園のフェンスの、更に向こうを恨めしそうに眺めた。
一方。
生還したランナーと、ベンチの仲間達がヒーローをホームベースで待ちわびる。
未だ響き渡る歓声に応えるように、大きく英雄が手を掲げた。
三塁を踏み、ホームベースへと急ぐ。
そして、ホームイン。
仲間に揉みくちゃにされながら、ヒーローは最後にもう一度、大きく声を上げた。

それは白昼夢。
誰かの、何処かの、いつかの記憶。
英雄が声を上げたところで、眠りから無理矢理覚まされた様に、そこでその映像は途切れた。
誰が、何処で、いつ見ていた映像だったのだろうか。
だが、それは夢だ。
だから、気にする事はない。

「一、もう一度言ってみろ」
「俺は勤務外になります」
はっきりと、一が店長に対してそう言い切った。
一の視線は、店長から頑として動かない。相手の瞳の、その奥を見つめる。
何も言わずに、店長が一の頬を平手で打った。

声を上げずに、一が店長の顔をひたすらに見た。
お互い、黙ったまま。
「時間が無いのだけれど？」
梟が声を掛けるが、両者は動かない。
やがて、舌打ちの後、店長が先に折れた。
「……一。確かに、な、このままじゃ糸原が危険なのは認める。応援もやはり期待できない。でもな、助けに行く為に、お前が勤務外になったとして、本当に救えると思ってるのか？　お前はまだ一度もソレと戦った事が無いんだ、いきなり映画のヒーローみたく戦える訳無い、分かるだろう？」
一は黙ったまま。
「その前に、コイツが言っている事も百パーセント信じ切れるのか？　信じて、力を貸って、勤務外になれたとしても、お前は何かしらのリスクを背負わされるんだ。ソレと対等になるってのはそういう事なんだ。寿命が削られたり、体の一部を持ってかれたり。嫌だろ？　お前もそんなのはさ」
梟が喉の奥で笑う。
「私はそんな野蛮な代償要求しないわ」
店長が目だけで、黙れ、と合図を送った。
「頼む。勤務外になんてなるな、危ない目にも遭うな。お前はずっと一般でいてくれ……」
懇願にも似た、そんな口調で店長が続けた。
「じゃあ、誰があの人を助けるんですか？」
自ら閉じていた口を重そうに開けて、一が淡々と語る。
その言葉は、感情を込めず、と言うか、今にもあふれ出てきそうな物を、何とか押さえている、そんな印象を受けた。
初めて見る一の表情。一を見て、店長が迷った。
言うべきか、否か。
何処を見ているか分からない一と、店長は視線を中々合わすことが出来ない。

――何で。
「諦めてくれ」
やっとの事で一と目を合わせ、店長はそれだけ口にした。
それだけしか口に出来なかった。
一はその言葉に、驚きも、怒りも、悲しみもしないように見える。
――何でそんな顔が出来るんだ？
一はぼんやりと、前を見ていた。
そして、徐に手を伸ばす。
伸ばした先は、白い鳥。
縋る様に、指を惑わせ、梟に声を掛けた。
「力を下さい」
震える声で。
震える指で。
「安心なさい。私は目玉を寄越しなさい、なんて言わないから」
震える体で。
震える心で。
「さ、もっと近づいて」
一が梟の元へ、一歩足を踏み出すと、店内が閃光弾でも投げ込まれたかのように、真っ白な光の中に包まれた。

何も無い。
真っ白な光以外何も無い。
そんな空間で、一は目を瞑っていた。
ここはどこ？
なんて考えも思いつかない。
一の頭の中で、重く、鋭く、喧しく耳鳴りが響いている。
耳の穴を指で塞いでも、一向に音は消えなかった。
何回か唾を飲み、やっと、音が消えていく。
次に一は、目を開けた。

真っ白。
真っ白な空間。
落ち着いてきた頭の中、ここはどこだ、とやっと思う。
「店長？」
声を掛けるも、店長からの返事は無かった。
それどころか、先程まで店にかかっていた有線のＢＧＭも、何も聞こえない。
――おかしくなっちまったのか？
最悪だ、そう思った矢先、一が今いる真っ白な空間よりも、更に白さを増した光が目の前に現れた。
輝きの中、何かが姿を形作っていく。
だが、一の目ではそれを見る事が出来なかった。
太陽を、眼鏡でも掛けて直接見せられているような、厳しい眩しさ。
一はまた目を瞑るも、閉じられた瞼の中の眼球に、光が焼き付いて離れない。
「勇ましき者よ」
何処からか、声が聞こえた。
一の耳はその声を捕らえていたが、気のせいだと、一は再び回らなくなった頭をして、そう思う。
もう一度、同じ声が聞こえた。
「誰？」
目を瞑りながら、一が答える。
少しの間があってから、
「アテナ」
と、一の頭の中に直接聞こえてきた。
優しい声だな、少なくとも一はそう思った。
その声に安心し、一はゆっくりと目を開ける。
――誰？　アテナ？
西洋の兜、胸当てを身に纏った姿。

兜から、長く垂れ流したブロンド。
手には、一本の槍が握られていた。
反対側の手には、醜いレリーフが施された盾。
優しかった声と一致しない姿に、一は戸惑う。
戸惑いながら、声を掛けてきた人物の顔を見る。
だが、後光ともいえるものに遮られ、確認できなかった。
眩しくて、一が視線を下げると、アテナと名乗った人物はサンダルを履いている。
――何で？
重々しく武装した上半身に比べると、一はそれがアンバランスに感じた。
「……安心なさい」
輝きを放っていた光が、それを徐々に失っていく。
やっと、一はそのアテナの顔を見ることが出来た。
整った顔立ち。
目鼻は筋が通っており、透き通る蒼をその瞳に宿していた。
きれいな人だな、と一は思う。
付け加えて、我ながら陳腐な表現だとも思った。
「えっと、俺はどうなるんですか？」
無表情を保っていたアテナの顔が小さく崩れる。
小さく、笑っていた。
「大丈夫よ」
何が、そう言おうとした一より先に、
「目玉を寄越しなさいなんて言わないから」
そう、女神が言った。

にのまえはじめ

「おめでとう、今日からはあなたも人外よ」
一の耳元で、睦言を囁くようにして。
「さあ、行ってらっしゃいな」
実の母親のように、優しく。
「……はい」
アテナは、笑った。

体中を蜘蛛の糸に巻かれながら、蜘蛛に囲まれながら。
いつ死なされても、殺されても可笑しくない状況におかれながら。
糸原四乃は、そこに居た。
既に彼女の体力は限界を迎えていた。
いや、とっくに越えていたのかもしれない。
それでも、彼女は諦めなかった。
助けを待っているわけでも、目の前の敵を蹴散らす機を待っているわけでも、奇跡を待っているのでもなかった。
なんでもなかった。
ただ、一秒でも長く生きていたかった。
とても他人には見せられない、蜘蛛の糸にまみれた、ぐちゃぐちゃな姿になってまで、糸原は、生を捨てきれない。
生きていたい。
死にたくないからだ。
何故、死にたくない？
それは。
――それは……。
糸原の、すぐ傍の蜘蛛が、腕を振り下ろす。
眼前の得物に、辛抱出来なくなったのか。

糸で見え辛い視界だったが、蜘蛛の攻撃は雑だった。
糸原は体を捻らせて、必要最低限の動きで、それを避ける。
否。
最低限の動きしか、出来ないのだ。
疲れ切った心身。
楽になりたいと、何度も思って、想って、願った。
なりたければ、すぐになれる。
このまま、蜘蛛にされるがままにされていればいい。
体を足で突き刺されようが、糸でがんじがらめにされようが、動かなくなるまで、動けなくなるまで、そこでじっとしていればよかった。
だが、糸原は蜘蛛の攻撃を避けた。
何故、何故？

「今日は、バカに星が綺麗だな」
そんな事を呟きながら、店長は紫煙を吐き出す。
「そうね、この国でも、綺麗に見えるのね」
梟が、夜空を見上げながら、そんな事を言った。
「そりゃそうだろ。どこにいても、いつでも、国が変わっても、空は変わらないさ」
「そうね」
一人と一羽は、同じモノを見ながら、小さく笑った。
ふと、梟が顔を下げ、
「私の事、殺したい？」
物騒な事を聞いた。
そうだな、と店長が頭を掻く。
ややあった後、「そりゃそうだろ」と言った。
「でもな、もう終わっちまった。一は行っちまった。済んだ事はしょうがないだろ、もうお前を殺しても、あいつは来ちまったんだよ。

こっちにな」
そう言った店長の顔は寂しそうでもあったし、どこか嬉しそうでもあった。やがて、短くなった煙草を地面に落として、足でえらく乱暴に踏みつけた。
「本当はこうしてやりたいけどな」
「その顔は、嘘を吐いてなさそうね」
「……一にやった力は、どんな物だったんだ？」
「気になる？」
梟がやけに意地悪く笑った。
鳥類の笑顔は、やはり気持ち悪い。
そんな事を考えながら、店長はぶっきら棒に
「私の部下の事だからな」
と、答えた。
やはり、気持ち悪い顔のまま、梟が笑う。
「安心なさい。最高よ。私の力の中でもとびっきりのモノを渡したわ」

彼女の頭の中に、どこかで見たことの有るもの達が浮かんだ。
浮かんでは、すぐに消えていく。
それは場所だったし、人だったし、良く分からないものでもあった。
確かなのは、それが一度はどこかで見たことの有るもの。
ただ、それだけ。
出来の悪いスライドショーみたいに、次から次へと映像が切り替わっていく。
映像は、靄がかかったような物もあったし、くっきりと細部にわたるまで鮮明に描かれている物もあった。
その中の一つ、モノクロの映像。
「……ぅ……」

それが脳裏に浮かび上がった。
知らずと、糸原の口から言葉が出てきそうになる。
人物が、頭の中に映っている。
これは、誰。
誰か、分からない。
大切なモノだ。
ただただ、大切な者のイメージだと分かる。
男と、女と、年端も行かない子供。
三人並んで、浮かび上がる。
その人たちの表情も、顔もはっきりしない。
だが、糸原には分かった。
きっと、楽しそうに笑っている。
そうに違いない。
「……ぅさん、か、さん……」
やっと、糸原は気付く。
走馬灯を見ていたのだ。
死の間際に見えると言うそれを。
そして、遂に糸原は倒れた。
崩れ落ちるように。
糸が切れるように。
「……っは。あははっ」
糸原の背中がひんやりとする。
熱くなった体が、コンクリートに熱を奪われていく。
糸原はその冷たさに、心地よさを覚えた。
「あ、ははっ」
そして、乾ききって、枯れ切った、掠れた声で笑う。
そうか、自分は今から死ぬんだ。
走馬灯も見たし、体は冷たい。
急速に、死、その事実を、糸原の体全体が受け止めていく。
受け止めれば、あっけないもんだと実感する。

自分はこんなところで死ぬのか、何だそうなんだ、と。
実感して、受け入れれば、加速度的に、死は近づく。
蜘蛛の群れが、糸原を囲んでいた輪のような陣形を縮めた。
ソレが目に入り、糸原は目を固く閉じた。
――最期に見た風景がソレなんて、酷すぎるな。
そんな事を思って、さっき見た走馬灯を思い出そうとする。
だが、先程の映像は全く浮かんでこなかった。
代わりに、小さな部屋が現れた。
鮮やかに。
ついさっきまでグルグルと回っていた映像を掻き消すように、部屋は動く。
鮮やかに。
小さな部屋。汚い部屋。床に無造作に置かれた雑誌。
真新しいこたつ。
後姿のあいつ。
「……あれ……？」
顔が見えない誰か。
糸原は頭の中で、こっち向きなさいよ、なんて声を荒げるも、その人物は背中を向けたままだった。
気になる。
誰だ、こいつは。
会いたい。
只管に、糸原は思った。
最期なんだから、会いたい。
糸原は想った。
そして、目を開ければ、蜘蛛の足があった。
ゆっくりと、ゆっくりと。
ソレの武器が糸原に近づいてくる。
糸原には、一瞬が一秒にも、一分にも感じられた。
糸原の視界が真っ白になる。

強い、強すぎる光に、襲われたようだった。
――ああ。
光の中、見たことの有る顔が浮かんだ。
――こいつは。
今までで、一番ハッキリしていた。
――何でだろ。
糸原は力なく笑う。
「……ベタ過ぎ……」
もう目を閉じているのか、開けているのか分からなかった。
ただ、光が辺りを包んでいる。
そして、そいつを呼んだ。
そいつの名前を、掠れた声で、精一杯呼んだ。

「」

そいつは何故か、ビニールの安っぽい傘を持っていた。

白い梟とビニールの傘、赤い目と黒い体

傘。

雨や雪から、自身、もしくは持ち物を濡らさない為に使うもの。

一般的に、雨傘、と言う。

強い日差しから、肌を守るための日傘と言うものも存在する。

妙齢の女性が日傘を差して歩いている姿なんかには、ピンと来る人もいるんじゃないだろうか。

蜘蛛の戦場。

蜘蛛だらけの道路。

蜘蛛の死骸と、蜘蛛の遺骸と、蜘蛛の成れの果て。

動く蜘蛛、歩く蜘蛛、飛ぶ蜘蛛、動かない蜘蛛、獲物を狙う蜘蛛、糸を吐く蜘蛛、目を光らせる蜘蛛、今まさに、糸原へ足を振り下ろそうとしている蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛。

そこに、人間が一、二。

一人は地面に倒れこみ、一人は地面に立っている。

一人は女、一人は男。

一人は糸原四乃、一人は一一。

「久しぶりね」

まるで、街中で会ったかのような軽い口調で、糸原が一に声を掛けた。体中は糸まみれ、服も所々破れて、情けない姿になっていても、糸原は一に対しては、少し上目線である。

糸原の声を聞いて、一が安心したように、息をついた。そうして、動かない蜘蛛の体に触れない様、おっかなびっくり足を踏み出す。

「大丈夫でしたか？」

「見て分からない？　髪はボサボサ、おろし立ての服は返り血やら何やらで汚いし、オマケに蜘蛛の糸のサービスまで付けられたわ」

そう言いながら、糸原が自分の姿を、自分の姿と信じていないような、もう何も信じられないといった風に見回した。
「そりゃ災難ですね。ちなみに、そのダメージ加工なんて言ったらダメージ加工に失礼なぐらい、ダメージ受けてる汚い服は、糸原さんが俺の金で買ったものなんですけど」
そんな事を言いながら、一が蜘蛛の群れの中を歩く。
およそ、戦場に似つかわしくない、相応しくない会話をしながら。
「それよりさ、何であんたが来てんのよ？　仮に、仮によ？　もし私を助けに来るならヤンキーか、あの店長だと思ってたんだけどさ」
「俺じゃ不満ですか？」
体を、恐怖と、得体の知れない感覚に震わされながら、一が歩く。
「馬にでも乗ってきたら、面白かったんだけど」
「白馬の王子様ですか？　しかし、意外な意見ですね」
「何よ？　私にメンヘルは似合わない？」
「糸原さんってやっぱ病んでたんですね」
軽口を叩きつつ、一が少し開けた所までやってきた。一が視線を下げると、片手を挙げた糸原が、何とも微妙な格好で、何とも言えない表情をしていた。
「……酷い格好ですね」
「ふふん、今の私扇情的じゃない？」
「ええ、たしかに戦場的です」
「？」
それより、と言いながら一が首を動かす。
自分たちに今にも飛び掛ってきそうな蜘蛛の群れ。
全身の汗腺から冷たくて、嫌なものが吹き出る感覚。
一はただ只管に、その感覚をおぞましく思って、この光景をおぞましく思った。
「いったん、店に戻りましょう」
「逃げていいの？　てっきり私は死ぬまで戦え犬！　とか言われるのかと思った。そんならとっととこんなトコから逃げるわよ」

肯定の返事をして、一が糸原に背を向ける。
「行きますよ」
「……あー。ちょっと待って」
「何ですか？」
「肩貸してくんない？　一人で歩くのだるいわ。面倒だし」

傘。
最近では、ビニール傘が割りとポピュラーらしい。
コンビニでも手に入るお手軽さと、百円均一で売られているお手頃さが人気の秘密。ただ、コンビニのビニール傘は、結構高いものである。雨の日など、分かりやすい所に陳列されていて、「ほら、傘がほしいんだろ？　買えよ、このいやしんぼめ」なんて言われてるようで、腹が立つ。おまけに、ついつい買ってしまったときには殺意が芽生えそうになる（主にコンビニへの）。
逆に。
百円均一の、超良心価格なお値段のビニール傘。ちょっとした突風にあおられたり、車が向かってきたので、端に寄った拍子にどこかにぶつけたりしたら、すぐに壊れてしまうあれ。
だけど、自分を雨や雪といった、自然災害から守る為に払ったのが百円である事を考えれば、それはまあ、何かもう仕方の無い事である。
ビニール傘と言うのは罪深いものである。

「ねえ、あんたってさ」
「後にしましょう、時間もありませんし」
一は蜘蛛の間を、糸原を支えた状態で難儀そうに抜けていく。
「時間？　何のよ？」
「……気付いてますよね？　この状態は、正直、後一分も持ちませ

んよ。ていうか、持たせたくないですね」
言いながら、二人はやっと蜘蛛の道を抜けた。
一は糸原に肩を貸したまま、走れますか、と尋ねてみる。予想通り、と言うか、糸原の状態を見たとおり、嫌よなんて答えが返って来た。嫌だなんて言っているが、どっちにしろ、糸原の疲弊しきった姿を見れば、走らせるなんて事も一には出来そうに無かった。
「なら、少しでも距離を稼ぎます」
糸原からの返事は無い。口を閉ざしたまま、一に体重を預ける。一を巻き込んでしまった罪悪感か、蜘蛛との戦闘で疲れきったせいか、それとも口を開けるのも面倒なだけなのか。
「ごめん」
と、糸原から小さな声。もはや、軽口を叩けるほどの気力もなくなってしまったのだろう。
さっきまでの饒舌は気を紛らわせる為だったらしい。緊張の糸が切れ、糸原はもう、完全に力をなくした。
いつもとは違いすぎるほど違う糸原を、肩で感じながら、一はゆっくりと、一歩ずつ、帰るべき場所へと向かう。
そうして、一分ばかり経った頃、先ほどの一の言葉が予言だったかのように、今まで動かなかった蜘蛛たちが動き出す。
さっきまで蜘蛛が囲んでいた傷だらけの獲物は、そこに居ない。
では、どこに行ったのか。
赤い、赤い赤い眼を光らせて、蜘蛛が暗闇をそれで照らす。
――ああ、そこに居たのか。
よろよろと歩く一を、一匹の蜘蛛が発見した。一匹が見つけると、即座に他の赤い目も、一の方を照らす。サーチライト。脱走者。蜘蛛の監獄。
煙草の吸殻が、オンリーワン北駒台店の店先に無造作に捨てられていた。

ポイ捨ての犯人は、店主であり、店長。店を仕切る二ノ美屋の仕業である。

既に一箱は消費しているらしい。

それでも、落ち着きの無い様子で、新しい煙草に火を点けては、何か考え込み、消し、また点ける。意味の無い行動を繰り返している。

「勿体無いわよ」

「ちっ、鳥に煙草の価値が分かってたまるか」

そう言いながら、店長は煙を至極不味そうに吸い込んだ。

「……神様ってのは、人間ってのをまるでおもちゃみたいに扱うんだな」

いきなり、どこかの漫画から引っ張り出してきたような台詞が飛び出したもので、梟は元から丸い目を、更に丸くさせた。

だが、それが自分のやった事に関しての皮肉だと気付いて、

「力ってのは、無条件で振るっちゃ駄目なのよ」

と、諭すように言った。

「おまえが一にやった力っていうのは、人間一人の、人生を変えてしまうほどの、馬鹿みたいな制限を与えるようなものなのか？」

「そうよ。言ったでしょ？　私の力の中でも極上の、最高のものをあげたって」

「力？　ビニール傘一本がか？」

店長は言いつつ、ついさっき傘を持ったまま走っていった人間を思い出す。

一一。

雨も降ってないのに、そもそも戦場に向かうのに。

ソレとの戦闘に関しては、全くの、完璧の、百パーセント、混じりけなしのズブの素人。そんな彼が、蜘蛛との戦闘へ、蜘蛛との戦場へ持っていった武器は、コンビニエンスストア、百円均一のお店で売っているビニールの傘一本。オンリーワン北駒台店にて、一本五百円で提供している安っぽい作りのビニール傘。ありふれた、ど

こにでも文字通り転がっていそうな傘である。一つ、他の傘と違う点を上げるとするならば、傘の手元の所に、「オンリーワン」とロゴが入っている事だろう。是が非でも、意地でも、ほんの少しでも、店の事を宣伝したい商人根性である。そんな格好悪い傘を持って、一は戦場へ駆けていったのだ。

「性質の悪い冗談かと、目を疑ったぞ」

白い梟、アテナを睨みながら、店長が恨み言を呟く。

「じゃあ、傘を千本持たせれば文句は無かったのかしら？」

「……」

「冗談よ。そうね、あの子にあげたのは私の中でも最高で、最硬で、最強の力よ。確かに、と言うか、なぜか傘一本だったけど、それはただの傘じゃないわ。この国でも、いいえ、この世界でもトップクラスの防御力を誇るモノよ」

梟が、さも自慢げに胸を反らした。

「……防御？」

店長が、「おいちょっと待て話が何かおかしくないか、普通こういう時に渡すのは武器として、攻撃力が優れていたりする剣とかじゃないのか」みたいな、俗な事を考えていたのかはさておき、見る見るうちに変な顔になる。

「あの子は、助けたい、守りたいと言ったの。土蜘蛛を殺す力なんて望んじゃいないわ。レージングを持っている、あの女の子を助けたいと言ったの。だから、あげたわ、とっておきでうってつけな、守ることに関しては、ギリシャで一番の、いえ、世界で一番の盾を」

糸原を自分の後ろにやって、庇う様な体勢で一が立っている。

庇う。

〜〜を危険から遠ざける。守る。

危険。

何から。何から、何から？

一と糸原へ襲い掛かろうとする土蜘蛛から。
土蜘蛛の群れから。
赤い眼球が、土色の体躯が、八つある足の蜘蛛が。
小さい蜘蛛が、大きい蜘蛛が、遅い蜘蛛が、早い蜘蛛が。
一へと走る。糸原へと走る。獲物へと走る。
やがて、小さくてすばしこい一匹の蜘蛛が、一の眼前にまで迫った。
「……」
既にソレと遭遇した事はあるが、一にとっては勤務外として、初めてのソレとの遭遇。
前回、前々回のソレとの戦闘では、全て三森が一人で片付けた。
だが、その三森も今はこの場に居ない。一が一人でこの状態を、現実を片付けるしかないのだ。
恐怖も、緊張も、焦燥も、大よそネガティブな感情しか、今の一にはないだろう。

それなのに。

蜘蛛の足が一に迫る。
土蜘蛛の群れの中でも、小柄なモノだろう。が、それでも人間にとっては、どっちでも良い事の筈だ。大きい蜘蛛だろうが、小さい蜘蛛だろうが、怖いものは怖いし、痛いのは痛い、死ぬときは死ぬ。
そう、死ぬ。
攻撃を食らえば死ぬ。
あっけなく、簡単に、なすすべも、面白くも無く死ぬ。
昨日まではただの、どこにでも居る一般人の一でも、絶望的に運が悪くなければ、奇跡的に運が良ければ。
蜘蛛の攻撃を避けられたならば、打ち所が悪く無かったならば。
たら、れば。
助かる可能性はあるだろう。

命を繋げるならば、がむしゃらでも無茶苦茶でも、動けば良い。
動かなくては悪い。

それなのに。

一は全身から汗をかきながら、体は震え、膝は笑い、視線は定まらず、喉は渇き、糸原は重くて、蜘蛛が怖くて、何も考えられなくて、声が、声が震えても、

「止まれ」

目の前の蜘蛛に、当たり前のように言い放った。

アラクノフォビア

「さみぃ」
誰に言うでもなく、
「だりぃ」
別に意味はなく、
「たりぃ」
独り言を呟きながら、真っ暗な駒台の街を三森が歩く。
黒が支配する世界で、三森のトレードマークとも言える赤いジャージと、短めの金髪がその色を浮かび上がらせている。
三森が、指の腹と腹を擦り合わせて、火柱を作る。
火を生み出す。
それが、勤務外店員の、三森の力だった。
その火の中へ、口に銜えている煙草を浸す。ジジ、と音を立て、点火。煙が上へ昇っていく。その煙を眺めながら、三森が息を吐き出した。
電信柱にもたれながら、三森は目を遣る。その目は、確実にそれを捉えていた。しかし、三森はそこから動く気が無いかのように、やる気なく突っ立っている。
その目が捕らえたのは、ソレ。
自分たちの住む駒台を、好きなだけ、あらん限り、やりたい放題蹂躙し、侵略し、進軍する蜘蛛の群れ。
今現在、一と糸原が戦っている場。
三森には、そんな事知る由も無かったし、知りたくも無かった。
もし、その事を知っていれば、彼女はどう動くのだろう。
避難勧告が出され、住民の消えた駒台で。
それもいまや、せん無き事である。

オンリーワン近畿支部。
ソレと戦う者たちの拠点、職場。
前線でソレと戦う勤務外への、指示、援護、その他諸々を担当する。
その支部で、土蜘蛛の群れが駒台に現れた事についての、緊急本部が設置された。
スーツを着込んだ、男たちが長テーブルを囲んで、顔を突き合わせている。
「では、北駒台への援護は出来ないと言う事で」
「異議なし」
「異議なし」
「ちょっと待って下さい。せめて、一人でも社員を派遣できませんか？」
「そうしたいのは山々だがね、誰に行かせるつもりなんだ？」
「そうだよ、堀君。ソレが出現したのは北駒台エリアだけではないんだ。正直言って、戦力をこれ以上注ぎ込むのも、分散させるのも危うい状態なんだぞ」
「では、私が行きます」
と、よく通る声で、誰かが発言する。
「君が、かね？」
「はい」
「ゲッシュは？　今の君の状態だと満足な戦闘も出来んのだぞ？」
「それでも、たかが土蜘蛛数十体です。問題ありません」
「……あそこは、君の管轄だったな」
「……はい」
「間に合うと思うのか？　全滅しているかもしれんよ？」
意地悪そうに、一人の男が口元を吊り上げた。
その笑みを、黙って誰かが見つめる。
静かに、時間が流れた。無駄と思えるほど、長い時間。

「……堀、任せたぞ」
その台詞を聞いた瞬間、堀と呼ばれた男が即座に椅子から立ち上がる。
他の人間たちが、驚いてその方向を見たとき、既に堀の姿は消えていた。
オンリーワン近畿支部所属、オンリーワン北駒台店ＳＶ、堀。
彼もまた、駒台へと、戦場へと向かう。
懐かしい戦場へ向かう。

動かない蜘蛛を見ながら、糸原が口を開ける。
「やっぱり」
そう言ってから、次は一へと視線を向けた。その視線に耐え切れないといった風に、一が顔を背ける。
そしてまた歩き出す。少しでも早くここから立ち去るために、少しでもここから遠くに逃げ去るために。
「……あの鳥に何をされたのよ？」
答えず、一は歩みを進める。
「その傘、邪魔じゃない？　捨てなさいよ。雨も降ってないじゃないのよ」
黙ったまま、一は進む。
「怒るわよ」
糸原は、掴んでいる一の肩に爪を立てた。そうしてから、自分の方を見るつもりが一に無いと分かると、更に力を込める。
一の肩に血が滲み始めた。だが一は、意に介さず、只管足を動かす。
「あんた、こっちに来たのね。駄目よ、許さない。まだ間に合うわ、その傘と私を捨てて走って逃げなさい。早くして。ほら、後ろ見なさいよ、他の奴らも追ってきてるわ、怖いでしょ？　だからとっとと行けって言ってんのよっ」

「うるさいです」
カッと、糸原の頭に血が昇る。
「っざっけんじゃないわよっ」
一の肩から手を離し、髪の毛を引っつかんで、糸原は無理矢理自分の方へ向かせた。
「あんたね……」
と、捲くし立ててやるつもりだったが、一の無表情な顔が現れたので、糸原は柄にも無く言葉に詰まる。
――何よ、こいつ。
何も言わない糸原の、その後方、迫り来る土蜘蛛。
それが視界に入り、一が再び前を向いた。
「行きますよ」
「行けば？」
「糸原さんもです」
「嫌よ」
「……死にたいんですか？」
「死にたくないわ」
何て二人が会話している間に、土蜘蛛の一匹がすぐそこまで近づく。
分かっていない筈は無い。筈だが、一の方を向いている糸原には、迫る蜘蛛が見えない。
「糸原さんっ」
思わず、一が叫んだ。
が、糸原は右手をぐるりと回すだけ。
回すだけで、蜘蛛が解体される。蜘蛛の体に直接線を入れたみたいに、一瞬、五本の筋が通り、いとも簡単に五等分。
その光景を、驚いた様子で、一が目撃させられた。
引きつったままの一に、
「なぁに？」
と、糸原がニコニコしながら答える。

「……お願いですから、一緒に店まで逃げましょう」
「ふうん、じゃお願いだから傘を捨てて」
それは、と一が口ごもった。
「あんたがそんな目に遭う必要ない。ソレと戦う必要なんてない。こういうのは他の奴に任せておけば良いのよ。たとえば、あ、ほら、あの金髪とかさ」
「三森さんは来ません」
一が切り捨てる。
「じゃあ店長とか。堀って社員とか、ほら、適任じゃん。あんたよか全然」
「信用できないし、動いてくれませんよ」
日ごろ、ここまで一に抵抗された事の無かった糸原の、堪忍袋がおかしなことになり始めていた。飼い犬に手を噛まれた気がして（飼われているのはむしろ、糸原だが）、一を睨み、
「ワガママ言ってんじゃないわよ！」
一の胸倉を思い切り掴み上げ、糸原が叫ぶ。
正直、一は怖くて、糸原が怖くて、まともに視線を合わせることも出来なかった。何も言えなかった。
糸原が泣いていると、気付くまでは。
「……っ、俺はっあなたに死んで欲しくないんです！」
「勝手な事言ってんじゃないわよクソガキ！　ちょっと優しくすりゃあ付け上がって！　私を自分の物だと勘違いしてんのっ？　彼女か何かだと思ってんの！？　バッカみたい！　バカ！」
「優しくされてない！」
「したわ！」
「詐欺師の癖に！」
「何よちび！」
そして後ろには土蜘蛛の群れ。
気付いた一は、掴まれている腕を、思い切り掴み返して、糸原を自分の後ろに下げる。何か糸原が喚いているが、無視して一は、ワ

ンタッチ式のビニール傘を、蜘蛛に向かって広げた。
「止まれっ！」
そう言った瞬間、今までの勢いを完全に殺して、蜘蛛たちの動きが止まる。蜘蛛たちの時間だけが切り取られたように、足を上げているものはそのまま、糸を吐こうとするものはそのまま。そのままの姿で止まっている。
まるで映画のワンシーンみたいに、まるで嘘みたいに、まるで性質の悪い冗談みたいに。
一は肩で息をしながら、強く傘の手元を握り締めた。
やがて、近くの電信柱に手を付き、激しく咳き込む。
「これがあんたの力ってわけ？」
ゆっくりと息を整え、一がそうです、と答えた。
「便利よね、動きを止められるなんて。そんでもって無敵じゃない、何も出来ない相手をボッコボコにできるじゃん。ねえ、ただの善良で性悪な一般人から、最強に近い力を持ってるクソ生意気な勤務外になった気分はどう？」
まるで詰る様に、糸原が一に声を掛ける。
そんな皮肉も無視して、一が電信柱から手を離した。
「正直、もう持ちません。そんなに喋れるなら走れますよね？　行きますよ」
「嫌だっつってるでしょ、私は、一とは一緒に帰るわ。でも、クソみたいな力を持った勤務外と一緒に戻るつもりは無いの」
その言葉に、一がたじろぐ。
「調子に乗ってんじゃないわよ。そんな馬鹿みたいな傘持っちゃってさ、アクション映画のヒーローにでもなったつもり？　俺は特別な人間なんだぜやったー糸原さんを助けに来たぜー、さあ一緒に戻りましょうってか、あっはっは。笑わせんじゃないわよ。あんたは大人しく店でレジ打ってりゃ良いのよスカタン」
糸原が一を更に責める、攻める。
「俺が助けに来なきゃ、糸原さんなんてとっくに死んでた！」

「何ですって……？」
「俺がこの力を貰ってなきゃ！　ここに向かって無かったなら、あなたは死んでたんですよ！　そんな口もきけないでさ！」
鈍い音が響いた。
一が、糸原のパンチを食らった衝撃で、よろよろと情けなく後ずさる。
殴られた箇所、右頬を摩りながら一が糸原を睨んだ。涙目で。
「私を誰だと思ってんのよ！」
「……金に汚ぇ口汚ぇ詐欺師ですよ、あなたは」
血の混じった唾液とともに、吐き捨てるように。救いようがねぇ、とも一が付け足した。
へん、と糸原が鼻で笑う。
「あんたに救われるような愚図なんてこの世に存在しないわ」
「確かにそうですね。もう後一分もすれば、こいつらは動きます。そうなりゃおしまいですよ。俺も、あなたも。誰一人救われずにこの世から消えてなくなりますね」
「ふーん、あっそ。一分もあんのね」
「はっ？」
言うが早いが、糸原が両手を伸ばす。十指を伸ばす。そして、動かない、いや動けない蜘蛛たちに容赦なく、攻撃を加え始めた。銀の光が、蜘蛛の体躯に銀の線を引いていく。
舞うが如く。
糸原がレージングを動かす。指揮棒を振るうが如く。徐々に、徐々に、動きを早めていく。
――見蕩れていた。
やがて、一たちの周りに居たソレ全てに線が引かれた。バラバラに、規則的に、無茶苦茶に、整然と。
――ああ、見惚れていた。
ボケッと突っ立っている一を一瞥し、糸原が不敵に笑う。
「残念でした」

刹那、蜘蛛たちの体がバラバラと、バラバラにされて落ちていく。
何が起こったのか分からずに、伸ばそうとしていた足が無い蜘蛛、
獲物を睨もうとしていた眼球が無い蜘蛛、胴が、腕が、脳が、牙が
無い蜘蛛。関係なしに死んでいく。全て命を落としていく。蜘蛛が
死んでいく。
そして、動ける蜘蛛はこの場から居なくなった。
「誰が死ぬって？」
シニカルに糸原が笑う。
「……誰だったんでしょうね」
「ま、救われない愚図に間違いないでしょうね」
「あれ、なぜか俺たちは生きてますよ？」
「救ったのよ、私が」
誇らしげに糸原が笑う。
つられて、一も笑顔になった。
「かっこよかったですよ。ついでに、すっげぇ綺麗でした」
素面なら、恥ずかしくて言えそうにも無い事。
今の一なら、そんな事も言えそうだった。
っていうか言った。
「当然よ」
一に背中を向けながら、自分の顔を見せないように、糸原がハッ
キリと答える。少し頬に赤みが差した、何ともいえないにやけ顔で。
あの、と一が小さな声を出す。
糸原は返事をしない。
「あの……さっきは言い過ぎました。その、すいませんでした」
「別に。気にしてないわよ」
「一つだけ言い訳させてくれるなら」
くるりと、糸原が振り向いた。
「ふむ。じゃ、してみ」
「俺はこんな力欲しくなかったんです。けど、欲しくなりました。
それは今のところ、糸原さんのせいですよ」

「何でよ?」
「だって、本当に、マジでそうしないと糸原さんが死んじゃうって思ったからですよ。ああ、正確に言えば思わされたのかなあ、あの人たちに」
「要領を得ないわ。ちゃんと筋道立てて喋りなさい」
糸原がタン、タンと靴を踏み鳴らした。
「つまり俺はもう一回ホームランを打ちたかったんですよ」
「え? あんたホームラン打ったことあんの?」
「すっげぇ気持ち良かったんですよ。カァンなんて良い音がして思い切りぶっ飛んでいって。まあ、小さい頃の話ですけどね」
「今もちびじゃん」
「糸原さんがでかいんですよ、無駄に」
「ああ、違うわ。筋道立てろって言ったじゃないっ。関係ないこと喋るな」
糸原がタン、タン、タンと靴を踏み鳴らした。
「俺はハリウッドスターじゃなくて、プロ野球選手になりたかった男です」
「うん。夢のある男でよろしい」
「だからアテナさんに傘と力を貰いました。あ、終わりです」
「糸原さん、今の話に関係ないわよね?」
「ま、きっかけを作ってくれたと言う事で。ありがとうございます」
「気にしないで」
糸原が一を蹴飛ばした。
「とにかく、終わったんだから。その傘捨てなさいよ」
尻を押さえながら、一が傘を両手で握り締める。
「何度言われても、駄目です。嫌です」
「……じゃあ、あんたはさ、これから勤務外になって調子付いてヘラヘラして気持ち悪い顔晒して情けなーく生きていくつもりなの?」
「何だか、そういう人生も良いなあとか思えました」
「あっそ」

「と言うかですね、俺は勤務外になるつもりないですよ。この傘は、訳あって手放せませんが。正直ソレと戦うの怖いですし、今日だっていろんな意味で特別でしたから」
「……あっそ」
「それじゃあ今度こそ帰りましょうか」
「そうね、ありがと」
「？　そうですね」
曖昧に一は返した。
「あっ」
と、糸原が声を上げる。
一が振り向くと、そこには巨大な蜘蛛がいた。
さっきまでの土蜘蛛とは訳が違う大きさ。
「糸原さん？」
糸原の姿はない。
糸原と蜘蛛が交換されたみたいに。当たり前のように、ソレはそこにいた。
振り下ろされる蜘蛛の足。
ああ、まるで、まるでこれこそがギロチンだろう。
声を上げる間もなく、一が吹き飛ぶ。
吹き飛ばされる。
道路に転がされる。
――死んだ。
うつぶせのまま、情けなく地面に倒れたまま。一がもぞもぞと体を動かしてみる。何とか腕は動くらしい。その腕で体のあちこちを触ってみた。血は出ていない。どこも折れてない。呼吸も出来る。内臓も無事らしい。
「生きてる……」
どうやら蜘蛛の直撃を受けたわけではないようだった。
「死んでる！？」
声が聞こえる。

「生きてます！」
その声に応えるべく、一は喉から声を絞り出した。一はすぐに起き上がって、ソレに備える。
「なら何とかしてよ！」
一が前を見ると、糸を挟んで（レージング）、糸原と蜘蛛が力比べをしていた。
蜘蛛の四つの腕が、糸原の体へ、肉へ食い込ませようと力を込める。全身の力でもって、糸原が必死に抵抗していた。
「何やってるんですか！」
と、喚いた時に、一は気付く。
――俺を吹っ飛ばしたのは。
自身を飛ばしたのは、蹴り飛ばしたのは、糸原である事に。だからそこで糸原がそんな事をやっているのだ、とも。
一は心の中で糸原に詫びを入れる。
そして、傘を広げ、蜘蛛に向けた。
すぅ、と冬の冷たい空気を吸い込み、
「止まれ」
と、震える声で告げた。
心なしか、糸原の体がどうしようもなく震えているように見える。
蜘蛛の動きは止まった筈なのに、いつまでも何をしているんだろうと、一は不思議に思った。
「糸原さん、帰りますよ。こんなでかい奴相手にしてらんないですってば」
暢気に、のんびりと一が言う。
糸原は何も言わない。
――まさか。
「……ちょっと！　早くこいつを止めてよ！　死んじゃう！　死んじゃうわ私、やだやだ絶対やだってば！」
糸原が叫ぶ。
「あれ？」
一が持っている傘を二度見した。

「私が死んだらあんたも死になさいよ！」
糸原が必死に叫ぶ。
「何で？」
蜘蛛はすごく元気に、至極まともに動いていた。

アラクノフォビアは続く

アイギス。

ギリシャ神話において、主神ゼウスが女神アテナに与えた防具。鍛冶神ヘパイストスが作成したとされる。その形状は盾だとも、胸当てだとも肩当てだとも、それ以外のモノだとも言われる。

だが、「アイギス」の形が何であれ、邪悪なものや災厄から、身を守る力がある事に変わりは無い。

後に、ゴルゴン三姉妹の三女（説は多々あるが）、見たものを石に変える力を持つ魔物。蛇姫。つまりはメドゥーサ。アテナは、その魔物の首をアイギスに埋め込み、その守備力を磐石のものとした。その瞬間こそ、ギリシャ神話、いや全世界でもトップクラスの防御力を誇る防具の誕生である。

「それを一にやったって訳か？　随分気前が良いもんだ」

煙草を銜えながら店長が言う。

「今の私が持っていても仕方ないのよ。それなら、しかるべき所にあれば、そっちの方がいいと思わないかしら？」

梟が意味もなく笑みを浮かべながら言った。

「しかしな、動きを止められて、並大抵の攻撃なら防げる最強の盾だろ？　そんな物一にやっても良いのか？」

「盾ってのは間違いよ。アイギスは最強の防具で、盾だけれど、あくまで概念なのよ。だからあんな安っぽい傘でも問題ないわけ。それにさっきも言ったけど、今の私には必要ないの」

「概念？　神様の言う事ってのは相変わらず分からんな」

店長が煙草に火を点ける。

「でも、女神の力をそう簡単には使わせないけどね」

「……使ったら寿命が縮むとか言うんじゃないだろうな？」

店長が白い目を、白い体に向ける。
「そっちの方がマシかもしれないわ」
「おい、場合が場合とはいえ、あいつはまだドが付く新人だ。ろくでもない条件付けてたら承知しないぞ」
「心配しないで。使ったら死ぬなんて、そんな安易な条件美しくないわ。ちゃんと女神アテナの名に相応しい交換条件よ」
梟が嫌らしく笑う。
「本当だろうな？」
「本当よ。アイギスを使えるのよ？　一生純潔でいるなんて安いものでしょう？」
「純潔……」
「私は処女よ」
表情一つ変えずに、梟がそんな事を言い出した。
いきなり現れた場違いな単語に、店長が目を丸くする。
「からかってるのか？」
「私は処女神。私に仕える者にも、純潔を保ってもらうわ。穢れたモノが私の下についたり、私の力を使ったりするなんて虫唾が走るもの」
店長がゆっくりと、その言葉を咀嚼するように、何度も頭の中で繰り返した。
「つまり、一は一生死ぬまで」
「そ。童貞って事よ」

「もう限界」
呟いて、糸原ががっくりとうな垂れる。指に絡まったレージングは、ギシギシと音を立てて圧力をかけていた。糸原の指は、大蜘蛛との力比べで赤く腫れ上がっている。
「何とかなりませんか！」
一が離れた場所で声を上げた。

「何とかなるならとっくにしてるわよ！　馬鹿！　自分だけ安全な場所にいるくせに、あんたが何とかしなさいよノロマ！」
「だって！」
ビニール傘が、アイギスが、一の言う事を聞いてくれない。
この力を貰った時に、アテナは条件を提示してきた。
一つは、一生純潔を守り通すこと。アテナ曰く、穢れたモノがアイギスに触れると神罰が下るという。
――意味ないじゃないか。
せっかく、一は糸原を助けるために死ぬまで童貞という汚名を被ったのだ。それなのに、この大事な局面でアイギスが発動しない。
「まずい……」
かと言って、蜘蛛の前に飛び出していって勇敢に戦う。そんな事、幾ら力を貰った一と言えど出来そうになかった。正直、今でも一の体のどこかは震えている。膝が笑う。喉が渇く。恐怖で。
怖い、怖い。

まるで、と店長がアテナを見ながら呟いた。
「生き地獄だな」
「あら？　別にそういう事しなくても生きていけるものよ。地獄だなんて、あなた色々な方々にすごく失礼ね」
「それだけでもキツイ条件だ。他にも一には何か科したのか？」
「そうね、とりあえずアイギスを持たせる条件はそれでしょ。後は力を発動させるのに幾つか与えたわ。だって、大いなる力には大いなる責任が宿るものでしょ？」
漫画か何かで覚えたような台詞を、さも自分のもののようにアテナが述べる。
「言っても、大したものじゃないわ。まず一つ目に」

――一つ目に。
アテナに言われた条件を、一が思い出す。
一つ目には、声を出せる状態である事。
「あ、あー、あぁあー」
発声練習。声は出る。問題ない。
――二つ目に。
アテナに言われた条件を、一が思い出す。
二つ目に、視界が良好である事。
雨の日や、霧が出ている日など、前方を見渡せない状況だとアイギスの能力は発動できない。らしい。
一は天気を確認する。馬鹿みたいに星が綺麗な、冬の夜。夜、だが視界が悪いとは言えない。現に、一の前方では糸原と大蜘蛛の対峙している姿がハッキリと見えている。糸原が青筋を立てている、その表情もハッキリと見えていた。
「なら」
三つ目の条件。
それは、動きを止める相手の、名前を知っているという事。
今回のケースならば、土蜘蛛。
仮に、土蜘蛛が「土蜘蛛」以外に名前を自分で決めて付けていた場合、その名前を知らなければ発動できない。だがその可能性は果てしなく、限りなく低い。蜘蛛が自身に名前を付けるなど、少なくとも聞いた事がない。聞く方法も知らない。
という事は。
「あれは、土蜘蛛じゃない……？」

――。
この姿になったのは、こんな姿にされたのはいつからだろう。
誰のせいだろう。誰にされたのだろう。
私が何をしたというのだろう。

赤い目玉で、自分の姿を確認する。
ああ、気持ち悪い。
気持ち悪い。
こんなになかったのに。
私の足は、目は、手は。
こんなに大きくなかったのに。
私の体は。
こんなはずじゃなかったのに。
許さない、許さない。
――。

「――――――!」
この世のものとは思えない音が轟いた。
音の発生源のすぐ傍の糸原は、耳を塞ぐ事も出来ずに顔を歪める。
距離のあった、耳を塞ぐ事の出来た一ですら、鼓膜が破けたかと思えるほどの衝撃だった。
大蜘蛛は余っていた足を振り上げる。
まずい、と思った糸原だったが成す術もなく、その攻撃を食らった。一の近くまで吹き飛ばされ、転がる糸原だが、寸前、糸から指を離していたのは流石といえる。そのまま離さずにいたら、指が千切れる所だった。
だが、直接攻撃の出来ない一たちにとって、その糸は最初で最後の攻撃手段である。
「カンダタじゃあるまいし……」
「はい？」
糸原が蹲りながら、吐き捨てるように言った。
「つうか、大丈夫ですか？」
暴れ狂う蜘蛛に怯えながら、一が糸原に尋ねる。
「うっさいっ、役立たずごく潰しろくでなし！」

「そのままそっくりお返ししたいっすね」
「さっきみたいにあいつも止めてよ」
糸原が頬を膨らませながら一に言った。
「こいつ言う事聞かないんですよ。条件は満たしてるんですけど」
一が傘を見ながらぼやく。
「条件？」
「ああ、それはともかく。俺の予想なんですけど、あいつ土蜘蛛じゃない気がしますね」
「はぁ？　じゃあ何だって言うのよ、どっからどう見てもスパイダーにしか見えないわよ！」
突拍子もない一の発言に、糸原が思わず英語で返した。
一単語のみだったが。
「蜘蛛は蜘蛛でも、土蜘蛛じゃない、とか。とにかく傘の力が出ないって事は、あいつは土蜘蛛じゃないって事なんですよ」
「だぁかぁらぁ！　あんたが使えないって事と、あれが土蜘蛛じゃないって事にどういう関係があるってんのよ！　言い訳ばっかしてんじゃないわよちびのくせに」
二人が言い争っているまさにその時。
蜘蛛が妙な動きをとり始めた。腹に力を込め、口元を震わせている。何かを堪えているような、そんな様子。
「――――――！」
再び、先ほどの奇声が辺りを騒がせる。
その声に、一と糸原が蜘蛛へ振り向いた。う、と声にならない声が、二人のどちらとなく零れる。
「吐きそ……」
「あはは、俺もです」
咄嗟に、一が目を背け、糸原が顔を蜘蛛から背けた。
そうして、吐き気を堪える。
見ると、蜘蛛の穴から何かが見え隠れしていた。液体のような、固体のような、原型を留めていない物体。一つ一つは小さかったが、

数は目を疑うほど多かった。目を疑うほどの、いや、見たものならば、目を疑いたくなる光景だった。

蜘蛛の産卵。

しかも、この地球上で一番大きな蜘蛛の産卵。ぼたぼた、と吐かれた卵が地面に落ちては潰れ、潰れては落ちる。吐瀉物を撒き散らしたような、そんな惨状。

やがて、その中の卵の一つが、不気味な動きを見せた。左右に細かく揺れて、ひびが入る。まだ完成しきっていない蜘蛛の幼体が、その姿を顕した。そして、その一匹が現れたのを皮切りに、次々と卵から蜘蛛が生まれる。産まれる。

小さいながらも、あの赤い目を二人に向けてきた。

「子沢山ね、しかもお母さん似だわ」

「言ってる場合ですか。やばいですよ、今のうちに逃げましょう」

「じゃあ一人で逃げれば？」

間髪入れずに、一の申し出を糸原が切り捨てる。

「何で！？」

「何でしょうー？」

と、言いながら糸原が足をこれみよがしに見せ付けた。

ズボンの破れた箇所から血が流れ出ている。

おそらく、折れている。

糸原の異常な汗の量。痛みで冷や汗が止まらないのだろう。

「ぶっちゃけ、気絶しないのが不思議なくらいね。しんどいし、痛いのよ」

だから、

「あんただけでも、逃げなさい」

糸原は、そう言った。

終わるアラクノフォビア

避ける。
避ける。
避ける。
生存競争を勝ち抜いた数匹の蜘蛛。
振り上げる足は肉を裂くべく。
振り下ろす手は骨を割くべく。
「下がってください！」
叫んで、一が広げた傘を正面に構える。瞬間、重い衝撃が傘のパーツを通して一に伝わった。耐え切れず、呻き声が一の口から漏れる。
足を弾かれ、蜘蛛が飛びのく。
その隙を目掛けて、別の蜘蛛が一に襲い掛かった。
右から、左から。
一は傘をスライドさせて、右からの打撃を防いだ。再び衝撃。左からの攻撃。一は先刻の衝撃を利用して、反動をつけて今度は左方向へ傘をスライド。蜘蛛の足は、一たちに突き刺さる事無く、傘に弾かれ、距離をとる。ギリギリのところで、これも防いだ。
「いってぇ……！」
何とも情けない声。
蜘蛛の攻撃、その衝撃がもう何度も一の骨まで伝わっている。既に一の両手は真赤に染まっていた。手傷は負っていないが、満身創痍。蜘蛛の攻撃も、傘に阻まれ一度も獲物に有効な打撃を与えられない。生きるか死ぬか、瀬戸際の膠着状態。
今の所は防御が成功しているが、大蜘蛛の庇護の元、増え続ける土蜘蛛の事を考えると、もう自分たちが持たないであろう事は、ソレとの戦闘の素人、一でも充分に分かっていた。
「まさか、共食いしてでかくなるとはね……」

渇いた笑いと一緒に、糸原が呟く。
共食い。
大蜘蛛が産んだ大量の卵。一つ一つの数は小さかったが、卵が孵り、蜘蛛が生まれるにつれて信じられない事が起こった。
蜘蛛達が互いを食い合い始めたのだ。
殺し、殺され、死なし、死なされ、食って食われて。体の大きいものが小さいものを食べ、より大きいものがより小さいものを食べる。
弱肉強食を狭い世界で体現させたのだ。
そうしてヒエラルキーの頂点に立った蜘蛛が二匹。みるみる内に大きくなった蜘蛛は、大蜘蛛を守る騎士のように、当たり前に現れた。
そして、今もそれは続いている。
第三、第四の騎士の誕生。
「何とかならないですか？」
「ならないっぽいわねー」
絶望的な状況。
絶対的な窮地。
「ねえ」
そんな中、糸原が一に声を掛けた。
「逃げろってのはナシですよ」
一が先んじてそんな事をぼやく。
「違うわよ。もう良いわ、あんたって意外と頑固なのよね。そうじゃなくって、このまま死んだら後悔すると思わない？」
「しない方がおかしいです」
「そうよね。じゃあさ、もう駄目だ、いよいよって時になったら私とキスしない？」
「……糸原さん、遂に頭が……」
「おかしくなってないわよっ、失礼ねボケナス！」
突っ込みを入れながら、糸原が激昂する。

緊張感のない会話だな、と思いつつ一は周囲の警戒を怠らない。
今ではもう自分しか、蜘蛛と渡り合えない。
糸原は戦えない。
体力の問題や、武器を手放した事も理由になるが、一番の理由は糸原が切れてしまった事だ。戦闘への緊張感、生への執着。そういうものが、致命的な何かが切れてしまったのだ。
だから、糸原は場違いな事も言える。
「私ね、実はまだなのよ、そういう事。だから最後に、死ぬまでに一回ぐらいはしたいのよ。たとえ相手があんたでもね」
最後のところだけ、やけにトーンが低かった。
「ちょっ、俺だってまだですけど、嫌ですよそんな成り行きでなんて。と言うか、すげぇ意外っすね。俺はてっきり糸原さんなら……」
「てっきり私なら何だってんのよ！」
あわわ、とか言いながら一がうろたえる。
視界に蜘蛛が映った。
「うわっ！」
前方に傘を向ける。引けた腰では、蜘蛛の攻撃は防御しきれない。何とか初撃は防げたが、衝撃を受けきれずに、一が傘から手を放してしまう。
ふわり、と傘が宙を舞った。
「何やってんのよ！」
「あなたのせいでしょう！」
言いながら、一が手を伸ばす。
が、広げたままの傘は夜風に晒され、軌道をゆらゆらと変え、蜘蛛の後方に流れていった。
一たちに残された最後の武器。身を守る盾。それが失われた。
「終わりだ……」
この世にヒーローなどいない。

弱者を、絶体絶命のピンチから助けてくれる人間なんていない。
この世に勇者などいない。
悪しき者を切り裂く剣なんて存在しない。
この世には神も仏もいるけれど、英雄だけがいない。
存在しない。したくない。して欲しくない。
そう、世の中は悪意と理不尽と少しばかりの偽善で作り上げられているのだ。

盾を失った一たち。
その隙を逃すはずもなく、土蜘蛛の一体が襲い掛かる。赤い目玉を爛々と輝かせて襲い掛かる。それは真っ暗な世界にはとてもとても良く似合っていた。
動かなければ死ぬ。
それなのに、一は動けなかった。諦めか、恐怖か、何なのか。足が地面とくっ付いたみたいに、吸い付いて、取り付いて動かない。
薙ぐように、蜘蛛が足を振るう。
目の前の世界全てが、一にはスローに感じられた。自身の心臓の鼓動、流れる冷や汗、か細い吐息。全てがゆっくりだった。その中で、自分が死ぬと言う事も、ゆっくりと理解した。
一の頭だけがやけに良く回る。
「あほうっ！」
突然の罵声とともに、糸原が一の体を抱え込んだ。
蜘蛛の攻撃は横の軌道だったため、姿勢を低くする事で何とかやり過ごせたらしい。
だが、蜘蛛は第二の攻撃を繰り出す。
休む間もなく、今度は上から突き刺すような縦の軌道。標的は一。
気付いた糸原が、必死で自分の元へと一を手繰り寄せる。
が、少し遅かった。一の肩を蜘蛛の足が掠める。掠めただけで、一の体には激痛が走った。

「……っ！」
脳内から、全ての肉体の箇所に向けて信号が走る。
――危険だ。逃げろ。死ぬぞ。危ない。
「痛い……っ！」
「ちょっと！　泣いてんじゃないわよ！」
一が情けない姿を晒している間にも、蜘蛛は雨を降らす。
攻撃、攻撃、攻撃。
それは死の雨だ。
頼りにならない一を抱えながら、糸原が無理な体勢で致命傷を避け続ける。も、致命傷を避けてはいるが、傷は負う。一つ一つが死に至るほどではないが、一、糸原両名の血液と体力を奪い続けていた。
――痛い。痛い。熱い。熱い。血が止まらない。血が止まらない。
「も……限界……っ」
動きが鈍った糸原に、蜘蛛が止めを刺すべく動く。
まずは一本目の足を糸原の顔のすぐ横に。二本目を足に、三本目を糸原の右手に。四本目を糸原の左手に、刺そうとした瞬間、抱えていた一を逃がすように糸原が左手を離す。離した刹那、一は間一髪攻撃を避け、すぐ隣へ転がされる。
だが、糸原の左の手のひらに、血と、それの吹き出る音を撒き散らせながら脚が刺さった。
「良い趣味してるわよホント」
糸原が毒づく。
一は倒れたまま動かない。そんな一を無視するように、捕らえた糸原を値踏みするように蜘蛛が目玉をせわしなく移動させる。
――怖い。死にたくない。もう何もしたくない。されたくない。
「……にのまえ」
糸原の声。
「ごめんね……」
謝罪。

糸原が諦めた表情で、目を瞑りながら、隣で倒れている一に詫びる。
「守れなかった」
それだけ言うと、満足したように、深く、更に深く糸原が目を瞑った。
――何を言ってるんだこの人は。
勝手な事を。
一が笑う。
「馬鹿にしないで下さいよ」
ゆっくりと、体を動かす。
――そうだ。怖いって事は、死にたくないって事は。
足に、膝に爪先に力を込める。
手のひらに、腰に肩に力を込める。
力を込める。
諦めない力を、立ち向かう力を、生きようとする力を込める。
そして、立ち上がる。
体中の所々から血を滲ませながら立ち上がる。
――まだ俺は、生きてるって事じゃないか！
一は眼前の蜘蛛を真っ直ぐに睨んだ。
もう怖くない。
いや、分からない。怖いかどうかなんて分からない、もう知らない。
一の感覚は麻痺していたのかも知れない。
そんなの関係ない。
一はこの絶望的な状況、無策だった。勝とうとも生き抜こうとも思っていなかった。
だが、まだ自身は生きている。
それならば。
ならば。
――どうせ死ぬなら。

潔くなんて死んでやるか、最後の最期まで足掻いて、そうして人間らしく死のうと。
そう思っただけだった。
「――――！」
一の叫びは形を成さず周囲に轟いた。
徒手空拳、武器は自分の人間らしさだけ。
拳を突き上げ謳った。
もう頼るべき神々の助けも、英雄の情けも信じていない。
信じるのは、真実は人間だけ。
最後のちっぽけな誇りと一緒に、一が蜘蛛へと突き進んだ。

そうだ。
ヒーローなんて、勇者なんていない。
神様仏様、妖怪や化け物はいるけれど。
この世には、人間しかいないのだ。
本当は人間の世界には、人間しか居てはいけないのだ。
だがここは、様々な世界が混ざり、様々な線が混じった世界。
期待しても良いのではないのだろうか。
希望を抱くのは悪いことなのだろうか。
……都合の良い英雄が現れるのは都合の悪いことなのだろうか。

燃える。

「良く吠えたな。カッコいいぜ、お前」

燃える。

悪しきもの。
ソレ。

ソレが現れるならば、ソレに相反するものが現れても良いのではないだろうか。

善きもの。

何を悪として、何を善とするのかに様々な議論が交わされるとは思う。

正義の反対は悪。

悪の反対は正義。

正義の反対は正義。

悪の反対は悪。

正義の反対は悪？

悪の反対は正義？

正義の反対は正義？

悪の反対は悪？

燃える。燃える。

「後は私に任せろ。心配すンな、虫ってのは良く燃えるように出来てンだよ」

蜘蛛が燃える。

そうだ。

ヒーローなんていない。

正義の味方なんていない。

でも、ここに確かにいる。

都合の良い人間の味方が、オンリーワン最強の勤務外が、少し口の悪い一の同僚が。

一を睨み返していた眼球も。糸原を捕らえていた手足も。

「私のためにな」

全て燃える。

オンリーワン北駒台店、勤務外店員。

三森冬。

ヒロイン出陣。

アラクノフォビア再び

一はただ見ている事しか出来なかった。見ている事だけしていたかった。

見て、いたかった。

演舞。

三森が拳を振り上げる。蜘蛛が燃えた。

三森が拳を振りかざす。蜘蛛が焼かれた。

三森が蹴りを繰り出す。蜘蛛が灼かれた。

演武

――炎舞。

三森の周りには火の粉が舞い落ち、蜘蛛の欠片が舞い落ちている。炎を体に纏わせて、怯え狂う蜘蛛たちに向かっていく。怒りや憎しみと一緒くたにして、打撃をぶつけていく。アスファルトを溶かしながら、蜘蛛を溶かしながら彼女は進む。

それは暴力で暴虐で暴戻の化身だった。

やがて、三森を取り囲んでいた蜘蛛の数は、両手の指で数えられるくらいに減っていた。あるものは怯え、あるものは竦み、あるものは後ずさり、あるものは怒りを露わにして向かってくる。

三森は決して緩めない。歩みを止めはしない。

「どうした？　ビビってンじゃねぇよ、来いよ」

蜘蛛に人間の言葉で挑発をかける。

通じる筈もない。

蜘蛛たちは三森と距離を保ちながら、それでも三森への包囲だけは解かなかった。

三森はソレに近づきながら、ジャージのポケットに手を突っ込む。取り出したるは、赤い箱。突っ込んだ右手だけ、器用に炎を消しながら箱を燃やさないようにして。

そうして箱の中身を口に銜える。

煙草だった。
頭を振って、火の粉を散らす。その中でも割と大きめな火の粉に目を付けると、鷲掴んで、煙草に押し当て火を点けた。退屈そうに煙を口から吐き出し、首の骨を鳴らす。
「つまンねぇなあ、所詮は虫かよ」
三森はそう言って、まだ燃え残っている蜘蛛の遺骸に唾を吐き捨てた。
煙草を銜えたまま、今度は両手をポケットに入れる。
そうして、肩で風を切るように歩き出した。
向かうは標的、向かうはソレ、向かうは敵、向かうは蜘蛛。
真っ直ぐに炎が進む。
その姿はまるで。
そう、まるで。

「ヒロインからはかけ離れてるわよね」
そう呟いて、糸原が地面に座り込む。
「え？　何がですか？」
「別に。それより、なんかもう余裕ね、目には目を、化け物には化け物って奴だわやっぱ」
皮肉っぽく糸原が笑った。
それを見て、一が微妙な表情になる。
「三森さんは、俺たちを助けてくれたんです。そんな言い方無いでしょう」
「るっさいわね、あのヤンキーが仕事サボってなきゃ、私はこんな怪我しなくて良かったのよ」
あんただって、と言い掛けた所で糸原が口をつぐんだ。
「あー、何でもないわ」
「……そうですか」
再び一が黙り込む。

その様子を見て、糸原も静かになった。
そして、再び一が魅せられる。
あの炎、あの動き、あの人。
一度ソレと戦ったからこそ、やっと一には分かった。
――凄い。
世間では騒がれ、一般人には疎まれ蔑まれ、ソレと戦う存在。人間の敵と、自身の命と金を賭けて戦う勤務外。異能の、異常の力を持つ化け物。
一もつい先日まではそう思っていた。
勤務外は、化け物だと。
事実、何一つソレと戦う力を持っていない者からは、そう見えるのだろう。
だが今の一はそうは思っていなかった。
立ち上がり、夢遊病患者のように、ぼうっと一点を見つめる。
その一点こそ三森冬。
一の視界では、また一匹三森が蜘蛛を仕留めている所だった。
まるで、テレビの中のアニメヒーローでも見ている感覚を一は覚える。
遠い国のお姫様。ブラウン管の中のスーパーマン。蜘蛛と戦う勤務外。
そんな一を、糸原は冷たい目で射続けていた。

凄まじい音を立て、オンリーワン北駒台店の前に、黒いワゴン車が止まった。
店の前とはいうが、殆ど道路の真ん中である。
「堀か」
呟き、店長が目を細めた。
「ああ、あの……」
意味ありげに梟が笑う。

落ち着いている二人だった。
ややあって、勢いよくドアが開く。
「どうなってますか！」
堀だった。
「説明すんのが面倒だ」
店長が煙草に火を点けながら、本当に面倒くさそうにぼやく。
「そんな事言ってる場合ですか！」
「分かった、分かった。おい、説明してやれ」
「……私が？」
梟が、嫌よ、と白い顔を背けた。
「蜘蛛は？　もう片付けたんですか！」
「落ち着け堀。糸原と一が行ったし、三森も何だかんだで現場に向かってるだろ。問題ない」
店長が遠い目をしながらそんな事を言う。
「一君が？　どういう事ですか、って何だか店長。もうどうでも良いって顔してますよ」
「当たりだ。もう皆死んじまえ」
「なるほど……あなた絡みですか……」
と、眼鏡の位置を直しながら、堀が梟に話しかけた。
梟、アテナは何も言わない。
「とにかく私も現場に向かいます。ですが、あの子達に手土産の一つも無いのでは社員失格ですよ。アテナ？　あなたの事です、何か隠している事はないんですか？」
ふっ、と軽く笑って、アテナが堀を睨みつける。
「……アラクネ」

土蜘蛛の数は残り四体にまで減っていた。
三森を囲むようにして、じりじりと蜘蛛が距離を詰める。
そんな状況で、三森は不適に、不敵に笑う。三森がすぅ、と息を

吸い込むと、銜えていた煙草が短くなった。煙を吐き出しながら、吸殻を吐き出す。吸殻は火の粉を散らせながら音を立て、地面に落ちた。

ポケットから右手だけを出して、肩を回す。

落ち着いた雰囲気の三森を見て、焦れてしまったのだろうか、土蜘蛛の一体が三森に襲い掛かった。

繰り出される足。

何かが弾ける音。

三森の体に纏わり付いていた炎が大きくなる。

蜘蛛の足が三森へ届く前に、その炎の熱によって足が焦げる、溶ける、無くなる。足を失った蜘蛛はバランスを取れずにふら付く。大儀そうに三森がその蜘蛛へと近づき、蜘蛛の頭部に当たる部分へと拳を叩き付けた。テレフォンパンチだったが、そんな事は関係ないし問題にもならなかった。蜘蛛の頭部、と言うか体半分を根こそぎ奪う威力で、勢いが止まらず、地面にまで三森の拳が突き刺さる。

半分になった蜘蛛は、痙攣のような動作を見せた後、やがて動かなくなった。

隙だらけの三森に、別の蜘蛛が背後から攻撃を仕掛ける。

足音のお陰で三森は奇襲に気が付いてはいたが、後ろを振り返らずに、ポケットから左手を抜き取り、そのまま裏拳。三森の左手は、蜘蛛の目玉を貫いていた。だが致命傷には至らない。そう悟った三森は左手に力を込める。蜘蛛の体の内側にまで拳を食い込ませると、左手を発火させた。蜘蛛が自身の内部から焼かれる。やがて、三森が蜘蛛に出来た傷口を掻き回しながら、拳を引き抜いた。堪らず、蜘蛛が悶絶し、後ずさった。

そんなソレを横目に、三森が地面から、右腕をゆっくりと引き抜く。振り返って、退屈そうに、つまらなさそうに蜘蛛を一瞥し、一歩踏み込んだ。ミディアムレア状態の蜘蛛へケンカキック。蜘蛛の体が内側から外側から壊れて、ばらばらになって四散しながら吹き飛んだ。

ソレを二体仕留め、息をつく三森の肩に鈍い衝撃が走る。
三森が鈍く痛みを訴えている肩を見ると、蜘蛛の足が乗っていた。
「やりやがったな……」
三森は低く呟き、その足に手を伸ばし、掴み上げる。全身に力を込め、そのまま蜘蛛を持ち上げた。半分中空に浮かされている蜘蛛は、手足をもがきながら抵抗をしている。
蜘蛛が掴まれている八本の内の一本は、ギシギシと音を立てて、三森の握力によって痛めつけられていた。
残った最後の蜘蛛が捨て身で向かってくるのを確認して、三森が持っていたソレを投げつける。衝撃と衝撃とがぶつかり、蜘蛛の体がひしゃげた。
三森は、もう動けそうに無い二匹の蜘蛛に歩み寄り、手を差し伸べる。その手から火花が散り、辺りには光が放たれ、蜘蛛の体からは黒煙が立ち昇った。
「さァて、残るはデカいのが一匹か」
さっきまでの土蜘蛛とは、比べ物にならないほど大きい蜘蛛を見ながら、楽しそうに三森が言う。三森の右手が熱を帯びる。轟々と炎が唸りを上げて揺らめく。爪先で地面を蹴って、頭を下げ、姿勢を低くし、蜘蛛の元へと踏み出した。距離は二十メートルも離れていない。すぐに大蜘蛛の懐へと潜り込み、右手を突き出す。
蜘蛛は避けようとも、受けようともせずに三森の攻撃をもろに食らった。
――あぁ？
あまりにもあっけない幕切れ。
感じすぎた手応えに三森が呆けてしまうほどだった。
カーテンコール。
閉じていく緞帳を、蜘蛛の足が阻む。
手応えはあった、あったが、それはあくまで三森の感覚でしかない。攻撃を受けた大蜘蛛はどうだったのか。
効いたのか、効いていないのか。

三森の横っ腹を、大蜘蛛が足で薙いだ。完全に防御を忘れていた三森が、抵抗も出来ずに地面を転がる。這いつくばってからようやく、三森が呻き声を上げた。

……三森の身体能力は常人のそれを遥かに凌ぐ。防御をしなかったとはいえ、並のソレ程度の力では三森に傷を負わせるのは難しい。その上、蜘蛛はソレの中でも低ランクに位置づけされている。知恵が無い事、武器が無い事が理由に挙げられるが、その蜘蛛が勤務外に、しかもオンリーワンでもトップクラスの実力を誇る三森にダメージを与えたのだ、腕力だけで。

「……やばいんじゃない？」

糸原が一に声を掛ける。

一はすぐに言葉が出てこずに、ええ、とか、はい、何かで答えを濁した。

「鎌鼬や釣瓶落としの時とは違うのに……」

「何それ？　日本の妖怪よね？」

ええ、と一が返す。

「前に三森さんが倒したソレです」

「で？　今あいつがぶっ倒れてる事と関係あんの？」

少し顔を引き攣らせながら、糸原が三森を指差した。

「……俺が居ないんですよ。俺が居ないのに、三森さんがやられてる……」

「あんたって、たまーにわかんなくなるわ」

糸原のぼやきを聞き流しつつ、一が以前の戦闘の事を思い出す。

釣瓶落とし、鎌鼬。

一が目撃した、三森とソレとの戦闘記録。

つまり、どちらの場合にも、戦闘の場には一が居た。

勤務外ではない一が。一般人の一が。力を持っていない、つまりは役に立たない、足手まといの一が。

だが、今三森は一を守る必要もなく、足手まといに邪魔される事もなく、言うなれば枷の嵌っていない状態で戦えている。何も気にすることなく、ソレとの戦闘だけに力を注げる状態。

その状態の三森が、倒れている。

虫は良く燃える、と。

三森の能力を考えた相性の上でも、ランクでも、絶対ではないが、ほぼ負けるはずの、傷を負うはずもない戦闘で。

――痛ェ……。

腹を摩りながら、三森が顔を苦痛に歪める。

骨は折れているのか、中のモノは無事なのか。それすらも分からない。

込み上げる吐き気を耐え、何とか顔だけ上げて、ソレのいる場所を確認した。

居る。

さっきと変わらない場所で、悠然と、勝ち名乗りを待っているかのように立っている。

「……なめやがって」

なぜ、止めを刺しにこないのか、相手が油断をしているのか、それとも自分が舐められているのか。決まっている。舐められている。

大蜘蛛からすれば、三森が幾ら実力のある勤務外とだとしても、それでも、餌である人間の中の一人に過ぎない。

三森の体が熱くなる。

怒りで、憎しみで、恨みで、怒りで、恐怖で。強く、堅く、血が出るほど拳を握り締める。

「やってやろうじゃねェかよ！」

少しふら付くが、立ち上がり、声を荒げ、三森が再び蜘蛛へと向かった。

蜘蛛の視界には、確実に三森が入っているはずだが、気にする事

もなく、蜘蛛はなぜか一の方を向く。
まるで何かを欲しているように、望んでいるように、焦がれているように。
――まるで、恋焦がれているように。
赤く、紅く瞳を輝かせながら。

「アラクネ？」
堀ではなく、店長が訝しげにアテナを見た。
「……人の名前、ですか？」
今度は堀が尋ねるが、アテナは口を閉ざし続ける。
ちっ、と舌打ちして店長が煙草を投げ捨てた。
「おい、黙るな。答えろ、アラクネとは何だ？」
神に対してもこの傲岸不遜な物言い。
堀は少しばかり恐怖した。二ノ美屋店長に。
「……別に、大した事じゃないわ」
「なら言え」
と、店長が視線を鋭くさせ、アテナを責める。
やれやれ、と息をついてアテナが重たそうに口を開いた。
「大した事じゃないわ。私のキライな女の名前よ」
「女の名前？　何だ、ホントに大した事ないじゃないか。損したな」
店長が暢気にそんな事を言う。
ただ、堀だけが深刻そうな顔をしていた。
「いえ、待って下さい。確かアラクネとは、ギリシャの……」
「あら、私たちの方も知っているの？　博識ね、信じられないわ」
アテナが堀の言葉を茶化すように、軽やかに言う。
「あなた、とんでもない事を私たちに黙っていましたね」
「堀？　何の事だ？」
「……アラクネとは、蜘蛛にされた女の名前ですよ」
「……おいおい、何を……」

言いつつも、店長は嫌なものを堀の顔から読み取っていた。
「そして、蜘蛛にした張本人が」
「懐かしい話ね」
遠い目をしながらアテナが呟いた。
そんな感慨深い表情をする鳥を見ながら、店長は、これから死ぬまで梟を見たらついつい殺したくなるんだろうなあ、なんて思っていた。

コロポンの機織女

「私は機織の女神、アテナをも凌ぐ織り手よ」
とある女が、自慢げにそう言った。
その言葉を聞いたギリシャの女神、アテナは怒りを覚えた。
だが、アテナも鬼ではない。慈悲深い、人間を超える存在なのだ。
事実、アラクネは優れた織り手であったし、処罰を与えるのも勿体無い。そこでアテナは老婆へと姿を変え、愚かな彼女を諭す為に、決して神々の怒りを買ってはいけないと忠告した。
「ふふ、神様が何だって言うの？　怖くも何ともないわ、やれるものならやってみなさいよ」
神を馬鹿にして、彼女は高々と笑った。
アテナは老婆から、鎧を纏った自身の姿に戻る。
だが、神を目の前にしても女はうろたえもせず、落ち着いた風だった。
アテナが言う、ならば勝負だ、と。どちらが優れた織物を作れるか、と。
「良いでしょう」
女は自信ありげに言った。
やがて、織物勝負が始まった。
アテナは、ポセイドンとの勝負に勝ち、自身がアテナイの守護神に選ばれた時の物語をタペストリに織り込んだ。勇壮で、勇敢で、勇気に満ち溢れた作品。
一方女は、ギリシャの主神ゼウスの浮気、不義、落ち度についての、神を滑稽に仕立て上げた物語をタペストリに織り込んだ。女の作品は、非の打ち所のない、とても優れたもので、美しかった。
アテナすらそれを認めてしまうほどであった。
「どう？　幾ら神でも私には勝てないのよ」
だが、アテナは激怒した。嫉妬からではない。女が織り込んだテ

ーマについてだ。アテナの親でもある主神ゼウス。彼の事を馬鹿にされたのだ。許せるはずはないだろう。

アテナは女の織機を叩き壊し、憎きタペストリを引き裂き、最後に女の頭を強く打ち据えた。

女は自分の愚考、愚行を認め、恥ずかしさのあまり逃げ出して、自らの首を吊った。

神をも恐れぬ、神をも超えた機織の女が一生を終えた。

それでも、アテナは女を許せなかった。

怒りが収まらず、女を呪うようにトリカブトの汁を撒いた。すると、女の体が少しずつ崩れていった。トリカブトの汁と混ざり合うようにして、人間の形が崩れていく、壊れていく。やがて原型を留めずに、女の体が液体と化した。

アテナが嗤った。

先ほどの液体が、ゆっくりと固まっていき、何かの姿を成していく。

おぞましいほどに大きく、醜い姿。

生まれる、何か。

「――――！」

声にならない声を上げ、それが取り乱した。

その様子を見届け、アテナが姿を消した。

紅い目玉、多足、醜いからだ。

変身物語、ギリシャの蜘蛛女、否、女だった蜘蛛。

アラクネの物語。

異例。

異例中の異例。

オンリーワン近畿支部の情報部に、緊張と怒号と罵声が行き交い、

飛び交う。
「状況は！」
「川北店、似津真天五、牛鬼が七！　北駒台店、土蜘蛛四十三！　大百足が四国エリアから近畿エリアへ近づいています！」
「浅沼勤務外死亡！　手塚勤務外重傷、伊瀬店、戦力がもう無いです！　増援を！」
「だああ！　どうしろってんだよ！」
同時に、しかも群れを成してソレが活動する。
今まででは有り得ないケース。
示し合わせたかのように、全国各地にソレが現れた。
情報部の片隅、サンダルを履いている少年がモニターを見つめる。
「旅さん、どう思いますか？」
眼鏡を掛けた知的な女性が、その少年に声を掛けた。
どう見ても、女性の方が年上だったが、少年に敬語を使っている。
「今までの奴らとは違うね。今回、群れを作ってあいつ等は襲ってきた。となると、中心がいるはずなんだ、群れを束ねるリーダーがさ。だってそうだろ？　賢い奴がいなきゃ、集団を作るなんて事、基本頭の悪い奴らが出来るはずないからね。つまりさ」
旅と呼ばれた少年が一旦言葉を区切った。自分よりも背の高い女性の反応を確かめるように、顔を上げる。
「つまり？」
「その賢いのが遂に出てきたんだよ。うん？　って言うかやっと、ね。マズイね、下手したら神話級の怪物とか出てきちゃったんじゃないの？　嫌だよ僕は。あいつらしんどいんだからさあ」
「……一つ、面白い話が有りますよ？」
女性がくい、と眼鏡の位置を直した。その仕草は、中々様になっている。
「本当だろうね？」
「駒台の土蜘蛛についてですが、どうやら梟さんが絡んでいるようですね。部下がついさっき教えてくれました」

「アテナが？　で、土蜘蛛。蜘蛛でしょ？　えー、そんなのないよー。あの人負けず嫌いって言うか、何と言うか、性格悪いって言うか。とにかく厄介事を持ち込みすぎなんだよね！」

少年がぷんすか（この表現が似合うので）怒りながら、文句をぶつぶつ言い出した。

「おらァ！」

三森の右ストレートが、蜘蛛の足にめり込む。

だが蜘蛛はダメージを意に介さず、三森の拳がめり込んだままの足を乱暴に振り払った。

「くそっ」

三森の体が浮いた。浮かされた。

蜘蛛は三森がくっ付いている足を、地面に叩き付ける。

「痛ェ！」

三森はダメージを受けたが、その衝撃で、三森の右手が蜘蛛から抜けた。

今度は蜘蛛が攻撃を仕掛ける。八本のうち、二本を巧みに使い、三森を追い詰めていく。

三森は避け、払い、受け止めて攻撃をやり過ごしていくが、とても反撃は出来なかった。

出来ないのだ。

蜘蛛の攻撃が早すぎる。避ければ、攻撃され、払っては第二撃が、受け止めれば次の足が。

それでいて、散漫な攻撃。時間を潰しているような、暇を三森で弄んでいるような適当なコンビネーション。

――私を誰だと思ってやがるっ！

三森の右手が赤く燃え上がる。

蜘蛛の足を掴むと、瞬時に右手の温度を上げた。焦げ臭い匂いが辺りに漂う。やがて、三森の手の中で、蜘蛛の足が爆発した。

「どうだよ！？」
鬼の首でも取ったように、嬉しそうに三森が叫んだ。
八本のうちの一本。
蜘蛛は失った足も、足を奪い取った三森にも視線を遣る事は無く、只管に一を見ていた。数ある目玉の内、一つとして一以外を見る事は無く。

「ねえ、あいつさっきから私たちを見てない？　気持ち悪いんだけど」
糸原が蜘蛛を見ないように言った。
「そうですか？　それより、今のうちに俺たちは店に戻りません？　店長に言って、他の社員に来てもらった方が良さそうですよ」
一が気にせず、そんな事を言う。
「ふうん、三森さんは良いんだ？」
「でも、俺たちにはもうどうしようも無いですよ。なら助けを呼びに行った方が良いと思います」
「……あんたがそう言うんなら、別に良いけどね」
糸原が立ち上がる。
「お？」
一たちの耳に駆動音、エンジン音が聞こえてきた。
「なあんだ、迎えが先に来たじゃない。ラッキー、歩かなくて済んだ」
こちらに走ってくる黒いワゴン車を見ながら糸原が呟く。
車が道路の真ん中で乱暴に止まった。
ドアを開けて出てきたのは、眼鏡を掛けた優男。オンリーワン近畿支部社員、北駒台店スーパーバイザー、堀。
「車に乗って下さい！」
「はいはい、言われなくてもそうするわよ」
「堀さん！　三森さんが！」

三者三様、見事にバラバラと言うか。会話が成り立っていなかった。
「とにかく一君、糸原さん車に乗って！　三森さんも一旦戻しますから！」
「何か様子がおかしいわね」
不思議に思いつつも、一と糸原が車の後部座席に乗り込む。
だらり、と糸原が体を伸ばし、傷口に手を当てた。
「……大丈夫ですか？」
「ん？　んー、駄目かも、痛いし痛いし痛い。あんたこそどうなのよ？」
「俺は別に大丈夫ですよ。怪我は無いけど、疲れました……」
ふう、と糸原が息を吐いた。
「でも。何か、生きてるって感じがするわ……」
「……そうですね。けどもう、後は社員に任せて、家に帰って寝たいです」
外からは、堀と三森の声が聞こえてくる。
三森は無性に怒っている様子だったが、少しずつ声は大きくなり、近づいてきた。
バン、とドアが乱暴に開け放たれる。
「邪魔すンじゃねェよ！」
悪態を吐きながら、三森が助手席に乗り込んだ。
少し遅れて、運転席に堀が座る。
「皆さん、とりあえずはお疲れ様です。本当に、一人も犠牲にならず、良くやってくれました」
と、堀が労いの言葉を三名へ掛けた。
「ホントよ、ホント。私なんて勤務外の仕事今日が初めてなんだから！　さっさと病院に連れてってよね。あー、骨折れてるわ絶対。こういうのって、店から何か出んの？　慰謝料とか、保険とかさ？」
「うるせェ女だな」
「何よ！」

「ちょっと車ん中で喧嘩しないで下さいよ」
一が二人の仲裁に入る。
「大体だな！　何でお前がここにいンだよ！」
「あ、それは、その……」
「ハッキリ言いやがれ！」
「皆さん、私の話を聞いてください」
「声がでかいのよヤンキー。ホント何で頭悪い奴らは声がでかいの？　馬鹿だから声のでかさで威嚇とかしてるわけ？　生きてるだけで迷惑よね、ねえ、一？」
「ンだと！？　てめえ私が来なきゃ死んでたンだぞ！　礼の一つでも言ったらどうだ！」
「あはは、アリガト。超助かった、ついでに車降りてくれない？　そしたらもっと助かるんだけど」
「てめェ！」
「止めて下さいってば！」

「皆さん」

透き通った、落ち着いた声。
一たちは、車内の温度が下がった、ような気がした。
声の発生源は、眼鏡を光らせてにこやかに笑っている。蛇に睨まれた蛙に、一たちは成り果てた。あの三森ですら、額に冷や汗を浮かべ、顔を引き攣らせている。
「話、聞いてくれますか？」
声も出せずに、三人は頷くしか出来なかった。それでは、と堀が車を、蜘蛛とは逆方向に発進させた。
「おいおい、どこに行くンだよ？」
「まずはソレから距離を取ります」
堀の言葉に、糸原が眉をひそめる。
「どういう事？　このまま家まで送ってくれるんじゃないの？」

「いやあ、そうもいかないんですよ。そもそも。あいつを倒さなければ帰る家も無くなりますよ」
「高が土蜘蛛一匹、あのまま私がやってただろうが」
三森が不満げに口走った。
「土蜘蛛なら、ですがね。群れを作っていたから分かりませんでしたが、あれは違うんですよ」
「土蜘蛛とは違う？」
一が堀に尋ねる。
「ええ。あれはアラクネと呼ばれるソレです。ギリシャ神話の、まあ、悲劇のヒロインと言った所でしょうか」
「足が八本もあって、口から糸を吐くヒロインなんて聞いた事無いわよ」
聞きたくも無いけど、と糸原が自分の言葉に付け足した。
「マジかよ……」
と、三森が下らなさそうに呟く。
「今日が勤務外初日のお二人には、分かり難いかもしれませんが、名前付きは厄介何ですよ。とにかくその強さは日本の妖怪とは比べ物になりません。何と言っても神話に出てくるモノですからね」
「道理で」
一がひとりごちた。
思い返せば、あの大きい蜘蛛だけは他の土蜘蛛と違って手強い印象を受ける。
「ワケ分かんない。じゃあ何でそんな奴をさ、私らがどうにかしないといけないのよ？　もっと強い奴連れてくれば良いじゃない」
「……この話はあまりしたくなかったんですが、各地でソレが出現したんですよ。しかも殆どのソレが群れを作って、です」
堀が気まずそうに話した。
「各地って、具体的に範囲は？」
「世界各地です」
堀の言葉に一と糸原が固まる。

ちっ、と舌打ちして、
「やられたな。上手い事ウチの戦力を分散させられたって訳かよ。で、どうすンだよ、堀さん？」
三森が堀へと疑問を投げかけた。
「とにかく我々に出来る事をするしかないでしょう。具体的には、アラクネを倒す事になりますね。それでは、今から作戦を説明します」
「作戦ですって？　ちょっと、私たちは正義の味方でも何でもないのよ。ただのバイト、しかもコンビニの！　今の話聞いて、あいつに喧嘩ふっかけるなんて嫌よ私っ」
「なら黙ってろ。お前の声は耳障りなンだよ」
「ちょっとちょっと、もしかしてヤンキー、あんたまだあの蜘蛛とやり合う気なの？」
当たり前だろ、と三森がさも当たり前に言った。
「……一君は？　どうしますか、勿論私は、これ以上の戦闘を君に無理強いさせる気はありません。店まで戻ると言うのなら戻りますよ」
ああ、帰れるんだ。
堀の優しそうな言葉が、一の胸を打った。
――そうだよな、俺ってド素人だし、そもそも怖いし疲れたし。
今日は家に帰って寝たいし。
糸原が一の顔を覗き込む。
三森がミラー越しに一を見ている。
――けど。
「俺もやります」
ハッキリと、一が言った。
一がちら、と三森を盗み見る。表情こそハッキリとしていなかったが、一の目には、三森が笑っているように見えた。
「ありがとう、一君」
堀がにっこりと、優しく笑う。

「……っ！　馬鹿！　バァカ！　何考えてんのよ！　あんたが行ってもすぐに殺されるのがオチよ、絶対危険よ危ないわ！」
糸原が声を荒げ、一へ掴みかかる勢いでそんな事を言った。
「で、でも俺は……」
「駄目よ！　私と一緒に店まで戻るのよ、んで後は全部他の奴に任せたら良いじゃない！　漫画の主人公みたいな事言ってんじゃないわよっ」
今度は本当に糸原が一の襟元を掴む。背の高い糸原が一の襟元を掴んでいるその光景は、いつかのカツアゲのようだった。非常事態に、非常にシュールな絵面だった。
「俺だって、本当は嫌です。怖いです。帰って、全部忘れて寝たいです。でも、でも、俺たちが逃げても、もう何も変わらないんですよ……。今まではずっと、ソレの事なんて関係ないって思ってました。誰かがやってくれるだろうって、何とかしてくれるだろうって……。けど、違うんですよ。もう駄目なんですよ。こんな所まで来ちゃったんですよ、俺は……。もう戻りたくても戻れないんです、このまま三森さんや堀さんに後を任せて尻尾巻いて逃げても、ソレは、確かに居るんですよ？　この街に、俺たちが住んでる駒台に居るんです。誰かがやらない限り……。だから、俺は、俺は……！」
半泣きで、一が自分の思いの丈を訴える。
「馬鹿」
糸原が一の頭を引っ叩いた。
意味が分からず、一が糸原を見る。
「……私だって、そういう事は分かってるつもりよ」
もう一度、糸原が一の頭を引っ叩く。
「私の目の前で死んだら駄目だかんね」
「……一緒に来てくれるんですか？」
どかり、と糸原が座席に踏ん反り返った。
「良いわよ、行ってやろうじゃない。さあ、さっさと作戦とやらを説明しなさいよ」

笑いを堪えきれず、堀が高らかに、声に出して笑う。
「良いですね、良いですよ。やっぱこういうのも戦場には必要ですね。どう思います？　三森さんは」
「うっさいな」
ぶっきら棒に三森が返した。
「さて、説明する前に、まずはお二人にこれをお返しします」
そう言って、堀が汚れたビニール傘と、血に塗れた糸を片手で取り出す。紛れも無く、一のアイギスと糸原のレージングだった。
「必要になりますからね。拾っておきました」
二人はお礼を言う。
一が雑にアイギスを掴んでいるのに対し、糸原は大事そうに両手で糸を抱えていた。
「おい」
「……」
「……」
「……」
三森が舌打ちする。
「おいって言ってンだろ！」
とは言っても、名前も呼ばずに誰が誰を呼んでいるか等、そんなチームワークはこの四人にはまだ存在していなかった。
苛苛した様子で、三森が振り向き、後部座席へ身を乗り出した。
「お前だよ」
と、一の頭を拳骨でどつく。声を出さずに、一が頭を抱える。
「あ、ヤベ。手加減してねェわ」
「ちょっと何してんのよ！」
「うるせえ、お前だってこいつの頭叩いてたじゃねェか」
「私のは愛情表現よ！」
糸原が面倒な事を喚きつつ、一の胴体にパンチを入れた。
「とにかくだな。何でお前が勤務外になってンだよ？」
「……帰ったら説明します」

「……あンな、私らはいつ死んでもおかしくない立場にいるンだよ。そういう事は話せる内に話しとけ。後悔する暇なンかねえぞ、私らには」

それでも、と一が顔を上げないまま、

「帰ったら、ちゃんと説明します。必ず三森さんと話します。その、色々と」

きっぱりと言った。

「そうかよ」

三森はそれ以上何も言えずに、再び座席へ戻った。

「いやあ、楽しいですね」

「何がですか」

「あっはっは。楽しくなりそうですよ。それじゃ、そろそろ真面目にいきましょうか」

堀がハンドルを握りながら、愉快そうに笑う。

「どうでもいいけど、さっきのあんた死亡フラグ立ちまくりよね」

「うえぇっ？」

正しく糸原の言う通りだった。

「それじゃ、シートベルトをしっかり締めておいてください」
言って、堀がアクセルを踏み込んだ。
黒いワゴンが嘶く。
速度を上げ、真っ直ぐな道を飛ばしていく。
うう、と呻き声が車内から聞こえた。恐らく一が漏らしたものだろう。
がたがたと揺れる車内で、一はアイギスを抱え下を向き、三森はしっかりと、フロントガラスを通してアラクネを睨み、糸原は一を見てにやにやと笑っていた。
「行きますよ」
堀が言った次の瞬間にはもう、黒いワゴンは衝突音を撒き散らして、アラクネに突き刺さっていた。

堀の説明した作戦とは、

「まず、車を奴にぶつけます」
「はああ？　それが作戦だっての？」
気にせず、堀が続きを話す。
「それだけではアラクネに大したダメージが通りません。ガードされる可能性もあります。いえ、確実に受け止められるでしょうね、その為の多足でしょうし。で、受け止められたと、します。私は前進し続けますから、皆さんにはその間に車から降りてもらいます」
「降りてどうするんですか？」
一が不安げに尋ねた。
「まず、糸原さんに残り七本全てとは言いませんが、足を何とかしてもらいます。レージング、私はまだ直接威力を見た訳ではありませんが、話に聞くだけでも中々のモノと伺ってはいます。そして次

に一君。アイギスを使ってもらいます。正直、能力の程は半信半疑なんですけどね。そもそも、一君にはもう残ってないでしょうし、十秒とは言いません、一秒、アラクネの動きを止めてください。三森さんが後は上手い事やってくれますよ」

「え、おい、何だよ。私には指示はねェの？」

「いやあ、あなたに指示する事なんて、殆どありませんよ。分かってますよね？　そこまでお膳立てして、何をするかなんて分かり切った事聞かないでくださいよ」

堀が笑顔でそんな事を言う。

「ちっ、結局は力ずくじゃねェかよ」

「あら？　あんたにはお似合いだと思うけど？」

「うるせえ。おい、ミスるンじゃねえぞお前ら」

「あ、はい」

「はーい」

「それじゃ行きましょうか」

「……頼むぞ、ホント」

こうである。

そして堀の言ったとおり、猛スピードで突進するワゴンは蜘蛛の足でがっちりと掴まれていた。ワゴンのタイヤはけたたましく音を上げ、空回りしている。道路には跡が残り、黒い筋を作っていた。

蜘蛛は、七本の内六本で車を掴み、残り一本で車のあちこちを刺そうとする。

「降りて下さい！」

まずは助手席から三森が飛び出した。フロントガラスを割ろうとしている蜘蛛の足を払い除ける。

次に一、糸原が後部座席から降りた。

「退いてっ」

糸原が腕を振り上げる。三森が蜘蛛から離れた。蜘蛛の足の根元

に、銀色の線が絡みつく。七本全てにレージングが照準を合わせた。
後は引き裂くのみ。
が、
「硬いっ！」
土蜘蛛の足と違って、アラクネのそれは簡単には千切れなかった。
しかも蜘蛛はそんな事気にせず、堀の乗った車を壊そうと無理矢理に腕を動かす。
蜘蛛に引っ張られるように糸原がじりじりと前に進んでいく。
「信じらんない！　何なのこいつ、馬鹿力過ぎるわよ！」
「口動かすなら手ェ動かせ！」
「っさいわねっ！」
糸原が喚きながら、腰を落とした。引っ張られまいと、力を込める。それでも、蜘蛛の方がやはり力が強い。
「一、ボーっとしてないで手伝いなさいよ！」
「え、あ、え？　どうやって？」
「私を抱いて！」
「ええ！？」
「馬鹿女！　血迷ってんじゃねェよ！」
「とにかく何とかしてよー」
言われて、一が糸原のお腹に手を回す。力を込めて、糸原を支えようとした。
「痛いっ、お腹痛いっ！　ちょっとっ、もっと優しくしてよね、初めてなんだから！」
「さっきから頭おかしいですよ」
「ふざけてンじゃねえよ！」
三森の怒号が響く。
二人も遊んでいるつもりはないのだが。
だが、これでアラクネから引っ張られる事は無くなった。神話級の怪物、アラクネとは言えども、彼女に武勇は無い。そもそもが、機織だった女性なのだ。一と糸原、二人がかりで何とかなるレベル、

レベル。
「うわあっ」
一が叫ぶ。
突然、蜘蛛の力が強まった。
……幾らアラクネといえど、人間二人の力でどうにかなる訳なかった。アラクネが力の重心を、車から糸原に変えただけの事だった。アラクネの元へと引き寄せられていく二人。
「何やってンだよ！」
作戦は第二段階で破綻したように思われた。
が、ワゴンのタイヤが激しく回転し始める。堀がアクセルを踏みつけ、ワゴンの最高速までスピードを上げたらしい。パワーバランスが糸原側へと移ったため、少しは自由が利くようになったのだ。
アラクネが再び車と膠着状態に陥る前に、堀のワゴンが突っ込む。フロントガラスが割れ、タイヤも磨り減り、ボンネットが何故か吹っ飛んだ。
そしてアラクネの体勢が崩れる。
「糸原さん！」
分かってると言わんばかりに、糸原が指を、腕を動かした。振り上げていた腕を、力の限り振り下ろす。
銀の閃きが蜘蛛の足に奔った。アラクネの足から体液が噴き出る。
「一！」
糸原がレージングでもぎ取った足は五本。残りの二本は仕留め切れなかったが、アラクネの捕縛から、ワゴンが脱出するには充分だったし、ダメージも与える事が出来た。
その様子を確認した一がアラクネの真正面に立つ。足が震える。心臓の鼓動は早くなる。戦えると言った筈だが、怖いものはいまだに怖い。それでも、それでも一はアラクネの真正面に立つ。
――作戦は次の段階へ。
後は、アイギスでアラクネを止めるだけ。
だが、アラクネもじっとはしていない。残った足で、遮二無二攻

撃を開始する。
「うわあっ！」
一が叫んで、しゃがんで、蜘蛛の足を回避した。
――やっぱ駄目だ、怖いっ！
「う、あ……」
「馬鹿！　何やってんのよ、立って構えなさい！」
糸原の助言も、一の耳には入らない。
――かっこつけるんじゃなかった、くそ、くそ！
「来るぞ！」
三森が叫ぶも、一は反応しない。
蜘蛛の次の攻撃がしゃがみ込む一に襲う。
「ビビってンじゃねえよ！」
見かねた三森が、一と蜘蛛の間に飛び出した。一に向かって振り下ろされた足を、三森が素手で掴む。
「目ェ開けろ！」
一を庇っている為、三森も派手な動きが取れないでいた。
――力を使えば、巻き込ンじまうな……。
「体を起こせ！　立ち上がれってンだ！」
一が顔を伏せたまま、鼻を啜り立ち上がる。
二本目、最後の蜘蛛の足が一たちに襲い掛かった。
三森は、右手を蜘蛛の足から離して、振り下ろされる二本目の足を掴む。
片手で片足を、片手で片足を。
しかし、人間とソレとでは圧倒的に力が違う。一対一、同じ条件で力比べをしても、三森が押されるのは自明の理であった。
三森の後ろで、一が下を向いている。
「……てめェ、やるって言ったろうが。何だよ、帰ったら私に話があンじゃねえのか？　おい、言っとくけどな、私は、はっ、私は、ここじゃ死なねェからな。力を使って、でも、お、お前を、こいつと一緒に殺すぞ、それが嫌なら、嫌なら……」

一の顔を見ないで、アラクネを睨みつけながら、三森が息を吐く。
既に三森は肩で息をしていた。
「見せてくれよ、さっきみたいによ」
「……俺は、やっぱり……」
一が口を開く。
「悪ィ、やっぱビビるよな、嫌だよな」
一は答えない。答えられない。
「なら、一緒に死ぬか？　なあ、ただで死んでやるのもヤだろ？
この虫ッケラによ、最後の最期に見せてやろうぜ。人間様の意地ってモンをさ」

――そうだよ、生きてるって事じゃないか。

痛いのも、怖いのも、震えてるのも
全部全部、俺がまだ生きてるって証拠なんだ――

「三森さん、俺が叫んだらいってください」
「あぁ？」
一が傘を広げる。
「後ろの事は気にしないで、あいつを何とかして下さい」
もう一度、今度は本当に。
「お前、私が手ェ離したら死ぬぞ？」
「征ってください」
一がゆっくりと顔を上げる。
真っ直ぐにアラクネを捕らえる一の双眸。
ややあってから、
「……ちっ、なら死ねよ」
三森が地面に唾を吐いた。

今度こそ、本当に。
一がアラクネの真正面に立った。
風が一の前髪を揺らす。
アイギスを前方に構え、蜘蛛の目玉を見つめる。
アラクネも、一を見ていた。

一には、初めから、何となくだが分かっていた。
アラクネ。
堀に話を聞いたとき、、一匹だけ手強い、止まらない蜘蛛を見たとき、アテナからアイギスを受け取ったとき、アテナから話を聞いたとき。
アラクネ。
元は人間だった、腕の良い機織だった、蜘蛛になるまでは。
恨んだろう、怨んだろう、呪ったろう。
自分を蜘蛛に変えた女を、神を。
アテナを。
ちら、と一がアイギスを見る。自分がアイギスを、アテナの物を持っているから。
アテナは、追われていると言っていた。匂いをつけられているとも。
誰に？　ただの、知能の低い、低級の蜘蛛に？
「違うよな……」
ぼそり、と一が呟いた。
ずっと、憎んでいた。
アテナを追っていた。只管、只管に。
そしてアテナの匂いが染み付いたアイテムを、自分が持っている。
アテナを追っているアラクネを、アテナの関係者である一が倒す。
これは運命か、それとも一の使命なのか。
否、皮肉か。
また一が顔を下げる。

「ごめんな……」
「おい、まだか？　私ももう限界なンだけどよ？」
――ごめんな。
「アラクネ！」
一の朗々とした叫びが、静寂を切り裂く。
夜の闇へと。
どこまでも届くような、響くような。
一瞬、三森が出遅れたが、蜘蛛の足を離すと、一足飛びでアラクネの懐へ潜り込んだ。
アラクネの足が一へ襲い掛かる。だが、一はそんな事を気にせずに、アラクネへアイギスを向けた。
――あなたも、怖かったでしょう、嫌だったでしょう、悲しかったでしょう。
銀の光が、折り重なる。
一の手前、アラクネの足の手前。
幾重にも光が走る。線を引く。
一へ届く前に、アラクネの足が何かに引っ張られるかのように動かなくなった。
長い髪を無造作にたなびかせ、白い腕をスーツの袖から覗かせる。
指の動きは器用に、激しく動く。
そして何より美しい。
「一、やっちゃって！」
糸原がレージングを操りながら、そんな事を喚いた。
一が糸原を見て、微笑む。
――死にたくないですよね、生きたいですよね。

俺も、そうです。死にたくないし、生きたいんです。

「止まって下さい！」

悲痛な声。

瞬間、一の広げていたアイギス――ビニール傘――が輝く。

怪しく、黒く、鈍く輝いた。

それは瞳だった。

見るもの全てを虜にしてしまうような、妖艶な光。

「あ……」

一は理解した。

アイギスの能力。

アテナとの契約。

力の正体。

蛇姫。

メドゥーサ。

――だから俺は、俺は。

あなたを殺します。

俺が生きたいから。

ごめんなさい、許してくれなくても、構わないです。

糸原が力を込めずとも、アラクネの動きが止まっている。

残った二本の足は、中空で止まったままだ。

糸原がレージングを軽く引っ張ると、アラクネの足がいとも簡単に千切れた。

「うっそ、止まったの……？」

「三森さん！」

自分のするべき事は、一に返事をする事じゃない。

全身全霊、全力全開。

体中全部の力を今に賭け、ソレを殺す事。

それが自分のするべき事と、三森は分かっている。
三森は拳を高々と突き上げ、アラクネの、人間で言うなら心臓部に風穴を開けた。
「これじゃあ足りねェよなあ！？」
三森の全身を、爪先から、頭の天辺まで行き渡るように血液が走る。
熱くなる。燃え滾る。
三森の体が熱を帯びて、火を放つ。
舞い上がる火の粉。
赤く、紅く、真赤に！
三森はアラクネの内臓器官を掴み上げ、引き摺り出した。飛び出たモノから順に燃やし、灰になる。
煙は黒く、高く暗闇へと舞い上っていく。

――人間のまま、あなたを殺せなくて、ごめんなさい。

やがて、あれだけ大きかった蜘蛛の体は、何分割にもされ、燃やされ、灰にされ、煙になってしまって。
その光景を滅茶苦茶に壊された車の中、運転席に深く腰掛けた堀が愉快そうに、楽しそうに笑いながら眺めていた。ひとしきり笑った後、ゆっくりと息を整え、
「素晴らしい」
と、堀が唇の端を軽く持ち上げた。

「さよなら、俺に似てる人」

そう言って、一は夜空を見上げた。
女神に酷い目に遭わされた、哀れな人。
知らずの内に、一の眼から涙が毀れた。ぽたぽた、と服を濡らし、地面を濡らす。

「一……」
おい、と一に駆け寄ろうとする糸原の肩を三森が掴んだ。
「今は、話し掛けない方が良い」
「何よ、偉そうに……」
「偉くねェよ」
「分かってるわ。そんな事、分かってるわよ」

さよなら、そして、ごめんなさい。
俺が初めて殺したヒト。

ヘイブラザー、マイブラザー

空は青く、雲は白い。
空はどこまでも続き、雲はどこまでも流れる。
駒台は今日も晴れだった。
吹き抜ける風を気持ち良さそうに受け、一が歩く。片手にはビニール袋をぶら下げ、もう片方は煙草を摘んでいた。時折、煙草を口にし、煙を吐き出す。地面を確かめるようにしながら、ゆっくりと歩き続け、立ち止まった。目の前の建物を確認してから、自動ドアをくぐる。
建物の中は、喧騒とは無縁だった。
清潔感のある広い室内。白衣を着た男女が廊下を談笑しながら歩く。
一は少しの間ぼけっとしていたが、自分がここへ来た目的を思い出し、ナースセンターへ足を運んだ。
カウンターの女性は看護服に身を包み、優しげに一へ微笑みかける。
――ナース好きの気持ちが少し分かる……。
「すみません、三日ほど前にこちらで入院している、糸原四乃さんは何号室か分かりますか？」
怪訝そうな顔を女性がしたが、それも一瞬の事、少々お待ち下さいと言って、何やらリストのようなものと、パソコンの画面を見比べ始めた。
手持ち無沙汰の一は、病院内を見渡す。
「お待たせしました」と、声が掛かった。
一が振り向くと、先ほどと同じく優しげな顔で女性が微笑む。
「糸原さんは大部屋の３０１号室です。お見舞いは午後九時までなので注意して下さいね」
ええ、と一が頷き、そこへ向かった。

ありがとう

一の目の前の病室。オンリーワン北駒台店、勤務外店員、糸原四乃が入院する病室。

病院ではお静かに。

なんて張り紙が、廊下に所狭しと並んでいた。何故か、ここ、３０１号室の近くにだけ。

病院の常識を覆すほどのけたたましさ、喧しさ。部屋の中からは歓声や悲鳴、喚声や奇声。

「分かりやすいなあ」

呟きながら、一が扉を開ける。

やばい、まずい、皆静かにして、

色々な声が、一の耳に届いてきた。

――ここは病院だよな。

大部屋のど真ん中、テーブルの中心に数人の人々が集まっている。誰もが寝間着やジャージを着て、中には松葉杖を突いている者もいた。多分、ここの入院患者たちだろう。

一人だけ、スーツをすらり、と、まるで部屋着の如く着こなしている女性。

やたら背が高く、黒い髪を腰まで伸ばした見た目は美しい女。一際目立つ、目立たざるを得ない、元指名手配犯、現脱獄犯。その女性はトランプを持ったまま、逃げんじゃないわよ、と隣のベッドの患者に喚き散らしている。

ふう、とため息を吐き、一が近づいていった。

「……ポーカーですか」

その声と姿に、糸原が目を丸くする。そして安心したように、にこにこと笑った。

「何だ、一じゃん。何何？　どしたの、お見舞いにでも来てくれたわけ？」
　そう言って、一の手から袋を奪い去る。
「へえ、お姉さんは嬉しいなあ、嬉しい。あんたって結構気ぃ利かないからさー、手土産の一つも持たずにノコノコその顔見せに来たんならぶっ飛ばしてやるトコだったわよ。ってああ！　何よこれ、果物ばっかじゃん！　つまんなーい、雑誌とかゲームとかお金とか何かもっと良い物持ってきなさいよう。こんなん食べたらすぐに終わりじゃないのさ！　私はもっと手元に、こう、なんつーの？　形に残る物を欲していたわけ！　オッケー？　アンダスタン？」
「……思ってたより、元気そうですね」
　じゃあ、と手を上げて一が踵を返す。
　一の肩が掴まれた。物凄い強い力で。
「痛い、痛い痛い痛っ、ちょっと離して下さいよっ」
　一応糸原も入院患者ではあるのだが、そんな事は忘れて一がその手を強引に振り解く。
「乱暴！」
「あなたが言いますか……」
「私すんげえお淑やか！」
「ここ、絶対痣になってますよ」
　自分の右肩を指で示しながら、一が恨めしそうに言った。
　ふーん、と言いつつ、糸原がそこを指で突く。何度も、何度も。力をそれなりに込めて。
　今度は何も言わずに、一が扉に手を掛けた。
「ああ！　ごめん、ごめん！　あんたと会えなくて寂しくて、私ったら、つい意地悪しちゃったの！」
　早口で糸原が捲くし立てる。
　他のベッドからひゅー、と、囃し立てるような、超前時代的な口笛が聞こえてきた。
「ほらほら、こっちこっち」

と、糸原が手招き。
肩を押さえながら、一が近くにあったパイプ椅子を手に取った。
ぼすん、と音を立てて糸原がベッドに飛び込む。
そのベッドの近くに椅子を組み立て、一が座った。
「あ、カーテン閉めて」
一が目だけで、「嫌です」と訴える。
「閉めなきゃしめるわよ」
「何をですか？」
ん？　と愉しそうに糸原が微笑む。
ナースセンターの看護師とは違う類の笑み。
指を鳴らす糸原に怯え、一が仕方なくカーテンを閉めた。
「ま、何はともあれ、全員無事で良かったわね」
「……そうですね」
「何よ、今の間は」
別に、と一が誤魔化した。
全員無事で良かった、と言った時の糸原の笑み。それは先の看護師と同じ類のそれだったから。
――騙されんな、俺。
「あのヤンキーはどうしてんの？」
「ああ、三森さんは大した怪我もしてなかったから、今は店でレジ打ってんじゃないですかね」
糸原が吹き出す。
「あいつが？　接客する気あったの、あいつに？　あんなナリしてる癖にさ」
「まあ、俺らが帰ってくる間の穴埋めっすよ。そういや、堀さんは当分店に来れないらしいですね」
「へえ、何でだろ」
「んー、車壊したからじゃないですかね？　あのワゴン、オンリーワンから借りてたらしいですよ」
――表向きは。

「あっそ。何だ、せっかくあんなヤバイ奴に勝ったってのに、大して何も変わらないのね。時給上がったり、ボーナス貰えたりとかさあ。つまんないの」
「治療費貰ってるじゃないですか、しかも、何かこの病院オンリーワンのモノらしいですよ。腕利きばっか揃ってるって、昨日俺が退院した時聞きましたし」
糸原の眉がつり上がった。へー、とか、ほー、とか何事か呟いている。
「何か？」
「べっつにぃ。誰に聞いたのかなあってさ」
「……確か、炉辺さんですよ。ほら、前に話したじゃないですか、釣瓶落としの時に助けてくれた人ですよ」
一の顔が自然と綻んだ。
炉辺、優しいお姉さんといった感じの看護婦さん。一はそんなイメージを炉辺に抱いていて、実際昨日まで色々とお世話してもらっていたのだ。
――優しかったなあ……。
「痛いっ、何するんですか！」
一の妄想が突如掻き消される。
「あんたが笑うとムカつくのよね」
理不尽な事を言いつつ、糸原が寝転がったまま一に蹴りをかましていた。
「くっそう、俺だって糸原さんが笑ってたら恐怖を覚えますよ」
「何でよ？」
「詐欺師がまたくだらん事考えやがったな、みたいな」
一が人差し指を立てながら、おそるおそる思った事を口にする。
糸原は流れるような、空気の動きみたいな自然さで、ベッドから起き上がり一の指を両手で包んだ。
「てい」
そんで折り曲げた。

「――！」
「あはは、あの蜘蛛みたいな声出してんじゃん」
「――！」
「あれ？　ちょっとマジ？」
糸原が指を離すと、一の人差し指が二倍にまで腫れ上がっていた。
「うわあ、嘘だろ……」
「大丈夫よ、ここ病院だし」
「涼しい顔でよくもまあ、ホント糸原さんって怖いっすわ」
「そう？」と、糸原が受け流す。
「あ」
と、突然間の抜けた声を一が発する。
椅子から立ち上がり、勢いよくカーテンを開けた。
「え？　な、何よいきなり？　やる気、やる気なの！？」
「そういや俺、店長に呼ばれてるんだった。じゃ、そろそろ帰りますね」
不満げな声がベッドから漏れる。
「もう帰っちゃうのー？　もっとお姉さんと遊んでよー、構ってよー。りんご剥いて、ウサギさんの形に切って、あーんって食べさせてよー」
「……糸原さんはいつ退院するんですか？」
「えー？　そうねえ、いつでも良いんじゃないの？　手の穴とかもう塞がってるし、体力も戻ってるし」
糸原はそう言って、包帯の巻かれた手を開いては閉じる。
「あー、そうなんですか」
「……あんた、残念がってない？」
何も言わずに、一が３０１号室から立ち去った。

また会いましょう

短い髪を金色に染め上げ、目付きは鋭く、全身から殺気を漲らせている人物。店内に蔓延る立ち読み客を、本当に鬱陶しそうに睨みつけながら舌打ちを繰り返す。

オンリーワン北駒台店、そのカウンター内で、制服を着ているというのに、接客をする気も無さそうな、と言うか、まず、した事が無さそうな、そんな奴が煙草を吹かしていた。挙句に、商品であるホットスナックを勝手に食べながらである。

「ちょっと三森さん、仕事しないんならレジ立たないでくださいよ」

「ああン？」

「……しかも、怖いっすよ」

「てめェ泣かしてやろうか、アア？」

三森が生意気な口を利く後輩に殴りかかろうとする。

が、カウンターを出たところで両手が塞がっている事に気付き、立ち尽くした。煙草と、ホットスナックを持ったまま。

そんな三森を、一がじっと見つめる。

「……何だよ？」

「俺、もう怖がりませんから」

一が言った。

突然の一の発言、その意味を捉えられずに、三森が固まる。

「正直な話、あの日まではずっと怖かったんです。けど、もう大丈夫ですから。これからは普通にやって行こうと思います」

「ん？　あ、ああ」

――何だこいつ？　ソレが怖くなくなったって？　ンなの知るかバカ。バカ。それより。

ごほん、と咳払いして、

「そ、そっか。ま、良かったンじゃねえの？　そ、それでさ、お前私に話す事あったろ」

「ええ」

一が頷いた。

「何だよ」
「え、あ、すんません、今言いました」
「はあ!?　今のか？　今のが話か！　怖くなくなったって、それだけか!?」
三森が煙草を床に捨て、串に刺さっていたから揚げを投げ捨てる。空いた両手で一の襟元を掴み上げた。
「それだけって、それだけで充分でしょ！」
「てンめえ、こないだから、あれだけもったいぶりやがって！」
「じゃあ三森さんは俺に何て言って欲しかったんですか！」
ぱっと、三森が一から手を放す。咳払いをしながら、一から顔を背けた。
「ん、んん。ま、まあそうだな、とりあえずはそンだけで充分だよな」
「俺が言うのも何ですが、譲歩した方ですよ。今までの事はもう水に流しましょうよ、お互い。俺は怖くなくなったし、三森さんも、もう俺の事露骨に嫌わないでくださいよ」
ああ、と三森が生返事。
「それじゃ俺店長に呼ばれてるんで」
「ん、おう」
一がバックルームに入っていくのを見届ける三森。
「あれ？」
――俺が言うのも何ですが、譲歩した方ですよ。今までの事はもう水に流しましょうよ、お互い。俺は怖くなくなったし
「ん？」
――あの日まではずっと怖かったんです。けど、もう大丈夫ですから。これからは普通にやって行こうと思います
三森が首を傾げる。
――あの日まではずっと怖かったんです。けど、もう大丈夫ですから。三森さんも、もう俺の事露骨に嫌わないでくださいよ
「ってオイ」

一を呼んだ張本人は、バックルームの回転式の椅子にふんぞり返って、煙草を吹かせていた。バックルームに入ってきた一の存在を無視するように、パソコンのディスプレイを、もしくはその向こう側を遠い目で見つめている。

「店長、用がないんなら帰って良いですか？」

「駄目だ」と、店長が椅子を一の方へ回転させながら、にべも無く言った。

「じゃあ、早く用件言って下さいよ」

面倒くさそうに一が口を開ける。

「一」

何ですか、と一がぶっきら棒に答えた。

「おはようございますは？」

喜色満面。

一をからかえて、弄って楽しい。みたいな顔だった。

「……ざいます」

「結構。お前は私に雇われてる身分だからな、まずは私に敬意と最大限の親しみを込めて挨拶だ」

それで、と一が促す。

「まずはお疲れ様と言っておこう。初陣にしては良くやった方だ」

「俺は、別に何もしてないですよ」

短くなった煙草を持って、店長が視線をさ迷わせた。

「勤務外の初陣で生きて帰って来た。それだけでやった方だと思うがな。……そもそも、私はお前が行く事には最初から最後まで反対してたんだ。絶対こいつじゃ無理だ、すぐに死ぬと思ってな。一、お前は一般業務は出来るが、他の事は結構駄目っぽいしな」

「さいですか。後、さり気なく煙草を床に捨てないでくださいよ。誰が掃除すると思ってんですか、誰がいつも床を綺麗にしてると思ってんですか」

悪びれず、
「こっちはお前らバイト一人につき、一時間の労働なんかで、千円近くも金払ってんだぞ。私の面倒ぐらい見ろ。何のためのコンビニバイトだ」
店長が二本目の煙草に火を点けた。
「で。何の為に俺を呼んだんですか？　勝手に力貰って勤務外まがいの事をした俺に説教ですか？　それとも俺に愛想尽かして首とか言うんじゃないでしょうね」
かはは、と景気よく店長が笑う。
「私は愛想振りまくのが苦手だ。嫌いと言っても良い、いや、憎んですらいるかもしれんな。そんな事は動物園のパンダにでも任せておけば良い。第一にだ、お前なんかに媚売った覚えはないし、売るつもりも、男として見るつもりも好きになるつもりもないぞ」
「……じゃあ何すか？　んな事言われたら、言った俺は結構恥ずかしいんですけど」
「勤務外になっても良いぞ。但し、あれは取り上げだ。私が責任を持って預かっておく」
ロッカーの近くに立てかけられたビニール傘を店長が指差した。
一はたっぷり迷ってから、
「別に俺はなりたくないんですけどね」
と、弱弱しく声を発した。
「ん？　そうか、それならそれで構わないな。むしろ願ったり叶ったりだ。余計な世話も面倒も迷惑も私は御免被るからな」
「話はそれだけですか？」
「ああ、そんなもんだな。とにかく、傘は使わせんぞ。分かったな？　それと、床を掃除していってくれ。分かったな？」
「分かりましたよ」
言って、一がバックルームから出て行こうとする。
「おい、分かったなら掃除していけ」
「傘の事は分かりました」

「ちっ、ああ、それと。奴らの事だがな」
奴ら。
誰の事だろう、と一は考えたが、店長が嫌そうに「奴ら」と呼ぶのはオンリーワンの本社の人間か、ソレの事ぐらいだったな、とすぐに思い当たった。
つまり。
話の流れから、アラクネ戦から考えて。
一は黙ったまま、壁に背を預けた。
「お前らが病院に運ばれてすぐに帰ってったぞ。何処にかは知らんがな。知りたくもない。面も見たくないし、二度と会いたくないな。白い鳥が嫌いになったぞ」
「……あの人は何か言ってましたか？」
店長は何かを思い出す素振りを見せたが、口から白い煙を吐き出しつつ、「知らん」と一言だけ答えた。さながら煙と一緒に何かを吐き出してしまったように。
「そうですか、少し残念です」
「何だ、女神様からお褒めの言葉でも頂きたかったのか？　そりゃ残念だな、ああ、残念だ」
意地悪く店長が笑った。
「けど、俺が病室で寝てた時、誰か来てたと思うんですよね。意識は無かったけど、直接頭ん中に響くような感じの声で。多分それが」
「三森じゃないのか？」
一の言葉を遮るように店長が言う。
「あれ、三森さん俺の見舞いに来てくれてたんですか？」
「ああ。私は面倒だから行かないって言ったんだけどな」
「全く気付かなかったですね。もし気付いてたら、さっきお礼でも言っとけば良かったな。三森さんも、言ってくれれば良かったのに」
「あいつも中々面白いところがあるからな、お前が礼を言ったらもっと面白くなりそうなんだが」
意味深に笑う店長。

よく笑う人だ、と一は思った。
よく怒る人でも、あるが、とも。
「……何の話してましたっけ？」
「三森は可愛いって話だ」
店長が真面目な顔でそんな事を言う。
「は？　……あー、もう良いです。んじゃ俺帰りますね」
「おう。お疲れ」
「あれ、帰る時の挨拶は店長から言うんですか？」
ん、と店長が固まった。
そして、
「何の事だ？」
と、一を出来の悪い末っ子を見るような、それは、まるで母親の、慈愛に満ちた瞳で店長が問いかける。
「いえ、お疲れ様です」
一が店長を、遂にボケてしまった母親を見るような、それは、まるで長男の、ああこれからこいつの面倒見ないといけないのかという、自愛に満ちた瞳で淡々と返した。

それまではさよなら、私の小さな勇者

「おい」
「うわっ、何すか三森さん」
バックルームを出た一は、何故かそこに居た三森に呼び止められた。
「……怖がらないンじゃなかったっけ？」
「驚いたんですよ」と、一が心拍数を上げながら、ようやく口にする。
「それで、どうしました？」

「あ？　あ、ああ。いや、どう言えば良いンだ、っけ。あー、その、な」
三森はいやに歯切れが悪かった。
「俺にはいつも男らしくしろって言ってる癖に。三森さんも男らしくしたらどうですか」
「あ、ああ、そうだな。悪ぃ」
しかも思考能力まで鈍っていた。
「さっきの話だけどよ」
一が黙って首肯する。
「その、何て言うか、あれだ、あれだよ。私も、その、お前と普通にするからな」
三森が、たどたどしくも、やっと言葉を繋いだ。繋げた。繋ぐ事が出来た。
しかし、その言葉が届いたのかどうか。
「あ」
と、一が呆然と固まる。
「なっ、何だよ！　文句でもあンのか！？　調子乗ってンじゃねえぞ！」

「あら、ジャパンにはまだこういうタイプのがいるのネ」
高い声。
高く高く朗々と、高く高く楽しげに、それでいて決して耳障りではない。
鈴を軽く鳴らしたような、優しげな音色。

三森が振り向いた。
一は動けずにいた。

純正の金色。

声の主は、自身のブロンドヘアを惜しげもなく、手で見せ付けるように梳いた。紅いリボンで髪を二つに纏めている。金色に、そのリボンは良く栄えていた。つまり、ツインテールの少女（ちなみに、ツインテールとは、髪を左右の中央あるいはそれより高い位置で纏め、両肩に掛かる長さまで垂らした髪型の俗称である。怪獣の名前のような気もするし、正式名称はツーテールとも）。まるで出来の良い人形のようだった。肌は白く、真冬の雪ですら霞むほどのそれ。背丈は男性の中でも小柄な一より小さく、三森よりも僅かながら低い。それでいて、尊大で、自信に満ち溢れていて、身長以上のオーラが彼女の体から立ち上っているようだった。一と三森を見つめる瞳は只管に青く、空と、海を足して二で割ってから蒼を混ぜたような、透き通ったあお。

既に顔までで金、白、青、赤と四色も使っていた。

手にはテンガロンハットを持ち、長いスカート、爪先がやや尖っているウエスタンブーツ、ラメの入った派手なロングコート（コートの末端には穴が幾つも空いていた）を着こなすその姿は、何となくカウボーイと言うか、西部劇をイメージさせる格好だった。

「外人」

三森が思わず口にした。

その単語に、彼女の蒼い瞳がきらり、と輝く。

「失礼な人ね。レディとは呼べないわ。きったない色に染めてるくせに」

と、三森を鼻で笑う。

そして両手を肩の上で竦めて見せた。

「なっ、なっ、なめてンのかてめぇ！　良いぜ表に出ろよ！　やってやるよ！」

「……Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｊａｐａｎｅｓｅ？」

「……何だと？」

「ユー　アー　ジャパニーズ？」
ゆっくりと、一語一語区切るように、少女が英語らしき言葉を紡ぐ。
「ああ？　そりゃどういう意味だ」
「あなたは、日本人ですか？」
あどけない顔で、ツインテールの少女が言った。
「さっきの、本当に日本語？　だとすれば、あなたの話し方は汚いワ」
「ガキだからって容赦しねえぞ、ああ？」
どこからどう見てもいじめだった。
但し、今優位に立っているのは三森でなく、背の低い外国の少女ではあるが。
「それよりも」
と、少女が声のトーンを若干上げた。
嬉しそうでもある声色。
「Ｉｔ’ｓ　ｂｅｅｎ　ａ　ｌｏｎｇ　ｔｉｍｅ」
誰に向けられた言葉だったのか。
分からないまま、少女は続ける。
「Ｈｏｗ　ｈａｖｅ　ｙｏｕ　ｂｅｅｎ　ｄｏｉｎｇ？」
「あ？　お前何言ってんだ？」
「？」
やがて、腑に落ちない表情を少女が浮かべた。
そして、胸元に手を当て、何かを必死に探り当てるような、真剣な表情を見せる。
「Ｈｍｍ」
少女はすぐに嬉しそうな表情へ戻った。
探し当てたのは、
「お兄ちゃん！」

そんな言葉だった。

三森が怪訝そうな顔を見せる。と言うか、引いていた。

少女は、兄、と呼んだ男性に駆け寄っていく。

「えーと、確かそう、久しぶりね！　で、合ってるよね？」

その男性の袖口を掴んで、親しげに、上目遣いで話しかけた。

「……どういう意味だ」

その男性、袖口を掴まれている男性、三森から軽蔑に近い眼差しを受けている男性。

つまり、一。

何も言えずに、何も答えられずに、ただただ、メドゥーサに魅入られた男のように固まり続けていた。

ありがちなお話

それは誰かの、幼い日の、子供っぽいお話。
小さな女の子の大きな約束。

「ねえ、お兄ちゃん」
ん、と少女に呼ばれた少年が振り向いた。
少女の瞳は青く、少年の瞳は潰れた黒。
「ずっとアタシのおうちにいるの？」
半分は期待、半分は諦め。
いや、と少年が返した。
いや。
少年は日本人。少女はアメリカ人。
二人が出会った当初こそ言語の壁はあったが、それでも長い間一緒に住んでいると、双方の言葉が分かるようになるものだ。
彼は英語を、彼女は日本語を。簡単ではあるが、彼らは互いの言葉を習得し、会話も出来るようになっていた。
「アタシは、お兄ちゃんとずっといっしょにくらしたいな……」
少女が、抱えている熊のぬいぐるみに顔を埋めながら呟く。
その声が聞こえているのか、いないのか、少年は黙ったままだ。
「いつか、あっちに帰っちゃうんでしょ？」
うん、と少年が答える。
「じゃあさ、アタシが大きくなったらむかえに来て」
少女は少し目線を上げて、少年に答えを求めた。
どこに、と少年は問いかける。
「アタシ」
お前をか、と少年が笑った。
「本気なんだから！　ね、おねがい、むかえに来て。そしてアタシといっしょに、ずっと、ずうっとくらそ。二人でずっと、うん。ず

っと！」
分かった分かった、と少年が答える。
あしらう様な、軽い態度だったが、少女にはそれで充分だった。
それだけで満足だった。
「ホント？　ぜったいによ！」
分かったって、と少年は言う。
少女は笑った。
嬉しくて、楽しくて、自分の将来は約束されて、希望に満ちて。

「オンリーワンアメリカ支部からＳＶ（スーパーバイザー）として、やって来ました。ジェーン・ゴーウェストでス、ヨロシクね、ボス？」
少し日本語のアクセントに難はあるが、それでも気にはならない程度には流暢に、歌い上げるように、彼女――ジェーン・ゴーウェスト――が言った。
頭にぶら下げている、二つのおさげが楽しげに揺れる。金色の髪、蒼い瞳、赤いリボンはアクセントに。カウボーイ風のファッションに身を包んだ、背の低い女の子。
「ああ、よろしく頼む。店長の二ノ美屋だ。そこでアホ面下げて突っ立ってんのは、ウチのレジ打ち係の一だ。後のアルバイトは、あー。さっき見たと思うが、三森って奴と、糸原って入院患者が一人だ」
店長が椅子に座りながら、権高に喋る。本当に偉そうな、実際「店長」の肩書きがあるのだが。
とにかく、ジェーンと名乗った少女は、そんな店長の態度を気にもしていなかった。
「ボスなら、それくらいの態度でなくっちゃネ。ｗｅｌｌ、アタシの兄を侮辱するのはやめて」
それよりも、ジェーンは一を馬鹿にした発言を気にしていた。小さな体で、店長を威圧するような、威嚇するような視線で射抜き続

ける。
が、
「兄？　お前の？　何処にいるんだ？」
ワケが分からん、と付け足して店長は煙草に火を点けた。
ジェーンは、ハッ、と、その言を鼻で笑い飛ばす。
「見えないの？　そこに居るでショ、最高にクールなマイブラザーが」
と、真っ直ぐ、勢い良く、誇るように、ジェーンの人差し指が一を指で示した。
「人を指差すな」
指された一は、蚊でも追い払うようなジェスチャー。明らかに不快感と言うか、迷惑そうな物を見る目つきだった。
「……一。お前アメリカ人だったっけ？」
「いえ。れっきとした日本人です。母親は日本人、父親は日本人。正真正銘純血の日系日本人ですよ」
「え？　純潔？」
「言うなよ、馬鹿店長！」
一が珍しく怒る。
「何だと？」
「いえ……あの、すいません」
すぐに黙った。
「じゃあ、何故ゴーウェストはお前を兄と呼んでるんだ？」
「アラ、ジェーンで良いわよ、ボス」
ジェーンの言葉に、そうか、と頷いてから、
「で？　何故ゴーウェストがお前を兄と呼ぶんだ？」
そう言った。
「Ｏｈ、ストーンヘッドね」
「ジェーン。色々と間違ってるってか、残念だ俺は。……んで、こいつが俺を兄と呼ぶ理由ですが、言いませんでしたっけ？」
一が店長に、「お前ボケてんのかババア」のニュアンスを込め、

聞いてみる。
　逡巡。
　思考。
「お前って喪服が好きなんじゃなかったか？」
　回答。
「その通りです。けど、さっきの質問の答えにはなってないですよね？　ちなみに俺は年下は恋愛対象として見てないです」
　ＵＦＯやＵＭＡを発見した時の、人間の顔と言うのは、こういうものか。
　店長が一を、本当に信じられないようなものを初めて見たという、そんな顔になっていた。
「Ｗｈｙ!?　じゃあアタシの立場は!?　アタシをもてあそんだの!?」
　一が、迫ってくるジェーンを片手で押さえながら話を続ける。
「四、五年前の事、だったかな、あれ？　まあ、いいや。とにかく、日本にソレが出たから、俺は集団疎開でアメリカまで行ったんです。その時、俺を受け入れてくれた向こうの家族の子供が、そこにいるジェーンだったんですよ。二年ぐらい住んでたっけな、確か。あんまり覚えてないですけど。俺は当時英会話なんて簡単なモノしか出来ませんでしたし、家事もあまり手伝えませんでしたから、せめて子守ぐらいはと思って、頑張って相手してたんですよ」
　ちら、と一がジェーンを見た。
　ジェーンは目を瞑って、一人で勝手にうなずきを繰り返し、悦に入っていた。
「と言うわけで、俺が面倒見てたから、血も繋がってないのに、ずっとこいつは勝手に俺の事をブラザーブラザー呼んでたんです。分かってもらえました？」

「お前がアメリカに行ったなんて話聞いてないぞ？　勝手に後付の設定を付けるのは止めろ。見苦しい事この上ないな」
店長が煙を吐きながら、汚いものを見る目つきで一を非難する。
「言いましたよ！　しっかり伏線張ってましたって！」
「どうだかな」
「……もう良いです。とにかく、そういう事ですから」
諦めて、一が呟いた。
「そうか。まあどうでも良い。じゃあ早速なんだが、ゴーウェスト。明日からでもシフトに入ってもらえるか？　本当はもう一人ＳＶが居るんだが、今は謹慎中でな。正直言ってまずい、手が足りないんだ。このままじゃ私も店に出ないといけない状況に陥ってしまう」
深刻そうな表情を浮かべ、店長が重たげに口を開く。
一は突っ込みたくて仕方ないという顔をしていたが、
「ＯＫ、任せてボス。オヤスイゴヨウよ」
ジェーンは間を空けずに、軽く返事をした。
「なら、明日の午前中に顔を出してくれ。説明はまたその時する」
「……顔を出す？」
「ああ。会おう、って事だよ」
一が説明。
それでもジェーンは得心していない様子で、バックルームから立ち去っていった。
「あ、おい。……じゃ店長、お疲れ様です」
一がジェーンの後を追うようにバックルームを飛び出る。
「……あ、ああ。お疲れ」
一歩引いた店長の挨拶、タイムラグに一は疑問を感じたが、もうどうにでもなれと思って、そのまま放置して店内に戻った。

案の定。お約束。鉄板。
一が目にしたのは、向かい合う二人。対峙する三森とジェーンだ

った。カウンターを挟んで、客と店員と言う立場で、彼女らは睨みあっている。
「……あいさつぐらイ、したらどうなの？」
ペットボトルのミネラルウォーターを握りながら、ジェーンが口を開いた。
「……ありがとございましたー」
目も合わせないで、三森が答える。
「バイトのくせに」
「はっ、てめェみたいなガキが社員だったとはな！　アメリカは人間が減ったのかよ？　ソレにやられ過ぎたか？　ざまあみろってンだ」
「この……！　サル！　サルのくセに！」
「ンだとう！　ガキだからって私が手ェ出せないと思うな、もう容赦しねえからな！　泣くまで殴ってやる！」
三森がカウンターに拳を叩きつけた。
負けじと、
「ウェスタンは好きかしら！？　そんなに叫びたいナら、口を増やしてあげる！」
ペットボトルをカウンターに叩きつける。
既に立ち読み客は、と言うか客は店内から姿を消していた。逃げていた。
修羅場。
睨み合う二人、燃え上がる闘志、湧き上がる殺意。先に動いた方が、死ぬ。そんな空気を感じ取る両者。目だけで相手を殺せそうなほど、穴が空くほどガンを飛ばし合う。
「止めて下さいよ」
一が心底呆れ返った様子で、二人に近付いた。
「邪魔すンじゃねえよ！」
「お兄ちゃん！　絶対に止めないでヨ、ブシノニゴンよ！」
分かった分かったと言いつつ、一がジェーンのおさげを引っ張る。

ｏｕｃｈ！　とか聞こえたが一は無視して、二人の距離を無理矢理空ける事に成功した。
「三森さんも相手にしないでやって下さいよ。この手のは、一回でも構ったら調子に乗っちゃうんですから、オンリーワンの社員とは言いますが、まだまだ子供何ですからこいつ」
　三森は物凄く不満な顔をしていたが、ここで退かなければ、自分も子供だという事実に気付く。少しの間、確保されているジェーンを睨んでいたが、
「……ちっ、おいチビ。ツイてるな、今日は見逃してやンよ」
　一にとっては、意外にも大人しく三森は退いてくれた。
「お兄ちゃんはどっちの味方なの！」
「うん？　うーん、俺は中立の立場にいたい」
「お前にはお似合いだよ。っとにフラフラしやがって、とっとと帰れ」
「何で三森さんが怒るんですか？」
「もうイイ！　お兄ちゃん、帰ろ！」
　ジェーンが一の手を引っ張る。
「な……！　おい、ちょっと待て！」
「え、今度は何ですか？」
「あ？」
　三森が一を睨んだ。
「何で睨むんですか……」
「わりぃ、つい」
「用が無けりゃ帰りますよ。んじゃ、お先に失礼しますね」
「……おう」
　手を振る一に、三森が片手を上げて応じる。
　ジェーンはずっと舌を出して、あかんべえ、のポーズを向けていた。
　扉を開け、一とジェーンが店内から出て行く。
　二人の後姿を見えなくなるまで見届け、三森が制服のポケットか

ら煙草を取り出した。三森は指を擦り合わせ、火を灯し、煙草の先を浸ける。ふう、と一息吐き、
「……何で私だけ……」
消え入りそうな声で呟いた。

バックルーム。
防犯カメラで一部始終を盗み見していた店長はぼやく。
「働けよ」

家路につきながら、一が隣を歩くジェーンに問いかける。
「何でついてくんの？」
「どういう意味？」
「そのまま。このまま行くと、俺んちに着いちゃうんだけど」
「？　ノープロブレムじゃない」
ジェーンが、何で今更そんな事を聞くの、と付け足す。
頭を掻きながら、困った表情を一が浮かべた。
「……お前、家はどうすんの？」
「ＨＡ？　お兄ちゃんの所に決まってるじゃナイ」
「へえ、誰が決めたんだろうな。でもな、俺んちは一人用なんだ。お前は入れない」
「Ｎｏ、ｋｉｄｄｉｎｇ！　兄妹が一緒に住めないなんテ、そんなの聞いたこと無いわ」
「兄妹ならな。そもそも、お前何やってんだよ？　オンリーワンの社員にはなってるし、日本まで来るし、おじさんとおばさんは反対しなかったのか？」
ぴたり、とジェーンが足を止める。
仕方なく一もそれに合わせた。
「……忘れちゃったの？」

「何をだよ？　っつーか、お前日本語上手くなったな。背は変わってねーけど」
「お兄ちゃんが来ないから……。だから、アタシが来たのに」
「はあ？」
「手紙も、電話も、ニホンにお兄ちゃんが帰っちゃったあと、何もくれなかった」
「あー、そうか。確かにそれは悪いと思ってたよ。二年とはいえ、俺みたいなんを世話してくれたもんな。薄情ってもんか。けど、俺も大学受験とかで忙しかったんだよ」
「ニホン語も、ニホンの事も覚えた。お兄ちゃんはいつまでたってもイエスとノー、ハロー。それしか覚えてくれなかったカラ」
「……ずっと向こうに居るつもりじゃ無かったからな。せいぜい一ヶ月か、長くても半年ぐらいと思ってたし」
だから。
だから、と。
ジェーンが感情を込めて、言葉を区切る。
冷たい風が二人を通り過ぎていった。既に日は落ちかけ、辺りは暗くなり始めている。
ジェーンが顔を伏せた。
「話したいなら、アタシが言葉を覚えるしかなかった。会いたいなら、アタシがニホンに来るしかなかった！　なのに！　約束してたのに！」
「約束？　さっきも何か言ってたよな。あのさ、俺、帰ってくる前に何か言ってたか？」
伏せた顔を上げないまま、ジェーンは口を閉ざす。
「……悪い。覚えてない。あー、とにかくさ、しょうがねぇ、住むトコもまだ決まってないんなら、今日は俺んち泊めてやるからさ。今は」
今は、糸原さんもいないし。
と、言おうとしたところで一は思いとどまった。

「……今は？」
ジト目でジェーンが一を見る。
「ノー。なんでもない。とにかく、座って話そう。お前も疲れてんだろ？」
ＯＫ、と短く返し、ジェーンが一の隣に並んだ。
「よしよし、んじゃ行くか」
――後ろめたかったのかな。
何故、糸原の事を伝えなかったのだろう。
何故、手紙の一枚も書いてやれなかったのだろう。
何故、電話の一本もかけてやれなかったのだろう。
何故、何故。
一の頭の中を、ぐるぐると思いが駆け巡る。

「ん？」
少年が振り向く。
振り向くと、あどけない顔つきをした少女がそこにいる。
知っていた。
蒼い瞳。透き通っていて、無垢で、純真で、幼くて。
自分の汚い目とは大違いだ、と少年は思う。
ずっとアタシのおうちにいるの、と、少女に問いかけられた。
ずっと。
「いや、俺は日本に帰るよ」
だって。
小さな声が少年の耳に入る。
少女が、抱えている熊のぬいぐるみに顔をうずめながら、何かを呟いていた。何を言っているのか、はっきりしなかったので少年は答えられない。

いつか、あっちに帰っちゃうんでしょ、と少女が上目遣いで尋ねてくる。
「……うん」
じゃあさ、アタシが大きくなったらむかえに来て、と少女が言った。
少女は少し目線を上げて、少年に答えを求めた。
苦笑しながら、
「どこに？」
と、少年が聞き返す。
アタシ、と顔を真赤にさせて少女が言った。
「え？　ははっ、お前をか？」
真赤にさせた顔を、更に紅潮させ、少女が何事かを喚く。早口で捲くし立てられ、何を言われているのか少年には聞き取れなかったが、怒っているのだろうな、と決め付けた。
「分かった分かった」
子供の言う事だ。少年は軽くあしらう。
ぜったいによ、と少女が念を押した。
「分かった、オッケー」
少女は笑った。
嬉しくて、楽しくて、自分の将来は約束されて、希望に満ちて。

それは少年の、少し幼かった頃の、まだ楽しかった時分のお話。
小さな男の、小さな約束。

グッナイ

『犬小屋？』

それが一の部屋に足を踏み入れた、ジェーンの第一声だった。一つ物を見つけては怒鳴り、見つけては喚き、見つけては呆然としていた。

「……もう良いか？」

「ウン」

今ジェーンは、こたつに入って、お茶を大人しく啜っている。

それじゃ、と一もジェーンの向かいに座って、こたつに入った。

一が足をこたつの中で無造作に伸ばすと、人間の脚らしきものを蹴飛ばしてしまった。が、気にせず、みかんに手を伸ばす。

ジェーンが何か言いたそうな顔をしていたが、一は気にしない。

「色々聞きたいことはあるんだけどさ」

みかんの皮を剥きながら、一が言う。

「……元気だったか？」

「エ？」

「いや、唐突だとは思うけどさ。他に聞くべき事がある気もしないでもないんだけどさ。まずは、こう、なんつーの？　やっぱ元気だったかなー、とか、そういう事が気になったんだよ。腐っても、俺はお前の兄ちゃんだからさ」

皮むきに没頭しながら、視線は合わさないまま、ジェーンを見ないようにして、一が少しの照れを混ぜて呟いた。

「フフ。ありがと」

「笑うか、礼を言うか、どっちか一つにしろ」

「そうよネ、やっぱり2年会わなくても、手紙もｔｅｌｌもくれなくても、お兄ちゃんは腐ってもアタシのお兄ちゃんだヨ」

そうかよ、と、みかんを咀嚼しながら、一がぶっきら棒に言い放

つ。
「お兄ちゃんこそ、元気にしてた？　こんなコエダメにいてたらウイルスに侵されちゃうワ。ニッポンは家が狭いし、人がｓｗａｒｍしてるから、すぐに病気が感染しちゃうヨ。こんなコエダメにいてたらダメダヨ！」
「掃き溜め、な。肥溜めって二回も言っちゃ駄目だ。二度と使っちゃ駄目だ。それとお前、英語忘れてんじゃないか？」
「それはある鴨しれないわネ。イングリッシュよりジャパニーズを優先して使っているシ」
　一は「かも」のアクセントが気になったが、一々訂正していては身が持たないな、と思い、突っ込みは口にせず、みかんを黙々と口に運ぶ。
「そういや、おじさんたちは元気か？」
「Ｙｅｓ、アイカワラズｃｏｏｌヨ。オンリーワンに行くって言った時は二人にどつかれたワ」
「……ふーん」
　どつく、って誰がジェーンに教えたんだろう、と。一は考えた。
　一はじっと、ジェーンを観察する。安っぽい蛍光灯に照らされ、きらきら光る金色の髪。
　一が最後に見た姿。二年前のジェーン・ゴーウェストと、何一つ変わらない容姿。一の記憶と完全に一致する、白い肌、蒼い瞳、赤いリボン。
「お兄ちゃん？　どしたの、アタシに見惚れたの？　ユーラブアイ？」
「Ｏｈ……」
　変わったと言えば、目、ぐらい、かな。と一はふと思う。ジェーンの眼。目。目つき。視線。眼球。真っ直ぐに、相手の目を見て話すジェーン。まっすぐに。純真で無垢で、一のことを信頼しきっている目。
　――苦手だ。

「？」
ジェーンが一を見つめる。一の心を、一の向こう側まで透き通すように見つめる。それは、もはや見え過ぎて盲目的とも言えた。
「……あ。いや、別に。来る前に連絡くれたら、俺も色々準備出来たのになあ」
「お兄ちゃんを驚かせようと思って。サプライズ？」
「ああ、ホントに驚いたよ」
一は思い出す。
アメリカへ行ったときの事を。ジェーンのこと、ジェーンの家族のこと。アメリカでの生活、二年間の思い出。
二度と会えない、会わないと思っていたのに。
「オンリーワンの社員ってことはさ、お前ソレと戦ってたりしてたの？」
一の質問で、ジェーンの表情に少し影が差した。
しまったか、と一は思い、「言いたくなかったら別に良いよ」と慌てて付け足す。
が、
「イエース。ザッツライ、ハードな生活だった、かな。ニホン語覚えて、ソレとの戦い方も覚えて、忙しかったワ」
笑顔でジェーンは答えた。
「そっか」
少々、作り物めいたそれではあったが。
「Ｂｕｔ、辛くはなかったよ。お兄ちゃんと会えるから、ガンバレば、きっとまた会える。そう思って、アタシはお兄ちゃんがいなくなった2年をガンバッタの」
何で、そこまで？　一は尋ねようとした。
けど止めた。
「……ウチのＳＶになるのは良いんだけどさ、お前日本にいつまでいるつもりなの？　ずっとこっちで暮らすつもりなのか？　見たと

ころ、荷物も何も持ってないけどさお前」
「ニホンに、いつまで？」
「そうだよ」と、一が頷く。
ふっ、とジェーンが笑った。一を馬鹿にするように、薄く笑う。
「アタシのせりふだよ、お兄ちゃん？　お兄ちゃんこそ、いつまでここにいるつもりなの？」
「……何言ってんだお前？」
「お兄ちゃんこそ何を言ってるの？　約束を忘れたくせに」
一が言葉に詰まった。
確かに、一はジェーンとの約束を忘れていた。
守らずに、破らずに、ただ忘れた。
「だからアタシが来たのヨ。迎えに。お兄ちゃんが来てくれないから、アタシが迎えに来たの。ネ、アメリカに、アタシの家に、お兄ちゃんの家に帰ろ？」
一は、呆然と、楽しげに話す目の前の女を見る。
「……おいおい、冗談きついぞ」
「冗談？　それこそ冗談じゃないワ、お兄ちゃん」
精一杯の一の虚勢を、ジェーンが軽く一蹴した。
ジェーンの一を見つめる視線、瞳に変わりはないが、鋭さが増している、気がする。
「アタシがどれくらい待ったと、耐えたと思うの？」
「それは……」
「ソレと戦って、戦ったワ、疲れて、疲れた。お兄ちゃんと会いたいから、暮らしたいから、約束を守って欲しかったから」
「約束、ってそんな、お前が小さいときの話じゃないか……」
「関係ナイ！！」
バン、とひっくり返るかと思うぐらい、こたつの卓に拳を勢い良く叩きつけ、ジェーンが怒鳴りつける。実際、こたつからみかんはひっくり返って落ちたし、一も心臓がひっくり返ったんじゃないかと思ったくらいびっくりしていた。

「え、あ、ああ、そうだ、な。ごめん」
「謝ったネ？　じゃあ帰ろ、お兄ちゃん」
「……あー。そうだよな。けどな、いきなりは無理だ。俺にも準備とか、後悔とか、やり残してることとか、置いていけない、置いちゃいけないことがあるんだよ」
「じゃあいつ帰れるの？　明日？　あさって？　それとも1週間、1ヶ月、1年？　アタシ待つよ。お兄ちゃんがやり残したことも終わらせるの手伝うヨ。だって、アタシは」
　もう何年もずっと待ってるんだから。と、ジェーンは唄った。うたうようにいった。
「言い方が悪かった。ハッキリ言うぞ。俺はアメリカには戻らない、ここで、日本で暮らす。多分、駒台で俺は死ぬよ。ここで大学を卒業して、このへんで就職して、彼女も見つけて、結婚して家庭を持って、そんで死ぬよ。ここが俺の最後の場所だから。もう最後にする場所だから」
「……じゃあ、アタシもここに残る。死ぬまで、お兄ちゃんのそばでずっと一緒に暮らすワ」
「ジェーン。俺とお前が一緒にいたのは、たったの二年だぞ？　確かに俺も、その、楽しかったのは楽しかったよ、あの家は。でもさ、たった二年で、たった二年俺といたせいで、お前はソレなんかと戦ったり、死ぬ思いしたり、しんどかったり、俺のせいで人生を棒に振ってんじゃないのか？　もっと、お前は優しくて、素直で、良い子だったろ」
　落とされたみかんを拾い集めながら、一が言う。
「たった？　たった2年？　今そう言ったよ、お兄ちゃん。ダメ、ダメ。ダメだヨお兄ちゃん。アタシに言っちゃダメなのに」
　二年。
　一年が二回。
　十二ヶ月が二回。
　二十四ヶ月。

三百六十五日が二回。
七百三十日。
一時間が……。
「時間は関係ナイ。アタシには、2年でも長すぎたヨ。1年でも、ううん。お兄ちゃんと会って、好きになって、一緒にいたいって思うには1秒あれば、あれば」
ジェーンにとって、二年は、時間は関係なかった。例えば、生まれたときから一緒にいたとしても、街中ですれ違う瞬間だとしても。一を一目見たときから。
「錯覚だ。錯覚だよ。俺みたいな奴を好きになってんじゃねえよ、馬鹿。せっかくお前は、まあ、なんだ。可愛いんだからさ、オンリーワンなんてやばい仕事辞めて、アメリカ戻って、彼氏の一人でも作ってさ、楽しくやれよ。わざわざこんな島まで来て、お前の生き方変えるんじゃねえよ、勿体無い」
「……」
「……」
「……」
「何だよ？　言いたい事があんなら言えよ」
二つ目のみかんを剥きながら、一が吐き捨てるように言った。
「分かってくれないノ？」
「うん」
「何度言っても？」
「ああ」
「……OK。アタシもすぐにかたがつくとは思ってなかったよ。今日は、もうこの話は終わり。ゴメンね、お兄ちゃん。せっかく、せっかく会えたのに……」
一変して、ジェーンが落ち着きを取り戻し、悲しげに俯く。
今にも泣き出しそうな雰囲気。壊れそうな儚い空気が狭い部屋に立ち込めた。
一も頭に血が上っていたのかもしれない。

突然の、二年ぶりの来訪者。整理が、脳の回転速度が思考速度が速さが、事態に追いつかなかった感はある。

ふう、と一息つき、一は冷静を装った。

「俺も大人げなかったよ。ごめんな、とりあえず布団敷くから今日は寝ろ。な？」

「ウン……」

一がこたつから出て、押入れから布団を引っ張り出す。

「汚いけど、今日は我慢してくれな」

「ウン……」

「ほら、泣くなって。そうだ、みかんでも食べて元気出せって。結構良いやつなんだぜ、それ。こたつにはみかん！　って隣町のスーパーまで買いに行かされたんだけどさ、苦労した分美味いんだ。まあ、俺はこたつにはアイスだって言ったんだけどさ。糸原さんは働かないくせに食べ物には」

そこで一は自分を突き刺す視線に気付いた。さっきまで沈んで萎んでいたジェーンの顔が上がっている。そして呪い殺すように、憎憎しげに一を睨んでいた。

「……どした？」

無言で、ジェーンが畳を指差す。

正確には、畳の上の雑誌。

女性誌。

「あ」

指を動かし、次に流し台を指差す。

マグカップ。しかもペアの。赤と黒の、色違いのハートマークなんぞが描かれている代物。際物。

――あの人はホントに……！

「それは」

一の言葉を無視し、次にジェーンは「イトハラ？」と、舌足らずの、可愛らしい声を極限まで低くして、恨み言でも絞り出すようにして一を睨んだ。

「イトハラって、誰？」
「え、あ、あ。あ！　俺の友達だよ。たまに遊びに来るんだ」
「……お兄ちゃんのフレンド？　ふうん、敬語使うんだ。友達に。へえ、アタシにも使ってもらおうカナ」
「ミスジェーン。何が仰りたいのですか？」
何か、一が頑張っていた。
「説明を求めるワ。それに、謝罪と賠償とドゲザと、お兄ちゃんからアタシへの最大限の無償の、フォーエバーラヴを」
別に、一とジェーンは恋人同士のそれではない。ただの、日本人とアメリカ人の姉妹。血の繋がっていない赤の他人。
「……すいませんでした」
一は土下座した。
「賠償は？」
「……今度、好きなもん買ってやるよ」
「かってやる？」
「買わせて頂きます。いえ、買わせては頂けないでしょうか？」
土下座したまま一が言う。
「イエース。お兄ちゃん、最高にクールな答えネ。もう一つ忘れてない？」
「愛してます」
「ダメー。顔上げて、アタシを見ながら言ってヨ」
「それはちょっと……」
「Ｗｈａｔ！？」
そう。
土下座なんて、一がする必要はない。謝る必要も、理由も筋合いも何一つない。
あるとするならば。
――俺は、この関係を潰したくはない。
顔を上げないまま、一がもう一度、愛の言葉を唱えた。

「ヘックショォンッ！」

盛大なくしゃみをした患者に、看護婦が声を掛けた。

「風邪ですか？」

「ん？　んー、違うと思う。分かんない」

「ふふ、誰かが糸原さんの噂でもしてるんじゃないですか」

「人気者だかんね、私も」

「それじゃ、そろそろ消灯時間ですし、私も戻りますね」

「うん、おやすみー」

「おやすみなさい」

看護婦が音を立てないで、静かにカーテンを閉める。

枕に頭を預けながら、糸原が瞼を閉じる。

頭を過ぎるは、先日の、アラクネ戦の事。自分の事。三森の事。堀の事。店長の事。白い梟と小さな女の子の事。

そして。

「あー、退屈」

あんな奴でも、いないよりはマシか、なんて考えつつ、糸原は眠りに就いた。

一はこたつに入って、みかんを食べていた。

ジェーンは顔を真赤にさせて、拳を震わせていた。

「な、な、こ、ここ、こんな狭い部屋で！　い、一緒に住んでルの！？　お兄ちゃんと女の人が！？」

「うん」

「ジーザス！！　信じられない！　アンビリーバボゥ！　一部屋しかないのに、トイレも一つだけだし、お風呂は無いし！　一体どうしてるのヨ！？」

ジェーンは遂に立ち上がる。
「風呂か？　近くに銭湯があるんだよ」
「二人で？　あの女と二人で一緒に行くの！？」
「あの女って、お前まだ会った事ないだろ。うん、まあ、たいてい二人で行くかな。あの人に財布握らせて一人で出歩かせるの怖いし」
一の、主に財布の中身が。
「ＫＡＮＤＡＧＡＷＡ！」
「良く知ってるな。とにかく座って、でかい声出すな。近所迷惑だろ」
「ね、ねねね寝るときは、ど、どうしてるの？」
動揺を隠せないまま、ジェーンが目を泳がせながら一に尋ねた。
「俺はこたつで、糸原さんが布団。逆の場合もあったかな。でもさ、あの人寝相悪いし、何か夜中にメチャクチャでかいくしゃみとか寝言とか歯軋りすんだよね。勝手に人の布団潜り込んでくるときあるし。邪魔くせえよ」
「ドロボウネコ！？」
「うわっ、声がでかいって。しかも何だよ泥棒猫って……」
「ドロボウネコ？」
「聞き返すんじゃねえよ」
「ドロボウネコ！」
面倒なので、一は無視してみかんを食べ始める。
「まあ今日は別に良いんだけどさ。もうちょいしたらその人も帰ってくるし、お前住む場所決めとけよ」
「イトハラを見捨てればいいじゃナイ」
「一回鍵閉めて、無視して寝てたんだけどさ。あの人ドアの前で大声で喘ぎだすんだよ。真夜中だってのに、そんでしょうがないから中に入れたらドン引きするぐらいしこたま殴られた」
一が体のあちこちを摩りながら呟いた。
「アタシとソイツ。どっちの味方なの？」
「……じゃあ、このアパートに住めば？」

「ここに？」
明らかな嫌悪、拒否がそこにあった。目は口ほどになんとやら。
ジェーンは本当に、至極嫌そうにそう言った。
「何だよ、一緒に住みたいって言ってたじゃん」
「ＮＯ！　ＮＯ！　アタシはデビルでお兄ちゃんと暮らしたいの！　一人で、こんな狭いトコロに住めるワケないじゃない！　死んでしまうワ！」
「おお、俺が妹に馬鹿にされている、なんと情けない。あと、デビルじゃなくて、あくまで、な」
「合ってナイ？」
あくまで＝悪魔。
「明日図書館で辞書借りてきてやるよ」
「いらない！　もう寝る！　明日もお店に行かなきゃダメだし！」
「ん、そだな。けど、嫌だったら仕事辞めても良いんじゃないか？」
ジェーンは何も言わずに布団に潜り込む。
「それに俺は、やっぱりお前には危ない目に遭って欲しくないな」
「……ダイジョウブ。それに、お兄ちゃんはそんな子を好きにならないヨ」
「いやいや、俺は案外ダメそうな子がタイプなんだよ」
「ウソツキ」
「その通り。じゃ電気消すぞー」
部屋の明かりが落ちると、何ともいえない静寂が訪れた。さっきまで普通に話せていたのに、声が出ない。
「……お兄ちゃん」
「ん？」
「アタシ、諦めないから」
「ん」
「それじゃ、また明日ネ。お休み、お兄ちゃん」
「お休み、妹」

「グッモーニン、お兄ちゃん！」
「ん……。んん、ん」
「何言ってんのか分かんないヨ」
「……おはよう」
「サ！　仕事に行こ！」
「ん。じゃあ布団からどいて……」
オウ、とか言いながら、ジェーンが一の布団からゆっくりと降りた。靴を履き、玄関で足を何度も鳴らす。いつまでも目を擦って眠そうにしている一を急かすようだった。
「ハリーアップ、時間は無限じゃないヨ！」
「……朝からうるさいな……」
仕方なく、一が布団から身を起こす。
「あれ？」
「ン？」
「俺、こたつで寝てなかったっけ？」
「イエス。アタシが持ってきたの」
「……俺を？」
楽しそうにジェーンが頷いた。
はあ、とため息を吐き、一が体を伸ばす。
「顔、洗ったか？」
「……ウン」
ジェーンが一の部屋の、流し台兼洗面台を一瞥した。
嫌そうに。
「俺と住む事になったら、これが普通になるんだぞ。それが耐えられないなら、さっさと、できれば今日中にでも家を見つけるんだな」
「イジワル」
蛇口を捻り、手のひらに水を溜め、一は顔を洗った。左手で、手

探りでタオルを探す。
「Ｈｅｒｅ」
一の左手に、布の感触。
「サンクス」
顔を拭き、頭を振って、無理矢理目を覚ます。
「……じゃ早く店に行こ」
「うん。ん？　いや、良く考えたら、俺今日シフト入ってないぞ」
一がこめかみを指で押さえた。
「どうしたの？　お兄ちゃん頭おかしいの？」
「実はお前日本語完璧だろ」

ジェーン・ゴーウェストが日本に来て二日目。
オンリーワン北駒台店、スーパーバイザーとして勤務する、その初日。
「今何時？」
「９時」と、腕時計を見ながらジェーンが言った。
一は今日、シフトに組み込まれていなかったが、取り立てて、用事といえる用事も、これと言った、予定という予定もなかったので、散歩がてらジェーンについて来ている。
「お兄ちゃん、アクビ」
「豪快だろ」
「……眠いの？　昨日あれだけアタシの横で寝かせてアゲタくせに」
頼んでねえよ、と言い切る前に、一がもう一つあくびをした。
やがて二人は、他愛ない会話をしつつ、北駒台店に着く。
「ざいまーす」
一が店の扉を開けて挨拶するが、店内には立ち読み目当ての客どころか、店員すらいなかった。いつもどおりの風景だった。
「奥か」
なんでもないように呟き、一がバックルームへ向かう。

「何で誰もいないの？」
目を見開き、声を震わせながら、ジェーンが言った。
「……何でって……」
「おかしい！　仕事する気あるの！？」
「ないんじゃないか」
「何で！？」
「何でって……」
「フロアは汚いし、商品も適当に並べてる！　仕事する気あるの！？」
「……ないと思うよ」
「何で！？」
バンッ、と乱暴にトイレのドアが開け放たれた。煙草を銜えながら、金髪を掻きながら、がさつな感じの女性が現れる。オンリーワンの制服を着ている。着ているが、当たり前のように、その女性には似合っていなかった。
「ああ、三森さん、おはようございます」
「朝からうっせェぞ」
「……アンビリーバブル……」
「ジェーン？」
「店内で、煙草……？　スモーキング……？」
ジェーンがふら、と足をよろめかせた。
「あ？　悪いかよ？」
「あ、当たり前じゃない！　アタシより年上のくせに、そんなのもわかんないの！？」
「喚くんじゃねェよ。頭いてえ……、畜生……」
頭を押さえながら、三森が辛そうな表情を見せる。
「あれ？　え、三森さん、風、邪、で、す、か？」
「……何で区切ンだよ」
一が視線を反らした。
ちっ、と舌打ち。

「……店長の酒に付き合わされたンだよ。あの人、馬鹿みてーに強え……。あー、頭がガンガンする。おい。私は寝るから、後はお前らがやっとけ」

言って、三森がバックルームに入っていく。

「し、ししし仕事中にアルコール!?　ウェイト、ストップ、ドントムーヴッ!　何考えてんのヨ!」

「あああああ!　うるせェっつぅの!　文句があンなら店長に言えよ!」

死ねチビ!　怒声とともにバックルームの扉が閉まった。

「……お兄ちゃん」

悲しげに、寂しげにジェーンが一を呼んだ。

一は答えず、視線だけジェーンに向ける。

「アタシ、ステイツに帰りたい……」

「普通の女の子に戻りたいか?」

「……ノー。タブン、もう戻れない、かな。戻りたくても、ダメね」

ジェーンの顔は、ジェーンと同年代の女の子が浮かべるにしては、物事を悟りすぎていて、可愛くなくて、妙に老けていて、老成しているというのか、何というか、黄昏だった。

小さな顔と小さな体と小さな心。一より年下で社員。ジェーンより年上でバイト。何ともいえない、微妙な距離。掴み辛い距離感。近くて遠い。遠くて近い。届きそうで届かない。

だから一は、

「あっそ」

それだけ言った。

店内は静かだった。今は、三森の代わりに入ったジェーンが、神経質ともいえるほど、モップで汚れを落としているところだ。シミを見つけてはモップで擦り、靴墨の後を発見してはモップで擦る。汚れに対して、親の仇をマウントポジションとってボッコボコにす

るが如く、凄まじい勢いで対処している。鬼気迫っていた。
「良く働くな……」
そんなジェーンの様子を、防犯カメラで見ながら、遥か上空から見下すように、見下ろすように、店長が呟く。
「あの汚れの大半は、店長と三森さんでどうにかできたんじゃないですか？」
「いや、私にはとても出来ん。あいつらは手ごわいぞ」
「俺生まれ変わったら店長みたくなりたいですよ」
「そうか」
軽く流して、店長が煙草に火を点けた。
「……一。ゴーウェストとは、どんな奴だ？」
パイプ椅子に深くもたれ掛かり、雑誌を読んでいた手を、一が止める。意図の掴みづらい質問に、一が言いよどんでいると、「そのままの意味だ。深く考えるな」と店長が付け足した。
それでも、少しの間考えて、
「子供ですね」
一はそう答える。
「ふうん。子供か。確かに背格好はガキだな。外人とはいえ、やはりガキはガキだ」
「子供に恨みでもあるんですか？」
「私は基本的に年下の生物が嫌いなんだ」
人間ではなく、生物ときた。
「で？　他には？」
「他？　うーん。うるさいとか、目が青いとか、髪が金だとか。そう言う感じですか？」
「外面は誰にでも分かる。私が聞いているのは、内面の事だ」
「深く考えるなって言ったじゃないですか……」
「言ったか？　一、お前またそんな事を」
もう良いです、と手を振って一が店長の言葉を遮る。
「内面。内面。うーん、別に何も問題ないと思うんですけどね」

「そうか？」
「そうか、って店長。ジェーンに何かあるんですか？」
少し棘のある口調で、一が言った。
「お、どうしたアニキ。妹が悪く言われそうで、気分を害したか？」
ははっ、と店長が軽く笑う。
一は、店長をいないものと扱うように、雑誌のページへ目を落とした。
「……冗談だ。ゴーウェストに不満や不安は特にない。まあ、会ったばかりだがな。ただ、あいつに関して、気になることはある」
「気になること、ですか？」
「ああ。なぜ、どうして、ゴーウェストがウチに来たか、という事だ。更に言えば、来れたか、という所かな」
「……あいつは、俺に会いに来たって言ってましたけど」
今度は喉の奥で、くくっ、と店長が笑いを噛み殺す。
「おいおい。自惚れ過ぎじゃないか、兄さん？　まあ、仮にだ、仮にゴーウェストが、お前に会いたかったとしよう。日本に来なきゃ、お前とは会えない。さて、どうやって行くか、だが。果たして本当にオンリーワンのＳＶとして来る理由があいつにあったのかどうかだ。お前に会うだけなら、休みを利用して旅行ついでにでも来れば良かったんじゃないのか？　わざわざ、二年もソレと戦って、苦しい思いをして、ここまでする必要はあったのか？　なあ、一。どう思うよ？」
店長の顔は、意地悪く歪んでいた。遂には、殺しきれずに、笑い声を口から垂れ流す。
「……どういう意味ですか？」
「怒るなよ。私はただ気になっただけだ。ついでに、お前の意見でも聞ければ、と思ってな」
「……まあ、確かに、突然でしたし、色々腑に落ちない点もあります」
「一、私はな、やっぱり並々ならない理由があると思う。正直、正

直に言うぞ。ゴーウェストが、ＳＶとしてやって来た。堀が来れないという事になって、すぐにだ。まるで示し合わせたみたいに、入れ替わりにやって来た。どうだ？　タイミングが良すぎるだろう？

そう思わないか？」

「誰かが、何かを仕組んでるとでも？」

ふう、と店長が長く、ゆっくりと紫煙を吐き出した。

「仕組んでる、か。なるほどな、それもアリか」

「……アラクネが出てから、何か、おかしいですよね。堀さんは世界中でソレが、群れを作って現れたって言ってました。例外的、おかしいって……」

「削られた戦力、新しい戦力。同じ時間、同じ場所か」

ははっ、と店長がおかしそうに笑う。

続きは言わなかった。

一にも分かっていた。

同じ時間、同じような、群れを作ったソレ。負傷した勤務外、死んでいった勤務外。

新しい戦力。

タイミングが良すぎる。まるで台本どおりに、事が進んでいる。しかも、その台本は荒唐無稽で、出鱈目で、滅茶苦茶で、幼稚園児のお遊戯会のそれの方がまだ絶対的にマシじゃないか、とそう思うぐらいの代物かもしれない。

一はそう考えた。寒くなった。

「まあ、今は別に良い。だが、いつか、ハッキリさせないとな」

一は答えなかった。

何を、どう、誰の事を、誰が、どうやって、どのように、誰のために、誰のせいで。ハッキリさせるというのだろう。

一には、分からなかった。

「おい、水取って来い」

一が読んでいた雑誌から視線をずらす。
ずらした先には、腕を組んでいる三森。尊大そうに、一の傍に立っていた。一は読んでいた雑誌に視線をずらす。
「シカトすンじゃねえよ。早く持って来い、おら、ぶっ飛ばすぞ」
「……自分で買えば良いじゃないですか。っていうか、取って来いって言いませんでした？」
「細けえな。先輩は敬えよ、私は立ってるのも辛いンだ」
「じゃ寝といてください。俺本読んでるんで」
そう言って、一は次のページを捲った。
「……いー度胸じゃねえか。立てよ、根性叩きなおしてやっからよ」
「分かりましたよ……」
聞こえないように舌打ちしながら、一が椅子から立ち上がる。
「何だ？　本当にやンのか？」
「構えないで下さいよ。水なら何でも良いんですか？」
「……おう」
「じゃ仮眠室で寝ててください。静かに」
静かに、を強調。
一がバックルームを出て、店内のペットボトル飲料のコーナーへ。適当なミネラルウォーターと、炭酸飲料を手に取り、ジェーンに声を掛ける。
「レジ頼む」
「オッケー。ア、それ、アタシの？」
「いや、三森さんの。水が飲みたいんだってさ」
「……やっぱり今は無理ネ」
「意地悪すんなよ。お前にも何か買ってやるから」
不承不承、ジェーンがカウンターに入り、ペットボトルを手に取る。一の炭酸飲料のバーコードを通し、三森の水に手を伸ばし、しっかり掴んでから、床に落とした。静かな店内に、派手な衝突音が長く尾を引いて響き渡る。
「……Ｏｕｃｈ」

「……まあ、俺のじゃねえから良いけどな」
「お兄ちゃんだから、マケテあげる」
「仕事に私情を挟んじゃ駄目。ほら、ぴったし二百五十円な」
「……」
「何だよ？　ありがとうは？」
無表情で一から小銭を受け取り、ジェーンが無言でレジを打つ。
大袈裟に溜息を付いた後、
「オツリ渡すときに、手掴みたかったノニ」
「せめて優しくしてくれな」
もう一度、軽くお礼を言って、一がバックルームに戻る。バックルームでは、三森が椅子に座って雑誌を適当に捲っていた。
「おせえぞ」
「寝てれば良かったのに」
言いつつ、一が少し拉げたペットボトルを三森に渡した。
礼も言わずに、三森が蓋を開けて水を飲み干す。一分もかからずに、ペットボトルは空になった。
「……」
「何見てンだよ」
いえ、と三森をなるべく見ないようにして、一が呟く。そして、
「ああ」と思い出したようにもうひとつ。
「百円です」
三森が仮眠室に入り、ソファに寝転がった。
「あー、あったまいってえ……」
「百円ですってば」
一が仮眠室に入り、ソファに寝転がっている三森に声を掛ける。
「あ？　私に言ってたのか？　てっきり」
「てっきり何ですか？」
「まだ何も言ってねえだろうが」
「とにかく、水代。おごったわけじゃないんですから」
はい、と一が手を出した。

「……お前も一応は勤務外だろ？　私らは金払わなくても良いンだぜ？」

悪びれずに三森が言う。

確かに、オンリーワンに所属する勤務外店員は、店の商品を無償で受け取れる。勝手に取っても良いよ、と、公認された万引きのようなものだ。嘘みたいなシステムで、馬鹿げた決まりごと。だが、命がけでソレと戦う勤務外にとっては、当たり前の事実。むしろ足りないくらいだ、そう語る勤務外も中にはいるらしい。

だが、それでも。

「おかしくないですか、やっぱ」

「……タダで何でも持ってけるのが、か？」

「だって、そうじゃないですか」

「そんな事はな、ソレを一匹でも自力で倒してから言いやがれ。私らがどれだけ命張って、お前ら一般の、ああ。いや、今はお前もそれだったな。弱っちいけど。ん？　あれ、私何を言おうとしてたっけな……」

「お前ら一般の、ですよ。続きをどうぞ」

皮肉っぽく、一が言った。

「ああ、そうだった。でだ。命張って、一般の奴らの前に立って、ソレと殺し合ってやってるんだよ私らは。そンで、命賭けた結果がコレだ。こんなんだよ」

三森が空のペットボトルを、一に向かって投げた。格好つけようとして、一が片手で掴もうとする。弾いて、飛んで、ペットボトルは床に転がる。

「私らの価値なんてそんなもんだ、あっけねェだろ？」

「まあ、そうですけど。でも、そういう事分かってて納得したうえで、三森さんは勤務外になったんじゃないんですか？」

「知った風な口利くンじゃねえぞてめえ。私はな、何も分かってなかったし、何一つ納得もしてなかったよ。次調子乗ったら半殺しにすンぞ」

「……つまり、商品を店から貰うのは、金を払わなくて良いのは、当然の権利って言いたいんですか？」
「それがどうしたってンだ」
「別に。どうもしないですよ」
「おい、含みのある言い方はやめろ。私がイラついちまうじゃねえか」
三森がソファから起き上がる。
「ビビらせようとしてるつもりですか？　別に、構いませんよ。殴りたけりゃ殴れば良いじゃないですか、勤務外ってのは何やっても許されるんでしょ？」
「分かった、分かったよ。相変わらずお前は私を怒らせるのが上手いって事がさ」
「ははっ、歯でも食いしばっておきましょうか？」
「意味ねえっての。私が殴ったら、ンなもん関係なくなるからな。歯でも顎でも心臓でも脳味噌でも、どこでも好きなとこを精々食いしばっとけ」
一が三森を睨み、三森が一を睨む。
「分かりました。けど、俺だって、黙ってやられっ放しにはなりませんよ。お望みどおり、どこでも好きなところを食いしばってやりますから」
「言ってろ」
吐き捨て、三森が立ち上がる。
一が身構えたが、既に三森はスイングのモーションに入っていた。拳を一に対して振りかざす。容赦なく、慈悲もなく、一片の迷いもなく。

「痴話喧嘩もそこまでにしとけ」

ぴたり、と三森の拳が止まる。
煙草をくゆらせながら、店長が一たちの間に割って入った。

「仲が良すぎるのも、悪すぎるのも考え物だな……」
ぼやきつつ、店長が三森の肩を掴む。
三森の拳は、一の鼻のすぐ手前、一センチも間は空いていなかった。
「そんなんじゃねえ、ただの新人教育だよ」
「はっ、三森、お前がか？　柄じゃない、やめとけ」
店長と三森が視線を交わす。紫煙を余裕たっぷりに吐き出し、店長がニヤついた。三森は舌打ちして、「分かったよ」と、店長の手を肩から振りほどく。
「また命拾いしやがったな」
三森が乱暴に、一の肩を突き飛ばす。
「ってぇ……」
よろよろ、と一が情けなく後ずさりした。
「おいおい、一の肩が外れたらどうするんだ」
「ンな強く殴るわけねえだろっ」
「んん？」「え？」
「……何か変な事言ったか？」
「別に」店長がまた笑った。

一が雑誌を読み始めて一時間。
ジェーンが店内の掃除を始めて一時間。
三森が仮眠室で眠り始めて一時間。
店長が椅子に座り始めて一時間。
一時間経ったところで、オンリーワン北駒台店に電話が来た。ベルが鳴る。りんりんと鳴り続けるベル。
一は雑誌を閉じ、ジェーンは掃除を中断してバックルームに戻って来た。三森は目を開け、店長は黙って電話を見つめ続ける。
「取らないんですか？」
焦れた一が、店長に声を掛けてみた。

焦った素振りも見せずに、店長が煙草を吹かす。
「取ろうか？」
「ボス、カキューの用かしら？」
「さてな」
店長がやっと受話器を手にした。
「もしもし」
決まり文句の後、店長と受話器の向こうの誰かが会話を始める。
その様子を慣れた風に、三森が見ていた。
「また出やがったのかね」
言って、三森が煙草に火を点ける。
「落ち着いてますね」
「あ？　そりゃ、そうだろ。もう何年も勤務外やってンだからな。慣れない奴は死んでくだけだ。何だよ？　お前はまだまだってか？」
三森が目だけで笑った。バカにしているような、そんな視線を受け、
「……死ぬまで慣れませんね。慣れたくもありませんけど」
一が返す。相変わらず皮肉っぽかった。
もう誰も喋らない。
店長の事務的な声だけが、バックルームに聞こえていた。やがて、その声も聞こえなくなる。電話が終わった。
「今日のオペレーターは新人だった。噛みまくって面白かったぞ」
店長が振り向いて、煙草に火を点ける。
「ボス？　で、どうなの？　出たの？」
ジェーンが責めるように口を開いた。
出る。出ない。
勿論、それはソレのこと。
「結論から言うと、出た。出ている。ソレは単独で駒台にいる所を観測されたらしいな」
三森が一歩踏み出す。
「種類は？」

「恐らくは飛行タイプだ。出現場所がビルの屋上や、電波塔の近くだからな。確定はしていないが、オーソドックスな鳥獣のようなモノだろう」
「鳥、ですか？」
「……お前には関係ないだろう」
店長が一を三白眼で見つめた。というか睨んだ。
「それで？　そいつをやっちまえば良いのか？」
「イージーな考え方ね。サル……サルの方がマシかしら」
「ガキは黙ってろ」
煙を吐き出し、店長が椅子を回転させる。くるくると。そして止めた。
「別に無視しても良いらしい。被害はゼロだそうだし、フリーランスも動くと言う話だからな」
「おいおい、マジか。どうかしてンじゃねぇのか、この街はよ……」
「まあ、アラクネと言う神話クラスの怪物と、クソみたいな女神さまが来られたからな。フリーランスの連中が嗅ぎ付けるのも無理は無いだろう」
その会話を聞いて、「あのー」と一が手を上げる。
「フリーランスって、何ですか？」
「面倒な連中だよ」
「厄介だ」
「クールじゃないわね」
一以外の三人が、それぞれ一言で説明してくれた。
「全く分かりません」
「分からなくても問題ない。それより飛行型のソレについてだが、今回は近畿支部から、私たちに任せると言う類の指示を貰った」
「つまり？」
椅子を回転させ、店長が一たちの方を向く。楽しげに、愉快気に、面白そうに。
「好きにしろって事だ」

「……じゃ、私はパス」
三森が仮眠室へと足を向けた。
「意外ですね」
心底意外そうに、一が声を発する。
「……別に私は好き好んで戦ってるわけじゃねえし。抵抗もしない、被害も出してねえソレが相手じゃつまンねえよ」
「――逃げるの？」
ジェーンが、後ろを向いた三森に、背中合わせの状態で声を掛ける。と言うよりも、挑発じみた台詞だった。
「良く聞き取れなかったンだけどよ、もっぺん言ってくれねぇか？」
三森は振り向かず、ジェーンに問いかける。
ふっ、と薄笑いを浮かべ、たっぷり間を空けて、
「チキン野郎」
ジェーンが言い放った。
「ジェーン！」
「エ、あ、何、お兄ちゃん？」
何故か一が怒り出した。一はジェーンに近づき、彼女の真っ白い頬っぺたを抓り、引っ張りあげる。
「ＡＨ――！」
「そんな言葉どこで覚えたんだよ！　下品だからやめろ！　やめてくれ！」
「ＮＯ！　ＮＯ！　ＳＴＯＰ！　ＳＴＯＰ！」
真っ白い頬っぺたは真っ赤になっていた。
「分かったか！？」
ジェーンは声も出せずに、必死に首を縦に振る。
満足し、一が手を離した。
「……お兄ちゃん……ヒドイ……」
ジェーンは涙目になって、頬を押さえる。しゃがみ込んでいじけ

ているその姿は、年相応のそれだった。
「あ、悪いごめんすまん。やり過ぎちゃったか？」
一が手を差し伸べる。
と、無言でジェーンに払いのけられた。
「理解した。理解したワ。お兄ちゃんはやっぱり、まだアタシを子ども扱いしてる」
ジェーンが立ち上がる。
「そりゃそうだろ。だってお前まだ子供じゃん」
「シャラップ、お兄ちゃん。良いわ、オーケー、こうなったら分からせてあげる。アタシのクールさを。ソレをノックアウトさせて、お兄ちゃんの前まで持ってきてあげる。そうすれば分かるでショ？」
「何言ってんだ？　そもそもだ、ここにいるソレはまだ何もしてないらしいじゃないか」
ジェーンが人差し指を一に向ける。
「してからじゃ遅いのヨ、トゥーレイト！　デンコーセッカ、センテヒッショー。フリーランスもソレに仕掛けるつもりならなおさらヨ！」
「……だからって」
「ボス！　行っていい？」
真っ直ぐにジェーンに見つめられた店長は、一瞬考えるようなフリをしてから。
「構わん。好きにしろ」
「アリガト！」
礼を言うと、一目散に、すぐさまバックルームからジェーンが飛び出した。あまりのあっけなさ、速さに一同の動きが止まる。
「ちょ、ちょっと！　店長何言ってんですか！　ジェーンはまだ子供なんですよ！」
だがそれもすぐのこと、一が店長に詰め寄った。
「構わんと言っただろう。私の言う事が聞けんのか？」
「だって！」

「五百九十一」

「は？」

「ゴーウェストが二年間、向こうでやった数だ」

店長がパソコンのマウスを動かす。モニターには、英語で記された文書が表示されていた。

「これは？」

「アメリカ支部からのメールだ。ゴーウェスト関連のデータ付きのな。しかし、なるほどな。ようやく納得できた。あんな小さなクソガキをよこす訳ないよな、くくっ」

店長は一人で勝手に納得し、独りで勝手に笑う。

「説明してください」

一が店長の襟を掴んだ。

それでも店長は余裕の表情を崩さない。

「……お前に話す内容として、相応しいかどうかは分からんが、面白そうだから簡単に教えてやる。あいつは、ゴーウェストはな、エースだよ。勿論、勤務外としてな」

「エース……？」

「ああ。勤務外。対ソレ。反人外。怪物殺し。つまりはそういう事だ。五百九十一、この数字は伊達じゃないぞ。雑魚も含まれてるかもしれんが、そんな数のソレをあいつは殺しきってるんだ。たった二年で、しかも比較的ソレ被害の少ない向こうでな。はっはっは、笑わせてくれるよ、ジョークか？　アメリカンジョークか？　タチが悪いな、外人は。なあ、三森、どう想う？　どう思った？」

つまらなさそうに、退屈そうに。

「面白いじゃねェの。私に向かってあそこまでメンチ切りやがったンだ。兄妹揃ってムカつくったらねえよなあ」

「どうする？　三森、お前も行くか？」

「ああ」と、短く答え、三森が首の骨を鳴らした。

穏やかでない空気が、雰囲気がバックルームを支配していく。
「……冗談ですよね？」
一人だけ馴染めない一が、そんな言葉を口にした。
「自分の、妹みたいに接してきた女の子が、ソレ殺しまくってる勤務外過ぎる勤務外だって事がか？　一、悪いが嘘じゃない。お前が日本に来て二年、ゴーウェストが向こうに残って二年。二年あれば人は大抵のモノになれるぞ。一。これは真実だ。そして一、手を離せ。服に皺が寄るだろう」
「……っ！」
何も言わずに、ジェーンの後を追うように一がバックルームを飛び出す。
「あの野郎、傘も持たずに行きやがった」
「三森」
店長の声に三森が振り向く、と、同時に傘が投げられた。安っぽい作りの、ビニール傘。どこにでも転がっていそうな、ただの傘。
「何度見ても、それが最強の盾だとは思えないな」
「……あいつに届けろってか？」
「いや、お前に任せる」
「私に？　ふーん」
「好きにしろ」
「あっそ」
駒台は今日も晴れだった。

ガーゴイルは旅をする　2

時刻は昼前。場所は駒台。
現れたソレは鳥型。
北駒台店からは、ジェーン・ゴーウェスト、一一、三森冬が勤務外として出勤。

「何してンだ」
店を出た三森は、店の前で煙草を吸っている一に声を掛けた。一が結構な勢いで飛び出していったので、近くにはいないだろうと踏んでいたのだが。三森の予想に反し、一は落ち着いていた。
「あれ、どうしたんですか？」
「お前らに振り回されてンだよ。……ほら」
三森が傘を差し出す。
「……今日は天気が良いんですけど」
「茶化してンじゃねェ。チビを追っかけなくて良いのか？」
「煙草吸ってたら、急に落ち着いちゃって」
一が短くなった煙草を、店前の灰皿に捨てる。
「……とにかく、適当に歩き回ってみます」
「適当に？」
「ジェーンがどこ行ったのかも分かりませんし、今回のソレは飛べるんでしょう？　ジェーン以上に行方が知れませんよ」
体を伸ばし、一が眩しそうに空を見上げた。
「それじゃ、傘。どうもです」
三森からビニール傘を受け取り、一が歩き出す。
その後姿を、イラついた様子で三森が眺めていた。一が目の前の信号を渡りきったところで、
「一人でウロチョロすンじゃねえよ」

呟いて三森が駆け出した。

見渡せば人。
見回せば店。
「Ｗｈｅｒｅ　ａｍ　Ｉ？」
眩しいほどの金髪、ちんまりとした体、ウエスタンな格好。ただでさえ人の視線を集めてしまう異国の少女が、お昼前の、唯でさえ人の多い駒台の商店街のど真ん中できょろきょろ、うろちょろしていれば、それは尚更だった。
行き交う人。立ち止まる人。
本人は気付いていないが、いつしかジェーンを囲むようにギャラリーが集まっている。
「ソレは、どこ……？」
ジェーンが探しているのはソレ。
「君、どうしたの？」
見かねたギャラリーの一人が、ジェーンに話しかける。
スーツ姿の中年、眼鏡を掛けた、「良いお父さん」風の男性。
「？　Ｍｅ？」
「あ、そうか、しまった、困ったな……」
「……何か用？」
訝しげにジェーンが尋ねた。
日本語が喋れる異国の子供。男性は戸惑ったが、すぐに落ち着き払って、まるで実の子に向けるような優しい声で、
「お母さんと、はぐれたのかい？」
優しく、柔らかにそう言った。
「ＨＡ？」
ジェーンが探しているのはソレ。

「ビル、デパートの屋上、電波塔」
「ソレが出た場所ですね」
一と三森は、むやみやたらに歩き回るより、ピンポイントに思い当たる場所を探す事にした。北駒台店を出て、目の前の信号を渡ってすぐの駐車場。そこで二人並んで、煙草を吸って、知恵を絞っている。
「全く分かンねえ」
「諦めるの早すぎじゃないですか？」
「私は前線向きなんだよ。こういう事はお前が考えろ」
絞ろうとしているのは一だけだったが。
「……うーん。高い場所ですよね、ソレが出たのって」
「まあ、鳥型らしいからな」
「なら駒台で高さのある建物を回れば、ジェーンか、ソレに会えるかも知れないですね」
「会えないかも知れないけどな」
「どこか知ってる場所ありませんか？」
「ないな」
流れる沈黙。
「やたら否定的ですね……」
「ごちゃごちゃ言ってねえで、こういうのは動いた方がはええんだよ」
「さっきは適当に動くのは危険だ、とか言ってたのに」
「るっせぇ。おら、行くぞ。とりあえずは駒台デパートが近いな。そこに行くぞ」
三森が歩き出す。
その後に一が付いて行く。
「なるほど、犯罪者は現場に戻るって奴ですね」
「……。ああ、お前もやっと分かってきたじゃねェか」
「三森さん、何だかんだ言っても、色々考えてくれてんですね。正直嬉しいってか、ビックリですよ」

無言で煙草に火を点ける三森。
不覚にも、一は、この人かっこいい、とか思ってしまう。
「上手くいったら、何かおごりますよ」
「よせよ、気にすンなって」
「三森さんって、もっと考えなしで、戦闘狂ってかマニアックっていうか、ちょっとアレな人かなーとか思ってた自分が恥ずかしいですよ」
「よし、お前後で店の裏に来やがれ」

「あー！」
「どうしました？」
「いや、叫んでみただけ」
「……驚かせないでくださいよ」
看護師が胸をなでおろす。
「ごめんごめん。けどさ、こう、なんつーの？　ずっと病院にいたら体が鈍るし、退屈だし」
「私は糸原さんが入院してから、退屈しませんでしたよ」
「ありゃ、それって皮肉？」
にっこりと、糸原に笑顔が降り注がれた。
「あのヤロー、一回しか見舞いに来ないんだもんなあ、あーあ。お姉さん嫌われてんのかなー」
「さあ、どうでしょうねえ」
「後さ、何か最近出番が「まあまあ、明日退院なんですから、それまでの我慢ですよ」
大部屋に沈黙が流れる。
「最近出番が「あなたの怪我の治り具合の早さときたら、先生も驚いてましたよ。歴代ベストテンには名を連ねる事になるかもしれないって言ってました」
「……あ、そう」

「それじゃ失礼します」
カーテンが閉められた。

駒台デパート。
正式名称は、あるにはあるのだが、駒台住人の殆どはそう呼んでいた。無論、駒台に越してきた一も、昔からいる三森もだ。十三階層、プラス地下、プラス屋上の、駒台屈指の高さを誇る建物。屋上からの眺めは、訪れる人々によれば、中々評判が良いらしい。勿論、品揃え、サービスに関しても抜かりはない。地下は巨大な食料品売り場。その他のフロアも、生活用品、家具、電化製品、おもちゃ、本、服飾品、とバラエティに富んでいる。屋上の一つ下の階、つまり十三階には、中華、フレンチ、イタリアン、和食、エトセトラエトセトラ。と、多種多様な飲食店が軒を連ね、そのフロアの一角、隅の方には、クラシック音楽が流れる、小さめだが感じの良い喫茶店がある。
一も、レストランで食事、下のフロアで買い物と、何度か利用していた。事もあって、広い店内でも迷うことなく、一と三森は屋上へと向かう。
駒台デパートには、エレベーターが数基設置されているが、屋上までは直接繋がっていない。一が聞いた話によると「安全上の問題」だとか「設計上のミス」だとか。
とにかく、屋上に上がるには、一旦十三階まで行って、そこからはフロアの真ん中に作られた螺旋階段を上らなければならない。
「来るたびに思うんですけど、面倒な作りですよね」
「だな。あー、これで誰もいなかったら無駄足だよホント。お前責任取れよな」
「はいはい、ってあっ、三森さん。ここ禁煙ですよ」
「うざってェな、分かってンよンな事はよ」
ぼやいて、三森が指と指を擦り合わせ、小さな火を灯した。煙草

を吸うつもりはないだろうが、手慰め程度の行為だろう。
　一はスプリンクラーが作動するのではないかと、内心焦ったが、そんな事は起こらなかったので、安心半分。もしかしたら警備上のミスでもあるんじゃないかと、不安半分、息を吐いた。
　ダラダラと歩く三森より先に、一が螺旋階段の入り口へ辿り着く。
「遅いっすよ」
「ン……」
　遅いというより、完全に三森の動きが止まっていた。
　視線は一点で固定されている。何かに気を取られているのか。
「……やる気あるんですか……」
「分かってンよ」
　やっと一に追いついた三森は、乱暴に螺旋階段の入り口の扉を開け放ち、三段飛ばしで階段を駆け上っていく。
「おらっ、早くしろよ！」
「小学生かよ……」
　あきれながらも、一も三森に続いて駆け出した。

　屋上には誰も、何もいなかった。
　ただただ、まっさらなコンクリートと、周囲に張り巡らされた背の高いフェンスしか存在しない空間。幼児向けの遊具などはなく、一応、申し訳程度に簡素なベンチ――滅茶苦茶に壊されているので、ベンチだった物が正しい――が端に置かれている。後はもう本当に空だけ。
「平日だからか？」
「……それにしたって、子供連れのおばさん連中はいつもいますけどね」
　会話しながら、二人は屋上の端に向かって歩いていく。
「久しぶりに来たけど、やっぱ、こっから見る景色は良いですね」
「……そうだな。あ、ここなら煙草吸っても良いだろ？」
「駄目って言っても吸うんでしょ？」

「あったりまえだろ。邪魔したらこっから叩き落すぞ」
有り得ない話ではないだけに、一の足が震えた。フェンスが何とも頼りなく見える。話題を変えるべく、一が頭を働かす。
「あ。被害が出てないって言っても、ソレが出たって場所だから誰も寄り付かないんですかね？」
「そうかもな。勿体ねェ話だけどよ」
「混んでなくてラッキーじゃないですか。俺は二年近く駒台にいますけど、こんなん初めてですよ。静かに、ゆっくりと最高の景色を見れるなんて」
「大げさな奴だな」
「……三森さんは、小さい頃から駒台に住んでたんですか？」
何気ない、なんでもない質問。
「ああ」
「あー、それじゃあもうとっくにこっからの景色なんて見飽きてますよね。ソレもいないし、ジェーンもデパートにはいなかったし、違う場所に行きますか？」
「ああ。あ、いや、もう少し」
「気、使ってくれなくても良いですよ？」
「誰がお前に気を使うかよ」
言って、三森が火の点いた煙草を投げ飛ばす。フェンスを越えて、中空に、まるで飛行機雲のような、白い線を描きながら、煙草が落下していった。
「せめて火ぃ消してから捨てて下さいよ」
「るっせぇ。行くぞ」
三森が歩き出す。
一も歩く。
「……勿体無いなー」
「何がだよ？」
扉に手を掛けている三森が一を睨んだ。
「いや、俺と三森さんの貸切状態だったのにって」

「……馬鹿か、行くぞ」
今度は五段飛ばしで三森が螺旋階段を下りていく。
一も習うように、軽快に段を踏んでいった。

一方その頃。
「Ｗｈｅｒｅ　ａｍ　Ｉ？」
以下省略。

螺旋階段を降り切った二人は、足を止めて次の候補を考えていた。
「ここじゃないなら、電波塔、ですか？」
「こっからじゃ遠いな、私は行く気しねェ」
「んなはっきり言わなくても」
「腹減ったから動く気しねェ」
「……あんま変わらないですね」
しかし、と、一が周囲を見回す。
「何探してンだ？」
「時計です」
「……ケータイ見りゃ一発だろうがよ」
三森がポケットから、赤い携帯電話を取り出した。
「持ってないんですよ」
「はあ？　じゃあ誰かと連絡するときはどうすンだよ」
「一応、家に電話は置いてます」
「面倒な奴だなお前はよ」
「あ、今何時ですか？」
「もう十二時回るな」
「じゃあ三森さんのリクエストにお答えして、何か食べていきましょうか」
一がとある方向へ歩き出す。

付いていかない理由も見当たらなかったので、三森も歩く。
「つーかさ、何でお前と飯食わないとならねェんだ？」
「ご飯食べるだけじゃないですか。……うわ、何かもう鬱になりそうだ。三森さん、俺の事そこまで嫌ってたんですか」
「あ？　いや、ちげェよ。だって、何かアレじゃねェ？」
「アレ、とは？」
「ここ来てさ、屋上行って、ンで飯だろ？」
「まあ、今の所は」
「まるで、何かこう、まるで……」
「三森さん、ここで良いですよね」
一は牛の顔が描かれた看板を指差していた。
「何だここ」
「焼肉屋さんですけど？」
「何でだよっ！？　しかも良いですよねって断言してンじゃねえぞ！」
「ええっ！？　何で！？」
他のお客に死ぬほど注目されていた。

「……」

結局、一は候補を何軒か回ったが、どれも店先で三森が喚いて、人に注目されての繰り返しだった。最後に、仕方なく寄ってみた喫茶店。
『しょうがねェから、ここでいい』
と、三森が言ったので、成り行きというか、運命というか、都合仕方なく二人は喫茶店に入ることになる。客は一たち以外には誰もおらず（お昼時なのに）、サングラスを掛けた、表情も年齢も分かりづらいマスターへ、無条件で奥のテーブルへ案内された。屋上とまではいかないが、窓際の眺めの良い席だった。一はコーヒーとミックスサンドを。三森はミルクティーとオムライスをそれぞれ注文。

「……」

注文した商品が届く間も、と言うか、店に入ったときから三森は口を開かなかった。注文するときも、メニューを指差して頼んだくらいだった。

注文した料理はすぐにテーブルへ運ばれ、やはりお互い無言で食べ始めた。一はそれほど空腹を感じていなかったし、元から小食なので、そこそこの満足感を得られた。三森が食べ終わる間、ＢＧＭのクラシックを聴きながら、窓の外に思いを馳せ、少しの間、ソレの事を忘れてしまうぐらいに、ゆっくり出来た。

「……」

そして今。

三森もオムライスを食べ終わり、ミルクティーも飲み終わったのだが、「よし、行くか」とは言ってくれない。言おうとしない。かと言って、「そろそろ行きませんか？」と一が言おうにも、何となく言えない雰囲気を三森は醸し出していた。

一は助けを求めるように、マスターへと視線を遣る。

マスターはカウンター内で黙々と、豆を炒ったり混ぜたりしていた。

一心不乱に。

ならば、と、一は次にフロア側へ視線を移す。

平日のお昼時。なのだが、客はまばらだった。多分に、デパートの屋上に現れたソレ、情報が広まって、大概の人々は警戒して近寄らないのだろう。

「何きょろきょろしてンだよ」

やっと口を開いた三森に対して、一が言葉を選ぶ。

「……お客さん、少ないですね」

大した言葉は出てこなかった。

「知ってンよ」

「じゃなくて、三森さん、機嫌悪くなってません？」
一が斬り込んでみた。
「かもな」
斬り返された。
「理由、聞いても良いですか？」
「……話してもいーけどよ、それじゃお互いマヌケになっちまうな」
「俺は構いませんけど」
「私がイヤなンだよ」
「じゃ、理由は聞きませんから、機嫌直して下さいよ。それか、別行動取りましょう。やり辛くってしょうがないですよ」
一が、少しの皮肉を込めて言ってみる。すぐには答えは返ってこない。一は三森の様子を窺う。
三森は窓の向こうに視線を遣りながら、呟く。
「私もガキじゃねェんだ。機嫌ぐらい直してやンよ」
「あ、そうですか」
「……お前ってなんかムカつくンだよな」
二人は席を立ち、会計を済ませ、十三階のフロアに戻った。会計のときに、「おごったら機嫌直してくれます？」と、一が三森に聞いたら、物凄い目つきで睨まれたのは余談の中の余談。
「さて」
「次はどこへ行きますか？」
「……これで映画でも見に行ったら完璧だよな」
「何がですか？」
三森が一の脛に、ローキックを振り下ろす。
「そンじゃ、一旦店に戻るか？　もうとっくに片がついてるかもしれねェしよ」
「……困るなあ」
ふと、一が視線を螺旋階段に移した。丁度、階段の前の扉が開いたところで、誰かが降りてくるのが見える。

――綺麗な、男だった。

否、男と言うよりは、少年の方が正しい。背は低く、色は白く、利発そうな顔立ち。少年は白いパーカー、青いジーンズと簡単な格好だったが、充分に格好がついている。髪の色からすると、彼は日本人ではなさそうだった。少年は薄い、金色の短い髪をかき上げて、扉を見ている。

もう一人、今度は綺麗な男が降りてきた。その男は背が高く、腰まで伸ばしている程の長髪だったが、汚らしさは皆無だった。茶色のファーコートを羽織り、黒のカーゴパンツ、ベルト付きのスタッズチェーンミュールを履きこなしていた。

「ホストみてェ」

聞こえないように、三森が呟いた。

少年と男が並ぶ。少年、と、男、その前に美をつけても差し支えはない。

美少年と美男子。

並ぶ姿はまるで一枚の絵画のようだった。

「……行きますよ」

「お。何だ？　コンプレックスか、コンプレックス感じてンのか？」

「二回言わないで下さいよ」

「ま、かっこ良いっちゃ良いよな。顔も良いし、服も中々だし、タッパあるし、金髪だし外人だしな。へっ、その辺突っ立ってるだけで女が勝手に寄ってくるぜ」

三森が男たちを横目で見ながら、退屈そうにしている。

「やっぱ、ああいう人がタイプですか？」

「あ？　私のか？」

「まあ、そうですね」

曖昧に一が返した。

「……知りたいか？」

歩きながら、三森が笑う。

間を空けて、一が三森の後を付いて行く。
「いえ、話の流れで聞いてみただけです」
「ちっ、つまンねえ奴だな。いじり甲斐もからかい甲斐もねえ」
「すいませんね。あ、今何時ですか？」
「ン」
三森が携帯電話を取り出す。
「一時前」
「どうもです。はあ……ジェーンどうしてるかな……」
「つうか、私はお前の時計じゃねェぞ」
「時間ぐらい聞いても良いじゃないですか」
「ヤだよ面倒くせえなバカ」
一の眉が傍目では分からない程度に動いた。
「ちなみに」
「ンだよ？」
「俺のタイプの女性は煙草を吸わない人なんですよ」
ふーん、と呟いて三森が歩き続ける。歩みは止めない。
「それで、黒髪で、背が高くて、家庭的で、すっげえ上品で、優しくて」
「ンな女この世には一人もいねえよ」
「あの世にはいますかねえ」
「行った事ねェから分かンね」
「ちょっとで良いんで、確かめてきて下さいよ」
「てめェが逝ってこい」
三森がエレベーターのボタンを押す。二人は無言で、エレベーターが来るのを待っていた。少し経つと、１３のランプが点灯する。
まず三森が、次に一が乗り込み、「閉」ボタンを三森が押した。
閉まっていく扉。
「すまない」

閉まろうとする扉を掴む手。白く、細い指だった。
扉は開き、長い金髪を揺らしながら、男がエレベーターに入ってくる。
小走りで、もう一人少年も。
「……」
一がつまらなさそうな顔をした。
三森は、男たちからは見えない角度で顔をにやけさせている。
美、少年と美、男子。
先ほどの男たちがエレベーター内に乗り込んだ。さほど広くないエレベーターには、一と三森、少年と男、四人の人間が詰められている。男たちが階層ボタンを押さないところを見ると、一たちとは行き先が同じらしかった。
地上一階。
十三階から一階まで。
息苦しさを覚えた一は、顔を上げて階数表示をひたすらに見つめる。
「……」
柑橘系の香りが、一の鼻を掠めた。嫌な匂いではなかったが、それがどうやら男の付けている香水のモノだと気付くと、一が顔をしかめる。
「収穫無しだったね」
「そうですね」
狭い空間、静かな空間。
知らない人と一緒に閉じ込められる空間。
「ここにいないって事は、後は、どこだろうね」
「候補は殆ど回りましたからね」
エレベーター。
一は知らない人とこれに乗り合わせるのが苦痛で堪らなかった。
おまけに、それが自分よりも、どう見ても誰が見ても格好良い同性だとすれば尚更だった。

――コンプレックス。
一は先の、三森の言葉を思い出す。確かにそうかも知れない、と一は考える。
「難しいものだねえ」
「全くです」
男と少年は、小声で話しているが、こんなところでは、まさに詮無きこと。嫌でも、一たちの耳に二人の会話は入ってくる。
「ああ、そういえばこの街には山が無かったっけ？」
「駒台大学の裏の山ですね。ですが、建物は無かったと記憶しています」
「洋館があるって聞いたよ？」
階数表示は9を指す。
「そうでしたか？　いや、貴方が言うのなら、そうなのでしょう。それでは、そこに行きましょうか。馬も退屈してるでしょうし、候補もそこが最後です」
「オッケーオッケー。でも狭いし、小さいし、そこまで綺麗じゃない街だよね」
「好都合でしょう。大きければ、その分候補も増えます。今回のケースがトウキョウだとしたら、鳥肌が立ちますね。怖気もしますよ」
「そだね、あそこはでっかいビルとか多いから。一個一個調べていったら日が暮れちゃうよ」
「全くです」
階数表示は4を指す。エレベーターは止まる気配を見せず、途中で乗客が乗る気配も無く、一直線に地上一階を目指す。
「……楽しみだね」
冷たい声。
「そうですね」
冷たい声。
「久しぶりだからね」
楽しそうな声。

「ええ」
楽しそうな声。
「ガーゴイルだっけ？　結構強いのかな？」
「分かりません」
「ハッキリ言うなあ……。ま、どっちにしろ良い経験にはなるよね。だってさあニホンでソレと戦うのは初めてじゃないか」
階数表示が1を指し、扉が開いた。

「どちらまで？」
「駒台大学だ。飛ばしてくれ」
タクシーの運転手は頷くと、車を発進させた。鈍いエンジン音が車内を包む。
「間に合いますかね？」
「知らねェよ」
後部座席に一と三森が並んで座っていた。
窓の外を不機嫌そうに、三森が睨むように眺めている。
「……さっきの人たち、勤務外、じゃないですよね？」
「知らねェ。けど、見たことない連中だったからな、オンリーワンの勤務外じゃねー事は確かだ。フリーランスじゃねェの？　ああ、畜生、ムカつくったらねーよ」
「あの二人。ソレだとか、日本で戦うのは初めてだとか、色々、っぽいことは言ってましたね。何か、強そうには見えませんでしたけど」
一が冗談っぽく言った。
三森が一をジッと見る。
「言うようになったじゃねェか」
「……すいませんでした」
一が頭を下げた。
「蜘蛛に勝ったからって調子に乗ンな。アレはお前の力じゃねェ、傘の力だ。お前は強くも何ともなってない、何にも変わってねェンだからな」
「……はい」
頭を下げたまま、一が謝る。
その姿を見て、罰が悪そうに三森が頭を掻いた。
「ま、何だ。その、わかりゃ良いンだよ。ああ、後な、フリーラン

スはヤバイって事も覚えとけ。奴らはあんなナリしてやがったが、ンなの関係ねェ。外見が人間でも、中身は人間じゃねえからな」

「どういう意味ですか？」

「……お前、勤務外の私をどう思う？」

三森が自身を指差す。

一は顔を上げ、じっと三森を見つめた。三森の姿。短い金髪、赤いジャージ、背丈は一より小さい。

それと。

「早く言えよ」

「目つきが悪いですね」

三森の目つきが悪くなった。

「私は、そういう事言ってンじゃねェ。こっからぶっ飛ばすぞ」

「……冗談でした」

「ンで？」

改めて、一は考える。

勤務外。ソレと戦う人外。異能者、異端者、異常者。オンリーワンの狗。金で命を賭ける存在。一般人からは、畏怖され恐怖され尊敬され信奉され、疎まれる。迫害の対象。

「俺は、別に何とも思わないです」

一が事も無げに、そんな事を言う。

そんな事を言うから。

「ンなのはいらねェ。じゃあな、私を初めて見たときどう思った？」

「……怖かったです」

「……あっそ」

「だよな、そうだよ。ま、それがフツーだよ。一般の、まともな考えだ」

適当に一が相槌を打つ。

「勤務外はヤバイ、人間じゃねェ。そう奴らは思ってんやがンだ」

奴ら、と三森は憎憎しげに、腹立たしげに言い放った。

「俺は、だからそんな風にはもう」

「分かってンよ知ってンよ。だから私とこうやって喋っていられる。だろ？」
「……そう言う意味でもないんですけど」
「けどな。フリーの奴らは違う」
舌打ち。
「あいつらは私ら勤務外とは全然違う。ヤバさで言やァ比じゃねえ。半端ねえ。いや、そもそも比べるレベルでもねェか」
「そんなにフリーランスの人たちは怖いんですか？」
「勤務外ってのはオンリーワンのバイトだ。雇われ。言いたかねーけどさ、結局は駒でしかねェんだ。基本的には上からの指示に従って、好き勝手にソレと戦ったり、シフト通りに、好き勝手できねーのさ」
「でも三森さん、最近は好き勝手やってませんでした？」
仕事に来なかったり、蜘蛛戦でも後から美味しいところを持ってったり。
「私は良いンだよ」
一がそう言おうとしたら、一蹴された。何となく、話を反らすように三森が続ける。
「勤務外には、まあ、最低限、ルールがあンだよ。規則原則、私の嫌いな言葉だけどな。嫌いだけど、しょうがねェとも思う。私ら勤務外はソレと戦える力があンだ。そういう奴らを、ソレと戦ってくれるからって、野放しにしておくのもマズイってのは分かる。繋いでおきたいんだろうよ。犬には首輪付けて飼わなきゃ駄目だろ？勝手に通行人に襲い掛かるかもしンねーもんな」
「……」
「……お前、余計な事想像してねェだろうな？」
「滅相も」
「……。とにかく、勤務外ってのはオンリーワンのルールン中で動いてる。動かされてる。けど、私はそれで構わねェ。食うのにも、寝るのにも、何にも不自由しねーしな。ソレに殺されない限りは目

ェ瞑ってても生きていける」
　一が相槌を打つ。
「話、少し変えるけどよ。お前、北駒台店に来るとき面接してもらったか？」
「バイトのときですよね？　ええ、してもらいましたよ。ちょっと、適当っぽかったですけど。って言うか、それが普通でしょう。アルバイト雇うなら、履歴書で書類審査。面接で人間審査。適当に名前も顔も性格も知らない奴を雇うなんて、滅多に無いですよ」
「店長は適当そうに見えて、実はしっかりやってンよ。あの人は目も良いしな。ンで、オンリーワンに雇われるってのは、本当はすげェ事だぞ。何つってもソレと最前線でやり合ってるトコだからな。向こうとしちゃあ力のある奴は欲しいけど、それだけじゃ駄目だ。奴らが欲しいのは犬だ、野良犬でも狂犬でもねェ。出来れば飼い犬、良ければ番犬忠犬。飼い犬に手を食いちぎられるのはゴメンだ、だろ？」
「確かに、幾らできる人でも、扱いづらい、そもそも従ってくれなくちゃ話になりませんもんね」
「ああ。勤務外は、少なくとも、少しは選ばれた人間だ。中にはやり辛い勤務外も居るけどよ、その分強いし、扱いづらいっつっても底が知れてら、無理じゃねェ」
「……じゃあフリーランスは？」
　一が固唾を飲む。少し、嫌な予感。
「無理なンだよ」
　三森の鋭い声。
「フリーの奴らは、オンリーワンじゃ手に負えねェ。オンリーワンのルールに従わない、従えねェ、最低限の規則すら守れないカスだよ。飼うこともできねー、飼おうとも思えない非人間だ」
「そこまで言いますか」
「言い足りねえよ。じゃあな、お前、ソレと戦えって言われたらどうする？」

「……いやです。俺はまだそんなのに慣れてませんし。三森さんとは違って」
「お前、勘違いしてるから教えてやるよ。良いか、私だってソレとは戦いたくねェ、ハッキリ言や、私だって嫌だ。普通に一般人みてェにダラダラ訳分かんねーまま過ごしたい」
「嘘だあ……」
「嘘じゃねェよ！　お前私を何だと思ってやがる！」
「……」
「黙ンなよ、考えンじゃねえよ！」
三森の怒鳴り声が車外に漏れる。タクシーの運転手は黙ったまま、ラジオを入れた。軽そうなＤＪの軽そうな声がスピーカーから聞こえてくる。
「ちっ、もう良いよ。お前には何も喋ってやらねェ」
「ああ、すいません。もう言いませんから。フリーランスの事教えてください」
「反省の色が見えねェンだよな……」
「そんな色見たこと無いですけどね。ちょっと青っぽい感じっすかね？」
楽しそうに一が笑った。
「……もうどうでもいーけどよ。じゃあ、さっきの続きだ。ソレと戦うのは嫌だ。誰だって、勤務外だってな。けどフリーランスはそうは思ってねェ。勤務外と違って、保険も手当てもクソも、何一つ保障されてねーからな。フリーの連中が保障されているのは、その腕、強さだけだ。ソレと戦える、ってトコだけ」
「はあ、具体的には、どうやってフリーの人たちは生活してるんですか？」
「ソレ一匹、ン万円。ソレのランクにもよるけどよ。奴らはソレを殺して、金を貰ってやがる。だから奴らは、私らとは違って、喜んでソレと戦って殺す。てめェらの食い扶持だかンな。ソレのいる所に湧いては失せて、失せりゃ湧きやがる。何時でも、何処にでも、

何にも関係ねェ。ゴキブリみたいな、いや、ゴキブリの方がマシか」
　酷い言われ様だ、と、一は思う。
　だが、そこまで言われるフリーランス。勤務外である三森にそこまで言わせるフリーランス。一にも、連中の姿、のような物が分かってきた。
「でも、俺から言わせて貰えば、正直勤務外の人たちとフリーランス。大差無い気がしますけどね。どっちもソレと戦えるのに変わりありませんし」
「まあ、一般の、外から見てる奴らには変わりねーだろうさ。けどな、大差が無くても、確かに差はあるンだ。中の私らから言わせりゃ、充分、デカイ差なんだよ。あいつらは私らとは違う。勤務外は、少し、ほんの少しでも、人間なんだ。ギリギリ人間の部分が残ってるンだよ」
　人間。非人間。
　非常識。常識。
　正常者。異常者。
　アウト。セーフ。
　勤務外。フリーランス。
　――それでも。
「……そういや、フリーランスにお金を払ってるのは誰なんです？　国、とか？」
「あ？　何で国が金払うンだよ？　あいつら心底使えないのによ。ンな事してくれねーよ」
「じゃあ、誰が？」
「おいおい、決まってンだろ。ソレ退治の専門家、金の亡者、天下のオンリーワン様に決まってンだろうが」
「はあ！？」
　一の叫ぶような声。
　一瞬送れて、タイヤが道路を擦る音。甲高いブレーキ音が辺りに響いた。

「お客さん、着きましたよ」
大きな建物、綺麗な広場。
一が窓の外に目を遣る。
若い男女が肩を並べて歩き、スーツを着た男性が歩き、グループで、一人で、若者が歩いていた。
「ああ」
感慨深げに、一が声を漏らす。
駒台大学。そこは一の通っている大学だった。そして、その近くの、裏の山にはソレがいるかもしれない、そんな大学でもあった。
「金はこいつが払うから」
言って、三森がドアを開ける。
「え？　ちょっと、普通ワリカンでしょ！」
「るっせェよ！」
三森は、既に歩きながら煙草を吹かしていた。
「……お客さん？」
「……領収書、ください」

駒台大学。
四年制の、一般的な大学。駒台坂、通称駒坂の中腹に建てられた、創立三十周年を誇る学校である。
三十。
多いのか、少ないのか、短いのか、長いのか。
生徒数は、一学年、約千人。合わせて四千人。多分、全国津々浦々存在する大学の中では、規模はそれほど大きくない。はず。最近では、一、ニ学年がこっちのキャンバス、三、四学年はこっちと、生徒数が多いために分けている大学も少なくない。何しろ、一つのキャンバスに全学年全生徒が収まるのだ。駒台大学の大きさは推して知るべし、だろう。
「学校ってのは、どうして、山の上や坂の上に作りたがるのかねェ」

「さあ、土地が安いんじゃないですか？　後は、生徒を登下校のときでも鍛えられるように、とか」
「私なら、ンな学校行かねェけどな」
「あはは、俺もです」
下らない話をしながら、一と三森が坂を登っていく。
擦れ違う人も、追い抜く人もいない。
何故か、答えは簡単。学校の上には誰も行かないから。山しかない。
「どうして、裏山の入り口まで乗せてもらわなかったんですか？」
「ソレが近くにいるんだぞ？　巻き込んだらヤベェだろうが」
「……なるほど」
しっかし、と、呟き。疲れたなあ、と、ぼやき。一は足を動かすたびに文句を零す。
「はあ、しんどいなあ」
「なら、ここで待ってるか？」
先導する三森が足を止めた。
一は三森まで追いつかず、その場に、同じく立ち止まる。
三森は黙ったまま、一の眼を貫くように見つめていた。
息が止まる。思わず、息が止まりそうになる。一は視線を地面に落とし、小さく息を吐いた。
「行きますよ」
「だるいンだろ？　じゃあ来ンなよ」
「いや、行きますって」
一が歩く。
「巻き込みたくねーっつってンだろが……」
「何か？」
「行くぞボケナス」
小さく舌打ちした後、三森が歩き出す。歩幅はさっきより広く、速度はさっきより速く。
「待って下さいよ」

「早くしろー」

二人が坂を五分も歩くと、緑が増えてくるのが分かった。

草、花、木。緑、白、緑。

「目に優しくなってきましたね」

「体には優しくねェよ。あぁ、くそ、何で山なんかにソレが出やがるンだ」

「あー、百パーセントいるとは限りませんけど」

足を動かし口を動かし、二人が只管、坂道を歩く。段々と、舗装された道が少なくなって、山道、と言うか獣道になってきた。

「何か、歩きづらいんですけど」

「しょうがねェだろ」

獣道を選んでいたのは、前を歩く三森だった。

そう言えば、裏山に行くとは聞いていたが、一はまだ、裏山のどこに行くかは聞いていない。頂上か、中腹か、すぐそこなのか。

山道を、森の中を、鬱蒼としてきた草の中を二人は歩く。

「まるでジャングルだな……」

こんな場所が、すぐ近くにあったのか、と一は思う。

――そんな馬鹿な、って話だよホント。

ふと、一の目に不自然な物が見えた。

重く光り、鈍く輝く何か。自然物だけのこの場所に、気配を見せた人工物。

「三森さん、今何かいませんでした?」

「そっか? なンも見えなかったぞ」

「うーん、像って言うんですか? とにかく、何かいました」

「ふーん。目ざといな」

「うーん?」

前を歩く三森が息を吐いた。指と指を擦り合わせ、炎を灯す。

山火事になるのではないか、と、一が慌てて止めようとする、

「心配すンな。もう着いたよ、変わってねーなあ、ここは」
が、三森は平然とした様子で、煙草に火を点けた。
「……ここは？」
山の中。
とは、異なる空間。
三森が、開けた場所に足を踏み出す。
周りには殆ど何も無い。
「どうした？　来いよ」
日が差さなかった木々の下を抜け出し、誘われるように一が陽光を浴びた。
「ここは？」
もう一度、一が尋ねる。
「頂上だよ」
「え？　もう、頂上に着いたんですか」
「まあ、タクシーと徒歩で大分距離稼いでたしな。山は意外と、そンな広くねーんだ」
改めて、一が広場を見回す。この場所だけ、背の高い木は伐採され、陽が照るように設計されているようだった。広々とした、子供が悠々と走り回って、飛びまわれて遊べるぐらいのスペース。いや、大人でも充分にそれは可能だろう、そんな広さだった。走り回って飛び回る大人を見たいとは、誰が思うか知らないが。
そして。
一際目立つ、と言うか、この広場には、もうそれしかなかった。
「洋館……？」
ツタが生えた、コケの生した湿っぽい、それっぽい壁。洋風建築の、二階建ての住居らしき建造物。
「ってか、異人館だろうな」
「異人館ですか？　へえ、道理で古いわけですね。でも、何でこんな所に？」
「いや、昔はもっと綺麗な土地だったんじゃねェの？　それにこの

手のモンはこういう、高台とか、町外れにしか建てられなかったンじゃねえ？」

「ああ、内地雑居の後に建てられたのかな」

一が面白そうに呟いた。

「何？　興味あンのか？」

「まあ、男なら、こういうモンに惹かれるのは当然ですよ」

ふうん、と退屈そうに三森が目を細める。

「それより三森さん、異人館とか良く知ってましたね」

「ああ、婆ちゃんに教えてもらったンだよ。確か、えーと、あ。いいや、忘れた」

「あ、そ、ですか」

一が洋館、もとい、異人館を眺めた。

「それより、お前さっき何かいたとか言って無かったか？」

「ああ、気のせいでした」

「あンだよ、面倒な奴だな」

「いや、だってこんな所にこんな館があるなんて思ってませんでしたし。良く似合ってますよね、あの銅像。すげえ格好良いな、良いなあ。俺の住んでるアパートにあんなんあっても、何か趣味悪いとか、不恰好だし」

一が洋館を見上げる。

「……像？」

「ええ。ほら、あそこ」

一が指差す先には、洋館の屋根。その屋根の上、背中に翼の生えた、グロテスクな容姿をした銅像が、番をするかのように佇んでいた。

「金持ちっぽいなあ、良いなあ」

「おい」

三森の表情が歪む。嫌なものを見たときのように、嫌いな奴でも見かけたときのように。

「ありゃ、像じゃねェぞ」

その言葉を受け、一が像をもう一度見上げた。

笑っている。

動かないはずの銅像が、動けないはずの銅像が、笑わないはずの、笑えないはずの。一の方を振り向き、グロテスクな顔を薄く歪ませ、笑う。確かに笑っている。

「……嘘だろ」

洋館に溶け込むように、確かに、ソレはいた。

笑う。嗤う。哂う。

声を上げずに、何も言わずに喋らずに、顔だけで笑うソレ。やがて、ソレは一たちの反応に飽いたのか、元の位置に戻る。街を見下ろすかのように、見渡すかのように、ソレは街に目を向けた。

「ははっ、やったぜ、おい。チビも来てねェ。フリーランスもここにはいない。いるのは私らだけだ。やってやろうじゃねェか。なあ？」

そう言って、三森も笑う。

――でも。

だが、一は答えない。

先ほどの翼を持つ、銅像の姿をしたソレ。

あの笑いが脳裏から、離れない。

――ソレが、笑うのか？

一は、既にこちらを見ようともしない異形を見つめる。

先ほどの、あの笑い。

人を食ったような笑い。

人を馬鹿にしたような哂い。

人を見下すような嗤い。

知性が宿った、わらい。

ガーゴイルは話をする

笑い。
笑いとは、何だろう。
一般的には、陽性の感情（楽しいとか、面白いなど）に伴って、表情が特有のモノ。つまり笑顔、になったり、特有の声。つまり笑い声、を伴った現象の事を指すらしい。
笑い。
では、人間は笑うか？
笑う。間違いないだろう。人間ほど笑いを使い分け、自由に使える生物は存在しないだろうと、思われる。そもそも、笑う、という定義めいたものを作ったのは人間だからだ。笑う事を知らなければ、笑いを定義する事は難しい。無感情な人間や、無表情な人間も中にはいる。しかし、笑えない事はないだろう。笑わない人間は笑えないのではない。やはり、笑わないのだ。
中には、本当に笑えない人間もいるかもしれないが。
では、猫は笑うだろうか？
犬は笑うだろうか？
一度はそんな話を聞いたことがあるだろう。もしかしたら、見たことがあるかもしれない存在は、するのだろう。にっこりと笑う猫や犬。
では他の獣は？両生類は？　爬虫類は？鳥は？　魚は？　虫は？
では、ソレは？
ソレは、笑うのだろうか？

「おっしゃ、お前四つん這いになれ」
「はあ！？」
一が大きな声を上げた。

「ソレを相手するにしても、屋根まで上らねェと話になンねーからな」
「あの、意味が分からないんですが？」
「だから、私があいつとやり合うから、踏み台になれっつってンだ」
三森がソレを指差し、一を睨みつける。
「それとも何だ？　お前があれと戦うってンのか？　良いぜ、やれるもんならやってみな。但し、私を踏み台に出来るもンならな」
「何で踏み台ありきの話になってんですか？　ほら、あそこの木に登って、そっから飛び移れば良いじゃないですか」
一が背の高い木に視線を向けた。木は、洋館の屋根に届くほどの高さで、距離も離れていなかった。一般的な成人男子、成人女子の身体能力ならば、飛び移るのに苦労はしないだろう。三森も、釣られてその木を見つめる。
やがて、
「あー、そう言う手もあったな」
つまらなさそうに言った。
「……俺を踏みたかっただけでしょ？」
「良し、じゃあ行くか。おい、四つん這いになれ」
「何で！？」

「楽しそうだね、混ぜてくれないかな？」
楽しげで、それでいて冷ややかな声。
その声のする方向に、一と三森が弾かれたように振り向く。
小柄な少年。
大柄な青年。
どちらも照りつける陽光を浴び、ブロンドの髪が輝いていた。
美少年。美青年。
「あなた達は……」
駒台デパートのエレベータ内で、先ほど二人が出会った二人。勤

務外の二人が出会った、フリーランスの二人。
「あれ？　なーんか、見たことある人たちだな？」
少年が首を捻る。
青年が溜め息を吐き、
「先刻、駒台デパートのエレベータで乗り合わせた人たちですよ」
呆れた風に呟いた。
「あー、そうだった、そうだった。で？　何でそんな人たちがここにいるのかな？」
「さあな、ただの散歩だよ」
へっ、と三森が笑う。
「……そうですか。では、今の内にお立ち去りください。ここは今から戦場になりますので。ただの人間である貴方方には、不釣合いな場所に成り、果てます」
「そうか、そうかそうか、そうかよ。流石はフリーランス、相変わらずムカつくぜ」
「あれ、フリーランスだなんて名乗ったっけ？」
「いえ、恐らくは、同業者でしょう。もしくは……」
少年と青年が、三森を値踏みするかのように観察する。
その視線に応じ、三森が口元で薄く笑った。
「もしくは？　おうよ、天下の勤務外様だ」
「勤務外……！」
青年が只ならぬ口調で吐き捨てる。
「あンだ、どうしたよ？　てめェらもあいつ狙ってきたンじゃねーのか？　おら、動けよ。早くしないとあいつが逃げちまうぜ？」
言って、三森がソレを指差した。
ソレも、新たにこの場に現れた人物、フリーランスの二人に気が付いているはずだが、一瞥もくれない。只管に前を、真っ直ぐに見ている。
「そのつもりだったんだけどね、勤務外がいるんじゃ、話は違ってくるかな」

「ええ、全くですね。商売敵と仇を前にして、激情せずにはいられないですよ」

フリーランスの二人から、敵意が剥き出しになった。目に見えない何かが、一たちに降りかかる。

「ははっ、良いじゃん、良いじゃねェの！　良いぜ良いぜ、何もしねェ動かねェソレだけじゃ不完全燃焼になる所だったンだ！　勤務外が気に入らねェンだろ？　かかって来いよ！」

三森が拳を突き出し、足を鳴らした。

「ちょ！　ちょっと、俺はどうするんですか？　嫌ですよ人間同士で殺しあうなんて！」

気圧されていた一がやっと口を開く。

三森は一に目もくれず、「知らねェ」と一言で切り捨てた。

フリーランスの二人は、はなから一に興味が無かったようで、一の姿を視界の隅にも入れようとしない。一の存在を脳の片隅ででも認識していない。

「とにかく、あぶねェから下がってろ」

「三森さんは？」

ははっ、と三森が軽く笑う。

瞬間、この場にいた全員、三森の姿が消えたように感じられた。

「決まってンだろ！？」

フリーランスの青年の目の前に、三森の拳が現れる。早すぎる攻撃。だが、青年は体勢を崩しながらも攻撃を避けた。

「ヤるじゃねェの！」

続いて三森は、フリーランスの足を狙ったローキックを放つ。今度は避けられず、青年の表情が苦悶に歪んだ。

躊躇せず、顎にアッパー。容赦なく、腹にトーキック。肉を叩く、独特の鈍い音が三森の耳に心地よく響く。

それでも倒れない青年に三森は業を煮やし、後ろへフラフラとよろけている青年の長い髪を鷲掴んで、無理矢理地面へ叩き付けた。

小さく呻き、青年が仰向けで、地面に釘付けになる。

「へえ、やるじゃないか」
「次はてめェの番だよ」
味方が窮地に立たされていると言うのに、少年は身動ぎ一つしなかった。パーカーのポケットに両手を突っ込み、三森の動きを素直に褒めるだけ。
三森が、少年へと奔り寄る。
伸ばす拳。
「けど、ディルの番は終わっちゃいないよ」
届かない拳。
少年は大きくバックステップ。三森から距離を取る。十メートルほど。
「な……？」
驚愕。
三森が固まった。
「……っ！」
それも一瞬間の事、背後からの攻撃に反応して、三森がその場から飛び退く。三森の立っていた空間を、ほんの僅かに遅れて、剣が切り裂いた。
「ほう、なかなか……」
青年が素直に感心する。
その手には一振りの剣。形状は、西洋の一般的なブロードソードとなんら代わりは無い。ただ、刀身が今まさに磨かれたかのような、輝きを放っているだけだ。
「……へえ、面の割に打たれ強いじゃねェか」
「貴方こそ。お顔の割に、良いものをお持ちで。全く、勤務外にしておくには惜しい逸材ですね」
「はっ、てめェこそ、こんな商売やるよりもっと違う仕事の方が似合ってるンじゃねーの？」
「それはこちらの……ああ、失礼。貴方には良くお似合い、かと」
シニカルに、ディル、と呼ばれた青年が笑う。

その頃、一は木に登っていた。
ビニール傘を小脇に抱え、ゆっくりと、誰にも気付かれないように。
そもそも、一の存在を気にする者など、この場には今のところいないのだが。
「どうすっかな……」
悩んでいても仕方ない、当初の予定通り、一は屋根に上ることにした。上っていくと、やがて太そうな枝に目を付ける。おっかなびっくり、木の幹を掻き抱いたまま片足を乗せ、もう片方を乗せた。足場に問題が無い事を確かめ、一が枝の上に立つ。
「……こわっ」
思わず下を見てしまう。地上までの高さは、ニ、三メートルといったところか。一の膝が震えた。屋根までの距離は、一メートルも無い。が、怖いものは何だって怖い。飛び移る勇気は、一には無かった。ここから落ちれば、即死ぬ事は無いだろうが、怪我ぐらいは確実にするだろう。自分が情けなく地面に落ちる様が、一には容易にイメージできた。
――避難してよっかなー。
「ん？」
ふと、誰かに、見られているような感覚を一が覚えた。きょろきょろと、辺りを見回し、一が気付いてしまう。
翼を持ったソレ。出来損ないの犬のような顔。鈍く輝く、重い体。グロテスクな容姿。
ああ、ソレが見ている。何も出来ない人間を、抵抗できない人間を。
「……！」
一は絶句した。
まさか、ソレに見られているだけで、声も出なくなるとは、一は

思ってもいなかった。

「どうぞ、こちらへ」

感情のこもっていない声。

事務的なそれを聞いて、一が目を大きくさせる。

「え……？」

顔だけで、ソレが笑う。その表情から、一は何も読み取る事が出来なかった。動けない。分からない。どうして良いか、何をすれば良いのか、何も知らない。

「わたしは何もしませんよ」

「……お前、喋れるのか？」

屋根と、木の枝。

一メートル足らずの距離で一とソレが会話する。

「日本語で構いませんか？」

「あ、ああ、構わないよ」

「では、よろしく。わたしはガーゴイル。にんげんたちで言うならば、ソレ、と言ったところでしょうか」

ソレが喋っている。えらく流暢に。えらく軽妙に。

「……あ、俺は一一（にのまえはじめ）。よ、よろしく？」

「ふうむ、一が二つでにのまえさん、ですか。ははあ、なるほど、一はニの前の数字。面白い、珍しいと見える苗字ですね。長く生きていますが、一と仰る方に出会ったのは初めてですよ」

えらく絶妙に。

すっかりペースを狂わされ、握られた一は、自身をガーゴイルと名乗るソレと、少しの間話をする事になった。

三森とディルが向かい合う。

三森は、ディルの獲物、ブロードソードの間合いのギリギリ外を

維持してステップを踏む。
ディルは自分からは動こうとせずに、間合いの中に入ってきた敵を打ち倒すスタイルらしい。
リーチの差で、三森は先に動けない。
戦法のせいで、ディルは先に動けない。
つまりは、膠着状態。
少年は、対峙する二人から離れた木にもたれ掛かり、あくびをしていた。
「ディルー、つまんないんだけどー？」
呼びかけも、呼び水にはならない。だが、隙を見つければ、たとえそれが一秒でも、一瞬でも、どちらかが勝負を決める。確実に。
それまでは、膠着状態。
「ディールー？」
「黙ってて下さい」
青年が片手で髪をかき上げる。それも、三森が飛び込むまでの隙には至らない。
「……怖くて腰が抜けたか？　ジッと黙って突っ立ってンじゃねェよ」
「それは貴方も同じことでは？」
静寂の後、睨み合う二人が同時に笑った。

「何だ、じゃあ人間に手を出した事は無いんだ」
「必要も無いですからねえ。わたしは、色んな世界を見られればそれで満足なんです」
「ふーん、ま、それを聞いて安心したよ。ところで駒台には、何を見に来たの？」
「特には決めてませんね。ただ、何かを見たいというよりは、何かに惹かれてきたのではないか、と、わたしは見ます」
木の枝から屋根の上に飛び移った一は、四方山話を咲かせていた。

ソレ、であるはずのガーゴイルと。
「惹かれた？　お前の仲間でもいるのかな、ここには」
「どうでしょう。ガーゴイルという意味なら、ここにはわたし以外いないと見ますね。ですが、ソレ、と括ってしまうならば、この街には仲間がいると見ます」
「ソレかあ、そういや、最近は結構な数のソレと会っちゃったんだよ俺」
「ほう、興味深いですねえ」
二人はお互いの顔を見ずに、街を見下ろしながら会話を続ける。
「釣瓶落としとか、鎌鼬って知ってる？」
「日本に古来から伝わる妖（あやかし）の類ですね」
「……古来って、本当に知ってんのな」
ええ、とガーゴイルが肯定。
「うーん、じゃアラクネって知ってるか？」
「アラクネ？　いえ、知りませんね。見たことも有りません」
「あ、そうなんだ。じゃアテナって神様は？」
「見たことがあります。という事は……なるほど、では一さんの持っているそれは……」
ガーゴイルが、一の抱えているビニール傘に目を遣った。
「お前話が早いな」
「ははあ、わたしはアテナ、そしてアイギスに惹かれてこの街に来たわけですねえ」
「良く分からないけど、ソレがこの街に現れるのって、これのせいなの？」
一がビニール傘を掲げてみせる。
「見たところ、そんな感じでしょうか。大きな力、存在は同種のモノを引き寄せるのにも長けていると、わたしは見ますね」
「これが、ねぇ……ん？　じゃあ駒台にソレが出てくるのは、俺の、こいつのせいなのか？」
「そうとは限らない、と、わたしは見ます。確かにアイギスに惹か

れ、多くのソレがこの街にいるとわたしは見ます。ですが、一さんの責任とはまた別問題でしょう。例えば、一さんがここを離れたとします。ですが、駒台にソレが現れないだけで、一さんの移動した場所にまたソレは現れるのです。大局的に見れば、責任はアイギスにあると、わたしは見ます」

「うーん、微妙な話だ」

結局は俺のせいじゃないか、と一は傘を見つめた。

「……今更だけどさ、何で人間の言葉を話せるんだ？」

一が話題を変える。

突然の話題転換にも、ガーゴイルは困った様子を見せず、

「……わたしは長い間、多くの街を見てきました。教会の鐘の上から、時計台の上から、斜塔の上から、こうして民家の屋根の上から、様々な街を見てきました。活気で賑わう街を、風が優しく吹く町を、雪に閉ざされた町を、荒れ果てた町を、様々なにんげんを見てきました」

思い出に浸るように語った。

「街が好きなんだな。他の場所は見てこなかったの？」

「いえ、全く見なかった訳ではありません。ですが、わたしは特別街が好きなのです。にんげんたちが動き回り、歩き回り、一秒、一日、一年と、同じ時は決して訪れない。見ていて飽きないのです。同じ所に何年も居続けた事もありました」

「……何年」

一が訝しげな視線をガーゴイルに向けるが、視線を向けられた当の本人は気にしない。

「にんげんたちを毎日見ていると、自然、膨大な量の情報も吸収する事が出来ました。様々な町の文化、特色、そしてその中には言葉も含まれました。わたしは見ることで、言葉を話せるようになったのです」

「百聞は一見にしかず、か」

「それはどういう意味の言葉なのですか？」

「ああ、えーと。まあ早い話が、百回聞くより、一回見たほうが良いって事だよ」
「ははあ、わたしにはぴったりな言葉と見ますね」
ガーゴイルが楽しげに言った。
その様子を見て、一も少し楽しくなる。
「……あ」
「どうしました？」
「……いや、何か、久しぶりに普通の話をした、っつーか。話せる相手に会えたっていうか……」
「ほほう、光栄ですね。にんげんの言葉を覚えた甲斐があると見ます。実はわたしも、覚えた言葉や事柄が合っているか試したかったんですよ。一さんと出会えて良かったと見ますね」
「……」
一は何だか、切なくなった。オンリーワンでバイトを始めてから、普通の会話を、普通に話が通じる者とようやく出会えた。嬉しさの反面、やはり空しさも覚える。相手がソレと言う事に。
「あの人たちは何なんだろうな」
一が眼下の三森たちを見ながら、寂しげに呟いた。
「勤務外とフリーランスですね。困りました。このままではわたしは、どちらかに殺されてしまうかもしれません」
「随分、他人事っぽく言うね」
「そう聞こえますか？　ううむ。わたしは、今まで多くの出来事や風景を見てきました。しかし、見てきただけなのです。楽しそうな事も見ているだけ、悲しい事も見ているだけでした。ずっと、一人で見ていただけなのです。巻き込まれず、参加できず。傍観者、第三者として、わたしは完成しているのかもしれませんね」
ガーゴイルはそう言って、やはり他人事みたく自嘲気味に笑う。
「つまらなくない？」
「さあ、どうなんでしょうか」
「……まあ、俺の事じゃないから、深くは言わないけどさ」

「助かりますね。見るのは好きですが、見られることには慣れていないもので――おや？　新しいにんげんが」
ガーゴイルが山の広場に目を向けた。
一もそちらに目を遣る。と、一が頭を抱えた。
「あー、何だこのタイミングは……」

二つに括ったブロンドを揺らし、カウボーイさながらの格好で、背の高い木々の間を、背の低い少女が抜け、舌足らずの、少女特有の甲高い声で、

「やっと見つけたワ！　アタシってばクールじゃない！」

オンリーワン北駒台店ＳＶ（スーパーバイザー）、一の妹（のような存在）、ジェーン・ゴーウェストが軽やかに現れた。
三森が、ディルが、少年が固まる。一が、ガーゴイルが固まる。
場が、固まる。
「ＨＥＹ、どしたの？」
空気を気にせず、ジェーンが首を傾げた。
全員隙だらけ。隙がありすぎて誰も動けない。
「ン？　モンキーガール、その人誰？　知り合いかしら？」
悠々と、ジェーンが歩みを進める。
「……おいチビ、モンキーってのは私の事か？」
「イエース、ザッツライト。で？　彼は誰？　ＹＯＵとステディなカンケイなの？」
「面白い女性だ。面白すぎて笑えませんよ、激情しそうだ」
「……君も勤務外なの？」
少年が、あくび交じりで問いかけた。
ジェーンが、少年とディルを見比べ、考える素振りを見せる。
「鈍いチビだな」

「アー、ＯＫ、ＯＫ。そういう事、良いワ。七面鳥な事になってるワケね」

「七面倒だろ……」

「一さん？」

屋根の上からの突っ込みは聞こえない。

「理解したわ。で、お兄ちゃんはどこ？」

「あいつならその辺で膝抱えて震えてるぜ」

「シャラップ、サル女！　そしてフリーランス、ここはオンリーワンのエリアよ、知らなかったのなら許してアゲル。Ｂｕｔ、知ってて、ここにいるなら――」

ジェーンが少年とディルに、それぞれ視線を遣った。

「心配しないでよ、おチビちゃん」

「ええ、問題ありません。勤務外が一人増えただけの事です」

「……クールね。お兄ちゃんもどこかで見ていることだし、アタシのエキセントリックなパフォーマンス、魅せてあげるワ！　お兄ちゃん、アタシをしっかり見ててネ！」

一は頭を抱え、両手で目を覆い隠した。

「おっと、一さん。傘が落ちますよ」

「あー、助けてくれー」

身内の恥は、自身の恥より恥なのだ。

ガーゴイルは旅を続ける

ジェーンが何の遠慮も迷いも無く、誰よりも先に動いた。
「あー、早いねぇ」
少年があくびを噛み殺しながら、感慨も無く言った。
早く。
速く。
踏み出す一歩で、ディルの背後を取り、足払いを仕掛けた。簡単に、あっけなくディルがバランスを崩し、地に膝を付く。
その隙に、三森も右側からディルを挟み込むように動いた。ディルが左に剣を構えているためだろう。
右から三森、左斜め後ろにジェーン。
「イージーね」
ジェーンが呟き、拳を握った。そのまま、ディルのこめかみを狙った一撃を背後から放つ。
が、ディルは振り向きもせずに、剣の柄でそれを防いだ。
「はあっ！」
ジェーンの拳を受け止めたまま、ディルが剣でなぎ払うように、空気を裂く。無理矢理だった。ジェーンが追撃出来ないぐらいに無理矢理な、力技。
「……！」
間一髪、ジェーンは剣の軌道から逃れた。しかし、後方へ退いたため、ディルから距離は離れる。
ディルは音だけで、ジェーンが飛びのいた事を悟ると、向かってくる三森への牽制に左手から、右手へ剣を持ち替えた。
だが、止まらない。
それだけでは三森は止まらない。
「……まるで猪ですね」
片膝を付いたまま、ディルが剣の切っ先を敵に定める。もう動け

ないように、奔らないように。二度と向かってこないようにするために。急所を狙った突きをディルが放った。三森の左胸、心臓を狙った一突き。

「甘ェよ！」

さりとて、三森も勤務外。

攻撃を読んでいたのか、心臓を庇うように、横軸へ体をずらした。勢いを殺さないまま、三森がディルの顔面へ蹴りを繰り出す。

冷静。ディルは蹴りを避けようとも、防御しようともせずに、右手で突き出していた剣を、横へ薙いだ。

「危ね！」

ディルの狙いに気付いた三森が、繰り出していた足を中空で止め、上から剣の腹を踏みつけ、軌道を無理矢理に変える。

剣の上に、三森の足が乗っている状態。

「くっ」

がくん、とディルの右手が地面へ垂れ下がった。何とか三森の足を払い除けようとするが、それより先に三森が飛ぶ。

剣を足場にして片足で跳躍。ディルの真上に短い滞空。

「させませんっ」

ディルが飛んでいる三森に、自由になった右手で剣を向けた。

このままでは、三森は串刺しになる。

「ディルっ、後ろっ」

今まで、忠告の一つもしないで、暢気に、退屈そうに観戦していた少年が声を上げた。

その声に反応して、ディルが後方に視線を遣る。

真正面に、真っ正直に走る姿がそこにいた。とんでもない速度で、とんでもなく俊敏に、ジェーンがディルへ飛び蹴りを放つ。

挟み撃ち。上と後ろからの、二度目の挟み撃ち。

「激情しそうですね……」

一瞬の攻防。
間断なく繰り出される三森とジェーンの攻撃。
だが、同時ではない。一瞬でも、そこには確かにタイムラグが生じる。ならば順々に防いでいけば良いだけの事。
ディルは左手をコートの中へ突っ込んだ。
現れたのは、剣。

「もう一本！？」

屋根の上から、戦闘を覗き見している一が叫んだ。
既にディルが右手で握っている剣とは、大きさが異なるブロードソード。若干、今しがたコートから出てきた剣の方が小さい。右手に剣を、左手に剣を。
上からの、三森のフットスタンプを右手の剣で。背後からの、ジェーンの飛び蹴りを左手の剣で。それぞれ剣の腹で受け止め、
「はあっ！」
と、声を荒げ、腕に力を込め、受け止めた二人を弾き返す。
受け止められた二人の顔には、驚きの表情が浮かんでいた。突然の事に戸惑いながらも、砂地に跡を残しながら、三森とジェーンが危なげなく着地する。
「……男はやっぱ、顔だけじゃいけねェよなあ」
「トゥーソードとは、やるじゃナイ」
二刀を隙無く構え、無駄なく佇むディルに対して、賞賛の言葉を二人が送った。
木に背を預けている少年は、無言で拍手を送った。
屋根の上の、一は言葉も出ない。何もでない。何も出来ない。
ガーゴイルはただ、ただただ見ているだけだった。
「それはどうも。私も久しぶりに激情してしまいましたよ」
さて、と、ディルが剣を振るい、
「次はどちらから？」

爽やかな笑顔を見せた。

「……何だあいつらは？」

一はようやく、声を出す事が出来た。

「勤務外とフリーランスと、わたしは見ますが」

「知ってるよっ、何だよあの動きっていうかなんつーか、とにかく、改めて気持ち悪いんだよ！」

「はあ、そうですねえ。確かに、あの髪の長い方、二刀流とは。いやはや、凄いですねえ。戦闘に関しては疎いわたしでも、分かるぐらいの凄さですねえ」

ガーゴイルは淡々と語る。

「……冷静だな、お前」

「あくまで、わたしは傍観者ですから。客観的に、何の感情も込めずに物事を見るのが、わたしの存在意義なのですよ」

「両方、良く生きていられるよな……」

「……お互い、殺すつもりはないのではないか、と。わたしはそう見ていますが？」

「は？　何でだ、じゃあ何であんな事やってんだよ」

それは、とガーゴイルが初めて言葉に詰まった。しかし、すぐに言葉を紡ぐ。

「見たところ、髪の長い方も、あのお嬢さんも、赤い方も、余力を残している、と言いますか。本気ではないと言いますか、わたしには遊んでいるように見えます」

「あ、遊び？」

「もし、誰かが誰かを殺す気だったならば、既に誰かが死んでいたのでは？」

感情の篭っていない眼で、ガーゴイルが一を見た。

普通に話せるとは言っても、ガーゴイルと見つめあうのは、精神衛生上宜しくなかった。一はすぐに視線を反らし、先のやり取りを

思い出す。
「……ああ、確かに、三森さんがあいつ倒したときに、あー、何だ。まあ、やろうと思えばやれてたもんな」
「そうでしょう。それに、あの赤い方、確か、他に力が有ったのでは？」
一が身動ぎした。驚いたのだ。
「何で、知ってんの？」
「いえ、知ってはいません。あくまで、わたしの見立てです」
「おいおい……」
「見ただけで、わたしにはたいていの事がわかるもので。あの長い髪の方からは、そういう雰囲気が見えなくなりましたが、お嬢さんと、赤い方、そしてわたしと同じく見に徹しているあの少年からは、同様の雰囲気が見えますね」
ガーゴイルが、得意げでも、何でもなく、淡々と言う。
「雰囲気って。どんなだよ？　そもそも見えるもんなのか？」
「目に見えて見えるものではありませんが、他に形容する言葉が見当たりません。そうですね、にんげんの言葉を借りるなら、『心の目で見る』という感じですね。それと、雰囲気なんですけど、一さん。あなたからも同じものが見えますよ」
ごくり、と一が唾を飲み込んだ。やけにその音がうるさく感じられて、一の耳に酷く障る。
「……だから、どんなだよ？」
「何かを、隠している雰囲気です」
「そりゃ、人間隠し事の一つや二つはあるだろ」
「そういった類の秘密ではありません。もっと違う、異質な種類のものですよ。ああ、言葉では伝えきれない。難しいものだとわたしは見ます」
「何となく、伝わったけどね――」
一が、傘を持つ手に力を込めた。

一がガーゴイルと話をしている間も、二対一の戦いは続いていた。
繰り出される攻撃、攻撃、攻撃。右から、左から、後ろから、前から、斜め後ろから、斜め前から。時には同時に、分散して、ワンテンポタイミングをずらして。
三森は真っ正直に正面から、拳を、踵を、肘を、膝を、頭を。五体をフルに使って、ディルに打撃を加えていく。ダメージを与えていく。
ジェーンはステップを踏んで、ジグザグに、緩急をつけて、スピードを生かして、多角的にディルを追い詰めていく。
が、ディルも刀で防ぎ、払い、凌ぎ、受け止め、致命傷は絶対に負わない。右手左手に握った剣で、最小限の動きでその場その場を切り抜けていく。二刀を巧みに使って、斬り、薙ぎ、払って、突いて、ディフェンスからオフェンスへ切り替えていく。
誰も一撃を食らわない。
誰も攻撃をもらわない。
斬撃を避け、打撃を受け流し、剣を握って、拳で断つ。ギリギリの、瀬戸際の、命を賭けた最悪の殺陣を見ている気分。集中に集中を重ねた、三人の演者のパフォーマンス。
屋根の上の一は恐怖を覚えた。いや、見るもの全てに威圧と畏怖と戦慄を覚えさせるであろう、捨て身の演劇。そもそもが、これが、勤務外。これが、フリーランス。ソレと日夜血を流し合い、骨を折り合い、肉を食い合い、命を奪い合うモノたちの常なのだ。これが、普通。これが正常。戦いの標的が、己の敵が、ソレから、人間へと変わったに過ぎない。
何も変わらない。
「……っ！」
戦い続ける三森と、ジェーンの顔に焦りの色が見え始めた。数の上では有利なのに、ディルに対してアドバンテージが握れない。優勢になれない。

一方のディルは涼しげに、攻撃を流し続けている。視線は定まっていて、瞳は爛々と輝く。
楽しんでいるかのように、愉しんでいるかのように、何かを期待している、待っているような、確かな目的を持っている人間のそれ。
一度、勤務外の二人が攻撃を中断した。
ディルから距離を置いて、肩で息をつく二人。
「おしまいですか？」
飄々と、ディルがそんな言葉を吐いた。
「はっ、これからだよ。慌てンじゃねえ、そろそろ本気を出してやるよ」
負け惜しみでも何でもなかった。三森は、右の手のひらに意識を集めて、強く握った。
「そうネ、アタシもギアを上げようカシラ」
言って、ジェーンが片足で地面を鳴らす。
トントン、と。トントン、と。ドアを軽くノックするような音。
「……激情ですね」
自らの、腰の位置まで垂れ下がった長髪を靡かせ、ディルが不敵に笑った。二刀を、剣道などで言う正眼に構え、三森とジェーンの動きに注意を向ける。

「ヤバイんじゃないのか、このまま続けると」
「確実に誰かは死ぬと、わたしは見ます」
おいおい、と一が誰に突っ込むのでもなしに、嘆いた。
「空気が見て取れるように、ハッキリと変わりました。さすがに、もう遊びでは済まされない所にまで来てしまったようですね」
「意味が分かんねえよ……。何で誰もやめようとしないんだ？」
「さあ、わたしには何とも」
「つーかさ」と、他人事のように、全く関係無い事だ、と言わんばかりのガーゴイルの態度に、一が痺れを切らす。

「次はお前の番かもしれないんだぞ？　逃げようとか、何とかしようとか思わないのか？」
「わたしは傍観者ですから」
考える間もなく、最初から用意されていた答えを述べるように、ガーゴイルが言った。
「……それで良いのかよ」
「なるようになるでしょう。ここで殺されてしまうようなら、わたしはそういう運命だった、としか言いようがありませんね」
一は黙る。
もう、何も言えなかった。

トントン、と。トントン、と。
一定の間隔で聞こえる、ジェーンが地面を蹴る音。それだけがこの広場に、山に、果ては世界にこの音だけが響いているような。

――ドン、と。

リズムが急に変わった。
ジェーンがいない。上から見ている一ですら、ジェーンの姿を認識できなかった。その場にいたディルや三森からは、ジェーンの姿を認識する事が、更に困難であったと思われる。
ディルは咄嗟に剣を払った。
「スロウリィ！」
金属音。高く舞い上がる剣。
「ぐっ」
肉を叩く音。同時に、ディルが腹部を空いた手で押さえる。まだ、ジェーンの姿を、ディルは捉えられない。
前後左右だけでなく、上下を絡めた死角からの攻撃がディルに襲い掛かる。防げない、防ぎきれない。舞い上がった剣が落ちるまでに、ディルは合計十発以上も、ジェーンの打撃を食らってしまう。

同様に、三森もジェーンの姿を確認できない。三森も、攻撃に参加できないでいた。

早すぎる。

ジェーンが早すぎて、動きが掴めなくて、三森は攻撃のタイミングを逸してしまった。三森が小さく舌打ち、明らかに苛立っている。自分が中途半端に攻撃に参加すれば、ジェーンの邪魔になってしまうと、分かってしまったからだ。

「……やるねえ、おチビちゃん」

少年が感嘆の声を漏らす。

今、この場を支配しているのは、間違いなくジェーンだった。

「しかし」

と、ガードを固めるディルが呟く。

最速は、いつまでも続かない。いつかは、速度が確実に、絶対に落ちる。いつかは、ジェーンの疲労も蓄積し、いつかは、ディルの目も、スピードに慣れてしまうだろう。最速は、それまでのものだった。

だからジェーンは、それまでに決着をつけなければいけなかった。

しかし、

「そこです」

と、ディルの残った剣が誰もいない空間を指した。いや、誰もいなかった空間に。

そこに、今はジェーンがいる。

「……クール」

喉元に剣の切っ先を当てられたまま、ジェーンが呟いた。

「素直に、驚きましたよ。貴方の早さは驚嘆に値する。そこまでの速度は私たちですら、初めて目にしました」

「サンクス。でも、慣れちゃった？」

「いえ、慣れるのは恐らく無理ですね。私は貴方のパターンを読んだだけです。確かに早い、ですが、それ故に単純だ。どこか子供っぽさが抜けきれていない、甘い連係の構築でしたよ」

「……言うじゃナイ」
「言わせて下さい。自分でも少し、浮かれていると思います。なんにせよ、あの速さに相打ち同然の形までもつれ込む事が出来たのですから」
そう言って、ディルは自分の喉元を一瞥した。
突き付けられた剣。ディルがついさっきまで握っていた剣。
「私の剣を狙ったのは、この為だったのですか？」
「ＮＯ、この剣が落ちてくるまでに、あんたを倒そうとしてたのヨ。分かりやすいサインでしょ？」
不敵に、ジェーンが笑う。
剣を突きつけられたまま、剣を突きつけたまま。
「どうします？　このままではお互いの命が危ういですよ？」
「Ｎｏ、ｋｉｄｄｉｎｇ！　あんたの後ろから、真赤なおサルさんが近づいてるワよ」
「ふふっ、貴方の後ろには、私の仲間がいるんですよ？」
お互い動けない。再び膠着状態。
そこで、

「ここまでにしておこうか」

少年が軽やかに言った。
「ここで誰かが死ぬのは勿体無いよ。今日はソレを狙ってみんなここに集まったんだ。みんな戦って死んでしまえば、誰が得をする？　するのは、あそこで高みの見物をしている奴らだけだよ」
少年が洋館を指差す。屋根の上の、ガーゴイルの姿が一同の目に入った。何の感情も込めず、持たず、空っぽの瞳でガーゴイルは彼らを見つめている。
「お兄ちゃん！？」
その隣に座る一の姿も、嫌でも一同の目に入った。
「……あいつ、何してやがンだ……」

いたたまれなくなり、一だけが違う方向を向いた。
「どうやら、今回のソレは無害のようだね。つまらない事だけど」
「その通りです。そして、勤務外と争う理由も消えましたね」
ディルが剣を、コートの中に収めた。
それを受けて、ジェーンがディルの喉元から、剣を降ろす。
「返していただけますか？」
「……ハイ」
素直に、ジェーンが剣を渡した。
そしてお互い距離を取る。
「しゃあねェな」
物足りなさそうな三森だったが、自分だけが暴れる訳にもいかず、不承不承と言った感じに、ぼやいてみせた。
「それじゃディル、帰ろうか」
「ソレの始末はどうします？」
「良いさ、彼に任せるとしようよ」
ディルが顔をしかめる。
「……彼？」
「そう、彼さ」
楽しそうに呟くと、少年は山を下りていった。
続き、ディルも広場から姿を消す。
山には、勤務外とソレだけが残った。

屋根の上には、一とガーゴイル。
そして、三森とジェーンがいた。
「お前なあ……」
怒れば良いのか、戸惑えば良いのか、どう扱って良いか分からない状況に、三森は頭を掻く。
「ソ、ソソソレなんかと話をして！　お兄ちゃんのバカ！　お、おおお兄ちゃんのくせに！」

ジェーンは怒っていた。
「あ、あんたも、よくも抜け抜けとお兄ちゃんと話をして！」
しかもソレに嫉妬していた。
「ジェーン、何となく気持ちは分かるけど、ちょっと落ち着いてくれよ」
「このシチュエーションで！？」
騒ぎの一端、張本人のガーゴイルは、自身の処遇がこれから決定されると言うのに、何処吹く風そ知らぬ顔で、駒台の街を眺め続ける。あくまでも、どこまでも傍観者だった。
「だからさ、何度も言うけど、こいつは人畜無害だよ。ほら、俺別に何もされてないだろ？　それにこいつは街を見に来ただけなんだってば」
「……信用できねェよ。しかも、何だ、喋るソレってのは、結構クるモンがあンな」
煙草を吸いながら、三森がガーゴイルに目線を向ける。
「とにかく、今回は見逃してやって下さいよ。お願いします、三森さん」
「ンな事言われてもな……」
「お兄ちゃん、アタシには何も言ってくれないの？」
「ジェーン、俺お前の事怖くなっちゃった」
「そんな事言わないでヨ！」
ガーゴイルが冷ややかな視線をくれていた。
「何とかならないですか？　良い奴ですよ、こいつ」
「……だから、お前な。良いとか、悪いとかじゃなくて、ソレなんだから、放っておく訳にもいかねーだろうが」
「どうしてですか？」
「どうして、って、くそっ。面倒な奴だよなお前はよ」
三森が一から視線を反らす。
「大体、店長からは、好きにしろって言われてるじゃないですか。なら、好きにしましょうよ。俺はこいつを殺したくないのは勿論だ

し、殺されるのも嫌です」
「好き勝手言いやがって。私はもう知らねェ」
そっぽを向いて、三森が煙を吐いた。
「……ジェーンは？」
頬を膨らませて怒っているジェーンに、一が声を掛けてみる。
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……勝手にすれば」
よっしゃ、と一がガッツポーズを作った。
「……」
「……」
「……」
案外、他人のガッツポーズは見ていて気持ち悪いと、一以外の者は思う。
「話は纏まったようですね」
「あのな、他人事みたいに言わないでくれ。俺が馬鹿みたいだ」
「いえ、一さんは大変聡明な方と、わたしは見ます」
ガーゴイルは淡々と言った。そして、徐に翼を広げる。その姿は、やはりグロテスクと言うか、悪魔チックだった。
が、少し格好良いかな、とも一は思ってしまう。
「……次の街へ行くのか？　折角オンリーワンのＳＶからお許しが出たんだぜ」
「いえ、もう少しこの街に留まる事にします。次は、もっと別の場所から駒台を見たいと思いまして」
「そっか。じゃ、また会えるな」
「ええ。わたしもそう見ます」
それでは、とガーゴイルが屋根から足を離した。翼を左右に、大

きく広げ、宙に浮く。
「一さん」
と、ガーゴイルが空から呼びかけた。
返事はしないで、顔だけを一が向ける。
「わたしからの、心ばかりのお礼です。どうぞ、後少しだけ、この場に残っておいて下さい」
「は？　何でだよ？」
「良い物が見れますよ。それでは、わたしはこれで」
それだけ言うと、ガーゴイルはゆっくりと、空を泳いでいった。
その姿だけ見ると、やはり悪魔のような、そんなカタチだった。ゆっくりと、ゆっくりと、ガーゴイルの姿が小さくなる。その姿は、やはり傍観者で、第三者で。そしてどこまでも自由だった。

どうしてくれるんだ、と一は思った。ガーゴイルの言葉に乗せられた形で、屋根の上に残るのは良いが、そこには険悪な雰囲気が漂っている。
ジェーンは一と目も合わせず、言葉も交わさず。
三森も、ただ黙ったまま、煙草を吹かし続ける。
だが、誰も屋根から下りようとしなかった。
「助けて」
一が誰にも聞こえないように、小さく呟く。
「あ」
と、誰があげたか定かではない、驚きの声が何処からか漏れた。
一の顔に突き刺さり、差し込む橙色の光。
その声と感触に、一がはっと顔を上げる。

――きれいな夕陽だった。

駒台の街を包み込むように、オレンジの明かりが姿を現す。一日

の終わりを告げるような、優しい光。暖かな輝き。
「いつも見てンのにな」
退屈そうに呟く三森も、しっかりとその光を両目で捉えていた。
いつも見ていた、いつも見ているただの夕焼け。しかし、駒台の山の洋館、そこの屋根から見る夕陽は、格別だった。言いようのない、妙な感情が一の胸に込み上げる。
それは隣のジェーンも同じだったようで、さっきまでの怒りを忘れたかのように、ぼうっとそれだけを見つめていた。
――ありがとな。
全員が、夕陽を見送る。
昨日も消え、今日も消え、明日も消え、恐らくは未来永劫に現れては消えるもの。しかし、一日とて、同じ日は無く、同じ陽は無い。恐らく、未来永劫に。今日の夕陽は今日しか見送れない。誰もが知っている当たり前の事。だから、いつもは見送らない。当たり前の、日常過ぎる日常の風景。
だが、今は感謝を。
当たり前じゃない当たり前に感謝を。
昨日に感謝を。
今日に感謝を。
明日に感謝を。
屋根の上の全員が、今日も今日と言う「ひ」を見送った。

言う事聞かなきゃあいつが来るぞ

一一（にのまえはじめ）の住むアパート、中内荘。

尤も、中内荘、そう呼ぶ者など誰もいない。少なくとも、駒台には存在しない。寂れた外観、朽ち（かけ）た壁、二階へ上がるための階段は、上るたびにギシギシ、と不快かつ不安を駆り立てる音を奏でる。１０１号室から２０６号室の、計十二部屋。単純に計算すれば、十二人は住める。も、殆どの部屋は空き部屋であった。現在の入居者は、２０２号室の一、その真下、１０２号室の、北、と呼ばれる中年の男性、１０４号室の老人、２０６号室の若いカップルぐらいのものだ。ちなみに、あまりに人が入ってこないので、元々は大家の部屋だった１０５号室と、訳も無く、その隣の１０６号室は意味も無く大家の部屋となっている。二部屋あるからといって、部屋の広さが二倍になる訳ではない。ただ、二つ、というだけ。本当に意味が無かった。そして、駒台に住んでいて、このアパートを知っている人間はおろか、住んでいる人間ですら、中内荘の事を「ボロ小屋」「肥溜め」「木に穴を空けて住んだ方がマシ」などと言う。

中内荘には、特に決まった別称は無かったが、蔑称なら掃いて捨てるほど存在していた。

ギシギシ、と。

そんな中内荘に不快な音が聞こえる。まだ日も昇りきっていない、冷たい風が吹く早朝。

ギシギシ、と。

一段ずつ、一段ずつ、ゆっくりと踏みしめながら歩く姿。

「さっむー」

吐く息は白く形を残す。

足音の正体は、自らの両手を擦り合わせ、ささやかな暖を取ろうとしていた。やがて、それは二階のとある部屋の前で立ち止まり、ドアノブに手を掛け、躊躇いも無く勢い良く捻った。

が、回らない。

恐らく、と言うか確実に鍵が掛かっている。

「……」

彼女は恨めしげに扉を睨み、部屋の窓に目を向けた。

彼女が立っている部屋の前、２０２号室には、明かりが灯っていなかった。人の気配はするが、動いている様子は無い。早朝なので、それは仕方の無い事でもあったが。

静かな時間が、しばしの間、そこに流れた。

長く、美しい黒髪をかき上げ、意味ありげにスーツ姿の彼女は笑う。

そして、

「にのまえー、鍵開けてー」

極上の猫撫で声で、女は言った。

ドアの向こうからの返事は、無い。

ドン、と女がドアを殴りつけた。

「開けろっつってんでしょ！　本当は起きてんの分かってんだからね！」

何度も、何度も、ドアを殴りつける。かちり、と扉を叩く音に紛れて、小さな音。

「遅い」

ドアを叩くのを止め、女が満足げに言った。

「……どちら様ですか……？」

２０２号室から出てきた家主、一は目を擦りながら現れる。眠たそうに、あくびを隠そうともせず、迷惑そうに、嫌そうな目をしたままで。

「あんたさ、自分の生涯のパートナーの顔も忘れたの？」

「……障害のパートナー？　そんなの要らないです。帰ってくださ

い」
「つーか、あんた今日何の日か知っててそんな態度取ってる訳？」
うーん、と一が唸った。
「ああ、糸原さん。今日退院でしたっけ」
「……薄情な奴」
スーツ姿の女、糸原が拗ねたように頬を膨らませた。
「俺寝起きなんで、その顔やめて貰えます？」
「どういう意味よ？」
「まあ、迎えに行こうとは思ってましたよ」
「じゃあ何で来なかったのよ？」
一が部屋の中に視線を移す。
「今、何時か分かりますか？」
「私デジタル派なのよ」
「……六時です」
だから何、と、糸原が尋ねた。
「早すぎますよ、今日退院だって知ってても、まさかこんな早く帰ってくるとは思ってませんでしたから」
「そう？　ああ、アレよ、病院って何かいるだけで病気になりそうで嫌いなのよ。もっと早く帰りたかったぐらいだわ。体も鈍ってるし。肩と腰と胸が重いわ、後で揉んで」
「肩なら叩きます。それと、糸原さんがいない間に、新しい人が来ましたよ」
「新しい人？　このアパートに？」
糸原が怪訝そうな顔をした。
「いえ、バイトの方です。新しいＳＶが来たんですよ。アメリカから」
「アメリカ？　すっげえ外人じゃん、ヒュー！　どんな奴？　カッコイイ？」
糸原の妙なテンションに困惑しながらも、一が答えを模索する。
オンリーワン、北駒台店の新しいＳＶ、ジェーン・ゴーウェストを

どう説明するのか。ああ、と考え込んでいた一がそれに行き着いた。糸原へ向き直り、一がハッキリと、新しいＳＶとはどんな人間か口にする。

「俺の妹です」

「……あっそ。どうでも良いわ、じゃ布団退いてね、私寝るから」

「それなんですが」と、部屋に入ろうとする糸原を遮って、一がドアを後ろ手で閉めた。

「何よ、寒いんだからとっとと開けなさいよ」

「糸原さん。あなたがこの部屋に住んでから、どれくらい経ってると思いますか？」

突拍子の無い質問に、糸原が面倒くさそうに息を吐く。答える気も、そもそも考える気も、糸原には無かったのだが、一の顔が思っていたより真剣だったので、

「三日ぐらい」

とりあえず答えた。

「違います。もう一週間経ってます。そして、一週間経ってるのに、糸原さんは自分の家を見つけようとしないじゃないですか」

「はあ？　何言ってんの？」

「追い出しますよ」

「冗談冗談、ちゃんと探してるわよ。それに一ヶ月って事だから、後、三週間は住まわせてくれるんでしょ？」

糸原が軽く笑う。

その様子を見て、一が力なくため息を吐いた。

「実は、家ならもう当てがあるんです」

そして、糸原の目を見ないまま、一が口を開いた。

「……へー、あっそう、そんなに私に出て行って欲しいんだ。あーそりゃそうよねー」

「そんなつもりはないですよ。まあ、迷惑かって言われたら、百パーセント否定は出来ませんけど。それと、その当てを作ってくれたのは、実は三森さんなんですよ」

二度目の「実は」に糸原が目を丸くする。
「ヤンキーが？」
「そうです。勤務外専用のマンションに、こないだのソレの事件で空きが出たから、誘ってみろって」
「期限は決まってんの？」
「さあ、そこまでは知りません」
ふーん、と糸原が腕を組んで、考え込むそぶりを見せた。
「確か、あの高そうなマンションよね」
「高そう、じゃなくて、実際高いらしいですよ。けど、勤務外ならお金要らないって聞きました。おまけに、部屋も広いし、支部には近いし」
「げっ、って事はタルタロスにも近いじゃないの」
「……脱獄犯、ですか？　けど、もう糸原さんには関係無いじゃないですか。向こうから撤回してくれた事ですし」
「そうだけど、嫌なもんは嫌なのよ」
冷たい風が、一たちを通り抜ける。
寒さに身を震わせて、糸原が一をジト目で見た。
「とにかく、もう良いでしょ？　その話は保留ね」
「しょうがないですね」
言って、一が扉を開ける。一が玄関に足を踏み出した瞬間、気付く。
――糸原四乃。
タルタロスから逃げ出した、元指名手配犯。半ば、流されるままに流され、請われるままに請われ、糸原を同居人として部屋に置いている一だったが、気付いてしまう。犯罪者だから、行くところがないから、仕方なく一の部屋に。だが、既にそんな肩書きは糸原には、無い。
何も無い。
隠れる事も無く、怯える事も無く、どこへでもどこにでも好きなように好きに出来るのだ。もうこの街に住む必要も、この部屋にい

る必要も、一と一緒にいる必要も、無い。
「何よ、どうしたの？」
それならば。
何故、この人は、ここにいるんだろう。何で、この人は、ここに帰って来たのだろう。と、一は思う。思いを巡らせ、走らせ、考える。
「いや、何でもないです」
言って、一が靴を脱いで先に部屋に入った。
糸原が慌しく靴を脱ぎ捨て、「ただいまー」と、景気良く声を放つ。
――どうして、俺はこの人と、一緒にいるんだろ。
考え込む一は、近づく影にも気付く事が出来ない。
「おりゃ」
「……ったあ！」
一が額を押さえ、しゃがみ込んだ。
「何でデコピンしてんの、この人……？」
「ほらほら、ただいまって私が言ってんだから、無視しないでちゃんと挨拶しなさいよー」
脱いだスーツをひらひらと弄びながら、糸原が笑う。雑誌の表紙の女性のように、上手な笑い。
「……」
納得いかない一だったが、額に走る痛みのお陰で、頭を支配していた靄が晴れた気分だった。
――まあ、良いか。
「それじゃ、お帰りなさい」
うん、と糸原が素直に笑う。
つられて、一も楽しい気分になれた。
「良く出来ました、そいじゃ朝ごはん食べに行こうか」
「眠いんじゃなかったんですか？」
「折角帰って来たんだし、病院食ばっかで飽きたし、何か食べたい

よう」
「つっても、この時間じゃ大した店は開いてないですよ」
「……あんたの手料理が食べたい」
一が顔を引き攣らせた。
「何て不細工な顔してんのよ」
「俺の母親に聞いてください。て言うか、手料理って、俺のですか？」
うん、と糸原が短く頷く。
「……何で？」
「何でもよ、気分なのよ、私が食べたいって言ったら食べさせなさいよ。私が、魚が食べたいと言えば海まで行って、鳥が食べたいと言えば山まで行って、肉が食べたいと言えば牧場まで行くのが！　あんたの！　仕事なの！」
「無茶苦茶な……」
「ほら、何か作ってよ。肉じゃがとかクリームシチューとかさ」
「嫌です！　しかもお嫁さんに作ってもらいたい料理っぽいチョイスじゃないですか！　そんなの俺が作って欲しいぐらいなのに！　そもそも、俺が、何で料理しないと駄目なんですか！」
一が叫んだ。魂が篭もっていた。

「その通りヨ！」

それは突然で、唐突に、突拍子もない登場だった。けたたましく、赤く錆びた扉が開け放たれる。
盛大な声で正大にツインテールが現れた。小さな背丈に合っていないのか、袖を余らせている、金色の刺繍が縫い付けられた派手なコートを着込み、ベルボトムのジーンズの裾口を垂らして履いている少女。
ジェーン・ゴーウェストが現れた。
「誰……？」

「それはアタシのせりふヨ！　このマオンナ！」
「ま、まおんな？　間女？」
糸原が目を白黒させたまま聞き返す。
その様子に少し満足したようで、ジェーンが意味ありげに微笑んだ。
「イエース。アタシの居ない間に、勝手にお兄ちゃんに近づいて……。お兄ちゃんに料理を作るのも！　作ってもらうのも！」
ジェーンは自分を指差し、
「このアタシだけなの！」
高々と宣言して、そのまま一の部屋に侵入する。
「このチビっ子何？　一体何事？」
「おい、靴脱いで入れジェーン。畳汚れるだろ」
「オゥ。ニホンはこれだから嫌なの。お兄ちゃんもこんな国飽きたでしょ？　早くステイツに帰らない？」
「帰りません。それより、こんな時間に来るなんて面倒くさいな」
「お兄ちゃんに会うのに、時間なんてカンケイあるの？」
「凄くあるよ。まあ、どうでも良いや、ところで、新しい部屋は慣れたか？」
「勤務外専用のマンションね、なかなかクールよ。アタシにフサワシイところだワ、エレガントで、セレブリティックで、ブリリアントで」
一はそのマンションに住んでいる三森を想像してみた。どうにも、ジェーンの言う形容詞とはかけ離れていて、少し笑ってしまう。
「コラ」
一の後頭部に、糸原の長い足が乗せられた。
「お姉さんを無視するとは何事か」
「頭蹴らないでくださいよ」
「じゃあどこなら蹴って欲しかったの？　んん？」
「んん、じゃないですよ。どこも蹴られたくありません」
「はいはい、じゃあ質問には答えてよ。こいつ一体誰なの？」

糸原が親指でジェーンを指す。
指されたジェーンは不機嫌そうに糸原を睨み返した。
「ああ、さっき話した新しいＳＶですよ」
「はあ？　何で社員があんたの部屋まで来てるわけ？」
「だから、言ったじゃないですか」
「何を？」
一がジェーンに向き直る。
「お、お兄ちゃん、な、ななな何？　急に見つめないでヨ……」
何故かジェーンが頬を赤らめた。
「この頭ハッピーな奴が俺の妹、みたいなモンなんですよ」
糸原が固まる。え、あれ、マジ、とかうわ言の様に呟きながら、
ジェーンと一を見比べながら、
「本当だったの？」
いまだに信じられない、といった風にようやく口を開いた。
「残念ながら」
「何で！？　何が残念なのお兄ちゃん！？」
「じゃあ朝ごはんは食べに行く事にしますか」
動揺している二人を横目に、顔を洗う。一は落ち着いた様子で、
ハンガーに吊るされていた、くたびれ掛けたコートを羽織る。ゆっ
くりした動作で靴を履き、あくびを噛み殺した。

一が糸原とジェーンへ事情を説明するのに大して時間は掛からな
かった。
ジェーンは、糸原に対して、あまり良い感情を持ってはいないよ
うだったが、
『一？　何で私がこいつを好きにならなきゃいけない訳？　私面食
いなのよ』
『アー……』
『本人目の前でそういう事言える人って、好みですよ俺』

一連のやり取りで、糸原への誤解はある程度解けたようで、少しは打ち解けたようだった。

一方の糸原は、ジェーンが一の身内だと知ると、ベタベタとジェーンにくっ付く様に甘えだし、「私こんな妹が欲しかったのよね」とかのたまっている始末だった。

「仲良き事は素晴らしきかな、ってマジで良い言葉ですよね」

「うん？　うん、そうよね、あー、ほっぺたプニプニじゃん、マシュマロみたいね。若いって良いわー。ね、食べて良い？　ほっぺた食べて良い？」

「カーニバル！？　ＮＯ！　ＮＯ！　触らないで！　それ以上近づかないで！」

糸原はジェーンにしなだれかかり、もたれかかり、ジェーンの真っ白で柔らかな頬肉を人差し指で弄んでいた。

ジェーンは必死で糸原を引き剥がそうとするが、糸原は食らい付いて離れない。体格差か、それともそれ以外の何かか。

一はジェーンを助けようともせずに、触れようともせずに。係わり合いを避けるべく、二人から距離を開けて、オンリーワン北駒台店へと一人足を速めていた。背後から、ジェーンの舌足らずな、助けを求めているような、悲痛な声が聞こえていたが、一は、一足先に店内に入っていく。

「アアー！　お兄ちゃん！　お兄ちゃん！　ヘルプ、ヘルプミー！」

「へっへっへ、超可愛いじゃんお嬢ちゃん。あー、一はこんな事させてくれなかったからなー、気持ち良いー。ね、ねね、髪の毛に顔埋めて良い？　良いよね？　良いよね」

もう、何も聞こえなかった。

一は店内を見渡す。相変わらず、客も店員も、誰もいなかった。いつもと変わらぬ光景に少し安心して、バックルームの扉に手を掛ける。

「おはようございます」
「ん、何だ、早朝から入ってくれるのか？」
相変わらず、椅子に座って煙草を吹かしている店長と、一がいつもの言葉を交わした。
「いや、糸原さんが朝ごはん食べたいらしいんで」
「ああ、今日が退院だったな。ん？　もう帰ってきてたのかあいつ？」
「ええ、お腹減ったってうるさいんですよ。だから廃棄下さい」
店長が煙草を空き缶に押し付ける。
「買え」
「今月厳しいんですよ。同居人が増えちゃったんで。俺を助けると思って、お願いします」
「……なら、私に感謝するか？」
店長が一を見据えた。冷たいというよりは、感情が篭もっていない。そんな瞳で、店長は一から視線を反らさない。
「え、あ、まあ、そりゃ感謝しますよ。有り難いです」
射殺されるような店長の鋭い視線にうろたえつつも、一が答えた。
「それは困るな」
「はあ？　どうしろって言うんですか、ホント」
「そうだな。一、お前が廃棄処理して来い」
「ああ、それぐらいなら別に」
「頼むぞ。誰もやってなかったんでな」
一が奇声を上げた。

一は適当なかごを持って、店内に出る。と、一の目の前で、長身の、黒いスーツを着た女が、ツインテールの少女を襲っていた。
「お兄ちゃん、助けて……」
髪の毛に顔を埋められている、か弱そうな少女が、涙を浮かべて、一に助けを求める。

一はデイリー商品の置かれている棚に向かった。
「あー、マジ気持ち良いー。良い匂いー。ね、ね、シャンプーってやっぱ良いの使ってるわけ？　髪サラッサラじゃないの、お姉さんにも分けて欲しいなー。あー、いっちゃいそうだわ」
襲っている女は、恍惚とした表情で、少女の腰に手を回した。
一はおにぎりやサンドイッチなど、商品のラベルを確認して、廃棄にすべき時間が書かれているものを、次々とかごの中へ放り込んでいく。
「うわ、三日前のが残ってる」
信じられない、と呟き、一が溜息を漏らした。一通り売り場の商品を確認すると、一はバックルームへ戻っていく。かごの中は商品で一杯になっていた。ずっしりとした重みが一の腕にのしかかる。
「店長、掃除もレジもしなくて良いですけど、廃棄だけはお願いしますよ」
「ん、そうだな」
生返事。
一は店長を横目に、机の上に中身の詰まったかごを置いた。パソコンの前に立ち、マウスを操作する。
「あー、やっぱ廃棄やばいっすよ、滅茶苦茶多いです」
「良いじゃないか、好きなの持ってけるだろ？」
「……店長って、店長ですよね？」
「何を言っているんだお前は」
「そっくりそのままお返ししたいですよ……」
廃棄登録も終わり、適当なパンなどを袋に詰めて、一は体を伸ばした。
「じゃ、俺帰りますね。今日の夕方からなんで」
「ああ、よろしく頼む」
「……確か、今朝は三森さんがシフトに入ってませんでした？」
「ああ、ちゃんといるぞ」
店長が仮眠室を指差す。

「ちゃんと、いますね」
さっきは気付かなかったが、確かに仮眠室からは、誰かの寝息が聞こえてくる。
「それじゃ、また後で。お疲れ様です」
「うん、お疲れ。あ、そう言えば、ソレが出たらしいから気を付けろよ」

早く寝なきゃ奴らが来るぞ

オンリーワン北駒台店、バックルームは険悪な雰囲気に包まれていた。
「子供が？」
「ああ、二日前から数えると、もう四人目らしい」
店長が紫煙をゆっくりと吐いた。
「ボス、どうしてアタシに何も言わなかったの？」
ジェーンが背後の糸原を警戒しながら、店長に冷たく言い放つ。
「……ソレの仕業だと分かったのはついさっきだ。言おうと思ったんだがな、ゴーウェスト、ここに来るのが早い」
店長の冷たい物言いにジェーンが黙り込んだ。
「ぷー、早いってさ、早いのは男だけで充分だっつの、ねえ？」
糸原がけらけらと笑った。
「……それで店長、ソレはどんな奴なんですか？」
「さあな、情報部が捜索してるらしいが、詳しい事は未だ分からん」
「ふーん、でも正体がわからなくてもさ、ガキ狙うようなソレに、私らがやられるとは思わないけどね」
「……そうネ、イトハラの言うとおりだわ。じゃあボス？　新しい情報が入ったら、アタシたちに伝えてくれるかしら？」
「ああ、分かってる」
「それじゃ、とりあえず帰りましょうか？」
一の発言に、そうね、と糸原が頷き、ジェーンも同意した。
歩き出す三人。
「待て」
と、店長が椅子をくるりと回転させる。
「どうしました？」
「ゴーウェストは残れ。一と糸原は帰って良いぞ」
「Ｗｈａｔ！？　アタシもお兄ちゃんと帰りたいんだけど？」

「……ゴーウェスト、君はＳＶだろう。店内に誰もいないこの状況、捨て置けるのか？」
「ジーザス……」

冬の寒空の下、まだ日が出切っていない、中内荘への道を、一と糸原が歩く。
「ね、あんたがぶら下げてんの、何？」
糸原が、一の右手へ視線を落とした。
「朝ごはんです」
「ふーん、中身は？」
はい、と、一がビニールの袋を糸原に渡す。
「なーによコレ、コンビニのじゃない」
「たまには良いじゃないですか、つーか、糸原さんが来てから食費が異様に嵩むんですよね。すぐに高いもの食べたがるんですから、金無いのに、妙に舌だけ肥えてんだからホント」
「はいはい、わるぅございましたね。ん、ん？　何よ、これ賞味期限切れてんじゃん」
「ええ、廃棄だから当然です」
悪びれず、真顔で一が頷いた。その一の顔に、ビニール袋が振り下ろされる。
「あーっ！？」
中身の入った、そこそこ重いビニール袋が、良い角度で。
「私を馬鹿にしてんの！？」
「し、しししてません……」
鼻を押さえながら、一が弁解した。
糸原は怒りが収まらない様子で、遂には蹲ってしまった一の後頭部に、再度ビニール袋で殴打する。
「食費ならきちんと入れてんじゃない、もっとちゃんとしたモン食べさせなさいよ。お姉ちゃん、頑張って稼いできたのに」

ビニール袋をくるくると、指で回しながら、糸原が一を責める。
「北さんからイカサマでぶんどった金じゃないですか……」
「サマァ見破れない方が悪いのよ。私に罪は無いわ。むしろあのおっさんの目が節穴なのを追求すべきよ。あれはもう島流しモノね。何度同じ事やっても引っかかるんだから、笑いが止まんないわね、あっはっはっはー」
「くそっ、犯罪者の考え方だ」
「うっさいわね、んな事言うならあんたも共犯者よ。そのお金で良い思いしてんだから」
「してないですよ！　結局は、あなたが勝手にお金持ってくんだから！」
閑静な住宅街に、一たちの喚声が喧しく響く。
「あんた、最近楯突くようになったわね」
「暴力で訴えられたら俺の負けなんですから、口答えぐらいさせて下さいよ」
「……良くわかってんじゃん」
糸原の口元が、嫌らしく釣り上がった。ビニール袋を投げ飛ばし、一の肩をがっしりと掴む。
「じゃあ、その力に訴えかけよっかなー」
にやにや、と楽しげに糸原が言った。
「ちょっともう、ホント止めて下さいよ。肩に痕残っちゃうじゃないですか」
「ダイジョウブ。痛くしないから」
糸原の腕に力が入る。
「いたい！　既に痛いです！　いい加減にして下さいってば、いたいたいたいもう嫌だ！　バカ！　詐欺師嘘吐きバカ！」
「あはは、ガキみたい」
「ガキはどっちですか！」
「あー、余計な事したらお腹減ったー」
糸原が一から手を放し、長い手足をゆっくりと伸ばした。

一は掴まれた肩を摩り、糸原を睨む。精一杯の抵抗だった。
「……もう、何なんですか一体。俺の事いっつも馬鹿にして、おもちゃにして、そんなに俺を弄るのが楽しいですか？」
その質問に糸原が、猫のように瞳をまん丸にさせ、愉しげに目を細める。
「ふうん、なかなか嗜虐心をくすぐる質問ね」
糸原が舌なめずりした。
「完全に悪役じゃないですか」
「誰がどこをどう見ても、超完全正統派ヒロイン系美少女の私に向かって、よくもまあ、そんな事を言えたもんね。あんたの神経おかしいんじゃないの？」
「糸原さん、確かにきれいですけど、少女って年では無いですよね」
と言う台詞を一が言い切る前に、一の臀部に激痛が走った。
「失礼千万な奴ね」
「っとに子供なんだから。すぐに手ぇあげるし、蹴るし、どつくし、掴むし、引っ掻くし……糸原さんのせいで、傷が増えて増えてしょうがないですよ。ソレより、あなたに付けられた傷の方が多いんじゃないですか」
「夜、寝る前に痛んだりする？」
「一日中痛いですよ。ああ、銭湯の帰りが一番痛いっすね」
「そうなんだー」
「何でにやけてるんですか？」

「オマエらいい加減にしろよ！」

一が振り向いて、驚いた。
緑の帽子をかぶった子供がそこにいる。
「いつまで喋ってるのさ！　四大せーれーのシルフ様を無視しようなんて、ニンゲンめ、生意気だぞ！」
一が驚いたのは、子供が背後にいたことではない。

立っていた位置だ。口を尖らせて、不機嫌そうにしている子供は、空中に立っていた。

「え、あ、お、お前」

「オマエとは何だ！　口の利き方がなってないぞ！」

立っていた、足場も無い空中に。空気の上に、空に。むしろ、浮いている、といった方が正しいだろうか。しかし、子供はそれが当たり前だとも、何とも思っていないのだろう。

なぜならば。

「風のせーれー、シルフ様に向かって頭が高いんじゃないのか！」

この子供は、ソレなのだから。

「うっさいわね」

「え？　あ、あー！　何すんのさ！」

糸原が背伸びして、シルフの頭を片手で掴む。

「あ！　オマエ、石食らってやられてたニンゲンだな！」

シルフが鬼の首を取ったように、頭を掴まれながらも、高く笑った。

「ぅあんたがやったんじゃない！」

「うわあああああああああああ！」

シルフを掴んだまま、糸原が腕を回転させる。

「……」

なるほど、と、一がやっとシルフの事を思い出した。たった一日だけの、一回だけの邂逅だったが、この我侭な子供の事を、一はまだ覚えている。そして、一は少しほっとした。

糸原の嗜虐対象が、たとえ、たとえ今このひと時だけだとしても、自分から他人に移った事に。

振り回されるシルフを見ながら、一が煙草に火を点ける。

「ニンゲン、助けてよ！」

「……何で君がここにいるの？」

「そ、それは、あ、あああああああ」

シルフが回転する。

見かねた一が、
「糸原さん、止めてあげてください」
「駄目よ、あと二万回ぐらい」
「ごめん、駄目だって」
「ばかあああああ！」
言うも、無駄であった。
結局、糸原が肩に違和感を感じると訴えたところで、シルフは解放された。足はふらつき、目は回り、口元を押さえながら、風の精霊は地面にへたり込む。
「……きもちわるい」
「私も肩凝っちゃったー、一、揉んで」
一は近くのガードレールに腰掛けて、煙草を吹かしていた。
「大丈夫？」
「う、そう思ってるなら、助けてくれてもよかったじゃん！」
「そうだね、ごめんごめん。で、何か用でもあったの？」
「な！　オマエ、約束を忘れたのか！？」
シルフが元気に立ち上がる。拳を突き出し、一に向かって吠えていた。
「約束？」
「そうだよ！　忘れたとは言わせないぞニンゲン！」
「記憶に御座いません」
「？　どういう意味だ！」
「ふぅ……」
糸原がシルフの耳元に息を吹きかける。シルフが、息をかけられたむず痒さで思わず立ち上がった。風を舞い上げながら、中空で足をばたつかせる。
「うわああ！　何すんだバカ！」
「意味は無いわ」
両腕を組んで、糸原が真顔で答えた。
「オマエはキライだ！」

「うわあ、子供の格好してるとはいえ、ソレにまでちょっかいを掛けるなんて」
一が糸原から距離を置いた、引いた。
「ていうか糸原さん、話が進まないんで、ちょっと黙っててもらえますか？」
「分かったわ」
「良し。えっと、シルフ君？　で、良いのかな？　約束って何のこと？」
「……これだからニンゲンは……」
文句を言いながら、シルフが両足で地面に立つ。
「良いか、ニンゲン、シルフ様は心が広くておっきいから、オマエにもう一度約束を教えてやる」
「うん、ありがとう」
「シルフ様とオマエが会った日を覚えてるだろ？」
「……？」
「何で覚えてないの！？　覚えててよバカ！　バカバカバカ！」
両腕をぶんぶんと振って、シルフが怒りを露にした。
「バカバカってうわあああ！　何だ！？　何すんだアホ！」
背中に気持ちの悪いこそばゆさを感じて、シルフが再び飛び上がる。
「だーかーらー、糸原さん！　黙っててって言ったじゃないですか」
「うん。黙ってたよ。動くなとは言われてなかったから、私の指テクで坊やを喜ばせて上げたけど」
「喜んでない！」
シルフが反論するも、糸原は全く聞いちゃいなかった。
「糸原さん、もう動かないでください。息はしてて良いですから」
「何であんたにそんな事決められなきゃいけないのよ？」
「それで？　シルフ君、続けてくれよ」
むう、とシルフが唸る。
「そんな事言われたって。オマエ、忘れてるんだろ？」

「君にお菓子をあげたことなら覚えてるよ」
「そ、それだよ！　オマエがもっと良い物くれるって言うから、シルフ様がわざわざ来てやったのさ」
「そこは覚えてない」
「もう！　バカニンゲン！　言ったよ言ったの絶対言ったもん！」
一が頭を掻いて、何とか思い出そうとする。
シルフは大声を張り上げすぎて、肩で息をしていた。
「んー、言ったような、言わなかった、気も、しないでもない、かな」
「ややこしい事言うな！　結局、シルフ様にお菓子をくれるか、くれないか、どっちなのさ？」
「分かった分かった、悪さしないんなら、お菓子ぐらいあげるって」
一が面倒くさそうに手を上げる。
そんな様子にも気付かないで、シルフは期待に目を輝かせた。
「やった、じゃあ早くちょうだい！」
「今は無いんだ。そうだな、今日の夕方にでも店に来てよ。その時にあげるから」
「……店？」
シルフが小首を傾げた。
「ああ、俺たちの働いてるところ。勤務外のいるとこさ、ほら、そこを真っ直ぐ行った先のコンビニだよ。オンリーワン北駒台店。分かるかな？」
「……分かんない」
「そっか。それじゃ糸原さん、帰りましょう」
「オッケー」
一と糸原が歩き出す。
その後姿をシルフが見送
「あっ、ちょっと待て！　何も解決してないじゃないか！」
ろうとしたが、一がごまかそうとした事に気付いた。
「ちっ、じゃあどうしろって言うんだ君は」

「今すぐお菓子を持ってくるか、その店まで案内すれば良いじゃないか！　ニンゲンのくせに、もっと頭を使えよ」
「……糸原さん、肩の違和感は？」
「直ってないけど、反対側で行こうか」
糸原が左腕の、スーツの袖を捲くる。そして徐にシルフの頭を掴んだ。
「や、やめろよ！　分かったってば、もう一つ方法があるから！　そっちでいくよ、だから離して！」
「方法？」
一がシルフを睨むように見据える。
「そう！　そうなの、そうだったの！　シルフ様が風のせーれーだって事はさっき言ったよな！？」
「うん」と、一が頷く。
せーれー。
精霊。
その意味を理解する事は、一には出来ていなかったが。
「だから、オマエらの風を覚えれば良い話だったんだよ。そうすれば、オマエらがどこにいても、シルフ様には手に取るように分かるのさ」
「……発信機取り付けられるみたいね」
糸原が意味ありげに呟く。
「ふーん、便利じゃないか。じゃ、俺らの風とやらを覚えてくれよ」
「分かってるよ。おいデカニンゲン、シルフ様から手を放せ」
「分かったわ」
そう言って、糸原はシルフの頭を掴んだまま、コンクリートの地面に左腕を振り下ろした。シルフの眼前に、硬い地面が迫る。
そして糸原は、地面すれすれのところで、シルフの頭が地面と激突する寸前のところで、その動きを止めた。
「あはは、ビビったでしょー？」
「……」

「シルフ君？」
糸原がシルフの頭から手を放すと、糸が切れたマリオネットみたく、だらんと、シルフが地面に崩れ落ちる。
「やり過ぎた？　声も出てなかったもんね、あははは」
「シルフ君、恐怖で身動きが取れないんだ……」
その声に、シルフが反応した。ゆっくりと、生まれたての子馬を思い起こさせるフォームで、シルフが立ち上がる。
「こ、怖くなんてなかったもんね……」
「ふーん、足めちゃくちゃ震えてるわよ？」
「震えてなんかいないさ、ふん、ただの武者震いだよ」
「震えてるじゃないか」
「うるさいな！　それより、風を覚えるから、少しじっとしてろよ」
そう言って、シルフが糸原に視線を向けた。糸原を、糸原の周りを、糸原の、その後ろを見ているような、注意深いそれ。
「ガン飛ばしてんじゃないわよ、コラ」
「ひっ、ち、違う、風を見てるだけだ！」
「風を？」
風とは、目に見えないものではなかったか。姿の、目に映ることのない存在。シルフは、それを見ていると、言い切った。嘘を言っているような様子は、シルフには無い。
一はとにかく、シルフを信じることにする。
やがて、
「……もう良いぞ」
一分も立たない内に、シルフは風を覚えたらしい。
「あ、そ」
糸原が体を伸ばした。
「つまんないなー、フツウのニンゲンの風だったぞオマエ。ちょっと捻くれた風だったけどな」
「普通の人間だもん、私」
何か言い返してやろうかとシルフは考えたが、待ち受ける報復が

容易に想像できて、糸原を無視する事にした。かくして、シルフはこの世界の理を一つ学んだ事になる。

「……次はオマエだ、チビニンゲン」

「糸原さんがでかいんだよ。俺は標準サイズだ」

「ありゃりゃー？　何が標準なサイズにゃのかにゃー？」

「その喋り方を家でもしたら叩き出します」

「黙ってろよバカ！」

仕方なく、一が口をつぐんだ。

糸原は退屈そうに、肩を回してあくびをしている。

シルフは一の全身をねめつけた。値踏みするように、価値を、測るかのように。

「……おい」

シルフが言った。

「何？」

一が答えた。

「オマエってさ」

シルフが言う。

「俺が？」

一が答える。

「ニンゲン、だよな？」

シルフが尋ねた。

「当たり前だろ」

一が答えた。

「……何か、変な風だな。一応、ニンゲン、っぽい風は吹いてるんだけど」

「っぽいって……」

「大丈夫よ。こいつは人間だから。ちゃんと私が調べておいたしね」

糸原が薄笑いを浮かべる。

「ちょ、ちょっと何をどうちゃんと調べたんですか！」
「うーん、まあ、それはシルフ様も保障するよ。オマエはニンゲンだよ。ちょっと怪しいけど、百パーセント、絶対の絶対にオマエはニンゲンだ。間違いないね」
「そんな当然の事を保障されてもなあ……」
「とにかく、オマエの風は覚えたぞニンゲン。それじゃ、夕方にまた来るからな」
「え、何で？」
「お菓子くれるって言ったじゃん！」
ああ、と、一が思い出したように首を縦に振った。
「……忘れんなよ！」
「はいはい、じゃまた今度ね」
「子供扱いしてるだろ！」
「大丈夫、俺子供は嫌いなんだ」
「あ、そ、そうか。って何か違うんじゃないか？」
言いながらも、もう良い、疲れたと呟いたシルフは空に立ち、ふわふわと、風を伴って去っていく。その後姿を、一と糸原が見送った。
ふう、と一が安堵の息を吐く。
「ソレよりも、子供の相手の方が疲れますね」
「一応、あれもソレなんじゃないの？」
思い出したように、確かに、と一が頷いた。
「どうでも良いけどね、それじゃご飯食べに行こうか。私にあんな廃棄食べさせようとした罰よ。良い物を食べさせなさい。うんと高いものを」
「……はい」
一はソレよりも、子供よりも、目の前で悪戯な微笑を湛える女の相手の方が疲れると、考えを改めた。

「子供ってのは何だと思う？」
椅子に座ったまま、店長が呟く。
その声が、自分に対する問いなのだと気付くと、ジェーンは腰に手を当て、
「小さい人じゃナイかしら」
と、軽く答えた。
「ふーん、小さい人間か。背丈が」
「アラ、身長の事を言ってないのに何でアタシを見るの？」
「さあな。ゴーウェスト、君は今のが本当に私の問いに対する答えだと思うか？」
「……答え、ね。じゃあ精神的に幼い人間」
「なら、精神的に成熟した人間はいるのか？　そもそも、どうすれば、どこを誰がどう見れば、精神的に幼くない人間と分かる？」
ジェーンが冷たい床を爪先で鳴らす。
「オッケー、なら、成人してない人間ってのはどうカシラ？　ニホンじゃ、二十歳になれば大人と認められるんでしょ？」
「悪くないな。だが、あくまでそれはこの国が勝手に決めた定義だよ。実際、成人式に暴れまわるガキも大勢いる。果たして奴らは大人と認められて良いのか？」
「……悪い事を、しない、人間？」
ジェーンが歯切れ悪く口を開いた。
「苦しくなってきたな。悪い事をしない人間はいないぞ、ゴーウェスト。逆に言えば、罪を犯してない人間なんてのはまだまだガキだな。人間にもなっちゃいない、まあ、罪を定義するのも面倒な話になってくるが」
「ミスをしない人間、あー、今のナシね。それじゃあ、親に養ってもらってる人間」
「もっと広く物事を考えてみろ。もっと上から見下ろすような感じでな」
「……ジャパニーズは小さいし、細かいこと言うからキライよ」

ジェーンがブロンドの髪を揺らし、頭の中で渦を巻く雑多な考えを散らした。
その様子に、店長が笑みを漏らす。
「一の事も嫌いか？」
「お兄ちゃんは良いの」
そうか、と店長が短く返した。
「一体何なのカシラ、今の質問の意味は？」
やがて、苛立ちを隠しきれないまま、ジェーンが声を発した。
やはり、そんなジェーンの様子に店長が嬉しそうに笑う。
「すまん、新しいＳＶとコミュニケーションが取りたくてな。意地悪だったか？」
別に、とジェーンが店長と目を合わさず答える。
そうか、と店長がまた短く返す。
一息吐き、
「今、駒台から子供が消えている事件が多発している」
声のトーンを落として、店長が言う。
ジェーンも心の中で構えつつ、返す。
「それはさっき、ボス。あなた自身から聞いたわ。アタシが聞いてるのは、その事件と、子供のテーギとやらに関係するところがあるのかどうかってことヨ」
「消えたのは最初に幼稚園児、次に小学生、三人目に大学生。四人目には近所の工場で働く、一人暮らしをしていた若者だそうだ」
一瞬、言葉に詰まったジェーンだったが、
「それが何？」
と、すぐに続きを促した。
促された店長は喉の奥で笑う。
「子供ってのにも、随分バラつきがあるもんだな」
「……？」
「ゴーウェスト、私の質問に対する君の答え。全て正解で、全て不正解だ。勿論、真の正誤なんて知ったこっちゃないし、知る由もな

い。が、人の足元纏わりつくようなのも、精神的にも経済的にも幼いのも、日本の式典でバカやらかす連中も、広義で言えば全員子供だよ。全員ガキだ。どうしようもなくな。更に言えば、そこで寝てる三森も、私も、君も、一も糸原も。全員、この世界の人間全てが子供だと言っても、問題ない気がするね」

捲くし立てる店長に、ジェーンがたじろぐ。息を呑む。関係ないところで、自分が気圧されていると、ジェーンは思う。

「そう言われれば、そうなんだけどネ。けど、今のところ、ソレが狙ってるのは「子供」だけなんでしょ？」

「たまたまだ。たまたま学生や若者が狙われただけだよ。それが四件続いたから、支部の連中も子供がやばいなんて言い出すんだ。五件目にジーサンバーサンがやられたらどう言うつもりなのか、少し楽しみではあるがな。そもそもだ。ソレが人間を区別なんてするのか？」

――区別。

「……さあ、考えた事も、なくはないかしらネ。ただ、スマートなソレがいるって可能性もあるんじゃない？」

「賢いなら賢いで、やり様はある筈だがな。情報部が目撃してるんだ、ソレが力任せに影ん中へ引きずり込んでいった、とな」

「つまり、ボスは今回のソレについてどう思ってるの？」

ジェーンが問い掛けた。いい加減、店長の回りくどい説明にはうんざりしていたところだった。

「ソレは無差別に駒台の人間を襲撃している。時間にも場所にも共通性は無い。今の所は」

くっ、と笑いを噛み殺し、

「子供が狙われているがな」

と、店長が意地悪く言った。

「五件目は、起こると思うカシラ？」

「ああ、起こるさ。そして、いつ、どこで、誰が、誰に襲われるかも分からんままな」

「ヒントはシャドウね」
ああ、と店長が頷く。
「しかしだ、影なんてどこにでもある。結局はヒントなんてないのさ」
「まるでブギーマンね」
ジェーンが事も無げに言った。
「ブギーマン？」
「アラ、ニホンじゃ知られてないのカシラ。向こうじゃ、割とポピュラーなのヨ」
「ソレ、なのか？」
「ハッキリしてないワ。モンスター、サイコキラー、えーと、きょーふのしょーちょー？　とにかく、ニホンでもカッパやテングがいるでしょ、あれと同じなの」
興味深い、と店長が顎に手を遣った。
「言う事聞かない子供に、『ブギーマンが来るわ』なんて脅かしてシツケに使うのよ」
「ブギーマンか……。ん、何かそんな映画見たことあるな……」
「ニホンでも公開されてたとは思うわよ。何しろ、三大ホラーで有名なんだから」
「ああ、ジェイソンにフレディにブギーマンか？　今回も人間が相手なら、ソレより楽なんだがな」
店長が嘆くように天井を見つめる。
「Ｂｕｔ、彼らもソレ並みにタフよ」
「知ってるよ。一作目から見たことあるからな」
「意外ネ。ところでボス、ｈｏｗ　ｏｌｄ？」
ん、と店長が向けていた視線を、天井からジェーンに変える。
「……英語は苦手でな」
「こんなの小学生でも分かるわよ？」
「私も、まだまだ子供でな」
店長が意地悪な笑みを浮かべた。

消えた緑風

影はそこにある。物理現象として、心理現象として、文化的現象として。
影は、どこにでもある。人の近くに、壁の近くに、地面の近くに。
すぐ、近くに。

影は走る。
影は止まり、影は見た。そのシルエットは細く、均等の取れたものだった。折れそうな程細かったが、それでいて、しなやか。身軽な猫を思わせるような姿。その影の目の前では、小さな、緑の帽子を被った少年が、『影』に吸い込まれて、消えていく。
ゆっくりと、味わうように、舌で転がすように、『影』は少年を飲み込んでいく。
影は動じない。
非現実的な、不可思議な現象を、影は見る。見るだけ。他には何もしない。『影』に飲み込まれる子供を、ゆっくりと、見届ける。
無感動に、無感情に。
やがて、『影』は消え、少年も消えた。『影』がいた場所には、緑の帽子が。ワンポイントに、羽のついた帽子が転がる。
まだ、日も落ちきっていない夕刻。白昼堂々とは言いがたいが、人の活動する時間帯、その時間に行われたソレの事件。
影は、徐にジーンズのポケットから、薄い携帯電話を取り出す。短いコールのあと、無機質な声が電話口の向こうから聞こえた。
『どうでした?』、と。
「問題ない。ソレを確認、件の影で間違いないようだ」
影も、声を発する。その声も、無機質で、感情が篭もっていなかった。冷たい、無感情な、何も考えていない機械が発するような声。
『了解。支部にて詳しい報告を待つ』

「……了解だ」
短い応答。
そして、しなやかな影は携帯の電源を落とした。携帯をポケットにしまい込むと、もう一度、影は現場を見る。
もう、そこには何も無かった。今しがた起きた事なんて、無かったかのような、いや、何も無かった。何も無い現場。
緑の、帽子以外は、何も。

しなやかな影は、自身の長い長い髪の毛を、後ろで束ねた——それでも、束ねた髪は腰まで長く伸びていたが——折れそうな程長く、細い手足を、真っ直ぐに伸ばして、影は動いた。
折れそうな程細い足が屋根を踏む。民家の屋根から屋根へ、ビルの屋上から屋上へ、屋根から屋上へ。軽やかに、しなやかに、影は飛ぶ。舞うが如く。
その姿を認める者は、いない。
早く、速く、もっと疾く。自身を急かすように、影は足を早めた。

やがて、影は足を止める。
高い高い、ビルの上、駒台デパートの屋上で。影の眼下には、街が、人が蠢いている。
何も知らず、何も知らされず、今日、ソレがまた一人、新たな犠牲者を増やした事も、何も知らないまま、人々は歩く。そんな人々を、苛立ちと、憐憫と、少しばかりの憎悪を込めた瞳で影は見下ろした。
その瞳は、横顔は、儚い。愁いを帯びた、陰のある表情。が、それも一瞬の事だった。
影は再び、帰路につく。影の帰る場所は、オンリーワン近畿支部、情報部。ソレに対する全ての情報を司る部署。情報の収集も、公開も、秘匿も、全て思いのままに出来る場所。そして、それ以外には何もしない。
何も。

情報の収集公開秘匿のみに全てを注ぎ、全てを賭け、全て費やすのが、情報部の仕事。無感情に、無感動に、延々と繰り返す。繰り返してきた事。だから、影は何も思わない。思えない。思うともしない。そんな事も、思わない。自身のすぐ傍で誰が死のうが、目の前で子供が影に飲まれようが、知ったことではない。

だから、彼女は何も思わない。

オンリーワン近畿支部、情報部在籍、春風麗（はるかぜうらら）は、何も思わない。

一一（にのまえはじめ）は割と律儀な性格だった。

一という人間は、約束は破らない。時間にも遅れない、ように心がけている人間だった。

そして、一は、守れそうに無い約束はしないし、間に合いそうに無い場所には、最初から行かない人間でもあった。

「何が良いですかね」

と、オンリーワン北駒台店の、お菓子のコーナーにしゃがみ込んでいる一が、隣の糸原に声を掛けた。

「うーん？　さきいか」

「……三森さーん」

一に呼ばれた三森が、カウンターから顔を覗かせる。

「あンだよ、間抜けな声で私を呼ぶンじゃねえ」

三森は不機嫌だった。

「三森さんって、お菓子、何が好きですか？」

「な、何？」

「いや、お菓子ですよ。お菓子。何が好きですか？」

三森が視線を宙にさ迷わせ、一の質問に戸惑った様子を見せる。

「なーに慌ててんのよ」

茶々。

「慌ててねェよ！　死ねボケ。……そうだな、あー、アレだ、ザッハトルテ」
ザッハトルテ。オーストリアの名物。
「何それ？　似合わないでやんの、ふ菓子でも食ってなさいよアンタは」
笑いながら、糸原が茶々を入れる。
それを無視するように、一が適当に口を開いた。
「ザッハトルテ。あー、聞いたことはありますね。具体的にはどんなお菓子なんですか？」
え、と三森が言葉を詰まらせた。
その様子に、一は不審を抱いたが、無視する。
「確か、ケーキでしたっけ？」
「ああ、チョコレートのな」
うーん、と一が唸った。
今はまだ十月下旬。一応、十二月にはクリスマスが控えているが、結局のところ、今現在、ザッハトルテはおろか、ケーキすら店には置いていなかった。
「ケーキは無理だなあ、高いし」
呟いて、一が再びお菓子の棚に目を遣った。ふ菓子、スナック菓子、キャラメル、チョコレート、駄菓子類。次々と、様々なお菓子のパッケージに、一は目を通していく。
「おいコラ」
一の頭が何の伏線も無しに小突かれた。バランスを崩し、無様に一は床に倒れこむ。
「何するんですか！」
「私の好みを聞いてどうするってンだよ」
一を倒した三森は、仁王立ちで一の前に立ち塞がっていた。
たじろぎながらも、一は答える。
「どうもしないです」
「……じゃあ何で聞いたンだよ」

「理由が無きゃ、三森さんに口利いちゃいけないってんですか？」
ん、と三森が口ごもる。
「ンな事はねーけどよ」
「……糸原さん、糸原さんの好きなお菓子って何ですか？」
一が視線を、三森からずらした。視線の先には、雑誌コーナー。
週刊誌を立ち読みする糸原が、いつの間にかそこにいる。
「えー？　なんて？」
「好きなお菓子は何ですか？」
「のしいか」
雑誌に目を落としたまま、糸原は振り向きもしないで答えた。
「……もっと女の子っぽいお菓子で」
「うーん？　蒸しパン」
一が、三森に視線を戻す。
その視線に、三森がたじろぐ。
「見ンな」
「あ、すいません。けど、糸原さんみたく、俺たちも普通に喋れないですか？　なんか、一々突っかかったり、疑ったり、しんどいんですよね」
「……前から言ってるけど。私は、元々そんなつもりねぇよ。普通に話そうとしてるだけだ」
「……俺もですよ」
「ねえ」
糸原の呼びかけに一が答える。
「やっぱアイツ遅くない？」
と、糸原が、やはり雑誌を読みながら、唐突にそんな事を言う。
糸原の言葉を受けて、一が店内の時計に目を向けた。時刻は、現在十七時五十四分。午後、十八時前。外は既に暗くなり始めている。
「そうですね。夕方って言ってたのになあ」
「おい、何の話だ？」
「アンタにゃカンケイない事よ」

と、糸原が冷たく言い放った。
三森は小さく舌打ちする。
「……そうかよ。あっそ、死ぬまでやってろ」
「いや、関係無いとは言い切れないじゃないですか。ほら、覚えてますか、三森さん。シルフ君が来るんですよ」
「シルフ？」
「ええ、あの生意気な子供です」
「……あいつが、何だって？」
「店に来るんですよ」
と、一は平然とした様子で受け、答える。
受けた三森は、あからさまに表情を変えた。不機嫌な顔から、更に不機嫌な顔へ、と。
「おい、おいおいおい。そりゃねェだろうよ。お前ら、ここがどこだか分かってて言ってンのかよ？　分かってンならどうかしてるぜ、頭湧いてやがる。……ソレを殺す為の、勤務外の集まってる場所にソレと待ち合わせでもしてんのかてめぇら！　何とか言えよ、ああ？」
激昂。三森が一の襟元に手を伸ばし、手首を捻る。
「……っ」
ぱたん、と、糸原が雑誌を閉じる。しかし、やはり、一たちには振り向かないまま。
「ちょっとジャージ女、湧いてんのはアンタでしょうが。調子に乗ってると縛り上げるわよ」
「笑わせやがる。本当に沸かせてやろうかよ、あぁ？」
三森が拳の骨を鳴らし、糸原が首の骨を鳴らした。
「言っとくけど、私が振り向いたら、アンタの体はその瞬間、離れ離れになっちゃうわよ」
「言っとくがな、てめぇの体は燃え尽きちまうぞ。てめぇが振り向いた瞬間にな」
張り詰めて行く空気。針で刺すと、破裂しそうな程のそれ。

パン、と。
張り詰めていた店内に小気味良い音が鳴った。
「そこまでだ」
と、店内に声が響く。
「あ」
身動き一つ、身じろぐ事すら出来なかった一が声を漏らした。
「仲が良いのは結構だが、喧嘩ならよその店でやってくれ。そうすりゃ自然、ウチの売り上げが伸びる」
煙草を銜え、手を合わせた店長が、堂々とフロアに現れる。
その後ろには、微妙な顔をしているジェーン。
「ボス、煙草は吸わないでって言ったじゃナイ……」
「ん、ああ。すまんすまん」
言って、店長が煙草を店の床に落とし、踏みつけて火を消した。
その光景に、一とジェーンの背筋が凍る。
「引っ込んでろよ店長」
「そうね、いつもみたいに座ってたらどう?」
尚も、三森と糸原は食い下がった。二人の意気は収まらない。店長の体に、四つの瞳が射抜くような視線を送る。睨むような、と言うより、既にそれは睨んでいる視線。
だが、店長は二人の視線など、どこ吹く風で、涼しげに笑みを絶やさない。
「体力が有り余ってるらしいな、仕事をやろう」
挙句、楽しげに言い放つ。
「ソレが出たぞ」
流石に、勤務外。内輪もめよりは、ソレの方が優先される。状況を把握し、さっきまでの怒りを押し殺し、三森は糸原から、店長へと視線を移した。
「いつの話だ?」

三森が一歩前に出る。
「ついさっきだ。場所は、確か三丁目の川沿いだ」
「ソレの種類は？」
「影だ。十中八九、あの影だろうな」
「……あの、子供ばかり狙うって奴ですか？」
一が深刻そうに口を挟む。
店長は、含み笑い。
店長を後ろから見ていたジェーンは、何ともいえない顔になる。
「ジェーン？」
「あ、何も無いワ」
愛想笑いをジェーンが浮かべた。
「……そうだ、一。朝言った例のソレだ。情報部が見ていたそうだしな」
「なら、間違いねーな。私らに出ろって言ってんのか向こうは？」
「とりあえず現場を見に行ってみろと言っている」
「ふうん、でもさ、何も残って無いんじゃないの？　朝は何も分かってないって言ってなかったっけ？」
軽そうに、糸原が言う。しかし、その発言は的を得ていた。
だが、
「今回は違う」
と、店長は否定の意見を述べる。
「今回は？」
訝しげに、一が口を開く。
「ああ。現場に落ちてたものがあるらしい」
「落ちてたもの？」
と、言った一の心臓が早鐘を打った。
唐突に、理由も無く、意味も無く。鎮まれ、と一は祈った。
「何が落ちてたって言うンだよ？　関係ねーんじゃねぇの？」
「緑色の帽子だ」

どくん、と、一の心臓が、強く、胸を叩いた。

「帽子だぁ？」

ああ、と短く店長が答える。

三丁目の、川沿い。

――とんでもない、後付じゃないか。

その道を、一は覚えている。鮮明に、克明に思い出せる。何故なら。

「ああ、シルフと会った場所じゃない」

糸原が、軽く手を叩いた。

「シルフ？　お前、会ったのか？」

「うん。私だけじゃなくて、一もだけど。ねえ？」

一は、答えない。

「……一？　シカトしないでよ」

「え、あ、はい。そう、ですね」

若干の間のあと、一が歯切れ悪く答える。何で気付かないんだ、と一は、糸原に対し、心中で毒づいた。

「そうか。そうだったか。なら、間違いないな。残念だったな、一」

一が、店長を見つめる。

店長は、無表情で、涼しげに立っていた。さっきまでと、何も変わらないままで。

「どういう、意味ですか？」

「ん？　気付いていないのか？　緑の帽子だ。それと、お前らがその近辺でシルフに会ってるんなら、合点がいく。どうやら、今回襲われたのは人間とは違うものらしい、と情報部が言っていた」

「へっ、なるほどなるほど。ソレ同士も関係なしってか、ま、共食い結構ってとこだな」

納得したように、三森が笑う。

一は、答えられない。

何も、続けられない。

「シルフが、その影にやられたって言うの？」
糸原が、一の代わりを果たすべく、口を開いた。
「間違いないだろうな」
店長の、その言葉を聴いた瞬間、一の足が動く。
「おいっ」
三森の制止を振り切って、一はバックルームへ。乱暴に扉を開き、ロッカールームへ。乱暴に自分の為に宛がわれているロッカーを開け、傘を手に取る。傘の柄はいつの間にか、かいていた汗で滑りそうだった。鼓動が、早くなる。焦りか、怒りか、恐怖か。速く、急かすように、心臓は動き続ける。
まるで、行き急ぐように。
バックルームを出ると、横目で店長らを一瞥し、一は店の外に出るべく、出入り口へと向かう。
「ちょっと、にのまえっ？」
糸原の言葉も無視し、一は出入り口の扉に手を掛けた。
その手を、強い力で掴まれる。
振り向かず、
「離せ」
一が顔だけ、自身の手を掴んでいる人間へと向ける。
Ｎｏ、と短く、ジェーンが顔を伏せたまま言った。
「離してくれ」
「……お兄ちゃんは、アタシが手を離したらどこに行っちゃうの？」
縋るような、甘い声。
「ソレのところ」
「行っても、どうしようもナイよ」
「そんなの分かんないだろ」
ぐっ、と一が腕に力を込める。
「……イヤ！」
更に、力を込められる。ジェーンの、少しばかり長い爪が、一の腕に食い込む。

「離せって、痛い」
「あ、ソーリー。でも、ダメっ」
「……間に合わなくなるかもしれないだろ」
「もう遅いヨっ！　それに、何でソレなんかのために、お兄ちゃんが行こうとするの？」
　更に、一の腕にジェーンの爪が食い込んだ。深く、深いところまで。
「約束したから」
「……ッ！　バカッ！」
　一の腕からは、血が少量ながら流れている。服を濡らした血液は、そのまま、そこで止まり、固まっていく。
「いい加減にしろよっ」
　痛みに耐えかね、一がジェーンの肩を押した。
　ジェーンの爪が、腕が、一から離れる。
「……お兄ちゃん？」
　呆然と。
「おい、やめろよ、そんな顔するな……。お前だって勤務外なんだろ。ソレを倒すのがお前の仕事だろ？　じゃあ、どうして邪魔をするんだよ！　お前はっ、ここまで何しに来たんだよ！」
「う……。ア、アタシは、お兄ちゃんが……」
　ジェーンが瞳を潤ませた。
　だが、一は動じない。
「ジェーン。俺にはもう泣き落としは通じないぞ」
「ち、違う……。そんなつもりじゃ……ナイ……」
「……そこで泣いとけ」
　再び、一が扉に手を掛ける。そして、一の頭が殴られた。
「いい加減にするのはアンタよ」
「次は糸原さんですか。良いですよ、止められるもんなら止めて下さい。俺は行きます」
「違うっつーの！」

今度は、一の腹部が殴られた。
咳き込む一に、糸原が問い掛ける。
「アンタ、自分の妹泣かして、とんずらしようって気なのかって、言ってんのよ」
「……こいつは、俺の妹じゃ――」
今度は、一の爪先が踏まれた。
「血が繋がってなくても、一の家族なんでしょ？　このチビっ子は、ここまで、わざわざ追いかけてきてくれたんじゃないの？」
「……随分と、普通な事を言いますね。日ごろからそうだと有り難いんですけど？」
「そりゃごめんね。じゃあもっと普通で、簡単で、ガキにも分かる事言ってあげる。女の子を泣かしちゃったら、男の子はどうするのかな？」
少し楽しげに、糸原が目元を歪ませた。
この人は怒っている、と、一は気付く。そして、すぐ傍で小刻みに震えるジェーンを見る。
その光景は、一がもう、何度も見てきたものだった。
一の傍で、ジェーンが泣いている。
オンリーワンの勤務外、ＳＶとしてやってきたジェーン。一の妹、のようなもの。突然の来訪、それも、自分自身も落ち着いていられなかった時期。そんな時に、一は何も出来なかった。する気も起きなかった。
今でこそ、ソレを殺しソレに殺される仕事をやっているジェーンだが、昔は、一がまだアメリカにいた時は、そうじゃなかった。少し泣き虫で、怖がりで、すぐに甘えてきて、怒りっぽくて、怒ると一にも分からない言葉で捲くし立てて。
――ああ、どうしてなんだ。
どうして、ジェーンは、勤務外になんかなったんだ。一は、思う。この期に及んで、今更になって。どうしようもない事を。そして、思い出す。昔の『妹』の姿を。

――こいつは、初めて会った時から、こんなに小さかったんだ。
変わらない。何も変わっていない。結局は、何がどうなろうと、一は『兄』で、ジェーンは『妹』だった。どこまでも。それだけは、この期に及んでも、今更になっても、一には気付く事が出来た。
「ごめん」
ふう、と息を吐き、一がジェーンの背丈に合わせるようにしゃがみ込み、ジェーンの頭に手を置いた。そして、もう一度「ごめんな」と謝った。
ジェーンが、俯いたまま、頷く。
震えた声で、「いいよ」と。
その光景も、一が何度も見てきたものだった。経験してきた事だった。

「ちっ、ホームドラマやってンじゃねーんだぞ」
一たちから距離を取って、三森が毒づく。
「割には、口を挟まなかったじゃないか、三森」
その横で、店長が笑う。
うるせえな、と三森がぶっきら棒に言い放った。
間を取って、
「……店長、どうする？　もう、シルフは死んでると思うか？」
そんな事を、三森が店長に尋ねる。
「さあな。だが、子供が連れ去られた、とは聞いているが、殺されているとは聞いていない。確実に生きているとは言えないが、死んでいるとも言えない状況だろう」
「何だそりゃ。結局はやってみなきゃわかんねーンだろが」
三森が苛立たしげに頭を掻く。
「そうとも言うかもな」
「ちっ。何か、やり方は考えてンのか？」
「そうだな……。正直言って、今回は完全に後手に回ることになる。

と、言うより、影の性質上回らざるを得ない。手掛かりも何も無いしな。有るとすれば……」
店長が、愉しげに唇を歪めた。

少しして、ジェーンが泣き止んだ。本人は、泣いていないと言い張っていたが。
「ま、短かったけど、誠意があったから許してあげる」
満面の笑みを浮かべ、糸原が愉しそうに一に話しかけた。
「……糸原さんに言われる筋合い無いです」
顔を反らして、一が憎まれ口を叩く。
「ふふーん、ういやつめ」
「重いんだから乗っかんないで下さいよ！」
「チビっ子、あんたも、もう良いよね？」
「ノープロブレムよ、イトハラ。と、言うより、問題なんて最初からなかったのだケド？」
あっそ、と糸原が笑った。
「おい、もう良いだろ？　てめぇも急いでンじゃねーのかよ」
和やかな雰囲気の中、三森が割って入る。
「……でした」
「ちっ、シスコンが。まあ良いや。じゃ店長、行ってくるぜ」
「おう」と店長が手を上げ応える。
「え、どこ行くんですか？」
「情報部だよ。ああ、そうだ、店長。こいつらは？」
三森が一たちを指差した。
「そうだな。一と糸原は、携帯持ってないんだったな。よし、なら一とゴーウェストは先に現場へ行け。ソレの痕跡、もしくはソレ本体を探しながら三森の連絡を待っていろ。糸原は、三森と一緒に近畿支部の、情報部まで行け」
「あ、え、でも……」

「どうした、一。これは勤務外としての仕事だぞ。お前には、拒否権もくそも無いぞ、馬鹿め。行け。急げ」
店長が、虫でも追い払うように鬱陶しげに言う。
それでも、一は少し嬉しかった。やっと、自分が勤務外として認められたのと、店長が動いてくれるのなら、まだ間に合うかもしれないという淡い期待に。元気良く返事をして、一とジェーンは店を飛び出した。

「私も行かなきゃ駄目なのー？」
「おい、てめぇ私に向かってンな声で話しかけんじゃねェ。吐き気がすンぜ」
「んな声ってどんな声ー？」
猫なで声。
「ぶっ殺してやる」
「……やってみな、ヤンキー風情が」
店長が額を押さえたまま、やめろ、と心底呆れた風に言った。
「ちっ。で？　何で情報部ってトコに行かないと駄目なわけ？」
「……情報が有るからに決まっているだろう」
「店長って言語中枢に異常きたしてるんじゃないの？」
「安心しろよ。てめぇもだ」
「良いから行け。行けば分かる。不服なら、三森に簡単な説明だけ受けておけ」
「はいはい、分かったわよ。じゃ、行くわよヤンキー」
糸原が店を出る。
遅れて、
「指図すンじゃねえよ、イカレ女が！」
物騒な事を叫びながら、三森も店を出た。

「……ガキどもが」

そう、この世は子供ばかりだ。
誰のモノか分からない、誰のでも変わらない子供ばかり。

春風は黒く吹く

一たちが、件の現場に着いて二十分。シルフを飲み込んだ影の痕跡を探し始めて二十分。

「お兄ちゃんって、タバコ吸ってた？」

「……こっちに帰ってから、だったかな」

フウン、と、ジェーンが電信柱にもたれ掛かる。

時刻は午後の六時を回った。陽は落ち、辺りは特有の静けさと宵闇に包まれつつある。

一たちは川沿いの、この道に一本だけ設置されている電灯だけを頼りに、暗い中、影の、シルフの、ソレの手掛かりを探す。

ガードレールを飛び越え、川にも一は足を踏み入れた。ジェーンに止められるまで。無駄だ、と諭されるまで。ずっと。

「ズボン乾いた？」

「いや、まだ冷たいや」

笑って、一が煙を吐く。至極、不味そうに。

「……お兄ちゃんは何で、そんなにヒッシなの？」

ジェーンは、喉から声を絞り出すように、悲痛そうに呟く。

顔は、上げない。

「必死？　俺が？」

「だって、そうじゃナイ」

「そうかな。ああ、そうなのかなあ。だって、シルフ君とは約束したからな。お菓子をあげるって。だから、多分、いや――」

一が言い淀んだ。

きょとん、とした顔で、ジェーンが道路から一へと視線を移す。

「だから、何？　約束したから、お兄ちゃんはソレなんかも助けたいの？」

「まあ、そんなところかな」

「……アタシとの約束は覚えてなかったくせに」

まるで、恨み言だった。ジェーンはジト目で一を見る。
「う。やめなさいジェーン。可愛い顔が台無しだぞ。大体、本当にそんな約束したか？　お前の妄想じゃねぇの？　それに、前から聞きたかったんだけど、何でお前勤務外になんてモノになってんだよ」
「お兄ちゃんには教えナイ」
頬を膨らませ、ジェーンがそっぽを向いた。
「ガキだなあ。じゃあ良いや、違うこと聞く。情報部って何？」
「ホントに違うこと聞いたー！」
「うるさいなあ、早く答えてくれよ」
「……んー。もう、生姜ないなあ、情報部の、何を知りたいノ？」
――何を？
一は迷う。
何を、知りたいのか。本当は、何を。本当に、何か。
「仕事は？」
「情報部の？」
煙を吐いて、一が小さく頷いた。
「ウーン。お兄ちゃん、ニンジャって知ってる、よ、ネ？」
「日本人だからって訳じゃないけどな。そりゃ知ってるよ。で、忍者？　情報部は忍者みたいな仕事するのか？」
「……ニンジャがなにをしてるのか、わからないケド」
「そりゃ、アレだ。スパイみたいなもんだろ？　敵の内情探ったり、破壊工作したり」
良く分からんけど、と付け足し、少し自信が無さそうに、一が言う。
「そんな感じ、なのカナ。とにかく、彼らはクールなの」
「イメージ先行っぽいなあ、そのクールは。ん？　ジェーンは、情報部と一緒に仕事した事とかあんのか？」
「イエース。最高にクールだったワ」
「ふうん。まあ、良いや。どうせ会わないだろうし」
一がつまらなさそうに、自身の吐いた紫煙に包まれた。

「どうして？　会うかもしれないじゃナイ」
「情報部の人たちってのは、最高にクールな忍者、だろ」
だからだよ、と一が言った。

密室。
エレベータは動く。
「……息が詰まりそうだから話しかけてあげるわ。情報部ってどんな奴らなの？　名前だけは色々と聞いてんだけどさ、ほら、他にも戦闘に医療に技術、でしょ？　けどさあ、どんなのが集まってんの？　それは知らないし知りたいのよねーやっぱさあ」
階数表示を見つめたままの糸原は、すぐ隣の三森を見ないまま、言った。
三森は、只管に携帯電話を弄りながら、決して隣の糸原は見ない。そして、声も出さない。返事もしない。
オンリーワン近畿支部の、情報部へ向かうエレベータの中には、かちかち、と携帯電話のボタン音だけが聞こえている。
「ちょっと、ねえ、シカトしないでよ」
「……窒息しねェの？」
「はあ？　する訳ないでしょ」
三森は、わざとらしくため息を吐き、肩を落とした。
「奴らはさ、汚ェ連中だぜ。情報部なんて聞こえは良いけどよ、人の周りウロチョロして、勝手にその辺を嗅ぎ回ったりする犬みたいなモンだ。しかも奴ら、情報を自分たちだけで処理しやがる。私ら下に届くまでに無茶苦茶こねくり回しやがってンだ」
「え、何をこねくり回すの？」
「おい、おい、おいっ。その手つきを止めろ！」
にじり寄る糸原の顔面を両手で押さえつけながら、三森が叫ぶ。
やがて、単純な力では敵わないと悟ったのか、糸原が自分から身を引く。

「冗談じゃーん、ビビッてんじゃないわよー」
「……目がマジだったンだよ。おい、良いか？　情報だよ、情報。あいつらは好き勝手に情報を管理してるんだよ。それこそ、全部だ。そンで好き勝手に改竄したり、自分らの都合の良いようにしやがる」
本当に、憎憎しげに、三森が言葉を吐き捨てた。
「ふうん。けどさ、自分らの都合の良い様にってさ、私ら勤務外にとっても都合が良いんじゃないの？　何？　オンリーワンでも派閥とか、色々面白そうな事があるわけ？」
「……まあ、そうだよ。つうか、本当に楽しそうだなお前」
「いつだって人の不幸は蜜の味よ。ところで、田舎のヤンキーの割には、色々と知ってんのね」
まあ、な、と歯切れ悪く三森が答える。顔を伏せ、ジャージのポケットにしまった携帯電話を指で弄ぶ。
「ふーん。……情報部。医療部。戦闘部。技術部」
「な、なんだよ？」
「情報部」
「お前、頭おかしいぞ」
「医療部」
「……？」
糸原はゆっくりと、一語一句しっかりと発音して単語を並べていく。
「戦闘部」
「技術部」
最後に、三森の目を見つめながら、糸原は言い切った。
四つの部署。オンリーワンの支部を構成する四つの部門。情報を司り、医療を司り、戦闘を司り、技術を司る四つのモノたちの名前を。
「……あンだよ……？」
「あんた、昔戦闘部に居たでしょ？　っていうか居たよね。あの、化け物揃いのトコに」

「ンなっ！？　……訳ねェだろ」
「うーわ、陳腐でチンケな反応をありがとうってトコ？」
何で、と、三森は顔を上げた。まるで、魔術師にでも出会った時のように、奇術師にでも出会った時のように。
「いや、っていうかさ、あんたが居られそうなのって、どう考えても戦闘部だけじゃん。あんたが情報医療技術？　机にしがみ付いてたり、ナース服着たり、技術？　うーん、スパナ？　あー、とにかく、あんたが物を作る物を持ってんのが想像できないんだけど。ほら、あんたって壊すとか殴るとか、蹴るとか殺すとか、そんなんしかできないでしょどうせ」
「……あー」
三森は力なく、エレベータの天井を見上げた。横目で糸原を見ると、そこには自慢げな、意地悪い笑顔があった。
魔術師でも、奇術師でもなければ、占い師でもない。
「詐欺師」
「良く言われるわ」
笑顔を崩さぬまま、糸原は言った。

川沿いの道。ソレが消えた道。
ジェーンは突然、何かに弾かれる様に、下げていた顔を上げ、辺りを見回した。
「え、何だ？　どうした？」
一が驚いて声を掛けるも、ジェーンは返事をしないでうろちょろと、忙しく顔を動かす。
「お兄ちゃん、何か……いるヨ」
「え……」
途端、一の背中を、得体の知れないモノが這った。ぞくり、と。
背中どころか、体全体を震わせて、一が声を上げる。意味の無い声だった。誰に向けたのでも、意味を込めたのでもない。ただ、ただ

ただ恐怖に駆られて声を発したに過ぎない。口を開けたに過ぎない。
「う、後ろっ！　俺の後ろだ！」
一は何とか、腰を抜かさずに、少しよろけてはいたが、ジェーンの傍まで近寄った。
ジェーンは一を庇う様に、自分の後ろへ一の姿を隠す。注意深く、慎重にジェーンは周囲の様子を窺った。
しかし、
「お兄ちゃん、誰もいないヨ？」
と、不思議そうに漏らす。
「そんな……。確かに、俺の背中を、何かが」
「お兄ちゃんの、背中……？」
ハッとして、ジェーンは一が居た方角を見る。視線は上。民家の上。屋根の、上。

そこに、影がいた。

月光に、影自身の細く、しなやかなシルエットを照らされて。折れそうな程細い手が。折れそうな程細い足が。胴が。胸が。腰が。人間の体が。確かに、そこにあった。影は、腰まで伸びているであろう束ねた髪を、さも退屈そうに指で弄くる。暗くて見えないが、影はリボンのようなもので髪を無造作に縛っていた。
ごくり、と一は唾を飲み込んだ。何だか、その音がやけに五月蠅く感じられて、屋根の上の人物にもその音が届いたのではないかと、要らぬ心配をする。
「ジェーン、あれは……？」
「多分、ソレじゃあナイわ。もしかして、勤務外？　それとも――」
「――フリーランスか」と、一がジェーンの続きを受け持つ。
一とジェーン、二人の視線は、屋根の上で立ったままの人物へ釘付けになった。
――全く、気にしていない。明らかに自分の姿を認められたと言

うのに、見つかってしまったと言うのに、影は動じない。くるくる、と、自分の髪で遊ぶだけ。指に髪を巻きつけ、解き、また巻きつけて、また解く。

「……」

ちらり、と、影が眼下の、人間の姿を視界の端に捉えた。

屋根と道路。上と下。

「……勤務外か」

影は、彼女は、一たちに聞こえるか、聞こえないかも分からない、そんな事など気にもしていない風に、呟いた。

一たちから距離を置いて、影が屋根から飛び降り、道路に着地する。屋根から地面までの高さは、優に三メートルはあった。そんな高さを苦にした様子も無く、音も立てずに、あくまでしなやかに、猫のように影は着地した。そして、感情のこもっていない双眸で、影は一たちを見据える。

「……流石、鼻が利くようだな。ジェーンゴーウェスト」

「……っ！？」

影は、無感情に喋った。ジェーンの名前を、言った。

「え、あ、知り合い、じゃないよな……」

一は、馬鹿な事を言ったと後悔する。

驚いているジェーンの様子を見れば、そんな事は一目瞭然だったのに。

「そっちは、にのまえはじめか」

「う、あ、何で？」

「何故？　名前を知っているか、か？　それとも、こんな所に居るのか、か？　そんな事は決まっている。私が情報部だからだ」

当然だと、当たり前なのだと、影は主張した。

「オッケー、アー、オッケー。そういう事、あっそう、分かった、了解、ラジャ、オッケー。情報部、アナタ、情報部なのネ」

ジェーンが何事か捲くし立て、流れる様に喋る。その声は、やけに楽しそうだった。

「ジェーン？」
　一はジェーンの顔を確認しようとするが、なぜか足を踏み出せないでいた。自然、庇われたままの格好になる。
　楽しそうなジェーンに対して、影は、表情を出さずに、感情を出さずに言う。
「……オンリーワン近畿支部、情報部二課実働所属の春風麗（はるかぜうらら）だ。性別は女。年齢は二十五。利き手は右手。利き脚は左足。利き目は右目。好きな食べ物はカレーライス。嫌いな食べ物は甘い物全般。身長は百七十六、六センチメートル。血液型はＡ型。誕生日は――」
「待て！　待って待って待って！　あなた、一体、その、何なんですか？」
　一が大声で口を挟んだ。
「――何、とは？」
　影が、初めて表情を見せる。全く持って、不機嫌ここに極まるといった顔だった。
「いや、あなたが情報部の人ってのは分かったんですけど、何で、その。余計な事まで言うんですか？　今、この場に相応しくないと言うか、マジで要らないっつーか」
　誕生日なんて聞いてもどうしようもないです、と一が、本当に困った顔で言う。
「……私は情報部だからな。ちなみに、趣味は少年誌の立ち読みだ」
「別に聞きたくねえよ！」
　一は、目の前の、春風と名乗った情報部が、自分よりも年上の人間だと知っていた（今、この場で知らされた）が、それでももうこの人物に敬語を使いたくは無かった。
「随分と、お喋りな情報部なのネ」
　皮肉っぽく、ジェーンが笑う。
　その笑みを受け、春風は「ちなみに」と前置きしてから、
「嫌いな人間は、勤務外。特に、にのまえはじめだ」と、淡々と言い放った。

オンリーワンの各支部を構成するのは――つまり、土台となり、骨となるのは――、医療部。情報部。戦闘部。技術部。これら四つの部署だ。四つに分かれた各部署は、更に部署ごとによって、「課」に分けられる。大体が、一部署につき、三から四の課に分けられる。ひとつの課は、五、六人のメンバーから成る。課長が一名。デスクが数名。実働が数名。デスクとは、そのままデスクワーカーを専門とする人材を指し、実働とは、実際にソレが現れた場所へ向かい、実際に対応する人材を指し、課長とは、責任を取る人材を指している。

基本的には、どの部、どの課も、変わらない。

そして、各部には長がおり、各部の長を集めた部署が、司令部と呼ばれている。重大な事が発生した場合に、最終的な決断を下すところ、と呼ばれている。

が、近畿支部が出来てから、司令部が使われたことは無い。

「きったないわねー」

情報部一課のオフィス。

壁には、天井には大小さまざまな大きさのポスターが貼られ、床一面には、散らばる書類、ペットボトル、スナック菓子の袋。少年、少女を問わず漫画誌、単行本。ハードカバーの小説。小冊子。裸のCD、DVD、空っぽのケース。ゲーム機。

それらを踏みつけ、糸原はうんざりした様子で呟いた。

「だから言ったろうが、汚いってよ」

三森も、後に続く。

招かれざる客。二人の侵入者を、部屋の隅で呆然と見る者が、一人。丈に合っていないスーツを着て、縁の黒い、厚みのあるレンズの眼鏡を掛けた男だった。体格は、中肉中背。オンリーワン近畿支

部、情報部一課デスク所属、田村薫、三十三歳、妻子あり。マイホーム無し。

「ン？　ははっ、丁度いいや、あンたしかいねぇんだな？　おい、ちょっと私らの頼みを聞いてくれねえか？」

三森が机越しに、デスクトップ型のパソコンにしがみ付いたままの、くたびれたスーツを着て、眼鏡を掛けた、如何にもサラリーマンといった出で立ちの男、田村を発見し、接近する。

「な、なななな！　き、きみ、君たちは一体何者何だ!?　許可無くオンリーワンの近畿支部、しかも、よりにもよって情報部、しかも、まさか一課へ勝手に入ってくるだなんて！　ひ、ひひひ非常識にも程がある！　出て行きたまえ！　って、ひっ、ひひひひいっ、すいません！　申し訳ございません！」

やたら甲高い声で喋る田村を、三森は目で黙らせる。

「おい。謝ンなくて良いからよ、頼みを聞けって言ってンだ」

「た、たた頼み、ですか？」

しかも、既に敬語だった。

「おうよ。ちょっとばかし、『影』について教えてくれや」

「か、影？　かかか影って言いますと、ま、ままままさか……」

「もったいぶった言い方すンじゃねえよ、面倒くせえな」

三森がガンを飛ばす。

田村は、その眼光に気圧されていたが、「いや、ですが、しかし。それは無理です」と、額に汗を滲ませながらも、気丈に答えた。

「……何でだよ？」

田村を射抜く、鋭すぎる視線。

う、とか、ああ、とか、田村はもごもごと口を動かしていたが、

「それは、その、私が、情報部だからですよ」

と、やはり気丈に答えた。

「ふーん」

三森がポケットから、煙草を取り出す。指の腹と腹を擦り合わせ、火をつける。

「えっ？」
そんな田村の顔色が、一瞬にして変わっていく。青く、青く、深い蒼に。
「あなた、まさか……」
「まさかが好きらしいな。そうだよ、久しぶりだな情報部」
「せ、せせせ戦闘部一課の、火鼠（ひねずみ）？　な、何だって今更近畿支部（こんなところ）に？」
だん、と、三森が机に拳を叩き付けた。
その音と行動に驚き、田村が目を瞑って小さく呻く。
「火鼠、蜥蜴人間（サラマンダー）、赤鬼。はっ、どいつもこいつも懐かしいあだ名だぜ」
「な、なななんで？　なぜなんですか？　あなたが、なぜ？」
「言ったろうが、影について聞きに来たンだ」
「そ、そそそれでも、わ、私は情報部です。だだ――」
だから、と続けようとした田村の視界に、糸原が映る。机の上のノートパソコンを立ち上げ、マウスとキーボードを触る糸原が。悠然と椅子に深く腰掛け、髪を手で梳く糸原が。
「何を！？」
「ねえ、ロック掛かってんだけど。パスワード教えてくんない？」
「はぁぁ！？」
田村が絶叫した。
「は、ぁ、ぁ、と。あれ？　何よ駄目じゃない。ちょっと適当言わないでよ」
「パ、パパパスワードを教えるわけないじゃないか！　勝手にぼ、ぼぼぼくのパソコンに触るな！」
田村は自分のノートパソコンまで小走りで近づき、触ろうとした瞬間、糸原に腰を蹴られ、ごみや書類やらで散乱した床に尻餅をつく。
「く、くくくそっ！　何だって僕がこんな目に！」
悪態を吐き、田村が周りの書類を乱暴に払い除けた。

「あ、ロック外れた」
「え？」
ぽーん、と無機質な機械音が鳴った。やがて、暗かったディスプレイのスクリーンは、徐々に青みを増していく。透き通るような、青。スクリーンには、画面いっぱいの青空をバックに、画面いっぱいの、少女のキラキラとした笑顔が映し出された。
「あああああああ！　なんでどうして！？　そんな馬鹿な！？」
田村が声を張り上げた。
「何よこの壁紙、もろアニメじゃん。あ。あー、これ見たことあるわ、日曜の朝やってる奴じゃないの？　杖振り回して、マジカルマジカルー、とか言ってる女の子のだー。へー、可愛いなー、ねえねえ、ヤンキー見て見てー」
田村薫のデスクトップで、二次元の少女が笑っている。屈託なく、無邪気な瞳をした少女。
「やめてくれえええええ！」
心からの叫びだった。
「……何でてめぇはンなもん知ってんだよ」
三森を呼び寄せ、楽しそうに、けらけらと糸原は笑う。
「夜勤明けに仮眠室で見てたのよ。ね、ねえねえ、この子の画像って他にはないの？」
「もう良いじゃないか！　分かったよ分かりました！　影の事なら教えますから！」
田村が力なく、頭を垂れる。
「お、何だ、良いのか？　そりゃ助かるな。とりあえず、お前ら情報部が掴んでる事、一から説明しろ」
三森が田村の襟を掴んで、無理矢理立たせる。
田村は、静かに泣いていた。

一は、ジェーンの横に立ち、正面の女を見た。

自身を情報部だと、春風だと、そう名乗った女。全身を黒いボディスーツに身を包んだ女。改めて見ると、女は細く、強い風が吹けば今にも折れて、飛んでいってしまうんじゃないかと、そう思わせるぐらいの体つきだった。掴んでしまえば、力を込めて抱けば、それだけで、それだけで。

均整の取れた春風の顔に、表情は、ない。変わらない。何も、ない。

寒くないのか、と一は聞こうとしたが、「……俺が嫌い？」と、先に聞いてみる。

「そうだ」

冷たい声と、冷たい雰囲気を、春風は一に届けた。そして、冷たい視線。底冷えするような、視線だった。真冬の川の水温なんて、冬の風なんて高が知れてる。一はそう思う。

そして気付く。

「さっきから、ずっと見てたのは？」

「私だ」

得体の知れない物の正体を、一は確信した。

視線。冷たい視線。

「隙あらば殺そうと思っていた」

春風は、事も無げに言う。一の背中に向けられていたのは、春風の視線ではない。

「あなたとは、初対面の筈なんだけど」

「そうだ」

向けられていたのは、敵意。殺意。圧倒的な、一に対する悪意。

「……恨まれる覚えも、殺されるいわれも無い筈なんだけど？」

「死ぬ事に理由が要るのか？」

「出来るなら。けど、俺はあなたには殺されたくない」

「そうか。私はお前が嫌いだ」

影が走った。

その姿を認め、ジェーンが一の前に出る。

「お兄ちゃん！」
ジェーンが一の体を後ろへ押したのと同時、鈍い音が響いた。黒いものを、ジェーンの腕が掴んでいる。
「……流石、足が速いな。ジェーンゴーウェスト」
「ハルカゼ、情報部のくせに、何のつもりカシラ？」
黒いものは、春風の足だった。
春風は直立姿勢のまま、左足だけを高く上げている。
その足を、ジェーンが掴んでいる。
「炎を自在に操る勤務外、火鼠、三森冬。タルタロスからの生還者、裏切屋、糸原四乃。最悪の盾の所持者、一一。アメリカ支部のエース、狼女、ジェーンゴーウェスト。北駒台のＳＶ、堀。二ノ美屋。異質が揃いも揃ったものだ」
「アタシはっ、理由を聞いてるの！」
春風の足を握った手に、ジェーンが力を込める。
刹那、ジェーンの腹を、春風の右足が突き刺した。鋭い痛みが走り、思わずジェーンは手を離す。
自由になった両足で、春風は地面に立ち、ゆっくりと、たっぷりと距離を空けた。
「その中でも、一一。お前は最悪だ。北駒台の中でも、警戒すべきは、唾棄すべきは、死ぬべきなのは、三森冬でも糸原四乃でもジェーンゴーウェストでも堀でも二ノ美屋でもない。お前だ、一一。私は、お前が嫌いだ、一一」
そして、淡々と告げる。
「な……。何を言ってんだ、あなたは？」
一は蹲るジェーンを支えるように、すぐ隣に立つ。しかし視線は春風へ、「敵」へと向けたままだ。
「けほっ、お、お兄ちゃん、あいつ……」
「……あなたは、オンリーワンの人だろ。俺たちに、何の恨みがあるってんだ……？」
分からない。

判らない。一は、目の前の情報部が、春風麗が解らない。
ふっ、と口元に笑みを湛えて、春風は言う。
「言ったろう。私は、一一、お前が嫌いだと」
「……っ！　嫌いだったら、あんたら勤務外は人を殺しても良いってのかよ！」
「勤務外？」
「え、あっ、あれ」

「……それも私は嫌いだ」

黒い風が奔った。
一の動体視力でも、ぎりぎり捉えられる動きではあったが、あくまでぎりぎり、捉えるだけ。
結局、一には、そこから先どうすることも出来なかった。

駒台悪夢13

一はうつ伏せのまま、驚愕する。単純に、震え上がる。
「……ジェーン？」
ジェーンの勤務外としての実力を、一はジェーンについての全てを知らない。
だが、ガーゴイル出現時において、フリーランスとジェーンが戦闘に入った現場を、一は目撃している。その強さの一端を、その、速さを。
「安心しろ、ジェーンゴーウェストを殺す理由はまだ無い。気絶させただけだ」
一の頭上から、冷たい声が聞こえた。見下ろされている。完膚なきまでに。
「まだ……？」
「勤務外が、いつ、人間に敵意を剥くか知れたものではない。そんな物を長い間生かせておくほど、情報部は愚かではない」
あの、フリーランスの男も、決して弱くは無い。むしろ、強者の部類に入るだろう逸材。
そのフリーランスを、互角以上に追い詰めたジェーン。少なくとも、一にはジェーンがその時、手の届かない存在に見えた。見えてしまった。
――妹、だったのに。
その、ジェーンが。あっさりと、本当にいとも簡単に、春風の足刀で、地に伏している。臥している。
「くそ！　あんた、それでもオンリーワンかよ！　ソレを何とかするのがお前らの仕事だろう！　俺たちがあんたらに何とかされる理由があんのかよ！？」
「……何度も言わせるな。私は、お前が嫌いだ。それだけで、事は足りる」

強く、強く一は手の中のモノを握り締める。
もう、関係無い。
相手がソレだろうと、ソレでなかろうと、人間だろうと、そうでなかろうと。現状を打破するには、力を行使するしかないと、一は決心する。
「分かった」
呟いて、一は力を全身に込めて、体を反転させた。仰向けの姿勢。右手には、ビニールの傘。アテナの力、蛇姫、メドゥーサの力。すなわち、世界最高峰の防具、ギリシャ最強の盾。その名はアイギス。物理攻撃を可能な限り防ぐ事が出来、一が対象にしたモノの動きを止める術を持つ、防御の概念。だが、力の発動には様々な制約、条件をクリアしなくてはならない。
一つは、一が声を出せる状態である事。
一つは、視界が良好である事。
一つは、動きを止める相手の、名前を知っている事。
これらの条件をクリアして、初めてアイギスは真価を発揮する。

「ハルカゼウララ、止まれ」

宣言。
一が精一杯に声を絞り出した。右手を対象に翳し、一が対象を睨みつける。不可避の静止、絶対の固定、アイギスが発動――
「……遅いな」
「あ？」
――しなかった。
止まっていない。ハルカゼウララは止まっていなかった。
「効果は知っていた。条件も読めていた。一一、情報部を、私をなめるな」
一は、右手を見る。
「ああ……」

そして、納得した。
右手には、何も握られていなかった。アイギスは、そこに無かった。
「この距離ならば、何をするにしても、されるにしても、だ。私の方が早い。女神の道具に対して礼を失するが、蹴り飛ばさせてもらったぞ」
一が目だけを動かす。
倒れて動かないジェーン。その傍に、傘が。
アイギスが。
アイギスは、地面に転がっていた。それこそ、普通のビニール傘となんら変わりは無かった。
早かった。
一の宣言開始前、ほんの少し前、確かに春風はアイギスを、一の手の中のアイギスを蹴ったのだ。先刻の、ジェーンの首を蹴ったときのように。
「一一。聞いておくが、アイギスは遠隔操作出来るのか？　お前の手の届かない所にあったとしても、効果を発揮するのか？」
「……」
そんな事を「敵」に聞くか普通。一は呆れた。
が、
「出来ない」
一は正直に答えた。
意味は無い。他意は無い。その問いを、春風が信じたかどうかは分からない。否、信じてはいないだろう。
「そうか」
それでも、春風は一の答えに満足した様子で、一を仰向けからうつ伏せの体勢に転がした。
「無様だな、一一（にのまえ）。それがお前の限界（はじめ）だ。最悪の盾の所持者と言えども、盾を持っていなければ、唯の人間でしかない」
一の背中を踏みつけながら、春風は勝ち誇ったように言った。

「……ちくしょう、意味が分からねぇ……」
「このまま背骨を踏み砕いてやろうか、一一？　それとも頭蓋か？　一一、どこを砕かれたい？　どう殺されたい？　答えろ」
春風が足に力を込める。
呼応するように、一の骨の軋む音。一の呻き声。
「いってぇ！　やめろ、頼む！　頼むから殺さないで！」
「駄目だ。千載一遇の好機を逃すほど、情報部は愚かではない」
一の懇願を、春風は冷たく受け流す。
春風に届かなくても構わない、誰か、通行人に自分の声が届けば。
一はそう願った。
「大声を出しても無駄だ。ここには誰も来ないぞ、一一」
「なっ、んなわけねぇだろ！」
「……忘れたのか？　私はオンリーワン近畿支部の情報部二課実働所属、春風麗だぞ。好きな季節は春。嫌いな季節は冬。夏と秋は別段何も感じない。だが、海は好きだ。水着になるのは嫌いだ。スリーサイズは上から――」
「うるせぇよ！」
一の背中への負荷が、大きくなった。声にならない声を、一が上げる。痛みが、思考を塗り潰していく。
「私の話を遮るな」
誰か、助けて。
一の意識が、薄れていった。視界がぼんやりと、白く霞む。白く、白く。潰れていく。白に、白に。全てが、真っ白に、雪に覆い隠されるように。
一の目には、もう、白しか、白白白白白白。
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白
白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白白

白白。

黒い、影が。

白い景色の中から、黒が生まれる。

ぬるり、と。這い出る。腕が、黒い腕が、影が。

影が。

「あ……かっ……」

「これは……！」

既に四人を飲み込んだ影が、シルフを引き摺り下ろした影が、生まれた。

一たちの眼前に、その姿を現す。

「くっ、私かっ」

春風が一の背中から足を退かせた。そして跳躍、向かうは『影』。

その影に、明確な形は無かった。顔も、胴体も、足も、何もかも。辛うじて、腕のような部位が確認できるだけ。それでも、春風は踵を、影にぶつけた。

「ちっ！」

春風の攻撃は、影を捉えるも、影は微動だにしない。攻撃を受けたのか、ダメージを食らっているのか、全くわからない。

「ならば」

呟いて、春風が影に背を向けた。

その先には、倒れているジェーン。

そして。

「てめえっ！」

掠れた声で、一が思わず叫ぶ。
「……勤務外に用は無い」
そして、ジェーンのすぐ傍には、アイギス。最高の防具。ギリシャ最強の盾。絶対の防御を所持者に、不可避の凍結を敵に与える女神アテナの概念。蛇姫と知恵の女神の、二つの力が注ぎ込まれた無二の逸品。
「それに触るんじゃねえっ」
春風が、アイギスに手を伸ばした。

オンリーワン近畿支部、田村たち情報部が掴んだと言う『影』に関する、一通りの話を聞いた後に、三森は呟いた。
「わかりづれぇ」
「そんな！　ぼ、ぼぼぼ僕は懇切丁寧に一から百までし、ししししっかりと説明したって言うのに！」
煙草の煙をのんびりと燻らす三森に、田村は憤慨する。
「だ、だだだから戦闘部上がりは嫌いなんだ！　君たち戦闘部は、頭で物を考えると言う事が出来ないんだ！　筋肉馬鹿め、くそっ！　くそくそくそっ！」
「もう一回説明しろ。今度はメールで適当に書くから。奴ら電話に出やしねェ、くそ、何やってやがンだ」
三森が携帯を弄りながら、舌を打った。
「ナニやってたりしてねー、あはははは」
二人の横暴に、田村が「ふ、ふふふざけるな！」と喚き散らす。
「おい」
「な、ななんだ？　睨むな、いや睨まないでくださいお願いします」
「私はイラついてンだよ。早く説明しろ、この部屋ごと燃やすぞてめぇ」
手の平に炎を灯し、三森が田村ににじり寄った。

「わ、わわわかったよ。良いですか？　『影』の正体は、人の恐怖なんだ。恐怖。分かるよね？　さっきも説明したから、大丈夫だと思うけど」

敬語とタメ口と、無茶苦茶に入り混じらせて、田村が説明を始める。

が、「あのさー」と、糸原が口を挟んだ。

「正体が人の恐怖って言うけど、それって正体になんの？　怖いって、人の気持ちじゃない。そんなん正体も実体もクソもなくない？」

田村が眉を顰めて、不快感を露にする。

しかし、糸原は気付いているのかいないのか、気にせずにいた。

「そ、そそういう考え方もあるけどね。しかし、しかしだね、今回の影、恐怖だね。実は、昔から存在しているんだよ。まあ、名前はその時々によって違うけど、影だとか、悪夢だとか、幻だとかね。ただ、現象自体は殆ど同じなんだよ、実際に記録にも残っているしね。今回の事件と一致する所も、幾つかあるんだ」

「こんな事が前にもあったの？」

メールを作成する三森に代わって、糸原が田村から話を聞きだす。

「あ、ああ。とは言っても、一番新しい事件で、三年前の情報なんだけどね。三年前、つまりソレと人類の大規模な戦争に突入した、あのパンドラ事件、第一次大戦の時分だね。えーと、出現場所はスコットランドや、アメリカだったかな。その時『影』はブギーマンとか、ボガートなんて呼ばれていたらしい。不定形のソレだからね、呼び名も姿も、やはりその土地の人の心、恐怖心によって変化していくのさ」

「おい、分かりやすく言え」

「じゅ、じゅじゅじゅ充分噛み砕いて説明してるじゃないか！」

「いい加減指が疲れてきた。もっと簡単にしろ」

「んー？」

糸原が、三森の携帯の、ディスプレイを覗き込む。そこには、田村の言った言葉が、一言一句完璧に記入されていた。

「げえ、あんた気色悪いわね。あ、勿論良い意味でよ？」
「うるせえな、こっから編集するから問題ねェんだよ」
そう言うと、三森はまた携帯を弄りだした。
「……と、とととととりあえず、続けて良いかな？」
「あー、良いわよ。次は、そうね、何を説明してくれるのかしら？」
「そ、そそそうだな。じゃあ、今回の事件と、今までの事件との類似点を挙げていこうかな。うん。まずは、その正体不明って所だね。やっぱり、影とか悪夢。幻に霧とか、姿がはっきりしていないんだ。それと、犠牲者。どうも、子供が犠牲者の大多数を占めているんだよね。あー、他にも、子供以外にもお年寄りや若者が狙われたみたいだけど。それも、まあ、割合で言えば、本当に極少数だね」
「……あー、確かに同じね。今回もガキが狙われてるみたいだし。まあ、私にしちゃ別に都合が良いかなー。だってさ、あいつら超うっさいじゃん」
「き、きき君さー、勤務外だよね？」
田村が頭を抱えた。
糸原は、そんな田村を見て、鼻で笑う。
「そ。私は一応、勤務外よ。けどね、正義の味方ってわけじゃないの。あくまで、私に喧嘩売ってくるソレにだけ糸を振るってるつもり。めんどいししんどいし、私以外の人間なんて知ったこっちゃないわ」
「……き、君は」
「その意見には、私も賛成だ」
冷ややかに三森が声を発した。
「君たちは……」
田村がこめかみを指で押さえる。
「何？　頭痛いの？　どうでも良いけど。んで、何でガキが『影』に狙われてるわけ？」
「……か、かか影は。あ、ああ、あくまで、便宜上、影と呼ぶだけだけどね。影は別に子供を狙っているんじゃないんだ。影は恐怖を

狙っているんだよ。人の恐怖、怯えている心をね」
「つまり、影ってのは、無差別に人間を襲ってるって事？」
「無差別と言えば、まあ、無差別になるかな。だがね、一応、影にも獲物を獲物とする条件があるのさ。それが、さっきも言ったけど恐怖。例えば、夜道をおっかなびっくり歩いている人間。何気ない物音に反応する人間。誰かに怒鳴られたりしてる人間。そんな人間、精神的に弱っている人間を狙うのが、奴らの手口なんだよ」
その話を聞いて、糸原が嫌らしく笑う。
「成る程ね、夜道を怖がったり、他人にびびったりする人間、ね。なーるほど、確かにガキだわ」
「不定形、怖がってる人間を襲う。そして目立った類似点の最後の一つに、影の手口が挙げられるんだ」
「手口？」と、糸原が聞き返す。
少し楽しげに、田村が頷いた。
「スタイル。戦法だね。まあ、弱った人間に対して、戦術も戦略も戦法も無いけどね。んん、まず、奴らは弱っている人間を見つけると、体の一部分だけを外に出すんだ。本体は影の中、ああ、今回に限って言えばだけどね。例えば、スコットランドの時なんて、霧の中に直接子供を飲み込んだって聞くし。そして、話を戻すけど、出した部分、腕やら足やらで、ターゲットの体に触れるんだ」
「触ってどうすんのよ？」
「い、いいいい今から言うところじゃないか！　黙って聞いてくれよ。触って、そして、ターゲットを更に弱らせるのさ。方法は定かではないんだけどね。犠牲者ばっかだからさ。記録にも、影と遭遇して生還した者は殆どデータが残ってないんだよね。もしかしたら、いないのかもしれないけど。ま、僅かなりに残っている資料、調書を読んだ僕の想像、推理としちゃあ、中々エグい方法だね」
やはり、田村は少し楽しげだった。
「……方法は？」
三森が頭を掻きながら、続きを促す。

「それは」と前置きして、田村は口を開けた。
「影はさあ、ターゲットに合わせて、自身の姿を変えているんだよね。いや、あくまで僕の仮説だよ？」
楽しそうな田村に対して、三森が面倒くさそうに顔を上げる。
「それだと、話が違うンじゃねぇか？　そもそも、影ってのは出てくる時から、元から何になるかわかんねェ不定形のソレ何だろ？　遭遇してから姿を変えるってな、どういう事だ？」
ふふん、と意味無く田村が笑った。
その笑みに、三森が舌打ちし、糸原が露骨に気持ち悪がる。
田村は気にせずに、
「そこが、影のエグい所だよ。とある被害者の証言にね、あ、ああ、この被害者はもう死んでて、近くにいた人からの証言。ん？　それだと発見者の証言か。んん、まあ、良いや。それでね、話を戻すけど、被害者の証言に、「巨大な犬に殺される」ってのがあったんだよ。いや、実際殺されてるんだけどね、その人。ん、まあ、犬。大きな犬に、その人は怯えていたわけさ。けどね、その傍で影を目撃した人によると犬なんていなかった、なんて言う訳さ。ああ、じゃあ、影に怖がって平常心を失った被害者の妄言か、と思うよね？　まあ、普通の情報部ならそう思うよ。けどね、僕は違う。僕は調べたんだ」
楽しそうに、饒舌にまくし立てた。
そして続ける。
「どうやらね、殺された人。昔、犬に襲われた事があるんだ。それもただ追いかけられただけじゃなくて、思い切り、お尻に噛み付かれて、お尻の肉を結構な量、頂かれちゃったんだよ。こりゃキツイよねえ。ん、それで、その人は子供心に、いや、死んだときも子供だったんだけど。子供心に、犬が死ぬほど嫌いで、それこそトラウマになっちゃったらしいよ。つまりだね、その人にとって、恐怖の対象根源は犬だったのさ。だから、影は犬の姿をとったんじゃないのかな？　そして、傍で見ている人には、ただの影、夢幻にしか見

えない。だって、犬が怖いのは被害者だけだったんだからね。ああ、いや、被害者が犬を怖がってたから、影は犬になったのかな」

はっ、と三森が田村の意見を吹き飛ばすように笑い、鼻から煙を出す。

「……何だそりゃ、ンな訳ねーだろうが。それに、ただのあてずっぽうだろ？」

「そうだよ。証拠も無いし、合っているなんて保障もね。けど、僕は、ぼ、僕だけは確信している」

「ちっ、何だって良いけどよ。そンで？　そこまで分かってて情報部は影は無差別に人を襲うなんて抜かしてやがったのか？」

「ん？　いや、今回の影は二課が担当しているからね、僕ら一課は知らないよ。そもそも、ここまで知っている情報部は僕ぐらいじゃないかな。まあ、半ば趣味みたいな物だよ、これはさ」

「二課？　おい、おいおい、お前ら一課じゃねェのかよ？」

三森が焦った様子で椅子から立ち上がった。

反して、田村は余裕たっぷりの態度で「そうだよ」と、言い述べる。

「……あー、面倒だわこりゃ」

「何がよ？」

糸原が漫画本片手に、三森に問いかけた。

「二課にゃ、面倒な奴がいンだよ」

「ああ、春風さんだね。君たち、仲が悪かったよねえ」

「知った風な口利いてンじゃねぇぞ」

ぎらり、と光る三森の眼光に、ひっ、と田村が身を縮こまらせる。

「あのさー、あんたと情報部が仲悪くて、そんで何が面倒なの？」

「あー、春風はさ、私ら北駒台の奴らが嫌いなんだ。だから、二課がウチらの担当に当たったら、情報をまともに回してくれなかったりしてさ。何度か、邪魔もされたぜ。偽の情報流されたり、ちょろちょろと戦場行ったり来たりしてよ」

「仲間割れ？　あはは、良いぞもっとやれ」

「馬鹿野郎。今、現場にはあいつらが行ってるんだ。っつー事は、春風も現場のどこかに居やがるに決まってら」
何かされてなきゃいーけど、と三森が不安そうに呟いた。
「ふーん。まあ、大丈夫でしょ。邪魔ぐらいされても、流石に殺されやしないんだから。所でさ、何でそいつは私らの事嫌ってんの？」
糸原が気楽そうに言う。
三森は、本当に言い難そうに頭を掻き、視線を天井に向けた。
やがて、
「春風の家族を、私らが殺した」
三森が無表情に言った。

蛇。
蛇。
蛇が絡み付いている。
春風の腕に、右腕に絡み付く。一匹ではない。地面を蛇行しながら、春風の右腕を伝い、何匹もの蛇が絡み付く。大きさも、色も、全てがバラバラの蛇。何匹も何匹も、蛇が蛇が。

「ぐっ、何故だ！　何故動かない！？」

一の目は、しっかりと蛇を捉えていた。視界には、夥しいほどの蛇。
春風だけではない。一の体にも、蛇が纏わり付き、絡み付いている。背中を這うような感触も、爬虫類独特の冷たさも感じていた。

「一一！　貴様、遠隔操作は出来ないと言っていたな！　私を騙したのか、くそっ、一一！」

何故だろう、と一は倒れたまま思う。

何故、春風には、見えていないのだろう、と。もしかすると、春風にとって蛇は嫌悪の対象ではないのかも知れない。体中に纏わり付かれても動じないほど蛇が好きなのかも知れない。

「これは、これは何だ!?」

春風は、何度も、何度も何度も右腕に力を込める。しかし、どう足掻いても、腕は上がらない。と言うより、動かない。それこそ、全く。微動だもしない。

当然だ。

蛇に動きを封じられているのだから。

影と蛇と風

一は目を瞑り、思い出す。
蛇に囲まれながら、アテナの言葉を思い出す。自分に力を授けた、女神の言葉を脳内から引き出す。

「アイギスを使うには、条件があるわ」

一つは、所持者が声を出せる状態である事。
一つは、視界が良好である事。
一つは、力を行使する相手の名前を知っている事。

「細かい条件は他にもあるんだけれど、時間が無いから、ね。それに、いずれわかるわ」

もっと、思い出す。記憶の奥底に辿り着こうと、もがく。

「けど、何よりも大切なのはね、貴方が穢れていないって事よ。分かる？」

一は心の中で頷く。

「そして、アイギスを他の誰にも触らせてはいけないわ」

アイギスを所持する条件。それは、穢れていない事。穢れない事。
心も、体も。

「穢れた者が触れれば、アイギスは機嫌を損ねるわ」

一の何気ない問いに、くすり、とアテナは笑う。
「どうなるのかって？」
どうなるのかって。
ああ、と一はそこで、眼を開けた。
――こうなるのか。
動けない。動けない。動けない。動かない。
一も、春風も、ジェーンも。唯一、この場で動けるのは『影』だけだが、その影も、異常な事態に恐れたのか動こうとしない。
「くそっ、一一！」
春風は、先ほどから只管に喚いている。蛇に巻き付かれた腕を必死に動かそうと、懸命に力を込めていた。
「……あんた」
そんな春風に、一が声を掛ける。
「っ！　貴様、何をした？」
俺は何もしてない。何かしたのは、あんただよ」
「一一、貴様何を言っている？」
ふう、と一が息を吐いた。
「あんた、処女か？」
ゆっくりと、一が宣言する。
単純な驚きへと表情を変えた春風の、息を呑む音。
「貴様っ、こんな時に何をっ」
「こんな時だからだよ。良いから答えろよ。さもないと――」
一の肌に冷たい感触が走る。背中に、腕に、腰に、首に。巻き付

かれる様な、否。一は今、確かに巻き付かれている。蛇に、蛇に、蛇に、そして蛇姫に。

「――俺の蛇姫（メドゥーサ）に絞め殺されるぜ」

そう言って、一は薄く笑った。

瞬間、春風の腕が強く締まった。絞められた。春風の腕に絡まった蛇が、自分の体ごと引き千切ってしまいそうなほど、強く力を込める。

「あ、ああっ」

信じられない。そう言った風に、春風は右腕を見た。春風の目には、何も映らない。視界には、右腕しか入らない。蛇なんていない。

「答えろ、ハルカゼウララ」

「ふ、ふざけるなっ！　一一、貴様は下種だ！」

「ふざけてんのはあんただろうが。いらねぇ事ばっかりペラペラ喋りやがって。良いから聞けよ、そして答えてくれ。じゃないと、そろそろ俺の命にも関わるんだ」

一の首が、絞まる。絞められる。ゆっくりと、真綿で首を絞めるように。細く、白く、長く、冷たい指。まるで、それは蛇。

一の首の色が、徐々に赤く、そして青く、そして紫に染まっていく。

「……俺が、止めるから……。それには、状況確認が必要なんだ」

「何の確認だっ！」

「……このまま、全員死ぬつもりか？」

一と春風を襲う蛇。そして、今は沈黙を守っている影も、蛇が消えればジェーンを襲い、倒れた二人を襲う事は自明の理であった。

何かを諦めたかのように、春風が唇を強く噛んだ。血が、滲む。春風の口内を、赤い液体が。春風の舌を、鉄の味が支配していく。歯列を、赤く染め上げていく。

やがて、

「私は、処女じゃない」

凛とした声で、春風が告げた。

――やっぱりか。

アイギスは、穢れたモノに触れられると機嫌を損ねる、とアテナは言っていた。

一は確かに聞いていた。どうなるかとは、聞いていなかったが。

そして今、ハッキリと理解する。

こうなるのか、と。

アイギス単体の力では、一が願った相手の何かを止める事は出来ない。あくまで、アイギスは魔を祓い、災厄を退け、物理攻撃から所持者を守ることしか出来ない。

しかし、盾としては、それで充分なのだ。充分すぎるほどに、充分すぎる。

アイギスの盾。ギリシャ最強の盾。魔を払い、災厄を退け、所持者の身を守る。

それだけでは足りない。それだけで、最強と呼べるのだろうか。

呼べなかった。少なくとも、神々は、女神は、そうは思わなかった。だからこその、メドゥーサ。見た物を石に変える力を持ち、毒蛇の髪を持つ女。怪物。彼女の首を英雄ペルセウスが切り落とし、アテナに献上し、アイギスに首をはめ込んだ。見た物を石に変える力を持つモノを、魔を払い、災厄を退け、所持者の身を守る盾にはめ込んだのだ。

アイギスは、新たな力を得た。

そして、名実ともに、アイギスは最強と呼ばれるようになった。

メドゥーサを、神代の怪物を、稀代の毒蛇を、獅子身中の虫を。アイギスは蛇姫を内に飼ったまま、最強と言われた。

メドゥーサを飼っているから、最強と言われた。

唐突だが、首を切り落とされても意識を保てる生物などいるのだ

ろうか。
　この世に、そんな人外が存在するのだろうか。

「嫉妬させたんだよ、あんたは」
　一は冷ややかな声で春風に告げた。
「……ぐっ、あっ、だ、誰を？」
「可哀想な独身女だよ。んじゃ、あんたの名前を教えてくれ。蛇を退かせるから」
「蛇、だと？　一一、気でも触れているんじゃないだろうな？」
「失礼な奴だな」
　それより名前、と一が春風を急かす。
　蛇の締め付けに堪えながら、春風が「ハルカゼウララ」と何とか一息で告げた。
「違う。それはもう知ってる。字は？　ハルカゼウララってのは、どう書くんだ？」
「な、何を？」
「早くしろよ！」
　一が声を荒げる。
「は、春の風だ。季節の春、春に吹く風。麗。麗かにの、うららか。春に吹く、麗かな風だ」
　くっ、と喉の奥で一が笑った。余りにも、綺麗過ぎたから。
　春風は、端から用意されていた答えを、謳うように、歌うように言った。
「勿体無い」
　呟いて、一は背中に圧し掛かっている人物に意識を集中させる。
「春風麗ね、あっそ畜生、良い名前だな」
　一の頭の中で、組み立てられていく文字。
　春、風、麗。
　ハルカゼウララ。

はるかぜうらら。
はるかぜ、うらら。
春風麗。
理解する。一は、彼女の名前を字と音で今、理解した。
その瞬間、
世界が壊れた気がした。
世界が揺れた気がした。
世界が割れた気がした。
世界の割れる音を聞いた。
世界の揺れる場面を見た。
世界の壊れる時を感じた。
思わず目を瞑り、一は小さく呻く。

目を閉じればそこは、白い世界だった。
白い世界の中、白い女が立っている。一はその女を見たことが無かったが、知っている。そんな気がした。
声を掛けるのも憚られるほど、女は世界と同化していた。
どうかしていた。一には女が世界そのものに見えた。
そして一は、また一つ理解した。

一は目を開ける。暗い世界だった。戻ってこれた、と。とりあえずはひとり安心する。
まず一の背中から重みが消えた。立ち退いた。丁度、成人している女一人分くらいの重量が、だ。すると、今度は春風の右腕から蛇が一斉に退いて行く。蛇たちは春風に巻きつくのをやめ、体に登るのを中断し、呪縛を解く。解いていく。
「はっ……！」
がくん、と、春風が右腕を下ろし、肩で息をしだした。右腕は、

ボディスーツのせいで肌がどうなっているかは分からない。恐らくは、一の首と同じく紫に。下手をすれば、血液が凝固して、どす黒く変色しているかもしれない。

「はっ、はあ、はっ。……一一、貴様どういうつもりだ？」

アイギスを手放し、春風が一を睨んだ。

「意味が分からないんだけど」

ズボンに付着した土埃を払いながら、一が立ち上がる。いつの間にか、蛇の群れも、一の背後にいたモノも消えていた。

「……一一、なぜ私を助けた？」

「助けた？」

「今の行動を、それ以外にどう表現するのだ貴様は」

春風が恨めしげに一を睨む。

「俺はあんたをただで助けるつもりは無いよ」

一がしれっと、そんな事を言った。

「ふん。金か？　女か？　勤務外の地位向上でも要求するつもりか？　無駄だぞ、私はあくまで情報部。情報部でしか無いんだ」

「違うよ。いや、金は欲しいけど。ん、そうだな、俺が欲しいのは命だよ」

「な、ななな何だ、そういう事は先に言ってくれよ」

そう言うと、情報部の田村は、キーボードを軽快に叩き出した。

「じ、じじじ実はさ、僕の自作のデータベースには膨大で甚大で広大な量のソレに関するデータが詰まっているのさ。でも、人間の頭の中には詰め込みきれないからね、仕方ないけど不本意ながらこうしてパソコンの中に入れてるってわけさ。で、何が聞きたいんだったっけ？　えーと……？」

三森が田村の座っている椅子を蹴飛ばす。

田村は短く悲鳴を上げた。

「影に触られた人間が、どれくらいで死ぬかって聞いてんだよ」

「あ、あああ、ああ。そうだったね、えーと、影、幻、悪鬼に幽鬼。影、影影影」

ぶつぶつと呟きながら、田村がモニターと睨めっこする。

「……ねえ、こいつ大丈夫なの？」

「知るか。私に聞くンじゃねぇ」

やがて、「お」と、田村が声を上げた。モニターに直接触れないように気をつけながら、田村がそこを指差す。

「ほら、見てみなよ。ここだよ、ここほらほら見えるかい？」

「見えねーから退けっ」

「うわっ、くそうっだから勤務外は嫌いなんだ！　口より先に手を出す！　下等劣等極まりないよ！」

「どれどれ……」

床に這い蹲る田村を無視して、三森と糸原がモニターを覗き込んだ。

影（便宜上）は、弱者を好んで狙う。

特に、恐怖を感じている者をだ。精神的に弱い者と言い換えても差し支えは無い。

「ここは聞いたじゃん、スクロールしてよ」

「どうやるンだ？」

三森を馬鹿にするように、糸原が高く笑った。

「退いてなモンキー」

影は通常、獲物を一息に殺さない。

殺せない。影に攻撃能力は皆無だ。獲物を弱らせ、影に引きずり込む事は出来るが、その後は獲物の衰弱死を待つ事しか影には出来ない。

「……おい」

びくり、と田村が身を強張らせる。

影は、獲物を誰の手にも届かないところに隠して、ゆっくりと獲物が死に至るまで待ち続ける。稀に、死体の形が残ったまま発見される事があり、検死解剖の結果、死後二週間以上は経っている事が分かった。つまり、影に連れ去られても、そこからは被害者自身の体力持久力に因るところが大きい。

「ふうん。じゃあまだあのガキどっかで生きてんのね」

「……おい、まだ下に何か書いてあンぞ」

影は恐怖を糧にして生まれ、恐怖を糧にして生きるソレである。だが影は、実際には恐怖に弱いと言う報告もある。己よりも、より恐ろしいものに出会えば、その存在を自ら逃げるようにして掻き消すのだ。

「田村ぁ！」

「忘れてたんです！　ぼ、ぼぼぼ僕だって人間なんです！　人間は覚えては忘れて、そうやって成長する生き物なんです！　すいません！」

「これ、伝えなくて良いの？」

「メールじゃ間に合わないかもしンねえ。けどよ、あのチビ電話に出やがらないンだよな」

三森が、携帯電話を握った手に力を込めた。

影は、もうどこにもいない。少なくとも、既に一たちの周囲にはいない様子だった。

「……命、だと」

春風が訝しげに一を見る。

「ああ、助けてやったんだ。それぐらい聞いてくれても良いだろ？」
「私の命か？」
「シルフのだ。メドゥーサにビビって逃げたか知らないけど、影はもうここにはいない。つまり、唯一の手掛かりが無くなっちまったわけだ」
一がジェーンの頬を張りながら言った。
ジェーンは、時折うわ言を放つが、覚醒する様子ではない。
一は、遠慮がちにジェーンの心臓に耳を当て、安堵する。普通に、心臓は動いているようだった。本当に気絶させられただけらしい。
「それで、私にどうしろと？」
ジェーンから離れると、一は嫌そうに春風を見つめた。
「情報部だろ、あんた。足でも頭でもどこでも使えよ。使って探してくれ」
「……馬鹿な。無茶苦茶だ、探せ？　そんな事が可能ならば、一人目の時点でやっている」
「嘘だ。やってないだろ。あんた、他人なんてどうでも良いんだ」
春風と視線を合わせないまま、一は冷淡に言い放つ。
「そんな事は無い」
「言い切りやがって……。じゃあ聞くけどさ、あんたシルフ君が連れ去られた時、何処に居たんだ？」
春風は口ごもった。少し悲しそうに、俯く。一に対しては、初めて見せる表情だった。
「そこに居たんだろうが。なら、何で助けてくれなかったんだよ？あんた、強いんだろ。じゃあ、何で？」
何でだよ、と。
一は繰り返す。どうしようもない事を、もう、意味の無い事を。
「……私が情報部だからだ」
俯いたまま、春風は答えた。
「意味がわかんねえ。勤務外ってのはさ、ちょっとおかしいけど。それでも、あんたみたいにソレを見過ごしたりしないと思うよ。シ

ルフ君を助けてくれたと思う。……少なくとも、俺の知ってる勤務外の人たちは、だけど」
「私は、勤務外とは違う」
やはり春風は、俯いたまま答える。
「オンリーワンの情報部。何だよ、ソレと戦う正義の味方じゃねーのかよ？」
「簡単に言うな、一一。我々は、漫画みたくシンプルには出来ていない」
「大人の事情って奴？　まあ、そうだよな。そうなるよなあ、知るか」
一はジェーンを起こすのを諦め、アイギスを手にして立ち上がった。そして一歩、春風の方へ進む。
「探せよ情報部。何とかしろよ春風麗。お前のせいだろ怠慢女」
「きっ、貴様！　近寄るな！」
春風が左手を上げて、構えを取った。
「やめろ一一！　それ以上近づくと、今度は本当に殺すぞっ」
「今度は？　本当に？　俺たちを殺す気が無かったってのか？」
「うるさいっ、足を動かすな！」
「じゃあ何か、あれか。俺たちの邪魔でもしに来たって言うのかよ。ふざけんなよ、時間が無いっつーのに。そんな事は、お前ら情報部の方が知ってたくせによ」
もう一歩、一が足を踏み出す。
「近付くなっ！」
春風の叫びは、もはや懇願に近かった。

何故、勤務外に怯えているのだろう。
何故、この男に怯んでいるのだろう。
私は、どうして一一なんかに、どうして、どうして。

春風は、また一歩後ずさった。明らかに、春風は一に恐怖を抱い

ていた。ただの、勤務外に。
「わ、私はただ三森冬が！」
「三森冬？　今は関係ねえだろあの人は」
「関係ある！　貴様らは、貴様ら北駒台の連中が私の家族を殺したんだ！」
もはや叫び声だった。
「今は関係ねえだろ。シルフ君を探せ」
「なっ……！　私の話を……！」
「聞いたよ。だから何だってんだ。早く仕事に戻れよ、情報部」
一はアイギスをバットに見立て、一回、二回軽くスイングした。
「聞いたならば理解もしろ！　私の家族を殺した勤務外にっ、私が協力するはず無いだろう！」
「……じゃあもう辞めれば？　三森さんが嫌いなら何とかすれば良いし、勤務外が嫌いなら勤務外がいないところまで、どっか遠くまで行っちゃえよ。俺もその方が助かるなあ、初対面の人間に殺すとか嫌いとか言われたくないし。そんな人間、出来れば近づきたくない」
一が頭を掻きながら、うんざりした様子で春風を見る。
その目に気圧されたのか、春風は固まってしまった。罵声を浴びせたかった、口汚く勤務外を罵りたかったのに、春風は喋れない。口が動かない。舌が回らない。頭が働かない。
「お、お前なんかに言われる筋合いは無い」
精一杯の虚勢。
空気を緩く切り裂く音。一がアイギスを軽く振った。
「そりゃそうだ。その台詞、あんたにそのまま返したくなるぐらいにな」
「……私はお前が嫌いだ」
「俺もあんたが嫌いだ」
「一一、お前の言う事を聞く理由が私には無い」
春風の声色は、先刻までの冷たいものに戻っていた。言葉を交わ

しているうちに落ち着いたのだろう。一を無感情に見つめる瞳からは、もう何も読み取れない。
「あるね。俺はどういう形であれ、あんたの命を助けてやったんだ。影から――」
そして、と続けて一はアイギスを掲げるように腕を上げた。
「――こいつからもな。理由が無いとは言わせない、命の恩人の言う事だ、一個ぐらい聞いてくれよ」
「とんだ戯言だ」
「筋も通ってないしな」
「……自分で言うか、一一」
「なら交渉しよう。俺たちは幸運にも不幸にも、まだ人間なんだから。言葉は通じる、だろ？」
一はポケットから煙草を取り出した。
「交渉？　笑わせるな、私とお前とで何をどう話をするんだ？」
「簡単にいこうぜ、時間は無いんだ。俺はあんたを許す。だから、あんたはシルフ君を探して見つけ出す」
「私にメリットが無いな。それに、一口に探すと言っても、私に何処を探させるつもりだ。当てはあるのか？」
ふう、と一が煙を吐く。
「無い。ここら一帯を走れ、駒台を探せ、日本を回れ、世界を飛べ、何なら地球を出てっても良いよ。とにかく血眼になって探せ」
「貴様、何様のつもりだ……？　私がそこまでする理由は無い」
「有る。俺は、初対面でいきなり襲い掛かってきた人間を許すって言ってんだぞ。人間一人が人間一人を許すって言ってんだ。破格じゃねえか、それでもお釣りが来るぜ。何ならレシートもつけても良い」
春風が一を睨む。無感情ではなかった。瞳には、怒りが確かに込められていた。
「……本当に殺してやろうか、一一？」
声音は低い。

「出来るもんならな。悪いけど、俺にそういう脅しは通用しないぞ。こっちはあんた以上の勤務外に胸倉掴まれたり殴られたりしてきたんだ」

一は自慢げに、自慢にもならない事を言った。

「狂っているぞ勤務外」

「お互い様だぜ情報部」

一が鼻で笑い飛ばす。

「……お前のような死にたがりは初めてだ」

春風は呟く。

「あっそ。で、どうしてくれる？」

「お前は、何故ソレの為に動けるんだ？　シルフはお前の何なんだ？」

「何でもないよ、ただのガキだよ」

「なら、どうして！？」

春風は語気を荒げた。

「……罪滅ぼしかもしんない」

「シルフへのか？」

「違う。あー……、それに、やっぱ罪滅ぼしでも無いな。とにかく俺はもう約束を破りたく無いんだ」

一の答えを訊いて春風は黙った。交渉に対する答えに窮しているわけではない。嫌がらせで黙っているわけでもない。ただ、一を上から下まで観察している。

ふう、と息を吐き、

「情報部は何でも屋では無いぞ」

言ってから春風は目を瞑った。

「……交渉は、決裂か？」

いや、と春風が頭を振る。

「条件付で成立させよう」

「条件？」一が不審げに聞き返した。

春風が口元だけで笑う。

「三森冬の情報を教えてくれれば、シルフを探そう。血眼に探そう」
「情報部のあんたに教えられる事なんて無いんじゃないか？」
「三森冬の情報を確かに私は知っている。少なくとも、一一。お前よりは知っている」
「……じゃあ、あの人の何を聞きたいんだ？」
「何でも良い。下らんことでも構わん。私たちは、そうしないと動けんからな」
あ、と一は気付く。
情報部の仕事。
情報部の性質。
情報部は、情報の収集、秘匿、公開のみに全てを費やすのだと。
ならば、それに伴わない行為はどうなのだろうか、と。
一は春風を盗み見た。別段、変わった様子も、何か企んでいる様子も見られなかった。表情も冷たいままだ。無表情で無感情。機械のような印象。
「……どうした？　このまま決裂させても構わんのだぞ」
それでも。少し、ほんの少しだけ、一には春風が柔らかく見えた。
――交渉、ね。
一は心中で笑い、そして安堵もした。
胸を撫で下ろした。
――なんだ、そんな事か。
「分かった。じゃあ、三森さんの――」
一瞬、一は躊躇う。裏切りに当たるのではないか、と。自分は今、三森を売ろうとしているのでは、と。
「三森冬の？」
まあ良いか、とも一は思った。確かにくだらない事だ、つまらない些細で些末でどうしようもなく、小さな事だ、と。
駒台を小さく騒がせていた『影』の引き起こした事件は、終わっ

た。

一先ずの終わりを告げた。犠牲者と被害者は、あっさりと発見された。駒台の山、木の葉の中に隠されるように。こんなケースは初めてだと、情報部は言っていた。

正体がハッキリしていないソレ。一の蛇に恐怖したのか、それとも何か別の理由で獲物を見逃したのか、それすらもハッキリしていないソレ。だから、オンリーワンの中には、再び姿を現すのだろう、と。そう考えるものもいる。

それでも、それでもだ。だとしても、終わったのだ。

『影』は、もう駒台にはいない。死者三名、行方不明者一名の被害を出した『影』は終わったのだ。

『影』が消えた翌朝。

オンリーワン北駒台店。

ソレと戦い死なせ殺される役目を持つ、勤務外を擁する店。

そこの仮眠室から、二つの寝息が聞こえる。静かな寝息は、粗末な作りのソファーで横になっている一一のものだった。

傍に立ち、幸せそうな表情を浮かべているのはジェーンゴーウェスト。

「……お兄ちゃん、ごめんネ。昨日は役に立てなくて」

一は答えない。眠っているのだから当然だ。

完璧な独り言だった。それでも、一に訴えかける真摯な態度。真摯な瞳。

「ホントは怖かったよネ？　お兄ちゃんが震えてたの、アタシ知ってたよ」

静かな寝息。

「そんなにこの子を守りたかったのカナ……」

ジェーンが、視線を一から、一の隣で眠っている少年に移した。

お菓子の詰まった袋を抱えた無垢な寝顔。幸せそうな、小さな顔。

つられて、ジェーンも小さく笑みを零した。
「じゃ、アタシは仕事に戻るから。グッナイ、お兄ちゃん」
言って、ジェーンが仮眠室の明かりを落とす。
「それから、アリガト」
静かな寝息が一つ。それは時計の針みたく規則的な寝息だった。

この事件から数日後、三森冬の部屋に大量のザッハトルテが届けられる事になる。
それはまた別の話、にもならない話。

ｃａｍｐｕｓ　ｌｉｆｅ，ｂｒｅａｋ　ｔｉｍｅ

一一（にのまえはじめ）は紛れも無く、正真正銘の大学生である。駒台大学に通う、ごく普通のありふれた大学生。ただ、卒業までに単位が足りないかもしれないだけの大学生。

「一、今日休みー？」

糸原がこたつの中で足を伸ばす。手にはみかんと女性誌。

「バイトは無いですけど、学校に行きます」

朝食代わりの菓子パンを頬張りながら、一がテレビに視線を向けた。天気図と、天気予報士が映っている。どうやら、今日は夜から駒台一帯に雨が降るらしい。

「えー？　何その設定、あんた大学生だったっけ？」

「……これでも三年目です」

「ふうん、三回生かあ。就職活動はどうなの？」

「その心配はいりません」

一が立ち上がり、洗面台で頭髪を整える。

「へー、自信あんじゃん。それかもう決まったの？　じゃあ将来安泰だね。ちゃんと私を養ってよん。どこ？　どこに受かったの？　近く？　近くの会社？　良いトコなの、それともブラックって感じ？」

「その心配はいりません。一回生一年、二回生二年目。つまり俺は、今二回生です」

だから心配はいりません、と一が真顔で言う。

「くそ学生ね」

「苦学生でも無いですし。そはいりません」

「そんじゃ頑張って勉強してきなさい。お姉さんはコンビニ昼からだかんね」

言って、糸原は寝そべった。
玄関に向かい、一は靴を履き、違和感に気付く。
「あれ。じゃあ糸原さん、何で起きてたんですか？　寝てれば良かったのに」
「ん。んー、生活リズムがあんたと似てきたのかしら」
そうでしたか、と一は扉を開けた。
「それじゃ、留守番と戸締りお願いしますね」
糸原は答えず、片手を上げて肯定の意を示す。一はそれに満足して、鍵は掛けずに扉を閉めた。

駒台大学は、駒台山のすぐ近く。通称、駒坂を登っていった中腹に位置している。生徒数は一学年約千人。大学は一回から四回まであるので、大雑把に言えば四千人近くは駒台大学に在籍している事になる。車で通学するもの以外、つまり生徒の半分以上がこの長い駒坂を上ってきているのだ。特に目立った物も無い。ありふれた、どこにでもある大学。掃いて捨てられるぐらいの大学。

「寒い……」
一は駒坂を上りながら呟く。坂を上れば上るほど、遮蔽物の無い道に寒風が容赦なく吹きすさぶ。見上げれば、同じように体を震わせながら上る学生。白い息を吐きながら、一はマフラーを買おうかな、なんて考えに耽った。大学生になってから買ったコート。一がちらりと視線をやると、袖の所が解れかかっているのが確認できる。白い息とともに、溜め息。
「苦学生、かな」
肩に掛けた鞄の紐も頼りなく感じられた。今すぐにでも千切れてしまいそうなほど、細い紐。鞄を担ぎなおすと、一の肩に、中身の教科書やノートの重みがそのまま伝わる。

「先輩！」

声より先に足音が聞こえた。軽快な足音だった。

一は振り返って、苦笑する。

小柄な女の子が走ってくるのが見えた。一は立ち止まり、坂道を物ともしない勢いで駆けてくる少女に微笑む。

少女も一の笑顔を認め、微笑んだ。向日葵のような、太陽のような、自然な笑顔が輝く。

「先輩、お早う！」

「朝からうるさいよ」

少女は一の隣に立つと、歯を覗かせてまた笑った。少女の肌は日に焼けている、健康的な黒さ。そのお陰で白い歯が余計に映えて見える。

「そんな事を言うな、先輩。せっかく可愛い後輩が挨拶しているのだぞ」

一と少女の二人が並んで歩き出す。男性にしては小柄な体躯の一よりも、小さな体の色黒な少女。

その少女の格好。少し茶色掛かったショートヘア。青いナイロンのパーカーの下に、白いインナーが覗いている。ショートパンツに、白いスニーカー。肩にはエナメルのバッグを掛けていた。活動的な、スポーティな装いであった。

「そうだね、可愛いよ早田（はやた）」

「そうか、先輩にそう言われると照れるな」

早田、と呼ばれた少女は顔を少し赤くしていた。本当に照れていた。

「……ええい、真っ直ぐな奴だな」

一がそっぽを向く。言った一の方が恥ずかしかった。

「ところで先輩、今日は朝早いのだな」

早田が一を見つめながら、無垢な瞳で問う。

「っていうか、学校来るの久しぶりかもしんない」
「先輩。先輩の事を来年は先輩と呼べなくなるかもしれないな」
「かもしんない。うわ、って事はお前と同学年になるのか……」
憂鬱な表情を隠すことなく、一はぼやいた。
「私は構わないぞ。そうなったら語学の授業を一緒に受けようじゃないか」
「ヤだよ。俺英語しか分からないんだから。フランス語なんて良く取ったなお前」
「いや、部活に集中していたら、申し込みの締め切りを忘れていたのだ。残っていたのが仏語だった」
「ああ、フットサルか。良いねえ、一回生の分際で、弱小だったフットサル部を救ったエースになれるだなんてさあ。あーあ、俺も部活に入ってれば良かった」
「む？　今からでも遅くはないぞ。フットサル部はどうだ、部員一同歓迎するぞ」
早田が何故か一に手を差し出した。握手を求めているようにも見える。
「……フットサルって女子しかいないじゃん」
「マネージャーとしての活躍を期待している」
爽やかな、体育会系の笑顔を早田は一に向けた。
「それもアリかな」
「……やっぱり駄目だ」
早田が手を引っ込める。
「何でだよ、良いじゃん。俺だって女子にベンチで囲まれて、練習終わって汗かいてる女の子にスポーツドリンクとかタオルを渡したいんだよ。ん、あ、良いなこれ。おい、俺入部するわ」
「それが気に食わない。先輩のそういうところを、私は見たくないのだ」
「何だよ、ぬか喜びさせんなよぅ。じゃあ文系のクラブに行くかな。楯列（たてなみ）ん所にするわ。楽そうだし」

「だ、駄目だ！　もっと駄目だ、奴には近づくな！」
酷く慌てた様子で、早田が縋るような視線を一に向けた。
「……奴って。一応、先輩だろ。何で楯列には先輩って付けないんだよ」
「私が先輩と呼ぶのは、先輩だけで良い」
そう言って、早田はまたしても一に笑顔を向ける。
「う、畜生上目遣いをやめろ。それよか、ゼミで課題とか出てたか？」
早田の笑顔から逃げるように、一が質問を変えた。
一の意図には気付かず、早田は「ちょっと待って欲しい」と、鞄から携帯電話を取り出す。携帯の蓋を開け、たどたどしい手つきで早田は画面とにらめっこを始めた。
「……九十九（つくも）先生の事だから、多分無いとは思うけどな。っていうかこれからも出ない気がする。あの人授業中茶ぁしか飲んで無いじゃん」
「私はまだ一年も付き合いがないが、とみにそう思う」
「ん。じゃあ別に調べなくて良いよ」
「駄目だ。先輩に不確かな事は言えない。もう少しでメモ帳まで辿り着けるのだ」
あっそ、と一はポケットに手を伸ばす。がしり、と。骨が軋むぐらいの勢いで、その手首を掴まれた。
「煙草も駄目だ。仮にも私はスポーツマンなのだ。でなくても、煙草と言うのは人体にとって百害あって一利なしの麻薬ではないか。先輩だけが煙に巻かれて体を蝕まれるのは構わないが、副流煙を垂れ流されては困る」
スポーツ『マン』と言うところに一は突っ込もうとしたが、予想外に強い力で早田が握ってくるので、
「……痛いから離して」
と、涙を浮かべながら早田から視線を反らした。
「む。煙草は止めると誓うか？」

「誓う誓う。癌で死んだじいちゃんに誓って煙草は止めるよ」
ならば良い。満足げに呟いて、早田は一から手を離す。同じようなやり取りが、二ヶ月前にもあった事を一は思い出し、我知らず笑う。
「何がおかしいんだ、先輩？　奴が坂から転がっていくのでも見えたのか？」
「去年それは見たけど、案外面白くなかったよ。それより俺、笑ってたか？」
一が自分の頬を触った。ああ、と。静かに納得する。
顔が、歪んでいたから。
「ああ、笑っていたぞ。ラッキーだった」
「俺って笑うのが珍しいタイプだったっけ？」
「いや、先輩は無関心やクールを装ってはいるが隠しきれないタイプだ。表情のバリエーションには枚挙に暇が無いくらいだぞ」
「お前は何なんだ」
「私は先輩の可愛い後輩だ。うむ。さっきのような種類の笑顔は初見だった。私としたことが、心を奪われて写真を撮るのを忘れていたぞ」
この野郎。一は内心毒づく。
「早田」
「どうした先輩？　手首が痛むのか？　なら部室へ寄ってくれ、湿布があった筈だ。応急処置にはなるだろう」
「可愛いぞ、早紀（さき）」

駒台大学には、学生が講義を受ける為の教室が並ぶ、講義棟と呼ばれる建物が六つ。教員の私室兼研究室になるべき部屋がいくつも並ぶ、研究棟と呼ばれる建物が三つ存在する。そのうちの、研究棟一、九十九ゼミの教室。ドアを開けたすぐそこに、靴箱がある教室だった。つまり、この教室に入るためには靴を脱がなければならな

いと言う事である。
　理由は明確。九十九ゼミの床には、青々とした畳が敷かれているからである。十畳あるかないか、ぐらいの部屋。よもや、畳に土足で上がりこむ不心得者は日本人には居まい。と、信じたい。とは一の弁。
　畳の上には、ちゃぶ台が一つ置かれている。それ以外には、殆ど何も無かった。精精が、お茶の準備に必要な道具と、九十九教員の私物ぐらいだろうか。
　九十九ゼミに在籍する一たちは、そこにいた。一は何故か、お腹を抱えて畳に座し、ちゃぶ台に顔を埋めている。早田は一の横に陣取り、一を挟むように私物を置いていた。
「先輩、まだ痛むのか？　腹筋をもっと鍛えるべきだぞ」
「うっさい機械音痴のくせに。早田なんか嫌いだ、ちょっとからかったぐらいですぐ殴るし。今日はお前を昼ごはんに誘わない。楯列と二人で食う」
　その言葉に弾かれるように、早田は立ち上がる。
「駄目だ！　そんな事になれば私は死んでしまう！」
「偉そうに言うな。俺が卒業したらどうすんだよ？」
「先輩が後一回留年すれば問題ない。一緒に卒業しよう」
　にこやかに早田が言った。そして一に向かって手を差し出す。
「何だよこの手は？」
「手？」
　これだよ、と。言いながら一が早田の手を無遠慮に握った。瞬間、一の体が宙に浮く。浮いた体が、重力引力様々な物理法則に従って、
「いてえっ！」
　落ちる。
　鈍い音を立て、一が畳の上に突っ伏した。顔だけを何とか上げて、一はそんなことをした早田に怒鳴る。
「何するんだ馬鹿！」
　だが早田は毅然とした態度。

「いくら先輩と言えども、易々と私に触らないで貰いたい。確かに私は先輩に好意を抱いてはいるが、それとこれとはまた別の話だ。そうは思わないか先輩？」

「っていうか、お前が手を出してきたんじゃねえかよ」

「……そうだったか？」

やがて、ああ、と早田が頷く。

「すまない。どうやら握手を求めるのが癖になっていたらしい。無意識の内に手を差し出していたようだ」

「先生早く来てくれ！　無意識の内に殺されちゃう！」

「待たせたね、みんな」

一の呼び声に答えるかのように、扉が開かれた。

女性か、と思わせるような。畳の敷かれた、和室に似合わない人物が九十九ゼミに現れた。

姿を現したのは、青年。まず、目が行くのが髪の色。輝かしいばかりの金色。そして、透き通るような白い肌。だが、彼の肌を見る者に不健康なイメージは抱かせない。瞳はダークブラウン。日本人に多く見られるブラウンに属する目の色。

「あれ、先生はまだ来ていないのかい？」

流暢な日本語。彼は紛れも無く日本人だった。それにしては、日本人離れした、整った顔立ちだった。目、鼻、口。顔に付いている全てのパーツが美しかった。顔だけではない。彼の肉体全てが、どこにどう付ければ美しく見えるのか、そう計算されているかのように、彼は完璧に美形であった。彼を初めて目にする人に、彼が雑誌のモデルか、海外の俳優と言っても、信じない者はいないだろうと、そう思わせるであろう黄金比のスタイル。

「やあ、良い朝だね」

綺麗な声だった。高すぎず低すぎず、中性的な容姿と声。

「ああ、お早う楯列」

一は臆することなく、挨拶を交わす。
「うん」
楯列と呼ばれた青年は、屈託の無い笑みを浮かべて、一の隣に座った。
早田の私物を蹴っ飛ばして。
ぎりり、と早田が歯軋り。
「おい楯列。私の鞄を蹴るな、何度も言っているだろう。そこは私の場所だぞ」
早田が憎憎しげに楯列を見据える。先ほどまで一に向けていた、太陽のような笑顔は無かった。
「ん？　そこと言うのは一君の隣かい？　ははは、一年遅かったね。ここは僕の指定席と決まっているんだよ」
楯列は優雅に笑い、さり気なく一の肩に手を回す。
「や、やめろ！　先輩に気安く触るな！」
「何怒ってんだよ？」
一が呆れた風に早田を見た。
「せ、先輩は騙されているんだ。そいつは先輩を狙っているのだぞ、危険だ。離れた方が良い」
「知ってるよ」
「知っていながらそんな奴を傍に置いていると言うのか！」
「ははは、僕と一君の関係に周回遅れが口を出さないで貰いたい。君は指を銜えて見ていたまえ。僕が一君の――」
最後の辺りは囁く様に言って、楯列が指を伸ばした。
「下半身には触るんじゃねえよ！」
楯列の伸ばした人差し指は、一に届く前に掴まれる。
「なっ、一君が僕を拒むなんて……」
驚愕の表情を顔に貼り付け、楯列がよろめいた。
「ふっ、先輩に相応しいのは私だ。そこを退け楯列」

「一君、今日のお昼はどこで食べるんだい？」
「寒いしここで食おうぜ」
「良いだろう、立て楯列！　私が直々に制裁を加えてやる」
「ははは、僕は暴力に訴えかける野蛮な嗜みはしない主義なんだ。座りたまえ早田君、文化人らしく話し合おうじゃないか」
「誰が文化人かっ、先輩も何とか言ってくれ！」
早田が焦れて立ち上がる。拳を握って楯列に掴みかかろうとした瞬間だった。

「授業を始める」

静かだが、よく通るしゃがれた声。一たちの対面、甚平を着流す禿頭の老人が座った。既に五十か、六十は重ねている齢。雰囲気は厳かで、彼が場にいるだけで緊張がそこに張り詰める。
楯列と一は佇まいを正し、その老人と向き合った。
先ほどまでは、この部屋にいなかった登場人物。扉を開ける音も、気配もさせずに入ってきた人物。だが、一たちは別段驚いた様子も戸惑った素振りも見せない。一たちの属する九十九ゼミ、その長、九十九敬太郎（つくもけいたろう）。このような立ち居振る舞いが彼の常だった。
「早田、座れ」
老人の瞳が早田を捉える。捕らえる。
無言で早田が畳に座った。
「九十九先生、おはようございます」
一の挨拶に、九十九と呼ばれた老人が無言で頷く。
「一、久しいな。一ヶ月ぶりか？」
そして、しゃがれた声で一に尋ねた。
九十九の雰囲気に、一は少し気圧されたが、「そうですね」と小さな声で返す。
「これ以上欠席すると単位を落とすぞ。気をつけなさい」
一は短く返事をし、九十九の次の言葉を待つ。

九十九はおもむろに、ちゃぶ台に置いておった湯飲みを手に取った。

「それでは、授業を始める」

駒台大学では、一回生からゼミに属さねばならない仕組み、決まりがあった。必修である。これの単位を落とすと即座に留年してしまうので、どんな生徒でもある程度はゼミに顔を出すのが普通であった。

勿論、一も例外ではない。そして一が属するのは九十九ゼミ。大学の教員である、九十九敬太郎が率いる、少数精鋭をモットーとする演習クラスだった。

少数精鋭。その理由は、九十九が何よりも、誰よりも「静」を好むためである。生徒数が多ければ多いほど、自然「動」が生まれる。そのため九十九は、各学年から一人ずつ――あるいは一人の生徒も取らない学年すら存在する――吟味に吟味を重ね、面接をして選びに選び抜いた生徒を自身のゼミに招く。そんなスタイルを貫いていた。

所属する生徒は、一回生から早田早紀（はやたさき）。二回生から一一（にのまえはじめ）。三回生から楯列衛（たてなみまもる）。四回生に該当者なし。教員一名。生徒三名。合計四名からなるゼミ。授業内容は至ってシンプルなもので、授業の最初に九十九がテーマを提示し、それに関して生徒が自分の考えを原稿用紙に感想文、もしくはレポートの形をとって書く。それだけだった。用紙の枚数も、文字数も指定は無い。どんなテーマであれ、たった一言「あ」と書くだけでも九十九は満足してレポートを受け取る。テーマも多種多様だった。捕鯨問題、経済問題と言った核心の掴みづらい難解なものから、パンダと言った簡単なのか何なのか分からないような物まで、九十九はテーマにするのだった。

授業が始まって三十分。九十九ゼミには、紙と、筆記具がこすれ合う音。時折九十九がお茶を啜る音しか聞こえてこなかった。

今回九十九が出したテーマは、「学食の値段」について。一たちは慣れているのか、筆を止めることなく書き続ける。授業が終わる、九十分が経つのもあっという間だった。

「一君一君、ほら口開けてあーん」
「早田、午後からは授業あんの？」
「いや、今日は昼までだ。部活に行こうと思う」
九十九ゼミ生には、教室の鍵が貸与される。空いた時間、一たちのように食事や、自習活動の為に教室はゼミ生の為に開放されていた。
「しかし、九十九先生のゼミで良かった。冬は学食も混む。こうしてのんびりと先輩と二人きりで食事出来る特典があったとはな。厳しい倍率を勝ち抜いた甲斐もあると言う物だ」
「早田君。君の視力は悪かったのかい？」
「え、早田って目ぇ悪かったっけ」
「私の視力は七だ。私の視力が悪いと言うならば、地球上に住む殆どの生物の視力が悪い事になるな」
早田は淡々と言って、アルミホイルに包まれたおにぎりに手を伸ばした。
「嘘付け。七ってマサイ族より上じゃねえか。あいつらでも七はねえだろ」
一は菓子パンの袋を開けながら、早田を馬鹿にしたように笑う。
「皮肉も通じないとはね。体育会系は苦手だよ。ところで一君。一君の時の倍率はどれくらいだったんだい？　ああ、ちなみに僕のときは、倍率六十倍だったよ」
楯列が弁当箱のおかずを突きながら一に顔を向けた。
「俺？　俺は分かんないな。倍率とか関係なしに何か一発で通ったけど」
「流石先輩だ」と、早田が自分の祝い事のように、嬉しそうに目を

細めて呟く。
「へえ、僕が見込んだ男なだけはあるね。あの九十九先生に、そんな簡単に選ばれるだなんて」
楯列も嬉しそうに笑みを零し、一に箸を向けた。一はその箸に刺さった春巻きを口にし、咀嚼。
「私と君で、合わせば百だ。とか言われて受かった」
嚥下して、一は事も無げにそんな事を口にする。
「うむ。流石先輩だ。名前の時点で常人をも越えていたわけだな」
「一と九十九で百。ははは、先生にはユーモアもちゃんと備わっていたようだね」
「別にこのゼミじゃなくても良かったんだけどな俺は。もっと人の多い所とか、女の子の多い所が良かったなーとか最近思ってきた」
一は菓子パンの袋をくしゃくしゃにして、鞄に詰めた。九十九ゼミの教室にはゴミ箱が存在しない。
「ん。どうしたんだ？」
問われた早田と楯列は、少し顔色が悪かった。
「そんな、先輩が他のゼミに行くだなんて。だ、駄目だ！　先輩が他の女の毒牙に掛かってしまう！」
「あああああ、一君が僕に飽きたんだー！」
「冗談だよ、うるさいな」
半分は、とは言わずに、一はその言葉を噛み殺す事にする。

一はその後、早田、楯列とは別れ、大教室で三時限、四時限を受けて家路に着いた。大学での、いつも通りの一の行動。いつも通りの、何事も起きない、何も変わらない、普通の生活。家を出て。坂道を上って。友人と話して。講義を受けて。煙草を吸って。坂道を下って。家に入る。
いつも通りの。
一はオンリーワンでアルバイトしてからでも、勤務外になってか

らでも、ここだけは、大学での自分だけは変わらないと。大学では平和に過ごせると、そう信じていた。何の確証も無く、子供みたいに信じきっていた。

ソレは、いつ、どこで、現れるかもしれないのに。ソレは、いつでも、どこでも、現れるのに。

赤はあの人の色

一は学校帰りにオンリーワン北駒台店へと寄った。店長の勝手な都合で毎日のように変わるシフトの確認と、お菓子を買いに。

影の事件が終わってから、一がお菓子を所持していると、必ずと言って良いほど寄ってくるモノがいたからだ。最初こそ辟易していたが、大学から家までは何も無い帰り道。子供だろうがなんだろうが、話し相手がいると言うのは良い物だと一は思う。

「おはようございます」

レジには三森がしかめっ面で立っていた。一応、オンリーワンの制服を着てはいる。しかし、カウンターに寄りかかり、店内で煙草を吸う三森の姿勢からは仕事を真面目にやろうとする意欲が感じられなかった。

「……よう」

一に気付いた三森がだるそうに片手を上げる。

「煙草吸いすぎじゃないですか？　一日何本ぐらい吸ってんですか一体」

「うるせェな。お前だって吸ってんだろうが、私の事に口出しすンじゃねえ」

煙を吐きながら、三森が鬱陶しそうに首の骨を鳴らした。

「……店内で吸いたくなるほど、俺は中毒じゃないっすよ」

「一々うるせェ奴だな、大体お前はシフトにも入ってねーのに来るンじゃねぇよ」

「買い物ぐらい良いでしょう」

それだけ言うと、一は商品棚から適当に見繕ってお菓子を数百円分手に取る。飴玉やキャラメル。チョコレートにスナック菓子。一は、合計で十点程のお菓子をバーコードが見えるようにして丁寧に置いていった。

「お願いします」

「は？　何をだよ」
「……レジですよ」
三森はカウンターに置かれた商品の山を一瞥して、心底面倒くさそうに紫煙を吐く。
「買い過ぎじゃねえ？　私が戻してきてやっから、一個だけにしろよ」
「んー、確かに買い過ぎですかね。……でも、つい買ってあげちゃうんですよね」
言って、一がお菓子を手にとって見比べ始めた。
「……買ってあげる？」
「三森さんってチョコレートと飴、どっちが好きですか？」
「チョコ。じゃなくて、話聞いてンのかてめぇ？」
「聞いてますよ。シルフ君に買ってあげてるんですよ。駄菓子ぐらいですっげぇリアクションしてくれるから、ついつい」
一はやがて、半分ぐらいのお菓子を棚に戻した。
レジ前まで戻ってきた一に、三森は呆れたような視線を送る。
「お前な、どうしようもねェぐらい使い物になんなくても、お前も一応は勤務外なンだぞ？　ソレと遊んでんじゃねーぞ、立場弁えやがれってんだ」
「良いじゃないですか。シルフ君は言葉も分かるし、人間を全面的に好いてはいませんが、害を与える気も無いんですから」
「ちっ、イカレてやがるぜ」
舌打ちしながら、三森がお菓子のバーコードを通していく。
「ン。全部で五百……円ぐらいな。つーかさ。お前、勤務外なんだから金払わなくても良いンだぜ？」
「……五百五十三円、と。あー、勤務外ってそういう設定でしたっけ」
「ああ、そうだよ。金は良いから持ってけよ」
袋にお菓子を詰めながら、三森が言った。
「そりゃありがたい話ですけど」そう言って、一は百円玉を六枚、

カウンターに並べる。
「おい。私の話聞いてたか？」
「聞いてますよ。けど、この店売り上げマズイんですから、少しでも貢献しときますよ」
袋を手にとって、一はごまかす様に笑った。
「まァ、金払うのは私じゃねーから良いけどな。それよか、私の好きなもの。誰かに喋ったりしたか？」
「は？」
「いや、知らないなら別に良い」

一はバックルームに入って、壁に画鋲で貼り付けられたシフト表に目を通していく。今日のシフト表によると、早朝から昼まではジェーン。昼から夕方。ついさっきまでは糸原。夕方から明日の朝までは三森。の予定だった。明日の午前からは一が入る予定になっていた。ちなみに明日の午前、一には大学の授業があったのだが。
「ひでぇ……」
思わず口をついた言葉だった。
オンリーワン北駒台店。幾ら客の少ない店とはいえ、納品、掃除、レジ打ち、店長の相手等等。さまざまな仕事を、各時間一人で押し付けられている状況。せめて後二、三人いればマシになるのに。と、嘆いても仕方の無い事を一は嘆いた。
とりあえずのシフトを確認した一は、足早にバックルームを立ち去ろうとする。
「おいおい、挨拶はー？」
バックルームの奥から、意地悪い声が聞こえてきた。
一は不機嫌そうに「おはようございます」と一言だけ告げ、店長の顔を見ないで部屋から出る。出たところで、一は後ろから背中を掴まれた。
「お兄ちゃん！　何でアタシまで無視するの！？」

「あれ、ジェーン居たのか？」
「いたもん！」
「悪い悪い、冗談だよ」
一にはただ、ジェーンがどこにいたのか見えなかっただけだった。
「別に良いけどネ、お兄ちゃんだし。ばいざうぇい、お兄ちゃん、もうディナーは済ませた？」
「お前英語の発音も怪しくなってないか？」
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！　良いから、食べたの？　食べてないの？」
「ん。食べてない」
その問いに、ジェーンは満足げに頷く。
「ゼンは急げ、じゃあお兄ちゃんの好きなお店連れてってヨ」
「今からか？」
一はバックルームの時計を見上げ、黙考した。
今の時刻は、午後五時を少し回ったところ。晩御飯には少し早い時間だろう。
「ジェーン、駒台は慣れたか？」
「？　少しはネ。でもでも、まだ行ってない場所もあるけど」
「それじゃ、駒台デパートには行ったか？」
「デパート？　ううん、行ったことナイよ」
ジェーンがオーバーリアクション気味に首を振った。
「ん、じゃ決まりな。適当に買い物もしようか」
そう言って一が自然に、ジェーンへ手を差し伸べる。
ジェーンもその手を、ごく自然に握り返した。

「ありゃ」
一が中内荘の自室まで戻ってきて、自室の扉のノブを捻ったところで声を上げる。意図せず、何も考えずに出たものだったので、声は間抜けその物だった。一は軽く木造の扉をノックして、中にいるであろう人物に呼びかける。しかし、その人物――コンビニのバイ

トが終わって帰宅しているはずの糸原――は、扉の鍵を掛けたまま、挙句の果てには一に対して返事もしなかった。

「……」

一の部屋からは、物音が聞こえてくる。テレビから流れる何かしらの音、声。何かを擦る音。確実に、一の部屋には誰かがいるのだ。

まさか、と。一はネガティブな想像を抱く。空き巣。強盗。殺人犯。泥棒。盗人。

一は身震いした。

だが、果たして自分の部屋へ盗みになぞ、誰が入るのだろう。ご丁寧に鍵まで掛けて、だ。不思議に思いながらも、一は部屋の中にいるであろう誰かに声を掛ける。

「糸原さん？　開けて下さいよ」

返事は無い。

一の体を、夜の風が吹き抜けていった。一はまた身震いする。

「寒いんですけど！」

強めにドアをノック。

すっ、と。部屋の中から、ドアの前に誰かの立つ気配がした。一は安堵する。

「駄目よ」

ドア越しの声は、酷く冷たかった。

「はっ？　糸原さん、ですよね？」

「うん」

肯定。という事は、一の部屋にいるのは糸原で間違いない。しかし、何が駄目なのだろう。一は糸原の言葉を理解できない。

「遅いから、もう入れてあげない」

追撃だった。

「……！」

絶句する。何を言っているのか、扉越しの女の言っている事が、頭に入ってこない。

「家主に向かってあなたって人は……」

一の握った拳が震えていた。寒さのせいではない。
「へっへっへー、あんたが家主って証拠は無いわよ。私はその家主から、直に留守番を頼まれてるんだかんね。家に入れて欲しいなら、あんたが一だって証拠を見せなさいよ」
「この状態で何をどう見せれば良いんですか？」
「ふっ、あんたの誠意を見せてみなさい」
「誠意。はあ、分かりました」
扉から一歩距離を取ると、一は煙草に火を点けた。胸いっぱいに煙を吸い込み、一呼吸。
「ほら、ほらほら見えますか？　俺の渾身の土下座」
「えっ、土下座!?」
糸原があっさりと扉を開いて飛び出してくる。その顔は異様な期待感に満ちていた。
「おっしゃ」
呟いて、一が火の点いた煙草に気を付けながら部屋に入る。一は流し台に置いてあった灰皿を掴んで、こたつに足を入れた。
「ちょっと、あんた土下座してないじゃない！」
糸原が扉を乱暴に閉め、一を睨んだ。
「何がしたかったんですか、あなたは？」
あきれ返った一の顔。
そんな一を気にもしないで、糸原は告げる。
「晩ごはんが食べたかったの」
「……食べれば良いじゃないですか」
勝手にどうぞ、と言って、一がこたつに潜り込んだ。足の先から、暖かさが伝わってくる。心地よさを感じ、一は目を瞑り、訪れた睡魔に身を委ねた。
「どうやって食べるって言うのよ。あんたが財布持ってるから私お金持ってないし、店長は廃棄くれなかったし、この部屋には何にもないじゃない」
「あ、忘れてた。でもジェーンとご飯食べちゃったしもう眠いし。

だからおやすみなさい」
糸原の言った事は至極まっとうで、筋もちゃんと通っていた。
一は心からの謝罪を述べ、もう一度目を瞑る。
「良し分かったわ。お姉ちゃんが出来の悪い弟を教育してやろうじゃないの」
閉じていた目が開かれた。糸原の細く長い指が、見た目とは裏腹に万力のような力でもって、一の瞼を無理矢理に開けていく。
「やめてやめてやめてやめて」
懇願を聞き届け、糸原は一の瞼から指を離し、頭を引っ掴んだ。
そうして、流れるような動作で一の額をこたつの卓の、角の部分にぶつける。
「あ――！」
衝撃音は叫びによってかき消された。一は額を押さえ、こたつに入ったままの、身動きの取れない体勢で足をバタつかせる。
「あはは、ね、痛い？」
「もう嫌だあ！　ちょっと帰りが遅かっただけじゃないですか！」
「……それよ」
糸原は声を低くして言った。そうして、寝転んだままの一の横に胡坐を掻く。
「あ、俺のジャージ穿かないで下さいよ」
「はあ？　じゃあ私にパンツ一丁でいろって言うの？　はっ、それが目当てなのそうなのきっとそうに決まってる！　やん、エッチ。けど一になら見せても、良、い、か、も☆」
「気持ち悪い……」
「あんたって眠かったら毒吐くわね」
悪戯っぽく糸原が微笑んだ。その笑みが、一にはどこかぎこちないものに見えた。
「……何かあったんですか？」
「んー、ソレが出たんだってさ」
その言葉に一の眠気が霧散する。

「またですか」
「ん。またここら辺に出たんだってさ」
髪の毛を弄りながら、糸原は世間話をするかのような、軽い口調で一に返した。
「えっと、その、犠牲者とかは？」
「一人殺されたらしいわよ。斧か鉈。刃物でズタズタに体中斬られた男が、近くの墓地で見つかったんだって。血が墓石とかにこびり付いて大変だー、とか言ってたわね」
「……墓場？」
一は頭の中に駒台の街を描く。
「ああ、高校の近くの墓地ですかね……。うーん、俺の家からだと結構遠いかな」
「少し、安心した？」
「遠いとは言っても、結局はこの街に出たんでしょ。だったら気休めぐらいにしかならないとは思いますけどね」
「それでも、私はちょっとほっとした」
糸原は窓の外の景色に目を遣りながら呟いた。優しい、声だった。
一は糸原の物憂げな横顔を目の端に置いたまま、曖昧に賛同する。
ところで、と。前置きしてから、
「ソレの正体ってハッキリしてるんですか？」
一は話を変えてみた。
「チビっ子や情報部が言うには、殆どね。赤い奴が犯人なんだってさ」
「赤い奴？」
一の脳内に一人の人物が浮かんできた。
「……服、とかが赤いんですかね」
「さあ？」
だが、一はその人物の事を言おうとは思わない。思えなかった。
少なくとも、言ったらその人に対して申し訳ない、と。悪い気がするのが半分。もう半分は言ったら殴られそうと思ったからだ。

「そう言えば、ソレが出たって時にあのヤンキー店に居なかったのよね」

それがどうした、とは一には言えなかった。

駒台の街に学校は少ない。小学校が三つ、中学校は二つ、高校も二つ、大学に至っては、一の通う一つしかない。駒台にはオンリーワンの近畿支部がある為、被害を少なくするためにもそれは仕方の無い事ではあったのだが。未来有望。前途洋洋。若者たちを戦場の真っ只中で勉学に勤しませる。悪逆非道。そんな真似は良心があれば許さないだろう。良心があれば。人並みの、普通の心があれば。

北駒台高等学校。駒台に二つある高校の内の一つ。もう一つの南駒台高等学校より、人気のある学校。その理由は立地にある。北駒台高等学校――通称、北高――は平地に建っている。一方の南駒台高等学校――通称、南高――は坂道の上。山の上に立っているのだ。やはり、毎日通学する場所なのだ、行くだけで疲れてしまう南高を志望する者は少ない。

「……はっ、はっ」

北高の近くの墓地。この近辺の道は昼間でも見通しが悪い。墓地の周りを、背の高い木々と塀が覆っているせいだ。電灯も立っていない。光なんて無い。

墓場の近く。見通しの悪い道を、息を切らせて走る影が一つあった。闇に溶ける様な、紺色の襟詰めタイプの男子学生服。つまり学ラン。制服のボタンを外しきって、だらしの無い格好だった。だが、それも状況によりけり。仕方の無い話ではある。この学ランを来た学生は、ソレに追われているのだから。

「ちくしょう！」

後ろのソレに向かって、ツンツン頭の少年が悪態を吐く。ワックスで固めた頭髪も、走り回ってかいた汗のせいで乱れ始めていた。鏡を見て直す余裕があるはずも無く、少年は只管に走る。少年の顔には、恐怖と疲労の色が浮かんでいた。息も絶え絶えに走る。手にはデニムの竹刀袋。持って走るには邪魔なぐらいの長さだった。しかし少年は、大事そうにしっかりと五本の指で竹刀袋を掴む。

離さない様に。落とさない様に。もう、なくさない様に。

少年の後方には赤い影があった。赤い帽子。赤い服。赤い靴。赤い、紅い。全身を真紅に染めた、小さな体。手には、鈍く輝きを放つ片刃の斧。その斧は血と脂に塗れて錆びていた。既に何人もの、何匹もの血を吸っている魔性の道具。魔の凶器。小さな体には不釣合いなほど大きい斧を振りかざし、あかいものは笑う。陰惨に口を歪め、欠けた歯を見せびらかすように。真赤な舌を伸ばし、唾液を垂らして赤い小人は笑った。眼前の獲物を追いながら。

その様子を、墓地から少し離れた、民家の屋根の上で見ている者が一人。

細すぎるシルエット。月光に照らされた美しい容貌。黒いボディスーツに身を包んだ、折れそうな程細い足。折れそうな程細い手。折れそうな程細いからだ。

「……面倒だな」

無感情に、無表情に呟く。

オンリーワン情報部二課実働所属、春風麗（はるかぜうらら）。眼下で繰り広げられる鬼ごっこ。春風はそれを見ながら、少しばかり憂鬱そうに頭を振った。

春風は、墓地の近くに現れたというソレの調査の為にやって来たのだが。既にソレは現れ、既に犠牲者になるであろう少年を追い掛け回している。予想外ではない。あくまで春風の予想の範囲内。だ

が、考えられる限り最悪の状況ではあった。
一瞬、春風は考えてしまう。
どうするのか。だがそれも一瞬の事。なぜなら彼女は情報部。考える事も許されない。

――何で助けてくれなかったんだよ！

春風の脳裏に浮かぶ男の姿。鼓膜に響くは男の声。
怒っていた。怒られた。
それでも春風は動かない。
今宵、赤帽子（レッドキャップ）が新たな血を啜ろうとも。
今宵、少年という新たな血が流されようとも。
春風麗は動かない。
「……」
だが今宵、春風麗は少し揺らいだ。

――その晩、レッドキャップと呼ばれるソレが死んだ。

生きてるのか死んでるのか

擬死、という防御行動がある。敵に襲われたときに、体の力を抜いてじっとしたり、硬直したまま動かなかったり。擬死を行う生物は多い。例えば、七節や黄金虫、亀虫に玉虫。昆虫以外では、蜘蛛や蟹。狸寝入りという言葉もある。擬死と同じ意味だ。哺乳類にも擬死を行うものがいると言うことである。熊に遭遇したら死んだふりをする、それで助かるとは良く聞く話。良くある話。人間も擬死をする生物なのだ。死を装って、敵から逃れる。それが大雑把な擬死の解釈。

昨晩の雨で、水溜りが出来た箇所を避けながら一は道路を歩く。曇り。駒台の街からは太陽が見えない。まだ空模様はぐずついていたが、一の見た天気予報によると、今日はもう雨は降らないらしい。煙草を吹かしながら、一はオンリーワン北駒台店へ向かう。自らの勤め先へ。自らの戦場へ。

「ニンゲン、これはいまいちだぞ」

「そうかな？」

一の横で飛んでいる少年が苦言を呈した。ワンポイントに羽根のついた緑の帽子に、デフォルメされたパンダがプリントされた子供服。それらに身を包んだ、風の精霊シルフは、少年と言うには幼すぎるかもしれなかった。

シルフは手の平のグミを神妙な面持ちで見つめながら、

「甘みが強すぎるよね。シルフ様みたいなおとなには、もっとこう――」

「じゃ今度は辛いの買ってこようか？」

「……オマエは舌が馬鹿だから不安だよ」

「味覚は完全にお子様のくせに」

「子供じゃない！　子供じゃないぞー！」
騒ぐシルフの口の中に、一はグミを突っ込んだ。
「まあ、グレープは確かに甘すぎるかもね」
口の中でグミを転がしながら、シルフは舌に意識を集中させる。
時折、難しい顔をして唸ったり、無防備に笑ったり。
「おいしい」
顔を綻ばせながら、最終的にシルフはそんな感想を口にした。
「超分かりやすいね。そうか、シルフ君はグレープよりオレンジが好き、と」
「取替えっこしようよー、こっちよりオマエの方が良いなー」
「俺も甘いのはあんまり好きじゃないんだよ。今からバイトだし、口ん中に甘さを感じたままレジを打ちたくない」
一はそう言って、袋からグミを取り出して口に入れる。
「そんなのワガママだぞ！　シルフ様は取り替えろって言ってるんだ！」
「……じゃあ、もうお菓子あげない」
「オーボーだ、ヒキョーだぞニンゲンめ！」
適当にシルフをあしらいながら、一はグミを咀嚼した。
「オレンジうめー」
「オマエバッカじゃないの！？　オマエみたいな奴は一度痛い目を見れば良いのさ！」
「分かった分かった。今度はオレンジ買ってくるから。それより、今日は糸原さんいないけど店まで来るのか？」
すぐそこにあるオンリーワン北駒台店を指差しながら、一がシルフに尋ねる。
シルフは腕を組んで真剣に考えて。
「やめとく。赤い奴がいるから」
「ん、三森さん？　何だ、あの人が怖いのか」
「こ、怖くないよ？　怖くないもんね？　ちょっとウマが合わないだけさ！」

目を逸らしながら、シルフは震えた声で一にそう告げる。
一は「そっかそっか」と楽しそうに笑った。
「と、とにかく！　また今度な絶対だぞ約束だかんな！」
ここから一刻も早く立ち去りたいのか、早口で捲くし立ててシルフは高く飛び上がった。やがて、どこまでも広がる雲の中にその姿を隠す。
一はシルフが見えなくなるまでその場にぼうっと立ち尽くしていたが、脇を通り過ぎた車の音で我に返った。

――約束ね。

約束ならしょうがない。一は内心苦笑して、次はどんなお菓子を買うか、思いをめぐらせながら店へと足を向けた。

「おはようございまーす」
店内に入った一は決まりきった挨拶を口にする。決まりきったように返事は無かった。悲しむ事も怒る事もなく、一はバックルームへ向かった。バックルームへ入ると店長がシフト表と睨めっこしているのが見えた。が、それに構わず。っていうかなるべく構われたくないな、と思いながら一は短く挨拶をして、ロッカーへ足を向ける。
「なあ一、今から面接があるんだよ」
店長がポツリと漏らした。
その言葉に対し、一が過敏に反応する。
「新しい人来るんですか！？」
制服に着替えるのも忘れて、一はハンガーだけ持ったまま、期待に満ちた眼差しで店長を見つめた。
一に見つめられた店長は黙って頷く。
「まあ、採用するかどうかは私が決めるんだがな」

「もうどんな人でも良いから採って下さいよ。分かってると思いますけど、クソみたいなシフトなんですからうちは。これじゃ交代要員もいないし、誰かが怪我とか病気になったらどうしようもないんですよ？　店長、少しは真面目に、っていうかまともに考えて下さいよ。それと、三森さんにおでん仕込み過ぎだって言っといて下さい。アホみたいにごぼ天ばっかり浮いてて引きましたよ。あーけど俺が言ったら殴られるから内緒にしといてください」

「煩い」

一言で一を切り捨てた店長は顎に手をやって、考える素振りを見せる。うそ臭い、胡散臭い仕草だった。

「……」

実際、店長のそれはあくまで素振りだと、一には分かっていた。

「なあ、一。ちょっと頼みがあるんだが」

ほら来た、と。一は体を堅くする。

「何でしょうか？」

「今から面接なんだがな。以前私が言っていた九州の奴の話は覚えているか？」

九州。九州。日本の南西部に位置する、日本で三番目に大きい島。

「……九州？」

「おいおい、お前の年でボケるってのも珍しい話じゃないけどな、せめて私の話だけは覚えておけ」

曖昧に返事して、一は頭を下げる。

「で、だな。九州から面接希望者が来てるんだよ」

「いや、覚えてますよ。けどそれって、結構前の話じゃありませんでしたっけ？」

「ああ。本人が外に出るのを嫌がっていたらしくてな。最近になって話が纏まったらしい」

徐に、店長が煙草に火を点けた。

「……え？　本人が、ってどういう事ですか？」

「うーん。今何時だ？」

「店長の後ろに時計掛かってるでしょうが」
言いながらも、一は壁掛け時計を確認し、「九時前です」と、慇懃に告げる。
「面接までは間があるな。よし、暇潰しに話してやろう、コーヒー取って来い」
「はいはい」
一は制服を着ながら、ウォークインへ歩き出す。扉を開けると、外気に触れた冷気が白い煙へと形を作っていく。煙を散らしながら、一が適当に詰まれたダンボール箱の中からコーヒーの缶を引っ張り出した。寒い寒いと漏らしながら、一が扉を閉めて店長へ缶を手渡す。
「無糖じゃないか。まあ良い。で、どこまで話したっけ私は」
「まだ話に入ってません」
「そうか。うん、九州には立花（たちばな）と言う退治屋がいるのは知っているか？」
「早速訳が分かりません。退治屋って何ですか？」
店長が舌打ちをする。露骨だった。
「勤務外と同じだよ。ソレと戦い殺し死なせてきた連中だ。ただ、あっちの方が歴は長い」
「……ソレが現れたのはつい最近の事でしょう？　勤務外より歴史が長いってのはおかしくないですか？」
一の問いに、店長が薄く笑う。
「ソレが人間に対して、戦争なんてふざけたほど大規模な活動を始めたのは三年前だ。パンドラ事件。覚えてるな？　だがな、三年よりもっと前からソレは居たんだよ。散発的だったが、小さいながらも被害は出され続けてた。勤務外、オンリーワンが確立する、ずっと前からな。日本や世界には、妖怪や幻獣なんて神話や伝説が残されているだろう？　ソレのせいだよ。奴らはそれくらい前から活動を始めていたんだ」
用意していたかのような、長台詞。

一は何も言わず煙草に火を点け、店長の言った事を頭の中で反芻する。ゆっくりと、長く息を吐き出すと、

「……んな馬鹿な」

それだけを、一は何とか口にした。言葉に出来た。

「今更だが、お前が疑うのも分かる。私だって本当にソレが神代から活動していたなんて半信半疑だ。だがな、ソレを退治して来た立花って言う生き証人もいる。誰を信じて、何を信じないのか。それはお前次第だ。私の言葉だけ鵜呑みにするなよ」

「とりあえず、九州には立花って退治屋がいる、ってところだけ信じます」

「それでいい」

満足げに店長が笑って紫煙を吐き出す。

一拍置いて、

「立花。立花は、九州では最も強い力を持つ家なんだ」

店長が切り出した。

「えっと、経済力とか、ソレと戦う力って事ですか？」

「全部だ。ソレと戦う力を持っているから、金も地位も全て手に入る。九州を裏で牛耳っていると言っても、まあ言い過ぎではないな。誰も逆らえん」

ソレと戦う力を持つもの。

勤務外店員も、ソレと戦う代わりに特権特例が認められている。命を賭ける為だ。いつ死んでもおかしくない。どう殺されても文句は言えない。ソレと戦うと言うのは、つまりはそういうことだった。そして、一般人は勤務外や退治屋を軽蔑し迫害し恐怖しながらも、その一方で人外に縋る。頼るしかない。彼らに逆らえば、彼らは死ぬしかない。

「……横暴な気がするなあ」

「そうやって立花は力を我が物にして来たんだが……今年の秋、立花が壊滅に追いやられた」

表情を変えず、店長は缶に口をつけコーヒーを喉へと流し込んだ。

店長が空っぽになった缶へ、灰皿代わりに火の点いた煙草を押し付ける。

「いや、壊滅って……。だって九州で一番強かったんじゃないんですか？」

もはや灰皿となった缶を手渡され、店長に倣う様に一も煙草の火を押し付けた。

「ああ、強かった。だから九州にはオンリーワンの支部が置かれていなかったんだ。東北、関東、中部、私たちの住む近畿、中国、四国の全部で、日本に支部は六つあるが、九州には必要なかったからな。それに、あっちじゃオンリーワンより立花の方が強い影響力を持っていた。置きたくても置けなかったと言うのが正しい」

「でも――」

「――立花はたった一体のソレによって、二ヶ月前に壊滅へ追いやられた。ニュースは見ていないのか、一？　向こうじゃ大騒ぎだったんだがな。いや、今でもか」

「一体……」

ソレ、一体。

ソレの命を食らい続けて、九州で栄華と言う栄華を極め、力と言う力を手に入れてきた立花。一体のソレによって、退治屋最強の立花が終わらされた。その事実は、一の心に深く影を落とす。

「そいつは？　立花を潰したソレは今どこにいるんですか？」

「さあな。世界中の情報部ですら掴めていない情報だ。私が知っているはずもないだろう」

「やばいんじゃないんですか？」

「笑えるぐらいまずいな」

笑いながら店長が言った。楽しげだった。

その笑みに不快感を覚えながらも、一は正体不明のソレに恐れを抱く。単純に、一は怖かった。今もなお、危険な存在が情報部の網をかいくぐりのうのうと生きているのだ。怖がらない方が不思議な話ではあった。

「うわ……。辞めたい。勤務外辞めたい。オンリーワン辞めたい」
「そろそろ話は飲み込めてきたか？」
「はい。えっと何の話ですか？　やばいってのは充分に通じたんですけど」
「違う。面接の話だ」
一は首を捻った。
九州最強の退治屋、立花。その立花を滅ぼしたソレ。そんな話の後に、バイトの面接。
「スケールの小さな話ですよね。もうどうでも良いじゃないですか」
「そのやばい立花がうちに来るんだよ。ソレに襲われた時、五代目が戦闘で死んだからな。六代目がオンリーワンの勤務外として北駒台店までやって来る」
店長が二本目の煙草に火を点けながら言う。
「え、嫌です。落としましょうよそいつ」
「……出来れば、私もそうしたい。だが上からの命令だ、逆らえん」
「んなトラブルメイカー嫌ですよ、怖いし」
ある意味、と言うか事実上九州最強の人間が一の同僚になるのだ。頼もしいの前に、恐ろしいと言うのが一の本音だった。
「……ん？　っつーか、わざわざ近畿（ここ）まで来なくても良くないですか？　九州からなら、中国、四国地方のが近いじゃないですか」
一が尤もらしい事を言った。少しばかりの期待を込めて。
「九州からじゃ近すぎる。忘れたのか一？　勤務外ってのは、人を外れた力を持つものがどんな感情を持たれるのか。それも、九州で好き放題やってた立花の人間だぞ、近所の奴が受け入れるはずがないだろう」
「じゃあもう東北まで行けば良いじゃないですか」
「知るか！　私だってイヤだと言ってるだろ！」
椅子に座っていた店長が立ち上がり、一の頭をグーで殴った。
鈍い音と、一の短い悲鳴が上がる。
「怒らないで下さいよ……」

頭を摩りながら一が半泣きで訴えた。
「黙れ。とにかく、私らは立花を受け入れなきゃならないんだ。それも認めろ信じろ」
「はあ……。まともな奴である事を祈りますよ」
「馬鹿か勤務外。ソレと戦ってるような奴らがまともな訳ないだろ。全員が全員、どこか頭のネジが緩んでる連中ばっかりなんだよ」
「……そうですね。あれ、俺ももしかしてそのまともじゃない中に入ってるんですか？」
「面接は十時から一人。十一時から一人だ。十時から来るのは高校生。十一時に来る方を、お前には駅まで迎えにいってもらいたい」
スルー。
「……ちょっと待って下さいよ。俺シフト入ってるんですけど？」
「知っている。とにかくあまり待たせるなよ。立花の機嫌を損ねて切り捨てられても知らんぞ私は」
「うわああ！　嫌だ！　いきなり過ぎますよ！　今駅に立花がいるって事なんでしょう！？　嫌だ嫌だ俺はまだ死にたくない！」
取り乱した一はバックルームをうろうろしながら泣き言を喚いた。
「早く行け。もうすぐ十時からの面接志望者が来る。お前みたいな情けない奴がいたら見限られて帰ってしまうかもしれん」
「じゃあこうしましょう」
ぴたり、と一が動きを止める。一は人差し指を綺麗に立てて、
「俺が高校生の面接をします。だから店長は――あいたたた！」
店長に人差し指を捻られた。
「とっとと行け！」

店から立花の六代目が待っているという駒台駅まで十分は掛かる。だが、一にとっては「十分しか掛からない」。今、一は駅までの道のりを出来る限り遅く、のろのろと歩いている。結局は立花とどういう形であれ対面せねばならないのだから、牛歩戦術なんて意味は

なかったのだが。
「……はあ」
自然、ため息の回数が増える。憂鬱陰鬱、楽しくない面白くも何ともない。一体、どんな人間が自分を待ち構えているのだろうか。もしかしたら、人間じゃないかもしれない。一は色々と立花の六代目の姿を考えては、恐ろしくなり想像するのを止め、また想像し、止め……。
「これじゃ駄目だ……」
完全に負の連鎖。思考の悪循環。
とりあえず一はニコチンでも摂取して落ち着こうとする。一時の、殆ど幻想に近い煙草の効能。
「ふう……」
なるべく深く、五臓六腑へ煙が染み渡るように一は息を吸った。
確かに一は願った。今の店の人員ではシフトもまともに機能しない。いつかは必ず崩れてしまう。綻びどころか、端から穴が空いている状況なのだ。だから願った。誰でも良いから人が来い、と。願ってしまった。
「俺のせいじゃないよなあ」
呟きながら、一は溜め息を吐く。

「八回目だな」

背後から突然聞こえてきた声に、一が体を強張らせた。耳元で囁かれるような、無感情な声。
一が目を白黒させながら振り向くと、そこには春風麗がいた。いつものボディスーツではなく、普通のスーツに身を包んではいたが。折れそうなぐらい細い体躯。感情の篭っていない声。
「あんたは」
確かに、情報部の春風麗であった。
一は即座に春風から一歩、二歩。充分に距離を取る。

「俺に用でもあんのか？」
　ぶっきら棒に、なるべく敵意を込めて一は言い放った。それもそのはず、一は先日の『影』事件で、春風麗に襲われているのだから。
　襲った当人、春風は一の様子を訝しげに感じながら、相変わらず冷たい双眸で一を眺めていた。
「八回目だぞ、一一」
「……？　何がだよ」
「お前が店を出てからのため息の数だ」
　一の手が、足が。末端神経から背筋へ脳へ、体が冷えていく。心臓から血の供給が無くなったのかと一は思った。
「あ、あんた俺を――」
「――勘違いするな一一。私事の途中で偶然貴様を見つけたに過ぎん」
「だからと言って、ため息の数なんてカウントするかよ！」
「お前はしないのか？」
　当たり前だ、と一が怒鳴る。調子が狂う。
「私を警戒しているつもりか、一一？」
「しない方がおかしいだろが」
「甘い。私は情報部だぞ、私を警戒するつもりなら三百六十五日二十四時間、三百六十度東西南北全方位、貴様の周囲全てに警戒しろ」
「……偉そうなんだよ。ストーカーのくせに」
「ストーカーではない。私はオンリーワン近畿支部、情報部二課実働しょ――」
「もうそれは良いって！」
　一が右手を上げて、春風の言を遮った。
　ほんの少し不機嫌そうに顔を歪めるも、春風は素直に従う。
「で？　用でもなきゃあんたらは俺たちに話しかけて来ないだろ。何を企んでんだあんたら」
「企む？　それはこちらの台詞だ一一。よくも駒台にとんでもないものを呼んでくれたな」

春風は無表情のままだったが、声には若干の敵意が込められていた。
「とんでもないもの？　だから何の話だよ？」
「しらばっくれるな」
「……」
一には、何となく察しが付いていた。春風が現れた瞬間から、覚悟はしていた。
「……立花か」
観念したように、一が声を潜めて言う。
「九州の悪夢が何故こんな所にいるんだ？　貴様ら何をした？　何をしようとしている？」
「お前、知らないのか？　立花がオンリーワンへ頼んだんだろ、うちで働かせて下さいってさ」
「知っている。一一、貴様に言われるまでも無い」
春風が腕を組んで、苛立たしげに言った。
その様子に、一は段々と違和感を覚え始める。
「あのさ、話が見えないんだけど」
「……駅に居た立花は誰だ？　あれは私が知らない立花だったぞ」
「俺も詳しくは知らん。店長に言われて、そいつを迎えに行く最中なんだ。顔すら見てねえよ」
言って、一は気付いた。どうやって比較的人の多い駅前で立花を見つけるのだろうと。
「まさか、奴が六代目なのか？」
「ん？　いや、そりゃそうだろ」
当たり前の事を聞く春風に、苛立ち交じりで一は答えた。
「……一一、何故分かる」
「一々面倒だな。俺は、立花の六代目がうちに来るって聞かされてるんだよ。お前らだってそうじゃないのか？」
「違う」
一には、その一瞬だけ周りの温度が下がった気がした。不穏な空

気。
「私たちは五代目が来ると聞かされていた」
「……五代目は、死んでるんじゃないのか」
一は六代目、春風は五代目が来ると言う情報を握っている事になる。その二つの情報、立花が来ること自体に間違いは無い。だが、来る立花がそれぞれの情報で違っていた。
五代目と六代目。
「そうだ。だから、立花が近畿までやって来る話は、一旦は流れた」
死んだ者と生きている者。
「だけど、つい最近になって六代目が来るって、そう決まったんじゃないのか？」
「……私はそんな情報を知らない。悔しいが、初耳だ」
「なあ、嫌な予感がするんだけど」
「そうか。それではな」
春風が踵を返した。
「待て待て待て！　待ってくれ待って下さい！」
「正直な話、関わりたくない」
「まだ何も言ってないじゃないかよ！」
「断る。私も一緒に付いて来いなんて言えば殺すぞ一一」
「死にたくないよ！」
縋るような一の視線をあしらいながら、春風は一に背中を向ける。
「頼むよ！　三森さんの弱点でも何でも調べて教えるから！　何も俺の横にいろなんて言わない、遠くで見てるだけで良いんだ。あ、でもやばくなったら助けてくれ」
「お前、本当に三森冬の仲間なのか？」
必死な一から逃げるように春風は後ずさる。
「仲間じゃないよ。あくまでバイトの同僚さ」
親指をぐっと突き出して、一は爽やかに笑った。
「……三森冬に関しての情報は得難い。良いだろう、但し、基本的に私は何もしないぞ」

「うん、それで良いよ。助かる助かる、ありがとう。こないだの事は全部水に流しても良くなってきた」
「一一。貴様、許すと言ったのではなかったか？」
「それはあくまで交渉の席でだよ。俺自身はチャンスがあれば、いつかお前にぎゃふんと言わせたいぐらいお前が嫌いだよ」
一は事も無げに言う。
「そうか、それでは。『ぎゃふん』」
春風の無感情な声。
「やっぱ嫌いだわお前」
吐き捨てるように一は毒づいた。

一と、一から少々の距離を取った春風は二十分掛けてようやく駅前に着いた。
駅前には一が思っていたよりも人がいなかった。平日の、もう九時を回っている。通学ラッシュも通勤ラッシュも遠のいた時間だろう。駅前には、杖を突いた老人や、学生服セーラー服の少年少女、スーツ姿の中年男性、犬を連れた妙齢の女性、道端に座り込んで駄弁っている若者、などなど。
「どれが立花だ……」
こんな事なら、店長か春風から容姿について説明を聞いていれば良かった、と。過ぎた事を一は悔やんだ。
人ごみから離れた場所で缶コーヒーを傾けながら、一は懸命に目を凝らす。ふと、一の目が何かを捉えた。と言うより、気付かないほうがおかしかった。さっきから、妙な違和感が駅周辺には漂っていたからだ。ある一点を避けるように人々が動いている事に一はようやく気付く。
点。
だが、肝心の中心にいるであろう人物が見えない。まるで人々に隠されているかのように、その姿を一に現さない。

焦れた一が近づこうとした瞬間、人の波が割れる。一は立花を見たことが無い。だが、見間違えるはずも無かった。

紛れも無く、異質な存在がそこにいた。

そもそも、セーラー服を着た高校生は駒台に存在しない。駒台に二つある高校、北校、南校ともに男子は学ランで女子はブレザーなのだ。烏の濡羽色の、鮮やかなカラーリングのセーラー服は行き交う人々の視線を嫌でも集める。しかし、人々の視線を集めるのは制服だけが理由ではない。自身のセーラー服に負けないくらいの、青みを帯びた艶やかな黒い髪。長い髪の毛をポニーテールに括っている、十代の少女。成人男性にも負けないくらい背は高く、目が合ったものを、そのまま視線だけで殺してしまいそうなほどの強い意志を持っていそうな、鋭い切れ長の瞳。全身から立ち上る異様な雰囲気。まるで抜き身の刀だった。自分からは何もしないが、近寄ったものを容赦なく切り捨てる敵意が体全体から溢れている。手には竹刀袋らしきものをぶら下げている。その中には、恐らく竹刀では無いものが入っているのだろうと一は思った。

人々も彼女の異質さに、おぼろげながら気付いているのだろう。絶対に、一定の距離から先は彼女に近付こうとしない。

――これが立花だ。

一は確信する。そして、躊躇する。自分が近付いていっても問題はないのだろうかと。幾ら一がオンリーワンからの迎えだと言っても、問答無用で斬られてしまうかもしれない。そんな危うさを彼女は、立花は持っていた。

「どうした、行かないのか？」

「うわっ、びっくりさせんなよ！」

一の背後から、いつの間にか春風が現れる。背中に嫌な汗が流れ

ていく。ふう、と一は息を吐いた。
「行かなきゃ駄目なんだろうけど、見ろよあれ。怖くないか？」
「成る程な、確かに立花だ。だが……まだ子供ではないか」
「子供だろうが年寄りだろうが、怖いものは怖いんだよ。あー、帰りたい」
一が、握った缶コーヒーを弄びながら天を仰ぐ。
「心配するな」
「あ？」
「何か起こりそうならば、すぐに私が駆けつける」
無表情、無感情で。春風は一を諭すように言った。
「……本当だろうな」
「手に負えないと判断すれば、すぐに私は駆けて行く」
「どこにだよ！」
ともあれ、少しばかりの踏ん切りと、ほんのちょっとの勇気を一は得る事が出来た。後は一歩踏み出すだけ。
その一歩も、
「ほら、早くしろ」
春風の、文字通り背中を押す行為によって踏み出す事が出来た。
「分かってるよ」
ぶっきら棒に答えながらも、一握りの感謝を一は春風に捧げる。

たちばな、タチバナ、立花（たちばな）、太刀花（たちばな）、絶花（たちばな）、断花（たちばな）！

繰り返される呪詛。少女を襲う怨念。人々はこぞって怨嗟を紡ぐ。言葉を作れないソレは咆哮で少女を襲う。仲間を殺された怒り、同胞を陵辱された悲しみ、憎しみ恨み呪い何もかもを詰め込んで。

――少女は耳を塞いだ。

それでも声は聞こえてくる。声は止まない。声は終わらない。少女を責める声は続く。少女が死ぬまで永劫に続く。

――少女は目を瞑った。

それでも人々の顔は消えない。彼女の脳裏からは消えない。彼女の網膜には人々の顔が鮮明に焼き付いている。

悪夢だった。耳を塞いでも目を瞑っても止まらない悪夢。眠っていても起きていても終わらない悪夢。覚めない悪夢。少女は夢の中にいる。

一は立花と思われる人物へ近づく間に、どう会話を切り出すか考えていた。足を一歩踏み出せば、案を一つ生み出しそれを否定し却下する。どう言えば機嫌を損ねないで済むのか、何をすれば殺されないで済むのか。ちらりと、一は後方に目を遣った。姿こそ見えないが、春風はどこかで一の様子を窺っているのだろう。同時に、立花の様子も。じっとしていても仕方ない、意を決して一は前を向いた。

「……！」

前を向いた自分の目に、矢が飛び込んできたのかと一は錯覚を覚える。目が、合った。立花と目が合った。ただそれだけで一の視界が歪む。

一の頭が真っ白になった。

品定めするような視線。やがて、その視線が一から外れる。

抜き身の刀の雰囲気を纏わせた女。

立花。

その立花が、静かにスカートを翻して歩く。歩みは速かった。しかし、無駄な足音は立てずに歩く。

濡烏。駒台では見ないセーラー服。艶やかな黒髪。ポニーテールを揺らして、立花が一の前に立つ。

その間、一は指一本動かす事すら出来なかった。

「あの」

静かで、落ち着いた声。少し擦れた、ハスキーボイス。一の耳から体へと、深深と染み渡っていく。

「……オンリーワンの人ですか？」

ハッとして、一が面を上げた。声の持ち主は、一よりも背の高い人物なので、自然、一が見上げる形になる。

「えっと、あ、はい。北駒から迎えに来ました」

「ああ、良かった」

そう言って、立花が目を細めた。

「……オンリーワンの一一です、その、よろしく」

一が自分より年下の高校生に敬語を使う。気圧されていた。初対面だから、そんな理由ではない。使わざるを得なかった。

「……色々と聞いているとは思いますが、ボクが立花の六代目、立花真です。今日から勤務外としてお世話になります」

立花がそう言って、一に頭を深く下げる。

「うわ、そんな……。頭なんて下げないでくださいよ」

一は妙にこそばゆくなった。後輩、年下の人間に頭を下げられる事も今までに経験してきたが、早田の様な一般人でなく、確実に自

分よりも強い力を持っている人間に頭を下げられるなんて、一には中々に耐え難い事であった。

すっ、と立花の頭が上がる。

「そうですか。それでは、あなたも畏まる必要は無いと思うんですけれど」

「はい？　いや、けど俺は勤務外ですけど、殆ど一般だし、立花さんは、その、全然俺何かとは比べようがないくらい強いって聞いてますし」

一は滅茶苦茶卑屈だった。

そんな一を立花が沈痛な面持ちで見つめる。

意外だった。一が話に聞いていたのと、自分で想像していた「立花」の印象とは全く違う。なぜ、君がそんな顔をするの？　一はそう尋ねたくなったが、それより先に立花が申し訳無さそうに口を開いた。

「立花が怖いですか？」

「……いや、そんな事はないです」

正直、一は核心を突かれた、意表を突かれたと思う。心臓の鼓動が早くなる。答えた声は、少し乾いていた。

「では、ボクに敬語を使うのはやめて下さい」

「ンな事言われても」

立花を何の気なしに一は見る。

「……」

悲しそうな顔だった。

一はその顔を見て、溜め息を漏らしたくなる。溜め息を吐く代わりに頭を掻く。困ったときの一の癖になりつつあった。

「じゃあ」

「はい、何でしょうか？」

「立花さんも敬語はやめてくれない、かな？　タメ口の方が俺も気が楽なんですけど」

「それは出来ません。年長者の方へは、相応の敬意を払って然るべ

きです。タメ口などと、そんな馬鹿な……」
厳しい表情で、立花は一を睨むように見つめる。
「なら、俺も敬語を使い続けますよ」
意地の悪い言い方だな、と一が自戒した。それでも、頭を下げられるのも、敬語を使われるのも、一にとっては気持ちの悪いものだった。少しぐらい嫌われたって構わない。自分が敬意を払われるなんて、耐え難いものだった。
「タメ口、ですか」
切れ長の瞳をさ迷わせ、困ったような表情を立花は浮かべる。
余程厳格な家庭で育ったのだろうか、九州最強退治屋立花。やはり、まともでない教育風景がそこにはあったのだろうか、などと一は勝手に想像を膨らませていく。
「無理なら別に良いんですけどね」
舐めきった敬語こそ使ってはいるが、この場は既に一が主導権を握っていた。最初に感じたプレッシャーは何だったのだろうか、戸惑いながらの、一の仮初に近い主導権ではあったのだが。
「いえ、無理と言うわけでは……。そもそもタメ口、と言うものをあまり使った事が無いんです」
「ふーん。友達とかにも、そんな感じだったんですか？」
その言葉、友達と言う言葉に立花の肩が小さく震えた。
「ボクには、友達がいませんでした。周りは親戚の人たちや、立花を護衛する外の人たちばかりで……」
「……えっと、まさか親にも？」
「ボクが言うのもおかしな話ですが、立花は厳格な家です。両親は勿論、立花に出入りするお客さんにも敬意を払うよう言われていました」
だから、と続けて、立花が泣きそうな顔になる。実際、何を思ったのか涙すら浮かべてもいた。
「……おいおい」
一は呆然となる。

「ボ、ボクには友達なんて作れなかったんです。だからタメ口なんて……！」

「ええっ、泣き過ぎだろ！　分かったよごめん俺が意地悪しすぎたって！」

立花は涙を堪えるが、それでも溢れ出る液体は止めようが無かった。コンクリートにぽたぽた、と歪な染みを作っていく。

「ごっ、ごめん、ごめんね……」

「いや、良いから。落ち着くまでそうしてなよ」

一はハンカチの一枚すら持っていない事を悔やんだ。

鼻を啜る音がやたら耳障りに聞こえる。一は頭を掻きながら、助けを求めるように周りを見た。

立花真、一一。

制服を着た女の子と、大学生の男。男の横で、女が泣いている。

駅周辺を歩く人々は一たちから、今度は別の意味で距離を取りつつあった。

「あ」

一が思わず声を出す。

手招きをする細長い女が見えた。春風だった。焦った様子でもなかったが、早く来いと急かしている様子。

だが、一は立花を放っておくことが躊躇われた。春風から目線を外し、もう一度辺りをよく見る。木製のベンチ。都合の良いことに、今は誰もそこに座っていなかった。

「立花さん」

「ふ、あ、あっ、何ですか？」

一はベンチを指差し、

「あそこで座って待っててくれないかな？　温かい飲み物でも買ってくるよ」

自分でも笑ってしまいそうになるくらい、出来るだけ優しい声音を作った。

「急に呼ぶんじゃねえよ」
「一一、あれは本当に立花なのか？　威厳も覇気も感じられんぞ」
自販機へと向かう一に歩幅を合わせて、春風がゆっくりと歩く。
「自分で立花って言ってたし、間違いないだろ。何か、イメージと違うけど」
「あんな事で泣き出すとはな。とんだ立花だ」
「……聞こえてたの？」
「当然だ。私は情報部だぞ」
一の血の気が引いていく。
「あんなに離れてたのに……。本当厄介だなお前」
「ふん、その厄介者に貴様は助けられたのだぞ、一一」
「結果的にはだろうが」
「会話の雲行きが怪しくなっていたから、私がお前を呼んだんだ。結果『的』にではない。結果だ、ありがたく思え」
相変わらずの無感情な声で春風は謳った。
その発言に、一が目を丸くする。
「え、何だ。そうだったのか。まあ、助かったよ」
「それは良い。で、六代目はどうなんだ？　駒台をどうしたいんだ？」
「分からないっつーの。人畜無害な、唯の泣き虫っぽいよなあ、あの子」
自動販売機まで辿り着いた一は、ポケットから財布を探った。
「分からんぞ。演技かもしれん」
「演技できるタイプじゃ無さそうだけどな。そもそも、そんな理由ないだろ。立花だからって警戒しすぎじゃないのか？」
「一一、貴様は甘いな。情報部は立花のオンリーワン進出について一つの情報を握っているんだ。警戒に値すべき情報をな」
春風は誇るように胸を張る。
「なあ、高校生って無糖のコーヒー飲めんのかな？」

「……よりけりだろう。私は好きだがな。で、だ。立花を警戒すべき対象にたらしめる情報を我々は掴んだ」
「ココアで良いや」
一は数枚の小銭を自販機に投入する。ボタンを押すと、がたん、がたん、がたん、と間を空けて三回音が鳴った。取り出した三つの缶を地面に置いて、釣銭を財布に戻す。右手に二つ、左手に缶を一つ持ち、左手を春風に突き出した。
「……何のつもりだ？」
差し出された缶を、次に一を睨んで、春風が不機嫌そうに口を開く。
「心遣いだよ。寒い中、しっかり約束を守ってくれてるんだ。そんなお前に温かい飲み物を差し入れするぐらい当然の事じゃないか」
「私は無糖が好みだと言ったろう」
春風は缶を受け取り、タブを開け、嫌そうに匂いを嗅いだ。
「あれ、甘いもの全般が好きなんじゃなかったっけ？」
「甘いのは嫌いだ。記憶力に乏しいようだな、一一」
「いや、記憶力には自信があるぜ」
「……まあ良い。違う話だ。一一、知りたくないのか？」
春風はそう言ってから、ココアに口を付ける。鉄面皮のような、春風の無表情が崩れた。
「甘い……」
一は笑いを噛み殺すのに苦心する。
「ああ、情報ね。別に要らない、必要無さそうだからな」
「それは残念だ」
「お前、何でも良いから喋りたいだけだろ」
「かも知れん。さ、そろそろ戻ったらどうだ？」
春風が立花の座っているベンチを指差した。
「そうするよ。どうする、お前はもう帰るか？　用事があるって言ってなかったっけ？」
「言った。知っていて貴様は私を連れてこさせたんだぞ、構わん、

最後まで見届けてやるさ」
「んな大層な……」

一がベンチに戻ると、既に立花は泣き止んでいた。
「落ち着いたみたいだね、はい」
「わあ、ココアだ」
お菓子を前にした子供のように目を輝かせながら、立花が缶を受け取る。さっきまでの、触れたら切れそうな雰囲気はもうどこにも無い。
立花がすっかり元気になったようで一は安堵した。何か気分転換になるような話題を一は探してみる。学校の事、友達の事、家族の事。一番手堅い話題が彼女にとって鬼門である事に、何となく気付き始めていたので、更に差しさわりのない、簡単な話題。
「駒台には電車で来たんだよね？」
「はい。電車って意外と時間が掛かるものですね、もっと早く着くと思ってました」
「九州からなら、まあ、掛かるよね。荷物とか持って無さそうだけど、こっちに来て家や学校はどうするつもり？」
一は立花のあまりに身軽すぎる格好を見ながら言った。
立花の荷物は、ベンチに携えた竹刀袋一つ。後は身一つと言った様子だった。
「勤務外専用のマンションが借りれると聞きましたので、とりあえずはそこに。荷物は実家から送られて来るそうです。学校は、北校へ行く手筈になっています」
「へえ、流石にしっかりしてるな」
一はなるほどと納得する。
「学校へは生まれて初めて行くので、楽しみなんです」
「……へえ」
一はスルーする事にした。

「あなたは学生さん、なんですか？」
「俺？　うん、今大学生。それと、呼ぶときは名前か苗字で良いよ」
「あ、ああ、すみません。人と話すのに不慣れなもので」
「うーん、俺も敬語使うの止めたんだから、立花さんももっとこう、適当な感じに喋って欲しいんだけどなあ」
「す、すみません」
立花は謝りながら頭を下げる。
それをやめてくれ、と、一はそう思っているのだったが。
「敬語なんて使わなくて良かった人はいなかったの？」
「あ、え、と。あ、人では無いんですけど、すごく仲の良い子はいました。その子と同じ風に喋らせてくれるなら、敬語を使わなくても良いかもしれません」
「……ん？」
「チヨって飼ってた犬がいたんですけど、その子と遊ぶときは敬語なんて使いませんでした」
「あ、そう、なんだ……。まあ、任せるよ」
一が遠い目をして呟いた。
「あ、あの、それでボクはあなたの事をなんと呼べば良いんでしょうか？」
「何でも良いよ。にのまえ、でも、はじめ、でも。上でも下でも呼び捨てでも。堅苦しくなければ俺は気にしないよ」
「そ、それじゃ、よ、よろしくお願いします、ににょまえさん」
「……」
立花の頬が紅潮していく。顔全体に赤みを帯びた立花が、ベンチから立ち上がって「すいません」と頭を下げて連呼する。
「あ、別に良いよ。ほら俺の名前って珍しいしさ」
「にのみゃえさんは優しいですね」
「……そうかな」
「ご、ごごごめんなさい！　ボ、ボク、あんまり人の名前を呼んだ事なくて！」

誰が抜き身の刀で、誰と視線を合わせたら殺される。誰が誰に気圧されていたのか、もう誰にも分からない。
「にのまえ、って言いづらいよね。下の名前で良いよ」
「う、うん。じゃ、じゃあ、はじめ君で良いかな？」
窺うような立花の視線。それを受けて一は下の名前にナ行が入っていなくて良かった、と心底親に感謝した。
「良い感じじゃん。これから一緒に働く仲間なんだし、そんぐらいでなきゃな。よろしく、立花さん」
「う、うん！」
嬉しそうに、何度も立花が頷く。
何となく。本当に幻でしかなかったのだが、一には立花から犬の尻尾が見えた気がした。ぶんぶん、と。勢いよく振られる小動物の尻尾が。

立花がココアを飲み干したのを確認して、「それじゃあ」と、一がベンチから立ち上がる。
「そろそろ店まで行こうか。十一時から面接だけど、早いに越した事は無いからさ」
牛歩戦術を用いた一が、時間の大切さを口にした。
一の言葉に頷いた立花もベンチから立ち上がり、竹刀袋を手にする。
「コンビニまでは遠いのかな？」
「いや、十分も歩けば着くよ」
ベンチに座った数分間で、すっかりタメ口も板についたものだ。
一は素直に感心する。そして嬉しくもあった。
「あ、ちょっと待ってて。缶を捨ててくるよ」
「え、そんな悪いよ。ボクが捨ててくる！」
「あー、良いって良いって。店長から、立花さんは丁重に扱えってお達しが出てるんだよ。気にしないで、ちょっとだけ待っててくれ

ないかな？」
「う、うん。はじめ君がそんなに言うなら」
「ん、ありがと」
「？」
缶を受け取る一を、不思議そうな面持ちで立花が眺める。
気にせず、一はベンチから見えない位置にある自動販売機までゆっくりと歩いていく。丁度、立花の位置から一が見えなくなったところで、春風が物陰から現れた。
「立花の六代目か。まるで犬だな」
「……良い耳持ってんな」
「だが使い勝手は悪い。要らぬ事も入ってくるからな」
春風が自身の耳を指で示す。
「ふん、情報部の掴んだネタとは、いまいち違うようだ」
「へえ、この際だ。聞くから手短に話してくれよ」
「立花はお家復興の為にやってくる。そう我々は聞かされた」
「……もうちょい詳しく」
「手短にと言ったろう。仕方ない、話してやる」
春風は少しばかり表情を緩ませた。本当に喋るのが楽しいのだろう。
「没落した立花は、オンリーワンの勤務外となり、ソレを倒して名を上げることで財産と知名度を得ようとしている。これは少し頭を働かせれば誰にでも分かる話だ、そうだろう一一？」
そして春風は、話の途中で事あるごとに聞き手の意見を求めたがる。一が適当に頷いたのにも満足して、
「そして最大の目的が立花の婿探しだ。立花家は代々女が家督を握っていたらしい。女が実権も力も、何もかも思いのままに使っていたらしいな。だが、女も男がいなければ子を産めん」
春風は朗々と述べ上げる。
「最近はそういう事も無いけどな。人工授精ってあるじゃん。いやあ、このまま時代が進めば男ってこの世に必要なのかな、とか考え

ちゃうよな本当に」
　本当に。
「……一一、貴様は私にとって不必要な存在だがな。立花は婿となる男には相当うるさいぞ。九州最強の退治屋の、表向きは長となる男を選ぶんだ。九州からはある程度離れている、事情に疎い近畿地方を狩場に決めたんだろうな」
「狩場って、単なる婿探しだろうが」
「果たしてそうかな」
「……情報部ならしっかり分かりやすく要点まとめて喋れよ」
「この話し方は情報部だからだ。ふん、そう簡単に機密を漏らすと思うのか、この私が」
「滅茶苦茶漏らしてんじゃん！」
　春風がきょとんとした顔になる。
　一は目の前の女が分からなくなってきた。
「……あの立花からは、何かを企んでいるような裏が見えないな」
「そりゃ、裏にしてるんなら俺らからは見えないだろ」
「一一、お前は表だがな、私は裏だ。裏が見えるんだ」
「そうかよ」
　このままここにいれば、余計な話まで聞いてしまいそうだ。そう考えた一は、ゴミ箱に缶を投げ捨て、
「……もう帰るわ、色々とありがとな」
　春風に背を向ける。
「そうか。少し話し足りないのだが、仕方ない」
「自販機にでも話しかけてろよ」
「……確かに。一一、貴様と話すよりは幾分かマシかも知れん」
「もう顔見せんじゃねえぞ」
「私の台詞だ」
　一は数歩歩いて、ふと春風の方へ振り向いた。
　当たり前のように、そこにはもう、誰もいなかった。

立花と合流した一は、来た道を十分も掛からずに、オンリーワン北駒台店へと戻ってきた。一が扉を開け、その後を不安げに立花が着いてくる形になる。フロアの壁に掛かった時計を見ると、まだ十一時前だった。

「ちょっとここで待ってようか」

「うん、分かったよ」

一は店長に、高校生が十時から面接に来ると聞かされている。アルバイトの面接中に、バックルームへ店員が入ってくると、面接者は緊張と言うか、ぎこちない感じになってしまうかもしれない。そう考えた一の、一なりの心遣いのつもりだった。

「はじめ君は、いつからここで働いてるの？」

「まだ一ヶ月ぐらいかな、俺も新人だよ」

「そうなんだ、じゃあボクと同じだね」

立花が嬉しそうに笑う。新人とは言っても、一にはコンビニ経験者の肩書きがあったのだが、一は黙っておく事にした。

無邪気に笑う立花を尻目に、一は何の気なしにデイリー商品の棚へと向かう。おにぎり、サンドイッチ。消費期限が短い類の商品なので、しっかりと陳列しなければ、廃棄が増える事になってしまうのだ。一応、今の時間は一の勤務時間だったので、商品の陳列に努める。案の定、早朝の三森は陳列を怠っていたようで、期日の古い物が棚の奥に眠っていた。渋い顔をしながら、それらを引っ張り出し、並び替えていく。

その様子をずっと見ていた立花が、

「これもお仕事の一つなの？」

気になって仕方が無いと言った風に、一へ話しかけた。

「一番簡単で、一番重要な仕事だよ。商品が汚く並んでたら、客の買う気も失せちゃうだろ？　日本人は綺麗なものが好きなんだよ。掃除は嫌いなくせにね」

「そうなんだ。ね、ね、ボクにも出来るかな？」

「大丈夫、俺にだって出来るんだから」
「そ、そんな事ないよ！　はじめ君の手、凄く良いもの」
「手？」
　一瞬、自分の何を立花が「良い」と言ったのか、一には分からなかった。だから、聞こえた言葉をそのまま聞き返す。
「うん、手。慣れてるって感じがして、良いと思ったんだ」
「……こんな事で俺の手が褒められるとは。俺なんかより、よっぽど凄い人はいるよ。マジシャンまがいのトランプ捌き出来る人とか、手から火が出る人とかね」
「え！　そんな人いるの！？　良いなあ、見てみたいなあ。あ、あ、じゃなくてね、そういう人も凄いとは思うけど、はじめ君の手とはまた別と思うんだ。あなたの手は、何ていうか、ボクたちに近いっていうか、動きを見ていて、落ち着くっていうのかな……」
　立花は言いたい事を頭の中で整理出来てないらしく、それでも身振り手振りを使って、誤魔化す様に話を続けた。
　その話を聞いているうちに、一は何だか恥ずかしくなってくる。一は褒められる事に慣れていない。大体、今やった作業なんて、コンビニ店員ならば殆ど誰にだって出来る事だった。そんな当たり前な事を、立花は言葉足らずになりながらも、必死で褒めてくれる。
「良い」と、言ってくれる。駅前で頭を下げられたときのような、むず痒い感覚が鮮明に蘇った。
「あ、いや、そんな事ないよ。立花さんだってすぐに慣れるさ」
「ボ、ボクにも？　そうかなあ、あー、無理じゃないかな」
「簡単だよ。多分、一般の仕事は俺が教える事になるし、気楽に行こうよ」
「そうなの？　そうなんだ、はじめ君が教えてくれるんだ。良かった、これで心配ないよ」
　一は粗方商品を陳列しなおした棚を、少し距離を取って眺める。若干気になる箇所もあったが、気にし過ぎても仕方ない。ある程度

満足した一はカウンターの中へ足を向けた。
やはり、その後ろを一の飼い犬よろしく立花が着いて来る。
「……ね、こういうのもボクたちがしなくちゃいけないの？」
立花が、ホットスナックと肉まんの什器を指差した。
「そうだよ。適当にレンジでチンしたり、そのままここに突っ込むだけで良いんだけどね」
一が什器を叩きながら苦笑する。
「そうなんだ？　ボク、料理なんてした事ないから、ちょっと不安だよ」
「ふうん、けどさ、今日から一人暮らしじゃないの？　ご飯とかは？」
立花の表情が、見る見るうちに悪くなっていく。非常に分かりやすい反応だった。
「あ、あああ、どうしよう……。お手伝いさんも荷物と一緒に届いてないかな……」
「……頑張りなよ」
「ね、ねえ、はじめ君？　はじめ君って一人暮らし？　もしかして料理とか出来る？」
「機会があれば教えてあげるよ」
「本当！？　やった、ありがとう。はじめ君って良い人だなあ」
一は大人の対応で流したつもりだったのだが、こう、子供の対応で食いつかれてしまうと、自分がすっかり擦れてしまったのだなあ、と妙な感慨に耽ってしまう。

バックルームのドアが、静かに開かれた。現れたのは学ランを着た、背の高い少年。学ランの胸元に北校の校章が縫い付けられていたので、一には一目で彼が高校生だと分かった。その高校生は酷く憔悴しきった様子で、カウンターにいる一たちに気付かず溜め息を漏らす。

店長と一対一で面接だもんなあ。一は強くその少年に共感し、同情した。

「お疲れ様です」

一は、もしかしたら新しい同僚になるかもしれない、その少年に声を掛ける。

少年はハッと顔を上げ、背筋を張らせて姿勢を正した。

「お、お疲れ様です！」

高い背に、快活な高い声。少年は運動部にでも入っているのだろうか、挨拶の声はやけに気合の入ったものだった。

「……受かると良いね」

半分は嘘だった。

「ありがとうございます！　失礼します！」

爽やかに、礼儀正しく少年はもう一度、一に頭を下げ店を出て行く。

その姿が見えなくなるまで、一は背筋のしっかり伸びた少年を見送った。

「……今の子も、立花さんの仲間になるかもしれないね」

「う、うん。そうだね」

一は、何故か一の後ろに、隠れるようにして立つ立花へ声を掛ける。尤も、立花の方が一より身長が高いので、隠れるにしては意味の無い行為だったのだが。

立花は目を伏せたまま、心細げに、

「でも、何だか怖そうな人だったね」

そんな事を言った。

「そうかな？　いまどきの高校生にしちゃ、珍しく良い子だったと思うけど」

「ボクもそう思うよ。けど、なんだか怖かった」

むしろ一は、ソレを退治する立花が人間を怖いと評する事に、恐怖を覚える。

「ん、まあ、気のせいじゃないかな。それより、次は立花さんの番

だよ」
「う、うん。頑張る。で、でも、あのさはじめ君？　面接のとき、傍にいてくれない？」
　立花と店長とを、一対一で面接なんてさせてしまったら、この泣き虫はどうなるのだろうか、と。一は考える。
「こういうのは最初が肝心なんだよ。さ、一人で頑張ろう。さっきの子も頑張ってたと思うよ」
「そんなあ……」
　考えた結果、少しばかり楽しい事になりそうだ、と。一はそう判断した。
　と言うか、一は自分が面接の場に居合わせたところで、立花に助け舟の一つも出せないだろうとも判断している。それならば、一緒に沈んでしまう頼りない泥舟を出すよりかは、立花が沈む光景を岸から眺めていた方が色々と楽しいし、何より立花の為になるだろう。

　そこまで一が考えていたかどうかは知らないが、次に立花が一の元へと帰って来たときに、大量のティッシュペーパーが必要になった事だけは、それだけは確かであった。

四国最強

九州からオンリーワン北駒台店へとやって来た、退治屋立花（たちばな）の六代目、立花真（たちばなまこと）。北校の高校生、ワックスで大胆に固めたツンツン頭の、背の高い少年。この二人の面接を行ったその日の内に、二人の採用は決まった。そもそも、立花は元からオンリーワン近畿支部の意向により、端から採用が決まっていたのだが。

「よろしくお願いします、神野剣（かんのけん）です！」

神野、と名乗った少年が、一に頭を下げた。背筋の張った、威勢の良い挨拶。

一はその声の大きさにたじろぎながらも、精一杯微笑んで返す。

「こちらこそ、よろしく。大変な時期だけど一緒に頑張ろうね」

「はい！　お願いします！」

声の大きさは難点だが、一はそれ以上に神野と言う少年に非常に好感を覚えた。若く、爽やかな風貌。分かりやすい、誠実な性格。自分には持っていないもの。もしかしたら、持っていたかもしれないもの。

……羨ましかった。憎らしかった。

「立花さんも、改めてよろしくね」

「う、うん。よろしくね！」

一は次に、何故か自分の背後に立つ背の高い少女に話しかける。まるで神野から隠れるようにしている立花は、機嫌を窺うような視線を一に向けていた。

「それじゃ、時間もない事だし始めようか」

一は二人を見回し、マニュアルを手に取る。バックルームで椅子にふんぞり返る店長を軽く睨みつけてから、店内へと足を向けた。その背中に続いて、立花と神野も店内に出て行く。

フロアに立つ一が、まず時計に目を遣った。時刻は午後八時三十分過ぎ。
「……今日は時間が無いから、大したことはしないでおこうか」
「ボ、ボクなら大丈夫だよ？　まだ学校始まってないし」
「学校は始まってるでしょ。じゃなくて――」
「高校生は十時までしか働けないんですよね？」
一の代わりに優等生神野が答えてくれた。
「その通り。ま、高校生ってか十八歳未満は深夜働いちゃいけないんだよね」
「そ、そうなの？　二人とも良く知ってるね、凄いや」
一と神野が顔を合わせ、お互い苦笑する。
立花は何も分からず、羨望の眼差しを二人に向けたままだった。
「……一さん、俺たちは何をすればいいんですか？」
「そうだね、コンビニって簡単なようで割と仕事が多いんだよ。特にウチはね」
一がバックルームを一瞥し、再び二人に向き直る。
「仕事をしない店長がいるから。ま、それは良いんだ、あの人は基本的に無視してて問題ないよ」
「あはは……」
なんとも言えず、神野は愛想笑いを浮かべた。
「今日は店の雰囲気に慣れてもらおうかな、お客としてコンビニに来るのと、働きに来るのじゃ感じるものは違うと思うし。それと、お客さんへの挨拶にも慣れておこう、挨拶は大事だからね。とりあえず、いらっしゃいませとありがとうございました、この二つ言えたら問題ないよ。後は皆好き勝手にやってるからさ」
「む、難しいよ……」
「難しくないと思うけどな」
立花の弱気な発言に、神野が頭を掻く。

「……んー」
一には、二人の立ち位置が既に見えてきた気がした。
「お」
入り口の扉、ガラス越しにスーツ姿の男が立つのが、一には見えた。
――都合が良い。
男が扉に手を掛け、扉を開ける。フロアに男の革靴が乗った瞬間、
「いらっしゃいませ」と、一の間延びした声が店内に朗々と響いた。
「い、いらっしゃいませ！」
「あ、う」
遅れて神野が大声を出すが、立花は口ごもる。
男が雑誌コーナーに行くのを確認し、一がカウンターに入った。
手招きし、高校生二人を呼び寄せる。
一はまず神野を見遣り、
「そう、そう。そんな感じで問題ないよ」
出来るだけ優しく声を出す。
「はい！」
良い返事が返ってくる事に、一は少し嬉しくなった。
「で、立花さん？」
「ご、ごごめん！　ごめんね、だってさ、いきなりだったから」
「ああ、別に怒ってるつもりは無いんだけど……。初めてだからね、失敗って言うか、まあ当然だよ。落ち着いて、ゆっくり声を出してごらん」
「う、うん」
「それじゃ、今みたいに今日は挨拶だけしようか」
その言葉に神野が驚いた様子を見せる。
「それだけで良いんですか？」
「うん」
「で、でも」
神野は食い下がる。

「神野君って、これが初めてのバイト？」
「は、はい、そうです」
成る程と、一は得心した。何でも、誰でも始めてやる事には真剣になる。それが働く事であれば、神野の様な反応は珍しいものではない。お金を貰うのだ。労働の対価としての給料。挨拶をするだけで、貰える金に神野は言い知れぬ何かを感じているのだろう。
「それじゃあ固くなるのは仕方ないかな。けどさ、基礎って大事だろ？」
「え、ええ」
神野は答えながら、自分が所属する部活を思い出す。剣道部。剣道。神野が幼い頃から取り組んできた、真剣になったもの。
「神野君はスポーツやってる？」
「……剣道を」
「剣道か。俺はやった事ないけど、剣道の基礎って何だと思う？」
一の言葉を受け、神野は考える。色々と、思い浮かんでは来るが、
「素振り、だと思います」
神野はそう答えた。
「じゃあ素振りもしないで、試合に勝てると思う？」
「絶対に思いません」
練習もしない人間が、試合に勝つなんてありえない。許せない。存在してはいけない。神野は強い意志を込めて、言い放つ。
「コンビニのバイトも同じ、だとは言い切れないけど、そんなもんだよ。挨拶が素振りと考えてくれて良いんだ。だから、今日は君たちには素振りだけして貰うよ」
「……一さんって口が上手いですね」
「ありがとう。それじゃ仕事を始めようか」
「ね、ね、ボクは？」
二人の会話を横で聞いていた立花が楽しそうに声を出した。ある種、期待感を込めたような、そんな声。
「え？」

「ボクには何か言ってくれないの？」
「……えっと」
困ったような、実際困っているのだが、一がそんな声を出す。
「立花さん」
「うん！」
「……がんばれ」
「うん！」

一は人に物を教えるのが好きではない。嫌いと言っても過言ではなかった。何にしろ、面倒なのだ。教える相手の覚えが悪かろうが良かろうが、結局は同じこと。面倒くさい。ただそれだけだった。

一、立花、神野がフロアに出てから一時間が過ぎた。その間一は一人でレジをこなし、二人には新たにフェイスアップを教えて、店内中の掃除と点検を任せる。
「ふぁ……」
暇だった。一人でレジを打つと言っても、元々この店に客は来ない。ピークを過ぎた店内には、一のあくびと、高校生二人の作業する音だけ。

――ジリリリリ！

警告音。アラーム。危険を知らせる、音。静寂を守っていた店内が音を取り戻す。その音に一が一瞬で身を固くする。立花は声を上げて驚き、神野は何事かと立ち上がった。
「は、はじめ君！？」
情けない声を立花が上げる。
「電話、ですよね？」

神野は一の元に駆け寄ってきた。
「……電話なんだけど」
一は躊躇う。言って良い物かと、この、電話の意味を。
言いよどむ一を不審げに神野が見つめる。
「一さん？」
「はじめ君？」
遅れて駆けつけた立花も不思議そうに小首を傾げた。フロアにいる三人のうち、一だけが今の状況を、これから起こるであろう、既に起こったであろう事象を予感している。確信している。神野は勿論、勤務外としてここにいる立花にも、一には言い出しにくかった。すぐそこに、ソレの影が迫っている事を。

「安心しろ、雑魚だ」
店長が煙草を片手に、悠然と言い放った。
「雑魚？」
聞き返す一に、
「ああ、唯の化け狸だよ」
店長は余裕たっぷりに口を開く。
「化け狸って、一応ソレになるんですか？」
「なるんだろうな」
ふう、と、店長が煙を吐き出しながら答えた。
近くにいた神野が眉を顰める。煙草の煙に対してか、店長の態度に対してかは分からない。
「被害者は今のところ出ていないが、先に動くぞ。後手に回るのもつまらん」
「……誰が行くんですか？」
一が恐る恐る店長に尋ねる。
店長は唇を嫌らしく釣り上げ、三人をねめつけた。
「誰が行きたい？」

ぞくり、と。悪寒が走る。何か良くないものが一の体を駆け抜けた。

一の傍に立つ神野はと言うと、神野も同じような感覚を抱いたらしく、少し気分が悪そうな顔をしている。辛そうだった。

「店長」

「なんだ一？　お前が行くのか？」

少し不機嫌そうに店長が一を睨む。

「いや、って言うか、今更なんですけど。この話、神野君に聞かせて良いんですか？」

「……？」

「一応、ソレの事何ですから、一般の神野君には……」

一は自分がまだ、何も知らない、気楽な一般時代を思い出す。とは言っても、一ヶ月も経っていない、すぐ前の記憶。

「おいおい、誰が一般だって？」

「だから神野君がですよ。立花さんは勤務外ですけど」

店長が、笑った。

「神野？　言ってやれ」

「え？」

びくっ、と、神野が体を震わせる。

「言ってやれよ。『俺は勤務外です』ってな」

冷酷だった。冷淡だった。残酷だった。

「……っ！？」

「言え、勤務外。でないと私は認めんぞ」

「お、俺は……」

神野が俯く。店長の視線から逃れるように。

見かねた一が助け舟を出そうと、一歩踏み出した。

「ボクが行きます」

青みを帯びた艶やかな髪が揺れる。
——烏。烏が飛び降りたのかと、一は思った。
立花が、それより先に一歩踏み出して、言った。
「……ほう、早速行くか？」
「征きます」
強い意思を秘めた切れ長の瞳。刀。刀だ。既に立花は刀になっていた。鞘の無い、抜き身の危うさ。
「なら神野。お前も行け、見るだけで良い」
「見るだけ、ですか？」
「ああ。見るだけでも充分に戦いだ。勤務外になりたいのなら、それぐらいは初めてでもこなしてみせろ——」
店長が視線をずらす。
「——生きて帰って見せろ」
「……！」
「わ、分かりました！」
神野が力強く頷いた。
「良いぞ、神野。実に良い。ソレは北校近くの墓地に出た。そういえば前もそこにソレが出たな。恐らくは、そいつの遺した血にでも惹かれて来たんだろうが……」
「ソレは一体だけなんですか？」
「ああ、狸一匹。怖がる事も怯える事も、心配する事は何も無い。そうだろう？」
「……はい」
二人が頷く。戦いに赴く、二人の高校生が力強く、自らの意思で頷く。自分の考えで、自分の力で、自分自身で。
「……俺も行きます」
「一、お前は待機だ。立花も神野もいる。お前が行く必要は無い」
「だけど！」
一が語気を荒げた。神野が怪訝な反応を示し、立花は酷く驚く。

叫びに近い声。言った一自身も驚いていた。
「ふ、二人は高校生じゃないですか、危なすぎますよ。せめて三森さんか、ジェーンを一緒に行かせた方が」
「ソレと戦う者の中には小学生もいる。七十過ぎた爺さんもいる。勿論高校生もな。しかも全員お前よりは使い物になるだろうな。下らん事言うなよ、一」
取り繕うように言った一の言葉を、店長がにやけ顔で反論する。
「……店長」
「何だ？」
真剣な一に、店長が愉しそうに返す。
険悪な雰囲気が立ち込めるのを神野は見逃さなかった。
「俺たちなら大丈夫ですから」
そう言って、一と店長の間を通り抜け、バックルームへ向かう。
立花は何も言わず、神野とは違い一の後ろを小走りで通り抜けた。
――情けねえ……。
一は年下に気を使われた恥ずかしさで頭を掻き、冷静さを取り戻すべく大きく息を吸った。
「……本当に大丈夫なんでしょうね？」
二人が店内から姿を消したのを見届けて、一が努めて平静な声を出す。
「今回のソレか？」
「そうです。二人とも、ソレと戦った事はあるんですか？」
「……お前は勤務外として、初めて店を出たときの事を覚えているか？」
「覚えてます。覚えてない方がおかしいでしょう」
質問に質問で返されたが、店長の声が存外に優しいものに変わったので、一の声からも棘が抜けた。
「私はあの日、お前が死ぬと思った。糸原も死ぬと思った。場合によれば、堀も三森も、奴らも死ぬと思った」
奴ら、と言ったときの店長の顔は酷く不機嫌なものになる。

一もなんとなく察しが付いた。だから、黙っておいた。
「全滅すると思った。一般の仕事はこなせるが、お前のソレに関する態度はクソみたいな素人同然だったからな。何も出来ないお前が出れば、糸原も三森もお前を庇ってしまうだろうと思った」
「……ですよね」
「相手が唯のソレなら良かった。だが、相手はギリシャの怪物だった。お前からすりゃ、初陣でそんなのが出てくるんだ、とんでもない話だな。それでもお前は生きて帰って来た」
一は思い出す。思い出すと、随分と前の事だと思っていたのに、手が震えた。右手を咄嗟に隠し、一は店長の意見に同調した。
「だから、問題ない。神野も立花も問題ない。相手がアラクネ以上じゃなければ、生きて帰ってくるだろうさ」
「何だか、俺の運が悪いって話に聞こえてきましたよ」
「確かに悪そうだな」
「……ま、店長がそれだけ余裕なら大丈夫でしょうね。なんせ店長、蜘蛛の時なんて――」
何か言おうとした一を遮るように、バックルームの扉が開く。竹刀袋を抱えた、少年と少女。
「準備は出来たらしいな」
店長が二人の方に顔を向けた。
一もつられて二人を見る。成る程、確かに問題は無い。一はそう思った。
背の高い神野と立花。二人の持つ雰囲気は、唯の高校生には持てないものだった。剣を持つべき者の、剣を持って良いものの雰囲気。
「十時までに片付けろよ、高校生」
軽口を叩く店長に対して、一はすぐ傍にまで近づく二人に、どう声を掛けて良い物か迷い、
「気をつけて」
無難な対応を選ぶ。
「はい！」

それでも神野は、その言葉に対し、一と店長に頭を下げ、竹刀袋をしっかりと掴んで店外へ出て行った。戦場へ行った。

「……俺が言うべきではないと思うけど、その、立花さんも気をつけて」

鋭い刀。触れたら切れそうな、近づいたら斬られそうな。そんな、冷たい空気を漂わせている立花は一の言葉に、

「……うん！」

嬉しそうに目を細めて、それら全部を投げ捨てて、和やかな空気を身に纏った。

「頑張るよ！　じゃあはじめ君、行ってくるね！」

立花もそう言って、店の外へ飛び出した。狩場へと、飛び出した。

時計の針が動く。時間が、進む。

「一、苛々するな。見ていて苛々してくる」

「苛々しないでくださいよ、店長。それと、煙草をフロアで吸うのやめてもらえませんか？　苛々します」

店長は喉の奥で笑った。

一はその笑い声に不快感を覚える。

「大丈夫だと言っただろ。立花がいるんだ、心配は要らないと思うがな。その辺のソレにはまず負けん」

「でも、神野君は」

「さっきから勘違いしてるみたいだがな、神野は今日が初陣じゃないぞ」

「え」

間抜けな声だ、一は我ながらそう思った。咳払いをしてから、

「どういう事ですか？」

誤魔化すように一は尋ねる。その事に気付いているのか、いないのか、店長が小さく笑った。

「赤いソレ。糸原から聞かされていないか？」

「……あ、聞きました。全身赤くて、それで――」
「――そいつを神野が仕留めた。レッドキャップと言ったらしいな、件のソレは。墓場で遭遇したときに持っていた竹刀でヤったらしいぞ。面接でも確認したし、情報部がその様子を目撃している。逸材だ。そう思わないか？　あんな主人公気質は滅多にいないぞ。ソレと出会って、襲われて、巻き込まれるように戦って、殺して、勝って。素晴らしい、素晴らしいよなあ？　即決だったな、神野を採用したのは。いや、鍛え甲斐があって、それに応えるだけの伸びシロも確実に持っているぞ、あいつはな」
何を言っているのか、一には分からなかった。

一閃。
それだけで、駒台に現れたソレは死んだ。腕を切られ、足を斬られ、首を刎ねられ。血を流し、涙を流し、魂を流し、死んだ。動かない。もう動かない。ただ、冷たいからだから血だけが、それだけが流れ続け、動き続ける。コンクリートへ執拗に染みを作りながら。まるで、ソレが自分の生きた証を刻み付けているようだった。
「神野君？」
立花は平時と変わらない、あまりに普通すぎるトーンで神野に話しかける。
神野は答えない。応えられない。目の前で繰り広げられた、一瞬の出来事が脳裏から焼き付いて離れない。短い映像が、頭の中をリピートで何度も流れ続ける。

ソレはいた。確かに、狸の姿をしていた。ただの狸。ただ、今までに神野が見た事がないくらい大きかった。そして巨大な狸は四つんばいでなく、二本足で立っていた。
神野は怯んだ。ここまでは急いで、走ってきたのに、もう足が動

かない。自分の足の感覚ではなかった。震えていた。怯えていた。恐ろしかった。レッドキャップを殺しているとはいえ、やはりソレは怖かった。

だが、動けない神野を尻目に、立花の対応は早かった。袋から日本刀を取り出すと、柄を引っつかんで、素早く鞘からそれを抜く。街灯の明かりも無くなった闇の中、刀だけが異様な光をぎらつかせていた。

その光に神野が目を奪われたとき、立花がソレの腕を一つ持っていった。

獣の声が轟く。苦しそうな声だった。

神野はその声にハッとして、しっかりと立花の動きを目で追った。刃の輝きを頼りに、立花とソレの動きを追っていく。

見えた。そう神野が思ったときには、ソレはもう動いていなかった。達磨みたいに四肢を削ぎ落とされたソレは、苦しそうに息を吐いている。ぎらついた光。

「……っ！」

煌く銀の光。血を吸った、魂を吸った凶器。立花の日本刀が空を裂いて奔った。断末魔。首を落とされたソレは血を盛大に吹き散らして、絶命する。

立花が刀を抜き、ソレが死ぬまでに、一分も掛かっていなかった。

神野は五歳の頃から、近くの道場に入って剣道を始めた。理由はもう覚えていない。昔見たテレビの影響だったかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

理由はもう覚えていない。理由なんて関係なく、神野は竹刀を振り続けた。毎日、毎日、毎日。竹刀を触らない日はなかった。道場で、家で、学校で、時には外で振った。竹刀を振った。素振りをしているとき、雑念は消える。一回一回、徐々に意識が尖っていくのが神野には分かった。

少しずつ上手くなっている気もした。
持ち前の背丈と負けん気のお陰で、神野はめきめきと実力を伸ばして行った。神野が小学校高学年の頃には、同年代で神野に勝てるものはいなくなってしまった。中学生になって、剣道部に入った。当時一年生だった神野は、遊びじみた部の歓迎会で三年の主将と試合する事になる。
遊びだった。その遊びで、神野は主将から一本を取った。主将の実力は決して低いものではなかった。それよりも、神野の実力が勝っていただけの話。
神野は歓迎会の翌日、剣道部を辞めた。

毎日毎日毎日。
竹刀を振り続けた。
毎日毎日毎日毎日。
素振りをし続けた。

道場へ頻繁に顔を出し、知り合った大人に色々な所へ連れて行ってもらった。時には土下座して頼み込んだ事もあった。連れて行って欲しかった。自分よりも、剣道の強い者がいる所へ。一種、武者修行だった。北海道まで行った事もあった。大会の規模の大小問わず、神野は試合を見、試合にも出た。勝利すれば、勿論敗北もした。
少しずつ、神野は強くなっていった。
事実、強かった。通っていた道場にも、神野に敵う奴はいなくなった。

――俺は、強い。

事実、神野は強かった。

だから神野は今起こったことが信じられなかった。自身はあった。実力もあった。自分よりも強いものを見たことが無いわけではない。だが、それらは全て手の届く強さだ。いずれは越えられる、壁にもならない存在。

「神野君？」

ならば、目の前のこれはなんだ。神野は、立花を前にして我知らず息を呑む。

「……あ」

綺麗だった。ひたすらに美しかった。人間業じゃなかった。届かない。触れない。強さが、分からない。実力のある、そこそこに強い神野だからこそ分かる。今、自分はどこにいて、立花がどこにいるのかが理解できない。

分からないと言う事が分かる。

「大丈夫？」

立花が手を差し伸べた。

「？」

神野は地面に座り込んでいた。自身も気付かぬうちに。

差し出されたその手を、神野は手汗の滲んだ右手で掴んで立ち上がる。柔らかかった。まるで女の子の手みたいだ。そう思った。

「歩ける？」

「大丈夫。それより、いつまで握ってれば良いんだ？」

神野が視線を落とす。

つられるように立花も視線を下げ、

「う、うわわっ！」

慌てて神野の手を離した。

「ご、ごめんねっ！」

「良いよ。それより帰ろうぜ、十時までに戻るって見栄切っちゃったしな」

「そ、そうだね」
細切れになったソレを置いて、二人は並んで歩き出す。

この日、駒台に現れたソレ。
立花があっけなく倒したソレ。
化け狸。名前を、隠神刑部（いぬがみぎょうぶ）と言った。四国地方最高、最強の力を持つ化け狸。八百八匹の眷属を従えていた化け狸。
それだけの話である。

地獄から飛ぶモノは

生と死。
天と地。
光と闇。
愛と憎。
白と黒。
女と女。
敵と敵。

何の事は無い。彼女は自由で、彼女は不自由だった。それだけの事だった。彼女は彼女を羨み、彼女は彼女に嫉妬し、彼女は彼女を殺したい。それだけの事だった。

「はじめ君ってそういう本読むの？」
一が並べた女性誌を、立花は興味深そうに手に取った。表紙を飾る、煌びやかな女性が眩しく見える。こっそりと、一には気付かれないように溜め息を漏らした。
「俺じゃないよ。お使いお使い」
「え、あ、い、糸原さん？　そ、そうだよね！　はじめ君が見るわけないよね」
「糸原さんじゃなくて、タルタロスの人だよ」
一は財布から紙幣を取り出す。
立花はぎこちない手つきで、商品のバーコードを読み取っていく。
「タルタロスって、あの？」
「そ。あのタルタロス」
「……コンビニって大変なんだね」
「いや、多分ウチだけだよ」

袋に詰められた女性誌を受け取り、一が肩を落とした。
「それじゃ行ってくるよ。もうすぐしたらジェーンも来るし、心配要らないからね」
「う、うん」
一は財布をジーンズのポケットにしまい込み、出口へと向かう。
その後ろを、カウンターから出てきた立花が付いてくる。
背後に異様な存在感を感じつつも、一が扉を開けた。暖房の入った店内と違い、透き通った冬の空気が一の鼻腔をくすぐる。
「うわっ、寒いねー」
「そうだね。何で立花さん付いて来るの？」
「えっ、ボクも行っちゃ駄目なの？」
「……ダメダヨ」
「ええっ！？」
立花が心底驚いた風な声を上げた。
「店に誰もいなくなっちゃうでしょ。って言うか、仕事中だから立花さんは店から出られません」
「ボ、ボク一人でなんて無理だよ。お客さんが来たらどうすれば良いのか分からないのに……」
悲しそうに俯く立花。
「挨拶して、レジ打って終わりだよ」
「で、でもさあ……」
庇護欲をそそる声だった。
「……ええい、でもじゃない。とにかくやるの」
「は、はじめ君は意地悪だよ」
「えー、超心外ー。じゃあ頑張ってね、お疲れ様ー」
引っ張られていた袖口を乱暴に振り解き、一は立花へ背を向ける。
「うわああ！　はじめ君？　はじめくぅーん！？」

タルタロスはオンリーワン近畿支部の近くに位置する。

タルタロスはオンリーワンと提携らしき物を結んでいる。
タルタロスはソレに関係した犯罪者が収容されている場所。
タルタロスは、怖い。
一はタルタロスについて、漠然とした事しか認識できていなかった。それでも、異常めいた場所だとはハッキリと分かる。分かっていながらも、そこに足を運んでしまう。運ばざるを得ない状況を作ってしまう。
店を出て十数分歩いた一の目に、真っ白に塗装された殺風景な建物が見えてきた。高い壁。鉄条網。大きな門。
拒んでいるようだった。外から人がやって来るのを、中から人が出るのを拒んでいるように見えた。
「おはようございます」
「……おはようございます」
タルタロスに着いた一は、正門で警備している人物に声を掛ける。
一は持っていた袋を見せるようにして、
「オンリーワンから来ました」
気さくに、そう言った。
「ええ、伺ってます。もう四回目になりますか、一さん?」
「そう、なりますね。大分慣れてきましたよ」
それは良かった、と。警備員が笑う。
「通っても?」
「はい、どうぞ。ああ、ですが今日は行きも一人でお願いできますか?」
「……構いませんが、何かあったんですか?」
一が不審げに尋ねた。
一がタルタロスの、目的の部屋まで行くときに際し、警備員が一を先導するように付いてくるのが常だった。何故か帰り道は一、一人きりなのだが。

一の質問に、警備員が答えづらそうに被っていた帽子の位置を直す。
「実は、警戒レベルが上がってまして……」
「警戒？　まさかソレが？」
「……そんな所です。ですが、あくまで警戒ですから。過度の心配は要りません」
「はあ……」
警備員は一の緊張を解す為に言ったのだろうが、そうまで「心配ない」と言われると、天邪鬼の気質がある一は、逆に警戒せざるを得なかった。

正門をくぐり、本館から離れた棟へ。その棟の一角に、隔離されているように存在する地下へ続く階段。
一はその階段の一歩目を踏んだ。長い長い階段。照明は薄く、先が見えない。今日は付き添いの警備員もいない。その事実が一の不安感を急速に駆り立てる。終わらない、何段下っても終わらない階段。
「こんなに、長かったっけ？」
迫り来る恐怖を紛らわす為に、一が独り言を呟く。その声は狭い階段中に反響し、自分の口から出た声とは思えないほど不気味に変質した。怖気が走り、鳥肌が立つ。走ってやろうか、歌ってやろうか。歌いながら走ってやろうか。そんな考えが一の思考回路を支配する。暗く淀んだ、湿った空気が一の圧し掛かっていく。押し潰されそうな、濃厚な空気。息を吸い込むと、吐きそうなほど汚く、埃っぽかった。胃の中の物を吐き散らしてしまいそうになるのを我慢して、一は喉元まで来ていた不快なそれを強く飲み込み、押し戻す。
「はっ、はあっ……」
壁に手を付いて、小休止。一は前を見ると、違和感を覚えた。薄暗がりの中、既に方向感覚が狂い始めていた。空気が、新鮮な空気

が欲しかったが、ここにいては望むべくも無い。
とにかく、下りなくては。
口元を押さえながら、強迫観念に押されながら、一は階段を駆け下りる。
「あ……」
か細い、今にも消えそうな光。階段に終わりが近づく。階下の廊下から漏れる、仄暗い照明。

薄暗い廊下を進むと、突き当たりに赤錆のこびり付いた扉が見える。一がその扉に手をかけようとした瞬間、軋みを立てて、扉が開く。独りでに開いた扉を見たのは、これで四回目だったが、一は何の疑問も抱かなかった。
「……良いですか？」
「ふふ、その為に開けたのよ？　入って頂戴」
部屋の中から、脆い声が聞こえてくる。ガラス細工のような、儚げな声。
一はその声に促され、殺風景な部屋に入った。
「相変わらず、寂しい部屋ですね」
「そうかしら？」
「そうですよ」
部屋には窓が一つ。見える景色はつまらない物だった。荒れ果てた光景だけが延々と広がっている。一は目を逸らした。簡素な机と椅子。椅子には、室内だと言うのに黒いローブを羽織り、フードを被った女性が一人。
それ以外には何も無かった。
「もう四回目ですけど、何も変わらないんですね。この部屋は」
「……ハジメは変わったみたいね」
鮮やかな紅色。フードを被った女性が静かに声を発した。感情は読み取れなかったが、一にはその声が、どこか寂しいものに感じる。

「俺がですか？」
「女神の力を手に入れたのね」
ぎくり、と。一の体が強張った。
「知ってましたか」
「ええ。忘れたの？　ここはそういうモノを管理しているのよ」
「……そうでしたね」
一が女性の反対側の椅子に座り、持っていた袋から雑誌を取り出す。
「今日は本を持ってきました。これならそこそこ時間は潰せますよ」
「あら、気が利くのねハジメ」
「……そりゃどうも」
皮肉っぽく女性が笑った。
「ふぅん、私とは縁遠い人たちばかりね」
女性誌の表紙を眺めながら女性は呟く。
「縁遠い？」
「私とは全く違う、華があるわね。憎らしいわ」
「あなたも充分綺麗だと思いますけど」
「あら、私の顔を見たこと無いのに？」
白く、細長い指を口元に当てて女性が上品に笑う。どこか自嘲めいた微笑み。
「じゃあ見せてくださいよ。そもそも、俺はまだあなたの名前を知らないんですけど」
「名前なら好きに付けてくれって言ったじゃない。良いのよ、ハジメが付ける名前なら何でも」
「……繰り返した問答ですけど、ペットじゃないんですから、駄目ですそんなの」
「ふふ、意地っ張り」
女性は怪しく口元を歪めた。
「……ところで、何かこっちで変わったことはありましたか？」
「ここで？　そうね、特に無いわ」

「警備員の方が言っていたんですけど、警戒レベルが上がったとか、何とか」
「そう言えば、そんな事あったかしら」
「あなた、ここの人間なんですから……」
それぐらいは把握して置いて下さいよ、と、一が嘆くように言う。
「ずっとこんな所にいるのだから、仕方ないじゃない」
「外に出れば良いじゃないですか？」
「外へ？」
女性にとって予期していなかった言葉だった。思わず、女性がフードに隠された顔を上げる。
「閉じ込められてるわけじゃないんでしょうに。勿体無いですよ、今日は天気も良いのに」
「……そうね。そうしたいわ」
含みのある言い方に、何かを感じ取った一はそれ以上この話題に対して、何も言わなかった。

「ああ、そう言えば思い出したわ」
「何をです？」
女性が人差し指を一の前に立てた。
「脱走したモノがいたのよ」
「脱走？　ここから、ですか？」
「そう」
普通に言ってみせたが、一には信じられなかった。信じられない存在が、今一の部屋で寛いでいるであろう事を差し引いても、鵜呑みには出来ない話。
「そんな人がいたんですか？」
「正確には人じゃないの。ソレよ」
「……ソレ？」
「そう」

ソレがここにいた？　一は言い知れぬ感情に押し潰されそうになる。

「え？　えっと、タルタロスにいるのはソレ絡みの犯罪者だけなんじゃ？」

「あら、そんな事誰がハジメに吹き込んだのかしら。……目の前に居たら八つ裂きにしてやりたいわね。むしろここで管理しているのはソレの方が多いのよ」

「う、ええっ。本当ですか？」

八つ裂きには触れないのが、一という男だった。

「……俺、そろそろお暇させて――」

立ち上がった一は扉に手を掛け、ゆっくりと開く。

「――まだ早いじゃない」

一の意思に反して、ゆっくりと扉が閉まっていく。力を込めても、押しても引いても、もう扉は開く素振りすら見せなかった。

「……あの」

「どうしたの、お座りなさい」

「……はい」

儚げな声。ガラス細工のような、触れたら砕けそうな声。それでも、強固な意志がその声には隠されていた。

「前にあなたが来てから、随分と間が空いたわね。忙しかったのかしら？」

「ええ。忙しかったです。勤務外になっちゃったんで」

「ふふ。なら、聞かせて頂戴？」

ミステリアスな女性の雰囲気に、一は抵抗できない。軽い眩暈を覚えるぐらいの、閉ざされた濃密な世界。いつしか、一はその世界に沈んでいった。

――ああ、やっと出られた。

空を泳ぎながら、ソレは思う。

高い高い空の上、雲のずっとずっと上。気持ち良さそうに羽根を羽ばたかせ、ソレはまた高度を上げた。太陽が近付く。陽光に照らされるソレの姿。獅子の頭を持った、鷲の様な姿だった。人間より一回りも大きい出来損ないの鳥。

――それにしても、汚い空だ。

ソレは思い、憤った。そしてソレは吠えた。その咆哮に共鳴して、雲が蠢き、風が鳴く。空は歪み、徐々に暗くなる。風は鋭さと勢いを増し、荒れ狂った。

嵐。嵐を引き連れ、ソレは飛ぶ。空を行く。目的があったが、まずは飛ぶ。ソレは飛びたかった。空を飛びたかった。何も考えず、何にも縛られず、囚われず。ただ、上を目指したかった。

一はいい加減この部屋を出たかった。タルタロスの一室にある、この部屋。

「……どうしたの？」

「いえ、別に」

妖艶さを湛えた、フードを目深に被った女性の部屋から出たかった。一刻も早く、出来れば一秒でも、一瞬たりとも早く出たかった。

「ふふ、退屈そうね」

女性は口元を愉しそうに歪めながら、女性誌に目を落とす。

一は、退屈だった。もう気を遣うなんて精神力は残されていなかった。

「そうですねえ……」

だから気だるげに、ストレートに返す。

「素直ね。正直な人は好きよ」

「そうですか……」

一は窓の外に目を遣った。土と岩。砂と石。黒い雲だけがひたすらに広がっている。無限とも言える、だだっ広い荒野。

「逃げたソレってどんな奴なんですか？」

やはり何度見ても気分の良い景色ではなかった。一はその景色から逃げるように目を逸らし、女性に声を掛ける。
「そうね、私も一度しか見たことが無いから詳しくは言えないのだけど」
「構いませんよ」
「欲深い性格だと思ったわ」
「はあ……」
一はソレの容貌を聞いたつもりだったのだが、女は平然とソレの性格、内面を口にする。それがどれだけ不可思議で不可解で、気持ちの悪い発言だったのか、女は気付いていなかった。
「姿は？」
「覚えてないわ。性格だけが目に付いちゃってね」
「……そ、ですか」
「それより、もう話は無いのかしら？」
女性は口元に手を当て、上品に微笑む。
「期待に応えられないようで残念ですけど。最近の出来事は殆ど喋らせてもらいましたよ」
「あら、本当に残念ね」
「それじゃあ、今度こそ帰りますよ。頼りない新人が泣いてるかも知れないので」
「ふふ、大変ね」
一が席を立つと、錆びた扉が自動的に開いた。
「ところで、あなたはずっとここにいてて大丈夫なんですか？　ソレが逃げたんなら、結構な騒ぎになるとも思うんですけど」
「言っている意味が良く分からないけれど、心配は要らないわ。それに、ハジメたちが何とかするんでしょう？」
「……仰るとおりで」
女性は、膝の上に乗せていた雑誌を机に置き、
「ハジメ。逃げ出したソレを何とかしたら、またいらっしゃい」
艶やかさを含んだ声で、そう言った。

一は唾を飲み込みそうになるのを堪える。
「あ、はい。けど、別にソレは関係なく、また来ると思いますけどね。次は何が欲しいですか？」
「あなたは何が欲しい？」
甘く、囁かれた。声は耳から入り、内耳を蕩けさせ、脳に狂おしい音波を届けさせる。全身の骨という骨が引き抜かれ、体中の臓腑という臓腑がぐちゃぐちゃになって、何もかも全てを投げ出して、その場に倒れこみたくなる衝動が一を襲う。
「俺は、何も……」
粗方破壊し尽くされた理性。鎌首をもたげる様に現れる本能。
「そう？　素直じゃない人は、嫌いなのだけれど」
一が生唾を飲み込んだ。やけに静かな室内に、その音が無駄に響く。
「失礼します」
「ふふ、またね」
一握りの、欠片も残っていなかった理性を総動員して、一は部屋を出た。逃げた。扉はゆっくりと閉まっていく。振り返らなかった。心臓は馬鹿みたいに高鳴り、体は空気を欲している。虚ろな瞳で、帰るための階段を捉えた。おぼつかない足取りで、廊下を進む。
一は階段に足をかけたとき、行きよりも、外の世界までの道が遠く、長く感じられた。もう、戻れないのではないかと、愚かな考えに身を委ねた。
「はじめ君！」
一が店に入った瞬間、立花が嬉しそうに近寄ってきた。
立花はオンリーワンの制服ではなく、セーラー服。
「……あれ、立花さん仕事終わったんじゃないの？」

「うん、終わったよ。はじめ君を待ってたの」
一はちょっとにやけそうだった。
「店長がボクら二人に言いたい事があるんだってさ」
「ああ。ああ、なるほど」
自分の気持ちが急速に沈んでいくのが、一には分かる。
「はじめ君？　どうしたの、疲れた？」
「いや、店長は奥？」
うん、と短く立花が頷いた。
「それじゃ、行こうか」

バックルームにはジェーンと神野が居た。
「お兄ちゃん！」
ジェーンは一の姿を見るなり、一に飛びついてくる。片手でジェーンの頭を掴んで、一は溜め息を漏らした。
「うざいよ」
「うー、ハートブレイク……」
「うるさい。店長に呼ばれてるから、後でな」
一はジェーンの髪の毛を多少乱暴に撫でてやって、神野に目を向けた。
「おはよう、神野君」
「おはようございます！」
神野はツンツン頭を一に向けて深くお辞儀と、気持ちの良い爽やかな挨拶をする。
「店長ー、店長ー、はじめ君来たよー」
「オルァ、私には敬語を使えと言っただろう」
立花に急かされた店長が、煙草の煙を纏わせながらやって来た。
「やっと来たか一、時間は大切に使えといつも言っているだろう」
「初耳です」
「タルタロスからソレが逃げたのは、全員聞いているな？」

一以外の全員が頷く。
「初耳でした」
「ソレは逃げ出すときに、タルタロスの連中にとって重要なものを盗んで行ったらしい」
「……」
「これがどういう事か分かる奴は手を挙げろ」
店長がバックルームの全員を順番に見回した。
「Ｈｉ」
「ん、ゴーウェスト」
律儀に手を上げたジェーンを、嬉しそうに店長が指差す。
「今回のソレは、知能を持っていると言えそうネ」
「正解だ。ただ逃げるだけじゃなく、物を盗んでいくんだからな。良し、他には？」
立花と神野は訳が分からず沈黙を守っていた。
「なんだ、誰も分からないのか？　じゃあ一、答えろ」
「初耳です」
「それはもう良い。答えられないと時給を糸原より上げるぞ」
「やめて！　そんな事されたら妬まれて殺されちゃいますよ！」
「正解だ。ただ殺されるだけじゃなく、お前の大切な何かを持っていかれるんだろうな」
立花と神野とジェーンは沈黙を守る。白い目に突き刺されながら、一は考えてみた。ニヤニヤと笑う店長の顔が目に付いて、長くは考えるのに集中できなかったが、
「タルタロスに恩が売れます」
一はハッキリと、そう断言する。
「正解だ」
店長が笑う。酷く耳障りだと、一は思った。
「と言うわけで、今回の目的はソレよりも、むしろソレの盗み出したものに重点を置くぞ」
「あの、一つ良いですか？」

神野が右手を上げる。
「神野、もう問題は終わったぞ」
「違います！　そうじゃなくて、俺は何が盗まれたのかが気になってるんですけど」
「そう、確かにネ。ソレは確か、鳥類だったカシラ、ボス？」
「そうだ。だから、盗まれたものはそれ程大きくはないだろうな」
店長が煙草を吸いながら、尊大に答えた。
「けど、まだ盗んだものを持っているとは限らないよね」
「ああ、そう言えばそうだよな。時間も経ってるし、どこかに隠したかもしれないですね」
立花の意見に賛同するように、一が頷く。
「その通りだ。だが、我々は基本的にソレを叩く事しか出来ん。どうせ盗まれた何かは、今頃情報部が探してるだろ。しかしだ。その上で、お前らとソレが戦闘に入ったとき、ソレが盗んだであろう物を持っていた場合は、何とかして取り返せ」
「……店長」
「なんだ、一」
「面倒なんですけど」
「良し。今回はジェーンと立花が行け」
「シフト滅茶苦茶じゃないですか！」
一が思わず叫んだ。
店長が耳を塞ぎながら、一を睨む。
「どうせお前の業務はもう終わってるんだから、良いだろ」
「立花さんも終わってるじゃないですか」
「うん。夕方からはゴーウェストと神野がシフトに入っている」
「分かってんなら、何でシフト弄るんですか？　せっかく俺が苦労して組み直したって言うのに！」
「は、はじめ君。ボクなら平気だよ？」
立花は健気だった。
「駄目だ。嫌な物は嫌だって言わなきゃ、バイトなんてやってられ

ないんだよ。特にコンビニ、しかもウチに限って言えばアホみたいなシフト組まされちゃうし、仕事量も半端じゃないんだよ？　店長の言う事に頷いちゃいけないんだ。断固として立ち向かわないと駄目だ！」

「一、お前クビな」

「どうして！？」

「うっさいから」

適当な物言いだった。

「あっそうですか。じゃあ良いです、俺はもう黙っておきますから」

拗ねたような口振りで、一はパイプ椅子を引っ張り出し、そっぽを向いて座り込む。

「良し。ゴーウェストと立花は勤務外業務に移れ。急げよ」

「オッケー、ノープロブレムね。行くわヨ、タチバナ！」

「う、うん！　あ、ねえ皆一緒に行くってのはどうかな？」

「急げ！」

「ご、ごごめんなさい！」

ジェーン、立花。勤務外の二人がロッカールームに駆けて行く。

「……神野、一般で頼む。一に仕事を教えてもらっておいてくれ」

「はい……！」

やる気の感じられる、若い返事。

「俺今クビって言われたんですけどー？」

「大丈夫だ。金はやらんから」

「うーわマジっすか死ねば良いのに……。まあ、どうでも良いですけどね。それじゃ、行こうか神野君」

パイプ椅子から立ち上がり、一が体を伸ばす。

「よろしく頼むぞ」

店長はもう一仕事終えたとばかりに、バックルームの椅子に座り込んだ。煙草を美味そうに吸い、体を仰け反らせて椅子に全体重を預けている。

一は面倒そうに溜め息を吐いた。

ジェーンと立花が勤務外として出て行ってすぐ、神野は沈痛な面持ちで一に、
「立花たちが危険な目に遭ってるのに、俺たちは中で仕事やってて良いんですか？」
どこかで聞いた事のある台詞を零した。その言葉に、一は、一の体に刻まれても無い古傷が痛んだ気がした。フラッシュバック。今もまだ、一の記憶の奥底に焼きついている、綺麗な炎。頭の中の炎が揺らぐ度、じわじわと、体を蝕まれていく感覚に一は身を任せていた。
「……神野君は戦いたいの？」
それは。
「え？」
「ソレを、殺したいの？」
誰に対しての質問だったのか。
「……ソレと戦うのは、怖いですよ。けど、俺以外の誰かが傷つくのは見たくないんです」
「そっか。なら、いつかはまた、神野君も戦う事になると思うよ」
一自身にも、分からなかった。
「そう、ですか……」
「だから、今は信じて待ってれば良いんじゃないかな。大丈夫、あの二人は俺らより強いと思うよ」
「……そう、ですか」
「うん、そうだよ」

その日は風が強かった。

The Bad, the Bad and the Bad

風よ吹け。雨よ降れ。
大気よ嘶け、空は鳴け。
嵐よ、この空を駆け抜けろ。

駒台には嵐が近づいていた。突然の、何の前触れもなく一陣の風が吹く。強風は家屋を揺らし、木々を薙ぎ、歓喜の雄叫びを上げた。駒台の住民は暴虐なそれから隠れるように家へ逃げ帰る。
風の中、ジェーンと立花。二人の勤務外はそこにいた。
「うわあ、ひどいね。飛ばされちゃうかも。ジェーンちゃん、大丈夫？」
「……ちゃんはやめてくれナイ？」
「どうして？」
「アタシはＳＶ（スーパーバイザー）でアナタはバイトなの。立場が違うの！　アタシが上なノ！　アンダスタン？」
「でも、ボクの方が年上だし」
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！」
ジェーンは荒れ狂う風に負けないくらい大声を張った。ツーテールを押さえながら、ジェーンは先陣切って風に向かっていく。
「ところでさ、ボクらはどこに行けば良いのかな？」
「アッチよ。良くないニオイがするワ」
「臭い？　まるで犬だね、ジェーンちゃん」
「……アナタも犬じゃナイ」
「え、何でボクが犬なの？」
ぴたり、と。ジェーンが歩を止めた。振り返り、立花を指差す。
「お兄ちゃんに近づかないで」
立花は、その宣言が何の事だか分からない。きょとんとした顔の

まま、時折飛んでくる空き缶に一々大袈裟な反応を示す。
「……お兄ちゃんって、誰の？」
「アタシのよ！　アタシのものなの！」
「わからな――あ！　もしかして、はじめ君の事？」
「Ｙｅｓ。それと、お兄ちゃんの事をはじめ君なんて、なれなれしく呼ばないで」
強い口調だった。ジェーンの蒼い瞳はしっかりと立花を捉えている。
「え、な、何で？　ボクの勝手じゃないか」
立花は何故自分がこんな事を言われているのか、引っかかりながらも応戦する。
「生意気言わないでヨ、ルーキーのくせに」
「ボ、ボクがはじめ君をはじめ君って呼んだらいけないの！？」
「半径一キロ以内に近づくのも腹立たしいワ」
「そっ、そんなの無理だよっ！」
「無理じゃナイ。オンリーワンをやめれば良いのヨ、ミツモリやイトハラより、誰より、タチバナ。アタシはアナタをお兄ちゃんに近づくエネミーだと判断するワ」
「なっ……！」
勝手な言い分だった。立花は訳が分からない。傍若無人な振る舞いをされ、温厚な立花の頭にも血がのぼり始めていた。
「そんな事言われる筋合いは無いよっ」
「あるワ」
「ないよっ」
「……新しく入ってきたくせに。アナタなんかが、お兄ちゃんのとなりに立たないで」
「……っ！　きっ、君だって本当ははじめ君の妹じゃないんだろ！　はじめ君の家族でもないのに、そんな事言われたくないよっ！」
売り言葉に買い言葉。涙を浮かべながら、立花は叫ぶ。
風が少しだけ強く吹いた。周囲の空気が冷たくなっていく。

「言ったワね」

良く通る声で静かに呟くと、ジェーンはジーンズのベルトに手を掛ける。そのベルトには、メタリックシルバーに輝く凶器が吊り下がっていた。

「……な、何のつもり？」

現物は見たことがない。それでも、立花は知っていた。凶暴に煌くモノの威力を、形状を。

「抜きなさい、サムライ」

ジェーンが握ったのは、回転式拳銃（リボルバー）。グリップには派手な装飾が施され、全体色は銀で統一。

風雨によって視界の悪くなった外であっても、銀は決して視界から外れない。立花の瞳が嫌でも釘付けになる。

「……え」

意図せず、立花は肩から提げている竹刀袋に触れた。

「タチバナ。今アナタが言ったのはタブーよ。触れたのはスイッチなノ、分かる？」

「あ、その、ご、ごめん！　ボ、ボク……、そんなつもりじゃ」

立花は焦っていた。まさか、ここまでジェーンが怒るなんて思っても見なかった。ちょっとした仕返しのつもり。それだけのつもりだった。

「それでも、アタシは今、アナタを許せない」

それでも、ジェーンはもう止まらない。

「……そ、そんな」

今優先すべきはソレではないのか。勤務外同士で争う理由はないのではないのか。そもそも、なぜジェーンはあんなに怒っているのか。

「い、いやだよ……！　何で……」

ない交ぜになった感情が、立花の頭を駆け巡る。怖かった。悲し

かった。
「誰が何と言おうと、アタシはお兄ちゃんの妹なの――」
一向に戦闘態勢に移ろうとしない立花に、
「――ダカラッ！」
ジェーンが痺れを切らした。

ジェーンは一歩で踏み込み、二歩目で立花の懐に入る。手加減は出来ない。この後、一人でソレと戦う事になるリスクを負ってでも、分からせねばならない。
ジェーンゴーウェストと一一。妹と兄。二人の絆を引き裂くような輩には、体へ分からせるしかない。

ジェーンの爪先が、立花の腹部へと迫る。新人だろうが、同僚だろうが、関係ない。一切の迷いも躊躇もなく放たれる蹴撃。
「……チッ」
思わずジェーンは舌打ちする。手加減した覚えは無い。手は絶対に抜いていない。迷いのない腹部へのミドルキック。
それでも、それを立花は受け止めた。立花の表情からは、先ほどまでの情けないものが消えている。恐れも、悲しみも、焦りも、迷いも無い。何も無い。無の表情。
「ジェーンちゃん、どうしてこんな事するの？」
立花の声だけが、子を諭そうとする親のように優しげだった。
「……っ」
ぎりり、と歯軋りをする。勢いで噛み砕きそうになるぐらい、強く歯を軋ませる。その、優しげな声がジェーンを苛立たせた。
「タチバナ、今すぐアタシの目の前から消えて」
でないともう、収まりがつきそうになかった。ジェーンは今、ギリギリのところで耐えている。本能に任せて暴れたくなるジェーンを繋ぎ止めている物は理性だった。ここで立花と無謀にも戦い、ど

ちらかが命を落とせば、悲しむ。
そして怒る。自分の兄に嫌われてしまう。だから、だからジェーンは。
「ボクが一人でソレを倒すよ」
「ハ？」
「ジェーンちゃんを怒らせちゃったのは、本当に悪いと思ってる。ごめん。でもね、ボクも、ボ、ボクもね、ここまでされて黙ってられないんだ。やっぱりそう出来てるんだ。だって、ボクは立花だから。だから、だから」

怖かった。悲しかった。だけど、ジェーンが踏み込んできた瞬間、頭の中を掻き乱していた全てが消えた。ごちゃごちゃになった感情は全て霧散し、立花は拳を前に突き出していた。何も分からないまま、何も感じないまま。
気付けば、目の前で舌打ちするジェーンがいた。ジェーンの足を掴んでいる。自分の腕がいつの間にか掴んでいる。立花は震えた。
「ジェーンちゃん、どうしてこんな事するの？」
怒っているジェーンを刺激しないように、ゆっくりと諭すように言った。なるだけ、立花は優しく言ったつもりだった。
「……っ！」
ぎりり、と。何かを削る音が聞こえる。その音はジェーンの口から聞こえていた。
「タチバナ、今すぐアタシの目の前から消えて」
歯軋りだ、と、立花が気付くころにはもう遅い。
ジェーンは瞳を強く歪ませて、立花を睨んでいた。声は感情を抑えているかのように、所々で震えている。向けられる敵意。中（あ）てられる害意。懐かしい感情。立花の心に、ずっと住み着いている凶暴な感情。そんな物を見せられては、もう止まれなかった。
しかし、と。立花は思い直す。ここでジェーンを殺すわけにはい

かない。あの人に嫌われてしまうかもしれない。だから。
「ボクが一人でソレを倒すよ」
だから、とりあえずはどこかへ行って、ジェーンとは別ルートでソレを探そうと立花は思った。ジェーンと行動を共にし続けることは、もう出来ない。どちらかが痛い目を見てしまう。立花にとって忌避すべき事だった。だから。
「ハ？」
馬鹿にしたように、ジェーンが聞き返してくる。
立花は少し悲しくなった。
「ジェーンちゃんを怒らせちゃったのは、本当に悪いと思ってる。ごめん。でもね、ボクも、ボ、ボクもね、ここまでされて黙ってられないんだ。やっぱりそう出来てるんだ。だって、ボクは立花だから。だから、だから」
とにかく謝ろう。立花は気持ちを込めて、精一杯誠意を伝える。新しく出来た、初めて出来た知り合いに、友達に、一一の妹に、ジェーンに嫌われたくなんてなかったから。立花は頭を下げた。

物質を構成させる四つの元素。火、水、土、風。四大元素。その内の、風。
穏やかな風が吹く。駒台に突如強風が襲い掛かったその日、風の精霊シルフは駒台中をうろついていた。
「おっかしいなあー」
腕を組みながら、空を散歩する子供。ブツブツと呟きながら、眼下の町と雲を交互に見比べる。ゆらゆらと浮かぶシルフの背後から、突風が襲い掛かった。
「うわっ」
突風はシルフをすり抜けるようにして、何事もなかったかのようになりを潜める。
「シルフ様の風じゃないなー。誰だ、許可なく風を吹かせてる奴は

！」

シルフの声は、シルフ自身の呼び出した烈風によって掻き消された。

「くっそー！　シルフ様を馬鹿にしてんのかー！」

駒台の風はシルフが支配している。支配と言うほどの影響力を持っているかどうかは定かではないが、今日この日、駒台に吹くここまでの風を、シルフは知らなかった。自分の知りえぬところで、知らない誰かが、この強風を巻き起こしている。

「……腹立つなぁ！」

シルフにとっては非常に不愉快な話であった。おもちゃを横取りされたような、お菓子を横取りされたような、そんな気分だった。

「ん？」

不機嫌なシルフの双眸が、二つの人影を捉えた。雲の中にいたシルフからは、影の輪郭がはっきりとしない。それでも、知っている風だと、そう感じた。

シルフは風の精霊である。風を操れるし、風を作れるし、風を感じられる。シルフは、言うなれば『風』そのものであると言い換えても良かった。

その風の能力の一つに、風の違いを感じ取れると言うものがある。シルフ曰く、ニンゲンは生きていれば風の形を人によって変えられる、らしい。勿論、人間の自由意志でなく、自動にである。人間一人ひとりに纏わり付く風の形、向き、大きさ、全てが千差万別違っている、らしい。風は人間の身長体重年齢性別性格、それぞれの原因、理由によって姿を変え、一人ひとりが違った風を持っている、と、シルフは言う。そしてシルフは、人間の個体差によって微妙に違う、風の流れ、風その物の区別が付くらしい。直接その人の姿を目で見なくても、声を耳で聞かなくても、風を感じる事で、「ああ、こいつか」と、いとも簡単に区別が付き、把握できる。

だからシルフには分かった。今、人々が家に逃げ帰る中、そんな強風吹き荒ぶ街中で対峙する二人が。二匹の勤務外が。ジェーンゴーウェストと立花真が理解できた。そこにいる、と。そこで向かい合っている、と。

「……どういう事？」

だが、この事態は理解できなかった。二人の勤務外が戦っている理由と言うものが。シルフの目からは、立花がジェーンの蹴りを受け止めているのが確認できる。

「まずいんじゃないのか？」

止めなくては。シルフは風を呼び寄せ風を連れ、風と共に空を奔った。

力を込めないと。そう立花が思ったときにはもう遅かった。掴んでいた立花の手から、ジェーンの足がすり抜ける。急激な力で引っ張られ、前のめりになる立花。バランスの崩れた立花の顎に掌底が入った。快音が響く。

「後から来たくせに！」

顔を浮かせたままの立花。

ジェーンが、がら空きのその腹にもう一度掌底を入れる。肉を嬲る鈍い音が、ジェーンの耳に心地悪く聞こえた。

「う……っ」

立花の頭が、本人の意思とは無関係に下がる。下げられる。後頭部に衝撃。ジェーンの踵が突き刺さっていた。吐き気を堪えながら、立花が倒れまいと足を地面にくっ付けて踏ん張る。

ジェーンは立花の頑丈さに辟易しながらも、打ちつけた踵をそのまま二度、三度と叩き付けた。

「寝てなさいヨ！」

「……もう怒った」

立花がそのままの姿勢で、ジェーンの踵を両手で掴みあげる。

ジェーンは逃げようと身を捩るが、それよりも強い力のせいで足は動かない。
「Ｂｕｔ、右はもらうワ」
冷静だった。ジェーンは掴まれた踵はそのままに、若干宙に浮いた姿勢で、手を伸ばす。ベルトの、ホルスターに吊り下げられたリボルバー。狙うは立花の右足。足さえ撃てば、もう敵は動けない。
「でやあっ！」
ジェーンが銃に手を伸ばすより先、立花がジェーンを回した。頭の上で一回転。突然の回転で体勢を崩したジェーンの手が、後数ミリの距離だったリボルバーから離れる。頭の上で二回転。三回転。そして落下。立花はコンクリートの地面へと、ジェーンの頭から叩き付ける。踵を掴んだままの強烈な一撃。
ジェーンは、頭だけは残っている両手でガードし、体全体で地面にぶつかった。衝撃を面で逃がす為の、苦肉の策。全身が痛みに痺れた。動けない。
「もう知らない！　知らないからね！」
何事か喚きつつ、立花が竹刀袋に手を伸ばす。袋から取り出したのは、無骨な日本刀。
「こ、殺さなきゃ良いんでしょ！」
「アァァ！　抜いたわね！」
倒れたまま、ジェーンが叫んだ。抜け、とは言ったものの。やはり刀は怖い。異国の伝統。伝説。サムライソード。武器は怖い。
「ぬ、抜けって言ったのはそっちじゃないかぁ！」
もはや狂乱。立花の頭の中はぐちゃぐちゃだった。
「足一本なら、は、はじめ君も許してくれるよね？」
かしゃん、と。落下音。伏せったジェーンのすぐ近くに、刀の鞘が落ちてくる。
「……ぅえ？　ゆ、許すわけないでショ！」
立花が遂に刀を抜いた。白銀に煌く刀身が、ジェーンの姿を映す。銀光を瞬かせ、立花の日本刀が、獲物が姿を現した。

「お、おおおお覚悟っ！」
涙を浮かべながら、ある種倒錯した表情で立花がその刀を振り下ろす。
「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏ！」
ジェーンは伏せった姿勢から、痛んだ体を無理矢理後転。さっきまでジェーンが寝ていた、ジェーンの頭のあった場所に刀の切っ先が突き刺さる。攻撃を外して小首を傾げる立花を、何か恐ろしいものでも見てしまったような表情でジェーンが目視。冷や汗が流れる。素手では戦えない。そう判断したジェーンは、距離を取ってから、ゆっくりとリボルバーを抜く。グリップをしっかりと握り、目標を睨み付けた。
「ああ！　飛び道具なんてずるいよ！」
「……クレイジー」
「ジェーンちゃんがそう来るなら、ボクも本気で行くからね」
「も、もう良いじゃナイ。イタミワケにしない、か、シラ？」
「ボクの方が一発多くもらってるよ。ジェーンちゃん？　それじゃ引き分けにならないからね」
立花が刀を正眼に構える。険しい表情。立花の瞳は『敵』を捉えていた。酷く、落ち着いた構え。
――これがタチバナ。
ジェーンはいつの間にか、手に汗を握っているのに気付く。リボルバーを持ち替え、汗を拭き、再び持ち替える。雰囲気に、空気に、圧されていた。このまま事態が進めば、どちらかは確実に命を落とす。勤務外の経験上、ジェーンはそう悟った。理解する。
「ア、アタシがやりすぎちゃった。謝るカラ、も、もうストップ。ギブアップ。ｄｏｎ'ｔ（ドンムーブ）　ｍｏｖｅ」
「ボクはさっき謝ったのに、許してくれなかったじゃないか」
「それも含めて謝ってるノよ！」
「嫌だよ！　ジェーンちゃんは勝手だ！　子供だよ！　どうしてもって言うんなら、はじめ君とボクに関してもう何も言わないで。そ

うしたら、刀を納めるよ」
ぴく、と。ジェーンの眉が僅かに動いた。
「……今なんて言ったのカシラ？」
「そ、そんなの覚えてないよ！　何か、き、気に障った？」
本当に立花は覚えてなかった。
「オーケー。良いわ、タチバナ。西部劇（ウエスタン）は好きかしら？」
「え、あ、えーと？」
「アタシは特にスパゲッティが好きなの。Ｌｏｖｅなの。意味が分かる？」
「は、はぁ？　分からないよ」
「今から教えてあげるワ」
にっこりと、ジェーンが微笑む。
ぞくり、と。立花が凍りついた。
――残酷に殺してあげるワ。
「死ねェ！　エル・インディオ！」
「ボ、ボクは立花だよぅ！？」

「何やってんだバカ！」

甲高い罵声とともに突風が吹く。ジェーンと立花の、二人の間へ割って入るように風が吹き抜けた。目も開けていられないほどの強い風。
ジェーンは顔を腕で覆い隠し、立花は刀を傾けて顔を守ろうとする。
「お前ら味方同士なんじゃないのか！」
「……キミは……」
先に目を開いたジェーンが、風の中から現れた人物を確認した。
緑の帽子を被った子供。『影』から生還した精霊。風の申し子。
「シルフ……」
「シルフ？」

「そうだよっ、シルフ様だっ！」
腕を組み、足を組み、顎を逸らせて偉そうにシルフは名乗りを上げる。
「……そうか、君が風の。けど、ボクたちの邪魔をしないでもらえるかな？」
「じゃ、じゃまっ！？　このシルフ様がある！？　じゃなくてっ、何でお前らこんな事やってんだよ！」

「ダッテ、タチバナがアタシとお兄ちゃんの――」
「しょうがないじゃないか、ジェーンちゃんがボクとはじめ君の――」

二人の勤務外は声を揃わせて言う。

「邪魔をするんダカラ」「邪魔をするんだよ」

シルフは呆然とする。慄然とした。唖然となった。
「……あいつか……」
いつもお菓子をくれる人畜無害っぽい顔を、シルフは思い出す。
「とっ、とにかくさあ、シルフ様も見ちゃったからにはほっとけないのさ。お前ら、あのニンゲンの知り合いだろ？　シルフ様は奴に借りがあるから、ここでほっといたら、借りを返せなくなるんだ。分かるだろ？　おとなのジョウシキってやつ。だからちょっと落ち着――おい！　その物騒なものをしまえよ！　当たったら危ないだろ！」
「……じゃあ風を弱めてくれないカシラ？　とてもウットウしいんだけど」
ジェーンは少し落ち着きを取り戻し、吹っ飛びそうになるリボンを押さえる。
「これはシルフ様のせいじゃない！」

「Ｗｈａｔｓ　ｔｈｅ　ｈｅｌｌ？」
「別の誰かが、この風を起こしてるのさ。お前ら、知っててあいつをどうにかしに来たんじゃないのか？」
シルフは雲の向こうを指差した。
「あいつ？」
ジェーンと立花は、その指の向こうを見る。どす黒い雲。駒台の空を覆い隠し立ち込める、歪に広がった雲。その雲の中に、いた。ソレはいた。
「……あれがっ！」
立花は思わず声を上げる。自分よりも一回りは大きい、翼を持ったモノ。遠目ではハッキリとは捉えられないが、鳥の体に獣の頭を持ったソレ。雲の中、悠然と翼を広げ、今この空を支配しているモノ。

「神野君、仮点検行こうか」
「はい」
一はそう言って、鍵の束を神野に渡す。
頷いた神野は鍵を受け取り、レジの差込口に鍵を入れ、レシートを出した。
「……風、強くなったね」
「そうですね。立花たち、無事だと良いけど」
「大丈夫だよ。さ、俺らは俺らに出来る事をしよう」
「……はい。それじゃバックルーム入ってますね」
お願い。そう短く答えて、一は神野を見送る。
お願い。
お願い。
お願い。
二人ともどうか、無事に帰ってきますように。一は心の中で強く祈った。

立花は日本刀をしっかりと握りなおす。鋭く、無骨な日本刀。それは剣士の武器。竹刀袋はポケットの中にしまい込み、敵を見据える。

ジェーンはホルスターに、リボルバーをゆっくりとさし直す。眩しいぐらいの銀色。それは銃士（じゅうし）の武器。

ジェーンとと立花。二人は並んで立つ。彼女らの瞳には、『敵』が映されていた。

「一時休戦だね」

「そうネ。まずはソレを何とかしましょうか」

踏み出す一歩は力強く。

「アタシから仕掛けるワ。落とすから、そこを狙って」

「分かった。任せるよ」

向かい風など物ともせず。

「おい、お前らだけじゃ不安だからな、シルフ様も手伝ってやるよ」

「そう？　じゃあ一つだけ良いかナ？」

ジェーンが悪戯っぽく指を立てた。

「……邪魔だけはしないでネ」

「……お、おう」

「それじゃ――」

ジェーンがリボルバーを抜く。目にも留まらぬ一瞬の所作。その勢いを殺さないまま、ジェーンは地を駆けた。

「――戦闘開始（オープンコンバット）ネ！」

ソレとの距離が見る見るうちに縮まっていく。

ジェーンの後ろの立花は驚嘆の声を上げていた。

深呼吸。

ジェーンは飛ぶソレを捉える。構えるは銀の凶器。オンリーワン

アメリカ支部特製、破壊力は折り紙つきのリボルバー。
照準器（サイト）は己の目。
引き金（トリガー）は己の意思。
弾丸（ブレット）には猛る思いを。
撃鉄が雷管を叩きつけ、銃口から炸裂音。マズルファイアとともに、弾丸が飛び出した。続いて、凶暴なマズルフラッシュが飛び散っていく。ジェーンの視界が、一瞬だけ白に染まった。

あいつに向かって撃て！

欲望。強欲。貪欲。暴欲。多欲。
欲しい。あれが欲しい、これが欲しい。上りたい。上へ行きたい。空を飛びたい。欲しくて、欲しくて欲しくて欲しくて堪らない。それの何が悪い。

銃声は風に掻き消され、硝煙は風に掻き消され、弾丸は翼を貫くには至らない。だが、ソレは一発の銃声を確かに聞いた。ソレは硝煙を確かに見た。弾丸が翼を掠めるのを感じた。敵がいる。自分を狙っている敵がいる。地上から銃口が、自分の翼を、頭を、鉤爪を、宝を狙っている。見えた。二つの人間が、雲の切れ間から確かに見える。ならば、ならば殺すしかない。邪魔をするならば、死んでもらうしかない。
翼を広げよう。
瞳は捉えよう。
声を上げよう。
翼は大きく、瞳は確かに、声を高らかに。来るなら来ればいい。今、この空を支配するのは鉄の鳥でも、風の申し子でもない。自分だ。自分なのだ。
咆哮は雷鳴に。羽撃（はばた）きは嵐に。
神になる。今度こそ、自分は神になるのだ。誰にも、誰であっても、もう、邪魔はさせない。

「ミスったっ」
ジェーンは一旦銃を構えるのを止め、反撃に備える。この強風の中まだ倒れずにいる電信柱。そこに寄りかかり、ソレを見た。ソレ

は奇声を上げながら、徐々に高度を下げている。翼はこちらを威嚇するように大きく広げ、獅子の瞳は敵意を剥き出しにしていた。風と一緒に圧力が吹いてやってくる。

「くっ……」

圧されるな。押されるな。ジェーンは歯を食い縛って重圧に耐えた。頭を振って冷静さを取り戻す為に思考する。銃弾は外してしまったが、狙いは間違ってはいなかった。ソレの翼の付け根。言うなれば、関節部に当たる守りの薄い箇所。その部位に致命傷を与えれば、巨大なソレでも確実にバランスを崩す。運が良ければ地上に落ちてくるかも知れない。

もう一発、後一発だ。ジェーンは気力を振り絞り、的を睨んだ。ソレがこちらを認識した事により、戦闘の態勢を取っている。雲の中から姿を現し、戦う意思を見せている。さっきよりも的は大きい。これならば、当たる。

「お兄ちゃん……」

あの敵よりも、もっと小さくすばしっこい標的とも戦った。そして倒した。殺しきった。だから、自分はここにいる。一の近くにいられる。勤務外となって、ソレを際限なく仕留めた。その功績を認められ、オンリーワンのSVにも上り詰めた。全ては兄の為、自分の為。一の為。幼い頃の約束を糧に、何度傷ついて倒れても、歳や性別や身長を馬鹿にされても耐え続けてきた。終われない。こんな所では止まれない。

ジェーンは深く息を吸い込んだ。ソレとの戦闘は未だに怖い。いつ命を落としてもおかしくない。だから、

「お兄ちゃん」

名前を呼んで、力を貰った。ここには『兄』はいない。それでも、呼べさえすればいつも見ていてくれる気がするから。だからジェーンはリボルバーのグリップを強く握った。

隠れても無駄だ。電信柱の陰のジェーンを見据えながら、ソレは思う。

ソレが啼けば嵐が吹く。ソレが啼けば雷が落ちる。ソレが本気になれば、コンクリートや金属の柱なんて樹木と同じだ。隠れた人間ごと吹き倒してやろうか。

否。ソレは自身の考えを戒める。警戒を緩めてはいけない。ソレは片目でジェーンを監視しながら、もう片方の眼球をぎょろりと動かす。

ジェーンの後方、刀を持った勤務外。立花は何故か動こうとせず、不動の姿勢でソレをじっと見据えていた。動かない敵よりは、動く敵。ソレは標的をジェーン一人に定める。

――ゴー！

心中で叫んで、ジェーンは柱の陰から飛び出した。向かうはもう一つか、二つ先の電信柱。狙うはソレの羽部分。ジェーンは走りながら、狙いをつけずにリボルバーを撃つ。フラッシュがジェーンの姿を一瞬隠し、ソレの意識を一瞬逸らせた。通用するかは分からなかったが、とりあえずの威嚇射撃。どうやら、牽制程度には機能したらしい。

ジェーンのか細い、頼りない小さな片手でも楽に撃てる様に設計された、特注の専用銃。それでも幾らかの反動はジェーンの手首に跳ね返って来る。若干の痛みを堪えながら、ジェーンはソレを見た。ダメージを受けた様子はない。銃弾は風によって反らされてしまったらしい。

まだ、遠すぎる。距離は二十メートル前後。もっと近づかなければ、弾丸は強風に煽られてしまう。その前に、風が発生する前に叩かなければ攻撃は届かない。だが、ソレに近づけば近づくほど危険度も増していく。今のところ、ソレの攻撃手段は風と雷だけだったが、あの体躯。小柄なジェーンとは数倍もの差があった。普通にソ

レの体当たりを食らっても、鋭い爪で切り裂かれても傷は負う。下手をすれば、一気に致命傷をもらってしまう。

「……怖くナイ」

思考をカットし、今度はソレの翼へ狙いをつけた。問題ない。的は大きすぎるくらいだった。これならば目を瞑ってても当てられる。ジェーンはそう判断して、引き金を引いた。烈風の中、耳を劈く炸裂音。放たれる弾丸は見ずに、ジェーンは一気に二つ先の電信柱の陰へ身を隠す。柱へ身をやった瞬間、空気を切り裂く轟音が走った。ソレの雄叫びが次いでやって来る。

――外したっ。

確認せずとも分かった。あそこからではまだ遠い。それだけだ。ジェーンとソレとの距離は十五メートル前後に近付く。

十五メートル。危険域。安全な場所はもう無い。ジェーンがこれから行く先。ソレの近くの電信柱は、先の突風で根元から揺れていた。次に強風が吹けば、確実に倒れるだろうと予想はつく。もう時間は無い。隠れる場所も無くなった。ならば、先に仕掛けるが常套。ジェーンの動きは早かった。ソレの瞳が、飛び出したジェーンを捉えられない程度のスピードだった。走り出したジェーンは一直線にソレへ向かう。距離は十、九、八、七、六、五メートル。充分。ジェーンは薄く笑い、銃口を上空に掲げる様に出した。狙いは、翼の付け根。

「センテ……ヒッショ！」

ソレがようやくジェーンの姿を視認出来た頃にはもう遅い。

銃声が一発。銃身が大きく反動。ソレの風は間に合わない。銃弾は真っ直ぐにそこへ進む。

ソレの真下を走り抜けながら、速射の準備。ジェーンは親指と小指を使い、巧みにコッキング。掌を扇ぐような、独特の動作。西部劇でしか見られないような、ショーテクニック。

――ファニング。

本来ファニングと呼ばれる連射テクニックは、実弾を撃った反動

により、次弾以降の命中精度は落ちるものだ。実際落ちる。ジェーンとて、例外ではない。

それでもだ。ジェーンが実戦でこの魅せ技を使っている理由はモチベーションの維持、増進に他ならない。他人から見れば意味の無い、無駄な事でも、彼女には必要な事だった。小さい頃から見ていた西部のガンマン（ヒーロー）を自身に重ねる。それだけで、ジェーンの心は昂ぶる。研ぎ澄まされていく。イメージするのは、荒野に対峙する二人のガンマン。同時に抜き、同時にトリガーを引き、同時に笑う。無様に撃たれて、倒れる悪役。

立っているのは、夕陽を背にしたカウガール。

一瞬。ジェーンは一発目から殆ど間を置かないで引き金を引く。続いて二発。閃光が弾丸を隠し、ソレに襲い掛かる。既に一発。牽制で二発。今ので四発。計七発。シングルアクション、装弾数七発のジェーンのリボルバーは一端の攻撃を終えた。これで終わりだった。リロードは要らない。ジェーンの番は、もう終わり。ガンマンはこれにて役目を終えて、次は侍がやって来る。

「サボテンよりかは、難しい的だったカシラ？」

小さなカウガールは、悪役から背を向けて、銃口から立ち上る硝煙を吐息で吹き消した。

立花はソレが悲鳴を上げるのを聞いた瞬間、走り出す。走りながら立花はソレの状態を確認する。ソレの右翼は皮一枚、ぎりぎりで繋がっている状態。ジェーンが放った四発の銃弾。初弾はジェーンの狙い通り、右翼の付け根に命中した。弾丸はソレの薄い部分、皮を剥ぎ取り肉を抉り出し貫通。次弾は右翼の下部分に。三発目は二発目の着弾したすぐ上に命中。計三発が装甲の薄い部分に叩き込まれる。右翼はこれで皮一枚。最後の四発目はソレの右目を抉り出し

ていた。食い千切られた様な、獰猛な傷跡が遠目からでも良く見える。

立花の肌が粟立つ。

「……凄い」

知らず知らずのうちに、立花は賞賛の言葉を口に出していた。

あの向かい風、あの強風、雷の中。空を飛ぶソレ。手の届かない敵。正直、自分一人では戦闘を放棄していたかもしれない。手に負えない相手。それを自分よりも小さなジェーンがやってのけた。ならば、自分も応えなければならない。

ソレは飛行高度を著しく下げている状態。もはや飛んでいると言うかは、地面から少し浮いている状態。お膳立ては整った。後は、期待に応えよう。

「行くよっ」

寄らば斬る。寄らずば寄って斬る。ソレはもう立花の目と鼻の先。まずは足。立花は刀を大上段から振り下ろす。

「――――ッ！」

声にならない醜悪なソレの声。刀がソレの脚、凶悪な鉤爪に阻まれた。力勝負では立花に分が悪い。

「あああっ！」

立花は気合を込め、相手の力から逃げるように、斜め方向へ刀を振り抜く。ソレの脚が二つに裂けた。これでソレの右の翼、眼球、脚にダメージを与えた事になる。

右半身を力無く、だらりとぶら下げ、ソレは片翼だけで飛翔を試みた。飛べない。跳べない。もう空へは行けない。どんなにソレがもがいても、右半身から重力に引っ張られ、更に高度を下げていく。

続いて一閃。

銀色の光が、ソレの腹部に走った。立花の無骨な凶器が、ソレの薄皮を裂いて、肉をこそぎ落としていく。

「――――！」

痛みに耐えかね、ソレが悲鳴を上げた。血と腹の中身を地面に落としていく。コンクリートは真赤な絨毯に。

立花は返り血を嫌ってサイドステップ。ソレの垂れ下がった顔面近くに位置取り、右からの見えない一撃。死角になったそこからは、立花の姿が確認できない。成す術なく、ソレの顎に剣先が突き刺さる。

ダメージをもっと与えなくては。立花は剣先をソレの口内まで貫通させる為、刀を両手で握り、柄の部分を捻った。抉り込まれる鋭利な鉄。

ソレは抵抗すべく、残った脚を自身の顎近くに向かって蹴り上げる。狙いは言うまでも無く立花だった。

「……っ！」

ソレの意図に気付いた立花は、更に力を込め、刀を更に奥へ突き刺していった。充分に刀が刺さったところで、立花は柄を握ったまま跳ぶ。その横っ腹をソレの脚が襲った。立花はジャンプの軌道を変えて、脚へ飛び移る。靴の裏をソレの脚に乗せ、踏み台にするかのように、今度はソレの顎へと飛び移った。両手は刀の柄部分を握ったまま、立花は逆さの状態になる。不安定な姿勢でソレの顎に脚を置く。

目標を見失ったソレの脚は、情けなくその場で宙ぶらりん。

「今だっ」

立花は腕と刀を支点にして、ソレの顎から勢い良くぶら下がった。その衝撃で、ソレの口内の肉を軋ませながら、刀はずり落ちていく。

地面に降り立った立花は、鞘から抜くように刀を引いた。ソレの歯を数本持っていって、刀は主の元へ帰還する。続いて、立花は一歩踏み込みソレの喉を袈裟切り。そのまま、しゃがみ込むように姿勢を低くし、ソレの背後へと回った。

ソレは思わず振り返る。傷口からは血が滲み、直ぐに飛沫を散らせ、噴水を思わせる勢いで辺りへ放たれた。

「――――ッッ！」

声は形になっていなかった。擦れたような、気味の悪いノイズが勤務外二人の耳へ直に響く。その声に何かを感じ取り、立花は後ろへ下がった。下がらされた。怯んでしまった。

なぜ、こんな事に。

もう動かない右半身。機能しない腹部。臓物を地面にひっくり返し、声を出す事さえままならない。血液は傷口から際限なく垂れ流され、止まる気配を一向に見せず。ソレは、死を覚悟した。

だが、まだ終われない。自分はまだ、王になっちゃいない。まだ、飛び足りない。もっと、下界を見下ろしていたい。嵐を呼び、雷を起こし、羽撃いていたい。だけど、だけどだけどもう駄目だ。もう死んでしまう。だから、だからだからせめて道連れを。一人では死にたくない。

それは最後の咆哮だった。単純な音。単純な、音の暴力。音は空を揺るがし、風を呼ぶ。風はうねりを上げた。

一瞬で空気を侵略し、音波は近くにいた立花とジェーンの鼓膜にぶち込まれる。

二人は何事か叫んだが、自分たちが何と言ったのかは聞き取れない。

三半規管が直接に揺さぶられ、二人は両足で立つ事さえ困難な状況に追い込まれる。ジェーンは倒れこみ、立花は膝を突き、勤務外は動けない。

――この状況はまずい。

二人とも、そうは思ったが体が着いて行かない。動けない。間違いなく、手負いのソレ一匹でも殺されきってしまう状況。そして不幸な事に、耐久力ギリギリだった、彼女らの近くにある電信柱が遂

に崩れる。斜めになった電信柱は電線を引き込み、千切れたコードからは火花が飛び散る。やがて、二本の柱がコンクリートに激突。

轟音。

倒れた柱は、ジェーンたちには当たらなかったものの、依然として現状は変わらない。柱の倒れたときの音は、ジェーンたちの機能しなくなった聴覚では捕らえられなかったが、舞い散るコンクリートの破片、粉塵でジェーンたちは状況を理解した。そして身を引き裂くような、鋭い風。それが容赦なく彼女らに襲い掛かる。シルフの風とは違う、異質な風。

目を開けていたくない。勤務外は風から身を守るように、顔を腕で庇う。

荒れ狂う風の中、ソレが立ち上がった。

脚は切り落とされ、翼と瞳は片方ずつ失い、血液は流し放題。立ち上がったと言うには、あまりにもお粗末だったかもしれない。もはや自重を支えきれないソレは、刀で裂かれた腹部で這いずって、勤務外に近づいていく。血液と臓物を地面に擦り付けながら、ソレは瞳をぎらぎらと殺意を光らせた。

辺りには鉄の錆び付いた臭いが立ち込める。皮一枚で繋がっていたソレの右の翼は、既に千切れて地面に置きっぱなし。ソレは、残った左翼で地を掻き分けるように進む。ゆっくりと、だが確実に。ソレの巨体であっても、傷口から大量に流れ、噴き出る赤い血はもう致死量に達している筈だった。それでも、歩みを止めない。

「――――！」

ソレの、最期の咆哮だった。

「春風さん、書はここにもありません」

呼ばれた春風は答えない。黒一色のボディスーツに身を包み、腕

を組み、フェンスに背を預けたままだ。
「……やはり、ソレが持っているか」
「その可能性が、また高くなりましたね」
春風にそう答えた人物も、黒のボディスーツを身に着けている。
「……ソレの通ったルートは、これで殆ど洗ったな」
「はい。今ソレは、北駒台の勤務外と戦闘を行っているようですね。となると、やっぱり」
「ちっ、仕方ない。戦闘が終了するのを待ち、死体から探すぞ。強欲と評判のソレだ。腹の中にでも隠しているんだろうさ」
「……気が進みませんねえ」
私もだ。短く答え、春風は無感情に空を見上げた。
「戦闘している勤務外は？」
「は？」
「誰がソレと戦っていると聞いた」
「……ゴーウェストさんと、立花の六代目です」
「そうか。ならば良い。では現場に向かうぞ」
「でも、手伝いはしないんですよね？　そんで手柄を奪うみたいに――」
「――まるでハイエナだな。しかし気にするな、私たちは情報部だ」
春風は誇らしげに言う。

聴覚を失った世界の中、ジェーンは顔だけ上げて、立花を探した。周囲には粉塵が舞い上がり、電信柱は倒れて、電線は時折青い火花を上げている。そんな中、ジェーンは立花を見つけた。自分から少し離れたところに、片膝を立ててソレを見据えている。
「――――」
駄目だ。ジェーンは立花に呼びかけたが、口から漏れ出たものは声にならない。ならば、と。ジェーンは移動を試みる。しかし、膝はがくがくと震え、視界は酷くぶれていた。立ち上がれない。這う

事すら出来そうにない。気を抜けば、胃の中の物を戻してしまいそうな気持ちの悪さ。意識を集中させ、今度は迫るソレを見る。もうソレは距離を半分以上縮めていた。このままでは、二人とも殺される。心が少しずつ侵されていく。じわじわと、端のほうから恐怖がやって来る。

――もう、駄目なの？

ジェーンは敵を前にして目を瞑ってしまう。

「……ジェーンちゃん」

聞こえないはずの耳に、聞いた事のある声が届いた。ジェーンは驚き、発生源へ振り向く。思わず息を呑む。

立花が膝を立て、こちらを見つめていた。真剣な表情。二人は目と目を合わせ、思いを交わし、それだけで立花は立ち上がる。

刀を杖の代わりにして、震える体に鞭を打つ。両足が地面を掴んだところで、立花は刀を地面から抜いた。刃に未だ滴る液体を振り払い、腕を上げていく。少しふらついた、正眼の構え。心臓は平時よりも小刻みに鼓動し、息遣いも荒かった。異形の声が頭から離れない。考えも纏まらない。だから、立花は考えるのをやめた。ソレに近づけば、後は勝手に体が動いてくれる。粉塵を体で掻き分け、立花は進んだ。ゆっくりと、だが確実に。

両者が対峙する。ソレと、立花が向かい合う。

ソレはもはや動く事すら困難な様子で、それでも獣の瞳は敵を掴んで離さない。

立花は足を引き摺りながら、虚ろな、それでも手負いの獣を思わせる瞳で敵を捉える。

そこから、二体の獣は動かない。警戒しているのでも、なんでもない。ただ、動かないだけ。ソレは舌を出して、必死に空気を舐めている。意識を繋ぎとめようと、必死になっている。立花は、顔を上げているのが辛くなり下を向く。

「――っ！」

誰の声かは分からないが、立花にそれが届いた。弾かれるように前を見る。ソレの翼が向かってきていた。

いつの間に、何で。

叫ぶ事すら忘れて、立花は刀で翼を受け止める。しかし、すぐに力負けして、立花は翼に押し込まれるように吹っ飛んだ。

――あ。

ここで倒れたら、二度と起き上がれないような気がする。それでも、立花はもう抵抗できなかった。背後に、冷たい地面が迫るのが分かる。それでも、立花は、もう。

優しい、風が吹いた。

その風が、立花の体を支える。倒れそうになる立花を繋ぎとめた。

「これ、はっ」

肺に残った空気を吐きながら、立花は目を見開く。足は地面に、腕は刀に体重を預けながら。視線は、風に。

「シルフ様を忘れてもらっちゃ困るね、ニンゲンどもめ」

そこには、緑の帽子を被った幼い精霊がいた。

「……シルフ？」

何故、キミが。立花は問う。

「何でって……。関係無い。関係無いぞ。そうさ、そうだよ、そうなのさ！　シルフ様がいる限り、そう簡単に駒台（ここ）はやらせないぞ。それだけなのさ！　良いかニンゲン、シルフ様は少しばかり油断して影にやられちゃったけど、そんでもってニンゲンなんかに助けられちゃったけど、シルフ様は風のせーれーなのさ！　ニンゲンなん

かが気安く声を掛けて良い存在じゃないのさ！」
だけど、とそう繋げてシルフは風を舞い上がらせた。
「仕方ないけど、借りがあるのさ！　せーれーはしんせーでげんかくなモノなんだ！　気に入ったニンゲンの！　あいつの周りぐらい助けられなくて、せーれーとは呼ばれないんだ、だからっ！」
立花の周りを風が覆う。優しく、傍にあるだけで力が湧いてくるような、そんな風だった。
「シルフ様の代わりに、あいつを倒せ」
「……ありがとう」
力が入る。足は地にしっかりと吸い付き、腕はしっかりと柄を握れた。瞳には光が戻り、立花は歩く。走る。駆ける。
「うあああっ！」
刀が振り落とされ、ソレの残った翼が切り落とされる。もはや悲鳴を上げることさえソレには出来なかった。
立花はもう返り血は気にしない。風が勝手に降りかかるモノを払ってくれるから。返す刀でソレの左目を薙ぐ。
ソレの視界が黒に染まった。もう、空を見ることすら叶わない。
「でやあっ！」
立花の声はソレにも聞こえた。鈍い痛みがソレの体に走る。もう、どこを斬られたのかも分からない。だが、自分の意識が徐々に薄れていくのは分かる。
その光景を見ていたジェーンは息を吐いた。安堵の溜め息。誰が見ても、もう勝負は決した。
立花は、刀を振り払う。ソレの体液が地面に降り注がれた。
シルフは何の感慨も持たず、ただソレを見た。

今度こそ、終わりだった。
空を、獅子の首が舞っている。
最後に空を、風を感じながら死んでいくソレは幸せだったのだろ

うか。

砦

何も無い。
岩と砂。土と石。それ以外には何も無い。生きているものは、殆ど何も無い。荒れた野には乾いた風が吹き抜ける。砂を巻き上げ、土を舐め、岩を削り、石を転がす。
「面倒くせえなぁ……」
誰かが呟いた。心底嫌そうに。心底めんどくさそうに。呟いた言葉は、無限とも思える空間へ消えていく。誰にも届かず、誰にも伝わらず、誰も受け取らない。

男が座り込んでいた。

荒れ果てた地に腰を下ろした男が一人。ぼさぼさの髪の毛を掻き毟り、遠くを見つめ、男は呟く。
「仕事だりぃなあ、行きたくねぇなあ、サボっちまおうかなぁ」
男は上半身には何も身に着けておらず、唯一、ぼろきれの様なズボンだけが男の裸体を隠していた。
「皆死んでくれたら良いのになぁ、死なねぇかなぁ、死ねよなぁ」
ぼやいて、男は地面に力無く寝そべる。
「あー、もう考えたくねぇ」
「そうは行かない。仕事よ、掃除屋」
どこから。いつから。初めからその場にいたかのような自然さで、女が現れて男に声を掛けた。
「……あんたかい」
男はその女に視線を向けず、地面の上で大の字になった。
「あんた言ったよな？　腕が治るまで代わりに働けってさぁ」
「言ったわね。そして仕事を請けたのはあなたよ」
女は包帯を巻いた右腕を、男に見せるよう掲げる。

「いつになったら治るんだ？　あんた、仕事を俺に押し付けすぎだよ、もうやだね」
「……しょうがないわね、今回の仕事が終わったら少し休みをあげるわ」
暗い空を見上げたまま、
「それだけかぁ？」
男はがっかりした様な口調で言う。
「あなただけ特別扱いするわけにはいかないのよ」
「あーあーあー。しょうがねぇ。じゃあだるいけどとっとと終わらせますか」
足だけを使って、男が器用に立ち上がった。猫背のせいでそうは見えないが、百八十センチはある体躯。
「……勿体無いわね、まともにしてれば女も寄り付くんじゃない？」
女は、本心からそう思う。尤も、女にとって掃除屋の男は自分の好みではなかったが。
「んー？　そうかぁ？」
男は伸び放題の顎髭を弄りながらあくびを一つ。興味が無さそうにアキレス腱を伸ばし、もう一つあくび。
「外へ出る前に身支度ぐらいは整えておいてね」
「……へいへい。ところで、今度は何を斬りゃ良いんだ？」
「いつも通り、ソレの死体よ」
「げえっ、だからこの仕事は嫌なんだよなぁ、あー、なんか行きたくなくなってきたなぁ、あー、前みたいな奴だったら楽だったのになぁ。俺がやんなくても殆ど燃えカスしか残ってなかったもんなぁ」
男は肩を落とした。
「そのときはそのときで、退屈すぎて嫌だなんて言ってたじゃない」
「その前に虫は嫌いだって言ったのになぁ……」
「蜘蛛は虫じゃないわよ」
「え？　そうなのか、ふーん。あー、どうでもいい」
荒野にぽかりと、穴が開く。何も無かった空間に、突如開いた穴。

先は見通せず、黒一色に染まった穴。
「さ、よろしくね」
その穴を見ながら、男は深く溜め息。
「何だか、いつもコレが苦手なんだよなぁ、嫌だなぁ」
「男しての尊厳が、そのまま飲み込まれる感じよね」
「他人事だなぁ、あんた」
「そうよ。他人事だもの。あなた風に言うと、『どうでも良い』ってのも付け加えて良いかしら？」
男はぼやく。その呟きは、すぐに掻き消され、誰にも届かなかった。

「やべー、外ひでェなオイ」
店内に慌しく入る人影。赤いジャージに短い金髪。目つきは悪く、人当たりの良くない雰囲気。
「こんなんじゃ客なンて来やしねェよ！　店閉めようぜ！」
「コンビニは２４時間空いてなきゃ意味ないでしょ」
三森だった。
一は三森に物怖じせず近づく。
「ンな事ねーよ、言っとくけどな、田舎のコンビニなんてこんな時間じゃとっくに閉めてンぞ」
「じゃあ田舎のコンビニに行けば良いじゃないですか」
「馬鹿かお前、田舎になンか住めるかよ」
「いろんな人に失礼ですよ、三森さん」
うっせぇ、と一の脛を蹴っ飛ばして、三森は近くにいた神野に気付いた。
「お。おー、お前が新人か」
凶暴な、まるで野獣のような三森の双眸に見つめられた神野の背筋が伸びる。
「あ、は、はい。か、神野剣です！　よろしくお願いします！」

「へっ、元気あンじゃねーか。どこかの口うるさいボケとは違うぜ」
そう言ってから三森は一を愉しそうに眺めた。
鬱陶しそうに、視線から逃れた一はジト目になる。
「……悪かったですね、口うるさくて」
その問いに、更に三森は愉しそうに口元を歪めた。
「おいおい、おいおいおい！　お前の事とは誰も言ってねーだろ？」
「目は口ほどに物を言うって知ってますか？」
「うっせぇな、目玉潰すぞカス」
そこで三森は、学ラン姿の神野が大事そうに抱えているものに気付く。
「ン？　何だ何だ、サービス利いてンじゃねェかよ」
「え？」
「使わせてもらうぜ」
そう言って三森は、神野から真っ白なタオルを奪い取った。
「あ……」
「三森さん、それは駄目です」
「あー？」
三森を止めたのは神野ではなく、一だった。
神野は何とも言えない表情で、一を見る。
「私がこれをどう使おうが、私の勝手だろーがよ」
「そのタオルが三森さんの物なら構いません。けどそれは三森さんのじゃないんですよ、な、そうだろ神野君？」
「あ、は、はい。すいません、三森、さん」
不機嫌そうに三森は二人を見比べた。
「……じゃあ、誰のだってンだよ？」
「あ、た、立花のです。今、外でソレと戦ってるから、雨で濡れてるんじゃないかって」
「あー……」
三森は流石にばつが悪そうに頭を掻く。タオルを神野の手に戻し、
「悪かったな」と小さく謝った。

「って事はあれか、やっぱりこの天気はソレのせいかよ。迷惑な奴だな」
誰の目も見ずに、三森は話題を変える。
「全くその通りですね、夜勤の時間にまで食い込むぐらい手ごわい奴ですし。お陰でジェーンの代わりに俺が深夜入らなきゃいけない始末ですよ」
「あ？　何だ、今日はチビじゃなくてお前かよ」
「ちゃんと仕事して下さいよ。仮眠室で寝ようとしたら怒りますからね」
「分かった分かった。お前こそ途中で眠くなったとか言うンじゃねーぞ、そこに顔叩き込むからな」
おでんの鍋を指差して、三森はバックルームに入っていく。
「……ジェーン、早く帰ってこないかなー」
一は願望を口にした。多分、もうしばらくは叶いそうもない願望を。

風は少しずつ弱まり、雨は止んだ。どす黒かった雲も散っていき、雷の音もしなくなる。
穏やかになりつつある空を見上げ、
「……ふう、疲れた」
立花は刀をしまいながら呟いた。
「こんなで値を上げちゃ、ショーバイ上がったりヨ」
「何だか変に聞こえるなあ、それよりジェーンちゃんは大丈夫なの？」
「心配ゴム用ネ、タチバナこそ平気？」
「うん。ありがとう」
屈託無く、立花は微笑む。
ジェーンは一瞬たじろいだ。自分よりも年上の、あどけない仕草。
「……やっぱり、ヤだな」

さっきまで憎み合って、戦っていたのに。何故、その相手に対して笑えるんだろう。そんな顔を、出来るのだろう。ジェーンは少し立花が羨ましくなった。

「？　ジェーンちゃん、何か言った？」

「Ｎｏ。それより、早く帰るわヨ。お兄ちゃんが待ってるし、処理係が来るだろうしネ」

「しょり？」

立花にとっては、聞きなれない単語だった。聞き返し、ジェーンの返答を待つ。

「……ソレの死体を片付ける人たち」

ジェーンはやがて、苦々しくそれだけ言った。

「死体を？」

「ええ、ケド見ててエキサイトするものでもナイ。だから、早く帰りまショウ」

「そっか、分かった。じゃあ行こう。……キミはどうするの？」

立花はシルフに声を掛けた。

シルフは答えることなく、動かなくなった、ソレだったモノを見つめている。

「シルフ？」

ジェーンの呼びかけに、シルフは目を覚まされたかのように体を震わせた。

「ん。あ、ああ、シルフ様はもう少しこの辺にいるよ」

「ソウ？　じゃあ、またね」

「うん、あいつによろしくな」

ジェーンは頷き、シルフに背を向ける。

立花もジェーンに続くように、そうした。二人は歩き出す。風が吹く。そして。しばらく歩いてから、同時に振り向いた。

黒い風。

ソレの死体の前に、二つの人影が降り立った。影は降り立ち、すぐにソレへ駆け寄る。そして、作業を始めた。

その、二つの影の片方は、細く、しなやかなシルエットをしていた。黒いボディスーツに全身を包み、長い髪を縛った女。

――春風、麗。

その隣、春風と同じくボディスーツに身を包んだ人物。その人物の顔は分からなかった。顔に覆面のようなものを掛けていたからだ。

「な、何だよ！」

一番春風たちに近かったシルフが叫ぶ。

その二人は何事もなかったかのように、作業を続ける。

「何してんだよ！？」

それもそのはずだった。シルフには理解できなかった。

春風たちは穢れる事も厭わず、未だ乾かぬ、全身を血に染められたソレの切り開かれた腹に、手を突っ込んでいたからだ。

「や、やめろよ！」

シルフの、懇願にも似た叫びは届かない。

春風とその連れは、ひたすらにソレの体を、体内を弄繰り回す。

無表情で、無感情に。

「もうやめろよ！！」

遂にシルフの涙腺から、涙が零れた。シルフ自身にも、何故何故涙が出たのか、意味が分からなかった。敵。ソレは敵。あいつは敵。

「やめてくれ！」

それなのに、敵の死体を好きなようにされているだけだったのに。

シルフは悲しかった。悔しかった。何故だか、腹が立った。

「もうやめろよバカァ！」

「ハンズアップ、ハルカゼ」

甲高く、子供っぽい甘い声。
春風は作業の手を止める。止めざるを得ない。背中に銃口を、これでもかと押し付けられれば誰だって。
「……私に用でもあるのか、ジェーンゴーウェスト？」
「とりあえず、それから離れなさい」
「それとは？」
ジェーンは無言でグリップに力を込めた。
「……アタシは別に、このままトリガーを引いても構わナイのヨ」
冷たさを充分に含ませ、ジェーンは囁くように言う。
「は、はるかぜさぁん」
隣には、立花に刀を突きつけられた情けない顔の部下がいた。
春風はとりあえず、勤務外の支持に従う事を決めた。間抜けが二人揃ったと、内心苦笑する。
「了解した。銃口を下ろせ、ジェーンゴーウェスト」
「それはムリね」
「何故だ？　私は何もしないぞ」
「Ｔｏｏ　ｌａｔｅ。あの子を泣かせたからヨ」
そう言って、ジェーンは強引に春風の向きを変えた。
「ちっ、何を――」
変えた先、シルフがいた。赤く目を腫らした、帽子を被った風の精霊。
「シルフ、好きにしても良いのヨ？」
「……別に良い。何もしたくない」
シルフは大仰に首を振った。
「ふっ、殊勝な子供だな」
瞬間、春風の背中の肉に、銃口が食い込む。
「余計なコトは言わないで」
「お、おいニンゲン。やり過ぎじゃないか？」
「……シルフ？」
「シ、シルフ様は別にもう気にしてないから。ちょっとびっくりし

ただけだから」
「ケド、アナタ何かされたんじゃないノ？」
「私は何もしていない」
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！　シルフ？　怖がらなくても良いの。しっかり裁判で証言して、それから――」
「ち、違うよ！　何もされてない。ただ、こいつらがソレの死体を触ってて、何だか、無性に腹が立って、それで……」
それからシルフは俯いて、黙った。
「目的は？」
ジェーンは冷たい目で春風に問いかける。
「答えられん」
「情報部がここまでヤるなんて、どういった風のフキマワシかしら？」
「……ふん、そう言えば今日の風は強かったな」
ジェーンは銃口を春風の背中から外し、後頭部に勢いも強く押し付けた。
「なめんじゃないわヨ、情報部」
「粋がるな、勤務外」
「……勤務外の特権をご存知カシラ？」
「ほう、私を殺す気か？」
「『を』じゃなくて、『も』ヨ。タチバナ？」
急に声を掛けられた立花は、慌てながらもジェーンに応えた。刃の切っ先がぎらつく。突きつけられている覆面の男の全身が粟立った。
「え、え？　殺しちゃ駄目なんじゃなかったっけ？」
「プランは変更よ。Ｂプランに移行するワ」
「Ｂプランなんて聞いてないよ！」
「今決めたノ！　良いからやっちゃいなさい、キリステゴメン！」
「で、でも……」
「はるかぜさあん！　もう喋っちゃいましょうよ！　こんな所で死

にたくないですよ！」
覆面の男が情けない声を上げる。
「……仕方ない。こうまで時間を掛けられてはもう遅いからな」
春風は至極つまらなさそうに呟いた。
「時間？」
「私たちは、ソレが盗み出した書を探していたのだ。タルタロスに恩が売れるからな」
どこかで聞いたような台詞を春風は口にする。
「だが、もう遅い。見ろ、ゴーウェスト」
「……そういう事ネ」

それは、黒いバンだった。異様な雰囲気を引きつれ、車は停まる。重々しく、物悲しい雰囲気。その場にいた全員が息を呑んだ。まるで霊柩車のようだとも、誰かが思う。
「来たか、葬儀屋」
春風が忌々しげに言った。
「……あれが、処理係？」
「……そうさ、あれが」
ジェーンは唇を強く噛み、それを見た。
車の助手席から現れたのは男だった。上半身は裸で、下半身には辛うじてぼろきれを身に纏い、髪はぼさぼさで猫背。全体的にだらしなさを漂わせる、そんな男。この場にはそぐわない、気だるい雰囲気を連れ込み、男は少しだけ目を見開いた。
「あれ、先客？」
「……葬儀屋か。気にするな、私たちはすぐにこの場から消え去る」
春風が応える。
「あ、そ。何だぁ面倒くせぇ、結局俺かよ。あーあ」
ぼやきながら、男が持っていた鞘から刀を引き抜く。
「……日本刀」

立花は、熱に浮かされたように、ぼうっと呟いた。月明かりに照らされる、透き通った刀身。不精な男には似合わない、綺麗な獲物。
「それじゃ、始めますかね」
男は片手に刀を持ち、相変わらずの猫背でソレの死体に近づく。
そして、死体を斬った。何の前触れも無く、タメも無く、男は普通にソレを斬った。刀がソレに触れるたび、肉も皮も裂かれ、骨が断たれる。だが、不思議な事に何の音もしなかった。
無音の剣筋。

「帰るぞ、漣（さざなみ）」
「え、で、でも」
「もう遅いと言っただろう」
「い、良いんですか？」
ふと、春風は男を見た。葬儀屋を見た。
「……地獄が伝染（うつ）るぞ。それでも良いのか？」
「う。そ、そうですよね」
漣と呼ばれた覆面の男は慌てて頷く。
「ふっ、ではな勤務外」
ジェーンは立ち去っていく情報部には、もう目もくれなかった。
「タチバナ、帰るわヨ」
「……」
案の定、返事はない。立花は先ほどから魂を抜かれたように呆けていた。
漠然と、何か嫌な予感がする。ジェーンは立花の肩を掴んだ。
「返事ぐらいしたらどうなのカシラ？」
少しおどけて、声を掛ける。
「……ん、ん」
「？　タチバナ？」
「……あの人、早いね」

「……アナタ……？」
肩に置かれた腕を振り払い、立花が一歩踏み出した。ソレへと、男へと向かって。
「お、おい！　ニンゲン、シルフ様は別にもう気にしてないから！」
「――関係無いよ。ごめんね」
提げていた竹刀袋から刀を取り出し、立花は鯉口を切る。
しまった、と。後ろでジェーンがそう思ったときにはもう遅かった。
立花は、ソレの解体を続ける男に切りかかっていく。背後から、前触れもなく、容赦なく。
男は気付いていないのか、ひたすらに死体を切り刻む。見る見るうちにソレの死体は二つに、四つに、八つに、十六、三十二、六十四。百二十八。意味を成さないパーツに分かれていく。寸断、分断、断裂、分解分別分離分割。頭を、肩を、胴を、腰を足を羽を脚を。男の剣筋は早く、肉を断つ音も、骨を裂く音も、何も。何も音がしなかった。
――凄い。
ずっとその剣捌きを見ていた立花は思う。男の太刀筋は、今までに見たことが無いものだった。もしかしたら我流かもしれない。とにかく早いのだ。タメがない。隙がない。構えがない。男の剣は早い。立花ですら、集中していなければ、見えはしない。
もう我慢は出来ない。所詮、立花は立花なのだ。
「いざ！」
獣が吼えた。

男は解体作業の途中、背後からの剣閃に気付いた。
「……いざって、後ろからそりゃねぇよなぁ」
男はソレの腹を切り裂き、返す刀で背後の、立花の刀を弾く。その勢いで、今度はソレの上腕を断ち割った。続いて、立花の二撃目

を捌く。流した刀はソレの腰だった部分を更に両断。大上段からの、力の篭った立花の打ち下ろし。

男は刀を合わせ、合わせたと同時に蹴りを後ろへ放った。

立花はそこで迷う。防御か、回避か、それとも蹴りを食らってでも攻めを継続するか。

「う、ああっ！」

攻めを継続！立花は一層の力を腕に込める。

「強引だねぇ、嫌だ嫌だ」

覚悟を決めた立花の腹部に男の足が入った。強烈なミドルキック。

「……っ！」

だが、耐えられないレベルではない。立花は痛みを堪え、突き進む。

ふと、男の足が動いた。立花の腹部から足を離し、腿に一発、流れるような動きで左右の脛に一発ずつ踵で打つ。

下半身の踏ん張りが利かなくなり、立花の力が弱まった。

その隙に男は立花を押し返す。

立花は尻餅を着き、男を見据えた。

男はソレの解体を続ける。

向かってくる立花に止めも刺さず、仕事を続けていた。

「ボクを、立花を舐めるな！」

立花は怒りのままに声を荒げる。今まで、こんな屈辱は受けたことが無かった。剣ならば、剣の腕だけならば、こんな事は。

「……おいおい。お嬢ちゃん、いきなり切りかかって来てそりゃ無いんじゃないの？」

「あ、貴方の腕が悪い。剣を握るものならば、これは仕方の無い事です」

「ふぅん、今日はやけに評価される日だねぇ。面倒くせぇったらねぇ」

立花は一呼吸置いた。少し、冷静になろうと努力する。
「な、なぜ、貴方はこんな事をしているのですか？」
ひとまずは会話。そして本心からの興味。
「うぅん？　こんな事って、こんな事かぁ？」
男は軽口を叩きながらも、決して手は止めない。既に、ソレの死体は殆ど原型を留めていなかった。
「貴方ほどの実力があるのなら、こんな、こんな死体など斬らなくても……」
立花は俯く。悲しそうに。
何を勝手に。
「おいおい、そりゃ嬢ちゃんに言われるこったねぇよ。俺が好きにやってんだ。死体斬ろうが生きてるもん斬ろうが、俺の腕が凄かろうが凄くなかろうが、結局は働かなきゃならねぇ。人間様のためになぁ。そんなら、楽な方が良いんだよ。同じ面倒くせぇことなら、少しでも面倒くさくない方を選ぶのが俺さぁ」
「処理係や葬儀屋と呼ばれ、悔しくはないのですか？」
「掃除屋とも呼ばれてるぜ、俺は」
「……剣士としての誇りは、ないのですか？」
その言葉を聞いて、男が鼻で笑った。
「この時代に剣士かい？　嬢ちゃん、中々の腕前だが、それじゃあ駄目だ。それだけじゃあ駄目なんだ」
「ボクはっ、ボクにはこれしかない！」
「……そうかい。仕方ねぇ。言って素直に聞くタイプにゃ見えねぇし、面倒だけどこれが終わるまでは相手してやろうかね、ほら、どうした？」
男は立花を見ようともしない。
「言われなくてもっ」
立花は柄をしっかりと握りなおし、男へ向かった。
雨が、また降り始めていた。

ジェーンはもう手を出さない事に決めた。
「……遊ばれてる」
立花と男の力量には差がある。剣を握ったことのないジェーンでも、それは分かった。そして、決して埋まらない差ではない。手が届く、それぐらいの差なのだ。
しかし今の立花は、どうも冷静さを欠いている。それでは勝負はつかない。掃除屋は立花と対等に勝負する気が無さそうだし、立花はそもそも勝負できる状態ではない。ソレとの連戦で体力的にもベストではない。どうせ、掃除屋の仕事が終わればそこで終わりなのだ。
だから。
「な、なあ？　助けなくて良いのか？」
シルフはおたおたと宙を舞う。
「ドウセ、もう少しで終わる事ヨ」
「け、けどさぁ？」
「雨も降ってるシ、すぐにあいつは帰るからノープロブレムよ」
「？　どういう事？」
ふ、と。優しい表情でジェーンはシルフを見た。
「……アナタに説明してもしょうがナイ」
「な、なっ、シルフ様を馬鹿にしてるな！」
「子供は知らなくて良いノ」
「お前だってチビだし、子供じゃん！」
確かに。ジェーンはシルフの言った事に納得する。
「あの頃に戻りたいな」
「お前、ババアだな」

男は片付いた死体、死体だったものを見て頷いた。
「こんなもんかな」

後は別の掃除屋が死体を持ち帰ってくれるだろう。雨が降っているし、血もそのままで問題は無さそうだ。そう判断した男は刀を下ろす。

「ボクはっ！？」

立花は目の前で武器を下ろした男へ、苛立ち混じりに叫んだ。

「あー、そっか。じゃ、ここまでな」

男はそこで、初めて振り返る。向かってくる刀に臆することなく、拳を作り、刀の腹を突いた。

「素手でっ？」

「中々良かったぜ、嬢ちゃん」

払った刀と立花に興味を失ったのか、男はもう完全に背を向ける。

「ま、待って！」

「それじゃあなぁ」

男はゆっくりと、だるそうに車まで歩き出した。

立花は、もう追えない。完全に自分の負けだと、そう思った。

黒いバンは男を乗せると、すぐにここから立ち去っていく。

その後姿を、立花はただただ見送る事しか出来なかった。彼女の頬を、水滴が伝い落ちる。雨が、降り始めていた。

一はカウンターに頬杖をつき、時計を見ながら溜め息を吐く。もう、何度目の溜め息だろうか。春風がいれば、また後ろから『八回目だ』なんて囁かれるのだろうか。

「お前、眠いんじゃないだろうな？」

「……あくびじゃないですよ」

くだらない考えを、一は頭の隅に追いやった。

「あっそ。しかしおせぇなチビども」

「立花さんは、三森さんより背が高いじゃないですか」

「年は私のほうが上だろうが、頭腐ってンのかてめぇ」

「あー、そうですね。ごめんなさいごめんなさい」

適当に手を振りながら、一は外を眺める。小刻みにガラスを叩く音。

「あ、雨だ」

「……また降って来やがった。朝までに止まねェかな」

「どうでしょうかねー」

「別にてめェにゃ聞いちゃいねーよ」

「……どうしろって言うんですか」

「なあ肉まん食って良い？」

「廃棄には早いですよ。ま、どうせ客は来ないでしょうけど」

一は振り続ける雨を見ながら、ため息をつく。

「おいコーヒー取ってくれ」

「さっきから食ってばっかじゃないですか！」

「食ってねぇよ、飲んでンだ」

「どっちも同じですよ！」

「お前も飲めば良いじゃねェか」

三森はレジ前の、ホットドリンクのケースから適当な缶を見繕い、一に差し出す。

「……ヤです」

「へっ、駄目じゃなくてイヤかよ。お前も一応勤務外なんだから、気にしなくて良いっつーのにさ」

豪快に言い放ち、三森はコーヒーを一口で飲み干した。

「なあ、煙草吸ってきて良いか？」

「……さっきも吸ってたじゃないですか」

「一々かてェ奴だなお前はよ。そんなンじゃ人生つまんねーぞ」

「面白かった事なんて、俺の人生には滅多に無かったですよ」

一は什器に貼られた紙を確認する。紙には、ホットスナックの廃棄すべき時間が書かれていた。

「……相変わらず馬鹿みたいに仕込むから」

一はビニール袋に、廃棄になった商品を詰めていく。

「お。廃棄？　じゃ裏行って来るわ」

三森はその袋を掴むと、軽やかな足取りでカウンターを出て行った。

「あー！　仕事サボっちゃ駄目って言ったじゃないですか！」

「休憩だよ、休憩」

それだけ言うと、三森はバックルームへと姿を消す。

「……老害め」

一は何の気なしに、カウンターに置かれたままの缶コーヒーを手にした。

――勤務外は、金を払わなくても。

「無茶苦茶だ」

飲まない。一は決心して、缶をケースに戻す。

それが、一の最後の砦だった。

果たして、この店に人間は何人いるのだろうか。何人残っているのか。何人、人間だったのだろうか。自分も、人間なのか。

一は頭を振る。

「みんな、人間だよな」

独り言は、誰にも届かない。

眠り姫

「先輩、私なら覚悟は出来ているぞ」
「俺には出来てねぇ。って言うか、何にもしねぇよ。付いて来いって言っただけじゃねぇか」
「皆まで言うな、先輩。ふふ、先輩の言うことには逆らわない。先輩の行くところならどこまでも。そんな私を知っての先輩の誘いだ。覚悟しないわけにはいかんだろう？」
「知らねぇよ！　しかも結構逆らうしお前！」
「奴隷にも発言権ぐらいはあって然るべきものだとは思わないか？」
「ね、奴隷って誰が誰の？　お前さっきから頭おかしいぞ」
「先輩といるときの私は、やはり律しようとしてもおかしくなる。駄目だ、自分でも分かってはいるのだが、この胸の膨らみは抑えられない」
「お前胸無いじゃん」
「心配は無用だ。私は先輩の好みに合わせて変身する事が出来る」
「じゃ早田お前生まれ変わってみ？　おにぎりとかに」
「そして先輩が私を食べる、か。良いだろう、愛する人の血肉となるのもまた至上の喜びだ」
「いや、駅前の鳩にでも食わすわ」
「ふふ、先輩は照れ屋だな」
「……さり気なく腕を組もうとするな」
一は心底後悔した。

いつも通りの、一の朝だった。深夜勤務を終えて、家に帰り、午後からは大学の授業に参加する。何故か、ジェーンの様子がおかしかったのは一には気がかりだったが、それも込みで、一にはいつも通りの朝だった。

朝が終われば昼が来る。一は糸原に留守を頼み、部屋から出た。
そこまでが、いつも通りの一の朝だった。

「突然の来訪、大変申し訳ない。一さん、今はお時間大丈夫ですか？」

アパートを出た一を馬鹿丁寧な言葉遣いが出迎えた。

「え……何で？」

一は間抜けな声を出す。

醜悪な、悪魔のような姿。翼を持ち、自分の意思で自在に飛び回る異形のソレ。

「……ガ、ガーゴイル？」

「ええ、その通りです。一さんの記憶力は良いと見ました。ところで、今からお出かけですか？」

ガーゴイルが、そこにいた。久しぶりに会った友人と接するような気さくさで。

「お出かけっつーか、まあ、大学へ」

「ははあ、一さんは学生さんだった訳ですか。なるほど、では仕方ありません」

残念そうに言うと、ガーゴイルは翼を広げる。

「あ、ちょっと待てよ。良いよ、何か用事があったんだろ？」

「ですが、一さんは学校へ行くのでは？」

「話聞いてからでも遅くないよ。どうせ、今からじゃ午後の講義しか受けられないし」

「一さんは気遣いが出来ると見ます。あり難い。それでは、どこか落ち着ける場所で話をしましょうか」

「……うん」

お前がそれを言うか。一は心中で突っ込みを入れた。

「……俺の部屋には糸原さんいるしな……」

「では、先日の山の入り口付近ではどうでしょう？　あそこなら人

も滅多に来ませんし、都合が良いと見ますが」
「そうだな。分かった、じゃあ先に行って待っててくれ。なるべく急ぐから」
「いえ、そこまで急ぎの用事では無いので、一さんが焦る事は無いと見ます」
「そ、そうか？」
「ですが、せっかくの会話する機会です。時間はあった方が良いでしょう、とわたしは見ます」
「分かった。ま、なるべく早く行くよ」
「お待ちしています」
それだけ言うと、ガーゴイルは翼を広げて、駒台山の方へ飛んでいく。
「……寝起きにはきつい顔だったな」
しかし、会話している分には問題ない。何と言っても、ガーゴイルには知性がある。会話が出来る。まともな、世間話が出来る。ソレとの会話。複雑な気分になりながらも、一は少し嬉しかった。そしてやはり、近しい人間とそんな会話が出来ない事に気づき、悲しくもなった。

一は大学の講義はスッパリと切り捨て、大学前の入り口に着くと、少しだけ講義棟を眺めてから、煙草に火を点け、山へと歩き出した。眼下の風景を眺めながら、コートのボタンを全て閉める。やはり、山の上へ上へ行くほど、寒さが身に染みてきた。
「お待ちしていました」
「お、わざわざわりぃな。遅かった？」
「いえ、それほどでも無いと、わたしは見ます」
まるで山の管理者のように振る舞い、ガーゴイルは坂の上から現れる。
「それじゃ、とりあえず歩きながら話そうか」

「そうですね。ところで一さん、先日の嵐は酷かったですね」
「ああ、あの嵐。ソレのせいだったんだよありゃ。お陰で俺は夜勤に入れられちまった」
「それは災難ですね。しかし、そうですか、やはりソレの起こした嵐だったのですか」
ガーゴイルは考え込む素振りを見せた。
「何か、気付いてたのか？」
「少し、あの日の風雨に違和感を見ました。どうも、駒台に居座っているシルフさんの風とは違うものだな、と。わたしはそう見ていました」
「へえ、何でも分かるんだな」
「それほどでもありません。ああ、山に着きましたね。どうです一さん、ここに掛けては？」
ガーゴイルは割と綺麗な、平たい、座りやすそうな石を指す。
「ん。じゃあ座らせてもらうわ」
別にガーゴイルの所有する物でもないのだが、一はつい素直にお礼を言ってしまった。座り込み、コートのポケットから煙草を取り出す。
「あ。煙草吸って、良い？」
「構いません。わたしは嫌煙家でも愛煙家でもありませんし」
「そっか。……何か違う気がするけど」
最後の方は小声で言いながら、一はライターで煙草に火を点けた。
「ふぅ。お前、今まではどうしてたんだ？」
「日本の北の方まで行っていました。アイヌと仰る方々の集落にお邪魔してましたね」
「そらまた。随分遠くの話に聞こえるよ」
「同じ日本ならば、一さんも今度来て見ませんか？」
「俺寒いところは苦手なんだよ。そこには、こたつとアイスはあんのか？」
「ああ、失礼。そこまでは見ていませんでした。ですが、アイスな

らばそこらにあるのでは無いでしょうか？」
「……そりゃ、あるよね」
一は煙を吐き出し、短くなった煙草を地面に押し付ける。
「一さんは、何か変わったことはありましたか？」
「……お前にはどう見える？」
「言い難いですが……。特に何も、変わったところは見られませんね」
「じゃあ、そうなんだろうなあ」
「変わらないと言うのは、悪い話ではないとわたしは見ますが」
ガーゴイルは取り繕うように言った。その仕草がどうにも人間らしく思えたので、一は苦笑する。
「確かにその通りだと俺も思うよ。けど、やっぱ少しぐらいは変わったって言って欲しかったな」
「一さん、少しぐらいは変わりましたよ」
「額面どおりに受け取って、律儀に返すんじゃねぇよ！」
「ああ、やはり怒らせてしまいましたか。すいません、まだその辺りの、機微というものがいまいち見えないものでして」
「あー、そっか。いや、けど大分進歩というか、馬鹿な人間よか話し甲斐があるけどな」
「ふうむ、そうですか？　では、わたしは額面どおりに受け取って喜ぶとしましょう」
一はやはり苦笑した。分かってやってんじゃないだろうな。一はガーゴイルも変わっていなくて、少し安心する。そして、何故この時期にガーゴイルがやって来たのか。
「でさ、こう言うのもなんだけど、用ってのは何だったんだ？」
疑問を口にする。
「……会話に興じていて、すっかり忘れていました」
「おいおい」
「実は、この先の洋館に人が住み着いたらしいのです」
「洋館？」

一は思い出す。この先を進んだところの、中腹にある寂れた館。
以前、一がフリーランス二人組と出会い、他でもないガーゴイルと出会った場所。その時、ガーゴイルはその洋館の、屋根の上から街を見下ろしていた。
「……つーか、そうだよな、普通、家があったら住む人がいるよな」
「いえ、そうではないのです。わたしがあそこにいた頃、誰も住んではいませんでした」
「え？　じゃあ、人が住みだしたのはつい最近の事じゃないか？」
なんとも、絶妙なタイミングだった。
「わたしもそう見ます。駒台に戻り、やはり洋館の屋根に立ち寄ったのですが、どうにも、人の雰囲気がありまして。視線を感じたので、逃げる様にそこを立ち去ったのですが」
「ああ、見られるのには慣れてないんだな」
「恥ずかしながら」
「ふうん。あんなトコロに、人が、ねえ」
一は腕を組み、洋館の方角を見上げる。
「わたしとしては、あそこが気に入っているので、何とかならないものかと見まして。こんな事を頼めるのは、駒台では一さんしかいないんですよ」
「……んー、そう言われちゃ、俺としては何とかしてあげたいんだけど、洋館の所有者だろ？　上手い事交渉出来れば良いけど、難しい話だよなぁ」
「やはり、難しいですか」
「けど、他ならないガーゴイルの頼みだ。何とかしてみよう」
「感謝の極みです」
ガーゴイルは、心のこもっているのかいないのか、無機質な声でそう言った。
「情報が欲しいな。どんな人が住んでるのか分かるか？　家族なのか独り身なのか。男か女か、年寄りか、若い人なのか。それだけでも対処のしようがあるんだけどさ」

「ふうむ。わたしの見たところ、女性が独りで住んでいたように見えましたが」
「……若い？」
「少なくとも、わたしにはそう見えました」
「なら間違いないな。しっかし、若い女の一人暮らしか」
一は石から立ち上がり、砂埃を払う。
「一さんとわたしでは、女性の警戒心を煽って交渉まで持ち込めないと見ます」
「……言うなよ」
分かってんだから、と、一は加えた。
「俺が一人で行ってもナンパか何かに思われちゃうかもしんないしな」
「でしたら、誰か女性を連れてくれれば宜しいのでは？」
「なん……だと？」
一は考える。知っている女性。尚且つ、こんな山まで付いてきてくれそうな女性。
まず三森は除外した。殺されそうだ。同じような理由で、店長も無理そうだ。では、糸原はどうだろう。何だかんだ言って、付いては来てくれそうだが。余計な厄介事まで持ち込んできそうだ。一は却下する。次にジェーン。多分に、自分が『兄』である事を考えても、ジェーンは付いて来てくれるだろうと、一は思った。少し、自惚れてみる。しかし、なるべくなら『妹』に頼りたくないと言うのが一の考えだった。パス。立花。
「高校生か……」
「？　いえ、家人は学生では無いようですが」
と言うか、一が何も言わなくても、勝手に付いて来そうな気がする。そして非常に面倒だった。
「俺って、交友関係狭いのかな」
「それは、わたしには何とも言えないと見ますが」
「んー。ここまで付いてきてくれて、話をややこしくしないでくれ

て、誘っても別に良い奴」
「……遊びの関係ですね」
「違う。違うぞそれは」
一は首を振って、ガーゴイルの間違いを正す。
「あ。いや、いた。いたぞ、そいつでいこう」
「ははあ、誰かいたんですね。さすが一さん」
「良し。話は俺が付けるから、ガーゴイルはその辺にいてくれ」
「協力者の方に挨拶はしないで宜しいのですか？」
「ぅ。うん。そこはそれ、気にしないでくれ」
「分かりました」

一はガーゴイルにひとまずの別れを告げ、大学へ向かった。講義の為ではない。
一はゼミ室まで行き、図書館をうろつき、グラウンドを端から端まで眺め、広場の真ん中のベンチで豪快にいびきをかいていた早田早紀を発見した。
「お、いたいた。おい、早田」
一は早田に近付き、眠っているのにもお構いなしで声を掛ける。
「ん、んん？」
「起きろよ」
「んー？　二の腕？　逞しいな……」
「あー、そうだね逞しいね。ちょっと、おい、頼みがあんだけど」
「……え？　食べても良いのか？」
早田の口から涎が零れた。
「だ、駄目駄目！　食べちゃ駄目だろ！　涎垂らすな、みっともねぇぞ！」
「んー……」
ゆっくりと瞼を開け、早田の無垢な瞳が一を捉える。一と視線を交錯させると、早田は何故か頬を朱に染め、

「せ、先輩っ？　酷い、酷いではないか」
乙女のように恥らった。
「酷いのはお前の夢の内容だよ」
ポケットティッシュを差し出し、一は早田に無理矢理握らせる。
「先輩、これで何を？　まさか……」
「うん、そのまさかだよ。早く涎拭けって」
「あ、ああ。何だ、すまない。てっきり私は先輩が不埒な事を……」
「謝ってるつもりかてめぇ。それより、目は覚めたか？」
「ああ。先輩の気配を感じた瞬間に覚醒していたぞ」
嘘付け、言いながら一は笑った。
「早田、頼みがあるんだけどさ」
「引き受けた。私は何をすれば良いのだ？」
「……少しは考えても良いんだけど。って言うか考える材料すら与えてないんだけど」
「ふふ、先輩の頼みを断る物か。さあ、先輩！　好きなように私を弄んでくれ！」
「ンな事頼んでないし頼むつもりもこの先ねぇよ！」
胸を張る早田に、一は頭を抱える。
「？　では私はどうすれば良いのだ？」
「あそこの山の、洋館まで付いてきてくれれば良いんだよ」
「……そうか、人目につかないそこで行為に至る訳だな」
「至らないよ。断じて至らないから。付いてきてくれれば良いの」
「分かった。先輩が言う事に間違いは無いからな。ふふ、デートか」
「えっ？　俺そんな事言ったっけ？」
「しかし、デートなんて私はした事が無いな。どうすれば良いのだ？」
早田はベンチに座って首を傾げた。
「……良いよ良いよ、そんなの考えなくて」
「そうか、ではお言葉に甘えて先輩のリードに従うとしよう。服従の証として、私は何をすれば良い？」

「そういうのも考えなくて良いから」
「先輩、気にせずにデートの間は私の事を『雌豚』と呼んでくれ」
「デートじゃないじゃんそれ！　何でそんな事言うのお前！？　あ！　いや、勘違いすんなよ、そもそもデートじゃないからな」
「そうか。私は勘違いしていたのか……。なんて恥さらしなんだ……」
しょんぼりと、早田は頭をうな垂れる。
そもそも、人の集まる広場のベンチで、涎垂らして豪快にいびきまでかいている時点で、恥も見栄も外聞も無かった。一はそんな事はおくびにも出さず、面倒くさそうに溜め息を吐いた。
「死のう」
ぽつり、と早田がそんな言葉を唐突に言う。
「えっ？　いや、そこまで言わなくて良いから」
「いや、私は死ぬ。先輩に多大な迷惑を被らせたのだ。おめおめと生き恥を晒すわけにはいかない。デートだなんて、一介の女学生のような、浮かれた考えを口にした私は早田家の恥曝し、愚か者だ。死して屍疲労骨折。デートだなんて、私は、ああ、私は。私は死ぬ。先輩、介錯を頼む。今から私は首を括って死のうと思う」
「……分かったよ、デートで良いよ。デートだよ、はいはい。これで良いか？」
「先輩の滑舌が悪くて聞こえなかった」
「せめて自分の耳が悪いって言えよ！　分かったよ！　ごめん！　早田、デートに行かないか！？　な？　俺が悪かったよ、頼むから付いてきてくれよ、この通り」
頭を下げ、一は心で泣いた。何でこんな事を言わされているんだろうか、と。
「こういうのも、たまには悪くないな」
「おい！　その笑い方は止めろ！　後輩が尊敬してる先輩に向ける笑顔じゃねぇよそんなの！」
「あ、ああ。すまない、そんなつもりは無かったのだが――ふふ」

「もう！　最後まで隠し切れよ、お馬鹿！」
「ところで先輩、お昼はどうするんだ？」
「昼？　昼ならもう食べてきたぞ」
「そうか……、ちなみに私は先輩との昼食を楽しみにしてて何も食べていないぞ」
「お前午前の授業からここで寝てたろ？　なあ寝てたろ？　そりゃ飯食ってる暇なんかねぇよな、しょうがねぇよな？　良し、行くぞ」
　一は話を打ち切り、早田に背中を向ける。
「そこで先輩が『お腹が減ったのなら僕の○○○を食べなよ！』なんて、なんて言ってくれたら好感度アップだったぞ。むしろ感度が高まる」
「……○○○には何が入るんだ？　顔だよな？　いや、顔でもやばいけどそうだよな？」
「僕の♪♪♪を食べなよ！」
「そこを鼻歌で誤魔化しちゃ駄目だろ！」
「むしろもう僕が君を食べて良いかい？」
「ああ、構わないよ」
「じゃあ、服を脱いで……」
「せ、先輩？　少しだけ待ってくれないか？　ここは人目につきすぎる、もっと人の少ない、今の時間なら、第二講義棟の裏で……」
「もう駄目だ、お前が悪いんだ。我慢できない」
「ふふ、先輩の言うことを無碍にする訳にはいかないな。だが一つだけ頼みがある」
「ああ、早田の言うことなら何でも聞くよ」
「私の事を激しく罵倒してくれ」
　途中から一人で喋る早田を、一は奇怪な生物を見るような目つきで眺める。やはり、ガーゴイルと話している方が人間らしい会話だったかな、と。一はそう遠い目をしながら思った。

一は心底後悔していた。

昼食を食べ損ねた早田を食堂へ連れて行き、奢らされ、坂道を早足で上り、山の入り口に着き、腕を組もうとする早田を押しのけ、洋館までの道を歩く。

ガーゴイルは一らの前に姿を現さない。

「先輩、二人きりだな」

「そうだな。ミスったよ」

「こんな人気の無い山の中に二人きり、ふふ」

「人選ミスったよ、楯列でも連れてくれば良かった」

「先輩、私と一緒にいる間くらい、あの害――他の女の名前を出さなくても良いだろう。先輩は私に対するデリカシーに欠けている。もっと私を大切にしてくれても構わないのではないか？　釣った魚には餌をあげないのが先輩のポリシーだとしてもだ」

「早田。楯列は害虫でもなければ女でもない。デリカシーが欠けているのはお前だし、俺はお前を釣った覚えは無いぞ」

「違う、それは違うぞ先輩」

「……何が違うんだよ」

「害虫じゃない。害毒だ、先輩。それこそ、奴の事を害虫と称しては、害虫に失礼だと思わないか？」

「おい！　俺の尻を触ろうとするな！」

ガーゴイルは、一たちの前に姿を現さない。

「はっ、すまない。無意識の内に手が伸びていたらしい」

「あっそ。裁判でもそんな事が言えれば良いな」

「ところで先輩、ずっと聞くのを躊躇っていたんだが、駒台山（こんなところ）までどんな用向きがあるのだ？」

「山って言うか、洋館に用があるんだよ。言わなかったっけ？」

「聞いた。この私が先輩の言葉一言一句聞き逃すはずがないだろう。私はその洋館まで、先輩が、何故、出向かなければいけないのかを

聞いている」
「……んー」
一は差しさわりの無いように、具体的に言えばソレが絡んでいる事を伏せて、かいつまんで早田に説明する。早田はその説明を、時折相槌を混ぜながら素直に聞いた。
「成る程、合点がいった。先輩は寛大な方だ。悪逆非道が蔓延り、天魔外道が跳梁し、狂気が蠢く世知辛い今の世の中で人助けだったとは、いやはや、この早田早紀、改めて先輩に恐れ入る。さすがは私の認めた方だ。これからは先輩などと、気安く呼ぶことは出来ないな」
「いや別に先輩で――」
「これからは、はじめちゃんと呼ばせてもらおう」
「――良いっつってんだろ！　親にすらちゃん付けされるのを嫌がってたんだぞ俺は！」
「ならば呼び捨てで構わないか？」
「お前俺に敬意払う気ないだろ！　実はもう先輩とすら思ってないだろ！」
「……やはり先輩に隠し事は出来ないな。実は……」
「あー！　嘘！　やっぱり聞きたくない！　なんだかイヤだ凄く寂しくなる予感がする！」
「ふふ、冗談に決まっているではないか。先輩は私にとっていつまでも先輩なのだ。天地がひっくり返ろうが、死んだ者が蘇ろうが、どんな事が起ころうが、先輩は先輩だ。それだけは変わらないぞ」
「……そうですか」
一は照れたようにそっぽを向く。
早田は悪戯っぽく笑うと、ごく自然に、一の腕に自分の腕を絡みつかせた。
一はその腕をゆっくりと外していく。
「先輩、何故だ！？」
「いや、鬱陶しかったからなんですけど」

「はじめちゃん、酷い！」
「てめぇ……だったら俺もお前の呼び方を変えなければいけないようだな」
「？　私は構わない。それこそ、先輩との仲が縮まったようで非常に愉快だ。心が躍るぞ」
「こんにちは、こんな所で奇遇ですね、早田さん」
「距離感を感じるぞ、先輩」
「あ、じゃあ僕はもう行きますね。早田さん、部活頑張って下さいね」
「何の変哲も無い言葉なのに、胸が引き裂かれそうだ！」
「って接して良い？」
早田は無言で、ふるふると首を横に振った。
「じゃあ、もうはじめちゃんって呼ぶなよ」
「分かった。時と場合を考えよう」
「ケースバイケースじゃないの！　一生呼ぶなって言ってんだ！」
「では私と先輩が結婚したらどうする？　私はなんと呼べば良いんだ？　『先輩』では先輩の気持ちが萎えてしまうかも知れないんだぞ」
「疑問系でさも二人の問題みたく言ってんじゃねぇよ。前提がまずおかしいよ。頭おかしいよ」
「結婚はしないのか？」
「え？　あ、ああ普通の返しだな。うん、しないよ」
「そうか、まあ先輩はそう思っていてくれて構わないが」
「……『が』ってなんだよ？」
「気にしないでくれて構わない、が」
「強調してんじゃねぇかよ！」
「そんな事はない。が」
「ルビに点が付いてそうなぐらい強調してる！？」
「む。あれが件の洋館ではないのか？」
早田が指差す先、確かに洋館が見えた。少し開けた、山の中腹。

二人はそこに足を踏み入れる。
「中々趣のある館だな。街のラブホテルとは天と地ほどの差がある」
「そうですね。それじゃ俺はそこの人と話があるから、横で黙って突っ立っていてくれ」
「了解した」
一は館のドアに近づいていき、チャイムが無いか確認した。
「……無いな」
「先輩は失礼だな」
「胸押さえながら何言っちゃってんのお前？」
とりあえず、一はノックを一回。二回、三回。強めに一回。二回、三回。
「出ないな」
「すまない」
「胸押さえながら何言っちゃってんのお前？」
「それより、さっきから先輩は何をやっているのだ？」
「見りゃわかんだろが。ノックだよ、ノック。館の人と話があんの」
「ふむ。そうか」
早田は一から一歩距離を取る。
「……何で離れるの？」
「ウチの祖母が言っていた、怪しい人には近づくな、と」
「変質者？　どこにいるんだ、そんな奴」
一は辺りを注意深く見回した。
早田が、もう一歩距離を取っている。
「おい。まさか俺が変質者って事か？」
「遺憾ながら」
「ふざけてんじゃねぇよ、それよかチャイムが無いか探してくれよ。埒が明かねぇ」
「ふざけているのは先輩ではないか。初体験はムードが大事だと聞くぞ、なのに先輩と来たら意味の分からない行動を取る始末だ。緊張しているのか？」

「……？」

フラッシュ音。

「許可無く写メ撮るなよ！」

「すまない。先輩のきょとんとした顔が壺に嵌ってしまった」

「良いから説明してくれよ。何で俺が変質者なんだ？」

「先輩は誰もいない家のドアをノックするのか？」

「は？」

「無人の建物のチャイムを探し、誰もいないのに誰かいるかのごとく振る舞うのか？」

「何言ってんだ？　だって、ここには人が住んでるんだぞ」

「……住んでいない。ここには誰も住んでいないだろうに。人の生きている気配がしないぞ。洗濯物も干されていない、館の外壁を見てみろ先輩、築数十年では利かないぞ、この廃墟。家は人が住まなくなると朽ちるのが早くなる。まさにそれを体現をしているではないか、ここは」

早田は神妙な面持ちで館を指差した。

「いや、だって俺は――」

「――誰か住んでいると聞かされたのか？　では、誰に？」

「誰って……」

ガーゴイル。

知性があり、どこまでも自由な旅人。醜悪な、悪魔の姿をした客観的な第三者。一の話し相手。

「先輩、答えてくれ。誰に聞いたのだ？」

「……それは……」

――ソレ。

ソレに聞いた。ソレに聞いた。ソレが言った。ここに、誰か、住

んでいると。
「早田、正直に答えろよ？　ここに誰も住んでないって、マジか？」
「部活でもここの館は話題に上ったことがある。大学の近くの、曰く付きのスポットだからな。三回生が見物に来た事があるらしい。そして、中にも入ったらしい。誰も住んでいないと、私はそう聞いている。そして今初めて館を見たが、断定できる。ここに人はいない。先輩もそうは思わないのか？」
　早田の真剣な眼差しを見ずとも、一には分かっていた。
「……だよな。じゃあ、何で……」
　ガーゴイルが嘘を吐いた。
「ありえねぇ……」
　少なくとも一には、その可能性は考えられなかった。嘘を吐く理由も、吐かれる理由も存在しないように思える。
「先輩が意味の無い嘘をつくとは思えない。先輩が何者かに騙されているとも思えない。先輩は馬鹿ではない。それでは、実際に建物の中に入って確かめてみようではないか」
「え？」
　フラッシュ音。
「だから写メ撮んなよ！」
「先輩の不思議そうにしている仕草がたまらなかった」
「機械音痴の癖に。そういう機能だけピンポイントに使いこなしやがって……」
「良し。ではドアを開けるぞ」
「いや、鍵閉まって――」
　どごっ、と。何かがめり込む鈍い音。一はその音に思わず耳を塞いだ。静かな森の中で、その音だけが響き、やけにうるさく聞こえる。
「な、おい……」
「どうした、行かないのか？」
　ドアのノブが完膚なきまでに破壊されていた。

「やべえ、怒られるぞ馬鹿！」
一は青ざめながら早田を怒鳴りつける。
「む。少し乱暴すぎたか」
「せめてそこのガラスを小さく割ってさ、鍵を開ければ被害は少なくて済んだんだよ」
あくまで。
「む。その手があったか」
早田は石を掴み、歩いていく。そして立ち止まり、徐に腕を振り上げ、下ろした。耳を劈く破壊音。ガラスとガラスのぶつかり合う気味の悪い音。
一の血の気が引いていく。
「馬鹿っ！」
「この手段は先輩が考えたのだぞ？」
周囲に舞い散るガラス片を物ともせず、早田は言い放った。
「ドア壊したんだからガラス割る必要はねぇだろうが！」
「む。失敗失敗。では先輩、次はどこを壊す？」
「目覚めてんじゃねぇよ！　もういい、犯人はお前だ、俺は知らない、中に入るぞ」
「待ってくれ主犯」
「さり気なく俺を引き入れるな主犯」
一はもうどうでも良くなり、館に入る。入った瞬間、独特のかび臭さと空気が一の鼻をついた。思い切りその空気を吸い込んでしまい、激しく咳き込み、早田に背中を摩られる。一旦外に出て深呼吸し、もう一度館へ入る。一歩進むごとに床は軋んだ音を立て、埃が舞い上がった。
「かび臭いな。こりゃ、本当に誰もいないのか」
「うん、電気も通って無さそうだ。物音もしないぞ」
「しかし、中は割と豪華だな」
館の廊下には騎士や悪魔を象った像が立ち並び、壁には抽象画が掛けられていた。尤も、一にはその価値が分からない。

「誰かいませんかー？」
「先輩、侵入した後では無駄だぞ」
「ポーズだよ、ポーズ」
館内の光源は、窓から差し込む日の光だけ。薄暗く、淀んだ空気を一たちは掻き分け進む。
「汚れが溜まっていて気づかなかったが、レッドカーペットだなこれは」
早田が足元に視線を落とし、感慨深げに言う。
「その様子だと、中に入ったって言う先輩から話は聞いていなかったのか？」
「ああ、三回生の人か。そうだな、口が利ける状態ではなかったからな」
「……冗談はやめろよ」
「すまない、先輩の怯える顔を見てみたかった。その人はチームの要として今も活躍している。私の後を継いでもおかしくない逸材だ」
「突っ込みどころ満載だー」
「む。階段があるぞ先輩」
「よし、暗くて怖いから先に行け後輩」
「嫌だ。リードしてくれ、先輩」
「今更！？　お前完全に俺の手綱振り解いて行動してたじゃん！」
「私も怖い」
「ニヤニヤしながら言っても説得力ないからな。ほら、後で『良くやった』って言ってやるから」
「それだけじゃ足りないな、先輩。私も安く見られたものだ。『良くやった雌豚』ぐらい言って貰わなければ納得出来ない」
「さっさと行けよ雌豚」
「ふふ、その意気だ」
「帰りてぇ……」

階段を上りきると、館内のかび臭さは一層の強さを増した。薄暗い廊下は、来訪者を拒んでいるように見える。
「先輩、二手に分かれて探索してみないか？」
「……唐突だな。まあ、別に良いけど」
一の気は進まなかった。一人になる事が怖かったのだ。薄暗い洋館を一人で歩く事が、ではない。もっと別の何かを感じていた。しかし後輩の手前、一は頷かざるを得なかった。
「では右と左、先輩はどちらに行きたい？」
「どっちでも良いよ」
「先輩は何利きだ？」
「右」
「では私は左を行こう」
「分かった。早田、やばくなったら大声出せよ。飛んでくから」
「先輩、先輩の厚意は有り難いのだが、人間は悲しいかな、飛行することの出来ない生物なのだ」
「言葉のあやだ」
一は面倒くさそうに手を振った。あっちいけのジェスチャー。
そして一は足を踏み出す。左へ。
早田は不思議そうに一を見た。
「あれ？」
「……先輩は左右の区別が付くと思っていたのだが」
「いや、付くよ。っかしいな」
一にも訳が分からない。とにかく、もう一度足を踏み出した。
「また左だぞ。先輩、右は箸を持つ方の手だ」
「お母さんみたいに優しく諭すな。勝手に足が動くんだから仕方ないだろ」
「では仕方ない。私が右へ行こう」
「……ん、頼む」
「先輩、危ないと思ったら大声を出すんだ。そうすれば直ぐに飛んでいく」

「へっ、人間は飛べないんだろ」
「人間ならば、な」
「意味深！？」

颯爽と歩く早田を少しだけ見送り、一は左へと進む。廊下を少し歩くと扉があった。ノブを回すも、ビクともしない。
「……外れ、と」
更に進む。扉を発見。ノブを回す。開かない。
「また外れ」
進み、扉を見つけ、ノブを回す。その作業を二回繰り返し、一は突き当たりにある、少し大きな扉を見つけた。ここで行き止まり。この扉で、終わり。
「……よっしゃ」
ノブに手を掛ける。ぎいい、と、軋んだ音を立て、少しずつ扉が開いた。廊下の窓、陽光が部屋の輪郭を露にしていく。
一は息を呑んだ。部屋の中に窓は無いようで、真っ暗だった。早田を呼ぼうかとも一は考えたが、声を出すのが億劫でそのまま一人で部屋に入っていく。窓の光で僅かに照らされた部屋。部屋の中、照らし出されたのは天蓋の付いたベッドだった。
それ以外、一の目には映らない。誇り一つ被っていないカーペットも、価値のある調度品だろうと、一の目にはベッドしか映らない。何でだろうと、疑問にも思わない。

ベッドで安らかな寝息を立てる、女にしか目がいかない。

整った顔立ち。シーツで大部分は隠されているが、その上からでも、女性の体は細く、多分に美しいものだと一には理解出来た。彼女は、眠っている彼女は高貴だった。声を出すのも、息をするのも、何をするのも憚られた。そんな風に一は感じる。かび臭い廊下と違

い、部屋には別の香りが立ち込めていた。一もどこかで嗅いだことのある、誘われるような類のもの。

「バラ……？」

それだけで、一は気圧された。自分が部屋に入ってはいけないような、そんな気持ちに襲われる。

バラの香りの中、豪奢な天蓋ベッドで眠る女性。一の目が釘付けになった。

見てはいけない。そう思っても、どうしようも出来ない。頭は真っ白で、足元も覚束ない。手は何もない宙を掻き、息がし辛い。曖昧な状態のまま、一は部屋の中へもう一歩踏み出した。

一の手が何かにぶつかる。部屋の中の、甲冑に全身を包んだ騎士の像。年月が立ち、朽ちかけていたのだろうか。一の手が騎士の篭手を掠め、甲高い金属音を出しながらその篭手がカーペットの上に落ちる。柔らかい音がした。その音で、一は目が覚める。一の頭の中から白い靄が消えていく。ハッとして、ベッドへ目を遣った。

「……」

衣擦れの音が部屋を支配する。女性が身動ぎするのが確認出来た。起こしてしまった。それどころか、不法侵入ではないのか。一はどこか場違いな、現実的な考えに思考回路を預けた。

「……随分長い間、眠っていたようね。ふぁ……」

あくび交じりの寝ぼけた声。

「あ、そ、その」

「……君、だれ？」

一は何とか言い訳を考える。だが、考えが纏まる前に女性が身を起こした。女性の瞼は完全に開ききっていない。少しだけ覗く瞳は、澄んだ青。

「……名前は？」

「っと、俺、の？」

ゆっくりと女性が首を振る。
「あ、に、一一、です。そ、それより、あのスミマセン！　勝手に家に入るつもりは、そのあるにはあったんですけど、やむを得ない事情と言いますか、如何ともし難い事態に巻き込まれてしまいまして、と、とにかく申し訳ありません！」
必死で謝罪する一をボケッとした様子で眺めながら、女性は「ん？」と小首を傾げた。ややあってから。
「……名前、長いんだね。えっと？　ニ、ニノマエハジメデスソ、ソレヨリ……」
「ああ！　ち、違います！　俺の名前は一一です」
「……あーなんだあ、そっかあ、そうなんだあ」
「……お、怒ってないんですか？　勝手に家に上がりこまれて、寝てるの邪魔されて、しかも、その、もしかしたら入ってきたのは泥棒かもしれなかったんですよ」
一はまだ、ドアとガラスを破壊したことは伏せてみた。
「……んー？」
女性の反応は鈍い。
「いや、だから」
「……すぅ」
女性の首がガクンと垂れ下がる。
「う、うわっ！　この人寝てる！」
「……あー、ごめんね。起きたばかりで眠いの」
「は、はあ……」
「……えーっと、怒ってないかって？」
「え、あ、はい。そうです」
女性は「んーん」と首を横に振る。酷くのんびりとした動作。
「……今回は、君なんだね」
「えっと、何が、ですか？」
「……いーの」
一には女性の言っている事が何のことだか全くもって理解が出来

なかったが、とりあえず怒られる事もなく、場合によれば、なあなあで逃げ切れると踏んで安堵した。そして女性が寝起きである以上、事態の発展は望めないとも踏んだ。

「あの、俺も用事があって来たんです。けど、今日のところは申し訳ないんですがお暇させていただきます」

女性は「ん」と短く答え、枕に頭をぽんと置いた。

一は女性に何か言おうとしたが、すぐに寝息が聞こえてきたので諦める。

「意味が分かんねえ……」

「全くだ」

ひっ、と一が短く悲鳴を上げた。

「先輩、どうしたのだ？　イイ表情をしているぞ」

突然現れた早田は愉しそうに笑う。

「ど、どこから出てきたんだよ」

「向こうからだ」

「一番端じゃねぇか、本当に飛んできたのかよ」

「うん。先輩の危機を感じたからな」

「その割には、何もしてくれなかったじゃないか」

「？　先輩は横で突っ立っていろと、私にそう言わなかったか？」

「言った。でも機転を利かせて欲しかった」

「そうか。次回は努力する」

一は心底後悔した。

眠り姫（後書き）

完全に趣味に走った。

怒り姫

燃え盛る炎に囲まれ、彼女は眠っていた。

「つまり、失敗してしまった訳ですね」
「う、面目ない。でも交渉が決裂した訳じゃない」
一は駒台山入り口付近の平石に座って、煙草を吹かしている。その向かいにはガーゴイル。
「協力者の方にも、申し訳ないと見ます」
「……そのお詫びとか言われて、今の今まで引っ張りまわされたよ」
「ははあ、デートですね」
「好きに言ってくれ」

一が館に（不法）侵入してから、数時間が経過していた。
館で眠っていた女性。
不法侵入、器物破損。いずれも罪に問われることは無く、一と早田は館を出た。早田は無駄足だと一を非難して（館に人がいた事は無視し続けていた）、お詫びのデートだと称し、一を引きつれて駒台の街を数時間歩き続けた。

「足がパンパンだぜ」
脹脛を摩りながら、一が情けない声を出す。
「……お気の毒です。そして申し訳ないんですが一さん、あの館はもう駄目なんでしょうか？」
ガーゴイルは館を恨めしそうに見つめた。
「分からない。そもそも交渉にすら持ち込めなかった。連れてく奴

をミスったぜ」
「では、余地は残されているのですか？」
「うん。とりあえず、今からもう一度行ってみようと思う。ちゃんと謝ってもいないし」
そう言うと、一は傍に置いてあった大きな紙袋を手に取り立ち上がる。
「お詫びの品も持ってきたし、今度は邪魔も入らねぇ」
「ふうむ、期待しても宜しいのですか？」
「するのは勝手だよ。問題は俺がそれに応えられるかどうかだね」
自嘲気味に言い捨て、一が歩き出す。
「わたしはどうしましょうか？」
「そこで待っててくれ」

館の中は先刻一たちが入ったときと同様、かび臭さが立ち込めていた。一は手で口元を押さえ、ゆっくりと廊下を歩く。階段を探しながら、周囲に目を配った。日も落ち始め、館内はオレンジに照らされている。一種幻想的な光景だった。
一は頭を振って、階段に足を向ける。一段、二段、階段を上るにつれかび臭さは増していく。階段を上りきると、左側の廊下を進み、行き止まりに突き当たった。他の部屋の扉より、幾分か大きい扉。ノックをして、ノブを回す。容易く扉は開いた。瞬間、バラの香りが一の鼻腔をくすぐる。館内のかび臭さが一掃されていく。
一の頭が、白くなった。ぼんやりと、視線が虚ろをさ迷う。室内の闇と、窓からの光が交差し、混じっていく。
一は気を取り直し、咳払いをした。
「あの、一です。先ほどはすみませんでした……」
天蓋ベッドで眠る女性から返事は無い。
「……お休みのところ、申し訳ないんですが」
乗りかかった船だ。帰ろうかと一は思ったが、ここまで来ればも

うなる様になると踏んだ。
「……んー？」
瞼を擦りながら、女性がゆっくりと体を起こす。
「入っても宜しいですか？」
「……あー、君かあ。うん、いいよー……」
「失礼します」
目が慣れない。暗い中、一は周囲に気を配りながらベッドに近づく。
「あの、これ……」
「……それはぁ？」
一の差し出した紙袋を女性が認めた。
「つまらない物ですが、お詫びの品です」
「……お詫び？」
「ええ、勝手に部屋に入って、お休みのところを起こしてしまって、その、だから」
そこまで言うと、一は急に恥ずかしくなる。自分は本当にとんでもない事をしてしまったと、罪の意識が芽生え始める。
「……んー？　私は気にしてないよう」
「そ、そうなんですか？　じゃ、じゃあお近づきの印という事で。とにかく受け取ってもらえますか？」
そうでないと、女性に対して本当に申し訳なかった。
「……ん、そういう事なら」
「助かります」
女性は紙袋を受け取ると、大事そうに紙袋を抱える。
「それで、重ね重ね申し訳ないんですが、お願いがありまして」
一は女性と目を合わせられず、視線を泳がせた。
「……お願い？」
「ええ。俺の友人が、その、あなたの家の屋根を借りたいと」
女性はきょとんと小首を傾げる。
そりゃそうだよな、と一は自身の発言を恥じた。

「……屋根？」
「意味が分からないとは思うんですけど。あ、いえ、決して面倒な事にはならないと思います。絶対にご迷惑はお掛けしません」
絶大な迷惑を掛けた後の発言だったが。
「……んー」
女性は瞼を閉じる。
「やっぱり、駄目ですよね」
一はとにかくここから出たくてしょうがなかった。
そんな一の気を知ってか知らずか、女性は愚図愚図として答えを出さない。
「……良いよー、使って」
「え？　い、良いんですか？　その、ここまで迷惑を掛けちゃって」
女性はふるふると首を横に振る。
「……迷惑とは思ってないから」
「あ、ありがとうございます」
「……あ、私もお願いがあるの」
ふと、女性が部屋の壁を見た。
「俺に出来る事なら、何でも」
「……カーテンを開けて欲しいの」
「カーテン？」
一も女性の視線の先を見る。目を凝らすと、布のような物が揺れているのが分かった。
「お安い御用です」
一は足元に気をつけながら壁際まで歩く。指で手触りを確かめてみると、それは確かにカーテンだった。何故か、少し躊躇ってからゆっくりと、カーテンを引いていく。少しずつ、窓からの光がもれ出て一の体と暗い部屋を眩く照らした。
「……う」
一の目が眩む。急激な明暗。視界が真っ白に塗り変わっていく。
「……ありがとう」

「いえ、これぐらい」
　完全に開ききらない瞼をほったらかしに、一は女性へと振り向いた。
　茶色掛かった、仄かに赤い髪。寝癖の付いたセミロング。今までは、薄暗がりの中ハッキリしなかった女性の容貌。光を得た事によって鮮やかに、女性の姿態が一の網膜に焼きついた。
　女性は一に笑いかける。
「……眩しいね」
「……ええ、そうですね」
　一の心臓が不意に高鳴った。

　その日、糸原四乃はスーパーへと買い物に行く途中だった。黒いスーツに身を包み、駒台の街を鼻歌交じりで闊歩する。背が高く、流れるような黒髪。糸原のスタイルに異性は皆振り向いた。その中には声を掛けてくる者もいたが、
「ねえねえ、君さあ、今一人？」
「ん？　見りゃ分かるでしょ」
「じゃあ俺と遊びに行かない？」
「遊びぃ？」
「そ。今からさ、皆でカラオケ行くんだけどー、可愛い子が足りないんだよねぇ」
「へえ、って事は私が可愛いってこと？」
「そ、そう！　その通りさ。どうかな？　君みたいな子がいれば絶対盛り上がるし！」
「……ふーん。ねえ、アンタ今いくつ？」
「へっ？　じゅ、十九だけど」
「あらら、残念ね。お姉さんより年上になれたらまたおいで。二秒ぐらい考えてあげる」
「なっ、そんな事言わないでさあ、なあ良いだろ？　イイ思いさせ

てやれるって、な？」
「気安く触ってんじゃないわよ」
「――っ！　いてぇ！　てめぇよくも俺の顔に！」
「……ガキに興味ないって言ってんのよ！」
「――ちょっ、まっ！　あ――――！」
糸原のお眼鏡に適う男はいなかった。それでも、声を掛けられる事に悪い気はしなかったので、糸原は上機嫌になっている。知らず知らずのうちに、にやけているぐらいに。自然と足取りも軽くなり、糸原は浮かれていた。

「風船欲しい？」

背後の気配に、気づかないほどに。
「……っ！」
糸原はその声に、弾かれるようにして振り向いた。
「そーんなに怖がらなくたっていーじゃない」
「アンタ、何？」
「えー？　見て分からないかなー？」
糸原の後ろに立った人物は、色とりどりの風船を両手に持って、愉しげに口元を歪めていた。その人物の顔は真っ白に、目元や頬は真赤に塗られている。紫の口紅が、やけに糸原の目を引いた。魔法使いの被るような、珍妙な帽子を頭に載せてそいつは笑う。赤、緑、青。三色のまだら模様の服装を着込み、只管楽しげに笑う。
糸原も、その正体は一目見ただけで分かった。
「……ピエロ」
「せいかーい！　ほらお姉ちゃん、風船あげるよ」
陽気な声を上げ、ピエロはその場で軽快なステップを踏む。
「要らないわよ！」
派手な化粧に派手な衣装。糸原も何度か、どこかで見たことがある。サーカスか、遊園地の出し物か何か。記憶は定かではないが、

見たことは確実にある。人々を愉快にさせる道化師。
「これ、なんかのイベント？」
「そう！　イベントお祭りパーティーさ！　楽しくて楽しくてしょうがないんだ！」
何故、ここにピエロがいるのか。
「アンタが楽しんでどうすんのよ」
「ははっ、だって仕方ないだろ！　遂に僕らの番が来た！　楽しくて可笑しくて滑稽さ！　滑稽なのさ！」
「……何よこれ」
糸原は周りを見た。さっきまでは糸原以外にも通行人がいたのに、何故か今は誰もいない。自分だけがこの道に取り残されたかのような疎外感を糸原は覚える。この道に、自分だけ。自分と、ピエロ、だけ。
「あはははははははは！」
ぞくり、と、鳥肌が立ち、背中が粟立った。酷く、糸原の癇に障る笑い声だった。男なのか女なのかハッキリしない中途半端に高い声。
「……とりあえず、私に付いて来ないでよ」
糸原はピエロに背を向ける。
「あはははは、ねえ？　いっちゃうのー、お姉ちゃん？」
問いには答えず、糸原は歩調を速めた。
「仕方ないなー、つまんないなー」
大方近くのデパートの宣伝だろう、そう思い糸原は己を納得させる。そうでもしないと、気持ちが悪くて仕方が無かった。
「じゃあね、勤務外」
陽気さなんて、一欠けらも残っていない。底が見えないほどの冷たい声だった。
糸原は内ポケットに手を伸ばし、レージングの感触を確かめる。

振り向くと、そこにはもう誰もいなかった。

「……名前？」

赤毛が揺れる。

「はい。うっかりしていてまだ聞いてませんでしたから」

「……ん」

ベッドの上の女性は瞬きを繰り返す。

「……ヒルデ」

「ヒルデさん？　えっと、出身は日本じゃないんですか？」

こくり、とヒルデは頷いた。

「……多分、違うと思う」

「自分の事じゃないですか。でも、日本人では無さそうですね」

蒼い瞳。白い肌。

「……そうかなー」

「日本語、お上手なんですね」

「……そうかな、えへへ」

ヒルデは嬉しそうに目を細める。

「ヒルデさんはいつからここにお住まいで？」

「……んー？　分かんない」

「は？　分からない、ですか？」

「……ずーっと寝てたから」

「はあ、そうですか。って言うか、この家、電気とかガス通ってます？」

一はかねてからの疑問を口にした。ヒルデの部屋はそうでもないが、館内にはかび臭さが充満している。電気は通っていない事も、一には分かっていた。電気が無い。ならばガスも水道も通っていないだろうとも予測は立つ。ならば、どのように生活をしているのだろうかと、気になって仕方が無かった。

「……んー？」

「誰かと一緒に住んでいないんですか？」
ヒルデはゆるゆると首を横に振る。
「掃除とか、洗濯とか、してます？」
「……寝てたから」
「驚いていいですか？」
「良いよー、ふああ」
ヒルデは控えめにあくびをした。
「……うーん」
明らかに一より年上なのだろうが、ヒルデは一の保護欲というものをくすぐっている。
放っておけない。一は溜め息を吐いた。
「それじゃ、俺の友達が屋根を借りる。その代わりと言ってはなんですけど、俺が家事をしましょう」
「……えー、そんなの悪いよう」
「なら、ヒルデさんがちゃんとやるって言いますか？」
ゆっくりと、ヒルデは首を振る。横に。否定の意思。
「俺が好きでやるんだから、それぐらいは構わないでしょう？」
「……んー」
それぐらいやらないと、許してはもらえない。本当ならば裁判沙汰になってもおかしくはない。むしろそれが普通だった。犯罪者にならなくて済むのなら、家事なんて安いものだと一は思う。
「……本当に良いの？」
「勿論です」
力強く一は頷いた。
「……それじゃあ、お願い」
「喜んで。でも、本格的な掃除は明日からで良いですか？　そろそろ日も暮れますし」
「……ん」
少し残念そうにヒルデは俯く。
「差し当たり、今日の所は晩御飯を用意すると言う事で」

「ん」
嬉しそうに、ヒルデは何度も頷いた。
「じゃあ俺は買出しに行ってきます。大丈夫だとは思いますけど、出歩かないでくださいね」
「……分かった」
それでは、と。一が扉に手を掛ける。
「あ」
「？　なんですか？」
「……暗くなったら、ここには来ないで」
「分かりました、そうします」
確かに、知り合って間もない、一人暮らしの女性の家に夜遅くまで長居するのは失礼だと、一は納得する。そして恥じた。当然の気遣いにも気づかない自分に。
「……危ないから」
「あ、え？　ご、ごめんなさい。そうですよね、い、一応俺も男ですもんね」
「……違うの」
否定された。一は少しショックを受ける。
「……君が、危ないの」
ヒルデは真剣な眼差しを一に向けた。

スーツ姿のスタイリッシュな女性。夕暮れ時のスーパーには、いささか似合わないように思われる。周囲の視線を集める鼻歌交じりの長身。長い黒髪を揺らしながら、糸原四乃は今晩の献立を考えていた。
「お。魚が安い」
陳列棚から適当に、パックの切り身をかごに放り込み、糸原はスーパー内を右往左往する。この間は一にシチューを作らせ、その前は肉じゃがを作ってもらった。今日は味噌汁が飲みたい。ならば和

食で攻めよう。和と言えば、米に味噌に魚だろうと、短絡的な思考で糸原は食材をかごに詰めていく。必要以上の商品を詰め込んだかごを糸原は満足げに眺めた。

「……良し」

「あれ、糸原さんも買い物ですか？」

不意に声を掛けられ、糸原は無防備に振り向く。

「ありゃ、一じゃん。何してんの？」

「買い物に決まってるでしょう」

「んふふー、そうだよねー」

「何でにやけてるんですか？」

一は糸原から不穏な空気を感じ取った。

「今日さー、私深夜なのよ」

「知ってます」

「そいでさー、あんたは今日休みじゃん」

「ええ、まあ」

「だからさー、晩御飯一緒に食べられるよね」

「……ああ、確かに」

「その反応、無いわね。有り得ないわ。私みたいな美人のお姉さんとご飯を一緒に食べられるのよ？　何でそんなに淡白なワケ？」

糸原はジト目で一を見る。

一はそんな視線を気にせず、調味料のコーナーへ足を向けた。

糸原もその後ろをぴったりと付いて行く。

「だってご飯作るのいつも俺じゃないですか。単純に一人分手間が掛かるのが嫌なんですよね」

遠まわしの皮肉。だが糸原は一のかごの中身を見て、頬を綻ばせる。

「もー、そんな事言っちゃってさあ、可愛いんだからあんたはー」

「近いですってば」

「結局は二人分の材料買ってんじゃない。お姉さんを喜ばせる技術はホント天下一品よねー。よっ、年上キラー、お姉さん殺しっ」

「……は？」
「ちょっと。ネタ上がってんだからそんなリアクションは逆に寒いだけよ？」
「だから、何がです？」
「皆まで言わせる気？　エロいわねあんた。だーかーらー、私の分の材料まで買って、しらばっくれてんのがつまんないって言ってんのよ。照れてんの？　もー、素直じゃないなー。別に無理しなくていーのに。お姉ちゃんと一緒にご飯食べたいんだよねー？　私に美味しいもの作って食べさせたいんだよねー？」
　一はそこで理解した。どうして人間と言う生き物はここまで見事に面白く勘違いできるんだろう。面白すぎてもはや笑えない。どうしようかと頭を捻る。完全に糸原は自分の分までご飯を作ってくれると勘違いをしている。そして真実を話せば、確実に糸原の機嫌を損ねてしまう。
「……五体満足では出られない」
「ん？　なんか言った？」
　一は最悪のケースを想定する。糸原は衆人環視の中でも容赦なく自分に肉体的な制裁を求めるだろうとは、容易に推測が付いた。ちらり、と、糸原の持っているかごを盗み見る。鳥肌が立った。紛れも無く、糸原のかごには高級食材しか入っていない。やはり糸原に家計の半分を担わせたのは間違いだったと、一は過去の自分を恨んだ。
　最悪のケースは更に最悪へ。つまり、糸原の要求は高いのだ。高級食材を使え、ご飯を作れ、一緒に食べろ。どれも、今日の一には守れそうに無い。
「糸原さん。明日にしませんか？」
「何を？」
「ですから、その、晩御飯を」
「じゃあ今晩はどうすんのよ？」
「その、俺はちょっと」

「ちょっと何よ？」
　既に糸原の機嫌は悪くなっていた。一が本題を切り出す前に険悪な雰囲気が漂い始める。
「じ、実は――」
「――誰か他の奴と食べるんじゃないでしょうね」
　糸原の瞳が冷たくなるのが、一には分かった。もう、目を合わせられない。それでも、逃げちゃ駄目だと歯を食い縛り、糸原の視線を真っ直ぐ受け止める。
「チガイマスヨ」
「めちゃめちゃ目ぇ泳いでるわよ」
　おまけに声が裏返っていた。
「あっそ、ふーん。そっかー、別の女とディナーしちゃうんだー」
「じょ、女性だなんて俺は一言も！」
「つまり誰かとはご飯一緒に食べるのね」
　グサリと言葉が突き刺さる。
「へえ、私を差し置いてそんな事しちゃうんだー」
「そ、それの何が悪いって言うんですか」
　糸原の嫌らしいやり口に苛立ち、一は開き直った。
「べっつにー、良いじゃん？　あんたのやりたい様にやれば」
「……仰るとおりで。そうですよ、俺と糸原さんはただの同居人なんですから」
「はっ、そうよね。彼氏彼女の関係でも何でもないんだかんね」
「ええ、お互い必要以上の干渉は要らないでしょう」
「……生意気」
「……年増」
「クソチビ」
「詐欺師」
「へたれっ」
「ドケチっ」
　糸原が持っていたかごを乱暴に床へ放した。

「馬鹿！」
「な……、そんな証拠も無い事を」
「性悪！」
「それはあんただ！　大体、勝手に勘違いする糸原さんが悪いんです」
「ふん、もう良い。知らない、あんたなんてもう知らないかんね。見捨ててやる」
「見捨てるのはむしろ俺の方でしょうが。あんまりわがまま言ってると、閉め出しますよ」
「勝手にすればー？　私はその辺の男と行きずりの関係持っちゃうもんねー」
「そんな事人前で言わないで下さいよ！」
「あによー、嫉妬してんの？」
「恥ずかしいんです！」
ぎろり、と、糸原が一を睨む。
「な、なんですか？　また暴力に訴える気ですか？　やれるもんならやってみたらどうです？　ここは俺んちじゃないんです、すぐに警備員が来て取り押さえられますよ」
「家出する」
「はあ？」
「もうあんたなんかに頼らないから」
「……探しませんよ」
「ふん、あんたなんて私がいなくなって死ぬほど寂しがってから死ぬほど泣いて、死ぬほど後悔してから死ねば良いのよ」
言い捨てると、糸原は足早に一の前から立ち去っていく。
呆然としながら、一はその後姿を見つめた。
「って財布は置いてけよ！」

一は糸原の置いていったかごの商品を全て戻し、レジで自分の商

品の精算を済ませスーパーを出た。既に陽は落ち、辺りは暗くなり始めている。街灯もちらほらとつき始めていた。洋館までの道のりを思い出しながら足を速める。買い物袋を片手に、一は煙草に火を点けた。

「……むかつく」

糸原。あの態度。天上天下傲岸不遜傍若無人な振る舞いの数々。そもそも、何故未だに居座っているのかあの女。

――何が家出だ、勝手にしろ！

短くなった煙草を捨て、唾を吐く。

ガーゴイルの姿が見えなかったことを、一は不思議に思うべきだった。

暗くなってからここに来るなと言われたのを、一は覚えておくべきだった。

美人に関わって良い例が無かったことを、一は心得ておくべきだった。

「ねえ、こいつどうする？」

「そうねえ、あんまり格好良く無いしぃ」

「やっちゃおっか」

冬だというのに、やけに露出度の高い格好をした三人組の若い女。派手な化粧に姦しい口調。一はその三人組を遠い目で見ながら心底後悔した。

「でもさー、こいつ見たことあんだけど勤務外じゃないの？」

「えー？　マジ？」

「きゃははは！」

何が可笑しい。笑いたければ笑え。一は息をするのも面倒になってきた。

山に入った一は黙々と洋館までの道を進んでいた。数分ばかり歩くと、木々の間から洋館の外観が見えてくる。街灯も無い、暗い山道。茂みから得体の知れないものが現れても不思議ではない。そんな気分に誘われつつ、しかし一は安堵する。もう少し。山の中腹の、開けた広場のような一角。そこに洋館はある。

「……疲れた」

そこにそいつらは居た。館の前に座り込み、冬だというのに無駄に露出度の高い服装で、甲高く姦しく、やけに煩い三人の若い女。全員茶髪で、耳にピアスを幾つも空けていた。

――まずい。

一は一旦退散しようと背を向ける。

「あれー？　そこにいんの誰よ？」

「えー、うっそ、きもーい」

「覗かれてたわけー？」

一は駆けた。

一は逃げた。この世で一番厄介な種族から。草を掻き分け、無理矢理に山を下っていく。

「待ちなって！」

「え……？」

一の袖が引っ張られた。強い力で引き摺られ、バランスを崩す。走っていたので急には止まれず、整備されていない下り坂を転がって、体中に擦り傷を作りながら、それでようやく一は止まった。

「きゃはは、だっさー！」

「なにー？　もう終わったの？」

倒れている一の襟元を女の一人が掴み、無理矢理に一を立たせ、木の幹に叩きつける。

「ちょっとー、お兄さん私らの事ずっと見てたわけー？」

「マジきもいんですけどー？」

「あはは、死ねば良いのに」
一から、彼女たちまでかなりの距離があった。充分に逃げ切れる距離だと、予想していた。なのに、何だこれは？　一は頭を働かせる。
「答えなって！」
ゴツン、と、一は頭を幹に押し付けられる。早すぎる。そして女とは思えないほどの強い力。全く抵抗できない。
「う、す、すいませんでした」
「んな事聞いてないんですけどー？」
「何こいつ、舐めてんの？」
「しめちゃえしめちゃえ」
あっという間に一は三人の女に囲まれた。

非常に、情けなく。

姫、ウェイクアップ

姫は大変お怒りである。

「南駒台店？」

「そうだ。近々オープンするらしい」

オンリーワン北駒台店のバックルーム。店長とジェーンは緊急のミーティングを行っていた。

「ボス、アタシはそんなことニューイヤー何だケド？」

「……ニューイヤー？　何だそれは。あ、もしかして初耳、か？」

苦しい。

「ン？　何が？」

「くそっ、口うるさくても堀の方がまだマシだ」

「Ｈｅｙボス、何の話？」

「それよりゴーウェスト、対策を考えろ。このままでは売り上げを半分以上は持っていかれるぞ」

「Ｈｍｍ、そうネ。ただでさえ少ないのにネ」

ジェーンは腕を組み、あくびを漏らした。

「ＳＶとしての自覚はあるのか？」

「ボスこそ、ボスの自覚あるノ？」

店長は腕を組み、煙草を吹かした。

「とりあえず、北駒台店（ウチ）は他の店のコトを言ってられないと思うんだけど？」

「確かにそうだ。じゃあ南駒台は放置だな。出来てから考えるとしよう」

「そうネ、ミツモリもいるし、その気になればツブせるわネ」

「その通りだゴーウェスト。大分ウチのやり方が分かって来たようで嬉しいぞ」

店長は楽しそうに笑った。ジェーンもつられて笑った。
バックルームに居た神野は何も聞かなかった事にした。

春風麗は苛立っていた。
春風は情報部の人間だ。情報部に所属するという事は、情報部以外の人間よりも情報を持っていなければならない。誰よりも先に、誰よりも多く。
なのに。
今日、春風は戦闘部の人間に聞かされてしまった。教えられてしまった。オンリーワン南駒台店。そんな物は知らなかった。よりによって、戦闘部。春風の一番嫌いな部署の人間に。無表情、無感情。それが彼女の平時の顔。だが、オンリーワン近畿支部の廊下を早足で歩く今日の彼女の顔には、僅かなりの感情が見え隠れしている。
「春風さん、怒ってますか？」
「……怒ってなどいない」
春風の隣を歩く、同じく情報部の新人である漣。彼は胃痛に悩まされていた。情報部に配属されてから、春風の下で働くようになり数ヶ月。どうにも、春風のやる事なす事危なっかしいのだ。少なくとも、漣にはそう思える。情報部は、情報部以外の人間とは不干渉無干渉、必要以上の接触を取ってはいけない。そう聞かされていたし、彼自身もそう思っていた。
なのに。
春風は情報部以外の人間とも接触を取る。しかも積極的に、だ。特に、北駒台店の人間と。この間のソレの時といい、その前の勤務外の少年といい、とかく、必要以上に春風はそこの人間と接触し、無駄な情報を得ようとする。情報部の領分から外れていると、新人ながら漣は思っていた。
「今日はデスクですよね」
「知らん。私は出かけるぞ」

「まさか、また北駒の人たちの所ですか？　勘弁して下さいよ、上からきっつく言われてるんですからね」

漣は今日も上司から釘を刺されていた。春風の奇行を何とかしろ、と。何故部下である自分に言うのか、少なからず上司を恨んだ。それと、春風も少しだけ恨む。

「あんまり酷いと上に言いつけますよ」

「好きにしろ」

どこまでも自由だった。

閉ざされた空間。狭い世界。歪な空。その中で、そこを飛び越えて彼女は行く。好きなように、自分勝手に、気ままな風だ。

漣は春風を羨む。波は風に遊ばれるだけ。風が吹かない限り、波は揺れない。漣は春風が居なければ、何も出来ない。だから恨む、羨む。純粋に、憧れる。彼女の自由な魂に。

「絶対に必要以上に事は荒立てないで下さいよ。なんて言ったっけ、あの傘の少年。あの子には迂闊に喋り過ぎじゃないんですか？」

「……お前も情報部ならば、ソレに関する情報はしっかりと刻んでおけ。アイギスの使われ手、一一だ」

「ああ、そうでしたね。それより、お願いしますよ春風さん」

「私を誰だと思っている。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗だ。好きなものは――」

「――俺、もう行きますから」

漣は苦笑して、二課の部屋に入っていった。

その後姿をつまらなさそうに見つめて、春風もまた廊下を早足で進む。

さあ、仕事の時間だ情報部。

「ねえ、どうする？」

「ひん剥いちゃう？」

「きゃはは、超ウケル！」

一は駒台山の、洋館に至るまでの道の途中の、木の幹に頭を擦りつけられていた。周りには三人の若い女。派手な化粧に軽い口調。
「お兄さん、そういうわけでぇ、やっちゃって良い？」
女が口を開ける度に、一の鼻を香水の匂いが突き刺す。きつ過ぎる。一は顔をしかめ、表情だけで嫌悪感を露にした。
「……何こいつ？」
「調子乗ってるよねー」
「おらっ、舐めんなよ！　きゃははは！」
そろそろ、一も我慢の限界だった。こんな仕打ちを受けているが、相手は女。一も手は出し辛かったし、無抵抗を貫いていればすぐに解放してくれるだろうと思っていた。
「あの、もう許してくれませんか？」
三人の女が顔を見合わせる。
「はあ？　何言っちゃってんの？」
「許す許さないはぁ、私らが決めんの」
「お兄さんは黙って好き放題やられときなって」
「……そうですか」
一は覚悟を決めた。
「目瞑ってるよこいつー、ビビッてやんの！」
不用意に近付いた女の顎が真上を向く。自由だった一の左拳からのアッパーカット。
「えっ？」
驚きの声が女たちから上がった。
一は内心ほくそ笑み、束縛から解き放たれる。すぐさま女の脇を走り抜け、山道を駆け上った。
「ちょっ、ふざけてんじゃないよ！」
「くそがきぃ！」
女たちの脚力は凄まじいもので、すぐに一の背後に付く。手を伸ばせば届く距離。
「おらぁ！」

女は右手を伸ばす。その腕を見切っていたかのように、一が姿勢を低くした。振り返りざま、がら空きだった女の腹に蹴りを入れる。うめき声を上げ、女が坂道を転がり落ちた。

「て、てめぇ！　男の癖に女に手ぇ上げんのかよ！」

「ジェンダーフリーの現代に何言ってやがる、先に手を出したのはそっちだろ」

不敵に言い放ち、一は女に背を向け駆ける。背後からとんでもない罵声と怒号が聞こえてきたが、無視して見晴らしの良い広場へと向かった。

追撃は無い。一は一本道の出口に立った。広場へと続く道はここだけ、ならば地の利を得て戦うのみ。

「……相手は女か……」

しかも、恐らくは一般の。

一は深く溜め息を吐く。しかし、やられっ放しは腹が立つ。そして何よりも、今日は虫の居所が悪かった。

「暗くて見えづらい……」

一は目を凝らし、山道の向こうを確認する。女たちは姿を消していた。ほっと胸を撫で下ろす。

――流石に帰ったか。

「あ、買い物袋」

木の幹に置きっぱなしだった事を思い出し、一は山道へと再び足を踏み入れる。

「おい、こら」

「あ？」

振り向いた一の体が、「く」の字に折れ曲がった。

「痛い？　痛いよねー？」

「きゃはは、だっさーい」

「もう良いよー、殺しちゃおうよこいつ」

吐き気を堪え、一は信じたくないものを目の当たりにする。先ほど撒いた筈、帰った筈の女たち。三人組の女は、山道側からではな

く広場側からやってきていた。
――瞬間移動でも使ったのか。
そう考えなければ、有り得ない。
「……嘘だろ」
息も絶え絶えに、一が女たちを睨む。
「嘘じゃないよー、お兄さん」
「私らの事舐めすぎ、だっつの」
「勤務外だからって調子くれてちゃ駄目だよーん？」
心臓が止まった。そして鼓動が爆発的に早くなる。その台詞はさっきも聞いたような気がしていた。
「何で、知ってんだ？」
「はー？　決まってんじゃん」
「きゃはは、ウケルー」
「私らも、勤務外だからだ、よっ！」
鋭く、早い蹴り。女の爪先が一の顎に的確に突き刺さる。声を出す事も出来ずに、一はその場に蹲った。

悪魔だった。糸原の前に現れたのは、紛れも無く悪魔だった。
「夜分に、突然失礼します。あなたが糸原さんとお見受けします」
偉く、礼儀正しい悪魔だった。
「え？　何、あんた誰？」
糸原は訳も分からず悪魔に聞き返す。
「重ねて失礼しました。わたしはガーゴイル、ニンゲンの言葉を喋りはしますがれっきとしたソレに当たります。実は、あなたを勤務外と見込んでお願いがあるのです」
「……今日はこんなんばっかかね」
糸原は夕刻に出遭ったピエロを思い出した。
「でもあんた、その言葉遣いでラッキーね。舐めた口利いてたらぶっ飛ばすところだったわ。今ね私、虫の居所が悪いの。で、お願い

って？」
「ははあ、機嫌が悪いのに頼みを引き受けてくれるとは、糸原さんは気遣いの出来る方と見ます」
「引き受けるとは言ってないけど？　話を聞くだけよ、そんで、何で私の名前をあんたが知ってるわけ？」
「あなたの名前を知っていたのは、一さんに聞いていたからです」
ぴくり、と、糸原の眉が動く。糸原にとっては今、一番聞きたくない名前だった。確か、ガーゴイルとか言ったか。糸原は以前一から聞いた話を思い出す。
「……やっぱナシ。私行くわ」
くるりと、糸原がガーゴイルに背を向け歩き出した。
「殺生な。話だけでも聞いては貰えませんか？」
糸原の後をガーゴイルが付いて回る。
「ちょっと、付いてこないでよ」
「せめてお話だけでも」
「なんだって私がソレと話をしなきゃなんないのよ。事情を知ってなきゃあんたなんて見た瞬間に千切り殺してたんだから」
ガーゴイルはしゅんと項垂れた。その仕草が非常に人間臭く糸原には映る。
「……あああ！　分かったわよ！　簡潔に！　分かりやすく言ってよね！」
「分かりました。糸原さん、一さんを助けて下さい」

ブーツの紐が切れた。オンリーワン北駒台店内に居たジェーンは、言い知れぬ不安を覚える。
「……Ｈｏｏｋ　ｉｔ　ｉｓ」
「ジェーンちゃん、どうしたの？」
床を掃除していた立花がひょっこりと顔を出した。
「紐が切れたノ」

「……古かったの？」
「Ｎｏ、ジャパンに来る前に買ったヤツ。お兄ちゃんには新しいアタシを見て欲しかったカラ」
ジェーンは恍惚とした表情で遠くを見る。
「何だか不吉だね。悪い事が起きなければ良いけど」
「……お兄ちゃん。ハッ、まさか……」
「どうしたの？」
「お兄ちゃんの身にデンジャーが迫っている気がスル……」
「ジェーンちゃん、仕事中に外出ちゃ駄目ってはじめ君が言ってたよ」
立花は心配そうな表情を浮かべた。その心配は、一とジェーンに対する物ではなく、自分が一人店内に残される事だったのだが。
「タチバナ、後は任せるワ」
「だっ、駄目！　駄目だよ！　行っちゃやだ！」
「……アナタ、一応はアタシよりも年上のハズなんだけど」
「と、年なんて関係無いよ！　とっ、とにかく行ったら怒るよ！」
呆れるジェーンに、立花は涙を浮かべて駆け寄る。服の袖を捕まれたジェーンは鬱陶しげにその手を払った。
「触らないで。アナタはアタシの敵でもあるんだカラ」
「ボ、ボクが敵？　ジェーンちゃん、まだこないだの事根に持ってるの……？」
「ちゃん付けはやめて、ダディにだってそう呼ばれるのはイヤなの」
「あ、う、ご、ごめんね。で、でもさ、やっぱりさ、改めて仲直りしない？　ボク、こういう気持ちでお仕事するの、何だか嫌なんだ」
「……お兄ちゃんへのボディタッチは禁止ネ」
仕方なくといった風に、ジェーンが肩を竦める。ジェーンの仕草に立花は目を輝かせ、ハッとして、俯き、上目遣いに、
「……ジェーンちゃんも？」
ぎこちなくそう聞いた。
「アタシは良いノ！」

「ずるいよ！　ボクだって、ボ、ボ、ボボボ、ボクだってはじめ君に触りたいのに！」
「シノビの心でたえてチョウダイ、タチバナ」
「ボクは忍者じゃないよ！」
一の苦難も知らずに、二人は楽しそうに口論を繰り広げ始めた。
「……仕事しようよ、みんな」
店内に居た神野は肩を落としながら呟く。
さあ、仕事の時間だ。仕事の時間だぞオンリーワン。

煙草が切れた。三森は寝ながらの体勢で、空になった箱を握り潰して部屋の隅、ゴミ箱に向かって投げ捨てる。放物線を描いたそれは、壁にバウンドして見事に収まった。
三森の気持ちが少しだけ鎮まる。枕もとの携帯電話と財布を引っつかみ、布団を跳ね除け三森はベッドから飛び降りた。下着姿から真赤なジャージを上下に通し、肩を回して首を回して体中の骨を鳴らしてから三森は玄関に向かい靴を履く。そこで、異様な気配を感じ取った。懐かしい気配だった。記憶している限り、数ヶ月ぶりだろうか。やれやれと、少々憂鬱になりながらドアノブを回し、三森は来訪者に声を掛ける。
「よう、久しぶりじゃねェか。確か、お前の弟をヤって以来だったか？」
「……八ヶ月と十一日振りだな、三森冬。私の弟を殺されて以来だ」
廊下の手すりに腰掛け、無表情に淡々と語る来訪者。無感情な姿勢を崩さず、来訪者――春風麗――は言った。
「ちっ、細かいところは相変わらずだなてめぇはよ」
「貴様ら戦闘部の連中が大雑把過ぎるだけだ」
「へっ、私はもうあんなトコとはおさらばしたっつーの。大体情報部のお前ならンな事知ってンだろが、一々嫌味な奴だな」
「……私の中では、三森冬。貴様はいつまでも戦闘部だ。どこまで

も行き着いても変わらない。貴様は野蛮で、粗野で、救いようが無く救いようが無い」

「ンだよ、謝って欲しいのか？」

三森は思い切り春風を睨みつける。敵意も殺意も、思いつく限りの粗方の害意をぶつけるような視線。

「……三森冬、お前は私に謝って、私に許して欲しいのか？」

並大抵の生き物ならば震え上がってしまうような三森の視線を受け流し、感情を込めずに春風は見返した。冷たい、この世の冷酷さを悉く詰め込んだような視線。

「誰が？　誰にだよ？　ソレを殺した私に罪があンのか？　罰を受けなきゃ駄目なのか？　言ってろよ気取り野郎が」

並大抵の生き物ならば縮み上がってしまうような春風の視線を受け流し、溢れんばかりの怒りを込めて三森は更に睨み返す。

三森と春風。二人は睨み合い、視線を交錯させ、やがて三森が堪え切れず目を逸らした。

「……許してもらおうとは思っちゃねェよ」

自室のドアにもたれ掛かり、三森は俯く。

「前回も同じ台詞を聞いた。私の答えも変わらない。そもそも、謝られても『許すつもりはない』がな」

「そうかよ。で、今回は何だよ？　また私に嫌がらせするつもりじゃねーだろうな？」

「聞きたい事があってやって来た」

「お前が、か？」

三森は春風を指差し、瞳を大きくさせた。

「そうだ。情報部二課――」

「――それは聞き飽きた。で、何が聞きたいってンだ？」

「……南駒台店。知っているか？」

「何だそりゃ？　新しく南にオープンすンのか？　へえ、珍しい話もあるもんだな」

素直に、非常に素直に三森は驚いてみせる。同じ街に二つのコン

ビニ。決して珍しい事ではない。問題は、そのコンビニがオンリーワンであるという事。ソレに殺し殺され死なし死なされる勤務外を擁する人外集団。そんなものが同じ場所に二つ。人外集団が二つ。地獄が二つ。

「三森冬。このケースが異常な事態だとは気づかないのか？　珍しい話？　そんな生易しいものでは済まんぞ」

「……だろうな。駒台。まさか、重点地区にでもされちまったのか？」

「さあな。そこまでは調査中だ。しかし、しかしだぞ三森冬。気づかないか？　今の異常さを」

「異常さ、ねェ。考えた事もねーよ。っつーかな、何度もてめぇにゃ言うようだけど、私はただのバイトなんだ。面倒くせェ事は全部上に任せてりゃ良いンだよ」

「ふん、単細胞が。だが、その口振り。単細胞は単細胞なりに気づいてはいたようだな」

「……前線に出てンだ。猿だろうが何だろうが、嫌でも気づくだろ」

「ああ」

「ソレの数が多すぎる」

二人は声を合わせた。

「秋に入ってからソレの出現数は爆発的に上昇した。勿論、駒台だけでは無いがな」

「それでも去年と比べりゃ充分多いぜ」

三森は腕を組み、退屈そうに鼻を鳴らす。

「……去年の駒台の、ソレの出現数は三十にも上らない。だが、今秋になって九十にもなった。まだ今年を後二ヶ月近くも残しているのにだ。三倍だ。三倍だぞ」

「言わなくても分かってら。けどよ、もう一軒店が建つほど異常なのか？　前年度ナンバーワンの中国地方なんて、去年と違ってソレ

が殆ど出てねぇって聞いたぞ？」
「それも知っている。だがランクはどうだ？　ギリシャ神話の怪物、アラクネほどのソレが現れたのは駒台ぐらいの物だろう。上層部も駒台には何かあると警戒しているのではないか、そう私は踏んでいる」
「考えすぎじゃねーのか？　そこそこ名の知られた奴も今までに仕留めたトコはあるンじゃねーの」
「三森冬。貴様は私の敵だ」
「……知ってンよ」
だからどうしたと言わんばかりに三森が鋭い視線を春風に浴びせた。
「私は情報部だ。その私が『敵』と認めるのは貴様と一一ぐらいのモノだ」
「は？　何であいつも敵なんだよ」
「それは言わん。とにかく、貴様をある程度能力のある人間と私は認めている。今から話す事はそれを踏まえての事と思え」
「はいはい、わあったよ。とっとと言え、ヤニりたくて仕方なくなってきそうだぜ」
フッと馬鹿にするように春風は薄く笑った。本当に、春風を知っている人間でなければ分からない程度の、そんな薄い笑い。
「……フリーランスが駒台にどれ位いるか把握しているか？　三森冬」
「ンな事知るかよ。ああ、そういや変な二人組とは前にやり合ったな」
「十組だ。十組のフリーランスが現在駒台に潜伏している。これが何を意味するか分かるか？」
「お前が冗談を言うとは思っちゃいないけどな、信じたくもねェし、分かりたくもねェよ」
三森は頭を掻き、唾を吐き捨てる。
「三森冬、貴様と顔見知りのフリーランスも来ているぞ」

「嬉しくねェよボケ」
「『神社』、『天気屋』、『教会』、『魔女の家』、『図書館』」
「ちっ、面倒な奴ばっか来てやがんな」
「……面倒でないフリーランスがいるのか？」
「大物が出るのか？」
「さあな。だが、奴らの鼻は格別だ。何か起こるのは確かだろうな」
「だろうな。わざわざ私の気分を悪くさせてくれてあり難いぜ、ホント」
春風は手すりの上に立つ。
「そう言ってもらえれば、来た甲斐があると言う物だ」
「うるせェ、さっさと消えやがれ」
「そうしよう」
そう言うと、春風はそこから飛び降りた。
三森は春風の安否を確認することなく、エレベーターホールへと向かう。
十組のフリーランス。とんでもないものがやって来た。とんでもないものがいる駒台に。三森は先の事を考え、憂鬱な気分になる。
「……今年は何人残れるかな」
それは誰にも分からない。

「じこしょーかいしとこっか、お兄さん？」
「アイギスのお兄さん、私らはね南駒台店の勤務外なんだ」
「私ら戦乙女（ワルキューレ）って言うんだけどぉ、あれ？　ちゃんと聞いてんの？」
一の頭が痛みと処理しきれない情報のせいで混乱していく。初耳だった。南駒台店なんて物も。自分がそんな風に呼ばれていた事も。三人組が勤務外なんて事も。全部が全部、信じられなくて、考えたくても痛みで何も考えられなくて。痛みに全てを委ね始める。もう何でも良かった。何をされても良かった。運が悪かった。とんでもないモノに喧嘩を売られてしまった。それだけだ。

「あれー？」
「気絶してんじゃないのー？」
「きゃはは、だっさー、どうする？　いっとく？」
女たちが一に近付く。
輪になって、戦乙女が近付く。
戦死者を選ぶ者が、一に、近付いていく。

――銀光が閃いた。

「何っ？」
「これはっ！」
「やっばー！」
女たちのすぐ近くを、銀色の線が奔る。女たちは咄嗟にそこから距離を取り、周囲を見回した。
「誰がっ！」
女は一を睨む。一の周囲にも線が奔る。銀の糸にまるで守られるかのように、一は蹲ったままそこに居た。
周囲の様子が一変した事を不審に思い、一は顔を上げる。
「あ、これは……」
一が、それが何かという事に気づいた瞬間、自分が心底安心した声を出した事が急に恨めしくなった。
「縛り付ける（レージング）もの！？」
女が叫ぶ。
「私らの遺物がどうしてここに！」
女が喚く。
「これはっ、北駒台のっ！　勤務外のっ！」
女が我鳴る。

「なっさけない、あんたそれでも男？　ちゃんと付いてんでしょうね？」

女が謳う。朗々と謳い上げ、堂々と姿を現す。手にはスーパーの袋を提げ、気だるそうに彼女は歩く。彼女は、一をつまらなさそうに目の端で捉えながら、どこか遠くに視線をやった。

戦乙女たちは近付けない。乱入者に、一に近付けない。接近出来ない。既にレージングは周囲に張り巡らされている。雲の切れ間から月が顔を覗かせるたび、銀糸が妖しく煌く。

すなわち結界。不壊の領域。女たちはその力を知っていた。だから、動けない。

その姿を認めた一は気恥ずかしくなり、目を逸らした。ついさっき喧嘩別れしたばかりだというのに、なのに。

「糸原さん……」

糸原四乃。

レージングの使い手。

タルタロスからの脱獄者。

オンリーワン北駒台店の勤務外。

「ん？　何か言いたい事でもあんの？」

にやにやと、楽しそうに糸原が口元を歪める。

「……こんな所まで男漁りに来たんですか？」

「なぁーに言ってんのよその帰りよ帰り。男どもの相手すんのが疲れたから人の居ないトコまで来たのよ。そしたら何か世にも珍しいだっさいチビが居た訳だけどー」

「楽しそうで何よりですね、それより俺の財布返してくれませんか？」

「はあ？　これっぽっちしか入ってないのに、けち臭い事言ってんじゃないわよ。それぐらい貢いだらどうなの？　ホント金の亡者ね、あんたは」

「胡散臭い詐欺師にそんな事言われるとは思いもよりませんでした。

あはは、けち臭いのはそっちじゃないですか」
「黙りなさいよ甲斐性ナシ、それよかほら、助けて欲しいんじゃないの？　ん？　お姉さんに頭下げてみ？　そしたら生かして帰してあげるから」
「犯罪者に下げる頭は持っていません。その袋を返して下さい。それは俺のです」
「あー、これ？　へへー良いでしょ拾ったの。あんたが落とし主だったの？　じゃあ一割ちょうだい」
「……鬼ですかあなたは。良いから助けてくださいよ」
「私お腹減ったなー、山なんて久しぶりに登ったからなー」
「分かりましたよ、明日で良いですか？」
「この袋さー、なんか食べ物入ってんだけどー？」
糸原は袋の中をごそごそと漁り出す。一は糸原の行為を止めようとしたが、レージングに囲まれているので出られない。恨めしそうに手だけを伸ばす。
「調味料が多いわね……。塩舐めて良い？」
「そんなにお腹減ってるんですか？　その辺の草でも食べれば良いじゃないですか。どうせ糸原さん、味なんて分かんないでしょ」
「あはは、超ウケルんだけどー。じゃあツバメの巣」
「……何が『じゃあ』なのか分かりませんが、そんな高いの駄目です」
「フカヒレ。キャビア。はも。ふぐ。トリュフ。蟹。アワビ。ステーキ。すき焼き焼肉ジンギスカン」
「うっ、家計を圧迫しそうな単語を羅列しないで！」
「助けて欲しいんでしょ？」
「また脅迫するつもりですか？」
一は糸原を強い意思で以って睨む。その視線を涼しげに受け止め、糸原は不敵に笑った。
「わーたしがいつそんな事したって言うのよ？　ちゃんと選択肢は与えてんじゃない」

「選択の余地はくれないじゃないですか！　こんな所まで追い込みやがって、脅迫強要以外のなんだって言うんだ畜生」
「ほーらほら、どーすんの？　今日の晩御飯は何なの？」
「ぐっ、袋ん中見りゃ分かるでしょ。カレーです」
「はっ、ガキのキャンプじゃあるまいし、もっとマシなモンにしなさいよ」
「もう食材買っちゃったから、オーダーを変えないでください」
そこで糸原は腕を組み、考え込む。
「……私、甘口なのよね」
やがてそんな事を言い放った。
「他人にはインド人も驚くほど辛口ですけどね」
「うん、そうすんげー辛口。そうね、あんたが誰とご飯を食べようが関係無いわ。カレーなら私にも振舞えるでしょ？　とりあえず今日の所はそれで許してあげるわ。明日は肉が食べたいけど。牛ね、牛。あ、イベリコ豚も良いわね。美容に良いらしいわよ、寿命も延びるってさ」
「またテレビに影響受けちゃってこの人は……。はいはい、もう良いですよ豚でも牛でも鶏でも魚でも何でもご用意させていただきますよ」
「良く言ったわ男の子。カレーね、カレー。あ。ちなみに私、辛口のカレーを出されたら暴れまわるかもよ。って言うか暴れる」
「お子様」
「お姉さまとお呼びなさい」
フンっと糸原は鼻を鳴らした。
「……俺、ホント糸原さんを尊敬しますよ」
「そ。さ、じゃあ改めて私に何か言う事は無いのかしら？」
糸原は促す。
まったく。そう呟き、頭を掻いて一は照れくさそうに、
「お姉さま、生意気言ってゴメンなさい」
頭を下げた。

その姿を満足げに認め、糸原は高らかに宣言する。
「うむ、カレーで許すっ！」
仁王立ちを解除し、糸原は戦乙女たちに初めて視線を遣った。

戦乙女。女たちは合図も無しに一斉に散らばった。三方から糸原へ仕掛けるつもりなのだろう。
「なるほどね。一、動いちゃ駄目よ」
「ええ、よく切れますからねこれ」
酷く間の抜けた会話だった。糸原は指を小刻みに動かす。
ちっ、ちっ、ちっ。
少しばかりの間を置いて、
「おらぁ！」
「きゃはは！」
「いっちゃいなよ！」
糸原の右左斜め後ろ、三方から声が聞こえてきた。木々の間から、洋館の屋根から、広場の向こうから。いつの間にか、女たちの手には槍が、楯が、獲物が握られていた。
ワルキューレが詐欺師に迫る。臆することなく、糸原は右手を上げた。右から来た女が悲鳴を上げる。次に左手を上げた。左の女がけたたましく鳴く。
「ババァ！　おせぇんだよ！」
包囲網を掻い潜り、斜め後ろの戦乙女が糸原を襲う。その手には鋼鉄の長柄武器。
「誰が――」
糸原は振り返り、眼前に迫る槍を足で叩いた。その衝撃で女の手に痺れが走る。
「――きれーなお姉さんだって！？」
隙を見逃さず、糸原は顎、腹、股関節の三点を爪先で蹴り上げ、拳で殴り上げた。女は中空に一瞬静止し、地面に倒れこむ。

「もっぺん言ってくれない？　お姉さんさー、最近難聴気味なのよね」

しゃがみ込んだ糸原は女の髪を引っ張り上げ、耳元で冷たく囁いた。

女の全身を悪寒が駆け巡る。

――やばい。

「……へっ、ババァは家で寝てな」

「嘘も方便って知ってる？」

女の精一杯の虚勢に、糸原は優しく微笑んだ。糸原は、掴んだ髪の毛から手を離し、女の後頭部に手を添える。その意味に気付いた女から血の気が引いていった。

「お、おい！」

「はあー？　聞こえないわよ」

「やめ――！」

うわ、と。

その光景を見ていた一が潰れた声を出す。

地面にめり込んだ女の顔に一瞥をくれ、糸原が立ち上がった。

「次はどっち？」

距離を取っている女二人に、糸原は気さくに声を掛ける。女たちは答えずに武器を構えた。

「調子に乗んないでくれる？　オバサン」

「きゃはは、私らも本気でいっちゃうから！」

笑う女たち。その声に眉を顰め、

「まずはあんたからね」

糸原は右の女を指差す。指された女は糸原をねめつけ、楯を持った女に目配せした。

「知るかよババァ！」

空手の女は糸原に向かって、叫びながら突っ込んでくる。糸原が指を動かすと、女の前方が煌いた。レージング。女は咄嗟に右へステップ。避け切れず、女の前髪が糸によって切られる。構わず女は

突き進んだ。
「女の命って何だか分かる？」
「ああ？」
糸原の指の動きに合わせて糸が揺れる。
「まずは顔よね」
「……？」
動きの止まった女へと光が奔った。
「ちっ！」
舌打ちして女が後ろへ下がる。避け切れず、女の髪が糸によって切られた。
「ははっ、北駒台の勤務外なんて大したこと無いね！」
女は絶えず動き回りながら嘲笑する。
「顔。だけどさぁ、私は女の命ってのはやっぱり髪だと思うのよ、髪」
言いながら、糸原は指をしなやかに曲げた。
「！」
糸が奔り、女の髪を後ろから切り刻む。
「髪ってさあ、良いよね。特に可愛い女の子の髪。頬擦りしたくなるわ。食べちゃいたい」
女は糸から逃れる為に動き回る。
「男はどう思ってるか知らないけど、私は髪から見ちゃうわね。人は見た目で判断するなってどっかのチビが言ってたけど、やっぱ見た目って大事じゃない？　女は髪よ。髪が命よ」
走り回り飛び回り、女は逃げ回る。だが、糸は的確に、それでいて執拗に女を追い詰めていく。
「こいつ……！」
女も糸原の意図に気付き始めた。
「つまりさあ、髪の毛が無けりゃ女は女じゃないのよね。男でもないし、ホント何になるのかしら」
「てめぇババア！」

「丸坊主にしてやるわ、クソガキ」
ぶちり、と。女の中の何かが切れる。完全に頭に血が上る。
「ざけんなよコラァァァァ！」
真っ直ぐに、馬鹿正直に女は突っ込んだ。その姿に糸原は微笑を浮かべる。
「いっちょ上がりね」
女の周囲に線が走った。銀の線。死の線。主に、女の頭付近に線は集中していた。
「あ……」
呟いた女は自分の髪の毛が、雨のように降りかかるのを見て失神する。
うわっ、と。その様子を見ていた一が、悲鳴めいた声を上げる。
糸原は勝ち誇ったように高笑い。
「ふっ、お姉さんを怒らせるからこうなるのよ」
丸坊主の女を楽しそうに眺め、そして残った女に視線を移す。
「顔に髪。女は何が命だと思う？」
「え？　あ、そ、その……」
すっかり戦意を殺がれた女は引き攣った笑いを浮かべた。
「は、歯？」
「そうねえ、歯も大事よねえ。でもさ、もっと大事な物があると思わない？」
糸原は腕を広げて女に近づいていく。
「も、もっと？」
「そう！　もっと！」
女は糸原の威圧感に腰が抜け、地面に手を付きながら必死で後ずさった。
糸原は指を動かし、女の体全体を糸で締め上げる。肉も皮も切れない。ギリギリの、絶妙な力加減。
「下手に動いたら痕が残るわよ」
その意味を理解し、女は頷く事も出来ずに涙を流した。

「教えてあげるわ」
糸原は優しく、諭すような声を出す。その声に女は少し安堵の表情を浮かべた。
「もっと大事な物、それはね、命よ！」
「そのまんまじゃないですか！」
一の叫びを聞き流し、糸原は泣いている女に指を突きつける。
「あいつはほっといて。で、どうしたい？　あんた死にたい？」
「し、死にたくないです！」
「そりゃそうよね、あははは」
「何でもするから殺さないで！」
「わーお、テンプレート通りの命乞い。良いわね、ゾクゾクしてきた」
糸原は楽しそうに口元を歪めた。その表情を見てしまい、女は気が遠くなる。

手放しかけた意識の、最後に映った女の景色。
一人の女。
ああ、そこには死神が映っていた。魂を刈り取る鎌。死を招き寄せる黒い気配。最高の戦乙女。ワルキューレのリーダー。全ての魂へ、全てに死を。それが彼女。

振り返った一は驚愕した。こんな時間にパジャマを着た女が居た事ではない。パジャマよりも、目に入る物がある。それよりも、受け止められない事実がある。
「……どうして？」
長い鎌が嫌でも一の目に入る。彼女の身の丈よりも大きな鎌。苦にする様子も見せずに片手でそれを持ち、彼女は寂しげに一を見る。
「……だから言ったのに」
その瞳には一抹の憐憫。がちゃり、と。彼女は音を立てて鎌を構えた。その姿、まさに死神。

「ヒルデさん、勤務外だったんですね……」
「……黙っててごめんね」
一に謝ると、ヒルデは視線を『敵』へと移す。
「へえ、次はあんたがお相手？」
「……許さない」
一は対峙する二人を結界から見つめる事しか出来ない。
「糸原さん、この人は――」
「――あんたのデートの相手って訳？」
糸原は楽しそうに笑った。
「糸原さんっ！」
「うっさいわね、黙ってなさい」
ヒルデに向き直り、糸原は腕を下げる。
「先に言っとくけど、私も勤務外なのよ」
「……知ってる」
「勤務外同士で戦うって訳？」
ゆっくりと、確かな意思をもってヒルデは頷いた。
「話は大体聞いてたけど、あんたら新しく出来る南の連中でしょ？揉め事起こしても良いの？」
「……しつこい」
ヒルデは鎌を握り直し、糸原に刃の切っ先を向ける。
「ふうん、それなら私も気兼ねなくヤれるって訳ね」
「糸原さん！　駄目ですってば！　ヒルデさんも！」
「……先に仕掛けたのはキミたちじゃない」
「ち、違います！　俺が山に入ったらあの人たちが！」
一は力の限り声を張った。
「……ん」
ヒルデは緩慢な仕草で小首を傾げる。
「……そう、なの？」
「そうなんです！　確かに夜に来ないでって言われてましたけど！」
「どうしよう……」

鎌を抱えてヒルデは俯いた。
「ちょっと一、水差してんじゃないわよ」
「糸原さん。いつから戦闘狂になったんですか？」
「なってないわよ。今日は……虫の居所が悪いだけ」
「当り散らすにしても限度があります」
一は倒れている三人の女をそれぞれ見やり、
「もう充分でしょう」
悲しそうに言った。
「……あんただってやり合ってたじゃないのよ」
「俺はもう良いんです」
「勝手な奴」
「知ってるくせに」
一を少しだけ睨むと、糸原は指を動かし、周囲に巡らせていた糸を回収していく。一分も掛からずに、全てのレージングは持ち主へと帰っていった。
自由になった一が立ち上がり体を伸ばす。伸びきった一の背中。そこに衝撃が走った。うめき声を漏らし、一がその場にしゃがみ込む。
「自惚れてんじゃないわよ」
「……痛い……」
「今日はもう良いわ。お腹減ったし」
「ありがとう、ございます。ヒルデさんも今日のところは、あ」
安らかな寝息。立ったまま、ヒルデは眠っていた。
「……今こいつらやっちゃったら南駒台ってどうなんのかな？」
「ホント、どうなるんでしょうね」
何しに出てきたんだ、この人は。一は呆れながらヒルデに近付く。
「ヒルデさん、ちょっとだけ起きて下さい」
「……ん……」
「とりあえず、お話はまた後日伺うとして。今日の所はお開きにしませんか」

ノロノロとヒルデは首を振った。
「……ベッドまで戻れますか？」
「……むり」
「じゃあ部屋まで連れていきます。鎌は置いといてもらえますか？刺さるんで」
こくり、と。ヒルデは素直に頷く。地面に鎌を投げ捨て、ヒルデは一へ体を預けた。
「糸原さん、この人たちはどうしますか？」
「適当にやっとく」
「じゃ、後は任せます」
「ん」
一はヒルデの袖を引き、館内へと入っていく。
糸原はその姿を見届け、倒れている女たちを一箇所に纏めた。
「……とりあえず、八つ当たりしとこ」

嫌らしく笑うその顔は、死神だって戦乙女だって恐れるのかもしれなかった。

うつむく者

敵は何処だ。
敵は誰だ。
敵を探せ。
敵は、敵は、敵は。

館の台所、らしき場所。やっとの事で埃等の汚れを取り除いて使えるようになったテーブルと椅子。そこに腰掛、カレーライスを頬張りながら一は思う。隣のヒルデを横目で見ながら、正面の糸原からは視線を逸らしながら思う。何をしているんだろう、と。さっきまで戦っていた『敵』同士が食卓を同じにして、何の冗談だと。

「……」

ヒルデは黙々とカレーを食べるのに集中している。

「……」

糸原は少しだけ不機嫌そうにカレーを口に運んでいた。時折一と目が合い、何とも言えない視線を向ける。

あの後、ヒルデを寝室まで運んだ一だったが、「お腹空いた」とヒルデが言い出すので、汚い台所を必死で掃除し、ガスと水道を復活させ（止まってはいなかった）、晩御飯の調理に取り掛かった。出来上がったのが深夜一時過ぎ。

糸原はすっかり機嫌を損ね、無茶苦茶になっていた三人娘、戦乙女たちを適当な部屋に運び入れ、体中を弄繰り回して何とか精神の安定を保っていた。その光景は一にとって筆舌に尽くし難く、見なかった事にしていた。

「……おいしかった」

ヒルデは空っぽになった皿を満足げに眺め、コクコクとゆっくり、水を飲む。

「ありがとうございます。お代わり、要りますか？」
「ンな奴に要らないわよ」
糸原を一瞥してから、ヒルデはゆっくりと首を振った。否定の意。
躊躇うように視線を落としてから、
「……キミは怒ってる？」
許しを請うように、一にそう尋ねた。
一はカレーを咀嚼しながらヒルデを見る。
「……別に。怒ってませんよ」
そもそも、最初から一には怒る理由も資格も無い。
「……良かった」
ヒルデは安心して微笑む。
「まあ、言いつけを忘れてたのは俺ですからね」
その笑みを真正面からは受け取れず、一は視線を逸らした。
「一、福神漬けは無いの？」
「……俺はカレーに福神漬けは邪道だと思ってます」
「はぁ？　王道も良いトコじゃんよ。あんたって舌が馬鹿なんじゃないの？」
「舌がお子様の糸原さんには言われたくありませんね」
「おっしゃ、帰ったら分からせてやるわ」
「ヒルデさーん、糸原さんが苛めてきます」
「……分かった」
静かに頷くと、ヒルデは立てかけていた鎌を掴む。
「ちょ、ちょっと！？　冗談ですってば！」
「はっはー、良いわよ私は？　やってやろうじゃないの」
ヒルデは困ったように一を見た。
「嘘です、嘘ですから、座りましょう」
頷くと、ヒルデはちょこんと椅子に座る。糸原は何故か勝ち誇ったような視線をヒルデに向けていた。
一は三人分の食器を流し台に置き、鍋に蓋をする。
「ヒルデさん。少し残りがありますので、また明日にでも中身を片

付けておいて下さい」
　こくり、とヒルデは首を振った。
「それと、折角なので聞いておきたい事があります。ヒルデさん、あなたは俺たちの何ですか？　敵ですか？　味方ですか？」
「……ん」
「あなたが勤務外だという事はもう知っています。俺たちが勤務外だという事も知られていました。知られていて、俺はあの人たちに襲われました。どういう事になるんですかね、これは。勤務外同士ってのは戦っても問題無いものなんですか？　どうなんですか、ヒルデさん」
　ヒルデはスプーンを手の中で弄びつつ、俯いている。
「……怒ってる」
「怒ってないですってば。ただ、分からない事が多すぎるので、それを説明して欲しいだけです。南駒台店ってのは何なのか。ワルキューレだか、俺の素性が知られている理由とか」
「……多い」
「多い？」
「……追いつかない」
　ヒルデはキッと一を見た。眠そうな、半分だけ空いた瞳で。
「はっ、一？　しっかりそこのノータリンに説明してやんなさい」
「……うるさい」
　ヒルデは壁に立てかけられた鎌を掴み、糸原に向ける。
「やるっての？」
　向き合った糸原はニヤニヤと笑う。
「やらないでくださいよ。糸原さん、挑発しないでください」
「はーい、善処します」
「……ヒルデさん、それじゃあ一つずつ答えてもらいます。良いですね？」
「……ん」
　一が一つ咳払い。

「あなたは、俺の敵ですか？」

その眼を見た物は即死する。

駒台、南。自衛隊の団地から離れた場所にソレはいた。藪を抜けた所にある、小さな泉。昼間ですら、誰も近づかない不気味な泉。そこに三つの影。

「オキナ、用心だけは怠らないで」

「分かってるよ」

オキナと呼ばれた方の人間はエプロンを身に着けた、背の高い青年。本を抱えて注意深く眼前のソレと対峙する。

「ナコトこそ、しくじらないでくれよ」

「分かってるわよ」

ナコトと呼ばれたのは白いセーラー服を着た背の低い少女。セーラー服。ハンチング帽を目深に被り、眼鏡を付けている。手には鎖。鎖の先端には分銅のような物をつけていた。

「……ま、簡単な仕事だけどね」

いつも通り、オキナが凍らせた相手をナコトが砕く。それだけの事。それだけの事で、彼らはここまでやってきた。

「いつも通り、気楽にやろう」

オキナはそう言ってナコトに笑いかける。

ソレ。水牛の体に、細い首。まるで腸のように細い首。垂れ下がった、豚のような頭。紛れも無く異形だった。

そんな異形を前にして、オキナは笑う。

「さて、ここでの最初の仕事だ」

オキナは持っていた本の、一ページを破り捨てた。紙片をソレに向けて掲げ、念を込める。呼応するかのように、紙片が呼吸を始めた。周囲の空気が固まっていき、紙片を中心として温度が徐々に下

がっていく。冷え、固まっていく。
「風に乗りて歩むもの！」
オキナが叫ぶと、紙片が独りでに動いた。絶対零度を身に纏わせ、紙片は奔る。ソレに向けて、一直線に奔る。当たれば、それで終わり。
ソレは、終わり。紙片がソレに当たるかと思われたその時、パァン、と。小気味の良い音が鳴った。紙片を魔力ごと掻き消したその音は、オキナの耳に残り続けている。
「……え？」
後方からその様子を窺っていたナコトが間抜けな声を出す。それもその筈、絶対が破られたのだ。今までに破られた事のない、絶対の技が。
「まさか……」
オキナも狼狽した様子でソレを見つめていた。
ソレは先ほどと変わらない様子だった。
そんな話は聞いていない。知らない。二人は知らなかった。対峙するソレが魔術を掻き消す能力を持っている。そんなのは、知らない。聞いちゃいない。有り得ない。おかしい。何かがおかしい。
「オキナっ！」
ハッと、オキナがナコトの声で我に返る。そうだ、あいつは攻撃手段を持っていないに等しい。何かの間違いだ。オキナは思い直し、歯を食い縛り、もう一枚本からページを破いた。
「風に乗りて歩むもの、歩む死……」
オキナの掲げた紙片は周囲の温度を下げ、空気を固めながら呼吸を繰り返す。絶対へと、その姿を変えていく。
ナコトは知らずの内に息を呑んでいた。
「……あいつ、本気じゃない」
少なくとも、オキナと組んでから初めて見る彼の本気だった。オキナも、今までにないくらいに念を込めている。ブツブツと呪文のようなモノを呟きながら、ソレを睨む。

「大いなる白き沈黙の神、風の眷属！」

爆発した。真っ白な火花。冷徹な殺意。明確な意思を持って紙片は奔る。オキナの手を離れ、紙片が先ほどとは比べようにならない速度でソレに向かっていく。絶対零度を撒き散らし、ソレの心臓を止める為に。

一秒も要らなかった。

心臓が止まる。

一瞬の出来事。

心臓が、止まる。オキナは薄笑いを浮かべると、その場に崩れ落ちた。紙片は魔術行使者の魔力を失い、力を失くした紙として、ひらひらと宙に舞う。

「オキナ！？」

ナコトは鎖をしっかりと握り、倒れた相棒に駆け寄っていく。

何が起きたか、全く分からない。頭の中が真っ白になる。頭の中からガンガンと何かが響く。音を鳴らす。サイレン。

「オキナ！」

体を揺すっても、呼びかけても何も帰っては来ない。後ろで見ていたナコトにも意味が分からなかった。オキナが唱え、紙片が奔り、そしてオキナが倒れた。

「何で！？　どうしてっ！？」

ナコトは気付く。万が一にも有り得ない、起こる筈の無かった、可能性にもならない可能性。オキナの眼を見て、気づいてしまった。

「……ひっ……！」

小さく、悲鳴を漏らす。

痙攣を繰り返すオキナのからだ。彼の、体中の穴という穴からは血が溢れ出ている。極め付けだった。ナコトは自分の目を疑う。オキナの眼はぐずぐずに溶けてしまっていた。直接硫酸か何かを入れられてしまったかのように、内部から粗方溶かしつくし、髄液は毒と化し、瞼の外側までも食いつくさんばかりに流れている。思わず、オキナから逃げるようにナコトはそれから手を離した。

「はっ、はっ、はっ、はっ……」

呼吸は荒く、短い。心臓は胸を強く打ち、鼓動はナコトを急がせる。ここから、逃げろと。オキナの近くに転がっていた本を抱え込むと、ナコトはそこから背を向けた。相棒の死は、悲しみにも怒りにも変わらない。仇を討ってやろうと言う気持ちは起こらない。只管、ただ只管、ナコトは恐怖しか感じなかった。縺れる足。ナコトは震える体へ鞭打って、無理矢理にその場を逃げ出すのがやっとだった。

クトゥルフの魔道書『ナコト写本』を使いこなすフリーランス。ソレに関する膨大な知識を所有する、優秀なフリーランス。生涯で仕留めたソレは三桁にも上ると言われたフリーランス。黄衣(きごろも)オキナ。

彼の一生は幕を閉じた。つまりその事実は、フリーランス『図書館』の片割れが死んだ事に他ならない。彼は、これから始まる残酷劇(グランギニョル)の最初の犠牲者でもあった。

一の視線に耐え切れずヒルデは俯いた。

「……何度も言いますが、俺は怒ってる訳じゃないんです。つまり、ヒルデさんは俺の敵になるつもりは無いって事で良いんですか？」

コクコクと、何度もヒルデが頷く。

「そして南駒台店も、俺たちに敵対するつもりは無い、と」

「……ん」

「じゃあ、さっきの人たちは？」

「……あの子達、若いから……」

つまり独断専行か、命令違反か。一はそう決め付けて納得する。

「まあ、糸原さんが千倍ぐらいで返してくれたから良いんですけどね」

「足りないくらいよ」
「充分だと思いますけど」
「……痛み分けにしとくから」
ヒルデは糸原を何とも言えない表情で見つめる。
「あ？　何よ、やる気？」
「んーん」
ファイティングポーズをとる糸原を無視して、ヒルデは一に視線を移す。
「……キミは？　許してくれる？」
「だから、許すも許さないも無いですって。今回の事はお互い水に流しましょう、お願いします」
「……そう、ありがとう」
心からヒルデは微笑んだ。やっぱりその笑顔は無邪気すぎて、一には眩しすぎた。
「ふーん、そういう事なら今日からは勤務外同士味方って事になんの？」
「……ん。難しい……」
「まあ、系列が同じでも一応は商売敵ですからね」
「面倒な話ねぇ」
糸原は他人事のように気楽に呟く。
「けれど、少なくとも、俺たちとヒルデさんは敵対しないって事になったんですから」
「良しとしましょうって？」
「……いけないですか？」
「さあねー、あんたが良いってんなら良いんでない？」
含みのある糸原の言い方。
「はあ……。とりあえず、疲れたし帰りましょうか」
一は洗った食器を適当な所に置いて、体を伸ばした。
「ヒルデさん、あの三人組は任せても大丈夫ですか？」
ヒルデは緩慢な動作で頷く。眠そうだった。

「それじゃ、俺たちは帰ります。それと、屋根の上の奴にはあんまり話しかけないであげて下さいね。照れ屋なもんで」
「ん」
「……良し。じゃ、糸原さん帰りましょうか」
糸原も無言で立ち上がり、台所を軽い足取りで抜けていった。
「じゃあまた、今日は色々とご迷惑を掛けてしまって」
「……もう良いのに」
「そうでしたね。それじゃ、また今度遊びに来ます」
「ん。待ってる……」
嬉しそうに、ヒルデは目を細める。その仕草を認め、一も糸原に続いた。

洋館を出ると、一は真っ先に屋根へ目を遣った。
「おい、ガーゴイル」
屋根の上で、まるで館を守護するように陣取っていたガーゴイルは顔だけを一へ向ける。
「おや、一さん。このたびはどうも有り難う御座います」
「それは良いよ。って言うかさ、あの時助けてくれても良かったんじゃないのか？　見てたんだろ」
「如何にも。ですが残念な事にわたしには戦闘能力は備わっていないのです」
「……まあ、糸原さん呼んでくれたのは助かったけどさ」
「気に食いませんか？」
「う。うーん、そう言われると……」
一はやる瀬なさそうに頭を掻く。
「しかし、流石は一さんです。わたしが見込んだにんげんなだけはありましたよ。もう一度、ここからの景色を気兼ねなく楽しめる事が出来たのは、一さんのお陰と見ます」
「お前、なんかずるいよな」

「ところで一さん、先ほどソレが現れましたよ」
場の空気が固まる。
「え？　それって、マジなのか？」
「ええ。そしてにんげんが一人亡くなったようです」
「……ちょっと、やばいんじゃないの」
「あー、聞いても仕方ないとは思うけどさ、一般人が死んだのか？」
「いえ。ソレと戦っていたので一般人ではないと見ます」
「まさか……」
一の脳裏にオンリーワンの面々が浮かぶ。最悪の想像が、浮かんでいく。
「わたしもはじめて見る方々でした。恐らくはフリーランスの方ではないかと見ます」
「そ、そうなのか？」
安堵するとともに、一は自己嫌悪に陥った。結局、人間が死んだ事に変わりはないのだ。
「ま、少しは溜飲が下がるってもんよね」
「そりゃそうですけど……」
「一々悲しんでたらキリないわよ。せめて知り合いが死んだってんなら話は別だけどさ」
「糸原さんはドライな方と見ます」
「クールなお姉さんって言ってよね」
糸原は意味なく髪をかき上げる。
「……つーか、フリーランスがやられたって事は結構まずいんじゃないのか？　滅茶苦茶強いソレって事だろ？」
「げー、次は私らの番じゃないの？」
「うわ、洒落になんねぇ……」
「カトブレパスは一さんたちにとって、そこまで脅威とは見えませんがね」
「？　カトブレパス？」
一の問いに、ガーゴイルは慇懃に頷いた。

「ええ、カトブレパスです。エチオピアで見た事があります」
「どんなソレなんだ？」
「そうですね。牛のような姿をしていますが、首が異常に細く、頭は常に垂れ下がっていました。なんでも、カトブレパスの眼を見たにんげんは死んでしまうのだとか」
「ふーん。じゃあ死んだってフリーランスはそいつの眼を見ちゃったのね。間抜けにも」
「ですが、彼らの頭は滅多な事では上がりません。と言うより、自力では上がらない筈です」
「……どういう事だ？」
一が腕を組む。
「仲間でも居たんじゃないの？　無理矢理頭を上げたとかさ」
「それじゃ仲間って言うより、道具扱いですよ」
「とにかくさ、そのカトプレバスだけじゃどうしようもないんでしょ？　だったら誰かが使ったってのが当然じゃない」
「糸原さん、カトプレバスではなく、カトブレパスです」
「うっさいわね！　どっちでも良いでしょ！」
「うーん、店長に報告してみますか」
「えー？　明日で良いじゃない。もう眠いんだけどー？」
不満を言う糸原は無視して、一が歩き出す。
「ありがとなガーゴイル。気を付けるよ」
「ええ。お役に立てて光栄です」
「だああ、待ちなさいよ！」

深夜二時を回っても、二十四時間営業のコンビニには関係無い。明かりが点いている。その事実だけで一は安心した。店内に糸原と連れ立って入ると、カウンターのジェーンに嫌な目で見られる。
「……お兄ちゃん、アタシと言うものがありナガラ……」
「店長いる？　いるよな？」

ジェーンを軽く無視しながら、一はバックルームへ入っていった。
「お兄ちゃん!?　カンバック！」
「夜中だってのにうるさい奴だな」
「あんたの妹でしょうが」
一と糸原、来訪者に気づいた店長が椅子に座りながら器用に近づいてくる。
「こんな時間にどうしたんだ？」
「おはようございます。実は、ソレが出たって話を聞きまして」
「……誰からだ？」
店長の目が鋭くなった。
「あー、ガーゴイルからです」
「お前、ソレと友達感覚で接してるのか？　仮にも勤務外だろうが」
「周りの人たちがもっとまともなら、こんな事にならなかったんですけどね」
「類は友を呼ぶと言うな」
「あはは、笑えますね。誰が類で誰が友なんでしょうね、全く」
「あれ？　あんた友達いたの？」
「……先ほどの話に戻りますけど、とにかくソレが出たんです。憶測ですが、フリーランスの方が一人亡くなったとも聞きました」
一は糸原を視界に入れないようにしながら言う。
「一、お前を百パーセント信じないわけではないが、情報部からはそんな話聞いてないな。信用に足る情報なのか？」
「少なくとも、糸原さんよりかは」
「そうか。まあ、真実ならば近いうちに情報部から連絡が来るだろう」
「あれ、俺って信じられてませんか？」
「いや、信じているぞ。少なくとも糸原よりはな」
二人はそう言って、糸原を見つめる。
「あによ。やる気？」
「やりません。とりあえず今日の所は帰ります」

「一、ソレの情報は？」
言いつつ、店長は煙草に火を点けた。
「えーと、カトブレパスって奴ですね。知ってます？」
「私を舐めるなよルーキー。アレだ、牛みたいな奴だろ」
「……まあ、そうですけど」
「何だその目は？」
別に。そう言って一はバックルームを後にする。
「ちっ、あいつには教育が足りてないな」
「んじゃ、私も帰るわ。お疲れね、てんちょー」
「ああ、わざわざすまんな。気をつけて帰れよ」
「はーい」
ひらひらと手を振り、糸原も一に続いた。

オンリーワン近畿支部。
戦闘部のオフィス。明かりは既に消え、部屋の一角だけが小さなスタンドライトによって照らされていた。大量の書類を目の前に、眼鏡を掛けた優男、堀は今日何度目になるか分からない溜め息を吐く。彼はアラクネ戦後、備品である車を壊した事と命令違反によってデスクワークを命じられていた。
「……ふう」
無駄に肩が凝る。自分にはデスクなど似合わない。戦場に居た頃を思い出し、堀は自嘲の笑みを浮かべる。平和、ではない。戦いから遠ざけられているだけ。
それが堀には気に食わなかった。こうして一人で居ると、どうにも気分が昂ぶって仕方ない。自制できない。戦場に、戻りたい。血の臭い、乾いた風、生々しい感触、貫く快感、貫かれる愉悦。何処までも浸っていられる。
「ほーり君」
「うわっ」

首筋に当てられた冷たい感触に堀は驚き飛びのいた。
「あらら、驚いちゃった？」
「……炉辺さん」
ナース服を着た、子供っぽい笑顔を浮かべる女性。
「はい、差し入れ。どう？　デスクワークって大変？」
「ええ。こういうのはいつまでたっても慣れませんね」
缶コーヒーを受け取り、堀は書類の山に目を向ける。タブを押し開け、渇いた喉に液体を流し込むと少しは気が楽になった。
「疲れたときには甘い物よね」
「確かに、美味しいですね」
「ふふ、やっぱりお店の事が気になる？」
炉辺はその辺の椅子を持ってきて堀の隣に座る。
「話だけは聞くんですけどね、私の代わりの方や立花の六代目が入った事、色々です。私の知らないうちに、どんどん変わっていくようで、少し寂しいですかね」
「堀君があそこを離れるのって初めてだもんね」
「……随分長い間、お世話になっていた気がします」
「ふふ、これからもお世話になります、でしょ？　このお仕事が終わったら復帰できるじゃない」
「本当に終わるんでしょうか……」
力なく、堀がうな垂れた。
「大丈夫よ。明日からはお手伝いも来てくれるんでしょ？　それに、今日は私が手伝ってあげるわよ」
「は？　い、良いんですか？」
「うん。堀君にはふゆちゃんもお世話になってるしね。気にしなくていいよ」
「……そういう問題では」
「ん？　何か言った？」
炉辺が堀に顔を近づける。
「い、いえ。ではお願いします。こちらの束を片付けていってもら

えますか？」
「うん、お任せー」
書類の束を受け取り、炉辺が気楽そうに返事をする。空いている机に陣取り、彼女は明かりを点けて書類に目を通し始めた。
「ねー、堀君。最近大変らしいわよ、駒台」
「ええ、聞いています。今年はソレの出現数が多いそうですね」
「うん。医療部も忙しいんだ。たくさん怪我人とか出ちゃってね」
「お察しします、部長」
「ふふ、今度は堀君にも手伝って貰おうかな」
「私が？　はは、私に白衣の天使なんて似合いませんよ」
堀は眼鏡の位置を直しながら苦笑する。
「そうね、天使よりかは戦士に戻りたいよね」
「……そういうわけでは」
「ホント？」
炉辺に真っ直ぐに見つめられると、堀は何も言えなくなる。ずるい人だと、堀はそう思う。
「嘘を吐きました。そうですね、確かに戻りたいです」
「今の状況なら、お偉いさんも強くは言えないと思うよ。私も戻って欲しいかなって、ほんの少しだけ思う。少しだけ。あの子達だけじゃちょっと不安だものね」
「店の話だけ聞けば、私の出る幕は無さそうなんですけどね」
「でも、大人がついてあげなくっちゃ。愛ちゃんだけじゃ御しきれ無さそうだもん」
「問題児が揃っていると、旅さんにも言われましたよ」
「ふふ、あの子も大変だからね。あ、そう言えば麗ちゃんにさっき会ってね、ソレが出たって聞いたよ？」
炉辺は書類から目を外し、あくびを一つ噛み殺した。
「神話級のソレですか？」
「んーん。麗ちゃんは取るに足らない奴だって言ってたよ。けどフリーランスの人は、その、亡くなっちゃったって」

「……フリーランスが？」
堀の視線が鋭くなる。
「うん。『図書館』の人だってさ。強い人だったの？」
「……『図書館』と言えば、名の知られたフリーランスですよ。クトゥルフの魔術を行使する二人組で、三桁近くソレも倒していました」
「へえ、強かったんだね。けど、麗ちゃんが取るに足らないって言ってたソレに負けちゃったわけか」
「おかしな話ですね。ああ、炉辺さん、ソレの名前は聞いていますか？」
「カトブレパスって言ってたわよ」
「……アレに？　『図書館』が殺された？　そんな馬鹿な」
「麗ちゃん、嘘は吐かない子よ？」
疑っちゃだめと、炉辺が人差し指を堀に向かって立てた。
「嫌な予感がしますね」
「そうね……。ん、だからこそ、堀君が駒台に戻ってあげなくっちゃ。ね？」
「私の居場所があれば良いんですが」
「だいじょぶだいじょぶ。さ、仕事しよ、し、ご、と！」
炉辺に促され、堀は仕方なく書類へ視線と意識を戻す。嫌な予感。
それと同時に、堀は懐かしくも思っていた。懐かしい戦場の気配。
それと、懐かしい誰かの、気配。

黄衣図書館

眠りから覚めた一は頭を抱えた。現在、時刻は九時を回っている。
「……んー？　一、どしたの？」
こたつから這い出てきた糸原が、一の深刻そうな顔を見て笑った。
「ひゃひゃひゃ、何よその顔？　一発で目ぇ覚めちゃったじゃない」
「遅刻だ……。どうしよう、今まで遅刻なんてした事なかったのに……」
今日の一は午前からシフトに入っている。午前から。オンリーワンでは、午前からと言うのは九時からを指す。
つまり。
「あー、どんなに急いでも間に合わないわねー。こういう時はさ、二度寝すんのが良いと思うんだけど、あんたはどう思う？」
糸原の問いに答えず、一は布団から跳ね起き洗面台へ向かった。歯を磨き、顔を洗い、ジャージを脱ぎ捨て外出着に着替えると、急いで玄関に向かい靴を履く。
「何よー？　バイトなんてジャージで良いじゃん。着替えた分時間勿体無くない？」
「終わった後、タルタロスに寄るんです」
「はあ？　相変わらずあんたって時間を無駄にする天才よね」
「そうです。だから俺は糸原さんとも喋っていられる訳です」
「……どーいう意味よ？」
「糸原さん、今日は午後からでしたっけ？　鍵閉めといて下さいね、店まで取りに行きますからっ」
「だー、話聞きなさいよー！」
無視して、一は扉を開けた。外はこれでもかと言うぐらいに眩しかった。

一が店に着くと、半泣きの立花がカウンターで恨めしげに佇んでいた。
「ごめん！　すぐに行くから！」
「は、はじめ君！」
一の声に、立花は瞳を輝かせる。期待に応えるべく、一はバックルームへ慌しく入っていった。
「……やあ、おはよう、一君」
そこには一にとって面倒な女がいた。
「う。遅れてすみません」
「いや？　気にするなよ、一。初めての遅刻だしな、何も言わんさ」
ニヤニヤと、口元を歪めながら店長は言う。
「あ、ありがとうございます」
引き攣った笑顔を作り、一は店長に返した。
「おいおい、気にするなって言ってるだろ？　たかが遅刻だ。気にするなよ」
「……もういっその事怒ってくれた方が楽なんですけど」
「だからだ。良いか、一。五分と言えど遅刻は許さん。コンビニだからと言って舐められてる感じがして気に食わん。そして何よりも許せんのが店に連絡をしなかった事だ。分かるか？　前もって遅刻をすると言ってさえくれれば、私だって何とかしてやれるんだ。代わりを立てることも出来たし、場合によれば、いや、万が一。億が一として私が代わりに出ることも可能なんだ。死ぬほど嫌だがな。良いか、一。ああ、嫌とは言わせんが、罰として、私は今日お前を徹底的に弄りぬくぞ」
「早い話が、自分が店に立つのが嫌なんですね」
「茶化すな。お前は何を誤解してるのか知らんがな、私はお前の雇い主だ。お前は私に雇われている。つまり、私は責任もってお前を守らなければならん。大事な戦力だからな。連絡無しで無断欠勤でもされてみろ、心配だろうが」
店長は煙草に火を点けながら一を睨む。

「……その、すいませんでした……」
素直に頭を下げた一を、店長は真剣な瞳で見つめた。
「分かれば良い。行って良いぞ」
「はい、気をつけます」
「ん。しっかり働けよ」
気落ちしたまま、一はバックルームを出て行く。
店長はその姿を見送り、頭を掻いた。
「言い過ぎたか……」

強すぎる薬は毒になる。

「ど、どうしたのはじめ君？　もしかして、店長に怒られちゃった？」
心配そうに覗き込む無垢な瞳。
「うん。普通に怒られた。逆にああ言うのが効くわ」
「……だ、大丈夫？」
何とか。短く答え一はカウンターに立てかけてあったモップを手に取る。
「今日は俺が掃除するよ」
「えぇ？　良いってば、ボク気にしてないよ？」
「駄目。ちょっと反省する」
「じゃ、じゃあボクどうしたら良いの？　はじめ君が掃除してる間、ボクがレジするの？」
「……フォローはするよ。あ、お箸足りなくなりそうだったから補充しといてね」
「う、うん。分かった、頑張る」
力強く立花は拳を握った。
夕方と違い、この時間帯に客は少ない。一は大した心配もせずに

ゆっくりとモップをかけていく。小汚い床を綺麗にしていけば、心が洗われる様な気がした。全く持って何も伴わない見えていない盲目的な考え。だが一はそれに縋る。自身の内側に溜まった物をぶちまける様に、無茶苦茶に床を擦りあげる。

「……ジェーンちゃんと似てるね」

「え？」

いつの間にか近くにいた立花に驚きながら、一が掃除の手を止めた。

「ジェーンちゃんも掃除の時は、ちょっと怖いんだ……」

俯く立花。

「あ、と。俺、怖かった？」

「す、少しだけだよ？」

「……ごめん。気をつけるよ」

「そ、そんなつもりなかったんだけど……」

俯く二人。

「あ」

その時、店のドアが開く。

眩しいばかりの白いセーラー服が一の目に入った。駒台では珍しい、と言うより全く見ない制服。同時に、少女の背負っている大きなリュックサックに目が行く。小柄な少女には不釣合いで、背負っていると言うよりも、背負わされている。そう言った方がピッタリと当てはまる気がした。

「……サボりかな？」

「不良？　どうしよう、ボクどう接していいのか分からないよ？」

「立花さん、今日学校は？」

「ボ、ボクは来週から始まるのっ」

そう言えばそうだったか。一は何気なく、立花から視線をセーラー服の少女へ移した。ハンチング帽に、知的な眼鏡。少女の全体像を眺めていた一はぎょっとする。彼女のセーラー服に細い鎖が巻かれていたからだ。

「最近の子は変わってんだね……」
「ボ、ボクもはじめて見た……」
二人は「いらっしゃいませ」と言うのも忘れてこそこそと喋る。
セーラー服の少女は、キョロキョロと忙しなく視線を動かしていた。挙動も、何処となく不審だった。何かを警戒しているような、そんな印象を一は受ける。
そこで一はハッとした。
「……立花さん、あの子マークしといて」
「え？　どうして？」
「人を疑うのは良くないと思うけど、あの子、万引きをするかもしれない」
「ええっ！？」
立花の大きな声で、少女が一たちを見た。目が合った一はぎこちなく会釈。立花の方に向き直り、さっきよりも小声で話しかける。
「……刺激しちゃまずい。あんなの巻いてる子だし。とにかく、注意深く見てて」
そう言うと一は何事もなかったかのように掃除に戻った。
「が、頑張る……」
立花は少女の反対側の棚に回り、ジロジロと少女を観察する。
「……」
完全にバレバレだった。

立花が奇行を続けて数十分。その間に来た客は一が掃除の手を止めて対処し、その間少女は何も買わないで店内をうろついていた。
「立花さん」
「あ、な、何？」
呼ばれた立花は子犬よろしく一の元へ駆けて行く。
「もうマークするのは止めようか。あの子はさり気なく俺が見とくよ」

「し、失敗しちゃった？」
「……いや、してないよ」
「そっか。分かった、じゃあ何をしておけば良いかな？」
「うーん。そろそろ納品業者も来るし、あ、そうだ。おでんの具足しといてくれる？」
「分かった！」
立花はカウンターに走りより、おでんの鍋の蓋を開けて中を覗き込んだ。
「はじめ君、何を足せばいいかな？」
「え？　あ、ちょっと待って」
一は外側の窓を拭いていた手を止め、カウンターへ近付く。
「……んー、大根と玉子足しとこうか。この辺は売れ筋だから、迷ったら足しておいて問題ないよ」
「そ、そっか。分かった、ありがと、はじめ君」
そう言うと、立花はバックルームへ駆けて行った。
一はその間、レジに立つ。所在無さげに立っていると、セーラー服の少女がつかつかと一の方へ向かってきた。一は思わず身構える。
「あの、店長っていますか？」
「……はい。いますけど、えっと、君は？」
少女の口から出た意外な言葉に、一は拍子抜けした。
「あ、ごめんなさい。あたし、ナコトって言います。あの、ここって勤務外の人がいるお店ですよね？」
「そう、ですけど」
「良かった。あの、実は店長さんにお話があって……」
ナコトと名乗った少女は、鎖を弄りながら恥ずかしそうに俯く。
「……ちょっと待っててくれるかな」
「はい。ごめんなさい、いきなりで」
「いや、それは良いんだけど……」
一には少女の鎖が気になって仕方なかった。
「はじめ君！　大根って何パック要るかな！？　って、ああ！　ま、

万引き犯！」
バックルームから出てきた立花が叫ぶ。
「……万引き犯？」
ナコトが、何ですかそれはと呟いた。少しばかりの敵意が剥き出しになっている。
「あ、た、立花さん？」
「は、はじめ君から離れてよっ」
大根の入ったパックを抱えながら、立花が涙目で駆け寄ってくる。
「あの、誰が万引き犯なんですか？」
「き、君だよ！　盗人たけだけしいよ！」
「立花さん、一個多いから」
「え？　持ってき過ぎちゃったかな？」
「そっちじゃなくて」
あの、と。ナコトが手を上げる。
「誰が万引き犯、なんですか？」
意外としつこかった。

バックルームには煙草の煙が充満している。煙を鬱陶しげに払いながら、セーラー服の少女――ナコト――はリュックサックを下ろした。
「あなたが、店長さん？」
「ん？　おい、一。部外者をバックに入れるな」
「いや、実は店長にお話があるとかで」
店長は不思議そうに少女を眺める。
「見ない顔だな」
「あ、ご、ごめんなさい。はじめまして、黄衣（きごろも）ナコトと申します」
「ん。はじめまして、私が店長だ」
その一言に店長の人となりが集約されていた。
「……それじゃ、後はどうぞごゆっくり」

「あ、待って下さい」
一の袖が掴まれる。
「え、な、何？　なんなの？」
「あの、この人と二人きりにしないで貰えますか？　凄くやり辛そうな人です」
ナコトはきっぱりと言い切った。
「……失礼な奴だな」
「確かに失礼だけど、人を見る目はありますよ」
「遅刻したくせに生意気言うんじゃない。とにかく、お前は仕事に戻れ」
追い払うような手振りを示し、店長は紫煙を吐き出す。
「あの、言う事聞いて貰えませんか？」
「んー、俺バイトだから。この人の言う事には逆らえないんだよね」
それに面倒くさそうだし。とは流石に言い留めた。
「……そうですか」
ナコトは悲しそうに俯き、鎖に手を掛ける。一はその挙動に気づかず、バックルームを出ようとした。出ようとして、足を踏み出し、何かに足を取られ、情けなくすっ転ぶ。
「おい、一」
「だああ、笑わないでくださいよ！」
「そうじゃない。足を見ろ」
言われた通り一が自分の足を見た。
「はあ？」
そこには、鎖が巻かれていた。幾重にも細い鎖が一の足を絡め取っている。これでは転ぶのも無理はない。
「すみません」
ナコトが突然頭を下げる。
「どうしても、この人と二人きりになりたくないもので」
「……実は謝る気とか無いよね、君？」
「……すみません」

「仕方ない。手早く用事を済ませてもらうか。で、黄衣？　君は一体何しに来た？　そして、君は何者だ？」
　店長が煙草の先をナコトに向ける。
「ここには、頼みに来たんです」
「何をだ？　焦らすんじゃない、手早くと言ったろう」
「……う、あの、ソレを倒して貰おうと思って」
　鎖を弄りながら、ナコトはまた俯いた。
「ソレを倒す？　わざわざ、ここにか？　君に言われなくてもやっている。そんな事を言いに来たのか？」
「か、仇をっ、仇を取って下さいっ」
　聞き慣れない言葉に、一と店長が固まる。沈黙と時間だけが、静かにバックルームに流れていった。何だか、とても気まずい。
「……仇って？　どういう事？　ソレに何かされたの？」
　一が何とか聞き出すと、ナコトは顔を手のひらで覆う。すんすんと、ナコトは鼻を啜って泣き出してしまった。店長は面倒くさそうに頭を掻き、短くなった煙草を空き缶に捨てる。
「おい、理由を言わなきゃ分からんぞ。君はめそめそと泣く為にここまで来たのか？」
「ちっ、違う。違いますっ」
「なら喋れ。私も暇じゃないんだ」
　嘘付け。一は内心で突っ込んでおいた。
「あ、あたしっ『図書館』でっ、ソ、ソレに仲間を殺されて、それでっ」
　ナコトは詰まりながらも、一生懸命に説明を始める。店長は何も言わず、ナコトの説明に耳を傾けた。
「く、悔しくてっ、けど、あたしだけじゃ、仇を討つの、ムリ、だ、だからっ」
　そこまで言うと、ナコトはまた泣き始める。それ以上の情報は得られそうも無かったので、一はナコトを一先ず放っておいて疑問を口にした。

「店長、図書館に出るソレってなんですかね？」
「……一、お前は面倒事を引きずり込んでくるよな」
「俺じゃないですよ。この子が来たんです」
暢気な一を憎憎しげに睨みながら、店長は深く息を吐く。
「一、コイツは多分な、フリーランスだ」
「へっ？　こ、こんな子が？」
「こんな子とは誰の事ですか？」
ケロッとした顔でナコトは一を見つめた。
「いや、君だよ。君、高校生でしょ？　高校生がフリーランスやってんの？」
「あなただって高校生でしょう」
「な！　お、俺は大学生だよ！」
「すみません。背が――」
「――低いってか！　うるせぇよ！」
「一、煩いぞ。それで黄衣。君はフリーランスだな？」
答えを口にするのを躊躇うように、ナコトは俯く。
「隠しても意味は無いぞ。ああ、安心しろ。私は別にフリーランスを毛嫌いしている訳じゃない」
「……そ、です。あたしはフリーランスです」
「マジかよ……」
一は何となくナコトから視線を逸らした。
「ふん、『図書館』と言えば、そういや二人組だったな。なるほど、相方がやられた訳か」
ナコトは唇を噛み締める。
「フリーランスが勤務外に敵討ちの手助けを頼む、か。情けないなあ、君は」
ナコトは答えない。
「何故、その場でソレと戦わなかった？　ここまで来たという事は、一度はソレから逃げたと言う事だろう？　相棒を見殺しにして。自分だけが生き延びて。大した生き狂いだな、流石はフリーランスと

言ったところか」
　ナコトは答えない。
「店長、ちょっと言い過ぎじゃないですか？」
「言い足りん。私は他力本願な奴が嫌いなんだ」
「同属嫌悪って知ってます？」
「ああ、知ってる知ってる。ほら、どうした黄衣？　何か言ったらどうなんだ」
　ナコトは、唇を強く噛み締める。硬い歯が薄い皮を食い破り、唇からは血が滲み出た。溢れる血液を舐め取り、彼女は立ち上がる。
「助けて、下さい……！」
　ナコトは店長に向かって、勢いよく頭を下げた。
　店長は冷ややかにナコトをねめつけ、
「土下座だ。頭が高いとは思わんか、黄衣？」
　言い放つ。
　やり過ぎだ。一の頭に血が上る。
「っ！　店長！　これ以上は俺も黙ってませんよ……」
「お前は年上が好みなんじゃなかったか？」
「……あなたは好みじゃない！」
「ちっ、怒るなよ。冗談だ。黄衣、顔を上げろ」
　だが、ナコトは頭を下げたまま。
「……お前の相方をやったのはカトブレパスか？」
　何度も、力強くナコトは頷いた。
「悔しいか？　仇を取りたいか？　ソレを殺したいか？」
　何度も何度も、ナコトは頷く。
「フリーランスを辞める覚悟はあるか？」
「やめます……っ！」
　声は震えていた。それでも、それでもナコトの声には意思がしっかり刻まれていた。
　店長は薄笑いを浮かべる。
「良いだろう。『図書館』の仇討ち、手伝ってやろうじゃないか」

「あっ、ありがと、う、ございます……！」
顔を伏せたまま、ナコトは言葉を紡ぐ。
何故だか、一には店長が良い人に見えた。
「店長、流石に鬼じゃなかったんですね」
「お前の給料払いたくない」
「うぉーい！　鬼か！」
「口も利きたくない」

書類の山を感慨深げに眺め、堀は眼鏡の位置を直す。
「……まさか、これが終わるとは思ってもいませんでしたよ」
「ふん、私が手伝ったんだ。当然の結果だろう」
「そうねー、麗ちゃんのお陰ね」
誇らしげに立つ春風を、炉辺は目を細めて称えた。
「そして、まさか春風さんに手伝ってもらえるとは思いませんでした」
「……交換条件が魅力的だったからな」
交換条件。堀にとっては初耳だった。
「なんですか、それは？」
「一一の情報だ。炉辺乙女が教えてくれるのだろう？」
「ええ、勿論」
「そんな、炉辺さん安請け合いを……」
「えっとね、はじめちゃんはー入院してるときに教えてもらったんだけど、ちゃん付けされると怒るのよ」
ニコニコと、微笑みながら炉辺は言う。
「……炉辺乙女、私をからかっているのか？」
「え、どうして？　からかってないわよ？」
「春風さん、炉辺さんはこういう人なんです」
堀はこの上なく春風に同情した。
「くっ、騙された……」

「えー？　騙してないじゃないっ、ちゃんとはじめちゃんの事教えたのに」
「あー、皆さん、ありがとうございました。さて、そろそろ私は上司へ報告しに行きましょうかね」
　居た堪れなくなった堀は、逃げるようにその場を去った。

「……黄衣さん、何か食べたいものある？」
「おでんが食べたいです」
「う、元気になったみたいだね。リクエストとかある？」
「この店の売れ筋を」
「……かしこまりました」
　泣き止んだナコトは「お腹が空きました」と、何故か一に言った。店長は最初から聞く耳を持たず、一はしつこく食い下がるナコトに負けて、自腹を切る破目になっていた。納得いかなかったが、さっきまで泣いていたナコトを見て、かわいそうだなと思ってしまっていた。だから、仕方ないかとも思ってしまう。
　完全に手の平の上でローリングストーンだった。溜め息を吐き、一は一時間振りに店内に戻る。
「は、はじめ君……」
　立花は泣いていた。
「……あの、これは、その」
「ボ、ボク……。ボクね……？」
　一は潤んだ瞳に見つめられる。
「本当にごめん……」
「い、良いんだ！　はじめ君は戻ってきてくれたから」
　どこまでも健気だった。
「ごめんな、立花さん。そんで悪いんだけど、おでんの容器取ってくれる？」
「うんっ、はい、どうぞ」

「ありがと。あ、そうだ。立花さんっておでんで何が好き？」
「え、えっと、えっとえっとね。馬すじでしょ、それと小桜っ」
立花は二本、嬉しそうに指を立てた。
「……小桜って？」
「し、知らないの？　桜の花びらに似てるんだよ？」
「そっか」
一は流す。
「うーん。馬すじは無いけど、牛すじを入れておこうかな」
適当に具を容器に入れて、一はプラスチックの蓋で閉じた。
「参考になったよ、ありがとね」
「？　え、どこ行くの？」
「さっきの子がおでん食べたいって言うからさ」
「ボ、ボクのじゃないの！？」
「え、違うけど……」
「ひ、酷いや！　はじめ君の馬鹿！　あの子結局万引き犯じゃないかっ！」
「……金払ってくれそうにないし、そう言われればそうなるよね」
一は芥子を適当に引っつかみ、カウンターへ身を乗り出して箸を一つ手に取る。
「もうボク働きたくないよっ、きんろー意欲が無くなったもん」
ぷいっと立花はそっぽを向いた。
「またジェーンに吹き込まれたな……。分かった、仕事終わったらご飯食べさせてあげるから」
「ボ、ボクを食べ物で釣ろうとしても、そ、そうは行かないよっ」
「立花さん、家でご飯どうしてる？」
「……い、いんすたんと」
「お米とか、ちゃんと食べてる？」
「た、食べてないけど、か、関係無いじゃないかっ」
「今日は俺学校無いし、ちょっと遠くまで外食しに行こうと思ってるんだ。糸原さんいないから、和食の美味しいお店までね」

もはや意地悪でしかない。
「まあ、別に良いや。制服連れた子と一緒にいたら職務質問喰らいそうだし。一人で行くよ」
「き、着替えるっ！　ご、ご飯食べたい」
「素直でよろしい。ってわけで、ごめんね。これ渡したらすぐに戻ってくるから」
おでんの容器を大事に持って、一は立花に背を向ける。
「は、早く帰ってきてねー」
「はいはい」
正直な話。一にとって、この世で一番立花が可愛かった。

ナコトはバックルームで優雅に女性誌を読んでいた。
「遅かったですね」
「あのさー君さ、さっきまで泣いてたよね」
「あたしって泣いたらお腹空くんですよね」
一からおでんの容器を奪い、ナコトは蓋を開ける。
「……確かに、売れ筋ばかりです」
「ご注文どおりでしょ」
「ですがありきたりで、つまらないですね」
「店長！　やっぱ敵討ち止めませんか！？」
返事は無い。店長は疲れて寝ていた。
「箸と芥子を」
「畜生、納得いかねえ。せめて金払ってくんないかな」
「狭量な殿方は嫌われてしまいますよ。主にあたしに」
大根を頬張りながらナコトは言い放つ。
「敬語に誤魔化されていたけど、段々化けの皮が剥がれてきたって感じだな」
「あたしは化けてなどいませんでした。あなたの理想の女性像を押し付けるのは遠慮して貰えませんか」

「てめぇ、変な鎖巻いてるくせに」
「……鎖は関係無いでしょう。あなたは馬鹿ですか？」
騙された。一は今更ながら、猛烈にそう思った。
「さっきまでのは嘘泣きだった訳かよ」
「あたしは、そこまで器用ではありません」
玉子を箸で割りながらナコトは淡々と言う。
「あの涙は紛れも無く本物です。確かめてみますか？」
「……どうやってだよ？」
ナコトは黙って床を指差した。
「あたしの涙の痕がまだ染み付いている筈です。どうぞ、舐めてみて下さい」
「なあ、ぶん殴っても良いよな？」
「どうぞご自由に。あなたがオキナの仇を取ってくれると言うなら、ですけど」
「随分と、仲間の事を軽く言うんだな」
「あなたにはあたしたちの事は分かりません。ですよね？　だから、そんな口を利かないでください」
カップに口を付け、ナコトはだしを飲み干す。
「……足りないですね。お代わりを頂けますか？」
「芥子でも食ってろ！」
――騙された！
一はもうナコトに関わらない事を決めた。

二度と関わらないと、そう決めた筈だった。

「ボク、季節の親子丼セット」
「あたしはB定食で良いです」
「……天丼で。あ、以上でお願いします」
エプロンを着た店員は頭を下げると、一たちのテーブルから離れていった。
「……何でお前まで居んのかな、ホントに」
一は正面のナコトをジト目で見る。
「まさかとは思いますが、あたしの事ですか？」
「お前以外に誰がいんだよ」
ナコトはフッと鼻で笑う。
「お腹が空いたからです。第一、こちらの方には奢るのに、あたしに奢らない理由が無いでしょう」
立花を横目で見ながら、ナコトは至極当たり前に、そう口にした。
「ボ、ボクは約束してたもん。ナコトちゃんこそ、何で付いてくるの？」
「あたしをあの人たちと一緒にする気ですか？　取って食べられてしまうかと思いましたよ」
「食べやしねえよ、嫌味言われるだけだ」
「それが嫌なのです」
ぷいと、そっぽを向き、ナコトは下ろしていたリュックサックから本を取り出す。その本の表紙はボロボロに擦り切れ、ページも幾つか破けていた。表紙には小さく、五角形や一の見たことも無いモノが記されている。
「……飯時に本を読むのはやめろよ」

「分かっています。本が汚れてしまいますからね」
「そうじゃねぇよ、マナーの問題だ、マナーの」
ナコトはページを閉じ、やれやれと言った風に溜め息を吐いた。
「あなたはあたしのお父さんですか？　違いますよね、だったらそんな口を利かないで下さい」
「はいはいごめんね。お前自分の分はちゃんと払えよ」
「分かっています。一々煩いですね」
それだけ言うと、ナコトは表紙を開き、食い入るようにページを眺め始める。
「ね、ねえナコトちゃん、それって良い本なの？」
「……」
「凄いや、ナコトちゃん読み始めたばかりなのに、もう集中してる……」
「無視されてるんだよ。俺たちも無視しようぜ」
一はお冷に口を付け、ナコトを視界から外した。
「立花さん。俺ご飯食べたらタルタロスまで行くんだけどさ、立花さんはどうする、どっか行きたい所ある？」
「え、え、え、え？　そ、それってさ、デートって事？」
一は何故だか早田を思い出す。
「……うん、そうそう、デートだよ。いや、さっきは悪い事したなあと思って。付いてきて欲しいところがあったら、まだ時間もあるし付き合おうと思って」
「あ、あ、じゃ、じゃあねっ、ゆ、遊園地！」
「今から？　遊園地なんて駒台出ないと無いからなあ、今度にしない？」
「じゃ、じゃあ映画館は？」
「今良いのやってないんだよなあ。立花さんは見たい映画があるの？」
「無いけど？」
立花は小首を傾げる。

「無いのに映画館行きたいの？」
「……水族館、動物園、植物園っ」
「遊園地と同じく市外なんだよね、駒台にはそういう施設無いから」
「むう、はじめ君は意地悪だよ」
「意地悪って……。ああ、そう言えばさ、市外だけど、図書館ならバスに乗ればすぐ行けるよ」
ナコトが本から顔を上げた。
「図書館？　ボク、本嫌いじゃないけど。デートでそんな所行くのは嫌だよ」
「じゃあデートってのは忘れよう」
「い、嫌だよっ！　ボクは、はじめ君とデートに行きたいの！」
「うーん、正直すげえ嬉しいんだけど、もう昼過ぎ回ってるし。今から行っても大して遊べないよ。それに、あんまり遅いとなあ」
「ボ、ボクは気にしないよっ」
「立花さんが気にしなくても、警察とかは気にするの。俺もう職務質問されるの嫌なんだよ」
「……さ、されたの？」
一は遠くを見る。
「ジェーンと歩いてたら二回ぐらいされた……」
「ボ、ボクはジェーンちゃんより大きいよ？」
「立花さん、あれ程言ったのに制服じゃん」
「だ、だってナコトちゃんはセーラー服なのにボクだけ駄目なんてそんなのずるいよ」
「こいつ俺の言う事聞かないんだもん」
「そんな事より図書館の話をしましょう」
「うわ、急に入ってくんじゃねぇよ」
身を乗り出してきたナコトを、一は鬱陶しそうに手で払った。
「ナコトちゃん、本好きなの？」
「はい、愛しています」
ナコトの眼鏡が光ったように一には見えた。

「ふーん、図書館ならバス乗ってすぐだから行ってくれれば？」
「冷たいですね。あたしはこの街に来るのは初めてなんですよ？　道案内ぐらい買って出ようって気概はあなたに無いんですか？　それだから警察に目を付けられてしまうんです」
「付けられてねぇよボケ」
「図書館に行きたいです」
「素直に付いて来てくれって言うなら、考えなくも無い」
「付いてきて下さい」
頭を下げるナコトに、一は少し引く。
「そ、そんなに行きたいのか？」
「もしあたしの言う事を聞いてくれないなら……」
じゃらり、と。ナコトの鎖が揺れた。
「……分かったよ。立花さん、特に行く所が無いなら図書館でどうかな？」
「さ、三人で行くの？　それってもうデートじゃない、よね……」
悲しそうに立花は俯いた。ポニーテールの先っちょが力無く揺れる。
「今度、今度、ね？　絶対に埋め合わせはするからさ」
「……わ、分かった。絶対だよ？」
「あなたは心底からの外道ですね。年下を泣かす男性は地獄に落ちますよ」
「うっさい泣かすぞ」
一たちの会話は、ウエイトレスが料理を運んできたところで一端のお開きになった。

駒台の街をバスで揺られて二十分。街の郊外、小高い山の入り口付近に図書館はあった。公立の図書館ではない。駒台に住んでいた、本好きの老人が私財を投げ打ってまで作った、私立の図書館。蔵書数は二十万冊にも上り、二階建てのフロアには所狭しと本が並んで

ある。休日には子供たちが絵本を読み、学生が自習をしたり、平和な光景が見られる。司書の人柄と、館長でもある創始者の老人が人気な事で有名。

「良い名前ですね。つくも図書館ですか」
ナコトは入り口に掲げられた看板を見上げ、感慨深げに呟いた。
「そうだろ、俺のゼミの先生が作ったんだぜ」
「それは聞いていません」
「ぐっ、そ、そうだな……」
「は、はじめ君の先生の図書館なの？　凄いや、立派な人なんだね」
一は自分の事では無いが、何だか誇らしげになる。
「そ、そうかな」
「そうだよっ、はじめ君の先生が凄いって事は、はじめ君も凄いってことなんだよっ」
「立花さん」
一は真剣な瞳で立花の肩を両手で掴んだ。
「な、何？」
気圧されながら、立花は一を見返す。
やがて一は静かに、良く通る声で言った。
「結婚しよう」
「……う、うんっ！　ありがとう、はじめ君、その、し、幸せにしてね……」
顔を真っ赤にして、立花は目を細めた。
「式には呼ばないで下さいね」
ナコトは先に階段を上り切ると、一たちを見下して言い放った。

館内は吹き抜けだった。溢れんばかりの本棚、本、本、本、本、本。一は眩暈を覚える。

「……ここの館長は本を愛しているんですね」
「ん、分かるか？」
「したり顔で本について話そうとしないで下さい。遠まわしに言うと虫唾が走ります」
ナコトは舌打ちした。
「な。何だよ、お前には分かるのかよ」
「当然です。この空調、温度、書物にとっては最高の環境です。本を傷めないように設定されていますね」
「へえ、そりゃ凄いや」
一は意味も無く辺りを見回す。
「す、凄いね、ボクんちよりたくさん本がある」
「立花さんちって、そんなに本があるの？」
「うん、お母さんが読書家なんだ」
立花は誇らしげに言った。
「何読もうかな……。ボク、ちょっと見て回ってくるね」
「う、うん。外に出たら駄目だよ」
「分かった！」
そう言うと立花はひょこひょこと駆けて行く。
「ああ、走ったら危ないのに……」
「あの人には絵本が似合いそうですね」
「お前毒吐くよな、ホント陰口が似合う奴だわ」
「あなたも本を読んで教養を高めてはどうですか？」
「言われなくても読むよ」
「……精々辞書に載っている卑猥な単語を見つけて線を引いてはニヤつく作業を頑張って下さいね」
「ンな事しねぇよ！」
「では、そんな事をした経験が無いと？」
「俺も見て回ってくるわ」
一はナコトに背を向け、二階へ続く階段を上っていく。ナコトからの謂れ無き視線を感じたが、それは無視した。

図書館の二階にも本は山のように納められている。自習の為の机と椅子が所々に置かれ、一階よりも子供が少ないせいか、一には二階の方が静かに感じられた。一は棚と棚の間を手持ち無沙汰に眺め歩く。図書館に来たのは良いが、特に読みたい物は無かった。本を手にとっては、戻し、手にとっては戻す事を繰り返す。

やがて一は経済学の本を三冊手に取り、空いている椅子に腰掛けた。タルタロスに行く用事はあったが、まだ二時を回った所だったので、ゆっくりと一はページに目を通していく。

一が本を読み始めて、三十分は経っただろうか。ふと、一は背後に不穏な気配を感じた。ゆっくりと振り向くと、ナコトがこちらをジッと見ている。目が合ったのに、彼女は何も言わずただ一に視線を向け続けていた。

「……な、何だよ」

「経済学の本ですか」

ポツリとナコトが漏らす。

「悪いかよ」

「いえ。ですが、そういう本を読んでいればあなたでも頭が良さそうに見えますね」

「……ありがとう」

「お礼を言うのならその本に言ってあげて下さい」

ナコトは一の向かい側にリュックサックを下ろすと、抱えていた本を机に広げた。

「そんなに読むのか？　長くは図書館にいないぞ、俺」

「大丈夫です。本を読むのは早いですから、あたし」

「ふーん。本好きなんだな」

「と言うより、愛しています。あたしはマニアです」

「……好きなジャンルとかあんの？」

何気なく一は聞いてみる。ナコトはその質問に、少しだけ目を細めた。

「嫌いなジャンルはありません」

「特に、好きなのは？」
「ダダ甘い恋愛ものです」
「……ホントに？」
一は広げられた本を見ながら、疑いの目を向ける。
『ドジアンの書』『ゴエティア』『黒い雌鳥』『ピラミッドの哲人』『大いなる教書』
広げられた本の題名からは、恋愛なんて甘い物が想像出来そうになかった。
「何、これ？」
「魔導書（グリモワール）です」
「ぐりもわーる？　何だそりゃ？　新しいジャンルか？」
「……違います。そうですね、あなたにも分かるように噛み砕いて言えば、魔法の本と言ったところでしょうか」
ナコトは『ゴエティア』を手に取り、くるくると回す。
「そんな物がここにあったのか？」
「あくまで、これは贋作と言いますか、コレクターズアイテムと言いますか。まあ、本物ではありませんね。しかし中々のレア物です。こんな所でお目に掛かれ、あまつさえ手にとって読めるとは思いもしませんでした」
「ふうん、でも珍しい物なんだ。あー、けど九十九先生の図書館だからな、あり得なくは、ない、か」
「この手の本を集めてる人なんですか？」
「うん。お前みたいに変わってる人なの」
一は本の続きを読み始めた。
「あなたは魔術の存在を信じていますか？」
「……は？　なに、勧誘？」
唐突な質問に一の目が丸くなる。
「違います。イエスかノーで答えてください」
「んー、イエス」
「意外ですね。あなたのような人が、魔術なんて不確かなモノを信

じているとは思っていませんでした」
　ナコトは眼鏡の位置を直し、本を回すのを止める。
「そりゃ、俺も一応勤務外なんてやってるし、ソレなんて存在もいるわけだし。今更魔術や魔法なんて言われても信じるしかないよ」
「魔術と魔法を一緒にしないで下さい」
「はいはい、ごめんね。で、さ。さっきから気になってたんだけど、お前って魔法使えるわけ？」
「あたしが使えるのは魔術です」
　きっぱりとナコトは宣言した。
「……え、マジ？　マジで使えんの？」
「あたしはあなたの事があまり好きではありませんが、嘘は吐きません」
「因果関係が見当たらないが、とにかくそういうの使えるんだなお前。へー……」
「あなた、信じるんですか？」
「いや、だからさっきから言ってるじゃん。疑う理由が無いよ」
　一は本を置いて、ナコトをジロジロと眺める。
「嫌らしい目で見ないでもらえますか」
「あのさ、俺にも魔術って使えるわけ？」
「……は？」
　ナコトの眼鏡がずり下がった。
「あー、やっぱ無理か」
「そ、そうではなくて、何故、そんな事を聞くのですか？」
「だって使ってみたいじゃん」
「あなた、今幾つですか？」
「夢見たって良いだろが」
　そこでナコトは腕を組む。何か考えているようにも見えた。
「そうですね……」
　呟きながら、ナコトはリュックサックの中から一冊の本を取り出す。やけに古びた本だったが、きちんと手入れはされている。

「この本を読んでもらえますか？」
そう言ってナコトは本を一に手渡す。
「何だよこれ、日本語じゃないじゃん。アラビア語かー？」
手渡された本を、一は不思議そうに眺めた。
「と言うより何語でもないです」
「はあ？　じゃあ読めないじゃねぇかよ、俺を馬鹿にしてんのか」
「馬鹿にはしています。ですが騙すつもりはありません。良いから、読んでみて下さい」
強くナコトに言われ、一は仕方なく適当なページを開く。やはりと言うか、理解できない文字の羅列が只管並んでいた。アラビア語にも似ていたが、良く見れば確かにアラビア語でもなんでもない、子供の悪戯書きのような文字だった。目を凝らしても、離して見ても、一には一つの文字ぐらいしか意味が読み取れない。
「……ふーん」
「何も、見えませんか？」
「うん、残念だけどね。アルアジフってのしか読み取れない」
「え？」
ナコトが弾かれたように椅子から立ち上がる。
「返すわ。目が痛くなりそう」
指で瞼を押さえながら、一は本をナコトに突返した。
「あ、あの、何が読み取れたって、言いました？」
「アルアジフって単語」
「……まさか、見えたんですか？」
そう一に問うたナコトの拳は震えている。
「見えた、って言ったらそういう事になるのかな。って言うかさ、説明しろよ」
「分かりました」
ナコトは椅子に座り、返された本の表紙を一に向けた。
「これは１９７３年に、アウルズウィック・プレスと言う方が贋作とハッキリ言った上で出版した『アル・アジフ』と呼ばれるモノで

す」
「ああ、アルアジフってその本のタイトルだったのか」
「はい。そしてこの本の価値はほぼありません。マニアにだけ受けの良いコレクターズアイテムです。何故なら、中身は全く意味の無い、アラビア語風の文字が羅列されただけの書物だからです」
「……なら、何で俺はアルアジフって文字が見えたんだ？」
嫌な物が、一の体を走り抜けた。
「そうですね、恐らく一さんにはセンスがあるんでしょう」
「おーい、何か簡単な説明だな」
一の肩の力が抜ける。
「魔術なんてそんな物ですよ。詳しい説明をしても良いですが、結局それは何にもなりません。説明など、所詮は魔術を使う側の自己満足です。現代の科学で説明できない不思議なもの、そういうものを魔術と呼ぶんですから」
「ふうん、センスねえ……」
「魔術を使うには何も要りません。センスです。持って生まれたセンスが物を言います。この本を読ませたのは、あなたのそう言った物を確かめる為だったのですが、まさか、本当に見えるとは」
「お、じゃあアレか。俺にも魔術が使えるわけか？」
嬉しそうに一が言う。
「さあ、そこまでは。しかしあなたには資質があるようですね。みっちり十年魔導書と向き合えば、可能性は一パーセントぐらいには跳ね上がるでしょう」
「アホか、十年なんて飽きちまうよ」
「勿体無いですね。どれだけ使いたくても、どんなに求めても魔術を使えない人間もいると言うのに」
「ふーん。ちなみにさ、どうやったら魔術って出来るの？」
「は？　どういう意味、でしょうか？」
「だからさ、なんか、その、魔法を使う時ってさ、呪文とか、唱えるわけ？」

ちょっと一はワクワクしていた。
「必要ありません。魔法使いではないあたし達は、厳密に言えば魔術を使うのでなく、魔導書によって魔術を使わせてもらうのです」
「使わせて？」
「ええ。あくまで力を借りるだけです」
「……つまんないな、それ」
一は椅子に深く腰掛け、だるそうに体を伸ばす。
「あたし達は、魔導書のページを破り、念を込めて魔道書に呼びかけるんです。力を貸して下さい、と。そうして魔導書が答えてくれれば、魔術を行使できます。そうですね、仕組みだけ言えば、簡単に聞こえますね」
「でも十年掛かるんだろ？」
「あたしは二年でした」
「さり気に自慢してんじゃねぇよ」
そう言って一は立ち上がった。
「やっぱり飽きちゃいましたか？　それともあなたの頭では難しすぎましたか？」
「逐一突っかかるなお前。良いんだよ、俺には魔術なんて」
「……宜しければ、魔導書をお一つお貸ししましょうか？」
ナコトはリュックサックから古びた本を何冊も取り出していく。
「良いよ、それはお前の大事な商売道具だろがフリーランス」
「いえ、あたしに合わないモノもありますから」
「相性とか、やっぱ大事なのか？」
「勿論です。相性が悪ければ、中身を読み取る事すら難しいですからね。魔術を行使するなど無理に等しいですね。全く持って可能性は絶無です」
「やっぱ難しいわ」
ふと、一の目に異質なものが映った。古びた魔導書。その中に一つだけ、真新しいカバーの本が一つ。やけに小さく、やけにファンシーな、漫画の単行本のようなサイズの本。

「それも魔導書なのか？」
「……いいえ。これはあたしの百パーセント趣味の本です」
「どっからどう見ても、魔導書なんかにゃ見えないな。少女マンガ？」
「はい。魔導書全部を手放す事になっても、これだけは誰にも渡せません」
ナコトは一から隠すようにその単行本を鞄に詰める。
「難しい話してたら、肩凝っちまった」
「すいません、頭の良い話をしてしまって」
「いや、どっちかって言ったら頭の悪い話だろ」
そう言って一は苦笑する。
この一時間後、一たちはつくも図書館を後にした。

オンリーワン近畿支部。
戦闘部のオフィスを出た堀は、支部の地下にある駐車場へ向かっていた。彼の顔は鬱屈したデスクワークから開放され、晴れやかなものになっている。
「堀」
地下へと繋がるエレベータの前で、堀は誰かに呼びかけられた。
「……ああ、春風さん」
油断無く振り向き、堀は笑顔を作る。
通路の向こうから現れた、細いからだ。
「少し待て」
実働時とは違い、春風はスーツを着こなしていた。
「どうしました？」
「店に戻るのか？」
「ええ、久しぶりなんで少し緊張してますよ」
にこやかに堀は言う。
「そうか。では二ノ美屋店長に言伝を頼む」

「ええ、承ります」
「……件のカトブレパスだが、早めに動かねば先を越されるぞ」
「はあ、そのまま伝えれば良いんですか？」
春風は頷いた。
「フリーランスの動向までは掴めんが、南駒台店が出向くらしい」
「……あそこはまだオープンしていないのでは？」
「研修だとさ。カトブレパスなど丁度良い肩慣らしなのだろう」
「『図書館』を仕留めたソレが？　そう上手くいきますかね」
堀は眼鏡の位置を直し、エレベータのボタンを押す。
「さあな、だが南には戦乙女（ワルキューレ）がいる。戦力としては申し分ないだろう」
「成る程」
エレベータが、開く。
「ああ、春風さん。一つお願いしたい事があるんですが」
「……私は便利屋ではないぞ」
「そんな風には思っていませんよ」
堀はエレベータに入り、『開』ボタンを押し続ける。
「なんだ、言ってみろ」
「カトブレパスについて、調べては貰えませんか？」
「……今更か？」
「気づいては、いるでしょう？　カトブレパスの向こう側。裏について調べて下さい」
にこやかに、堀は言った。
「フッ、油断なら無い笑顔だな。心配するな、漣が調査に入っているさ。すぐに私も続く」
「それならば問題ないですね。それと、何か気づいた事があれば連絡を下さい。恐らくは――」
「――皆まで言うな、堀。私を誰だと思っている。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗だ。好きな漫画のジャンルは少年漫画。嫌いな漫画のジャンルは――」

エレベータの扉が閉まった。

駒台の街へと戻るバスの中。一番後ろの席で、一は立花とナコトに挟まれる形で座っていた。

立花は安らかな寝息を立て、頭を一に預けている。

「まるで子供ですね」

「お前も俺も子供だろ」

ナコトはリュックサックを空いた席に下ろし、読書に興じていた。

「ふあ、随分長く居ちゃったな」

あくび交じりに一は言う。

「中々に楽しめました。一つ心残りがあるとすれば、あの本が貸し出し禁止だった事ですね」

「しょうがないだろ、貴重なモンなんだからさ」

「あなたにあの本の価値が分かりますか？　分かりませんよね、だったらそんな口を利かないで下さい」

「……はいはいはい、ごめんな」

ぼんやりと、一は窓の景色を眺める。流れる町並みは平和なもので、実にのんびりとした時間だと、そう思った。

「店に戻るのですか？」

「いや、俺はタルタロスに寄ってく。お前は戻れよ」

「分かっています。分かっていますが……」

ナコトは憂鬱そうに俯く。

「店長たちか？　心配するなよ、立花さんもいるし、向こうにゃ神野君って高校生もいるから味方になってくれるよ」

「あなたは店に戻らないんですか？」

「あー？　何？　俺と一緒にいたいの？」

「下卑た目であたしを見ないで下さい。あたしはあなたがいれば、暇潰しには事欠かないと思ったからそう言ったまでです」

きっぱりとナコトは切り捨てた。一からそっぽを向き、ナコトは

窓に目を遣る。
その横顔は、どこからどう見ても普通の高校生だと、一は思う。
「……お前さ、何で駒台に来たの？」
「あたしじゃなく、オキナが……」
オキナと、そう口にした途端ナコトはまた俯いた。
「フリーランスってさ、ソレを殺して生活してるんだってな」
「……いけないですか？」
「そんな事ないけど。たださ、制服着てるし、お前も学校通ってたんじゃないか？　親とか心配しないの？」
普通の生活が出来るんじゃないのか。一はそう思って、口にしようとするがぐっと堪える。
「学校なんて、別に」
「親は？」
「良いんです。プライベートな問題に踏み込まないで下さい。あたし、そういう人嫌いです」
「……確かに、俺が言えた事じゃないよな」
その通りです。そう言って、ナコトは一を睨んだ。
「お前はさ、何の目的も無くここまで来たの？」
「ですから、プライベートな所には……」
「分かった分かった、答えたくなかったら良いよ」
一は手を振ってナコトから目を背ける。
「……本、です」
ナコトは持っていた本を両手でしっかりと抱きしめた。
一は何も言わず、続きを待つ。
「あたし達『図書館』は、魔導書を集めていたんです。ですが、魔導書は貴重なもので、中々見つからないものなんです」
それは一にも分かった。具体的な魔導書の価値までは分からないが、あれが大事なものだとは分かる。
「でも、手掛かりみたいな物はあって。ソレの現れる所には、魔導書があるケースが多いんです。何故だかはハッキリと分からないけ

ど、やっぱり、異質なモノは異質なモノを呼び寄せるとは、思うんですよね」
　類は友を呼ぶ。
「だから、ソレが多いところにあたし達は出向いてました。必要になれば、ソレとも戦って……」
「そういうのは全部、お前の仲間の意思だったのか？」
「え？」
「本を集める為に頑張ってたのは、全部その、オキナって奴が決めてたのか？　お前はただ、後を付いて回ってただけなのか？」
「……違います。あたしだってちゃんと、集めたいと思ったから、一緒に『図書館』なんてやってたわけで」
　一は最初から、ナコトに何か違和感のようなものを感じていた。彼女の行動、そこからは自分の意思めいたものが何もないように思えたからだ。誰かに、動かされているような。考えを断ち切り、ふと、一は立花を見る。
「……まあ、こういう子もいるしな……」
「あの、何か言いました？」
「いや。そろそろ陽が落ちるな」
「もうそんな時間ですか……」
　二人は揃って、窓の外を見た。
「暗くなるな」
「そうですね」
「……俺、やっぱ店に戻るわ」
「そうですか」
「仲間の仇、討ちたいよな」
「はい」
「俺の事嫌い？」
「はい」
「そっか」
　一は笑う。

バスはもう、目的の停留所に近づいていた。

俯くな、前を見ろ。

ニット帽を被った女。顔を包帯で隠した女。目が死んでいる女。

三人は横一列に並んでいた。

「……やっぱりやめた方が」

彼女らを見ながら、ヒルデは上目遣いに言う。

「駄目よ。ヴァルハラが名を上げるチャンスなんだから。いざと言うときにはウールヴヘジンもバーサーカーも呼んであげる。だからほら、行きなさい」

ヒルデの懇願を聞き流し、胸元の開いた赤いビジネススーツを着た女は言い放った。

ヒルデは逡巡する。変わり果てた戦乙女（ワルキューレ）。彼女らを連れてソレを殺しに行く。以前の彼女らならいざ知らず。

だが、ヒルデにとって、今の彼女らはとんでもない足手まといだった。しかし、自身は雇われの身。上司の指示には逆らえない。

「北駒台なんかに負けてらんないのよ。ほら、どうしたの、行きなさいってば」

「……時間を……」

「幾ら時間を与えても、もう元には戻らないわ、それ。代わりは手配してあるから、とりあえず向かいなさい。日も暮れてきたし、さっさと帰りたいのよね、私」

言う事を聞いてくれない、使えない上司にヒルデは嫌気が差す。

「知りませんから……」

「大丈夫よ。エチオピアのソレ如き、あんた一人で大丈夫でしょ」

分かりました。呟き、ヒルデはロッカールームに保管してある鎌を手にした。目線だけで、戦乙女に合図を送る。ニット帽の女だけ

がヒルデに答えた。
「初陣よ、決めてらっしゃい」
返事はせずに、ヒルデは戦乙女を引き連れバックルームを出て行く。
彼女らの後姿を見届け、残った女は煙草に火を点けた。
「厄介ったらありゃしないわ」
紫煙を吐き捨て、女は乱暴に壁を蹴った。

オンリーワン北駒台店。
「良し、お前ら集まれ」
煙草片手に、店長が椅子ごと器用に移動する。バックルームの真ん中に椅子をつけると、ふんぞり返り煙草に口をつけた。
「もう分かっていると思うが、さっき情報部から指示が来た」
集まった面々をゆっくりと眺め、店長は灰を床に落とす。
「自衛隊の団地の、近くの泉に出たそうだ。種類は獣、カトブレパス。犠牲者は一人。上からは確実に仕留めろと言われている」
「カトブレパスで間違いないですよね？」
一が念を押した。
「私に言うな、情報部に言え」
「なあ店長、出たって、一体だけか？」
「何だ三森、一体じゃ足りないか？」
店長は喉の奥で笑う。
「確認だよ、確認。けどま、何だ、物足りねえっちゃあ、物足りねェな」
「心配するな。今日はお前が留守番だ」
「はあ！？　あンでだよ！」
パイプ椅子から立ち上がり、あまつさえその椅子を蹴飛ばし、三森は店長に食って掛かった。
「残念だが、先約がある」

そう言うと、店長は部屋の隅にいたナコトに目を向ける。視線を向けられたナコトは恥ずかしそうに俯き、体に巻きつけている鎖を弄った。

「私よりフリーランスを優先するってのかよ！」

「どっちにしろ、ミツモリは今日シフト入って無いんだケド？」

「呼んだのはてめぇだろうがチビ！」

「吠えるな三森。お前を呼んだのは悪いが念の為だ。もしもの時に備えて、お前には店で待機していてもらう」

涼しい顔で店長は言う。

「あのー、じゃあ今回は誰が行くんですか？」

おずおずと、一が手を挙げた。

店長が腕を組み天井を見上げる。

「そうだな……」

その様子を見ていた神野が一の背中を軽く叩いた。

「あの人何も考えてなかったんですか？」

「……多分。あの人アレだから」

「聞こえてるぞ男ども。決まった、お前らが行け」

声を揃えて一と神野が抗議の声を上げる。

「ちゃんと考えて下さいよ！」

「俺新人なんスけど！」

「確かに、お兄ちゃんたちだけじゃ心配ネ」

「煙草ばっかスパスパ吸いやがって！」

「店長、しっかり考え直して下さい」

「年増！」

「おい、私に行かせろよ」

口々に店長以外の人間が意見を口にした。店長は煙草を床にポイ捨てし、一の顔をジッと見る。

「今私の悪口言ったろ」

「言ってませんよ、本当の事を言っただけです」

「遅刻したくせに調子に乗るな」

近くにあった空き缶を手に取り、店長は一に投げつけた。缶は一の顔のすぐ傍の壁に跳ね返り、音を立てて床に転がる。
「……殺す気ですか？」
「私だってちゃんと考えているさ。まず、今回のメンバーから黄衣は外せん」
その言葉に三森は眉を顰めた。
「なあ、だから何でだよ？　そもそも、フリーランスがどうしてこんな所に居るんだっつーの」
「話せば長くなります。今は一刻を争う状況なんですよ？　後にしてもらえませんか？」
ナコトは三森から顔を背ける。
「うーわ、コイツすっげームカつくわ」
「黄衣とは約束してしまったからな。それで、残り二人だが」
「え？　何で残り二人なんですか？」
神野が爽やかな声でそう尋ねた。
「ウチの規則だ」
「……ソレと戦うのに、ルールが必要なんですか？」
「若いな神野、羨ましいぞ。確かに色々と言いたい事はあると思うが、雇われは黙って飲み込め」
「……は、はい」
「ああいう人だから、とりあえず黙って従っておけば良いよ」
一が神野の肩を持つ。
「糸原と立花はもう休みだ。ゴーウェストには店に残ってもらい、三森のフォローを頼む。それで一と神野が勤務外として黄衣と一緒に行けば、な？」
「何が『な？』ですか。俺だって今日はもう休みですよ」
「私なんて二連休だったンだぞ」
「さっきからごちゃごちゃとうるさい。良いから行け、これだから人数増えると嫌なんだ」
店長はそれだけ言うと、椅子に体重を預けた。一はこれ以上店長

には期待しない事にする。
「……ジェーン、ＳＶとしての意見を聞かせてくれ」
「アタシもノープロブレムだと思うワ。お兄ちゃんならきっと大丈夫」
「あのな、ＳＶとしての意見が聞きたいんだよ俺は。黄衣と俺と神野君で、絶対に大丈夫なんだろうな？　命の保障は出来るんだろうな？」
　一は不安そうにジェーンを見つめる。頬を朱に染めながら、ジェーンは一の傍に近付き、背伸びをした。
「心配」
「……ほら見ろ」
「Ｂｕｔ、お兄ちゃんは行かなきゃダメ」
　ジェーンは人差し指を一に突きつける。
「こーいうコト言いたくないんだけど、今コマダイは大変なの。アタシも出来る限り皆のフォローをしたい。ケド、それも難しくなっちゃう」
「そうなのか？」
「イエス。だから、だからニノマエ、がんばって」
　はにかんだ笑顔を目の前で見せられると、一はそれ以上何も言えなくなってしまった。ジェーンから視線を逸らし、照れくさそうに頬を掻く。
「……しょうがねえな。なんだよ、店長も始めからそう言ってくれれば良かったのに」
　恨みがましい目で店長を見ると、一はジェーンの頭に手を置いた。
「頑張りますよ。じゃあ店の事は任せるな。あの人たちだけじゃどうしようもないからな」
「……うん。ケド、お兄ちゃん？　子ども扱いはもうしないでよネ」
「はいはい」
「おらっ、いつまでもホームドラマやってンじゃねェぞ、とっとと行きやがれ」

三森が一の尻を蹴飛ばし、舌打ちする。
「蹴る事無いじゃないですか」
「うっせェボケ。おらっ、落とすなよ」
一が投げ渡されたのはどこからどう見ても、ただのビニール傘。傘の柄をしっかりと握り、一は三森に礼を言う。
周りに視線を配ると、神野は既に制服を脱ぎ、学ランの状態だった。竹刀袋を抱え、壁にもたれ掛かっている。ナコトは相変わらず恥ずかしそうに俯いて鎖を弄っていたが、一の視線に気が付くと不機嫌そうにそっぽを向いた。
「勤務外ども、準備は出来たようだな」
店長が顔を上げる。
「ソレは前回の場所から動いていない。現場までは堀が送ってくれるらしい、外で待ってるから早く行ってやれ」
一たち討伐組は顔を見合わせ、それぞれ頷いた。

一たちが店を出ると、黒いワゴン車が目に入った。車の近くには、スーツ姿の優男。眼鏡の位置を直しながら、彼はにこやかに微笑む。
「久しぶりですね」
「堀さん、元気にしてましたか？」
懐かしい顔に、一の心が少しだけ躍った。堀はぎこちなく笑う。
「こっちに戻って、やっと元気になったって感じですかね。一君も元気そうで何よりです」
「……あの、店長たちに挨拶は？」
「いやあ、電話で店長に復帰を告げると『そうか』って一言。相変わらずクールですね、店長は。そんな訳で、別に良いんじゃないですか？」
「あの人はっとにもう……」
ふと、一が後ろを向くと神野とナコトは所在無さげに突っ立っていた。

「……おや、確か後ろの方々は」
「新人の神野君と、その、フリーランスの黄衣です」
一がそう紹介すると、神野は頭を下げ、ナコトは俯いた。値踏みするような視線を後ろの二人に向け、堀は車のドアを開ける。
「立ち話もなんですから、とりあえずは中に。移動中に自己紹介を済ませましょう」
堀の提案に三人は頷く。
一が助手席。神野とナコトは後部座席に乗り込み、堀が運転席でシートベルトを締め、ドアを閉める。
アラクネ。唐突に一は思い出してしまった。あの日もこの車に乗った事を、思い出す。アイギスを握る手に力が入った。そうだ、また、夜が始まる。

北駒台店のバックルームで、三森は椅子にもたれて煙草を吹かしていた。静かな部屋に時折、店長のマウスを弄る音だけが聞こえてくる。最近一が買ってきた、バックルーム専用の灰皿に短くなった煙草を押し付けると、三森は椅子から立ち上がった。
「なあ店長、マジにあいつらだけで大丈夫なのか？」
店長はパソコンのディスプレイから視線を外し、ゆっくりと顔を上げる。
「一が心配か？」
「あいつらって言ったンだけどな、私は」
ニヤニヤと笑う店長を見下げ、三森はジャージのポケットに手を突っ込んだ。
「フリーランスはともかくよ、あの二人はまだ新人もいいトコだろうが」
「だからだ。お前も気づいているだろう、三森。今年の駒台は、ソレが異常に現れていることを」
「そういや、春風にも同じこと言われたな」

「クルーひとりひとりの質を上げなきゃならん。去年までの、お前一人に頼りきりの状態じゃ店（ウチ）は回しきれなくなるぞ。それどころか、非常に面倒で考えたくは無いが、駒台で年を越せんかも知れんな」

気だるげに、店長は煙草に火を点ける。

「どういうこったよ」

「そのままの意味だ。ソレの数が増えた。先日のアラクネ戦で、徒党を組むソレが居るというのも明らかになった。そして、これはまだ誰にも言ってなかったんだがな、どうも最近のソレには作為めいた意図を感じるんだよ」

「……店長の勘ってのは、当たるンだよな」

「勘だけじゃない。堀も言っていた。カトブレパスが単体でフリーランスを殺すなんて有り得んとな」

「私は考えンのが嫌いなんだけどさ、つまりそれって、誰かが裏で糸引いてるって事になンのか？」

三森の言葉には答えず、店長はただただ紫煙を吐く。

「有り得ねーだろ、ンな事」

「……だといいがな」

夜道を黒いワゴンが走る。何の変哲も無い、普通の光景。中に、勤務外とフリーランスが詰まっていることを除きさえすれば。

「それではおさらいしましょうか」

ハンドルを握りながら、堀はにこやかに笑う。

「敵を知り、己を知れば百戦危うからずという気休めもあります。まず敵についてですが、カトブレパスで間違いは無いでしょう。では神野君、カトブレパスの能力を」

突然呼びかけられた神野が目を泳がせた。

「えーっと、そいつの眼を見たら死ぬ……？」

「正解です。ではどうすれば良いでしょうか、はい、黄衣さん」

「……眼を見なければ良いんです」

ナコトは淡々と告げる。堀はニヤリと笑い、「正解です」と告げた。

「では、どうして『図書館』の片割れは死んでしまったのか、はい、一君」

「……カトブレパスの眼を見たからです」

酷な質問だ。一はナコトを気にしながらそう思う。だが同時に、明確にしておかなければならない事だと思った。ハッキリと、口にしておかなければならない問題。

「優等生揃いで嬉しい限りですね。では黄衣さん、あなたの相棒は本当にソレの目を見ましたか？」

ナコトは持っていた本を掻き抱き、俯く。

「……あいつは見た、筈です。あたしは後ろに居たから何が起こったのか、ちゃんと見てないけど」

それでも、気丈に声を振り絞った。

「覚えている限りの事を話してもらえませんか。ああ、既に店長か誰かには話したと思いますが、私はまだあなたの状況を把握していませんので」

「……ソレと出会って、オキナがソレに魔術で仕掛けて、その、消されたんです」

「魔術を、ですか？」

「はい。そうです」

俄かには信じられない話だと、神野は思う。魔術を掻き消された事ではなく、魔術の存在自体を信じられない。

堀は淡々と喋る。

「『図書館』については、オンリーワンの社員である私も知っています。クトゥルフを使いこなす中々の使い手だと。実際彼の挙げた功績は大きい。ですが、カトブレパスがそんな彼の魔術を掻き消したと、黄衣さんはそう仰るんですね」

「……そうです」

「カトブレパスにそのような力はありません。あなたの相棒が魔術

を失敗した可能性は考えられませんか？」
「有り得ません。でも、だけど、あの時のオキナ、むきになってたかもしれないです」
魔術には集中力が不可欠である。魔導書との対話に失敗すれば、魔術は魔術師に跳ね返る場合もある。そう言った事情にも精通していた堀は成る程と、頷く。
「分かりました。そして魔術を行使した彼は、眼を見て死んでしまった、と」
難しい顔をして、堀は片手で顎をなぞった。
「黄衣さん、そこに、誰か居ませんでしたか？」
「居なかったと、思います。……あの、どうしてそんな事を聞くんですか？」
「いやあ、念の為ですよ。それでは次に我々の戦力についておさらいしましょうか。皆さん、この面子で臨むのは初めてでしょう？お互いの事もより良く知っておきましょうか」
コロリと声音を変え、堀が陽気そうに言う。
堀以外の一たち三人は、すっかり彼のペースに呑まれていた。
「それではまず神野君、君に出来ることを教えてください」
「出来ることって言っても、俺にはこれしか……」
そう言って、神野は竹刀袋を掲げる。
「成る程、充分です。確か神野君は剣道をやっていると聞いていますが？」
「はい。剣道には自信があります」
堀は知っていた。レッドキャップを殺した神野の経歴を。
「……頼もしい限りです。ですが、今回は店長から黄衣さんを中心に使っていけと言われてるんですよ。という訳で、神野君には後衛をお願いします。なあに気張ることはありません、基本的に見ていれば終わりですから」
神野は少しだけ安心する。そして、心の奥深くでどこか焦りを覚えた。

「では黄衣さん、あなたは？」
「魔術が使えるんだよな」
一がナコトより先に、ほんの少し誇らしげに口にする。
「……は、はい。魔術と、それと、鎖、です」
その続きをナコトは恐る恐る喋った。
「鎖、ですか。糸原さんのアレと同じくらいなんでしょうかね……」
「糸原って人がどれ程の腕前かは知りません。けど、あたしもその人に負けるつもりは無いです」
「成る程、自信有り、と。良いでしょう、では最後に一君。君の能力は？」
そう改めて聞かれると、非常に恥ずかしい。一は頭を掻き、なるべく誰とも視線を合わさないようにしてから口を開く。
「アイギス。多分、相手を止める力です」
そう言うと、一は窓の向こうに意識をやった。外はもう暗い。
「あなた」
ナコトが席から立ち上がる。座席の肘掛に手を置き、バランスの悪い走行中の車の中で、それでも一に向かって立ち上がる。
「今からソレと戦うんですよ？　冗談はやめて下さい。今回あたしがメインで戦うからって、フリーランスと一緒に戦うのが気に食わないからって……あなたは本当に最低ですね。あたし、少しだけあなたの事が嫌いじゃなくなったのに、本当に酷い。手なずけていた犬に手を噛まれた気分です」
「……色々と言いたい事はあるけどさ、とりあえず座りなよ」
不承不承と言った風に、ナコトは乱暴に座席に着いた。
「黄衣さん、一君の持っているアイギス。その力は本物ですよ、私もこの目で発現した所を見たことがあります」
「何かの間違いです。あなたのような、ちょっと変わってるだけの人があんな力を持っているなんて、信じられません」
堀のフォローにも頷かず、ナコトは疑惑の目を一に向ける。
「そう言われてもなあ。まあ、これが凄いモノってのは分かるよ。

けどそこまで言うかあ？」
　一は何となくアイギスを眺めた。どこからどう見ても、ただのビニール傘だ。
「本当にアイギスの価値を理解しているんですか？　ギリシャ最高の女神、アテナの所持するギリシャ最高の盾なんですよ？　どうしてその傘がアイギスなのか、どうしてあなたが持っているのか、全く以って不愉快です。理解に苦しみます」
「……あの、一さんってそんな凄いの持ってたんですか？」
　神野が尊敬の眼差しを一に向ける。
「どうなんだろ、貰い物だしなあ」
「誰に貰ったんですか？」
「アテナ」
　ナコトの顔面が蒼白になった。
「し、信じられない……。何故女神があなたなんかに……」
「さっきからうるせぇな、俺だって知るかよ。とにかく、これは紛れも無い本物だ」
「黄衣さんはアイギスについて知っているようですね。良いでしょう、では自己紹介も済んだところで、僭越ながら私が君たちに作戦を授けましょうか」
　堀は楽しそうに笑う。その笑顔を見て、一はアラクネ戦の時にもこんなやり取りがあったのを思い出した。
「まず、神野君は後衛で待機。私は車の近くに待機していますので、何かあったら神野君が私に伝えに来て下さい。そうですね、中継役と言ったところでしょうか」
「分かりました。あの、堀さんは、来てくれないんですか？」
「すみません。規則なもので」
「……そう、ですか」
　また、規則。
「いやあ、私なんていなくても大丈夫ですよ。そうですねえ、前衛は勿論黄衣さんにお願いしましょうか。一君にはアイギスで一応の

フォローをお願いします。まあ、正直に言えば作戦なんて呼べるものではありません。いつもの北駒台店（わたしたち）らしく、力技で行きましょう」

「元も子もないですね……」

一の呆れるような視線をやんわりと受け流し、堀は微笑した。

「そろそろ、目的地ですね。皆さん、お願いしますよ」

堀が道路の脇に車を止めると、神野とナコトが車を降りる。一もシートベルトを外し、ドアに手を伸ばした。

「ああ、一君。一応この付近の住民の避難は完了していますので」

「……オッケイです」

「それと、今から話す事は私の杞憂であると祈るのですが、注意事項を」

「はい？」

「もし、もしカトブレパス以外に誰か居たら、すぐに引き返して下さいね」

堀は何時に無く真剣な表情だった。

「……誰かって、その、俺たちの他に、全然別の人間が居るって事ですか？」

「あくまで可能性です。今回の事件、非常に不可解な点がある事には、気づいてますよね？」

「まあ、少しぐらいは……」

「安心して下さい。可能性です。一パーセントにも至らない、極々些細な私の妄想ですよ」

「はあ……。とにかく分かりました。当たり前ですけど、気をつけてみます」

「ありがとうございます。それでは、お気をつけて」

一は分からないながらに堀の言葉を咀嚼しながら、車のドアを開ける。

「遅いです。シートベルトを外すのにどれだけ時間をかけているんですかあなたは。これだから童貞は嫌なんです」

「お前終わったらぶん殴ってやる」

「緊張感無いなあ……」

一たちが注意深く藪を抜けると、幾分か開けた場所に出た。地面には草が好き放題に生えて荒れている。

まず、一は件の泉を見た。大きくは無い。申し訳程度の規模。

「池って感じだよな……」

こんこんと岩場から水が湧き出ているのが確認できた。泉は月を映し、揺ら揺らとその姿を変えている。静かだった。今から、ここで戦闘をするのかと、一は息を呑む。幻想的で、どこか異様な気配。

「一さんっ」

神野の焦った声。彼が指差す先、気配の源はいた。ただ、そこにいた。

「……あいつです」

ナコトが敵意を込めて声を振り絞る。既に鎖を構え、臨戦状態。

一も見た。

牛の体。豚の頭。空っぽの腸のような細い首。いつ、折れてしまってもおかしくはない。

そんな不安定な首に任せたまま、ソレは俯いていた。一たちが来たことに気づいているのか、いないのか。カトブレパスと呼ばれるソレは、決して動こうとはしなかった。

「良し、神野君は下がって。黄衣、話は聞いていたけど、とりあえず魔術を頼む。相手の出方が見たい」

一が指示を出す。ナコトは鎖に手を掛けたまま、

「魔術は必要ないでしょう。相手は動かないんです。あたしが一発で仕留めて見せますから、必要以上に怯えないで下さい。出方を伺うなんてそんな事無用です」

一を非難するようにそう言った。

強い意志に圧され、一は仕方なく頷く。

「分かった。俺がフォローするから、遠慮なく行けよ」

「あなたに期待はしていません」
ナコトは一歩踏み出し、鎖の先端を振り回し始めた。鎖は唸りを上げ旋回する。
一はアイギスを広げ、しゃがみながら距離を取った。
ソレはまだ、動かない。
鎖はやがて風になる。力を伴った、荒れ狂う風。触れたもの全て傷つける暴力の象徴。ナコトはそれをカトブレパス目掛け飛ばした。
当たれば、それで終わり。ソレは、終わり。

――ねえ、死体はどうしたの？

誰かの声を、一は聞いた。

うなずく者

死体は動かない。

ワゴンで待機していた堀は座席に深く腰掛けていた。一たちの向かった先をぼんやりと眺めながら、堀は眼鏡を押し上げる。

怠惰な時間だ。せっかく前線に戻ってきたと言うのに。ふわふわとした気持ちのまま、堀は何気なく携帯電話を手に取った。

「……と」

手にした瞬間、マナーモードにしていたので、堀の携帯電話は無音で震える。メールではなく、着信だった。非通知。一つ咳払いして、堀は営業用の声に切り替える。

「……はい、堀です」

『私だ』

無感情な声だった。堀にはその声だけで誰か分かったので、黙ったまま相手を待つ。

『調査が終わった。お前の言っていた通りだったな』

「……では、やはり――」

『いや、お前の言っていた人物とまでは分からなかった。だが、確実に今回の事件には黒幕が居る』

堀は息を呑んだ。そうして、続きを待つ。

『堀、今どこに居る？』

「今は現場の近くで待機しています」

『ソレには誰が当たった？』

その質問の意味が、堀には分からない。

「……一君、神野君、『図書館』の黄衣さんです」

戸惑いながらも堀は答える。

『そうか。ではすぐに呼び戻せ』

随分と乱暴な話だった。

「訳を話してください。彼らは業務に入りました。そう簡単には……」

『黄衣オキナの遺体が見つからなかった。理由は分からんが、何者かが持ち去った可能性が高い。そして、その何者かは確実に今回のソレと関わりがある筈だ。見ず知らずの人間が現場に近づくなど、有り得ん』

「……遺体が見つからなかったのと、彼らを呼び戻すのと何か関係が？」

確かに、妙な話ではあった。黄衣ナコトは、相棒であった黄衣オキナの死を目撃して、死体をそのままにして逃げ帰った。現場は、以前から付近の住人も近づくことは無く、ソレ発生後は情報部の迅速な処置により、住民の避難も終了している。つまり黄衣オキナの死体は、情報部が現場に到着する前に何者かの手によって消えたということになる。

『持ち去った人物が誰かは分からんが、これだけは言えるぞ。マズイ事態だとな』

「『図書館』の抜け殻を何に使うのか知りませんが、確かに、良くない感じですね。分かりました。一度体勢を整えましょう」

『賢明だ。ではな、堀』

電話が切れたのを確認し、堀は車を飛び出した。杞憂。勘違い。妄想。やはり、自分の考えは間違っていない。正しかった。

堀は一人ほくそ笑むと、泉へと駆ける。

ナコトの放った鎖はソレへと一直線に駆けていった。鎖の先端が、カトブレパスの細い首の横を通り抜けるのを確認すると、ナコトは腕を動かす。絶妙な加減で以って、鎖は軌道を変えてカトブレパスの首に巻きついていった。幾重にも、幾重にも、幾重にも。俯いたままのソレは抵抗せずに鎖を受け入れる。巻きついていく鎖。回転

を失った鎖はソレの首を挟んで、ナコトと一直線に結ばれた。
「ああっ！」
声を上げ、ナコトは思い切り腕を引っ張る。ソレの首に巻きついた鎖が、肉を千切っていく。鎖はぎちりぎちりと音を立て、皮を裂き、肉に食い込み、
――ブチッ！
一際大きな音が鳴り、ソレの骨を断った。宙に浮いたソレの首は重力に逆らわず落ちていく。泉へと、まっさかさまに。水音と飛沫を上げ、ソレの首は水中に沈んでいった。
顛末を見届けたナコトは、鎖を泉に浸して返り血を洗い、引き戻す。乾いた音を連れ、鎖は主へと帰還する。濡れている事に構いもせず、ナコトは鎖を全身に巻きつけた。
「――――」
淀みの無いその動き。一は少しばかり見惚れていた。これが『図書館』。紛れも無く、フリーランス。
「どうしました？」
ナコトは呆けていた一を鼻で笑う。ハンチング帽の位置を直し、眼鏡を人差し指で押し上げ、優雅に一へと歩み寄る。
「言ったでしょう。あなたには何も期待していないと」
「……本当に一発だったな」
「本、早く返して下さい」
ナコトは一の抱えている『アルアジフ』に目を向けた。一はナコトにそれを手渡す。
「どうだよ、仇取れて嬉しいか？」
「まあ、それなりには、ですね」
ナコトは顔を背けながら言う。照れているナコトのその顔は、本当に、少しだけ。ほんの少しだけ、一には可愛らしく見えた。
「そっか。そりゃ良かった」
「じゃあ堀さんの所に戻るか。神野君、行こう」
一とナコトは泉から背を向ける。

神野は頷いた。
「お腹が空きました。何か食べたいですね」
「そうか、水ならあるぞ。水を飲みなさい、水を」
「……あたしの勝利を祝おうという意気込みが感じられませんね。あたしに見惚れてたくせに」
「み、見惚れてねぇよっ」
「戦闘中でも、あなたのおぞましい視線を感じていました。まるであたしの体を舐め回すように……鬼畜ですか、あなたは」
「良いか、一つだけ言っとくぞ。俺は年下だろうが女だろうが関係なく殴れる人間なんだ」
「自ら鬼畜宣言とは、やりますね。あなたには心底恐れ入りますよ。という訳で今すぐあたしから二メートル離れて下さい」
ダラダラと喋りながら二人は歩く。
神野は、その場から動いていなかった。動けなかった。その異形に、異常に、異質に、目を奪われる。だから、声も出せなかった。助けを呼べなかった。誰にも訴えられなかった。
「――あ、に……」
一さんと、そう言いたかった。口が開きにくい。喉が開かない。声が小さい。誰かに助けて欲しい。手から力が抜けていく。カランと、神野の持っていた竹刀袋が地面に落ちた。
「神野君？」
その音を聞いて、一が振り向く。
泉から、黄衣オキナが現れた。

俯いていた。
だから、顔なんて分からなかった。ただ、それが人間の形を留めていたから、「ああ、こいつは人間なんだ」と、そう思う。泉から出てきたそれは、大量の水を滴らせながら足を踏み出した。
ぐちゃり。

ぐちゃり。
ぐちゃり。
二足歩行で草を踏みしめ大地を踏みしめ歩くその姿。紛れも無く、人間だった。足もある。顔もある。だが、それはふらついている。収まりの悪い体だった。
風が吹く。
風は一たちを通り抜け、それの腹を通り抜ける。腹部の真ん中には大きな穴が空いていた。穴からは、赤いものが見えている。骨と肉と皮が見えている。剥き出しになった臓器は、風に吹かれて震えていた。
それなのに、それは歩く。
ぐちゃり。
ぐちゃり。
ぐちゃり。
それの歩いた地面には跡が付く。泉の水だけでなく、粘着質な液体が地面にこびり付いていく。それの腕は何かを掴んでいた。見覚えのある、何か。
考える。なんだろう。あれは、あれは、あれは。
そして、それは歩みを止める。俯いたまま、もう、動かなくなった。

最初に反応したのはナコトだった。
それを見た瞬間、力を奪われたようにへたり込む。体を掻き抱き、目を見開いてナコトは絶叫した。
その叫びで、一は我に返る。まず、近くに居たナコトの傍にしゃがみ込み、声を掛ける。
全くの無反応。泉から現れたモノにも注意しながら、呆然としている神野に走りよっていく。　神野は一の声に反応する。苦しそうに呼吸を繰り返し、その場に蹲った。

訳が分からない。一はとりあえず、逃げようと思った。ここから立ち去らないと、まずいと思った。

叫び続けるナコトの肩を揺すり、何度も呼びかける。だが、ナコトは何かに取り憑かれたかのように奇声を上げていた。

一は神野とナコトの間を右往左往する。こんな事をしている場合じゃない。だが、どうにも事態は動かない。

「良い声ね、その子」

悪い方向にしか。

この世の憎しみ全てを集めたような低い声。一は確かにその声を聞いた。

見たくは無かったが、一は泉に目を向ける。濡れた男。その隣に、闇が浮かび上がっていく。闇を塗りつぶす深い闇。漆黒は姿を変えていき、人のような形を作った。

「……なんだよ、これ……」

一が唾を飲み込もうと喉を鳴らす。何も飲み込めない。喉はからからに渇いていた。場に立ち込める濃密な、死の気配。ずっしりと、肩に何かが圧し掛かるような気がした。

闇の中、コートが翻る。衣擦れの音を立てて現れたのは、緑色の髪をした、背の低い女。白い肌だった。白過ぎて、一には気味悪く見えた。

女の目はどこか虚ろで、焦点が合っていない。

ふらり、と。女の体が緩々と動く。泉から出てきた男に近付き、頭を撫でた。

「上手くいっ、た。ふふ……」

女の顔が綻ぶ。この場にはそぐわない、楽しそうな顔。

撫でられた男は嬉しそうに笑った。ぽっかりと、穴が空いた喉で。異形な声で、男は笑う。くつくつと、静かに、嬉しそうに。

ゾクリ、と。一の背筋に怖気が走る。体は強張り、血が凍る。足

が竦み、脳は警告を繰り返す。今までに、何度もソレを見た。一は何度もソレを見てきた。会った。出遭った。戦った。でも、それでも、ここまで、ここまでの恐ろしさは初めてだった。見てくれはただの女。それなのに、目の前の女が、釣瓶落としよりも鎌鼬よりもシルフよりもアテナよりもアラクネよりもガーゴイルよりも『影』よりも、何よりも恐ろしく見える。

「……あ、か……はっ……」

一の意思に従わず、口が勝手に動き出した。体が、空気を欲しがっているのに呼吸が出来ない。あまりの息苦しさに体を曲げる。

「ボウヤ、どうしたの？」

問いかける声は優しかった。優し過ぎて、気持ちが悪かった。

一は顔だけを何とか上げる。アイギスを握る手にも力が入らない。抵抗、出来ない。

「立って」

女の言葉に、一は心中で反論する。

――無理に決まってんだろ……。

心とは裏腹に、体は女に答えた。一は俯いたまま、見えない何かに無理矢理に立ち上がらされた。

「はっ……は、は？　なに、これ……」

必死に空気を吸い込み、一が泣きそうな声になる。

一の視線は女へと釘付けにさせられた。見たくないのに、目が離せない。離れない。

女は男の持っていた物を奪い取る。

頭だった。

ついさっき、ナコトが千切ったソレの頭。うつむく者、カトブレパスの細い首が頭の付け根から垂れ下がっている。ぽたぽたと、水と血を垂れ流している。

女は口の端を釣り上げ、妖しく微笑んだ。我が子を愛しむ様な視

線をソレに向けている。
「……」
やがて、女はソレに口付けをした。
「……っ！」
ナコトの鎖によって千切り取られたソレの傷口へ、唇を付ける。まだ、血も乾いていない。濡れた血肉は泉の水と混ざり合い、ドロドロになっていた。それこそ、一が吐き気を覚えるほどに。そんな傷口へ、女は愛おしそうに唇を何度も重ねた。トロンと、酒にでも酔っているのか、目を細める。女の長い舌が、傷口から覗いていた骨を舐める。
何度も、何度も、何度も何度も何度も！
一の気が遠くなる。目を逸らしたい光景なのに、何故か女から目が離せない。声も出ない。大声で喚き散らしたい。恐怖をぶちまけたい。瞼を無理矢理に開かれているような、そんな感触を一は覚えた。
「……はっ、はぁ……あっ……」
女の息が荒くなる。舌で舐め、唇を重ね、愛しげにソレのソレを愛し続ける。女の細く、白い指がソレの肉を掻き分けていく。
ずぶり。
ずぶり。
白い指が、赤い肉の中に埋まっていく。女はソレに深く口づけをしながら、一へ誘うような視線を向けた。
一歩、一の足が独りでに動く。行きたくないのに。動きたくないのに。勝手に、足は動く。近付いていく。ソレとの距離が。そっちに行ったら駄目なのに。終わるのに。一の足は止まらない。もう、止まらない。
「……や、やめ……」
何とかそれだけを口にする。意味など、とうに無かった。一が自信の終わりを覚悟したその時、足に何かが巻きついた。

じゃらり、と。

足を引っ張られた一は直立したまま地面に激突する。顔からだった。鼻を強く打ちつけ、口の中には血の味が広がっていく。痛かった。熱かった。けど、意識はそこでやっと帰って来てくれた。ゆっくりと手を握る。体はもう、自分の物になっていた。口から血を吐き出し、立ち上がる。振り向くと、ナコトの冷笑が見えた。

――ちくしょう。

一は悪夢から抜け出て、我に返り、現実へと戻る。

「……悪ぃ」

だから一は礼を言う。

「いえ、先ほどの姿は良くお似合いでしたよ」

ナコトの顔には脂汗が浮かんでいた。それでも、ナコトは一へ軽口を叩く。悪夢から負けないように、飲み込まれないように。

一にはその事が嬉しくて嬉しくて、嬉しくて仕方が無かった。

「……そっか。それじゃあ――」

一は女を強く睨む、

「――逃げるぞ」

頷き、ナコトは鎖を一から巻き戻す。

一は流れる血を袖で拭き、神野の元まで駆け寄った。背後で何かが動く気配を感じたが、一たちは振り返らない。もう戦うなんて考えられなかった。今はただ、この場から離れたかった。

神野も息を吹き返して立ち上がる。三人は出口である藪へと走った。

「歩む死（イタカ）」

背後から、潰れた声がする。同時に、空気を切り裂く音も聞こえた。急に一の周囲が寒くなる。神野とナコトを先に行かせた、殿の一が振り返った。網膜に焼きついたのは、這い寄る死の風。

「……うわあああ！」

アイギスを翳したのは一の本能だった。死を恐れ、生を渇望する意地汚い人間の本能が一を守った。凄まじい衝撃を弾き、アイギスは絶対零度の魔術を相殺し、この世から掻き消す。それでも衝撃は確実に一に伝わっていた。手は痺れて握力を失いアイギスを地面に落としてしまう。自分も逃げなければ死んでしまう。殺されてしまう。無理矢理にアイギスを引っつかみ、一は背を向けた。

「歩む死（イタカ）」

声は朗々と響く。潰れた声で、気持ちの悪い声で。

怖気を感じ、一は藪へと身を隠す。彼のすぐ傍を人魂のようなモノが奔った。藪を凍て付かせながら、やがてそれは掻き消える。二人が見えなくなったのを確認して、一も全速力で走った。悪夢から逃げた。

ああ、夢はいつも、すぐ傍にあるのに。

藪に入った堀は妙な音を聞いた。

衝撃音。何と何がぶつかれば、そんな音になるのか。堀は焦りを感じ、速度を上げて駆けた。刹那、正面から突然現れたものとぶつかる。

「うわっ」

情けない声だった。

学ランを着た、背の高い少年。

「……神野、君？」

「に、一さんが！」

神野はぶつかった人物が堀だと言う事に気づくと、切羽詰った様子で訴える。それだけで、堀には全てが理解できた。

「一分下さい」

だから、告げた。示した。

「じゃなくて！　あたし達はあの人を助けて！　早く逃げましょう

って言ってるんです！」
　ナコトの剣幕に怯む事無く、堀は続ける。
「私が行きます。武器を取ってきます。ですから、一分稼いで下さい」
　全てが理解出来た堀には、この事態がまずい事だとも理解できていた。そして、決着を着けなければいけないと、そう理解した。神野とナコトは、唯一の希望が絶望に変わったと、そう感じた。理解した。
「もう良いです！　あたし達だけでも！」
「――また、逃げるんですか？」
　ナコトは弾かれたように堀へ振り向く。
「……あなた……」
「一君はあの場に居るんでしょう？　なのにあなたは見捨てるんですか？　私はそう聞きました」
「堀さん！　けど、相手は！」
「神野君、あなたも勤務外でしょう。確かに後衛にあなたを指名しましたが、私は仲間を見捨てて逃げろとまでは命じていません」
　食い下がる神野にも、堀は淡々と告げた。
「そ、そんな……」
「ですから、一分です。こうして話をしている間にも一君は危険な目に遭っているんです。だから、私が出ると言っているんです」
　堀は強く示した。自分でも、酷な事を言っているのだと分かっている。この子らが、どんなモノを相手にしているのかも分かっている。
　でも、それでも堀は。
「……一分を一秒でも過ぎればあたし達は逃げます。あなたがどんなに強かろうが、あの場を何とかしてくれるんだとしても、あたし達は逃げます」

ナコトは鎖を握りながら、強く示す。
「良いでしょう『図書館』。ならばしっかりと六十秒、稼いで下さい」
堀を睨み、ナコトは背を向け走り去った。
神野は、示せない。
「お、俺は……」
もう堀にも時間は残されていなかった。自分でも、本当に酷いとも分かっていながら。
「逃げたければ、逃げなさい」
彼にそれだけを告げ、車へと走り去った。
神野は、彼は、彼は。

一は藪から出られなかった。直接見なくても分かる。あいつが自分を狙っていると分かっていた。もう動けない。出口まではまだ遠い。飛び出しても、絶対の死からは逃れられない。
静かに呼吸を整え、一はアイギスを強く握った。ならば、粘る。少しばかりの確信があった。神野とナコトは先に逃れた。つまり、堀のところへ戻れた筈。ならば社員である堀の事、どうにかして自分を助けてくれるだろうと、そんな打算めいたものがあった。だから、相手がこのまま動かない限りは、このまま時間が過ぎるのを待つ。

「歩む死（イタカ）」

怖気を誘う醜悪な声。
一は咄嗟にアイギスを構えた。
――位置がバレた！
どうしてと思うより先に、こちらへ駆け寄ってくる人影が見えた。
「堀さん！？」

期待を込めた、一の声。
「違います！」
現れたのは、セーラー服。
「どうしてお前なんだよ！」
狙われたのは一ではなく、無防備に現れたナコトだった。一は凄まじい速度で飛んでくる人魂と、ナコトの間に体を滑り込ませる。両手でアイギスを握り、一は人魂へと自らぶつかっていった。気が狂いそうになる衝撃に、目を瞑る。
「あああああ！　死ねぇぇぇクソ眼鏡！」
物騒な叫びを上げ、一はアイギスで魔術を掻き消した。
「一分です！」
「お前が死ぬまでの時間か！？」
一とナコトは背の高い草むらの中に姿を隠す。ナコトは一を睨みながら、
「違います、あの堀って人が来るまで時間を稼いで下さいっ」
自棄になった口調で口を開けた。
「はああ？　逃げるんじゃないのかよ？」
一の打算は脆くも崩れ去る。期待が消え、言いようの無い不安が一の心を塗り潰していく。
「あたしだって逃げたいんですっ、けどっ、けどっ！」
「……堀さんが、何とかしてくれるんだな？」
「知りません！」
だが、やるしかなかった。戦いたくはなかったが、逃げることも封じられている。
「一分だな？」
「……あなた、本当に？」
半ば、一は自棄になっていた。悪夢にあてられていたのかもしれない。それでも一は、一は。
「まだ、終わってないだろ」
傍で震える、小さな女の子の仇を取ってやりたかった。夕焼けを

一緒に眺めた、ただの本好きの女の子の悲しみを少しでも取り除いてやりたかった。ソレに仲間が殺された、そんな女の子を、助けたかった。それだけは、その思いだけは、どんなに恐ろしい目に遭わされても揺らがない。

……何故なら一は。

「カトブレパスじゃない。あの女だ。あいつがお前の仲間を殺したんだ」

「……そんな事、どうして」

「分かるんだ。絶対あいつだ」

「でもっ、もうそんな事言ってる場合じゃないんですよ!?」

ナコトは懇願した。もう、良かった。敵討ちなんて端から諦めていたから。だけど、そうでもしないと、オキナに申し訳が立たなかったから。

だから、だから、だから。

「そんな事かよ。仇を討ちたいってのは嘘かよ?」

「あたし達が死んだらどうにもならないんですよ……?」

一は自棄になっていた。ナコトの襟元を掴み上げ、自分の顔を近付ける。

「店で泣いたのは嘘だったのか?」

「ちっ、違います。それより、顔を近づけないで下さい」

「じゃあお前は誰の為に泣いたんだ?」

ナコトは何も言えず俯く。

一はナコトの顔を引っつかみ、無理矢理に自分へ向かせた。

「俯くんじゃねぇ。答えろよ」

「あ、あたしは……」

「歩む死(イタカ)」

遠くで声が聞こえる。一はナコトから手を離し、アイギスを前方に向けた。

「答えろよ」
ナコトに背を向け、一は魔術を迎え撃つ。絶対零度が絶対防御にぶち当たる。一は歯を食い縛り、それに耐えた。
「あたし……あたし、自分の為に泣いてました……」
蚊の鳴くような声。
仲間を殺された自分がかわいそうだったから。怖い目に遭わされた自分がかわいそうだったから。悲劇のヒロインを気取ってみたかったから。
一はその答えに納得する。疑問が、氷解していく。
「じゃあ、今からやろうぜ敵討ち」
一は悪戯っぽく、ぎこちない笑顔を作った。
「に、のまえ、さん……？」
許してくれるのか。こんな、自分を。ナコトは信じられない様子で一を見る。
「やろうぜ、黄衣ナコト」
ああ。それは、誰の名前だったのだろう。
ナコトは下を向いた。
俯く為じゃなく、頷く為に。自分の意思を示す為に。
「一さん、あたし……」
「俺、良い名前だろ？」
「……まあまあですね」
ナコトは微笑んだ。
一も笑って、前を向いた。

いい加減にしやがれ

一分は六十秒。
六十秒は一分。

相手は死んでいる魔術師と得体の知れない女。
呑まれていた。一は呑まれていた。ナコトも呑まれていた。そんな事は、自分たちでも分かりきっていた。
それでも、一は覚悟する。ナコトも覚悟する。相手が元相棒であろうと、なんであろうと。自分たちは生きている。死にたくない。だから、だから、だから。

まず一が藪から飛び出した。反応した黄衣オキナが、魔術を行使する。一はアイギスで飛んできたそれを受け止めた。
その隙に、ナコトが駆け出す。狙いはあの女。ソレの首を愛しげに愛撫する、あの女。ナコトは鎖を回し、充分に速度を稼いで放り投げる。
暴風、暴力、暴虐の象徴。自らに向かってくる鎖を一瞥すると、女は何を思ったのか、その場に倒れた。鎖は標的を失い、空を切り裂いていく。
一投目は失敗。ナコトは鎖を巻き戻そうと力を込めた。足を踏ん張り、腕を引く。
そしてあの声。あの醜悪な声。クトゥルフの魔術が、ナコトを狙いに奔っていく。
一はまだ痺れの取れない腕であるのも厭わずに、二射目を防ぐべく、ナコトの前に躍り出た。
ナコトは鎖が一に当たらないように器用に軌道を変える。

一は地面をしっかりと踏み、両手でアイギスを握った。一発目と同じ威力。同じ衝撃。だが、疲弊している一には耐え難い威力と衝撃だった。アイギスが黄衣オキナの魔術を相殺したと同時、一は軽く吹っ飛ぶ。叫び、地面に倒れて呻いた。

ナコトは一に構わず、戻しきった鎖を緑色の髪をした女へ放る。女は倒れたままだ。確実に鎖は標的を捉える。

ナコトも一も、そう思っていた。

――それが現れるまでは。

倒れたままの女が泉に手を浸す。泉は女の触れたところから、徐々に色を変えていく。

黒く、赤く、どす黒く。

清廉な水が汚れていく。穢れていく。鎖が届くより先、泥水の如く酷く濁った泉から、生き物が飛び出てきた。文字通り飛び出してきたのは、細長いシルエットをした蛇のような生物。体表が粘膜で覆われている生き物が、数匹泉からロケットのように射出される。飛び出た生き物は女を守るように、次から次へ鎖にぶつかっていく。無茶苦茶な速度の鎖に負けないような、無茶苦茶な速度だった。蛇のような生物は鎖にぶつかり、体を粉々に砕かれる。砕かれては地面に落ち、地面に落ちては砕かれる。続々と湧き続ける生物は体当たりを止めはしない。始めのうち、鎖は生物の勢いを殺し続けていたが、衝撃が二桁を越えると鎖の速度の方が殺されていく。

「……まずいです」

呟いたナコトの額から冷や汗が零れた。ナコトの危惧していた通り、鎖は速度を失い、力を奪われ地面に乾いた音を立てて落ちる。

終わりではなかった。鎖の勢いを殺しきった生物は、次の標的を定める。即ち、敵。一と、ナコトへ。

飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ。

自身へ向かってくる生物を見上げ、一はその正体に気がついた。

「こんなもんにっ！」

アイギスを広げ、一はナコトを庇える位置に立つ。それこそ生物の衝撃は、黄衣オキナの魔術と変わりが無いように感じた。一発一発が重い。生物はアイギスに接触するとすぐに掻き消えていく。だが、その数に終わりが見えない。いつまでもいつまでも一に降り続けて行く。

一の後ろのナコトも気が付いた。どうして。何で。そんな考えに至る前に、

「ウナギ……？」

見た物をそのまま口にする。細長いシルエット。粘膜を帯びた体。水から現れた生物。アイギスに体当たり、掻き消されていくその姿。どこからどう見ても、あのウナギだった。こんな物がどうしてこの場に現れ、あまつさえ自分たちを襲っているのか、一たちには分からない。

少なくとも、一はもうこれから先ウナギを食べたいと思えなくなった。

一の腕に痺れが走る。断続して痛みが走る。

「何とかしろよ！」

「どうしろって言うんですか！」

一の八つ当たりに、ナコトは声を荒げた。

「お前も魔術を使えよ！　その本は飾りかっつーの！」

ナコトの直ぐ傍に落ちている魔導書『アルアジフ』を一瞥し、一は叫ぶ。

「……あ、その……」

落ちている魔導書を見て、ナコトは申し訳なさそうな顔になった。

「あたし、魔術なんて使えないんです」

一の目の前が白くなる。追い討ちをかけるように、黄衣オキナが口を開ける。彼のすぐ傍に紙片が現れ、人魂のようなモノに打って

変わった。周囲の温度を下げ尽くし、凍て尽くす死の風。風に乗って、死を歩ませる名状しがたきものの眷属。

ウナギの群れを浴び続けている一に、魔術が突き刺さる。アイギスを握る手が、痛い。このまま手を離せば、目の前の痛みからは逃げられる。

だが一は、歯を食い縛って耐えていた。

「一さんっ！」

年下を守るのには慣れていた。だから一は耐え続ける。守らないといけない。逃げてはいけない。ごめん、ごめん、と。心中で謝り続ける。

……一は、ナコトと誰かを重ねていた。

ナコトを守れば、誰かを守っている。そんな気持ちになれたから。

「あああああっ！」

自分でも信じられないくらいの声だった。一は雄叫びを上げ、弱気になる自分を奮い立たせる。自分は、何も出来ない。三森のように強くない。糸原のように美しくない。ジェーンのように賢くない。立花のように、堀のように、神野のように、店長のように。

誰にもなれない。

一には、耐える事しか出来ない。アイギスが自分の力じゃない事には気付いていた。あくまで、これは女神に貰ったモノだから。一（にのまえ）の一（はじめ）の力じゃない。

自分は無力だ。叫ぶしか、耐えるしか、意地汚く生きる事しか出来ない。勤務外になりたいわけじゃなかった。戦いなんてもっての外だった。

一はただ、もう一度、もう一度だけ――。

「痛いっつってんだよ！」

――ホームランを打ちたかった。

ヒーローになりたかった。

誰かを助けたくも、守りたくも無い。自分の為だけに、一はあの時、女神に答えた。

溢れ出る感情に任せて、一はアイギスを振った。

最高の、フルスイング。

黄衣ナコトの魔術を、ウナギの群れを、一はアイギスで振り抜く。人魂は一直線に打ち返され、ウナギの群れは跳ね返ったそれと、飛び出てくるそれとがぶつかり合い、地面に次々と落下していった。

「うそ……」

ナコトには、アイギスが一の叫びに答えたかのように見えた。一瞬だけ、ナコトに見えた幻。髪の長い女だった。主を守るように、女は一を抱いていた。後姿だったので、彼女にはそれが誰か分からない。一瞬の光景。女は、すぐに見えなくなる。

「一さんっ！　魔導書を探してっ！」

女の姿が消えた直後、閃きが走った。ナコトは気付き、叫ぶ。

幾ら相手がソレとは言え、死体だからとは言え、元相棒だと言え、黄衣オキナだったとしても、魔術を行使するには絶対にクリアしなくてはいけない条件がある。それは魔導書。書が無ければ、術者は何も出来ない。

さっきまでは突然現れた黄衣オキナに動揺していたが、一のスイングを見てナコトは我に返る。

「本を取り返せば、オキナは何も出来ません！」

一は咄嗟に傘を下ろし、黄衣オキナを凝視した。穴の開いた喉。穴の開いた腹。どこまでも薄気味悪い、人間『だった』黄衣オキナ。

一は見つけた。黄衣オキナの腹の中、微かに覗いていたそれを。

「腹の中だ！」

「フォローを！」

ナコトは駆け出した。黄衣オキナの腹部を、自分も確認する。なるほど確かに魔導書（グリモワール）。皮と肉と骨と臓器に、隠されるようにしてそれはあった。

魔導書さえ奪えば、砲台と化した黄衣オキナを無力化できる。絶望の中の、一筋の希望。細い糸を辿る様な、危うい望み。だが、一たちはそれに賭けた。切欠になるかもしれない。魔導書さえ奪えば。黄衣オキナさえ無力化すれば。

残りは、あの女だけになる。

一は全身に力が戻るのを感じていた。先行するナコトの後ろに付き、一は黄衣オキナに注意を払う。

ナコトは一直線に魔導書へと向かっていた。手が血で汚れる事も構わない。相棒の体を傷つける事になろうとも構わない。全ては、仇を討つ為だったから。

「歩む死（イタカ）」

声を聞いた一は叫ぶ。

「止まれ黄衣！」

「分かっています！」

悔しそうに歯噛みして、ナコトは一の後ろへ戻った。

距離が近くなった分、対応を間違えば一たちの命は無い。一つの失敗が死へ直結する。一とナコト。どちらか片方でも命を落とせば、もう片方も命を失う。

集中していた。かつて無いほど一は一つの事に集中していた。

ナコトも同じだった。黄衣オキナに、全神経を、全てを払っていた。

だから、気付かなかった。

一は必死で魔術に耐える。背後のナコトを感じながら、精一杯地面を踏みしめた。やがてアイギスは魔術を掻き消す。絶対の力。

ナコトはオキナの第二撃を警戒しながらも、一の後ろから躍り出る。

女が、笑っていた事にも気付かずに。

傘を翳していた一には見えなかった。ナコトだけに見えている。

女の、嫌らしく、妖しい笑みが。そして、女の抱えたそれが。

カトブレパスの首が。

カトブレパスと目が合った。その瞬間、ナコトの意識が飛んでいく。希望も絶望も焦りも悲しみも怒りも何もかも消えていく。手には力が入らない。足が縺れ倒れこむ。仇を討つ事も、オキナの事も、目の前で笑う女の事も、支えてくれた一の事も、全て吹っ飛んだ。声を出す事も叶わない。ただ苦しくて苦しくて、ナコトは弱弱しい呼吸を繰り返す。誰かが叫んでいるのが聞こえた。多分、一の物だろうと推測する。

あんな情けない声を出せる人物が、ナコトには他に見つからなかったから。

アイギスを下げた一が最初に見たのは、黄衣オキナ。次に目に入ったのは、倒れているナコトだった。弱弱しく、今にも止まってしまうような呼吸を繰り返している。

まず、一の力が抜けた。虚無感。絶望感。最悪の考えを振り払い、一はナコトに駆け寄っていく。

「お別、れ。待ってあげるわ、ねえ?」

女が何事か喋っているが、一の耳には入らない。必死でナコトの名を叫ぶ。叫び続ける。

「ふ、ふ。良い声ね、ボウヤも」

――黙れ!

体を揺する事は躊躇われた。とにかくナコトを安静にさせておきたい。一はさり気なくナコトの前に出て、女らから庇うようにしゃがみ込む。

「そろそ、ろ。良い?」

――黙れ!　黙れ!　黙れ黙れ黙れ!

「黄衣っ！　おい！　おいってば！」
「……に、の……」
「ごめん！　喋んなくて良いから！」
ナコトは手を伸ばす。自分の体から、何かが抜けていくのを感じていた。伸ばされた手を、一はしっかりと掴む。
「黙って寝てろ！　後は俺が何とかするから！」
嘘だった。
無理だった。
不可能だった。
苦しそうにしながら、ナコトは微笑む。一に応える。
「歩む死（イタカ）」

背後からの容赦ない声。一は「ごめんっ」と謝りつつ、ナコトから手を離す。アイギスを構え、黄衣オキナへと向き合った。振り向いたと同時、魔術が一を襲う。相変わらず凄まじい衝撃だった。だが、もう退けない。一はもう逃げられない。それでも、一の腕に力が入らない。
もう六十秒なんてとうに過ぎているのではないか。
涙が出てきた。どうして、自分たちがこんな目に遭わなければならないのか。

もう、嫌だった。

アイギスは魔術を掻き消した。だが、一にはそこからどうする事も出来ない。
絶対防御。不壊の結界。女神の盾。
それだけだった。アイギスで攻撃を防ぐ事が出来ても、アイギスを使って攻撃を仕掛けることは出来ない。
ギリシャ神話最高。世界でも最高峰のアイテム。しかし、アイギ

スは盾だった。もう、どうしようもない。一には気力が残っていない。

「あ、ら？　終わり？　ふ、ふ」

女が笑う。カトブレパスの首を投げ捨て、指を緩やかに動かした。それを合図に、黄衣オキナが口を開ける。

い。た。か。

絶望の三文字。

一はアイギスを構えた。だが、防ぎ切る自信なんてもう無かった。風が奔る。邪悪の皇太子の眷属。イタカがアイギスに襲い掛かる。一は歯を食い縛る事もできず、ずるずると後退していく。そのすぐ後ろには、ナコトがいる。なのに。あれほど誓った筈なのに、もう、駄目だった。

「歩む死（イタカ）」

ダメ押しだった。連続で放たれる魔術。今の一には、もう、限界。

ごめん。ごめん。ごめん。

誰に謝っているのかすら、一には分からない。死が目前に迫っているのにどうしようも出来ない。

風が奔る。

二発目の魔術がアイギスに着弾する、その瞬間、風が奔る。

どこかで見たことのある女たち。一の目には、それが天使に見えた。自分とナコトを絶望から運び去る、一筋の光。

四つの光は、一とナコトを連れ、離れた場所に着地する。

「……大丈夫？」

眠そうに問いかける声。赤み掛かった、茶髪。その手には、天使には似つかわしくない大きな鎌。オンリーワンの制服を着た女。

「ヒルデさん……？」

ゆっくりと、ヒルデは頷いた。

彼女の傍には三人の女。ニット帽を深めに被った女。包帯を顔中

に巻いた女。虚ろな目をした女。彼女らはそれぞれ、槍と盾を持っていた。オンリーワンの制服を着ていたが、紛れも無く彼女らは戦士の装いであった。

「あなた達、天使だったんですか？」

その問いに、ニット帽を被った女は馬鹿にしたように笑う。

「言うじゃんお兄さん。天使だなんて、おちょくってんの？」

「す、すみません」

「……その子は？」

ヒルデは心配そうにナコトを見遣った。

「……その、カトブレパスの眼を見ちゃって……」

ワルキューレたちはナコトに近付く。

「なーにコイツ？　超地味なんだけど？」

喋っているのはニット帽の女だけだったが、他の二人も同じような感想を持っているようだった。

「……シルト」

「う、そんな目で見ないで。冗談っすよ」

「こいつを早く病院へ連れてかないと……」

一は悲痛な声で訴える。

だが、シルトと呼ばれたニット帽の女は涼しげだった。、

「おかしくね？　アイツの眼で見られたら即死じゃなかったっけ？」

こくり、と。ヒルデは頷いた。

「……シュー？」

シューと呼ばれた、包帯姿の女はナコトの顔をじっと眺める。尤も、包帯越しからは本当にナコトが見えているのか、ハッキリはしなかったが。

「片目だけじゃん」

シューは事も無げに言った。

「あー、だからまだ生きてんだね、そいつ」

「どういう意味ですか？」

「熱くなんないでよお兄さん。何？　こいつあんたの彼女なワケ？」

ケラケラと笑うシルトの襟首を掴み、
「良いから教えろっつってんだ。髪の毛生えたらまた千切るぞボケ」
一は脅し文句を口にする。
シルトは一の剣幕に押され、やれやれと言った感じに口を開けた。
「……ちっ、アレだよ。要は半殺しの状態なのよソイツ、オッケー？」
一はナコトの顔をよく見た。なんとも言えない、酷い光景。ナコトの片目はグチャグチャに潰れていた。
「助かるんですか？」
ふるふる、と、ヒルデは首を横に振る。
「……分からないの。ごめん……」
悲しそうにヒルデは俯いた。
「てめぇこら！　ヒルデさん泣かすんじゃねぇよ！」
シルトが喚いているが、一にはその事を気にする余裕も無い。
「じゃあどうすれば！」
「黙りな、お兄さん」
グイっと、肩を掴まれた一の背筋が凍る。
一の耳元へ、シューは一の肩を掴みながら囁いた。
「私らはさ、あんたらを助けに来たワケじゃないの。ソレを殺しに来た勤務外なの」
シューは槍を握り、妖しく微笑んでいる女を睨む。
「ヒルデさん、行ってきます」
「……気を付けて」
頷くと、シューを先頭にシルトと残っていた女が駆け出した。
だが、今の一には戦闘がどうなるかより、ナコトの方が気になっていた。
「ヒルデさん！」
一に呼ばれたヒルデは何も応えずに、鎌を握り締めている。
「南駒台が俺たちを助けに来たんじゃないって、そんなの分かってます！　でも教えてください！　どうすれば良いんですか？　こい

つはどうすれば助かるんですか？」
　ヒルデは応えない。
「……勝手な事言ってるの、分かってるつもりです。けど、それでも俺は……」
「……あの人」
　鎌を女の居た方向に向け、ヒルデは悲しげな声を出す。
「あれを殺せば、その子はカトブレパスの呪いから解かれるかもしれない……」
「本当、ですか？」
「……ごめんね、あくまで可能性なの。私、そういうの専門じゃないから……」
　その言葉が本当でも、嘘でも、一の心に沸々と何かが湧き上がって来る。だが、行動に移そうとまでは思えない。怖い。恐ろしい。死にたくない。自分はまだ、生きていたい。
「俺……」
「……？」
「多分、って言うか絶対、足手まといになります」
　一の言わんとする事を理解して、ヒルデは少しだけ残念そうに顔を伏せる。
「……分かった。でも、あの人が来るまでそこに居てあげて」
「あの人？」
　ヒルデは藪の入り口の方へ鎌を翳す。
「……キミの上司」
　静かに微笑み、ヒルデは優しい声を出した。

　先頭のシューが女へと槍を放り投げる。その槍は、黄衣オキナの魔術によって砕かれた。控えていたシルトが魔術の隙を突き、走り抜けていく。
　緑髪の女は徐にカトブレパスの首を掲げた。

「せこいんだよ！」
シルトは持っていた盾で自身の視界を隠す。
「歩む死（イタカ）」
視界を隠しながら、シルトは走って魔術を避けた。魔術の着弾した地面一帯が一瞬にして凍土と化す。恐れることなくシルトは走った。槍を突き出し、女へ迫る。
「ふ、ふ」
女は死が目前にあるという、この状況下で笑った。女は動じない。先刻の泉のように、女が地面に手を置くと、触れた箇所から変色していく。
黒く、赤く、どす黒く。
混沌とした黒から現れたのは灰色。牙を持った、灰色の狼。
「――――！」
唸り声を上げ、突如現れた狼はシルトへ襲い掛かった。盾を食い破らんと牙を立て続ける。
「何なんだよコイツ！？」
均衡状態に、黄衣オキナが割って入った。死の呪文、人魂がシルトへ突っ込んでいく。その時、シルトの前にシューが盾を前にして割り込んだ。
「一度下がるよっ」
「もうっ！」
凄まじい衝撃を斜めに受け流し、魔術を無効化した事を確認したシューは、シルトの盾に食い下がっていた狼を蹴っ飛ばす。狼は高い声を上げて地面を滑っていった。
「うざいっつーの！」
その隙に、シルトとシューが距離を取る。
こうして戦乙女たちの、戦いの火蓋が切って落とされた。
「……キミはどうするの？」

一は答えられない。
「俺は……」
握り締めたアイギスも答えてくれない。
「……私、そろそろ行くね……」
ヒルデは戦場に目を向けた。一から目を背け、背を向け、敵に鎌を向ける。一瞬の躊躇いの後、ヒルデは地を駆けた。
残された一は力を奪われたようにナコトの傍にしゃがみ込む。未だ震えるナコトの手を握りながら、一は謝罪の言葉を繰り返す。
「ごめんな、敵討ちとか簡単に言っちゃってさ……」
返事は無かったが、ナコトのか細い呼吸が、自身を責めているように一には感じられた。
「やっぱり、向いてないんだよな。俺にはさ……」
もはや誰に語るでもなく、一は続ける。
「……頑張って……」
ビクリと、一の肩が震えた。一は握った手に力を込める。
「黄衣……？」
ナコトの目はまだ死んでいない。残った眼で、一をしっかりと捉えている。
「……仇、討ってください」
もう、消えそうな声。
それでも、意思を込めた声。
半分死んでいる人間。そんな彼女の視線に一は気圧された。
「大丈夫。南の人たちが来たからさ、あんな奴らすぐに――」
一の言葉に、ナコトは弱弱しく首を振る。
「あなたが……」
「――！」
あなたが。
あなたが。
「俺、が……？」
「……うん」

声は消えそうで、握り返す力も弱くて、今にも、死にそうで。
なのに、ナコトの意思は強い。一を信じきった眼で、ナコトは一を見つめる。それ以上は何も言わずにナコトは瞼を閉じた。
一は思わずナコトの脈を取る。顔を近づけ呼吸を確認する。
生きている。
ナコトはまだ生きている。ナコトの意思は生きている。

「受け継ぎましたか？」

背後から優しそうな声。一が振り返ると、堀がいた。彼の後ろには、ばつの悪そうな顔をした神野。
「彼女の意思は、受け継ぎましたか？」
「……一分、過ぎてますよ」
「いやあ、南の方々を見た物でして。時間を稼いでくれるだろうと」
堀は何故か苦笑する。一にはその笑いが、耐え難かった。
「もっと早く来てくれれば！　黄衣はこんな目に遭わなかったのに！」
あんな眼と遭う羽目には、ならなかった。
「……その件については悪いと思っています」
「抜け抜けとさぁ！」
一は堀に詰め寄る。明らかに八つ当たりだった。
だが、堀は甘んじて受け入れる。一の怒りは良く分かる。堀には、一の行き場の無い感情を受け止めるのも、また自分の仕事だと良く分かっていた。
「ですから、行きましょう。仇を討つんでしょう？」
「……あんな化け物相手に？　俺はただの人間なんですよ」
「そうですね。相手は化け物。一君は人間です」
「だったら！」
「それがどうしました？」
狼狽する一を無視し、堀は続ける。

「『図書館』の仇を討つんでしょう？　あなたは黄衣ナコトさんから、先ほど受け継いだはずです。意思を、彼女の純然たる決意を」
「でもっ！」
「言葉による答えなど要りません。そうでしょう？」
静かな口調だったが、堀の言葉には反論の出来ない何かが秘められていた。
「……堀さん。俺、怖いです」
「私もです」
「死にたくないです」
「私もです」
「まだ、生きていたいです」
「……私もです」
「でも、俺……」

握った手は暖かった。
握った手は震えていた。

「何とかしたいです。こいつを助けてやりたいんです……」
「しましょう」
堀は持っていた武器を地面に突き刺す。獲物は槍。全長で二メートルに達するほどの長さを誇る、堀の武器。
「その為に、私は戦います」
「一さん、俺も手伝います。もう、逃げません」
二人に見つめられ、一は頷く。
「一君。仇を討つのは南の方々でも、私でも、他の誰でもありません」
「……分かってます」
一はナコトの手を離し、立ち上がった。
「宜しい。では、あの女は私がどうにかしましょう。アレが術さえ解けば、黄衣ナコトは助かります。ですが時間に余裕はありません」

「どう、行くんですか？」
堀は神妙に頷く。
「私が突っ込みます。神野君と一君は援護を」
「結局力技なんスね……」
「いやあ、古今東西力が物を言うモンですよ。それでは、南に負けないように、そして、死なないように頑張りましょうか、皆さん」
「ははっ、勿論です」
全員が、敵を向く。
「しっかり付いてきて下さいよ！」
「おっしゃあ！」
神野の叫びを合図に、全員が戦場へ向かった。

消えない呪い

目を見て話せ。

泉の周りは黒かった。泉自体も、周辺の地面も。みんな、みんな黒かった。

黒く、赤く、どす黒く。

濁って濁って濁りきっている。

「ヒルデさん！」

助けを求める声は聞こえていた。でも、ヒルデにはどうする事も出来ない。戦乙女（ワルキューレ）のリーダーとして、部下は救いたい。だが、何よりもまず自分を救って欲しかった。溢れ出る敵。湧き上がる敵。泉からはウナギが、地面からは灰色の狼が暴れまわる。緑髪の女を狙う暇は無い。必死に纏わり付く敵を切り裂くしかない。

同様に、シルトもシューも敵に追われていて、既に仲間の一人は這い蹲っていた。ヒルデは彼女を守るべく、敵を追い払い切り払い続ける。時折、あの女が嬉しそうにカトブレパスの首を掲げてこちらを狙う。視界を隠して命を守るも、死角は生じてしまう。狼は死角からヒルデに爪を立て、牙を剥く。

「……くっ」

半ば自棄だった。鎌のリーチを活かして敵を追い払っていくが、際限なく増え続ける敵は容赦が無い。まさか、こんな事になるとは思っても見なかった。

「ふ、ふ……」

女の声が酷く耳障りで、ヒルデの集中力が掻き乱される。隙を突いて、狼が向かってくる。見えない位置からの攻撃に、ヒルデは裏拳を見舞った。甲高い悲鳴を上げて狼は地面を滑っていく。

「やばいです！　一旦退きましょう！」

シューが悲鳴混じりに叫んだ。
退きましょう。出来るなら、とっくにやっている。ヒルデだって勤務外としての期間は短くない。退くべき時も、進むべき時も理解している。この状況、明らかに異常だった。間違いなく、退くべき時。だが、退けない。ヒルデは引き際を見誤ったのではない。そも、最初から戦うべきではなかったのだ。戦うにしても、相当の人数を連れてこなくては話にならなかった。ぎりりと、強く唇をかみ締める。判断ミス。鎌を握る手が重くなっていく。持たない。まずい。ただのソレとは訳が違っている。一体、あの女は何者なのか。
「……！」
考えていては、猛攻を避けられない。糸口はある筈だと言い聞かせ、ヒルデは敵を払い続ける。
一瞬、ヒルデは周囲に目を遣った。信じられなかった。最初の頃より、敵は増えている。雲霞の如く押し寄せる敵に、ヒルデの目が眩む。四名の戦乙女は、敵の中にいた。もう逃げられない。抗えない。
「ふ、ふ。誰から？」
女は笑う。絶対的優位の状況で、女は笑う。カトブレパスの首を舐めながら、値踏みする。誰から殺そうか。嬉しそうに笑みを零す。
つらかった。
死ねば楽になれるかもしれないと、一瞬でもヒルデは思ってしまう。甘い、誘惑。女は死を誘う。笑って笑って、死へと誘う。
「森賀（もりが）ァッ！」
声が轟いた。その声は大きく、戦場にいた全てのモノに届いた。
ヒルデたちにも、狼たちにも、あの、女にも。
女はその声に、今までで一番嬉しそうな顔をした。
「あ、あ、あ、あ」

女の声は声にならない。まるで赤子の様だった。
親に縋る子の様に。
子に縋る親の様に。
藪の入り口の方に居た敵から、姿を消していく。叫びを上げ、雄叫びを上げ、唸りを上げ、轟いて、咆哮して。狼は地に伏せ、ウナギは地に伏せ消えていく。黒いモノで一杯だった戦場は、少しずつ元の形を取り戻していく。
「久しぶりですね」
優しそうな声だった。
敵を掻き分け敵を蹴散らし敵を退け敵を切り裂き敵を砕いて敵を殺す。血河を、死山が侵食していく。
「あ、あ、あ……。堀、堀、堀、堀（ホリン）！」
森賀と呼ばれた、あの緑髪の女は、愛しそうに名を呼ぶ。堀と。堀と。堀を呼ぶ。抱えていたカトブレパスの首を投げ出し、森賀は狼の群れの中を駆けた。まるで、恋人に会うかの様に。

最初に突っ込んでいったのは堀だった。
一と神野は堀の俊足に驚いたものの、気を取り直し後に続く。
堀は槍を片手に構え、雲霞の如き敵の群れを切り裂いた。狼の群れ。中心に居た一番体の大きな狼を槍で貫き、そのまま振り回す。あっという間に敵は消え、残ったのは堀だけになる。
だが、敵は湧き続けている。
堀は振り返らない。前だけを見る。前にだけ進む。後ろの敵は見ていない。
――なぜならば。
「あああっ！」
狼の額に、竹刀が食い込んだ。額は割れ、血が溢れ出る。地面に突っ伏した狼は、そこへ同化するかの様に溶けていく。黒い靄を撒き散らしながら、地面に溶けていく。

「神野君、右だっ」
その声に反応して、神野は右を竹刀で薙いだ。狼が一瞬仰け反る。駆け寄った一が、狼の頭をアイギスの石突きの部分で突き刺した。黒い靄を掻き分け、一は前進する。神野も前進する。
「皆さん、しっかり付いてきて下さいよ」
振り返らず、堀は言う。
「すげぇ数っすね」
「……最悪だ」
「いやあ、まだまだ序の口でしょう」
軽口を叩きながら、三人は進む。その時、堀の目が飛来する敵を確認した。
「一君」
堀が立ち止まる。
一はその意味を理解して、堀たちの前に傘を広げた。広がったアイギスに、次々とウナギが体当たりを仕掛けてくる。
「う……ぐうっ」
滝のようにウナギが降り注ぐが、一は攻撃に耐えた。
「神野君」
神野はその意味を理解して、接近する狼を叩き割った。攻撃が止むと、堀はすぐさま走る。槍を曲芸師の様に振り回し、襲い掛かる敵の群れへ雪崩れ込む。
「はっ……」
堀の口から、自然と笑みが零れ出た。
「ははっ……」
敵を貫くたびに、堀は笑う。押さえきれない衝動を、必死で殺す。その様子を後ろで見ている一たちは言い知れぬ何かを感じたが、この場に於いて堀以上に頼りになる者は居なかったので見てみぬ振りをした。それ以上に、自分たちも何故か気分が高揚していくのを感じた。
広場が見える。泉が見えてくる。入り口付近の敵を殲滅した一た

ちは、戦場を目にした。戦乙女が戦っている。そして、あの女がいる。

「森賀ァッ！」

堀が叫んだ。ありったけの敵意をぶち込んだ、鋭くて大きい声。

ビリビリと、一たちの鼓膜が響く。

力強かった。敵には厳しく、味方には優しい声。

堀の槍が唸ったのを聞いて、一たちも戦場に躍り出る。

僥倖だった。

一たちが広場で最初に目にしたのは、駆け寄ってくる森賀。顔を嬉しそうに綻ばせ、無防備にこっちへ近づいてきていた。諸悪の根源。

「てめぇがぁっ！」

一瞬で一の頭に血が上り、森賀へと向かう。だが、森賀は一に目もくれず堀だけを見ていた。

「堀、堀、堀堀、堀堀堀堀ィ！」

森賀は、うわ言の様に、何度も堀の名を呼び続ける。その喉に、アイギスの石突きが刺さった。手応えはあった。肉を貫く、気味の悪い感触。

「……ふ、ふ」

森賀の体が黒い靄となって消える。地面と同化していく。空気と同化していく。消えていく。

「ふ、ふ」

そして、再び姿を現していく。

「そんなっ！？」

神野が目を見開いて叫んだ。

「一君下がって！」

堀の声を聞き、呆然としていた一がよろよろと後ろへ下がる。
一の居た空間から、赤いモノが飛び出てきた。巨大な、牡牛。一を突き飛ばすべく、牛は走る。突如現れた牛へ、一はアイギスを構えるも易々と吹き飛ばされた。宙を浮く一は満足な受身も取れず、強かに背中を打ちつける。
「……がっ……！」
一は呻いて、アイギスを必死に握りこんだ。倒れた一の耳に、地面から音が伝わる。振動音。足音。駆ける音。赤い牛が狙っている。
「くっ……」
堀は槍の柄を握りこみ、一を救うべく赤い牛を睨んだ。が、袖口を引っ張られる。
「ね、堀？　堀、堀堀堀ぃ？」
「森賀ァ……！」
堀は槍を森賀へ突き刺す。心臓を確実に捉えたその一撃。黒い靄となり、森賀は地面へ沈む。
「一君っ！」
間に合わない。
「俺が行きますっ！」
神野が走った。
だが、周りには夥しい数の狼。
「神野君！」
「行けます！」
言い放ち、神野は飛んだ。跳躍し、狼の頭を踏む。踏んだ狼の頭を竹刀でかち割りつつ、次の足場へ。
平家物語。源義経が壇ノ浦で見せた、八艘飛びの如く神野は飛ぶ。狼から狼へ、足場から足場へ。神野は狼の頭の上から一を確認する。赤い牛はすぐそこだった。
「らあっ！」
飛び降りつつ、牡牛へ竹刀での唐竹割りを見舞う。牛の頭に竹刀は刺さっていき、弾かれた。ゴムの塊を殴った様な、手応えのまる

で無い感触に神野が困惑する。
牛の勢いは止まらない。一から神野へと標的を変えた牛は突進していく。
「見てらんない！」
走り出す風。牛の横合いから、シルトが盾で殴りつけた。
衝撃で赤牛は足を縺れさせて倒れこむ。
「こいつは私がやるからっ、お兄さんたちはヒルデさんを！」
神野は頷き、狼の群れへ再び舞い戻る。
「あんたはっ？」
立ち上がった一がシルトに尋ねた。
「戦う！」
それだけ言うと、シルトは一に目もくれず敵の群れへ消えていく。
一は迷ったが、神野を追いかけた。

突然の援軍にヒルデは困惑していた。
闇を散らす、まるで閃光。堀と、その後ろの一たちを認めると、ヒルデの体に力が戻る。まだやれる。彼らに合流するべく、倒れた仲間を引っ張りつつ、襲い来る狼を蹴散らしていく。
「……ルル」
「やれ、ます」
声を掛けると、ルルと呼ばれた女は一人で立ち上がった。ルルの足取りは重く、ふらついてはいたがヒルデにはやるべき事ができた。
「……ごめんね」
「いけ、ます」
ヒルデは鎌で周囲を薙ぎ、空いた隙間を縫うように駆け出す。狙うはあの女の首。だが、ヒルデの前進を拒むように、泉からはウナギの群れが飛び出てきた。
避け、受け、弾いて切り裂き、ヒルデは進む。時間が無いというのに。あの子を自分も救いたいのに。

「ヒルデさん！」
声がした。その声の向こうへ、ヒルデは駆ける。狼の群れの中から神野と一が現れた。
「下がって！」
ヒルデは一の声に従い、後ろに身を隠す。一がアイギスを広げて、泉から飛び出る敵の群れを防いだ。
「……戦うの？」
「盾ぐらいなら、俺にだってなれます」
少しだけ嬉しげにヒルデは頷く。
「……なら、鎌は私ね」
鎌に付いていた敵の返り血を払い、ヒルデは一の前に立った。
「神野君、堀さんは？」
「向こうで森賀って女と戦ってます」
「……不死身か、あいつは……」
「……不死身？」
きょとんとした顔のまま、ヒルデは鎌を薙ぎ払う。
「あいつ、死なないんですよ。何回やっても何回やっても生き返ってくるんです」
一の言葉に、ヒルデはふるふると首を振った。
「そんな人、いないよ……」
「じゃあ、何かトリックでも？」
「……多分、魔術」
「魔術！？　って事は……」

「歩む死（イタカ）」

一が傘を広げる間もなく、魔術は飛来する。
ヒルデは咄嗟に一を抱えてその場から離れた。神野もヒルデに従い、距離を取る。その後に、彼らの居た地面へ魔術が突き刺さった。魔術の刺さった地面一帯の熱が奪われていく。近くに居た狼たちの

足からも熱を奪い、何もかも一緒くたにして凍らせていく。その光景を眺めながら、一はふと、自分の状況に気が付いた。

「ヒルデさん！　下ろして！」

一は、ヒルデに抱えられていた。所謂、お姫様抱っこ。お姫様抱っこをされたままの一は羞恥で顔が真赤になっていた。問われたヒルデは小首を傾げる。

「……どうして？」

「はっ、恥ずかしいからですよ！」

狼狽する一をよそにヒルデは何故かくすりと笑う。

「……このまま、あそこまで行くよ」

どこか嗜虐的な笑みを浮かべながら、ヒルデは狼の群れを抜けていく。

神野は遅れながらも、先刻と同じように狼の頭を足場にして跳躍を繰り返し、距離を稼いでいた。

ヒルデは堀と森賀の姿を確認すると、一気に加速をつけて接近する。

「待って！」

ガクンと、ヒルデの膝が落ちた。ヒルデは片手で一を抱え、もう片方の手に持った鎌を杖代わりにする。

「……どうして？」

「魔術です。言いましたよね？　あの女が死なないのは、魔術のせいだって」

ゆっくりとヒルデは頷いた。

「魔導書があそこにあるんです」

一の指差す先、狼の群れから離れた位置に、それはいた。黄衣オキナは、悠然と立っていた。

「……どこ？」

「あいつの腹ん中に本があるんです」

「……じゃあ」

ヒルデは方向を転換して、黄衣オキナへ向かう。

「神野君！　堀さんの援護を！」
「はい！」
神野は一たちと別れ、堀の元へ向かった。

一の考えは、不確かな物だった。
森賀の再生能力。狼や牛を召喚する能力。どれもこれも、まさか、あの魔導書が絡んでいるのではないかと。
一はそう考えている。
「下ろしてっ」
一はヒルデから解き放たれると、一直線にオキナへと向かう。背後から狼が走ってくるが、ヒルデが阻んだ。
「歩む死（イタカ）」
――もう逃げねぇっ！
「アイギスっ！」
魔術の詠唱に被せるように、一が叫ぶ。アイギスの能力。敵を止める。だが、今までに試した事はなかった。
止める。では、止まっているモノに対してはどうなのか。死んでいる。即ち、生きていない、終わっている、止まっている。生者にのみ行使してきた、蛇姫（メドゥーサ）の力。
「止まれ！　止まれ止まれ止まれ！」
一は魔術に臆することなく突っ込んでいく。傘を向け、魔導書へと走っていく。
魔術は、飛んでこない。見れば、黄衣オキナの動きも止まっていた。一は懐に潜り込み、気後れしつつも黄衣オキナの空いた腹に手を伸ばす。血と皮が一の手にこびり付いていく。
「……うっ」
魔導書は、ビクともしなかった。一が幾ら力を入れて引いても、押しても駄目だった。
「……どいて！」

ヒルデが鎌を上段から振り下ろす。まず、黄衣オキナの首を落とした。次に右腕左腕。
「お腹っ」
障害物の無くなった胴体を、ヒルデは横一閃に切り払う。鎌の切っ先には、魔導書が刺さっていた。
「これで！」
しかし状況は変わらない。
何一つとして変わらない。
狼もウナギも牛も縦横無尽に駆け回っている。
「……どうして」
「ヒルデさん、本を見せてもらえますか？」
「読めるの……？」
心配そうな顔をして、ヒルデは切っ先を下ろした。地面に魔導書を置き、鎌を引き抜く。その時に、捲れたページが光っていたのを一は見逃さなかった。急いでそのページに目を通していく。
「……読め、ない」
仕方ないので、とりあえずそのページは破っておく事にした。一は血で濡れた紙をビリビリに破いていく。
「……ん」
ヒルデの目が揺れた。

槍が心臓に食い込んだ。
槍は額を断ち割った。
槍は喉元を食い破った。
槍は顔面を貫いた。
堀の槍は、森賀の体を貫いた。何度も何度も何度も何度も何度も。
だが、森賀は体にダメージを負う度に黒い靄に姿を変え、再び現れる。
「堀、堀堀堀堀堀堀堀」

現れる度、森賀は堀に抱きつく。払い除け、堀は辟易しながらも森賀の体に槍を通した。

もう何度繰り返した事だろう。堀は一旦槍の穂先を地面に突き刺し眼鏡の位置を直す。

「ねえ、ふ、ふ。堀ぃ？」

「……しつこいですね、あなたは」

「堀？　堀、堀、堀」

「あなたの力だけではここまでの芸当は不可能な筈」

「堀堀堀ぃー」

ザクリ、と。森賀の眼球に堀の手刀。

「ほりぃー」

意に介さず、森賀は堀に近づく。

「……恐らく、魔導書でしょうね」

やれやれと、堀は軽く溜め息を吐いた。槍を持ち直し、縋りつく森賀の体にそれを突き刺す。

森賀は崩れ落ち、地面に倒れた。彼女の周囲からは黒い靄が立ちこめ、地面と同化していく。そして、体を包んで消えていく。

一分も立たない内に、また森賀は現れる。

「あの子たちに任せるとしましょうか」

ならば、自分が出来る事はただ一つ。槍を構え、堀は寄ってくる狼を散らしていく。そして、精々背後を取られないように集中を高めた。全く以って、無駄な努力だった。

神野はシルトと合流していた。堀の近くまで行ったものの、戦闘と呼べない一方的な殺戮を目撃し、自分の価値が見出せなくなりそうだったので、神野は仕方なくシルトの元まで引き返していた。

赤い牡牛を相手にしていたシルトは、神野に目もくれず牡牛の突進を避け、横合いから殴りつけるのを繰り返す。

まともな返答は期待していなかったが、神野はシルトに声を掛け

てみた。
「手伝いましょうか」
「……調子乗んな、失せてろ」
案の定、にべも無かった。他にやる事も思いつかなかったので、シルトの死角の狼を片付けながら、神野も牡牛に目を向けた。
「ゴムみたいっすね」
「ああ？　何よ？」
シルトは神野を親の仇のように睨む。
「いや、だから、あいつ」
倒れても倒れても起き上がる牡牛を指差しながら、神野はシルトから視線を逸らした。
「骨が無いんすかね」
「そんなの関係ないし、知ったこっちゃない」
「そりゃそうですね」
神野は竹刀を正眼に構える。
「何であれ、俺に出来るのはこれだけですから」
「あっそ」
「でも、一さんたちが何とかしてくれると思いますよ」
「あのお兄さんが？　無理無理、うるせぇだけじゃね、あいつ？」
シルトは本当に可笑しそうに笑った。
「俺も最初はそう思ってましたけどね」
「後ろ」
神野は振り返りざま、大口を開けていた狼の口内に竹刀を突っ込む。喉の奥まで竹刀を突き込んで、風穴を開けた。充分な傷を与えたのを確認してから、竹刀を引き抜き、狼の顔を足の裏で押す。
「あの人、すごいっすよ」
「はっ、ただの人間じゃん。力も強くないし、足も速くない。頭ぁ良くなさそうだし、顔は、……、んー、私のタイプじゃないし……。とにかく、どこにでもいそうな奴」
「だからっすよ」

「まっ、私に啖呵切れるのは面白いと思うよ。すっげーうぜーけど」
狼と戯れながら、シルトはぶっきら棒に言った。

「……消えてくよ」
ヒルデの目が揺れた。目の前の光景を、ヒルデは信じられない。
灰色の狼が消えていく。
黒いウナギが消えていく。
自分たちに、魔導書に近い敵から姿を消していく。狼たちは黒い靄に姿を変え、地面に溶けて消えていく。ウナギどもは、黒い靄に姿を消え、空気に溶けて消えていく。
「俺の予想は当たってたみたいですね」
汚れた魔導書を仕方なく抱えて、一は少しだけ誇らしげに笑った。
「その、本が……？」
「詳しい説明も、正しい答えも俺には説明できませんけどね。知り合いの魔術師もどきからも言わせると、魔術の理論や説明なんて、魔術を使う側からの自己満足に過ぎない、だと」
「……ん。分かんない」
「実は俺もです。けど、これなら何とかなりそうですね。黄衣オキナも殺しきった事ですし、残りは……」

周りの獣が消えていく。黒い靄となり、地面に溶けて消えていく。
赤い牡牛も、消えていく。黒い靄になって、地面に溶けて消えていく。
「何よ、これ？」
シルトはきょろきょろと、絶え間なく視線を動かし続ける。
神野は竹刀を杖代わりに、その光景をぼんやりと眺めていた。
「言ったじゃないっすか、一さんですよ。あの人がどうにかしてくれたんです」

「はっ、ただの人間の、あのお兄さんが？」
「はい。俺の先輩が」
にっかりと、歯を見せて神野は笑った。

「森賀」
「堀、堀、堀堀ー」
片腕と片足を失くしながらも、森賀は堀にしな垂れかかる。熱を帯びた視線を浴びせかけながら、彼女は自分の下半身に手を伸ばした。
堀は無言で森賀の残った腕を刎ね飛ばす。
「いつまで、続ければ良いんでしょうか、森賀」
「ふ、ふ。ずっと、ずっとよ？　その為に、こんなくだらない事をしたの。だから、ずっとよ？」
ああ、まるで睦言。こんな言葉を真正面から言われては。
森賀の首が吹っ飛んだ。
「いやあ、今のを一君が聞いてたらどうなる事やら。口は災いの元とは言いますがね。あなたは存在そのものが災いですよ」
槍に付いた森賀の返り血も、森賀の体と一緒に黒い靄に成り果てる。堀が手を下していないにも関わらず、堀を取り囲んでいた狼も、森賀が消えたのと同時に靄へと姿を変えていく。眼鏡の位置を直し、堀はようやく安堵の息を吐いた。
「あっけないものですが、これで終わりですか」
終わりとは、得てしてあっけない。

一は走った。
これで、全部が元通り。灰色の狼も、泉のウナギも、赤い牡牛も、緑の女も、黄衣オキナも、全部全部消えた。だから、大丈夫だと。
失われた物は、無くなった者は帰ってこない。それでも、失ってな

い物も、無くなってない者がいる筈だ。
まだ、全部終わっちゃいない。
一はアイギスを握ったまま、堀やヒルデには目もくれず走った。
走って走って走って、たどり着く。
黄衣ナコトの元へと。
「黄衣！　生きてんだろうな！」
ナコトは苦しそうに呼吸を繰り返している。
ひとまず、一は安心した。返事は無かったが、ナコトは顔を僅かばかり一へと向けている。一はナコトの傍にしゃがみ込み、魔導書を見せた。
「おら、見ろよ。取ってやったぜ、敵討ち」
形だけなら、森賀を倒したのは堀になるのだが、一は細かい事は気にしないことにする。魔導書を見たナコトは手を伸ばした。一は最初、手を握ろうかと思ったが、ナコトの視線が自分へ向いていないことに気付き、複雑な思いで魔導書をナコトに差し出す。
「すげぇ汚れてるぞ」
「……あ、こ、これ……」
「無理に喋るなよ。……そう、これがあいつの腹にあった本だよ」
「ず、っと……、さが、してた……」
ナコトの目から涙が一筋零れた。涙は頬を伝い、顎に溜まり、地面まで伝い落ちる。
「……そうだったのか」
良かったな、とは一には言えなかった。
ずっと、ナコトが捜し求めていた魔導書。見つけることが出来たのは、良くも悪くも、森賀のお陰に他ならない。彼女が、黄衣オキナの腹にこの魔導書を詰めたから。
ナコトの相棒、オキナを殺して埋めたから。だから、見つかって良かったな。
あいつが死んで良かったな。

一にはそんな事、口が裂けても言わないし、口を裂かせても誰に言わせるつもりもなかった。

「……はっ、はぁ、あ……っ、くっ……」

ナコトは苦しそうに呼吸を繰り返す。魔導書を握ったまま、苦しそうに、苦しそうに。今にも、死にそうなくらいに。

「おい、おい、黄衣？」

様子がおかしい。何かがおかしい。一は、一向に良くならない、変わることの無いナコトの容態に不安がった。全部、全部終わったのに。あの森賀も、灰色狼も、ウナギも、赤い牡牛も。全部、消えた筈なのに。

何で、ナコトは良くならない。死の呪いが、消えてなくならない。

「……あ」

そもそも、ナコトを殺すのは何だったのか。

ナコトを殺せたのは、何だったのか。

ナコトの体に、呪いを送ったのは。

眼を、見たのは――。

一は立ち上がり、走り出した。広場で固まっていた堀たちを認めると、一は声を荒げる。

「カトブレパスの首はっ！？」

その意味に気づいたのは、堀とヒルデだった。ヒルデは泉へと駆け、堀は辺りに目を配りながら全員に問いかける。

「首を見た人はっ！」

戦乙女三人は首を横に振る。神野は「すみません」と謝った。

「まだアレの呪いは消えてないんだ！　黄衣が死んじまう！」

時間が、無かった。

ナコトが見たのは、片目だけ。カトブレパスと目が合ったのは片方だけ。片方だけ、とは言ってもソレの力は計り知れない。

――眼を見たら死ぬ。

シンプル、だからこそ恐ろしい。単純明快な、誰にでも通用する

死の呪い。果たして、片目だけで見てしまったとは言え、半殺しで済むのだろうか、呪いは、半分で済むのだろうか。

誰にも、それは分からない。ソレにも、恐らくは分からない。だから、時間が無い。どうなるか分からないから。

「無い、ないないないない……」

一の焦りは募る。

早かった。一秒が、一分が、時間が、今まで生きてきて、一番早く過ぎていくのを感じる。

時間が足りない。時間が欲しい。時間が止まれば良い。時間が、止まれば。

止まれば。止まれ。

止まれ。止まれ。止まれ。止まれ。

一はぼうっとした頭で立ち上がった。

この手が握っているのは、なんだ？

一はゆっくりと振り返る。傘を広げ、瞳は標的を捉える。

誰かが、何か叫んでいた。一の耳はもう何も受け付けない。

時間その物を止めるなんて、出来なかった。

だから、だから一は。

「で？　終わったのか？」
「ええ、滞りなく。いやあ、一君と神野君、ルーキーと思っていましたが、中々……。一君のアイギスと、場を変えるほどの爆発力。神野君の立ち回り、安定感。私もうかうかしてられないですねぇ」
　堀は店長以外に誰もいなくなったバックルームで嘯いた。
「お前にしてはあいつらを随分高く買うんだな。そうかそうか、成る程な。ん、負い目か？」
　店長は煙草を吹かしながら、いやらしく笑う。
「いやあ、手厳しい。確かに、新人にアレはきつかった、ですよねぇ。ですが、あの二人は本当に面白いですよ。どう育つのかが気になりますね」
「そうか。堀、どっちが良い買い物だと思う？」
「……別に店長が買ったわけでは無いでしょう」
「馬鹿か。来たのはあいつらの勝手だが、面接して採用してやったのは私だぞ。私の買い物でなくてなんになると言うんだ？」
　堀は苦笑した。
「そうですね。私は、神野君の方が伸びるのではないかと思います」
「私と同じ答えだな。ふーん、何でそう思った？」
「一君より年下ですから。それと、彼には剣道をしていたと言う下地があります。現に、竹刀一本でのあの立ち回り、見ごたえがありましたよ」
　店長は煙を吐きつつ、少しだけ詰まらなさそうに堀を見上げる。
「……一は性格が悪いからな。人の言う事に耳貸さないし」
「伸びしろはあると思うんですけどね……」
「と言うかだな、元々一はそういう性質じゃないと、私は思う」
「戦闘向きではないと？」
「一般なら、手放しで喜べる逸材なんだがな。どうにも、あいつは

勤務外には向いてない」
「フリーランスやソレとも普通に話せてますしねぇ」
眼鏡を指で押し上げながら、堀は店長の顔色を窺う。
「悪い事とは言わんさ。本人の勝手だしな。私らは強制出来ん。精々が忠告してやれる程度だ」
「まあ、今のままでも問題ないように思えますがね」
「今のままならな。まあ良いさ、一の話をしてたら気分が悪くなってきた」
「いやあ、そんな事を言ってても、実は店長が一君の事を心配しているのが私には分かりますよ」
不機嫌そうに店長は紫煙を堀に吐き掛けた。
堀は無言で煙を手で扇ぐ。
「……では、南駒台のお話などは如何でしょう？」
眼だけで、店長は続きを促した。
「まだ南駒台店、オープンはしていませんが、カトブレパスの際には研修と言う形で戦乙女（ワルキューレ）が四名出勤していました。どうやら一君とは顔見知りだったようですね。お陰で会話がスムーズに行きましたよ。で、彼女らから簡単に話を聞けば、オープンは近日、オープン前の状態で保有人員は一般が十名、勤務外が戦乙女を含めて十名以上は在籍しています。いやあ、ウチと比べるのは失礼な話ですかね」
「どっちに失礼なんだ？」
「さて店長、南への対処はどうするおつもりですか？　向こうのSVは手強いですよ。本部からの派遣ですからね。何でもその方は店長と兼任なさるとか、いやあ意味の無い事この上ない。しかし、現実問題ウチにとっては恐るべき相手になるのではないでしょうか？」
「……堀。帰ってきてから良い性格になったじゃないか」
「いやあ、お褒め頂き光栄です。しかし店長、余裕ですね、既にどう動くかは決めているようで、私も安心しましたよ」
堀はにこやかな笑顔を作る。
「はん、北は変わらんさ。いつも通りやってくぞ」

「安心しました。私も、新しい事を覚えるのには年を取りすぎていましてね」
「一たちには説明したのか？」
「何をです？」
「とぼけるな。今回の事件、その裏だよ。お前の知り合いだそうだな、森賀と言う人物は」
短くなった煙草を灰皿に押し付け、店長は堀を睨んだ。
「あの子達に教えるのには、まだ早いかと」
「遅すぎては困るんだがな」
「ご心配なく。機会はすぐに訪れますから」
「要らん。そんな機会丁重に送り返してやれ。何なら私がアイロン掛けて返してやってもいいぞ」
「それは怖そうですが、避けられないモノは受け入れましょうよ」
店長は舌打ちして、缶コーヒーに手を伸ばす。一息吐いてから、今思い出したかのように、
「黄衣ナコトはどうなった？」
そう言った。
穏やかだったバックルームの空気が違うものに変わっていく。
「『図書館』ですか。いやあ、何と言いますか……」
「黄衣オキナが確実に死んだってのはさっき聞いたぞ。のらりくらりとかわしやがって。一か、お前は」
「私なんかと一緒にしては一君に失礼ですよ。とは言え、そうですね、んー」
煮え切らない堀に、店長はもう良いと手を振った。
「大体分かる。生きていようが、死んでいようが、フリーランスが一度でも私らに頼みごとをしたんだ。もう業界じゃやっていけないだろうさ。仮に生きてて仕事を辞めても、元フリーランスだ。まともなところじゃ働けないだろう。フリーランスを続けても、折れた奴に同業者やソレは甘くない。すぐに死んじまうか殺されちまうだろうな。ああ、なんだ、そう考えると可哀想な話でもあるか」

「まあ、元の生活には戻れないでしょうね」
「だが、あいつは言った。フリーランスを辞める覚悟はあるとな。私が聞いたのは、つまりはそういう事だ。フリーランスなんてやってる奴が辞めるってのは、死ぬ覚悟があるってのと同意なんだよ」

大した目的も無く、これと言った予定も無く、三森は駒台の街をぶらぶらと歩いていた。
金髪と、真赤なジャージ。スーツ姿のサラリーマン、学校へと急ぐ学生の制服の中、異様に目立つ服装だった。慌しい駅前の風景を眺めながら、三森は一人のんびりとベンチに腰掛ける。自販機で買った缶コーヒーを流し込み、煙草に火を点けた。一目があるので、いつもの様に能力を使わず、コンビニから持ってきた安っぽいライターを使う。煙を灰まで入れて、深く息を吸い、吐き出していく。
ふと、バス停の方を三森は見た。バスを待つ列の中、見知った顔がそこにいた。
「……」
今日は目的も無いし、予定も無い。たまにはバスに乗って遠出をするのも良いだろう。そう考えた三森はベンチから立ち上がり、バスの停留場へと足を向けた。

一は心中で呻き声を上げた。声にならない声だったかもしれない。とにかく「うわっ」と思った。
バスを待っていた一が、ふと顔を上げると、そこには見知った顔。
「よう、どこ行くンだ？」
一の目に入ったのは、赤色。愉しそうに声を掛けてきたのは、三森だった。
「……俺の勝手でしょう」
ぶっきら棒に一は答える。

「あー、そうか、確かにそうだよなァ」
言いつつ、三森は一の後ろに並んだ。
「ちょっと、何してんですか」
「私の勝手だろ？」
勝ち誇ったように三森は皮肉っぽく笑う。
一はもう、それ以上は何も言わずにバスを待った。程なくして、バスは停留所に止まる。最後尾だった一が乗り込む頃には、バスの中の席は埋まっていた。
二人掛けの席以外は。ほんの少しの間、一は入り口に立ち尽くす。
「おらっ、とっとと行けよ」
三森に背中を殴られ、一は渋々バスに乗り込んだ。ここから、一の目的の停留所まで十五分近く掛かる。仕方なく、空いている席に座った。
「おい、もっと詰めろ」
その隣に三森が座り、一の肩を叩く。
「……立ってれば良いじゃないですか」
「てめぇ、先輩を差し置いて自分だけ座ろうってンのか」
三森に席を譲って、自分だけ立っておこうかとも一は思ったが、負けた気がするのでその考えはすぐに頭から追いやった。バスも動き出したし、他の乗客の迷惑になる。溜め息を一つ吐いてから、心持ち、窓際に一は体をずらす。
三森は満足したようで、それ以上は文句を言わなくなった。
「なあ、どこに行くンだよ」
「だから俺の勝手でしょう。それに、言っても言わなくても付いて来るんでしょうに」
「はっは、よっく分かってンじゃん。どうせ夜勤まで暇だしなー」
一は頭を抱える。つまり、下手をすれば、晩まで三森は自分に付いて来るのかもしれないのであった。
「あ？　頭痛ぇのか？　煙草でも吸うか？」
「バスは禁煙ですよ。乗った事無いんですか？」

「おう。バスは使った事ねーな」
「……煙草、しまって下さいね」
三森は舌打ちしてから、ポケットに煙草の箱を入れる。
「おい、景色見たいから席変わってくれよ」
「寝ててもらえませんかね」
「そしたらお前起こしてくれンの？」
「さあ？　終点まで行けば運転手が起こしてくれるんじゃないですか？」
無言で三森は、一の足を踏んだ。足に走った痛みに一は顔を顰める。
「お、田舎になってきたなー」
ガキが。内心でその台詞を押し殺し、一は只管耐えることにした。目的地までの距離が一メートルでも短くならないかと、子供じみた考えに頼りながら。

距離が一メートルも短くなるどころか、バスはやたらと信号に捕まって、一の予測していた十五分を軽々とオーバーして目的地に着いた。それどころか。下車の際、三森は料金を払わずにバスを降りた為、一が二人分払わされた。停留所に着くと、一はバスを見送ってから歩き出す。
「三森さん、二百円」
「私はそンなに安くねぇぞ」
「市場で叩き売りされてたとしても買いませんから安心して下さい。さっきのバス代です。三森さん、払わずに出たでしょ。バスってのは降りる時にお金払うんですよ」
「東京じゃ乗る前に金払ってたぞ」
「乗った事あるじゃないですか！　良いから返して下さいよ」
三森は煙草に火を点け、
「こっちは静かなもンだな」

悪びれず言い放った。
「つーかさ、こンなトコに何か用事でもあんのかよ。確か、この辺図書館ぐらいしか無かったンじゃねェか？」
「結構知ってるじゃないですか……。そうですよ、図書館に行くんです。あ、でも花屋に寄っても良いですか？」
「花はンなに好きじゃねえ」
一の歩幅が広くなる。
「てめぇ私の事嫌いだろ」
「人の足を二十分以内に五回も踏む人間がどの口で言いますか」
「踏まれる方が悪ィんだろが」
「そういう被害者を馬鹿にしたような考え方が犯罪者を助長するんですよ」
「煙草うめェー」
三森は一の後ろをダラダラと歩きながら、紫煙を吐いた。
「大体よ、花屋っつーか、店がこんな時間に開いてンのか？」
「……どうでしょうねえ」
黙々と一は歩く。
「そういやさ、こないだはしンどかったらしいな」
「あー、確かに。もっと簡単に、上手くいくと思ってたんですけどね」
「いや、堀さんがーだけどよ。てめぇらルーキー連れてお守りしながらヤバイ奴相手だろ？　私だったら無理だな。てめぇらごと全部纏めて燃やしまくってたろうな」
そう言って三森は笑った。
三森を流しつつ、一は前方に意識を集中させる。停留所から少し歩くと、商店街らしき物が見えた。早朝だと言うのに、信号の向こう側には活気の溢れた光景。商店街らしき所に足を踏み入れると、一は花屋を探す。
「おい、右行こうぜ、右」
一が左辺りを見ると、花屋を発見した。店頭で商品であろう花に

水をやっている、エプロンを着た中年の女性。恐らく店員であろう。一はその女性に声を掛け、追弔の為の花を頼んだ。店員は微妙な笑顔を浮かべて、あれこれと一に、棘の無い花や、臭いの強い花は駄目なんだとか、色々とレクチャーを交えながら、五分ぐらいで花束を作ってくれた。

店員の教えてくれたお勧めの花の中から、一つ選ぶ。出来た花束は、一の注文通り菊だけだった。シンプルだが、それ故に死者への手向けらしかった。

一は丁重に店員へお礼を述べ、商店街を後にする。その間三森は、一言も喋らなかった。

「あンだよ。花束なんて頼むからデートでもすンのかと思った」

一の持っている花束を眺めながら、三森はどこか不機嫌そうに言った。

「デートに花束って、すっげーレトロじゃないですか」

「いや、案外今の女も喜ぶモンだぜ」

「へー、そういう物ですか。じゃ今度糸原さんに花でもあげよっかな」

「クチナシの花でもやってみな。血相変えて喜ぶぜ」

「三森さんって意外と乙女チックなんですね」

煙草を美味そうに吸い、道端に唾を吐く三森へは振り返らずに一は嘯く。

「……てめぇはさ、ホント私を怒らすのが上手いよな。感心すンぜ、お前の性格の悪さにはよ」

「今まで俺、三森さんの事は乙女チックって言うか、乙女ファックって感じで見てました」

「上等だコラァ！　ヤキ入れてやっから袖捲くれてめぇ」

「冗談ですよ。それよか、墓前じゃあ大人しくしてて下さいね」

「あ？」

三森の足が止まった。
「図書館に行くンじゃねーのか？」
一も足を止め、三森に振り返る。
「図書館の裏に、墓があるんですよ」
「……あー、なんだ。それって、『図書館』のか？」
「ええ、『図書館』の」
そっか。呟くと、三森は一の横に並んだ。二人は歩き出す。
「帰りますか？」
「あンでだよ？」
「フリーランスが嫌いじゃ無かったんですか？」
「はっ、聞くまでもねェ。あいつらは殺したいほど嫌いだよ」
心底憎らしげに、三森は吐き捨てた。
「だけどな」
フッと、三森の声が優しくなる。
「死んだらカンケーねーよ。死ンじまったら、勤務外だろうがフリーランスだろうが、ただの元人間だ。そこまで私もカスじゃねえよ。安心しろ、墓に唾なんて吐きゃしねー」
「そりゃ有り難いです。流石に三森さんと殴り合って生きていられるとは俺も思っちゃいないんで」
「はっ、てめぇに殴られるほど柔くねェよ」
その声も、どこか優しかった。

つくも図書館。そう書かれた看板を、一は見上げた。ここに来るのは三度目だった。
「来たか、一」
図書館の入り口、階段の近くに居た着流しの老人が声を掛けてくる。その老人が、何もない空間からいきなり現れたようだったので、三森は少し驚いていたが、一はそんな事にはすっかり慣れていたので、

「先生、お早うございます。この度は、色々とご迷惑を掛けてしまって……」

駒台大学教授、兼、つくも図書館館長である、九十九敬太郎へ当たり前に挨拶をした。

「気にするな。教え子の頼みだ。聞き入れぬわけにはいくまい」

九十九は一が上がってくるのを待ってから、そう声を掛ける。

「そう言ってもらえると、非常に有り難いです」

「……一、後ろのは？」

「ああ、その、何て言いますか」

言いよどむ一は押しのけ、三森が九十九の前に立った。

「バイトの先輩だ」

「ふむ、豪胆な女子だな。はじめまして、ここの館長と、駒台大学の教授をやっている九十九敬太郎だ。どうやら、君には一が世話になっているようだ。わざわざ墓参りにまで付き合ってくれるとは……」

「あ、先生、それは……」

「ガッコのせんせーか。ま、宜しく。三森だ」

一の抗議に被せるように三森が発言する。

「三森か。三森は学校には通っておらんのか？　見たところ、一と年は変わらんように見えるが」

「あー、私にゃ向いてねンだ。ベンキョーなんて退屈で退屈でしょうがねーよ」

「それは残念だ。どうだ、今度私の授業を受けてみんか？」

三森の顔が少しだけ青くなった。

「遠慮しとく……」

九十九は静かに笑う。

「あの、先生。俺、墓参りに来たんですけど」

「知っている。お前は中々顔を出さないからな。少しぐらい話に花を咲かせても良いだろう」

「こないだ会ったばかりじゃないですか」

「学校では会わないだろう。私のゼミはともかく、単位が足りなくなっても知らんぞ」
一は耳に痛い小言を受け流しつつ、話が終わるのを祈った。
「センセ、とりあえずさ、先に用事済ませたいンだけどよ」
思わぬ助け舟だった。
「……ふむ。良いだろう、こっちだ。付いて来たまえ」
三森の提案を素直に飲み込み、九十九は図書館の入り口を抜けて裏へと進んでいく。九十九には聞こえないぐらいの声で、一は三森にお礼を言った。
「四百円分は働いてやンよ」
「……あはは」
果たしてつり合っているのかそうでないのかは、一には分からなかった。

簡素な墓だった。周りを木の柵で囲まれた、少しだけ盛り上がった地面。その近くには、線香が空き缶の中に立てられていて、それ以外には、もう本当に、他には何もなかった。
一は『墓』の前に立ち、持っている花束を置こうともせずに、ぼんやりとそれを見つめる。
「済まんな、こんな物しか用意できなかった」
九十九は申し訳無さそうに墓を眺めた。
「いえ、急なお願いを聞き入れて頂いただけでもあり難いのに、その上、お墓まで作ってもらえるとは……。感謝しても、し切れませんね」
「ふむ。お前にしては殊勝な物言いだな。学校ではもっと飄々と振舞っているだろうに」
「ケースバイケースです」
一は苦笑する。
「だが、本当にこんな所で良かったのか？」

「……俺が言うのもなんですが、本が相当好きな奴だったらしくて、身寄りも分からなかったし、先生には悪いかと思ったんですけど、図書館の近くに埋めてやりたかったんです」
「埋めてやりたかった、か。詳しくは聞かんが、あの本をか？」
「何分、死体が残っていませんでしたから」
「最初は冗談かと疑ったがな。血染めの本を差し出して、私を謀っているんじゃないかと」
くくっ、と喉の奥で九十九は笑った。
「未だ短い付き合いだが、お前は嘘を言う生徒では無いと、私は思っている」
「さあ、どうでしょうかね」
「ふっ、そういう所は直せよ」
九十九は一に背を向ける。
「ではな。私は中にいる。終わったら、また声を掛けろ」
一は頷いた。そして、ゆっくりとしゃがみ込むと、花束を供え、持参していた線香を取り出す。
「火、使えよ」
ずいっと、沈黙を守っていた三森が手を差し出した。
一はその手を何も言わずに見つめていたが、「ライターがありますから」と断る。
「良いから、使え」
三森は一の言葉を無視して、自身の指の腹と腹を擦り合わせ、火を生み出した。仕方なく、一は三森の手へ線香を近付ける。線香にはすぐに火が灯り、独特の匂いが鼻を刺した。空き缶へ線香を立てると、手を合わせる。形だけの黙祷だった。そこには、誰もいないのだから。

黙祷が終わった後、一はその場に突っ立っていた。
三森は何も言わないで、煙草も吸わないで、一の傍に立っていた。

どれだけの時間が経ったろうか。一際強い風が吹き、一たちの体を通り抜けていく。

「……そろそろ、帰りましょうか」

その風を合図に、一は三森を見遣った。三森は短く返事をして、歩き出した一の後に付いていく。

一は図書館に入ると、一階のフロア、西洋史などの本が並ぶ一角に入った。

「ンだよ、挨拶しに行くんじゃねェのか？」

「先生はいつもこの辺にいるんですよ」

本棚を抜けると、机と椅子が並んだ、自習の為のスペースが現れた。そこの一番端の机、椅子に座って九十九は読書に耽っていた。一には、九十九の読んでいる本が何か分からない。本のタイトルは何語かすらも分からない。

「先生、お待たせしました」

「一か。あと少し待ってくれ」

九十九は本に目を落としたまま、静かに言った。

三森は舌打ちして、九十九の対面の椅子に座り込む。

一は所在無さげにその場に立ったままだった。

やがて九十九はしおりを挟み、本を閉じる。

「すまん、良い所だったのでな」

「いえ、気にしないで下さい」

「けっ、よくもまァ、そんなぶっとい本を読めるよな」

三森は信じられ無いと言った表情で、九十九の置いた本を見つめた。

「お前ぐらいの頭なら、これで一発じゃねェの？」

一を見ながら三森は笑う。

「そんな事をしたら怒られるぞ三森。本に失礼だ、とな」

九十九は鷹揚に笑った。

「……はっ、どこのどいつが私にンな事言えるってンだ」

「あなたのお友達は、随分と下品な方なんですね」

背後からした声に、一たち三人は振り向く。

「神聖な図書館には向かない格好ですね。と言うより、外を出歩くには向いてない格好です。前時代的なファッションセンスですね。やはり、類は友を呼ぶんでしょうか……」

「ンだとコラ、てめぇ？」

「はっはっは、元気があって結構だ。紹介しよう、ウチの新しい司書だ」

一は何気なく視線を逸らした。

「……あたしが紹介されてるんだから、しっかりとあたしを見てください。でも目を合わせられないのも仕方ない話ですか。幾らあの時、カトブレパスの呪いが回っていたあたしを助ける為だとはいえ、あたしの体ごと時間を止めたんですからね、あなたは。汚らわしい事この上ないです」

一は眉間に皺を寄せ声を荒げる。

「うるせえよ、敵討ちまでしてやって、その上お前を助けてやって、さーらーにその上『図書館』続けられなくなったお前に仕事先斡旋してやったのはどこの誰だ？　俺だろうがっ、文句言うな馬鹿」

「後から聞いた話ですが、あの女の人を追い払ったのは堀さんで、しかもその女はまだ死んでいなくて、ああ、しかもその時あなたは特に何もしていなかったらしいですね」

「おい、誰から聞いた話だそれは。俺の活躍が大分抜けてるぞ。それかその話をした奴の頭が抜けてんだなきっと」

「館長、この人……あたしの手を無理矢理握ってきたりしていたんです」

「何？　一、本当か？」

九十九が椅子から立ち上がる。

「……ええー？　最悪だよコイツ」

「お墓参りにまで来れば、セクハラの罪が消えると思ったんですか

？　浅ましいですね。オキナもあなたの様な人に見舞われてしまって、とてもじゃないですけど浮かばれません」
「お前ってとンでもねェ女ったらしな」
三森が侮蔑の目で一を見た。
「ひっでぇ！　言われない！　言われないよ普通そんなの！」
「図書館ではお静かにして下さい。さもないと、あなたの服に『中耳炎』と油性のマジックペンで書いてからつまみ出しますよ」
「陰湿だよなあオイ！」
「館長、油性ペンを」

つくも図書館。駒台の街の郊外、小高い山の入り口付近に位置する図書館。公立の図書館ではなく、本好きの老人が私財を投げ打って設立した私立の図書館である。蔵書数は二十万冊にも上り、二階建てのフロアには所狭しと本が並んでいる。休日には子供たちが絵本を読み、学生が自習スペースで勉強をしている、平和な光景が見られる。司書の人柄と、館長の老人が人気な事で有名。

尚、最近新しく入った、セーラー服を着た眼帯の司書が、利用客の一部ではカルト的人気を博している。

生殺し

自然の脅威。

どれだけ科学が進歩しようと、文明が躍進しようと、人間が進化しようと、自然の力は変わらない。自然の脅威は衰えない。どれだけ高いビルを建てようと、地震が起これば崩れ去り、素晴らしい薬を作っても、嵐が起これば飛んで去り、どれだけ人間が居ても、津波一つも止められない。

古来から、人間の歴史と言うのは自然との、戦いの歴史なのだ。

人間は、正体の分からない、意味の分からない物を酷く嫌う。酷く怯える。だから人間は進化してきた。何でもかんでも、こじつけておきたいのだ。地震の起こるメカニズム。人は何故人を殺すのか。幽霊の正体見たり枯れ尾花。

人間は古来、正体不明の天災を神の仕業だと考えていた。嵐は神の息吹だと、地震は神の震えだと、干ばつは神の怒りだと。人間に対する罰を、神は与えているのだと。一種、信仰である。その一方で天災を非常に恐れていた。自然の力を崇め、称えるのと同時に、怯え、恐怖していた。人間は自然を、動物や生物に喩えていた。

八俣遠呂智（やまたのおろち）

日本書紀では八岐大蛇と表記されている。日本の、有名すぎるほど有名な伝説の生物。八つの頭と八つの尾を持ち、目は鬼灯（ほおずき）のように真赤で、背中には苔や木が生え、腹は血で爛れており、八つの谷と八つの峰に跨るほど巨大な、蛇の怪物。八俣遠呂智は、出雲国に毎年現れ、凶暴すぎる気性と凶悪すぎる力を以ってして、生贄を要求していた。だが、その悪逆の限りも一人の勇者によって終わらされる。

スサノオ。

この軍神が八俣遠呂智を退治した。そこで、八俣遠呂智は終わった筈だった。

雨が、降り続いていた。

駒台、一の部屋。

「行きたくないわ」

こたつに潜ったままの糸原が、不意にそんな事を言う。今日の糸原はスーツ姿であった。コンビニのシフトに入っている日は、大抵スーツを着ていて、今日も一応、糸原は夕方からの勤務になっていた。なっていたのだが。

「サボろっかなー」

一は「またか」と内心ウンザリして、糸原を無視して、テレビに意識を向けた。

「最近ずっと気が滅入るのよね。何でだと思う？」

窓に当たる雨の音。アパートの廊下に振り続ける雨の音。

「……雨が降ってるからでしょ」

「何で雨が降ったら憂鬱になんのかな」

糸原はうつ伏せから仰向けの体勢に変えて、天井を見上げる。

「服が濡れるからじゃないですか。濡れたら気持ち悪いじゃないですか、やっぱり」

その答えを糸原は鼻で笑った。

「男なら濡れるより濡らしたいもんね」

「誰もそんな事言っていません。って言うか、そろそろ行かなきゃマジで遅刻しますよ。一昨日も遅刻してたんですから、今日はちゃんと行かないと店長に怒られますよ」

「一昨日『も』じゃなくて、一昨日『だけ』よ。そーれーにー、別に私は怒られたって気にしないもーん。高がコンビニのバイトじゃない。口うるさく言われたら辞めりゃ良いのよ、辞めりゃ」

糸原は悪びれずに寝転がった。
「バイトぐらい行って下さいよ。俺だって雨でめんどくさいけど学校行ってんのに」
「行かなきゃ良いじゃん」
「部屋に引き篭もってるよりかは、外に出たほうが幾分か気が紛れると思いますよ。働いてたら憂鬱な気分もどっか行くかもしれませんし」
「バーカ。働くから憂鬱になんのよ。もう、ずっとこのままで過ごしたいわね。私が死ぬまであんたに養ってもらってさ。ご飯食べるのもめんどいから「あーん」ってして貰ってー、で、寝んの。そんで一生そのまま。うわっ、最高じゃない？」
「俺だって女の子にそんなんされたいですよ」
一はテレビに映っているバラエティ番組をぼんやりと眺めながら、やはりぼんやりと答える。
「……あんたなら、されるんじゃない？」
「誰がしてくれるって言うんですか。イカれたボランティアか聖人君子でも無い限り、俺みたいな奴に尽くしてくれる人間いませんよ」
「んー、ほら、ジェーンちゃんとか」
「あいつにそんな事されるぐらいなら、俺は死を選びます」
「ふーん。勿体無い」
「本当に時間が勿体無い。もう十分前ですよ。今から行けばギリギリ間に合うじゃないですか、ほら糸原さん、ゴーゴー」
やる気なさげに手を上げて、一は糸原を鼓舞した。
糸原は不承不承こたつから抜け出し、体を伸ばして、電話に手を伸ばす。
「電話してる暇なんか有りませんよ」
「……あ、うん、そうそう。私私ー」
一の言葉を無視して、糸原は誰かと会話を始めた。電話越しの声は、一には届かない。一体誰と話をしているんだろうと、不思議がる。

「うん、そう。っつーわけで、オッケー？」
糸原はやたらとフランクに喋っていた。そもそも、一は彼女が真面目に喋る所なんて殆ど見た事が無かったが。一の心配をよそに、糸原は受話器を置く。
「オッケー。一」
糸原は一を見遣り、ガッツポーズを作った。
「あんたが私の代わりに働いて」
一は言葉の意味を理解できずに、脳内で弄ぶ。規則的な雨音を捉えたまま、テーブルに顔を伏せた。
「……誰に電話したんですか？」
「店長。行きたくないっつったら、代わりを探せって。だからあんたが行くって言っといた」
まるでその事が当たり前であるかの様に糸原は言い放つ。
「俺だって行きたくないのに……」
「あんた、何か勘違いしてるわ。あんたが行きたくないって気持ちと、私の行きたくないって気持ち。絶対に私の気持ちの方が上なのよ。だからあんたが行ってくるのが筋ってモンなの。お分かり？」
「分かってたまるか！」
だが結局、一は三十分ばかり遅刻してオンリーワン北駒台店のバックルームに顔を出すことになる。

雨が、降り続けていた。

「お兄ちゃん、眠いノ？」
心配そうに、ジェーンは一の顔を見上げる。
一は大丈夫だと言って、頭を振った。
「遅刻もするし、最近むくんでるヨお兄ちゃん」
「別に俺の顔腫れてなくね？」
「ア、ミステイクミステイク。緩んでるネ、だよ」

「……糸原さんの所為だよ」
止みそうに無い雨。一は気だるげに窓の向こうを見遣る。
「人のせいにしちゃダメだよ」
「はいはい、分かってますよ。でも、ホント眠い。この雨じゃ客も来ないし、裏で寝てても良い？」
「だ、だめっ！」
ジェーンは血相を変えて叫んだ。一はその声の大きさに驚いて、遅まきながら耳を塞ぐ。
「なんだよ、もっと兄を労われよ。俺はこんなにお前の事を愛していると言うのになあ……」
「Ｉｔ　ｉｓ　ａ　ｌｉｅ！　お兄ちゃんこそ、もっと妹を大事にしてヨ！　アタシの方がもっともっとお兄ちゃんの事を愛してるもん！」
「超大事にしてんじゃん」
「……お兄ちゃんはちゃんぽん過ぎるヨ」
「それを言うなら、あー。ちゃらんぽらんか？　あ、誰がちゃらんぽらんだ。けしからん、お前をここまで大きくしてやったのは一体誰のお陰だと……。……、いや、大きくないな。すまん」
「Ｇｏｄｄａｍｎ！」
「汚い言葉を使うなっ」
一はジェーンの頭を軽く叩いた。
「痛い。痛い。お兄ちゃんはランボーだヨ。ホリは優しかったのになー」
「ああ、そうか。帰ってきた堀さんと会ったのか。……、ふーん、そうか、優しくしてもらったのか」
ジェーンは悪戯っぽく笑ってから、
「……気になる？」
一の反応を窺う様に上目遣いになる。
「まあな。今度会ったらお礼言わなきゃ。お菓子貰ったんだろ？」
「もらってナイ！」

「じゃあ何だよ？　お菓子に付いてるおまけでも貰ったのか？　いや、それとも……」
「何ももらってないヨ……。違うモン。ホリはネ、アタシのことをｌａｄｙとして扱ってくれたの。……誰かさんと違ってネ」
ジェーンはジト目で一を見た。一はおでんの仕込をしていた。
「ジェーン、がんも取ってきて」
「アタシ、ドクターじゃないんだけど」
「下らない事言ってんじゃねぇよ。癌じゃない。おでんの具に決まってんだろが」
「……アタシそんなの知らないもーん、アイドンノー」
ジェーンは一から視線を逸らし、口笛を吹く。
「だいたい、お兄ちゃん。バイトのくせにＳＶであるアタシに命令するなんて、十年早いヨ」
「どっちかって言うと一年遅いんだよって感じだな。って言うか、今更そんな事言っても意味無いぞ。ほら、ゴーゴー走れ走れ」
「団子お断りダカラ」
「元からやる気ねぇよ」
「ダンコ男割り」
「おおう、何かどこかが痛くなってきた気がする」
「ダンコ、お断り……？」
「良く言えました。はい、がんも取ってきて」
「……じゃあ、今日は一緒に帰ろうよ」
ジェーンは先ほどとは打って変わって殊勝な態度になった。一の袖をぎゅっと掴んで、少しだけ顔が赤くなっている。
「途中までか？」
「アタシの家まで」
「雨降ってんじゃんよー。あ、もしかしてお前、傘無いのか？」
「……ン。うん、そう」
一は深く息を吐き、頭を掻いた。
「しょうがないな。次は忘れんなよ」

「やったっ、アイアイガサだネ」
ジェーンは快活に笑う。
一はその笑顔を見て、ほんの少しだけ楽な気持ちになれた。

雨が、降り続けていた。

駒台の街を、雨が濡らしていく。ビルも、木々も、人も、全てを平等に濡らしていた。人々は出来る限り外出を控え、仕方なく出かける場合は傘を差し、体を濡らさないようにしている。駒台の駅前、人々は足早に歩いていた。ある者は屋根のある建物を目指し、ある者は家を目指している。濡れないようにしたい。改札口の近くには、傘を持っていないので誰かしらと連絡を取って時間を潰したり、親兄弟の迎えが来るのを待っている者もいた。
人ごみの中、彼女はいた。
――異質。
傘も差さず、雨を厭う素振りも見せず、彼女は確かにそこにいた。只管に雨に打たれ、雨に濡れ、雨の下に立っている。豪快に袖の破けた、巫女装束。白い小袖に緋袴。巫女の衣装を着てはいるが、おおよそ巫女と呼ぶのを躊躇われる、半ば破戒僧的な雰囲気を彼女は漂わせていた。雨に濡れた短い銀髪。腰には小さな、酒瓶の様なものをぶら下げていた。彼女の身長は高く、人々を見下ろす様に悠然と立っている。顔立ちは整っていたが、彼女に声を掛けようとする異性は存在しなかった。
誰も、彼女に近寄らない。近寄れない。
彼女が雨に打たれてからどれ程の時間が経ったろうか。
「はっくしょんっ！」
豪快なくしゃみを一つ放つと、巫女装束の女は鼻を啜る。ジト目で周囲を見回すと、彼女は「さみぃ」と言い捨て、駅前を後にした。

フリーランス『神社』、山田栞（やまだ　しおり）。
それが彼女の名前だった。

雨が、降り続いていた。

「一時間か……」
商品を陳列していた一が、ぼそりと呟いた。
「あと、一時間しかナイ……」
商品を陳列していたジェーンが、ぼそりと呟いた。二人は時計を眺めながら、作業の手を止める。結局、勤務終了まで残り一時間を切った段階で、客といえる客は殆ど来なかったのだ。
「納品終わったらヤバイぐらい暇になりそうだな。なあ、寝てたら駄目？」
「……そんなに眠いなら寝てくれバ？　ケド、勤怠は切っておいてよネ」
「怒ってんじゃねえよ」
「アタシを怒らせるようなコト、さっきからお兄ちゃんが言ってたくせに」
隣同士で作業しながらも、二人はどこか気まずい。
「可愛い妹と言葉によるスキンシップを取ろうとしてるだけだ」
「お兄ちゃんが言うコトは、何だか意地悪に聞こえるのっ」
「昔のお前はもっと素直で可愛かったのになあ。いつからこんなに擦れてしまったんだろう……。俺は悲しい。悲しすぎて眠たくなってきた」
一はわざとらしく肩を竦めた。
ジェーンは無視して、珍しくも店内に入ってきた客に挨拶をする。そこで、彼女の作業の手がもう一度止まった。不審に思った一が振り返る。客を見る。
「……今日は祭りでもあったっけ」

その客の服装に、一もしばしあっけに取られた。白い小袖に、緋袴の巫女装束を来た女性客。それだけでも充分目を引く格好だというのに、女性の袖は無茶苦茶に破れていて、腰には酒瓶のような物をぶら下げていた。体はずぶ濡れで、短い銀髪がやけに一の目に留まる。

「む。お兄ちゃん、いつまで見てるの」

ジェーンに袖を引っ張られ、一は仕方なく作業に戻った。必要以上に時間を掛け、時間を潰し、納品作業は完了する。一は台車に商品の詰まっていたケースを積み、バックルームへと運び入れ、一言二言店長と会話を交わしてから店内に戻った。

「……なんだ」

「さっきの人なら立ち読みしてすぐに帰ったヨ」

一の呟いた言葉を耳聡く拾い、ジェーンは軽蔑の眼差しを一に向けた。

「別に何も言ってないじゃんか」

「ふーん、どうせミコさんの服に見とれてたんでしょ」

「だって珍しいんだから仕方ないだろ」

「……そんなにあの服が良いノ？」

「浪漫を感じるよな、あの服」

ボケッとしたまま、一は呟く。

「じゃあ、上に掛け合ってみようカナ……」

「何か言った？　お腹空いたのか？　喉渇いたのか？　眠たいのか？」

「子供扱いしないでってば！」

「ああ、そうだ。仕事終わったら店長が話あるってさ」

「アタシに？」

一は首を振った。

「俺にも」

雨は、降り続いていた。

勤務の終了した一とジェーンは、深夜勤務の三森に引継ぎを頼み、バックルームに戻った。店長は椅子に座ったまま煙草を吹かしている。

「話ってなんですかー」

一は制服を脱ぎながら店長に尋ねた。

「……先にお疲れ様です、だろうが。私を誰だと思ってるんだお前は」

「話が無いなら帰りますよ」

「あのな、あんまり舐めた真似ばっかしてたら首にするぞ」

「良いですよ。首にされたら北駒台の情報持って南に行きますから」

のらりくらりとかわす一に、店長の苛立ちが増していく。

「お前、今日来た時からそんなんだよな。私に恨みでもあるのか。言いたい事があるなら言え。私は逃げも隠れもせんぞ」

「店長に恩こそ感じてはいますけど、恨みなんて一つも無いですよ。俺が恨んでるのは糸原さんです」

「お前が代わるから悪いんだろうが。自分の蒔いた種だろう。生えてきたものは自分で刈り取れ」

「事後承諾だったんですよ!?」

一はロッカールームから曲がったハンガーを取り出し、無理矢理そこに制服を掛けた。

「そうじゃない。根本的な問題だ」

「？　どういう意味ですか？」

はあ、と。店長は溜め息を吐いてみせる。

「分かってないなら別に良い。まあ、糸原との同居はその様子じゃ上手くいっているらしいな。仲が良過ぎるのは考え物だと、私は思うが」

「さあ、どうなんでしょうね。上手くいかされてるって感じですけ

ど」
「まあ良いさ。それより話だ。ゴーウェスト、ニヤニヤしてないで話を聞く姿勢を作れ」
「ニヤニヤなんてしてないんだケド？」
ジェーンは脱いだ制服を椅子に掛け、コートを羽織った。
「実はだな。本部から連絡が来ていて、勤務外店員に必ず伝えろと、そう言われている事がある」
「ニューイヤーね」
「それはもう良い。で、だな、まず、何から言おうか、と言うより、どう言うかだな……」
店長は腕を組み、椅子に深く腰掛ける。
「……結構、重要な話だったりします？」
「いや、本部の話は特に大した物じゃない。アレだ、最近、勤務外の活動を邪魔する輩が居るらしい。まあ実際居るんだけどな。それでだな……」
「滅茶苦茶大事な話じゃないですか！」
「うるさい。大声出すな。今更そんな事言わなくたって、お前は既に知っているだろう。カトブレパスの時に、遭っている筈だ」
一を睨み、店長は煙草を口だけで銜えた。
「っと、あの、森賀って人の事ですか？」
「ん、その通りだ。そういう連中が世界中に現れ始めたらしい。幸い日本じゃあ大きな被害は出ていないが、インドや北欧辺りは相当なダメージを受けたそうだ」
店長は何気なく言う。大きな被害は出ていない、と。一の、癇に障った。
「日本でも、被害は出たでしょう……」
「おいおい、まさか『図書館』の事を言っているのか？　フリーランス一組が終わっただけで済んだんだぞ。そんな些末な事を大きな被害なんて呼んでいたら、インド人に殺されるぞ」
確かに、その通りかもしれない。一は口を堅く閉ざす。

「……ボス？　結局、その人たちは何者なノ？　どうしてアタシたちの邪魔をするのか、どうしてそんなコトをするのか、ハッキリしないんだけど」

ジェーンが場を察したのか、話題を変えた。

店長は喉の奥で笑いを噛み殺し、煙草を灰皿に押し付ける。

「全く分からん。だが、ソレを殺す私らを邪魔して、まるでソレを利用して私らを殺そうとしている奴らが現れたのは確かだ」

「クールじゃないわネ。本当に彼らは人間なのカシラ？」

「全く分からん。とにかく、本部から勤務外への通達は以上だ。何か質問はあるか？」

問われた一とジェーンは何も言えなかった。質問が、あり過ぎて何を聞けば良いのかまるで分からなかったからだ。

「無いとみなす。じゃあ、次は大事な大事な私の話だ。良く聞けよ」

店長は沈黙を自分勝手に解釈して、話を続ける。一を見て、ジェーンを見てから、

「この仕事を続ける気はあるか？」

何気なく、そう言った。アイギスを使っていないのに、時間が止まる。最初、一は店長が何を言ったのかが分からなかった。この仕事、オンリーワンでの、勤務外を、続ける気はあるのか、と。

「オフコース。グノコッチョウ、そんな質問アタシには無意味よボス」

ジェーンは戸惑っていたがハッキリと、店長にそう言った。

「そうか。一、お前はどうする？　いや、どうしたい？」

「……俺は」

性急に答えを求められ、一は弱る。

「その、他の人たちはどうなんですか？　皆続けるって、言いました？」

「他人は関係無いだろう。今私は、お前に聞いているんだ」

店長は強く突っぱねた。
「いきなりじゃないですか、その質問は」
「良いから答えろ、私も暇じゃないんだ」
「……続けますよ」
半ば自棄になりながら、一はぶっきら棒に口にした。
「そうか。なら答えを聞いていないのは糸原だけだな」
「一昨日に聞かなかったんですか？」
「いや、あいつは保留にしてくれと言っていた。本当なら、今日答えが聞けると思っていたんだがな」
「その手があったか……」
一は頭を抱えて悔しがる。
「それじゃあ話は終わりだ。三森が言ってたが、雨は強くなる一方だとさ。川が氾濫するかもしれんから、気をつけて急いでなるべく慎重に早く帰れよ」
難しい注文だったが、一は気楽に手を上げて返事をした。ロッカールームから普通の傘を取り出し、ジェーンの帰り支度を待ち、ジェーンと連れ立って店の外に出る。
「酷いな」
一の呟いた言葉は雨音に掻き消された。
「早く帰ろうよっ、アイアイガサでっ」
「何でそんなに楽しそうなんだよ……」
傘を広げ、一はジェーンを招き入れる。
「レッツゴウ！」
「暴れんな、濡れるぞ」
まるで子守だ。苦笑しながらも、一は少しだけ楽しい気分になれた。

一はジェーンを送り届けると、すぐに来た道を引き返し、アパートまでの道を歩く。やや駆け足でアパートまで到着し、階段を上り、

自室の扉をノックする。
「ちょい待って」
雨が降っているからだろうか、糸原は一が思っていたよりも素直に扉を開けた。
「酷いですよ、雨。銭湯行こうかと思ったけど、これじゃ風呂に入っても、風呂から出たら意味なくなりますね」
「げー。じゃ明日朝一で風呂屋行こうよ。ジメジメしてたからサッパリしたいのよねー。お姉さん、実は一日に二回は風呂入らなきゃ死んじゃう体質なの。知らなかったでしょ？　だからついさっき生き返ったところだったんだかんね。いや、あんた運が良いわマジで」
「良いからタオル渡して下さいよっ」
一は糸原からタオルを受け取り、髪の毛の水分を弾いていく。
「そう言えば今日、店長から仕事続ける気はあんのかって聞かれましたよ」
その言葉は、一なりの『ジャブ』だった。唯一あの店で糸原だけが答えを出していない。他の面子は恐らくは、全員が答えを出しているであろうと一には予想できている。全員が、続けると。だから、糸原の答えが、保留している答えが知りたかった。
「私は無いわよ」
「え？」
軽い牽制に、えげつないカウンターを合わされた気分だった。一の頭が少し揺らぐ。
「あによその間抜け面。だから、私は勤務外なんて続ける気無いって言ってんのよ」
糸原は至極当然に、そう口にした。
「辞め、ちゃうんですか？」
「……逆に。あんたはどうして続けるって言ったの？」
「俺まだ何も言ってないんですけど」
「はん、私にカマ掛けようなんて甘いのよ。あんたがもし辞めるなんて言ってたら、そんな普通の顔して帰ってくる訳無いじゃない」

一はタオルで顔を隠しながら、
「妙に冴えてますよね、糸原さんって」
会話を続ける。
「あんたみたいなお人よしに褒められても嬉しくないわよ。で？さっきの質問だけどさ、何であんたは続けるなんて言ったのよ？」
「いや、だって辞める理由なんて別に無いかなーって」
「じゃあ、私も同じね。それが辞める理由よ」
「……続ける理由も特に無いって事ですか？」
「だあって、ソレと戦うなんて危ないじゃん。死ぬかもしんないのよ？　まあ、別に続けても良いけど、ヤバイ橋渡る必要も無いでしょ。向こうから辞めていいよ、みたいな感じで聞いてくんだからさ、お言葉に甘えちゃうじゃん普通」
糸原はヘラヘラと笑った。
「んー、じゃあまたシフト変わっちゃいますね」
一は一通り体を拭き終わったので、タオルを置いてジャージに着替え始める。
「あんたも辞めれば？」
ふと、糸原はそんな事を口にした。
こたつで寝転んでいるので、一からは糸原の表情が見えない。
「新しいバイト先探すの面倒だからなあ……」
「探せば良いじゃん」
「だから、面倒だって――」
「――理由、あんたにはあんじゃん」
拗ねた様な糸原の物言いに、一はたじろいだ。
「別に、ありませんよ」
「あっそ」
「……明日、昼からでしたよ」
「知ってる。何か、もう眠いわ、あんた待ってて起きてた訳だし」
「オヤスミナサイ……」

雨は、止みそうになかった。

SNAKE STALKER

雨は今日も降り続いていた。

昼過ぎに雨音で目を覚ました一は、糸原が居ないことに気付く。時計を見ると、既に勤務時間は過ぎていた。店から電話が無いことから、糸原が仕事に行っているのだと一は安心する。午後から講義を受けようが迷ったが、雨が降っていたので一は寝なおそうと決意した。雨は、どうにも全てを鈍らせる。

「……ふあ……」

あくびを隠すことも無く、一は大口を開けた。こたつのスイッチを入れ、温まるのを待つ間テレビを見て時間を潰す。足元から、徐々に温度が上がっていくのを感じ、気持ちが穏やかになるのを感じた。充分な暖かさになったのを体で確認し、枕に頭を預ける。目を瞑れば、睡魔はすぐに大挙してきた。雨音を聞きながら、まどろむ意識に全てを委ねていく。

コン、と。

そこで一は雨音以外の音を聞いた。何かを叩いたような、軽い感じの音。

コン、と。

もう一度、その音が聞こえた。一はやっと、自室の扉がノックされている事に気付く。新聞か、宗教の勧誘だろうと思い込み、一は無視することに決めた。

「おい、坊主。いねえのか？」

「……んー？」

扉越しに聞こえてくる無骨な男の声。一はその声に聞き覚えがあった。

「今日はあの女もいねえのか……」

独り言のようだったのだが、その声は一の耳にも届くほどの声量。

仕方無しに、

「今日は誰も居ませんよ」
と、寝ながらの姿勢で言った。
「あ？　居るじゃねぇか！」
突込みが返って来る。
「まあ良い。あの詐欺師が帰ってきたら言っとけ。この間の負け分は取り戻すってな」
「はーい」
適当に返事をし、一は寝返りを打った。
やがて、廊下を進み、階段を下りていく音が聞こえてくる。声の主は帰ったのだろう。声の主の、北英雄（きたひでお）は。階下に住む、このアパートの住人。中年の男性。一は数回だけ北の姿を確認した事があるが、よれよれのシャツに、よれよれのズボン、無精髭の、適当な感じの独り身の男性。北の姿は常にそのような物だった。酒と煙草と賭け事が大好きな、典型的な駄目な大人と、一は北の事をそう認識している。
一は殆どの場合。こうして北と扉越しにしか会話を交わさないが、糸原はちょくちょくと北の部屋に遊ばれているようだった。そして、北は間違いなく糸原に遊びに行っているようだった。有体に言えば、鴨にされている。賭け事が好きな北。賭け事が好きな糸原。賭ける物は勿論、金だった。そして糸原は、一が思っている以上に詐欺師だったようで、時たま北からイカサマ紛いのギャンブルを仕掛け金を巻き上げている。その金は、一には一円たりとも入ってこない。全て糸原のポケットマネーになっていた。
と言うわけで一は、北、と言うこのアパートの住人に同情めいた仲間意識を抱いている。

「……ちっ」
オンリーワン北駒台店には険悪な雰囲気が漂っていた。フロアには、外からの雨音と誰かが時折発する舌打ち以外、他の音は一切無

い。その雰囲気を作り出していたのは、午前からシフトに入っている糸原と、昨日の深夜からシフトに入っている三森だった。

三森と糸原。

この二人は、他の北駒台店のメンバーも認める仲の悪さである。そして当人たちもその事は自覚していた。つまり、自他共に認める犬猿の仲。理由は今となってはハッキリしないし、当人たちも口を割ろうとはしないが、とにかく三森は糸原の事が嫌いで、糸原も三森の事が嫌いだった。お互いがお互いの事を自分の視界から消えて欲しいと願っている。馬が合わないなんて生易しい物ではない。隙あらば、殺してやろうかなんて考える事もあると、彼女らは一に話した事があった。

「ちっ」

牽制。

糸原は三森の方を見ないで舌を打つ。

そうまでしてお互いの事が嫌いならば、どちらかがどちらかの目の届かない場所――バックルームなど――に行けば良い物だが、彼女らはそうはしなかった。どちらかが離れれば、離れた方の負けになるから。そう、彼女らは認識している。だから、こんな異常な雰囲気を作り上げた二人は、異常な雰囲気の中で立っていた。ある種、自業自得。

そして今日はとびきり最悪な日だった。降りしきる豪雨。常に耳を刺す雨音。雨が降れば憂鬱な気分になる人間は、決して少なくない。三森も糸原も、そういう人種だった。いつにも増して店内は険悪だった。最悪だった。その空気を察してか、今日は立ち読み客ですら居ない。入ってくるには入ってくる客も居たのだが、カウンターで悪鬼の様に立っている三森、もしくは糸原を見て、何も買わずにそそくさと立ち去っていくのだ。全く以って、店としての機能を成していない。

そもそも、店長がこの二人を一緒のシフトにしなければ良いのだが、贅沢を言っていられないほどに北駒台店の人員は不足していた。

一般も、勤務外ですら足りていない。ギリギリのシフト。それでも一時期よりはマシだと言える。三森も糸原も、その事を分かっているが故に何も言えない。何も言わない。

「暇……」

糸原は立ち疲れたのか、カウンターに飛び乗り腰を下ろす。無意味にレジを開け、札束の枚数を確認していく。

「いちまーい、にーまーい、さんまい、よんまい、ごーまい、ろくまい……」

「うぜェよ！　声に出して数えんじゃねぇ！」

糸原の平坦な抑揚が気に障ったのか障らなかったのか、とにかく三森は糸原に噛み付いた。

「……ななまい、はちまい、きゅうまい、じゅうまい……」

三森は舌打ちして、煙草に火を点ける。いつもならば一が店内で喫煙する事を咎めるのだが。

「じゅういちまい、じゅうにまーい、じゅうさんまい……。……、いちまい、足りない……」

「店長に報告しとけよ」

「犯人は誰……？」

「てめェしかいねーだろうが！」

「あー！　退屈！」

数えていた札束をレジ内に乱暴にしまいこみ、糸原は乱暴にレジを閉めた。

「そんなに退屈なら外掃除して来いよ」

「……あんたが行ってきなさいよ」

「こンな天気の日に外うろつくアホはいねェよ」

「私だってわざわざ濡れに外出るほど馬鹿じゃないわ」

そこで、二人は気が付く。その、アホと馬鹿が居る事に。いつの間にか店内には、客が居た。背の高い、女性客。その客は滅茶苦茶に体を濡らしている。

「何アレ、コスプレ……？」

糸原がそう呟いてしまうのも無理からぬ物だった。その客は、白い小袖に緋袴を着用しており、糸原のイメージしている巫女にピッタリだった。ただ、袖のところは乱暴に破られており、顔立ちこそ整っているが、女性客は巫女と呼ぶには相応しくない豪胆な雰囲気を備えている様に感じられる。短い銀髪も、腰に下げた小さな酒瓶のような物も、彼女の体も濡れていないところなど無く、歩くたびにフロアを水浸しにしていった。

「ちっ、本当にアホがいやがった」

三森は女性客の振る舞いに辟易する。誰が掃除するんだと、内心で毒づいた。

……尤も、掃除をする気は端から三森には無かったのだが。

「あ。帰った」

巫女装束の客は、店内を適当にうろついただけで何も買わずに出て行ってしまう。傘も買わずに、雨の降る外へと、出て行ってしまう。

「頭おかしいンじゃねぇの、あいつ」

「そうね、あんたは頭が悪いけどね」

さらりと糸原は言い放った。

「……最近の新人は言葉遣いもわからねェらしいな」

「年は私の方が上でしょ。働いた年数なんかより生きた年数を敬いなさいな」

「ようは言い方だよなァ、良いか、私はお前と敬老の日が大嫌いなンだよ」

「私は年寄りが嫌いよ。この国の平均寿命って長すぎると思わない？　人間五十年って豊臣秀吉も言ってたじゃない。日本が狭いのは全部死に際を見誤った奴らの所為よ。昔日本を支えてくれたって言っても、もう良いじゃん。とっとと極楽浄土に行きゃあ土地はもっと余ってみんなハッピーになるのに」

「老害ってのは、しゃあねェだろ。そんなモンだろが。私が敬老の日が嫌いなンは、年寄りを敬うのは祝日にするほどだと思ってねー

からだ。私の婆ちゃんは馬鹿にすンな。まあ、概ね分かる気もするけどな。それと、人間五十年って言ったのは織田信長だぞ」

「鳴かないの？　それなら良いわ、殺すから。一句出来たわね」

「季語がねェぞ」

「うっさいわね、マザコ……。グランドマザコン」

「ンだとコラァ！？」

仲が悪い。まあ、そんな物である。

彼女は蛇を探していた。小さな、とても小さな蛇である。小さすぎて見つからないような、そんな蛇。

雨の降りしきる中、彼女は銀髪が濡れる事も厭わず、服が濡れるのも構わず、蛇を探し続ける。それが彼女に、フリーランス『神社』に課せられた任務だった。そして同時に、山田栞（やまだしおり）に背負わされた使命でもあった。

使命。

栞の背には、少しばかり重い物。重すぎて、背中はとっくに麻痺している。何も感じられなくなっている。何も、感じたくはない。だから、只管になって蛇を探す。見つかる見つからないは関係無い。とにかく、考え事をする前に体を動かしていたかった。

栞は腰に手を伸ばし、酒瓶のような物を手に取る。逡巡してから、瓶の中身を口に含んだ。

――美味かった。

瓶の中身は酒。肴は、雨で良い。他には何もいらない。雨を眺め、雨に打たれ、酒を呑む。

それだけで、充分だ。

栞は口の端を釣り上げ、空を見上げる。

「今日も元気だ酒が美味いってな」

大きなくしゃみを一つ放ち、栞は鼻を豪快に啜った。

惰眠を貪っていた一は電話のベルによって叩き起こされた。寝ぼけ眼で、寝起きの頭で、もはや条件反射の様に受話器を取る。
「……もしもし」
少しだけ声が不機嫌な物になっていた。
『早田だ』
短く答えた、偉そうな調子な電話の向こう。
「なんだ早田か、切るぞ」
答えを待たず一は受話器を置いた。電話を切った。一秒と経たずに電話が鳴る。
「もしもし」
平坦な調子で一は喋った。
『早田だ』
「なんだ早田か、切るぞ」
『駄目だ。私の心が持たない』
「緊急の用事か？　いつも言ってんだろ、電話するなって」
一は電話が好きではない。ぼんやりとしている時に、急に音が鳴るものは苦手だったのだ。
『む。だが先輩にはやはり携帯電話をお勧めしたい』
「……苦手なんだ。って、これも前に言ったろうが」
『私はもっと先輩と他愛無い事を夜中に話したり、メールで益体も無い事柄についてやり取りしたいのだ』
「ふーん。俺が携帯買ってもお前にだけメリットがあるよな。フェアじゃないぞスポーツマン。俺は携帯電話を購入すればどんなメリットが得られるんだ？　返答次第では考えない事も無い」
『一肌脱ごう』
スポーツマンには突っ込みを入れず、早田はさっぱりと言う。
『とは言っても既に全裸なのだがな』
「あっそ全裸ね。ってことは今家か。随分とフリーダムだな、今家には家族居ないの？」

『いや、今リビングでお母さんと再放送のドラマを見ている』
「俺がお前の母親なら、泣いてるかお前の顔面ぶん殴ってるわ」
『先輩に殴られるなら吝かではない……。と言うか望ましいぐらいだ。どうだ先輩、今ここで言葉責めをすると言うのは？』
「どうだじゃねぇよ。つーかさ、お前のキャラ設定に色々と問題があるような気がしてきたぞ……。お前はもっとさ、爽やかなスポーツ少女じゃ無かったか」
『確かに処女だが』
「少女だよ馬鹿！」
『すまん、先輩の滑舌が悪くてな』
「だからお前の耳が悪いんだよ！」
『それより先輩、先輩の家は大丈夫か？』
「は？」
『雨だ。四日前からずっと降っているだろう。先輩の家は川の近くではなかったか？』
「……いや、結構距離離れてるし大丈夫だと思うけど」
成る程と、一は納得した。早田は川の氾濫によって一の家が床上浸水の被害に遭っているのかどうか気になっていたらしい。
『そうか、それなら心配ない。実は私の家の近くに川があってな。滅茶苦茶増水しているのだ』
「この雨だもんな。お前んちは大丈夫なのか？」
『問題ない。ただ泳げそうに無いな。せっかく水着を着ていったのに』
「今は冬だとか色々突っ込みたいけどさ、もう良いよ電話切って良い？」
『まだ喋り始めたばかりだろう。切らないでくれ、切ったら先輩の家まで水着で押しかける。いや押し倒す』
「何で水着前提なんだよ！　だからお前は俺の家に上げたくないんだ！」
『ちゃんとスクール水着だ』

「ちゃんとの意味が分からない！」
　しかし一の心は揺れている。
『しかしこの天気では学校に行くのも憂鬱だな。実際昨日から私は、自主休講の形を取っている』
「部活も出来ないしな」
『その通りだ。まあ、部活は良いとして。私としては先輩の顔が見れないので酷く寂しい』
「それはどうも」
『しかも休む前に私が学校で最後に見たのが楯列だったのだ。最悪だ』
「別に良いだろ。あいつは元気にしてたか？」
『川に突き落とした』
「あいつ泳げるのかな」
『バタフライで下流まで下っていった』
「俺、お前らと距離を置こうかと思うんだ」
『実行しなければ別に構わないぞ。思うだけなら先輩の自由だ。さあ、好きなだけ私の事を想ってくれ』
　一は電話を切った。一分も立たない内に電話がけたたましく鳴る。
「もしもし」
『早田だ』
「もー、何だよ。何か用でもあんのかよー」
『投げやりにならないでくれ。私はただ先輩の声を聞きたいだけなのだ。顔を見れないなら、せめて声だけでも聞かせてくれ。あまり先輩が私に冷たいと、そっちに行ってしまうかも知れない』
「脅迫かてめぇ。つーかな、来れる物なら来てみろ」
『分かった。しばし待て』
「ちなみに俺引っ越したから」
『……いや、先輩の気（オド）は移動していない。引っ越したのは嘘だろう』
「なあ、気って何？　何なの？　お前って何なの？」
『私は先輩の可愛い後輩だ』

「可愛さあまって憎さ歪を越えた百二十パーセントだよ」
『それじゃあ今から行くぞ。裸で待機していてくれ』
「なっ……！　辞めろ、来るな！」
クックックッと、早田は喉の奥で笑う。
「なんだその悪役笑いは」
『先輩は照れ屋さんだな。良いだろう、裸に靴下で待機していてくれ』
一は咄嗟に武器になるようなものを探した。今現在、糸原はバイト中だし、この部屋には自分一人だけだ。今から助けを呼んだところで間に合うとは思えない。
「待って。待て待て待て。今からじゃお前の体が濡れてしまう。お前はフットサル部の宝なんだ。体を冷やすな。辞めてくれ、俺はお前の事を思って言っているんだ。頼むから来るな」
『心配は無用だ。もう濡れている』
「聞かないから。俺は何も聞いてないから」
『ああ……、昂ぶってきた……』
「荒い息遣いを辞めろ！」
『はあ、はあ、すぐに行くから……』
「やめてぇ！」
『む。ドラマが良い所に差し掛かった。先輩、済まないがまた今度』
ブツリと、あっさり電話が切られた。一はしばし受話器を眺め、安堵の溜め息を零す。しかし、自分よりドラマを優先された事に言い知れぬ何かが湧いて来た。
「……やだ、嫉妬してる……？」
考えれば考えるほど気持ち悪かったので、一は寝ることにした。雨音がやけに煩い。雨なんて、止んでしまえば良いのに。降らなければ良いのに。

夜になると、雨は上がっていた。

一はゆっくりと身を起こす。テレビをつけて、ぼんやりと映像を眺めた。内容は頭に入ってこない。世界のドコドコでソレが現れた、誰かが事故で死んだ、そういう事柄は聞き取れるが、それだけだ。それ以上の事は耳に届かない。頭に入らない。晩御飯はどうするか、考えているとアパートの階段を、誰かが上る音が聞こえてきた。その音は規則的にコツコツと響き、一の部屋の前で止まる。

「私よ」

一には聞き覚えのある声だった。しかし、疑念が沸き起こる。果たしてこの声は、本当に糸原の物だろうかと。

「……合言葉を言え」

「はあ？」

ドア越しから呆れた声。一は怯まない。

「でないと開けません」

「……四乃さんの包容力は世界一！」

無言で一は扉を開けた。開けた瞬間額を殴られる。

「何のつもりよ！」

「俺の貞操が掛かってたんです！」

「掛かってたのは鍵じゃない！　あんたの貞操なんて知るかっ！」

糸原は陰干しにしていたタオルを引っつかみ、適当に髪の毛を乾かしていく。

「あー、帰ってくる途中で雨止んだわ。最悪ね、ホント気分悪い」

「銭湯行きます？」

「そうしよっかな。あんたは？」

「ん。俺も行きます」

「オッケー、あと、私バイト辞めるわ」

「いつですか？」

「今月末。だから、えーと……」

「後、一週間ぐらいですね」

「うん。せいせいするわ」

何気なく、会話が進む。

「けど、こっからは出て行かないかんね。別の所で働くつもり」
「いや、出て行って下さいよ……」
「るっさいわね。私の勝手でしょ」
一は銭湯へ行く準備を続けていた。
「ああ、店長が言ってたわよ。なんかでっかいソレが来るかも知れないってさ」
「曖昧だなあ。もっと詳しく聞いてないんですか？」
「さあ。私にはもう関係無いしね」
「はあ、俺も辞めようかな」
「だったらさあ……」
糸原は髪を拭きながら、
「どっか遠いトコ行こっか。んで適当に働いてさ、適当に暮らすの」
そんな事を言った。
「……魅力的な提案ですけど。俺学生なんで」
「辞めちゃえば？」
「学校を、ですか？」
「全部。ぜーんぶ辞めちゃえば」
一は苦笑する。
「そう言う訳にも行かないでしょう。まあ、糸原さんが言ってる事を、考えた事が無いって言ったら、嘘になりますけどね」
「ふーん。……、私とじゃヤなの？」
「そうじゃなくって、出来ないって言ってるんですよ。学校あるし、バイトもあるし」
「だから、私と遠いトコ行くのとさ、今の生活。私と遠いトコに行く方が嫌って事？」
「は……？」
何を言ってるのかが分からなかった。一は目を見開いて糸原を見つめる。時間が、流れていく。
「冗談よ」
やがて糸原は、一から顔を背けるように、タオルに顔を埋めた。

「全部、冗談」
なんでもないように、糸原は笑う。
「……」
一はどこか、自分を遠くから見つめているような感覚に襲われた。

小さかった。
小さかったはずだった。だが、蛇は力を得た。大きくなった。大きくなってしまった。
八つの頭の内、蛇は二つ、頭を取り戻した。
「……」
『神社』の目を掻い潜り、蛇は進む。
力を、力を、力を。
力を取り戻す為に。
爬虫類特有の、感情の篭らない目が獲物を捉える。地面を這い、壁を這い、獲物に這いよる。獲物のすぐ後ろにまで、蛇は近付いた。
「さあ、行け」
どこからとも無く聞こえた、冷たい声。それを合図に蛇は口を開けた。毒腺から、毒液の分泌が開始されていく。充分な量を牙に含ませたところで、蛇は噛み付いた。獲物の足に食らい付くと、その箇所から血が滲む。
噛まれた事にに気付いた獲物は振り返り、自身の足を見て驚愕。必死に振り解こうと足を振り回す。
しかし、蛇は更に深く牙を突き立てた。薄い皮を、鋭い牙が、貫いていく。穴が空き、血が溢れ、その穴から毒は伝っていった。
毒は血を辿り、神経に到達していく。獲物の足が震え、膝から崩れ落ち、動けなくなっていく。
蛇は、牙を一旦外し、先が二つに分かれた舌をチロリと覗かせ、獲物を無感情に見つめた。獲物の顔が恐怖に歪んでいく。助けは来ない。誰も来ない。蛇は口を開ける。牙を見せる。顎を、外してい

く。

獲物は、その光景を生まれて始めて見た。故に恐れる。全身が震える。目が、揺れる。蛇は獲物の状態など無視して、顎を限界まで外した。

「いいぞ、食え」

それもまた合図。蛇はその声を聞き、獲物に噛み付く。爪先から、大きく開いた口を使って、飲み込んだ。

獲物が悲鳴を上げる。痛みは、無い。肉を、皮を、骨を削がれるのに、何も感じない。食われる痛みは感じない。毒の成分に、痛みを麻痺させるモノが含まれていたのか、とっくに獲物の感覚の方が麻痺していたのか。獲物はただ、悲鳴を上げて、痛みも無いまま、自分の体が少しずつ蛇に呑まれて行くのを見るしか出来なかった。

食われるままに食われ、呑まれるままに呑まれ。抵抗さえも許されていない。出来ない。生きながら、未だ意識のハッキリしている体のまま、体が食われていくのを、少しずつ壊れていくのを眺める。殺されていく。生きたまま、殺される。

痛みで失神した方が、獲物にとっては幾分かマシと言えた。否、最高の贅沢と言える。もう死ねた方が楽だと言える。だが、死ねない。体が完全に完璧に完膚なきまでに蛇の口内に体内に消えていくのを、最後の最期まで見届けなければいけない。感じていなければならない。

確実な死は足元から迫ってきていた。獲物は目の前の全てを投げたように目を瞑る。せめてもの、死へ対する『抵抗』だった。

それは蛇足で

「はっはっはぁー！　いやー鴨って素晴らしいわ、素晴らしい。あんたも、そう思わない？　私はそう思うわよホントもう最高ね。向こうからネギと鍋担いでくるんだから美味しく頂いてあげないとむしろ失礼ってもんよねあははははは」

一は辟易としていた。糸原の機嫌が良過ぎる。悪いよりかはマシかも知れないが、それでも過ぎる物は厄介なものだと一は認識していた。

今日の糸原は朝早くに階下に住む北からギャンブルで金を巻き上げ、一の部屋に戻ってからずっとこうだった。

「働いてるのが馬鹿みたいだよねー。コンビニでレジ打っててもさ、一時間で千円ちょっとよ？　勤務外ならもう少し行くけど、それでも賭けに比べりゃカスみたいなもんよ。あー、私ギャンブラーなろっかなー。超楽じゃん、世の中頭と目が悪い人間ばっかなんだもん。私の天下よ天下あっはっはっは」

ずっと、こうだった。一時間近く、糸原は喋りっぱなしである。糸原の話を無視したり、たまに相槌を打たないと殴られてしまうので、一は仕方なく内容の全く無い糸原の話の中から、相槌を打つポイントを窺っていた。

「あんたもさー、バイトなんて辞めちゃってギャンブラーなろうよギャンブラー。二人で組んでラスベガスとかハリウッドとかモナコに行こうよー。んで金持ちから絞れるだけ搾り取っちゃおう。超楽しいって、脳内麻薬出まくりよー？」

ここだ、と。一は相槌を打つ決意をした。

「あー、良いですね。けど俺じゃあ、人様と生き馬の目を抜くような駆け引きするのなんて無理ですね」

「心配ないわよ？　だって私がいるじゃん。あんたは横で見とくだけで良いわ。あー、でも少しぐらいならあんたにテクニックを教え

るのも楽しそうね。そしたら私の事はマスターイトハラと呼びなさいよパダワン？」

一は一つ溜め息を入れる。

「……楽しそうなのは結構ですけど、泡銭だけでなく、きちんと働いて手に入れたお金も良いものですよ」

糸原は一の苦言などお構いなしに、

「はっ、金は金よ。私は金を手に入れるまでの最短ルートを最速で突っ走ってるだけじゃない」

そう言ってから鼻で笑った。

「そんなにお金が好きですか」

「少なくとも、あんたよか金の方が好きね。お金は私に好きな物を与えてくれるけど、あんたは何もくれないじゃない。好きなようにもならないしね」

「……えっと、ここが誰の家か知っていますか？」

「居候、三杯目にはそっと出し」

「分かってんなら良いんですけど、糸原さん最近ゴーマンですよホント。食費圧迫するし、俺の財布持ってパチンコ行っちゃうし。大体そんなに喜ぶほど賭けに勝ってお金があるなら、少しぐらいは生活費入れてくれても良いじゃないんですか？」

「い・や・よ」

糸原は人差し指を振りながら得体の知れないポーズを決める。一の眉間に皺が寄った。

「バイトまで辞めるんですよね？　次の当てはあるんですか？　まさか先の事を何も考えずにコンビニ辞めちゃうんじゃないでしょうね」

「だーかーらー、ギャンブルで暮らすっつってんじゃん」

「……糸原さんの決めた事だから、身内でもない俺が口出しできません。だからどうぞ、勝手にしてもらって結構です。結構です。結構です、が、この先も俺の部屋に住むんなら、せめて食費、いや、家賃の半分、いや、いやいや、お願いですから一万円下さい」

「何よ。そんなにやばいの？」
「やばいです。貯金も殆ど無いですし、コンビニの給料はもうちょい先だし、せめてあと一万円あれば凌げるんです」
嘘ではない。
「ふーん……」
糸原の口の端がつり上がった。
「人に頼みごとする時には、それなりの誠意と態度が必要よね？」
「誰の所為でこんな事態に追い込まれたのかはもうこの際突っ込みません。昨日より明日が大事なんです。俺はまだ死にたくないしもう少し人間らしい生活を続けていたいんです」
一は頭を下げる。
「跪きなさい」
「……これで良いですか？」
この際だったので、一は糸原の指示に従った。
「あんたの頭に私の足乗っけて良い？」
「一万円くれるなら」
「はっ、安いプライドね」
安いのはどっちだ。内心で突っ込みをいれ、一は糸原の屈辱極まりない行為を受け入れる。
「うーん。イマイチね。あ、そうだ。足でも舐めてもらおうかな」
「糸原さん」
「何よ？」
「俺は今泣いて良いんですよね？」
「涙腺をコントロール出きるんなら我慢して。大体さあ、涙を流して良いのは女だけよ。それも極上に良い女だけね。そう、私のような」
跪いている一の頭に片足を乗せたまま、糸原は高笑い。
「今日の糸原さん飛ばしてますね」
「うん、滅茶苦茶気分良いのよ。幸せなの。だから私は笑うのね、あんたにも幸せを分けてあげたいから」

「わあ、じゃあお金下さい」
「おら、足を舐めな少年」
「ちょっと……、あの、ホント勘弁してもらえませんか？」
糸原の突き出した足を手で払い、一は泣き言を漏らす。
「じゃあどこなら舐めるって言うのよ？」
「どこであっても舐めるのは嫌です。糸原さん、良い機会ですからハッキリさせておきましょう。誰がどう見ても、この家の主は俺なんです」
足で頭を踏みつけられたまま、一はそんな事を言った。
「……誰に見せるっての？」
「見せちゃ駄目です！　見ちゃ駄目！　見ないで！　誰にも見ないで欲しいです！」
「分かったわよ。足も疲れたし、今日の所はこの辺で良いわ。はい、じゃこれ」
糸原は足を一の頭から下ろし、スーツの内ポケットから札束を取り出す。そして躊躇うことなくその札束を一の傍に落とした。
「……え！　こんなに！？」
札束を見た一が驚愕の声を上げる。
「ふっ、釣りは要らないわ。今までの礼よ。そんじゃ私パチンコ行って来るからー」
それだけ言うと、糸原は颯爽と部屋を出て行った。
一は糸原がアパートの階段を降りていったのを確認すると、札束を確認する。……偽札という事もありうる。透かしや通し番号を入念に確認し、一は安堵の息を吐いた。
「本物だ……！」
間違いなく、紛れも無く、糸原の置いていった札束は本物であった。一は喉を鳴らす。そして震える手でもう一度お札を確認する。全部で十枚あった紙幣は、全て千円札だった。

昼からバイトだった一は、勤務開始時間十五分前に家を出た。コートを羽織り、しっかりと家の鍵を閉める。鍵を財布の中にしまい、アパートの階段を下りると、

「随分と古色蒼然な所に住んでいるのだな、一一」

黒いスーツ姿の女が居た。女は腰まで届くほどの髪の毛を無造作にゴムで縛ってある。

「……素直にぼろいって言えよ」

「気を遣ったつもりは無いがな」

「俺んちまで知ってたのかお前。ストーカーで訴えるぞ」

「ふっ、ストーカー？　私はオンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗だ。ストーカーである筈が無い」

一は春風を無視して歩き出した。

春風は詰まらなさそうに、しかし表情は変えず、一の横に並ぶ。

「一一、貴様はあのアパートで糸原四乃と同棲をしていると聞いたが、真偽を教えろ」

「はあ！？　何でそんな事お前が知ってんだよ？」

「ソースは明かせない。だが、真偽は今の貴様の反応で明らかになった。そうか、成る程な」

「……そんな事知りにわざわざやって来たってのか？」

一は訝しげに春風を睨んだ。

「いや、今の質問はあくまで蛇足だ。今日は暇だから貴様に忠告の一つでもしてやろうと思ってな」

「お前の行動そのものが蛇足なんじゃないかと思うよ俺は」

「先日から五日間ほど雨が降りっぱなしだったろう？」

春風は一の皮肉と言うか一その者を無視するような素振りで話し出す。

「駒台の北部にある川が氾濫寸前まで追い込まれた。今でこそ問題は無いが、後一度雨が降れば、間違いなく近隣の住宅を呑みこむほどの規模に発展するだろうな」

「んな話を聞いてもさ、南に住んでて良かったとしか思えないんだ

けど？」
「昨日、行方不明者が出たそうだ」
「はあ？」
川の氾濫と行方不明者。いきなりの話題転換に一の頭はついていけなくなる。
「家族が捜索願を出した」
「そりゃ……そうだろ」
「捜索願の届け先はオンリーワンだ。私たち情報部、と言う事になる。行方不明になったのはその家族の長男だそうだ。勤め先はオンリーワンの技術部。今まで家族へ何の連絡もなしに出かけたりはしなかったそうだ」
「……情報部ってのは、人探しまでやってくれんのか？」
「ソレに関係あると判断した場合はな。今回はそう判断した。それだけの話だ」
春風は無表情。
「お前らが動くって事は、じゃあやっぱり、ソレが本当に出るって事なんだな？」
「確定ではない。あくまで可能性が高いと言うだけだ」
「はーん、まあお仕事ご苦労様だよ。それじゃさっきの川の話はなんなんだ？」
そこで、春風は一を見た。無感情に、無表情に。
「そのままの意味だ。精々気をつけろ。つまらん事で死ぬなよ」
「川の氾濫にか？　気をつけてもしょうがねぇだろがそんな事」
「なるべく川に近づかなければ良いだろう。雨が降れば背の高い建物に逃れるとかな」
「……なんだ？　もしかして普通に心配してくれてんのか？」
一は意味ありげに笑う。
「……そうかも知れんな」
春風は視線を地面に落とした。
「ぞっとしねえよ」

「だが、そうでないかも知れん。お前の反応を見てみたいというだけかも知れないな」
「性質の悪い奴だな」
「一一、お前と私は似ているからな。お前は話し易い」
相変わらずの、無表情。
一は春風の言葉に眉を顰める。
「俺とお前に共通点が有るってだけで嫌な気分になれるよ。性別も違うし、ギリギリ同じなのは人間ってトコぐらいか？　ああ、確かに似てるわ。人間同士だもんな」
「違う。もっと根本的な話だ。お前も私も、自分以外の人間全てに警戒しているように見えて、非常に隙だらけ。自分以外の人間全てが嫌いなくせに、一人にはなりたくない。自分が一番大事なくせに、他人に気を遣ってしまう」
「……似てねえよ」
「そうか」と言って、春風は空を見上げた。雨は上がったが、いつ降り出してもおかしくない曇り空。
「あのさ、川と行方不明の話ってどう繋がるんだ？」
「今は繋がらん。他愛も無い意味も無い益体も無い話だ。あまり気にするな」
一が歩き始めてから五分は経つ。あと少しで、店に着く。
「一一、カトブレパスの時には役に立ったようだな。まあ、予想もしていたので驚きはしなかったが」
「役に？　そんなつもり無いよ。全部堀さんやヒルデさんたちが丸く収めてくれたんだ。俺は情けなくあたふたしてただけだ」
「ふっ、そうか。しかし貴様はフリーランスやソレと仲が良い様だな。元『図書館』の黄衣ナコトといい、ガーゴイルやシルフといい」
「……悪いかよ」
ぶっきら棒に一は言い放った。
「さあな。良いか悪いかは私の決める所ではない。しかしだ、一一。お前と仲良くしているフリーランスとソレ。そいつらがこの世全て

のフリーランスとソレと思うな。思えばろくな目に遭わんぞ」
「分かってるつもりだよ。けどさ、ソレにも良い奴は意外といるもんだぞ？」
「ソレについては否定はせん。だが、フリーランスには気をつけろ」
「オンリーワンの人間ってのは、フリーランスがホント嫌いなんだな……」
一は三森や店長の言葉を思い出す。
「当然だ。奴らは人間の中でも最下層のカスと私たちオンリーワンからの裏切り者で構成されているからな。一一、貴様はそんな話も聞かされていないのか？」
「あー、そういや三森さんがボロクソに言ってた気もするな。ゴキブリ以下だとか、ルールも守れない犬畜生だとか」
「ソレと対等に戦えるだけの力を持っていながら、オンリーワンに入れなかった人間、オンリーワンを追い出された人間、そもそも最初からオンリーワンに興味の無かった人間。はみ出しモノがフリーランスになってしまうのはある意味必然だな」
「……けどさ、黄衣は良――。口は悪いけど、そこそこまともな人間だと思うぞ」
何故か一の頭の中に、ナコトの罵詈雑言が浮かんでは消えていった。
「『図書館』か？　ふん、一一。魔術師をまともと言える神経を疑うぞ。だが、そうだな、今駒台に来ているフリーランスは比較的、あくまで比較的だがまともとは言える」
「ん？　フリーランスが来てるって何で分かるんだ？」
そこで、春風が笑った。春風麗と言う人物を知っていなければ分からない程度の、小さな笑い。
「ふっ、私を誰だと思っている？　オンリーワン近畿支部……」
「分かった分かった分かってるって。お前の事は超分かってるから。好きな爬虫類はヤマカガシ。嫌いな爬虫類はインドガビアル。だろ？」

「一一、貴様には虚言癖があるらしいな。私の好きな爬虫類はエリマキトカゲだ」
「年がばれるぞエセ秘密主義者」
「私は秘密主義者ではない。情報部だ。ところで一一。貴様は駒台に潜伏しているフリーランスを把握しているのか？」
一は立ち止まり、コートから煙草の箱を取り出す。
「知ってる訳無いだろ。『図書館』の行方なら知ってるけどな」
煙草に火を点け、一は不味そうに煙を吸った。春風は風上に立ち煙を避ける。
「『元』には興味が無い。そうか、知らないのか。知りたいか、一一？」
「どうせ喋りたいだけだろ。まあ良いや、知っといて損は無いだろうし。教えてくれよ」
「では私の言う事を、一つ聞いてもらおうか」
「……言ってみろ」
一は煙を力いっぱい吸い込んだ。
「貴様の好きな爬虫類は何だ？」
「何だって？　俺の好きな爬虫類？」
「そうだ。言え」
春風は、無表情のまま。
一は拍子抜けした。
――まあ、適当言っても良いんだしな。
一は内心でほくそ笑む。フリーランスの情報となら破格な条件と言える。
「……エリマキトカゲ」
「本当か？」
「こんな事嘘ついても仕方ないだろ」
「確かにな。一一。貴様はこんな下らない質問にすら嘘をつく、器の小さな人間ではないな」
春風は満足げに頷く。

「……」
一は何だか試されたと言うか、騙された気分に陥った。
「現在駒台には『神社』、『天気屋』、『教会』、『魔女の家』、『騎士団』、『貴族主義』、六つのフリーランスの行方が確認されている」
「フリーランスって凄いんだな」
主にネーミングセンスとかが。
「しかも聞いただけじゃどんな奴か分かんないぞ。大体『天気屋』って何だ？　気象予報士かなんかか？」
「いや、気分屋なだけだ」
「あっそう」
「活発的に動いているのは『騎士団』ぐらいだな。二人組の、西洋の剣を使うフリーランスだ。駒台に来てから既に九匹のソレを手に掛けたらしい。最近動き出したのは『神社』だ」
「……何だか童心に戻った気がする」
一は煙を盛大に吐き出した。
「ん。神社ってのはどんな奴なんだ？」
「袖の破れた巫女装束の女だ」
「巫女装束着た男なんか見たくねぇよ」
そこまで喋って、一の動きが止まる。
「……あれ？　見たことあるな……」
「『神社』か？」
「うん。前に店に来たと思う。そいつが『神社』って言うフリーランスかどうかは分からない。分からないけど……」
「ふっ、そんな格好をした奴がこの世に二人もいて堪るか。で？　そいつは何をしていたんだ？」
「コンビニで立ち読みして帰った。雨降ってるのに傘も差さないでさ、店の床好き放題濡らしてったよ」
「ふん、そうか。実につまらんな」
春風は吐き捨てるように言い放った。

「なあ、ヤバイ奴なのか？　その、『神社』っての」
「問題無い。おかしな格好をしてはいるが、ただの杜氏だ」
「杜氏？　酒を造ってる人の事か？」
「その認識で問題は無い。山田栞（やまだしおり）と言う名前だ。背の高い、私の好きなタイプではない女だ。そうだな、どことなく三森に似ている」
「……フリーランスなのに、杜氏？」
「訳は知らん。本人に聞いてみろ。今日も来るかも知れないしな」
「なんで？」
春風は曇り空を睨む。
「……雨が降るからな」
「はあ？」
「今日の所はこの辺で良いだろう。そら、もうすぐ店に着くぞ」
「分かってるよ。じゃあな情報部」
一は立ち止まった春風を追い抜いた。
振り返らず、軽く手を振る。
「ところで一一。お前は歩幅が狭くなったのか？」
「あ？」
一が振り返っても、そこには誰もいなかった。

「ってな事がありまして」
店に着いた一は、制服に着替えながら、先ほどの会話の内容を店長に掻い摘んで話してみた。話を聞いた店長は、少しの間煙草の煙に巻かれながら口を開かないままだったが、
「ソレとは限らんだろう」
と、冷たく言った。
「えっと、何がですか？」
「行方不明者の話だ。本当にソレの仕業だと言えないだろう」
「いや、だってそうとしか……」
「ソレの存在を隠れ蓑にしている犯罪者も存在する今の世の中だぞ。

ソレがやったと言う証拠も無いんだろう？　大体、今まで家族に連絡の一つもよこさなかった奴が失踪したからと言って何なんだ。珍しい話じゃない」

店長は、まるで一を否定するかのように厳しい口振りで話す。

「そう言われりゃそう、ですね」

「情報部に踊らされるな、一。お前も勤務外なら自分でしっかり考えろ。自分を持て」

「……耳が痛いですね」

「まあ、気を付けて置くに越した事は無い。お前はソレより、川に気を付けて置いた方が良さそうな奴だしな」

「どういう意味ですか……」

一はロッカーの扉を閉め、勤怠の登録を終える。

「さっさと働け。立花が泣いて待ってるぞ」

「いつの間にか泣き虫キャラが定着している……」

その時バックルームの扉が開いた。

「はじめ君！　お客さんだよ一杯来たよどうしよう！　早く助けて！」

先にフロアに行った立花の、今にも泣き出しそうな声。

「……ほら、行ってやれ」

「はい……」

立花は小首を傾げた。

「えっと、も、もう一回言ってくれるかな？」

頷いた一は、

「袖の破れた巫女装束を着た女の人が来たら教えてくれないかな？」

一言一句、先ほどと同じ台詞を口にする。

「……そ、そんな人来るの？　い、いるの？」

「いたんだよ。こないだ見たしね」

「は、はじめ君って巫女さんが好きなの？」

俯きながら、立花は口を開いた。
一はその質問に二秒ほど迷ってから「嫌いじゃない」と、簡潔に口にする。
「そ、そう、なんだ……」
「フリーランスの人かも知れないんだってさ」
「え？　フ、フリーランス？」
「うん。『神社』って呼ばれてるらしい。巫女服着てるからかどうかは知らないけどね」
「わ、分かった。見つけたらはじめ君を呼びに行くよ」
立花は何度も頷いた。
「ありがと。じゃ俺検品行ってくるから」
「で、できればすぐに戻ってきてね……」
一は立花へ曖昧に返事をし、バックルームに入る。つい一時間ほど前に、納品業者によって運び込まれたダンボールの山、商品が一を待ち受けていた。
「……店長。やっといてくれても良いじゃないですか」
「無駄口叩くな。とっとと労働しろ」
ダンボールが壁になっていて、店長の姿が一からは見えない。溜め息を吐き、ダンボールに貼られたシールのバーコードを、リーダーで読み取っていく。
「今日、雨が降るらしいな」
淡々とした声が、ダンボール越しに聞こえてきた。
「今日って、あと三時間ぐらいしか無いですよ」
「だから、もうすぐ降るんだろう。傘は持ってきてるのか？」
「いや、無いです。店のやつ持ってって良いですか？」
「構わん。風邪でも引かれたら困るからな。私が」
一は苦笑する。ダンボールの山を半分ほど片付けた辺りで、
「……糸原さん、辞めるそうですね」
懸念していた事を切り出してみた。さり気なく言ったつもりだったが、声のトーンは自然と落ちている。

「そうだな。来週にはシフトが変わるぞ」
店長の様子は、一からでは見られない。
それでも、店長の声の調子が全く変わっていないことに、一は少しだけ寂しくなった。
「何だ？　お前は糸原に辞めて欲しくないのか？」
「……唯でさえ人数が少ないですからね。ツケは残ってる俺らに回ってくるんです」
くつくつと、店長が喉の奥で笑う。
「そうだな。寂しいな」
「勘違いしているようですけど、ここを辞めてもあの人は俺の家に居座り続けるんですよ？　迷惑極まりない話です」
「ん？　そうなのか？」
意外そうに店長が尋ねた。
一は作業をしながら答える。
「今日だってパチンコ打ちに行って、今頃こたつで寝てるんじゃないんですかね」
「そうか。まあ、気まぐれな奴だからな。考えも変わるか」
「何か、糸原さんが言ってたんですか？」
検品も、もう少しで終わりそうだった。

「ああ、ここを辞めた後、駒台を出て行くそうだ」

一の作業の手が、止まる。
「え、と……？」
口から出たのは自分でも驚くほどの間の抜けた声。
「その様子だと聞いていなかったようだな」
一は答えなかったが、店長は気にせず話す。
「糸原四乃。元々はタルタロスに収容されていた罪人だ。今でこそ指名手配は解かれているし、だからこそ私も雇っていたんだがな、トラブルの種である事に違いは無い」

一はゆっくりと、無言でバーコードを読み取っていく。
「お前の家に住まわせていたようだが、善良な一市民のお前が、犯罪者に対して情でも湧いたのか？」
「……俺だって人間です」
「そりゃそうだろうな。情の一つでも湧くか。ふーん。そう考えると、どうやらパチンコなんぞに行ったなんて糸原の嘘かも知れんな」
「出て行ったって事ですか？　でも、まだ、あの人のシフトは残ってるでしょう」
店長はダンボールを押しのけて、一の前に紙を差し出した。薄っぺらい、唯の紙。
「シフト表が何だって言うんですか？」
「すまんな一。事後承諾だ」
事態を飲み込めない一がシフト表に目を通す。糸原。彼女の名前にバツ印が大きく付けられていた。その横には一、と。
即ち、それは――。
「先日、糸原が来たときにな。そのときに話も聞いたし、面倒だからシフトの変更についての承諾も受けた」
「……っ！　だったら、どうして俺に教えてくれなかったんですか……」
「糸原が。自分が駒台を出るまで、この事をお前に言うなとも口止めされていた。この時間だ、とっくに電車にでも乗って、遠い街に行ってるだろ。時効だ時効」
「そんな……」
一の頭がグチャグチャになっていく。考えるべき事はたくさんあるのに、何も考えられない。
店長は一を横目で見ながら、椅子に深く腰掛け煙草に火を点けた。深く、深く煙を吸い込み、吐き出す。
「まあ、しかしだな。私や他のメンバーにはともかく。世話になったお前に礼も別れも告げないのは何のつもりか知らんがな」
一はその言葉にハッとした。気付いてしまった。今朝の、糸原と

の遣り取りを。
「……いや、お礼なら受け取ってます……」
「何だ？　そうなのか？」
「ええ……」
今は、もうそれ以上何も考えられなかった。

雨が、降り始めていた。

一は仕事が終わると、挨拶もそこそこに店を飛び出した。店から借りた傘を広げ、雨の中家路を急ぐ。アパートの前に着くと、急に足が止まった。
それまでは必死に走っていたのに。
自分の部屋の窓を見上げる。明かりは、付いていなかった。一は不安に潰されそうになりながら、階段に足を掛ける。ゆっくりと、一段一段踏みしめていく。上りきり、廊下を進む。扉の前に着き、ノブを回した。鍵が掛かっている。ドクン、と。一の心臓が跳ねた。

――どうして、あの人は鍵の事を言わなかったんだろう。

糸原は、一のシフトを把握していた。この時間、鍵が閉まっている事を知っていた筈だった。
一は、声を掛ける。
「糸原さん。開けて下さいよ」
鍵は自分が持っているのに。
返事は無かった。一はしばらくの間、扉の前に立ち尽くす。寒さに負けて、財布から鍵を取り出し、鍵穴に差し込んだ。息を呑み、扉を開ける。傘を扉の前に置き、靴を脱ぎ、部屋に入った。部屋の明かりを点ける。

――安い。

テーブルの上に置きっぱなしだった札束をぼんやりと眺めた。何も、部屋を出たときから何も変わっていない。変わり様が無い。

「……安すぎだろ……」

一はその場に座り込んだ、壁に背をつき、長く息を吐く。

雨は、強くアパートの屋根を叩いていた。

封豕長蛇

雨が、降り続いていた。

一は布団から身を起こす。眠れない。眠れない。何度も目が覚める。目を瞑っても、睡魔は訪れない。寝返りを何度も打ち、暗い部屋に目を凝らす。

幾ら耳を澄ませても、狭い部屋の中には一人分の呼吸しか聞こえなかった。

「煙草……」

呟いて、一は立ち上がる。テーブルにはクシャクシャになった、空っぽの煙草の箱。コートを羽織り、靴を履く。鍵を開け、扉を開けた。雨音が妙に耳に響く。一は立てかけておいた傘を手に取り、アパートの階段を下りた。階段を下り切り、傘を広げる。

煙草を買いに行く。口実だった。街を歩けば、当て所なくさ迷えば、もしかしたら。

――もしかしたら。

一は苦笑する。一種、その笑みは自嘲だった。冗談じみた、馬鹿げた考え。

それでも、一は歩き出す。雨粒は傘を打ち、街灯が僅かに彼を照らしていた。闇夜の中、視線を忙しなく動かす。もう、糸原はいないと言うのに。分かっているのに、理解しているつもりなのに、体は動く。

雨に打たれ雨に打たれ一は歩いた。歩いて歩いて雨に打たれて、一は自分でも気づかない間に、川の近くまで来ていた。今にも川の水全部が溢れそうな程の状態。荒れ狂う川をぼんやりと眺める。

雨は一を打ち川を打ち地面を打った。雨音を聞きながら、川に近付いていく。誰かが、雨の日には気をつけろと言っていた。お前は、ソレよりも川に気をつけろと言っていた。

一は呆けた頭で川に近付く。

「おい、あぶねぇぞ」

「……」

「おいってば」

一は肩を掴まれた。抵抗する事もせず、振り向かされる。

「オレの話聞いてんのかよ」

鋭い眼光で射抜かれた。だが、一は気圧される事も怯む事も無く、ゆっくりとその手を振り解く。

「……なんですか」

「お前自殺志願者か？」

女だった。霞掛かった一の頭が徐々に晴れていく。

「……違います」

一は自分の肩を掴んだ女を今一度見た。

「自殺する奴以外にゃ、こんな所近づく奴は居ないだろ」

女は珍しい格好をしている。白い小袖に緋袴。巫女装束のようだった。ただ、袖が破かれている。背が高く、短い銀髪。

女は傘も差さず、一を見下ろしていた。

「『神社』……」

一は呟く。

「オレの事知ってんのか？」

女は驚いたように一の顔を睨んだ。一は気にもせず、女をぼんやりと観察する。全身を濡らした女はどこか色っぽかったが、気にしない。

「フリーランスがこの街に何の用ですか？」

「お前同業者か？」

訝しげな視線を寄越したまま、巫女装束を着た女は問いかける。

「勤務外です」

「……喧嘩売ってる訳じゃないよな？」
「どう捉えてもらっても結構です」
一は感情を込めずに、冷めた目で言い放った。
「見るからに弱っちそうだなお前……」
「さあ、人を見かけだけで判断するのは良くないと思いますけどね」
「ははっ、威勢は良いじゃねえかよ。けどよ、別にオレはお前なんかに構ってる暇はねえんだ。中々楽しい奴だからよ、見逃してやるぜ。オラ、オレの気が変わらないうちにとっとと逃げな」
女は一を顎でしゃくる。親指を立て、適当な道を指していた。行け、という事なのだろう。一は何も考えず、女の指示に従う。
「今度見かけたら、こうは行かねえぞ」
「そりゃどうも、山田栞（やまだしおり）さん」
無意識のまま、一はそう言っていた。手を上げて歩く。
「覚悟は出来てるらしいな」
その手を、女に掴まれた。
一は目だけを女に向ける。
「見逃してくれるんじゃなかったんですか？」
「……お前さ、人の嫌がる事はするなって親に言われなかったか？」
「さあ、言われたかも知れませんね」
女は無言で一の腹を殴った。重く、鋭く、早い。一は何が起きたのかも分からず、傘を手放して体を「く」の字に折り曲げる。女は一の髪を鷲掴み、無理矢理自分へ向かせた。
「男の子は女の子苛めちゃ駄目だろ。謝れ、訂正しろ」
「……何を……？」
一は吐き気を堪えながら、何とか聞き返す。
「『神社』はな、名前を呼ばれんのが大っ嫌いなんだよ。知らなかったのか？」
「……知りませんよ、あんたの事なんて」
冗談抜きで。
女は一の顔に自分の顔を近付ける。一は流石にたじろいで、身を

捩った。女は一の体を抱き寄せて、一の瞳を見つめる。
「マジなのか、それ？」
「マジです……」
一は必死で視線を逸らし、女から距離を取ろうと試みた。
「そりゃ悪かった」
女は一から手を離す。
「人の腹殴っといてそりゃ無いでしょうよ」
「謝ったじゃねえか」
本当に悪びれる様子も無く、女は尊大に腕を組んだ。
「じゃあアレか。金でも渡せって言うのか？　それともアレか、オレの体を寄越せってか？」
「……いえ。俺が悪かったです。引き分け。ドロー。このままお互い別れましょう。今日の事は水に流して」
「つまんねえ奴だな」
結構です。そう言って一は女に背を向けて再び歩き出す。振り返らず、歩く。
「へっくしっ！」
豪快なくしゃみが後ろから聞こえてきた。一は少しだけ迷って立ち止まる。頭を掻きながら振り向いて、歩き出した。
「どうした？　やっぱりオレの体が惜しくなったか？」
へへっと女が笑う。一は無視して傘を差し出す。
「今更ですけど、使ってください」
女は一と傘を見比べた。
「……お前が濡れるだろ。オレは良いよ、もうずぶ濡れだから気にすんな」
「俺が気になるんです。良いから使ってくださいよ」
「駄目だ。お前が使え。唯でさえ弱そうなツラしてるんだから、風邪でも引かれちゃ寝覚めが悪くなら……へくしっ！」
一は無言で傘を差し出す。
「……なあ、お前鼻紙持ってないか？」

「家になら……」
「分かった。じゃあ傘は要らねえ。紙をくれ。お前の家、こっから近いのか？」
女は勝手に歩き出し始めた。
「俺の家！？　来るんですか？」
「傘貰う訳にゃいかねえだろ？」
少しの間、一は立ち尽くす。
――どうせ、家には誰も居ないんだ。
「良いですよ。こっちです」
「お、そっちか。ところでさ、お前んち酒ねえか？」
女――山田栞――は豪快に笑った。

「一人暮らしか？」
「え……？」
一の部屋に入るなり、山田はそう問いかけた。
「……そう見えますか？」
「見えねえ。歯ブラシとか、コップとかさ、どう見てもペアじゃねえか」
山田は部屋を見回しながら事も無げに言う。
「女の人ってそういうの敏感なんですね」
一は感慨深げに言って、山田にタオルを手渡した。山田は受け取ったタオルで髪の毛を拭き始める。
「部屋に上げても良いのか？　彼女がいるのによ。オレだって一応女なんだぜ」
「いや、良いんです」
「ふーん。振られたのか？　案外、自殺志願ってのも百パー嘘とは言えなかったんじゃねえか？」
一は言葉に詰まった。
その様子を見て、山田はばつが悪そうにタオルへ顔を埋める。

「あー、悪ぃ。冗談のつもりだったんだけどよ」
「そんなんじゃ無いですから」
一は軽く笑った。誤魔化すような、そんな笑み。
「そうか？　それなら良いんだけどよ」
「ああ、着替えは置いてあるジャージ使ってください」
「……良いのか？」
一は頷く。
「そんじゃ有り難く使わせて貰うぜ」
山田は笑ってタオルをテーブルの上に置き、しかしジャージに手を伸ばす事を躊躇っているような、そんな素振りを見せる。
「？　どうしました？」
「いや、あのよ。言い辛いんだけどさ。お前、オレの着替え見たいのか？」
「……着替え終わったら呼んで下さい」
頭を掻きながら一はアパートの廊下に出た。扉をゆっくりと閉め、深く息を吐く。
「まずった……」
――あの人はそんなの気にしなかったから。
扉に背を預け、一は廊下に腰を下ろした。

変わった奴。
山田の一に対する第一印象はそれだった。初対面の相手に、それもフリーランスである自分に喧嘩腰で対応する人間なんてそうはいない。おまけに自分を殴った相手を部屋に招き入れる。とんでもない奴だと、山田は内心で笑った。
「おい、良いぜ」
扉越しに声を掛けると、一は少し躊躇しながら部屋に入ってくる。
「サイズ、大丈夫ですか？」
「おう。ちょっと胸が苦しいけどな」

山田の言葉に一は苦笑した。
「服、洗っておきましょうか？」
「……お前って変わってるよな」
「そうですか？」
意外そうに一は答える。彼のその態度に、やはり変わっていると山田は改めて思った。
「この際だ。頼むぜ」
「分かりました。あーと、その……」
言いよどむ一を山田は睨む。
「男だろ、はっきり言え」
「あー、じゃあ、あなたの事、何て呼べば良いですか？」
思っても居なかった質問に、山田の顔がきょとんと固まる。
「は、ははっ。やっぱお前って面白いな。オレの名前か？　そうだな……」
「聞いて良い事かどうかは分かりませんけど、どうして名前で呼ばれるのが嫌なんですか？」
「聞いてんじゃねえかよ」
山田は笑った。
「アレだ、『山田』なんて普通の名前、オレは嫌いなんだよ。面白くもなんともねえ」
「月並みですが、全国の山田さんに失礼な発言ですよ」
「まさかお前も山田じゃないだろうな？」
「違います。俺の名前は数字の一が二つで、一一（にのまえ はじめ）です」
「へえ、珍しい名前だな」
心底羨ましかった。
「オレのと交換しようぜ」
「冗談でしょ」
「ちょっと本気だった。所でよ、何で一（はじめ）はオレの名前知ってたんだ？」
一は少しだけ表情を変える。

「……『神社』の話は聞いてましたから」
「へへっ、オレも有名になったもんだな」
「で、何て呼べばいいですか？」
山田は思案する。
「そうだな、特別に栞って呼んで良いぜ。下の名前はそんなに嫌いじゃねえんだ」
「じゃあ栞さん。聞きたい事が一つあるんですが、聞いても良いですか？」
一はこたつの電源を入れながら山田に尋ねた。
「オレが答えられることならな」
「それじゃあ、あの、どうして駒台に来たんですか？」
「オレがフリーランスだからだ。この街にゃ、どうもソレが多く出るらしいって聞いたからな」
「……本当にそれだけですか？」
しつけえ奴だと、山田は舌打ちする。
「確かお前勤務外だったな。あんだよ、『神社』の情報収集でも頼まれてんのか？」
「単なる好奇心です。あ、すいません話したくない事があるなら別に構いません」
「ふーん……」
という事は、山田がこれ以上何も話さなければ、一に話したくないような事があると、そう取られてしまう。
「腕っ節はねえのに、弁は立つんだな」
「えっと、俺が、ですか？」
そうだよ、と山田はぶっきら棒に言った。山田は一が鈍い奴だと思うのと同時、羨ましくも思う。
「ヒントだけやるよ。一、お前勤務外だろ？　飯の種取られちまったらオレも生活が成り立たなくなっちまうからな」
「でも、や――栞さんって本業は杜氏じゃないんですか？」
「なんだ、知ってんのか。まあ、酒造りは訳あって今休業中だ。フ

リーランスがオレの本業になってるんだよ」
「へえ……」
一はまじまじと山田の手を見つめる。
「な、何見てんだよ」
「手、綺麗だなって。そう言えば、杜氏の人の手は綺麗って聞いた事ありますね。お酒って肌に良いんですか？　化粧品にも使われてるって聞いた事があるんですけど」
「しっ、知るか！」
山田は咄嗟に手を隠して、一を怒鳴りつけた。
「馬鹿！　オレの話を黙って聞いてろ！」
「ご、ごめんなさい」
息を整え、山田は少し声を潜めるように話を続ける。
「……一、八俣遠呂智（やまたのおろち）って知ってるか？」
「八岐大蛇ですか？　えっと、でっかい蛇の怪物です、よね」
一はこめかみを指で押さえながら、たどたどしく記憶を辿る。
「おう。流石に知ってるか。じゃあな一、その八俣遠呂智がこの街、駒台に出るって言ったら、お前は信じるか？」
「じゃあ、栞さんがここに来たのは……」
「違う！　仮定の話だ。出るって言ったらって、そう言ったろ！　出るとは言ってねえ！」
「……ああ、そうでしたか。にしても、八岐大蛇。んー、俄かには信じられない話ですね」
一は考え込む。山田はゴロリと横になった。
「とりあえず、世話になる」
「あ、はい。それで、えっと、ヒントってのは？」
「それだけだ。オレは疲れたから寝る。……寝込み襲おうとしたら、幾らお前でもただじゃおかねえぞ」
「誰も襲いませんよ。それじゃ俺も寝ます。電気消しますよ」
「……おう」
やがて一の宣言どおり、部屋の明かりが落とされる。

「……やっぱ変わってやがる……」
「何か言いましたか？」
「言ってねえよ！　とっとと寝ろ！」

――俺は寂しかったのかもしれない。

山田が目を覚ますと、そこは見慣れないところだった。見慣れない天井、見慣れない部屋。身を起こし、部屋中を見回す。
「……何処だ、ここ」
ゆっくりと立ち上がり体を伸ばすと、部屋の中央、テーブルの上に自分の持ってきていた酒瓶が置かれているのが目に入った。
山田が酒瓶を何気なく手に取ると、酒瓶を重しにしていたのか、メモ用紙がヒラヒラと舞い降りてくる。訝しげにそのメモ用紙を拾い上げ、寝ぼけ眼で目を通した。そこには『出かけてきます。昼ごろには戻るので留守番お願いします。一一』と、簡潔に記されている。
「ああ……」
そこで山田は、ようやく昨晩の出来事を思い出した。ふと、自分の服装を確認する。ジャージだった。自分が今まで着ていた巫女装束を探しても、何処にも無い。冷蔵庫の中から缶ビールを発見したところで、山田は一に洗濯を頼んでいた事を思い出す。
「ちっ、こんな格好じゃ外に出れねえじゃねえか……」
缶ビールの蓋を開け、一息で半分ほどを飲み干し、山田は横になった。
――留守番、ね。
別にそんな約束にもならない約束を守る必要なんて山田には無かったのだが。

――オレは寂しかったのかもしれない。

山田を部屋に置いてきた事に若干の不安を感じていた一だったが、図書館へと向かうバスの中でまどろんでいる内にそんな事はどうでも良くなっていた。

陽光が窓を貫く。一の顔を差し、睡魔を差し向ける。

「ふあ……」

大きなあくびを一つしてから、一は座席に座りなおした。バスの振動が、疲れた体に心地いい。瞼を閉じて揺れに身を任せていると、最寄り駅に到着する事を告げるアナウンスが聞こえてきた。

やがて、ドアの開く音。一は急いでバスから飛び降りた。久々の太陽の光を全身に受けながら、図書館までの道をのんびりと歩く。気持ち良かったが、それも束の間のひと時。陽光は曇り空の切れ間から、僅かに顔を覗かせているだけだった。

一は右手に持った傘を握りなおし、空を見上げる。また今日も、雨が降るのだろう。

彼らは寂しかったのかもしれない。

つくも図書館。一はその施設の扉を潜り、館内の空気を吸い込んだ。本の群れに囲まれた一は何気なく周囲に目を遣る。お目当ての者は受付でぼんやりと立っていた。

「仕事しろよ」

受付に近付き、一は気さくに声を掛ける。

声を掛けられた人物は、一の存在など気にも留めていないという風に、ちらりと一を一瞥しただけで、また視線を宙に向けた。セー

ラー服の上からエプロンを着た、眼帯の少女。一はその人物、黄衣（きごろも）ナコトに「おい」ともう一度呼びかける。
「……ナンパならお断りです。死んで下さい」
「お前さあ、命の恩人にそんな口利いて良いわけ？」
溜め息を吐き、ナコトはやっと一に向き直った。
「恩着せがましい人は嫌いです」
「そりゃ悪かった。だけどこれだけは言わせてくれ、お前をナンパする気なんざねえよ」
「どうでしょうかね」
ナコトは侮蔑の感情を瞳に宿らせて一を睨む。
「最近、と言いますか、あたしがこの図書館で働かせてもらってから、頻繁に、或いは定期的に男性から声を掛けられるんです」
一はそこで、ナコトを何となく見た。何となく。
「まあ、口さえ利かなきゃそこそこに見えるからなお前。文学少女っつーの？　何か儚げって言うか」
「フォローのつもりですか？　あたしは非常に不愉快です。下劣な輩の下劣な視線を受けているあたしの身にもなってみて下さい。そんな事、絶対に言えませんから」
「案外良い気分なんじゃねえの？」
ナコトは無言で一を見た。一はその視線に耐え切れず顔を逸らす。
「ごめん」
「分かってもらえれば良いです。許しましょう。あたしは空よりも高く海よりも広くあなたよりも確実に寛大な心を持っていますから」
「……まあ、上手くやってるようで何よりだ。九十九先生や先輩の司書さんとは仲良くやってるか？」
「あなたはあたしの保護者ですか？　違うでしょう。ならそんな口を利かないで下さい。ナンパ目的の男性客よりも目障りです。癇に障ります。有体に言えばむかつきます」
一は押し黙った。
「九十九館長には非常によくして貰っています。先輩も、あたしと

本の趣味が似てて話していて楽しいです。フリーランスやってた時よりも、少しだけ楽しいです」

ナコトはそう言って、微笑む。一はゆっくりと頷いた。

「そっか。それは良かった。本当に良かったよ。でもな、最初から素直にそう言ってくれれば俺の心は傷つかなくて済んだのに」

「ニヤニヤ。年下に翻弄される気分は如何ですか？」

「非常に不愉快です。もう帰りたいです」

「お客様、お帰りはあちらになります」

「くそっ！　板に着いててなんかムカつく！」

完全に手玉に取られていた。

「それより、何か用事があったんじゃないんですか？　それともあたしに会いに来ただけなんですか？」

「分かってると思うけど、お前じゃなくて図書館に用事があるんだよ」

「分かってます。自分でも言ってて吐きそうになりました」

「……お前に仕事を頼みたいんだけど」

一は会話を打ち切る。これ以上は身が、心が持たなかった。

「仕事？」

ナコトは不思議そうに聞き返す。

「うん。ちょっと気になる事があってさ、調べ物に来たんだけど……」

一はグルリと館内を見回した。

「本が多すぎて、俺だけじゃ資料を集めるだけで日が暮れちまう」

「成る程。そこであたしの力を借りたいと。そう仰るわけですね」

「うん。手伝ってよ」

「気安いですね」

ジロリとナコトは一をねめつける。

「幸い今は館内に人も少ない事ですし、日本人の伝統芸能、土下座の一つでもして貰いましょうか」

「……ついでに足でも舐めりゃ満足か？」

「俗物！　あたし、あたしっ！　あなたの事を信じていたのに……」
ナコトは顔を手で覆い隠し、泣き崩れる。
一は肩を落とし、頭を抱えた。
「なあ、手伝ってよ……」
「そうですね、苛めるのも飽きた事ですし。哀れな迷える子羊に魂の救済をして上げましょう」
「お前漫画の読みすぎじゃねえ？」
ナコトはカウンターを出て、一の傍に立つ。
「何についての資料をお求めで？」
「八岐大蛇だ」
「という事は、そうですね。日本書紀や古事記、竜や蛇に纏わる伝承……。その辺りを何十冊か持って来れば足りますか？」
「……充分だよ。俺も手伝おうか？」
「お客様にそんな事はさせられません。あなたは、そう、ですね。二階の隅の席を取っておいて下さい。十分ぐらいで持ってきますから」
「って言うかさ、図書館って非営利じゃないの？　お客様とかお前が言いたいだけじゃねえ？」
「黙って席に着いといて下さいお客様。館内では静かに、その汚い口をしっかり閉じておいて下さいお客様」
「語尾にお客様付ければ良いと思うな！　逆に不愉快だ！」
一は憤慨した。酷く憤った。それでも、ナコトの指示通り、二階の隅の席にきちんと座って待つ。情けない事に、ナコトには何故か逆らえなかった。

ぼんやりと席に座って待っていると、十分もしない間に、ナコトは本を抱えて一の元へとやって来た。
「すげえ。ちょっと見直したぜお前の事」
「ありがとうございます。重いからとっとと本を受け取って下さい」

「……あ、うん」
　一はナコトの持っていた本の半分ばかりを受け取り、机の上に置いていく。ナコトもそれに倣って本を置いていく。本の総数は二十にも上っていた。
「ありがたいけど、こりゃしんどそうだ。昼頃には戻れないな……」
「約束でもしてるんですか？　あなたのくせに」
「一々毒を吐くな。俺に恨みでもあんのか」
「……いえ、無いです」
　ナコトは俯いて、深刻そうな顔つきになる。
「え？　な、何？」
「実はあたしって毒舌家なんですよ」
「『実は』は付けなくて良いから」
「これは実話なんですが、あたしって毒舌家なんですよ」
「それならオーケー」
　一は続きを促した。
「あたし、イライラを溜め込んでしまうタイプなんです。ほら、あたしってお淑やかだから、人には強く言えないし、物には当たれないし……」
「……それで？」
「でも、定期的にストレスを発散させないと、凄く苦しいんです。死んでしまいそうになるんです。最近は……鬱陶しい人も良く来るんです。いえ、鬱陶しい人しか来ないと言うべきか……。でも、一応、一応、一応はお客さんだし、あたしは司書だから、何も言えないんです」
「嫌な予感がするけど、お前の言いたい事は分かった」
「そうですか、分かってもらえましたか。それでは、死んで下さい」
　ナコトは嬉しそうに微笑む。一はグッと堪えた。
「……つまり。アレか、毒を吐かなきゃしんどいのに、周りにそんな事を言える人間が居ないと。だから、あー、だから……」
「あなたはあたしにとって無くてはならない特別な存在です」

「嬉しくねえ……。本当に嬉しくねえ……」
「さあ、八岐大蛇について調べましょう。あなたはこっちの本を読んでください」
ナコトは一に本を手渡す。
「……いや、別にそこまでは手伝ってくれなくて良いんだぞ」
「暇ですから」
それだけ言うと、ナコトは本に視線を落とした。仕方なく、一は手渡された本の表紙を確認する。『サルでも分かる！　足し算引き算！　目指せ霊長類ナンバーワン！』
「てめえ！」
「館内ではお静かにっ、館長に進言してあなたを出入り禁止にして貰いますよ」
「ぐっ……！」
本当に有り得そうだったので一は黙った。敗北感で胸が一杯だった。

そこは駒台の郊外だった。建設途中で放り出されたビルが連なる、廃墟じみた通りだった。駒台住民は、殆どそこには近付かない。夜な夜な不良じみた若者が屯するし、何よりそこら一帯は明かりも無く、不気味だった。
「久しぶりね」
だから、彼らには都合が良かった。
「……一年ぶりか」
「二年よ」
廃墟と化したビルの一つ。そこに彼らは居た。彼ら。男と女の二人組。昼でも暗い、朽ちたビルの中。彼らの姿はまるでシルエットみたいになっていた。
「どう？　元気でやってたの？」
女の問いに、男は小さく笑う。

「お前が言うか。ふっ、あそこはどうだった？」
「地獄よ。一切の誇張表現無しにね」
「だが、出られたようだな。流石は俺の元相棒だ」
男は座ったまま銃の手入れをしていた。銃身が長く、スコープのついている銃だった。
「まだ、それ使ってんのね」
「ああ。何年経とうが俺は俺だ」
「長雨（ながあめ）。あんたは変わらないのね」
長雨と呼ばれた男は作業の手を止める。
「お前は変わったようだ。少しだけ丸くなったか？」
「ふん、私のナイスバディはあの頃のままよ」
「……その様だな」
女はゆっくりと歩を進め、男――長雨――の対角線上の壁に背を預けた。
「ここには何の用？」
「元フリーランス（れ）の言う事とは思えんな。決まっている。フリー（お）ランスが動くのはいつだって自分の為だ」
「あんたの網に、大物でも引っ掛かったのかしら？」
「まだだ。まだ網には何も掛からん」
「そ」
「だが、もうすぐ掛かるさ」
「なら、私も一口乗らせてもらおうかしら？」
そこで長雨は初めて表情を見せる。驚きの表情。
「ふん、どういう風の吹き回しだろうな」
長雨はサングラスの位置を直す。
「昨日には昨日の、今日には今日の、明日には明日の風が吹くってね」
女は一歩足を踏み出した。
廃墟ビルの一室。曇っていた空の所為で、今まで光が差し込んでいなかったその一室に、一筋の陽光が差し込む。部屋は少しずつ照

らされていった。長雨と呼ばれた男の姿がハッキリしていく。
長雨は、サングラスを掛けた、ラウンド髭を生やしている強面の男だった。精悍な、幾つもの修羅場を潜って来たような顔つき。年齢は二十代後半から三十代前半だろうか。髪型は短いパンチパーマ。背は高く、筋肉質のたくましい体つき。黒いスーツが男には良く似合っていた。
「あら、あんた全然変わってないのね」
女の姿も、少しずつ明らかになっていく。長雨同様、黒いスーツに身を包んでいた女の背も高かった。長く美しい黒髪。整った顔立ち。瞳は酷く冷たい。自分以外の全てを見下しているかのような、女のプライドの高さを窺わせるような、そんな眼だった。
「お前もな。あの頃と変わっていない。安心したぞ」
「なら、これでフリーランス『天気屋』の復活って所かしらね」
「良いだろう。糸は錆び付いていないだろうな？」
「死神の名は伊達じゃないわ」
女は長雨の挑発を受け、内ポケットから自身の獲物を取り出す。穴の空いたグローブをはめ、女は長雨に対して手招きをした。
長雨は傍らに置いてあったハンドガンを無造作に掴み、女へと発砲する。発射音がけたたましく響いたが、廃墟と化したビルの周囲に人影は存在しない。
問題なんて全く無かった。
「どう？」
問題なんて全く無かった。
「合格だ。良いだろう。『天気屋』の復活だな」
長雨は大した感動も見せずに、それだけ言うと銃の手入れに戻る。
女は自身の獲物、糸を室内に張り巡らせて、自分を狙った弾丸を木っ端微塵に切り刻んでいた。退屈そうに糸を巻き戻し、弾丸だった金属片を足で踏み付ける。
「獲物は？」
「ヤマタノオロチだ。久々のビッグネームだな」

「良いわね――」
女は笑った。
「――稼げそうじゃない」
フリーランス『天気屋』。
糸を操り、意図を操る稀代の詐欺師。
黒髪の死神。
天上天下唯我独尊の裏切り屋。
「ところで相棒。今まで、どうやって暮らしていたんだ？」
「ああ、ちょっと勤務外とかやってたのよ」
元、オンリーワン北駒台店勤務外店員。
元、一一の厄介な同居人。
「中々楽しかったわ」
糸原四乃。
糸原はそう言って、もう一度笑った。

蛇の道は蛇

オンリーワン北駒台店。

理由も無く信念も無く、もはや疑う事すらもしないで日夜ソレと戦い戦わされ、死なし死なされ、殺し殺される勤務外店員を擁する唯一のコンビニエンスストア。戦う術も力も持ち得ない一般市民の盾となり剣となり、人々の畏怖を一身に受ける勤務外店員。無力な人々は力を持つ者を煙たがる。疎外する迫害する嫌悪する。人々の恐怖と怨嗟と妬みと嫉みと恨みと憎しみを浴びる勤務外店員。

「……三森、客来てるぞ」

「あっそう」

勤務外店員を纏めるのは長である。即ち店長。責任者。店での最高の権力を有する者。

「早く行け。ガキがレジの前で泣きそうな顔してるだろうが」

椅子にふんぞり返り、モニターを指差して偉そうな物言いをしているのは、北駒台店の店長。二ノ美(にのみや)屋である。彼女はこうして椅子に座って煙草を吹かしては指示を飛ばす。それが彼女の仕事であった。

「私が行ったらもっと泣かせちまうんじゃねェの？」

ぎゃはは、と品のない笑い。勤務外店員、三森(みつもり)の発したものであった。彼女は常に真赤なジャージを着ており、髪の毛は短い金髪。目付きは悪く口も悪い。

「良いから行け。給料下げるぞ」

「どーせならクビにしてくれよ。最近ソレが多くてさ、しンどいんだよな。たまには休みが欲しいぜ」

「早く行け」

「店長が行けば？」

軽口を叩き合った彼女らはバックルームで睨み合った。やがて三森が折れる。いつもこうだった。

「……レジ打ちゃ良いンだろ」
「あー、言わんこっちゃない。泣き出しやがった。ほら三森、とっとと行って謝って来い」
「了解……」
突如地球上に、この世界に現れた人類に仇なす存在。通称は『ソレ』。勤務外店員の業務内容は、そのソレと戦う事が第一であったが、通常のコンビニのアルバイトのこなす様な仕事も、彼らの大事な業務の一つであった。
「煙草は消してから行けよ。煙がどうので親に出張られちゃ面倒だ」
「ちっ、面倒なのはこっちだ！」
三森は盛大に舌を鳴らし、煙草をバックルームの床に落とし、滅茶苦茶に踏みつける。
「こンなのは私の仕事じゃねェ！　あいつ向きだろうが！」
今日も、オンリーワン北駒台店は忙しい。ああ、忙しい忙しい。働かざるもの食うべからず。

「嫌な悪寒がするな」
「……と言う事は、良い悪寒と言う物も存在するんですね」
一と黄衣は、つくも図書館の二階の隅の席でヤマタノオロチについて調べていた。机の上には二十冊にも上る資料の山。全てヤマタノオロチに纏わる本である。
一は読んでいた本を閉じ、何故か肩を震わせた。
「今日バイト行きたくねえなあ……」
「アリとキリギリス、ご存知ですか？」
ナコトはそう問いかけ、眼鏡の位置を直す。一は鼻で笑った。その話なら知っている。
「どうせ俺がキリギリスって言いたいんだろ？」
「？　いえ、あなたは虫以下ですね、と。そう言いたかったんですけど……」

「ああ、そうなんだ。じゃあアリとキリギリス持ち出す意味が無いよね？」
「確かに。あたしとした事が。凡ミスです。ついうっかり」
ナコトは再び本のページに視線を落とした。
「お前手伝ってくれるって言ったよな？」
「ええ、言いましたよ」
「じゃあ何で違う本読んでんだよ。ヤマタノオロチについて調べてるって言ったじゃんか。約束破ってんじゃねえよ、おら、お客様に失礼だろ」
一はナコトを非難する。今までの借りを返すかのように。そりゃもう、水を得た魚の様に。
「聞き苦しいな……」
「えっ？」
「なんでもないです。……あたしはもう、殆どの資料に目を通しました。今別の本を読んでいるのは飽きたからです。その証拠に、ヤマタノオロチについての質問を受け付けましょう」
ナコトはジロリと一に冷たい視線を遣った。
「へーっ、あんな短い時間でか？　じゃあ答えてもらおうじゃねえか」
一はナコトの目にたじろぎながらも、食らいつく。
「……そうだな。じゃあ、ヤマタノオロチを倒したのは？」
「そんなの質問とも言えませんね。子供ですら知ってる答えです。スサノオ。スサノオノミコトでしょう。ミコトとナコト。ちょっと字面が似てますね」
ナコトは一を馬鹿にしたように小さく笑った。
「今のは、ほんの序の口だ。……良し、スサノオがヤマタノオロチを倒した時に持っていた剣の名前は？」
「十束剣（とつかのつるぎ）ですね。ちなみに十束剣は固有名称ではない筈です。日本神話でも様々な場面で登場していることや、束が長さの単位の一つであったことから、十束剣とは、そもそも長剣の一般名詞であった

と考えるのが妥当でしょう。ああ、それとあなたの次の質問が予想できてしまったので先に答えておきます。『では、ヤマタノオロチの尾から現れた太刀の名前は？』でしょう？　答えは天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）です。諸説ありますが、名前の由来は、ヤマタノオロチの頭上にいつも雲、叢雲が掛かっていたからと言うのが主流のようですね。ああ、そう言えば草薙剣（くさなぎのつるぎ）と言う別名も与えられていましたね。スサノオがアマテラスに剣を献上した後、天孫降臨（てんそんこうりん）の際にニニギに渡って、紆余曲折ありヤマトタケルの元に行き、そのヤマトタケルが東征中の駿河で燃え盛る火を草を薙いで退けた事から草薙剣と言われるようになったそうです。まあ、この由来にも諸説あるんですが、やはり今あたしが言った説が一番広く知られているものでしょう」

一は黙り込む。

ナコトは何も言わない。何も答えない。何もしてくれない。一の事を黙って見ているだけ。

やがて一は、

「正解だ」

固くなった声でそれだけ言った。

「ま、まあ今のも序の口だからな。ふ、ふふっ、惨劇への幕は開いたばかりだ」

「御託は結構です」

ぴしゃりと、ナコトが冷淡に切り捨てる。

「……分かってるよ。じゃあ、ヤマタノオロチってのは何の神様か知ってるか？」

「オロチは水を司る神だったような気がします。ヤマタノオロチ。八つの谷と八つの峰に跨る巨体だとしても結局は蛇です。そも、古来から世界各地で蛇は信仰の対象となっていたんです。知ってますよね？　蛇は脱皮をする生物です。脱皮と言うのは死と再生を連想させると聞きます。そして人間には持ち得ない長い体と毒、人間以上の生命力を以ってして、昔の人は蛇を神様の使いだと信じていたようです。蛇は野山に棲み、人間にとっては害であるネズミを餌と

していたので、大地母神の象徴だったんです。豊穣、多産、永遠の生命。あなたにも関係の深いギリシャ神話にしても、蛇は生命力の象徴ですしね」

「どうして俺とギリシャが関係あるんだよ？」

「あなたの頭には何が入っているんですか？　あなたの持っているアイギス。それをあなたに授けたアテナ。ほら、関係無くは無いでしょう」

「……そうかあ？」

そういうものですと、ナコトは頷いた。

「でもさ黄衣。蛇って昔から神様の使いだと言われてたんだよな？」

「ええ」

「基本的に神様って正しいモノだよな？」

「……んー。非常に難しい質問ですけど、まあ、あなたが信じるなら神様は正義なのでしょう」

「曖昧な答えありがとう。じゃあ、あえて言うけどさ。蛇って嫌われ者じゃないか？　何かニョロニョロしてるし、毒持ってるしさ。信仰の対象ってか気持ち悪いって印象じゃね？　俺も蛇は好きじゃないし。むしろ蛇を好きな奴って少ない気がする」

「信心深い人が減ったんじゃ無いんですか？　確かにあたしも蛇は好みではありませんが、財布の中に白蛇の抜け殻は入れてます。勿論岩国の白蛇です」

「ああ、そう言えばい――薬にも、なるらしいな蛇って」

「ええ。ですから、結局は信仰なんてそう言う物なのでしょうね。信じる人は信じれば良いし。信じない人は信じないで良いんです。なんにせよ昔にはモノが少なかった。縋る物が必要だったんでしょう。あたしは世界が滅ぶって聞かされても、蛇に縋るなんてごめんですけど」

一は腕を組む。

「ヤマタノオロチなんて唯の怪物だと思ってたけど、でっかい蛇の神様だった訳だな」

「あなたは随分と大雑把な解釈をするんですね。逆に羨ましいです。ああ、あたしからも一つ質問、良いですか？」
「……俺に答えられる範囲なら」
「では。オロチが水の神様なら、クシナダヒメは一体何の事を指し示していると思いますか？」
「えっと、クシナダヒメってヤマタノオロチの生贄にされちゃいそうになる女の子だよな？」
ナコトは神妙に頷いた。
「……クシナダヒメは、その、何だ。可哀想……。……そう、可哀想なヒロインだ！」
「成る程。あなたはアンドロメダ型神話を持ち出した訳ですね」
一には何のことかさっぱり分からない。てっきり「あなたの方が可哀想です」ぐらい言われると思っていた。
「ま、まあ、そんな所だ」
「あたしもアンドロメダ型神話は好きなんですよ。あなたは特に何が好きですか？」
「お前から言えよ」
そこでナコトは酷薄な笑みを浮かべる。
「あなたからどうぞ……」
言えるものなら。一はそう言われている気がした。
「すまん。適当言いました」
「浅はか過ぎますね。無知は無知なりに、素直に教えを乞えば良いんです」
その通り。
「ごめん、教えて下さい」
「素直ですね。気持ちが悪いですが……良いでしょう、教えましょう。アンドロメダ型神話と言うのは、英雄が怪物を倒して囚われのお姫様を救い出す、と言った流れのストーリーを持つ神話の定型のひとつです。ほら、スサノオがヤマタノオロチを倒してクシナダヒメを救う。アンドロメダでしょ？」

「成る程。そう言われれば漫画でもアニメでも良く聞く話だな」
「でしょう？」
「ところで何の話してたっけ？」
心底憎らしげに、ナコトは一を睨む。強く睨む。
「クシナダヒメは何を示しているのかと、あたしは聞いたんです」
そのままペッと唾でも吐きそうなぐらいにナコトは言い捨てた。
「ああそうだったそうだった。で、俺が可哀想なヒロインって答えたんだよな」
「あなたの方が可哀想ですけどね」
「……ごめん」
「謝るくらいなら頭を働かせて下さい。必死で。まあ、そうは言っても時間も無いんでしょう？　教えてあげます。クシナダヒメは稲田を表していると、そう言われているんです」
「ヤマタノオロチが水で、クシナダヒメが田んぼ。ふーん、どして？」
一はお気楽に口を開いた。ナコトは何か言いたげだったが、呆れた表情を浮かべて目を瞑るだけだった。
「……蛇と川は関係の深いモノなんです。蛇行って言葉知ってるでしょう？　ぐにゃぐにゃと這う蛇の動きが川の流れと同一視されていたんです。昔の人は分からない事や自然現象を何でも生きてるものの所為にしようとしてましたから。だ、か、ら。オロチは水を表していている事に、どうしてと聞き返すなんて恥知らずも良い所です。あなただって資料に少しは目を通していたでしょう？　考えて下さいよ。大学生にもなって……。情けない」
返す言葉も無かった。一は黙ってナコトの話を待つ。
ナコトはゆっくりと呼吸を繰り返し、椅子に深く座りなおした。
「オロチが毎年生贄を要求していたのは何を指し示すと思いますか？」
冷静を保ちつつ、ナコトは質問する。
「んー。オロチが水、川でクシナダヒメが田んぼ。で、毎年だろ…

…」

与えられたキーワードを元に一は推理を始めた。

「遅いです。どうして分からないんですか？　オロチが毎年娘をさらうのは、毎年起こる河川の氾濫の象徴なんです。当然の帰結でしょうに」

一の推理が終わった。

「そしてスサノオがオロチを退治した事は河川の氾濫を沈めた事、つまり治水にあたります」

「分かった分かった。お前は凄いよ、頭良いよ。俺が悪かった」

「本当にそう思っているなら、少しは敵について知ろうとして下さい」

「……敵？」

「八俣遠呂智（やまたのおろち）。カトブレパスの次は日本神話の怪物ですか。この街は本当にバリエーションに富んでますね。最悪です。折角フリーランスを辞めたって言うのに……」

ナコトは悲しそうに俯く。

「そんな事俺は一言も言ってねえぞ」

「……あなたは絶望的に嘘を吐くのが下手なんです。と言うより、隠そうともしないし」

「俺も出るとは信じちゃいねえよ。人から聞いたんだ」

「誰から？」

一は頭を掻き、窓を見た。今にも降り出しそうな黒い雲。雲。叢雲。否が応でも連想させる。

「『神社』だ」

その言葉を聞き、ナコトは呆れたと小さく呟いた。

「あ、あなたってつくづくツイて無いんですね。あたしと言い、『神社』と言い……」

「知ってたのか？」

「あたしだって、元『図書館』です。同業者の情報だってちゃんと持ってます。まあ、有名な人たちだけですけど」

「……なら黄衣、お前は信じるのか？　ヤマタノオロチなんて化け物がこの街に現れるなんてよ」
「あなたは？　信じるんですか？」
何を信じれば良いのだろう。何を信じる事が出来るのだろう。ヤマタノオロチ。自分自身。それとも山田栞。どれを信じれば良いのだろう。グチャグチャになった頭を掻き、一はナコトを見つめる。
「分かんないな」
「そうですか。ですが『神社』の情報ならばある程度は信用できると思いますよ。ヤマタノオロチと関わりの深い人ですからね」
へえ、と。一が感嘆の声を上げた。
「良く知ってるな」
「あなたが何も知らないんです。敵の事を知っておかなければ、アイギスの力を発揮するなんて出来ませんよ」
「アイギスの？」
「あなたならば知っている筈です。直接女神（アテナ）から授かったんでしょう？　あなたの頭の中に、全て詰め込まれている筈なんです」
力の使い方が、と。ナコトはそう付け足す。
「……どうだかな。俺もそんな事詳しくは他人に話したくないし」
「名前、ですよね」
一は目を見開いた。驚きを隠せないまま、ナコトの顔を窺う。
「アイギスを発動させる為の条件。あたしなりに推測しました。恐らくは他にも様々な制約が課せられている筈ですが、『止めたい相手の名前を知っている事』が、絶対条件、もしくは前提条件なのでは？」
「正解、とは俺の口から言わないぜ」
「分かってます。あたしが何時敵に回るか分からないですからね。……、しかしそれだけでは足りない筈です。名前を知っているだけでは、アイギスの効果は十二分に発揮出来ないのでは？」
「……それも言えない」
「でしょうね。ですがこれだけは言っておきます。あたしはあなた

を敵に回すつもりはありません。絶対に。あたしの全てを賭けても足りないぐらいです。そしてあたしはあなたに恩を感じています」

ナコトは平坦な口調で言葉を紡いだ。

「いきなりだな……」

「あたしはあなたに死んで欲しくないんです。詰まらないですからね、あなたが死んでしまえばあたしは誰に毒を吐けば良いのか分かりませんし。ですから、確率を上げて下さい」

「何の？」

「生き残る確率です。あたしはソレとの戦闘からリタイアしてしまいましたが、あなたはまだ続けるのでしょう？　勤務外を。ソレとの戦いを。人外を」

「……お前」

「もう、お昼になりますね。雨も降り出しそうです」

ナコトは空を見上げながら、徐に席を立つ。

「湿気は本の大敵なんですよ」

「なあ、黄衣？」

一も席を立ち上がった。ナコトは眼帯の位置を直し、溜め息を一つ。

「……あなたはペルセウスでも聖ゲオルギウスでもスサノオでもないんです。あなたでしかないんです」

「なあ、ゲオルギウスって誰だ？」

「煩いです。とにかく、あたしはまだあなたに借りを返していません。相手がヤマタノオロチであろうが、なんであろうが――」

「――知ってるよ」

一はナコトの頭に手を置くと、

「また来るから」

それだけ言って階段を下りていく。

「さっ、触らないで下さいっ」

ごめんごめんと、軽そうに一は手を振った。

約束の時間、昼頃を大幅にオーバーしてしまったが一は自分の家に戻ってきた。扉を開けると、室内から酒の匂いが漂ってくる。一歩室内に足を踏み入れれば、充満した酒気が一の鼻を強く刺した。思わず目を瞑り、一は山田の名を呼ぶ。

「栞さん……？」

部屋のどこにも山田の姿は無かった。不意に、一の脳裏にあの日が蘇る。帰って来ても誰もいない部屋。テーブルに置かれた札束。冷たい空気。あの日の光景のどれもが、やけに鮮明でいやに克明だった。

もう一度、一は山田を呼ぶ。枯れそうな声だった。

「――――……ん？」

眠そうな声。部屋の中央に位置するこたつが動く。

「……栞さん、居るんですか？」

やがてこたつから人間の顔が飛び出してきた。一は短く叫ぶ。こたつから出てきたそれは、不機嫌そうに顔を歪ませた。

「うるせえぞ一。折角気持ち良く寝てたっつーのによ……」

髪の毛を掻き毟り、山田はこたつの卓に頬杖を突く。

一は一先ず安心した。

「何もそんな所で寝なくたって……」

「オレは狭い所の方が落ち着くんだよ。それよっか、すげえ腹減った」

「栞さん、食べ物に好き嫌いはありますか？」

山田はブンブンと首を振る。

「ねえよ。好き嫌いしてたらこんなにでかくなれる訳ねえだろ」

はっはっはっと豪快に笑って、山田は一を見た。

「一もしっかり肉食わなきゃでかくなんねえぜ？」

「……あはは、じゃ、ご飯作りますね」

「お？」

台所に立った一を、山田は信じられない表情で眺める。じっくり

一分ほど一の全身を見物した後、山田はやおら立ち上がり、一の背後に付くと戸棚から包丁を取り出した。
「退いてな」
煌く刃。
「うわっ、危ないですよ！」
「心配ねえって。大体だな、台所に立つのは女の仕事だ。男はどっしり構えてりゃ良いのさ。おら、飯ならオレが作ってやっから、お前は寝てろ」
包丁を持ったまま、山田は一を手で追い払う仕草を見せる。逆らうのも怖かったので、一は仕方なくこたつのそばに座した。一はテレビを点けて、気になっていた事を何気なく質問してみる。
「料理、作れるんですか？」
後姿の山田がピクリと反応。
「……オレが料理できる女に見えねえってか？」
怒気を孕んだ低い声。一の背筋が震え上がる。
「い、いえ、そういう意味じゃなくって……、……やべえ。あ！ほら、俺んち材料少ないから、作れる物なんかあるのかなって。それだけの意味ですよ、嫌だなあ」
「ふーん。ま、確かにそりゃそうだ。一、この辺に店はねえのか？この際だ、スーパーでも何でも良いぜ」
どの際はスーパーじゃ駄目なんだろうと思いつつ、一は近くにスーパーとコンビニがある事を山田に告げた。
「それじゃ買い物に行くとするか」
山田は包丁をまな板に置くと、首の骨を鳴らし肩を回す。
「……あ」
「どうしました？」
固まったままの山田を見て、一が声を掛けた。山田の顔面は蒼白になり、自身の体を両腕で強く抱きかかえる。何かに怯えているような、そんな鬼気迫る表情だった。山田の様子に、一体どうした事かと一が駆け寄る。

「や、やべえ……」
「だから何がですか？」
「そ、外に出られねえんだ」
「……どういう意味ですか……？」
この表情。何かある。もしかしたら既に何か起こったのかもしれない。一は油断無く耳を澄ませ、外の様子を窺った。
「ふ、服が」
「ふく？」
山田は自分の今着ている服――一の貸し出したジャージ――を指差しながら、
「こんな服じゃ外に出られねえ……」
泣きそうに、実際半泣きになりながら一に訴える。
それを言うなら、あの巫女装束の方が恥ずかしくないのか。と言う疑問を飲み込み、一はジャージでも、むしろジャージは大丈夫だと言う事を山田に説明した。

「……やっぱ、しっくり来ねえなあ」
スーパーの帰り道。周囲をキョロキョロと警戒するように視線を配りながら、ビニール袋を提げた山田がそう、呟いた。
「巫女装束の方が目立ったでしょうに」
「いや？　そうでもなかったぜ、誰とも目が合わなかったしな」
「……なるほど」
触らぬモノにたたりなし。一般人は力を持たない分恐怖に敏感で、それでいて非常に賢明だった。
「それよかさ、昼だけでこんな材料買い込んでて大丈夫なのかよ？」
「何がですか？」
山田は少しだけ顔を赤くして。
「いや、オレが言うのも何なんだけどよ、一人暮らしって、ほら、金掛かるんだろ？　節約しなくて大丈夫なのか？」

「……えっと、晩御飯の分も買っときました。実は俺、今日は夕方からアルバイトなんですよ。晩御飯、食べるの遅くなっちゃうんで、栞さんは先に食べちゃってて下さい」
「駄目だ。待っとくから、仕事終わったら早く帰って来い」
「え？　十時回りますよ？」
「待っとくって言ってんだろ」
有無を言わせぬ口調だった。山田は顔を真赤にして俯いている。
「分かりました。あー、その、怒ってます？」
「う？　お、怒ってねえよっ」
食材の詰まったビニール袋を振り回しながら、山田は必死で否定した。
「ご、ごめんなさいっ。分かりました！　分かったから落ち着いてっ」
「お、おう……」
「……あの、そう言えばヤマタノオロチって水の神様だったんですね」
「ん？」
一の言葉に、山田は目を丸くする。
「俺、でっかい怪物だとばっかり思ってましたよ」
「あ、お前もしかして出掛けてたのって……」
「ヤマタノオロチの事が気になったんで図書館で調べてきました」
事も無げに一は答えた。
「けっ、調べるのは良いけどよ、オレの邪魔はしないでくれよ」
「分かってますよ。とてもじゃ無いですけど、あんなデカイの相手にしようだなんて思いません。思えません」
「へっ、でもビビッててもさ、一は勤務外だろ？　今日、もしソレが出たらどうすんだ？」
「言わないで下さいよ」
はっはっはっと、山田は笑って一の肩に手を置いた。
「心配すんな！　ソレが出てもオレが全部終わらせておいてやるか

らよ」
「頼もしいですね」
「……あー、けどよ。早い所オレの服を持ってきてくれねえかな？」
先日洗濯に出した、山田の巫女装束。
「大丈夫です。今日バイトが終わったらクリーニング屋まで取りに行ってきます」
死ぬほど恥ずかしいけど。とは言わないのが一の矜持。
「そっか、頼むぜ。アレが無きゃ締まらねえからな」
「栞さんこそ、美味しいの作ってくださいよ」
そう言って一は空を見上げる。曇り空だった。降りそうで、中々降らない。だが、いつかは必ず降るのだと、雲はそう言っていた。
一には、そう聞こえた。

その日の晩、『天気屋』と『神社』が遭遇した。

藪を突いて蛇を出す

「あ、雨……」
「え？」
この日、夕方からシフトに入っていた一と立花の二人は揃って窓を見た。
立花は悲しそうな顔で降り始めた雨を眺めている。
「ど、どうしよう。傘忘れちゃった……」
困り果てた様子で店内をウロウロと行ったり来たり繰り返し、立花は涙目で一を見た。そんな目を向けられても困ると言わんばかりに、一は視線を逸らす。
「店に置いてある傘を使えば良いよ」
「え？　い、良いの？」
「うん。俺も昨日使ったし」
立花はホッと安堵の息を吐いた。
「はじめ君は優しいね」
「……まあ、良いや」
雨が降り始めれば、ただでさえ少ない客足は自然と途絶え、今日も大した事件は無く、深夜勤務の三森に引き継ぎ、一は急ぎ店を後にした。
「……大丈夫だよな……」
一は恐る恐る、店から持ち出した傘を広げる。どこからどう見ても普通のビニール傘。どこから、どう見ても。だが、一は今ちょっとした恐怖心に駆られていた。何故ならば、一が持ち出した傘は、あのアイギスだったのだから。杞憂。傘を広げてみると、普通に雨から身を守ってくれるし、一がそう願わない限りはアイギスも力を発揮しない。
「使えるじゃん……」
一の向かう先は家ではない。先日、山田の巫女装束をクリーニン

グに出した店である。非常に、気は重かったし、足取りも決して軽い物ではなかったが、一は約束を守るべくその店に急いだ。

駒台の街。

時刻は午後十時を回り、雨も降り出した。外出している人は殆ど居らず、居たとしても家路を急ぐ者が殆どであった。傘を差し、足早に急ぐ人々。

「殺さなくて良かったのか？」

「はっ、悪人みたいな台詞吐くのね」

その中で、彼らは異質だった。明らかに異質で異常で、一線を画した存在だった。彼らを見てしまった者は目を逸らし、足を止めるか足を速める。雰囲気で分かる。

――何かがおかしい。

「俺が悪人？　冗談がキツイな」

「ま、あのままほっといても問題無いでしょ。大した情報は得られなかったけど、競争相手が一人脱落した訳だしね」

雨の降る中、傘も差さず二人組の男女は歩く。男女ともに背が高く、黒いスーツを着こなしていた。男はサングラスを掛けていて、ラウンド髭を生やした強面。その隣を優雅に歩く女は、長い黒髪を手で弄びながら、鬱陶しそうに雨を、空を睨む。

フリーランス『天気屋』。長雨と糸原、その二人であった。

「……痛っ」

糸原が肩を押さえる。表情こそ平常だったが、彼女の額からは脂汗が流れていた。

「タイマンなら負けていたな」

長雨は糸原を心配する様子も無く、先刻の戦闘を思い返す。

「ざっけんじゃ無いわよ。あんた何もやってなかったじゃない」

「ふん、俺が後ろに立っていただけでも二対一の意味はあったと言うものだ。心配するな、相棒。お前が死んでいたとしても、俺が後

は何とかしていたさ」
糸原の刺すような視線を受け流し、長雨は嘯いた。
「はん、言ってなさいよ」
「しかし『神社』か。八塩折（やしおり）の酒の一族、中々に出来るようだったな」
長雨は顎に手を遣りながら、しみじみと呟く。
「八塩折？」
「知らないのか？　ヤマタノオロチを討った酒の事だ。その酒をオロチが呑んで、酔っている隙にスサノオが首を刎ねたのさ。英雄とは言え相手は化け物。姑息な手段に頼らざるを得なかったんだろうさ」
「良いんじゃない？　とにかくさ、勝負事ってのは勝てば良いのよ」
「その通りだ。さて、あそこへ戻る前に腹に何か入れておくとしよう。俺は先に戻る。相棒、お前は何か買って来い」
「……あんで私よ？」
「銃の手入れをしておかなければならん。アレは時間が掛かる。それとも、お前が手入れをしてくれるのか？」
にやりと、長雨は不敵に笑った。
「何でも良いのね？」
糸原は大げさに肩を竦め、来た道を引き返していく。

滅茶苦茶恥ずかしかった。顔から火が出るとはあの事だと、一はクリーニングの済んでいる巫女装束の入った袋を提げながら、心底からそう思う。
「……はあ」
意味も無く溜め息を吐き、一は家路を急いだ。
雨は勢いこそ大した物ではなかったが、止む気配を全く見せない。常に体中にへばり付く様な、粘着質な雨だった。雨の所為で視界も悪く、街灯は点滅を繰り返していて、一の目を戸惑わせる。

あと二つ路地を曲がればアパートにたどり着く。一はぼんやりとそれだけを思い、一つ目の路地を曲がった。

「――――っ！」

曲がった所で、一は異様な気配に気付く。気配の正体こそ分からなかったが、いつの間にか現れていた鳥肌が全てを物語っていた。体が教えている。一に伝えようとしている。

危ない、と。

だが、一はそのまま歩いていった。手に持っていたアイギスの安心感と、家がすぐそこにあるのに引き返すなんて面倒だと言う投げやりな気持ちが、がむしゃらに足を進ませる。

二つ目の路地。一の足は少しだけ鈍ったが、意を決し路地を曲がった。

「……」

アパートが見える。一の住んでいるアパート。その入り口近くの塀に、誰かが座っていた。座っていた、と言うよりも、壁にもたれ掛かっていると言った方が正しいかもしれない。既に彼女は、座っていられるほどの体力も無かったのだから。

一はその女に近付いていく。見覚えがあった。雨に濡れた体。短い銀髪。背が高く、威圧的な雰囲気を備えていた女。

「……栞、さん？」

山田栞。フリーランス『神社』。袖の破けた巫女装束が良く似合っていた女は、今は一から借りたジャージを着ていた。返事は無い。

一はアイギスを投げ出し、山田に駆け寄った。

「栞さん！」

山田の、雨で濡れた体を抱え、一は必死で呼びかける。声を掛ける。何故か山田は傘を手に持っていた。一がコンビニから持って帰った傘だった。尤も、一はその傘を店に持っていくのを忘れていたのだが。とにかく、その傘が邪魔だったので、一は山田の手から傘

を奪おうとする。しかし、傘は離れない。山田は傘を離さない。
「……っ！　栞さん！」
こんな時に。山田に対する心配より先に、一は苛立ちが募る。
「邪魔だから離せっつーの！」
一向に返事は無い。山田からは動こうとする気配すら窺えない。
ドクンと、一の心臓が跳ねた。鈍く、重く、暗く。一の体を痛めるかのように心臓は打つ。早鐘を打つ心臓に対して、体の動きは酷く鈍重だった。一はふらりと立ち上がり、山田の近くにへたり込む。
「返事、して下さいよ」
頭が真っ白になっていた。何で、どうして、こんな事に。考えても考えても答えは出てこない。一の瞳は何も映してはいなかった。降り止む事のない雨も、道に転がったままのアイギスも、すぐ傍の山田も。何もかも真には映っていなかった。
「……はじめ」
「！」
消えそうな声。一はしっかりとその声を聞き届け、弾かれる様に山田を見つめる。しゃがみ込み、彼女の体を支えた。
「悪い。やられちまった」
かはは、と。乾いた声で山田は笑う。
「……救急車呼びますから」
「駄目だ呼ぶな。心配すんな。オレは死にゃしねえよ」
「怪我してるじゃないですか……」
出血こそ無かったが、一が山田の体を触るたび、山田は苦悶の表情を張り付かせていた。恐らくは打ち身、下手をすれば骨折。運が悪ければ内臓に。
「オレの体だ。オレが一番良く分かってる。だから、呼ぶな」
「……知りませんよ」
そう言って一は山田の肩を支えた。
「立てますか？」
山田は一を振り解き、その場で軽くステップを踏んでみせる。

「おら、文句ねえだろが。それよか、転がってる傘拾っとけよ」
「はあ……」
言われたとおりに一はアイギスを拾った。
「とりあえず、部屋に行きましょう」
山田は短く答える。その手に傘を握ったまま。
「……いつまで持ってんですか、それ」
「ん。ああ、いや、そうだな」
今まで、その存在に気が付いていなかった風に傘を見つめ、山田は頭を掻く。
階段を上りながら、一は財布から鍵を取り出した。
「つーか栞さん、外に出て一体何をやってたんですか？」
「ん。お前を待ってたんだよ」
「は？」
「……お前、傘忘れていっただろ。困ってんじゃねえかなって」
山田は一から視線を逸らしながら、ばつが悪そうに台詞を並べる。
「あんな所で待っててもしょうがないでしょうに……」
「かはは、かもな」

とりあえず、一は山田の着替えをアパートの廊下で待つ事になった。扉を背にして立ったまま、一は考える。誰が、あんな事をしたのか。どうして、こんな事が起こったのか。考えても考えても仕方の無い事だった。繋がりそうで繋がらない何か。噛み合いそうで噛み合わない何かをすぐ傍に感じながら、一の気持ちが重くなっていく。
「良いぞ」
「あ、はい」
一はゆっくりと扉を開いた。部屋には、巫女がいた。袖の破れた巫女装束を着た山田が。白い小袖と緋色の袴。紅白のコントラストが眩しく一の目に映る。

「突っ立ってんなよ。座れ」
曖昧に頷き、一は腰を下ろした。こたつの卓には、いつの間にか料理が並べられている。山田が作っておいた物だろう。メニューは、ご飯に味噌汁、魚の照り焼き、きんぴらごぼう。大皿には豚の角煮。料理から立ち上る湯気と、温かい匂いが一の食欲をそそった。
「……えっと？」
しかし、こうしてご飯を食べている場合ではないのではないかと。一は山田を不思議そうに見つめる。
「う。何だよ？」
「いや、食べてて、大丈夫なんですか？」
とにかく、何が起こったのかを知らなければならない。
「あ、当ったり前だろ！　食えるモンしかここには並んでねえよ！」
「……あー、分かりました。それじゃ食べながら話を……」
怒らせてしまった。理由は分からないが、山田が不機嫌では話も進まない。そう判断した一は箸を手に取った。しかし、正直に言えば一もおなかは空いていたし、何より美味しそうだった。温かい食卓。こんな食事を取るのは何年ぶりだろうか。
「早く食べろよ」
山田は何故か箸を持っておらず、一の動向を睨んでいるだけだった。先に食べてしまったのかもしれない。一は山田に対して少しだけ申し訳ない気分に陥る。
「……」
一が選んだのはきんぴらごぼうだった。
「……美味いか？」
山田は伏目がちになりながら、顔を赤く染め、一へ尋ねる。
「美味しいですよ」
きんぴらごぼうを咀嚼、嚥下の完了した一はあっけらかんとそう言った。
「おい」
「はい？」

「もっと間を取ってくれても良いんじゃねえのか……」
「？」
何の事を言っているのか一にはさっぱり分からなかったが、きんぴらごぼうが美味しかったのでもう一口運ぶ。ご飯も進む。
「やっぱ良い。そんじゃオレも食うかな」
山田は嬉しそうに箸を取り出し、きんぴらごぼうに手を付けた。
一はとにかく話を聞きたかったが、もう少し食べてからでも良いかな、と。味噌汁を啜る。美味しかった。ひどく、美味しかった。
半分ほど料理を片付けたところで、
「『天気屋』にやられた」
と、唐突に山田は口を開いた。
一は豚の角煮を飲み込み、そんな名前をどこかで聞いていたなあ、と記憶を引っ張り出す。
「……フリーランスの、ですか？」
「ああ。連中オレの持ってる情報が欲しかったんだろうさ。オレも口は割らなかったけどよ」
「連中？」
その言葉に、一は相手が複数人だと推測した。
「割と本気で相手してたんだけどな、相手は予想以上に強かった。二人掛かりってのは言い訳になんねえな」
かはは、と山田は笑う。
「二人相手に生きていられたんだから御の字だと思いますけどね」
「まあ、向こうも殺す気は無かったと思うぜ。適当に痛めつけられて、適当なところで帰っていきやがった。舐められてたのかもな」
「どんな人たちだったんです？」
「……暗くて良く分からなかったけどよ、男と女の二人組だ。黒いスーツを着てよ、オレよりも背がでかかったな。実際にオレとやり合ったのは女の方だ。獲物も使ってなかった癖にすげえ強かったぜ」
「卑怯な奴らですね」
一は言いつつ、お茶碗にご飯をよそった。

「だがよ、それよりもヤバかったのは目だ」
山田は箸を止め、天井を見上げる。
「目？」
「女の目だ。氷みてえに滅茶苦茶冷たかった。正直、目だけで人を殺せるとしたらさ、あんな目なんだろうなとか、柄にも無く思っちまったよ」
「……目、か」
一はその目を見た事は無かったが、フリーランスがそう言うぐらいなのだ。自分なら本当に目だけでも殺されていたんだろうなあと、少しの間考えに耽った。
「あの、栞さん」
「改まってどうしたよ？」
一は魚の骨をばらしながら、
「ヤマタノオロチは、この街に出るんですか？」
そう、聞いた。
山田は笑う。
「ははっ、そんな話、まだ信じてたのかよ？」
「嘘だったんですか？」
はっはっはっと笑った後、山田は懐から酒瓶を取り出し、一気に呷った。
「……出るぜ」
「どっち、なんですか？」
「そうだな、お前には世話になったし、教えといてやるよ。信じてくれるかどうかはこの際置いといて、だ」
「信じますよ」
「……ありがとよ。まず何から説明すりゃ良いのかな。あー、そうだ。お前さ、ヤマタノオロチを倒したのが誰か知ってるか？」
図書館で勉強していて良かったと一は思う。一は誇らしげに「知ってます」と答えた。
「あっそ」

そっけない。
「じゃあさ、ヤマタノオロチはどうしてスサノオに負けたと思う？」
「……どうして？」
斬新な切り口からの質問だったので、一は少しの間考える。考える事は重要なのだ。
「スサノオが強かったから、ですか？」
「違うな。確かにスサノオは強かったと思うけどよ、それだけじゃ足りねえ。それだけじゃスサノオもクシナダヒメもさ、オロチの腹ん中にいたと思うぜ」
「……えっと」
一は再び考える。資料なら午前中に何冊も読んだ筈なのに。一は自分の記憶力を恨んだ。
「時間切れだ」
山田はドンと卓を叩く。その音に驚いた一がそちらを見ると、山田の手に酒瓶が握られているのを確認した。そこで一は気付く。一でも気付く。ナコトならばとっくに気づいているかも知れない。
「お酒、ですか」
「おうよ。八塩折（やしおり）の酒。こいつが無きゃ蛇退治は始まんねえ」
ヤマタノオロチを『蛇』と称する山田の気概に感心するより先、一は件の物語を思い出した。
「あ、確か、オロチをお酒で酔わせて、その隙に首を落としたって……」
「覚えてるじゃねえか。まあ、そう言うこった。ヤマタノオロチを倒したのはスサノオじゃねえ、酒なのさ。そしてその酒を造った一族。そいつらがオレのご先祖って訳だ」
あまりにも普通に言うので、一は山田の言葉を理解出来てしまった。
「え？　し、栞さんが？」
「そう言ってんだろ。まあ、遠い先祖だけどよ。遠すぎて果たしてマジかどうか分からねえけどさ、とにかくやま――オレらの家は昔

から酒造りを生業にしてきたんだ。来るべき時が来るまでな」
「それが、今なんですか？」
「ああ。ヤマタノオロチが出来上がる前にぶっ倒すのがオレの、『神社』の役目なのさ。幸いっつーか何つーか、オロチはまだ出来上がっちゃいねえ。今なら手負いのオレでも倒せる」
　山田は握り拳を作り、憎憎しげに窓を睨みつける。その向こうの雨を、叢雲を、まだ見えない、姿を現さない八俣遠呂智（やまたのおろち）を。
「あの、出来上がってないってどういう意味ですか？」
　一は山田が怒っているように思えたので、ビクつきながらも質問をしてみる。
「……お前さ、ヤマタノオロチみてえなデカい奴がいきなり街に出てくると思うか？」
「出てくるときは何でも出てくると思いますけど」
「オロチは出ないんだよ。そうじゃねえんだ。日本書紀や古事記の時代と違ってな、今の温い世の中じゃ、神様や化け物たちも、そう上手くはいかねえのさ」
「聞いてばっかりで申し訳ないんですけど、どういう事ですか？」
「神気（しんき）さ。神気ってのが足りねえのさ。今の時代に神様や化け物を心の底から信じてる誇大妄想ヤローなんていねえだろ？　居たとしても、そいつは少数派だ。異常なんだよ。オレだって昔から親や年寄り連中に「オロチ退治は任せた」なんて言い聞かされてここまでデカくなったけどよ、ヤマタノオロチなんて、ンな事信じられるか普通？　正直な、フリーランスやってる今だってオレは半信半疑だ。ソレは確かに居てる。この世に存在してる。けどよ、やっぱ現実味が湧かねえのさ」
　返事こそしなかったが、一も心中で山田に同意する。確かに、おかしいのだ。今の世の中。だが、誰も何も言わないから、こうしてこの世は回っているのかもしれない。勤務外だってフリーランスだって、神を信じる少数派と等しい存在なのだから。
「オレは良く分かんないんだけどよ、力の弱いソレってのは人間が

信じようが信じまいが、お構い無しに出てくるらしい。けどさ、力の有り過ぎる、でか過ぎる奴はそう簡単にこの世に出ることなんて無いんだ。有り得ねえんだ。だってさ、誰も信じてねえもん。誰も想像もしてない奴がいきなり出てくるなんておかしいのさ。お前だって聞いた事ねえか？　人間の頭の中で想像する物は、いつか必ず創造できる物なんだってよ。飛行機だって核だって、最初は考えた奴の方が頭おかしいって言われてたんだぜ。オレは成る程って思ったね」

「でも、ヤマタノオロチは――」

「――出る。間違いねえ」

山田は言い切る。一はその言葉に、強い不安を覚えた。不安は頭の中を這いずり回り、考えたくも無い事を、言いたくも無い事を、一の口まで運んでくる。

「……なら、そうまで言うなら、この世にヤマタノオロチを信じてる人がいるって事なんですか？」

そう言い切った一の喉が訳も無く渇いた。

「オレが、オレが八塩折の酒を作った奴らを遠い先祖に持つならさ、いるんだよ。お前の言う通り、怪物なんか信じてやがるイカレた奴がな」

「つまり？」

「存在するのさ、ヤマタノオロチの子孫がな」

ゾクリ、と。一の肌が粟立つ。部屋の中の空気が重くなる。

「……子孫、が？　でも、蛇、なんでしょう？　蛇が子供を作っていたって言うんですか？」

つまりそれは。その事について考えただけで、一は吐き気を覚えた。

「はっ、異種間交配ぐらいお前だって知ってんだろ？　珍しくもねえんじゃねえか？　ほら、レオポンとかライガーとかさ」

「でも、交雑種ってのは大概一代で終わりじゃないですか。無茶苦茶なんですよ、同属でも無いのに、無理矢理生まされた子供に力は

無い筈です。生き残るのも難しいのに、ましてや子供を作るだなんて……」

「ハイブリッドって言葉、知ってるか？」

「そんなの言いようです」

「へっ、だから先に言ったろ。オレは別に信じてもらわなくても良いんだぜ。とにかくよ、いるんだよ。オロチの子孫が、今この街にな。そんでそいつは厄介な事にヤマタノオロチってのを心底信じてて、挙句の果てにおかしな奴らの力を借りて、そのオロチ様を復活させようとしてるのさ」

馬鹿みてえだろ。そう言うと、山田はおかしそうに笑った。そして一は不思議に思う。

「あの、どうしてそこまで知ってるんですか？」

今までおかしそうに笑っていたのが嘘みたいに、ピタリと山田は哄笑を止め、一に向き直ってから、

「そいつは昔『神社』だったのさ。つい一月前までの話だ」

聞いた者が底冷えしそうな声を放った。その声は、怒りから来る物でも、悲しみから来る物でもない。

「……じゃあ、栞さんは……」

「へっ、そうだよ。軽蔑すんなら軽蔑してくれて良いぜ。そうさ、そうさそうさそうさ。仲間殺しさ、身内殺しさ。オレァ、人間を殺しに来たんだよ。ヤマタノオロチはあくまでおまけだ。オレの目的はオロチの血を引く者の抹殺。裏切り者への制裁。人を殺す為だけに、ここまで来たんだ」

「……っ。栞さん……」

「一。オレに同情するな。軽蔑しろ、限りなくな」

一は何も言えない。

「世話になったな」

山田は立ち上がった。一には目もくれず、扉を目指して。

一は咄嗟に袴の裾を掴んだ。山田は引っ張られた衝撃で、足元からバランスを崩し一に圧し掛かるような形になる。小さな呻き声が

二つ漏れ、部屋には衝撃音の後、静寂が訪れる。
やがて。
「……なあ、一」
圧し掛かったままの体勢、仰向けの山田は呟いた。
「……なんですか」
圧し掛かられたままの体勢、うつ伏せの一は呟いた。背中越しに言い知れぬ気を感じる。一はこの感じを知っていた。
「ぶっ飛ばして良いか？」
「あの、先に煙草吸ってきて良いですか？」
「あ？　お前煙草吸うのか？　辞めとけ辞めとけ、煙草なんて百害あって一利無しだぜ。呑むなら酒にしとけ。知ってるか？　酒は万病に効く薬なんだぜ」
「煙草が健康に悪いんじゃなくて、健康が煙草に悪いって聞いた事あります？」
はっはっはっと山田は豪快に笑う。一しきり笑ってから。
「バカァッ！！」
マウントポジションでしこたま殴られた一は、山田を宥めてとりあえず煙草を吸いに外に出た。
山田は煙草の煙が非常にお嫌いな様子であった。
一は、今だけ傘代わりのアイギスを持ち、廊下を進んだ。強くはないが、それでも雨は降っている。降り続けている。いつになったら止むのだろう。この雲は消えてくれるのだろうと。柄にも無く、何かに祈りながら。
「……寒いな……」
階段を下りながら呟いて、煙を吸い込む。食後の一服は格別だった。自然、一の頬が緩む。
「はっ、締まりの無い顔ね」
後ろから声がした。誰のものだろう、誰に告げたものだろう。一

は不思議に思いながら振り向く。
「……いと、はらさん？」
アパートの入り口近くの塀へもたれるように、傘も差さずにそれはいた。糸原四乃。一の元、同居人。
「何を、してるんですか？」
一は糸原に近付いていく。恐ろしく、無防備に。
「近付くんじゃないわよ、勤務外」
「えっ？」
冷たい声だった。冬の寒さにも、雨の無情さにも引けを取らない、そんな声。一は思わず立ち止まってしまう。戸惑いながら、糸原の顔を窺った。
「……っ！」
恐ろしく、冷たい目だった。氷みたいに、滅茶苦茶に冷たい目。自分以外の全てのモノを見下しているような、視線だけで、目を合わせたものを殺せそうな目。カトブレパスなんか比じゃなかった。一の体が震える。
「私はね、あんたに警告しに来てやったのよ」
平坦に、冷淡に糸原は告げた。
「何を、言ってるんですか？」
一の声は固く、震えていた。膝が笑う。膝が笑う。膝が笑う。
「あいつをボコボコにした時点で気付くべきだったわね。『神社』があんたの知り合いだったなんて。はっ、あんたよっぽど運が無いのね」
「どうして……？」
どうして『神社』の事を、山田の事を知っているのか。糸原に尋ねたかったが、それ以上一は何も言えなかった。
「どうして知ってるのって？　もう気付いてんでしょ、私の正体に」
「し、知りません……」
「その通り。私はフリーランスよ。今まで言う必要も無いから黙ってたけどね。『天気屋』って言うの。ベンキョーんなったかしら？」

軽そうに、あの日の朝みたいに、同じ口調で糸原は言う。
「出て、行ったんじゃ無かったんですか……。駒台から」
俺の家から。
「は？　そんなの私の勝手じゃない。とにかくさ、私らの仕事の邪魔になるかもしんないから、あんた、出て来ないでよね」
「仕事……？」
「『神社』からはろくな情報聞けなかったけどね、私ら『天気屋』はヤマタノオロチを追ってんのよ。勤務外より先に、他のフリーランスより先に、確実にそいつを殺して、私らはビッグマネーを手に入れるって訳」
「じゃあ……、今まであなたが勤務外を続けていたのは……」
一の言った言葉に、糸原が吹き出した。
「はっ、ははっ……。そうよ、あいつらのシフトの確認をしたかったし、色々と勤務外の手口も教えてもらったわ。ふっ、ふふっ、バカみたい……」
「本当に、糸原さんが山田さんを……？」
「山田？　あー、『神社』の事？　そーよ。私がやったわ。ま、殺してないから別に良いじゃない。命あっての物種でしょ？　尤も、今回のヤマには関われないぐらい痛めつけといたけど」
ぎりりと、一は歯を軋ませる。強く、拳を握る。
「俺を利用してたんですね……」
「自惚れんじゃないわよクソガキ。あんたなんか、何とも思っちゃいないわ。思ったことも、一度だって無い。ただ、あんたがあの時、あそこに居ただけよ。特別扱いされてるとか思ってたの？　自己中心的ね、死んだ方が良いわ」
糸原は続けた。
「あんたみたいな、チビなんかじゃなくって、もっとカッコイイ金持ちにでも身ィ寄せてた方が楽だったわ。つーか、あんた、最悪だったわ。今まで私も『最悪』って呼ばれてる人間にあった事があるけどさ、あんたは格別に群を抜いてダントツに最悪だったわ」

糸原は続ける。
「家族ごっこはもう終わり。終わった。終わってたのよ、ハナっからね。気持ち悪い、吐き気のするぐらい歪な馴れ合いも、全部終わり、ははっ」
「それでも……」
「あ？」
一は虚ろな目で糸原を見た。とてもじゃないが、あの冷たい目を見る事なんて出来そうになかったから。それでも。
それでも。

「……それでも、俺は、楽しかった……」

呟いた一に、糸原が襲い掛かった。腹に一発。一の胃が揺れる。
一は倒れた。
「ざけんじゃないわよ！」
糸原は一に飛び掛る。顔面に一発。一の鼻から血が溢れた。
「ここまで言われて！　何がどう楽しかったってのよ！」
一は抵抗もしないで、ただ殴り続けられる。
「私は全然楽しくなかった！」
内臓が潰れているかも知れない。
「あんたなんか居なけりゃ良かった！」
骨が折れているかも知れない。
「ここでの生活なんて！　全部！」
それでも、一は殴られ続ける。
「全部最悪だった！」
叫んで、殴って、疲れ果てたのか、糸原は一から離れた。
「……ここで、一生そうしてれば良いのよ」
それだけだった。それだけ言って、糸原は立ち去っていく。
一から、離れていく。
一はどうする事も出来ずに、雨に打たれる糸原の後姿を見送った。

その、寂しそうな後姿を。

盲信者、蛇に怖じず

雨はもう、止まないのかもしれない。

一は背中で地面を感じながら、降りしきる天水を体で受けていた。殴られた所がズキズキと痛む。吐き気がするし、鼻からは血が出ていた。口の中に鉄の味がじんわりと広がっていく。呻きながら上半身だけを起こす。

「はっ、ははっ……」

何故か一は笑ってしまった。糸原にここまで手酷くされた事についてなのか、服がずぶ濡れになった事についてなのか、それとも、ここまで自分を痛めつけた糸原を恨む事の出来ない自分についてなのか。何がおかしかったのか、自分でも分からない。あるいは全部。あるいは全部違うのかもしれなかった。

「貴様はマゾヒズムの傾向があるらしいな、一一」

「糸原さんはどこに行った?」

一のすぐ傍には、スーツ姿の春風麗がいつの間にか立っている。細長い手足に腰まで伸ばした長い髪。傘も差していないのに、春風の体は殆どと言っていいほど濡れていなかった。

「何故、抵抗しなかった?」

「俺が知るか」

「そうか。やはり私と貴様は似ているな」

無感情に、無表情に春風は言う。

「……どこがだよ?」

「言ったろう。私も貴様も、一人になるのが嫌なんだ。そのくせ、他人の事を心から嫌って、心から信じない。歪なのさ。形が悪く、酷く終わっている」

「そういや、お前は『天気屋』の事も言ってたな。知ってたのか?」

「全部は知らん。だが、一一。貴様の知りたい事を私は知っている」
「糸原さんの事も、知ってたのか？」
「貴様がそれを知りたいのであればな」
一は深く溜め息を吐いた。息を吸い込み、吐くだけで喉が痛む。
「……なら、あの人が今どこにいるのか教えてくれ」
「また殴られに行くのか」
「場合によっちゃ、そうなるかもしんないな」
「一一、貴様はどうしたいんだ？　それとも、糸原四乃にどうして欲しいんだ？」
分からない、そう言って一は立ち上がった。落ちていたアイギスを拾い上げ、口内に溜まっていた血と唾液を地面に吐き捨てる。
「貴様らは付き合っていたのか？」
「多分、違うと思う」
一は多分、違うと思った。
「一方的に好きだったのか？」
「そうかも知れない」
一はそうかも知れないと思った。
「糸原四乃は、貴様にとって何なんだ？」
「分からない」
一には分からなかった。
「歪な、家族ごっこだそうだな。貴様はまた、戻りたいのか？　繰り返したいのか？」
「うん」
春風は「そうか」と呟き、内ポケットから、徐に携帯電話を取り出した。
「一一、駒台にヤマタノオロチが現れた。未だ不完全の、ただの巨大な蛇としてな」
「……そっか」
「今では使われていない、建設途中のビルが連立する地区だ。貴様も知っているだろう、北部の商店街を抜けたところだ。その内の一

つの建物から、先ほどソレの存在が確認された。つまり、今回は南の出番が無いと言う事だ。現在動いているのは、フリーランスだけ。『天気屋』、辛うじて『神社』か」

「お前……？」

「さて、ここに電話があるな？　私はオンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗として北の連中に伝えてやらねばならん。『死ね、勤務外ども』とな。相手は出来損ないとは言え日本神話の怪物だ。時間を掛ける道理は無い」

「今日は、三森さんだ」

呆然と、一は呟く。

「そうなればどうなるか、分かるだろう？」

一の考えうる中でも、それは最悪だった。勤務外の三森とフリーランスの糸原がかち合う事になれば。

「そこで、だ。一一、貴様に時間をやろう」

「は、はあ？　お前何言ってんだ？」

「今の事態は、私にとってはある程度望ましいのだ」

「……お前も一応、オンリーワンの人間だろ……」

「それ以上に、私は三森冬が嫌いだ。お前が出張り、事態を掻き回す事になれば北駒台にもフリーランスにも、強いて言えばソレにも打撃を与えられるかも知れん」

春風は携帯電話を弄びながら、やはり無感情に言った。

「先に言っておくが、私は戦闘に手を貸さん。南の連中も動かん。私が連絡をしなければ、基本的に勤務外も動かん。どういう意味か、分かるか？」

「俺は別に、戦いに行くわけじゃない」

「それでもだ。貴様の味方はいないと言う事だ。一人で、一人で貴様は動かなくてはならん。ソレを倒すのか、糸原四乃をどうするのか、何をするのか。何をするにしても、貴様は一人だ」

「何度も言うなボケ」

「交渉と行こう、一一。私が与える物は時間だ。邪魔の入らない時

間を作ってやる。貴様が一人で場を掻き回す為のな。では、貴様は何を与えてくれる？」

一は唾を吐き捨て、傘で意味も無く地面を抉る。

「……俺がお前にやれる物なんて何も無い。お前には何かあげようって言う気もねえ。先に言っとくぞ、俺はお前の事が好きじゃない」

「奇遇だな、私もだ」

「でもな。お前が俺に時間をくれるってんなら、俺にあいつらを掻き回して欲しいってんならやってやるよ。何もやらねえんだ、期待にぐらい応えてやるよ。ギブアンドテイクだ。お互いがお互いの事を嫌いで。けど、噛み合っちゃいるんだ。だから、それ以上は負からない」

「ふん、立場を弁えていない様だな」

「……俺を使える人間じゃねえよ、お前」

一は笑う。ハッタリだった。

「良いだろう、今から三十分作ってやる」

「作るってな……。電話しないだけだろ？」

「その通りだ。だが一一、貴様は電話をしないだけで三十分稼げるのか？」

詭弁だ。だが一は何も言わない。

「期待はしていない。精々張り切ってくれ」

「分かってるよ。とっとと失せろ」

「ふっ、走れ臆病者」

一が視線を地面に落とすと、その隙に春風の気配は無くなった。服はずぶ濡れ、顔は血で汚れ、体には鋭い痛み。確かにマゾかも知れない、と。一は妙に納得する。

雨は駒台の街を打ち続ける。落ちた水は建物と言う建物に染み込んでいく。上から下へ。

駒台の街、北部。今は使われなくなった、廃墟と化したビル。連

立したその中の一つ、フリーランス『天気屋』はいた。
飽きもせず外を眺める黒い瞳。『天気屋』の片割れ、長雨はコンクリートの隙間を覗きながら呟いた。
「止みそうに無いな」
「そうね……」
長雨の対角線上、糸原は壁に背を預けて佇んでいる。光の差し込まない室内なので、彼女の表情は伺えない。
「どうした？　気分でも悪いのか？」
「別に。すこぶる快調よ」
「……相棒、ただの買出しにしては時間を食っていたようだが？」
「立ち読みしてたのよ」
糸原の様子に不審な点は無い。だが、長雨には、「不審な点が無い」と言う事が引っ掛かった。今回の仕事は今までの獲物とは比にならないぐらい大きく、強い。ヤマタノオロチを狩るに当たって一切の憂慮を断ち切っておきたかった。
「やる気はあるんだろうな」
「うっさいわね、ちゃんとあるわよ。無くてもこんなちょろい仕事、どうって事ないしー」
「ならば良い。『天気屋』の評判を落としたくないからな」
長雨はコンクリートの隙間から隣のビルを眺める。ビルとは言っても、今長雨たちが居るのと同じく、とうに人の手が入らなくなった廃ビルだ。
「フリーランスが他人の目ぇ気にしてもしょうがないと思うけど？」
「俺はそうは思わん。名前が知られてるだけでも、幾分か動きやすくなる」
「……あんた、おかしいんじゃない？　名前知られてる方が動きにくいに決まってるわ」
朽ちた建物。隣のビル。長雨は何度もそれを見る。確認する。ソレを見る。
「そうか、お前はタルタロスに居たのだったな」

事も無げに長雨は言った。
「あんたが送ったんじゃない。私を裏切ってね」
糸原が長雨へ一歩だけ踏み込む。
「ふん、俺に裏切られたのが悲しかったか？」
「冗談。舐めた事言ってると後ろから切り刻むわよ」
「おかしいな、前衛はお前の役の筈だぞ」
長雨は視線を糸原に移し、目だけで笑った。糸原は肩を竦めて見せると、それ以上は何も言わず、内ポケットから取り出したグローブをはめる。糸を使う際に自身の指を傷つけない為の、グリップ力上昇の為の、オープンフィンガーグローブ。
「長雨、手筈は？」
「いつも通りだ。俺が狙撃してソレの注意を逸らし、隙を作る。出来た隙にお前が飛び込め。何も変わっちゃいない。いつも通りだ」
「了解。いつ仕掛けるの？」
長雨はスーツの袖を捲くり、腕時計で時刻を確かめる。
「同業者の邪魔は入らないが、勤務外がいつ出張ってくるか分からん。俺のライフルの手入れが終わり次第開始する。お前は現場へ向かっていろ」
「オッケ、なるべく早くしてよね」
「ああ、なるべくな」
糸原は体を伸ばしてから階段を降りていく。
その足音を聞きながら、長雨は一人ほくそ笑んだ。非常に、酷薄な笑みだった。

手にはアイギス。既に止まっているが、鼻からは血。腕は痛む。足も腹も頭も痛かった。服はぐちゃぐちゃ。雨で濡れ泥で汚れ血に染まっている。だが、そんな事はどうでも良かった。一は歩き出す。
「おい」
振り返らなくても、一にはその声が誰の物か分かった。

「……栞さん」
「だから言ったろ、煙草なんて百害あって一利なしだってよ。お前、煙草吸うたびに毎度毎度そんなんなっちまうのか？」
「煙草は関係無いですよ」
乾いた、一の苦笑。
山田は舌打ちして一の肩に手を置いた。
「お前、どこに行くつもりだ？」
「ちょっとそこまで」
「はぐらかすんじゃねえ。一がどこに行くのか、オレにだって何となく分かってんだ」
「流石フリーランス、鼻が良いんですね」
「馬鹿野郎、オレは今風邪気味なんだよ」
一は肩に置かれた手を払いのける。
「そんな人を連れて行くわけにはいきません」
「お？　心配してくれてんのか？」
「……そうです」
「かはは、オレも舐められたもんだ。お前みたいな弱っちい奴に心配されるとはよ」
豪快に笑ってから、山田は再び一の肩に手を置いた。一の顔が苦痛で歪む。
「……おい、大概にしろ。風邪気味だろうが骨が何本折れてようが、内臓潰れてようが、それでもお前よりオレの方が強いんだぜ？」
一の骨が軋んだ。山田は徐々に力を込めていく。
「言え。オロチはどこにいやがる」
「し、知りません……」
肩を潰す勢いで、山田は一の肩を容赦なく掴んだ。
「アレはオレの獲物だ。手ぇ出す気なら、ここでお前を潰す」
「ほ、本当に……、ただの身内なんですか？」
「んだと？」
山田の手から一瞬力が抜ける。その一瞬で一は山田から逃れた。

「本当に、ただの元『神社』なんですか？」
「誰の事言ってやがる」
「あなたが、殺そうとしてる相手ですよ」
「……ああ、ただのイカれ野郎だ。それがどうしたってんだ」
一は首を振る。
「違う気がする。その人、本当にただの『仲間』なんですか？　本当に、ただの『身内』なんですか？」
「そう言ってんだろうが！」
「じゃあ、どうしてそうまでなれるんです？」
山田は思わず口をつぐんだ。
「骨が折れてまで、内臓が潰れてまで、そうまで必死になって、本気になって。どうしてですか？」
「お前には、関係ねえだろ……」
「答えてください」
「関係ねえって言ってんだろ！」
一は動じない。
「答えて下さい。俺は聞きたい。俺は、あなたが他人の為に必死になれる理由が知りたいんです」
「うるせえ！」
一は屈しない。
「教えてくれなきゃ、俺も何も教えません。ヤマタノオロチがどこにいるのかも、あなたの大切な人がどこにいるのかも」
「違うって言ってんだろうが！　なら！　お前はどうだって言うんだよ！？　お前だって無茶苦茶にされてんじゃねえか！　ボロボロだろうが！　じゃあ何でだよっ、お前だって誰かの為に必死になってんじゃねえのか！？」
一は怯えない。
「だから聞きたいんです。正直、俺にもよく分からないんです。どうしてここまでされてその人の事を憎めないのか、怒れないのか。どうしてこんなになってまで、どうして……、……どうしてその人

にまだ会いたいと思えるのか……」
「……一……」
「ごめんなさい栞さん。『天気屋』の女と俺は知り合いなんです」
山田の視界がぶれる。
「俺の『身内』がしでかした事です。許して欲しいとは言いません」
「気に、すんな。お前がやった事じゃねえ」
「栞さんは、許せないんですよね？　自分の身内がやった事を」
「……当然だろ。身内の不始末はオレの不始末だ」
「大切な人なんですよね、殺したいって言ってる人の事」
「ああ……」
苦虫を噛み潰したような表情。だが一は納得できた。やっぱり、と。
「お前は、どうなんだよ？　あの女をどうしたいんだ？　殴られたんだろ？　裏切られたんだろ？」
「殴られましたけど、裏切られたわけじゃないと思います。それと、どうしたいってのはさっきも聞かれました」
「？　オレは聞いてねえぞ」
一は頭を掻く。髪の毛が濡れて少し気持ち悪かった。
「あ、そうでしたね。じゃあもう一度。俺は、分からないんですよ、まだ」
「分からないのに行くってのか？」
「分からないから、行くんじゃないんですかね」
はっはっはっと、山田は豪快に笑う。
「死ぬぞ、お前」
一はソレのいるであろう方角を見つめた。
「一人じゃ間違いなく死ぬでしょうね」
「……分かってんじゃねえか」
にいい、と。山田の口の端がつり上がる。
「俺はとりあえずあの人ともう一度話したい。あの人にもう一度会いたい。けど、あの人はヤマタノオロチを狙ってる。つまり、ヤマ

タノオロチなんて邪魔なんですよ。ソレを先にどうにかしないと何も出来やしないんです」

「小難しいんだよ、一は。言え、奴はどこだ」

まだ、一は答えを貰ったわけじゃなかった。結局のところ、何も分かっちゃいない。なぜ自分が糸原に会いたいのかも、山田の本心も分からない。何も、分からない。だが、一は山田に場所を教えた。

「よし、行くぞ」

場所を聞いた山田はすぐに歩き出す。

「どこか、知ってるんですか？」

「知るか！　早く着いて来い、先越されちまうぞ！」

小走りで山田に追いつくと、一は隣に並んだ。

山田は自分の体と一の体を眺めた後、

「手負い二人か」

そう、呟く。『神社』とは言え、流石に心細げのようだった。

「しかも片方は頼りない素人ですね」

まるで他人事の様に一は笑う。

「はっ、任せろよ。少々痛んでたってオレは『神社』だ。言ったろ、ヤマタノオロチを倒すのはオレ（オレ）の仕事だ。八塩折の役目だ。スサノオ（おま）（え）は精々、死なねえよう後ろで見てな」

「じゃあそうしようかな」

「バァカ、頼りにしてんぜ」

山田は豪快に笑う。よく笑う人だ。一はそう思った。羨ましいと思った。だから、一も笑う。今から戦場に行く人間とは思えないぐらい、思われないぐらいに、二人はおかしそうに笑った。

オンリーワン近畿支部情報部、二課実働所属漣（さざなみ）。彼は春風の直属で、春風の唯一の部下だった。漣は今、突然いなくなった上司を探すべく、駒台の街を奔走している。

「くそっ」

口から漏れるのは愚痴と上司への陰口。
探すと言っても、春風は自分の上司だ。春風が本気になって姿を眩まそうと思ったら、自分ではとてもじゃないが探しきれない。漣は溜め息を吐きつつ、雨が降って視界の悪い街並みを、ビルの屋上から見下ろす。眼下を歩く人々の、色とりどりの傘が妙に眩しく見えた。
「……電話にも出やしないし……」
内ポケットから携帯電話を取り出してみては、春風からの連絡があるかどうかを確かめる。もう何通メールを送ったか、何回電話を掛けた事か。もしかしたら、連絡の取れない状態に追い込まれているのかもしれないが、春風に限ってそんな事は無いだろうと頭を振って、馬鹿な考えを頭の片隅に追いやった。
駒台北部の商店街を抜けたときだった。漣は人の姿を目の端で捉える。別段珍しい事ではない。一般人が立ち寄らない、廃ビルの連立する地帯であったが、素行の悪い人間が屯する話も聞いていたし、平時であればその人影を見逃していたかもしれない。
「春風さんっ」
漣は廃ビルの一つ、そこで雨宿りをしている人影に声を掛ける。見逃す筈も、見間違う筈も無かった。
「……漣か」
「な、こんな所で何をしてるんですか？　早くヤマタノオロチを探さないと……」
春風は漣を一瞥しただけで、感情の篭っていない瞳で曇り空を見上げ、雨音に耳を傾ける。
「職務放棄ですか。上に言いつけますよ」
「勝手にしろ」
「……冗談です。冗談にしない為にもソレを探しましょうよ」
漣は泣きそうになりながら情けない声を上げた。
廃ビル。その中の一つを指差して、春風は詰まらなさげに溜め息を吐く。

「どうやら、まだまだ私には追い付けていないようだな」
「えっ？」
「ソレはあそこだ。一一と『神社』、『天気屋』が当たっている」
「ああ、なんだ……。もう店に連絡までしてるんですね」
手際の良い事だ。漣は改めて自分の上司を誇らしげに思う。
「連絡はしていない。そうだな……」
春風は内ポケットから携帯電話を取り出して現在時刻を確認した。
「十五分は連絡するな」
「はっ？　あ、あの、その、意味が分からないんですが？　そんな指示来てましたっけ？」
「来ていない。あえて言うなら私の指示だ。聞けないか？」
「……順序立てて話して欲しいんですが……」
何となく、漣には察しがついている。先ほど春風の口から出た言葉。一一。
――！　一一（にのまえ）！（はじめ）
とことんまで。漣は一の事が気に入らなかった。ぎりりと歯を食い縛る。
「また、一一ですか」
「ふっ、気に入らないか？」
「俺たちの任務をこうまで妨害するんです。一一は、ハッキリ言って障害、不確定要素です。気に入る理由がありますか」
春風は漣を見た。彼の、嫉妬に燃える瞳。
「同感だ。だが、私にとっては利用価値のある人間だ」
「利用？　あなたは一体、何をしたいって言うんです？　最近の――じゃなくて、あなたの下についてからずっと思ってました。情報部の人間にしては春風さん、あなたは勤務外なんかと関わりすぎてます。どんな事情があるにせよ、許されない事ですよ」
「……お前が知る必要は無い。私がお前の事を知る必要が無いようにな。私の事が気に入らないなら本部にそう言え。ふっ、私なんて吹けばすぐに飛ぶさ」

気に入らないなら。
漣は皮肉っぽい笑みを浮かべる。
「あなたはずるい人だ」
何が吹けば、この人が飛ぶと言うのか。漣は春風を見つめた。どこまでも自由な人だ。全てを知っていて、全てを語らない。
「十五分ですね。分かりました。この事が上にバレたら一緒に始末書でも何でも書きますよ」
「私は始末書なんぞ書いた事が無い。漣、頼むぞ」
「ちょいと自由過ぎやしませんか？」
それでも、自分はこの人の分まで始末書を書こうと、書くのだろうなと、そう思う。彼女の瞳に自分が映っていない今、そんな事ぐらいしか、自分には出来ないのだからと。

――残り十分。

一と山田は駒台の北部の商店街を抜け、件の地区に足を踏み入れた。
山田は周囲の廃ビルをキョロキョロと見回し、
「オロチはどこだ？」
切羽詰った様子で一にそう尋ねる。
「この中のどれかでしょうね」
何食わぬ顔で一は答えた。本当に他人事みたく冷静な口振り。
「……場所、知ってるんじゃなかったのか？」
「いや、その筈だったんですけど。情報源が、細かそうに見えて実は大雑把な奴だからな……」
やっぱり似ているのかもしれない。一は頭を抱えたくなるのを堪えて顔を上げる。
「と、とにかく、このビルのどこかにヤマタノオロチの出来損ない

も、その、あなたの目的の人もいるんです。探しましょう」
「しょうがねえな。じゃあ、オレはこっちから探す」
山田は分かれた道。左を指差した。指差しながらそちらへ歩いていく。一には振り向きもしないで。
「だ、ちょ、ちょっと待ってください！　別れて探すのは良いんですけど、見つけたらどうします？」
「……ん？」
意味が分からないと言った風に山田が一へ振り返る。
「いや、聞き返さないで下さい。当然の事を聞いてるんです俺は」
戦力分散は愚の骨頂。一にとっては重要な事だった。慣れてきたとは言え、ソレとの戦闘に関して一はまだ素人に毛が生えた程度の力しか持っていない。力。腕力、体力、判断力ｅｔｃｅｔｃ……。
それより何より、一は一人でいるのが怖かった。
「栞さんが先に見つけた場合はともかく、俺が先に見つけた場合はどうするんですか？」
「おい、オレを心配しろよ」
「してます。で、どうするんですか？」
「……助けが欲しい時は大声を出せ。簡単だろ」
あっさりと、簡単な事を山田は言う。
「あ、はい。そうですね」
簡単過ぎて、一にはそれ以上の案がすぐには思いつきそうに無い。
「心配すんな。雨が降っちゃいるが、周りにゃ殆ど人もいねえだろうし音もねえ。でけえ音立てりゃ嫌でも聞こえるよ」
「分かりました。じゃあ、ちゃんとしっかり絶対、俺が助けを求めたらすぐに来てくださいよ」
「……やっぱ頼りねえなあ、お前」
山田は呆れ顔で一を眺めた。
「返す言葉もありません。それじゃあ俺はこっちを探しますから」
「おう、奴を見つけたらすぐにオレを呼べよ」
言われるまでも無い。一はおっかなびっくり明かりの無い道を進

んでいく。
糸原に会う。
一は曲がりなりにも、そう決意して、それだけを思ってここまでやって来たが、やはり怖いものは怖い。未だに。ソレとの戦いなんて決して慣れそうにもなかった。まして、勤務外ではなく一人の人間としてソレと戦うなんて考えたくも無い。
ビルとビルとの間、狭い路地を当て所なく歩いていると、ふと懐かしい光景が頭を過ぎった。
――鎌鼬（かまいたち）。
初めて、一がソレと戦おうと思った相手。初めて、一が戦ったソレ。否、戦いと呼べるような物では無かった。無茶苦茶に突っ込んで、なるように身を任せただけの向こう見ずな行動。
「……」
あの時は味方がいた。三森がいた。今、一の傍には誰もいない。いつだってそうだった。ソレと相対するときには、戦うときには誰かが傍にいた。一の近くには、必ず誰かが。
一はとりあえず歩いてはいるが、今すぐにも歩みを止めたくて仕方が無かった。何もしていないのに、何もされていないのに、呼吸が苦しくなる。見えない何かが、自身の体を上から押し潰そうとしているような。得体の知れないモノを感じながら歩く。
歩く。
深く、暗く広がる闇。挫けそうになるが、一は歩く。歩き続ける。足は震えた。一つ一つ、ビルの外周と内部を調べていく。止まりそうだった。しゃがみ込んで休んでしまいたかった。それでも、何かが一を歩かせている。彼を歩かせるのは一つの思い。
――糸原。
ハッキリしていない。漠然とした何か。
一は図書館での、黄衣ナコトとのやり取りを思い出す。
信仰。
縋り、祈り、拠り所とする何か。自身を歩かせるもの。一が信じ

ているものは見えない何か。神や仏ではなかった。この街のどこかにいるであろう、その人に会う、会えるという事を信じて一は歩く。確信など無かった。盲信めいた不確かな何か。だが。信仰など、何かを信じるという事など所詮はそんな物なのだろう。信じたくなければ信じなければ良い。信じたければ信じれば良い。そんな物。

朽ち縄に怖じる

雨が降り続いていた。

小高い丘の上。

「なあ、お前はずっとここに残るんだろ？」

「……分かんねえ」

陽が落ちるのを眺めている、一組の男女。

「どっか行っちゃうのか？」

「考えてねえなあ」

白い小袖と緋袴。女は巫女装束に身を包んでいる。

「……お前がここを出るなら、オレも付いて行く」

「駄目だろそりゃ。お前には神社の役目があるだろ」

男は紺色の半纏を着ていた。男の付けた白い鉢巻が、夕焼けの中でやけに映えていた。

「そんなの関係ねえよ、オレが行きたいから行くんだ」

「そっか。けど心配すんな、後十年はここで暮らすよ」

女は不安げな顔をしていたが、男の言葉に少しだけ笑顔を取り戻す。

「別に。心配なんかしてねえよ。お前みたいな若い奴が抜けたら酒造りもしんどいって、それだけ」

「俺なんか、まだまだ下っ端だ。一人ぐらい抜けたってどうしようもねえよ」

男は笑った。

「……俺がどっかへ行ったら……。お前、寂しくなるか？」

女は顔を真っ赤にしてその言葉を否定する。

「ははっ、やっぱな。お、良い匂いがして来た」

「ありゃあ、おじさんトコからだな。そろそろ帰ろう。オレも腹減

ってきた」
そう言って、女は男に背を向けて歩き出した。
「なあ」
男も、女を追いかけるように歩き出す。
「なんだよ」
「やっぱさ、俺がいなくなったら寂しいだろ？」
男から女の表情は伺えない。
「……少しだけな」
だが、その言葉だけで充分だった。満ち足りた気分になり、男は女の横に並ぶ。
その翌日、男は女の元から、この地から姿を消した。

雨が、降り続けていた。

「春風さん、あと十分切りました」
「……そうだな」
「本当に一一とフリーランスだけに任せるんですか？」
「そうだ」
「……どうなっても知らないですよ」
「知っている」
漣は溜め息を吐く。さっきから、春風に何を聞いても上の空だ。
漣を認識していないような、どうでも良いと思っているような節さえ見える。
「随分と、一一を買っているんですね」
ふと、春風が漣を見た。全てを見透かしたような、そんな目で。
全てを知っているような、そんな声で。
「嫉妬か」
そんな事を言う。

「違いますよ」
「……私は別に一一を買っているわけじゃない。恨みならば、買ったし買わされたがな。奴との関係などそんな物だ」
「吹けば飛ぶような、ですか？」
春風は無言で。頷きもしないで雨を見た。

どうして気付かなかったんだろう。
ぼんやりと歩いていた一の目にそれが留まった。他の建物よりも、一際背の高い廃ビル。そのビルに絡みつく、苔生した一本の糸。
「……うっ……」
一の肌を何かが這った。圧倒的な嫌悪感。纏わりつく嫌悪感を振り払うように一は身を捩る。これは何だ、と。一はそれを見上げた。その正体を一は知っている。今まで生きてきて見た事も何度かある。触った事も、一度だけなら。だが、この大きさは何だ。
背の高いビル。何階建て、とまでは一に分からなかった。それでも二十メートルはあるのではないかと推測してみる。建物を見上げる首が疲れてきたので、一は視線を地面に下ろした。
「とんでもねえよ」
一は投げやりに呟く。建物の高さが二十メートル。だとすれば、そのビルに絡み付いている、巻き付いているソレの大きさはビルと同じくらいか、大きいか。
一はソレの姿を知っていた。ソレの名前も知っていた。だが、あの大きさだけはまだ飲み込めていなかった。気持ちが悪くて、心細くて一はソレから見えない位置まで逃げる。姿を隠し、深呼吸する。とぐろを巻いたその姿。どう見ても、何度みても、ソレは蛇だった。長い体だけが見えていて、蛇の頭は見えない。建物の中にあるのか、一からは反対側の方にあるのか。
ヤマタノオロチ。八俣遠呂智。八岐大蛇。
一は実感する。出会ったのだと。山田よりも先に、ソレに出会っ

てしまったのだと。とてもじゃないが、大声なんて出せそうに無い。出せば居場所を感づかれてしまう。かと言って、その場を立ち去るわけにも行かない。

――場を掻き回す。

「……どうやって……」

考え無しもいいところだ。一はビルを見上げソレを見上げ空を仰ぐ。

桁違いの大きさの蛇。

隣のビルに巻き付いた、ヤマタノオロチの出来損ない。

狙撃場所はビルの屋上。ソレを見ながら、長雨はライフルを構えた。雨で視界が悪い。蛇の急所も分かりづらい。仕掛けにくい。しかし、相棒の糸原ががなり出す前に撃たなければならなかった。スコープを少しずつずらして行く。頭はどこだ。

「……ん」

長雨の双眸がそれを捉えた。傘を持った、小柄な青年。何故こんな所に、こんな奴がいる。長雨はライフルを構えながら、考えをめぐらせる。そう言えば、と。糸原が勤務外の事を話していたのを思い出す。目つきの悪い女店長、眼鏡を掛けた優男、年端も行かないSV、火を使う女、高校生の勤務外が二人に、そして、そして。

――傘を持つ、小柄な青年。

使えると、長雨は思った。勤務外が予想よりも早く現れてしまったのは誤算だが、嬉しい誤算とも言える。自分たちが二の足を踏んでいる内に、あの勤務外に隙を作り出してもらおうと、長雨は考える。

長雨は携帯電話を掛けた。相手は糸原。ワンコールも鳴らない内に通話状態。

「……相棒、予定を変更する」

『はあ？　なんでよ？』

予想通り、不満げな声が電話口から聞こえてくる。
「勤務外が来た」
長雨は出来るだけ笑わないように、淡々と告げた。

糸原の、携帯を持つ手が震えた。雨で冷えた所為ではない。
「……へえ、随分と早いのね」
血の気が一瞬引いていき、すぐに全身を駆け巡る。平静を装うとして声が固くなっていた。
『ああ。意外と出来るじゃあないか勤務外。そこで、だ。彼にやってもらおうと思う』
「何をよ？」
彼。つまり、男。男の勤務外。
『俺の代わりに隙を作ってもらう。お前の代わりに奴を倒してもらう』
「……私たちは手を出さないって訳？」
『ああ。使えるものは何でも使わせてもらうとしよう」
分かっていた。それが『天気屋』のやり方。長雨と言う男。分かっていたのに、何故か納得出来ない。
「汚いんじゃないの、それ」
電話の向こうから、噛み殺しきれなかったであろう笑い。
『漁夫の利さ。簡単な話の筈だが？　俺たちは何もせずに金を手に出来るんだぞ』
「……勤務外が隙を作れなかったら？　倒せなかったら？」
『その時は俺が作る。お前が倒す。何も変わらん』
握った電話を潰しそうだった。どうしてなのか、糸原にも分からない。
『しかし、そうだな……。ヤマタノオロチを倒してもらったとしても、少々邪魔になるか』
「邪魔……？」

「ああ。俺たちが倒したと言ってもだ、その勤務外が真実を話せば報奨金は俺たちに出ないからな。さて、どうするか……』

恐ろしく冷たい声だった。ぞわりと、糸原の全身が総毛立つ。

「お、脅せば良いじゃない。喋ったら殺すって……。分け前をやるって言っても良いんじゃないの？」

『なるほど……』

考えていない。この男は何も考えていない。

『酷く面倒だな。分け前をやる理由も無い。脅す手間も掛かる』

「……やるのね」

糸原は手汗をかいていた。声はいつの間にか震えている。心拍数も徐々に上がってきている。どうしてなのか、分からなかった。

『ああ、やるぞ。とりあえず見に入れ。勤務外とソレの動きによって、俺たちがどう動くのか決める。良いな、そこにいろ。手出しするなよ』

「あの、さ」

『どうした』

一瞬口ごもる。

「……勤務外ってどんなのが来てた？」

『ふっ、なるほどなるほど？　かつての同僚か』

「赤い女だったら、厄介よ」

言わば、希望。

『ああ、心配要らん。男だ、傘を持ってる男。あんなでも勤務外になれる物なのだな。それとも何か、オンリーワンは人材不足なのか？』

言わば、絶望。

そして電話が切られた。糸原は繋がっていないそれを握り締めて、その場に立ち尽くす。

雨は、降り止まない。

それは記憶だった。これは、思い出だった。

「……おじさん？」

その日は雨が降っていた。

朝早くから、女は白い小袖と緋袴を身に纏い、男のいるであろう仕事場へと向かった。仕事場。杜氏。酒造りの場所である。

女の手には傘と包み。包みの中には、男の為の昼食が入っていた。今日も「美味しい」と言ってもらうために。

「なあ、今日は休みなのかー？」

女は入り口付近で異変に気付いた。何故、誰も働いていないのかと。平時なら、もう既に音がしていても良い筈。人の声、水の音、働く気配。そのどれもが今日はしていない。

ともかく、女は裏口の方へ回った。扉は開いている。酒造りの仕事場は、女にとって勝手知ったる我が家のような物なので、躊躇はしなかった。中は暗い。

「ヒロ？　いないのか？」

ヒロとは、今年で十六歳になる少年。女とも昔から面識のあった少年で、若いのに酒造りの現場で働くと聞いたときには女も感心したものであった。

この時間、いつもなら台所に飯焚（めしたき）のヒロがいる筈だった。台所で全員分の朝食を作り、ささやかな歓談を交わす。サボっているのを上役に見つかりヒロが怒られ、それを女が宥めるのがここでの、女の日課とも言えた。

「ヒロ？」

何も変わらない。これからも同じ。そんな朝の筈だった。

不思議に、不審に思いながら女は靴を脱ぎ、台所に入る。台所を抜けたところで女は異臭に気付いた。鼻を刺す、つんとした臭い。嗅いだ事のあるモノ。『神社』の仕事上、そういうモノには慣れていた。しかし、今、ここで、この臭いを嗅ぐとは思ってもみなかっ

た。
「……みんな……？」
生臭い、血の香り。女はそれ以上足を踏み出すことが出来なかった。明かりをつけようとも思えない。進みたくないから、見たくないから。だが、『神社』としての本能が先を促す。行けと、急きたてる。女の足取りは重く、鈍かった。それでも、少しずつ仕事場へと向かう。
「……しお、り……」
廊下へと差し掛かったところだった。
「――ッ！」
声が出なかった。突然、自分の足を掴まれた女はただその場で体を震わせる。
「い、行くな……」
「と、父さん……？」
視線を下げると、暗闇に目が慣れてきたのか人が倒れているのが見えた。その人物は顔も上げず、息も絶え絶えと言った風に苦しそうに呻いている。女の、父親であった。杜氏集団を纏め上げる最高責任者、酒造りの全てを任された親方。
女は父親の元にしゃがみ込む。体を抱きかかえると、女の手の平にベッタリとした、生暖かいモノがこびり付いた。
血。それも大量の。女は目を見開く。父親の腹部に大穴が開いていた。素人目にも、助かりそうに思えないような、致命的な穴。
「怪我してるじゃない！　病院、きゅ、救急車……」
女が立ち上がろうとするのを、父親は制止する。首を振り、女の手をしっかりと掴んだ。
「……俺ァ、助からん……」
「な、何を言ってるの？　父さん、気をしっかり持って。ね、他の人は……？」
男の事が気になっていたが、女は「他の人」と誤魔化して聞く。父親は悲しそうに顔を伏せてから、力なく首を横に二、三度振っ

た。

「……みんな、駄目、だ……」

「何が……駄目、なの？」

気付いていた。奥に進めば進むほど強くなっていく臭い。血の臭い。吐き気を催すほどの臭い。濃密な、死の気配。女は凄絶な考えに思い至るのを、父親の激しく咳き込む声で現実に引き戻された。

「父さん！　しっかり、しっかりしてっ」

「……すまな、かっ、た……」

父親は抱えられたまま、女の耳元に顔を寄せる。何事か囁いた後、いとも簡単に、あっけなく、父親は死んだ。女はしばらくの間何度も父親に呼びかけ、体を揺さぶる。

「……父、さん……？」

重かった。支える事を止めた体。支えられなくなった体。死体は、重かった。女はその重みを感じながら、声を上げて泣き出す。どうして、なんで、私たちがこんな目に遭わなきゃいけないの。

答えるものも、答えなど無い。

唯一の手掛かりは、父親の呟いた「――」だけ。

女は一しきり泣き、落ち着いてしまった後、父の躯を廊下に置き、立ち上がった。確かめなければならない。この先を、この後を、全てを。

女は走った。男に会いたい。その一心で走る。どう走ったのかも、どこを走ったのかも分からなかった。とにかく走り、只管走り、女は作業場へとたどり着く。締め切られている筈の作業場の扉。今日に限って、そこが開いていた。扉は開きっぱなしで、女が近づくと中からはアルコールの臭いがする。それに混じって、あの、血の臭い。その臭いがキツくて、女は顔を顰めた。

「――！」

心細くて、女は男の名を叫ぶ。何度も、何度も。返事は無い。女

は意を決して、作業場に足を踏み入れた。作業場の中には、大きな酒樽があった。臭いは、その中から発せられているように思われる。『神社』の勘だった。女は酒樽を見つめながら、水音を立てて歩く。ふと、女は足元に目を遣った。ただの水や酒にしては粘り気があり、不審に思ったからだ。屈んで、液体を指で掬う。どろりとした感触が、指先から全身に駆け巡った。

女の予想通り、それは血。

それも大量の血液だった。人間の一人や二人分ではきかないぐらいの量の血汁が、床一面に流れて、こびり付いている。まだ固まっていない事から、つい最近流れた血液だと、女はそう考えた。そして今も血は流れ続けている。あの、酒樽の中から。

「……」

女の手が知らずに震えた。一歩、また一歩そこに近づいていく。もう、全部分かっていた。理解してしまった。変わらないモノなんて、何一つ無いのだと。

作業場の隅に備え付けられた脚立を使い、上っていく。女はその一番上から、酒樽の中を覗いた。

ああ、見てはいけなかった。先に進んではいけなかった。そうすれば、少なくとも、少なくとも女は――

――地獄を見ずに済んだのに。

雨は、降り続いていた。

その話を聞いた漣は少なからず嫌悪を覚えた。ソレが現れた今の世の中では、さして珍しい話ではなかった。むしろ良く聞く話だ。親族郎党皆殺しにされた、何て話は。

「……よくもまあ、そんな事が出来ますよね」

問題は、その虐殺を行ったのがソレでは無いと言う事。

「いや、簡単だったのだろう。素手で人間を千切って樽に詰めるぐらいならば、な」

春風は事も無げに言った。

「違いますよ。どんな神経持ってんだって事です。死にかけだった自分を拾ってくれた人たちを皆殺しにするなんて、俺にはとてもじゃないけど……」

「お前は人間だからな」

「え、あ、まあ、一応人間と自負してますけど……」

その言葉を、春風は鼻で笑う。

「『神社』が追っているのはソレじゃない。人間の血が半分入ったモノなのさ」

「半分？」

漣は訳も分からず聞き返す。

「ああ、ヤマタノオロチの子孫だそうだ。そいつ本人にどれほど蛇の血が混ざっているかは知らんが、少なからず蛇が混じっているのは確実だろうな」

「……オロチの子孫、ですか？」

「恐らくは酒呑童子（しゅてんどうじ）」

「酒呑童子？　ヤマタノオロチの子孫が？　聞いた事もありませんよ、そんなの」

「お前が聞いた事が無いだけだろう。漣、アレは日本でも最悪に近い妖怪だぞ？　知らない方がおかしいと思うがな」

ふう、とわざとらしい溜め息を一つ吐き、春風は漣を見つめた。

見つめられた漣は気恥ずかしくて視線を逸らす。

「俺だって、それぐらいは知ってます。白面金毛九尾（はくめんこんもうきゅうび）の狐、大天狗。そして日本最強クラスの鬼、酒呑童子。三大妖怪の内の一匹、ですよね？」

「……そこまで知っていて、何故分からない」

「じゃあ、逆に聞きますけど。どうしてヤマタノオロチが酒呑童子と関係あるんですか？　スサノオに殺されたのに、どうして子供な

んて作れたんです？」
「ヤマタノオロチは殺されずに、スサノオから逃げ延びて富豪の娘との間に子を作った。その子供が酒呑童子だと、そういう話がある」
漣は怪訝な顔つきになっていく。
「へえ、初耳ですね。俄かには信じられませんけど」
「証拠とは言わないが、二匹には共通点が有る。オロチも酒呑童子も酒に倒されている、と言う所だ。スサノオも源頼光（みなもとのよりみつ）も恐れていたのさ。自分だけの、人間だけの力では倒せないとな。だから酒に頼り、寝首を掻いた。掻くしかなかったんだろうな」
「……まあ、そう言われちゃ頷かざるを得ない、ですね」
「信じるか信じないかはお前の勝手だ」

雨に打たれ過ぎたのかもしれない。雨音を聞いていたからかもしれない。山田はハッと我に返った。周囲を見回す。どうやら、自分は今廃ビルの入り口の前でぼうっとしていたらしいと、そう気付いた。短い銀髪を掻き毟り、自嘲の笑みを浮かべる。
「……何思い出してんだか」
独り言は雨音に打たれて、消えていく。
山田が思い出すのはあの日。あの日、瞳が捉えたもの。あの日、脳裏に焼き付いたもの。あの日の臭い、あの日の空気、あの、絶望感。全てが鮮明に浮かび上がってくる。逃れられない、忘れる事など出来ない。
「……ちっ」
湧き上がる悲しみ。去来する怒り。だが、それ以上に、憎しみが色濃く山田の中に影を落とす。拳を握り、やり場の無さに震え、山田は歯を食い縛った。

結局、一がオロチを発見して、オロチから見えないように姿を隠

してから五分が経過していた。
一はアイギスを抱え、時折オロチの様子を窺う。あまりに大き過ぎる存在。神経は麻痺しかかっていた。どうしようも、何かしようという気さえ起こらない。元々、一はソレと戦う気なんて無かったのだ。あくまでおまけ。山田の付き添い。いざ事が起これば、アイギスを使って手助けぐらいしようとは思っているが、自ら進んで戦おうなんて、そうは思えない。そもそも、一は糸原を目的にやって来ている。未練たらたらの、腑抜けた魂胆。諦めきれない、一途な思い。
「……」
携帯電話ぐらい買っておけば良かった、なんて一は思う。そうすれば誰かの意見を聞けたのに。誰かの言うとおりに動く事が出来たのに。
もう、勤務外として何度か戦闘をした。戦場に出た。ソレにも何度も出会った。それなのに、一は怖い。ソレが怖い。戦う事が、命のやり取りが恐ろしくて仕方が無い。考えれば震えてしまう。自分が傷つき、倒れ、死んでしまうのを想像してしまう。
その時、何か物音が聞こえた。一の耳は確かに捉える。何かが、動いた音を。音は廃ビルから聞こえてきた。ソレの、いる方から。
一は躊躇したが、体をずらし、塀から顔だけを出す。別段、先ほど見た時と何も変化は見られなかった。ふと、ビルの入り口を見る。赤い光が見えた。二つの、赤い光。それはまるで鬼灯のように赤く、ギラギラと獣性の伴った光。
その光と、一の目が合う。
「……あ……」
真赤な光。それがヤマタノオロチの目だと分かるのは、蛇の頭が完全にビルから出きった時だった。一は絶句する。
蛇の、長い胴体のほんの一部が、雨でぬかるんだ地面に現れる。泥を跳ね飛ばし、土を巻き上げ、蛇は進んだ。
ビルの入り口から一のいる場所まで、使われなくなった工事現場

を挟み、距離は離れている。だが、あくまでその距離は人間からのもの。ビルに巻き付いた蛇が少し体を伸ばせば、そんな距離など無いに等しかった。

――まずい……。

一は顔を塀の内側に戻し、呼吸を整える。ソレが何故姿を現したのか。もしかしたら、自分がここにいるのがばれてしまったのかも知れない。

ギュッと、一はアイギスの柄を握った。不思議なくらい呼吸は落ち着いていた。先刻まで全身に付き纏っていた重圧めいた空気は、とっくに消えている。

蛇は頭を揺らしながら、少し開けた工事現場を徘徊していた。獲物を探しているのかもしれないし、ビルに巻きつくだけでは窮屈だったのかもしれない。鬼灯のような赤い目が爛々と輝き、二又の長い舌を出し入れしながら、蛇は進む。

「ふう……」

自分ひとりだ。一は今の状況を頭の中で整理した。助けてくれるモノもいない。ここにいるのはソレと自分だけ。逃げ出したかった。だけど、自分がやらなきゃ、いつか必ず犠牲が出てしまう。犠牲。一自身か、一の知っている人間か、知らない人間か。だが、ソレを放っておけば誰かは死ぬ。

蛇は少しずつ一の元へ迫ってきていた。もう、距離は無い。

どうせ。どうせ、と一は思った。

奮い立たせる何かを一は探す。どうせ、いつかは死ぬんだ。どうせ、いつかは殺される。今か、今じゃないか。それだけの違い。それにヤマタノオロチは完全体ではない。話だけでは信じきれなかったが、あの頭。図書館で調べたものとは違う。頭は一つしかない。

「ただの、でかいだけの蛇じゃねえか……」

やるなら、今しかなかった。一がソレと戦えるのは今しかない。

蛇の頭が、工事現場を抜けた。

「だったらさあ！」

蛇の目が一を捉えるより先、一が動く。傘の石突きの部分を目立つ所へ振り下ろした。赤い、赤い、真赤な瞳。

だが、一は力が入り過ぎていた。傘の先端はソレの目に刺さらずに、その僅か上の部位に刺さってしまう。鱗を食い破り、石突きはソレの体に食い込んでいく。血が傷口から溢れ、蛇は呻く。ダメージは僅かなりとも与えた筈だ。一は確かな手応えを感じ、反撃を食らう前にアイギスを引き抜く。

「……っ！？」

引き抜けない。

一が思っていたよりも深く刺さってしまったのか、アイギスは一が力を込めてもビクともしなかった。

蛇の赤い目が一を捉える。睨まれた一は身の危険を感じ、一旦アイギスを諦めた。蛇の頭を通り抜け、工事現場へと走りこむ。ぬかるんだ地面は酷く走りにくかった。泥が跳ね、服を汚していく。既に服は血と雨でぐしゃぐしゃになっていたので、一はそんなに気にならなかったが。とりあえず、このままビルへと逃げ込む事を決めた。泥に足を取られながらも、必死に走る。その後ろに蛇の気配。

「――――！」

空気を切り裂くような、高い音。蛇が鳴いた。

一は咄嗟に横っ飛びする。一が地面に着地するより先、蛇が一のいた所を、大口を開けながら突き抜けた。蛇はそのままビルの中へ身を隠す。頭に続いて、胴体がビルの中へ入っていくが、獲物を持たない一は何も出来なかった。とりあえず、辺りを見回す。工事現場だったであろう広場。その隅に廃材の山があった。近づいていき、手頃な角材を掴む。何度か試し振りして、一はこれに決めた。

何とも頼りなかった。

「ま、木の枝よっかマシだな」

苦笑する。やはり、麻痺していた。

突き過ぎた藪

「あんのバカ……！」

自分が折角忠告してやったというのに、しこたま殴りつけてやったというのに、そいつはそこにいた。ソレに立ち向かうにしては、あまりにも力不足な、頼りないモノを持って。一は角材の感触を確かめるように素振りしている。今から草野球でもしに行くかのような、気軽い雰囲気で。

糸原は物陰から一を睨み、歯軋りして、スーツの内ポケットから携帯電話を乱暴に引き抜いた。

『……どうした』

程なくして、冷たい声が聞こえてくる。

糸原は深呼吸してから、

「作戦変更よ私が出るわあの勤務外には頼れないからねオッケー？ちゃんと援護してよね」

一気に捲くし立てた。

『いや、このまま待つぞ』

ピクリと、糸原の眉が動く。

「あー、ちょっと早口過ぎた？　あの勤務外はね、もう駄目。戦えないの。だから、私が出るしかない。分かった？　分かってくれた？　分かってくれたわよね？」

『それでも、囮ぐらいには使えるだろう』

「……本気で言ってるわけ？」

『それは俺の台詞だ。わざわざあの男と揃って食われるつもりか？』

「んなつもりも趣味も無いっつーの」

わざとらしく溜め息を一つ。

「あんたが何と言おうと、私は動く」

『そうか。ならばあの男を撃つしかないな』

糸原の聞き間違いじゃなかった。

「何ですって？」
『あの男を殺すと言ったんだ』
まただ。勝手に糸原の呼吸が乱れ始める。鼓動が早くなる。喉が渇きだす。
『相棒、お前の様子がおかしい事には気付いていた』
長雨は続けた。
『お前と再会して、俺は随分と驚いたぞ。あの女がここまで丸くなるものかと、変わるものなのか、とな』
「私は……変わっちゃいない」
苦虫を噛み潰したような糸原の表情。自分の顔も、長雨はスコープ越しに覗いているんだろうと考え、糸原は更に顔を歪ませる。
『いや、変わった。俺が言うんだ、間違いない。微笑ましいぐらいに人間らしくなったじゃないか。育ての親として少しばかり鼻が高くなるな。こんな俺でも人間を一人育て上げられるのか、なんてな』
「あんたなんかに育てられた覚えは無いわ……！」
フッと、電話越しに哂われた。
『お前の糸も、意図も、誰がそこまで叩き込んでやった？』
「うるさいっ」
『答えろ、四乃。親に捨てられたお前を拾ったのは？　名前を付けてやったのは？』
「頼んでないでしょうがっ！」
このまま電話を握り潰してやろう。糸原は力を込める。モノが軋む音が長雨にも伝わった。
『その電話も、俺が渡したものだろう？　タルタロスで取り上げられなかったようだな。これは驚きだ。くくっ、最近は驚かされ続けている。俺もまだまだ勉強が足りないなあ』
「黙って私に従えってのよ！」
『お前を変えたのは誰だ？』
思わず、糸原の体が硬直する。芯まで底冷えさせられ、体が震えた。

『答えろ。お前を変えたのは誰だ？』
答えられるはずが無い。
「私は私よ！　私のまま！」
なるべく冷静になろうと試みるが、すぐそこにある絶望が邪魔をしている。糸原は話題を逸らそうと必死に努めた。
「……とにかく長雨、そろそろね、私も立ちっぱなしは飽きてきたの」
『都合の悪い事からは話を逸らす、か。話術は進歩していないな。そうか、そうか』
「長雨？」
『気に入らないな。手塩にかけて育てたモノを横取りされた気分だ』
その言葉に、糸原の胸糞が悪くなる。
「私はあんたの物でも、誰の物でも無いわ」
『ああ、そうだな。撃つか。勤務外だな。勤務外がお前を変えたんだな。あの男か、それとも別の誰か。少しばかりむかむかして来た』
「違うわ。けどね、私の指示を無視する気なら、私にだって考えがあるわよ」
『いつから俺に指図できるようになったんだ、羊飼い？』
「押し問答してる時間は無いの。切るわ」
糸原は無益な通話を終了すべく、ボタンに手を伸ばした。
『切れば撃つ』
指が止まる。止められる。たった一言で。
『見えてきたぞ、やはりお前を変えたのはあの男のようだな』
「はっ、何が見えてきたって？　老けたんじゃないの、長雨」
『男を撃つ。お前が勝手な真似をすれば撃つ。電話を切れば撃つ』
「乱暴ね」
皮肉を込め、敵意を込める。
『嫌いじゃないだろう？』
軽々と皮肉で返され、糸原の眼光が鋭くなった。
「あんたの、そういうふてぶてしいトコは嫌いじゃないけどね」

『くくっ、アレがそんなに大事か？　一体どんな話術、魔術、技術を使われればお前がこうまで甲斐甲斐しくなるのか。気になるなあ。あの男には、俺にも是非ご教授願いたい』

「……どうすれば良いってのよ？」

埒が明かない。このままでは、このままでは。

『大人しくしていれば良い。そら、状況開始だ』

何気なく、糸原はソレの方へ目を遣った。

蛇の頭がビルの入り口から現れる。一はアイギスがまだ蛇に刺さったままなのを確認して、まずは一息吐いた。もしもアイギスがオロチの飼い主とやらに奪われていれば洒落にならない。持っている角材ではどうにも頼りない。

「……きやがれってんだ」

蛇は一に答えるかのごとく、鎌首をもたげた。高い位置から獲物を見下し、細長く甲高い威嚇音を発する。口を大きく開くと、獰猛な牙が顔を覗かせた。

まずは攻撃を避けなくてはいけない。一は蛇から距離を取るように後ずさる。

獲物が怯んだところを見るや否や、蛇はそれへ食らいつくべく飛び掛った。一は持っていた角材を投げつけ、蛇の右方向から回り込む。狙いはアイギス。蛇は角材など殆ど意に介さず、真っ直ぐ向かった。しかし、一にとっては一瞬でも蛇の狙いが逸れれば良かった。間一髪と言うところだが、蛇の大口は空気と泥と雨だけを飲み込む。一はアイギスの柄へ手を伸ばし、思い切り引き抜こうとした。

「だああ！」

だが、引き抜けない。雨でぐちゃぐちゃにぬかるんだ地面の所為か、踏ん張りが利かないのだ。時間もチャンスも、もう訪れないかもしれない。そう判断した一は柄を握ったまま、蛇の体目掛けて飛んだ。ソレの体に突き刺さったままのアイギスを支点にして、一は

バランスを崩しながらも着地する。
蛇は一を振り落とす為に体を揺すった。泥がそこかしこに跳ね、一と蛇の体を汚していく。
泥が目に入りそうになったので一は思わず目を瞑った。蛇の縦横無尽な動きが一を揺さぶる。えげつないロデオ。落ちれば食われてそこで終わり。必死にアイギスにしがみ付き、声にならない声を上げ、耐え続ける。
「返せっつーの！」
靴底に付いた泥を蛇の鱗で削ぎ落とし、眼下の地面よりは踏ん張りが利くようになったところで一はもう一度力を込めた。さっきまではビクともしなかったアイギスが少しずつ抜けていく。もう一息。
「――――――ッ！」
痛みに耐えかね、蛇が今までに無い動きを見せた。体に乗った異物を振り払う為と言うよりか、どうしようもなく体を只管に震わせるような、本能から来る動き。一は対応できずに足を滑らせた。アイギスの柄を掴んだまま、片足を宙に遊ばせる。必死に足を伸ばすが、もう蛇の動きは捕らえ切れない。
「あと少しっ……！」
無理な体勢から、一は根限り力を込める。
「――――！」
届かなかった。蛇の頭が上下に揺れて、一は中空へ投げ出される。叫びは雨音より小さかった。一の視界が灰色の雲とビルだけになり、すぐに転換。地面と蛇の体を視界の端に捉えつつ、地面に叩きつけられた。腹を見せた状態では受身も取れず、緩やかにワンバウンドしてから体を大の字に伸ばす。
「いたい……」
情けない声。動けない。動かしたくない。もしかしたら、今度こそ骨でも折れたんじゃないかと、雨に濡れて唯でさえ冷たい体に冷や汗が流れる。
すぐ傍には蛇の体が見えていた。恐怖を感じながら、一はそれで

も動けない。
「……くそ……」
蛇は未だ体を揺すって、地面に擦り付けて痛みを逃がそうと苦心している。立つなら今しかない。一はおっかなびっくり体を駆動させていく。
「お」
動いた。動ける。まだ動ける。
今日が雨で助かったと一は思った。地面がぬかるんでいなければ、衝撃が吸収されずに固い土へ強かに打ちつけ、本当に骨でも何でも折っていたのかもしれない。
ツイてるのか、ツイていないのか。ともかく、一の手元には角材どころかアイギスが帰ってきていない。何も無い。徒手空拳じゃアクションを起こす気にもなれないが、そこらの角材を掴んだところで結果は変わらない気もしていた。
もう一度飛び乗るしかない。
手詰まりではないが、恐ろしくさじを投げたくなる状況に一は追い込まれていた。
それでも、一は絶望していない。
悲観もしていない。悲壮感などここにはない。
落胆も失意も失望もない。断念も観念も諦観こそしていない。
どうせ、自分が出来る事は限られている。選択肢など端から存在していない。こと、戦闘行為に関しては、自分が成しえる事など絶無だと、理解していた。
一一には、殆ど何も無い。能力も武器も意思も信念も信仰も戦術も戦略も皆無だと、そう信じていた。
自分にある物は借り物の力と、ほんの少しの願望。向こう見ずな勇気。命知らずと謗られても、無考えと哂われても、無茶でも無謀でも何でも良い。
何故なら。
一は蛇に向かって歩き出す。唇の端が何故か釣り上がった。頭を

打った覚えは無いが、どこかおかしくなったのかもしれない。それでも良いやと一は笑った。

鬼灯の様に赤く染まった二つの瞳。正面から向き合い、一は照れくさそうに頭を掻いた。

蛇は狙いを定め、舌を覗かせ牙を尖らせ口を開いて歓喜に酔う。もうすぐ自分を手こずらせた獲物を食える、と。あと少し、もう少し食べれば、なれる。なれる。なれるのだ。本物のオロチに。日本神話唯一と言っても良い蛇神の力を手に出来る。あの、八俣遠呂智に。

一は笑う。

力は無い。ソレを一人きりで殺しきるなんて有り得ない。

武器は無い。女神から盾は借りているが、奪われたまま。

意思など無い。糸原、と。名目はあったが、流されるままにここに来たような物だった。

戦術も戦略も作戦も戦法も、何も知らない。薄っぺらな、向こう見ずな勇気だけ。

だから、もう良い。要らない。

「お願いします」

吹っ飛んだ。

ソレが何かに横合いから殴りつけられ、工事現場の一番端、ブロック塀まで飛ばされた。蛇は体を薙ぎ倒され、ブロックを破壊しながらけたたましく啼いた。耳を劈く破壊音と衝撃音。ソレの頭はブロック塀の下敷きになる。

「うわ……」

一は思わず呻く。

「はじめぇ！　大声出せつったろ！」

蛇の長い胴体を踏みしだきながら、袖の破れた白い小袖、緋袴を身に纏った女が現れる。女の短い銀髪は雨を弾いていた。その様子

に一は少し、見惚れる。
「……ああ、はい」
「はいじゃねえだろ。おら、怪我ねえか？」
――山田栞。『神社』。八塩折の切り札。破戒巫女。
「無い、と思います」
「……よく持ってたな。出来損ないとは言え、ありゃオロチだぜ？　並の神経してねえんだな、勤務外ってのもよ」
「褒めてくれてます？」
山田はぶっきら棒にそっぽを向く。
「褒めてやるよ。古今東西、あんなのに夜討ち不意打ち何も無しで突っ込む奴はそうはいねえぜ？　どっかが壊れてるか、そもそも元から無いのか、人間にしとくにゃ勿体無いな」
「……褒めてないですよ」
「うるせえ。しっかしまあ、アレだ。認めてやるぜ勤務外。惚れちまいそうだぜ、一一」
「そりゃどうも。そいじゃ俺は休んでおきます」
一は山田に背を向けた。
「おいおい。八塩折（オレ）の酒が来て、スサノオ（おまえ）がいるんだ。蛇退治はこっからじゃねえの」
グッと、山田は一を逃がすまいと肩を掴む。非常に痛かった。
「十束の剣なら持ってないんです。あいつに取られちゃいましたよ」
「あー？」
一はソレの頭を指差す。山田もつられてそこに目を遣った。
「あー、あーあーあー、成る程な。ありゃ鱗にでも引っかかってんだろ。よっしゃ、まずはあの傘取り返せば良いんだな」
「くれぐれも丁重に。ギリシャのそこそこ良い盾なんですから。女の子を扱うように優しくお願いしますね」
「任せろよ男前」
豪快に笑って、山田はソレの元へと駆け出した。
「任せたぜ男前」

何も無くて良い。一はとみにそう思う。
自分には何も無くて良い。力も技も武器も意思も、要らない。仲間がいれば良い。代わりに戦ってくれる人がいれば良い。一緒に死んでくれる人がいれば良い。だから、自分に見せ場はいらない。何もいらない。

何故だか悔しかった。無性に腹が立った。何も出来ない自分にか、自分以外の人間を頼ったあいつにか。理由は分からない。とにかく、釈然としない。
『あいつか。行動不能に追い込んだ筈だが』
「……自慢じゃないけど、骨もイかせたし、内臓も潰した筈よ。私がね」
語尾を強め、糸原は得体の知れない苛立ちを長雨にぶつけた。
『ふん、こうなってしまえば、お前を突っ込ませておいても良かったな。神社が来てしまった、となると手間が掛かりすぎる』
「二回トリガーを引くだけじゃない」
『違う。単純に捉えればそうだが、そうではない。あの男一人ならばどうにでも出来たが、二人になると話は変わってくる。一発、ないし殆ど連射で仕留めなければ俺の位置が割り出される。自慢じゃないが、接近戦は苦手なんだ』
「はっ、臆病風吹かせるからよ。で？　どーすんのよ。このまま見とくだけ？」
『そうだな。ソレを倒して気が緩んでいるところに撃ち込むとするか。神社ならば、手負いだとしても倒しきるだろう。有り難い話だ』
ハッと、糸原は鼻で笑う。
「そこまでやりゃ臆病者も充分立派よ」
『と言う事でだな、相棒、戻って来い』
「……そう、ね」
一先ずは安心だろう。納得はしていないが、『神社』ならばそこ

そこは安心だ。それに、自分が長雨の傍にいれば何かしらの牽制も出来る。

「分かったわ」

『安心したか？』

「何がよ？」

『奴が撃たれなくて、安心したか？』

冷たい。どこまでも冷たい声だった。

糸原は返事をせずに通話を切る。さっきまでは気にならなかったのに、やけに雨が鬱陶しくて、冷たくて、悲しかった。

「おらあっ！」

山田の拳が蛇の胴体に減り込む。蛇は啼き、赤子の様に喚いて体を捻らせ捩じらせる。もはやそれは悲鳴だった。

戦闘は激化している。

一は離れたところで山田とオロチを見ていた。圧倒的だった。山田は、只管に強い。どうしてこんな人が糸原に負けたのだろうかと、疑ってしまうほどに。オロチはまだ出来損ないだと言っていた。それでも、それでもやれるものか。ここまでやれるものなのかと、一は震える。

そして思った。

「栞さん！　俺の傘！」

早くアイギスを。未だ原形こそ留めているが、蛇の激しい動きで根元から。何てことも有り得るかもしれない。実際、そんな事は起こり得ないだろうとも思ってはいたが、どう見てもただのビニール傘のそれを見ると、どこか、そんな普通めいた考えも湧いてきてしまう。

一の不安を知ってか知らずか。山田は傘の事など忘れたかのように拳を振るっていた。無茶苦茶に、滅茶苦茶に。狙いなど知った物かと、ただ、ただ拳を振り上げ、振り下ろす。無暗に、矢鱈に。

蛇は拳を食らい、鱗を剥がされ、肉を捲られ、時には骨を砕かれる。その度に奇声を上げ、啼き、喚いた。

圧倒的。

少しばかり、一はやり過ぎだと思ってしまう。無論、蛇に対して何の情けも持ってはいなかった。だが、それでも。

「……何で」

どうして、山田はあんなに怒っているのだろう。一はどうしてか分からないが、そう思った。

憎い。憎い。憎い。

こいつが、こんな奴がいなければ、いなければ、あんな事には、こんな事には。

「あああああああああ！」

既に蛇は動きを止め始めていた。生命力が人間よりも幾分か優れていようが、こうまで痛めつけられては動く気すら起こらないのだろう。真赤な瞳は力無く、虚空を見つめている。

「栞さんっ！」

自分を呼ぶ声が聞こえた。そこで山田は我に返る。拳を下ろし、肩で息をしながらソレを見遣った。もう、蛇は抵抗しない。ヤマタノオロチの出来損ないは動く事を諦めている。

「……いけねえ」

山田は無造作にアイギスを引き抜いた。傷口から血が溢れ、鱗が剥げたが、蛇はもう呻く事すらしない。

「栞さん……」

「おらよ」

近付いてきた一にアイギスを放る。一は両手でそれを受け取った。

「死んでるんですか？」

「いや、まだ生きてるけどよ。生きてるだけだな」

「生きてるだけ、ですか？」

一は訝しげに尋ねる。
「ああ、放っといても良い。飼い主を探すぞ」
山田はビルを見上げた。一も倣い、同じく見上げる。
「馬鹿と煙は何とやら、ですか」
「ただの馬鹿なら良いんだけどな。相手はとびきりの馬鹿だ。気を付けろよ」
呟くと、山田はビルの入り口に足を踏み入れた。
一も続く。建物内は電気など通っておらず、薄暗かった。色濃い闇が視界を狭め、足を踏み出す気力を挫く。瞼を閉じ、無理矢理に目を慣らそうとした。
「上だな」
「上、ですか」
ヘッと鼻で笑うと、山田は階段を顎でしゃくる。
「濁ってやがる。上に行くほどにな」
何が、とは聞かなかった。分かってしまった一は、黙ってアイギスを握る。
「オレの前に出るなよ」
頷き、一は山田に続いた。
――失策。
最初にそう気付いたのは一だった。何かが砕ける音。弾かれるように振り返る。
居た。
一たちが入ってきたビルの入り口。そこから大きく、ソレ自身の、顎の関節を最大に開けた口が見えた。
「一ッ！　下がれ！」
間に合わない。獲物を飲み込むべく、大穴が一らに襲い掛かる。
そこには二つ、口があった。皮も鱗も引き裂かれた、見るも無残な蛇の頭と、その頭からまっさらな頭が生えていたのだ。二つの分かれた、首が。二俣の、オロチ。
蛇の生命力を、生きようとする気概を、死にたくないという執念

を山田は甘く見ていた。一もまた、油断していた。
そう、執念深いモノを例える時に使われる生き物。
――蛇。
蛇はまだ、死んでいなかったのに。

長雨は笑った。あまりにも楽しそうに。あまりにもおかしそうに。あまりにも、嬉しそうに。
「気持ち悪いわよ、何笑ってんの？」
咎めるような糸原の口調。だが、長雨は気にする風でもなく、スコープを覗き続ける。
「腐っても蛇。八俣遠呂智は力を取り戻しつつあるらしいな」
ビルに戻ってきた糸原は、濡れた髪の毛を手櫛で整えていく。
「……説明を求めるわ、私にも分かるようにね」
クククと、怖気の走る笑い声。糸原は身震いを隠す。
「狂ってきたんだよ、予定がな。あのフリーランスと男。五体満足じゃ出てこられんな。いや、そもそも満足な部位が残っているかどうか……」
「蛇は死んだんでしょ？　そう言ってたじゃない」
「アレはただの蛇じゃない。とっておきの悪意が込められた、とびきりの悪意だ」
糸原は舌を打つ。やっぱり、か。
「狂ってんのは、誰かしらね」
恐らくは目の前の男。長雨は何かを知っている。もしかしたら全部知っているのかも知れない。何も知らないのかも分からない。だが、糸原は直感した。
――天気屋はもう終わり。
レージングを構えると、糸原は長雨から距離を取る。
「タイミングが良すぎるのよね」
「藪から棒だな」

長雨はスコープから視線を逸らさない。
「あの電話も、あの蛇も、あのフリーランスも」
自分の、気持ちも。
「何もかも、あんたの掌に纏められてる。動かされてる。これは私の勘違い？」
「勘に頼るなと教えた筈だ」
空を切り裂く風切り音。
「……何の真似だ」
長雨のすぐ傍の、コンクリートの壁が削り取られる。
「あんた、何を知ってるの？」
長雨は一向に視線を逸らさない。
「やはり、あの男を撃つべきだったな」
「……じゃあ撃てば？」
そこで初めて、長雨が糸原に視線を寄越した。
「言ったろう。俺は、殴り合いは好きじゃない」
そして穏やかに笑みを湛える。
「平和的に解決しようや、相棒。そう、天気屋らしく、な」
長雨が取り出したのは、銀色に輝く一枚の硬貨。それを見て、糸原も笑った。
「私がタルタロスにぶち込まれた時の？」
「ああ。あの時にコイントスで使った百円玉だ」
裏か、表か。
たったそれだけの事で。全てを決められる。
「安い命だ」
「はっ、百円？　そんなんで先を決められるだなんて――」
糸原はコインを長雨から受け取り、
「――勿体ないくらいよ」
指で中空目掛け弾いた。
「裏だ」「表よ」
やがて、コインは糸原の手の中に吸い込まれる。

「あの時も、俺は裏を取り、お前は表を取ったな」
まるで勝ち誇るように長雨は口元を吊り上げた。
「あの時は、私が地獄を見て、あんたが地獄を見ずに済んだっけね」
目を瞑り、糸原は静かに微笑む。
「四乃、分かってるな？　俺たち天気屋の意見が割れた時には……」
「……覚えてるわよ。『運に頼れ』ってね。けどさ、私としては勘と運の違いってのを教えて貰いたいところなのよね」
「ふん、百円以下の安い自分なんざ信じるなって事だ」
あっそ。短く呟き、糸原は外の景色を見遣った。蛇がざわめき、蠢いているのが見える。あのビルの中に、あいつはまだ居るのだろうか。
「さて、確認しておこうか。コインが裏なら、お前は俺の言う事を聞く。表ならば、俺がお前の言う事を聞く。問題は？」
「無いわ」
「そうか。先に言っておくが、俺は、お前を俺の物にするぞ。一生。死ぬまで俺の傍に居ろ。そう言うつもりだ」
「へん、あっそ」
糸原は手を広げる。銀の光が煌いた。

雨が、降り続く。
彼女は雨音に耳を傾けた。少しだけ、振り返る。
身寄りの無い、親に捨てられた自分。拾ってくれた男。名前を付けてくれて、育ててくれた男。天気屋としての、相棒。裏切る事と騙す事でしか、彼女はこの世を生き抜けなかった。それ以外の方法を、知らなかった。
だけど、彼女は知ってしまった。気付いてしまった。
だから、彼女はもう。

「残念、私は誰の物でも無いし、誰かの物になるつもりも無いわ」
「表、か」
コインは、表だった。糸原は内ポケットにそれをしまい込む。
長雨は厭世的に笑う。彼もまた、直感したのだ。
「……あんたにゃ少しぐらいは感謝してるわ。けどさ、もう私裏切りたくないのよ。もうね、しんどい。疲れた。限界」
「傘の男、助けるのか？」
「裏切ったり殴ったり詰ったり。滅茶苦茶にしてやったけどね、へん、知らないわ。私の好きなようにやらしてもらうんだから」
そうか。それだけ言うと、長雨は床に腰を下ろす。
「我儘に育ったものだ。間違えた、かな。折角の右腕を手放してしまう事になるとは」
「駒の間違いでしょ。新しくパートナー見っければ？」
「さて、自信が無いな」
笑い飛ばし、糸原は背を向けた。前を向いた。
「そいじゃ、行くわ。生きててもその顔、もう見せないでよね」
糸原はポケットから携帯電話を取出し、床に滑らせる。高く、乾いた音が室内を占拠した。
「四乃、愛している」
「聞こえない」
それだけだった。糸原は駆け足で室内から、このビルから、長雨の元から立ち去ったのだ。
「さて……」
随分とあっさりした再会と別れ。ここまでお膳立てして貰ったと言うのに。
痛い。しかし、長雨は心のどこかでは、これも良しと納得している。雛鳥の巣立ちを見送る親の気分。恋い焦がれたヒトを達観して見送る気分。これも人生。これが別れ。これで良い。
それに、自身が生きているならばまだ機会は残されている。一人ほくそ笑むと、長雨は事の顛末を見届ける事に決めた。

チャンスをくれた、あの男への礼儀として。

ああ、雨はまだ降り続けていた。

蛇に睨まれた蛇

素晴らしい、出来損ない。

階段付近のスペースが狭かったのが、一にとって幸いした。背後からの、二つの頭を有した蛇。ソレの奇襲は功を奏さない。広げたアイギスによって、蛇は充分な力を発揮出来ないでいた。頭が多くても中身は獣。獲物を奪い合うが如く、互いに互いを押し合って、蛇の進軍は困難を窮めている。非常に、自分勝手に。非力な一でも耐え切れるほどに。

「一、どけ！　オレが仕留める！」

「……ダメです！」

「言ってる場合か！」

一よりも進んでいた山田が踊り場から叫ぶ。

だが、

「先に行ってください！」

一は山田の援軍を拒んだ。

「頭潰しゃあ終わりだ！　邪魔なんだよ！」

違う。そうじゃない。頭は、ここに無い。一は頭を振る。

「……頭じゃない！　分かってるでしょうに！　オロチの頭は、こいつらじゃないんです！」

山田は一の剣幕に面食らう。

「な……？　お前……？」

邪魔だ。邪魔だ邪魔だ。自分の見せ場はもう終わりだ。

「あんたの相手はこんな雑魚じゃない！」

疲れた。一はアイギスを握る手に力を込めて蛇を押し戻す。蛇は一の気勢に圧されたのか、すぐには仕掛けてこなかった。その隙に一は振り返る。

「なるべく早く、頼みます」
静かだが、力強い声だった。半ば気圧されるまま無言で頷くと、山田は駆け出す。一はその音を聞いて少しだけほっとした。
もう、時間が無い。

情報部がヤマタノオロチを確認してからきっかり三十分後、オンリーワン北駒台店の電話が鳴った。時刻は十時を過ぎた頃。電話に出たのは店長。その場に居た勤務外は三森のみ。この日、深夜勤務に入っていたはずの一は未だ姿を現していなかった。
「連絡は？」
気楽そうに三森が尋ねると、店長は睨むだけで何も言わない。
「……別に、今に始まった事じゃねェだろ」
オンリーワンのバイトは長続きしない。ソレと深く関係している所為だ。誰も、危険には首を突っ込みたくない。
「そうじゃない。いや、確かに一と糸原は首を捻りたくなるほど腹が立つがな」
店長は首を振る。
「じゃあ何だよ？」
「情報部の手際の悪さだ」
「……春風か？　それも今に始まった事じゃねーだろ」
三森は指と指を擦り合わせ火花を走らせ、銜えていた煙草の先を火で浸した。
「奴は何か隠している」
「そりゃ、いつもの勘か？」
ああ、と。店長は自信たっぷりに頷く。
「私は、私しか信じないんでな」
「……あっそ。そういうンは任せる。私は戦うだけだ」
三森は煙草を灰皿に押し付けた。
「どうしたら良い？」

「うん、現場までは遠い。堀が迎えに来るまで店で待機だ」
「あ？　店には誰が残るンだよ」
「ゴーウェストを堀が拾ってくる。可哀想に、今日は休みだったのにな」
遠い目で店長は呟いた。
「どれもこれもあいつらの所為かよ。ちっ、顔見せやがったらぶっ飛ばしてやる」
「……そうだな。罰をくれてやろう」
彼らが、帰ってくるのならば。戻ってきてくれるのならば。

走った。
振り返りたくなるのを堪えて、足を止めてしまうのを耐えて、山田は走った。彼女の背には一の命が圧し掛かっている。不思議と、重たくは感じなかった。でも、早く、もっと早く。
飼い主。八俣遠呂智の飼い主さえ何とかすれば。あの男さえ倒せば。あいつさえ、止める事が出来れば終わる。
淀んだ空気を肩で掻き分けて、山田は辿り着いた。ビルの最上階。迷う事はない。部屋は一つしかなかったのだから。入り口の前に立って目を凝らすと、誰かが居るのが見えた。異常。山田は油断せず部屋に足を踏み入れる。
大きな部屋だった。恐らくは大人数の会議にでも使う予定だったのだろう。部屋の中央には長机が幾つもあり、長方形をかたどっている。壁には、立て掛けられたパイプ椅子。
「●●」
山田は名前を呼ぶ。今までに何度も呼んできた、呼びたくて仕方の無かった名前を。ずっと、追いかけていた人を。

「ほほ、オロチを仕留めたか？」

しゃがれた声が返ってくる。山田は顔を顰めた。
「まだだよ。今からだ」
知らない。聞いた事の無い声だった。状況が分からない。理解出来ない。あいつはどうした。分からない。分からないが、今までの『神社』としての経験が山田を状況に対応させる。こいつは、敵だと。
拳を作り、山田は一歩踏み出す。異質な空気が体に纏わり付いて、酷く息苦しかった。
「ワシを殺すか？　お若いの」
ちっ。山田は舌打ちして、相手を探りながら声を発する。
「オロチをどうにかしろ。さもねえと、知らん顔だからって容赦しねえぞ」
「恐い恐い、最近の若いのは血の気が多くていかん、いかんぞ娘。もっと冷静にならんとなあ」
「オレの性分だ。何十年経とうが変わりゃしねえぜ」
ほっほっほっ。ヒトを小馬鹿にするような笑い声。
徐々に、暗闇に目が慣れていく。山田はついに声の主を捉えた。主は椅子に座っている。白いマントを羽織った、小柄な老人だった。顎に髭を蓄えていて、彼はそれを指で弄っている。一見すればどこにでもいる好々爺だ。
だが。普通の人間が、ましてや老人が、こんな所に、こんな朽ち果てた場所にいる筈が無い。
「爺さん、オレは急いでる。あんたをぶっ飛ばすのが早いのか、あんたがソレを止めんのが早いのか、まだ計りかねてるだけなんだぜ？　慎重に言葉を選んでくれよ。オレは頭が悪いんだ」
かはは、と。豪快に笑う。笑いながらも、警戒は怠らない。机を挟んで、山田の向かいに悠然と座る老人。間違いなく、何かある。
「話に聞いた通りで驚いておるよ、娘。いや、フリーランス『神社』」
老人は禿頭を恭しく下げると、

「遅くなってしまったが、初めましてじゃな」
わざとらしい所作ではあったが、彼には不思議と似合っていた。
「はっ、ご丁寧にどうも」
不敵に笑い、山田も返す。
「で、聞きたいんだがよ。あんた以外の人間がここにいなかったか？」
「ほっ、面白い事を言うのう、娘。ここには人間なぞおりゃせんよ」
老人は長い顎髭を弄りながら視線を部屋の隅に向けた。
「いるとすれば――」
コロリ、と。
物音が聞こえた。山田は音のした方、部屋の隅に目を向ける。
「――蛇の吾子（わこ）、鬼の首くらいかの」
老人は快活に、愉快に笑った。それこそ、鬼の首を取ったかのように。
山田の目が見開く。まるで、信じられないようなモノを見る目付き。転がってきたのは、ヒトの首だった。その首は、その顔、その、男は。
「……●●、情けねえな」

探し続けていた男は。

それも一瞬の事。目を瞑り、山田は擦れた声を出す。疲れ切った、何かを打ち砕かれたような絶望が重くもたれ掛かり、体から力が抜けていく。
「蛇を渡してやったというに、少し反抗的だったのでなあ」
「……そりゃ、手間が省けたぜ」
「んん？　つまらん反応じゃな、そこな男とお主は恋仲だったのでは？」
老人は嫌らしい声音で問い掛ける。
「残念だけどよ、オレの片思いだ。いや、だった、か」

「乾いておるのう」
「おう。使いきっちまったからな」
だけどよ。山田は呟き、体勢を低くして身構えた。視線は老人から逸らさず、自分からは逸らさせない。
「全く何も感じちゃいないって訳じゃねえのさ。確かにこいつは死んで当然の人間だ。現に、オレはこいつを殺しにきた訳だしな」
「それはそれは……」
「……オレはこいつが好きだった。それこそ、身内をこいつに殺されるような目に遭ってもだ。歪んでるだろ？」
はっはっはっと、豪快な笑い声。
「ぶつけるモンが無いならそれまでだったがよ。聞きたい事も出来た。悪いな爺さん、今のオレと出会っちまったからには、何者だろうが知ったこっちゃねえ。色々と付き合って貰うぜ」
「ふむ。有り余る若さを受け止めるのも、老いた者の役目じゃろうなあ」
老人は組んでいた腕を解き、指を鳴らす。刹那、床に転がっていた男の首が宙に浮き、粉々に砕けた。血と肉が床にこびり付き、即座に乾いていく。床が血を吸っている。山田はそう錯覚した。
「あいつに蛇を渡したっつったな？」
老人は鷹揚に頷く。
「うむ。欲しがっていたのでな。ワシも日本のソレに興味はあった。じゃから、引き受けて、創ってやったのよ」
「……創った、だあ？」
ソレを、創る。聞いた事も、考えた事もない答えに、山田の顔が強張った。
「神をも恐れぬ所業じゃなあ。ほっほっ……」
「マジな話なら、あんた大した悪魔だぜ。異常だとは思っちゃいたがな」
その言葉を否定するように、老人はゆっくりと首を振る。
「ワシなど、まだまだ。なんせ悪魔を呼び出す事がワシの本懐じゃ

からな」
「ちっ、皮肉も効きゃしねえ」
「……生憎、主よりも長くこの世におるのでな。それよりも娘、何か聞きたい事があるのではないかな？」
見透かした目。気に入らない。山田は唾を吐き捨てる。血が混じっていた。気に入らない。自分の何が分かるというのだ。この悲しみも、怒りも、憎しみも虚しさも、全部自分だけの物だというのに。
「……一つだけ」
だが。
「あいつは、オレの事何か言ってたか？」
どうしても。嘘でも良い。知りたい。たった一つの冴えない答えが欲しかった。
「ふむ……」
老人は目を細める。考え込んでいる風でもあった。やがて老人は目を瞑り、
「今際の際に、主の名を呼んでいたなあ。くく、自分で捨てた女の事をな。付け入り、騙し、裏切った相手の名を」
これで満足か、と言わんばかりの口調で語った。山田は満足気に頬を弛ませる。嘘でも、良かった。
「そっか……」
憑き物が落ちた気分。体が軽くなる。血が抜けすぎたのかもしれない。
「若いの、どうする？　ここまで話に付き合ってやったワシをどうしたい？」
「ああ、表に人を待たせてる。蛇を止めてくれないなら、あんたを殺すしかねえな」
老人は細めた目をゆっくりと開いていく。
「ワシを殺したところで、蛇が止まるかどうかも分からんのにか？」
「……言ったろ。付き合って貰うぜ。オレの全ての矛先は、今あんたに向いてんだ」

山田は笑った。部屋の空気が張り詰めていく。
「ほう？　中々の昂ぶりじゃな。良かろう……」
「おう、フリーランス『神社』、山田栞だ。よろしくな、爺さん」
ステップを踏む山田に対し、老人は未だ席を立とうとしない。余裕たっぷりに口を開く。
「円卓の奇士（きし）、第六席の青髭じゃ。お手柔らかにな」

山田がビルの最上階に到着した頃、一は必死に入り口を守っていた。
狭い空間。低い知能のソレ。吹っ切れた気持ち。今、一には追い風が吹いている。アイギスを持つ手に力を入れさえすれば、蛇はすぐに引いていく。二つの頭が同時に向かってくるも、互いが勢いを殺し合い、一の元まで満足に届かない。
しかし、確実に疲労は積み重なっていく。腕が鈍い。徐々に奥へ追いやられていく。足が重い。
「や、ばっ……」
更に、一には疑念があった。先程から浮かんでは沈む、どうしようもない考え。果たして、本当にこれで終わりなのだろうか。蛇の頭は、二つだけなのだろうか。
八俣遠呂智。八つの頭を持つ巨大な蛇。偉大な神。稀代のソレ。
一は山田から、オロチは出来損ないだと聞いていた。しかし、これはどうした事だ。これでは、これではまるで。
――本当に、八俣遠呂智では無いか。
気のせいか、蛇の勢いが増しているように思える。一はふと、下げていた頭を上げてみた。なるほど、と。得心がいく。一の眉根が険しく寄せられる。何のことは無い。蛇の頭が四つに増えていた。しかも、あくまで一からは見える範囲での話である。もしかしたら、四つどころの話では無いのかもしれない。
「……畜生」

相変わらず、蛇の頭は悪かった。四つの頭が功を競って一へと押し寄せる。それでも、単純に一の負担は二倍になる。二倍疲れ、二倍、持たなくなる。

いつまで持つのか、もう分からない。一は、静かに忍び寄る何かを感じ取り始めていた。

先手を打ったのは山田だった。

近くにあった椅子を蹴飛ばし、老人へ放つ。避けられるだろうと思いながら蹴った椅子だったが、老人は座ったまま指を鳴らすだけ。

「年寄りなんでな、少しハンデを貰うとするぞ」

真っ直ぐに老人へと向かっていた筈の椅子が、突如として宙に浮いた。

「何しやがった！」

驚いた。驚いたが、今の山田にとってそんな事は大した問題ではない。叫びながら、山田は左足で老人の顔面を狙う。

だが、その攻撃は届かなかった。蹴り付けた椅子と同じく、山田の足も宙で止められる。その上、動けなかった。

「ほほ、早いのう。素晴らしく早い。若さとは良い、じゃが、若すぎる」

老人はスッと腕を上げる。山田の足首が締め付けられていく。見えない何か。訳が分からぬまま、苦悶の喘ぎを山田は洩らした。

「てめ、え……、何を……？」

「ワシは何もしておらんよ」

片足を上げさせられた体勢から、山田は攻撃を試みる。必死で腕を伸ばすが届かない。足と同じく、腕も締め上げられた。

「がああっ！」

「さて、思ったより時間も掛かった。幾ら愚鈍だと言え、勤務外もそろそろ来るやもしれん。面倒ごとは迅速に潰すとしようかの」

パチン、と。音が鳴る。

一、二、三、四。

止むことの無い打撃。蛇の頭は一を喰らう為に、遮二無二突進を繰り返す。

このままではいつか死ぬ。絶対防御。不壊の盾。アイギス。だが、道具が優れていても、結局の話扱うのは人間なのだ。勿論、使い手が優れていれば道具を自在に使いこなし、そのスペックを一から十にも引き上げる事もあるだろう。

「あああああああっ！」

使い手が、良ければ。

何も、一が優れていない訳ではない。曲がりなりにもギリシャで最高の、最硬の盾を使える人間なのだ。少なくとも彼はアイギスに、アテナに、メドゥーサに認められた男。選ばれるべくして選ばれた人間。

優れている。

しかし、肉体的な面はどうしようもなく普通なのだ。一はあくまで普通の人間。良くも悪くも、一はアイギスを行使する事によって、普通の人間より身を守る術に長けているだけ。少しだけ、生きられるかもしれないだけ。何を以てして優れ、何を基準にして劣るとするのか。とにもかくにも。一は普通の人間で、アイギスは特異な道具で、釣り合いはもう取れそうに無くて、一はもう、持ちそうに無かった。それだけは、確か。

「……うあああっ！」

肉体は限界を越えていた。それでも一はここから動かない。逃げない。全てを『神社』に預けたのだ。思いも、願いも、命も。なぜ自分がこんな事をしているのか。任せたからだ。賭けたからだ。自分一人だけではどうしようもなかったから、一は山田に頼った。オロチを止める為に。いや、何よりも、糸原にもう一度会う為に。言わなければならない。聞かなければならない。返してもらわなけれ

ばならない。伝えなければならない。いや、言いたい。聞きたい。返してほしい。伝えたい。

「……っ！」

だから、邪魔だ。

失せろ消えろ退け去れ疾く去ね無くなれ亡くなれ死んでしまえ殺す必ず。高が、高が蛇が。高が出来損ないが。高が八俣遠呂智が。

「俺の邪魔をすんじゃねえよ！」

ソレがたじろいだ。感情の籠もっていなかった無機質な爬虫類の瞳。赤い、赤い目。今、そこに初めて感情が宿る。

その時、アイギスが眩く光った。一の手へと光輝は伝わり、消えていく。

――使って。

誰かの声。知らない声。美しい、声。

その声に導かれるように、一は頭の中から記憶を引っ張り出した。ハッキリとあの女神の声が思い出される。

「う、あ、アイギィィィィイス！」

世界が光り、変わっていく。顕現する。

一の背後を見据え、一の背後の何かに見られ、蛇たちは固まった。身動きが取れない。入り口付近に集まったまま、ソレは石にでもなったみたいに凍っている。

「はっ……、……はあっ、はっ……」

一はハッキリと見た。蛇たちに浮かんだ感情。瞳に宿った、隠しきれない恐怖を捉える。そして認める。

オロチ以上の存在、力を。

見てしまう。感じてしまう。その姿を、あの重みを。

「……顔を見るのは、初めてだな」

オロチとは言え、今はただの、出来損ないの蛇たちが動けなくなるのも無理はない。それ程までに彼女は美しかった。

――蛇姫。

しな垂れ掛かり、一の顔を覗き込む灰色の目。彼女の腕は一を抱え、彼女の体は一を捉える。その目を見ただけで石に変えられてしまいそうな、異質な目。埒外の威圧。度を越した美は恐怖に変貌を遂げる。

一は身を以てその事を体験した。全てを捧げ、委ね、何もかもを捨ててしまいたい。だが、耐えた。アイギスへの耐性が付いていた事もあったが、それ以上に一は彼女が気に入らなかった。この美しさが気持ち悪くて仕方なかった。自身を奮い立たせ、メドゥーサの誘惑を無視し彼女の腕を払い除ける。

「――――」

メドゥーサは不満げに一を睨む。何事か囁いたが、声は誰にも届かなかった。

アイギスに埋め込まれたメドゥーサが、どうして実体を成し現われたのか。何が起きているのか、一には分からない。そもそも分かろうともしなかった。

しかし、状況を理解するより先に一は状況に対応する。メドゥーサのお陰でオロチは向かってこない。

つまり、使える。

一は心中でメドゥーサに命じた。問題ない。使い方は分かっている。思い出した。記憶の中であの女神に言われた事。

「――――」

メドゥーサは笑う。怪しく、淫靡に。心得たと言わんばかりに。長い髪が顔に掛かるのも気にしないで、蛇姫はオロチを見る。

ただ、見るだけ。それだけで蛇の頭、四つの内二つが完全に止まった。あっけなく石と化した。動けない。反応しない。何にも心を動かさない。

ソレは石になってしまったのだから。

体も、心も、時をも止める力。メドゥーサの美しさ。命を止める事すら、彼女の前では些末な出来事だった。

「……すげえ……」

一は感心する。恐怖も畏怖も不安も歓喜も当てはまらない。まるで無垢な少年に戻った気分。自分よりも上のモノを見て、ひたすらに『すごい』と思うだけ。懐かしくなり、震えた。

そう、思ったのは一だけではない。残ったソレも本能で察知していた。

ああ、格が違う、と。

同じソレ。同じ化け物。同じ異形。同じ蛇。なのに、明らかに違っている。コレは何だと体が震え頭が麻痺した。

「――――」

メドゥーサは笑う。委ねろと。任せろと。

蛇は彼女の、灰色の目を恐れ、言い様の無い感覚に駆られ飛び出していく。真っ正面に一へ向かう。

天井が砕けた。

一はアイギスを広げ、降り掛かる破片から身を守る。天井へと飛び込み、砕いたのは一を襲った蛇であった。真っすぐに一へと向かったソレは途中で軌道を変えた。

――怯えたのだ。

頭は向かったのに、筈なのに。体が拒否した。これ以上メドゥーサに近づきたくない。だから体は上へと逃げる。その先に壁があろうと天井があろうと関係ない。一刻も早く、ソレはここから立ち去りたかった。

パチン、と音が鳴り、その音に重なり掻き消すように、より大きな音が轟いた。

「これは……！」

老人が部屋中に視線を走らせる。部屋が強い衝撃で揺れていた。

と言うよりも、建物全体が衝撃で揺れている。

「かはっ……」

そのショックで山田の拘束が緩んだ。片足を長机の上に付け、腕一本を犠牲にする覚悟で脱出を試みる。存外、足も腕もすんなりと抜けた。山田は老人から距離を取り、呼吸を整える。

「娘っ、何か仕掛けたのか？」

「……うるせえジジイ、てめえこそ卑怯な手使いやがって」

座ったままの老人だったが、彼からは余裕が消えていた。形相が怒りに染まっていく。山田は少しだけ楽しくなってきた。

未だ鳴り響く轟音は徐々に大きくなっていく。何かがこのフロアに近づいてきている様子だった。

「むう、オロチか？」

老人は指を鳴らす。一瞬の後、部屋の壁が突如として割れた。大きく穴の開いた箇所からは外が見える。椅子に座ったままの体勢で、老人はそこに目を遣り、驚愕した。

その視線に釣られるように、山田も外に目を配る。

「……はっ、かはは！　やるじゃねえか！」

豪快に笑うと、山田は腹を抱えた。

老人は憎憎しげに山田を睨み、顎髭を一本抜き取る。

「勤務外めぇ……」

「残念だったな、爺さんよ。八俣遠呂智はもう終わりだぜ」

終わりだと、そう言った時なぜか無性に虚しくなった。

山田はもう一度外の、工事現場を確認する。雨は止む衰えを見せないで地面と四つのソレを叩き続けていた。細切れになった、四つの蛇。オロチの名残。無造作に、無作為に無意味に肉片が散らばっている。誰がやったのかは知らないが、山田には確信めいた心当たりがあった。

「さて、と」

老人は分かっていないが、オロチはこちらに向かっている。後、数秒も経たないうちに姿を見せるだろう。その時が勝負だ。形勢は逆転しつつある。どんな裏技を使ったのか知らないが、折角一が作ってくれた見せ場だ。応えない訳にはいかない。

気合いを入れ直し、山田はしゃがんで長机の足を掴む。今の体には少しばかり重たかったが、無理な話ではない。
「おい、爺さん」
老人は無言で山田を見た。
「何じゃ、それは……？」
「分かんねえか？　かははっ、ただの机だよ」
長机を片手で持ち上げた山田は笑う。
「気でも触れたか、娘」
「おう。気ぐらい触れるぜ」

床が砕けた。

えげつない勢いで、何かが室内を通り過ぎていく。下から、上へ。床から、天井へ。突き抜けていくのはソレの長い胴体だった。
「ぬう、オロチか！？」
老人が驚愕の声を上げた。刹那、老人の矮躯が宙を滑る。しゃがれた呻きを洩らしながら、椅子から叩き落とされ、壁に叩きつけられる。
「ぬおお――！」
「痛えかよジジイ。ま、悪く思うんじゃねえぞ。とりあえずさっきやられた分は返しといたからな」
長机を老人に向け、片手で振るった山田は首の骨を鳴らした。
「安心しな、いたぶる趣味は持ち合わせちゃいねえ。次で決めてやる」
「くっ……」
山田は机を振りかぶる。凄まじい風切音を聞きながら、老人は悔しそうに唇を噛んだ。
「ブラドっ、撤退じゃ！」
「ああ？」
振り下ろしていた拳を途中で止め、山田は老人から離れる。

黒い霧が老人の体を包んでいた。見間違えでもなんでもない。白い外套が黒く、黒く染まっていく。白が完全に黒で隠れた刹那、霧が一斉に散り、その形を一変させる。

「ちっ……」

それは大量のコウモリだった。何十匹と言う小さいモノがそれぞれに喧しく泣き喚き、壁の隙間、穴の開いた床や天井へと飛び去っていく。

「逃げられたか……」

後にはもう、何も残っていなかった。山田は壁を殴り砕き苛立ちをぶつける。青髭と名乗った老人も、八俣遠呂智も、ずっと追い求め、恋い焦がれた男の影も形も、綺麗に。さっぱりに消えて失せた。

幼い頃より言い聞かされてきた『神社』の役目も、小さな時から始まった淡い思いも、全て終わり。

「ふう……」

か細い息を吐き、山田は壁を背にもたれ掛かり、やがて座り込む。限界だった。『天気屋』とソレから受けたダメージが、気の抜けた今になって襲い掛かってくる。気力と意地と、男への思いだけで持たせてきた体だったが、もう、そんな意味も無くなった。全部無くなったのだ。

自然と感情が堰を切る。頬を暖かい涙が伝い、冷たい床と乾いた自分に染み込んでいく。噛み殺すような啜り泣きは、やがて嗚咽に変わった。

――もう、死のう。

山田は俯いていた頭を上げる。視線の先には、男の血が染み込んだ場所。ここで死ねるのなら、あっちで一緒になれるかもしれない。子供じみた、否、子供でも笑ってしまうような馬鹿げた考え。

しかし、山田はそれに縋った。おもむろに腕を上げ、拳を作る。幾多のソレを殺し、数多の命を奪った、自慢の拳。自分一人、ただの人間一人を死なすには充分過ぎた。これで胸を貫けば、全てが終わる。終わらせられる。

「……何やってんですか」
いつのまにか。気まずそうな面持ちで一はそこにいた。呆れた声で山田を見遣ると、頭を掻きながら近付いていく。
「一、か」
「その様子だと、終わっちゃったみたいですね」
「まあ、な」
何となくだが、一には察しが付いている。恐らく、事態は後味の悪い展開で、一先ずの終わりを迎えたであろう事を。
「かはは、お前も上手い事やってくれたじゃねえか。お陰で助かったぜ」
「……？　まあ、お役に立てたのなら嬉しいですね」
なのに。山田はそんな事をおくびにも出さず笑ってくれる。
だから一は、山田が泣いている所を見たのは黙っておいた。
「立てます？　とりあえずここから出ましょう。もうすぐ勤務外の人たちも来ますから、事情を話して病院にでも連れていって貰いましょう」
「……いや、必要ねえ」
「怪我、してるじゃないですか」
山田は視線を落とす。
「オレさ、もうどうでもよくなっちまった」
「栞さん……」
「一、お前はまだ終わってねえだろ。あの女はどうした？」
一は何か言いたそうだったが口を噤んだ。
「なら、行けよ」
「……分かってます。だけど、あなたを連れてってからだ。俺の目の前で死なれても困るんですよ」
「……お前に止める権利があんのかよ？」
なら。そう、一は呟く。
「どうして……。どうしてあの時、あなたは俺を止めたんです？」
山田は口をポカンと開け、目を瞑ってから観念したように笑った。

「分かった、分かったよ。勤務外が来るんだな？　そいつらに訳を話して医者に行きゃ、一はそれで満足か？」
「ええ。じっとしてて下さいね」
「おう」
一は満足そうに微笑み、山田に背を向けた。
「なあ、一」
「何ですか？」
「オレ、お前の事好きだぜ」
一は振り向かず、
「ありがとうございます。俺も山田さんの事好きです」
部屋から立ち去っていく。山田はその姿を見届けると、大の字に寝転がり笑う。
「かはは、また振られちまった」
その笑いは、やはり豪快な物であった。

竜頭蛇尾

「おいおい、ンだよこれ……」

件の工事現場に到着した三森と堀が見たのは、見るも無残。細切れにされた四つの蛇たちだった。手間が省けたとも思えない。

「ヒドイですね。しかし、この切り口は……」

眼鏡の位置を直しながら、堀はソレの残骸に近付いていく。傷口の切断面を認めると、堀は神妙に頷いた。

「堀さン、なンか気付いたのか？」

「ええ。どうしてこんな事態になっているかは知る由もありませんが、誰がやったのかは分かりました」

三森は訝しげに眉根を険しく寄せる。

「この鋭い切り口、私は見た事があります。三森さんも、恐らくは」

「……ああ」

ソレの切断面を見た瞬間、三森も理解できた。

「けど、どうしてあいつがソレを殺すンだかな」

「いやあ、そこまでは。彼女はもう辞めた人間の筈、何ですけどねえ」

「……辞めた？」

「ええ」

三森は心底驚いた。感情を出さないように気を付けながら呟く。

「この事はまだ、店長と私、ジェーンさんしか知りませんから」

「へっ、そういう事はいつも社員だけが知ってんだな」

少しばかり皮肉と不満を込めた後、ふと、三森は気付く。社員しか知らない。と言う事ならば。

「なあ、あいつは知ってンのかな」

「一君、ですか？」

「その、ア、アレだ。あいつらさ、一緒に住んでンだろ？　どうなんだろって……」

腕を組み、天水を浴びながら堀は唸った。
「気になるんですか？」
「……あンまり」
「まあ、私も気になりますけどね。しかし、男と女の事ですから、根掘り葉掘り聞くのも野暮でしょう」
事もなげに言ってのける。
「野暮、か」
「もしくは不粋」
「不粋……」
自分が非難されているようで、三森は軽くショックを受けた。
「……ところで三森さん、一君たちの心配をするのも良いですが、仕事を忘れないで下さいよ」
「はあ！？　心配なンてしてねェよ！」
泥が服に跳ねるのも構わずに、三森は大股でぬかるんだ地面を歩いていく。
「どこに行くんですか？」
「あン中！　何か残ってっかもしれねェ！」
三森はビルを指差した。壁が壊れていたり、入り口付近が滅茶苦茶に荒らされている事から、このビルが戦場になったのは容易に想像がつく。手掛かりが残されていれば良いのだが。　堀は溜め息を吐き、
「さて、鬼が出るか蛇が出るか」
乱暴に歩く三森から、距離を置いて静かに付いていく。
「……」
死んでいるソレに目線を合わせると、堀は苦笑。
「ああ、鬼はいないんでしたっけ」
「早くしてくれよ！」
急かされ、堀は少しだけ歩調を早めた。

そう、鬼はもういない。

堀のワゴン車を見かけた時はヒヤリとしたが、気付かれた様子も無かったので一は胸を撫で下ろした。目の前の商店街を抜ければ、とりあえずは大丈夫だろうと希望的観測。

「まずは良くやったと言っておこう」

思わず後ずさる。

どこからともなく聞こえてきた無感情な声。一は身構え、周囲を警戒した。

「だが、少しばかり期待外れだ」

背後から、耳元に吹き掛けられる暖かい吐息に、一の心臓が口から飛び出しそうになる。大げさなくらい距離を取って振り返れば、詰まらなさそうにこちらを見つめる冷たい瞳があった。

「……中ボスみたいな登場の仕方すんなよ。心臓に悪いだろが」

「ふっ、一一、それは私の勝手だろう。そも、私を誰だと思っている？　オンリーワン近畿支部、情報部二課実働所属の春風麗だぞ。登場の仕方ぐらい自由にやらせて貰うさ」

「別に構わないけどさ、耳元に息掛けるのはやめてくれよ」

やれやれと言った風に春風は肩を竦めてみせる。

「ではどうすれば良いのだ」

「……普通で良いよ」

「ふん、一一、貴様が普通を口にするか。面白い、良いだろう。次は普通に現われてやる。普通にな」

「強調すんなよ！　てめえ屋根の上から飛び降りてきたり地面から穴掘って出てきたりしたらぶっ飛ばすからな」

一の指摘に春風の目が見開かれる。

「……成る程な」

「その手があったか、みたいな顔すんな！」

本当にやりそうだった。

「まあ、次回の楽しみにしておけ。それよりもだ、一一。貴様は期待以上の成果は出せなかったが、私の予想通りには掻き回してくれた。礼を言うぞ」
「……さいで。ちなみに、どうすりゃお前の期待に応えられたんだ？」
「簡単な話だ、死者を出せ。一一、貴様自身も、三森冬も糸原四乃も山田栞も誰も死んでいないではないか」
「良い事じゃねえか！　ソレを片付けられて、その上誰も死んでねえんだぜ」
ふん、と。拗ねたように春風は鼻で笑った。
「見ていてつまらん」
最低の観客だった。
「もっとギャラリーを湧かせろ。そんな事では少年漫画の主人公にはなれんぞ」
「もう俺は少年じゃない」
「いつまでも少年の心を忘れるなと言っている。そう、私のようにな」
「お前女じゃん！」
そこで春風は瞳に侮蔑の色を宿らせる。春風という人間を知らなければ分からない程度の、小さな変化。
「……ふん、性差別か。良いご身分だな、一一。貴様に私の何が分かる」
「お前が女だって事ぐらいは、分かるつもりだけどな」
「果たしてどうかな。実は男かも知れんぞ」
一はそろそろ面倒になってくる。
「なあ、用ってそんだけ？　俺さ、実は急いでるんだよ」
「胸でも触らせれば、私が女かどうかハッキリするかもな」
「……先を急ぐから」
「そうか。では最後に、礼と言っては何だが糸原四乃の居場所を教えてやろう」

「いや、いらない」
一は手を振り、春風に背を向ける。
「……なぜだ？　一一、貴様の目的だろうに」
ピタリと足を止め、面倒臭そうに一は頭を掻いてみせた。
「あー、アレだ。なんつーかさ、お前に聞いちゃダメな気がする」
「ふん、難儀な奴だな」
「……男ってな、皆そうだよ」
多分。
「つまらん意地とくだらんプライドだな。私が、情報部が教えてやると言っている」
「だあーっ！　るっせえな、いらないって言ってんだろ！　それに、ああ、アレだ。見当はついてるから、良い。大丈夫……」
語尾が弱かったが、春風は気にしない様子だった。
「まあ良い。精々這いずり回れ」
「そーします」
ではな、と。春風は一が見もしないのに手を上げる。
「おう。もう顔見せんなよ」
一は振り向かなかった。どうせ、もうそこには誰もいないと分かっていたから。

暗い、暗い場所だった。何の明かりも届かない深い闇。深い地の底かもしれないし、この世でもなかったかもしれない。ただ黒く塗り潰された世界。
キイキイ、と。喧しく泣き喚きながら、黒い霧がそこに立ち込める。霧は大量のコウモリだった。やがてコウモリたちが霧散し、一斉に飛び去っていくと白いモノが現れる。
「くっ……」
白い、外套。身に纏っているのは小柄な老人で、顎に蓄えられた髭が目立つ。青髭だった。酷く疲弊している様子で、その場にしゃ

がみ込んで動かなかった。
「あ？　ぎゃはははっ！　ジィさんおい、どうしたよそんなに疲れちまってよ！？」
頭の悪そうな、チンピラの様に柄の悪い声。
「……主か」
青髭は声の主を認めると、相手をするのも辛そうに目を瞑る。
「あぁん？　おいおいマジか、あんたがそんなになるなんて珍しいじゃねぇか！」
声の主はそんな青髭に気を遣う素振りも見せず、愉しそうに近づいていく。
「他の者は？」
「今日は俺サマだけだぜ。知ってんだろ、全員色々やってんじゃねぇ？　あんたみたいにな、面白おかしく笑ってんだぜどうせ！　あーあ！　なのに俺サマは留守番！　ひでぇ話だ、不公平だとは思わねぇか！？」
青髭は眉を顰め、声の主、軽そうな性質の男を見遣った。
「じゃんけんで負けたのはお主じゃろう……」
ピクリ、と。男の動きが止まる。
「……そうだよ、そうなんだよ！　てめぇら俺サマを嵌めたんじゃねぇのか！？　俺サマ以外の奴が全員チョキで！　なんで俺サマだけパーなんだよ！？」
「ワシが知るか」
「もーどーでもいーけどさー。こーしてあんたが帰ってきたって事は、当分は出ねぇんだろ？　よっしゃ、留守番交代だぜ」
「……よかろう、好きにしろ」
その言葉を聞き、男は盛大に笑った。「どこにしよーかな」「だれにしよーかな」なんて大声で放ちながらその場でステップを踏んでいる。
「ん」
やがて、男が動きを止めた。一瞬物事を考えた風に目を瞑った後、

青髭に問いかける。
「ところでよ、あんたさ、どこのどいつにやられたんだ？」
「……やられてなどおらん」
「おい！　おいおいおいおい！　そのナリで言うかよ！　誰がどっから逆立ちして見たって、やられてねぇとは言わせねぇぞあんた！　良いよ、隠すなよ、笑わねぇからさ、言ってみな、んん？」
男は愉しそうに青髭の顔を覗き込んだ。青髭は男から顔を離すと、仕方なく口を開く。
「……日本の勤務外、それとフリーランスじゃ」
「日本？　日本の奴らにやられちまったってのか！？　おいおい、あんな小せぇ連中に痛め付けられたってのの！？　ぎゃはははははは！」
腹を抱え、転がりながら男は笑い崩れた。
「黙らんか、小僧」
見る者を凍り付かせる視線と、聞く者を竦み上がらせる声。
「……へいへい。分かってますともさ。けどさー、俺サマに言わせりゃまだまだあんたの方が小僧なんだけど？」
だが、男は平然とした様子で軽口を叩く。
「……知っておる。じゃがな、ならば相応の振る舞いを見せてみい」
そりゃ無理だ。男はきっぱりと言い放ち立ち上がる。
「で？　あんたはなんで日本に行ったんだよ？　あそこはあのストーカー女のシマだろ？」
「少しばかり日本のソレに興味が湧いたのでな、創ってやったんじゃよ。なに、あの娘には許可を貰っておった。『奴に手を出すな』と言う条件付でな」
「はー、つくる、ねえ。面倒って言うか、よーやるぜホント。んなの引っ張ってくりゃ楽なのによ」
男は体を伸ばしながらあくびを一つ。
「……ふん。物を壊す事しか出来ぬ、主には言われたくないな。大体の話、ワシの勝手じゃろう」

「元人間のキョージって奴？　大変だねえ、あんた」
青髭は男の言葉を聞き流し、息を整え起き上がった。
「主はどうするつもりじゃ？」
「おう！　何も考えてねぇな」
「ふむ、では日本はどうじゃ？」
不満そうな表情が男の顔に張り付く。
「やーだよ、あんな小さい国つまらなさそうじゃねぇか。俺サマは好き勝手やらせて貰うぜ。そうだな、あいつも動く気無さそうだし、とりあえず世界でも獲っちまうか！」
「好きにせい」
「ちぇー、ノリ悪いな。ま、俺サマは行くから、留守番頼んだぜジィさん！」
心底から愉しそうに、男は駆け出した。
その後姿を眺めながら青髭は凶悪な笑みを浮かべる。ああ、愉しくなりそうだ、と。

本当は見当なんてついてなかった。汚れた体と疲れた心を引き摺って、一は街を歩く。誰も居ない夜を抜けるかのように進む。
会えたらなにを伝えようか。それだけを考えて一は行く。どこに向かえば良いかなんて分からなかったが、自然と、足は動いていた。どれくらい雨に打たれていたのだろう。
「あ……」
一はアパートの前まで戻ってきていた。入り口近くの塀にもたれ掛かると、大きく、深く息を吐く。煙草が吸いたかった。そう言えば、と。出かける前に部屋の鍵を掛けていなかった事に気付き、一はアパートの階段をゆっくりと気だるげに上って行く。
「……はろー」

右手を上げて、罰が悪そうに笑う女がいた。一の部屋の扉の向かいで三角座りしている、黒いスーツを着た女。
「糸原さん……」
その姿を見たとき、全てが吹っ飛んだ。もう、今まで考えていた事なんてどうでも良くなってくる。
「あはは、久しぶりって感じ」
「……鍵、開いてますよ」
「ん、知ってる」
糸原は悲しそうに扉を眺めた。どこか、遠い物を見ているような、空っぽな瞳で。
一は何も言えなくて、つくづく自分はアドリブに弱いのだと、ぼんやりと思う。
そうして、お互いが何も言わないまま、言えないまま時間が過ぎていく。
「聞かないのね」
ぽつり、と糸原が呟いた。
一は頭を掻き、ズボンのポケットに手を伸ばした。煙草は部屋に置きっぱなしだった事を思い出し、もう一度頭を掻く。
「……糸原さんの気まぐれには慣れてます」
「慣らせてあげたのよ」
「みたいですね」
苦笑して、一は壁に背を預けた。
「ビルから出た時、ソレが死んでるのを見ました。あれって、俺を助けてくれたん、ですか？」
「さあね。私って嘘吐きだから、信じない方が良いわよ」
糸原は、どこか厭世的なものを感じさせる微笑を湛える。
「ねえ、あのフリーランスは？」
「三森さんたちが向かってましたからね。今頃は病院じゃないでしょうか」
今度お見舞いにでも行った方が良いだろうか。一は今更になって

山田に罪悪感を覚えた。
「……あんたは？」
「え？」
「あんたは、一緒に行かなくて良かったの？」
その意味を察する事が、一には出来なかった。
「ああ、今日は俺サボりです。あはは、次行ったら二人とも店長に怒られますね」
「私、辞めたんだけど？」
「……じゃあ戻りましょう」
「無理」
糸原は膝に顔を埋める。そんな彼女を、一は今までに見た事が無かったので対応に困った。
「……まあ、その話は明日にでもするとして」
一はドアノブに手を掛ける。
「とりあえず、今日はもう寝ましょう」
「無理」
「なにが無理なんですか」
「無理。絶対無理。全部無理」
「子供ですかあなたは。ほら、立って下さいよ」
手を差し伸べるも、にべもなく一はそれを払われた。
「やっぱ無理。勤務外に戻るのも、生きてくのも、その部屋に入るのも、もう無理なの」
「俺の部屋に入るのがそんなに嫌ですか」
ふるふると、力無く糸原は首を振る。
「帰りたい」
「矛盾してますよ」
「だって私、裏切ったんだよ」
「誰を？」
「バカ！　あんたをよ！」
一の耳を穿つ雨音。しくしくと啼いていた。泣いていた。

「……えーとですね、その……」
「許して欲しいし、戻りたいよ。けど、そんなの虫が良すぎる……」
「俺は気にしてませんよ」
「嘘だ」
「……嘘じゃないですってば」
本心だった。糸原さえ戻ってくれれば、もうそれで良かった。
「あんたを殴ったし、嘘付いたし、あんたの知り合いも傷つけちゃったのよ」
「だから、慣れてますって」
「……ド変態」
「糸原さん、俺は裏切られたなんて思っちゃいませんよ。だって、何だかんだ言ってあなたは戻ってきてくれたじゃないですか」
糸原は顔を上げる。一と目が合って、慌てて目を伏せた。
「……俺は、借りを返して欲しいんですよ。あなたが来てから家計は火の車で、貯金も底を尽きかけてます」
「それは……」
「一万円じゃ足りません」
金額の問題ではなかったが、一は言葉を紡ぐ。
「釣り合いが取れてません。だから、戻ってきて、しっかり働いて返してください」
「一……」
「それに、家に誰かが居てくれるってのは、その、結構良いものでした」
思ってたよりも、ずっと。
糸原は答えない。一は気恥ずかしかったが、不思議と嫌な気分はしなかった。ふと、空を見上げる。雨雲は街を覆い、雨は変わらず街を叩いていた。それでも、雨は勢いを失って小降りになっている。もうすぐ、雨は止むだろう。
「私さ……」
「はい」

「家族ってのが、いないのよ」
「……亡くなったんですか？」
不躾な聞き方だったが、今更でもあったので一はあまり気にしない。
「んーん。私さ、ちっちゃい時に、私を産んだ奴に捨てられたらしいのよ」
「らしい？」
「覚えてないのよ。拾ってくれた奴が教えてくれたの、お前は俺と血が繋がって無いんだ、って、びっくりしたけど、そいつには育ててもらった恩もあったし、あまり関係は変わらないで言う事も聞いてたのね」
「糸原さんが？」
信じられない。一には想像も出来なかった。
「何よその目は」
「ああ、いえ、続きを聞かせてください」
「……その、私を育ててくれた奴はまともな奴じゃ無くてね、結構やばい事にも手ぇ出してたのよ。んで、二人とも追い詰められた」
一は黙って聞いていた。そして、何となく話も見えてくる。
「気付いたと思うけど、私らを追ってたのはタルタロスよ」
「……いったい、何をやったんですか？」
「これよ」
そう言って、糸原はスーツの内ポケットから糸を取り出した。彼女の武器。拠り所。
「糸がどうかしたんですか？」
「鈍いわね。私らはこれをタルタロスから盗んでやったの。高く売れるって聞いてさ、そしたら予想以上にあいつらしつこくて……」
方法まで聞こうとは思わなかった。糸原の事、手八丁口八丁で何とかしたのだろうと、鈍い一でも予想がついた。
「でも、私らも粘った。それこそ奴らが交渉を持ち出してくるくらいね」

「まさか、それって」
「ま、早い話がどっちかを差し出せって事言われたの。私らも長い間逃げてて疲れてたし、向こうも犠牲出したくなかったんでしょ。でも、逃げられちゃ面子が立たない。守りたい。そういうのがあって、だからこそ成り立った訳だけど」
「……じゃあ、糸原さんがその人の代わりに」
「ま、そんなトコ」
合点が行った。一先ず納得して、一は糸原の言葉を咀嚼していく。少しばかり急な話だったので理解が追いつかなかったが。
「そんで、運良く抜け出せて、この街であんたと会った」
あの日、あの目で、汚れた服を着ていても関係ない。高潔で誇り高い瞳で。
「……先に謝っとくけど、あの時は誰でも良かったんだかんね」
「あれ？　謝られてる気がしないんですけど」
「もう、私疲れてたの。逃げて走り回ってボロボロだったし、とりあえず手頃な場所で休んだら……その、休んだら……」
糸原は言い淀む。
「……構いません」
どうせ、そんな関係じゃない。
「……ごめん、『天気屋』に戻ろうと思ってた。でも、でもさ」
「はい」
「戻れなかった。つーかさ、そんなの忘れてた。あんなに笑ったの久しぶりだったし、ご飯は美味しかったし……」
一には意外だった。笑うのが久しぶり。あんなに楽しそうに笑ってた人が、笑わない日があったとでも言うのか。
「ダラダラしてたよね、こたつで昼まで寝たり、寝付けない時は夜中ずっと話したりさ」
「……付き合わされましたねえ」
「フリーランスだった頃なんて、忘れられた。そんぐらい、あそこは楽しかった」

何故。

「でも、裏切られるのが、捨てられるのが恐かった。楽しい日の次は、いつも考えてたの。明日は、この街から放り出されるんじゃないかって……」

何故。

「そんな時さ、あいつから電話が掛かってきたの。フリーランスをやり直さないかって」

「……電話？」

「ケータイ。もう捨てたけど、ずっと持ってたの。結局はそういうのを今まで捨てきれなかったから」

「そう、だったんですか」

一には何も言えなかった。口をついたのは単なる相槌。

「私、嫌だったの。いつか裏切られるなら、自分から裏切った方が、ごめん。楽だったから」

「……俺が、店の皆が裏切ると思ったんですか？」

糸原はゆっくりと頷いた。一は深く息を吐く。

「そんな事しませんよ。糸原さんがどんな育てられ方して来たのか、知りたくもありませんけど、俺たちは、あ、いや……、少なくとも俺は裏切りません」

目尻に涙を浮かべながら、糸原は顔を上げた。

「……私、戻っても良いの？」

「さっきから言ってます」

「でも、やっぱり私……」

ハッキリしない彼女を見て、一は覚悟を決める。本当はこんな事有耶無耶の内にしたかったのだが仕方ない。後で、彼女が元に戻った時、どんな事を言われても我慢しようと、そう思う。

すう、と、静かに、長く息を吸い込み吐き出していく。視線は合わせたくなかったし、どんな顔で言えば良いのか分からないから、一は空を仰ぐ。

「……糸原さん、元通りに丸く収めましょう。またこたつでみかん

食べて、テレビ見ながらくだらない事話して、美味しいものを一緒に食べましょう。たまに、北さんからお金巻き上げて無駄遣いしても文句言いません。その、家賃も払わなくて良いです。だから、その、戻ってきてください。『おかえり』って言ってください。あー、その、正直に言います。俺は、あなたがいないと淋しいんです」

言ってしまった。今まで生きてきて、一番恥ずかしかった。

糸原は呆気に取られたのか、口を開けて、間の抜けた表情で一を見つめている。

「……何それ、プロポーズ？」

「違いますよ！」

「バーカ、分かってるわよ」

「……それと、俺たちを過去形にしないでくださいよ。もう、勝手にいなくならないでください」

「ありゃ、はじめちゃんは私がいないと淋しいの？」

一はグッと堪える。

「勝手にいなくなっちゃうと、皆に迷惑が掛かるでしょう」

「はいはい」

「明日、謝りに行きましょう」

「はいはい」

「話聞いてます？」

一は糸原を強く見据える。さっきまで居心地が悪そうに座っていたのに、いつのまにか立ち上がり、糸原は空を眺めていた。

「雨、止んだわね」

「……ですね」

黒い叢は風に流され、少しずつ千切れていき、隠していた月を解放していく。

「真ん丸で綺麗ね」

「あー、けど少し欠けてますね」

「私らみたいね。歪でさ、いつ壊れてもおかしくなくて」

「……時間が経てば、月は綺麗に丸くなりますよ」

それこそ、明日になれば。
「私たちはどーなんのかなー」
「さあ、知りたくも無いですね」
「ふふ、そうね」
二人はぼんやりと月を眺めた。
「……あの、さ」

トン、と。

糸原は、一の胸に軽く頭を置く。自然な動きだったので、一は少しの間何が起こったのか分からないでいた。
「糸原さん？」
「私さ、やっぱあんたじゃ無いとダメみたい」
「あ、え……？」
訳が分からない。一は視線を泳がせ、明かりに誘われ、月に助けを求めた。
「にのまえ？」
「は、はい？」
糸原は顔を伏せたままで。
「嘘吐きで、ケチで、わがままで、ちょっとだけ性格が悪い私だけど、捨てないでください。裏切らないでいて貰えますか？　また一緒に楽しいこと、してくれますか？」
「え、あ、その、勿論。こちらこそ、その、よろしくお願いします」
一はしどろもどろになりながら手を遊ばせる。
――この人は誰だ。
糸原は顔を上げ、悪戯っぽく笑った。
「ふふ、糸原四乃よ。よろしくね」
視線など合わせられる筈もない。
――まあ、誰でも良い、か……。
「……良い名前、ですね」

横目で見た彼女の笑みは、初めて出会ったあの日のように誇り高く、嘘みたいに似合っていた。

ｉｎもじゃもじゃ

一週間近く駒台に降り続けていた雨も止み、街を覆っていた雲も無くなって、文句のつけようが無い晴天が広がっていた。気温は低かったが、久々に現れた太陽が人々の心を爽やかにさせてくれる。

「お前には二十四時間働いてもらう」

一人を除いて。

今日は非常に天気が良かった。しかし、晴れやかな日差しなど関係無しに、今、一は店のバックルームで店長の叱責を浴びている。

「……えーと？」

一しきり罵詈雑言を吐いた後、店長は告げた。淡々と、冷酷に。

「聞こえなかったか？　耳元で言ってやるからこっちに来い」

店長は椅子に座ったまま手を振る。片手には煙草。一は指示に従い、ノコノコと店長に近づいていく。

「お前には」

店長は近付いてきた一の頭を灰皿で殴り、

「二十四時間」

下がった頭を平手で打って、

「働いて」

座ったままの体勢で一の脛を蹴り、

「貰うと言ったんだっ」

最後に足で一の体を押す。

「働け馬鹿野郎！」

一は床にへたり込み頭を押さえていた。

「……やり過ぎじゃないですか？」

涙声で抗議する一を見下し、店長は悠然と煙草に口を付ける。

「これでも甘い方だと自分では思っているくらいだ」

「一回サボっただけじゃないですか」
「サボっただけなら、私も手を上げたりはしないがな」
「……う」

軽い気持ちだった。それがいけなかった。
一と糸原は朝早くに目が覚め、近くの銭湯で汚れを流してから遅めの朝食を摂り、昼過ぎまでテレビを見てから店へ出かけた。先日の、八俣遠呂智（やまたのおろち）の事件での行動について謝りに行く為。
二人がバックルームに入った瞬間、怒声と罵声に出迎えられ、一は店長に睨まれながら事情を話した。
「……まあ、こっちでも粗方の話は聞いている」
「はあ……」
「気の無い返事をするなっ」
どうしろと言うのだ。とりあえず一は黙って神妙な顔をする。
「先日保護した『神社』から、彼女の事情やお前たちの話は聞いた。ヤマタノオロチの顛末についてもな」
店長は煙草に火を点け、煙を胸一杯に吸い込んだ。
「あの、栞さんは無事でしたか？」
「……ああ。命に別状は無くなった、そうだ。一時はやばかったらしいがな、今じゃ毎日炉辺に酒を強請っているらしい」
良かった。一は胸を撫で下ろす。
「いつ退院できるかは分からんがな」
「けど、本当に良かった」
「……ホント」
糸原は一から目を逸らし呟いた。
「今度、お見舞いに行きましょう」
「ええ！？　私も？」
「当然でしょう。ボコボコにしたのは糸原さんじゃないですか」
「……しゃあないわね」

渋々、糸原は頷く。
「おい、おい馬鹿。こっちを見ろ、勝手に話をするな馬鹿ども。まだ話は終わってないんだ」
「あ、すいません」
ちっ。滅茶苦茶大きい舌打ち。
「……なあ、何であんな事をした？」
「それは……」
あんな事。店をサボり、店に黙って勝手にソレと戦った事。
「言いたくないか？」
一は無言。店長は肯定の意と酌んだのか、「やれやれ」と溜め息。
「構わん。言わなくて良い。けどな、一」
「……はい」
「一つだけ聞かせてくれ。私は、私たちは頼りにならないか？　大人は、信用出来ないか？」
存外に優しい声音だったので、一は驚く。
「えっと、いや、別にそんな事は……」
「なら、今度は店の誰かに話せ。分かったな？」
「はあ」
「気の無い返事はするなっ」
「すいません！　絶対に言います！」
ならば良い。店長は深く椅子に座り直す。
「糸原、行って良いぞ。シフトを組み直したら伝える。それまでは休んでろ」
「……は？　あの、私の事、聞いてないの？」
糸原は自分を指差し、素っ頓狂な声を上げた。
「聞いてない。ほら、行け」
「んん？　ま、良いやラッキー。じゃ、立ち読みしてるから、あんたが終わるまで待っとくねー」
愉しげな歌を口ずさみながら、糸原は呆気なく、バックルームから出て行く。

「じゃ店長、お疲れ様です」
「一、今度は本気で殴るぞ」
「……冗談です」
頭を押さえながら一は嘯いた。
「あの、店長？　糸原さんの事、山田さんから聞いてないんですか？」
「『神社』に？　さあな、私は聞いちゃいない。だが、気になる事を言っていたな」
「……さっきから気になってたんですけど、店長まさか、山田さんのお見舞いに行って、直接話を聞いたんですか？」
「悪いか」
悪いというより、一は単純に驚いた。
「意外ですね。て言うか、店長が店以外の場所に行くとは思って無かったです」
「誰の所為だと思ってる。お前が『神社』に仕込んだんだろうが」
「あー、すいません。で、気になる事って何ですか？」
店長は頭の隅が痛くなる。目の前でヘラヘラと、平然と笑うこの男。マイペースなのか何も考えていないのか分からない。心配して損をした。
「……一、ソレを創る事は出来ると思うか？」
「創る？」
質問の意味が計り知れない。店長の意図が窺い知れない。一は少しの間考え、
「出来ない、事は無いと思います」
ぼんやりと、そう口にした。店長は訝しげにしている。まずい事を言ったつもりはなかったが、一は不安になった。
「あの、俺変な事言いました？」
「……いや、何故そう思う？」
「へ？　だって、今更じゃないですか。体から炎を出せる人や魔術だなんてモノも有るんですよ。俺から言わせてもらえば、むしろ、

創れないってのがおかしいくらいですよ」
　それぐらい、色々なモノを一は見て、出会った。
「なるほど、ま、確かにそうだな」
「あの、今の質問は？」
「『神社』がな、出会ったそうだ。ソレを創るだなんて抜かしやがる老人と」
　苦い顔で、店長は煙草の火を灰皿に押しつける。
「……出会った？」
「あのビルの最上階、お前と別れてからだろう」
「そんなの、聞いてませんでした……」
「奴も自分の事で手一杯だったそうだ。気になるなら本人に聞け。それよりもだ」
　店長は椅子を器用に動かし、一に向き直った。
「その時に老人は自身を青髭と、円卓の騎士の者だと名乗ったらしい」
「はあ？　円卓の？」
「聞いた事は無いか？」
　一は頭を捻る。どこかで聞いたような気はしたが、明確な答えは出そうに無かった。
「フリーランスじゃないんですか？　ネーミングセンスがそれっぽいし」
　図書館に神社に天気屋に。
「私もそう思って調べてみたがな、無かった。どこにも載っていないし、誰も知らない」
「うーん。本当に意味のある名前なんですか？」
　その、青髭と名乗った老人が適当に喋っただけかもしれない。
「自分は第六席とも、青髭は言ったらしい。堀に聞けば、円卓と言うのは組織の名前だ、そうだ。さらに言えば、ハッタリで使えるようなモノでも無いらしい」
「堀さんが？　何か知ってるんですかね」

「さあな。口振りはそうだったが、多くは語ってくれなかった。ま、情報部に任せるとしよう」
「……何か、漫画だなあ」
全くだ。店長は下らなさそうに笑った。
一は、笑えなかった。
「えっと、話ってのはそれだけですか？」
「ん？　いや、本題は今からだ」
「はあ……」
どうにも、気の無い返事だった。

話は、戻る。

「二十四時間？　冗談でしょ。冗談ですよね？」
「今、二時前だからな。二時ちょうどに入れ。もう少しでゴーウェストが来るから、それまで一人でな」
真っ白。目の前が真っ白になった。
「……訴えますよ」
「勝手にしろ。あのな、オンリーワンを舐めてたお前が悪い。うちに喧嘩売って裁判で自由に発言出来ると思うなよ」
「びっくり。治外法権に近い暴言ですね」
「何とでも言え。そら、後ちょっとで二時だぞ」
店長はクツクツと喉の奥で笑う。
「……逃げます。サボります。働きません、勝つまでは」
「やってみろ。本気で怒るぞ」
「お、お？　怒れば良いじゃないですか、つか、怒りたいのは俺ですよ。ふざけてます、何が二十四時間働けだっ、人権無視だ侵害だっ！　何ですか？　勝手な事をした罰ですか？　ふざけてるっ！」
「一、働け」

「大体、俺だけなんてずるい。糸原さんは！？　そうだ、あの人だって勝手な事を」
店長が椅子から立ち上がる。一は忘れていた。最近は、店長が椅子に座りっぱなしだったから。自分よりも、この人の背が高い事に。
「糸原は、あの時既に辞めていてうちの人間じゃなかった」
妙な威圧感があった。
「糸原はあの日、私の、責任の範囲外だった。あいつが今日から復帰するとしても先日の行動とは関係ない。だろう」
なぜか一は動けない。
「だがお前はどうだ？　勝手にアイギスを持ち出し、シフトに入ってるというのに店に顔を出さず、挙句、フリーランスと組んでソレと戦う……。……、ん、お前やり過ぎだろ。殴って良いか？」
「……勘弁、して下さい」
もうすぐ、二時だ。

「あー？　あによ、今から仕事なの？」
「残念ながら」
本当に残念そうに、一は顔を伏せた。
「罰、だそうです」
「ふーん。あのさ、あんたって制服似合うわよね」
「……はい？」
一は首を傾げ、オンリーワンの制服を着た自身を眺めてみる。
「ま、頑張りなさいよ」
糸原は気楽そうに言うと、適当な雑誌をケースから抜き取った。
「……？　糸原さん、帰らないんですか？」
「んー」
「俺、明日の二時まで働かなきゃなんないんですよ。だから糸原さんは帰った方が……」
自分で言うと、一層の絶望感。

「んー、待っとく」
「いや、だから……」
「終わるまで待っとく」
強い口調で言われると、もう一にはどうする事も出来ない。
「はあ、それじゃ、その、お願いします」
「んー」
「……」
糸原が雑誌に視線を落とし続け、こっちを見ようとしないのは照れている、のか。そう思うのは一の自惚れなのか。
「何見てんのよ？」
「うぇ？　み、見てないですよ」
「……あっそ。ま、別に良いけどね」
客はいない。今日もいない。店内には一と糸原だけだった。一は雑誌のフェイスを整えながら外の景色を見遣る。今更になって気付いたが、今日は天気が良い。今夜には満月が拝めるだろう。そう思うと、少しだけ気分が楽になった。
「ねえねえ、服買いに行こうよ」
「ええ？　お金無いんですけど」
「だーかーらー、お給料入ったらに決まってんじゃん。そろそろでしょ、きゅーりょーび。私さ、正直スーツは飽きたのよね。家帰ってもジャージしか無いじゃん」
一は何気なく糸原の持っている雑誌を見る。予想通りと言うか、案の定と言うか、女性向けのファッション雑誌だった。
「あー、お金は自分で出してくださいよ？　ちなみに、そのスーツも、家のジャージも、全部俺のなんですけど」
「うっさいわね、生意気言うんじゃないわよ。で、行くの？　行かないの？」
「……うーん、そうですね。たまには良いかも。けど、あんまり高い店ってのはちょっと」
「うーわ。そんなだからあんたは駄目なのよ、もてないのよ。服に

ぐらい金掛けなさいよね」
「あなたがそれを言いますか……」
「まあ、アレね。値段は関係無いかも。私が見繕ってあげるから、心配要らないわよ」
正直、あまり気は進まなかったが、楽しそうに笑う糸原を見ると、少しはそういうのもアリだろうか、なんて一は考える。

「ストーップッ！」

甲高い、少し舌足らずな甘い声。
一が顔を向けると、むくれた顔をしたジェーンがそこにいた。オンリーワンの制服に、ブロンドの髪をツーテールに結わえた彼女。背伸びしながら、一を指差す。
「お兄ちゃんの服はアタシが決めるノ！　イトハラは出しゃばらないデよ！」
「あれ、ジェーンいつ来たんだ？」
「さっき！　あいさつまでしたじゃナイ、バカ！　お兄ちゃんはバカ！」
地団駄踏んでジェーンは一を恨めしく睨む。
「ああ、そっか。ごめん、ごめん」
「……むー」
「ちっちゃくて気付かなかった」
「カンケイない！」
ぼそりと呟いた糸原に標的を変え、ジェーンは息巻いた。
何とも平和な光景だ、と。一は愚かしくも、今はそう思う。

安っぽいコーヒーと、煙草の臭いの染み付いた小さな休憩室。オンリーワン近畿支部に備え付けられたその部屋の一つに、堀はいた。
堀は中身を飲み干した紙パックを握り潰し、ゴミ箱に投げ入れる。

少し曇った眼鏡の位置を直し、休憩室の扉に手を掛けた。
「あら？」
「おや……」
向かい側から見知った顔が現れる。ナース服を着た、優しそうな、全てを受け入れてくれそうな印象の女性。
「炉辺さん、こんな所で会うとは偶然ですね」
「ふふ、たまにね、ここのコーヒーが飲みたくなっちゃうの」
炉辺は堀の横をすり抜け、自販機に小銭を入れた。少しだけ迷ってから、ボタンを押す。
「……炉辺さん、申し訳ありません」
「え？　何のこと？」
「今回の、その、フリーランスの事です」
「もう、気にしてないって言ってるのに」
「ですが……」
出来上がったコーヒーを取り出し、炉辺は粗末な作りのソファに腰掛けた。湯気の立つ紙コップに顔を近付け、愛おしそうにその香りを懐かしむ。
「あの子がフリーランスだからって関係無いの。命は、オンリーワンやそうじゃない人たちだからと言って、区別するもんじゃないよ？」
「……上に、何か言われませんでしたか？」
「気にしない。それに、医療部の皆は賛成してくれたよ？　だから、堀君も気にしないの」
「すみません……」
頭を下げる堀を見つめ、炉辺は微笑む。
「そんなに気にしてるなら、はじめちゃんをあの子のお見舞いに連れて来てくれる？　あの子、ずっと気にしてるのよ。一言目にはお酒、二言目には、はじめちゃんって。ふふ、可愛いわね」
我が子を語るような、優しい目。その目に見つめられ、堀の底に溜まった澱が消えていく。

「……分かりました。伝えておきます」
「うん、よろしくね」
一息吐き、堀は扉を閉めてもたれ掛かった。
「懐かしい、ですね」
「ん？」
「私たちがここに来た頃、ずっとこうして、こうやって話していたでしょう」
「ふふ、そう言えば、最初は、ここに上手く馴染めなかったね」
炉辺は苦笑する。
「でも、もう慣れたでしょう？」
「……はい。ですが、私はまだ、こうしてここに来るんです」
「やっぱり、難しい？　皆と仲良く出来ない？」
心配そうな声音。堀は炉辺を安心させたくて首を振る。
「いえ。皆さんには良くして貰っています。その、ですが、やっぱり落ち着きませんね」
見透かされている。
「前線の方が、気が楽？」
「ええ。私には戦場で槍を振るっているのが合っています」
「……ふふ、堀君ってデスクワーク苦手だもんね。パソコンの使い方、覚えてないでしょ？　電源落とすのにコンセント抜くもんね。技術部の皆が言ってたよ？　堀にはウチの機械は触らせたくないって」
恥ずかしそうに堀は頬を掻いた。
「もう覚えましたよ」
「そ？　なら良し」
楽しそうに言うと、炉辺はゆっくりと立ち上がり、空になった紙パックをゴミ箱に入れる。
「さ、お仕事お仕事。ほら、堀君、今日も一日頑張るわよ」
この人には逆らえないな。
「そうですね。老体に鞭を打つとしましょう」

「あはは、堀君まだ若いでしょ」
炉辺に背中を叩かれ、眼鏡がずれる。
「おわっ」
堀が指で眼鏡を押し上げているうちに、炉辺は元気良く歩き出していた。その背中は大きく、遠く。自分では一生掛けても追いつけそうに無い。それでも堀は歩き出した。
「ほらっ、もっとしゃきっと歩くっ」
優しく笑う彼女に、少しでも追いつきたかったから。だから。

「お兄ちゃん、スプーン足しておいてチョウダイ」
「ん」
「あ、フォークも少ないカモ」
「足しとく。レジ前の缶コーヒーは足りそうか？」
「……ノープロブレム。どうせお客来ないシ」
一とジェーンは客が来ない間、商品やレジ前の雑貨を補充していた。やる事が無いのである。時刻は午後四時を回っていた。何とも微妙な時間で、おまけに商品を配送するトラックが遅れているとの事で、まともな仕事は無い。
「はあ、何かだりーな」
「だらけないでヨ。アタシがいるんだから、もっと楽しくお仕事してよネ」
「……つってもさ、後二十二時間もここにいなきゃなんないんだぜ。ダブルやトリプル出勤の話じゃねーっての。そらダラけるわ。だろ？」
あくびを隠す気も一には無いらしい。大きく口を開け、息をするのも面倒くさそうに壁にもたれ掛かった。
「眠いノ？」
緩慢に頷く一を見遣り、ジェーンは頬を膨らませる。
「……だったら、お兄ちゃんの目を覚ませてアゲル」

「んー？」
「ね。いつになったら、アタシといっしょに帰ってくれるノ？」
「……ん」
確かに、少しだけ一の目が覚めた。
「言ったろ。アメリカに行く気は無いってな」
「……どうしたら、帰る気になってくれるの？」
「ならない。俺にはやりたい事があるんだよ」
行く。帰る。二人の距離は縮まらない。
「それが終わったら？」
「いつ終わるか分かんないし、終わるかも分かんないからな」
「ずるい。ナマコ殺しじゃナイ」
一は頭を抱える。
「お前が言いたいのは生殺しだ。俺はナマコなんて殺した事無いぞ」
殺したくもない。
「むー、ニホン語はむずかしい」
「だったらアメリカに帰ってアルファベット並べてろ」
「……そんな言い方無いヨ」
悲しそうにジェーンは俯いた。
「悪いけど、本心だぞ。俺はな、今でも、今からでも遅くない。お前には勤務外なんて辞めてほしいと思ってる」
「どうして？」
「……分からないのかよ。心配だからに決まってんだろうが。まだガキだってのにソレと戦うなんて。いつ死んでもおかしく無いんだぞ」
「アタシより小さくてもソレと戦ってる人だっているモン」
「違うっ」
一が珍しく声を荒げる。ジェーンは驚き、少しだけ悲しくなった。
「そういう意味じゃない。俺は、お前より小さな奴がソレと殺し合って死のうが、そんなの知らない。興味ない。けど、お前はダメだ」
「お兄、ちゃん？」

「お前が日本にきて、俺の目が届く範囲で何かあったら、世話になったおじさんたちに申し訳が立たねえんだ」
「……」
「だいたい、おじさんたちも何なんだよ。娘がオンリーワンで働くなんて、何で認めちゃうんだよ……」
一は空しくなる。折角、あそこは楽しかったのに。いい人だったのに。
「お、お兄ちゃん。アタシ、アタシね……」

「きゃあああああっ！」

絹を裂くような女性の叫び。店内にいた二人は驚いたが、顔を見合わせ直ぐに外へと飛び出した。
何が起きた。何なんだ。最悪の予感が頭を掠める。人類の脅威。外敵。害悪。ソレが我が物顔ではびこる世の中だ。何が起きても不思議ではない。
「お兄ちゃん！」
「ジェーン！」
いた。
何かがいた。店のすぐそこ。毛むくじゃらの物体。それに顔を埋める何か。
「うあああー、可愛い。可愛いよー、もっふもふしてるよー」
一は力が抜けた。馬鹿らしくなり、その場にしゃがみ込む。
「これ欲しいよー」
一たちに背を向け、顔を埋めているせいか若干くぐもった声で奇行に走る何か。そこへジェーンは足を向けた。何かは四つんばいに近い体勢だったので、スカートが捲れパンツが見えている。にも関わらず、一は嬉しくない。見てはいけないモノを見てしまったような、微妙な気分に陥る。
「かあいいよう、持って帰りたいよー」

「ていっ」
その尻をジェーンは蹴り上げた。可愛らしい悲鳴を上げ、何かは毛むくじゃらの物体から顔を離す。
「痛いっ、な、何？　何ですか？」
一は溜め息を吐いた。
「あ、ジェーンちゃん」
何かは、立花だった。立花は烏の濡れ羽色のセーラー服を着ており、それに負けないような、艶のある長い髪をポニーテールに結っている。学校の帰りだろうか。傍らには学生鞄と竹刀袋が転がっていた。
「こ、こんにちわ、ジェーンちゃん。あの、何でボクを蹴ったの？」
切れ長の瞳に悲哀の色と涙を浮かべ、立花は怖ず怖ずと尋ねた。
「ハロー、タチバナ。キュートなパンツが見えてたから蹴ったノよ」
「ええっ？　そうだったの？　危なかった。教えてくれてありがとね」
「ノーウェルカム」
ジェーンは微笑んだ。立花もつられて笑いだす。
「こんにちわ、立花さん。何してたの？」
「あ、は、はじめ君。こんにちわ。そ、その。いたの？」
立花は地面に座りながら、恥ずかしそうに上目を遣う。
「あはは、ごめんよ。俺がいたら迷惑だった？」
ぶんぶんと、立花は勢い良く首を振った。ポニーテールもついでに揺れる。
「めっ、迷惑じゃないよ！　そんな訳無いじゃないか」
「そりゃ良かった」と、一は笑顔を作る。
ジェーンは不機嫌そうに一を見遣ったが、一は視線を合わせようとしなかった。
「あ、あのさ？　はじめ君っていつからいたの？」
「いつからって……、あー、最初から」
立花の頬が凄まじい速さで紅く染まっていく。やがて、呻きなが

らスカートの裾を押さえ、
「ボ、ボクのっ、ボクのパンツ見たでしょ！」
涙声で叫んだ。
「立花さん、大丈夫だから」
一は得心し、優しく、諭すような口調で語り掛ける。
「何がっ！？」
「あんまり嬉しく無かったから」
「それはそれで屈辱だよ！」
立花は立ち上がり、一へ迫った。
「近い」
「ぎゃうっ」
ジェーンの差し出した足に引っ掛かり、立花は派手にすっ転ぶ。
「なっ、何すんのさ！」
「お兄ちゃんにずーずーしく近寄らないでヨ。それと、アタシの許可を取りもしないでお兄ちゃんと口を聞かないで」
「かっ、勝手だよ！　はじめ君と何をしようがボクの勝手じゃないか！」
「いや、俺の意志を介在させてくれよ」
口を挟んだ一を、ジェーンはジト目で睨む。思いの外、その眼光が鋭かったので一は黙った。黙らざるを得なかった。
「ほら、早く許可を取ったら？　お兄ちゃんと話せなくなるワよ？」
「し、知るもんか」
「はい。スリー、ツー、ワン。ほら、お願い（プリーズ）しますは？」
馬鹿にされている。それも、自分よりも年下の少女に。立花は逆らいたくなるのを我慢して深呼吸。体中の臓器に、脳に、新鮮な酸素が澄み渡っていくのを感じる。思考はクリア。そうだ。自分よりも、小さいのだ。年下なのだ。そう自身に言い聞かせると、少しだけ落ち着いてくる。そう、可愛いではないか。妹は兄を取られたくないのだ。嫉妬だ。背伸びしたい年頃なんだ。ならば、可愛い悪戯に付き合ってあげるのは年上の自分の役目だろう。

「ん。じゃ、じゃあ。ジェーンちゃん、お願いだよ。ボクもはじめ君と喋っても良いかな？」
だが。ジェーンは殊勝な立花の心がけを鼻で笑い飛ばし、オーバーリアクション気味に肩を竦めると、
「絶対にＮＯ！　アタシが死んでもお断わりー、許可しないもんネー」
心底楽しげに言い放った。
「……あ、あはは。そこを何とか」
大丈夫。
「しつっこいわねジャパニーズ。これだからナットウなんて腐ったモノを食べるレッツアックな奴らはイヤなのよ。アンビリーバボゥだワ」
「俺は納豆好きだけどな」
「……シャラップお兄ちゃん」
ちなみに、立花も納豆は好きだった。腐った豆でなく、発酵させた豆なのだ。言い返したい。でも、まだ、大丈夫。
「……お、お願いだよ」
「ドヒョー際のスモーマンみたいな粘りネ、タチバナ。見ていて吐き気がしちゃうわ。これダカラ電車の中で寝てしまうようなカトー種族はイヤなのヨ」
「いや、寝るだろ」
「お兄ちゃんはケーカイ心が無さすぎるの！」
ちなみに、九州から近畿までの長い電車での移動で、寝ていた。立花はこれでもかと言うぐらい寝ていた。目的地を乗り過ごしてしまうぐらい寝た。気のせいか、凄く馬鹿にされている気がする。
「……お願いします」
色々と。少しずつ。本当に少しずつだが場の空気が重たいものに変わっていく。
「Ｈｍｍ？」
ジェーンはそんな事にはお構いなし。

「アナタ、それでもＳＡＭＵＲＡＩなの？　涙が出るＣＲＹにあきらめが悪いのネ。タチバナの名が泣いてるわヨ？　アー、ハン？もう死んだらどうカシラ」
「お前さ、どこで日本語教えてもらってんの？」
「時代劇。お兄ちゃん、アレは良いわヨ。彼らはサイッコウにクールね」
「う、うう……」
「……？　あら、泣いてるのタチバナ？」
立花は悔しそうに顔を伏せ、竹刀袋を強く握り締めていた。
「ああ、ナルホド。今からタチバナはハラキリＳＨＯＷを見せてくれるってワケネ」
「……なあ、ジェーン。言い過ぎじゃないか？」
流石の一でも、そろそろ心配になってくる。これ以上はまずい。
「ハーラキリ、ハーラキリ」
ジェーンは全く心配してなかった。何も考えていないのか、小学生でも「それは……」と言わんばかりに立花を煽っている。
「で、で……」
遂に。遂に立花が袋から刀を取り出した。一はぎょっとして目を疑い、距離を取る。
「ハーラキリ、ハーラキリ」
「馬鹿！　二人ともやり過ぎだろ！」
「ハラキリハラキリハラキリ！」
「ちょっと黙れ馬鹿！　リズム変えんな、ムカつくわ！」
一はジェーンの口を押さえ立花を宥めに掛かる。
「お、落ち着いて！　落ち着いて立花さん！」
「で……、で……」
で。で、とは何だ。そもそも会話が成立していない気もしてきた。
「た、立花さん？」
ダメだ。もしもの時は体を張ってでも抜刀を防がなければならない。一は降って湧いた不幸に倒れこみたくなった。

「ジェーン、余計な事言うなよ」
「ふん（ウン）、ははっは（わかった）」
「あっ……」
口を押さえていた手が、ジェーンの舌と吐息で舐め回された。何とも言えない感覚に一の体から力が抜け落ちていく。
そこを好機と見たのか、立花は鞘から刀を抜き、大上段に振りかぶった。
「で、殿中でござるうぅ！？」
ああ、『で』とはその事か。けど、刀を抜いた君が言ったらダメなんだよ。突っ込みきれない状況に、一はどうしようも無いくらいに意識を手放したくなった。

歌う犬、月を謳え

動物界。脊索動物門。脊椎動物亜門。哺乳綱。ネコ目。ネコ亜目。イヌ科。イヌ亜科。イヌ属。タイリクオオカミ。イエイヌ。通称、犬。

「可愛い……」

頬を赤らめ、立ち尽くす立花の視線は毛むくじゃらのそれに釘付けだった。

「んー、野良犬かな？」

一は何気なく、その物体を観察する。ジッと見る。昔テレビで見たコリー犬に似ていた。しかし、その姿がコリー犬と完全に一致しているわけではない。尻尾は毛でふさふさしていて、丸い。毛色は少し明るい灰色で、耳がピンと張っていた。どことなく体つきは小さい。体高は六十センチあるか、ないか。首輪をしておらず、飼い主らしき人物もいない事から、一はそう決定付けた。何よりも、その目だ。飼い慣らされた生温い目ではない。野性の、今まで一人きりで生きてきた、誇り高い眼だ。決して人に媚びる事はなく、誰にも尻尾を振りそうにない。　孤高。その言葉が彼には良く似合うと思った。

そして思う。面倒な事になりそうだ、と。立花は嬉しそうにじゃれているが、このままではいけない。

「ねえねえ、はじめ君。飼おうよ、この子さ、店で飼おうよ」

「……店は駄目だよ」

せめて自分の家でと言って欲しかった。店で飼うなんてとんでもない。

「え？　ど、どうして？」

立花は理由が分からずに、涙目で一に訴えかける。まずい。心が揺れ動く。一はなるべく立花を見ないように努める。

「う、うちは駄目。食べ物とか扱ってるから、衛生上悪いし」

「お、お風呂に入れてあげれば良いじゃないか。ボ、ボク毎日この子を洗うからさ……」
「……店で飼うって言ったってさ、店のどこに置いておくつもりなの？」
「え、えーと？　あっ、店の外！　だってさだってさ、この子を置いておけば番犬代わりになるじゃない。それに、すんごく可愛いから看板犬にもなれるよ？　ね、ね？」
まずい。押されている。
「そ、そうだね……」
「お兄ちゃん？」
中々の強さで、一はジェーンに足を踏まれた。しかも、その攻撃は的確に爪先を狙っている。
「い、いや！　駄目だ。犬が嫌いな人もいるし、店の近くに置いとけば、唯でさえ少ないお客が更に少なくなっちゃうよ。だから、その、ね？」
「意地悪だ……」
潤んだ瞳で一は見つめられてしまう。誰か助けてくれ。一は強く願った。
「ありゃ、何してんの？」
その願いが通じたのか、どうしようもなく膠着していた所へ、騒ぎを聞きつけた糸原が現れる。
「ああ、その、犬が」
「犬ぅ？」
答えるかのように、犬が和やかにあくびを一つ。この場の空気など知ったことかと、耳をぺたりと座らせ、丸くなって目を瞑った。
「あー、ホントだ。けど小さいわねコイツ」
糸原は犬に近付いていくと、全身を値踏みするかのように見回す。
「何か、見たこと無い感じの犬ね」
「あ、糸原さんもそう思いました？」
「うん。これは強敵ね、挑戦するかどうか迷うわ」

「は？」
　一は目を丸くした。何を言っているんだこの人は。
「ね、ねえねえ、しのちゃん。お店で犬飼おうよ、飼おうよ。はじめ君ってば駄目だって言うんだ。意地悪だよ。ずるいよ。卑怯千万なんだよ」
「ちょ、ちょっと立花さん？」
　立花は数の利を得ようと糸原に訴えかける。
「えー？　にーのまえー、それぐらい別に良いじゃない」
　良し良しと、糸原は立花の頭を撫でた。嬉しそうに喉を鳴らし、立花は糸原にしがみ付く。
「ほらっ、今のところ二対二だよ？」
「……厄介だな、ホント」
「うるさいわねー、別に犬をくうぐらい良いじゃない」
「は？」
　場の空気が一変する。
「……？　何よ？」
「は、はは。ヤダナ糸原さん、俺の勘違いかな。くうんじゃなくて、かうんですよ」
　引き攣った一の笑い。
「そ、そうだよ？　しのちゃん何言ってるの？」
「……イトハラ？　キツイジョークはアタシも好きじゃないワ」
　蒼い瞳が糸原を貫く。たしなめるようなジェーンの口調。
「ジョーク？　何言ってんのよ、犬ってのは飼うんじゃなくて、食うもんなのよ」
　真剣みの篭った口調に、立花は糸原から離れた。
「糸原さん？」
「ちょっと小さいけどさ、そこそこ丸いし」
「……イトハラ？」
「ほら、腿の辺りとか大丈夫そうじゃない？」
「大丈夫じゃねぇよ！」

一は叫ぶ。糸原が悪乗りしているのか本気なのか判断が付かない分、本当に大丈夫じゃなくなってしまう。
「……何怒ってんのよ？」
「し、しのちゃん、ひどい。ひどいよ……」
純真そのもの。めそめそと泣き出す立花に、見かねたジェーンが肩を貸した。
「ちょっと、悪ふざけもそこまでにして下さいよ。立花さん、すごく犬好きなんですから」
「あー、そうだったの？　ごめん、ごめんねー」
「……」
糸原は立花に睨まれる。涙目だったので、何の迫力も無かった。
「あんたも犬が好きだったんだー？　私もね、超好き。良いよね、犬って。あの筋ばった所とかさ。妙な臭みさえ取れればイケるし」
「イケねえよ！」
糸原は怒鳴る一を手で制す。
「ちょっと、うっさいわよあんた。別に犬食べるぐらい普通じゃない」
「……普通じゃないっすよ……」
「はん、よっぽど裕福な生活を送っていらっしゃったらしいわね？　羨ましすぎて反吐が出るわ。私なんか、私なんかね……。ただの鍋だって言われてさ、食わされてたのよ。だいてん鍋とか言われてね……」
あの事件以降、糸原に妙な設定が出来上がっている。仕上がっている。一は頭が痛くなるのを感じた。
「あー、その、だいてんって何ですか？」
「うん。ほら、大きな点で、だいてんよ。大って字に点付けてみ？」
「はあ……？」
けろりと糸原は言い放った。一は脳内でやってみる。なるほど、『大』に『点』。
「……糸原、もう黙れ」

この人は一体どんな生活をしてきたんだろう。
「まともなお肉が食べたかったなあ……」
何故か、糸原の視線が寝ている犬に向いた。
「分かった！　分かりましたよ！　今日は焼肉でもすき焼でもステーキでも何でも良いですから！　お肉を食べてきて下さい、牛の！」
「良いの？　へへ、やったラッキー」
一が差し出した財布を奪うと、糸原は鼻歌交じりで立ち去っていく。終わるまで待っていてくれるのではなかったか。とんでもなかった。
後に残されたのは、呆然として立ち尽くす一と、只管すすり泣く立花と、彼女を必死で宥めるジェーン。犬は自身の生死が掛かっているにも関わらず、素知らぬ顔で眠っていた。
「冗談、だよな……」
「すごく、リアルだったんだケド……」
とんでもなかった。

「駄目だ」
立花の泣き落としにも屈せず、店長は頑として言い放った。
「そ、そんな……。ひどい、ひどいや。じゃあ店長さんは、あの子がどうなっても良いって言うの？」
「知らん。大体、ここまで一匹でやって来たんだろう。これからだってやって行ける。人間の勝手な都合で生き物を飼おうとするな。おこがましいとは思わんのか？」
「で、でも……」
店長は煙草を燻らせつつ、強い意思を宿して立花を見据える。
「でもじゃない。良いか？　動物はお前がどうこうして良い物じゃない。無論、私たちにもだ。見ろ、奴らは動物園で暮らすのが幸せか？　ああ、確かに朝昼晩と三食出され、敵も居ない平和な空間で悠々と食事が出来、何の脅威もなく眠り、暮らせるんだ。幸せと言

えば幸せかも知れんな。だが、本当にそうか？　そうなのか？　本当は、動物ってのは自分の生きるべき世界で、自然と暮らすのが一番じゃないのか？　立花、お前は自然の摂理に逆らってまで、自分か、もしくはその犬が死ぬまで面倒を見切れるのか？」

「う、そ、それは……」

「言い切れないのか？　じゃあ駄目だ。言い切っても駄目だがな」

「う、うう……」

顔を伏せる立花に、店長は追撃を加える。

「泣くな。私は一みたいに甘くないからな。悔しかったらすぐに泣く癖を直せ。鬱陶しい」

「うわあああん！」

立花は半べそをかいてバックルームを飛び出した。一は追おうとしたが、ジェーンに止められて仕方なく店長に向き直る。

「……何もあそこまで言わなくても」

「お前が甘いんだ。誰かが言わなけりゃあいつはあのままだぞ」

「まあ、そうかも知れないですけど……」

ジェーンはさり気なく一の横に並び、

「でも、ボスもマトモな事言うのネ。ハードだったケド、ボスの言ってる事は正しいワ」

しみじみと呟いた。

一も続く。

「……俺もびっくりしましたよ。ああ、この人も人間なんだなって。店長、動物に関して含蓄がありましたけど、昔ペットでも飼ってたんですか？」

「いや、私は犬が嫌いなだけだ」

時刻は午後五時。

一の勤務終了まで、残り二十一時間。

「ジェーン、この団子はどこに並べれば良い？」

「ン、そうネ。お兄ちゃんに任せる」
「……俺が？」
一とジェーンは、遅れてきた商品の陳列を開始していた。弁当やパンの位置は滅多に変わらないので、陳列自体は簡単だ。だが、たまに珍しい物や新商品が入ってくるので、その度に陳列の位置を考えなければならない。新しい物は客の目に付き易い場所に並べるのが常だったが、考えるのも棚の位置を移動させるのも、得てして面倒な物だ。
「んー」
心底面倒だったが、今日のジェーンは何故か機嫌が悪い。ここは長いものに巻かれろ。君子、危うきに近寄らず。
「じゃあ、レジ前にバックの台を持ってきて並べるわ」
「ン、オッケー」
「明日は満月らしいしな。月見する人もいるかもしんない」
自分みたいに。
「え？　オツキミ？」
「そうだよ。多分、俺もするだろうし。明日の晩に出て来いよ。ほら、お前さ、星とか見るの好きだったろ？」
「……そう、だネ。ン、時間がアレバ行く」
「？」
どうにも感触が悪い。しかし、仮にも妹であるジェーンのご機嫌を伺うばかりではどうかと思い、一はそれ以上口を出さなかった。出せば、良かったのに。
「じゃ、台取って来るから、そっちはよろしく」
ジェーンが頷いたのを確認し、一はバックルームに向かった。外からは遠吠えが聞こえる。まだ、あの犬は店の前にいるのだろうか。願わくば、糸原の餌食にならないよう。
「うちは保健所じゃない！」
「うぇっ？」
バックルームに入った瞬間、一は怒声に出迎えられる。数時間前

のやり取りを思い出し、気分が沈んだ。店長は電話をしていたようで、どこかで聞いたような罵声を通話相手にぶつけている。
一は団子を並べるための台を取りに来ただけだったが、何故か動けなかった。
「馬鹿にしてるのか！」
盛大な音を立て、電話が受話器に叩きつけられる。店長は怒り心頭と言った様子で、拳を震わせながら煙草を口に銜えた。
「あ、あの、どうしたんですか？」
「……丁度良い。私の捌け口になってもらうぞ」
何の。突っ込む事も出来ず、一は事情を聞いてみる。
「何があった？　さっきの電話だよ」
「電話って、その、誰からですか？」
一は話を聞くため、自然な動作でパイプ椅子に座った。
「座るな。私の話は立って聞け」
「……別にそれぐらい――」
「――それぐらいなんだ？」
凄みを利かせ、店長は一を見据える。一は黙って椅子を畳んで、壁に立てかけた。
「それぐらい、何ともありません……」
「うん。さっきの電話は近隣住民からだ」
「またクレームですか？」
違う。店長は短く答え、煙を一に吐きかける。
「犬だよ、犬」
「え？」
まさか。店の前の奴だろうか。まずい。危惧していた事が起きてしまった。
不安そうな一の顔を楽しそうに見遣ると、店長は手を振る。
「違う。あの犬じゃない。別の犬だ。いや、犬、どもと言ったところか」
「へ？　違うんですか」

「ああ。最近な、野良犬が増えたらしい」
「えっと、野良犬とうちに何の関係が？」
そこで、店長は火が付いているにも関わらず煙草を握り潰した。
「……そうだ。ウチと野良犬どもは何の関係もないっ。なのに奴ら、何とかしろと言ってきやがったんだ。知るか、食い殺されろ」
稀に見る店長の、自分以外に対する激昂ぶりに一は焦る。
「あの、とりあえず落ち着いてくださいよ」
「落ち着いていられるか。くそっ、役立たずとか、職務怠慢だなんて抜かしやがってあのババア、畜生、匿名で電話してくるな。正々堂々と名乗ったらどうなんだ」
「……その通りじゃねえか」
「何か言ったか？」
いいえ。一は首を横に振り、作り笑いを浮かべた。
「んー、今まではそういう事無かったんですか？　わざわざここに電話するなんて、よっぽど切羽詰ってる感じがするんですけど」
「無かった。一切な。これだから何も知らない一般人は困るんだ」
知らせていないのはそっちだろう。とは、一には言えない。
「はあ……」
今までは、無かった。やはり、よっぽどの事が起こっているのだろうか。そう言えばと、一は昼間の犬を思い出す。
「でも、俺も野良犬なんか久しぶりに見ましたよ。何だかんだ言って、日本の治安はまだマシな方と思ってたんですけどね」
「犬、か」
店長は感慨深げに呟いた。
「もしかして、ソレが絡んでるんじゃないですか？」
「……有り得ん。とは、言えんな。まあ良いだろう。たまには客の意見にも耳を貸してやろうじゃないか」
「どうするんです？」
「犬退治と行こうか」
紫煙に包まれながら、店長は口の端を吊り上げる。

「退治って。犬、殺すんですか？」
「場合によっては、だ。野良犬の増加、何かあるかも知れん。情報部に伝えておくとしよう」
一は生返事。まさか、たかが野良犬だろう。一は甘く見ていた。

十月も終わりに近づき、残すところあと二日で十一月。その頃の冬にもなれば、五時を過ぎると大分暗くなる。月は太陽が沈むのを今や遅しと待っていた。太陽はじきに姿を隠し、爛々とした月が現れる。明日は満月らしい。曇る気配もなく、絶好の月見日和。
「……立花さん、遅いな」
「そうネ」
交代の時間はとっくに過ぎていた。本来なら一、ジェーン、立花の三人で作業している筈だったのだが。立花は出て行ってからもう一時間近くも飛び出したままだった。
「探しに行った方が良いのかな」
「エー？　ダメ、ダメだよ。お兄ちゃんはここで仕事してなきゃ」
「じゃあお前が探しに行けよ」
「絶対にＮＯ」
一とジェーンは新商品――店長が気まぐれで仕入れた団子――を並べるのに苦心している。
「んー、寂しいな。ポップが欲しい。ジェーン、何か書いてよ」
「お兄ちゃん？　ニホンじゃ、そーいうのは言いだシッペがやるんじゃないノ？」
「だって俺、自慢じゃないけど絵書くの苦手だもん」
本当に自慢でもなんでもない。
「……むー、うまい人っているノ？」
「いるんじゃないか？」
一一、店長、三森冬、糸原四乃、ジェーンゴーウェスト、立花真、神野剣、堀。一は考える。

「いや、やっぱいないな」
「Ｈｍ、しょうがナイ。今はこのままにしとこっか、お兄ちゃん」
ジェーンは不満げに頬を膨らませながらも、仕方なく商品から背を向けた。一は何気なく、店の外に目を遣る。どうしても。先ほどの話を聞いてしまえば、あの犬が気になってしまう。
「お兄ちゃん？」
「ん。ああ、あの犬がさ、ちょっと気になって」
「……アレ、アタシ犬じゃないと思うのよネ」
ぽつりと、ジェーンは呟いた。
「犬じゃない？」
「Ｙｅｓ、ドッグじゃなくてカィアゥディっぽいノ」
「カイアウデイ？」
ジェーンは呆れ顔で一を見上げる。
「お兄ちゃん、何年向こうにいたっけ？」
「知っての通り二年だよ。それがどうした」
イエスとノーと、ハローしかマスターしなかった二年間だった。ジェーンもその事を嫌と言うほど知っていて、身に染みていたので、諦めた。
「……コ、コヤウテ？　じゃなくっテ、そ。コヨーテ。カィアゥディはコヨーテなの」
発音の問題。
「コヨーテ？」
日本では聞き馴染みが無かったが、一はその名前を知っている。なるほど、そう言われれば、確かにアレはコヨーテだったかもしれない。
「でもさ、日本には普通いないだろ。何だ、動物園から抜け出してきたってのか？」
一も気付いてはいたが、その可能性は非常に薄い。そも、コヨーテを飼育している動物園の数が少ない。アメリカなどでは害獣と言われているが、日本では手に入らない、そこそこに貴重な生物だか

らだ。脱走させるような、間抜けな真似はしないだろう。おまけに、駒台の近くにはコヨーテを飼っている動物園すら存在しない。

「それもアリだけど、アタシは、何だかちがう気がする」

「ふーん」

鋭い指摘だった。なまじ、店長とその事について話してきたばかりだったので、一は殊更そう思う。これが、この鋭さが勤務外を続けてきた、続ける事の出来る証だろうか。

もう一度、一は店外へ目を向ける。毛むくじゃらの物体。コヨーテらしき犬は変わらず、そこにいた。強いて言うならば、少しだけ変化があった。

「きゃうん！」

甲高い、野性の鳴き声。泣き声。助けを求めるような声にも聞こえる。

「またか……」

一は目を疑い、顔を覆った。ジェーンはもう我関せずと言った具合に目を背けている。

コヨーテの体に、立花が顔を埋めていた。

立花はコヨーテに餌をやっているようだった。

店の外にはドッグフードや、缶詰が散乱している。一は眩暈を覚えた。

「あの、ちゃんと片付けてね？」

「うんわかった」

分かりやすい生返事。

「……けど、この子食べてくれないんだ」

「んー？」

見ると、コヨーテは耳を座らせて、目の前に広げられたペットフ

ードには目もくれず、目を瞑って眠りを貪っていた。
「おなか、空いてないのかな……」
「見られてたら、恥ずかしくて食べないんじゃないかな。それより立花さん、今日五時からシフトに入ってるよ？」
「え、ええ？　う、嘘っ！？」
立花はコヨーテの体から、やっと顔を離して立ち上がる。
「……今なら店長も許してくれるよ。片付けは俺がやっとくから、着替えておいで」
「わ、分かった。ごめんね、はじめ君！」
慌しくその場を後にする立花を見届けると、一は腰に手を置き、面倒くさそうに息を吐いた。誰が後片付けをすると思っているんだ。しかし、やはり、一はあの立花の、純真無垢な瞳で見つめられる事を思えば、と。我慢する。どうにも、女の涙は苦手だった。嫌いだった。
「あんたも大変だな」
「まあね」
「ここは騒がしいな。ジャパンってのは、皆あんななのかい？」
「いや、そうでもない。あの子が特別なんだよ」
日本人一人だけを見て、特に、立花真と言う女の子一人だけを見て、日本という国を理解してもらっては困る。色々と、申し訳が立たない。
「しっかし、毛が乱れちまったぜ。どうしてくれんだ、あのサムライガールは」
「そりゃ申し訳ない。どれ、毛づくろいしてやろう」
一はしゃがみ込み、彼の毛を撫で始めた。
「……お、おう。中々上手いじゃねえか、リトルボーイ」
「ところでさ、腹減ってないの？」
ちらり、と。一は缶詰の山に目を向ける。折角立花が買ってきたのに。恨めしい目つきで彼を見遣ると、ぶんぶんと。彼は少しだけ申し訳無さそうにしながらも首を振った。

「悪いが、駄目だね。人の作ったモンには手を付けない事にしてるんだ」
「ふーん、オーガニックだな」
「良い言葉だな、リトルボーイ」
そりゃどうも。礼を返すと、一は彼の尻尾を触り始める。ふさふさしていて、立花が夢中になるのも分かる気がした。
「お、おい、尻尾の付け根には触るんじゃねえぞ！」
「うん。分かったよ」
残念そうに、一はそこから手を離し、今度は腹を撫で始める。
「君ってさ、犬なの？」
その言葉に、彼の耳と尻尾がピンと張る。
「ノーノー、ミーは誇り高きコヨーテだ。人間なんかに尻尾振って飼い慣らされてる奴らと一緒にするんじゃあない。ミーは文化的英雄。トリックスターなんだぜ」
「ふーん」
なるほど。やっぱりコヨーテか。そうかそうか。コヨーテか。
動物界。脊索動物門。脊椎動物亜門。哺乳綱。ネコ目。ネコ亜目。イヌ科。イヌ亜科。イヌ属。コヨーテ。
一はふと、疑問が湧く。
「なあ」
「なんだい、リトルボーイ」
「俺さ、どうして犬と喋ってんだ？」
コヨーテって、人語を解したっけ？

闊歩する。闊歩する。闊歩する。
人の目が触れない暗がりを抜け、光の届かない闇を進む。
進軍する。進軍する。進軍する。
それは集団だと言うのに、足音は無い。無音で往く。太陽は隠れ、月が姿を現していた。夜の中でシルエットが踊る。

獣。獣。獣獣獣。
四足で歩く獣が、獣たちが街を目指していた。それは犬。犬。犬。犬。犬。何かに、誰かに誘われるかのように、一同が足を進める。何故かは分からない。ただ、体が勝手に動くのだ。行かなければならない。進まなければならない。
野良犬だけではなかった。人に飼われていた犬も行軍に参加している。首輪を引き千切り、リードを振り解き、飼われていた犬は犬で無くなった。飼い主への忠孝よりも、温情よりも、何よりも、獣としての本能が彼らを優先させた。月に吠え、街を目掛け、獣たちは夜を越える。

――そうだ。

そうだ。そうだ。呼んでいる。呼んでいる。仲間が呼んでいる。助けてくれと叫んでいる。声を嗄らして鳴いている。だから、行かなければならない。彼らの為にも、自分たちの為にも。
走れ、走れ走れ走れ。疾走しろ。疾行しろ。驀進しろ。馳走しろ。
仲間が呼んでいる。走れ。
月が呼んでいる。変われ。
綺麗だ。群れの先頭を走る一匹が空を見上げた。
綺麗だ。群れ全体が空を見上げた。
綺麗だ。
今夜は、月が綺麗だ。だが、まだ足りない。満ちろ。満ちろ満ちろ。早く満ちろ。犬たちは、月齢なんて知らない。本能で理解する。
明日が、その日だと。

あなたは人狼ですか？

コヨーテは、人語を解さない。

一は即座にコヨーテから距離を取った。

「な、何だ！　何で喋ってんだお前！」

「何言ってんだ、リトルボーイ。さっきまで会話してたじゃねーか」

コヨーテは不思議そうに一を見上げる。

「それより、早く続きをやってくれよ。あんたのフィンガーテクは中々良かったぜ」

獣に褒められても嬉しくない。一は周囲に人影があるかどうか確認した。いない。誰もいない。

「いや、気付かなかったのはアレだけど。とにかくさ、お前、動物だろ？　なんで俺と話が出来るんだ？」

「……それこそミーの台詞だぜ。あんたこそ、どうして俺と話が出来る？　どうして俺の言葉を聞き取れる？」

「？」

コヨーテからは、敵意を感じない。嘘を言っているようにも見えない。だからこそ、意味が分からない。

「どうしてって、お前が喋ってるからだろ」

「まあ、喋ってると言ったら喋ってるけどよ。普通の人間にゃ聞き取れない筈だぜ」

「そんな訳ない。俺だって普通の人間だぞ」

父親が妖怪だった訳でも、母親が天使だった訳でもない。人間と人間から生まれた、正真正銘純度百パーセントの人間だ。

「そうなのか？　だがリトルボーイ、あんたからは何か匂うぜ」

「匂うって、どんな？」

「……そうだな。あんた、魔術は使えるかい？」

久しぶりに聞く言葉だった。聞く事も無い言葉と思っていた。
「いや、使えない」
「じゃ、魔絡みの本なり石版なり、見えはするんだな」
「……なんで分かるんだよ？　お前も、その、魔術を使えるのか？」
一の言葉。それを鼻で笑い、コヨーテは牙を見せた。
「ミーが魔術を？　冗談キツイぜオイ。そもそもだリトルボーイ、あんた自分を普通だって言ったよな？」
「それがどうしたんだよ」
にいい、と。まるで人間みたく口の端を吊り上げコヨーテは笑った。
「その割にゃ、魔術について知ってるみたいだな？　普通の人間は、存在すら知らないし、知ってても信じないと思うけどよ」
「……たまたまだよ」
言い返せなかった。
「ま、知ってんなら話が早いぜ。良いかい、ミーの言葉は、普通では理解できない。聞こえない。それこそ、本当に犬が鳴いてるようにしか聞こえないんだ」
一は黙って続きを待つ。
「となると、ミーの言葉を聞ける奴は限られてくる。まず、ミー以外のコヨーテ。ミーと同じくらいの力の持ち主。あとは、魔術的素養を少なからず持っている者だ」
「俺は……」
「コヨーテじゃない。ミーに匹敵する力も無い。すると、答えは三択のうちの残り一つって訳さ。理解したかい、リトルボーイ？」
一はまた黙った。なるほど、ならば納得がいく。あの日だ。あいつだ。それが本当ならば。本当に、コヨーテが嘘をついていないのならば。
「……お前は、ソレ、なんだよな？」
「イエスだ。尤も、ソレなんてのは人間が勝手に名付けた物だけどな」

「目的は何だ？　どうしてここにいるんだ？」
　喋れるからと言って、今、こうして話しているからと言って油断は出来ない。百パーセント信用出来そうにもない。信じるな。簡単に引っ掛かるな。
「呼ばれたのさ」
「呼ばれた？」
　帰ってきたのは短い答え。一は拍子抜けする。
「ああ、そうさ。誰彼構わず、とにかく助けて欲しいって、何とかしてくれってな」
「……誰に？」
　コヨーテを呼ぶ人物などいるのだろうか。半信半疑ではあったが、一は続きを促した。
「ここの犬たちさ」
　心臓が強く、一の胸を打つ。
「い、ぬ？　いぬって、犬か？」
「……犬は犬だろ。少なくとも、ミーは犬にしか呼ばれてない」
「この街の犬が、お前に助けを求めたって言うのか？」
　コヨーテは空を仰ぐ。月が徐々に、その姿を現し始めていた。
「ミーだけじゃない。その声が聞こえるモノ全てにだ。ま、目的なんて無いさ。あんまりその声がうるさいから、ついつい見に来ちまっただけだぜ」
　まだ、信じられない。
「何だよ、この街に何が起こってるって言うんだ？」
「さあね。けど、良い事だけは起こりそうにないな。そう思うだろう、リトルボーイ？」
　今のところ、その言葉だけは信じられる。
「ソレが、またここに来るって言うのか？」
「ソレをミーに言うか？　もう来てるじゃねえか。いや、来てたって言うべきか、居てたって言うべきなのか」
「……嘘だろ……」

また、ソレが来る。戦いが始まってしまう。
「なあ、教えてくれよ。何が来るって言うんだ？　何が起こるって言うんだ？　知ってんだろ？」
「その前にだ。あんた、そうやって警戒心を剥き出しにするのはやめてくれよ」
「え？」
「わかんねえのか？　まずはミーを信じろって言ってるんだ。話を聞くなら、態度を改めて欲しいところだぜ」
コヨーテは尻尾を振りつつ、一を眺めた。
「あんたがミーを警戒しているように、ミーもまた、そんな態度をしているあんたを警戒しているんだぜ」
「……だってさ、お前ソレなんだろ？」
「ふん、縛られるなよリトルボーイ。益々小さくなっちまうぜ。ミーは、確かにあんたらの言うところのソレだ。けど、だからどうしたってんだ？　何もソレが、人間以外の種族が、全てリトルボーイに危害を加える訳じゃないんだぜ」
諭されて一は冷静さを取り戻す。確かに、喋るだけならばガーゴイルやシルフも人語を話していた。だが、彼らは異形の姿をとっていたからであって、一の二十年近く積み重ねてきた常識が通用しないと、最初から分かっていたからだ。割り切れていたからだ。コヨーテ。一の知っているコヨーテは、喋れない。そのコヨーテにも一の常識は通じない。
「ん。まあ、そうだよな。そうなんだよな……」
一は自分に言い聞かせる。何もかも、今更だ。
「分かってくれたところで、ミーから一つアドバイスだ」
コヨーテは耳を寝かせ、幾分か嬉しそうに尻尾を振った。
「昼間に会った嬢ちゃん、気を付けておいた方が良いぜ」
「……嬢、ちゃん？」
「とりあえず、ミーは行く。そろそろサムライガールもバッドガールも来る頃だ」

「え？」
コヨーテは立ち上がり、一から背を向ける。
「縁があれば、また会おうぜリトルボーイ」
「お、おい！　嬢ちゃんって誰の事だよ！」
振り返ることなく、コヨーテは夜の街に消えていく。
「なんなんだよ……」
時刻は午後六時過ぎ。一の勤務終了まで、残り二十時間弱。

「お兄ちゃん、何してたノ？」
「片付けだよ。それよか、立花さんは？」
ジェーンは商品の廃棄漏れを確認しながら、バックルームを指差した。
「ボスにどなられてる」
「……そっか」
あとで泣き付かれるな。一は肩を落とし、消費期限の切れたパンをかごに詰めていく。
「なあ、ジェーン？」
「なあに、お兄ちゃん」
「コヨーテって喋れると思うか？」
ジェーンは一瞬、一を不思議な物でも見るように見つめた後、
「……メ、メルヘンチックな話ネ」
それだけ言った。
「ありがとう。それだけ聞けりゃ充分だよ」
「何かあったノ？」
一は首を緩やかに振る。
「いや、何でもない。しっかし、お腹減ってきたなー。店長休憩くれないかな」
野良犬が増えたなんて話よりも、コヨーテの話よりも、何よりも切実に一は思った。先の事もも大事だが、今の方がもっと大事だ。

「タチバナとチェンジすれば良いじゃナイ」
「んー、良いのかな？」
「ノープロブレム。かまわないヨ」
一は頭を振る。
「そうじゃなくて、お前に悪いなって。ジェーンだって俺と同じくらいに入ったろ。お腹空いてないか？」
「……レディにそんなコト聞かないでよ」
「OH、失礼。じゃ俺だけご飯食べてて良い？」
「ダ、ダメ……」
ジェーンはお腹を押さえながら訴えた。
「はいはい、分かったよ。最初っからそう言えば良いのに」
「ビークワイエット。レディのタシナミ何だから」

「はじめくぅん……」

「うわっ」
いきなり背中にしがみ付かれ、一は飛び上がる。振り返ると案の定、目を真っ赤にさせている立花がいた。
「店長、怒ってないって言ったじゃないかぁ……」
「ご、ごめん」
そんな目で見られては、謝る事しか出来ない。
「……遅刻したボクが悪いんだけどさぁ」
立花は指で『の』の字を書き、イジイジとしている。
「け、けど良いんだ。あの子がいるし、元気をもらうからさ……」
「あー、言いにくいんだけど。あいつ、どっかに行ったよ」
「え、え？」
「ついでにさ、俺たちお腹減ったから、少し休憩に入るね」
「えええっ？」
今しかない。隙を見せれば彼女は容赦など無しに牙を突き付けてくる。

「そーいうワケだから、タチバナあとよろしくネ」
「はっ、はじめ君!?」
「お、お客さんも少ないし、仕事も片付けたし。だ、大丈夫心配いらないよ」
一は立花から背を向け、逃げるように歩き出す。
「は、はじめ君はボクの事が嫌いなんだ?」
計算でも何でもなく、彼女は素でこんなことを言えるのだ。一は恐ろしくて仕方がなかった。
「ちっ、違うよ! 嫌いな訳ないじゃないか!」
「……じゃあ、どうしてボクが来たら休憩に行くの?」
お腹が空いてたし、交替するにしてはこれ以上無い最高のタイミングだから。とは言えない。断じて。口が裂けても。
「……俺は、立花さんを信じてるんだよ。君になら、任せられるんだ」
「そ、そうなの?」
「そうなの!」
必死だった。
「じゃ、じゃあさ、はじめ君はボクが嫌いじゃないんだよね?」
「当たり前じゃないか」
「ボ、ボクの事が……、……好き、なんだよね?」
「そう! ザッツオーライ!」
一は叫んだ。
「お、お兄ちゃん?」
「も、もう一回、今度はちゃんと言ってくれないかな?」
「そう! ザッツオールァイ!」
一は叫ぶ。ちょっとだけ発音が良くなっていた。
「そ、そういう意味じゃないのに……」
「? とにかくごめんね。なるべくすぐに戻るからさ」
「う、うん。お、お願いだよ?」
一は喉を押さえながらバックルームに入っていく。その後ろを、

不満そうな顔でジェーンがついていった。

一は店長に休憩する旨を告げた。店長はまず最初に自分に言えと憤っていたが、立花を一人にさせる事が彼女への、遅刻に対しての罰だと気付き、快く一たちに休憩を与えてくれた。

「……さ、どうすっかな」

休憩を貰ったは良いが、特にどうするかなんて考えていない。差し当たっては晩ご飯だが、財布を取られたままではどうしようもなかった。隣で腕を絡めようとするジェーンを遠ざけながら、一は頭を捻る。

「……ジェーン」

「えへー、何？　お兄ちゃん？」

ジェーンはツーテールを揺らして、嬉しそうに答えた。

「金貸してくれ」

「ＷＨＡＡＡＴ！？」

静かな町並みに、彼女の甲高い声は良く響く。

「だって財布ないんだもん」

「な、なんで？」

「……糸原さんに取られたんだよ。とにかく、お前は金あるだろ？良いから出すもん出せよ」

手を差し出し、一は横柄に告げた。

ジェーンは体を震わせ、口元をひくつかせる。

「い、色々と言いたいコトはあるけど、しょーがないワ。お兄ちゃんをかわいそうな目にあわせられナイからネ」

不承不承と言った具合に財布を差出し、ジェーンは一を見つめた。

「助かるよ。それじゃ……」

「ウェイト」

一の出した手が軽く払われる。

「何だよ」

「条件があるワ。守ってくれるナラ、ご飯を食べさせてあげる」
「……ええ？　あー、無理な事は言うなよ」
仕方ない。一は自分を納得させて頷いた。
ジェーンは満足そうに微笑み、人差し指を立てる。
「一つめ。お兄ちゃんはアタシとご飯を食べるコト」
「あいよ」
それぐらいなら問題ない。
「二つめ。お兄ちゃんはアタシに優しくするコト」
「いつもしてるだろ」
「してナイ！」
分かった分かった。一は手を適当に振り返事する。
「……むー。じゃあ、三つめ。お兄ちゃんの作った物が食べたいナ」
「俺の？」
意外だった。
「ま、まあ、そんなんで良いなら。任せろ、お安い御用だよ」
どうせ材料もジェーン持ちなのだ。お金を出して貰える。断る理由なんて無い。
「Ｉ　ｄｉｄ　ｉｔ！　それじゃ、お兄ちゃんの家に行こ！」
「俺んち？　んー、お前のマンションよか近いから良いけど。その代わり、家には何もないから買い物が先な」
「オッケーオッケー、さ、ゴーゴー！」
「おい、近いぞ」
「近くしてるノ！」
ジェーンに引っ付かれ、腕を絡められる一。仕方ない。諦めて成すがままにされる。

「ねえ、一は？」
「あ、しのちゃん」
一たちが店を出て数分後、入れ違いになる形で糸原が店にやって

きた。片手には大きめの袋を抱えている。
「はじめ君ならジェーンちゃんと休憩に行ったよ」
カウンターの中で暇そうに立っている立花が声を掛けた。
「休憩ぃ？」
「う、うん。あ、あの、なんで怒ってるの？」
立花はおずおずと尋ねた。糸原の眉間に、急に皺が寄ったからだ。
怒らせてしまっただろうかと不安になる。
「別に。怒っちゃいないわよ……」
「そ、そう？　で、でもさ」
「――でも何よ？」
その剣幕に、ぶんぶんと首を振って視線を逸らした。
「ちっ、何よ。つまんないわね」
「あ、それさ、隣町のお肉屋さんのコロッケじゃない？」
立花は見覚えのある袋を指差し、嬉しそうに見つめる。
「あー、有名なの？」
「ボクたちの学校で、今人気なんだよ。安いけど、すごく美味しいからさ」
「ふーん」
何の気なしに、糸原は袋の中を覗いた。結構な量のコロッケが、まだ湯気を立てている。湯気と一緒に、芳ばしい香りが周囲に広がっていった。
「わっ、良い匂い……」
「……あー、食べる？」
「い、良いの？」
「そんな目で見られちゃあね」
糸原は店のキッチンペーパーを取って来て、コロッケを丁寧に包んでから立花に渡す。
「うわあ、ありがと、しのちゃん」
「はいはい、こぼすんじゃないわよ」
さあて、残りはどうやって処理しようかな。糸原の気分が少し、

沈んだ。

卓の上には簡単な料理が並んでいた。

「……お兄ちゃん……」

「あー、お腹減ったし」

カレーライス。ハンバーグ。エビフライにナポリタン。全てレトルトである。

「手を抜きすぎじゃナイ？」

「うるさいな。お前のリクエストには答えてやっただろ」

「……？」

「ほら、ちゃんと冷蔵庫にプリンも冷やしてるし」

一は呆れたように口を開いた。

「サ、サンクス？　でも、アタシリクエストなんてしてないヨ」

「馬鹿だなあ、兄を甘く見るもんじゃない。俺にはお前の食べたい物が分かるんだよ」

「……それが、これ？」

どうにも、年端の行かない幼子が好みそうなメニューである。ジェーンは訝しげに一を見た。

「ねえ、お兄ちゃんもしかして……」

「あ、そうだ」

一は何かを思い出し、立ち上がる。戸棚を漁り、何かを持って戻ってきた。

「悪い悪い、忘れてた」

旗、だった。爪楊枝と紙で作られた、小さなアメリカの国旗を模したもの。一はそれをハンバーグに突き刺し、ジェーンの側に寄せた。

「はい、完成」

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｋｉｄｄｉｎｇ？」

「ちょ、大声出すなよ。馬鹿になんてしてないって」

「どう見ても！　お子様ランチじゃナイ！」
ジェーンはこたつから足を抜き、憤慨した様子で立ち上がり、一を指差す。
「指差すな」
「ささささ、さされるようなコトしたのはお兄ちゃんでしょ！」
「何だよ。こういうのが食べたかったんじゃないのか？」
「絶対に言ってナイ！　バカ！　お兄ちゃんはバカ！」
「そう……だったのか？　悪い、ついスーパーのお菓子売り場ではしゃぐお前を見ていたら……」
一は頭を押さえながらよろけた。
「と、とりあえず座ってくれ……」
「ン」
素直に指示に従い、ジェーンはこたつに足を入れる。その時に、何かを蹴ってしまったが気にしない。一は何も言わなかった。
「お兄ちゃん、アタシも小さいままじゃないんだヨ。なのに、ちょっとばかりひどいんじゃない？」
「まあ、考えが至らなかったのは認めるよ。でもさ、お前が何も言わないのも悪いんじゃないか？」
「……アタシは任せるって言ったもん」
頬っぺたを膨らませ、ジェーンはオレンジジュースに口を付ける。
「アメリカ人の癖に、自主性が無いのかお前は」
「ゴーに行ってはゴーに従え、ヨ」
「口は上手くなったなあ」
「ニホン語も、上手になったでショ？」
悪戯っぽく笑い、ジェーンはナポリタンにフォークを伸ばした。
「ああ、上手いもんだよ。初めて、日本で会った時は驚いた」
あの、あどけない少女が。
「お兄ちゃんは変わってなかったネ」
「悪かったな。背も伸びてないし、髪も染めてなくて」
「ウウン、良かった」

「……良かった？」
口の中のハンバーグを飲み込み、ジェーンは頷いた。
「お兄ちゃんは、お兄ちゃんのままで、良かった」
「なんだそりゃ？」
「ふふ、ナイショ」
「……あっそ。ま、別に良いけどさ」
旗をスプーンで退かし、ジェーンは次にカレーを食べる。口に入れた瞬間、甘口だと分かり眉を顰めた。
「でもさ、お前も変わってないぜ」
「……そう？」
「イエース。分かりやすいところは、やっぱりあの時のまんまだよ」
「そう、かナ？」
一は楽しげに頷く。ジェーンは自分の皿のエビフライを平らげ、満足そうに目を細める。
「美味しかった？」
「Ｓｏ－ｓｏ……」
「では、おぜうさま。デザートをお持ちしましょうか」
「ふふっ、オネガイするワ」

外は寒かった。店を出た時よりも冷え込み、風が一たちを穿つように通り過ぎていく。
「一時間以上も店開けちまったな」
「良いじゃナイ。お兄ちゃん、明日までお店にいなきゃダメなんだヨ？」
「そう、だよな。でもさ、そんな無茶、何とかしてほしかったなー」
一は恨めしい目付きで、隣に並ぶ少女を見つめる。
「ボスには逆らえないヨ」
「……お前でも無理か、あの人強いよなー」
クスクスと、ジェーンはおかしそうに笑った。

こうして改めて見ると、彼女は変わったなと、一は思う。背丈こそあまり伸びてはいないが、体付きは丸くなり、大人っぽく見えた。

二年、か。一はしみじみと、アメリカにいた時の事を振り返ってみた。思い出していけば。短いようで、長かった。その曖昧な時間の大半を、ジェーンと過ごしていた事も思い出す。

「お兄ちゃん？」

考えに耽っていたので、一は少しだけ驚いた。

「……どした？　寒いか？」

「ン、平気。お兄ちゃん、何考えてるのカナって……」

「ああ、いや、別に。そういや、おじさんたち、元気してるのか？」

連絡ぐらいは入れた方が良いだろうか。一は向こうで世話になった人たちを思い出す。

「……元気、だと思うヨ」

「なら良かった。あのさ、今更だけど手紙とか書いた方が良いかな？　ほら、俺もこっちで一応、お前の保護者みたいなもんしてるんだし」

「気にしなくて、良いと思う」

「そう、か？」

ジェーンの答えは、妙に歯切れが悪かった。さっきまでは笑っていたし、怒らせたつもりも一にはない。

「……ジェーン、もしかして疲れてないか？」

ジェーンは黙ったまま、首を横に振る。

「何か、悩みとかない？」

「ナイ」

「……じゃ、出来たら言えよ」

「ふふ、何それ」

微笑んでくれるジェーンを見て、一は益々訳が分からなくなった。

「――――！」

「ん？」
唸り声が聞こえる。距離は近い。
「なあジェーン、今何か聞こえたよな？」
「……ウン。近いね」
犬、だろうか。野良犬が増えていると店長は言っていた。
「急ぐか」
「う、うん……」

「――！」

甲高い鳴き声だった。聞き流して店に急ぎたかったが、その声がやけに耳に残っている。本能に訴えかけてくる。嫌な、声だった。
「犬の鳴き声か」
一はぼんやりと口にする。
「お兄ちゃん、先に行ってて」
「は？　何でだよ？」
「良いカラ！」
そういう訳にはいかない。一は隣に目を向け、立ち止まる。ジェーンは一の後ろで立ち尽くしていた。
「……っ、おい！　帰るぞ！」
様子がおかしい。空気が重い。張り詰めていく。風がひどく生臭い。鼻を突き刺す獣臭。
「ジェーンっ！」
彼女は答えなかった。一に背を向け前だけ見据える。
見たくない。見たくなかった。そんなの、見せるな。
一は前を見た。
そこに、いた。
大きな、男。人間の形。筋肉が異常に発達しているのか、その男は太かった。しかし、決してその太さが脂肪の為ではないとも分かる。脚も腕も胸も腹にも筋肉がしっかりと付いていた。嫌でも分か

った。何故なら、男は服を着ていない。上半身は裸。下にはジーンズを穿いていたが、筋肉で今にもはち切れそうだ。靴も履いておらず、彼の爪先は丸見えである。

「……あ……」

異様に、鋭かった。男の爪は嘘みたく長い。右足、左手、右手、左足。まるで獣のそれだった。男の全身、肌の見えているところは全て毛むくじゃらで、いったいどんな生活をすればそうなるのか。一には一つも理解できない。

異質。異常。異形。なまじ人間のカタチをしている分、男の姿は筆舌に尽くしがたい。見るに耐えなかった。

茫然とする一を見て、男が笑う。口の端を吊り上げ、楽しそうに。その口から見えているのは、もはや歯ではない。牙だ。ギラギラと月光を浴びて輝くそれは、立派な凶器。もはや、狂気。極め付けは耳の位置。彼の顔。通常の、普通の、人間だと証明する為の位置じゃない。顔の横ではなく、男の耳は頭の天辺から生えていた。そして男の顔。いや、男だった顔と言うべきか。人間だった頃の名残は見受けられるが、彼の、その、顔は。

出来の悪いホラームービーから抜け出した怪物。月明かりを受けて、この世界にいるのが当たり前だと言わんばかりに立つ男。

――狼男。

一はそう、連想する。

体が動かない。助けて欲しくて、一は眼球だけを動かした。視線の先にはジェーン。何をしているんだ。早くここから逃げないといけない。こちらには今、何も無い。武器が無い。戦えない。アイギスも、ジェーンの銃も店に置きっぱなしだ。

「お兄ちゃん、先に行って」

それなのに。

「……置いていけるか」

ジェーンは動こうとしない。男と向かい合い、見えない火花を散らしている。今にも戦闘が始まってしまいそうな、一触即発の闘気をぶつけ合っている。

「おねがい、先に行って」

珍しく、強い語気だった。戒めるような、嗜めるような、一種上からの目線で。意志の籠もった彼女の言葉。その、本当の意味を一が理解する前に男が動いた。速い。男が風を切る。一の目では追い付けない。

「――――――！」

破砕音。一の目では追い付けない。音のした方へ、数瞬遅れ目を向ける。見開く。民家の塀が粉々に砕かれていた。その破片の中、強靱な肉体を持つ男が仰向けに倒れている。

「なっ……！」

何で。

二の句が継げない。見たくない。見たくない。信じたくない。そんなの、嘘だと思いたい。倒れた男を見下げ、ジェーンが立っている。彼女のツーテールは風に揺れ、緩やかに宙を泳いでいた。気持ち良さそうに。

気持ち良さそうに。

ジェーンは笑っていた。

あどけない彼女は何処に行ったのか。その笑みは、今までに一が見た事が無い、嗜虐的な物だった。

「……」

声を掛けることすら躊躇われる。ひどく曖昧で、遠い存在に思えてしまう。

事実、そうだった。

ジェーン＝ゴーウェストの肉体は、もはや人間のそれではない。体付きこそ小さなままだったが、身に纏う空気が違う。圧倒的に逸

している。ヒトの形をした獣。アンバランスで、歪で、見る者全てを不安にさせる威圧感。瞳はぎらついて、男を見る目付きは狩人のそれだ。舌なめずり。歯が見えた。鋭く、長い。

――誰だ、これは。

一の問いには誰も答えない。『妹』の格好をした何かが、只管に一をざわつかせる。

月明かりを浴びる彼女。耳の位置、獣じみた空気、あのざらついた瞳。まるで、人狼。出来損ない。ホラームービーから抜け出した怪物。

「……ジェーン」

その名前は誰の物だったのだろう。

一の声は誰にも届かない。

月明かりに照らされる彼女は、酷く綺麗だった。一はぼんやりと、そう思う。

The Howling

二年は、長いのか？
それとも短いのか？

何処へ行くにも彼女は付いてきて、彼女の行く場所には彼も居た。当たり前だと思っていた。

彼女は妹を演じ、彼は兄と言う役をこなした。当たり前のように。無くしたものを埋めるような、傷の舐め合い。家族ごっこ。歪な関係。それでも彼らは『兄妹』を続けた。心地好かったから。偽物の気持ちでも、何かが埋まっていったから。そう、信じていた。

事実、彼らは少なからず満たされていた。美しく、麗しいキョウダイ愛。ずっと続くと割り切っていた。永劫に続けるのだと思っていた。二人が死ぬまで続いてくれるのだと、信じていた。

「……ジェーン」

一の声は酷く擦れている。乾き切っていた。信じていたモノに裏切られたような、悲痛な声。

呼ばれた、呼ばれた筈の彼女は答えない。不様に地面を舐める男だけを見て、満たされている。笑っている。口角を吊り上げ、瞳はギラギラと輝いていて。

倒れているのが狼男ならば、倒したのは、なんだ。目の前に居るのは、なんだ。

「ジェーン……」

名前を呼ぶ。当たり前の行為が、一には何故か滑稽に感じてしまった。振り向いた彼女の顔は、一の知っている物ではない。血に乾き、肉に餓え、骨に飢(かつ)える獣のそれだ。容器は同じ。違うのは中身。

「お兄ちゃん」

あの顔で、あの声で、囀ったジェーンは一へと一歩踏み出す。その事が途轍もなく怖くて、知らずの内に一の足は一歩下がった。

「お兄ちゃん？」

「……あ」

足が震えている。彼女の顔を見て、彼女の声を聞いて。

「どうしたノ？　帰ろうヨ」

頷く事も、答える事も出来ない。体は独りでに震えるだけ。頭の中は気持ち悪い物で一杯になり、気持ち悪くなるぐらい掻き回され、喉元まで込み上げてくる嘔吐感に、一は口元を手で押さえた。

耳鳴りがする。耳の中を甲高い音が響き回り、山彦の様に一を揺らす。その音の中で、人の声を聞いた。怒鳴り声と驚愕の声。恐らく、塀を壊された民家の住人だろう。逃げないと面倒な事になる。分かっているのに、体は応えない。吐き気を堪えたまま視線だけを上げると、あの男は姿を消していた。騒ぎになるのを恐れたのだろうか。それとも。

「……店に、戻ろ？」

「あ、ああ」

そうだ。考えるのも、倒れ込むのもここから離れてからだ。理解はしている。痛いほどに分かっている。

蹲りそうになる一に、手が差し伸べられる。

「……え？」

呆けたジェーンの声。

一はその手を、払った。反射的に、本能的に逆らった。

「……あ……」

『妹』を、拒んでしまった。

「おにー、ちゃん？」
空っぽな音が響く。中空に消えていくそれがジェーンの声だと気付くのに、少しばかりの時間を要した。
「わ、悪い悪い……」
「ふふ、疲れてるノ？　だいじょーぶ？　けがはナイ？」
「ああ、お前こそ大丈夫か？」
どこまでも白々しい。
改めて差し伸べられた彼女の手を一は掴む。

――ぞりっ。

一が短く呻いた。
擦れた感触。冷たかった掌が熱を持ち始める。鮮血が滴る。疼く箇所に目を遣れば、生々しい傷口。表皮を深く裂き、奥の肉まで届くような切り傷だった。掌の半分が薄く開かれている。血は止め処なく溢れ、地面を汚し続けていた。
「痛っ……」
傷口を見てしまうと、心は弱くなる。朧ろげだった疼きを、脳は痛みだと認識して全身に信号を送り始める。
「……ア」
ジェーンの手は、一の知っている物ではなくなっていた。爪は鋭く、長く伸びていて。その爪からは一の血液が滴り落ちていて。
「アア……」
何故、手を差し伸べる事が出来なかったのか。
何故、声を掛けてやる事が出来なかったのか。
何故、心を通わせる事すら出来ないでいたのか。
「アアア

アアあああああああああああああああああああああああああああああアアああああああああああああああああああああああアアアッ！」

　どうして、こんな事になってしまったのか。
『兄』は『兄』としての役目を務めきれずに。
『妹』は『妹』としての責務を果し切れずに。
『兄妹』は『兄妹』としての任を終えることが出来ずに。
　ジェーンは頭を押さえて駆け出した。店からも、一からも離れていく。その姿はすぐに一の視界から外れていった。
　一は手を押さえ、見送る事しか出来なかった。追い掛ける事が出来なかった。ただ、ジェーンの去っていった方向へ目を向け、立ち尽くす事しか出来なかった。

「手を見せろ」
　店に戻ってきた一への、店長の第一声はこれだった。
「い？　いや、それよりジェーンを探すの手伝ってくださいよ」
「ゴーウェストを探すのは吝かではない」
「だったら……」
「本当にゴーウェストならばな」
　一を突き放すような声だった。
「……言っている意味が分かりません」
「そうか。一、隠している手を見せろ」
「必要ないでしょう」
「見せろ」
　店長はやおら椅子から立ち上がり、一の腕を掴む。一は声を荒げ

抵抗したが、店長の瞳に射抜かれると観念し、掌を見せる。血こそ止まっていたが、ぱっくりと開かれた傷口は、しばしの間店長を絶句させるには充分だった。
「誰にやられた？」
「誰にも。アパートの階段で転んだんです」
「……ゴーウェストはどこへ行った？」
「だから、今から探しに行くって言ってるじゃないですか」
一は店長の手を振り解き抗議の視線を向けた。
「何故ゴーウェストは戻ってこない？」
「知りません」
「……やったのはゴーウェストか」
「やられてません」
店長は煙草に火を点け、ゆっくりとした動作で椅子に座る。
「エグイ傷口だな。まるで狼にでも引っ掛かれたみたいに」
店長がマウスを操作すると、店に備え付けられたパソコンのディスプレイに英語の文書が映った。数字も混じっており、何かのデータのようだ。
「五百九十一。この数字が何か覚えているか？」
「……ジェーンが殺してきたソレの数でしょう」
「ああ、忘れる筈は無いか」
カチカチ、とマウスをクリック。現れたのは数字。数字が画面を覆いつくしている。
「これが何か分かるか？」
「さあ、生憎文系なんで」
「私も文系だ。これはゴーウェストの、向こうでのデータだよ。何月何日に何匹ソレを殺した、何時何分何秒に戦場で何をしたってモノだ」
「細かいですね」
「細か過ぎる」
勤務外一人に対しては異常とも言える詳細なデータ。膨大な資料。

「……やはり警戒されていたんだろうな」
「ジェーンが？」
頷き、店長は画面を指でノックする。
「見ろ」
言われ、一は数字の羅列を注視。見れば見るほど訳が分からなくなりそうだった。
「……ん」
ただ、一つだけ気になる事を見つける。
「月に一度だけ、撃墜数がメチャクチャ多い日がありますね」
ソレを倒した日が二桁の日もあればゼロの日もある。だが、一の目を引くのはやはり多い日だった。
「……う、あ？　信じらんねえ。一日に三十匹……」
「一、気付いたのはそれだけか？」
「って、他にも何かあるんですか？」
「月。月だよ」
一は怪訝な顔つきで店長を見遣り、言葉の意味を探った。
「……え、っと。月って、何がですか？」
「少しは自分で考えたらどうなんだ」
「考えても分からないから聞いてんですよ。そっちが意地の悪い聞き方してるから……」
「はっはっ、妹の事になると必死だな」
置いてあった缶コーヒーに手を伸ばしつつ、店長は一を茶化す。
「……楽しそうですね」
「そう睨むな。私が悪かったよ」
悪怯れた様子も見せずに店長は静かに笑った。
「一、本当に気付かないのか？　ゴーウェストが目覚ましい戦果を挙げるのは月に一度だ。月に一度。この日が何なのか分かれば、話は早くなるんだが」
「……大した規則性は無さそうですけど」
「本当に鈍い奴だな。満月の日だよ」

「あ」
ゾクリとした。
「どういう理屈か分からんが、ゴーウェストはどうも満月の日に頑張っているようだな」
嘘だ。一は無言で店長を見つめる。
「……どうした？」
「いえ、何も」
この人は、気付いているのだと一は思った。
「満月の日に動きだす。まるでB級映画の人狼だな」
「たまたまでしょう。そんな証拠もないですし」
「偶然が二年も続けば必然だと疑われるさ。それに、証拠はお前の手に刻まれている。深く、な」
「……それでもっ」
「信じたくない、か？」
甘い。そう、言い捨てて、店長は煙草に口を付ける。
「前にも言ったが、もう一度聞いておく」
「何を……」
「何故、ゴーウェストは日本に、駒台に、お前の所に来た？」
「知りません。知る必要も、俺にはありません」
一の口調からは一切の拒絶が感じられた。その事を理解していながら、店長は続ける。
「考えろ。考えるのをやめるんじゃない。知ろうとしろ。お前は人間だろう。ならば考えろ」
「『妹』が『兄』に会うのに、理由が必要なんですか？」
「お前らは本当の兄妹じゃない。互いが互いを騙し合っているだけだ」
「なっ、ち、ちがうっ、俺たちは！」
「血も繋がっていないだろう。ガキみたいに、他人同士がお飯事やっているんだ」
「ちがうっ！」

「違わない。いい加減に目を覚ませ。お前は彼女の兄にはなれん。ゴーウェストがお前の妹になれないようにな」
「……ンの野郎……」
「私は自分の目も勘も良い方だと自覚している。どうだ、一。図星だろう」
頬を紅潮させた一が店長に歩み寄る。
「……さっきから好き放題言いやがって！」
一は店長の襟元を掴み上げ、無理矢理に椅子から立たせた。
「怒ったのか？」
「当然だろうが！　あんたが俺たちの何を知ってるってんだ！」
「知らん。だが、つまらん兄妹ごっこを見せられるのはいい加減に耐え難い」
「そんなの知るか！　目ぇ瞑ってろ！」
「お前らは家族の振りをし続ける事で安心していたんだ。本当に伝えたい事も聞きたかった事からも目を背けてな。傷つくのが怖いんだ。適当な距離を保って、気持ち良い温かさにしがみついているのさ」
涼しい顔で店長は喋る。その顔が腹立たしくて、一はしたり顔の彼女を壁に叩き付けた。
「それがどうした！　赤の他人がさあ！　俺たちのやり方に口を出すんじゃねえよ！」
「教えてやってるんだ。自分たちの世界に篭りすぎて、周りが見えちゃいないお前らにな。狂っているんだよ、お前らは」
「だっ、黙れよ！」
「ゴーウェストが日本に来る理由があったのか？　本当に、まだ若い彼女が二年を棒に振る理由があったのか？　本当に、お前に会いたかったのか？」
「うるさいっ」
「日本に来なくてはいけなかったんじゃないのか？　二年を棒に振らざるを得なかったんじゃないのか？　お前に、会わなきゃならな

かったんじゃないのか？」
「……っ！」
一は言い返すことも出来ずに店長から手を離す。うな垂れ、力無くへたり込む。
「聞かなければいけなかったんだ。お前が仮にもあの子の兄を名乗るなら、家族ごっこをやろうとするなら伝えなきゃいけなかったんだ」
「……もう、黙ってくれよ……」
店長は乱れた襟を直し、再び椅子に腰掛ける。
「ゴーウェストはお前の妹じゃない。人狼だ。半分はソレなんだ」
「言わないで下さい……」
「お前らにどんな理由があろうと、ヒトを傷つけてしまったゴーウェストは私たちの敵になるかもしれない」
無常な言葉。そんな事、一にもわかっているのに。
「幾らソレを殺そうが、彼女はソレだ。事実は変わらん」
無慈悲な言葉。
「だが、それを踏まえてもう一度聞く。お前は誰を探しに行くつもりだ？」
「……ジェーンです」
「全てが分かった上でも、お前はそう言うんだな？」
――今更、何を。
「あいつは俺の妹です」
「彼女が人狼だとしてもか？」
迷うな。必死に言い聞かせる。
「……悔しいけど、あなたの言う通りだ。俺はまだ、あいつの口から何も聞いちゃいないんです」
「行くのか？」
「止めますか？」
一はよろよろと立ち上がる。
「いや、お前ら兄妹の問題だ。勝手にしろ」

「……どうでも良いって顔ですね」
「そう思うなら好きにしろ」
店長は徐に立ち上がり、ロッカーからビニール傘を取り出した。
「一、怪我してる方の手を出せ」
差し出された手に、店長は傘の柄を握らせる。
「……いっ！」
一の顔が苦痛に歪んだ。まだ癒えていない傷口が痛む。柄を無理矢理押し付けられる。
「お前らバイトは、少しぐらい私の立場を分かれ。ゴーウェストは厄介者なんだ。私はアメリカに、オンリーワンにあいつを押し付けられたんだ」
「いっ、痛いんですけど！？」
「この痛みを忘れるな。これは、私の痛みでもある。私だって何かしてやりたいさ。だがな、出来ないんだよ。表立って好き勝手にやれない」
「……っ、てん、ちょう？」
「だから、お前らには勝手をさせてやる」
最後に、今までに無いくらい力を込め、店長はビニール傘から手を離す。
「……好きにやれ」
「……はい」
突き放すような口調。だが一は、彼女の思いを知る事が出来たと思えた。アイギスを怪我してない方の手に持ち替え、一は店長に感謝しながら背を向ける。
「じゃあ、お言葉に甘えてきます」
「うん。よろしく頼む」
「……その。さっきは……」
「気にするな。強引にされるのは嫌いじゃない」
一は思わず笑ってしまった。
「……それと、ジェーンの事は」

「ああ。私は誰にも言わんぞ。まあ、お前らが自分の口で話すのは勝手だがな」
「ずるいなあ、あなた」
「私だって女だからな。ずるくもなるさ」
店長は涼しげに答える。一はそれ以上言葉を求めず、バックルームを出て行った。
「さて……」
椅子から立ち上がり、店長はバックルームの商品の山、ダンボール箱が積み重なっている所へ向かいゆっくりと歩き出す。
「糸原、立花。聞いていたなら、あいつの分までしっかり働けよ」
しばらくの静寂。ややあって、
「……はーい」
沈黙に耐え切れなかったのか、罰の悪そうな表情の糸原が、その姿を現した。
「ごめんなさい……」
続いて立花も。
「立花は十時まで。糸原は深夜よろしくな。朝になったら三森が来るから」
「うえぇ……」
糸原は不満を隠さない。
「それと、一の邪魔はするなよ。したら殺すからな」
「……何よ、それ」
「さあな。おら、とっとと仕事しろ」
二人のバイトを蹴っ飛ばし、店長は煙草に口を付けた。手が、少し震えていた。

吠えた。吼えた。咆えた。
喜びを隠し切れない彼は月に向かって、街に向かって、彼女に向かって呼びかける。まさか、こんな辺鄙なところに仲間がいるとは

思っていなかった。いや、辺鄙だから仲間がいたのか。ともかく、僥倖だった。

何の因果で自分がこの街に呼び出されたかは知らないが、それだけの理由があったのだろうと彼は思う。

もう犬どもの相手も飽いた。人間どもなど眼中に無い。自分は、湧き上がる本能に身を任せればそれで良い。燃え上がる闘争本能に火を点けてくれればそれで良い。強いものと、戦えればそれで良い。

そして見つけた。彼女こそ、自分の相手に相応しい。いや、彼女以外に自分の相手は務まらない。血に乾き、肉に餓え、骨に飢える夜も終わりだ。これで満たされる。自分は充たされる。彼は笑う。

場所ならば指定した。彼には逃げるつもりなんて無い。

刻限ならば伝達した。いつでも構わないが、やはりウェアウルフには満月の夜が良く似合う。

滾る。滾る。すぐにでもこの衝動をぶつけてしまいたい。殺意をぶちまけてしまいたい。

だが彼は耐える。必死で自分を押さえ込む。

ああ、明日は満月だ。

最初に一が向かったのは勤務外専用のマンションだった。もしかしたら、ジェーンが帰っているかもしれない。情けない、一縷の望み。

馬鹿でかく、だだっ広いマンションに萎縮されながらも一は歩を進める。

「……はあ……」

この間から、こんな事ばかりしている気がした。目を背け続けていた。耳を塞ぎ続けてきた。頭では考えないようにしてきた。そんな事が今になって、倍返しでやって来ている。進んでいるように見

えて、実際はちっとも動いちゃいない。同じ場所でグルグルと足踏みを繰り返すだけ。
「悪いのは俺か……」
「浮かない顔だな、リトルボーイ」
「色々あってね」
「はっは、人間はだから面白いのさ」
楽しそうな声だった。
「……ま、少しは解決しそうだけど」
一は振り返る。思わず頬が綻んだ。これなら、彼ならば。
「縁があったようだな、リトルボーイ」
コヨーテならば、事態を打開してくれる。
「よう、元気してたか？」
「ミーはいつだってファインさ。ところで、あんたはここに何か用だったのかい？」
コヨーテは耳と尻尾をピンと尖らせる。
「いや、用があるのはここじゃなくて、君にだよ」
「ふうん？　どうやら、ミーのアドバイスを活かせなかったみたいだな」
「お陰様でね。もっと具体的に伝えてほしかったもんだよ」
皮肉っぽく一が言った。
「そいつは悪かった。だけどな、具体的に言っちまったら、そりゃもう命令の域だ。ミーはあくまでリトルボーイに気付いてほしかったのさ」
「気付いてたさ。だけど、動けなかった」
「そうかい」
尻尾を振りつつ、コヨーテは一に苦笑を浴びせる。
「……教えてほしい事がある」
「嬢ちゃんの事か？」
「ん、知りたい。けど、良いや。自分で聞くから」
「なら、何が知りたい？」

「狼男。人狼ってのは、その、実在するのか？」
安っぽい映画でなら、日本でもアメリカでも、飽きる程見てきた。映画の、中でなら。
「するんじゃないか？」
肩透かしを食らった気分。
「おい、俺は真剣に聞いてんだぞ」
「いやいや、リトルボーイ。そんな質問、するまでもねえだろう」
「？」
「だってそうだろ。いるに決まってる。現に奴らは、ミーたちはここにいるんだから。ずっと前からさ」
さも当然だと言わんばかりの口調だった。
「それじゃミーからも聞くが、あんたら人間が名付けたソレってのはさ、何だと思う？」
「……人類の敵だろ」
「じゃあミーも敵って事になるな」
一は返しに困る。
「ああ、分かってる。もうあんたからは、ミーに対する警戒心を感じないからな」
「なら、何なんだよ？」
「……考えなよリトルボーイ。人間てのは考える葦なんだろ？　与えられたモノは使っていかなきゃ損ってもんだ」
あくび混じりにコヨーテは口を開ける。
「ソレ……」
ぼんやりと口にして、一は考えてみた。今までに会ったソレの事。話した事。戦った事。殺した事。
確かにソレは人間を襲い、殺す。だが、話せる者もいる。人間を助けてくれる者もいる。全てのソレが敵ではなく、全てのソレが味方ではない。各々が意志を、意思を、あるいは本能で動いているのだ。
「一括りにゃ、出来ないだろ？」

「……ああ」
　一は素直に頷く。
「だが、面倒なのさ。そんな事に気付いている人間も中にはいるだろうよ。だけど、やっぱりソレの中にはヒトを襲うのもいるんだ。ミーは区別がつく。リトルボーイも分かってきたはずだ。でも、大抵の人間は分からない。ソレが全部敵に見えるのさ」
「……オンリーワンが情報を握っているから、か？」
「まあ、一まとめにする方が楽だとは思うぜ。何も考えなくて済むからな。ソレに関するスペシャリストが、ソレは全て敵だと言えばみんな信じるだろう？」
　苦々しく放たれるコヨーテの言葉に、一はただ頷くしか出来ない。事実、自分だってそうだったのだから。
「この世界の人間は踊らされてるのさ。自分が踊ってる事にも気付かないで、一握りの人間が流す曲にだけ耳を傾けてる。傾けさせられてやがる」
「……ソレと、仲良くしろってのか」
「悪いが、そこはミーの領分じゃない」
「俺たちにどうしてほしいんだよ」
「だから、そこはあんたたちが考えるのさ。ただね、リトルボーイ。あんたは、全ての人間と友人になれると思うかい？」
　そんなの無理だ。言葉も、人種も違うのに。一は否定する。
「じゃあ視野を狭めよう。日本。この国全ての人間と友人になれると思うかい？」
　それも無理だ。一は否定した。
「なら、この街の人間とは？」
「全員となんて、無理だ」
　コヨーテは一の答えに、満足気に目を細める。
「じゃあ、戦う事は？　嫌う事は？　憎まれる事は？」
「世界中の人間から？」
　一は考えた。答えはすぐに出る。

「時間は掛かるけど、不可能じゃない」
「良し。じゃ、さっきの質問の『人間』ってトコを『ソレ』に変えて、もう一度質問だ」
つまり。世界中のソレと、日本のソレと、この街のソレと、仲良く出来るのか。と、言う事。
「……答えは、変わらない」
「ちょいと意地悪いが、そうだろ？　人間同士でも戦争が起こる。敵が生まれる。そんな世界で、ソレと仲良くするのは間違いかい？　人間とソレとを敵味方で区切るのは正しいかい？」
「……」
一は答えられなかった。そう簡単に、割り切れなかった。
「今は、それで良いのさ。大事なのは考えるって事だと思うぜ」
「分からないな、なんでそんな事聞くんだ？　よりにもよって、俺に言うんだ？」
「リトルボーイが嬢ちゃんの兄だから、と言ったらどうするよ？」
「……？」
コヨーテは一の反応をじっくりと眺めたあと、
「ミーはあの子に救われた事があるのさ」
ぽつりと言った。
「あんたが、ジェーンにか？」
「向こうは覚えてなかったらしいがな。ミーは絶対に忘れない」
「助けてもらったって、どういう風に……」
「そいつぁ言えない。恥ずかしいからな。今思い出しても赤面もんだぜ」
コヨーテは耳を座らせ、心なしか気恥ずかしそうに一から視線を逸らす。
「じゃあ何か、あんたは恩返しに来たってのか？」
「……あんまりにも嬢ちゃんの声が煩かったからな」
一はそこで違和感を覚えた。
「お前を呼んでたのは、犬たちじゃ無かったか？」

「あー、そうも言ったっけな。まあ、犬がミーを呼んでるのも嘘じゃない。だけど、一番必死だったのは、あの嬢ちゃんだ」
「ジェーンが、助けを求めてた？」
俄かには信じられない。悩みなんて無いと、言っていたじゃないか。
「……兄さんには知られたくなかったんだろうよ」
「そんな……」
「……勿論、一番伝えたかった相手はあんただと思うよ、リトルボーイ。けどさ、『兄さん』だからこそ、言えなかったんじゃ無いのかい？」
分からない。いや、分かろうとしなかったのは自分、か。一は自嘲した。
「あー。ま、良いや、あいつに聞けば済むことだからな」
「そうかい。ああ、頼むぜリトルボーイ」
構うものか。何が起こっているのかも、何が起こっていたのかも、関係ない。蚊帳の外でも知るものか。もう、迷わない。一はそう決めた。
「……おっと、お客さんだ」
「客？」
振り返り、コヨーテは楽しそうに尻尾を揺らす。つられて一も振り返った。
「な……！？」
「良い月だな、人狼（グッドイブニング）」
コヨーテが顎でしゃくったその先に、あの男が、いる。
「――ッ！」
歌う犬の挨拶に憤怒の咆哮を返すと、狼男はコンクリートを割らん勢いで地を踏んだ。

アイギスを広げる間も無かった。動いたと思った次の瞬間には、もう一の目の前に男が現われている。早過ぎる。

「――――！」

咆哮一閃。男は鋭利な爪の付いた腕を弓のように引き絞り、既に矢の如き一撃を放っていた。

一は目を瞑りながら後ろに下がる。空を切る音。前髪を数本持っていかれたが、直撃は避ける事が出来た。

「ガアァッ！」

その横合いから、男の腕にコヨーテが喰らい付く。男が幾ら腕を振り回しても、牙が深く肉に刺さっているらしくコヨーテは離れない。

「――――！」

男が吠えた。痛みに耐えかね苦痛を訴える。彼の叫びは一の下腹へずしりと響いた。

「……っ」

バケモノだ。獣だ。今までに相手をしてきたソレの中でも、とびきりの。まさか声だけでここまで萎縮させられるとは思っていなかった。懸命に喰らい付くコヨーテに援護をしてやりたかったが、一の腕は酷く重い。

「ちっ」

迷っている間に、コヨーテの牙が男の腕から抜けてしまう。男は自由になった両腕でコヨーテの尻尾を狙った。的確で早い。しかし、単純だった。コヨーテは男の腕に足を乗せ、飛び上がる。爛々と輝く月にまで届きそうな、軽やかな跳躍。

「鈍いね、あんた」

宙に舞った姿勢で皮肉げに呟き、

「子守歌にもならねえぜっ」
着地ざまに男の横っ腹を爪で引っ掻く。蹲る男に目線を遣りながら、コヨーテは一の前に駆け寄った。
「……ただの犬じゃなかったんだな」
「リトルボーイ、ミーは犬じゃない。コヨーテだ。あれぐらいは出来て当然だぜ」
だが。憎々しげにコヨーテは声を発する。
「思った以上に効いちゃいない。鈍いが、硬いね。全く羨ましい限りだ」
「はっ、ジョークを飛ばす余裕はあるんだな」
「そっちは立ってるだけで一杯一杯らしいね。まあ、人間には荷が重いか？　だけど、そいつぁ飾りじゃないだろう」
一の持っているアイギスに一瞥をくれ、コヨーテは尻尾を振った。
「……どうだろうね」
「謙遜はジャパンの美学って奴かい？」
「だああ！　うるせえ、来るぞ！」
「――――ッッ！」
一は右、コヨーテは左に飛び退いて男の攻撃を避ける。二手に分かれた一らへの追撃。男は踏み込んだ足を軸にして、真横に方向を変え跳躍。右を選んだ。
「やっぱり！」
地面に足を付いているかどうか分からないほどのスピードが一を襲う。

――予想済みだ。

一は、既に広げていたアイギスを男の眼前に突き出した。幾ら獣の速度でも、この盾は突き破れない。アイギスへ強かに体をぶつけて、男は派手に弾かれる。一も衝撃で地面を転がるが、大した傷は負っていない。コヨーテが賞賛の口笛を贈るが、気にしている余裕

までは持ち合わせていない。すぐさま立ち上がり、男に視線を向ける。
「……うわ」
男は大変、憤慨している様子だった。筋肉を盛り上げ、短い呼吸を繰り返している。荒い吐息が白い靄となり、冬の寒空に消えていく。
「どうやら怒らせちまったみたいだな、リトルボーイ」
この期に及んで軽口を叩くコヨーテに、一は軽く敵意を覚えた。
「お前に噛まれた腕が痛むんだろ」
「はっ、クールじゃないねえ！」
コヨーテは臆する事無く、男へと駆け出していく。その姿を一は捉え切る事が出来なかった。早い。速い。風のようだった。灰色の風。右へ左へ変幻自在に軌道を変え、男の目を自身の速度に慣れさせない。充分に揺さぶった所で、男の脚を奪う。爪で掻き、牙を立てる。男の傷口から溢れる鮮血が、コヨーテの灰色を赤く染めていった。
「――ッッ！」
男はそれでも怯まない。戦意は尽きていない。湧き上がる怒りをその身と、二つの燃えるような瞳に宿らせ立ち上がる。
「……これは」
コヨーテは牙を抜いて男から飛び退いた。再び一の元まで戻り、用心深く男を観察し始める。
「おい、どうしたんだよ？」
確かに男の迫力には気圧される物があるが、一にはコヨーテが押している様にも思えていた。あっさりと攻撃を中断させた理由が分からない。
「厄介な事になってきた。一度逃げた方が良いかもしれないぜ」
「は？　な、何で？」
「そもそも、ミーたちが、いや、少なくともミーが今のあいつとやり合う理由は無いのさ。リトルボーイ、あんたが狙われたから応戦

したまでに過ぎない」
「……いや、そりゃそうだけど」
勤務外としての立場もある以上、易々とソレを見逃すわけにも行かなかった。更に言えば、見逃してくれるわけにも行かないらしい。男は剥き出しの殺意を全身から立ち昇らせている。
「逃げるだけなら何とかなるさ。任せろ、体がすり潰されたって問題なく逃げ切れるぜ」
「いや、それは流石に……」
「第一、あんたの目的は嬢ちゃんだろうに。ここでアレとやり合っても仕方ないぜ」
「ん、そう、だな」
何より出会った時間が悪い。再戦するにしても、二度と会わないとしても、引く事が大事と一は判断する。
「……良し。逃げる」
「了解だ。リトルボーイ、耳を塞いでおきな」
「え？」

――――――――！

突如、今までに聞いたことも無いような衝撃が一の鼓膜と、この周囲一帯に襲い掛かった。犬の遠吠えを極限まで煩くした様な、耳障りな騒音。視界がぶれ、頭の中に高音が響き渡る。混乱する脳内。
「さて、今の内だぜ」
そんな中で、コヨーテの声は良く聞こえた。異常に声の通りが良いのだろうか。一は不思議に思う。
「……！？」
しかし、今の内と言われても、一の足は動かない。それをコヨーテに伝えようとするが、耳が聞こえ難くなっていて自分ですら何を言っているのか分からなくなる。
「あ？　足が動かないだって？」

一は身振りで「そうだ」と伝えた。
情けない。コヨーテは舌を出して空気を舐めつつ、一を呆れた様に見遣る。
「無理矢理動かせ。じゃないと死んじまうぞ、リトルボーイ」
そう言われては動かさざるを得ない。未だ何も成し遂げていない身で死ぬのは御免だった。一度だけ狼男へ振り返る。彼は耳を押さえ、苦しそうに地面を転がっていた。
「くくっ、聞こえ過ぎるってのも考え物だな」
コヨーテの笑い声は、良く通る。

満月に照らされて。

一とコヨーテはアパートまで逃げ帰ってきた。
駒台の中心部へ行けば隠れる場所には困らない。人口も多いし、それだけで隠れ蓑になると思ったのだが、人混みの中、犬は良く目立つ。実に目立つ。仕方ないので一が不自由な口で説得し、彼を自分の部屋まで連れて来たと言う次第である。
「ここペット禁止なんだよなあ……」
一は部屋の電気を点けながら、大家に見つかった時の事を考え、溜め息混じりに呟いた。
「おい、ミーはペットじゃないぞ」
「あ、土足で畳に上がらないで」
コヨーテは鼻で笑う。
「どうしろってんだ」
「ちょっとここで待ってて。雑巾濡らすから」
「……おい。おいリトルボーイ。まさかそんな汚らしい布きれでミーに触るんじゃないだろうな？」
「洗ったから大丈夫だよー」

一はコヨーテの抵抗には興味を示さず、強引に彼の足の裏を拭き始めた。
「あー！　ミーの肉球がああ！」
「うるさいな。もう十時回ってんだから静かにしろよ」
「訴訟だ！　訴訟もんだぞ！」
「ええい、やってみろ四足歩行」
たっぷり時間を掛けてコヨーテの足を綺麗にすると、一は満足した様子。コヨーテはぐったりと四肢を伸ばし、畳の上で寝転がっている。
「疲れてるところ悪いけどさ、聞きたい事が色々と出来た」
こたつに入り、みかんの皮を剥きながら一は尋ねた。
「……ＺＺＺ」
「タヌキかお前は」
「ミーはタヌキなんかじゃない。誇り高きコヨーテだ」
むくりと起き上がると、コヨーテは緩慢な仕草で体を伸ばす。
「そいじゃコヨーテ君、質問です」
「なんだい人間？」
「……あのさ、なんであいつは俺らを狙ってきたわけ？」
「さあね、本人に聞くのが一番早いんじゃねえの？」
まだコヨーテの機嫌は悪そうだった。
「あれが人間の言葉を使えるんならそうしてるよ」
「ま、違いない」
「何か知らないのか？」
「そうだな。真実は語れないけど、予測なら立てられるぜ」
一はみかんを口に運ぶ。程よい甘さだった。
「……ああ、それでも良いや。聞かせてくれよ」
「んん、リトルボーイ。美味そうだな、それ」
「みかん？　食べたいのか？」
「物は試しだ。一つ投げてくれ」
コヨーテは口を大きめに開ける。一は逡巡してからみかんを放り

投げた。山なりの軌道を描き、オレンジの小さな果実は歌う犬の口の中へ。
「どうだ？」
「悪いがリトルボーイ、イマイチだ」
彼の尻尾は嬉しそうに、目茶目茶上下していた。
「そりゃ残念だ」
一は笑いたくなるのを堪え、もう一つみかんを放り投げてやる。
コヨーテはゆっくりと、味わうように咀嚼し、嚥下。
「なあ、リトルボーイ」
「ん？」
「ミーは何の話をしていたっけ？」
「ネギ食わしたろかてめえ」
みかんの話では決して無い。
「ジョークだ。さて、本題だ。まずは狼男について語ろうじゃないかリトルボーイ。敵を知り、己を知れば百戦危うからずと言うだろう？」
どこかで聞いたことのある台詞だった。
「……ええ？　語るったって、あんなの映画ぐらいでしか見た事無いのに」
「充分だ。そもそも、あんな怪物を映画以外のどこで見るって言うんだ？　ジパングにはそういうのを集めたアニマルテーマパークでもあるのかい？」
「あるとしたら、お前も間違いなくテーマパークの檻の中だよ」
言いつつ、一は今までに見た映画を思い出していく。
「じゃあ、ミーから。狼人間、人狼、ウェアウルフ、ルー・ガルー、リカントロープ、ヴェアヴォルフ、ライカンスロープ、ワーウルフ。何のことだか分かるかい？」
「全部、同じ意味だろ」
「正解だ。つまり、それだけ色んな国に奴らの存在が知れ渡っているという事だな」

厄介な話だと、一は息を吐いた。
「それじゃ、こいつら人狼の特徴は？」
「あー、満月を見たら狼になれる。狼になる」
「当たりだ。更に言えば、奴らは満月が近付くにつれ力を増すようだな」
ならば。あの力、あの早さは本気では無かったと言う事か。こたつで暖まっている筈なのに、一は寒気を覚えた。
「リトルボーイ、人狼の弱点は分かるか？」
「あー、確か、銀だったか？」
「ビンゴ。ちなみに、銀を溶かして作った十字架を刺せば効果は抜群らしい」
「十字架？」
「ああ、それが？」
「いや、十字架って吸血鬼が苦手なんじゃ無かったっけ？」
そんな話は聞いた事が無いので、一は疑問に感じる。
「リトルボーイ、極端な話になっちまうがな、狼男と吸血鬼は大元が同じなのさ」
「へえ、そうなのか？　だったらニンニクでも持っていくか」
「ついでに白木の杭でも担いでいけば恐いものナシだな」
二人は声を上げて笑った。作り笑いだった。
「……さーて、結局あいつが俺たちを狙ってきた理由は分からずじまいなんだけど？」
「多分だが、奴は嬢ちゃんを狙ってるんだと思うぜ」
「俺はジェーンじゃないぞ」
尤もな言い分だった。
「気付かないのか？　幾ら奴が人間のカタチをしていても、狼の、イヌ族の力を持ってるんだぜ」
「……ああ、そうか」
当たり前すぎて見落としていた。
「そう、耳だけじゃない。むしろミーたちの特筆すべきチャームポ

イントはこっちだ」
　自身の長い舌先で、コヨーテは鼻を舐める。
「嗅覚か……」
　そう。イヌの優れた点は数あるが、その中でも一番といって差し支えない能力。鼻、嗅覚だ。
「あんたには、嬢ちゃんの匂いが移ってんだろうな」
「それで勘違いしたってのか。クソ、しっかり嗅ぎ分けろってんだ」
「恐らくだが、アレは元々そうじゃなく、別の人狼に噛まれてから日が浅いんだろう。力を使いこなせていないのさ」
「ん？　噛まれた？」
　ああ、と。コヨーテは煩わしげに首を振った。
「映画で見た事が無いか？　人狼に噛まれた者は人狼になるんだよ。そうやって奴らは仲間を増やしていくのさ」
「それじゃ、今頃は世界中に奴らが溢れてるって話にならないか？」
「勿論、噛まれても死ななかった者だけさ。大抵の人間は脆いからな。あんなのに噛まれる前に殺されちまうよ」
「ふーん。色々と詳しいんだな」
　コヨーテは呆気に取られた表情で一を見つめる。
「……むしろ、なんで知らないんだ……」
「うるせえな、良いから言えよっ」
「はん、オーケー、存分に聞かせてやろうじゃねえか。ミーたちが出会った奴はな、一月以内に生まれた急造の人狼だぜ」
「一ヵ月？　随分と具体的だな」
「奴はまだ満月を体験していないと見た。人狼ってのは満月の度に強くなるのさ、力を覚え、使い、本能のままに殺して強くなる。だがな、それにしちゃ奴は手緩かった」
　そこまで分かるのか。一は素直に感心した。
「はあ、でもさ、アレで本気じゃないんだよな……」
「そうブルーにならなくても良いぜ。逆にいや、満月でもアレはまだ完成しないんだ。やりようはある」

ふと、一は思う。
「……なあ。そもそも、俺たちがあいつを相手にする必要があるのか？」
「嫌なら逃げ回りゃ良い。死ぬまでな」
コヨーテは幾分か、一に敵意を込めて言った。
「死ぬまで？　俺が？　先に死ぬのはあっちだろ」
自分がやらなくとも、この街の誰かがいずれ仕留める。一はそう思い、ぶっきら棒に言い放つ。
「違う」
「……何が」
「さっきから思っていたんだがな、リトルボーイ。あんたが逃げるのは狼男からだけじゃない。嬢ちゃんからも逃げる事になるんだぜ」
「俺はそんなつもり無い」
毅然とする一に対し、コヨーテは軽い態度で話を続ける。
「つもりが無くてもそうなるのさ。狼男は嬢ちゃんを追っ掛けてる。あんたも嬢ちゃんに用がある。分かるだろ、ここであんたが引く意味がさ」
「……ジェーンに会おうとするなら、あいつが出張って来るってか」
面倒な話だった。一の胃がキリキリと痛む。
「どうするよ、リトルボーイ」
「聞くまでも無い。だろ？」
「ＧＯＯＤ！　流石は嬢ちゃんの兄さんってところだぜ」
「ありがとよ。あー、だけどさ、なんであいつはジェーンを狙ってるんだ？」
「仲間だからな」
聞き捨てならない単語に一が反応を示す。
「……誰と、誰が？」
「おいおい、怖い顔しないでくれよ。ミーはあくまで客観的に、当たってるかどうかも分からねえ事を言っただけだぜ」
「……んな怖い顔してねえよ」

一は続きを促した。コヨーテは少しだけ間を取った後、
「犬ってのはさ、グループで動く生き物なのさ。そりゃ、ミーみたいに単体で動く奴もいるだろうけど。基本的にミーたちは寂しがりなんだ」
遠い目をしながら呟いた。
「一匹狼って言葉もあるけどな、狼だって群れるモノなんだよ。だから、あいつもそうなんじゃないのか？」
「……ジェーンは、人間だ。俺の妹なんだ」
「けど、狼の血だって混じってる。嬢ちゃんがいつそうなったのかは知らないが、今は確かになっちまってる。半分人間半分狼なんだ」
「……ああ」
受け止める。ありのまま受け止めなければいけない。一はハッキリと頷いた。
「まあ、真相は分からないけどよ。もしかしたら、あいつは仲間なんて求めていないのかもな」
「うわ、全否定」
「全部は否定してないさ。ただね、こう、何と言うか、分からないか？」
「分かるか」
コヨーテは今までになく言葉を選んでいるようで、目を瞑って口を開閉させる。
「んー、そうだな。リトルボーイ、今夜はやけに血が滾らないか？」
「……どういう意味だ？」
「何故ミーから逃げるんだ？」
「いや、つい。で、何だよ血が滾るって。俺は別に普通だぞ」
「月が満ちると、気分が高揚すると言うか、闘争本能を刺激されると言うか、そんな気分にならないか？」
「んー？」
そう言えば、血の気が多くなっているような気がしないでもなかった。言われればそう思えるし、言われなければどうも思わないぐ

らいの、微妙な変化。ただ、変化しているかどうかすらも、一には正直分からない。

「なるような、ならないような」

「人間にゃ効果ないんかね。ミーたちには覿面なんだがな」

「へえ、そういうもんなのか？」

「お月様と本能には逆らえないぜ。ミーほどになれば自制も出来るけどよ、そこらのワン公じゃ話になんないだろうよ」

誇らしげにコヨーテは語る。

「なあ、って事はさ、明日の晩にゃあいつはもっと強くなるんだろ？　なんでさっきの内に仕留めてくれなかったんだ？」

「……言ったろ？　ミーたちは寂しがりだって」

「いや、聞いたけどさ。関係無いだろ」

「あるね。あの場所にいたのはミーたちだけじゃなかったのさ。多分、犬か、狼がいた筈なんだよ」

「あ、そうなのか？　ん？　でも、いや、やっぱ関係無いだろ？」

ふう。コヨーテは呆れたように溜め息を吐く。

「あの場にいたのは、もしかしたら嬢ちゃんだったかも知れないって言ってるんだ」

「はあ？　おい、何で教えてくれなかったんだよ！？」

「もう十時回ってるんだろ？　大きな声を出すなよ、リトルボーイ。なら聞くが、仮に嬢ちゃんがいたとしてどうしたって言うんだ？　あいつとまともにぶつかって倒して、その後嬢ちゃんを説得していたとでも言うのかい？」

「説得って……。んな必要ないだろ」

「あるね。明日は満月だ。狼が混ざってる嬢ちゃんも、きっと昂ぶっているはずさ。危険なのさ。狼としての本能に負けて、見境が無くなる恐れがある。嬢ちゃんがあんたから逃げたのはそれを恐れたからだ。そんな嬢ちゃんに、あんたが何の考えも無しでノコノコ出て行ったところでどうなる？」

嗜めるようなコヨーテの口調に、一は反論を控える。

「実際に、嬢ちゃんがいたのかどうかは分からない。だけど、さっきのは状況が悪すぎたんだ」
「……お前ってすごいんだな」
「気持ちが篭っていないぞ、リトルボーイ。まあ良い、話し疲れたし、そろそろ寝るとしようか」
「は？　いや、狼男とはぶつかるって決めたけどさ、まともな対策とか出来てないぞ」
「銀が弱点なんだから、それで良いじゃないか」
「いやいやいや、そりゃ映画の話だろ。んな話、フィクションじゃないかよ」
一の弁明も空しく、コヨーテの瞼がゆっくりと閉じられていく。
「……大いに結構じゃないか。今、この街にいる人狼だって映画さ、フィクションなのさ。フィクションにはフィクションで対抗する。何が悪いってんだ？」
「けどさ……」
「リトルボーイ。あんたはまだ、ミー（ソレ）たちとの付き合い方がイマイチ分かっちゃいないようだね」
「しょうがないだろ。勤務外としては、まだまだ俺は新人だからな」
「ん。そういう意味じゃ無いんだけどな」
「じゃあ、どういう意味だよ」
「ＺＺＺ」
「……おい」

「ね、ねえ、しのちゃん」
「……何？」
糸原は目を瞑る。どうにも、ちゃん付けで呼ばれるのには未だ抵抗があった。変に余所余所しい対応も癪に障るが、馴々し過ぎると言うか、年上に見られていないような気がしてならない。
「しのちゃんはさ、さっきの話どう思う？」

だが、呼び方についての訂正を求めたところで立花は泣いてしまうのでは無いかとも思う。立花真。背は高いし、瞳は切れ長。顔だけ見れば、彼女が気弱で泣き虫などと誰が思うだろう。いや、思うまい。

「んー」

非常にやり辛い子だと、糸原は思っていた。苦手だと言っても良い。

「ボ、ボクは嫌だったな」

「嫌？」

「……うん。ジェーンちゃんがソレかも知れないんでしょ。そんなの、嫌だな」

心底から悲しそうに、立花は俯いた。糸原は少しだけイラつく。どうしてこうも、感情をストレートに表現するのだろうか。出来てしまうのか。

「かも。じゃなくて、そうじゃないの？　話聞いてたなら分かるじゃん」

「けど……」

そんな立花へ、ついつい余計な事を言ってしまう。困らせてやりたくなる。本当の彼女を、見たくなる。

「信じたくないなら、良いんじゃない？　今までと変わらずに接してやれば？」

自分には無理だ。糸原はそう思う。

「そう、だね。　今まで通りにすれば良いんだよね。ボクにも、ちゃんと出来るかな？」

「あんたなら、出来るんじゃないの」

糸原は驚いた。まさか、立花がここまで純真だとは思っていなかった。

「うん、ボク頑張るよ！　あ、いや、頑張らなくて良いんだ……」

立花は頭を振り、自分の頬を両手で押さえるように軽く叩く。

「……なんかムカつく」

「？　しのちゃん、何か言った？」
「言ってない」
力を入れ過ぎてしまったのか、立花は赤くなった頬っぺたを涙目になって押さえていた。
一挙手一投足。何から何まで腹が立つ。自分には無いものを一杯持っていて、糸原には立花が輝いて見えた。今までも、この先も、決して手にすることの出来ないもの。心の底から他人を疑うことをせず、心の底から他人を信じられる。感情を隠す事を知らないで、明け透けに自身を曝け出せる。彼女の周りには味方ばかりで、自分には敵ばかり。彼女の世界は広くて、自分の世界はひどく狭い。
強く、弱い。
「あ、そろそろボク上がりだ」
「……そう、ね」
早く視界から消えてほしかった。眩し過ぎる光は、余計なものまで照らしだす。立花たちといると、自分の矮小さと無理矢理に向き合わされるようで嫌だった。
「……でも、しのちゃん平気？」
「は？」
「だ、だって疲れてない？　ほら、隈出来てるよ」
立花は自分の目の下を押さえて、遠慮がちに問い掛けてくる。
「ホント？　全然気付かなかった」
糸原は無駄だと分かっていても、隈を掻き消すように何度も指摘された箇所を擦った。
「その、疲れてるなら少し寝てきたらどうかな？」
「そしたらここに誰もいなくなるじゃない」
「ボ、ボクがその間いておくよ」
「はああ？」
糸原には、なぜ立花がこんな事を言ったのか訳が分からなかった。魂胆でもあるのだろうか。訝しげに立花の表情を観察する。
「な、なあに？」

小首を傾げる立花からは、不審な点が見当たらない。真っすぐな瞳で、真っすぐに見つめてくる。

「……あんた、張り切ってんのね」

「え？　えへへ、そうかも。はじめ君だって頑張ってると思ったら、ボクもしっかりしなきゃと思っちゃって」

「ふうん」

あいつか。糸原はぼんやりと彼の事を思い出す。今頃はジェーンを探す為に、街中を走り回っているのだろうか。

「そうね、私も頑張るか」

そう思うと、不思議と力が湧いてきた、気がした。

「うん、一緒に頑張ろうよ。はじめ君の分までさ」

「おっしゃ、じゃ三十分だけ寝てくるわ」

「う、えぇ？　そんなに？　五分ぐらいで帰ってきてよう……」

「……あんたね」

自分の事だけを考えていれば良かった。他人なんて、せいぜいが駒扱い。自分の思い通りに意図を操れば良かった。

だが、彼女は、糸原は変わりつつある。勤務外になって、初めてソレと戦った時は苦しかった。フリーランスとは違い、自分自身だけを気にして自由気儘に立ち回れない。あの時、彼女の背には一たちの命が圧し掛かっていた。とんでもない、重荷。下手を打ち、戦闘不能に陥れば自分だけでなく一たちにも危害が及んでしまう。事実、アラクネ戦ではギリギリまで追い詰められ、一旦は死をも覚悟した。

今こうして糸原が生きていられるのは運が良かったからに過ぎない。一の決断がもう少し遅ければ結果は火を見るより明らかだったろう。そして一を決断させてしまった理由が、自分には大いにあると糸原は気付いている。これ以上傷つけたくなくて、裏切られたくなくて。一度はフリーランスに戻った。だが、彼女は。彼女は、もう――

――もう、逃げないけどね。

決して表には出さないが、糸原は一に感謝していた。自分を変えてくれた彼に、何か恩を返してやりたい。

恩を返して、そして――。

「ふあ……。そんじゃ、よろしくねー」

「う、うん。ご、ごゆっくり？」

不安げな立花をフロアに残し、糸原は仮眠を求めてバックルームへと向かった。

ウルフかい？

星を見ていた。

夜空を見上げるのが好きだった。地上から自室の窓から木の上から見るのが好きだった。特に、屋根の上から満天の星空を眺めるのが好きだった。空との距離が、そこからなら一層縮まる気がしたから。

誰にも邪魔をされない。されたくない。大好きな両親とすら共有したくない。綺麗な景色を独り占めしている気分に浸れた。嫌な事や悲しい事、腹立たしい事があると梯子を使い屋根に登る。そして自分の小さな悩みを星屑と一緒くたにして空へと流した。全て、忘れられた。

「俺、高いところ苦手なんだよね」

なのに。

「きみは、平気なの？」

彼はやってきた。ズカズカと、当たり前のように隣に座る。彼は拙い英語の発音に、意味が分からない日本語を混ぜて彼女へ話し掛けてきた。

「うわ、こりゃ落ちたら死ぬな」

「……」

――死んじゃえ。

彼女はそう思っていた。

突然やってきた異邦人。楽しかった日常を狂わすかのごとく彼はやってきた。

当時、ソレが日本で猛威を奮っていたため日本人の疎開先の一つに選ばれたのがアメリカであった。彼女の両親は快く彼を受け入れてくれた。彼の両親は日本を離れる事が出来ず、彼は一人でアメリ

カに来たのだ。彼女の両親は、まだ十代だった彼を哀れみ、同情し、娘の兄代わりになってくれればと期待を込めて引き取った。

事実、彼は努力する。

しかし、当の彼女は受け入れてくれなかった。ソレから逃げてきた情けない日本人。背は低く、髪の毛どころか全体的に地味で冴えない。彼に対する印象は最悪に近かった。少なくとも、彼女の理想的な男性像からは掛け離れていた。

「あのさ、きみ、俺の事好きじゃないだろ」

「……」

おまけに、この遠回しな言い方が気に食わない。もっとハッキリ意見を口にすれば良いのに、彼はどこか遠慮がちに喋るのだ。

「用があるなら、さっさと言ったらどう?」

「……ん」

彼は彼女の不躾な物言いに怯む。

「用がなきゃ、きみの傍に寄っちゃいけないのか?」

「アタシ、アナタが嫌いなの」

言ってやった。

「……そっか。けどさ、そこを曲げて仲良くやってこうよ」

「アタシと仲良くするように、パパとママに言われたんでしょ」

「それもあるよ。でもさ、俺は単純にきみと仲良くしたいんだよ。これから、いつまでかは分からないけど同じ屋根の下で暮らしていくんだし」

彼女はその時、強い嫌悪感を覚えた。冗談で済まされるにしても質が悪い。

「イヤよ」

「つれないなあ」

彼女はまだ幼かった。人見知りこそしなくなったが、我が家に見知らぬ他人が入り込む事など、ましてや異国の人間となれば話は別になる。新しいモノを受け入れられるほど、彼女の心は固まっていない。

「……早くここから消えてよ」
それに、今日は一人でいたかった。
「邪魔なんだけど？」
「……う」
月に一度の、彼女の一番好きな日だったから。今夜は天気も良い方だ。今は少し雲があるが、それが晴れたときはさぞや美しく見えるのだろう。
「あー、もう少しだけいてもいい？」
「なんでよっ？」
彼女は思わず声を荒げてしまう。
「……いや、なんでって聞かれても」
「アタシはっ、アナタが嫌いなのっ！」
「さっきも聞いたよ」
「……っ！　背だって低いし頭悪そうだし顔は良くない地味で冴えない！　おまけに諦めまで悪いワケ！？」
ここぞとばかりに彼女はまくしたてた。
「ちょっとだけだよ。もうすぐ消えるって」
「今すぐに消えてよ！」
「……うるさいなあ。ほら、静かにしなよ」
彼女の並べ立てた暴言を気にする素振りも見せず、彼は涼しい顔で天を指差す。
「……あ」
雲が、晴れていく。
彼女が待ち望んでいた物がその姿を徐々に見せ始めた。同時に、わずかな光が屋根の上の二人を照らしだしていく。漆黒に塗り潰された空。その中で、僅かに瞬く星たちよりも一際強く輝くもの。深く、吸い込まれそうな闇の中で浮かび上がる一つきりのまばゆい光。
「……きれい」
彼女は呟いた。
隣にいる彼を罵倒する事も忘れ、ただそれに、それだけに目を奪

われた。全身から歓喜が沸き上がる。
「今日は満月だから、どうしても見たかったんだ」
「……アナタ、月が好きなの？」
「嫌いじゃない」
「そう……」
彼のハッキリしない物言いにも、何故か腹が立たなかった。
「こっちでも月は丸いんだね」
「当たり前でしょ。どこにいたって同じに見えるわ」
「うん。でも、確かめてみたかった」
どこと。とは、彼女は聞かなかった。家族を残し、一人きりで知らない国までやってきた彼の気持ちが、少しは理解出来た気がしたから。
「綺麗だ」
彼はそれきり言葉を発しなかった。黙って、月を見上げていた。その横顔が無性に悲しそうで、綺麗で。近くにいるのに遠くに感じる。
やがて、
「邪魔して悪かったね」
彼は立ち上がった。彼女に背を向け、梯子へと近づいていく。
「風も出てきたし、きみもそろそろ戻ったほうが良いよ」
「ねえ」
彼女は空を見上げたまま、彼に声を掛けた。
「名前で呼んでよ」
「え？」
「アタシと仲良くしたいなら、名前で呼びなさいよ」
「……分かった。そうするよ」
どんな顔をしているのか分からなかったが、彼は嬉しそうに答えた。少なくとも、彼女にはそう思えた。
一一とジェーン＝ゴーウェストが出会って、七日目の出来事であ

った。

これより彼らは、お互いの事を『兄妹』と認識する事になる。

騙し合いの、始まりになる。

……。

夢を見た。ぼんやりとそれだけを思い、一はこたつから体を起こした。背中には嫌な汗をかいている。一は着ていたシャツを無造作に投げ捨てて立ち上がった。まだ覚醒していない頭を振り、洗面所で顔を洗う。タオルで顔を拭くと、幾分か意識がハッキリとしてきた。

「ふあ……」

あくびをしながら冷蔵庫へ足を向け、中からペットボトルの麦茶を取り出す。キャップを開け、乾いていた喉にお茶を流し込んだ。

「グッドモーニング、リトルボーイ」

「ん」

「意外と早起きなんだな。とっくにお日様が真上になってる時間だぜ」

「そうか。朝食代が浮いたな」

一はコヨーテがいたことを今になって思い出す。

「さて、どうするよ？」

「言ったろ。ジェーンに会う。それだけだ」

「だが、人狼が邪魔をしに来る」

「何とかするさ」

「自信満々じゃないか、リトルボーイ。全く頼もしい限りだぜ」

「そりゃどうも」

言いつつ、一は煙草に火を点けた。寝ぼけた頭を無理矢理に叩き起こすためだ。煙を深く吸い込むと、頭がぐらりと揺れる。すぐに火は消した。

「俺は今からにでも動こうと思う」
「へえ、どうしてだい？　聞かせてもらおうじゃないか」
「月が出てたら狼男は強くなるんだろ？　だったら、太陽が沈む前に探し出して倒す」
「悪くないが、そう簡単にいくとは思えないな。向こうだって分かってるはずさ。夜までは、十全に態勢が整うまで隠れてる」
「そこを何とかするのが、お前の鼻だろうが」
一はコヨーテを指差した。
「……ま、期待には応えようか」
「ありがとよ。んじゃ、ちょっと買い物に行って来るから、大人しくここで待っててくれよ」
「買い物？　そんな暇があるのかい？」
「うん。一時間くらいで戻ってくるから」
適当に置いてあったシャツを着込み、コートを羽織ると一は慌しく外へ飛び出していく。

陽が落ちるまで、あと数時間。

お昼のピークを越えたオンリーワン北駒台店は静かだった。店内には三森と糸原が二人。レジカウンター内の壁に背を預けて、何をするでもなくぼんやりと突っ立っている。
「……ねえ」
「……あンだよ？」
ぼそりと呟く糸原に警戒しつつ、三森は視線だけを動かした。
「あんたさ、ソレってどう思う？」
「ソレって、ソレか？」
糸原は頷く。
「あー、別に何も思ってねェよ。出てきやがったら燃やすだけだ」

「知り合いでも？」
「あ？」
「もし、もしよ？　今まで付き合ってた人間がソレだったらどうする？」
困った。三森は今までそんな事を考えた試しがなかった。
「……知らねェよ。お前こそどうすンだ？」
「どうもしないわ。今までどおりにするだけ。ま、私に喧嘩売ってくるなら買うけどね」
そう言って、糸原は薄い笑みを浮かべる。
「ま、それにゃ同感だな。向かって来るなら相手するけどよ、こっちを見てない奴まで追い掛ける趣味はねェな」
「ありゃ、意外ね。あんたの事、一からは戦闘狂（マニアック）いって聞いてたからさー」
「っの野郎、私の事を陰でンな風に思ってたのか……」
今度会った時には、彼の体へ徹底的に教え込んでやろう。三森は固く決意した。
「……それだけじゃないんだけどねー」
「え、あ、なんだよ？　他にもなンか言ってやがったのか？」
「んー？　んー、秘密」
「良いから言えよ」
「ここから先は会員登録が必要になるんだよねー」
「言え」
「ふーん。そんなに一があんたの事をどう思ってるか知りたいの？」
糸原は嫌らしく目を細める。
「な、ちっ、ちげェよ！　そういう意味じゃねーっつーの！」
「顔が赤いわよぅ？」
「暖房が効きすぎてンだよっ」
「ま、教えないけどね」
「ちっ、えらくご機嫌じゃねェかよ」
三森は苛立ち混じりで床を踏み付ける。

「そ？　けど、そうね。確かにご機嫌かもね」
「小銭でも拾ったのかよ？」
「……拾われたのは、私かな」
「物好きな奴もいたもンだな。私ならてめーみたいなのは金払ってでも良いからお引き取り願うね」
「あら勿体ない。お買い得なのに。今なら拾ってくれた方に好きな願いを三つ叶えてあげるのになあ。下着とかプレゼントしちゃうわよ」
「ンな豚みたいな願い事すっかよ」
苦笑しつつ、三森はジャージのポケットに手を遣った。お目当ての煙草を探り当てると、それを銜えてプラプラと揺らす。
「……お前さ、丸くなってねェ？」
糸原はしばし瞬きを繰り返し、やがて嫌そうな目付きで三森を睨んだ。
「私、あんたよかスタイル良いつもりなんだけど」
「違うっ。その、なんだ……。ああ、アレだ、お前険がとれたっつーか、話しやすくなったっつーのか……」
「ああ、そゆ事？　何よ、そんなに私と話したかったわけね」
「耳鼻科なら近くにあるぜ」
「生憎私に悪いところは無いのよね。イトハライヤーは地獄耳、イトハラアイは透視力。ちなみにイトハラウイングで空を飛ぶわ」
「ああ、頭が悪いのか」
三森は煙草に指で火を点け、煙を胸いっぱいに吸い込む。少しは苛々が収まった気がした。
「ちょっと、煙吹き掛けないでよ」
「掛けてねーよ。エアコンの風がそっちに流れてンだ」
「パーヘクト美人の私の肺が悪くなったらどうしてくれんの？」
「私の勝手だろうが。嫌なら外で窒素でも吸ってろ。大体家でなら、その、あいつだって煙草吸ってンだろ」
「ん？　一の事？　一なら家で吸わないわよ。少なくとも私のいる

前じゃ吸わせないかんね」
煙草を口から落としそうになる。
「……ふーん」
「だってさ、煙草ってイラついた時とか間を持たせたいっ、みたいな時に吸うんでしょ？　なら、私と一緒にいるってーのに目の前で吸われたら腹立たないの？」
「はっ、自意識過剰女」
「良い女は何しても許されんの。それにいーじゃん、一は私のなんだし」
「……へえ」
知らずの内に三森の眉が吊り上がった。
「仲が良くて羨ましい限りだな。私にも分けて欲しいぐらいだよ」
「分けてあげよっか？　小指とか」

今日は冷える。街を歩きながら、一はとみに思った。
「へくしゅっ」
くしゃみがさっきから止まらない。どこか建物にでも入って暖まろう。一は鼻水を啜りつつ、そう決めた。

「……皮肉で言ったんだよ」
三森は火の点いた煙草を手で揉み消し、無造作に床に捨てる。叩きつけられた吸殻が灰と火の粉を撒き散らした。
「知ってるー。だってさ、あんたって一の事嫌いだもんね」
「あ？」
「違うの？　何なの？　好きなの？」
「別に嫌いって訳じゃねェけど……」
「じゃ、好きなの？」
糸原が一歩近付く。彼女の妙な威圧感に気圧されて、三森は思わ

ず後ずさった。
「すっ、好きじゃねェよ！」
「じゃあさ、どっちかって言うと？　どれくらい好きかどれくらい嫌いかは置いといて」
「ン、ンなの言う必要ねェし！」
「……ふーん。そ、分かったわ。なら私が勝手に決め付けとく。そして必要なら一に言う」
喜色満面。糸原は愉しそうに笑う。
「やめろっ、余計な事すンじゃねぇ！」
「えへへー、次に一と会うとき超気まずくなるかもよー」
そこで三森は気付いた。こいつは自分をおもちゃにしている、と。
真正直にぶつかれば躱されてしまう。ならば。
「……はっ、好きにしろよ。それがどうしたってンだ」
「分かった、そーするー」
あっさり躱された。
「お、おい待て。なんて言うつもりだ？」
「別にー？　何も考えてないけど。ただ、そうね。あんたが一の事を殺したいほど憎んでる。肉を燃やして骨まで焼いて、ひとかけらだって残さなくなるまで徹底的に炭にし尽くして生きている事を後悔させ尽くしてむしろ自分から殺してくれって言わせるぐらいに痛め抜いて、ああそれでも死ぬ間際に火葬の手間が省けて良かったなってぐらいは思わせたい。これぐらい憎んでるって言おっかな」
「やめてくれ……」
三森はうな垂れながら呟いた。
「本当にそう思われてるかもしンねェからさ……」
脳裏に、一と初めて出会ったときの事が浮かび上がる。あの目、あの表情。世にも恐ろしいモノを見たような、あの顔。一は変わっているが良い奴だ。短い付き合いだが、三森は最近そう思っていた。
今でこそ、こんな自分に対し普通に接してくれてはいるが、最初はそうじゃなかった。

「ありゃ、あんた意外とメンタル弱いのね。ネットで叩かれたら自殺するタイプ？」
「……誰だって叩かれたら凹むだろ」
「ふーん……」
何故か糸原は意味ありげに、嫌らしく笑った。
「な、なンだよ？」
「別にぃ」
「あ、あっ！　お前っ、何か勘違いしてンだろ！　違うぞ、私はこのバイト同士でくらい、仲が良くても構わねェって思ってるだけだっ」
「一と仲良くなりたいんだー？」
「なりたくねェ！　ンな事言ってねーだろ！　仲なんて必要以上に悪くなけりゃそれで良いンだよ！」
必死で弁解する三森に対し、糸原は余裕たっぷりに微笑んだ。
「笑ってンじゃねーよ！」

「リトルボーイ。そりゃ何だ？」
小一時間で一は戻ってきた。件の買い物とやらを終えたのか、大きめのビニール袋を抱えている。
「ああ、これは俺たちの昼ご飯だよ」
その袋から取り出したのは、微かに湯気を立てている小さな包み。
「美味そうだったから買ってきた」
「……人間の作ったモンじゃないか」
「まあ、そうだけどさ……我慢してくれよ。腹が減っては戦は出来ないだろ」
「ブシは食わねど高楊枝とも言わないか？」
「お前犬じゃん」
コヨーテは一の言葉に対し、不機嫌そうに鼻を鳴らした。
「ほら、毒なんて入ってねえから」

一は包みを開き、コヨーテにそれを放った。
「初めて見るな……。何だこりゃ？」
「肉まん。饅頭の中に肉が入っております。御所望なら他にも、あんまんピザまんカレーまんとございますよ」
「はっ、これだからアジアの連中は……。ライスやパンに具を挟めば何でも美味いと思ってやがる」
「ハンバーガーを考えたのはお前んとこだろ」
「イエローはこれだから困る」
「ギリギリだから、そういう事言うのはやめろ灰色」
やれやれと頭を振り、コヨーテは肉まんを一齧りする。途端、彼の口の中に肉汁が溢れた。次いで、香ばしい生地が舌の上に広がり、絹のような滑らかさで解けていく。泡のごとく。一口目を名残惜しそうに胃へ送ると二口目に手を――口を伸ばした。なんとも不思議でならない。全く飽きが来ないのだ。コヨーテは貪るように残りを平らげる。最後の一欠片を嚥下し、口の周りを舌で舐めた。
そしてこう言った。
「イマイチだな」
「尻尾振ってんぞ」
一はあんまんを頬張りながら、包みを開けておいたカレーまんをコヨーテに渡す。
「大丈夫。タマネギ入ってないから」
「……ミーは犬じゃない。誇り高きコヨーテだ」
「はいはい分かってるって」
言いながら一は袋に手を伸ばした。取り出したのはこれでもかとピンクを施した紐。その先には犬の首にでも通せば丁度良い大きさの輪っかがついていた。
「……リトルボーイ。重ね重ねすまない。こりゃ何だ？」
「ああ、付けてくれ」
「ミーにそういう趣味は無いんだが」
「俺にも無いなあ」

しかも動物相手に。
「言っておくが。ミーは誇り高きコヨーテだ」
「聞いたよ」
「なら、これはどういうつもりなんだ」
「日本は中途半端に治安が良くてね。そう、犬が一人歩き出来ないくらいには」
「知っているさ。保健所の連中に何度も追い掛け回されたからな」
一は黙った。追い掛けられたのかよ。しかも何回も。本当にプライドだけは無駄に高いな。と、言わなくても良いことを言わないために。
「……あー。知ってるなら話は早いよな？　これさえ付けりゃ、まあ、飼い犬と思われるから大丈夫。だから、な？」
「屈辱だ……」
「良いからリード付けろよ」
「……嫌だね」
コヨーテはそっぽを向いて口を尖らせる。
「付けないと外に出られないぞ」
「別に構わないさ。そんな恥辱を受けるぐらいなら」
「おい、ジェーンに借りを返すんじゃないのか」
「背に腹はかえられない」
イラッときた。一は溜め息を吐き、買ってきたリードを無造作に掴む。
「暴れんなよ」
「……来るな」
立ち上がり、輪の部分をカウボーイよろしく振り回しながら一はコヨーテに近づいた。
「来るな。噛むぞ」
「ほら、頭下げろ」
「やめろ……！」
「おらっ、じっとしてろ！」

「やめろ！　ミーは！　ミーはコヨーテなんだ！　誇り高いんだぞ！　偉いんだぞ！」
「うるせぇなあ」
「わんわんわんわんわん！」
コヨーテはもはやただの犬に成り下がる。腹を見せ、じたばたと頭を振り続けて抵抗を続けた。

一は犬を連れて駒台の駅前に来ていた。駅前ならば街の中でも特に人が多い。お目当ての人狼の匂いの、手掛かりぐらいなら掴める筈だと、一はそう踏んでいる。
「おい、どうなんだよ？」
「……さあな。いるんじゃないか？」
「投げやりだな」
「投げやりにもなるさ」
コヨーテは紐で繋がれていた。
「見ろよ、ミーを。はっはっはっ、お笑い種だぜ。なんだってんだ、この格好は……」
「似合ってると思うけどな。つーか、あるべき姿と言うか何と言うか」
「くそっ、犬を見かけたら吠え立ててやる」
「やめなさい」
その時、コヨーテの鼻がピクリと震える。
「……来るぞ」
「え？」
一は駅の改札口付近に目を向けた。丁度、電車が来た時刻なのだろう。今から駅に向かう人々と、電車から降りてきた人々とで広くも無い空間がごった返している。
一たちはそこから少し離れたところで人の群れを観察していた。多種多様。老若男女。学生もいればスーツ姿の中年もいる。

「どいつだ？」
身構えながら、一はアイギスを持つ手に力を込めた。
「ハッキリとは分からないな。人が多過ぎる。混ざり合っていて、上手い事臭いが嗅ぎ取れない」
「急いでくれよ」
一は焦る。こちらへ向かって人の波が押し寄せてきているのだ。もし、もしあの中に、本当に奴が紛れているのならばまずい。こちらはまだ向こうを捕捉していない。人狼がこちらに気付いているのなら先に仕掛けられてしまう。
「……一旦離れよう」
「ああ、そうしてくれ」
コヨーテは視線を人ごみに向けながら、首を揺らした。リード越しに振動が伝わり、一は方向を転換。だが、コヨーテは何故か動かない。
「おい」
声を掛けるも、彼は動こうとも返事をしようともしなかった。
「……少しばかり、遅かったな」
何が。とは聞けなかった。聞くまでも無い。
――いつの間に。

「会うのは三度目だが、太陽が出ている間に会うのは初めてだな」

一の前に影が差す。
背の高い男が、一たちを見下ろすように立っていた。男は冬だと言うのに半袖のシャツにジーンズというラフな格好。引き締まった筋肉だと、服越しからでも一には良く分かる。嫌でも、だ。
「こうして見ると、大したことが無さそうに見えるんだが」
強い、声。
「昨日の人狼か？」
コヨーテが問いかける。男は少しの間だけ目を見開いたが、

「……ほう、人の言葉を話せるのか」
大した驚きも見せず、静かに、そう返した。
「な……お前……」
呻く一を嘲笑うかのように、男は薄く笑った。
「昨夜はどうも。お陰さまで耳がまだキンキンしている」
「はっ、リトルボーイ。当たりを引いちまったようだな」
「外れだろ、この状況じゃあ……」
先に仕掛けられてしまった。目の前の男は世間話でもしに来たような気軽さで接しているが、こちらから仕掛けるだけの隙までは持ち合わせていない。おまけに、一の頭はまだ混乱している。アクションを起こされても満足な対応を出来る自信なんてなかった。
「心配するな。今は仕掛けん」
一の不安を見抜いたのか、男は存外穏やかな口調で語る。
「……んな保障があるかよ」
「ヘイ、落ち着きなよ。こいつにその気があるなら、ミーたちはとっくにくたばっていてもおかしくないんだぜ」
「その通りだと言っておこうか」
男の棘のある口調に、一の心がささくれ立って行く。
「わざわざこんな時間に、あんたが何の用だってんだ」
「そうだな……」
男は思案するかのように腕を組んだ。
「邪魔をして欲しくない。そう、忠告をしに来た」
「邪魔だって？」
コヨーテは訝しげに男を見上げる。首に引っ掛かったリードが邪魔で、上手く顔を上げられなかった。
「なあリトルボーイ、これを外してくれないか？」
「ダメ」
「……俺が言いたいのはそれだけだ」
一たちを避けるようにして人ごみが流れていく。
「おい、待てよ。何の邪魔をするなって言ってんだ？」

男が立ち去りそうだったので、一は引き止めるべく声を掛けた。
「……俺と、彼女の」
「彼女？　誰の事だ？」
「あの晩、俺を倒した娘だ。確か、お前もその場にいたか？」
一の脳裏にあの光景が過ぎる。ドクン、と。心臓が強く胸を打った。――ジェーン。体から血の気が引いていく。――ジェーン。
「どういう……意味だ？」
問うた声は震えていた。
「俺は人狼だ。彼女も、な。そして明日は満月。考えただけで滾ると言うものだ」
それだけで充分だろう。男は付け加えると、一たちから背を向ける。
「待てよっ」
一の体がカッと熱くなった。
「勝手言ってんじゃねえぞ！」
男の正面に回り、一は真っ向から立ち向かう。コヨーテはしきりに「やめろ」と吠えていたが、リードを握られていては引っ張られる他無い。
「勝手？」
「あいつは、俺の妹だ。手は出させない」
「ほう……」
くつくつと、男は喉の奥で笑った。
「そうか。お前の妹だったのか、それはそれは……」
「何笑ってやがる」
愉しそうに笑う男に腹を立て、一歩踏み出す。
「ならば宣言しておく。貰うぞ、あの娘」
一は声を出せない。見えなかった。いつの間にか背後を取っていた男の爪が、一の喉に薄く食い込んでいた。
「今、この場でお前を殺すのは造作も無い。だがね、俺にも人間としての立場がある」

「人狼っ！　リトルボーイから手を離せっ」
「喚くな犬。人前だから御してはいるが、俺を怒らせるな。力が入ってしまうだろう」
「……おま……えっ」
「今夜だ。あの娘を貰う。俺と戦うに相応しい相手だ」
男は一の首から爪を引き、再び背を向ける。
「邪魔をするならば、次は容赦しない」
言い残し、彼もまた人ごみの中に消えていった。
残された一は首元を押さえ、男の背中を見送る。動けなかった。
奇襲、と言う事もあったが、それ以上に男がジェーンを狙っている事実が、何よりも一を凍らせている。
「何で……」
「リトルボーイ、夜を待とう」

もうじきに、陽も暮れる。
狼たちの時間はもう、すぐだ。

忌避すべきモノ

ああ、今夜は月が――。

「お兄ちゃん」

振り向いた彼――つまり一一（にのまえ）――は絶句していた。驚愕の表情を顔に浮かばせ、お世辞にも美形だとは言えない間の抜けた顔を心なしか引き攣らせている。

――やった。

少女――ジェーンゴーウェスト――は一（はじめ）が期待通りの反応を見せた事に内心ほくそ笑んだ。

「……」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

ジェーンは困惑する一へと追い討ちを掛ける。もう一度、上目遣いに呼び掛けてみた。

「う、あ、え？」

効果は覿面だったらしく、一はジェーンから目を逸らしオロオロとするだけ。

「熱でもあるの？」

ジェーンは背伸びして、一の額へ自分の額を持っていく。彼は「うえぇっ？」とか喚いたが気にせずにピタリと額同士をくっつけた。

「……あれ？」

至近距離で。ジェーンは一の顔を観察し始める。そして一分ばかりの時間を要して気付いた。

「本当に熱いじゃない」

「離れろよ！」

肩を力任せに押されてジェーンはよろけてたたらを踏む。

「ちょっと、レディに何するのよ？」

「おっ、お前こそ何のつもりだ！」
「ハーン？」
顔を真っ赤にして怒鳴る一に怯む事無く、ジェーンは口笛でも吹きそうなくらい軽い態度で臨む。
「いきなりお兄ちゃんとか言うな！　恐いわ！　イタリアのギャングかお前は！」
「……ギャング？」
「……ああ、知らないか」
ジェーンは素直に頷いた。
「とっ、とにかく。俺をお兄ちゃんと呼ぶのはやめろ」
「……兄さん？」
「違う」
「お兄さま？」
「そうじゃないっ」
「兄上っ」
「だーかーらー」
「兄チャマ、チェキ☆」
「てめぇわかってやってんだろ！」
ジェーンは素直に頷いた。
一は溜め息を一つ吐き、あのなと前置きをしてから、
「呼び方の問題じゃない。俺を兄と呼んだり、兄と思うのはやめろって言ってんだ」
気だるげに口を開く。
「えー、どうしてよ？　アタシが納得出来る理由を教えてくれなきゃ、パパたちの前でお兄ちゃんの事お兄ちゃんって呼ぶからね」
「……ややこしい奴だな。理由も何も無いよ。俺は、お前の、兄ちゃんじゃない。そんだけで充分だろ」
ジェーンは不満げに頬を膨らませた。一は少しだけ躊躇う素振りを見せたが、構わずに話を続ける。
「お前とは血が繋がって無い。本当の兄妹じゃないのに、そんなの

おかしいよ」
「お隣のフィーはライアンの事を『お兄ちゃん』って呼んでるじゃない」
「それは、あの二人が幼馴染でご近所さんだからだろ」
「納得出来ない」
強く、固い意志を込めてジェーンは言い放った。
「納得しろよ。世間体ってのもあるの。良いか？　お前みたいなちっちゃいのに俺みたいな奴が『お兄ちゃん』って呼ばれてみろ。それを聞いた人はどう思う？」
まず『小さい』発言に腹が立ち、次に一の『お兄ちゃん』と言った時の声音が気色悪かった。
「……仲が良いのねって思うんじゃない？」
「誰がっ！　日本人がちっちゃい子に無理矢理兄さんと呼ばせて気持ち悪いって思われるわっ」
「本当にネガティブなんだから……」
ジェーンは彼の自虐的と言うか、常に後ろを向いた姿勢が嫌だった。そこさえ直してくれれば、もう少し好きになれるのに。
「考えが深いと言え」
「考えるだけで行動に移さないだけじゃない。なんで日本人って周りの目を気にするのよ？　そーいうの疲れない？」
「はっ、疲れないね。しょうもない話をお前とするよりかはな」
「……」
時間が経つにつれ、仲が良くなるにつれ、ジェーンは一の性格、本性を理解し始めていた。
「あのさ、お兄ちゃんって性格悪いよね」
「おまけに口も悪いし頭も悪い。顔も悪いし、背も低ければ金すら無いって奴だ」
「もうっ、自分を悪く言うのやめなよっ」
本当に気に入らない。誰もそんな風に思っちゃいないのに。
「うるさいな。だったら俺の事を兄ちゃんなんて呼ぶなよ。無視す

れば良いじゃねーか」
「そっちが仲良くしようって言ったんじゃない！」
「誰が兄ちゃんと呼べなんて言ったよ」
「……っ！」
だったら。
「確かに仲良くしようとは言った。だけど兄妹みたくしようとは言ってないね」
だったら。
「うっ、うるさい。アタシの勝手でしょ」
目の前の、一一を、なんと呼べば良いと言うのだろう。
――はじめ。
無理だ。そんなの今更だ。恥ずかしくて照れ臭くて情けなくて。
だから誤魔化そうとしたのに。
「……おい、泣くなよ？」
「泣いてないっ！」
「……あっそ。とにかく兄ちゃんは禁止な」
素っ気ない態度。一は手を振り自室の扉に手を掛ける。いつもそうだ。彼は用が無い限り、自分の世界に閉じ篭る。こちらから呼び掛けない限り、絶対に姿を現さない。
「……お兄ちゃん」
「……おい」
卑怯だ。ずるい。とにかくやり方が汚い。思えば、いつからかジェーンは一に惹かれていた。あの日一緒に夜空を見上げた時か。もしかしたら、最初に顔を合わせた時かもしれない。ない。関係ない。
「お兄ちゃん」
気になるのに、そうさせたのに、彼からは決して動かない。
「お兄ちゃん、お兄ちゃん」
「やめろってば……」
だったら、自分から動かなければしょうがないではないか。
「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんっ」

「やめろって！」
振り向かせてやる。認めさせてやる。認めてやる。
「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！」
「……もう、好きにしなよ」

日が沈みかけた頃、彼女は目を覚ました。朧げな記憶。微かな、甘い感覚。夢を見ていたのだと、彼女は認識する。
「……熱い……」
酷く、喉が渇いていた。思えば昨夜から何も口にしていない。そして何故か体が痛かった。彼女はブロンドを靡かせ周囲を見回す。見覚えの無い景色だ。まだ夢の続きにいるのだろうか。現実味を帯びない、ぼやけた視界。一面の緑。差し込む橙。森の中にでもいるのか。彼女は頭を振って、耳を澄ませる。すると、微かに聞こえる人の声。活発な幼い声。ここらで家族らしき人たちがピクニックをしているようだった。時折母親らしき人物が子供に注意を促している。楽しそうな家族の弾んだ声。いったい何故、自分はこんな所にいるのだろう。考えれば、思い出そうとすれば、鈍い痛みが頭を揺らした。それでも彼女は思い出す。
土に汚れ血に塗れた服。あの人が昔、可愛いと褒めてくれた服。
「……っ」
痛い。頭が痛い。だけど彼女は思い出す。そう、昨夜だ。思い出せ。自分は何をしていた。
ああ、そうだ。歩いていた。誰かと。誰と？　曖昧な記憶を引っ張り出せ。痛む頭に、楽しげな声が耳障り。
ああ、そうだ。彼と。一と。兄とだ。それから、それから。それからそれから。
「……ぅ」
手が痛い。痛い。傷なんて負っちゃいない。なのに痛む。シクシクと、ズキズキと痛む。

――ああ、そうだ。

「くあっ……！」

流れ込む。蘇る。止めてくれと必死に思考を脳を回路を遮断。出来ない。昨夜の光景、その断片ときに塊が奔流となり、彼女の脳内を怒濤となり進む。壊す。犯して回る。理性が砕かれていく。助けを求め空を仰げば一面の茜色。太陽は沈みかけ、月が現われていく。見えてくる。

月が。月が。月が。月が。

月が彼女を騒つかせた。滾らせた。本能が、本能という本能が叫ぶ。闘争を。闘争という闘争を求めて叫ぶ。彼女の体を構成する細胞から原子、一つたりとも意を違わず、一つに口を揃えて渇望する。

血を。血を。血を。血を。

「かっ……は……」

熱い。異常な熱が彼女を支配していく。抗えない。逆らえない。気を抜けばすぐにでも堕ちてしまいそうだった。地を掻く。爪の間に土が入り込もうが爪が剥がれようが構わない。意識を逸らす。それだけに全力を尽くす。

「……う……」

情けない。自然に涙が零れた。どうしてこんな目に遭わなければならないのか。どうしてこんな気持ちにならないといけないのか。

ネガティブな感情は怒りに取って代わる。怒りは本能を呼び覚ます。分かっているのに、どうしても気持ちは殺せない。委ねてしまいたい。だが、最後に残る理性が彼の存在を訴えかけていた。なっていいのか。次に彼と会うときに獣の姿でいいのか、と。彼女へ必死に語り掛ける。

「うっ、うぅ……」

ダメだ。ダメだ。そんなのダメだ。誰が許しても、囁いても、認められない。認めてたまるか。謝るんだ。彼に、会って謝るんだ。

その一心を支えに、彼女は吐き気を堪え、土を掻き、渇いた喉で嗚咽を零しながらも耐える。次第に、衝動は弱まっていく。熱も冷めていく。血も、引いていく。

「はっ、はっ、はっ」

短い呼気を繰り返し、彼女は期待した。いける。大丈夫だ。

「ねえ、お母さぁん！」

ぞくり、と。一瞬にして血が凍った。

「待ってよ、お母さんっ」

息が出来ない。酸素が吸えない。すべての神経が耳に集う感覚。

「母さんってば！」

静寂の後、どす黒い波が彼女を再び襲った。

茜色が短い間街を覆ったあと、すぐに暗闇がやってきた。薄い雲が街を包み、雲より遥か上からの明かりを途絶えさせている。

「なあ、まだ見つからないのか？」

一は駅前のベンチに体を預け、傍らで地面に鼻を寄せているコヨーテに尋ねた。

「……なんなら手伝ってくれても良いんだぜ」

「風邪気味でね。今日は鼻が詰まってるんだ」

「はっ、そりゃお大事に。家に帰ってママのミルクでも飲んでたらどうだい？」

一は一昔前のスラングをゆっくりと噛み締めた後、

「ママとは喧嘩してんだよ」

吐き出すように言い放った。

コヨーテは面白くなさそうに尻尾を揺らし、駅前一帯を眺めまわしたあと眉根を寄せた。

「匂いが薄いな」

「……何の？」
「あいつのだよ。人の形を保ってやがったし、キツイ香水を振りたくってやがった。どっちに行ったのか見当が付かないと来てる。ふん、奴に狼としての誇りは無いらしいな」
一は男と出会った時、その、匂いなどには気が付かなかったが、鼻が利くコヨーテが言うなら間違いは無いのだろうと思案する。
「……キツイ匂いが残ってるなら、それを追えば良いだろ」
「残り過ぎだ。ここらに香水だけが溜まってやがる。匂いを辿っても、奴までは着かないと思うぜ。恐らくだが、ミーたちの追跡を振り切るために別の香りを付けてるとも考えられるしな」
「でも、やるしかないだろ」
「……分かってるよ」
あの後、一は男を追い掛けようとした。だが、コヨーテがそれを止めたのだ。匂いなら覚えていると。そう言って。一にはコヨーテの考えが読めなかったが、その手の事に関しては一日の長があると判断し、素直に従った。従った結果が今の状況。恨み言の一つでも言ってやりたかったが、一はそうしなかった。ただ、後ろで急かすのだ。
「だから、そうプレッシャーを掛けないでくれよ」
「かけてねえよ。見てるだけだろ」
コヨーテはまだ何か言いたげだったが、首を振り一から顔を逸らす。
しばらくの間、一人と一匹は口を開かなかった。一切合切の言葉を忘れて数十分。ベンチに深く腰掛けたまま、一が空を仰ぐ。
「……なあ、そろそろ良いんじゃないのか？」
「……何が、だい？」
「話してくれても良いんじゃないかって言ってんだ」
その意味を推し量っているのか、言葉を忘れたのか、それとも単に答えたくないだけなのか。とにかくコヨーテは長い間沈黙を守った。それこそ、答えを欲している一が声を掛けるのを躊躇ってしま

うほどの、長い時間。
「あの人狼なら、見つけたさ」
だから、コヨーテが口を開くのを待つしかなかった。
だけど、コヨーテの言葉は一の欲している答えじゃない。
「知ってる。俺が、いや、俺たちが聞きたいのはそんな事じゃない」
一はジーンズのポケットに手を伸ばす。
「……たち？」
「うん。俺と、ジェーン」
煙草の箱を摘み上げ、残りの本数が少ないことを確認して、溜め息を一つ。一は緩慢な動作で箱を元に戻した。
「リトルボーイ。日本人ってのは遠回りでいけないな。良いか？ユーは、ミーに、何を聞きたいんだ？」
「遠回しに本題へ入るのはな、遠慮深い日本人の美徳なんだよ」
「センスの無い人種だな」
「ピンクの首輪してる奴が言える台詞か。あのな、俺はどうしてお前が助けてくれるのかが知りたいんだよ」
黙る。コヨーテは黙る。首輪云々で腹を立てたのではない。
「誰かが誰かを助けるのには、理由がいるんだ。無意味無償じゃ誰も動かねえ」
「知った風な口を利くんだな、ミーはただ……」
「ジェーンに借りがあるんだっけか？　俺はさ、それを知りたいんだよ。お前が動く理由だ。なあ、あいつはお前に何を貸してくれた？」
コヨーテは一の問い掛けに少しだけ考えた素振りを見せた後、
「命さ」
ぽつりと、呟く。
「……そういや、救われたって言ってたっけか」
「救われたって言い方は正確じゃあ無いけどね。少なくとも、ミーは嬢ちゃんのお陰で助かったよ」
「ふぅん。行き倒れてたとこをでも拾ってもらったのか？」

確か、ジェーンは動物が好きだった。一は何気なく二年前――アメリカにいた時――を思い出してみた。
「……リトルボーイ、円卓の騎士って名前を知ってるかい？」
「円卓……？」
鸚鵡返ししながら、一はその名を思い出す。円卓の騎士。つい最近、聞いたような気がする名前。
「店長が、そんな事を言ってたような。俺が知ってんのは名前ぐらいだけど」
名前以外には、勤務外の邪魔をする集団、ぐらいの認識しか一には無かった。
「一応はユーも勤務外って事か。そう、その円卓の騎士さ。ミーは二年前にアメリカでそいつらに襲われたんだ」
「……え、あ、マジ、なのか？」
さすがに予想外だった。一は目を丸くし、眼前のコヨーテを穴が開くほど見つめている。
「ミーは軽口を叩くけど、嘘は吐かない事で有名なんだぜ」
「なんで、お前が狙われるんだ？」
「さてね。そこん所はミーに聞かないでくれ。ただ、奴らはミーで何かを試したがっていたようだけど」
「試す……」
一には訳が分からない。何を？
「冷たい夜だったよ。ミーを狙ったのは吸血鬼と呼ばれる種族でね。奴のあの目、あの目だけ、まだ覚えてる」
「……ジェーンは、お前を助けたって言ったよな」
その、円卓からコヨーテを助けたと言う事実が信じられなかった。二年前、ジェーンはただの女の子だった筈だ。コヨーテが逃げ出すくらいの連中から、どうやってジェーンが介入したと言うのか。考えても一には答えが浮かばない。
「ミーはね、嬢ちゃんを売ったのさ」
だから、コヨーテの言葉を馬鹿みたいに待って、答えを聞いて馬

鹿みたいに呆ける。
「必死で逃げて、街まで逃げた。そこでミーは嬢ちゃんを見つけたのさ。木の上で淋しそうにしてた嬢ちゃんをね」
コヨーテは一を見上げる。「続けて良いか」と無言で問われているようで、一は曖昧に頷いた。
「……ミーは、死にたくなかった。嬢ちゃんを木の上から落として、吸血鬼の注意を逸らす事にも何とも思わなかったよ。でもね……」
一拍置いて、
「あの子は抵抗しなかったんだ」
悲しむような、あるいは哀れむような。
「ミーが木から落とした時も、吸血鬼に攫われた時も、悲鳴一つ上げなかった。ミーにはまるで死にたがっているように見えたよ」
「……勝手な事言うな」
唇を噛み締めながら、一は苛立ちをぶつけた。
「あいつが死にたがってた？　吸血鬼に攫われた？　ふざけるなよ、コヨーテ」
得体の知れない苛立ちが募る。二年前、ジェーンが死にたがっていた？　円卓に攫われた？　そんなの、そんな事初耳だった。おこがましくも彼女の兄を名乗った自分が知らなくて、何故他人が知っている。
「そんなの嘘だ」
「リトルボーイ。嘘じゃない、真実なのさ」
「だったらっ！」
自分でも驚くほど声を荒げてしまい、一は頭を掻く。
「……だったら、どうして真実を俺が知らないんだ。あいつはどうして俺に黙ってるんだよっ」
なるだけ声のトーンを落とす事を心がけたが、語尾はどうしても強くなる。
「……嬢ちゃんは言いたくなかったんだよ。少なくとも、あんたには」

自惚れているつまりはなかった。それでも、それでも一にはどこか甘えがあったのかも知れない。
「分かってる」
つもりだった。
「……嬢ちゃんがあんな事になってるのは恐らく奴らの仕業だろう。ま、原因はミーにあるんだけどな」
おどけたコヨーテの口調が、一には痛々しく耳に残る。
「ん……」
「……どうした？」
「血だ。血の臭いがする」
明後日の方角を睨み付け、コヨーテは鼻をひくつかせる。
「血……？」
まさか。一の背筋を嫌な物が伝った。
「思っていたよりも近いな。リトルボーイ、この先には何があるんだ？」
「あ、ああ。確か、でかい公園があったな」
昔、一は駒台にやってきてからすぐに、その公園へ一度だけ行った事があった。ほんの、軽い気持ちで。当時を振り返りながら、一は言葉を紡ぐ。
「自然公園って言うのかな、家族連れが多かったよ」
居た堪れなくて、逃げるように立ち去った事も思い出し、一の気分が少し沈んだ。
「家族、ね。随分とアットホームなところだ」
血の臭いとは掛け離れてる。皮肉げに言い足して、コヨーテは笑う。
「なら、行こう」
軽く言いつつベンチから腰を上げ、一が体を伸ばした。
「……それだけかい？」
「何か、言ってほしいのか？」
「いっそ、ね」

「ん……そうだな……」
一は頭を掻き、言葉を探してみる。だが、どうにも思いつかない。
「多分、聞きたい事とか言いたい事はあるんだけどな」
「聞けば良い。言えば良い。あんたにはその権利がある」
「権利？　無いよ、んなモン」
真剣なコヨーテの言を笑い飛ばし、屈伸。
「何度も言ってるけど、俺が聞きたい事はお前に聞いちゃ駄目なんだ。そんで、お前に何かを言うべきなのは俺じゃない」
「……嬢ちゃん、か」
「……正直、お前に対して何も思っていない、なんて事は無い。ジェーンがこんな事になってる原因は少なくともお前にあると思う」
でも。そう、一は前置きしてから、
「俺は気付いてやれなかった。気付こうとも、思わなかったんだ。あいつが今あんな目に遭ってるのは俺にも原因がある。だから、俺はお前を恨まない」
自嘲気味に呟いた。
「恨まない？」
「ああ。恨まない。憎まない。怒らない。俺は、お前を許さない」
「……はっ、良いセンスだ」
楽しそうに尻尾を振るコヨーテを一瞥。
「お前を恨むのも、憎むのも、許すのも。決めるのは俺じゃない。ジェーンだ」
「分かってるさ」
「ちゃんと、自分の口で謝ってくれよな」
「……分かってるさ」
まるで人間みたいに微笑んで、コヨーテは歩き出す。彼の背を追いかけるように一も歩き出し、やがて隣に並んだ。
「世話の焼ける妹を持つと苦労するなあ……」
「兄冥利に尽きるってもんさ、リトルボーイ」
一人と一匹は笑い合った。まるで、今から散歩にでも行くかのよ

うな気楽さで。

駒台公園。駒台の中央部に位置する巨大な公園である。平日休日問わず、多くの人が利用している。子供の喜びそうなアスレチックや青々と広がる芝生エリアのお陰で、家族連れに好評。森林浴が楽しめる長い散歩道ではのんびりとした空気が流れる。

そして夜には。

「なあ、良いだろ？」

「えー、ここで？」

夜には、男と女。夕方までの盛況さとは打って変わり、耳を澄ませば虫の音が聞こえるほどの静けさが公園には訪れる。若い男女。カップルには人気のデートスポットだった。

「誰かに見られたらどうするのよー？」

「心配するなって、ここ穴場なんだからよ。誰も来やしねえって」

「でも、昼間は人が多いじゃない」

「あ？　ああ、けど夜にゃ殆ど消えるんだよ。なあ、大丈夫だって、それに俺さあ、もう我慢できねえんだよな……」

押しの強い男に女は諦め始めていた。誰かに見られるのはご免だが、男の言う通り確かに、周囲に人影は見当たらない。それにここまで拝み倒されて悪い気はしない。男の目的が自身の体であったとしても詮ない話。こっちだって我慢は出来なくなりつつある。お互い様だと割り切って、一夜を楽しむのも若さゆえの特権だろう。女は言い訳じみた考えに至り、たっぷりと間をとって焦らしてから、

「もう……しょうがないわね」

興奮しきった様子の男に妖艶な笑みを向けた。

「へへっ、それじゃあさっそく……」

下卑た笑い。女の服に、男の手が伸びる。

いつ、気付くべきだったのだろう。

なぜ、昼間は賑わっているこの公園から人がいなくなるのか。

「……あ？」

彼らはもっと慎重になるべきだった。もっと、ソレに意識を傾けるべきだった。

そも、日夜ソレと相対する勤務外だけが異物に敏感になる訳ではない。確かに、確実に勤務外は一般よりソレに対する嗅覚が優れている。だが、力を持たないと言われる一般が本当に、全くの無力と言うわけではない。彼ら一般は普通であるがゆえに、普通でないモノを嫌い、拒む。察知する。ぼんやりと、うっすらと。確信ではない。確実ではない。それでも、何かおかしいと感じられる。だから、立ち去る。君子危うきに近寄らず。分からない。だから、分からない場所からは逃げる。夜が近づくにつれ、公園が、ここが変だと体のどこかから訴えるのだ。あるいは訴えかけられているのか。

「てめえ、何見てやがるんだ？」

彼らはまだ気付いていない。平時であればこの時間、絶対に近付かないでいられたこの場所が、格別の危険地帯である事に。

「聞いてんのかコラァ！」
「ちょっと、やめなよ……」

今宵、ここは――

「……あ？　あ、あ」
「ひっ……！」

「……邪魔だ」

上がる血飛沫。飛び散る悲鳴。罵声と怒声は調味料。僅かに鉄を含んだ臭い、生暖かい空気は場を盛り上げてくれる。体から突き出た骨や臓器はオブジェのよう。踊れ臓物。歌え脳漿。

「く、くく……」

場を掃除した男は二人分の肉塊を見下げ、薄く笑う。僅かに覗かせた口元から鋭く尖った歯が見えた。いや、それはもはや牙と呼べただろうか。

「ああ……」

待ち遠しい。恍惚とした彼の表情からはその手の感情が読み取れた。

――今宵、ここで。

月光カーニバル

お兄ちゃん。
お兄ちゃん。どうして、ここからいなくなるの？
どうして、ここじゃないところに行くの？
ねえ、どうしてアタシを置いていくの？

「あー！」
「……うるさいぞ」
オンリーワン北駒台店、バックルーム。
突然上がった大声の主に、店長が非難めいた視線を向けた。
「……何でもないけど？」
声の主は糸原。店長とは視線を合わそうとせず、そそくさとバックルームから立ち去ろうとする。
「待て。今隠したものを出せ」
「はあー？　何にも隠してないわよ。無い物出せって言われてもそりゃ無理な相談よね」
「……糸原、こっちを見ろ」
糸原は背を向けたまま固まっていたが、背後からの無言の圧力に屈した。
「ん。好きなだけ私の顔見て良いわよ。ほら、超美人でしょー」
「目が泳がないな」
「あったりまえでしょ。私、後ろめたい事なんかしてないもの」
「無駄に偉そうだな」
「偉そう？　あら、正々堂々胸張って背筋伸ばして生きてくのが悪い？」
「いや、悪くない。それより糸原、制服のポケットが膨らんでるぞ」
「は？　んな訳な……あ」

何気ない店長の口振りに糸原は引っ掛かった。つい、ズボンのポケットに手をやってしまったのだ。
「……で、何を盗んだ？」
「盗んでないわよっ」
糸原は眉を釣り上げ、ポケットにしまっていた物を店長に向かって放り投げた。
「お前は嘘が上手過ぎる」
片手でそれをキャッチすると、店長は楽しげに笑う。
「嘘が上手いってのに、どーしてバレんのよ……」
「どうにも不自然に見えたんでな。まあ、私以外には通じると思うぞ。特に一や立花には」
「褒め言葉になってないんだけど？」
「さて。ん、これは？」
店長は首を傾げ、手の中の物をためつすがめつ見返した。
「……キー、ホルダー？」
チェーンの付いた、可愛らしくデフォルメされたピンク色の猫。
「子供の喜びそうなおもちゃよ。珍しい商品だから、ちょっと弄ってたの、そしたら……」
糸原の言葉を受け、なるほどと店長が呟いた。……猫の、尻尾が取れている。
「……なんで隠そうとするんだ……」
「だって、弁償とかイヤだし」
「けち臭い奴だな。まあ、今回は特別だ。お前は初犯だから見逃してやろう」
「……ホント？」
「ああ。壊れてしまった物はしょうがない。それに、所詮はガキのおもちゃだ」
つまらなさそうに言いながら、店長は猫のキーホルダーをごみ箱に投げ捨てた。
「何？　捨てちゃうの？」

「商品にならんからな」
「接着剤で直して、立花にでも上げれば喜ぶんじゃない？」
「……私が立花を喜ばせる理由が無い。と言うかだな、一度壊れてしまった物をやるのも可哀相だろう」
うーん、と糸原は腕を胸の前で組んで唸っていたが、あっさりと
「それもそうね」と切り捨てた。

そう、壊れたモノは直らない。

最初は何が転がっているのか分からなかった。だからもっとそれに近づいて、顔を近づける。するとようやく鈍い頭の鈍い脳味噌が緩々と思考を開始し、理解した。
「……うあ」
目的地である公園に辿り着いた一とコヨーテは、一番にそれを発見した。
「酷いな……」
バラバラに飛び散っている、恐らくは人間だったモノを見下ろし、コヨーテは哀れむような口調で呟く。
『素敵な散歩道。森林浴を楽しもう』、そんな謳い文句が書かれた看板に背を預けて一は頭を振った。
「……最悪だ」
「ふうん、やられたのは二人みたいだな。さて、どうするよリトルボーイ？」
「どうするったって……」
一はもう一度、現場に目を向ける。あまりにも凄惨な光景だった。二人分の血液と臓物がそこら中にこびり付き、そこに居る者には鼻が曲がるような血の臭いが吐き気を訴えかける。逃げ出したくなるのを堪え、

「……このままにはしておけないだろ」
一は声を絞り出した。
「じゃあ嬢ちゃんはどうなっても良いんだな？」
「な……？」
そういう事だろ。コヨーテはどことなく冷淡な声音で言い放つ。
「そんな事言ってねえよっ。だったらお前は放っておけって言うのか？」
「……そうだ。選べ。選ぶ事を覚えろよ。いったい、ユーは何をしにここまでやってきたんだい」
「……っ！　分かってるよ！」
分かってる。分かってる。だけど心は揺れ動く。捨てていけ。置いていけ。どうせコレは死んでるモノだ。何を優先すべきなのか分かってる。そう、一は自分に言い聞かせる。何度も、何度も。
「……行くぞ」
一は背の高い木々が連立する散歩道へと歩きだす。
今は、それで良い。そうやって自分を正当化しないと、壊れてしまいそうだった。
「リトルボーイ、歩きながらで良いから聞いてくれ。もし、もしだ。ユーは……嬢ちゃんが壊れていたらどうするんだ？」
「元に戻す」
「具体的な答えが聞きたいね。壊れてるモノをどうやって直すって言うんだ？」
「ジェーンはモノじゃない。壊れたりしないさ」
「気に入らない答えだな。良いかい？　直らないから壊れたって言うんだぜ」
「直らない物なんか無いさ」
「……バラバラになったモノは？」
「欠片を全部集めてくっつければ良い」
「欠片がなければどうしようもないぜ」
「新しいのを持ってくりゃ良い」

「おいおい……」
「心配すんなよ」
呟いて、一が徐に足を止める。
「俺たちは、壊れるほど立派な形を持っちゃいない」
「？　なんだそりゃ？」
「歪、だってさ。だから壊れるほどのモノは作っちゃいない。いや、端っから壊れてたかも知れないな」
「……だから、日本人は嫌いなんだ」
コヨーテは一に背を向けると、一匹でスタスタと歩いていってしまう。
彼の憮然とした様子に苦笑しながら、一も後を追い掛けた。

どうして？　どうして？　どうして！？
頭の中を占めるのは疑問と驚愕のみ。予想外、予想以上の状況に対してこれからどうするのかすら、今の彼には分からない。
「はっ、はっ、はっ……！」
みっともなく舌を垂らして喘ぐように呼吸を繰り返す。休みたい、止まりたい、早く楽になりたい。だが、足を止める事はできない。何故なら彼の背後には明確な『死』が居るからだ。
「……くそっ、くそっ！」
朦朧とする意識の中、口を吐いて出るのは呪いの言葉。効き目なんてまるで無い、確かにそれは一種マジナイでもある。
今にも倒れこみそうなほど疲弊している彼は何度も振り返り、追跡者を確認する。その度に死との距離は縮まっていて、絶望に身を捩りたい気分だった。
視線を前に戻すと出口が見えた。背の高い木々が連立する散歩道。頭上から僅かに注ぐ月明かり。彼は思わず安堵する。
「はっ、はっ、はぁっ……！」
ここになってようやく、彼の思考がまともになり始めた。考える

のは唯一つ。なぜ、俺が負けたのか。みっともなく逃げ回っているのか。こんな筈じゃなかった。彼は心中で悪態を吐きながら、さっきからうるさいぐらいに訴えかけている右腕の痛みに顔を歪ませる。

「ぐっ……」

スッパリと、根元から、彼の右腕は消えていた。傷口からは鮮血が滴っていて、散歩道に道しるべを作っているようにも見える。

バランスを崩したまま、彼は走った。走って走って走って走って――

「捕まえた」

肩に、手が置かれた。やんわりと、体を労っているような。そんな手つきで。

「あ……」

情けない声が漏れる。

「ぎっ！」

声は苦痛を秘めた物に変わった。置かれていた手に力が込められ、爪が食い込んでいく。深く、静かに。彼は逆らう事も出来ずにただ正面を見つめていた。

「ネ、どうして逃げるノ？」

問い掛ける声は恐ろしく穏やかで優しい。寒気がする。

「たっ、助けてくれ……」

死を間近に感じた瞬間、思わず救済を求めた。求めてしまった。もはや、彼の中に戦う意志は存在していない。生きたい、死にたくない。本能が彼にそうさせたのだ。

「お、お願いだ。命だけは……」

生きてさえいれば、復讐の機会もいずれ訪れよう。戦闘衝動に身を焦がし、血肉に心を踊らせる彼にとって今の行為、状況は屈辱でしかない。

「たのむ……」

だが、今だけだ。これが最後だ。自ら望んで人としての半分を捧げた。戦う為、血を味わい肉を引き千切り魂を震わせる為に。だから、ここで終われない。まだ死ねない。生きてさえいれば、生き延びさえすれば。

「……」

長い、長い長い沈黙の後、

「ダメ」

舌足らずな、やけに可愛らしい声で死刑は宣告された。

道を進んでいた一たちは、道しるべに気が付いた。

「……血だ」

臭いに敏感なコヨーテが、一を制し辺りに鼻を向ける。

「まさか、また……」

一の脳裏に先程の死体が過った。ズタズタに引き裂かれ、死に際し人間として最低限の誇りさえ失ったあの、死体。

「いや、死んじまうような量じゃない。ほら、見なよ。跡が向こうに続いてる」

コヨーテは顎をしゃくり、道を示した。一は指し示された方角に目を凝らす。……確かに、言われてみれば点々とした血痕が続いていた。

「ま、ここで血生臭い出来事はあったみたいだけどね」

「……この先に、あいつがいるのか？」

「可能性は高いだろうね。けど嬢ちゃんがいるって事は奴もいるって事になる」

「……先を越された、んだよな」

「間違いなくね」

深く、大きな溜め息を吐いた後、一は確かな足取りで歩きだす。

「正直、鈍ってるよ。あいつと会ってもどうしたら良いか分からなくなってる」

「……ミーは、なるべくなら嬢ちゃんを助けたいと思ってる。ユーも、好きなようにやれば良いじゃないか」
「そのつもりなんだけどな」
「土壇場に弱い男は嫌われちまうぜ？」
「……そうかい」

「――――――！」

「！」
静寂を破り捨てる、悲痛な声。木々の合間を抜けて聞こえたその声に一とコヨーテは弾かれたように顔をあげる。
「今のは……」
「近いぞっ、リトルボーイ！」
先んじて走りだすコヨーテ。
「待てよっ！　結局っ、どうすりゃ良いんだ！」
一はコヨーテの背中を追い掛ける。到底追い付けそうになかった。
「やりたいようにしなよっ！」
「でもっ！」
「兄ちゃんだろっ！」
コヨーテの声は徐々に遠くなる。ある程度舗装された道とはいえ、月明かりの届きにくい森の中では心許ない。躓きそうになりながら、必死でコヨーテに追い縋りながらも、一は声を振り絞る。
「そうだよっ！　兄ちゃんだよっ！」
「だったら気にすんな！　やりなよっ、それにっ」
「はあっ！？」
いよいよコヨーテの後ろ姿が見えなくなってきた。もはや声さえも届いているのかすら怪しい。
「それにっ、今夜は月が綺麗じゃないか！」
嬉しそうな声。
「……見えねえよ！」

ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃん、アタシ会いに来たんだよ。あなたが手紙の一つもくれないし、電話の一本もくれないから。来てくれないから、来たんだよ。

なのに。なのに。

どうしてこっちを見てくれないの。どうしてアタシを無視するの。

どうして、あいつらばかり気にするの。

おかしい。おかしいよ。おかしいっ。おかしい！　おかしいっ！

狂ってる。

許せないよ、お兄ちゃん。アタシのお兄ちゃんはそんなんじゃない。そんなんじゃダメなの。ダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメ。アタシのお兄ちゃんはもっと優しくなきゃダメなの。もっとアタシの事を大切にしなきゃイヤなの。もっと、もっとアタシだけを見てよっ！じゃないと。

じゃないと――

辿り着いたその先で、ジェーンは笑っていた。人狼だったモノを見下し、その亡骸を踏み付けている。彼女の右手はやけに水気を帯びていて、左手は何かを掴んだままだ。

「あ……」

一は、声を掛ける事が出来なかった。

月明かりに照らされた彼女の横顔は、一が見慣れていた筈の。

「……ジェーン」

「待て。待て、動くなよ」

血に濡れた素肌に淡い月光が反射して、この世の物とは思えない雰囲気を醸し出す彼女。

……一は、見惚れていた。

知らずの内に一歩踏み出し、ついさっき全力疾走したばかりで膝

が笑っているのにも構わずにもう一歩。一歩、近付いていく。誰かに操られているような不確かな足取り。

「待てよっ」

背後からコヨーテの声が聞こえてくるのにも意に介さず、夢遊病患者みたくおぼろげな足取りで一は進んでいく。

「――――」

そんな一を見て彼女は笑う。ジェーン・ゴーウェストは哂う。

「ジェーン……」

「お、兄……」

向かい合った二人は手を伸ばしあった。真っ白な一の手。真赤な、ジェーンの手。

「――――――ッ！」

後ろから音の風。一は耳を押さえ、その場に蹲った。

「あああああっ！」

突然の衝撃に、ジェーンは耳を押さえ地面を転がった。

「ボーイ！　中（あ）てられるな！」

音波の正体はコヨーテの咆哮。

「……う」

一は今初めてここにいるのだと気が付いたように辺りを見回す。

「そこから離れろっ！」

だけど、一の足腰は言う事を聞いてくれなかった。見かねたコヨーテが一のコートの襟元を噛んで引っ張っていく。

――待てよ！

そう言いたかったが、頭の中がガンガン響いていて声が出せない。代わりにコヨーテの首輪を掴み、一は彼の進行を妨げる。

「仕切りなおしだっ、ユーは無防備過ぎる」

まだ、ここにはジェーンがいるのに。何を、仕切りなおすというのだろう。一には何一つ理解できなかった。

「はなせ」
「……何だって？」
「はなせっ」
力の入らない腕を無理矢理動かし、コヨーテを退かす。
「待つんだっ、今はやばい！　嬢ちゃんはやばい、予想外なんだよ！」
何が予想外だ。内心で悪態を吐き、一はよろよろと立ち上がった。
「ジェーン」
未だ苦しそうにして転がっているジェーンを見つめ、一は歩き出す。
「……っ」
頭が痛い。ぐらぐらと視界が揺れている。息もし辛い。
「う、あ、ああ……」
「……待ってろよ」
――俺が、助けてやる。
一とジェーンの視線が交差。
「ジェーン……大丈夫か？」
怯えた表情のジェーンを安心させるように微笑むと、一は彼女へ手を差し伸べた。
「やめろっ！」
雑音。雑音。
「……あ、あ」
「大丈夫だって……」
ちゃんと、自分の思ったとおりに喋れているだろうかと一は不安になる。なんだか舌が痺れているような感覚がしている。
「……お、にい……」
ああ。
なんて可哀想なんだ。血に塗れて、泥に塗れてぐちゃぐちゃの顔と服。
なんて可哀想なんだ。彼女の体は酷く震えていて、彼女の瞳は酷

く潤んでいて、彼女の手は酷く――
「え？」
――冷たかった。
手が触れ合った瞬間、一自身を引き千切らんばかりの力で腕を掴まれる。宙に浮く体。地面と中空、視界は反転。持っていたアイギスは振り落としてしまう。視界の隅でそれを捉えながらもどうする事も出来ない。
「う……」
吐き気。吐き気。吐き気。
「がっ……！」
体は直ぐに腹から地面へと叩きつけられる。胃の中の物全て口からぶちまけて、一は視界さえも吐瀉物で覆われた。
「ねえ、お兄ちゃん」
一の頭上から声がする。舌足らずな、とても可愛らしい声。
「……は、はっ、はっ……」
息が出来ない。苦しい。苦しい。一は必死で自分の戻した物から顔を上げ、無理矢理体を捻らせる。仰向けになって酸素を取り込もうと口を何度も動かした。
「……お兄ちゃん」
呼んでる。呼んでる。妹が呼んでいる。だけど返事なんて出来そうにもない状態だった。
「お兄ちゃんっ」
ぐい。引っ張られる。
「……う……」
「聞いてるのっ！？　返事してよ！」
右腕を無理矢理引っ張られて立ち上がらされる。次に首をロックされた。一の喉元にまで人狼のモノであろう血がこびり付く。
「ねえっ、ちゃんとアタシの話を聞いてるのっ！？」

声を出せなかったので一は首をゆっくりと縦に振った。首肯を認め、ジェーンはぞんざいに一を地面に落とす。
「ねえ、アタシのコト好き？」
思わず顔を上げた。本当に予想していなかった質問。なんだ、それは。今ここで言う事なのか。違うだろう。
「……ジェーン？」
咳き込みながらも一は問いかける。聞きたいのはそんな事じゃない。言いたいのはそんな事じゃない。
「好き？　ね、どうなの？」
だけど、異常に昂ぶっているジェーンには何を言っても届きそうに無い。とりあえずは素直に従っておくべきだと一は判断する。
「あ、ああ……」
蹴りが飛んだ。油断しきっていた一の腹に鋭い痛みが走る。また吐いてしまいそうだったが何とか堪えた。
「なっ……！？」
「ハッキリしてヨ」
「……なっ、何を……」
もう一発。今度は蹲っていた一の後頭部にジェーンの踵が突き刺さる。もう悲鳴すら上がらなかった。一はどうしようもないほどぐちゃぐちゃに混乱している思考回路を必死に繋ぎ止める。
「イエスかっ、ノーで答えてっ！」
「……イ、イエスっ」

「――じゃあ、タチバナは？」

「……え？」
ぞくりと、底冷えするようなジェーンの声に一の背筋が震えた。彼女のこんな声、今までに一度だって聞いた事が無い。
「答えてよっ！」
もう、一は顔を上げられない。とてもじゃないが、ジェーンの、

妹の顔を見ようとなんて思わなかった。ここまで来てやっと気付いた。

「……た、立花さんは……」

「早くっ！」

――怖い。

まるでソレを目の前にしているような感覚が一の体中を支配する。犯していく。

「き、嫌いじゃない」

一の腹部にさっきよりも強い衝撃。

「イエスかノーって言ったじゃナイっ！」

この答えは紛れも無く一の本心だった。心の底から人を好きになる事も無ければ心の底から人を嫌いになる事も無い。だからこその「嫌いじゃない」。中途半端な、彼の答え。

「……イエスだ」

「……ふぅん」

値踏みするような、心の底まで覗かれるような粘っこい視線が一に注がれる。

いつの間にか一は手に汗をかいていた。

「じゃあイトハラは？」

「イエスだ」

「ボスは？」

「……ノー」

「ミツモリは？」

「……イエス」

「オッケー」

背中に衝撃。息を全部吐き出して地面に崩れ落ちた。何が起きたのか分からない。

「ねえ、お兄ちゃん？　どうして？　どうしてなの？」

それはこっちの台詞だと言ってやりたかったが、やはり満足に息すら吸えない状態なので、どうしようもなかった。

「アタシが好きなんじゃないの？」
――ああ、そうだよ。
何とか体を起こし、一はうつ伏せから仰向けに体勢を移す。
「……好きだ」
「じゃあどうしてっ！？」
びりびりと、一の鼓膜にジェーンの怒声が襲い掛かった。
「どうしてあいつらの事も好きなの！？　見ないで、話さないで、思わないで好きにならないでよ！　アタシだけ好きでいてよ！　おかしいじゃないっ！　アタシのお兄ちゃんがアタシ以外を好きだなんて、おかしい！　全部、全部嫌いって言ってよ！　あいつらなんて好きじゃないって、そう言って！　じゃないと許さないっ」

――これ、何だ。

一は目の前にいるのが誰なのか、分からなくなっていた。声も、顔も、全てジェーンの物なのに。もう分からない。それとも、自分が間違っていたのだろうか。今までこれがジェーンだと、そう信じていただけだったのだろうか。
「……はっ」
ここから逃げたい。助けてほしくて一は視線をさ迷わせた。さっきまでいたはずのコヨーテの姿が消えている。立派にお兄ちゃんをこなせない自分に愛想を尽かせたのかもしれない。
「ははっ……」
口元が歪む。自嘲がどこか空々しかった。
「笑わないでよ！　……ねえ、どうなの？　みんな、アタシ以外の奴はみんな嫌いよね？　そう、よね？」
「……ああ」
馬鹿馬鹿しい。
白々しい。
何が兄だ。何が妹だ。何が家族だ。結局はごっこだ。子供の、薄

ら寒い吐き気を催すようなママゴトだったんだ。店長に言われた事を脳内で反芻し、一は全てを投げ捨てたくなる。

――そうだよ。全部嫌いだ。みんな死んじまえ。

「嫌いだよ」

「タチバナも？」

「嫌いだよ」

「イトハラも？」

「嫌いだよ」

「……ボスも？」

「死んじまえ」

「……ミツモリも？」

「……ああ、大嫌いだ」

「そっ……か。そっか、ふふ、良かった」

凄絶な笑みだった。一に対して半ば強制的に言わせた言葉に、ジェーンは心底から喜んでいる。

「じゃあ、死んでくれるかな、お兄ちゃん？」

最初はジェーンが何を言っているのか理解しようとしなかった。だけど一は霞掛かった意識の中でそれも良いかと軽く頷く。

「良いよ」

「ふふっ、ありがと。断られたらどうしようかと思ってた」

「一思いにな」

「……？　いつだってアタシはお兄ちゃんだけを思ってるよ？　だから、死んで欲しいの。もう、お兄ちゃんは誰にもあげない。お兄ちゃんの全部をアタシの物にするんだ。ね、今お兄ちゃんが死んじゃえば、アタシのモノになってから死ねるんだよ？」

スタンディングオベーションでもしてやろうかと一は笑った。

「ふふっ、それじゃあね」

「ああ……」

一は寝転がったまま月を見上げる。綺麗だった。今までに見てきた中でも極上に。最期に見る景色にしては上等だろうと、月と、血

に塗れたジェーンを網膜に焼き付けてから目を瞑った。
「アタシもすぐにそっちへ行くから」
「ああ、待ってる」
「――待つんじゃないっ！」
何かと何かがぶつかるような音の後、ジェーンの口から悲鳴が漏れる。
「……」
一は気だるげに首を動かして、森の方へと吹っ飛ばされたジェーンを見遣った。
「何やってんだリトルボーイっ、ここまで死にに来たってのかよ！」
「……コヨーテ」
ジェーンの横合いからぶつかって来たのは今まで姿を眩ましていたコヨーテだった。彼は一が落としてしまっていたアイギスを地面に転がす。
「こいつを拾いに行ってたんだよ」
「もう、必要ねえよ」
「何度も言うが、ユーは無防備すぎる。今の嬢ちゃんは異常なのさ。ボーイは中てられてたんだよ」
「……中て、られた？」
「正直言って、ミーは嬢ちゃんを見くびってた。たかが人狼、しかもハーフの出来損ないってね。だけど違う。こいつはやばい。今日が満月ってのも差し引いたとして、ありゃ本物だぜ」
一はふらふらと立ち上がり、近くの木の幹に背を預けた。
「どういう事だよ」
「時間が無いから手短に説明するけど、月は人を狂わせるんだよ。特に、今日みたいな満月の日はね。それでもってあの嬢ちゃんだ。頭がおかしくならない方がおかしい」
「ジェーンは、人間だ」

「半分はね。もう半分は狼さ」
「……俺がおかしくなってたのは認める。でも、どうしろってんだよ」
コヨーテは油断無く、ジェーンが飛んでいった方向を睨みつける。
「ミーの見たところ、嬢ちゃんとはまともに話も出来そうにもない」
「誰が見てもそうだよ」
「話が出来る状態に戻すんだ。最悪、今晩どうにかすれば嬢ちゃんの狼としての力は弱まる。そうすりゃ嬢ちゃんの理性も帰ってくるだろ。時間を稼ぐのがベターだね」
「……駄目だ。ベストじゃない。今のあいつじゃ何をしでかすか分かんないぞ。ここで俺たちが止めるんだ」
「それこそ、どうするんだい？」
一は溜め息を吐いて、転がっていたアイギスを拾い上げた。
「大人しくさせるしかないな」
「だから、どうやって？」
「……気が引けるけど、ボコボコにして縛り上げるしかないだろ」
「……それが、ベストなのかい？」
「……知るか」

遠吠え。遠吠え。遠吠え。
血の臭いと仲間の匂いに誘われて彼らはやってくる。列を作り、群れを成し、彼らは駒台公園とへ進軍を開始する。恐れていたモノがここにいる。
だから、彼らは助けを求めていた。団結し、それを何とかする為に。片方は何とかなった。後は、もう片方。
そうだ。
今宵、ここは月光の――

狼男は死んだ。
あっけなく、情けなく、簡単に死んだ。一は彼の死体を見つめ、冷静に事実を受け止める。
……決して、彼が弱い訳ではなかった。恐ろしく強くもなかったが、一からすれば充分な脅威とも言えた存在。そんな彼をあっさりと仕留めた人物。ジェーン＝ゴーウェスト。
「……ふぅ」
一は今から相手をする彼女の事を考え、深く溜め息を吐く。
「ボーイ、油断するなよ」
「出来るかよ」
彼女を助けに来たはずの自分が、どうして彼女と戦う羽目に陥ってしまったのか。
「……嬢ちゃんとやり合うについて、一つ忠告だ」
周囲の様子を注意深く探りながら、コヨーテは一に声を掛ける。
「絶対に、噛まれるな」
「難しい注文だなあ、おい」
その忠告は絶対に殺されるな、と、ほぼ同義だと一は認識した。
「どうひいき目に見ても、ジェーンは俺より強いよ」
「知ってるさ。だが、噛み付きにぐらい注意は払えるだろ？　そうすりゃ、幾ら爪で裂かれても構わないんだからな」
それでも、ジェーンの戦闘においての速さを見た事がある自分にとっては難しい話だと、一はそう思う。
「しんどい話だってのは分かってる。だけど、やらなきゃいけないんだ」
「……ホント、しんどいわ」
背中合わせのまま、一とコヨーテはジェーンの襲来を待った。

一たちの狙いは一つ。

ジェーンの動きを止める事である。なるべく彼女に手傷を負わせないよう、チャンスは一度きり。彼女が自分達に攻撃を加えるその隙にアイギスで動きを止める。それだけだった。

だが、アイギスを発動させるには幾つかの条件がある。

一つは視界がクリアである事。最近一は気付いたのだが、要するにこれは対象の相手を視認出来れば良い、ぐらいの条件らしかった。木立に囲まれた散歩道。木々の合間から差し込む月明かりよりも暗闇の比重が大きかったが、全く見えない、レベルの暗さではないので問題はない。

二つ目、声を出せるか。喉を締め上げられた一だったが、声帯まで潰されてはいなかった。精々、声が少し擦れる程度のダメージ。問題ない。

三つ目、相手の名前を知っているか。問題ない。こと、今回の標的に限って知らないはずが無い。補足しておけば。三つ目の条件についても一には気付いたことがある。それは、相手の名前についてどれだけ知っているかで効果の程が変わるという物だ。音、字、由来、対象の名への執着度などなど。

つまり、相手の事をより深く、より多く知っていればいるだけ、アイギスは効果を発揮しやすく、更に威力が上がるらしかった。一先ず、道具（アイギス）については問題ない。

問題なのは人だ。

アイギスが力を発揮するには、前提として一がジェーンを確認しなければならない。しかし、彼女は速いのだ。それこそ、一の目では追いきれないほどに。おまけに今のジェーンは狼、獣としての血が色濃く顕れている。理性よりも本能が勝った彼女の身体能力は以前とは比べ物にならないくらいに向上していた。獣だから、限界を知らないのだ。体が幾ら悲鳴を上げても、彼女は走り続ける。

……一たちが見晴らしの悪いこの場所から動かないのも、ジェーンの速度が原因だった。彼女のスピードに対抗する為、あえて見晴らしの悪い散歩道に二人は陣取る。広い場所では、上下左右三百六十度から彼女の攻撃がやってくる。見えない攻撃。ガーゴイル事件でのジェーンと、ディルと呼ばれた男の戦闘は一にとって大きな収穫と言えた。あの時、ディルは徐々にスピードの落ちるジェーンに対してカウンターを取る事が出来たが、自分にはとても出来そうにない。

ならば、そのスピードを発揮させなければ良いだけの事。足場も悪く、視界も良好とは言えないこの場所は自分たちだけでなく、ジェーンにも足枷をさせる事が出来ると一は踏んでいた。

おまけにこっちにはコヨーテがいる。彼の索敵能力は高い。血の臭いが染み付いたジェーンの位置を捕捉する事も可能、いざ彼女が現れるに際し、木の葉や木々といった障害物がある限り全くの無音で登場するのも不可能だ。奇襲を受ける確率もグンと低くなる。

コヨーテが見つけ、一が捕らえる。充分な情報も戦力も無い今の状況では、ベストな選択肢だと、一は思っていた。

「……近いっ、来るぞっ」

鋭くコヨーテが叫んだ。

一はアイギスを広げて周囲に目を配る。

「どっちだ？」

「右だ、ミーの方から来るっ」

咄嗟に、一はアイギスを右へと広げた。

「……いや、左だっ」

「はあっ？」

「なっ？　ち、違う、後ろっ？」

「おいっ！」

どっちが強い。
誰が強い。
どっちが弱い。
誰が弱い。
――下らない考え。
そう、分かってはいても気にはなる。
「ねえ」
「……ンだよ」
疑問を自分の中で溜め込むのは好きじゃない。
「あんたと私って、どっちが上なのかしらね」
だから、糸原は率直に聞いてみた。
「……はあ？」
少し遅れた納品のトラック。
苛々しながら商品のおにぎりを並べていた三森は、しばしの間作業の手を止める。
「上って、何がだよ？」
「勤務外として、に決まってんじゃない。それ以外にあんたが私と勝負できる所なんて無いでしょ」
「喧嘩売ってンなら買うぜ。こっちは休憩時間が短くなってイライラしてンだ」
「あー、そう。文句なら私じゃなくて業者に言ってくれる？」
糸原は適当に弁当を並べながら、気楽そうに笑った。
「……ちっ。勤務外として、どっちが上か？　アホかてめェ、ンなモン私に決まってるだろ」
「まっ、自信家ー」
「そうじゃねェよ。単純に私の方が長いんだから、経験値積んでる方が上だろうがよ」
「ふーん。まあ、それもそうかしら」
反論しようかとも思ったが、糸原はあえて黙る。

「……ま、タイマンでやり合ってもお前には負ける気がしねェけどな」
「だったら、誰には負けんのよ？」
「あー？　私に一対一で勝てる奴なンて、いる訳ねェだろ」
「やっぱ自信家じゃん」
じゃなくて。三森はそう前置きした後、
「そもそもな、勤務外同士を比べるのがアホだって言ってンだよ」
頭を掻きながら、詰まらなさそうに口を開いた。
「……ふーん？」
「私たちの相手は人間じゃねェんだよ。ソレだよ、ソレ。だから比べたってしょうもねェ話だ。相性ってのもあるし、勤務外だからって前線向きの能力持ってる奴だけじゃねェしな」
「あんたは、前線向きよね」
「そンでもって、一対多なら面倒な事になる。火ィ使えるからって、私はその……器用じゃねェからな。結局は肉弾戦に頼るっきゃない」
あはは、と。糸原はお気楽そうに笑う。
「囲まれたら終わりって事ね」
「つうか、それが普通だろが。でも、お前は違う。便利な物持ってるから、囲まれてもまだマシな方だろ」
「……しんどいのに変わりは無いけどね」
「そう言う訳だ。私ら勤務外同士で比べるのがアホって話が良く分かったか？」
「うん。あんたをぶちのめす時には数呼んでフクロにするわ」
三森の手の中のおにぎりがチリチリと音を立てた。
「やっっっぱお前ムカつく」
「そんじゃあさ、私らの中で戦いたく無いってのは誰？」
糸原は三森の怒りに気付いているのかいないのか。
「……戦いって言うか、殺したい奴は目の前にいンだけどな」
「良いからとっとと答えなさいよ。あ、おにぎり燃えてるわよ？」
「うるせェな、後で食うから暖めてンだよっ」

ツナマヨのおにぎりを握り締めながら三森は憤る。
「で、誰？」
三森はラベルの読めなくなるまで燃えたおにぎりをゴミ箱に捨てて、考え込むように目を瞑り腕を組んだ。
「……一対一でやり合うなら、あのチビは嫌だ」

コヨーテは必死で周囲に意識を飛ばした。
――おかしい。
臭いは確かにしている。紛れもない、ジェーンに染み付いたであろう人狼の血。
最初は自分の右側から、続いて左、背後、そして前方。四方八方から彼女の気配がざわめき立つ。
「どっちなんだよっ」
背中を預けたパートナーが酷く頼りなかった。彼の声からは容易に焦りと不安が窺い知れる。全くもって素人と組むのは嫌な物だった。
「ミーにばっかり言うなよっ」
「鼻が利くのはお前だろうがっ」
利き過ぎるのも考え物だと、コヨーテは自信の鋭敏すぎる嗅覚を呪う。
「まるで囲まれてるみたいだ……」
ジェーンがこちらの考えを読んで惑わしているのだろうか。しかし、こちらの索敵能力を惑わせるほど超高速で森の中を移動できるはずが無かった。彼女はあくまで一人。だが、集団で包囲網でも作っているかのようなこの気配。じりじりと狭まってくる血の臭い。
狩る者と狩られる者。
この二つに世界が分類されるというなら、コヨーテたちはしっかりと狩られる者のカテゴリに区分けされていた。

「……なんで、あの子なの？」
「あー、まずお前には負ける気がしねェ」
三森は忌憚の無い意見を述べた。
「……へえ」
他人の機微に疎い自分でも糸原の機嫌が悪くなっている事に気づき、三森は内心でほくそ笑む。
「糸は面倒だけど燃やせば良いしな」
「はっ、あんたなんかに出来るかしらね」
「出来なきゃ懐に飛び込んでボッコボコにする」
「それが出来ないって言ってんのよ」
「絶対ボコる。マウント取って顔の形変わり果てるまで殴りまくってやる」
気にせずに三森は告げた。
「同じ理由でコーコーセー二人に負ける気もしねェな」
「武器燃やして終わり？　単純な奴ね」
「単純なンが一番強いんだよ」
糸原は悔しそうに爪先で床を踏み鳴らす。不規則なリズムが彼女の精神状態を表しているのかのようだった。
「そいじゃあ一は？」
「……ある意味一番面倒な相手だけどよ、何か一発殴ったら終わりそうな気がする」
「まあ、比べるのも可哀想よね」
「あー、ちなみに店長と堀さんはナシな」
今、思い出したように三森が言う。
「どうしてよ？」
「ありゃ、規格外だ。論外論外。比べるまでもねェよ」
「……えーと、どっちの理由で？」
「……決まってンだろ」
何も言わずとも、二人は納得したように揃って目を瞑った。

「あー、そいじゃあ本題なんだけど。どうしてあの子が一番ヤなの？」

微妙な空気を取り繕うかのように糸原が話題を逸らす。

「あ、ああ。そりゃアレだ。一番面倒な相手だからだよ」

「その言い方だと、一応は勝てるって嫌味に聞こえるんだけど？」

「悪かったな。けど、まあ事実だぜ。負ける気はしねェよ」

「へーん、良いもんねー、何が勤務外よー、負ける気はしねーよなのー、馬鹿じゃないのー」

糸原は口を尖らせながら弁当を雑な手つきで棚に置いていく。

「でもな、あいつにゃ無傷で勝てるとは思っちゃいねェよ」

「はーん？　その言い方だと私たちには無傷で勝てるって聞こえるんですけど？」

「……私の言い方が悪かったよ」

諦めたように、三森が大きく息を吐いた。

背中を預ける相手がこんなに頼りないとは思っていなかった。口先だけは達者。未だ付けたままのピンクの首輪が酷く滑稽に見える。

「囲まれてるだって？」

「……そうとしか思えない」

「相手はジェーン一人だろっ」

そう思い、そう考え、そう結論して、自分たちは逃げ場の少ない一本道に踏み止まったと言うのに。

「裏目に出ちまったとしか言えないな」

「お前だって俺の意見に納得したろ！」

動くに、動けない。まだ、本当に多人数に囲まれているのかどうか把握できていない。コヨーテの勘違いだという事も有り得る。計画はそう簡単に捨て切れなかった。

ざざっ

びくりと、聞こえてくる音に過剰反応してしまう。
「……風が吹いただけだぜ」
「知ってるよ」
もう、嫌な予感しかしなかった。しかし、動けない。そも、人間とは危険な状況にあっても動く事が出来ない生き物だ。大多数の人間が、どんな状況であっても現状維持を望む。それがどんなに自身を追い詰める事になるのか、気付きもしないで。

三森は並べ終えたおにぎりを一瞥してから、隣でケースを積み上げている糸原に視線を向けた。
「一本だ」
「……何が？　あんたの脳味噌の皺の数？」
「いい加減にしねェとマジで怒るぞ……」
「冗談よ、冗談。ホントは十本ぐらいあるわよね」
諦めた。
「じゃなくて、あのチビと私がタイマンでやったら、腕一本ぐらいは持ってかれるって言ってンだよ」
「ふーん。あんた、意外と謙虚ね。でも、どして？　あの子ってそんなに強いの？」
「強いってか、早いンだよ」
「あー、女で良かったわね」
「何言ってんだお前」
煙草に火を点けながら、三森は呆れ顔を隠せなかった。
「早いって、追い付けないの？」
「見えねェ。全く。一回しか見た事無かったけどよ、ありゃやべー。伊達に社員は張れねーって事だな」
「……でも、いつかは目が慣れるでしょ。向こうだってずっと同じ速さで動ける訳無いんだし」

「慣れるまでにやられちまう。だから、腕一本でもサッサとやっちまって捕まえるっきゃねェ。一度捕まえりゃ、体格差で押し切れる」
「ひゅー、乱暴」
「てめェが振った話だろうがっ」

――それでも。

それでも、と。三森は僅かに不安を覗かせる。勝てると言ったのは、あの日見たジェーンの力、アレが彼女の全てだとした場合だ。同様に、糸原も、立花も、神野だって手の内全てを明かしていない気がしていた。
「まあ、私らが戦うなんてねェ話だと思うけどな」
「……あははー、そうね」
「……？」

音を聞いた。
「……犬だ」
身動きが取れなくなって数分、ようやくコヨーテが口を開ける。
「なんだって？」
「犬だよ。間違いない。ミーたちは囲まれているんだ」
「犬に、か？」
「それも大量の犬だ。この、鼻に付く感じ……間違いないね」
血の臭いに混じって、微かに漂う獣臭。コヨーテは鋭敏に感じ取っていた。
「……なあ、どれくらいいるんだ？」
「……さあ。とりあえず、逃げ場が無くなる程度には」
敵の姿が見えないというのが、これほど恐ろしい物だとは思わなかった。一は無駄だと分かっていても、必死に目を凝らして周囲を観察する。

「今は、見えないところで待機してるんだろうね。でも、合図一つで奴らは飛び出してくるぜ。なんせ犬だもんな」
「合図って……誰の？」
「決まってんだろ」
ゴクリと。唾を飲む音ですらやけに大きく感じられた。
「さて、ボーイ。作戦はどうするよ？　このままだとまずいんじゃないか？」
「開けた場所に出るか？」
「……それこそ、向こうの思う壺だな。一斉に囲まれて終わり（ジエンド）さ」
「このままここに居てもジリ貧だぞ」
「逃げようとすりゃ、ミーたちの後ろから嬢ちゃんが襲ってきそうだけどな」
だったら、どうしろと言うのだ。頭を抱えて蹲りたくなるのを堪え、一は何とか意識を保つ。

作戦は軽々と破綻した。
まず、一たちがジェーンの力を見誤っていた事。傷一つ負わせようともしない。なんて事を何故考えていたのか。実に甘かった。お互いに無傷で済ませようなんて都合の良い話、所詮は甘い空想、机上の空論。
そして索敵能力の無効化。二対一。コヨーテの鼻はあくまで相手が単体の時にこそ効力を発揮する。そして一のアイギスも能力の都合上、集団には相性が悪い。アラクネ、土蜘蛛戦では、知能レベルの低さもあり、『土蜘蛛』にだけ条件がまだ働いたのだが、今回は『犬』。彼らは哺乳類。決して虫レベルの知能ではない。生物の中では賢い部類に入る、と言っても良いだろう。そして決して『犬』と一括り出来ない。犬とは言え、様々な種族が存在する。余程の犬好きでない限り、目の前に現れた犬の『名前』など浮かぶはずが無い。二対多の状況になっただけで、ジェーンを拘束する可能性も薄

まる。
何とも脆い作戦だった。
見上げた月は、やけに綺麗だった。
「……逃げ場は無いのか？」
「全方位囲まれてるね。いや、何と言うか、死ぬには良い日だって事か？」
「死んでたまるか。俺は子供ん時から、ジジイになって、畳の上で死ぬって決めてんだ」
「はっ、ダイオージョーかい？　良いねえ、それ」
皮肉っぽく、コヨーテは嘯く。
「夜が明けるまでジッとしといてくれねえかな……」
「そりゃ無理そうだな。奴ら殺気立ってやがる」
「先に言っとくけど俺、弱いからな」
「……知ってるよ。分かってる、なるべく犬どもの相手はミーがやる。傘に篭って何とか凌いでおいてくれ」
何も期待していない。諦観の表情をコヨーテは浮かべた。
「だが」
「……何だよ？」
「嬢ちゃんの相手は任せた。完璧に任せたぞ」
「……貧乏くじ引かせやがって」
「生憎、ミーはくじなんて引いた事無くてね」
二人が軽口を叩き合っている間にも、殺気めいた獣臭が近づいてくる。獲物を逃がすまいと、徐々に包囲の網を狭めてくる。
「そろそろ、来るぞ」
「とりあえず、ジェーンは任せろ」
「声が震えてるぜ」
「……うるせえ」

影が、一つ。
しなやかな、長い影。
「周り、見てきましたよ」
影がもう一つ。
「凄いですね。この公園、犬だらけですよ。街中の犬全部が集まってるんじゃないですか？」
「そうか」
「野良犬騒ぎも仕方ないってもんですね」
「ふん、犬如きで駆り出されるとはな」
後からやってきた、少し興奮した様子の男に対し、最初から居た女は男の報告を冷静に受け流した。
公園の街灯の上に立つ男女はしばしの間公園内に視線を遣る。
男女とは情報部の春風と、その部下である漣だった。
「漣、一番犬が集まっていた場所は何処だ？」
「え、と。確か、あっちの森みたいな場所ですね」
「……成る程な」
納得したように呟く春風を、怪訝な様子で細波は見る。
「あの、何がでしょうか？」
「気にするな」
「嫌な予感がするんですけど。もしかして、ジェーン＝ゴーウェスト絡みの話ですか？」
漣は先日仕入れたばかりの話を思い出し、少しだけ憂鬱になった。
「気にするな」
「……気にしますよ。もし彼女が居たらマークしないと駄目だって言われてるじゃないですか」
「そして、ジェーン＝ゴーウェストがソレならば勤務外の要請をしろ、とも言われているな」
「う。分かってるじゃないですか」
「当然だ」

無感情に、無表情に、春風は告げる。
「……今回は大人しくしてくださいよ。あの蛇の時、始末書を書いたのは誰だと思ってるんです？」
「あそこに一一とジェーン・ゴーウェストがいるわけだな」
「なっ、ちょっ、お願いしますよ……情報部の仕事しましょうよ……」
情けない声で漣は懇願する。無駄だと分かっていても。
「安心しろ。一一らと接触は取らん」
「あ、本当ですか？」
良かった、と、漣は安堵の息を吐いた。
「……まあ、犬ぐらいは退かしてやっても良いか」
「は？」
「後々役に立つかもしれん」
春風はぼそりと呟き、散歩道の方へと飛び去った。街灯から街灯へと飛び移る彼女の背中を眺め、漣はいつものように頭を抱える。
「……この仕事辞めようかな……」

「……犬が、減った？」
「犬が、え？　なんで？」
「さあね。だが、気配は確実に薄れてる」
不思議そうにコヨーテは呟いた。
「抜けられそうか？」
「いや、そりゃ無理だな。あくまで減ってるのは森の外側の犬たちだよ」
「……誰か、いるのか？」
さてね。周囲を見回し、コヨーテは姿勢を低くする。
「嬉しいハプニングだが、そろそろミーたちも気合入れようか」
「ああ……」
言われなくても分かっている。

既に一の耳にも獣の唸り声が聞こえていた。寒気がする。今から、本当にジェーンと一戦交えるのか、あのジェーンと。

――でも、やるっきゃない。

アイギスを握る手に力を込め、一は虚空を睨んだ。

永劫とも思える一瞬の静寂の後、

「――――ッ！」

森の中から飛び出してくる黒い影。

一は咄嗟にアイギスをそちらに向ける。

「こいつぁミーがやるっ」

「……頼むっ」

喉元を食らい合おうとする野犬とコヨーテから距離を置き、一はジェーンの襲撃に心を構えた。

「ジェーンっ！」

呼んでも無駄だと理解しているが一は呼びかける。

「――ッ！」

「うわっ」

背後から叫喚。相手の正体を確認しないままにアイギスを広げ、一は振り返った。二頭。黒く、細い野犬が二頭。尖った耳と短い尾。筋肉質で、それでいてしなやかな体。訓練されたそれは人間では勝てないと言われるほどに強い犬種、ドーベルマン。

「嘘だろっ」

振り下ろされる前足をアイギスで弾き、二頭目の牙は傘の中に篭りやり過ごす。しかし、牙を突きたてようとする片方に気を取られている内に、もう片方に背後を取られてしまった。挟撃を避けるため、一は柵を飛び越え森の中に入り込む。少しでも小高い場所さえ見つかれば、地の利を得られる。そう考えて行動した一だったが、完全に裏目に出てしまった。

「――ッ」

即ち、三頭目のドーベルマンの登場。
不意を衝かれ、アイギスを持っている方の手を前足で引っ掛かれ、アイギスを手放してしまう。犬は好機と見たのか、一気に一に襲い掛かった。前足を巧みに使い、獲物を押し倒す。後ろ足で抵抗する部位を押さえつけながら、一息に一の喉元に口元を寄せた。
「駄犬が――」
走り来る灰色の影。歌う犬が容赦なく爪を振り下ろす。きゃいん、と甲高い悲鳴を上げ、横っ腹を切り裂かれたドーベルマンが一から飛び退く。その隙に一が体勢を立て直し、落ちていたアイギスを拾った。
「……助かったよ」
「苦労してるようじゃないか」
野犬たちはコヨーテの威圧に気圧されたのか、一たちを取り囲むだけで動きはしない。体全体を震わせ、野犬たちの血をコヨーテは飛び散らせる。
「……やっぱ、殺したのか？」
一の問いに一呼吸おいた後、
「やらなきゃ、やられるぞ」
ゆっくりと、まるで自身に言い聞かせるかのようにコヨーテは言い放った。
「こいつらに、罪は無いんだよな……」
「ミーたちにだって罪なんて無いさ。それとも何か、愛犬家の類かい？」
一は「まさか」と首を振る。
「ジェーンはこの近くに居るのか？」
「多分ね。犬たちに命令してるのも嬢ちゃんだろう」
「馬鹿みたいな話だよ」
アイギスを持ち替え、ズボンで手汗を拭う。心臓は、小刻みに揺れていた。頭がぼうっとする。
「ボーイッ」

「っ！」

呼ばれて、一は我に返った。視線を戻すと、すぐ目の前でコヨーテが『敵』の喉元を食い千切っているところだった。数秒間牙を突き立てた後、痙攣する獲物を地面に叩き捨てる。コヨーテは口内の肉と血を吐き捨て、周囲で萎縮している野犬たちに威嚇の咆哮を放った。

獣でなくても……その咆哮がどんなに恐ろしいか、一でも分かる。一は身震いしてコヨーテの後姿に目を奪われた。血が、灰色の体全てに朱（あか）がやけに映えている。

「どうした犬ども、ミーたちには時間が無いんだ。かかって来なよ」

「――！」

言葉が通じたのかどうか、群れの中の一頭がコヨーテへと飛び掛る。図体の大きな犬だったが、中々に機敏な動きであった。それでも、その動きを上回る速度でコヨーテは駆ける。犬の背後を取ると、後ろ足を爪で引き裂いた。だが犬は低く唸るだけで動じない。首だけ動かして、コヨーテに食らい付こうと口を大きく開く。

「でかいだけあって鈍いな……」

コヨーテは呟くと、相手の脇腹に自身の牙を捻じ込んだ。傷口からは血が溢れ、コヨーテの口内に侵入していく。牙を突きたてながらも、コヨーテは窒息すまいと滴る血液を飲み込んでいく。大きな犬は必死でもがくが、小回りの利くコヨーテには追いつけない。やがて、血液を流しすぎたのか犬がふらりとよろめいた。その隙を見逃すはずも無く、コヨーテは自分よりも大きな犬の、喉元へと標的を変える。口を開き、牙を立て、皮を裂き、肉を噛み千切る。深く、深く傷口を作り、開いていく。

他の犬たちは恐れをなしたのか、取り巻くように二匹の戦闘を眺めていた。

一は周囲を警戒しながら、コヨーテの戦闘を眺めていた。

「ひでえ……」
勝手に口が動く。
目の前の情景。相手は、ソレではない。なのに。
――なのに。
余りに惨く、余りに酷く。苛烈で、峻烈で、それでいて鮮烈。
一は頭を振って、強く自分を意識する。自分を保つ。
「そうだ……」
関係無い。忘れろ。仕方ない。
呪文みたいに何度も頭の中で唱えた。自分が何をしに来たのか、何をすべきなのか。あんな物、犠牲にすらなりはしない。
すう、と、大きく息を吸い込み、
「――ジェーン」
自分でも驚くほど澄み渡った声で彼女を呼ぶ。
「近くで見てるんだろうが、出て来いよ」
耳を澄ませ、意識を尖らせ、一は神経を研ぎ澄ませた。
このままでは被害が広がってしまう。もう、止めなくてはならない。自分たちだけの問題では無くなってしまう。
だが今なら、今ならまだギリギリのラインで間に合う。
「ジェーンッ！」
答えは、すぐに返ってきた。
「――がっ！」
一の、すぐ後ろから。
風が吹いたと思った次の瞬間、一は森の中を転がっていた。

狼とこうしよう

「お兄ちゃんは、アタシの事が嫌いなんだ」
怖気が走った。
「パパと、ママと同じだヨ。何にも言ってくれない。何も思ってくれない」
いつもと変わらない、彼女の甘い声。
「アタシの事なんてどうでも良いんだ。アタシがどうなっても気にしないんだ」
本当に、怖気が走る。
一は倒れたまま、顔だけを動かした。睨み付けるように彼女を見上げる。
既にジェーンは変わっていた。頭からは犬みたいな耳が生え、爪が異様に長い。何より、纏わり付く雰囲気が圧倒的に獣じみていた。隠そうともしない、血の臭いと猛々しい野性の本能。
「ジェーン、話がある」
だけど、一にはそんなもの関係ない。倒れたままの不様な体勢で、呼び掛ける。
「……話？」
「ああ、そうだよ」
背中を擦りつつ、一はゆっくりと立ち上がった。
「その、なんだ。今まで、色々と俺が悪かった。だから、ちゃんと話をしよう。させてほしい」
ジェーンには、まだ一のことばを聞く分には理性が残っていた。
「……ふーん」
トン、トン、トン。
落ち葉だらけの冷たい地面を爪先で慣らす音。
何処かで、聞いたことのあるリズムだと一は不意に思う。
トン、トン、トン。

「ふふっ、話かあ……」
――ドン。
リズムが、変わった。
その音を何処で聞いたのか思い出す前に、一の体に衝撃が走る。
「うあぁっ！」
風が吹く。それだけで一はしゃがみこんでしまった。しまったと気付くより先、顔を上げて正面のジェーンを確認する。いない。
――何処にっ？
今更ながら、この場所を選んだのは間違いだったのではないかと、一はおぼろげにそう思う。遮蔽物と障害物だらけの森の中。果たして、ここは本当にジェーンのスピードを止めるに至る場所なのだろうか、と。
とにかく、一は一人でいるのは危険だと判断し、コヨーテの元まで戻ろうと落ち葉を踏みしめる。瞬間、後頭部に鈍い音。痛みは後から訪れた。
「だっ……」
痛みを逃がす為に、何でも良いから声を出す。倒れてはならないと足に力を込め、それでも体は言う事を聞かない。枯葉と湿った土の混ざり合う地面に手を添え、一は何とか踏みとどまった。
「もう、遅いよ」
声が聞こえる。声だけが聞こえてくる。聞き間違えようの無い、あの可愛らしい声。
「ジェーンッ」
応えるべく、一は姿の見えない妹に呼びかける。
「ダメ、なんだよ」
風が走る。木々の合間を縫うように、一直線に一へと向かう。
「くっ……」
今度は腹部を叩かれた。見えない攻撃。葉だけが揺れ、枝だけが震える。まるで森がジェーンに味方しているかのように、彼女の姿を隠していた。

これでは、アイギスが使えない。ジェーンの姿が見えない以上、メドゥーサの力を行使するのも不可能だ。おまけに、盾としての役割も彼女の速さの前には果せそうにない。

「いい加減にしろよっ、俺はお前とこんな事しに来たんじゃないんだよ！」

一の声には苛立ちが混じっていた。完全に、作戦は破綻した。ジェーンの驚異的な速度を妨害する為に選んだこの森。関係なかった。彼女の速さが、一たちの計算よりも速かっただけの事。地の利もクソもない。障害物の影響を受けているのは一だけであった。

無言。三度、風が吹く。

「ちくしょうっ」

吐き捨て、一は正面に広げたアイギスを掲げ、木の幹に背を預けた。どこから来るのか分からないなら、こうして死角を減らせば良い。姿を見せたところを確実に捕まえる。しっかりと頭の中で意識し、繰り返す。

「こっち」

「あ？」

姿は見えないのに、声だけ聞こえてくる。惑わされる物かと、一は正面を睨み付けた。刹那、首に何かが巻き付く。

「だから言ったのに。お兄ちゃん、頭がお留守だったよ？」

ジェーンの、足だった。

「なっ……」

「ふふっ、手こずらせないでよ」

口調こそ優しかったが、首に巻きついている足はちっとも優しくなかった。ぎりり、と。一の首を一切の躊躇なく締め上げ始める。

一は必死で足を退かそうと、ジェーンの素肌に爪を立てた。しかし、全くと言って良いほど、彼女は反応を見せない。見上げた彼女の顔は酷く楽しそうだった。

許しを乞おうとも思わない。
怒りを買おうとも構わない。
情けを掛けようなんて以ての外だった。
「はっ、はっ、はあ……」
群がる野犬どもに鋭い眼光を浴びせかけ、コヨーテは短い呼吸を繰り返す。彼の自慢の毛並みはとっくに崩れていて、灰色の体は返り血だらけになっていた。
犬どもはコヨーテに対し、集団で襲い掛かるような事はしなかったが、一匹を倒しても、新たな一匹が群れから現れ、倒しても、現れ続ける。いつ終わるか分からない。先が見えない。それでも、決して手は抜けなかった。もし自分が倒れるような事があれば、終わってしまう。自分がここで犬たちを押さえているからこそ、あの情けない男が好き勝手に出来るのだ。そして、ジェーンを救えるのも、恐らくはその男だけなのだ。
「くそっ」
歯痒い。恩人に仕立て上げたジェーンに対して、何もしてやれない。
「――っ！」
「しつこいじゃねえかっ」
まともに息すらつかせて貰えない。既にコヨーテの爪は何本か剥がれ、片目は返り血で塞がれて、四つの足全てに疲労が蓄積されていた。
相手の犬は小柄だが、コヨーテよりも動作が俊敏であった。お互い、背後を取ろうとしてぐるぐると相手の尻尾を追っかけあう。正真正銘のドッグファイト。周囲の犬が焦れ付く程度に時間が経ってから、急に立ち止まったコヨーテが戦いのペースを掴んだ。小柄な犬は面食らい、立ち止まる。立ち止まってしまう。
――始まるのは残虐な解体劇だった。血が吹き荒れ、肉が飛び狂い、犬どもの怒声と罵声が森に木霊している。必要以上に、執拗に、コヨーテは動かなくなった犬に攻撃を加え続ける。別に、加虐癖が

あるわけではなかった。あくまで、威嚇行為。示威行為。分かりやすく、示してやっているのだ。これ以上近付くな、と。
「――！」
「――っ！」
しかし、犬たちは恐れない。コヨーテに怯まない。むしろ、今夜ここに集って、そして死んでいった仲間の仇を取るといわんばかりに力強く猛り、吠え立てる。
「これだから犬ってのは嫌いなんだよっ」
愚かにも真正面から飛び掛かってきた犬の目玉を爪で刳り貫き、コヨーテは盛大に吠える。月に向かい、彼に向けて、彼らに届くと願って。

「助けないんですか？」
「……誰をだ？」
「一一と、あの犬ですよ。結構やばそうな展開になってるじゃないですか」
眼下に広がる森の道。情報部である春風と細波は、高い電灯の上から状況を見下ろしていた。
「あれは犬じゃない。コヨーテだ。良く覚えておけ」
「はあ……」
春風はあくまで無感情に、無表情に戦闘を眺めている。
今までを振り返ってみれば、その事が細波にとっては恐ろしかった。何しろ、この春風という上司には表情と感情がないからだ。滅多に感情を表に出さず、表情すら変わることがない。自分以外のモノに無関心を装っているような。それでいて、彼女は顔色一つ変えることなく大胆な行動に移るのだ。
「今日は、俺の言う事聞いてくれるんですね」
「……誰がだ？」
「あなたが、ですよ。あの勤務外と接触しないでくれるんですよね

？」

最近、細波は胃痛が酷くなっていた。薬はもう手放せない。キリキリと、常に身を苛む感覚に悩まされる毎日。原因は明らかであった。

「ふん、そうだな。今日はもうその必要もないだろう」

「……今日は？　今日で終わりそうなんですけどね、あいつ」

少しばかりの期待と、敵意を込めて言い放つ。

「あれは唯の人ではない。勤務外だ。良く覚えておけ」

だが、春風は不敵に笑った。ように、見えた。

「はあ……」

考えろ。考えろ。考えろ。

足りなくなる酸素空気を全て頭に回して、思考回路を起動させる。

回せ。回せ。回せ。

この危機的状況を乗り越えろ。

何度も言い聞かせ、自分を奮い立たせ、一はジェーンを睨み付けた。

「ふふっ、死にそうだね、お兄ちゃん？」

既に意識は飛びそうで、視界からは色が消えつつある。苦しい。首に食い込むジェーンの足。ギリギリと締め上げる彼女に抵抗しているのは、自身の右腕だった。首と、ジェーンの足の間に挟まって隙間を生み出している。ギリギリで息が出来る。だが、苦しい。この腕さえ手放せば、力を緩めれば、どれだけ楽になれるだろうか。

「イイ、顔だよ？　もっと好きになっちゃいそう……」

手放す物か。

そうは行くかと、一は力を振り絞る。まだ、まだ終わっちゃいない。馬鹿みたいに薄っぺらく、吹けば飛んでしまうような軟い作戦は、まだ破綻していない。何故なら、未だジェーンは気付いていないからだ。一たちの狙い、アイギス発動に気を取られていない。い

や、それ以前に――

「くっ……」

一は左手の感触を確かめる。しっかりと、アイギスを握っている事を確認する。酸素はまだ足りている。息はもう少しだけ、持ちそうだ。ならば。

「ん……」

ジェーンは拘束を解いた。一の体が一瞬だけ軽くなり、すぐに重くなる。支えを失った一のからだが地面に無様に倒れて落ちた。

――死んだか。

獲物の死を感じ取り、狩人は弛緩する。

「あーあ、終わっちゃったなあ」

驚くべき事に、ジェーンは腕一本で自重を支え切っていた。木の幹に刺したままの爪を引き抜きながら、軽く言い放つ。

「よっ……と」

引き抜いた際の反動を利用して、ジェーンは軽やかに跳躍した。くるくると。森を抜け出し、月下に踊り、再び森に戻ってくる。くるくると。一の顔のすぐ傍に着地すると、愛おしそうにその顔を撫ぜた。手向けのつもりで、見開いたままの瞼をそっと閉じてやる。

「お兄ちゃん……」

触れた頬が、まだ温かい。ついさっきまでここにあった『生』を感じ取り、ジェーンは身震いを起こした。

「好きだよ」

甘い、甘い、甘ったるい洋菓子のような声。

「アタシも、すぐにそっちへ行くから――」

一はもう少し、ジェーンについての考えを改めるべきだった。彼女の能力。性格。性能。その他諸々。

もっと、考えるべきだった。本当にこの場所で良かったのだろうか、と。結果から言えば、軽々と駄目だった。舗装されていない道。連立する背の高い木々。見通しの悪い、僅かな月光しか望めない暗い場所。障害物。遮蔽物。木。草。葉。枝。森。全てが一たちに牙を剥いて、全てが獣たちに味方した。

ジェーンは障害物を障害物と認識していなかった。人間のままでは決して感じ取れなかった風のニオイ。森のざわめき。獣の言葉。それら全てを活用して、風の様に森を駆け抜ける事が出来た。彼女の瞳には、障害物はもはや足場程度でしかなかった。三百六十度、上下左右、天上天下どこにでも移動する事が出来た。この場所は、完全な独壇場。獣たちのフィールド。彼女の、一人舞台。

もっと考えるべきだった。

「――そっちってどっちだよ」

手を掴まれ、視線を合わされ、ジェーンは慄いた。

「なっ……！」

声が出ない。言葉が出てこない。そうこうしている内に組み敷かれる。馬乗りになった一に、手首を遠慮なく掴まれた。

「はっ、離してヨっ」

「いっ――てぇ！」

足をバタつかせ、無防備な一の背中に何度も蹴りを入れる。膝を立てる。爪を立てる。噛み付こうと顔を動かす。

「触らないでっ！　退いてっ！」

一は、退かなかった。何度蹴りを食らおうが、膝を入れられようが、爪を立たれようが、手首に噛み付かれようが、決して退かなかった。

「……うるせえっ、好き勝手やりやがって、俺の話を聞けってんだ！」

何で、どうして。死んだ筈の、殺した筈の彼が自分に圧し掛かっ

ている事実が信じられない。力が入らない。月の魔力に狂い、血に餓えた闘争本能に任せた筈なのに、力が入らない。彼に触れられてから、狼としての血が薄れていくようだった。

「……う、うう……」

感情が溢れ出す。怒り、悲しみ、どれも違うような気がする。これは、安堵だろうか。ジェーンは自問自答を繰り返した。

「泣くな馬鹿っ！　耳を塞ぐな、目ぇ瞑んな！」

「うるさいっ、うるさいっ！」

喋るな。口を開くな。その声を、聞かせるな。彼の声はどうして、どうしてこうも響くのだろう。どうして、こんなに胸を打つのだろう。苦しい。苦しい。

ジェーンはもう少し、一についての考えを改めるべきだった。彼の能力。性格。性能。その他諸々。

もっと、考えるべきだった。本当にこんな事をしでかしてしまって良かったのだろうか、と。結果から言えば、軽々と駄目だった。『兄』しか残されていない世界。戦慄する先の見えない日々。見通しの悪い、僅かな希望すら望めない暗い場所。障害物。遮蔽物。三森冬。糸原四乃。立花真。オンリーワン。自分以外のモノ全て。全てが自身に牙を剥いて、全てが自分以外の誰かに味方した。

一は、障害物を障害物と認識していなかった。二年前のままでは決して感じ取れなかった外のニオイ。周囲のざわめき。他人の言葉。それら全てを活用して、当たり前の様に日々を生き抜く事が出来た。彼の瞳には、障害物は何でもなかった。どうでも良くなっていた。三百六十度、上下左右、天上天下どこにでも移動する事が出来た。この場所は、この世界は、完全な独壇場。人間たちのフィールド。彼らの舞台。

もっと考えるべきだった。

終わりは、突如訪れた。

「何だ……？」

睨み合いを続けていたコヨーテと野犬たちの間に漂い続けていた闘争の空気が嘘の様に消えて失せた。犬たちはしばしの間、コヨーテと、蹲り倒れている犬たちに目を落とす。

「まさか……」

コヨーテの疑問を確信に変えたのはすぐだった。一匹の犬が立ち去ると、次々と他の犬も立ち去っていくのだ。ある犬は傷ついた仲間を銜え、引き摺り、連れて行く。体格の良い、動けない数匹の犬と、もうどうしようもない仲間を残し、森からはほぼ全ての犬が姿を消した。

警戒しながらも、コヨーテは血の付いていない地面を選び腰を下ろす。体中が痛くて、ぼろぼろで、疲れ果てていた。もう今は、一歩たりとも動きたくない。それに。

「はっ……」

兄妹の間に水を差すのは酷く無粋で、自分の美学からは外れていた。

――上手くいった。

とりあえずは上手くいった。予想通りだった。ジェーンは、絶対に狼じゃあない。信じていて良かったと、一は安心する。

「こっちを見ろって言ってんだっ」

ジェーンの体からは、さっきまでのような力が抜けきっていた。分かっていた。彼女は月に狂い、血に酔い、本能に任せて行動しているわけではなかったのだ。そう、見せ付けているだけだった。でないと、息を止めて死んだ振りしているだけの下らない手に引っ掛かるはずもない。

「やめてっ、やめてえっ」

一は無理矢理にジェーンの顔を固定する。涙声で訴える彼女を、折れそうなくらい細い体躯を震わせている彼女を、無理矢理に自分の方へ向かせた。

「くっ、離して！　離さなきゃ殺す、殺すっ！　殺してやるんだからっ！」

「やってみろ！」

とりあえずジェーンを落ち着かせないことには話にならない。一は彼女の頭を掴み、強引に立たせる。木の幹に頭を押し付けると、自分の体重を思い切りかけた。

「痛いっ」

もう恐ろしくはなかった。ジェーンが元に戻っている事に、いや、元から変わってなど、壊れてなどいない事に気付いたから。

「いい加減にしろってんだっ、もうバレてんだぞ馬鹿！」

「バカはそっちでショ！　殺すったら、殺すんだから！」

「やってみろって言ってるだろ！　つうか、暴れんのやめろよっ落ち着けって！」

「じゃあ離してヨっヘンタイ、ヘンタイヘンタイ！」

「離したら逃げるだろうがっ」

「アタシの勝手じゃナイ！　もうっ放っておいてってば！」

「放っておける訳ないだろ！」

「うるさいっ！　いまさらになって……パパとママみたいにアタシなんてムシすれば良いじゃナイ！」

「意味が分からねえよ！　しっかり喋れっ、言いたい事があんなら言え！」

「聞かなかったのはお兄ちゃんのくせに！」

「お前だって何も聞かなかったじゃねえかっ！　俺だけのせいにするんじゃねえよ！」

「お兄ちゃんでしょっ！？　気付けバカ！　ミツモリやイトハラたちばっかり構って、アタシなんてどうでもよかったんじゃナイ！」

「どっ、どうでも良いわけないだろ！？　お前だって気付け！　何

年の付き合いだと思ってんだっ」
「二年ヨ！　たった二年でそんなの分かるわけナイ！」
「たったって言うな！」
「言ったのはお兄ちゃんでショ！？」
「言ってねえよ！」
「い、いいい言ったわバカ！」
「うるせえバカ！」
一旦、仕切りなおし。
一はジェーンから離れると、アイギスを投げ捨てて、肩で息をして天を見上げた。馬鹿みたいに、月は真ん丸で綺麗だった。
「……何しに来たんだ俺は……」
「……知らないわよ」
ジェーンも肩で息をしながら、乱れた髪を整える。頭から生えた耳がしゅんとうな垂れていて、ついさっきまで纏わり付いていた気持ちの悪い雰囲気が掻き消えていた。
「はあ……とりあえず、謝るよ」
「何をヨ……？」
「全部。ごめん、やり過ぎたし、言い過ぎた。それと、今まで放っておいて、わ、悪かった……」
作戦が何だ。アイギスが何だ。考えていた事は全て水泡に帰って、残ったのは陳腐な言い訳だけだった。
「……毛、痛んだら責任とってよネ」
「何でもしてやるよ」
「服も、顔もドロドロ……。お風呂に入りたい……」
「新しい服も買ってやるし、新しい顔だって用意してやる。風呂は、その、銭湯に連れてってやる」
「バカみたい」
微笑んで、ジェーンは座り込む。
「馬鹿とは何だ。ところで、俺だって全身が痛いんだけど？」
叩かれて、蹴られて、地面を転がって、血を浴びて、おまけに吐

いた。今着ている服を脱ぎ捨てて裸にでもなった方がマシだと一は笑った。

「……ゴメン」

「……良いよ」

「アタシこそ、色々ひどいことしちゃった」

「良いよ。気にすんな妹。兄は寛大であるぞ」

今更兄と名乗るのは、少し、気恥ずかしい。

「うそ。本当はおこってるんでショ？」

「お前さ、構って欲しかったんだろ？」

「なっ？　な、何言ってるの！？」

「残念だけど、途中からなんとなーく気付いてた。だってさ、本当に俺を殺す気だったらとっくに俺なんか死んでるよ」

何気ない口振りで言うので、ジェーンはもう何も言い返せなかった。

「でも、フツーはおこる」

「怒ってない。家族だろ、これぐらいは何とも思わねえよ」

「……家族、じゃナイ」

ぼそりと、ジェーンは躊躇うように口にした。

「家族だ」

きっぱりと、一は反論する。

「フェイクよ、アタシたちは兄妹じゃナイ。お兄ちゃんが、そう言ったんでしょ」

「お前、店長に何か言われただろ」

ジェーンは何も言わなかったが、彼女の目が怯えているのを一は見逃さない。もう、目を離さない。

「……騙し合ってても、他人同士が飯事やってても、兄妹ごっこやってても良いじゃねえかよ。周りの奴なんて無視しようぜ。だってさ、安心、するだろ？　家族の振りでも何でも良いさ。俺たちが良ければ、それで……」

「でもっ、ダメだよ……、もう、ダメなんだよ。だって、だって、

おかしいんでショ？　アタシたちがフリをするのって、変、なんだよ？」
「そんなの気にすんなよ」
「するよっ！　だって、だって――」
「――血が、繋がってないからか？」
弾かれるように、縋るように。ジェーンは一を見つめた。瞳は悲しい色に濡れていて、声は震えていて。
どうしようも、無い問題。
「……もう、ムリだよ……」
「無理、じゃないだろ」
そんな事、とっくに気付いていた。
「何、言ってるの？」
「俺は、もう家族を手放したくない。お前と離れたくない」
だから、誤魔化す。欺く。偽る。取り繕って、欺瞞に満ちた詭弁を弄する。
「繋げりゃ良い。血なんかよりも、もっと良いもんでさ」
「……お兄、ちゃん？」
どうなるか分からない。ジェーンの心が動かない限りの、最後の手段だった。ずっと、気付いていて、気付かれていて、『絶対にするな』と釘を刺されていた事。
でも、これしかなかった。こんな事しか思いつかなかった。
「俺を、噛め」
言い切った後、ジェーンの息を呑む音が聞こえた。
「な、何で……？」
「お前だって気付いてるし知ってるだろ、なあ、人狼」
「……アタシに、人狼（アタシ）に噛めって、そう言ってるの？」

「あー、ちなみに、どうなるか分かって言ってっから」
人狼に噛まれた者は、人狼になる。人を捨て、狼を手に入れる。
何度も、コヨーテから言われていた事だから。間違いない。
「バッ、バッカじゃないノ！？」
「でも、これしかないだろ？」
「そ、そこまでする必要なんて！」
「あるね。分かったんだ。もうさ、言葉だけで分かり合えるタイミング、逃しちまったんだよ。俺が」
「……ア、アタシみたいになっちゃうんだヨ？」
俯いて、ジェーンは声を絞り出す。
「それが目的だ。おら、一思いに噛んでくれ」
一はジェーンの傍まで近付いて、少しも迷った素振りを見せずにしゃがみ込んだ。
「こっ、来ないでってば！」
「良いから噛めって」
「ムリに決まってるじゃナイっ、辛いんだよ、半分でもソレになっちゃうんだよ？　耳はこんなトコから生えてくるし、爪だって、長く、なるし……、今はガマンしてるけど、しっ、しっぽだって生えちゃうんダカラっ！　そっ、ソレなんかに、お兄ちゃんをソレなんかに出来るわけナイよっ」
「つべこべ言うなっ」
「つべこべって何ヨっ」
涙を浮かべて、ジェーンは訴える。
「……っ、何だよっ、お前は俺が嫌なのかよ！」
「そういう意味じゃないっ、お兄ちゃんこそ、自分で本当に何言ってるか分かってんの！？」
「分かってるって言ってんだろ」
「ソレに、なるんだよ？」
「違う」
そうじゃない。

「俺は、お前と一緒に居たいだけだ。ずっと。これから先、何があっても。でも、ごめん。俺、頭悪くて、鈍くて、器用じゃねえから。だから、こういう事しか思いつかないんだ……」
「分かってたくせに。遅いよ、バカ。家族になんか、もう戻れっこナイ」
「……だから、噛んでくれよ。そしたらさ、ギリギリ、間に合うだろ？」
血なんかよりも、もっと確かで。それでいて、血よりも不確かで。彼女と同じモノになれば近付ける。離れなくて済むかもしれない。そんな事、誰も決めてない。だけど一は決めた。もう、決めた。
「……本当に、知らないから」
そっと、ジェーンは一の肩に顔を近付ける。ぶっきら棒な物言いの中でも彼女の嬉しさのような物が感じられ、一は少し救われた。
「なあ。痛く、すんなよ？」
「……知らない」
そう言った彼女の歯が尖っている事に、今更ながら一は気付いて、怖気づく。
「う。歯、長いんだな」
「知らないって言ってるでしょ」
「……あー、そうでしたね」
「……ねえ」
「何？」
今まで、異性として意識していなかった存在だったというのに。一とジェーン。互いの吐息が掛かる距離で見つめ合ってしまい、一は思わず視線を逸らした。
「狼ってさ、オスとメス、一度パートナーになった同士は死ぬまで絶対に離れないんだって」
「？　それが何だよ？」
「浮気もしないし、パートナーに近付く奴には攻撃したりするんだって」

「……ジェーン？」
「死ぬまで、ずっと二人でいるんだって」
意味が分からない。どういう事だと尋ねる前に、一の肩口へジェーンの歯が突き刺さった。

歌え、犬ども

三日後。

一は三日ぶりにオンリーワンへと足を運んだ。シフトの確認と、店長にお小言を頂きに行く為だった。

この三日の為に、一はシフトの変更を願い出た。突然の事だったので、店長は許してくれなかった。殆ど、サボリであった。

「おこられるカナ？」

「……だろうな」

ジェーンと、二人で。

殆ど、丸まる三日間。一とジェーンは二人で過ごした。二人だけで過ごした。あの夜が終わった時、二人でそう決めた。

一は今回の事件での協力者でもあり、加害者でもあるコヨーテを探したが、彼の姿はどこにも見えなかった。まるで、始めからこの世界にいなかったみたいに。

仕方無しに、公園を立ち去った一たちは一旦着替えを取りに戻り、ジェーンの部屋――勤務外店員だらけのあのマンション――でゆっくりと過ごした。

それから、二人は昼過ぎに目覚めて、店に連絡を入れ、寝食忘れて只管に話し続けた。悲しい話。嬉しい話。腹立たしい話。楽しい話。無駄話。下らない事をして、下らない事で笑った。もっと早くこうしていれば良かったと、二人は思った。

店に向かう道すがら、一は物陰に隠れている、見覚えのある後姿を発見した。

「……ジェーン、先に行っといてくれないかな？」

「何でヨ？」
むすっとした顔でジェーンに睨まれ、一はたじろぐ。
「い、いや、二人揃って行ったら糸原さんたちに弄られるじゃん」
「……アタシは別にかまわないんだけどナー？」
「俺は構うの」
「お兄ちゃん、アタシのコト離さないって言ったのに。あの分厚い夜を忘れちゃったノ？」
「まあ、本にしたら辞典になりそうなぐらい喋ってたけどな」
それを言うなら熱い夜だ。しかも熱くなかったし。喉まで出掛かった言葉をグッと飲み込み、一は頭を掻いた。
「ほら、色々突っ込まれたら面倒だろ？」
「むう？　バット、お兄ちゃんのコト自慢したいんだけど」
「……アレだよ、アレ。俺はさ、こないだの事、二人だけの秘密にしておきたいんだよ」
「……二人、だけの？」
一は曖昧に頷く。
「そっ、か。そっか。ふふっ、じゃあ仕方ないネ。ふふー、いーヨ、二人だけのシークレット、ね？」
すごく、罪悪感で満たされる。
「じゃあ、悪いけど先に行っといてくれるか？　ついでに、俺の分まで謝っといてくれると嬉しいんだけど」
「バカ。そーゆーのはレディにやらせちゃダメなんだから」
「あー、ごめん」
「別に、いーけどネ。それじゃ、またあとでネっ」
手を振って駆け出すジェーンを眺めながら、一は溜め息を吐いた。
吐いた後、どう声を掛けるか迷った挙句、
「……久しぶり、だな」
ありきたりな言葉をぶつけてみる。
沈黙が流れた後、罰が悪そうな表情を浮かべた彼が出てくるのは、すぐの事であった。

オンリーワン北駒台店、バックルーム。
「……シフトの変更だと……？」
「は、はい」
神野剣は怯えていた。
「ほーう。ここは良い度胸だな、と言っておくべきか……」
この三日、店長の機嫌が大いに悪い事に。理由はもう一つしかない。一と、ジェーンだ。二人がこの三日、無断欠勤に近い形で店に姿を現さない事に、店長は大変ご立腹なのだ。無理なシフト交代に頭を悩ませながら、腹を立たせながら。
「何とか、ならないでしょうか……？」
更にもう一つ。追い討ちを掛ける様に神野と立花のシフト交代願い。
火に油を注ぐような、火に油を注いでいる感覚に苛まれながら、神野はちらりと店長の顔を窺う。
「……午前から、午後に変更、だったな？」
「……はい。あの、ウチの学校が創立記念日で、俺、剣道部の手伝いに行かなきゃならないんです」
「手伝い、か。……まあ、良いだろう。奴らも帰ってくるらしいし、一たちと交代で何とかなりそうだな」
「あっ、ありがとうございます！」
勢いよく、神野は頭を下げた。
「待て、神野。立花はどうした？　立花の理由を聞いてないぞ」
「……あー、その」
「第一だな、何故あいつは私に直接言いに来ないんだ。人伝でのシフト交代はするなとあれ程言っただろう」
非常に、言い難い。が、言わなければならない。神野は静かに、覚悟を決める。
「あいつ、補習食らってるんですよ」

「……補習？」
「ええ。創立記念日に、テストの点が良くなかった奴ら集めて、補習、です」
店長は深く溜め息を吐いた。
「頭も悪いのか……」
何か反論してやろうかと思ったが、出来なかった。
「まあ、転校してきたばかりですし、慣れてない……の、かな」
「はあ、事情は分かった。だが、今度は自分で言いに来るように立花には伝えておけ」
「そう言っておきます」
話は終わった。あまり長居したくなかったし、何より店長と一対一で話すのはまだ苦手だった。
「すいません、よろしくお願いします。それじゃ」
「――ああ、そうだ。神野、明日、暇か？」
「……は、はあ、学校が終われば、暇、ですけど」
質問の意図が分からない。が、嘘を吐くのは嫌いだったので、神野は正直に答える。
「そうか、なら立花も暇だろう。都合が良い。明日、ミーティングを行うから店に来い」
「ミーティング、ですか？」
「そうだ。新人が来るんでな、自己紹介も兼ねて、今後について適当に話し合おうと思う」
「……適当、に。ですか？」
「そうだ。適当にな」
ぷかあ、と。紫煙を吐き出し、なんでもないように店長が述べた。
「分かりました。それじゃ……お先に失礼します」
「おう、気をつけてな」

神野がバックルームを出ると、見たくないものを見てしまう。見て、しまった。三森と糸原がレジで喧嘩している。どうしようかと、頭を捻った。無視して帰るのも一つの手だが、下っ端の身分で失礼な真似も出来ない。何より、挨拶は大事だと思い直す。

どこまでも真っ直ぐで、可哀想なぐらい真っ直ぐだった。

「ヤに決まってンだろうが、ボケ」

「ボケとは酷い言い草じゃない。ノータリンの分際で私に意見すんじゃ無いわよ」

「……喧嘩売ってンだよな？　そうだよな？」

「あー、はいはい。売ってる売ってる。大安売りの超お買い得。今ならキャッシュバックもサービスで付いてくるから、良いから言えって言ってんのよ」

「ざけんなよっ！　何でンな事しなきゃなんねェンだ！」

「うっさいわね、良いから一が来たらやれって言ってんのよ！」

早速気が殺がれる。口汚く罵りあう二人の先輩。恐ろしい光景だった。

「あ、あの……」

恐る恐る、腰が引けながらも声を掛けてみる。

「ん」「お」

二人の顔、四つの瞳がこっちに振り向いた。

「……丁度良いわ。ねえ神野、ちょっと話聞いてよ。って言うか、聞きなさい」

神野の姿を認めた糸原が、やけに居丈高に物を言う。

「は、はあ、話？」

「そう。こいつったら私の提案を呑めないって言うのよ」

「誰が呑むかよっ！　おい、お前からも何とか言ってやれ」

「と、とりあえず話を聞かせてください……」

今度は三森に睨まれた。しまった。これでは巻き込まれてしまう。そう思っても、もう遅い。

「よし、説明してあげるわ。あんたさ、メイド喫茶って知ってるわ

よね」
「……一応は」
「最近テレビ見て知ったんだけど、アレめちゃめちゃ流行ってんじゃない。だから流行に乗っかろうとした訳よ」
今更!?　古っ！　とは突っ込めない。良くもまあこの人たちに立ち向かえる物だと、神野は一を尊敬し直した。
「もう流行ってねェよ。とっくに下火だっての。何が良いってンだ、あんなの」
「金払ってメイドさんと遊べるんでしょ？　お触り禁止の。健全な風俗、良いじゃない。廃れはしても決して消える事はないと思うんだけど」
「……あの、メイド喫茶と、その、二人が喧嘩してた理由ってのは何なんですか？」
神野の言葉に、糸原が「それよっ」と嬉しそうに反応する。
「お帰りなさいませ、ご主人様。これ、何の挨拶だか分かるわよね」
分かるわよね。男なら。そう問われているようで、試されているようで神野は答えるのに少しばかり躊躇う。
「ええと、メイドさんの挨拶、ですよね？」
「そうっ、どうよ!?　超可愛いじゃん！　ヤバくない!?　ご主人様よ、最高じゃない。こんなん言われたらもう発狂モンよ、発狂モン」
「……お前、薬使ってるだろ」
「という訳で、この挨拶をウチでも取り扱ってみたいと思ったわけよ」
口に茶でも含んでいれば噴出していただろう答えに神野の心が折れそうになった。
「でもさ、新しい商品を取り扱うのには情報が必要なのよね。マーケティングよマーケティング。いきなり私が言って、失敗したら目も当てられないし、何より恥ずかしいじゃない？　だからこいつに言わせようとしてるんだけどさー」

「言うわけねェだろ！　お前一人でやってろよ！」
「なのにこいつったら、頑なに拒むのよ」
「……はあ」
とりあえず相槌。
「で？」
「……はい？」
「神野、あんたはどっちに味方するわけ？」
「はい！？」
何故いきなりそんな話に繋がるのか、全く理解出来ない。
「私はこいつに言わせたい。こいつは言いたくない。これじゃあいつまで経っても話は平行線なのよ」
「一生交わるはずねェだろが。大体だな、私はお前が隣に居るってだけでムカつくンだよ」
「という訳で、第三者に決めてもらおうと今決めたのよ。ほら、さっさと選びなさい。私を敵に回すか、こいつを敵に回すか」
どっちの味方に付くかではなかったのか。神野は頭を抱えた。仮に、仮にどちらかを選んだとする。
糸原を選んだ場合→三森に燃やされる。
三森を選んだ場合→糸原に殺される（恐らく自身が思っているよりも残酷な手段で）。
「うあああ……」
どっちを選んでも破滅だった。死ぬしかなかった。
「ほら、さっさと決めなさいよ！」
「お前、私にまで喧嘩売るつもりじゃねェだろな？」
「に、にのまえさーん！」
助けて！

「……三日ぶり、だったかい？」
「そうなるな。元気だったか？」

駒台の街の目立たない路地裏に、一と、コヨーテはいた。
「まあね。相変わらずここの保健所連中はしつこいけど」
「元気そうで何よりだ」
ひとまず、一はコヨーテが変わっていなくて、この街から帰っていなくて安心する。
「飯とか、どうしてたんだ？」
「……ああ、心配ないさ」
そう言いつつ、コヨーテの顔色は若干悪そうだった。
「ふーん。飼い主でも見つかったのか？」
「……まあ、そんなところだよ」
「何か、気のせいか元気無いんじゃないか？」
「……気のせいさ」
これ以上はこの話題に触れないでおこう。一はコヨーテを気遣ってみる。
「こないだは、ありがとな」
「ミーは何もしていないさ。それを言うなら、ミーの方こそ礼を言うべきだな」
「そんな事ないだろ。お前がいなきゃ、もう、駄目だった」
本当に。一は本当に、コヨーテに感謝していた。
「嬢ちゃんとは、仲直りできたのかい？」
「……ああ」
「話は、聞けたのかい？」
「まあ、ね。予想してた通りって言うか、気持ちの良い話ばかりじゃなかったけど」
本当に。
「……お前さ、ジェーンに謝りに行かないの？」
「生憎、ミーと話せるのはリトルボーイみたいな、変わった連中だけでね」
「茶化すなよ」
「さてね、ユーモアの足りない人種だな」

コヨーテは牙を覗かせて笑う。
「……お前にも、聞いといて貰いたい話があるんだけど」
「へえ、聞こうじゃないか？」
一はコンクリートの塀に背を預け、
「おじさんと、おばさん。つまり、ジェーンの両親なんだけど……」
躊躇いがちに話し出した。
「……ジェーンを、棄てた、らしいんだ。いや、言い方が悪いけど」
「……そうかい」
思うところがあったのか、コヨーテは粛々と一の言葉を受け止めて、続きを促す。
「あの日、お前とジェーンが出会ったあの日。ジェーンは覚えてないんだけど、木から落っこちて、気絶してて、気付いたら、見た事も無いところにいたんだってさ」
何も知らないまま。何も分からないまま。何も、理解出来ないまま。
「不幸中の幸いっつーのか、幸い中の不幸っつーのか、オンリーワンのアメリカ支部の近くだったらしくて、事情を察してくれた勤務外に拾われたんだ。そんで、休ませて貰って、体、調べられて。……おじさんたちに迎えに来て貰って、拒否、されたんだってさ」
その時彼女は、どんな気持ちだったのか。どれだけ泣きたかったのか。どれだけ怒りたかったのか、どれだけ死にたかったのか、どれだけ、殺してやりたかったのか。一には分からなかった。
「半分が、もうソレの娘なんて恐ろしいって、さ」
聞きたくなかった。分かってはいても、予想してはいても、彼女の口からは、絶対に聞きたくない話だった。
二年間。楽しい楽しい二年間。世話になった、自分のような人間の面倒を見てくれたあの家族が壊れる様など、誰の口からも聞きたくなかったのに。
だから、逃げていた。一は、ジェーンから逃げていた。怖かったから、嫌だったから。

「……行く当ての無くなったジェーンは、勤務外になった。なるしかなかった。どんな気持ちであいつが過ごしてたのか、俺にはまだ分からない」

一が本人から聞いた話では、とにかく、若さと力に飽かせた勤務外生活だったらしい。スポンジのような吸収力。瞬く間に勤務外としての力を付けて行き、ジェーンは社員にまで昇りつめたらしい。異例の人事だったが、実力主義の国ならではの処置だったそうだ。

「SVになってからは、日本に、ここに来る事をずっと考えてたってさ」

オンリーワンの社員ならば、ある程度融通が利く。自由がある。

「……そうじゃない。ここじゃない。リトルボーイ、嬢ちゃんはあんたのところに行こうとしてたと思うぜ」

「……あの国を出たかったって、言ってた。自分の……国なのにな」

推しても、知れない思い。

「俺は情けなかったよ。あいつが頑張って話をしてくれて、泣くのを耐えてたってのに、俺が、泣いちまった。駄目だよな、ホント。頼ってきてくれたのに、俺から折れちゃ駄目なのにな」

「リトルボーイ……」

「……あいつの話は、これぐらいだ。もう腹一杯だろうけどな」

「その口振りだと、デザートまで用意してるみたいだな？」

「さて、用意してるのはどっちだろうな」

一は不敵に笑ってから、

「聞きたい事がある」

そう、口火を切った。

「こないだの犬、ありゃ何だ？」

「……何を言うかと思えば。犬は犬だろうに」

「あの犬を操ってたのは、誰だ？」

「嬢ちゃん、だろ」

違う。そう言って、一は首を振る。
「俺もそう思ってたけど、ジェーンが言ってた。あの犬たちは知らないって。自分には、そんな力無いってな」
「だったら、何だって言うんだい？」
「お前だろ、コヨーテ」
一は真っ直ぐにコヨーテを見据えた。
「確かに、お前を呼んだのはジェーンかもしれない。あいつの声が聞こえたのはお前かもしれない。だけどさ、お前が、犬を呼んだんだろ？」
「へえ、ミーが呼んだって言うなら、何だってミーが奴らに襲われなきゃなんなかったんだい？」
「さあ。そこまでは分からねえよ。大方見当は付くけどな」
「……とりあえず、その見当って奴を言ってみなよ」
ゆっくりと、息を吐いてから、
「お前さ、死ぬつもりだったろ」
一はゆっくりと吐き捨てた。
「俺たちが、俺が、ジェーンを助けられなかった場合の話だ。お前、俺に聞いてたよな？　『壊れたらどうする』ってさ。俺は答えた。『壊れたら直す』、『ジェーンは壊れてなんかいない』って。じゃあ、お前の答えは？　壊れていたらどうするってんだ？」
「……」
「お前、ジェーンを殺すつもりだったな？　多分、ついでに俺も。んで、俺たちを殺した後、死ぬつもりだったんじゃないか？」
コヨーテは答えない。一は気にせずに続ける。
「お前はあのジェーンを見たとき、助けられるかどうか線を引いたんだ。無理だって、そう思ったんだ。だから、犬を呼んだんだろ？　有耶無耶にしたかったんだろ？　助けて欲しかったんだろ？」
「ミーは……」
「責めるつもりはないよ。それは、俺の役目じゃないからな。だけど答えろ。お前は、お前は何だ？　お前は、何を知ってるって言う

んだ？」
　詰るような、責めるような口調で一はコヨーテを問い詰めた。
「……ミーも、謝るつもりはないよ。あんたにはね」
「良いさ」
　溜め息を吐き、コヨーテは一区切り置いてから、
「ミーは、円卓の奇士（きし）だ」
　そう、宣言した。

　オンリーワンの敵対組織。ソレを創り、ソレを操り、人間を殺し、人間で遊ぶ。
　実態、目的こそ定かではないが、確実に言える。声高に言える。
　円卓は、敵だ、と。
　一はそう、思っていた。

「なん、だって？」
「ミーは、円卓の元、メンバーだ。とは言っても、末端クラスだったけどね。席に名を連ねていなかったし」
「……な？　どういう、意味だよ？」
　突然の告白に、一の頭は付いていかない。
「そのままの意味だけど？　まあ、色々やったような気もするるね。だけど、次第にミーは奴らのやり方に付いて行けなくなったのさ。ただ奴らとミーとで会話出来たから、暇潰しにいただけ」
「それじゃ、お前、追われていたってのは……」
「自らの意思で来る者は拒まず、自らの意思で去る者は決して許さない。これが、奴らの理念、仲間意識って奴でね」
　コヨーテは何でも無い事の様に、さらりと言ってのける。
「安心しなよ。ミーはもう抜けた身だからさ。ま、入ったつもりも無かったんだけどね」

「……信用、出来るのかよ」
「信用するかしないかは、ミーが決める事じゃない」
「俺たちの、味方なのか？」
それを決めるのも自分じゃない。そう言わんばかりに、コヨーテは口を開かない。
「だったら、教えろよ。その、円卓の目的ってのは何なんだ？　一体、そいつらは何者なんだよ？」
「さあね。言ったろ？　ミーは居ても居なくても同じようなポジションに居たってね。奴らのやりたい事なんて何一つ見えてなかったさ」
「……その言葉を信じるのも、俺、なんだよな？」
「そうして貰えると、ミーとしては助かるね」
一は考える。考える。オンリーワン、勤務外、円卓、青髭、八岐大蛇、フリーランス。色々な人がいて、色々なソレがいて、色々な事が起こった。喜怒哀楽。全ての感情をぶちまけた二ヶ月弱。
「やっぱ、知らない」
「……何がだい？」
「お前は信じる。だけど、お前の言葉は信じない。少なくとも今は」
結局。考えても、無理なものは無理なのだ。
「保留って事にしとくよ」
一の言葉に、コヨーテは面食らってから、笑った。楽しそうに、おかしそうに。本当に、面白そうに。
「そうかい。そりゃ良いや。良いんじゃないのか」
「とりあえず、今日の事だけ考えるよ」
「ふうん？」
「だから、今までの話全部込みでもう一度聞くぞ？」
どうぞ、と、コヨーテは尻尾を揺らす。
「お前さ、ジェーンに謝りに行かないのか？」
「さて、どうだろうね」
「……ま、良いや。それを決めるのは、俺じゃないからな」

今、この街にコヨーテがいる。それだけで充分だった。
「謝る気が無いなら、こんな所でうろうろしてる筈無いもんな」
「そりゃどうだろうね。この街は、存外過ごしやすいから」
「お気に召して何よりだよ」
「はっ、リトルボーイ、あんたが言う台詞かい？」
「……」
「？　どうした？」
急に一が黙ったので、コヨーテは不思議がる。
「ああ、あの、さ」
「なんだい？　言いたい事があるなら言ってみな」
「いや、もうタイミングは逸したんだけどさ、その、リトルボーイって爆弾みたいな名前、やめてくんないかな？」
「今更じゃないか」
「だから躊躇ってたんだよ」
一は頭を掻きながら、コヨーテから視線を逸らした。
「ボーイって歳でも無いから、何か恥ずかしいんだけど」
「ミーからすりゃ、まだまだ青二才なんだがね」
「一一（にのまえ）ってんだ。もう一（はじめ）はやめてくれ」
ぶっきら棒に名乗る。
「ふうん、ハジメ、ね。中々良い名前じゃないか」
「良い名前だろ？」
それじゃあな、と一は手を振る。ひとまずの、別れの挨拶。
「ああ、そう言えばリトルボーイ。体の調子はどうだい？」
引止めの言葉に少し気落ちしながら、
「ん。すこぶる良いよ」
振り向いて、一は答えた。
「月を見たら、興奮したりしないかい？」
「……あー」
成る程。コヨーテはあんな手を打った自分を心配しているらしいと、一は得心する。

あんな手。
人狼に噛まれて、人狼になった、こんな自分に。
「中途半端なハーフに噛まれたお陰かな。大した影響も無いよ」
「そりゃ結構な事だね」
「あー、でもアレだ」
「ん？」
一は手を掲げてみせる。コヨーテの意識が自分に向くのを確認してから、
「爪が伸びるの早くなった」
罰が悪そうに、そう言った。

歌え、犬ども（後書き）

詰めの甘い話で申し訳ありません。

MADE IN 駒台

命の価値は。

「この街ってソレが多いよな」
ふと、ぼんやりと、一（にのまえ）は取り留めの無い戯言を口にしてみた。
「そうかなー、そうは思わないけど」
ふわふわと。隣に浮いているシルフを見て、何気なく口にしてみたのだった。
風の精霊。シルフ。いつの間にか、駒台に居ついているソレ。姿形はどう見てもただの子供で。
「……お前が言うか。まあ、どうでも良いんだけど」
「そんな事より、こないだ頼んだチョコレートはどうなってんのさ」
中身も子供。甘味を何よりの喜びとするソレ。
一とシルフの間では協定、のような物が結ばれている。一がお菓子を与える代わりに、シルフはこの街で悪さを働かない。本当に、いつの間にか。
「あー、忘れてた。今度で良い？」
「しかたないなー。だけど良いかニンゲンめ、次忘れたらオマエの家の近くにだけ台風を起こすからな」
一はそう言って、ポケットから煙草の箱を取り出す。
「家が壊れるからやめて。まあ、今日はこれでガマンしてくれよ」
そして、箱の中から煙草を一つ摘み上げ、シルフに差し出した。
「なっ、オ、オマエこれ！　これお菓子じゃないだろ！」
「ありゃ、知らないの？　これシガーチョコだよ。煙草の形をしたチョコレート。お菓子。最近店で入荷したんだよ。……ふーん、そうか、知らなかったのかー」
「しっ、知ってるよ？　知ってたさ！　シルフ様はオマエを試して

やったんだよ！　……最近調子に乗ってるようだけど、良いかニンゲン、本当ならな、オマエみたいなヤツにボクみたいなせーれーが話しかけてやってるだけでもすごいことなんだぞ？　もっとシルフ様をそんけーして、ありがたく思えっ」

「ふーん、お前ってそんな凄いの？」

一はシガーチョコをボリボリ齧りながら問いかけてみる。

「当然さ！　オマエらにんげんたちは『ソレ』って一つにして呼んでるけど、ボクたちにもランクってのがあるんだよねー」

シルフは誇らしげに胸を張った。

「ランク？　なんだそりゃ？」

「……ふーん？　知らないの？　知らないんだー？」

目を細めて、愉しそうに一を見遣るシルフ。

意趣返しのつもりだろうか。

「成人したっつっても、俺はまだ二十そこそこしか生きてないからな。しかも学生の身分だし。知らない事はたくさんあるよ」

留年も一回したし。とは、言わない。せめてものプライドだった。

「ふふーん、教えてほしいだろ？　頭を下げれば考えてやってもいいぞ」

「……でも知らない事より知りたくない事の方がこの世には一杯あるんだよね」

ふいっとそっぽを向き、一はシガーチョコを齧る。齧り続ける。

「な、おっ、おい、聞け！　聞けよ！　聞いてくれなきゃつまんないじゃん！」

「んー、やだよ。俺唯でさえ脳味噌の容量少ないんだから。余計な事聞いて無駄遣いしたくない」

「後で外付けすりゃ良いじゃん！」

「何をだよ！」

「うっ、うるさいなあ！　良いからシルフ様の話を聞けよ！」

うきゃー、とか金切り声を上げながらシルフが空中で地団太を踏む。

「あー、もう分かったよ。分かったから」
「……ふ、ふん、はじめっからそう言えば良かったのさ！」
「聞いて欲しいなら頭を下げろと言いたい所だけどな」
「よーし、じゃあシルフ様のすばらしさを救いようのないニンゲンにも分かるよう教えてやる」
シルフは目を瞑り、腕を組み、ふんぞり返る様に語り出した。
「まず、シルフ様は強い」
「お前影に飲まれてたじゃん」
「あ、あれはわざとさ！　ちょっと遊んでやっただけだもん、パフォーマンスだもん！」
「そうか、パフォーマンスだったのか」
顔を真っ赤にして怒るシルフを横目に、一はぼんやりと、今日のミーティングの事を考える。働き始めてから、始めてのイベントだった。一体何を話すのだろう。話し合うのだろう。意見を出すのだろう。あの、メンバーで。
「とにかくシルフ様はサイキョーなの。そしてシルフ様は、すごい」
「おお、なんと分かりやすい。はい、話おしまい」
「終わらすなよ！」
「じゃあ、もっと具体的に自己アピールしてくれよ」
全く凄さが伝わらない。
「……んー、昨日雲の上を散歩してたら飛行機にぶつかりそうになった。アレ怖いよ、何であんな鉄の固まりが空を飛べるのさ」
「そりゃ事故アピールだろ。そうじゃなくて、お前の凄い所を述べよ」
「風を自由に操れる、ボクすごい」
「まあ、確かに凄いけど……」
えっへん、と。言わんばかりにシルフは誇らしげだった。
「オマエには何かすごいところはないの？」
「ないよ。ビックリするほど、ビックリし過ぎて逆になんとも思わなくなるぐらい俺には何もない」

「へへーん、まあ舌がお子様なヤツには仕方のないことだよねー」
「精々、目隠ししてお菓子を食べて、その品名を答えられるぐらいだな」
「すげー！」
シルフは目をキラキラさせて、一を尊敬の眼差しで見つめる。
「誰かさんにずっとお菓子を買ってあげてる内に、いつの間にかそんなスキルが身に付いてしまった」
どんな味の、どんなお菓子をあげればシルフは喜ぶのか。苦心し、研究し、浪費し、一は必死にお菓子を食べ漁った。その結果身に付いた、ある意味無駄極まりない技術であった。もう途中からは目的がずれていた気もしていたが、北駒台店の甘味ならば、極めている。そう、自負している。
「ニンゲンにしてはやるじゃん、シルフ様びっくり」
「ふっ、そう褒めるなよ」
――空しくなるから。
「そう言えば、オマエあのタバコってヤツ吸わないの？　いつもぷかぷかやってんじゃん。ボクはすごく煙たくて好きじゃないけどさ」
「あー、うん。煙草はやめたんだ。禁煙」
「ふーん？　まあ、シルフ様にしちゃありがたいけど」
「そうかい」
シガーチョコを銜えながら、一は空を仰ぎ見た。
「ま、こんなの食べてるところで、完全に断ち切れるとは思っちゃいないけど」
未練たらたらだ。そう言って、一は笑う。
「それ甘いの？　苦くない？」
「ん、チョコだからね」
「じゃあシルフ様にも早くくれよ」
「はいはい」
ポケットからお菓子の箱を取り出し、一は一本摘み上げ――
「あ」

――ようとした。
「何じらしてんのさ、意地悪すんなよ」
「あー、そうだね……」
しまった。食べ過ぎた。
「じ、実は……」

駒台には今日、台風が来るらしい。
そう断言された一は、オンリーワン北駒台店のバックルームで、ミーティングが始まるまで大人しく座っていた。
「はあ……」
「一さん、どうしたんですか？」
「いや、自然災害って怖いよね」
「……はあ……」
パイプ椅子を一の隣に並べるのは神野剣（かんのけん）。彼もまた、ここの勤務外だ。ツンツン頭に学ラン。いつもの彼の格好。
「ミーティングって何を話すんでしょうか？」
「さあ。昔、他の店ではそういうのあったけど、オンリーワンのミーティングだからね」
何が起こるか分からない。付け加えて、一は店長を見遣る。
「ろくでもない事、じゃない事を祈るだけだよ」
「聞いた話だと、新人さんが来るらしいですよ。それと自己紹介をするだとか」
「そうなんだ？　へえ、また新しい人かあ。ここも賑やかになっていくなあ……」
殆ど自分以外に店員がいなかった時期を思い出すと、感慨深かった。もう、嫌でも。
「でもなんか、自己紹介ってのも今更だよなあ」
「改めてするのも、何だか恥ずかしいですね」

そこで、神野はふっと顔を曇らせる。
「挨拶って、どういう風にしたら良いでしょうか？」
「え？　あ、いや、普通で良いんじゃない？　っていうか、そういうの神野君の得意分野っぽいんだけど……」
「いえ、ほら。普通の挨拶だとあの人たちが何か言ってきそうで」
「あー……、あの人たちね……」
あの人たち。
「そう言えば、挨拶で思い出したんだけど」
「はい」
「昨日さ、店に行ったら糸原さんが、恐らく、恐らくメイドの真似してたんだけど、俺はもう恐ろしくて何も言えなかったんだ。家に帰ってもずっと『ご主人様』とか言われてたんだけど、俺はどうしたら良かったと思う？」
「……」
聞くだけなら、羨ましい話を一は訥々と語った。
「またテレビの影響を受けてんのかな、あの人」
「……大変ですね」

ミーティング開始時刻は午後五時。現在時刻四時三十分。
ミーティング開始まで三十分。
「ちょっとご主人様ー、何で先に行くのよ。起こしてくれても良かったじゃない！」
あの人、一号――糸原四乃（いとはらしの）――がやって来た。
黒いスーツに黒い長髪。居丈高な態度。いつもの彼女。
「……」「……」
「何よ？　何とか言ったらどうなのよ？　危うく寝過ごしちゃうところだったのよこっちは。本当にあんたって使えないし金もないし学もないし、ないない尽くしの甲斐性なしね、ご主人様」

「……その、語尾に『ご主人様』を付けるのをやめて欲しいんですけど」
恐る恐る、一が口にする。
「ありゃ？　メイドはお気に召さないかしら？」
「いや、メイドは好きですけど、ご主人様とさえ言えばどんなぞんざいな言葉遣いであってもメイドだろうと言う糸原さんの心遣いはお気に召しません」
「やーん、ご主人様が何言ってるか、しのわかんなーい」
「……あの、一さん？」
非常に冷めた目で、神野が問いかける。目を覚ませ。そう言っているように、一には感じられた。
「ち、違うんだ神野君。俺は嵌められている！」
「ご主人様ったら『はめる』だなんて超ひわーい」
「だああ！　いい加減にしてくださいよっ、卑猥なのはどっちだセクハラ魔神！」
「もううっさいわね、まるであんたに、メイドに関して一家言あるみたいな感じで鬱陶しいんだけど」
やれやれ、と。呆れた風に糸原は頭に手をやった。
「勿論あります。メイドってのはご主人様に尽くす者なんですよ。尽くしてくれなきゃ嫌です。語尾や呼び方を変えたところで、そんなの偽者なんですよ。人に奉仕する心、つまり……、そう、愛。愛がなければスーパーメイドじゃないんです。本物ではなく、唯のバッタモン。分かりますか、糸原さん？　あなたは言わば、流行の波に乗ろうとしているにわかサーファーなんですよ。と言うか、気持ち悪いからそろそろやめて下さい」
「ふーん、分かったわご主人様」
「表出ろてめえ！」

ミーティング開始まで二十分。

「今日って四時からだったっけ？」
そう言いつつ、立花真（たちばなまこと）が姿を現した。
黒い、烏の濡れ羽色のセーラー服。ポニーテール。いつもの彼女。
「……あのさ、もし本当に四時からだったら遅刻だよ？」
「だって学校終わるの遅かったんだもん。はじめ君は酷いや」
既に、立花の瞳には涙が浮かんでいる。
「立花、今日も補習だったのか？」
「あ、けん君。今日もボクを置いてったでしょ？　いつも一緒に行こうよって言ってるのに。ホントに二人とも酷いよね……」
「おい泣くなよ。お前本当に涙腺緩いな……」
めそめそとする立花。何故か竹刀袋に手を伸ばしていた。
「ねえ、この子なんで刀出そうとしてるの？」
「癖、らしいですけど」
耳打ちする糸原に、神野が気後れしながらも答える。
「……神野君と立花さんって、学校同じなんだっけ？」
「実はクラスも同じだったりするんですよね……」
はあ、と。溜め息を吐きながら神野は返答した。
「いつの間にか、俺が立花の世話係に……」
「大変だね、神野君も」
すっかり仲間意識が芽生えた二人だった。
「あ、そうだ。はじめ君、あのワンちゃん見てない？」
「……ワンちゃん？」
「うん。毎日ご飯あげてたんだけど、今日はまだ見てないんだ」
「あの、ワンちゃんって、この間の、あー、犬？」
嫌な予感が一の体を通り抜ける。
「うんっ、あのお腹が気持ち良い子だよ」
「……えーと、見て、ないなあ」
「うーん？　どっか行っちゃったのかなあ。せっかく名前も考えたのに」
残念そうに、立花が肩を落とした。

そんな立花の様子を知ってか知らずか。恐らく知っていて糸原は話に割り込む。
「犬って、あれ？　この前の筋張ってた犬？」
「その覚え方はどうかと思いますが、まあ、その犬です」
「ふーん。まだこの辺にいるんじゃない？　来るとき見たわよ」
ぱああ、と。その言葉に立花の顔が輝いた。
「ほ、ほんと？　ど、どこで見たの？」
「私の家の近く」
「いや、それを言うなら俺の家の近く、でしょう？」
「うるさいわね。口挟むんじゃないわよ」
糸原はナチュラルな動作で一の尻を蹴っ飛ばす。
「そ、それで？　元気にしてた？」
「うーん？　元気だったんじゃない？　野良犬同士で喧嘩してたから」
「……」
どこまで落ちていくんだ。一はコヨーテに対し、同情を禁じえない。
「良かったあ。じゃあ、帰りにはじめ君にご飯あげよーっと」
空気が固まる。冷たくなる。冷えて、固まる。
「あ、あれ？　みんなどうしたの？」
「……た、立花？　お前、今、何て言った？」
神野の声は震えていた。
「え？　はじめ君にご飯をあげようって……」
きょとんと小首を傾げる立花。
「あんた、いつの間にヒモになってたの？　私も混ぜなさいよ」
「なってない！　ちょっ、立花さん？　俺にご飯って何？　なんですか！？」
「え、え？　あ、ち、違うよ、はじめ君じゃなくて、違うはじめ君の事だよ？」
「違う俺！？　それ見たら俺死んじゃうじゃん！」

ドッペルゲンガー。
「？　そうじゃなくて、あのワンちゃんの名前だよ？」
「え？　あ、そうだったのか。ふう、良かった良かった」
「えへへ」
何故か笑う立花。
「って言うか、何で一さんの名前を犬に付けてんだ？」

ミーティング開始まで、残り十分。
「グッモーニン、お兄ちゃん！」
高らかに、快活に叫びながらジェーン＝ゴーウェストは現れた。
眩いばかりのブロンドヘア。ツーテール。いつもの彼女。
「何で俺だけなんだよ」
「もう、お兄ちゃんったら照れちゃって」
分かってるくせに。なんて言いつつ、ジェーンは指で一の腹を突く。
「突くんじゃねえよバカ」
「ふふ、嘘ばっかり」
「ちょ、離れろよ。ああ、もう！　糸原さん、助けて下さいよ！」
糸原は、と言うか、神野も立花も一たちから距離を取っていた。
「ええ!?　何この距離感！　助けてってば！」
「……んな事言って鼻の下伸ばしてんじゃないわよ」
「一さんって基本的にたらしっぽいですよね」
「はじめ君なんて嫌いだもん」
一は三者三様三方向から攻撃を食らう。
「うわあ、傷付いた。特に神野君のが一番効いた……」
「でも確かに、一ってジゴロっぽいわよねー。とっかえひっかえ女の子と遊んでそう」
「ボク、はじめ君の事信じてたのに……」
「そう言えば、前に一さんが女の人と街を歩いてたの見ましたよ」

「神野君!?」
ぐぐっと。一の腹に触れていたジェーンの指に力が入った。
「……お兄ちゃん?」
低い、声でジェーンは問う。詰るように、責めるように。
「デタラメだ! 言いがかりだ! 根も葉もない噂だ! だからお腹の肉を摘まないで!」
「あーでも、あんたは大丈夫なんじゃない?」
「何がヨ、イトハラ」
糸原はジェーンを指差しながら、軽い口調で続ける。
「だって一ってロリコンだし」
「……一さん」
「だから違うって!」
神野から浴びせられる視線が痛い。
「じゃあロリコンじゃなきゃ何だって言うのよ? って言うかねあんた、曲がりなりにも私と、この私と、この『私』と一緒の部屋に住んでるのに、何の反応も見せないなんてそうとしか思えないじゃない。じゃなきゃ、男としての機能死んでんじゃないの?」
「そりゃ、糸原さんに魅力がないからでしょ」
あっけらかんと、あっけなく一は言い放つ。
「……へえ……」
眉間に皺を寄せながら、糸原は椅子から立ち上がった。
「ちょっと、お兄ちゃんに近寄らないで」
「うっさい。その可愛らしい髪の毛食べるわよ」
「……や、やめてって言ってるでショ」
「ふふ、語尾が弱いわよ? ほら、自分の髪の毛と一の命、どっちが大切なの?」
「……う」
答えに窮するジェーン。
「お、おいジェーン? 悩む事ないだろ? な、な?」
やがて。

スッと、糸原を真っ直ぐに見つめ、椅子から立ち上がり、ジェーンは一から離れた。
「えー？」
「ごめんね、お兄ちゃん。ここはレディのライフなの」
髪の毛を押さえながら、ジェーンは可愛らしく舌を出す。
「俺のライフ多分なくなるんだけど」
「言い残す事はあるかしら？」
「俺はロリコンじゃありません」
「そう」
目の奥で、星が散った。

「ねえ、けん君。ロリコンって何のこと？」
「……ローリングコンビネーション」
「ふうん？　どこかの流派の奥義？」
「……手を出すと、捕まる」
「禁じ手なんだね。そっかあ」

ミーティング開始まで、残り三分。
「……」
無言で、機嫌が悪そうに、あの人二号こと三森冬（みつもりふゆ）がやって来た。
赤。赤。赤。真赤なジャージに短い金髪。煙草を銜える、いつも通りの彼女。
「三森さん、おはようございます」
「おう」
短く返し、三森は空いていたパイプ椅子に腰を下ろす。
「ミツモリ、十分前行動を心がけてって、アタシ言ってるでショ」
「……黙れよチビ。私の勝手だろうが」
神野と立花は、三森から少し離れたところに椅子を並べて座って

いた。
「まあ良いじゃない、妹。一応、遅刻無しで来たんだしさ」
「ダメ、ちゃんと言って聞かせないと」
「……？」
一は見逃さなかった。糸原の唇がつり上がる所を。酷薄に、刻薄に。
「ねえ、ヤンキー」
「……私はヤンキーじゃねェ」
紫煙を吐きながら、三森は気だるそうに、糸原へと視線を向ける。
「まあ、そうよね。ヤンキーだ不良だなんて持て囃されていたって、所詮はあんたもそこまでの人間って事よね」
「ヤンキーは褒め言葉じゃないですよ」
「黙りなさい」
糸原は自然な動きで一の臀部を蹴り上げた。実に無駄のない、スムーズな動きだった。
「てめェ、何が言いたいんだ？」
「べっつにー？　ただ、アレよね。あんたって意外と真面目ちゃんよねー」
「なっ！？」
「何だかんだ言ってもさ、遅刻とかしないじゃん？　無断欠勤もしないしさ」
にやにや、と。分かりやすく愉しそうに、糸原は微笑む。
「そう言えば、三森さんって遅れそうになった時も店に連絡入れますよね」
「ボクもこないだ見たんだけど、ふゆちゃん掃除してたよね」
高校生二人も、糸原に乗っかる。
「てめェら！」
三森は火の点いたままの煙草を床に投げ捨て、椅子から立ち上がった。
「……言われて見れば。ミツモリ、仕事中にお酒飲まないシ」

「はっ、化けの皮が剥がれてきたようね？　みんな、良い？　こいつはこうして煙草吸って髪を染めて真赤なジャージを着て、周囲に『あ、私ヤンキーなんスよ、どうも先輩ごぶさたっス、ちわス』みたいなオーラを振り撒いてるけど、こいつは唯のなんちゃって野郎なのよ！」

神野たちは「そうだったのか」と、何か神々しいものでも見るような目つきで糸原を見上げる。

「いや、別に良いんじゃないですか？」

「ふんっ」

強烈な平手打ちが一の頬を襲った。

「どうよヤンキー。いえ、偽ヤンキー！　あんたには煙草を吸う資格も髪を染める資格も真赤な警戒色丸出しのジャージを着る資格もないの！　あんたにビビるような奴は精々中学二年生までのガキだけなのよ、はっはー！」

「ぶっ殺してやる！　てめェ今すぐ表に出やがれ！」

「あーはっはっはっはあっ！」

「……ちょっと、二人とも飛ばし過ぎです。落ち着いて下さいよ」

ダメージから回復した一が二人の間に割って入る。

「って言うか、糸原さんたちが言ってるの悪口じゃないですから。三森さん、頭に血が昇り過ぎです」

「……そう言えばそうだった気がする」

「気のせいじゃなくて、マジで悪口じゃないです。人から言われる事にイライラしすぎなんですよ三森さんは」

「そうかもしんねェ」

――お？

ここで一は、何か手応えのようなものを掴んだ、気がした。

いつもなら「うるせェ」と一喝されるだけなのだが、今日の三森は何故か大人しい。つまり、溜まりに溜まった文句と愚痴を言えるチャンスだ。一はハッキリとそう思った。

「……良いですか、三森さん。あなたは怒りっぽ過ぎます。短気過

ぎます。短絡的過ぎます。ちょっと人に物を言われただけでカーッとなるのを何とかした方が良いですよ。そんなんじゃ絶対この先しんどいです。どうするんですか、結婚出来ないですよ、その性格を何とかしなきゃ。大体もう二十過ぎてるんですから、もっとこう、年齢を考えたファッションをするべきだと。いつまでもやんちゃ出来る訳ないでしょ？　そろそろ大人になる時期だと思うんです。あと俺の話をもう少し聞いてください。おでん。そう、おでんです。いつもいつも言ってるじゃないですか、大根と卵は絶対に切らさないで下さいって。三森さんには一般の仕事一つたりとも期待してないんです、俺は。だからこれだけは季節柄守って欲しいと思って言ったのに、まるで、まるで！　俺の言うこと聞いてないでしょ！　いつもいつも三森さんのあとはおでんが空なんですよ！　誰が補充すると思ってるんですかもう！　まさかつまみ食いしてるんじゃないでしょうね。あ、つまみ食いといえばこの間肉まんが一袋消えてたんです。疑うつもりはないんですけど、一応聞いておきます。三森さん、食べてないでしょうね？　はい、それと煙草を店内で吸うなってあれだけ言ってるのに、さっきも吸殻見かけましたよ。ご丁寧に商品棚の下に、隠すようにして……！　バレるのが嫌なら端っから吸わなきゃ良いんです！　良いですか！？　俺は三森さんの為を思って」

「うるせェ」

強烈な、凶悪なまでのボディーブローが一を襲った。

午後五時。

ミーティング開始。

「さて、床に転がっている一は一生放っておくとして、ミーティングを始めるぞ」

「わー」

「下手に盛り上げようとするな立花。ミーティングは遊びじゃない

ぞ。まあ真剣にやる必要もないが」
身も蓋もなかった。
「まず、今日から新人が来る」
「ハイっ」
「何だゴーウェスト？」
ジェーンは、こほんと咳払いしてから、
「男？　女？」
可愛らしい声で問いかける。
「質問の意図は掴めんが、女らしい。良かったな男ども」
「……ジェーン、何故睨む。それと踏むな、踏むなって！　いたっ、痛い！」
「あのよ店長、そいつ勤務外で来るのか？　それとも、一般なのか？」
「両用らしい」
「へえ、そいつァ助かる。私の休みも増えるってもんだ」
椅子に深く座りなおし、三森はけらけらと笑った。
「じゃあ私からも。その子、可愛い？」
「糸原、お前の質問はゴーウェストの質問以上に意図が掴めんが、まあ、造形は悪くないらしい」
「さっきから『らしい』ばっかりですね」
ぽつりと、神野が疑問を口にする。
「ああ、私もそいつと会った事はない」
「は？　じゃあ店長、どうやって面接とかしたんですか？」
床から立ち上がり、一が疑いの眼差しを向けた。
「……上の指示だ。ここで鍛えてくれるよう頼まれた」
「ははーん、アマクダリって奴ネ」
知ったかぶった口調で、ジェーンが言う。
「ふーん、じゃあ皆でいびっちゃおうよ、そいつ」
「し、しのちゃん？　皆で仲良くしようよ？」
「だってこれ以上登場人物が増えたら、必然的に私らの出番も減っ

ちゃうのよ？　そいつの靴の中に画鋲入れたり、勝手に退勤登録したり、陰湿な陰口叩こうよー」
「糸原さん、それ以上喋ったら性格悪いのがばれますよ」
その時、不意に扉が開いた。
その際に物音一つしなかったので、誰も気付かなかった。
「ん」
一番に気付いたのは店長だった。
「ああ、来たか」

「お早う御座います」

綺麗な、声だった。透き通った、冷たい声。
まるで、機械の様に、機械的な。
「お前ら、紹介するぞ。新人だ」
振り向いた一たちは目を丸くさせる。
「……」
沈黙。
「お早う、御座います」
もう一度、彼女はそんな事を言った。
メイドの格好をした彼女は、実に柔らかな物腰でそう、言った。

AUTOドール

メイド。

メイドは、清掃、洗濯、炊事などの家事労働を行う女性使用人を指す。

メイドの語源、ｍａｉｄには未婚の少女や処女と言う意味合いから、女性使用人の意味となった為、現在でもこの単語には少女と言う意味がある。

現在、日本のサブカルチャーのおける狭義として、メイドはしばしば『萌え』の対象として語られる。近年は（飽きられた風もあるが）、メイド萌えの客層に特化したメイド喫茶と呼ばれる店が各地にオープンしている。

「あ……」

記憶が飛んでいた。

一は頭を振り、現在の状況を確認する。

「メイドじゃん！」

までもなく、興奮した様子の糸原が叫んでいた。状況を、端的に示す叫び。

一はバックルームを見渡す。ジェーンも、神野も、立花も、三森も、店長でさえ驚きを隠しきれない。そんな表情を浮かべていた。

「ま、またニューフェイスが……」

ジェーンは拳を握り締めて震えている。何故か嫌な予感がした。こういう時の予感を、外した例が無い事を一は自覚している。

「皆様、お初にお目にかかります」

北駒台メンバーの困惑した様子を他所に、腰の前で両手の指先を組み、丁寧にお辞儀する女性。

一言で彼女を表すのなら、糸原が叫んだ「メイド」と形容するの

が一番相応しく、最も簡単だった。
黒のワンピース、白いロングのエプロンドレスに身を包み、白いカチューシャを乗せた、黒髪のショートヘア。肌の露出は殆ど無い。シンプルで、装飾も少ない。唯一の装飾具と言えば、フルリムの眼鏡だけ。
彼女をメイドと呼称するに相応しい格好だった。
「今日から、こちらでお世話になります」
上品で、清楚。彼女の柔らかい物腰、雰囲気に一は呑まれていた。
「ああ、よろしく頼む」
女性のメイド服に慣れたのか、店長は普段と変わらない様子で答える。
「はい」
にっこりと、女性は微笑んだ。
「……あのよ」
呆れたような、どうでも良いような風に三森が口を開いた。
「その、何だってそんなの着てるンだ？」
「そんなの、とは？」
女性は三森を真っ直ぐに見つめ、小首を傾げる。
「だから、その、メイド服だよ……」
三森の口から「メイド」という単語を聞き、一のテンションは何故か上がった。
「製作者の趣味でございます」
女性はお辞儀しながら答える。実に、機械的な動作だった。
「……ふーん？」
「他にご質問はございますか？」
「あ、じゃあ私」
手を上げる必要は無かったが、糸原がやけに元気良く手を上げる。
「何でミニじゃないのよ」
「……」
シン、と。場が静まり返る。静まり返るしかなかった。

「……何が、でしょうか？」
「だーかーらー、なんでスカート短くないのー？　メイド服ってもっとこう、グッとくるもんじゃないの？」
冥土に落ちろ。一は強く念じる。
糸原の低俗な質問に怒る事もせず、
「私がヴィクトリアンスタイルなのは製作者の趣味でございます。お気に召しませんでしたか？」
彼女は鷹揚に応答した。
「んー、そんな事はないけど。結局、可愛いのは可愛いし」
「ありがとうございます」
「ねえ」
ジト目で、ジェーンが女性をねめつけている。
「なんでしょうか？」
敵対心を漲らせたジェーンの視線に怖じる事も動じる事もせず、女性はにこりと微笑んだ。
「あなた、わざわざウチにインタビューもナシでやってきたって事は、強いん、でしょうネ？」
「強い、とはどういう事ですか？」
「あなたも勤務外として呼ばれたんでしょ？　何が出来るのカシラ、って聞いてるのだけど？」
ふふん、と。鼻を鳴らしてジェーンは言い切る。慇懃無礼な態度だった。
「そういう事でしたか。畏まりました、説明させていただきます。現在の私の装備では近距離戦にのみ対応しております。ですが、別途アタッチメントを装着すれば、中距離戦、遠距離戦、特殊な状況下での戦闘にも対応することが出来ます。夜間での狙撃、悪天候下での長時間戦闘など、その他四十八のスタイルに変更可能です」
女性は「ああ」と頷いてから、機械の様に正確に、一言一句淀み無く、噛む事も無くすらすらと言い切る。
「……ふーん。まあまあってトコかしらネ」

女性からそっぽを向いて、ジェーンは拗ねるように唇を尖らせた。
「お褒め頂き、ありがとうございます」
丁寧に頭を下げる女性。一はどこか、間が抜けている印象を彼女から受ける。
「それじゃあ、そろそろ自己紹介でもやっておくか」
「……今更かよ」
「文句を言うな三森。何だ、恥ずかしいのか？」
「……別に」
「あの……」
と。女性が弱弱しく声を発した。
「なんだ？」
「すみません、自己紹介とは、恥ずかしい物なのですか？」
「……いや、違うぞ。自分の名前や特技を言って、皆に愛されたいとアピールする事だ」
「またそんな事言って……」
一の突っ込みも店長の耳には届かない。
「それじゃ、新人から行こうか。おら、早く言え」
「あ、その……」
女性はもじもじと、指を絡ませて俯く。
「何だ？　本当に恥ずかしいのか？」
「い、いえ。そうではありません、ありませんが……」
「なら、何だと言うんだ」
「あの、私、名前が無いんです」

オンリーワン近畿支部、情報部二課、デスク。
「……」
「おや、珍しいですね」
「……漣か」
キーボードを叩く手を止め、春風が来客者に目を向ける。少し、

疲れている様子だった。
「何の用だ？」
「な、何の用とは酷いですね。あなたの報告書待ちですよ」
「……そうか」
短く答え、春風はモニターに再び視線を移す。
「もう期限から二日経ってるんですけど」
答えは無い。
「……北駒台の人員データだけでしょうに。そんなの一時間もあれば終わるでしょ」
漣の遠まわしな皮肉に、春風は吐息を一つ零した。
「分かっていないな。北は、あそこは南とは訳が違う」
「人数だって、戦力だって北は南以下だと思いますけどね」
「ふっ、そうか」
無感情に、無表情に。春風は笑う。彼女の人となりを知っていなければ分からない程度の、小さな、極僅かな変化。
「何でも自分だけ分かったような顔してますね。……俺だって少しは知ってますよ」
「そうか」
キーボードを叩く手は止まらない。むしろ打鍵の速度は徐々に上がっていく。
「まず、北は何と言っても三森冬でしょう。彼女が居なければ、駒台はとっくの昔に廃墟になっていてもおかしくは無いですからね」
「元、戦闘部だからな」
「うーん、どうして辞めちゃったんでしょうかね？　部長クラスになっていてもおかしくなかったのに。俺は、土田（つちだ）さんよりあの人のほうが強いと思ってるんですけどね」
「さあな」
漣はふと、春風のモニターを見た。
「……随分と北を高く評価しているんですね」
「値すると、そう思っているからな」

「あ、この糸原四乃って、確か、タルタロスに喧嘩売った女ですよね」
「それがどうした」と、春風は事も無げに言い切る。
「いや、危険、じゃないですか？」
春風は手を止め、ネクタイを緩めた。
「タルタロスに目を付けられる、か？　今更だろう。大して私たちと変わりが無い」
「まあ、そう言われちゃあアレですけど。でも、糸原の評価が高すぎる気が」
「ならば、一人で土蜘蛛三十を相手にしてみろ」
漣は黙る。
「ジェーン＝ゴーウェストは言うまでもなく、立花真も資質としては充分過ぎる。私の評価に不満でもあるのか？」
「……神野剣と一一の評価の理由は？　奴らは実力も実績も無いと思うんですけど」
「神野剣、か。伸び代だけで見るなら奴が北で一番だからな。目立った実績は無いが、隠神刑部とカトブレパスに関わって、生きて帰っている」
「若さ、かあ」
遠くを見ながら、漣は呟いた。
「でも、一一だけは納得いかないですね」
「ふん、そうか、お前は一一が嫌いだったな」
「……アイギスを持ってるってだけでしょう。個人としては、他の連中に比べて酷く劣るかと」
「個人ならばな。アイギスの性質上、一一単体でソレを倒す事は難しい。だが、誰かと組んでいればその力は何倍にも跳ね上がる」
春風はモニターを指で示し、詰まらなさそうに口を開く。
「勤務外に成り下がる前には、釣瓶落とし、鎌鼬、ヘルハウンド、シルフと遭遇。いずれも三森冬か糸原四乃の助けはあったが生還。勤務外としての実績は蜘蛛、ガーゴイル、影、カトブレパス、八岐

大蛇、人狼と遭遇。いずれも誰かの助けがあって生還している」
「つまり、一人じゃ何も出来ないって事じゃないですか」
「そうだ。だが一一は自身をある程度は理解しているらしい。基本、奴はソレと関わるに際し、一人で動かない。偶発的に遭遇するのは別にして、いざ戦闘が起これば、奴の周りには誰かが必ず傍に居る」
「……それが何か？」
「恐ろしい事に、奴の周りには勤務外、フリーランス、ソレを問わず誰かが居る。他に、こんな恐ろしい人間が誰が居る？　そもそも、一一は人間、なのか？　とっくに越えている。人の矩（のり）を越えている」
春風は憎憎しげに声を絞り出す。それでも、漣には彼女と同じ危機感が湧いてこなかった。
「そんなに恐ろしいとは思いませんけどねえ」
「……私が把握している一一の性格上、起こり得ない事ではあるがな。もし奴が自分の為だけに、誰かを敵と定め、標的にして動くなら、どうなるか分かるか？」
「？」
「一一は流されるままに勤務外になった。大した目的も、確固たる意思も無く、な。だが、奴が目的を作り、敵を作り動けば奴だけでは済まん。必ず、確実に一一に呼応する者が現れる。一一が何もせずとも、何も求めずとも味方に付く者がいる。或いは、一一が声を掛ければ動く者もいる筈だ。お前はまだ分からないのか？　果たして、一一を誰が止められる？」
ごくり、と。漣の唾を飲む音がフロアに響く。
「も、もし、もしの話ですよ。一一が俺ら（オンリーワン）の敵に回ったとして、止められないって事は無いでしょう。こっちにだって戦闘部はいます。医療部だって、技術部だって、情報（おれら）部だっています。戦力的に劣るなんて、まず有り得ないでしょう」
「……私が確認している限り、北駒台は全員、南駒台はヒルデたち戦乙女（ワルキューレ）、フリーランスならば図書館と神社が、ソレならばシルフ、ガーゴイル、コヨーテが。可能性は薄いが、タルタロス、医療部の

炉辺、場合によっては堀も動くだろうな。となれば、止められない、と言うのもおかしくはないさ」

「な。そ、そんな馬鹿な……」

「全員が全員一一に付くとは思えんが、動く。確実に誰もが一一の言に踊らされて動かされる。私はそう、確信している」

言葉が無かった。漣は馬鹿げた考えだと思いつつも、頭の片隅に言い知れぬ不安が凝り固まるのを感じている。

「ま、まあ、もしもの話ですよね」

「ふっ、そうだな」

「……ん。あの、この名無しってのは？」

「ああ、言っていなかったか。今日から北駒台にアレが行く」

春風は事も無げに言う。やはり無感情に、無表情に。

「アレって、技術部のアレ、ですか？」

「らしいな。実に馬鹿らしく、空恐ろしい」

「北駒台だけで、小さな国なら潰せるんじゃないですか？」

「どうだろうな」

暖房が効いている筈なのに、漣の体は嫌に冷たくなっていた。

「……あの、もう一つ聞いて良いですか？」

「なんだ？」

「さっきの、一一の呼びかけに、春風さんは応じ、ますか？」

「ふん、そうだな……」

春風はキーボードを叩きながら、思案する素振りを見せる。

「条件次第で、考えてやっても良い。と言う所か」

それだけ言って、もう一言も春風は口を開かなかった。

「製作者には七号と呼ばれていました」

自分には名前が無い。そう言った彼女は慌てたように、こう付け加えた。

「……名前が、無い？」

女性の言葉に、一は不信感を募らせる。
「申し訳ございません」
「あ、いや、あなたが謝る必要は……」
頭を下げる女性に、一は息苦しさを覚えた。こういうのは、得意じゃなかった。
「ふーん、それじゃ不便だよね」
あっけらかんと、立花は気軽に言ってのける。
「ま、まあ、不便っちゃ、不便だけど。何か他に言う事があるような……」
「そうかな？　この人にも色々と理由があるんじゃないの？」
「うーん」
まさか立花に諭されるとは思っていなかったので、一は少したじろいだ。
「そうだ、ボクたちで名前を付けてあげようよ！」
「立花、ペットじゃ無いんだからさ……」
「何が良いかなー」
神野の言い分は無視して、立花は自分の世界に浸り始めた。
「まあ、遊び程度にな。それじゃあ、私たちが先に自己紹介を始めよう。自己紹介の最後に、各々が考えた七号の名前も付け足す事。良いな、お前ら？　七号、もし気に入った名前があるなら改名しても構わんぞ」
権力を振りかざすように店長は述べる。
それでも女性は、
「畏まりました」
と、他人事の如く丁寧なお辞儀をした。
「……それじゃ、そうだな。一、お前からだ」
「え、俺から？」
「当然だ。お前の名前は飾りか。一を冠しているんだからお前から言うのは当然だろう」
そう言って、店長は煙草に火を点ける。

「まだ何も考えてないんですけど……」
「良いから言え。時給下げるぞ。後は、そうだな、一の反時計回り、順番に言っていけ。最後が私だ。ああ、その次に七号、君が頼む」
「畏まりました」
「……うーん」
気は進まないが、仕方ない。トップバッターなので気は張るが、一は椅子から立ち上がり、七号を見つめる。
「えーと、数字の一が二つで一一、です。ここにはつい最近から働かせてもらっています。一般がメインで、勤務外も少しだけやってます。分からない事ばかりですが、その、皆さんで助け合ってやって行きましょう」
「はじめちゃんって呼んでもいーい？」
「呼んだら部屋から追い出します」
――うるさい外野。
「一、七号の名前はどうした？」
「あ、そうか」
店長に言われ、一は頭を捻った。
「七号さん、だから、じゃあ、ナナさんで」
「ナナ……、良い名前だと思います」
一は微笑む女性から目を逸らし、安直に考えてしまった自分を恥じる。
「お兄ちゃん、ネーミングセンスナイのネ」
「うるさいよ」
手振り身振りを挟みつつ、当たり障りの無い自己紹介を終えると一は席に着き直した。
「一（にのまえ）さん、ですね。こちらこそよろしくお願いします」
「あ、こちらこそ……」
「ところで、一さんはソレとの戦闘において何か装備でも？」
「あ、えーと。アイギスって傘を」
「……成る程。あなたが？」

「？」
女性が納得したように頷いている理由が一には分からなかったが、質問する前に隣のジェーンが立ち上がってしまう。
「ジェーン＝ゴーウェスト、オンリーワンアメリカ支部からＳＶとして来たワ。アタシはバイトとは違って一般も勤務外もどっちもオッケーだから、ヨロシクね。Ｈｍ、そう、ネ。アナタの名前はクソメガネでどうかしら？」
「……悪口じゃん」
「クソメガネ……、良い名前だと思います」
「良くないよ！　それ悪口だから！　って言うか誰か突っ込んでよ！」
人数がこれだけ揃っていて、突っ込み役は自分だけなのかと、一は不安を覚えた。
「さっきから一はうるさいな。それじゃ次、糸原」
「ん」
糸原は髪の毛を梳きながら、もったいぶった動作で椅子から立ち上がる。
「糸原四乃よ。見たら分かると思うけど自他共に認める超美人。あんたたちからすりゃ高嶺の花みたいな存在かもしれないけど、気軽に糸原様と呼んでも構わないわ」
「黙れ性格ブス」
「一、あんた後で覚えときなさいよ」
「俺じゃない！　言ったのは三森さんですよ！？」
「……一般も勤務外も両方こなせるわ。私が居ないとこの店はどうにもならない状態だから、誰よりも私を尊敬して、大切にしなさい。そんでもって、あんたの名前は……バーツ！」
最後に女性を指差して、糸原は悦に入った。
「バーツ……、タイの通貨ですね。良い名前だと思います」
「でしょー？」
「七号さん、言いたい事があるなら言った方が良いと思いますよ？」

しかし女性は微笑むだけで何も言わない。
「……三森」
そんな中、ぼそりと、座ったままの体勢で三森が呟く。
「わりーけど、名前を考えるのは得意じゃねェ、とりあえずよろしくな」
「はい、よろしくお願いします」
「ま、死なねェように頑張ンな」
三森はそれだけ言うと、もう女性には興味無さげに、弄んでいた煙草に火を点けた。
「こいつさー、一丁前に照れてんのよ」
「……うるせェ」
擦り寄ってくる糸原を鬱陶しそうに手で払う三森。
「それじゃ次は俺ですね」
咳払いをしてから、神野が立ち上がる。
「神野剣、高校生です。新人ですけど、精一杯皆さんに付いていける様に頑張りますっ」
溌剌とした声が、バックルームに朗々と響いた。
「うん、元気が良い。本当に神野は主人公気質だな」
誰かと違って。そう付け足し、店長は喉の奥で笑いを噛み殺す。
「ええ、元気があるのは良い事だと私も思います。神野さん、これからよろしくお願いしますね？」
「はっ、はいっ」
「けん君、名前はー？」
「う、あ、そうだった」
立花にジト目で見られ、神野は女性を見ては目を逸らし、見ては目を逸らした。
「そ、その、それじゃあ、エミリーさんで……」
「エミリー……、良い、名前だと思います」
にこり、と。女性は笑む。
「なーんか、男ってネーミングセンスが安直よねー」

「はいっ、じゃあ次はボクね！」
妙に楽しそうに、立花が立ち上がった。
「立花真っ、ボクもけん君と同じで高校生、きゅーしゅーから来たばっかりで分からない事もあるけど、よろしくねっ。それとね、えと、君の名前は……はじめ君っ！」
シン、と。場が静まり返る。静まり返るしかなかった。
「あ、あれ？　な、何で？　何で皆黙っちゃうの？」
一は恥ずかしそうに頭を抱えている。
「……何で一さんの名前を使うんだよ……」
「だっ、だって、だってだって！」
「はじめ君……、良い名前だと思います」
「もうやめてくれー」
今日は厄日だ。使い古された言葉だが、一はそう確信した。
「あっ、あとね、ボクも勤務外なんだ！」
誇らしげに胸を張り、
「これがボクの武器ー」
立花は竹刀袋から刀を取り出す。
「立花さんは剣士様でいらっしゃるのですね」
「うんっ、ほらほらっ、見てみて！」
女性に微笑みかけられたのが嬉しいのか、立花は鞘から刀を、抜いた。
「すっごくきれいでしょ！」
「うわあ！」
煌く刀身を振り回す立花。刀の切っ先が、隣に座っていた神野の耳を、頭を、体を掠めていく。
慌てて飛び退く神野。
「やめろバカっ！」
「アタシたちをコロす気！？」
「私さ、やっぱこの子怖いんだけど」
「てめェ！　私を盾にすンじゃねぇよ！」

「だって斬られたら死ぬんですよ！？」
「立花、頼むから落ち着け」
きょとんと、小首を傾げる立花。
「？　どうして？」
全員が立花から距離を取り、檻から放たれた獣を遠巻きに眺めていた。
「こんな狭い所で刀抜く奴がいるかっ！」
「う、けん君怖い……」
――怖いのはお前だ。
「……とりあえず、全員座れ」

閑話休題。

「二ノ美屋、店長だ。名前は何でも構わん。七号、君の好きなようにしろ」
それだけ言うと、店長は紫煙をゆっくりと吐き出した。
「うわあ、凄く店長だ……」
「はい、二ノ美屋さん、よろしくお願いします」
「……ああ。それと、ウチにはあと一人いたな」
「あの、今店内にいらっしゃる方ですか？」
「ああ、そうだ。堀と言う。一応社員だ」
堀の扱いがどんどん悪くなっていくのを、一はまざまざと感じた。
「ねえ、名前はどうすんのよ？」
「ああ、そんな話もあったな」
「店長が言い出したんでしょうが」
店長は一を一睨みし、女性に視線を移す。
「何か、気に入った名前はあったか？」
「そうですね……」

ナナ。クソメガネ。バーツ。エミリー。はじめ。
「無いだろ……」
まるで苛めだ。一はこの企画を止めた方が良いと思い直した。

「ナナ」

立ち上がろうとした一より前に、彼女は、ナナは、優しげにそう言う。
「え？」
「私の名前です。ナナが気に入りました」
上品に、女性は一へと微笑む。
「あ、いや、気に入ってくれたのは嬉しいんですけど、その……」
にこにことしている彼女を見ると、適当に考えたとは言い出しにくかった。
「まあ、クソメガネよかマシだよな」
げらげらと、三森は笑う。まるで、と言うか他人事。
「何よー、バーツは気に入らなかったの？」
「他の皆様には申し訳ないのですが、照合した結果、ナナが一番合理的かと思いましたので」
「……合理的？」
一が不思議そうにナナを見つめる。さっきから、誰も言い出さないのがおかしいほどの違和感。
「はい。ナナ、が、一番短く、呼称しやすいと結論付けました。いけません、でしたか？」
「ああ、そういう事か……」
ちょっとだけ、残念だった。
「ははーん、残念だったわね、にのまえー？」
「だああ、もう、糸原！　バカ！　尻触んなよ！」
「事情はともあれ、決まりだな。それじゃあ最後にナナ、君の自己紹介だ」

「畏まりました」
ナナは深々と頭を下げ、一同を順々に見渡す。無駄の無い、まるで――
「今日からこちらでお世話になります、ナナと、申します。皆様に比べて、まだまだ至らない点はあると思いますが、逐次修正して、即時対応していきますので、どうかよろしくお願いします」
「……あの」
声を潜め、一は隣に座っている糸原に声を掛ける。
「何よ？」
「……みんな、どうして聞かないんですか？」
「何がよ？」
不機嫌そうに眉を顰め、糸原は一を睨み付けた。
「いや、だからっ、さっきからナナって人――」
ナナの、言葉の端々に滲む違和感。
一は強くそれを感じていた。だから。

「――ああ、一さん、私は人ではありません」

ナナは一の言葉に反応し、にこやかに微笑む。どこか作り物めいた、完璧な微笑み。
「え？」
「私、オンリーワン近畿支部の、技術部によって作られた自動人形（オートマータ）でございます」
突然に、忽然と。
「オート、マータ？」
「はい。自動人形とは、自らの意志で動く人形の事でございます。聞き馴染みのない言葉でしたらゴーレムやロボット、アンドロイドと言っても差し支えは無いと思います」
「えっと……、冗談、ですよね？」
今までの短いやり取りの中で、ナナが笑顔で嘘を吐くようなタイ

プの人間とは、一には思えなかった。
「申し訳ございません、一さん。私は冗談を言えるようには作られておりません」
「……これは……」
本当に、冗談じゃない。
「それでは皆様」
ナナは、黙りこくるメンバーたちを気にした素振りを見せず、
「改めまして、これからもよろしくお願い致します」
そう、言い切ってお辞儀した。
――まるで、機械みたいに正確な動作で。

ＤＯＬＬは静かに笑う

昼には女の形をして、夜には魔に姿を変える生き物。女と魔。どちらが真実なのか、あるいはどちらも真実なのかもしれない。そも、往々にして女は魔を含むモノなのだ。

――魔女。

真実は分からない。真実などあって無いような、不確かで曖昧で。それでも一つだけ、確かな事がある。それの正体が女であれ魔であれ魔女であれ、姿形を見た者は誰彼口々に揃えてこう言うのだろう。

――化け物。

そう、言うに決まっていて、化け物はいつだって鏖殺（ころさ）れ、魔女はどうしたって狩られるのが、この世の常だ。

俄かには信じられず、確かには飲み込めない事実。

「……」

一たちの目の前で微笑を絶やさない彼女、どこからどう見ても、ただの人間のナナが、人間でない、事実。

「本当に、人間じゃない？」

「はい。私はオートマータでございます」

一の再三の問いにも笑顔を崩さず、ナナは綺麗にお辞儀する。

「まっ、ありえねェ話じゃねーな」

茫然とする一を尻目に、三森は笑った。

「テクノロジーの無駄遣いね」

べたべたと。糸原はナナの全身をためつすがめつ眺め、僅かに露出した肌を遠慮なく触り続ける。

「髪だってサラサラだし、肌だってモチモチだし、……割と、スタイル良いし」

「ありがとうございます。私のコンセプトは人間より人間らしく、そう作られましたから、糸原さんの様に言って頂けると、とても嬉しいです」
「うん。その辺の女より可愛いわよ。その辺の赤いジャージの奴より可愛い」
「黙れ黒スーツ。てめェは言う事全部胡散臭いンだよ」
「……ですが」
「ん？」
睨み合う二人へ遠慮深く視線を向けながら、ナナは俯いた。
「お二人とも、美人のカテゴリに入るかと思いますよ」
「……なンだって」
「あら、あらあら、あんた、可愛い上にお世辞も上手いのねー」
「いえ、そのような事は……」
可愛いと言われ、躊躇いがちに顔を上げるナナの挙動は、誰がどう言おうが、人間そのものだと、一はハッキリと認識する。
「ねえ、じゃアタシは？　アタシもビューティー？」
「……ゴーウェストさんは……」
「ミツモリとイトハラが美人なら、アタシだってソウよネ！」
ずい、と。ジェーンはナナにプレッシャーを掛けていく。
「ゴーウェストさんはまだ美人、では無いかと」
「オーマイゴッド！」
一はうな垂れるジェーンの肩を叩き、
「ノーと言える日本人は好きって言ってたろ？」
曖昧な微笑を浮かべた。
「おせちも言えないヤツは嫌いなノ！」
「はいはい、お世辞な、お世辞」
「あの……、私はゴーウェストさんが美人では無いと、そう言った訳ではありません」
意気消沈するジェーンへ、申し訳無さそうに、ナナは口を開く。
「……じゃあ、どういうワケなのヨ？」

「ゴーウェストさんはまだ若い方です。でも、将来、必ず美人になりますよ。今はまだ。私はそのつもりで言ったのですが、ご気分を害してしまったようで……」
「……う」
一たちには、瞼を閉じ、顔を伏せるナナの姿がやけに痛ましく映った。
「ま、まあ、ソウいうつもりなら、良いんだけど……」
「そう、ですか。良かった……」
「ねえねえ、だったらボクは！？」
「立花さん、は……」

――ジリリリリリ！

ハッ、と。バックルームに居た全員が息を呑む。ここで、オンリーワンにおいて電話が鳴る意味。その意味を、全員が理解していた。
「ミーティングも一旦お開きだな」
鳴り響く電話を注視する一同を見回した後、店長は余裕たっぷりに受話器を手にする。
「私だ」
店長は口元を愉しげに歪め、まだ名乗りもしていない相手へ、それだけ口にした。

駒台の街。
陽はとうに落ち、暗くなりつつある路地を街灯が照らしている。
風は吹いていないが、人通りの殆ど無い道はどことなく、寒い。
「何よ……」
腹が立った。
通話を終えた彼女がまず感じたのは、怒り。
「……何なのよっ」

声を潜めて、憤りをぶちまける。握り締めた携帯電話はミシミシと嫌な音を立てていた。

店長だ、と。彼女は、通話の相手がそう名乗っていた事を思い出す。ふざけたような、他人を見下し、馬鹿にした態度だった。あの声を思い出すだけで、彼女の腹は煮え繰り返る。

「何で私がっ」

こんな思いをしなければならないのか。コンクリートの塀を背にした彼女は、先刻までの行動を振り返る。

仕事が終わり、いつもと同じ時間に会社を出て、いつもと同じ時間に電車に乗り、いつもと同じ時間に家に帰る。

それだけ。他に無い。振り返るまでも無い。それは、彼女がほぼ毎日繰り返している変わりの無い日常、終わりの無い現状だった。

つい、さっきまでは。

死ぬまで変わらない彼女の日常に変化をもたらしたのは一人の女、だったモノ。前触れも、予兆も無かった。当たり前のようにそれはいた。ソレは、いた。

街灯が点き始める時間、陽が落ち始める時間、昼から夜に変わり始める時間に、彼女はソレと出会ってしまったのだ。

逢魔が時。

幸い、ソレは彼女に気付く事無く飛び立っていった。

しかし、彼女は今もその場から立ち去る事が出来ずにいる。最初は茫然として、次に、何故か気持ちが騒いだ。ソレと、遭った。遭えた。

何かが、変わった気がした。

そう確信した彼女は、思い立ったがまま、ソレに対処し得る勤務外を擁するオンリーワンに電話を掛けたのだ。

退屈だった。刺激の無い毎日。気だるいルーチンワーク。変わってほしい。そう思ったのは一度や二度の話ではなかった。

「……」

ソレ。この街に、この世界に住む者で知らぬ者はいない、人類の敵。彼女も例外ではない。だが、見た事は一度だって無い。名前だけは知っている。この街に現われたのも知っている。だが、ソレについて何も知らない。オンリーワンやマスメディアが情報を簡単には漏らさないからだ。どんな姿をしているのか、それすらも分からない。一般には、何一つ公開されない。唯一ソレについて一般が知る時があるのは、ソレと出会った時ぐらいの物だと、大抵の人間は一笑に付す。

だが、巡ってきた。笑い話程度のチャンスが訪れた。ソレについて知るチャンス。何より、この退屈な日々に変化を加えられるチャンスなのだ。

彼女は、自分がさっきまで業腹だった事も忘れ、降って湧いた刺激に酔っていた。

「……あら？」

頬に何かを感じる。手で触れてみると濡れた感触が走った。今日、雨が降るとは聞いていない。何故だろうと思いつつ彼女は頭を上げる。

「……い」

変化を求めてはいけなかった。

ソレについて知ろうとしてはならなかった。

彼女がソレと出会った時、一目散に逃げれば良かったのだ。

変化。変わる事。良い方向に転がる事もあるが、悪い方向に転がる事もある。

「いや……」

彼女の場合、今回は悪い方向に転がったらしい。

「いやあっ！」

尤も、今回で終わりだろうが。次回は、無し。彼女が退屈だと嘆いていた人生はこれにて終了。あっけなく、幕を閉じた。

「さて、誰が行く？」
通話を終えた店長の第一声はこうだった。
「……また、ソレが出たんですか？」
「そうだ。今回は近いぞ、歩いても行ける距離だ」
一の不安げな問いに、店長は笑い混じりに答える。
「どんな奴だ？」
「さあな。要領を得ない言い方だった」
「あン？　また春風が邪魔してンのかよ？」
「いや、さっきの電話は一般の垂れ込みだ」
「一般だァ？」
三森が露骨に嫌がる。
「……？　別に誰からの電話だって良いじゃないですか。だって、ソレが出たのは出たんでしょ？」
「ちっ、お前は何も分かっちゃいねェな」
「……何が、ですか？」
「本当にソレが出るンなら、誰からだって構わねェよ」
やけに引っ掛かる三森の物言いに、一は眉根を寄せた。
「……？」
「お兄ちゃん、考えてみてヨ。アタシたちって、勤務外なんだよ？」
見かねたジェーンが一に声を掛ける。
「知ってるよ。だから何なんだよ？」
「……アタシたちはそう思わないけど、ノーマルな人たちは、勤務外のコトが恐いんだヨ？」
「あ」
「お馬鹿な一でもやっと分かったみたいね」
「糸原さん、本当に気付いてたんですか？」
「さあねー」
口笛を吹きながら、糸原は一に背を向けた。
「つまりだな、一般は勤務外に、オンリーワンに良い感情を持って

いない。むしろ嫌悪しているぐらいだろう」
　一は黙って、店長の言葉に耳を傾ける。
「だが、力の差は目に見えて歴然だ。ソレと対等に戦える勤務外相手に一般は何も出来ん」
「……早い話が……」
「そう、嫌がらせだ。一般からの電話は決して少なくない。そのどれもが私たちを踊らす為の虚偽の報告だ。現場に出向いた我々を、陰から覗いてせせら笑っているんだろうな」
「大の大人がそんな事……」
　話を聞いた神野は唇を強く噛み締めていた。
「まあ、十中八九ガセだろうが、無視する訳にもいかん。後で何かあって、責任を追求されるのは面倒臭い」
「……何だかなあ」
　一はやりきれない感情と一緒に溜め息を吐く。どうにも、空しい話だった。
「さて、話は戻るが。現場には誰が行く？」
「はーいっ」
「ん、立花。行きたいのか？」
　ぶんぶんと、立花は首を横に振る。
「みんなで行こうよっ」
「あ。それ良いんじゃないの？　折角面子が揃ってんだから、袋叩きに出来るじゃん。もしソレがいなくてもさ、イタ電した奴見つけてそいつを袋にすりゃ気分も良くなるってもんでしょ」
「悪戯の犯人をボコボコにするのはともかく、俺も賛成ですね」
　一も糸原たちにつられて手を上げる。
「ほう？　一、その心は？」
「……赤信号、みんなで渡れば恐くない」
「はっ、お前の言いそうな事だぜ」
　つまらなさそうに、三森が一を睨み付けた。
　その視線から逃れようと、一は店長に目を向ける。

「駄目、ですかね？」
「駄目だ。金が掛かる」
バッサリと。一刀両断に。
「か、金？　俺たちの命が掛かってるんですよ？」
「知るか。大体、おまえら一人一人にどれだけ金が掛かると思ってる。金食い虫どもめ。人件費については上からもきつくお達しが来てるんだ」
「鬼ですか、あなた達は」
恨めしい視線をぶつけて、一は力なく肩を落とした。
「……ンー、お兄ちゃん？　非難ＧＯＧＯなのも分かるけど、ボスの立場も分かってあげてヨ」
「……やけにノリの良い非難はともかくだな。ジェーン、俺はアルバイトだぞ、店長の立場なんて分かって堪るか」
「ボス、説明してあげてヨ」
「全く……」
やれやれと呟いてから、店長はわざとらしく肩を竦める。
「一、お前なんかに私の立場を理解できるとは思わんがな、バイト如きでも分かるようにこの私が説明してやろう」
「……お願いします」
「うん。勤務外を一度に大量投入できない理由だが、まず金が掛かる事が一番に挙げられる。次に勤務外の同士討ちを避ける為だ」
「同士討ち？」
「勤務外同士でも、仲良しこよしとは限らんだろう？　コンビニなんて小さな世界とは言え、小さいながらに派閥も存在し得る。殺したい程嫌いな奴もいるだろう。……勤務外はソレとの戦闘において、一切の超法規的措置を得られるのは知っているな？」
一は何も答えられずに、ただ頷く。
「邪魔だった。手が滑った。勤務外はそんな舐め切った理由で人を殺めようが、罪に問われない。無論、一般や他からも非難は受けるだろうが、それだけだ」

「……つまり？」
「……勤務外が一度に、大量に投入されればされる程、ソレにかこつけて嫌いな奴を殺してしまうようなケースが増える。集まった力にあてられて暴走しやすくなるんだ」
「……そんなの、人によるんじゃないんですか？　絶対に起こるとは言えないような……」
馬鹿が考えた馬鹿みたいな話だと、一はそう思う。
「なら一、勤務外がぞろぞろと戦場に並んでも、絶対にそんな事は起こらないと、お前はそう言えるのか？」
「そう言われちゃったら困るんですけど」
「……尤も、然るべき相手には計画を立て、信頼出来る指揮官を現場に立たせれば仲間割れ、同士討ちの可能性は下がる。だが、可能性がゼロでない限り、オンリーワンは危ない橋を渡らないのさ」
「……はあ」
頷く事しか出来ない。周りを見ても、誰も彼もが渋々とはいえ、納得しているようだった。
「最後に、これは考えられる中でも最悪のケースだが」
「あ、まだあるんですか？」
「……説明を求めたのはお前だろう。黙って聞け」
「すいません……」
店長は持っていた煙草を床に捨て、踏み付け、不機嫌そうに足を踏みならす。
「考えれば分かる事だがな、例えばウチがお前ら全員を現場に向かわせたとしよう。さて、一。この場合どうなればウチにとって最悪だと思う？」
「うーん。全員で出て行ったけど、糸原さんは勝手にパチンコ行って、立花さんはいつのまにかどっか消えちゃってて、仕方ないから手分けして二人を探そうってなって、俺が三森さんと二人になったら最悪ですね。すげー無駄に舌打ちされそう」
「てめえの安い喧嘩！　買ってやろうじゃねェか！」

目にも止まらぬ速さで、三森が椅子から立ち上がった。
「売ってません！　売ってないから火は出さないで！」
「……座れ馬鹿二人。なあ、一、お前ふざけてるのか？」
「ふざけてません。今俺が言ったのは、最悪中の最悪、死活問題です」
「お前が百回死のうが、千回殺されようが知った事じゃない。ウチにとって最悪なのは、勤務外が全滅してしまう事だ」
ああ、と。幾分か演技掛かった言い回しで一が手を打った。
「そりゃ、確かに最悪ですね」
「考えたくもない話だが、お前ら全員が束になっても勝てないソレが現れたとしよう。ノコノコと群れて、むざむざと一網打尽になんてされてみろ。この街はすぐに消されるぞ」
「いや、でもそんなの現れたら何人で行こうが変わらない気がするんですけど……」
「だがソレについて情報は得られる。対策も立てられる。残ったメンバーに、支部からの応援を加えれば手の打ちようもある。お前の死は決して無駄にはしない」
しみじみと語る店長に、一は非難の視線を送った。
「捨て駒も良いところですね」
「……捨て駒になるかどうか、そんなのはな、実際に現場に行って蓋を開けてみないと分からん。まあ、事前にソレの力が把握出来ていて、尚且つ私のような優秀極まりない指揮官がいれば避けられる事だ。問題ない」
「……はあ」
「とにかくだ。私は全員で行くのを絶対に許さん。つべこべ言わずに誰でも良い、二人、悪戯かどうか確認してこい」
「……私はパスだからな。ンな、つまンねェ仕事はやりたくねー」
三森が店長に向かって手を振り、やる気のなさをアピールする。
「だったら私もー。めんどいしだるいしかったるいわー」
「……イトハラ、もっとやる気を見せたらどう？　ふふん、そんな

んじゃお兄ちゃんのハートはつかめナイわよ？」
「ごめんジェーン、俺も行きたくない」
「ジーザス！」
「あの……でしたら私が」
全員の目が、怖ず怖ずと発言したナナに向かう。
「……新人だからって気を遣う必要は無いぞ、ナナ」
「いえ、店長。私はまだ駒台の地理を把握しておりませんし、まだまだ新米です。迅速な対応が出来るよう、なるべく多くの経験を積ませて頂きたいのですが」
「……聞いたか、お前ら。彼女こそ真の勤務外だ。死ねバッタもんども」
店長は目頭を押さえた。実に見え見えな、空々しい演技だった。
「ナナ、残り一人好きなのを持っていくと良い。よりどりみどり、勤務外のバーゲンセールだ」
「ね、けん君。ボクって幾らぐらいするんだろ？」
「……知るか、馬鹿」
高校生二人の掛け合いを流し、
「では、一さん。申し訳ないのですが、一緒に来てもらえますか？」
ナナはにこやかに一へ微笑みかけた。
「え、俺？　えと、なんで？」
「一さん以外有り得ません」
「おおぅ……」
強い口調でナナに言い切られ、一は少したじろぐ。
「……へえ、良かったじゃん一、可愛い子に選ばれて」
「お兄ちゃん、あとで話があるんだケド？」
「はじめ君、鼻の下伸びてるよ」
「そ、そんな事無いよ？」
あと、ちょっと嬉しかった。正直、一はナナに選ばれて優越感のようなものを感じていた。
「あ、あの、でもナナ、さん？　どうして俺なの？」

「はい、今回のパターンですと、どうやら悪戯の可能性が非常に高いとの事。ならばわざわざ勤務外として長く経験のある人や、能力の高い人が行くのは非効率です。また、仮にソレがいるとすれば、店長の言ったとおり捨て駒となる方はやはり必要だと思われます」

ちょっと、嫌な予感。

「えーと？　つまり？」

ナナはにっこりと笑みを作る。

「つまり……、一番弱くて、死んでも困らない人が行くべきかと」

バックルーム、大爆笑。

『道を歩いていたら女がいて、気が付いたらその女が下半身を置いてコウモリになって飛び立って行ったらしい』

出発前、店長が一般からの電話で聞いた話を一たちに伝えてくれた。

「……絶対嘘だ」

信じられる要素が皆無だった。少なくとも、一はその話を信じていない。

「何がですか？」

駒台の街。陽はすっかり落ち、点々と立ち並ぶ街灯が、一とナナの行く先を照らしている。

「いや、さっきのソレの話だよ。上半身と下半身が分かれるだなんて、スーパーロボットじゃ無いんだからさ」

「いえ、あながち嘘だとは言い切れませんよ」

「どうして？」

一は隣を歩くナナへ顔を向ける。

「マナナンガルをご存じですか？」

「ナナナンガル？」

「いいえ、マナ、ナンガルです。フィリピンのシキホル島に伝えられている魔女の事を指します」

「……いや、初耳だよ」
流石に、一も魔女は知っているが、詳しい名前、ましてやフィリピンの魔女については何も知らない。
「では、目的地まで僭越ながら私がご説明を」
「うん、お願いするよ」
ソレについての知識はさほど欲しくないが、出会ったばかりのナナと道中無言で歩き続けるよりはマシだと思い、一は話を振った。
「マナナンガル。昼間は人間の姿をしているのですが、夜になるとコウモリへと姿を変えられる存在のようです」
「へえ、さっきの話と一緒じゃないか」
全く、瓜二つ。
「はい。ですから私は先程の電話が、あながち嘘ではないと申し上げたのです」
「成る程ね。うーん、何か、他に特徴は無いのかな？」
「マナナンガルは主に胎児を狙うそうです。細く、鋭い舌を母親のへそに接触させ、胎児の血を吸い取ってしまう、だとか」
「……うわ、スプラッタ」
想像しただけでも気分が悪くなる。
「そうですか？」
「……そうじゃないかな。それよりさ、そいつ、マナナンガルには弱点とか無いの？」
「弱点、ですか？　そう、ですね……」
ナナは下を向いて黙り込んでしまう。
「あ、分からなかったら別に」
「いえ、分かります。少々お待ちを」
「案外、負けず嫌いなんだね……」
ナナの意外な側面を見られたのは面白かったが、どうにも手持ち無沙汰になる。一はポケットから煙草を取り出そう、としたところで手を止めた。
「……こりゃ続きそうに無いな」

「いえ、もう少しだけお待ちを」
一の独り言にもしっかり反応するナナだったが、答えは出ない様子だった。
しばらくの間、二人は無言で歩き続ける。
ふと、一は視界の端で何かを捉えた。
「……何だありゃ」
最初は、ゴミ置場に捨てられてあるマネキンか何かだと思った。
「んん？」
しかし、徐々に近付いて行くにつれ、それが間違いだと一は知る。
古雑誌、家電などの雑多な物の中、ゴミ置場に捨てられていたのは。
「うわっ、これ……」
「どうしました？」
突然発せられた一の声に思考を止めたのか、ナナもゴミ置場に目を向ける。
「ちょっ、これ、これってさ」
「ああ、人間の下半身ですね」
「何でどうでもよさげなの！？　人だよ、人の下半身だよ！」
「そんな事より、マナナンガルの弱点を……」
真顔でそんな事を言うナナ。
「そんな事じゃないよ！　もっとリアクションして！　驚いてる俺の方が変に見えるから！」
「私の分まで一さんが驚いてくれた方が生産的だと思いますが」
「違う、違うと思う。もっとこう、驚きを分かち合おうよ……」
そこでナナは眼鏡の位置を押し上げた。えらく上品で、様になっている動作。
「一さん」
「うん」
「弱点、思い出しました」
「あー、そっちかー」
このポンコツ。とは口が裂けても言えやしない。

「はい。マナナンガルがコウモリの姿をとっている時は日光が致命的な弱点となるのです。夜明けが来た時、上半身と下半身を分離させたままだと、滅びてしまうとか。打倒する為には、マナナンガルが狩りにあたって残しておいた下半身を捜すべきでしょう」

「……じゃなくてさあ……」

一はゴミ置場の下半身を何気なく見た。スカートを穿いている事から女性の物だと判断する。視点を変えれば、荒々しい肉の断面図。所々皮は解れ、僅かながらも血液が滴っていた。上半身と下半身を、無理矢理二つにするべく引き千切ったような、そんな印象を受ける。

「こんなの見たら、本当に悪戯じゃなかったとしか思えない。ソレが近くにいるかも知れないんだよ？」

なのに、どうして。

「ええ、とりあえず電話を下さった方を捜しましょう。詳しいお話が聞けるかも知れません」

どうして彼女はさっきから。

「……これは、どうするつもり？」

「放っておきましょう」

「もしかしたら、これが電話をくれた人かも……」

「その可能性も否定できません。ですが、先に現場へ向かいましょう。その方が効率的です」

ナナは店長から渡された、現場の住所が書いてあるメモを片手にすたすたと歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ってってば！」

一は慌ててナナを追いかけた。隣に並び、彼女の顔を伺う。

「せめて店に連絡を入れるとか……、あのままにしておくのはどうかと思うんだけど」

「でしたら、一さんがそうして下さい。私は連絡手段を持ち合わせておりませんので」

「……俺も持ってないんだけど」

「では、先を急ぎましょう」

真剣に、本当に携帯電話を買おうと一は決心した。誰の物かは分からない。あのまま放置するのも忍びない。だが、何も出来ず、あの場に留まり無駄に時間を浪費するのもどうかと思い、一はナナに付いていく。

「あのさ、何とも、思わないの？」

「何について、でしょうか？」

「……いや、やっぱり良いよ。変な事聞いてごめんね」

「そうですか」

それだけ言って、ナナは口を閉じた。一も、もう喋ろうとは思わない。どうせ、目的地はすぐそこなのだ。あと少しの辛抱だ、と。自らに言い聞かせ、未だに鈍る頭の中身を振り払い、無理矢理足を動かす。

そうして五分ほど進むと、前方を歩いていたナナは足を止めた。

「ここが？」

辿り着いたのは、何の変哲も無い殺風景な唯の路地。人通りは全く無いようで、人家も少ない。

「ええ、その様です。店長の話によると、近くに電話を下さった方がいる筈なのですが」

「悪戯なら、とっくにどこかへ行ってると思うんだけど……」

あんなモノを見た後では、その線も薄いと一は思う。ほぼ間違いなく、ソレはこの近辺に出たのだ。

「恐らく、どこかに姿を隠しているのでしょう」

「ソレに見つかってなきゃ良いんだけど」

二人は人が隠れられそうな場所を丹念に探す。だが、何も無いこの場所では探索もすぐに終わってしまった。

「どうしよう、やっぱり悪戯だったのかな」

「ですが、先程のアレは気になります。全くの無関係だとは言い切れません」

「……もしかして、電話くれた人の、だったのかな……」

「おや？」

所在なさげに立っていたナナが、何かを見つけて歩き出す。一は電信柱にもたれながらその様子をぼんやりと眺めていた。
「一さん、こっちに来てもらえますか？」
「何かあったの？」
ナナはコンクリートのブロック塀をジッと見つめている。
「これを見て下さい」
「うん、唯の染みじゃないか？」
指差された箇所に目を凝らすと、染みの様な物が確認できた。
「いいえ、これは血液です。それもまだ真新しい、人間の」
「……何だって？」
「恐らく、ついさっきまで、ここで血が流れるような事が起きていたのでしょう」
「血の、持ち主は……」
「高い可能性で、この塀の向こう側にいると思います。血の痕が塀の上部に向かっておりますので。仮説になりますが、ここで血を流した後、塀を上り、助けを求める形で人家に逃げ込んだのでしょう」
無理矢理なこじつけだが、血を流し、パニックになった者が何をしでかすか分からない。一はナナの説明に一先ず納得する。
「良し、覗いてみよう」
そんなに高くない塀だったので、一はブロック塀の出っ張りに足を掛け、先端に手を掛けた。
「恐らく、無駄だとは思いますが」
目撃者の生存を信じている一には、ナナの呟きが聞こえない。

Empty admonition

私はただ、子供が好きだっただけだ。

「待ってるだけってのも退屈よね」

一とナナが出て行ったバックルームで、糸原は椅子にだらしなく全身を預けながら呟いた。

「だったらてめェが行けってンだ」

「耳聡いわね、あんた。何よ？　そんなに私に構ってもらいたいの？」

「あー、そうだな。とりあえず店から出ろよ。ミーティングが終わったってのに、何でまだいやがる」

バックルームには今、三森と糸原、それに店長しかいない。ミーティングは店長の判断で終了、という事になった。ジェーンは堀の手伝いに、神野と立花はミーティングが終わってすぐに帰宅。

「一々うるさいわね、私の勝手でしょ」

「……はっ、そりゃ悪かったな」

店長は二人の会話に、もう口を挟まない。只管にパソコンを操作し、彼女らを認識せず、意識からシャットアウトしているかのように無反応だった。

「ねえ、今までにもこういう事ってあったの？」

「どういう事だよ？」

「だーかーらー、悪戯よ、悪戯。ホントに大丈夫なんでしょうね？」

三森は、ほんの少しだけ愉しげに口元を歪める。

「あァん？　何だよ、お前、あいつの事が心配なのか？」

糸原は、愉しげな三森に気付いているのか、いないのか、

「そうよ」

そう、一言だけ放った。

「……お、あ、そ、そうか」
そして三森は黙る。何か、見てはいけない物を見たような風に顔を逸らして。
「何？　私が人の心配しちゃいけないっての？」
「ンな事言ってねェだろ。ただ、なんつーか、お前が素直に答えるのが気持ち悪いってだけだ」
「あら、そう」
髪を手で梳き、流れるように糸原は立ち上がった。実に優雅で、実に嘘くさい。
「あン？　帰ンのか？」
「暇だから、本持ってくるのよ。……どうも、長くなりそうな気がするし」
「……何が長いって？」
尋ねる三森に、糸原は振り返って微笑んだ。
「一の帰り（ダーリン）」
「はっ、言ってろや」
糸原に笑い返し、三森は三つ並べた椅子の上に寝転ぶ。
「あら、あんたは帰らないの？」
「うるせー」
別に良いけどね。そう呟いた糸原とは、三森は目が合わせられなかった。

やけに鮮やかだと、一は目の前に広がる血を見て、そう思った。
「どうやら、隠れ切れなかったようですね」
黙り込む一の頭上から、涼しげな声。
「……この人が……」
メタリックブルーの携帯電話を握り締めたまま動かない女性。もう、動かない彼女から視線を離せず、一は呆然と呟く。
「ええ、連絡をした方でしょうね」

ナナは塀を難なく飛び越え、女性の傍らに着地した。
「悪戯じゃ無かったんだな……」
「そのようです」
言いつつ、ナナは女性の服を捲り上げる。
一瞬、ナナが何をしているのか一には分からなかったが、
「おいっ、何やってんだっ」
すぐに、思い出したように声を荒げた。
だがナナは、どうして一が焦っているのか分からない様子で、その手を止めない。
「やめろって」
一がナナの肩を掴み、ようやく彼女は腰を上げた。
「……一さん、止めろとはどういう事でしょうか？」
「なっ、お前本気で分かってないのか？」
「私は彼女の損傷部位を確認したいだけです。今のところ、マナナンガルの可能性が高いですが、傷口によっては、もしかしたら別のソレの仕業かもしれないんですよ」
「だからってそんな……、死体を辱めるような事っ」
「いけない事、でしょうか？」
ナナの発言に、一はしばらくの間、二の句が告げなかった。
「本気で、言ってるのかよ」
「これはもう死んでいます。ならば、生きている人間を救う為、未だ生きているソレを殺す為に使うのは至極全う且つ、効率的だと思うのですが」
当然だと、ナナはそう言い切る。その通りかも知れない。だが、一には受け入れがたい事だった。
「……お前の言ってる事は分かるよ。でも、ダメだ。良くないよ」
「それは人道的観念から来る発言でしょうか？」
「え？」
「なら、一さんはソレとの戦闘において自身が死ぬ事よりも、モラルを優先するのですか？」

「……誰もそんな事言ってないだろ」
一の煮え切らない態度を見て、ナナは首を振る。
「いいえ、そういう事になります。どうやら、一さんは自身よりも他者を優先する傾向にあるようですね。そして場合によれば、人間よりもソレを優先してしまうカテゴリの方のようです」
「勝手に、分析しないでくれ」
「失礼致しました。ですが、私と共にやってきた以上、私は一さんを死なせる訳には参りません。他の何よりも、誰よりも優先させて守らなければならないのです」
深く頭を下げ、ナナは一を宥めるように優しげに言った。
「……それは、俺が生きてる人間だからか？」
「勿論です。ですから一さん、敵を確認する為にも、作業に戻らせていただけませんか？」
「……勝手にしてくれ」
一は半ば諦め、塀に足を掛ける。とてもじゃないが、ジッと見ていられる気分じゃなかった。
「一さん、どちらへ？」
「向こうに行ってる。安心してくれ、勝手に出歩いたりしないよ」
「かしこまりました。すぐに終えますので、しばしお待ちを」
返事はせずに、一は塀の向こう側に降り立つ。コンクリートのブロック塀に背を預け、夜空を見上げた。途端、どうしようもなくやるせない気持ちに襲われる。
結局、助けられなかった。自分はなんて無力なんだろうと、持っていたアイギスをぞんざいな扱いで地面へ落とす。何の役にも立たない。どうしようもない。自身に腹が立つと同時に、やり場のない憤りも感じた。先刻のナナの言動、オンリーワンのつまらない体制、規則。目に映るモノ全てが、耳に入るモノ全てが一を苛立たせる。それでいて、決して口にも、態度にも表そうとしない自分がもっと嫌いになれる。
「くそっ……」

足元に転がっていた小石を蹴飛ばそうとして、空振った。
「くそっ」
情けない。八つ当りすら満足に出来ない自分が嫌で嫌で堪らない。目を瞑り、意識を無理矢理にニュートラルに戻そうとするも、どうしても焼き付いて離れない。
あの、メタリックブルーが離れない。
ソレに殺された彼女は、最期に、どこに、誰に電話を掛けようとしていたのか。家族だろうか、友人だろうか、恋人だろうか。一には分からない。もう誰にも分からないのだ。
「……ちくしょう……」
今までの犠牲者とは違う。一の知らないところ、知らない間に死んだわけではない。彼女はついさっきまで、自分たちに助けを求めていた。届いていた。届くはずだったのに。
気を抜くと、泣いてしまいそうだった。だから一は体が震えるのを堪え、歯を食い縛る。
「一さん、終わりました」
ナナの声が少しだけ有り難かった。
「……どうだった？」
「腹部に小さな傷口がありました。鋭いモノで穿ったような……、マナナンガルの手口に酷似しています。間違いないかと」
「そう、か」
こうして話していれば意識が散らされ、気が紛れる。
「……ん。でも、本当にマナナンガルなのか？」
「どういう意味でしょうか？　一さんは私の検証を信用できないと？」
「いや、信用はしてるよ。だけどさ、マナナンガルってのは妊婦を、胎児を狙うって言ってなかった？」
塀越しなのでナナの表情が窺い知れない。一は無難にフォローも付け足す。
「ですから、ほぼ間違いないと」

「いや、だからさ……」
「マナナンガルは胎児を狙います。ですから、私の言っている事に間違いはありません」
どうにも納得しづらい。一はもっとストレートな疑問を口にするべく唾を飲んだ。
「この人、妊娠していたようです」
もっと真っすぐな、もっと早い直球に返されて一は黙る。
「残りがありましたから、間違いありません」
「妊娠って……」
そんな、酷い話があるのかと、一は頭を抱え、すぐに上げた。
「……ナナ、今なんて言った？」
「残りがありましたから、間違いありません」
「残りって、何の……？」
何が、どこに残っていたというのか。一の背筋がぞくりと粟立つ。
「ご覧になりますか？」
塀越しから、涼やかな声。一は誘われるように、塀へ足を掛けた。
上り切る前に、血のニオイが鼻を突く。
予想はしていた。予感もしていた。
「う……あ……」
塀を乗り越えた一の視界に、赤が飛び込んでくる。
ナナのメイド服が塗れていた。濡れていた。
「お、前……！」
唾棄すべき、破棄すべき出来事。一は眩暈を覚え、何事もなくその場に立っているナナを睨みつける。
「お前っ！　何やってんだ！」
割かれて、開かれた肉。鮮やかな赤。死んだ目撃者。哀れな彼女。
死んでしまった後ですら、無残にも彼女の肉は。
「？　ですから、作業をしておりました」

「何のだよっ！」
叫び、一は地面に降り立つ。人家の庭だという事も忘れ、声を只管に荒げた。
「何で！　何でこんな事が出来るんだよ！？」
腹部を露出させた彼女を指差し、一は心の底から湧き上がるモノを口にする。
「勝手にしろと言ったのは一さんの筈ですが？　ですから私は作業をしていたのですよ」
ナナは淡々と言い放った。それが無性に、腹が立つ。
「……っ！　死んだ人間の腹を掻っ捌いてかよ！？」
「そのお陰で、マナナンガルの仕業だと断言できるのです」
「ふざけんな！　お前は人間を何だと思ってやがる！」
「これはもう、人間ではありません」
女性の、開きっぱなしの腹の中から痩せ細った肉塊を無造作に掴み上げ、ナナは一を見据えた。
その瞬間、一はアイギスを放り出し、ナナの顔面を殴りつける。
ナナは身動ぎ一つせずに、一の拳をそのままにした。
「何のつもりでしょうか？」
「人間だ！」
拳が、痛い。
「……一さん？」
「その人も！　お前が掴んでるその子も！　人間なんだよ！」
「いいえ、これはもう人間ではありません。死んでしまったのです。唯の、肉の塊です」
「違う！」
一は拳を下げ、力任せに首を振る。
「違いません」
「違う！　違う！　こっ、こんなの間違ってる！」
「では、私はどうすれば良かったのですか？」
ナナは少しだけずれていた眼鏡の位置を指で押さえながら、やは

り無機質な声で問いかけた。
「うるせえっ、お前は正しいよ！　正しいかもしれない！　でもっ、人間をこんな風にするなんて、これじゃあまるでソレじゃねぇかよ！」
「ですが、それでも私は……」
「……」
うな垂れるナナを見て、ようやく一の頭が冷めてくる。出来る事なら、一生茹ったままの方が良かった。自分の情けなさを再確認する羽目になるのなら。
「……ごめん、そんなつもりじゃ、無かったんだよな」
まるで子供だ。嫌な事からは逃げ出し、目を逸らし、怒鳴り散らして殴りつける。
「人間を、助ける為なんだよな」
分かっていた。ナナは人間ではない。人形なのだ。それでいて、人間を守ろうと、そう言ってくれていたのに。
「分かって貰えたのなら、嬉しいです」
「うん。でも、こういう事は前もって言っといて欲しかったかな。慣れてないし」
「申し訳ありません、私もまだ人間の機微には疎いようです」
何だか、どこかで聞いたような台詞だったので、一はこの状況下で笑ってしまう。
「どうしました？」
「いや、なんでもない。それよりごめんな、その、殴っちゃって……」
一は拳を後ろ手に隠し、もう片方の手で頭を掻いた。
「気にしないで下さい。私に痛覚はありませんし、それに、幾ら人間に近いとは言え、自動人形ですから」
「でも、女の子だ。だから、ごめん。……どうしよう、一発殴るか？」
「一さんの発言の意図するところは分かりませんが、私は何も気に

していません」
「でもなあ……」
姿、顔だけでは、ナナはどう見ても普通の女性。一の心には罪悪感が圧し掛かる。
「では、私が一さんを殴れば、一さんの気が済むのですね？」
「ん、ん。まあ、そういう事になるんだけど」
「そういう事でしたら」
ナナはエプロンドレスのポケットからハンカチを取り出し、丹念に手を拭いた。
「ところで一さん、私はどれ位の力で殴れば良いのでしょう」
「……はい？」
「力を入れ過ぎると、顔ごと吹き飛ばしてしまうかもしれません。顔が飛んでも、一さんは生きていられますか？」
ナナが余りにも真面目な顔で尋ねるので、一は笑えない。
「言っとくけど、指一本、爪の先、体のどこが飛んでも俺は死ぬぞ。あと、お前には手加減って選択肢が無いのかな？」
「常に全力。これがオンリーワン近畿支部技術部の、私のポリシーですので」
「成る程。良し、今度ご飯でもおごってあげよう。いや、おごらせて下さい。だから許して、お願いします」
深く。一は深く頭を下げた。
「ですから私は気にしていないと申し上げましたのに。それと、食事のお誘いは丁重にお断りさせていただきます。私に食機能は搭載されていませんから」
「じゃあ、エネルギーは何なの？　もしかしてネジでも巻けって言うのか？」
「失礼な。私を何だと思っているのですか」
「あ、ごめんごめん。……じゃあさ、何で動いてるの？」
「一さん、飛行機はどうして飛ぶのかお分かりですか？」
「……さあ？　揚力とか、気圧とか、どうのこうのじゃないの？」

そう言えば、シルフも同じことを言っていた気がする。
「いいえ、お客様の愛によって支えられているからなのです」
「何だよそれ」
思わず笑ってしまった。まさか彼女の口から冗談じみた戯言が聞けるとは思ってもいなかったから。
「では一さん、私がどうして動いていられるかお分かりですか？」
「お客様の愛に支えられてるんだろ？」
「その通りです」
上手く誤魔化されてしまった。一は息を吐き、ナナに背を向ける。
「行こう。マナナンガルってのを見つけなきゃな」
「かしこまりました」
「……あのさ、その人たち、置いていくのか？」
「ご安心を。タルタロスや情報部の方達がすぐに対処してくれるでしょう。そう、私は聞いています」
一はそんな事初耳だったが、ナナを信じる事にした。冗談を言う事はあっても、ソレに関して彼女は決して嘘は吐かないだろうと、そう思う。
「ひでえ話だ……」
「一さん、何か？」
「何もっ」
塀を飛び越え、一は着地地点で足を挫いた。

当座の一たちの目的は、マナナンガルの下半身を捜すという事に決定した。言い伝えでは、日の出までに彼女の上半身と下半身が分かれたままだと、日光に当たり滅ぼされる、らしい。
「さっきのゴミ置き場、あそこにあったのがそうかもしれない」
「可能性は高いでしょうね。こんな事なら、あの下半身を持ってくるべきでした」
「……そんな奴の隣歩くの嫌だよ」

「仕方ありません。先程の場所で、マナナンガルが戻ってくるまで待ちましょう」
そう言ってナナは歩きだす。
「って、本当に来るのかな？」
一もナナを追い掛け、隣に並んだ。並んでから、彼女の血に塗れた服を見て、少しだけ下がる。
「ソレだって自分の弱点は把握しているでしょう。日の出までに必ず戻る筈です」
「……でもさ、ただ、待ってるだけで良いのかな？」
あの、死体。一はアレを思い出し、またソレが新たな獲物を狙っているのではないかと、新たな犠牲者が出るのではないかと危惧した。
「そうですね、こちらからソレを捜すのも良いのですが、相手は飛行型です。地上から、しかも二人で捜索するのは非効率的かと」
「でも、また誰かが殺されたら……」
「……本当に甘い方ですね、一さんは。しかも、自分には厳しくしたがらないタイプです」
ナナは眼鏡を一旦外し、取り出したハンカチでレンズを拭う。
「だから、そんなつもり無いって」
「待つだけ、と言うのがお嫌いでしたら、ソレを誘き出す手もあります」
「……どうやってさ？」
「囮を使います。マナナンガルは妊婦を狙う傾向にありますから、近辺で囮に使う妊婦を捜してみる、と言うのは如何でしょう？」
間を空けず、
「ダメだ」
一は半ば、ナナの発言に割り込む形で声を発した。
「でしょうね。今までの一さんを見ていたら、そう返すのだろうと予測はしていました」
「だったら言うな」

「言わせたのはあなたです。待つのは嫌いなのでしょう？　ですから私は別の打開策を提案したのです」
「俺が悪いみたいに……、ああ、いや、俺が悪いのか……」
「異論が無いのでしたら、夜明けまであそこで待ちましょう」
もう、すぐそこまで見えてきた目的地を指差し、ナナは真っすぐに歩き続けた。
「夜明けまで、随分掛かりそうだな」
「では仮眠でも取りますか？」
「……どこでだよ？」
「私の膝をお貸しします。安心してください。ちゃんと柔らかいですから」
何がちゃんとなのか分からないが、一にとって魅力的な提案なのは確かだった。血に汚れたとはいえ、ナナはメイド。メイドなのだ。メイドに膝枕。ああ、なんて甘美な響きなんだろう。
一は天を仰ぐ。
「えっと、マジで？」
「ええ、私は睡眠を特に必要としませんし」
そしてナナを見た。主に下半身あたりを。凄く、とても良い感じに眠れそうだった。
「じゃあ、ソレが出てくるまでお願いしよう、かな」
「かしこまりました。では一さん、どうぞこちらに」
ナナはにこりと微笑み、道路の端に腰を落ち着かせる。誰かがこの道を通る可能性など、今の一には考えられなかった。
「……そ、それじゃあ」
「ええ、どうぞご遠慮なく、ごゆるりと。眠っても問題ありませんよ。しっかりと叩き起こしますから」
一の歩みがピタリと止まる。
「……叩き？」
「はい。叩き起こします。ソレを目前にして寝惚けたままでは一さんが危ないですから」

「確か、君たちのポリシーって……」
「はい、常に全力。後悔しないように力を残さず、惜しむな。そう言われてきました」
ナナは、やはり笑顔を崩さずに言った。
「あの、やっぱり良いです」
自分の顔面がコンクリートに埋まるのを想像し、一気に一の気持ちは萎える。一時の快楽より、やはり命の方が大事だ。
「そうですか？　遠慮なさらずとも良いのに……」
「ごめん、俺まだやりたい事あるからさ」
悲しい顔で死刑宣告されるのは、意外と堪えるものだと一は学んだ。

夜明けまで粘る必要は無かった。
一たちが件のゴミ置場近くの人家、そこの庭で待っていたところ、十分も経たずにソレが現れたのだ。
その姿、正しくコウモリ。但し、元よりも大分離れ、崩れている。人間の上半身に翼を生やし、顔付きは人間とコウモリをムチャクチャに混ぜたような、醜悪なモノ。
「すげえタイミング……」
翼をはためかせて舞い降りたソレを見て、一は何とも言えない気持ちになる。
「今日の狩りは終了というところでしょうね。この辺りは、少ないとはいえ人も通りますし、目立った行動はとれないのでしょう」
「どうする？　正面から突っ込むのか？」
とりあえず、一は堀直伝の策を提案してみる。
「無策無謀も良いところですね。却下させていただきます」
「……なら、打開策を述べよ」
「打開策を持ち出す程追い詰められてはいませんが、そうですね、とりあえず待ちましょう」

ナナは酷く落ち着いていた。ならば自分だけ慌てふためくのも損だろう、と、一は考える。

「安心してください。見ていれば分かります」

塀から身を乗り出すと、マナナンガルは今まさに、元に戻ろうとしているところだった。

分かれていた上半身と下半身。解れた肉。千切れた皮。滴る血。マナナンガルはそのどれもを意に介さない様子で、自らの、二つの身体の断面図を重ね合わせていく。解れたモノ同士が絡み合い、繋がり合い、溶け合っていく。

「……うわ……」

一はその光景に耐え切れず目を逸らした。肉の混ざる過程が目に焼き付き、プチプチ、と、何かが蠢き、泡立つ音が耳から離れない。強烈な嫌悪感と嘔吐感が胸に残って、必死で堪える。気を抜けば確実に戻してしまう。

「一さん、ご気分が優れないのですか？」

「……あんなの見たら優れる訳無いよ。くそう、変な物見ちゃった」

「そうでしたか。ですがご安心を。もう元に戻りましたから」

半信半疑で、一はもう一度塀から顔を覗かせた。

「って……マジかよ」

先程まで見えていた醜い姿が幻だったのかと思える程、余りにも当たり前に、忽然と、超然と。美しい女性がそこにいた。コウモリの面影はどこにもなく、長い茶髪を揺らして、女性は颯爽と歩き出す。

「……人間、じゃないか」

「半分は、ですが」

ナナは呟き、塀に足を掛けた。

「ちょっ、何するつもりだよ？」

「仕留めます。マナナンガルは人間時に大した力を持ちません。今が絶対の好機かと」

「じゃなくて、アレはどう見たって人間じゃないか。それを……」

一は狼狽していた。そう、どう見たってアレは人間にしか見えない。ナナは、彼女はその人を――。

「――殺します。完全に、完璧に、完膚なきまでに殺し切ります」

「でっ、でも……」

「姿は人間でも、半分はソレなのです。命令を受けた以上、見逃す訳には参りません。それに、お忘れですか？　アレは、人を既に殺しているのですよ。それとも一さんは、この先新たな犠牲者が出ても構わない、と？」

ナナは涼やかな声で、流れるように捲くし立てる。そんなの、言われなくても分かっているのに。

「そんなつもりは……」

全く無かった。とは言い切れない。ソレが人間に戻った時、一の気持ちは揺らいでしまったのだ。本当に、殺しても良いのか、と。一瞬でも一時でも、確かに、揺らいでしまったのは事実だった。

「では行って参ります。一さんはどうぞここでお待ちを。私一人でも充分過ぎますから」

お前が居ると邪魔だ。そう言われている気がして、一は俯く。

「……ごめん、一つだけ聞いて良いかな？」

だが、これだけは聞いておきたかった。

「……手短にお願いします」

ナナは迷惑そうな表情を取り繕うかのように、柔和な微笑を見せる。

一は一拍置いてから、切り出した。

「もし、俺や、北駒台の誰かに少しでも、少しでもソレの血が流れていたら、ナナはどうすると思う？　どうしたい？」

一の質問に、ナナは少しだけ考える素振りを見せ、

「……この状況下でのその質問、一さんの意図は全く以って計り知れませんがお答えしましょう。もし、皆さんの中にソレが混じっていても、命令が無ければ私はどうもしません。ですが、殺せと言われれば殺します。完全に、完璧に、完膚なきまでに」

完璧な笑顔で、そう言った。
「……そっか。ありがとう、安心したよ」
「私の答えに満足して頂けたのなら光栄です。では」
ナナは塀を飛び越え、ソレに向かって走り出す。
「……まあ、そりゃそうだよな」
一は、長く伸びた自分の爪をぼんやりと眺め、自身の立ち位置を再確認した。
――ソレの血が混じった半端モノ。
完全に人間でも無ければ、完全にソレでも無いのだ。
ナナが言ったように、いつ何が起こって殺されても、殺しても仕方がない。仕方がない。そう、決めたのだから。妹の為に、自分の為に堕ちたのだから。
「……はっ」
思わず自嘲する。ここまで来て、一体何を期待していたのか。誰に期待していたのか。コンクリートの冷たいブロック塀に頭を預け、一は笑う。

間もなくして、一の耳が酷く長い女性の断末魔をとらえた。
それを聞いて、一はまた笑う。それはどうしようもなく乾いた笑いで、どうしようもないからこそ、乾いていたのかもしれなかった。

骨が折れる

午前六時三十分。彼の朝はこの時間から始まる。
目覚ましなど使わずとも、この時間に目が覚めるのだ。
「兄さーん！」
一階から聞こえてくる、間延びした声。そして、彼が返事しない事を分かりきっているのか、声の主はけたたましく、わざとらしく音を立てて階段を上る。
「朝ですよ！」
ノックもしないで、声の主はドアを開いた。隙間風が室内に通り、部屋の気温を下げていく。
声の主はまだ少女の様相であった。薄く茶掛かったショートヘアの、その両脇に白いリボンを付けている。そして服装は北駒台高校の、女子の制服。
「……寒い」
「冬ですから。さあ、兄さん起きて。ご飯が冷めちゃいますよ？」
「まだ早いだろ……」
「早くありません！」
顔まで布団を被り、彼は声を遮った。
「もうっ」
「ああっ」
布団を捲くられる。名残惜しい温かさが消えていき、寝間着だった彼に冷たさが襲い掛かった。いやが上にも、朝だと言う事を思い知らされる。
「……毎度毎度起こしにきやがって」
「兄さんが起きないからでしょ？　それとも、兄さんは遅刻してしまっても良いんですか？」
「良くないけど……」
彼は立ち上がり、あくびを一つ。

「もう父さんと母さんは仕事に行っちゃいましたよ。私達もご飯食べて、学校に行きましょう」
「あの二人が早過ぎるんだよ……。学校なんてもっと遅くに出ても間に合うだろ」
「駄目です。しっかり朝ごはんを食べて、元気良く学校に行きましょう」
そう言うと、彼女はドアを閉めずに部屋から出て行ってしまう。
「閉めてけ！」
「ごめんなさーい」
「くそう」
兄としての威厳が薄れつつある。彼は静かな不安を覚えた。

こうして、彼こと、神野剣（かんのけん）の一日は始まる。

身支度を済まし、一階のリビングに下りてきた神野の鼻腔を、芳ばしい香りがくすぐった。
「お、良い匂いじゃん」
制服のボタンを閉めながら、神野は自分の席に座る。テレビを点け、適当なニュースを適当に流し、適当に頭に詰め込む。
「トーストとスクランブルエッグです。簡単な物ですけど」
そう言いながら、彼女こと、神野剣の一つ下の妹、神野姫（かんのひめ）は神野の傍まで湯気が立ったばかりのコーヒーのカップを差し出した。
「ありがとう。って、またコーヒーかよ……」
「だったら兄さんが私より先に起きて、準備して下さい」
「美味そうだけど、やっぱり和食の方が良いな。なあ、姫、和食も覚えろよ。せめて味噌汁だけでも良いからさあ」
「朝からお味噌汁なんて、手間が掛かるから嫌です」
トーストに苺のジャムを乗せながら、姫はリモコンに手を伸ばし、

電源を落とす。
「……何で切るんだよ。俺、見てたんだけど？」
「駄目です。父さん達が居なくても、食事中にテレビは見ないで下さい」
「父さん達が居ないから、少しは息を抜けるってのにさ」
お前は真面目だな。そう言って、神野は何も付けていないトーストを齧った。
「それ、ジャムも付けてないけど、美味しいんですか？」
「パンは何付けてもパンだよ。俺は、やっぱり米が良い」
「もう、拗ねないで下さいよ。明日は和食にしてあげますから」
姫はくすくすと、静かに微笑む。
「拗ねてねえよ。それよりお前さ、学校で上手くやってるか？」
「兄さんったら、父さんと同じ事聞くんですね」
「う、そうか。気を付ける」
「良いですけどね。大丈夫、ちゃんとやってますよ」
「まあ、姫は外面が良いからな。皆騙されてくれてるだろ」
神野はそう言って笑って、思い切り顔をしかめた。
「痛え！　爪先を踏むな！」
「あら、ごめんなさい兄さん、足が滑っちゃって……」
神野の対面に座る姫は、視線を逸らしながらわざとらしく口元を手で覆う。
「お前さ、最近俺の事兄貴と思ってないだろ……」
「そんな事ありませんよ。兄さんは兄さんじゃないですか」
「……言っとくけど、俺はその笑顔に騙されないからな」
「ふふ、そうでした」
実に和やかで、いつも通りの神野家の朝だった。

午前六時三十分。彼の朝はここで終わる。
「三森さーん、勝手に上がらないで下さいよー」

「うるせェ。私がいつ上がろうが、私の勝手だろうが」
オンリーワン北駒台店のバックルームに、彼こと、一一（にのまえ）の情（はじめ）けない声が響く。
「俺が外掃除行ってる時は、ちゃんとレジ見てて下さいって言ったじゃないですか」
「だから見てたっての」
「監視カメラの映像で見ててもしょうがないでしょう！」
「朝からガタガタ抜かすンじゃねェよ」
「誰のせいだと思ってるんですかっ」
憤る一を尻目に、三森は煙草に火を点けながら、椅子に腰掛けた。
「朝から元気だな、一。そんなお前に仕事がある」
椅子に座ったまま、二人の様子を見ていた店長が一を手招きする。
「……仕事なら、今終わったばかりなんですけど」
「追加だ。喜べ勤労者。この時代に職にありつける、素晴らしさを噛み締めろ」
「はいはい、なんですか」
差し出されたのはまっさらな紙切れ一枚。
「これで、何をしろと？」
「シフト表だ。ウチも人数が増えてきたんでな、しっかりした物を組み立てたくなった」
「はあ、どうぞご自由に組み立ててくださいよ」
「組み立てるのはお前だ、一」
「何でだよ！？」
今日も、一は朝から元気だった。
「勿論、私も一度は考えた。だが途中で面倒臭くなった」
「うわあ、誰だよこの人を店長にさせたの……」
「一人ひとりの要望を聞いて、反映させるのも面倒だ。最近では字を書くことすら億劫になって来たんでな。一、よろしく頼む」
「生きるのも面倒になってきませんかね？」
一は遠まわしに死ねと伝えてみる。

「あ、いかんな。急にお前の給料を払うのが面倒になって来た……」
「三森さーん、シフトの都合をお伺いしまーす」
「あァ？　知るかよ、ンなの。勝手にやれや」
ぷかあ、と。紫煙を吐きながら、三森は店内から持ち出してきた女性誌に目を落とした。
「そういうの、一番困るんですけど。じゃあ毎日シフトに入れるけど、良いんですか？」
「良い訳ねェだろ。骨バキバキに砕くぞてめェ」
「だったら希望言って下さい。今なら早い者勝ちですよ。出来る限り、三森さんを優先しますから」
「へえ？　じゃあ休み多めにくれよ。出来れば七連休ぐらい」
三森は笑いながら、そんな冗談を口にする。
「……それじゃシフトに組み込めませんよ。何か、他に、希望する時間帯とか……」
「深夜は嫌だな。眠いから。早朝も昼間も嫌だ。昼まで寝ててェからな」
「わがままな……。なら、夕方という事で良いんですね」
「嫌だ。再放送のドラマが見てェ」
「……分かりました」
一は渡された紙切れに、静かに文字を書き込み始めた。
「三森さんは、二度とこの店に近付かないって事で」
「おいおい、冗談じゃねェか。怒るンじゃねーよ」
げらげらと笑いながら謝る三森を見て、一の堪忍袋に穴が空き始める。
「だったらもう少し真面目に考えて下さいよ……」
「悪かった、悪かったって。そうだな、じゃあ、私は後で良いからよ」
「……後で？　それじゃ土日とか、微妙な所になっちゃいますよ」
「別に構いやしねェよ。そンなら、別の奴とか、お前が好きなとこ選べ」

「はあ……」
一は曖昧に頷いた。何か、気味が悪い。
「三森さん」
「あンだよ？」
「三森さんって、優しいですね」
少し間が空いた後、いつも通りの三森の怒声が聞こえ、その陰で店長がくつくつと笑う。
実に和やかで、いつも通りの北駒台店の朝だった。

部屋に帰ってきた一はすぐに布団に飛び込んだ。
「うー……」
「何よ。今集中してるんだから、気持ち悪い声出さないで」
こたつに入ったまま、何かに熱中している糸原は、非難の声を一に浴びせる。
「……何、やってんですか？」
「ゲーム」
短い答えが返ってきた。成る程、携帯ゲームかと、一は納得する。
「あれ？　でも、そんなの持ってましたっけ？」
「北（カモ）から巻き上げたのよ。あのオッサン、金は無いくせに色んな物置いてるから。借金の肩代わりね」
「ふーん。糸原さん、滅茶苦茶画面に顔が寄ってますけど、面白いんですか？」
食い入る様に画面を見つめながら、糸原はやはり短く「うん」と返した。
「ひたすらモンスター殺しまくるゲームだけどね」
「そんなにモンスター殺してどうするんですか」
「皮剥いで、そいで装備強くすんのよ。そんでまた違うモンスター殺して、装備作って……」
「……それ、本当に面白いんですか？」

唯の作業じゃないですか。一はそう付け加え、自分よりも年上であろう糸原が、ゲームにのめり込む姿を物悲しい目つきで見つめる。
「この、やらされてるっていう、作業プレイ感が良いのよ」
「だったらコンビニでの作業もちゃんとやって貰えませんかね」
「嫌よ。あんたの皮剥いでもろくな装備作れやしないし」
「俺はモンスターですか……」
枕に顔を埋め、一は襲い掛かる睡魔に身を委ねた。
「そうよ、あんたなんてモンス――あああああああああ！」
「うわっ」
突然の大声に、一の体がビクリと震える。
「ちょ、うるさいですってば」
「あああ、死んじゃった……。後少しで倒せそうだったのに……」
糸原はゲーム機を放り投げ、畜生とか罵声を吐きつつ倒れ込んだ。
「ん」
物珍しさも手伝って、一は何気なくそのゲーム機を手に取り、画面を覗く。見れば、鎧武者の様な男が、馬鹿みたいな大きさをしたトカゲ型のモンスターに軽々と吹っ飛ばされていた。
「あはは、糸原さんってゲーム下手なんですね」
「うるっさいわね、そいつが弱いのよ……」
やがて画面が暗くなり、ゲームオーバーを告げる画面が表示される。

『にのまえ　はじめ　は　死んだ』

「何で俺の名前!?」
一は思わず叫んだ。まさか、自分の名前が、勝手にゲームのキャラクターの名前に使われているとは思いもしなかった。
「あー？　そのゲームさー、名前考えなきゃ駄目だったから。適当に決めたのよ」
「あ、ああ、びっくりした」

糸原はのそりとこたつから這い出て、一の手からゲーム機を奪い取る。
「ちょっと、画面に指紋付けないでよ。あー、腹立つ。今から罰ゲーム開始なんだから。にのまえを裸にして、さっきのトカゲに突っ込ませて何度も殺す様を楽しんでやる」
「止めて！　にのまえを苛めないで！」
「へへへ、ほーらほら、兜脱がしちゃうよー。お次はかたびらだー、ほーれびらびらびらー」
滅茶苦茶楽しそうだったので、一はもう何も言わない事にした。
「あ。そうだ、糸原さん、バイトのシフトに何か注文とかありますか？」
「ひゃひゃひゃひゃひゃ」
「聞いて下さいよ！」
「ひゃ……、え、何？　急に現実に戻さないでよ。テンションガタ落ちじゃない」
糸原は手を止め、こたつに体を突っ伏す。
「だから、シフトの希望日とか、入りたい時間帯とか、あります？」
「うーん。そうねえ……」
「七連休が欲しいとか、夜勤は眠いから嫌だとか言ったら怒りますからね」
「なんなれ――そうね、別にバイト以外してる訳じゃないから特に希望は無いんだけど」
そこで糸原は、体を反らして、一に悪戯っぽく笑いかけた。
「どうせなら、あんたと一緒のシフトが良いな」
「……そんな事言って、楽するつもりでしょ」
一はポケットに突っ込んだままだった、まだ白紙のシフト表を広げ、糸原から、少し視線をずらす。
「えへへー」
「片目閉じて舌を出すな。……まあ、分かりましたよ。特に希望も無いみたいですし、こっちで適当に考えます」

「んー、よろしくー」
シフト表を広げたまま、一は色々と考えを巡らしていて、いつの間にか、眠ってしまっていた。

顔に重みを感じて目を開けると、目の前に白い何かが乗っかっていた。一はそれを払い除け、寝返りを打つ。
「……ん」
そう言えば、今は何時だろう。顔だけを動かして、壁に掛かった時計に目を凝らせば、もう昼を回っていた。
「お腹減った」
よろよろと立ち上がり、先程払い除けた物が目に入る。それはスーパーかコンビニのビニールの袋だった。しゃがみ込み、袋を逆さにして中身を確認する。
「畜生」
カップ麺、の空容器が二つ。おにぎりとパンの包装紙が二つずつ。それとレシートが一枚。そのレシートの裏には、殴り書きで『おなかなぐっても起きなかったから全部食べちゃった☆』と残されていた。
そう言われれば、腹部に何か鈍痛が残っている感覚がする。一は自分の鈍感さを憎んだ。
「仕方ない……」
恨めしく呟き、一は買出しに行く事を決める。ついでに、病院にも寄っていこうと、そう思った。

自分の分の昼食と、お見舞い用の果物を買ってから、一は病院に足を運んだ。
オンリーワンの関係者が利用する、近畿支部医療部が在籍する、信頼の置ける病院。

「すみません、見舞いなんですけど、山田栞（やまだしおり）さんの病室はどちらか分かりますか？」

玄関を潜り、受付にそう尋ねる。一は前にも来た事があった。ここには、見舞いにも、入院にも。

「山田さん、ですか？」

「……？」

係の女性は微妙な表情で一に聞き返してきた。

「えっと、こちらで入院しているって聞いてるんですけど……」

「おかしいですね……、……山田なんて方、一人だってここには入院していない様ですけど」

「ええ？」

そんな筈は無い。店長から確かにそう聞いていたし、フリーランスなんてある意味面倒な患者をここ以外で引き取るとも一には思えなかった。

「もしかして、退院してるとか……」

だが、あの時の山田は重傷だった。そう簡単に治って、退院出来る筈も無い。

「あら、はじめちゃんじゃない」

聞き慣れない、自分を呼ぶ声に一は振り返る。ナース服姿の、優しい雰囲気を漂わせた女性がそこにいた。見覚えがある、どころか。

「……炉辺（ろばた）さん？」

「あ、お早うございます」

受付の女性は炉辺の姿を確認して頭を下げる。

「はい、お早うー、お仕事ご苦労様。はじめちゃんも久しぶりね、今日はどうしたの？　もしかして怪我？　駄目よー、気を付けなきゃ」

「あ、えーと、じゃなくて、今日はお見舞いに来たんです」

その言葉を聴いた瞬間、炉辺の顔がぱあっと輝いた。

「もしかして、しおりちゃんの！？」
「……そうです」
どうして、この人はこんなに喜んでいるんだろう。一は不思議に思う。
「あ、で、でも。山田栞なんて人、ここに入院はしていないらしくて……」
「うふふ、そうだったの。大丈夫よ、しおりちゃん、ちゃんとこの病院にいるから」
一は首を傾げた。
「それじゃ、案内してあげるからついといで」
炉辺は元気良く、スキップでも踏みそうなぐらい楽しげに歩き出す。
「え、あの、ちょっと」
一も慌てて、彼女の後を追いかけた。

辿り着いたのは、病院内の奥まった場所にある個室だった。
「ここよー、それじゃ、お姉さんは退散するからごゆっくりー」
「え？　あ、あのちょっとっ」
なんて騒がしい人なんだろう。一は騙されている可能性も考慮し、病室前に掛けられたプレートを確認する。
「……あの人は……」
思わず、頭を抱えた。

『二栞（にのまえ　しおり）』

と、そう、プレートには書かれていた。
「失礼します……」
ノックをして、返事は待たずに一は病室の扉を開ける。
「誰だー？」

カーテンの引かれたベッド越しから、あの男前な声が聞こえてきたので、一は一先ず安心した。
「俺です、一です。お見舞いに来ましたー」
「なっ……！」
カーテン越しでも、山田の、あからさまにうろたえた様子が分かる。
「どうしてお前が来るんだよっ！」
「いや、どうしてって……来ちゃ駄目でしたか？」
確かに山田とは、あの日の最後にあまり良い別れをしたとは言えない。嫌われてしまったのだろうか。一は長い溜め息を吐いた。
「じゃあ、ごめんなさい。ここに果物置いていくんで、良かったら召し上がって下さい。それじゃ」
「ばっ、馬鹿！　馬鹿かお前！　帰るな、帰ったらぶん殴るぞ！」
「……う、分かりました」
一は部屋の隅に立て掛けてあるパイプ椅子を手に取り、山田の居るベッドへと近付いていく。
「ちょっと待て。来ても良いけどよ、カーテンは開けんじゃねえぞ」
「へ？　どうしてですか？」
「どうしてもこうしてもねえよ。オレが駄目だって言ったら駄目なんだ。分かったか？」
「はあ……」
仕方ない。一はパイプ椅子を組み立て、ベッドの傍に椅子を置き、腰を下ろした。最初になんと声を掛けようが迷ったが、
「表のプレートはなんですか？」
まず、それを尋ねてみる。
「……ん、アレか」
「そう、アレです」
糸原といい、立花といい、最近、自分の名前を勝手に使う奴が多すぎる。一は少しだけ気にしていたのだ。
「一、お前には話してたよな。オレが自分の苗字が嫌いだって事を

よ」
「あー、やま――」
「――言ったら殴るぞ」
ごほん、と。一は寒々しい咳払いを繰り出す。
「……ええ、そうでしたっけね。で？」
「おう。フルネームを聞かれたんで、お前の苗字を借りてみた」
だからか。だからなのか。炉辺の、あの嬉しそうな態度。
「絶対誤解されるじゃないですか……」
「まあ、それもアリだろ」
「何がアリなんですかっ」
「かはは、冗談だよ、冗談。おう、冗談だ……」
何度も言うな。一は頭が痛くなってきた。
「はあ、もう良いですけど。それよか栞さん、体の調子はどうなんですか？」
「あー、骨が折れてて内臓が潰れてたらしいな。一時はやばかったが、今は大丈夫だ。精々、ゆっくり養生させてもらうぜ」
「……良かった。本当にもう、あの人手加減してたんですかね」
今頃はゲームに興じている同居人を、一は思い出す。
「……あの人、なんて呼んでるってこたあ、一、上手くやったんだな」
「上手くは、無かったと思いますけどね。でも、お陰さまで何とか」
「かはは、そりゃ失敗しちまったな。損したのはオレだけか」
一は言葉に詰まってしまう。でも、何か言いたい。言ってあげたい。少しでも、彼女の心を癒し、支える事が出来るのなら。それがせめてもの恩返しだろうと、一は考えた。
「あ、あの……」
「おい、慰めならいらねえぜ。好きだった奴が死んだって損してもよ、得た物だってオレにゃあるんだ。だから、一は気にすんなよ」
「……やっぱり、大切な人だったんですね、追っ掛けてた人の事」
「あ？　だからあん時、ビルでそう言ったろ？」

山田は一を馬鹿にするように、豪快に笑う。
「いや、それは今初めて聞いたんですけど。だって結局、俺は答えを貰ってませんでしたからね」
「……あ」
笑いが止まった。
「栞さん、誰か別の人に話したんじゃないですか？　それを俺と勘違いしてた、とか」
「ぐ……」
「そっかー、好きだったのかー。予想はしてたんですけど、実は意外だったり。あっはっは」
「わっ、笑うな馬鹿！」
カーテンの向こうから、ジュースの空き缶が飛んでくる。一は椅子から立ち上がり、それを避け、律儀にも拾った。
「少しぐらいは弄ったって良いじゃないですか。俺なんて、多分この先、ここに来る度に炉辺さんにニヤニヤされちゃうんですよ」
「男だったら我慢しろ」
「はい、はい、と。……でも、得た物もあったんでしょ？」
「ん、まあ、な」
「何を得たんですか？　教えて下さいよ」
一はちょっと楽しくなっている。基本的に、あの店ではからかわれ、遊ばれる立場に居るので、こうして他人をおちょくるのは中々に新鮮なものがあった。
「……駄目に決まってんだろ」
「良いじゃないですか。別に俺は取ったりしませんよ。だから教えて下さい、減るものじゃなし」
「駄目だ。減るかもしんねえからな」
「分かりましたよ、だったらこうしましょう。交換条件です。栞さんがそれを教える代わりに、俺も何か一つだけ質問を受け付けますから。しかも、俺が先に答えます。どうです、破格でしょう？」
物凄い詭弁だった。

「何言われたって、嫌なものは嫌だからな」
「強情ですね。ほらほら、我慢は体に毒ですよー」
「一、調子乗るなよ」
「はい」
口調が怖かったので、一は素直に頷いた。カーテン越しなので、山田に見えているかどうかすら関係なく首を振る。
「……とにかく、駄目な物は駄目だ。他の話なら聞かせてやっからよ」
「うーん、かと言って、特に聞きたい話なんて別に――」
「――あるよな？」
「……あ、じゃあやっぱり、話は良いですから顔を見せて下さいよ」
こうして再会したのだから、やはりカーテン越しでの会話は寂しい。数日とは言え、一にとって栞は打倒八岐大蛇を成し遂げた相棒なのだ。
「そっ、それも駄目だっ」
だが、山田は頑なに拒む。
「もしかして、顔が無茶苦茶になってるとか……」
「馬鹿！　そんな訳あるかっ、大体だな、んな事は思ってても口にすんじゃねえ！」
「他に見せられない理由があると？」
山田は答えない。
一は何だか、空しくなってしまったし、お腹も減ってきた。
「まあ、栞さんが元気だって分かりましたし、今日の所はこの辺で」
「なっ、馬鹿っ、帰ったら殴るって言ったろうが！」
「……じゃあいつまで居ろって言うんですか。俺にだって色々とあるんですからね」
「知るか。ずっと居ろ」
それじゃあ唯の入院患者だ。一はビニール袋をぶら提げて、椅子から立ち上がる。
「また、今度来ますから」

歩き出し、扉の前まで一が来た所で、
「分かった。見せるから」
山田のか細い声が聞こえてきた。
「だから、もうちょっとだけ話しようぜ。正直暇なんだよ。この街にゃ知り合いもいねえしな」
一は黙って、立て掛けかけたパイプ椅子を握り直し、ベッドの傍まで持っていく。
「冗談ですよ。そんなに嫌なら、カーテン越しでも良いですから。それじゃ、何の話をしますかね」
「い、いや、嫌なんじゃなくて、だな……」
「栞さんにしては、男らしくない物言いですね」
「……男だったら、自分の発言には責任を持つものだよな？」
冗談です。一は笑って誤魔化した。
「とにかく、嫌じゃない。嫌じゃないんだけど、その、笑うなよ？」
「笑うわけ無いじゃないですか、そいじゃ開けますよ」
「うわっ馬鹿！　心の準備がっ」
もう面倒臭くなったので、一はカーテンを一気に引いてやる。そこにはベッドと、パジャマを着た山田と、幾つかの雑誌類があるだけだった。
「って、別になんともないじゃないですか」
一は内心ほっとする。もし、本当に山田に何かあったらどうしようかと考えてもいたのだ。
「……」
一方の山田は無言で顔を伏せている。心なし、顔を赤くさせていた。
「栞さん？　どうしたんですか、熱でも？」
「うっ、うるせえ！　やっぱり見るな！」
「別におかしなところなんて……」
そう言って、一は改めて山田を観察する。高い背、短い銀髪、ピンクのパジャマ。前に見た時と何一つ――。

「あ」
一つだけ、違った。
「ああ、巫女さんの服じゃ無いって事ですか」
「……悪いかよ」
山田はジャージを異様に毛嫌いしていた、というか、巫女装束以外の服装を拒絶していた節があったのを一は思い出す。
「前にも言いましたけど、ジャージやパジャマは変な格好では無いんですよ？」
「オレには似合わねえんだよっ」
「そうかな……、こんなに可愛いのに。栞さん、鏡とか見ました？」
「な、なっ？」
確かに、山田には巫女装束が良く似合っていて、今着ているパジャマ姿が珍しい格好ではあったが、一にはそんな事気にならなかった。
「ん？」
ふと、一は山田のパジャマの、胸元に目を遣る。
「あ、何だか可愛い兎もプリントされてるじゃないですか、すっげえ可愛いですよ、それ、栞さん」
「かっ、帰れぇ！」
真赤になった山田の拳を腹に食らい、一は『く』の字に折れ曲がった。何だか懐かしいなあ。なんて思いながら、意識が薄れていくのをぼんやりと感じて。

痩せ腕にも骨

午後、一時三十分。
「おい、立花、呼ばれてるぞ」
神野のいつも通りの午後が始まっていた。
「……うーん……」
昼休みが終わり、五時間目の授業。数学。神野は隣の席で眠っている立花が当てられたので、声を掛けて、起こす。
「起きろって、先生怒ってるから……」
「んー、はじめくぅん……」
だが、立花は一向に目を覚ます気配を見せない。お約束の様な寝言を吐き出し、口からは涎が少し垂れていた。
「神野、叩いて起こせ」
教壇の前に立つ若い男性教師が、苛立っているのかボールペンを何度もノックする。
「……はい」
一クラス、四十人前後の注目を浴びながら、神野は立花の頭を軽く小突いた。
「う」
呻き声を発し、立花は身を捩じらせる。
「や、やめてよぅ……、ボクがそこ弱いの知ってるくせにぃ……」
「どあほっ」
さっきよりも力を込めると、立花は鳴きながら飛び起きた。

午後一時三十分。一の昼は大体この辺りから始まる。
ゼミに出席する為だけに大学へやってきた一は、時間が中途半端に余っているので、構内を意味もなくぶらついていた。
喫煙所近くを通り掛かった時、聞き覚えのある声と、見覚えのあ

る顔とに遭遇する。
　小さくて黒いのと、大きくて白い二人。
　その二人は言い争いをしているようで、彼らの周りの雰囲気は悪く、近付く者は誰もいなかった。
　無視して通り過ぎるのが人情だったが、余った時間を無為に費やすのもまた人情だ。そう考えた一はゆっくりと二人に近付いていく。
「ふざけるなっ！　私は認めん！」
「ははは、ふざけているのは君じゃないか。何をどう考えて喋っているのか、僕には理解できないよ」
　近付くにつれ、いつも通りの会話が聞こえてきた。一は何故だかほっとする。
「よう、楽しそうじゃねえか」
「ん？　ああ、お早よう先輩、誰よりも会いたかったぞ」
　一の姿を認めた小さくて黒い方、早田早紀（はやたさき）が嬉しそうに歯を見せて笑う。
「やあ、今日も素敵だね、一君」
　次に、大きくて白い方、楯列衛（たてなみまもる）が声を掛けてきた。
「煙草吸わないのに、何だってこんなところ居るんだよお前ら」
　一は二人の、微妙に空いた隙間に座り込む。
「うむ。私は吸わないが、先輩は吸うだろう？　先輩はいつ何時姿を見せるか分からない多忙極まりない方なので、こうして先輩が出没するポイントに網を張っていたのだ」
「俺はモンスターかよ」
「モンスター、確かに、一君の素晴らしさと来たらモンスター級だと思うけどね」
「褒め言葉じゃないだろ、それ」
　いつも通りに二人の戯言を流していると、一は視線を感じた。
「う、な、何だよ……」
　早田と楯列からの熱烈な視線から逃れるように身を捩る。
「いや、先輩、調子でも悪いのか？」

「へ？　そんな事無いけど」
訳が分からず、一が首を捻っていると、
「一君、煙草は吸わないのかい？」
良く通る澄んだ声で、楯列が尋ねてきた。
「……あー、なるほど」
一は得心する。そう言えば、この二人と居る時は煙草を吸っていたような。
「煙草は止めたんだよ。っつっても、いつまで続くか分かんないけどな」
「……そうだったのか、いや、良い心掛けだぞ先輩。益々惚れ直してしまった」
「そんな大袈裟な……」
「ノン。煙草を止めるなんて大した事じゃないか、見たまえ、ここに居るもの達を。ほら、煙草なんて害毒をあんなに美味そうに吸っているっ。彼らは生きているだけで害毒なのだよ」
楯列は立ち上がって力説し始めた。
「バカ、喫煙所まで来て何言ってやがる。また敵増やしちまうぞ」
「ふむ。と言う訳で一君、結婚しようじゃないか」
「……唐突だよな、お前って」
「愛は何時だって唐突な物さ。そうだ、一君、君に聞いてほしい事があるんだ」
「ああ、何か言い争ってたな、お前ら」
一は何気なく早田に目を遣った。
「うむ、先輩なら私の考えが優れていると、そう言ってくれるだろう」
「だから、何の？」
「一君。僕は猫が好きなんだよ。猫の気紛れさ、気高さ、実に素晴らしく、美しい」
唐突に、楯列は言った。
「先輩、私は犬が好きなのだ。忠実さ、誠実さ。飼い主に尽くす真

の臣下ではないか。見習うに値する心意気だ」
「……ふうん」
一は頷いて、楯列の着けている腕時計で時間を確認する。
「つまり、僕は猫が好きで、犬が、早田君が嫌いなのさ」
「つまりだ、私は犬が好きで、猫が、楯列に死んでもらいたいのだ」
「仲が良いのか悪いのか……」
溜め息を吐く。
「で？　俺に何をしろと？」
「うむ。犬か猫。私かこいつ。先輩には私たちのどちらが好きなのか、選んでほしいのだ」
「……なるほど、俺は犬も猫も嫌いだ。そしてお前ら二人のどちらかなんて、選べるわけが無いじゃないか」
「せ、先輩なんでだワン！？」「一君、どうしてだニャ！？」
「アホか、両方好きじゃ無いからに決まってんだろ」
顔を近付かせてくる二人から逃れる為、一は立ち上がる。
「ひっ、ヒドイぞ先輩っ、私が今までにどれだけ尽くしてきたと！」
「んな事はこないだ貸した昼飯代を返してから言ってくれよ」
「では一君っ」
「うわあっ、尻触るな！」
半ば反射的に、一は楯列の鼻を裏拳で打ち抜いた。
「僕だって今まで君に尽くしてきたじゃないか！　それなのに、それなのに君はっ」
「あ、おい、鼻血出てるぞ」
「構うものか、君の為に流す血ならば厭う事なんて無い」
「……お、おー」
一はポケットティッシュを差出しながら、素直に感心する。どうしてこうも、人間は気持ち悪くなれるのだろう、と。
「……とにかく一君、選んでくれ給え。この際嘘でも何でも良い。僕は君が言う事になら従える。だから……」
「……目を潤ませて、こっちを見るのは止めなさい」

一は頭を抱えた。
「だが先輩、私か楯列。そろそろ、ハッキリさせるには良い時期だと思うが？」
「……何をだよ」
「ふっ、知れた事を。どちらを娶るかに、そして抱くかに決まっているだろう。勿論、選ばれなかった方には死が訪れる。先輩の手によって、な」
「それこそ痴れた事じゃねえか。相変わらず突っ込みどころ満載な奴だな、本当に」
早田は何故か照れている。
「って言うか、もう授業の時間になるぞ」
「誤魔化さないで貰いたいね、一君。答えを貰えるまで僕は頑としてここを動かないよ」
「じゃあ癌になるまで喫煙所にいろよ。行こうぜ早田、遅刻しちゃまずい」
「先輩の行くところなら何処へでも」
早田は一の腕を取り、力任せに組もうとする。
一はやんわりと彼女の腕を解き、講義棟へと足を踏み出した。
「一くーん？　本当に僕を置いていくのかーい？」
無視し続けると、楯列は鳴きながら飛び起きてくる。一はやっぱりいつも通りだと、内心ホッとするのだった。

午後五時。
「けん君、部活行くの？」
「ああ、大会も近いし、下級生の様子見も兼ねてな」
人の少なくなった教室。神野の夕方はここから始まる。
「だったらさ、もう剣道部に入っちゃえば良いのに」
立花は鞄を振り回しながらそんな事を言った。
「……一度辞めた身だからな。正式には戻りづらいんだよ」
「ふーん。なんで辞めちゃったの？」

お前の所為だとは、言えない。神野は困った顔で手元に視線を落とした。
「俺より強い奴が、あそこにはいないからな」
だから、笑って誤魔化した。
「えへへ、けん君強いもんね」
「……皮肉にしか聞こえねーよ」
「何か言ったー？」
「言ってねーよ」
ぶっきら棒に言うと、神野は鞄を持って立ち上がる。
「でもさー、部活で毎日素振りやるだけでもタメになるよ」
「……だったらお前が入れよ。強いのが入りゃ、皆喜ぶぞ」
「本当はそうしたかったけど、ボク頭良くないから……」
烏の濡れ羽色をしたポニーテールが、力なく垂れていた。
「なあ、毎日素振りやってんのか？」
「ボク？　んーん、時間が空いたら、かな」
「……どれくらい振れば、お前に追い付けるのかな」
神野は、もはや、独り言と変わらぬ声量で呟く。
「けん君は毎日素振りしてるの？」
だが、立花はしっかりと拾ってきた。答えなど、欲しくは無かったのに。
「してるよ、毎日。帰ったら、一時間ぐらいは竹刀を握ってる」
「ふーん、少ないね」
「やっぱりそうなのか……」
「ボクに追い付くって意味が分からないけど、今のけん君のままじゃ、立花（ボク）にはなれないと思うよ」
あっけらかんと。立花は大した事でも無さそうに言った。
「じゃあ、どうしたら良い？」
気に入らないが、自分と立花の力量は明らかに差が開いている。開き過ぎて、ハッキリ見え過ぎている。彼女の助言に耳を傾かせるのは、弱者である自分の義務、といったところだろうか。

「んー、どうせ振るなら、腕が上がらなくなるまでかな」
「……そりゃ、当たり前じゃないのか？」
立花は首を振った。
「上がらなくなっても、また振るの。そうだね、隣で誰かに見てもらえば良いよ。休んだりしたら叩いてもらってさ」
「壊れちまうだろ、んなの」
「大丈夫。人間って丈夫だからさ。繰り返してたら直慣れるし、限界だ、って思うのも伸びるよ」
「……お前、まさか九州にいた頃は」
少しばかり、神野の肝が冷える。
「うん、毎日。生まれてからずっと」
「生まれてから……」
酷い家だと、勝手に思った。思ってから、だからこそこんな酷い奴になれるのだとも思う。
「それと、竹刀だけじゃダメだよ。楽になってきちゃったら尚更ね」
涼しい顔のまま、立花は提げていた竹刀袋――中身は真剣だが――を示した。
「ウチには真剣が無いからな……」
「そうなの？　じゃあ買わなきゃ。あ、ボクのお下がりならあげるけど」
「……いや、自分で買うよ」
安いプライドだとは、自分でも気付いている。それでも神野はそう答えた。
「そっか、ん、それが良いかもね」
「ああ、悪いな」
「……？」
「それより、そろそろ補習じゃないのか？」
訝しげにする立花から目を反らし、話を反らした。
「あああ、本当だ。嫌だなあ……」
「ま、俺たち学生は剣だけじゃなくて、違うのも握らないとな」

「うん、そうだね。お寿司とか」
「……腹、減ってんの？」
立花は静かに頷く。
「……こんなんが俺より強いだなんて……」
「けん君、また何か言った？」
「終わるまで待っててやるから、帰りに何か奢ってやるって言ったんだよっ」
「本当に！？　やったあ、良し、ボク頑張るよっ」
言うなり、立花は教室から早足で立ち去ろうとする。
「あ、おいっ」
「なに？」
振り返る立花を見て、神野は何故声を掛けたのか、悔やんだ。
「――――」
言葉を、失う。
烏の濡れ羽色の彼女は、廊下側の窓に屈折した西日に照らされて。
良く、映えていた。
――眩しい。
それだけを思う。眩しくて、とてもじゃないが直視出来ない。すぐ傍に居るのに、どれだけ頑張って手を伸ばしても届かない存在。
「あ、いや……」
だからこそ、しっかりと刻んでおく。目的を、目標である彼女を見失わないように。
「補習、頑張れよ」
「うんっ、じゃあまたあとでね」
いつか、彼女に追い付ける日が来て。
いつか、彼女の隣に並べる時が来たら。
「……頑張るのは、俺だろ」
いつか、きっと、自分は。
神野は、離れていく立花の背中を、今はただ黙って見送る。
必ず追い付くと、そう、胸に刻んで。

午後六時。オンリーワン北駒台店、フロア。
「お兄ちゃん、シフト考えてるんだって？」
「無理矢理押し付けられたんだけどな」
一とジェーンはカウンターの近くに立ち、遅れている納品のトラックを待っていた。
「もう決まったノ？」
「まだ。皆の希望を聞いてるところ」
「……Ｈｍ、じゃ、アタシはねえ」
「お前、一応社員じゃん。勝手にシフト決めて良いのかよ」
一の心配をよそに、ジェーンは嬉しそうにはにかむ。
「社員をなめないでよネ、お兄ちゃん。シフトぐらい自分の都合どーりにして見せるワ」
「あっそ。だったら聞いとくか。なあ、どこが良い？」
予定調和。社交辞令。
「モチロン、お兄ちゃんと一緒が良い」
「……しっかりしろ社員。誰、じゃなくて俺は何曜日の何時が良いかって聞いてんの」
「もう、アタシはお兄ちゃんとならどこでも良いの」
拗ねた風にジェーンが言うので、一は頭を抱えたくなった。
「……それじゃ、俺が入る日しか来ないって事じゃないか。ウチは新人ばっかなんだから、他の人のフォローはどうすんだよ」
「知らなーい。フリーダムにやっちゃえば良いヨ」
「自覚、あるか？」
どうしてこの店は、こんなにも上の人間が駄目なんだろう。
「お二人とも、お早ようございます」
「ああ、お早よう」
「……グッモーニン、ナナ」
そこに、ナナがやってきた。いつも通りのメイドの格好で。

「今日、シフトだったっけ？」
「はい。店長から、今日は一さんとゴーウェストさんに仕事を教わるようにと」
　ナナはよろしくお願いしますと頭を下げた。実に丁寧な、機械的な動作であった。
「またあの人は勝手に……」
　早くシフトを完成させなければと、一は強く思う。
「ちょっと待ってナナ、シフトに何か希望あるかな？」
「希望、ですか……」
「うん。他の人にも聞いてるんだけど、中々決まらなくてさ」
　ナナは眼鏡の位置を直してから、迷った素振りすら見せず、
「そうですか。私も無いですね」
　涼しげに、涼やかな声で言い切った。
「……えーと。困るんだけど。あの、本当に何も？」
「そう言われましても」
「あー、あんまり聞きたくは無いんだけど、その、時間に希望が無いんだったら、入りたくない人とかでも良いよ」
　もう何でも良いから、シフトを埋めたい。
「では、折角なので。一さん」
「ん」
「とは入りたくないです」
「んん……」
　聞くんじゃなかったと、一は今更後悔した。
「あの、理由聞いて良いですか？」
「前回の様な事があったら困りますから。非常に、非効率です。ところで一さん、何故敬語に？」
「……そういう気分なんです」
　ナナは納得いかない様子だったが、そうですか、と一言だけ漏らす。
「まあ、ナナの希望はちゃんと反映させるよ。けど、もし都合が合

わなかったら、俺と一緒でも我慢してくれよな」
「……善処します」
一たちに頭を下げ、ナナはバックルームに入っていった。
その後ろ姿が消えるのを見届けてから、一は溜め息を吐く。
「お兄ちゃん、ナナに嫌われちゃったネ」
「そうだね、はあ、もう嫌だ。何も分からないよ。お前が笑ってる理由も分からないけどな」
「ダッテ、お兄ちゃんにバッドバグズが付かなくて済んだんだもん」
「はいはい、悪い虫ね」
尤も、ナナは悪くないし、虫でもなければ人間でも無いのだが。
「シフト、決まりそうに無いや」
「あと、だれに聞いてないノ？」
「えーと、立花さんと神野君。高校生二人かな。あ、堀さんと店長にも聞くだけ聞こうかな」
「ホリはともかく、ボスにも？」
ジェーンは眉間に皺を寄せる。あまりにも、露骨に。
「分かってる。溺れるものは藁にもって奴だよ」
「だいじょーぶっ、見つからなかったらアタシとお兄ちゃんでシフト埋めちゃお」
「……ありがとう、助かるよ」
一は、この日一番長く深い溜め息を吐いた。

午後、八時。
「いただきます」「いただきます」
神野家のリビングに二人分の声が重なる。
「今日も母さん達は遅いのか」
食卓に並べられた、湯気の立ち上る和食のメニューに箸を迷わせながら、神野は何気なく口を開いた。
「兄さん、行儀が悪いですよ」

制服姿の姫が嗜めるので、神野はとりあえず味噌汁を一口啜る。
「制服、着替えないのか？」
「ええ、寝るまでは気を引き締めておかないと」
「家でぐらい気を抜けよ」
「誰かさんがお気楽な分、私がしっかりしないといけませんから」
神野は言葉を返さず、焼き魚の身を解す作業に取り掛かる。
「兄さん、明日はどうするんですか？」
「ん、明日？」
問われてから、しばし考え、明日が創立記念日だという事に思い当たった。
「ああ、部活の手伝いに行くんだよ。明日は顧問がいないって聞いたし。ま、雑用係みたいなもんだ」
「……学校、行くんですか？」
「何驚いてんだよ。俺が休みに学校行っちゃ悪いのか？」
姫は俯き、
「そんな事は……」
心なしか、悲しそうに呟く。
「ん？　そういや、姫も明日学校行くんだっけ？」
「あ、はい。委員会の仕事が残っていて」
「そんなの休み明けにやりゃ良いのに。真面目だな、姫は」
神野は笑って、茶椀の中身を片付けた。
「おかわりっ」
「もう、兄さんの方が近いのに……」
姫はぼやきながらも神野から茶碗を受け取り、椅子から立ち上がる。
「俺は朝から行こうと思うんだけど、姫は？」
「私は……、私も、朝から行こうかな」
「じゃ、目覚ましはセットしなくて済むな」
神野は茶碗を受け取り、また笑った。
「どういう意味ですか？」

「冗談だよ。でも、ちゃんと起こしてくれよな」
「もう、そんな事言って。どうせ素直に起きてくれないでしょ」
かもな。そう言って、神野はテレビのリモコンに手を伸ばす。
「あ、兄さん駄目ですよ」
「固い事言うなよ。ちょっとぐらい良いじゃんか」
「ご飯を食べ終えてから自分の部屋で見て下さい」
「面白そうな番組があるんだって。な、良いだろ？」
カタン、と。やけに静かな音が響いた。
神野はその音に息を呑む。
妹の、箸を置いただけの挙動に気圧される。
「……ひ、ひめ？」
姫は目を瞑り、深く息を吸っていた。
「分かりました。どうぞ、兄さんのご勝手に」
まずい。神野は己の行いを悔いると同時に、姫の沸点の低さを恨む。
「その代わり、私も好きなようにやらせてもらいます」
「わ、分かった。分かったよ、俺が悪かった。ほら、リモコンから手離したぞ」
「これからは和食を作りませんし、起こしにも行きません」
「わああ、悪かったって！　ごめんっ」
だから、敬語で怒るのは止めてくれ、恐いから。
とは、これっぽっちは残されているであろう兄の威厳を保つ為、喉元で押さえた。
「……」
「に、睨むなよ……」
「睨んでません。もう、冗談ですよ」
未だ姫はジト目だったが、少しは機嫌を直した様子だった。
「食べる時はテレビ見ないからさ」
「へえ、ま、兄さんのお好きに。ところで兄さん？　私、今日初めてお味噌汁作ったんですけど、お味はどうですか」

迷う余地などない。
「お、美味しいよ。あ、でももう少し薄めの方が……」
「え？　何か言いました？」
「とても、美味しい、です」
最近、女性に振り回されている気がする。
笑顔のままこちらを見ている姫から目を逸らせずに、神野はそう思った。

「はあ……」
「何よ、溜め息ばっか吐いちゃって」
午後、十時。
「いや、シフトが全然決まらないんですよ」
自室の布団に寝転がりながら、一は真っ白な紙を睨んでいた。
「んなの適当で良いじゃん」
「適当にやったら、その分俺に跳ね返ってくるんですよ」
「ふーん。私がやったげようか？」
一は少しだけ考えてから寝返りを打つ。
「結構です。それよりモンスターでも狩ってて下さいよ」
「言われなくても狩ってるわよ。でも退屈ね。これさ、多人数でやるゲームらしいのよ」
「へー、でも残念ですね。俺持ってませんから」
「じゃ買いなさい」
嫌です。一はそう言って目を瞑った。
「何でよ。私と一緒にゲームすれば楽しいに決まってるのに」
「囮とかに使われそうなんで」
「当ったり前じゃない」
糸原が言い放った時、どこからか爆発音が聞こえてくる。
「あー、ミスった」
ゲーム内の効果音だと気付き、一はごろりと頭の位置を変えた。

「明日、朝からでしたっけ？」
「んー？　そーよ、起こしてね。私徹夜でゲームやってるから」
「……嫌ですよ。自力でどうにかして下さい」
「じゃあ、にのまえはじめを殺すわ」
やけに冷たい声。
「勝手にどうぞ。ゲームのキャラが何遍死のうが痛くも痒くもくすぐったくもありませんから」
「よいしょっと」
「ん？　ご飯ならさっきも食べたでしょ」
立ち上がった糸原を見て、一はあくび交じりに言う。
だが、その糸原がハンガーに掛けているスーツの内ポケットから取り出した物を見て、一の眠気が一瞬で覚めた。
「ちょ、ちょっと？　そんな物持ち出してどうする気ですか？」
「はあ？　今さっきあんたを殺すって言ったじゃない」
糸原はオープンフィンガーグローブを嵌め、レージングの感触を確かめている。
「……冗談でしょ？」
「ある所に嘘吐きの羊飼いがいました。『狼が出たぞ』とほらを吹き、慌てふためく村人を見るのが趣味の根暗な羊飼いが」
「なんですか、その話」
「でも、ある日本当に狼が現れて、飼っていた羊は次々に食われていきました。羊飼いは叫びます。『狼が出たぞ！』　と。ですが、村人はまた嘘だと思い信じてくれません」
今更ながら、一は身の危険を感じた。
「そして最後には、羊飼いは狼に食べられてしまうのです。ああ、可哀想。さて、一。今から私に何かされちゃう訳だけど、言い残す事はあるかしら？」
「あの、今の話は？」
「特に意味は無いわ。ほら、立って。寝てるとやり辛いのよ」
「何がだよっ」

一は夜中だという事も忘れて叫ぶ。
「ほらほら、殺されるのが嫌なら、明日間に合うように私を起こすと誓いなさい」
「……素直に言えば良いのに。はいはい、分かりました。分かりましたよ、起こします」
「最初っからそう言えば良いのよ。ったく、余計な手間取っちゃったじゃない」
糸原はスーツの内ポケットにレージングを突っ込み、グローブを外して投げ捨てた。
「すいませんでしたね。じゃ、俺は寝ます。あ、電気消しても良いですか？」
「駄目よ。私ゲームするんだから、目が悪くなっちゃうじゃない」
「目も悪くなっちゃまずいですね。それじゃおやすみなさい」
一は抗議の言葉を聞き流し、目を瞑る。

午後、十一時。
北駒台高校に一つの影。
「……これで、最後」
その影は校庭の隅、目立たない場所に何かを、木の枝で書き込んでいる。意味の無い記号の様でもあったし、意味のある呪文の様にも見えた。
影は人の目が無い事を確認してから立ち上がり、学校の裏口に当たる場所へ向かう。途中、警備員の所持する懐中電灯の明かりに怯えながらも、影は学校から抜け出した。
「……」
家路へと向かう途中、何度も足を止め、何度も振り返る。
これで良かったのだろうか。
何度も、そう思った。
同時に、こうするしかないのだとも。

「ごめん……」

誰に向けての謝罪の言葉なのか。

後悔と不安と焦燥と、そして少しばかりの期待を胸に秘め、彼女は歩き出した。

怨徹骨髄

一言で表すならば、彼らが見たのは悪夢であった。

そして、激痛で目が覚めた。

最初に襲ってきたのは胸を締め付けられるような息苦しさ。空気を求め、口を開けて喘ぐと、次に全身に痺れが走る。体を流れる電流の如き熱さに寝返りを繰り返した。火を点けられたと錯覚しそうな熱さに身悶えしていると、最後の、最悪の痛みが頭部に襲い掛かる。何かが頭の中を叩き続けていて、視界がぶれ、涙と嗚咽が零れた。鳴り止む事の無い不快な音と、永劫に続きそうな、脳内を這い回る鈍痛。

しばらくの間、頭を押さえて呻きながら、布団の上で転がり続けていると、直に痺れが治まってくる。か細い呼吸を繰り返す内、胸への圧迫感が消えていった。そして、体から熱が引いていく。徐々にではあるが、楽になっていった。

しかし、消えない。

頭痛だけがいつまでも消えてくれない。頭の外側からも、内側からも何かで殴り続けられているような、激しい痛みが残り続ける。

折角、良い気持ちで眠っていたのに。

時刻は午前三時を回ったところ。浅い眠りを繰り返していた糸原は物音で目が覚めた。暗い部屋の中、隣で眠っているであろう一を確認する為に目を凝らす。

そこには、奇怪な動きをしている一がいた。最初は寝相が悪いのだと思っていたが、寝相が悪いのは自分だったのを思い出し、やがて彼の息が荒い事に気付く。

「……何よ、どっか痛いの？」

自室の布団の上で苦しそうにしている一を見て、糸原はようやく声を掛けた。だが、返答は無い。一は喘ぎ、呻き、痛みから逃れるように寝返りを繰り返しているだけ。

「頭？　お腹？　あ、それとも顔が悪過ぎて夜中に鏡でそれ見ちゃって苦しんでるとか？」

答えはまだ返ってこない。見かねた糸原は、やれやれ、なんて呟いて立ち上がる。部屋の明かりを点け、この部屋唯一の、外部との連絡手段である電話の元まで近付いた。

「救急車、呼ぶ？」

糸原は受話器を持ち、一に問い掛ける。

一は頭を振った。糸原はそれを否定の意と汲み、受話器を戻した。

「ねえ、やばいんじゃないの」

「だい、じょぶ……」

全然大丈夫だとは思えない。糸原は動き回る一の頭を強引に押さえ付け、彼の額に手を当ててみる。熱はあったが、寝起きだという事を考慮して大した事は無いと判断した。勝手に。

「うわ、汗付いちゃったじゃない」

非難がましく睨まれたので、糸原は口笛を吹いて誤魔化す。正直、そんな事しか出来ない。この部屋には救急箱なんて大層な物は無かったし、薬と言えば、偶に一が服用する市販の胃薬ぐらいしか置いていなかった。

第一、糸原にはこんな状況経験した事が無い。昔は親代わりの長雨と過ごしていたが、彼が病気になる事なんて殆どと言っていいほど無かった。誰かと一緒に暮らしていて、その誰かが苦しんでいても、糸原にはどうすれば良いのか分からない。

「水、飲む？」

今度は首すら振ってくれなかった。一は涙を浮かべて嗚咽を漏らし続けている。それなのに、自分には何もしてやれない。

「……ねえ、もう医者呼ぶわよ」

確か１１０番だったか、なんて思いながら、糸原は再び受話器を

手に取った。
「……いり、ません」
背中越しに一の声。今にも消えてなくなりそうな、頼りない声。
「だって私じゃ分かんないし、あんたしんどそうじゃん」
一は糸原の言葉に眉根を寄せると、壁に手を付いてよろよろと立ち上がる。
「頭、痛いだけですから……」
「泣くほど痛いんでしょうが」
「泣いてません」
強がりにしか聞こえないが、一はそれでも糸原の言を拒み続けて、洗面台に近付き蛇口を捻った。彼は流水に頭を浸し、少しだけ気持ち良さそうに息を吐く。
「……何か、悪い物でも食べた？」
「心当たりは無いです」
一は水を止めても、しばらくの間そのままの体勢でいた。
「本当に大丈夫なんでしょうね」
糸原は積み上げていた洗濯物の中から、乾いていたタオルを一の頭に掛けてやる。だが、彼は身動ぎ一つしない。焦れたので、無理矢理に髪の毛を拭いた。
一も糸原も無言で、広くない部屋には静寂が立ち込める。一は何も言わず、布団の上に戻り、糸原はこたつに潜り込んだ。
「寝れそう？」
沈黙に耐えかね、糸原が口を開く。
「……ちょっと、無理そうです」
「あんた、明日休みよね？」
一は静かに頷いた。
「私もバイト、休んであげてもいいわよ。ほら、アレよ。ご飯とか薬買いに行くし。様子見て、きつかったら病院まで付いてっても……」
「は、ははっ……」

「……何笑ってんのよ」
「いや、何か、糸原さんが優しいから」
怒鳴って叩いてやろうかと思ったが、一の顔色が未だ悪いので我慢する。
「それで、どうなのよ？」
「大丈夫です。流石にマシにはなってきましたから」
「あら、そう」
少し、残念。
「しっかり働いて下さいね」
「どうかしらね」
糸原はそっぽを向き、何の気なしにテレビを点けた。砂嵐が映ったので、舌打ちしてチャンネルを変える。この時間だ、まともな番組はやっていなかった。仕方ないので、詰まらなさそうな通販の番組に目を向ける。
「どうせなら、コレぐらいの時間に深夜アニメやってくれりゃ良いのに」
「……子供が深夜にアニメ見るんですかね」
「さあ、見るんじゃないの？」
完全に目が冴えてしまった。バイト開始まで、あと数時間も残っている事に憂鬱になる。糸原はだるそうに溜め息を吐いた。
「……あの、ニュースやってないですか？」
「ニュース？　興味無いんだけど」
「ちょっとだけで良いんで」
一は辛そうに頭を起こす。
「ん、ほら」
仕方ないので、チャンネルを変えてやった。流れてくるのは作業的な口調の、男性キャスターの退屈な声。読み上げられている情報自体も、糸原にとっては退屈な物であった。
「何よ、気になる事でもあったの？」
「や、特には」

「ふーん。それよりとっとと寝なさいよ」
そうします。一は呟き、布団に潜り込み目を瞑る。糸原は電気を消し、壁を背にして座り込んだ。
結局、糸原は朝が来るまで一睡も出来なかった。

朝、目が覚めると体中が痛い。と言うか、痛みで目が覚めてしまった感じだった。一はゆっくりと体を起こし、鈍痛が続く頭を抱える。窓から差し込む朝の陽光も、今日だけは目障りだった。
「……九時、か」
そろそろ糸原も帰ってくる頃だろう。お腹が減った。動けなくは無いが、動きたくない。朝食は糸原に任せ、自分はもうしばらく大人しく眠ろうと、そう思う。
一は再び枕に頭を埋め、目を瞑った。しばらくの間そうしていると、昨晩の――日付の上では今日の――出来事を思い出す。どうして、あんな目に遭ったのだろう、と。
よくよく考えてみれば、呼吸困難に陥り、全身に痺れが走り、燃える様に熱くなり、あまつさえ激しい頭痛に襲われるなんて、想像もしたくない病だった。そして原因が全く分からない。おかしな物は食べていない。さほど注意はしていないが、手洗いうがいは帰ってきたらやっている。煙草も今は止めている。健康に害を与えるような事をした覚えは無かった。
一は何気なく、伸びた爪を見る。
「と、すれば……」
ぼんやりと、あまり考えたくは無かった事を口にしてみる。
と、すれば。やはりこれの所為だろう。一は爪を眺めては目を反らし、目を反らしてはまた眺めた。
一はもう、人間ではない。ソレの血が混じった半端者なのだ。更に言えばソレでもない。人間の血も混じっている半端者だった。ジェーンの様な人狼（ハーフ）ですらない。僅かに、ほんの少しだけソレの血が

混ざっているだけ。
突如襲い掛かった激痛。一には心当たりが二つあった。一つはこれ。自身に異物が混入した事により、耐え切れなくなった体が悲鳴を上げている、そんな可能性。内側からの、自業自得の業の部分。

――――――！

考え事に耽っていた一を、電話のベルが引き戻した。
最初は無視を決め込もうとしていたが、ベルの音がやけにうるさく、頭の中に響くので渋々受話器を手に取る。
「……もしもし」
私は不機嫌です。そんな気持ちを込めて、露骨に言ってやった。
『私だ。今から店に来い』
「……」
電話口から聞こえてきた、遥か上空からこちらを見下ろすような、偉そうな声音。
「嫌です」
一にはそんな人物、一人しか心当たりがなかった。
『何も働けと言っている訳じゃない』
「だったら何しに店まで行くってんですか」
『客が来ている。お前目当てのな』
無駄だと分かっていても、一は受話器に視線を遣ってしまう。
「……なんで俺宛の客がそっちに行くんです」
『お前の住所も連絡先も知らなかったようだ。良いから来い、お前の好きな女の子が来ているぞ』
面倒な話だった。
「どういう意味ですか……」
『良いから来いと言ってるだろう。意味なんて、店に来れば嫌でも分かる』
「ちょっと、遅くなりますけど」

『ん、ああ、構わん』
それだけ言うと、電話口から乱暴な音が聞こえてきて通話が切られる。別れの言葉も無しだった。
「……はあ」
一は溜め息を吐き、頭を掻いて立ち上がる。行かない訳には、いかない。
恐らく、確実に客はあいつだ。一は確信めいた物を感じた。
突然の激痛。心当たり、その二つ目の理由。一つ目が内側ならば、もう一つは、ある種外側のモノ。忘れようにも忘れられない。そんなモノ。
また、ボロクソに言われるのだろう。心が弱っている今の自分がどこまで耐え切れるのか、一は心底から慄いた。

北駒台高校、体育館。北駒台高校の正門から最も近い、校内の施設。
「何時まで使えるんだ？」
「ああ、バレー部が一時から。だから、そうだな、十二時過ぎまでは余裕」
全校生徒と全教師を収容できる広大なスペース。儀式的行事にも使用されるのか、体育館の入り口から一番奥にはステージと緞帳が設けられている。入り口は一つ。手狭ではないが、一度に大量の人間が押し合えばすぐに埋め尽くされるような空間の玄関。体育館のサイドには、二つの出入り口。今は閉められているが、夏場にもなると風通しを良くするために開け放たれている。何の事はない。特筆すべき事などない、平凡な、どこにでもある体育館だ。
体育館には男子、女子の剣道部員が総勢、三十名前後。木製のフロアを半分に区切り、半面ずつ使用しているらしかった。男子の方が若干人数が多く、入り口側の面を陣取っている。思い思いに談笑を楽しんだりする者もいれば、防具の装着に手間取っている者もい

た。
「顧問がいないから、少し早めに切り上げてやるか」
体育館の隅に座り込み、他の部員を見回すようにしてから、大柄な少年が笑った。練習前なのか、防具は装着していなかったが、その少年は頭に水色のタオルを巻き付けている。
「安田（やすだ）は相変わらず甘いな。下に舐められてないか？」
大柄な少年の隣に腰を下ろしているのは神野だった。脱いだ学ランを肩に掛け、清潔そうなシャツに身を包んでいる。
「部長のお前が辞めたからだろ、今まで厳しかった分、新部長の俺が優しくしてやってんの」
「何だそりゃ」
安田と呼ばれた少年の笑いにつられ、神野もおかしそうに吹き出した。
「あー、神野、今日はわりぃな。折角の休みだってのによ」
「ああ、良いって言ってるだろ。どうせ今日は暇なんだから」
実は、バイトを休みにして暇にしたのだが。とは言わない。神野は安田に余計な気を使わせたくなかった。
「今日の俺は雑用だからな。何でも言い付けてくれ」
「お？　そうか、だったらジュース買って来いよ」
神野は安田の言葉を笑って受け流し、体育館内に目を向ける。
「ん、誰か来てない奴がいるんじゃないか？」
ふと、気になった事を問うてみた。
その問いに、罰の悪そうな顔で安田は頬を掻く。
「あー、一年の村西（むらにし）だな。遅刻の常習犯なんだ」
「ったく、甘やかせ過ぎだ。一応、来るのは来るんだろうな？」
「おー、さっき連絡が来てたらしい」
「やっぱ舐められてんじゃねえか」
安田は申し訳無さそうに顔を伏せた。
「……あー、やっぱお前の方が部長に向いてるわ」
「……そうか？」

実際、そうかもしれないと思いつつ、神野はとぼけている振りをして聞き返す。
そろそろ、部活を始めるには良い時間だ。そう、思いつつ。

一が家を出たのは電話を受けてから三十分後の事だった。
「さみー」
どうしようもない事をぼやき、一は自室の扉に鍵を閉める。
「おう？　出掛けんのか？」
自分を呼ぶ無骨な声に振り返れば、今しがた階段を上ってきたであろう、一と同じアパートの、階下の住人北英雄（きたひでお）がいた。相変わらずの無精な格好だった。だらしなく髭を伸ばし、ヨレヨレのシャツと、ヨレヨレのズボンを着ている。と言うか、一はこの格好以外の北を見た事が無い。
「ええ、今からバイトの用事で」
「そうか、まあ、ガンバレや青少年。所でよ、あの女狐はいねえのか？」
女狐と言うのが誰を指しているのか分からないが、一の知っている中で、そう形容出来る人物なら一人だけ。
「糸原さんならバイトに行ってますよ」
「だああ……マジかよ」
北は手すりに背中を預け、力なく空を見上げた。
「用事でもあったんですか？」
「ゲーム機を取られたままだったんでな、取り返しに来たんだよ。畜生、まだあのソフトはクリアしてねえのによ」
アレ、か。一は楽しそうにゲームをしていた糸原を脳裏に浮かべる。
「どうせ店で会いますから、伝えておきますよ」
「……あ、おい。それより今取ってきてくれよ。部屋にあるだろ？」
「北さん、持ち運び出来る物をあの人に渡しちゃ駄目ですよ」

「畜生っ！」
北は空に向かって叫んだ。元気な中年だと、一は思った。
「まあ、勝手に渡しちゃうとあとで俺が殴られるんで」
「はっはっは、尻に敷かれてんのか、坊主？」
「……じゃ、先を急ぎますんで」
「おいおい、怒んなよ」
軽薄そうな声を無視し、一は階段の一段目を踏む。
「それより坊主、顔色悪いんじゃねえか？」
「あー、やっぱり分かりますか」
一は振り返り、頭を掻いた。大分マシになった筈なのだが、疲れは顔に残っているのだろうか。そう思い、意味も無く頬っぺたを摘む。
「調子が悪い時は無理しない方が良いぜ。何だ、風邪でも引いたか？」
「んー、それがさっぱり。原因が分からないんですよね」
「へえ、それともアレか。悪い夢でも見たんじゃねえのか？」
「――え？」
階段の真ん中で立ち止まる一を尻目に、北は手すりに足を掛け、そのまま階下の地面へ飛び降りた。割といつもの事なので一は驚かなかったが、別の事に意識を奪われる。
「……悪い、夢？」
鈍痛が、再び頭の中で活動を開始した。

「おはようございます」
店内に入るなり、一は物憂げに突っ立っているジェーンと、無表情でおでんの鍋の洗い物をしているナナに声を掛ける。
「一さん、おはようございます。今日はどうされたのですか？」
「んー、何か俺宛にお客さんが来てるとかで」
ナナは作業の手を止めず、「そうでしたか」とだけ呟き、納得し

たように頷いた。
「……」
そしてジェーンは不機嫌そうに一を見遣る。
「……何だよ。どうしたんだ？」
「さっき、お兄ちゃんの知り合いが来てた」
「だから俺が呼ばれちまったんだよ」
「ふーん？」
ジェーンに疑いの眼差しを向けられ、一はたじろいだ。何もやましい事はしていないのに。
「女の子、だったんだケド？」
「らしいな」
「わざわざ、お兄ちゃんに会いにこんな朝早くカラ？」
ジト目で見つめられ、一は心中まで見透かされているような、そんな気持ちに陥る。
「俺が知るか」
「ねえ、お兄ちゃん？」
一はバックルームに向けていた足を止めた。振り返らず、黙ってジェーンの続きを待つ。
「ステイツじゃ、浮気はデスペナルティになるらしいヨ」
「……嘘吐け」
吐き捨てるように言うと、一はバックルームの扉を開けた。少しだけ後が怖かったが、大体、ジェーンとはそんな仲では無いだろうと思い直す。

バックルームに入ると、疲れた顔の糸原と、椅子に座ったままの店長と、
「遅いですね。一体どれくらいあたしを待たせれば気が済むんですか？　無駄にするのはあなたの人生だけにして下さい」
一の、予想していた通りの人物がそこにいた。

その人物、白いセーラー服を着た背の低い少女。彼女はベージュ色のハンチング帽を目深に被り、右目を隠すように眼帯を付け、手では分銅の付いた鎖を弄んでいる。
「久しぶりだってのに、端っから飛ばしてるじゃねえか」
「再会の喜びを分かち合う仲でも無いでしょう。あなた相手に社交辞令の挨拶をする事を想像しただけで、反吐が出ます」
全く以って、一の予想通りの挨拶を交わしてくれたのは黄衣(きごろも)ナコトであった。元フリーランス。クトゥルフの片割れ。『図書館』と呼ばれていた時期もあったが、今の彼女は唯の、図書館の司書に成り上がっている。
「……店長、客ってのは？」
「ああ、それだ。さあ、お前らがいると賑やかで敵わんから持って帰ってくれ」
店長は手を振り、至極面倒くさそうに言い放った。
「あたしをこの人の所有物みたいに言わないで下さい」
「な、うるさいだろ。いきなりバックルームに入ってきてお前を出せとか抜かしやがる。その上、所構わず私達に噛み付く訳だ」
椅子に座っていた糸原は無言で頷く。相当、疲れているようだった。
「あー、糸原さん、心は大丈夫ですか？」
「……一、あんたの客じゃなかったらこのガキもう百回は死んでるわよ」
「あはは……」
一の笑い声は乾いている。さしもの糸原も、勤務明けのナコト責めは耐え切れなかったのだろうと、心中同情した。そして、このまま彼女の罵声を飛び火させるのも悪いと考える。
「じゃ、とりあえず外で話すぞ」
「は？　何指図してるんですか？　あなたはあたしの彼氏ですか？　違いますよね、だったらそんな事言わないで下さい」
「……彼氏にだったら指図されても良いんだ……」

一は僅かにショックを受けた。正直、そんなナコトは見たくない。
「あなたは何を言ってるんですか？　あたしは外に出ませんよ。今日、あたしがわざわざこんな所にやって来たのは、あなたたちに話があるからです」
「あなた、たち？」
その言葉に、誰よりも早く店長が反応する。座ったままの体勢で器用に椅子を動かし、ナコトの方へ向けた。
「ほう、聞かせてもらおうじゃないか。元フリーランスの話なら、いささか興味がある。何だ？　今度は誰の仇を討ってほしいんだ？」
「ここの人たちは皆性格が悪いんですね。こんな店、早く潰れれば良いのに」
ナコトはわざとらしく溜め息を吐いてから、一を見据える。
「本題に入る前に、一つ確認しておきたい事があります」
一たちを見回した後、ナコトはゆっくりと口を開いた。
「昨日と言いますか、今朝方、そうですね、午前三時頃にあたしは夢を見ました」
突拍子も無い発言に糸原が眉根を寄せ、ナコトを睨む。敵意を微塵たりとも隠そうとしていない、そんな目で。
「あのさ、何なのよ？　何が言いたい訳？　言っとくけど、夢の話なんてね、私の嫌いな、他人から聞く話ナンバースリーに入るのよ」
「一位は自慢話でしたっけ」
一がへらへらと笑い出す。
「話の腰を折らないで下さい。大事な話なんです。特に、あなたたちにとっては」
「……へえ、じゃあ続けなさいよ」
「言われなくとも。……夢の内容は簡単な物です。どこかの学校が、何かに襲われ、人がたくさん死ぬ。それだけの夢でした」
ナコトは平坦な口調で言い放った。その平坦な口調が、一には何故か引っ掛かる。
「そして、私は目が覚めました。途轍もない激痛で。息は苦しくな

って、体には痺れが走り、燃える様に熱くなり、目が覚めました。
覚まされました」
「何を言っているんだ？」
店長は不思議そうにナコトを見ていたが、糸原には予感めいた物が訪れていた。そして一には確信が。
やはりか、と。一は納得する。せざるを得ない。それ以外、有り得ない。
「さて、一さん、頭は大丈夫ですか？」
優しげな声音で尋ねられ、一の心がささくれ立った。
「……お前の聞き方には悪意を感じる」
「さっきから様子を見てたんですけど、どうやら、あたしと同じ状態みたいですね。まだ頭に痛みが残っていますか？」
「まあ、少しは」
一とナコト、二人のやり取りに意味を見出せなくなったのか、
「さっきから何を言っている？　分かるように説明しろ」
店長が銜えていた煙草を噛み砕いて言った。
「そうですね。簡単に言いますか」
ナコトはえへんと咳払いしてから、

「今日、この街に魔女が現れます」

静かに、それでいて高らかに宣言する。
店長と糸原は呆気に取られていたが、一だけは観念したような表情を浮かべていた。
「……魔女、だと？」
「ええ、魔女です。非常に気に入りませんが、確実に」
問い掛ける店長へ、ナコトは当たり前の様に答える。
「まだ皆さん、話が飲み込めていないようなので説明しましょうか」
鼻で笑うナコトを見て、一は罵声を浴びせ掛けたい衝動に駆られるも我慢する。

「皆さん、『館』と呼ばれるフリーランスをご存じですか？」
「……さあ、初耳ね」
「名前を言うのすら憚られるぐらい当たり前な集団です。正式名称は『湖の魔女の館』。当り前過ぎて、知っている者からは『館』とだけ呼ばれます」
一は以前、その名を春風から聞いていたがだんまりを決め込んだ。
「彼女らは異常に、性質の悪いフリーランスです」
「ふん、性質の良いフリーランスがこの世にいるのか怪しいがな」
「……フリーランスの中でも、とびきりの厄介者です。理由も挙げればキリが無いほどに。あえて幾つか摘むなら、『館』の仲間意識の高さにあります」
一の背中を冷たいモノが通り過ぎていく。
ナコトは一の状態など気付かず、気付いていたとしても、お構いなしに話を続けた。
「本来『館』は積極的に動こうとはしません。必要最低限の活動だけに留めています。むしろ、表舞台に出るのを恐れている節さえあります。恐らく、人の目に触れるのを好まないのでしょう」
「なら、何故お前は魔女が出ると言ったんだ」
店長の威圧的な視線に怯む事無く、ナコトは更に続けた。
「ですから、仲間意識の高さです。彼女らは滅多に動きません。ですが、万難を排してでも動く理由も存在するんです」
「……なるほどな」
話に付いていけなかった店長も、今の言葉で何かを掴んだらしい。
「さて、率直に聞きます。勤務外、あなたたちは魔女を殺しましたね？」
「『館』が動くのは、仲間の復讐の為か」
「……質問、してるんですけど？」
「一、答えてやれ」
一の肩が少しだけ震える。
「魔女……」

震えながら、一は声を絞り出した。どうして、こんな事になってしまったのか。やはり自分はあの時止めるべきだったのだろうか。

だが、どう足掻こうが、幾ら考えようが、事実だけは変わらず、動かない。

――そうだ。

「魔女なら、殺したよ」

あの、魔女を。

マナナンガルと呼ばれる、醜悪なソレを。

命あれば勤務外も魔女に会う

後悔はしていない。懺悔などしていない。謝罪などしていない。歓喜などしていない。悲観などしていない。

する暇が無かったからだ。

殺した。殺した。殺してやった。

疑問すら抱かずに。罪悪感なら既に手放している。直接手を下した訳ではないが、その場にいた自分も、いなかった他人にも責任はあるのだと、そう思う。

「マナナンガルって魔女だ。確かに殺したよ」

だから一は、心を空っぽにして声を絞り出した。

「……あなた……」

ナコトは額を押さえ、呆れた風に息を吐く。

「よっぽど、ツイて無いんですね。あたしといい、『神社』といい、『館』といい、この街のフリーランスと悉く関わるなんて」

「とんだ疫病神だ」

一は笑った。

「『館』は、仲間を傷つけた者を決して逃がしませんし、許しません。何処まで逃げようが、何処に隠れようが、彼女らは確実にあなたたちを殺します」

「はっ、やってやろうじゃない。魔女が何だってのよ」

「髪の長いあなた、随分と短絡的なんですね」

ナコトは糸原を侮蔑の篭った瞳で見下げる。

「何よ？　私らを殺そうとしてる奴らと話し合いでもしろっての？」

「そのつもりは向こうにありません。危惧すべきなのは、被害の拡大に関してです」

その言葉を聞いて店長が笑った。

「どうやら、本当に厄介な連中のようだな」

「店長、どういう意味ですか？」

「……一、いつも言っているだろう。自分で考えろとな」
そう言われても、一には見当が付かない。被害なんて言われても、精々北駒台店か魔女の館のどちらかが死ぬだけだ。
「時間が無いので、頓馬なあなたにも分かるよう説明しましょう。その為に、あたしは来ましたから」
「なあ、今俺、悪口でトンマとか言う奴初めて見たぞ」
「『館』の最終目標は復讐です。仲間を殺した者を殺す事。そして、彼女らを厄介だと評す理由のもう一つに、目標しか見えていない事が挙げられます」
「そりゃ当然だろ」
一は軽く発言してみる。
「……しか、見えていないんです。つまり、『館』は目的を達する為なら手段を選ばず、周囲を気にせずあなたたちを始末に掛かると言う事です。手段、勤務外を始末する為の手段」
「手段も何も、やり合うしか無いんじゃないのか？」
「流石、あなたは本当に賢いですね、うんうん」
「……はいはい、俺は賢いよ。だったら賢くないお前の、勤務外を殺す為の手段とやらを教えろよ」
鎖を弄っていた手を止め、ナコトは眼鏡の位置を押し上げた。
「あたしなら、と言いますか、少しでも勤務外の面倒さを知っている者なら誰でも考え付く手ですが。まずは二人以上の勤務外と同時に戦わない事です。単純に、面倒ですからね」
糸原は何とも言えない表情を浮かべた後、顔を隠すように俯く。
「次に、正面からは行かない事。そして出来るなら、戦闘を行わない事。罠を仕掛けるなり、背後を衝くなりして、勤務外が臨戦する前に殺してしまうのがベストでしょうね」
「なるほどな。けどさ、そんなの勤務外だけに限らないだろ。ソレだってフリーランスを相手するにしたって、出来るなら隙を衝いてやっちゃった方が早いって皆考えると思うぞ」
「あたしに歯向かう気概は気に食いませんが、あなたにしては面白

い発言ですね。確かに、勤務外も、フリーランスも、ソレも、奇襲などには気を付けている筈です。しかし、勤務外だけに通用する手段が一つだけあります」

「俺たちに、だけ……？」

そんな効果的な手段が有る物かと、一は訝しげにする。

「まあ、一つだけとは限らんがな」

店長が割って入り、ナコトを見据えた。

「だが、我々に対して一番効果的且つ、我々が一番避け辛いモノは確かにある」

「流石に店長クラスともなると知っていますか」

「罠、だろう？」

ナコトは静かに頷く。

「その通りです。ソレはいつ、どこに現れるのか自由。フリーランスも好き勝手に動けます。しかし、勤務外は違います。何故なら、あなたたちは『犬』だからです」

「ふん、『犬』と来たか」

店長は皮肉げに笑った。

「勤務外には権利が生じます。何をしても許され、与えられます。ですが、それに伴う義務も生じます。ですよね？　勤務外は命令を受ければ応えなくてはならない。ソレが出たら、殺しに行かなければならない。そう、それがいつ、何処であっても」

「……罠が、仕掛けてあると分かっている所でも？」

一はようやく理解し始める。そして、これから起こるであろう事実の確認を店長に問う。

「当たり前だ。行けと私が言えば、お前らバイトが拒否する事は他の誰が、たとえ現れたソレが許したとしても、私が許さん」

「俺たちを殺す気ですか？」

「死ね」

「仲が良くて羨ましいですね。とどのつまり、そういう事です。勤務外のルールを知っている者ならば、罠なんて誰でも取る手段でし

ょう。そして『館』は確実に罠を仕掛けます。既に、仕掛けているかもしれませんね」

ナコトは二人のやり取りをせせら笑ってから口を開いた。

「笑うなボケ。……魔女が動く理由ってのは分かったし、勤務外には罠が効くってのも分かった。そんで、被害ってのは何なんだよ？」

「今から説明するところです。途中で口を挟まないで下さい。千客万来迷惑千万です」

「曲がりなりにも、司書なんてサービス業やってる奴が言う台詞かよ」

「あたしは本にはサービスしますが、それ以外の物にはサービスしない主義です」

「仕事辞めちまえ！」

「辞めません。さて、被害の件なのですが、あなたたちが死んでしまう事は被害の内にも入りません。あたしが厄介だと思っているのは、『館』が罠を仕掛ける場所についてです」

一の叫びを聞き流し、ナコトはスラスラと台詞を口にする。

「罠の場所？　んなの知らないわよ。どこにでも仕掛けりゃ良いじゃない。どうせ、命令受けたら行かなきゃなんないのに変わりは無いんだからさ。ま、私は行かないけどー」

「くそっ、もう自分の出番は終わったからって……」

糸原に恨めしい視線を送る一。

「罠を仕掛けても、効果を最大限に発揮出来なければ意味がありません。効果的だとは言いましたが、そもそも、勤務外相手に罠自体発動するか怪しい可能性もあります」

「あん？　さっきは通用するって言ってたじゃないか」

「耳鼻科をお奨めします。あたしは百パーセントだとは言ってません。それに、店長も言ってたじゃないですか」

「……なんて？」

死ねと言われた事しか覚えていない。

「……行けと私が言えば、です。オンリーワンの店長は、無策

で勤務外を送り出す事はしないでしょうね。与えられた情報を吟味し、必要だと判断すれば策を与えてくれるでしょう。つまり、あなたたちをタダでは死なすつもりは無いんです」

「そうだ、異能で異質で異常な力を失うのは勿体無いからな。私が駄目だと判断すれば支部に意見するし、行けそうなら行かす。私だって考えているさ。うん、勤務外より良く分かっているじゃないか、黄衣。考えを改めてしまいそうだ。どうだ、一とトレードでウチに来ないか？」

「死んでもイヤです。『犬』みたいに尻尾を振るのも、こんな人に本を触らせるのも」

「じゃあ死ねば良いのに」

ぼそりと、一は呟いた。半分は本心だった。

「ですから、『館』としては勤務外が確実に出勤するであろうポイントに仕掛けなければなりません。そんな馬鹿は居ないと思いますが、何も無い更地に仕掛けたって誰も近付きません。遠くから叩いて終わりなのですから」

「じゃあ、勤務外が動かざるを得ない物がある場所に罠はあるのか」

「そんな場所あんの？」

糸原は詰まらなさそうにあくびをする。

「あると言えば、あるな。まずは支部、または本部の内側に仕掛けられた場合だ。支部内の人間は上層部を逃がしたり、内部犯を疑ったりで動き辛いから、外部の勤務外が動かなければならん。そして次に、犠牲者が大量に出ると予想される場所だ」

「大量、に？」

「早い話が、人の多い場所だ。オンリーワンは罠の有無関係無く、人命救助最優先で動かねばならん」

「へえ、意外と利他的なんですね」

一は少しだけオンリーワンを見直した。

「いや、人が大量に死ぬと、その分客も減るからだ」

「わあ、やっぱり利己的だあ」

前言撤回。
「……つまり、罠がある、『館』がいるのは人の多い場所って訳ね。デパートとか、ゲーセンとか、そういうトコ？」
「ええ。ですが、今回に限っては罠が何処にあるか探す必要はありません。もう、分かっていますから」
そう、ナコトは当たり前の様に言う。
「何で罠の場所を知ってんだよ？」
「……呆れた。呆れました。あなた、覚えていないんですか？　あたしがついさっき夢の話をしたでしょう。いえ、しなかったとしても、あなたは覚えている筈です」
「はあ……？」
「惚けても無駄です。あなたはどう足掻いたってあなたなんですから。今更まともになりたいなんて、思わないで下さい」
何とも厳しい叱責だった。一は失敗したなあ、何て思いつつ、今朝見た、夢を思い出す。

――へえ、それともアレか。悪い夢でも見たんじゃねえのか？

そう言ったのは、あの無精な中年だったか。一は内心で笑い飛ばした。
――悪夢を見たからどうしたってんだ！
「お前がその、夢を見てたのは、今朝の、三時頃だったっけ？」
「往生際が悪いですね。不愉快ですが、あたしとあなた、同じ内容の夢を見ていた筈です」
一は長い溜め息を吐く。
「どういう事よ？　夢の中身があんたと一とで被ったとして、罠のある場所がどこか分かるっての？　それ以前にさ、本当に魔女なんて出てくる訳？」
糸原の言う事は尤もだ。一はそう思う。
「糸原さん、俺だって信じたくないけど、残念な事に魔女は出ます。

しかも今日、この街の学校に」

「説明しなさい。そんで、私を納得させなさい」

一はナコトの顔を見る。彼女は目だけで訴えていた。あなたがどうぞ、と。

「……夢の内容が被ったのが、俺と糸原さん、ジェーンたちならどうにもなりませんし、どうでも良いんです。問題なのは、俺と、こいつが被ってしまった、という事にあるんです」

午前、九時五分過ぎ。

学ランを着た一人の少年が歩いていた。肩には竹刀袋を掛け、手には鞄を持っている。彼は今から、部活動に向かうつもりであった。

少年は既に遅刻の身である。同級に、遅れると連絡はしておいたが、遅刻は遅刻。ならば、どうせならと、彼は今いつもより歩くペースを緩めていた。今日は元部長が来る日だと聞いている。現部長と違い、あの人は非常に厳しいと、そう彼は認識していた。怒られるのは確実。嫌な事は後回しにしてしまうタイプの人間。

ズボンのポケットから携帯を取り出し、時刻を確認する。彼は少しばかり安堵した。この時間なら練習は始まったばかりだろう、と。

目的地へ近付くにつれ、彼の顔が少しずつ強張っていく。そろそろ、体育館が見えてくる。部活の皆の声が聞こえてくる筈だ。あの人の声は人一倍大きく、人一倍厳しい。ビクつきながらも、ゆっくりと歩を進めていく。

次の角を曲がれば、もうそこは。

「ん……？」

その時、彼は忘れ物に気付いた。

「……あれ？」

少年の歩が止まる。

忘れ物を、忘れた事に気付いた。何かを忘れたのは思い出せる。だが、何を忘れたのかが思い出せない。とりあえず、一度目的地に

着いてからでも構わないだろう。そう考えた彼は再び歩き出す。
しかし、今度は足が動かない。
「おかしいな」
小声で自分の、今の状況を確認する。おかしい。おかしい。何かがおかしい。
なのに、何がおかしいのか分からない。
その場に数秒立ち止まった少年は、道を引き返した。

今日ばかりは、少年は自分の遅刻癖を有り難く思うべきだろう。
祭りが終わった後、残った者にどれだけ怨まれようとも。
少なくとも、彼は今日、宴に参加せずにすんだのだから。

一は後悔していた。
突き刺さる糸原の視線に晒されながら。
「ねえ、一。私の耳がおかしくなかったら、あんたの頭がおかしくなかったらの話なんだけど」
「……はい」
「何がどうなったら、魔法だなんて言葉が出てくるのかしら？」
先刻、『館』の現れる理由を説明する為に必要だと判断し、一は魔術の存在を明かした。ナコトから教わった事。ナコトは魔術を使えないが、使えるかも、そういう素養はあるという事。そして自分にも魔術が扱えるかもしれない素養が備わっていた事を明かしたのだ。
「あたしたちに備わっているのは、魔法ではなく、魔術の素養です」
「あんたは黙ってなさい。魔法も魔術もっ！　どっちだって私には関係無いのよっ」
糸原は椅子から立ち上がって、一の胸倉を掴んでいる状態。いつでも、好きなように出来る状態。

「本当なのね？」
「どうやら、そうみたいです」
甲高い音がバックルームに響く。
「何で、私に言わなかったのよ？」
「……必要無いと、そう思ったからです」
事実、今日の今日まで大した事は起こらなかった。
「私には言いたくなかったって事ね」
「んな事は……」
甲高い音がバックルームに響く。
「……てえ……」
一は叩かれた頬を摩ってやりたかったが、この状況ではどうしようもない。第一、言いたくなかったのは。この人だけでなく、言えなかったのは。
「……心配とか、掛けたくなかったから……」
甲高い音がバックルームに響く。
「心配掛けた後に言わないでよ、馬鹿っ」
糸原は一の頬を三発打った後、愛おしそうに彼の頬を撫でた。
「酷いアメとムチを見た気がします……」
聞こえてくるナコトの呟きに、一は賛同せざるを得ない。

結局、頬が腫れて喋りづらくなった一の代わりをナコトが務める事になった。
「おさらいします。この店には頭の良くない人が多いですからね。まず、魔女が動く理由。『館』は仲間を勤務外に殺されたので、復讐に乗り出しています。その矛先、勤務外への罠の有効性はご理解しているかと。次に、その罠は学校に仕掛けられている事。あたしたちが夢で見たのが何よりの証拠です。そして先程、そこの役立たずさんが説明しようとしていた、夢が何故証拠となり得るのか、魔女と魔術の関係性」

一は恥ずかしくなって顔を背ける。
「魔術についての信頼性は、皆さん良くお分かり頂けたようで」
ナコトは店長と糸原に視線を遣ってから、咳払いを一つ。
「あたしたちは今現在魔術を使えませんが、使えるようになるかもしれない。稀有な素質を持っています。ですが、ここで勘違いして欲しくないのが、魔術とは魔法と似て非なるモノだという事です」
「同じにしか見えないし聞こえないし思えないんだけどー？」
「……魔術と魔法の決定的な違いは、格です。圧倒的なまでに、力の差が歴然としています」
「ふーん、どっちが上なのよ？」
糸原の茶々にも、ナコトは屈しない。
「残念ながら、魔術の方が劣っています。名からも推測出来ますが、魔術とはあくまで術なのです。この世の中で、人が身に付けることの出来る、ギリギリの線上での魔の力」
一は今更ながら、魔術の意味を知った。
「そして、口にするだけでも憎らしいのですが、魔法についてです。魔法、すなわち、魔の法です。人が身に付ける力なんて馬鹿らしくなってしまうくらい、馬鹿になった方がマシなくらいの、絶対的な、法外な魔の法則。法律と言っても良いでしょう。魔法とは、ある種一つのルールなのですから」
「法（のり）、か」
沈黙を守っていた店長が、意味ありげに口を開く。
「海苔、ですか？」
「一、お前が思っているのりとは違う。国語の授業をするつもりは無いが、宣（の）る、だ。神仏からの意を告げ、知らせるの意味を持つ動詞だな。つまり法とは、昔は神や仏の宣告を指していたんだ。人の持つ術と、神の決める法。どちらが上なのか、まともに教育を受けていれば比べるまでも無い事だとは思わんか？」
「……まだ教育を受けている途中なんで」
店長は喉の奥で、噛み殺すように笑った。

「魔術と魔法の違いも分かりましたね？　まあ、しかし、分からない人から見れば、二つを一つに纏めたとしても問題ないくらいの、些細な違いではありますが」

「黄衣、前置きが長いぞ」

「あなたが喋ると空気が濁るので、口を開けるのは控えて下さい。……現に、魔術と魔法はやはり似ていますから。両方、力の大小はあれ魔の力を行使していますからね。ここで何故、あたしたちが夢を見て、その夢の内容が『館』絡みであるのか説明出来ますね。あたしたち魔術師……見習いが悪夢を見、痛みに苛まれた理由」

　ナコトは話を続けながら頭に手を遣る。やはり、一と同じくまだ痛みが続いているのだろう。

「魔術は、魔法の影響を受けやすいのです。力の無いモノは力の有るモノに反応し、影響され、場合によれば淘汰されます。今回は、『館』がこの街で魔法を発動した事により、この街にいた魔術の素養を持つ者、つまり、あたしたちが影響を受けた訳です」

「じゃあさ、それって他にも頭が痛くなったりした人がいたってワケ？」

「恐らくは。フリーランスや勤務外の中には素養を持つ者もいると聞きますしね。この街の人口は把握していませんが、あたしたち二人だけ、という訳では無いでしょう。しかし、影響を受け、行動に移せる者は限られています。なんせ、相手が『館』なのですから」

　ナコトはちらりと店長を見遣る。

「……誰かさんが来てから、最近は望まない客ばかり増えるな」

「俺の事言ってるんだったら、筋違いですよ？」

　一は弁解してみた。

「話を反らさないで下さい。あたしの話、理解していますか？」

「分かってるって。俺が酷い目に遭ったのは『館』の所為って話だろ？」

「あなたを主軸に据えた話は一度もしていません。これからもしません。まだ、残っている疑問があなたたちにはある筈ですよ？」

やれやれ、と。ナコトは自分の頭に手を置く。
「なら聞くけど、魔術が魔法の影響を受けるってのはまあ、納得しとく。で、なんだけど。夢を見たのと、体が痛くなったの。どっちの割合がでかいんだ？」
一はこれから先、起こるかもしれない不安は解消しておきたかった。根本的には解消出来ないが、心構えぐらいは出来る。心か、体か。どちらか。
「……嫌な質問ですね」
「疑問を口にしただけだ」
「良いでしょう。魔法が発動され、あたしたち魔術の素養を持つ者が影響を受けるのは、体ではなく心です。ですから、魔法からの影響は悪夢のみ、です。では何故体が痛んだのか。『館』の側に立って考えれば分かる事なのですが、彼女らは紛れも無く、本物の魔女なのです。人間を軽々と超えてしまった存在、そう言っても過言ではありません。上位の魔法を使えば、下位の魔術が影響を受ける。彼女らがそれを知らない筈はありません」
「あー、つまり？」
一はついつい合いの手を入れてしまった。どうにも、ナコトの説明は要領を得ないというか。得てくれない。説明が好きなのだろうか、話が長いのだ。
ふと、もう一人話が好きな人物を思い出してしまい、一は慌ててその想像を振り払う。
「つまり、かなり手の込んだ嫌がらせでしょうね。自分達よりレベルの低い魔術師が苦しむのを見て笑っているのでしょう」
「……なんつーか、一般もフリーランスも変わんないのね」
糸原は気が抜けたように呟く。
「なら、お前らが見た夢とは予知夢の様な物か」
「その考えで間違いは無いと思いますが、言わば、今回のは、そうですね、指名手配のビラの様な物でしょうね」
ナコトは面倒臭そうに肩を落とした。

「ビラ？　挑戦状の間違いじゃねえの？」
「いえ、だって出すべき相手が分からないんじゃ、挑戦状の出し様が無いでしょう」
「……いや、だって……」
一は呆気に取られる。その魔女を殺したのは北駒台店のナナで、引いては北駒台の勤務外が殺したのだ。つまり、『館』は自分達を狙っている。そう、言った筈だ。
「『館』は俺たち勤務外を狙ってるんだろ？」
「あたし、そんな事言いましたっけ」
「……いっ、言ったじゃねえか！」
「ああ、今までのは、あくまで仮定の話のつもりだったんですけど」
ナコトの口調は、もはや白々しい領域に入っていた。
「あたしは最初、魔女を殺したのはこの店の勤務外だとは思ってました。だって、『館』を敵に回すフリーランスなんていませんし、魔女を殺せるソレなんて殆どいないでしょうからね」
「まあ、その通りといえばその通りだな」
店長は平然としている。その事が、一には信じられなかった。
「鎌を掛けてみれば、あっさり白状したので驚きましたけど。あたしが『館』だったら、あなた、死んでましたよ」
ナコトは一を指差す。
「てめえ、さっきまでの話は何だったんだよ！」
「……急に元気になって、何か良い事でもあったんですか？　例えば、ポケットに十円玉が入っていたとか」
「俺はそんなに安くねえよっ」
五十円玉ならちょっと嬉しいお年頃。
「うるさい人ですね。さっきの話は、あたし程度でも思いつく話です。なら、『館』だってそれ位は考えているでしょう。あたしは忠告に来たんですよ。魔女が狙っているから気を付けろ、って」
「……確かに、そうだけど」
もし、本当にナコトが『館』ならば。一は想像し、身震いした。

そして、次がある事に感謝する。
「『館』だって勤務外が犯人だと気付いていると思いますが、まだ、その勤務外が誰かを特定出来ていないんです」
「……断言、出来るのかよ」
「犯人を見つけていれば、こんな回りくどい事しないでしょう。相手が一人なら、二人以上で囲めば良いだけですから」
暴論だが、正論でもある。
「要するに、罠自体が撒き餌でもあるという事だ。向こうは仇が誰か分からん、だから罠を張って、来た勤務外を手当たり次第に仕留めるつもりなんだろう」
「……だったら、罠なんて張らずに店まで来れば良いのに」
自分で言ってみてから、一は少し恐くなる。
「正面からやり合うのは『館』の苦手分野ですから。魔法が使えるとはいえ、単純な力比べではあなたたちに軍配が上がります」
ナコトの発言に一は安心した。
「まあ、力比べにはなりそうにありませんけど。『館』が罠を仕掛けているのは確実で、あなたたちの誰かが罠に飛び込むのも確実なので。一度向こうに飛び込めば完全にアウェイですから。どうしようもなく殺されちゃうでしょうね」
ナコトは軽く笑った。
店長は笑っていなかった。
「……黄衣、今までの話だがな。確かに興味深く、役立った」
「それはどうも」
「で、だ。そろそろ教えてはくれないか？」
「何を、ですか？」
店長は煙草に火を点け、美味そうに煙を吸い込む。
「お前が、『館』のメンバーなのかどうかを、だ」
ナコトは、黙り込む。一も、糸原も。

ただ、店長の吐き出した紫煙だけが、バックルームの沈黙を埋めるように漂っていた。

Natural Born Witches

北駒台高校。その空き教室の一室に立花はいた。

「……うー」

黒板に埋め尽くされた大量の文字。聞いた事も無い様な話を垂れ流し続ける数学教師。教室内には十人ほどの生徒が男女関係無く集められている。ペンの走る音。教科書を捲る音。幾つもの溜め息。

「はあ……」

立花の溜め息も、その中の一つだった。他のそれと溶け合い、混ざり合い、消えていく。

今日は折角の創立記念日だと言うのに、どうして補習なんて受けなければならないのだろう。本来なら、昼までゆっくりして、バイトに精を出すだけだったのに。立花は楽しかった筈の今日を夢想し、もう一度溜め息を吐いた。

窓の外を見れば、グラウンドにはサッカー部や陸上部が走る姿。今頃、体育館では神野たち剣道部も竹刀を振るっているのだろうか。出来るなら、自分も頭より体を動かしたい。授業の内容が全く理解出来ない訳ではないが、やはり、立花は肉体労働の方が気が楽だった。

北駒台高校。体育館。

迸る数十人分の気合の声を耳心地良く聞きながら、神野はふと、壁に掛けられた大きなアナログの時計に目を遣った。時刻は、九時を三十分ほど回った所。

「おせえな……」

神野は体育館の玄関付近に立ち、正門に目を向けている。部活動に遅れている、一年の村西とやらの到着を待つ為だ。連絡が来てから既に三十分。村西の家は学校からそう遠くない。十分もあれば辿

り着く道程で、そろそろ到着してもおかしくない頃合だった。
踏み鳴らす足は苛立ちを示している。早く来い。遅刻する奴は好きではないが、心配ぐらいはする。何かあったのではないか、と。
だが、今日は折角の創立記念日だ。少しぐらい長く眠っていたいし、部活動に行きたくない気持ちも神野は重々承知している。
「にしても」
今日はやけに外が静かだ。正門から視線をずらし、神野は通学路を眺める。創立記念日なのは自分の学校だけだろうし、いつもなら、もう少し人が通っていてもおかしくはない。グラウンドの方からは他の部活動の生徒からの声が聞こえてくる。校舎からは流石に声は聞こえてこないが、今頃は立花たち十数人が補習を受けている頃だろう。
神野は一度体育館のフロアに目を遣ってから、部員たちの熱気で蒸し暑い体育館から、一度涼を取ろうと思い立つ。
ドアに手を当て押し開けると、一陣の風が神野の体を吹き抜け、体育館中に広がっていった。

オンリーワン北駒台店。バックルーム。
中に居た一、糸原、ナコトは完全に沈黙していた。
「どうした黄衣、答えろ」
理由は明白で、実に明確である。店長がナコトに投げ掛けた質問が、彼らの沈黙を生んだ。

――お前が、『館』のメンバーなのかどうかを教えろ。

と。店長はそう問い掛ける。
しばしの沈黙の後、口を開いたのはナコトではなく一だった。
「……あの、店長？」
「どうした、一君？」

「こいつが『館』だったら、俺、死んでるんですけど……」
「だろうな」
にべもなく店長は答える。
「だったら、こいつが『館』な訳――」
「――今朝見た夢の内容とやらを教えろ」
「……は？」
一は口をぽかりと開けた。
「一、お前が見た夢の内容だ。言え」
「んな事言っても……」
強い口調に押され、怖い目で見られても、一には上手く説明出来る自信は無い。『館』の魔女がもたらした、魔法による影響の悪夢、予知夢であっても、結局は夢なのだ。夢の内容を正確に記憶し、把握できる人間など存在しない。
「全部は覚えてませんからね」
「構わん。むしろ都合が良い」
「……えーと、内容っても断片的なイメージなんですけど、まず笑い声が耳に付きました」
一は目を瞑り、夢を思い出しながら話を始めた。
「その声に心当たりは？」
「多分……無い、ですね。女の人たちの声ってのは分かりました。あと、学校、ですね」
「その学校に見覚えはあるか？」
「無いです。ただ、校庭や校舎、体育館が見えましたから、多分、学校じゃないかって」
店長は煙草を床に落とし、その吸殻を踏み付ける。
「他には？」
「……結構、学校には人がいたような気が」
「見覚えのある人物はいたか？」
「いえ。見た事の無い人たちばかりです。制服を着てたから生徒と思われる子たちと、あと、何人かのスーツを着た、多分教師っぽい

人たち。それと、笑っている女性、ですかね」
その後も、店長は一に質問を続けた。その結果、夢の中での出来事の時間帯は昼間だとか、かなりの人数が死に瀕していたとか、様々な事実が判明していく。
「では、誰が学校の人間を襲っていたのか分かるか？」
「……えっと、その……」
一は言葉に詰まった。幾ら思い出そうと頑張っても、何故かそれだけは思い出せない。そもそも夢に出ていなかったのかもしれない。
「分からない、か。まあこんな所だろう」
店長は一人だけ納得した風に、深く息を吐く。
「今のお話はどういう意味だったんですか？」
疑念を持たれていたナコトが、堪えきれずに口火を切った。店長は彼女を三白眼で一瞥すると、新しい煙草に火を点ける。
「『館』の存在。魔術、魔法の存在。勤務外への罠。それが仕掛けられた場所。お前らが見た夢。黄衣、お前の話は実に面白かった。勤務外の認識について、幾つか間違っている所もあったが着眼点は素晴らしい」
「だから、それとあたしが『館』だって疑う事に何の関係があるんですか？」
「お前の話は素晴らしい。お前が、嘘を吐いていなければ、の、話だがな」
「……嘘、ですって？」
ナコトは敵意を剥き出しにして店長を睨んだ。
「こんな朝早くにご苦労な事だがな。私にはまだお前の目的が見えない。一は知らんが、私は基本的に黄衣、お前を信用していない。大前提として、お前の話を信じるにはお前を信じなければならん。今の所、私はお前を信じるつもりはない。さあ、どうやって前提を退かしてもらおうか」
「何を言えば、信用してもらえるんですか？」
「そうだな、お前は何故『館』の名を口にした？」

「それは……」
口篭るナコトを見て、店長は楽しげに唇を歪ませる。
「魔術は魔法に影響を受けるんだったな。魔法が行使されれば、近くにいる魔術の素養を持つ者に影響を与える。それは理解した」
「店長、別にこいつはおかしな事言ってないと思うんですけど」
「一、お前に備わった魔術の資質が珍しいのと同じく、いや、それ以上に魔法を扱える者は少ないだろう。この世界に百人もいれば多いくらいだと、私はそう思う。『館』は唯でさえ少ない魔法を使える魔女が集まっているらしい。だがな、魔法を使える者全てが『館』に属していると、そう思うか？」
「……分からない、ですけど」
異能は勤務外になり、フリーランスになり、あるいは、ソレにもなる。なれる。なるしかない。
「一、お前は勤務外だ。黄衣は元、とは言えフリーランスを経験している。同じ魔術を使える身だというのに、所属は分かれているじゃないか。同じ力を持っていても、同じ考えを持つとは限らん。時と場合に応じ、敵味方にも分かれる事もあるだろう。なのに、何故黄衣は魔法が発動したからといって、『館』を想像した？　想像出来た？」
「元、フリーランスだったからじゃないの？」
糸原はナコトを横目で見ながら、店長に顔を背けて発言した。
「それもあるだろうな。普通の人間なら、悪夢を見て激痛に襲われたとしても、それが魔法だとは気付かんし、魔女の仕業だとも思わん。その上、自身に魔術の素養があるとも思わんだろうな」
「だったら……」
「『館』について、随分と詳しいようだな、黄衣」
ナコトの肩が分かりやすいくらいに震える。その様を見てしまい、一の全身を寒気が走った。
「あたしだってフリーランスでしたから。同業者の情報は嫌でも耳に入ってくるんです」

「違うな。お前にとって、『館』は唯の同業者じゃない。お前は『館』を嫌悪している。憎悪している。恐らくは、悉く皆殺したいと思っている」
「あっ、あなたなんかに分かる筈がっ」
俯いていたナコトは、弾かれるように店長を睨み、
「分かるんだよ。私には分かるんだ」
また、俯いた。
「あ、あたしは……」
震える声。震える体。
「黄衣、外に出てろ」
「……え？」
その姿を見て、一はどうしようもなくなって声を掛ける。
「店の前で待ってろ」
「で、でも……」
「ちょっと頭冷やしてろ」
一は躊躇するナコトの肩を押し、半ば無理矢理にバックルームから追い出した。追い出してから、壁に手を付いて溜め息を吐き出す。
「店長、苛め過ぎです」
「質問していただけだ。エセフェミニストが」
「……どのくらい、黄衣を信用しているんですか？」
「九割信用している。あいつが嘘を吐く理由が見つからないからな」
店長は涼しい顔でそんな事を言った。
「一割は、あいつがもし、本当に『館』だったらって、そういう可能性ですか？」
「『館』でなくとも、『敵』であるなら何でも良いが、まあ、そういう意味だな」
「つまり、店長はあいつが『館』のメンバーだとは、一割くらいしか思ってない訳ですね」
「お前な、仮にも私は店長だぞ。険のある言い方をするな。第一、私が疑わないで、他の誰があいつの話を疑うって言うんだ。良いか、

他人の話を真に受けるのは構わんがな、とばっちりが来るのはお前ら勤務外だぞ？　少しでも危うい物を取っ払ってやろうという、私の親心が分からんのか」

店長は大変ご立腹のようである。

「ねえ、さっきの話が本当だとしてさ、私らはどうしたら良いのよ？　嫌よ、みすみす罠に突っ込んで行くなんてさ」

「とりあえず、情報部に駒台中の中学と高校を洗わせる」

「ふーん、一応、あの子の事を信じるんだ」

「不満か？」

別に。糸原は短く返すと、一を見た。

「行ってやんないの？」

「……店長。とりあえず、どうしたら良いですかね？」

「情報が確定するまでは動きようが無い。ま、それまではフェミニストらしく奴を慰めにでも行ったらどうだ？」

一は反論を試みようとするも、上手く言い返せる自信が無かった。

店を出ると、ナコトはすぐに見つかった。店前の駐車場の隅で丸まるように膝を抱えている。

「ほら」

一は慰めの言葉は選ばず、持ってきたビニール袋を渡した。ナコトはしばらくの間それを受け取ろうとはせずに見つめていたが、

「……何ですか、これ」

やがて、躊躇いがちに袋を手にする。

「俺の優しさが詰まっています」

「……」

中身の入った袋が宙を舞った。一は慌てて着地点に先回りし、両の腕でしっかりとキャッチする。

「投げるんじゃねえよ！」

「投げてません。捨てたんです」

「凹んでんのに口だけは達者だな」
一は袋をナコトに突き付けた。袋の中身はまだ暖かい中華まんと缶コーヒー。
「……同情、ですか？」
「温情だ。寒かったろうから持ってきたんだよ」
「情けを掛けられたり、借りを作るのは好きではありません。大体、外に追い出したのはあなたでしょう」
「あのままだったら泣いてたろお前」
ナコトは缶のタブを開け、口を付ける。一は少しだけ安堵した。
「……泣きません。涙なら、全て流し切りましたから」
嘘吐け。一は心の中で突っ掛かる。
「あっそ。ああ、アレだ。今、情報部が動いてくれてるらしい」
「とりあえず、と言ったところでしょうね。まあ、来た甲斐はありましたか」
「なあ、どうして来てくれたんだ？」
中華まんを齧ろうとしていたナコトは動きを止めた。
「あ、あなたを心配していたからです」
「嘘吐け。まあ、その気持ちが一割でもありゃ嬉しいけどさ」
「……言い過ぎたかな」
「あ？」
何でもありません。そう言ってから、ナコトは中華まんを齧った。
「ところでさ、今日お前休みなの？」
「ええ、それが何か？」
「この後、予定でもあんのか？」
「あたしのスケジュールを知ってどうするつもりですか？　今の質問は立派なセクハラです。告訴します」
つまり、ナコトは折角の休日の午前中を費やしてここまで来たらしい。自分を朝から電話で呼び出し、悪口を言いに来た訳ではないと、一はそう思った。
「……店長たちはまだお前の事信用してないけどさ、あんま気にす

るなよ」
「別に、その位で気にするつもりはありません」
「お前ってさ、攻撃的な分、打たれ弱いよな」
「少しくらいあたしに優しくしたからって、あたしを分かったような発言をするのは止めて下さい。吐き気を催します」
ナコトは缶の中身を一気に呷る。
「まあ、元気が出たようで何よりだよ。ついでに本当の事も喋ってくれると良いんだけどな」
「……それは、嫌です」
「月並みだけど、なんで？」
「あ、あなたに、その……怒られるかも、しれないから……」
ナコトは俯き、ぼそぼそと喋る。一は珍しい物が見れたと驚き、
「何だよそれ？　俺が怒るから？」
腹を抱えるほど笑った。
「わっ、笑わないで下さい！」
「俺が怒ったところで気にもしないだろうが」
顔を真っ赤にして詰め寄るナコトをあしらいつつ、一は口元がにやけないように堪える。
「とっ、とにかく！　今はまだ言えませんっ、言いたくありませんっ」
「分かった分かった、気長に待つよ。それで、この後どうするんだ？　一応、話は済んだんだろ」
「……別に予定は」
「あー、やっぱりな」
「……たくさんあります」
ナコトが見栄を張っているのは一目瞭然だった。
「へー、例えば？」
なので、一は彼女を泳がしてみる。仮に予定が本当だったとして、それはそれで興味深かった。
「た、例えば、合コン、とか」

「ほう、お相手の方々は？」
「は、歯医者さんです」
出だしから苦しい。どうやら黄衣ナコト、アドリブにはとことん弱いらしい。
「あー、なるほど。医者かあ、ちなみにどこで知り合ったんだ？」
「は、歯医者で知り合いました」
「あはははははは！」
一、思わず大爆笑。ナコトには常日頃虐げられっ放しなので、一矢報いたと、とんでもなく気分が良くなっていた。
「……と、これぐらいで気は済みましたか？」
「なっ……？」
「あなたが楽しそうだったので、少し付き合ってあげようと思ったのですが、気分はどうですか？」
「うっ、嘘だっ！　今までのは演技だと言うのか！？」
一の言葉を受け、ナコトはニヤリと微笑んだ。
「あたしの掌の上でくるくると踊るあなた。実に微笑ましかったですよ」
「……くそっ、予定が無いのは本当なのに！」
悔しくて仕方がない。
「まあ、その通りと言えばその通りなんですけどね。さあて、冷やかしついでに週刊誌の立ち読みでもしてきましょうかね」
「……ふーん、暇なのは暇らしいな。だったらどっか行くか？」
「はあ！？」
ナコトは目を見開いた。
「嫌だったら良いよ。けどさ、んな露骨に態度に出すな。俺だって傷付く」
「……あなたって、よっぽどのマゾなんですね。今まで、あたしに何回悪口を言われたか覚えてないんですか？」
「数えられる範囲なら数えてたんだけどな」
もう、諦めた。

「……それに、あなたたち勤務外はあたしを信用してないんでしょう」
「まあ、俺も信用はしてないな。利用はしてるけど」
「面白い事を言いますね。まあ、良いでしょう。そんなにエスコート役を買って出たいんなら、あたしの暇潰しに付き合わせてあげない事もありません」
「そりゃどうも。感謝感激、光栄の極みでございますね」
一は天を仰ぐ。良い、天気だった。
「暇潰しとは言え、今日中に『館』は動くのですから。それまでの間、だけですよ」
「分かってるって。あんまり店から離れるのは却下だな」
「でも……そうだな……。ふふ、帽子でも買いに行こうかな」
かくいう一も、今日は、今だけは休みなのだ。だから、隣で楽しそうにしている彼女に付き合うのも悪くはない。目前に避けられないであろう戦いが迫っているのなら尚更だと、そう思った。

良く晴れている。今日は良い天気なのかもしれない。
しなやかな長い影。南駒台高校の屋上に立つ影こと、オンリーワン近畿支部情報部、二課実働所属、春風麗（はるかぜうらら）はそう思った。
今日の彼女はスーツ姿である。彼女の折れそうな程長く、細い手足を包むのは、恐らくはブランド物であろう黒いスーツ。腰まで届くくらいの長髪は無造作にゴムで縛られていた。
「春風さん、こっちじゃ何も見つかりませんでした」
その横に、同じくスーツを着た男が飛んでくる。
彼は春風と同じく、オンリーワン近畿支部、情報部二課実働に所属する、漣（さざなみ）と呼ばれる青年だ。
「……そうか」
漣の報告を受け、春風は僅かに顔を曇らせる。尤も、彼女は平時から感情を変えず、表さず、常に同じ顔でいるので、その変化に隣

の彼は気付かなかったが。
「罠があるとすればここの筈なんだがな」
「駒台の中学、高校ならここが一番生徒数が多い。勤務外を誘き寄せる罠を仕掛けるなら、格好の的だったんですけどね」
「北の情報が虚偽である可能性が高くなってきたな」
まさか。漣は笑う。そんな事はありえない、と。
「北には奴らがいるからな、こちらを踊らしているかもしれん」
「……得になりませんよ、どっちにしたって」
「忘れたのか？　我々はオンリーワン近畿支部情報部、二課実働だぞ。情報を偽る事はあっても、偽られる事は許されない」
春風は漣に目を向ける。やはり、無表情のままで。
「警戒は俺だってしてます。しかし、まだ候補は残っているじゃないですか」
「北校、か。今日、あそこは創立記念日だぞ。果たして『館』が人の少ない所を選んでくれるかな」
「……創立記念日？　初耳でした」
「……まあ良い。無駄だと分かっていても行くしか無いからな」
呟くと、春風は屋上に設けられた、転落防止用の金網を助走もなしに飛び越えた。
彼女の体は重力に従い落下。地面に向かう途中、校舎三階の開いていた窓枠に膝を曲げただけの状態で着地し、また飛ぶ。縛られた髪の毛は風の影響を受けて揺れるも、彼女の姿勢がぶれる事はない。グラウンド近くに建てられたポールの頂点に両足を乗せると、次の跳躍で校内最後のフェンスを乗り越えていった。
「……気持ち良さそうに飛んでくれるよ」
スーツの襟を正すと、漣も後に続いて飛翔する。
驚く事に、彼らの姿を目撃した者は誰一人として存在しなかった。
震えていた。

震えていた。
「はっ、くっ……」
彼女は震えていた。かちかちと歯を鳴らしているのは寒さの為では決してない。
制服に皺が寄ってしまうほど体を掻き抱いているのは寒さの為では決してない。
堪え切れぬ恐怖が漏れ出ているのだ。
目尻に涙を浮かべた彼女は今、女子トイレ最奥の個室にいる。ハンカチを噛んで声を抑えようとはしているが、止まらない嗚咽は個室の壁など意味も為さない。反響して、彼女の耳朶を打ち続ける。自分の声がこんなにも悲しそうに、虚しそうに、白々しく聞こえるのを彼女は初めて知った。知った上で泣き続ける。
覚悟ならしているつもりだった。他者が死ぬ事も、自らがそうなる事も。
しかし、理解はしていても納得は出来ていない。彼女はまだ、無常で無残で、無駄な死を見るのに若過ぎた。命があっけなく終わるのを知るのが早過ぎた。この世界に足を踏み入れるのが絶望的なまでに遅過ぎた。
「……うぅっ……」
そう、過ぎた事だった。
まだ宴は始まっていないとは言え、もう始まるのだ。覆水は盆には返らない。
絶対に覆らない。宴の決行は魔女によって定められたのだから。
それでも彼女は目を瞑り耳を塞ぎ口を閉じ、出来る限り心を無くした。見たくない。聞きたくない。話したくない。感じたくない。
狭い個室に、目に見えない罪悪感が密集して、密着して彼女に問い掛ける。
この宴を始めたのは誰の所為だと。
私の所為だと彼女は返した。
胸が苦しくなり、彼女はやおら制服のボタンに手を掛ける。最初

こそ普通に外そうとしたが、小刻みに震える指が邪魔して上手く行かず、力任せにボタンを引き千切った。胸元が露わになるが関係ない。見ている者など誰もいない。仮に誰か見ていたとしても、彼女は躊躇わなかったかもしれない。

壁に手を付き息を吐き、彼女は崩れそうになるのを堪えた。

しばらくの間、彼女はそうしていたが、淡い光が自分を照らしている事に気付き口元を手で押さえる。

光は彼女の、体の中から溢れだしていた。青く、赤く、白く、時に眩しく。

やがて、光は一定の光度を保ち始めた。色だけは相変わらずバラバラで。しかしそのカラーリングも赤の比重が増していき、

「あ……」

真っ赤に染まる。

「あら、もう時間？」

「らしいわね」

豪奢な作りのソファに腰掛け、優雅とも言える仕草で紅茶の入ったカップを置いたのは二人の女性。

「……予定通りよ。外に出た者も、中に入ってきた者もいないわ」

先の二人よりも、幾分か深くソファに体を埋め、何かを探るように目を瞑る一人の女性。

その三人の女性全てが、真っ黒なローブに身を包んでいた。顔まですっぽりと隠れるように、体の線など分からないように。

「始まったのは良いけどさ、あの子を見てないかい？」

窓の傍に陣取り、蓮っ葉な口調で話す四人目の女性。

彼女はローブこそ着ていなかったが、黒い三角帽を被り、黒いマントといういかにもな出で立ちだった。

四人とも、年齢は二十代後半か、三十代前半に見受けられる。共通点はその服装。一人を除いて黒いローブで統一され、除かれた一

人ですら色は黒で統一している。
「……あの子なら、ここの三階、かしら」
「ふうん。まーた引き篭もっちまってんのかい……」
黒い三角帽を被った女性は、壁に立て掛けておいたモップを引っ掴んだ。
「先に始めといてくれ。あたしゃ、馬鹿弟子を探してくる」
「そうね、お願い。骨を操れるのはあの子だものね」
「あいよ」
短く返し、モップを掴んだ女性は部屋から出て行く。
「……私はここにいるから」
「はいはい、分かってるわよ。しっかり陣を守っといてよね」
更に二人の女性が立ち上がり、
「留守番よろしくねー」
残る一人に軽口を叩いて出て行った。

戦場へと、赴いた。
『彼女』らが出向いた戦場の中でも、今までの規模からすれば格段に小さなフィールド。
それでも、不満は無い。
殺された仲間の仇が討てる事を思えば、彼女たちにとって戦場なぞ大きな問題ではなかった。
問題なのは、誰が殺したか、と言う点。恐らくはこの街の勤務外であろうが、この狭い町に、異常な勤務外が何人も居過ぎている。
的を絞れない。
的を絞れないなら、的を増やせば良い。
ここを罠にして、のこのこと現れる勤務外、ならず全ての人間を殺せば良い。そうすれば済む話だ。
彼女達はいまいち人間の社会の話は良く理解していなかったが、この学校という場所には人がたくさんいるらしい。あの子はそう言

っていた。

とりあえず、今は見せしめに何人か、半分ほど死んで貰おう。全員殺しては、折角の罠が意味を失う。かと言って、生き残らせ過ぎてもつまらない。出来るなら、この場にいる大半の者には、死んでいったマナナンガルの様に無残に、無駄に、無常に、無益に、無慈悲に無下にして、死んで貰わなければ、殺さなければ気が済まない。

だから、だから。

今が昼であっても、今日が二月一日でなくても、八月一日でなくても、十一月一日でなくても、ましてや五月一日でなくても魔女（サバト）の夜宴は始まるのだ。

Day of the Skeleton

良い天気で、今日は静かだ。
体育館から響いてくる、剣道部員たちが放つ裂帛の気合いを耳にしながら、神野はそう思った。
同時に、静か過ぎるとも。
嫌な、ただひたすらに嫌な予感がする。ざらつく空気。まるで、ソレと相対しているかのような。そんな空気。
神野は勤務外としての期間は決して長くない。ソレに対する反応もさして良くはない。特筆すべき物は彼に無い。だが、剣道を長くやっている彼持ち前の勘や本能に近いものが告げていた。何か、起こるかもしれない、と。
「……まさかな」
学校にソレが出現したという話は珍しくない。半ば混沌と化したこの世では良く聞く話だ。しかし、心のどこかでは遠い話だとも思っている。自分だけは、自分達にだけは、と。よくよく考えてみれば、学校と呼ばれる施設は世界中に星の数ほど存在する。ならば自分の学校にソレが現れる確率など一笑に付せられるレベルだ。神野はそう思い直し、馬鹿な考えを掻き消すかのように頭を振る。
そんな事より、まずは目の前の部活だ。部長を任されていた自分が退部して、後任の安田が上手く部員を纏めてはいるが、それもいつまで続くか分からない。神野が知る限り、安田は優しい性格で、他人に厳しく当たれないのだ。現に、一年生の村西は部長である安田を舐めている。このままではいけない。既に剣道部を去った身ではあるが、去ったからこそ、罪悪感にも似た思いを抱き、何とかしてやりたい、何とかしようと、神野は固く決意した。
「――！」
体育館内に戻ろうとした神野の足が止まる。グラウンドの方から、大きな声が聞こえてきたのだ。声が聞こえてくるのは別段珍しい事

ではない。今の時間はサッカー部と陸上部が活動している。大方、サッカー部が紅白試合でも行っていて、見学に来ている女性との歓声だろうと、そう決め付けた。

――眠い。

終わりそうに無い数学の補習中、立花は何度も目を擦った。あくびを噛み殺し、窓に目を向けようとして、止める。この補習中、教師の判断により、集中力を乱すものを極力排除する為にカーテンは締め切られているのだった。

周りに目を向けると、露骨に眠っている者こそいないが立花と同じように心底退屈で、早く家に帰って眠りたい。そんな表情を顔に張り付かせた者が多数。午前八時から開始された補習は既に一時間強が経過している。そろそろ休憩を挟んでくれても良いのではないか。立花は切に願った。

「……ん」

ふと、黒板へ一心不乱に公式を書き留めていた教師が手を止める。彼はスーツの袖を少しだけ捲り、腕時計を確認しているようだ。

「もう一時間か。そうだな、トイレに行きたい者はいるかー？」

その、救いの声にも似た、間延びした教師の質問。手を上げない者は誰一人としていなかった。集められた十数人の生徒全員が期待に満ちた瞳で教師を見つめる。

「分かった分かった、十五分休憩だ」

教師は生徒達の一致団結振りに苦笑しながら、

「俺も喉が渇いたからな、職員室に戻る。戻ったら、また始めるからな」

教卓に広げていたノートを閉じ、一番最初に教室を出て行った。そのすぐ後に、ささやかな歓声。解放された生徒達はめいめいに教室を抜け出して行く。

立花は安堵の息を吐き、椅子に座ったまま体を伸ばした。与えら

れたのは十五分。喉も乾いてはいないし、トイレに行く用事も今のところは無い。ただ、ずっと同じ体勢でいた為か体が鈍い。

教室内には立花を含め女子生徒のみ三人残っており、その中の一人がカーテンを開けた。人工の光ではない自然の光が飛び込んでくる。同時に、

「え……？」

「やだ！　何アレ！」

彼女らの目に、惨状と呼称すべきモノも飛び込んできた。

北駒台高校。グラウンド。

今日の午前中はサッカー部と陸上部がグラウンドを割り当てられていた。と言っても、陸上部は隅の方で準備運動と筋トレを済ましており、大半が学校の外周へと走りに行っている。そのお陰でサッカー部はグラウンドを伸び伸びと使えているのだった。

部員を二チームに分けた紅白戦はそこそこに盛り上がり、見学に来ていた一年生女子を湧かせるほどにサッカー部一同は熱戦を繰り広げる。

試合も間もなく前半終了に差し掛かった時、事件は起きた。一人の選手の動きが急に止まったのだ。

「おい！」

ベンチに座る顧問が大声で呼び掛けても、その選手は反応を見せない。虚空を指差したまま、口を半開きにさせているだけ。顧問の近くにいたマネージャーの女子も、紅白戦の出番を待つ他の部員も訝しげに彼を見つめる。

「ごっ――？」

奇声。

次に悲鳴。

そして叫び。

意味を為さない多数の声は恐怖に彩られていて、プレイ中の部員

たちもその声に思わず振り返り、足を止めた。熱を帯びた二十二名の視線が一斉に一点に集まる。逃げ惑い、走り出し、ただ震え上がる人々の叫喚の中、顧問であった男性教諭の首が転がっている。首。その一点に視線が注がれていた。

グラウンド内の誰もが声を出せず、茫然と固まる。

今、自分達は学校でサッカーをしていただけだ。なのに、何故首が？　何が起きた？

彼らの疑問はとある男子生徒の叫びによって、いとも容易く明確に解決された。

「ソレが出たぞぉ！　みんな逃げ――」

その叫びも途中で遮られる。胸を剣で貫かれれば誰しもがそうなる。

彼らはようやく理解出来た。今、この瞬間にソレが出たのだ、と。

「待て、漣」

「はい？」

北駒台高校へ向かっていた途中、前方を進んでいた春風が足を止めた。

「何かあったんですか？」

「……分からん。だが、嫌な予感がする」

そう言うと、春風は来た道を戻り始める。

「ちょっ、ちょっとっ、もう学校はすぐそこですよ？」

「これ以上は近付けん。いや、近付きたくない」

「……また職務放棄ですか」

「駄目だ。足が出ない」

春風は眉を顰め、道を行ったり来たりしていた。

「あの……、何をしているんですか？」

「線を確かめている」

「ですから、何の？」

「……漣、あと六歩進んでみろ」
漣は意味が分からない。分からないが上司には逆らえない。戸惑いつつ、言われた通り足を踏み出した。一、二、三、四、と、心の中で数を数える。
「……これは」
五歩目を踏み出したところで、漣は違和感に気付いた。小さな、とても小さな違和感。
「そのまま動くな。漣、今我々が向かっている場所はどこだ?」
「……それは」
何故か、漣は答える事が出来ない。
「当たりか」
春風は得心したように呟く。
「戻れ」
言われてから、漣は六歩目を踏み出す事もなく春風の隣に並んだ。同時に、抱えていた違和感が薄れていく感覚。
「春風さん、これは……」
「口惜しいが、北の指摘は当たっているようだな」
「……もしかして、既に」
「始まっているらしいな」

フリーランス『館』の構成員は現在五名である。全員が魔法を使い、全員が魔女と呼ばれていた。
「へー、骨やるじゃない」
「そうね、一応はランダの弟子ってところかしら」
その内の二人が、物陰からグラウンドの様子を覗いている。両方ともが黒いローブに身を包んでいる所為で区別は付かない。
「一、二ぃ、三……。ふーん、骨が十匹ね」
「充分でしょ。中にも何匹か行ってる筈だし」
グラウンドからは割れんばかりの、怒号にも似た悲鳴が聞こえて

くる。『館』の二人はその声に耳を澄ませ、満足気に息を吐いた。
「それじゃパシパエ、私がグラウンド当番ね」
「……何でよ？」
パシパエと呼ばれた方が不満げに口を開く。
「だって、あんたの力って広いとこに向いてないじゃない」
「それを言うならキルケ？　そっちだってそうじゃないの」
「……つべこべ言わないでよ。マナの仇、討ちたくないの？」
今度はキルケと呼ばれた方が不満げに口を開いた。
「仕方ないわね。じゃ、私は中に行くわ。少ないけど、何人か残ってそうだし」
パシパエは肩を落とし、手近な窓を見つけて素手で割る。
「その代わり、しっかりやってよね。ああ、全部殺しちゃ駄目よ。勤務外が来なくなっちゃうから」
「わーかってるわよ。とりあえず半分ね」
「……あと、作り過ぎないでね。私、あの臭い駄目なのよ」
それを捨て台詞に、パシパエは割った窓から強引に体を滑り込ませて校舎内に戻っていく。
「さ、それじゃ始めようかしらん」
楽しげに呟くと、キルケは狙いを定めた。グラウンドに目を凝らしていると、骨の包囲網を抜けた女生徒がこちらにやってくるのを確認する。
「結構可愛い子ね……」
舌なめずり。
近付いていくと、向こうもキルケの存在に気付いたのか、表情を変えた。即ち、哀願、期待に満ちた表情。この絶望的状況下で人間の形をしたモノに会えたのが嬉しいのだろう。
「あっ、あのっ！」
女生徒は、校内にローブを着た女がいる事にも気が回らず助けを求めた。
「……なぁに？」

キルケは女生徒に口を利く。魔女は人間に口を利く。
「ソレがっソレが出たんです！」
「そっかあ」
キルケは女生徒に近付き、優しく髪の毛を撫でた。動揺する女生徒が困惑の声を上げる。
「ねえ、あなた豚は好き？」
「はっ、はい？」
「パシパエは嫌いだって言うんだけど、私は好きなのよ。あの臭いが、こう、何て言うのかしら……」
「そっ、そんな事よりっ」
「えー？」
撫でていた手に力を込めて、キルケは女生徒の頭を掴み校舎の壁に叩きつけた。くぐもった声と骨が砕ける音が魔女の耳に心地良く染み入っていく。
「そんな事なんて言っちゃ駄目。ついつい力が入っちゃうから」
キルケはくすくすと笑い、女生徒から手を離した。壁に鼻血が垂れるも、女生徒は身動ぎ一つしない。校舎の外壁に顔を張り付かせたまま、四肢だけがダラリと伸びていた。
「だらしないわね」
キルケはその姿を見咎めると、女生徒の髪の毛を引っ掴みコンクリートの地面に後頭部から叩きつける。呻き声が漏れ、彼女がまだ生きている事を示していた。
「助けを求める相手をミスっちゃったわねー」
キルケは引っ繰り返った女生徒の顔を見てせせら笑う。ひしゃげた鼻からは血と水が流れ、涙が溢れていた。顔は恐怖と驚愕と困惑でぐちゃぐちゃに歪み、自らの涙と血とで醜く濡れている。
「ひっ、ひっ、ひっ……」
女生徒の短い、連続したか細い呼吸。キルケは盛大に笑った。
「あはははははははははははははは！　何よそれ！？
折角の可愛い顔が台無しじゃない！」

自分自身が彼女の顔を台無しにした事を忘れているのか、キルケは指を差し、腹を抱えて笑う。笑い続ける。
女生徒は身動き一つ取れない。取る気にもならないのだろう。もう、分かってしまったのだろう。
一しきり笑った後。キルケは倒れたままの女生徒に手を翳した。
「それじゃ、豚にしてあげる」
キルケが女生徒へと艶やかに微笑み掛けると、
「さようなら」
女生徒は、豚になった。

校舎内を歩き回っていた『館』の一人パシパエは、鼻の曲がりそうな血の臭いの中、楽しそうに鼻歌を口ずさんでいた。
「ふふん、結構残ってるのね」
生徒の教室が連なる二階廊下を悠々と闊歩しながら、パシパエは視線をさ迷わせる。右を見れば男子生徒の倒れた姿。左を見れば女子生徒の蹲る姿。後ろに振り返れば女性教諭の血を流して喘ぐ姿。前方には、
「ひっ――」
恐怖で顔が引きつった男性教諭。
パシパエはフードの下で口の端を吊り上げる。
「ごきげんよう、人間さん」
「あっ、あんたはっ」
「やあねえ、恐がらないでよ」
「おっ、お前がこんな事を！」
男性教諭のスーツは右肩から纏めてバッサリと切り刻まれていた。
「まあ、痛そうねえ」
右半身が殆ど抉られた状態の男へ、パシパエはゆっくりと近付いていき、優しげに声を掛ける。
「来るな！」

「……血が出てるじゃない」
「いっ、いったい何の目的でっ！」
パシパエは眉根を寄せた。この男、さっきから声が大きい、と。
「傷口を良く見せて御覧なさいな」
ふらりと。まるで愛しい人にもたれ掛かるような挙動でパシパエは男の残っている肩に頭を預ける。
「無骨な傷跡ねえ」
「うわ、うわあっ」
男は逃走を選択した。まともに思考が可能な状態なら、高が女一人、組み伏せるのは簡単な筈だろうに。
「きゃっ」
頭を突き飛ばされ、パシパエは男から離される。男は不恰好に走って彼女から距離を取ろうと必死だった。
「……可愛いんだから」
パシパエは焦る事もなく、男の後ろ姿を余裕たっぷりに歩いて追い掛ける。男の傷の深さから見て、長くはまともに動けないと判断したからだ。
間もなく、男は廊下の角を曲がった先の階段で足を滑らせてしまう。一度倒れると、体が疲労を訴え、素直に言う事を聞いてくれない。
苦痛に喘ぐ男の背後から、かつん、かつん、と、ゆっくりした間隔の足音が聞こえてくる。
「あら、転んでしまったのね」
パシパエは、顔を上げないまま踊り場にへたり込む男を見て、楽しげに微笑んだ。
「ひっ、あ、あ、あ……」
一歩ずつ近付いてくる死の足音。紛れもない狂気の塊。男は背中越しにそれらを感じ、慄いている。
男の震える様子を眺めながら、やがてパシパエは階段を下り切り、踊り場に足を踏み入れた。

「もう、動けないんでしょう？」
パシパエは男の傍にしゃがみ込む。
「……こ、殺すなら殺してくれ」
男の諦めは早かった。血を流しすぎたのか、それともう、この地獄にも似た空間から解放され、楽になりたかったのか。
「……ふうん」
だが、潔い男にパシパエは心底から苛立ちを覚えた。
「あなた、目的は何かって聞いてたわよね」
男は答えない。パシパエは構わず続ける。
「教えて上げるわ。冥土にお土産ぐらい持たせて上げる。私たちの目的は復讐なの」
「……ふく、しゅう……？」
「ああ、安心して。仇は勤務外だから。あなたじゃない」
男にとっては慰めにもならないことば。
「でもあなたたちには餌になってもらうわ。奴らを誘き寄せる為に、ね。だから、精一杯生きなさい。簡単に諦めちゃ駄目よ」
「な、何を……」
自分がここまで追い込んだくせに。だが、男は声を発する事が出来ない。
「……私たちの仲間は無残に、体を引き千切られて殺されていたわ。可哀相、きっと必死で生きようと、助かろうとしたのよ」
パシパエの口調には熱が籠もっていた。男は気持ちの悪さを覚えながら声が出せない。
「なのにあなたったら、殺してくれ、ですって？　可能性があるならどうして最後まで足掻こうとしないの？　生きたくないの？　殺されたいの？　あなた、マナを冒涜してるわ」
男には目の前の女が何を言っているのか分からない。
「でもね、私は寛大よ。だってもうすぐあの子を殺した勤務外を殺せるのだもの。だから、あなたにもチャンスを上げるわ」
「……チャンス？」

「ええ。私はもうあなたに手を出さないわ。逃げるのも良いし、私を襲っても良いわ。好きになさいな」

男の瞳に僅かながら光が宿る。襲う気などさらさら無かったが逃げられるのならそうしたい。

「ふふ、それじゃあ頑張りなさい」

「……？」

おもむろに。パシパエは自らの指の腹を噛み千切った。少量ながら、傷口から血が溢れ出す。男は彼女の意図を計りかねるが、何も出来ない。

パシパエは血の流れ出る指を男の傷口に押し当てた。男は苦悶の表情を浮かべ、声を荒げて痛みに耐える。

「ねえ、あなた虫は好きかしら？」

突然の質問に男は答えられない。ただ痛みに耐えているだけ。

「私はね、好き」

そう言うと、パシパエは立ち上がる。

「……あんたは？」

男は息も絶え絶えに問い掛けた。パシパエは僅かに口元を歪ませるだけで答えない。

「くっ……」

パシパエを無視して、男は立ち上がろうとした。残った左肩を壁に押し付け無理矢理にバランスを取ろうとする。足は小鹿の様に震えるが致し方ない。顔を上げ、目の前の魔女を睨みつけてやると気分は少しだけ落ち着いた。

――カサ。

男のスーツの襟元で音がする。彼は首を巡らし音の出所を探った。

――カサカサ。

何かが蠢き、這い回る様な乾いた音。
男は不思議に思いつつ、自分の体に目を凝らしていく。ふと、パシパエと目が合った。彼女は笑いを堪えているようで、自分の右肩をトントンと指し示している。
「……あ」
それが自分の右肩を指している事が分かると、男は無くなってしまった右半身に目を遣った。刹那、死にたくなる。
「うっ、ひっ、ひっ……」

――カサカサカサカサ。

「ふふふ、良く御覧なさいな」
もう、男は口を開く事さえ叶わない。何故ならば、彼の思考は真っ白になっていて、彼の視線は一点に集中しているからだ。そう、傷口から湧き出る大量の虫共によって。

――カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ。

サソリ。百足。クモ。蠍。ムカデ。蜘蛛。男が今までに見た事の無い種類のモノもいたが、些事だ。関係無い。一目見て分かる。害虫、毒虫、不快感を与えるフォルムをした昆虫共が自分の傷口から溢れ、漏れ出て、自身を這い回り、足を這わせ蠢き続けている。
「可愛いでしょう？　キルケは虫なんて気持ち悪いだなんて言うんだけど。ふふ、失礼ね。さあ、どうしたの動きなさいな？　折角のチャンスよ、私が大人しくしている内に逃げた方が良いんじゃなくって？」
「――――ッッッ！」
パシパエの言葉は届かない。男は左手で必死に虫を追い払う。だが、際限無く出現する虫共にとっては焼け石に水であった。血が溢れ、肉と骨が露出している傷口からは色とりどりの害虫が好き勝手

に動き回っている。払われても払われても、サソリは男の足元から這い上がっていく。ムカデは体内を食い破り、蜘蛛は皮膚をくまなく噛み付き始めている。

終わりが無い。救いが無い。もう、無限と言っても良いのかもしれない。

「ああああああああああああああああっ！」

無限に続く、体内を冒される痛みと体中を這い回られる不快感。無間地獄に比べれば生易しく、幸せな絶望感だろうが。男にとっては正しく無限の地獄で、出来る事なら夢幻であって欲しかった。

「あらあら、そんなに暴れちゃって」

パシパエは男に背を向けた。もう、彼に対しての興味など失ったのだろう。

「いや、いやだっ！　いやだああ！」

男の声は直に消えていく。恐らく、彼の口腔内にも虫たちが押し寄せたのだ。

音だけが、這い回る様な乾いた音だけが聞こえてくる。

——カサ。

その光景を見て、立花は目を皿の様に丸くした。

「……ソレだ」

窓際に走りより、食い入る様に惨状を眺める。既に立花の瞳は、弓の如く振り絞られて鋭く尖っていた。

グラウンドでは逃げ惑う生徒達の姿。だが立花は、それ以上に生徒達を襲っている存在に目が行っている。

――骸骨だ。

他の物で形容するのも馬鹿らしくなるほどに。

人間の骨格死体が、生きている人間を好き放題に襲っている。骸骨は全部で十体。そのどれもが武器として西洋の剣を所持していた。刀身は錆びかかっており刃毀れも酷い。だが、骸骨は気にもしないで目に映る（骸骨達に眼球は無いが）者に襲い掛かり斬り付ける。なまじ、ソレの持っている刀身の刃毀れが酷いだけに、掠るだけでも切り口がズタズタになり深手になってしまう。今息のある者も、時間が経つにつれ生存確率が低下していく。

立花は目を反らさない。

グラウンドでは怒声と悲鳴。叫喚が木霊していた。倒れる男。血を流す女。人間の尊厳が踏み躙られている。窓の外では男女構わず足が削がれ、腕が斬られ、胴が薙がれ、額が割れ、首が真っ二つにされるこの世の物とは思えない無法地帯を呈していた。

今、無残に殺される彼らを見て可哀想だと、同情するのは得策ではない。立花は非情にもそう決意する。何故なら、次は自分の番かも知れないからだ。校舎の中にいるから、安全だとは言えない。いや、もしかしたら外の方が安全な可能性もある。既に校舎は包囲されて脱出不可能な状態に陥ってるかもしれない。

ならば、と。立花は喉元まで出掛かった嘔吐感を必死で押し戻す。今は時間が許す限り相手の正体を、出方を窺わなければならない。幸い、骸骨の力量は把握出来た。思っていたよりも動きは早いが、太刀筋の荒さが目立つ。

――アレは大丈夫。でも。

立花はセーラー服の胸ポケットから携帯電話を取り出し、液晶画面を確認した。予想通り、お約束と言うか、圏外。電波は今学校内に届いていないらしい。つまり外界と連絡が取れない。誰かが気付き、勤務外に連絡を入れてくれるのを祈るのみだ。

ソレが集団で出現し、あまつさえ統制された動きを見せている事から、立花は骸骨達を操っている者が、裏で手を引いている者の存在を薄っすらと感じる。

計画的な犯行である事は明白であった。犯人の狙いまでは掴めないが、学校内の人間を無事に帰すつもりは無さそうで、つまりは脱出も困難、そもそも不可能かもしれない。

「逃げなきゃ！」

「ムリ！　ムリよそんなの！」

周囲の女性は何事か喚いているが、立花の耳には入ってこない。とにかく、まずはこの状況を脱出する事が第一だと判断する。物は試しだ。一度塀を飛び越えるなりなんなりして、とにかくこの空間から逃げ出さなければならない。

しかし、単独でも行動は可能だが、オンリーワンが動いてくれるまでに、学校から逃走するまでに幾ら敵を相手にするか分からない。背中を預ける人間が必要だった。

「……けん君なら」

都合が良い事に、今日は剣道部が体育館で活動している。まずは勤務外でもある神野と合流する事が状況改善の、最善の一手だと立花は判断、即座に行動を開始。教室内に立て掛けて置いた竹刀袋を引っ掴み、躊躇する事無く日本刀を袋から抜き去った。背後から悲鳴が聞こえるが、相手にしている時間は無い。廊下に耳を傾け安全を確認してからドアを開け、三階廊下に身を躍らせる。耳を澄ませ周囲に気を張る。敵の気配はしない。どうやら、まだここは安全らしい。

だが、それもいつまでかは分からない。安全地帯など、もはやこの学校には存在しないのだ。学校を見取り図にし、そこが敵によって少しずつ塗り潰されていく焦燥感を立花は感じた。

北駒台高校の体育館では、外の喧騒を掻き消すような部員たちの竹刀を振る音と、その掛け声が断続的に響き渡っていた。

神野は村西の事を一旦頭の隅に置いて、自身も館内の熱気に当てられて、竹刀を振るうべく持ってきた袋から竹刀を抜き出していた。その途中、こちらに向かってくる男子部員と目が合う。男子部員はフロアを出る際、一礼をしてから神野に近付いていった。

「どうした？」

「水、浴びてきます」

「そっか。まあ、冬だけどこの熱気じゃあな」

「今日は皆やる気がありますよ」

「おう。無理はすんなよ」

神野は彼を見送り、フロアの隅で竹刀を振るう。装備は付けていないが、今は正式の部員でもない。少々礼を失してはいるが、皆集中していて咎める者もいなかった。

教室を出た立花は体育館へと向かっていた。彼女の考えていた道順は単純で、まずは校舎の一階に行き、そこから玄関、窓、場所は問わずとにかく外に出る。骸骨の襲撃に遭うかもしれないが、正門近くまで突っ切り、体育館に逃げ込む。

筋書きは噴出してしまうくらいに簡単だったが、そう上手くは行かない事も理解はしている。三階廊下の角を曲がり、階段に差し掛かったところで異様な気配を感じた。

「……」

立花は無言で鯉口を斬る。下、二階から足音が聞こえてくる。

――かしゃ、かしゃ。

明らかに、靴を履いた人間の奏でる物ではない。恐らくは、あの

骸骨剣士だろう。
　立花は深呼吸をすると、刀身を煌かせ、何度か試しに振ってみる。体の調子は悪くない。頭がこの状況に付いていけていないが、問題は無い。
　後手に回るのは好きではない。自分のやりたい様に立ち回るのが彼女のスタイル。
「はっ！」
　だから立花は飛び出した。予想通り、そこにいたのは骸骨。
　階段を上っていた骸骨の、剥き出しの頚椎に刀身が刺さる。立花は力を込め、それを両断。支えられていた頭蓋骨が階段の踊り場に落下していく。
「よっ」
　立花はその頭蓋に着地した。放っておけば再起するかもしれないので、前頭骨、頭頂骨。側頭骨。後頭骨蝶形骨諸々にして砕く。思っていた以上に骨は脆かった。刀を使わずとも、勢い良く叩き付ければ素手でも充分に砕けそうだった。
　息を吐き、立花は階段を下る。教室から近かったので西側の階段を使用してしまったが、反対側の方が良かったかもしれない。そう思っても後の祭りだ。彼女はゆっくりと、一段ずつ階段を下り、周囲に意識を走らせる。階段を下り切り、何の気なしに二階廊下を覗いてみた。
「……うあ――」
　失敗だった。
　廊下の真ん中に、骸骨が四体群れている。骸骨たちの下肢部分は血溜まりで浸され、その中心には生徒であろう人影がいた。制服ごと、体はズタズタに切り裂かれ、貫かれ、もう息は無いのが確かなのに、それでもまだ骸骨共に寄ってたかって弄ばれている。
　余計な物を見てしまったと嘆くより先、立花は刀を前方に構えた。無視するのも手だったが、これ以上の蛮行は見過ごせない。第一、背後から奇襲を受けるのも恐ろしかった。

「てあああっ！」

気合を吐きつつ前進。骸骨たちはふっと顔を上げ、襲撃者を確認する。動く骨は間近で見ればグロテスク極まりなかったが、今は気にせずに刀を振る事だけを考えた。

乾いた音と共に、まずは一番近くにいた骸骨の胴を破壊。あっけなく、剣を振るう間も無く、骸骨の上半身と下半身がばらばらに散っていく。骸骨が取り落とした西洋の剣が生徒の死体に突き刺さるが見ない振りをした。

残った三体が立花に襲い掛かる。

立花は返す刀で左側の骸骨の両腕を斬り、制服に血が付かない様床に転がった。骸骨の剣は空を切り、もう一体の剣はまた死体に刺さる。勢い余ったのか、その剣が上手く引き抜けない様子だった。

その隙を見過ごす筈は無い。立花は起き上がりざま、剣を引き抜くのに苦心している骸骨の下肢を地面すれすれに断つ。そのままもう一体の骸骨の背後を取り、背骨を砕く勢いで踏み抜いた。倒れた骸骨は自らの骨を床に撒き散らす。

倒れた二体の骸骨の頭蓋骨を砕き、立花は残った一体と対峙した。策も何も無く、唯本能だけで向かってくるモノを仕留めるのは容易い。横薙ぎの剣を、頭を下げる事で避け、脇を通り過ぎる骸骨の胸部に当たる部分を掌で打つ。骸骨は壁に激突し、実にユーモラスに骨を四散させた。もう動く事はないだろう。戦闘の終了を確認し、深呼吸。

冷静になってから、立花は一度だけ死体に視線を遣った。

「……今は、ごめん」

葬れない。このまま晒し者にしてしまう非礼を詫び、立花は廊下を抜けた。目指すは階段。二階から階段を下り、一階に辿り着く。後は外へ出て体育館に向かうだけだ。

――かしゃ、かしゃ、かしゃ、かしゃ。

最悪。としか言い様が無い。背筋の凍る無機質な音を聞きながら、立花は深呼吸を繰り返す。グラウンドにいた骸骨が校舎の方にやって来たのか、それともグラウンドのモノとは別なのか。

窓も通用口も、外に出る為には幾らでも入り口があったが、体育館には一体だって骸骨を連れて行く訳に行かない。あそこには神野がいるが、ソレと初めて相対する素人に近い人間も大勢いるのだ。不安要素は排除しなければならない。

本当なら、立花は全て放り出して逃げ出したかったが、学校内に残る知り合いを見殺しには出来ない。

立花は壁に体を隠しながら、そっと、音のする方へ顔を覗かせてみた。

一、二、三、四、……。数える気を失くす位の骸骨がそこにいる。廊下が骨で埋め尽くされていた。あそこには職員室がある。骨があそこに集まっていることから、教師の助けを求める選択肢を立花は諦めた。骨が連れて来る血の臭い、死の臭いを嗅ぎ取りながら思う。もう、皆死んでいる、と。

転校してきて間もない身ではあるが、それでも学校の人間が死ねば悲しくはなる。空しくはなる。

「……ふう」

仇だって、取ってやりたくなる。

だが、幾ら相手が脆いとはいえ、こちらは一人だ。あの数を相手にするのは限界がある。ソレに気付かれない様周囲に目を配り、打開策を探す。しばらくの間周囲を探索していたが、結局、立花に使えそうなのは消火器ぐらいな物だった。

一端、日本刀を鞘に仕舞ってから壁に備え付けられた消火器を抱えると、立花は骨のひしめく廊下に姿を見せる。骨たちの視線が彼女に集中。新たな獲物を感じ取り、骸骨達は頭蓋骨を揺らし、上顎骨、口蓋骨、下顎骨を揺らし始めた。

――笑っている。

骸骨たちは笑っている。不協和音が廊下中に響き渡り、立花は顔

をしかめた。

「くそう……」

憎憎しげに呟き、立花は抱えていた消火器を思い切り放り投げる。これが彼女の思い付いた打開の策であった。

放り投げられた消火器は骸骨の群れに向かって緩やかに放物線を描いていく。やがて先頭の骸骨が向かってくる消火器に斬り掛かった。しかし、刃毀れを起こしている錆びた剣では、簡単に鉄の塊を切断出来る筈もない。刀身の腹が消火器に食い込み、勢いの残っている消火器が骸骨の頭蓋に食い込み、貫いた。その背後にいた次の骸骨の剣も無視し、消火器は脆い骨を砕き続ける。言わば鉄の弾丸。速度こそ信じられないほどに遅かったが、威力は充分。打開の文字通りソレを打ち開いていく。ドミノ倒しの如く、骸骨を砕いて砕いて、砕いて、骨の群れ、その真ん中辺りで遂に勢いを無くして落ちる。骨共は寄ってたかって消火器に狙いを定めた。

次の瞬間、白刃が舞う。

興奮と混乱の坩堝に立花が刀一つで飛び込んだのだ。既に倒れた骨を砕きながら、水飛沫ならぬ骨飛沫を上げてソレに刀を振るい上げる。

「あああああっ！」

一振りすれば骨は砕かれ、二振りすれば骨は飛び散り、三度振れば骨は木っ端微塵に成り果てる。

骸骨たちは応戦しようと剣を振るが、残念な事に彼らに知能と呼べる物は存在していない。即ち、敵が目の前にいようがいまいが、先頭の仲間が剣を振ったから、隊列中盤の骨も、後方の骨も関係なく自分もと剣を振り出したのだ。そこに立花がいない。いるのは仲間だというのに。

混乱に乗じ、立花は一気呵成に攻め続ける。右手に握った刀で砕くだけでなく、左手はソレの眼窩に指を掛け、向こう側に無理矢理押し倒した。すると、倒れてくる仲間を見てソレの間で新たな混乱が起こる。

既に、骸骨たちの半分近くが戦闘不能に追い込まれていた。
「これならっ！」
――いける。
そう思った瞬間、骸骨たちの向こうに只ならぬ気配を感じる。殺気にも似た、痺れる様な甘い闘気。立花は弾かれる様に骨の群れから離れた。
「好き勝手やってくれるじゃないの」
「……誰だっ？」
骨が擦れ合い、ひしめき合う中から聞こえてきた確かな女の声。
「ごきげんよう、人間さん」
立花は一瞬で理解する。
骨が波の様に割れて、その中から姿を現した黒いローブを着た女。
「ソレ――」
「ふふふ、可愛い」
立花は学校を脱出するどころか、体育館に行けるかどうかも怪しくなってきた事を理解した。

十分ほど竹刀を振るっていただろうか。神野はふと、先ほど出て行った部員がまだ戻っていない事に気付いた。
「……サボりか……？」
竹刀を壁に立て掛けると、体育館の隅に置いてあった自分の鞄からタオルを取り出して額の汗を拭う。
「安田！」
仕方ない。一応報告だけはしておこう。そう思った神野は練習の邪魔をするのを申し訳ないと思いつつ、部長である安田を呼んだ。
安田は礼をしてからフロアを出て、頭に巻いていたタオルで汗を拭いながらやって来る。
「どうした？」
「そろそろ休憩挟んだらどうだ？　さっき出て行った奴もまだ戻っ

てきてないしさ」
「……あー、そうだな。今日はお前が来てるし、皆気合入ってんだよ」
「ん？　そうなのか」
安田は苦笑。
「鬼の元部長が見てるからな。良し、でも鬼の目にも涙だ。休憩にすっか」
「誰が鬼だっ、誰が」
「おーい、皆ちょっと休憩しようか！」
男子部員が声を揃え肯定の意を述べ、向かい側の女子部員も倣う様に竹刀を置いた。
神野は自分の意見が通ってしまった事に少しだけ不安を覚え、フロアに腰を下ろす。
「よっこいしょっと」
その隣に、タオルを片手にした安田も腰を下ろした。二人は何の気なしに、体育館を出て行く部員達を眺める。
「なあ、神野」
「ん。何だよ」
「……あのさ、俺……」
安田は話の続きを躊躇っていた。実に言い難そうな、苦虫を噛み潰した様な表情。
「何だよ、言えよ」
神野は笑い混じりに続きを促す。
「あ、ああ、実は俺、やっぱりさ――」

「――うあああああああ！」

体育館の玄関から聞こえてきた男子部員の悲鳴に、神野はすぐさま反応した。
「どうした！？」

竹刀を握り締め、玄関に向かうと、
「あああああああああっ」
腹を押さえた男子部員と、それを取り囲む複数の男子部員。そして。
「……なん、でっ？」
玄関のガラス戸に遮られ、向こう側で剣をがむしゃらに振り回している骸骨の姿をした、化け物。
だが、その姿を認めた瞬間、神野は全てを理解した。
「ドア全部閉めろぉ！」
神野は指示とも言えない叫びを発する。その叫びに気圧され、玄関に集まっていた部員たちが走る。
「神野、どうした？」
安田が遅れて顔を出した。神野は舌打ちしてから、
「残ってる奴らに外へ出ないように伝えろ！」
玄関側のドアに鍵を掛けてから、負傷した部員に肩を貸して立ち上がる。安田は何が起こっているのか把握出来ていなかったが、目の前に怪我をしている部員と、外に異形がいる事だけは把握して、すぐに伝令を掛けた。
神野は背後のソレが気になったが、怪我人の介抱を優先させる。フロアに寝転がらせ、清潔なタオルで患部を当ててやった。白いタオルは真赤な血液を吸収し、瞬く間に朱に染まる。
「何があったか話せるか？」
「……う、外に出たら、いきなり……」
苦しそうに脂汗を流す男子部員に、これ以上聞き出すのは酷だと神野は思った。今は安静にさせておきたい。
「とにかく、ジッとしてろ」
一旦その部員を置き去りに、神野は指示を飛ばす安田に近付いていった。
「おい、人数確認してくれ」
「あ、ああ……」

安田の顔面からは血の気が失せている。無理もないと、神野は思った。自分だって、意味が分からないし、何が起こったのか全く理解出来ていないのだ。

神野はもう一度ソレの姿を確認しに行く。ソレは、姿を見せた神野に気付いた素振りこそ見せるが、ドアを開ける気配は無かった。単純に知能が低いのか、何なのか判断は付かない。一先ず、部員たちに更なる混乱を招く事は不要だと考え、ソレの姿を見せないようにする為、鉄製の防音扉を半分だけ閉めた。

「神野、まずい……！」

安田の蒼白だった顔が、更に青くなっている。

「どうした……？」

自身の心臓が跳ねる音を聞きながら、神野は耳をそばだてた。

「……さ、三人足りないんだ」

「……っ！　マジかよ……」

嫌な予感はしていた。恐らく、ソレに見つかる前に校舎内の水道まで行ったか、混乱の時に外へ逃げ出したのだ。どちらにせよ、その三名を締め出す形になってしまった。神野は悔やんだが、今体育館を解放する訳にはいかない。目の前にソレがいるのだ。

「三人で間違いないな……？」

「あ、ああ」

「女子も集めろ、いない奴を見たかどうか話を聞いといてくれ。あと、外は見ないようにな」

安田は頷き、傍にいた女子の部長と何事か話し合っている。

神野は体中から力が抜けて行くのを感じていた。体育館の壁に背中を預け、息を吐く。突然のソレの襲来に、体も心も付いていってくれない。情けなかった。自分は新人であろうと、勤務外である事に変わりは無いのに。

だが、考えなければならない。これからどうやって全員を生き残らせるのかを。出来るならば、自分が勤務外である事は隠しながら。

しばらくの間、神野は呼吸を整えていた。部員たちの泣き喚く様

な声が聞こえていたが、出来る限り聞き流し、平常心を保つ。自分だって感情に任せて泣き叫びたかったが、こういう時こそ冷静にならなければ駄目だと、必死に言い聞かせる。

「神野、やっぱり三人とも外だ」

「……あ、ああ、そうか」

だから、神野は安田に話しかけられた事にも少しの間気付かなかった。

「外……か」

と、なれば。見殺す訳にはいかない。なんとしても助けなければならない。その為には、自らもソレの待ち受ける体育館外へ出向く必要がある。

外のソレが剣を振り回す音が聞こえてきた。決断しなければと、神野は唾を飲む。

「安田」

「お、おう？」

「俺が部長を辞めて、次にお前が部長に選ばれた。どうしてだか分かるか？」

「……何だって？」

神野は深呼吸をして一拍置いた。困惑する安田の肩に手を置き、

「お前が、俺の次に強いからだよ」

残酷な事を告げる。

神野は部員たちから話を聞き、今自分たちが置かれている状況を確認した。そして、三つ問題がある事に頭を抱える。

まず、ソレがいる。目の前の骸骨だ。休憩時に出て行った数人の内一人を、こいつが裂いた。今、その部員は女子部員に看て貰ってはいるが、文字通り見て貰っているだけに等しい。この体育館にはまともな包帯や薬一つ無い。一刻も早く学校外から抜け出し、病院へと運ばなければならない。

次にいなくなった三人の部員。
三人は恐らくは校舎内か、他の場所にいる。願わくば学校外に脱出して欲しかったのだが、三人が校舎の中に逃げ込むのを他の部員が目撃していた。
この三人も助けなければならない。ソレが外の一体ならばどうにでもなる話だが、その可能性は薄い事に神野は気付いている。
先刻のグラウンドからの叫びと、胸中をざわつかせていた、本能にも似た警鐘がその可能性を否定していた。恐らくは、いや、確実にソレは複数出現している。物事は得てして、都合の悪い方に転がる物だと神野は承知していた。
最後に、学校からの脱出。
体育館の扉も窓も全て締め切ってはいるが、ソレ相手には何の保障にもならない。他の場所よりかは時間を稼げるだろうが、いつまでも閉じ篭っている訳にはいかない。他の部の人間だって気になるし、教師の意見も仰ぎたい。第一、脱出するには結局外へ出るしかない。
――外へ出るしかない。
そう決断した神野は、安田に協力を仰いだ。
「二人で行くぞ」
「……だよな……」
安田は諦めにも似た表情を浮かべている。
「諦めろ。やるしかねえんだ。このままここにいたってどうしようも無いぞ」
「……分かってんだけどさ」
「安心しろ安田。お前は強いから」
「慰めになってねえよ」
戦闘になったとしても、自分がアレを仕留めれば良いだけの事だ。少なからず、神野には自身があった。敵の力量を勝手に判断したつもりになってはいけないが、外の骸骨の太刀筋を見る限り問題は無い。全くの素人だった。適当に棒を振り回す小学生と変わりが無い。

さっきは恐ろしくて仕方が無かったが、冷静になれば恐怖心も自然薄らいでいく。

本当に、全く以って勤務外になっていて良かったと、神野は思った。もし、勤務外になっていなければこれがソレと対峙する二回目になってしまう。とてもではないが、今までの経験が無ければこうまで落ち着いていられなかっただろう。

「なあ、全員で突っ込めば良いんじゃないか？」

「俺も考えたけど、そりゃやばい」

ふと問い掛けてくる安田に、神野は首を振って答える。

「俺たちは剣道部で、皆、竹刀さえ持てばその辺にいる奴より強いと思う。けど、全員が全員ソレと戦えるとは限らないだろ？」

「……俺は良いのかよ」

「お前なら問題ない」

集団で動く事に、神野は絶対の否定をするつもりはなかった。だが、今この状況に於いて、ソレを相手に集団で動く事にはメリットよりもデメリットの方が多いと判断している。

神野はまず、恐怖が伝染してしまう事を第一に恐れた。

集団で動けば、一人で動くよりも断然周囲に気を配れる。敵の発見も早くなるし、何より心強い。

だが、異常事態の中で十全に力を発揮出来る筈がないのだ。ソレが現れたのなら、やはり恐れる。現に、負傷した部員を見てしまった者からは気勢が殺がれている。

――自分も、こうなるのか、と。

百歩譲って怪我だけならまだマシだとしても、怪我だけで済む可能性の方が低いかもしれない。そんな中、全員が死の影に怯えたままおっかなびっくり行動していても、敵に襲われれば一たまりも無い。恐怖で統制が取れなくなった集団はパニックを起こし、全滅の危機を招く。軍隊みたいに訓練を受けていれば別だろうが、自分たちは一介の学生なのだ。

「まあ、俺とお前なら心配は要らないか」

「……おう」
安田の何気ない一言に神野は嬉しくなる。人間二人では心許ないが、自分たちは剣道部の部長と元部長、兼、現勤務外店員なのだ。他の者とは違い、人間性でも剣の腕前でも互いが互いに信頼を置ける関係。少数精鋭では言い過ぎだろうが、力もそれなりに備わっているし、あの、骸骨剣士程度の力量では自分はおろか、安田の足元にさえ及ばないと認識していた。
そもそも、戦闘に及ぶつもりも神野には無い。今から体育館を出れば、目の前の骸骨とは刃を交えることになるだろうが、その一回きりだ。逃げられるのなら逃げる。無駄な戦いは生還確率を低めるだけだと理解している。
「良いか、俺たちはソレを倒す為に外へ出るんじゃないからな」
他の生徒とはソレを見てきた数も、戦ってきた数も違う。それでも神野は傲慢な態度には出ない。何故ならば、自分はまだまだ未熟だと分かっているからだ。自分よりも強い勤務外、怖い勤務外、オンリーワンで様々な勤務外と出会い、彼は少なからず成長していた。
「心配すんな、こっから逃げる算段もあるんだぜ」
神野は無邪気に笑う。
「……本当かよ？」
「おう」
嘘ではない。
ここには今、自分と同じく、それ以上の力を持つ勤務外の立花がいるのだから。彼女は神野にとって追いつくべき目標でもあったし、頼れる仲間でもある。平時の彼女は何だか頼りなくて泣き虫だが、非常時には性格が反転したみたいに格好良いのだ。
今、ようやく自分が動き出したのだから、彼女はとっくに行動を開始していて、ソレも何体か倒しているかもしれない。
出来るなら早く合流したい。
「おっしゃ、それじゃ行くぞ」
「……はあ、やっぱ、こええなあ」

「俺だって同じだよ馬鹿」
神野たちは自分たちが出て行った後の事を女子部長に託し、三十分経ったら一度戻って来る事も告げた。心配そうな顔を残して、他の部員は開いていたもう半分の防音扉も閉める。勿論、神野たちの指示だった。
二人は唸りを上げて閉まる扉の音を聞き、身が引き締まるのを感じる。目の前には、獲物を前に猛るソレがいるのだ。
「安田、俺がドアを開けるからな」
「分かった」
安田は相変わらず蒼い顔をしていたが、神野は彼の事を心底から信頼していた。
神野は深く息を吸い、吐きながら心の中で三つカウントをして、
「おおおっ！」
獣の咆哮が如く、声を発する。
――かしゃん。
勢い良く開け放たれたドアは、目前にいた骸骨の体を吹っ飛ばした。
その光景を、竹刀を握り締めた安田が呆然と眺める。骸骨は自らの骨を飛び散らせながら、コンクリートの地面に激突し、幾度かの痙攣を繰り返した後、動かなくなった。念の為、神野が骸骨から剣を取り上げて、それを茂みに隠し、ついでに目立った骨も砕いておく。
「……おい」
「……ん」
神野と安田は顔を見合わせ、釈然としない思いを抱えたまま校舎の中に足を踏み入れた。

オンリーワン北駒台店、バックルーム。
「……黄衣の言った事は本当だったでしょう？」
一は嬉しそうに店長に問い掛けた。
先ほど、情報部からソレが現れたとの連絡が届いたのだ。
店長は本当に鬱陶しそうに一を睨み、煙草に火を点けて、
「まだ分からん。学校で何かが起こったのは確実でも、起こしたのは『館』じゃないかもしれん」
ゆっくりと煙を吐く。煙は揺ら揺らとバックルームを漂っていく。
バックルームには現在、一とナコト、店長とジェーンがいた。糸原は一たちが戻ると既にいなくなっており、ナナにはフロアを任せている。
「ねえ、お兄ちゃん、さっきまでどこに行ってたノ？」
「……ん、散歩」
「ふーん？　そこのフリーランスと？」
「っていうか、今はそんな事言ってる場合じゃないだろ」
今は学校に出現したであろうソレの話をしている場合だ。一は頭を掻いた。
「そっ、そんなコト！？　お兄ちゃんはアタシをさしおいて、そこのレディフォックスなんかと！　でっ、デート！　デートに行ったのヨ！？」
「何だそのスパイみたいなコードネームは……」
ジェーンに指を指されたナコトは、新しく購入したハンチング帽を楽しそうに眺めている。
「恐らく、女狐では無いでしょうか。あたしを呼称する表現としては不適切ですけど」
「いや、合ってるだろ」
「楽しそうにおしゃべりしないでって言ってるじゃナイ！」
「おい馬鹿共。真面目に私の話を聞け」
店長は心底からウンザリしていた。
「……さて、恐れていた最悪の事態が起こった訳だがな。間違いな

く、学校には罠が仕掛けられている。相手の正体も未だ分かっていない」

「その、情報部の人の話から察するにですが、学校には多分、と言いますか、確実に魔法が掛けられています」

ナコトは憂鬱そうに口を開く。

「黄衣、折角だから聞いとく。俺、まだ死にたくないんだけどさ。何か良い作戦は無いのか？」

一の情けない発言にナコトは口の端を吊り上げた。

「ええ、ですから、あたしに考えがあります」

酷く楽しそうな、凄絶な笑み。

一は嫌な予感を感じつつ、また彼女に頼るしか無いのだろうと、そう思った。

「気に食わんが、その手しか私にも思い付かないな」
ナコトの作戦と呼べるかも怪しい話を聞いてから、店長は詰まらなさそうに紫煙を吐き出した。
「なあ、黄衣、本当に上手く行くんだろうな？」
「魔術の素養を持っているのはあたしたちだけです。これしか手は無いでしょう。それとも何ですか、怖いんですか？」
「……そりゃ、怖いよ」
一は素直な気持ちを口にする。
「まあ、あたしはあなたにはあまり期待していませんから。それより店長、情報部と勤務外の方に電話を」
「私に指図するな」
店長は言いつつ、乱暴に受話器を引っ掴んだ。
一件目の用事、情報部に連絡を終えてから、次に店長は勤務外店員である三森に連絡を試みる。何度目かのコールの後、
『今日は家から一歩も出ねェ』
静まり返ったバックルームに、三森のぶっきら棒な声が小さく響く。
店長は少しだけ目を瞑り、煙草に口を付けた。
「文句を言う相手を間違えるな。私ではなく、黄衣に言え」
『ああン？　あのフリーランスか？　何だってあいつが出てくンだよ』
店長は電話口の三森へ、かなり適当に今までの経緯を説明する。
しばらくの沈黙の後、
『嫌だ』
それだけ答えると、三森は電話を切ってしまった。
「使い物にならんな、あいつは」
「や、でも三森さんじゃないと……」

一は不安に駆られる。三森は今回の『館』戦において、非常に重要な戦力なのだ。糸原でもなく、ジェーンでもなく、ナナでもない。相手が未知数の力を持つ『館』だからこそ、北駒台店最強の、近畿地区でも最強の呼び声が高い三森が必要なのだ。のっけから作戦が破綻するのを恐れるのも無理は無い。

「だがな、本来なら三森は今日休みだ」

「俺と黄衣だけじゃ死んじゃいますって！」

「だったら……」

店長は受話器を一に渡す。

「……えっと？」

「お前が説得しろ。私は嫌だ。面倒だからな」

――クソ女。

一は内心物騒な台詞を吐き、何度も溜め息を吐いた。

「仕方ない、か」

壁にピンで留められた紙に書かれた、目的の人物の番号を何度も確かめながら入力し、呼び出し音を待つ。

『……しつけェぞ店長！』

いきなり怒鳴られ一の身が竦んだ。しかし、怯む訳には行かない。こうしている間にも神野や立花、北高の生徒たちは危機に晒されているし間接的には自らの身にも災いが降り注ぐのでもう必死。

「あ、あのう。お、俺です。一です。せめて話だけでも聞いてもらえませんか？」

『なっ、お、おあっ？　てっ、てめェがなンで電話掛けてくンだよ！』

何故だか、焦ったような声を三森は発する。

「だって店長が……」

『っ！　とっ、とにかく嫌だぞ！　私は今日休みなンだから！』

「そこを曲げて何とか……。あー、実は……」

一は今までの経緯を説明した。それはもう懇切丁寧に。

しばらくの間、また沈黙。

「三森さん、本当お願いします……」
『……私が行かなきゃ駄目なのかよ？』
「って言うか、三森さん以外考えられないです」
糸原のレージングも、ジェーンの速さも、ナナの力も、三森の前では霞んで見える。一も今までに多種多様な異能を見たり、異能と戦ってきたが、中でも三森が一番強く、格好良い。
勤務外になる前、釣瓶落としや鎌鼬から助けてもらった事を差し引いても充分にそう思える。だから、一はハッキリと言葉にした。
『わ、私じゃないと？』
「駄目です。駄目なんです。お願いします、来てくれたらもうこの際です、何でも言う事聞きますから！」
『……そ、そうか。でもなあ……』
電話口から溜め息が聞こえてくる。
「お、お金なら必ず払いますから」
『金じゃねェよ！　馬鹿かてめェは！』
「えっ？　違うんですか？」
『私をあの守銭奴と一緒にすンなっ、ちっ、くそ、馬鹿。分かったよ、行きゃあ良ンだろが。どこだ？　北高だったか、そこに行っとけば良いんだな？』
「あっ、はい、そうです」
『……借りだぞ。良いか忘れンなよ？　絶対に返してもらうからな！』
「もっ、勿論です。あの、ありがとうございます」
『ふん』
やがて向こうから電話が切られる。受話器をゆっくりと所定の場所に置き、一は深く息を吐いた。
「どうでした？」
「めちゃめちゃ緊張したよ」
ナコトは一を睨み付ける。
「そんな事は聞いていません。首尾はどうだったのですか？」

「来てくれるって。あー、良かった。首の皮が繋がった思いだよ」
「結構。それでは急ぎましょうか」
一は頷いて、ロッカールームからアイギスを持ち出してくる。
「それじゃ店長、行って来ます」
店長は頭を掻き、煙草を空き缶に押し付けた。
「一、そう暗くなるな」
「……なってませんよ」
「心配もするな。物事はそうそう都合悪く進まんさ。学校内には神野と立花もいる筈だからな、案外あっちでとっくに解決してるかもしれん」
一は口を開けた。間抜けな顔だった。
「えー、と？　もしかして励ましてくれてるんですか？」
「客観的な事実を述べたまでだ」
「まあ、少しは気が楽になりましたけど」
「そりゃ良かった。おら、とっとと逝って来い」
追い払う様な手振り。
「……はいはい。じゃ、ジェーンも留守番頼むな。店長もナナも、いまいち信用出来ないからさ」
「こっちは任せて。お兄ちゃんこそ気をつけてよネ」
「何たって、相手は魔女だからな」
一は他人事の様に苦笑する。
「ゼッタイ、帰ってこなきゃダメなんだカラ。ン、ケガもしてきちゃイヤだよ？」
「当たり前だろ。俺は痛いのが嫌いなんだ」
「約束破ったら、ハリセンボン」
「わーかったって、お前が許してくれるまで何本でも飲んでやるよ」
「ふふ、分かった。それじゃ、ｔａｋｅ（いってらっしゃい）　ｃａｒｅ」
ジェーンは少しだけ名残惜しそうに微笑んだ。
「……Ｉ'ｍ（いってきます）　ｇｏｉｎｇ.」
一も背中を向けて答える。バックルームの扉を開け、フロアに足

を踏み入れた。
「痛いのは嫌いだそうですね」
後に続くナコトの、笑いを噛み殺した声。
「……それがどうしたよ」
「さっきのやり取り、中々痛快でしたよ」
「うるせえ」
『館』が行動を開始してから三十分弱、オンリーワン北駒台店もこうして動き出した。

広がる血。転がる体。突き刺さるは赤錆びた西洋の剣。
脈を取らなくても、呼吸を確認しなくても分かる。彼らはもう――。

「っざっけんなよ！」
校舎内に突入した神野、安田を出迎えたのは剣山にも似たオブジェ。三体の人間だったモノに、剣が無造作に、一種無残に突き刺さっている。
安田は蹲り催してくる吐き気を堪えていた。自らが部長を務める剣道部。その部員が三名もああなっていれば、そうなる。責任感、絶望感、次は自分の番かと、本当にここから抜け出せるのだろうかと、処理仕切れない感情がない交ぜになり彼を襲っていた。
神野は何も言えない。安田には何もしてやれない。終わってしまったのだ。彼らを助ける目的で、意を決し体育館から出て来たというのに、なのに。
「……一度、戻るか？」
口をついたのは安い言葉。まだ十分も経ってはいないが、このまま校舎内に留まるのも気が引ける。確実に、ソレは複数で動いていて、まだこの近くに潜んでいるのだ。
「……残った奴らに、どう、説明すりゃ良いんだよ……」
「今は黙っておいた方が良いかもしれないな」

「今は？」

壁に手を付きながら、安田はよろよろと立ち上がる。彼は信じられないと言った表情で神野を睨みつけていた。やけにぎらついた双眸で。

「お前、ふざけんなよ。お前はそれで良いさ、今が終わればそれでさぁ！」

「な、何言ってんだお前？」

神野は安田の剣幕に圧され、思わず後退する。

「お前は辞めた人間だろ！　学校から出れたとしてっ、その後で説明して、責任を問われるのは俺なんだ！　剣道部の命は俺が預かってるんだよっ、忘れたのかよ！？」

「おっ、俺は、そういう意味で言ったんじゃない」

「聞こえちまうんだよ、そういう風にさ！」

忘れた訳ではない。神野は決して『部長』の肩書きが持つ意味を忘れた訳ではない。自分だって、短い間とは言え部長の地位にいたのだ。

「……悪かった」

ただ、日常で起こったあまりにもな出来事に気が動転していて安田の立場まで頭が回らなかった。それは事実で、だから神野は真摯に受け止めて謝罪の言葉を口にする。

安田はそこからしばらくの間、まともに口を開く事はなかったが、

「すまん」

時間が経つにつれ冷静さを取り戻した。さっきは言い過ぎたと思ったのか、神野へ頭を下げる。

「今は内輪で揉めてる場合じゃないよな」

「……いや、お前の立場にまで気が回らなかった俺が悪い」

二人は顔を見合わせ、照れくさそうに頭を掻いた。

「ま、二人して謝り合ってる場合でもない、か」

気まずい空気を払拭したくて神野は作り笑いを浮かべる。安田もそれに倣った。

「それじゃ改めて聞くけどよ、どうする、体育館に戻るか？」
「まだやめとく。正直言って、今は戻るのが怖い。なんつーか、整理がついてないって言うか、みんなの前で叫んじまいそうだ」
「なら、職員室か……」
そこなら自分たちよりも頼りになる大人がいる。その近くには保健室もあった。付近が安全ならば、負傷者の為に包帯程度の治療なら受けさせてやれるかもしれない。
「良し、とりあえず東棟に向かうか」
安田は頷き、竹刀を握り直す。
神野は今更ながら周囲に意識を巡らした。敵の気配など感じ取れないが、物音はしない。一先ずの安全を確認して東棟へと足を向けた瞬間、がくりと、膝から力が抜けて崩れ落ちる。
「あ……」
「神野！？」
落雷で撃たれた事は無かったが、今は、今だけは撃たれたい気持ちだった。駆け寄る安田の声も耳には入るが頭には届かない。
そう、神野は気を取られていたのだ。突然のソレ。負傷した部員。血に塗れたオブジェ。生き残りたい。そう、思い過ぎていた。
「ああ……」
頭の中が真っ白に塗り潰され、その中でも一つだけ、一人だけが彼の脳内に浮かび上がる。

――神野姫。

今日、彼の妹も、ここにいた。
この戦場に、この地獄に、このどこかに彼女はいる。
「やばい……」
どうしてこんな大事な事を忘れていたのか。他の事に気を取られ、他の事に気を回す暇がなかったのは確かだ。それでも、それでも。
「おい、神野！」

大事な妹を他の事と一緒くたにしてしまった自分が許せない。
「……安田」
自分への憤りを力に変え、神野は立ち上がる。
「先、戻っててくれ」
「……神野？」
「俺、最悪だ」
「おい、どうしたんだよ？」
神野はゆっくりと息を吐き出し、たっぷりと空気を吸い込んだ。
少しだけ血の臭いが混じっていて、気が遠くなりそうになる。
「妹が、ここにいるんだ」
自らにも言い聞かせる様に、そう、神野は言い切った。

立花の決断は早かった。
刀を胸元で水平に構えると、連なっていた骸骨たちに切っ先を当て、一息に貫く。
そも、選択肢など最初から用意されていない。半分程度片付けたとは言え、前方には未だ大量の骸骨が列を成す。後ろは空いているが、背中を向ける訳にはいかない。
「ふふ、向かってくるのね」
正体不明の女。迂闊な隙を見せれば何をされるか分かった物ではない。
「お前がやったのか！？」
立花は骨の壁、その向こうにいるであろうソレに叫ぶ。刀を引き抜くと、三体の骸骨が崩れ落ちていった。
「あなた、ここの人間かしら？」
「そうだよっ」
「残念、そんなの振り回してるから勤務外かと思ったのに」
ソレを切り刻みながら、立花は女の独白を心中で繰り返す。自分が勤務外なら何だと言うのだろうか。

「何でこんな事をするんだっ！」
かしゃかしゃと鳴り響く骨の行進に負けないよう、立花は必死で叫んだ。
「恨むなら、勤務外を恨みなさいな」
「勤務外（ボクたち）が何をしたって言うんだ！」
「……何ですって？」
刹那、空気が凍り付く。闘気ではない。体の芯まで冷たくさせる暗い熱気。
「勤務外が何をしたかって、聞いたんだ」
この場を支配するのは殺気。口を開くのですら躊躇われる重苦しい重圧。それらに負けない為、立花は声を張った。
「ふ……」
女は口元を歪ませる。
「ふふ……」
『館』の一人、パシパエは笑いを堪え切れない。
「ふ、ふふ、あは、はっ」
「わっ、笑うな！」
パシパエのもたらす熱狂的な狂気。立花は気圧されまいと声を発した。
「ふふっ、良い、良いわ。予定より早いから驚いたけど、良いわ、私ってツイてる」
「……？」
立花は一度、骸骨の群れから、パシパエから距離を取る。
「確認するまでもない事だけれど、あなた、勤務外よね？」
「そうだよ、それが何だ」
「そう、だったら死んで頂戴」
「――ッ！？」
足元から悪意。確認しないままに後方へ跳躍。そこで立花は悪意の正体に気が付いた。
目を覆いたくなるグロテスクな姿。見る者全てに嫌悪と不快を抱

かせる醜悪なフォルム。
「いきなりなんで……？」
骸骨たちの足元から、数匹のムカデが姿を覗かせていた。それも、立花が今までに見た事が無いくらいに大きい。
「可愛いでしょう、私の虫たち。ふふ、そんな顔しないで？」
「くっ、む、むかでが何だ！」
確かに、多足のムカデは姿こそ恐ろしかったが、所詮は虫だ。突き刺せば、貫けば、斬り込めば終わり。
「安心なさい。こんなのもいるから」
パシパエの声に応じるかの如く、骸骨たちが一斉に道を作る。割れていく骨の中から現れたのは――。

――ぎちぎちぎち。

「どう？　自信作よ？」
現れたのは一匹の巨大なサソリだった。近くにいた骸骨たちは、サソリの出現によって壁に追い遣られ砕かれていく。
サソリの中身を覆う殻は赤と青を混ぜた、紫に成り切れていない中途半端なカラーリング。それでも、立花を絶句させるには充分な体躯。廊下の天井に届くくらいのサソリは自らの鋏状になった手を開閉させている。その度にぎちぎちと、奇怪な音を体の何処からか響かせた。
「さ、行きなさい」
パシパエは微笑みながらサソリの尻尾を撫でる。それが合図だったのか、巨大なサソリはぎちりと音を立て、立花に狙いを定めた。
「うわあああっ！」
立花は叫んで、敵に背を向けた。狭い廊下ではあの巨躯に勝ち目が無い。あの手に挟まれれば、あの尻尾で刺されれば致命傷だ。そんな計算は立花になかった。それ以上に、何よりも嫌悪感が先立った。どれだけグロテスクであろうが、小さければ我慢は出来る。し

かし、あれは何だ。
本能から来る恐怖心に任せ、立花は廊下を駆けた。背後では骨の砕ける音、踏み潰される音。そして、
「――――！」
追い掛けてくるサソリの足音。
泣き出しそうになるのを堪え、立花は廊下の角で一瞬だけ迷い、二階へ上がる事を選択。あんな化け物を体育館まで連れて行けないと彼女が考えられたのは、もはや僥倖と呼べただろう。

神野と安田は体育館へ戻るのを選ばなかった。助け出す筈だった剣道部員三名の救出が不可能となり、どうするか迷っていた二人だったが、神野が妹の存在に気付いたのが決定的であった。
神野は自分一人で助けに行くと主張していた。が、安田は頑として首を縦に振らなかったのだ。
「何度も言うけど、これは身内の問題だからな。危なくなったらすぐに逃げろよ」
「こっちだって何度も言うけどな、お前の妹はお前の家族であると同時に、俺と同じ学校の生徒でもあるんだからな。ここまで来て見過ごせるかよ」
二人はもう何度繰り返したか分からないやり取りを交わしながら、東校舎四階の図書室へ向かっている。その理由は一つ、図書委員である神野姫がいるとすれば、そこの筈だからだ。
「……本当に、図書室にいるんだろうな妹さん」
「ああ、多分な。委員会の仕事が残ってるって言ってたから」
「図書委員だからって、図書室で仕事するとは限らないだろ」
安田は不安げに呟く。図書室は東校舎の四階、その一番奥にある。即ち、地理的に一度四階まで上がりきると、もう逃げ場は無い。校舎は四階が最上階で、屋上へと続く階段こそあれど、肝心の屋上は開放されていない。囲まれればもう上に行く事も下に下がる事も出

来ないのだ。下手をすれば、自分たちは死地に向かっている事になる。

「だったら、体育館に戻れば良いだろ」

「……お前を見捨てるなんて出来ないって言ってんだろ」

これも、この短い間に何度繰り返されたやり取りか分からない。

二人は西校舎から入り、渡り廊下を抜けて東校舎の、二階へと続く階段にまで差し掛かっていた。

「待てっ」

先頭を進んでいた神野が声を潜め、停止を促す。

「何だよ？」

「足音がする……」

「え……？」

言われてから、安田も目を瞑り、耳を澄ました。

――ずる、ずる。

「……本当だ」

確かに、階段の方から足音らしき物が聞こえてくる。

「でも、変だ。何かを引き摺るような、かなり遅い足音じゃないか？」

神野は握った竹刀に力を込めた。

「ま、またあの骸骨が？」

「分からねえ、けど……」

「やるしか、ないか」

覚悟を決めた二人は神野を先頭に、竹刀を向けて廊下の角を曲がった。

「なっ……」

そこで二人が見たモノは、男の形をした何か。階段の踊り場からやって来る、倒れた人間。倒れながら、階段を一段ずつ下ってくる。まるで、何かに引き摺られているかのように。

「……社会の水島だ」
「水島先生!?」
呆然と発した安田の呟きに神野が反応を見せる。何故なら彼は、神野のクラス担任だったからだ。
だった。彼の右半身は存在していない。スーツごと、恐らくあの骸骨の剣によってバッサリと斬り抉られている。そして、二人に何の反応も見せない。顔も下げたままで、うつ伏せになっていた。
「死んでる、のか?」
「じゃあ何で動いてんだよ!」
二人の声に反応したのか、ふと、男の顔が上がる。神野は期待した。まだ、彼が生きているのではないかと。そして、次の瞬間には絶望する。
顔を上げた男の口、鼻、目からは多種多様な虫が顔を覗かせたのだ。教師であった男の顔を、体を、好き勝手に蠢く無法の侵入者。
「げっ……」
安田はその侵入者を見て、強い嫌悪感を覚える。
「こいつらがあっ!」
だが神野は、嫌悪感を覚えるより先、強い敵意を虫たちに抱いた。飛び出し、階段を三段飛ばしで跳躍、男の体から離れた虫へ攻撃を仕掛けていく。足で踏み潰し、竹刀で追い払い、元教師であった男の体から異物を取り除こうとする。
「おい神野っ!」
遅れて、安田も神野に続いた。腰は引けていたが、彼もまた必死に虫を潰し続ける。
一分か、二分が経過しただろうか。無限に沸き続けるかと思われた害虫を、二人は何とか駆除に成功した。
残されたのは、虫共に食い荒らされた哀れな屍。
「神野、先生の、その……どうするんだ?」
安田の感覚も、神経も、とっくに麻痺しかかっていたが、『死体』とは言わなかった。言えなかった。口にするのは簡単だが、何かが

失われてしまうような、そんな恐ろしい衝動を感じたからだ。
「悪いけど、置いていこう。今は時間が惜しい」
「ああ、分かった」
残酷だが、神野の意見は正鵠を射ている。この場に留まり死者を悼む時間は無い。まだ、ここには生きている者が残っているのかもしれないのだ。ならばそちらを優先させない都合は、ない。
二人は心が磨り減るのを感じながらも、階段を上っていく。

四階までの道のりは、驚くほどに平坦な物だった。骸骨一体、虫一匹に出くわす事無く。二人は図書室目指して進んでいく。安堵するとともに、人間一人に出会えない事を嘆いた。
「……今日が創立記念日でまだマシだったかもな」
「え？」
安田の呟きを受け、神野の足が止まる。
「どうした？」
「いや、なんでもない」
そう言えば、と。神野は固まっていた思考回路を溶かしに掛かった。
――どうして、ソレは創立記念日に来たのか。
骸骨たちに知恵が無い事は分かっている。だから、神野はおぼろげながらも、裏で誰かが糸を引いている事に気付いていた。

円卓の騎士。

店長たちから以前、その名前を聞いた事がある。ソレを操り、徒党を組ませ、あるいは自らも戦場に出、人間たち、勤務外に害を成す存在。
自分が北駒台店と関わる前、大きな事件があった。オンリーワンの指示により、街中の人間が避難した、勤務外とソレとの戦い。最

近になって知ったのだが、その戦いは『アラクネ事件』と呼ばれていたり、『蜘蛛戦』だとか店の人間が呼んでいるらしい。

その『蜘蛛』以降、集団で動くソレや、明確な意図を持った、持たされたソレが増えているのも神野は理解し始めていた。

つまり、今回も。

「おい、神野？」

「……おお、わりぃ」

もう少しで何かが繋がりそうだったのだが、安田の声で我に返る。どうせ、自分では大した推測も立てれない。神野は頭を振って、雑念を払い除けた。

やがて二人は階段を昇りきり、廊下へと差し掛かった。

神野は逸る気持ちを抑える。この廊下の角を曲がれば、図書室が見えるのだ。

「安田、慎重に行くぞ」

「おう。分かってるって」

心臓が高鳴る。この先に、妹がいる。いる筈だ。言い聞かせながら、神野は廊下を曲がる。図書室の、一際大きな扉が目に飛び込み、その扉の前でたむろする骸骨たちを見た瞬間、神野は駆け出した。

安田の声も耳に入らない。相手が何体いるのかも見えていない。慎重に行こうなどと誰が口にしたのか。胸を焦がす憎悪と憤怒だけが神野の心をせき立て、手足を稼動させた。

「どけえええええっ！」

すぐそこに、すぐ傍に妹がいるかもしれないのに――！

神野は自分へ振り返る骸骨たちに竹刀を打ち込んでいく。ひたすら打ち込み、道を作っていく。竹刀の直撃を受け骨が砕け、蹴りを受けて壁に叩きつけられ、骸骨たちはまともに剣を振るう暇がなかった。

「……すげえ」

出遅れた安田は後方で、ただぼんやりと神野を眺めている。思わ

ず口を出た言葉は半分が賞賛で、半分が畏怖だった。いつもの、さっきまでの神野じゃない。そう、まるで、まるで。

「――きんむ、がい……？」

確信を持てないまま、何の証拠も持てないまま口にした言葉だった。だが、果たして自分たちのような一介の学生がああまでなれるのだろうか。幾ら妹がいるかもしれない、だけで、あのソレの只中に飛び込めるものなのだろうか。

「ちっ」

短く舌打ちし、安田は竹刀を握り直した。事実がどうであれ、友人とその妹の危機なのだ。怖い。その気持ちは嘘じゃない。このまま尻尾を巻いて、神野を見捨てて体育館まで逃げ帰り引き篭もりたい。だけど、あいつを見捨てるのは出来ない。

このままおめおめと逃げ帰っても、死んでいった部員や先生にも申し訳が立たない気がする。

「うあああああっ！」

第一、目の前の戦い振りを見て燃えない訳が無い。男なら、血が沸々と沸きあがるに決まっている。だったら、自分だって飛び込まない訳には行かない。

安田は声を張り上げ、恐怖感を無理矢理掻き消した。神野の打ち漏らした骸骨に、がむしゃら攻撃を加えていく。礼節も基本の型もあった物じゃなかったが、相手が相手だ。

「あらら、こりゃまた……」

二人の意識は完全に骸骨に向かっていて、新たに背後から現れた登場人物に気付く事もなかった。

その人物は何故か、手にモップを持っており、黒い三角帽とマントを身に着けている。そう、どう見たっていかにも魔女な出で立ちをしていた。

砕く。砕く。砕く。砕く。
打ち砕き、すり砕き、骸骨共を粉々の粉にしていく。
粉砕し、破砕し、撃砕し、動かざる死者を今度こそと砕いていく。
「あああああっ！」
北駒台高校、東校舎四階図書室前には狂乱と熱狂が渦巻いていた。
渦の中心には神野剣、安田の両名。彼らを取り囲む様に骸骨共がうじゃうじゃと群れを成し、列を成していた。殺される為に、砕かれる為に、死なす為に、砕く為に。
神野の勢いは凄まじかった。図書室前に存在していた三十数もの骸骨の半分を薙ぎ倒し、ただの学生とは思えない、目覚しい戦果を挙げている。だが、頭に血が上り過ぎてもいた。すぐそこ、扉を抜けた先に妹がいるかもしれない、とは言え、突出し過ぎている。
安田。剣道部現部長。彼の存在が、神野の無茶とも言える行動を支えていた。背中を預ける訳ではないが、神野の死角の敵を安田が何とか仕留めきっている。だからこそ、背面を気にせず神野は動けていた。
「退けって言ってんだっ！」
振り下ろされる剣を竹刀で受け止め、横薙ぎの剣を足で弾き飛ばし、残った片方の腕で近くの骨を払い除け、神野は図書室を目指して真っ直ぐに突き進む。
既に骨の骸は二十にも上っていた。最初こそ怯えていた安田も、全てのソレの駆除が夢ではないと、そう思えた矢先、
「やってくれるじゃないのさ」
女の声が朗々と響いた。
冷静さを欠いていた神野より先に、安田が振り向く。

「あんたら、本当にガクセイって奴かい？」
安田は目を見開いた。ここに誰かが現れたからでも、女が魔女の様な黒い三角帽を被っていた事でも、あまつさえ黒いマントに身を包んでいた事に驚いたからでもない。その女が、嘘の様に綺麗だったからだ。三角帽から僅かに覗くブロンドが揺れ、彼の目を釘付けにする。魔性を具現化した女の姿態に息を呑み、全てを、少しの間忘れ去る。
「――安田っ！」
耳元で破砕音。高く乾いた、骨の砕ける音。
「馬鹿野郎、ボッとしてんじゃねえぞ！」
叱責する神野の声に、安田はようやく我に返った。振り返り、短く謝罪すると、三十近くいた骸骨が全て地に伏して、砕けに砕け散っているのが見える。
「……誰だ、あんた？」
神野は油断なく身構え、女に問い掛けた。
女は持っていたモップをクルクルと回しながら、神野と安田にそれぞれ視線を遣る。
「そりゃこっちの台詞だよ。勤務外はまだ来てない筈なんだけどねえ、骨共がこうも簡単にやられちまうとは」
「あんたもソレか？」
「……不躾なガキだねえ、礼儀ってのを親から教わらなかったのかい？」
神野は女にばれない様、安田に視線を送る。安田は了解し、一歩だけ後退する。
「教わったさ。俺はただ、敬意を払う相手を選んでるだけだ」
「はっ、可愛くないね」
女は楽しそうに笑い、回していたモップを止め、神野に突きつけた。
「それじゃ、小僧共の伸びた鼻っ柱でも叩き折ってやろうかねえ」
「やってみろよっ」

神野が女に飛び出したと同時、安田も一目散に駆け出す。ただし、女とは逆方向、つまり図書室に向かって。道を塞いでいた骸骨が全て倒れた今、図書室への進入を阻む者は誰もいない。

「おっと、そこには行かせないよ」

女は向かってくる神野には目もくれず、しゃがみ込んでから手を床に差し伸べた。刹那、文字の様な、図形の様な、形容し難い蒼い光の線がその手から溢れ出す。光は床を一直線に這い、安田を追い掛けた。

「なっ！？」

線は神野の足元をも通り過ぎ、図書室の扉に手を掛けていた安田の足元に辿り着く。安田は光の存在に気が付いていたが、それを無視し扉を引こうとした。

――かしゃ。

「そこから離れろっ！」

その様子を離れたところから見ていた神野は気付く。

――かしゃ、かしゃ、かしゃ、かしゃ。

砕け、折れ、割れ、地に伏し、ばらばらに成り果てていた骨共が姿を取り戻し、立ち上がりだした。蒼い光に触れた骨が、まるで磁力に牽き付けられるかのごとく元の姿を取り戻していく。

「安田ぁ！」

神野は走り出した。

「うっ、うおおっ！」

安田も今更になってようやく気付く。扉から手を離し、竹刀を振り回して骨の群れを抜けようと引き下がった。

が、遅い。

既に三十の骸骨に囲まれてしまい、安田は身動きが取れなくなる。

一斉に襲い来る西洋の剣に、竹刀一本では太刀打ち出来ない。
「そら、どうするんだい？」
後ろから楽しそうな声が聞こえてきたが、神野は無視して、取り残された相棒目掛けて飛び込んだ。
「させるかよ――っ！」
神野は廊下の窓枠に足を掛け、半分程度距離を稼ぎ、自身が傷付くのを厭わずに図書室前まで一気に着地する。その衝撃で周りの骨たちは再び砕け散り、スペースが空いた。敵の位置を確認するまでもなく神野は竹刀を振る。
「ドア開けろ！」
安田は間隙を逃さず、神野に背後を任せ扉を開ける事に成功した。転がり込むように図書室内に入り、
「お前も早くっ！」
神野に呼び掛ける。
「姫を頼むっ」
「はあっ！？」
その台詞を残し、扉は外側から閉められてしまった。

店を出た一とナコトは北高へ向かっていた。
「はあ……」
目的地まであと五分程度の距離に達した時、一の口から溜め息が漏れる。ナコトはそれを聞きとがめ、舌打ちで返した。
「今更弱気になってどうするんですか？」
「……だって、相手は魔女じゃんか。店長はああ言ったけど、中の人が皆死んでたらどうしよう、そうなったら次は勤務外の俺の番だぜ」
「全滅は有り得ないでしょう。あたしたちを誘き寄せるには生きている人間が不可欠ですからね」
「でもさー、戦闘になったら、魔法で殺されるよ絶対」

ナコトは眼鏡を押し上げ、侮蔑を込めて一を見据える。
「安心して下さい。そんな簡単な魔法なんてありませんから」
「……どういう意味だよ」
「確かに魔法は魔術より高度ですが、複雑で使い辛いとされています。例えば、魔術は扱うのが簡単な分、簡単な事しか出来ない。炎を出したり、氷を出したり、と」
一は言葉には出さず、カトブレパス戦での黄衣オキナを思い出した。
「しかし、魔法はそんな単純な事出来ません。と言うか、魔女はそんな事しないでしょうね。彼女らはもっと分かり辛く使い辛い、複雑な種類の魔法を行使してくる筈です。例えば、相手を別の生物に変える魔法や、怪物を召喚する魔法、とか」
「何でだよ？　そんなの効率悪いじゃないか。もっと簡単に、その、何だ。人を殺せる手段なんて山ほどあんだろうが」
「……力を持てば、その力を試したくなるものです。魔女はわざと面倒な魔法を使って、自分たちよりも劣った人間相手に実験めいた事をやるんですよ」
本当に性質が悪い。今更ながら、一は実感する。
「それじゃ、とりあえず魔女に出会っても、すぐには殺されたりしないって事だな」
「ええ。こっちが先に体力勝負に持ち込めば問題ないでしょう」
「なーんだ、じゃ楽勝じゃん」
「そうやって笑うのは結構ですが、その程度の事『館』が気付かないとお思いで？　彼女らだって正面切って戦うのが嫌だから罠を仕掛けたんですよ。学校内に足を踏み入れた瞬間、待ち伏せしていた魔女に魔法を掛けられて、豚にでも姿を変えられないよう、精々気を付けて下さいね」
ナコトはさらりと言い放った。
「豚って……マジで？」
「有り得ない話ではないでしょう。なんせ相手は恐ろしい魔女なん

ですから」
「恐ろしい魔女、ねえ……」
ふと、一の頭に疑問が湧いて来る。
「そんな恐ろしい奴相手に、何だってお前が力を貸してくれるのか気になるな」
「気になりますか？」
「店長の言ってた事じゃないけど、もしお前が本当に俺の敵だったとして、後ろから撃たれるのは遠慮したい」
「では前からなら撃っても良いんですか？」
「駄目に決まってんだろ」
一はナコトを恨めしく睨み付けた。
「冗談です。銃なんて持ってませんから、あたし」
「ふーん、じゃあ冗談か物見気分で付いてきてくれるってんのかよ」
「……意地悪ですね、あなた」
ナコトは悩ましげに息を吐き、足を止める。
「あたしが付いて行っちゃ駄目な理由でもあるんですか？」
「俺は付いて行く理由を聞いてんだよ」
「強いて言うなら、あなたが行くと言ったからです」
「安っぽい」
本心からそう思い、一は呟いた。
「あたしもそう思います」
「……店長が言ってたな。黄衣、お前は『館』を憎んでる、殺したいって」
「それがどうしました？」
一は頭を掻き、ポケットに手を突っ込む。取り出したのはお菓子の箱だった。
「……なんですか、それ？」
「煙草の形した、子供喜ばす為のチョコレートだよ」
そう言って、一は箱から一つチョコを摘み上げナコトに渡す。
「だから、それが何だと言うんですか？」

「――しんどくないか、復讐って？」
　ナコトは絶句した。どこまでも分かりやすく、アドリブの利かない奴だな、と。一はチョコをぶらぶらと振りながらそう思った。
「……あなた、気付いてたんですか？」
「案外分かりやすいからな、そういう事考えてる奴って」
　一は何でもない事の様に言う。ナコトは俯き、一から視線を反らしつつチョコレートを受け取った。
「軽蔑、しますか？」
「あ？」
「復讐なんて考えてる人間を。それも、一度だけじゃない。あたしはオキナの時にもあなたたちを頼った」
「……軽蔑って、いや、しないけどさ。何だ、今度は誰だよ、親兄弟か？」
　触れている話題に比べ、一の口調は軽い。語尾には笑いを混ぜ、顔には笑みを作った。
「ええ、あたしは家族を『館』に殺されました」
　ナコトの口調は平坦、むしろ冷淡とも取れる。
「えらくあっさりと認めるじゃねえか」
「これ以上黙っていても、あなたとより良い信頼関係を築けそうにありませんからね」
「あっそ」
　可哀想だとは言えなかった。
「二年前です。ちょうど、ソレが活動を大々的に開始し始めた頃でしょうか。フリーランスの活動も、ソレに呼応するみたいに始まった時期です。その頃、あたしの家は北陸の小さな町で、小さな本屋を営んでいました」
「……何だよ、唐突だな」
「黙って聞いたらどうですか？　ヒロイン的存在のあたしが涙涙のエピソードを紡ぐ名シーンになるんですよ？」
　仕方ない。目的地まではすぐだし、話もすぐに終わるだろう。一

は口を噤む。
「……普通の家でした。あたしと、父さんと母さんと、三人で。ソレが出現したといっても山間の小さな町でしたから、わざわざソレもあたしたちの町まで出てきませんでした。取り立てて生活に変化はありませんでしたね」
　ナコトは淡々と語り始めた。
「ですが、父さんの本屋は少し変わっていて。それこそ、『館』の連中が嗅ぎ付けてくる程度には」
「……」
「……」
「……」
「……」
「何だよ、喋れよ」
　沈黙を守っていた一だが、ナコトの言葉が止まり、その上足まで止まってしまったので仕方なく振り返り声を掛ける。
「いえ、先ほどの部分には相槌を入れてくれないと」
「なんて入れれば良いんだよ？」
「さあ？　あなたに任せます」
　――めんどくせえ。
「分かったよ。と言うか、今気付いたんだけどさ、お前結構大事な話してるんじゃないのか」
「ええ、あたしの伏線を回収する重要な場面ですよ」
「……絶対作り話だよ……」
　一はポケットからチョコレートを取り出し、糖分を吸収して落ち着こうと努力した。
「では。……ですが、父さんの本屋は少し変わっていて。それこそ、『館』の連中が嗅ぎ付けてくる程度には」
「ふーん、『館』って鼻が利くんだな」
　指定通り、一は棒読み加減に相槌を打ってみる。
「……ちっ」

「おい、舌打ちすんじゃねえよ。しっかり要望には応えてやったじゃねえか」
「そこは、『あ、もしかして魔導書を取り扱ってたのか？』　って父の本屋が何故変わっていたのか疑問に思って突っ込むところでしょう」
「そんなのお前の父親だもん、変わってるに決まってんじゃねえか」
ナコトは露骨に、嫌そうに顔をしかめた。
「もう良いです。ほら、赤いジャージの野蛮な方が見えましたよ」
一は何気なく前方を見遣る。言われて見れば、見慣れた赤が目に突き刺さってきた。もう少し近付けば、いつも通り機嫌の悪い彼女の顔が見れるだろうと、そう思ったら、口元が緩んでくる。
「何ニヤついてるんですか、おぞましい」
「おぞましいと来たよ。あーあ、もうやだ、このホラ吹き女」
「あたしは嘘を吐きませんっ」
「あっそ、もう良いもう良いって」
二人が楽しそうに言葉を交わしていると、それを見咎めた三森から罵声が飛んできた。

三森の足元には大量の吸い殻が転がっていた。
「あー、お待たせしました、ですかね？」
一はなるだけ腰を低くする。
「別に待ってねェよ。それより相手は『館』ってマジか？」
「そのようで」
「ちっ、最悪……」
三森は舌を打ち、不快感を露わにした。
「赤い方、『館』をご存じなのですか？」
「あ？　なンだコラ？」
「……何語ですかそれは。日本語でお願いします。それとも言葉を知らない、とか」

「てめェやってやろうじゃねーかよ！」
平然な顔で挑発するナコトに、三森が猛る。
「やめろ黄衣、その人煽りに弱いんだから」
「よっ、弱くねェよ！」
「それより、情報部の方がいませんね。見取り図をお願いしていたのですが」
「「情報部？」」
一と三森の声が重なった。お互い顔を見合わせ、お互いが同じ気持ちでいる事を確認する。
「……どうされました？」
「いや、何か気持ちが……」
「あー、ヤな予感しかしねェ」
一は頭を抱え、三森は気だるそうに煙草へ火を点けた。
「あの……？」
「黄衣、気を付けろよ、あいつは人の後ろに回り込んでくるからな」
「は？　て、敵、ですか？」
「情報部だ、一応な」
投げやりに呟く三森を見て、ナコトは益々困惑した。
「後ろだ、後ろに気を付けろ」
一はうろうろと、あちらこちらを行ったり来たり。視線を忙しなく動かし、ある種楽しそうにしていた。
――風切り音。
ナコトはふと、音のした方向、上を見る。黒いスーツを着て、細い手足の体付き。そんな女が空から降ってきた。いや、下りてきた。
「うわあああっ」
一の悲鳴。本当に楽しそうだ。ナコトはつまらなさそうに視線を下ろす。
「ここは既に敵地だぞ。何を楽しそうに遊んでいる、一一？」

「耳に息を吹き掛けんなよ！」
「ふっ、愚問だな。私を誰だと思っている。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属春風麗だぞ」
「くっ、どこから湧いて出やがった！」
一は背後に付く春風を降り払おうと、必死に足掻く。
「無論、そこの電信柱から。一一、貴様が望んだ事ではないか」
「それを止めろって言ったんだ！」
「春風麗。先日の健康診断では視力は両目とも二、五。虫歯ゼロ、内臓にも異常なし。だが最近耳が悪くなってしまってな……」
「悪いのは頭だっ」
「……ん？　すまん、聞こえなかった」
何度振り解こうが、春風は一の後ろに居続ける。
「良いじゃねえか耳、特に都合がよお」
「貴様は相変わらず性格と顔が悪いようだがな」
「そういう事は親に言え、親にっ」
「持って生まれた物は仕方ない。が、変えようと、少しでも努力しようとしないのは貴様自身の怠慢に他ならない。猛省するが良い、一一」
「俺はこの顔が気に入ってんだ、ほっとけ！」
ようやく、春風が一から離れる。
「あの……」
ナコトが春風を指差しながら一の方へ近付いてきた。
「あたしもあなたの顔は良くないと思います」
「そうじゃねえだろ！？」
「……ああ、むしろ遠回りに言うと不細工のカテゴリに入りますかね」
「そうか……やってやろうじゃねえか、やってやろうじゃねえか……」
「何故二回も同じ事を言ったんですか？」
「うるせえ馬鹿！」

ポン、と。激昂する一の肩に手が置かれた。服越しでもその手がやけに冷たくて、一は震える。
「一一、不様だな」
「……手を退かせ冷血女」
一は春風の手首を掴んだ。
「聞き捨てなりませんね、その発言、その行為はセクハラに値しますよ」
「ふん、黄衣ナコトの言う通りだな。幾ら女体に餓えているとはいえ、私の手を握り、あまつさえメス呼ばわりとは……」
「なっ、冤罪だ！　って言うか女体とか言うな、エロいわ」
「どうやら性根だけでなく、あなたの耳は犯罪的なまでに腐っているようですね」
「一一、私は貴様が嫌いだ」
前門のナコト、後門の春風。一は死にたくなってきた。
「たっ、助けて三森さん……」
三森からはイエスでもノーでもなく死ねと返ってくる。この場で舌を噛み切って本当に死んでやろうかと一は思った。

落ち着いた面々はようやくになって現状を把握し始めた。
「意識が？」
「ああ、この先をもう少し進むと、北駒台高校が頭から消える。意識から無くなる」
ナコトの問いに、春風はそう答えた。
訝しげにするのは三森で、彼女はまだ魔術魔法の類を信じていない。
「どうにも嘘くせェ話だよな」
「なら、確かめてくればどうですか？」
「へっ、面白ェ。良いぜ、確かめてやろうじゃねーの」
ナコトの挑戦を受け、三森は肩で風を切りつつ角を曲がっていく。

「恐らく、学校の周囲には『館』の一人、カリュプソが魔法を仕掛けています」
三森の後ろ姿を見届けた後、ナコトは口を開いた。
「かりゅぷそ？」
「あなたは本当どうでも良いところに食い付いてきますね……。今問題なのは誰が仕掛けたかではなく、何が仕掛けられたか、です」
一は押し黙る。ナコトに強く言われ、更に魔法の事では口を挟む余地が無い。
「何が仕掛けられた、か。私は魔法について詳しく知らん。どのような種類のモノが掛けられていると言うのだ？」
「モノを隠す魔法です。カリュプソが最も得意とする種類の」
「隠す？　それだけか？」
「ええ、それだけです。ですが、非常に厄介です。それだけでここまでの状況を作り上げてしまうんですから」
ナコトは憎憎しげに呟く。
「なあ、隠すって例えば何を隠すんだよ？」
「あら、ではお馬鹿なあなたにも分かるように説明しましょうか。情報部の方、お願いしていた見取り図を」
「分かった」
春風はスーツの内ポケットから四つ折に畳まれたルーズリーフを取り出した。それを広げ、ナコトに手渡す。
「これ、北高の？」
「その通りだ」
一が覗き込むと、そこにはやけに詳細な北駒台高校の見取り図らしき物が書き込まれていた。しかし。
「なあ、この余白のイラストはなんだよ？」
空いたスペースの所々に少年漫画の主人公みたいなイラストが描かれている。一はそれらを指差し、相変わらず表情を変えない春風に問うた。
「私が描いた。どうだ、上手いだろう」

胸を張る春風。
「下手じゃないけど、何だってこんな時に描いたんだ……」
「ふっ、和むだろう」
「返り血浴びてる男を見ても和まねえよ」
「あなたたち、今から『館』と戦闘になるんですよ、どうしてこうも緊張感がないんですか？」
呆れ顔のナコトを適当にあしらい、
「で、この見取り図が何なんだよ？」
一は疑問を口にする。
「……ふう。情報部の方のお話を聞くに、どうやらこの学校の周囲にはカリュプソのモノを隠す魔法が掛けられているようです」
「あのさ、だからモノを隠すってのは分かったけど、何を隠してるんだよ？」
「気付かないんですか？　今日は創立記念日らしいですが、だからと言って生徒や教師が一人もいないとは限らないでしょう」
「……そういや、立花さんは補習って言ってたし、神野君は部活の手伝いって言ってたな」
一はぼんやりと思い出し始めた。
「一一、貴様は相当に鈍いらしいな」
「悪かったな。で、それがどうしたんだよ」
「はあ、まあ良いでしょう。あなたには期待してませんから。つまりですね、あなたの言った事が本当ならば部活や補習に来る生徒がいる筈でしょう？　気付きませんか？　もう学校はすぐそこにあるんです。なのに、静か過ぎます。補習ならともかく、部活で声を出さないなんて有り得ません。何の音もしないなんて、おかしいんです」
言われて初めて一は気付く。そう、角を曲がれば学校が見える。なのに何の音もしない。聞こえてくるのは全て学校外からの音。
「つまり、何だ、魔女は学校の音を隠してるって事なのか？」
「それだけではありません。角を曲がれば分かる事ですが、あたし

たちの意識から学校を隠し、恐らくは学校自体をも隠している筈です」

「更に言えば、中では助けを求める為の外界へ通じる連絡手段が隠されているだろうし、中の者たちからは外が隠されている筈だ。抜け出したくても、何処に抜け出せば良いのか分からないだろうな」

「……って、それが本当ならどうやって助けに、っつーか中に入れば良いんだよ？」

「ですからっ」

ナコトは一の言葉を途中で遮り、道路の真ん中で見取り図を広げた。

「あたしたちがいるんです。魔法とは言え、学校周辺に仕掛けるともなると効果も薄れます。充分に真価が発揮されません。だから、だからあたしたちでも隙を衝ける」

「具体的には？」

「これだけの規模になると、魔法陣を使わざるを得ません。地図を見ながら学校を外回りに一周して、比較的効果の薄いところから侵入します。その上で、内部の陣を見つけ次第潰していきましょう」

「陣……？」

「それは後回しです。良いですか、こんな事が出来るのは世界でもあたしたちだけです。まずはそれを強く思ってください。魔術は魔法なんかに負けないって、自分は魔女なんかに負けない、勤務外は『館』になんか負けないと、そう思ってください」

「どういう意味だ？」

「カリュプソの魔法は意識下に直接作用します。そこの角を曲がった時から魔法はあたしたちに影響を及ぼします。だから、魔法になんか負けないと、そう思えば大丈夫です」

眩暈がした。

「……おい、そんなんで魔法を破れんのかよ？」

「そんなんが出来るのはあたしたちだけと言ったでしょう。相手の懐に飛び込むまでは肉体よりも心の強さが物を言います。問題あり

ません、あなたほど我の強い人物はいませんから、魔法なんかじゃ止められませんよ」
「精神論かよ……」
「魔法なんて何でもありですからね。精神論、根性論、お嫌いですか？」
「そんなの信じてねえよ」
「結構。では、魔女に吠え面でも掻かせてやりましょうか」
ナコトは地図を仕舞い、角を、その先にいるであろう『館』を睨む。
「……春風、出入り口を作ったら一旦戻ってくる」
「何故私に報告するのかは理解出来んが、了解した」
「戻ってこなかったら、店に連絡を頼んで……、そうだな、皆には俺の仇でも討つように伝えてくれ」
「了解した」
無表情で承諾する春風に満足すると、一はナコトを前に出して角を曲がった。
ここから先が、戦場になる。唾を呑み、震える手足になけなしの勇気を送り込んで無理矢理に動かした。
角を曲がると、三森が全てを忘れてしまったような忘我の表情で煙草を吸っていた。勇気が挫けそうになる。

The Rage

頭が痛い。一は鈍い頭痛を感じながらも泣き言を言わず、学校の周囲を歩き続けていた。泣き言を言えなかったのは、隣を歩く少女――黄衣ナコト――がいたからだ。自分と同じく、魔術の素養を持つ彼女もまた、自分と同じ頭痛に悩まされている。自分一人だけ弱音を吐いていられなかった。

「そろそろ一周するけど、俺にはどこがどうとか分からないぞ」

「……頭痛が酷くなった場所とか、ありませんでしたか？」

「いや、特にない」

言葉を発するのも、正直辛い。カリュプソの魔法に打ち勝つ様、一はさっきからずっと脳内で自己暗示を繰り返していた。意識が乱れると、持っていかれそうで恐ろしい。

ナコトは表面上は平静を装ったまま、春風から受け取っていた地図を広げる。

「北高は大雑把に言うと、東棟と西棟に分かれているようです。二つの校舎には行き来する為の渡り廊下があり、棟の真ん中には中庭と、棟から離れた場所にグラウンドが一つずつ。東棟の傍にはプールもありますね。そして体育館は、正門近く、と。一般的な、面白みの欠片もない学校です」

「学校に面白みを求めてもしょうがねえよ。それより、何か突破口みたいなのはないのか？」

「難しいですね。こちらから向こうが見えていなくて、向こうからこちらは見えている現状、待ち伏せは避けられないと考えた方が良さそうです。ですが、最終的にはどこからか塀を乗り越えて行くしかないでしょう」

「……なら、グラウンド側からは駄目だな。フェンスが高くて上れそうにない。この、東棟の裏の塀から行くのはどうだ？」

一は見取り図上の東棟を指差した。ナコトはその指を退かし、

「東棟に魔女がいた場合、見つかってすぐ豚ですよ」
東棟をトントンと指で叩く。
「豚を押すな。だったらどうするんだよ？　効果の薄いところなんか見つからないし、どこから行こうとしても待ち伏せがあるんだろ？　四方八方塞がれてて手も足も出ねえじゃねえか」
「せめて、陣がどこに設置されているか把握出来ていれば良かったのですが。そうすれば、陣の形を割り出し、弱いポイントを衝けたのに……」
ナコトは溜め息を吐いた。辛そうだった。
「形、か。なあ、魔法の陣ってさ、どんな形があるんだ？」
「……全て挙げることは不可能ですが、陣には五芒星や六芒星が多く用いられますね。しかし、本当に数が多いんです。今回、相手がどんな形の陣を使っているか読む事なんて不可能ですよ」
「じゃあ駄目か。くそう、魔術の素養なんてあっても役に立たないぞ、ホントどうすんだこれ」
一は頭を掻き、フェンスに手を付く。頭の中はぐちゃぐちゃだった。
「仕方ありません。手近な塀を乗り越えて、中から陣を探しましょう」
「探して潰して、入り口を作る、ね」
「……不満ですか？」
「いや、でもさ、ホント俺何も出来ないんだなあって」
「ですが、入り口を作らなければ他の勤務外は入ってこられません。中の人間は殺されるまま、いつまで経っても『館』に好き勝手させたままです。状況を打開する為の扉を作るのは、あたしたちにしか出来ない事なんですよ？」
諭すようなナコトの口調。
「……分かったような事言いやがって」
「まあ、少なくともあなたよりは。で、どうします、どこから侵入しますか？」

「ええ？　そんなのお前が決めろよ」
　中途半端に選択権を委ねられても困る。
「あなた、あたしが選んだ場所から入って、待ち伏せに出遭って殺されたらどうしますか？」
「ふざけんな、死ぬまで文句言って死んでからも恨み言連呼しまくるからな」
「――あたしは言いません。あなたが決めたなら、あたしはそれに従います。それで死んだって、絶対にあなたを恨むような事言ったりしません」
「……なんだよ、それ」
　ナコトは笑って、
「それにあたし、くじ運が悪いですから。生まれてこの方、当たりを引いた事ないんです」
　一にそう言った。
「俺だって言うほどラッキーマンじゃないぞ」
「知ってます。でも、悪運は強そうですから」
「……今度は片目じゃ済まないかもな」
「ええ、でも、あたしがそんな事になりそうなら、あなたはもう一度助けてくれるって、そう信頼してますよ」
　ナコトはまた笑う。
「ちっ、期待はしてないんだろ？」
「当然です」
　一は舌打ちを繰り返し、西棟から侵入することを告げた。

「……勤務外」
　ソファに深く腰掛けている、黒いローブを着た女は呟いた。彼女は『館』の一人、カリュプソと呼ばれる魔女だ。
「ふうん、こっちから、来るの、ね」
　たどたどしい手付きで、テーブルに広げられた北高の見取り図を

なぞって行く。彼女の白く、細い指先は西棟を指していた。フードで隠れた顔からは、辛うじて唇が釣り上がる様だけが見えている。愉しそうな笑みだった。

「それじゃ、まずは、一人、ね」

一は西棟近くの上れそうな塀まで回り、既に足を掛けている最中だった。

「落ちないで下さいね。格好悪いから」

「俺の体の心配をしろ」

下らない掛け合いをしながら、一は塀を上り切る。上り切った瞬間、頭に激痛が走った。転げ落ちそうになる体を必死で食い止め、片手を塀に付き、もう片方は頭にやる。

「一さん？」

「……いってえ、頭いってえよ」

「あたしだって痛いんですから我慢してください。それより、問題ないですか？」

「あー、おう。誰もいない」

尤も、一たちが侵入したのは学校裏口だ。人がいなくて当然とも言えるが、何の音もしない事が一には恐ろしくて堪らない。

アイギスを地面に投げ捨て、部室棟らしき建物の裏に着地すると、一は安堵の溜め息を吐く。何とか、奇襲も待ち伏せも回避出来たらしい。

「全く、神の盾を粗末に扱うとはっ」

ナコトも一の傍に降り立ち、スカートに付いた埃を払った。

「俺の物なんだから良いだろ。それより、どうするんだ？」

「……ふむ、西棟はすぐそこにありますが、グラウンドは遠いですね。目下、陣を破壊してジャージの人を迎え入れるのが目的ではありますが、さて」

「でも、立花さんたちも気になる。出来るなら合流したいんだけど

な」

「それでは、建物内には入らずグラウンドの端っこを進んで、目立たないように正門近くまで陣を探しながら進みましょう」

見取り図を取り出して地面に広げながらナコトは提案する。

「校舎には入らないのか？」

「ええ、囲まれたら怖いですから。外にいればまだ逃げようがあります。あたしたちには魔法が利き辛いから、その気になればフェンスでも塀でも、何でもぶち壊して脱出出来ます」

「……異論ナシ」

そう言われては、校舎に入り辛くなってしまった。

「む、何か音がしませんでしたか？」

「そうか？」

「ええ、グラウンドの方から」

「人間、かな？」

「さあ、どうでしょうね。どの道、あたしたちだけでは『館』に太刀打ち出来ないですから」

ナコトは建物の影に身を隠し、顔を覗かせて周囲を窺う。

「……誰もいないですね。行きましょう」

「おう」

「全く、貴様は役立たずにも程があるな、三森冬」

「……うるせェ、油断しただけだ」

角を曲がったままの三森だったが、一とナコトが彼女を発見して春風に引き渡していた。当の本人は今、学校から離れた場所で煙草に火を点け、機嫌が悪そうに煙を吐き出している。

「あっけなく魔法に引っ掛かるとは。心の弱い証拠だな」

「てめェだって引っ掛かってたンじゃねーのかよ？」

「引っ掛かったのは私ではない。漣だ。尤も、タネさえ分かれば恐れるに足りん魔法だがな」

春風は笑った。彼女を知っていなければ分からない程度の、極僅かな表情の変化ではあったが。
「タネ、だァ？　ンなのあんのかよ」
「ああ、簡単な話だ。何でも、学校に掛かっているこの魔法はモノを隠す事に特化しているらしい。目に見える物から、見えないモノまでな」
「そりゃ便利だな」
「意識下に直接影響を及ぼすらしい。つまり……」
春風は言葉を区切り、視線だけを三森に向ける。
「魔法なぞ効かんと、強く思えば問題ないらしい」
「嘘くせー」
「自己暗示もある種魔法だ。自身に語り掛け、言い聞かせる。例えばボクサーのように『自分は強い』とな」
「心だけ強くてもどーしようもねェよ。そのボクサーが鍛えてなきゃ、パンチは当たらないぜ」
「だが、体だけ強くても勝てないだろうさ。信念なき拳では何も掴めん」
「……漫画の読み過ぎだぜ、情報部」
三森は鼻で笑った。
「……貴様の仲間は、その冗談みたいな策とやらを実行に移している最中だがな」
「仲間じゃねェ。ただの同僚だ。あいつらが成功しようがしまいが、私が突っ込めばしまいだろ」
「ふっ、その身一つでか？」
「問題ねェ、高が魔女。私に勝てるわきゃねーだろ」
口に銜えていた煙草を吐き捨て、三森はそれを踏み潰す。視線は学校。尤も、ここからでは何も分からない。
「とっとと魔女とやらのツラ拝んで、凹ましてやりてェもんだぜ」
まだ見ぬ敵に思いを馳せ、三森は笑った。

「へえ、やるじゃないのさ」
肩で息をする神野を見て、女は笑う。
「……こっから先には通さねえぞ」
神野の足元には三十体分の骨が転がっていた。
「あんた、勤務外だね？」
「それがどうした」
鈍くなりつつある腕に鞭を打ち、竹刀を女に突き付ける。突き付けられた女は、尚も笑みを崩さない。
「だったら、死んでもらうしかないんだけどねぇ」
女は面倒そうに帽子の位置を直し、溜め息を吐いた。
「……始めっからそのつもりだろうが。お前ら、一体何者なんだよ、俺たちが何をしたってんだ」
「あんた、ソレを今までに殺した事あるかい？」
神野は質問に答えない。先に質問したのはこっちなのに、無視されて苛立ちが募った。
「ま、勤務外だからそりゃ勿論あるだろうね。それじゃあさ、あんた、魔女を殺した勤務外を知ってるかい？」
「……魔女？」
「ああ、あたしのお仲間さ。仲間を殺した奴を探してる。他の奴らは皆殺しにするなんて息巻いてるけど、こっちゃ年寄りでね。んな体力ないっつーのに」
「……復讐に来たってのか」
考える。神野は今、いまだかつてないくらいに頭を使っていた。目の前の女の言い分をどこまで信じるべきなのかどうかを。
「ま、復讐っちゃあ復讐だね。仲間殺されて動いてるワケだから」
「……魔女が誰なのか分からないけど、俺はやっちゃいない。こう見えてまだ新人なんでね」
女はじっと神野を見つめる。
「ふぅん、自分可愛さに嘘吐いてるようにゃ見えないねぇ」

「当たり前だ。俺はお前に敬意を払う気はないけど、嘘は言わない」
「こりゃまた、育ちの良い坊っちゃんだね」
くつくつと、女は喉の奥で笑った。
「じゃあ、あんたに用はないね。こっちも忙しい身なんでお暇するよ」
「――ざけんなよっ！」
手を上げ背を向けた女へ、神野は飛び掛かる。女は背中越しに、モップで竹刀を受けとめていた。
「……何のつもりだい？」
「お前に用がなくたって、俺にはあんだよ！」
握る竹刀に力を込め、神野は叫ぶ。
「そっちの目的が復讐なら、こっちだって復讐って目的があるんだっ！」
「……あたしゃまだ一人もやってないんだけどねぇ」
「骨を操ってたのはてめえらだろ！」
「ふーん？　ま、そういう考え方もありだけど――」
女が遂に振り返る。
「――いつか身を滅ぼしちまうよっ」
モップを斜めに下げ、一息に竹刀を振り払った。神野は一旦下がり、再び切っ先を女に向ける。
「今は関係ねえ！　お前ら、くそっ、よくも！　俺たちの友達を何人やりやがった！？」
「知らないよ、大体先に仲間を殺したのはあんたらだろ？」
「やっ、やられたのは一人だろ！　学校のみんなは関係なかった！」
「一人とみんな、かい。はん、命の重さ計って比べるなんて何様のつもりだい？」
「お前が言うかぁっ！」
神野は踏み込み、大上段に竹刀を振り下ろす。が、空を切った。
女はサイドステップで攻撃を避け、手に持ったモップで隙だらけの、神野の脇腹を突く。

「……っ！」
神野の腹にモップの持ち手側、その先端が食い込んだ。
「ほらっ、どうしたんだい？」
女は神野の体勢が崩れたのを確認し、そのまま彼の太股にモップの先を叩きつける。一度、二度、
「ってえなこら！」
三度目が来る前に神野は床に転がった。そのまま起き上がり、竹刀を構え直す。再び大上段から打ち下ろす、振りをして、サイドにステップを踏んだ女に横薙ぎへ竹刀を振った。
「へえ……」
女は竹刀を受けとめたが、神野は力任せに壁際へ押し込んだ。
「今すぐ骨を止めろっ」
「出来、ないね。今更止めても無駄って奴さ」
「良いから止めて失せやがれ！」
竹刀とモップの鍔迫り合い。神野は女の力量に驚いていたが、力ではやはり自分の方が上だと認識した。
「ふふっ」
骨の一本でも折ってやろうかと思った矢先、突如女が噴き出す。
「笑うんじゃねえよ、イカれてんのか！」
「がっついちゃって。あんた、まだまだガキだね」
女の目論みに気付いた瞬間、神野は竹刀を下げた。同時に、手首に鋭い衝撃が走る。女の狙いは、股間への蹴りだった。
「ぐうっ……」
急所への攻撃は防御出来たが、女は次にモップを神野の手首に落とす。神野は得物を離すまいと耐えるが、苦悶が顔に浮かんでいた。そこを見逃すほど女は、魔女は甘くない。自由になったモップの柄を神野の頬へ打ち当てると、肩を押し当て壁際から抜け出す。
「勤務外なんて、所詮こんな物かい」
吐き捨てるような女の言葉が、床に倒れた神野へ突き刺さった。
頬が熱い。神野は冷たい床を感じながら、頬に手を当てる。歯が

折れたかもしれない。口内から血が出たかもしれない。痛い。痛い。
――それがどうした。
疲れていた。心身共に万全の状態じゃなかった。相手が女だと思って油断していた。女の言葉に揺らいでしまっていた。
――だからどうした。
心の底から沸き上がるのは怒り。腑甲斐ない自分への怒り。
体を流れているのは憎しみ。皆を殺した敵への憎しみ。
「俺は、馬鹿だ」
床に手を付いて、中腰のまま転がっていた竹刀を確保。
「……ホント、馬鹿だ」
立ち上がり、ゆっくりと息を吐きだす。
胸中を過るは怪我をした剣道部員。無残に死んだ三人の部員。虫に侵された担任の教師。骸骨共。目の前の魔女。安田。そして何者にも代えがたい妹。
「お前なんかに、負けてらんねえのに」
――仇を。敵を。かたきを！
復讐の為に、私怨のみで動くのは簡単だ。
「……へえ、まだやるってのかい？」
甘美な誘いに身を焦がす。なんて楽しくて、気持ち良さそうだろう。
「復讐なんて、やめだ」
だが、死んだものは何も言わない。何も思わない。自分勝手な復讐心、そんな名前の欺瞞で動けば自分が鈍る。不様に床に這い蹲る。ならば、自分のこの竹刀は、握った剣は生者の為に振るおうと、聖者の如く奮おうと、神野はそう決意した。
「悪いけど、次から本気だ。あんたの事情なんて知らない。だけど、ここで俺が倒れちまったら、また友達が、次は妹が危ない目に遭っちまう」
「傲慢な物言いだね。高が人間、その剣が魔女に届くかい？」
「……甘く見てろ。神野（おれ）の剣、高が魔女一人、届かせてやるさっ！」

神野は踏み込み、女の突きを躱した。だが、すぐには打ち返さない。相手を自身よりも上と捉え、的を散らす。切っ先を上下に揺らしてから、右足で女の下肢を払った。

「なっ……！」

これは女も予想していなかったらしい、思わずモップを手放し受け身の体勢に移る。床に片手を付き、その反動を使って跳ね上がった。

神野は更に踏み込み、無防備な女の喉を狙って突きを繰り出す。だが竹刀は女の片腕に阻まれた。舌打ちし、神野は竹刀を一度引く。相手の得物はこちらの足元にあるからだ。

「魔法でも使ってみるか？」

「そうさせてもらおうかね」

女は床に両手を付き、何事か呟く。

「――骨か！」

しくじったと思うより先、光が神野を通り過ぎた。先刻の光景、骨の復活を思い出してしまい、彼は光を目で追う。

神野が振り返った瞬間、女は転がっているモップ目掛けて走りだしていた。

「なあっ！？」

竹刀を振り下ろすが間に合わない。神野の攻撃は女の三角帽を剥ぎ取るだけに終わる。得物まで奪われ、その上、位置を入れ替えられてしまった。

女は飄々とした様子でモップと、露わになった自らの金髪を弄くっている。

「安心しなー、骨（こいつら）はもう復活しないからさ」

「し、信じられるか！」

「年長者には素直に従いなよ。それよりさ、帽子返してくんない？」

女の視線は、神野が何気なく拾った黒い三角帽に注がれている。

神野も帽子に目を遣った。ただの三角帽にしか見えない。しかし、もしこれが何らかの力の源だとすれば。そう思い、渡すのを躊躇っ

てしまう。
「……んー？　もしかして、その帽子が魔力を持ってるとか思ってるんじゃないかい」
「ちっ、違うのかよ？」
考えていた事を言い当てられ、神野の声は震えた。
「ひゃひゃひゃ、違うっつーの。そりゃそこらで売ってるただの帽子さね」
「……だったら、要らないんじゃないか」
「駄目だよ。可愛い弟子からもらったプレゼントだからね。『師匠、これで魔女っぽく見えますよ』なーんて言いやがった可愛い可愛いわたしの弟子さ」
「……分かった」
神野は帽子を竹刀の先に引っ掛け、そろそろと女へ近付いていく。
「わたしゃ獣かい」
突っ込みが来た事に驚きつつ、帽子を渡した。
「ん」
女は帽子を被り微調整を加え始める。神野はその様子を黙って見ていた。
「ふうん、礼儀がなってるのかなってないのか……」
女はにやりと笑う。
「待たせたね、きな」
その台詞を言い終わった直後、神野は竹刀を振り下ろした。女はそれを受け止め切り返す。
「おおおっ」
今度はさっきよりも早く竹刀を振るった。受け止められた瞬間、竹刀を引いて次の一撃を見舞う。また止められるも、もう一度引き、打つ。
「くっ……」
女の顔には焦りの色が浮かんでいた。打つ、止められる、引く。打たれる、止める、引かれる。間断無く繰り返される神野の鋭く、

素早い乱打。女は凌ぐので精一杯。
かのように見えた。が、女は太刀を受け止めて、神野が引く時を見計らい思い切りモップを跳ね上げる。竹刀が高く浮いたところに、体を捻りモップを横合いに振り抜いた。
当たる。女はそう確信する。
「っと」
引き際を狙われた神野だが、両手で握っていた竹刀を離して手を前に出した。反動が付き、体は反っていたが横薙ぎのモップの柄を掴む事に成功する。女は奪われまいと引っ張るも、神野は離そうとしなかった。
「離しなっ」
「離すかっ」
引き合う両者。
「――そうかい」
均衡状態はすぐに破られる。女がモップから手を離したのだ。急に手を離され、神野はたたらを踏んで後退する。
女は神野の腹を踏み抜き、彼が放った竹刀を拾い上げた。
「竹刀の振り方、知ってんのか？」
「……あんた、モップの使い方分かるのかい？」
「先輩に教えてもらった。床はしっかり磨いて、ってな」
神野は不敵に笑う。つられて女も笑った。
「やるじゃないのさ、人間」
「あんた、魔女の割に泥臭いな。もっとこう、魔法？　使うと思ってた」
「生憎、あんたにゃ勿体なくてね。使っても良いんだけど次の日は腰が痛くなるんだよ」
「……そうかよ」
女は竹刀を下ろし、帽子を被り直す。
「あー、なんだろうね。笑ったら興が冷めちまった」
神野に向かって竹刀を放り投げると、女は窓を開けた。冷たい風

が廊下を満たしていく。
「……飛び降りでもする気か？」
竹刀を受け取り、神野は女に軽口を叩いてみた。
「ああ、厄介なのが来てるからね」
「厄介？」
「そうさ。じゃあね、また会うかも」
女は神野に手を振り、身を乗り出して窓から飛び降りた。
「おいっ！」
神野は慌てて駆け寄る。潰れた女の、凄惨な死体を想像したが、彼女の姿はどこにもなかった。
「……って、何で心配してんだ……」
敵を気遣った自分に自己嫌悪。
息を吐き、しばらくの間壁に背中を預けて呼吸を整えていると、階段の方から足音が聞こえてきた。咄嗟に身構え、廊下の角を睨み付けていると、
「あ、けん君だー」
半泣きの立花が現れる。
「……なんで泣いてんだよ」
力が抜け、神野は背中を壁に擦り付けながら再びへたり込んだ。

グラウンドには数十人分の死体が転がされていた。
部室棟の影に隠れながらそこに辿り着いた一たちは暫し、立ち尽くす。立ち竦む。
一は本当に、全く動けなかったが、ナコトに無理矢理背中を押されグラウンドの隅、体育倉庫の裏に移動させられた。後ろにはフェンスがあり、倉庫との間には僅かな空間しかない。
「……気にしたら駄目です」
グラウンドに到着してからの、ナコトの第一声はこうである。
「アレ、なんだよ？」

一は俯き、フェンスに背を預けてどうにか立っている状態だった。
「アレとは？　校庭を闊歩している、剣を持った骸骨の事ですか？　息絶え、それでも尚剣を突き立てられているこの学校の生徒の死体の事ですか？」
ナコトの冷酷な物言いに腹が立ち、一は彼女に掴み掛かる。
「なんで、そんな冷静なんだよ……」
「では、戦いに行きますか？」
「……それは」
「こちらは二人、相手は十体。ルーキーとオールドガールが適うとでも？」
ナコトは胸倉を掴まれたまま、一を見据えた。
「激情に駆られ飛び出すのも結構、恐怖に押し潰され縮こまるのも構いません。でも、無謀な行為は自分一人だけの場合にお願いします。今はあたしだっています。あなたの巻き添えを食うのはごめんですからね」
「……悪い」
一はナコトから手を離し、地面に座り込んだ。
「構いません。あなたのリアクションは予想の範囲内です」
「ひでぇ、ひどすぎるだろ、あんなの……」
グラウンドの土は血の色に染まり、生徒の屍で埋め尽くされ、人間たちを踏み倒し我が物顔で歩く骸骨。
「くそっ、くそっ」
風が吹き抜けるたび、生臭い血の香が一たちへと運ばれていく。
「あたしだって、あなたと同じ気持ちです。恐いし、憎い。でも、目的を忘れないでください。陣を壊し、ジャージの方を呼んで魔女を倒す。これが最終なんです。違いますか？」
一は黙ったまま首を振る。
「……無念、でしょうね。あの人たちは日常を謳歌していた。でも、奪われた。準備も、覚悟も、何もなしに。何も成さないままに」
ナコトは一の傍に腰を下ろし、

「厳しい事を言いますが、この惨状はある意味あなたが引き起こしたんです。勤務外の誰もに責任があるんです」
本心から思ってもいない事を口にした。
「……あなたは生きて、責任を取らなくてはなりません。今日、『館』に殺された人たちに償う為、終わらさないといけません」
我ながら、なんて的外れで残酷なんだろうと、ナコトは思った。
欺瞞だ。大儀めいた、名文めいたモノを振りかざす。それでも、それでもナコトは。
「だから、今はあんなの忘れてください。あなたが生き残る事を第一に行動して、他の全ては見捨ててください」
一は俯いたままナコトの話を聞いていたが、
「気が動転してたらしい……」
立ち上がり、アイギスを握り締める。
「お前に諭されるとは。何だか、普通に馬鹿にされた時より馬鹿にされた気分だ」
「それはどうも」
「うん、ありがとう。でも心配すんな、ここの生徒ならいざ知らず、お前を見捨てるような真似は死んだらしねえよ」
「……死んでも、の間違いだと祈りますね」
ナコトは胸元の皺を直して一に手を差し出した。
「それでは、陣を探しに行きましょうか」
「ああ」
一は差し伸べられたその手を掴もうとして、
「あっ」
突き飛ばされる。尻餅を突き、何がなんだか分からない前後不覚の状態に陥ってしまった。
「おいこら黄衣てめえっ」
ナコトは凄まじい勢いでグラウンドを駆け出している。そりゃもう、脱兎の如く。
「……？」

不穏な気配に振り向けば、一のすぐ後ろに骸骨がいた。相手に眼球はないが、思い切り目が合う。視線と視線らしきモノが交錯。

「ぶっ殺してやる！」

対象はナコト。一はそう叫んで彼女の後を追った。そりゃもう、脱兎の如く。

最終鬼畜一部骨

黄衣ナコトは見てしまった。情けないパートナーを叱咤し、可哀想だから立ち上がるのを助けてやろうかなと思って手を差し伸べた時、そのパートナーの背後に忍び寄るソレの姿を。

「あっ」

骸骨だ。グラウンドでやりたい放題やっていたソレだ。

まずい殺される。そう思い、元フリーランスの本能が働く。せめて自分はと咄嗟に判断し、彼を生贄にして逃げようとソレに向かって突き飛ばした。

振り返らず、脇目も振らず全力疾走。グラウンドに存在する多数のソレに姿を晒す事になってしまうが気にしていられない。さっきの西棟の塀まで走り込み、脱出しよう。

「……そう、思っていたんですけどね」

「何言ってんだ人殺し」

一たちは今、体育倉庫の屋根の上にいる。

「誰が人殺しですか」

「お前だお前っ、俺を囮に逃げようとしやがって！」

「嫌だなあ、あたしはちゃんと助けようとしてましたよ」

「めちゃめちゃ走ってたじゃんお前」

結局、一はナコトを捕まえる事に成功した。確かに彼女の逃げ足は舌を巻くスピードではあったが、一が自分で思っていたよりも自身の全力疾走は早かったらしい。

だが、追い付いて襟を掴んだところでナコトは転倒。一も巻き込まれる様にすっ転び、仲良く地べたに顔を擦り付けていた。そこをソレに襲われ、グラウンドでの二対十の逃走劇の末、彼らはフェンスを上り体育倉庫の屋根に逃げ込んだ。

「まあまあ、何はともあれ一先ずは安全、でしょうか」
「俺の命をまあまあの一言で済ますお前が怖い」
一は何気なく、倉庫の屋根から顔を覗かせる。骸骨が十体近くうろうろしていた。倉庫はそこそこに大きな建物で、骸骨たちが手を伸ばしても屋根には手が届かない。が、倉庫はすっかり、しっかり囲まれている。
「……どうすんだよ、下りられないぞ」
「ここに逃げ込んだのはあなたでしょう。それくらい考えて下さい」
一とナコトからは戦闘への意欲が完全に萎え、失せていた。
「そんな事言ったって。お前見ろよアレ、剣持ってるぞ剣」
「刺されたら死にますね。刃毀れも酷いですし、掠っただけでも致命傷になりそうです」
「動きも早かったな。俺、ゾンビが走る映画はもう見たくない」
「アレはゾンビではなく、スパルトイだと思いますけどね」
「スパルトイ？」
鸚鵡返し。
「ええ、ご存知ありませんか。まあそうでしょうけど。スパルトイとは、ギリシャ神話に登場する戦士の事です」
「へえ、ギリシャの」
一はアイギスに視線を落とす。何となく、感慨深い。
「ドラゴンの歯を大地に蒔き、そこから現れる者たちです。彼らは生まれながらに剣を装備し、恐れを知らず敵に立ち向かう屈強な戦士、らしいですね」
「ふーん、でも骨じゃん。脆そう」
「まあ、姿形には諸説ありますが。彼らが骸骨の姿をしているのはとある映画が元ネタじゃないでしょうか。そう考えると、スパルトイは出自こそギリシャ神話であれ、認識され出したのは比較的現代のソレだと言えますね」
ナコトはしたり顔で語るが、一には正直どうでも良かった。
「説明は良いけどさ、ついでにこっからどうするかも教えてくんな

いかな。このままじゃ餓死するまで屋根にいなきゃなんないぞ」
「ご安心を。幾つか方法はありますよ」
「……言ってみろ」
一は不安を覚える。何か、嫌な予感が、と言うかもはやそれしかしない。
「まず、あなたが屋根から飛び降ります」
「ほう」
「あなたが骨たちの気を引いている間にあたしが脱出。その後あたしはつくも図書館に戻って読みかけの少女マンガに目を通しながら、先輩の淹れてくれる紅茶と焼き立てのクッキーに舌鼓を打つのです」
「せめて助けは呼んでくれ」
ナコトは傍の一を無視して、指を二本立てた。
「次に、あなたが屋根から飛び降ります」
「ほう」
「あなたが骨たちに見つかって逃げ回っている内にあたしは逃走。その後、あたしは今日発売の単行本を購入して近くの喫茶店で優雅に読了、部屋に戻ってその本へもう一度目を通してから眠るのです」
「なあ、そのパターンはもう良いんだけど」
ナコトは指を三本立てる。
「では、あなたが屋根から飛び降ります」
「……俺が屋根から飛び降りる以外の選択肢はないのかよ」
「ありません。古今東西、男と言うのは女の為に身を滅ぼすモノですから。あなたが犠牲になるのはそっちの方がドラマティックだし免れません」
「って言うか戦えるだろお前！」
一はナコトのセーラー服に巻かれた鎖を指差した。
「フリーランスを辞めたあたしにソレと戦えと？」
「嫌だ！　俺はここで餓死するのも骸骨なんかに殺されるのも嫌だからな！　お前、それ飾りじゃないだろっ」
「まあ、一応。ですが、動いている物を狙って投擲するのは難しい

んですよ」
「カトブレパスの時はどうなんだよ？」
ナコトは目を瞑る。
「相手が全くと言って良いほど動きませんでしたし、そもそも『図書館』でのあたしの役割は、オキナが凍らせた相手を砕くだけでしたからね。あんな動きの早いの、しかも十体なんて不可能に近いですよ。八方塞がりですね、あっはっは」
「笑うな馬鹿！　……じゃあ、何か、動かない相手だったらどうなんだよ？」
「んー、動かない相手なら何人いようが問題ありませんけどね。この鎖で叩いて砕いてひき潰すのをご覧に入れましょう」
「分かった」
頷いてから、一は屋根から飛び降りた。
「えっ？」
高さは二メートル程度だったので、着地には困らない。足が痛んだが、一は無事に地面に降り立つ。
グラウンド側に降り立った一を見て、骸骨たちの視線が一斉に彼に集まった。ぞろぞろと、雁首を並べて骨がひしめき合う。
「ちょっ、一さん！？」
今にも泣き出しそうなナコトの声。一はそれを聞き流し、骸骨たちに向けて持っていたビニール傘を広げた。
「……スパルトイ、だったな」
骸骨の名前を思い出し、呟く。思考をクリアに、視界はクリア。声もクリアで条件もクリア。動かない相手ならナコトは出来ると、叩けると言った。なら、動かなくすれば良いだけだ。
ソレ共は我先にと走り出す。眼前の獲物を前に自身を抑える者など誰もいなかった。一目散に一へと向かい、彼の掲げた傘の意味（アイギス）など分からぬまま、そこから漏れる鈍く輝く光に照らされる。
「ああっ、もう！」
骸骨剣士、スパルトイの動きが止まった。一の視界上に存在する

十体全ての時間が止まる。
　そこへ、ナコトの鎖が突き刺さった。屋根の上からではあったが、針の穴をも通すような正確な攻撃。骨たちの頭蓋骨を鎖の先に付いた分銅で叩き、砕き、すり潰していく。時間にして五秒にも満たない間に、彼女は全てのソレを宣言通りにやってのけた。
　一は傘を畳み、屋根の上でへたり込むナコトに視線を向ける。
「流石、伊達にフリーランスは名乗っていなかったな」
「……あ、あなた、本当に頭悪いですね」
　ナコトは呆れた顔を隠さずに屋根から飛び降りた。
「なあ、そもそもさ、俺が行かなくても、お前が今みたいに一体ずつ潰してけば良かったんじゃないのか？」
「ええ、その通りです。でもあたしは、ギリギリまであなたの慌てふためくサマを見物したかったんです」
「はあ？　じゃ飛び降り損力の使い損じゃねえか」
「……そもそも、そもそもですよ。ここは『館』のフィールドです。カリュプソが自分たち以外の異能、例えば勤務外の能力、更に言えばあなたの力を隠しているかもしれないって、そうは思わなかったんですか？」
　一の顔から血の気が失せていく。
「な、何でもっと先に言わないんだよ！」
「あなたがそれより早く飛び降りたからでしょう！　全く、自殺志願も良いところです」
「ま、まあ、助かったから結果オーライって感じだな」
　ナコトは一をずっと睨んでいたが、
「これだから楽天家は」
　そう言って視線を反らした。
「とりあえず、陣でも探してみるか？」
「言われずとも。さ、行きますよ」
　まだ機嫌の悪いナコトに率いられ、一は頭を掻きながら彼女の後ろを歩き出す。

結果から言えば、神野剣の妹である神野姫は無事だった。

「……」

合流した神野と立花はお互いの身に起こった事を簡単に確認して、先に安田の入っていった図書室に進入。奥にある、伝奇小説の立ち並ぶ書架に挟まれる形で、神野姫と安田の両名に合流。合計四人となった彼らは図書室のテーブルに着き、今後について簡単に話し合っている。

の、だが。立花の視線は神野の妹、姫に注がれていた。

姫は兄である神野と再会してからずっと、ずっと彼に抱きついたまま離れない。いまだに嬉し涙の様な物を流している。

「立花さん、目が怖いんだけど」

隣の席の安田が何事か喋ったが、立花の耳には入らない。

「立花、それでお前が見たってサソリはどこにいるんだ？」

「……」

「立花、おい」

「……」

「立花ってば！」

「え？」

神野の声でようやく我に返る。

「えっと、ごめん、なんて？」

「……サソリはどうしたって聞いたんだよ」

「あ、えと、その、サソリからはボク、逃げてきちゃったから」

「そんなにやばかったのか？」

立花は俯いた。

「えーと、あの、あのね、やばいっていうか、その、怖かった、から」

「まあ、お前も女だもんな」

「それ、どーいう意味？」

神野は安心したように微笑む。
「とにかく、一度体育館に戻ろうか」
「ああ、もう三十分経っちまってる。部員も心配だ」
安田は立ち上がり、テーブルに置いた竹刀を掴んだ。
「ボクもついてくよ」
「よし、それじゃ図書室を抜けるぞ」
立花に向かって頷き、神野は立ち上がろうとするが、姫は動かない。
「おい、姫」
姫は何も言わず、首を横に振る。
「……怖いのは分かるけど、ここにいたら危ないぞ」
「ち、違うの、違うの兄さん」
涙声で訴える姫。
「ここを出たら危ないよ、きっと殺されちゃう……」
「大丈夫、大丈夫だって。心配すんな、お前は俺が守る。だから、行こう、な？」
姫はぐずっていたが、神野が粘り強く説得し、体育館への移動を承諾する。
神野と安田、それに立花と姫を加えた四人は図書室を抜け、東棟四階から一階、次に中庭を抜けて体育館へ行くルートを選んだ。
「後ろは任せたぜ」
「任せて、けん君」
立花を殿に、神野が前方、間に安田と姫を守るようにしながら四人は階段を下っていく。
より注意深く、より慎重に。立花が加わった分戦力は上がったが、姫は完全に戦力外。守らなければならない。ソレとの余計な遭遇も戦闘も、尚且つ、
「……こっちだ」
余計な物も、姫には見せたくはない。時には予定外のルートを進み、神野は姫から非日常を遠ざけた。

「あったぞ」
　一たちはグラウンドを正門方面へ抜けて体育館の前まで来ていた。ソレの姿が見えない事もあって、付近で陣の捜索を開始してから五分。
「本当ですか？」
　遂に、捜し求めていた陣らしきモノを発見する。
「ああ、ほら。ラクガキにしか見えないけど」
　一が指差した先、茂みの中の地面で隠す様に幾何学模様が彫られていた。傍には図形を描く際に使ったであろう木の枝も転がっている。
「成る程、当たりですね」
　ナコトは陣を見つけるやいなや、足でぐちゃぐちゃに踏み消した。
「……まずは一つですか」
「ん、それなんだ？」
　達成感を感じるより先、一はナコトの拾い上げた物が気になる。
「ああ、これは恐らくトネリコの枝でしょうね。魔法使いが陣を描く時に良く使うんです」
「とね、りこ？　木の名前か？」
「トネリコも知らないんですか？　聞いて呆れますね」
「うるせえな、俺は植物には興味ないんだよ」
「まあ、植物もあなたには興味ないでしょうけど。それより、あなたは植物を見習ったらどうです。二酸化炭素吐いてるだけで地球に申し訳が立たないとか、思わないんですか？」
　一は無視して、その辺に茂る木の枝から葉っぱをもぎ取った。
「これで、正門周辺の陣の効き目が鈍くなったはずです。一旦正門から外に出て、ここまでヘビースモーカーの方を連れて来ましょう」
「ああ、分かった。けど、その前にさ、一度確かめてみないか？」
「何をです？」

「生きてる奴がいるかもしれないだろ。だったら、連れ出してやろうぜ」

何はともあれ、まともな出口が作れたのだ。学校内の人間だけではその存在に気付かないだろうが、今は自分たちがいる。逃がしてやる事が出来る。

「……出来ません」

返って来たのは残酷な答え。

「何で、だよ。ここの人を助けるのだって俺たちの目的じゃないのか？」

「それは勤務外の目的でしょう。あたしの目的は違います」

「……そういやまだ聞いてなかったっけな」

こうして自分に付いてきて助けてくれる。それだけで一には文句なかった。が、腑に落ちないとも思ってはいた。

「じゃあ言ってみろよ」

「それは出来ません。ですが、あたしの目的を達成する事は、引いてはあなたの為にもなるんです。その為には『館』を倒すのが先決です」

「そりゃ、『館』は倒さなきゃなんないけど。それでもここまで来て見捨てるってのは……」

「……一度学校を出ると言っても、赤い方を連れてくるだけでしょう。残された人を助けるには『館』を倒すのが手っ取り早い筈です」

ナコトの言い分は尤もだ。一は本心から納得する。反論の余地などどこにもない。

「……分かった。三森さんを連れてこよう」

「結構、では行きましょう。あっ、後ろには気を付けてくださいね、豚になるかも」

「もう良いって」

ナコトは恐る恐る足を運び、正門を抜ける。魔法の効果はもともと一たち二人には通じ辛いが、

「……ふむ、問題ありませんね」
どうやら、本当に陣を潰すだけで効果は覿面らしかった。

「あー？　なンで私が手を引かれなきゃならねーんだよ」
一たちが戻ってきた事に三森はとりあえず安心した。だが、彼らの提案を呑む気はさらさらない。幾ら魔法のせいで学校を意識から隠されるとはいえ、その上一人では学校まで行けないからとはいえ。
「いや、そうしないと三森さん学校まで辿り着けないでしょ」
「嫌だからな、ガキじゃねェんだ。ンなみっともねー事出来るか」
三森は断固として受け入れない。
「……ではどうするのだ三森冬。貴様はここで乾いたままいるのか？」
「ンなつもりねェ！　だけどな、情けない姿晒すくらいなら……」
一からも春風からも視線を反らし、三森は頑として首を縦に振りそうにない。
そんな切羽詰まった状況下で笑みを浮かべる者が一人。
「手を引かれるのは嫌、ですか。成る程。しかしですね、あなたを連れていかなければ話になりません」
黄衣ナコト。彼女だけが笑っていた。
「それがどうしたよ」
「では、一さんにおんぶしてもらうのはどうでしょうか？」
「なっ！？」
「不服ですか。では肩車は？　抱っこは？」
一は自分の意見を無視されながら思った。肩車は面白そうだと。
「おっ、お姫さま抱っこなんて無理に決まってンだろ！」
「お姫さま抱っこなんて指定してませんが、あなただって勤務外でしょう。手段を選んでいる場合ですか」
「……てめェ、いっちょまえな口利くンじゃねーぞ。フリーランス崩れが誰に意見してやがる」

耳から伝わる静かな殺意。三森の声には確かな怒気が孕まれている。

「あたしをどうするかは勝手です。どうぞお好きに。ですが目的だけは違えないでくださいよ」

剥き出しの殺意を浴びせ掛けられて尚、ナコトは口調を改めない。

「……目的だァ？」

「ええ、あたしが愚かでなければあなたとあたしの『目的』は一致している筈です。腹が立つくらいに同じでしょう。そして、あたしは愚かではありません」

ナコトは一を一瞥し、三森に視線を向ける。

三森は一とナコトを交互に睨んだあと、

「……ちっ、分かってるっつーの」

罰が悪そうに頭を掻いた。

一は二人のやり取りを訳が分からないまま見つめている。

「あー、あの三森さん、とりあえずありがとうございます」

「……っ」

三森はキッと一を睨んだ。

「勘違いすンなよ！　私は勤務外だから行くんだからな！」

「は、はあ……。分かってますけど」

本当、分からない。

結局、三森はナコトが手を引っ張っていく事で納得した。

「うわ、骨が転がってンじゃねェか」

学校内に侵入した三森の視線が、砕けた骸骨に注がれる。

「あー、俺たちが来る前からあったんですよ。神野君か立花さんがやってくれたんじゃないでしょうか」

「そ、そうか」

三森は額を押さえる。心なし、辛そうだった。

「？　三森さん、どうかしましたか？」

「いや、何か気分わりぃ。……なあ、私たちって何しに来たンだっけ」
「魔法の影響でしょうか、少々記憶に混乱が生じているのかもしれません」
「あー」
一はナコトの言葉を受け、
「俺たちはここにいる『館』の魔女を倒しに来たんですよ」
もう一度、三森に説明をしてみる。
「ん、あー、そうだったそうだった」
それでも三森はまだ混乱しているようであった。
三森の記憶が、混乱、混濁、混雑している。一がそう認識した途端、彼の中に生来眠っている悪戯心がムクムクと鎌首をもたげ始めた。
「……それと、三森さんは俺に一万円借りてるんです」
「あ、そうだったっけ？　今度返すわ」
「ええ」
ついでだから、色々吹き込んでみよう。一は至極当然だと言わんばかりに、自分が有利になる嘘を吐いていく。
「あと、三森さんは週五のシフトでした」
「……あー、そういえばそうだった気がする」
「それと、三森さんは俺に借りがあります。そう、返しきれないほどに」
ここぞとばかり。まあ、あとで笑って誤魔化してパンチの一発でも食らえば良いと一は割り切っていた。
「おう、分かってる」
「……はい？」
だが、三森は気持ち良く言い切る。それこそ、嘘を吐いた張本人の一が拍子抜けするくらいに。
「おら、行くぞ」
「あ、はい……。なあ黄衣、どうするよ？」

「……何故あたしに聞くんですか？」
「に、睨むなよ。お前の方が的確だろ」
ナコトに睨まれると、一の体は知らず強ばる。
「まあ、あなたよりはあたしの方が優れていますからね。ではとりあえず――」
そう言ってナコトが人差し指を立てた時、
「――勤務外には死んでもらうわ」
グラウンド側から黒いローブを身に纏った、魔女が現れた。
一たちが魔女と出会ったその頃、神野たちは中庭に辿り着いていた。
北駒台高校の東棟と西棟の塀に囲まれた、洋式の小さな空間。中庭の一面には赤い煉瓦が敷き詰められ、中央には同じく赤い煉瓦で縁取られた噴水。庭の周囲には花壇が多数置かれている。昼休みには生徒がここで昼食を取る、北高で一番人気のあるスポット、だった。
「良かった……」
小さな声で姫は呟く。彼女に袖を握られている神野だけに聞こえた儚い囁き。
「そうだな」
神野は姫の頭に手を置き、くしゃくしゃと撫でてやった。
ここだけは、何も変わらない。昨日と同じ空間。骨の一欠けらだって、血の一滴だって、ここには何も置いていない。いつもと同じく、彼らの日常を象徴している。
「……行こう、そこを抜けたら西棟だ」
神野が指差したドア。そこを潜ると西棟に着き、あとは体育館へ一直線だ。三人は頷き、ドアへと向かって警戒しながら歩いていく。

一番最初に神野が抜け、次に姫、安田が続き、最後に立花が抜けた時、

――ぎちぎちぎちぎち。

日常の象徴が砕けた。

「中に入って！」

立花はドア近くに立っていた安田と位置を入れ替え、前にいた彼の背中を突き飛ばし、乱暴な音と共に足でドアを閉める。三人が建物内に入ったのを確認し、刀を構え、ソレに向かって駆けた。

「立花っ！？」

「先に行ってて！　あいつが来たっ！」

噴水が壊れ、花壇は薙ぎ倒され、中庭に敷き詰められた煉瓦が飛び散った。

「――サソリだっ！」

神野は叫ぶ。西棟の窓から見えたその姿、赤と青を混ぜても尚紫にはならない。中途半端なカラーに身をやつした狂おしいくらいに巨大な体躯。鋏と毒針の付いた尾を振るい、尾部を上げて中庭を行進する一匹のサソリ。

「なんだよありゃ！？」

「くっ、俺も行く！」

高さだけでも、サソリの体は一メートルを楽に越している。幾ら立花でも苦しい相手かも、しれない。助けに行く。そう思ってドアに手を掛けた神野の学ランの裾を、姫が引っ張った。

「姫、離してくれ」

「だ、だめ……」

姫は俯いたまま、祈るような体勢で力を込め続ける。

「兄さん、行かないで」

「あいつ一人じゃ危ない」

弱く、小さく、脆く。姫の力は全く障害にならない。苦にならな

い。それでも、神野はその手を振り解けなかった。
「そんなの知らないっ、私は、私は兄さんが……」
駄々をこねる姫を神野は初めて目にする。生まれてこの方、わがままも言わず、大人しかった妹。
「お前を守る為なんだ。大丈夫、危なくなったら逃げるから」
神野は気付かれない様、安田に視線を送る。
「……気を付けろよ」
安田に頷いてみせ、神野は姫の手をそっと握った。
「姫、ここで待ってろ。兄ちゃんが守ってやる」
「兄さんっ」
姫の手を振り解き、神野はドアを開ける。追いすがる姫を安田が押さえ、ドアに鍵を閉めた。

サソリの姿をしたソレ。ソレの攻撃は早くなかった。狙いも正確ではなかった。が、重い。ソレの鋏は立花を捕らえられずに空を切るが、その度に中庭を破壊していく。既に噴水は元の外観を留めておらず、水道管のパイプが剥き出しになり、中庭を濡らし続けていた。
「立花っ」
「けん君!?」
立花は駆け寄る神野に振り向き、背中越しにソレの鋏を刀で受け止め、弾き返す。
「危ないよ!」
「心配すんな、それよりこいつ強いのか?」
振り下ろされる二つの鋏、神野と立花はそれぞれ左右に分かれて回避し、ソレが引き戻すところを狙って懐に潜り込んだ。
「動きは遅いよ!」
「だなっ」
二人は息を合わせて左右から刀と竹刀で攻撃を試みるも、堅い殻

に覆われたサソリにダメージは与えられない。
「通らないかっ」
舌打ちして、神野はソレから距離を取る。
「だったらこれだ！」
立花は飛び上がり、ソレの背中に着地。刀の向きを回転させて外皮に突き立てた。しかし、切っ先はソレの殻を貫けない。高く乾いた音を引き起こし、彼女の刃は弾き返される。
「後ろ！」
「くっ……」
ソレの尾が立花を狙っていた。立花は攻撃を諦め、ソレの体から飛び降りる。着地の隙に鋏が彼女を狙ったが、その鋏を神野が防いだ。二人は噴水を盾にしながら後退していく。
「……立花、どうする？」
「どうしよう……」
刀は通らない。竹刀も通らない。外の殻をどうにかしない限りダメージは通らない。加えて二つの鋏と尾が一つ。連係こそ取れていない攻撃だったが、それ故に不規則で、ソレの攻撃の軌道とタイミングが掴み辛い。
「どうしよう、分からない。ボクには分からない。けど……」
立花の瞳には未だ光が灯されている。生きる事を諦めず、戦いに勝つ事を見据えた目。
「やるしかないよ、けん君」
「……ああ、分かってる」
彼女の覚悟に気圧され、神野は頷いた。
――そうだ、こんなところで諦められるか。
恐怖は他者に伝染するが、時には勇気も他者に伝染する。覚悟を握った神野の手は、恐怖心を焼き尽くすほどに、酷く熱い。

一は恐怖した。ナコトは戦慄した。黒いローブを身に纏い、身にはどこまでも昏い殺意を纏わせた女に。

「『館』のキルケよ、はじめまして勤務外」

キルケの口調は穏やかだった。街中で知人に交わすそれその物の穏やかな挨拶。それでも、一たちは声を出せないでいる。

「よう、てめェが魔女か。はじめまして、そンでもってさよーならだ」

三森を除いて。

彼女は一たちより前に出て、和やかに挨拶を返す。

「あははっ、好戦的ね。鳴かせ甲斐があるわ」

「言ってろ。鳴くのはどっちか試してやンぜ」

指から炎を灯し、三森は獰猛な笑みを作ってみせた。

「み、三森さん……」

「下がってろ。まともに動けねーなら邪魔にしかなンねェ」

情けないとは思ったが、一はナコトと顔を見合わせて少しの距離を取る。

「へっ、精々巻き込まれンなよ」

笑い、三森はキルケへと歩を進めた。

キルケは動かず、三森の前進を待つ。

「……あの人、パイロキネシスを使えるんですか？」

「パイロットが何だって？」

「発火能力の事です。火を自由に発生させ、意のままに操る。超心理学における、早い話が超能力ですよ。誰もパイロットなんて言ってません、空までぶっとべ馬鹿」

ナコトの憎まれ口もどこか固い。

「無知で悪かったな。でも、そうか。三森さんの力はそう呼ぶのか？」

「無知は悪くありません。悪いのは無恥です。知らない事はきちんと恥だと思ってください」
「……うるさいな。で、どうなんだよ？」
縮まる三森とキルケの距離を眺めながら、ナコトは溜め息混じりに口を開いた。
「一般的には。ですが、あの人の火は変わっている、ような……」
「変わってる？」
「上手く説明できません。ごめんなさい。でも、あたしよりあなたの方が彼女の力を見てきた筈でしょう？　何か、変わった点とかは」
一は三森の後ろ姿を見つめながら、ぼんやりと想う。夢にまで見た、あの輝きを。
「あの人の火は強いんですか？　消えないんですか？　……何か、違う気がするんです」
「……俺には分からない。強いのかも、違っているのかも分かりたくない」
真っ赤な、火。
「でも、きれいなんだ」
あの炎は、一の一番深い場所に、今でもまだ燻り続けている。

三森とキルケの戦闘が始まった。
お互い、足を大きく踏み出せば相手に届く距離。先手は三森、左の拳でキルケの顔面を狙う。
「狂暴ね」
「黙ってろっ」
キルケは頭を低くして、地面に手を付き攻撃を躱した。だが、余りにも無防備な体勢。三森は迷う事無くキルケのこめかみに蹴りを放つ。爪先が食い込む感触。魔女は衝撃で宙を舞い、地面に転がった。
「……おい、おいおいおい」

三森は頭を掻いて、ポケットから煙草を取り出し、口に銜えて火を点ける。
「魔女ってのは意外とフツーなンだな。おらどうした、魔法でも何でも使ってみろや」
「ふ、ふふ……」
伏しながらにして、キルケは哂った。その様子が異常に感じられ、三森の眉がつり上がる。
「……痛い。痛いわ」
蹴られた箇所を手で押さえながら、キルケはよろよろと立ち上がり始めた。
「蹴られたら、痛い。痛いのね。あ、はは……」
「ああ？　冗談はやめろよ、頭おかしくなっちまったか？」
「蹴られて痛いなら、死んだらもっと痛いのよね。は、あははっ、切り裂かれたら、腹を裂かれたらもっと痛いのかしら？　ねえ、どうなのかしら？」
腹部に手を当て、キルケは三森を見据える。
「これで、マナの受けた痛みを少しでも知る事が出来たのかしら……。ねえ、答えなさいよ、勤務外」
とびっきりの狂気を向けられ、三森は愉しそうに口元を歪ませた。
「……はっ、そういう事かよフリーランス」
「あなたがマナを殺したのかどうかはどうでも良い。勤務外である以上、あなたの死は絶対よ。豚の様に泣き喚きなさいな」
「やってみやがれ」
三森が向かってきたのを確認し、キルケは地面に手を付く。その手から淡い光が漏れ、周囲一帯に広がっていった。
「それがどうしたっ」
「気張りなさい、勤務外」
光が霧消しキルケの姿が掻き消える。三森の拳は空振り、消えていく光の中からは乾いた物が擦れ、ひしめき合う音。
「あァ？」

現れたのは数体の骸骨。骨のソレ。皆、古びた西洋の剣を手に持ち、眼球の失われた双眸で三森に視線をくれている。

「……おもしれェ」

呟き、三森は振りかぶられた剣諸共骨を殴り飛ばした。グラウンドまで錐揉み回転しながらソレは地面に叩きつけられる。仲間の死に目もくれず、残ったソレが勤務外に襲い掛かった。足を、腕を、胴を、頭を、首を。五本の凶器が三森に降り注ぐ。

景色が揺らめいた。

三森は両手から炎を噴出させ、左右の二体を熱風で吹き飛ばす。校舎の窓に叩きつけられた一体は硝子の破片と一緒に己の体を室内に撒き散らした。もう片方のソレは地面を転がり、立ち上がる事が出来ない程度にコンクリートで体を削られる。

「出て来いよフリーランス！」

吼え、背後のソレに回し蹴り。音を立てて砕ける骸骨に一瞥してから、三森は姿勢を低くして残った骸骨全ての下肢を足で薙ぎ払った。下肢の骨が達磨落としの如く吹き飛び、ソレの膝から上の部分が中空に浮く。落ちてきたソレにアッパー気味の角度で拳を放ち、各個撃破。

「ビビんじゃねェよ『館』ァ、おい、もう終わりかよ？」

姿を眩ませたキルケに呼び掛けつつ、三森は周囲に意識を巡らせていた。

「……安心なさい」

「上かっ」

降って来た声に反応し、三森は空を仰ぐ。が、上空から姿を躍らせたのは魔女ではない。豚だ。

Ｗｈｅｎ　ｐｉｇｓ　ｆｌｙ。

一はその光景を見てそう思った。豚が、空を飛んでいる。

――グシャッ。

飛んでいたのは一瞬だったが、目を疑う光景だったのは間違いない。どうして、何故、何の脈絡もなしに豚が空から降って沸いたのか。

「うわ、アレ、なんなんだよ……」

地面に落ちて、潰れて口から臓腑を吐瀉している豚を見て、一の肝が冷えた。未だ生きているのか、何度も痙攣を繰り返している豚。

「哺乳鋼偶蹄目イノシシ科、イノシシを家畜化して非常に免疫力と環境適応力に優れた飼育の容易な生物ですね。あたしはあまり好きではありませんが、最近じゃペットに飼う人も多いと聞きます」

「そういう事聞いてるんじゃない。何で、空から豚が降って来るんだよ？」

「さあ、降って来たというよりは降られて来たって感じでしたけど」

「……さっきのキルケって奴の仕業か？」

豚。豚になる。ナコトに言われていた言葉が一の頭を過ぎる。

「意図が掴めませんが、恐らくは」

落下してきた豚に目を遣りながら、三森は唾を吐き捨てた。

「で、これがなンだっつーの」

確かに、豚（これ）が落ちてきた時は驚いたがそれだけだ。自分の身には何の変化も変哲も無い。あの魔女の嫌がらせだとすれば上出来だが、わざわざ手の込んだ嫌がらせをするような状況でもない。眉根を寄せ、上方を睨み付けていると、

「見たでしょう。可哀想に」

キルケの声がどこからか聞こえてくる。

「可哀想も何もてめェの仕業じゃねーかよ」

「あはは、そう言われればそうかしらね。どうかしら勤務外、それをしっかり目に焼き付けた？」

「私にンな趣味はねェ。とっとと出て来い、時間が惜しいってんだ」

「あらそう、残念。今の内に見ておいた方が良いわよ」

――後ろっ！

背後から感じた気配に三森は振り向いた。黒。真っ黒。黒いローブが翻り、キルケの素顔を露わにしている。彼女の顔は整ってこそいたが、つり上がった紅の唇。獰猛な光の宿った瞳。振り乱された赤い髪。獲物を捉えた狂喜の表情。全てが彼女の景観を台無しにしていた。

「あなたもそうなるんだからねえ！」

「うざってェ！」

キルケは掌を三森に向け、その手を伸ばしている。容易な攻撃だった。避ける事も防ぐ事もカウンターに移る事も可能。だが、

「触られちゃ駄目です！」

後ろから聞こえてきたナコトの叫びに、三森は避けを選択する。間一髪、キルケの右手は三森の頭を掠めていった。

「ふうん……」

キルケはそのまま三森の脇を抜け、詰まらなさそうにナコトを見つめる。

「厄介な子がいるのね。カリュプソったら、あんなの通しちゃって甘いんだから」

三森は黙ってキルケの右手を注視した。今、彼女は手を握ってはいるが、その掌から淡い光が漏れているのが確認出来る。光を確認した刹那、ぞくりと、三森の背に悪寒が這いずり回った。

「……てめェ、そりゃ何だ？　それが魔法か？」

「あら、ようやく気付いたの？　鈍い子ね。そうよ」

そう言って、キルケは握った手を解いていき、掌を三森に見せるように掲げる。

「とくと見なさい。これが私の魔法よ、人間。この掌に、この光に触れた者を好きな家畜に変えられる。犬にでも、牛にでも、アヒルにでも、豚にでも、ね」

「野郎、まさか……」
「あははは っ、そのまさかかもね！　ほらっ、見なさいよそれを！　哀れにも死に掛けちゃってるけど、そろそろ時間よ」
キルケは可笑しそうに、心底から可笑しそうに。痙攣を繰り返す豚を指差した。
「やってくれるじゃねェかよ、ええコラ？」
やがて、豚の痙攣が止まる。か細い呼吸も、流れ出る血液も凝固していく。生が終わって、死が、始まっていく。三森の予想していた通り、命を完全に終了させた豚は姿を変えていく。淡い光が豚から漏れ出て、周囲に鈍く輝きを放ち始め、
「うそ、だろ……」
その光景を後方から眺めていた一は吐き気を堪えた。それでも、これが自身の責任だと、目を反らさず、変化が終わるのを見届ける。
「なんで、そんな事が出来るんだよ……」
豚が、人間に変わっていく。豚は服など着ていない。だから、それも服など着ていなかった。生まれたままの姿で屍を晒している。光が完全に消え失せると、年端も行かぬ女子の死体だけが残された。確実に、ここの生徒だろう。豚の最期の姿と変わらず、目には涙を浮かべ、流れた涙は頬に跡を作って、口からは臓物を吐き出したまま、顔をぐしゃぐしゃに歪ませて手だけを上に伸ばそうとしている。落下した際の衝撃で、場所を問わず体の殆どの骨は砕け、突き出、肉を食い破る様をまざまざと、生きている一たちに見せ付けていた。
「あははははははははっ！　かーわいそう！　可哀想！　さっきまで人間だったのに、どうしてこんな事になっちゃったのかしら！？　見て、見て、見てよ、見なさいよ勤務外っ、あんたたちの所為よ、あんたたちの責任よ、あんたたちの罪よ！　先に仕掛けたのは勤務外よ、私たちの仲間の腹を切り裂いたのはあんたたち、マナを殺したのはお前らだ！　私たちの為の楽しい楽しいサバトを引き起こしたのはねえ、紛れも無くあんたたちなの、あははははは！」
腹を揺すって哄笑し、顔を歪めて嘲笑し、しばらくの間、魔女の

呵呵大笑が周囲に木霊する様に響き渡る。
一は動けなかった。ナコトも、一に身を寄せて震えていた。三森ですら、動くのを忘れたみたいに死体に目を奪われている。
「――隙だらけよ、勤務外」
戦場では、敵の前で動きを止めてはいけない。迷ってもいけない。死を悼み悲しむ事は、もっと良くない。三森は今更ながらに昔教わった訓戒を思い出してしまった。
三森の首に、キルケの腕が巻き付く。
「てめェ……！」
振り解いて燃してやろうと右手を上げるが、
「動いたら、ああなるわよ」
耳元で死刑宣告にも似た文句を囁かれ、やむなく抵抗を止めた。
「三森さん！」
「動かないで勤務外！」
駆け寄ろうとした一にも、キルケは冷たい視線を浴びせる。
「動けば、この子も豚にするわ。威勢だけは良いこの子の豚みたいな悲鳴。どうなの、あなたは聞きたいの？」
「……やられた」
一はアイギスを下ろし、ナコトを自身の背で隠した。
「まずいです、あの状態だと、赤い方が何をするよりも早く触れられてしまいます」
「畜生……」
キルケは勝ち誇って、込み上げる笑いを我慢せずに発する。耳元で喚かれ、三森は顔を顰めた。
「これだから止められないわね。さ、答えて頂戴。マナを殺したのは誰？　この子、それともあなた？　ね、どうしたの？　早く答えて。豚にはなりたくないでしょう？　ま、どうあっても、私に乱暴を働いたこの子には豚になってもらうけ、ど」
「……っ」
どうしようもない絶望に、一は目の前が真っ暗になった。

通らない。通らない。その攻撃は通らない。どの攻撃も通らない。
「くそっ！」
神野の竹刀での殴打、打撃も、立花の日本刀での刺突、残撃ですらサソリのソレの堅い殻に阻まれる。既に五分近くも攻撃を繰り返していたが、有効な攻撃は一度たりとも繰り出せない。
一方で、サソリの攻撃は二人の体力をじりじりと削り始めていた。当たらない。遅い。だが、ソレの鋏は重い。そして学習しない。避けられても避けられても遮二無二攻撃を繰り返す。その度に煉瓦を抉り、校舎の塀を断ち割っていく。二人はその破壊力に脅威を感じつつ、飛び散る破片に掠り傷を負わされながら、尚且つ、有効に立ち回れない。
「……このままじゃ」
立花はソレの攻撃を避けつつ、剣の通りそうな部位を見定めるが都合良く見つかる筈もない。中庭が暴虐されるのを、特等席で黙って見ているしかない。
膠着状態。尤も、時が進むにつれ不利になるのは明らかに人間である神野たちだ。反撃の糸口を見出せないまま、時は刻一刻と進行していく。
更に、
「見ぃつけた」
もう一人。神野たちがやって来た東棟の入り口から、魔女がその身を現した。
「こんにちは、勤務外。ランダから話は聞いてるわよ、好きにやってくれてるそうじゃない」
「……こんな時にっ」
神野は歯噛みする。
「あいつは……」
「さっきは逃げられちゃったけど、そこの女の子。もう逃がさない

わ」

パシパエ。『館』の一人である魔女が勤務外のいる場所にやって来た。即ち、

「徹底的に、殺し抜いてあげる」

戦闘の激化を意味するに他ならない。パシパエは地面に手を付き、その手から鈍い光を放ち始めた。輝き、輝き、輝き、地面が色を変えていく。赤い煉瓦が割れていき、その下から現れる。赤と青を混ぜて尚、紫にはならない中途半端なカラーリング。巨大な鋏と毒針を持つ尾を掲げ、新たなサソリが姿を見せる。尾部を上げ、この世に生まれ出たのを誇るが如く行進を開始した。

「もう一匹……」

神野は醒めた目でソレを見つめる。ここまで来ればもう何でもありだ。

「ふふっ、遊んでらっしゃい」

パシパエはサソリの尾をいとおしげに撫でる。それを合図に、サソリは一直線に獲物へと向かった。

「けん君！」

「分かってる！」

立花が叫んだと同時、神野は右に飛び出す。彼の動きにつられ、新たに出現したサソリはそっちへと向かった。

もう一体は立花が引き付け、挟撃を避ける。戦力が分散するのは好ましくなかったが、打開策も見つからないままでは仕方が無い。

「くそっ！」

中庭の規模は広くない。人間だけなら充分に憩いの空間に成り得るのだが、そも、戦闘を念頭に置いて作られた場所ではないし、巨大なサソリが二体も現れるなんて予想も出来ない。二体分のサソリがスペースを詰めた分、神野と立花の回避可能な範囲が狭まられる。

先刻の様に自由には攻撃を避けられない。下手に動けば、その分自身が追い詰められていく。二人は端を回避し、隅を忌避し、逃げ場の多い中央に移動しようとする。

「必死ね。見苦しいぐらい。けど、そうでなくっちゃ……」
二人を退屈そうに見つめながら、パシパエはフードを脱ぎ捨てた。
「う、あ、あああ、ああ、あああああああああああ！」
おぞましい。
その言葉がパシパエには良く似合っている。彼女の顔は整ってこそいたが、つり上がった口元からは蜘蛛が這い出、狂気に彩られた瞳からは百足が足を蠢かせている。青く染まった長髪からはサソリが姿を覗かせ始めた。体内から湧き出る虫共の感触。その激痛に顔を歪ませながら、彼女は二人を睨み続ける。
零れた虫は中庭の中央を目指し、不快な音を立てながら進軍を開始した。
「あああああああああああああああああああああああああああああああ！」
痛みに任せ叫び、喚き唸る。パシパエの絶叫が中庭に迸っていた。
「いっ、たい……！　いたい！　いたいいたいいたいいたいたい！」
血管を、臓器を、神経を蝕まれる。それでも尚、パシパエからは虫が溢れていた。
「いやあああああああああああああああっ！　はあっ、ああっ、あっ、ま、な！　マナアアアアアアア！　あああああっ、きんむ、がっ、が、がっ、がっ」
何かしら言葉を発しようとするが、その度に口から溢れる蜘蛛を噛み潰し、彼女の言葉は完成しない。舌の上に広がる苦味と粘液とに悶えながら、パシパエは地面をのた打ち回った。

――異常だ。
死の空気に触れ続け、麻痺しかかっていた神野ですらその絶叫で一気に冷めた。醒めた。覚めた。真に恐ろしいのは骸骨でもサソリでも、モップを持った魔女でもない。アレだ。
人間の形を保ったまま、人間でないモノを生み出し、作り出し、

吐き出し続ける異形の存在が恐ろしくて仕方が無い。あの女が声を上げる度に足が竦み頭が鈍る。

「あああああっ！」

魔女の声を掻き消したくて、声をわざと荒げた。噴水の傍、中庭の中央まで逃げたかったが、そこには既に虫共が居座っている。カサカサと、ぎちぎちと。耳障りな音を立て、ただそこにいた。存在するだけで、虫唾が走る。気持ち悪い。気持ち悪い。触りたくない見たくない。この状況、四の五の言っていられないが、根源的な本能から来る嫌悪には逆らえない。どうしても、あそこには行きたくない。

見ると、立花も同じように中央からは遠ざかっていた。彼女の額には汗が流れ、辛そうな表情をしている。

「くそ！　くそっ、畜生！」

サソリには攻撃が通らず、そのサソリももう一匹増え、おまけに逃げ場には害虫が占拠している始末。魔女は叫び、見えないところからも精神的に神野たちを追い詰めてくる。完全と言って良いほどに手詰まりだった。このまま攻撃を回避し続けていてもいずれは捕まる。

つかまる。

「くそおおお！」

捕まれば、もう本当に終わりだ。神野、立花。どちらかがサソリの一撃を食らってしまえば、それで終わり。食らった方は鋏で挟まれ、針から毒を注がれる。動けなくなったら食われてしまい、仕舞。残った方も二体に挟まれ、虫共の餌食だろうし、自分が思っているよりも手酷い方法で魔女に殺されるかもしれない。

それでも良い。神野はまだ、生を諦められる程には達観も成熟もしていない。だが、勤務外だ。自分には勤務外だという自覚が備わっている。ソレとの戦闘で死んでしまうのも、殺してしまうのも、

とっくに、充分に理解している。
「うあああああ！」
だが、自分が死ねば終わる訳ではない。まだ、続く。魔女は殺す。殺し続ける。生きている者は殺される。
すぐそこにいる、安田も姫もきっと殺される。
残った友達も知り合いも皆殺される。殺される殺される。呆気なく殺される。
ここで戦える者は今、自分たちだけだ。諦めて折れる訳にはいかない。曲がりなりにも自分は勤務外だ。ソレと戦う為の人間だ。
「死ねるかあああ！」
サソリの鋏を竹刀で無理矢理弾き飛ばし、片側の鋏を掻い潜り、殴打を繰り返す。たとえ通じなくても、何もしないままで良い筈が無い。神野は決心し、気の遠くなる感触に苛まれながらも攻撃を繰り返す。

刀が、鈍っていた。
力も入らない。
サソリの単調な攻撃を受け流しつつ、立花はぼんやりとそう思った。
――調子が、悪い？
理由は分からないが、自身に訪れている違和感を立花はそうだと捉える。
体が重く、足捌きもどこかぎこちない。いつもなら、こんなの簡単なのに。堅い。固い。硬い。難いからなんだ。いつもの自分なら、この程度のソレに苦戦はしない筈なのに。斬れないなら、力を込めてやればいい。そうすれば、あんなのするりと片付くのに。
「くっ」
苛立たしい。腹立たしい。自分勝手に動けない。その理由が分からない。

死なら見てきた。グロテスクなソレが作り出したグロテスクな死体。足がもがれ、腕が削がれ、胴が薙がれ頭が割られ目玉が串刺しにされ首が刎ねられ命が終わる様を悉く見てきた。駒台に来る前から、ずっと見てきている。だから揺らがない。死を間近に見ても迷わないし、決して惑わない。

なのに。頭を過ぎる。死体が、死んで行った者が、教師が、生徒が、同級生が。

「ボクの……」

学校なんて、生まれて初めてだった。立花の都合上、外に出る訳にはいかなかった。家の中でひたすらしごかれ、鍛えられ、変えられる。その為だけに彼女は生きてきた。

友達なんていない。家族なんて呼べない。人とどうやって接するのかも、話すのかも分からない。教えられたのは刀の振り方と身の振り方。ソレの殺し方と自分の殺し方。

その筈だったのに。

「ボクの邪魔をするな……」

変えられた。駒台に来てから、オンリーワンに来てから、変えられてしまった。余計な物が身に付いてしまっている。不愉快。邪魔。温い感情。そう思いながらも、手放せない。得体の知れない感情が身を走っていた。心地悪く、心地良い。

誰のせいだ。誰のせいだ。誰のせいだ。

立花は煩悶する。誰のせいだと。隣で共闘する神野もそうだ。後ろで見守る安田だって姫だってそうだ。この学校にいた全ての人間が彼女に影響を与えていた。だが、足りない。足りない。そうだ、それでもまだ、

――敬語はやめてくれない、かな？

あの人から言葉を貰っていない。自分を大きく変えたのはあの人だ。あの人のせいだ。あの人の声を聞くとなんだかむず痒くて。あ

の人の姿を見ると何故だか心がざわついて。

――これから一緒に働く仲間なんだし、よろしくな。

誉めて貰いたい。声を掛けてもらいたい。優しくして、欲しい。

いつだって、ソレと戦う前にはあの人がいた気がする。あの人の声を聞き、あの人の姿を見ていた気がする。

だから、

「邪魔をするな」

嫌いだ。好きだ。

自分に芽生え始めた感情に戸惑いを隠せない。皆、死んだ。初めての学校で、皆が死んだ。

分からない。悲しいのか、嬉しいのか、怒りたいのか、楽しいのか、全てが当てはまりそうで当てはまらない。

教えて欲しい。あの人に、聞きたい。

だから、もう一度。

「邪魔をするな」

ぎちぎちぎちぎち。

「邪魔を……」

ざくり。

奇跡の時間

サソリの鋏が断ち割られた。
「なっ……！」
塀に囲まれた中庭の狭い空を鋏が飛ぶ。それを見上げながら、神野は驚きの声を上げた。
「……あ、あ、あ？　か、刀なんか、で？」
パシパエも宙を舞うソレの一部を見上げながら、驚愕を顔に張り付かせる。腕を斬られたサソリも、神野と戦闘に及んでいたサソリでさえ、西棟から様子を見ていた安田と姫ですら、そちらに目を向けていた。
信じられない。
誰も彼もが、ソレの鋏が地面に落下するまで目を逸らせない。

――ひゅっ。

「――――！」
ただ一人、立花を除いて。
もう一本、鋏が飛んだ。続いて、尾。風切り音が響き、ソレの体を切り裂いていく。音が鳴る度、サソリの部位が分かれていく。あっという間にサソリは動きを止められた。
「私のっ、私のっ！」
パシパエは叫び続ける。自分の可愛いペットが刻まれ、変わり果てていく姿を彼女は離れたところで見ているしかない。
立花は無言でソレの殻に飛び乗り、刃を突き立てた。先刻とは違い、今度は弾かれる事なく、問題なく貫いていく。その一点、刀の切っ先が入ったところから放射線状に殻の外皮にひびが入った。
「……ボクは死ねないんだ、もう一度はじめ君に会うまでは」
立花は力を込め、刀を更に奥深く押し込む。外皮は砕け散り、切

っ先は脆い内部に突き刺さった。確実な手応えが伝わり、刀を引き戻す。ソレの体液が噴出する前に彼女はその場を離れ、刀身についた汚れを振った。

「お、おおおお前えええええ！」

パシパエは走り出し、倒れているソレの傍に駆け付ける。噴水の様に溢れ出る体液を厭う事もせずに、彼女はそれを一身に浴びた。

「お前お前お前お前お前！　一体なんだ！　お前はなんなんだ！　私はっ、私は魔女なの！　『館』のパシパエなのよ！　お前なんかに私の子がっ、私の魔法がっ、私が負ける筈がない！」

「そっか、この虫は魔法だったんだね」

「きっ、勤務外！　どこまで私たちを虚仮にすれば気が済むの！　私の魔法に掛かったら、お前なんか、お前なんかお前なんかぁ！」

「ふーん、どういう魔法なの？」

あどけない声。

パシパエはその声に気圧されながらも、自身を指差し語り出す。いかに魔女が優れているのか、いかに人間が劣っているのか。教えなければならないと、彼女はそう思った。

「ふ、ふふっ、良いわっ、見なさい勤務外！　魔女、『館』の魔女なのっ、その私の体には虫が棲み付いてるの、爪の先から血管一本髪の毛一本細胞一つだって余す事無く虫の卵が植え付けられてるのよ。私の意志によって自由自在に虫を出し入れ出来、自由自在に虫の大きさを変えられるっ、私の意志で虫は動き、虫は襲い、虫は殺すぅ、お前らを！　ふっ、ふふっ、うふふふふ。どう、驚いたかしら？」

そんな物に、意味は無かったと言うのに。

「何だ、魔法って言ってもそんなものなんだ」

立花は事も無げに言い切り、安心して剣を振るう。

「あっ――」

パシパエの首に線が走った。

「――あなた、な、何者？」

その線が赤く滲んでいく。
「九州退治屋立花、その六代目立花真（たちばなまこと）」
僅か一瞬の出来事。
「……そう、良い名前ね」
亀裂が走り、歪みが生じる。するりと、パシパエの首がずれていく。
立花は刀を血振りし、鞘に納めた。

一は思った。彼女に囚われのヒロインは似合わないと。
「ほら、どうしたの答えてよ」
『館』の一人、キルケに捕まったままの三森。赤く、勇ましい彼女は火の手を下げ、諦めたような視線を一たちに向けていた。
「……マナ、ナンガルだったっけか」
「あなた、マナを知ってるのね？」
「ああ、良く知ってる。アレだ、コウモリに姿を変える魔女、だろ？」
とにかく時間を稼ぐしかない。ダラダラと喋って、尚且つ目の前の魔女が興味を示す話題を提示し続けなければならない。
「そうよ、知ってるのね。知ってるって事は、あなた見たのね？」
後ろのナコトは黙ったまま必死に頭を働かせる。一も同じく、下手を打たないように頭を働かせていた。
「……ああ、見たよ。だけど、マナナンガルを殺したのは俺じゃないんだ。それだけは信じてくれ」
「あなたの言葉を信じても良いけど、結局はあなたも殺すわ」
「絶対に、か？」
「ええ、絶対よ」
「……あんたの仲間を殺した勤務外の正体を教えるって言っても？」
悪戯に語尾を伸ばしたり、言葉を必要以上には区切れない。人間の姿をしていても相手は魔女だ。思考が全く読めない異種の生物と

一は考えている。キルケの機嫌を迂闊に損ねては三森の身が危ない。
「正体なんて関係ないわ。来た勤務外を全て殺せば良いもの」
「そこの、豚みたいにか？」
一は顎をしゃくり、女生徒の無残な死体を示した。キルケは少しばかり楽しげに口元を歪める。
「ええ、そうね。豚みたいに鳴かせて喚かせて、豚にして殺してあげるわ」
「……俺は、死にたくない」
悲痛に訴える。
ナコトは一の必死な声に、思わず顔を上げた。演技だと彼女は知っていたが、それでも真に迫るモノを感じたからだ。
「俺はまだ死にたくない……」
「あは、あははっ」
キルケも一に感じるモノがあったらしい。見定めるような視線を一に向けだした。
「笑わせないで。マナだってきっとそう思ったわ。思ったに決まってるっ」
「アレは、ひどかった。あいつはやり過ぎだった。人間のやる事じゃねえよ」
一は目を瞑り、声を振り絞る。
「……あなた、その場にいたの？」
「言ったろ。でも、見ているだけだった。俺には同僚を止められなかったんだ」
「その通りよ。立派な共犯じゃない、死に値するわ」
キルケの放つ剥き出しの憎悪に一は震える。
「雲行き、怪しいですよ」
一にしか聞こえない小声でナコトが注意を促した。
「……俺は勤務外だ。ソレを殺しても罪に問われない。でも、そりゃあくまで人間側での勝手な話だ」
三森は黙ったまま、訝しげに一を見据えている。

「あんたたちソレにとっちゃ、勤務外に殺される理由は無いもんな。アフリカの肉食動物と同じだ。弱い奴を餌にして悪い筈がねえ」
「……そうよ。私たちに罪はないわ。でも、獣なんかと一緒にしないで」
「悪かった。俺にはまだ、人間だった時の考えが抜け切れてないらしい」
一は頭を下げる。
「人間、だった？」
意識を逸らせ。話を広げろ。舌を乾かすな。興味を示す話題を選べ。
「急な話で悪いんだけどさ、俺をあんたたちの仲間にしてくれないか？」
場が凍るのは予想済み。そこからどう流れるのかは、魔女次第。
「仲間、ですって？」
――食い付いた！
一はにやけてしまいそうになるのを堪え、言葉を選びにかかった。
「ああ、頼むよ。実は俺、もう人間じゃないんだ」
「嘘おっしゃい。いい加減な事言って時間でも稼ごうって魂胆かしら？」
「違う。正確に言えば、半分が、いや、四分の一以下がソレなんだ。俺には、少しだけどソレの血が流れてる」
嘘では、ない。
「証拠は？」
「悪いけど見せられない。見せるほどの力は備わってないんだ」
「……なら、必要ないわ。『館』に半端者はいらないもの」
「力なら、ある」
キルケは面倒臭そうに顔を上げた。
「あんた、俺たちの能力についてどれくらい知ってるんだ？」
「知らないわ。だけど知る必要もないわ。所詮、人間じゃない、力なんて推して知れるわ」

「……こんな状況に追いやられた俺が言えた事じゃないけど、油断は禁物だぜ？」
「本気になった私たちを脅かす力を持つ者がいるとは思えないわ」
キルケは笑った。一は、アイギスを掲げた。
「そっちが魔女ならこっちは女神だ」
「……なんですって？」
「ギリシャ神話の女神アテナ。そいつの持つ最高の盾アイギス。俺が今持ってる力だ」
「馬鹿言わないで。神具なんて、そんなの信じる訳無いでしょ」
その最高の盾を、一は放り投げる。放物線を描きながら、一とキルケの丁度真ん中にアイギスが落ちた。
「何のつもりかしら」
「信じるかどうかはあんた次第だ。どうせ俺は死ぬんだからな、絶対に」
「……あなた、何がしたいの？　何をしようとしてるのか知らないけど、あなたたちは今日、ここで死ぬのよ？」
「仲間にしてもらうのも無理。生き延びるのも無理。だったら、せめて仇でも取って欲しくてね」
一は皮肉っぽく笑う。
「へえ、誰の仇？」
「マナナンガルとやらの、だよ。俺はどうも、勤務外なんかにゃ愛想が尽きてね」
「……言われなくても、仇は取るわ。あなたたちを殺して、ね」
キルケは左手の爪で三森の頬を引っ掻く。
「情報は欲しくないか？　あんたらの仇、その勤務外のさ」
「……てめェ、おいてめェこら、さっきから黙って聞いてりゃふざけた事抜かしやがって！　仲間売るつもりなのかよ！」
「黙りなさい」
堪忍袋の尾が切れた三森の髪の毛を、キルケが鷲掴みにして黙らせる。

「……はっ、そうだよ。あんたはそこで黙ってりゃ良いんだ」
「この野郎、殺してやる！」
罵声が恐い。
「あの人、演技に気付いてませんよ……」
恐い。あとが恐い。
「はあ、もう良いわ。面倒だもの。全員殺せばそれで良し。マナだってきっと喜ぶわ」
キルケは輝く右手を三森に近付けていく。
「待った！　待て、その人が誰だかわかってるのか！？」
ぴたりと、キルケの動きが止まった。
もうなりふり構っていられない。
「マッ、マナナンガルを殺したのは姿を隠せる奴なんだ！」
「……見苦しいわね」
「だああっ、もう一回聞くぞ！　あんたが今捕まえてる人の能力を知らないのか！」
「しつこいわね。この子の力は見切ってるわ。パイロキネシスって奴でしょ。手から火を出すだけの単純な能力じゃないの」
――その、言葉が。
「そっ、そうだ！　そいつは手から火を出すだけの使えない馬鹿女だ！　場所を取る分ライターよりも使えない！　だけどな、おい、後ろだ！　後ろから来てるぞ！」
キルケは要らないものを聞き過ぎた。話を聞いてしまった。一の話を彼女は一割程度しか信じていない。アイギスも、一がソレだと言う事も、仲間になりたいと言う事も、勤務外の正体も、殆ど何も信じていない。
だが、揺らいだ。
少しでも迷ってしまった。あの女神の盾、アイギスがもし真実なら。一がもしソレなら、仲間になりたいなら。
姿を消せる勤務外がいるなら。
様々な要素が絡み合い、キルケの思考をがんじがらめに鈍くさせ

ていた。キルケは迷う事無く、三森を殺すべきだった。一の話を聞いてはいけなかった。全ては、魔女が人間よりも優れていると思っていた慢心が引き起こしてしまった。

だから、キルケは振り向いた。

犯してはいけないミス。

それでも、キルケはまだ三森を解放はしていない。彼女の首元に手を掛けたまま振り向いたのだ。これもミス。彼女は喋りすぎた。一なんかと会話をし過ぎた。

「あ……」

――体が、熱い。

キルケは三森の力を見誤っている。発火能力の認識を間違っている。一が信じるヒーローを、馬鹿にし過ぎていた。

要は一瞬、刹那。三森から意識を逸らしたキルケが瞬きでもして、玉響を稼げれば良かった。それだけで、後はもうお好きなままに。

――あつい。

「よお、誰が豚になるンだっけか？」

一瞬にして臨海を突破。火柱と憤怒が立ち昇り、三森の周りを小規模な熱波と殺意が包む。触れたモノを焼き尽くし、燃やし尽くし、焦がし尽くし、灰になるまで躍らせる極上の灼熱。

「あ、あああ……」

キルケは紅の塊に手を伸ばす。無駄だった。伸ばそうとした手は、肩から先に渡り焼失している。直で三森に触れようとしていたのだ、当然とも言えた。

「そっ、そんな」

口を開くたび、むせ返る熱気と乾いていく空気に唇が干乾びていく。体から水分が失われていく。

「……教えてやるよ」

三森はキルケの襟元を掴んで持ち上げた。不思議な事に、魔女の

ローブには引火すらしていない。服の下の素肌だけがちりちりと燃えている。
「私のはパイロキネシスなンかじゃねェ。でもな、火なンて私の体のどっからでも出せるんだよ。それこそ、髪の毛からだってな」
「き、勤務外いいいいい！」
「好き放題やってくれたじゃねェか、なあ、魔女」
キルケを掴んだ手に意識を集中させていく。背中から、熱が伝わる感触。それを感じながら、三森は魔女に獰猛な笑みを向けた。
「泣き喚けよ、豚みたいにな」
「き――」
弾けて消えた。

一陣の風が吹く。風は一たちを通り過ぎ、三森の金髪を揺らし、魔女だったモノの成れの果て、灰を吹き飛ばしてグラウンドまで運んでいった。
一の体から力が抜ける。
「どうにかなりましたね」
ナコトが微笑みかけてきたので、一は作り笑顔で返した。
「……一時はどうなる事かと思ったよ」
「そうですね。でも、さっきのあなたのは中々に面白い話でしたよ。あの魔女だって食い付いてきましたしね」
「ん、まあ、ね」
一は言葉を濁し、ナコトから視線を逸らす。前方に目を向けると、三森と目が合った。笑っている。三森は手を上げて笑っている。凄まじく嫌な予感。
「なあ、黄衣」
「あたしは知らないですよ」
「ちょっ、ちょっとたすけ――」
「――あたし何も見てない何も知らない何も聞いてない」

ナコトは背を向け、耳を塞いだ。
「よう、立てるか？」
ぽんと、軽やかに一の肩が叩かれる。
「……三森さん、聞いて下さい」
ぎぎぎ、と。一は油を差してなかった機械みたいにぎこちなく首を動かしていった。
「いや、気にすンな。お前の言いたい事は分かってるから」
「え？」
「あーやってあいつの気を逸らしてたンだろ？」
後光が差している。一は目を輝かせ、何度も頷いた。
「そっ、そうです！　全部嘘っぱちです！　でなきゃ俺があんな事言う筈が無いんです！」
「だよなー」
三森は頭を掻いて、座り込んでいた一に手を差し伸べる。
「み、三森さん」
一はその手を掴んだ。次の瞬間、皮膚が焼けるような痛みを覚える。
「あちい！」
――さっきの余熱だ！
叫び、一は手を振り解こうとするが、自分よりも遥かにえげつない力で掴まれていて、とてもじゃないが脱出出来そうに無い。おまけに容赦なく握られていて痛い。
「いたいいたいたいたいたい！」
「よーく分かってンだよ。でもな、やっぱムカつく」
「ごめんなさいごめんなさいごめんごめんごめん！　痛い！　痛いってばバカ！　あーギブ！　ギブ！」

声を掛ける事は躊躇われた。
壊れ切った中庭の噴水、そこに掛かる小さな虹を背にして立花は

魔女の死体と、動かなくなった虫共に目を向けている。
　虫共は、一切合切全ての虫は、パシパエが活動を終えたと同時に、その命に幕を下ろした。今はもう、動くモノはこの中庭に存在しない。唯一、神野と立花だけが生き残っている。
「……行こう、けん君」
「あ、ああ……」
　立花は神野を促し、西棟に続くドアをノックして安田に鍵を開けてもらった。
「――っ」
　氷肌玉骨。
　その言葉が立花には似合っている。安田は思わず息を呑み、立花を見上げた。
「？　どうしたの？」
「あ、い、いや、何でもない」
「？」
　立花は蹲って震えている姫に目を遣ると、体育館への道程を歩き始める。神野は姫を抱きかかえるように立ち上がらせ、自分の肩を貸してやった。
「お、おい、神野……」
「どうした？」
　安田は声を潜め、前方の立花に聞こえないように神野へ囁く。
「た、立花って、何者なんだ？」
「何者って言われてもな……」
　勤務外だとは、言えない。
「すげえ強いじゃんかよ、太刀筋とか、全然見えなかったぞ？　なんだろ、剣道やってたのかな、もしかして全国区の選手だったりして」
「……かもな。俺も、いまいち分からないんだけど。まあ、俺たちを助けてくれたんだからそれで良いだろ」
「あー、まー、そーなんだけど」

「とりあえず体育館に戻って、皆で逃げようぜ」
とりあえず、今は。

校長室と書かれたプレートを見上げ、魔女は息を吐きながら扉を開けた。
「やられちまったね」
黒い三角帽と黒いマント。いかにもな出で立ちをした彼女はソファに深く腰掛ける。その対面、黒いローブに身を包んだ女――カリュプソ――はテーブルに広げられた学校の見取り図に指を這わせたまま、俯いて動かない。
「……キルケと、パシパエ、死んだわ」
「ああ、分かってる。こっちでも確認してきたよ」
「勤務外が、四人。フリーランスが一人、よ」
「旗色は悪いねえ、どうする、白旗でも揚げるかい？」
「ランダ……」
ランダと呼ばれた魔女は目を瞑り、白い指をこめかみに当てた。
「わーかってるって。どうにかしてやりたいよ、仇討ちに来たってのに、仇増やしちまってるからね」
だが、カリュプソはふるふると首を振る。
「……もう、良いの。知ってたわ、私。ランダに最初っからやる気が無かったってこと……」
ランダは答えず、用意されたティーポットからカップに紅茶を注いだ。
「ホントは、マナがいけなかったの、よ。『館』の決まりを破って、勝手に人間を食べてしまったから……」
「でも、仲間だろ。仇を取ってやりたくなかったのかい？」
「分からない、の。もう、今となっては。だけど……」
カリュプソは拳を握り、テーブルに緩く叩きつける。
「何が望みだい？」

「……私、魔女として、『館』として、死にたい」
「それで？」
「生き残ったあなたにお願いをするのは厚かましいと思ってる。だけど、お願い出来る人なんて、もう、あなたしかいないの。陣は、まだ三つ残ってる、わ。充分に召喚は出来ない、だけど……」
ランダはテーブル上の見取り図、印が付いた部分に目を遣った。
「確かに、召喚術なんて一番面倒だね。手間が掛かる事この上ないし、その上、あんたの言う通りあたしゃ今日やる気が無くてね。馬鹿弟子の面倒まで見させられる始末だ」
「……ランダ」
「そんな目で見ないどくれよ」
カリュプソは立ち上がり、まだ中身の入っているティーカップをテーブルに叩きつける。カップは琥珀色の液体を撒き散らせながら、高い音を立てて砕け散った。
「確か召喚には、生贄が要るのよね？」
「……そう、だったかねえ」
「生贄の数が多ければ多いほど、格の高い、力の強いモノを呼び出せる。今日、ここにはたくさんある、わ。生贄が。骨も数十体、人間だってたくさん……」
ランダは溜め息を吐き、見取り図を指で示す。
「駄目だよ。生き残った人間は勤務外がもう殆ど脱出させちまった。校舎の中には何人か取り残されてるけど、足りないよ。骨もまだ残ってる。死体なら山ほど残ってる。だけど、生贄にするには力が足りなさ過ぎる。魔女みたいに力のあるモノの死体ならともかく、死んだモノを使っても、下級の悪魔一匹呼べやしない」
「それでも良い、わ。生き残った人間と骨を道連れに、出来る、なら」
「あんた、何言ってんだい？」
――ざくり。

カップの破片が血に染まる。滲み、噴出す。頸動脈を掻き切って、それでも尚足りないのか、カリュプソは右手首にも傷を付け、気丈に笑った。

「私を生贄に使って」

「……正気じゃないよ、あんた」

「ほら、は、早くしないと、私、死んじゃう」

ランダは舌打ちし、見取り図を広げる。印の付いた場所を睨みつつ、

「くだらない事で命を粗末にすんじゃないよ！」

声を荒げ、カリュプソに怒鳴った。

「い、良いの。私たちは本物じゃないから、だから、お願い」

テーブルの上に散らばったカップの破片を引っ掴み、ランダは自身の人差し指をそれで裂く。血が滲んでいくのを確認して、怪我をしているその指で地図をなぞり始めた。印の付いた場所、印から印へ。計三つの印を血でなぞり、赤く、薄汚れた図形を描く。図形の中心には北高のグラウンド。

「お願い、ランダ。私、たちを、本物に変えて……」

「……あたしゃ、あんたたちが嫌いだったよ」

「そう、ね」

カリュプソが膝を突き、ゆっくりと床に寝そべった。彼女からは血溜りが広がっていき、彼女からは血の気が失せていく。

「さよならさ、カリュプソ」

「ええ……」

しばらくの間、沈黙と血の香が部屋を満たした。

「本物、ねえ」

ランダは既に息絶えたカリュプソを見下ろし、息を吐く。

「それを言うなら、充分あんたたちの方が本物だったよ」

疲れ切った表情で見取り図を見下ろし、召喚陣を完成すべく最後の点を書き足した。その点が記された場所は北高、グラウンド。

一たちは神野らと合流し、生存者の大半を校外に脱出させる事に成功した。神野曰く、正門は近かったが、見えていなかったらしい。逃げようとは思っていても、どうやって逃げるかは意識から消えていた、と。

魔法の威力を思い知りながらも、彼らは体育館に残っていた剣道部員数十名、一階校舎の教室に隠れていた数名を逃がし、正門前で集まっている。

一、ナコト、三森、神野、立花の勤務外たちに加え、姫と安田は最後までその場に留まっていた。

「……安心は出来ませんね、二人仕留めたと言っても、まだ『館』には何人か残っている筈ですから」

「でもさ、もう骨は動かないし、追撃だって来ないじゃん」

「まあ、確かにそうですけど」

ナコトは気を揉んでいたが、一の気持ちは軽い。

「とにかく、一旦勤務外以外の子は外に出しちゃおう。俺たちで生存者を確認して、残りの魔女もどうにかすりゃ良いんだ」

一は神野を手招きし、安田と姫を逃がすよう告げる。

「分かりました、一さん。あの、もう、大丈夫ですよね？」

「何とも言えないけど、今のところは大丈夫だよ」

神野は頷き、姫を説得してから外へと連れ出してやっていた。

「立花さーん」

「んー、なにー、はじめ君？」

立花は嬉しそうに一の傍まで駆け寄る。

「あー、いや、何と言うか、今日はお疲れ様、だったね」

「え、う、うん」

「怪我とかしてないかな？」

「う、うん！　大丈夫だよ！」

良かった。一安心。神野にも怪我といえる怪我は無かったし。一

は胸を撫で下ろした。
「じゃあ、どうしようか黄衣？」
「……あなたが決めたらどうですか？」
「えー、俺が？　嫌だな、面倒だ。あと、自信無い」
ナコトは露骨な舌打ちを一に向けた後、
「では、誰かに正門前の守備をお願いしましょう。それ以外の方は固まって生存者の方の探索という事で……」

――最初に襲ってきたのは胸を締め付けられるような息苦しさ。空気を求め、口を開けて喘ぐと、次に全身に痺れが走る。体を流れる電流の如き熱さに寝返りを繰り返した。火を点けられたと錯覚しそうな熱さに身悶えしていると、最後の、最悪の痛みが頭部に襲い掛かる。何かが頭の中を叩き続けていて、視界がぶれ、涙と嗚咽が零れた。鳴り止む事の無い不快な音と、永劫に続きそうな、脳内を這い回る鈍痛。
しばらくの間、頭を押さえて呻きながら、布団の上で転がり続けていると、直に痺れが治まってくる。か細い呼吸を繰り返す内、胸への圧迫感が消えていった。そして、体から熱が引いていく。徐々にではあるが、楽になっていった。
しかし、消えない。
頭痛だけがいつまでも消えてくれない。頭の外側からも、内側からも何かで殴り続けられているような、激しい痛みが残り続ける。

「「あああああああああ！」」
二人分の悲鳴が木霊して、響く。
「おっ、おい！　お前らどうしたってンだ！？」
「はじめ君、はじめ君？」
蹲る一とナコトに、三森たちが走り寄った。異様な気配。異常な事態。
「おい、しっかりしろ！」

全員の視線が一たちに向き、その間に事態は悪化する。

「――かん、の」

「……やすだ？」

消えそうな声に呼ばれて、振り返った神野が見たのは、全身に骨が突き刺さった安田だった。

Ｄｅａｄ　Ｓｅｔ

友人が見えた。母が見えた。家族が見えた。自分が見えた。
自分のアルバムの写真を無造作に選び抜いた、早送りのスライドショーを見ていた。
遡り、巻き戻り、怒涛の如く押し寄せる情報の波。
その中で、一つだけ輝く。
「かん、の……」
今までで一番楽しかった記憶。一番悲しくて、一番嬉しくて、一番悔しくて。
生涯を捧げたと言っても良い。剣道は自分の全てだと言えた。だから、一番は全てそこにある。仲間と一緒に竹刀を振り、仲間と一緒なら厳しい事だって乗り越えられた。
剣道。
神野剣。
最初に彼を見たのは中学の時の大会だった。同中で自身に敵う者がいなかった。そんな中現れたその男。こっ酷くやられた。恥ずかしいぐらいに面を食らった。次元が、違う。その時はそう思った。でも、高校入学時、彼の名前を見つけた時は飛び上がるほどに喜んだ。これで一緒に剣を振れる。剣を交えられる。恋の様に、熱に浮かされ焦がれていた。
追いつきたい。その一心で毎日を過ごした。だけど、彼は強くて、自分はとてもじゃないが追いつけなくて。それでも、満足で。

「安田っ！」
振り返った神野が見たのは、崩れ落ちる安田の体。彼の体を通り抜けたのは、骨だった。形容しがたい速度と軌道で、何本もの骨はどこかへと飛び去っていく。

鋭い骨に穿たれて、安田の全身は穴だらけで、血も噴出していた。そんな事には構わず神野は崩れそうになる友人を支え、抱きとめる。

「おいっしっかりしろ！」

必死に呼び掛けるも、安田の目には生気がない。焦点の合わない視線を虚ろにさ迷わせ、縋る様に手を伸ばしている。神野はその手をしっかりと握り、何度も名前を呼んだ。

「すぐに病院連れてってやるからな！」

安田の体からは血が流れ、肌の色も徐々に変わっていく。体温も下がり、呼吸も苦しそうだった。

「か、かんの……」

「心配すんな、お前は死なないから！」

「おれ……」

背後で、三森たちの息を呑む音が聞こえる。

「みっ、三森さん、医者だ、医者を！」

だが、三森は答えない。いや、「もう駄目だ」と言った。だから、神野は聞かない事にした。

その間にも、安田は冷たくなっていく。心臓の鼓動が弱り、握り返す力すらまともには残っていない。彼の口から吐かれる息は小さく、細く、まるで、そこから命が流れているのだと、神野は思わされてしまった。

「し、しにたく、ない……」

「しなねえよ！」

誰も当てにならない。頼りになるのはいつだって自分だけだ。神野は安田を抱え、正門を出ようとする。

「しにたくな――」

安田の声が途切れたのを不審に思い、首を傾けた。何の事はない。体の中に骨がまだ残っていたのだろう。遅ればせながらの形で、彼の中からその骨が飛び出ただけだ。

「安田！」

結果的に、それがとどめとなった。多量の骨が体を貫き、ショッ

クで死んだのかもしれない。血を流し過ぎ、力尽きたのかもしれない。だが、死因を述べるにしろ、原因を探るにしろ、彼はもう、この世にはいない。

神野が後生大事に抱えているのは、安田だった、友達だった、その抜け殻でしかなかった。

声が渦巻く。たくさんの声。

それは恨みだ。

それは妬みだ。

それは僻みだ。

それは憎しみだ。

憎悪で満ち溢れ、怨念がとぐろを巻き、敵意を以って仇視する。

『助けてくれ』

『生かしてくれ』

『誰か来てくれ』

声が渦巻く。助けを求める声。

だが、誰も声を聞いてはくれない。自分たちを見てはくれない。

次第に、声は怨嗟の色を帯びてくる。

『殺してやる』

『憎んでやる』

『どうして自分だけ』

黒い、黒い、黒くて堪らない。憎い、憎い、憎くて憎くて堪らない。殺したい、殺したい、殺したい、殺したくて殺したくて殺したくて殺したくて堪らない。

やがて全ての声は皆、同じ事を唱えていた。

どす黒い感情は、皆、生きている者にぶつけられていた。

自分は殺された。

呆気なく野垂れ死んだ。

学校で、日常の中で殺された。

許せない。
だから、皆も死のう。

神野の怒号。それに合わせる様に、一とナコトが苦痛に呻く。
「……どうなってやがる」
骨が空を飛んでいた。屋内に転がっていた骸骨は校舎の窓を割り、無理矢理に外へ飛び出す。骸骨がばらばらになって飛んでいく。ばらばらになった骸骨が、この世の理を無視してどこかに引かれていく。空は明るく、雲は少なく、良い天気だ。その空を、ソレが飛んでいる。
異常事態。それが分かっていながらも、三森は動けなかった。弛緩、し切っていた。魔女の一人を片付け、もう一人も神野らが片付け、生き残った生徒を脱出させ、仕事が済んだと勘違いしてしまっていたのだ。詰めが甘い。お笑い種だ。目の前で人間一人死なせてしまった。
「グラウンドに、向かってる」
隣で立ち尽くしていた立花が、誰に言うでもなく呟く。
「……あー」
三森は一たちから離れて骨たちを見送った。
「あそこに、渦巻いてる」
「何が？」
「みんな。みんながボクらを殺す為に集まってるんだ」
「……なるほどね」
グラウンドに目を遣れば、骨たちが砕け、見えない何かに巻き上げられ、形を作っていた。それは一つの、巨大な骨。
「お仕事はまだ終わっちゃいねェってか」
安田の死体を下ろし、神野はしゃがんだままグラウンドに視線を

向けた。三メートルか、四メートル。巨大な骸骨が、そこにいる。生まれている。

まだ、何も終わっていない。

「これ、借りてくな」

傍らに置かれていた安田の竹刀を拾い上げ、神野は立ち上がる。

「……おい、前から思ってたんだけどな。そンなの持ってソレと戦うのは止めとけ」

「三森さん……」

三森はナコトを抱え、正門前に歩き出した。

「竹刀なンてよ、言っちゃアレだが、ガキのおもちゃだ。確かにお前はこーこーせーにしちゃ出来る奴だと思う。けどな、私らは勤務外だ。勤務外ならもっとヤれる得物持ってろ」

「でも、俺は……」

唇を噛み締め、握った竹刀に力を込め、神野は俯く。

「今まではどうだったか知らねェ。これからの事考えろ。こっから、マジでやばくなる。ンなの振って勤務外だなんて満足するな」

「ふゆちゃん、厳しい」

「ちゃん付けすンな！　あンな、迷惑するのは私らなんだぞ？　こいつがしくじってみろ、死ぬのはこいつだけじゃねェ。私らも巻き添え食うんだかんな」

「でも、けん君だって……」

「るっせえ！」

呻くナコトを正門から校外に投げ出し、三森は落ちていた石を蹴っ飛ばした。

「学ラン、てめェはもう下がってろ。妹と一緒にいてやれ、邪魔だ」

「なっ、俺は……！」

「ここがお前の学校だってのも、お前の知り合いが死にまくってたのも知ってるよ。むちゃくちゃにされたンだから、むちゃくちゃにしてやりたいよな。けどダメだ。私は、お前と肩並べらンねェ」

「俺は、俺だって勤務外だ！」

「あめェってンだよ。腕は立ってもそれ以外が立ってねー。中途半端に勤務外名乗ンな」

――悔しい。

悔しかった。そんなの、自分が一番良く分かっているのに。

「俺は、俺は……」

力が欲しい。

誰にも負けない力が。誰かを守れる力が。

「それでも、勤務外だ」

揺るがない決意が欲しい。

「今はまだ、新人だけど……」

ソレを許せない。

「この街を守りたい。俺の生まれた街だ。それを守りたくて、何が悪いんだ」

駒台を、家族を、友人を守りたい。

「あんたなんかに、俺を否定させない」

その為に、部活を辞めた。

その為に、覚悟を決めた。

その為に、竹刀を握った。

ソレを倒して、街を守って、皆を救って。

未来が、明日が欲しい。その為に出来る事が自分にはある。

「……だったら」

神野の熱意に負けたのか、三森は苦虫を噛み潰した様な、してやられた表情を作る。

「いーよもう。じゃあ見せてみろ、そン代わり後で泣き言言ってもしらねーからな」

三森は未だ辛そうに呻く一を背負い、

「先にやってろ、すぐに行く」

神野を見ずに、正門まで再び歩き出した。

「言われなくたって」

神野もまた、三森を見ないまま答えて、歩き出す。

「ボクも行くよ。はじめ君たちの分まで、やらなくちゃね」
「……立花」
「なーに？」
「頼む」
「うんっ、任せてよ！」
三森より一足先に、剣士が二人、新たな戦場に躍り出る。相手は骸骨。握るは刀。その背に担うは街の明日。

北高正門前には、事情が飲み込めていない生存者が集まっていた。怪我人は春風が待機させていたオンリーワン医療部に運ばせ、残った生徒には情報部がどさくさに紛れる形で話を聞き出している。
既に、学校に仕掛けられたカリュプソの魔法は解け掛かっており、何名かは曖昧になっていた校内にいた頃の記憶を取り戻しつつあった。
「小さな地獄だな」
甦った記憶。ソレに対する恐怖に泣き喚き、ソレに対する怒りに任せて暴れ回る学生たちを眺めながら春風は呟く。
そこに、正門から現れる新たな人影。
「重いンだよちきしょう！」
一を背負った三森だった。
三森は一を乱暴に地面へ投げ捨てる。
「黄衣ナコトは医療部の車に運んでおいた」
「ん、おうご苦労」
「……三森冬、貴様に労ってもらう道理は無い。それより、一一も魔法の影響を受けたのか？」
魔力による頭痛と、コンクリートに激突した際の痛打に呻く一を見下し、春風は涼しげに問い掛けた。
「知るか」
「だろうな」

「しっかしひでェ有様だな。おい、情報操作とかどーすンだよ？」
「余計な世話だ。……中で何が起こっている？　『館』はどうした？」
　先程春風は、体調の収まったナコトから、既に二人の魔女を仕留めたと聞いている。
「さあな。ま、最後の悪あがきって奴じゃねェの？」
「そうか。神野剣と立花真が向かったのだな。相手は雑魚か？」
「いや、私も行く。相手はでっけェ骨だ。ケリはすぐ付く」
　三森はポケットから煙草を取出し、火を点けた。
「ふん、つまらんな」
「……おい、それよりこいつ大丈夫なンだろうな？」
「一一か？　黄衣ナコトの話では問題ないらしい。直に痛みも収まるという事だ。尤も、一一の方が魔の影響を受けやすいので、苦しむ時間が延びる、と」
「へっ、そうかよ。おらっ、迷惑掛けンじゃねェぞ」
　三森は蹲る一の尻を軽く蹴り上げる。
「せーぜー、こいつの面倒見といてやってくれ。私はあっちのガキのお守りに行ってくる」
「そうだな、精々、動けない一一を使って色々試してやるとしよう」
　春風は一に肩を貸し、悠々と立ち去っていく。
「……一言多い奴だなホント」
　彼女らを見送り、三森も学校に、戦場に戻った。

　がしゃ、がしゃ。
　音を立ててどくろが歩く。形を持たない怨念が、形を持ってこの世に生まれた。
　がしゃ、がしゃ。
　音を立ててどくろが歩く。野垂れ死んだ人々の呪いが、殺された人々が、その恨みを生者に当て付ける為に。

怨嗟の集合体。贄に捧げられたモノたちが自ら呼び寄せ、溶け合い、変わり果てたその姿。巨大な、骸骨だった。

「こいつが……」

骸骨のソレを間近にして、神野の背筋が嫌でも凍る。あまりにも分かりやすい殺意と怨念が、生きている自分たちに降り注がれていた。

「やろう、ボクたちの意味だよ」

立花が剣を抜く。

「……でかいな。どう攻める？」

「やり方は変わらないよ。大きくても、骨は骨だからね。ボクは正面から行く」

「賛成」

風を裂き、神野らを薙ぐべくソレが攻撃を仕掛けてくる。

グラウンドの砂が風圧で舞い上がり、砂煙が視界を覆う。立花は目を瞑り、砂塵を無理矢理抜けて刀を振り下ろした。だが、固い。刃は骨を断ち切れない。

「けん君っ、薄い場所を狙うんだ！」

「分かった！」

神野は正面、脛に当たる部分に竹刀を薙ぐ。骨に弾かれる感触、瞬間、彼の頭に声が届いた。

「……うあっ？」

――殺してやる。

優しさなんて一片もない。他人を顧みず、自身の望みをどこまでも真っすぐに届ける暗い音。

「なんだってんだよ！」

神野は声を荒げ、その音を掻き消す。

――お前も死ねば良い。

竹刀を振る度に、ソレに打撃を加える度に声は神野を苛み続けた。
その声は神野の心の底に溜まっていき、彼の腕を鈍らせる。どうして、重い。悪いのはそっちだ。自分は皆を守る為に戦っている。自身を正当化しながら必死に竹刀を握った。振るった。なのに、どうして？
「けん君っ」
「うわあっ！」
雑念が神野を鈍らせた。手を払うだけの、ソレの鈍重な攻撃が彼に直撃する。竹刀で防ぐ事も出来ないまま塵の様に吹き飛んだ。舞い、落ちる。砂埃の舞うグラウンドを転がり、地面に突っ伏す。
「……あ、あ……」
体が痛い。胸を強かに打ち付けてしまい、呼吸がし辛かった。空気を吸い込もうと口を開ければ、容赦なく、ざらりとした砂が口内に流れ込む。その上、
「けん君、逃げて！」
追撃だ。大きな影が神野を覆い隠すが如く這いより、がしゃがしゃと音を立ててどくろが歩く。
逃げなければと脳は訴えるが、体が付いてこなかった。背中が痛む。足が震えて声もろくに出せやしない。
空気を切り裂く鈍い音。待ったなし。ソレが骨の拳を振り上げ、下ろす。まともに食らえばただではすまない。もう一つ、足音。軽快な中にも焦りの浮かぶ立花の音。援護に回ろうとしているが、もう遅い。そこからでは間に合わない。
覚悟を決めて、神野は目を瞑った。
――ぐしゃり。
ソレの拳が大の字に倒れた神野に向けて振り下ろされる。微塵に砕ける。砕けて、ばらばらになる。
「諦めてンじゃねェぞ！」
降り注ぐがさつな声に目を開ければ骨の雨が降っていた。

「……あ」
神野の前に立ち、
「見せろっつったろーが、潔く寝てンなボケ」
彼を詰る赤い影。
砕けたのが自分ではなくソレの拳の方だと気付くには少し時間が掛かった。
短い金髪、赤いジャージ。勤務外、三森。
「――――！」
ソレは新たにやってきた勤務外を警戒し、乾いた音をたれ流しながら距離を取る。
「三森さん、あの……」
「立てよ、そーいう話は帰ってからだ。まずはあいつを片付ける」
「ふゆちゃんっ」
三森の背中に立花が飛び込んできた。
「あああ、うぜェ！　離れろ！」
「助けに来てくれたんだね、ありがとうっ」
「やり方が温いンだよ、お前らは」
救援に安堵し、安堵した事が少しだけ情けなくて、神野は立ち上がる。
「……あいつに触れたら、その、声が聞こえてきました」
「あー、殺すだとか言ってやがったな。舐めやがって。お前ら騙されンなよ、手も抜くな」
「でも、あの声は……」
「聞き覚えでもあったか？」

――殺す。殺す。

「無いです。でも、やりづらいです」
「知るか、やるぞ。私の指示に従え」
三森はソレを睨み付けた。敵意と殺意が籠もった、ぎらつく瞳。

その眼に気圧され、ソレは勤務外三人を見返した。
「おら、死にたがりの間抜けが真っすぐ来るぞ」
がしゃ、がしゃ、がしゃ。耳障りな音を立て、どくろが拳を上げて走りだす。
三森の左右に神野と立花が並んだ。
「どうするんすか！？」
「馬鹿正直に相手しようと突っ込むな、三人いるんだ、死角に回って足狙え！」
「うん、分かった！」
頷き、神野は右から、立花は左からソレに回りこむ。そして三森は馬鹿正直に真っ正面から突っ込んだ。

「ん……」
目を開ければ、知らない場所で寝かされていた。首を巡らし、状況を確認してみる。どうやら自分は車の中、後部座席を占領しているらしかった。広さからして、ワゴンだろうか。そんな事を考えていると、
「目が覚めたか、一一」
前方から無感情な声。
「……春風、ここ、どこ？」
分かってはいたが、他人からの答えが欲しくて問い掛ける。
「情報部の車の中だ。貴様が失神してしまうのでな、私が身柄を預かっている」
「黄衣は？」
「私の隣で眠っている」
耳を澄ませば、静かな寝息が聞こえてきた。とりあえず安心してみる。運転席には春風、助手席にはナコト。一は体を動かし、座る姿勢。頭をカバーに預けると、やけに痛んだ。
「あ、三森さんたちは？」

「ソレと戦闘中だ。直戻ってくるだろう」
「そっか、もう、終わるんだな」
「さあな」
「何だそりゃ」
一は再び寝転がる。
「む。終わったようだぞ、一一」
「あ？　何で分かるんだよ？」
「魔法とやらの効果が消えかかっているらしい。今、大きな音が聞こえた。何か、巨大なモノが倒れるような音だったぞ。聞こえなかったのか？」
全然聞こえなかった。一は今更ながら耳を澄ましてみるが、聞こえてくるのはナコトの安らかな寝息だけ。
「まあ、終わったんならそれで良いや。それで？　お前は家まで俺たちを運んでくれるのかよ？」
「いや、無理だ。私は免許を持ってないからな」
「……つかえねー」
寝返りを打つ。
「人の事は言えないだろう。一一、貴様こそ、資格も免許も持っていない筈だ」
「馬鹿にすんなよ、漢字検定くらいは持ってら」
「準二級だろう。履歴書に書けるのか？」
「バイトの面接なら。って言うかさ、漢字馬鹿にすんなよ。あと、どうして俺が準二級って知ってんだ」
「さあな」
春風は意味も無いのにクラクションを鳴らした。その音が頭に響いて、一は顔を顰める。
「……対向車？」
「いや、押してみたくなっただけだ」
迷惑な奴だ。そう思い、一は目を瞑った。

がしゃ、がしゃ、と。
音を立てて、どくろが倒れた。下肢の骨が砕かれ、立っていられなくなったのだろう。実に呆気なく、戦闘は終わりを迎えている。
「あンだよ、パンチ一発で終わっちまった」
「美味しい所、三森さんに持ってかれちゃったな」
「？　骨って食べれるの？」
「なんでもない」
小首を傾げる立花を無視して、神野は倒れたソレに向かって歩いていく。
「……これが」
半ば、忘我。神野は完全に機能を停止させたソレを改めて眺め、呟いた。
守りたかった。その一心でこいつを倒した。
――死ね。お前も。

今もまだ、頭の中にあの声が響いている。
聞き覚えのある、誰かの声。この学校に生きていた、誰かの音。
守れなかった。
守りたかったのに。
「けん君、どうしたの？」
「なんでもない」
立花は声の正体に気付いていたのだろうか。幾分かぶっきら棒に返事をすると、神野は竹刀をソレに向かって放り投げた。
「あ？　いらねェのか、それ」
「俺のじゃありませんから」
「ふーん？」
「三森さん、一つだけお願い聞いてもらって良いっすか？」
神野はどくろと竹刀を見つめながら、声を振り絞る。自分で思っ

ていたよりも、声は震えていて頼りなかった。
「……なんだよ？」
「こいつら、燃やしてくれませんか？」
「こいつらって、ソレと……」
「竹刀です。返さなきゃ、いけないんで」
訝しげにする三森に、神野はぎこちなく笑って誤魔化そうとする。
「……ダメ、っすか？」
「天まで昇れって奴か？　良いぜ、嫌いじゃないからなそーいうの」
三森は薄く笑い、指の腹と腹を擦り合わせ火を灯した。
「けん君、良いの？　だってその竹刀、安田君のじゃ……」
「良いんだ。俺の勝手だけど、そうするのが一番だと思う」
本当に自分勝手で、都合の良い話だ。守れなくて、それでもこうしてやれば。
「剣道が好きだったから。俺も、あいつも。こうすりゃ、向こうでも竹刀が振れるだろ」
「……けん君」
神野は、立花の目を見れなかった。同情か、憐憫か、それとも哀れみか。彼女の瞳に宿った感情を直視するのが怖かったから。
「おい、火ィ点けンぞ」
三森が促すので、神野はゆっくりと首肯する。
「……ま、こんなんで浮かばれるかは知らねェけど」
火が、点いていく。赤く、激しい炎がソレの体に行き渡り、やがて炎は竹刀にも。その光景を焼き付けようと、神野は目をしっかりと開いた。
「皆、ごめん」
竹刀はすぐに燃え、紅蓮の中に消えていく。黒煙がグラウンドから、魔女の夜宴から逃れるように空へと上っていく。後を追うように、ソレの体も少しずつ融け、燃えていく。
呪いの声は、神野の頭から徐々に消えていった。許してもらったとは思わない。ただ、魔法が切れただけだと、自分自身に言い聞か

せる。
「ごめん……」
謝罪の声は、ごうごうと唸る火の音で聞こえなかった。誰の耳にも届かず、誰の心にも響かない。それでも、神野は火が収まるまでの間謝り続けた。

鎮魂。死者の為の、手向けの炎。
「派手にやられちまったねえ」
その炎を眺めながら、魔女は呟いた。
黒い三角帽と、黒いマントを身に付けた女。彼女は『館』のカリュプソからランダと、そう呼ばれていた女だった。
「『館』もそろそろ潮時かね」
ランダの声には悲壮感など皆無で、むしろ楽しそうとも言える。
彼女はしばらくの間炎を眺め、マントを翻してその場から去った。

こうして、北駒台高校を襲った悲劇は幕を閉じた。
一フリーランスである『館』。総勢五名の魔女が引き起こした小さなサバトは勤務外四名、元フリーランス一名、学内にいた教師生徒合わせて百余人を巻き込んだ事になる。駒台では先日のアラクネ事件に続く大きな事件だった。犠牲者の数だけを見るなら、アラクネ事件よりも上を行っている。
ちなみに、今回の事件に当たった勤務外四名に目立った負傷は無い。巻き込まれた一般の死者、負傷者、生存者の正確な人数は把握出来ておらず、しかし、学内の殆どの人間は惨たらしく殺されていた。一方で、『館』五名の内三名の死亡が確認されており、その内キルケと呼称されていた魔女は勤務外店員三森冬が欠片も残さず灰にしたという報告があった。残った二名、ランダと呼ばれていた魔女はオンリーワン近畿支部情報部が目下捜索中。残りの名無しの魔

女の行方は、ランダ共々依然として知れない。
禍根の根を残したままではあるが、事件は一端の終局を迎え、被害にあった北高は数日間の間、休校という形を取るらしい。生徒たちの受けた精神的苦痛は甚大であり、中には重傷を負い、数ヶ月の入院を必要とする生徒もいる。それでもまだ、救いはあった。『館』の情報不足である。即ち、今回の事件において、北高が創立記念日だった事である。犠牲者の数が大方の予想よりも少なくて済んだのはこの為だろう。不幸中の幸いと言うにはおこがましいが。

28じゃなくて3日後

「先輩、私は最近有名になりたいと、とみに思うのだ」
学校にはあまり来たくなかった。それでも、生命の危機より、単位が足りないと留年してしまうと言う危機感から、一は大学に来ている。既に、『館』が北高を襲撃してから三日経っていた。
「有名ねえ。もう充分フットサル界じゃ有名じゃないのか？」
「違う。もっとこう、大衆に愛される様な存在になりたい」
「ふーん、アレか、お前芸能界とかに興味あんの？」
今日受けるべき分の講義は終わっている。楯列はとっくに帰っていたが、一は部活に行くと言う早田に付き合い、門までは遠回りをしてグラウンドまで向かっていた。
「どうだろう。確かに興味はあるのだが、自分からはその道に進みたいとは思っていない」
「……だったらスカウトとか？」
隣を歩く早田早紀は、黙ってさえいれば、そもそも、この尊大な喋り方さえ矯正すれば、背が低く、肌が健康的に焼けていて、そこそこに可愛い部類に入るのではないかと、一はそう思う。
「スカウト？」
「良く聞くじゃん。街で歩いてたら芸能のスカウトに声掛けられてはい芸能界デビューっての。まあ、この辺じゃ駄目だろうけど」
「そうか、だから私に声が掛からなかったのか。もっと都会っぽいところを歩くべきだった。いかんいかん、私とした事が、これは猛省すべきだな」
「試してたのかよ。やっぱ興味あるじゃん」
先ほど学内のコンビニで購入したコロッケパンをビニール袋から取り出し、袋を開けた。
「私も女だからな。信じられないのなら、どうだ先輩、試してみるか？」

「何でこう、いつもいつも下ネタに持っていこうとするんだよ。そんなだから彼氏の一人も出来ないんだお前は」
「愚問だな、私は先輩以外の男など必要ない。世界から全て消え去ってくれても良いとさえ思っている」
「お前が消えた方が世界にとって有益だな」
コロッケパンに被り付く。まずくはなかったが、やっぱり、温めて貰えば良かったと今更ながらに思う。
「先輩先輩」
「何だ後輩」
くいくいと、早田に袖を引っ張られた。
「一口分けてくれ」
「……やだよ。お前の口すげえでかいじゃん」
一は前に、ハンバーガーを一口で半分持っていかれたことを思い出す。
「なっ、乙女の口が大きいなどと。先輩は本当に下種だな。まあ、そんなところも好きなのだが」
「おだてても何も出ないぞ。今から買って来れば良いじゃん。まだ部活始まるには時間あるだろ」
「私は今猛烈に先輩のコロッケパンが欲しいのだ。自分で買ってきても仕方あるまい。それとも何か、先輩は私が部活中に栄養失調で倒れても構わないと言うのだな？」
「コンビニのパン一口で栄養なんて補給出来るかよ」
縋る早田を無視して、一は半分程度コロッケパンを飲み込んだ。
「甘いな先輩。私が補給するのはパンではない。先輩の愛だ。私にパンを分けてくれるという先輩の行為と好意がどこまでも私を強くする。具体的には戦闘力五十三万くらい強くなる」
「わー、具体的だー」
「とにかくパンをよこせ先輩。私は小腹が空いたのだ」
「お前が本当に俺の事好きなのかどうか、最近分からなくなる」
仕方ないので、一は袋ごとコロッケパンを渡す。

「流石先輩だ。私の様なしがない雌豚にさえ気に掛けてくれるとは。この恩は私のつまらない一生を掛けても返しきれる物ではないな。という訳で先輩、私を嫁にしてくれないか？」
「食べないならパン返せ」
早田は黙って、素直にパンに口を付けた。口が大きいと言われたのを気にしているのか、もそもそと、小動物みたいな仕草でパンを食べ始める。
「……ホント、黙ってりゃ可愛いのに」
「ふぁふぃふぁふぃっふぁふぁ？」
「飲み込んでから口を開けなさい。あー、ほら、パン屑が零れてる……」
「ん。んん。先輩にみっともないところを見せてしまったな。しかし、これで先輩の私への愛が確保出来た。部活にも安心して精を出せるというものだ。本当に先輩に対しては感謝の念が堪えない。ところで先輩、喉が渇いてしまったのだが」
「唾でも飲んでろ」
「先輩の吐いた唾ならむしろ望むところと言えるだろう、さあっ」
一は頭を掻き、鞄からペットボトルのお茶を取り出した。
「おお、先輩は準備万端用意周到だな。真の紳士だ。男の草分け的存在な先輩、ありがたく頂こう」
「取って付けたような誉め言葉ありがとう」
早田はペットボトルの蓋を開け、飲み口に何度も何度も舌を這わせる。真顔で。何だかとってもエロかった。
「……あのさ、何してんの？」
人目があるので一は自分よりも小さい早田を物陰に隠しながら聞いてみた。
「うむ、やったあ先輩と間接ディープキスだー。と思って」
「君には恥じらいって物がないんだね。お兄さんがっかりだよ」
「あー、そうか。先輩はそっちの方がお好みだったか。早紀失敗☆」
「舌出すなボケ。引っこ抜くぞ」

早田からペットボトルを取り上げて一はゴミ箱に視線を遣る。少し迷ってから、捨てた。
「あああああああ！　折角私の唾液をまぶしておいたのに！」
「大声で馬鹿な事喚くんじゃねえよ！」
大学は楽しい。一は内心、そんな事を思った。

早田と別れ、一は帰路に就く。その途中、大学内の喫煙所に良く知った顔を見かけた。声を掛けようかどうか迷って、結局声を掛けることにする。
「お前、煙草なんて吸うんだな」
喫煙所のベンチに座る春風。珍しい光景だった。ちょっとテンションが上がったが、それが悔しくて、一は彼女に背を向ける形でベンチに腰掛ける。
「やはり声を掛けてきたか、一一」
春風は三日前と相変わらず、無感情な声で、恐らく無表情に口を開いた。
「なんでお前が俺の大学にいるんだよ？」
「ふん、私を誰だと思っている。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属春風麗だ。好きなようにやらせてもらうさ」
「……それで、なんでここにいるんだよ？」
「先日の『館』についてだがな」
その言葉に、一は思わず口を噤む。
「調べる内、色々と面白い事が分かったのでな。伝えてやろうとわざわざここに来てやった」
「大学にか？」
「場所はこの際関係無いだろう。それよりも、聞きたいのか？　聞きたくないのか？」
どうせ、聞きたくないと言っても無理矢理聞かせるんだろう。一は苦笑し、続きを促した。

オンリーワン北駒台店、バックルーム。
「お疲れ様でした」
「ああ、ご苦労」
バックルームを出て行く神野の後姿を眺めながら、店長は煙草に火を点ける。
「……ボス、ケムいんだケド」
「ならフロアに行けば良いだろう」
わざとらしい手振りで紫煙を扇ぐジェーンに一瞥をくれ、店長は椅子に深く腰掛けた。
「ゴーウェスト、神野たちの様子はどうだった？」
「ンー、いつも通りヨ。あんなことがあったのに、最近の学生ってストロングなのネ」
「お前の方が年下だろうに」
「そーだったカシラ」
ジェーンは店長の隣のデスクで書類とにらめっこしている。伝票整理やレジの点検表と言った雑務。本来なら、店長がやるべき仕事であった。
「こっちはてっきり、あいつらには心が弱ったので休みを下さいとでも言われると思っていたんだがな」
「お仕事が増えなくて良かったじゃナイ」
「その言い方では、私がまるで仕事が嫌いだと言っている様なものだな」
店長は喉の奥でくつくつと笑う。
「あれから三日ネ。本当、お兄ちゃんが無事で良かった」
「アラクネ以来だったな。中々でかい事件だった気がする」
「アラクネ？　あー、アタシがいなかったころのヤツね」
ジェーンは少しだけ書類から目を上げ、またすぐに作業に取り掛かった。

「あの頃に比べれば、随分と人数は増えたがな」
「フフン、アタシたちのお陰で楽になったでｓｈｏｗ？」
「……ああ、まあな」
人が増えた分、面倒事も増えてしまったが。店長は煙と一緒にそんな言葉も吐き出す。
「……そーいえば、タチバナたちはいつまでスクールが休みなの？」
「今日までと聞いたが、あんな事があったんだ。昨日の今日で事件現場に行きたくないだろうさ。学校なんて当分はまともに機能しないだろうな」
「ラッキーじゃナイ、休みがもらえて」
「ああ、これで神野たちを働かせやすくなるな。一の作ったシフト表には悪いが、やりたい放題回すとしよう」
怪しい会話を交わしながら店長と社員は笑うのであった。

「火祭愛美（ひまつりなるみ）、馬越泰江（まごしやすえ）、嵐山明衣（あらしやまめい）」
春風はぽつりと、三人分の名前を挙げた。
「あー、誰それ？」
「魔女の名だ」
「……魔女？　魔女って『館』の？」
「それ以外に誰がいる」
春風がさも当たり前に言うので、一は納得せざるを得ない。が。
「え、いやおかしいだろ。何でソレが人間の名前持ってんだよ」
「別におかしくはないだろう」
「……ん、ああそうか。コードネームとか、そんな感じか」
「いや、魔女の本名だ」
「本名？」
益々意味が分からない。
「一一、貴様は人間だろう。人間から人間が生まれ、生まれた人間に名前を付ける事の何がおかしい」

「……なあ。まさか魔女って、人間なのか？」
「少なくとも、『館』の三人はな」
春風の持っている煙草の煙が、風に揺れる。
「もっと詳しく説明してくれよ……」
「キルケ、パシパエ、カリュプソ。この三人が『館』内で死亡が確認されている」
「キルケってのは人間を豚にしちまう奴だよな」
思い出したくもない。
「ああ、そうだ。火祭愛美だ」
「……つまり、キルケって魔女は火祭愛美って人間って事なのか？」
「……貴様は魔女について大きな誤解をしているようだな」
無感情な声。それが一の感情を逆撫でる。
「してねえよ。要は魔法が使える女のソレだろ」
「違う。魔女とはソレではない。人間だ」
「……はあ？」
「ヨーロッパで、十五世紀から十七世紀に掛けて多くの人々が魔女の嫌疑を掛けられ、宗教裁判などで処断されたのを知っているだろう」
「知ってるよ。魔女狩りだろ、中学で習った。本当は魔法なんて使えないマイノリティの人たちが犠牲になったんだってな」
馬鹿にされたくなくて、一は頑張って記憶からそれだけを引っ張り出した。
「ふっ、そうでもない。多くは貧民階級の、更に言えば高齢の女性が告発される傾向にあったようだな。他にも同性愛者や姦通者、果ては隣人の恨みを買った人間などなど。魔女のバーゲンセールだな、くだらん」
「……あと、アレだろ。助産師みたいな人たちが槍玉に挙げられてたんだろ。中途半端に賢くてモノ知ってたから」
「いや、良く聞く話だが、実際の裁判記録ではそうでもない。産婆や助産師、占い師、いかにもな職業の人間はそこまで告発の対象に

はなっていなかったそうだ。聞きかじりで知った風に話すのはどうかと思うぞ、一一」

「失礼しました……」

結局馬鹿にされてしまう。どうも、ナコトや春風とは相性が悪い気がした。

「つまりだな、魔女なんて殆ど実在しないと言う事だ。考えてもみろ、彼女らが本物なら裁判に大人しく掛けられる物か」

「……でも、『館』は」

「偽者だ。キルケは人間を豚に変え、パシパエは体から虫を湧かせ、カリュプソはモノを隠す力を持っている。だから彼女らが人間ではない、魔女だと言うのか？」

春風は煙草には口を付けないまま、無感情に話を続ける。

「ならば、体から火を出す女も魔女か？　狼の血が流れている女も魔女と呼べるのか？　違うだろう。彼女らも立派な人間だ。決して魔女と呼ばれるような器ではない」

「言い包めようとしても無駄だぞ。本物の魔女でもなけりゃ、あんな事出来るもんか。あの日、何人死んだと思ってんだ」

「……火祭愛美は幼少のみぎり、家族を強盗に殺されたそうだ」

「なんだよいきなり」

一を無視して、春風は口を開いた。

「馬越泰江は家族に捨てられ、嵐山明衣は十代の頃に異性から酷い暴行を受けたと聞いている」

「……だから、なんだってんだよ？　まさかお前、同情でもしろって言うつもりか？」

「いや、ただ、ただの人間が力を得て魔女になる。一体どんな状況に追い遣られればそんな事を思い付くのだろうと思ってな」

殺されたから殺す。捨てられたから捨てる。やられたらやり返す。

「お前も何か、自分がやられたら他人にやり返しても良いと思ってるのかよ」

「馬鹿な、有り得ん。私たちは人間だぞ。いかなる理由があったと

して、殺人は決して許される行為ではない。法で定められているからな、ルールには従うさ。この世界で真っ当に生きていく為のシンプルなルールだ。それが守れない奴は人間ではない」

「そうかよ。で、結局何が言いたかったんだ？　俺らが殺した三人の魔女は、実は昔酷い目に遭っていた人間でしたーってか」

「概ねそんな所だ。一一、貴様の説明は実に分かりやすい」

一は舌打ちして、小さな抵抗を示した。

「生存者から話を聞いた限りでは他にもまだあるがな。貴様も今回の事件について疑問を抱えている筈だ。まず、『館』が北高の創立記念日に来襲した理由」

「……偶然だろ。フリーランスがそんな都合良く動いてくれるのかよ」

「そして、骸骨型のソレの不可解な動きだ」

「骸骨の？」

「ああ。私は動いているところを見た訳ではないが、数少ない生存者の話によると、どうにも、奴らは扉を開けられない様子だったらしい」

春風は淡々と喋る。そうしている間にも煙草は短くなり、彼女はそれを捨てて、新しい物に火を点けた。

「……扉を開けられないって、そんな事ないだろ。幾ら自分の骨が脆くても、剣なんて持ってた訳だから無理矢理こじ開けられるし、窓だって割れるじゃないか」

「それがそうでもないらしい。現に、生存者の九割が室内にいた者だけだったからな。教室、体育館、トイレ。ドアのあるところに隠れていた者だけが助かっている。外にいた者は大抵死んでいた。一一、貴様も見ただろう？」

グラウンドでの、あの地獄を見た。一は頭を振り、陰惨な光景を脳内から振り落とす。

「それも偶然だろ。確かに、骨は『館』が操ってたっぽいけどさ、そんな事する理由ないじゃねえか」

「陣もそうだが、恐らくは学校の事情に詳しい者の手引きがあっただろうな」
「内部、犯？」
「さあな。だが、『館』の魔法陣が発動したのは午前三時頃。学校への出入りが禁じられたのが午前九時。部活の始まる時間帯だったそうだ。『館』が何時から侵入していたのかは知らんが、黄衣ナコトの話からすると、今回のは大掛かりな陣だったらしい。少なくとも前日には何者かが陣を仕掛けていたと思われる」
楽しそうに喋る奴だと思いながら、一はポケットから飴玉を取り出し、包み紙を開いた。
「警備員からはろくな情報が聞き出せなかったがな、少なくとも午前三時までに不審者や部外者を見てはいないらしい」
「内部犯ねえ。まあ、確かに。ふらふらと動いてるように見えて『館』は自分たちから姿を見せてたしな。学校の地理なんかは把握してたのかもしんないな」
「……確証は無いがな、もしかすると生存者の中に『館』が紛れているかもしれん」
飴玉を舌で転がしながら、一は春風の顔を盗み見る。無表情だった。
「そりゃ無いだろ。だって自分だって骨に殺されちゃうかもしれないし、バレるかもしれないじゃん」
「少なくとも、魔女は骨を操れるらしいがな。しかしこう考えてみてはどうだ。骨は魔女には危害を加えない。だが、魔女でないモノには危害を加える、と。内通者が一般人ならば、骨共には区別が付くまい」
「そんな事言われてもなあ」
「だから、魔女は骨に扉を開けるなと命令していたのではないか？　一般の内通者の命を守る為に」
「魔女が？　一般を守る為に？　だったら最初から学校なんて襲う筈ないだろ」

馬鹿馬鹿しい。一は飴玉を少しずつ溶かしていく。
「ならばこう考えてみろ。その一般は魔女の弟子だったとな。ならば納得がいくのではないか？　一般は一般でも、『館』の一員なら魔女だって守らざるを得まい」
「……でも、結局は推論だろ？　納得出来るっちゃ出来るよ、それが本当ならな。辻褄も合うし」
「創立記念日に事を仕掛けたのは、学内の人間の犠牲を少しでも減らす為、か？」
「結局犠牲者は出てるんだ。都合の良い解釈だよ。本当は何も考えてなかったのかもな」
「かもしれんな。だが、そうかもしれない。『館』にも少しは良心が残っていたのかもな」
そんな事はない。あんなに楽しそうに人を弄んで殺せるんだ。一は奥歯を噛み締め、豚の様に死んでいった女子生徒を思い出す。
「お前が何を言いたいのか知らないけどさ。やっぱり、『館』は本物の魔女だよ。同情なんて出来ない。あいつらは人を殺したんだぞ」
「……一一、貴様にはそれを分かってほしかった」
「あ？」
「復讐だろうがなんであろうが、人間として生きる以上人間の法を破ってはならんとな。殺人など、その最たるものだ。人を殺してのうのうと生きるモノを私は許せん」
「……お前さ、確か家族をその……」
言い辛そうにする一を見て、春風は鼻で笑った。彼女にしては分かりやすい感情の変化。
「殺された。三森冬にな。だが安心しろ、復讐する気はない。嫌悪は目一杯しているがな」
「その話、本当なのか？」
「信じたくなければ信じるな。信じたければ勝手にしろ」
「いや、その割には三森さんと普通に喋るだろ。本当に嫌いなのかなって」

「仕事だからな」
春風は短く言い切り、二本目の煙草を乱暴に投げ捨てた。もしかして機嫌が悪いのだろうか。一は話題の選択ミスを少しだけ後悔する。
「えっとその、ごめん。やっぱり触れられたくない事だったよな」
「……気にしていない」
「気にしてんじゃんよ。あー、それよりさ煙草吸わないのか？　さっきから火を点けて持ってるだけじゃん」
我ながら無理矢理な話題転換だと、一は気恥ずかしくて顔をそらす。
「私は吸わない。情報部の仕事柄、臭いが付くと不便なのでな。居所がバレる」
「でもさ、煙草吸ってる忍者を漫画で見た事あるぞ俺」
「アレは忍者ではない。ファンタジーな世界だからな。問題ない。問題ないってばよ」
妙な語尾が気になったが、一は黙殺した。
「じゃあなんで煙草持ってんだ？」
「……この銘柄の煙草は弟が吸っていた」
「え？」
「家で良く吸っていた。どうにも、忘れられなくてな」
春風は三本目に火を点け、煙草の先から上る煙に息を吹き掛ける。
「ブラコンじゃん」
「否定はしない」
「……おい、まさか、お前の弟が俺と同じ大学に通ってたとか無しだぞ」
「否定はしない」
「しろよ」
「私の弟と、一一、貴様の顔は良く似ている」
吐き気がする。一は気持ち悪くなってベンチから腰を上げた。
「ふっ、冗談だ。弟は貴様とは似ても似つかぬ良い男だった。私に

は過ぎた弟だったよ」
「……これみよがしに煙草なんて持ちやがって。お前本当は身内自慢に来たんじゃないだろうな」
「さあな。だが、この時期になると感傷的になってしまうのは確かだ」
「……命日でも近いのか？」
「そんなところだ」
ゆらゆらと揺れる煙を眺めながら、春風は無感情に呟いた。
「しかし勿体ないな。吸えば良いのに」
「一一、貴様が来る前に試したのだが駄目だ、むせた。私の繊細な喉では耐えられない。勿体ないというのなら、どうだ、貴様が吸うか？」
目の前の、鉄仮面でも被っている様な無表情女がむせるところを想像してみると、一の溜飲は少しだけ下がる。
「自白剤とか仕込んでそうで嫌だな」
「面白そうだな。次の機会に試すとしよう」
「お前といい黄衣といい、俺の周りにゃ口の減らない奴ばっかだな」
言いながらも、一は春風から煙草を受け取った。
「でも俺禁煙してんだよな」
「知っている」
「嫌がらせかよ。まあ良いや一本くらい」
言い聞かせつつ、一は煙草に口を付ける。久方ぶりの喫煙はやけにきつかった。頭がくらくらして、気分が悪くなる。
「……うー、止めときゃ良かった」
「一一、煙草とは美味いのか？」
「あー、今はあんまり。知り合いに言わせりゃ百害あって一利無しだと」
「そうか」
そこからしばらくの間、二人が会話を交わす事は無かった。一は煙草を燻らせ、帰路に就く学生の流れを眺める。向かい合わせに座

っている春風が何を考え、何を思っているのかは分からない。
家族を殺されても復讐なんて馬鹿らしい。どんな理由があろうと殺人は駄目だと、春風はそう言った。一はその通りだと思う。ナコトにも『館』にも悪いが、復讐なんて何も生み出さない。増えるのは死者と新しい憎悪だけで、なんとも馬鹿らしく非生産的な行動だとも。
「なあ、もし法なんて無かったらの話だけどさ。そしたらお前、復讐してたか？」
「さあな。全く分からん。一一、貴様こそどうなんだ？」
「……俺は家族を殺されてないからな、分かんないよ」
「ふっ、そうか。家族が健在ならそれに勝るものは無い。精々孝行にでも励め」
春風は立ち上がり、煙草の箱をスーツの内ポケットから取り出した。
「お前にしちゃ、随分とまともな事を言うんだな」
「そうか？　いや、そうかもしれんな。……一一、貴様の故郷は駒台か？」
「……いや、違うけど。なんだよ、俺の事は調べてるんじゃないのか？」
「情報部の私にだって分からない事はあるさ。まあ良い、話は粗方終わった。ではな」
一は振り返らず手を上げる。彼女との別れに際しては、これが正解だと思っていたからだ。
「ふう……」
短くなった煙草の灰を落とし、吸殻を灰皿で揉み消し捨てる。振り返ると、やはり春風の姿はどこにもなかった。遠ざかっていく気配も、足音の一つもさせないで。
自分ももう帰ろうと思いベンチから立ち上がると、春風の座っていたところに彼女の持っていた煙草の箱とガスライターが置かれていた。一は小時迷い、それらをズボンのポケットにしまい込む。今

度会った時には文句の一つでも言って突き返してやろうと思い、頭を掻いた。

今度。

その機会が与えられる事を疑わないで、一は歩き出す。

陽は沈みかけ、もうすぐ夜になる。とりあえずは、この街の未来を守ってくれた人たちに感謝をしながら、一はポケットから煙草を取り出し、火を点けた。口を付け、紫煙を吸い込む。

「……まずい」

勿体無かったが、煙草はすぐに捨てた。禁煙がいつまで続くは分からないが、少なくとも春風の弟が吸っていたらしい銘柄を吸う事はやめておこうと、そう思う。

28じゃなくて3日後（後書き）

今回、サブタイトルにはゾンビ映画などのタイトルを元ネタに使わせてもらいました。

でも、その手の映画を見た事はあまりありません。だって怖いじゃないですか。僕は人が無暗に死んだり無残に殺されたりするのが苦手なのです。血とか臓物出まくりとか。想像しただけで恐ろしい。よくもまあそんな残酷な話を思いついて、あまつさえ作品に出来るものです。

もろびとこぞりて

歌。唄。詩。謡。詠。唱。うた。
心を届かせる為に人はうたう。
誰かに聞いて欲しい。響かせたい。自身を他者に分かって欲しい。
だから、うたう。人はうたう。

駒台の街、その中央に位置する自然公園。平日には森林浴を楽しむ人々で、休日には家族連れで賑わう、駒台住民にとっては人気のある場所だ。
だが、陽が落ちれば公園からは人気が消える。完全に、完膚なきまでにだ。理由は定かではないが、陽が落ちるとここは危険になると、多くの人がそう話す。危険の正体こそ誰も正確に説明できないのだが、それでもここには何かがある。何かが、いる。漠然とした不安。曖昧とした恐怖。それらを内心に薄々と感じながらも、人々は公園を訪れ続ける。恐いもの見たさにギリギリを行ったり来たりし続けているのかもしれない。
日常に刺激と癒しを求め、非日常には卑しい安全を欲して。人々は、駒台の街を今日も生きていた。

母親と子。ベビーカーを押す主婦。ゆっくりと、景色を楽しみながら歩く老人。若いカップル。子供たちが鬼ごっこに興じて走っている。
「平和だねえ……」
駒台中央に位置する自然公園、散歩道に備え付けられたベンチに座り、行き交う人たちを眺める男が一人。その男はオンリーワン北駒台店の勤務外店員、一一（にのまえ）（はじめ）であった。

一はつい先ほど自販機で購入したホットの缶コーヒーを両手で挟み、暖を取っている。彼と、公園内を歩く人たちが時折吐く息は白く、冬の清冷さを物語っているようだった。陽は高く、天気こそ晴れてはいるがさすがに寒い。吹く風は剥き出しになっている部分の素肌に突き刺さり、体温をじわりと奪っていく。

「……ふあ……」

だが、心地よい。一は公園内に堆積している穏やかな空気に後押しされ、あくびを一つ漏らした。彼が平日の真昼から、さして大した目的を持たないままこうしてのんびりとしていられるのは、彼が通っている大学の、午後からの講義が休講となったからだ。バイトは夕方からで時間が余っていたので、癒しめいた雰囲気を求めて公園までやってきた。

だが、どうにも居心地が悪い。確かにのどかで和やかで、先日の魔女の事を忘れてしまうほどに素晴らしい環境なのだが、行き交う人たち――特に親子や家族連れ――を見掛ける度に一の心は緩やかに沈殿していく。

一時間はベンチに座っていただろうか、少しばかり冷えてきた事もあって、一は家に帰ろうと重くなっている腰を上げた。

その時、立ち上がった一の両目が珍しいものを捉える。異質。彼は一般人に紛れ込む何かを自分だけが見つけてしまったような、言い難く気まずい気持ちに陥った。『それ』は少しずつ近付いてくる。杖を突いて歩く男性の後ろをおぼつかない足取りで歩く人物。遠めからでも辛うじて確認出来る赤み掛かった茶色い髪。端正な顔立ち。一の視線は『彼女』に釘付けになっていた。

一は逡巡し、ベンチに腰を下ろしてお目当ての女性が来るのを待つ事にする。コートのポケットから飴玉を掴んで包み紙を開いた。

風が吹き、一の体を撫でていく。包み紙が飛ばされないようしっかりと握り締めて近くのごみ箱に捨てた。ベンチに戻る途中、もう一度風が吹く。

「ん……」

口内に含んだレモン味のキャンディ。その香りを吹き飛ばすくらいの強い薔薇の香が一の鼻をくすぐった。杖を突いた老人が彼の傍を通り過ぎ、その後ろの女性がふらふらとしたままベンチに体を預ける。瞼は開き切っておらず、非常に眠そうだった。と言うか寝ている。

「……風邪引きますよ」

「……ん」

女性はあろう事かパジャマを着ていた。涼しげな水色のパジャマだけを着て、ここまでやってきたのだ。寒くないのだろうか。恥ずかしくないのだろうか。何を話そうか一は悩んで、

「久しぶりですね、ヒルデさん」

そう、話し掛けた。

一がオンリーワン北駒台店の勤務外として働いているのに対し、ヒルデは近々オープンするオンリーワン南駒台店の勤務外店員であった。

北と南。

一とヒルデは南北に分かれていても共に駒台の街を守護する勤務外であり、友、もしくは戦友と呼べる存在である（ヒルデがどう思っているか知らないが、少なくとも一にとっては）。が、それはあくまで一ら個人としての結び付きであり北と南の店自体の関係としては非常に険悪であった。同チェーンの店とはいえ、街の客を奪い合うのだから仲が悪いのは当然とも言えるし、何よりオンリーワンの特殊性に問題がある。

即ち、勤務外サービス。

特殊極まりない存在のソレに対抗する為に特殊極まりない存在の勤務外を擁する店なのだ。特殊、特異、特化、異常、非常、異能、異形。素晴らしく狂っている。人間の客を取り合うならまだしも、彼らはソレを獲り合うのだ。

何故なら、オンリーワンの各店にはソレを倒した分褒賞が手に入るからである。

倒せば倒すほど、目に見えて分かりやすい金と、その後から見えない名誉が付いてくるのだ。自身の活躍が他者の目に留まり地位が向上する可能性は、オンリーワンでは決して低くない。雇われの身から雇う側に出世できる。実力主義と言えば聞こえは良いが、その為の手段は命を賭けて殺し合いを望み、命を懸けて殺し合いに臨む荒々しい力頼み。まるで群雄割拠の戦国時代だ。到底現代の世で採用される手法ではない。

しかし、オンリーワンでは罷り通ってしまう。各社員も雇われの各店長もアルバイトだって関係なく容赦もなく上を見れ、上に行けるシステム。

だからこそ、オンリーワンでは同地区に二店舗以上出店する事を控えていた。いや、恐れていた。単独でさえ恐ろしい、狂った力を持つ勤務外を纏めて配置すれば何が起こるか分からない。仲間割れ。共謀してのクーデター。馬鹿らしい話だが、ありえない事にしてはならない。勤務外になら馬鹿げた事だって可能なのだ。その気になれば街一つ消してもおかしくはない。いやさ街一つ消せなければ勤務外としておかしい。

世界にはバランスが必要なのだ。

しかし、駒台ではそれが起こった。同地区に店が二つ。

とある者は駒台に増加するソレへの対抗手段、戦力増強の為だと語る。尤も、裏では人間同士が己の利益と野心とを優先させるべく、何処までも白々しく何時までも黒々とした策謀と工作と策略と謀略と奸策と詭計とが渦巻いているのだ。

そんな事は露知らず。

「……ん、キミと会うのは久しぶりだね」

ヒルデは緩々と首を傾け、一に向き直った。

「お元気でしたか？」
　一の質問にヒルデは首肯で返す。彼はその答えに満足し、彼女の隣へ遠慮がちに腰を下ろした。
「あの、なんでパジャマなんですか？」
「……？」
「いや、不思議そうな顔しないで下さいよ。幾ら天気が良いとは言え、その格好じゃ寒くないですか？」
　それと、恥ずかしくないんですか？
「……寒さには、強いから」
「あー、なるほど。……ヒルデさん、熱さや痛みにも強いでしょう？」
　こくりと、ヒルデは首を振った。多分、彼女は強いのではなく鈍いのだとは、一は言わないでおく。
「でも、やっぱり人目があるから……あ、ほら、さっきの人めちゃめちゃこっち見ていきましたよ」
「……キミはパジャマ嫌い？」
「嫌いじゃないですけど、せめて何か羽織ってくるとか」
　ヒルデの格好について、知人とは言えあくまで他人である自分が口出しするのはどうかとも思ったが、それよりも彼女が他の誰かの好奇の目に晒されるのは快くないと、一は思う。
「じゃあ、コートとか……」
「ああ、良いですね」
「……ちょうだい？」
「ダメです。情けない話ですけど、俺貧乏なんで」
　ヒルデがコートの裾を掴んでくるので、一はやんわりとその手を解いた。
「……お金、ないの？」
「コンビニのバイトなんて儲かりませんよ。時給も安いし」
「そうなの？」
「……ヒルデさんもコンビニのバイトじゃないですか」

「……時給、二千円って安いの？」
「はああっ！？」
ヒルデの肩がびくりと震え、硬直していく。
「……え、え？」
「あ、あああすいません大声出して怒ってないですから」
「ほんと……？」
一は何度も頷いた。
「びっくりしただけです。……あの、時給二千ってマジですか？」
「ん」
「……同じ店なのに」
ちなみに、一般と勤務外を兼任している一の時給はつい最近四桁に達したばかりである。
「キミは、専任じゃないから」
「？　え、勤務外だけの方が時給良いんですか？」
「……ん、分からない。でも私、一応リーダーだから」
「あー」
ヒルデ。ぼけっとした彼女からは想像がつかないかもしれないが、これでも南駒台店の勤務外、戦乙女（ワルキューレ）のリーダーである。一も何度か彼女たちの戦闘を見たが、とてもとても、及ぶ相手ではないと認識していた。
「バイトのリーダーだから時給高いんですかね。良いなあ」
「……キミはリーダーじゃないの？」
「人の上に立つ気もないですし、そんな器もありませんよ」
上に立てば、責任も増える。平か下っ端の方がまだ気が楽だった。
「……南って、勤務外が何人ぐらいいるんですか？」
「ん、秘密にしろって言われてるんだけど……」
「そりゃそうですね」
「……キミになら、良いよ」
そう言ってヒルデは薄く微笑む。
「へ？　でも……」

「……まず、私たち戦乙女が四人とー」
一の困惑をよそに、ヒルデは指を折って数え始めた。
「野獣（ウールヴヘジン）が三人、狂戦士（バーサーカー）が三人、あとはー支部から応援が何人か来るよ」
「……そんなにも。あ、ウールヴヘジンとか、バーサーカーってのは？」
「……ん。チームの名前、なのかな」
ヒルデは小首を傾げた。
「ふーん、何だかプロって感じがするなあ」
同じオンリーワンの筈なのに、違いがこうも如実に現れるとは。
一は少しだけ不安になる。
「……キミは北が嫌なの？」
俯いていた一を、ヒルデが下から覗き込んだ。
「え、と、そーいうわけじゃ」
薔薇の香気が一の鼻孔に直接流れる。彼は驚き、ヒルデから距離を離した。
「あー、でも、人使い荒いし給料も良くないしいじめられたり、いじられるしなあ……」
改めて考えると、やっぱり嫌かもしれない。
「……こっちに、来る？」
しばらくの間、一はヒルデが何を言ったのか分からなかった。
「え……？」
こっちに、来る。
つまり北から南に移る、と言う事だ。言うなれば引き抜き。
「えーと、冗談ですよね？」
一の意に反して、ヒルデはふるふると首を振る。
「……んーん、本当。今ね、南で北の子たちを引っ張って来るって話が出てるの」
青天の霹靂。寝耳に水。
「なんで、だって南には勤務外がたくさん……」

「……まだ、欲しいんだって。私はそういうの好きじゃないけど」
「その話、俺以外のみんなには」
「誰にも、言ってないよ。キミにだけ……」
一は少し安心する。
「……ダメ、かな？」
「魅力的なお話だとは思いますけど、その、俺なんて勤務外と言っても弱いですよ。下っ端も良いところですし、良いところもないですから。それにほら、他の戦乙女の人たちも俺の事好きじゃないでしょう」
主に、糸原のせいで。
「……シルトたちなら心配ないよ。この話には賛成してくれたから」
「え、そうなんですか？」
「あの子たち、キミを嫌いじゃないよ……」
ヒルデは優しく笑う。
「……うーん？　意外だ」
「それにね、キミは弱くないよ」
ジッと見つめられてしまい、一は気恥ずかしくなって目を逸らした。
「買い被りですよ」
「……ふふ」
「……でも、北を首になっちゃったら助けてもらおうかな」
「ん、いつでも良いよ」

――ボトッ。
「ちみっ子、おにぎり落としたわよ」
「……お」
「お？」

「お兄ちゃんにデビルハンドが迫っている気がスル」
オンリーワン北駒台店フロア。
「デビルハンドってなにー？」
ツインテールと小さな体と拳を震わせるジェーンを尻目に、糸原は常からすれば黙々とおにぎりを並べていた。
「お兄ちゃんが危ナイ……」
「仕事しなさいよー、私がその分動かなきゃいけないじゃないの」
糸原は包装された商品用の明太子の入ったおにぎりを勝手に開け、口に銜えながら作業を続ける。
「……また、ニューフェイスが……いや、コレは、アタシよりもオールドの……？」
ジェーンは糸原が商品を駄目にした事を咎めずに、そもそもその存在を無視している様子でもあった。俯き、深刻な表情を浮かべて何事かをぶつぶつと呟き続ける。
「……」
糸原も同様に、ジェーンの存在を無視して作業に没頭していた。これが終われば、今日は終わり。夕方勤務の一を家で待っている間、北から巻き上げた新しいゲームを遊んで、一が帰ってきたらご飯を作ってもらって、ダラダラして。あはは。
楽しい妄想だった。

彼女らの事などいざ知らず。
一とヒルデはゆっくりとした会話のペースを維持し続けている。
「そう言えば、どうして公園に？」
ヒルデの住んでいる駒台山の洋館からここまでは、いささか遠くはないだろうか。彼女が車を運転したり、何か乗り物にでも乗ってやって来たとは一は考えられなかった。失礼な話ながら。
「……ん、歌をね、聞きに来たの」
「歌、ですか？」

ヒルデは幾分か楽しそうに頷いた。
「ここの公園で、ですか？」
一は意味も無く周囲を見回してみる。歌。ストリートミュージシャンでもいるのだろうか。
「ん、探してもダメだと思う……」
「あ、もう帰っちゃいました？」
「んーん、もうすぐ……」
「詳しいんですね、ヒルデさん」
「……ん、私、常連さんだからね」
ヒルデは誇らしげに胸を張り、楽しげに髪を揺らせて危なっかしい足取りで立ち上がる。
「……歌、かあ」
一はこの公園内のどこかにいる歌い手を思った。正直、音楽には大して興味がない。皆無ではないが、殆どない。特定の歌手が好きなわけでも特別好きなジャンルがあるわけでもない。勿論、楽しい感じの曲を聞けば楽しくなれるし、悲しい曲なら悲しくなれる。人間なら当然の反応だろう。それでも所詮気分による、錯覚の様なものだろうと、一は思っている。
何故なら、真に悲しい時に楽しげな曲を聞いても真に楽しくはなれない。それどころか火に油かもしれない。音楽、歌を聞いて気持ちが動くのは精神状態がニュートラルだからこそである。ニュートラルだから、外部からの刺激に作用されるのだ。楽しくなろうと思うからこそ楽しい曲を聞くのだろうし、少しでも気分が沈んでいれば悲しい曲を聞いて悲しくなる。おまけに歌詞を都合良く自身に投影して浸るのだ。
――嫌だ。
自分を律してさえいれば、音ごときで心は動かない。
一は頭を掻きながら、目を細めて何かを期待している様子のヒルデを横目で眺める。
「その、歌ってどんなのですか？　日本の人が歌ってたり？」

「……ん、歌は英語だけど、分かんない。歌ってる子を見た事がないから」
「へえ、そうなんですか？」
別段、一は歌が嫌いというわけではない。特別好きでもないから、嫌いでもないだけの話だが。つまり、どっちでも良かった。この世に、自分の周りに、歌があろうがなかろうが、大して困りはしないだろうと思っている。
「まあ、時間はあるし」
一はそう呟き、ポケットから飴玉を取り出した。包み紙を開け、いちご味のそれを口の中に放り込もうとした時、
「……ん」
手が止まり、指が鈍って地面に飴玉を落としてしまう。間抜けにも、口は開いたままで。
「――――っ！」
だが、そんな事はどうでも良い。一は落とした飴を放り出し視線を向けないまま必死に耳を傾ける。この公園のどこかから聞こえてくる、美しい歌声を聞く為だけに。

前兆などなかった。声はいきなり響き、届き、飛び込んできたのだ。楽器による演奏も伴奏も何もない。混じり気のない、声、だけ。
「……」
駒台公園内のどこまでも高らかに、余すところなくどこまでも響いていく。動いていたモノは人間を問わず鳥や動物でさえ、しばしの間、声が耳に入る内は止まっていた。止まらされていた。母親と子。ベビーカーを押す主婦。ゆっくりと、景色を楽しみながら歩く老人も、若いカップルも、鬼ごっこに興じていた子供たちでさえ、歩き方や走り方を忘れてしまったみたいに。まるで、歌声の届く範囲の時間が止まっているように。勿論、一も例外ではない。口を開けたままの間の抜けた格好ではあったが、誰も気に留めるモノはい

なかったし、そもそも誰も彼もが一と同じ状況にある。
誰も彼も、男も女も老いも若きも、勤務外も、あるいはソレでさえも、今はただ歌を、歌声を、声だけを聞いていた。清廉で潔白な透き通った声。
それでいて、決して小さな声ではない。公園中のモノには確かにそれが聞き取れる。かといって大き過ぎる事もない。乱暴に、力任せに歌っているのではない。歌い手はただあるがまま、自分の好きなまま、自然に身を任せるままに音を楽しんでいる。同時に、公園中にだけ声を届かせているような、計算的な部分もあるのではないかと、少なくとも一にはそう思える。
「……主よみもとに」
一の隣に座っているヒルデも美声に聞き入っていた。
彼女の呟いた言葉の意味は一には分からない。それよりも、歌い手の方が気になっている。聴覚だけで判断するならば、十中八九ストリートミュージシャンの正体は女性だろう。年齢までは把握出来ないが、年寄りではないだろうし、子供でもないと思われた。異常なまでに聞き心地の良いソプラノ。天性の天声とでも呼ぶのだろうか。皆、美声に酔いしれ、息をするのを忘れる。
姿が、見たい。一は漠然とそう思った。歌など、この世に必要ない。そう思ったのは誰だったか。そんな奴がいたらぶっ飛ばしてやろうと彼は今、今更ながらに思い直しているところである。
ベンチから立ち上がり、声のする方角に当たりをつけ、進もうとしたところで一は微妙な、本当に気を付けていなければ分からない程度の些細で、微細で、極微な違和感を覚えた。足が進まない。歩こうとしても、足が動かない。動くな、と。まるで、誰かに来るなと言われているみたいに。焦燥感。そうしている内に、声は少しだけ高く、大きくなる。盛り上がる。彼が今までに聞いた事のない歌だったが、もうそろそろ終わりなのだと、強く認識させられた。
「あ……」
世界が、動き出す。

止まっていたモノは皆、ようやく動き方を思い出したかのように歩き、動き、あるいは呼吸を開始し始めた。がくりと、一も肩を落とす。そう、歌は終わってしまったのだ。

「……ふふ、言ったでしょ？」

「何がです？」

「探してもダメ、って」

悪戯っぽく笑うヒルデを見て、一は苦笑しながらベンチに腰を下ろす。

「足が動きませんでしたよ。なんだろ、さっきの歌に呑まれてたのかな」

「……ん。私はね、歌には力があると思うよ。人が自分の心をうたうんだから。特に、あんなすごいのには、ね」

「力、ですか」

非科学的で何の根拠もない話だが、不思議と信じられた。少なくとも、今だけは。

「ヒルデさんは、今の歌を聞きに来てたんですね」

「ん。ちょっと前からだけど」

「どんな人が歌ってるか気になりませんか？」

「……なる」

ヒルデは少しだけ迷ってから、緩々と頷いた。

「でも」

「でも？」

「……そういうのって、なんだろ。手品の種明かしを見ちゃうみたいで」

「……無粋、ですかね。やっぱし」

そうかも。そう言って、ヒルデは眠そうにあくびを一つ。

「……キミは、今日はどうして？」

一は自分が何を問われたのか考えた後、

「えーと、学校が休みになっちゃって。暇潰しに来たんです。結果的にラッキーでしたけどね」

本当の事をヒルデに話した。嘘は吐いていない。
「歌、良かった？」
「んー、それもありますけどね。ヒルデさんと久しぶりに会えた方がラッキーっちゃラッキーです。一応、立場上は南北に分かれた敵同士、みたいですし」
ヒルデは一の言葉を聞き、嬉しそうに目を細め、
「……私も、キミに会えて嬉しい」
真っ直ぐに一へと微笑んだ。
その笑顔がやけに眩しくて、可愛らしくて、一の顔に血が上る。赤くなった顔とちょっと気障な事を言ってしまった自分を誤魔化す為に、顔を伏せて話を反らした。
「そ、いえば。さっきの人、明日も来るんですか？　その、時間とか」
「……んー」
ヒルデはそんな一の目論見には気付かず、小首を傾げて考えを巡らせている。
「今度は違う歌も聞いてみたいなー、なんて」
「……分かんないけど、来ると思う。キミは明日も来るの？」
「確か、明日はバイト、午前で終わりでしたから。そうですね、うん、行こうかな」
学校はサボっても、もう今更だ。開き直りは人間を形成するにいたって重要なファクターだ。うん。一は自身をそう納得させた。
「残念。私はあさって、かな」
「あー、明日はバイトですか？」
こくり。ヒルデは残念そうに頷き、そのまま俯く。
「それじゃあ、あさっては俺も付き合いますよ。またその時に会いましょう」
長居し過ぎたかもしれない。一は立ち上がり、公園内に時計を探してみた。彼は時計や携帯電話を持たないので時間の経過が分からないのだ。

「……帰るの？」
「う。あ、えーと。はい、そうです。そろそろバイトの時間なんで」
捨てられた子犬の様な、濡れた瞳を向けられてしまい一はたじろぐ。
「……残念」
「俺もですよ。もうちょっとゆっくりしたかった、かな」
だが、それ以上に寒かった。風が心なしか、さっきより強くなっている気がする。
「ん、それじゃあまた、えーと……？」
「あさって、今日と同じくらいの時間に会いましょう」
「……ん、分かった」
ヒルデが頷いたのを見届け、
「じゃあ、また。今日は楽しかったです」
別れの挨拶を口にした。

公園の出口に向かって歩く内、思い出してしまう。一は頭から、体から、どうしてもあの違和感が拭いきれなかった。歌を聞いている途中に動こうと歩いた時の、あの、違和感。
確かに、あのストリートミュージシャンの歌は今までに一が聞いていた歌と比べても（と言っても、一は大して歌に興味がなかったので、比較の対象が圧倒的に少ない）何の遜色もなかった。と言うより、今までで一番、気持ちを動かされていた。言葉を尽くせば尽くすほど嘘くさくなってしまう気がしたので、恐らくは『彼女』であろう、あの歌声に対してあまり口にはしたくなかったが。
それでも、それでもだ。あの声を、あの歌を、あの歌声を。あえて、強いて、どうだったのか言えと、誰かに強要されたならば。一はこう言おうと思う。
「――今までに聞いた中で、一番悲しい歌だった」

そう、言おうと思った。

一が悲しいと、そう評した歌をうたう人物、件のストリートミュージシャンと出会うのは今日の次の日。つまり、翌日の事である。

それが一にとって、今までで一番面倒で、困難で、悲しい事件の幕開けともなる。

そんな事にはまだその時、一はおろか――否、一は愚かで、一以外の人物はとっくに分かっていたのかもしれなかった。

よろこべやたたえよや

「歌ぁ？」
「ええ。糸原さんって好きな歌手とか、好きなジャンルの歌、ありますか？」
「……今更聞く事なの？」
オンリーワン北駒台店、バックルーム。シフトの交代の時に、一はふと思い立ったので糸原に尋ねてみたのだ。思い立ったが吉日だし、大した意味もない。
「あんたこそ、好きな歌手って誰なのよ？」
糸原はオンリーワンの制服を脱ぎ、ロッカーからいつも彼女が着ている、黒いスーツをハンガーから引っ張り出してくる。制服をハンガーに掛け、ロッカーの扉を足で乱暴に閉めた。
「おい、ウチの物は大事に扱えよ」
その音に顔を顰め、店長は糸原に苦言を呈す。
「はーい。ごめんなさーい。で？　あんたの好きなのって誰なのよ？」
一は制服に着替えながら、
「いませんよ」
あっさりと答えた。
「はあ？　だったら私に聞くんじゃないわよ」
「いないから聞いてるんじゃないですか。お勧めの曲とか、ありません？」
糸原は不審げに一を眺め回し、彼の真意を探ろうとする。
「や、他意はありませんよ」
「……ふうん？　ま、アレね、私はアニソンが好きよ」
「アニ、ソン？」
「そ。アニソン。アニメのオープニングとかエンディングの歌よ。あ、今あんた馬鹿にしたでしょ。笑ったでしょ」

ずいと詰め寄る糸原から距離を取りながら、一は作り笑顔を浮かべた。
「馬鹿にしてないし笑ってませんよ」
「心ん中で笑ったでしょうが。私にはお見通しよ」
「してませんって。俺だって糸原さんと一緒に夜中のアニメ見てる時あるじゃないですか」
夜中の二時三時に文字通り叩き起こされて、無理矢理の場合が殆どだったが。
「でも、あんたはまだアニメの何たるかを分かってないわ。見てるとは言っても、ただ映像を見てるだけなのよ。全然駄目、駄目駄目、死んだ方がマシのレベル」
「……見てるだけで充分じゃないですか。それ以外に何をしろって言うんです」
「馬鹿っ！」
平手で思い切り頬を張られた。一は患部を摩り、涙目で糸原を見上げる。
「謝りなさいっ、アニメの神様に謝りなさい！」
そんな神様、存在していたとしてもくたばっちまえ。
「もう良いです。じゃあ俺は一生アニメ見ませんから。少なくとも糸原さんとは見ないです。だからこれからは夜中起こさないで下さいよ」
「もーう、冗談じゃない。ぎゃはは、そんなに怒らないでよー」
「冗談で殴られちゃ堪ったもんじゃないですよ」
「だったら本気で殴れば良いのね？」
糸原は肩を回し、楽しそうに笑う。
風圧が一の顔を撫でた。
「ちょ、ちょっと、冗談でも本気でも殴るのは、殴るのは……」
「お姉ちゃんに寂しい目を見ろって言っちゃう奴はこうだー、ていっ」
糸原は可愛らしく語尾を延ばし、媚びた声で拳を振り下ろす。

「うげふっ」
一の頭がへっこんだ。

鼻歌交じりで出て行った糸原と入れ替わる様に、今度はジェーンがバックルームにやってきた。
「お兄ちゃん、早くフロア行かないとナナが怒っちゃうヨー？」
「……うん、分かった」
「？　お兄ちゃん頭悪いノ？　あ、ちがう。痛いの？」
「お約束をありがとう」
その間違いだけはしないと思っていたのに。一は期待を裏切られ少し凹む。そんでもって、凹んでいると思われた頭はどうやら無事らしかった。
「そうだ、ジェーン。お前って好きな音楽あるか？」
「Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ、アタシはジャズが好きカナ」
「あー、俺もそれは好きかもしんない。サックスとか格好良いよな」
「サクソフォーンがあるからってジャズとは限らないんだけどネ。ふふ、でも良かった」
ジェーンは意味深に微笑む。
「何笑ってんだよ」
「ン、お兄ちゃんと同じものを好きになれて良かった、って。ネ、こういうのって、レッドストリングを感じるよね？」
「……ああ、赤い糸ね。じゃあお前納豆食えるか？」
「ボスー、明日の納品のコトなんだけどー」
「おい」

フロアに入った一の目に奇妙な服装の女性が留まった。留まったあと、いつもの事だと割り切った。
「遅れてごめん」

「いえ、構いません。今しがた作業は完了したばかりですから」
そう言って、一の方に振り向いた女性はメイド服を着用している。黒のワンピースと白いエプロンドレス。白いカチューシャを頭に乗せた、黒髪のショートヘア。肌の露出は殆どなく、余計な装飾品も付けていない。唯一のアクセサリーと言えば、フルリムの眼鏡だけ。
彼女はオンリーワン北駒台店の勤務外店員、ナナ。オンリーワンの制服は特に着用せずとも構わないと店長が言ったので、ナナはメイド服を選んでいるのであった。
「あ、洗い物任せちゃったね、ごめん」
「ですから、構わないと言いました」
「……うん、でもさ、ナナって、その、水は平気なの？」
一がさっきから気にしているのは遅刻した事でも、ナナに仕事を任せた事でも、ましてやメイド服に関してでもない。仕事の内容についてだ。
信じられないくらいに馬鹿らしい話ではあったが、ナナは人間ではない。人間より人間らしいをコンセプトに創られた自動人形（オートマータ）と呼ばれる一種のロボット、アンドロイド、マシン、である。
「私は水陸両用に設計されておりますので、耐水性も基準を大幅にクリアしています。一さんの心配は不要かと」
「あ、そうなんだ」
だが、その心配も今消える。
「それより一さん、肉まんの陳列の仕方を教えて頂けませんか？」
「あ、ああ、分かった」
一は考え事を中断して、肉まんの什器に目を向けた。都合の良い事に商品の大半が売り切れている。
「それじゃあ、バックルームから肉まんとあんまんだけを多めに持ってきてくれる？　あとは、ナナの裁量で良いから」
「かしこまりました。少々お待ちください」
ナナは綺麗な角度でお辞儀を決め、無駄な動きを極力削った様な歩き方で、それでいて実に優雅な仕草でバックルームに姿を消した。

その姿を見届け、一は安堵の溜め息を吐く。
一は何となく、ナナの事が苦手だった。他人行儀な敬語が苦手な訳でも、人間ではないからだ、なんて陳腐な理由でもない。
恐らくは、見透かされている。
一に流れる狼の血。ソレの証。人間ではない理由を、ナナは知っているのだ。彼女は決してその事を表には出さないが、いつ何時自分に襲い掛かってくるか分からない。彼女には好意も、嫌悪も、何も抱かれていない。だからこそ、殺される。もし自分がソレに成り代わる事があるなら、自分を殺すのは恐らくメイド服の格好をしたアレなのだと、どこかでハッキリと分かっていた。
誰かの命令一つで、ナナは一を殺す。簡単に、呆気なく殺すだろう。
「……ビビってんじゃねえよ」
自分にしか聞こえない小声で自分を叱咤する。そうだ、そうなったらその時だ。その時はジェーンと二人でどこか遠いところにでも行こう。……糸原になら、言っても大丈夫だろうか。後ろ暗い後ろめたい事を考えていると、
「お待たせしました。こんなものでいかがでしょうか？」
肉まんの袋を両手一杯に抱えているナナに声を掛けられた。
「……っ。う、うん。良いと思うよ」
一はなるべく平静を装い、什器の蓋を開ける。
「ウチはこういうの、夕方からの方が売れるから、多めに仕込んでおいても問題ないよ。バックルームに残しておいたら三森さんに食べられちゃうしね」
「了解です。他の物はどれくらい仕込めばよろしいですか？」
「うーん、悪いけど完全に経験頼みだね。一週間分の売り上げデータ見て、予測立てるのも良いかもしれないけど。あー、あとは天気は確認しておいた方が良いよ。雨の日だとお客さん少しは減るから、肉まんだけじゃなくて、そうだな、他の物も少なめで大丈夫」
什器に、新しく袋を開けた肉まんを入れながら、一は口を開いた。

湯気が入り、むせそうになるのは我慢する。
「……一さん」
「んー？」
「一さんはやはり、一般のお仕事の方が向いていると思います」
「俺もそう思うよ」
「でしたら、今すぐにでも勤務外を辞めるのを強くお奨めします。何もオンリーワンを辞めろとは言いません。一さんの一般業務の技量は非常に高いと、大事な戦力だと、私はそう思っていますから」
　ナナの声音には何も含まれていない。ただ、喋るだけだ。口を開けて音を発するのみ。そこには感情なんて存在する余地はない。
「俺もそう思ってる。だけど、今は辞めない」
「でしたら、いつになるのですか？　私はまだ『館』のお話を詳しくは聞いておりません。ですが、一さんはそこでもマナナンガルの時の様な立ち回りをしたのではないですか？」
「もう忘れちゃったよ」
「……いつか、死んでしまいますよ」
「そりゃ人間だもの、いつかは死ぬよ」
　一は新しい袋を開け、カレーまんをトングで掴んだ。
「もしかして、冗談を言っているおつもりですか？　だとすれば、一さんは性格が悪いという事になりますね」
「茶化したつもりはないけど、気に障ったなら謝るよ。ごめん。でもさ、俺は今すぐに勤務外を辞めるつもりはないよ」
「でしたら、考え方だけでも改めて頂けませんか？」
「考え方って、俺の？」
　ナナはゆっくりと頷く。惚れ惚れする様な、機械の様に正確なお辞儀の角度だった。
「俺の、何に対する考え方を変えろって？」
「全てです。もう一度、良くお考え下さい。特に一さん、あなた自身の価値について」
「……善処するよ」

特に言い返そうとも思わない。
「ええ。是非、善処して下さい」
「……なあ、ナナ」
「なんでしょう」
「俺の勘違いだったらごめん、あのさ、もしかして、俺の事心配してくれてんのかな、それって」
何となく、一の口をついて出た言葉にナナはしばらくの間沈黙を守った。作業の手すら止まっている。どうやら、本当に考えていてくれているらしい。それも大分長い間。
「……」
やっぱり勘違いだったのかな。超恥ずかしい。さっき要らない事を言った自分を殺せたらどんなに楽か！　両手で顔を覆い隠して、店から出て行こうかしら、なんて考えていると、
「心配はしていません」
ナナからバッサリと背中から斬られるイメージ。
「だよね、やっぱ」
「そもそも、私には配る心がありません。心のない人形には人の心配なんて出来ないですから」
「そんな、自分を卑下しなくても良いのに」
「していません。純然たる、純粋な事実ですから。私は人形で、一さんたちは人間。そうじゃありませんか」
「まあ、そうなんだけど」
尚も納得しない様子の一を見て、ナナは呆れた風に息を吐く。
「……一さんが今のままですと、私がやり辛いのは確かです。マナナンガルの時、少し困りましたから。そう考えると成る程、本当ならあなたに死んでもらうのが一番なんでしょうけれど。何故でしょう、私の頭の中に、そうは思えない、死んで欲しくない。そういう気持ちもあるのかもしれません」
「えーと、つまり？」
「申し訳ございません、今の私には分かりかねます。……もしかし

たら、今の様な状態を、心配していると形容するのかもしれないですね」

良く分からなかったが、いつも歯切れの良いナナが言葉を慎重に選んでいる印象を受ける。一は曖昧にしたままとりあえず笑っておいた。

「話すごく変わっちゃうけどさ、ナナは音楽って好き？」

「……音楽ですか。生憎、そういった娯楽機能は搭載されていないのです。……ああ、でも」

ナナは何か思い付いたらしく、頭の上のカチューシャを指差す。

「一さん、ここを押し込んでみて下さい」

不思議に思いながら、一は言われたとおりカチューシャに手を伸ばした。ナナの柔らかな髪の毛が触れてしまい、少しドキッとする。

「このまま押せば良いの？」

「はい。何分初めて使うので、誤作動が起こらないよう優しくお願いします」

「よ、よし。ポチっとな」

死ぬまでに一度は言ってみたい言葉ベストテン（駒台在住一一調べ）。

「あっ……」

ナナが艶めかしい息を吐いた瞬間、耳障りな音がカチューシャから発射され、店中に響き渡った。一は耳を手で覆い、騒音から身を守る。

「なっ、なんだこれ！？」

「防犯ブザーです」

「馬鹿じゃねえの！」

涼しい顔で答えるナナ。一は彼女を創ったオンリーワン技術部の感性と神経と人間性を疑ってしまいそうになった。

「少なくとも、私は一さんより知識量が多いと自負しておりますが」

「この音はいつ鳴り止むんだよ！？」

「初めてなので、私にも分かりません」

目の前のメイドに、コンセントが付いていたら迷わず抜きさっているところであった。

音は五分近く一の鼓膜を揺らし続け、ようやく止まった。店内に客がいなかったのが、せめてもの救い、だったのかもしれない。

「別に俺はナナをラジカセ代わりにしようとは思ってないから」

「タイマー機能が付いていれば目覚ましにはなれたんでしょうけどね」

「あはは、くだらねえ」

まだ耳の奥でさっきの音が反響している。

「……一さん。一さんには好きな音楽というのがあるんですか？」

「んー、ないよ。でも今日良い歌を聞いてさ、好きになれそうだった」

「どんな歌ですか？」

「えーっと、何だろ。聞いた事のない歌だったからなあ。とりあえず、英語だったよ」

思い出そうとするが、ブザー音が邪魔して要領を得なかった。

「……羨ましい、かもしれません」

「へっ？」

「好きなものがある。何かを好きになる事が私には良く分かりませんから、一さんや、人間が羨ましいです。いえ、嫉ましい、のでしょうか……」

「分からない？」

モノを嫌いになったり好きになるのは、難しい事なのだろうか。一にはそれが分からない。

「私は多分、そういう風には作られていないと思うんです」

「……人間らしく、だろ。だったら、好きになるのも嫌いになるのも出来るに決まってるよ」

「私の目はソレを見つける為に。手はソレを殴る為に。足はソレを

蹴る為に。耳はソレを捉える為に。私は、私はソレを殺す為に生まれたんです」

「あー、いや、そんな事ないだろ」

ナナは首を振る。

「勘違いも、同情もしないで下さい。私は悲しくはないんです。だって、分からないですからそんなの。一さん、私にはあなたの言うような心がないですから」

「……心がなけりゃ、羨ましいとも思わないよ」

「……分かった風な事を言うんですね」

「そりゃそうだろ。俺の方が年上なんだから。確か、ナナはまだ一年も動いてないんだろ」

一は耳の穴に指を突っ込みながら、什器の水を入れ替える。

「だったらまだ、自分の感情とか、そんなの分からないに決まってるじゃん。赤ちゃんと同じレベルだよ。いや、それ以下か。泣く事も知らないんだから」

「……馬鹿にしないで下さい。泣く事ぐらい知ってます」

「知識の上ではだろ。でも、気にする必要はないと思うけどね」

「あの……」

「ん？」

「何だか、変な気分です」

ナナは胸に手を当て、一を見つめる。

「良く分からないものが、私の中に蓄まっていくみたいです……」

「……？」

「今の私の気持ち、の様なものを正しく説明出来ませんが、そう、これは……」

訝しげにする一に近付いていき、ナナは彼の手をそっと握った。

「え、な、何、何だよ？」

「私、多分、あなたが……」

グッと。

「いてえ――――！」

骨の軋む音が響く。

余談、もしくは後日談だが、ナナが最初に覚えた感情らしきものは『怒り』だったらしい。

バイト終了。一は手の甲を擦りながら自室のドアを足でノックした。

「はーい」

部屋の中から糸原の間延びした声が聞こえてくる。扉が開かれ、

「ウチは新聞取らない主義なの」

閉まった。

一は無言で扉を開け、玄関に上がって鍵を締める。

「糸原さんごはんどうしますか？」

「作って」

こたつに入ってゲームをしている糸原に尋ねながら、一はコートをハンガーに掛けた。

「……そろそろ料理の一つも覚えて下さいよ。働かざる者食うべからずって知ってます？」

「だったら赤ん坊は食事にありつけないわね」

「赤ちゃんは泣くのが仕事でしょう」

「女は生きてるだけでも偉いのよ。私らがいないと人類なんてとっくに滅亡してるんだかんね。ほら、私は空腹である。肉を所望するぞ給仕係」

「誰が給仕か」

言いながら、一は冷蔵庫の中身を確認。

「……冷やご飯があるから、炒飯で良いですよね」

「うええ？　もっと手の込んだのが食べたいよう。具体的に言うなら牛肉」

「指でもしゃぶっといてください」

棚から玉ねぎを取出し皮を剥く。冷蔵庫から出しておいたベーコンと一緒に食べやすい大きさへと切り刻んでいく。
「お腹空いたー」
「うるさいなあ」
「あむ」
「ぎゃあああっ！」
足の指を銜えられた。一は驚いて包丁を振り回す。
「おわあっ、刃物危ないっ」
糸原は口から一の指を離して飛び退き、抗議の視線を向けた。
「なーにすんのよ」
「指をしゃぶんなボケェ！」
「あんたが言ったんじゃない」
「……自分の指ですよ、人のを銜えちゃいけません。しかも足だなんて、もう……」
誰がこれを育てたのか。親の顔を見て小一時間説教かまして笑いながらパンチの雨を浴びせてやりたい。
「意外と臭くなかった」
「自由人め」
「おい世話係」
「なんですかお嬢さま」
まな板の上で具材を刻む一定のリズム。その音に耳を傾けながら一はぼんやりとあの歌を思い出す。
「ご飯食べたらお風呂行きたい」
「はいはい、分かってますよ。用意しといて下さいね」
フライパンを熱しながら、一はおぼろげなメロディを口ずさむ。
「何よ、ご機嫌じゃん。何の歌、それ？」
「タイトルは知らないんですけど、やけに耳に残ってて。今日、公園で誰かが歌ってたんですよ」
「……ふーん。公園って中央の？　へー」
「なんですか？」

「一人で行ってたの？」
責める様に糸原が言うので、一は少し迷ってから「そうです」と答えた。
「……ふーん」
沈黙が長い。玉ねぎを炒めながら、糸原を盗み見る。彼女は何故だか頬を膨れさせ、拗ねている様にも見えた。
「空気、美味いですか？」
「ああ？」
一は無言で頬っぺたを指差す。舌打ちが聞こえてきたが、油の跳ねる音がそれを掻き消した。
「ねえ、一。どっか行きたい」
「あとで銭湯に行くでしょう」
背中に何かが当たる。視線を落とすと床にスプーンが転がっていた。拾い上げ、糸原に手渡す。
「……どこに行きたいってんですか」
「んー、何かこう、っぽいところに行きたいな。映画館とか水族館とか旅館とかさー」
「公民館ぐらいならご希望に沿えそうですね。卓球でもします？」
次はまな板にフォークが刺さった。もう慣れた。それを横目で見ながら、一は皿に炒飯を盛り付けていく。
「あんたってさー、鈍いのか馬鹿なのか良く分かんなくなるわホント」
「ひでえ言われ様だ」
一は苦笑し、こたつの卓の上に皿を並べていく。糸原は彼から皿を奪い取るみたいに引っ掴んで、持っていたスプーンで炒飯をかき込んだ。
「……分かんないかなー、私はさ、デートのお誘いをしてやってんのよ？」
「デート、ですか」
「何よその微妙な表情。私みたいなウルトラスーパーデラックスな

美人とデート出来んのよ？　もっと分かりやすく喜びなさい。もっと全身使って喜びを表現しなさいよ」

「裏がありそうで、素直に喜べないってのが……」

百歩譲って財布代わりになるのは良しとしよう。どうせ逆らえないし。だが、それ以上の事を強いられそうで一は心から嫌だった。

「裏なんてないわよ。失礼な奴ね」

「遊園地に連れてかれて、俺一人でコーヒーカップとかメリーゴーランドとか観覧車に乗せられそうで。しかもその間ずっと糸原さんはにやにやしてそうなイメージが」

「……しないわよ」

分かりやすい間だった。

「でも、嬉しくないって言ったら嘘くさく聞こえますね。糸原さん、黙ってたら美人さんだし」

「ははーん、私をブランド物感覚で見てるわけ？　良い度胸じゃない」

「優越感みたいなのは期待してるかも」

「安心して勘違いしときなさい。私が特上でもあんた自身は並だから。良くいるじゃん、街歩いてても片方が美人でもう片方がクソ不細工な組み合わせのカップルとか。アレは神様がちゃんとバランス考えてくれてると思うのよね。百点と百点が付き合ってても面白くないし、どうせ長続きしないのよ。つまり、美人の私と普通以下のあんたの相性は世界的レベルで保障されてるの」

「つまり、糸原さんは顔が良くても性格が悪いって事ですか？」

一は冷蔵庫から、二リットルの烏龍茶の入ったペットボトルを持ってくる。糸原はそれを奪い取って、コップに移さず豪快にラッパ飲み。

「ぷはー……、まあ、あんたは性格も悪いけどね」

「行儀の悪い人よりマシでしょう」

「顔が良い女は何やっても許されんのよ、はっはー、悔しかったら美形に生まれ変わってみなさい」

無視して炒飯を片付ける。一は流しに皿を置き銭湯に行く準備を始めた。
「ちょっとー、私まだ食べてないんだけどー？」
「先に出てます」
「ぎゃー、拗ねてやんのー！」
糸原の嘲笑を背に受けながら扉を開ける。冬の夜風が心地良い。見上げれば、真ん丸。アパートの二階から眺める月は、何となく手を伸ばせば、何となく掴めそうだった。
静かで、気持ち良い。
夕方に鼓膜を直撃し、それからずっと耳の奥に残っていた防犯ブザーの音が静寂の中に溶け込み、消えていく様に感じられる。耳鳴りが薄れていくにつれ、昼間聞いたあの歌が鮮明に、一へと返ってきた。今まで聞いた事のなかった歌。声。素晴らしい。
もう一度、もっと聞きたい。
「ありゃ、また歌ってんの？」
「え？」
扉が開き、現れた糸原が小首を一の方に傾げる。
「歌って、ました？」
「うん」
どうやら、無意識の内に鼻歌を歌っていたらしかった。意味もないのに口元に手を当て、照れ臭いのを誤魔化す。
「よっぽど気に入ってんのね。ふーん、私も興味あるかも」
「だったら明日、聞きに行きます？」
「公園まで？」
「公園まで」
「何時から？」
「昼からです」
「……やっぱ良いわ。明日は駅前のパチンコ屋の新装開店だし」
糸原は鍵を閉めながら、そう、嘯いた。

歌とは良いものだ。
歌は歌い手の心を届けてくれる。
楽しければ楽しい気持ちを。悲しければ悲しい気持ちを。やるせなければやるせない気持ちを。
声に乗せて、響かせて、運んでくれる。
心。心を。
では、良い歌の条件とは何なのだろうか。
気持ちを込め、心を届ける事だろうか。
では、気持ちを込めずに心を届けなければ良い歌と呼べないのだろうか。
……心のないモノがうたっても、歌に成り得るのだろうか。

虫にも等しき

学生にとって単位とはとても大事なものである。そりゃもう金で買えるなら買いたいくらい。特に大学生にもなると、その気持ちが一層濃くなるというものだ。服装や髪型に関する規則も基本的には無い。自由。時間割りは自由に決められて余暇に費やせる時間も、まあ、増える。そう、自由。

だが、その自由とは誰が保障してくれるのか。……他ならぬ、自分自身であった。

遅刻早退欠席。咎める講師も高校や、それこそ中学に比べればグンと減る。自由なのだから。その分、どこかでツケは必ず返ってくる。自分で払わなければならない。

単位を得る為には日々の授業がものを言うのだ。大学の講義内容の進みは早い。単純に、講義の時間が長いせいもある。つまり、大学はテスト範囲が広がる分、しっかりと積み重ねる事が肝要なのだ。軽い気持ちで一回休むと癖がついて取り返しのつかない事態に陥ってしまう。

「……」

――百も承知。

一は一年前にも痛い目にあった事を忘れてはいなかった。が、ついついい公園に足を運んでしまう。

昨日と同じ時間。同じ場所。まったく、懲りない奴だと内心自嘲しながらも、自重しない自分が一は好きだった。

昨日聞いてはいたが、やはりヒルデの姿が見えない。ベンチに座りながら、その事を残念に思う。

「……んー」

考えてみた。

昨日の歌。歌い手の事を。ヒルデとは一度話したが、一はストリートミュージシャンの正体が気になっていたのだ。

「不粋、かあ……」

思いつつも、既に一はベンチから立ち上がっている。不粋結構。手品の種明かし結構。好奇心は我慢出来ない。

猫をも……とは良く聞くが、気にしない事にする。

一は前回の経験を踏まえ、歌が始まる前に歌い手を探そうと考えていた。始まってしまえば、昨日と同じく動けなくなってしまうだろうと分かっているからだ。

だが、手掛かりはまるでない。

まず、件のストリートミュージシャンは楽器を使っていなかったので分かりやすい目印が無い。ギターケースでも抱えていれば、目に付いたのだが。

更に、一はお目当ての歌い手が十代の若い女性だと思っているが、もしかしたら若くないかもしれないし、下手したら男性かもしれない。もう完全に分からないのだ。声だけでは、当たりが付けられない。

それでも、探してみない事には始まらない。一はきょろきょろと視線を巡らせ、人の少ない方向へと進んでいく。そう、人の少ない方へ。

一つだけ、手掛かりはあった。

あの、声。歌。あの、悲しい歌。少なくとも、一がそう思った歌。

そしてその時感じた違和感。

「……来るな」

来るな、と。足を踏み出したあの時に言われた気がした。

だから歌い手の周りには誰もいないのではないか。歌い手側が聴き手を遠ざけているのではないか。反面、ふざけた話だ。だったら最初から歌わなければ良いとも思う。が、そう、思う。思い込む。

正確に言えば、手掛かりと呼べるほどのものではない。信じると言うには、程遠い。

足を適当に動かしていた一は広場にやってきた。休憩所の様相を呈している空間にはベンチが七つ。その内五つは仲睦まじいカップルが独占している。

「しくじった……」

一には今、隣に座ってくれる連れ合いがいない。場違いなところに来てしまったと溜め息を吐き出した。だが、すごすごと引き下がるのも格好悪いので、仕方なく近くの縁石に座り込む。視線は誰とも合わさぬように顔は伏せておいた。

「はあ……」

待ち合わせを装っておこうとして、さり気なく広場の、反対側の入り口へ顔を上げた。

尤も、一には謎の歌い手という待ち人がいるので、来るかどうか会えるかどうかはさておき、待ち合わせをしている事自体は嘘ではないのだが。

広場のカップルが醸し出す停滞した甘い空気を吸って数分は経ったろうか、一の目が新たな人物の登場を確認した。背の低い、高校生くらいの女の子である。一とは反対側の入り口から広場にやってきた彼女は遠慮なく、そこにいる人間たちに視線を遣ったあと、いかにも不機嫌そうに舌打ちをした。次に、落ちていた空き缶を蹴っ飛ばす。甲高い音を立てた缶は真っすぐに宙を滑っていき、一のすぐ傍、背の低い茂みに勢い良く突き刺さった。

その音、行動に、一を含めた大半の人間が犯人に視線を注ぐ。抗議と好奇が降り注ぐ。しかし、静寂を蹴り破った当の本人はそんなものどこ吹く風で、あろう事か睨み返してくる始末だった。彼女は注目を集めるかのごとく、勿体ぶった足取りで広場の真ん中を進み、空いているベンチに腰を下ろす。堂々としたその所作に、他の人間はもう何も言わないし、言えそうにもなかった。

かくいう一もその一人で、厄介事には関わるつもりもない。女の

子から目を逸らし、空き缶の突き刺さった茂みへ何とはなしに顔を逸らした。

「……」

ふと、一は気が付く。

もしかしてあの女の子は自分を狙っていたのではないかと。そうでなくても、一歩間違えば他ならぬ一の顔面にスチールの缶が直撃していたのだ。

そう考えれば、沸々と怒りが沸き上がってくる。理不尽過ぎる。乱暴過ぎる。だが、声を大にしても仮に小さかったとしても彼女を叱り飛ばす気にはなれなかった。かといって、すごすごと引き下がる勇気も一には無い。せめてもの行為として、犯人の顔を覚えて二度と関係しないように、女の子の顔を盗み見るのが精一杯の抵抗だった。

「うーん」

一はばれないように女の子の観察を始めた。目を引いたのが金色に染めた髪。髪の毛は襟足を長めに残した、ウルフカットと呼ばれるものである。彼女は羽織っている真っ黒な皮のジャケットの前を開けており、おどろおどろしい髑髏がプリントされた白いインナーが見える。否、見せている、と言ったところか。やけに腰の位置をずらして穿いているジーンズはダメージ加工。そして、サンダルだった。と言うか、突っ掛けだった。いわゆる便所サンダルと呼ばれるアレである。

「……」

そして、再度一の目を引くのは女の子が身に着けているアクセサリーの数である。そのどれもが、銀。ピアスを右耳に三つ、左耳に二つ。ロープチェーンタイプのネックレス。

「うわ……」

女の子の十指に嵌められた、それぞれ違う形のシルバーリング。殴られたら痛そうだ。と、一はぼんやりと考える。

女の子は広場にやってきた時と変わらず、不機嫌そうな表情を浮

かべていた。目は細めており、真向いのベンチに座るカップルを睨んでいる様にも見える。そして止まらない舌打ち。静かな場所なので、やけに響いていた。何が彼女をああまで苛立たせているのだろうか。もしかして、彼氏が遅刻でもしてるのか。一はいるかどうかも定かではない、空想上の女の子の彼氏を呪う。呪って呪って、早く来て機嫌でも直してやれと祈った。

甘い空気が薄れていく。

「ん？」

剣呑な空気が場を侵食していくのに気付いた。見れば、同様の感想を他の人間も持ち始めたらしい。気まずく、居辛く、ある種居た堪れない雰囲気に呑まれた半数の者が広場を抜け出していく。

一体何がどうしたんだろうと思いながらも、一もこの場を去ろうと立ち上がった。瞬間、件の女の子と目が合った。威圧的な目。早くここから消えろと言われている様で、言われなくても出て行くよと、心の中で返す。

広場の出口に足を向けた所で、背後から悲しげな声が聞こえてきた。同時に、一の動きも止まる。いや、止められてしまう。

声が耳に入り、脳に届けられて、背筋にはぞくりとしたモノが走り波打ち粟立った。振り返る事が出来ない。そこで初めて、一はその声が朗々と響く歌だと気付く。

探していた、あの声なのだと気付く。

三分。

言葉にするのも声にするのも簡単だ。だが、一はその短い時間の間に自身の全てを抜かれた様な虚脱感に身を浸している。体も、魂も。動けなかった。奪われていた。

結局、一が探していたストリートミュージシャンは彼女だったのだ。

不機嫌な顔をした、小さい女の子。シルバーアクセサリーをごて

ごてにつけたくった、彼女。
一はしばらくの間、自分が何をしているのか分からなかった。立ち上がったまま、歌い手に背を向けたまま、ただ呆然と突っ立っているだけに思い至り、振り返って広場に目を向ける。
広場にはもう、一以外のオーディエンスがいなかった。七つあるベンチは今、一つしか埋まっていない。不機嫌な表情の歌い手だけが座っている。
やがて彼女は気紛れで顔を上げた。その時に一と視線がぶつかる。
「ちっ」
「……う」
露骨に嫌そうな顔をされ、一は情けなくなった。
これ以上ここに留まっていても一銭の得にもならない。むしろ損する。気になっていたストリートミュージシャンの正体が、声だけは筆舌に尽くしがたく素晴らしい人格破綻者だと分かっただけでも儲け物だろう。ヒルデには黙っておく。せめて、夢を壊された身としては彼女にだけでも夢を見続けてもらいたいものだ。
一は頭を振り、広場を後にしようともう一度、そこに背を向ける。
「なあ、自分」
その声が自分を呼ぶものだと一が気付くのは、羽織っているコートの襟元を引っ張られてからだった。
バランスを崩してふらふらとなったところに、
「聞いとんのか、コラ」
蹴りを食らう。
「……っ！」
衝撃でたたらを踏み振り向いた。何をする。一は思い切り犯人を睨み付けてやった。
「ん、何や？　怒ってんの？」
効き目は全く無し。一を蹴った女の子はからからと笑う。
「……理由も無いのに蹴られたら、誰だって怒るよ」
「そら悪かったな。でも、痛くなかったやろ？　むしろ気持ち良か

ったんちゃうん？」
「俺はマゾじゃないっ」
「おー、突っ込みやー」
女の子はピアスを揺らし、尚も楽しそうに笑っていた。だが、一は彼女の変化に戸惑う。さっきまでの不機嫌な表情はどこに消えてしまったのか。
「自分なかなか出来るなあ、どや、ウチの相方に立候補してみいひん？」
「……て言うか、お前関西弁使ってるけどさ」
初対面の人間を蹴り飛ばす相手になど『お前』で充分。気付かれない程度の敵意を込め、一は彼女の口調について問うてみる。
「それがなんなん？　近畿で関西弁使ったらあかんの？」
「お前、エセだろ」
「はあっ！？」
関西弁。
女の子はそこそこ上手に関西弁を使ってはいるが、地元民の一を欺くには至らないレベルだった。
「ハッキリ言っておく。お前は断じて関西人じゃない、関西弁を使用する資格も器も足りんと知れぃ」
「なっ、そっ、そっちこそ何やねん！　駒台のモンなら関西弁使えやっ」
「いや、俺は数年前ここに越してきたばかりだから使えないよ。使う気もない。まあ、覚えりゃ口喧嘩と威圧感のレベルは上がりそうだけど」
ナンジャコライテマウゾボケ。
女の子は悔しそうに唇を噛み締め、一を睨み付けてから力なくうな垂れる。
「どうしたら、本物になれるんや……」
「ん。まずはプラスチック、ロマンティックなどの語句をプラッチック、ロマンチックと言い換えてみなさい」

「アスレチック、とか……？」
「ちょっと違うけど、そんな感じ」
「ほっ、他には？」
「お好み焼きを食べる時には必ずご飯と一緒に食べなさい。それと、大人になったらヒョウ柄のえげつない服を身に付ければよか」
「ホンマやな？」
「ホンマホンマ」
そう言って一は笑った。つられて女の子も笑う。
「あ、ちゃう。ちゃうねん。聞きたい事があってん……」
女の子は頬を抓り、無理矢理笑顔を掻き消した。
「自分、何でここに居れたん？」
その質問に一は首を傾げた。何故ここに居た、ではなく、何故ここに居れたのかと女の子は尋ねる。
「理由が無いと駄目なのか？」
「……だって、うちの歌聞いとったやろ。自分なんも感じへんかった？」
「うーん？」
もしかして感想でも求められているのだろうか。一は頭を掻き、彼女を満足させられそうな言葉を探した。
「いや、すごく良かったよ。今までで聞いた歌の中で一番」
「おおきに。で？」
「で？　って言われても。何だよ、次はおひねりでも出せってか」
「いらんわアホ、うちが聞いてんのはな、なんでうちの歌を聞いてここにおれたかって事っ」
一は咄嗟に顔を背ける。睨まれるのは精神衛生上よろしくない。
「そんなの知るかよ。……お前さ、自分の事過大評価し過ぎじゃないか？　歌聞いただけでどうこう変わらないぜ、普通」
「はっ」
鼻で笑われる。
「うちは自分の事なんてすごいと思ってへん。すごいのは、ここや」

女の子は挑発的に口の端を吊り上げ、自身の喉を指で示した。
「……へー、なるほど。食道が太いんだね」
「……や、食道じゃなくてな……」
「違うっ！」
「ひっ」
突然の大声と剣幕に女の子がたじろぐ。構わず、一は彼女にずんずんと向かっていった。
「今のはどう考えても俺の突っ込み待ちだろうが！　てめえ舐めた事言ってんじゃねえぞ！　何が『や、食道じゃなくてな』だっ、関西人になりたいんだろ！？　だったら寝呆けてんじゃなくてバシッと来い、バシッと！」
女の子は目の端に涙を浮かべながら何度も頷く。
「良し。ならば教えてやる。今日から俺の事は実の親と同じように崇め、絶対の存在と心得よ。そうだな、師匠とでも呼んでもらおうか」
「し、ししょー？」
「むやみに語尾を上げるなっ、吐き気がする！　分かったら返事だ弟子一号」
「わ、分かった……」
「敬語を使え！」
カッと目を見開き、一は思い切り女の子の頬を平手で振り抜いた。フリをする。女の子はいまいち意味が分かっていないのか、目を点にして目の前の『師匠』とやらを見つめていた。
「敬語だっ、返事はどうした！？」
「はっ、はい。わ、分かりました、し、師匠……」
「うん、実に心地良い響きである。師弟の繋がりが出来たところで、早速奥義を伝授してやろう」
「……奥義？」
女の子の疑問を余所に、一は左手の指を揃えて水平に伸ばす。晴れ晴れとした顔のまま、裏拳気味に左手を虚空に振りぬいた。一瞬

遅れて風を切る音。近くにいた女の子の顔と髪を風圧が撫ぜる。
「師匠、これは……？」
「うむ。一流奥義『なんでやねん』だ。弟子一号、これは一子相伝、門外不出の秘伝。心して扱うが良い。使いどころを見誤れば……死ぬぞ」
「し、死？」
「ああ、（恥ずかしくて）死ぬ」
一は不敵に微笑み、伸ばしていた手をゆっくりと下ろした。
「他にも『えー加減にしなさい』、『やめさしてもらうわ』など、バリエーションは豊富にあるが、まずは先の技を極めると良い」
「はっ、はい！」

正気に戻って。
一と女の子は広場のベンチに並んで座っていた。
「なあ師匠、さっきの話の続きやねんけど」
「……あー、その、師匠って呼ぶの恥ずかしいから止めてくれないかな？」
「なっ、しっ、師匠が呼べって言ったからやろ！　大体、うち師匠の名前知らんもん」
「そういやそうか。ん、俺は一一って言うんだ」
女の子は目を丸くして一を見つめる。
「に、にのまえ？　なんやけったいな名前やなあ」
「数字の一が二つでにのまえはじめ。良い名前だろ？」
「……ふーん。まあ、よろしくな師匠」
「一だって言ってんだろ」
女の子はぷいっとそっぽを向き、ベンチからぶら下がった足をパタパタと振った。
「だって言いにくいねんもーん、師匠なんやから、師匠で良いやん」
とりあえず、この子と街中や知り合いの前で会わない事を一は祈

る。
「はあ、お前さあ……」
「お前ちゃうよ。うちは歌代（うたしろ）チアキいうんや。へへー、かっちょ良いやろ？」
「うたって、あの歌か？　ふーん、ま、格好良いかは知らないけど良い名前だな」
名は体を表すとはいうが、実に分かりやすくて一は気に入った。
「で、さっきの話ってなんだよ？　お前の喉はすごいって話か？」
「しっかり覚えとるやんか、そーそー。まあ、喉っちゅうか、声、やけどな」
チアキは誇らしげに胸を張る。
「声、ねえ……」
「うん、めっちゃすごいねんで？　でも、師匠には効かへんみたいやけど」
「いや、聞いてたよ？」
「……うちな、仲ようしとる男と女が嫌いやねん」
「はあ？」
そんなの俺だって嫌いだよ！　心の中で諸手を上げ、全面の同意。だが、何故このタイミングでチアキがそんな事を言ったのか一には理解出来ない。
「せやから、そーいう奴ら見る度にうちの歌で邪魔しとってん。消えろって思いながらうたったら、思い通りに消えてくれるからな」
「……歌、で？　馬鹿らしい。そんなんで人を操るみたいな、出来るわけ無いじゃん」
「出来るわっ、実際、さっきも師匠以外みんなどっか行ったやん！」
「そりゃ、俺が一人だったからだろ？」
違う。強い口調でチアキはそう断言した。
「あん時はみんな消えろって思いながら歌ってん。せやから一人やろうと二人やろうと関係あらへん」
「……あのさ、お前の歌がすごく良いってのは認めるけど、んな力

は正直信じられないよ」
「師匠が何を言おうが、歌には力があるんや。特にうちのにはな」
力強い意志を宿したチアキの瞳に、一は思わず息を呑む。俄かには信じられない与太話だが、自分の時間を止められ、体の自由を奪われ、心を持っていかれてしまったのはれっきとした事実ではあった。
「……なあ師匠、ソレって知っとるやろ？」
「そりゃ、な。知らない奴の方がおかしい世の中だろ」
「うちな、ソレやねん」
「ふーん」
一は素知らぬ顔でコートのポケットから飴玉を取り出して口に含んだ。
「……もっとええリアクションしてぇや」
「つまんない事言うからだよ。俺に突っ込んで欲しいならもっとパンチ効いたの頼むぜ」
「充分パンチ効いてるやん、こんなん言われたら普通足元ふらつくで。師匠がおかしいわ」
「だってさ、ソレって言うけど、お前どう見ても人間じゃん」
歌代チアキ。彼女は変わった格好と言動をしているが、ソレには見えない。少なくとも、数多くのソレを見てきた一にとっては。
虚言癖でもあるのだろうか。そう、呑気に構えていた。
「師匠、うちな、ソレの血が混じっとんねん」
口から飴玉が零れ落ちそうになる。一は口元を引き締め、チアキを注意深く眺めた。
「……月を見たら、狂暴になったりするのか？」
「なんやそれ？　ちゃうちゃう、そないな事ならへんよ」
自虐。自爆。自縄自縛。
「ソレの血いうても、そんな格好良いモンとちゃうよ。急に力が強くなったりせえへんし、頭良くなったりもせえへん。ちょっと歌がうまなっただけや」

「あー、参考程度に聞くんだけど。どんなソレの血が混じってるんだ？」
「師匠が知っとるかしらんけど、セイレーンっちゅーソレらしいわ。なんや、えらい歌が上手いねんて」
「……つまり、人間とソレのハーフって事？」
「ちょっとちゃうかな。うちのオトンもオカンも人間やし。あー、でもあかんで、なんでうちにソレの血が混じってるかは企業秘密って奴やからなっ」
作り話にしては良く出来ている。面白い。真偽のほどはともかくとして興味が湧く話ではあった。
――ソレの血が、混ざっている。
一一。歌代チアキ。
自分と同じ境遇のチアキ。
一は考える。彼女が自分についての情報を持っているとは考えにくい。十中八九、自分にソレの血が混ざっているのを知らないのに、どうして彼女がそんな事を言えるのか。
「あー、師匠信じてへんやろー」
「……いや、前情報を知ってたとはいえ、結構効いてるよ」
一の発言にチアキはきょとんとしている。当然ながら、意味が分かっていないのだろう。
「とにかくホンマやねんからな。うちにはセイレーンの血が流れとんねん」
「まあ、今は話半分で聞いとくよ」
何にせよ、真偽を見極める為の情報が足りない。出会ったばかりだと言うのに人懐っこい彼女。油断は出来ない。正体が分からない。裏があるかもしれない。チアキを信じるか信じないか。結論を出すには早いだろうと一は勝手に結論付けた。
「ホンマやってー」
「分かった分かった。……でも、なんで見ず知らずの俺にそんな事言ったんだ？」

「……見ず知らずちゃうやん。うちと師匠の仲やんか」
「いやいや、さっきまでは他人だったじゃん。ソレの血が混じってるなんて言っちゃったら、普通はもっと引かれると思うぞ。良く言おうと思ったな、お前」
自分には出来そうにない。一はある意味、チアキが羨ましくなる。
「……あー、やっぱ、引いちゃった？」
罰が悪そうな表情で、チアキは探るように一を上目遣いで見つめた。
「ほんの少し。距離にしたら三千メートルぐらい引いちゃった」
「少しちゃうやん！」
「おー、突っ込みだー。俺の教えが早速実を結んだな、弟子一号」
「アホ。……うちかて、だれかれ構わずそんな事言わへんよ。師匠に教えたんは、なんか、言うても大丈夫やろって思ったから」
「大丈夫って、どういう意味だよ？」
人畜無害か、よっぽどどうでも良い奴と思われていたのか。一の語気には苛立ちが含まれていた。
「んー、なんかな、うちと師匠は似てるって思ってん」
正直言って、吐きそうになる。
「ど、こが？」
「なんとなく。ぱっと見た感じでな」
「……全然、似てないじゃん。性別だって、年齢だって、背丈だってさ」
「そーゆーんじゃなくて、こう、なんか、雰囲気っちゅーのかな？」
チアキは嬉しそうに語る。年相応、女の子らしい屈託のない笑顔を向けられて一は困惑した。どうして、自分が異端だと曝して笑っていられるのか。
「……俺、そろそろ行かなきゃならないから」
これ以上は無理だ。悟り、一はベンチから立ち上がる。

「えー？　なんや師匠忙しいんか？」
「バイトだよ」
「さよか。ほんならまた今度な。あ、うち、明日も今日みたく嫌がらせにここ来るから」
「ほどほどにしとけよ」
一は手を振り、チアキに背中を向けた。
「師匠、またなー」
楽しそうな声を背に受け、一は広場を後にする。

――分からない。

自分には笑えない。ソレの血が混じっていて、あまつさえその事を他人に話していて笑顔でいるなど、無理だ。足元が不安になる。自分が今どこに立っているのか、この世界で息を吸えているのか、生きていても良いのか分からなくなる。ソレとは、人間の敵じゃないのか？　忌避すべき、唾棄すべき、破棄すべき、ぞんざいに死に、殺されるべき存在ではないのか？
いつか、一は歌う犬に問い掛けられた。

『ソレとどう接するのか』

人間同士でも争い事は起きる。そんな世界で、ソレと仲良くするのは間違っているのか、と。人間とソレとを敵味方で区切るのは正しいのか、と。
分からない。分からない。覚悟も決意もした筈なのに。自分でこ……うなる事を選んだのに。分からない。
答えはまだ、出せそうにもない。

恐れず来たれ、聖徒

ソレは敵だ。
ソレは味方じゃない。
ソレは殺すべき存在だ。
ソレは死んで当然だ。
ソレは、必ず殺す。

「またかよ！」
バックルームに入ろうとした一の体が竦んだ。まだ、何も怒鳴られるような事はしていない筈なのに。
「おはようございます……？」
中にいたのは店長と三森だった。三森は顔を真っ赤にして店長を睨み付けている。
「おう。なんで疑問形なンだよ？」
一と三森の目が合った。
「……えーと」
「三森が恐いんだよ」
店長が喉の奥でくつくつと笑い、煙草の灰を空き缶に落とす。
「あ？　そーなンか？」
「いや、扉開けるなりいきなり怒鳴られたんで」
「あー、悪ぃ。お前じゃねェよ。この人の人使いが荒いから、ついな」
人使いが荒いのは今に始まった事でもないだろう。一は心の中で溜め息を吐く。
「何かあったんですか？」
「ソレが出た。だから勤務外は働かなければならなくなった。という訳だ、一。良かったな、あと少しソレが出るのが遅れていたら、

深夜勤務のお前の出番だった、という訳だ」
　すごく良かったです。一は安堵の息を吐く。だが、今からソレと命のやり取りをしに行くであろう三森を前にして、命知らずな発言は出来なかった。
「あー、その、三森さん？」
「うるせェ。言われなくても行くっつーの。てめェなンかにゃ任せておけねーからな」
　三森はぶっきら棒に言い放ち、顔を背ける。
「素直に一が心配だと言えば良いだろう、三森。だからいつまで経っても怖がられるんだ」
　バッと振り向く三森。顔は真赤だった。
「しっ、しん！？　馬鹿野郎、心配なンかしてねーよっ！　私はただ、こいつが行くより私が行った方が問題なくヤれるって言ってンだ！」
「分かった分かった。ほら、ソレはまた公園に出たそうだぞ」
　店長は三森を軽くあしらい、早く行けと言わんばかりに手を振る。
　三森はそれ以上何を言っても無駄だと悟ったのか、舌打ちしてバックルームから出て行った。
「……あの、店長」
「なんだ？　ん、顔色が少し悪いな、一」
「ソレが出たって公園、もしかして中央の公園ですか？」
　知らずの内、一は拳を強く握り締めている。
「知っていたのか？　ああ、そうだ。一昨日からな、その公園にソレが出続けているようだ。まあ、心配要らん。昨日もゴーウェストが行ったが、取るに足らない雑魚だったらしい。三森なら五分も掛からず終わらせてくれるさ」
「そう、ですか」
「おい、一。お前、もしかして何か絡んでいるんじゃないだろうな？」
　――相変わらず、妙に鋭い人だ。

一は店長の視線から逃れるようにロッカーへと目を向ける。
「何でもかんでも俺のせいにしないで下さいよ。それより、仕事しなくて良いんですかね？　もう時間なんですけど」
「……とっくに勤怠は登録してやったぞ。おら、とっとと行け」
店長からの追求は無い。後が怖かったが、一はいつもより短い時間で制服に袖を通し、背中に突き刺さる視線を受け止めながらフロアへと出た。

ソレが出たという公園に出向いて、ソレを見つけて、火を灯して、点けて、燃やして終わり。
事前に店長から聞いてはいたが、簡単過ぎる。
ソレの燃えカスと、立ち上る煙を見つめながら、三森は肩透かしを食らった気分に陥っていた。
「ちっ」
ジャージのポケットから煙草を取り出し、火を点ける。口に銜えて燻らせるも、何だか、いつもより味気ない。一仕事終えた。そんな感慨は驚くほど、全く湧いてこなかった。
遭遇したソレは一体だけ。もう三日続けて、この公園にはソレが現れているらしい。もしかしたら他にも何かが潜んでいるかもしれない。そう考えて、散歩を兼ねて念の為に公園全体を見て回った。が、ソレの気配はおろか、自分以外の生物の気配すら感じ取れない。
これ以上の探索捜索詮索、その他一切の行為は無意味だと諦め、手近なベンチに腰を下ろして夜空を見上げる。月は雲に隠れていて、星だってまともに見えなかった。だが、三森は何も思わない。どうでも良いのだ。もし、月がくっきりと空に浮かんでいて、星だってまともに見えたとしても、彼女は何も思わない。どうだって良いのだから。

夜を越え、日を跨いで次の日。
太陽が駒台の空の真上に位置した頃、一は中央公園に足を運んでいた。彼が目指すは、二日前にヒルデと出会った、公園内のベンチである。
ヒルデが随分と気に入っているストリートミュージシャンの歌声を、二人で一緒に聞く約束を確実に果す為、一は二日前よりも早くにその場所までやって来た。まるで、デート。と言うか、それ以外の何物でもない。しかし、彼の気分は決して晴れやかなものではなかった。
ストリートミュージシャン。
聞く者の自由と魂を奪う、素晴らしい歌声。
だったのだが、一は知ってしまっている。声の正体は不機嫌な顔を常に張り付かせ、他人を寄せ付けない大物ぶった威圧感と大量のアクセサリーを身に纏い、それでいて嫌に人懐こく、初対面の人間にエセ関西弁で話し掛けてくる少女だと言う事を。
あまつさえ、彼女は自らをセイレーンと呼ばれるソレの血が混ざった、半端者（ハーフ）だと、そう名乗っていた。
ヒルデにはとても見せられない。知られたくない。彼女の純真な幻想を打ち砕きたくはなかった。彼女は、下手をすればコウノトリやキャベツ畑を信じている。近頃の小学生でも信じない様な馬鹿げた話でも、彼女ならば「……そうなの？」と、信じてしまう。
一はかねてよりヒルデから、そんな危うさを感じ取っていた。
だからこそ知って欲しくない。素晴らしい歌声の持ち主が、実は男女が仲良くしているのを毛嫌いしていて、あまつさえ自分の歌で邪魔してやろうという気概の持ち主だと言う事を。
「……ん」
俯いて考え込んでいた一の頭上を影が覆った。顔を上げれば、眠そうに瞼を擦る待ち人がいる。
「あ、おはようございます」
「……寝てたの？」

ヒルデは一の隣に腰を下ろし、心配そうに見つめてきた。
「いえ、ちょっと考え事をしていて。あ、それより……」
一はヒルデの着ている、真っ白な、ウールチェックのトッパーコートに指を差す。
「コート、着てるんですね」
「キミが言ったんじゃない……」
拗ねたようにヒルデが言うので、一は少しばかり焦った。
「ああ、すみません、そうでした。……その、良くお似合いですよ？」
本心から出た言葉である。
今日のヒルデは、何だかいつもとは違っていた。少なくとも、昨日一が見たパジャマ姿とは雲泥の差である。赤み掛かった茶色の髪、透き通る様な白い肌と白いコート。首元には温かそうなオレンジ色のマフラーをしており、彼女は時折目を細めてそれに頬ずりしている。視線を足元にずらせば、これもまた温かそうな、トグルボタンの付いたファーブーツ。
「……そう、かな？」
「ええ、本当に。どうしたんですか、それ？」
「……えへへ、あの、ね。今日の事を戦乙女のみんなに言ったら、買い物に付き合ってくれたの」
一の脳裏に、ニット帽を被った女、顔を包帯で隠した女、目が虚ろだった女の三人が浮かんできた。
「へえ、良かったですね。あの、でも……」
ヒルデは小首を傾げて一を見つめる。
指摘するのが心苦しかったが、一は心を鬼にした。
「なんで、下にパジャマ着てるんですか？」
それでもヒルデは、首を傾げたまま一を見つめていた。
五分ばかりの、夢の様なコンサートは終わった。

ヒルデは満足げに息を吐き、先ほど一が買ってきた缶の緑茶に頬を当てている。
「……良かったね」
「ええ、そうですね」
こうして、誰が歌っているかも分からない、遠くから風に乗ってくる歌声だけ聞いていれば何の問題も無い。一はチアキの顔を頭の中から追い出して、耳に残っている声だけに集中していた。
別段、一はチアキの事が嫌いなのではなかったが、どうにも苦手なタイプではある。不機嫌な顔が似合うくせに、人懐こい笑顔も似合う。男女が仲良くしてるのを嫌いだと言うのに、男である自分に話し掛けてくる。矛盾を孕んだ、どこか不安定な印象を彼女から受けていた。
「本当、良い歌です。聞いた事は無い歌ですけど」
「……恐れず来たれ、聖徒」
「え？」
「そういう、題名だったと思う」
ヒルデは目を瞑りながら、愛しげにその名を呼ぶ。
――恐れず来たれ、聖徒。
「有名な歌、なんですか？」
「賛美歌。聞いた事、ないの？」
「生憎と」
怪物や幻獣が跳梁し、神や仏が跋扈するこのご時世だが、一は無神論者で無宗教だった。神に縋っても、どうにもならない事を彼は知っている。いつだって、世界を動かすのは人間なのだ。人間を動かすのは、人間だけだ、人間以外の意志が介在してはならない。
一はそう、思っていた。
「神様は、信じたくないんです」
「……信じない、じゃなくて？」
一は静かに頷いた。
「だって、嫌じゃないですか。ソレなんてモノが好き放題やってる

のに、人間を助けてくれない神様なんて。俺は、嫌です。認めたくない」

いる。神はいる。だけど信じたくない。それでももし、本当に神と呼ばれるものがいるのなら、憎みはすれど崇めはしない。讃えはしない、敬いもしない。この世界を放っておいた責任を問うて、呪い、恨み、出来る事なら、殺してやりたい。

「そう、なのかな」

ヒルデは悲しそうに俯く。

「ヒルデさん？」

ヒルデが悲しむ理由が分からなくて、一は彼女に向かって手を伸ばした。が、その手は虚しく空を切る。

「……私は、信じるよ」

ベンチから立ち上がったヒルデは一を見下ろしていた。彼女の瞳には、薄く憐憫の色がある。

「神様を、ですか？」

哀れみの視線を向けられ、一の語気は僅かなりとも荒くなっていた。

「うん。キミは、本当に信じないの？」

「信じたくないんです」

「……でも」

「多分、ヒルデさんが何を言っても、俺の考えは変わりません。もし、神様が俺の目の前に現れたとしても信じません。信じないまま殴ります、そいつを」

一は少し、むきになっていたのかもしれない。

「ん。殴っちゃ、ダメだよ？」

「人に優しくない神様なんて、嫌いです」

「……えっと、神様にも色々いるから……」

「死神とか疫病神。この世界にはそんなのしかいないんですね」

「……で、でも」

「優しい神様なんていないんだ。いたなら、俺たちがこんな酷い目

に遭わなくて済んだのに」
　ソレと戦わなくても、死なされなくても、殺されなくても良かった。ソレになんてならなくて済んだ。
「ねえ、そうじゃないですか？」
　同意を求めてヒルデを見れば、彼女は瞳いっぱいに涙を溜めている。
「う、ええっ？　なんで泣いてるんですかっ？」
「……だって」
「ヒルデさんが泣く事ないでしょう……」
　ヒルデはぽろぽろと涙を零し、頬に伝うそれを気にもしないで言葉を紡いだ。
「……きょ、今日のキミ、な、なんだか違うよ。こ、恐い。恐いよ」
　やっと、一の頭が冷えてくる。
「あ、ご、ごめんなさい。俺、ヒルデさんを恐がらせるつもりは……」
　しどろもどろになって弁解するも、もう遅い。ヒルデは涙を流し続けて一を睨み付けている。
　でも全然恐くなかった。むしろ可愛らしい。一は頬が弛んでいくのを我慢しながら、それでもヒルデが怒っているのだと理解する。
「……な、なんで笑ってるの？」
「笑ってませんってば。それより、ほら、使ってください」
　一はポケットからハンカチを取り出した。ちなみに、ハンカチは彼の持ち物ではない。ジェーンに常日頃持たされているのだ。ジェーン＝ゴーウェスト曰く、ハンカチの一つも持っていない男は紳士失格、らしい。
「い、いらない……」
　ヒルデは一瞬手を伸ばしかけて、引っ込める。
「そのままじゃ美人さんが台無しですよ」
　泣いている顔も中々、こう、来るものがあったが。

「……私、美人じゃないもん」
「充分綺麗ですってば。そんな事言って、全世界の女性を敵に回さないでくださいよ」
一の歯の浮くような薄ら寒い台詞に、ヒルデは肩をぴくりと震わせた。
「ほ、本当に？」
「ええ。だから、ほら」
「……ん」
長い逡巡のあと、ヒルデはハンカチを受け取る。
「……でも、まだ許さない」
「う」
恨みがましく見つめられ、一の心に罪悪感という名の刺が突き刺さった。
「どうしたら許してくれますか？」
「……ん。それは、んん……」
「？」
「……すう」
「話の途中で寝ないでくださいよっ」
しかも立ったまま。
「……ん。つい」
「そんなに眠いんですか？」
ヒルデはゆるゆるとした動作で頷き、そのまま安らかな寝息を立て出した。
「ウェイクアップ！」
びくりとヒルデの体が跳ねる。
「……なんだか、泣いたら疲れちゃった」
「虚弱過ぎますよ」
「キミが泣かしたのに……」
「だーかーら、俺はいったいどうしたらヒルデさんに許されるんですか？」

悪いのは百パーセント自分だとは分かっているのだが、一はそろそろ面倒臭くなってくる。
「……そんなの、キミが考えてよ」
「うーん。じゃあヒルデさんの好きなものを教えてください」
「……ん。好きなもの？」
「食べ物とか」
「……えーと」
ヒルデは顔を綻ばせ、目を瞑った。
「えーとね、私は……」
「はいはい」
しかし、ヒルデは何かに気付いたみたくハッとして、一を見据える。
「……キミ、物で釣ろうとしてない？」
一は小さく舌を打った。
「わっ、私好きなものなんてないよ……」
「うっ。なんか今日は手強いな」
「好きなものなんて……」
そこで再度、ヒルデはハッとする。何か思い付いたのだろうか、悪戯っぽい笑みを浮かべ、ふふんと可愛らしく鼻で笑った。
「……私、歌が好き」
一の表情が強ばる。
「歌、ですか」
こくんと首を振り、ヒルデは愉しそうに微笑んだ。
「……うたって」
「やっぱり……」
それなりの予想は付いていたのだが、一はげんなりする。
「まあ、罰ゲームだと思えば。ちなみに、どんな歌をご希望ですか？」
「ん……」
「あと、勝手ながら今、ここで、って言うのはちょっと」

流石に衆人環視の中では恥ずかしい。
「じゃあ、今度家でうたって？」
「ああ、それなら――」
「子守歌が良いな」
「――や、ちょっと……」
恥ずかし過ぎる。適当に短い曲でお茶を濁そうとしていたのに。
「……ちゃんと枕元で」
何がちゃんとなのだろうか。
「あの、勘弁してください。子守歌とかは……。他のジャンルなら何でも良いです。ええ、この際演歌でもロックでもポップスでも。何だったらヘヴィメタルだってお聞かせ出来ますよ」
だが、一の必死な哀願を受けて尚ヒルデは笑った。
「……ねーんねん、ころーりーよー」
「嫌だあ！」
「私がレム睡眠に入るまでお願い、ね？」
「そんなの判断出来ないじゃないですか！　ゆっ、許してくださいっ、土下座します。土下座しますから！　ほらっ見てください、すごく綺麗に地面に頭擦り付けますから！」
日頃糸原に虐げられている成果を役立てる時が来た！　一はここぞとばかりに自分の土下座スキルがいかに高いかを説明する。屋外でだって固い床の上でだって、その気になれば焼けた鉄板の上でだって。どんなに過酷な状況、条件であっても自分には最高の土下座を披露出来る力量があるのだと熱く語った！　びっくりするくらい情けない。
「……私は歌が良い」
「はあ、はあ……。こ、こんなにしゃべったのに……」
ヒルデは肩で息をする一に愛想を尽かしたのか、背を向けて歩き出す。
「ちょ、ヒルデさん！？」
「……ごめんね。今日は疲れちゃった」

振り返らず、そのまま歩き去っていく。追い掛ければすぐに手が届くのに、一は何故か足を踏み出せなかった。ただ、ヒルデの背中を立ち尽くして見送るだけ。

一はすっかり意気消沈してベンチに座り込んでいた。近付き難い雰囲気を作り出して他人を寄せ付けない。道行く人も、なるべく彼の姿を視界に収めないようにしている。

自己嫌悪に苛まれ、一は暗く淀んだ、死んだ魚もどうかと思わせる目で溜め息を吐いた。

「みんな死ねば良いのに」

「ドンマイ！」

物騒な事を口走った一の丸まった背中を誰かが叩く。

「……ってえな」

「くふふふ、いやあ、ええもん見せてもらったわあ」

振り向けば、心底から楽しそうに笑う少女がいた。一は彼女を見て嫌そうに顔を歪める。

「……お前か」

少女は歌代チアキであった。昨日付けていた物とは違う形のピアスを弄び、からからと笑っている。

「おっす。師匠、今日はご機嫌うるわしゅー？」

「ねえよ。帰れ帰れ、今はお前と遊んでる余裕はないんだ」

「そんなん言わんといてやー、うちと遊ぼうやー」

チアキは一の隣へ図々しく座り、彼の肩を何度も叩いた。

「ええい、鬱陶しい」

「なんや、女に振られたぐらいやん。気にせんでええって、女なんて星の数ほどぎょうさんおんねんから！」

「お、お前見てたのか……？」

「そりゃもうバッチリと。きれーな人やったなー、なんやボケっとしてはったけど。にしても、くふふ、師匠の顔！　いやあ、明日世

界が終わるって聞かされても、あんな酷い顔にはならんのとちゃうか？」

一は肩を落として深く息を吐く。見られていたのか。よりによって、あの場面を。

「……覗き見とは、中々趣味が良いじゃんよ」

「だーかーらー、気にしたらあかんって。そもそもやで、男女の間に友情なんて成立せえへんねんから。師匠だって下心あってんやろ？」

「無いね。俺とヒルデさんは友達だ」

全く無いとは言い切れなかったのだが。

「……嘘や」

チアキは笑顔から一転、不機嫌な表情になる。一を睨み付けて、

「ありえへん」

冷淡に言い放った。

「……だったら、こうして喋ってる俺とお前はどうなんだよ？　あ、俺にはないからな、下心」

「うちらは師弟関係やからええの。師弟の絆は友達や家族よりも厚いんや」

「都合の良い奴だな」

一は呆れるより、チアキの柔軟さに感心してしまった。

「おう。うちは都合の良い女やで、どやどや、今ならお買い得ー」

また、チアキは笑う。怒ったり笑ったり、コロコロと変わる表情が少し面白くて、一は思わず、彼女につられて笑ってしまった。

「今持ち合わせがないんだよ。また今度な」

「そん時には売り切れてるかも。うち、人気者やからなあ」

「まあ、その時はその時だな。すっぱりばっさり、潔くお前の事は忘れて諦めるよ」

一は立ち上がって体を伸ばす。凝っていた筋肉が解れていくのが気持ち良い。

「あ、なあ師匠。今日もうちの歌聞いた？」

「ん？　ああ、聞いたよ」
「ホンマ？　なあ、なあなあどうやった？」
「うーん、良かったんじゃないかなあ、とは思うよ」
素直に「良い」と言うのが悔しいくらいに。
「くふふー、せやろー？」
一の遠回りな感想でもチアキは嬉しいらしい。無邪気に笑い、ベンチからぶら下がっている足を犬の尻尾みたくパタパタと振っている。
「……そうだ。お前さ、前からここでうたってるのか？」
「ううん、ちょっと前からやで。せやなー、一ヵ月くらい前、やったかな？」
「ふうん？　お前引っ越してきたのか？」
「……んー、そんな感じかなあ」
快活な彼女にしては、歯切れの悪い言い方だった。
「なあ、ししょー、なんでそんなん聞くん？」
「あー、いや、この辺さ、夜になると危ないから」
「なんか出んの？」
「ソレが出るらしい。確か、三日か四日ぐらい前からだったかな、連続して出現してるんだって」
「……師匠、なんでそんなん知ってるん？」
チアキに尋ねられ、一は自分が勤務外だと告白しようか迷って、止めた。
「勤務外の知り合いがいてね。危ないから気を付けなって言われたんだ」
「……ふーん」
一は見逃さなかった。『勤務外』だと言った直後のチアキの目を。彼女の瞳には確かに敵意だとか、殺意だとか、良くないモノが映り込んでいたのだ。
一は正直に言わなくて正解だったと、直感で理解する。
「まあ、そういう事だから気を付けろよ」

「うちは平気やけどなー」
「弟子一号、師匠の忠告は聞いとくもんだぜ」
「……うーん、まあ、師匠がそんなに言うんやったら気ぃぐらい付けたろうかなあ」
チアキは神妙な顔で曖昧に頷いた。それも束の間、パッと瞳を輝かせて一に笑い掛ける。
「あー、師匠、うちに惚れたんか？　あかんあかん、うちは弟子で師匠は師匠やからな。恋愛感情は現金持ってこられても厳禁やでー」
「……残念でした。俺のストライクゾーンは限りなく狭いんだよ。お前はキャッチャーミットにすら納まらない大暴投だっつーの」
「なんか、それはそれで腹立つなあ……」
結局、一はそのままチアキと話し続けた。関西人について、嘘を五割混ぜて教えてからかったり、ヒルデの事を聞かれてからかわれたり。
チアキとの、日が暮れるまでの時間。楽しくなかったと言えば嘘になるが、どうしても、彼女の瞳に一瞬だけ宿った感情が、一の胸に暗い影を差す。
敵意とも殺意とも取れる色を滲ませた、刃物の様な鋭い視線。
チアキは明らかに、勤務外に対して反応していた。一は会話の端々にそれらしい単語を混ぜ、どんなに小さな彼女のリアクションでも見逃さない様にしていたが、この日はもう、何の反応も見せてくれなかった。
いったい何だったのだろう。勘違いだったのだろうか。
分からない。一は考えるのを止めて、この日の会話を打ち切る。
また明日と口約束をしてからチアキと別れて、家に帰り、糸原に遊ばれる。ヒルデやチアキの事が気になるが、明日は大学に行こう。
そう思って、布団の中で目を瞑った。

その日の夜、駒台の中央公園にソレが出た。

オンリーワン北駒台店からは勤務外店員として、ジェーンとナナが当たった。

彼女らの話によると、相手は大して力を持たない、日本古来の妖怪だったらしい。

が、これで四日連続である。ソレが件の公園に出てから、もう四日だ。

オンリーワン近畿支部も、何かあるとしてこの事態を異例と見たのか、問題解決の為に一人の社員を送り出す事になる。

その人物、オンリーワン近畿支部、戦闘部一課実働に所属する『棺(ひつぎ)』と呼ばれる男。

……彼を知る人間は、彼について尋ねられると口を閉ざし、それでも尚開くならば、彼の事を『最低』と呼ぶ。

『最低の棺』だ、と。

血潮滴る

午前、八時過ぎ。
勤務外専用のマンションの八階。
ドアを開ければ、刺す様な冷たさの空気が玄関から流れ込む。吐く息は白く、ジャージのポケットに両手を突っ込んで溜め息を一つ。
オンリーワン北駒台店の勤務外店員である三森冬は朝からうんざりとしていた。
先日はつまらないソレの為に駒台の中央公園にまで借り出されて、今日は午前からのバイトである。
寒い。眠い。だるい。苛々する。
三森はエレベーターホールを素通りして、非常階段へと続く扉を足で蹴り開けた。眼下には、日輪を受け、未だ朝露に輝く駒台の街。良い眺めだった。舌打ち。
煙草に火を点けながら、三森は階段を一段ずつ下っていく。吐き出す紫煙が風に揺れ、火の粉と共に流れていくのを横目で追い掛けた。
三森はエレベーターを使わないのではない。使えないのだ。ついこの間から、何者かの悪戯によってマンションのエレベーターが故障している。この事が彼女の苛立ちに拍車を掛けている理由の一つでもあった。
「……ちっ」
おまけに、背後から腹の立つ足音が聞こえてくる。かつん、かつん、と。三森を上から追い掛けて来る。上方にいるであろう人物は決して急ぐ様子を見せず、足音は一定のリズムを刻んでいた。
――わざとだ。三森は直感する。わざと、音を立てている。どうやら、音を立てている者は自分に気付いて欲しいらしい。挑発的な、自己の存在感をアピールする足音。
聞き慣れた音だ。

三森は踊り場で立ち止まり、手すりに背を預ける。
かつん、かつん、と。音が近付いて来た。それが近付く度に苛々が募る。銜えていた煙草を圧し折り下手に投げた。風に煽られた吸殻は揺ら揺らと踊り、人々の歩く街並みへと落下していく。吸殻が地面に落下し切るのを見届けないで、三森は睨む様にして階段を見上げた。
「よう、今日は何を教えてくれるンだ？」
返事は無い。代わりに、白い封筒がひらひらと舞い降りて来る。不審に思いつつも、三森はそれを引っ掴んだ。
「……なンだよ、これ？」
「四の五の言わずに開ければ分かる」
声と共に、異様に長い、それでいてしなやかな影が現れる。長い髪を無造作にゴムで束ねて、折れそうな程に細く、長い手足を伸ばして、ブラックスーツに身を包んだ女が現れる。
無感情、無表情。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗が現れる。
しかし三森は驚かない。僅かに眉を顰めるだけである。
早朝だろうが深夜だろうが、春風が自分の前に姿を現すに到って気を遣う筈がないと、三森は分かっているからだ。
気にせずに封筒を開けると、中からはピンク色をした、メッセージカードの様な物が出てくる。それと写真だ。見た事のない赤ん坊を抱えた女性が写っている。幸せそうな笑顔でこっちを見ていた。だから、舌打ち。
「開けても分かンねーよ、誰だこいつ？」
写真をヒラヒラと、手元で弄びながら三森は問う。
「田中次史（つぎふみ）の妻と娘だ。妻の名は田中天美（あまみ）。天美の旧姓が河内（かわち）、河内天美。娘の名が希（のぞみ）と言うらしいな。ふん、面白い」
「面白くねェよ。大体田中って誰だよ？　私らの知り合いにンな奴いたか？」
「……三森冬、貴様冗談のつもりか？　まあ、仕方の無い話ではあ

るな。オンリーワンでも田中次史より、別の通り名の方で知れ渡っているからな」

春風はつまらなさそうに言うと、懐からもう一通封筒を取り出す。三森に渡したのと同じ種類のものだ。春風は封を開ける事無く、破る。白い封筒は中身のカードと写真と一緒になってバラバラになっていく。彼女は鮮やかな手つきで封筒を百以上の破片に作り替え、それを掌に乗せた。緩やかな風が通り過ぎ、破片を連れていく。

「『棺』」

春風は呟いて、掌に乗せた破片に息を吹き掛けた。

「……あー、そーゆー事ね」

三森は納得したように返事をして、カードと写真を封筒にしまい込む。

「あのクソ野郎、結婚なんて良くもまァ、出来たもンだな」

「『棺』の伴侶か。ふん、余程の天使か、悪魔なのだろうな。まともな神経を備えていれば、こんな事は起こらなかった筈だ」

「くだらねェの送ってきやがって。……まさか、あの野郎、支部の奴全員に……？」

春風は掌に残った破片をすべて風に流して、捨てた。

「そのまさかだ。今朝方、近畿支部に段ボールで送られてきた。人数分以上に封筒が入っていてな、三森冬、貴様にもお裾分けをと言ったところか」

「いらねー……」

三森はこれ以上封筒を持つのも捨てるのも面倒だったので、右手に意識を集中させて、火を灯す。直火で燃やした。すっきりした。

「……けどよ、私が戦闘部に居た時、あいつまだ謹慎食らってなかったか？」

「だからその謹慎が解けたのだろう。私はまだ『棺』を直接確認していないが、確か、一ヶ月前に禁が解かれたそうだ。ふん、この様子だと、また駒台で動いているらしいな」

「うーわ、マジかよ。ちくしょうが、ガキ作ったからって盛ってン

じゃねーぞ」
「点数稼ぎに必死なのだろう。精々、奴には気を付けておけ、三森冬」
無感情、無表情に春風は言う。
「お前に言われるまでもねェよ。用が済ンだらさっさと失せやがれ」
「まだ済んでいない。今の話、一一にも伝えておけ」
「あ？　なンでだよ？」
「三森冬、貴様は私を誰だと思っている？　私はオンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗だぞ。こう見えても忙しくてな、一一に直接伝えるだけの余暇が得られそうに無いんだ。だから、貴様に釘を預けておく」
前口上が長い。イラつきながらも後半部分の話は聞いていたので、
「釘、だァ？」
とりあえず尋ねてみる。
「三森冬、貴様が一一に刺すべき釘だ。預けたぞ、必ず伝えろ」
「って、何をだよ？」
「『棺』について。奴と一一を関わらせるな。良いか、もしもの時は貴様が何とかしてやれ。ではな」
「おいっ、勝手言ってンじゃねーぞっ！」
それだけ言うと、春風は三森の言には耳を貸さずに、非常階段の手摺りに足を掛けて、跳んだ。目を瞑ったまま宙に身を踊らせる。
――気持ち良さそうだ。
それだけだ。それ以上はなんとも思わない。
「くそっ」
三森は春風の奇行には一分たりとも興味を示さずに階段を下りていった。

「はあ？」
「い、いや、だからな……」

春風の言う事になんて従いたくはなかった。が、春風の言う事にも一理ある。三森が知る限り、オンリーワン近畿支部でも『最低』と誉れ高い『棺』について、駄目で情けない後輩に教えてやらなければとも思うのだ。

「羊が何ですって？　お腹空いてんですか、三森さん」

頼りない。弱い。口だけは達者で性格も悪い。目の前の後輩、一一に『棺』について教えなければならない。奴は危険なのだから。

「羊じゃねェ！　ひ・つ・ぎ！　『棺』だっ、頭沸いてンかてめー！」

「……朝から元気ですね。羨ましいですよ、本当」

しかし、当の本人に聞く気は無さそうである。一は三森を適当にあしらって、おでん鍋の出汁を入れ替えていた。

「良いから聞いとけ。やべェ奴なンだよ、そいつが駒台で何かやるかもしんねェ、だからさ……」

蛇口を捻る音。

「俺には関係ないでしょうよ。知り合いでも何でもないんですから。それより、レジ点検ぐらいやって下さいよ」

「なっ……！」

「いや、まあ、別に期待はしてませんけどね。三森さんって基本的に一般向いてませんから」

体が赤くなって、熱くなっていた。気を抜けば指の先から火が灯りそうになる。こっちは心配しているのに、どうしてそう、冷たくされなければならないのか。

「……分かった。レジ点検やってくっから、あとで話聞けよ」

我慢。我慢。我慢。我慢。

三森は拳を強く固めて、静かに震わせる。

「え？」

一が固まっていた。

「あンだよ？」

「なんか、気持ちが悪いなあって」

殺してやろうか。そう言うのを抑えて、必死で声を振り絞る。
「……な、なンでだよ？」
「今日の三森さん、素直過ぎます。何か企んでませんか？」
一はレジ周りの点検をしながら、三森を注意深く観察していた。
「ガン飛ばすな。別に何も企ンじゃねェよ。話聞いてもらいたいだけだ」
「はあ、話？　聞いたじゃないですか、やべえっス先輩マジぱねぇっスみたいな人でしょう。アレですか、三森さんとこの、いわゆる総長みたいな」
「……私は暴走族になンて入ってねェぞ！」
「えっ？　嫌だなあ、そんな冗談は結構ですよ」
「冗談じゃねェよ！」
疲れる。イラつく。三森は自身の体温が上がっていくのをひしひしと感じていた。
「減らず口ばっか叩きやがって、舐めてンのかてめェ？」
三森は気の長いタイプではない。そろそろ我慢の限界である。
「ぼっ、暴力反対！　言い過ぎましたすいませんっ、でも大人しくしてたら良い様に弄ばれると思ってつい！　謝りますっ、だからレディースの人たちとかヤンキーの彼氏とか呼ばないで下さいお願いします！」
「呼ばねェよ！　ンな知り合いもいないっつーの！　てめェはいつまで勘違いしてやがンだよ！？」
断じて、ヤンキーや暴走族なぞに身をやつした覚えなど無い。
「……だって、三森さん恐いんですよ。すぐ怒るし、俺も距離感が掴めないと言うか、どう接して良いものか」
「えっ、あ、おっ、お前、私の事はもう恐くないとか言ってたじゃねェか！」
衝撃の事実。いや、三森にとっては。彼女はてっきり、自分がもっと皆に親しまれる様な人材だと思っていたからだ。そりゃ少しは取っ付き辛いかもしれないが。

「恐くなくなったのは本当です。……ある程度、ですけど。うーん、やっぱり第一印象が尾を引いてるのかなあ」
「呑気に分析すンな！」
「ほら、また怒鳴るでしょう。他の人たちともそんな感じなんですか？」
「あー？」
そんな感じと言われても困る。
「いや、だから、いっつも怒鳴ったり睨んだりしてるんですかって？」
一の発言を受けて三森は思案してみた。
今まで、二十年以上生きてきて、相手によって態度を変えた事は無い。
「お前が言うほど私は怒鳴っちゃいねェし、睨ンでもいねーよ」
「……皆怖くないのかな……」
「おい、仕事しなくて良いのか？」
三森は金庫の鍵をくるくると回しながら、カウンターに腰を下ろす。
「店長は店長だから平気そうだし、糸原さんは怖いもの知らずだし。ジェーンも気が強いからなあ。うーん、立花さんは何だか誰にでも懐いちゃうし、ナナは何とも思ってないよな。堀さんはずっと笑ってるだけだから……あ、神野君はどうなんだろう？　ねえ三森さん、神野君って……」
「知るか」
三森は吐き捨て、回していた鍵を放った。小気味良い音が一の額から生じると、三森の気分が少しだけ晴れる。
「～～～っ！　乱暴！」
「いちいちうるせェ野郎だな。もう知らねー、気ィ遣うのはヤメだ。どうせ客も来ないんだから、話ぐらい付き合えよ」
一はわざとらしい位に長い溜め息を吐いてから、「分かりましたよ」と弱々しく呟いた。

「おっしゃ。さっきも言ったけどな、『棺』って奴はやばいんだよ。頭のどっかがイカれてンだ」
「……抽象的ですね。具体的にどうおかしいのか、何かエピソードでもお願いします」
「うーん？」
三森は腕を組んで、思い出したくない事を思い出し始める。
「そう、だな。あー、まず、アレだ。そいつが『最低』って言われるようになった時の話なんだけどよ。ソレごと味方を殺しやがるンだ。つーか味方を味方と思っちゃいねェ。だったら組織になんて来るんじゃねぇって話だよ」
「分かりやすいなあ」
「笑顔が胡散臭くて、言動が嘘くさい。顔は笑ってても心は笑ってねェ」
思い出すだけで腹が立ってきた。
「で、何が最低って、そいつ腕が立ちやがるンだよ」
「……首にならないんですか？　幾ら強いって言っても、味方を殺しちゃうんでしょう？」
「上の考える事は分かんねェ。ま、大方放っておくより、手元に置いといた方が監視出来るとか思ってンだろうよ」
「えーと？　そんな人がオンリーワンの社員で？　駒台に来てるんでしたっけ？」
不安そうな声と顔で一は尋ねてくる。
「だから、さっきから言ってんだろが」
「味方殺しちゃうような人が、ですよね？　誰か、何とかしようとか思わなかったんですかね」
「……思わなかった奴はいねェよ。でも、実際行動に移した奴は少なかったな」
「その人たちは……？」
「死んだか病院で寝てた。野郎、マジで狂ってやがる。とびきりの奴には誰も逆らえねェんだよ。関わりたくもねー」

確か、当時の戦闘部でも腕に覚えのあった数人が使い物にならなくなった筈だ。三森は思い出して、憂鬱になる。

「って言うか、ソレよりもやばいじゃないですか。犯罪でしょうに。逮捕とかされなかったんですか？」

「全部勤務外中の話だと処理されちまった。仕掛けた方もソレとの戦闘に乗じてだったからな。まあ、それで『棺』は謹慎食らってたんだけどよ」

「……つい最近、解かれちゃった、と」

「だからマジで気を付けろよ。味方、っつーか、平気な顔で何でも殺しちまうような最低最悪だからよ」

「まあ、そりゃ気を付けますけど。あ、その人の特徴とか教えてもらえますか？」

「おう、えーと……」

気が乗らないが、三森は『棺』の姿を思い出してみる。しかし、難しい。内面の性格、性質は簡単に思い出せるのだが、身体的特徴が全く浮かんでこなかった。

そして、思い出す必要もなかった。

店の扉が開いた。客だ。そう思った一はそちらに顔を向けて決まり文句を口にする。

「……っ」

隣の三森は挨拶どころか、顔さえ上げはしなかった。

「あー、もう。三森さん、いらっしゃいませは？」

「最低だ」

「は？」

入ってきた客はレジに向かってくる。煙草かおでん、だろうか。おでんはまだ時間が掛かるから断らないといけないな、なんて思いながら、一はその客に視線を寄越した。

「すいません、店長はいらっしゃいますか？」

近付いてくる客と目が合う。
高くもなく、低くもない中性的な声だった。
「店長、ですか？」
「ええ」
背は高くないが、決して低くもない。顔立ちはハッキリしていなかった。幼くもなければ、老けてもいない。四十代半ば、二十代前半。丁寧な物腰の男性客は、そのどちらでも通るような顔をしていた。
一はその男を注意深く、それでいて失礼には当たらない程度に観察する。
――中途半端な男だな。
髪の毛も、身長も、体のパーツが全てにおいて普通なのだ。高くない。低くない。顔だって、彼が着ているダークスーツだってどこにでも転がっていそうな、特筆すべき事は何もない。
存在感が、薄い。こうして見ている限りにはしっかりと捉えられるだろうが、一度別れてしまえば、この男の姿なんてもう思い出せそうにない。少しでも目を離して、彼が雑踏にでもその姿を溶け込ませてしまえば、彼を探し出すのは困難だろうと、そんな事を一はぼんやりと考えた。
「……あの、どうかしましたか？」
「あ、すいません。えーと、店長に何の御用でしょうか？」
「ああ、失礼しました」
男は最初から開いているのか閉じているのか定かではない目を少しばかり開ける。
「実は僕、こういう者でして」
「あ、これはどうも」
一は男が差し出した名刺を受け取った。名刺を貰うなんて初めてで、ついつい嬉しくなってしまう。
「……えーと」
舞い上がる気持ちを隠しながら、名刺に書かれた肩書きと名前を

黙読していく。
「オンリーワン、戦闘部の田中、さん？」
「はい、田中と申します。先日から担当地区が駒台になりましたのでご挨拶に来ました。どうぞ、以後よろしくお願いします」
つまり、社員。自分は、バイト。地位が違う。こっちが下で、あっちが上。一はいやが上にも緊張してしまう。
「あ、そんな、いえいえこちらこそよろしくお願いします」
一は、既に頭を下げている田中と名乗った男よりも深々と頭を下げた。
「店長なら奥で仕事してますから、どうぞ」
「よろしいのですか？」
「ええ。お構いなく」
田中はにこやかに笑うと、バックルームに向かう。扉を開ける前にもう一度一に向かって頭を下げた。
「……はあー」
一は田中が中に入るのを見届けてから安堵の息を吐く。
「社員さんかあ。緊張したけど良い人だったなあ。あ、ほらほら三森さん、俺名刺なんて初めてもらっちゃいましたよ」
「……」
三森は俯いて、掲げられた名刺どころか、一を見ようともしない。
「三森さん？」
様子がおかしい。そういえば、さっきから三森は一言も喋っていないし、見ている方が痛そうなくらいに拳を握り締めて、震わせている。
「……どうしたんですか？」
「……あいつだ」
短い言葉ではあったが、三森はようやく口を開いた。
「あいつって、さっきの田中って人ですか？」
「馬鹿かてめェ、あいつが『棺』なンだよ」
「はい？」

馬鹿な。一は三森が嘘を吐いているのだとしか思えない。田中が話に聞いていた『最低』だとはどうしても思えない。礼儀正しく、物腰も低く、存在感だってひどく希薄なあの男が？

「人畜無害って感じでしたけど」

「人を見掛けで判断すンなボケ。人畜無害どころか人ですらねェよ。ありゃ鬼畜有害だ」

「……えー？」

「くそっ、こんな早く店にまで来やがるとは……！」

三森は壁に立て掛けておいたダスタークロスを苛立たしげに蹴り飛ばす。

「……あ、あの。本当にさっきの人が？」

「何度も言わすンじゃねェよ！　ああっくそっ、ムカつく！　何しに来やがったあの野郎！」

「挨拶でしょう」

「うるせェよ！」

一は荒れている三森からそそくさと距離を取る。今は何を言っても火に油にしかならない。

しかし、一には田中が味方殺しをやってのけた『最低の棺』なのかどうか本当に分からなかった。三森の様子からしてその可能性は高いのだろうが。仮に本当だとして、何故店にまでやって来たのだろうか。さっきは三森を落ち着かせようと冗談で口にしたのだが、まさか本当に挨拶だけしに来た訳ではないだろう。わざわざここに足を運ぶ理由、目的、裏がある筈だ。

「うーん？」

考えを巡らせるが、満足出来る答えには辿り着けそうにない。一は思考を一旦止める。

「三森さん」

「……あンだよ？」

ホッとした。むやみに怒鳴られない。若干ではあるが、三森の機嫌は良くなっているのだ。

「考えても仕方ありません」
「……何をだよ？」
「田中さんについて、です。あの人が『棺』だとして、何を目的にやって来たのか、何を理由に駒台に来たのか、何をしたいのか。俺にはまだ何一つだって分かりません」
三森は訝しげに一を見ていた。
「……あのな、『棺（あいつ）』に理由だとか、ンな細かいもんはないと思っとけ。下手すりゃ肩が擦れ違っただけで、そいつをバラバラに切り刻んじまうような頭してんだぜ？」
「いやいや、そうにしたって肩が擦れ違ったっていう理由はありますよ。まあ、それで殺されるなんて真っ平ごめんですけど。でも、わざわざ駒台に来たんですから、何かはあるんでしょう」
「ああ？　お前が何言ってるか分かンねェぞ」
「……今は何とも。俺だって自分で何を言いたいのか分からないですから。うーん。やっぱりハッキリした事は言えませんね」
「そうか死ね」
死ねと言われた。一はやれやれと言った風に肩を竦める。
「あの人だって人間なんですから、理由もなく人を殺したりしないでしょう。案外、実は本当に味方を殺さなきゃいけない事情があったんじゃないんですか？」
「あったとしてもだ。肩並べてる奴を殺しといて、のうのうと私の前に姿見せるのは許せねェ。……私は、そーいう奴が嫌いなンだよ」
三森は憎々しげに言い放った。
「……三森さんって、どうして戦闘部辞めちゃったんですか？」
「ああン？」
「睨まないで下さい。だって、バイトなんかより社員の方が絶対良いじゃないですか。給料とか、優遇も融通も利いてたでしょう」
「そりゃそうだけどよ、あー、なンだ。向いてなかったっつーの？」
もしかして、春風と関係があるのではないか。それとも、『棺』か。

一は頭を振って、考えを頭から追い出す。どう考えても、何を思っても、邪推にしかならないと気付いたからだ。

「それでも、この不況じゃ勿体無いとは思いますけどね。俺だったら必死にしがみ付いてると思いますよ」

「そうかよ、つまンない奴だぜホント」

「……社会の歯車にはなりたくないって言いたいんですか？　羨ましいですよ。歯車になりたくてもなれない人たちだってたくさんいるってのに」

三森は舌打ちして、一を睨む。

「私の勝手だろうが。お前は余計な口挟むンじゃねェ、首も突っ込むな。圧し折られたいのかよ？」

「まさか。まあ、そうですよね。誰だって人には言いたくない秘密がありますもんね」

「したり顔してンじゃねーよ。何も知らねェくせに、分かった風な口利くな、ボケ」

その意見には全面的に同意出来た。一は曖昧に頷いて、それ以上は何も言わない事にする。

しばらくして、『棺』こと田中次史がオンリーワン北駒台店を後にした。

田中との話が終わった店長はバックルームから出てくるなり、店内に客がいるにも関わらず大声で「塩撒け！　塩！」　などと叫び、喚いていた。

田中が持ってきた話の内容は、今夜、とある場所を探索するにおいて何人かの勤務外店員を貸して欲しいとの事だった。既に南駒台店とは話をつけていて、そちらからは数名の勤務外店員を連れて来るらしい。

何をするのかも、されるかも分からない。『棺』の噂を聞いていた店長は心底から嫌がっていたが、上の指示には逆らえない。北か

らは一一、三森冬、ナナの三名を田中の指揮下に置くと、苦渋の決断を下した。

とある場所。

その名前を聞いて、一は自ら進んで手を挙げたのだ。彼が良く知る、あの歌声が聞こえてくる駒台の中央公園。

あの日、狼たちと踊った月夜は今でも思い出せる。血が沸き、肉が踊った。月明かりに照らされた獣の宴。

一は半ば確信していた。今宵『棺』が動くのなら、またあの公園で血を見るのだろうと。自分に流れる僅かばかりの狼の血が、そう訴えている。

今夜もまた、誰かが踊るのだと。

今夜また、誰かと踊るのだろうと。

未だ耳に残る鮮烈なメロディを口ずさみながら、歌姫（セイレーン）の姿を思い出してみる。

彼女もまた、姿を見せるのだろうと。

生くる甲斐も無しと

オンリーワン近畿支部の戦闘部である田中次史が指定した時刻は午後十時。指定した場所は駒台中央公園の西側の入り口。

現在時刻、午後九時三十分過ぎ。

「申し訳ありません、一さん。私、まだこの辺りの地理には疎くて」

「謝らなくても良いのに」

ナナが公園の場所を知らないと言うので、一が彼女を店から連れて来たという次第である。

現在地、中央公園の東側入り口。時間もまだあったので、一はナナに公園の案内をしていた。

「一さんは、この公園には良く来られるんですか？」

「いや、来るようになったのはつい最近かな。越してきた時に一度だけここに来たんだけど、どうにも肌が合わなくてさ」

「肌に？　この公園の空気には有害な物質でも含まれているのですか？」

一は思わず苦笑する。

「空気って言うか、雰囲気かな。この公園さ、今は夜だから人もいないけど、陽のある内は家族連れで賑わってるんだよ」

「それは良い事ですね」

「それが苦手なんだ」

ナナは小首を傾げた。ふわりと、ナナの髪の毛とスカートが揺れる。

「家族が、ですか？」

一はゆっくりと頷いた。

「アットホームな雰囲気が苦手。つまり、一さんには家族がいないのですか？」

「そんな事ないよ。俺だって人間だからね」

「はい、私の目には一さんが人間に見えていますよ。では、既に家

族の方が亡くなられているのですか？」
　随分と不躾な質問だが、一は気にしない。オートマータとして活動したばかりのナナに、人間の中でもとりわけ神経質な日本人の機微を理解しろと言う方が悪い。
「いや、仲が悪いだけだよ。それこそ、実家にはお盆や正月に帰らなくても良いくらいにね」
「そうでしたか。ですが、産みの親には敬意を払って然るべきかと。私の様な人形に言われても快くないでしょうが、一さんには家族の方と仲直りする事をお奨めします」
「うん、そうだね。じゃあ、年始には顔を見せに行こうかな」
「ありがとうございます」
　ナナは丁寧に、機械的な動作でお辞儀をする。
「なんでナナが頭下げるの？　お礼を言うのはこっちだよ」
「そうなのですか？　お礼を申し上げたのは、一さんが私の意を汲んで下さったので」
「……ナナには、家族がいるの？」
「私に、ですか？」
　ナナは俯いた。何と言えば良いのか分からない。そんな風に戸惑った様子で、オロオロとしている。
　一は挙動不審なナナを見て、オートマータとはアドリブに弱いのかと思った。にやにやしながら。
「こういう場合ですと、私を創って下さった技術部の方たちが、産みの親となるのでしょうか」
「あー、なるほど。じゃあさ、兄妹とかいないの？」
「あ、それは……」
　ずり下がっていた眼鏡の位置を押し上げて、ナナは一から視線を反らす。
「申し訳ございません。私の姉妹機に関しては技術部の機密事項となっておりますから、一さんには伝えられないのです」
「へー、姉妹がいるんだ？　お姉さん？　妹？」

「……迂闊でした」
ナナは消え入りそうな声で呟く。
「うっかり口が滑るだなんて、ナナでも人間みたいなミスをするんだな」
「私のコンセプトが、人間より人間らしく、ですから。しかし痛いミスでした。一さん、どうか先程の事は忘れて下さい」
「嫌だって言ったら？」
一はヘラヘラと笑った。ナナの失敗が楽しくてしょうがないのだ。
ナナもにっこりと笑い、わざわざ一に見える様な位置に、広げた状態の掌を掲げる。それをゆっくりと、小指から親指に掛けて順番に閉じていき拳を作った。
「一さんの記憶に障害が残る程度の力で殴ります」
それだけでは済むとは思えない。
「あー、冗談。絶対。俺、口堅い。さっきの事、誰にも言わない」
「片言なのは頂けませんが、良いでしょう。それと一さん、口約束ですが、私があなたに約束を破られたと判断した場合、怒りますから」
「……分かりました」
笑顔で凄まれるのは、中々に心臓に負担の掛かるものだった。
「しかし、家族ですか」
ナナは感慨深げに言葉を紡いだ。どこか遠い目をして、深く息を吐く。
「家族がどうかした？」
「家族とは、実に人間らしいものだと思いまして。私には、家族と呼べる方すら咄嗟に出てきませんでした。あの、姉妹の話だって、人様に大っぴらに出来ないです、し……」
一は驚いた。
俯いて息を吐くナナの姿が、やけに悲しそうに見えたからだ。
ナナは自動人形である自分には心が無いと言っていた。心が無いから、悲しくもならないし、怒りもしないのだと。彼女が悲しくし

ていても、怒っていても、あくまで見せ掛けにしかなっていない。所詮は、オンリーワンの技術部とやらがプログラミングした仮初の感情なのだと。

一はずっとそう思っていた。なのに、今の彼女からはそれが感じ取れない。植え付けられた偽物の感情ではない。彼女の、ナナの生み出した本物の感情としか思えなかった。

「……あのさ、家族の事が話せないからって人間じゃないとは、そうは思わないよ」

「それは、一さんが人間だから言えるんです」

「あー、気付いてないのかな？」

「何がです？」

それだよ、と。拗ねた様に言うナナを見て、一は指を差して言ってやりたくなる。人間より人間らしく？　馬鹿らしいと思った。充分、人間だ。少しずつではあるが、彼女には確かな感情と自我が芽生えている気がする。

「や、気付いてないなら良いんだ。大した事じゃないし」

だけど、一はその事をあえて口にしなかった。

「今日の一さんは意地悪ですね。私、ちょっと嫌です」

「俺はいつもこんな感じだよ。それよか、今何時か分かる？」

「話を反らそうと必死ですね」

言いつつ、ナナは袖を捲る。瞬間、金属が何か固い物とぶつかり、滑る様な音が響いた。音の後、彼女の袖から鋭い刃物が姿を覗かせる。刃渡りは十五センチ程度だろうか。鞘などない。剥き出しになった刀身が月光を受けて、妖しくも揺らめく。

そんな事にまで考えが回ったかは知らないが、一は突然現れた凶器に思い切り後ずさった。

「なっ、何だよそれ！？」

「あ、こっちは仕込刀でした」

ナナは平然とした顔で刀を眺めてから、腕を振るう。

「しかし、手入れは完璧でした。あの曇りの無い輝きならば、相応

のソレとの戦闘にも耐えうるでしょう」
　刀身は再び袖の中に消えた。ナナがもう一度腕を振るうと、先刻刃が現れたところから、今度はオープンフェイスの懐中時計が出てくる。
「……えーと、九時五十分ですね。そろそろ、集合場所に向かいましょうか」
　一は頷くしか出来なかった。
「どうしました、一さん？」
「いや、便利だなって」
「ようやく私の有能性に気付いて下さいましたか。ええ、ナイフ、時計の他にも、缶切り栓抜き。やすり、鋏、虫眼鏡、ペンチ、万年筆、シャープペンシルに四色ボールペン、方位磁石や懐中電灯、耳掻き、爪切り……」
「十徳ナイフかお前は」
　ナナはムッとした顔で一を見据える。
「失礼な、十徳では足りません。せめて百徳と言って欲しいところですね」
「そりゃ悪かったな」
　一は目的地である公園西側の入り口へ、さっさと歩き出した。

一、二、三、四、五。
　一とナナが西側入り口へと辿り着くと、既にそこには四名の勤務外店員と、田中がいた。
　集まっていた彼らは誰一人として口を利かない。場には険悪な雰囲気が立ち込めていた。気後れしながらも、ナナに背中を押されて一歩踏み出せば、鈍感な一にも分かるレベルの、分かり易い敵意で以って迎えられる。
　一は目を凝らした。入り口には車が進入出来ない様に五本のポールが立っており、真ん中のポールを境目にして右側から、強く敵意

を感じる。
左端のポール近くには赤いジャージを着た女が一人。
右端のポール近くには鎌を持った女が一人と、二人の男。
田中は少し離れたところで佇んでいる。
――全員が、勤務外。全員が、異能者。
一はこの場からは背中を向けて逃げ出したかったが、
「遅ェぞ」
眉をつり上がらせた三森に手をこまねかれ、仕方なくそちらへ向かった。
「何やってやがった？」
「す、すいません」
「申し訳ありません、三森さん。私が公園の場所を知らなかったから、一さんに案内をお願いしたんです」
三森は煙草を銜えながらナナを見遣る。
「ですから、責めないで下さい」
「……どっちをだよ？」
「私です」
「おい」
意外に利己的である。このメイドには一生奉仕されないんだと一は気付き、内心で嘆いた。
「時間ですね、全員揃ったところですし、始めましょうか」
田中が口を開き、一たちの傍まで歩み寄ってくる。
一斉に、四人分の視線が田中に注がれた。そのどれもが、彼の実力と正体を値踏みする様な、ねちっこい、嫌な視線。唯一、三森だけが嫌そうに顔を背けている。
遅れて、一も注意深く田中に目を向ける。歩いてはいるが足音はなく、闇に紛れた彼の存在感はどこまでも希薄だった。
「まずは集まって頂いた事に感謝を」
そう言って田中は頭を下げる。
「白々しいぜ、あんた。俺たちは支部からの命令にゃ逆らえないん

だからよ」

シニカルな発言をしたのは、一が今日初めて見る男だった。まだ若い。年は一と大差ないだろう。しかし、身長は一よりも随分と高かった。百八十の後半、といったところか。服装はショートのダッフルコートに、チェックのシャツ。ブルーウォッシュのジーンズ。黒縁の眼鏡をくるくると指で遊ばせている。恐らくは度が入っていない、装身用の伊達眼鏡だろう。

全身から気だるい雰囲気を纏わせている彼は、ポールに腰を預けながらわざとらしくあくびをしている。更に特徴を上げるなら、彼は長い髪を茶に染めており、耳と鼻にはピアスを開けていた。

多分、友達にはなれないタイプの人間だと一は悟る。

「なあ、今日って何すんのよ？　俺っちさあ、遊び行く筈だったんだよねえ、本当ならさ」

もう一人。背の高い男の発言に乗る形で、その隣にいた男が口を開いた。

一はそちらにも視線を向ける。

その男も一と年齢は変わらない様に見えた。背も、髪の長さも一と変わらない。だが、身に付けているモノが異質だった。彼は獣の毛皮を羽織っている。

毛皮の下には何も着ておらず、肌を覗かせていた。彼が履いているジーンズとのアンバランスさが異質さを引き上げている。

この男とも友達になれない。と言うか、関わり合いになりたくないタイプの人間だった。

一は男二人を見遣った後、彼らの後ろに立っているヒルデへ視線を送る。

ヒルデは一の視線に気付いた後、少し困った風に目を泳がせた。

北と南。少なくとも、今この場では、一とヒルデは商売敵同士の立場である。

一は今更ながらにその事実を再確認した。

「突然の申し出で、僕としては本当に申し訳とは思っているのです

が、事態が事態でして」
　田中は表情を変える事無く、文句を言った二人に頭を下げる。
「皆さんご存じだとは思いますが、この公園には連日ソレが出ています。オンリーワンとしては見過ごせないのですよ」
「勝手にやってれば良いじゃん」
　毛皮を羽織った男が茶化すも、田中は顔色一つ変えなかった。
「……敵の正体が分かりませんから、僕一人では不安でして。万全を期す為、皆さんには集まってもらいました」
「はあ？　敵って、雑魚なんだろ？　北（こいつら）がそう言ってたんじゃねえか」
　背の高い男の発言を受け、田中はゆっくりと首を振る。
「あくまで今のところはです。こうも続いてソレが出ていますから、僕としては人為的、作為めいたモノを感じざるを得ないんですよ」
「何か、裏があると仰りたいのですか？」
　手を挙げる必要もないのに、ナナはわざわざ手を挙げて発言した。
　糸原率いる愉快な仲間たちに毒されている。一はナナに同情した。
「はい、その通りです。近頃は勤務外に仇名す存在も出てきたらしいですからね。何かあると、僕はそう思います」
　――即ち、円卓。
　連想してしまい、一の喉が渇きを訴える。鼓動が高鳴る。唾を飲み込み、無理矢理、気持ちに蓋をした。
「皆さん北と南に別れてはいますが、ソレを倒す勤務外には違いありません。まだオープンしていませんが、南駒台の皆さんにはこの先の為の予行演習として。北駒台の皆さんには今一度研鑽を積んで頂く為、どうかよろしくお願いします」
「えー？　北なんて必要ないって。俺っちたちだけで充分充分、ね、ヒルデちゃん？」
　突然話を振られたヒルデは困惑していたが、曖昧に頷いた。
「……くっ」
「一さん、どうかしましたか？」

何故か、嫉妬してしまう。見たくないものを見てしまい、一の意欲は減退した。

「……はっ、私だって素人とは組みたくねェよ。勘違いすンなよ、新参が出しゃばりやがって」

一方で、三森の意欲は増進していた。何か、良くない方向に。

「おいおいおい、あんたらがどうしようもないから、俺たちが助けに来てやってんだぜ？」

三森の挑発を受け、背の高い男が安っぽい笑みを浮かべる。

「てめェらに助けてもらった覚えはねーな。助けてもらおうなんてつもりもねェよ」

「女のくせに口だけは達者じゃねえかよ。良いか、はねっかえり。調子こいてるとなあ、今後俺たちは何もしてやらねえぞ？」

「男のくせに口だけは達者らしいな、木偶の坊。良いぜ、私が口だけかどうか見せてやンよ」

「ああん？　何を見せてくれるんだ？　そのちいせえケツ振りながらストリップでもしてくれんのかよ？　ぎゃはっ、良いぜ、全部脱いだら拍手喝采で、お捻りをあそこに突っ込んでやるよ」

三森はポケットに手を突っ込んで、空恐ろしい笑みを浮かべた。瞳は獲物を前にした肉食獣の如くぎらつき、彼女の周囲の気温が上がっていく。

「……三流映画の悪党でも言わねェような台詞ありがとよ。詫びだ、ゲスなてめェのお望みどおり、骨までストリップさせてやるぜ」

「やってみろよ、ヤニ女が」

三森の威圧感に押されながらではあったが、男もポケットに手を突っ込む。おそらく、その中に彼の得物が入っているのだろう。

「って……」

まずい。一は頭を抱えた。三森とあの男、相性が悪いのを通り過ぎて、良過ぎる。お互いが相手の火に油を注ぐのが上手過ぎる。

このままいけば、事態は間違いなく殺し合いにまで発展するだろう。止めなければ。だが、一にはあんな恐ろしい目をした三森を止

めるどころか、近付く事すら不可能に近い。
「なっ、ナナ！　二人を止めなきゃ！」
「何故ですか？」
一はまず隣にいたナナに助けを求める。が、当の本人はきょとんとしていた。
「あのままじゃやばいだろ！」
「……ですが、三森さんは卑猥な言葉を言われて怒っているのでしょう？　あの方と争って三森さんの気が済むのなら、後に何らかの形でしこりを残すよりはよっぽど効率的だと判断します」
「何の跡形も残らないくらいに暴れられたらどうすんだよ！？」
「……一さん。私が見たところ、三森さんの周囲の気温が上昇しているのです」
「怒ってるからだよ！」
「このまま上昇が続けば、三森さんは私の体でも融かしてしまう程の熱を生み出すでしょう」
焦り、惑う一とは対照的に、ナナは冷静な態度で話を続ける。
「と、言いますか。今の私の装甲では既に危険です」
「……お前、行きたくないんだな」
「一さん、昔の偉い人は言ったそうですよ。君子、危うきに近寄らず、と」
「誰が君子だっ！」
ナナの助力は諦めて、一は反対側の南駒台店の勤務外たちに視線を送った。
「そんな女いろんな意味でやっちまえー！　お前が負けたら次は俺っちが行くかんな！」
毛皮を羽織った男は楽しそうに笑っている。めちゃめちゃ煽っている。
予想してはいた。一は最後の希望、ヒルデに救援を求めた。
「……ん」
ヒルデは緩々とした動作で首を縦に振り、

「……」

そこから動かなかった。

「ヒルデさん!?」

この状況下でヒルデは舟を漕いでいる。もう終わりだ。一が諦めて、今日はとりあえず帰って寝ようと天を仰いだ正にその時、影が動く。

睨み合い、仕掛けるタイミングを計っていた三森が動いた。ポケットに突っ込んでいた右手を振りかぶる。

背の高い男が呼応して左手をポケットから抜いた。

二つの拳が凄まじい速度で空気の壁を切り裂いて突き進む。

互いが互いの顔面を狙っていた。もはや激突は必死かと一が目を瞑る。

しかし、いつまで経っても二人の攻撃がぶつかる衝撃音はしなかった。

代わりに二人分の舌打ちと、

「ここまでです」

朗々と響く田中の声。

田中は二人の間に割って入り、その拳を表情一つ変えずに受け止めていた。

それぞれ指一本で、だ。

「二人とも、些か盛り上がり過ぎですよ」

一は驚くのを忘れて、もはや呆れていた。これが『棺』。三森の拳を右手の人差し指、背の高い男の拳を左手の人差し指で制止させている田中は、事も無げに笑む。

「……仲良き事は美しきかな。良い言葉ではないですか。どうです、ここらで自己紹介でも?」

必要以上に、異常にギスギスした空気の中、田中は我関せずと言った具合に自己紹介を始めた。

誰も、逆らわなかった。
誰も、逆らえなかった。
逆らう気すら起こらなかった。
全員が全員、無理矢理言わされている感漂う自己紹介の場で一が把握したもの。
まず、南駒台店に所属している勤務外の名前である。先程三森と争っていた背の高い男は円堂慶。その争いを面白おかしく（そう思っていたのは本人だけだろうが）煽っていた、毛皮を羽織っている男の名は結城晃一。
結城曰く、『こういちっつっても、俺っち高校に行った事ないんだけどねー』だ、そうだ。誰も笑っていなかった。
ヒルデは自分の名前だけを言う。彼女に続いて一と三森は自分の苗字だけを短く告げ、最後にナナが生涯二度目の自己紹介を楽しそうに話して、終わった。
一にとって、南の勤務外の名を得られたのは大きな収穫ではある。だが、それ以上に『棺』の恐ろしさを知ってしまった。
一の知る限り、世界で一番強いと信じていた三森と、その三森に喧嘩を吹っ掛けた円堂。
円堂の実力は知らないが、勤務外である彼がそこそこには有名な三森を知らない筈がない。よしんば知らないにしても、激怒した三森に真っ向から挑んだのは確かである。彼にも真っ向から立ち向かう自信と、それに見合う腕があり、三森に対して勝算もあったのかもしれない。伊達で勤務外は名乗れない。なれないのだから。
しかし、『棺』はその二人を止めたのだ。己の指を二本使っただけである。涼しい顔で、一種飄々とした風情で、少しばかり強い風を受け流すが如く、彼は争いを止めたのだ。
一には、田中の実力が推して知れない。せいぜいが、恐いぐらい強いと思える程度である。だが、自身の拳を受け止められた二人は違う。二人とも田中の存在を忘れていたにしても、真っ向からの一撃を指一本で止められたのだ。

三森が元から『棺』を知っていたとしても、直にその恐ろしさ、強さを目の当たりにした円堂の衝撃は計り知れないものがある。事実彼は沈痛な面持ちで、自己紹介の間も、今も、俯き続けていた。結城もヒルデも、この場にいる『棺』以外の人間は何も言えない。三森は終始不機嫌そうに眉を潜めていた。

――まるで、ピエロだ。

一は二人を見て、申し訳ないと思いつつも、そう感じる。

まるで、『棺』の力をアピールする為に踊っていただけだ。

案外、田中が二人が争うのをぎりぎりまで止めなかったのはこの為ではないか。いがみ合う勤務外たちに力を誇示し、黙らせる為のデモンストレーションではないのか、と。

「……くそ」

一は三森に声を掛けられなかった。

田中が言うには、今日もソレは出る。しかし、勤務外である六名にはソレを見つけて倒すだけでなく、その裏を探って欲しい。むしろ、優先すべきはそちらだと、そう言った。

「ナナ、何かいたか？」

「いえ。こんな事なら、索敵用のレーダーを持ってくれば良かったですね」

現在、勤務外六人は北と南の三人ずつに分かれて公園内を探索している。

一、三森、ナナは西側から北に掛けて足を伸ばしていたのだが、

「……あー、ちくしょう」

三森の機嫌は一向に良くならず、一たちに付いてきて文句を言うだけで、ソレの捜索には力を貸す気がない様子だった。

「あら？」

マイペースに周囲を捜索していたナナが声を上げる。

一は三森が気になりながらも、ナナの傍まで近付いた。

「何か見つけたの？」
「いえ、今、人影が見えたような……。確か、この公園は陽が落ちると人間がいなくなると、そう聞いていたのですけれど」
「うん。理由は分からないけどさ。何か悪いモノでもいるんじゃないかって、皆言ってる」
「……では、誰だったのでしょうか。南駒台の人たちは反対側ですし。田中さんでもないようでしたから」
「だったらよォ」
三森がナナの肩に手を乗せ、楽しそうに笑う。
「あ、聞いてました？」
「聞いてちゃ悪ィかよ？　なあ、考えてても仕方ねーだろ、行ってみようぜ」
「三森さん」
「あン？」
「すげえ楽しそうですね……」
一は不安を覚えた。ソレを見つけたら、間違いなく三森はストレスを戦闘力に転化して暴れ回る、と。
「あーん？　ひゃははは、楽しくねェよー、おらっ早く来い」
巻き込まれたくない一心で抵抗していたが、焼け石に水と言うか、もう無駄だった。コートの裾を引っ張られ、市場に売られていく子牛よろしく一は三森に引き摺られていった。

この夜も、ソレは現れた。
探索開始から一時間経って、西側の入り口に勤務外六人が戻って来た時、ソレが姿を見せたのだ。送り犬と呼ばれるソレである。
ちなみに一はその時のソレが送り犬だと、後になってナナから聞いた。
その時に現れたソレは、何が何だか分からなかった。血塗れになって、五体を刻まれ、正視し難い姿に成り、果てていたからだ。

「いたから、殺しておきました」
田中は、そう言った。
一はただひたすらに吐き気を堪えるしか出来なかった。
ついさっきまで生きていた証明。ソレの体は痙攣を繰り返し、はみ出た臓物は跳ね、体液と血液を流し続けていた。

一は『棺』を思い知る。
今日も、そして明日も。
一は思い知った。
植え付けられた。

ソレとは殺すモノで、殺されるモノなのだと。
それ以外は、全て正しくないのだと。
ソレは、間違っているモノで、正しくないモノだと。

ならば、一一は何なのだろう。
ならば、ジェーンは何なのだろう。
ならば、歌代チアキは何なのだろう。

ソレが混ざった彼らは死ぬべき存在なのだろうか。
誰が味方で、誰が敵で、誰が死に値する存在なのか。

一にはもう、分からなかった。

重荷を負いて

虫ですか？
虫なら殺しましたよ。え？　何でって聞かれても。
虫だったから、としか、言えませんよ。

目的など見出せず、見出す気すら失せていた。
一は駒台の中央公園のベンチに、体を伸ばしてだらりと座っている。
「……くそっ」
昨夜見た、見せられたソレの死に様が脳裏から離れない。
ソレが死ぬのは、今までに何度も見て来た筈だったのに、ソレの血が混ざってからだって、何度か見て来た筈だったのに。
離れない、離れない。今も焼き付いていて、目を瞑ると、鮮明にその時の場面が浮かび上がった。
あの時、田中は表情を変えないまま、自身が切り刻み殺したソレを蹴っ飛ばして、勤務外たちの目の前にまで届けた。

――いたから、殺しました。

ソレとは、何だ。ソレとは、いったい何なんだ。
何の為にこの世界に生まれ、この世界に生きているんだ。
本当に、殺される為に生きているのか？
だったら、自分はどうなるんだ？
何一つ分からない。一には、何一つ分かる気がしなかった。
殺された、ソレ。

別段、一は昨夜殺されたソレに同情している訳ではない。
ただ、怖かった。
あんなに呆気なく殺され、屍を晒され。
次は自分の番ではないかと、一は昨晩、田中の目を見て怯えていた。
「次はお前の番だ」
そう、暗に言われているようで、全て見透かされているみたいで、ただただ恐ろしい。

この時間、一は本来なら、今頃は店でレジを打ち、納品された商品を並べている。
しかし、昨晩の捜索が空振りに終わってしまい、昨日の六人全てが今晩も同じ時間、同じ場所に来るよう『棺』こと、田中次史から召集が掛かったのだ。
その為、『兄』を思うジェーンの判断により一には休息が与えられている。
一はジェーンに感謝する一方で、何て事をしてくれたんだという気持ちもあった。
仕事をしていれば、少なくともその時間は嫌な事を思い出さずに済む。休む時間、考えてしまう時間を持て余したまま、家に篭る気にもなれず、一は公園にやってきた。
今の時刻は、午後の一時を少し回ったところである。一は昼食も取る気にならず、朝からこうして何もしないまま、無意味だとは自覚しながら、自覚している事すら無意味だと感じながら怠惰な時間を過ごしていた。

何も解決しないまま、時間だけが流れていく。
「……う、ん」
いつの間にか、一は眠っていたらしい。彼は目を擦り、あくびを

しながら頭を掻いた。
飲み物でも買いに行こうとして立ち上がると、正面のベンチに座っている、見知った顔と目が合う。
――歌代チアキ。
彼女は相変わらず眉間に皺を寄せ、無愛想にしていて、道行く人と一を睨んでいた。
「おーおー」
彼女には、何故だか不機嫌そうな顔が良く似合っていると、一は思う。
一はチアキに挨拶でもしようと思って、近付いていった。
「寄んなや、勤務外」
彼女の声には全てを拒絶する強い意志が込められている。
足が止まる。言葉に詰まる。頭が真っ白になる。嫌でもだ。
一はしばらくの間、チアキに睨み付けられる事しか出来ないでいた。
「あんた、嘘吐いてたな。うちを騙してたんや」
「……ちょ、ちょっと待てよ。お前、何言って――」
「――昨日、昨日の晩。公園におったやろが」
ようやく、合点がいく。惚けていた一にも、ようやく事態が飲み込めた。
どうやら、昨晩ナナが見たと言う人影はチアキだったらしい。彼女がどうしてあの時間あの場所にいたのかは知らないが、見られていたのは確かだ。
勤務外だと言う事を黙っていたのは悪いと思える。だがしかし、それだけで、こうまでチアキが怒るとは思っていなかった。
「だから待てって。確かに黙ってて悪かった、ごめん。うん、俺は勤務外だけどさ、でもお前、何でそんなに怒ってんだよ？」
見られていたなら仕方ない。とりあえず、一は改めて事実を認め

る。その上で、チアキが怒っている理由を尋ねた。
「……うちは勤務外が嫌いなんや！　ソレを倒す言うてるけど、あんたらは自分に都合のええ事しかせえへんやないかっ」
「お、俺はそんな事しないぞ！」
「勤務外なんて皆同じやろ！　あんただって、あいつと同じなんや！」
チアキは今にも一に飛び掛りそうな勢いで喚き立てる。
こうして言い争っている自分たちを興味深げにして通り過ぎる他人の視線が気になっていたが、一はそれどころではない言葉を聞いた。
「あいつ？　あいつって、誰だ？」
「しらばっくれんなや！　あんたの仲間なんやろ！」
そう言われても、一には何の事か分からない。仲間、と言う事は北駒台の誰かだろうか。
「もしかして、髪の長いスーツの女の事か？」
チアキは探る様な目付きで一を見据えていたが、
「誤魔化そうとしても無駄やで、うちは全部知っとんねんからな」
冷たく、突き放す。
「……何をだよ？」
「全部や、ドアホ！」
「……」
一は段々、チアキに対してイラついてきた。昨日まではヘラヘラと笑って懐いて来ていたのに、今は掌を返して噛み付かれている。
それだけならまだ我慢出来たのだが、昨夜の事が一の苛々に拍車を掛けていた。
「お前さ、ちゃんと喋れよ」
「なんやと？」
「悪いけど、何言ってんだか分かんないぞ」
「こっ、この期に及んで逃げようとすんなや！」
チアキは立ち上がり、一の胸倉を掴もうとする。

「お前から寄ってんじゃねえよ」
しかし、一はそれを避けた。
「俺が嘘吐いたってのは認めるよ。だけど、何だよお前のキレ方さあ。さっぱり分かんねえっつーの。筋道立てて順序良く喋れ」
「〜〜っ！　なんやねんアホ！　このっ、そっちが悪いくせに！」
「俺は悪くない。悪いのはお前の話し方だ。こうして俺に話し掛けてるって事は、何か言いたい事があるんだろ？　だったら、話してくれよ」
チアキは地面を何度も蹴り付け、怒りをぶつけている。一はそれを冷静になって見つめていた。相手が可哀想なくらい荒れているのを見て、頭がすっかり冷えてしまったのだ。
「……う、うちは何もしてへん」
「はあ？」
「いっ、言われたんや！　オンリーワンの社員って奴に！」
「だから、何をだよ？」
いまいち要領を得ない。一は続きを促してみる。
「どっから聞いたんか知らんけど、そいつ、うちにここで歌うなって。うちがセイレーンの血ぃ引いてるからって因縁付けてきたんや。ま、そいつの言う事なんて聞いたらへんけどな」
「……なあ。それ、本当か？」
「うちはあんたらとはちゃう、嘘なんか吐かへん」
「ふーん。で？　その社員って誰だよ？」
尤も、顔と名前が一致する社員など、一はジェーンや堀ぐらいしか知らないが。
「う、あ、の、その……」
「うあの？　ひでえ名前だな」
「ちゃうわアホ！　名前は……知らん」
嘘だな。一は冷ややかな目でチアキに一瞥をやった。
「だってそいつ名前言わへんかってんもん！」
「って言うかさ、何でお前にオンリーワンの社員が尋ねて来る訳？」

「はあ？　アホ言うな、あんたらがうちに頼んでんやろ？」
「頼んだ？　何を？」
オンリーワンがチアキに何を頼むと言うのか。見当もつかない突拍子な話。聞いた事もない話だった。
「一ヶ月前にうちを捕まえに来た勤務外が言うたんや！　命が惜しかったら、ここでうたえってな！」
「……嘘だ」
そんな勤務外、いる訳がない。一時でもソレを見逃してくれる筈がない。そもそも、そんな事をする理由が分からない。
「ホンマやって！」
「じゃあ、その勤務外の名前は？　性別は？　年齢は？　どんな奴だったんだよ？」
「……そ、それは……」
チアキは口篭り、視線を一から反らす。
「やっぱ嘘じゃねえか」
「ちゃう！　思い出せへんねや、そいつ、特徴っちゅー特徴があらへんねん。なんや、特徴がないのが特徴みたいな……」
「――っ！」
特徴が、ない。
一の知る限り、該当する人物が一人だけいる。
しかし、早計は禁物。チアキが出任せを言っている可能性も捨て切れない。何より、彼女の話が本当だとすればおかしな話になるのだ。
「なあ、お前さ、一ヶ月前にはどこにいたんだ？」
「……駒台。ちゅーか、こっから出た事ない」
「お前だって嘘吐いてんじゃんかよ！」
「吐いてへん、うちはそんな感じかなーって言うただけや。勘違いするししょ――あんたが悪い」
チアキは咳払いをしてから、再び一に向き直った。
「まあ、良いけどよ。じゃあさ、何でお前捕まったの？　見てくれ

じゃお前がソレの血を引いてるとか分からないじゃん」
もし、姿を見ただけでばれるのなら、一にとっては困った話になる。
「それは、あー、うちが面接に行った、から、か、な？」
「面接って、どこの？」
「ほら、そろそろ出来るやろ、オンリーワンの南駒台店ってとこ。あっこに行ってんな。ほんで、うち面接の時喋ってもうてん。そこから情報が漏れたんちゃうんかなー？　あははは」
馬鹿過ぎる。一は呆れてものも言えなかった。
「あのなあ、んな事言ってもお前の得にはならねえんだぞ？　ソレを殺す商売やってるとこで、自分はソレですなんて良くもまあ……」
「うーん。その通りやわ。ほんで、面接落ちて、そっからすぐに勤務外やーって奴が来てん。いやーびっくりしたわ。うちな、アパートで一人暮らししてんねんけど、夜中ノックされて、いきなし刃物突き付けられて。うわあ、思い出しただけでもぞっとするわあ」
恐らく、面接に持っていった履歴書から住所がばれてしまったのだろう。一はチアキの無防備さを呪った。
「……じゃあ、お前の力ってのは本物なんだな？」
「あんただって知ってるやろ。うちがちょっと気持ちを込めれば、何でも出来んねん。来いって思ったら何かが寄ってくるし、来るなって思えば、皆どっか行く」
「俺には効かなかったけどな」
魔女の時といい、自分には何かしらの耐性でも付いているのだろうか。一は己の悲運をただただ、嘆いた。
「その力はどこで手に入れた、っつーか、どうやってセイレーンとやらの血が混じったんだ？」
「さあ？　生まれた時からこんな感じやったけど」
「はああ！？」
「うわっ、唾飛ばすなアホ！」
逆算すれば十年以上も前の話だ。チアキは、ソレが大々的に姿を

見せたと言われる、パンドラ事件の前にソレと関わっていた事になる。

「お前、いつからソレを知ってたんだ？」

「うーん？　いや、ソレって名前が付いたんは最近やろ？　それまではうち、自分にそんな力があるなんて知らなかったもん」

「……わかんねー」

もしかして、『ソレ』はパンドラ事件よりもずっと前から存在していたのだろうか。そう言えば、と。一は今までに聞いた色々な話を思い出す。心当たりは、幾つかあった。

――しかし。

今は、置いておこう。一は頭を切り替えて、今起こっている事を追求しようと決めた。

「なあ、お前にうたえって言った勤務外と、つい最近お前に会いに来た社員ってのは同一人物か？」

「へ？　う、うーん、違うと思う。でも、勤務外の方は特徴ない奴やし、外暗かったし怖かったからよう見られんかったわ」

「二人とも、特徴のない奴だったんだな？」

チアキは素直に頷く。

「なんや、存在感が薄いっちゅーんかな？　影みたいな奴やったわ」

「なるほど、な」

話が上手く出来過ぎている。それこそ、恐ろしいくらいに。

一はとりあえず、今までに得た情報を元に、少しずつ真実を組み立て始めた。

「えーと……」

「なんや？」

まず、歌代チアキが本物であると仮定する。気持ちを込めれば、何でも出来るとチアキは言った。人間とソレの混ざった半端者である自分ですら、チアキの歌声に引っ掛かりはしたのだ。……ソレだって、彼女の声に誘われるだろう。

チアキの力が確かならば、成る程、オンリーワンの人間にも目を

付けられるかもしれない。
この公園に起きている連続したソレの出現に、チアキは確実に絡んでいる。チアキが歌でソレを呼んでいる。
確証はないが、一は自分の中でそう結論付けた。
しかし、そうなると不可解なのはチアキにうたえと強要した勤務外。セイレーンの血を引いていると言ったチアキをわざわざ尋ねたのは、彼女の力が本物であるという証明にもなる。
ほぼ間違いなく、歌代チアキは異能なのだ。
ならば、何故勤務外はチアキにうたえと言ったのかが問題になる。彼女が歌った場合、ソレが歌声に釣られて寄って来る可能性は決して少なくない。危険なのだ。チアキの力を信じている勤務外が、その可能性に気付かない理由は有り得ない。
現に、チアキは別の社員に釘を刺されている。ある程度彼女の能力を把握出来れば、何が起こるか誰にだって予想は付くのだから。
うたえと言った勤務外。
うたうなと言った社員。
「……『棺』、なら」
田中次史。
彼ならば、一の知っている勤務外、社員の中で唯一チアキの言う特徴に一致する。辻褄が合う。
だが、田中は社員の筈だ。チアキに釘を刺した社員には該当するが、うたえと言った勤務外には該当しない。
そもそも、田中が一連の事件の犯人として、一には理由、動機が思い付かない。彼がチアキを利用してソレを誘き寄せる。だが、結局はその彼自身が事件の後始末に駆り出されている。そんな馬鹿な話があるだろうか。無駄過ぎる。このままでは、どこにも辿り着かない。
それでも、一はチアキの話を嘘だとは決め付けられない。足りない、足りない、まだ足りていない。違う角度からの情報が欲しい。
「お前が、ソレを呼んでるのか？」

「はあ？」
頭の中がごちゃごちゃとしてきたので、一は話題を切り替えてみたのだが、思い切り睨まれる。
「あんなあ、うちはうたえって言われてうたってただけや！　なんでソレなんか呼ばんとあかんねん！」
「いや、いやいやいやいやいやいや」
一は力いっぱい首を振った。
「だったら、どうしてソレが来るんだよ？」
「知らんわハゲぇ！」
「俺はハゲてない！　見ろっ、地毛だよ！」
「近付くなボケっ、うちはあんたが嫌いになったんや！」
チアキは拳をぶんぶんと振り回して一を追っ払う。
「お前まだ隠してる事あんだろうが！」
「ないわっ、うちは勤務外に頼まれて公園でうたってるだけや！　ソレがどうとか、知らんもんアホ！」
「おい馬鹿っ、だったらまた考え直さなきゃいけないだろうが！」
「知らん言うてるやろっ、もううちに話し掛けてくんなあ！」
チアキは一の向こう脛を蹴っ飛ばして、その場を走り抜けていく。
一はもう、彼女を追い掛けようとは思えなかった。足が、痛い。
「くっそー、だったら俺の前に出てくんなよな……」

一はチアキが去った後も公園内のベンチに座っていた。
考える事は山ほどある。
このままで良いのか。流れに身を任せたままで良いのか。
一に流れる狼の血が、そう、呼び掛けていた。
勤務外、人間の立場ならソレは見過ごせない。ソレは、敵だ。
公園に現れるソレも、場合によってはソレを誘っているチアキも敵となる。
だが、今の一はソレの立場をも考えてしまっていた。

確かに、人に害を為すソレは見過ごせない。が、公園に現れたソレが何をしたというのか。チアキが果たして何をしたというのか。

ソレが連日現れているにも関わらず、まだ犠牲者が出ていない。チアキの力だって、本当かどうか怪しいものである。素晴らしい歌声ではあるが、ソレを誘う力が彼女にあると言う確証はない。

それでも、上からの命令に逆らってはいけない。それぐらい、一にだって分かっていた。

分かっては、いる。

逆らえない。下手に立ち回れば、自分がソレと関係があると疑われてしまう。それだけでも厄介なのに、もし、ばれてしまえば。

――『棺』には逆らえない。

しかし、心のどこかでこのまま『棺』に従っていても良いのかと、疑念が鎌首をもたげるのだ。

歌代チアキか、田中次史。

ソレか、人間。

誰を信じて、誰を信じないのか。

誰を味方とし、誰を敵に回せば良いのか。

「はあ……」

何にせよ、今のままでは踏ん切りが付かない。答えまであと少し。良い所まで来たという手応えはあるのだが、やはり足りない。

北駒台店の皆に相談する気は、今のところはなかった。問題がデリケート過ぎる。場合によってはオンリーワンの社員を敵に回すと言ってしまうのだ。言える筈もない。

言えるとすれば、ジェーンか、ギリギリのラインで糸原。それ以外のメンバーには、迷惑も心配も掛けたくないし、余計な目で見られたくなかった。

一はふと立ち上がり、ぐるりと公園内を見回す。

――こういう時、誰かが来てくれれば助かるのに。

余計なおせっかいは焼きに来るくせに、肝心な時には誰も来てくれない。

おしゃべりな情報部、口の悪い元フリーランス、生意気な四足歩行。誰でも良い。

「……って……」

そんな考えに至った時、一は自分を情けない奴だと恥じた。一人では何も出来ない駄目な奴だと、自戒する。

一は口を真一文字に引き締めて、甘えた気持ちを無理矢理追い出した。

だが、考えれば考える程に気持ちは沈んでいく。

ソレと、人間。

誰も頼んでもいないのに、板挟みになっている。考えても仕方がないから、忘れようとする。

気持ちは深く、深く。一の思いは自分でも手が届かない深層意識の最奥まで沈んでいった。

一が延々と悩んでいたのと同時刻、三森冬は自室のベッドに転がっていた。

枕元には灰皿が置かれており、皿の上には大量の吸い殻。そして、皿に乗り切らない灰がシーツを汚している。三森はベッドに広がっている惨状を見るたびに、その惨状を引き起こしたのが自分自身である事にも関わらず、陰鬱な気持ちになっていった。

――ムカつく。

思い出すのは昨夜の出来事。

南駒台店の勤務外、円堂に馬鹿にされ、あの『棺』にまでこけにされた。

何よりも一番腹が立つのは、何も出来なかった自分に、である。

あの時、『棺』に攻撃を止められた三森は『棺』に対して僅かなりとも恐怖を覚えていた。我を忘れて、ほんの少し周囲に目がいっていなかったとはいえ、怒りに任せ、滾りに飽かせた渾身の一振りを止められたのは歴然とした事実である。

一瞬でも、あの場にいた『棺』を忘れてしまっていた。警戒をし過ぎてもし過ぎることはない、それでもまだ足りない存在だった奴から目を離したのはとんでもない失策である。

三森は、昨夜、あそこに春風が居合わせていない事を祈っていた。もしあんな醜態を見られていたならば！　身を捩る。次に彼女と会うのが嫌で嫌で堪らない。何を言われるのか分からない。罵詈雑言ならばまだしも、慰められなどしたら自殺ものである。

「あああああっ！　畜生！」

三森は傍にあった目覚まし時計を布団に叩き付けた。みっともない、負け犬の遠吠えだとは分かっていたが、体が勝手に動くのは止められない。勢いに任せて、ベッドの上にある灰皿を足で蹴っ飛ばす。ガラスで作られた大きめの灰皿は割れる事無くフローリングを滑っていき、カーペットの上で止まった。

シーツには吸い殻や灰が零れたままだったが、三森は舌打ちだけをしてから、投げ遣り気味にベッドの上へ身を投げ出す。

目を瞑れば、浮かび上がるのは『棺』の顔。

「……ンあ？」

顔が、浮かんでこなかった。

特徴が、なさ過ぎる。せめて想像上で『棺』をボコボコにしようと思っていたのに。

三森は何事か喚いてから、仕方なくターゲットを切り替えた。事もあろうに、この自分にストリップだとか、口だけの女だとか抜かしやがった勤務外に怒りをぶつける。

――確か、円堂とか言っていたか。

頭の中にリングを想像して、マウントポジションで顔面の骨が砕けるまで、顔の形が変わるまで殴り続けた長髪で背の高い男を見下ろしながら、三森は敵の名前を思い出した。

あくまで、想像上。

「あー、くそ、こんなんじゃあ気が収まンねェ」

非常に根暗な行為だとは思いつつも、そうする事でしか仕返しが

出来ない。いっそ、相手が勤務外じゃなければ良かった。自分が勤務外じゃなければ良かった。そうすれば、余計な遠慮などせずに拳を振るえたのに。

三森は足をばたばたさせて悔しがる。

身分や組織に縛られて、自分の好きに、満足に動けない事が歯痒くて仕方ない。

「殴りたい殴りたい殴りたい殴りたい殴りたい殴りたい」

あの時は、相手が勤務外だったから本気じゃなかった。『棺』に対して油断していた。

それも事実ではある。

だが、それが何だ。あの時は、あの時確かに戦場だったのだ。戦場において本気を出していなかった、油断をしていたと言い訳するのがどんなに意地汚く、みっともない所業なのか、三森は自分でも分かっているつもり、だった。

三森は店にある少年漫画の単行本を立ち読みしながら思ったものだ。敵にやられそうになる主人公。主人公にやられそうになる敵。

「こっからが本番だ」「本気を出す時が来たようだな」舐めるな。殺し合いに手加減もクソもあるか。やるなら最初っから本気でやれってンだ、と。

そう思っていたのだが、いざ自分が戦うとなると、保身や立場が枷となる。相手を選んで、力を制御しなければならない場面もある。

殴りたい。暴れたい。ムカつく奴らの鼻っ柱を叩き折ってやりたい。そんな事、出来ない。自分は勤務外で、相手も勤務外なのだ。ルールに縛られている我が身では、叶いそうにない。

理由が、欲しい。

誰かに、何とかして欲しい。

動くに足る、殴るに足る、確固たる理由が欲しい。

自分は強い。間違いない。過信ではない。慢心はない。自信はない。それでも、ソレと何年も戦い続けた、圧倒的な経験が三森を支えている。

だが、その強さはあくまでソレとの戦闘において、のみだ。相手が人間なら、話は別になる。

勤務外を長くやればやるほど、オンリーワンの制約、異端の誓約が嫌でも身に染みていく。がんじがらめになった勤務外を解き放つのが、ソレとの戦闘。持って生まれた、後から付いた異能の力を行使出来る唯一の機会。

気の向くままに力を振るえば、ギリギリ残った人間の部分ですら、呆気なく消えてなくなる。

縛られているからこそ、三森冬は、大抵の勤務外は人間を保っていられるのだ。

「……あー」

それでも、『棺』は腹が立つ。円堂慶に腹が立つ。

それでも尚、何も出来ない自分に腹が立つ。

ソレ。人間。勤務外。フリーランス。

立場に怒り、身分に悩み、力を妬む。

一と、三森。

彼らもまた、苦しんでいた。

しかし、苦しんでこそ人間。

悲しんでこそ、妬んでこそ、悔やんでこそ、恨んでこそ、喜んでこそ、楽しんでこそ、憎んでこそ、憤ってこそ、人間。

迷い続け、思い続け、考え続けるのが人間の証。

少なくとも、今、一と三森は、限りなく人間なのだ。

今、だけは。

君もそこにいたのか

オンリーワン近畿支部の戦闘部である田中次史が指定した時刻は午後十時。指定した場所は駒台中央公園の西側の入り口。

現在の時刻は午後八時。一は、今日ここに集うであろう勤務外の誰よりも早くに公園へ足を踏み入れていた。彼の手にはビニール傘が握られている。今日は雨が降らない、曇りでもない、なのに、だ。

その理由を知る者は、今この公園内には一以外誰もいない。彼の持っているビニール傘が、古くからギリシャの地にあった城塞都市において守護女神と称され、崇拝された女神アテナの最高であり、最硬の楯、アイギスだと気付く者は誰もいない。いる筈がない。

ぐっと、アイギスを握り締める。

血が騒いでいた。狼と人との雑多な血潮が全身を駆け巡り、警告している。

――ここで、何かが起こる。

そう、分かっていた。自分は頭があまり良くない。が、救い難いほどの馬鹿でもない。一には全てが、理解出来つつあった。

田中次史。『最低の棺』。仲間殺しをやってのけ、今もまた駒台で何かをやらかそうとしているオンリーワンの社員。

店長や三森、オンリーワンの社員、『棺』を知る者は全て例外なく『棺』を毛嫌いしている。確かに、人を殺しておいてのうのうと生きていられるだなんて最低だろう。だが、一にはまだ納得が出来なかった。人を見掛けで判断してはいけない。何度も、それで痛い目を見て来た。それでもまだ、田中次史が『最低の棺』だとは思えない。

情報が足りない。欲しい。

自分の与り知らぬ所で事態が進んでいる。しかも、恐らくは悪い方向に、だ。流されるままに流されていてはいけない。

「ふう……」

一一は、今日、ある一つの決意を胸に秘めていた。

「……ああ、ヒルデさん。やっぱり来てくれましたか」

一はふと、顔を上げる。予想していた通りだ。ヒルデの到着に目を細めて、ベンチから立ち上がる。

赤み掛かった茶髪と、眠そうな目。一が昨日見た彼女の格好と殆ど変わらない。彼女の持つ埒外な大きさの鎌が、今日はやけに映えている。日常を象徴している様な昼間の公園では異常だが、今は人が全くいない夜の公園だ。良く似合っていると思って、笑った。

「……昨日は、ごめんね」

やって来た人物は悲しそうに微笑む。

「気にしないで下さい。……他の人たちが来るまであと二時間、と言ったところでしょうか」

「……北からは、誰が来るの？」

「昨日と同じで、三森さんと、ナナって子です。南も同じ面子ですか？」

「……ん。私と、昨日の、野獣（ウールヴヘジン）が二人」

北から三人、南から三人、計六人の勤務外を引き連れて、『棺』は何を始めようと言うのだろうか。

否、何でも始められるのだ。

「公園を探索するって言ってましたけどね」

一はぐるりと公園内を見渡す。

「裏と言ったって、いったい何を探すんでしょうか？」

「ソレ、じゃないのかな」

「今日出るのなら、もう六日連続です、か。でも、それにしたってやり過ぎな気はしますよ」

ヒルデはゆっくりと頷いた。彼女もまた、一と同じ様な違和感を感じているのかもしれない。

「ヒルデさんは『棺』について何か知りませんか？」

「……ん、私はずっと寝ていたから」
「寝てた……？　あ、いや、説明は良いです。また今度で。えーと、それじゃあ、他に何か話を聞いていませんか？」
　意味が分からないが、ヒルデが『棺』について殆ど何も知らない事に変わりは無さそうだ。今、深く追求するのはやめておく。
「私は、何も。行けって言われたから……」
「俺もです。でも、ヒルデさんだっておかしいとは思ってますよね？　何か、嫌な予感がしてるんですよね？」
「……ん、そうだね。そして、キミはその正体に気付いてる」
　一は少しだけ驚いた。
「ヒルデさんって、うちの店長みたいですね」
「？」
「普段は何考えてるか分からないんですけど、時々勘が鋭くなるって言うか」
「……失礼だよ」
　ヒルデは拗ねた様に唇を尖らせる。
「ああ、すみません。店長なんかと比べたらヒルデさんに失礼ですよね」
「そうじゃないよっ」
「……そうなんですか？」
　一がとぼけるので、ヒルデは諦めた。話の本題に戻る様に促して、一つ溜め息。
「じゃ、時間も無いので。ヒルデさんには伝えておく事が幾つかあります。まず、あのストリートミュージシャンの正体について、なんですけど」
「……え、キミ、会えたの？」
「ええ、出会えたのは偶然ですが。歌代チアキって女の子です。どっからどう見ても普通の……喋ったらちょっと変わってるって程度の、普通の子でした」
　ヒルデは黙って頷いて相槌を打ってくれる。余計な茶々を入れた

りしないので、実に心地良く、話し易かった。
「その、チアキなんですけど、どうやらソレの血が混ざっているらしいです」
「……本当に？」
「真実味はありましたよ」
少なくとも、一にとっては。
「セイレーンってソレの血が混ざっているそうで、それでそいつ、歌が上手くなったって言ってましたから」
一は必要以上に真実は語らず、必要ならば嘘も混ぜて話を展開していく。
「セイレーン……」
「ヒルデさん、知ってますか？」
「ん。私は、水の精霊って聞いたよ。えーと、ローレライ伝説って知ってる？」
一は小首を傾げる。
「……その、えーと。んと、水の中に、ひ、引き摺り込むの」
「ああ、歌で、ですか？」
ヒルデは満足げに頷いた。
「うーん。まあ、合ってると言えば合ってるのかなあ」
水中にではないが、彼女の歌に引き摺り込まれたと言えば、そうなるのかもしれない。
「あの、ヒルデさん。俺の話信じてもらえますか？」
「……ん」
ヒルデは緩々と首を振る。一は安心した。突然、ソレの血がどうとか言ってしまって、引かれないだろうかと。
とにかく、第一関門はクリアした。
「良かった。信じてくれなきゃ、これ以上話の続きが出来ませんでしたからね」
「キミの言う事だもん、信じるよ」
ちょっと照れる。

「あの、ヒルデさんってソレについてどう思いますか？」
「んん？」
「その、憎んでるだとか、殺したいだとか……」
「……命令があれば戦うのは仕方ないけど、私はあんまり、好きじゃないかな。憎むとか、そんなの」
「命令がなければ、ソレと戦いませんか？　嫌いになりませんか？」
ヒルデは顔を上げる。一が何を言いたいのか分からないのと、彼の声が震えていたからだ。
「……理由もないのに誰かを嫌いにならないよ。相手が、ソレだったとしても。ふふ、歌の上手い子だったら、尚更」
優しい人だと感謝する。同時に一は強い自己嫌悪を覚えた。今から自分はヒルデを試す。その事を内心謝りながら、声を振り絞った。
「ヒルデさん、俺、実はソレなんです」
ヒルデは目を見開いてこっちを見ている。
ああ、声が震えていたのか。笑顔が作り物過ぎたろうか。
一は涙を堪えた。
「……嘘」
嘘じゃない。一は頭を振った。
「俺も、俺にもソレの血が流れているんです。歌代チアキにはセイレーンが、俺には狼が混ざっています」
ヒルデは黙ったまま、一の真意を探ろうとしていた。
しかし、無駄だ。一は嘘を吐いていない。
「突然ですよね、ごめんなさい」
白々しい。一はヒルデを試した。ヒルデで、試した。自分にソレの血が混じっていると告げてどうなるのか知りたかったのだ。だが、三森や糸原、比較的近しい者に話すのは躊躇われる。
だから、ヒルデを利用した。
事前に探りを入れて、保険を掛けて。彼女ならば大丈夫だと判断して。最悪、嫌われても良いとさえ思っている。
「……気に入らないなら、ここで俺を殺してください。文句は言い

ません。いや、言えません、かな？」
殺されても良いと思う。
一方で、ヒルデならばそんな事はしないという打算もあった。つくづく終わっていると、自分が嫌いになる。
「……その事、誰かに話したの？」
「いえ。上手くいっていれば、この事を知ってるのは一人と一匹、です」
「なんで、私に？」
「ヒルデさんなら、良いかなって。話しても、嫌われても、殺されたとしても」
半分以上は嘘に近い。
「……どうして、今言ったの？」
ヒルデは少なからず困惑していた。一は頭を掻いて、そりゃそうだろうな、と、どこか遠くを見ながら思う。
「今から言うのは、俺の当てずっぽうな推測なんですけど。『棺』。田中さんは多分、歌代と繋がりがあるんだと思います」
「……？」
「確証はないですけど、田中さんは歌代を利用してソレを呼んでいるんだと思います。事実、その目論見が成功しているじゃないですか」
「チアキって子が、本当に勤務外やソレと関係あるの？」
「恐らくは」
勤務外と聞いた時のチアキの目が、全てを物語っている気がしていた。
何かは分からない。それでも、何かが確実にある。
「ある程度事情を知っている者が、少しでも調べりゃ歌代が怪しいって事には気付くんです」
ソレが連日公園に現れて、ソレと関わりのあるチアキが近くにいる。ソレの力を持った者がいる。
「何かが、ここにあるんです。勤務外を大量に使うだけの理由が、

必ず。田中さんがそんな事をする理由も目的も分かりません。けれど、その何かを、田中さんは持っている」

「……ねえ、キミ、まさか」

「ヒルデさんは優しい。本当に、笑っちゃうくらいに優しいです。でも、他の人はソレには優しくないと思うんです。俺たちには絶対に優しくしてくれない」

多分、ヒルデには自分が何をしようとしているのか分かっている筈だ。

一はそれでも、決意を口にしようと思う。

「……俺、皆を敵に回すと思います」

ソレを殺す勤務外。だが、一は勤務外に殺されるソレでもあった。今は何ともない。せいぜい常人より爪が伸びるのが早い程度だ。しかし、今後どうなるのか自分にすら分からない。あの時のジェーンの様に、誰かを襲うのかもしれない。来年か、次の満月か、もしかしたら明日にだって。自分が自分でなくなるのが恐い。たまらなく恐ろしい。

「歌代に聞いてみようと思うんです」

「……何を？」

「さっきヒルデさんにも聞かれたけど、どうしてそんな事を言ったのか。どうして言えたのか、です。自分が普通じゃないなんて、もう人間じゃないなんて、普通言えますか？」

一には訳が分からなかった。出来る事なら墓の下まで持っていきたい様な秘密をどうして出会ったばかりの他人に笑顔で口に出来る？　初対面だからか？　同じ境遇だと、似ていると思ったからか？

一には、歌代チアキが理解出来ない。

だが、理解出来ないまま終わらせたくはない。少なくとも、自分に関係のある事実なのだから。はっきりさせておきたい。すっきりさせておきたい。

歌代チアキを、分かりたい。

「同病相哀れむ訳じゃないですけど、放っておけないんです。……

そいつが、皆が言っている『最低の棺』に狙われるかもしれないのなら、尚更放っておけません」

「……皆を敵に回して、でも？」

「けじめは付けます。俺はそのつもりであなたに告げたんだから。これから先、皆とは違う事をしても良いのかどうか。俺には分かりません」

一は笑った。何とも小ずるい笑みである。

「ヒルデさん、判断してください。自信がないんです」

「……はん、だん？」

「俺は今から、自分の為に動くつもりです。勤務外なのに勤務外を裏切るような真似をして、勤務外なのにソレを助けるような真似をする、かも、しれないんですよ？」

ヒルデの腕に力が篭った。鎌の刃先が月明かりを受けて僅かに揺らめく。一はその動きを見逃さない。

「殺すか、殺さないか。今選んでくれませんか？」

「……キミは」

目の前で風が唸る。

一が目を瞑った次の瞬間、喉元に鎌が突き付けられていた。

ヒルデに対して情に訴え保険を掛けたが、一の目論みは上手く行かなかったらしい。

「……ま、予想はしてましたけど」

死ぬ前に出来るだけ格好を付けたかったが、一の声は面白いくらいに上擦っていた。

「キミは、誰を敵に回すつもりなの？」

「……皆、です」

「皆って、誰？」

「み、皆って言ったら皆です。俺みたいな半端者に味方してくれる奴いません」

「……私も、キミの敵なの？」

ヒルデの声は嫌に冷たく、一の耳に入っていく。

「ソレだからって殺さなきゃいけないの？　人間だからって守らなきゃいけない？　勤務外だから、戦わなきゃダメなの？」
「……っ」
似た事を、誰かに言われた。
灰色の毛並みをした、生意気で皮肉屋な犬が一の脳裏を掠める。
「……どうしても区別しなきゃいけないの？　私は、嫌だよ」
「そんなの、知りませんっ」
「私は、好きなら好きで。嫌いなら嫌い。それだけで良いよ。それだけが、良い」
勝手な物言い。
押し付けがましい、考え。
今の一には、そうとしか捉えられない。
「勝手な……くそっ。くそ、くそ！　おっ、俺はもう完璧な人間じゃないんだ。……完璧なソレでもないっ、どうしようもない最低な馬鹿なんだよ！」
一は鎌を突き付けられている事すら忘れて、激情を吐き出した。
「俺が悪いってのは分かってるんだ！　コヨーテにだって言われたっ、でもどうしろってんだよ！　どうやったら正解なんだよ！？　俺にはソレとか人間とか分からねえんだっ！」
「――分からなくて良いよ」
「は！？」
「……ん。だって、キミはキミだよ。ソレだとか人間だとかの前に、キミは一一君じゃない、ね？」
一は我が耳を疑う。
「私には決められない。キミが正しいのか、間違ってるのか、何をしたいのか、決めるのはキミだよ」
ヒルデは鎌を引いて、一を見つめる。
慈愛に満ちた女神の如き瞳に射抜かれた一は、自分がとても気持ち悪いモノだと認識させられた。
「……好きにしたら良いんだよ。カトブレパスの時だって、そ

うしてたじゃない」
「俺は……」
何を今更。そうも言われた気がした。
「キミがソレでも、私はキミが好きだよ？」
「でも、皆が」
「ふふ、だから皆って誰なのかな？　……キミは急ぎ過ぎなんだよ」
そうかもしれない。恐らく、一はチアキの言動に中てられたのだ。
彼女が、自分はソレだと告げてから、訳が分からなくなっていた。
違う価値観に魅せられて、自分を見失っていた。
「……キミの味方になってくれる人は、いるよ。だから、ね？」
途端、一は途徹もなく気恥ずかしくなる。耳が熱く、赤くなり、顔からは火が出そうだった。
「ごめん、なさい。俺、訳が分からなくて、恐くて……」
「……ん。気にしないで」
ヒルデは鷹揚に頷き、笑む。
「ん、まだ、『棺』さんが何をするのか分からないよ。大丈夫。落ち着いて考えよ、ね？」
「あー、俺格好悪い」
一人で勝手に悪い方向へ進んで、先走って、空回って。
穴があったら自分が入ったあとに埋めて欲しい。
何もかもチアキのせいだと責任転嫁してから、一はふらふらとした足取りでベンチに座った。
「……良し」
頭を無理矢理切り替えて、さっきまでの失態は自分じゃないと思い込む。
考えろ、考えろ。
考えるのは人の特権であると同時に、人の義務であり証明なのだと自身を鼓舞する。
「あの、ヒルデさん。セイレーンにソレを誘き寄せる力があると思えますか？」

ヒルデは気力を取り戻した一を見遣り、優しく微笑した。
「……そう、だね。ん、私は、出来ると思うよ」
「そう、ですか」
「でも、チアキちゃんって子が、そんな力を使ったとは思えないな」
「どうして、そう思うんですか？」
「……だって、あんなに良い声をしてたよ？」
一は苦笑いを噛み殺す。
「良い声をしてるからって良い奴だとは限りませんよ？」
「そうかな？」
「そうですよ」
しかし、一は何故か、それ以上ヒルデに言い返せなかった。
「……えーと、それじゃあ……」
次は何を問おう。何を考えよう。
「ねえ」
「はい？」
ヒルデの呼び掛けに思考が中断される。
「……キミは、何を考えてるの？」
「どういう、意味ですか？」
考える事は幾らでもある。
歌代チアキ、田中次史。一度ヒルデに諭されたとは言え、人間とソレの立場についてもだ。
どちらが正しくて、どちらかが間違っていて。
どちらの味方になって、どちらの敵になるのか。
「ヒルデさん、考える事は――」
「本当に考えなきゃ、いけない事？」
――まただ。
ヒルデに見つめられ、微笑まれると、自分が矮小な存在なのだと理解してしまう。
「……キミは、チアキちゃんに力があって、田中さんがチアキちゃんを利用しているのなら、どうするの？」

一は答えない。
「もし、もしもだよ。チアキちゃんが悪い事をしていて、田中さんが正しい事をしていたら、キミはどうするの？」
一は答えられない。
「……ん。言ったでしょ、そんなの関係ない。下らないよ。大事なのは、キミの気持ち。好きな事を、好きにすれば良いの」
「ヒルデさん、俺は……」
それ以上、一は言えなかった。
それ以上は必要ないと、ヒルデは笑む。
「……ん。私、いっぱい喋ったから、ちょっと疲れちゃった。えへへ……」
ヒルデは鎌を地面に置いた。一の横をすり抜けて、ベンチに腰を落ち着かせる。
「キミも座りなよ。ほら、疲れたでしょ？」
「……はい」
一はヒルデに見られない様に涙を袖で拭ってから、ゆっくりと振り返った。

駒台中央公園、西側入り口。
時刻は、午後十時を少し回ったところだ。
昨夜の光景そのまま、入り口付近に立っている五本のポール。真ん中のボールは北と南のボーダーライン。
左側には北駒台店の一一、三森冬、ナナの三名。
右側には南駒台店のヒルデ、円堂慶、結城晃一の三名。
彼ら六名の勤務外の真正面に立つのは、オンリーワン近畿支部、戦闘部に属する田中次史。彼自身がどう思っているのかは定かではないが、『最低の棺』の通り名を冠する男である。
場には悪意と敵意が渦巻いていた。その中で、三森はやけに静かだった。彼女はジッと、何かを抑える様にして『棺』を見ている。

三森の瞳に映るは、研ぎ澄まされた極上の殺意だ。気付く者は彼女以外を以って、誰一人としていない。

「昨日よりは集合が遅れましたが、まずは、今日も集まってくれた皆様に感謝を」

立ち込める険悪な雰囲気を無視するかの様に、田中はマイペースに口上を始める。

「そして、今日こそはソレの正体を見極めましょうか。捜索範囲は昨日と同じで構いません」

一は田中に視線を遣った。

成る程、こうして見ると実に胡散臭い。

開いているのか閉じているのか分からない目。

笑っているのか、それとも何も思っていないのか分からない表情。

人を見掛けで判断してはいけないと思いつつ、一は田中を信用してはならないと、きつく自らに言い聞かせた。

「……では、行動を開始しましょうか」

田中が告げると、南駒台の勤務外は返事もしないで各々散っていく。

「一さん、三森さん、行きましょうか」

ナナが二人を促し、北駒台店の面々も動き出した。

一は去り際に、そこから動かない田中へ振り返る。外灯に照らされている彼の存在感は薄く、瞬きをした間に消えてしまいそうな印象を受けた。

ナナを先頭にして、一たちは公園内を当て所なく歩き続けていた。

そんな折、ナナは立ち止まって、嬉しそうに一たちに振り返る。

「一さん一さん、三森さん三森さん、見てください」

「うーん？」

一と三森はナナが掲げている物に注目した。

「……何だ、そりゃ？」

「良くぞ聞いて下さいました三森さん。これはレーダーなのです」
「レーダー？」
「ええ。昨日言っていたでしょう？　残念ながら索敵用のレーダーは持ち出せませんでしたが、代わりに技術部の方たちにお願いして作ってもらったのです」
　一は目を凝らす。どう見たって、ナナが掲げているのはただの懐中時計でしかない。しかも、昨日見たのと同じタイプのものだ。
「一さん、これをただの懐中時計とお思いでしょうけど。これは一味違うんです」
　ナナは一の疑惑に満ちた目を寛容に受け流す。
「見ていてください。ここを押すと、レーダーの代わりになるんですから」
「へー、じゃあ押してみろよ。どんなもんか見てみてェな」
　三森は興味深げに時計を見つめていた。
「お任せください。てやー」
　気の抜ける掛け声と共に、ナナは懐中時計の裏側を押し込む。
　刹那、時計の裏側がスライドしていき内部が露出した。次に中のバネが飛び出してくる。
「おー」「すげー」
　これには一も驚いた。なんて無駄な仕掛けなんだ。
　そして時計のスライドしていた部分が閉まる。何も起こらない。元通りになってから数分。ナナは訝しげに時計を注視した。
「おかしいですね。バネが出てきただけです」
「……技術部の人たちに遊ばれてたんじゃないのか？」
　一は何となく、落ちていたバネを拾い上げる。良く見ると、バネには紙が括り付けられていた。
「お、なンだよそれ？」
「さっき時計から出てきたものですよ」
　紙を広げてみると、小さい文字で『ごめん』と書かれている。一気に気が抜けた。と言うか、ナナの様なオートマータを作ってしま

うオンリーワンの技術部でも、一日やそこらでレーダーなんて作るのは流石に無理らしい。
「一さん、何か書かれていましたか？」
「ごめんってさ。……俺、ちょっとトイレに行ってきます」
「あー？　あンだよ、勝手な事すんじゃねーよ」
三森は煙草に火を点けながら一を睨む。
「……じゃあ、ここでしても良いんですか？」
「……くだんねー事言うな。おらっ、とっとと行って戻って来い」
一は顔を真っ赤にした三森から背を向け、ここからは少し離れている公衆便所に向かった。

「ふー」
用を済ませた一は手を洗って便所から出た。
何となく、月を見上げてしまう。静かだ。自分たち以外、ここには誰もいない。
上を向きながら歩いていると、思い切り尻を蹴られた。振り返ると、チアキがそこにいる。
「……何してんだ、お前？」
チアキは恨みがましい目付きで一を睨んでいた。
「あんた、ここで何してんねん」
「俺の台詞だそりゃ。お前こそ何やってんだよ？」
「うちはあんたを付けてきたんや。あんたらが何をすんのか見る為にな」
「……お前って、本当馬鹿だな」
一は頭を抱える。どうして自ら火事場に入ってくるのか理解出来ない。よりによって、チアキは渦中の人物かも知れないというのに。
「うっ、うちは馬鹿ちゃうわ！」
「分かった分かった、それは良いからもう帰れ。ここにはお前の嫌

いな勤務外がたくさんいるからな」
「……知っとるわ。昨日も来たからな」
「あのさ、お前一応狙われてるんじゃないのか？」
チアキは鼻を鳴らして一を見据える。
「知らんわっ、うちはなあ、あんたらが悪させんか見張りに来てやってんねん」
「しないから帰れって、マジで。こんな所見られたら誤解されるだろうがよ」
「……はあ？」
「馬鹿かお前？　今俺たちはここで、ソレに関係しそうなモノを探してるんだよ。こんな所にいたら真っ先に疑われて、相手によっちゃ問答無用で殺されてたかもしれないんだぞ？」
「うちは何もしてへんで」
一の頭に血が上った。
「んな証拠ねえだろ！　お前みたいな奴はここにいるだけで疑われるんだよ！　ちょっとは頭使って動けエセ関西人が！」
「なっ、なっ、なっ……」
「分かったら帰れ馬鹿！」

「――帰す訳にはいきませんね」

高くもなく、低くもない声が響く。
影が、物陰からその姿を現し始める。
「何を、しているんですか？」
背は高くない。低くもない。何の特徴もない。
何の前触れもなく、気配すらさせず、足音すら立てず。
「……あ、た、……」
影と共に、影を引きつれ、影を侵して。
一たちの前に、『棺』がその姿を見せ付けた。

救いの主は

歌で世界が救えるものか。

「一さん、あなたは何をやっているんですか？」

影が揺らめいた。

「その子は、何故、こんな所にいるんですか？」

田中が一歩踏み出す。

「あなたは、それと何をやっているんですか？」

「……こ、これは……」

声は震えて、足は震えて。

それでも一は一歩下がり、チアキを隠す様な位置に立った。立つ事が出来た。

「言い訳は結構です。ソレの捜索はどうしたんですか？」

「や、やってますよ」

「では、その少女は？」

田中は一の背に隠れているチアキへ視線を送る。何を考えているのか、全く読めない、何も見えない目。

「……ここにいたから、保護、しました。どうやら、一般の子だったみたいで」

「ほう、そうでしたか」

一の苦しい弁解を涼しげに受け流し、田中は口元を歪める。その表情からは、獲物を前にした獣の様な、狩りを楽しむ色がハッキリと見て取れた。

「な、なあ……」

さっきから口を開く事のなかったチアキが、弱々しく呟き、一のコートの裾を引っ張る。

しかし、今はチアキを気にしていられない。一はどうやってこの

場を切り抜けるかだけ考えていた。
「田中さん、とりあえずこの子を公園の外に出したいんですけど…」
田中は腕を組み、わざとらしく唸る。
「そうしてあげたいのは山々なのですけれどね。その子が本当にソレと関わりが無いのか、今僕たちが追っている事と関係が無いのか確かめてからでも、遅くはありませんか？」
「……仰る通りで」
何も、田中はチアキを殺す訳じゃない。現段階では殺す理由さえ、彼女に手を出す必要は何一つない。
そう思ってはいるのだが、一は何故かそこから動けなかった。
「一さん、その子を調べるので退いてくれませんか？」
「調べるって、どうやって？」
「睨まないで下さいよ。手荒な事はしませんから」
田中は元々細い目を更に細め、足を踏み出す。
一はアイギスをしっかりと握った。意識した事ではない。体が、勝手に動く。
「こ、こいつや……」
「……何だよ？」
チアキは彼のコートの裾を先刻よりも強く掴んでいた。彼女は全身をガタガタと震わせている。目の端には涙を浮かべて、何か恐ろしい怪物でも目の前にしている様な素振りだ。
「おいっ、どうしたんだよ？」
「おや？　その子、震えていますね」
田中はまた一歩、一たちに近付く。
その瞬間、チアキは短く悲鳴を上げ、一の体にしがみ付いた。
「だああっもう！　何なんだお前！？」
「こいつ！　こいつがっ！」
「……？」
チアキは田中を指差している。

田中は何の事か分からないとでも言う様に、芝居掛かった動作で肩を竦めた。
「おい、何言ってんだ？」
「馬鹿！　こいつがうちの所に来た勤務外なんやっ！」
「……何だって？」
背筋に嫌な物が走る。
一はチアキを引っぺがして、泣き喚く彼女の肩を両手で押さえた。
「落ち着けって、何を言ってるんだよ？」
「落ち着いとるわっ、うちにうたえ言うたんはそいつなんやぞ！」
田中は深く息を吐く。呆れた様に、見下す様に、一たちへ冷ややかな視線を送る。
「何の事だかさっぱりですね。一さん、残念ながらその子は嘘を吐いています。僕は勤務外じゃありません。れっきとしたオンリーワン近畿支部の社員なのですから」
「しらばっくれんなや！　あんたがうちの家まで来て言うた事やろ！」
一は暴れ回るチアキを押さえながら、何とか田中と向き合った。
確かに、田中の言うとおりである。謹慎を食らっていたとはいえ、田中次史は社員だ。一ヶ月前にチアキと出会ったとしても、勤務外店員である道理は無い。
――しかし。
「……田中さん、こいつはこう言ってますけど」
「困りましたね。と言うか、弱りましたよ。訳の分からない言い掛かりを付けられてしまうし、一さんからは疑いの眼差しを向けられてしまいますし、ね。やれやれ、全く余計な事で手間は取りたくないんですが」
「本当に、あなたはこいつと関わりが無い。知らないんですか？」
田中は困った風に頬を掻いて、溜め息を吐いた。
「こんな事を言うのは弁解じみていて嫌いなのですがね。僕は、その子とは今初めて会いましたよ。……それより、僕としてはあなた

と、その子の関係を尋ねたい所ですね。その子の懐き具合からして。あなたたちが初対面同士とは思えない」

「そんなんあんたには関係ないわっ、しょうもない事言うなやドアホ！　あんたがどんだけ言い訳しようが、こっちはしっかり覚えとるんやからなっ！」

「やれやれ、口の悪い子だ。さて一さん、こうやって押し問答していても時間の無駄にしかなりません。そろそろ、本当に退いてはもらえませんか？」

田中は遠慮なく歩き出す。

――って！　待って待って待って待って待って待って待って待って待ってくれ！

一はまだ、何の覚悟もしていない。

田中にチアキを渡しても良いものか。信じても良いのか。

チアキをどうするのか、どうすれば良いのか分からない。彼女は、田中が自分にうたえと強要した勤務外であると言った。

が、今の一には判断が付かない。

どちらも嘘くさくて、どちらも真実くさい。

両者とも、言い分を信じるに足る材料がなさ過ぎる。お互いが自分に都合の良い事だけを喋っている様な、そんな胡散臭さを一はひしひしと感じていた。

「よっ、寄んな！」

チアキは再び一の背に隠れて、彼の体に抱き付いている。

「一さん、その子を渡して下さい」

「なああっ！？　あかん、あかんってっ！　渡したらあかんって！　こいつはうちを口封じに殺す気や！」

「……物騒な。何もしやしません。少し大人しくしてもらって調べるだけですよ」

「どこを調べる気ぃやねん！　嫌や嫌やっ、来んな来んな来んなっ

てばぁ！」
　二人の言い争いがうるさくて、一の考えは纏まらない。何も考えられない。
「さあ、一さん？」
　もう、田中はすぐ傍まで来ていた。
　チアキはもはや狂乱状態に陥っている。頭を振り、一の体に爪を立て、恐怖を叫ぶ。
「いいいいいいいいいやあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「……何やってンだ、お前ら？」

　田中の足が止まり、チアキの泣き声が止んだ。
「ん、ああ？　おい、そいつ何だよ誰だ？」
　頭を掻きながら現われた三森。その後ろでナナが興味深そうに一たちを眺めている。
「三森さん、これが複数の男女間の痴情の縺れが引き起こす修羅場と言うものなのですか？　私、ドラマでしか見た事ありませんでした」
　ナナに突っ込む事すらどうでも良くなる。一には今、三森が天使に見えていた。
　短い金髪、赤いジャージ、気だるそうに煙草を銜えた、柄の悪い天使に。

　勤務外がやってきた。
　騒ぎを聞き付けたのか、それとも争いの火種を嗅ぎ付けたのか。どちらかかは分からないが、とにもかくにも、北と南、総勢六名の勤務外が公園内の公衆便所前に集まった。
　一と、彼に抱き付いているチアキ。彼らの傍で何とも言えない表情を作っている田中を囲む様に、三森たちは事態を飲み込めずに突

っ立っている。
「……さて、面倒な事になりましたねえ」
田中は集まった勤務外たちに視線を遣した。
「おい田中さんよぉ、こりゃどういう事だ？」
「いやいや円堂さん、大した事はありませんよ」
「ああ？」
再び、田中は一とチアキに無遠慮な視線を送る。
何か、一は嫌な予感がした。この状態、勤務外が集まっている事は事態の停滞、一種の時間稼ぎにはなっているが、解決にも打破にもならないのではないか、と。むしろ、このまま悪い方向に進む気がしていた。
「何、下らない事ですよ。この少女がソレに関わりのある、それだけの事です」
――やっぱり。
一は唾を飲み、乾いた喉を誤魔化す。
場が俄かにざわめき、チアキに好奇と疑惑の目が集まりだした。
「へー、マジでマジで？　この可愛い子が？」
「……う」
見知らぬ勤務外たちの空気に呑まれたのか、チアキは震えているだけで何も言い返せない。
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ田中さん！」
チアキの震えが直に伝わっている一は、仕方なく彼女の代わりに弁解を計る。
「……待てませんね」
田中の答えは簡潔で、これ以上話す余地は無いと完結していた。
一の心臓が高鳴る。血が冷たくなる。
『棺』。
最低な仲間殺し。
田中の噂、通り名を思い出してしまい、嫌でも体は固まっていく。
もう、抵抗出来ない。抵抗すれば殺されるかもしれない。勤務外

や社員は、相手が何であろうと、人間であろうと、仕事中に障害だと判断すれば何をしても罪には問われない。

「ふう、これが最後ですよ？　一さん、退きなさい」

「……っ」

誰も、手を出せない。

三森もナナも、事情が分からないまま『棺』に、社員に逆らう愚は犯さない。

円堂も結城も、目の前の光景を理解出来ていない。チアキがいったい何者で、この場で何が起こるのか見当もつかない。

第一、彼ら勤務外店員は組織に属している身である。何が真実で、何がでたらめなのかを分かっていたとしても、上の者に従わざるを得ないのだ。

やれと言えばやる。

三森たち勤務外も、『オンリーワンの勤務外』と言う肩書きがなければただの異能、異常者。ルールに縛られていなくては人間のままでいられない。そうするしかない。そうして、生きていくのだから。

だから、銀の光が煌めいた。

一とチアキの側からしか見えない狂暴な揺らめき。気付いた時には田中がすぐ傍に佇んでいる。彼の手にはナイフが握られていた。

一は動けない。

どうしてこんな事になっているのか、さっぱりだ。分からないから動けない。

唯一、今から自分はチアキと一緒に殺されるのかと、それだけは分かった。殺される理由は知らない。知りたくもない。

悲しかった。悔しかった。

生命に危機が及んでいるこの期にまで、地位や種族、しがらみに足を引っ張られている自分が情けない。

歌代チアキ。
年下の女の子を守る事すら出来ない。
一に出来る事と言えばチアキの盾になる事だけだ。それも、殺される順番を僅かに遅らせる事だけにしかならない。結局、一が先に死んでチアキが次に死ぬ、だけ。
「僕は、最後だと言いました」
田中の腕が振り下ろされる。そこに慈悲はなく、仁慈はなく、温情も同情も人情もなく、慈愛などは以ての外だった。
命を終わらせる為に、死を始める為に。
味方殺し。『棺』が『最低』と呼ばれる所以を、再び見せ付ける。

声がする。
声が聞こえる。
声が呼んでいる。
聞こえてくるのは、誰の声だろうか。
分からない。知っている。知らない。分かっている。
その声は世界を止める力。
その歌は世界を動かす魂。
その心は一一を動かした。
ああ、知っていた。
ああ、分かっていた。
助けを求め、誰かを呼んで、自分を分かって欲しいんだと。
ああ、彼女の声は素晴らしく綺麗で、何よりも清廉で――

――とても、悲しそうだった。

似た境遇の彼女を助けてやりたいと思った。
自分は彼女を守らなければならないと思う。
一一（にのまえ）は、歌代チアキを守りたい。（はじめ）

守りたい。
護りたい。
その為に力が欲しい。
強い意志が、塗り潰す。
人間も、ソレも、勤務外も、何もかもどうでも良い。どうでも良かった。
ただ、ただ――。

「田中、次史――」

割れる。割れる。世界が音を立ててひび割れていく。
崩れる。崩れる。世界が唸りを上げ崩れ落ちていく。

――「主（あるじ）」

声が、聞こえる。

揺れる。揺れる。世界が世界を揺らしていく。
壊れる。壊れる。世界が世界を壊して、いく。

――「私の主、可愛い主」

あの日も聞いた、あの声。

光る。光る。世界が光に満ち満ちていく。
生まれる。生まれる。世界が新しく生まれ変わっていく。

――「あなたに、力を」

守りたい。その一心、ひたすらに思う一の意志に彼の僕（しもべ）が答える。

アイギスが、発動する。
耳鳴りと頭痛。一は目を瞑り、それらに耐えようと歯を食い縛った。
アイギスを握っている腕から力が抜け落ちていく。
頭から、何か大切なものが零れ落ちていく。
瞼の奥に、白い光が迸る。世界が白に染まっていく。
白い世界の中、一はまた、白い女を確かに見た。
そしてまた一つ、一は世界を理解する。
「――これはっ！」
ぼんやりとしたまま、一はどこか遠くから、田中の上擦り、慄いている声が聞こえた。

アイギスを発動する為の前提にして絶対条件。必要にして不可欠のルール。
それは、力を行使するには使い手が対象の相手を視認していなければならない、と言う事が挙げられる。
目を逸らしても瞑ってもいけない。両の目で、しかと相手を捉えていなくてはならない。
だが、一は今田中に背を向けている。相手を見ていない。
それでも、田中の動きは止まっていた。否、止められている。辛うじて口を動かす事は出来る様だが、ソレ以外の部位に関しては腕一本、指一本、神経の一本ですら満足に動かせない。
「っ、くっ、は……」
自然、呼吸も鼓動もままならなくなる。即、死には至らないが、この状態を続けるならば確実に死に至る。それが分かっている田中の表情には焦燥が見て取れた。
以前は春風にアイギスの使われ手と揶揄されていた一だが、彼は既にその域を脱している。違う域に達している。
新たな力の解放、そして顕現、行使。

恐らくは、アイギスに封じられ、アイギスの力の源である蛇姫（メドゥーサ）が認めたのだ。一一は、アイギスを使うに相応しいと。新たな力を貸すに相応しいと。

一一はもう、アイギスの使い手に他ならない。彼をおいて、アイギスの使い手など他にいない。

一が念じ、祈り、思い、意志を示すだけで敵を、相手を、世界すら止めてしまう力。

端から見ている三森たちには何が起きているのかまだ分かっていない。理解、していない。一が変わった事に、世界が変えられた事実にまだ気付いていない。

「……あ、う」

一に抱かれているチアキにも、まだ事態が飲み込めていない。自分たちを始末しに来た『棺』が急に動きを止めて、苦しがっている風にしか見えないのだから。

「……っ」

今だ。今しかない。

一はチアキに逃げるぞと、目で訴え掛ける。

しかし、千載一遇にして絶対無二の好機を前にして一は動けなかった。立ち上がれない程に、酷く頭が痛んでいる。

力の、反動。

一は確かに新しい力を得た。だが、彼の心身がまだ力に及んでいない。付いていかない。アイギスが作り替えた世界が頭の中で大量に蠢き、自由を奪う。

「……っ」

その内に、田中が自由を取り戻しつつあった。僅かではあるが身動ぎをし、一たちを睨み付けている。か弱い獲物に足で砂を掛けられる程度の抵抗を受け、酷く濁り、ぎらついた双眸。憎悪が彼の相貌を醜く変貌させていた。

その目を見てしまい、一の意志が薄れていく。力が、失われつつある。

もう、田中を押さえきれない。隠そうともしない『棺』の殺意を止めきれない。

ここにきてようやく、一は自分の直感が間違いではないと悟った。彼を敵だと断じる証拠はない。まだ満足な説明も、推理推測すら出来ない。

しかし、血が騒ぐ。

一の中に宿る狼の血が訴えかけていた。

田中次史は信用してはならなかった。彼はもはや敵でしかない。

この日、この時この場において、この夜を共に踊るのは、こいつしかいない。

「ガキ共がああああっ！」

遂に田中が猛る。

体裁を取り繕う事を放棄した、彼の内に秘められている『最低』に相応しい怒号が周囲一帯に轟いた。

一は必死で立ち上がろうとするも、彼に抱き付いているチアキの腰が抜けている。動けない。

「調子に乗ってんじゃねえぞ！？」

彼の周りを囲んでいる勤務外たちは事態に付いていっていない。

三森も、ナナも、円堂も、結城も『棺』の禍々しい敵意を目の当たりにし、動けなかった。

何故社員である田中がこうまで憤っているのか、一たちが何をしたのか、全く分からない。分からない。分からない、何も。

分からないから、動けない。動こうとしない。

ただ、一人を除いて。

――風が奔る。

立ち上がれない一たちと、今まさに彼らを亡き者にせんとしてい

た『棺』の間を、一陣の風が通り抜けた。
「……お前もかあああああっ！」
その正体にいち早く気付いた田中が声を有らん限りに荒げて叫ぶ。
「……これ以上は、やらせない」
彼女の声は一の耳朶を心地良く叩いた。静かで、涼しくて、この上なく頼りがいのある声。
戦乙女（ワルキューレ）が『棺』に向けて鎌を振るう。
彼女の持つそれは、通常の物よりも遥かに大きい。常軌を逸したサイズのサイズ。本来の用途には決して使われない。刈り取るモノは草ではない。人ではない。この鎌は、魂を刈り取る戦乙女の証なのだ。
一はチアキに肩を貸してようやく立ち上がる。
「……ヒルデ、さん？」
驚愕と安堵が入り交じる、か細い声。
「ん。言ったでしょ、私はキミが好きだって」
一のない交ぜになった感情を全て優しく包み込む、暖かな笑顔。
「……大丈夫。守るよ」
オンリーワン南駒台店勤務外店員、ヒルデ。
戦乙女が、戦死者の魂を選ぶものが、自らその手で死を振りまくために戦場に躍り出る。
彼女の獲物が風を切る。
唸りを上げて自らの存在を誇示する。
「……私の目が開いている内は、あなたの好きにさせないから」
「野郎っ！」
間、髪を入れず田中が吠えた。
何時の間に持っていたのか、両手にはナイフが握られている。彼は迷う事無く二本の凶器をヒルデの心臓目がけて投擲した。
が、真っ直ぐに向かってきたそれを、ヒルデはいとも容易く鎌の腹で弾き落とす。そのまま、刃が田中に届く位置まで距離を詰めて横に薙いだ。

田中は鎌の一撃を頭を下げるだけで避け、スーツの内ポケットに手を突っ込む。
「あ」
間抜けな声。
「ああ？」
「……あいつら、逃げちゃったよ、おい」
田中が反撃に転じようと顔を上げた時にはもう、一たちの走っていく後ろ姿しか見えていなかった。

「くっ、くっ、くっ、くっ」
腹を抱えて、田中が笑う。
「くっ、くひっ、ひひっ、ひっ」
喉の奥で噛み殺し切れなかった笑みが、零れていく。
「ひひっ、やってくれるぜ、くひ、ひっ……」
狂気が場を侵食していく。
その場にいた勤務外たちは口も利けず、立ち竦んでいた。
「ひゃっ、ひゃひゃ、ひゃあっはっはっはっはあっ！　ははははあっ、可笑しいな、可笑し過ぎるぜあいつら！　あいつらっ、あいつらあいつら糞がっ！　ぶち殺してやる！　ひっ、ひひひひひひひ」
哄笑の後、田中はくるりと振り向く。
全員が息を呑んだ。
もう、田中の表情からは狂喜の色が消えている。
「さて、問題発生ですね。一さんとヒルデさんが我々を裏切ってしまいましたよ。皆さん、今すぐに彼らを追い掛けて然るべき処断を下して来て下さい。僕は少し疲れてしまいました」
まるで、何事も無かったかのように田中は口を開いた。
「おや、どうしたんですか？　早く動いて下さいよ。僕たちはソレを殺す存在なんですから。ソレを生かす存在を見過ごせない、そうでしょう？　それとも、あなたたちもオンリーワンを裏切るおつも

りで？」
　口調こそ穏やかではあったが、田中の目は一切笑っていない。
　身の危険を感じ取り、円堂と結城が一たちが去っていったと思しき方へ駆けていく。
　だが、三森は動かなかった。煙草を口に銜え不敵に笑う。ナナは彼女の傍でおろおろとしていた。小声で呼び掛けているが、三森は答えない。
「……南の方々も動いて下さいよ」
「よォ、あいつが何をしたってンだ？　理由も知らずに私は動く気ねーんだけど？」
「は、ははっ、おかしな事を言いますね。見たでしょう、あの二人が僕に楯突いた瞬間を。勤務外がソレを連れて社員から逃げ出したんですよ？　理由はそれだけで充分だと思いますけどね」
「御託は良いンだよ、『棺』。私が聞いてンのはな、あいつがてめェに逆らった、逆らえる事の出来た理由だ」
　田中はわざとらしい溜め息を吐き、困った様に苦い笑いを浮かべた。
「それは本人に聞いて下さいよ。僕にはとてもとても分かりません」
「おい、惚けンなよクソ野郎。私の顔を忘れたか？　こっちだって戦闘部にいたんだ、てめェのやり口は知ってんだぜ、今度は何をした？　言えよ」
「……そういえば、あなたもいましたね。く、くく……」
　三森は煙草を吐き捨てると、掌から炎を生み出す。
「笑ってンじゃねェぞ。何なら、今ここで昨日の続きをしても良いんだぜ」
「あなたが？　昨日は随分と意気消沈されていたようでしたけどね。ま、今日は少しばかり元気ですねえ。何か面白い事でもありましたか？」
「だせー事言うけどな、アレが私の全力だと思うなよ」
「そうですか、ははっ、そうですかそうですか、ふふっ、くっ――

くひひひっ、ごちゃごちゃうるせえんだよ赤鬼が！　てめえらバイトは俺たちに従っとけば良いんだこら分かってんのかボケ！　てめえだって元社員だろがっ、四の五の言わずにあのガキ共を潰しに行けっ、クソが！」

三森は田中の怒気を前にして、尚、愉しそうに笑った。

「へっ、良いね、良いじゃん、良いじゃねェの。『最低の棺』に名を知られてるたァ私も箔が付くってモンだよな。けどよォ、一個だけ教えてやンぜ」

「ああ？」

「私はその名前が大嫌い何だよ。覚えとけ、次はお前の番だ」

「……言ってろよ、クソ女が」

三森は田中が嫌いだ。

正直言って、あのまま戦闘に雪崩れ込んでも良かったとさえ思っている。

だが、それ以上に、『棺』以上に腹の立つ人物がいる。

一一（にのまえはじめ）。

彼が今、何故だか憎くて仕方ない。

どうして何も言わなかった。

同じ店で働く仲間ではなかったのか。

信用も、信頼も、何も、されていなかったのか。

仲間だとも、何とも思われていなかったのか。

――どいつもこいつもっ。

他の奴らに何かされるぐらいなら、自分がどうにかした方がマシだ。

そう考えた三森は、ナナを引き連れて一たちの逃げた方向へ駆ける。

気持ちが悪い。
どうしてだか、胸糞が悪い。
三森は正体不明のもやもやを抱えたまま、先に追い付いているであろう南駒台の二人を追い、駆ける。

三森の、感情。
……彼女が自分の気持ちに気付くのは、もう少し先の話ではあったが。
今は、まだ。

計画的に動こうと思って計画予定その他諸々を考えていても、予想外のアクシデントに見舞われると計画、と言うのは非常に脆いものだ。

では何も考えずに心の向くまま思うままに行動していれば良いのかと聞かれれば、そうではない。

「……どうします、ヒルデさん？」

少なくとも、今この時は答えられそうにない。

正に今、一は衝動的に動いてしまった己が愚を悔いても悔やみ切れない状況に陥っていた。

何も考えずに。否、そもそも考える暇なんてなかった。自らを渦巻く状況を把握出来ず、殺されるかもしれない自身の立場すら呑み込もうとせずに『棺』から背を向けて、この有様。しかも、いざ事を起こして一たちの命を救ったのはヒルデという始末である。

一は、何もしていない。結局は流されるままに、抵抗すらせず身を任せて流されているだけだ。

「……ん、キミはどうしたい？」

何も思い付かない。一は考える振りをして俯く。ヒルデから、目を逸らす。

「とりあえず、歌代を逃がしましょう。公園から出るのが最善だと思うんですけど」

一は周囲に目を配りながら、ヒルデの耳元で囁いた。

現在、一たちは公園内の、様々な趣向を凝らした遊具がひしめくアスレチックエリアに身を潜めている。距離を稼いだのと、チアキが疲労を訴えたのを鑑みて、今後の指針を話し合っている、筈だった。

「でも、逃げ切れないと思う……」

「でしょうね。俺たちは何の準備もしてませんし、どこに逃げりゃ

良いのか見当も付きません」
「なあなあ、こっからはよ出ようやあ」
チアキは不満を隠そうともせずに唇を尖らせている。
一は、どこか危機感の足りていないチアキに苛立ちを覚えていた。
「あのな、お前のせいでこんな事になってんだから、もっと申し訳なさそうな顔しとけよ」
「はああ？　うちのせいちゃうわ、うちは何もしてへん。ちゅーか、首突っ込んできたんはそっちやろ」
「お前がアホ面下げてノコノコオンリーワンまで面接行ったからだ」
「アホがアホって言うなアホ！」
「声と威勢だけはでかい奴だな。ちょっと黙れ、誰かにばれちまう」
チアキは顔を真っ赤にして一に詰め寄る。が、片手で押し返されて涙目になっていた。
「なんやねん、どさくさに紛れてうちの胸揉みまくった男が調子乗んなや」
「揉んでねえし、抱き付いてきたのはお前じゃん。……つーか揉む程無いだろうが」
「しばくぞオラァ！」
「やってみろよまな板人間」
一の挑発に引っ掛かったチアキは頭からタックルを仕掛けた。
――温いっ！
一は易々と彼女の頭を掴み、頭と顎を両手で挟み込んで上を向かせる。そのまま足を払って体勢を崩し、頭を支点にしてチアキを仰向けにさせた。
「えい」
手加減はしたが躊躇せず、一は倒れたチアキの腹の上に乗っかる。
「げふっ！　なっ、何すんねんっ」
「マウントポジション、知らないの？」
「知っとるわ！」
「あっそ。さて、これから俺はお前の顔をボコボコにする訳ですが」

「さっ、最低！　信じられへんぞこいつ……」
「げひゃひゃひゃひゃひゃ」
楽しそうに笑う一の図（女の子に馬乗りになっている状態で）。
「いたっ」
馬鹿を付けても間違いないくらい笑っていた一の頭が揺れる。
その隙を見逃さず、チアキが膝を一の腹に入れた。すぐさま、悶絶している彼と体勢を入れ替える。
「……キミ、やり過ぎ」
「う……」
頭上からヒルデに冷たい視線を送られ、一は深く反省した。
「覚悟出来てんのかコラ、吐いた唾飲まんとけよ、おお？」
「飲まねえよ！　ヒルデさーん、違うんです違うんですよー。こいつが悪いのに全然悪怯れてないからお仕置きしてやろうと、つい」
「ダメ」
「ひゃっ」
ヒルデはチアキの髪を愛しげに撫で始めた。
「……チアキちゃん、優しいから。明るく振舞ってくれてたんだよ？」
「ちゃ、ちゃうわっ。助けてもらった事は、その、ありがとう。……せやけど、気安く触らんといて」
「ふふー、キミたちは素直じゃないなあ」
チアキはそっぽを向く。
「うっさい」
「つーか歌代、退けよ」
「うぎゃあああああっ！」
一は何となくチアキの尻の肉を掴んだ。
叫ばれて、蹴られて、殴られて、ヒルデからは白い目で見られた気がして。
遊んでいる場合ではないのだが。

「馬鹿としか言い様がねえよ、ありゃ」
一たちを捜索していた円堂と結城、南駒台店の勤務外二人はアスレチックエリアに辿り着いていた。半ば『棺』に脅される形で飛び出したはいいものの、彼らにやる気はない。見つからなかったら見つからなかったらでそれで良いかと考えている。
「どーすんの？　俺っち正直言ってめんどいんだけどさー」
ここで、一たちの馬鹿騒ぎを耳にするまでは。
見つけてしまった時の事を二人は何も考えていなかったのだ。円堂と結城は顔を見合わせる。
「ヒルデが相手となると、面倒だよな」
適当に時間を潰して、申し訳なさそうな顔を作って『棺』のところに戻ろうと思っていた。しかし、見つけてしまったからにはそうも行きそうにない。それに、もし『棺』に監視されているならばあとで何を言われるかたまったものでもない。
「えー？　ヒルデちゃんとやり合うの？」
「そこにいんだから仕方ねえよ。それによ、別にヒルデと戦う必要はないんだぜ？　俺ら、つーか、あの田中って野郎の目的は北の勤務外とガキだけだろ」
円堂は髪をかき上げながら、至極面倒そうに口を開いた。
「ふーん？　ま、俺っちはどっちでも良いけどね。じゃ、ヒルデちゃんは説得して連れ帰って、残りは……とりあえず、殺さなきゃ良いんじゃん？　社員からの許可は下りてるようなもんだし、何してもオッケーっしょ」
結城は歯を見せて笑う。嗜虐的な、獣性を帯びた笑みだった。
「説得？　ぎゃはは、おめーがか？」
「笑ってんなよなー、ちゃんと人間らしく話し合えば良いんだろー？　それに俺っちヒルデちゃん殺すなんて考えらんないよ。だってさ、勿体無いじゃん。まだ何もやってないっつーのに」
「同感。んじゃま、ヒルデには黙っといてもらって、残りを動けね

ーぐらいボコって連れてくか」
カラカラと笑う結城につられて、円堂も僅かに口元を歪める。
「晃一、あいつらどこにいるか分かるか？」
「おー、ちょい待って」
結城は素肌の上に羽織っていた毛皮を撫で、ズボンのポケットから瓶を取り出した。瓶の中は白い錠剤で満たされている。彼は蓋を開け、瓶を逆さにした。零れ落ちる錠剤を掌で幾つか受け止め、口の中に放り込む。それをがりがりと音を立てて噛み砕き、水もなしに飲み下していった。
「もったいねー、零れてんぞ」
「うるさいなー。……っ、ぐ、きた……」
直後、結城が呻きながら目を押さえる。
円堂は結城の変貌に驚いた素振りを見せず、ただずっとアスレチックエリアに目を凝らしていた。
しばらくして、結城が目から手を離し、深く息を吐く。彼の目は、真っ赤に染まっていた。カラーコンタクトを付けた訳でもなく、錠剤を口にしただけで、である。
「ちかれたー、やるたんびにこれだもんなー」
「毎度思うんだけどよ、これってどーなってんだろな？」
「……さあ？　俺っちが作った訳じゃないし、つーか興味ねーし」
結城は本当に興味がないのか、ぞんざいな口調で言い放った。一たちがいるであろうアスレチックエリアに目を向けて、瞬きを何度も繰り返す。
「お、あのトンネルかな」
「オッケ、んじゃ分かれて入り口塞ぐぞ」
円堂は拳の骨を鳴らし、トンネルの遊具を見据えた。

ウールヴヘジン
野獣。
バーサーカー
狂戦士と並び、時に同一視され、北欧神話にその名を残すヴァル

ハラの勇壮な戦士。戦場では狼の毛皮を被り、彼らは人から獣に変わる。死を思わず、感じず、忘れて、恐れを捨て去るのだ。深い傷を負おうが決して退かない。逃げない。背を向けずに敵へと真っすぐに突き進む。戦死こそが戦士である彼らの誇りであり、希望なのかもしれない。

しかし、南駒台店の野獣は違う。

ソレが溢れる世とはいえ、人は人。簡単には人を捨てられない。獣に成り切る事など出来ない。人である以上、死は絶対だ。死への恐怖は体中に刷り込まれている。人であろうとするならば、死を恐れなければならない。

今の世に、本物の野獣はいない。

それでも円堂、結城の両名が野獣の名を冠しているのは、彼らが名に相応しい能力を有しているからであった。

それ即ち、身体強化。

彼らはオンリーワンから支給された錠剤を服用する事により、常人を遥かに超えた、獣じみた力を手にする。

結城は気にしていなかったが、錠剤は南駒台店店長の強い要請により、オンリーワン近畿支部の技術部と医療部が共同で開発した、ソレに対抗する為、人体の強化を旨とした技術の結晶であった。一粒一粒が無駄に出来ないほどに、高価である。

だが、その薬を飲めば誰でも力を得られる訳ではない。まだあくまで試作品。近畿支部が請われて、仕方なく作った為、不確定要素が多い。服用する側の持って生まれた資質、性質が不可欠だった。人によっては強い拒絶反応と、とんでもない副作用が起こる。

そして、何よりも当たり外れが大きかった。

薬を飲んで拒絶反応が出なくても、副作用が起こらなくても、何の力も得られないケースもある。得られたとしても勤務外としては使えない部位だったり、力である場合もあった。

そんな中、結城は見出される。

結城は南駒台店に勤務外として招聘され、野獣としての力を得る

為数々のテストを潜り抜けた、言わばエリートであった。彼が薬によって得られたのは、視力の強化。静止視力、動体視力、深視力、中心視力、視力と名の付くもの全てが、錠剤を服用する前と比べ、格段に跳ね上がる。

視力が良い。

一口に言っても、視力にも様々な意味がある。まず、遠くの物を見られるか。広く見られるか、暗い場所でも見られるか。多くの色を見られるか。

その中でも、遠くの物を見られる事に地球上で最も長けているのは一般的に猛禽類、鷲や鷹だと言われている。猛禽類の視力は人間の七、八倍はあるとされ、そのお陰で空中からでも地上を這う小動物の姿を捉える事が出来るのだ、そうだ。

今、結城の視力――望遠に関しての視力――は猛禽類と同等か、それ以上である。

その力を以って、結城と円堂が一たちに忍び寄っていた。

「……店、ですか？」

「……ん」

思ってもみなかったヒルデの提案に、一は目を丸くさせる。

ヒルデが言うには、今の状況、チアキの力の真偽、『棺』の真意を誰かに伝えよう、との事であった。

緩々と頷くヒルデと、落ち着かなさそうに視線をさ迷わせているチアキへ交互に視線を遣った後、一は目を瞑る。成る程、妙案かもしれない。

しかし、気になる。

「どうして、北駒台店なんですか？」

何故、助けを求める相手があの人たちなのか。一は疑問をぶつけてみた。ヒルデはゆっくりと首を横に振り、申し訳なさそうに口を開く。

「……南は、信用出来ないから」
「信用って、ヒルデさんとこの店でしょうに。それを言うならうちだって信じられないですよ」
「ん。私たちと同じ立場の勤務外に言ってもダメだと思うの」
「まあ、社員に丸め込まれちゃうでしょうね」
それじゃあ意味がない。敵を増やすだけである。一は頷き、続きを促す。
「……だから、北駒台担当の社員さんを味方にすればどうかなって」
「社員、ですか。うーん、心当たりは、あるにはあるんですけど……」
候補として、まず、ジェーンと堀が浮かび上がった。自分たちに似た境遇のチアキが絡んでいるとなれば、ジェーンが力になってくれる可能性は高い。堀だって、自分たちを無下に追い返したり、話を聞かずに問答無用で襲い掛かっては来ないだろう。上手く話を持っていけば、店長を引き込める可能性もある。
だからこそ、自分たちを助けてくれるかもしれないからこそ、一は彼らに話そうとは思えなかった。
一たちの味方になるという事は『棺』を敵に回すという事だ。オンリーワンに反逆の意志を見せた、という事になってしまう。
「ヒルデさん、四の五の言ってる場合じゃないんですけど。やっぱり、これ以上知り合いを巻き込むってのは……」
「……」
「あ、その……」
思い切り睨まれていた。
ヒルデは表情を険しくさせて、一に対して強い敵意を剥き出しにしている。
「ヒルデさんの提案を蹴っちゃうような真似をしたのは謝ります、ごめんなさい。でも、そ、そんな怒る事は――」
「――静かに」

有無を言わさぬヒルデの口調に、一の背筋が凍った。喋っていなかったチアキですら、口を真一文字に引き締め、体を硬直させている。

一は泣きそうになるのを堪えて俯いた。怒られたり、憎まれるのは構わないが、その相手がヒルデとなれば話は別である。彼女にだけは、何故か敵意を向けて欲しくなかった。

ヒルデは依然として一を見据えている。彼女の怜悧とも言える美貌に見惚れて、思わず息を呑んだ。

瞬間、髪の毛が逆立つ様な感触に一は震える。

「――っ、これって」

「……追い付かれた」

ヒルデの呟きに対して、何にだの誰にだのと聞き返す気は起こらない。敵だ。彼女は一ではなく、その向こう側を睨んでいたのだ。

一はアイギスを握り締め、耳を澄ませる。

「ど、どないしたん？」

「ヒルデさん、出ましょう。挟み撃ちに遭うかもしれません」

ヒルデはゆっくりと首肯すると、大鎌の柄を手繰り寄せた。

「私が最初に出るから、キミたちは真っすぐ走って」

「ヒルデさんは？」

「……相手によるけど、少し引き付けて、私もあとを追い掛けるよ」

「分かりました。信じます。……とりあえず、あそこに見えてるトイレまで逃げ込みますから」

チアキは不安そうに一の服の裾を掴んだ。

「歌代、もっ回走るからな。俺から離れんなよ」

「……指図すんなや」

ヒルデは一たちのやり取りに目を細めて、

「……行くよ」

開幕を告げた。

トンネルの左側にいた円堂は足音を立てないよう細心の注意を払っていた。しかし、この行為は無駄になるのだと諦めている。相手は同じ南駒台店勤務外。それも戦乙女のリーダーときていた。肩書きは同じだが、力量が違う。確実に向こうが上だ。野獣としての、自身の力が決して低くないとは思っているが、それでも届かない、とも、心のどこかで理解している。

自信は必要だが、慢心は不要だ。円堂は向こう側に待機している結城を見て頭を振る。ヒルデの力を幾度か見て出した結論は、自分では彼女に勝てない、と言う事だ。

……一対一ならば。

こちらは勤務外二人だ。

向こうの人数は三人。

比べれば一人多いが、問題はない。それどころか、諸手を上げて歓迎する。幾らヒルデが強くとも、ひ弱そうな北駒台の男と戦力外の子供を連れていれば話は全くの別物だ。彼らを庇いつつ戦闘を行なうのは無謀でしかない。それどころか、こちらの勝利条件は端から緩いのだ。向こうは追っ手を相手取りつつも全員で脱出するしかないだろうが、こっちは最低でもあの子供を捕らえれば良いだけである。

ヒルデが防戦に撤するならば手こずるだろうが、野獣二人の攻撃を長くは耐えきれない。自信がある。五分掛からずに崩せると。

更に、長引けば長引くほどヒルデたちは不利になる。期待も望みもしていないが、客観的に考えてこちらには援軍の来る可能性もあるのだ。万事抜かりない。

それに。

上手く行けば、最高も狙える。ヒルデをこちら側に引き戻させれば。

円堂は舌なめずりして、一時の間、愚劣な想像を楽しんだ。

「……」

やがて、結城から無言の合図が届く。視線を交錯させ、同時にトンネル内に踏み込む事を確認し合ってから、円堂は足を踏み出した。

――ぎゃりぎゃりぎゃり！

金属が何かに擦れる音が鈍く響く。思わず足を止め、結城へ目を遣った。

「……ありゃ？」

彼は不様に倒れている。何が起こったのか分からない様子で目を丸くさせていた。

火花が散っていた。

予想だにしていなかったトンネル内からの閃光に、結城は一瞬視力を奪われる。目の良過ぎる彼にとっては致命的なミスであった。

次いで、死神の一撃にも等しい、こちらの命を確実に狙った鎌の一振りが結城を襲う。聴覚を頼りに、勘と本能に任せて咄嗟に尻餅を付く。下がった頭のすぐ上を疾風が通り抜けた。何とか避けられた様だ。が、こちらの出方がばれていた事に酷くイラつく。

「ってえっ！」

その上、地面を転がっていたところを遠慮なく踏み付けられる。顔を上げれば、あの北駒台のチビだと、自分の身長を棚に上げておいてそう気付いた。舐めるな、お前は殺しても構わないんだぞ。殺気を込めて、自分を踏んで逃げ去ろうとする一を睨み付けて立ち上がり――

「うおっ？」

――れなかった。

上げた頭をチアキが踏み付けて、一のあとを追っていく。

もう良い、知るか。あいつも殺してやる。結城は怒気と殺気を孕んだ双眸でチアキを睨んだ。

が、それもミス。
「あ……」
喉元に冷たく、鋭い感触。
結城が最優先にすべきだったのは鎌を振るったヒルデであった。隙を衝かれ、片膝で立っていたところに鎌を突き付けられている。
「……動かないで」
「ヒルデちゃん」
見下され、哀れみの視線を向けられ、結城の心がささくれ立った。
「大丈夫、このままじっとしていれば……」
上から目線の発言が鼻に付く。おかしな事もあるものだ。大人しくするのはそっちだと言うのに。
「すげームカつく」
結城が呟いた瞬間、トンネルの陰に隠れていた円堂が飛び出す。
――ざまあみろ！
一人になったのが仇になりやがった。結城はほくそ笑み、ヒルデが一たちを逃がした事に内心で拍手喝采を送ってやった。これで紛れもない二対一。優しくしてやるのは取り止めだ。一方的にいたぶって、徹底的に弄んで、暴力的なまでに刻んでやる。
「左腕」
ヒルデが何事か呟いたのを、結城は聞き逃した。

飛び掛かってくる円堂を視界の端に捉えながらヒルデは思った。
この世にいる人間を敵味方にして分けるつもりはない。自分にはそんな大それた事が出来ない。する権利も価値も資格もない。他人には精々、好きか嫌いかで接すれば良いと思っている。
だが、今だけは別だ。
彼らは敵だ。敵で構わない。南駒台店の同僚である野獣たちだが、その目には煮えたぎった殺意と、自分に向けられる下卑た情欲がある。怖気がした。

自分だけに危害が及ぶなら我慢も出来る。適当に、降り掛かる火の粉を払うだけで良いのだから。

しかし、野獣は一たちにも殺意を向けていた。許せない。やらせない。決して、手は出させない。

火の粉が一たちにまで降り掛かろうとするならば、払うだけでは済ませない。

「……キミは確か、握力、だったよね」

「ぎいいいいっ……！」

円堂の左腕が宙を舞った。体から離れていく腕を追い掛けるかの様に、傷口から血煙が上がる。彼は苦痛に顔を歪め、不自然な体勢で地に落ち、地べたを転がった。

――徹底的に、消す。

ヒルデの決意を切っ先に受け、大鎌は彼女の代わりに唸りを上げた。風切り音が幾度も鳴き声を上げる。

「て、てめぇ……！　何やったか分かってんのか？」

結城は驚愕に目を見開いていた。何が起こったのか、愚かにもまだ理解していない様子である。

「味方だぞ！？　俺っちたちは同じ店の、同じ勤務外じゃねーか！　ちくしょう、てめえもオンリーワンを裏切るっての！？」

ヒルデは答えず、鎌の先端を結城に向ける。

「へ、何、何だよ？　俺っちもやろうっての？　……良いよ、やれるもんならやってみろ！　その代わり、もうてめえは普通の生活なんか送れねえ！」

同じじゃない。同じ店、同じ勤務外だとしても、同じじゃない。

野獣二人に目を遣ってからヒルデは目を瞑る。

敵じゃない、味方でもない。この人たちは、嫌いだ。前から気付いてはいたが、そ知らぬ振りをしていた。この二人が自分を見る時の目はやけにぎらぎらしていて、恐ろしく汚らわしい事に。

構わなかった。その目が自分にだけ向くのなら問題などない。しかし、駄目だ。彼らは、その目で誰を見ていた？　何をしようとし

ていた？　自身に問い掛けながら、ヒルデは深く息を吐く。
「……大人しくしてくれるなら、私は何もしないよ」
「舐めてんのか……？　慶の腕切っといてそりゃないでしょヒルデちゃん。俺っち、キレてんだよ。なあ、そうだよなあ、お前もだよなあ慶！？」
　結城が叫んだ。刹那、ヒルデの背後から、倒れていた筈の円堂が再び飛び掛かる。彼は残った右腕を伸ばした。顔は激痛と激情により歪んでいて、口からは意味を成さない怨嗟の叫びをひり出して。
「そう……」
　ヒルデは悲しそうに呟く。分かっていた。死角から来るだけの些末な奇襲だ。一度目も通じなかったと言うのに、二度目を仕掛ける円堂が可哀想に思えてならない。結城も同じだ。何を笑っているのか、勝ち誇っているのか。解せない。
「戦乙女（ワルキューレ）！」
　――そうだ。それが私。
　ヒルデは向かってくる円堂に振り向かないまま、片手で鎌を後ろに振るった。短い叫び。刃物が肉に食い込む感触が、鎌の柄を通して伝わってくる。
　――慈悲など、くれてやるものか。

　ワルキューレ。
　北欧神話において、戦死者の魂を集める乙女。時には戦場を駆け、主命により戦況を変える戦女神。
　彼女らが集めた魂はヴァルハラにて永劫の戦士と成り果てる。来たるべき時までは死なない、死ねない。戦死から掛け離れた、永久に戦い続ける戦士に生まれ変わる。
　野獣と狂戦士に成り、果てる。

　ヒルデは円堂の腹部に刺さっていた鎌を一息に引き抜いた。返り血を浴びない様に身を翻すと、鎌に付いた血を振る。円堂が地面に

崩れ落ちる音を聞き、結城に三度鎌を向けた。
「やりやがったな、糞アマ……」
「……やってないよ。今から病院に行けば間に合う。だから、もう来ないで」
慈悲など――。
今宵、ヒルデは一に味方すると誓った。彼の為に勝利を捧げる、と。彼の命と命令を守りたいと思った。
しかし、一は殺人など好まない優しい人だとヒルデは知っている。分かっている。ならば、主の望まない事はすべきでない。
主に捧げるのは勝利だ。味方殺しの汚名は必要ない。自分だって、彼の元へ戻る時に要らぬ命は背負いたくない。
「はっ、あはっ」
結城は乾いた声で笑った。ヒルデは喉元に切っ先を当て、黙らせる。
「ヒルデちゃんってさ、おっぱい大きいよね」
鎌には構わず結城は喋り出した。
「……？」
「前からさー、俺っちずっと触りたいなーって思ってたんだよねー。柔らかいんだろーなって。あはは、ねえ、何なの？　そんなにさっきのチビが良い訳？　超ムカつくんだよね、そーゆーの」
ヒルデには眼前の男が何を言っているのかが良く分からない。気でも触れたのだろうか、そう思って彼の顔を覗き込もうとした瞬間、
「揉み殺してやる」
結城が立ち上がった。
喉に刃先が食い込むのを厭わず、まっすぐに向かって、腕を伸ばしてくる。
「……っ！」
殺す気はない。これ以上結城が進んでくれれば致命傷になると判断して、ヒルデは結城から鎌を引いてしまった。
「あははははっ、やったああ！」

腕が上がり、無防備になったところを狙われ、ヒルデは胸を触られる。屈辱と羞恥に頬を染め、唇を強く噛んだ。すぐさま体勢を整えて鎌を振るうが、結城は笑いながらそれを避ける。

「ヒルデちゃん何カップ？　思ってたよりあったなー、あははは！」

結城はヒルデから距離を取り、哄笑した。

「許さない」

「こっちの台詞だっての！」

ヒルデは大きく足を踏み出して鎌を薙ぐ。しかし、冷静さを欠いていては思う様に振れなかった。大振りの攻撃をあっさりと回避され、懐まで潜り込まれる。

「うらあっ！」

腹部への打撃。目の奥で火花が散るも、覚悟していたので何とか耐え切れた。みっともなく声を上げる事もない。追撃を阻止すべく、鎌を結城の鼻先に向けて突き出す。

思っていたよりも厄介な相手だと、ヒルデは思った。一たちとはまだ合流出来そうにない。

ヒルデ。結城。神話でも、現実でも味方同士である筈のワルキューレとウールヴヘジン。しかし、今宵だけは敵でしかない。

「……退いてもらうから」

騎行はまだ、終わりそうにない。

鎌を握る手に力を入れ直し、ヒルデは眼前の男を強く見据えた。

走る。走る。走る。

一はチアキの手を引いて必死に走った。

肩で風を切り、息は絶え絶え。ヒルデが気になったが、自分たちがいては邪魔になるだろうと無理矢理に考える。振り返らずに前だけを睨み付けてやった。

「はっ、はっ、はっ……」

チアキの体が重くなる。セイレーンの血が混ざっているとはいえ、彼女は体力的には普通の女の子と変わりない。疲労が蓄積され、足取りもどこか鈍い。

一は彼女の手を一層強く握り、力を込めて引っ張っていく。

もう、一の体力も限界に近かった。体力はもとより、何よりも精神的に辛い。

「あ……」

チアキの口から安堵の息が漏れる。当座の目的地である公衆トイレは、もうすぐそこだ。

トイレに辿り着くと、一は周囲を素早く見回し、誰もいない事を確認してから男性用の入り口に身を隠す。

しかし、チアキは一の手を振り解く。入り口の近くに突っ立ったまま、苦しそうに肩で息をしている。

「馬鹿っ、早く隠れろよっ」

「……あ、あほ」

「さっさとしろって！」

一は戻り、チアキの手を引っ張った。

「触んなボケ、ちゅーか、あんた……」

「あ？」

「うちに、そ、そっちに入れって言うんか……？」

「そっち？」

チアキは一の足を豪快に踏み付け、男性用と書かれたマークを指差す。

「うちは女やぞっ」

「知ってるよ！　四の五の言うなアホ！」

一は頭に来て、チアキの腕を取った。喚き散らす彼女の声に顔をしかめながら、無理矢理引きずっていく。

「離せ離せ離せアホ！」

「うっせえ黙ってろ！」

「おー、楽しそうじゃねェの？」

一の心臓が寸時止まった。背後からの声。誰なのかを理解し、ぴたりと動きが止まり、ひやりと、背中を嫌な汗が伝う。いつの間に、彼女は来ていたのか。

「へー、お前もやるじゃん。嫌がる女を人気のないトイレで無理矢理ってか？　良いね良いね、良いじゃねェの古典的でよォ」

嘲りと愉悦に満ちた声。

一はチアキの手を離し、自分の背で隠した。

「……俺たちを連れ戻しに来たんですか、三森さん？」

三森は不敵に笑う。赤いジャージのポケットに手を突っ込み、無遠慮な視線を一たちに投げかけた。

「連れ戻す？　おいおい。そりゃまた、随分とのんびりした話だな」

「どういう、意味ですか？」

一は三森の表情を観察しながら考える。どうして、彼女が自分たちに仕掛けてこないのかを。

「てめーらあそこまでされて本当に分かってねェのか？　あンな、お前らは今日、死ぬんだよ」

「なっ……なんで！？」

チアキが叫んだ。一は、そりゃそうだろうな、と。諦めにも似た境地でいる。

「わりィが、お前ら三人、『棺』からは潰せって言われてンだよ。……あ？　おい、あの女はどこ行きやがった？」

「ヒルデさんなら、向こうで野獣（ウールヴヘジン）を足止めしてますよ」
「あっそ。そりゃ残念だ」
本当、残念だ。一は内心で同意した。ヒルデがいない。つまり、三森の相手を自分がしなくてはならない。アイギスの柄を深く握り直して、チアキへ逃げる様に促す。
「ああ？　何構えてんだよ。ヤンのかてめェ？」
「今更……やりに来たんでしょうに」
三森は鼻で笑い飛ばし、肩を落とした。
「調子乗ってンなよ。勝てると思ってんのか？　私は別にんなつもりねーよ」
「……は？」
「『棺』の野郎に従う気はないって言ってンだ。ま、この先どーなるかはお前次第だぜ」
戦う気が、ない？　一は三森の言葉を信じられなかった。
「よォ、話でもしようや、なあ？」
「――っ！」
動きが見えない。息を呑む暇すらない。いつのまにか、三森は一の肩を掴む位置にまで来ている。
「話……？」
声は震えていた。まずいと思っていても、どうしようもない。従うしかない。
「おうよ。まあ、あっちのベンチにでも座ろうや」
獰猛な笑みを向けられる。選択肢は恐らくないのだろう。一は小さく、頷いた。

話の邪魔だと三森が言うので、チアキには公衆トイレに隠れているよう、一は告げた。
今、一と三森は近くのベンチを挟み、向かい合っている。
「どうした、座れよ？」

警戒を続ける一に背を向け、三森は先んじてベンチに腰を下ろした。

敵である相手に背を向ける。自分はまるっきり相手にされていないんだと、一は安心した。息を吐いたあと、覚悟が鈍っている事に気付き、自身を恥じる。

「……座る前に聞かせてください。何の、つもりですか？」

「つもりって、何だよ？」

「何しに来たのか聞いてるんです。俺たちを、殺しに来たんでしょう？　少なくとも、南の勤務外はそのつもりでした」

向けられた敵意、浴びせられた殺意。思い出すだけで、一は胸が詰まりそうになった。

「私は雑魚なンか相手にしねェんだよ」

「だったら、俺たちに構わないでくださいよ」

「……俺たち、ね」

「何か？」

三森は煙草に火を点け、頭に手を置いた。

「何でもねー。まあ落ち着けよ。ほら、一服しろや」

差し出された煙草を見て、一は気付かれない程度に顔をしかめる。

「結構です。俺、禁煙中ですから」

「へー、初耳。そいや、店でも吸ってなかったっけか」

「話って、なんですか？」

関係ない話題を振られて時間を潰されるのはまずい。ヒルデは今も戦ってくれているのだ。何とか、しないと。

ひとまず一は、三森がまだ何もする気がないと判断した。

「話、ねェ。ま、大した事じゃねーよ」

「なら、話は終わりです」

短く言い放ち、一は三森から背を向ける。

「やっぱり、お前がムカつくって話だ」

「そうですか」

聞き流してやろうかと思ったが、勘に触った。この状況で何を言

っているのかが分からない。一は立ち止まり、三森に振り返る。
「お前さ、何でもかんでもてめェ一人で出来ると思ってンだろ？」
三森はベンチに背を預けたまま、一に背を向けたまま話を続けた。
「自分以外の人間を見下してンだ。私らなんか信用すらしてねー、そうだろ？」
「何を言うかと思えば……この期に及んで説教ですか？」
「答えろよ。どうなンだ？」
三森の声が、刃物めいた鋭さを帯びる。一は逡巡して、
「俺はそんな事思ってません」
戦闘の回避を選んだ。まだ仕掛けるタイミングじゃない。アイギスを一瞥し、肺の奥から深く息を吐き出す。
「じゃあお前は私らを信用してるって事なンだな？」
「同僚ですからね。一定の信頼は置いてるつもりです」
同様に、一定の距離も置いているが、とは言わない。
「……なら、話せよ」
「何を、ですか？」
答えはなかった。三森の吐く紫煙が場を満たそうとして中空をうろつくだけ。張り詰めた空気に息が詰まりそうになる。
「何を話せって言うんですか？」
耐え切れず、一は切り出した。
「煙草、なンで辞めたんだよ」
「は……？」
肩の力が抜けた。
「三森さんには関係、ない事ですから」
我ながら酷い言い草だとは思ったが、口にしたものは仕方ない。
一は三森の続きを待った。
「……蛇が出た時」
「蛇？　……あ、ヤマタノオロチ、ですか？」
「あの馬鹿女が店を辞めた時だよ」
馬鹿女が誰を指すのか、一は即座に理解した。

「糸原さんが何か？」
「あいつじゃねェ、お前だよ」
「俺？　俺が何かしましたか？　あ、いや、しちゃったけど、ちゃんと説明したじゃないですか」
　要領を得ない三森の話し方に戸惑いつつも、一は考えて、無難に返す。
「なあ、私――私らはお前と関係ねェのか？　信じちゃくれねーのか？」
「だから、そんな事は――」
「――おせェんだよ！　あのチビが出てった時もじゃねーか！　話なら確かに聞いた、何があったのか、お前が誰とどこで何をしてたかってのも全部聞いた！　聞いたってンだよ、全部が終わった後にっ！」
　焔が揺らめく。
　子供の様に喚いている三森の激情が一を突き刺した。
「ちゃんと話してくれよ。店長だってお前に言った筈だぜ。一人で先走ンなよ、どうして教えてくんねェんだ、なあ？」
　一は固唾を飲み、思考を巡らした。言えるわけがない。言って、巻き込みたくない。ヤマタノオロチだって、人狼だって、今だって、全て自分から巻き込まれに行った。自業自得なのだから、しょうがない。
「言ったでしょう。関係ないって。俺が勝手に首を突っ込んだ事なんです」
「やっぱ信じてねェんじゃねーかよ！　何とも思ってないンだろうが！」
「思ってるから言わなかったんです！」
「思ってンなら言えよ！」
　遂に三森はベンチから立ち上がる。
　一は二の句が告げなかった。振り返った三森の瞳が、濡れている。
「……なんで」

三森はその事に思い至ると、ジャージの袖で乱暴に涙を拭った。
「……なんで、泣いてるんですか？」
「うるせェ、お前がムカつくからだよ……」
これなら、殴ったり蹴ってくれた方が気が楽だ。一は俯き、女はずるいと思う。
「言っても、どうしようもない事だってあります」
「言わなきゃ分かンねー事もあるだろうが」
「その通りです。でも、今までの事はどうしようもなかった。……今だって、そうです」
「それを決めるのはお前じゃねェ。話を聞いた奴が判断すンだよ」
――だったら。
一は三森を睨んだ。
「話したら、助けてくれたんですか？」
「……知るかよ。でも、ダメだ。もう遅ェ」
三森はベンチの縁に足を掛け、軽やかに跳躍する。手に持っていた煙草を指で弾き、真っすぐに一を見つめた。
「殺しゃしねェ。後は任せて、もう寝とけ」

助けて欲しかった？
話して欲しかった。
言って欲しかった。
伝えて欲しかった。
頼って欲しかった。
思って欲しかった。
信じて欲しかった。
勝手な話だとは分かっていたが、それでも助けを、求めて欲しかった。
「……何を、言ってるんですか？」
困惑した表情の一を見て、三森は少しだけ悪いと思う。

「もう止めろって言ってンだ」
自分だけじゃない。『棺』と南の二人だって動いている。一たちを、殺そうとしている。やらせない。春風に言われた言葉が脳裏を過った。助けてやれと言われた。
――言われるまでもない。
この状況で、一の命を拾ってやれるのは自分しかいない。
「心配すンな。お前を殺させやしねェよ。お前が死んだら、店が回らなくなっちまうからな」
「だから、何をしようと言ってるんですか？」
「言わせンなよ。お前を助けてやるって言ってんだ」
「……俺を？」
聞き返してくる一を煩わしいと思いながらも、三森は頷いて答えてやる。
「お前をだよ」
「三森さん、ナナはどこにいるんですか？」
思わず、舌打ちしてしまった。
「知るかよ。その辺じゃねーの？」
一は三森の言葉を受け、苦渋の色を顔面に浮かべる。やられた、とでも言いそうな顔になっている。
「助けて、くれるんですよね？」
「そうだって言ってんだろ。もう良いって、黙って寝てろ」
それ以上勘繰られるとまずい。駆け引きは得意じゃない。三森は余計な口を利かないよう注意を払い、会話を打ち切るべく足を踏み出した。
「俺を助けてくれるんですよね？」
三森は拳を強く握る。
一発で気絶させる。狙うのは腹だ。恐らく一は体なんて鍛えていないだろうから、問題なく倒れてくれる筈だ。
「顎狙うから、構えとけよ」
「俺だけを助けてくれるって訳ですね。ヒルデさんと歌代をどうす

るつもりですか？」
　気付かれたか。思っていたよりも聡い奴だと、三森は少し驚く。
「あの二人を田中さんに渡すつもりじゃないでしょうね」
　その通り。田中に二人を渡して、店長や他の社員に掛け合えば一だけは何とかなるかもしれない。何とかさせる。
　三森は握った拳を解き、掌に一瞥を遣る。
　――小さい。
　自分が拾える命は、一つあるかないかだ。全部、一の責任だ。もっと早く事情を知らせてくれれば、他にもやり方はあったと言うのに。
「……私は、嘘は吐かねェ」
「何ですって？」
　良い。
　良い。
　一にどう思われようが、約束は守る。そう決めた。決めていた。決まっていた。
　こいつを守ると、あの日に誓った。
　――だから。
「守るって言ったろ」
　一には聞こえない程度に囁くと、三森は拳を再び握り締めた。

　一はアイギスを広げて三森を見据えていた。
　全く、やり辛い。泣いたり怒ったり、自分を助けてくれると言いつつ顎を殴ると言ったり。いっその事、三森には何も言わずに仕掛けてきて欲しかった。
　第一、助ける？　吹き出しそうになった。望んじゃいない。求めていない。そんな事頼んじゃいない。気持ちは嬉しいが、気持ちだけで充分過ぎる。ここで三森に倒される訳にはいかない。自分が倒れれば、ヒルデとチアキがまた一歩死に近付いてしまう。助かると

いうなら、三人一緒だ。
「ナナは歌代のところにいるんですね」
三森からの答えはない。結構。
一は深く息を吸い込んだ。
「時間がないから、始めるなら始めてください」
「……あ？」
「聞こえませんでした？　掛かって来いって言ったんだよ、三森」
分かりやすいくらいに三森の顔が歪む。怒りを持て余しているのか、口元には笑みが浮かんでいた。
「一丁前に挑発してンじゃねーよ。良いから、おとなしくしてろっ」
三森が身を低くして地を蹴る。
一は前方にアイギスを構えた。彼女の速度には追い付けない。しかし、思考は読める。三森は恐らく、格下の自分に余計な技は使わない。力のみで捻じ伏せに来るはずだ。そして、まともにぶつかれば勝ちの目は薄い。挑発して掻き回して、こっちのペースに持ち込みたい。
一の予想通り、三森は構わずにアイギスへ拳を振り下ろす。
「うおっ」
思っていたよりも重い一撃に一の体が後退していった。三森は間合いを詰め、またもやアイギスに狙いを絞る。助走を付けた飛び蹴りが突き刺さった。
また、重い。一の手が痺れ、離しはしなかったもののアイギスを弾いてしまう。
「くたばれっ」
三森は中空に浮いたまま、アイギスに足を残した。一は咄嗟に振り落とそうとするが、遅い。
反動を利用して、三森はくるりと体を回転。弓のように引き絞られた状態から、足が飛ぶ。盾で守られていない一のこめかみに力が炸裂する。
「いっ……てぇ！」

一は呆気なく地面を転がった。一呼吸吐く間もなく、倒れている彼目掛けて三森が走り寄る。

「がっ……！」

遅い。避けようとするより早く、三森の爪先が一の脇腹に深く入った。

一は唾液と涙を垂れ流しながら、またもや地面を転がされ、それでも気絶だけはすまいと意識の糸をしっかりと手繰り寄せる。不様に呻きながらも、彼は必死に勝機を探った。こちらには武器がない。あるのはアイギス。条件は問題ない。三森の名前も知っているし、声だって出せる。目だって正常だ。止められる。三森を止められる。だが、止めた後はどうする？　一は混濁する脳内で思考を続けた。止めると言っても、長時間は止められない。拘束するにも限度がある。第一、止めるしか出来ない。アイギスだけ、一だけではそれが限界だ。

メドゥーサの効果が切れれば、三森はまた向かってくる。それでは意味がない。何より、二度目はない。止めた後、決定的な何かが必要になる。三森を殺さないで、それでいて追撃を防ぐ為の何かが。

「げほっ」

何も思い付かない。一の目の前が真っ暗になりつつあった。

それでも諦められない。鍵はアイギス。大事なのはタイミング。虎の子をいつ、どこで解き放つかが一の進退を握っている。

やるしかない。一は決意して、痛む体に鞭を打った。アイデアが浮かぶまでは時間を稼ぐしかない！

悠然と近付いてくる三森に背を向け、一は猛然と駆け出す。

三十六計逃げるに如かず。背後から燃え上がらんばかりの敵意を向けられながら走って、走って走って身を隠せそうな場所を求めた。

「……くそっ」

一は時間を稼げそうな場所を見つける。迷ったが、舌打ちしてそこに駆け込んだ。

懐かしくもある、木々に囲まれたダンスホール。

その場所は、先日、一が犬たちと踊った公園の散歩道だった。

「離せって言っとるやろ！　馬鹿メイド！」

声が響く。

「それは出来ません。あなたを田中さんの元まで送り届けるのが私の使命ですから」

メイド服を着た女が、少女を小脇に抱えて闊歩していた。

言うまでもなく、ナナとチアキである。

「ちくしょう離せ離せ離せ！　馬鹿っ、馬鹿力！」

「……随分とボキャブラリーに乏しい方ですね」

ナナはほんの少しだけ腕に力を込めた。

「それと、私は馬鹿ではありません」

「痛い痛い痛い痛い！　分かった、分かったから力抜いてや！」

「では、少しだけ声量を落としてもらえますか？　スピーカーが割れそうです」

チアキは指示に従い、声を落として了解の意を伝える。

「ありがとうございます」

短く礼を言い、ナナは約束通りに力を緩めた。

そこから、会話が途切れる。ナナは黙々と足を運び、チアキは黙って揺られていた。

「なあ、うちを殺すん？」

ぽつりと、チアキが漏らす。今にも泣き出してしまいそうな、消え入るような声だった。

「殺す、とは？」

「せやから、あいつのとこまでうちを連れてくんやろ？」

「はい。田中さんのところまであなたを無事、お送りします」

「……連れてかれたら無事じゃ済まへんねんけど」

ナナの歩みは止まらない。

「私は三森さんにそうしろと言われただけですので、後の事は知り

ません」
「うちの事、可哀想やなーとか、助けてあげようかなーとか、思わへん？」
「何分、私には心がありませんから」
チアキは訝しげにナナを見つめる。
「何それ？　ボケ？」
「私は馬鹿でもなければボケでもありません。……比喩表現で言ったのでもなければ、冗談でもありません。私は、オートマータですから」
「おーとまーた？　何やそれ、お粥？」
ナナは無表情にチアキを見た後、
「オートミールではありません。オートマータ。つまり、人形です」
淡々と告げた。
「人形？」
「ええ、その通りです。お分かり頂けましたか？」
「いや、全然」
「は？」
ナナは理解に苦しむ。今、この少女は何と言った？
「説明が足りませんでしたか。良いでしょう、私はオンリーワン近畿支部の技術の粋を……」
「いや、そーいうんじゃなくて」
チアキは話を遮り、ナナの顔に指を突き付ける。
「あんた、人形なんて言うてるけど。どっからどう見たって人間やん」
思わず、ナナは呆気に取られてしまった。咳払いを一つしてから、取り繕うように説明を始める。
「……人間より人間らしくが私を作製するに当たってのコンセプトでしたから。確かに、何も知らない方が見れば、私は人間に見えるでしょうね。でも、私には心がありません。ですから――」
「――いや、あるやん」

今度は驚きの声すら上げられなかった。心なんてモノ、人形の自分にある筈がない。

「何度も申し上げますが、私に心はありません」

「うちがあるって言うてんねんから、あるに決まってるやん。こー見えてもセイレーンの血ぃ引いてんねんやで？」

「私の知る限り、セイレーンにそのような力はありません。あなたの勘違いでしょう」

「ふーん、せやったら試してみる？」

チアキは悪戯っぽく笑んだ。

「……何を試すのですか？」

「うちがうたったるわ。うちの歌聞いたら、絶対に心があるって分かるで。くふふー、ぜっったい感動するで、自分」

まさか。そう思う反面、ナナはもしかしたらと淡い期待を抱く。

「結構です」

だが、断った。もし心があったなら、自分が自分でなくなってしまう気がしたのだ。

「さよか。ま、ええけど」

何より、期待が裏切られてしまうのが恐ろしかった。

それでも、もし、人形の自分に心があるならば。

ナナは頭を振り、考えを払う。

「少し、急ぎます」

チアキの返事を待たずに、ナナは足を速めた。

胸が、苦しい。

一は散歩道の脇にそびえる木々の合間に身を潜め、息を潜めて三森を待っていた。あれから数分が過ぎていたが、自分以外の気配は感じ取れない。しかし、逃げ切れたなどとは思えない。

やるしか、ない。

この数分は無駄ではなかった。何かを思い付いた。勝機はある。

だが、実行に移せるチャンスは一度あるかないか。移せたとしても、成功するかは五分もない。紙一重。だが、賭けるしかない。

「ふう……」

手が湿っている。ズボンで汗を拭き、昂ぶる気持ちを鎮めた。耳を澄ませ、虫の呼吸する音さえ聞き逃さないように意識を研ぎ澄ませていく。

が、さっぱり分からなかった。しかも気が抜けてしまう。木の幹に背を預け、枯葉の上に腰を下ろした。

「撒いたんじゃねえのかな……」

ヒルデに加勢するか、チアキを探しに行くか考えていたところ、視界が急に明るくなる。目の端に眩い光を捉え、一は思わず目を瞑った。何が起こったか分からないまま、雷が落ちたと思わせるほどの衝撃音が耳をつんざく。ついで、木の焼ける臭いが鼻に付いた。

「なっ、なあっ？」

落雷か？　一がそう思ったのも束の間、そうではないと理解する。見えたのは拳大の大きさをした火の玉。それが、途方も無い速度でこちらに向かっていた。

「うわあっ！」

頭を下げ、その場から転がるように逃げる。空気中の酸素を飲み込みながら、唸りを上げる火の玉。一が背にしていた木の幹に、それが直撃した。

一は心底から驚いたが、威力はそれほどでもないと判断する。木は焼けていると言うより、焦げている程度であった。それでも、当たれば無傷で済むとは思えない。

「……これって」

火。赤い。連想する。こんな事が出来るのは三森しか有り得ない。

不幸中の幸いと言うべきか、火の玉の命中率は悪かった。その証拠に、火球が四方八方に飛んでいる。一の居所が分からないから、燻り出そうとしているのだろう。

「おらあーっ！　さっさと出てきやがれ！」

なんて強引。なんて乱暴。

「誰が出るかっ」

一は落ち葉を避け、音を立てないように気を付けながら、三森の声が聞こえてくる反対側へと逃走を計った。

生きた心地がしない。

一は予想が外れた事に毒づく。三森は今、本気になりつつあった。まさか火を圧縮させて飛び道具に使うとは。

――立派な技じゃないか、畜生。

こんな事が出来るとは、いや、してくるとは思わなかった。

体から火を出す。類い稀な格闘能力、身体能力。対ソレではその力で圧倒的に殲滅し尽くす。三森の能力は把握しているつもりだった。勘違いにもほどがある。

一は三森を評価し直した。小手先の技を嫌って強引に押してくるのだとばかり思っていたが、器用さも持ち合わせている。恐らく、今まではやれなかったのではなく、やらなかったのだ。頭を使う相手がいなかった。自分みたいに逃げ回る敵と出会わなかったのだろうと、一は推測する。

「反則だろっ」

だが、一筋の光明も見えた。三森は強いが、頭を使う事にかけてはそうでもないらしい。

三森がやたらめったら火の玉を放っているのは、本気で一がどこにいるのか分かっていない事に他ならない。戦況、戦力。何をとってもついさっきまでは彼女が圧倒的に有利だった。

が、自身が優位だという事をアピールしないのが勿体ない。確かな焦りを一にすら見破られている。まだ、戦えるのだと思わせてしまった。

更に、一は火の玉の飛んでくる方向から三森の大まかな居場所を割り出している。彼が狙うのは背後からの襲撃。それしか、ない。

切り札はない。

一は自覚していた。自分が持つのはアイギスと、言葉だと。

動きを止めた後、三森に突き付けるのは傘の石突きでも狼の爪でも牙でもない。

戯言めいた、妄言だ。

一は口の端を歪め自嘲する。分の悪い賭けだ。しかも、賭けるのは自分の命だけじゃない。ヒルデとチアキの命も懸かっているのだ。

止めろと、体のどこかが喚いている。知っていて尚、一は笑みを堪えるのが出来なかった。

救いを成し給う

風が唸る。

振り下ろされ、振り上げられ、右に薙がれ左に薙がれる大鎌を避けながら結城は思った。

このままならいける、と。

ヒルデは強い。確かに手強い。一対一では搦め手を使ってでも厳しいだろう。そう思っていたのだが、どうにも彼女の動きは鈍かった。精彩を欠いている。何か、迷っているように見える。

「あははっ、よゆーよゆー！　本気出しなよ！」

「……うるさいっ」

繰り出される攻撃は、避けるだけなら造作もなかった。

結城は確信する。この期に及んでそうする理由は知らないが、ヒルデには自分を殺すつもりが本当にないのだと。

だから、勝てる。

こちらには何も制限が掛かっていないのだ。向こうが手加減するなら好きなだけすれば良い。勝手にしろと唾を吐く。舐められていると思わないでもないが、それだけの力量差があるのも動かしがたい事実。なら、利用しない手はない。

結城は生憎と武器を持ってはいなかったが、勤務外になる為に鍛えられた肉体なら持っている。しかも、オンリーワン技術部特製の薬でドーピング済みのをだ。視力は笑ってしまうほどに上がっている。これなら、ヒルデが全力で鎌を振ったとしても脅威にはなり得ない。

「よいっしょお！」

ヒルデが鎌を返すところを狙って、結城は軽やかに、軽々しく踏み込む。どうせ向こうは致命傷を狙ってこないのだ。やりたい放題好き放題、無茶苦茶にしてやる。

腹に蹴りを放ち、足の甲を思い切り踏んで押さえた。自由を奪い、

ヒルデの下がった頭に何度も何度も打撃を加える。
「あはははははは！」
「くうっ……」
結城の目の前を鎌が通り過ぎて行く。がむしゃらに振り回されても何も怖くなかった。少し体を動かすだけで、鎌が勝手に避けていくイメージ。ヒルデの手首を見れば、どこを狙いたいのか分かる。想像通りに全てが上手くいく。今までに無いほど、彼の気分は高揚していた。
「ああっ！」
見た限り、ヒルデの感情はかなり荒れているが、それでも結城に対してある程度は的確な攻撃を放っていた。だが、的確なだけに軌道が読みやすい。彼女は強い。強いが――
――それが命取りだよねっ！
口元に嫌らしい笑みを湛えたまま、結城は攻撃を当てるとすぐに後方へ下がる。下がって、また仕掛けに行く。
元々、結城にヒルデを殺す気はない。冷静さを取り戻すにつれ、彼女への欲望が増していく。腕を切り落とされ、腹を抉られ血を流し続けている円堂には悪いが、彼は自分を優先させていた。
動けなくなるまで、動く気を失くすまで痛めつければそれで良い。
「よっ……と」
とは言うものの、結城の思惑に反してヒルデの鎌を振る速度は全く変わっていなかった。思わず圧倒される。底無しの体力。無尽蔵の気力。彼女の極点が分からない。先の見えなさに、自分から折れてしまいそうだった。
結城は、このまま同じ事を繰り返しても時間の無駄だと考える。目に付いたのは、アスレチックエリアの片隅に置かれた古めかしい遊具。雲梯、シーソー、ジャングルジム、ブランコ、滑り台。
結城は高さ三メートル程度のジャングルジムの天辺へ軽やかに跳び、着地する。視力ほどではないが、薬によって跳躍力も上がっているらしい。

ヒルデは結城を追い掛けず、息を整えながら彼を見上げていた。
「ねえ、ヒルデちゃん。あのチビと仲が良かったんだね」
「……何の事？」
「とぼけなくても良いのに。ねえ、ここまでする必要あるの？　俺っちには無理だなー」
得意ではないし、まどろっこしいから好きではないのだが、結城は言葉による揺さぶりを選ぶ。
「ホント、俺っちには分かんないなー。ヒルデちゃんさあ、あいつに借りでもあんの？　弱みでも握られてんの？」
結城とヒルデは長い付き合いではない。二人が出会ったのは、オープン前のミーティングが数回、南駒台エリアに出たソレを仕留めに行った一回きり。実際に会話を交わしたとなると、その回数もぐっと減る。本当に、同僚と言う間柄なだけ。
それでも、結城はヒルデについてある程度は分析出来ているつもりだった。
彼女は常日頃から眠たそうにしており、滅多な事では感情を表に出さない。ソレとの戦闘だって淡々とこなし、何物にも興味を示さず、下手をすれば何者にも心を開かない。
そう思っていた。思っていたのだが、今はどうだ。
少なくとも、彼女は今、自分に対して怒りを露わにして焦っている。
初めて見るヒルデの表情に興奮すると同時、彼女にそんな顔をさせているのが北駒台の人間だと言う事に苛立ちを感じずにはいられない。
「ヒルデちゃんってさー、あのチビが好きなの？」
「……関係ない」
「嘘だね。俺っち、ヒルデちゃんのそんな顔初めて見るもん。ねえ、あいつに何かもらったの？　何かしてくれたの？」
ヒルデは答えなかった。口惜しい。
「ムカつくんだよね。何？　あいつとデキちゃってるワケ？　見せ

付けちゃってんの？」
　結城はジャングルジムから飛び降り、遠くを見つめる。散歩道の方で何か光った気がしたが、気のせいだと思い込んだ。
「なんでそこまですんの？　俺っちにここまで殴られたり蹴られたりしてさー、意味分かんない。もう諦めたら？　無理無理ぃ、このままだとマジに俺っち潰しちゃうよん。ねーねー、あんなチビほっといてさ、俺っちに乗り換えなよ。ぜってー楽しいし、すっげー良ーい思いもさせてあげっから」
「……恐れを知らない者」
「はっ？　なんて言ったの？」
　聞き返すも、言葉の代わりに、鎌が返ってくる。結城は大きく後ろに下がってそれを避けた。
「俺っちよりさっきのチビがそんなに良いわけ？　だっせーじゃん、あいつ。止めときなって、どこが良いんだよ」
「キミじゃ、無理だよ」
「……はっ、なんだよ？　俺っちが無理であいつは良いの？　なんだよなんだよっ」
　距離を詰めてくるヒルデを退屈そうな目付きで見ながら、結城は鉄棒の連立する場所まで後退した。
「だったら良いよもう。ヒルデちゃんが裏切ったのもそんな顔してんのも、あいつのせいなんだろ。じゃあ、決まり。殺すから」
　ヒルデの動きが止まる。
「……殺す？」
「うん。あいつさえ殺せば何とかなりそうだし。首だけになったのを見せりゃ、ヒルデちゃんの目だって覚めるっしょ」
　結城はけらけらと笑った。思い付きで口にした事だが、それも悪くない。ヒルデはどんな顔をしてくれるだろう。楽しみで仕方ない。
　楽し過ぎて、地雷を踏んでしまった事に結城は気付いていなかった。

「あら？」
ナナはチアキを抱えたまま小首を傾げていた。田中が待っているであろう公園の入り口にまで戻ってきたのだが、今は誰もいない。
「どうしましょう、困りました」
そう言いつつも、ナナは落ち着いて周囲に視線を配っていた。
「……なあ、せやったらうちを見逃すとか、そーゆーのどう？」
チアキの発言を受け、ナナは沈思黙考する。
「うち、まだ死にたないねんけど」
「分かりました」
「ホンマ！？」
ナナは外灯の下にチアキを離した。
「お、おおきに。そんじゃ、うちは退散しよっかなー」
「ここで待ちましょう」
逃げ出そうとするチアキの肩をしっかりと掴み、ナナは淡々と言い放つ。
「えーと？　うちを助けてくれるんやないの？」
「あなたを助けるか助けないかは私が決定する事ではありません。誰かの指示を仰がなければ。……田中さんをここで待ちます」
「……あー、探しに行った方がええんとちゃうかなー？　ほら、あっちの方とか」
チアキはさり気なく来た方向を指差した。しかし、その甲斐も空しい物となる。ナナは首を横に振り、一種冷淡に告げた。
「いえ。今回の様なケースですと、入れ違いになってしまう確率が非常に高いです。私のデータに間違いありません。その点、二作目の勇者は非効率でした。ふふ、サマルトリアの王子は待てば良いのですよ」
「そのデータめっちゃ偏ってるやん……」
チアキは肩を落とし、その場にしゃがみ込む。
「おや、ご気分が優れませんか？」

もはや、チアキには答える気すら起こらなかった。

炎に囲まれた城で眠っていた。
永遠に目醒める事はないと思っていた。
この世界に自分の居場所はないんだと諦めていた。

「うっ、うわあああっ！」
結城は逃げた。算を乱して必死に走る。公園に設置された遊具を盾にしながら死に物狂いで攻撃を避ける。もはや、鎌の僅かな向きだとか、ヒルデの手首の角度だとかを見ている余裕などなかった。背を向けて、距離を少しでも稼ぐので精一杯。
「うおああっ！」
雲梯は切り裂かれ、シーソーは薙がれ、ブランコは切り刻まれ、滑り台は切り払われて。
原型を留めているモノなど、既にここにはなかった。
結城はトンネルの中までほうほうの体で逃げ込み、四つんばいになって息を吐く。口から飛び出してしまうのではないかと思うくらいに心臓は高鳴っていた。
「……な、なんだってんだよ」
彼の網膜に焼き付いているのは冷たい双眸。戦乙女のどす黒く濁った瞳。
目が合った瞬間、体中の穴という穴から全てが奪われる気分に陥った。肌は粟立ち、総毛立つ。喉はひり付き心は凍る。
あんな目がこの世にあるとは思えなかった。
「ひっ、ひっ、ひいっ……」
呼吸が覚束ない。膝はガクガクと震えて、しばらくは立ち上がれそうになかった。
結城は自身の能力を、恨む。見え過ぎるが為に、彼は余計なモノ

まで見てしまったのだ。
「はっ、はふっ、ふっ、ひっ……」
冷や汗と悪寒が一向に止まらない。寒い。羽織っていた毛皮はとっくに脱ぎ捨ててしまった。後悔先に立たず。だが、彼が真に後悔すべきは軽はずみな言動であった。
雉も鳴かずば――。
「うおおおおっ！」
沸き上がる恐怖を塗り潰す為、喉の奥から声を振り絞る。折れそうで堪らない。崩れ落ちたくて堪らない。
いや。結城は首を振る。折れてたまるか。折られてたまるか。負けてたまるか。勝たせてたまるか。死んでたまるか。殺されてたまるか。
「あのアマ……舐めやがって舐めやがって。ぜってーヒイヒイ言わせてやる。腰がぶっ壊れるまで、いいやクソっ、ぶっ壊れてもヤってやる。やってやるよ……くひひひひ」
どこか壊れた笑みを漏らしながら、結城はトンネルの壁に手を付きながら立ち上がる。まだまだこれからだ。自分に言い聞かせながら、残った気力を総動員して立ち向かえば、あるいは。
刹那、トンネルの中にいた筈だった彼の目が、月を捉えた。

目醒めたのは誰のせい。目覚めたのは彼のせい。
世界が終わるまで炎に包まれたままだと信じていた。
二度と生を謳歌出来ないと信じ切っていた。
恐れを知らない者だけがその炎を越え、眠りを覚ませてくれる。
この誓いを思い出す度に笑ってしまいそうになる。
なんてふざけた話だ。竜殺しの彼は、もうこの世にいないと言うのに。
でも、彼はやって来てくれた。
竜殺しじゃない。鳥の言葉も分からない。怒りの長剣すら持って

いない。
でも、彼は自分を眠りから解き放ってくれた。
竜どころか、ともすれば虫すら殺すのさえ躊躇う様な、そんな男が来てくれた。
恐れを知らない、勇ましき者。
穢れを知らない、愛おしき者。
感謝しても、し足りない。
二度目の生と目覚めを与えてくれた彼が、好きだ。
だから、殺させはしない。

コンクリートで作られたトンネルが斜めに切り口を残して、真っ二つに裂けていた。斬られた破片は力なく地面を転がっている。
トンネルの中にいた結城は月を見上げながら、膝から崩れ落ちていた。口を開け、目を大きく見開いたまま、だらしなく失禁している。
「……」
トンネルの切断面は、結城の鼻先から一センチも離れていなかったのだ。
「……もう、来ないで」
ヒルデは放心状態の結城を見ずに声を掛けると、彼に背を向けて歩き出す。
もう、戦う気も動く気も失くしただろう。
こちらの攻撃がお見通しなら、存分に見せつけてやれば良い。見えていても避けられなくなる様、徐々に速度を上げてプレッシャーを掛け続け、見えないところから仕掛ければ良い。目が良いだけでは絶対の脅威にはなり得ない。
流石にあれだけ暴れてやれば当然か、と、ヒルデは少しだけ反省する。
そして、後悔もした。壊れた遊具を申し訳なさそうに眺めながら

思う。この公園、大丈夫かな、と。
「ふう……」
ヒルデは一たちの待っているであろう場所へ歩きつつ、何度も溜め息を吐いた。今日は柄にもなくたくさん喋り、たくさん動いた。
「……ちょっと、疲れちゃった」
何だか、愛用の大鎌もいつもより重く感じられる。今すぐにでも目を瞑って眠ってしまいたい。睡魔が何度も呼びかけてきていた。ああ、丁度良いところにベンチもあった。座ってしまおうか。少し。少しだけ。
「……んん」
ヒルデは頭を振って、甘い誘惑を断ち切る。ベンチを視界に入れない様に顔を反らし、足を動かしていった。

オンリーワン北駒台店、バックルーム。
糸原は悪態を吐きながら、納品の確認をしていた。
「なんだ、またトラックが遅れてきたのか？」
「そうよ。嫌になっちゃう」
ぶすっとした糸原の受け答えに、店長は苦笑いを漏らす。
「えらく機嫌が悪いな。一たちが心配か？」
「……悪い？」
「いや、私も今回ばかりは気を揉んでいる。何せ相手が『棺』だからな」
糸原は眉根を寄せ、訝しげに店長へ視線を据えた。
「相手？　敵はソレじゃない、どうして社員が敵になんのよ」
「正確に言えば、敵も味方もないな。『棺』にとっては自分以外が全て敵なのだから」
店長は短くなった煙草を空き缶に押し付けると、糸原に向けて椅子を回転させる。
「奴は頭のねじが飛んでいてな、いや、そもそもねじがあったのか

どうかも怪しいか。……ともかく、『棺』にはブレーキが付いていないんだよ。人を殺す事に、何一つためらいがない」
「そんな奴、この辺にゃごろごろいるんじゃないの？」
「ソレを殺せる勤務外や人を殺せるソレならいるがな。対象が人になるとそうもいかんぞ。人間である限り、人を殺す時には迷うぞ。必ずな」
「そういうもんかしら。で？　『棺』って奴は迷わず人を殺せるからやばいって言いたいわけ？」
　糸原は、台車にデイリー商品の詰まったケースを乗せていく。
「色々な意味でな」
「なーんか、昔嫌な目にでも遭ったんじゃないの？」
「ああ、そうだ。そうだった。確か、『棺』は入社してすぐに苛められたらしい」
「はああ？　何それ笑うとこ？」
「大いに笑うと良い。ま、苛めと言ってもガキの喧嘩じゃないんだ。靴が隠されたりする程度じゃなかったろうな」
　糸原はわざとらしく声を上げて笑う。
「靴、ねえ。靴なんかで済めば良い方じゃないの？　最近のガキはえぐいってテレビでやってたから」
「そりゃ言えてるな。……だがな、苛めは苛めだ。人間として生きる以上避けては通れん事だろうが、やられる方はたまった物じゃない。『棺』にこの二つ名が付いたのは、そのせいだろう」
「サイテーの棺だっけ？　大層な名前が付いたもんね」
「『棺』のやった事はその名に相応しい。幾ら理由があろうとも、奴は自らの意志で人を殺した。苛められていたからやり返した？は、組織に属する以上、仲間殺しは一種の禁忌だからな。犯せば、まともには生きられない」
　尤も。店長は呟きながら、新しい煙草に手を伸ばした。
「オンリーワンでは最低も通ってしまうんだがな。ルールってのは融通が利かん。縛る時もあれば、その逆も然り、だ」

「ふーん。でもさー、要はそいつ、苛め食らって捻くれたってだけでしょ。なーんか私のタイプじゃないな」
「安心しろ。『棺』は既婚者だ」
「あっそ」
糸原は何でもなさそうに言った後、ふと、作業の手を止める。
「……え、結婚、してんの？　最低なんて言われてる人格破綻者が？」
「お前が言うか」
「るっさいわね」
「真偽は確かじゃないが、三森が言っていた。あいつは滅多に嘘を吐かんし、吐いてもすぐばれる。だからまあ、本当なんだろう。いや、私も驚いたがな。『最低』のパートナー、か。天使か聖人、それとも『棺』以上の人格破綻者か。何にせよ、まともな人間じゃあないだろうよ」

田中は公園内を歩いていた。足音はなく、存在感は皆無。外灯の無い暗闇に、辛うじて彼の輪郭だけがぼやけて見えている。
「お茶を濁されましたねえ……」
彼の口元には笑みが浮かんでいるが、目は決して笑っていない。目と鼻の先の、見るも無残な光景を遠巻きに眺めながら呟いた。
いまや、ここに設置されていた遊具は見る影も無い。一つだってまともに機能しそうなモノが存在しない。
視線を移す。
円堂は右腕をもがれ、腹を抉られている。うつ伏せに倒れており、傷口から血を流し続けていたが、今すぐにでもオンリーワンの医療部を呼べば助かるだろう。
結城は真っ二つになったトンネルで四肢を投げ出していた。負傷している様子はないが、彼は大きく目を見開いたまま、口を開けて涎を流し続けている。……コンクリートと彼のズボンに染みが出来

ていた。恐ろしい目に遭ったのだろうと、適当に思った。
「南の戦乙女、ですか。随分と手強いですねえ」
やってくれる。田中は顎に手を遣り、難しい顔になった。実に気に食わない。片方には肉体へ傷を与えておいて、もう片方には精神を傷付けた。生温い。彼女のやり方が気に入らない。
「しかし、これだけの力があるとは思わなかったな」
田中は滑り台だったモノの切断面に目をとめる。一切の迷いを感じ取れない、ある種理想的な切り口だった。
しばしの間、ヒルデの所業に見惚れていると、ズボンの裾が引っ張られる。
「……おや」
視線を下げると、片腕になった円堂がこちらを見上げていた。彼の息は荒く、顔は苦痛に歪んでいる。ここまで必死の思いで這って来たのだろう。
「た、たすけてくれ……」
田中は冷静に円堂を観察した。助けてくれ。確かに、今すぐにでも病院に運べば助かるだろう。傷口は浅くないが、急所は外れている。しかし放っておけば長くは持つまい。
「誰にやられたんですか？」
「……ヒ、ヒルデだよ」
知ってるよ。田中は目を細め、喉の奥で笑いを噛み殺した。
「そうですか」
「な、お、おい」
円堂の声は懇願にも似た色を帯びていた。早く医者を呼んでくれと言わんばかりに、掴んだ裾に力を込める。
「では円堂さん、あなたは裏切り者を処断する任を果たせなかったという事ですね」
田中は淡々と告げた。円堂は何も言えない。徐々に手から力が抜けてくる。顔には悲壮が表れ始めた。
「まあ、良いでしょう。誰にだって失敗はありますからね」

「……あ、ああ」
「楽にしてあげましょう」
円堂は田中の声音が優しくなった事に安堵を覚える。これで助かる。
「円堂さん」
「が、あっ――！」
差し伸べられた手は、新たな苦痛を円堂にもたらした。残っていた腕の感覚が消える。同時に、激しい痛みが傷口を焼いた。
「あなたが掴んでいたズボンはね、今朝、妻がアイロンを掛けてくれたものだったんですよ」
「あああああっ！　いてえぇぇぇえええっ！」
腕を切られた。そう認識した時、痛覚が改めて活動を再開する。傷口は燃えるように熱いのに、のた打つ体がやけに冷たい。
「どうしてくれるんですか。あなたの血で汚れてしまった」
田中が何を言っているのか、円堂の耳には入らなかった。
「僕も鬼じゃない。クリーニング代と深いお詫びさえ頂ければ腕一本で許そうと、そう思っていたんですけど……」
田中は転がり回るモノに目を向けながら、内ポケットに手を這わした。
「今日の僕は少しばかり慈悲深い。場合が場合ですからね、何、お礼です。持っていってください。あなたの苦痛を一刻も早く取り除いて――いや、切り刻んであげますよ」
黒光りする刃。田中の手に納まっているナイフは月光を浴び、生々しくぎらついている。
「うおおおおっ、いてえっ、いてえ――！　てめえちくしょう！　がああっ、許さねえ！」
「……汚いですね。ああ、そうだ。僕の耳を汚した責任を相方さんにも果たしてもらいましょうか」

円堂はハッとして結城を見た。残念ながら、彼はこちらの事などに気付いていないらしい。もしくは、気付けないくらいに呆けているらしい。

援護は期待出来ない。自分だけで切り抜けなければならない。

ナイフはもうすぐそこにまで迫っている。

「か、ああ……」

意味を成さない吐息が漏れた。終わりだ。

しかし、円堂の思いとは裏腹にナイフは彼から離れていく。合点がいかない。

「ど……して……？」

空気が足りない。息苦しい。それでも、尋ねざるを得なかった。

「ああ、すみましたよ」

顔を蹴られる。転がされた円堂の目に飛び込んできたのは、両腕と頭の無いどこぞの死体。田中がくつくつと笑っている。喚きたくなった。泣きたくなった。叫びたくなった。この死体は。これは。

死を理解した途端、急速に、脳から酸素が失われていく。視界が染まっていく。意識は徐々に薄れていく。ホワイトアウト。ブラックアウト。

一仕事終えた田中はトンネルの縁に腰を下ろし、辺りを見回した。壊れた遊具。死体が二つ。錆びた臭いが鼻を突く。

「……全く、天美には見せられませんねえ」

返り血を浴びたスーツに手を遣りながら、田中は自嘲した。これは、家庭には持ち込めない。家族には、自分がオンリーワンの戦闘部である事と、『最低の棺』である事を伝えていない。

やれやれと息を漏らし、田中は立ち上がった。今日はいつになく忙しくなりそうだな、と、感覚的に理解する。

一一、ヒルデ、あの少女。目的は最初から少女だけだったのだが、まさか一と彼女が知り合いだとは思いもしなかった。その上、一と

ヒルデが社員である自分に歯向かうとは。
「まあ、良いでしょう」
ここまで手こずらせてくれたのだ。野獣の様に生易しくは出来ない。思い付く限りの苦痛を与えてから始末する。
尤も、今頃は、赤鬼と呼ばれた元戦闘部がどうにかしているかもしれないな。田中は肩の骨を鳴らして、夜の闇にその姿を溶かしていった。

悩む者よ疾く立ちて

森の中を、一は疾風のように駆けていた。
「はっ、はっ、はっ、はっ……」
後ろからは三森の怒号が聞こえてくる。足を止め、頭を下げて許しを乞えば、半殺しで済ませてくれるだろうか。無駄、だろうな。
一は幹の太い大木の裏に隠れて、様子を窺った。
火球は飛んでこなくなっていたが、そんな物よりも数段上の悪夢が近付いてくる。
「くそっ……」
一は自身の浅はかさを呪った。どうして、三森の背後を取れると思ったのだろう。あの時の自分がいたら今すぐにでも殴ってやりたい衝動に駆られた。
捕まらなかったのがせめてもの救い。
だが、これから先の選択肢は大幅に狭められている。もう奇襲は通用しない。そもそも、奇襲さえさせてくれなかったのだ。
一は途方に暮れる。
なら、正面切って向かって行けと言うのか。無理だ。手に負えないからこそ、太刀打ちできないからこそ不意打ちを狙ったと言うのに。
もう一度、やってみるしかない。

一が待ち伏せの為に選んだポイントは木の上だった。
古典的だが、仕方ない。息を殺して、三森が通り過ぎるのをじっと待つ。
風が木々を通り抜け、一の耳をざわつかせていた。
「……っ」
ざわめきの中から足音が聞こえる。自分の存在を隠そうともしな

い、好戦的な靴音。一は唾を飲み、眼下に視線を向けた。
緑の中、彼女の赤はとても目立つ。一歩、二歩。悠然と歩く三森に少しだけ見惚れてしまった。一は内心で毒づき、彼女がこちらを向かない事を強く祈る。
「……」
もう、三森はすぐそこだ。彼女が気紛れに見上げれば、一目瞭然の位置に一はいる。頼むから行ってくれ！
一の願いが誰に通じたのかは定かではない。しかし、願いは確かに通じた。三森はペースを崩さず、悠々と歩いていく。
今しかない。
もう一度、心の中で切り札を暗唱する。突き付けるのは言葉。そしてチャンスは今しかない。一は音を立てないようにアイギスを広げてから、跳躍、と言うより木の枝から落下した。
呻きは口の中で押し殺し、三森から少し離れた場所に着地する。流石に今の音で彼女にばれてしまったが予定内だ。この位置なら、向こうが振り向くより先に先手を取れる。
「動くなっ」
アイギスを掲げ、一は短く叫んだ。
その声がどこにも届いていない事に気付くのが、少しばかり遅れてしまう。
「なあっ？」
目の前にいた筈の三森の姿が、ない。咄嗟に振り返り、周囲に視線をさ迷わせる。だが、彼女はどこにもいなかった。
「避けるンじゃねェぞっ」
声。
頭よりも体が先に機能する。本能に動かされ、一は前方に構えていたアイギスを両手で持ち、上からの攻撃に備えた。
「ぐううっ……！」
傘を手放しそうになるのを耐える。両腕に痺れが走り、一は見上げた。ビニール傘の上に三森が両足を乗せている。

――何でだよっ！？

さっきまで地面を歩いていた筈の三森が、どうして空から降ってくるのかどうにも解せない。

考えている内、三森が傘から飛び降りて拳を放った。一はアイギスで受け止め、無茶苦茶に傘を振るって追い払う。

「あっぶねェな。殺す気かよ」

「……なんで、上から？」

「飛ンだからに決まってんだろ、馬鹿かお前」

三森はからからと笑い、ポケットから煙草を取り出した。

「お前のやるよーな事は分かってンだよ。つーかさ、隙見せてやったんだからもうちょい気張れや」

やっぱり、気付かれていたのか。一は落胆すると同時、嬉しくも思った。憧れている人が、ヒーローだと信じている人がこんな事でやられてしまっては困る。

「楽しんでますね」

「おう、まともにやってもつまンねーからな。少しくらいは持って、楽しませてくれよ」

嘘だ。ナナが『棺』の元までチアキを運ぶ、時間稼ぎのつもりだろう。一はそう判断し、息を吐いた。

「……三森さん、話を聞いてもらえませんか？」

「やだね」

三森は紫煙を吐きつつ、一を強く見据える。

「魔女だって煙に巻いちまう奴の話なンて聞く訳ねェだろ」

「だったら、聞かざるを得ない状況に持っていきますよ」

「ハッタリはうめェよな、お前」

一は一笑に付した。その通り。このまま真っ向からぶつかっても、そんな状況を作れる見込みは皆無だ。こうなったら、遮二無二突っ込んでアイギスを発動させるしかない。ないのだが、上手くいくとは思えない。

こんな事なら、もっと使い勝手の良い物を女神にもらっておけば

良かったと、一は後悔する。
アイギス。幾ら相手の動きを止められると言ったって、どこまでいっても盾は盾。盾でしかないのだ。一対一の戦闘に向く筈がない。
「やる前から暗くなってンじゃねーよ。つまんねェだろが」
「暗くもなりますよ」
一は疲れた振りをしてしゃがみ込む。手頃な大きさの石を拾って、しっかりと握り締めた。
「他の人ならともかく、三森さんが相手ですからね」
「あン？　どーいう意味だよ？」
「それは――」
決めろ決めろ、覚悟を決めろ。
とっておきまでは、これ以上はもう、
「――秘密ですっ！」
言葉は要らない。
一はノーモーションで石を投げて、一息に駆け出した。
「ちっ」
舌打ち。三森は顔面に放たれた石を避ける事無く、火を纏った右手で払う。石は熱され、道の脇へと転がった。
その隙を衝いて、一が迷わず傘を突き出す。狙いは目。柔らかい部分でないと、自身の力では抜けないと把握した上での行動だった。が、そもそも当たるとは思っていない。少しでも怖がってくれればと一は割り切っている。
予想通り、真っすぐに繰り出された突きを、三森は体を横にして回避する。そのまま、回転の勢いを殺さずに後ろ回し蹴りを放った。
三森の蹴りが一の腹部に向かう。まともに食らえば、内蔵の損傷を免れない一撃。
「ちいっ……！」
血が騒いだ。
血が叫んだ。
一は何者かの後押しを受け、体内に発信された命令に従う。自分

の取った行動の意味を理解出来ないまま、持っているアイギスを腹に当てた。瞬間、体が宙に浮く。浮遊感に身を任せ、地面に激突した。背中を強かに打ち付けたが、起き上がれない程度ではない。
「手加減、なし、ですか」
「……してるっつーの」
三森はその場から動かずに、足を何度も振っている。どこか、機嫌が悪いようにも見えた。
「ちったあ、出来るじゃねェの」
どこが。一は突っ込むのを我慢して、服に付いた埃を払う。
三森は何度もステップを踏み、煙草を吐き捨てた。
――なんだ？
一は三森の行動を不自然に感じる。足を気にしているのを誤魔化しているような……。
「ボッとしてンなよっ」
拳を作り、三森が地を駆けてくる。また正面。一は考えるのを止め、アイギスを構えた。覚悟していたが、重い一撃が彼の全体重に圧し掛かる。
分かりやすい攻撃ではあるが、一では避けられない。防御しか出来なかった。それも、長くは続かないだろうと心の片隅で理解させられる。腕が痺れ、精神は磨耗していくのだ。地力の差もあるが、このままでは疲弊させられて、何も出来ないまま終わってしまう。
「……？」
三森は追撃して来なかった。アイギスを殴った方の右手をぶらぶらと振り、納得いかない表情を浮かべている。二撃目、三撃目を予想していた一は肩透かしを食らった。
考えを巡らせている内、得も言えぬ閃きが一の頭を駆け巡る。まさか。とは思いつつも、アイギスをぎゅっと握り、三森を注意深く観察してみた。
三森に大した変化は見受けられない。それでも、一は三森が僅かに顔をしかめたのを見逃さなかった。疑念は確信に変わる。

やはり、アイギスで間違いは無かったのだと。
ビニール傘の外見をしているから惑わされがちなのだが、アイギスは最高の盾であると同時、この世で最も硬く、最も抜け難い盾なのだと。
言うなれば、神の持ち物なのだ。三森の戦闘能力は一を軽く凌駕している。しかし、彼女はあくまで人間なのだ。アイギスを素手で殴っておいて、ただで済むはずが無い。
知らず、一の口元はつり上がっていた。
「手、痛みますか？」
三森は答えず、苛立たしげに一を睨み返す。
一はその答えに満足した。気力が漲ってくるのを感じる。まだ、戦える。
「……ニヤけてンじゃねェよ！」
三森が向かってくるのを確認して、一は再びアイギスを構えた。だが、衝撃は無い。
――やっぱり！
半ば、答えを貰ったようなものだった。三森は確実に拳を痛めている。恐らくは、先程の攻防で足も。
三森はアイギスには殴り掛かっておらず、飛び上がって足場代わりに利用している。一はアイギスから手を離して彼女を振り落とそうとかとも考えたが、それより先にもう一度跳ばれた。
一が振り返るより先に、三森は背後に着地する。
「うおっ……」
襟を引っ張られ、後ろ向きのまま三森へと引き寄せられた。抵抗も空しく、がしりと首元に腕が巻き付かれる。
「そろそろ良いだろ」
首の骨が軋む音が聞こえてきた。一は三森の腕を解こうともがく。
「まあ、ちったァ痛いだろーけど我慢してくれや」
一向に抜け出せない。それどころか、三森は更に力を入れ始める。窒息して、気絶するのも時間の問題だ。息苦しい。回らない頭は妙

案を思い付こうともしてくれない。
酸素が取り込めない。朦朧とした前後不覚の視界。
――右か左か。
どちらかを痛めている筈なんだ。一は最後に残った力で、三森の右足を踏み抜く。彼女は声こそ出さなかったが、腕からは力が抜けた。
緩んだ拘束に付け込む。三森の腕と自分の首の間に腕を挟み入れ、脱出の為にスペースを作った。
持ち直した三森が再び力を込めるも、一は空気を腹一杯に吸い込んでから彼女の腕を振り解く。
続いて一はアイギスを振り回した。何でもない、難でもない攻撃に、三森は右足を庇うように避ける。しかし、不自然な体さばきからは隙が生まれ始めていた。
反撃はない。一は距離を離してアイギスを畳む。最も、硬い。ハイエンドの盾は広げれば防具に、畳めば棒状の武器になる。こうして見ればリーチも長く、致命傷を与える事は難しそうではあったが、打ち据える事は可能だ。何とも心強い。
狙うのは三森の右半身。腕でも足でも構わない。怯んでくれればそれで良い。
まともな武器など扱った経験はおろか触った試しもない一は、見よう見真似で剣のようにアイギスを振るった。イメージは立花。完璧にトレース出来る筈もないが、少しは気分が落ち着く。
「しつけェんだよ！」
三森は突き付けられ、振るわれるアイギスから嫌そうに距離を取ろうとするも、一がそれを許さなかった。執拗に右側に位置して攻撃を繰り返す。
「話を……聞いてくださいってば！」
「嫌だってンだろっ、お前は弱ェくせにうっとーしいんだ！」
三森はアイギスを捌きながら、一の爪先を狙って踏み込む。
「話ぐらい聞いてくださいよ！」

一は足を持ち上げてそれを躱した。お返しとばかりに、横にアイギスを薙ぐ。
「うっせェ死ね！」
「〜〜っ！　小学生でも言わないですよっ」
一進一退の攻防が続いていた。今の状況、一、三森ともに想像すら出来ない事態だった。
三森は本気を出していない。だが、一相手に苦戦するとは思っていなかった。
その事を一は重々承知している。それでも、戦えていた。三森相手に何とか立ち回れている。
だが、とうとう均衡が破られた。破ったのは三森。痺れを切らした彼女が猛攻を仕掛ける。
「うわっ」
ハイからミドル。ミドルからロー。ローからハイ。打つと思えば逃げ、逃げると思えば打つ。フェイントを織り交ぜた三森の素早い攻めに、一は殆ど何も出来なかった。
しかし、クリーンヒットだけはもらわない。アイギスを上手く使ってガードを固め続けている。
途端、三森の攻撃に大振りが混じりだした。見え見えのごり押しに一は焦るも、勇気を振り絞って頭を下げる。頭上を風圧が通り抜けていくのを感じて肝を冷やしたが、チャンスを得る事に成功した。
三森は今や隙だらけ。何でもありだ。そして、ここしかない。時間を掛けていられない。
一はアイギスに手を掛けたまま、体全体を使って頭から三森に体当たる。呻きが聞こえたので、内心で謝っておいた。
男と女。体格、体重だけなら一が有利。三森は歯を食い縛って堪えようとしたが、成す術もなく尻餅をつく。
——逃すかっ。
一はアイギスを広げ、すぐそこで体勢を崩している三森へ掲げた。
止まれ。止まれ。止まれ！

思いをアイギスに、メドゥーサに届ける。
祈りにも似た懇願を受け入れ、広がっている傘が光を帯びた。
後は名を呼べば良い。三森。三つの森。みつもりふゆ。冬。三森冬！
「止まれっ、みつも――」
吐き出した白い息が塗り潰されていく。
黒い夜を捉えていた視界が塗り替えられていく。
赤に、紅に。
強烈な熱を間近で感じ、一は本能的に飛び退いた。目は、それに釘付けられていた。
赤い。紅い。
正に火の柱。三森から紅蓮が立ち上っていた。彼女の周囲に炎が渦巻いている。
一は身震いした。もしアイギスがなければ、あの焔に焼かれていたかもしれない。背に嫌な汗をかきながら、声を絞り出そうと唾を飲む。喉はすっかりからからで気持ち悪かった。
「いや、焦った。正直舐めてた。マジに危なかったぜ」
三森の姿は炎に隠れていて良く見えなかったが、影が揺らめいたので彼女が立ち上がったのだと気付く。
気付く。
一は気付いてしまう。今自分が握っているモノが無用の長物になってしまったのを。
火柱が上がっている。まるで、三森の姿を隠すかのように。いや、隠しているのだ。彼女は一の能力に気付いている。本能からか、経験からか。
だが、それは一にとって重要な事ではない。問題なのは三森が火の中に隠れている事実。彼女が見えないのだ。ぼんやりとした輪郭こそは見えるものの、それでは意味がない。
アイギスを発動させるには敵を見なくてはならない。一が三森を視界に収めていなければならない。

使えない。アイギスは使えない。
一はチャンスを逃してしまった。三森はもう油断しないだろう。
これで、彼の勝機は失われた形になる。
勝ちは拾えない。負けは拭えない。
それでも――
「てめェ！？」
――諦め切れなかった。
三森の声を真っ向から受け止めて一は突っ込む。触れれば、触れなくても火傷は必至の火中に向かう。
アイギスを広げ、策もなく飛び込んだ。
「あっっっちぃいいい！」
「なっ、ばっ、馬鹿かお前っ！　さっさと退け！」
いいや、退かない。一歩も譲らない。勝機がなくなった事など、一は理解している。
それでも、と、思ってしまったのだ。一秒だって構わない。一瞬でも充分、三森が視界に入ればアイギスは発動できる。痛い目、熱い目がどうした。火傷？　気にしない。何なら四肢をくれてやっても良い。最後の最後に命さえ残ってくれれば儲け物。ここを越えなきゃ、ここで終わってしまうんだ。
何かを押し倒す手応えが感じられる。目を開けていられないので、確認しないまま一はそれに圧し掛かった。と言うより倒れ込み、体を預けた。
肌が焼けていく。音が弾ける。水分が消えていく。熱い熱いと脳は訴える。体は悲鳴を上げている。
我慢しろ。
逃げ出したくなる気持ちを押さえ込む。
ここで助かっても一時凌ぎにしかならない。自分だけじゃない。ヒルデもチアキも逃げられない。どうせ逃げ切れない。だったらここで、骨まで燃えても良いじゃないか！
「……バカ野郎」

「え……？」
優しい声だったから、誰のものなのか最初、一には分からなかった。
突如、三森らを覆っていた炎が消失する。熱さも辛さも霧散する。訳の分からぬまま、一は目を開いた。もう、そこには何もなかった。
「……生きてっか？」
「あ……」
一は三森の上に乗っている事に気付いて気恥ずかしくなる。が、退いたら駄目だ、やましい事なんてないんだと己に言い聞かせた。
「あのう……火、消してくれたんですか？」
三森は何一つ気にした様子も見せないで、
「消したンじゃねー、戻したンだよ」
ゆっくりと口を開く。
「その、なんで？」
「あー？」
ちょんちょん。
一に乗られたまま、三森は自分のジャージのポケットを指差した。
「煙草、吸わせろよ」
迷ったが、一はポケットを弄って煙草の箱を取り出し、三森に渡す。
三森は寝たきりの姿勢で煙草を口に銜えて、指先を擦り合わせた。
「私はお前を殺しに来たンじゃねーからな」
「はあ……」
一は曖昧に頷く。
「……てっめえ、信用してねェだろ？」
「してますよ」
「だったら退け」
「腰が抜けちゃって」
嘘吐け。三森は幾らか楽しそうに呟いて煙草を摘んだ。それを、何食わぬ顔で一に向ける。

「なんですか？」
「吸えよ」
「禁煙してるって言いませんでしたっけ？」
「私の煙草が吸えねェってのか？」
一は心ならずも吸い掛けの煙草を受け取った。禁煙してるんだけどなあ、この一本吸ったらまた吸いたくなるだろうなあ、そう言えば春風にも吸わされたっけ、そもそもこれって間接キスじゃないのか、三森さん何とも思ってないのかなあ、いやそんなの気にする歳じゃないか、そうだろうか。なんだろうか。
「……一本だけですからね」
自問自答の末、一は煙草に口を付ける。火口が赤く光り、紫煙が揺ら揺らと立ち上った。それをついつい目で追い掛けてしまう。
「三森さん、いつもこんなの吸ってるんですか」
三森から貰った煙草は、以前自分が吸っていた物よりもきつくて、とてもじゃないが美味いとは言えなかった。
「おう、悪ィかよ？」
「体に悪いですよ。……三森さん、俺……」
今更ながら、一の手が震え出す。自分はとんでもない事をしでかしたのではないか。
「つーか私に乗ったまま泣くンじゃねェよ。今頃びびってどーすんだよ、ああ？」
「泣いてませんっ。けど、恐かった、の、かな……」
三森は罰が悪そうに頭を掻いた。
「はーあ、やり過ぎた。悪かったよ。だけどよ、お前も本気で掛かってくっから……つい……」
「あ、いや、俺も色々と……すいません、でした」
頭を下げる一を見て、三森は破顔する。馬鹿みてェと、そう言って溜め息を吐いた。
「いーよ、もう。話、あンだろ？」
「聞いて、くれるんですか？」

「おう、その、何だ――」
三森は一度言葉を飲み込んでから、
「――私の、負けだ」
清清しい笑顔で、そう言い放つのだった。

一の話を聞き終えた三森は大の字になって寝転がっていた。頭がくらくらしている。情報量の多さと、話の荒唐無稽さに頭がついていっていない。
「っあー……」
信じられない。だけども、信じたい。一の話を――彼の事を信じてみたい。今すぐにでも彼のあとを追い掛けて、手助けしてやりたかった。
それなのに体は動いてくれない。残った理性が冷静になれと訴えている。
一の話には一つだって確証がなかった。そんな話を真に受けて人生を棒に振るのか。オンリーワンを裏切るのか。歯向かって、牙を剥いて立ち向かうのか。
「お楽しみだったな」
「……てめェか」
突然沸き出した無感情な声に、三森は努めてぶっきら棒に返した。
「一一に押し倒され、悪い気はしなかったろう？」
声の主――春風麗――はここにいるのが当たり前のように姿を見せる。彼女は黒いスーツに身を包んでおり、腰まで届く長い髪を無造作にゴムで束ねていた。
「なあ、さっきの話どー思うよ？」
「さっきの話とは何の事だ？」
「はっ、てめェの事だ。盗み聞きしてたンだろうがよ」
春風は表情を崩さぬまま、
「当然だ」

短く答える。
「……ふん、一一の話、か。中々に興味深く、腹立たしいな」
「腹立たしい、だァ？」
「ああ、非常にな。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属の私と、ただの勤務外である一一の考えが似通っている事がな」
春風は胸の前で腕を組み、僅かに眉を潜めた。
「……回りくどいンだよお前は。で、つまりアレか」
「三森冬、貴様が単細胞過ぎるんだ。単線思考は考え物だぞ。まあ、つまりアレだな。一一の話には随分と間違いがあり、相当に足りていない部分もあったが、核心はついている。真実に手が届いている」
二人は顔を見合わせた後、三森だけがにやりと笑った。
「はっ、そうかそうか。『棺』は黒って訳かよ」
「限り無くな。残念ながら私も一一と同意見だ。他の人間が何を言ったとしても、これは変わらない」
「だったらよ」
三森は足の力だけを使って乱暴に起き上がる。
「何であいつに教えてやらなかったンだ？　情報部のお墨付きだぜ、動きやすくはなるだろうよ」
「ふん、一一を調子付かせたくなかったんだ。それに、この事実に現段階で気付いている者は極少数しかいない。具体的に言えば、私と一一ぐらいのものだ。悪いが、まともな助力は得られんぞ」
「……そうかよ。ま、良いぜ。面白くなったじゃねェか」
これで理由が出来た。奴を殴るに足る何かが得られた。込み上げてくる愉悦を堪え切れず、三森は口の端を歪める。
「それよりもだ。三森冬、貴様は私の言った事を理解出来なかったようだな」
「あー？」
「一一を助けてやれと言ったろう。それが、何だ、さっきのは？　まるでヤンデレじゃないか。貴様が一一を危険な目に遭わせてどうする」

ヤンデレの意味は分からなかったが、何を言われたのかは何となく理解出来る。
「ンなつもりなかったわボケ。手加減してたっつーの」
「どうだかな。頭に血が上った貴様は人殺しすら躊躇わないからな」
「……なあ、お前があいつに肩入れすンのってさ」
「気紛れだ」
春風は三森の言葉を最後まで言わせなかった。
三森は肩を竦めて気のない謝罪を口にする。
「ま、これで情報部のお墨付きをもらったって訳だ。私も行くぜ」
「行くとは？」
「決まり切ってンだろ。『棺』ブッ飛ばしにだよ」
肩をぐるぐると回しながら、三森は言い放った。
「……空手でか？　三森冬、貴様は何も考えず、力だけで片付けるつもりなのか？」
「力がありゃ充分だろ」
春風は呆れた風に肩を竦める。
「貴様の力は戦闘には向いているのだがな。ああ、確かに向いている。相手を殴り、蹴り、芯まで燃やし尽くせるだろうさ」
「それの何が悪いってンだ」
「頭が悪い。三森冬、貴様の力では一一を守り切れんぞ」
三森は春風の発言に憤り、何かに気付き、この上なく困った。
「じゃあ、どーしろってンだよ……？」
「ふっ」
春風は何でもない事だとばかりに鼻で笑ってから、
「簡単な事だ」
懐から携帯電話を取り出す。そして、無感情に告げた。

歌代チアキは眼前の光景を未だ理解出来ずにいた。
ちらりと顔を上げれば、ほんの僅かに緊張した様子のナナの顔。
自分を抱えている彼女の腕にも力が入っている事から、何かがおかしいと感じられる。
「早く渡してくださいませんか？」
一定の距離を置いてナナと向かい合っているのは田中次史。本人の意向かどうかはさておいて、『棺』と呼ばれている男。
自分を、歌代チアキを利用し、亡き者にしようとする男。
彼がすっと足を踏み出せば、ナナが同じだけ下がって距離を取る。
「な、なあ？　あんた……」
チアキの困惑を無視して、ナナは田中を見据えた。
「田中さん、今のあなたに彼女をお渡しする事は出来ません」
「え……？」
驚きの声はチアキから上がる。今、このメイドは何と言った？
自分を田中に渡すのが目的ではなかったのか？
「……やれやれ。一さんに続いてあなたもオンリーワンから離反するつもりですか？」
「失礼ながら。私はオンリーワンを離反するつもりも、一さんに味方するつもりも毛頭ございません」
醒めた田中の口調に、ナナは冷たく、機械的に返す。
「では、どういうおつもりで？」
「私に命令を下せる権利を持つ、現段階でのマスターはオンリーワン技術部の方々と、オンリーワン北駒台店の店長である二ノ美屋さんだけです」
田中の顔が僅かに歪んだ。
「尤も、技術部の方々は私の自主性を重んじてくれていますから命令を下す事などありません。そして、店長は一時的にマスター権を

三森さんに譲度しています。つまり、今現在私に命令出来るのは他ならぬ私自身と、三森さんしかおりません」

「言いたい事が良く分かりませんねえ……」

ナナは構わずに続ける。

「三森さんからは歌代チアキを保護した後、田中次史の元に届けろと言われています」

「それじゃ命令違反になりませんか？」

「歌代チアキを決して殺すなとも、言われました」

田中の表情が強ばった。怒りを押し殺そうと必死なのは、チアキからでも見て取れる。

「田中さん、あなたが怪我をなさっていない事から私は問います。あなたの血でないと断定するならば、その返り血はいったいどなたの物でしょうか？」

「僕のスーツに誰かの血が付いている事が、あなたに関係あるんですか？」

「ええ、大いに。殺すなと言われている人物を、殺人者、かもしれない人物にお渡し出来るとでも仰るのですか」

田中は忍び笑い。しかし、結局は堪え切れないで吹き出した。

「証拠でもあるんでしょうかねえ？　あなたが僕を殺人者だと断じるような、決定的な何かが」

ナナは胸を張って返答する。

「ございません」

「……自動人形（オートマータ）が」

「その通りでございます。私は人形。主人の命に従う人形です」

ですが。そう前置きしてから、ナナはチアキをゆっくりと地面に下ろした。

「あ、あんた……？」

ナナはチアキを見つめて、スカートの端を摘み上げ、丁寧にお辞儀をする。この状況下でも見惚れてしまうような、美しい所作だった。

「私は誇り高き自動人形。操り人形（マリオネット）ではございません。自らの意志で動く、オートマータなのです。田中さん、お分り頂けましたか？」

「結局は心のない作り物でしょう。黙って、僕の指示に従いなさい」

違う！　チアキは言ってやりたかった。ナナはちゃんと喜べる。怒れる。哀しめる。楽しめる。心がある！

何故だか、チアキは涙を流していた。もどかしい。伝えたい気持ちがあるのに口に出せない。

「――かもしれませんね」

顔を上げれば、ナナが悲しそうに笑っていた。その笑みも一瞬のもの。彼女はふっと表情を失くして、ぽつりと呟く。

「ですが、私にも心があるかもしれません」

「……ありえませんね」

田中は憎々しげに口を開く。零れる言葉はまるで呪咀のようだった。

「人形風情が……早くそいつを渡しなさい。さもなくば――」

刃が煌めく。獰猛に輝くそれからは、黒い瘴気が立ち上っているのかと思わせた。

「……渡せません」

「僕に届けろと言われたのでしょう？　なら、その後はどうなろうとあなたには関係ありません」

「何か、勘違いしておられますね。私はオートマータであると同時に、主人に仕え奉るメイドでもあります。……もう一度、もう一度だけ言いますが、マスターからは歌代さんを届けろと、殺すなと言われています。二つです。片方を達成しただけではマスターは満足しないでしょう」

田中は笑う。

「しかし、このままでは両方はこなせませんよ？　僕に彼女を渡すか。渡さないか。彼女を殺すか。殺さないか。人形であるあなたに選ぶ権利が、捨てる資格があるとでも？」

「選ぶ？　捨てる？　ありえません。マスターの望みを完全に、完

壁に、完膚なきまでに叶えるのが私の使命（メイド）であり存在理由なのです。マスターが白を黒だと言えば白を黒に塗り潰し――」

拳を前方に突き出してナナは言う。

「――二つの願いを叶えろと言うなら、二つとも叶えるのが道理でしょう」

田中は少しの間呆気に取られていたが、すぐに表情を引き締めた。

「無理難題、ですねえ」

「いいえ。あなたを何も出来ないくらいに痛め付け、その後歌代さんを届ければ事足りる話です」

「……では、あなたは僕に挑むと、そう仰るのですね？」

「挑むなどとは大仰ですね。しばらくの間、眠って頂くだけですよ」

開戦を告げ、ナナは『棺』へ拳を向けた。

一は焦っていた。さっきから、引っきりなしに怖気が走っている。何かが起こっている。

なのに、まだチアキはおろか他の人間を見つけられないでいた。最初に向かったトイレには、入り口付近のタイルの壁がぽっかりと穴を開け、破片をばらまかせていた。誰もいない。鼓動が早まる。自分の目の届かないところで、もう全てが終わったのではと、不安が心を突き刺していた。

深呼吸を一つ。トイレから出て、一はナナの行きそうな場所を考える。考えてから、そうではないと気付いた。ナナの向かう場所は決まっている。田中のところだ。そこしかない。ならば彼はどこにいる。円堂も結城も三森とも出会った。どうして『棺』とは出会わない。

アイギスを潰さんばかりに握り締め、一は目を瞑った。

決まっている。自分たちの捜索を勤務外に任せたからだ。自分たちを連れて行くのだと、誰もが言っていた気がする。……奴は待っているのだ。

今まで行かなかった場所を思い出す。反対側の入り口か、アスレチックエリアか。もしくは通り過ぎた場所。候補は嫌になる程上がった。考えていても仕方ないと、疲れを訴える両足に言い聞かせ、一は走り出す。外れたら、当たるまで走れば良い。

歌代チアキにはまだ、眼前で繰り広げられている光景が信じられなかった。

獣じみた速度で動く田中、その速さに付いていくナナ。

ナイフが閃き、ナナの体に跳ね返る。高い音を響かせて火花が散った。彼女のメイド服は切り裂かれ、白い素肌が剥き出しになっている。

「え……？」

火花？　チアキは目を擦って事実を確かめた。どうして、血が出ない。刃が刺さらない。ナナがどうして素手でナイフを受け止められる。

ここにきてようやく、チアキはナナが普通の人間ではないと、人間ではないのだと理解出来た。そして、本当に自分の為に戦ってくれているのだと分かった。

ナナは表情を変えずに田中の攻撃を受け続けている。一合たりとも避けようとしないのだ。腕で、体で、時には頭で。攻撃を気にせず、ひたすらに拳を繰り出している。ダメージは全くなさそうだ。

しかし、ナナの攻撃は田中に一発足りとも当たらない。スーツに擦らせる事さえ出来ない。

当たらない。片や当たるが気にしない。不毛とも言える、永遠に続くかとも思える戦闘。

「……？」

だが、田中が不可解な表情を浮かべていた事にチアキは気付いていただろうか。

一一、ヒルデ、円堂慶、結城晃一、歌代チアキ。彼らは今日の敵だ。

田中は名を挙げた一人一人の顔を思い浮べる。今日ここで倒した、倒すべき人物たち。

一一、裏切り者。

ヒルデ、裏切り者。

円堂慶、役立たず。

結城晃一、役立たず。

歌代チアキ、殺す。

誰も彼もが自分の障害だ。だが、気にする程度でもない。既に二人の役立たずを葬り、残り三人仕留めれば終わり。全て上手くいく、筈だった。

「――ッ！」

ナナのパンチが空を切る。まるで弾丸。あたかも大砲。当たれば肉体の欠損は免れない。一発避けるごとに田中の神経が磨耗していった。

単調で、ともすれば退屈なリズムでパンチは放たれる。見切った。見切っている。

なのに、ナナはリズムを変更しない。狂気じみた正確さでこちらを追い詰めようとしていた。気が狂いそうになる。

おまけに、ナナはナイフを回避しないのだ。馬鹿にされているのか、気にもしていないのか。苛立ちと怒りを込めて刃を突き立てようとしても、刃が負けている。

田中は今日、念を入れていつもより多めにナイフを仕込んできた。確実を期する為に切れ味の良い業物も、ナイフの刃先が飛び出すだなんて、あまり好まない色物も持ってきた。スーツは重くなっている。それもその筈、彼が持ってきたナイフ類は、常からすると二倍、三倍の量なのだから。

それなのに、体は徐々に軽くなっていく。田中はオンリーワン技

術部の力を称賛すると同時、非難した。これはやり過ぎ、出来過ぎだと。

いったいどんな素材、技術を使っているのか。ナナの体にナイフが当たる度、刃は欠け、根元から折れ、柄が衝撃に耐え切れず砕けるのだ。次から次へナイフを取り替えていく。既に足元には十を越える刃の欠けたナイフが転がっていた。

損害を嘆く暇もない。必死に攻撃を避け、隙が出来る度に切り込んでいく。だが、ナナは怯まなかった。馬鹿の一つ覚えのように攻撃を繰り返す。

「……しつこいですねえ」

「そうですか？」

思わず零した田中のぼやきにナナが食い付いた。

「そうです」

舌を噛まないように最低限の言葉で返す。

「では、上げましょう」

何を、と聞くまでもなかった。ナナは片手で田中の攻撃を捌きながら、残った手で眼鏡の位置を押し上げる。突如、回転数が上がった。

「くっ……！」

間一髪、田中は呻きながらもナナの拳を躱す。

加速。加速。加速。

ゼロから一気にトップスピードに。

リズムが変貌した。疾走感に満ち溢れたナナの攻撃。今度は完璧には避けられない。ナナの拳がスーツに擦り、次の攻撃で前髪が掠め取られる。

早い。今までに慣れていたリズムを変えられたのもあるが、それ以上に、単純に早い。この速度には慣れそうにない。間断ない攻めに、今度は反撃すら叶わなかった。ただ、逃げるだけ。

「あら、お疲れのようですね」

良く出来た人形だ。田中は答えずに、少しだけ顔を歪めた。

「あと、何本残ってますか？」
「……さあ、どうでしたか」
ナイフの本数は残り、十を切っている。
「そうですか」
「――なっ！？」
血が凍った。隙を見せたつもりはない。が、手に持っていたナイフを殴られ、折られてしまう。乾いた音を立て、刃は田中の顔の横を飛んでいった。歯噛みしながら懐に手を伸ばす。じわじわと追い詰められていくのを感じていた。ここで手間取る訳にはいかない。
「勿体ないですが……」
田中はおもむろにナイフを投擲し、ナナから急いで距離を取る。
メイド服を着た人形。そろそろ、目障りだ。

今のところ、非常に上手くいっている。
ナナは田中を見据えながら、そう思う。
田中の得物がナイフで良かった。自分には並大抵の刃物は通じない。力だって、速度でだってこちらが優位。
攻撃のスピードとタイミングを一定のリズムで刻み続けたのも功を奏した。相手の目は全然追い付いていない。更に、こちらには五割程度も余裕がある。まだまだ突き放せる。
しかし、遊ぶつもりはなかった。三森たちが来るまでにケリをつける。具体的に言うなら、あと、一発。一発で田中を沈めさせる。
ナナは少しずれていた眼鏡を押し上げ、標的を見据えた。
不安要素なんてありえない。強いて挙げるなら、人間を相手にするのはほぼ初めてなので力の入れ具合が分からない、事だろうか。まあ、大した問題にはなるまい。命さえ取らなければ大丈夫。だろう。手加減出来るかどうか、多分、出来る。だろう。
だから、ナナは気付けなかった。田中が自分を打破しうる武器を持っている事を、予想すらしていなかった。

チアキが見守る中、ナナと田中の戦闘は一先ずの区切りを迎えていた。

彼女の目からは、ナナが一方的に押しているように見えていた。現に、田中は沈痛な面持ちで（表情にれっきとした変化は無かったのだが）、肩で息をしている。

「あ……」

何故だか、チアキの背筋に怖気が走った。

田中が懐に手を伸ばす。

彼が取り出したのは、何の変哲もない、ただの小刀。

飾り気のない真っ白な鞘。

そこから引き抜かれたのは、六寸五分の頼りない刀身。美しいが、それだけにしか見えない。溜め息の出るような青白い白刃。だが、それだけではどうにもならないように思える。

田中は鞘を投げ捨て、短刀を構えていた。彼は今や、体中から絶対の自信を漲らせ、ナナを涼しげに見据えている。

ナナは田中の変化に気付いているのか、いないのか、拳を固めて一歩ずつ近付いていく。

田中は動かない。ねちっこい視線をナナに絡めたまま、彼女の一挙手一投足を観察していた。

「おや、随分と慎重ですねえ？」

「……その短刀、見覚えがあります」

「そうですか？」

「どこで、手に入れたのですか？」

「さて、ねえ」

二人の距離が縮まっていく。

喉がひり付くような緊張感が周囲を満たしていった。否応無しにチアキの体も強張っていく。

既に、田中とナナはお互いの攻撃が届くレンジ内に入り込んでい

た。だが、仕掛けない。どちらかが致命的な隙を見せるまで、虎視眈眈とチャンスを窺っている。

耐え切れない。チアキは思わず目を逸らしてしまった。

瞬間、田中が動く。短刀の握りを順手から逆手に持ち替え、腰を深く落とした。

ナナもつられて動く。田中の頭を吹っ飛ばす勢いで、右の拳をフック気味に放った。

それを、田中は更に身を低くする事で躱す。動きを止めないまま、ナナの右手首を狙って小刀を下から振り上げた。

ナナは回避を選ばない。自身の強度が絶対だと信じ切っているからだ。空を切った右手で刃を折り、その勢いで田中の体を薙ぐべく、裏拳で対抗する。

振り上がる刃。振り下ろされる拳。

邂逅までコンマ一秒も掛からない。

二人は理解していた。この一合で戦況が大きく変わるのだと。

激突の直前、田中がナナを見上げ、ナナが田中を見下ろす。交錯する視線。双方の瞳には自信の色が見え隠れ。

「くっ……」

田中は、嗤っていた。

並大抵の刃物では、ナナの装甲に傷を付けるのですら困難だ。その通り。間違いはない。ブレはない。

「たああっ！」

並大抵の刃物、では。

ナナが咆哮する。

激突。風が奔り、金属同士がぶつかり合って盛大に嘶き、火花が散った。

「……あ、ああ……」

チアキの目が見開かれる。驚愕と、絶望に。

押し負け、打ち負け、宙を舞う敗者の得物。

ナナの、右手首から先が飛んでいた。

「僕の勝ちですね」
田中が嘲笑って、宣言する。
煌めく。
一閃、左手。
二閃、右足。
三閃、左足。
「あ……」
伸ばそうとした手は地面に転がったままだ。何も掴めない。踏張ろうとして足に力を込めるが、無いものに力は込められない。四肢を失ったナナが、ゆっくりと地に倒れ伏す。
「……ふう」
「やはり、それは……」
「まだ、喋れますか」
「オートマータですから」
ナナは平然とした様子で答えた。
「奪い、ましたね？」
田中はその問いを受け、静かに笑う。
「ええ。お察しの通りですよ。この短刀、今剣（いまのつるぎ）は技術部の方から頂戴しました」
「道理で。ならば私が切断されたのにも納得がいきます。……オンリーワン技術部が再現した源義経の遺物なら、私をも打倒出来るでしょう」
「僕としては使いたくなかったのですが、目には目を、オンリーワン技術部には技術部を。いやいや、皮肉な話ですねえ」
そう言ってから、田中はまた嫌らしく笑った。
「あっけないものですねえ」
「ええ、お互いに」
ナナが呟いたと同時、今剣の刀身に亀裂が走る。
「……ふむ」
田中が今剣を軽く振ってみると、粉々に砕けた刃がぼろぼろと地

面に落ち、風に流されていった。
「耐え切れませんでしたか。ああ、勿体ない」
そう言う田中には悲愴感の欠けらもない。凡そ、この結末を予想していたのだろう。
「はあ、弁償して欲しいものです」
「柄だけならお返ししますよ。さて、と」
これ以上の用は無いとばかりに、田中がナナに背を向ける。
「――ひっ……」
チアキの体が凍った。流れる血がやけに冷たい。『棺』と視線が合う。絡められる。恐い。恐い。恐い。逃げたい。逃げ去りたい。遠いところまで走っていきたい。
「お待たせしましたね」
心臓が飛び跳ねた。胃液が逆流して口から吐き出してしまいそうになる。
田中が近付いてくるが、チアキは足どころか指一本だって動かせなかった。歯の根が合わない。かちかちと、かちかちと、かちかちと。
助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて誰でも良いから誰か助けて助けて何でもしますからだから助けてお願い助けて！
「歌代さん、申し訳ありません。バッテリーを使い過ぎてしまいました。私はスリープモードに入ります。後の事を、三森さんたちによろしくお伝えください」
「え、な、あっ？」
返事は無い。ナナは目を瞑り、一切の反応を見せなくなった。
「……出来の悪い人形だ。さて、と？」
ああ、それは最後通告。
チアキは何も言えず、震えるしかなかった。
「手間を掛けてくれましたねえ、歌姫（セイレーン）。生温く死ねると思わないでくださいよ」
助けてっ、助けてっ！

あまりの恐怖にチアキは目を瞑った。現実から逃れたくて、在りし日を思った。
浮かんだのは一人の男。
頼りない、口の悪い男。
ああ、助けて、助けてよ。繰り返し名を呼ぶ。
誰も答えてくれないのは分かっているのに、口は勝手にその名を呼んだ。
一度は突き放した。虫が良いのは分かっているけど、何度も思った。
「うるさいですねえ……」
首筋に軽い衝撃を感じる。意識が少しずつ薄れていく。
「……し、しょう……」

間に合え、間に合えっ、間に合ってくれ！
遅い、遅いっ、もう遅い！
折れてしまいそうな心を鼓舞して、止まってしまいそうな足に鞭打って、一は必死に走っていた。
疲労は体を蝕み、心まで犯そうと体内を駆けずり回る。
「歌代っ！　歌代――！」
叫んで、苦痛を忘れようと努めた。一度止まれば、二度と動けない自信がある。今しかない。走るしかない。
「うたしろぉぉー！」
舌がもつれそうになる。喉が乾いた。腹も減った。風呂に入って、温かな布団にくるまって一生眠っていたい。
見つからない。どこにもいない。誰もいない。不安と焦燥が一に襲い掛かる。
――助けてくれ。
誰でも良い、何でもするから、助けてくれ。
チアキだけじゃない。助けてくれ。自分を、自分たちを、人でも

ない、ソレでもない、半端者たちをどうか救ってくれ。
「かみさま……」
一は祈りを唱えた。叶えてくれるとは、答えてくれるとは思っていない。信じてもいないのに、虫の良い話だとも分かっている。だけど。
信じるから。崇めるから。助けてくれたら、何でもしますから。
遂に一は立ち止まってしまう。疲れが一気に流れ込んできた。肩で息をしながら視線だけを持ち上げる。
だが、もう走れない。動けない。歩けない。
神様なんか、みんな死ねば良い。

「――――――!」

声が、聞こえた。
聞き覚えのある喧しい声。
「……くそっ」
一は苦笑する。なんて最悪なタイミング。諦めようとした傍からこれだ。やっぱり、神様なんて死んでしまえば良い。
「休ませろってんだ……」
誰にも届かない文句を垂れつつ、一は顔を上げて前を見据えた。まだ動く。歩ける。走れる。気持ちはまだ、折れちゃいない。まだ何も終わっちゃいない。

腕。にこやかな『棺』。足。伏したチアキ。死んだように動かないナナ。手首。足。
「ああ、一さん」
田中――『棺』――が場にそぐわない、和やかな声で一に話し掛けてくる。
一は答えずに、倒れたまま動かないチアキに視線を送った。

「……歌代に、何をしたんですか？」
田中は薄い笑みを張り付かせ、チアキの傍にしゃがみ込む。何を思ったのか、彼女の右手を乱暴に持ち上げると、それを掲げた。
「彼女の声は耳障りですからねえ。少し、黙ってもらいました」
「何をしたって聞いてんだよっ」
田中はわざとらしい所作で肩を竦める。
「声を荒げないでくださいよ。あなたもこうなりたいんですか？」
そこで、ようやくになって一は気付いた。
田中が掲げたチアキの腕、手、爪。
爪。
チアキの爪が、剥がされている。
右手の指五本の爪、全てだ。爪の下の肉が、血に濡れ、塗れ、てらてらとした光を痛々しいばかりに放っている。
「――てめえっ……！」
「怒るのも止してくださいよ。これはまだ死んでませんから。多分、ですが。左も全て剥いだから、ショック死してなきゃ良いんですけどね。いや、僕としては望むところなんですが」
一は田中の話を聞き終わらない内に走り出していた。
許せない。許せるものか。
「うあああぁぁあああっ！」
すぐに何も考えられなくなる。頭がまともに働かない。怒りに任せて足を動かす。口からは叫びが迸っていた。握った拳からは熱を感じ取れる。
――こいつをぶん殴る！
「意外と熱くなるタイプなんですねえ、あなた」
「ぎっ――！？」
一は突然の痛みに歯を食い縛った。何が何だか分からないままにつんのめる。堪え切れずに地面に転がってから、痛みの元を見遣った。
「がっ、あ、あああぁぁぁぁあああああぁぁ！」

目を疑う、疑いようの無い真実が突き刺さる。当たり前みたいに、左肩にナイフが刺さっていた。

「大げさですねえ。急所も外してますし、深くも刺さってない筈ですよ」

一のひきつれた叫びを耳にしながら、田中は何でもなさそうに告げる。

そんな言葉は、一に届いていなかった。

急所を外されたから何だと言うのだ。深く刺さっていないからどうなんだ。

この痛みは、偽物じゃない。

流れ出る血はフェイクなんかじゃない。

「あっ、ぐうっ――！」

一は恐る恐るナイフを引き抜いて、投げ捨てた。出血自体は大したものではなかったが、刃物で刺されたと言う事実が彼を戦々恐々とさせている。

肩で息をしながら、冷静になろうと努めた。一は深く息を吐く。『棺』。激情に身を任せて勝てる相手ではないのだ。アイギスも、頭も、何も使わないで戦える相手ではない。

田中が何もしてこないのが幸いだった。のた打ち回るこちらを冷然と見ているだけなら、好きにしてくれれば良いと、一は投げやりになる。

「……あー、くそ、いてぇ……」

痛みがマシになってきたところで一は立ち上がった。尤も、痛みは完全に治まった訳ではない。やせ我慢しているだけ。

「面白い見世物ありがとうございました。さて、一さん。どうするんですか？　次はどんな風に喚いてくれるんでしょうかね？」

嘲りの声が一の耳を強く打つ。

どうでも良くなる。

見世物。見世物。

一は笑った。

「見世物、ね。良いですよ」
良いさ、小屋にでも何でも入ってやるさ。
そんなに言うなら、面白い見世物とやらを見せてやろうじゃないか。
「――ただし、あんたにも協力してもらう」
「判然としないですねえ。何を仰りたいので？」
馬鹿にしたような田中の声も、今の一にはどうでも良かった。
「踊ろうぜって言ってんだ。付き合えよ、『棺』」
「くっ、くっくっ、馬鹿が――――良いでしょう。踊りましょうか」
「――Ｓｈａｌｌ　Ｗｅ　ダンスは見た事あるらしいな」
「リメイク版、だけですが」
「勿体ねえ」
アイギスを広げ、一は左肩の感触を確かめる。傷口をぐいと押すと、涙が出そうになった。
まだ、棺に入るには早過ぎる。
今一度覚悟を決めて、一は『最低の棺』を睨み付けてやった。

ハレルヤ

あの歌を、もう一度。
あの声を、もう一度。
もう一度、聞きたい。

「始める前に、一つだけお願いしてもよろしいですか？」
「……何を？」
今から命のやり取りをすると言うのに。覚悟を決めた後、言葉を必要以上に交わしたくなかった。気勢を殺がれてしまい、一は少し気が抜ける。
田中は一の葛藤を知ってか知らずか、のんびりした動作で懐からナイフを取り出し、チアキの喉元に突き付けた。
「おい、何する気だ？」
「慌てなくても結構ですよ。……不本意ながら、今からあなたと一戦交える訳ですが、条件があります」
「……条件？」
短く肯定の意を述べると、田中は薄く微笑む。
「あなたの力、使わないでもらえますか」
一は顔が引き攣るのを我慢出来なかった。
「先ほど僕を止めた力の事です。何故あなたが傘なんて持ってきていたのか理解に苦しんでいたのですがね、それがあなたの武器、何かしらのアイテムならば納得はいきますよ。あの不可解な能力、僕の動きを止めたのか、時間を止めたのか定かではありませんがね。非常に厄介な事極まりない。あの力を以ってすれば、僕とあなたの力量差など関係なくなる。止める、ですか。成る程、一たまりもない」
「おい、ふざけんなよ。んな事言える立場か、あんた？」

田中は無言で、チアキの喉元に刃先を向けながらナイフを振る。
「……だったら、そっちも力を使うのは止めろ。不公平だろうが」
「不公平？　僕は社員で、君はアルバイトでしょう。バランスが崩れるのは摂理、と言えます。それに、生憎僕には力と呼べる力などありませんからね。何、これで平等になったと言っても過言ではないでしょう。でしょう？」
――過言に決まってる。
一は恨みがましい視線を送ろうとして、止めた。弱みはなるべく握られたくない。
「さて、返答はいかに。と、言ったところですか」
メドゥーサの力を封じて、戦え？
死ねと同義語だ。提示された条件、一は判断に苦しんだ。
自分には武器がない。体力だって常人と変わらない。もしくはそれ以下。アイギスの防御力とメドゥーサの能力があるからこそ勤務外として振舞えると言うのに。それを取り上げられてしまっては、無力だ。蟷螂の斧よりも使えない存在に成り下がってしまう。
「動きを止めなきゃ良いんだな？」
だが、チアキの生殺与奪権を握られていては、そう迷う余地などなかった。文句を言っても、愚痴を言っても状況は変わらないのだから、やるしかない。
田中は一の答えに満足したのか、チアキからナイフを遠ざけた。
「ええ、それ以外の用途ならご自由に」
一は盾が使える事に一先ずは安心する。
「では、始めましょうか」
「え？」
言った時にはもう遅かった。
予備動作も糞もない。田中は既に一の眼前にまで飛び込んで来ている。
「う……あああっ！」
一は闇雲にアイギスを振り回す事しか出来なかった。そんな無策

が通じる筈もなく、腹部に走った衝撃に呻き、あっさりと突き倒される。

「王手ですね」

待ったはない。振り下ろされる凶器を直視出来ず、一は身を捩らせた。何とか初撃を躱すも、頭の中で警鐘は鳴り響いている。

「ひっ――！」

次は肩を掠めていった。押さえ付けられてはいないが、プレッシャーでどうにも動きが鈍くなる。背中を向けて逃げようとしたところでコートを切り裂かれた。

「うっ、ああっ……」

「無様、ですねえ」

一は田中から距離を取ったところで振り向く。

田中は余裕を崩さず、追い掛けようともしない。チアキの元まで戻り、ナイフを弄んでいる。

「……遊んでんのかよ」

「ふむ。それもありますが、人質から距離を取り過ぎて力を使われるのも嫌なので」

一の目論みは見抜かれていた。

「慎重な事で」

落胆を表に出さないよう、一は気丈に努める。

「ふう……」

呼吸を繰り返した。上った血が急速に冷えていき、一を冷静にさせる。

「一さん、諦めませんか？」

田中の問いを鼻で笑ってから、聞き返した。

「何を？」

「全てをですよ。差し当たって、僕と戦う事を諦めてはどうです。このまま続けたって結果は見えてる。無駄は省きましょうよ」

「諦めたら見逃してくれるのかよ」

「いえ、これ幸いにと殺しますよ」

馬鹿な話もあったものだ。だけど、もう馬鹿騒ぎは終わらせる。
一は深く息を吐きながら田中を見遣った。
「ただでさえ弱いもの苛めだっつーのに人質を取って、俺の力を封じて。全く、最低と言われるだけはあるよな、本当」
「お気に召しませんか？」
一はゆっくりと首を横に振る。
「や、俺は好きだけど。勝てば良いんだよなあ、勝てば」
「ええ、その通りです」
「ふーん、そうかそうか、そうですか。……聞きましたか？」
「――っ！？」
弾かれる様に田中が背後を振り仰いだ。
刹那、彼の目が捉えたのは木々の合間から疾風の如く飛び出し、外灯の下で照らされる巨大な鎌と、凛とした美貌。
戦乙女、ヒルデ。
「ヒルデさんっ」
「……ん」
一は広げたアイギスを手に駆け出す。彼の呼号に応え、ヒルデは鎌を田中に向けて、地を滑る様に飛び出した。

――油断したっ！
田中は舌打ちしながら、前方の一、後方のヒルデにそれぞれ視線を遣ってから、チアキを見下ろした。
誰を狙う。誰に的を絞れば良い。
田中はチアキに刃を向けた。が、
「田中次史っ」
一がアイギスをかざしてくる。チアキは殺せるが確実にヒルデに殺される。
田中は咄嗟に横っ飛びして一の視界から外れようとした。正解か、不正解か。判断付かなかったが、一の舌打ちが聞こえてきたので正

解だと思い込む。
どうやら、一が力を使うには様々な制約、制限があるらしいと田中は決め付けた。
「……逃がさない」
「ちいっ」
体勢を崩したところにヒルデが飛び込んでくる。鎌を振り下ろされ、地面を転がる事でそれを躱した。
鎌の切っ先が地にめり込み突き刺さる。チャンスだ。田中は膝立ちのままナイフを強く握り、ヒルデに反撃を試みる。
「……あ、あああっ！」
「――っ！？」
しかし、ヒルデは鎌を無理に引き抜こうとせず、柄を持った状態でそれを支点にして地を蹴った。ふわりと、彼女は宙を舞い、続いて、反動が付き半回転した時点で鎌が引き抜かれる。彼女の軌道をなぞる様に鎌は動き、田中に襲い掛かる。
今度は避けられなかった。ナイフを前に出して防ぐのでやっと。刃はヒルデの攻撃によって砕け散り、破片が田中の顔に刺さっていく。
「きっ、さまあ――！」
懐から次の獲物を出す暇もない。袈裟切り、突き、右から左から繰り返される竜巻の様なヒルデの猛攻を凌ぐ事しか出来なかった。
更に、
「くっ……」
視線をずらせば、一がチアキとナナを離れた場所まで避難させている。これで人質もご破算だ。
「……あなたは、許せない」
「ふざけるな！　それは僕の台詞だっ、クソ！」
首を狙った一撃を避け、田中は鎌の腹を蹴り上げる。
「くっ……」
田中は懐に手を入れてナイフの残数を確認、舌打ち、あと三本し

かない。一本を引っ張り出し、逆手で構えた。

「歌代っ、おいしっかりしろよっ！」

横たえたチアキに呼び掛けながら、一は血の気が引いていくのを感じていた。どうして返事をしてくれないんだ。なんで目を開けてくれないんだ。

「歌代っ！」

「……静かにして下さい」

「――！？」

振り返れば、憂欝そうに瞼を持ち上げるナナ。一は驚いたが、彼女がオートマータである事を思い出す。四肢を切断されても、動くにはあまり問題でないらしい。

「ナナ、何があった？」

「説明している時間があるとは思えないのですが、仕方ありません、私が把握している限りの事をお伝えしましょう。私と田中さんとの交戦後、歌代さんは私がスリープモードに入っている間、田中さんに爪を剥がされていました」

「交戦って、ナナ、お前……？」

「勘違いはしないで欲しいです。私は、マスターの命令に従っただけですから、あなた方の助太刀をした訳でもないんです」

結局、それって助けてくれたんじゃないのか。一は言い返そうとしたが、やっぱり止めておいた。彼女はやけにプライドが高いのだ。

「歌代は大丈夫、なのか？」

ナナは目を瞑り、傍らに置かれている壊れた眼鏡を見つめた。

「生爪を剥がされただけでは、簡単に人間は死にませんよ。死ぬ程痛いでしょうけどね」

「……本当、か？」

「間違いを口にする事はありますが、私は嘘を吐きませんよ」

一は胸を撫で下ろす。

「ですが、少々気になる点がございます」
「気になる、点？」
知らず、一はアイギスを潰さんばかりに握り締めていた。
「ええ。歌代さん、最初は悲鳴を上げてらしたんですけど、途中から声が聞こえなくなっていました」
「……声、が？」
視界がぐらつく。
「声が掠れてしまったのか、喉を潰してしまったのか、それとも単純に、ショックで声が出なくなってしまったのか、私には分かりませんけれど」
寒気が走る。怖気が体を通り抜けていく。
声が出ない。
話せない。
「なんだよ、それ？」
うたえない。
歌えない。謡えない。唄えない。
歌代チアキはもう、うたえない。
彼女の声はもう二度と聞けない。
「そんなのってないだろ……」
一体、彼女が何をした？　脅されて、仕方なく歌姫の力を使っただけじゃないのか？　彼女がソレの力を求めたというのか？　望んで、こうなったと言うのか？
誰が、そう言える。誰のせいで、こんな目に遭っているんだ？
一は無意識に田中を見遣った。
「最低……だと？」
怒りが沸々と沸き上がってくる。
田中次史、『最低の棺』。
違う。最低なんてものじゃない。
「あいつは、それ以下じゃないか」
全部、お前の仕業だ。もうそれで良い。知らない。全てをぶつけ

るには都合が良過ぎるぐらいに、調度良い。

ここを抜かせる訳にはいかない。

ヒルデは鎌を振るいながらそう思っていた。自分が倒れてしまえば、田中は嬉々として一たちを殺すだろう。一は決して弱くないが、単体では『棺』を打倒し得ない。彼の能力は攻撃に向いていないのだ。

「……当たれっ」

気ばかり焦ってしまい、攻撃が雑になっている。が、修正もすぐには効かない。負ける訳にはいかない、その重圧が少しずつ精神を蝕んでいく。

田中は涼しい顔で鎌を避け始めていた。ヒルデの焦りを嘲笑うかの如く、自分からは一向に仕掛けず、隙を見せない。

「……逃げないで」

「発汗、大振り、定まらない視線。焦っているのがバレバレですねえ」

薄ら笑いを浮かべながら、田中はヒルデに揺さぶりを掛ける。

「あなたが死ねば、必然的にあの人たちも死んでしまいますからね。もっと必死になった方がよろしいのでは？」

「うるさい……っ」

鎌は虚しく誰もいない空間を切り裂いた。挑発に乗ってはいけないと理解しているつもりなのだが、一や、倒れたチアキを思えばそうもいかない。自分の事の様に悔しくて、悲しくて、腹立たしいのだ。

「荒いですねえ。恐い恐い、ほら、一さんもあなたの顔を見て怯えていますよ」

「――――っ」

そんな筈はない。だが、心とは裏腹に体には力が入ってしまう。

「ふっ！」

甘くなった体勢を狙われ懐に潜り込まれてしまった。迎撃を試みるも、鎌を持った手にナイフを投げ付けられる。避ける事が出来ず、刃は易々と肉に食い込んでいった。血が滲み、滴となって地に落ちる。あまりの痛みに堪えかね、遂に武器を手放してしまった。

「……うあっ」

決着は間もなく付く。

「はああっ！」

まず、掌底を腹に叩き込まれる。内蔵がグルグルに混ざり合う感触、ヒルデは吐き気を堪えながら必死になって崩れるのを我慢していた。

「くっ……ああっ」

関係、なし。

下がった頭、側頭部に容赦の欠片も感じられないハイキックをぶち込まれ、ヒルデの体が崩れ落ちる。意識が落ち掛け、もはや倒れた方が楽だと彼女は気付いてしまった。

「……くっ」

しかし、まだ終わらない。田中はヒルデの髪の毛を掴んで後頭部から地面へ叩きつける。短く呻くと、彼女はもう立ち上がる事が出来なかった。

――手こずらせてくれたものだ。

田中は肩の骨を鳴らしながら、ヒルデに一瞥を遣る。

ヒルデは手強かった。ナイフも残り二本で心許ない。

しかし、残りは今日一番の雑魚である。負ける方が、倒される方が、殺される方が難しい。

「腹が減ったなあ」

時計を見ながら、田中は家族を思った。今日はもうすぐ終わる。上に報告して、帰宅して、遅い帰りを妻に詫びて、夕食を食べて、娘の顔を見て眠りたい。

視線を一に移す。彼の表情はここからだと分からないが、恐れ慄いているところだろう。

「……さて」

幕を引こう。

田中はナイフの柄を握り直し、地を強く蹴った。

一はアイギスを構えてこちらを睨んでいる。何か、嫌な事でもあったんだろうか。心配いらない、すぐに終わらせてあげよう。

「『棺』ぃ！」

馬鹿だ。畳まれたアイギスを見て、田中は内心で笑う。一は何故、能力を使わない。よもやまだ自分の言葉に唆されているのか？　理解出来ない。生存への道を自ら断っている様なものだ。

何を考えているか知らないが、一は真っ向からやってくる。退く様子を見せていない。ならばこちらも真っ向から行く。せめてもの情けとして、必要以上には苦しめない。

だが、やはり不可解だ。何故彼は向かってくる？

「度し難いっ、あなたは人間でしょう！　何故彼女（ソレ）に味方する！」

距離はまだ遠い、田中は最後の揺さぶりも兼ねて、一への疑問を口にした。

一は少しだけ迷う素振りを見せたが、

「そんなの関係ねえんだよ！」

田中にとっては噴飯ものの答えを叫ぶ。

「それでも勤務外ですかっ」

二人の距離は残り十メートルを切っていた。

田中は目測で最終ラインを割り出している。

一はビニールの傘を得物としていた。それを広げずにしっかりと畳み、あまつさえこの距離で、相手の動きを止めるであろう外道に近い力を行使していない。

一が盾としての機能（尤も、傘程度の頼りない盾だが）を捨てて向かってくる理由は一つ。　彼の狙いは恐らく、石突き部分による刺突。傘で致命傷、有効な攻撃を与えるにはそこしかない。

しかし、そのプランは成立しない。ギャンブルよりも質が悪い選択だと、田中は認識していた。

傘による突き。その選択自体はまあ、悪くはない。悪いのは状況、一の頭。何よりも相手が悪い。

突きならば傘でもある程度のダメージが通るには通るのだが、狙いどころが少ない。突きの性質上、単純に、相手に当てる面積が限られてしまう。しかも当たれば良いというものではない。体の柔らかい部分――眼球など――でないと刺さらない。

こちらとしては顔面への攻撃を注意して避ければ良い。おまけに、一度回避すれば前に突き出す動作のお陰で反撃し易くなる。

自分はどこに、どんな攻撃が来るか分かっていて躱せない程間抜けではない。負ける要素が見当たらない。

最終ラインは一の持つ傘の長さ、そこから突きを繰り出してくると考えて、二メートル前後。

躱せば、今日は終わりだ。

刃を体のどこでも良い、突き立てて突き刺して切り刻んで――。

恐怖が近付いてくる。

自ら、『棺』に、死へと向かっている。

可視の死。具現化された恐怖。

しかし一は不思議と、それに怯えていなかった。手足も震えていない。心臓だって脳だっていつもと変わらない。冷め過ぎず熱し過ぎず。気持ちがニュートラルになっていた。

それでも、『棺』に勝てる気はしない。五体満足で生き残れるなんて思い上がってもいない。

策はない。道もない。多分、自分には何もないだろう。ただ、やる事だけは決まっている。

握ったアイギスは答えてくれないが、妙に頼りがいがあった。

――これで思い切りぶっ飛ばす。

やる事はそれだけだった。
アイギスで叩く、だけ。
メドゥーサの力を使えば良いのだが、頭の中で、勝手に世界を作り替えられるような感覚がして気持ち悪い。それに、力を使ったあとはいつも吐き気を催すのだ。
生死の懸かった瀬戸際で思う事でもないだろうし、田中の発言を鵜呑みした訳でもない。しかし、一は力を使うつもりはなかった。
一は田中の命が欲しい訳でも、殺したい訳でもない。
ただ、ぶっ飛ばしたいだけなのだ。
二人の間、距離にして、約五メートル。
一は田中の狙いなど考えない。考えられない。自分自身をイメージ通りに動かすので精一杯だった。
アイギスを前に突き出して、田中を叩くだけ。
「――やはりっ」
距離が三メートルを切ったところで、田中は笑っていた。一は彼の笑みに気付かないでいる。

男の大声に目を覚ませば、指先に激痛が走った。曖昧とした記憶を探るうち、すぐに原因に思い当たる。
「……っ！」
痛みの出所を見れば、そこにある筈の物がなかった。有体に言えば、爪がなかった。
記憶を更に辿れば、生爪を剥がされる感触、衝撃を思い出す。
「……あ……」
ひゅう、ひゅう。
呼吸の度、喉の奥から変哲な音が鳴っていた。
助けを求めたくて、誰かを呼びたくて、口を何度も開けるのだが、どうやってもまともな声を出せない。
――な、んで？

急に、世界が恐ろしく見えた。色が無くなって、全て真っ暗闇に閉ざされているみたいだった。

自分はいったい、どうなってしまったんだろう。

あの人は、何をしているんだろう。

「気が付かれましたか、歌代さん」

「――っ」

慇懃な口調。声の主が誰か分かって返事をしようとするも、肝心の声は出ていなかった。

「ああ、お返事は結構です。私の話は適当に聞き流してくださって構いません」

頷いてみせると、メイド服を着た女は口を開く。

「ご理解しているとは思いますけれど、今あなたは声を出せない状態です。おそらくは、爪を剥がされた時の精神的なショックのせいでしょう」

女は続ける。

「私は医者ではありませんので、治る見込みはおろか何も言えません。あなたに対して返事を期待していません。なんせ話せないのですからね」

なんて酷い奴なんだと、憤慨した。

「……失礼しました」

自分の態度だけで分かったのだろうか、女はすぐに頭を下げてくる。

「でも、言わせてもらいますね。――ありがとう、ございます。あなたのお陰で、私は少し人間の事を分かった気がします」

声を出せる状態でも、絶句していただろうと思った。身振りだけでも返事をしようと手を伸ばしかけるが、女は尚も話を続ける。

「それと、一さんをよろしくお願いします。私、そろそろ予備電源も切れてしまいそうなので……」

そんな事を頼まれても、どうしろと言うんだ。

「……応援、してあげてはどうでしょうか？」

迷っていると、的外れな意見が飛び出してくる。声が出せないのに、どうしようもないじゃないか。

「……」

でも、良いかもしれないと思えた。

顔を上げれば二人の男。お互い、ただならぬ雰囲気を身に纏っている。

何を言えば良いのか、思いあぐねていると、ナイフを持った男が走り出した。

「……っ」

やはり、声は出せない。

それでも、彼女は彼を思った。

短い付き合いでも関係ない。自分の為に命を張って戦ってくれている。それだけで充分過ぎた。

大きく息を吸い、ありったけの真心を込めて、馬鹿みたいに口を開ける。願う。届け。

――師匠っ！

田中が己の中で定めた最終ライン。

ほくそ笑む『棺』に、一は気付いていなかった。

「おおお――っ！」

何故ならば、彼に張りついた笑みが、一秒と立たず驚愕のそれに切り替わったからだ。

一は田中の顔を見ながら、あの頃を思い出す。自身の一振りで世界が変わるあの頃を。

晴天。強い日差し。蝉の声。流れる汗と濡れたシャツ。たくさんの笑い声。そして何よりも――。

「くあぁぁっ」

田中が吠える。その声は悲痛で、ある種滑稽だった。自分の腑甲斐なさを呪う、虚しい音。

一が繰り出した筈の突きを、頭を下げる事で躱した田中が顔を上げた時、目に映ったのはアイギスを構えたままの一。

理解出来ない状況に答えたのは田中自身である。経験豊富な彼の脳が、不可解な問いに答えを出した。

一が狙っていたのは突きじゃない。

突きだと思ったのは、距離を計る為の、単なる予備動作に過ぎなかった。

一が狙っていたのは――。

そんな馬鹿なと思う前、田中の体はそれを止めようと動きだす。

田中が無駄な動きでワンテンポ遅れた分、一はとっくに攻撃を開始していた。

それでもモーションが大き過ぎる。田中が少し手を伸ばせば、ナイフは一の攻撃する直前、どこかしらに刺さるのだ。

「てめえなんかにっ――！」

――ざく。

「――っ……があっ！」

絞る様な、痛みに耐えかね漏れ出た獣の如き咆哮が轟く。

刃の刺さった箇所からは燃える様な激痛が走っていた。傷口から血が、炎みたいに滴っている。

「てめえぇらあぁっ！」

そして、田中がナイフを落とした。彼のぎらついた視線は、苦しそうに胡坐をかいているヒルデに絡まっている。

ナイフを投げたのは田中ではなく、倒れていた筈のヒルデだった。

彼女は最後の力を使い切ったらしく、後ろに倒れ込んでしまう。

次の瞬間。

一は足の爪先を田中に合わせて、体が正面を向くように構えてい

た。

唸りを上げて突き進む。一の足は地面を削りながら、風を少しずつ切り裂いていった。

空気の壁を抜けていく。抜けた先、田中が顔を醜く歪ませていた。

だが、一が見ているのは田中の顔ではない。

眩いばかりの、小さな白球だ。

耳鳴りがして、幻聴も聴こえてくる。懐かしい声に後押しされて、目一杯体を捻った。

――捉えたっ！

力の限り、有らん限り振り抜いた。

ごきり、と。

バットから伝わる重く、鈍い感触。

「おらあぁっ！」

歓声が聞こえる。

駆け寄ってくる足音が聞こえる。

その中で一際大きな、彼女の声。

視界は真っ白に染まり、意識は彼方まで飛んでいった。

全身を爽快感が駆け抜けていく。

確かめなくても分かった。

――ホームランだ。

だって、こんなにも気持ちが良いのだから。

Hail Violent Queen

――なンて顔してやがる。

子供みたいに笑う一と、鼻から血を噴き出しながら吹き飛ぶ田中を見て、三森はぼんやりと思った。

人間とは、ああも簡単に空を飛べるんだったか。

先刻辿り着いた戦場と思しき場所。

そこで目にした世にも奇妙な物語。

一は傘で田中の顔面を振り抜いたのだ。何とも綺麗なスイングで、野球に興味のない三森ですら、少しの間見惚れてしまう。

よもや、『棺』があんな醜態を晒すなんて思いもしなかった。しかも、その相手があの情けない一ときている。夢でも見ている気分だった。

「……っと」

三森は頭を振り、煙草に火を点けた。自分の役割を忘れてはいけない。

本来なら自身で全てに片を付けるつもりだったのだが、一が予想以上に動いてくれた。お陰でこっちとしては後始末に精を出すだけで事足りる。少し物足りないが、仕方ない。

今、一は田中がどうなったのかを確認しないまま寝転がっている。疲れていただろうから、これまた仕方のない事ではあった。

「世話焼かせやがって」

面倒そうに呟く三森だが、彼女の顔には笑みが浮かんでいる。

これから自分が成すべき事に思いを馳せているのだろう。

チアキはしばらくの間、身動き一つ取れなかった。今日は随分と驚かされてきたが、先程の光景は彼女の体に今日一番の衝撃を走ら

せる。
田中次史、『最低の棺』。
世界で一番恐ろしい存在。自分を脅して、使い物にならなくなったら即、命を奪いに来た最低の男。
その男が、気持ち良いくらいに吹き飛んだ。
骨が砕ける乾いた音を響かせて、『棺』は宙を舞い、今はぴくりともせず地に伏している。
未だチアキは信じられなかった。そんな事をやってのけたのが、一だと。信じられる筈もない。
だけど、彼は応えてくれた。自分を、助けてくれた。
白馬に乗った王子様なんて洒落たものじゃない。先日知り合ったばかりの、ただの友達。命を懸けるに値しない関係。普通ならそうだろう。
しかし、一は動いた。彼の思惑がどうであれ、結果的には自分の為に命を懸けてくれた事に変わりはない。
嬉しくて、涙の一つでも流したかったのに、体は固まっている。
「あ……」
声が出ない。
でも伝えたい。ありがとうと、そう言いたい。

今まで生きてきて、頭と体をここまで使った日があったろうか。
――ない、だろうなあ。
一はアイギスを掴んだまま地面に体を投げ出していた。もう、一ミリだって一秒ですら動きたくない。
全部使い切った。田中をぶっ飛ばした。『棺』に一矢報いた。
悔いはない。そう言えば嘘になるかもしれない。
何せ、自分はまだチアキを助けていないのだから。彼女をほったらかしたまま、野球しに行っただけのようなものだ。
自分も、ヒルデもチアキも動けない現状ではこれ以上の展開が望

めない。第三者の介入、出来るなら味方になってくれる人間を呼びに行かなければならない。

「……くっ、うう……」

遠くからでは分からないだろうが、田中はまだ意識がある。アイギスで顔面を打っ叩いたのは良いが、一の筋力では彼の、鼻の骨を砕くので精一杯だった。意識を飛ばすには至らない。手をこまねいていれば、彼からの報復は避けられない。

一は立ち上がろうとするも、足腰に力が入らなかった。

田中の慢心、読み違い。ヒルデの復活。様々な偶然が重なった上でのラッキーパンチだったとはいえ、一度でも気を緩めてしまえば、再び気を張るのは難しいものである。アイギスを杖代わりに立ち上がろうとするも、どうしても駄目だった。

そんな中、

「――っ」

一の求めていた人物が現れた。

一も田中も、二人ともが彼女に目を向けている。停滞しつつあった状況を打破するであろう絶対の存在。

三森冬が、この場に遅れてやってきた。

威風堂々。三森は煙草を燻らせながら悠然と歩く。

彼女は倒れている二人の真ん中にまで進み、深く息を吐いた。短くなった吸い殻を燃やし尽くすと、男たちに一瞥を遣る。

「派手にやらかしたもンだよなァ、憩いの場が台無しじゃねーかよ。なあ、そうは思わねーか」

「……赤鬼」

田中は忌々しそうに呟いた。鼻から垂れた血が口内に入り、彼の歪んだ顔を一層歪ませる。

「『棺』さんよ、気分はどうだ？」

一は思わず身構えてしまう。

三森は一を見ずに田中へ手を差し伸べたのだ。

「……良くはありませんね」

田中は彼女の手を取り、ゆっくりと立ち上がる。
「来るのが遅い。いや、遅くはないですか。良いでしょう、遅刻についてはとやかく言いません。今から反逆者を始末すれば済む話ですからね」
「……反逆者、ねェ」
三森と一の視線が交錯する。彼女の目からは感情が読み取れない。一は視線を反らしアイギスを握った。今から手負いの田中と、殆ど無傷に近い三森を相手にしなければならない。
――絶対無理だな。
無理だ。勝てない逃げ切れない。だがしかし、彼らに立ち向かえるのは自分しかいない。やるしかない。
と。一はそう思っていたのだが。
「そんなにびびンじゃねェよ」
三森は一の不安などよそに、あっけらかんと笑う。
「……三森さん？」
「――赤鬼、お前……」
「鼻、右に曲がってンなァ」
「……何？」
田中に向き直った三森は、左手をおもむろに振り抜く。
「あぐっ――！？」
骨折している鼻を殴られた田中は、痛みに耐え切れないで地面を転がった。
「左からイっといたから、これで真っすぐになンじゃねーの？」
けらけらと笑う三森に、一は少しばかり引いてしまう。
「あ、み、三森さん？」
「あンだよ、これからが良いところだろが、止めたら殺すぞ」
「やり過ぎじゃあ……」
「やり過ぎだあ？」
三森は田中の腹を蹴ったあと、血の気が引いている一を強く見据えた。

「お前、『棺』に何されたか分かってンだろーな？　見ろ。お前の後ろだよ。やられたのはてめェだけじゃねェんだぞ」
「……それは、そうですけど」
「全員息はあるみてェだがな、そこの鎌女はボロボロだし、あのガキもひでェ目に遭ってるだろうよ。メイドに至ってはバラバラにされてンだぞ、ボケっ」
「……殺すん、ですか？」
一はのたうち回る田中を見た。なんて情けないんだろう。醜くて、気持ち悪い。
「お前、本気で言ってンだろうな……？　馬鹿が、当然だろうがっ、てめェ身内がやられて黙ってンのかよ！」
「でも……」
「でも、なンだよ？　温い事言ってンじゃねェ。ここでこいつを殺しとかなきゃな、いつかまた痛い目見んだぞ」
一は身を縮こませる。三森からの強い視線は体に毒だった。
それでも、自分たちさえ助かればそれで良い。それ以上は望むべくもない。
「……殺さねェよ。冗談じゃねェけど、冗談だ」
一の願いが通じたのか、それとも三森が折れてしまったのか。彼女は呆れた風に呟いた。
「本当、ですか？」
三森は溜め息を吐いてから田中へと視線を移す。
「こいつにゃ使い道があるからな」
不穏な言葉を聞いて、一の眉間に皺が寄った。
「後始末だよ、後始末。私はもう疲れちまった。だからこいつ一人に押し付けて、今日はもう終わりだ。この話を終わりにするからな」
――後始末、だと？
田中は鼻血を袖で拭きながら、よろよろと立ち上がった。

「ん、おいおい寝てろよ」
田中は声が出せなかった。三森の爪先が腹部に思いっきり突き刺さっている。恐らく彼女は手加減などしていない。今の蹴りで骨も何本か折れただろう。
「……かっ、はっ」
呼吸をするだけで田中の全身に激痛が走る。
「三森さん、やっぱりやり過ぎじゃ……」
「これ持ってろ」
三森は一に背を向けたまま何かを放った。
一は投げられたものを両手でしっかりと掴む。彼の手の中に収まっていたのは、赤い携帯電話であった。
「これ、どうすりゃ良いんですか？」
「持ってろ」
三森は一を半ば無視する形で、倒れている田中に近付き、髪の毛を掴み上げる。
「おらっ、呑気に寝てンじゃねェぞボケが」
寝かしたのはお前だ。田中は内心で毒づき、しかしされるがままに持ち上げられてしまった。
「……何をしているのか、分かってるんでしょうね」
「おうよ。てめェこそ今から何されるか分かってンだろな」
「くっ、ははっ。僕を殺しますか？　これはオンリーワンに楯突く行為ですよ。当然、処罰も覚悟の上でしょうね。君だけじゃない。今日の関係者全員がオンリーワンから狙われるんですよ」
一が不安げに顔を曇らせている。良い様だと、田中は思った。
「殺す？　ひっ、ぎゃははははっ！　馬鹿かてめェ、殺さないって言ったろうがよ。ンな人生悲観になんなって」
だが、三森は嗤う。心からおかしそうに。
背筋を寒いものが通り抜け、田中は思わず息を呑んだ。
「僕に何をさせるつもりですか？」
――にいい。

三森は口の端を吊り上げ、嫌らしい笑みを作る。
「今日は色ンな事があったよなァ。人が死んだり、死にそうになったり、いや、面倒だよな。これがバレたら大変だよなァ」
「……何が言いたい。そうだ。僕を殺さなければ、僕は必ず上に報告しますよ。そうなれば、また次の戦闘部があなた方を狙いに来るでしょうね」
田中は酷薄な笑みを浮かべ、一たちを見遣った。
「無駄ですよ。いたちごっこ。ウロボロス。無限ループ。どれを取っても構わない。あなたたちは死ぬまで僕らに追われるんですよ」
「知ってるよ」
「……何ですって？」
「――だから、てめェに任せンだよ。後始末って奴をな」
三森は田中の髪の毛から手を離す。支えを失った彼は再び地面に落とされた。
「今日ここであった事、私らは関係ない。私らは何もしてない」
「……赤鬼、お前まさか」
「さっきここへ来る時に死体を見たぜ。二つ、な。勿体ねェ、片方は私の獲物だったのによ。てめーに先を越されちまった。いやー、一人ではしゃぐねェ、『棺』さん。私らは何もしてないってのによ」
「何もしてないですって？　……なるほど、後始末とはそういう事ですか。しかし正気ですか？　僕が虚偽の、しかも自分が不利になる証言をするとでも？」
田中は毅然として言い放った。が、三森は顔色を一切変えない。
「今日ここには誰もいなかった。ソレなンていなかった。全部お前の勘違い。そう言え。言うんだよ」
「……僕を殺せ」
言える筈が無い。
「聞いた話だがよ、あのガキにてめェが頼ンでたらしいな。ソレをおびき寄せる為に歌えってよ」
「何故オンリーワンの社員である僕がそんな事を。証拠はないでし

ょう。第一、彼女の言い分を誰に伝えるおつもりですか？　誰も信じませんよ」

「いやあ？　あンたが自作自演してたなんて誰にも言うつもりはねェよ」

「……自作自演ですって？　僕がする必要はない。決してない。あなたの要求を呑むわけにはいきませんね」

「……三森さん」

心配そうに声を掛ける一を手で制し、三森は尚も堂々として口を開く。

「いや、呑んでもらう。お前には全ての罪を被ってもらう。勘違いすンな。私は真実がどーのこーのなンざどうでも良い。大事なのは、こいつらの明日だ」

「ふっ、明日など。僕は言いません。ここまでされて、どうしてあなたたちに――」

「――パパってのは大変だよな」

田中は声が出せないでいた。今、彼は目の前の女が何を言ったのか理解出来ない。

「子供、出来たんだってなァ。いや、『最低』と呼ばれたあんたが一児の父親とは、恐れ入ったぜ。どんな悪魔とガキ作ったンだ？」

「……赤鬼、何を……」

「くくっ、これ見よがしに絵葉書なンて送ってくっからだよ。……金、要るよな？　何せ私が戦闘部にいた頃から謹慎食らってたもんなァ。そりゃ家族の為に、自作自演してまで気張るよな、なあ？」

「み、三森さん？」

「おい、私のケータイ、履歴の一番上に掛けろ」

一は三森の言葉を受け、携帯電話の蓋を開ける。が、しかし、何をしていいのか分からない様子であった。

「……おい。何やってンだ」

「これ、どうやって電話掛けるんですか？」

「はあァ！？　……あ、お前ケータイ持ってないンだっけか。もう

良い、持って来い」
　三森は、申し訳なさそうに傍へ寄ってきた一から携帯電話を受け取ると、片手で操作を始めた。
「おら、電話に出て『棺』に話を伝えてやれ」
「ええ？　誰と話せば良いんですか。話って何ですか？」
「出りゃ分かる」

　一は三森の指示通り、電話を耳に当てた。
「……も、もしもし？」
『……』
　通話口からの応答はない。訝しんでいると、首元に息を吹き掛けられるような怖気が走った。
『……ふっ、難儀しているらしいな、一一』
　一は耳を疑う。それでいて、納得もした。感情の一切籠もらない、聞き覚えのある声。
「お前、何してんだ？」
『愚問だな。私を誰だと思っている。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗だぞ。私がどこで何をしているのか、分からない筈があるまい』
　一には全く見当がつかない。
「三森さんから話を聞けって言われたんだけど。お前で合ってるのか？」
『ああ、間違いない。田中次史に伝えろ。今私がどこにいるのかをな。それで奴には事情が分かる』
「……どこにいんだよ？」
『田中天美のすぐ傍だ』
「田中アマミ？　誰だよそれ」
　何の事か、相も変わらず一にはさっぱり分からなかったが、田中にはそれだけで充分に過ぎた。彼は驚愕、憤怒に表情を大きく変え

て一を睨み付けている。
『ちなみに、田中希も近くにいる』
「おい、まさかそれって……」
田中天美、希。この状況。不可解な電話。『棺』の様子。勝ち誇った三森の顔。
一にもようやく事態が呑み込め始めた。
――人質、かよ。
苗字が同じなのは偶然じゃない。田中天美と言うのは、田中次史の近しい関係者なのだと、一は理解する。
つまり、三森は脅迫しているのだ。
「……電話の相手は誰ですか？」
「無駄口叩くンじゃねェよ。分かってるだろ？　今からてめーが言って良い言葉は二つだけなんだよ。イエスかノー。これだけだ。余計な口利いたらぶっ殺すぞ」
田中が要求を呑まなければ、電話の向こうの春風が動くのだ、と。そう言っているらしかった。
一は三森たちのやり取りを見ながら、春風の声に耳を澄ませる。
『一一、貴様の話は聞いたぞ。田中次史が歌代チアキを利用してソレを呼び、殺し、オンリーワンからのボーナスを得る為に自作自演を働いたという、何一つ証拠のない荒唐無稽な話をな』
「別にお前がその話を信じなくても良いよ。俺が信じてんのは、そういううんじゃないからな」
『そう邪険にするな。一一、私は貴様の話を評価しているのだぞ。情報部でも何でもない、ただの勤務外がよくもまあ辿り着いたものだとな』
「荒唐無稽な話なんだろ？」
『その通りだ。仮に真実だとして、田中次史が口を割らない限りこの話は誰も信じないだろう』
一は溜め息を吐く。
自分の考えた話は自分に有利になる、極めて自分本位で独り善が

りな憶測だ。彼も分かってはいたのだが、改めて他人から言われると憂鬱になる。

『だが、今は必要ないな。真実か虚偽かなど、些末な話だ。そうだろう？』

「……重要なのは」

『田中次史の意志、という訳だ』

一は田中を見据えた。春風の名は伏せて、とある人物が田中天美、即ち、彼の妻の近くにいる事を伝える。

田中はしばらくの間、一を強く睨み付けていたが、

「……僕の家族を殺すつもりですか。何一つ証拠がない、誰が真に正しいのかも分からぬままに」

やがて観念して俯いた。

三森は煙草に火を点け、鬱陶しそうに田中へ向けて刺すような視線を放つ。

「どうしてですか？　僕はオンリーワンの社員としてソレを殺そうとしただけなのに。あなたたちも勤務外だ。少女の姿をしているとはいえ、ソレを見逃し、あまつさえ僕に楯突くなんて……」

「おい、喋ンなっつったろ」

「三森さん」

一は、田中に殴り掛かろうとした三森を手で制し、携帯電話を返す。

「……田中さん、俺は自分が勤務外だとか、歌代がソレだとか、あなたが社員だとかでこんな事をした訳じゃないんですよ」

「では、何故に？」

一は自分自身に言い聞かせた。そうだ。信じろ、自分を信じろ。人間、ソレ、勤務外、フリーランス、社員。全て関係ない。大事なものは彼女が教えてくれたのだから。

――好きにしたら良い。

「――俺は、あんたが嫌いなんだよ」
ソレとどう接するんじゃない。
誰とどう接するのか。
拙いながらも、それが一の見つけた答えだった。
彼が苦しみながらも遂に辿り着いた、一つの、この世で一つだけの、彼だけの答え。
「関係ないんだ、そんなのくだらない。俺は……人間で勤務外だ。けど、それ以前に一一なんだ。好きな奴と好きな時に、好きなようにやる。だから、もう邪魔をしないで欲しい」
一はそれだけ言うと、田中から背を向けた。
三森は笑っていた。通話を切っていない電話口からは、春風の声も聞こえている。
「三森さん、後、よろしくお願いします」
携帯電話を三森に渡すと、一は覚束ない足取りで歩き出した。

「おう、任せとけ」
三森は手だけを振って一に返すと、田中を見下ろした。
「さーてと、まだ返事を聞いちゃいなかったな。言え、『棺』」
「言わなければ、妻と娘を殺すのでしょう?」
「はっ、妻と娘だってよ。笑わせンな。良いか、てめェがイエスと言えば全部丸く収まるんだよ。そうすりゃ私らは明日からも問題なくいつも通りに過ごせンだ」
田中は探る様に三森を見つめた後、
「ノーと言えば?」
平坦な口調で言う。
三森は携帯電話を見せ付けるように掲げた。
「てめェの大事な大事な家族が死ぬ。思い付く限りの、いや、思い付かねェぐらいの残酷なヤられ方で死ぬ。ハッタリじゃねー、やるぜ。ガキだろうが、女だろうが関係ねェからな」

「……それでも人間ですか、あなたは」
「お前が言うかよ。……言え、時間は待っちゃくれねェぞ」
「そうですね、では」
田中は自然な所作で立ち上がる。滑らかな手付きで懐に手を伸ばし、凶暴に輝く刃物を取り出した。
「なあ、お前何してンの？」
「ああ、交換条件を持ち掛けようと思いまして。あなた方が僕の家族の命を握っているのなら、僕もあなた方の命を握ります。分かりませんか？　殺すんですよ。こちらが殺されれば、そちらを殺します。よもや、赤鬼如きが僕を止められるとは思ってもいないでしょうね？」
どうやら、田中は先日の事を指しているらしい。指一本で三森たちを止めた、あの日の事を。
三森は納得し、携帯電話をポケットにしまう。
「あー、そーゆー事ね。はっ、良いね、良いじゃん、良いじゃねーの。私も今日は不完全燃焼だったからな。オッケオッケ、付き合うぜ『棺』。ンじゃ決まりな、死んだ方が殺した方に従うって事で」
「良いでしょう、実に分かりやすい」
「だろ？」
田中は言うが早いが、一足飛びで三森の懐にまで近付いた。握ったナイフをかざし、彼女に切り付ける。
しかし、その攻撃はあまりにもお粗末過ぎた。田中がダメージを負い過ぎていたのか、動きは鈍く、易々と三森に手首を握られてしまう。
「よォ、やる気あンのか？」
「ええ、充分にね」
田中は口元を歪ませると、ナイフの鍔の位置に配置されたレバーらしきものを指で押した。刹那、刀身が、三森の顔を目掛けて射出される。
至近距離での投擲。目視は不可能に近い速度だろう。

だが、三森はそれを避けた。否、受け止めた。彼女は飛んできた刀身を歯で噛み締め、受け止めている。
「――狂っていますね」
三森は刀身を地面に吐き捨てると、田中のスーツの襟元を掴み上げ、嬉しそうに笑った。
「何だっけな、それ。スペ？　スペシウムナイフだっけか？　初めて見たぜ、ンなおもちゃ。くっだんねーなー、おい」
「アレを知ってたんですか？」
「漫画で読ンだ。確か、握り方がどーのとか、形が筒みてェだとか書いてあったな。そんでもって、さっきのは最後の手段だろ？　あンな物使うぐらいだから、もう手持ちの得物がないって訳だな。いやあ、惜しかったなァ、『棺』。もう少しでお前の台本通りに事が進んだってのによ」
田中は皮肉っぽく笑み、悠然と口を開く。
「さあ、どうでしょうね」
「これで何も気にせず無抵抗なてめェをボコれるって訳だ」
「……殺さないのですか？」
「あ？　言ったろーが、耳ねェのかお前。殺さねーっつったろ」
三森は田中を掴んでいない方の右肩をぐるぐると回し始めた。
「ただし、痛い目には遭ってもらうけどな」
「どうぞ。しかし、随分と印象が変わりましたね、あなた」
田中は懐かしむように言葉を紡ぐ。
「戦闘部にいた頃のあなたはもっと尖っていたと言いますか。そうですね、他者の為に動く事を決してしない人だった」
「おい、冷静に何言ってやがる。歯でも食い縛って黙っとけ」
「何があなたを変えたんでしょうね」
三森はそれ以上話を聞くつもりはなかった。ここ数日の間に積もり積もった様々な感情、積年の恨みとでも言うべきモノを拳に込めて、振り下ろす。
「はっ、どうしてこんな事になったのかなあ」

田中が寂しげに呟いた。三森は答えるつもりがなかった。

――変わった？　私が？

自分ではそんな事分からない。

だが、もしも自分が変わったと言うのなら、変えたのは誰だか分かる。

そいつを守ると、大よそ自分らしくない約束を交わしてしまったぐらいなのだから。

そして、どうしてこんな事になったのかも同時に理解出来た。答えが出ると、実に簡単でつまらないものだと、少しばかり落胆する。

三森は田中の意識が完全に飛んだのを確認した後、彼を乱暴に地面へ叩き付けた。

「……お前はやり過ぎちまったンだよ」

やっと終わった。そんな感慨に耽る事もなく、三森は大きく伸びをして、一の歩いていった方に目を向ける。

「マジかよ」

思わず舌打ちしてしまった。

一は歌代チアキの元まで行こうとしたのだろうが、辿り着くまでに疲れ果ててしまったらしい。呆れる事に、そこで眠っているヒルデと同じくして、満足げな表情を浮かべていびきをかいている。

眠っている者が二人。

四肢を失った者が一人。

傷付いて動けない者が一人。

気絶している者が一人。死者が二人。

誰が、この場を上手く丸めるのだろう。

「任され、ちゃったもンなァ……」

三森は頭を掻き、夜空を見上げる。月が、くっきりと空に浮かんでいた。

何故かは分からないが、今日の空は素直に綺麗だと思えてしまう。

そこでようやく、三森は何かで満たされたと、そう感じた。

「どーすっかなー」

とりあえず、一の寝顔でも見て笑ってやろう。そう思い、三森は煙草に火を点けながら歩き出した。

今日の煙草は実に美味いと、そう思いながら。

Joyful, joyful

ゴトゴト。
ゴトゴト。
白い軽トラックが駒台の街をゆっくりと進んでいく。
荷台には様々な家具が乗っていた。
ゴトゴト。
ゴトゴト。
縛り付けられたタンスと机が時折ぶつかり合い、軽快な音を鳴らしている。
運転席には柔和そうな顔付きをした眼鏡の男。
助手席には不機嫌そうな顔をした女の子。
車内ではこれといった会話もなく、ただゆっくりと、彼らを乗せた軽トラックは住宅街を通り抜けていく。しかし決して険悪といった雰囲気ではない。流れ行く時間を自然と受け止めるような、暖かな空気が二人を包んでいた。

大学の二時限目の講義が終わった一は中教室を出るなり耳を塞いだ。
「何故だ！　何故なんだ！？　どうしてなのだ先輩っ！」
「……声がでけえよ」
「どうして私とお昼ご飯を食べてくれないのだ！？」
そうやって大声でまくし立てているのは、一の一つ下の後輩である早田早紀（はやたさき）である。
二人は入り口近くに固まっていたせいもあって、教室から出て行く他の学生たちの注目を集めていた。学生の殆どは見てみぬ振りで、中には「またか」と声を漏らす者もいる。
「楯列（たてなみ）にも言ったけどさ、今日は俺自主休講、午前までの予定なん

だよ」
「だからその理由を聞いているのだ！　午前までで終わり？　ならば私は今日の昼休みと午後の講義を先輩と過ごせないではないか！」
「そうだな。じゃあ行くわ、用事あるから」
一は手を上げ、早田から距離を取った。
「待て待て待て待て待ってくれ！」
が、凄まじい脚力の持ち主である早田はすぐさま一に追い縋る。
一は服の袖を引っ張られ、やむなしに振り返った。
「もう、何だよ。急ぐって行ってんだろ」
「それは分かった。私も女だ、涙を呑んで、笑顔で先輩を送り出そう。それに、先輩は束縛する女が嫌いだと言っていたからな。自ら好き好んで好感度を下げるつもりはない」
「それで？」
早田は真っ白い歯を見せて笑う。
「せめて、先輩が学校を出るまでは一緒にいさせて欲しい」
一は直に、しかもかなり近い距離で彼女の、ヒマワリを思わせるような眩しい笑顔を見てたじろいでしまった。
「……勝手にしろ」
「ふふ、そうさせてもらおうか」
「腕を組もうとするなボケ」
「しかし先輩、用事とは何なのだ？　バイトではないだろうし、うむ、今日はそれ以外に用事があるとは思えない。何を隠している」
詰問するような早田の口調に呆れて、一は頭を掻く。
「確かに今日はバイトがない。でもさ、何で俺の予定を知ってるんだよ？」
「くくっ」
「悪役笑いは止めろっていつも言ってんだろ」
一はそれ以上追求するのを止めておいた。別に、どうでも良い事だと思っていたし、彼女ならばそれぐらいは把握しているだろうと諦めている節もある。

「では、何だ？」
「引越しだよ、引越し」
早田は目を丸くした。
「先輩のか？」
一は首を振り、空を見上げる。雲は掛かっちゃいるが、充分に良い天気だと言えた。
――絶好の引越し日和だな。
「俺じゃなくて、俺の住んでるアパートに引っ越してくる奴がいんだよ」
「ふむ、そうだったのか。ははあ、話が見えたぞ。では先輩はその人物の手伝いに行く訳だな」
「その通り。俺が戻る頃には始まってんじゃねえのかな、準備」
「ちなみに、その人物とは女、ではないだろうな」
トーンの落ちた早田の声音に、一の体が少しだけ固まる。
「生物学上は女だけど。ああ、誤解すんなよ、変な関係じゃないからな」
「ではどんな関係だと言うのだ？　聞かせてもらおうじゃないか、先輩」
「お前に問い詰められる理由は分からんが、そうだな、後輩、みたいなもんだよ」
「ショオオオオオオオック！」
「ひっ！　急に大声出すな！」
早田は一を押し倒さんばかりの勢いで食らい付いた。
「こっ、こっ、こっ、後輩だと？」
「みたいなもんって言ってんだろ」
「嫌だっ、断固拒否する！　先輩の後輩は私だけだ！　私だけじゃないと嫌なのだ！　今からでも遅くはない、そいつを後輩と呼んだ事を取り消すが良い。じゃないと――」
一は唾を飲み下す。
「……じゃないと？」

「――ひ、酷い事になる」
とっくに酷い事になっていた。
「分かった分かった、取り消すよ。そいつとの関係は……師弟関係だ。俺が師匠で、奴が弟子」
「そっ、そうだったのか。うむ、それなら――いや、良いな師弟関係。私もそっちが良い。良いなあ、師匠！　良い響きだ！　私にも教えて欲しいものだ。そう、牡と牝の肉体の何たるかを」
「……無駄にエロく聞こえるから牡って変換するな。なあ、お馬鹿な君はどうしたら納得するんだ？」
「師弟関係は先んじられたからな。良し、先輩とは肉体関係で手を打とう」
「頭強く打ってくれねえかなあ、こいつ」

学校を出てからも付いてくる早田を何とか押し止め、一はアパートまで帰ってくる。
「お」
アパートの前には家具を積み込んだ、白い軽トラックが停まっていた。
一は、そのトラックの荷台に背を預けて所在なさげにしている男に声を掛ける。
「堀さん」
スーツ姿に眼鏡を掛けた、優男が一の声に反応した。
「ああ、一君。思っていたよりも早かったですね」
「ええ、大学は午前だけ受けてきたんで」
「良いんですか？」
一は曖昧に頷く。堀はそれ以上何も言わなかった。人当たりの良さそうな笑顔を浮かべるだけである。
「あ、そういえば糸原さんたちは？」
そこで、堀は困ったような笑みを浮かべた。

「それが、皆してウチのコンビニまで行っちゃいましてね。何でも人手を増やすのと、打ち上げの買い出しを、との事です」
「増援はともかく、打ち上げってのは気が早いなあ。堀さんは留守番って事ですか」
「そのようで」
一と堀は顔を見合わせて笑った。
「どうします、堀さん、先に始めちゃいますか？」
「そうですね。鍵は預かってますから」
「ま、やっとかないと糸原さんあたりに文句言われそうですしね」
一は苦笑して、軽トラックの荷台を見遣る。
荷台にはタンスや冷蔵庫、机やテレビ。有り体に言えば重いものばかりだった。
「……明日は筋肉痛だな」
「いやあ、キツそうですねえ」
そう言う堀の顔には笑みしか浮かんでいない。
「あの、堀さん」
「何でしょう？」
一はトラックの荷台に上り、堀とは視線を交わさないままに口を開く。
「……ひつ――田中さん、どうなりましたか？」
堀は少しの間だけ笑顔を消し、眼鏡の位置を押し上げた。
「……彼は今頃、娘の写真を眺めながら、ゴーヤでも齧っているんじゃないでしょうかね」
一には、田中が遥々南の島まで行ったのが、単身赴任なのか左遷なのか分からない。精々、堀の言葉から彼が妻子と離れ離れになり、もう自分たちとは会わないんだろうなと、それぐらいしか理解出来ていなかった。
「苦い、ですね」
「この結末が、ですか？」
「まあ、そうですね。はっきりしないと言いますか、何か、歯の間

にモノが挟まったままな気がして」
「一君は田中さんをどうにかしてやりたかったんですか？」
堀はアパートのであろう鍵を弄びながら、一に問い掛ける。
「――殺してやりたかった、とか」
まさか。一は首を横に振り、それはないと断言した。
「殺されそうにはなりましたけど、ね。三森さんには怒られちゃったけど、俺も一発良いの叩き込んでやったし、だから、良いんです」
「なるほど。いやあ、田中さんのあの鼻は見ましたよ。完全に砕けていましたね。完治までには相当の時間を要するでしょう」
「あ、はは。そんなに酷かったんですか？」
堀は肩を竦め、良く分からない微笑を湛える。
「気にしなくても良いですよ。彼はそれだけの事をしましたからね」
「それって、南の勤務外を殺したっていう……」
「いやあ、それもありますが、一番はやはり、歌姫（セイレーン）を利用した自作自演でしょう。率直に言えば、彼はやり過ぎました。オンリーワンに所属している者がソレの出現を助長するなんて」
「でも、人を殺してるんですよね。その、俺なんかが言っても良いのか分からないけど、罪にならないのかなって」
堀は気まずそうに溜め息を漏らす。
「彼には……功績がありますからね。性格、と言うより性質に難はありますが、戦闘力には目を見張るものがありましたから」
「そう、ですか」
「気に入りませんか？」
「……そんな事はないんですけど。あの、田中さんは自作自演を認めたんですか？」
一は荷台の縁に腰を下ろす。
「いえ、残念ながら。他の事については洗い浚い話したようですがね」
「……じゃあ、真相は闇の中、なんですね」
「――良いじゃありませんか」

「へ？」
堀は笑顔を崩さないまま、一を見遣った。
「はっきり言ってしまうと、私にはまだ、事情が良く呑み込めていません。辛い事、悲しい事、悔しい事があったでしょう。ですが、一君たちはこうして生きている」
「堀さん……」
「そして、新しい生活だって始まるんです」
堀はトラックの荷台に積まれた家具の数々を眺め、眩しそうに目を細める。
「……それで良いじゃありませんか。何も、提示された全ての問いに答えを求める必要はないと思いますよ。本当に大事な何か一つ、それさえ分かっていれば、良いのではないでしょうか」
「そうかも、知れませんね」
一は憑き物が落ちたような、晴れやかな気分になっていた。
「うん。それじゃあ堀さん、荷物を部屋に入れていきましょうか」
「ええ、そうですね――と、少しばかり話し過ぎたようですよ」
一は何気なく荷台から顔を上げる。
「……あちゃー」
ビニール袋を振り回す糸原と目が合い、一は頭を抱えた。

「ねえ、どうして男が二人もいて荷物が片付いてないワケ？　あんたら、こ・こ・に、男の勲章がしっかり付いてんでしょうね？」
「……ごめんなさい」
「いやあ、申し訳ないです」
帰ってきた糸原に謂れのない叱責を受け、それでも一と堀はただただ頭を下げるしかなかった。
「ったく、使えないわねー。……にーのまえっ、なーにボサっとしてんのよ！　ほら、買い出しに行ってくれた私らと、わざわざ店から来てくれた奴らに飲み物を注ぎなさい」

「えと、引っ越しの準備は？」
「んなもん後よ、後！　私は喉が渇いたの、ふふーん、ほらほら、妾はドリンクが所望であるぞ」
　一は堀と顔を見合わせる。お互いがやれやれと言った具合に息を吐いた。
「じゃ、俺が飲み物注いでいきますから、あのう……」
　堀は糸原からビニール袋を受け取り、その中から新品の紙コップを取り出す。
「私が皆さんにコップを配っていきますね」
「お願いします。じゃあ皆さん、飲み物を配るんで一ヶ所に集まって――集まれって言ってんだろ！　おいジェーン勝手に俺の部屋入ろうとするなよ！」
　アパート周辺に散らばりだすまとまりのないメンバーに辟易しながらも、一はジュースの詰まった袋をぶら下げた。
「俺の荷物重いんで、堀さんは先に、パパっとコップ渡しに行っちゃってください」
「代わりましょうか？」
「いや、社員さんにそこまでさせらんないですよ」
　一は笑ってみせるが、堀はいまいち納得がいっていない様子である。
「……まあ、一君がそう言うなら。では、お願いしますね」
「？　はい、分かりました」
　堀は散らばったメンバーたちに紙コップを配り始めた。
　パンパンに張った、二つのビニール袋を両手に持ち、一は堀の後に付いていく。
「糸原さーん、何が良いですかー？」
　糸原は軽トラックの運転席で足を組み、ハンドルに肘を突いて踏ん反り返っていた。
　まるで玉座にでも座っているみたいだと一は錯覚してしまう。
「勿論、酒ね」

「これから荷物を運ぶんですけど」
「ふふん、分かってないわね。私がそんな事すると思う？　ここで勝利の美酒を味わいながら、あんたたちの労働する姿を眺めておくに決まってるじゃない」
思わなかった。
「何に勝利したんですか」
「ふふん、そうね。……何かしら？」
一は黙ってオレンジジュースを注いでおく。

その後も、一は甲斐甲斐しくジュースを注いで回った。
勝手に一の部屋に入り込んでいたジェーン。
トラックの荷台に積んであったベッドで眠っていた立花。
立花を必死で起こそうとしていた神野。
一人だけ引越しの作業に移ろうとしていたナナ。
部屋から出て来て混ざろうとしていた北。

アパートの塀にもたれ掛かり煙草を吸っていた三森。
「三森さんも来てくれたんですね」
「……無理矢理連れてこられたンだよ。言っとくけど私は手伝わねーからな……まァ、椅子なら一個ぐらい」
一は彼女のコップにウーロン茶を注ぎながら苦笑する。
「ところで、今は誰が店に残っているんでしょう」
「店長一人だ」
「あ、ははは……」
「ま、たまには良いンじゃねェの？　こーいうのもさ」
三森は煙草の灰を落としながら、穏やかな顔で言った。
「ああ、それよか堀さンに気ィ遣わせんなよ」
一は頷く。堀には家具の運搬や、お留守番、他にも多分、色々な

用事を押し付けてしまっているのだろうと思った。
「や、そーゆーンじゃなくてさ。ほら、今回の事だよ。一応、『棺』と部署が同じだったからな。戦闘部として、申し訳ねーとか思ってンだよ」
「あー、そういう意味でしたか。でも、アレですね。三森さんも堀さんの事には気が回るんですね」
「なっ！　ちっ、ちげェよ馬鹿！　わ、私だって、その、何だ。元とはいえ、戦闘部だったからな。お前に対してはそういう気持ちでいるンだよ」
「？　そういう気持ちって？」
顔を真っ赤にした三森にウーロン茶を引っ掛けられそうになったので、一は足早に彼女の元から離れた。

「お、こんなところにいたのか」
そして最後に、アパートの隅に隠れる様にして座り込んでいた、歌代チアキ。
彼女の喉には痛々しく包帯が巻かれ、両手には傷跡を隠す為の手袋がはめてあった。
「……人、多いから」
チアキの喉は嗄れに嗄れ、以前のような歌姫（セイレーン）を思わせる声ではなくなっている。がらがらに掠れた、ハスキーボイスに変貌を遂げていた。
「何が飲みたい？　何でもあるぜ、りんごジュースオレンジジュース、緑茶ウーロン茶に炭酸ミネラルウォーター、ああ、アルコールもあるな」
「いらん」
一はジュースの詰まった袋を地面に置き、チアキの指元に目を遣る。
「爪、まだ治ってないんだったな。良いよ、飲ませてやっから」

チアキは首を振り、一と顔を合わせないままさっきよりも深く俯いた。
「……爪ならすぐに生え揃うよ」
「声は？」
「声が掠れてんのは一時的なものなんだろ？　大丈夫だって、すぐ元に戻るよ」
「戻らん」
一は溜め息を吐こうとして、何とか我慢する。自分が投げ出してはいけない。
チアキの声はあの時のショックで、劇的に変わってしまった。掠れてしまった。オンリーワンの医療部ですらさじを投げてしまう特異な症状で、何故こんな事になったのか全く分からないのだと言う。最後まで諦めなかった、否、今でも諦めていない炉辺（ろばた）の話によれば、歌代チアキに流れるセイレーンの血が原因ではないかとの事だった。
しかし、原因が分かっても治療法までは分からない。
爪が生えたとして、今のところ、チアキの声は元には戻らないのだ。戻る見込みすら、ないのだ。
「うちはもう、一生うたわれへん」
「そんな事ないだろ。うたおうと思ったらうたえるじゃないか」
チアキは一を睨み付け、また、顔を伏せる。
「無理。声、変やもん」
「変じゃねえよ。それに歌ってのは、声だけじゃないんだろ。お前がそう言ってた、気がするんだけど」
「言ってへん」
「思いってのが大事なんだろ？　声なんてのは、二の次じゃないのか」
詭弁だった。それが分かっていながら、一はそう言ったのだ、
「うっさい。ボケ」
「気長に待とうよ。付き合うからさ」
チアキはもう、返事すらくれなかった。

「はーい、皆コップ持ったー？」
糸原の気楽な声が響く。
アパートの前の、ちょっとした庭らしき空間に置かれたチアキのテーブル。そこを中心に、チアキを除いた総勢十名にも上る人間が紙コップを掲げた。
「お兄ちゃん、チアキはイイの？」
「……放っておけって言われた」
一はちらりと、アパートの隅に座り続けるチアキを見遣る。彼女も同じ輪に入って欲しかったのだが、このメンバーだと彼女一人の都合に付き合い続けるのも、ご機嫌を取るのも困難なものに思われた。
誰が何をどう言おうが、結局はチアキの意思によって決定されるのだから。
「ねえ、しのちゃん。早く始めようよー」
「こういうのは音頭でも取って気分盛り上げんのよ」
「オンド？　ね、お兄ちゃん。今からアタシたち踊るノ？」
「そっちの音頭じゃない。あ、字は同じだけど」
「ああ、良いわね、踊ろうかしら。ヤンキー、パラパラでも安来節（やすぎぶし）でも構わないから踊りなさいよ」
「てめェ独りで踊ってろ」
一は額を指で押さえた。
このままでは一向に引っ越しの作業が進まない。
「おい坊主、もう飲んで良いだろ？」
「駄目よ！　誰かに踊ってもらわないと駄目、つまんないじゃない。良し、ナナ子、あんたいきなさい」
「どこに行けばよろしいのですか？」
「踊れって言ってんのよ」
「申し訳ございません。私には舞の機能はプログラミングされてい

ないのです」
　一は頭が痛くなってきた。
　このメンバーを纏める事など誰に出来るのだろうか。
「……神野君」
「すみません一さん、俺には……無理です」
「堀さん」
「いやあ、皆さん楽しそうですね」
　溜め息を吐き、一は律儀にも掲げたままだった紙コップを下ろす。
「あの、落ち着きましょうよ。早くしないと日が暮れちゃいますって」
「んー？　何よ一、私に歯向かおうっての。あ、今唐突にハムが食べたくなってきた。買ってきて」
「……糸原さん、調子乗り過ぎですよ」
　糸原は目を細め、にやにやと嫌らしく笑っていた。
「じゃあ、あんたが乾杯の音頭取りなさいよ」
「ええっ？」
　全員の視線が一に向く。
　一は視線を反らしつつ、しかし四方八方から注がれる視線からは逃げ場がないと判断した。
「分かりました……」
　この、混沌すら逃げ出すであろう状況には諦めが肝心である。一は咳をして喉の調子を整えた。
「えー、本日はお日柄もよく、冬の日もうららかに晴れ……」
「上司の結婚式じゃないんだから、もっと砕けなさいよ」
　一はもう一度咳払いをする。
「レディィィスアアンドジェントルマン！」
「お兄ちゃん、発音が変」
「……拝啓」
「堅くなってンじゃねーか」
「……皆様、本日は歌代チアキの引っ越し準備の為にお集まり

頂き、まことにありが」
「え、ボク？　はじめ君、ボクがどうしたの？」
「立花、お前じゃないから黙っとけ」
一は三度目の正直とばかりに咳払い。
「……皆様、本日は歌代チアキの引っ越し準備の為にお集まり頂き」
「飽きた。一、なんか芸でも見せて」
「糸原てめえいい加減にしろよ！」
糸原は見る者を底冷えさせるような視線を一に送った。
「――もっぺん言ってみなさい」
「一番、一一、うたいます！」
力関係は悲しいほどにはっきりとしている。
一は紙コップをテーブルの上に置き、息を吸い込んだ。
「よっ、係長！」
北の、寒気を誘発させるような掛け声を皮切りにして拍手が起こる。
「うたいます。聞いてください、俺の十八番、エマニエル夫人の――」
「――なんてもん十八番にしてんのよ！」
拍手は止み、一には糸原のパンチが飛んだ。
「大学じゃ受けが良かったのに！」
「そりゃお前笑われてたンだよ」
「だったらもううたわないっ、うたわないもんね！」
一は地面に膝を付いたまま半泣きで叫ぶ。
「あんたそんな態度をとって良いワケ？　ナナ子、やっておしまい」
「かしこまりました。一さん、失礼します」
「失礼すんじゃねえよ！」
ナナが一に飛び掛かると、周囲の熱気は狂気から狂喜へと変わっていった。
その光景は馬鹿げていて、くだらなくて、

――楽しそうで。

一人の少女の、凍り付いていた心を溶かすには充分に過ぎた。

「アホやなー、あんたら」

その少女の掠れた声は不思議なくらいに、暴れていた全員の耳朶を打つ。

「……歌代、お前……？」

一は目を見開いた。

チアキは自らに巻かれた包帯を解いていたのだ。片手に解き切ったそれを持ち、不機嫌そうに面々を見やっている。

「芸が見たいんやろ？　見せたるわ」

だが、彼女の声からは不機嫌の色など露も感じさせない。むしろ、堪えがたいほどの喜びが溢れていた。

「……師匠、こっち来て」

ナナはあっさりと一を解放し、一は無言でチアキに近付いていく。

誰も彼もが、彼女の――歌姫（チアキ）の声に耳を奪われていた。

「うち、うたうわ」

「良いのか……つーか、大丈夫なのか？」

「師匠の変な歌聞かされるよりはマシやろ」

一は頭を掻いて、早田たちには受けた十八番を馬鹿にされたような気分に陥る。が、それ以上に、チアキがうたってくれると言ったのが嬉しかった。そして、期待感に満ち溢れていた。声こそ掠れているが、関係ない。もう一度、彼女の清廉な歌声を聞けるのだから。

「せやから、師匠……手ぇ握っててて」

「手って、お前怪我してんだぞ」

チアキの手は微かに震えていた。

「ええから、お願い」

一は何も言わずに、指を絡めて握ってやる。

チアキは身を強張らせ、痛みを耐えている様だった。

「痛かったら言えよ」
「痛くない」
これ以上は何を言っても無駄と判断し、一は彼女の好きにさせてやろうと決める。
「何、うたうんだ？」
「えっと、な」
チアキは恥ずかしそうに、一の耳元でタイトルを囁いた。
「ああ、それなら聞いた事があるよ」
「……う。恥ずいわ」
「ヘイっ、お兄ちゃんっ！　いつまでチアキとシェイクハンドしてるノ！？」
ジェーンの甲高い声を受け、一は焦りながらも、歌が終わるまでと返す。
「……ずっとがええねんけどな」
「何か言ったか？」
チアキは息を吸い、答える代わりに、握った手に力を込めた。
「うち、こんな世界嫌いやった。皆死ねばええって思っとった。消えたらええねん、そう思っとった」
一は黙って耳を傾ける。
「……うち、こんな体やからな。色々、あってん。せやけど、師匠。師匠と出会えて、ホンマに良かった」
「俺もだよ」
「……ま、真顔で言うなや、そんなん。……ほ、ほんでこっちに来てあの公園で笑っとる奴ら邪魔してて。でも、あの、でもな……」
「聞かせてやろうぜ」
「師匠……？」
「お前の思ってる事だよ、歌代。言葉じゃない。歌にして届けてやろうぜ。俺たちだけじゃなくて、そうだな、とりあえずこの街の奴ら皆にさ」
チアキは目を丸くして、頷いた。

「――――師匠、好きやで。嘘やない」
「ああ、俺も好きだぜ弟子一号」
「……鈍感」
「？　おっしゃ、お前は俺が育てた自慢の弟子だ。いっちょ聞かせてやれ、うたってやれ」
一は笑ってチアキの肩を叩く。
チアキは、悪戯な笑みを浮かべて一層強く一の手を握った。
「今から、俺の一番弟子が心を込めてうたいます。聞いてやってください」
一は言葉を区切り、
「皆一度は聞いた事があるかもしれません。曲名は――――」
高らかに、歌い上げた。

風のいたずら

男は悪い事をしました。
男は悪人でした。
だから殺されました。
「お前には地獄へ行ってもらう」
男は霊界で男に言われました。
「いや、俺にはやりたい事がある」
男は男を言葉巧みに丸め込みました。
「良いだろう。お前に二度目の生を与えよう。だが、もう悪い事はするでないぞ」
男は喜び、二度目の生を得ました。
「ははっ、やったぞ」
男はまた悪い事をしました。
「私との約束を破ったな、許さんぞ」
男はまた霊界で男に言われました。
「お前には天国も地獄も相応しくない。生きる事も死ぬ事も許されない」
男は男に告げました。
生きる事も死ぬ事も出来ず、天国にも地獄にも行けず。
悪さをした男の居場所はこの世のどこにでもなくて、どこにでもありました。
それ即ち、煉獄。
しかし、男を哀れに思った悪魔は彼に、地獄の劫火から燃える石炭を一つ渡しました。
「これを使え」
男はそれを持ち、煉獄をさ迷い、彷徨い、彷徨って。

今日のオンリーワン北駒台店はやけにうるさかった。
お菓子の棚に群がる男の子。遠巻きに眺める女の子。男の子の中心に鎮座する、男。
「なー、どれが当たりなんだよマスター」
「早く教えてくれよー」
男は落ち着けとばかりに肩を竦めてみせる。
「弟子二から六号。今回のパックには罠が施されているんだ、良く見ろ」
「えー、どこだよー？」
「ここだ、この星の部分。こっちは星の、この部分が山に隠れているが、こっちは隠れていない」
「あー、マジだー！」
「すげー、さっすがマスター！　でもさ、どっちがレア入りなんだよー」
男は力なく首を振った。
「残念だが、どちらかは分からん。この地区の誰かが、裏切りである買い占め行為に走ったんだろう。パック数が少な過ぎて、統計が取れんのだ」
「じゃあだめじゃん！」
「案ずるな弟子四号、何の為に俺がいると思う？　ふっ、どちらか分からないのなら両方買えば良い。その上でどちらがレアかを判断すれば万事解決」
感嘆の声が男の子たちから零れる。
「何言ってるかわかんねーけどマスターすげー！」
「ふっ、そう誉めるな」
男は立ち上がり、トレーディングカードを二袋と、お菓子の山を籠に入れてレジに持っていく。
「三森さん、お願いします」
「馬鹿だろ、お前」

店の外で子供たちに囲まれている一を眺めながら、三森は退屈そうに頬杖をついていた。
「お兄ちゃん、また遊んでる」
「……また？」
ジェーンはレジ前で行っていた納品作業の手を止めて目を細める。
「最近あの子たち良く見るのヨ。お兄ちゃん、コドモみたい」
「はっ、くだンねー。ガキと遊んで何が面白ェんだかね」
「そうカシラ？　アタシは好きだケド」
「……どうせ、てめーはあいつが何やってても良いンだろーがよ」
三森は溜め息を吐き、煙草に火を点ける。
「ミツモリ、店の外でスモーキング。ＯＫ？」
「オッケーじゃねーよ。私の勝手だろうが、意見すンのはいっちょ前に背が伸びてからにしやがれ」
「良いもん、ミツモリのおきゅーりょー下げちゃうから」
「なああっ！？」
ジェーンは鼻歌を口ずさみながらバックルームに入っていった。

最近、やけに小さい子に懐かれている気がする。
一はふ菓子を齧りながら、ぼんやりとそう思った。
「おいニンゲン、早くシルフ様にもそれをよこせ！」
「……お前のせいだな」
「シルフ様がなんだって？」
何でもない。一は投げやりな手付きでふ菓子を放る。
「う、わ、と、とっと……バカ、何すんのさ！」
「お前がお菓子とかおもちゃねだるから、しかもその注文が細かいもんだから、俺の方が日に日にガキの遊びに詳しくなっていくんじゃねえか。どうすんだよ、近所の子供にマスターって呼ばれてんだぞ俺」

「そなの？　でもマスターってかっこいいじゃん！」
「ん、んな訳ねえだろ！」
実は満更でもなかったりする。
「それよりさー、今日はいっぱい袋持ってるよな。何が入ってんの？　あ、新しく出たカード？」
「そりゃ五号に取られた。レアだったんだけどなー」
「えー！？　バカバカバカっ、シルフ様のも取っとけよー！」
「だってお前金払ってくれないじゃんよ。俺だって慈善事業やりたい訳じゃないんだ」
「ジゼンジギョーってなんだよー！」
一はシルフの口にスナック菓子を突っ込んで黙らせた。
「これはお土産の本、とかだよ。俺は今からタルタロスに行って、とある人に渡すんだ」
シルフは大人しく菓子を齧りながらも、小首を傾げて一に問う。
「タルタロスってあの暗いトコじゃんか。ニンゲンなのに、平気なの？」
「……？　そこには人間もいっぱいいるぞ。あ、そうだ、お前も来るか？」
「えええっ！？」
シルフは嫌そうな顔をして、面倒そうに声を上げた。
「嫌なら来なくて良いよ」
「んー、いや、シルフ様も行くぞ。ニンゲン、お前だけだと危ないからな」
「別に危なくないよ。今までにだって結構行ってるし」
「行くったら行く！　危ないったら危ないの！　シルフ様の言う事聞けよバカ！」
一はシルフに頭を叩かれながら、久しぶりに会う、未だ名も知らない彼女の事だけを考えていた。

タルタロスには存外すんなりと入れてしまった。
得体の知れない子供を連れていたので、一は警備員に止められるものだと思っていたのだが、
「あなたの知り合いでしたら、構いませんよ」
シルフが無害だと判断されるのは早いものであった。

「ニンゲンっ！　もっと早く飛べよっ」
「飛べるかよ。つーか袋持ってくれたら助かるんだけど」
シルフは真っ暗な階段を滑るように下っていく。
今日の彼は、緑色の羽帽子を被り、星のマークがそこらにプリントされた半袖のTシャツの上にチェックのジャケットを羽織っており、半ズボンを履いていた。
「なあ、寒くないのか？」
「別にー。それより、暗いなここ。まるでさー」
「まるで、何だよ？」
「……何でもー」
一はシルフの煮え切らない態度に疑問を感じたが、どうせ追求してもはぐらかされるだろうと思い、黙っておく事にする。
かび臭く、先の見えない長い階段を二人は進んでいた。
十分ほど下ったところで、階下から頼りない明かりが見えてくる。
一は袋を持ち直し、くるくると中空を回っているシルフに声を掛けた。
「……なあ、失礼な事はするなよ」
「誰に口を利いてんのさ。ニンゲンに言われなくてもシルフ様は何もしないぞ。……大体、失礼なのはこの世界の方だと思うし」
「世界？」
シルフは頬を膨らませ、バーカと一に毒づく。
「気付いてないのかよ、ホントお前ってダメなんだな。そんなんでよくも生きてこられたもんだよ」

「もうお菓子あげないからな」
「……ま、まあ、その為にシルフ様がいるんだから気にしちゃダメさ。うー、あー！　ごめん、謝るからお菓子ください」
階段を下り切ると、老朽化した廊下に降り立つ。
廊下の天井には申し訳程度の照明が取り付けられてはいるのだが、一にとってはないも同然、酷く心許なかった。
一はゆっくりと歩く。靴音がそこら中に反響して落ち着かない気分だった。
「ん、ニンゲン、あのドアか？」
「そうだ。あんまり騒ぐんじゃないぞ」
「分かってるって！　……おおっ」
一たちが突き当たり、行き当たりの赤錆びた扉の前まで来ると、扉は自動的に開く。シルフは魔法だ、なんて楽しそうに叫んでいた。
ここに来るたびに起こるいつもの事だったので、一は驚かなかったが。
「あのう、今日は俺だけじゃなくてもう一人……一匹来てるんですけど、大丈夫、ですか？」
一は半分だけ開いた扉の向こうにいるであろう人物に話し掛ける。が、返事はない。尤も、彼女が拒むつもりならば最初から扉が開く筈はない、入って来いと言っているのだろうと判断し、一は扉を押し開けて部屋に足を踏み入れる。
まず最初に、相変わらず何もない部屋だと一は思った。
椅子と机しかない殺風景な部屋に気後れしながらも、
「お久しぶりです」
一は口火を切る。
「ふふ、そうね。お久しぶり、ハジメ」
「座っても？」
「嫌だって言ったら？」
「困るなあ」
一は女性に笑い掛けた。

その女性は部屋の中だと言うのにフードを深く被っていた。どんな事を考えているのか、表情も、顔ですら分からない。フードからは、鮮やかな赤で彩られた唇だけが薄っすらとそれを覗かせている。黒いローブ。白い肌。細い指。硝子の様に脆く美しい声。

――ミステリアス。

その表現が一番彼女に近い。そう思いながら、一は椅子に座り、女性と向かい合った。

「頼まれてた漫画の新刊、持ってきましたよ」

「あら、本当？　嬉しいわ、続きが気になっていたのよね。まさか主人公の父親も死神だったとは、って場面で終わっていたから」

「苦労しましたよ。ウチの店は漫画の仕入れを少なくしているみたいで」

「ふふ、感謝しているわ」

女性はそう言いつつも、窓から見える、荒れ果てた景色を眺めているシルフに注意深く目を向けている。

「……今日はボディガードを連れてきているのね」

「あいつが？　違いますよ。アレは……」

「ハジメの息子にしては落ち着きがないように見えるわね」

「違います。ああ、兄弟でもありませんから」

一は苦笑した。

「そうなの？　ふふ、良いわ。それよりいつものように話を聞かせてちょうだい」

一は思い付くままに口を開いた。

最近になって煙草を止めた事、学校に魔女が現れた事、公園にセイレーンが現れた事、色々な事を話した。

女性は一が話している間、時折相槌を打ったり、疑問に思った事を尋ねるだけで、基本的には黙っているだけである。

話しやすい、と言えば話しやすいのだが、女性はどんなにくだら

ない話題にも面白そうに聞いていてくれるので、一は話が途切れるのを少しだけ恐れていた。

一時間近くは喋り続けていただろうか。それでも、いつかは話題も尽きる。疲れも見えてくる。

「ハジメは自分の力を積極的に使わないのね」

一が次に話す事を考えあぐねていると、女性はおもむろに口を開いた。

「……そう、ですね。何だか、力を使うと、自分が変わってしまうような気がして」

「賢明ね。話を聞く限り、あなたの所持する能力は特殊なモノみたいだから」

「そうなんですか？」

聞き返しつつ、一は納得していた。時間を止め、動きを止めるなんて能力は他に聞いた事がない。特殊と言われれば、まさにその通りなのだろう。

「ええ。それと、気を付けなさいね、ハジメ。あなたの蛇姫に。先天的に授かったものならともかく、アイギスと呼ばれている道具に備わった力なのでしょう？　強過ぎる力には何らかの制約があって当然。力を使うのは構わないけど、くれぐれも使われないようにね」

「……分かってます」

だからこそ、頼りたくはなかった。アイギスの防御力ならともかく、メドゥーサの力には不安定で、不確定で、不明瞭な部分が多い。一が女神（アテナ）からこの力を得て大分経つが、全面的には未だ信頼出来ていない。

「変わってしまうと言ったけど、その感覚は間違いじゃないと思うわ」

女性は机の上に肘を突いた。食事中ならば決して褒められない所作なのだが、彼女ならば、そんな仕草ですら一の目には上品に映る。

「ハジメ、力を使い過ぎると世界が変わるのよ。いいえ、あなたの世界が作り替えられてしまうと言った方が正しいかしら」

「……世界が？」
「ええ。あなた、最近変わったと思う事はないかしら。例えば、嗜好の変化ね。好きな食べ物が変わったとか、嫌いな食べ物が増えた、とか」
「うーん。食事に関しては前と変わってないと思いますけど。あ、でも考え方は変わったかも」
「ふふ、分かるわ。今のハジメには確固としたモノが根付いているから。成長したのね。ふふ、今のあなた、素敵よ」
ストレートに褒められて、一は照れてしまった。耳が赤くなり、動悸も早まる。
「ふふ、いじめてしまったかしら。なら、話を変えましょう……魔女と歌姫の事なのだけれどね」
「は、はい」
「どうして、効率良く力を使わなかったのかしら？」
一は口ごもってしまった。女性の口調は責めるようなものではない。嗜めるような、どこか優しい口調である。
「力に使わなければ良いだけで、使うなとは誰も言っていないし、ハジメだってそう思うでしょう？」
「……けど、俺はなるべく力を使いたくなかったんです。相手は、人間だった。だから……」
一は俯き、机の上に置かれた単行本に視線を定めた。表紙に描かれた人物は能天気に笑っていて、彼の心をいらつかせる。
「あら、またいじめてしまったわね。良いわ、顔を上げなさいハジメ。あなたには笑顔が似合っているの。……だから、お詫びにイイ事を教えてあげるわ」
「良い事、ですか」
言われた通りに顔を上げ、一は女性の口元に目を遣った。
「それとも、イイ事をしてあげる方が良いかしら？」
「……良い事は教えてもらうのが一番です」
「ふふ、賢明ね」

女性は妖しげに笑うと、単行本を指でなぞる。
――なんか、エロい。
「二つ、教えてあげる。ハジメ、あなたはこれから、名前に気を付けなさい」
「名前、ですか？　えと、人の名前とか？」
「ええ、そうよ。ヒトの名前に気を付けなさい」
そう言われても、どうにも要領を得ない話ではあった。
「あの、もう少し詳しくお願いします……」
「そうね。あなたにとって、いえ、あなたの力にとって、名前とは強い意味を持つのではなくて？」
「えーと……」
「ふふ、隠さなくても良いのよ。私には分かってるんだから。……だから、名前には細心の注意を払いなさい。もし、あなたに名を教えたがらない者がいたら疑いなさい。その人物はあなたの敵になる可能性が高いから」
「俺の、敵に？」
女性は鷹揚に頷く。
「もっと具体的に言うのなら、フルネームね。あなたの知り合いの中に、苗字と名前、両方を知らない人はいるかしら？」
問われ、一は思い浮べてみた。
「……います。でも、その人が敵だとは……」
「そう？　なら良いのよ。でも、今後出会う人物には気を付けなさい。その中に、ハジメを脅かす存在がいるのだから」
――断定、か。
一は目の前の女性について考えを巡らせる。この人は確実に、アイギスがどんなものなのかも、メドゥーサの力の、恐らくは全てを理解しているのだと、そう、思った。
そして。
「俺が名前を知らない人は敵、ですか」
「ええ、そうよ」

一は深く息を吸い込む。同時、女性のものであろう甘い香りが鼻孔を貫いた。
「だったら、あなたは敵、なんですか？」
「……ハジメ、私はあなたの事が好きよ？」
「は、はぐらさないでくださいよっ」
「がっつかないの。もっと余裕を持たなくちゃ、ね？」
女性は自身の人差し指を、一の唇に押し当てる。
柔らかな感触と、女性の突然の接近に、一は椅子から飛び退いた。
「あら、初心（うぶ）ねえ」
「卑怯ですよ……」
「二つ目のイイ事」
女性は指を二本立て、余裕たっぷりに微笑む。
「一度しか言わないから良く聞いてね。エレン。それが、私の名前よ」
「エレン……」
――エレン。
良い名前だとは、一には思えなかった。

「なー、さっきから調子でも悪いのか？」
タルタロスを出た一とシルフは駅前のベンチに座っていた。
人通りはあるが、シルフも空を飛び回らずに大人しくしていれば普通の子供にしか見えない。道行く人は、一とシルフを兄弟とでも思っている事だろう。
一はここに腰を落ち着かせてから、タルタロスでの、女性――エレン――とのやり取りを思い返していた。
名前。
名前に気を付けろと、エレンは言った。
即ち、アイギスの使い手である一に苗字、名前、本名を告げない者は敵であると、そう、言ったのである。

一は女性に尋ねた。あなたは敵か、と。彼女は違うとも言わなかったが、初めて名前を教えてくれた。……名前、だけを。

だから、一には分からない。エレンが何を言いたかったのか。敵なのか、味方、なのか。何も分からないままだった。

「はあ……」

占い師みたいな人だと、そう思っていたのだが、そんなレベルの話ではないと一は思い知っている。

タルタロスから出た事がないと言うのに、エレンは外の世界の全てを理解しているような響きで話していた。

「なあ、おいニンゲンっ、返事くらいしろよ！」

「あ、ああ、悪い」

シルフは一の隣に腰掛け、頬を膨らませている。

「むー、シルフ様は喉が渇いた。ジンジャーエール買ってこい」

「またそれか？　歯、溶けちまうぞ」

「え！？　と、溶けちゃうの？」

一は立ち上がり、そうだよと嘯いた。

「なあ、シルフってさ、名前なの？」

「へっ？」

シルフは目を丸くして一を見上げる。

「だから、シルフってのは種族名じゃないのかって。ほら、俺は人間って種族だけど、一一（にのまえ）って名前もあるからさ。だから、お前にも名前があるんじゃないか？」

「……ない」

「ない？　本当に？」

エレンの話を聞いていたせいか、一は疑いの眼差しを向けてしまった。

「あ、お、お前、さっきの話を聞いてたから！」

意外に鋭い。

「まあ、仕方ねえだろ。で、実際のところどうなんだよ」

シルフはトマトみたいに顔を真っ赤にしていたかと思うと、寂し

そうに俯いた。
「……本当、ないのさ。シルフには名前なんていらないから」
「どうしてだ？　あー、名前考えるのが面倒だからか」
「違うもん！　シ、シルフ様には名前なんてひつよーないからさ。おまえら人間はたくさんいるから、区別する為に名前がいるんだろ？」
　一は強く否定せず、曖昧に頷いておく事にする。シルフの意見は全面的に同意出来ないものだったが、彼の機嫌を損ねるのがより面倒で、そうした。
「でも、シルフ様は違う。シルフ様はこの世界に一人だからな。名前で区別しなくて良いのさ。シルフってのが、シルフ様の名前。……それで良いんだもん」
　たまに忘れる時もあるのだが、一は目の前の子供が風の、精霊だと思い出す。
「ふーん。ま、お前の考えてる事は分かんないな」
「ふんっ、ニンゲンなんかに分かられてたまるか。でも、お前ならシルフ様の名前を考えても良いぞ」
「……いや、遠慮しとく」
「なんでさっ！？」
　シルフは腕をぶんぶん振り回し不満をアピールしていた。
「あー、俺ネーミングセンスがないんだよ」
「ふ、ふーん？」
「それでも良いなら、ちょっと考えてみるか」
「い、良いのっ？」
　一は腕を組んで肯定する。
「……お前は一応風の精霊らしいからな。じゃあ、又三郎（またさぶろう）ってのはどうだ？」
「やだ。かっこ悪い」
「うーん、ダウンバーストは？」
「やだ」

「一久か、正三」
「やだっ、またさぶろーと何が違うのさ！」
「注文の多い奴だな。良し、伊勢湾台風百五号！　かっちょいーだろ！」
「お前バカにしてるだろ！？」
シルフはベンチの上に立って叫んだ。
「もっと大人っぽい名前にしろ。シルフ様に子供っぽい名前は似合わないんだからな」
「どう見てもガキじゃねえか、お前。正三とか、充分渋いと思うんだけどなあ」
「そこだよっ、何で男の名前なのさ！」
「――は？」
一は目を丸くしてシルフを見遣る。
シルフは腕をぐるぐると回して憤っているらしいが、一には理由が分からない。男に男の名前を付けようとして、何が悪い。
「いや、お前男じゃん」
「ば、ば、ばあああ！？　バカだ！　バカじゃないのかお前！」
「……お前に馬鹿と言われる筋合いはないぞ」
肩で息を吐きながら、シルフは自動販売機を指差した。
「ジンジャーエール、買って来い」
「てめえ、金を払うのは誰だと思ってんだ」
「良いから買って来い！」
周囲がざわつき始める。一はこれ以上注目を集めるのは好ましくないと思い、仕方なくポケットから財布を取り出し、自動販売機に向かった。

買って来た缶を見せると、シルフは礼も言わずにそれを受け取った。イライラした様子でタブを押し開け、缶の中身を小さな体に勢い良く押し込めていく。

「もっと美味そうに飲めよ」
「……うるさい」
一も購入した缶コーヒーを開けて、シルフの隣に腰を落ち着けた。
「なあ、なんで怒ってんの？」
「シルフ様をバカにするからだ」
「男に男の名前を付けるのがそんなにおかしいのかよ」
シルフは目を三角にして一を睨み据える。
「ニンゲン、お前はせーれーの事を何も分かってないんだ」
「悪かったって。だからさ、何を言いたいんだよ？　その、なんだ。言ってくれりゃ頭の悪い俺にも分かるんだし」
どうして自分が子供のご機嫌伺いをしなければならないのか。そう思いつつも、一は隣に座る子供が風の精霊、シルフだという事を忘れた訳ではない。こうして軽口を叩き合ってはいるが、力の差は歴然としている。駒台の風を支配していると豪語するシルフが本気になれば、今、この場この時に超弩級の嵐が巻き起こっても不思議ではないのだ。
「せーれーってのはすごいって前に言ったよな。その中でも特に、シルフ様みたいな四大せーれーってのは自由な存在なのさ」
自由過ぎて困るくらいである。一は相槌を打ちながら、そんな事を思っていた。
「どれくらい自由かって言うと、姿とか、年齢とか。お前らニンゲンが生きてく上でどーしようもなく縛られてるモノが、シルフ様たちには関係ないのさ」
「へー、そりゃ便利だな」
適当に相槌を打ってから、一は缶コーヒーを啜る。
「だから、性別とかも自由なの」
口に含んでいた液体を噴き出しそうになった。
一は軽くむせながらもシルフの姿を確認する。
精霊が人間とは違う存在だとは何となく分かっていた。だがその認識は精々、ソレと同じレベルで、である。人間よりも少しだけ上

位の存在として、シルフの事はソレと同種だと認識していたのだ。
「は、はあっ？　じゃ、じゃあお前女なの？」
「むー、シルフ様は女じゃないし、男でもない。でも、女でもあるし、男でもある」
「……無茶苦茶な」
姿も年齢も性別も自由。自由に、変えられる。
俄かには信じられない話だが、目の前の子供は少し前までの自分ならばその存在すら信じられなかったであろう事を思い出し、一の頭は自分でも驚くくらい、自然にその事実を受け止められた。
「ちなみに、今は？」
「男」
「あ？　だったら又三郎でも良かったんじゃないか」
「うるさいなっ、シルフ様が嫌だって言ったら嫌なんだよ！　もっと良い名前を考えないお前が悪いんだ！」
一は空になった缶を弄びながら、ベンチに深く腰掛け、背もたれに頭を預ける。
「でもさ、今のお前に付けられる名前なんてそんなもんだぜ。自由だってのは分かったけど、結局ガキのまんまじゃん。太郎君とか次郎君とか、お似合いだと思うけど？」
「バカ！　バカバカバカバカ！」
シルフはベンチから立ち上がり、涙目になって一を怒鳴り付けた。
「うわっ」
まだ半分程度中身の入ったジンジャーエールの缶を投げ付けられ、一はベンチから飛び退く。直撃は避けたが、缶から飛び散った液体が服に跳ねてしまっていた。
「何すんだクソガキ！」
捕まえて尻でも蹴り上げてやろうかと思ったが、シルフはとっくのとうに一の手が届かない空の上にいる。
「――――！」
「やべ……」

駅前は空を飛ぶ子供を見つけた人々の悲鳴やら嬌声やらで満たされていた。
一はそっと、その場から抜け出す。
「ガキが」
去り際に見上げたシルフの後姿は実に気持ち良さそうで、空を飛べるのが少しだけ羨ましいと思ってしまった。

スラッシングパンプキン

時刻は午後十時を少し回ったところだろうか。
その時刻、駒台のとある通りを男が歩いていた。
なんら珍しい光景ではない。男が道を歩く。たったそれだけの事である。
「おい、何やってんだ！」
だが、男の歩いている道と言うのが歩道ではなく車道だったならば、話は別だ。
くたびれたスーツを着て、酩酊しているのかよろよろと、頼りない足取りで歩く壮年の男。
幸いにして、車の数は少ない。が、決して零ではない。男を避けて通ってはいるのだ。
誰かが男を大声で呼んでいる。戻れと叫んでいる。
しかし車道を歩く男は聞く耳を持たず、ふらふらと、しかし何かに導かれているかのように歩き続けていた。
既に通りには多くの野次馬が集まっている。携帯を片手に男の姿を撮影する者、男に呼び掛け続ける者、ただ、黙ってその光景を眺める者。
やがて男は立ち止まった。尤も、誰かの呼び掛けに応えた訳ではないらしい。彼の視線は虚ろで、中空をさ迷っている。
「危ないっ！」
悲痛な声が響いた。
男の前方から、大型の自動車が向かって来たのである。
多くの人々が男に目を向ける中、自動車は止まらなかった。自動車の運転手が気付かなかったのか、気付いていたのかは定かではない。
それでも、自動車は、男を――。

「糸原さん」
「んー、何ー？」
銭湯から帰ってきた一と糸原は、部屋で寝転がっていた。
一は畳の上で、糸原はこたつの卓の上に、である。
「糸原さんて、糸原四乃（いとはらしの）、って名前ですよね？」
糸原はジャージの裾を扇いで風を送っていた。風呂上がりで上せているのか、ぐてーっとした様子で一を見遣る。
「そーよー、あー、ちょっと湯船浸かり過ぎちったかもー、にのまえー、扇いでー」
一は立ち上がり、うちわの代わりになりそうな、適当な薄さの求人誌を拾い上げる。
「今日は少し寒かったですからね。雪でも降るんでしょうか」
「積もったら雪合戦しようよー」
「嫌ですよ。糸原さん、雪玉に石詰めて殺傷力付けるタイプでしょ」
「だって合戦って言うくらいだもん。命掛けで戦わなきゃ面白くないじゃーん」
一は黙って、糸原を扇いでやっていた。
「あー、気持ち良いー。でもお腹空いたー」
「そうですね、何か作りましょうか」
「おあー、でもあんたがご飯作ると、誰が私を扇いでくれんのよー？」
糸原はまだ乾き切っていない髪を弄びながら情けない声を漏らす。
「じゃ、もう少し扇ぎましょうか」
「嫌ー。扇ぎながらご飯作れば良いじゃないのよー」
「俺が二人いれば可能ですね」
一は扇ぐ手を止めて冷蔵庫に向かった。
「超高速で動けば良いのよ。しゅびびーんっ、しゅばばーんって。そうすりゃ分身くらい出来るんじゃないの？」
「漫画の読み過ぎです」

冷蔵庫の中身が貧弱である事を確認した一は玄関に行き、サンダルを履く。
「んー？　チアキん呼びに行くの？」
「ええ、まだあいつ手の怪我が治ってないから」
先日の事件以降、一たちの住む中内荘に越してきた歌代（うたしろ）チアキ。
一は、まだ怪我が完治していない彼女の面倒を見ていた。
とは言っても、チアキの怪我自体はほぼ治り掛けている。一がやっているのは食事の世話ぐらいのものだった。
一は扉を開け、寒さに身を震わせる。
チアキの部屋は一の部屋の真下に位置していた。階段を軽快に駆け下りた彼は、ノックもしないでチアキの部屋の扉を開ける。
「おーい、味噌くれよ」
「ひあああっ！？」
自室のソファで寛いでいたチアキは飛び上がって驚いた。彼女はさっきまで読んでいたらしき本を取り落とし、顔を赤くして一を睨む。
「ノックしてって言ってるやんか……」
「だって鍵掛かってないじゃん」
一は悪怯れる様子を見せないで、勝手にチアキの部屋の冷蔵庫を開けた。
「うおっ、空っぽじゃねえか」
「だって師匠らがようさん使うねんもん。買い出しが追い付かへんわ」
チアキは禍々しい髑髏が大量にプリントされた長袖のTシャツとホットパンツというラフな格好をしている。
「お前、その指で買い物行ってんのか？」
彼女は両指に痛々しいくらいの絆創膏を貼っていた。一はその事を心配して声を掛けたのだが、
「アホ、それぐらい出来るわ。なあ、それよりうちんトコにも来たって事は師匠のトコにも材料ないん？」

問題はないらしい。
「ああ、悪いけど」
「ホンマに悪いわ。けど、せやったら買いに行かなあかんなあ。ん、はよせなスーパー閉まってまうで」
「しょうがないな、ひとっ走り行ってくる。歌代、欲しいもんあるか？」
「のど飴」
「……まーた歌ってたのか？　本当に喉大丈夫なんだろうな、お前」
チアキは悪戯が見つかった子供みたいに笑って誤魔化した。
「ま、良いや。ああ、もうちょいしたらお腹を空かせた糸原さんが来ると思う。……相手、頼むな」
「はあっ？　イヤ、イヤやって！　あの人うちのお尻めっちゃ触ってくんねんもん！」
一は返事を聞かずに部屋を飛び出す。

急がないとチアキが食われるかもなあ、なんて思いつつ、一はのんびりとスーパーに向かっていた。
一が良く利用するスーパーは午後十一時には閉店する。今は午後十時を三十分回ったところだろうか。部屋を出る前に慌ただしく確認してきたので正確なところは分からないが、まだ余裕は残されていると踏んでいた。
「ん？」
ダラダラと歩いていると、前方に人影が見えた。こんな時間に学校の制服らしきものを着ているので目に留まったのである。
とは言っても、一には他人を注意する気概はなかった。見てみぬ振りでいようと思っていた、のだが。
「立花さん？」
「ふえ？」
間違っていたらどうしようかと思っていたのだが、一の知る限り

駒台でセーラー服を着ていて、尚且つ竹刀袋をぶら下げている人物は一人しかいない。

振り返った人物は間違いなく、一のバイト先の後輩に当たる女の子、立花真（たちばなまこと）であった。

「こんな遅くにどうしたの？」

「えと、お買物だよ。晩ご飯の用意するの忘れてて」

立花は恥ずかしそうに頬を朱に染めている。

「ああ、そうだったんだ。そこのスーパーまで行くの？」

「う、うん、はじめ君こそどうしたの、あ、お散歩？」

一は苦笑した。

「いや、奇遇だね。俺もスーパーまで行くんだ。あ、良ければ一緒に行かないかな？」

「いっ、良いよ！　一緒に行こう！」

立花は瞳をきらきらとさせて、元気いっぱいに頷く。

「えへへ、やったあ。ご飯を忘れてて得しちゃった。はっじめ君とーおっかいものー、ふふーん」

「大袈裟だなあ。あ、そういや立花さんの家って勤務外専用のマンションだよね？」

「うんっ、そうだよー」

「ここ、通るっけ？　逆方向だと思うんだけど、どこかに行ってたの？」

一はさっきから、その事が気になっていたのだ。

「え、えーとね。お家のベランダにいたらサイレンが聞こえてきて」

「うん」

「何だろうって思ってたら、あっちの通りにいっぱいパトカーとか走って行ったんだ。だからボク、パトカーを追い掛けに外へ出て……」

「ううん？」

一は頭を捻る。この子には動くものを追い掛ける習性でもあるのだろうか。

「パトカーには追い付けたの？」
「うんっ、何かね、結構近くに停まってたみたいなんだ。あっちのおっきな交差点があるところ。でも、人がいっぱいいて何があったか分からなかったんだ。黄色いテープとか、お巡りさんがずらーって並んでて！　ドラマみたいだったよ、ボクわくわくしちゃった」
「……それって、結構大きな事件じゃないの？」
「あ、そういえば道路の真ん中にトラックが倒れてたよ」
車や人が大量に行き交うであろう大通りでトラックが横転。
「やっぱ、大事故じゃないか。怪我した人とかいなかったの？」
「……うーん。分かんないや。あ、でもでも、帰ったらニュースやってるかもしれないよ」
もしそうなら、今頃は糸原辺りが騒いでいる事だろうな。一は一先ず、事故の事は頭の隅に追いやった。
「とりあえず、買い物しようか」
スーパーの前に着いた二人は入り口の自動ドアを潜る。

今日の献立は何にしようかと迷いながら、一はキャベツを手に取っていた。
立花は一の隣で買い物籠を持ったまま突っ立っている。
「……立花さんは晩ご飯どうするの？」
「え、えーと。カップラーメン、かな？」
そんな気はしていた。
失礼な話ではあったが、一には立花が包丁を握る姿が想像出来ない。
「一人暮らしだもんね。寂しくない？」
「う、うん。やっぱり少しは寂しいかな。でも、ボクのペースでご飯食べたりお風呂に入れるから、ちょっと嬉しいんだ」
「九州の実家にいた頃は？　時間に厳しかったの？」
立花は気まずそうに笑う。

「時間、って言うより、ボクに厳しかったかな……」
「そうなの？」
聞いちゃいけない話題だったろうか。一は少し後悔する。
「あ、で、でも厳しいだけじゃなかったから大丈夫だよ。お母さん、優しかったし」
「……そっか」
魔女を蹴散らす勤務外とは言え、立花はまだ十代の学生だ。親元を離れて一人暮らしするのに、寂しくない訳がない。
「あ、立花さん」
「ん？」
一は何故か言い淀んでしまった。自分が何か、決定的な事を聞いてしまいそうで恐くなったのである。
――どうして、ここに来たの？
九州で何かが起こって、『立花』が全滅の憂き目にあったのは聞いていた。立花の影響が及ばない近畿にまで来たのも聞いていた。他にも、色々と。
だが、本当にそれだけなのか。
立花には、何か目的があるんじゃないか。
「……良かったら今度、ご飯食べにおいでよ」
「えっ、良いの？　やったあ！」
一にはまだ、聞けそうにない。
まだ、踏み込めそうにない。
丁度良い。自分にとって都合の良い距離を保っておきたかった。
そうでないと、壊れてしまう。あと一歩でも立花の事情に踏み入ってしまえば戻れない。この、生温く気持ち良い関係が崩れてしまう。
一はそう、予感していた。
スーパーで買い物を済ませた一たちは、閉店時間ぎりぎりになっ

て店を出た。
「ねえ、立花さん。本当に大丈夫なの？」
「う、うん。任せてよ。はじめ君に負けてられないもんね。ボクだって料理ぐらい出来るって証明するんだ」
丸々一玉のかぼちゃを両手で抱えた立花を見て、一は多分、それは大分先の事だろうなあ、と思った。
「包丁とかちゃんと持ってる？　かぼちゃって思ってるより固いよ」
「だ、大丈夫。包丁が無理なら刀でバッサリ斬っちゃうから」
「……怪我だけはしないでね」
シフトに穴が開いちゃうから。とは流石に言えない。
「んー、ね、はじめ君」
「どうしたの？」
「かぼちゃ見てるとさ、ハロウィンって思い出さない？」
――ハロウィンか。
生まれてこの方、一はそのイベントには参加した記憶がなかった。そも、日本ではあまり馴染みがないのかもしれない。
それでも、言われてみれば確かにハロウィンのジャックランタンを連想させる。
「立花さんはハロウィンに何かしたの？」
「んーん、してないよ。あ、でも学校じゃ誰かがお菓子配ってたかも。どうしてだろうね」
「トリックオアトリートって聞いた事ある？」
立花は嬉しそうに首を振った。彼女のポニーテールも一緒に揺れて、犬の尻尾を一に連想させる。
「でも、どういう意味なの？」
「お菓子をくれなきゃ悪戯しちゃうぞって意味だったかな。ハロウィンになると、子供は皆変装して、お菓子をもらいに街を練り歩くんだって」
「ほ、本当に？　ボクもやりたいなー、やれば良かったかなー」
一は曖昧に笑っておいた。

「おっと、それじゃ俺はこっちだから」
「うん、また今度お店で会おうねー！」
立花と別れた一はふと、振り返る。案の定、彼女はかぼちゃを抱えたまま手を振ろうとして、あたふたとしていた。

「遅い」
「いってえっ！」
自室の扉を開けた瞬間、一は恨めしそうな顔をした糸原に平手を食らった。
部屋の中には憔悴し切った様子のチアキが寝転がっている。
「……あいつ、何であんなに疲れてるんですか？」
「さあ？　それよかお腹減ったー、とっとと用意してよねグズ」
「ま、遅くなったのは認めますけどね」
「師匠ー、今日のご飯なにー？」
一はスーパーのビニール袋から食材を取り出し、冷蔵庫に詰め始めた。
「オムライス」
「私、半熟ね」
「うち、半熟嫌いやから」
「統一しろよ！」
なんともわがままなお姫様二人である。しかし結局、何だかんだ言って一は注文通りの料理を作るのだから、仕方がなかった。
「あ、今日はデザートもありますよ」
「ふーん？」
糸原が冷蔵庫を覗き込む。
「これ、何？」
「かぼちゃのプリンです」
「へー……」
残念ながら、不評であった。

翌日。
一は大学の講義を三時限目で終え、アルバイトに向かった。
間食にメロンパンを齧りながら、バイト先であるオンリーワン北駒台店に入る。
「と、とととととっくりおあ鳥取！」
サングラスとマスクをした、怪しい人物がレジ前にいた。
レジではジェーンが未確認動物でも見ているかのような、そんな顔になっている。
「……タチバナ、何、してるのカシラ？」
「ボ、ボクは立花じゃないよっ、それよりどっちなの？」
「どっちって？」
「お菓子をくれるの？　くれないの？」
なるほどなあ、と、一は素直に感心した。成否はどうであれ、立花の行動力には見習うべきものがある。
「ハロウィンだよ、ジェーン」
「お兄ちゃん？　ハロウィンって、もう終わってるヨ」
「一ヵ月遅れの、だよ。ね、立花さん？」
烏の濡れ羽色のセーラー服に、野球帽とサングラス、マスクで変装しているつもりの立花は首を何度も横に振った。ポニーテールが揺れる揺れる揺れている。
「ち、違うよ？　ボク、はじめ君なんて知らないもん」
「それじゃ強盗だよ。言い忘れてたけど、ハロウィンじゃお化けや妖怪に変装するんだ」
「は、はじめ君のうそつき！」
立花はマスクとサングラスを取って床に叩き付ける。帽子はその時の動きで勝手に取れてしまう。
「やっぱりタチバナじゃナイ。ほら、キャンディあげるからお店の中で泣くのはストップ」

「え、本当に？」
「だから、アタシの仕事ジャマしないでよネ」
ジェーンはポケットから飴の包みを取り出す。それを開いて、
「キャッチ！」
投げた。
立花は宙を浮く飴玉に飛び付き、口でキャッチする。危険ですのでよい子は真似しないでください。
「……うわ、スースーする。何これ、はっか？」
「ミントよ。文句言うなら返してちょーだい」
「んー」
「アー！　やめてヨきたない！」
カウンター越しに口を近付けてくる立花から逃げると、ジェーンは一の背中に隠れた。
「ア、アタシのファーストキスはお兄ちゃんにサクるんだから！」
「……サクるって何だよ？」
「サクリファイス。つまり、さ、ささげる」
一はジェーンのツーテールを軽く引っ張り、立花に差し出す。
「俺を何だと思ってんだ。いらねえよ」
「Ｗｈａｔ！？　だったらお兄ちゃんはアタシのテイソーが誰かにスティールされても良いノ！？」
一は少しだけ考え、
「まあ、立花さんとならアリじゃないか？」
無責任に言い放った。
「やったあ、ジェーンちゃんジェーンちゃん、ボクもファーストキスなんだー」
「知らないわヨちょんまげ！　ひっ、あー、どっ、どんとたっちみー！」
「良いじゃない。しのちゃん言ってたよ、こんなのただのスキンシップなんだって。ボクら仲良しなんだから、気にする事ないってばー」

「イイイイトハルアアアアァァァ！」
「これがゆとり教育の弊害か……」
自分の事を棚に上げ、一は独りごちた。

バックルームには不味そうに煙草を吹かす店長がいた。
「ざいまーす」
「ああ、おはよう。早速で悪いんだが、あの強盗を追い返してこい」
店長はモニターを煙草で差す。監視カメラから送られている映像には、ジェーンがモップで立花と立ち回りを繰り広げているのが映っていた。
「お菓子を渡せば帰ると思いますよ」
「菓子？　立花は一体何のつもりであんな事やっているんだ」
「ハロウィンでしょうね。昨夜、そんな話をしましたから」
「そういう事か。……確か、立花の学校は『館』の影響で、まだまともに機能していないと聞いた。大方短縮授業で時間が余り、退屈だったから遊び相手を探していたんだろう」
短くなった煙草を空き缶に押し付けると、店長は椅子の向きをくるりと変え、制服に着替えている一へ目線を送る。
「一、昨日の晩に大きな事故があったのを知っているか？」
「ええ、知ってますよ」
一は何故か不安を覚えた。他愛ない世間話の筈なのに、店長がやけに愉しそうだったから、である。
「トラックが駅近くの大通りで横転して、ファミレスのガラスを突き破った。中々に酷い事故だが、犠牲者は意外と少ない。トラックを運転していた男が一人と、車道の真ん中を歩いていた男の計二名。あとは、被害に遭った店の従業員が飛び散ったガラスで腕を切ったぐらいだな」
昨晩から想像していたよりも大きな事故だったので、一は素直に驚いた。

だが。
「車道の真ん中を、ですか」
「ま、このご時世だからな」
「お酒に呑まれちゃったんですかね」
店長は首を横に振り、否定の意を見せる。
「いや、死体からは薬物反応もなし、アルコールだって検出されなかった。道路を堂々と渡っていた男は確実に素面だったんだ」
「……周りで見ていた人は何か言ってなかったんですか？」
「それが妙な話でな。意識があった筈の男に呼び掛けていた者もいたらしいが、全く反応を示さなかった、と、聞いている。男の視線はどこか虚ろで、足はふらついていて。……まるでただの酔っ払いだな」
「確かに変な話ですね。他に何か聞いてませんか？　現場には野次馬が大勢いたんでしょう」
そろそろ、嫌な予感がしてきた。だが、一は続きを促す。
「……火の玉を見たと発言する者が多々、いたらしいな。手放しでは信じられないが、中には携帯のカメラに写っていたものもあった。合成かどうかは、情報部が審議しているらしいが、目立ちたいって願望持ちの、一般人の虚言だとは笑えないかもな」
「火の玉、ですか。もしかして、ソレ、とか？」
店長は足を組み替え、妖しげに口角を吊り上げた。
「かもな。我々オンリーワンの人間はその可能性を考慮して動かなければならん。一、お前はどう思う？」
「もし火の玉がソレだとすれば、男の人を道路の真ん中へ歩くよう仕向けた。催眠術とか、その手の能力を持っているんじゃないかって思いますね」
「更に加えれば、恐らくはトラックの運転手も火の玉に影響を受けていただろうな。幾ら午後の十時を回っていたとはいえ、あの通りは見晴らしの良い直線だ。ライトも点いていたから、まさか道路の真ん中にいた人間を見落とす訳がない。第一、何にタイヤを取られ

て横転した？　人間一人轢いただけじゃびくともせんだろうよ」
　その言い方では、人知の及ばぬ何かが事故を起こさせたにしか聞こえない。
　一は制服の身嗜みを整えながら考えを巡らせる。
「そもそも、火の玉ってソレなんですか？　鎌鼬や土蜘蛛みたいな、人に悪さをするような妖怪ならともかく、ただの火じゃないですか」
「……私が知っているのは鬼火だな」
「鬼火？」
「皿数え、狐火、宗源火、不知火、送り提灯、陰火に風玉。呼び名は他にもある。日本各地には火の怪異が多く伝わっているからな。さて、鬼火と呼ばれる妖怪だが、大きさはばらばらで、群れるケースも目撃されているが、大した問題じゃない。厄介なのが、人の体力精神力、早い話が鬼火ってのは生きている人間の命を吸うってところだ」
「なら、事故で死んだ人たちは鬼火に殺されたって事ですか？」
「まだ断定は出来ん。情報部から新しい話を聞いてみない事にはな。だが、ソレの正体が何にせよ、そもそもソレではなかったにせよ、火の玉とやらが鍵となるのは間違いない」
　今提示されているヒントだけでは答えが得られない。
　一はとりあえず、フロアに出たら立花にお菓子をあげようと思った。
　彼女に悪戯されては、自分は敵わないだろうから。

　午後十時。アルバイトが終わった一は相方のジェーンと途中まで帰り道を一緒にし、今し方別れたところだった。
　吐く息は白く、時折吹く風は身に染みる。
　家に帰ったら銭湯に行って、糸原たちと遅めの夕食を食べよう。
　そう考えながら歩いていると、前方に人影が見えた。
「はあっ？」

前方の、空に、である。
民家の屋根から屋根へ飛び移り、空中に浮遊し続ける異様なシルエット。
――人間じゃない。
戦おうにも逃げようにも、アイギスがない。その事実に気付いた一は店に戻ろうとして、その場から背を向ける。
「……！」
瞬間、風が吹いた。不思議と冷たくない。むしろ暖かく、心地良い風。
一は振り向こうとして、止めた。その必要がないと判断したからである。
空を自由に駆ける者は、一の目の前に降り立っていたのだ。
「あんたは……？」
――女？
一よりも僅かに身長が高いその人物の胸元は、体型にぴったりと合った半袖のTシャツによって強調されている。スタイルは、良過ぎるくらいだった。彼女の手足は柳のように細く、だが、肌は健康的な白さに保たれている。
「分からないのか？」
女性の声は軽く、そして高かった。
一は暗がりの中、目を凝らして女性の顔を確認する。彼女の顔立ちは、類まれなスタイルに似合わず、あどけなかった。髪の毛は帽子に隠されているが、首元までは伸びているのが確認出来る。
服装は顔立ちよりで、大量の星がプリントされた半袖のTシャツに、ショートパンツと言うよりは、小さな男の子が好むタイプの半ズボンを穿いていた。見れば見るほど、知らない人である。
「いや、ちょっと。どこかでお会いしましたっけ？」
「あ、会ったよ！　お前、もう忘れたのか？」
「……？」
自分よりも年齢は上の筈なのに、何故だか一はそうは思えない。

言動もそうだが、正体不明の女性の雰囲気が幼いような、そんな気がしていた。
大きいのに、小さい。
女性から妙なアンバランスさを感じ、一は一歩退く。
「お、おいっ、なんで下がるのさ！」
「知らない人には付いて行っちゃ駄目って教わってるんで」
「はあ？」
「さいならっ」
一は来た道へ向かって一目散に駆け出した。店までは遠いが、少しでも距離を稼ぐ。今の時間なら三森とナナがいる筈だった。
「待てってバカ！」
――誰が待つか。

ハロー、ウインド

早朝、オンリーワン北駒台店バックルーム。
「本当ですって！　女の人に追い掛けられたんですよ！」
「うるせェな！　分かったって言ってンだろうがよ！」
「痛いっ！　三森さん蹴らないで！」
「うるせェ！」

正午、駒台大学内研究棟一、九十九（つくも）ゼミ教室。
「あれ、早田（はやた）だけじゃん。楯列（たてなみ）いないの？」
「奴は旅行に行っているらしい」
「へー、どこに行ってんだろ」
「やっぱり地獄じゃないのか？」
「やっぱりってのが気になるけど、ああ、そういや家族と東北まで行くって聞いていたような。うーん、あいつがいないと困るなあ」
「何故だ？　私と先輩の二人きりではないか」
「それが嫌なんだよ」
「それが良いのではないか！」
「耳元でででかい声出すんじゃねえ」
「ふむ、では先輩、何かエキセントリックな話をしてくれ」
「昨日女に追い掛けられた」
「あれ？　私は昨日先輩を追い掛けていないぞ。そんな馬鹿な事がある筈ない」
「馬鹿はお前だよ。全然知らない女の人だった。スタイル良かったけど、雰囲気は子供っぽかったな。悪く言えば、ちょっと頭が良くない感じの人だった」
「ふーん。それより先輩、折角奴がいないのだ、式を挙げよう」
「ああ、独りで勝手に挙げといてくれ」

「はあ、はあ、放置プレイ……良いぞ、先輩その調子だ……」
「一つも良い事ねえよ！　ホントもう、お前はいつでも絶好調だな」
「いや、そんな事はない。今日はメンスでな」
「……そうか」
「メンスなだけに、先輩にあっちのメンテナンスをしてもらおうかと思っているぐらいだ、はっはっはっ」
「笑えねえよ」

夕刻、オンリーワン北駒台店フロア。
「あら、一さんではないですか」
「げえっ、黄衣（きごろも）！　何でお前が店（うち）にいるんだよ……」
「今日は午前でオフなので、駒台の本屋を回っていたんです」
「ああ、それで紙袋とか抱えてんのか。へー、いっぱい買ったじゃねえか。金持ちー、何かおごってくれよ」
「嫌です。小銭を拾おうとしたらバランスを崩して地面に頭をぶつけて死んでください。第一、これは全て中古で購入したものですから」
「ふーん？　ま、そんだけ買ってりゃ新品も中古も変わらない気がするけどな」
「それより、今日はアルバイトなのですか？」
「違うけど」
「ふっ、そうですか。いやいや、時間が余っているようで実に羨ましい限りです。出来るならあたしにも分けて欲しいものですね」
「へっ、残念でした。俺は今から（タルタロスに）デートへ行くんだよ」
「独りでですか？」
「違うわ！　聞いて驚け、お前とは比べものにならない美人とだよ」
「へえ、確かに妄想もここまで来れば凄いですね。被害妄想とは言いますが、あなたの場合その逆です。妄想が被害を産んでるんです

よ。主にあたしに対して」
「別に良いよ信じなくても。だけどな黄衣、俺はモテるんだなあ、これが」
「……ありえませんね」
「本当だって。現に、昨日の夜は女の人に追っ掛けられたんだし」
「くっ、あっはっはっ！　くっくっくっ、はっはっはっ、あーはっはっはっ！」
「笑い過ぎだろ」
「はっはっはっ、笑わずにいられますか。女性に追い掛けられた？　ふっ、ちゃんちゃらおかしいですね！」
「なあ、ちゃんちゃらって何？」
「良いですか、妄想と現実を混同するのは危険です。止めてください。大体、あなたを追い掛けたのは本当に女の人でしたか？　いえ、人でしたか？　と、言いますか本当に追い掛けられたんですか？」
「だから信じなくて良いって言ってるじゃん。そんなに俺を貶めたいか」
「もっちろん！」
「うひゃー、良い顔してんなー」
「まあ、あなたが多数の女性に好かれようが好かれまいがあたしには関係ありません。それより手が塞がっていて買い物が出来ません。籠代わりになってください」
「ああ、別に良いよ」
「ふふ、ではお願いしますね」
「はいはい、かしこまりました」
「では手始めに、二リットルのお茶を十本ほど」
「帰れ！」

午後五時、タルタロス内、最下層に位置する部屋。
「そんなこんなで災難続きでしたよ」

「ハジメはその子たちに好かれているのね。羨ましいわ」
エレンは窓を向きながら、感慨深げに溜め息を漏らした。
「そうですかねえ。良いように遊ばれてるだけだと思いますけど」
「あら、本当にそうかしら？　……それより、さっきの話を詳しく聞かせてちょうだい」
一はエレンへの土産に持ってきた女性誌を適当に眺めながら考える。
「えーと、俺が女の人に追っ掛けられた話ですか？」
「興味はあるけど、そっちじゃないわ。オニビの方よ」
「ああ、火の玉の。でも、詳しくは知りませんよ。確か車が事故を起こしたって事は言いましたよね？」
エレンはゆっくりと頷いた。
「それで、事故現場には火の玉が出たって証言がかなりあったそうで。うちの店長が言うには、ソレが何かしたんじゃないかって」
「火の玉……。ハジメ、その事故で何人死んだのかしら？」
「車の運転手と、道路の真ん中を歩いていた人の二人です」
「死んだ男たちに不審な様子はなかったのかしら？」
一は「そういえば」と切り出し、轢かれた側の男がまるで酔っ払いみたいだった事を伝えた。エレンは何も言わず、考えを巡らせている様子である。
「あの、どうしたんです？　何か心当たりでも……」
「ええ、そうね。私の勘が正しければ、あなたたちには謝らないといけないのかも」
エレンはしかし、申し訳なさそうな素振りはこれっぽっちも見せていない。
「……どういう事でしょうか？」
「その火の玉とやら、タルタロスから抜け出したかもしれないのよ」
「ええっ？　だ、脱獄って事ですか？」
脱獄。自らが言ったのだが、一はつい糸原を思い浮べてしまう。
エレンは机の上に肘を突き、物憂げに息を漏らした。

「私の管轄ではないのだけどね。話を聞いていると、ここに置いていた子みたい」
「じゃあ、そいつがここを抜け出して事故を起こしたって訳ですね」
「ええ、時期的にもある程度一致しているから、間違いないでしょうね。さ、どうしたら良いのかしら」
一は答えに困窮する。頭を掻きながら、エレンの様子を窺った。
「悪さをしたってんなら、倒すしかないでしょう」
「……ハジメは、殺すとは言わないのね」
「え？」
「何でもないわ」
「えーと、じゃあその火の玉ってのはどんな奴なんですか？」
例えば、能力。しかし一は何よりもソレの名前が知りたかった。
「そうね、狡猾な奴よ」
エレンはまた分かりにくい事を楽しげに言う。
狡猾な火の玉なんて情報、どうやって活かせば良いのか一には想像も付かなかった。
「あの、せめてそいつの名前を……」
「あら、若いのに楽をしては駄目よ」
エレンはくすくすと笑い、答えをはぐらかしている。
――困ったなあ。
これじゃノーヒントと変わらない。
「ふふ、そんな悲しそうな顔はしないで。もう、ハジメが可愛いからよ？　仕方ないから、一つだけ教えてあげる」
エレンは一度言葉を区切った。
「ウィルオウィスプ」
「へ？」
「あとは自分でどうにかしなさい」
「は、はあ……」
一は曖昧に頷く。
――ウィルオウィスプ。

それはもう答えを言っているのと同じではないのだろうか。
「ウィルオウィスプ、か。ありがとうございます」
「あら、もう帰ってしまうの？」
椅子から立ち上がる一を見て、エレンは儚げな声で、縋るように口を開いた。
「もう遅いですし、エレンさんに教えてもらった事を誰かに伝えないと」
「私、ハジメにとって都合の良い女なのね。……それと、さん付けは面白くなくてよ。エレンと、そう呼びなさいな」
「努力します。それじゃあまた、えーと……」
エレンは、扉の前に立ち尽くす一を見遣り、
「解決したらまたいらっしゃいな」
優しく提案する。
あくまでも、優しく。

タルタロスを出たら、もう辺りは暗くなっていた。
時刻は午後の七時を回ったところで、道々に設置されている街灯が頼りなく一を照らしている。
自身の影が伸び縮みするのを眺めながら歩いていると、一陣の風が吹いた。
冷たくはない。寒くはない。むしろ暖かく、心地良く。なんとも優しい風である。
「お前、またタルタロスに行ってたのか？」
調子の軽い声に振り向くと、昨晩も出会った女性がそこにいた。
「……またあんたか」
一は溜め息を吐き、女性と向かい合う。
「またって何だよ？」
「どうして付いてくるんだよ。つーか、昨日から気付いてたんだけどお前、人間じゃないな。俺をどうするつもりだ」

「ふん？　別に何もしないよ。それよりほら、この格好見ろよっ、ほらどう思う？」
女性はその場をくるくると回り、無邪気に笑った。
「どう……たってな……」
一はぼんやりと女性を眺める。
彼女からは敵意を感じない。ただ、くるくると回っているだけだ。身に纏う雰囲気は軽く、どこか浮き世離れしている。笑い、怒り、自分勝手、気の向くまま風の向くままに行動していた。まるで子供のように、まるで、風そのもののように。
「何度も言うけど、俺はあんたみたいに良い体してる奴とは昨日初めて会ったんだ」
女性はぴたりと動きを止めて一を見つめる。
「じゃ、この体は悪くないって事だな」
「は？　ま、まあそうなんじゃねえの？」
何を言っているんだろうと女性を見るが、彼女は気分が良さそうに調子外れの鼻歌を口ずさむだけである。
「それじゃ、俺は行くから……」
一はこそこそとその場を立ち去った。日は暮れ、空には雲がそこかしこに散りばめられている。幾ら辺りが暗いとはいえ、まだ七時。こんな女と一緒にいるところを誰かに見られては堪ったものではない。
付けられても平気なよう、路地を適当に曲がった。右へ左へ再び右へ。
一は大通りから回り道をしてアパートに帰ろうと思い、車の通りが多い道を選んでいく。
やがて、一は騒がしい空気を感じ始めた。随分と遠回りになり、おまけに道にも迷ってしまったが、どうにか辿り着けたようである。
息を一つ入れ、視線を前方に向けて歩き出した。
目的は車道の真ん中だ。
一はふらふらとした、覚束ない足取りで歩き出す。と言うより、

歩かされていた。
「……あ」
――行かなきゃ。
一の視線は定まっておらず、中空を虚ろに映し続けている。
まるで酩酊しているかのような、危なげな様子だった。
彼の足は一歩、また一歩と通りに近付いていく。路地を抜けると、車道はすぐそこだ。ガードレールも柵もない。車の排気音も周囲の話し声も今の一には聞こえていなかった。
やがて、一台の大型車両が通りの角を曲がる。
一は歩き続ける。
車と一、距離は縮まりつつあった。どちらかが進むのを止めない限り、衝突は免れない。一が路地を抜けて少し歩けば、車とぶつかってしまう。
一は車に、そもそも何にも気付いていない。目に入っていない。耳に入っていない。
車からも一は見えていない。彼が路地を曲がってから初めて、運転手はその存在に気が付くのだろう。
だから、一は歩き続け、車は走り続けた。

――タルタロス。
ソレに関係する犯罪者を罪の大小に、罪の代償に関係なく隔離する施設。
施設の中では簡易的な裁判が執り行われ、送られてきた者の処罰がその場で決まる。
タルタロス、その建物自体は大きくない。近隣に位置するオンリーワン近畿支部と大差がない。特筆すべきは、地下である。広大な空間がタルタロスの地下にあるのだ。それは囚人を置いておく場所でもあったし、話によればソレを置いておく場所でもあるらしい。
らしい。

タルタロスについてはオンリーワンも殆ど知っていない。知らされていない。あくまで、噂だ。オンリーワンとタルタロスは協力関係にあるが、勤務外や一般のアルバイト、末端に近い人間には何も情報が入ってこない。何をどう協力しているのか、誰が誰と協力しているのか、何も分からない。

例えば、名前。オンリーワンの人間はタルタロスの人間の名前を知らないのである。

例えば、姿だ。オンリーワンの人間はタルタロスに所属する者の姿を見た事がない。

例えば、場所。大半のオンリーワンに所属する人間はタルタロスに入った事がない。

徹底した秘密主義。

噂や風評でしか知らない提携相手。

それでも、どこからか噂は流れる。出所も真偽のほども定かではないのだが、皆知っているのだから仕方ない。

曰く、タルタロスに集う者たちは犯罪者、もしくは大人物であると。だから名前を名乗らない、姿を見せないのだと。

曰く、タルタロスの地下は荒れ果てた平野がどこまでも広がっているのだ、終わらない世界なのだ、と。

しかし、噂のどれもが要領を得ない憶測ばかりだった。タルタロスに入った事のある人間が少ない、殆どいないのだから仕方ない。そも、噂とは概してその程度のものだ。

だが、不確定ながらタルタロスに投獄され、そのすぐ後に脱獄した者がいる。現オンリーワン北駒台店勤務外店員。通称『天気屋』、その片割れであった元フリーランス。

――糸原四乃。

彼女だけが唯一、タルタロスについて確度の高い噂を取捨選択出来るのだと目されている。

糸原四乃曰く、タルタロスは地獄であったらしい。

地獄の『ような』、ではない。紛れもない地獄だったそうだ。

曰く付きの経歴である事から、彼女はタルタロスからの指名手配が解かれた現在でも、情報部にマークされている。

そして、一一も一部の人間からマークをされていた。理由は多々あるが、まずはアイギスの所持者だと言う事。アイギスの能力が厄介なのも原因なのだが、問題なのは一がその力をアテナから受け取った、その一点にある。

ただの一勤務外が、ギリシャはオリンポス十二神の一柱から勇者の証を授けられたのだ。問題にならない筈がない。

次に、一一の交友関係の雑多さ。

これは彼自身の性格、性質に問題があるのだとする意見もあった。即ち、一が適当である事に問題がある、と。

主に大学周辺の一般人、同僚の勤務外、元フリーランス、現役のフリーランス、社員、ソレ、ハーフ。

一は立場も何も気にしないで、自分の思うままに人間関係を組み立てていたのだ。そして一が構成する関係者の中に、タルタロスに所属する者がいるのが恐ろしい。

「――っ」

オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、漣（さざなみ）は、一が恐ろしい。情報部ですら知り得ないものを知っている一が恐くて堪らないのである。

「……いっそ」

漣は今、駒台のとあるビルの屋上にいた。一を監視する為にである。眼下には大きな通りへ向かい、夢遊病患者の如くふらふらと歩く者がいた。

一一の対処に関しては、意見が大きく二つに分かれている。

殺すか、利用するかだ。

命令違反、社員への造反、情報漏洩。一勤務外の領分を越えるであろう一の振る舞いを危険だと判断して、早急に手を打つべきだとする意見。

もう一つは、一を限界まで利用する意見。確かに彼の力、振る舞

いはオンリーワンにとってマイナスになるかもしれない。しかし、プラスにもなっている。彼が勤務外となってから関わったソレの数には目を見張るものがあった。僅かな期間で神話級の化け物と出会い、生きて帰っているのは評価出来る。キワモノ揃いの北駒台店でも、一の経歴は特に目立っていた。

だから、死ぬなら勝手に死んでもらおう。それまでは好き勝手にしてくれ、という意見の二つ。

漣は前者の人間である。出来るならば、一には致命的な問題を起こすより早く死んで欲しかった。

しかし、彼の力は認めている。頼りない風な男ではあるものの、勤務外を伊達には名乗っていない。

……だが、漣は以前より一がいなければ、と。そう思っていた。事件の報告書を見る度に感じていた。一一が事態をややこしく引っ繰り返しているのではないか、と。

「ここで奴が死ねば……」

今はまだ大丈夫。しかし、いずれはオンリーワンへの脅威となる。一一が死ねば……。

――春風さん、だって。

「ちっ」

今は任務中だ。余計な私情を挟む余地はない。

漣は目を瞑り、己の頬を張った。弛んでいた気持ちが引き締まる。眼下の一に再び視線を送ると、得体の知れない女が彼を後ろから羽交い絞めにしていた。どうやら、彼にはまだ運が残っていたらしい。

「おいっ！」

体を揺さぶられる感覚が気持ち良かったので、一はしばし身を任せた。しかし、長時間も成すがままにされていると、胃の奥から酸っぱいものが込み上げてくる。

「あ、ちょ、ちょっと」
「バカ！　やっと気が付いたのかよ！」
「……いきなり、馬鹿呼ばわりかよ」
出会ったばかりの女性に羽交い絞めされている理由が分からなくて、一は泣きたくなっていた。辺りを見回すと、見覚えのない景色。こんなところまでいつの間に入り込んでいたのだろうか。
「おい、しっかりしろよ」
「……してるよ。で、ここはどこだ？」
「知らない。けどお前はもう少しで死んでた」
「死んでた？」
女性は呆れたように頷く。
「クルマにぶつかってたのさ、覚えてないの？」
全く記憶になかったので、一は驚いた。
「俺、何してたんだ？」
「歩いてたんだよ、ふらふらーっと。見てるこっちがハラハラしてた」
「……そうだったのか」
状況に一の頭が追い付いてきた。つまり、自分でも気付かない内に、車道までふらふらと飛び出そうとしていたらしい。
――まるで……。
「危なかった……」
「ホントにね！　感謝して欲しいもんだよ」
一は女性に向き直り頭を下げる。
「いや、本当にありがとう。見ず知らずの俺を助けてくれるなんて」
「はあ？　お前頭でも打ったのか？」
「打ってないけど」
「だったらなんで分かんないのさ！」
何を分かれと言うのだろう。一は改めて女性を観察する。やはり、彼女はスタイルこそ素晴らしいのだが身に纏う雰囲気からはどうにも子供っぽさが拭えない。軽いと言うか、無邪気と言うか。

そう、一はこのアンバランスな人物とどこかで会った事がある。
――まるで。
まるで、風みたいなこの人物と出会った事がある。
――風、そのものだ。
その時、一の体に電撃めいた予感が走る。いや、風が奔ったと言うべきか。どうしてもっと早く気付けなかったのだろう。
「お前、まさか……」
女性は偉そうに胸を張り、
「やっと分かったか」
ふわりと宙に浮いた。
「シルフ……君？」
「違うね。今はニンゲンのガキの姿をしてないからな。うん、ニンゲン、これからはシルフ様の事をシルフさんと呼ぶんだ」
シルフは楽しげに微笑む。悔しい事にその笑顔は、一にとってとても魅力的に映った。

シルフの話を要約するならば、彼、いや、彼女は先日一と別れたあと、すぐに姿を変えたらしい。
「なんで？」
一がそう尋ねても、シルフは答えなかった。
何となくではあるが、一には察しが付いている。シルフは子供だと馬鹿にされたので、大人に、しかも女性に姿を変えてまで自分を驚かせたかった。と、こんなところだろうか。
「中身はあんまり変わってねえのな」
「うるさいなっ。それより、お前はアレに操られてたんじゃないのか？」
「アレ？」
シルフの視線が向かっている先を見れば、そこには――、
「……なんだ、アレ？」

――かぼちゃが浮いていた。
オレンジ色の外皮には三角に切り抜かれた三つの穴と、ギザギザの穴が空いている。その穴は見るものに目と鼻と口を思わせる。穴からは煌々とした光が漏れ、自らを闇の中に浮かび上がらせていた。
知っている。
一はコレを知っている。
――ジャックランタン。
ハロウィンでもないのに、そこにいるジャックランタン。
ぞくりと、一の背筋に怖気が走る。
ジャックランタン、そのユーモアな風体が不気味さを一層押し上げていた。
「まさか、こいつが……」
一の脳裏に、店長から聞かされていた事故の話が過ぎる。野次馬が目撃していた火の玉。嫌でも連想してしまう。事故を起こしたのは、人を殺したのは、今まさに自分をどうにかしようとしていたのは、こいつじゃないのかと。
「なあ、どうしたのさ？」
どうする。考えるも、一は今武器を持っていない。そも、彼は常からアイギスを持ち歩かないのだが。
「今からどうするかを考えるんだよ。くそっ、何も用意なんてしてねえっつーのに」
アイギスも、心の準備ですら、一には出来ていない。
「ふーん？　じゃ、あいつ倒しちゃおうよ」
一が焦るのも無理はない。だと言うのにシルフはのんびりとお気楽な事を言った。
「……どうやってだよ？」
「ただのかぼちゃじゃん」
シルフはそう言うが、アレはただのかぼちゃではない。人を死に至らしめるソレなのだ。
「じゃあ、お前がやってくれるってのか？」

「良いよ。シルフ様は今ゴキゲンなのさ、あんな野菜ぐらいなんだってんだ」
その言葉が本当なら嬉しいのだが、一はシルフをあまり信用していない。
「ごちゃごちゃうるさいな。早くしないとあいつ逃げちゃうぞ」
「うーん」
一はもう逃げられたなら逃げられたで構わないような気がしている。店に戻って報告すれば良いのではないだろうかと、少々無責任ではあるのだが。
「あっ、おい逃げてくぞ」
かぼちゃのソレは一たちから背――ではなく顔を向けて空中をゆっくり移動していた。
迷っている時間はなさそうである。一は頷き、シルフを見上げた。
「帰ろう」
「なんでさっ!?」
「恐いじゃん。お前は頼りにならなさそうだし」
シルフの額に青筋が浮き出る。
「行くぞっ!」
「行かないって」
一人で風に乗り、空へと浮き上がるシルフを無視して一は背を向けた。
「ニンゲンっ!」
「そうだよっ、俺は人間様だっ! 精霊とは違うんだよ、姿も年も変えられない。水を被ったって女にもなれなけりゃ、空も飛べやしないんだ! だから、俺は戻る」
「戻るんじゃない! お前は逃げてんだ! 勤務外なんだろっ、ソレを倒すのが仕事じゃないのか! それに、あいつはお前を殺そうとしてたっ」
一は深く息を吸い込む。
「殺され掛けたんだぞ、俺は。武器も味方もいないのに化け物へ挑

むなんて馬鹿げてる」
「武器ならある、味方ならシルフ様がいるっ！」
「見下して言う台詞じゃねえよ！」
「～～っ、だったらぁ！」
「なっ……うわ、うわああっ！？」
突如、シルフから凄まじい風圧が迸る。吹き飛ばされそうになるのを堪えながら、一は目を瞑った。
――殺される！？
次の瞬間、一の立っていた地面が消える。
「――ひっ」
落ちる、落ちる、落ちるっ、落ちて死ぬ。
パニックに陥る一だが、そうではなかった。地面が消えたのではない。あえて言うならば、一が地面から消えたのだ。
舞い上がる風、舞い散る砂埃。小規模の嵐の中、宙に浮くは一人の男。
「なっ、なっ、なんだよこれ！？」
徐々に体が上がっていき、地面から体が離れていく。ばたばたと手足を動かすが、風の力には抗えない。
重力が全く感じられない。いまや浮遊感だけが一の全身を包み込んでいた。血が軽く、体が軽く、気持ちまでもが軽くなっている。
「シルフっ！」
一は何とか顔だけを動かしてシルフを睨んだ。
しかし、シルフは悪怯れた様子も見せずに、童女の如く無邪気に笑う。
「シルフ様はお前の姿を変える事は出来ない。女にだって変えられない。でも、飛べる」
シルフは中空に浮き上がった一の傍まで近付き、彼の手を取った。
「お前と一緒に飛べるんだ」
「……飛ぶ……？」
「そう、飛ぼう！　風に乗って、風を切って、風と一緒に、風にな

るんだ！」
　シルフは高らかに宣言すると、一の手を握ったまま高度をぐんぐんと上げていく。民家が小さくなっていく。街の明かりが小さくなっていく。
「おっ、落ちる！　落ちたら死ぬ！」
「落ちるもんかっ、シルフ様を誰だと思ってるのさ！　この街の風も雲も、空にある何もかもが味方なんだぜっ！」
「うわあああああああああっ！」
「ようこそニンゲンっ、これがシルフ様たちの、世界だ！」
　一陣の風が吹くと、その場にはもう何も残されていなかった。ただ、一の悲鳴の残響があるだけで、恐らくはもう誰も、彼らを捉える事は出来ない。

かぜよい

夢を見ていた。
落ちる。
落ちる。
真っ逆さまに落下する。
もんどりうって降下していく。
真っ暗な世界から真っ黒な世界へ堕ちて行く。
「シルフ様の手を離すなよっ」
浮遊感。漂って漂って、風が体を通り抜けていく。
雲が近い。街が遠い。天が近い。地が遠い。
一は唾を飲んだ。
シルフの手を離せば、落ちてしまう。
死んでしまう。命を落としてしまう。
怖くて怖くて、震えが止まらなかった。
しかし、一方で喜んでいる自分もいる。
夢見ていた。
空を飛ぶ事に憧れない者がいるだろうか。
鳥になる事を夢見ない者がいただろうか。
自由に空を駆け回りたいと、誰もが一度は思わなかっただろうか。
重力から引力から、自身を縛る何もかものしがらみから解き放たれ、何も考えずに飛びたいと、そう思う事は、おかしい事なのだろうか。
違う。
一は今、少なくともそう思っている。
おとぎ話を聞かされて、自分だって空を飛びたいと思っていた。
シルフという媒介を通じてだが、彼の夢は今、正に叶っている。
目の前にはジャックランタン。
人を殺すソレを追い掛ける為に飛んでいる。

だが、それでも一は――。
「シルフっ！」
「なにさっ？」
「何でもねえよ！」

「ハロウィン、ですか」
「ああ。堀、お前なら詳しいと思ってな」
オンリーワン北駒台店のバックルームでは、店長と堀が向かい合って話をしていた。
店長は椅子にふんぞり返り、堀はファイルに目を遣りながらでの会話である。
「確かにお祭りは好きですけどね。しかし、詳しくは知りませんよ？」
「構わん。起源だとか、そういうものを知りたい訳じゃない」
堀は眼鏡の位置を押し上げ、探るように店長を見据えた。
「知りたいのは、火の玉についてだ」
「ああ、なるほど。事故現場に出現したとされるソレ、ですね。しかしまた、この時期にハロウィンを？」
店長は紫煙を吐きながら頷く。
「現れた火の玉とやら、私はずっと日本古来のモノだとばかり思っていたんだがな。一がハロウィンの事を口にしていて思い付いたんだよ」
「ハロウィンで火の玉、となると、種火のウィルの事でしょうか」
「……聞いた事がないな。かぼちゃのアレの事か？」
「いやあ、知らないのも無理はないですか。多分、店長が仰りたいのはジャックオーランタンでしょう？　とあるお話のお陰で、今ではこちらの方が有名になってしまいましたからね」
堀はファイルを閉じ、小脇に抱えて腕を組んだ。
「昔々、ウィルと言う素行の悪い鍛冶屋の男がおりました」

「何のつもりだ？」
「いやあ、そんな人を殺せそうな目で睨まないでくださいよ。聞きたいと言ったのは店長じゃないですか」
「ガキに聞かせるような話し方をするからだ」
「性分でして」
店長は鼻で笑うと、顎でしゃくって話の続きを促す。
「では。その男は死後、死者の門と呼ばれる場所に辿り着いたのですが、ウィルは口が巧かったので番人である聖者を騙して生き返ったのです。しかしウィルは生き返った後も反省せず、以前と同じような暮らしぶりを繰り返していました。その死後、再び死者の門に着いたウィルは聖者に言われました。『お前はもう天国にも、地獄にも行く事を許さん』、と」
「自業自得だな」
「その通りです。……ウィルはどこにも行けず、天国でも地獄でも、この世でもあの世でもない煉獄をさ迷い続ける事になりました。ですが、それを哀れに思った悪魔が地獄の劫火から燃える石炭を一つ取り出し、ウィルに明かりとして渡したのです」
堀は一度店長の様子を窺い、咳払いを一つ。
「ウィルの手にした明かりは、あなた方の世界、即ち現世に度々弱い光を投げ掛けました。それから、夜中に不思議な光が見える時、哀れな彼の話になぞらえて種火のウィル、ウィルオウィスプと呼ばれるようになりました。……いやあ、ご清聴ありがとうございました」
「はっ、こちらこそ。拍手でもした方が良いのか？」
「いやあ、結構ですよ。それより参考になりましたか？」
「まあな。なるほど、ウィルオウィスプ――松明（たいまつ）持ちのウィリアムか。確か、旅人を危険な道に誘う存在、だったか」
店長は椅子に深く座り直し、煙草の灰を空き缶に落とした。
「ええ、私もそのように覚えています。独りでは寂しいんでしょうね。そうですね、やはり、ジャックランタンとウィルオウィスプは

同一の存在と考えて間違いないと思いますよ」
「……それが分からん。ジャックランタンもウィルオウィスプも人を迷わせる存在だ。つまり、人に害を成すソレだろう。何故ハロウィンで持てはやされるんだ？」
「さて、どうでしたかね。確か、スコットランドではジャックランタンをカブやルタバガで作っていたそうですけど」
「ルタバガ？」
堀は「ああ」と呟き、にこやかに笑みを作る。
「ルタバガとは、そうですね、カブの一種と言ったところでしょうか。厳密には違う種類なのですけど、気にしなくても良いですよ」
「それが何故かぼちゃに変わったんだ？」
「アメリカにハロウィンが伝わった時に変わってしまったのでは？　ゴーウェストさんがいれば、答えてくれましたかね」
「まあ良い。話を聞いた感じだが、何となくは分かった」
短くなった吸殻を空き缶に押し付けると、店長は退屈そうにあくびをした。
「ハロウィンにウィルオウィスプを使うのは大方、目には目をと言ったところだろう。良く分からんものを無理に使う、か。は、大雑把な国には相応しいだろうよ」
「また危ない発言を。この国の人だって、良く分からない方の誕生日にツリーを飾り立てて騒ぐじゃないですか」
「良いんだよ、ここには馬鹿しかいないんだ。踊る阿呆と見る阿呆。堀、お前ならどっちを選ぶ？」
堀は再びファイルを開き、誤魔化すように笑う。
「さあ、どうでしょうね。店長ならどちらを選ぶんですか？」
「踊らんし、見ない。阿呆とは関わらんのが一番だ」
「そう言うだろうとは思ってましたよ」
店長は煙草に火を点けて、不味そうに煙を吸った。

一とシルフはビルの屋上にいた。
「……おい、もう良いだろニンゲン」
ビルの屋上、その隅で口を手で押さえて蹲っているのは一である。顔色は悪く、血の気も引いていて、今にも嘔吐しそうな様子だった。
「なあ、早くしないとあいつ見失っちゃうぞ」
シルフが急かすが、一はそれどころではない。迫り来る吐き気と戦いつつ、首を横に振る。
「ううう……」
「情けないなー」
残念ながら、一は長時間の飛行に耐え切れず酔ってしまったのだ。最初こそ風が気持ち良いなどとはしゃいでいたのだが、シルフは彼を喜ばせる為か、空中をぐるぐると回ってみたり、地面すれすれまで急降下したりで、一の三半規管をこの上なく揺さぶっていたのである。
「やばい……」
一は寝転がり、空を見上げた。
「すげー気持ち悪い……」
「お前が騒ぐからだろー」
お前が滅茶苦茶に飛ぶからだろう。言い返してやりたかったが、下手に口を開けば胃から何か吐き出してしまいそうだった。
「おーい、もう見えなくなっちゃったぞ。どうすんだ、ニンゲン？」
「……分かった。追い掛けよう。だけど、安全運転で頼む」
「そんなのどうすんのさ？　スピード落とせとか言うんじゃないだろうな。シルフの世界にはルールなんかないんだぞ」
「必要以上に揺れなきゃ良いよ」
シルフは面倒臭そうに唇を尖らせる。彼女はビルの屋上、そのフェンスを飛び越えて空中で胡坐をかいた。
「じゃ、飛ぶのは止める」
「本当か？」
「うん、跳ぶから」

「は？」
刹那、一の体が持ち上げられる。シルフが自身の力を行使したのだ。
浮き上がった一は不恰好な体勢ながら、フェンスの縁を掴んで息を吐く。シルフは彼の手を握り、悪戯っぽく笑った。
「……何、するんだ？」
「しっかり掴まってろよ。シルフ様の手、死んでも離すな。……離したら死ぬかも」
ふわり、と。
「うわあっ！」
どこからか風が吹き、シルフの体に纏わり付く。その風は頭から胸へ、胸から腰へ、腰から足の裏へと集まり始めた。
「跳ぶぞっ」
――ぐううううっ！？
収束した歪な風の塊はシルフの掛け声と同時に爆発する。一を連れた彼女は空気を切り裂き、強烈な加速度を稼ぎ、天まで届けとばかりに跳躍した。
一は跳躍の際の負荷で、もはや叫ぶ事すら出来ない。ただただ必死に、シルフの手を握り続ける事にだけ全力を注いでいた。
厚い雲に隠された月は、飛翔するシルフらをその光で以て映し出せない。彼らのシルエットを映し出しているのは眼下の街、駒台の明かりである。
尤も、誰も一たちの存在に気付かない。街の人間は上空の状態に気付けない。
「降りるぞ」
「……っ！？」
上昇が終わる。周囲に溜まっていた風が消え、浮遊感が一の感覚神経を苛んだ。それも束の間、髪の毛が逆立ち、風が、ごう、と嘶く。やがて音が消え、喉から悲鳴が迸る。
――落ちていく。

圧倒的な衝撃が一の体を縦に突き抜けていた。視線を下げれば、すぐそこには民家の屋根がある。

「ぶつかっちまうぞ！」

このままではコンクリートに足から衝突し、下半身が使い物にならなくなってしまう。

一はシルフを握る手に力を込めて、半泣きで訴えた。

「だいっ――」

シルフは一を離さないように歯を食い縛って落下の衝撃に耐えている。

「シルフっ」

先導するシルフの足が接地する寸前、再び風が彼女らを吹き抜けた。

風はシルフの足元へ四方八方から吹き荒れ、収束していく。足の裏から腰へ、腰から胸へ、胸から――。

体が浮く感覚で、一の視界が揺れた。

「――じょうぶっ！」

シルフは風を爪先に集中させて、爪先を支点に体を捻らせる。回転しながら、落下の衝撃を殺していく。

「うおおあっ！？」

必然的に、シルフと手を繋いでいる一も回っていた。目まぐるしく切り変わる景色。見えるもの全て点になり、点は線と化す。彼女の周りを、一は衛星が如く巡っていた。

やがて風が収まると、シルフは安堵の溜め息を漏らす。

「シルフ様だけの方が楽ったらないな」

怪我もなく着地したシルフはやれやれとばかりに呟いた。

「……そりゃ悪かったな」

シルフからほんの少しだけ遅れて、一も恐る恐るといった具合に降り立つ。

「跳ぶより飛んでった方が楽なのに。おまけにお前みたいな足手纏いがいるから、シルフ様すごく疲れた」

「連れてきたのはてめえじゃねえかよ。出来るならこのまま一人で行ってくれ。俺は帰るから」
　一はシルフから手を振り解いてその場に座り込んだ。
「……もう、しんどい」
「何言ってんのさっ、やっとコツが掴めてきたとこなんだぞ！」
「信用出来るか。あんなの続けられたら俺の骨が折れちまう」
「えー？　ここまで来てそりゃないよ。なんだよー、骨の一本や二本や百本くらい良いじゃん」
「百も折れたら死ぬわ！」
　尚も食い下がるシルフから逃れようと、一は屋根から降りんとする。高さはあるが、飛び降りられない程度ではない。それとも、さっきまでの飛翔によって感覚が麻痺しているのかもしれなかった。
「あっ、おい！」
「待たないぞ。おらあっ」
　一は民家の庭に飛び降りようと足を踏み出す。
　が、
「あっ？」
　彼の足は宙に浮いたまま、一向に落下しなかった。試しに体を投げ出そうとしても見えない何かに押し戻されてしまう。
「なっ、てめえクソガキ！　また何かしやがったな！」
「へへーん、シルフ様の許可なく飛べたり跳ねたり出来ると思うなよ」
　シルフは一を指差しながらけらけらと笑っていた。
「言ったろ。二人でいる時に必要な風の使い方、コツを掴んだって。ふふん、シルフ様ホント天才っ、褒めても良いぞ、さあニンゲンシルフ様を褒めろっ！」
「……はいはい」
　一は観念して、屋根まで戻る事にする。こうなったら、毒を食らわば皿までだ。もとより、風の精霊であるシルフの気紛れから逃れられるとは思っていない。

「分かった、行こう。……けど、マジで使い方ってのを掴んだんだろうな？　一回跳ぶ度にこんなんなってたら身が持たないぞ」
「うーん、もっと足に風集めてー、高度を上げ過ぎなきゃ大丈夫だと思う」
シルフは顎に人差し指を遣り、考えるように上へ視線を向けた。
「……頼むぜ、こっちはお前に任せるしかないんだからさ」
「任せろっ」
シルフはサムズアップし、一の後ろに回り込む。
「な、何だよ？」
「うーん？」
「――ひ」
感触はないに等しかった。シルフの肢体は細く、何よりも軽かったのである。
だから、一は最初、シルフが自分に絡み付いているのに気付かなかった。
背中に柔らかく、妙に温かいものが押し当てられる感触に一は飛び退く。
「な……！　何してんだお前！　馬鹿じゃねえのかっ、もしくはアホか！」
振り払われたシルフは不満げに、ジト目になって一を睨んだ。
「くっついた方がやりやすいんだよ。手握ってるだけだったら、シルフ様、力の入れ具合がいまいち分かんないのさ」
「そっ、そうか」
「んー？　お前さ、なんで顔赤いの？　トマトみたいだぞ」
「あっ、赤くねえよ！」
一はむきになって言い返すが、彼の顔は誰がどう見たって赤いとしか言えないだろう。
「……あ」
「今度は何だよ……？」
「お前さ、もしかして照れてるの？」

思わず、一は絶句した。口をパクパクと動かすが、肝心の言葉は出てこない。
「へー、そうかそうか、シルフ様がこーんな美人になったもんだから照れてんだなー。子供の方が楽なんだけど、お前が嬉しそうだからこのままの姿でも良いかなー」
シルフは嬉しそうにして一にくっ付こうとする。
「だああっ、やめろ馬鹿！」
「そんな事言うなよー、ほらほら、おっぱいでかいだろー、どうだっ」
「幾ら姿変えたってな、中身がガキなら嬉しくもなんともねえよ！」
一はシルフを押し退け、屋根の縁ぎりぎりまで逃げていた。
「面白くない奴だなー、お前、もしかして女嫌いなの？」
嫌いじゃないが、意地でもイエスとは答えたくない。
「シルフ、お前こないだから変だぞ」
「へ？　なんでさ」
「……なんつーの、その、俺の気を引こうとしてないか？　いや、してないよな？」
「してるよ？」
シルフはきょとんとしている。
「だって、シルフ様はお前が好きだからな」
「なああっ！？」
「お菓子くれるし、おもちゃくれるじゃんか。ニンゲンにしては見所があるから、気に入ってるぞ」
その言葉を聞いて、一は少しほっとした。
「あ、ああ、びっくりした。好きは好きでもそういう意味か……」
年齢、性別、姿が不定な精霊だとは言っても、つい先日までシルフは子供の、しかも男の子の姿だったのだから、一が焦るのも仕方がないと言える。
「うん、好きだ」
そうじゃない。子供がスキンシップをねだっているだけ。しかし、

分かっていても、面と向かって言われてはどうにも気恥ずかしかった。
「……と、ところでさ。あのかぼちゃを倒すっても、どうするつもりなんだ？」
「アレは火なんだろ？　だったら話は早いぞ。シルフ様の風でびゅーんっと吹き飛ばしちゃえば良いのさ」
「上手くいくかなあ」
「いく！　いくったらいくの！　シルフ様に不可能はないんだからな！」
一は溜め息を吐き、ジャックランタンが去っていったであろう方角を見つめた。
「他意はないんだろうな」
「タイ？　魚がどうしたのさ？」
「や、何でもない」
「だったら行くぞ。しっかり掴まって――あ、掴んでおくのはシルフ様か」
シルフはけらけらと笑いながら、一を羽交い絞めする形になって四肢を絡ませる。
「……お前、軽いのな」
と言うより、シルフからは一切の重みを感じない。
「そう？　良く分かんないや」
言うと、シルフは前方を見据えた。
ごう、と風が吹き、ごうごう、と風が嘶く。四方からやってきた風はシルフの足元に集まりつつある。
「跳ぶぞ」
「……おう」
一が覚悟を決めて頷いた瞬間、世界が変わった。景色が下から上へ流れていく。空気の膜を切り裂き、風の音を聞きながら、シルフらは上昇していた。
「見えたっ！」

離れたところにジャックランタンの後ろ姿が見えている。
シルフは前回の跳躍よりも高度を下げたまま、次の足場である民家の屋根に狙いを定めた。
「うっ――ああああっ！」
急降下。髪の毛が上方向に持ち上がる。一は悲鳴を上げながら、必死に目を凝らして着地点を見つける。
シルフは片足にだけ風を集中させ、屋根の上に降り立った。が、完全には体重を預けない。一をしっかりと抱いたまま、集めた風を爆発させる。
「いくぞっ」
衝撃音が一の耳を劈いた。シルフに手足を掴まれている為に耳を塞ぐ事は出来ない。歯を食い縛って、上昇の際の衝撃と爆音に耐える。
シルフは涼しげな顔でジャックランタンを見遣った。彼女は、あと二回の跳躍で追い付けると踏んでいる。俄然、力が入る。
上昇が終わり、風に乗ったまま距離を稼ぐ内、シルフは二回目の着地場所を見つけた。彼女は再び片足だけに風を纏わせて屋根の上に一瞬だけ降り立ち、すぐさま上空に跳び立つ。
あと、一回で追い付ける。
「あああああっ！？」
一が喚くので、シルフは顔をしかめた。
「なんだよっ！」
「馬鹿っ、住宅街を抜けちまったぞ！」
見下ろせば、確かに先程までの建物はない。通りに出てしまったのだ。一般的な高さの民家は見当たらず、背の高いビルが連なっている。
「どうすんだよっ！」
シルフは跳躍の際、前回よりも高度を抑えめにしていたのだ。つまり、次の足場がない。彼女は距離を稼ぎながら、緩やかに落下し続けていた。ビルの屋上までは絶対的に高さが足りないのである。

眼下には車が走り、僅かながら通行人もいた。このまま一たちが地上に降り立てば混乱が起こるのは免れないだろう。
「別に良いじゃんか」
「良くねえよっ、見つかったら俺は晒しもんだぜ。誰に何を言われるか分かったもんじゃない」
「シルフ様はどーでも良いんだけどー？」
「頼むっ、何とかしてくれ！」
「……あとで文句言うなよ」
一が何をするつもりなのかシルフに尋ねる前、彼女はもうとっくに動いていた。
突如横殴りの風が吹き、通りの上を跳んでいたシルフらをビルの壁面まで押し戻す。
「っておいっ、ぶつかっちまうぞ！」
シルフは一を無視したまま、足元に風を集めて体勢を変えた。彼女はビルの壁に爪先を向けて突き進む。
「きっ――つうっ！」
空中で横になった姿勢で、シルフは壁に足を付けた。斜め上、ジャックランタンを睨み付け、吹き荒れる風を集約させていく。
抱えられている一は、頭からずり落ちていく感覚に恐怖を覚えた。
「あああっ！」
シルフが叫ぶ。彼女の声に応じて、高らかに風が鳴いた。
――弾（だん）っ！
壁を強く蹴り付け、シルフが斜め上に凄まじい勢いで跳び出す。
今までとは比べものにならない衝撃に、一は声も出せなかった。頭がくらくらして、頭の中身が吹き飛ばされて掻き回されるような感覚に陥る。
「いたあっ！」
シルフが嬉しそうに声を上げた。それもその筈、彼女の狙い通り、跳びだした先にはジャックランタンが浮遊している。
「ニンゲンっ、アレを捕まえろ！」

「はあああっ！？」
「シルフ様は手が塞がってるだろっ、捕まえてっ、中からめちゃくちゃにしてやる！」
確実を期する為にはそれしかない。纏まらない頭の中で、一はそう結論づけた。ジャックランタンを中途半端に吹き飛ばしても意味がない。刳り貫かれたかぼちゃの中、逃げる場がないように風を吹き込み、直接ウィルオウィスプを掻き消すしかない。
「分かった、あとは任せるからなっ」
「任せろ！」
シルフは手を離して一の両手を自由にさせる。
ジャックランタンはもう目の前だ。跳びだした勢いのまま一は手を伸ばし、
「げふっ――」
逃げ去ろうとしたソレに身体ごとぶつかり、掻き抱くように胸を当てて両手でがっちりとかぼちゃを掴む。
「食らえっ」
シルフは、刳り貫かれたかぼちゃの穴に手をかざした。ごう、と、風が吹く。ジャックランタンの火が揺れ光が揺れ、内部で風が鳴動していた。
「動くんじゃねえよっ」
お化けかぼちゃはガタガタと振動して、必死な抵抗を見せる。
一は暴れるソレを抱え、シルフはソレに強風を送り続けた。
やがて、ソレは一際大きな動きを起こすとぴったりとその動きを止める。
「あら？」
部屋に入ってきた人物を見て、エレンは意外そうな声を上げた。
「今日は誰も招いていないのだけれど？」
「……種火が消えたわ」

エレンに話し掛けるのは、右腕に包帯を巻いた女性である。彼女は苛立たしげに、ともすれば憎憎しげに口を開いた。
「あなたのお気に入り、やってくれるじゃないの。ふん、どんな入れ知恵をしてあげたの？」
「別に。私と、ウィルの名前を教えてあげただけよ」
「――っ！　アイギスの坊やに名前を教えたですって？　あなた、裏切るつもり？」
「裏切るつもりはないわ」
エレンは手元の女性誌に視線を落とし、淡々と告げる。
「分かっているんでしょうね。私たちが陽の光を浴びるには、奴らが邪魔って事を」
「他にも方法はあると思うのだけど？」
「ない。私たちに選択の余地はないのよ。……あの子で遊ぶのは勝手だけど、入れ込み過ぎないようにね」
それだけ言うと、包帯を巻いた女性は部屋を出て行った。
残されたエレンは薄く微笑み、
「分かってるわ」
儚げに呟く。

「……終わったのか？」
風前の灯火、だったのだ。穴から漏れ出ていた光は完全に消え失せ、火は完全に掻き消えている。いまやかぼちゃはただの空洞に成り果てていた。
「そうみたい。へへっ、やったじゃん」
シルフは屈託なく笑み、一を抱えたままゆっくりと飛翔していく。
邪魔になっていたのだが、一は何となくかぼちゃを手放せないでいた。
誰もいないビルの屋上に降り立つと、シルフは息を吐く。
「耳元に息吹き掛けんな」

――誰かさんを思い出しちまう。
「しょうがないだろー、疲れたんだもん」
「はいはい、ご苦労さまでしたよ」
一はかぼちゃを置くと、息を吐き出しながら身体を伸ばした。
「なあ、なあなあ、それもらっても良い？」
「へ、それって、ソレ？」
シルフはかぼちゃを指差して力いっぱいに頷く。
「そ、これこれっ」
「……良いんじゃないか？」
ジャックランタン――ウィルオウィスプはタルタロスにいたそうだが、今となってはただのかぼちゃだ。それをどうこうしようと、それこそ、煮るなり焼くなり、
「あはははははは！」
シルフが頭からすっぽり被ってはしゃごうが、好きにしても構わないだろう。
「シルフ」
「んー？」
一はシルフに、ソレを倒してくれたお礼を言おうかどうか迷い、
「楽しかったよ」
結局、お茶を濁した。彼女に面と向かってお礼を言うのは恥ずかしく、何か違うと思ったからである。
「おうっ、シルフ様も楽しかったぞ」
シルフはかぼちゃで遊ぶのに夢中になっていた。中身が子供でも、外見はスレンダーな美女なので、酷くアンバランスな、滑稽な光景だと一は思う。
「ニンゲン」
「ん？」
「お前ってさ……あ、やっぱり良い」
「言い掛けて止めんなよ。気になるだろうが」
それでもシルフは首を振った。

「良い。ニンゲンは、ニンゲンだもん」
「……？　ま、良いけどさ」
一はフェンスに背を預け、ポケットに手を遣る。
「シルフっ」
ポケットから手を抜き、握ったものをシルフに向けて放った。
シルフはそれを受け取ると、小首を傾げる。
「何だよ、これ？」
「見て分からないか、飴玉だよ」
「……まさか、お礼のつもり？」
「違うよ。でも、悪戯されるぐらいならお菓子をやろうと思ってさ」
空を見上げると、夜の中にか細い明かりが見えた。その明かりは一が気付いた瞬間、すぐに消えてしまう。天国か、地獄か、煉獄か。どこに行ったのか、どこかには行けたのだろうか、彼には分からなかった。

死人の寝床

鬱陶しい。

煩わしい。うるさい。面倒臭い。気持ち悪い。邪魔。疎ましい。苛立たしい。煙たい。うんざりする。暑苦しい。不快。腹が立つ。不愉快。忌々しい。憎たらしい。穏やかでいられない。むしゃくしゃする。癪に障る。吐き気がする。気持ち悪い。気味が悪い。気色が悪い。目障り。虫が好かない。嫌な気分。鼻に付く。

とにかく、うざい。

自分の部屋へ、図々しくも勝手に入ってきた彼を見て、彼女は――槐(えんじゅ)はそう思った。

槐はこの頃、ここを訪れる客がやけに多い気がしている。

勿論、自分にあやかろうとする愚かな人間が増えた事が原因なのだが、そんな人間が何故増えたのかが理解出来ない。ここを抜け出した事がないので、長い間外の様子が分からない。情報量も情報源も非常に狭い範囲に限られているのだ。

「……ふむ」

彼女はこの間フロントを通り掛かった際、予約は三年先まで一杯だ、このご時勢でも、このご時勢だからこそ商売繁盛だ、と、女将が笑っていたのを思い出す。

この家の人間の事を槐は愛していない。

だが、それ以外の人間は愛していない。

幸運を与えるのはここの人間だけに止めてきた。たまには気紛れで旅行客にも幸運を分け与えてもいたのだが、やはり基本的には外の人間は嫌いだった。

お陰で、ここはいつだって商売繁盛。いつだって、知らない人間が出入りしている。中には優しい者もいるが、基本的に人間はがめつい。自分を血眼になって探す醜い奴らの姿をもう気が遠くなるくらいに眺めてきた。

人間は、欲深い。

食欲、睡眠欲、性欲。この三つだけでも事足りるのではないか。

昔と比べれば、人間と言う種族は非常に進化してきたとは思う。

高い社会性、高い思考力を持ち得た人間たち。

獲得欲。保存欲。秩序欲。保持欲。構成欲。優越欲。達成欲。承認欲。顕示欲。保身欲。防衛欲。反発欲。支配欲。恭順欲。模倣欲。自律欲。対立欲。攻撃欲。屈従欲。親和欲。拒絶欲。養護欲。救援欲。遊戯欲。求知欲。解明欲。

高い能力を持ったから、高い次元の欲をも持ってしまった人間たち。

――調子に乗り過ぎだ。

欲を貪り、欲に渇き、欲に飽かず抑えずに目を眩ませる。

果たして、彼らに幸運を与えていたのは正しかったのだろうか。

槐は思う。もう、良いのではないかと。何より疲れたのだ。ここを訪れる人間の醜さ、汚さ、毒気にあてられて精神は磨耗する一方である。耐え切れない。いや、自分はもう充分に耐えてきたじゃないか。どうして我慢をする必要がある。人間なんて、もう、良いじゃないか。

知らぬ間に、槐は何かを握っていた。

小刀、である。

ここを訪れた人間たちが槐の気を惹く為に置いていった物の中の一つだった。

「……っ」

刀を握る手に力が入り、槐の心が乱されていく。黒い波が押し寄せて、積み上げた何かを浚っていく。黒い風が吹き抜けて、守っていた何かを攫っていく。

人間は嫌いだ。

囁く。耳元で誰かが囁く。

良いじゃないか。今まで数え切れない幸運を与えたんだから。奪うのは簡単だ。不幸を与えるのは造作もない。だったら、だったら、

だったら――。

部屋にいるのは自分と、彼だけだ。無防備にもこちらに背中を向け、憎たらしい笑みを浮かべている、奴だけだ。

やがて、槐は一歩足を踏み出す。

一歩踏み出せば、後は簡単だった。小刀を突き立て、抉るだけ。

それだけで男は動かなくなった。

生あくびが止まらない。

「先輩、眠たいのか？」

「うん」

大学までの坂道で出会った、隣を歩く一つ下の後輩、早田早紀（はやたさき）に生返事すると、一は昨晩の事を思い出した。

昨夜は、何が何だか分からない内に空を飛んでいた。文字通り上へ下への大騒ぎで、一の三半規管は二十数年の人生の中で一番揺さぶられている。今でも、だ。

一はシルフと別れて家に帰るなり、ちょっかいを掛けてくる糸原を無視して泥のように眠った。

そして、一時限目の講義を受ける為、休息を欲しがる体に鞭を打って登校している、という次第である。

「そうか、昨日は随分とお楽しみだったようだな」

今日は早田に突っ込む気力さえ起こらない。講義の途中で眠ってしまいそうだと不安を覚え、これでは家で眠っていた方がマシだったと、ここまで来て思ってしまう。

「そういや、楯列（たてなみ）って今日から大学に来るんだったっけ？」

「奴は来ないぞ」

「え、そうなのか。旅行の期間が延びたのかな？」

早田は口角を吊り上げて笑った。

「いや、駒台には戻ってきている筈だ。昨晩、奴からその事についてのメールが届いたからな」

「何だよ、それを先に言えよ」
「だからその必要はないと判断したのだ。奴が来ない。私にとっては僥倖なのだから、先輩に伝えるまでもない。そうだろう？」
「判断するのは俺だろうが。ま、良いけど。そんで、どうしてあいつは来ないんだ？　休み気分が抜けなくてサボりか？」
　しかし、一の知る限り楯列はサボりや遅刻、早退をするような人間ではない。事実、一は楯列がその手の行為をするところを見た事がなかった。
「うむ。奴は入院しているのだ」
「……え、嘘、マジか？」
　旅行先で病気にでも掛かったのだろうか。一は心配になり、早田の顔を見遣る。
　彼女は、俯いていた。
「早田、おい、まさか――っておい」
「くくっ、病気ではない。どうやら、奴は刃物で刺されたらしい」
　早田は薄ら笑いを浮かべている。人の、と言うより楯列の不幸を笑っていた。
「刺されたってどういう事だよ？　大丈夫なのか？」
「ああ、残念ながら命に別状はないらしい」
「残念ながらは余計だ。で、誰が楯列を刺したんだよ？」
　被害者がいれば加害者がいる。幾ら楯列が無事だったとはいえ、彼を刺した人間を一は許せそうになかった。
「ああ、それが……」
　早田は妙に歯切れが悪く、一の方をちらちらと見ては、再び地面に視線を落とす。
「犯人、まだ見つかってないのか？」
「見つかってはいるのだが、その、私も事態が飲み込めていないのだ。だから、先輩には正しく、客観的に説明出来る自信がない」
「どういう意味だ？」
「すまない、先輩。こればっかりはどうしようもないのだ」

一は正直、早田の説明に対しては納得出来なかった。が、彼女がこうも言い難そうにするのは珍しい。それ相応の理由があるのだと断じ、ひとまずは了承の意を込めて頷いておく。
「ありがとう、先輩。代わりと言ってはなんだが、私を嫁にもらっても構わないぞ」
「とにかく楯列は無事なんだな？」
「……ああ、無事だ」
早田はぶすっとした顔で一を見据えた。
「何見てんだ、あっ、おい腕絡めようとすんじゃねえよ」
「奴の事ばかり気にしないでくれ、先輩。今は私が目の前にいるのだぞ。遠くの楯列より近くの早田と言うではないか」
「言わないけど、そうだな。あいつなら心配いらないな」
一は苦笑する。半年前、楯列が軽トラックに横合いからぶつけられても無傷で、その上テンションが上がっていた事を思い出したのだ。

大教室での二時限目が終わり昼休みになった瞬間、早田の携帯電話がメールを受信した。
「先輩」
「んー」
「九十九先生からだ」
早田は携帯電話のディスプレイを一に突き付ける。
一は戸惑いながらもそれに目を遣った。
「……今から、ゼミ教室に来い？」
「そのようだな」
携帯電話を鞄にしまうと、早田は神妙な顔で溜め息を吐く。
「何かあったのだろうか？」
「さあ、何だろ？」
とりあえず、呼ばれたからには行くしかない。一たちは昼ご飯を

食べるのは後回しにして、九十九ゼミへと急いだ。

こんこんと。

ノックの後、「入れ」としゃがれた声が部屋の中から聞こえてきた。

「失礼します」

一が扉を開け、早田がそれに続いて部屋に足を踏み入れる。い草の匂いが彼らの鼻孔をふわりと漂った。

部屋の主であり、和と静を愛する九十九敬太郎（つくもけいたろう）の意向により、ここは畳の敷かれた和室になっている。卓袱台が置かれ、あとは流し台があるだけで他には殆ど何もない。

「一、早田、座れ」

声を掛けられ、一は思わず萎縮した。いつもそうだった、ここに来て、この声を聞けば嫌でも緊張してしまう。

部屋の中央に置かれた卓袱台の傍に座する禿頭の老人を見遣り、一は改まった様子で対面に座った。早田も、一の隣に遅れて座る。二人ともが綺麗な正座で、である。

「あの、今日はいったい……？」

一は遠慮がちに口を開いた。

対面に座る、甚平を着流す老人、九十九は顎を擦りながら、どこか遠くを見つめる。

「ふむ、大した用ではないんだが」

「はあ……」

「二人とも、就活はどうするのかと思ってな」

「就活、ですか」

最近大学をサボりがちだったので、出席率の低さを叱咤されるのかと思っていた一は肩透かしを食らった。

「まだ、何も考えていませんね。それよりも単位を取得して卒業出来るかが心配ですから」

「ならば学校に来たまえ。私のゼミはともかく、他の先生方は厳しいぞ」
「……はい」
結局、怒られてしまう。
「早田、お前はどうだ？」
「私は……」
早田は一に視線を送ってから言い難そうに、しかしはっきりとした意志の見て取れる声を放った。
「就職についてはまだ考えていません。今はただ、フットサルで、上に行きたいんです」
「……就活より部活か。早田、お前はまだ一回生だからな。それも良いだろうが、今からしっかりと将来についても視野に入れておけ」
「はい」
一は少し驚いていた。早田は日頃から先輩である自分に敬語を使わない。へらへらと、軽い調子で話し掛けてくる。だから、彼女が真剣な顔付きになって何かを語り、確固とした意志を貫こうとするのが珍しく思えて、少し、嫉ましかった。
「……ふむ、茶でも煎れるか」
九十九は立ち上がって流しに向かう。そこで、一の緊張が解れた。
「なあ、今日の先生変じゃないか？」
「うむ、私もそう思っていた。何か言い辛そうにしているようだが、本題は他にあるのだろうか」
「小言聞かせる為だけには、呼ばないよな」
一と早田がこそこそと話していると、九十九が盆を持って戻ってくる。盆には湯呑みと小皿がそれぞれ三つ乗せられていた。
「待たせた」
「いえ……あ、そのお茶請け、美登里（みどりや）屋の？」
「目が高いな、一。ああ、ここの羊羹は好物の一つでな、黄衣に頼んで買ってきてもらった」
「……あいつが、お使いですか」

傲岸不遜、傍若無人。ナコトが大人しく誰かの使いに行くのが一には想像出来ない。流石は雇い主、と言ったところだろうか。
「先輩、黄衣とは誰の事だ？　まさか、愛人ではあるまいな」
「話すと長くなるから言わないけど、そいつの名誉に掛けて否定しとく」
「むう、本当だな？」
一は頷く。
「くっくっ、一、隅に置けんな」
「……早田はともかく、黄衣は俺の事嫌いでしょうに」
「いやいや、まだ短い付き合いとは言え、あれが素直じゃない事ぐらい分かるだろう」
「……？」
九十九は喉の奥で笑い、「言わぬが花か」と呟き茶を啜った。
「どうした、食べないのか？」
「あ、いえ、いただきます」
一は、既に一口大に切り分けられた羊羹に爪楊枝を刺し、九十九を何気なく観察する。
「どうした、一？」
「……えっと、俺たちはどうして呼び出されたのかなって」
「ああ、ん、そう……だな」
咳払いをすると、九十九は茶を啜り、口の中の羊羹を流し込んだ。
「先生、深刻な話題なんですか？」
「そうではないがな、ん。羊羹、美味いか？」
――は？
一は咄嗟に答えられなかったが、早田は「美味しいです」と、白い歯を覗かせる。
「一、お前はどうだ」
「勿論美味しいです、けど……？」
「ん、んん。いや、お前たちは聞いているとは思うが、今朝楯列から連絡が入ってな。あいつは怪我をして入院しているらしい」

早田はぴんと来ていない様子だったが、一はそこで気付いた。
「……あいつ和菓子好きですからね。食べたいんじゃないのかな」
一は何食わぬ顔で、続きを言い難そうにしている九十九に助け船を出す。
「そう思うか？」
「ええ、出来ればお土産に持っていきたいですね。……見舞いの意味も込めて」
「では、持っていくと良い」
九十九は無表情を崩さぬまま立ち上がり、流し台の戸棚から、美登里屋のロゴが入った袋を持ってきた。
「……良いんですか、先生？」
我ながら白々しい演技だと一は思ったが、九十九は頷くだけである。
「それじゃあ、ありがたく。ああ、先生からだって伝えておきますね」
「頼む」
一は袋を受け取り、卓袱台に目を向けた。
「ああ、気にするな。片付けはやっておく」
ならば、用事はもう済んだろう。一は頭を下げ、鞄を肩に掛ける。
「早田、行くぞ」
「え？」
早田を急かし、もう一度九十九に頭を下げると、一は先に教室を後にした。
「先輩っ、先生の話はどうするのだっ？」
それならとっくに済んでいる。が、説明するつもりはない。それこそ、言わぬが花というものだろう。

三時限目が終わったあと、一と早田は楯列が昨晩から入院している病院へと向けて歩いていた。

「……普通の病院に行くのは初めてだな」
「何か言ったか、先輩」
「いや。それより、あいつの部屋は分かってるのか？」
早田は携帯電話を取出し、渋面を作る。
「メールが既に十件も来ている。奴め、先輩を連れてこいと催促しているのだ」
「案外寂しがりだな、あいつも」
「先輩、甘やかしては駄目だぞ。奴は付け上がって、くだらん事を先輩に頼むに決まっている」
百も承知だ。一は苦笑して歩を進めた。

病院には独特の臭いが立ち込めているものだ。それは薬であったり、器具であったり、
「……気持ち悪い」
死の臭いであったり。
早田は病院に入るなり、口元を手で押さえながら呟いた。
「見舞いに来といて医者に掛かるなんてつまらない真似すんなよ」
「ああ、分かっている。ミイラ取りがミイラになっては笑えないからな」
言い得て妙な、というより包帯を巻いた患者がいる、病院という状況に即した言い回しに、不謹慎と分かっていながらも一は破顔する。
一たちはエレベーターに乗り、最上階まで上がった。そこから降りるなり、真っ白い壁と廊下が眩しく目に映る。
「……誰もいないな」
一は辺りを見回し、訝しげに首を傾げる。
「ここはいわゆる、ＶＩＰ待遇の患者が入る階になっているらしい」
「御曹司は違うねえ」
楯列の境遇を思い出し、一は皮肉っぽく口を開いた。

「先輩、気が進まないのは分かるが行こう」
「ありゃ、やっと先輩を見舞おうって気になったのか？」
「私は好きなものを残しておく主義なのだ」
早田は得意げに言うと一を先導するように歩きだした。長い廊下を歩き続けて角を曲がると、白塗りの引き戸が姿を見せる。
「ここか？」
「そのようだな」
ノックしようとした一より先に、早田は乱暴な所作で戸を引いた。
「来てやったぞ」
部屋の中は一が思っていたよりも広くない。早田からの話を聞く限り、天井にはシャンデリアがぶら下がっていたり、豪奢な家具でも置いてあるかと思ったのだが、この病室には大したものはない。自分が入院していた病院と何ら変わりはないように思える。
その部屋の中央付近に設置されたベッドのカーテンは引かれておらず、半身を起こした楯列が一たちを見て嬉しそうに頬を綻ばせていた。
「よう、意外と元気そうじゃねえか」
一は手を上げ、ベッドに近付いていく。
楯列は白い、バスローブのようなものを羽織っているだけであった。寒くないのかと一は思ったが、室内が随分と暖かい事に気付き、合点がいく。
「一君、来てくれたんだね」
早田の方は一切見ずに楯列は言った。
「ああ、起き上がっても大丈夫なのか？」
「心配いらないよ。君が来てくれたからね」
「……刺されたんだってな。本当に大丈夫なのか？」
事前に、命に別状はないと聞かされていても、こうして楯列を見れば安心するし、やはりまだ不安な部分もある。
「大丈夫さ。そう簡単に死なないし、殺されても死なないだろうからね。僕を殺せるものがこの世にあるとすれば、それは一君の愛だ

よ。刺し殺されるのも殴り殺されるのも通用しないだろうけれど、君になら愛で殺されるかもしれないな。ああ、それも悪くないね」
「ならば死ね」
早田は楯列の顎を右ストレートで振り抜いた。
「うわあっ、早田！？」
一は思わず叫んでしまう。が、楯列は真後ろに仰け反り、
「やあ、早田君も来てたのかい」
仰け反ったままの奇抜な体勢で挨拶をした。
「来たくはなかったがな。お前と先輩を二人きりにさせるよりは兆倍マシだ」
「ははは、手厳しいな。さて……」
元の姿勢に戻ると、楯列は顎を摩った。
「早田君、一君にはどの程度まで伝えたんだい？」
「何も。私をメッセンジャー代わりに使おうとは片腹痛い」
「一君は携帯電話が嫌いだから仕方ないじゃないか。けど、予想はしていたよ」
「……何の話だよ？」
若干の疎外感を味わわされ、一の口調は少しだけ荒くなる。
「気を悪くしないでくれよ。何の事はない、僕を刺した犯人についてさ」
「ああ、そいつ捕まったのか？　早田に聞いても、要領を得ないっつーか」
楯列はくすりと笑みを零した。
「そうだろうね、立場が逆なら僕だって信じられないのだから」
「で、どうなんだよ？」

「――衛（まもる）、こいつらは何じゃ？」
「――っ！」
鈴を鳴らしたような、高く、甘い声。その声に弾かれて、一は振

り向く。
「何じゃ、小僧と小娘か」
そう言いつつ、部屋の隅から姿を見せたのは少女――いや、幼女と形容するのが正しいくらいの年頃の女の子だった。
彼女は黒い着物に身を包んでいる。その着物は少し変わっていて、襟、袖口、裾にフリルが付けられていた。文庫結びにされた、ピンクの帯が黒の上でやけに映えている。
「ほう、黒ゴスか。……じゅるり」
「ゴスって、何の事だ？」
「ゴシックロリータの事だ。知らないのか、先輩」
涎を垂らしそうになっている早田が、一には遠いものに見えた。
――ロリータ、ねえ。
だというのに、その女の子からはどこか老成した雰囲気が漂っていた。前髪は綺麗に揃えられ、肌は病的なまでに白い。はっきりとした顔立ちのせいか、年齢に似合わず凛として見える。
「先輩、この子……」
早田が戸惑うのも無理はない。楯列以外、誰もいない筈だった部屋から突然現れた女の子の存在は、一をも大きく混乱させていた。
しかし、彼女が楯列の関係者なのは間違いなさそうではある。楯列本人が女の子に驚いていない事や、楯列の名前を呼び捨てにしている事から一はそう判断した。
「紹介するよ、この子は槐と言うんだ」
槐と呼ばれた女の子は、一たちを値踏みするような、無遠慮な視線を送る。挨拶を返すつもりはない様子であった。
「えーと、楯列、この子は……？」
「ああ、言い忘れていたね。僕の妹だよ。人見知りをするけど、どうか仲良くしてあげて欲しい」
――妹……？
「ふん、お前の妹にしては似てないな」
早田は鼻で笑うと槐を見遣り、近付いていく。

「な、何じゃお主……？」
「槐ちゃん、このクソ野郎に似なくて良かったな」
「早田君、兄を前にしてその発言はどうかと思うよ」
「黙れ、耳が腐る」
楯列は大仰に肩を竦めてみせた。
「……久しぶりに君たちと話したものだから喉が渇いたね。早田君、悪いんだけど飲み物を買ってきてくれないかい？　ああ、勿論お金は出すよ」
「ふざけるな、お前はそこで渇いて死ね」
早田は槐の頭を撫でながら言い放つ。
「お駄賃が欲しいなら弾んであげるけど？」
「馬鹿にするなよ、楯列。お前みたいな成り上がりに恵んでもらう義理などない」
「……一君、喉、渇かないかい？」
楯列に目配せされ、一は頷いた。
「早田、悪いんだけど」
「先輩は何がお望みだ？　任せてくれ、どんな無理難題にも応えてみせよう」
「あー、じゃあ甘そうなコーヒーを……ってズボンを脱ごうとするな！」
早田は不満そうに唇を尖らせる。
「おい、お前はどうするんだ？」
「僕はレモンティーを頼むよ。ああ、ホットでね」
「分かったから金をよこせ」
楯列は差し出された早田の手のひらに一万円札を乗せた。
「……嫌がらせか？　面倒だから小銭を出せ」
「悪いけど、小銭は持ち歩かない主義でね。ああ、それとレモンティーは病院を出て、右に曲がって、少し歩いたところにある自販機にしか売ってないんだ」
早田は万札を握り締めると、拳を震わせる。

「早田、頼むよ」
「先輩の頼みだ、仕方あるまい」
「それと……」
「まだあるのか？」
楯列は槐を指差した。
「その子も連れてってくれないか？　部屋にばかり篭っていては退屈だろうからね」
「良いだろう」
「なっ、何をするっ！？」
早田は迷わずに槐を抱きかかえると、尚も抗議を続ける年下の女の子へ愉しげに笑い掛ける。
「槐ちゃん、お金ならあるから心配いらないぞー、お姉ちゃんと一緒に気持ち良――楽しい事をしよう」
「早田、子供に手を出したら絶交すっからな」
「……分かっている」
異様に長い沈黙について問い詰める前に、早田は病室から飛び出していく。
「あいつ、本当に大丈夫だろうな……」
「その点については心配いらないよ。槐君も本気で嫌なら抵抗するだろうしね」
一は溜め息を吐き、ベッドの端に腰を下ろした。
「一君、椅子ならあるよ？」
「……良いよ。で、話って何だ？」
「さすがだね、気付いてくれたんだ」
「三年も付き合ってりゃ馬鹿でも気付くよ。……わざわざ早田を追っ払った理由はなんだ？　あいつには聞かれたくない話なのか？」
楯列は大儀そうに体を起こし、一の目を真っすぐに見つめる。
「好きだ」
「ふざけてんなら帰るぞ」
「久しぶりに会ったんだから、もっと優しくしてくれても良いんじ

ゃないのかな？」
「充分優しいだろうが」
　一は立ち上がり、窓の近くまで寄った。
「……早田には黙っておいてやったろ。本当は、お前に妹がいないって事を」
「あれ、一君は知っていたっけ？」
「一回生ん時、お前が自分で言ったんだよ。『一人っ子だから愛に飢えてる。だから結婚しよう』ってな」
　楯列は「そんなのいつも言っているから」と、苦笑した。
「それを踏まえて聞くんだけどな。妹なんていない筈のお前が妹だと紹介したあの子は誰だ？　いや、つーか、何だ、あれは？」
「難しいね。一言でならある程度は言い表わせるんだけど、説明するのは至難の業だと思ってる」
「言ってくれ」
「あの子が、槐が僕を刺したんだよ」
　あまりにもさっぱりとした風に楯列は言う。
「……嘘だろ？」
「嘘じゃないよ。あの子のご機嫌を損ねてしまったらしくてね、お腹をぐさりと……。どうせ貫かれるなら、一君の――」
「――やめろっ。……じゃあ、妹じゃないのなら、あの子はお前とどういう関係なんだよ？」
「赤の他人さ。旅先で袖が触れ合ったくらいの縁はあるかもしれないけどね」
　一は呆れて溜め息を吐く。
「刺されたんだろうがよ。傍に置く理由が分からねえ、警察に突き出したらどうなんだ」
「出来ない理由があるんだ。一君、槐はね、ソレなんだよ」
　一は楯列と三年付き合ってきた。彼の人となりも良く知っている。意味のない嘘を吐く奴ではないし、シュールな冗談を吐く奴でもない。

「……楯列、お前……」
「大変な事になっちゃったよ」
楯列は笑って、力なくベッドに横たわった。

Tank Sank!

「灯（あかり）、準備は出来ていますね？」
「は、はいっ、勿論です光姉様（ひかりねえさま）」
「灯、私のもちゃんと持ってる？」
「はいっ、聖（ひじり）お姉様のも勿論持っていますよ」
「結構。じゃあ行くわよ、光、灯」

痛い。
誰かの何かで腹を刺され、血が流れ、傷口を抉られ、焼けるような痛みが全身を貫いた。倒れてしまいそうになるのを堪えて振り向けば、顔面を蒼白にさせた一人の少女、と、呼ぶにはまだ年端もいかぬ女の子がそこにいる。
彼女は小刀を握っていた。自分を刺したであろう凶器を持つ手は震え、歯はかちかちと震え、体はがたがたと震えている。
寒いのだろうか。的外れた事をぼんやりと思いながら女の子に笑い掛けると、彼女は震える声で呟いた。

「彼女との出会いはこんなところさ」
事のあらましを語った楯列は満足そうに目を瞑ってみせた。
一はしばらくの間言葉を忘れてしまう。どう返そうか考えているのではない。楯列に呆れ果てているのだ。
「馬鹿だろ、お前」
ようやく口を衝いて出たのは罵りの言葉である。楯列は「かもね」と笑った。
「自分を刺した奴を傍に置いとくか普通？　また寝首掻かれるかもしれないんだぞ」

「掻かれないかもしれない。一君、僕は槐君を信じてあげたいんだ」
「……信じる？　あの子の何をだよ」
「格と徳さ」
楯列は言い切ると、一の瞳を覗き込む。
「一君、座敷童子を知っているかい？」
「ざしきわらし？　あの、家に住んでる子供の妖怪、みたいな奴か？」
一は聞き返し、記憶からおぼろげなものを引き出した。
「うん、その座敷童子さ。彼らが取り憑いた家には幸運が舞い込み、彼らの去った家には不幸が舞い込むって言われてる、あの座敷童子だよ。東北地方に古くから伝わる有り難くも有り難迷惑な妖（あやかし）」
「詳しいな。お前、そういうのに興味あったんだ」
「溺れる者が藁の材質を調べただけさ。これにしがみ付いても、自分を預けても良いのかって」
楯列は自嘲気味に笑むと、
「ま、藁はどこまで行っても藁にしかならない。その上、助けを求めた藁まで助けを求めてた。そういう話さ」
どこか他人事のように言い放つ。
「なあ、お前の口振りだと、さっきの子が座敷童子なんだよって聞こえるんだけど」
「少なくとも僕はそう思ってる。一君、僕がどこに行ったか話したろう？」
「……東北」
楯列は嬉しそうに頷いた。
「そう。じゃあ僕の目的がなんだか分かるかい？」
一は頭を掻く。ここまでヒントをもらってしまえば、答えは一つしか思い付かない。
「座敷童子に、会いに、か？」
楯列は鷹揚に頷いてみせる。
「思うところがあってね。幸運にも二年前に予約が出来ていたから、

親戚総出で座敷童子を追い回してたって訳さ」
「二年って、そんなに前から？　つーか、すげえ人気なんだな、座敷童子って」
「出会えれば幸運が舞い込むからね。それもローリスクで。金持ちってのは伊達に欲深くないのさ。欲しいものを手に入れれば次のもの、次を手に入れればその次に――人間の欲が尽きる事は多分、ないんだろうね」
「お前なら欲しいものなんて何でも買えるだろ」
羨望と嫉妬。持たざる者の気持ちは持つ者には分からない。しかし、その逆も然りである。
「買えるものならとっくに買っているよ。残念だけど、欲しいものは未来永劫非売品さ。だからこそ、ソレになんか頼ったんだ」
「……で、あの子を追い掛け回して刺されちまったってか。幸運をもらう筈が不幸もらって、世話ねえな。いや、どうしようもないか」
「正直焦っていたよ。僕ともあろうものが、全く嘆かわしい」
楯列はわざとらしく肩を竦めるが、元々のルックスが日本人離れしている事もあり、違和感はなかった。
「槐、だったか。なあ、あの子はどうしてここにいるんだ？」
「さあ、僕にもさっぱり分からない。目覚めたら、彼女もここにいたんだ」
「お前に取り憑いてたりな」
一はそう言ってからすまなさそうに笑う。
「うーん、あながち間違ってはいないかもね。そもそも、座敷童子なんて妖怪が現れたのはどうしてだと思う？」
問われ、一は考えてみる。しかし、何故現れたかと言われても、誰かを幸福にする為だとしか思えなかった。
「ヒントだよ、一君。どうして子供の姿をした妖怪なのか。どうして子供が幸せにしてくれるのか。ここに注目してごらん」
「民俗学みたいだな」
「ああ、そんな感じだよ。一君、講義取ってたよね？」

「単位は落としたけどな」
腕を組み、もう一度ベッドの端に腰を下ろすと、一は目を瞑る。
「……妖怪って事は昔からいるんだよな。昔に、作られたんだよな。そんでもって子供、か」
「何か分かったかい？」
「時代背景……その辺から考えりゃ、労働力の象徴って事じゃねえの？　畑仕事とかさ、子供だからって馬鹿には出来ないだろ」
「流石、一君」
楯列は手を叩いて微笑した。
「どうして単位を落としたのか理解に苦しむね。……子供が多い事はそのまま富に繋がるんだ。だけど、そうならない場合もある。子供が産まれても、あまりに貧しければ労働力になるまで育てられないって場合さ」
「……口減らしだったっけ」
「東北地方では臼殺（うすごろ）と呼ばれる風習があったのを知っているかい？」
一は首を横に振る。初耳だが、響きからは何となく想像がついた。
「口減らしに子供を間引く事を言うんだけどね。間引く子を石臼の下敷きにして殺してしまうらしいんだ。その後、家の中の土間や、台所の下に埋めてしまう。臼で殺す。だから、臼殺」
気の滅入る話だ。一は深く息を吐き、楯列の続きを待つ。
「間引いた子供たちを祭る為に、あるいは世間体を保つ為に、座敷童子は多分、真っ当でない理由で生まれたんだ。言い方は悪いけど地縛霊みたいなものさ。ああ、勿論、僕らが話した事は仮説の域に過ぎない。だけど、座敷童子とは幸運をもたらす使者として、万人から望まれていた訳ではないと思うんだ。陳腐な言葉だけど、彼らは可哀想だよ」
「おい、まさかあの子に同情してるのか？　だから殺さないで、何もしないで傍に置いてるんじゃないだろうな」
「可能性はなきにしもあらずだね。だけど一君、忘れていないかい？　僕はね、幾らソレに縋ろうとした男とは言え、曲がりなりにも

金持ちなんだよ。欲しいものなら買える。……殺すというのは、命を奪うって事だよ」

だからどうした。一は目だけで訴えた。

「奪う――下賤だね。僕には楯列としてのプライドがある。与える事はあってもその逆は行なえないな。何があろうと許されない」

強い意志、確固とした決意を、一は楯列から感じる。自分を貫き通そうとする彼が眩しくもあり、嫉ましくもあった。

相手が人外、ソレだからといって己を曲げない。素晴らしい事だと一は思う。

しかし、一は勤務外だ。ソレを敵に回し、殺し、殺される存在なのである。勿論、ソレだからと言って問答無用で憎んだりはしない。今までで、充分に学んできたのだ。

「でも、あの子はお前を傷付けた」

それでも、納得がいかない。放って置く訳にはいかない。仮に自分が見逃したとしても、座敷童子の存在はいずれオンリーワンにばれてしまう。そうなれば、人を傷付けたソレとしてあの子は討伐の対象になってしまうだろう。同時に、ソレを匿った楯列にも危害が及ぶかもしれないのだ。ソレか人間かで助ける対象、肩入れする相手を選別するつもりはないが、会ったばかりの女の子と友人ならば、一は迷わずに友人を取る。

「僕が悪いんだ。仕方ないよ」

「……ソレの味方をするってのか？」

「まだ話が足りていないとはいえ、どうやら、この件に関しては一君と平行線を辿るしかなさそうだね」

楯列は憂鬱そうに溜め息を吐いた。

――吐きてえのはこっちだっつーの。

一は今後の事を考え、肩を深く落とす。

「喉、渇いたな」

「ああ、僕もだよ」

二人は目を合わさないで、力なく笑った。

早田は悩んでいた。
「槐ちゃん、何が飲みたい？」
「わしは、別に何でも良い」
「ふーん、ならば炭酸飲料はどうだ？　シュワっとして面白いぞ」
「それで構わぬ」
悩みとは、目の前の少女、槐についてである。
この子は誰なのだろう。楯列に妹がいるなんて聞いた事がなかった。自分より付き合いの長い一ですら驚いていたのだから、この少女が本当に楯列の妹なのかどうか、自分ではさっぱり分からない。
「どうした、買わぬのか？」
槐の、年に似合わぬ言葉遣い。背伸びしていると言えばそれまでだが、あまりにも似合い過ぎているのが気になっていた。外見は誰がどう見たって幼女としか思えないのだが、雰囲気からはこの世の全てを達観した老人そのものに思える。目を開ければ幼い女の子が、目を閉じれば老人が隣にいるような感覚に、はっきり言えば気持ちが悪くて仕方なかった。
そもそも、この子は、人間なのだろうか？
「まさかな……」
ソレの存在を早田は勿論認識している。理解している。しかし、幾ら槐が怪しいと思っていても、ソレだとは思えない。
馬鹿な考えだと自嘲して、考えを振り払うべく自販機に自分の千円札を挿入する。ボタンを押して、出てきた缶を槐に渡すと、彼女はびっくりして缶を落としそうになった。
「ああ、お姉ちゃんが持っていてあげよう」
「……わしの方が年上なのじゃが……」
「何か言ったか？」
「言っておらん――む？」
槐があらん方向に目を遣るので、早田もそちらへ視線を移す。

「なんだ、あれは」
彼女らの視界に飛び込んできたのは、珍妙な集団であった。

『騎士団』、『図書館』、『神社』、『天気屋』、『館』。
これらは駒台の街で目立った行動を起こしたフリーランスの通り名である。ソレを殺す事を生業とした集団の、もしくは個人の名前。
嫌悪すべき、忌避すべき、蛇蝎の如く扱われて当然の名前だ。
フリーランスはソレを殺し切る異能者で異常者で、あるいは異種の力を所持している。力を持つ。その点はオンリーワンに雇われている社員、勤務外と大差はない。
が、差は確かにあるのだ。
勤務外とフリーランスを分ける違いとは、唯一つ。自由。フリーランスは自由なのだ。勤務外と違い、他者からのルールに縛られていない。
だからこそ、疎まれる。同じ力を持つ筈の勤務外からですら嫌悪される。
縛られていないからだ。勤務外がオンリーワンに紐を付けられた飼い犬ならば、フリーランスは野犬か、狂犬。気に入らないものには噛み付き、吠え立てる。好きな時に好きな事を、好きなように好きなもの嫌いなもの関わらず、食い散らかすのだ。
勿論、フリーランスと呼ばれる者全てが狼藉を働く訳ではないだろう。一般人と変わらない生活を送れる者もいるのだろう。
しかし、それでも彼らは異なっているのだ。彼らは確かに力を持っている。生きる為に、恨みを晴らす為に、信念を貫く為にソレを殺している。
どこか、壊れている。
ルールに縛られている。聞こえは良くないのかもしれないが、勤務外はその一方、ルールに守られているかもしれない。ぎりぎりの、踏み越えてはいけない線の手前にいる事を強制されているからこそ、

人間を保てるのだから。
　中には素行の悪い、線を踏み越えた勤務外もいる。人々の為に、人々の為にならないソレを無償で殺すフリーランスもいる。一概に、フリーランスを悪くは言えない面があるのも確かだ。事実、オンリーワン近畿支部情報部の掴んだ話では『図書館』、『神社』、『天気屋』の片割れが街に溶け込めている、らしい。
　性質の悪いフリーランス、『館』は北駒台高校での戦闘により、構成員の約半数、三名の魔女が死亡を確認され、壊滅に追い込まれたと判断されている。『騎士団』は駒台に来てから、オンリーワンに褒賞を要求する事無くソレを殺し続けている。問題はない。駒台にいるフリーランスに問題はない。
　果たして、本当にそうだろうか。
　フリーランスを、力を持つ者を野放しにしていて、問題はないと言い切れるのだろうか。

　黒いベールと、黒いワンピース。
　――シスター？
　早田の双眸は修道服を着た三人の女を捉えていた。近付いてくる三つの影が、彼女の目には妙に禍々しく映る。
「……もう来たのか」
　槐が何事か呟いたのだが、早田の耳には入らない。何故だか背筋が寒くなる。体が強張っていく。フットサルの大会でも一度だって緊張した事がなかったのに、どうしてだか自分でも理解出来なかった。
「槐ちゃん、戻ろう」
　早田の声は微かに震えている。目的の飲み物は購入していなかったが、一刻も早くこの場から立ち去りたかったのだ。シスターから目を反らし、病院へと足を向ける。

「はぁい、神のご加護はいかが？」

「は……？」

軽い口調に振り向くと、三人の、シスターらしき人物がいた。

早田は声こそ上げなかったが、それでも驚きはしている。ついさっきまで離れていた筈の距離を、この集団は一瞬の間に縮めたのだ。

「……シスターが何の用だ？」

「よくぞ聞いてくれたわね。そうっ、私たちはシスターっ」

真ん中のシスターが声を張り、片手を天にかざす。

「何だお前ら、三つ子か？」

早田には正直、三人の区別が付きそうになかった。全員が同じ人物に見える。シスターは服も背格好も似通っているし、顔だってそうだ。

「神を愛する信仰深い敬虔な修道女（シスター）、そして、私たち三人は姉妹（シスター）でもあるのよ。シスターでシスター、主の命に答えるべく、フリーランス『教会』、ただ今参上」

早田の困惑は無視されている。シスターは何ものかに取り憑かれたみたいに話を続けていた。

「私たちは主の命に従い、この街を守る為にやってまいりました」

右側にいたシスターが恭しく頭を下げる。

「守る為、だと？」

槐を自分の背に隠しつつ、早田は疑問を投げ掛けた。フリーランスとは、何だ。確かに彼女らは修道服を着ていて、教会だなんて言っているが、信じられない。

「はっ、はい、私たちはこの街をソレの魔手から守る為にやってきたんです」

最後に、左側に立つ少し気の弱そうなシスターが口を開いた。

シスターで、シスター。

新手の、性質の悪い勧誘か、もしくは出来の悪い芸人としか思えない。早い話が、この状況は笑えない。関わり合いになりたくない。

「生憎だが、私は忙しいのだ。神に祈る暇がないくらいにな」
そう答えると、シスターたちは顔を見合わせてくすくすと笑った。
やがて、真ん中に立つシスターが早田に向き直る。
「用があるのはあなたじゃないの。……主の重要性について説くのはまた今度。私たちが欲しいのは……」
シスターは早田の後ろ――槐を指で示した。
「……そちらのおチビさんよ」
「何……？」
ますます訳が分からない。
「その子を大人しく引き渡してくれれば、神に誓ってあなたには何もしないわ」
「街を守るのとこの子を引き渡すのと、どう関係があるのだ？」
頭はまだ混乱している。だが、このまま流されるつもりはなかった。早田は状況を整理しながら、注意深くシスターたちの一挙一動に目を向ける。
「大ありですよ。私たちはフリーランス。ソレを殺す事を生き甲斐としているんですからね」
「勤務外、とは違うのか？」
「ちっ、違います！　あんなのと一緒にしないでくださいっ、私たちは犬じゃないんですっ」
「灯、落ち着きなさい」
左側のシスターが窘められた。どうやら、気の弱そうな彼女は灯というらしい。
「どうかしら、あなたにとって悪い話じゃない筈よ。命、惜しいでしょ？」
場の空気が、殺意によって凝固していく。相変わらず、早田は分からない。考えても考えても答えは出ない。自分は殺されるかもしれない。なのに、体は動かなかった。
「……聖姉さん、プラン変更です。『主は言いました、邪魔者は真っ向から討滅せよ』、でいきましょう。よろしいですね？」

聖と呼ばれた、真ん中のシスターはにやりと笑う。
「結構よ、光。では灯、聖釘(エレナ)を」
「はっ、はい……」
灯は持っていたトランクの中から、長さ十五センチ程の釘を取り出した。その釘を受け取った聖は早田を見て楽しげに相好を崩す。
「覚悟は出来てるかしら、異端者さん」
駄目かもしれない。ここで訳の分からぬまま死ぬのを覚悟した刹那、
「娘、逃げるぞ」
早田は槐に耳元で囁かれた。
「……了解した」
さっきまで動けなかった足が動く。不思議と、声が出ている。早田は頷き、『教会』と向かい合った。
「悪いが、この子は渡せん。私は預かり物を大切にするタイプなのでな」
「良い心掛けね、主も喜ばれるわ。どう、宗旨替えしないかしら？」
「重ね重ね悪いが、私が信じるのは神などと曖昧な存在ではない。もっと崇高で、確実なものだ」
目の前の奴らがフリーランスだとか、『教会』が街を守ろうが槐を狙おうが関係ない。自分はここで死ぬつもりもなければ、槐を渡すつもりもなかった。それだけで、動くには事足りる。
早田は強く聖を見据える。
「良い目ね。真っすぐで、強い子。あなたを亡くしてしまうのは残念かも、主も悲しまれるわ、きっと」
聖は溜め息混じりに言うと、持っている釘を早田に向けた。
――釘、か。
釘に大した仕掛けは施されていない。持ち手の部分に滑り止め防止の布が巻かれているぐらいだ。しかし、大きさ、長さが普通の釘とは桁違いである。これで貫かれては、普通の人間ならばただでは済まないだろう。

戦う。その選択肢は早田になかった。自分は武器を持っていないし、傍には槐もいる。自分の命を守るので手いっぱいだと言うのに、その上誰かに気を配るのは難しい。選ぶべきは、闘争ではなく逃走だ。

「来ないのならこちらから行くわよ？」

聖が一歩前に出る。

聖だけが、前に出る。早田を侮っているのか、他に理由があるのかは定かではない。だが、チャンスはここしかない。

「……槐ちゃん、私が隙を作る。出来たら、病院まで逃げるぞ」

「ふむ、悪くない案じゃな。あそこの人間たちを巻き込めば逃げ切る算段も付くじゃろ」

耳が痛かった。早田としても、一や無関係な人を巻き込みたくはないのだが、自分たちだけではどうしようもないのも事実である。

「何を話しているのかしら？」

「お前らを出し抜く相談だ」

早田は挑発的に笑って、右肩をぐるぐると回し始めた。

「ふふ、結構。出し抜いてもらおうじゃ――」

聖が腰を落とす。

「――ないのっ！」

釘の先端が妖しくぎらついた。加速したシスターは早田の喉元へ一直線に向かっていく。

次の瞬間、早田と聖を結ぶ直線上に異物が入り込んだ。

それを投げ込んだのは早田だ。アンダースロー気味のフォームから放たれたのは中身の詰まったジュースの缶。

スチール製の缶だが、致命傷には至らない。それでもだ、やはり当たれば痛い。何よりも、聖の体は障害を払おうと勝手に動いている。

勢い余った釘は缶を貫き、

「きゃっ！」

聖の目の前で破裂した。飛び散る中身が彼女を濡らしていく。

「馬鹿めっ」
「聖お姉様っ」
早田は視界の塞がっている聖のこめかみに飛び蹴りを放った。
フリーランスといえど、蹴りが綺麗に決まれば軽く吹き飛ばされる。聖は地面を転がり、受け身を取って立ち上がったが、早田たちの足は早い。疾風の如く、彼女らの背中は遠くなっていた。
「光っ、灯っ」
「分かっています」
光と呼ばれたシスターはとうに駆け出している。しかし、追い付けそうにはなかった。脚力自体は早田の方が上らしい。
「聖お姉様、大丈夫ですか?」
聖は差し伸べられた手を払い、憎々しげに彼方を睨み付ける。
「あの子、許せないわ。服がベタベタする、虫が寄ってきたらどうするつもりなのよ……」
「あ、あの、姉様、無益な殺生は良くありません……と、思うんですけど」
「祈る事を知らない奴らに主の慈悲は勿体ないわ」
聖は立ち上がり、服に付いた汚れを叩き落とそうとするが、粘着力が強くて落ちそうになかった。
「……主は言いました、右の頬を殴られたら肉の一片すら残さず消し潰せと。灯、奴らはどこに?」
「え、えっと、あっちの病院です……」
「灯、聖骸布(マンディリオン)を使うわよ。油断していたわ。気付いてはいたけど、あんな物投げてくるなんて……最初から三人掛かりで行けば良かった」
負け惜しみなのは見え見えだったが、灯は何も言わない。言えない。機嫌が悪い時の聖に余計な事を言えば痛い目を見ると、身に染みて分かっていたからだ。

看護師が叫ぶ。医者が怒鳴る。患者たちが声を張り上げ見舞い客が悲鳴を上げた。

彼らには内心で謝りながら、一刻も早く一たちの元へと戻るべく早田は駆ける。

「ぬ、えれべえたあとやらは使わんのか？」

「時間が惜しい」

最上階まで行く事に変わりはないのだが、早田は、今はただ足を動かしていたかった。止まってしまうと、恐怖が心を押し潰し、塗り固めていく。もう二度と動けなくなってしまう。そんな気がしていたのだ。

「走れるか？」

「ぬしのような小娘に心配されるわしではない」

頷き、早田は階段を駆け上がった。

まだ、追っ手が来ている気配はない。足の速さなら誰にも負ける気はしないが、生死を分かつ極限下でいつまでも最高速を維持出来るとも思っていない。距離と時間を稼ぎ、一たちに危険が迫っている事を伝えなくてはいけない。『教会』とやらが槐を狙っているなら、楯列にも被害が及ぶだろう。逃げなければならない。

「……槐ちゃん、君は」

「無駄話は後じゃ、ほれ、着いたぞ」

早田たちは最上階まで辿り着くと、真っ白な廊下を脇目も振らず走り抜けていく。

もう少しで、病室だ。

早田が安堵しかけたその時、けたたましい音と共に前方の窓ガラスが割れる。

「来おったか」

駆け抜ければ部屋には入れたのだが、早田は思わず立ち止まってしまった。

「……間一髪ですね。部屋に立て篭られては面倒でしたから」

窓の外から、ひらりと身を踊らせたのは光と呼ばれていたシスタ

ーである。彼女は茨のような形をした鞭を所持していた。
「フリーランスとは非常識だな。ここを何階だと思っている」
「あなたの足の方が非常識ですよ。聖姉さんを蹴飛ばし、あまつさえここまで逃げ切るんですから」
「『教会』、何故この子を狙うのだ。この子がいったい何をした？」
その言葉に、光は薄い笑みを浮かべる。
「そこのソレは人を刺しました。主もお怒りになっております。人に害なすソレを討伐して、何が悪いのですか？」
「……奴からも聞いた話だがな、そんな与太を信じるほど私は馬鹿じゃない」
「与太？　違うわ、あなた、本当にそれが人間だと思っているの？」
はっきり言えば思っていない。自分のスピードに付いてきて、尚且つ息を切らせていない女の子を同種とは思いたくなかった。
「知らん。人間だろうとソレだろうと、私はこの子を守らなければならない」
それでも、見過ごせない。
「――汚らしい。あなたもそいつの恩恵に預かろうとするクチですか」
「何を言っている？　私はただ、先輩に嫌われたくないだけだ」
「世迷言を……っ！」
光は床を鞭で打ち鳴らし、その両端を持って構える。
――今度は鞭か。良い趣味をしてるじゃないか。
「槐ちゃん、下がって。私が道を開く」
槐は訝しげに早田を見つめた。
「ぬしが、か？　言っておくが、先刻のような真似は通用せんぞ」
「任せてくれ、恋する乙女の前に敵はいない」
「……精々目を曇らせるな」
言われずとも。早田は光を睨み付ける。思い人はすぐそこだ。二人の出会いを邪魔するのなら、神様にだって退いてもらう。

ひとりぼっち

聖釘（エレナ）。フリーランス集団『教会』のメンバーである、聖が主に用いる武器である。その形状を一言で言い表すのなら、大きな釘。十五センチと、通常のものより幾分か長い事以外には、見た目の上で大した仕掛けはない。

が、大抵の場合、日夜ソレと戦い続けるフリーランスが種も仕掛けもない武器を使う事は稀である。

「茨の冠（ピラト）」

光の呟いた言葉は、彼女が鞭で床を打った音に掻き消された。

「一応、聞いておきます。その子を渡すつもりはないんですね？」

「神に誓って、ない。だからと言って傷物にされるつもりもないがな」

「挑発的じゃのう」

槐は呆れた風に呟く。

「しているからな」

光には聞こえないように早田は笑った。喧嘩ならともかく戦闘なんてした事がない。まして目の前の女はソレを殺す事が生き甲斐と言っていた異常者である。ならば相手との力量差は考えるまでもなく、精神的に揺さぶりを掛けて隙を作るしかなかった。

「私に奇襲は通用しません、何をやろうとしても無駄ですよ」

「知っている。お前の狡賢そうな顔を見た時からな」

「……挑発も無駄です。断言しておきましょうか。あなたは私に殺されます」

しかし、冷静な口調とは裏腹に、光は苛立たしげな様子で床を何度も鞭で叩いていた。

「では何でも出来るすっごい神様とやらにお祈りでもすると良い。

無事に私を殺せますようにとな」
「主を……侮辱しますか」
「どうした、掛かってこないのか？」
早田の挑発に乗る形ではあったが、光はぎりりと歯を食い縛ってから鞭で床や天井を叩き回る。
「それが異端者の言う事ですかっ！？」
光の持つ武器、茨の冠は所々に棘の付いた鞭だ。叩くだけではなく、傷口に棘が食い込めば追加のダメージを見込める。肌を叩き、抉る事が可能なのだ。
しかし、この武器は相手を痛め付けるばかりではない。ピラトの特異な部分として、持ち手の部分にも棘が生えている事が挙げられる。痛みは所持者にも何割か跳ね返るのだ。現に、光の手からは新鮮な血液が溢れ、しとどと濡れている。
「ソレを庇う愚者には茨の裁きを。『教会』の名に掛けて、あなたを抉り殺します」
光の言葉を最後まで聞く前に、早田は咄嗟にその場から飛び退いた。彼女の動作より一瞬遅れて高く乾いた音が響く。
「……避けましたか」
床が砕けていた。早田の立っていた位置の床が、歪な形に抉り取られている。飛び散る破片が目に入らないよう右腕でガードしながら下がれば、
「右からじゃっ」
死角からの二撃目。
槐の声に従い、早田は左方向へと転がった。耳元で破砕音。続けて風切り音。破片が腕が掠めていったが、痛いと気にしている余裕はない。壁際まで転がったせいで、逃げ場所が狭まっている。後ろに下がるか、右へ戻るか――。
「はあっ！」
迷う時間は与えられない。早田は勘に任せて、姿勢を低くしながら前方へと転がった。と、同時、右側の床がピラトによって抉り取

られる。
「もらった……！」
息を吐く間もなく、早田は光の武器を奪い取る為に突き進んだ。
予想していたよりも鞭の威力は恐ろしいが、叩き落とすなりすれば無力化するのは自分にでも出来ると判断、即座に行動に移す。
「させません」
「娘、下がれ！」
光はピラトの軌道を直線から曲線に変えていた。早田が飛び込んでいこうとした空間、そこを鞭で薙がれてしまう。
その軌道は正に変幻自在。上から下へ、下から上、右から左、左から右へ。更に上下左右問わず、ピラトは不規則に動き回っていた。
壁、天井、床が空間ごと切り裂かれていく。そう思わせるほどに光の鞭捌きは素早く、鋭利だった。とてもじゃないが近付けそうにない。早田は口惜しそうに後退した。
「逃げられませんよ」
光はピラトで空間を抉りながら足を進めていく。その分、早田たちは下がっていくしか出来なかった。
一縷の望みを掛けるのも馬鹿らしくなるくらいに、光は徹底した破壊を尽くしている。少しでもピラトの攻撃範囲内に体が触れてしまえば、その箇所から肉体は削られていくだろう。かと言って、ここから逃げては何の解決にもならない。早田は唇を強く噛み、鞭の軌道に目を凝らす。一見不規則に見えて何かパターンがあるのではないかと、そう考えたのだが、徒労に終わった。そもそも、早過ぎて見えないのである。
「下に行くんじゃ、どうしようもないっ」
「しかし……」
逃げるか、身を刻まれるか。迷いは新たな試練を産む。
「光姉様、無事ですか！？」
「――っ！」
振り返ったそのすぐ先、十メートルも離れていない階段から聖と

灯が姿を見せた。
「追い付かれたか」
槐は諦めの混じった口調で呟く。前方にはシスター、後方にもシスター。前にも行けない。後ろにも戻れない。長いだけの廊下には他に逃げ場がない。
早田は窓を見遣ったが、ここは病院の最上階だ。飛び降り、仮に即死を免れたとしても無傷で済む筈がないのだ。動けなくなったところを狙われればそれでおしまいである。
相手は早田よりも命のやり取りに長けたフリーランス、もう奇襲は通じないだろう。ならば選択肢は二つ。鞭で抉られるか、釘で貫かれるか。
「良いわね、光」
「分かっています」
絶対的に絶望的な状況に追い込まれている。一対一なら逃げる余地もあったのだが、挟まれてはもうどうしようもない。『教会』の誰かが少し腕を、あるいは指を動かすだけで殺されてしまう。
「……いや」
早田は息を呑んだ。まだ、希望は潰えていない。絶望的な状況。それなら、どうして問答無用で仕掛けてこない。いつでもこちらを殺せる機会を不意にする。『教会』は何か狙っているのではないか。そして、付け込むならそこしかない。
「槐ちゃん」
失敗すれば死ぬ。このままじっとしていても死ぬ。
「……すまない」
「ぬ？　お、おおっ？」
その子を渡せと『教会』は言った。
――だったらっ！
可能性があるのなら、やるしかなかった。
早田は槐を抱え上げると、光に向かって、投げ付ける。嵐の如きピラトの見えない打擲（ちょうちゃく）空間。ここに放り込まれれば、肉は叩かれ棘

で抉られてしまうだろう。
「嘘っ！？」
しかし、そうはならなかった。悲鳴のような叫びが光から上がり、嵐のような攻撃は止んでいる。攻撃を止める為、無理に軌道を変え無理に力を入れた彼女はピラトを手放してしまっていた。
「止めなさい光！」
その間、槐は光の脇をすり抜けている。向かう先は一たちのいる病室だ。
そうはさせまいと、光は振り返って槐へと手を伸ばす。
「待ちなさいっ」
「待つのはお前だ」
「光！」
気が動転していたのだろう、光は早田がいる事を忘れて背を向けてしまった。聖の呼び掛けは少しばかり遅い。早田は既に床を蹴って、跳んでいる。
「かっ……！」
背中に強い衝撃を受けてしまい、光は床に倒れ伏す。
早田は光の背を踏み台にして前方の障害を飛び越えた。充分に勢いが付いていたらしく、着地した瞬間にはもう槐に並んでいる。あとは病室まで走るだけだ。
「逃がさない……！」
聖は走りながら、修道服のポケットから釘を取り出す。聖釘ほどの大きさではないが、先端がやけに尖っていた。それを両手の、指の間に挟み込んで投擲する。合計六本の釘が早田の背に襲い掛かっていた。
「――させぬ」
その前に槐が身を踊らせる。彼女の手には小刀が握られていた。
「槐ちゃん！」
「走れっ」
槐の着物の袖が翻った次の瞬間には、迫っていた釘が二本落ちて

いる。残りの四本はあらぬ方向へ飛んでいき、その行方を見届けた槐は再び走り出した。

早田は一足先に病室の前まで辿り着いて扉を開けている。

「先に中へっ」

後ろからは聖と、立ち直った光が迫るが、もう遅かった。槐は室内へと入り、続いて早田も中に入って鍵を掛ける。

「……早田、何やってんの？」

一と楯列は目を丸くして早田たちを見つめていた。

早田は息を切らせながら「鬼ごっこだ」と、何でもなさそうに告げる。

「馬鹿な娘よ。……衛、ここを出るぞ。奴らが追ってきている」

「へ？　奴らってお前ら、誰と遊んでたんだ？」

一は不思議そうに扉を眺めた。

「早いね。一君、悪いけど備え付けている電話の一番を押してくれないか？」

楯列は慌てる素振りを見せず、一をベッドから追い出してカーテンを閉める。

「おい、説明しろよ」

「ん、一君は僕の着替えを覗きたいのかな？」

「目を腐らす気はねえよ。一番だな、一番を押せば良いんだな？」

一は返事を待たずに、一番をプッシュする。何も起こらなかった。

「……おい」

「説明は後じゃ。小僧、ここを出るから準備せい」

「生意気なガキだな。あー、良くわからないけど早田、帰るぞ」

鞄を肩に引っ掛けた一は扉の鍵を開けようとする。

「先輩、駄目だ。開ければ死ぬぞ」

「……あ？」

「向こうにはまだ鬼がいるからな」

一は動きを止めたまま早田に向き直った。

「なあ、どういう事だ？」

「……遊び相手は、『教会』というフリーランスだ」

「くっ、駄目です姉さん。ピラトじゃ歯が立ちません」

「何なのよこの扉っ」

「あ、あの、早くしないと誰か来ちゃいますよ……」

楯列の病室、その扉の前でシスター三人が突っ立っていた。

聖は壁を蹴りながら何事かを喚き散らしている。扉には幾つもの凹みや傷跡が出来ているが、どれも微々たるものだ。『教会』が病室に入る為に何度も攻撃を仕掛けたのだが、扉は強固だった。釘は先端が欠け、ピラトの棘も刺さらなかったのである。

「聖姉さん、エレナを使っては？」

光の提案に聖は首を振った。

「エレナは無機物相手だと単純な硬さ比べになるのを忘れた？　多分、これは無理だわ」

「じゃ、じゃあ、外から侵入するしか……」

「そう、ね。ん、光、お願いね」

溜め息を吐き、光は肩を落とす。

「高い所は好きじゃないんですけどね」

「これが終わったらパフェでも食べに行きましょうか。灯のおごりで」

「お、お姉様……？」

聖は「冗談よ」と、灯の頭を撫でながら言った。

「主よ、どうか私をお守りください」

光は胸の前で十字を切ってからピラトを構える。次に窓の鍵を開け、茨を外に向かって伸ばしていった。

「いってらっしゃい、気を付けてね」

「光お姉様、どうかご無事で……」

だったら代わってくれないだろうか。そう思いながらも、光は力なく笑った。

その頃、一たちはとっくに部屋を抜け出していた。
「……なあ、なんでこんなものがあるんだ？」
「備えあれば憂いなしと言うじゃないか。それとも一君はエレベーターが苦手なのかい？」
今、一たちはエレベーターに乗っている。楯列の話によれば、このエレベーターは病室から駐車場まで直通らしい。
「病室にこんなん作りやがって。馬鹿な金持ちってのは最低だな」
私服に着替えていた楯列は嬉しそうに笑った。
「否定はしないよ。でも、助かったろう？」
「……楯列、先輩にくっつき過ぎるな」
早田は一と楯列の間に割り込むと、楯列の足を強く踏み付ける。
「仕方ないじゃないか、ここが狭いのがいけないんだよ。ああ、それとも悪いのは僕を惑わす一君の魅力かな」
「楯列、それ以上顔を近付けたらぶっ飛ばすからな。……で、この後はどうすんだよ。警察にでも駆け込むのか？」
「いや、病院に行こうと思っている。と言うかだね、既に相手方へ連絡を入れているんだよ」
一は訝しげに楯列を見やった。
「また病院に？　そうすりゃフリーランスってのを撤けるのか？」
「そこに行けば警察よりは融通が効くからね。撤けるかどうかは分からないけど、時間は稼げるよ」
――どうだろうな。
一は、まだ自分が勤務外である事を黙っている。日常を壊したくなかったのだ。何より、楯列や早田に軽蔑されたくない。されないまでも、以前と同じようには過ごせなくなるだろうと思っていたからだ。
「下に着いたら僕の車で行こう。……事情はそこで話すよ」
「事情だと？　私や先輩がこんな目に遭っている事情が本当にある

んだろうな。納得出来なければ、殺してやる」
「目が恐いよ、早田君」
「……へらへらと。本当に気に食わない奴だ」
早田は楯列の足を解放してやると、彼とは反対側の壁に背を預ける。
「楯列」
「なんだい一君」
「……話がある」
一は声を潜めて言った。楯列は彼の言わんとする事が分かっていたらしく、早田に一瞥をくれる。
「奇遇だね、僕もだよ」

地下駐車場に着いた一らは楯列に先導されて早足で歩いていた。今は影も形もないが、フリーランスがいつ、どこから来るのかは見当が付かない。追われている。そんな焦燥感に体は後押しされている。
「槐君、追っ手は？」
「知らぬ。じゃが、人の気配はせんな」
楯列は頷き、一に目配せした。
やるのか。一は平静を装いつつ、
「早田」
声を掛ける。
早田は一を真っすぐに見上げて、小首を傾げた。
「……悪いんだけど、ジュース買ってきてくれないか？」
「こんな時にか？」
「こんな時だからな。お前も走ってたから喉が乾いてるだろ」
「問題ない。私は唾液でも飲んでいよう」
飲むな。一は頭を掻く。
「俺の喉が乾いたんだよ」

「むう、先輩の頼みなら仕方がないな」
「悪いな。楯列、自販機はどこにあるんだっけ？」
「あっちかな。ああ、僕の車は赤いスポーツカーだから。先に行って待っておくね」
楯列は駐車場の奥を指差した。早田は頷き、軽快に駆けていく。
その後ろ姿を見届けながら、一たちは真っ赤にカラーリングされたスポーツカーに乗り込んだ。

向こうから車のエンジン音が聞こえてくる。待たせては一に悪い。そう思った早田は速度を上げた。が、どこまで行っても自販機は見当たらない。あるのは車、車、車。車だけだ。
「何……？」
更に、行き止まりに突き当たってしまう。道を間違えたかと思ったが、ここは一本道だ。左右にも注意を配っていたし、自販機を見落としたとは思えない。しんとした、地下特有の物寂しい雰囲気に囚われ始め、早田は思わず息を呑んだ。
戻ろう。一には土下座して……許してもらえるだろうか。楯列には嫌味を言われるかもしれない。槐にはどう思われるだろうか。
低いエンジン音が規則的に駐車場に響いていた。が、その音が長く尾を引くものに変わっていく。遠く、離れていく。
「う、あ……？」
やがて、一切の音がこの場から掻き消えた。早田の心臓が早鐘を打っている。息が荒くなり、頭が真っ白に染まっていく。
一瞬、何が起こったのか分からなかった。しばらくの間放心していたが、ポケットで震える携帯電話のお陰で我に返る。
「……た、てなみ？」
早田は震える指を誤魔化しながら、受信したメールを開いた。
『シスターにバレないよう家に帰りたまえ。事情は後日説明するよ。

突然君を置いていった事に対して悪いとは思っているが、これは僕と一君の総意だ。部外者の君を巻き込む訳にはいかないからね。ではまた、学校で』

メールを何度も読み返す。だが、文面は変わらない。状況は変わらない。

「あ……、ああ……」

足元の感覚が消えていく。地に足が着いているのかどうか分からなかった。底無し沼に全身が浸かっていく感覚に、早田は震えている。

「先輩、先輩……」

捨てられた。見捨てられた。

嫌われた。一に嫌われてしまった。

ここまで一緒に来ておいて、巻き込みたくないなんて嘘だ。嫌だ。独りでいるのはもう嫌なのに。

頭は上手く働かない。何も考えられず、何も信じられない。

「急ぐわよっ、ああっもう！　あいつら舐めた真似してくれたわね！」

聞き覚えのある女の声に、肩がびくりと震えた。

「姉さん落ち着いて、まだ遠くには行ってない筈よ」

「車で追い掛ければ、す、すぐですよ」

間違いない。『教会』が追い付いてきたのだ。どうやってあの壁を抜けたのか、ここを探り当てたのか。とにかく、敵は今ここにいる。それだけは確かだった。

早田はふらふらとした足取りで、目についたワゴン車の後ろに隠れる。

「でも、どこに行ったんでしょうか……」

「知らないわよっ、手当たり次第に潰していくしかないわ」

「いえ、それはどうかと。多分別の病院では？　どうせ怪我人を連れて無茶は出来ないでしょうし」

「根拠がないじゃないの。街を出られたらどうするつもり？」
「街を出るにしても準備はいるでしょう。追われているとはいえ、ある程度はここで留まります。それに……」
「……ああ、なるほどね。タイヤの跡が残ってるわ。けど、車じゃなかったら？」
「わざわざ駐車場までエレベーターを繋げる意味がないでしょう。タイヤ痕は一つしか見えていませんし、それに、奴らが徒歩ならそれはそれで構いません。何にせよ、無駄口を叩かずさっさと車を出しましょう」
――どうする……。
シスターたちは会話を打ち切り、早田が隠れているのとは別のワゴンに乗り込んだ。
追い掛けるのか、ここに隠れ続けるのか。
「駄目だ……」
早田は結局『教会』を見送ってしまう。今から走れば、『教会』の行き先が掴めるかもしれない。しかし、足は言う事を聞いてくれなかった。せめて楯列に連絡を取ろうとして携帯を開く。が、電話を掛けても繋がらない、メールを送っても返事は来ない。どうやら彼は電源を切っているらしい。もしくは無視されているかだ。追い掛けようにも相手は車。おまけに手掛かりは、何一つない――。
「待てよ……」
――そんな筈はない。
早田は思い直し、先程の会話を思い出してみる。そうだ、楯列はどこに行くと言っていた。
「――病院だ」
確かにそう言っていた。ゴールさえ見つかれば、少しだけでも気力が湧いてくる。俯いている場合じゃない。本当に見捨てられたのか、嫌われたのか。まだ、分からない。一の口から真意を聞いていない。置いていかれたのは事実でも、楯列のメールだけでは何が起こっているのか分からないのだ。

早田はゆっくりと立ち上がり、鞄を投げ捨てる。走るのには邪魔だった。

何を悩む事がある。一に嫌われたのなら、彼の口からそう聞くまでは折れちゃいられない。走って走って、追い付く。追い付いてみせる。

病院。駒台に大した数はないが、余計な時間は食っていられない。一番近い所から、しらみ潰しだ。

決意すると、気持ちも体も不思議に軽くなる。早田はタイヤの跡を確認しながらゆっくりと、ゆっくりと速度を上げていった。

「良かったのかな」

４シーターのスポーツカー、その運転席に座る楯列はぼんやりと呟いた。

「早田の事か？」

助手席に座る一は流れていく景色を眺めながら、気の抜けた声で返す。

「うん。ここまで巻き込んでしまって、事情も話さずに置いてっちゃってさ」

「良いんだよ。あいつはまだ戻れる。ぎりぎり向こう側にいられるんだ。今日は、ちょっと運が悪かっただけだよ。ソレと話して、フリーランスなんて異常者に追い掛けられた。でも、それだけだ」

「それは一君にも言える事じゃないか」

一は楯列の横顔を眺めた。嘘を吐けない割には底の見えない顔をしているな、と、ぼんやり思う。

「だったら、どうして俺には言ったんだよ？」

「何をだい？」

後部座席で横になっている槐を見遣り、一は笑った。

「とぼけんなよ。早田を巻き込みたくなかったのは分かる。けど、俺にはその子の事を言ったよな？　俺は巻き込んでも良かったって

事だろ」
「しまったな、つい口を滑らせてしまったよ」
「……いつから気付いてた？」
「さて、僕には君の言いたい事が分からないな」
楯列は一の方を見ないまま、前だけを見つめている。
「ま、お前がそう言ってくれるなら良いんだけどさ」
「そうかい？」
「ああ。……楯列、俺さ――」
「――言わなくて良いよ。君が言いたくなったら、そうしてくれれば良い。状況に流されてしまうのは一君の悪い癖だと思うね。嫌いでは、ないのだけれど」
一は再び窓に目を向けた。付き合いが長い事は、時に面倒でもある。そう思いながら、どこか嬉しさも感じていた。つまり楯列は自分が勤務外であると知っていても、今まで通りに接してくれていた事になるのだから。
「そうするよ。でも、ありがとな」
「言葉よりも行動で示してくれた方が有り難いね。どうだい、今僕は運転中で手が離せない。ほっぺにキスでもしてくれれば、飛び上がって喜ぶんだけど」
「運転に集中してろ」
楯列は楽しそうに微笑む。
「のう……」
さっきからだんまりを決め込んでいた槐が口を開いた。
「どうしたんだい？」
「いや、その……」
槐は遠慮がちに目を伏せる。不思議に思った一は彼女をじっと観察してみた。
「あ、トイレか？」
「小僧、礼儀を知らん男子は幸せになれんぞ」
「心配しなくてもどうせ幸せにはなれねえよ。で、トイレじゃない

ならなんだ？　腹でも減ったのか？」
　蔑みの視線を一に向けると、槐は腕を組んで考え込む。
「……お主ら、異様に仲が良いな」
「はあ？」
　一と楯列は二人して顔を見合わせた。
　楯列はすぐに運転に戻ったが、一は槐に視線を投げ続ける。どうして彼女は恥ずかしそうにしているのだろう。
「まるで、その、睦まじい男女の様な雰囲気で……」
「はあっ！？」
「はっはっは、それは良い。だとしたら、どっちが男でどっちが女かな、一君？　ああ、僕はどっちもいけるクチなんだけど、君の意見を尊重するつもりだよ」
　二の句が継げず、一はただ自分から頑なに目を反らす槐を見続けるしか出来なかった。
「わ、わしには詳しい事が分からんのじゃが、そ、そういうのもアリ、なのか？」
「ねえよ！　楯列てめえ、こんな子供に何を教えやがった！」
「やだなあ、一君。姿はこんなだけど、槐君は僕たちなんかより遥かに大人だよ」
「うむ。伊達に長く座敷童子をやっておらんぞ」
　槐は誇らしげに踏ん反り返る。
「……大人？　お前、何歳なの？」
「淑女に年齢を聞くとは……まあ、良かろう。ふふん、聞いて驚け、わしは既に三百もの歳月を生きておる。こう見えても、座敷童子の中でも最上位なのじゃ」
　――三百年？
　しかし、数百年も生きていて童子、というのはどうなのだろうか。
「ん、驚いて言葉も出ぬか、小僧？」
　とりあえず、槐が満更でもない様子だったので、一は曖昧に笑っておいた。

早田早紀は、楯列衛の事が世界で最も嫌いである。
自分よりも一と仲良くしているのが気に食わないし、何より一目見た時からいけ好かない奴だと、生理的にそう思った。
隙あらば殴ってやりたい。蹴り回したい。一と奴が話しているのを見ると、死んでしまえば良いとも思う。

――病院に行こうと思っている。

楯列が自分を撹乱する為に嘘を吐いた一言だと、早田は思っていなかった。
確かに、早田は楯列を嫌っている。彼の動作一つ一つが癪に障る。彼の言葉一つ一つが胡散臭く、信じられない。理解出来ない、決してしたくない。
それでも、早田が唯一楯列を認められる点があるとするならば、彼が嘘を吐かないという事だろう。
もし楯列が嘘を吐いていたとしても、すぐにばれる嘘しか吐かない。いや、吐けないと言うべきか。さっきも槐が妹だのとのたまっていたが、少し鎌を掛ければ、あるいは彼の血縁関係を調べれば気付かれる事だ。
「ふっ……」
早田は息を吐いて、駆け出した。地下を抜けると、陽の光がやけに眩しく感じられる。
何キロだろうが構わない。この足は飾りじゃない。愛しい人に会う為ならば、何十キロ、何百キロだって走り抜いてみせる。

Ri—Ri—Ri

「なあ、お前って本当に座敷童子なんだよな？」
一は槐を見ながらぽつりと呟いた。
「小僧、まだ疑っておるのか？」
「だってさ、何かこう信用出来ないっつーか。座敷童子って取り憑いた奴に幸運を呼んでくれるんだろ？」
とてもじゃないが、一にはフリーランスに追われている事が幸運とは思えない。
「それは……」
槐は顔を曇らせる。
「一君、彼女にも事情があるんだよ」
「幸運を呼べない事情が、か？」
「……うむ。実は、その、わしは今、座敷童子の地位を追われようとしているのじゃ」
「座敷童子の地位？　そんなのあるのか？」
そう言えば、彼女は先ほども自分は最上位だとか言っていた。その事を思い出し、一は話の続きを促す。
「そんな事も知らんのか、お主？」
「あー、ごめんごめん。良かったら教えてくんないか？」
「誠意が感じられんが、良いじゃろう。座敷童子は大雑把に、チョービラコとノタバリコに分けられるんじゃ」
一は訝しげに眉根を寄せた。
「超ビラビラと海苔バター？」
海苔バターはちょっと美味しそう。
「違うわ、たわけ。チョービラコじゃ。チョービラコは座敷童子でも上位のものを指していてな。チョービラコと呼ばれるものは色が白く、美しい。何より力もある」
「へえ、つまり、お前がそれなのか」

「まあ、今はな」
槐は妙に歯切れが悪い。不思議に思ったが、一は曖昧にしておく。
「反対にノタバリコは階級が低いんじゃ。幸運を呼び込む事は滅多にない。座敷を這いずり回ったり、家人の寝ている時に臼を挽くような音を立てるだけで気味が悪い」
「座敷童子と言っても幸せにしてくれる訳じゃないんだな」
一は座席に深く腰掛け、溜め息を吐いた。
「当たり前じゃ、わしらにも意思と権利はあるからのう」
「ん、そういやどうしてお前はチョービラコって地位から降ろされそうなんだ？」
「ああ、それは僕を刺してしまったからだよ」
はっはっは、と。楯列は、見ている一が馬鹿らしくなってしまうくらいに明るく努める。
「座敷童子の定義とはね、基本的に幸せを運ぶモノなんだよ。そんな存在が、人をナイフでぶっすり刺して不幸にしてしまえば、意義を失うんだ。存在意義、存在理由をね」
「どういう意味だよ？」
「つまり、いてもいなくても良い存在。どうでも良い存在になる。この世から消えるんだ」
一は反射的に槐を見た。
「そう。本来なら、わしはチョービラコを降ろされ、ノタバリコにも見くびられるたたりもっけになるところじゃった」
「なんだって？　たたりもっけ？　たたりもっけってなんだよ？」
さっきから聞き返してばかりだとは思ったが、この状況ではもう仕方ないと一は腹を括る。
「口減らしで殺された子供は、その多くが生まれて間もない嬰児でね。その為、人間とは認めてもらえなかったんだ。だから、葬式もしてもらえず、きちんとしたお墓も作ってもらえずに家の周囲、あるいは土間の下などに埋められた。そうしたものの中で祟りのないものは座敷童子と認められ、祟りのあるものはたたりもっけと呼ば

れたそうだよ」
　楯列は嫌な顔一つせずに説明を続けた。
「とある民俗学者の文献では嬰児を蛙と捉えていてね、祟る蛙でたたりもっけとしているケースもあるんだ」
　今日は気の重くなる話ばかり聞いている。一は息を深く吐いた。
「つまり、座敷童子が悪い事をしちまったら位が下がるって事なのか？」
「概ね間違ってはおらんな」
　槐はむすっとした顔で答える。
「なら、今のお前は座敷童子じゃなくてたたりもっけなのか？」
「……違う。今のわしは、自分でも分からぬくらいに不安定な位置におるのじゃ。座敷童子でもなく、たたりもっけでもない。大した力を持たぬ、脆弱なソレじゃ」
「僕はそんな事ないと思うんだけどね」
「気楽なものじゃな」
　何となくではあったが、槐の正体が一には掴めてきた。しかし、彼女が『教会』に狙われている理由がさっぱり分からない。その旨を楯列に伝えると、彼は苦笑した。
「要は、僕もフリーランスも同じ穴のムジナなのさ。槐君が座敷童子の力を持っているのなら連れて帰り、幸運を得たい。だけどもし、槐君がたたりもっけなら、フリーランスという彼女らの立場上殺さなくてはいけない」
「身勝手な話じゃな」
「全く。悪いとは思っているよ。だからこうして傍に置いているんじゃないか。ああ、今の言い方では恩着せがましいかな」
　身勝手なのは槐もそうだろうと一は思う。彼女にどんな理由があったとしても、楯列を傷付け、傷付けた当の本人に守ってもらっているのだから。
「っと、いったん話は終わりにしようか」
「え？」

車は速度を落とし、とある建物の敷地に入っていく。
「って、ここ……？」
見覚えのある場所に、一の心はざわめいた。
「みんなお疲れさま。当座の目的地ではあるのだけど、着いたよ」
楯列が指差したのは、オンリーワンの関係者が利用する病院である。一が何度も足を運んでいた、あの病院だ。

車を止めて車外に出ると、一たちは白衣を着た集団に深々と頭を下げられた。
『お坊ちゃま、いらっしゃいませー！』
「なっ……？」
綺麗に揃った野太い声。突然の大合唱に戸惑う一を他所に、集団は楯列を取り囲んで跪く。
『今日はどうなさいましたか？』
一は寒気がした。これでは一種の宗教ではないか。
しかし、当の楯列は驚いた様子もなく、平然として愛想笑いを浮かべている。
「連絡は入れておいたよね？　もし空いているのなら、部屋を一つ貸して欲しいのだけど」
「はい一部屋入りまーす！」
その言葉を聞いた瞬間、白衣集団の一人が声を上げた。続いて残った十数人が『喜んでー！』と威勢の良い声を上げる。
『坊ちゃま、サイドメニューも充実しておりますが？』
「うーん、僕は入院しに来ただけだからね」
一人が立ち上がり、手拍子。
「坊ちゃまの、ちょっと良いとこ見てみたい！」
その手拍子に合わせて、老若男女問わず、白衣を着た者全てが踊り始めた。ある者は飛び跳ね、ある者は腰を振り、ある者は側転で楯列の周囲を回る。

『それイッキ、イッキ！』
辺り一帯が異常な熱気に包まれていく。
「ただの居酒屋じゃねえか」
しかも性質が悪い。
呟く一は車のボンネットに腰を下ろし、事態の行く末を見守っていた。と言うか関わりたくなかった。
ここは本当に病院なのだろうかと疑問を持ち始めたところで、槐が音もなく隣に座る。
「騒がしいのう」
「そうだな。お前はああいうの嫌いか？」
「いや、わしに関係のないところで騒がれるのはそうでもない。むしろ好ましいぐらいじゃ」
槐は遠い目で彼らを見つめていた。
「なあ、どうして楯列を刺したんだ？」
「……分からん。奴には悪いと思ってはいるのじゃがな」
「なら、あいつに少しは感謝してくれよな」
「感謝、じゃと？」
一は頷き、槐の頭を撫でようとする。が、その手を叩かれてしまった。
「悪い、癖だ。……感謝だよ。あいつが死ななかったから、お前はたたりもっけってのにならなくて済んでるんじゃないのか？　あいつが不幸だと思っていないから、だから……」
「ふむ。面白い解釈じゃな、小僧。確かにそうかもしれん」
「だったら、感謝だよ。違うか？」
槐は一を見上げ、つぶらな瞳をくりくりと動かす。
「お主、名前は？」
「数字の一が二つで一一（にのまえはじめ）」
「悪くない名前じゃな、一（はじめ）」
どうも。そう呟き、照れ隠しに笑ってみせると一はそっぽを向いた。

あの白衣の集団はこの病院の医者だったらしい。あの中には副院長もいたとか、いないとか。一たちは世も末な連中に案内され、病院の二階、一番角の部屋に通された。

荷物を置いて椅子に座ると、そこでようやく人心地が付く。

「さっきの人たち、ありゃなんだよ？」

「ここは僕の父親が割と懇意にしていてね。色々と援助しているんだ。こういうのは好きじゃないのだけれど、少しばかり七光りを発してみたのさ」

――割と、ねえ？

楯列はベッドに寝転がりながら自嘲した。彼のお陰と言えばお陰なので、一は余計な事は言わない事にする。

「……ここからはどうするんだ？」

「とりあえず待機だね。ついさっき僕の家の方から応援を呼んでおいたから。目下、僕たちを邪魔するものはあの『教会』ってフリーランスだけだからね。彼女らをどうにかすれば、道は自ずと開けてくるさ」

「つまり、槐を渡すつもりはないんだな」

「勿論さ。槐君がそう望む限り、僕はそうなる様に臨むまでだね」

一は息を吐き、覚悟を決め始める。楯列さえ助けられればそれで良かったのだが、槐も一緒に助けなければ意味はないらしい。

「なら、決まりだ。『教会』さえ倒せれば、俺たちはまた普通の生活に戻れる訳だな」

「ああ、その日常にもう一人可愛い子が入ってくるんだけど、構わないかい？」

「それも込みだよ」

立ち上がり、一は部屋を出ていこうとする。

「一、どこへ行くんじゃ？」

「一雨来そうだからな。傘を調達してくる」

「……雨？　今日は良い日和ではないか」
槐は窓を見遣りながら不思議そうに呟いた。
「いや、槐君、来るよ。一君がそう言うなら必ずね。……一君、頼んだよ。応援は呼んでおいたけど、彼らを当てにするのは酷だからね」
「俺を当てにするのは酷じゃないのかよ」
「君は鍵だから。槐君が幸せになれるかどうかの。何より、僕にとってもね。僕らの命運は、君の双肩に掛かっていると言っても良いくらいだよ」
明るい口調で言われ、一の毒気はすっかり抜かれてしまう。
「期待はすんなよ」
「するさ。頼んだよ、一君」
一は頭を掻き、苦笑いを一つ浮かべた。

「ざっけんなよっ！　オレを舐めてやがんのかっ！」
稲妻を思わせるような大きな声が病室に轟いた。
声の主はベッドから上半身を起こし、目の前のナース服を着た、看護師らしき女性に突っ掛かる。
「落ち着いて、しおりちゃん。緊急のお客さまが入ったらしくて、夕ご飯は少しだけ遅くなっちゃうのよ」
柔和な笑みを浮かべた看護師は、どうどうと、声を荒げる女性を諫めた。
胸元に可愛らしい熊が刺繍された、薄いピンク色のパジャマを着た女性。彼女はここの入院患者である。名を、山田栞（やまだ しおり）と言った。山田は『神社』と呼ばれるフリーランスである。が、彼女は先日駒台で発生したヤマタノオロチ事件での戦闘で負傷して以来、ここに入院していたのだ。
山田は舌打ちをしてから、対面のベッドを睨み付ける。
この病室にはベッドが二つ。つまり、患者が二人。

「……新しい患者さんが来るんだけど、部屋が空いていないから悪いけど相部屋にしてくれないかな？　あんたにそう言われてから、もう随分経つよな？」
「そうだねー」
「滅多に見舞いが来ない入院患者の楽しみっての、知ってるか？　睡眠と食事だよ。少なくともオレはそう思ってる」
「もう、そうだよ。しおりちゃんったら無理言ってメニュー変えてもらってるんだからね」
看護師――炉辺乙女（ろばたおとめ）――は指を立て、めっと可愛らしく頬を膨らませた。
「酒が駄目なら肉ぐらい食わせろよっ、第一、オレはもうとっくに治ってるっつーの。いや、それは良いんだ。問題は隣のあいつだよ。楽しみの一つ、睡眠を邪魔しやがるんだ」
「ヒルデちゃん淋しがりだから、友達が出来て嬉しいんだよ」
「あーあーそーだよ。夜通し語り明かすぐらいに仲良しだっつーの！」
山田はベッドを何度も殴り付ける。
「睡眠はあいつのせいで台無しだ。その上、オレに残された唯一の楽しみまで奪うっつーのか！」
「ちょっとだけ待ってって言ってるじゃないのー」
「うるっせえ！　畜生、誰かに文句言わなきゃ気が済まねえ！　どれもこれもっ、全部あいつが来てからだ！」

――どさどさっ。

「あ？」
病室の扉が開かれていた。その入り口の傍に、パジャマを着た背の高い女性が立ち尽くしている。そのパジャマは薄いピンク色で、胸元には可愛らしい熊がプリントされていた。
二つのパジャマは、ペアルック。

「……ご、ごめんね。わ、私……」
今にも泣き出してしまいそうな女性は、床に落としてしまった大量のお菓子を見つめて、声を震わせている。
「い、いや、その、そーゆー意味じゃなくてだな……」
山田はばつが悪そうな顔をしてから、しどろもどろになって弁解を始めた。
炉辺は床に散らばったお菓子を拾い集め、入り口近くに立つ女性――ヒルデ（彼女もまた、セイレーン事件以降にここへ入院していたのだ）――の頭を撫でてやっている。
「しおりちゃんがお腹減ったって言うから、買ってきてくれたのね？」
「……ん」
「ヒルデちゃんは優しいなー。……しおりちゃんもそう思わない？」
炉辺に笑顔で見つめられ、山田は直立不動の姿勢をとった。
「思うっ、思うから！」
「じゃあしおりちゃん、ヒルデちゃんに言うべき事があるんじゃない？」
「……う。その、わ、悪かった。お前の事は嫌いじゃないんだ、ただ腹が減ってイライラしててよ……」
ヒルデは瞳をきらきらと輝かせる。
「……本当？」
「本当だって！　だから、ゆ、許してくれ。な？」
何度も何度も頷き、ヒルデは嬉しそうに山田へと駆け寄った。
「……お菓子、何が良い？」
「えー、あー、何でも良いよ。あ、はは」
山田はヒルデの頭を撫でながら、力なく笑う。
「あ、ヒルデちゃんも今日の夕ご飯少し遅くなっちゃうんだけど、大丈夫？」
「ん。けど、どうして？」

「急なお客様が来ちゃって、そっちの準備に皆大忙しなの」
「……お客？」
ヒルデは小首を傾げた。
「そう、お客様」
「客、だあ？　オレらよりも偉いっつーのか、そいつ」
空腹のせいで虫の居所が悪い山田の手に力が入る。
「……痛い」
「っと、悪い悪い。で？　誰なんだよ、そいつは？」
炉辺は唇に指を当てて、申し訳なさそうに微笑んだ。
「この病院にお金を出してくれてる人って言ってたかなあ。そこの息子さんが来たから、おもてなししなきゃって皆言ってたよ」
「気に食わねえなあ。ボンボン坊ちゃまってか、はっ。おもしれえ、今まで良い目見てきたんだから、今日ぐらいは痛い目見てもらおうじゃねえか」
山田はベッドから飛び降り、スリッパを履いてずかずかと歩き出す。
「しおりちゃん、どこに行くの？」
「そいつを殴りに行くんだよ」
「ちょっと、喧嘩は駄目だよ？」
「喧嘩になんてなる訳ねえだろ。こっちゃ腐ってもフリーランスだ。心配すんなって、怪我してもお医者様がすぐに治してくれる。だろ？」
かはは、と。山田は豪快に笑った。
「ヒルデ、お前も行くよな？」
「……んー」
ヒルデは瞼を擦りながら、何か考えている様子だったが、
「栞ちゃんが行くなら、私も」
抱えていたお菓子を山田のベッドに並べると、彼女の後を追い掛ける。
「ノリが良いじゃねえの。それじゃあ、今から一緒にそいつを殴り

に行くとすっか」
「しおりちゃんっ」
炉辺は山田の袖を掴むが、すぐに振り解かれてしまった。
「だったらすぐに肉を用意しろってんだ！」
「それはー、ちょっと。私が作ったお料理でも良いの？」
「それじゃ食わねえ方がマシだな」
「……んーん」
ヒルデは緩々とした動作で首を、横に振る。
「そーゆー訳だ。じゃなっ」
山田とヒルデは楽しそうに駆けて行く。お揃いのパジャマで。

――出ない。
一は病院の外に設置された公衆電話の受話器を一度置き、溜め息を吐いた。
もう何度もコールしているのに、店には誰かがいる筈なのに、誰も電話に出てくれなかったのである。
「くそっ、俺が客だったらどうするつもりなんだよ……」
電話ボックスに一の溜め息と呪詛が充満していく。
「これが最後で良いや」
これで出なければ、店まで戻れば良い。苛立っている自分自身に言い聞かせ、一はオンリーワン北駒台店の番号をプッシュした。

一がオンリーワン北駒台店に連絡を入れていた頃、楯列と槐が宛がわれた病室でゆっくりしていた頃、一台のワゴン車が彼らのいる病院の真ん前に停まった。
「聖姉さん、跡はここで終わっています」
「上出来よ光、始めるわ。灯、持ってるわね？」
「は、はいっ」

車の中から現れたのは三人の、修道服を身に纏った女性たち。三人ともが同じ背丈と同じ顔をしており、彼女らと初対面の人間では見分けは容易に付かないだろう。

彼女たちは『教会』と呼ばれるフリーランス。座敷童子にもたたりもっけにも成り切れていない槐を連れ去るべく殺すべくやってきたフリーランスが、一たちに追い付いたのだ。

「目的は座敷童子。それ以外には目もくれないで」

「聖姉さん、邪魔者は？」

「排除よ。ただし、考えなしに殺しちゃ駄目。主が嘆くわ」

「ひ、聖お姉様、あの足の速い人はどうします？」

「主も言っておられるわ。私にやれと。私が手を下すから、あなたたちはあの子を見かけたら教えてちょうだい」

聖を先頭に、光と灯が続く。『教会』が、戦いの火蓋を切りにやって来る。

――出たくない。

オンリーワン北駒台店のバックルームに設置された電話は、さっきから引っ切り無しにリンリンと鳴いていた。

もう何度も無視をしているのに、そろそろ相手も諦めれば良いのに、電話は鳴り続けている。

「あの、店長、出ないんですか？」

「なら神野（かんの）、お前が出てくれ」

オンリーワン北駒台店、ここの勤務外店員である神野剣（かんのけん）は既に私服として使っている、学校指定の制服である学ランに着替えていた。彼の通う学校は、生徒、教師を含めて、『魔女』に襲撃されたという後遺症から立ち直っておらず、校舎にも事件を思い出させる痕がこびり付いている事もあってか、未だ復興の目処は立っていない。当初学校側が予定していた再開の期日も過ぎ、今ではもう再開自体が白紙になっていた。その為、神野が学校の制服を着用する必要は

大してなかったのだが、彼自身が学生である事を忘れたくなかったと言うので、店長は好きにさせていた。そもそも、店員の私服に口出しする義理もつもりも店長にはなかったのだが。

「電話って苦手なんですよね……」

「ほう、一みたいな事を言うんだな」

「え、一さんと同じ？　あ、ちょっと嬉しいかもしれません」

はにかむ神野。

「うん、恥ずべき事だぞ」

「へ？」

「何でもない。……お前が電話に出んのなら、誰も出られんな。ゴーウェストもレジで客の相手をしているところだし、な」

神野は決まりが悪そうにして受話器を取った。店長はしてやったりと言わんばかりの笑みを浮かべ、美味そうに煙草を吸う。彼はしばらくの間電話口の誰かと会話をしていたのだが、

「あの、一さんからです」

遠慮がちに受話器を差し出した。

店長は煙草を銜えたまま受話器を受け取り、不機嫌そうに口を開ける。

「私だ」

『……どうして、電話に出てくれなかったんですか？』

恨めしい声が聞こえてきたので、店長の気分は沈んだ。

『こっちは生きるか死ぬかの瀬戸際だって言うのに……』

「一、お前また厄介事に巻き込まれたんじゃ……いや、首を突っ込んだんじゃないだろうな？」

『そんな事ないですよ』

声が裏返っている。どうしてこいつはばればれの嘘を吐くのだろうかと呆れ果て、店長は髪の毛をくしゃくしゃと掻き毟る。

「もう良い。で、お前は無事なんだろうな？」

『喉が渇きました』

「唾でも飲んでろ」

『飲みました。あの、お願いがあるんですけど』
――来た。
「言ってみろ」
『今、病院にいるんですけど、そこへアイギスを持ってきて欲しいんです』
店長は眉を顰めて眼光を鋭くさせる。神野は天井へと目を反らした。
「アイギスはお前の私物じゃない。あくまで勤務外の道具だ。理由もなしに使う事は禁止している。忘れたのか？」
『理由ならあります』
「ほう、言ってみろ」
間が空き、
『フリーランスに追われています』
間の抜けた声。
店長の銜えていた煙草が一気に短くなる。彼女は眉間に皺を寄せながら、灰を吹き飛ばし、吸殻を吐き捨てた。
「よくもまあポンポンと災難を引き当てるものだな」
『こっちには座敷童子が付いてる筈なんですけどねえ』
呑気な一の声に、店長の気は更に重くなる。心配しているのが馬鹿みたいだと思ってしまう。
「……相手の名前は分かるか？」
『俺はまだ見てないんですけど、見た奴は教会って言ってました。シスターが三人いたそうです』
「『教会』か。確かに実在するな。お前の虚言ではないらしい」
『じゃあ持ってきてくれますか？』
店長は迷った。勤務外とはいえ、一はまだ成り立てである。神野とは違って戦闘に関しての能力に秀でたものもない。偶然にも女神に愛され、偶然にも生き残っているだけ、持っている武器が良いだけだ。彼の相手がもし本当にフリーランスだとすれば、援軍援助は必要だろう。だが、本当かどうかは半信半疑。それでも、勤務外と

して向いていないだけで、一には一般としての力がある。二十四時間三百六十五日回す為、彼はこの店に必要なのだ。死なせる訳には行かない。死んだら自分が仕事をしなければならない。

「面倒だから私は嫌だ」

『うあおあああああああああああ！　絶対呪いますからね！』

「耳元で怒鳴るな。私は、私が行くのは嫌だと言ったんだ」

荒い息遣いが聴こえてくる。一が息を整えているのだろうが、気持ちが悪くて店長は受話器から耳を離した。

『……店長、店長ー？』

「あ、ああ。何だ？」

『店長が嫌だって事は、誰か他の人を遣してくれるって事なんですか？』

「そういう事になる。誰を送って欲しい？」

喉の奥で店長は笑みを噛み殺す。

『えーと、堀さん』

「堀は支部でデスクワークだ」

『ナナはいますか？』

「ナナなら技術部でメンテナンスを受けている」

『糸原さん……は非番だったから、ああ、確か、今の時間ならジェーンはいるでしょう？』

店長は監視カメラの映像を一瞥。

「ゴーウェストはレジを打っている。ちなみに立花は犬の散歩らしいな」

『レジ？　どうせ客なんか少ないんだから、呼び戻してくださいよっ』

「絶対嫌だ。さあどうする？　三森か、神野か、奇跡を信じて私に頭を下げるか？」

『助けて神野君！』

一の声が聞こえていたのか、神野は苦笑した。

「良いだろう。神野は今仕事が終わったところだが頼んでみる。今、

仕事が終わったところだがな。あー、持っていくものはアイギスだけで良いんだな？」

『はいはいはい、すいませんでしたー。あ、でも、相手は三人なので出来れば他の人にも声を……』

「自分でやれ。顔が見えないからって調子に乗るな。……あの病院だな？　病院のどの辺りで待ってるんだ？」

『……正面玄関で待ってます』

それだけ聞くと、店長は一方的に通話を切る。受話器を叩き付ける様にして置くと、椅子を回転させ、神野の方へ向けた。

「一さん、何て言ってたんですか？」

「神野」

「……なんですか？」

「お前、童貞か？」

息切れ之人

二十名の男が病院の裏口を固めていた。全員が全員黒いスーツ、黒いサングラスを着用しており、髪型は五分刈りである。

病院の敷地内で異様な風景を形作っている彼らの目的は、雇い主の命を守る事だ。引いては――

「あら、聖姉さん、何かいますね」

――目の前の、三人の女の足止めである。

女は三人が三人とも修道服を着ており、背丈も顔も同じに見えた。どう見ても、普通のシスターにしか見えない。一般の女としか思えない。

しかし、黒服たちの体は強張り、緊張感が彼らをピンと張り詰めさせていた。何しろ、相手はフリーランスと呼ばれる人外なのである。数の上では自分たちが有利だと分かっていても、何分、いや、何秒持つのか分からないのだ。

「鬱憤を晴らすのに丁度良いわ、灯、エレナを」

「は、はい」

だと言うのに、シスターたちは臆する事無く近付いてくる。まるで、黒服の男達が視界に入っていないかのようにだ。

居並ぶ男たちを眺めた後、聖は地を蹴った。

彼女の両手指の間には小振りな釘が三本握られている。それを二十の的の内、三つに当たるよう狙って放った。数瞬後、彼女の目論見通り悲鳴が三つ上がる。

「アレを止めろおっ！」

聞こえてくる怒声に苛立ちながら、聖は突出していた黒服の懐に潜り込んだ。男の瞳はサングラスで隠されていたが、確認するまでもない。きっと、恐怖に彩られている事だろう。

聖は修道服のポケットから新たな釘を摘み上げると、男の腹部に容赦なく突き立てる。
「ぎいいいっ！？」
黒服たちは防刃ベストでも着込んでいるのか、感触は鈍かった。釘の先端をきっちり内蔵に到達させる為、聖は男の背に片腕を回し、突き刺さっている釘を残った掌で強く押したのである。釘が肉に食い込み、血の噴き出る鈍い音が響いた。抱き締められる形にされているので、男は逃げられない。
聖は激痛にのたうち回る黒服を突き倒し、仕掛けてきた二人の男を見据える。
驚嘆すべき事に、黒服は空手だった。自分たちの命を奪うつもりがないのか、それとも別に狙いがあるのか。
「どっちにしろ、舐められてるみたいで嫌な気分ね」
舌で唇を濡らすと、聖は釘を両手に構える。
左右から同時に飛び掛かる男たちを見遣り、聖はまず右の男の胸を掌で叩いた。
男の息は寸刻止まり、その間に聖は左の男を相手取る。放たれた拳を身を低くする事で躱すと、男の胸を裏拳気味に殴り付けた。
「聖姉さん、伏せてっ」
声に従って聖は頭を下げる。そのすぐ上を、しなるような音と一緒に風が奔り抜けた瞬間、男たちはくぐもった声を上げて倒れ込む。
男たちを倒したのは茨の形をした鞭、ピラトであった。
「すみません、遅れました」
申し訳なさそうに頭を下げる光を見遣り、
「結構、良いタイミングよ。灯は？」
「一足先に中へ。何人かが灯の後を追ったようですけど」
聖は嫌らしく笑う。
「主も言っておられます、問題はない、と」
「残りの者は？」
いつの間にか、黒服たちはじりじりと距離を詰めて聖たちを囲ん

でいた。
「私たちも二手に分かれて中に。追ってくる者だけ随時対応していくわよ」
「かくあれかし。では、主のご加護……をっ！」
光は胸の前で十字を切り、ピラトを握り締めて振り回す。棘の付いた鞭が男たちに襲い掛かり、ある者は腹を抉られ、ある者はサングラスを弾き飛ばされ、ある者はスーツごと地肌を持っていかれた。
その隙を衝き、聖は包囲の穴を見つけ出す。近くにいた男の足に釘を突き立て、彼女は振り返らずに病院内部へと向かった。
光は聖が正面に回っていくのを確認し、黒服たちを振り切って裏口の扉を開ける。
「……しかし、物足りませんね」
数人の黒服に視線を投げ掛け、光はつまらなさそうに呟いた。

一はごくりと唾を飲んだ。
「ふ、不死身の第二小隊？」
なんて頼もしい響きなんだろう。一は背後から、見えない男たちのパワーをもらった、ような気がした。
ベッドに寝そべる楯列は鷹揚に頷く。
「ああ、彼らはどんなところに行っても、必ず生きて帰ってくる事からそう呼ばれているんだ。多分、今頃は『教会』と交戦しているんじゃないかな」
「すげえ、名前だけで勝てそうな気がしてきたぜ」
頼もしさに一の気も大きくなる。彼は椅子に腰掛け、買ってきた缶のジュースを飲み干した。
「いや、それは無理だろうね」
「……相手がフリーランスだからか？」
「じゃなくて、彼らには危なくなったら逃げるよう伝えているからだよ。だから不死身。第二小隊の構成員は、普段庭の手入れをして

いたり、掃除をしてくれている家のお手伝いさんが殆どだからね。相手が野良猫ならともかく、フリーランスじゃあ一分も持たないよ」
楯列は何でもなさそうに微笑む。
「ちょっと待て、それじゃあ意味がないだろうが」
「ただ、敵が病院内に侵入した事は教えてもらったよ。ほら、ついさっきメールが」
「もっと早く言えよっ！」
一は立ち上がって喚き散らした。まだ神野は来ていない。不死身、だなんて大層な応援が来たと言うからのんびりしていた部分もあったので、今更になって焦っている。
「じっとしてたら殺されちまうじゃねえかっ」
「いや、今のところその心配はなさそうだよ。『教会』は全員が上の階に向かっているそうだ。ははっ、金持ちと煙は高いところが好きだからね」
一は、楯列みたく余裕たっぷりには笑えない。
「どうすんだよ、マジで。いつかは見つかっちまうんだぞ」
「そうだね、迎え撃とうか」
「……はあっ！？」
「ここなら、暴れても誤魔化しが効くからね。一君、槐君、頼んだよ」
楯列は二人に笑い掛けてから枕に顔を埋めた。
「楯列、ちょっと待て。俺はまともにゃ戦えないぞ」
「知ってるよ。だから、槐君と二人で何とかして欲しいんだ」
「良かろう。行くぞ一」
「なあっ！？」
槐は事もなげに言い放ち、着物の袖から小刀を取り出す。
「わしなら心配いらんぞ？」
「いや、心配なのは俺だ。槐はともかく、俺には何もないんだぞ」
勤務外店員といえど、素手で戦場に放り込まれては何も出来ない自信が一にはあった。

「案ずるな、わしが一を守ってやろう」
槐は自信満々なのだが、一には信じられない。
「一君、彼女を信じてあげてくれないか？　槐君は座敷童子なんだよ？」
「座敷童子が戦えんのかよ？」
「無論じゃ。わしらは幸福を呼び込むと共に不幸を払う力も持っておるからな。家を付け狙う性質の悪いあやかし共相手に、三百年以上も戦い続けて来たんじゃぞ」
「……お前が？　こんなちっこいのに？」
槐は無言で一の脛に蹴りを入れる。一は声にならない声を上げて床に這い蹲った。
「わしとぬし、二人で一人ずつ仕留めていくぞ。良いな？」
痛くて、返事など出来ない。一はただ、かくかくと首を振った。

「何か、人が少なくないか？」
病院一階の待合室にやって来た山田は首を捻った。幾ら平日と言えど、患者はおろか、ナースステーションや受付に誰もいないのはおかしい。そこそこに長い入院生活の中で、病院内に誰もいないというのは、彼女が初めて目にする異様な光景である。
隣のヒルデも目を瞑って何か考え込んでいる様子だったので、山田は声を掛けず、辺りをきょろきょろと見回していた。自動販売機のモーター音と、自分の足音だけがフロアに響いている。
「ちっ、つまんねえ」
山田は待合室のソファに腰を下ろし、退屈そうにあくびをした。
「ヒルデー、突っ立ってねえでこっち座れよ」
「……ん」
こくりと頷き、ヒルデはこちらに山田の方へ向かう。
その足音に混じって、別の足音が廊下から響いた。重くない。軽くない。フリーランスである山田が耳を澄ませて、辛うじて聞こえ

る程度の音である。
「栞ちゃん」
「おう、気付いたか」
山田は立ち上がり、ヒルデと並んだ。二人して振り返れば、修道服を着た女が何か呟きながらこちらに向かってくるのが見える。
ただのシスターではない。彼女が茨の形をした鞭を持っている事だけでなく、身に纏った雰囲気から、山田はそう察した。そして恐らく、自分に近い種類のモノだとも気付く。
「よう、診てもらいに来たのか？」
目の前の女は、フリーランスだ。
湧き上がる闘争本能を押し殺しつつ、山田は人懐っこい笑みを浮かべる。
「……ここにお医者様はいないようですが」
「患者も見舞い客もいないみてえだな」
豪快に笑い、山田は一歩、シスターに近付いた。
瞬間、山田の目の前の空間がぶれる。シスターが手にしていた鞭を払ったのだ。
「お医者様も、患者も見舞い客もいない。では、あなたは誰ですか？」
シスターは強い敵意を込めて山田を見据える。それを受けて、山田は口の端を吊り上げた。
「れっきとした入院患者だ。隣のこいつもな」
「そうでしたか。では、失礼します」
頭を下げ、シスターは来た道を引き返していく。山田はスリッパでぺたぺたと床を鳴らしながら、彼女に近付いた。
「おいおい、待てよ。その手診せに来たんだろ？」
「なっ……」
山田はシスターの腕を乱暴に掴むと、無理矢理自分へ振り向かせる。
「血だらけじゃねえか、おい。痛くねえのか、これ？」

「はっ、離しなさいっ」
「っと、かはは、怒るんじゃねえよ――『教会』」
場が張り詰め、空気が凍り、シスターから漏れる隠し切れない殺意が山田の肌を突き刺していた。
「あなた、何者……？」
「かはは、良いじゃねえかそんなもん。気にしないで掛かって来いよ」
シスターは山田から距離を取り、彼女の姿を眺めている。
「勤務外……？　いえ、むしろ私たちと……」
「つべこべ言ってんじゃねえぞ。今、オレは、むしゃくしゃしてる。それだけで充分だろうがよ」
「……栞ちゃん、どうするの？」
くいくいと。ヒルデに袖を引っ張られ、山田は楽しそうに口角を吊り上げた。
「邪魔はすんなよ。オレと違って、お前はまだ万全じゃねえんだからな」
「……栞ちゃんもじゃない」
「オレはもう完治してんだよ。って、おら、掛かって来いよ『教会』、そこはてめえのリーチじゃねえのか？」
シスターは信じられないと言った表情で山田を見つめる。
「あなた、まさかあなたも座敷童子を狙っているの？」
「ざしきわらし？　んなもんに興味ねえよ。あるのは、お前だ」
「そう、ですか。私の邪魔をすると言うんですね？」
「ごちゃごちゃ言ってんじゃねえぞ、やるのかやらねえのか、どっちだ？」
山田はスリッパを脱ぎ捨てて裸足になっていた。シスターが「やらない」と言ったところで、従うつもりがないのは見え見えである。
「良いでしょう。主もあなたの事がお嫌い、だそうです。では、姉さんの露払いといきましょうか」
シスターは茨の冠（ピラト）で床を叩くと、パジャマ姿の二人組に視線を定

めた。

「妙じゃのう」

一と槐は病室を出て、病院の正面玄関に向かっていた。店長が話を付けてくれているのなら、神野がアイギスを持ってそこに来てくれている筈、なのである。

「何が？」

槐は一の隣を歩きながら、せわしなく視線を動かしていた。

「気付かぬか一、人の気配が全くしない事に」

「……ああ、そういえば」

二人は階段までの廊下を歩いていたのだが、患者、医師、看護師、見舞い客。未だ誰一人としてすれ違っていない。病院と言う環境上、静かなのは当たり前なのだが、静か過ぎる。

「嫌な予感がするのう」

「皆、『教会』に殺されちゃったって事はないよな？」

「分からん。が、奴らにその気があったならば、あの病院でとっくに死人が出ていたろうよ」

「それもそう、なのかな」

むしろそうであって欲しいと願いながら、一は階段に差し掛かった。

「あら」

差し掛かったところで、修道服を着た女とぶつかりそうになる。

「っと、ごめんなさい」

一はすかさず頭を下げた。面倒事に巻き込まれたくなかったので、相手の顔も見ないまま、逃げるように階段へ足を掛ける。

「待ちなさい」

呼び止められても聞こえない振り。

「一、待つんじゃ」

槐に呼び止められ、一は仕方なく足を止めて振り返った。

「あなた、どういうつもり？」
「……ごめんなさい」
シスターは溢れんばかりの殺意を湛えて睨み付けている。しかし、ぶつかりそうになったぐらいで怒り過ぎじゃね？　ぐらいにしか一は気にしていなかった。ちょっと頭のおかしい人なんだな。適当に謝ってやり過ごそう。そう思って。
「あなた、その子を連れてどうするつもりなの？」
その言葉を聞いた瞬間、一は槐を抱えて階段を駆け上がった。失念していた。女の風体から鑑みるに、アレは『教会』と呼ばれるフリーランスだったのである。
「離さぬか一っ、わしらは彼奴を仕留めに来たのじゃぞ！」
「いきなりじゃ無理だ！」
「第一、どうして上に逃げるんじゃ！　玄関へ荷を取りに行くと言っていたであろう！」
「しまったあ！」
裏目裏目に空回り。今日は何もかも上手くいかない。いや、そもそも上手くいったためしが今までにあっただろうか。一は泣きたくなってきた。
「待ちなさいっ！」
すぐ後ろからシスターの声が聞こえてくる。彼女の足音は騒々しく、一の焦燥感を嫌でも煽った。
「どうするんじゃ！？」
「上だっ、上に逃げる！」
下る事は出来ない。シスターの足は速く、廊下に行っても直線で追い付かれる。ならば階段をひたすら上っていくしかない。しかし、この病院は五階建てだった。
――どこかで追い付かれちまう！
「神野くーん！」
その声は、どこまでも情けなかった。

「一さん、遅いですね」
「お兄ちゃんったら、どこでオイル売ってるのカシラ」
病院の正面玄関前で待ちぼうけを食らっている男女が二人。
一人は竹刀袋と、雨も降りそうにないのにビニール傘を持っている、学ランを着た背の高い少年。彼は神野剣、一の同僚だ。
もう一人は背の低い少女である。彼女はウェスタンブーツに細身のジーンズ、フリンジ付きのウェスタンジャケットを羽織っていた。テンガロンハットこそ被っていないが、その出で立ちはもう充分にカウガールといったところだろうか。
「もう、レディを待たせるなんて」
そう言って頬を膨らます少女の名はジェーン＝ゴーウェスト。一の妹、のような存在だと周囲には認識されている。
「ちょっと寒いし、中で待ってましょうか」
「そうネ」
神野はジェーンに対して敬語を使っていた。と言うのも、彼女は神野よりも年下なのだが、神野よりも立場が上なのである。アルバイトと社員。一の妹、と言うのもあってか、距離を計りかねているのだった。
「アラ、開かナイ……」
ジェーンは自動ドアの前に立って不思議そうに首を傾げている。軽いからだろうか。神野はジェーンの隣にさり気なく立つのだが、ドアは反応しなかった。
「壊れてるんですかね」
「……バッドコールドがするワ」
「はい？」
ジェーンはジャケットの内ポケットからリボルバーを抜き取る。勤務外店員、及び社員は武器の携帯が許されているのだ。しかし、神野は突如現れたメタリックの凶器にたじろいでしまう。彼女は一体何をしようというのだろうか、と。

「あ、あの……？」
「裏口に回るわヨ」
神野の返事を待たず、ジェーンは建物の裏側に向かって歩いていく。
「ちょ、勝手に入って良いんすかー？」
「オールオアナッシング。アタシは社員さんなのヨ？　ここは勤務外用の病院なんだから、ネ？」
「俺は知らないっすよ……」
言いつつ、神野はジェーンの後を付いていく。少し歩くと、二人は関係者用らしき通用口を見つけた。
「グッド、ここから入りましょうか……オープンセサミー」
扉を開くと、入り口のすぐ近くに大の男が三人、倒れているのが見える。
「だっ、大丈夫ですか！」
神野は驚いたが、一番近くに倒れていた男の傍に駆け寄った。
「しっかり、しっかりしてください！」
しかし返事はない。体を幾ら揺さ振っても、黒服を着た男たちは意識を失ったままである。
「……アームズを持ってナイ」
ジェーンは黒服の体を探っていたのだが、彼らは銃の一丁、ナイフの一本すら持っていなかった。
「カンノ、先に進むわヨ」
「この人たちはどうするんですか？」
「生きてるカラ置いとく。だれかが見つけてくれるワ。それよりお兄ちゃんを見つけなきゃ」
「……分かりました」
黒服を置いていく事に対して躊躇ったが、彼らが生きている以上、今は一を探す事が先決だと断じる。神野は意を決して立ち上がり、竹刀袋から竹刀を取り出した。戦場は、近い。いや、まさしくここが戦場なのかもしれないのだから。

「アラ、頼もしいわネ、サムライ」
「急ぎましょう。何だか、嫌な感じです」
首筋からちりちりとしたモノを感じ、神野は目を瞑る。……病院。閉鎖された空間があの日を思い出させる。『館』と戦った日の、あの時の昂ぶりを。

病院、四階の階段、そこの踊り場を抜けた一の体力はもう限界だった。追われている、その事実が精神的にも彼を疲弊させている。
「一っ、もう良い。わしは戦うぞ」
槐は一の手から離れ、踊り場にてシスターを迎え撃つべく立っていた。
「良い度胸じゃない、座敷童子っ」
踊り場の手前の段を飛び越し、シスターは両手から釘を放り投げる。
槐は放たれたそれを小刀の腹で弾き返し、切っ先を当てて軌道を逸らし、頭を下げて全ての釘を躱した。
が、シスターは回避されるのを見越していたのか、肉弾戦を仕掛けにいく。体格だけ見れば槐の方が不利となる。槐は接近されるのを嫌って、後方へ距離を取った。
その間、一は階段の上から離れて見ているしかない。手助け出来ない。だが歯痒くはない。絶対に戦いたくない。アイギスがあれば防御を引き受けられるのだが、それがない今、自分には何も出来ないと分かっているのだ。
「大人しく捕まりなさい……！」
シスターは釘を片手に持ち、遮二無二突いていく。槐は一歩も退かずにそれらを受け流していた。
――なんで、だ？
一は不思議に思う。先程の打ち合いを見ていただけだが、槐の力量は高い筈。シスターの攻撃をいなしなどせず、打ち返せば良い。

あるいは逃げても良いのだ。彼女にはそれだけの力がある。
何故そうしないのか。その事に思い当たった瞬間、一の体は勝手に動き出していた。今なら、シスターの虚を突ける。
階段から飛び降り、シスターの背中目掛けて、
「いい加減にしやがれってんだ！」
「いっ――た！」
着地した。
一はシスターと縺れながらも立ち上がる。彼女は背中に走る痛みからか、まだ起き上がっていない。
「逃げるぞ」
「なっ、まだ彼奴を仕留めておらん！」
構わず、一は槐の手を引いて階段を下っていく。
「一っ」
「殺しちゃ駄目だ、そしたら今度は本当にたたりもっけになっちまうぞ」
「じゃが……」
「悪いけど、楯列のやった事は無駄に出来ない」
追っ手の一人を潰せる機会だったが、槐に人間を殺させる訳にもいかない。何より、他人とあっても、それが例え敵であっても誰かが死ぬのを、一は見たくなかった。
「……手を離さぬか、自分で走れる」
槐は一の手を振り解いて彼の隣に並ぶ。
「一の言いたい事も分かる。じゃが、逃げ続ける訳にはいかんぞ」
分かっている。もう少しの辛抱だ。一は自らに言い聞かせ、神野が待っているであろう正面玄関に向かった。

倒れていた男たち。人の気配がしない病院。助けを求めていた一。
何も起こっていない方が不自然とはいえ、神野は何も起こっていない事を何に祈っているのかも分からないまま、ただ盲目的に祈っ

ている。
「ノープロブレム、カンノ。きっと皆、どこかにエスケープしてるはずヨ」
「そうなんですか？」
前方を歩くジェーンは頼もしげに頷いた。
「勤務外関係者の病院だから、対ソレ、対フリーランス用のマニュアルがあるに決まってるじゃナイ」
「……少し、安心しました」
「少し？」
「皆避難してるって事は、何かあったって事でしょう？」
嫌でも、思い出してしまう。血の臭い。怨嗟の声。際限なく膨れ上がる絶望と憎悪。
「だからアタシたちが来たノ。まだ何も起こってないかもしれナイ。アタシたちは何かを止めに来た。ＯＫ？」
年上の自分が焦っていると言うのに、ジェーンは余裕たっぷりに言い放った。見習わなければならないな、と、神野は頭を掻く。
「一さんの妹なだけはありますね」
「最高にクールな誉め言葉ね」
裏口から入った二人が廊下を半分程進んだところ、近くの女性用トイレから水音が響いた。平時ならば気付かなかったであろう微かな音だったが、今は誰もいない、いてはいけない、音がしない、してはいけない環境、状況なのだ。
「カンノ、ハートの準備をしておきなさい」
「……敵、ですか？」
「フリーランス、ヨ」
「でも、フリーランスが無防備にトイレへ行きますか？」
もしかしたら、逃げ遅れた人かもしれない。淡い希望を込めて神野は尋ねた。が、ジェーンは首を振って否定の意を示す。
「トラップかもしれないワ。……見てくるから、カンノはアタシが合図をしたら入って」

「……女子トイレに、ですか？」
「そうヨ？」
小首を傾げられてしまった。勤務外の仕事だとしても、だとしてもだ。やはり男性である神野には抵抗がある。
だがジェーンは、神野の思惑やら思案やら葛藤を全て無視する形でトイレに入ってしまった。
「あっ」
しかも合図を決めていない。神野はアイギスと竹刀を握り締め、溜め息を吐く。
――もう、どうにでもなれだ。
そこで何故か、立花の顔が神野の頭を過ぎった。頭を振っても、頭を叩いても、彼女の笑顔が、泣き顔が脳内を通り過ぎていく。

『けん君って覗き魔なの？』

神野の顔色が分かりやすく悪くなった。血の気が引き、冷や汗が背中を通り抜ける。

『へー、けん君も女子トイレ使うんだー。ボクと同じだね』

死にたくなった。
神野は両頬を両手で力強く叩く。雑念を掻き消し、目の前の事に集中しようと努めた。
しばらくすると、ジェーンが入っていった女性用トイレから、爆竹の破裂した時のような、乾いた音が数回響いてくる。それが発砲音だと気付いた時には、神野は禁断の領域へ足を踏み入れていた。

シスターはソレと出会い、シスターはフリーランスと出会い、シスターは勤務外と出会った。座敷童子、『神社』、戦乙女、狼女を

交えて、病院内での戦闘が幕を開ける。開けて、しまう。

You can't do it if you try

ベッドで体を休めていた楯列は、廊下からの足音を聞いて身を起こした。が、すぐに横になる。その足音は随分と静かで、敵意の欠片すら感じさせない柔らかな足音だった為だ。やがて、ゆっくりと扉は開く。患者を気遣っているのか、その人物は音は殆ど立てなかった。

「こんにちは、君が楯列衛……つまり、まもるちゃん？」

そう言って柔和な笑みを浮かべたのは炉辺である。彼女はにこにことしながら、楯列のベッドに向かって歩き始めた。

「僕をちゃん付けで呼んだのはあなたが初めてですよ」

「嫌だったかな？」

「いえ、新鮮だ。実に良い気分です」

楯列は苦笑し、上半身を起き上がらせる。

「まもるちゃんは、はじめちゃんのお友達、なんだよね？」

炉辺はパイプ椅子を組み立てて座った。

「一君を知っているんですか？」

「うん、あの子はうちの常連さんだからね」

「はっはっ、さすが一君だ。心が広いだけでなく顔まで広いとはね」

「それで、まもるちゃん」

炉辺が声のトーンを落としたので、楯列は僅かに身構える。

「まもるちゃんは逃げないの？」

「逃げませんよ。友人が矢面に立っているのに、守られている僕が背中を見せる訳にはいきません」

「でも、君は戦えないじゃない。わざわざ残る必要はないよ」

その言葉を聞いた楯列はシニカルな笑みを浮かべた。

「今は彼に全てを委ねています。が、僕もここでじっとしているつもりはありません。その名が示す通り、僕は彼の楯にだってなるつもりです」

「……どうしてそこまで出来るの？　はじめちゃんには力があっても、まもるちゃんには勤務外みたいな力がないんだよ？　危ないよ、そんなの」

この人は心の底から、出会ったばかりの自分を心配してくれている。自然と、楯列は微笑を浮かべていた。

――嬉しいな。

「僕が、一君を愛しているからですよ」

シスターの腕がしなり、鞭が壁を砕く。棘が床を抉り、待合室のソファやテレビを打ち据えていく。

「かははっ、やるじゃねえの！」

相対する山田は、飛び散る破片を避けようともせず、豪快に笑っていた。

「くっ、何を笑って……」

シスターは茨の形をした鞭を振り回す。その度に病院にあるものは破壊されていく。

「けどよ、振り回すだけじゃねえだろ！」

山田は身を低くして床を蹴った。刹那、彼女の右側から鞭が飛んでくる。が、山田は棘の付いていない部分に拳を当てて強引に軌道を変えた。

シスターの鞭捌きは大したものではある。手首を切り返し、山田の進行ルートを巧みに潰そうとしていた。

それでも、止まらない。シスターの技量がどんなに優れていようとも、山田栞は突き進む。

「ムチャクチャな……」

ピラトの軌道は直線から曲線、曲線から直線を描いていた。前後左右、上下から山田に降り注ぐ。

それでも、一発だってかすっていない。パジャマの生地一ミリだって触れられない。『神社』の進撃は止まらない。

「おっせえんだよ」
挙句、
「きゃっ……」
シスターは山田に鞭の先端を掴まれてしまう。
「飽きちまった。鞭なんてふざけたもん使いやがるから、どんだけ良い腕してんのかと思ってたんだけどよ」
山田は頭を掻き、冷めた目でシスターを見遣った。
「――弱いな」
かちり。シスターの頭の中で音が鳴る。
「……主よ。主よ、主よ、主よ……！」
力比べでは山田に分があった。シスターはじりじりと引き寄せられていく。
「主よっ、あなたと私の御名を汚す不信心者にぃ！」
「うおっ？」
「茨の裁きをっ！」
シスターは鞭から片手を離した。均衡が崩れ、山田の体は後ろに下がってしまう。
瞬間、シスターは懐からもう一本の鞭を出した。片手で山田を押さえながら、二本目の鞭で彼女を打ち据える。
「っの……ヤロ！」
二発目を食らう前に鞭から手を離し、山田は床を転がった。
「栞ちゃんっ」
「来んじゃねえ！」
山田の脇腹が露出している。パジャマの布地ごと肌が抉られて、傷口から血が滴っていた。
「異教徒があっ！」
シスターの攻撃は苛烈を極めている。一本なら山田も攻撃が見えていたのだが、二本となると話は別だ。二つの鞭が生物のように不規則な動きで、山田を追い詰めていく。
「欝陶しいんだよ！」

右からの攻撃を右手で弾くが、左からの攻撃は弾けない。鞭は山田の肩を打ち据え、ダメージを与えていく。

見えるが、避けられない。

シスターの攻撃を山田の後ろから見ていたヒルデは息を呑んだ。

鞭は生きているかのように自由に動いている。壁を、床を、天井を抉りながら這っていく。山田も良く躱していたが、そろそろ限界だろう。彼女の怪我はまだ治りきっていないのだ。本人は治ったと言って笑っていたが、あんなキレの悪い動きで万全の筈がない。もしも山田がコンディションを整えていたなら、鞭が三本でも問題はなかっただろう。

しかし、今は違う。山田の体調は良くて万全の半分程度と言ったところとヒルデは見ていた。

そして、今の山田よりシスターの方が強い。力だけなら不調の山田でも軍配が上がる。

力だけならば。

しかし、力だけで勝敗は決まらない。何より山田にとって相手との相性が悪い。鞭を使い、中距離からでも攻撃を仕掛けられるシスターと打撃一辺倒の山田。

山田が一発を打ち込む前にシスターは何十発と打ち込める。

茨の形をした鞭。あの武器も山田の不利に拍車を掛けていた。そもそも、鞭を武器に使っているのは性質、もしくは性格が悪い事に他ならない。

鞭とは本来、拷問用の道具なのである。一撃で致命傷を与えられないから、その分殺さないように加減が出来るのだ。鞭を打つ者が絶対的に有利な立場にいて、打たれる者が反撃の出来ない立場にいて初めて、鞭は辛うじて武器となる。しかし、戦場においてはそれが通らない。だからこそ、鞭は道具の域を出なかったのだ。仮に一発が当たっても、刀剣等を持った相手に無理矢理に突っ込まれては

効果がないから、である。鞭を使いこなせたとしても、得物が鞭である以上迅速には命を奪えない。

しかし、相手が空手ならば話も変わってくる。相手の攻撃の届かない位置から一方的に攻撃を仕掛けられる状況ならば、鞭も武器として効果を発揮するのだ。

そして、一発で死なないというのが最高に嫌らしい。食らった者は強烈な痛みに苛まれながら戦闘を続行しなければならない。動かなければ、新たな痛みがやってくる。が、痛みは動きを鈍らせるのだ。長期戦になればなるほど、山田は不利な状況を強いられ続ける。

一発目で皮を剥ぎ取り、二発目で肉を抉り出し、三発目で骨を砕く。

シスターは薄っすらとした笑みを浮かべていた。勝利を確信した者が浮かべる、実に幸せそうな、実に醜悪な顔である。

確かに、山田の不利は動かない。二本の鞭に翻弄され、痛みによって精神を削られている彼女ではシスターに勝てない。

――彼女、だけでは。

ヒルデは瞬きを繰り返して鞭の軌道に目を凝らした。早い。シスターの技量は確かだ。鞭なんて悪趣味じみたモノを、よくぞここまで昇華させられると素直に感心する。

「……ん」

一人では一本が限界だ。片方を捉えても、もう片方の鞭に打ち据えられる。

二人なら。二人なら一人一本押さえれば済む話だ。そしてヒルデは確信している。シスターがあの笑いを止めない限り、自分たちの勝ちは揺るがないと。

「いってえなちきしょう！」

「吠えるだけでは私のピラトを抜けませんよ、同業者さん」

鞭は鬱陶しいが、耐え切れないほどではない。気を張れば、苦痛

はどこかへ飛んでいく。
「あああああっ、なんだよもう！」
それでも痛いものは痛いのだ。山田は歯を食い縛り、鞭を拳で払いながら、少しずつ距離を詰めていく。
「……しつこいですね」
シスターは山田が近付く度に後ろへ下がり、一定の距離を保っていた。その様子を見て、山田は口の端を吊り上げる。一歩、また一歩。飛び散るタイルの破片を体全体に受けながら、鞭で叩かれながらも彼女は前進を繰り返した。
「どうして、進むのですか？」
「ああ？」
存外に穏やかな口調で尋ねられたので、山田は目を丸くする。
「あなたは座敷童子を狙ってもいない。私とも初対面で、お互いに何の遺恨もない筈です。なのに、どうして？」
どうして、進むのか。
山田はシスターの言うとおり、彼女とは今日、ここで、初めて出会った。恨みもない。怒りもない。憎しみもない。シスターには何一つ悪感情を抱いていない。
どうして、行くのか。
どうして、縁もゆかりもない人間に鞭で打たれながら、傷付きながらも行くのか。
――決まってんだろ。
「オレは今むしゃくしゃしてる」
「何ですって？」
「言った筈だぜ。腹が減ってるオレの目の前にお前がいる。それだけで充分じゃねえか」
豪快に笑ってから、山田は駆けた。
「くっ、主よ！」
「おおおおおおおっ！」
山田は飛んできた鞭を右手で掴み、強引にシスターを引き寄せる。

シスターは残った鞭で必死に山田を叩き続ける。
「んなおもちゃでオレをやれるわきゃねえだろっ」
そう言ってから、山田は床に膝を突いた。
「……あ？」
体から力が抜けていく。立ち上がろうとするのだが、足は言う事を聞いてくれなかった。顔を上げると、にやりと笑うシスターが目に入ってくる。
彼女は血を流し過ぎたのだ。激痛を強靭な精神力で無視していたに過ぎない。ダメージは確かに受けていたのである。
「ようやく止まってくれましたか」
シスターは「猪よりも面倒でした」などと呟きつつ、鞭で床を鳴らした。彼女が腕に力を込めると、山田の手から、するすると鞭が抜けていく。
「では、主の命によりあなたの罪を祓うとしましょう。ああ、こちらでは笞刑（ちけい）と呼ぶのでしたっけ？」
ぶれる視界、ぐらつく肢体。
「……てめえなんかがオレに」
それでも、気持ちまでは揺らがない。山田は気力だけでシスターを睨み付けていた。彼女の視線を受け、神の代行者である修道女は苛立たしげに唇を噛み締める。
「その目、止めてください。主も言っておられます、虫酸が走る、と」
シスターは躊躇せず鞭を振り下ろした。一本目の鞭が山田の頬をかすめ、皮を剥ぎ取る。
しかし、山田は怯む事無く、目を瞑らないでシスターを睨み続けていた。
「その目を止めなさいっ」
二本目の鞭が彼女の肉を抉り出すべく振り下ろされる。
「……くっ」
「……させない」

鞭は山田に届く前で中空に浮いていた。いや、受け止められていた。
「ヒル、デ？」
山田は眼前の光景が信じられずに目を白黒とさせる。
「任せて、栞ちゃん。覚えたから」
ヒルデは掴んでいた鞭をシスターに向かって放り投げた。
シスターはそれを引っ掴み、憎々しげにヒルデを睨む。
「覚えた、ですって？」
「……私が一本。栞ちゃんが一本。大丈夫だよね？」
かははは。
豪快に笑うと、山田は床を踏み抜く勢いで立ち上がった。
「誰に言ってんだ。オレを誰だと思っていやがる」
「私を無視しないでくださいっ！」
「蛇でも鬼でもねえ奴に、このオレが！」
山田は駆け出す。
「私をっ！」
「オレが！」
鞭が飛ぶ。
「無視しないでくださいっ！」
「負ける筈ねえだろうが！」
床が砕けて、拳は放たれる。

リボルバーの残弾を確認し、ジェーンは女子トイレ一番奥の個室をノックする。
返事はない。何の音もしない。
かちり。撃鉄を起こすと、ジェーンはもう一度ドアをノックした。
返事はない。しかし、気配はしている。隠し切れない、ヒトの臭い。何者かがここにいる。この個室の中にいるのだ。
撃つか。撃つまいか。

迷った末、ジェーンは扉の下方にある隙間から中を覗こうとして姿勢を低くする。もしも中にいた人物が目的の者でないなら失礼に当たるのだが、その時はその時だと楽観的に構えていた。

だが次の瞬間、扉が勢い良く開け放たれる。ジェーンは咄嗟に銃を向けて立ち上がった。中から現れたのは修道服を着た女性である。彼女は扉に手を掛けたまま、半身だけを晒していた。

「あ、あなたは？」

ジェーンと、気弱そうなシスターの視線が交錯する。

「勤務外ヨ」

勤務外。その言葉を聞いた瞬間、シスターはまたもや扉を閉めた。ジェーンは確信する。店長から前もって『教会』について聞いていたのもあったが、何よりも勤務外としての勘が告げていた。これが一を、自分たちを危険に晒す存在だと。

そう思った時にはもう指が引き金に触れている。扉が鉄製だったので、ジェーンは銃口を下に向けて、扉の隙間を狙って発砲した。

「お兄ちゃんはどこっ！？」

彼女の狙いは跳弾である。勿論、相手の姿が見えていないから、不規則に跳ね方が変化する跳弾を自在に操り、狙って当てるなんて芸当は不可能に近い。それでも、トイレの広さは高が知れている。可能性はゼロじゃない。

一発、二発三発四発、五発六発。

トイレの中で銃弾が縦横無尽に跳ね、タイルの床を削り取り、シスターの体に散っていく光景がジェーンには見える——気がしている。現に、銃声に紛れて小さな悲鳴が聞こえていた。下手な鉄砲数撃ちゃ当たる、である。

しかし、中で物音がしていない。誰かが倒れる音も、隙間から血液が流れてくる様子もない。

「ジェーンさんっ」

「カンノ、フリーランスよ」

神野が血相を変えて駆け寄ってくる。そういえば合図を決めてい

なかった。神野は銃声を聞き付けてやってきたのだろう。
「どこに、ですか？」
ジェーンは一番奥、入り口から数えて五つ目の個室を指差した。
「間違いナイ、『教会』のシスターが一人ヨ。今は中でｈｉｄｅａｎｄ　ｓｅｅｋのつもりみたいだケド」
「あの、銃声が聞こえたんですけど」
「六発打ったワ。だけど当たってないカモ、ノーリアクションなのヨ」
神野は表情を曇らせる。
「……殺して、ないですよね？」
「さあ？　でも、まだ生きてるはずヨ。フリーランスだもの、ｆｒｅｅ（だ）じゃ死なないでしょうネ」
ジェーンはジャケットのポケットから弾薬を取出し、リボルバーに装填していく。
「お兄ちゃんの場所を知ってたら良いんだケド」
神野はアイギスを壁に立て掛け、竹刀を握り締めた。気を入れ直し瞬きを繰り返す。もう、戦いは始まっているのだ。
「オープン……」
扉に手を掛けたジェーンは一息に引っ張る。
「セサミッ」
扉を開けた直後、シスターがその中から現れた。彼女は古びてぼろぼろになったマントのような布を手にしている。
「Ｉ　ｓｅｅ　ｙｏｕ！　って何よコレっ！」
マントでジェーンの視界を隠しつつ、シスターは走り出した。
「行かせない……！」
あと一歩で出口というところで、シスターの前に神野が立ち塞がる。彼の力量、能力を計りかねて、彼女はトイレの中に押し留められてしまった。入り口には神野が、後ろにはジェーンがいる。挟まれたシスターは持っていたマント――聖骸布（マンディリオン）――を翻して息を吐いた。

「……き、勤務外が何の用でしょうか？」
ジェーンは引き金に指を掛け、銃口をシスターに向けたまま口を開く。
「お兄ちゃんはどこ？」
「おに、お兄ちゃん？　あの、それは誰の事なんですか？」
シスターの後ろにあった鏡が音を立てて割れた。鏡には弾丸がめり込み、ばらばらになった破片が床に落ちていく。
「次は当てるワ。――お兄ちゃんは、どこ？」
「わ、私、知りませんっ」
半泣きのシスターは聖骸布を握り締め、必死になって訴えた。
「私、お、男の人なんて、今日はまだ見てません。あっ、あなたのお兄さんなんて方は知りませんっ」
「そう……」
ジェーンはシスターから視線を外さずに、リボルバーをゆっくりと下ろしていく。
「あなた、お兄ちゃんを見てないのネ」
「はっ、はい。見てもいないし、知ってもいません」
壊れた人形みたいに繰り返し首を振るシスターを見遣り、ジェーンは憂鬱そうに溜め息を吐いた。
「あなた、フリーランスよネ？　フリーランス『教会』」
「そっ、そうです」
「ケガ、してないのカシラ？」
シスターはきょとんした顔で小首を傾げる。
「アレだけショットしたのに、平気みたいだったカラ」
「あ、ああ、あの、それはですね――」
何か得心がいったらしく、シスターは聖骸布を広げてみせた。
「――この、マンディリオンのお陰なんです。これ、凄く固いんですよ。だから私、これに包まって銃弾を防いでいたんです」
「へえ、こんなぼろいので……」
「あっ、だ、ダメっ」

聖骸布へ不用意に手を伸ばした神野の手首を握り、シスターは顔を真っ赤にして彼から離れる。
「その、すみませんでした」
居たたまれなくなった神野は頭を下げ、悲しそうに俯く。
「それじゃ、そのマントがあなたのアイテムなのネ」
「はい、そうです」
「ふーん。カンノ、それ取って」
「へ？」
「それよ、それ。その布」
ジェーンはシスターが大事そうに抱えている聖骸布を事もなげに指差していた。
「お兄ちゃんはいなかったけど、ここでフリーランスを月までぶっ飛ばせば、お兄ちゃんはきっとアタシの事を見直してくれるワ」
「え、え、え？」
神野はジェーンとシスターへ交互に視線を遣りながら戸惑っている。
「ちょ、ちょっと！　こっ、これは私たちの大切な……」
「――知らないもん。アタシはお兄ちゃんに喜んでもらえれば良いんだカラ」
弾倉に弾を込めながら調子外れの歌を口ずさむジェーン。彼女に悲しげな視線を送りながら、シスターは胸の前で十字を切っていた。
「あ、ああっ、主よ。どうかこの迷える小羊に救いをお与えください……」
「押し付けまがまがしいわネ。アタシは救いナンカいらない、お兄ちゃんがいれば、もう何もいらない」
「がましい、です」
「こ、この……主を冒涜するような……」
「カミサマなんか、いてもいなくても変わらないわヨ」
ジェーンは嘯きながら、回転式の弾倉をくるくると回してから銃に戻し、撃鉄を引き起こす。

「ゆっ――るせない！」
シスターの蛮声に呼応するかのように、彼女の握っていた聖骸布が動き出した。
「ジェーンさんっ」
まずい。そう思った神野はシスターに竹刀を振り下ろすが、聖骸布が広がって彼女を包み込む。竹刀は布に衝撃を吸収され、床に叩き付けられた。
「どいてカンノっ」
続いてジェーンが銃弾を撃ち込んでいく。それでも、聖骸布はその全てを飲み込み、吐き出していった。殺傷力を失った弾は乾いた音を立てて床に跳ねる。
「マンディリオン……」
シスターが呟いた瞬間、聖骸布は床に広がり、ジェーンと神野の足に触れようとした。神野はそれを竹刀で払いながら後退する。しかし、ジェーンはその場に留まり続けていた。聖骸布が纏わり付いているのにも気にしないで弾薬を装填し、シスターを狙って発砲を開始する。
「無駄、ですよ」
聖骸布はシスターの盾になり、ただの一発でさえ銃弾を通さなかった。尚もジェーンは銃を撃とうとしていたのだが、突然として糸が切れたマリオネットみたいに床へ膝を突いてしまう。彼女は膝で立つのも辛いのか、唯一の武器であるリボルバーを手放して、両手を使って体を支えていた。
「くっ」
「ちっ、近付かないで」
苦しそうにするジェーンへ駆け寄ろうとした神野は、シスターの視線に射竦められてしまう。
「動いたら、こ、この子を殺してしまいます」
「……声が震えてる。あんたにやれるとは思えないぜ」
「私がやれなくても、マンディリオンが殺します。聖者と、聖者に

等しき者には聖なる守りを」
　シスターはジェーンを見下ろし、聖骸布を愛おしそうに撫でた。
「生者には聖なる裁きを。この布に触れた者には骸に成り果ててもらいます」
「ジェーンさんから離れろ」
「こ、声が震えてるのはあなたも同じでしょう？」
　握り締めた掌から汗が一滴流れ落ちる。神野は竹刀の先をシスターに向けたまま、息を呑んでジェーンの様子を見遣った。まだ彼女は息をしている。生きている。だが、シスターの言葉が本当なら非常に危うい状態である事は間違いない。
「わ、私だって何の恨みもない人を殺したくありません。だけど、あなたたちがわっ、私の邪魔をするって言うんなら……」
「分かった。俺だって人殺しなんて真っ平ごめんなんだ。あんた、本当に一さんを知らないんだな？」
　シスターは頷き、それでも敵意を込めた視線を神野に向け続けていた。
「なら邪魔はしない。行けよ。だから、ジェーンさんから……」
「……分かりました」
　シスターは聖骸布をジェーンから遠ざけ、ポケットの中へ回収すると彼女から背を向ける。
「ただし、ここから一分は出ないでください」
「それも分かった。だけど、本当にジェーンさんは無事なんだろうな」
「マンディリオンはせ、生者の生命力を奪います。で、でも安心してください。丸一日はまともに動けないでしょうが、死にはしません」
　神野はジェーンに肩を貸して起き上がらせようと試みた。しかし、彼女は本当に力が入らないようで、少しでも力を抜いて、手を離せば倒れてしまいそうであった。
「し、失礼します」

シスターはトイレから出て行く。
――邪魔はしないさ。今、だけは……！

一は直感していた。終わりはもう近いのだと。
「手こずらせてくれたじゃない」
放たれた釘は九つ。その内の一つは一の肩をかすめ、壁に突き刺さっていた。
「……一、ぬしだけでも逃げろ」
その内六つは一にも槐にもかすする事無く壁に突き刺さっている。
「俺だけ逃げても意味はねえんだよ」
一は蹲る槐を庇うようにして、シスターの前面に立っていた。
放たれた釘の内、二つが槐に命中していたのである。一つは右足に。一つは左肩に。血が着物を朱に染めており、彼女自身の表情は蒼白なものになっていた。
「一般人のくせに、フリーランス相手によくもまあ、ここまで……」
――勤務外だよ、ボケ。
しかし一は反論せずに黙っておく。何にせよ、アイギスのない間自分は一般人と変わらないのだからと、そう思うと改めて情けなくなった。
逃げられない。目の前には狂気を纏い、凶器を持ったフリーランスがいる。今の槐は一人じゃ動けない。逃げるには、彼女を抱えていくしかない。
「まさか今更逃げようだなんて思ってないわよね？」
「……まさか」
釘を刺され、一の背筋が凍った。
「本当ならあんただけは見逃してあげても良かったんだけど、私を押し倒しておいてただで済むとは思っちゃ、いないわよね？」
「お布施でもよこせってのか？」
「結構よ。座敷童子をもらって、あんたの泣き喚く顔さえ見られれ

ばもう満足だから」
　シスターは酷く嗜虐的な笑みを浮かべ、持っていた釘を掌の上で器用に遊ばせる。
　一は周囲に目を配った。勿論助けの来る気配はない。何とか一階まで下りてこられたまでは良かったのだが、階段を下り切ってすぐ『教会』に捕まってしまった。もう少しで正面玄関だったのだが、今や後ろには壁、前には階段と『教会』。廊下まで出ようにも、一歩でも動けば殺されてしまうだろう。
　何も、出来ない。
「一、わしを渡せ」
　一の心臓が大きく跳ねた。槐の提案は魅力的なものに思えてしまう。彼女を差し出せば、殴る蹴るの暴行は受けるかもしれない。だけど、命だけは助かるかもしれない。
「ふーん？　良いんじゃない、どうせあんたら会ったばっかなんでしょ？　命まで義理立てる必要はないんじゃない？　ほら、主だってそう言ってるわよ」
「……渡せない」
「一、お主……？」
　アイギスさえあれば。
　自分以外に誰かいれば。
　――俺は、一人じゃ何も出来ない。
「悪いな、槐。それでも俺はきんむうあ！？」
　シスターは一の頭を掴み、壁に押し付けた。
「はじめっ！？」
「ごちゃごちゃうっさいのよ雑魚が！」
　槐は立ち上がろうとするが、シスターに釘を投げられてしまう。着物が床に縫い付けられ、彼女は一が何度も何度も壁に叩き付けられるのを見ているしか出来なかった。

大乱闘スマッシュシスターズ

「カンノ、行って」
「……置いてはいけないっすよ」
神野はジェーンに肩を貸しながら、彼女の様子を盗み見た。顔色は悪く、うっすらと汗もかいており、今にも倒れてしまいそうである。
「アタシなら平気。だから、お兄ちゃんを……」
「でも……」
ジェーンは神野の手を振り払い、自らの力だけで壁に寄り掛かった。満身創痍の彼女の瞳には、ぎらついた光が宿っている。
「行って」
有無をも言わせぬジェーンの語気に、神野はとうとう頷いてしまった。トイレの中に立て掛けておいたアイギスを掴み、溜め息を吐く。
「ここに隠れていてください。一さんを連れて迎えに来ますから」
「……うん、お願い」
どうか無茶はしないで欲しい。それだけをジェーンに願って、神野はトイレを後にした。

ここまでだ。立ち塞がる女は、目線だけでそう言っていた。
一人増えただけでは自身の勝利は揺るがない。絶対の自信を誇る鞭を捉えられたシスターは、己の浅はかさを呪うしかなかった。
右の鞭はヒルデに押さえられ続け、左の鞭は山田に殴り返され続け、遂には懐にまで潜り込まれている。
「乙女の柔肌に傷を付けやがって。貰い手がなくなったらどうしてくれるんだよてめぇ」
敗因は二つ。一つはヒルデの力を甘く見ていた事にある。シスタ

ーは細心の注意を払っていたつもりだったのだが、どうやら彼女に攻撃を見せ過ぎてしまっていたらしい。
「本当に見切られていたらしいですね」
山田は本能だけで鞭の軌道に食らい付いてきていた。
その分、彼女は何発か攻撃を食らっていたのだが、ヒルデは違う。彼女はパターンを完全に読み切っていたのだ。シスターは鞭を振るう際、何も考えず遮二無二やっていた訳ではない。本命の、当てに行く攻撃にフェイントを織り交ぜて何十ものパターンを作り、その上それらをランダムに振り分けていたのだ。相手を舐めていたつもりは一切ない。しかし、時間を掛け過ぎてしまったのである。長期戦になればなるほど有利だと信じ切っていた自分に非があった。
二つ目の敗因。山田を甘く見過ぎていた事である。シスターは真っ正面から向かってくるだけの彼女に脅威を感じなかったのだ。山田が一度膝を突いたくらいで、勝利を確信してしまったのである。腐っても、皮を剥がれても、肉を抉られてもフリーランス。
「……くっ」
そして、今更ながらに脅威を感じてしまっている。武器を奪われ、シスターは逃げる事すら叶わずに山田に見据えられていた。
「覚悟は完了してっか、おい？」
山田は肩を回しながらシスターを追い詰めていく。いつの間にか壁際に背を向けている事に気付き、シスターは恐怖すら覚えた。今から殴られる。分かっているのに、体は動こうともしない。見え見えのテレフォンパンチを避けられる自信が一欠けらも湧いてこないのである。
「行くぜ」
風が唸りを上げた。戦闘中にあるまじき行為だと知っていたが、シスターは目を瞑ってしまう。
「……？」
予想に反し、いつまで経っても衝撃はやってこなかった。恐る恐る目を開けてみると、山田の獣じみた笑みが視界を覆っている。

「何のつもりですか？」
情けを掛けられたのだと思い、シスターはなけなしの闘志を振り絞って虚勢を張った。
「おまえ、オレを一発殴ってみろ」
「……なんですって？」
驚いているのはシスターだけではない。山田の後ろにいるヒルデですら目を丸くしている。
「だから、先に殴って良いって言ってんだ」
気が違っているとしか思えなかった。敵に情けを掛けるどころか、目の前に迫った勝利を手放し、あまつさえそれを譲ると山田は言っている。
「信じろとでも？　そんな事をしても、あなたにメリットなどありませんよ」
山田は豪快に笑い、拳を見せ付けるように突き出した。
「これはオレの自慢の拳だ。そんじょそこらの奴には負けねぇ。特に、てめえみたいな奴にはよ」
「大方、カウンターを狙っているのでしょうが……」
「かっ、ははっ。カウンター？　馬鹿かてめぇ。この距離でオレにそんなもん必要あるかよ。こいつはな、ハンデだ」
「ハンデですって？」
舐められている。馬鹿にされている。下に見られている。山田に対して沸々とした怒りが湧いてくる。
「そうだ。オレは強い。だからてめぇにハンデをやる。そうしねえと後味が悪いからな」
「言ってくれますね」
シスターだって紛れもなくフリーランスだ。鞭がなければ何も出来ない訳ではない。武器が失われた際の有事に備え、彼女もソレと素手で渡り合えるよう肉体を鍛えてきたのである。
「どこだ、どこを狙う？　おら、顎か？　頭か？　それとも腹か？　あ、けど顔は止めろよ」

ここまでに油断し切った相手を仕留めるぐらい、容易い。山田の狙いは依然として読めないが、嘘を吐いているようには見えなかった。つまり、彼女は本当に一発もらう気でいるのである。

――その油断、命取りと知りなさい。

シスターは山田が大口を開けて笑っている隙を衝き、彼女の顎を右から振り上げるように殴り抜いた。鞭を捌く要領でスナップを利かせた、自分でも感心するくらいに手応えを感じる会心のパンチである。この一発で倒れないまでも、確実にダメージは通った。

「しっ……！」

跳ね上がった山田の顎を目掛けて追撃を狙う。もう一度アッパー気味に振り抜けば、脳震盪を起こせる筈だ。

「――おい、一発って言ったろ」

「なっ……！」

振り上げた拳を掌で包み込まれ、シスターは狼狽する。

山田は顔をゆっくりと下げ、シスターをまっすぐに見つめた。

「約束を破るなって親から教わらなかったのかよ、おい」

力は込められていない。だと言うのに、シスターは山田の手を振り解けないでいる。冷や汗が流れ、体は硬直していく。

「効いてないの……？」

「や、思ってたより痛かったぜ。こりゃちっとばかしお返しにも気合いが入るってくらいにな」

かはは。山田は口の端を歪めると、再び肩をぐるぐると回し始める。その度に風を切る音が鳴り、シスターの恐怖感をいやが上にも高めていった。

「オレは今からてめぇの胸を殴る。しっかりガードしとけよ」

「あ、く……」

気絶してしまえばどんなに楽だったろう。シスターは祈りを捧げる事も忘れ、ただただ神に己の無事を願った。

もう何度、頭を壁に打ち付けられただろう。一は痛みを堪える事などせずに、衝撃を受ける度に悲鳴を上げ続けていた。

「あはははっ、安心なさい一般人！　あんたが簡単に飛ばないよう手加減はしてるから……ねっ」

「止めぬかっ、主の狙いはわしじゃろう！」

「うっさいのよソレ風情がっ、私はこいつにも用事があるのよっ！」

シスターは槐の懇願を聞き入れず一に暴行を加え続ける。

「主も言ってるわ、塵は塵に、やる時は徹底的にやれってね！」

「がっ……！」

一の額は真っ赤に腫れ上がって血が滲んでいた。彼は両手を使って少しでも衝撃を分散させようとしているが、度重なる攻撃から手の感覚は麻痺し始めている。

「貴様ぁっ！」

もう限界だ。槐は一を助けようとして、自分の怪我を押してまで釘を引き抜こうとする。

「座敷童子、動いたらこいつを殺すわよ」

しかし、彼女の行動を見越したシスターはポケットから見せ付けるようにして釘を取り出した。投擲用に使っていた小振りな釘ではない。接近戦で使うであろう、聖釘（エレナ）である。

「……必ず殺してやる」

「ふん、幸福の象徴が恐ろしい事を言うのね」

「わしがたたりもっけに堕ちようが関係ない。じゃがな、これ以上、わしを守ろうとした者に対して危害は加えさせんぞ」

シスターは鼻で笑い、一の髪の毛を引っ掴んだ。

「幸せ者ね、一般人。主も言ってるわ、あんたなんかに幸福はもったいないって」

「……槐、殺すなよ」

一はシスターを無視して槐に話し掛ける。彼の額からは血が流れ、髪の毛は乱れて悲痛な様相を呈していたが、目だけは光を失っていない。

「殺したら、俺が耐えてる意味もなくなっちまう」
「無視してんじゃないわよっ」
その事に腹を立てたシスターは一を無理矢理に壁へ押し付けた。
「良い度胸じゃない、あんた。気に入らないけどね」
シスターは一の髪の毛を掴んだまま、もう片方の手で聖釘を握る。
「殺しはしないわ。だけどあんたには主まで届くような悲鳴を上げてもらう」
一には抵抗出来る力が残っていなかった。いや、そもそも抵抗しようとも思わなかったのである。
「……あんた、さあ」
自分では何も出来ない。
自分には何一つ力がない。
アイギスを持たない自分は、勤務外になり得ない。
「耳、悪いんだな」
「何ですって？」
一の囁いた言葉に、シスターは目を見開いて驚愕する。手加減はしていた筈なのだが、もう壊れてしまったのだろうか、と。
「聞こえねえのかよ……」
「あんた、何が……」
シスターが一から手を離した瞬間、彼はずるずると、壁に手を付きながら滑り落ちていく。
「い、てえ……」
一の額から染み出している血液が壁に痕を残していった。彼は体力を振り絞り、シスターの正面を避けるように移動しながら、どうにかして壁に背を預ける。

シスターが三人。戦場が三つ。
病院内で起こっていた戦闘の全てが、同時刻、ほぼ同じ場所である事に誰が気付いていただろうか。

ジェーンと神野は病院一階のトイレでシスターと出会い、山田とヒルデは病院一階のロビーでシスターと出会い、一と槐はシスターと出会って、今現在は病院の一階にいる。
全員が、病院の一階で戦っていたのだ。

――だから。

「食い縛れよ」
山田は腰を低く落として拳を振り下ろす。彼女の宣言通り、その拳は胸元へと向かっていた。シスターは両腕でガードを試みる。
「ぐううう――っ！？」
「でえあああああっ！」
が、骨の砕ける音を聞いただけに終わった。山田の強烈な一撃はシスターの両腕を折っただけでは飽き足らず、彼女のブロックごと突き崩していく。
既にシスターの体は壁と拳に挟まれて押し上げられていた。足が地に着かないままに上り詰めていく。背後の壁がみしりみしりと音を鳴らしていた。
「くたばりやがれえええぇっ！」
山田が咆哮する。
「でえぇぇあっ！」
勢いを殺さないまま、山田は一気にシスターを殴り抜いた。ひびの入っていた壁は破片を撒き散らし、シスターもろとも背後の空間へ吹き飛んでいく。

――だから。

一には聞こえていた。気を失いたかったのに、意識は痛みによって無理矢理に覚醒されている。感覚が鋭敏に研ぎ澄まされていた。壁の向こう側の様子が手に取れるように、である。

「あー、いてえ……」
一は壁に寄り掛かり、釘を持ったシスターを見つめていた。
「あんた、何を言って……」
シスターがまた一歩壁に近付いた瞬間、みしりみしりと異様な音が鳴り始める。一は乾いた声で笑っていた。
「何笑ってんのよっ！」
そう、自分一人では何も出来ない。
力がない。武器がない。戦いは好きじゃない。だからと言って、ここまでされて強者に尻尾を振って媚びへつらうのも、尻尾を巻いて逃げるのも真っ平ごめんだった。
だったら、
「そこ、危ねえぞ」
助けを求めれば良い。
壁にひびか入り、シスターの耳を劈く破砕音が立てられる。舞い散る破片、開いた空間、吹き飛んでくるもう一人のシスター。
釘を持ったシスターは悲鳴を上げる事さえ出来ずに、コンクリートの破片と、飛んできたシスターに正面からぶつかってしまう。予期しない事態に、衝撃を殺し切る事さえ叶わずに二人のシスターが床を転がった。
「一、無事か？」
槐の呼び掛けに一は手を振って答える。
「あ？　はじめ、だあ？」
一にとって聞き覚えのある声が、割れた壁の向こうから響いた。
その人物は無警戒に穴から顔を突っ込むと、一の顔を見て豪快に笑う。
「お、おおっ、やっぱり一（はじめ）かっ、久しぶりじゃねえの！」
「……やっぱり、栞さんでしたか」
一は立ち上がろうとしてたたらを踏んだ。やはりまだふらついてしまう。
山田は嬉しそうにしながら一の傍へやってきた。だが、彼の様子

を見た瞬間表情を険しいものに一変させる。
「……やったのはあいつらか」
「まあ、そんなところです。それより栞さんはどうして？」
「話は後にしようぜ。向こうにゃヒルデもいるしな、一も知ってる奴だろ」
「ヒルデさんも？」
色々と聞きたい事があったが、今は死地を抜け出す方が先だ。そう考えた一は槐の着物に刺さっていた釘を抜いてやる。
「大丈夫か、槐？」
「無論じゃ」
槐は一の手を借りる事無く立ち上がった。彼女は小刀を握ったままで、戦意を失ってはいない様子である。
「一、まさかこいつが座敷童子なのか？」
「知ってるんですか？」
山田は倒れているシスターたちを眺めながら、
「こいつらが言ってやがったんだ。へっ、そういう事か。オレにも何となく見えてきたぜ」
愉しそうに口の端を吊り上げた。
「ヒルデっ、こっちに来い！　残りをぶっ潰すぞ」
一には、顎でこき使われている筈なのに楽しそうに微笑むヒルデの入院生活が浮かんで見える。
「……だめっ、もう一人来てる！」
「ああっ？」
山田は向こう側を見るために穴から顔を覗かせた。それに倣い、一と槐も襲撃者を確認しようとして覗き込む。
「……あ、君も来てたの？」
「ヒルデさん、お見舞いに行けなくてごめんなさい。体の具合はどうですか？」
ヒルデは目を細め、一に柔らかな笑みを向けた。
「……ん、大丈夫」

「ああ、それは良かったです。退院はいつ頃に？」
「えーと……」
「やってる場合かっ！　おら来やがったぞ！」
山田に一喝され、ヒルデは肩をびくりと震わせる。
「三人目か」
「『教会』は彼奴で最後じゃ」
一は廊下の向こうから、こちら目掛けて走ってくるシスターを見据えた。
――こいつら、似てる？
と言うより、むしろ同一人物としか思えない。『教会』の三人は区別が付かない。一は何故か一抹の不安を覚えてしまう。理由は分からないが、抗い難い悪寒が体中を駆け巡っていた。
「一とガキはそこにいろ。ヒルデ、オレらで仕留めるぞ」
「なっ、わしの事をガキと申したか！」
槐は山田に刀を向けたが、彼女は壁を乗り越え向こう側のヒルデと合流している。
「だって座敷童子じゃん」
「ええい、一、ぬしは黙っておれ！」
やっぱりガキじゃないか。喉元まで出掛かった言葉を飲み込み、一は素直に黙る事にした。

接触まで残り十メートル。シスターはポケットに手を突っ込み、釘を投げて牽制する。それに対して、未だ無傷のヒルデが前衛に立ち、怪我をしている山田を庇っていた。
ヒルデは拾っていた釘を巧みに操り、投げられた釘を弾いていく。
「……菜ちゃん、大丈夫？」
「問題ねえぜ、理由が出来たからな」
山田が何故笑ったのか理解出来ず、ヒルデは小首を傾げた。
「一はやらせねえ。それだけだ」

「……ん」

それを言うなら自分も、である。さっきまでのヒルデはただ山田にくっ付いていただけだったが、今は違う。今、後ろには一がいるのだ。守るべき相手が傍にいる。フリーランスと戦う理由ならばそれだけで充分に過ぎる。

しかし、だ。

ヒルデと山田は油断している。相手が一人、こちらが二人。既に『教会』の内二名を倒した。その事実が数的にも、精神的にも彼女らを優位にさせてしまっている。

「性に合わねえなあ……」

「栞ちゃんっ？」

遅々とした展開の戦闘が続いた後、後方で待機しているのに堪え切れなくなったのか、山田はヒルデの前に躍り出た。釘が何本か服をかすめてしまったが、そんな事を彼女は気にしてない。

「おら『教会』っ、いつまでもダラダラやってんじゃねえぞ！」

シスターは答えず、鋭い視線をもってしてヒルデらを射抜き続けていた。

「……んっ」

その視線に気圧されたのか、ヒルデの肩に釘が刺さってしまう。彼女は僅かに眉根を寄せただけで、その釘を引き抜くと負けじとシスターを見据え返した。

「掛かりましたね」

「ああ？　何も掛かってねえよ、馬鹿かてめえ。さっさとこっちに来やがれってんだ」

業を煮やした山田が更に踏み込んだ瞬間、彼女の膝が崩れ落ちる。歩き出そうとするが、力が一向に入らない。気力だけは十二分に有り余っているのだが、体だけが言う事を聞いてくれなかった。その上、膝だけで立つ事も困難になり、遂には両手を使って床に四つん

這いになる。
「……んだ、こりゃ……」
「マンディリオンに触れた者はそうなります」
シスターはいつの間にかマントのような布切れを愛しげに抱えていた。
「触れた、だあ？」
その時、山田の肩から布の切れ端がはらりと落ちてくる。
「く、釘に仕込んでおいたものです。本体の布から切り離されたモノでも、かすってしまえばマンディリオンは効果を発揮します。聖者には聖なる守りを。生者には裁きを。あなた方が骸になるまで生命力を頂いておきますね」
「誰がやるかよっ」
山田は助けを求める意味でヒルデに目を遣るのだが、彼女は既に床へと突っ伏していた。しかも寝息まで立てている。ただでさえ少なくなっていた体力が抜け落ち、彼女の意識も徐々に薄れていった。

どうして、ヒルデたちは眠っているのだろう。
戦局を窺っていた一にはどうにも解せなかった。
「一体、どうなってんだ……？」
寝息を立てているヒルデと、未だ動こうとしている山田の様子から判断して、彼女たちは決して死んでいるわけではない。まるで、急に力が抜け落ちたみたいだった。
山田の破壊した壁に出来た穴、そこから顔を出していた一の頭は事態の把握に努めようとしていて、動くのを忘れている。
廊下では二人の仲間が倒れ、最後の敵になるであろうシスターがゆっくりと、一歩ずつ近付いてきていた。
怖い。
さっきまで麻痺していた感情が、ようやくになってその機能を回復し始めている。

一の時間が凍結していた。思考が停止していた。
ヒルデ、山田。現時点で戦闘の出来る二人が倒れてしまった事により、残されたのは負傷した槐と自分だけ。相手は一人とはいえ、フリーランスだ。この状況はもはや一にとって絶望的と言える。
「――ぐうっ！」
一のすぐ上を何かが飛んでいった。ぎこちなく首を動かせば、向こう側の壁に槐が叩き付けられているのが見える。
――何が、起きた？
考えるまでもない。
「やってくれたわね……」
倒れていた筈のシスターが立ち上がったのだ。山田が殴り飛ばした方のシスターは依然として目を覚ます気配を見せないが、一の眼前で仁王立ちになっているシスターは致命傷を受けていなかったに過ぎない。
「か――――っ……あぐ……」
逃げ出す寸前、腹部に爪先を突き立てられて一は悶絶する。
「まさかこんなところにフリーランスがいるなんて。あんた、運が良いのね？　それとも悪運が強いのかしら」
良い筈がない。一は言い返したかったが、声が出ない。それよりも息が吸いたい。
シスターは一の襟元を掴んで体を引き起こすと、壁の向こうへ乱暴に放り投げる。
「あんたの悪運もここまでよ、一般人」
「聖お姉様、大丈夫ですか？」
「ええ。灯、あなたも大丈夫かしら。怪我はない？」
「問題ありません。……あの、光姉様は？」
聖と呼ばれた方のシスターは壁の向こうを指で示し、
「両腕は確実に折れてるわ。多分、他にも何本か持っていかれたでしょうね」
呆れた風に溜め息を吐いた。

「良いようにやられてしまって、主もお嘆きになっているでしょう」
「……お姉様、状況はどうなっているのですか？」
「ああ、後はコレをやれば邪魔者は消えるって状況よ」
コレ。頭上で交わされる物騒な会話を聞きながら、自分の事なのだろうなと思い、一の気分は沈んでいく。おまけにお腹が痛い。だが、そのお陰で意識があるのだ。出来るならヒルデたちと同じように眠っていたかったのだが、そうもいかない。残ったのが役立たずの自分だけだとしても、何もしないでむざむざと殺されたくはなかったのである。例え千に一つ、万に一つとして生存への可能性が残されていなかったにせよ、だ。
「それじゃ、座敷童子以外は殺しておきましょうか。本当なら無益な殺生は好まないけど、主が言っているから仕方ないわよね。さ、灯、あなたはマンディリオンで二人をヤりなさい。私はエレナでこの一般人を始末するから」
「わ、分かりました」
自分の命も残り一分あるかないか。覚悟を決めて一は立ち上がろうとする。
「あら、しぶといのね」
シスターはよろけていた一の胸倉を掴み、彼の首筋に釘の先端を突き付けた。
「言い残しておきたい言葉はある？」

――だから。

自分の聴覚はどうなってしまったのだろう。そう思いながら、一は笑みを浮かべる。
「薄気味悪いわね」
「あんたさ、耳が悪いのか？」
だから、繋がっている。
病院内で起こった戦場は全て繋がっているのだ。一にはその全て

が理解出来ていた。助けなんて求めていなかったのだから、助けてもらえる確率は恐ろしく低い。それでも、山田は壁を砕いてくれた。

「何を、言っているの……？」

「聖お姉様っ、新手ですっ」

灯と呼ばれたシスターの悲痛な声。その声を聞いて、聖は一から目と手を離してしまう。向かってきたのは少年だった。学生服らしきものを着た背の高い少年、神野である。

「聞こえなかったのかよ。響いてたろ、発砲音がうるさいくらいによ」

戦場へ参入した神野は、何事かを一に向かって叫び、光の頭上を越えるようにして何かを投げ付けた。

シスターたちの間隙を衝き、その何かは一の下へ、それが当たり前のようにして届く。彼はそれを拾い上げ、この世界に感謝した。

確率は限りなく低かった。

聖に壁へ叩き付けられていた時に聞いた音は二つ。壁の向こう側で何者かが交戦しているであろう音。この病院に山田とヒルデが入院している事を知っていた一には、二人の内のどちらかなのだと検討が付いていた。

もう一つは乾いた、高い破裂音。何発も何発も響くやかましい音であった。店長は嫌いだが、一は心のどこかで彼女を信じている。だから、必ず頼んだものを届けてくれると信じていた。頼んだものは、二つ。

「一さんっ、大丈夫ですか！？」

一は手を上げて神野に答えた。何となく察しが付いている。発砲音がしたという事は、ジェーンもここに来ているのだ、と。

どうやら、店長は約束を守ってくれたらしい。援軍も、

「何か、俺の悪運は相当らしいなあ」

アイギスも持ってきてくれた。

一はアイギスを広げる。それに反応して飛び退った聖に、彼は何を思ったか頭を下げた。

「……あんた、一般人ではなかったみたいね」
「初めまして、勤務外です」
一と聖とは離れたところで、神野と灯の戦闘は始まっている。が、一たちは動こうとせず、お互いの出方を窺っていた。
「主も言ってるわ、本当にしつこいわね、と」
「いやいや、もうすぐに終わるよ」
顔を強張らせる聖とは違い、一は穏やかな表情で、笑みさえ浮かべている。
「何、笑ってるの？　あんた、さっきからどうして笑っていられるの？」
――あんたの間抜け加減にだよ。
もう何も怖くない。お膳立ては調ったのだから。
「最後に教えといてやるよ。俺の名前は数字の一が二つで一一、すっげー良い名前だろ」
「あんた、何を言ってるの？」
「ああ、つまり――おやすみなさい、聖お姉様」
聖が全てを理解するより前、一はアイギスを彼女に向けていた。
「ようやったわ、一っ！」
次に聖が目覚めた時、今回のお話はひとまずの結末を迎える事になる。そんな事は露知らず、メドゥーサによって動けなくなった彼女は今現在、何が起こっているのかすら分からず槻に切られているのであった。

誰？

「安心せい、峰打ちじゃ」
小刀を袖の中にしまった槐は満足そうに、意識を失っている聖へ告げた。
「峰打ちでも死ぬ事があるって聞いたぞ」
「む、そうじゃったか？」
と言うか峰打ちではない。
「つーか、すげえうわーって感じで飛び掛っていったけどさ。怪我、大丈夫なのかよ」
「阿呆、わしらを痛め付けた奴に報いる絶好の機会だったのじゃぞ」
「……怪我の事を聞いてるんだけど」
一はその場に座り込んで槐に視線を送る。彼女は露骨に目を反らしていた。
「ま、そんだけ動けりゃ大丈夫そう、か。問題は……なあ、この人死んでないよな？」
「無論じゃ。ちいと血を流させ過ぎたかもしれんがの」
「本当かよ……」
聖が敵であるにせよ、槐を座敷童子であり続けさせる為には、なるべく早く医者を呼んだ方が良いだろうと一は判断する。
「しかし、ぬしの力は凄いのう。今までの役立たずぶりが嘘のようじゃ」
「役に立たなくて悪かったな」
槐は「冗談じゃ」と、一の肩をぽんぽんと叩いた。
「一、あの小僧を助けんで良いのか？」
「神野君？　ああ、もう終わったみたいだよ」
年下ながら何とも頼もしい同僚である。一はアイギスを畳み、あちらの戦闘に目を向けた。

あちらの戦闘こそ、神野と灯の戦いは一合で終わった。灯が臨戦するより先に、神野が聖骸布を弾いたところで、である。
「ひ、卑怯です」
灯は座り込んだまま、神野を恨めしい目付きで睨んでいた。
「涙目で言われても困るんだけど……」
「邪魔しないって言ったじゃないですか」
「一分待ったじゃないか」
「そっ、それとこれとは話が別です！」
灯はぎゃあぎゃあと泣き喚いて神野を困らせ、呆れさせている。
「……悪いけど、向こうも決着は付いてる。姉さんなんだろ？　さっさと病院に連れて……いや、ここ病院だったっけ」
「わ、私を殺さないんですか？」
「そんなのごめんだって言ったろ。ほら、運ぶの手伝うから」
神野は灯に手を差し伸べた。
「主が、言っておられるからですよ……」
彼女は頬を赤らめながら、躊躇いながらもその手に自分の手を重ねた。

聖、光、灯。『教会』は倒れ、ここに彼女らとの決着は付いた。
一たちは勝利したのである。何の為に戦ったのかも、誰の為に血を流したのかも、何もかも分からないままに。
だが、勝ちは勝ちである。
その後、一たちの懇願によって『教会』の面々と負傷した者たちは病院のベッドに運ばれた。

そして時刻は午後九時。『教会』との戦闘が終わって二時間は経った頃だろうか。

「一、妹は大丈夫なのか？」
「ああ。神野君に送ってもらった。今頃は家に帰って寝てるんじゃないかな」
一と槐は今、無茶苦茶になった状態のロビーにいる。彼らは適当なソファを占領して、雑談を交わしていた。
「ぬしが送らんで良かったのか？　あの娘、一と一緒に帰るやどうのと泣き喚いておったが」
「まだ聞きたい事があったからな」
「……わしに、か？」
「いや、お前らに、だよ」
一は荒れ果てたロビーを見渡す。
「しかしひでえな。壁は壊すわ床は抉るわ、皆やり過ぎじゃないか」
「それだけ激しい戦いだったんじゃ。今更じゃが、ぬしが生きていた事に驚いてしまうのう」
槐は一を見定めるような、無遠慮な視線を送った。
「運が良かっただけだよ」
「……そう言えば、ぬしは戦いの最中、何か聞こえていたと言っておったな」
「ああ、お前には聞こえてなかったのか。ほら、栞さんたちが戦っていた時の音だよ。壁が砕けたり、ジェーンが銃を撃った時の音」
「むう、悔しいがさっぱりじゃ」
やはり、血。
一は自らに流れるソレの血を、恨むと共に感謝する。少なくとも、そのお陰で窮地を脱するきっかけが生まれたのだから。
「む、どうした一、考え事か？」
槐に下から顔を覗き込まれ、一は仰け反った。
「失礼な奴じゃのう」
「悪い悪い。……なあ、楯列が来る前に聞いときたい事があるんだけど」
一は一度言葉を区切り、頭の中を整理していく。

「『教会』は何を狙ってたんだろうな？」
「愚問じゃな。わしに決まっておるだろう。それ以外に奴らが動く理由はない」
「……お前、あいつらと会うのは何度目だ？」
槐は僅かに目を見開き、その事を一に悟られないよう顔を伏せる。
「初めてに決まっておるじゃろ」
「じゃあ楯列とは？」
「……何じゃと？」
思わず上げてしまった顔。合わせてしまった目。今更避ける事など出来ず、槐は一の視線を真っ向から受け止めていた。
「あいつとはいつから会ってたって聞いてんだよ」
「衛とも、先日顔を合わせたばかりじゃ」
初めて出会って、その相手に刃を突き立てた。一は笑ってしまう。
「嘘だよ、そりゃ。全部話せ。隠してる事も何もかも、洗い浚い話してもらう」
槐は再び俯いてしまう。もはや、暗にそうだと認めているに等しかった。
「楯列が来てからで良い。だけど、絶対に話してもらう。どうしてこうなったのかをな」
一はソファに深く身を沈める。疲労している筈なのに、不思議と眠気は襲ってこない。それどころか、体は昂ぶっている。頭は冴え、血は熱く、感覚は鋭さを増していた。

――かつん。

耳は確かにその音を捉えている。こちらに向かってくる、一人分の足音だ。恐らくは楯列のものだろうと思い、一はそれ以上何も思わない。気にも留めない。
「一っ！」
「あっ？」

体が、宙に浮いていた。何が起こったかも把握出来ずに一はソファから身を投げ出される。呻きを上げて床に落ちれば、すぐ横にソファも横倒しになっていた。埃が舞い上がり、彼の鼻腔をくすぐっていく。

「……あっぶねえ」

冷や汗が背中を流れる。槐は無事だろうか。一はほうほうの体で立ち上がる。

と、無事だったらしい彼女は鋭い視線をこちらに向けていた。俺のせいじゃない。そう言おうとしたところで、そうじゃないのだと気付いた。彼女は自分の後ろにいるモノを睨んでいるのだと。

「……早田」

振り向いて、一はぞくりとした。久方ぶりに出会った早田からは一切の感情が消えていたのである。置いていかれたという悲しみも、彼女を置いていった自分たちに対する怒りも、ましてや再会出来たという喜びもなかった。

早田はただ、一を見ているだけである。

「先輩、久しぶりだな」

抑揚のない、感情の篭らない平坦な声。

一は気圧されながらも、早田を見つめ返した。

「よう、ここが良く分かったな」

「病院に行くと奴が言っていただろう？」

――馬鹿野郎。

心中で余計な事を言っていた楯列に毒づき、一は後ずさる。早田が一歩、足を踏み出したのだ。

「探し回ったぞ。大小問わず、駒台の病院をしらみつぶしに回った。先輩がいないと分かる度に、私の心は擦れていった」

「お疲れ様。ジュースでも飲むか？」

「走っている内に思うのだ。私は何をしているんだろうとな。段々と、分からなくなってくる。先輩と会いたいのか、それともただ走りたいのか」

早田はまた一歩足を踏み出す。彼女の雰囲気のただならぬものを感じて、槐は一と早田の間に割って入った。
「娘、お主……」
「常の私なら、先輩の姿を見掛けた瞬間嬉しさのあまり飛び付いていただろう。だけど、そうはならなかった。私は先輩の座っていたソファを蹴っ飛ばしていた。嬉しいが、憎い。相反する感情が私にブレーキを掛けている。なあ先輩、私はどうしたい？　何をしたいんだ？」
「早田、少し落ち着いてくれ」
ひまわりのような笑みを浮かべる後輩は、ここにいない。静かな狂気を秘めた早田に、一は恐怖を感じていた。
「ろくな説明もしないでほっぽり出したのは悪いと思ってる。だけど、お前を巻き込みたくなかったんだ。それでも俺を許せないってんなら、とりあえず殴れ」
「殴れ？　殴ったところで、私の気持ちはどうにも変わらないぞ。だが……」
早田は一との間に立つ槐を無視して進む。
「先輩が殴れと言うのなら、そうしよう」
「待て、一に手を出すな」
槐が口を挟むが、一は彼女に「良いんだ」と声を掛けた。その声からは、半ば諦めの色が感じられる。槐は納得していなかったが、渋々といった形で離れていく。
「やれよ」
一が自分の右頬を指で示した瞬間、早田は拳を振り上げていた。決して、早くはない。ついさっきまでフリーランスと戦っていた彼には、彼女の拳が自分の頬に届くまでがはっきりと見えていたのである。
――避けろ。避けろ。避けろ。当たると痛い。
「――――っ！？」
その、示していた指ごと殴られた。倒れる事も、フリーランスに

殴られた時ほどの痛みもなかったが、一の心だけがやけに痛んでいる。じくじくと、ずきずきと、奇妙な喪失感で胸が一杯になっていく。

「今ので許しを乞う先輩ではあるまい。こちらを向いてもらおうか」

「まだ、殴り足りないのかよ」

「殴られたくないのか？」

フリーランスより厄介な奴だと思いながら、一は言葉を選んだ。

「俺はマゾじゃないんだ」

「いいや、先輩は充分にマゾだと思うぞ」

言って、早田は一の左頬を殴り抜く。その際も彼女は無表情のままであった。

「許して、欲しいのか？」

正直に言ってしまえば、一には分からない。早田に許してもらいたい。その気持ちは確かにあった。だが、そうなれば置いていった意味がなくなってしまう。彼女は、彼女だけには日常に戻って欲しい。こちら側を知って欲しくない。だから、ここで縁を切ってしまえば目的は達成される。だから、揺れる。

「許して欲しければ、今、ここで、私を抱け」

「えーと……」

この馬鹿は何を馬鹿な事を言っているんだろう。どう返すのが適切なのか。

「先輩はまだ、だろう？」

早田は一の襟元を引き寄せ、そっと囁く。

顔に吐息を吹き掛けられ、一の背筋がぞっと粟立った。が、早田の顔からは表情が死んでいたので、甘やかな気持ちは爆発的に萎えてしまう。

「まだって、何が？」

「とぼけなくても良い。先輩はまだ初体験を済ませていない筈だからな」

一は押し黙った。答える義理はない。それ以上に認めるのが悔し

いのである。
「先輩ともあろうものが、まさか怖いのか？」
「違う」
童貞なんて、捨てられるものなら捨ててやりたい。だが、アイギスを得る為にアテナと契約した身では、二度と叶わない。一生純潔を貫き通す事が、一が勤務外でいられる絶対条件なのだ。そしてまだ、女神の加護を手放す気はない。
「安心しろ、私もまだだ。だから、もらってくれると嬉しい」
「だったらもっと嬉しそうな顔しやがれ」
「済まないな。だが、私が無表情キャラをやっているのも先輩のせいなのだ」
「……まさか、別路線を開拓しようなんて思ってるんじゃねえだろうな」
早田は何も言わず、一の頬を殴った。流石に予想外だったのか、彼は後ろに倒れていく。
「先輩はまだ自分の立場を分かっていないらしい」
早田は倒れていく一の襟元をしっかりと握り、無理矢理に自分の顔近くまで持ち上げた。
「どうやら、徹底的に教え込む必要がありそうだ」
「何を、だよ……」
「ナニカを、だ」

「そこまでにしてくれないか？」

振り下ろし掛けた拳を止め、早田は顔を上げる。そこで、彼女は今日ここにきて初めて感情を露わにした。
「やあ、久しぶりだね早田君。僕は君に二度と会いたくなかったのだけど」
「きさまぁ……！」
場の空気を全て掻っ攫うような声で、爽やかに謳い上げるのは楯

列である。彼は無警戒に、一種悠然として歩みを進めていた。

現れた楯列を見遣り、槐は溜め息を吐いた。
「やあ、一君。殴られている姿もキュートだね」
「……てめえ、今頃出て来やがって」
「良いタイミングだと思うけどなあ」
早田は一から手を離し、今度は楯列へと詰め寄る。
「説明もなしに放り出すとは、やってくれたじゃないか、楯列」
「ありがとう。ふうん。なら、今の君に説明をすれば許してもらえるのかな？」
「許しはしないが、貴様の顔面を殴るのは千発から九百発にしておこうか」
「太っ腹だね、早田君は」
楯列は早田を見下ろして薄く笑った。何をするのかと思えば、彼は槐に目線を向ける。
――ああ。
槐は覚悟を決めた。彼は全てを話すつもりなのだろう。ならば、自分は認めるより仕方ない。願わくば、彼が彼らに嫌われないように。

一は床に座り込み、楯列に事のあらましを話すよう促していた。
「早田、話が終わるまでは手を出すなよ」
早田は一に返事をせず、壁に背を預ける。彼女の顔はまた、無表情なものになっていた。
「それじゃあ、何から話そうか」
「全部、最初っからだ」
楯列は鷹揚に頷いた。
「……分かったよ。うん、あれは、二十年以上も前の、雪がちらつ

く寒い日の事だった。僕こと楯列衛は楯列家の第一子として産声を上げて……」

「ちょっと待て。そこ、飛ばせないのか」

雲行きがのっけから怪しくなりそうだったので、一は話を中断させた。

「最初からと言ったじゃないか」

最初過ぎる。

「融通の利かない奴め。だったら仕方ない、俺の質問に答えていってくれ」

「良いとも。さあ、一君は僕のどの部位が気になるんだい？」

「……お前と槐の関係についてからだ。妹じゃないってのは聞いてる。だけど、それだけじゃないだろ」

一に無視され、楯列は大仰に溜め息を吐いた。

「答えろ。お前は槐と、いつ出会ったんだ」

「僕の好意には鈍いくせ、こんな事には鋭いんだから。……そう、そうだね。僕は槐君と初対面じゃない。もっと前に知り合っていたんだ」

「具体的には？」

「生まれた瞬間からさ。正確に言えば、彼女とは僕が生まれる前からの付き合いになるのかな」

驚きはしない。一は槐に視線を向け、彼女の挙動を確認する。

「ああ、嘘じゃないよ。楯列家はね、座敷童子との縁が深い一族なのさ」

「縁？」

「僕も詳しくは知らない。座敷童子のいる生活が当たり前になっていたから、疑問にすら感じなかったんだ」

そんな生活聞いた事がない。一はとりあえず続きを促した。

「楯列は座敷童子のお陰で富を築いていったのさ。ピーク時には、二桁を越える座敷童子が家に居着いていたらしい」

「二桁って、そんなに集まってきてたのか？」

そこで楯列は自嘲気味に笑い、力なく首を振る。
「いや、集めたのさ。力ずくかもしれない。知恵を絞ったのかもしれない。だけど、結果から見れば誘拐と変わりないだろうね」
「……槐も、集められた内の一人だったんだな」
槐は答えなかった。一の問いがくだらないものだと笑っているのか、怒っているのかとも判然としない。
「座敷童子たちも数が多いから、楯列の内、特定の誰かに取り憑くのが当たり前になっていてね。槐君は僕を担当していたんだ」
「生まれた時から、か。じゃあ、槐は妹ってより姉ちゃんだな」
「だと愉しかったんだろうけど、残念ながら、そうはならなかったよ。槐君とは一ヵ月も経たず別れてしまったからね」
楯列はそう言ってから、僅かに顔を曇らせた。
「どころか、最終的には全ての座敷童子が消えてしまったのさ。ここ数か月の間にね」
「数か月……？」
一は眉根を寄せる。数か月なんて、本当に最近の話じゃないか。
「徳、格の高い者から順々に消えていったよ。彼らがいなくなるたび、家には不幸が舞い込んだんだ」
「は、いいざまだ」
「……早田」
吐き捨てるように言った早田を窘めると、一は再び楯列に向き直る。
「それで東北に、槐のところまで行ったのか」
「実際に会うまでは槐君かどうかとは分からなかったけどね。座敷童子なら誰でも良かったんだよ。残念ながら、良い出会いとは呼べないものだったけれど、ともかく僕は槐君と出会えた」
槐はばつが悪そうにしてそっぽを向いた。
「目的は槐を連れて帰る事だったのか。でも……」
「ああ、上手くはいかなかったよ。先客がいたからね」
「『教会』、か」

一は独り言のように呟き、シスターたちを思い出した。
「彼奴らはしつこかった。二週間もわしを追い回して、家の者にも迷惑を働いておってな」
「そうか。ま、三百年も世話になってる、いや、している人たちだもんな……あれ？」
「どうした、一？」
「お前、ずっと東北の旅館にいたんじゃなかったっけ？」
槐は言い辛そうにして俯いたり、一と視線を合わせては反らすのを繰り返す。
「その、わしは外の世界を見てみたかったんじゃ」
「取り憑いた家から出られないんじゃなかったのか？」
「いや、座敷童子は出ないだけだよ。彼らは義理堅く、情に厚い。だから、一度取り憑いた家からは滅多に出ないんだ。でも、取り憑く対象や時期ってのは僕らが思っているよりも自由なのさ」
どうやら、槐は元々いた場所から楯列家の者に付いていったらしい。
「それで、どうして槐は元の場所に帰っちまったんだ？」
「……駒台、この街から嫌なモノを感じたのじゃ。わしら座敷童子は幸せをもたらし、幸せに敏感じゃが同時に不幸に敏感でもある」
「嫌なモノって、何だよ。槐が駒台に来たのは二十年も前だろ？その頃にはまだ、ソレなんて……」

――ソレなんて、いなかった？

本当にいなかったのか？　お前らは本当にいたのか？　言い掛けた言葉を飲み込み、一は槐を茫然として見つめた。
「……？　わしが感じたモノの正体は分からん。じゃが、わし以外の座敷童子もここから逃げ出していった。ふ、そして今、わしらの予感は当たっておったと痛感しておるよ。この街は狂っておる」
「狂ってる、だって？」

楯列も早田も声を発する事無く、槐が次に何を言うのかを待っている様子だった。
「一、ぬしは何も思わんのか？　人を外れた力を持つぬしら、先の女子らや、わしらソレを含め、駒台には禍々しいモノが多過ぎる。まるで、ここには魔が降りておるようじゃ」
魔が、降りている。そう言われて、一は何も言えないでいた。
「駒台とは言ったものじゃな。さて、次は何を聞きたい？」
頭が追い付かない。一は必死に脳内から疑問を引き出そうとするが、的確なものは見当たらない。
「――槐ちゃん、君は何故楯列を刺したのだ？」
しどろもどろしている一を見兼ねたのか、沈黙を守っていた早田が口を開いた。
「……ふむ。そう、じゃな」
槐は楯列に目線を送り、ゆっくりと言葉を紡いでいく。
「今思えば、八つ当りだったのかもしれぬな」
槐はおどけてみせたが、彼女の声音からは悲哀の色が見て取れた。
「『教会』には追い回され、久方ぶりに出会った人間はわしの事を覚えておらなんだ。挙げ句、無理矢理にわしを連れ出そうとしおった」
「済まない、槐君。僕は……」
「もう良い。こうしてぬしに出会え、再び外に出ようと思えた。それだけで、もう良いのじゃ」
「……ちっ」
早田は舌打ちをして、楯列たちから顔を背ける。
「結局、『教会』の目的は何だったんだろうな」
「彼女たちの目的は槐君だよ。それは間違いない。ただ、槐君を使って何をするかまでは分からないんだけどね」
後で本人たちに聞けば済む事だと思い直し、一は頭を掻いた。
「何となくだけど、大筋は掴めてきたよ」
「……ああ、そうだな」

一に同意する形で頷いた早田は、キッと楯列を睨み付ける。
「充分に分かった、理由とやらが。今日の事は楯列、お前らが座敷童子を囲んだせいで起こったんだとな」
「早田、その言い方は……」
「間違っていないだろう？　こいつらが槐ちゃんたちに見捨てられ、未練がましく追い掛け、すごすごと戻って、私たちの街に不幸を招き入れた！　何も間違っていないっ、そうだろう！」
早田は今にも楯列に掴み掛からんばかりの勢いである。一方の彼は何を言おうとするでもなく、黙ったまま俯いていた。
「……許しは乞わないのか？　謝罪の意思を見せろ。何とか言ったらどうなんだ、疫病神が」
「殴らないのかい？」
涼しげな顔で、涼しげな声で。でも、彼の目だけは冷たくて。
「殴らないのかい、と聞いたのだけど」
「……っ！」
「早田！」
早田は正面玄関から病院を飛び出していた。見る見る内に、彼女の後ろ姿が遠くなっていく。
「行きなよ、一君」
追い掛けるかどうか迷っていた一に楯列が声を掛けた。
「話はまた後でしよう。槐君」
「うむ」
槐は頷き、外へ出ようとしていた一に「しゃがめ」と命ずる。
「……ああ」
一は時間がないとごねようとしたが、言う事を聞いていた方が時間を無駄にしないと判断した。
こうしている間にも、早田は遠くへ行ってしまう。自分から離れていってしまう。今日見つけだして、彼女の手を掴まえられなければ、もう二度と会えない気がしていた。
「心配するでない。ぬしにはわしが付いておる」

優しげに囁くと、槐は一の手に頭を乗せる。
「……おいこら」
「暴れるでない」
まるで子供扱いだ。しかし、一は槐の年齢を思い出して何も言えなくなる。それに、彼女の手は存外に気持ち良かった。
「……うむ、良いじゃろう。一、行ってまいれ」
「これさあ、何の意味があったんだ？」
「あの娘、思い詰めておった。放っておけば何をするか分からぬぞ、一」
「無視すんじゃねえよっ。……分かってる。早田は、必ず連れて帰る」
槐は満足気に微笑む。
「わしは奴に借りがある。助けてもらった恩を返させてもらうからな。一、任せたぞ」
任された。一は立ち上がり、駆け出す。

走れ走れ、今度は男が走る番。

病院のロビーに残った二人は、一が出ていった後も玄関の自動ドアを眺め続けていた。
「のう、衛。ぬしらの関係は一体何なんじゃ？」
「ん、僕らの関係、かい？」
改めて問われると、答えはすぐに出てこないものである。それでも、興味深そうにこちらを見上げてくる槐を見て、楯列は思考の回転を早回しさせた。
「……友人、関係なんだろうね。多分、だけど」
「多分、じゃと？」
楯列は首肯する。

「それも、とても危ういバランスでね」
「何だか、わしには分からん世界じゃのう」
「はは、分からなくても良いよ。いや、分からないでいて欲しい、かな。僕にだってまだ分かってないんだから」
多分、一生分からない。だけど、一生変わらない。そうあって欲しい。危うく、怪しく、甘やかなバランス。
「この街が狂っているなら、僕たちも狂っているんだよ」
離れたくない。近付きたくない。積み上げて壊したい。元通りにして崩したい。
「魔が降りる街、降魔の街か。本当、駒台（ここ）は狂ってるね。それとも、元から狂っていたのかな」
狂ったモノがいるからコマダイなのか。コマダイだから狂ったモノがいるのか。雲を掴むような話だと心中で苦笑し、外の景色に目を遣る。今日は良い天気だったと気付き、声に出して笑った。

男の子女の子

これが複写機、一般的にコピー機と呼ばれているものだとは理解している。

「ううん」

大学の構内のコンビニエンスストアに設置されたコピー機の前で、楯列衛はただただ唸る。

知っている。知っているのだ。だが、使い方が分からなかった。これはどのように動かすのだろう。隣でコピー機を使いこなす学生に聞けば良いのだが、楯列にはそれが出来なかった。

――楯列衛。

この名前を知らない者は駒台大学内にはいないに等しい。

駒台で一番の金持ちの息子で、一番狂っている。だから決して近寄ってはいけない。

この街に住む者は皆知っている。新しくやってきた者に先住者が伝えるのはコンビニの場所でも、安くて美味しい店でもない。

教えるのは楯列について、だ。

恐怖。嫌悪。畏怖。不快。

そのどれもが当てはまり、どれにも当てはまらない。関われば必ず面倒事が起きる。

楯列を成金だと揶揄する者もいる。持ち過ぎた者は、持たない者から疎まれるのが常だ。義務と言っても良い。絶対に、嫌われる。

だが、『楯列衛』が同じ大学に通う殆どの学生から距離を置かれているのは家柄だけが問題ではない。彼自身にも原因と呼べるものが存在するのだ。

奇行、である。

楯列衛は数々の伝説めいたものを打ち立て、今も尚打ち立て続けているのだ。

大学の坂道を自ら転がり落ち、向かってくるオートバイを避けよ

うとせず、むしろぶつかっていき数メートル吹っ飛んで、増水して氾濫寸前の川をバタフライで下って、など。など。枚挙には暇がない。

その全てが、真実である。目撃者もいるし、何より楯列本人がそうだと認めていた。そうだ、自分は異常者なのだと。

しかし、彼が異常であろうとも、金を持っているのは確かだ。おまけにルックスも悪くない。いや、良過ぎるくらいに。だから、楯列に擦り寄っていれば何か良い目を見られるのでは、との打算を胸に近付く物好きもいた。

が、物好きたちが見られたのは悪夢だけである。楯列に付いても一銭たりとも得られない。外身が最高でも中身は最低な彼といれば、むしろ損をする一方だ。周囲からは変人の知り合いと判断され、見下される。失うもの、捨てるものがある限り、誰だって楯列には近付かない。

その事は楯列本人の耳にも入っている。なのに彼は変わろうとしなかった。自身の異常を直そうとも治そうとも、改めようとも、向き合う事すらしなかった。

そんな未来と諦めている。

そんな周囲に呆れている。

だが現状に甘んじている。

何をするでもなく、何かを求めるでもなく。周囲には誰もいない。自分以外を羨ましいと嘆くでもなく、助けてくれと叫ぶでもなく。過ぎる時間を有り難く思い、過ぎた時間を疎ましく思う。

楯列衛は今日も、全てを独りで受け入れていた。幼い頃、座敷童子が去った頃からはいつも独りでいた。当たり前だとも思っていたのだから、さして疑問も感慨も、もう今更浮かばないのである。

――僕は一人だ。

難しい話ではない。要は、楯列には友人と呼べる人間がいなかった。それだけの話である。

知人なら星の数ほどいた。使用人なら、親戚なら。

彼らに対して情ならば向けている。向けられている。しかし、それは親愛めいた、敬愛に近いものなのだ。欲しかったのは、友愛。もう諦めてしまった、届かなかったモノ。

だけど、それで良い。それが良い。

もう、自分には何もいらない。あるじゃないか。金が物が、心のないものなら何でも持っている。だったら――。

「邪魔なんだけど」

不機嫌さを隠そうともしない素直な声に振り向くと、そこには一人の男子学生がいた。

「コピーすんならさっさとしろよ」

「……ああ、すまないね」

楯列は声を掛けられた事に対して僅かに驚く。いったい、どこの情報弱者だろうか、と。一回生の前期も終わりそうな七月の中旬。大学で会話したのは、自分の正体がここに知れ渡ってから一ヵ月ぶりだろうか。

声を掛けてきたのはどこにでもいる、ぱっとしない男子学生である。彼の身に付けているものの中にブランド品などなかった。安っぽいジーンズに、丈のあっていないポロシャツで、装飾品の一つすらない。着飾る事を知らない、もしくは興味がなく頓着なのか。

「ちっ」

その上、身の丈に合っていないくらいに態度が大きい。自分とは縁遠い人間だと、楯列はそう思った。

ともあれ、待たせているのに変わりはない。

「……おい？」

早くコピーを済ませなければとは思うのだが、焦ったところで咄嗟に使い方が閃く筈もない。出来るなら、他のコピー機の後ろで待っていて欲しい。よりにもよって、どうして自分の後ろなのだろう。これも一種の嫌がらせなのか。理不尽な敵意でなく、正当且つ明確

な理由のあるやり方が、無視やその他の手口よりも嫌らしい。
「おい、小銭」
「……っ」
「うお、何すんだてめえ」
肩を触られたので、思わず乱暴に振り解いてしまった。
「重ね重ねすまない。癖になっていてね。触れられるのが駄目なんだ」
「……自意識過剰な奴だな。それより、小銭だよ小銭」
楯列は目を丸くする。かつあげにしてはやけに程度が低い。
「申し訳ないが小銭は持ち歩かない主義でね」
「はあ？　だったらコピー出来ないだろうが」
「そうなのかい？」
男子学生は呆れたような――実際呆れているのだろうが――視線を向けてきた。
「お前、人間何年目だよ？　ガキでも分かるぜこんなの」
「使った事がなくてね」
「ふーん。良いや、じゃあ札を渡せ。両替してきてやるよ」
「……なんだって？」
楯列にとっては信じられない提案だった。目の前の男は自分に話し掛けるだけでなく、救いの手を差し伸べようとしている。
「あ、ちょい待て。持ち逃げなんてしないぞ」
「分かっているよ。分かっているのだけど……君、僕の事を知らないのかい？」
「楯列衛だろ。駒台じゃ、すっげえ有名人じゃん。知らない奴の方が少ないとも聞いたぜ」
「なら、どうして？」
どうして助けてくれたの？
どうして話してくれたの？
どうして、どうして？
「……？　良く分かんないけど、とっととコピーしようぜ」

そう言うと、男は楯列の手から財布を奪い取る。
「うおっ、すげえ入ってる！」
「あ、欲しいなら……」
「いらねえよ！　欲しいけど！」
どっちなのだろう。
楯列が思案している間にも、男はレジの傍にいた店員に両替を頼んでいた。
「ほい。コピーってどれくらいすんの？」
「え、あ、ああ。これ、だけど」
男からお札と小銭を受け取り、鞄の中から数枚のルーズリーフを取り出す。
「あんだよ、すぐ終わるじゃねえか。貸してみ」
「……聞いても良いかな？」
「んー？」
「どうして、手伝ってくれるんだい？」
コピー機に紙をセットしながら、
「邪魔だったからだよ」
男はそう言った。
実に単純明快で、楯列はその答えが気に入り、男の事も気に入った。
だからこそ、彼には自分と一緒にいて、周囲から白い目で見られて欲しくないと、そうも思う。
「離れた方が、良いよ」
「コピー終わったらすぐどっか行くって」
「ふう、君は鈍いね。僕と一緒にいたら厄介な事になると言っているんだよ。友人だっているだろうに、君も変人だと思われるよ」
自分で言っていて虚しくなるが仕方ない。これも声を掛けてくれた男の為だ。
「いや、俺友達いないから」
「馬鹿な……」

「おい、手で顔を覆うんじゃねえよ。友達がいないからなんだってんだ」
「意外だと思って。君みたいに良い人なら、誰も捨て置く筈ないだろう」
「そりゃどうも。でも、色々あんだよ。ああ、それとな、良い人なだけじゃ知り合いは出来ても友達は出来ないと思うぜ」
良い人だけでは駄目。初めて聞く理論である。楯列は心底から驚いた。
「ん、コピー終わったぞ」
「……あ、ありがとう」
紙の束を受け取り、楯列は出来るだけ失礼にならないよう頭を下げる。
「大袈裟な奴だな。良いよ、コピーぐらいでそこまでしなくても」
男は苦笑して、自分の分のコピーを始めた。
――駄目だ。好きだ。
「お茶に行こう」
「はい？」
「お礼だよ。君はああ言ってくれたが、それじゃあ僕の気が済まない」
気付いたら口を開けている。声は心ない言葉を作り上げ、男の意識をこちらに繋ぎ止めようと足掻いていた。
「世話になった者にまともな礼も出来ないようでは楯列の名が廃る。この後、時間はあるかい？」
「女の子に言ってみ、その台詞。絶対引っ掛かってくれるぞ」
「僕は君と一緒に行きたいんだよ」
男は困ったような表情を浮かべ、楯列から視線を反らした。
「……まあ、良いんだけど。高そうな店は嫌だぞ」
「ああ、心配しないで、高そうではなく、ちゃんと高い店を選ぼう。君の為に」
「それが嫌なんだよ、気を遣いそうだから。んー、だったら俺に付

いてこい、ジャンクフードと原価五円のコーラに舌鼓を打ちに行こう」
　言うが早いが男は歩き出す。
「ハンバーガーは嫌いかー？」
「いや、大好きだよ」

「その人物こそが、僕の婚約者である一君だったのさ」
「ほう、人間とは面白いのう……」
「あっ、いた！」
「む？」
　病院のロビーで寛いでいた楯列と槐、その二人のところに、血相を変えた炉辺がやってきた。
「は、はじめちゃんたちは？」
「早田君が出ていったので、一君も追い掛けに行きましたが……何かあったのですか？」
　炉辺は何度か深呼吸をして息を整える。
「……あのね、『教会』の子が逃げちゃったの」
「なんじゃと？　炉辺とやら、逃げたのは三人共がか？」
「ううん、しおりちゃんに両腕を折られた子は寝てるの。逃げたのは二人、ひじりちゃん、あかりちゃんだったかしら」
「まずい、一たちと彼奴らが出会わんとも限らぬぞ。衛、どうするつもりじゃ？」
　楯列はソファから立ち上がり、いつの間に取り出したのか、車のキーを握っていた。
「無論、行くさ。早田君の行きそうなところなら見当が付いているからね」
「一はどうするんじゃ、あやつは今武器を持っておらぬのだぞ」
「ふっ、僕に見当が付いているなら、一君にだって見当が付いているに決まっているよ。今頃は二人で抱き締めあっているんじゃない

かな。ああ、想像しただけで鳥肌が立ってきた。急いで、二人揃って拾い上げてくるよ」

「……良し、では行くとする――ひゃあああっ！？」

楯列は付いてこようとした槐を抱き上げて炉辺に渡す。

「悪いけど、ここからは僕らだけにさせて欲しいんだ。すみませんが、槐君をお願いします。それと、一君の仕事場の方に連絡も」

「うん、任せて。はじめちゃんたちをよろしくね。応援も出来るだけ頼んでおく。でも、無理しちゃ駄目だよ？」

「ええ、分かっています。槐君、大人しくしているんだよ」

槐は炉辺に頭を撫でられながら、諦めたように、力なく首を縦に振った。

「聖お姉様、光姉様はどうするつもりですか？」

「捨てていくわ。あの子、もう使い物にならないぐらい壊されたもの。新しい光を補充した方が早いわね」

ワゴン車の中、聖は包帯だらけのまま後部座席で横になっていた。

「良いんですか？　また神父様に怒られちゃいますよ」

「どうせ任務失敗しているんだもの、怒られるなら纏めて怒られちゃいましょ」

灯は運転中であるにも関わらず俯きたくなる。今から帰っても、聖は手当てを受けるだけなのだ。咎を受けるのは自分だけではないか、と。

「簡単に『教会』の代わりなんて見つかりませんよ。一ヵ月、いえ、もっと掛かるかも」

「……当てならあるわよ」

「え？　本当ですか？　でも、もう孤児院には……」

「やあね、この街から持っていくのよ。忘れた？　最高の素材がいたじゃない」

喉の奥でくつくつと笑い、聖は腹部を押さえて呻きを漏らした。

彼女の怪我はまだ癒えていないのである。
だが、灯は姉の容体よりも素材が誰なのかが気に掛かっていた。
「もしかして、光姉様を倒した二人ですか？」
「アレは『神社』と勤務外じゃない。灯はあんなのと組みたいの？」
「では、どなたが？」
「あの、猿みたいにすばしっこい生意気な奴よ。どう、アレなら能力的にも充分だと思うわ」
誇らしげに語る聖をミラー越しに見つめ、灯は陰鬱とした気分に陥る。
「い、一般人じゃないですか。あんな子を巻き込むんですか？」
「私たちだって最初は一般人だったのよ。まさかあなた、今からあの子に同情するつもり？　駄目、許さないわ」
「そっ、そんなつもりありません。だけど、やっぱり……」
「灯、私たちの目的を忘れたの？」
目的。その言葉を聞いて、反射的に体が震えた。
「忘れてないわよね？　無理を言って神父様に座敷童子捜索の任をもらったんだもの」
忘れられる筈がない。『教会』になってから、『教会』になる前から欲しかったものがある。灯は唇を噛み締め、弱い自分を苛めて、戒めた。
「記憶と、家族。忘れる訳がないです」
「結構、良い答えよ。私たちはその二つの為に主の言う事を聞いて、主の言う通りに動くの」
灯も、聖も、光も。『教会』の人間は皆、似たような身の上である。産んでくれた親も知らない。生まれた場所も知らない。家族も、友人も、何一つとして傍になかった。気付いた時には、『神父』と呼ばれる人の下、孤児院で暮らし、また働いてもいたのである。そこで、君は、君たちは『教会』の『シスター』なんだと告げられた。
「……聖お姉様は、あの孤児院で何年目でしたっけ？」
「覚えていないわ。でも多分、私は古い方よ。二十年目ってところ

かしらね。灯こそ、年、覚えていないの？」
「十年は越えていると思いますけど」
「あら、あなたでも冗談を言えるのね」
冗談を言ったつもりはなかったのだが、聖はくすくすと楽しそうに笑っている。
「あの子を連れて、行くんですか？」
「当然よ。私たちには前進しか許されていない。主だって、そう仰っているわ」
分かっていた。記憶と家族を、家族の記憶を取り戻す為には『教会』としての責務を果たすしかない。『神父』のご機嫌を取り続けるしかない。そうすれば、いつか、いつか、いつか必ず――。
「では、とりあえず車を走らせ続けます。ターゲットを見掛けたら教えてくださいね」
「はいはいっと」
必ず、見つかるのだろうか。記憶も、家族も。
「……本当に、あるんだろうか」
「灯？」
「何でもありません」と返し、灯は車の速度を上げる。
光は、終わった。聖に捨てられてしまった。自分本位の姉は、また一人、自分たちのような者を増やすつもりなのだろう。無関係な他人を引き入れ、自分が這い上がる為に。
――願わくば、あの子が見つかりませんように。
もし本当に神様がいるのなら、どうか、お願いしますと。

神様なんていない。
ずっとそう思っていた。思ってきた。
もし神様がいるのなら、自分はこんな目に遭わずに済んだのに。
そう、思っていたかった。
神様はいる。この世界、自分と同じ世界に立っている。女神と名

乗るモノにも会っている。信じない方が、おかしい。神はいる。
だけど一は神の存在を信じるだけで、神を信じるつもりはなかった。
彼らはいつも何もしない。自分勝手に場を荒らすだけで、人の事なんて何一つ考えちゃくれない。人の世を動かすのはいつだって、神じゃなく人でなければならない。
左右に分かれた道の前で、一はしばらくの間立ち尽くしていた。右か左か。どちらが早田に続く道なのか。それとも、どちらとも続いていないのだろうか。
「……っ」
迷った末、右を選ぶ。
――いや。
選ばされたと言うべきだろうか。自分の意志でなく、別のものに背中を押されたような感覚が一を苛んでいる。右に進んでも尚、迷った。人の意志か、別の意志か。信じるのは、どちらだ。

今日ばかりは神を恨んだ。どうにも、今日の彼は悪戯が過ぎる。
「……お前らは」
「はぁい、元気してた？」
聖に肩を貸しながら、灯は歯噛みしていた。
灯の意に反して、『教会』は早田を見つけてしまったのである。
彼女が地面に座り込んで、虚ろな目をしていたところを聖は話し掛けた。本当に、嬉しそうに。
「あら、元気ないのね。ふふ、私もそうだけど、ほら」
聖は自らに巻かれた包帯を見せ付けるようにくるくると回る。
「……私を殺しに来たのか？」
「なら、どうするのかしら？」
早田は厭世的に笑い、
「好きにすると良い。私はどうせ捨てられた身だ。帰る場所もない。

なら、前のめりに逝くのみだろう」
　吐き捨てた。
「あらら、可哀相。帰れないのね。――なら、私たちと一緒に来ない？」
「殺しに来たのではないのか」
「事情があって、ね」
「一人足りないな。は、なるほど、情けない。むざむざと返り討ちにあったのか」
　灯の背筋が凍る。挑発的な言葉を受け、聖は激昂すると思っていたのだが、彼女は早田に微笑み続けていた。まるで、妹に向けるそれみたいに。
「そ。出来の悪い子だったわ。その点、あなたは違いそうね」
「……私を連れていくつもりか」
「そうよ。ふふっ、頭も良いじゃない、あなた。結構。どうかしら、フリーランスにならない？」
　早田は顔を上げて聖の瞳を射抜く。
「紛れもなく本心のようだが、何故私なのだ。知っての通り、私は一般人だぞ」
「一般人にしてはイイもの持ってるわ。類い稀な身体能力、良過ぎる勘。素材としてはピカ一なの。それに、私たちも元々は一般人だったのよ」
「一般人がフリーランスに？」
　疑わしげな視線を向けられても聖は喋り続けた。その弁舌は留まる事無く、むしろ、熱が篭っていく。
　その光景を横目に、灯は事態がこれ以上進展して欲しくないと思い続けていた。先刻は聖に賛同する旨を述べていたが、これ以上、一般人を巻き込みたくなかったのである。
　だが、早田は灯が思っていたよりも話に耳を傾けていた。聖の自分勝手な言い分に、時折相槌を打ちもしている。雲行きが怪しいが、口は挟めない。『灯』はあくまで『聖』の妹、彼女よりも立場は下

なのである。そう、作られていたのだから。
「どう、悪い話じゃないでしょう？　今までの自分に未練がないなら、『教会』になりましょうよ」
「未練……」
真剣に考え込む早田を見て、灯はお願いだからこちらには来ないでと、そう思うしかなかった。

未練なら、ない。
早田は聖の話を聞きながら、フリーランスになるかどうかを本気で考えていた。これが『教会』の甘言だとは気付いている。
だが、拒めない。笑い飛ばせない。
――だって、拒む理由なんてないじゃないか。
一たちには置いていかれ、見捨てられ。自分の居場所はもう、この世にはないのだと諦めている。世界に、自分に、全てに。だったら、良いのではないか。今までの生活を捨てて、フリーランスと呼ばれ、人外に堕ちるのも良いのではないのか。
「どう？　ああ、考える時間はあげられないけど」
時間なんて必要ない。どれだけ時間が経つのを待とうが状況は変わらないのだから。一に捨てられた事実は変わらない。もう何も、覆らない。あの頃には帰れない。日常には戻れない。
「……フリーランス、か」
声に出してみると、存外としっくりと来る響きだった。
ああ、自分はこんなにも必要とされている。空っぽな自分を焦がれてくれている。
それが今だけだとしても。今だけは、今だけは自分の存在が望まれている。
だったら――

これが複写機、一般的にコピー機と呼ばれているものだとは理解している。

「ううん」

大学の構内のコンビニエンスストアに設置されたコピー機の前で、早田早紀はただただ唸る。

知っている。知っているのだ。だが、使い方が分からなかった。これはどのように動かすのだろう。隣でコピー機を使いこなす学生に聞けば良いのだが、早田にはそれが出来なかった。

怖いのだ。

他者に話し掛ける事が怖くてたまらない。

拒絶されたらどうしよう。一度は受け入れられたとしても、次はどうなるか分からない。

なら、最初から独りでいる方が良い。

そう思ったのは、早田が中学に上がってからの頃だった。

小学生までは、彼女は普通の少女と変わらぬ扱いを受けていたのである。

だから、自分が尊大な物言いをしていたのと、人間離れした運動能力を持っている事に気付けなかった。

自分は、特別な人間だと思い上がっていた。

他者を敬わず、見上げる事が出来なかった。

他者を侮り、見下す事しか出来ないでいた。

やがて周囲からは孤立していき、その時になって初めて、足が速いだけでは、高く飛べるだけでは人心など掴めないと気付く。気付いた時にはもう遅く、取り返しが付く筈もなかった。話し方を変えようにも、持って生まれたものを矯正させるのは難しい。強制は出来ても、所詮は付け焼刃だ。

親を恨む。どうして教えてくれなかったのかを。どうして自分は普通ではなかったのかを。どうして、普通に産み、育ててくれなかったのかを。筋違いも甚だしい。分かっていながらも、そう母親に告げた時、母は何も答えてくれなかった。ただ、悲しそうな目で見

つめられ「ごめんね」と頭を下げられただけ。
情けなくなった。死にたくなった。
かと言って、死ねるとも現状を変えられるとも思えなかった。せめてもの逃げ道として、卒業した高校からは遠いところにある大学を選んだ。ここなら自分を知っている者はいないと、そう思って。
変わる筈もない。
人間はそう簡単に変われるものではない。
入学して一ヶ月。何も変わらず、友人どころか話せる知人さえ作れないまま、時間だけが過ぎていく。
これで良いのかもしれない。ああ、これは罰なのだと。今まで侮っていた人たちへの償いなのだと。いつの間にか、独りでいる事に理由を作っていた。
――馬鹿だ。私は。
「ふっ」
知らずの内に口元が歪む。
「笑ってんじゃねえよ！」
コンビニ内に突然響き渡った怒声に、早田の小さな肩は震えた。
自分は笑う事すらも許されていないのだろうかと声のした方を盗み見て、もう一度肩が震える。
「楯列衛だ……」
呟いた言葉は、周囲の喧騒に掻き消されていた。
店内に入ってきたのは駒台でも有数且つ有名な変態、楯列衛である。
しかし、早田の目には話に聞いていたのとは違う人物に映った。
確か、楯列は独りで行動しているのではなかったか。なのに、今の彼は見知らぬ男子学生を引き連れて……引き連れられている。あの変態をリードする学生は一体何者だろう。
楯列たちに興味が沸くと同時、裏切られたとも思ってしまう。
彼らは自分と同じような人間だと思っていたのに、今の楯列は酷く楽しそうだったからだ。

普通の友人と、普通に話して、普通に学生生活を送っている。
またしても、自分だけ辛い目に遭っているじゃないか。『楯列』ですら友人がいると言うのに、自分ときたら……。
「あ」
気を取られている場合じゃない。ここへはコピーをしにきたのだ。その事を思い出し、緩やかな絶望が早田を侵食していく。コピー機の使い方なんて、分からない。
何も、分からない。
足元が崩れていく感覚。目眩を覚え、吐き気を催す。自分はこんなにも、脆弱な人間だったろうか。独りでいると、人間とはこんなにも弱くなるものだろうか。
倒れて、しまおう。
ここで意識を手放して、冷たい床に身を投げ出してしまおう。子供じみた、自暴自棄な考えに身を焼かれ、早田の体がぐらりと崩れ落ちる。

「おい」

崩れ落ちる寸前で、体を無理矢理支えられてしまう。
「え、あ……？」
「うわ、意外と重いのな」
「な……」
困惑する早田をよそに、彼女を支えたままの男は喋り続けていた。
早田は慌てて男を振り解き距離を取る。顔が、真赤になっていた。
「なっ、何をする！」
「あーごめん。そこで倒れられたら邪魔だったから」
そう言って、男は屈託なく笑う。
それだけで、早田にとっては充分だった。

Modorenai Live（戻らない日々－Ever Version－）

恋に落ちるのに理由は要らない。
愛を感じるのに根拠は要らない。
全ては一瞬で決まるのだと、そう気付いた。
「……何だよ？」
声を掛けられ体に触れられて。それだけで良かったのである。
男は急に早田が黙り込んだ事に戸惑っていたが、早田にはもう何も見えていなかった。意を決して、
「私を抱いてくれ」
ありったけの思いをぶち込む。
「馬鹿じゃねえの、お前」
馬鹿で良い。そう思い、早田は笑った。

「ねえ、どうしたの？」
「――っ！　いや、なんでもない」
聖に声を掛けられて初めて、早田は自分が昔の思い出に浸っていたのだと気付いた。
甘い夢。夢のような記憶。
「それで、決心は付いたわよね」
「聖お姉様、性急過ぎるのでは……」
「灯、お黙りなさい」
「ですが……」
二人の口論をよそに、早田は目を瞑ってあの頃を思い出す。別れを惜しむかのように、丁寧に記憶を手繰り寄せていく。油断すると、涙が零れそうになった。
大丈夫。この思い出があるなら、まだ生きていける。
「良いだろう」

早田がそう言うと、聖は瞳を輝かせ、灯はどこか浮かない表情になる。
「ふふ、つまり？」
聖はどうしても言わせたいのだろう。早田の口から、フリーランスになりたいと。自ら、人を外れたモノになりたいのだと。
「……私は」
――乗ってやる。貴様の安いプライドを満たしてやる。
「私は……」

「やっぱり、ここか」

全員の視線が、新たにこの場へ現れた人物へ向いた。
肩で息をして、今にも倒れてしまいそうなほどに疲弊しているのは、一。彼は早田だけをまっすぐに見つめている。
「……あんた、どうしてここが……」
聖が忌々しそうに呟き、灯は目を見開いて驚いていた。
「先輩、何故……？」
「お前が行きそうな場所は大体分かるんだよ」
一は頼りなさげに笑う。その笑顔が、早田には辛かった。

早田が行きそうな場所なんて、本当は分からなかった。
それでも、ここに違いないという確信めいたモノはあった。
駒台大学の、コンビニの前。
初めて、早田と出会った場所。
この時間、学生も教員もいない。
ふと、一の髪の毛がむずむずと疼く。何の気なしに掻いてみると、何故だか槐に怒られたような気分に陥った。
「勤務外、私たちは見ての通り取り込み中よ。今消えてくれれば、今日のところは見逃してあげるわ」

包帯だらけの『教会』――聖――が鼻を鳴らして一を見据える。
今、消えれば？　今日の、ところは？
「悪いけど、今しかないんだよ。見つけちまったからには空手で帰る訳にはいかない」
「そう、主に唾を吐くって言うのね？」
聖は立っているのがやっとだと言うのに、釘を握って、一に先端を向けた。
一は不思議と、彼女が怖くなかった。満身創痍の相手を見て落ち着いたのではない。自分は素手なのに、疲れて苦しいのに、それでも何故か、何とかなると思っていたのである。誰かが傍にいて、大丈夫だと囁いて、支えてくれている気がしていたのだ。
「早田、帰るぞ」
足を踏み出した一のすぐ横を釘が通り抜けていく。気にせずに、もう一歩踏み出した。
「せ、先輩、駄目だ。私は帰れない」
「帰るんだよ」
「帰れる訳ないでしょうがっ、無視しないでよ勤務外っ！」
聖は激昂しているが、動こうとしない。否、丸腰の一に対してですら動けないのである。
「早田」
やっぱり駄目だった。こんな事なら最初から置いていくんじゃなかったとほぞを噛む。
やっぱり必要だった。やっぱり、自分には早田が、日常が必要だったのである。
言葉を重ね、尽くしても、もう遅いのかもしれない。彼女の不安定さは自分が一番良く知っていた筈なのに。
それでも、言わなければならない。
「帰ろう」
エゴを貫き通さなければならない。
釘が頬をかすめても引き下がれない。

「先輩、私は……」
早田はしゃがみ込んで俯いたまま動かなかった。

聖は灯に体を支えてもらいながら、しっかりと釘を握り直す。病院での戦闘から思っていた事がある。
目の前の男、一一が気持ち悪い、と。
一目見た時から、得体の知れないモノを感じていた。幾ら叩き付けても、幾ら痛め付けても決して折れなかった。危うい光を宿した瞳に見据えられる度、怖気が走る。奴の口元がうっすらと歪む度、神に祈りたくなった。
――アレは、何なの？
勤務外である以上、フリーランスの存在は知っていた筈。一はあの時も、今も素手であった。策も武器もなく、『教会』の前に立ち塞がる。
一は危険だと、聖のフリーランスとしての勘が告げていた。
「灯、マンディリオンを」
「なっ、お姉様……！？」
「今ここで、アレを殺すわよ」
「だっ、駄目です。何の意味があるんですか！」
灯にはまだ、一の異常さが理解出来ていない。そう断じると、聖は舌打ちをして自分だけでやろうとも決意する。
聖は牽制用の釘を取り出すと、前方の敵を睨み付けた。

早田は場の空気が変わった事に気付いて顔を上げる。
聖からは一般人の早田でも分かるほどの殺意が迸っていた。彼女の狙いは一だろう。そう思ったと同時、体が動いていた。
細かい理由はいらない。正しい事なんて何一つとしていらない。
裏切られたと、捨てられたと、もう終わってしまったと思っていた

のに。
　一が危ない。
　もし理由がいるなら、正しい事がいるなら、これだけで問題ない。
　釘が聖の手から放たれるか否かの瀬戸際、早田は彼女に向かって飛び込んでいた。
「くうっ――！」
　早田の空襲を受け、聖は強かに地面に打ち付けられる。
「お姉様っ！」
「させん」
「うあぁっ！」
　次に、動こうとした灯のこめかみを目掛けて蹴りを放った。
　飛び上がる早田。その蹴りを回避する灯。
　――もう何もいらないんだ。

　早田たちが戦闘をしている間、一は、倒れて動けない聖の傍に立っていた。
　一は紛れもなく、疑いもなく、言うまでもなく勤務外ではあったが、身体能力自体は早田の方が上である。何より、彼は疲れていた。一般人の彼女にフリーランスの相手をさせる。鬼畜の所業と思われようが、罵られようが、構わない。半ばやけくそであった。
　それに、今日見た限りでは、灯と呼ばれていたシスターは人を殺せる器ではない。そうも思っていた。
「……何も、しないのかしら？」
「して欲しいのか？」
「結構よ。もう、動けないわ。残念ね、折角あの子を連れて行こうと思ったのに」
　聖の巻いている包帯からは血が滲み始めている。口を開く事すら辛そうな彼女を見てしまい、一は何もする気が起こらなくなったのだ。

「……あなた、気持ちが悪いわ」
「あ？」
「ただの人間がフリーランスに逆らうなんて有り得ないもの。普通じゃない」
「俺も一応、勤務外なんだけど」
気持ち悪いとは心外である。一は憮然とした顔で聖を見下ろした。
「あなた、何を見てきたの？」
「……何？」
「その目、イカれてる。私には……いえ、私だから分かるのかしら。この世の全ての嫌なモノを見てきたように濁っていて、この世の全てのモノを無視し続けてきたような乾いた目。凄く、不快よ」
聖は目を瞑ったまま言い捨てる。
「俺の何を知ってるってんだよ」
「知らない。知りたくないわ。多分、それを知ってしまえば、私なら耐え切れないだろうから」
「やめろ、黙れ」
無駄な体力を使わせて死なれたら、槐に会わせる顔がなくなってしまう。
「ああ、主よ。どうか彼に幸あらん事を……」
「やめろっ。祈るんじゃねえ。俺はそんなもん信じてないんだ」
「ふふ、うふふ。神はいるわ。私のすぐ傍に。あなたの傍にも、ちゃあんといるんだから」
死にかけでも関係ない。眼前の女を殴り飛ばしてやりたい衝動に駆られる。
「黙れ。祈ったって、願ったって、頼んだったって何をしたって！何もしてくれない。あいつらは人間が苦しむところを見て笑ってんだよ」
「違うわ。救ってくれる。私たちを見ていてくれる」
「見てるだけだろうが。……現に、今のあんたは怪我して死にかけてる。それでも神が助けてくれるだなんて言えんのかよ」

「それは、私の祈りが足りないからよ」
嬉しそうな聖の声音に、一の背筋は芯から凍て付かされた。
「私がもっと祈れば、神は答えてくれる。私が怪我をしたのは祈りが足りなかったからよ」
「……やめろ」
「……祈りなさい、あなたも。誠心誠意頭を下げて、自分は矮小な存在なのだと一心不乱に蔑みなさい。そうすれば、きっと――」
「――やめろ！」
叫んでから、一は自分が大声を上げていた事に気付く。我に返って顔を上げれば、早田たちが戦闘を中断して心配そうにこちらへ目を向けていた。
「白けたわ」
聖は誰の手も借りようとせずに自分の力だけで膝を突き、ゆっくりと立ち上がる。ふらつき、よろめき、今にも倒れそうだったが、それでも彼女は気丈に努めていた。
「もう駄目ね。時間を掛け過ぎちゃった。どうかしら、私たちを見逃さない？」
「……そんなの」
「勘違いしないで。見逃すのはあなたたちだけじゃない。こっちだってあなたたちを見逃してやろうって言ってるの」
冷たい瞳に射抜かれてしまい、一は頷くしかなかった。
「結構。灯、引き上げるわよ」
立ち尽くす一を見ようとせずに、聖は彼の脇を通り抜ける。
「……気を付けなさい、復讐は何も生まないわ」
自分自身に言い聞かせるようなその言葉は、一の耳に届いていたかどうか、定かではない。

ここの警備員は職務怠慢らしい。非難すると共に、今だけは感謝の念を覚える。

フリーランス『教会』は一たちの前から去っていき、残されたのは二人。営業の終了したコンビニの扉に背を預けた一と早田は、月を見上げて同じタイミングで息を吐く。
「先輩、疲れたぞ」
「あー、うん。俺も」
何を話せば良いのか分からなくて、一は何度も言葉を飲み込んだ。
「早田、ごめん」
ようやく形になった言葉は陳腐で、でもそれ以上は思い付かない。
「もう良い。済んだ事を掘り返さないのが私のチャームポイントなのだ」
「ありがと。……でも、明日からは俺と距離を取って欲しい」
「何？」
「こっち側に来るなって言ってんだ。お前には学校がある。部活だって、友達だって。俺たちのせいで、もうこれ以上お前の日常を壊したくない。だか、らっ――！？」
言った瞬間、一の頭に衝撃が走った。
「てっめ、何しやがんだ……俺はお前の事を思ってだな」
「先輩は、何も分かっていない」
何が。
早田に見下ろされながら、一は言い返してやろうとして顔を上げる。
「あ……？」
頬を生温い何かが伝った。指で拭ったそれは、紛れもなく、疑う余地もなく涙である。
「分かってない、分かってないんだ……」
早田は涙をぽろぽろと零しながら、声を絞り出していた。何度も何度も声を詰まらせ、その度にしゃくり上げている。
「落ち着けって。あ、違う、その、ごめん。……でもさ、泣くのはやめてくれないかな」
「し、知ってる。先輩が泣く女を嫌っている事は知っているんだっ、

けど、済まない先輩。とまっ、止まらないのだ」
泣く女じゃなくて、女性が泣いている姿を見るのが嫌いなのだ。苦手じゃなくて、嫌悪している。そう訂正しようかとも思ったが、我慢する。今はただ、早田を泣かせておこうと。

――復讐は何も生まないわ。

早田の涙と、聖の言葉が深く胸に突き刺さる。思い出したくない記憶が瞼の底からこじ開けられる。脳の片隅にしまっておいた筈の光景が暴れだす。
やめろ。やめてくれ。
体が無意識の内に震えていた。心の中で幾ら叫んでも、あの日、あの時の場面が流れ出す。止まらない。悪夢は光を思わせる奔流となって、一の網膜を焼き尽くす。
神様なんて、神様なんて、神様なんて。
神様なんて、この世界なんて、こいつらなんて、俺が、俺が――！
「先輩……？」
「……あ、ああ」
とっくに泣き止んでいたのだろう。早田は心配そうに一の顔を覗き込んでいた。
「寒いのか？　何なら私が温めてやろう、人肌で。全裸で」
「いや、大丈夫。もう平気なのか？」
「問題ない。さっきのは失態だった。これで、今までに獲得した先輩ポイントで積み上げてきた先輩タワーが崩れてしまったと思うと、残念で仕方ない」
「そんなポイントやった事ないんだけどな」
一は苦笑して立ち上がる。いつの間にか、体の震えは消えていた。
「話の続きをしても良いだろうか」
遠慮がちに口を開いた早田が珍しくて、一は何も言えずに頷く。
「先輩。先輩は私の日常を壊したくないと言ったな。学校があると。

部活があり、友人もいると。違う。違うのだ、先輩」
「何が違うんだよ。フットサル、つまんないのか？」
「まさか。これと言った取り柄のなかった私にフットサルを紹介してくれたのは先輩だぞ？　それをつまらないと言うのは、先輩をつまらないと言うのと同じ事だ」
「友達はどうなんだよ？」
小さな笑みを漏らすと、早田は首を振った。
「部活の先輩も、同学年の子も私に良くしてくれる。最近では、確かに友人と呼べる者も増えたと思う」
「なら、もう俺たちに付き合うのはやめとけよ」
「何故だ？　何故分かってくれないのだ。私に部活を与えてくれたのが先輩なら、友人を与えてくれたのも先輩だという事に。学校で私の居場所を作ってくれたのは、他でもない。一一さん、あなただろう？」
息が詰まる。そんなつもりはなかった。
フットサルを紹介したのは早田の足が速かったから、当時弱小だった部活を話の流れで、軽い気持ちで勧めたに過ぎない。彼女に友人が出来たのだって、自分は何もしていない。居場所だってなんだって、全て、早田が自分自身の力で得た筈だ。
「……だったら、だったらもう良いじゃねえか。今日だけで死ぬ思いを味わったろ。酷い目にも遭ったろ」
――勤務外の俺と一緒にいるから、こんな事になったんだぞ！
「居場所が出来たんなら、それを大事にしろ。多分、価値があるんだよ。しがみ付いてでも守らなきゃならないんだ、日常（それ）は」
「分かった」
早田は短く言い放つと、一を正面から抱き締めた。
「お前、何してんの？」
「先輩にしがみ付いている」
電光石火の早業である。一は驚愕を通り過ぎて、冷静になってしまった。

「先輩が言ったのだ。大事にしろと、しがみ付いてでも守れと」
「守るのは俺じゃないだろ。俺たちのいない、明日からの、いつも通りの生活を守れって言ったんだ」
「それに何の意味がある？」
「あるんだよ」
「ない。先輩は私の日常を壊したくないと言ったな。気付いてくれ、もう壊れている」
反論を許さないほどの鋭い口調に、一は息を呑む。早田と密着しているから、その音がばれてしまうのではないかと焦った。
「離れろだと？　来るなだと？　ほら、先輩はそう言って私の日常を壊した。見誤らないでくれ。見捨てないでくれ。愛してくれ。私の日常には、先輩が必要なのだ。絶対に欠けてはならない」
「早田……？」
「先輩のいない明日なんていらないんだ。だから、頼むから、私を遠ざけないで。お願いだ。先輩、私を傍に置いてくれ。私の傍にいてくれ。いつも通りと言うのなら、大切な日常だと言うのなら、そこにはあなたが必要なのだ」
どうして、こんなに正直になれるんだろう。
どうして、自分なんかを好きになってくれるんだろう。
大切な後輩だと思っていた。昨日と、何一つ変わらない明日が来ると思っていた。
新しい事を知れば、古い事を忘れてしまう。時間は止まらない。だけど、この関係だけは変わらない、変わって欲しくないと思っていた。
変わるなら、自分だけで良い。
早田には何も知らないままで居て欲しかった。
「早田、俺は」
その手を伸ばせば、もう終わる。
声を発してしまえば、戻れない。
言いたい。言って楽になりたい。

「俺は……」
隠し切れない。嘘を吐き続けないといけない。
巻き込めない。苦しさを分かち合いたい。
せめぎ合う感情が言葉を紡ごうとするのを邪魔していた。
「言ってくれ。受け入れるから」
それがとどめだった。水面に石が投げ入れられるかのように、一陣の風が蝋燭の炎を抜けていくかのように、一の心が揺らめいて、決壊する。
「――俺、勤務外なんだ」
「好きだ、先輩」
早田はそれ以上何も言わず、一を更に強く抱き締めた。

もっと早く止めに入れば良かった。
駒台大学前に停めた車のボンネットに腰を掛けた楯列は深く溜め息を吐く。
コンビニの前。予想通りの場所で抱き合っている一と早田を眺めながら、今からでも遅くはない。ヘッドライトで照らして邪魔をしてやろうか。
そんな事を考えつつ、一切の行動を取ろうとしない自分を微笑ましくも、情けなくも思う。
「あの様子だと、言ってしまったらしいね、一君」
誰に言うでもなく、楯列はぼんやりと呟いた。
一が早田に真実を告げたとするならば、彼女をこれから先のトラブルにも巻き込んでしまう事になるだろう。
それで良かったのかもしれない。少なくとも、一はそうなる事を望み、選んだのだ。彼の選択に一切不満はない。失望もしない。しかし、選ばれた早田に対しては嫉妬を覚える。一度は突き放されたのに、一に再び抱き寄せられたのだ。
「……今日だけは、許そうか」

たまには良い目を見させてやっても罰は当たるまい。特に、今日ぐらいは。

思えば、今日は一をいつもの数十倍も引っ張り回していたような気がしている。

楯列は頭に手を遣って反省するが、それでも一ならば自分に付き合ってくれるという打算があった事を思い出した。

楯列が一を必要としているように、一も楯列を必要としている。早田と一の関係についても、そう言えるだろう。

そして、心のどこかでは楯列も早田の事を必要としていたのだ。表面上では悪く言い合っている間柄ではあるが、彼女がいて、初めて自分たちが日常に埋没出来るのだとも思っている。

一、楯列、早田。

それぞれがそれぞれを必要としていて成り立つ歪な関係。傍から見れば、実に気持ち悪く、得体の知れない関係でもあるだろう。それでも良い。他人に何と思われようと構わない。自分たちは幸せなのだから。

だが。楯列には一つ、分からない事があった。

孤独だった。だから友人が欲しい。愛が欲しい。愛したくて、愛されたくて、愛し合いたい。一を必要としたのは、楯列にはそれらを構成する何かが欠けていたからである。

早田だって自分と似たようなものだと、彼女を一目見た時から楯列は見抜いていた。

「一君、君はどうなんだい……？」

一は、どうなのだろう？　本当に自分たちを必要としてくれているのだろうか？

楯列はぽつりと呟く。自分と出会う前、彼に友人と呼べる気の置けない存在がいない事も知っていた。声を掛けてくれたのは、必要としてくれたのは、一も自分たちと同様に孤独から脱出したかったからだと、そう思っていたのである。

――本当に、そうだろうか？

時折分からなくなる。

早田と出会い、三人で行動するのが当たり前になってきた頃、一はアルバイトを始めた。彼は生活費が底を尽きかけているからだと苦笑いを浮かべていた。その顔を見た時、閃きのように疑問に思ったのを覚えている。

一がアルバイトを始めて、三人でいる時間が減った後も今まで通りの生活が続いた。一の口から、見知らぬ人物の名前を聞かされて、その話をしながら笑う彼を見て嫉ましくも思った。

それでも、この関係は変わらないのだと。

楯列は願っていた。早田だって願っていただろう。

しかし、時が経るにつれて駒台では凶事が増えだしたのだ。

凶事――即ち、ソレの出現である。

例年と比べて比較的、などという穏やかな数ではない。

それこそ今まででは考えられない、それこそ有り得ない数のソレが押し寄せたのだ。毎日のように街では何かが起こる。オンリーワンが情報規制を試みて、実際にある程度は成功を収めていただろうが、人の口にまで戸は立てられない。なまじソレの実態を大多数の一般人が掴めていない事もあって噂が噂を呼び、憶測が憶測を招き、恐怖が恐怖を伝染させていく。

規模の大きな、被害の甚大な事件も発生した。

駒台に住む人々の間では『蜘蛛』だとか『魔女の襲撃』と呼ばれる事件である。実際に蜘蛛や魔女がいて、街で暴れたのかどうかは定かでない。だが、話を裏付けるように街の一画は半壊し、事件の起こった学校は閉鎖寸前にまで追い込まれている。

流言飛語が蔓延する中、一が勤務外だという話を楯列は耳にした。幸運にもその話は、この街に根を伸ばしている『楯列』独自の情報網からだったので、余人の知るところではない。

それでも性質の悪い冗談には違いない。楯列は申し訳ないと、その行為を唾棄すべきものだと恥じながら、自分と、信頼の置ける数人の使用人だけで一の身辺を探った。彼の疑惑を払拭させてやりた

かったのである。
数日間に渡る調査の末、冗談ではないと判明した。その上、『蜘蛛』や『魔女』だけでなく、駒台で起こった殆ど全ての、ソレやフリーランスの出現したとされる騒動に一が勤務外として関わっていた事までも明らかになったのである。のみならず、ソレやフリーランスと友誼を結んでいる彼に、楯列は少なからずショックを受けた。
追い討ちをかけるように、座敷童子に関しての話が楯列の耳に入る。以降、一についての調査はそれどころではなくなり、打ち切った。
それで良いと思っていた。元々気が乗っていなかったし、友人の正体が何であれ、何をやっていたにしろ、友人は友人なのだと。一は、一だ。

そう思っているのは、自分だけではないのか？

一が何を望んで、求めて、欲して自分たちと行動しているのか分からない。
「君は何者なんだろうね」
彼は自分を騙らない。素晴らしい事だと思う。だが、自分の事をも滅多に語らないのだ。こちらがさり気なく話題を振っても語りたがらない。
名前と誕生日、それさえ分かれば充分だろうと一は笑っていた事がある。その笑みは、楯列の目にはやり切れないものに映っていた。
どこから来て、どこへ行くのか。願わくば、ずっと傍にいて欲しい。その一方で、一はいつか、自分の――誰の手にも届かないどこかへ行ってしまうのだと確信していた。
出来るなら、その時が来ないように。もっと、ずっと遠く未来の事であるように。
一と早田を眺めながら、楯列はカミサマに祈った。

1999

Ｍｏｄｏｒｅｎａｉ　Ｌｉｖｅ（戻らない日々－Ｅｖｅｒ　Ｖｅｒｓｉｏｎ－）

セイレーン編に続いて、消化不良の気持ち悪くて中途半端な話が続きました。それが狙いです。

やまたのおろちのお話から、サブタイトルには共通点と言うか、同一の元ネタを使おうと試行錯誤しております。蛇だったり、狼だったりゾンビ映画だったり。今回は座敷童子なので、和風っぽい、独特の世界観を持った方の楽曲からになります（そのゲームはやった事ないですけど）。完全に自●行為ですね。元ネタに気付いた方が少しでも反応してくれれば、作者のモチベーションも上がると言うものですが。

次のお話からは、また掛け合いが前面に押し出された軽ーい感じのものが続きます。多分。　それと、ただ今申し訳ない事に、これともう一つ連載をやっております。更新頻度が微妙にトロく、ああすみません、輪をかけてトロくなっているかと思います。どうか見捨てないで。どうかご容赦を。

2000

貴族主義

終わりとは何だろう。
始まりとは何だろう。
命あるモノならば、死を終わりに、誕生を始まりとして考えても良いのだろうか。
では、終わりとは何だろう。
では、始まりとは何だろう。
何を基準に始まりだと断じ、終わりだと認識するのだろう。誰がスタートを決め、ゴールを決めるのだろう。
そもそも、終わりとは何だろう。
そもそも、始まりとは何だろう。
誰が、何を、どう定めているのだろう。

世界は、どうやったら終わるのだろう。

人間なら、少し力を込められれば終わる。少し力を込めれば終わらせられる。モノならば、作れば始まり壊せば終わる。
――どうしたら、世界は終わってくれる。
目に映る人もモノも何もかも終わらせたい。目に映らない全ても終わらせたい。目を瞑っても音は消えない。耳を塞いでも肌が気配を感じ取る。
死ねば、終わる。人間である以上、そうすれば終われるのだ。
だけど死にたくない。何より見たい。
人が死ぬところを。モノが壊れるところを。世界が、終末を迎える時を。
思っているよりも世界は頑丈で、絶対に近い。待っていても変わる事などありはしない。待っていて変わるものなどないに等しい。
だから、終わらせる。

2001

自分の手で、自分の意思で、自分の力で。
世界の終わりを望む。世界が終わるのを見たい。
こんな世界は消えてなくなった方が良い。

十一月も終わりに差し掛かったある日の午前、五時。
「うげえっ！？」
駒台の街の古いアパート、中内荘２０２号室の住人である一一（にのまえ）は（はじめ）腹部に衝撃を感じて目覚めた。
一は腹を押さえながら布団の上を転がる。ついさっきまで眠っていた頭では状況を把握しきれない。痛い痛いと呻きながら転がるしかなかった。
「……すかー」
隣の布団から安らかな寝息が聞こえる。寝息は一の同居人、糸原（いとはら）四乃（しの）のものだった。
そして、一の腹に衝撃を加えた犯人も彼女であった。
「えげつない寝相しやがって……」
三回に一回はこうして叩き起こされる。いつもの事だと、一は半分諦めていた。それに、丁度良い。今日は早朝からアルバイトなので、このまま起きておこうと決意する。
そうと決めたらお腹が空いた。一は何か食べられるものはないかと冷蔵庫を開ける。が、見事に空っぽだった。
「……うーん」
階下の住人、歌代（うたしろ）チアキの冷蔵庫なら何か入っている筈だが、時間が時間である。押し掛けるにはまだ早い。
一はとりあえずの身仕度を済ませて、アルバイト先のコンビニ――オンリーワン北駒台店――で何か食べようと思い直す。
「……んー、起きたのー？」
「あ、ごめんなさい。起こしちゃいましたか」
「別に良いわよ。けどお腹減った。ステーキ食べたい、ステーキ…

…素敵なステーキ食べたい」
「思い付きで喋らないでくださいよ」
一はコップに麦茶を注いで糸原に手渡した。
「冷蔵庫何もないわよね。チアキんとこから持ってきてよ」
「……まだあいつ寝てますよ。可哀相じゃないですか」
「お腹空かせたお姉ちゃんは可哀相じゃないってのね。あーあー、私って不憫。でも美人ー」
面倒なのを起こしてしまったと、一は頭を抱えたくなる。こうなった糸原は何か口にしない限り、四六時中文句を言わないと気が済まないのであった。
「分かりましたよ。その代わり、糸原さんも歌代に謝ってくださいね」
「わーかってるわよ。任せなさい、謝る事に掛けては私の右に出るものはいないから」
突っ込む気にもなれず、一は部屋を出てアパートの階段を下りていく。歌代の部屋を前にして躊躇したが、意を決してチャイムを押した。
「やっぱ寝てるよな……」
しかし、辛抱強く待ち続けると扉が開く。中から現われたチアキは不機嫌な顔をしていた。
「……なんやねん」
「おはよう。ご飯をください」
申し訳ないとは思いつつ、一は頼み事を口にする。
「朝もはよからホンマ……師匠やなかったらパンパンやで」
「あー、悪い悪い。んじゃとりあえず上がるわ」
「って土足で上がって来んなや！」
「ごめんごめん、アメリカ人になっちゃった。いや、最近良くあるんだよね、こういう事」
「そんなちっちゃい外人なんかおらんわ」
「……あれ？　お前起きてたの？」

点いていたテレビ。濡れている洗面台。温かくないベッド。さっきまで誰かが眠っていた部屋だと一には思えない。
「起きとったけど、ナチュラルにうちのベッドに潜り込まんといて」
一は布団に包まって枕に顔を埋める。
「糸原さんステーキが食べたいってー」
「えー？　肉なんかないでって、ああーっ！　何やっとんねんアホっ、変態！」
「ベッドって良いよなー」
チアキはにんじんを一に向けて喚いていた。
「野菜炒めが食べたいのか？　いや、でも朝から油使うのはやだなあ。パンとかないの？」
へらへら笑いながらベッドを下りる一。
「師匠がうちをなんやと思ってんのか分からんくなるわ」
「弟子だよ、弟子。あ、食パンみっけ。なあ、持ってって良い？」
「もー、すぐ持ってくねんから。ちゃんとお金払ってやー」
「分かってるよ。あ、お前も食うだろ。何が良い？」
「フレンチトーストがええなー」
「あいよ。じゃ、先に準備しとくから。適当に上がってこいな」

「師匠、ゆっくりしとるけど、バイト間に合うん？」
「んー、ぎりぎりかな」
「ぎりぎりなら遅刻しちゃえば良いじゃん」
午前、六時前。
三人で卓を囲みながら、一たちはニュースを流し見ていた。チアキが中内荘に来てから、普通に、日常に溶け込みつつある光景である。
「今日は朝、店長しかいないんですよ。遅刻したら何言われるか分かりません」
「あ、O型一位だ。やふーっ、一、何か買ってー」

「そろそろ行こうかな」
一は糸原を無視して立ち上がった。
「あ、洗い物ならうちがやっとくわ。師匠ははよう行ってき」
「良いのか？　じゃあ、悪いな。任せるよ」
それなら遅刻しないで済みそうだと、一はチアキの好意を素直に受け取る事にする。
「くふふ、弟子ってのは師匠を立てるもんやからな」
「その設定っていつまで続く訳？」
そんなの知るものか。

冬の朝は寒い。
吹く風と停滞する空気を身に受けながら、一は体を縮こまらせて歩く。
「ふあ……」
眠気がそろそろ収まりつつあるのが、せめてもの救いだった。
ぼんやりとしながら歩いていると、北駒台店はもう目の前にある。
外から店内の様子を窺うと、客も店員も一人としていない。
忙しくないのはありがたいが、暇過ぎるのも考え物だった。
「おはようございまーす」
挨拶が返ってこないのは分かっていたが、一は自らを奮い立たせる為に声を出す。客の相手をしないとしても、仕事は探せばある筈だ。

「もう仕事辞めてェ」
バックルームに入った瞬間に一は戦意を削がれた。
パイプ椅子に背を預け、不安定な体勢で文句をだらだらと口にしているのは三森（みつもり）である。彼女は煙草を口に銜えながら、店長に対して愚痴を零し続けていた。

「人が増えたってのに休みなンか滅多にねーしよ。仕事はきついし、こっちは命張ってンのに給料安いし。もう無理。辞める」
「あと十年経ったら辞めても構わんぞ」
店長は三森をまともに相手していないようで、適当な相槌を適当なタイミングで打っている。
「あー、働かずに生きてェなあ。寝てるだけで金が入ってくりゃ良いのによ」
「……朝っぱらから止めてくださいよ、そういうの」
一は肩を落としたままロッカーを開けた。愚痴なんか聞いていたら、制服に着替えるのが億劫になってしまう。
「あ？　辞めて良いのか？」
「そっちのやめるじゃないですよ。三森さんは大事な戦力なんですから、辞められたら困ります」
「へー？　私が抜けたら困ンのか？」
「ワリ食うのは俺たちですからね」
「けっ、可愛くねェの。あーあーあーあー、つまンねーつまンねー！」
駄々をこねるジャージ姿の二十代女性を見て一は戦慄した。
「三森、そんなに言うなら一つだけ方法があるぞ」
ぴたりと、三森の動きが止まる。
「結婚して専業主婦になれば良い」
「はあ！？　なっ、なっ、何言ってンだよ」
「別におかしな事は言ってないだろう。働くのが嫌。寝てるだけで金は亭主が稼いでくる。最高の職業じゃないか」
さも当然だと言わんばかりに店長は口を開いた。
「ああ、良いんじゃないですか。三森さんだってそろそろ将来について考えるべきだと思いますよ。恋人の一人や二人作っといて損はないんじゃないですか？」
「てっ、てめェに言われたかねーンだよ！　だったらてめェにゃ彼女がいんのか！　ああ！？」

「ひいっ、ぼ、暴力反対！」
「ンなもん知るか！」
襟元を掴まれ、一はタップアウトを繰り返す。
「止めろ三森。一が怪我をしたらどうなると思ってるんだ」
「どうなるってンだ！」
「私が店に出ないといけなくなる」
「それは良くねェな」
三森は一から手を離し、煙草に火を点けた。
一は床に這い蹲って咳き込んでいる。
「あー、何か疲れたからもう帰るわ。ンじゃな店長。おい、いつまで寝てんだよ、とっとと仕事しやがれっ」
――こんな世界なくなっちゃえば良いのに。

レジを打ち、商品を並べ、足りないものはバックルームから補充、床の掃除にトイレの掃除、店周辺のゴミ拾い、窓拭き、ゴミ捨てにゴミ袋の交換、おでんと肉まんの補充、ぐちゃぐちゃになった商品棚を陳列し直す。
これらの業務を一が一人で終える頃には、早朝勤務の三時間はあっという間に過ぎていた。
「……遅いなあ」
しかし、次にシフトに入る筈の立花（たちばな）が来ない。この後は立花と店長の二人で午前を回す。途中でジェーンもやってくるのだが、彼女が来るまでに二時間近くもあるのだ。誰かと交代出来なければ、少なくとも二時間、一は帰れないのである。
「どうした、一。上がらないのか？」
様子を見に来たらしく、店長がバックルームから顔を覗かせていた。
「立花さんがまだ来ないんですー」
「……また遅刻か。良い。一、上がれ。残業しても金は出さんから

な」

そうまで言われては残る意味もない。客もいないので、一は制服を脱ぎながらカウンターを出ようとして、

「ごっ、ごごごごめんなさい！　ねっ、寝坊しました！　寝坊しましたボク！」

足を止める。

頭を下げながら店に入ってくる立花を見て、頬が緩んだ。

「あー、別に俺には謝らなくて良いから。謝るなら……そこの……」

そっと顔を上げた立花は、手招きしている店長を見て青褪める。

「て、店長怒って、ないよね？」

「うん、怒ってないよ」

「こっ、こっち向いて言ってよ！　イヤだ、イヤだよっ、絶対怒ってるじゃないかあっ」

「立花ぁっ！」

「ひううっ」

直立不動で気を付けの姿勢。右手と右足、左手と左足を同時に出しながら立花は歩き始めた。

そこでふと、入り口から視線を感じて、一は振り返る。

気配もなく、存在感すら漂わせず、そこには美人がいた。

深い青を湛えたドレスを着こなし、眩いばかりの長いゴールデンブロンドの髪を縦巻きにカールさせている。まるで童話から抜け出してきたプリンセスのような――。

「いらっしゃいませ」

子供じみた考えを振り払い、何事もなかったかの如く振る舞い、一は頭を下げた。

「……道を尋ねたいのですけど」

女性は口調こそ丁寧ではあったが、居丈高な態度が滲み出ている。

彼女の身長は一よりも低いのだが、何故だか彼は見下されているように感じた。

「ええ、分かりました。それで、どちらへ行かれるんですか？」

コンビニの店員なら道を聞かれる事も多々ある。店外の落とし物を尋ねられたり、コピー機の使い方を教えて欲しい、などなど。

一は慣れていたので快く、あるいは軽い気持ちで頷いた。

「ありがとう。実は私(わたくし)、この街を見て回りたかったの」

「……は？」

絶句する。二の矢を継ぐ前に機関銃で撃ち抜かれている、そんな気分に陥った。

「早速行きましょう。エスコート、していただけますの？」

それではもはや道案内と言うより観光ガイドである。もう仕事は終わっているし、そうでなくとも、目に見えて分かりやすい異端と並んで歩きたくはなかった。

「あの、さすがにそこまでは……」

「約束を違えるおつもりですの？」

敵意の籠もった瞳で見据えられ、一はしどろもどろになってしまう。

女性は畳み掛けるように一へ向かって足を踏み出した。

「連れて行ってくださるの？　くださらないの？」

「――やめなよ」

一に近付こうとした女性の鼻先に竹刀袋が突き付けられる。

「あら、可愛らしいナイトですこと」

「あ、ありがとう？　でも、はじめ君に近付かないでよ」

立花は怯えながらも、気丈に女性を睨み付けていた。

「ではあなたが道案内を？」

「ボクもイヤだ。何だか、あなたからはイヤな予感しかしない」

一は少しずつ後退り、事態の行く末を見守るしかなかった。

「出て行ってくれなきゃ、これを抜くしかないよ」

「……元気な方」

女性は口元を薄っすらと歪め、さり気ない挙動で距離を取る。瞬間、立花の持っていた竹刀袋が宙を滑っていた。

「えっ……！？」

その軌道を追い掛けると、袋の行く先には女性の右手がある。彼女は革製の鞭を使い、立花から武器を掠め取ったのだ。

立花は咄嗟に刀を追い掛ける。

「甘いですわね」

女性はスカートを捲り上げたかと思うと、ガーターベルトに装着したホルスターから金属製の棒を引き抜いた。それを振り上げ、立花に突き付ける。

――やばい！

「ストップ！」

「……う」

立花の喉元から一筋の血が流れた。突き付けられているのは棒ではなく、そこから飛び出した針のように鋭い何かである。

「止めましたわよ？」

一の感じた悪寒はこれだった。女性が手にしている棒、だったモノは今やレイピアのような形状をした刃となっている。恐らく、持ち運びの利くように手を加えていたのだ。

もし彼が止めていなければ、そして彼女が聞き入れていなければ、切っ先は立花の柔らかな肉を貫いていたであろう。

「何かおっしゃられましたか？」

異端、異質。間違いない。断れば、確実に立花は殺されてしまう。人を人とも思っていない類の禍々しさではない。人を憎み切った荒々しさでもない。見えていない。女性はそこにいる人、あるいはものをそうだと捉えていないのである。目の前の命を、命だと分かって殺すのではない。今まで感じた事のない次元の恐怖だった。

「案内ならあんたの好きなように、好きなだけ付き合う。だから、それをしまってくれないか？」

「しまうだけでよろしいんですの？」

「――っ！　……その子にも手を上げないでくれ」

切っ先はゆっくりと立花から離れていく。自由になった彼女は傷口を指でなぞり、唇を噛み締めた。

「善は急げと申します。準備はよろしいですわね」
「……立花さん、悪いんだけど制服をロッカーに戻しておいてくれないかな。それと、俺のコートを。ああ、後、店長によろしく伝えておいて」
「で、でも……」
「大丈夫。心配しないで」
一は、未だ彼を一人にする事を躊躇っている立花に制服を握らせ、無理矢理に背中を押す。
「おっとりしていらっしゃる方ですわね」
女性の言葉の端々から皮肉めいたものが感じ取れてしまった。が、一は何も言わない。
「……あんた、フリーランスか？」
「利発でいらっしゃる方ね。読みは当たっていてよ」
一は冷静になろうとして女性を観察してみる。彼女は一の視線に気付き、悠然として笑んだ。髪を梳いているシルクの手袋が妙に眩しい。
ドレス、手袋に髪型、佇まい。
一がお姫様と連想したのも無理からぬ事ではあった。が、先の振る舞いを思い出して『姫』と言うよりはもっと違うものを彼は想像する。
「『貴族主義』」
フリーランスの名前など多くは知らない。知っている名前の中から一番しっくりくるものを挙げたつもりだったのだが、女性は否定も肯定もしない。
「良いけどな、あんたの正体に興味はないんだし」
「さようでございますか」
女性は改造式のレイピアを元の場所に戻す。目の毒になりそうだったので、一は咄嗟に顔を反らした。
「はじめ君、お待たせっ」
「ありがとう」

立花は既に制服に着替えている。一は、駆け足でやってきた彼女からコートを受け取った。
「……店長は何か言ってた？」
「ううん。道案内頑張れって」
一は肩を落とす。つまり、現状ではどうしようもないのだ。ただ黙って、言われるがまま、請われるがまま、流されるままに女性をエスコートしなければならないらしい。
「分かった、ありがとね。んじゃ、くれぐれも皆によろしく」
「あ、あの、はじめ君、本当に大丈夫？」
「取って食われたりはしないよ、多分」
女性と目が合った一は心の中でもう一度同じ言葉を繰り返す。多分、大丈夫だ、と。

一たちが去った後、レジカウンターの前で店長と立花は溜め息を吐いていた。
「はじめ君、あの女の人にいじめられてないかな……」
「あいつは本当に疫病神だな……」
尤も、彼女らの真意は別同士にある。立花は一を心配していて、店長は自分の事を心配していた。
「またフリーランスなんぞに目を付けられやがって。蟻地獄か、あいつは」
「はじめ君には人を惹き付ける才能があるんじゃないかな」
「……一に？　あいつは何も持っていない。そんなものある筈ないだろう」
「だから、じゃないのかな？」
「さっぱり分からないな」
新しい煙草に火を点けると、店長は不味そうに煙を吸い込む。
「それよりもさっきの奴だが、あれは『貴族主義』で間違いなさそうだな」

「綺麗なドレスだったなあ……」
夢を見ているような陶然とした様子で立花は言う。
「髪だってふわふわしてたし、話し方だって何だかお嬢様って感じで」
「時代錯誤も甚だしい格好だ。異端だと、自ら公言している――狂っているよ、あいつらは」
「店長さんはさっきの人の事、何か知ってるの？」
「……ああ、いや、詳しくは知らん。そうだな、情報部に連絡を入れておくか」
店長は立ち上がると、頭に手を遣りながらバックルームに向かった。
「ま、悪くは転がらんだろう」

道案内をするのは構わない。その相手が何をしでかすか、想像の埒外なんて言葉を軽々と越えたフリーランスなのも大して気にしない。
「……あの」
「何かおっしゃいましたか？」
何とかして欲しいのは、女性の服装である。嘘みたいな髪型、整った容姿。彼女は歩いているだけで人目を惹くのだ。そこへ豪奢なパーティーから抜け出したかの如きドレスときている。せめて、格好だけでも地味なものにしてはくれないだろうかと、一は痛切に感じる。
「服、着替えてもらえないかな？」
「お気に召しませんでしたか？」
一は溜め息を吐く。気に入る入らないの問題ではない。
あちこちから聞こえてくる囁き声。そのどれもが一たちを指しているものだった。
あの女性はどこかの国の姫さまだとか、お忍びでやってきた女優

さんだとか、はたまた自身過剰なコスプレイヤーだとか。
当然、一の存在も人の目に触れている。あんな美人の隣にいるとは何者なのだろう、と。
「執事か何かじゃないの？」
概ね似たようなものだ。誰とも知らぬ好奇がそこかしこに散りばめられた声に一は同意する。が、誰も彼の置かれた状況を知らない。誰も同情はしてくれない。
「目立ち過ぎる。街を見て回りたいんだろ？　そのままじゃ動きづらくなるぞ」
女性は怯まなかった。むしろ望むところだと言わんばかりに、周囲に目を向ける。
「貴族たるもの、常に下々の者から見られていなければなりませんわ。上に立つ者の義務とも申し上げておきましょうか」
「……とんだノブレスオブリージュだよ。巻き込まれる身にもなってくれ」
形容しがたい美貌と、溢れんばかりに自らのプライドを振り撒いている女性の隣にいる事で、嫌でも自分は凡人なのだと、劣っている存在なのだと思い知らされてしまう。
と言うより、これでは悪目立ちだ。
「もう良い。とっとと終わらせちゃえば済む話だもんな。それで、具体的にどこへ行きたいんだ？」
駒台には観光施設など皆無と言っても良い。とは言え、一日で街を歩き回るなど不可能に近い。案内させるなら、せめて指針になりそうなものが欲しかった。
「あなたにお任せします」
「……じゃあ、俺んちでだらだら寝転がるツアーに」
女性は無言で鞭を握り締める。
「いや、だってさあ、俺だってあんまりこの辺に詳しくないんだよ」
「……お引っ越しなさって来たんですの？」
「まあね。ん、だから行きたい場所を言ってもらった方が助かる」

「そうおっしゃられても困ってしまいますわ」
だったら観光地でもない街へ来る理由はなんだ。しかし一は疑問を口にする事はせず、黙って考えを巡らせる。
見たところ、女性は手荷物もないようだし、格好からしてまともな人間だとも思えない。第一、フリーランスが目的もなく旅行へ来る筈がないだろう。
と。
そこまでに思考が到達して、一の脳内に閃きが走った。忘れていたのである、目の前の女がフリーランスだという事に。フリーランスが動く理由なら一つしかない。
――ソレだ。
どこからか、誰からか、この街にソレがいるという情報を仕入れて、十中八九狩りに来たのだろう。
ソレが出たなんて話は未だ耳にしていないが、出ないとも限らない。女性がソレと戦い、倒してくれるならば自分は何もせずに済む。危ない目に遭うのは彼女だけで事足りる。
「どこでも良いんだな？」
女性はにこりと微笑んだ。
一は内心でほくそ笑む。ならば、女性をソレのいそうな、出そうな、関わっていそうな場所へ誘導すれば良いのだ。もしくはソレの出現に関する話を掴んでいそうな人物まで連れていけば良い。上手く事を運ばせれば、厄介者を押しつけられる寸法、である。
「分かった。じゃ、しっかり付いてこいよ」
少しの間針のむしろに座るだけで危険を減ぜられるのだ。安いものだと言えばそうなる。
だが、安いものと旨そうな話は同義に近い。そして旨い話には大抵、裏があるものだ。
一にはその時、その事実が頭に全くなかった。

アイネは化け物

わんわんっ、わんわんっ！
犬が鳴いている。
野良犬にとっては餌場でもあるゴミ捨て場にて、犬が鳴いている。
「この国は犬にも自由をおあげになっていらっしゃるのね……あら？」
犬が二匹。餌を奪い合い、醜い争いを繰り広げている。
その光景を見て、一は涙を浮かべていた。あまりにも、情けなくって。
「灰色の方が勝ちますわね」
「……そりゃそうだろ」
正確に言うのなら片方は犬ではない。
「わおおぉーん（どうだ新参、ミーに勝負を挑んだ時点であんたの負けは決まっていたのさ）！」
灰色の毛並みは少し薄汚れていたが、野性に染まった双眸だけは変わっていない。今もぎらぎらとして輝いている。紛れもなく、『彼』は一の知るコヨーテであった。
「わおーん（うひょー、今日は大量じゃないか）！」
アレは一の知るコヨーテではなかった。
一が声を掛けようかどうか思案していると、彼の方からやってくる。尻尾をパタパタと振って、舌を出して嬉しそうに。
「餌をくれ！」
野性の欠片もくそもなかった。
「……第一声がそれか。自分から餌とか言いやがって。プライドはどこに置いてきたんだよ」
「プライドで飯が食えるなら、ミーは今頃丸々と太っていただろうよ」
誇らしげに鼻を鳴らすコヨーテが、妙に一の勘に障る。

2016

「それより久しぶりじゃないかリトルボーイ。元気だったかい？」
「まあね。兄妹揃って元気だよ」
「そりゃ良かった。嬢ちゃんが元気なら、ミーがこの街に残った意味もあるってもんさ」
「だったら早く謝りに来いよ」
元々はそういう話だった筈である。
「ハードな物言いじゃないか。嬢ちゃんに謝る時機を一度逃しちまったからな、まだ先の話になるだろうよ」
「先っていつだよ？」
「勿論クライマックスに決まってるさ。敵に囲まれてこれまでになくピンチな嬢ちゃんのところへミーが登場、そして言うのさ――アイルビーバックってな」
「謝ってねえじゃん！」
「ディレクター、テーマソングもよろしく頼むぜ」
「犬のおまわりさん流してやるよ」
コヨーテは鳥の羽根らしきものを口から吐き出す。
「それよりリトルボーイ、今はまだ日も昇り切っていない時間だぜ。こんなところまで来て、目的もなくぶらついても良いのかい？」
「……いや、お前、何食ってんの？」
ちらりと、コヨーテは吐き出した羽根に目を遣った。
「ああ、こりゃ鳩だよ。だが、ここの鳩はまずいな」
「平和のシンボルをこんなにしちゃって、罰が当たるぞ」
「はっ、笑わせるなよリトルボーイ。鳩を食うなんてノーマル過ぎてつまらないくらいなんだぜ。第一、ジャパニーズだって鳩を食ってるじゃないか」
「そうなのか？」
一は女性に意見を仰いでみる。
「まことにおっしゃるとおりですわ。フランスでは一般的な食材とされているとうかがっておりますし」
初耳だった。と言うより、女性がこんなくだらない質問に答えて

くれたのが意外に思える。
「そう、だったのか。いや、だけど、なあ。やっぱり鳩を食うってのは」
「鳩が平和の象徴だって？　リトルボーイ、マーズアタックを見てみるんだな」
「ありゃB級映画じゃねえかよ。俗っぽい犬だな」
「ミーは犬じゃない！　誇り高いコヨーテ様だ。大体だな、俗っぽいとは酷い言い草じゃないか。ミーは文化的英雄なんだぜ。映画だって立派な文化さ、それを押さえておくのは当然だろ」
「その割には嗜好が偏っているような……」
文化的文化的とコヨーテは言うが、一にはどうにも信じられない。
「ん、いや、だがボーイの言っている事も確かかもしれないな。最近見た映画じゃ、暴力シーンの前にやたら白い鳩が飛ぶものがあった。アレは平和のシンボルを意味していたのか。今から鳩を飛ばすけど、平和とか関係なく暴力で訴えます、と」
「違うわ！　ありゃ今から暴力シーンにいくけど、平和のシンボルを見て少しは癒されてねって事なんだよ」
「それより二丁拳銃とスローモーションはもう飽きちまったな」
「アレがなかったらもう誰の映画か分かんねえよ」
とんとん。
肩を突かれる感触に振り返れば、不機嫌な顔をした女性が一の目を、まっすぐに見据えていた。
「……あ、ごめん。退屈だった？」
「ええ……そうでございますねえ」
否定とも肯定とも取れる言い回しに、一は不安になる。
「私、犬がお話になるとは存じ上げませんでしたわ」
「今更！？」
そこで、初めてコヨーテの目に女性が映った。
「リトルボーイ、そこのレディは？　もしかして、ユーの良い人かい？」

「あー、違う。この人はその、何と言うか……」
よくよく考えれば、一は女性の名前も知らない。フリーランスだという事だけ分かっているのであった。
女性はと言うと、柔らかな微笑を浮かべているだけで、自己紹介をしようとは思っていないらしい。
「お貴族様、だよ」

結局、コヨーテはソレの話など知らなかった。一が得た新たな知識は、豊富な餌場と、この近辺ではコヨーテの名前を聞くだけで野良犬が道を開けるという、無駄なものである。
女性を押し付ける事にも失敗して、一は彼女を連れ、とぼとぼと歩いていた。なるべく人の少ない方へ進んでいると、
「はじめちゃーん！」
呼び掛けられる。
が、無視した。
「はじめちゃん？　はじめちゃんってばー！」
「おい、こっちの道を行こう」
「あの方、あなたをお呼びになっているように存じますが……」
一は尚も背後からの声に見向きもしないで、聞きもしないですたすたと歩いていく。
「はーじーめーちゃーん！」
「……はあ」
諦めて、足を止めた。このままでは自分の名前を連呼されながら街を練り歩く破目になってしまう。
「はじめちゃんはじめちゃんはじめちゃんってばー！」
「だああっ、止まりましたから！　止まったから叫ぶのはやめてくださいっ！」
振り返ってみると、一の予想通り、オンリーワン近畿支部医療部の部長こと、炉辺乙女（ろばたおとめ）がそこにいた。

が、彼女は一の予想に反して看護服を着てはいない。白を基調にした大人しめの服装に、薄い桃色のマフラーと手袋が暖かく見えた。新鮮、だった。

「何か、可愛い感じになってますね」

「そう？　えへへー、ありがと」

「今日はお休みなんですか？」

「うん、でも午前中だけなんだよ。だから、今はお買い物してるの」

炉辺は手に持った紙袋を掲げてみせる。裏表のない笑顔を久しぶりに見れた気がして、一の気持ちは穏やかになった。

「可愛い服があったから買っちゃったー。……着る機会は滅多にないんだけどね」

「い、意外と落差ありますね」

「ところではじめちゃん、体の調子はどう？」

「お陰さまで。と、言いますか、あの病院で一晩寝たら傷とか塞がってるんですよ。どういう薬使ってるんですか？」

「秘密、かな？　それを知りたければ、医療部で働いてみたら良いと思うよー」

まさか人に言えない何かを使っているのではなかろうか。

一はそう勘繰るのだが、炉辺の笑顔の前では邪推にしか成り得ない。

「山田さんたちは元気にしてますか？」

「うん、元気元気。しおりちゃんは退院が延びちゃったけど、ヒルデちゃんならもう退院しちゃったよ」

「ああ、そうだったんですか」

「はじめちゃんもお買い物？」

「あー、いや、俺は……」

先ほどから、炉辺がちらちらと女性に視線を向けていた事に一は気付いていた。隠す気はなかったのだが、出来れば何も言いたくなかった。しかし、だんまりで通す訳にもいかないだろうと、半ば諦める。

「道案内、みたいなものです」
「ふーん？　はじめましてっ、私は炉辺って言うの。あなたは？」
炉辺はにっこりと微笑む。女性も彼女に微笑み返すのだが、口を開く事はなかった。
「ありゃ？　もしかして私、嫌われちゃったのかな？」
「……その、口下手っつーか、照れ屋っつーか。誰に対しても割かしこんな感じなんで、気にしないでください」
「そうなんだ、ふーん。ふーん、はじめちゃんって、いつも女の子と一緒にいるよね」
「へっ！？」
「しおりちゃんとか、さきちゃんとか。ダメだよ、ちゃんと他の子とも平等に接してあげなきゃ、めっ、だからね」
改めて言われると、そうかもしれない。炉辺には自分が好色で軽薄な人間だと思われていたのかと、一から血の気が引いていく。
「あ、はは。俺にそんな甲斐性はないですし、何よりたまたまですよ。たまたま」
「そうなの？　あ、でも、そう言われればそうだよね。だってはじめちゃんは――あ。ううん、ごめん、何でもないの」
「な、何を言おうとしていたんですか？」
「何でもないってば、あはは」
「どうして笑ってるんですか！？」
この笑顔の裏が怖い。見たいけど、見たらどうにかなりそうでもっと怖い。
「それより私行かなくちゃ、夕食のお買い物がまだ済んでないんだった」
「あ、料理出来るんですね」
「ふふふ、これでも自信があるんだよ？　私のイェミスタは絶品なんだから、多分」
聞き慣れない単語を耳にして、一は首を傾げた。
「イェミスタ――ギリシャのお料理の事ですのよ。お肉やお野菜を

くり抜いたパプリカやズッキーニに詰めていただく……と、うかがいましたわ」
「うん、そうそうっ！」
「へえ、凝った料理なんですね。良いなあ、家事が出来る人って。炉辺さん、結婚してくださいね」
「あはは、ごめんね」
即答である。
「じょ、冗談のつもりだったんですけど、いや、結構へこみますね」
「うーん、はじめちゃんがダメなんじゃなくって、私はね、誰とも結婚しないから。うん、結婚、出来ないんだよ」
「そう、なんですか」
勿体ない。しかし、一は炉辺にはその思いを伝えられなかった。自らに言い聞かせるような彼女の口ぶりが、どこか遠いものに感じられて、立ち入ってはいけないと、そう、理解出来た。
「……君と、同じだよ」
「え？」
「あ、もう本当に行かなきゃ、それじゃあね、はじめちゃん。元気でいるんだよー、お腹出して寝ちゃダメだよー」
「寝ませんよ……」

「気立てが良いお方でしたわね」
炉辺が去った後、女性は物憂げに呟いた。
「あのさ、自己紹介ぐらいしとかないか？」
「構わないのではなくって？」
「いや、だって名前ぐらい知っとかなきゃやり辛くないか？」
「……そういうお考えもありますのねえ」
どうにも、やり辛い。
女性は会話の合間合間に独特の間、のようなものを置くので、一は彼女とのコミュニケーションにおいて、どうしてもテンポを崩さ

れてしまう。
「一一、俺の名前だ。あんたも名乗れよ。それとも、『貴族』ってのはコンビニの店員に名乗られても返さないのか？　だとしたら、とんだ紛い物だぜ」
「……っ」
女性は眉を少しだけ吊り上げる。握っている鞭が、いやが上でも一を萎縮させていた。
「アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク、ですわ。一度しか申し上げませんわよ。よろしくって？」
アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。
「おお、本当にそれっぽいな。良い名前じゃんか、オッケーよろしくな、アイスクライマー」
「……あなた、喧嘩をお売りになる才能をお持ちでいらっしゃるのね」
「だって長いんだもん。じゃあ、アイネって呼んで良いのかな」
アイネは一を横目で見た後、「好きになさって」と、突き放すような口調で言う。
「不満か？　じゃあ、ジークナハトム」
「逆ですわ。アイネでよろしくってよ」
「ん、ならそう呼ぶわ」
少しアイネの扱い方、あしらい方を覚えて、一は彼女に対して親近感をも覚えた。
「アイネ、次はどうするんだ。このまま適当に街を歩き回って良いのか？」
「お任せしますわ」
「……マジに、何しに来たんだかな」
「何かおっしゃいましたか？」
「いいえ。それでは、次に参りましょうか、お姫さま」

時刻は正午に差し掛かっていた。
空腹を覚えた一は、恥と人目を忍んで人通りの多い方へと歩きだす。適当なところで昼食にしたかったのだ。
しかし、隣を歩く女性、アイネが気掛かりである。彼女は自分が入れるような店に文句を言わないだろうか、と。
「……なあ、お腹空いてないか？」
一の後ろを歩くアイネは不機嫌そうに眉根を寄せ、取り繕うように笑みを浮かべる。
「ごめん、デリカシーに欠けてたな」
しかし、強くは否定されていない。ここまで歩き詰めである事も考えると、一度休憩を取るのが得策だろう。そう思った一はどう切り出したものか考える。
「んー、なあ、どっか店に入って良い？」
「構いませんわよ」
「ん。ああ、だけど、なあ……」
中心部まで来たので、ちらほらと飲食店は目につくのだが、これだというものは見当たらない。
「む、一（はじめ）ではないか」
迷っていると、正面から歩いてきた、小さな女の子に声を掛けられた。
十にも満たない年頃の女の子は、やたらにフリルの付いた黒い着物に身を包んでいる。おかっぱ頭に挿したかんざしがとても可愛らしく一には見えた。
「あれ、槐（えんじゅ）？　どうしたんだよ、迷子か？」
「誰が迷子じゃ。そっちこそ、童のようにきょろきょろしおって」
槐。彼女は先日から駒台に居つき始めた座敷童子である。当面の脅威であったフリーランス『教会』を退けてからは楯列の家で世話になっていると、一はそう聞いていた。
「息災でおったか、一？」
「ああ、まあね。健康そのものだよ。しかも最近、落ちてる小銭を

やたらめったら見掛けるようになった」
　ふふん、と。槐は勝ち誇るように笑った。
「それはわしのお陰じゃな。感謝するが良いぞ」
「小さいなあ」
　器や体が。
「仕方あるまい。大半の幸福は衛に分け与えているからのう。座敷童子の力は基本的に、住まわせてもらっておる家の者にしか効力を発揮出来ぬのじゃ」
「へえ、そうだったのか」
「それでもわしの力は同族の中でもとっぷくらすじゃからな、一にもある程度の幸福が舞い込んでいるのじゃろう。ほれ、あの時頭を撫でてやったじゃろ？　ん、どうした、はよう感謝せんか」
「えーと、ありがとう？」
「良い良い、わしは今まっくすで気分が良いからのう」
　ほくほく顔で一の頭を撫でようとする槐だが、完全に手が届いていない。
「何かあったのか？」
「うむ。読みたかった漫画が発売日前に買えたのじゃ」
「ちっせー！」
「小さいとは何じゃ！」
「何が漫画だよ。お前といい、コヨーテといい、すっかり楽しんでんじゃねえよ。この街はどうかなってるんじゃないか」
　どうして誰もソレが闊歩している事に気付かないのだろう。
「ふん、ぬしにはこの漫画の面白さが分かるまいて。分かってたまるものか。で、何をしに来たのじゃ？　ここはぬしのような枯れた者が来るところではないぞ」
「良く言うぜ、お前の方が年食ってるくせに。アレだ、腹が減ったから、何か店を探しに来たんだよ」
「そうじゃったか。ふむ、ではこの先を右に曲がってまっすぐ進むと良い、美登里屋という和菓子屋がある」

「ああ、知ってるのか。あそこは美味いよな、特にきんつばがたまらない」
「その隣のクレープ屋がおすすめじゃ」
「クレープ食うんだ、座敷童子」
この数日で槐はすっかり街に慣れているようだった。
「む、すまん。メールじゃ」
槐は袖からデコレーションされた携帯電話を取り出す。ストラップががちゃがちゃしていて、操作し辛そうだった。
「おお、駅前のケーキ屋がセール中じゃと？　流石、ＪＫの情報収集能力は馬鹿に出来ぬのう。うむ、帰りに寄っていくとしよう」
「ＪＫってお前、誰とメールしてんだ……？」
「そんな事も知らんのか？　女子高生の事に決まっているじゃろう。ふふん、羨ましいか？　駄目じゃ、駄目じゃ、ぬしのようなＫＹには紹介出来んな」
「俺は空気が読めないってか？」
「カカクヤスクで行こう、じゃ」
「そんなキャッチコピー打ち出してねえよ。しかも安くねえぞ」
「気安いぞ、一」
「無理矢理だなあ、もう！」
無理矢理でもあり、安易でもある。
「携帯電話なんて持ちやがってよ、俺だってまだ持ってないってのに」
「む、そうじゃったのか。ではわしの紹介で買うと良い。友達割引が利くらしいぞ」
「毒されてるなあ」
と言うよりかは、槐は背伸びをしているようにも見えた。長い間、一つどころに留まっていたからだろうか、知識を貪欲に吸収している。偏った、知識ではあるのだが。
「衛の家は退屈じゃからな、暇潰しにこの辺をぶらついていると若い娘に声を掛けられるのじゃ。可愛い可愛いと持て囃されて、色々

と連れて行ってもらえて、少し気分が良い」
「座敷童子だってばらしてないだろうな？」
「案ずるな、そう言っても信じてもらえぬわ。ふっ、黙っていればわしも美少女で通るのじゃ」
「少女っつーか、幼女って感じだけどな」
「誰が幼女か！　ぬしのような若造があまり生意気を言うものでない。わしを怒らせれば、駒台中の女子高生がぬしの家に押し寄せる事になるじゃろうな、かっかっか」
「なっ、なんて卑劣な……！」
想像してみた。
「結構良いじゃないか！　むしろ望むところだと言っておこう！」
「しかも全員彼氏連れじゃ」
「嬉しくねえよ！」
「ときに一よ、散歩の途中で得体の知れないものを見掛けたんじゃが」
「なんだって？」
一は身構える。得体の知れないもの――遂にソレについての情報に巡り合えたらしい。
「うむ、昨日河原を歩いていた時の事なんじゃが、犬を連れた女がいての」
「……は、なんだよ。ただの犬の散歩じゃないか。そんなの得体が知れてるし、高が知れた話だな」
「いや、その女は犬を抱いて歩いておったんじゃ。何故じゃ？　犬を散歩させるのは、犬に運動をさせる為ではないのか？　わしには理解出来んかった」
「あー、なんつーの？　そりゃ飼い犬が可愛くて可愛くて仕方なかったんだろ。歩かせるのは可哀相だから、でも外には連れていきたい、とか、そんな理由じゃないか？」
「わざわざ犬を抱いて外出するのか？　ふむ、人間とは良く分からん生き物じゃな」

「もしくは見せびらかしたかったとか」
槐は小首を傾げた。その所作は三百年の長い月日を生きた座敷童子のものではなく、外見相応の女の子のようで、一は少しだけ焦ってしまう。
「……かわいい」
「犬が、か？　なるほど、しかし辻褄は合う気がしてきたのう。あれが一種の愛情表現だとは。いやいや、面白いものじゃ」
「多分、小さい犬種だったんだろ。セントバーナードみたいな犬より、チワワみたいにちっこい方が可愛いって感じる奴が多いだろうし」
「つまり、小さいものは可愛いという事か」
「そうとは限らないけど、間違いじゃないだろうな」
「では一よ、わしを抱き上げてみよ」
「はあ？　藪から棒に何言ってんだお前？」
気でも違ったのかと、一は訝しげに問い掛ける。
「小さいものは可愛い。可愛いものは抱っこして見せびらかしたい。そうではないのか？」
「そりゃ犬の話だろ、だいたい、俺はお前を可愛いとは……」
思っていた。しかもしっかりと口に出していた。
「……いや、可愛くないとは言ってないけど、また別の話だろ」
「良いから抱き上げてみろと言っておる」
「無理だって！　色々と問題があるから！」
「むうう、ならばわしが犬になれば済むんじゃな！」
「済まねえよ！　むしろ悪化するわ！」
「わんわん！」
「やめろっ、皆こっち見てるから……」
このままではまた警察に連れていかれてしまう。日夜ソレとの殺し合いに心身をすり減らしている勤務外といえども、国家権力には逆らえない。逆らいたくない。
「わんっ、わんっ」

「幾ら鳴いても無駄だぞ。泣きたいのはこっちの方なんだからな」
「わんっ、ご主人さま、どうか哀れな雌犬にお慈悲をっ、ああ、体が疼くんですぅ」
「てめえ分かってやってんだろ！」
「わんっ――かかか、中身はどうであれ、今のわしはどこからどう見てもただの娘よ。ぬしがどう取り繕おうが、男が幼女をいかがわしい行為に耽らせているようにしか見えまい――くぅーん」
「おい馬鹿やめろ、ただでさえ最近は厳しいんだからな！」
規制、とか。
「止めて欲しければ素直に従えば良いのじゃ。意地を張っていてはつまらんぞ、ん？」
「意地張らなかったらとんでもないレッテルが貼られるんだよ！」
「そういえば、ＪＫたちが最近面白い噂を話していたのう。何でも、つうてえる、などという髪型をしている異国の娘を誘拐し、あまつさえ市中を連れ回して、尚且つ自分の身体に強引に、無理矢理に接触させる悪逆非道な男がいるのだと」
身に覚えがあり過ぎた。
「……話が飛躍している……」
「ぬしが件の品性下劣なモノと疑われぬよう警戒するのは分かるが、なあに、心配はいらぬぞ。わしはそこらの娘とは違うからのう。存分に抱き上げ、わしの可愛さを周囲に見せびらかすが良いぞ」
「警察はお前が思っているよりも優秀で仕事熱心なんだぞ。頭も固いし、一時間は弁解しないと解放してもらえない」
「妙に説得力があるのう……」
「と、友達の話なんだけどな」
「ぬし、友人がおったのか？」
一は明後日の方角を向いた後、
「いるさ」
爽やかな笑顔で言い切った。
「ではその友人に伝えておいてもらおうかの、ゲス野郎、と」

「誰がゲスだっ、このチビ助！」
「やはりぬしではないか！」
「うるせえよロリババア！」
「ぬわーっ！」
槐は世にも奇妙な叫び声を上げて一に飛び掛かる。彼女の袖から携帯電話が飛び出し、ストラップが、がちゃがちゃと耳障りな音を立てた。地面に転がった電話が、メールを受信して震えている。
「誰がロリババアじゃこの犯罪者がっ」
「歳の割に精神年齢と背が低いだろうがっ」
一は飛び掛かってきた槐を胸の前で捕獲する。
「離さぬか、前科が移る！」
「移らないし前科なんて持っちゃいねえよ！」
槐はしっかりとロックされた状態から一の胸に頭突きを繰り返し、彼は攻撃を防ぐ為に力を込めて槐を両腕で挟み込んでいた。
その光景は、奇しくも槐が望んでいたものに見えなくもない。
「ぐああ、はっ、肺が、肺が……」
「くらええっ、ジーグブリーーーー」
「お元気そうなのは結構ですけれど、あちらからパトカーがお見えになりましたわよ」
アイネの言葉を聞いた一は素早い動きで槐を放り投げる。
「やばい、ずらかるぞ」
走れば目立つ。一は早足でその場を後にした。その姿、動作は熟練された『本物』の何かを窺わせている。
「あなたも、あの方のご友人ですの？」
槐は咳き込みながら「ついさっきまでの話じゃがな」と毒づいた。

コマダイ買い出しはしない紀行

一たちは槻と出会った場所からは離れた喫茶店の、窓からは遠い席で寛いでいた。

「……よろしくありませんわね」

いや、寛いでいたと呼べるのはアイネだけである。彼女はカップを置くと、トイレから戻ってきた一に冷たい視線を向けた。

「もう三度目ですわよ？」

一は姿勢を低くしたまま窓の外を注意深く観察すると、ようやく席に着く。

「どうやら、撒いたらしいな。ふう、あいつらしつこいんだよなあ、まったく」

すっかり冷めてしまったコーヒーに口を付けると、一はしかめっ面を作った。

「今日は散々だよ。警察には追い掛けられるし、ソレの情報は掴めないし」

「自業自得ではありませんこと？」

「なんだよ、ソレの居場所が掴めないってんならお前だって困るだろ」

アイネはその言葉に眉根を寄せる。

「私が？」

「ソレを探しに来たんだろ？」

「そのような事、申し上げた覚えはないと存じますが……」

「へ？　なら、どうしてこんなところに来たんだよ？　言っちゃなんだけど、駒台には何もないぜ。アイネだって見ただろ、ここには面白いものなんか一つとしてなかったじゃないか」

面白いと言えば精々、滞在しているフリーランスと勤務外、ソレの数が他の街よりも多いぐらいだろう。

「私の目的をお聞きになられたいのですか？」

「……目的？」
フリーランスの目的がソレでないなら、何だと言うのだろう。
一には見当も付かない。厄介事に巻き込まれたくない気持ちはあったが、興味も沸いた。
「出来るなら、聞かせて欲しいな」
「さようでございますか」
アイネは探るような目付きになったが、それも一瞬の事。一は彼女の視線には気付かずにカップの中身を飲み干していた。
「熱的死」
「はあ？」
「黙示録。ハルマゲドン。ラグナロク。ご存知ではなくて？」
「聞いた事はあるけど、なんつーか、物騒なものを並べてるな」
くすりと笑うと、アイネは髪の毛をかき上げる。
「で、それがなんだって言うんだよ。お前の目的と関係があるってのか？」
「おっしゃる通りですわ」
「……え？」
一は空になったカップを置く。その時の音が、やけにうるさく聞こえた。
「私は終末を望んでいますの」
そう言うと、アイネは静かに微笑む。完成された笑顔が、一の目には恐ろしいものに映った。
「終末論をご存知でいらっしゃいますか？」
「いや、知らない。何となく、意味は分かるけど」
一は気圧されてしまっている。本当は、もっと聞きたい事があった。聞かなければならない事があった。
「そうですの。では、問題ありませんわね」
アイネはカップに口を付けると、窓の外を見遣る。
――終末論。
どこかで、誰かが言っていた。誰もが口を揃えていた。

歴史、物事には終わりがあり、それが歴史の目的であるといった考え方の事である、と。

世界の終わりで、神が現れ、罪は暴かれ、裁かれる。世界は生まれ変わり、信じるものは救われる。

誰しもがそう思う。誰もが願うのだろう。

苦しい時には、誰だって神に頼る。

差異はあれ、どこの文化でも、宗教でも変わらない。

苦しい目に遭っても、いつかは必ず救われたい。

だが、違う。

一はアイネの瞳から何かを感じ取った。――否、正確に記すならば、何も感じ取れなかった。何もない。だからこそ、何かあると踏んだのである。

「私、高尚なものを求めたいと思っておりませんの」

「つまり……？」

「終末は、終末ですわ。そこに救いは必要ないと、そうは、お思いにならないかしら？」

がらんどうな瞳が一を捉えていた。

「ただ、壊れてしまえば。止まってしまえば。死んでしまえば。メギドの丘も、ヴィーグリーズの野も。ミレニアムキングダムも、イザヴェルも。全て等しく、終わってしまえばよろしいのに。ねえ、そうは思わなくって？」

この目をどこかで見た事がある。一の全身を怖気が走り、肌が粟立った。

「随分とまあ、ご大層な話だけどさ」

口はからからに渇いている。黙っているのが嫌になって、一は引っ付いていた上唇と下唇を無理矢理引っぺがした。

「アイネ、まさか、世界を滅ぼしたいなんて言ってるのか？」

「さようで、ございますの」

「お前一人で、か？」

フリーランスと言えど、人を外れているとは言えど、所詮、器は

人間なのだ。たった一人で世界に挑める訳がない。
「私だけでは、確かに難しいわ。でも……」
アイネはスカートに腕を突っ込む。いきなりだったので、一は勿論、話の内容こそ聞こえてはいなかったろうが、彼女の行動に他の客も驚いていた。
「これがあれば、不可能ではなくなりますわ」
「これ、は？」
テーブルの上に置かれたのは、小さな布の袋である。口を紐で縛られていて、袋の中身は見えなかった。
「あるお方から頂戴した種でございますの」
「種？　種って何の？」
一は袋に手を伸ばしたが、その手はアイネによってやんわりと押し止められる。
「世界を終わらせる種ですわ」
そう言って笑うアイネの微笑みは、やはり、完璧なものであった。

喫茶店のドアが開いたと同時、一陣の風が店内を吹き抜けた。
「ん……？」
一はただならぬ気配を感じて振り向いた。
「お、お、お……」
「ジェーン。何、なんだよ、何しに来たんだ？」
肩で息をしているジェーンは、オンリーワンの制服を着ている。着替えもしないで店からやってきたのだろう。
「この時間シフトだろ。サボってんじゃねえよ」
「……お兄ちゃん、そいつ、誰なノ？」
「あー」
アイネは敵意を振り撒く乱入者に怯む事無く、静かに微笑んでいた。やはり自己紹介などする気はないらしい。
「話せば長くなるっつーか、話す事なんかないっつーか」

「そっ、そんなどこの馬のボーンとも分かんない女なんかと……！」
「店はどうしたんだよ、店は。立花さんが可哀想だろ」
仕事を押し付けられて泣いている立花が容易に想像出来る。
「フフン、お兄ちゃんより優先するものなんか、このワールドにはないワ」
「あるだろ。ほら、そろそろ業者来るんだから、納品手伝ってあげなさい」
「イヤー、あ、メロンソーダプリーズ」
通り掛かったウェイトレスに注文を頼むと、ジェーンは一の隣の席に座った。
「つめたーい時に飲むつめたーいものはサイッコーにクールよネ。お兄ちゃんもそう思うでしょ？」
「俺はホットなコーヒーが良い」
「えー？　だってお兄ちゃん、コタツでアイスクリーム食べるじゃナイ」
「そりゃまた別だろ。ありゃこたつだから良いんだよ。分かってねえなあ、日本のわびさびってのが」
「ワサビって、あの辛いの？」
「わさびじゃなくてわびさびな。まあ、わさびもわびさびっちゃあ、わびさびか」
ジェーンはあからさまに顔をしかめる。
「あんなの食べるなんて信じらんない。スシなんてフィッシュをライスに乗せただけじゃナイ」
「向こうじゃスシスキヤキバンザイって言ってたじゃん。食いたかったんじゃないのか？」
「ンー、見たかったって感じカナ。お兄ちゃんが食べたいって言うから、気になってたんだもん。バット、オクトパスを食べるなんてやっぱりムリ。アレはフードじゃなくてモンスターヨ。ザ・グリードみたいな」
「あー、外人ってものを生で食うのが駄目なのかな。なら、魚の塩

焼きとか」
「あんなのフィッシュの焼死体じゃナイ」
それを言うなら牛の焼死体が好きな君たちは何者なのだ。
一は頭を掻き、反論を試みる。是が非でも、ジェーンに和食を食べさせてみたい。
「丼物は？」
「アレってB級グルメでしょ。アタシ、B級って嫌いなノ」
「さっきはザ・グリードがどうとか言ってた気がするけどな。じゃあ、漬物は？」
「あのスメルがドントライク！」
「天ぷらは？」
「……テンプラはサクサクしててノーセンキュー」
「それが美味いんだよ！」
「スキヤキ！」
「肉は高いから駄目」
一が考え込んでいると、ジェーンが思い付いたように笑う。
「お兄ちゃんお兄ちゃん」
「ん？」
「――お次はなんだ？」
「やっぱB級好きじゃねえかお前！」
コヨーテと趣味が一致している『妹』に一は目眩を覚えた。
「Ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　ｗｈａｔ？　お兄ちゃん、そいつ、フリーランスなんでショ」
ジェーンは侮蔑、敵意、悪意、それらをない交ぜにした視線でアイネを射抜いている。
「らしいけど。でも、何をしに来たって訳でもないし、俺をどうにかするつもりもないんだし。こう言っちゃなんだけど、害はないぜ」
「信用、出来ないワ」
何を思ったか、ジェーンは吊り下げていたであろうホルスターからリボルバーを抜き出した。凶暴に輝くメタリックのシルバーが一

の目を引き付ける。
「……おい、んな物騒なもん出すんじゃねえよ」
「ブシｓｗｏｒｄ？　ノー、お兄ちゃん。これはガンマンの証なんだカラ」
銃口が、アイネに向けられた。
「センテヒッショー、ここで叩いておけば、コーコのウレイは消えるんだもん」
「その必要はありませんわ」
向けられる敵意を気にする素振りさえ見せず、アイネは柔らかに微笑む。彼女は椅子から立ち上がると、ジェーンに背を向けて出口へと歩き出した。
「Ｈｅｙ、ｓｔｏｐ　ｉｔ！　まだ話は終わってないんだから！」
「――終わりますわ」
「おい、アイネ……？」
それ以上は言葉もなく。アイネはドアを潜り抜けて喫茶店を出て行く。気勢を殺がれたジェーンは銃を下ろし、行き場をなくした敵意はそのまま一に向けられた。
「お兄ちゃん、事情を説明してもらいましょうか？」
「いや、俺にも何が何だかさっぱり……」
「お兄ちゃん、ｅｘｃｕｓｅはｃｒｉｍｅと知りたまえ、ヨ」
騒動が収まった隙を窺っていたのか、ウェイトレスがメロンソーダをテーブルの上に置き、そそくさと立ち去っていく。一は溜め息を吐いた。痛めるのは心ばかりではない。支払いはどうせ自分、なのだろうと。

メロンソーダに目を輝かせるジェーンを置いて、一は一人で喫茶店を後にした。
自由、である。
アイネがいない。もう道案内をせずとも済むし、このままっす

ぐ家に帰れば、騒動に巻き込まれる事もない。平々凡々、日々安穏、いつも通りの、昨日と同じの生活に戻れるのだ。

足取りは軽やかに。意気は揚々と。家に帰って、布団に包まって目を瞑ってしまおう。

だが、視線はさ迷っている。誰かを探している。雑踏に紛れてしまっているであろう彼女を見つけようと、必死に動き続けている。

どうしてなのか、分からなかった。

――終わってしまえば。

終末を望んでいると、アイネは言っていた。

全てが終わってしまえば良いと笑っていた。

詰めが甘い。そう思って、一は内心で苦笑する。アレは、自分なのだと。今になってようやく分かった。どうして、彼女が自分に声を掛けてきたのかを。自惚れではない。どうして自分と出会ったのかを。どうして、彼女が気になったのかを。

続きが見たいのだ。

一度は求め、一度は諦め、また、手を伸ばしている。いつか見たいと思った景色を、彼女も見たいと願っている。いつかやろうと思った事を、彼女は今やろうとしている。

足を踏み出す。

次は、自分の意思で。はっきりとした、確固たる信念でもって。

アパートとは反対の方角へ。彼女は有象無象に埋もれるような存在じゃない。どこに隠れていようが、一には見つけられる自信があった。

「……っと」

信号が変わる。交差点にいた人が入れ替わっていく。進んでいく。人の波がアスファルトに押し寄せ引いていく。

その中で、進む事も戻る事もせずに、ただぼうと突っ立っている者が一人。嫌でも目立つその姿を見間違う筈もない。二つの青を湛えた紺碧のドレス。空のように、海のように広大な空虚さを身に纏った『貴族主義』。

アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。
彼女は、そこにいた。
何かを期待しているかのように、誰かを、待っているかのように。
「……よう」
だから、声を掛けてしまう。
振り向いた彼女の顔に別段変化はなかった。ただ、振り向くまでに若干の時間を要しただけである。驚いた表情を書き替えるぐらいは、驚いた事を取り繕うぐらいは出来得るくらいの、そんな時間。
「勝手に行くんじゃねえよ」
「お妹様のお相手はよろしいのですか？」
「正確に言えば妹じゃない。血は繋がってないからな。あいつは、妹みたいな奴なんだよ」
こんな状況でなければ相手の一つはしてやりたかったのだが。
「道案内はまだ終わってないしな。……世界、終わらせたいんだろ」
アイネは微笑む。一種、凄絶な笑みだった。
「手伝うよ。一人じゃ大変だろうからな」
「世界を終わらせてしまうようなお手伝いをなさるおつもりですか」
一は少しだけ考えて、首肯する。
「こんな世界なくなっちまえ。壊れちまえ。消えちまえ。止まっちまえ。くたばっちまえ。なんて、思わなかった人間はこの世にいないぜ。だから、手伝ってやるよ」
「……面白いお方ですこと」
「ありがとう」
そんな事を面と向かって言われたのは初めてだ。とは口にしない。
「それで、俺は何をすれば良い？」
「引き続き、この街の案内をお願いいたしますわ」
「案内？　それだけか？」
「さようでございますわ。――エスコート、していただけますか？」
世界が終わるならば、この街を見て回る意味もなくなる。一には、ここが今際に相応しい景色とは思えない。少なくとも、アイネには

もっと相応しい場所があるように思えた。
「俺で良ければ、『貴族主義』」
「ありがとう存じます」
一はアイネに貼り付いた笑顔を剥がしたくて精一杯の皮肉を込めたのだが、彼女は微動だにしない。詰めが、甘い。

「おや、一さんではないですか」
「ん」
無機質な声に振り向けば、機械的な動作でお辞儀をするメイドがそこにいた。ヴィクトリアンスタイルのメイド服に身を包まれているのは、同僚のナナ、である。
「久しぶり。今日はどうしたんだ？」
「はい、今日は支部の技術部まで調整に行きました。今からはお店に行くところです」
「あれ、シフトに入ってたっけ」
ナナはいいえと首を振る。
「ゴーウェストさんが勤務中に脱走したらしく、その代わりに私が呼ばれました」
何とも言えず。何を言えば良いのか。一はとりあえず頭を下げた。
「一さんが謝る必要はありません」
「でも、あいつのせいで折角の休みを潰しちゃったんだし」
「ですから、私はゴーウェストさんの事で一さんが謝る必要はないと申し上げているのです。第一、私は人間ではなく、自動人形（オートマータ）です。人間に使われるのが唯一の意義、仕えるのが無二の意味である私が一さんに謝られては決まりが悪いですから」
「そんな言い方はないんじゃないか？　ナナだって休みの日にしたい事があっただろ？」
「……甘い方ですね。私みたいな人形に優しくしても見返りは得られませんよ」

突き放すような物言いではあったが、ナナの表情は存外穏やかだった。
「それは残念だな。でも、本当にやる事がないのか？」
「趣味と呼べるようなものは、私にはないですから」
「読書はしないのか？」
ナナは眼鏡の位置を指で押し上げる。
「いえ、本なら読みます。書物から取得出来るデータは多いですからね。どこを叩けば一番痛いのか。どこを殴れば骨が折れるのか。ソレ殲滅には欠かせない作業です」
「あー、そういうんじゃなくて、もっと普通の小説を読んだりは……」
「読む必要性を感じられません。わざわざ読まずとも、私には数百の物語が記憶されていますからね」
「へえ、凄いな。全部覚えてるのか」
「勿論です。一言一句完全に、完璧に、完膚なきまでに。一さんはどなたの作品がお好みでしょう？　良かったら太宰でもお聞きになりますか？」
興味はそそられたが、往来で聞くには些か無粋だろう。それに、何を言われてもナナの話す内容が一言一句合っているかどうか確かめる術はないのだ。
「いや、遠慮しとくよ」
「では一さんのリクエストに答えて『女生徒』を」
「してねえから！　何でよりにもよって『女生徒』なんだよ！」
「『女性奴』の方が良かったですか？」
「そんなものこの世に存在しない！」
ナナはうーんと小首を傾げる。彼女は、一は何が気に食わないのか本気で理解出来ていないらしい。
「『パンドラの匣』、『女生徒』、『斜陽』、『人間失格』、『惜別』、『晩年』、『冬の花火』」
「タイトルでストーリーを作るな。大体、花火って言葉通り吹き飛

ぶ訳じゃないんだぞ」
「読書は一さんのお気に召さなかったようですね」
読書でも何でもないのだが、まともに受け答えする勇気は一には足りていなかった。
「他に何か趣味はないのか？」
「そうですね、技術部にいて時間が空いた時には溶接をしています」
「溶接？　何か作るのか？」
「いいえ。溶接するだけです。時間の許す限り鉄と向き合います。プラズマアーク溶接が最近のお気に入りですね。一さんもどうですか？　ティグ溶接なら火花も散りませんし、初心者におすすめですよ」
「……考えておくよ」
死ぬまで初心者で構わない。
ナナとは根本的に話が合うようで、合わない。
「そうだ。ナナ、植物に詳しい？」
「詳しくない事物など存在しません。私のデータベースにはこの世の全てが記録されているのですよ？」
「だったらさ」
一はアイネの様子を窺ってから、
「世界を終わらせる植物を知らないか？」
そう、口を開く。
ナナはしばらくの間、無言になって目を瞑った。
「あ、分からなかったら別に……」
「いいえ、分かります。少々お待ちください」
彼女は意外と負けず嫌いで、自分の欠点を認めたがらない。その事を忘れていた一は溜め息を吐く。
「……一さん、世界で一番大きな花を知っていますか？」
「え？　あ、えーと。ラフレシアだったっけ」
「その通りです。マゾーンの女王、試作型モビルアーマーのモデルのラフレシアです。ちなみに、一さんが思っているラフレシアとは、

ラフレシア・アーノルディと呼ばれる種類のものなんですよ」
「へー。ああ、でもさ、臭いがきついってだけでラフレシアは世界を終わらせたりしないよな」
尤もな疑問を口にしたところで、ナナは「しかしっ」と、大きな声で割り込む。
「ギネスブックに公認されている世界最大の花はラフレシアではございません。スマトラオオコンニャクなのです。花の形が燭台に似ている事からショクダイオオコンニャクとも、英名でタイタンアルムとも、強烈な腐臭から死体花とも呼ばれています。また、臭いだけでなく見た目の醜悪さから、世界で最も醜い植物の第一位に燦然と輝いています。私はそれよりもウツボカズラやハエトリグサの内部を推しておきたいところですけれど。ああ、一さんは食虫植物なら何がお好みですか？　やはりロリドゥラ科ですか？」
「聞いた事もない植物で俺を貶めたいのは分かった。だけど、俺は食虫植物やら醜い植物について尋ねてる訳じゃないんだよ」
「ではマンドレイクのお話などいかがでしょう？」
「マンドレイクってマンドラゴラの事？　ああ、何か聞いた事あるな」
「では詳細は省きましょう。やはり有名ですからね、説明をしても今更と言う感じはしますし」
沈黙が一たちを通り抜けていく。
――だからどうした。
「しょ、食人木と言うのはどうでしょうか？」
「何だそりゃ。木が人を食うのか？」
「……そうではないでしょうか」
「そんなもの、存在するのか？」
「……そうではないでしょうか」
ナナの語気が段々と弱まり始めた。
「あのさ、ナナ。知らない事は素直に知らないって言った方が良いと思うんだけど」

「私に知らない事なんてありません」
きっぱりと、はっきりとした口調だったが、ナナは顔を俯かせたままである。
困らせてやりたい。
不意に、一の悪戯心が鎌首をもたげ始めた。
「分かった分かった。じゃあさっきの質問は止めにしよう。もっと違う事になら答えられるんだな？」
「……先程の質問も、もう少し時間を頂けたのならお答え出来たのですけれど。良いでしょう、他ならぬ一さんの頼みです。何でもおっしゃってください。難問奇問、どんと来いです」
「西暦十二万八千二十五年の九月一日は何曜日でしょう？」
爽やかな笑顔で告げる一。
ナナは押し黙り、ずり下がった眼鏡を元に戻した。
「あれ、もしかしてナナさん分からないんですか」
「ご冗談を。飛ばない豚はただの豚。そのような問題に答えられないとあっては、オンリーワン技術部の面目が丸潰れです」
「ほう、では正解は？」
「せ、正解は……」
一は信じられないものを目撃する。ナナの頬が朱に染まっているではないか。恐らくは羞恥から。人さじの怒りから。彼はこの場にカメラを持ち合わせていなかった事を心底から後悔し、深く恥じた。
「……嫌いです」
「へ？」
「一さんは意地悪です」
ナナは背を向けると、それだけでは飽き足らず顔さえも一から反らす。
「今日の事、ゴーウェストさんに言い付けます」
「なあっ！？　やめてくれっ、今日はもうただでさえ余計な誤解をされてんだから！」
「武力で訴えるよりは死ぬほどマシだと諦めてください。一さんは

私の目測よりも身体に対する痛みが強いようです。だから、精神的に揺さぶりを掛けるとしましょう」

「謝るから！　だからお願い！　それだけは！」

調子に乗り過ぎたと、一は本気で後悔した。ジェーンのお仕置きは回を増す毎に熾烈の一途を極めている。座敷童子の一件が片付いた時、どこから入手したのか、早田（はやた）と抱き合っていた事を知った彼女は巨大な鉄板を持ち出して言ったのだ。

「あああ思い出したくもない！　ナナ、悪かった。悪かったってば」

「反省、していますか？」

してるしてる。一は何度も頷く。

ナナは振り向き、にっこりと微笑んだ。

「一さん、関係のない話なのですけれど」

「へ？」

「ゴーウェストさん、近頃はピラニアの生態に興味をお持ちのようですよ」

「関係あるじゃないか！」

世界が終わるより先、自分が終わってしまいそうだと一は嘆いた。

トリフィドの日が来たら二人だけでも死ぬ

寂しい。だけど目は反らしたくない。
苦しい。だけど物言わぬ貝になりたい訳ではない。
虚しい。だけど足を踏み出すつもりはない。
欲しいものがあった。持っていたものを根こそぎ奪われても尚、手にしたいものがあった。
長い旅路の果て、力を得た。その内人外と呼称され、奪われたものは取り返せないと知る。
気の遠くなる道程の先、欲しいものを忘れていた。自分以外の全てを憎み、周囲のもの悉くを蔑んだ。
何も映さなくなった網膜が最後に焼き付けたイメージ。消えてしまえ。壊れてしまえ。世界なんて信じられない。何もかもが虚偽に彩られ、虚像が踊って虚言を吐いて回るのだ。
終わってしまえ。

「……アイネ？」
自分の後ろを歩くアイネの様子がおかしい事に気付き、一は立ち止まって声を掛けた。
「疲れたのか？」
「いえ、あなたこそお疲れではありませんの？」
「いや、大丈夫だよ。……あー、それよりさ……」
気掛かりと言えば、アイネの所持している種、である。世界を終わらせる種と言われても俄かには信じられない。種であるなら植物に間違いないだろうと思ってナナに尋ねてみたのだが、芳しい話は聞けなかった。
「見せてくんないかな、あの種」
「さようでございますねえ……」

嘘だとは思えない。荒唐無稽の極地にもある話だが、彼女は嘘を吐いていない。吐く気がないのだと思った。
「もしかして、嘘、なのか？」
「……よろしくってよ。そうですわね、あなたは私の共犯者でしたわ」
「は、土壇場で裏切るかもよ？　やっぱり世界を終わらせるなんて良くないっつってな」
「ふふ、有り得ませんわ」
「この短時間で随分と信頼されたもんだな」
一は自嘲気味に笑う。
「信頼とは違いますわね。程遠いと申し上げても相違はないように存じます」
その笑みを受け、アイネもまた口元を緩めた。
「魚が海を泳ぐように、鳥が空を飛ぶように――あるいは、寒くなれば体が震えるように、熱くなれば喉が渇くように。そう言い換えた方があなたにはお似合いかもしれませんわね」
「意味が分からないんだけど」
「あなたはそう出来ていると申し上げたのですわ。私と同じように、と」
髪をかき上げると、アイネはスカートに手を伸ばす。その手が再び一の視界に収まった時、彼女は布袋を握っていた。
「どうぞ、ご覧になって」
一はすぐ傍にいるというのに、アイネは彼の真上に袋を放り投げる。
「だっ、おいっ」
不細工な格好で袋をキャッチすると、一は恨みがましい視線をアイネに送った。
「……はしたないぞ」
「お許しあそばして。それよりも中身を、ほら」
「あいよ」

中に何が入っているか分からない。もしかしたら手を入れた瞬間、食い千切られるかもしれない。一は慎重に袋の口を開け、腰が引けた状態で覗き込む。

「用心深いお方ですのね」

「素直に臆病と言え……あ？」

小さなものが一の手に当たった。かすかな感触にさえ血の気が引きつつ、一つ摘み上げてみる。

「うわ、本当に種なのな」

手に取ったそれは真っ白く、楕円形。植物の種と言えばひまわりか、もしくはヒヤシンスぐらいしか見た事のない一にとっては、これが何の花を咲かせるのか判断出来ない。

「これが世界を終わらせる種なのか？」

「さようでございます。トリフィドをご存知ですか？」

「とりふぃど？　いや、初耳だな」

「……意外ですわね」

「は？　どうして意外なんだよ？」

一の問いには答えず、アイネは彼の手から種を取り上げた。

「ご存じないのなら、それで構いませんわ。もう間もなく、あなたは世界の終わりをご覧になられるのですから」

「そりゃ楽しみだ。んじゃ、とっとと蒔こうぜ」

「では、この街で一番高い場所へ案内してくださいますか？」

「……高い場所？　構わないけど、なんでまた」

一がそう言うと、アイネは挑戦的な笑みを零す。

「良いものは良い場所から。世界の終わりだなんて、一生に一度しか見られない素晴らしいショーなのですから、特等席でじっくりと、拝見させていただきたい。……うふふ、ね、そうは思わなくって？」

なるほどと一は得心した。

「だったら大学の裏手にある山だな」

一はその方角を指差して、持っていた袋をアイネに返す。

「……」

指が触れ合った時、気付いた。
「どうかなさいまして？」
「いや、なんでもないよ」
手袋越しでも分かる。彼女の手は震えていたのだ。武者震い、なのだろうか。それとも――。

駒台山へ向かうまでの、人通りの少ない道にて。
「英雄色を好むとは言いますが」
会いたくない時に限って会う。こちらが望んでいる時には出会えない。万事が上手くいくとも思っていなかった。今日は千客万来である。もしかしたらと一は覚悟していたのだが、いざ彼女と顔を合わせると何も言えなくなった。
「あー、今日もその、いつもの服なんだな。寒くない？」
一が指差しているのは、セーラー服を着た少女、黄衣ナコト。彼女は一一の天敵であった。
「卑しい。脂ぎった目であたしを見ないでください。怖気が千里を走ります」
「千里も走ったらもうお前とは関係ないんじゃねえの？」
ナコトは持っていたビニール袋を下ろしてから一に向き直った。
「人の揚げ足を取らないでください。それより、またあなたは違う女性を連れているんですね。とっかえひっかえ、よくもまあ……」
「もう俺は何も言わない。お前の根も葉もない罵詈雑言に付き合ってたらストレスで寿命が縮んじまうからな」
「なっ……！　ではあたしのストレスはどこに行けば良いんですか。行き場をなくして体内で暴れ回ってしまいます」
「俺のストレスはどうなるってんだよ」
「ストレスを感じられるだけの神経があなたにあるとでも？」
「あるわ！」
こうして今も溜まりつつある。一がナコトの悪口によって蓄積さ

せられたストレスは相当のものだった。
「うるさいですね。セーラー服に関する膨大な知識だけが取り柄のくせに」
「そんなの取り柄にした覚えはないぞ！」
ナコトは考える素振りを見せてから、セーラー服の襟に手を遣る。
「この大きな襟の事を何と言いますか？」
「ジョンベラ」
「セーラーの意味は？」
「海兵」
「日本で女学生の制服として、初めてセーラー服が採用されたのは？」
「１９２０年。京都の学校だったかな」
「好きなテレビドラマは？」
「セーラー服通り」
「セーラー服は地域によって襟の種類に違いがありますが、関西と関東の襟、どちらがお好みですか？」
「関西襟」
「セーラー服に似合うのは？」
「スカーフ。今日のお前は減点だな、ネクタイはちょっと違う」
ふむ。ナコトは顎に指を這わせ、値踏みするような視線を一に送った。
「あなたはドが付くカス野郎ですね」
「どこがだよ！？　これぐらい誰でも知ってるし、誰だってこう答えるに決まってる！　なあ、そうだろアイネ！？」
「……さようでございますねえ」
アイネは決して一と視線を合わせようとはしない。それどころか、彼と距離を取るかのように数歩後退する。
「黄衣てめえ！」
「ああっ近寄らないでください。犯される、目で犯すだけじゃ飽き足らず犯されてしまいます」

「俺の尊厳はムチャクチャに犯されたよ！」

一呼吸置いて。

「……また本を買ったのか？」

「ええ、読みますか？」

「えー、だってそれ少女漫画だろ」

「先入観で毛嫌いしないでください。今や男性だって少女漫画を読む時代です。面白いものに性別や国境は関係ありません。あなただって息をするでしょう？　それと同じです」

「いや、その例えはおかしい。空気ぐらい好きに吸わせてくれよ」

なんて事を言い放つ女だろう。

「構いませんよ、許可します。あ、ほら、この辺りは窒素が豊富ですよー」

「酸素をくれ」

「駄目です。ところで、この街には座敷童子がいるのをご存じですか？」

「……なんだって？」

どうしてナコトが槐の事を知っているのだろう。一は何故だか、言い知れぬ不安感に襲われる。

「耳が遠くなりましたか？　あ、ついでに顔も遠ざけてくれます？」

「お前、座敷童子を知ってるのか？」

槐がやってきてからまだ一週間経っていない。ナコトは誰から話を聞いたのか。

「先程、座敷童子と書店で出会いましたから」

そういえば、槐も漫画がどうとか言っていたのを一は思い出す。

「おかっぱで着物、あなたの大好きな幼女でした。その子はあたしの前にレジに並んでいて、小銭が足りないとかで店員と揉めていたんです。あまりにも見苦しいので十円玉を渡してあげると、『ぬしは良い人間じゃな、幸せを分けてやる、かっかっかっ』と、あたし

の頭を撫でてから去っていきました」
本人からだった。
「いや、でも、それだけでそいつが座敷童子とは……」
「本人がそう言っていたので。なんなら連絡をとってみましょうか。メルアドも交換しておいたんです」
「いや、いい」
好き放題し過ぎである。一は頭が痛くなってきて、こめかみに手を当てた。
「まったく、この街は異常ですね。座敷童子やら魔女やら――――『えせ貴族』やら」
ナコトは眼帯の位置を直してから、アイネに鋭い視線を送る。
一は彼女の、そんな目を見るまで忘れていた。ナコトだって、元はフリーランスである事に。
「……初めまして、『貴族主義』。早速ですが、この街から、一さんの傍から失せてもらえませんか？」
「お、おい、黄衣……」
ナコトの視線――挑発を受けて、アイネは微笑んだ。
「ごきげんよう、元『図書館』。この街で一番最初に脱落した、奥ゆかしいフリーランスはあなた方だと存じておりますわ」
「余計なお世話です。今まで姿を見せず暗がりに隠れていた人には言われたくありませんね。貴族と騙るのならば民草の前に立つのが義務でしょう。……ああ、違いましたね」
ナコトは一度言葉を区切るように口角をつり上げる。
「今は貴族、主義でしたね。つまり、今のあなたは貴族ではない。どうせなら貴族趣味に名前を変えてみては？　おすすめですよ」
空気が、重い。
真っ向からやり返せば良いのに、アイネはただ笑むだけだ。それが、一には恐ろしくてたまらない。
「元気のある方でいらっしゃるのね。あなた、生き生きとしていますわ。フリーランスよりも、今の生活を余程楽しんでいらっしゃる

ように存じます。――お仲間を、見殺しになさった甲斐がありましたわね」

だん、と地面を蹴る音。

次の瞬間、ナコトは得物である鎖を握り締めてアイネに走り寄っていた。

「やめろっ！」

一が叫ぶが、止まらない。

「決闘なら、受けて立ちますわよ」

誰も止まらない。

アイネは左手に鞭を、右手には改造式のレイピアを握っている。

「あんたなんかにっ！」

走りながら、ナコトは鎖を振るった。狙いこそ乱れていたが、カトブレパスの時よりも更に速い。

「何が分かる！」

唸りを上げて突き進む鉄の風。ナコトは肉体的に恵まれていない分、鎖を回転させ、先に付いた分銅に遠心力を加えて不足を補っている。

アイネがいかにフリーランスと言えど、体のどこかに当たれば骨折は免れない。

「涼しい風ですこと」

その、暴虐を具現化したような風に対して、アイネは正面から迎え撃つ。

鉄の鎖と、皮の鞭。

アイネは鞭で鎖の軌道をずらした後、逆の手に構えたレイピアで弾き、大きく向きを変えさせた。

鎖はターゲットを見失い、大空高く上っていく。

「隙だらけ、ですわね」

「……くっ」

ナコトが踏み込まれた間合いは、アイネのレイピアが届く距離だ。

が、ナコトも戦闘慣れしている。彼女はバックステップ――と、言

うより後方に体を投げ出しながら鎖を引き戻した。
その軌道上にはアイネがいる。
背中を向けているアイネに当たればそれで良し。当たらずとも、彼女が回避行動を取りさえすれば仕切り直せる。そう考えて放った、ナコトの起死回生の一撃。
「……嘘」
「終わりとは……」
歌い上げるような口調で、アイネは朗々と言い放つ。
「えてして呆気ないものですわ」
ナコトは目を疑った。地面に突き刺さったレイピアに、放った鎖が巻き付いている。ぐるぐると、ぐるぐると。情けなく、空回りしている。
「あっ」
アイネがレイピアを弾くと、鎖は持ち主の手を離れて中空を舞った。
アイネは繋がり合った鎖の穴を狙っていたのだ。背を向けたまま、曲芸じみた、狂人じみた芸当をやってのけたのである。
回避と同時にナコトの武器を無効化させたアイネは、尻餅を付いている『敵』に悠然と近付いた。
「……やめろ」
「お退きになってくださらない？」
ナコトを庇って立つ一に、アイネは空虚な視線を向ける。
「もう良いだろアイネ、お前の勝ちだ」
「勝敗に興味はなくってよ。私を侮辱したのですから、死を賭して償うのが当然ではありませんこと？」
「……お前だって黄衣を侮辱したろ。お互い様だ」
「この辺りで剣を収めろと、そうおっしゃりたいのですか？」
依然、アイネは一を見据え続けている。光が宿らない瞳からは彼女の感情が読み取れない。
「……よろしくってよ。あなたがやめろとおっしゃるのなら」

武器をしまうアイネを見て、一は胸を撫で下ろした。

「終末を呼び込む植物――トリフィド時代、ですか」

険悪な雰囲気をどうにかするべく、一は世界を終わらせる種をナコトに見せてみたのである。尤も、アイネは良い顔をしていなかったようではあるが。

しかしナコトは興味が湧いたのか、彼女はいささか興奮した様子で先の言葉を述べた。

「黄衣、知ってるのか？」

「……あなたは知らないんですね。意外です」

「意外？　何でだよ」

「トリフィド時代、原題はＴｈｅ　Ｄａｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｔｒｉｆｆｉｄｓ、破滅をテーマにしたＳＦ小説ですよ。映画にもテレビドラマにもなりましたから、あなたはそういう映画、お好きだと思っていたのですけれど」

一は首を傾げる。

「そういうって、どういう映画だよ？」

「どういうとは、モンスターが出現して人々を襲う、Ｂ級映画の事です。頭を空っぽにしても楽しめるのであなたにはお似合いでしょう。トリフィドを題材にした作品は幾つかありますが、その全てが肉食植物である彼らが人々を襲うだけの陳腐でありきたりなお話です」

馬鹿にされている気はしたが、心当たりがあったので一は黙っておいた。

「破滅を扱っているとはいえ、トリフィドは心地良い破滅と揶揄されていますがね。私は否定するつもりありませんが、好きではないです。どうせ終わるのならもっとドロドロしたものを望みますね。やはりメアリーかリチャードの……」

「ごめん、分かんないからストップ」

ナコトはつまらなさそうに溜め息を吐く。
「これだから無知な人は嫌いです」
「それよりさ、トリフィドってマジでいるのか？　いたとして、どんな姿をしているんだ？」
「……存在する訳ないでしょう。所詮は小説の中での、空想上の産物です。と、言いたいところですが、ソレがそのような存在である事は周知の事実。存在するかどうかは知りませんが、いてもおかしくはないでしょうね」
「ま、尤もだな」
ですが。そう前置きしてから、ナコトは一の持っている種に視線を落とした。
「少なくともその種は見た事がありませんね。うーん、似ているものは思い付くのですが、やはり私も知らない種です。もしかしたらトリフィドってのも本当かもしれませんね」
「へえ、だってさ、アイネ」
話を振られたアイネは僅かに眉根を顰める。
「私は最初から申し上げていた筈です」
「確かめただけじゃねえかよ」
怒らなくても良いだろう。そう思いつつ、アイネが感情と言った類のものを表に出さない事は一にも分かっている。短い付き合いだが、彼女から人間らしさを引き出すのは実に楽しかった。
「で、トリフィドってのはどんな形をしてるんだ？」
「簡単に言ってしまうと、歩く木、と言う感じですかね。太くて丈夫な根っこが三本。頭から生えた有毒の棘で獲物を刺し殺し、死体を養分とする。とある映画ではハエトリグサみたいな姿をしていましたが、基本的な部分は変わりません。トリフィドとは、歩行する肉食植物です」
「歩く、木ねえ」
想像して気持ちの良いものではない。一は深く考えないようにして、頭を振る。

「ところで一さん」
「なんだよ改まって」
ナコトは可愛らしい咳払いを一つしてから。
「話を聞いてみると、『お貴族様』は終末を望んでいらっしゃる様子。では、あなたは？　あなたは世界が終わっても構わないんですか？」
「ああ」
「即答、ですか」
寂しげに言うと、ナコトは視線を落とす。
「あなたは、あたしを助けたんですよ？」
「は？　いや、まあそうだけど。えっと、それで？」
「……こんな事を言うと誤解を受けてしまうと思いますが。その、あたしには、あなたしかいないんです」
「なっ、え、あっ？」
一は赤くなって固まった。狼狽した彼を見て、つられたようにナコトの頬も赤くなる。
「だから言ったじゃないですか、もう……」
「いや、だってさ、んな事言われたらびっくりするに決まってんじゃんか」
見るも無残な微笑ましい光景に、アイネは冷たい視線を送り続けていた。
「とにかく、あなたはあたしを助けたんです。勝手に。自分の都合だけで」
「えー……」
「ですから、勝手にどこかへ行ったり、世界を終わらせるなんて言わないでください。良いですか？　あたしに世界をくれたのはあなたなんですからね」
「世界を？」
そんなつもり、一にはなかった。
誰かに何かを与えられるほど、自分は大きくない。そう思って、

内心で自嘲する。
「あなたは世界の定義を勘違いしています。いえ、少なくとも、あたしとは違っています」
ナコトは手を広げると、何もない空間を掴んだ。その手を広げて見せるが、中には何もない。空っぽである。
「何やってんだ？」
「あたしにとって世界とは、あたしの手が届く範囲の空間を指します。生きていく上で必要なスペースとでも言いましょうか」
「ちっせー世界だな」
「あなたがくれたんですよ？　あなたがあたしに生きるべき意味を与えてくれた。なのに、勝手にいなくなられては困ります」
「言われたってなあ」
とにかく。ナコトはそう言ってから、一から視線を反らす。
「あたしが今言いたいのはそれだけです。分かってもらえないのなら、まあ、仕方ありません。あなたの頭の悪さを笑うとしましょう」
本の詰まった袋を掴むと、ナコトは一たちに背を向けて歩き始めた。
残された二人は言葉を交わす事もないままに、立ち尽くす。

ナコトが去った後、一たちは山に向けて足を伸ばしていた。
もう、陽は落ち始めている。
「あなた、お友達がたくさんいらっしゃいますのね」
長くなった影に目を遣ったまま、アイネは口を開く。
一は歩くのを止め、今までを振り返った。
「あいつらを友達って呼ぶのはどうかと思うけどな」
「私が拝見した限り、あなたはたいそう楽しそうでいらっしゃいました」
「そうかあ？」
「ええ。本当、う――とましいこと」

アイネは眩しいものでも見るかのように目を細める。
「疎ましい、か。ストレートな悪口は初めて言われたな」
「ごめんあそばせ」
ドレスの裾を摘み、アイネはわざとらしく頭を下げた。
一は彼女のおどけた仕草に笑みを漏らす。
「……本当によろしいんですの？」
「何が？」
「世界を終わらせる事が、です」
「あー、良いんじゃねえの」
「あなたには友人がいらっしゃる。なのに、世界が終わっても構わないと？」
今更、こいつは何を躊躇っているのだろう。一はアイネに失望の念を覚える。
「俺に友達がいたら、お前は世界を終わらせないのか？　友達がいないから、世界を終わらせるのか？　そこんところはっきりしろよ」
「……失礼致しました。私、あなたを見誤っていたようですわ」
「ああ、俺も」
一はアイネに背を向けて、再び歩き出した。
彼には疑念ではない、確信があった。気付いてしまった。アイネは世界を終わらせる気がないのだろう。折角の種も、宝の持ち腐れである。
彼女の空虚な瞳は世界に絶望していたのではない。何も映さないのは、興味がなかったからではない。
似ているから。否。似ていたから。だから、気付けた。だから、彼女は自分に近付いた。
「なあ、アイネこそ友達はいないのか？」
その問いに、アイネは答えなかった。
「家族は？」
この問いに、アイネは答えなかった。
「好きな奴とかはいないのか？」

どの問いにも、アイネは口を開かなかった。

世界を終わらせてみたい。終わって欲しい。終わってしまえ。

思った。少年は確かに思った。一度ならず、二度ならず、三度ならず――。

あの日から、ずっと。ずっと。ずっと。ずーっと思っていた。思い続けている。今でも、終わってしまえば良いのだと。

――友達は？　家族は？　恋人は？

ずっと考えていた。世界を終わらせるにはどうしたら良いのかを。考えて考えて、その内、『世界』とは何か分からなくなっていた。定義も、境界も。何もかもが曖昧に思えてしまう。考えて考えて、気付いてしまうのだ。終わって欲しいのは、本当はなんだったのか、と。

自分を含めた全て。自分以外の全て。嫌いなモノ全て。好きなモノ以外は全て。それとも、もっと別の。

この街に来てからも、その思いは消えたためしがない。考えが中断された事はない。

気付いてしまったのだ。

――無理だ。無理だよ。

世界を終わらせるのは無理でも、自分だけならすぐに終わらせられる。それで済む。これ以上、世界を見ずに、聞かずに、感じずに済む。苦しい事からは逃げてしまえば良い。悲しい事は忘れてしまえば良い。悔しい事は無視してしまえば良い。嫌な事からは目を反らし、腹立たしい事からは目を瞑ってしまえば良い。

世界から、自分が終わってしまえば良い。

そうした方がずっと簡単で、傷付かずに済む。

だが、それでも、死ぬのは怖い。他者を求めてしまう。今日が最悪でも、明日は。明日が最低でも、明後日は。来週は、来月は、来年は、少しはマシになるかもしれない。そう、甘えてしまうのだ。

願ってしまうのだ。

坂道がある。この坂の中腹には駒台大学があり、その先を更に進むと山の入り口が見えてくる。ここには地元民ですら滅多に立ち寄らない。季節が冬で、日が沈んでいるのなら、獣だって近付きはすまい。

「着いたぞ」

「ええ」

その入り口に、人影が二人分。

世界を終わらせる、二人。

気負いもなく、奇を衒う事もなく、彼らは何の気なしに、破滅へ向かって歩を進めた。

小さな夜に

闇があった。

黒よりも黒く、陰よりも暗く、夜よりも優しい闇があった。

「なあジィさん、あのガキヤんなくて良かったのかよ？」

漆黒と呼ぶには明る過ぎる世界の中、二つの存在が浮かび上がる。

「あの娘が種を蒔いた後なら構わぬ。尤も、その頃には女どころか誰も残ってはおらんじゃろうが」

「あああ！？　ふざけてんじゃねぇぞ老いぼれ、あんたは枯れてっからどうでもよさげだけどなあ、俺サマにとっちゃ女ってのは水と同じなんだよ！　分かるか！　分かるだろ！　分かってくれよ！」

白い外套を身に纏った小柄な老人に、アロハシャツを着崩した男が詰め寄った。

「知らん。それより、少し黙ってくれんか。ここにお主と二人でおるだけで吐き気がすると言うのに、耳元でがなられてはかなわん」

「そりゃこっちの台詞だっつーの！　ちっ、折角戻ってきてやったってのに、いんのはジィさんだけなんだもんな。モリガンかヘルでもいりゃあ暇が潰れんのによー。あ、ヴィヴィちゃんでも俺サマ大歓迎」

アロハの男は体をくねらせながら、下品に笑う。

「ふん、腐り掛けや魔女はともかく、あの娘は主なんぞになびかんじゃろう」

「ジィさんってさー、いっちゃん下っ端のくせに生意気だよな。年寄りは敬うもんじゃねぇの？」

「ワシは神を信じておらんでな。主、ワシの目的を知らんかったか？」

「あー、あーあーあー、知ってる知ってる。悪魔を呼び出すんだろ？　悪魔なんかどーだっていーじゃねぇの」

老人は男を鼻で笑うと、地面、と、思しき場所に腰を下ろした。

「好きに言っておれ。それよりも、やっと交替してくれるのかのう？　皆好き勝手しおって。ここの守りはどうする気じゃ」
「するわきゃねぇだろ。俺サマは忙しいんだ。大体だな、こーんな国のこーんなトコに攻めてくる奴なんざいねぇっつーの」
「……ほう。忙しいときたか」
「おう！　アメリカってのを落としたいからな、まずはリハビリ気分でここの奴らをぶっ殺すんだよ」
　アロハの男は腕を組み、老人の隣りに腰を下ろす。
「お主、前はここなんぞに興味はないと言っておらんかったか？」
「興味はねぇよ。だからソッコー落としてソッコー次んトコに攻め入るっつーの」
「しかし、ここで暴れるとモリガンがうるさいと思うがの」
「ぎゃははは、知ったこっちゃねぇっつの。何か言ってきたらぶち込みまくって黙らせてやんよ」
　浅慮どころか、思慮とは無縁の男に対して老人は溜め息を隠さない。
「勝手にするが良い。じゃがな、ワシの邪魔だけはするでないぞ」
「へいへい」
「……それとな、『王』が欠番を埋めに行くらしい。ここに、な」
「ああっ？　マジかよ!?　じゃあここを落としたらやべぇじゃねぇか！」
　アロハの男は頭を抱えて意味の分からない言葉を叫んだ。
「あー、チクショウ。しゃあねぇな、今は準備だけにしとくか」
「くれぐれも、ワシと娘の邪魔をするでないぞ。種ですらまだ蒔かれておらんのじゃからな」
「あー、その種だけどよ。ガチで本物なのか？　だとしたら、ジィさんやモリガンどころか、『王サマ』の目的すら達成出来ねぇんじゃねぇの」
　老人は苦笑してから、
「心配はいらぬ。あの種はな――」

そう、告げた。

アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。

目を瞑れば今も思い出せる。彼女の脳裏にこびり付き、未だ網膜から剥がれ落ちない鮮烈な光景がある。

血と、火だ。

国が焼かれ、街が焼かれ、家が焼かれた。

皆死んだ。友人も死んだ。家族も死んだ。

何もかも、どれもこれも、全てソレのせいだ。

――貴族の血。

脈々と受け継がれた高貴な証は、体の中に今も流れ続けている。

彼女が望んでいようがどうかお構い無しに、だ。

貴族制度や階級社会は形骸化しつつも、一つのモノとして残っている国もある。アイネはその国の生まれであった。

高貴な義務（ノブレスオブリージュ）。全て多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。これは、貴族が自発的に『そうあるべき』と打ち出した責任ではない。無論、自分たちに許された自負だとも、自尊だとも声高に掲げる者もいる。

が、アイネはそう思わなかった。特権を持つ者に対して、持たない者が『そうあるべき』と貴族たちに社会的な圧力を掛けた結果が高貴（これ）な義務なのである。『貴族』と言う概念が廃れつつある現在でも守らなければならない。法的な義務はない。社会的な批判を浴びるだけだ。

耐え切れなかった。

ソレが出現して、その声は高まる。民衆は突き上げる。拳を振り上げる。

『ソレを倒せ』

『我々より前に出て戦え』

怨嗟の如く押し寄せる声に、アイネは唇を噛み締めた。

何をした。私たちが何をした。お前たちが何をしてくれた。持たざる者は持つ者に縋る。自分たちが何も出来ないまま殺されると分かっているからだ。本人たちが何もしないで死ぬのだと諦めていたからだ。――自分たちより裕福な者が憎かったからだ。

アイネの父は、その声に耐え切れなかったのである。

与える事も、与えられる事もなく。表立って賞賛される事も、非難される事もなく。

貴族たちはただ、突然と放り出された。

血の吹く嵐の中へ、肉が溢れる川の中へ。

充分な準備も整わないままに、大口を開けて待つ、死への顎（あぎと）へと飛び込んでいった。誰も彼もが、意味も分からないまま、意味もないままに命を散らしていった。

アイネの父も、母も、知り得る限りの親戚も、皆消えていく。

真赤な炎に包まれて、真赤な血飛沫を上げて食われていく。

狂騒は街を吹き抜け、国境を越えてまた新たな赤を生み出していった。

一晩で街は消え、やがて、アイネだけが廃墟に残されていた。戦場に出るには幼過ぎた彼女だけが、難を逃れたのである。

これで終わったのだと、アイネはそう思った。多大なる対価と、数え切れぬ犠牲。残されたのは、ちっぽけな命。

『お前のせいだ』

アイネが振り向いた先、数人の生き残りがいた。

しかし、彼女は喜べなかった。

負傷しながら、やっとの思いで立っている者たちの目は一様にこちらを向いている。獣じみた、ぎらついた輝きがアイネを怯えさせた。

『お前のせいだ』

耳朶を打つ声からは、生き残った喜びを共にしようという響きは

感じられない。アイネは立ち上がる事もままならず、尻餅を付いて後ずさる。

――やめて。

声はどこにも届かない。

家族も、故郷も、尊厳も、何もかもソレに食い尽くされ、奪われた。守るべき筈の存在だった人々に蹂躙された。

全てに絶望し、憎悪し、嫌悪する。

男たちの慰み者になっていた彼女を救ったのは、皮肉な事にソレであった。何も、ソレがアイネを助けようとした訳ではない。腹を空かせたソレの近くにたまたま人間がいて、たまたまアイネが生き残っただけの話だ。

それでも、彼女はまた生き延びた。

意思もなく、目的もなく、空っぽの心と体を引きずって戦地を這いずり回る。貴族としての誇りなど、とうに失っていた。それでも、歩みは止められなかった。――アイネを支えていたのは、憎悪である。

国を潰したソレに対してではない。街を焼いたソレに対してではない。家族や友人を飲み込んだソレに対してではない。

憎悪の対象は、自分の尊厳を踏み躙った人間たちだった。

「おい」

「……あ、何か？」

三度目の呼び掛けでようやくアイネが一の方を向く。

「足が止まってるぞ。疲れたのか？」

「失礼致しました。先を急ぎましょう」

アイネは一の脇を素知らぬ顔で擦り抜けていった。その後ろを追い掛けながら、一は空を見上げる。

「なあ、世界ってさ、本当に終わるのかな」

「終わりますわ」

「でもさ、トリフィドが世界を終わらせるよりも先に俺たちが死んじゃったら？」
「それまでに死ぬつもりはありません。あなた、生き延びる自信がなくって？」
「ないね」
適当とも取れる口調ではあったが、アイネは気にしない様子だった。
「仮に生き延びたとして、本当に世界の終末を見届けられるかが不安だよ」
「……土壇場で。あなた、私を裏切るおつもりですか？」
「いや、別に。たださ、お前も考えた事はないか？　終わりって、どこなのかなーって」
アイネの足が止まる。
「この街が潰れたら？　この国が滅んだら？　皆死んじまったら？　地球が消えちまったら？　違う気がすんだよな。多分、俺たちが生きてても死んでても世界ってのはあるんだよ」
「では、あなたは何を以てこれが世界の終わりだとお思いになるのですか？」
一は少しだけ考え――と、言うよりは、以前から用意していた台詞を演じるかのような素振りで、口を開いた。
「俺が死んだら。そこで俺の世界は終わりだよ」
「……あなたが消えただけでしょう。人間一人を置き去りにしたまま、世界は続いていきますわ」
「かもな。けど、そんなもんだよ」
「あなたは……」
それきり、会話は進まない。二人は黙々と足を運び、やがて、開けた場所へ出る。
「あら、ここは……？」
アイネの目が洋館に向いた。何か感じるものがあるのだろうか、彼女はしばらくの間、異国の建物を眺めていた。

「俺の知り合いの家。珍しいよな、こんなところにあるなんてさ」
一は言いながら洋館に近付いていく。
「ここも、ですか。お知り合いが大変いらっしゃるようですわね」
「そうかな。っと、誰もいないみたいだ」
建物の中を確認すると、一は近くの木に登り始めた。
「あなた、お気は確かですの？」
アイネには一が奇行に走ったようにしか見えなかったらしい。
「姫さまは見晴らしの良いところをご所望だと、そう伺っていたの、です、がっ」
ちょうど良い高さと太さの枝に足を掛け、一は洋館の屋根に飛び移った。
「ほら、こっち来いよ」
「……木登りなどと。そんなはしたない真似は……」
「剣を振り回すのは良いのかよ。良いから来いって。あ、まさか、高い場所が恐いとか？」
「……よくってよ」
アイネは二三深呼吸を繰り返してから木に近付いていく。幹の強度を確かめるようにぽんぽんと叩くと、諦めたように深い息を吐いた。

絶景だと、素直にそう思えた。まだ自分にもこんな気持ちが残っていたとは、不思議で仕方ない。
「中々のもんだろ？」
得意げに笑う一も、大して気には障らなかった。
「ここが、この街で一番高いところですのね」
屋根の上に立ち上がってみると、街の灯りが眩しく感じる。アイネは目を細めて、ゆっくりと一の隣に座り込んだ。
「うわ、女の子みたいな座り方だ」
アイネは何も言わず一へ微笑み掛ける。

「ごめん」
「よくってよ」
「……なあ、種、蒔くのか？」
決まり切った事を聞かれて、アイネは眉根を寄せた。
「当然ですわ」
「そうか」
すぐ横で溜め息を吐かれては良い気などしない。
「何がおっしゃりたいのですか？」
「いや、お前さ、本当は世界なんか終わらせたくないんだろ」

そろそろ観光案内も終わりだ。この先彼女とどんな関係になろうとも、彼女がどうなろうとも言うしかない。世界を終わらせるなんて妄言を吐いて良いのは、絶対に彼女ではないのだから。
「こう言っちゃ悪いけどさ、全部嘘なんだろ」
絶句しているアイネを待たず、一は話を続ける。
「もしもその気があったんなら、お前はとっくに世界なんて終わらせてた。でも、そうはならなかったんだよ」
「……何を……」
「終わらせる筈の世界に居残り続けて、終わらせる筈の街を見て回ったのも、俺みたいな奴と一緒にいたのも、未練があったからじゃないのか？」
ぐっと、息を呑む音がどちらからともなく立てられた。
「私は……」
アイネは一の視線から逃れるように俯く。
「お前は、世界を終わらせるほどの器じゃないんだよ」
「私はっ」
「あのさ、世界を終わらせたいって思ってる奴は、そんな寂しそうな顔をしないんだよ」
弾かれたようにアイネが顔を上げた。

「もっとこう、ないんだ。寂しくもないし、嬉しくもない。空っぽな顔して、当たり前みたいに終わらせるんだと思う」
「わっ、私はっ、こんな世界……！」
「違うんだ。何もないから、世界に対して怒ったりもしない。お前はさ、本当は」
「やめて！」
これ以上聞きたくない。アイネは耳を塞いで頭を振った。
「期待してたんだ」
それでも、一は続ける。まるで自分自身に言い聞かせるかのように。
「違うっ！」
「お前がどんな酷いモノを見てきたのかも、どんな辛い目に遭わされたのかも俺には分からない。だけど、アイネ。お前は世界を終わらせられなかった」
「違う！　違うのっ！」
涙を流して訴えるアイネに一瞥をくれてからも、尚、一は続ける。
「本当は、誰かに分かって欲しかった。家族でも良い、友達でも良い、恋人でも良い。とにかく、誰かに傍にいて欲しかったんじゃないのか。お前はこの世界を憎み切れなかった。こんな世界にどこか期待してたんだ。明日はもっと……」

――良い日に、なりますように。

「……お願い、もう、やめて……」
振り絞った声は弱々しい。だが、一の耳朶を確かに打った。彼の心を確かに揺さぶった。
「言い過ぎたとは言わない。だけど、ごめん。そんで勝手な話なんだけど、早く泣き止んでくれないか？」
「……本当に、勝手な方ね」
一は頭をかいて苦笑する。

「勝手なのはそっちだった気がするんだけどな。折角の休み、駒台中引っ張り回されちまった」
「あ、その、私……」
「良いよ。ちょっと、あ、いや、正直楽しかったんだし」
今日は、ここに来た頃の自分では到底考えられないくらいの人物と出会えた。何よりも――――。
「可愛い女の子とデート出来て、嬉しかった」
「かわ、い……。わ、私が、ですの？」
「うん。って、自分でそんぐらい分かってんだろ」
「そんな……。わ、私のようなつまらない女……」
頬を染めて俯くアイネは、つい先程まで世界を終わらせると言っていたような存在には見えない。少なくとも一には、普通の女の子にしか見えなかった。
「どうして、お気付きになられたんですの？」
「ん、何が？」
「私が、本当は世界の終わりを望んでいなかった事、ですわ」
「あー、なんつーか、だから、その、アレだよ、可愛かったから、かな」
しどろもどろになりながらも、一はアイネの問いに答える。尤も、視線だけは合わせないように苦心しながらではあったのだが。
「そりゃあ、普通には笑わなかったり怒らなかったけどさ。そんでも充分、女の子してたと思うぜ。で、俺にはそんな奴が世界を終わらせたいとは思えなかった」
「……褒め言葉、ですの？」
上目遣いで尋ねられて、一は頷くしかない。
「お前の目的は知らないけどさ、良いんでないの」
「……？」
「だから、普通に暮らしたって良いんじゃないか？」
一は、アイネの過去を知らない。彼女について、何一つとして知らない。

「私は、世界から見捨てられたのだとばかり。ずっと、そう思っていました。でも、違っていたのですね」
同様に、アイネも一の過去を知らない。彼について、何一つとして知らない。
「……きっと、私が世界を見捨てていたのですわ。心のどこかで期待していながらも、いざ救いの手が差し伸べられて、恐かったのです」
「見捨てられるのが？」
「それもありますわ。ですが、何よりも、憎悪に焼いていたこの身が変わるのが恐かった。自分一人だけが幸せを掴もうなんて、許したくはなかった」
二人は互いの事を何一つとして知らない。ただ一点においてのみ、分かり合っていただけなのだ。
「自分が幸せになったら、死んじまった家族に申し訳が立たない。でも、普通に生きていくだけで文句を言われる筈もなけりゃ、誰かに後ろ指を指される心配もない」
「勿論、分かっています。ただ、私にはそんな簡単な事が出来なかった。あなたは、出来た。それだけの話ではなくって？」
アイネは一に背を向けて、ゆっくりと、この時間を噛み締めるように立ち上がる。
「……あなたには、申し上げた通りの終末をお目に掛けられませんでしたね」
一にはアイネが今から何をするのかが分かっていた。
「気にしなくて良いよ、そんなの」
「今日は楽しかったですわ。ふふ、勝手な話かとはお思いでしょうけれど」
「なあ、そっち行くと危ないぞ」
アイネは屋根の縁ぎりぎりで足を止めると、スカートに手を突っ込んだ。
「迷惑な話ですけれど、あなたには是非、一つの終わりを見届けて

いただきたいのです。相手もいないのに、無意味な復讐に身を焦がした、一人の人間の終末を」

落ち掛けた陽の光を受け、レイピアの刀身が鈍く光る。

「俺、スプラッタは駄目なんだけど」

ここで、アイネを終わらせるのは簡単だ。このまま何もしないで、顛末を見届ければ良い。

「お願い。もう、私には何もなくなってしまったの。分からなくなってしまったのよ。ねえ、あなたならお分かりになるでしょう。支えを失ったモノが、どうなってしまうのかを」

「……やめろってば。死んでも意味ないぞ」

一の言葉を無視して、アイネは自らの喉元に刃先を突き付ける。

「では、どうしろとおっしゃるのですか？　私には帰るべき国も、頼るべき者もいないのです。私の悉くを塵に帰したモノ、ソレさえも憎めなかった私に、何をしろと？」

「何もしなくて良いんだよ。普通に暮らしてりゃそれで良い。俺だけじゃなくて、多分、お前の親がここにいたとしてもそう言うよ」

「死人は口を利きませんわ」

その通りだった。だが、一は怯まない。アイネをこのまま死なせたくない。

「……分かったよ。じゃあ、最後に一つだけ頼みがある」

「死に逝く者に託す事があると、あなたはそうおっしゃるおつもりですか？」

「後ろ、見てくれ」

訳が分からないままに、アイネは振り向いた。

最近、一人でいるのが妙につまらなくなった。寂しくなったと言い換えても、差異はないと思える。

「……くだんね」

物思いに耽りながら、三森は自室のベランダへと出た。銜えてい

た煙草に火を点けると、緩やかに紫煙を吐き出していく。
「似合わん顔だな、三森冬」
三森は煙草を吐き出した。
「……てめェ、誰に断って私の部屋にきやがったンだ？」
「誰に口を利いている。私はオンリーワン近畿支部情報部二課実働所属、春風麗（はるかぜうらら）だぞ。好きな状況は二死満塁。嫌いな状況は一死一、三塁。好きな球種はターミネーター。嫌いな球種はプレデター。パシフィックよりもセントラルが……何故止めない？」
ベランダの柵に立つ春風は、突然現れた事に対して詫びもせず不満を露にする。
「いや、止めなかったらいつまで喋るンだろうなって」
「ふん、悪趣味な奴だ」
「うるせェ。スパイダーマンみたいなポーズ取ってないでそっから退きやがれ、目障りだ」
「そうか」
春風は気にした風もなくベランダに足を置いた。
「こんな時間に何の用だよ？　くだらねェ用事だったらぶちのめすぞ」
「三森冬、貴様の顔を見たくなったのでな」
瞬間、三森は拳を繰り出す。その所作からは一切の情けが見当たらない。
が、彼女の拳は誰もいない空間を食い破るに過ぎなかった。
「相変わらず血の気の多い奴だ」
春風は再びベランダの柵に陣取っている。
「いつかてめェの仮面引き剥がしてやる」
「それよりも三森冬、先程面白いものを見たぞ」
「私は今まさに面白いもんを見てるけどな」
三森は吐き出してしまった煙草に目を遣ってから、新しいものを口に銜えて、
「一一と見知らぬ女が街を歩いていた。何やら、駒台山の方へ向か

っていたな」
落とした。
「……風がつえェな、今日は」
「そうか？」
「そうなんだよっ、つーか、そンなの私に関係ねェだろうが。あいつがどこで何してようが知りたくもねェよ」
「そうか。では、その相手がフリーランスだとしてもか？」
流石に、三森の表情が変わる。
「『貴族主義』。名前ぐらいは聞いた事があるだろう。鞭とレイピアを操る破滅主義者だ」
「今まで動かなかったと思えばこれかよ。畜生、毎度毎度大凶引き当てやがってあの野郎、どこまで迷惑掛けやがンだ」
「迷惑ではなく、心配の間違いではないのか？」
「ちっ、ちげェよ！　間違ってないっつーの、馬鹿じゃねーかお前」
「私は心配だがな」
時間の流れが凍り付いたように、三森には感じられた。
「……冗談だよな？」
「……当たり前だ。心配と言えば、奴らの相性が合っている事ぐらいだな」
「あ、相性……？」
「何を狼狽えている。三森冬、貴様は気付いていなかったのか、一一の異常性に」
「異常だァ？　あいつは別に、普通だろ」
春風は笑う。彼女という人間を良く知っていない限りは分からない、僅かな変化ではあったが。
「貴様がそう思うのならそれで良い。だがな、一一には気を付けろ」
「何が言いてェんだ」
「……奴は普通じゃない。奴は、人を動かす。変えるんだ。必ずな。一一が望んで、望んだ方に仕向けているのかどうかは分からん。しかし、私は恐い。一一が恐い」

「恐い？　あいつが？」
　買い被りも良いところだと三森は春風の言葉を鼻で笑う。
「現に私は変えられた。いや、現在進行形で変えられている。三森冬、貴様はどうだ？　一一と出会ってから何か思うところがあるのではないのか？」
「ねェよ。私は私だ。誰にも変えられやしねーよ」
「……そうか。では、私は帰るとしよう。そろそろアニメの始まる時間だからな」
　春風は言いつつも、何故かその場を動かない。彼女の視線は三森の部屋のある一点に注がれていた。
「あ？　帰るンならさっさと帰れよ」
「良いテレビだな」
「……あ？」
「なんでもない」
　風が吹く。夜風に紛れるかのように、いつの間にか春風は姿を消していた。
「……テレビ、だァ？」
　三森は釈然としないままベランダを後にする。部屋に戻って、何の気なしにテレビの電源を入れた。アニメが始まっている。頭を空っぽにしていても見られそうなアニメ。これが春風の言っていた番組だとは容易に想像が付いた。
　自分は変わったと、春風は言っていた。三森から見ても、それは偽りのない事実である。以前なら、自分たちと一が出会う前なら、あんな風にベランダで二人で話をする事もなかった。
「あいつ、テレビが見たかったのかな」
　灰皿を引き寄せ、煙草に火を点ける。
　変わったと言うならば、自分はどうなのだろうと、三森は改めて考えを巡らせた。
　春風は変化を恐れている。良くも悪くも、などは関係ない。単純に、彼女はあの日から動くのが恐いのだ。目を背け、忘れてしまう

のが許せないのだ。
——私は？
考えても考えても答えは出ない。しかし、存外に悪い気はしていなかった。
「けっ、つまンねェの」
テレビに悪態を吐きながらも、三森は結局チャンネルを変えなかった。

それが義務だと言うならば

燃え盛る炎の中、飛び散る血の中、アイネは確かに見た。
『――――――!』
父が死んでいく様を、しっかりと、見届けた。

男は世界の終末を望んでいた。女は世界の終末を望んだ。
だから、男は女に付いていったのである。自分では成し得なかった夢を目の前にぶら下げられて、ふらふらと付き従った。
その先に、何が待ち受けているのかも知らないで。否、知っていたとして、男は――。

一の言い付け通りに振り向いたアイネは、レイピアを手から落とした。からん、と、乾いた音を立てて地面に落ちたそれに目もくれず、彼女の視線は。
「ちゃんと見ろよ。綺麗だとか、そんな感想はいらないんだ」
彼女の視線は街に向けられている。眼下に広がる駒台の街には、そこかしこから灯(ともしび)が立ち上っていた。押し迫る闇に立ち向かうかの如く、家路を急ぐ者を導くが如く。現世的なネオンライトが、アイネには酷く崇高なものに思える。
「綺麗です。それ以外に何を申し上げればよろしいんですの?」
「だから、上っ面で返事すんなって。アレを見てさ、もっとこう根本的な……」
「根本的?」
「欲しくないか、アレ?」
一が指差す先にも街がある。しかし、先刻とは違うものに見えた。人が波なら街は海、アイネは夜の海を連想する。さしずめ、海に点

いた明かりは、夜空を瞬く幾万の星を映し出している鏡、と言ったところだろうか。
「……欲しい、ですか？」
「うん、欲しいと思う。つーか、俺たちはアレが欲しいんだ」
そうに決まってる。一はそう言い足して、言い切った。
「私も、アレが？」
人々が行き交う街の灯。誰かの帰りを待ち、団欒を共にする家々の灯。日常の灯。普通の、灯。
「駒台について何か知ってるか？」
アイネは何も知らない子供のように首を振った。
「あそこにはソレがいる。ソレがいるって事は勤務外もいる。フリーランスも一般人も、そうじゃない奴もたくさんいる。住んでてこんな事言うのはどうかと思うけど、おかしいよな、やっぱり」
屋根の上に座っている二人は、次から次に明滅する街の灯に目を細める。
「でも、あそこにいる人たちはそう思ってない。まあ、少しぐらいは色々あるけど、皆、それが普通になってるんだ。当たり前みたいに生活してる。ソレも、勤務外も、フリーランスも、そこそこに、だけど確かに生きていられるんだ」
「本当に、あなたは普通やそこそこ、それだけをお求めになりますの？」
もっと上を見ようとは、先へ進もうとは思わないのだろうか。
「普通ってのは意外と難しいんだよ。そんでも、お前が思ってるよりも簡単に手が届く」
「私でも……？」
「ああ。あそこなら、駒台なら受け入れてくれる」
こんな自分でも、こんなに汚れた自分でも。
途端、アイネの目から涙が溢れた。嬉しいからではない。悲しいからでもない。
「俺たちみたいなのはさ、きっと皆、あそこみたいに、ああいう風

に混ざりたいんだ。一緒に、普通になりたい。だから、人外が多いんだと思う。寂しいから、仲間がいるからついつい寄っていっちゃうんだよ」

「私も、あの街で明かりを灯せるのでしょうか？」

「……え？」

世界に絶望していた。世界を憎悪していた。でも、本心では、心のもっと深いところでは期待していた。見知らぬ誰かが手を差し伸べてくれるのを待っていた。誰でも良い、救い上げて欲しかった。この世界で裏切られ、手酷く扱われても尚、期待していた。

「……私、本当はあなたの事を存じ上げておりました」

「俺を？」

「フリーランスとしてやってきた時、この街の勤務外について色々と……その。それで、あの、誠に勝手な話だとはお思いになられるでしょうけど、あなたは、私と良く似ていらっしゃる、と」

正直に話すのが恐い。一は見ず知らずの自分を親切にしてくれた。彼を裏切るのが、アイネにはどんな事よりも恐ろしく感じてしまう。

「あー、まあ、俺は気にしないけど。俺たちが似てるってのは何となく分かるんだし」

「本当に、ごめん、なさい……」

興味の湧いた相手を付け狙うなんて、変質者か偏執狂の領域である。自らを深く恥じ、浅ましくも、出来るならば許されたいと思った。

「あー、ちなみにさ、いつから俺を？　もしかしてヤマタノオロチが駒台に出た時から？」

「え、ええ。その通りですわ」

「……やっぱり」

「やっぱり？」

「あ、ああ、そんぐらいから人が増えたからさ。時期としてはやっぱりそこかなあって」

あからさまに取り繕った笑みを見せる一だが、アイネは、嫌って

いる相手に笑顔は見せない筈だ、だから大丈夫、きっと自分を許してくれている！　と、結論を出すので精一杯だったのである。
「深くは考えないようにしとくよ。だからアイネも気にしないでくれると助かる」
言われるまでもない。何度も頷き、人知れず安堵の息を吐く。
「……良し、それじゃあ帰ろうぜ」
帰る？　どこに帰ると言うのか？　アイネは立ち上がれず、一を見上げた。
「今日は俺の知り合いんちに泊まれば良いよ。そうだな、明日から住むところを探そうか」
――駒台に住む。
アイネにとって、人外にとっては願ってもみない、願いすらしない、魅力的な提案だった。一つどころに落ち着ける希望が、降って湧いたのである。
「……あ、あの、でも」
「ああっ、知り合いっつってもノーマルな女の子だから平気だよ。がらがら声で、変な喋り方するけどさ」
「そういった事ではないのです。私、本当にあの街で暮らしても良いのでしょうか……」
「じゃあ、誰に許可を取るつもりだよ？　良いんだよ、普通に生きてくだけなんだから。誰にも文句言わせないし、誰も気にしないって」
「本当、に？　本当に私だけが幸せになっても……？」
復讐を誓った。父に、母に、死んでいった者たちに、他ならぬ自分自身に。
家族を焼かれ、故郷を焼かれ、尊厳は犯され、憎悪に身を焦がした。
死んでしまう。消えてしまえ。こんな世界、終わらせてやる。
そう思ったのは事実だ。紛れもない、誤魔化しの利かない厳然たる、確固たる思いは今でも胸の内にある。

同時に、救われたいとも思っていた。否、今も思っている。復讐するべき相手もおらず、ただただ暗い感情に身を任せてきた。心は磨り減り、体は『貴族』として暮らしていた時期に比べれば著しく変貌した。人を外れた身に堕ち、人々からはフリーランスと――『貴族主義』と罵られる。

「……でも、でもっ」

一人で世界の悪意と向き合うには、アイネはまだ幼過ぎた。彼女が苦汁を舐め続けて来たのは――。

「でも、お父様はソレの牙で五体を噛み砕かれました！　お母様はソレの爪に四肢を引き裂かれたっ！　あいつらがっ、あいつらが戦えと言うから！」

今でも思い出せる。まだ焼き付いている。アイネ＝クライネ＝ナハトムジークが終わってしまったあの日を。

「何よりも、誰よりも許せないのはっ、私なのです！　皆、皆皆皆っ、皆が私を逃がす為に戦った事が許せないっ、私だけが幸せに生きていけるなんて、思うだけでも許されてはいけないのです！」

惨たらしく殺された。呪いを吐き続けながら食い殺された。生きながら、死をまざまざと見せ付けられた。頭を割られた。胸を貫かれた。足をもがれた。腕を引き千切られた。顔を抉られた。肉を焼かれ、骨を燃やされた。何度も助けを求めた。祈りを捧げた。しかし神は降り立たず、悪魔だけが街に足跡と爪痕を残した。食い、飲み、大いに楽しみ、宴に興じていた。関係なかった。家族も、友人も、自分を犯し抜いた者たちも、ただ、そこにいただけで命を奪われた。

なのに、自分だけはまだ死なないでいる。何もないのに、おめおめと生き長らえている。

そこにいた誰よりも多くの生を見届けながら、死を見ていながら、憎悪を受けながら、それでも死にきれないでいる。

「あの日から、私が今日まで生き恥を晒し続けてきたのはっ、未練がましくも世界にこだわり続けたのはっ、悪魔の采配なのです！

神はどこにもおられません、どこにも降り立ちません。私は、復讐（ディ）の悪魔（アプロ）によって生かされました。世界の終末を成し遂げられなかった今、この身と魂を悪魔に捧げるしかないのです」

やはり、自分は生きていてはいけないモノなのだ。アイネは一に向き直り、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「私を殺して」

一時でも、ほんの一瞬でも幸せなど望んではいけなかった。望む事すら許されなかった。

「違うよ。いや、神様なんかいないってのには賛同するけど、悪魔がアイネを生かしたなんて、俺は認めない」

「……殺してと申し上げた筈です」

「アイネ、お前はさっき自分で言ったじゃないかよ。生かしてくれたのは誰なのかってさ」

――やめて！

復讐すら、何かを憎む事すら満足に出来なかったこの身など必要ない。

「殺して」

「お前は悪魔に助けられたんじゃない。家族に助けてもらったんだ」

「殺して、殺してっ」

――もうやめて！

「皆、意味もなく殺された訳じゃない。理由もなく、誰かに何か言われただけで死にに行く筈がない」

「殺してっ！　殺してよ！」

「皆お前を助けたかったんだ。皆が皆死んだとしても、お前だけは生かしてやりたかった。なのに、お前は殺してくれって言うのか？　繋いでもらった命を捨てるって言うのか？」

「あああああああああっ！　殺してっ、殺して殺して殺して！　もう殺してくださいっ、お願いだから！」

「……っ、親はっ！」

これ以上は聞きたくない。アイネは耳を塞いで絶叫するも、一は

冷酷なまでに続ける。
「子供には生きて欲しいと思うに決まってんだ！　生きてるだけでも良い、出来るなら幸せになって欲しいって願うんだ！」
「あああああああっ！」
「そう思うのは、願うのはっ、子供を産んだ事に対する責任なんだ！　だから、生かされたお前は生きなきゃならないんだよ！　どうしてそんな事が分かんないんだよ！」
死んだ。たくさん死んだ。たくさん殺された。一の言葉は綺麗事でしかない。アレを一度でも見てしまえば、綺麗ではいられないのに。
「お前の親はこんなの望んでない！」
生きる目的も、意味も、貴族としてのプライドも失った。
「だったら！　だったらどうすれば良かったの！？　私はこうするしかなかった、こうしないと生きていられなかった！」
それでも尚、世界にしがみ付いていたのは、『貴族』の名を捨てられなかったのは――。

『――――生きろ』

今でも、覚えている。忘れられる筈もない。
「死んだ奴が復讐してくれって言ったのかよ、親が苦しんで生きろって、そう頼んだのかよ。違うだろ」

『――――生きろ！』

何も言わなかった。誰も頼まなかった。自分勝手に、その場の感情に任せて解釈しただけだ。生きろと、その一言を捻じ曲げた。そうしないと、悲しみで潰れてしまいそうだったから。
アイネは気付く。今まで、自分は世界を憎んでいたのではない。逃げていたのだ。目を逸らし、耳を塞ぎ、心を閉じていたのである。

――世界の、中で。
「でも死ぬしかないの！　私にはもう何もないっ、誰も助けてくれない！　全部、全部遅過ぎたんだからぁっ！」
「アイネ、俺と友達になろう」
「……な、何、を？」
差し伸べられた手に、アイネは戸惑う。
「死にたくなかったんだよな？　世界なんて本当は終わらせたくなかったんだよな？　誰かに、傍にいて欲しかったんじゃないのか？　だったら、まだ遅くないよ」
「……わ、私、私は」
「あ、同情とかで言ってるんじゃないからな。俺が、アイネと友達になりたいから言ってるんだからな」
今までアイネが生きてきたのは、自分勝手に解釈した、父の遺した言葉に縛られていたからだ。『貴族』を捨てきれなかったのは、父の見せた背中のような、貴族としての高貴な生き方に憧れていたからだ。
「私、は……」
世界にしがみ付いていたのは、もう一度――友達が欲しかったからだ。
こんなに簡単な事から目を逸らし続けてきた。だから、幸せを掴んでも良いのだろうかと、中途半端に伸ばした手が、宙をさ迷う。
「……私みたいな、こんな女が……」
「普通に生きるのが、遺された人の義務なんだよ」
一はその手を強引に握り締めた。久しく感じていなかった温もりに、アイネの涙腺がまた緩む。
「あなたと友人になって、この街で生きるのが、私の義務？」
「まあ、高貴な、とは言えないけどさ。駄目、かな、俺が相手じゃあ」
「いいえ、いいえっ。それが、それが義務だと言うならば」
世界が終わる。アイネ＝クライネ＝ナハトムジークの世界は今宵、

終わった。明日からは、彼女にとって新たな世界が始まる。
これもまた、一つの終末なのだろう。

街の灯も少なくなった頃、屋根の上には、人影がまだ一つ残っていた。
「お疲れさまでした、と、私は見ます」
その影に重なるように降り立ったシルエット。
「よう、今日は悪いな。ここ、借りてたよ」
そう言って笑うのは一、
「今日はここからの眺めよりも、もっと素晴らしいものを見られたと、わたしはそう見ます」
彼に答えるのは、駒台に居着いているガーゴイルと呼ばれるソレだ。
「……あー、どこから見てたんだ？」
「ずっとですが」
「ずっと、か？」
「ええ、ずっとです」
しばらくの間、両者から声が出ることはなかった。
「ところで一さん、アイネさんはどちらへ行かれたのですか？」
「ああ、俺の住んでるアパートまで、一人で行ったよ」
「お一人で？」
「一人にしてくれってさ。なんか、泣いてる顔を殿方に見せるのはどーたらこーたら言ってた」
今更気にする事はないのにと、一はぼんやり思う。
「ま、今日は本当ありがとな。ガーゴイルのお陰で助かったよ」
「ストーカーの正体、ですか」
一は頷く。
彼は以前から、具体的にはヤマタノオロチが駒台から消えた時期から、得体の知れない視線、気配に悩まされていたのだ。最初は勘

違いだと思っていたし、自意識過剰と笑われたくはなかったから、ストーカーがいると大っぴらには出来ないでいたのである。

それでも、ふとした時、何かに見られている感覚は拭えなかった。眠る時でさえ、安らかな気持ちにはなれなかった。

事態が進展したのは数日前、ガーゴイルから「ずっと前から、知らない人があなたの後ろにいます」と言われてからである。勘違いではなかった、本当に誰かが見ていたのだと安堵する反面、正体を突き止める事に対して恐怖を覚えた。しかし、このままでは何も解決はしない。相手には気取られないようガーゴイルに調査を頼み、遂に、ストーカーが誰なのかが判明した。

アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。フリーランス『貴族主義』。

彼女こそ、ここ最近一の精神を磨耗してきたストーカーだったのである。

『訴えてやる、そして勝ってやる！』

しかし、一が駆け込んだ警察署員の反応は冷ややかなものだった。挙句、男が調子に乗るなだの、ストーキングされるような顔じゃないだのと（この文章には誇張表現が含まれております）人格を否定され、彼は大いに傷付いたのである。ここに至っては、もはや自身でどうにかするしかない。向こうがこちらを調べているならばと、一もガーゴイルの力を借りてアイネの事を調べあげた。

『あらん限りの、必要以上の弱みを握ってこの街から追い出してやるぜ、がはは』

一の下種な企みは、彼女の過去に触れた瞬間霧消したのである。ああ、似過ぎていた。アイネは自分と、同じだった。昔の自分を見ているようで、一は久しぶりに嘔吐した。

「あんな可愛い子だとは思ってなかったけどな」

「一さんも男なら、冥利に尽きると見ますがね」

「……正直に白状すりゃ、うん、ちょっと嬉しかった」

相手の正体が分かったとはいえ、アイネは人外魔性のフリーランス。どうやって接触すれば良いのか、そもそもこちらの話を聞いて

くれるのかすら怪しい。
「まさか向こうから来るとは思ってなかったよ」
「手間が省けたのでは？」
「結果的には、だけどな。今朝アイネの顔見た時、死ぬかと思ったぜ。いや、今日はビクビクしっ放しだったな」
偶然の産物か、神の悪戯か、もしくは悪魔の采配か。何はともあれ機会を逃す訳にもいかず、かと言って話も切り出せず、ただアイネに従うがまま街中を歩き回っていたのである。
「失せろストーカーだとか、次は警察に行こうとか、とっとと言えば良かったんだけど」
「楽しそうに見えましたよ、一さん」
「途中からはね」
似ていると、そう実感してからは違った。アイネから感情を引き出したいと――助けてやりたいと思い始めたのである。
「あいつさ、少し前までの俺とそっくりだったんだよな」
「そっくりと言うと？」
「一人が嫌なくせに近付くなってオーラ出してたり、友達や仲間が欲しいのに、手を差し出されてもパーンって弾きそうなところ」
「ほほう、流行りのツンデレって奴ですね」
「いやー、もう下火じゃねえの？」
「では、今は何が流行っていると一さんは見ますか？」
「……喪服、かな」
また会話が止まった。
「ああ、忘れるところでした。一さん、例の種を見せてもらえますか？」
一はアイネから受け取った布袋の口を開け、掌に種を乗せる。
「これだ。黄衣も見た事ない種類のだから、もしかしたらとは思うんだけど」
「……ふうむ」
ガーゴイルは鈍色に輝く翼を振り、様々な角度から種に視線を送

った。
「手に取れば？」
「感触に重きを置いていないですから。やはり、物事を判断するには何よりも、見るのが一番だと、わたしは見ます」
「そういうもんか。んで、どうだ？」
「長くこの世界を見てきましたが、こんな種は見た事がありませんね」
「そっか。お前が知らないってんなら、マジでトリフィドかもな」
今、自分が握っているのが世界を終わらせるかもしれない種ならば、世界とはなんて小さなものだろう。掌の微かな重みに、一はそう思わざるを得ない。
「……この種、アイネさんはどこから手に入れたのでしょうね」
「確か、薄汚いジーさんにもらったって言ってた気がする」
「ふうむ。一さんがわたしを頼ってくれるのは嬉しいのですが、実はわたし、植物には明るくないんです」
「え？　あれ、そうなのか？」
意外な発言に一は目を丸くする。ガーゴイルなら何でも知っていると思っていたのだ。
「ですから、わたしがこの種を知らないのも仕方がないと見ます」
「じゃあ、これって、何の種なんだろ」
「……一つだけ心当たりが」
「ん、何？」
「梅干しの種です」
「うめっ……！？」
まさか、まさかまさか。一の思考がこんがらがる。日本人ではないアイネが知らなかったのならまだしも、黄衣でさえ知らないと断じ、一自身も見た事のなかった種が、トリフィドではなく、ただの、梅の種。
「……嘘だろ。あ、でも、そう言われたらそんな気がしてきた」
「日頃見ているものを改めて別の視点から見ると、案外違った風に

見えがちですからね」
「俺たちは、梅干しの種に踊らされていたのか……」
「梅だけに酸っぱい話ですね」
「別に上手くないからな、今の」
一は軽く溜め息を吐く。
「なんか、どっと疲れたな」
「ええ、そのように見えますね」
夜の海を見ながら、一は頭を掻いて立ち上がった。
「そろそろ帰るわ」
「ああ、一さん。その種、もらっても良いですか？」
ガーゴイルは一の持つ布袋に視線を送っている。
「梅干しだぜ、これ」
「興味がありまして。よろしいですか？」
「まあ、こんなもんで良けりゃ」
「では、翼に結わえ付けてもらえますか？」
一は指示通り、ガーゴイルの翼に袋の紐を結わえ付けた。
「ありがとうございます」
「ん。じゃ、今日は色々とありがとな。お前には借りが出来たな、何かあったら言ってくれ。出来る範囲で力になるよ」
「いえいえ、では一さん、お休みなさい」
「ああ、お休み」
世界が終わる。
一の世界は今宵、終わった。明日からは、彼にとって新たな世界が始まる。
これもまた、一つの終末なのだろう。

街の灯も見えなくなり始めた頃、屋根の上には、影が一つ残っていた。
「さて、そろそろ行くとしましょうか」

翼の生えた影――ガーゴイルは駒台の街並みをしっかりと眼に焼き付ける。当分の間、この景色とはお別れなのだ。一つどころに留まる事など滅多になかったが、どうにもこの街は、彼の心を強く揺さぶる。

ガーゴイルは翼を広げ、一に結わえてもらった袋を見遣った。

「一刻も早く処分したいところです」

とりあえず、人のいない場所を探そうと決意する。差し当たり、海か、山か。長旅になりそうだが、致し方ない。こんなものが芽吹いてしまえば、世界は終わってしまうのだから。

一も、アイネも、黄衣も種の正体を見抜けなかったのは、ガーゴイルにとって、世界にとって僥倖と呼べた。こんな災厄の種を彼が持っていては、今頃世界が終わっていたかもしれない。

どうしてあの場面で嘘を吐いてしまったのか、ガーゴイルには分からない。今まで傍観者として、客観的に、感情を込めずに世界を見続けてきた。自分の意思を挟まずに、決して何とも思わずに。今になって、どうして。

「――ああ」

旅立つ前、もう一度街を見下ろした時に気付く。

自分は、この街が好きなんだと言う事に。

世界が終われば、駒台も終わってしまう。もしかしたら、そんな、人間めいた感傷がガーゴイルを動かしたのかもしれない。

「……では、行くとしますか」

翼をゆっくりと広げ、眼下の街に別れを告げた。それでも、出来る限りゆっくりと飛ぶ。別れを惜しむかのように、ゆっくりと、ゆっくりと。

次に出会うのはどんな街だろうかと思いを馳せ、ガーゴイルは目を瞑った。

月が照らし出す街。雪に埋もれた街。風が吹き荒れる街。

叶うなら、この街のように、良い人で溢れた、良い街でありますように。

闇が街の灯を侵食し切った頃、屋根の上には影一つとして残っていなかった。

ああ、こうしてまた世界が終わる。

ガーゴイルの世界は今宵、終わった。明日からは、彼にとって新たな世界が始まる。

これもまた、一つの終末なのだろう。

だが、誰か気付いていただろうか、ガーゴイルがぶら下げていた布袋に、穴が開いていた事に。

アリとキリギリスと

死者はどこに行くのか。

命をテーマとした話は幾度となく、いつの時代でも取り交わされてきた議論だろう。尤も、結論が出たためしはない。それでもだ、国や宗教によって死についての理解、死後の世界についての差はあれど、死者は死後、どこかには行くと、多くの者が信じている。信じてはいなくとも、そうあるのだと流されている。

日本では古代、黄泉の国である彼岸に行くとされ、西欧、キリスト教において死とは、天国に行くことだとされ、古代インドのヴェーダ聖典においては、人間の肉体は死によって消滅するが、魂は不滅だとされている。ウパニシャッドでは、肉体が死んだ後、魂の前には二つの道があり、一方はブラフマン――即ち、世界の魂――に至る道であり、もう一方は地上で肉体を得て再生する道であるとされた。宗派によって考え方は違えども、仏教では馴染み深い、輪廻転生と呼ばれる概念である。

死は全てのものに等しく訪れ、酷く平等だ。しかし、だ。おかしな話ではあるが、国によって、宗教によって、死者が死後、どこでどうなるかは違うのだ。

「野球ぅ！？」

青天の霹靂とはこの事か。

オンリーワン北駒台店バックルームにて、一（にのまえ）はそんな事を思いながら、それでもこの状況に対応する為、とりあえず大声を上げた。

「なんだ、野球を知らんのか、一」

一の大声に、店長は耳を塞いで顔をしかめる。彼女は口に銜えていた煙草を床に吐き捨て、出来の悪い生徒を見るような目付きで一を見遣った。

「野球とはな、棒切れで球を打つくだらん遊びの事だよ」
「野球を馬鹿にしないでください。俺が聞きたいのは、どうして野球をしなきゃいけないのかって事ですよ」
仕事が終わって、後は帰って眠るだけだった筈なのに。一は溜め息を吐きながらも、店長の表情から、彼女の意図を探ってみる。
「良いから、やれ」
無理だった。
「あの、とりあえず一から説明してもらえませんか？」
「まあ、お前が頭を下げて頼むのなら仕方がないな。説明してやっても、やぶさかじゃあない」
つまり、頭を下げろと店長は言っている。
「……お願いします」
「角度が足らんが、ま、及第点だな」
店長は口の端をつり上げて、新しい煙草に火を点けた。
「三日前の事だ。私は夜道を歩いていた」
「……店長って歩いたりするんですね。俺はもう椅子とお尻が合体しているんじゃないかと」
「度胸のある男は嫌いじゃない。お前は嫌いだがな。で、あー、なんだ、私はどこまで話していた」
「夜道を歩いていた、までです」
店長はそうかと頷き、それきり口を開かない。
「あの、続きは……？」
「推して知れ」
「あそこからどう推せってんですか。まあ、誰にだってそんな調子ならいざこざの一つや二つ起こりますか……喧嘩の相手は誰ですか？」
どうせ見知らぬ酔っ払いくらいのものだろう。そもそも、一にはこの店長に喧嘩を売れる人間が想像出来ない。
「いや、覚えていない」
「ああ！？」

相手も分からない、覚えていないのに、何を偉そうに。一の語気もいささか荒くなる。
「目上の人間にああはないだろうが、ああ？」
「あああああっっっっちぃ！」
店長はおもむろに立ち上がり、吸い掛けの煙草を一の首筋に近付けた。
「覚えていないものは仕方ないだろう。何しろあの日はしこたま飲んでいた……筈だからな」
あやふやな答えだった。
「火傷したらどうするつもりだったんですかっ！」
「責任を持って楽にしてやるから心配するな」
「弁護士を――医者を呼んで欲しいです」
「分かった分かった、もう良いから黙れ。とにかく、野球で勝負だと言われたんで受けて立った。簡単だ、そうは思わんか、一」
口答えは意味を成さない。まだ店長の指の間に火の点いた煙草が挟まれている以上、一は首を縦に振るしか出来ないのである。
「はあ、しかし野球とはなんでまた」
「さあな。好きなんだろうよ、野球が」
「日時や場所は決まっているんですか？」
「明日、河川敷グラウンドで午後一時からだ」
呆れてものも言えないとはこの事なんじゃないかなと、一は壊れつつある思考回路でもって、辛うじてそう思った。
「無視しましょうよ。どうせ相手なんか来ていませんって。今からじゃ人数揃わないだろうし」
「そうもいかん。オンリーワンがたかが野球の勝負から逃げたとなれば、一般にも、上からも叩かれる。私は痛いのが嫌いだからな」
「だったらその性格直しゃ良いのに」
睨まれて、目を逸らして押し黙る。
「一般のギャラリーも来るだろう。無様には戦えないな」
「……逆らうのも馬鹿らしくなってきました。で、人数は揃ってる

んですか？　野球って九人対九人でやるゲームなんですよ」
「知っている。一、あまり大人を舐めない方が良い」
「はあ、なら、俺を入れて何人集まったんですか？」
店長は灰皿に視線を落とし続けたまま、指を二本立てた。
「……あと、二人？」
「私とお前で二人。残りは八人だな」
「計算が合ってないんですけど。俺と店長、二人いるなら、残りは七人でしょ」
頭が痛い。気が重い。
「何を言っている。私が体を動かす筈がないだろう。一、お前が残りの選手を集めろ。これは監督命令だ」
血を吐くルール。
「……八人って。ん、あれ、三森さんたちには声掛けたんですか？」
「ああ、聞いた。だがな、あいつら酷いぞ。一も二もなく断りやがった。くそ、時給下げてやる。一時間三百円で働かせてやる」
「あの、俺も断りたくなってきたんですけど」
つまり、北駒台店で馬鹿げた事に参加するのは自分しかいないのである。モチベーションも何もなかった。
「断ったら毎日耳元で愛してると囁いてやる」
「いっそ殺して」
「どこまで失礼な奴なんだお前は。まあ、良い。とにかくオンリーワンの面目を保つ為にも八人集めてこい」
「明日の昼までに、ですよね？」
一はバックルームに掛かった時計に目を向ける。現在、時刻は午後一時過ぎ。おおよそ、残り二十四時間で草野球の面子を揃えなければならない。
「もし集まらなかったら……？」
「やる前から不安を口にするな。だが、まあ、そうだな。九人揃わなければクビにでもするか」
「……誰を、ですか？」

「聞きたいか？」
アルバイト、探そう。
一は私服に着替え、店を飛び出した。彼の目尻からはきらきらしたものが光っていたという。

野球。ベースボール。
ここで多くを説明するまでもなく、広く知れ渡っている球技である。さて、野球には細かいルールや巧みな戦術、試合を引っ繰り返す豪快な一発、打って走って守ってと、様々な魅力が詰まっている、の、だが。大前提として、最低でも一チーム九名の選手が必要なのだ。
――九。
人間とは、七以上の数をパッと見て認識出来ない生物である。八以降は九でも良いし、たくさんと形容しても良いのだ。
つまり、一が集めなければならないのは休日の麗らかな昼下がりから、相手すらも分からない草野球に興じてくれる人間である。たくさんの馬鹿を集めなければならないのだ。
「無理やな」
「ちっとは考えてくれよ」
とりあえず、一は一度アパートに帰った。そこで、何故か彼の自室で寛いでいた半同居人、歌代チアキを勧誘してみたのだが、
「無理ったら無理。幾らししょーの頼みでも聞かれへんもんは聞かれへん」
けんもほろろに断られてしまう。
「なあ、頼むって。八人集めなきゃクビになっちまうんだよ」
「ふーん。そしたら二人で商売でも始めよか」
「商売？」
「くふふ、ラーメンの屋台でも引こか」
「……楽しそうだけど、却下な。つーか駄目なら駄目で理由ぐらい

聞かせろよ」
　チアキはこたつに寝そべりながら剥いたみかんを口に運ぶ。
「んー、明日日曜日やん」
「ああ、そうだな、日曜日だな」
「なんで休みの日に昼から起きんといかんの？」
「てめぇ、毎日が日曜日のくせに！」
「馬鹿にすんなや！　まだ曜日の感覚ぐらい残っとるわ！」
「ギリギリじゃねえか！」
　しかし、一にも彼女の気持ちが痛いほど分かっていた。休日に、いや、休日でなくとも好きでもない事の為に体を動かしたい筈もない。
「野球、嫌いなのか？」
「好きやで。けど、うちが好きなんは見る方やからなあ。見てるのと実際にやる好きってまたちゃうやんか」
「じゃあ、野球経験は？」
「あらへん。やろうとも思わへん。いやー、師匠残念やったなー、うちがエースで四番やったら助けたんのにぃ」
　チアキはへらへらと笑って一の肩に手を乗せる。
「弟子とかもう言ってるだけだよな。師匠の危機に駆け付けない奴は破門だ破門」
「せやかて師匠、最近おもろい事言うてくれへんやん。師匠やったら弟子に稽古ぐらい付けてくれてもええんとちゃう？」
　確かに。最近はチアキを放置していたかもしれない。一は腕を組み、咳払いをしてからおもむろに口を開いた。
「うむ。では一つ聞かせてやろう。これは俺の友人から聞いた話なのだが……」
「師匠って友だちおったっけ？」
「話の腰折るんじゃねえよ。リアルで折るぞ馬鹿弟子が」
　もう一度咳払い、一は気を取り直して話を再開する。
「どうやら、関西人はオチのある話を好む傾向にあるらしい。と言

うより、オチのない話を許さないらしい」
「なっ……！　そんなん無理に決まってるやろ！」
「ああ、どんだけストック用意してんだって話だよな。だが――事実だ」
　チアキの息を呑む音が部屋に響いた。その音を合図に、一は再び口を開く。
「俺の友人、便宜上Ａとしておこう。Ａは生まれも育ちも関東で、Ａの友人、そうだな、便宜上Ｂにしておこう。Ｂは関西出身だった。彼らは顔を合わせては会話に花を咲かせるのだが、主導権はもっぱらＢが握ってたらしい」
「ふんふん」
「ある日、Ｂが聞き役ばかりのＡに話を振れと言ったそうだ。Ａは突然のネタ振りに困ったが、最近犬を飼った話、学校に遅刻してしまった話など、身近に起こった事を一生懸命話した」
「ええ子やん」
「しかし、Ｂはその話を気に入らなかった。Ａが話し終わった後、Ｂは冷たい口振りでこう言ったそうだ。『で、オチは？』と」
「ふーん」
「おい、反応が薄いぞ」
　チアキは一に背中を向け、みかんを頬張りながらテレビを見ていた。
「師匠が話をしてやったってのにその態度はなんだ！」
　が、彼女は悪びれる様子もない。激昂して立ち上がった一を見る彼女の視線は、見上げている筈なのにどうしてだか、遥か高みから見下しているような、冷たい瞳である。そして一言。
「で、オチは？」
「え？」
「オ・チ・は？」
「……今ので、終わりです」
　チアキは鼻で笑い飛ばすと、みかんの皮を一の顔に投げ付けた。

「腕が落ちたなあ、なあ師匠？」
「返す言葉もございません……」
「まあ、ええわええわ、かまへんよ。おっしゃ、じゃあ一、たこ焼きとミックスジュース買うてこい」
泣いてない。きっと、みかんの汁が目に沁みただけだ。

野球のメンバーの確保は出来ず、弟子（みたいな存在）であるチアキにも叱責を受け、一は意気消沈した様子で部屋を飛び出していた。
「ごきげんよう。今日はたいそう暖かですね」
「え？」
アパートを出ようとした時、一は後ろから声を掛けられる。
振り返ると、上下黒のジャージを着た女性がいた。買い物帰りなのであろう、スーパーの袋をぶら下げている女性の容姿こそ、決して悪くはないのだが、化粧をしておらず、腰まで届く長い髪の毛を縛る事なく、更に、瓶底眼鏡が野暮ったい印象を醸し出していた。有体に言ってしまえば、勿体ない。
「慌てていらっしゃるように見えますが、お出かけになられるのですか？」
しかし、一はこの女性を知っていない。完全に初対面で、紛う事なき見知らぬ人物。親しげに話し掛けられるような間柄ではないのである。
「……えーと」
もしかして、同じアパートの住人だろうかとも考えるのだが、ここ中内荘に部屋を借りてから数年、初めて目にする人物である。
「どうかなさいました？」
「ああ、いえ……」
警戒するも、盗人にしてはやけに丁寧だ。だがしかし、分からないモノからは逃げるが上策。一はひとまず、この場から立ち去ろう

と決意する。
「少し急いでいますから」
「そうでしたの。ごめんあそばせ、引き留めてしまいましたね。では、いってらっしゃい、ウーノ」
「うーの？」
「お気に召しませんでしたか？　にのまえはじめとは日本語で一とお書きになるんでしょう？　その、お、お友達になるのでしたら、あだ名が必要だと……」
「ああ、数字のウーノ。イタリアでした――」
言い掛けて一は気付いた。どうして女性は自分の名前を知っているのだろう。いつの間にあだ名で呼び合う関係になっているのだろうか、と。
「――じゃなくて、俺、自己紹介しましたっけ？」
「……？　はい、お互いに」
「ええっと、それはいつ頃のお話でしょうか……」
「つい先日の事ではありませんか。それともあなた、私をからかっていらして？」
誰だこいつ。育ちの良さそうな言葉遣いに野暮ったい格好。そんな女性に一切の心当たり、一にはない。
「からかってるのはそっちじゃないんですか？」
「……先に仕掛けたのはあなたでしょう。卑しい方、敬語なんかお使いになって。私の反応をご覧になるおつもりだったのではなくって？」
「なっ、なっ、なあっ！？　初対面なんですよ！？　失礼とは思わないんですかっ」
「しょっ……！？」
女性の顔色が青くなり、みるみる内に赤くなっていく。
「ふ、ふふ……」
そして、笑う。彼女から得体の知れない凄味を感じ、一は後退さった。

「初対面、初対面、初対面！　なんと甘美な響きなのでしょう！　ええ、ええ、よくってよ、よくってよ！」
「なっ、何がっ」
「私はまた裏切られたのですねっ、ああっ、あなただけは私のお友達と信じていましたのに！」
「……あれ？」
ふと、一は既視を感じた。前にも似たような事があったような。そんな気がしてならない。
泣き崩れる寸前の女性にも、覚えらしきものがある。姿こそ違えど、言葉遣い、滲み出る上品な佇まい。何よりも、彼女の根暗な思考回路が誰かを彷彿とさせた。
「……あのさ、もしかしてお前、アイネ？」
ぱああっ。女性は音が聞こえてきそうなくらいの笑みを満面に浮かべると、涙をジャージの袖で拭った。
「やっとお気付きになられましたか。そう、私は、私こそが、もしかしなくてもあなたのお友達、アイネですわ」
「ああ、やっぱり……」
女性の名はアイネ。アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。フリーランス『貴族主義』であり、破滅主義者であり、ちょっとネガティブな一の友人でもある。
「ああ、ああ、これがお友達同士のやり取りなのですね！　マンネリを打破する為のウィットに富んだご挨拶！　文化とは本当に素晴らしいですわっ」
「いや、普通に分からなかったんだけど」
出来の悪いミュージカルの、出来の悪い役者よろしくクルクル回っていたアイネの動きが止まった。
「だって格好が違い過ぎるじゃねえか。ほら、前はドレス着てたし、なんつーの？　こう、髪型はくるくるって天元突破しそうなドリル頭で……」
「お友達ですから申し上げますけれど、ウーノ。あなた失礼千万ど

ころか億万に値しますわ」
「誰が見てもドリルだよ」
「ロールですわっ！　あれは手間暇掛けて一生懸命に……力作でしたのに」
「面倒ならやらなきゃ良いのに」
アイネは恨みがましい目付きで一を見遣る。
「殿方とお会いするのですから、恥ずかしくないようにおめかししたのです。私だって、普段からああはならなくってよ」
「なるほどね。で、いつもはそういう格好な訳だ」
「……やはり、おかしいでしょうか？」
「おかしくないよ。別人みたいだったからさ、びっくりしただけ。アイネ、目が悪いのか？」
一はアイネの掛けた分厚い眼鏡を指差す。
「視力に問題はありませんわ」
「へっ？　だったらなんでそんなダサい眼鏡を……あ、いや、ごめん」
アイネは首を振り、自らの眼鏡に手を遣った。
「構いません。私は重々承知しておりますから。この、お世辞にもファッショナブルとは呼べない眼鏡を」
「理由、聞いて良い？」
「……私が初めてこんな、こんな格好になった時、見てしまったのです」
「何を？」
諦めたように深い溜め息を吐いた後、アイネはゆっくりと口を動かす。
「鏡、です。そこには貴族の面影一つない、気品など欠片もない、みすぼらしく、卑しい女が映っていました」
「はあ……」
「死のうかと。首を吊ろうかと。手首を切ろうかと。舌を噛み切ろうかと。ですが、私はそうはしませんでした。その代わりに、自分

をもっともっと追い詰めようと……」
　自虐的過ぎる。ただでさえ気が重いのに、一の気持ちも彼女につられて重くなってきた。
「あー、話変わるけどさ。アイネ、野球って知ってる？」
「ヤキュウ？　ええ、存じ上げておりますが」
「あ、もしかして経験があるとか？」
「さようでございますねえ……私ではお役に立てないかもしれません」
　アイネの口振りからすると、知ってはいるがやった事はない。そんな風に一は捉える。
「それじゃ仕方ないよな。んじゃ、またな」
「あの、何かありましたの？　お話をうかがってもよろしいかしら？」
「ああ、実は……」
　折角の機会、誰かにもっと話を聞いてもらいたい。店長の横暴をつまびらかにしてやりたい。一は幾分か表現を誇張して、アイネに事情を説明した。
　彼の話を聞き終えたアイネは暫くの間何か考えていた様子だったのだが、
「たいそうお困りのご様子、よろしくってよ」
　柔らかに微笑む。
「よろしくって、野球やってくれるのか？」
「お友達の危機ですもの。全力を尽くしますわ」
「マジで！？　ありがとう、すっげえ助かるよ！」
　メンバーが一人も見つからない事態を避ける事が出来た。一は飛び上がらんばかりに喜び、アイネの手を取って謝辞を述べる。
「……あ、あああの」
「へ、何？」
「その、手を……」
　真っ赤になって握られた手を見つめるアイネ。一は事情を察し、

彼女から急いで手を離した。
「あ、悪い。つい」
「さ、さようで。と、ところでウーノ、ヤキュウをするのにあたって、一つだけお尋ねしてもよろしいですか？」
「ああ、何なりと」
「その、髪を、髪を剃らなくてはならないのでしょうか？」
「はあ？」
アイネは手を組み合わせて俯く。
「え？　ヤキュウ選手は皆さん剃髪なさっているのでは？」
「……そりゃ高校球児とか、少年野球だけだよ。つっても、今頃になってまで坊主頭にしろって強要はしてないだろうけどさ」
「よくお見掛けするのですけれど」
「うーん。野球って古いからじゃないのかな。上の人たちの頭が固いから。日本って新しいもの好きなのに伝統とか慣習とかさ、変なところで古いものにこだわるんだよ」
「古き良き時代、ですわね」
「老害って言葉もあるけどな。ま、髪の毛は切らなくて良いよ。ほら、プロには髪の毛が長い選手も、染めてる選手もいるだろ」
「まあ、では私たちもプロですのね！」
「ただの草野球だよ……」
一は疲れてきた。しかし、楽しそうなアイネを見ると強く否定も出来ないし、一度泣かせると宥めるのも面倒そうである。
「とりあえず、簡単なルールだけ覚えておいて欲しいんだけど。アイネ、打ったら一塁に向かって走るんだからな」
「ふふ、お気立てに難のおありな方で」
「ああ、今更だけどさ、アイネ、ここに住むんだ」
一は中内荘を見上げた。
寂れた外観。朽ちかけた壁。ここ駒台に、好き好んで住もうなどと考える者は滅多にいないボロアパート。
「本当にここで良いのかよ」

「ここが、良いのですわ」
「ふーん？　まあ良いや、じゃあ、よろしくな」
「はい、喜んで」
アイネの真意に気付ける筈もなく、物好きな奴もいたもんだと一は苦笑する。
「この辺りの店とか、大丈夫か？」
「はい、歌代さまに案内をしていただきましたの」
「そっか。そんで、晩ご飯の材料買ってきたん、だよな？」
「それが何か？」
一は目を瞑って腕を組んだ。
「……料理、出来るの？」
アイネは静かに微笑む。
「怒るなよ。だってさ、家事とか似合わなさそうじゃん」
「褒め言葉ですの？」
「そう受け取ってくれれば助かる。で、何々、何作るの？」
「水炊きですわ」
「水……嘘吐け！　水炊きなんて食べる筈ないだろ！」
「ウーノは召し上がりませんの？　とっても美味しいのに」
一だって水炊き自体は決して嫌いではないのだが、アイネの口から水炊きと聞くのに何故だか抵抗があった。
「もっとこう、もっとこうさあ！　ブルジョアジーなもん食べてくれよ！　食べてて欲しい訳だよ！」
「ブルジョワ……」
「例えば、例えばキャビアとか！　トリュフとか！」
「あの、そういったものは私の口には合わなかったので」
「食った事あんのかよう！　羨ましいなあ良いなあキャビア、一度で良いから見てみたいなあ。せめて匂いだけでも嗅いでみたいなあ。いくらの色が黒くなっただけなのかなあ」
貧困である。色々と。
「まあ良いけどさー。あ、アイネ、今の話糸原さんにはするなよ。

絶対襲われるから」
「……肝に銘じておきますわ」
「はーあ。そいじゃ俺行くわ。最低でも、後七人に声掛けなきゃいけないからさ」
「お忙しいのは良い事だと存じます。ご健闘をお祈りしますわ」

果たして死者はどこに行くのか。
果たして死後の世界などあるのか。
果たして、死とは何を意味するのか。
生きている以上、死からは決して逃れられないだろう。生きていく上で、死を思考する事は切り離せないだろう。
しかし、である。国によって、宗教によって死への考え方が違うのなら、死に関しての様々な事柄を信じるも信じないも、人によるのだ。彼が信じていても、彼女は信じていない。この人たちが信じていなくても、あの人たちは信じている。つまりは、そんなもの。
更に言えば、更に例えるならば、一という男は神を信じていない。三森という女は死後に関して全ての事を信じていない。
そして、春風麗という女は、死神の存在を信じ切っていた。
詰まるところ、ただ、それだけの話なのである。

夏炉冬扇

午後二時三十分。駒台大学グラウンドにて。
「早田、頼みがあるんだけど」
「うむ、了解した」
「……いや、まだ何も言ってないんだけど」
一がそう言うと、早田は胸を張って得意げな顔をする。
「私が先輩の頼みを断るなどと、そんな大それた事をする筈がないだろう。何なりと用事を言いつけてくれ。買い物にエッチな事、代返、要人の暗殺にエロい事でもいかがわしい事でもとてもとても口には出せない事でも何でもござれだ」
「エロい事ばっかりじゃねえか！」
「私からエロを取ったらフットサルしか残らないではないか……あ、いや、フットサルも残らないな」
「残るわ！　お前はスポーツにまで何を求めてんだよ」
「先輩、それで頼み事とはいったいなんなのだ？」
「実は、野球をやって欲しいんだけど」
「ほう、棒と玉を弄り回すプレイか。先輩も中々にオツな趣味をお持ちのようで」
「変な言い方すんなっ、昼間っから何考えてんだお前」
早田は一を見つめ、口元に柔らかな微笑を湛えた。
「私は年がら年中先輩の事しか考えていないぞ。と言う訳でセッ――」
「――それ以上言ったら縁を切るからな」
「セパタクローをしようと、そう言おうと思っていたのだがな。いやはや、先輩はセパタクローがお嫌いのご様子。足でするよりも手でする方がお好みだとは。意外とノーマルだったのだな。しかし先

輩安心してくれ。私ならば、どんなにアブノーマルな要求にも一秒掛からず快諾してみせる」
　一は席を立ち上がる。
「じゃあな。縁があったらまた会おうぜ。八十年後ぐらいに」
「待て待て、冗談ではないか。ユーモアのセンス溢れる先輩にしては、いささか気が急き過ぎる。もっとウェットな会話に花を咲かそう」
「ウィットだろ。ウェットだったら濡れてるじゃないか」
「ああ、ウェットで間違いない。私のここは既に濡れてるからな。はっはっは」
「お前の中身、本当はおっさんが入ってんだろ」
　性質の悪過ぎる冗談が続き、一の胃がもたれてきた。
「む、麗かな乙女に向かって失礼な物言いだな。だが、先輩に言われたのならばその恥辱も快楽へと容易に変換出来るというものだ」
「俺は野球をしてくれって言いに来ただけなんだよ。どうしてお前にセクハラされなきゃなんないんだ。訴えるぞ」
「う、訴える……？　何だか興奮してきたぞ」
「分かった、俺が悪かった。だからさあ、野球をしてくれるのかしないのか、それだけハッキリしてくれないか」
　これ以上早田と喋っていると、確実に精神に異常をきたしてしまう。一は一刻も早く会話を切り上げたかった。
「先輩がそれを望むなら。で、試合はいつからなのだ？」
「えっと、明日の午後一時から。場所は河川敷のグラウンドだってさ」
「了解した。では明日、そこで先輩の到着を待つとしよう」
「助かる。ありがとう。……ちなみにさ、早田って野球をやった事はあるのか？」
「え？　先輩、子宮がなんだと？」
「死球食らって死ねば良いのに」

何はともあれ、アイネと早田が草野球に参加してくれる事になった。更に、早田は楯列にも声を掛けてくれるらしい。彼ならば快く頼みに応じてくれるだろう。一の気分は少しずつ晴れやかになり、軽くなり始めていた。

「……三時、か」

一は携帯電話を持っていない。付け加えるならば、まともに連絡を取り合う事の出来る知人も少ない。基本的に、彼が誰かを頼りにするには、街中を歩き続けて誰かを見つけるしかないのだ。

しかし、今日は朝からアルバイト。しかもまだ草野球の人数が揃っていないので、まだまだ動かなければならない。少しばかりの疲労を覚え、一は商店街を歩いている内、目に付いたゲームセンターに入っていく。自動販売機で飲み物を買い、空いている椅子にでも座ろうと思ったのだ。

「ざっけんなよイカサマ野郎が！　表出ろメガネ、レンズ割りまくってやらあ！」

思ったのだが、やっぱり回れ右して帰ろうと思った。

ゲームセンターならではの喧騒を打ち破る怒声。何だか、ここでは休めそうにない気がしたのである。

「イ、イカサマじゃない！　あれはシステムに則った立派なコンボだよ！」

「死ぬまで喰らってたじゃねえかよ！　ありゃなんだ、ハメだろハメ！　もしくは無限ループって奴だ！」

「違うっ、ゲージ使ったら抜け出せるじゃないかあ！　って言うか十回も同じ事されてんだから喰らった方が悪い！」

「良い度胸じゃねえかよ三下があ！」

騒ぎの方に目を遣ると、どうやら対戦型格闘ゲームの対戦内容に片方がいちゃもんを付けているらしかった。もう片方も黙るなり素直に謝るなりすれば良いのだが、譲れないものがあるのだろう。必死に抵抗を続けている。

「しかし殴り合いには発展しないんだな……」
一は騒ぎをぼんやりと眺めながら、缶コーヒーに口を付けた。
「喧嘩だ喧嘩！　本当の喧嘩って奴をオレが教えてやるよ！　おらどうした掛かってこい！」
「なんだよこいつー！　て、店員さん、店員さん助けてください！　変な女があ！」
「誰が変だってんだよ！」
「変な巫女服着てる奴のどこが変じゃないってんだよ！　中途半端なコスプレしやがって畜生！　巫女さんならもっとおしとやかに……」
「関係ねえだろクソが！」
一は口に含んでいたものを噴出してしまう。
「……巫女？」
口喧嘩をしている当人たちは野次馬に遮られて一からは良く見えない。が、時折見え隠れする紅白の衣装に、袖の千切れた巫女服が覗いている。そして何よりも、一人称がオレの、男勝りで乱暴な口調。
「なんで『神社』がゲーセンにいんだよ……」
間違いなかった。あそこで、ゲームに負けて怒鳴り散らしている厄介な女は、現役のフリーランスである『神社』こと、山田栞その人である。
「どうしよう。止めないととんでもない事に……」
一は情けなくおろおろとする。早く店員が来てくれないかと願ったが、誰も止めには入らない。いや、恐らく入れないし、入りたくないのだろう。
「大体君の使ってるキャラは強いんだよ！　ダイヤグラムから見てもフレーム表でも見ても、強い技だって揃ってるんだっ、負ける方が難しいんだよ！」
「ダイヤがなんだってんだ！　オレの拳はダイヤだって砕けるんだぞボケが！」

ヒートアップする山田。このままでは確実に死人が出る。
「ちょ、ちょっと待ってくださいっ」
一は意を決して、野次馬を掻き分けながら突き進んでいく。
「お、おお、一じゃねえか。聞いてくれっ、こいつがオレをハメまくりやがった！　卑怯過ぎるとは思わねえか？　思うよなっ？　だからこいつぶん殴っても良いよな！？」
山田は一の姿を認めるやいなや彼に駆け寄り、己の正当性を主張し始めた。
「駄目です！　ほら、もう行きますよ！」
無論、一が彼女の横暴を見逃せる筈もなく。
「だあああおい引っ張るな！　オレはこいつを殴らなきゃ気がすまねえー！」

「落ち着いてくれました？」
「……悪ぃ。頭に血が上り過ぎてた。反省してる」
山田はばつが悪そうな顔をして、一から缶ジュースを受け取る。
商店街の路地裏、目立たない場所で他人の視線から逃れるようなところで、二人は腰を落ち着かせていた。
「ああでもあの野郎、勝ち誇った顔しやがって。畜生、思い出したら腹立ってきた……」
「栞さん、ゲームとかするんですね。ちょっと意外でした」
「いや、オレも最近始めたんだよ。ヒルデが舎弟に勧められたみたいでな。でもさ、あいつトロいだろ？　ゲームもてんで駄目だ。んで、見かねたオレが助けてやる、お前を押しも押されぬプロゲーマーにしてやるぜって大見得切っちまってよ」
「ヒルデさんが、へえ。まあ、確かにゲームが上手なイメージはないですね。でも、栞さんは上手なんですか？」
人に教えるというなら、ある程度他人より優れていなければならないのではないか。だが、ゲームセンターで負けて暴れる山田から

は、ゲームが上手いなどとは到底思えない。
「分かんねえなあ。ああ、ただよ、あんまり勝てねえんだけど、どうやらオレにあだ名が付いてるらしいんだ」
「あだ名？」
「なんかゲーセンに入る度によ、指差されてこう言われんだ。『ゲームセンター荒らしだ』ってな。何でだろうな？」
「……まさかとは思うけど、物理的な意味じゃないですか？　栞さん、ゲームの機械壊したりしてないですよね？」
山田は憤慨した様子でスチールの缶を握り締める。
「オレはクマか？　ゴリラか？　馬鹿にすんな、ちょっとしか壊してねえよ！　しかもゲーム機じゃねえ、自販機だ！」
彼女の握り締めていた缶が、音を立てて破裂した。
「あ、やべ。ま、中身残ってなくて良かった良かった」
「弁償したんでしょうね？」
「あったりめーだろ。壊したものは買って弁償するのが筋ってもんだ。あー、にしても腹立つなあ。やっぱり今から殴りに……」
「駄目ですって。……栞さん、イライラしてます？」
「見りゃ分かるだろ。あんましつまんねえ事聞くんじゃねえよ、一。オレは今虫の居所が悪いんだ」
物は試しである。何にせよ、声を掛けられる程度に仲の良い人物は限られているのだ。
「野球、やりませんか？」
「野球、だあ？」
可能性があるのなら、声を掛けるに越した事はない。

アイネ、早田、楯列、山田。トントン拍子とは呼べないだろうが、それでも一は四人の人間を集める事に成功した。ついでに、ヒルデが今いそうな場所を山田から聞いておいたので、彼は今そこに向かっている、という次第である。

「ここ、か……？」

商店街の路地から路地へ、裏路地から裏路地へ。進むにつれ、行き交う人は徐々に少なくなっていく。やがて、準備中の居酒屋とシャッターの下りた金物屋の間に、入り口はあった。入り口と言っても、地下へと繋がる階段があるだけで、看板も旗も立っていない。入ってみなければ、下りてみなければ、そこに何があるか分からないのだ。

「ここにヒルデさんが」

山田の話によると、ヒルデは部下の戦乙女に連れられて、彼女らのプレイするゲームが、駒台で最も盛んなゲームセンターにいるらしい。そのゲームセンターとやらが、ここ。一はごくりと唾を飲み込み、階段を下りていく。

「……？」

「へ、へへ。兄ちゃんやめときな、あんた素人だろ？　見りゃ分かるんだ。ここには魔物が棲んでる。楽しくやるなら、他に場所があるだろ？」

階段を下りた先の自動ドア、その向かい側に憔悴しきった様子でへたりこむ男。一は彼を無視して自動ドアの前に立つ。

「どうなってもしらねえぞぉ！」

――なんだこの店は。

来たばかりだと言うのに、一は疲れを感じ始めていた。

店内に足を踏み入れた瞬間、一はぎょっとする。店の中が異様なまでに静まり返っていたのだ。勿論、営業はしている。ゲーム機だって音を立てていた。しかし、この店の喧騒を形作っていたのは機械だけなのである。人の声が殆ど聞こえない。だと言うのに、店内は人で溢れ返っている。誰も、一言だって発していないのだ。

「……っ」

一に突き刺さる視線。彼は今、客はおろか店員にまで完全に部外者とみなされたらしい。何をするでもなく、ただの暇潰しに来るようなところではない。この地を踏めるのは人間にとって大事なもの

を捨てた、悪鬼羅刹の類だけなのだと、無数の虚ろな目が、そう言っていた。

まるでゲヘナ。あるいはユートピア。ここにヒルデはいない。一は悪魔に背を向ける。が、

「――ひっ！」

完璧とも思われた、静謐な空気が割れた。声を上げたのはまだ若い男である。誰も、何も語らない。しかし、彼は他の客から叱責や罵倒を受けているかのように頭を下げ、啜り泣きながら謝り始めた。誰も、何も言っていないのにも関わらずだ。

「うっ、うあああああっ！」

何が起こったのか、一にはまるで分からない。

だが、声を上げた男が店を飛び出した時、全てを理解する。店の隅に置かれた一対の対戦台。そこに座るは、色にするならば、全身から黒い闘気を立ち上らせている男だ。

反対側に座るのは、この世全ての黒を塗り固めたかのような殺気を放つ女。

この二者が画面を挟んで対峙した刹那、先程の男はプレッシャーに耐え切れず逃走したのだ。

両者共に、椅子に座る姿は求道者か修験者に近いものがある。戦いだけを願い、求め、追い続けたストイックの完成形がここにあった。

悪魔めいた男と死神めいた女の一戦、その火蓋が遂に落とされる。筐体に五十円玉が投入されたと同時、今まで静まり返っていたのが嘘だったかのような、一心不乱の大歓声が沸き起こった。

「うおおおっ、キター！」

「眠れる獅子がやっと目を覚ましたぜ！」

「タケハラのトラとヒルデのゲン！　俺はこのカードを待ってたんだ！」

一には、彼らが何語を話しているのかが理解出来ない。のみならず、関係ない。一片の興味だってなかった。彼は死神めいた女に近

付いていき、
「こんにちは、ヒルデさん」
「……あれ？」
まあ、何というか、水を差した。

「びっくりしました。ヒルデさんって、ゲームがお上手なんですね」
「……恥ずかしい」
対戦が終わった後、一はヒルデをゲームセンターの外に連れ出していた。
「お邪魔でしたかね。何だか、凄く盛り上がってたみたいだし」
「……んん、全然。君に会えて嬉しい」
ヒルデは照れ臭そうに俯く。彼女の仕草がたまらなく愛しい。一の頬は自然と緩む。
「いちゃついてんじゃねーぞコラァ！」
「いってぇ！」
一の背中に強い衝撃が走った。殴られたのだと気付いた時には、彼の体は地に伏している。
「馴々しくヒルデさんに話し掛けんな。お前は北駒台だろ、私らの敵じゃないか」
顔を上げて振り返ると、ニット帽を被った、いわゆる今風の女がそこにいた。その女性は腕を組み、侮蔑の表情で一を見下ろしている。
「……あ、舎弟の人じゃないですか」
「舎弟じゃねえぇし！　はあ？　もうマジで気持ち悪いんですけどー。私にも名前があんだよ、バーカ。南駒台店の戦乙女、シルト。まー別に覚えなくてもいーけどー」
そういえば、そんな名前だったか。何分、初めて会った時から三人でワンセット的な存在だったので、一は殆ど覚えていなかった。
「ニットがシルトさんですね」

「なんだよこいつー、ヒルデさーん、超ウザくないっすか？」
「……んー」
ヒルデは小首を傾げて、そのまま安らかな寝息を立て始める。
「あー、寝ちゃったか。おい北駒台、ヒルデさん起こしたらボコるから」
「そっちのマスクオアサングラスの方は？」
一はシルトの隣に佇む女性を指差した。彼女は随分と大きいサングラスに、鼻まで隠れたマスクをしている。そのせいで顔は殆ど見えない。
「シュー」
「ふーん、ニットじゃない方がシューですか」
一の不躾な態度に、シルトは握り拳を作って怒りを露わにする。
「ねえ、あんたさ、私らに喧嘩売ってるワケ？　ヒルデさんとちょっと仲が良いからってイキんない方がいいよ。こっちだってムカついてんだから」
しかし、一は怯まない。立ち上がり、シルトを睨み返す。
「は、ざけんなよ。お前ら、俺に何をしたか分かって言ってんだろうな」
「……もしかして、あん時の事？　はああっ？　根に持ち過ぎ、ストーカーかっつーの。カトブレパスで借りは返してやったじゃん。チャラ、チャラ。あんまりしつこいとヒルデさんに嫌われちゃうよー？　きゃはははっ」
「俺はあんたたちに助けられた覚えがない。第一、まだ謝ってもらってないぞ」
「いやいや、私謝ったから。そっちが勘違いしてるんじゃないんですかー」
「……つるっぱげのくせに」
「んだとコラー！」
いきり立つシルトをシューが諫めようとするが、一との対立は熱を帯びていく。

「こんな目に遭わせたのはてめーのツレじゃねーか！　そっちが謝るのがスジじゃねー？」
「先に仕掛けたのはそっちじゃん。自業自得だろ」
「はあ？　それってどういう意味？」
「……ああ？」
「だから、ジゴージトクってどういう意味なの？」
「うわーこいつ馬鹿だー！」
「ありえねー！　てめーマジでありえねー！　馬鹿じゃねーし、馬鹿はてめーだし！」

傷口を自らの手で広げだしたシルトを散々馬鹿にした後、
「なあ、なんであんなとこにいたんだよ。しかもヒルデさんを連れて」
一は疑問を口にする。
「あんなとことか超ありえねー。あそこは私らの聖地なんだけど」
「……聖地？　あのゲーセン、ヨハネが経営でもしてんのか？」
「今の言い方本気でキショかったんだけど。つーかさ、ヒルデさんヒルデさんってウザいんだよね。さっきも、私らが超苦労したカードパーにしちゃってさ」
シルトは閉まっているシャッターに背を預け、一を強く見据える。
「ヒルデさんってゲーム上手いのな。栞さんはド下手って言ってたのに」
「あー、それはこないだまでの話だから。今じゃあのレバガチャ女よりヒルデさんの方が超強い。マジ強い。マジやば過ぎてやばい」
「ガチャ、って何？」
「あのゴリラのプレイスタイルだよ。格ゲーにはセンサイな指捌きがいるってのにコントローラのボタン適当に押しまくんの。何個新品が壊された事か」
一は刹那にも満たない時間で納得する。

「栞さん負けず嫌いっぽいしなあ。それであんな嘘を吐いたのか」
「あー、いや、あのゴリラが一時でもヒルデさんに勝ってたのはマジだから。ヒルデさん、レバガチャされてもボッコボコにされてたんだよ」
「そうなのか？　でも、今はヒルデさんの方が……」
シルトは誇らしげに頷いた。
「強い。意外と、ヒルデさんも負けず嫌いだから。あのゴリラを見返したかったんじゃねーの？」
「……そりゃ違うんじゃないかな」
一には、ヒルデが闘争心や競争とは無縁の人間に思える。思えて仕方がない。
「多分、遊びたかったんじゃないのか。栞さんと一緒に」
「はあ？　もう遊んでんじゃんよ」
「だから、対等に。同じようなレベルで遊びたかったんじゃないのかって。自分が下手だからつまらなくしてるんじゃ、とか思ってそう」
「……でも、今のヒルデさん超つえーんだけど」
「まあ、そこはあの人にセンスがあり過ぎたって事で」
「……ん、んん？」
立ったまま眠っていたヒルデが目を擦って身じろぎをする。シルトは彼女の体を支え、隣にいたシューに目配せした。
「ヒルデさん、そろそろ起きましょうか。シューが目覚ましのコーヒー買ってきますから」
「……ん、んん。甘いの……」
「大丈夫、私は分かってますって。……シュー、甘い奴だから！　ブラック買ってきたらマジでシメっからな！」
やっぱり舎弟じゃないか。一は甲斐甲斐しく動き回るシルトを見て溜め息を吐く。
――なんか、こう……。
彼女は、本当にヒルデが好きなのだろう。一には羨ましくて仕方

がなかった。損得抜きで誰かの為に動ける。恨めしくて仕方がなかった。

「なあ、北駒台」

「なんだよ南駒台」

「お前、ヒルデさんに用があったりした？」

「ああ、あったりしたよ。だけど、もう良いわ。邪魔して悪かったな。目が覚めたらヒルデさんによろしく」

下心があった自分が恥ずかしいモノに思えて、一は逃げるように戦乙女たちから背を向けた。

結局、一はヒルデに話を切り出す事は出来なかった。彼は仕方なく、あてどなく駒台を歩き回る。

「……五時、か」

この時期、陽が暮れるのは一が思っていたよりも早かった。長くなる影を見て、彼のやる気は次第に萎えていく。暗くなってからも歩くより、明日の朝、早い内から誰かを探した方が良く思えてきた。何より、早く帰りたい。

「帰ろう」

「帰るのか？」

「うぎゃあああああっ！」

突如として。耳元に息を吹き掛けられ、一の全身に鳥肌が立つ。

「みっともない声を上げるな。それでも男か、一一」

「てめえ、また出やがったな……」

一は耳を押さえて後退りした。彼の視線の先には、涼しい顔をした、と言うよりは、無表情の女がいる。彼女こそ――。

「ふ、私がどこで何をしようが、貴様の知るところではない。一一、貴様は私を誰だと思っている。オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属の、春風麗だぞ」

細く、しなやかなシルエット。黒いスーツに折れそうな程細い手

と折れそうな程細い足を身に包み、腰まで伸びているであろう束ねた髪はリボンのようなもので無造作に縛っていた。
「相変わらずの長台詞をありがとう。しっかし良く噛まないよな、舌噛んで死んじゃえば良いのに」
「誰が噛むものか。情報部を舐めるなよ一一、私はこれを毎日欠かさず練習している。朝起きて、昼食を食べて、就寝する前にもだ」
「うわー、すごいや情報部」
言いながら、一は早足で歩き出す。
「話は終わっていないぞ一一」
その横を春風がぴったりとマークする。
「終わった。さっき終わった。だから付いてくんなって」
「一一、貴様、野球のメンバーを探しているらしいな。もう九人集まったのか？　九人友達はいたのか？」
「耳が早いな。つーか、友達どうのこうのは余計なお世話だ」
「そうか、世話焼きなものでな」
一は一向に立ち止まらない。
「私を撒こうとしても無駄だぞ、一一。貴様の脚力では私を振り切る事は叶うまい」
「分かったよストーカー。話を聞くから五秒で済ませてくれ」
「野球のメンバーについてだが、心当たりがある」
一の動きが止まる。
「え、マジ？　マジなのか？」
「私はオンリーワンにとって不利益になる嘘は吐かん。一一、試合の相手がどこか知っているか？」
春風も一の動きに合わせて立ち止まる。
「いや、と言うか何も聞かされていない」
「そうなのか？　ふん、ならば私が語るべきではないな」
「語れよ！　何しに来たんだよお前」
「余計な事は言わないでおこう。さっきも言ったが、私がわざわざ来てやったのはチームメイトの斡旋についてだ」

「そりゃ助かるけど、誰が入ってくれんの？　もしかして、春風？」
　一の言葉に春風は表情を変えた。が、その変化も彼女という人間を良く知っていない限りは気付かない程度の、僅かばかりの変化である。
「……いや、私はあくまで情報部だからな。表舞台には立ちたくはない」
「高いとこから飛び降りてきたり、すぐに人の後ろ取ってはしゃいだりしてさ、目立ちたがりのくせによく言うぜ」
「そんな姿を見せるのも、貴様の前だけだ」
「嬉しくないカミングアウトありがとう。しっかしさあ、お前の紹介って事だろ。オンリーワンの社員さんなのか？」
　文句も言っていられないのだが、チームメイトになるとはいえ、偉い人が相手だとどうにもやり辛い。
「残念だが、そこまでに人員を割ける余裕はない。一一、上を見ろ」
「……上？」
　言われるがままに空を見上げれば、気持ち良さそうに宙を泳ぐモノがいた。
「ありゃシルフじゃねえか。あ、おい、まさか……」
「人を集めるというのは存外苦労するものだ。ならば、人でないものにも目を向ければ良い。不思議な事に風の精霊は、貴様に懐いているようだからな。気がねなく利用すると良い」
　淡々と。春風は無感情に、無表情に告げる。
「既に何人かは確保しているのだろうが、貴様の人望ではまだ規定の人数には足りていまい。声を掛けるも掛けないも自由だ。尤も、クビになりたくなければ自ずと答えは決まるだろうがな」
「なあ、春風さん。野球に興味ないかな？」
「私を口説くならもっと熱い台詞を用意しておけ。一一、貴様と仲良く遊ぶつもりはないのでな」
「……消えろ、馬鹿」
「用は済んだ。そろそろ消えるとしよう。貴様に言われずとも、だ」

たかが野球、されど野球。しかし、試合が始まるまでこんなに苦労するとは思っていなかった。一は今日何度目になるか分からない溜め息を吐き、再び空を見上げる。

「一一、今日は三十五回目の溜め息だな。幸せが逃げるぞ」

「とっとと消えろ！」

冬ざれた街に（前書き）

語るに落ちるという素晴らしい言葉があります。

今回のお話、本当は野球の描写にもっと力を割きたかったのですが、予想していたよりも長く、長くなっちゃいまして。何かもうこれだけで話が作れるんじゃねーの？　ぐらいに、です。

と言う訳で泣く泣く削ってみたのですが、ああ、もう良いや。もう良いです。

月が影を照らす。二つの影が、駒台の夜を抜けていく。誰の目に止まる事も、写る事もなく、影たちはただ自由に街を飛び回る。

「春風さん、聞きたい事があるのですが」

「言ってみろ」

やがて、ビルの屋上に影が降り立った。その正体はオンリーワンの情報部である春風と、彼女の部下、漣の両名である。

漣は屋上のフェンスに背をもたれて深く、ゆっくりとした呼吸を繰り返した。

「どうして、一一と接触を取ったんですか？　そんな命令は受けていないでしょう」

詰問しているかのような漣の強い口調にも、春風は顔色を変えない。

「漣、お前は自殺しろと命令を受ければ死ぬのか？　命令には従うものだが、縛られるものではない」

「詭弁です。俺たちは組織人なんですから、余計な事をするメリットはありません」

「私は北駒台が草野球を出来るようにと指示を受けた。一一と接触を取って何が悪い」

上司の発言とはいえ、幾らなんでもわがままが過ぎる。春風の我が強い事に漣は配属当初から気付いていたが、彼女は諫言を聞く耳を持ち合わせていなかった。

「あなたはいつだってそうだ。俺の事なんかお構いなしに一人で勝手に消えちまう。上からの面倒事は全部俺任せ、あなたは風の向くまま自由に飛び回る。俺の気持ちも知らないままにっ」

「構って欲しいのか？」

「違いますっ、俺は……！」
いつからか、振り回される自分に違和を感じなくなっていた。
春風の事は人間として尊敬出来ないが、上司としては情報部部長の旅よりも尊敬している。彼女はわがままだが、少なからず我を通せる分には有能なのだ。
「俺はっ……！」
いつからか、漣は春風に対して上司以上の感情を抱き始めていた。風のように、あるいは風よりも自由に飛び回る彼女に憧れた。何物にも縛られず、何者にも囚われない。自分では思う事も、描く事も、ましてや手など伸ばそうともしなかった生き方に、強い嫉妬すら覚えている。
だから、好きなのだ。
「……漣、お前も情報部ならば感情に任せて話そうとするな。可能な限り断て。切れ。我々はそういった生きものなのだからな」
「春風さんみたいに、ですか？」
「気に入らないなら部長を見習うと良い。あれもまた、一つの成れの果てだろうからな」
「いいえ、俺は春風さんが好きですから」
「そうか」
振り絞った勇気は功を奏さない。漣は溜め息を吐き、眼下に広がる街を見渡した。
オンリーワンに入ってから、ろくな目に遭っていない。最近ではそうでもないが上司に振り回され、ソレに追い回され、だというのにスポットライトの当たる表には出られない。報われたものが一つだって見当たらない。
「漣、辛いなら弱音を吐く前にオンリーワンを辞めろ」
「辞めませんよ。確かに辛いですけどね。でも情報部に入って良かったと思える事が一つ、あるんです」
「居場所を見つけられた事か？」
漣は緩やかに首を振り、街を指差す。

「それもありますが、これ、ですよ」
「……駒台の街がどうかしたのか」
「こんな眺めを見られるなら、少しくらい辛くても良いかなと、そう思えるんです」
「私にはいつもと同じにしか見えない。漣、お前は随分と感傷的だな」
春風はフェンスの縁に足を下ろすと、右から左へと町並みを見遣った。
「綺麗かどうかは分かりませんけど、なんかこう、良いでしょ？」
「曖昧だな。だが、悪くはない。そんな気がしてきた」
その時、漣には春風の変化が理解出来た。生まれて初めてと言っても差し支えない衝撃が走る。ああ、そうか、と。
「春風さん、今笑いましたか？　笑いましたよね？」
「……かもしれないな」
それきり、お互いから言葉が出る事はなかったが、漣はとてつもない充足感を得られた。

河川敷グラウンドにちらほらと人が集まり始めていた。時刻は試合の始まる一時間前、十二時である。
グラウンドはしっかりと均されており、ベースも置いてあった。スコアボードも、両軍の使用するベンチも真新しいものになっている。
「おはようございます」
ベンチに座る店長へ声を掛けたのは、ジャージ姿の一だ。
「早いな、一。お前が一番だ。最終的に何番になるかはしらんがな」
「あー、それがですね。実は……」
一も昨日は遅くまで粘ったのだが、結局九人揃える事が出来なかったのである。だが、その事を店長には今の今まで言えなかった。言える筈がなかった。

「ああ、そうだ。もしも人数が足りていなかったらの話なんだがな」
「はい？」
「戦闘部が一人有能な人材を欲しがっているらしい。ああ、確か、死に辛い実験台が欲しいとか言っていたな」
「まさか……」
「いや、別にさっきの話とは何一つ繋がりはない。ところで一君、まだ君以外のメンバーが姿を見せていないようだが」
一の背筋に冷たい汗が流れる。
「まさか、九人揃えられなかったなんて事はないだろうな」
「……あはは、嫌だなあ。集めたに決まってるじゃないですか。それじゃ俺はトイレに――」
「――駄目だ。いや、私はお前を信用してはいるがな。万が一があっては遅きに失する。そうは思わないか、一」
読まれている。一の行動は完全に読み切られていた。
「あの、実は……」
もう覚悟を決めるしかない。一は泣きそうになるのを我慢しながら口を開いた。
「先輩、待たせてしまってすまない」
「ん？」
訝しげにする店長の視線の先には、ユニフォーム姿の女と男がいる。彼らの着ている、野球チームのそれと思わしきユニフォームには、一ＬＯＶＥと、でかでかと刺繍されていた。
「おや先輩、そちらの方は？」
「……なあ早田」
「なんだ先輩？」
「そのユニフォーム、超ダサいぞ」

早田と楯列が到着した後、アイネ、山田、シルフと、一の元には続々とメンバーがやってきていた。

アイネは昨日と変わらないジャージ姿で、山田はいつもと変わらない巫女服で、シルフはいつかの時と同じく成人女性の姿とはアンバランスな、小さな男の子の格好で。
「見事にバラバラだな」
「そうですね」
どこからか、今日ここで野球の試合が行われると聞きつけたのだろう。河川敷の近くには野次馬が集まり始めている。
その中に、スーツ姿の男女が二人。オンリーワン近畿支部情報部の、春風と漣の姿があった。
「どうやら、我々の情報操作も上手くいったようだな」
「しかし、どうしてわざわざ一般を集めたんですか？」
漣に問いに、春風はしばし沈思黙考する。
「……上からの指示だからな。しかし、私が思うにこれはオンリーワンの、ひいては勤務外の印象を良くしようとする為ではないか？」
「勤務外の？　野球の試合なんかで、ですか？」
「相手は駒台の草野球チームだそうだ。勿論、一般のな。彼らと球技を通して、勤務外でも普通の事が出来ると、そう思わせたいのだろう」
「そう上手くいきますかね。だって、北駒台店ですよ」
フォローする気はないのだろう。春風は黙って、両軍の選手の集まりに目を向け始めた。
「面白い事にはなりそうだがな」

「面白い事になってきたな。そうは思わないか、一？」
「一生思いません」
店長が面白いと指差す先には、野球の試合、その相手チームがいた。
「どうして、こんな事になってるんでしょうかね」
「さあな」

面白くもなんともない。これは悪夢だと、一は思い込む。悪夢。その相手チームに、見知った顔がいたからだ。

「あいつら、私の誘いを断ったかと思えば、まさか向こうのチームに手を貸していたとは……」

三森冬。糸原四乃。ジェーン＝ゴーウェスト。立花真。神野剣。ナナ。堀。オンリーワン北駒台店の勤務外、一を除いた全員が相手チームに参加していたのである。

「おまけに、北さんまでいやがる」

「八人がお前の知り合いか。とんだ疫病神だな」

「七人は店長の知り合いでもありますよね。けど、まさか堀さんまで参加している、と、は……？」

「どうした？」

「……気付かないんですか、店長。ここに、北駒台の皆がいるって事は……」

「ああ、今頃店は空っぽだろうな」

つまりも何もないのだが、結果から言ってしまえば、全員が店をサボって野球に興じているらしかった。

「ジェーンまでが店をサボるとは。いや、でも、何か理由があるのかも」

「それはないな。一、糸原の腕を見てみろ」

「見えません」

見ろと言われても距離が離れている為に、一には糸原の腕どころか、彼女の輪郭すらぼやけて見えているのだ。

「良く見ろ。奴はこれ見よがしにスーツの袖をまくっている。理由は一つ、新しい時計を見せびらかしたいのだろう」

「まさか、皆も何かに釣られて……」

「その可能性が高いな。そして相手のユニフォームを見ろ。アレは駒台ブラックタイガースのものだ」

「なっ……！　近畿地区でもトップレベルの、あの！？」

駒台ブラックタイガース。今年で創立二十周年の強豪チームであ

る。名前の由来は設立時のメンバーが『強そう』との理由でブラックとタイガーを組み合わせたのだ。余談になるが、彼らは後に同じ名前の海老がいる事に気付き、気付いた今でもそんな海老は知らないと押し通している。
「そこに勤務外どもの力が加われば、どうなるか……」
「ああ、恐ろしい事になるな」

「面白く、実に恐ろしい事になるだろうな」
「何が、ですか？」
春風が幾分か愉しげに呟くので、漣は思わず聞き返していた。
「この試合、いや、恐らくは試合にならないだろうな。今日はもうこれで終わりだ」
「……どういう意味ですか？」
「勤務外がいるのだぞ、どうもこうもならない。結果から言えば、試合は始まらない」
「えっと、だから、どうしてですか？」
両チームともメンバーはきっちり揃っている。北駒台店側に少々の遅れがあって、更に何故か南駒台店の戦乙女が三人も参加している事には驚いたが、試合をするには何ら問題はないとも思える。
「北駒台店の勤務外には欠落している部分があるからだ」
「欠落、ですか。多過ぎて見当が付かないですね」
「チームワークだ。チームプレーとはまた別物だが、奴らにはそれもない。協調性がない。協力しようという心がない。誰かと背中を預け合うつもりもない。北駒台店は集団であって、組織ではない」
そもそも、漣にはチームワークとチームプレーの違いすら分からないのだが、春風の言いたい事だけは何となく理解出来た。
「個人個人が力を持ち過ぎている。事実、三森冬は近畿地区でも最強との呼び声が高い勤務外だ。他のメンバーもジェーン＝ゴーウェスト、立花真と、三森冬と比べても遜色はない。だからこそ、我も

強い。今まで一人でソレと戦い、一人でソレを殺してきたような連中ばかりだからな」

「他人に背中を見せる事を知らない、と？」

「北駒台店において、徒党を組んでの戦闘は致命的なものになりかねん。他のどこよりも、誰よりも質の高いスタンドプレーでソレを殺し切る事があったとしても、傍に誰かがいては足を引っ張られかねない。奴らにとって、一足す一はやはり二にしかならない。まあ、例外もいるがな」

何か聞こえた気がしたが、その続きは漣にとって面白くないものになりそうだったので、彼は黙殺する。

「しかし、本当にチームなんてものが必要なんでしょうか。北駒台店が個人主義だとして、実際に戦果を上げているじゃないですか」

「では、どうして南駒台店が出来る？　漣、南の戦闘は何度か見た事があったな。アレをどう思う」

どう思うと言われても。ただただ、凄いとしか言えなかった。

「戦乙女、野獣、凶戦士。彼らはそれぞれ四人から二人一組で動いている。そして役割もハッキリさせようとしている。北とは明らかに違う人員構成だ。そして、南はアラクネ以降に作られた組織だ。何を意味するか、分かるか？」

「戦力の増強、ですか？」

「増強か。確かに現段階ではそうなるな。しかしだ、アラクネが我々オンリーワンにあるものをもたらした。警告と、変化だ。意図的に群れて現れるソレが出現したのは今までに有り得なかった。今後、アラクネと同じような、アラクネよりも手強いソレが現れないと、どうして言い切れる」

「……円卓の騎士。南駒台店は奴らに向けての戦力という事になるんですか」

アラクネ以後浮上した、正体不明の集団。彼らについて分かっている事は皆無に等しい。ただ、ソレを使って世界に何かしらの害を与えようとしているのは確かだ。

「今後、散発的なソレの出現は減少すると上層部は見ている。代わりに、アラクネのような集団戦が増加するだろう。その事を見越して、南が作られた」
「なら、北駒台店はどうなるんですか？」
「何も変わらんさ。だが、集団戦闘になれば北の生存率は格段に下がる。二ノ美屋店長が動かない限り、北は近い内に潰れる。ふ、誰もが思っている事だろうがな」
北駒台店が潰れる。即ち、一一も、何かしらの害を被る。不謹慎かもしれないが、漣の胸は童子のように躍った。
「春風さん、要するに北駒台店の奴らは野球が出来ないぐらい協調性がないって事で良いんですよね？」
「ああ、その、通りだ……」
「？　顔色、悪いですよ」
「……かもしれんな」
春風は辺りに視線を遣った後、深く息を吐く。
「漣、私は先に戻る。試合の結果は後で聞かせてくれるか？」
「え、ええ。その、お大事に」
漣がそう言うと、春風の姿が掻き消えた。
こんな事は、彼女の部下になってから初めてだったので、漣は暫くの間放心していた。何かがあったのだろう。そう捉えるぐらいしか、今の彼には出来なかったのである。

試合は荒れ模様だった。
ボールとバット、グローブや一塁ベースなどがグラウンドを飛び交い、両軍の選手が入り乱れて、殴り合っている。
始まりは、一回の表、駒台ブラックタイガースの攻撃からだった。一番バッターはジェーン。北駒台店チームからは山田がピッチャーとして登板したのである。
山田の球は速かった。試合中だと言うのに、ブラックタイガース

からスカウトが来たぐらいである。が、絶望的に、致命的なまでに山田のコントロールは悪かった。二球目に投げた渾身のストレートは、ジェーンの脇腹に突き刺さったのである。間を空けず、ブラックタイガースのメンバーがベンチから文字通り飛び出した。

そして、こうなった。

人知を超えた乱闘を眺める一の瞳から生気が感じられない。

「全員クビだな」

店長が苛立たしそうに言うが、一の耳には入ってこなかった。

この日、実に両チーム合わせて十数名の負傷者が出たのである。勿論試合は無効になった。更に言えば、駒台ブラックタイガースはこの年以降、この件がトラウマになって強豪の名を捨てる事になる。

「うーん、人間はやはり、実に面白いネ」

見物人の中に、一際目立つ影があった。黒い山高帽と燕尾服を着た、紳士然とした装いの男である。

「あの子も見つかったし、やはりこの国は言う事がないネ。堪らないヨ」

だが、紳士と呼ぶにはいささか早計かもしれない。彼の燕尾服は古ぼけ、擦り切れ、破れていた。右手には葉巻を持ち、左手に持った瓶の酒を呷る。

「しかし、当たり前と言えば当たり前なんだけど、やはりここは人間臭いナ。ああ、腹立たしい。苛立たしい。さっさと退散するとしよう」

言葉とは裏腹に、男は愉悦の色に表情を染めてその場を立ち去った。

彼はこの世全ての黒を塗り固めたのような、死神めいた男であった。

オンリーワン北駒台店、バックルーム。
「申し開きをしてもらおうか。文字通り、腹を割ってな」
からん、と。一人だけ椅子に座る店長が、フロアに正座する面々に果物ナイフを投げ付ける。
「……店長、どうして俺まで？」
「一、連帯責任という素晴らしく美しい言葉を知っているか？　これはお前の教育が足りなかったから起こった、悲しい事件なんだ」
「俺がいつ、この人たちを教育しなきゃいけない立場になったんですか」
店長は答えない。
「おい、なんで私らが正座なンかしなきゃなんねーんだよ」
「三森、お前から答えてもらおう。どうして私を裏切ったのか、その理由をだ」
「あァ？　理由なンかねーよ。私はただ、こいつらに誘われてだな……」
「嘘ね」
きっぱりと、三森の言葉を遮ったのは糸原である。
「『面白いじゃねェの。店長が困ったところ見た事ねーんだよな。ぎゃはは、一回見てみよーぜ！』　とか言ってたじゃない。これは立派な背信行為よね」
「てめーだって物に釣られてたじゃねェか！」
「私は無実よ。罰を受けるのは私以外の奴にしといて」
店長は無駄なあがきだと言わんばかりに溜め息を吐いてみせる。
「ナナ、君はどうしてだ？」
「皆さんが行くとおっしゃいましたから。人間とはより多数の意見に流される生き物らしいではないですか。ならば、人間よりも人間らしいを追求する私も行かない訳には参りませんでした」
「……ナナ、人間のゲスいところまで真似なくても良い」
「と、言いますと？」
「つまりだな、まあ、こいつらを参考にするな」

小首を傾げるナナに毒気を抜かれたのか、店長はそれ以上の叱責を諦めた。
「堀、お前まで裏切るとはな」
「いやあ、私も少しばかり興味がありましたからね」
「ほう、何に、だ？　言ってみろ」
堀は眼鏡の位置を直して、人懐こい笑みを浮かべる。
「あなたの困った顔に、ですよ。店長、あなたとは長年の付き合いになりますが、いつも自信満々と言いますか、ネガティブな表情をあまり見ていませんから」
「それはお互い様だ。私こそ、お前の顔には変化がなくて飽きていた頃だからな」
「いやあ、根っから穏やかなものでして」
「は、良く回るものだ」
次に、店長は笑顔の堀から視線を外し、こちらと決して目を合わせようとしない二人に声を掛けた。
「神野、立花。どうした、顔を上げろ。目を合わせないと話も出来ないぞ」
立花の肩が分かりやすく震える。
「あ、あああの、ボク、ボク、ちっ、違うんだ。ボクは店長さんに恨みがあるんじゃなくて……」
「では、なんだと？」
「あっ、あっ、あっ、あの、あのね、え、映画のチケットをあげるって言われて、そいでボク、ちょうど見たい映画があ、あって」
「物に釣られたんだな？」
「う、うえ？　えっと、あの、ボク、ボク、映画なんて見た事がなかったから……」
「物に、釣られたんだな？」
「……うん」
「本来なら切腹ものだが、少し可哀想だな。見逃してやる。……ゴーウェスト、お前はどうして裏切った？」

一人だけ正座をせず、あぐらをかいていたジェーンに視線が集まった。
「えー、だってお兄ちゃんをくれるって言うんだもん」
「誰がだよ！？」
「声が大きいぞ一。で、ゴーウェスト。そう言われたから私を裏切ったのか？」
「オウ、ソーリーボス」
舌を出してけらけらと笑うジェーン。
「神野は……まあ、良いか」
「それはそれで複雑なんすけど」
「ならば判決だ。全員、今後私の決めたシフトに逆らわない事」
はーい、と、全員が声を揃えて答えた。
「ああ、時給は発生しないからな」
えー、と、ジェーンと堀を除いたアルバイト全員が声を揃えて不満を訴える。
「判決は覆らん。絶対に覆らん。悪いのは私に逆らったお前らだ。悔い改めて心を入れ換えて、可能ならば頭を床に擦り付けて許しを乞え。目溢しをくれてやらん事もない」
「すいませんでしたあっ！」
店長の言葉に一だけが反応して、素早く動いた。綺麗な土下座だった。
「……お兄ちゃん、プライドは？」
「ねえよ！」

走っても走っても、いつまでいっても、どこまで行っても、この感覚は拭えない。追われている感覚は、何をしても消え去らない。あの姿を、あの顔を見た瞬間から呼吸は荒くなったままだ。冷たい汗は止まらない。鼓動は早くなる一方だ。吐き気と寒気が全身を突き抜け、恐怖が、心を犯し始める。

『――久しぶりだネ』

「ひっ……」

優しく、溶かされていく。囁かれた耳元には、彼の好む安い酒の残り香があった。離れない。あの声が、離れてくれない。抱き締められた感触も、愛を囁かれた瞬間も、あの男の温もり、その残滓までもが女を苦しめる。

「くっ、あああああああっ……」

忘れようとしていた。事実、忘れ掛けていた。影は女から去ろうとしていたのである。

『今度は誰にしようか、ウララ。ああ、アア、家族はもう、いないんだったネ』

止めてくれ。止めてください。誰か止めて、誰か助けてください。あの声を聞かせないで。あの姿を見せないで。あの時を、あの瞬間を思い出させないで。どうか、どうにかなりそうで、誰かにどうにかして欲しくて。

けれど、口から漏れるのは痛みを堪える喘ぎと、意味を為さない叫びだけで。

「……っ、は、はっ、はぁ……」

目を瞑っても、脳裏には、記憶には焼き付いている。忘れたかった。おぼろげだった影は、今や輪郭を保ち、一つのモノになろうとしている。

『良い顔だネ。次はウララのお友達を殺す事にしようか』

そう言って愉しげに笑う男は、まるで紳士のようで、

『さあ、誰から壊してあげようかナ』

まるで、死神のような男で。

あなたの為なら死ねる

オンリーワン北駒台店のメンバーが店長の無茶なシフトから解放されたのは、午後の十時を回ってからだった。
「……酷い目に遭った。いや、遭わされた」
「お兄ちゃんにはヤクビョーのゴッドでも憑いてるんじゃないノ？」
「死神とかな、あっはっはっ」
一はジェーンと帰路を供にしていた。と言うのも、最後まで残っていたのがこの二人だったからである。
「神野君たちは良いけどさ、三森さんと糸原さんは最低だよな。一時間経たないで逃げたんだぜ」
「アタシは構わないケド。だって、お兄ちゃんと二人っきりになれたんだもん」
屈託なく笑うジェーンに腕を絡められては、邪険に振り払う事も出来ない。一は彼女の好きにさせてやる事にした。
「あ、一つ思い出したワ」
「へ、何が？　忘れ物か？」
「デス、デス。シニガミのコト。ここって、毎年出るんだって言ってたよ？」
「出るって、死神が？」
元気いっぱいに頷くジェーンを見て、一は頭を掻く。
「死神って、黒いマントに鎌持ってる骸骨みたいな奴だよな？　え、アレが出んの？」
「お兄ちゃん、シニガミと言ってもカラーカラーあるんダカラね」
「……カラーカラー？　ああ、色々ね。最初からそう言えよ」
「アメリケンスピリットを忘れたくないの」
アメリカ人が大いに誤解されそうだった。

「死神ねえ、この街に……毎年出んの？　去年も出てたのか？」
「ＹＥＳ！　近畿支部じゃ有名な話なんだって」
「じゃあ、毎年誰かが死神に殺されてんのか？」
「ンー、狙われてるのは一人だけって聞いたよ？」
死神に狙われるのは一人だけ。一にとっては殺されずに済むので嬉しい話ではあるが、おかしな話だとも思う。
「なあ、なんでそんな話知ってんだ？」
「狙われてるのはオンリーワンの社員らしいカラ。だから、この話は社員しか知らないノ」
「……狙われてるって、そんなのどうして分かるんだよ」
「さあ？　アタシ、こっちに来たばかりだからたくさんは知らナイ。知りたいならホリに聞けばいいんじゃないカシラ」
別段、一はそれ以上を自ら望んで知りたい訳ではない。話題が話題なだけに、軽々と振れるものでもないだろう。
「ま、気が向いたらな。でもさ、毎年来るって分かってんならどうにかしようと思わないのかな」
「ムリ、だったって聞いたよ。ソレが来ると分かってても、どうしても」
「そんな強い奴なのか？」
「分かんナイ。バット、近畿支部がシニガミにハンドを焼いているのは本当」
ふと、一は妙案を思い付く。
「その、狙われてるって奴をクビにしちゃえば良いんじゃねえの？　どっか島にでも流しちまえば、死神だってそっちに行くだろ」
「アタシもそう思うケド、狙われてるって人はベリーベリーユーノーなんだって。アイランドに流しちゃもったいないって」
「ふーん、なるほどね」
ジェーンの手前、汚い事を言うつもりはなかったが、その人物は死神とやらを誘き寄せる餌なのではないかと一は思っていた。幾ら有能と言えど、死神を連れているような人間である。それこそ疫病

神を傍に置いておこうと誰が思うのか。
「それ、誰の事なんだろうな」
「ンー、アタシはここまで。あとはホリに聞けば分かるかも」
「堀さんかあ……」
一は堀の顔を思い出してみた。温和を絵に描いたような人物ではあるが、いつも笑顔なので逆に恐い。何か裏があるのではと邪推してしまう。
と、ジェーンが愉しげに笑った。一の逡巡を見透かしたかのような、強かな笑顔である。
「お兄ちゃん、ホリが苦手なんでしょ」
「……別に苦手じゃねえよ」
「それとも、コンプレックス？　ホリ、笑顔がキュートだし、背も高いし、何よりクールよね。クールクール、ビークール！」
「コンプレックスなんかねえって！」
しかし、一は自分で思っていたよりも大きな声を出してしまう。ジェーンはまた、いらぬ誤解を受けて笑みを深めていた。
「アア、お兄ちゃんラブリー、あいらぶゆー。んふふー、すねてるんでしょー」
「うるさい」
「アタシはお兄ちゃんヒトスジ、ストレートだからダイジョーブダイジョーブ、見捨てたりしないってば」
「ストレートと言えば、お前さ、お腹大丈夫か？」
野球の試合――にはなっていなかったが――で、ジェーンが脇腹に死球を喰らっていたのを一は思い出す。何しろ、普通に生活している分には見ないであろう速球だったのだ。
「痛いって言ったら、キスしてくれる？」
「いや、しない」
「……してよ」
「しないってば」
宥めようとして、一はジェーンの頭に手を乗せる。子供扱いされ

ているようで気に食わないのか、彼女はその手を振り払い、膨れっ面を作って見せた。
「そういうのがガキっぽいんだよ」
「ガキで良いから、キスして」
「駄目だってば」
一応、一にはそういう事をしてはならない理由、制約があるのだが、彼はその事実をジェーンに伝える気はない。
「……Ｗｅｌｌ、抱っこして」
「はあ？　痛いのは腹だろ？」
「抱っこして」
涙を浮かべて見つめるジェーンに、一はこれ以上の抵抗は出来ないと観念した。しかし、抱っこは恥ずかしい。もう文句は言わせたくない一心で彼女を背に負ぶう。
「これで勘弁してくれ」
「……次はちゃんとやってね」
「泣く子と地頭には勝てないよな」
「ジトーって？　ムービースター？」
しかし、このままどこまで行けば良いのだろう。死神より何より、一はその事に恐怖した。

翌日、夕方からのアルバイトの為、一は店に向かった。
店に着いて、開いた口が塞がらず、塞がれば今度は閉口した。
「……なんですか、これは」
夢のようである。但し悪い方の。店内には、一がここで働き出してから今までに見た事のない数の客がいたのである。
「まるで夢のようだな」
「あ、抓っても痛い」
バックルームで煙草を吹かす店長は幸せそうだった。
「どうやら、昨日の野球が良い方に転がってくれたようだな」

「えー……」
「大方、怖いもの見たさで来たのだろうが、まあ良い。売り上げに貢献してくれるなら何でも良い。この際、毎日河川敷で乱闘するか」
絶対に嫌である。しかし、店長ならやりかねないと一はどこかで覚悟していた。
「はじめくぅん、ボク、あんなの無理だよう……」
立花はフロアに出る前から半泣きである。足は震えて、スカートの裾をぎゅっと握り締めていた。
「でも、シフトに入ってるんだし。頑張ろうよ」
「無理……」
その場に座り込むと、立花は鼻をすんすんと鳴らす。
「じゃ、レジ片方閉めよう。立花さんは手伝ってくれるだけで良いからさ」
「おい一、勝手な真似はするな。客の回転が鈍くなるだろう」
「一人も捌けないよりマシでしょう。それとも、店長が手伝ってくれるんですか？」
「勝手にしろ」
店長の決断は早かった。
許可をもらったなら、後はやるだけである。一はぐずる立花を引きずって、長蛇の列を作る客を片端から処理していった。
「なあ、あの赤いねーちゃんはいねえのか？」
精算が終わっても居残る客もいたが、殆どの客が店から出て行く。一時間も経つと、立ち読み客を一人残して北駒台店はいつもの風景を取り戻した。
「見事にガラッガラだなあ」
立花は憔悴し切っていて、口も開けない。ただ頷き、危なっかしい足取りでふらふらとカウンターをさ迷う。
「……これで、終わったんだよね？」
「あー」
夕飯時になると、手軽なコンビニ弁当を求めてサラリーマンやO

Lの集団がやって来るのだが、
「うん、終わったよ。ああ、掃除は俺がやっとくから、立花さんは少し休憩してても良いよ」
「良いの？　やった、ありがとう！」
一は嘘を吐いた。罪悪感からか、掃除も買って出た。
「さて、と」
一はバックルームからダスタークロスとモップを持ち出し、床の清掃に取り掛かる。が、雑誌のコーナーに行くと立ち読み客が邪魔になっていた。
しかし、こんな事はコンビニで働く者にとって日常茶飯事である。余程迷惑でなければ、声を掛ける事も滅多にない。注意して癇癪を起こされても堪らないし、変な噂を流されるのも厄介だ。一々目くじらを立てていても、良い事なんて一つもないのである。
「仕事熱心だな」
「……はあ」
しかし、客からこうやって労いの言葉を掛けられるのも滅多にない事だった。一は掃除の手を止めずに下を向いたまま素っ気なく答えるが、内心は嬉しくて仕方がなかった。
「……げ」
立ち読み客の顔を見るまでは。
「精が出るな、一一。いや、実に見上げた勤労魂だ」
一はどうして、今まで気付かなかったのだろう。週刊の少年誌を無表情で読み続ける、オンリーワンの情報部、春風に。
「どうしてここに……」
「私を誰だと思っている？　オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属春風麗に投げ掛ける質問だとは思えんな」
「掃除の邪魔だから失せろ」
「私は客としてここに来ている。お前は店員としてここにいる。立ち読みの邪魔をするな」
そう言うと、春風は一に背を向けて雑誌のページをめくる。

「……お客様、立ち読みはご遠慮願えますか？」
「くっ、また休載か。しかし、このとぼけた犬が可愛くて怒るに怒れん」
「話聞けよっ、買い物もしないなら出てけ！　つーか仕事しろよ！」
「今日は休みだ。一一、貴様にとやかく言われる筋合いはない。折角の休日だ、邪魔をするな」
　一はダスタークロスを掛ける手を止め、物珍しそうに春風を見遣る。
「折角の休日にコンビニで立ち読みねえ。いやいや、満喫してるじゃないか」
「漫画喫茶にも行ってきたしな」
「その満喫じゃねえよ」
「私としても降って湧いた休日だからな、何をして良いか分からないところもある」
　一緒に遊ぶ友達も少なさそうだし。とは口に出すまい。一は心中で春風を嘲り溜飲を下げる。
「時に一一、貴様に休日はないのか？」
「んー、あんまりない。学校あるし。シフトは無茶苦茶だし。あ、けど明日は休みだな」
「では旅をすると良い。目的地はなくても構わん。どこに行くのかも問わん。が、ここから遠ければ遠いほど好都合だ」
　急に旅をしろと言われても、一には困る事しか出来ない。
「いや、そんな金ねえし、次の日は朝からバイトだ。午後からは大学も行くしな。つーか、計画も何もしてないし」
「思い立ったが吉日だ。良い日旅立ちとも言うだろう。明日は全国的に晴れらしい。味噌カツでも食べに行くのはどうだ？」
「お前が行けよ。嫌だよ、あそこには味噌としゃちほこしかないんだもん」
「牛タンはどうだ？」
「遠くなってるわボケ。だから、旅行するほど金も時間も余ってね

えっつーの」
　すると、春風は懐から茶封筒を取り出した。
「やけに分厚いな」
「とりあえず二百万ある。これで楽しんでくると良い。ああ、足りないのなら今言え、ＡＴＭで卸してくる」
　単純に、気持ち悪い。一は鳥肌が立った二の腕を擦り、封筒から顔を背ける。
「……何のつもりだ？」
「他意はない。日夜勤労と勉学に励む青年にささやかなボーナスを、と言ったところだ」
　とてもじゃないが一にはささやかとは呼べない、正気の沙汰を易々と飛び越えた金額である。
「お前から金を受け取る理由はない。ましてや、こんな金額なんてな。言え、何を隠してやがる」
「他意はないと言ったろう。しかし、そうだな、あえて理由付けするならば。一一、私が貴様に好意を抱いているから、だ」
「もっと嘘臭い。良いから正直に言えよ」
「……そうか」
　春風は相変わらずの無表情なので、一には彼女が何を考えているのか読めない。しかし、何故だかこの時、春風が哀しんでいるように見えた。
「あー、とにかくさ、ちゃんとした理由がないと受け取れないって」
「本当に、どこかへ行く気はないんだな？」
「だから、ねえよ」
「そうか。ふん、随分と駒台が気に入っているようだな」
「ああ？」
　次の瞬間、春風はもう一の視界から消えている。どうしようもない気持ちの行き場はもう、ない。彼は仕方なく掃除を再開した。

「金、だァ？」
「ええ、何か心当たりはありませんか？」
シフトの交替でやってきた三森に、一は先刻の話をしてみた。春風が、二百万もの大金を無償で渡そうとした事についてである。
「つーか、なんで私に聞くンだよ？」
「え、だって、三森さんって春風と仲良いでしょ」
「だっ、断定すンじゃねェよ！　誰と誰の仲が良いって言いやがった！？」
一は無言で三森を指差し、次に天井を指した。
「上にいンのか！？」
「いや、そんなの知りませんけど」
「がぁーっ！　ムシャクシャすンなァもう！　殴らせろよてめー！」
「そんなガキ大将じゃあるまいし」
「うるせェ！」
三森は一の背中に蹴りを入れると、荒々しい足取りでフロアに飛び出していく。
「……馬鹿力なんだから……」
「ちょっかい掛けるからだ。三森はああ見えて繊細だからな」
二人のやり取りが終わったのを見計らい、店長がつまらなさそうに口を開いた。
「繊細？　人の背中にあんなに良いのをかます人が？」
「あいつなりの照れ隠しだな。それより一、さっきの話は本当か？」
「春風の話ですか？　ええ、マジですよ。いや、今更ながらに惜しくなってきましたね」
あの金さえあれば、アルバイトなんか当分しなくて良いのに。一は息を吐き、あの封筒の厚みを思い出す。
「旅行なんて行かせんからな」
「……行きませんよ」
「ならば良し。……一、春風とは仲が良いのか？」
「あんなのと仲が良いなんて、口が裂けても言いたくありませんね」

一の答えを聞き、店長は喉の奥でくつくつと笑った。
「そうか、まあ、何よりだ」
「含みのある言い方はよしてくださいよ。店長は何か知ってるんですか？」
「何かとは？」
「あいつの奇行についてですよ」
一は春風を常からしておかしな奴だと思ってはいたが、まさかあんな行動に出るとまでは思っていなかった。
「お前は気にするな。それよりも早く帰れ。ほら、外はもう暗いぞ」
「言われなくても帰ります。へっへーん、用事がなけりゃこんなとこにいる理由ねえしなー」
「いや、実に実に査定に響くなあ、その発言は。良し、時給をたっぷり下げてやろう」
「店長、愛してます」
「ああ、私もお前を愛している」
店長は一を見ず棒読みで返事する。
「……言ってて歯が浮くどころか腐りそうになりますね」
「お前もう（打ち）クビ（獄門）な」

ソレと初めて出会った時、オンリーワンに入った時。どちらでもない、漣は今日確信した。勝負は、この日この時になるのだと。
「……っし！」
「あれ？　気合い入ってるねー、えーと、漣君？」
「え、あ、はっ、た、旅部長……！？」
漣は今、オンリーワン近畿支部の廊下にいるのだから誰かと擦れ違うのは珍しい話ではない。ただ、その相手が所属する部署の長なら話は別であった。
「確か、君と顔を合わせるのは二回目だったね」
「お、覚えていてくれたんですか？」

親しげな態度で漣に話し掛けるのはオンリーワン近畿支部の情報部部長、旅である。
彼はサンダルに半ズボン、半袖と、威厳があるとはとても言えない服装をしていた。まるで子供のような、と言うより、旅の背格好はそのまま子供なのである。
それでも、漣は小学校高学年程度の姿をした旅に畏敬の念を禁じ得ない。彼こそが、オンリーワン近畿支部、情報部を纏めるただ一人の男なのだから。
「ふっふーん、タキシードに、紅い薔薇ね」
「おっ、おかしいでしょうか」
「そんな事はないよ。ただ、随分と古典的だね。それじゃあ弄ってくれって言ってるのと同じだと思うけど。それで、デートのお相手は？」
「え、えーと……」
漣はどうやって誤魔化そうかと考えてみるが、相手は情報部を統括する旅である。全て見透かされたような笑みを浮かべられては、観念するしかない。
「ま、あの子にはこれぐらいが丁度良いかもね。なんせ鈍いと言うか、薄いから」
「……どうか内密にお願いします」
「あっはっは、ここをどこだと思ってるんだい。多分、明日には情報部の皆にばれてるよ。って、そんな顔しないでよ。よしよし、結果はどうあれ僕は君を応援しよう。そうそう、あの手のタイプにはガンガン行った方が吉だからね。最近じゃ草食系がどうのとか言ってるけど、やっぱり男は肉を食べなきゃ」
「は、はあ、どうもです」
アドバイスは素直に嬉しいのだが、自分と別れた後、旅はこの事を誰かに話すのだろうなと、漣は肩を落とす。
「ん、頑張りなよー」
ひらひらと手を振る旅に別れを告げ、漣は目の前の扉をノックし

た。返事がないのはいつも通りなのでドアノブを握る。掌が汗で湿っていたのに気付き、彼は苦笑した。
「失礼します」
目当ての人物は、そこにいてくれた。それだけで漣の鼓動は早くなる。
「どうした？」
「あ、その、春風さんこそ、どうして……」
「暇だったからな」
漣の目当ての女性、春風はいつもと変わらないスーツ姿で漫画に読み耽っていた。
「暇だから、ここに？」
知っていた。春風がここにいると分かっていた。一言、それだけ言えば済むのに口は無駄に空回る。
「折角の休日に仕事場で漫画を読む、か。ふ、情けないな」
「そっ、そんな！　俺は良いと思いますよ！」
「そうか。それよりも漣、その格好はどうした。パーティにでも出席するつもりか？」
心臓が高鳴る。
「あ、っと、その……」
漣の喉は既にからからだ。断られたらどうしよう。やっぱり変な格好だろうか。頭の中はぐちゃぐちゃに撹拌され、必死に言葉を探し求める。
「春風、さん。あの、俺、伝えたい事があるんです」
「携帯では駄目なのか？」
春風の視線は漫画に釘付けだ。でも、構わない。漣はありったけの唾を飲み込み、なけなしの勇気を振り絞る。
「駄目なんです。直接、言わせてください」
「そうか。では言ってくれ」
「……俺は」
言ってしまえば、もう後戻りは出来ない。成功しても失敗しても

以前のような関係には戻れない。
「あなたの事が――」
それでも、漣は口を開くのだ。届くかどうかも分からない思いを吐き出す為に。

「ああ、駄目だヨ」

「――っ！？」
部屋中に張り巡らされる殺意。室温が下がったように感じられ、空気は淀んでいく。実際に寒くはなっていないのだが、漣の背中からは冷や汗が止まらない。指一本たりとも自由に動かせない。
「キミ、誰だい？　何を言おうとしていたんだい？　いけないナあ、人のモノに手を出しちゃ」
「……お、まえっ……」
漣の声は悲しくなるほど小さく、震えていた。無理もない、ここはソレに対抗、対処する為のオンリーワン近畿支部。そこに、今、何がいる。想像すらしなかった。出来なかった。
「口の利き方がなっていないネ、キミ」
不機嫌な様子を隠そうともしない。黒い山高帽と燕尾服に身を包んだ、一見すると紳士然とした男はまるで無警戒に漣に近付いていく。
「く、るなっ……」
「ん？　聞こえないナ。もっと大きな声でお願いするヨ」
男は漣の肩に手を置くと、春風に視線を送る。それだけで、彼女は恐怖に目を見開いて体を震わせた。
「火を」
男は葉巻を銜えると春風に再度視線を送る。
「……春風さん……？」
漣には信じられなかった。春風がこんなに怯えて感情を剥き出しにしている事も、ソレが支部に入り込んでいる事も、

「……はい」
彼女がソレの、他者の言う事に従い、唯々諾々と動いている事も、何もかも。
「んん、やっぱりイイ。イイネえ」
葉巻に火が点く。室内を紫煙が満たしていく。
「くっ……」
見ていられない。春風の、尊敬している上司の泣き出しそうな顔なんて、見たくない。漣は目を瞑り、これからどうなるのかを考えた。今日は春風に思いを伝えて、そこからは、そこからは――。
「ウララ、彼は誰だい？　キミとはどんな関係にあるのかナ？」
「う、あ……」
春風の視線が辛い。漣は許しを乞われているような、そんな気がしている。
「……ただの、部下だ」
「んん、そうかい」
正直、漣はほっとした。当たる前に砕けるというのは、こんなにも気が楽になれるものなのかと、内心で笑う。
「じゃあ、今年は誰を壊せば良いんだろうネ。ウララには家族がいないし、そこの彼とは何でもないらしいからナあ。うーん、良かったネ、そこのキミ、優先順位は下の方だヨ」
このふざけた男は何を言っているのだろう。得体の知れない怒りが、漣の体内から沸き上がる。
「……ってる」
「ん？　もっと大きな声で頼むヨ」
確信した。与太だと笑っていた話だったが、確度の低い情報がオンリーワンに、ましてや情報部にはびこる筈はない。駒台に現れる死神とはこの男の事で、
「漣、漣、動くな……」
死神に狙われているのは、この人なのだと。
「春風さんが嫌がってるじゃないか！」

「んん！？」

軽蔑した。落胆した。憤りさえ覚えた。だからこそ、春風を好きだと確認出来た。金縛りから解かれた漣は、男の持っていた葉巻を手で払い、返す刀で頬に拳を打ち込む。

男は簡単に壁まで吹き飛び、背中を強かに打ち付けた。被っていた山高帽はずり落ち、苦しそうに呻いている。

「春風さん、こいつは、こいつが……」

「なっ、何をしているんだ！」

「なっ、何をって……」

「漫画の主人公にでもなったつもりか！？　自惚れるな漣、すぐに逃げろ！」

そんなつもりは毛頭ない。ただ漣は、惚れた女性が困っていたから動けたに過ぎない。

「あなたは嫌がってた！」

理由ならばそれで充分だと割り切っていた。春風が自分を何とも思っていなくても構わなかったのである。

「戦闘部を呼ぶんだ！」

「春風さんも逃げるんですよ！」

「私は……」

漣の覚悟は決まった。春風を残して逃げようとは思わない。彼女がこの場に留まるなら、一時だって目を離したくない。

「じゃあ、戦います」

「無理に決まっているだろう！」

漣にはソレと戦う力はない。ソレから逃げる足やソレを捕捉する目はあっても、ソレを殴る腕はないのだ。残酷な事実だが、漣本人がその事を一番分かっている。戦闘部でもない一社員が死神と対峙出来る筈はない。

「やります。だから、逃げてください。少しくらいなら時間も稼げます」

「……私に逆らうのか？」

「今はお互い勤務中じゃありませんから。ただの男と女、それだけでしょう」

早く、早く消えて欲しい。漣はもうぎりぎりだった。恐怖と不安を押し殺すにも限界がある。春風には醜態を見られたくない。

「春風さん、俺には何が起こっているのか分からない。悔しいけど、俺にはあなたを助けられるかどうか分からない。だけど、あなたはこの状況を望んじゃいない筈だ。だから、格好付けさせてください」

春風は死神に狙われているのだろう。理由は知らないが、確かな真実なのだろう。そして、彼女にこんな顔をさせている奴は目の前にいる。死神も、関与出来ない自分自身も、何もかも、漣には許せなかった。

「あなたはもっと自由に生きるべきだ」

「……しかし」

男はふらふらとしながらも起き上がりつつある。もう迷っている時間はない。

「……それから、やっぱり戦闘部には行かないでください。逃げるなら、外へ」

「え……？」

春風はまだ気付いていないが、漣はオンリーワンの内部にソレが入り込めるとは到底思えなかった。情報部まで誰にも見られずに来られるとも考えにくい。運が良いだけでは済まされない。高い確率で内通者がいるのだ。もしも春風が死神以外にも狙われているのなら、ここはもはや鳥篭に等しい。一刻も早く彼女を逃がさなければならない。

「……北駒台店へ逃げてください」

漣には少なくとも、あの店の連中が陰謀とは無縁に思える。同時に、死神を打倒し得る人材も揃っているのだ。自分では死神を倒せない事も、春風が逃走するまでに充分な時間を稼げない事も漣には分かっている。それでも、やる。

「んん、不意打ちとはいえ効いたヨ効いた。戦闘部じゃなくてもま

ともなパンチを打てる人間がいるんだネ。いや、参考になったナあ」
死神が立ち上がる。ダメージは受けているが、特に気にした様子はない。
「春風さん、これを」
漣は胸ポケットに挿してあった一輪の薔薇を春風に差出す。
「この後ディナーに行きましょう。美味しいフレンチレストランを予約してあるんです」
「……アナクロな奴だな」
そう言いながらも、春風は薔薇を受け取った。
これで、差し当たって思い残す事はなくなった。漣は春風を背に庇いつつ、窓へ後退りしていく。
「んんん？　こらっ、勝手な真似はよしたまえ」
「行ってください！」
冷たい風が体を吹き抜け、部屋中の淀んだ空気を吹き飛ばした。
「すまない」
春風が飛び立つのを横目で確認すると、漣は安堵の息を吐く。
「キミ、ウララが逃げちゃったじゃないか。責任を取ってもらうヨ」
「やっぱ、あの人には空が似合ってる。それも夜の、満天の星空だ」
「んん、分かっているじゃないか。僕もそう思うヨ」
最後に見れた彼女の姿が、あれで良かった。これで、本当に心置きなく死ねる。

白い嘘吐き

何度見てもこの手の光景は慣れないものだと、情報部の木麻（きあさ）は溜め息を吐いた。彼女は旅の直属の部下で、何も知らない者からは彼の秘書だと思われている。実際には木麻も現場に出る事もあるのだが、その事実を知る人間は少ない。

「やはり、酷いですね」

「うん」

正直、木麻は辟易としていた。自宅で寛いでいるところに旅からの呼び出しを受けて支部に戻ると、これである。

まず、信じられなかった。オンリーワンの内部で起こった事件もその一つならば、起こった事件が殺人なのである。それも、殺害方法は極めて残酷だ。

部屋中に飛び散る臓物と血液。充満したおぞましい臭い。壁にこびり付いた肉が血の跡を引きながらずり落ちていくのを見て、これはついさっき起こった事なのだと木麻は改めて実感する。

「爆弾でも投げ込まれたのでしょうか」

「いや、それはないよ。……気付いてるんでしょ、木麻君」

言ってみただけなのだが、上司の旅には相変わらずこの手の冗談が通じない。

「例の死神ですね」

「うん。手口は一貫してるね。体内に侵入、あるいは憑依と呼ぶのかもしれないけど、とにかく体の内に入る。一体どんな原理でこうなったのかは知らない。だけど、こうなる」

木麻は過去に二度、今回と同じような惨状を目撃している。そのどちらもが、死神と呼ばれるソレの引き起こしたものだ。

「あながち爆弾というのも間違いではないかもね。手段はどうあれ、

ここまでバラバラになるんだから。うん、これはむしろ……」
「むしろ、破裂ですか。人体の形成を維持するのに不可能なレベルまで膨張、耐え切れなくなり、やがて……」
木麻は室内を見回した。凄惨さ、残酷さがやけに目立っているが、やり方としては実に派手で、見事である。オンリーワンに侵入するだけでなく、内部の人間を殺害、更にここから逃げおおせるだけの手腕。ただのソレに出来るとは思えない。
「やられたのは……うちの二課、漣君か」
「しかし、彼はどうしてここに？　二課は今日非番になっていたと思いますが」
「……さあね。僕には分からないよ」
旅の歯切れは悪かったが大した問題でもない。殺されたのが情報部の漣と分かればそれで良い。問題なのは被害者よりも容疑者だ。
「窓が開いているね」
「犯人はここから逃げたんでしょうか」
「多分、違うだろうね」
「では、やはりここから逃げたのは春風になりますね」
「だろうね」
理由は分からない。しかし死神が狙うのは春風なのだ。ここに死神らしきソレが現われたのなら、ここに春風がいなければならない。
「旅さん、春風はここにいたのですか？」
「うん、間違いないね」
旅がそう言うのならば、春風はここにいたのだろう。そして、彼女は消えた。死神も消えた。残ったのは哀れな死体だけである。
「では、春風が犯人であるケースも視野に入れましょう」
「どうしてだい？」
こんな時だけは旅のとぼけた表情が気に入らない。それでも、木麻は僅かな憤りすら殺して無表情を努める。
「過去二件で春風は現場に残っていました。死神が犯人だと、そうも言いました。我々も人間には難しい犯行だと判断して彼女を容疑

から外しました。しかし、今回に限っては違うでしょう。どうして、春風はここから姿を隠したのですか」
「死神に連れ去られたのかもしれないよ」
「違うかもしれません。春風が犯人でないとも言い切れないでしょう」
「ただ、死神から逃げたかもしれないね」
「連絡もなしに、わざわざオンリーワンの外へですか？」
「そんな暇がなかったりして」
「……理由はどうであれ、何が起こっているのであれ、春風がここにいないのは事実です」
　これは旅が意地悪く木麻の意見を否定している訳ではない。彼はこれから成すべき事を理解しており、それを彼女に分かって欲しいだけなのだ。意見を戦わせるというより、お遊び程度の論議なのである。
「その通り。なら木麻君、君ならどうする？」
　その事が分かっているから木麻も嫌な顔をしない。情報部としての職務を全うするべく動くだけだ。
「最優先事項は春風の捜索、保護でしょう。次に死神の位置確認、及び確保。最後に、この部屋の後片付けを」
「うん、僕もそれで良いと思う。だけど春風君の居所には当てがあるんだ。多分北駒台店だろうね」
「確か、あそこには三森がいましたか。なるほど、可能性としては一番高いですね」
「時期はどうあれ、遅かれ早かれ死神もそちらに出向くだろうね。春風君は北に任せるとして、一先ず、ここを片付けなきゃ」
「それなら明日にでも係の者を呼びましょう」
　まさか、この部屋を情報部の長である旅に掃除させる訳にはいかない。そう思い、木麻はよかれと発言したのだが、
「いや、僕がやるよ」
　旅は頭を振る。

「失礼ですが、このような些事をあなたには回せません」
「些事じゃない。漣君は僕の部下だ。それに、彼には身寄りがない。誰も引き取ってはくれない。まともな式にだってならないよ。だから、僕がやる」
旅のセンチメンタリズムは情報部には似合わない。木麻は常々そう思っていた。
「では、お任せします」
「木麻君、君も悼んでいくんだ。仲間が死んだんだよ」
時間は金にも代えられない。何物にも変え難く、何をもってしても買えない。しかし、上司には逆らえない。木麻は心ない黙祷を捧げてから旅を見遣る。
――今、殺してしまおうか。
小さな体躯。あどけない笑顔。部下思いの優しい優しいお人好し。情報部には相応しくない。木麻の思い描く理想的な職場、自分が取って代わってしまえば、夢は現と成り代わるのだろうか。
「木麻君」
「……次はなんですか。線香でも買ってきましょうか？」
「僕にその手の冗談は通じないよ。春風君が情報部や戦闘部に連絡せず逃げた理由だけどね、少し見えたんだ」
「早いですね。お聞かせ願えますか」
「うん。近畿支部には内通者、スパイがいるよ」
「内通者、ですか。それが春風の逃亡とどう繋がるのでしょう」
旅はしゃがみ込み、床に落ちている肉片を愛しげに撫でた。
「死神を見た者はいるのかい？　春風君はここの人間を疑っているのさ。支部にソレが侵入しただけでも拍手喝采なのに、誰にも見られずに漣君を殺して逃げ去るなんて、ちょっと信じられないな」
「単純に姿を隠せる能力、もしくは他者の視界、認識を妨害遮断する能力を持つソレなら可能です」
「僕が言いたいのはそういう事じゃない。仮に、死神にその手の力があったとしてだ。わざわざオンリーワンに来る意味が分からない。

だってそうだろ、春風君を狙うならここじゃなくても構わない。事実、今までは彼女の自宅で事件が起きているんだ」

鋭いと言うべきか目敏いと言うべきか。木麻は素直に感心しておいた。

「つまり、死神を手引きした者がいると。そしてオンリーワンへ手引きする理由があると。そう言いたいのですか？」

「まあね。そうでもないと納得出来ないよ。ここには優秀な人たちがたくさんいるんだから。でもね、理由は分かるよ。これは明らかに挑発だよね」

「挑発ですか。我々に真っ向から喧嘩を売る者がいると？」

「いるだろうね。ま、問題はスパイがどこに通じているかだよ。誰が、僕たちに挑戦状を送り付けたのか、だ。木麻君、そこを踏まえて色々とよろしくね」

木麻は頷き、耐え難い臭気の立ち込める部屋を辞するべくドアノブに手を掛ける。

「ああ木麻君。一つだけ伝えておくよ」

「なんでしょうか」

「僕は裏切り者には寛容なんだ。だけど、部下を殺す奴には容赦しない」

「……聞き届けました」

どこまでも冷酷な声。旅の顔は見えないが、木麻には分かる。彼はきっと、楽しくて楽しくて仕方なくて、笑っているのだ。

「糸原さんって基本的に嫌らしいですよね」

「はあ？　ちゃんと手加減してやってんじゃないの」

「これ、このなんか、端から抜けられないんですけど。ああっ、今ガードしてましたよ俺！」

「今の中段だからしゃがんでたらガード出来ないわよ。あと、抜けれるから。バッタみたいに飛んでるから落とされんのよ」

「飛ばなきゃ抜けられないじゃないですか！」
深夜の中内荘に一の悲痛な叫びがこだまする。彼と糸原は、彼女がポーカーで北から巻き上げたゲームで対戦していた。携帯型のゲーム機は知っていたが、テレビに繋げる据え置き型のゲーム機が来た事に一は痛く感動していたのである。
が、楽しかった筈のゲームもいざ対戦が始まると糸原の狡猾さが目立ってきた。最初こそ、お互いがゲームについて何も理解していないから勝負は拮抗していたのだが、糸原がコツを掴むと、後はもう。
「やばー、もう十連勝じゃん。一、なんか賭けない？」
「ハンデくださいよ、ハンデ。三十秒動かないでください」
「イヤよ。それよりほら、何賭ける？　金？　金ね、良いわよ、俄然乗ってきた」
「……ヒルデさんと遊びたかったなあ」
糸原の耳が僅かに動く。
「ヒルデって、あのぼけーっとした女？」
「淑やかでおしとやかで可愛い女性です。失礼な事言わないでくださいよ」
「あっそ。へえ、あんたってああいうのが好みなんだ」
「ヒルデさんはハメたり無限コンボしませんからね」
「これハメじゃないわよ。あんたが下手だからよ」
「あー、そうですか」
室内にはお互いの声はなく、コントローラのボタンを叩く音だけが響いていた。その音が、一には酷く乾燥したものに思える。
「……ちっ」
「あんた今舌打ちしたでしょ」
「してないですよ」
糸原は無言で一の頭を叩いた。一も糸原の足に蹴りを入れ返す。
「バグっすかね、画面端から逃げられないんですけど」
「そうね」

「……逃がしてくださいよ」
「ヤ。絶対に逃がさないから」
――足を、絡めるな。
一は溜め息を吐いた。文句を言ってやろうと思ったが、どうせ何をしても自分の負けは動かない。

不躾な電話の音が鳴ったのは、一たちがゲームに飽き、布団を敷いてうとうとしていた頃だった。
「……糸原さん、電話」
「すかー」
寝たふりである。これでは何を言っても糸原は動かない。一は諦めて、重くなりつつある体を引きずっていく。
「もしもし……？」
『私だ』
「……切りますよ店長」
『これだから最近の若い奴は嫌いなんだ。キレる十代、ああ、恐ろしい。恐ろしくキレやすい』
キレるの意味が違うし自分は十代でもない。一は受話器を掴む手を持ち替えて頭を掻いた。
「シフトの交替ですか？　ちなみに今、俺は寝ようとしていたところです」
『おはよう。一、今から店に来い』
「俺の話聞いてました？　いーやーでーすー」
『何を勘違いしているかは知らないが、お前の命に関わるぞ。これは善意の通報だ。そこを踏まえてもう一度聞く。店に来い』
深夜、突然の呼び出しに応じるほど一は寛容ではない。しかし、命が関わっていると、それも自分のものならば話は違ってくる。
「……分かりました。すぐに行きます。俺一人で良いですよね」
『ん、ああ。そうだな、寝かせといてやれ』

何が起こっているのか、一にはおおよその見当が付いている。店に行けば、奴がいる。

嫌な予感は当たるものだと、一は改めて思った。

店のバックルームには店長と三森、それと、春風がいる。彼女の姿を見て、一は少なからず驚いていた。情報部である春風が、三森を嫌っている春風がここにいるからではない。無感情、無表情を常としていた彼女が俯き、今にも死にそうな体でいたからだ。

「……店長、どういう事ですか？」

店長は少しばかり憂鬱そうに一を見遣り、煙草に火を点けた。

「何を説明して欲しい？　お前が呼ばれた理由か？　春風がここにいる理由か？」

「多分、関係あるんでしょう？　俺がここにいるのと、春風がここにいる事は」

「そうなるな」

漂う紫煙に一を顔をしかめる。つい最近まで自分も吸っていた筈なのに、今はとても汚いものに感じられた。

「単刀直入に言ってしまえばだ。春風は死神と呼ばれるソレに狙われていて、その死神はお前も狙っている」

「……俺が、死神に？」

「意外と冷静だな。もっと取り乱すかと思っていたが」

こうして一が落ち着いていられるのは、ジェーンに死神の話を聞いていたからなのだが、その事について彼は黙っておく。

「まあ、俺もソレには慣れてきましたからね」

「魔女に、死神か。次はなんだろうな、天使と悪魔か？」

「次があれば、ですけどね」

その通りだと、店長は喉の奥でくつくつと笑った。

「一、助かりたいなら私の言う通りに動け」

助かるのなら何でもする。一は迷わずに頷いた。

「俺は何をすれば良いんですか？」
「実行出来そうな方法は二つある。一つは、駒台から離れる事だ」
「死神から逃げるって事ですか。上手くいくんですかね」
「無論だ。もう一つは簡単だ、何より手っ取り早い。死神を倒す、だ」
確かに、言うだけなら簡単だ。だが、一は知っている。今までに死神をどうにか出来た者がいない事を。なら、逃げるしかない。
「聞いても良いですよね。どうして、俺が狙われているんですか？」
一の問いに店長は黙り込む。今はこれ以上話す事がないと言わんばかり、そんな態度だった。
「私が話す」
代わりに口を開いたのは三森である。
「お前が死神に狙われてるってのは、マジな話だ。ソンで、どうして狙われてんのかって事なンだけどよ」
「ええ、俺はそこを聞いてるんです」
「こいつのせいだ」
三森は溜め息を吐いた後、春風を指差した。指差された春風は身じろぎ一つしなかった。
「……要領を得ませんね。三森さん、順を追って話をしてください」
「あー、長くなンぜ」
「俺は命が掛かってるんです」
「仕方ねェな。あー、じゃあまず、えーと」
三森に会話の主導権を握らせていては埒が開かないと一は判断する。
「じゃあ、俺の質問に答えてください。そもそも死神ってなんなんですか？」
「え？　そりゃアレだろ、死の神様だろ。ほら、骸骨で鎌持ってマント着ててよ」
自分は三森と同レベルの想像力だと一は内心で嘆いた。
「俺を狙ってるのもそんな格好してるんですか？」

「あ？　違うに決まってンだろ」
「……だったらおかしな事言わないでくださいよ」
「てめェが聞いたンだろうがよ！」
「もう良い。三森冬、貴様は黙っていろ。私が話す」
まともに会話すら出来ていない二人を見かねたのか、今まで何もしゃべらないでいた春風が口を開く。
「一一、死神とは何かを聞いたな。貴様らが想像した死神のイメージは一般的なものだろう。決して間違いではない。あのおどろおどろしい姿は死の神、死を司るモノに対してのアレゴリーだ」
「本当はそうじゃないってのか？」
「いや、正しい。しかし死神にはまた違った側面もある。ただ恐れられる存在ではないんだ」
一は首を傾げる。その様子を見て春風は何か言いたげだったが、やがて何も言わずに俯いた。
「死神は神に仕える農夫とも呼ばれている。何故だか分かるか？」
「農夫？　あー、鎌持ってるし、ほら、魂を刈り取るって奴じゃないのか。刈る、ならやっぱり鎌が似合ってるし」
「では、どうして魂を刈る、なのだ。別に切るでも壊すでも叩くでも構わない筈だろう。更に言えば、鎌である必要はない。戦闘で相手を殺傷するのなら剣や槍の方が理に適っている」
春風に物を教わるのは何とも言えないが、そう言われてみればそうかもしれないと一は思う。
「死神のイメージ、鎌を持った姿には原型がある。ローマ神話の農耕神、サトゥルヌスだ。この神は鎌を持った男の姿で表される事が多い。農耕と死、共通点は刈り取り、収穫だ。作物、稲や麦を収穫する時には鎌を使うだろう。鎌を武器にする勤務外もいるが、そもそも鎌は鍬と同じで農耕具なのだからな」
「ああ、そういう事か。農夫って部分もあるから鎌を持ってんのか」
麦と魂を一緒くたにされているようで、ぞっとしない話だとも彼は思った。

「それに、死神は無差別に殺さない。死期の迫った者の魂を刈るだけだ。そして、その魂が現世で迷わないように死後の世界に連れていく」

「なんだ、良い神様じゃないか」

一は今、見た目の恐い不良っぽい子が捨てられた犬を拾っていた現場を目撃したかのような、温かな気持ちになっていた。

「だが、神なのだ。神は国によって、あるいは宗教によって姿を、性質をも変える」

「えーと？」

「一一、我々を狙っている神は確かに死神だ。そして、死神でしかない。死を司り、死を弄び、死をこよなく愛する、真の意味での死神だ」

不良はやはり不良なのだ。犬を拾ったとはいえプラスにはならない。マイナスに何かを足してもゼロになるか、マイナスのままなのである。

「流石に詳しいんだな。伊達に狙われてはいないって事なのか？」

「……その死神の名は、ゲーデ。バロン・サムディ、バロン・クロア、バロン・シミタールとも呼ばれている。ハイチ、ブードゥーに伝わる死とセックスのロアだともされている」

「ロア？」

「言わば精霊だな。だが一一、そこを気にする必要はない。ゲーデが神であれ精霊であれ、我々に危害を加える存在である事に間違いはない」

――我々、ね。

「何か他に特徴はないのか？　例えば姿とか」

「黒い山高帽と燕尾服を着ている。後は、酒と葉巻を持ち歩いているな」

「格好だけならジェントルマンだな」

「中身は違うがな。非常に、自己中心的だ。粗野と下卑を付け足しても足りないくらいだ」

一の疑心は徐々に膨らんでいく。
「俺が何に狙われてんのかは何となく分かった。けどよ、俺は、どうして狙われてんだ？」
「ゲーデは無差別に人を襲う。理由などない。一一、貴様はたまたま奴に選ばれたのだ」
頭に血が上っていくが、一は冷静になろうと必死に努める。
「……あの、さ。さっきから皆はぐらかそうとしてるけど、理由がない訳ないだろ」
「ないって言ってンだろうがよ。てめェはとっとと旅行にでも行ってこい。土産は木刀で良いからよ」
「何を隠してるんですか」
「隠してなどいない」
一度息を吐き、吸う。落ち着けと自分に言い聞かせる。
「春風、お前は俺に駒台を出るよう勧めてたよな。お前はあの時点で俺がやばいって知ってたのか？」
「いや、単なる気紛れだ」
「知ってやがったな。言え、お前はどうして俺がやばいと気付いたんだ。死神が狙うのはお前だけなんだろうがよ」
「だから、知らん」
「分かった、分かったよ」
一は諦めた風に装い、自分のロッカーを開ける。
「おい、何してやがる。てめェはこっから失せろ」
「怒らないでくださいよ、三森さん」
「――っ！」
彼の狙いは、ロッカーにしまわれていたアイギスだった。形状こそどこにでもあるビニール傘だが、威力は絶大で、使い手である一本人にも能力の全貌は把握し切れていない。
「動かないでくださいよ。余計な事をしたら、本気で止めにいきます」
「……おい、私は味方だぞ。てめェは何を使うって言ってンだ、あ

あ？」

「信用出来ないんです。さっきも言ったけど、俺は命が掛かってる。訳の分からない理由で振り回されちゃたまらないんですよ」

「信じろって言ってンだろ！」

「だったら全部話してください。でないと、こいつは下ろせない」

いつのまにか、一は手に汗を握っている。納得出来ないとはいえ、三森を含め三人を敵に回そうとしているのだ。

「……一一、何度も言うが、貴様がゲーデに狙われるのは確かなのだ。だから」

「だからっ、どうして俺が狙われるって分かるんだよ！　ゲーデってのは無差別に誰かを襲うんだろ。なら、死神本人でもない限り次は誰がやばいのか知りようがないだろ！」

話が始まってから、春風たちは何かを隠そうとしているのが嫌でも分かる。

「春風、お前は死神について何を知ってんだ。それとも何か、お前は死神とつるんでんのかよ？」

「……違う。私は……」

「――もう良い。見苦しくてかなわん」

心底煩わしそうに口を開いたのは店長である。彼女は火を点けたばかりの煙草を床に捨て、足で強く踏み付けた。

「春風、お前の口から言えるだけの事を全て吐き出せ」

「二ノ美屋店長、しかし、私は……」

「言え」

春風は縋るような視線を店長に送る。

「言え。それで一も納得するだろう」

厳しい言い方だったが、一にはまだ店長が春風の味方をしているように思えて仕方がない。

――お前の口から言えるだけ。

つまり、全ては春風の胸三寸なのだ。今から説明するのは彼女一人だけで、彼女の言いたくない事は言わなくて良い。それでいて一

は納得しなければならない。
しかし、聞かない訳にはいかなかった。この話の結果如何によっては、また、アイギスを握る事になるのだから。

彼には知られたくなかった。自分がどれだけ厄介で、汚れていたのかを。もし知られてしまえば、あの人に良く似た顔で罵られてしまう。軽蔑されてしまう。想像するだけでも耐え切れない。想像すらしたくない。
隠そうとしていた気持ち、その事が三森にも店長にもばれているから、気を遣われる。あの日から今まで、ずっと彼女たちを敵として見ていた。だから、余計に情けない。情けなくて、悲しくて、嬉しかった。涙が出そうになっていたが、我慢する必要はない。どうせ流れ尽き、枯れ果てている。出そうとしても出せない筈だ。

――姉ちゃん。

好きな人がいた。全身全霊を掛けて愛していた。届かない、伝えてはいけない思いだったけれど、思うだけで満足していた。
今は戻らない。彼は二度と帰らない。割り切った。振り切った。
なのに、それなのに、あの顔で、あの顔で現われた奴がいる。
そうか。自分はあの人を忘れてはいけないんだ。傍にいても気軽には触れられなかった。離れてしまったから諦めた。だというのに、世界とはなんと残酷なんだろう。

「……分かった」
春風は小さな声で短く呟いた。
「話す。だから一一、話を聞いて欲しい。その後なら幾らでも私を罵ってくれて構わない」

「罵る……？」
「聞けば、分かる」
何の事か一には分からない。ただ、話を聞いてしまえばここにいる人間の関係が壊れてしまうような、そんな危うさを感じていた。

冬の雪売り

春風麗は父、春風涼（りょう）、母、春風秋菜（あきな）、弟、春風夏樹（なつき）の平凡な四人家族の長姉だった。

だった。

今となっては全てが過去の、露と消えた話である。思い出だなどと、聞こえの良い言葉では片付かない。

――二年前の話だ。

春風の弟、夏樹の誕生日にそれは起こった。ソレは、やってきたのである。

夏樹は春風の五つ下、彼は今年駒台大学へ合格し、来年からの新生活に胸を膨らませる高校生だった。春風も両親も喜び、恥ずかしいと嫌がる夏樹を無理矢理引き止めて、ささやかなパーティーを開いた。家族と、春風と仲の良い友人を入れた計五人。それでも、楽しかった。嬉しかった。少なくとも、春風はそう思っていたのである。無論、ここに集まっている全員も同じ気持ちだと彼女は信じていた。

宴もたけなわ、春風と友人が明日の仕事に差し支えるといけないからと、席を立った時だった。

『ンン、楽しそうだナあ。お誕生日会、かい？　僕も混ぜてもらえると嬉しいのだけどネ』

春風家のリビングに得体の知れない男が現れた。

誰も口を開けず、動けなかったが、友人の叫びに全員が我に返った。母親は顔面を蒼白にしながらも、自分の体で夏樹を隠す。父親はその二人の前に立ち、男に問うた。

『お前は何者だ』

煙のように現れた、一見紳士風の格好をした男は笑んで返す。

『僕は死神と呼ばれているヨ』
疑う余地もない。男はソレか、もしくはソレに準じる存在なのだ。恐怖していた。しかし、彼らは僅かに安堵もしていたのである。春風の友人が、そうさせていた。春風はオンリーワンの情報部で、友人は対ソレのスペシャリスト、戦闘部なのである。まさか、むざむざとやられる筈がない。
『この街で今日誕生日なのはネ、君だけなんだ』
男は葉巻を口に銜え、夏樹を指差した。
『……俺、が……？』
『口を利くな夏樹。父さん、母さん、私たちがやるから、逃げていて』
『ンン、気丈なお嬢さんだね。気に入ったヨ』
男が春風に向き直った刹那、友人はソレに飛び掛かっていた。

「それで、どうなったんだよ？」
冗舌に話していた春風が急に口を閉ざしたので、一は彼女に相槌を打った。それでも春風は続きを話さない。
「おい、少し待ってやれよ」
「……時間がないんですよ？」
「待てってンだよ」
「待てないって言ってんですよ。俺はあなたと違って死神に狙われてる。……安全な立場から物を言う気分はいかがですか？」
今日に限って、一は三森に対して腹立たしいという感情を抱いている。彼女に対しては語気も荒くなっていた。
「てめェ、私に噛み付いてンじゃねーぞ！」
「……やめろ。一一、済まないな、続きを話す」
春風が割って入り、二人は仕方なく黙り込む。
「続きと言ったが、もう終わる。……死神に飛び掛かっていったが、攻撃は一発も当たらなかった。まるで煙を殴っているような手応え

のなさだった」
「社員が二人もいて一発も、か？」
「ああ、一発もだ。その後、両親は殺された。翌年の冬、弟が殺された」
「な、あ、おい」
肉親の死を詳細に話したくない気持ちは分かるが、春風の語り口は余りにも淡々としていて、一には不気味に思えて仕方がない。
「話は以上だ。一一、質問はあるか？」
「あり過ぎて困る。だからさ、どうして俺が狙われるんだ？」
「誕生日だとか、気丈だとか、死神はそれだけで人間を殺せる。私と知り合いだから。これだけでも奴は誰かを殺す。一一、今一度言うが、他に理由はない」
「んな理由で殺されてたまるかよ！」
一は声を荒らげるが、春風は気にした素振りを見せない。仕事は終わりだとばかりに立ち上がる。
「おい、どこに行くつもりだ？」
「二ノ美屋店長、世話になった。私は一度家に戻る」
「そうか」
それだけ言うと、店長は煙草に火を点けてパソコンのモニターに顔を向ける。
春風もバックルームから立ち去ろうと扉に手を掛けた。
「――なあ、方法はもう一つあるんじゃないのか？」
「さあな。それよりも一一、荷物を纏めておけ。長旅を覚悟した方が賢いぞ」
「死神から逃げる。倒す。でもな、俺が助かるならこんなんもどうだ。お前が、死ぬってのは悪くないんじゃないのか」
空気が痛い。それでも一は続けて言った。
「死神はお前に興味を持ってる。お前の知り合いだから俺はやばい。なら、お前が死ねば俺には危害は及ばない。なあ、こう考えるのはおかしいか？」

「……なるほどな。いや、その考えには頭が回らなかった。手が詰まったなら考えてやらん選択肢でもない」
「詰まってんだろうが。俺はお前と心中すんのも、お前の為に死ぬなんてのも真っ平ごめんだからな」
「肝に銘じておこう。では一一、息災でな」
どの口で言うのか。春風は軽く手を上げると扉を開けて出ていってしまう。
「分からねえ奴だな」
「……おい、こっち向け」
三森に呼ばれて振り向くと頬に一撃をもらった。一は何が起こったのか分からずに呆然とする。
「てめェ、くだンねー事言ってんじゃねェぞ」
「……くだらない？　本当にそう思ってるんですか」
「くだらねェだろうが！　死神を倒せば済む話にいちゃもん付けやがってよ！」
「誰が倒せるんですか！　現に二人がかりでも無理で、二年経っても倒せてない。俺は死にたくない。方法があるなら賭けてみたい。俺は間違ってるんですか？」
三森は言葉に詰まるが、引き下がれないのかまだ食って掛かる。
「倒せば良いンだろ倒せば！」
「じゃあ倒してくださいよ！　旅に出ろとか訳分からない事言うな！　結局勤務外にはそれしか方法がないんだよっ」
「うるせェ！　うるせーうるせーうるせー！　ごちゃごちゃ喚いてンじゃねェよっ、こっちだって好きで勤務外やってねーんだ！」
「なってるもんは仕方ないだろ！　今更文句言うなよ！」
「私の何が分かるってンだ！　好き勝手ぬかしてんじゃねェ！」
ヒートアップする二人を、店長は止めようともしない。煙草を吹かし、やに焼けした壁を眺めるだけだ。
「じゃあ早く倒しに行ってくださいよ！」
「調子乗ンなよ下っぱァ！　てめェからぶっ飛ばしてやっても構わ

ねーんだぞクソが！」
　しかし、うるさい。店長は煙草の吸い殻を空き缶に押し付け、器用に椅子を回転させる。どうやって馬鹿二人を黙らせるか考えていると、電話が鳴った。タイミングとしては絶妙だったが、情報部から死神に関しての連絡だろう。どうにも、出る気が起こらない。
「……店長、電話ですよ」
「知っている。今出るからお前らは口を開くな。耳障りだ」
　受話器を取ると、予想していた通りの声が聞こえてくる。相手はオンリーワン近畿支部情報部の木麻だ。

　電話が掛かってきたのは幸運かもしれない。あのまま三森と言い争っていても得るものは皆無だったろう。一はパイプ椅子に座り、深く息を吐き出す。
「ほっとしてンじゃねェぞ」
　その隣に、三森がわざわざ椅子を並べて座った。
「……まだ言い足りないんですか？」
「ぎゃっはっはっ、ネチネチいじめてやンぜー……って、冗談だよ。私の性には合わねェからな」
　だったら、せめて今だけは隣に座らないで欲しい。一はテーブルに積んである雑誌を手に取り、わざとらしく三森から目を逸らした。
「それと、嘘を吐くのも性に合わねェンだ。つーか、私が吐いてもすぐバレやがンの」
「……嘘？」
「あの野郎全部喋ると思ったんだけどよ、最後の方は流しやがった。だから、私が話す」
　むきになっていたのは自分だけだったらしい。一は恥ずかしくなり、雑誌を元の位置に戻した。
「三森さん、怒鳴ってすいませんでした」
「う、うぇ？　あ、あーあー、気にすンなよ。その、なんだ、

こっちこそ悪かったな」
「……なんか、すぐカッとなっちゃうんですよね」
「もう良いって、な、あんま気にすンな！」
三森は一の肩をばんばん叩く。
「三森さん相手だと」
その動きがぴたりと止まった。
三森は考える。今の言葉はどういう意味なのだろう。もしかしてまだ喧嘩を売られているのだろうか。しかし、お互いが謝ったのに、ここで蒸し返しては元の木阿弥。ループである。
「……そ、そっか。は、ははっ、私ってお前とよっぽど相性が悪いンだろうな」
「そうかもしれませんね」
彼女は大人だった。だが今のところは否定して欲しくもあった。
「あー、じゃあ話すけどよ。一個だけ頼みがあンだ」
「ええ、なんですか？」
「話聞いても、春風を嫌いにならないでやってくれ」
一は訝しげな顔で三森を見つめる。
「嫌いになるなとか、罵ってくれだとか、俺にどうして欲しいんですか」
「あいつ、ちゃんと言うと思ったんだけどよ、やっぱ無理だったみてェだからさ。とにかく、頼む」
「はあ、嫌いも何も、俺は元からあいつが好きじゃないんですよ」
「それでも良いンだ。今より嫌いにならないでくれって話だよ」
良く分からないが、頷かなければ話は進まないだろう。そう思い、一は首を振った。
「……じゃ、ま、順を追ってくわ。春風の補足みたいな感じで。あ、それかお前の質問聞いてった方が良いか？」
一は少しだけ考えて、
「質問でお願いします」
頭を下げた。

「ン、何から聞きてェんだ？」
「……死神、ゲーデって奴のやり口っつーのか、戦法が知りたいですね。春風の家族はどうやって殺されたのか。教えてください」
三森は頭を掻き、天井を見上げる。
「なンつーか、とにかくえげつなかったぜ」
「えげつない？」
「あの野郎は人の体ン中に入るんだよ。小さくなったりとか、そーゆーんじゃなくて、野郎がそのままそいつの体と重なって消えやがんだ。死神どころか、魔法使いかもしンねェな」
「……体の中に入って、どうなるんですか？」
「喋ンだよ」
一は目を点にする。
「その、な、内容がえげつねェんだ。死神は……例えばお前に入るとすンだろ。そしたら、お前の秘密だとか、気持ちだとかが全部バレる」
「記憶を盗み見られるって事ですか……」
「それだけじゃねェ、その本人の口から、死神は好き勝手に喋るンだ」
想像するだけでもおぞましい。記憶とは楽しい思い出ばかりではない。個人の隠してきた罪も嘘も、殺してきた感情も、全て纏めて記録されている。何者かに中から見られ、あまつさえ露わにされてしまったら。
「春風の家族も……」
「……最初は、あいつの親父さんだった。ま、ありきたりな話だったぜ」
「ありきたりって？」
三森は煙草を指で遊ばせていたが、結局火は点けなかった。そのままへし折り、乾いた笑みを浮かべる。
「浮気してたとか、子供が最近うぜーだとか、大学に行かせる金があンならキャバ嬢に貢ぎてーだとか。ま、どこにでもいるおっさん

の話だったよ」
「そんな、酷過ぎる」
「それだけじゃねェんだけどな」
まだあると言うのか。一は唾を飲み込み、話の続きを待つ。
「親父さんが――死神が喋る度、親父さんの体が膨らンでくんだ。そんで、まあ、耐え切れなくなって……いや、実際キツい絵だし、意味が分からなかったぜ」
「膨らむって、風船みたいに、ですか」
「ンな可愛いもんじゃねェよ。人間の肉が膨らんでくんだぞ。穴っつー穴から無理矢理空気入れられてンの想像してみろ」
「あー、想像はやめときます。……春風の、母親も？」
「聞きてェか？」
聞くなと言われているようで、一は首を横に振った。
家族の仲を崩壊させ、修繕する機会さえ与えず、殺す。ゲーデの手口に、一は怒りを感じつつあった。
「両親が死んだ後は随分駆け足な説明でしたけど、弟が死んでるんですよね」
「あー、いや、死んだっつーか」
「？」
歯切れの悪い三森に苛立ちを覚えたが、思い出してしまう。
春風の家族は、三森に殺されたのだ。少なくとも、春風本人はそう言っていた。
「お前、聞いてンじゃねェのか。その、色々とよ」
一は言いよどんでしまう。確かに、色々と聞いてはいたが、正直には言えない。
「気にしなくて良いぜ。事実だからな。なんならもっぺん言ってやる。私が、春風の家族を殺したンだ」
「三森さん、それは……」
「違わねェ。実際に殺したのは死神かもしンねーけどよ、私は何も出来なかった。馬鹿みたいに喚いて、あいつの親を両方見殺しにし

たんだ」
「悪いのは、死神じゃないですか」
「やめろ。それにな、あいつの弟に関しちゃ、私はマジで殺してる」
「え……？」
三森はポケットから煙草の箱を取り出す。一から、目を背けているようにも見える所作であった。
「殺したンだよ。私がこの手で」
「冗談ですよね」
「春風は、弟について何も言わなかったな。てっきり、もう水に流してくれたンだと思ってたけどよ、あの調子じゃあ割り切っちゃいねェわな。はっ、ま、虫が良過ぎるってもんか」
「あの、何を？」
「あいつはな、弟が好きだったンだよ」
その話は以前、一も大学の構内で春風本人から聞いている。好きな煙草の銘柄だとか、自分と同じ大学に行っていたのだとか、話の内容もおぼろげに覚えていた。
「すげえ自慢げに話してました」
「じゃなくて、マジに好きだったンだよ」
「マジって、その……」
「家族としてじゃなく、男して、だよ」
「なっ……！」
そんな、ドラマみたいな話聞いた事がない。聞かされるとは思っていなかった。一の頭は真っ白になり、混乱していく。
「そういうのって、駄目なんじゃないんですか」
「いや、外国じゃ知らねェけどよ、なンか、こっちじゃ取り締まる法律はないらしいぜ」
「法律とかじゃなくて、こう、倫理とか、道徳的な問題と言いますか……」
「昔じゃあ普通にヤってたって聞くけどよ。ほら、神話の神様とか」
近親姦は、神話では禁忌や異種だのと特に取り上げられたテーマ

ではない。だが、今は神の蔓延る世界ではない。あくまで人間の世界なのだ。

「私だってフォローする訳じゃねェけどな。そーゆーンは止められねェと思うぜ」

「恋は……にしたって、見えなさ過ぎる気がしますけど」

「かもな」

「でも、あいつの弟は、その、死神に……」

殺された。その一言が、一には口に出せない。

「春風の親が死んだ後な、あいつは弟の為に必死になってた。親戚にも頼れねェし、自分らでなんとかするしかなかったンだよ」

「死神に狙われてたから、ですか？」

「寒い話だけどよ、珍しくもねェ話だよな。ンで、幾らか貯金もあったし、弟は大学に通えるようになった。傍から見てたけど、なンつーか、そこそこ幸せそうでもあったかな」

家族は殺され、残った姉弟は歪に絡まり、もたれ合う。その幸せは砂浜に築いた城よりも危うく、脆いものだろう。一は息を吐き、張り詰めた何かを僅かなりとも吐き出す。

「特に何もなくて、一年ぐれェ経った時期かな。私はオンリーワンの勤務外として、ここにいた。その日はシフトに入っててよ、ソレが出たって聞いて、現場に行った」

三森は煙草の箱をポケットに戻し、口の端をつり上げる。その表情がいたたまれなくて、一は顔を下げた。

「私が受けた命令は、死神を殺せ、だった。言われるまでもねェ。けど、ちっとばかし遅かった」

「もう、終わってたんですか？」

「そっちの方が救われてたよ、私も、春風もな。死神は、あいつの弟の体ァ乗っ取ってやがった」

拳を強く握り込み、三森は床を睨み付ける。

「死神に乗っ取られたら終わりだ。野郎が見逃さない限り絶対に死ぬ。死神は実体と霊体ってのを使い分けるンだってよ。だから、こ

っちはもう何も出来ねェ。完璧手遅れだったよ」
「本当に、どうにも？」
「……死神を殺すには体に入られる前、実体化してる時に叩くしかねェ。けど、そりゃ無理な話だ。こっちの攻撃は当たらねー」
「無敵じゃないですか……」
実体化している時でないと死神には攻撃が当たらない。霊体になられてしまっては攻撃が通じない。
「だから、やるなら一発でカタを付ける。野郎が何も出来ないまま、気付かないままにな」
「……三森さん、話の続きを」
「ン、あー」
この期に及んで話を逸らそうとする三森に、一はもう何も感じなかった。
「春風の部屋でな、あいつは弟に、ヤられてた」
想像は付いていたが、一は思わず息を飲む。
「正確に言えば、死神に乗っ取られた弟だけどよ。けどよ……」
中身は違っても、外見は同じ。彼女の愛した男そのもの。
「もう、夏樹は原型を留めてなかった。ぶくぶくに膨れ上がって、意味わかんねェ事喚きまくって、そんで、そんで」
「三森さん」
「は、まるで化け物だったぜ。でもよ、あいつは抵抗してなかったンだ。相手は好きな男じゃねえ、人間ですらねェ。ただの肉の塊だ。なのに、あいつは、あいつはっ」
「三森さん、もう良いです」
三森の悲痛な声が一の胸を突き刺している。どうする事も出来ないで、彼はただ話が終わるのを願った。
「死神にキレてもいねェ、泣いても、恨んでも！　諦めてたンじゃない、それどころか――ただ、ただ、あいつは……！」
「聞きたくないですってば！」
「……悪ィ。悪かった。私は、見てらンなかった。頭真っ白なって、

気付いたら夏樹は死んでて、そんで」
　後はもう、一にも分かった。春風がああなったのは、最愛の弟を殺されたからだろう。初めて彼女と会った時、三森を、勤務外を、北駒台店を憎いと言ったのは――。
「春風の言っていた事、今の話を聞いて色々と納得出来ました。でも、同情するつもりはないんです。あいつの為に死ぬ理由もありません」
　一は椅子から立ち上がり、体を伸ばす。
「三森さん、春風と仲の良い友人ってのは、あなたの事ですよね」
「……ああ」
　仲が良かったとは訂正しない。つまり、そうなのだろうと一は歯を食い縛る。
「俺にはあなたたちの関係がいまいち分からない。本当に仲が良いのか悪いのか」
　三森は答えない。当人である彼女にすら分かっていないのか、それとも。
「……三森さん、釣瓶落としを覚えていますか？」
「忘れてねェよ」
「だったら、あなたがあの時、俺に言った事を覚えていますか？」
「……忘れてねェよ」
　――守る。
　そう、彼女は言った。彼はその言葉で北駒台店への残留を決意したのである。分かっているから、お互いが直接は口にしない。もし口にしてしまえば、途端安っぽくなる。少なくとも、一はそう思っていた。
「あれは、本当に恥ずかしかったです」
「……うるせェな」
「でも、嬉しかった」
「そーかよ」
　ぶっきら棒に答える三森は、一と決して視線を合わさない。

「ただ、あれが本当に、俺にくれた言葉だったなら。もっと嬉しかったんですけどね」
彼は今、何かの壊れる音を聞いた。足元が定まらないのは、世界が割れ始めているからなのではと夢想する。
「三森さん、あの言葉は俺に、一一にくれたものなんですか？」
「おい、お前……」
ここまで口にしたのなら、もう止まらない。
「それとも、春風夏樹にくれたものなんですか？」
「――てめェ……っ！」
「春風が言ってました。俺と、弟は似てるって。話が本当なら、俺はそいつと重ねて見られてても不思議じゃない。いや、むしろ自然でしょうね」
「私はンなつもり――」
「――なかったとは言わせません。あなただって、似てると思ってたから、だから、俺にあんな言葉を掛けたんだ。その気持ちが少しもなかったなんて、そんなの言わせない」
三森は唇を強く噛み締めて俯いていた。謂われのない発言にはらわたが煮え繰り返っているのか、図星を言い当てられて返す言葉もないのか。一は、後者の意を彼女から読み取っていた。
「あなたたちは、俺に何を求めているんですか。守れなかったから、もういないから。次は、俺なんですか？　贖罪なら他を当たってください」
「……違う。私は、そんなつもり……」
「いや、違わない。逃げろだとか、今度こそ死なないでくれって言われてるみたいで押し付けがましいんですよ。――だから」
一はとっくに電話の終わっていた店長に目を向ける。目が合うと、彼女は全てを理解している素振りで息を吐いた。
「事情が事情だ。一、好きにしてくれ」
「……お世話に、なりました」
店長にだけ頭を下げると、一は足早にバックルームを出ていった。

残されたのは固い沈黙と宙を漂う紫煙だけで、後はもう、何もない。脱け殻のような三森と、諦観した様子の店長だけである。
「電話の相手は情報部だった」
やがて気まずい空気を嫌ったのか、店長はおもむろに口を開いた。
「仕事だ、死神を討伐しろだと」
「……奴が出たのか」
「春風がここに来た時点で察しは付いていたろ。犠牲者も出ている。早急に動け」
「おい、犠牲って……誰がやられたってンだよ」
切羽詰まった三森を見て、店長は喉の奥で笑いを噛み殺す。
「殺されたのはオンリーワンの社員だよ。ただし、春風の部下だ。更に言えば、支部内でやられていたらしい」
「支部だァ？　冗談きついぜ、あそこは、性格はともかく腕は良い連中が揃ってンだぞ」
「さて、何があったのかな。とにかく、我々が受けた命令は一つだ」
「……春風、知ってンのかな」
三森は煙草を口に銜え、自らの指に灯した火をぼんやりと眺めた。
「奴も情報部だ。知っているだろうさ。いや、知っていたからこそここに来たのだろう」
「知ってたから？」
「……今は関係ない話だったな。三森、一人では辛いだろう。誰を呼ぶ？　ああ、この時間だからな、高校生は駄目だぞ」
「いや、私一人で良い」
「しかしな……」
三森は長く、深く、煙を吐き出していく。
「あンたが言ったんだぜ、死神を倒せるのは私だけだってな」
「覚えていたか。ああ、そうだ。実体と霊体を行き来する死神には、お前の炎しかない。余計な相方は犠牲者を増やすだけだ。だがな……」
「分かってる。けどよ、ケジメ付けさせてくれや。これは私と、あ

いつの問題なンだよ。他の奴には首を突っ込まれたくねェんだ」
「ケジメなら、戦闘部を辞めた時に付けた筈だ。三森、それだけで足りないと言うならお前は」
――業、と、火花が散り、燃え盛る。三森は掌から火を生み出し、店長の言葉を遮った。
「店長、あンたには感謝してる。戦闘部抜けて、居場所のなくなった私の面倒見てくれてた。春風の事も、陰で色々助けてやってたんだろ。あいつだって、きっとありがたく思ってるよ」
「三森」
「……死神はどこだ。春風も、そこにいやがる、そうに決まってる」
「この間、草野球をやっただろう。あの河川敷グラウンドだ」
頷き、三森はバックルームの扉に手を掛ける。
「さっきのあいつの真似じゃねェけどよ、世話ンなったな、店長。――ありがと」
「まるで別れの言葉だな。三森、必ず戻ってこい。シフトに穴が開く」
その問いには答えず、彼女は曖昧な笑みを浮かべて店を出ていく。
店長は三森から覚悟を決めた者特有の、死の気配を感じ取っていた。だから、何も言えずに見送った。何も言ってはいけないと思ったのだ。
「……馬鹿が」
命は命で贖えない。ただ、無意味に消費されるだけだ。それでも、三森にそう伝えられたとしても、この結果は動かなかっただろう。何一つ変わらず、新たな命がまた、死神に刈り取られる。ただ、それだけの話なのだ。

いい日神断ち

アルバイトを辞めるのは短絡的な考えだったかもしれない。それでも、後には引けない部分もあった。一はアパートまでの道すがら、どうしようもない後悔に苛まれていた。

時間が時間なので、一はアパートの階段をゆっくりと上る。もうとっくに糸原も眠りに就いているだろう。自宅の鍵を鍵穴に差込み、音がしないように回した。

「遅い」

「ひいっ！」

「ひいっとは何よ！　ひいって！」

部屋の明かりも消えていたし、物音一つしなかったので、てっきり一は糸原が寝ていると思っていたのである。扉を開けたすぐそこに彼女の顔があったのだから、彼としては叫ぶしかない。

「……起きてたんですか？」

とりあえず電気を点け、一はこたつの前に座った。人心地が付けたとは言い難かったが。

「さっき起きたのよ。なんか、あんたが帰ってきそうな気がしたから」

「へえ、女の勘って奴ですか？」

「結構当たるわよ、これ」

言ってから、糸原は愉しげに口角をつり上げる。

「何の話してたの？　あ、またシフト交替しろとかそういう話？」

「ええ、まあそんなところです。断って帰ってきましたけどね」

真実を話すかどうか、一は少しでも迷ってしまった。だから、黙っておこうと判断する。

「その割には、時間が掛かってたみたいね」

「店長がしつこかったんですよ。逆らったらすぐに時給下げるとか言いますし」
「あははは、私も言われた事ある。あの人の口癖なのかもね」
糸原は一頻り笑った後、流し台からマグカップを二つ手に取った。
「一、何か飲む？」
「ああ、良いですよ、俺がやります」
「座ってなさいってば。何しようかな、ココアの、ほら、素になる粉とかないの？」
「そっちの棚の方に……あー、右です、右」
悪戦苦闘する糸原は珍しい。たまにはこういう光景も良いかと思い、一はこたつのスイッチを入れる。
少し時間が経つと、疲れが溜まっていたのか彼の瞼が下がってきた。死神ゲデ。春風の過去。三森との仲違い。頭痛の種を抱え込んで、もはや限界に近い。
「起きなさい」
「うっ……！」
首筋に痛みを感じ、一はこたつの卓に突っ伏した。
「何、するんですか」
「私が作ったココアが無駄になるじゃない。ほらほら、冷めない内に飲んじゃいなさい」
マグカップから立ち上る湯気と、仄かに漂う甘い香りが意識を覚醒させる。
「うあ、すっげえダマ出来てる。ちゃんと掻き混ぜたんですか？」
「……あんたねえ、私が他人にものを作ったりあげたりすんのがどんだけレアな事か分かってんの？　光栄に思いなさいよね、光栄に。おら、ダマがなんだ。黙って呷れ罰当たり」
煽られて、仕方なくココアめいた液体を口に運ぶ。
「超美味しいでしょ？　美味しいわよね？　美味しいと言いなさい」
市販のものを使っていたので味はそこそこだった。が、何よりも暖かかった。

「ええ、美味しいです」
「へっへっへー、どんなもんよ。私だって料理くらい作れるんだかんねー」
満足げに微笑む糸原を見て、一の頬は自然と緩んだ。
「あ、そうだ。あんたに言いたい事があったんだ」
「なんですか？」
「これよ、これ。押入れの奥から出てきたのよ」
彼女が差し出したのは、ソフトタイプの煙草である。一は思わず目を見張った。
「あんた、禁煙してるんじゃなかったっけ？」
「ああ、それは――」
その、煙草は。春風から受け取った、彼女の弟の――。
「俺のじゃないです。もらい物ですよ。実際、俺は吸ってないですし、ほら、最近は臭いもしないって言ってたじゃないですか」
「ふーん。じゃ、捨てても良いわよね？」
「ええ、別に……」
一瞬だけ、春風の寂しそうな横顔が脳裏を過ぎった。過ぎったが、どうしようもない。どうしろと言うのだと、一は内心で自嘲する。
「あんたさ、かなり疲れてるわよね。ほら、目の下にすっごい隈出来てるわよ」
「え？」
触っても分かる訳がないと、糸原はくすくすと笑った。
「あんな仕事じゃストレスとか、疲れとか溜まるに決まってるもんね。たまにはゆっくりしたら？」
「ゆっくりったって、簡単にはいきませんよ」
「どっか行きたいわねー。北海道とか、沖縄とか、遠いとこが良いなー。あ、沖縄は鬱陶しい奴がいるんだっけ？」
声を出す事は、何とか堪える。偶々だろうが、タイミングと察しの良過ぎる一言に一の心臓は飛び跳ねた。
「あはは、旅行なんてもっと無理ですよ」

「ねえ、本当は何があったの？」
「いや、だからシフトの話ですってば」
「……あんたさ、家を出る前と比べると全然違ってんの。分かる？」
糸原はじとりと一を睨み付ける。
「心配掛けたくないとか、舐めた事抜かしたらどうなるか分かってるわよね？」
「えーと」
一は思わず頬に手を遣った。
「言いなさい」
「いや、だから、シフトの……」
「言・い・な・さ・い」
「あー、そのー……」
死ぬほど睨まれる。
だが、言えない。今回に限っては自分の事だけじゃない。春風の事も話さなければならなくなる。
「……あれ？」
「は？　何よ？」
どうして、彼女の事を考えたのだろう。自分でも良く分からない感情と思考に、一は考えを巡らせる。
「ちょっと、話聞いてんの！？」
店だって辞めた。もう、オンリーワンの人間と関わる必要も、理由もない。なのに、胸の内に引っ掛かっているものがある。
「……っ」
――復讐だろうがなんであろうが
「ちょっと、一？」
――人を殺してのうのうと生きるモノを私は許せん。

「――そうか」
「一？」
春風は、嫌いだ。その感情に間違いはない。家族を殺されたのに同情は出来る。でも、嫌いだ。今後もその気持ちは変わらないだろう。
それでも、通じる部分はあったのだ。
復讐は何も生まない。彼女は言っていた。人間として生きるなら、人間として生きたいのなら、人間である以上、法を破ってはならない、と。その通りだと一も思う。しかし、しかしとも思うのだ。復讐する相手が、人間でなかったならば。家族を殺した相手が、人間でなかったならば。そもそも、最初から法など関係のないモノが相手だったならば。
「許せねえよなあ……」
「あのさ、一？　頭大丈夫？　疲れておかしくなったの？」
――復讐、したいよなあ。
気持ちが薄れていた。暖かさに包まれて、鈍くなっていた。
「糸原さん、やっぱり俺、シフト変わってきます」
「えー？　何言ってんのよ、あん、た……」
「何か？」
糸原は一の顔を見て、薄く微笑む。
「なんか、吹っ切れた？　結構良い顔になってるけど」
「分かりません」
一度コートを羽織ったが、これから先に起こる事を予想して、一は動きやすいジャージに着替え直した。
「帰ってきたら、ちゃんと教えなさいよね」
「はい。あの、糸原さん」
「良いから。早くしなさいよ。ったく、ホントにさー、こんな良い女待たせるとか何様なのって感じなんだけどー」
着替えが終わり、ジャージのポケットに煙草を突っ込み靴を履く。
多分、もう始まっている。

「一、気ぃ付けてね」
「ええ」
「いってらっしゃい」
一瞬、言葉に詰まった。
「……いってきます」
この幸せを奪ったモノを、許せそうにはない。

携帯電話をスーツの内ポケットにしまい込むと、春風は深い溜め息を吐いた。
漣が、死んだ。木麻から届いたメールの文面を思い出し、少しだけ、心が痛む。予想はしていた。あの状況下では、死神から逃げるのは不可能に近い。なのに、彼を置いていった。見殺しにしたのと変わらない。
「馬鹿な男だ」
死を悼む資格は、ない。漣も分かっていた筈だ。自分のような女を逃がす為に、生かす為に犬のような、豚のような死を選んだのである。
両親が殺されて一年、弟が殺されて一年、自分は何をしていたのだろう。倒せない。逃げても、追ってくる。だから、だからなんだと言うのだ。手をこまねく事すらせず、ただ、時が移り行くのを待っていただけ。もしかしたら、死神は来ないかもしれない。薄汚い期待を胸に秘め、日々を無為に過ごしていた。
「……馬鹿な女だ」
馬鹿な女を救おうとして、馬鹿な男が一人死ぬ。馬鹿にはお似合いの末路だ。だから、悲しまない。心はもう痛まない。死は悼まない。謝罪はしない。
もっと早くに死を選べていれば、家族の元に逝けただろうか。どうして、死なないでいたのか。ちらつく死の影に怯えながら、それでも生を望んでいる。生きる意味が、どこにある。

仲の良かった友達も、世話を焼いてくれた人たちも、以前と同じような関係には戻れない。他ならぬ、自分から拒んだのだから。悔いがあるとするなら、多分そこなのだろう。謝って、許されたかったのだろう。いや、何より自分を縛っているのは、愛した人の面影を持つ、彼なのかもしれない。

一、一。

どうして、似ているのだろう。

どうして、出会ってしまったのだろう。

どうして、彼は死んで、彼は生きているのだろう。

どうして、どうして、どうして、あの声で、あの顔で、あの雰囲気で。

聞かせて欲しくない。見せて欲しくない。感じさせて欲しくない。もう割り切った筈なのに、忘れ去った筈なのに、気付けば、自分から彼の元へと足を運んでいる。重ねて、いたのだろう。今となっては、いや、今になっても彼にとっては迷惑な話で、自分は迷惑な女なのだ。

それでも、諦められなかった。構って欲しくて、構いたくて。声を聞きたくて、聞かせたくて、顔を見たくて、見て欲しくて、自分の存在を感じて欲しくて、彼を通して弟の存在を感じたくて。

別人だとは分かっている。一一と春風夏樹は、似ているだけで、同じじゃない。でも、似ているのだ。死なせたくない。彼だけでなく、もう、自分と関わった全ての人間に死んで欲しくない。

本当に、馬鹿な女だ。痛いくらいに分かっているのに、止められなかった。今更になって気付いてしまった。だから、ちゃんとケリを付けよう。ケジメを付けよう。この身、この命で、三年目の罪を贖おう。

「やあ、ウララ」

「……死神」

背中越しに伝わる死。ゲデからは殺気を感じない。当然だ、彼は喜色満面で人を殺す存在なのだから。

震えを堪えて、精一杯強がる。どうしても、恐怖や不安が払拭出来ない。

「僕を待っていてくれたのかナ？　だとしたら、とても嬉しいヨ」

「そうか」

振り返るな。振り向くな。決して、奴の顔を見るな。

――願わくば……。

警鐘を打ち鳴らす体の内を無視して、春風は死神と向き合った。自然、冷たい汗が額を伝う。

「ンン、良い顔だ。ウララ、キミは本当に素晴らしい。素晴らしい人間だヨ」

「そうか」

ゲデは持っていた酒瓶を一息に呷り、投げ捨てた。かしゃん、と、辺りに酒気を滴らせた硝子片が散らばる。

「僕はネ、永遠の交差点から色々な人間を見てきた。僕が壊した人間も、そうでない人間も。でもネ、キミは特別面白いんだヨ。家族を壊されて、恋人を壊されて、でもキミは壊れなかった」

――願わくば……っ！

「仮面を貼り付けて、心を奥に閉じ込めて、実に、実に嘆かわしく、愉しい存在だヨ。キミは、壊れなかった。だから僕を怒らせた」

「そうか」

「その、凍り付いた顔を、徹底的に壊してあげたいんだ。その為なら、僕は何だってするよ。キミの為なら、僕は何にだってなれるんだ。分かるかい、この気持ちが？　いや、分からないだろうナア。分からないんだろうナア。僕が、どれだけキミに心を蕩かされ、砕かれているのかなんて」

ゲデは饒舌に語り出す。その声を、その言葉を、一言一句逃さないつもりになって春風は聞いた。

「ゲデ」

聞いた上で、

「ンン、まだ話は終わっていないヨ？」

「死ねなどと都合の良い事は言わん。――共に、死のう」
「ンンンン！　ウララ、最高だヨ！」
やはり、こいつだけは許せないと再確認出来た。

煙草を吸い始めてから、これを美味いと思った事も、不味いと思った事も滅多にない。が、過去に何度か、特別不味いと思った事はあった。
「……ふう」
自分以外誰もいなくなったバックルームで、店長は今、久しぶりに煙草を特別不味いと思っている。
日に日にソレの脅威が増していく現況で、一がいなくなった。辞めてしまった。だが、仕方がないとも思う。誰だって見知らぬ他人と比べられ、重ねられたくはない。その相手がアルバイトの同僚、時には戦場で背中を預け合う間柄ならば――――彼の気持ちは、分かる。分かるから、やり切れない。一方で、一と春風の弟を重ねて見ていたであろう三森たちの気持ちも分かるのだ。なまじ、彼女たちと長い付き合いなのがいけなかった。知らず知らずの内に、三森に、春風に肩入れしてしまっていたのである。一の、気持ちを考えないで。
その三森も、恐らくは帰ってこない。仮に死神との戦闘で生き残ったとしても、ここへは戻らないのだろうと確信している。彼女は死ぬつもりなのだ。自らの命を捧げてまで、春風に謝りたいのだ。
止めたい。止めたかった。そんな事をしても、もうどうにもならない。失われた命は戻らないのだ。誰がどう足掻こうと、もう、遅い。しかし、三森の決意は並々ならぬものだった。何も、言えなかった。
「どこまで、持つかな」
オンリーワン上層部の見解では、どこから仕入れてきたのか、年内に大きな戦闘が起こるとの事である、と。円卓の騎士とやらが動

いているのだから、年内との読みは妥当なところだろう。だが、三森がいなくなれば、単純に北駒台店の戦力はがた落ちする。一が消えれば、糸原とジェーンは抜けるかもしれない。彼に懐いている立花も、神野の意気も下がるだろう。

崩壊は目に見えていた。戦力と戦意を欠いたまま、全員が生き残れる筈がない。

――大きな戦闘、だと？

「それは戦争と言うんだ、クソが」

不味い。不味い。不味い。しかし止められない。片時も手放したくない。そんな効果はないと分かっていても、煙草を吸っていないと、苛立ちも、恐怖から来る焦りも何もかもが際限なく溢れ出てくる。止められない気がするのだ。

どうしてあの二人を止めなかったのだろう。彼らがいないと、明日の朝日を拝めない、そんな日がいつか必ずやって来る。先が見えていながら、どうして引き留めなかった。泣いて喚けば、頭を下げて縋れば、一も、三森もここに残ったかもしれない。根気良く話し合えば、分かってもらえたかもしれない。

――そんな時間はなかった。死神はもう目の前にいるんだぞ。

自分が間違った事をしたとは思わない。今までに、大きなミスは犯さなかった。だが、本当に正しい行いをしたとは言い切れない。ただ、現状を維持してきただけに過ぎない。

――どうしろと、どうすれば良かった……！

現状を維持するのに精一杯だった。維持出来ただけでも、跳梁が跋扈する今の世では拍手喝采だろう。だが、足りない。それでは、それだけでは足りないのだ。

「あああああああああああっ！」

立ち上がり、椅子を蹴飛ばす。荒くなった息遣いが、自分のものだと気付くのに数秒を要した。物に当たっていても何も変わらない。だが、何もせずにはいられなかった。物にぐらい、当たりたかったのである。このまま、全て壊してやろうか。外へ出て、気の向くま

まに誰か殺してやろうか。目に付くもの全てを、全てを――。
「何か、良い事でもあったんですか？」
いつの間に、そこにいたのだろう。
「お久しぶりですね、店長」
一つ、この先へ繋げられる可能性があるとすれば、こいつしかいない。一一にしか、望みを託せない。
「……部外者は立ち入り禁止だ」
「レジに誰も立ってないから、わざわざ呼びに来てやったんですよ」
この憎まれ口も、今だけは許そうと思った。

「で、何をしに来た？　お前はもう辞めた人間だろう」
尤もな意見だが、さっきまでの店長の様子を見ていたので、一の気持ちは落ち着いていた。
「忘れ物を取りに来たんですよ」
「ここにお前の持ち物はない」
「ありますよ。そこの、傘が」
ロッカーに目を向ける一を、店長は強く見据える。
「アレは勤務外のものだ。お前個人のものではない」
「いいえ、俺のです。俺が女神様から個人的にもらったものですから」
「……減らず口を」
一はふっとバックルームを見回し、声の調子を落とした。
「三森さんがいませんね。仕事もせずどこに行ったんですか？　それとも、仕事をしに行ったんですかね？」
「お前には関係ない。もう良いだろう、用事がないなら帰れ」
「用事ってのは、三森さんたちの事ですよ」
「だから、うちの人間について部外者には話せんな」
店長は紫煙を吐き出し、美味そうに目を細める。
「死神はどこですか？」

「言えんな。言えば、お前はそこに行くだろう？　死神の待つ場所へ、だ。いかんな、一般人をみすみす殺すような真似は出来ないなあ」
「……さっきの発言、取り消しても良いですか？」
その言葉を聞いて、店長は思わず笑みを零しそうになった。
「もし聞き入れてもらえないなら、俺はあなたを止めてでも行きます」
「最近な、物覚えが悪くなったよ」
「え？」
「一、お前は何故死神と会おうとする？　行けば、死ぬかもしれない。いや、死にに行くようなものだ。シフトにも入っていないお前は、家で眠っていれば良い。何故だ？」
問われ、一は改めて考える。自分は何をしたいのか、何をしようとしているのか。
「俺は春風が嫌いです。あいつが死神に狙われているからなんて、そんなの関係ない」
「では、何故動く？」
「……嫌いだからですよ。俺は今まであいつに、一方的に嫌な目を見させられてきた。だから、あいつが死んじまったら気が済まない。それだけです」
「嫌いか」
長い息を吐くと、店長は椅子に深く座り直す。
「死神に家族を皆殺しにされ、関わる者全てを狙われ、感情を殺さざるを得なくなった彼女を嫌いだと？」
「ええ」
「……春風はあまり感情を表に出すタイプではなかったが、嬉しい時には笑い、悲しい時には泣ける人間だった。何故、ああなったのかお前には分かるのか？」
分かりたくもない。一は沈黙を選び、話の続きを待った。
「家族を目の前で殺され、ショックで心を閉ざしたんじゃない。死

神から狙われないよう、周囲の人間を守る為にああなったんだ」
　店長は一を見つめたまま、続ける。
「他人に対して何を思ってもいけない。何か思われてはいけない。喜怒哀楽を捨て、己を殺さなければ壊れてしまうんだよ。春風は、優しい奴なんだ。一、お前はそれでも奴を嫌うのか？」
「……中途半端なんですよ」
「何がだ」
「やる事なす事、全部。本当に周囲を守りたけりゃ、誰もいない山にでも引きこもれば、いっそ死んじまえば良かったんです。事実、俺はあいつのせいで狙われてるんだ」
　今更、本当に何を今更。可哀相だから春風を助けろと言うのか。一は歯を食い縛って耐える。
「どうして、あいつがここに残ったのか、生き残ったのか、店長には分かっているんですか」
「さあな」
「分かっていて、春風が可哀相なんて言ったんですか？」
「可哀相？　私がいつ、そう口にした」
　――言ったんだよ！
「春風は決して他人に優しい人間じゃない。分かっているんでしょう。あいつが残ったのは、むざむざと生きていたのは、誰かに助けて欲しかったからだ。自分はこんなに可哀相だろうと訴えて、哀れまれたかったんだ」
「言うじゃないか、一」
「本当は家族の仇を討ちたい。だけど相手が悪いから諦めて、でも、最後の最後まで諦めきれはしなかった。……感情なんて、簡単には殺せないんです」
「嫌いだと言う割には、良く分かっている風な発言だな」
　店長はくつくつと、喉の奥で笑う。もう、彼女は押さえ切れなかった。
「欝陶しいんですよ。あいつは誰かの手を払い除けるか、掴んで離

さなけりゃ良かった。それをしないでいたのは、可哀相な自分に酔ってたとしか俺には思えない」

「それで、どうしたい。お前はあいつに何をしてやりたい？」

今までからかわれてきた借りを返したい。弟と自分を重ねてきたのを三森共々謝ってもらいたい。だが、一が動いたのは彼女だけが原因ではないのだ。

「……店長、家族はいますか？」

「両親共に生きている。兄弟はいない、私は一人っ子だからな」

「いってきますと、そう言える相手がいないってのがどんなに辛いか知っていますか」

店長は言葉を返さない。いや、返せなかった。一が春風の事だけを言っているのではないと気付いたからである。

「どうせなら、最初から何も知らなければ幸せなんでしょうね。でも、あいつは知ってるんだ。誰かと交わす何気ない挨拶の有り難みを」

「一、お前は……」

「俺は春風が嫌いです。あいつを可哀相だと思いません」

――そうだ、俺は……！

「ただ、死神が憎くて憎くてたまらない……！」

一の瞳はまるで、狼のようにぎらついて。

そうだ、これなのだ。人間が社会的なコミュニティに依り生きる動物である以上、しがらみに囚われて動けなくなるのは当然。だが、人間は動ける。動けるのだ。時には損得勘定抜きに、根源的な、本能的な感情だけで――！

「殺されても良い。ソレを殺せるなら、どうなっても良い。だから教えてください、死神はどこに……！」

「……教える。だが一つだけ約束しろ。一、その顔は止めるんだ」

「え？」

店長は自らの頬に手を当て、それから一を指差す。

「その顔ではソレを殺せても生きては帰れないぞ。忘れるな、我々

はソレの殺害を目的としていない。対処するのが仕事だ。戦闘行為は、あくまで手段の内の一つとして捉えておけ」

一に言い聞かせるように、店長は一言一句ゆっくりと喋っていた。

「……店長、俺……」

それからと前置きしてから、店長は火の点いた煙草を灰皿代わりの缶に押し付ける。

「生きて戻れ。三森と、春風を連れてな。二人も消えちまえばな、シフトに穴が開くんだ。分かったな？」

「さりげなく、三森さんの事も心配してるんですね」

「返事はどうした？」

ロッカーからアイギスを掴むと、一は苦笑で返した。

「勿論です。三森さんには借りを返してもらってないんですから」

「……一、ソレへの憎悪を捨て去らなくても良い」

「さっきと言ってる事が……」

「憎悪にこだわるなと言ったんだ。確かに、復讐だとか私怨で動くのは気持ち良いだろう。だが、飲まれるぞ。強過ぎる感情は相手だけでなく、自分も、周囲をも巻き込み、全て滅ぼす。分かったか？」

まともな事を言う店長が珍しくて、一は頷くのを忘れ、ただただ聞き入っていた。

「分かったか？」

「あ……はいっ」

「分かったなら行け。生きて帰れ、やれ。それで、だ。今回に限っては――ソレを生かして帰すな。必ず、殺せ」

言われるまでもない。その為にここへ来たのだ。一はアイギスを握り締め、力強く頷く。

「いってきます」

「……ああ、いってらっしゃい」

不安はあっただろう。恐怖はあっただろう。死神を相手にするだ

けでも苦しいのに、そんな一に生きて帰れと命令した。それだけでなく、他者の命まで背負わせた。鬼か悪魔の所業だと店長は悔やんでいる。

気休めの言葉一つ掛けなかった。だが、一を弛緩させたくなかったのだ。ソレに対して強い憎悪を抱いた彼を初めて目にし、期待したのである。

ああ、これならば、と。

勤務外の仕事に対して消極的だった一が初めて言ったのだ。ソレが、憎いと。無謀だと思った。誰かが手綱を取ってやらなければ危うい。分かっていながら、最低限の忠告だけを贈った。

見てみたかったのだ。一が、強い感情を以て本気でソレと立ち向かうところを。分の悪い賭けだ。しかも、賭けるのは彼本人の命なのである。それでもだ、店長は年内に起こるであろう戦争に向けて強い駒が欲しかった。強くなれば、本人にとっても悪くはない。生き残れる確率が高まるのだ。

――駒扱いされるのは気に食わないだろうが。

この時期になって新たな人材を育てる余裕はない。現状の戦力だけで年を越す。力を誰に注ぐか、誰を軸に組み立てるか、見極めが大事なのだ。

願わくば、今回の件が彼にとっての踏み台になれるようにと、そう、店長は思っていた。

一陣の風が吹く。

「あああああっ！」

その風よりも速く、強い風が吹いていた。

河川敷グラウンドにて、死神が舞う。満面の笑みを顔面に貼り付けて、風に弄ばれる。それでも尚、死神は笑うのだ。

「あああああっ、最高だ！　たまらないヨ！　その顔！　その顔！　その顔が僕を昂ぶらせるんだ！」

春風の狙いは一つ。一撃でゲデを仕留める事である。霊体を持つゲデは自分の身に危機が迫ると実体から霊体に変化する。そうなれば、物理的な攻撃は一切届かない。通らない。

「くっ……！」

一方、死神の狙いも一つ。春風の体に乗り移り、彼女を壊す事だ。死神が人間に乗り移る方法はいたって単純である。対象の体に触れさえすれば良いのだ。ただし、剥き出しの素肌に限る。衣類越しでは能力を発揮出来ないのだ。それでも、接近さえすれば幾らでもチャンスはある。出来る。あるいは対象の方から触れに来ても構わない。

つまり、ゲデはほぼ、いつでも春風を壊せる。そうしないのは勿体ない、愉しいからだ。彼女をぎりぎりまで甚振って、痛め抜いて、苦痛と絶望を堪能させてから仕留める。

「ウララッ、ウララアッッ！」

まるで、ダンス。ステップをくるくると踏みながらゲデは動く。春風もそれに合わせて動く。本人たちが真剣であれ、傍から見れば、仲の良い男女が頭の悪い行為に耽っているようにしか見えない。

――さて、どうなるだろうか。
河川敷グラウンドを見渡せる鉄塔の上に木麻は立っていた。とても、不機嫌そうな顔で。
「来たね、死神」
「そうですね」
隣で笑む旅本人にその気はないのだろうが、どうしても能天気な発言に聞こえてしまう。
「春風は死神を殺し切るでしょうか。いいえ、殺し切れるでしょうか」
木麻には、どう贔屓目に見ても春風が遊ばれているようにしか見えない。今の状況は戦闘ではない。遊戯なのだ。死神の掌で、彼女はただ踊らされているだけ。
「春風は情報部です。実働に戦闘部ほどの能力はありません。旅さんはどう考えているんですか？」
「確かに、このままだと死神のおもちゃになって殺される。けどあの子、快足（タラリア）の靴を使う気だね」
「タラリアを……」
――タラリア。情報部の人間が所持を許されている神具である。一言で表すなら、『空を飛ぶ』概念を仕込んだ靴だ。その出自はギリシャ神話のとある神が持つ、履けば空を飛翔し得るサンダルだ。情報部の持つタラリアはいわばレプリカ。一一の持つアイギスに近い。しかし、オンリーワン技術部が総力を上げ、血道を上げて作り上げた贋作である。オリジナルには及ばないまでも、充分な性能を持っていた。
「許可は下りているのですか？」
「ううん、と言うかだね、許可を求められてもいない」
だが、コピーと言えど神の持ち物を模したもの、タラリアを容易くは使用出来ない。情報部は部長である旅に許可を取らなければならないのだ。何故か。不完全だから、である。不安定と言い換えて

も大差はない。あくまで、情報部がタラリアを似せて作ったモノなのだ。元の設計図もなければ、オリジナルの材料もない。完全なスペックを再現出来る筈がない。となれば、何が起こるか分からない。ここぞという時に故障するかもしれない。そんな粗悪品を使わせる訳にはいかないというのが旅の意見だった。

「謹慎ものですね」

「それだけ必死なのさ。あの子の気持ちは分かるよ。だから重い処分は下せない」

「処分は下すのですね」

「示しがつかないからね。トイレ掃除か、お茶汲みでもやらせようか」

それも春風が無事に、五体満足で帰ってくればの話である。

「不完全ですが、タラリアのスペックを最大限に引き出せば、あるいは……」

タラリアの能力は一つではない。まず、脚部の強化だ。その為に情報部の人間は人間離れした動きが可能になる。例えばビルからビルへの跳躍だ。そしてもう一つ、加速、である。しかし、こちらの能力を発揮するには不安が残る。人体に影響を及ぼすのだ。自身の能力以上の速度を加えるから加速、つまり、重力が掛かる。本来生活する上では決して掛からない重力だ。加速によって足の筋が切れたり、血管が破れたりするのは当たり前。それだけならまだマシだ。鍛えた者ならば外側の皮、肉を破損、欠損するだけに留まる場合もあるが、ろくに体を動かさない者が使用すれば、まず臓器の破裂は免れないだろう。

「常人がタラリアを使えばどうなるか分からない」

「しかし、加速を使えば死神を打倒出来るかもしれません。タラリアで一点に力を集中させれば、春風でも……」

使用者の身体を守る為、タラリアにはリミッターが掛かっている。リミッターを外さない限りは、人体に悪影響を及ぼさない程度の能力を発揮出来るのだ。しかし、一度外せば後はもう、神のみぞ知る、

だ。
「分が悪いね。せめて彼女に協力者がいれば……一人、いや、少なくとも二人」
この場で木麻が手を貸すのは簡単だが、彼女に戦闘能力はない。春風の足を引っ張るのがオチだろう。それが分かっているから、木麻は何も言わない。
「木麻君、情報部の責務を忘れてはいけないよ」
「分かっています。……旅さん、やはりあなたが手を貸す事は？」
旅は複雑な表情を浮かべる。
「僕が介入出来たら、一番話は早いんだけどね。ごめんよ」
「いえ、今の私の発言は忘れてください」
木麻は眼下の春風と死神に目を向ける。
タラリアを使えば、死神を倒せるかもしれない。だが、やはり勝ちは薄い。賭ける価値はない。十中八九、春風は死ぬだろう。自分に出来るのはただ、事態の推移を見守るだけだと、木麻は目を瞑った。

攻撃が当たらない。こちらの行動は全て読み切られている。だが、悲観はしていない。一対一ならば死神の独壇場。そんな事にはとっくに気付いている。
――精々甘く見ろ。
遊ばれているように見えながらも、春風は布石を敷いていた。攻撃を紙一重で躱し続ける死神に、彼女は薄く微笑み掛ける。
初見ならば、死神に恐れをなしていただろう。焦りを感じ、自滅していただろう。しかし、これでゲデとの交戦は三度目なのである。三度目の正直などと言う気はないが、付け入るべき隙は見つけていた。隙は、ある。
紙一重で躱し続ける。紙一重で、だ。死神は恐らく観察力に長けているのだと、春風はそう推測する。自分の挙動、速度を上手く見

切り、ぎりぎりで回避しているのだと。死神が危険を冒すのは愉しいからだろう。壊したいと言った。だから、こうして遊んでいる。自分への絶望を出来るだけ長引かせたいのだろう。

――下種め。

だが、今この時ばかりは感謝する。死神は愉悦を追求するが為、自らの性根の悪さで死に至るのだから。

「ンン、ウララ、ウララ、それじゃあ僕には届かない。届かないんだヨ！　思いを届けたいなら、もっと、もっと、もっと！」

知っている。むしろ、届かせる気はなかった。中途半端な攻撃では自らを死地に追い込むだけ。死神には最も強く、最も速い一撃、それだけで良い。

死神がこちらを舐め切っている間にワンパターンな連係を繰り返して、目を慣れさせておく。充分引き付けたところでタラリアのリミッターを外し、渾身の蹴りを叩き込めば――。

春風は動きが速くならないよう、遅くならないよう、細心の注意を払いながら攻撃を繰り出していた。

「ウララ、ああ愉しい。愉しいヨ、愉しいよ！」

しかし、本当に上手くいくのか。疑問と不安が心に、少しずつ染み込んでいく。上手くいく。そう思っても心は沈み、重くなる一方だった。死神は自分の考えなど全て見通していて、その上で付き合っているのではないか。上手くいかなければ、もう打つ手はない。本当に絶望を味わうのだ。そうなれば、もう、本当に。

「ははははははっ、キミは？　キミはどうなんだい、愉しんでいるのかい？」

まだ体まで鈍くはなっていない。まだ一定の速度を保てている。しかし、春風はどうすれば良いのか分からなくなりつつあった。いつ仕掛ければ死神を倒せるのか、タイミングを計り兼ねて、無駄な体力を消費し続ける。

その内に、このまま仕掛けずにいれば生きていられるのではと考えてしまっていた。もし看破されていたなら、仕掛けた瞬間壊され

る。体を乗っ取られ、憐れ地面に四散する。だが、このまま何もせずにいれば、少なくとも死神の気が変わるまでは生きていられるのではないか。そう、思ってしまう。
気付いた時、春風の思考は完全に止まった。

死神はにいいと口の端をつり上げる。
「捕まえたヨ、ウララ」
声が出なかった。春風は目を落とす。
肩に、手が置かれていた。
「捕まえたヨ、ウララ」
「……う、あ」
何が起こったのか、最初は理解出来なかった。呆然として視線をさ迷わせる。死神と目が合って、ようやく事態が飲み込めた。自分の負けである、と。
「安心しなヨ、ウララ。まだ壊さないから、もっと愉しもうじゃないか。僕は三年も待ったんだ、ラストダンスにはまだ早い。そう思うだろう？」
「う、あああああっ！」
迷っていられない。春風は遮二無二死神の手を払い、靴の踵を地面に打ち付ける。タラリアのリミッターを外したのだ。仕掛けるならもう今しかない。
「ンン！？」
春風は打ち付けた反動をそのまま利用する。膝を前に突き出し、死神の顔面を狙った。が、ゲデは尻餅を付いて回避する。
「あ、ああっ、凄いじゃないカ！　これなら届くっ、僕に届くヨ！」
無論、攻勢を維持する。勢いが付いた春風は地面を滑りながら少しずつ速度を緩め、死神の背面から飛び出した。高く飛び上がった彼女に、死神の目は届いていない。
空中で体を回転させ、死神の頭を強く睨み付ける。落下の速度も

相まって、当たればソレといえどただでは済むまい。
放つは一蹴。放てば一撃。
春風のボディースーツが徐々に剥がれていく。身を突き刺すのは加速の衝撃、冬の寒風。痛みに顔をしかめ、それでも目を見開いて彼女は標的を定めた。
「ンンンっ！　そこにぃ！？」
死神が見上げた時にはもう遅い。
「――独楽割（こまわり）」
春風麗渾身の踵落としが炸裂した。
「カ――っ、あっ……」
ただの打撃ではない。リミッターを外したタラリアの加速により、破壊力、殺傷力は格段に上がっている。
事実、死神は頭部の破損を免れたものの、立ち上がれていない。地に尻を付いたまま、だらりと四肢を伸ばしている。
春風は短く息を刻み、肩を何度も上下させる。タラリアのリミッターを外したせいか、やけに体が重い。神経が何本か切れているのだ、その程度だと言い聞かせて、倒れこむのだけは堪える。
手応えはあった。だが、拭いきれない不安はまだ胸の内にしこりを作っている。本当に仕留めたのか。確かめに行くのが恐くて、春風はその場に立ち尽くす。
「う……っ」
口内に血が溢れ始めた。どうやら、臓器を傷めてしまったらしい。溜まった血を吐き捨て、問題のありそうな箇所を擦る。一度違和感を覚えてしまうと、もう駄目だった。激しく咳き込み、地面に手を付けて四つん這いになる。呼吸すらままならず、流れる冷や汗を拭う事も出来ず、不快感に囚われた。
「はっ、はっ、はっ……」
息を吸い込む度、喉に鋭い痛みを覚える。苦しくてたまらない。
これで死神を倒せなかったら、全く無駄な代償を支払った事になる。
春風は顔を上げ、死神を確認した。

――そうか。
死神はいなかった。諦めは付いた。
「いや、いやいや驚いた。驚いたヨ、ウララ」
自分では駄目だったのだと、彼女は目を瞑る。
「頭がひしゃげた時は驚いたけど、残念だったネ。僕を殺すにはそれじゃ駄目なんだ。それだけじゃあ駄目なんだ」
「……そう、か」
髪の毛を引っ張り上げられて、春風は弱々しく呻いた。
「今から壊すけど、何か言っておきたい事はあるカナ？　ああ、面白い事を言ってくれれば少しは長引かせてあげるヨ」
死神を喜ばせる気は毛頭ない。ここで命を繋いだとして、自分には打つ手がないのだ。最後の最期ぐらい、矜持を貫く。
「殺せ」
「……つまらないナア」

春風に会ったところで何を話せば良いのか分からなかった。もう、二人して笑い合えたあの頃には戻れない。自分で招いた結果なのだから、仕方ないと言えば仕方がない。自分に出来る事と言えば、精一杯頭を下げて、命を以って贖う事だけだ。
だが、河川敷グラウンドに辿り着き、彼女の姿を見た瞬間全てが吹き飛ぶ。
「春風――！」
春風がいる。死神がいない。まだ始まっていないのか、それとも終わってしまったのか。
「……おい、春風」
返事はない。春風は中空を見つめたまま動かないのである。焦れた三森は彼女に駆け寄り肩を揺さ振った。
「野郎はどうした？　返事しろって、おいっ」
「……三森、冬か」

少しずつ、春風の瞳に焦点が合い始める。彼女は三森を見遣り、ぽつりと呟いた。
「何があった？」
「いや、何もない。正確にはまだ何も起こっていないと言うべきか」
その割には、春風の様子はどこかおかしい。表情こそいつもと変わらないが、彼女のボディースーツは所々が破れている。
「……なンか、お前変わってねェか？　いや、その、何もおかしなとこはないと思うんだけどよ、なンつーか、中身がっつーの？」
「ふ、寒さで頭がおかしくなったか」
「ンだとォ！？」
「冗談だ。それよりも三森冬、一一はどうなった？」
三森は頭を掻き、言い難そうに視線を反らした。
「辞めたよ。明日の今頃は汽車の中か、飛行機の中ってところじゃねェの」
「残念だ」
「あ？」
「別れの言葉でもやろうと思っていたのだがな」
その発言に三森は苦笑する。
「似合わねェよ。気にすンな、私だってまともにゃあ挨拶出来なかったし、そもそもあいつは私らを嫌ってる」
「……そうか。では、一度戻るとしよう」
春風はゆっくりと体を伸ばした。まるで、一つ一つの動作を確かめるかのように。
「戻る？　どこにだよ」
「北駒台店だ」
「……戻るにしても、死神をぶっ殺してからだ」
「いや、その必要はないだろう」
三森は目を丸くさせた。いよいよ、春風の意図が理解出来ない。
「てめェ、ケツ割ろうなンて思ってねーだろうな？　何の為に三年待った。あいつを地獄の底までぶち込む為だろうがよ」

「ここに死神は現れない」
「奴は場所を選ばねェ。家も外も関係ねーよ。てめーがいるとこが戦場だ。そうだろうが」
「いや、そうだな……」
春風は俯き、何か考えている素振りを見せる。
「……疲れた、か。頭が痛くてな、少し休みたい」
春風は頭を押さえ、申し訳なさそうな表情を浮かべる。
「……ヘェ、マジに辛そうだな」
「ああ、辛い」
仕方ねェなと呟き、三森はポケットから煙草を取り出した。
「三森冬、一服する時間も惜しいのだがな」
「急かすンじゃねェよ。……なあ、お前はあいつをどう思ってた？」
「あいつ？　ああ、一一の事か？」
三森は軽く頷いた。
「どう、と言われてもな。ただ、そうだな、やはり夏樹に似ていた。今にして思えば、弟と一一を重ねて見ていたのも仕方なかった」
「そうじゃなくてよ、もっとシンプルに言えってンだ。好きか、嫌いか。どっちだ？」
「ふん、らしくないな。貴様こそ、こんな会話は似合わないぞ」
「へっ、そうかよ」
煙を吸い込み、吐き出す。何度か同じ動作を繰り返した後、三森は短くなった煙草を握り締め、手の中で燃やし尽くした。
「なンか、前に戻った気分だぜ。初めて私らが会った、あン時によ」
「そうだな、こんな日が来るとは思っていなかった」
「だからよ、てめェは殺したいくらいにムカつくが、マジに少しくらいは感謝してンだぜ」
「……三森冬、貴様何を……？」
「死神ってのはよ、人間に乗り移るンだ。じゃあ、乗り移られた奴はどうやって見分ける？」
春風は答えない。答えられない。口の端をつり上げるだけだ。

「今後の参考になるかもしれん。聞かせてもらおうか」
「――勘だ」
「……っ！？」
三森は炎を纏わせた拳を振り下ろす。炎は春風の鼻先を掠め、僅かに皮膚を焦がした。
「貴様、気でも違ったか？」
バック宙で距離を取った春風は、親の仇を見据えるような視線で三森を射抜く。
「なンかこうさ、違うんだよなァ」
「三森冬！　貴様っ！」
「こう、あいつがさ、私に弱み見せんのも変な気がしたし、何よりさァ楽しかったンだよなあ。んなの、もう有り得ないってのによ……」
「私は春風だっ、春風麗だ！」
「だからさ、違うンだよ」
三森は一歩ずつ春風に近付いていく。
「何が違う！？」
「なンかだよ」
今自分と話しているのは春風の姿をした何かだ。三森は深く溜め息を吐き、掌を打ち合わせる。
「やっと会えたぜ、死神」
「……キミは」
声に濁りが混じった。春風の声に重なって、男の声が聞こえてくる。聞き覚えのある声だった。
「覚えているヨ。ウララのお友達だネ」
独特の口調、イントネーション。やはり、死神。春風はもう乗り移られてしまっている。
「友達だった、だ。間違えンなよ。そいつの中にいるって事ァ、全部分かってんだろうが」
「存外に賢しいネ。概ねその通り、今のは僕の趣味だヨ。気を悪く

したかい？　ならば嬉しいネ」
　笑う。死神は、春風の顔で笑う。彼女の無表情な顔は醜く歪み、どうしようもない悦に染まっていた。
「馴染むヨ、ウララと僕の相性はよっぽど良いんだろうナア。早く壊したくて堪らない、ああ、堪らない」
「……やってみろ。そン時ゃ、てめェは即黒焦げだ」
「強がりはやめたまえヨ、お嬢さん。僕がこの体を乗っ取ったなら、ウララは帰ってこない。僕が何もせずウララの中から出ていけば、助かるのカナ？」
　その通りだった。この状況に陥ったなら、もう春風が助かる方法はない。死神の気紛れ、気分一つに賭けるしかない。だが、その可能性は那由多の彼方よりも低いだろう。
　だから、殺すしかない。三森がこの場を丸く収めるには、最小限の被害で済ませるには、死神を春風の体毎殺すしかない。よしんば逃がしたとして春風は確実に殺せる。彼女が死ねば、執着の対象を失った死神は駒台に現れないだろう。
　話は簡単だった。やるべき事は単純だった。勤務外としての仕事をすれば良い。
「……てめェはそこから退かねーだろうよ」
「良く分かってるじゃあナイか。そうだヨ、僕は待った。ウララを最高の状態に仕上げる時をネ」
「最高……？」
「そう！」
　春風――死神は両手を合わせて嬉しそうに微笑んだ。
「ウララに残されたものは少ない。家族を殺され、友人を失った。でも、ウララはまだキミに未練を持っている。腹立たしい事極まりナイ。だから、ウララの手でキミを壊す事にしたんだ」
「……心底クズだな」
「最後に残った、縋っていた者が死ぬ。その瞬間、僕はウララの体から出るよ。そして、絶望の色に染まったウララを……！　ああ、

堪らない！」
「そうはならねェし、させねーよ」
足を踏み出す。三森が歩く度に土は熱を帯び、風は融けた。周囲の景色が陽炎の如く揺らめき、体から発している火は空を舐めようと勢いを増す。
「なるヨ。分かっているのかい？　僕は今、ウララの体を乗っ取っているんだ。キミは、ウララもろとも僕を殺せるのかい？」
殺す。確実に殺す。そうする事でしか春風を救えないのなら、三森は躊躇なく拳を振り下ろす。振り下ろしてみせる。
「ンン、キミとウララはお友達だろうニ。それでも僕を殺すのカナ？」
「友達だからだよ。てめェなンかにゃ理解出来ねーだろうけどな」
「ンン、それが人間か。少し面白いネ」
――もう黙れ。
これ以上は忍びない。春風の顔を、彼女を好き勝手に弄られて黙っていられるものか。三森は飛び出し、左拳を突き付ける。
「ンンン！」
躱されたが、何一つ問題はない。炎を纏った一撃はフェイントだった。必要以上に燃え盛った火は死神の視界を隠し、惑わせる。
本命は右。
容赦しない。
躊躇しない。
後悔しない。
懺悔しない。
許しを乞うなら、二人が地獄で見えた時にでも出来る。今はただ、この炎が手向けになると信じて貫くだけだ。

まだ終わらない。旅はそう確信していた。
「三森が来た、か。旅さん、これなら……」

「いや、これじゃあ死神を落とせない。まだ足りないね」
「どういう意味でしょうか」
「分からないかな。一対一じゃ死神を倒せないんだよ。奴はね、体を乗っ取る。実体から霊体にもなれる。だけど一番厄介で恐ろしいのは、死に敏感な事なんだよ」
木麻は眉根を寄せる。彼女の様子を見遣った旅は苦笑した。
「死神、ゲデは数えきれない死を見てきたんだろうね。だからとは言わないけど、僕たちより死について理解している筈。特に、自分の死についてはね」
「つまり、自身に及ぶ危害を察知出来る……？」
「うん。ゲデは酷く臆病だ。三年近くもオンリーワンの目から逃れ続けられたのは、彼の力に因るものだ。だからこそ引き際を見誤らない。死神が三森君と対峙しても尚あそこに残っているのは、引く必要がないからだ」
「引く必要がない、ですか。死神は三森に脅威を感じていないと？」
旅は軽く頷く。
「何か、持っているね」
恐らく、死神を打倒し得る勤務外はこの世で三森だけだ。旅はそう信じている。実体と霊体を行き来するゲデ。彼を仕留めるには実体の時のみ。そこを狙うしかない。だが、死神は酷く死に敏感だ。
「霊体の死神を殺せるのは、三森君だけなんだよ」
「三森、だけが？」
「木麻君、君は彼女の能力についてどれくらい知っている？」
「……体から炎を発する、ですか？」
「それだけじゃあない」
木麻は何か言いたげだったが、旅は黙殺する。見ていれば分かると、彼の目はそう訴えていた。

後少し。ほんの少し。

拳を三センチでも伸ばせば、届いた。
「……どうした三森冬。私を、殺さないのか？」
三森の目を真っ直ぐに見つめ、両手を広げていたのは、
「おま、え……」
死神ではない。春風だった。
春風は三森に微笑みかけている。その事実が信じられなくて、信じられなくて。
「三森冬、私を殺してくれないんだな。私を、夏樹の許へは行かせてくれないんだな？」
「春風、なのか？　死神はどうしたんだよ……？」
三森は拳を下ろす。もう、春風からはさっきまでの違和を感じない。彼女は今、間違いなく春風麗なのだ。
「私を殺しては、くれないんだな？」
「おいっ、だから何言ってやが――」
春風の手が、三森の首へと伸びる。
「――がっ……っる、かぜ……？」
「貴様が私を殺さないのなら、私が貴様を殺そう」
相変わらずの無表情で、無感情な声で。
「私たちは罪を犯し過ぎた。無関係な者を巻き込み、私たちだけ生き延びてきたんだ。三森冬、今がその時だとは思わないか？」
何の事か分からない。三森は抵抗を試みるが、相手が春風では本気で抵抗出来ない。死神に囚われていた彼女は助けられない。しかし、今は違う。分からない。春風は本物に思えるのだ。だから、迷う。
「……どういう、意味だ……」
擦れた声で問い掛ける。
「償う時だ。私と貴様が死ねば、死神はもうここへは来ない。誰も死なない。もう、誰も死なさないで済む」
春風は続けた。もう、彼女は三森の目を見てはいない。
「三森冬、貴様を殺した後で私も死のう。夏樹のところへ、一緒に

逝こう」
「あ、あ……」
腕に力が入らない。どこにも力が入らない。
「三森冬、私は、貴様を許そう」
甘い囁きは脳髄に染み渡る。思考を麻痺させ、やがて停止させる。
「だから、死んでくれないか」

俺の名前を言ってみろ

一が春風と初めて会ったのは影と呼ばれるソレが現れた時分である。彼は連れ去られたシルフを助ける為に影と出遭い、彼女と出会った。

一緒にいたジェーンを気絶させられ、一自身もいきなり殺され掛ける、部類としては最悪の出会いであった。

一はその時春風を嫌いになり、今でも、嫌いなままだ。

だが、店長や三森から春風の事情を聞いて、少しは彼女に対する印象が変わっている。

あの時、初めて会った時に春風が自分を殺すと言ったのは、弟に似た者を許せなかったのだろう。何よりも、彼女が自分自身を許せなかったに違いない。二年もの月日が経ち、忘れようとしていた顔、声。一は愛憎入り交じる感情をぶつけられたに過ぎないのである。その気持ちは酷く分かる。やり場のない気持ちを処理する困難さは良く分かるのだ。彼女にだって理由があり、意味もなく自分を襲った訳でもない。

誰にだって悩みがある。理由がある。誰かを憎み、誰かを愛す。生きていく上で、それは当たり前の事なのだ。

だから、一は春風が大嫌いだ。

見つけた。見つけた。見つけた。

走って、走って、走って、走り抜いた上で、もう全てが終わってしまっていたら。

だから、一は三森と春風の姿を認めて安堵する。

「……って、マジかよ」

始まっていた。そして、今まさに終わろうとしている。
経緯はどうあれ、今、一の目に映るものが真実だ。春風が、三森の首を絞めている。そして信じられない事に、三森は一切の抵抗をしていなかった。
――どうしてだよ。
あの三森が死んでしまう。死にそうな目に遭っている。そんな目に遭わせたモノも、この状況も何もかもが許せなくて、一はアイギスを握り直して河川敷の土手を滑り落ちるように駆け下りていく。
「三森さんっ！」
駆けてくる一に、春風が冷たい視線を遣した。
「一一か。邪魔をしてくれるなよ、もう、終わるところだからな」
「馬鹿かてめえ！」
一は春風の手を強引に引き剥がし、三森の体をそっと地面に下ろす。
か細いが、まだ息はあった。一は胸を撫で下ろす。
「邪魔をするなと言った筈だがな」
「……三森さんを殺すつもりだったのか？」
「見て分からなければ、語っても分かるまい」
「っ、人を殺すつもりだったのかって聞いてんだよ。お前、言ってたじゃねえか、ルールがあるなら、ルールを守るのが人間だってよ」
春風は無表情を崩さない。
「ルールを守るのが人間なら、破るのもまた人間だ。一一、それが何故分からない？　三森冬は夏樹を殺した。人を殺した。ならば、奴は報いは受けてしかるべきだろう」
「報いを与えるのはお前じゃない。……神様にでもなったつもりかよ」
「神か。なるほど、かもしれん。くく、かもしれんな」
春風は笑う。声を上げて、顔を歪ませて、愉しそうに、おかしそうに笑う。
「……思ってたより、汚い顔だな」

「何……？」
「お前のお面みてえな顔にも見飽きてたところだけどよ、そんな面なら見ない方が良かったわ」
初めて見る春風の分かりやすい笑顔。しかし、一にはこれが彼女のものだとは思えなかった。思いたくなかった。
「ふん、貴様とはとことん反りが合わないな。一一、貴様には三森冬同様死んでもらう。が、夏樹と同じ場所に行けると思うなよ」
「勝手抜かしてんじゃねえぞ。三森さんは死んでねえし、お前の弟なんか知るか。それよりも、お前本当に春風なんだろうな？」
「仮に春風でなかったとして、私は何者になる。一一、貴様の妄言には付き合い切れん。その顔、目障りだ」
「……あっそ」
本物の春風なら謝罪の一つでもしてもらいたかったが、どうやら、この春風は偽物らしい。否、体は本物だが中身が違う。口調こそ似せているが、どこかが違う。それに、三森がただの春風に追い詰められる筈がない。三森は恐らく、惑わされたのだ。
死神は他者の体を乗っ取る。眉唾ものの話だったが、ここに至って信じないほど一の頭は固くなかった。
——間抜けが。
「実際目にしてもまだ半信半疑なんだけどよ。どうやら、マジにお前が死神らしいな」
「死神？　何の事か話が見えないな。ゲデはまだ来ていないぞ」
「てめえと腹の探り合いをする気はねえよ。さっさとそいつの体から出てけ」
「ふうん」
春風はしばしの黙考の後、にいと口角をつり上げた。
「……やはり、似ているネ」
春風の声に濁りが混じる。音が重なる。さっきまでの無感情な口振りとは違う。独特のイントネーションに、他人を見下した色の滲む調子。

これが、ゲデ。
一は唾を飲み込み、アイギスに意識を集中させる。
「ウララの弟にとても良く似ている。いや、殆ど同じと言っても良いネ。その顔、声、態度。全てが僕を苛立たせる」
これが、ハイチの死神。
「苛立ってんのはこっちもだよ、知らない奴に似てる似てるって言われても、ちっとも嬉しくねえんだ」
「キミを喜ばせる気はないヨ。キミはただ、僕とウララの為に死んでくれれば良い」
「……春風の為？」
一は自分でも信じられないくらいに冷静だった。恐らくは、ゲデが人語を解する存在であるというのが大きい。会話によって重圧を感じる事もあれば、会話によって冷静さを保てる事もある。
「そうさ。一一、ウララの弟に似たキミがいればウララは迷う、躊躇う、戸惑うんだヨ！」
アイギスを使用する機会は限られている。今はまだ動く時ではない。そう判断した一はゲデの話に耳を傾ける。
「迷うのは一種停滞なんだ。停滞は困る！　ウララには先へ進んでもらわなきゃ困る！　そうでないと、ウララがいつまで経っても壊れないじゃあないか。そして、その原因は一一、キミと……」
死神は一を指差し、
「三森冬、彼女さ」
次いで地に伏せたままの三森を指差した。
「ウララの恋人の面影を持つキミと、ウララに残った最後の友人。キミたちがいる限り、ウララはいつまでも壊れない。いつまで経っても壊れてくれない。甘酸っぱい絶望を享受出来ないんだヨ。分かるダロ？」
口を挟むつもりはない。好きに喋っていれば良い。死神の戯言、聞くに堪え難いが、時間は稼げるのだ。
「キミらをウララ自身の手で壊してしまえば全ては終わる。サイッ

コーのフィナーレを迎えられるっ。最後の縁(よすが)を自らの業で終わらせたウララは絶望に染まるんだヨ！　完全に壊れてくれるんだ！」

「……つまり何か、俺らは餌って事か」

「察しが良いね、糞人間。精々、良い香り付けになってくれヨ」

死神が一歩踏み出す。話は終わりだと言わんばかりに、一を見定め、狙いを定めて歩み寄る。

「これで終わり、今日で終わり。ラストダンスの相手がキミではどうにも締まらないけど、我慢はしヨウ。愉しい事ばかりでは、本当に愉しい事すら愉しくなくなってしまうからネ」

死神が呟いたと同時、彼の姿が消える。

「霊体か……っ！？」

否。死神はただ、一の右に回っただけだ。中身は違えど、肉体はあくまで春風自身の能力に限定される。死神が彼女に乗り移り続けている以上霊体にはなれないし、他者の肉体を奪う事も出来ない。

だが、速い。死神は春風のスペックを引き出している。彼女の体に慣れ始めている。

「ンン、驚いているようだネ」

地を蹴る音どころか擦る音さえ聞こえない。何も聞こえない。死神は無音で一の死角に移動し続ける。

そもそも、一は死角に入られた事にさえ気付けていない。いつ来るか分からない襲撃に恐れ戦くしかなかった。

「こっちだヨ」

「……っ」

声のする方に振り向いても、死神はその動きより一歩早い。一はただ翻弄され、消耗させられ、遊ばれていた。

「どうしたのかナ？　大人しく壊されても良いのかナ？」

舐められているが、どうにも出来ない。尻尾を巻いて逃げる以外には何も思い付かない。

声がする。音が聞こえる。
「……はっ、はっ……」
息が吐ける。息を吸える。
目を開けば星が見える。湿った土の温度を感じる。
咳が止まらない。急激に空気を取り込み過ぎた。
苦しい。苦しい。苦しい。だからこそ感じられる。実感出来る。
――私は……。
自分はまだ生きているのだと。
「……春風」
春風に首を絞められていた時、これで良かったと思った。実際に絞めていたのは死神だったのかも知れないが、彼女だってそうしたかった筈である。自分を殺したかった筈なのである。この安い命で贖えるなら、それで許してもらえるなら、良いと思えた。
「春風……」
まだ四肢に力が戻らない。膝を付き、両手を付いて立ち上がろうとする。視界は狭い。頭の中に霞が掛かったような気分だった。
どうして、まだ生きている。
どうして、自分は死んでいない。
これで贖えた、許された筈なのに。
「……野郎」
歯を食いしばり、拳で土を抉った。ここにいてはいけない者が、ここにいる。
一一だ。
勤務外を辞めた人間が何故ここにいる。お前が、何故ここにいる。
三森は足がふらつくのも構わずに歩き出した。
一は気付いていない。春風の姿をした死神に翻弄されたままである。
――何も見えちゃいねェ。
こちらの都合などお構いなしに場を荒らし、好き勝手に場を作ろうとする。一がここに来なければ、自分は死ねた。許された。春風

に、謝れた。
「てめェ！」
「三森さん！？」
一がこちらを向いた瞬間、死神が彼のアイギスを蹴り飛ばした。
アイギスを握ったままの一は地面を転がり、泥まみれになる。
「はっ、良い様じゃねェか！」
「……っの野郎」
言いつつ、三森は一を庇えるように前に立った。ふらふらになりながらも、しっかりと敵を見据える。
「ンン、息を吹き返したみたいだネ」
「……おい、なンでここにいやがる」
一は立ち上がり、アイギスを構えた。
「もうてめェにはカンケーねー筈だろうが」
「俺は、あなたたちに謝ってもらいに来たんだ」
「あァ？」
一の言っている意味が分からない。三森は死神から視線を外し、彼の全身をねめつけた。
「お前、頭ヤられちまったのか？」
「俺は俺だ。俺は、春風夏樹じゃない」
「キミたち、お喋りはその辺にしておきたまえヨ」
足場を確かめるようにステップを踏んでいた死神の足が止まる。来る。
「……おい、来るぞ」
「俺は、一一だ」
死神が飛び出した。速いが、捉えられない速度ではない。辛うじて目に映る。三森は指を擦り合わせ炎を生み出した。
「俺は……っ！」
迎撃に移ろうとした彼女よりも先、一が前に出る。
「ンンン！？」
動きを捉えられるとは思っていなかったのだろう。死神の表情が

驚愕に変わる。一の振り被ったアイギスは空を切ったが、死神に後退を余儀なくさせた。僅かなりとも恐怖を与えた。

「キミ、見えているのかい？」

「こんなに良い名前だろうが。だからお前ら全員、頭を下げろ」

一はアイギスで死神と三森を指す。

「……はァ？」

「キミ、何を……？」

「一一は良い名前ですって頭を下げろっ！」

これは笑える。しかし戦場で笑っていると木麻に怒られるので、旅は俯いて誤魔化した。

「……旅さん、アレは」

息を吐くふりをして何とか落ち着く。

「一君だね。北駒台からの援軍と言ったところかな？」

「そうは見えませんが」

「結果的にはそうなるよ。しかしなるほど、アイギスを持つ子か。この上ない援軍だね」

「アイギスが、ですか？　それとも、一自身が、ですか？」

無論、両方だ。アイギスだけではどうにもならない。一だけではどうにもならない。二つ揃ってこそアレは真価を発揮する。

「姉さんが見込んだだけはあるか」

「旅さん？」

何でもない。そう言って旅は頭を振った。

「今までは死神のお遊戯だった。二対一になったここからが戦いだね」

「勝算があれば戦う意味も見出せるのでしょうが。私には、彼らにそれがあるようには見えませんね」

勝算はある。何故なら、春風はまだ死んでいないからだ。まだ、助け出せるかもしれない。戦いはまだ、今、始まったばかりなのだ。

三森が復活してくれた。時間は稼げた。
これなら、目的を達成出来そうだ。
「謝ってくれないんならそれでも良い。お前ら並べて無理矢理にでも土下座させてやるからな」
「……クソが。さっきから訳分かンねェ御託並べやがってよ。ここにお前の居場所はねーんだ。さっさと消えろ」
――誰が消えるか。
「ンン、面白くなりそうだけど、キミたちには壊れてもらわなきゃならないからナア」
死神は地面に踵を叩き付ける。
「少し、急ごうか」
タラリアの解放だ。風が吹く。刹那、死神の姿が掻き消える。
全く、見えない。
さっきの攻撃は死神の速さに目が慣れていたのと、破れかぶれの勘任せ運任せがたまたま重なっただけなのだ。
「退いてろ、お前がいたら邪魔だ」
「さっきまで死にそうだったくせに」
「ンだとてめ――右だっ」
咄嗟にアイギスを前に突き出す。重い感触が一の腕を痺れさせた。
死神は一らから距離を取り、哄笑を上げる。
「あははははっ、仲間割れとは見苦しいネ！」
汚い声だった。一は顔をしかめ、わざとらしく片手で耳を塞ぐ。
「俺は退きませんからね」
「無理だっつってンだろ。とっとと消えろ、二秒で消えろ」
「邪魔はしません。俺が盾になります」
「お前……」
自分では役に立たない。少なくとも目が慣れるまでは向こうのペースに巻き込まれるしかない。

「春風を助けたいんでしょ」
「勝手な事抜かしてンなよ。私はな、あいつを殺しに来たんだ」
「殺されてたのはどっちですか。良いから、協力してくださいよ」
一の目的は三森、春風の両名に心の底から謝罪してもらう事だ。
――執念深いと思うなら思え。
その為には、この場を生きて抜けなければならない。どちらが死んでも、自分が死んでも、誰が死んでも目的は果たせない。この場で死んでも良いのは、死神だけだ。
「っざけンなよ、あいつはもう駄目だ。助からねェんだよ！」
「まだ生きてる！」
死神が跳ぶ。
「次はどっちですか！？」
「～～っ、上だ！」
アイギスを真上にかざしたと同時、強烈な衝撃が一の両腕を突き抜けた。歯を食い縛って、短く呻く。
「ンン、やるじゃないか！　良いヨ、良いヨっ、二人一緒に来なヨ！」
「春風はまだ生きてる。助けられる。違いますか？」
三森は一瞬言葉に詰まった後、髪の毛を掻き毟って叫んだ。
「あーっ、もうっ、うっせェな！　関係ねェって言ってンだろうがよ！　助けるも助けないもねェんだ！　てめーがここにいンのが駄目だってんだよ！」
「それこそ関係ない。勤務外とか、そんなの関係ないっ。俺は俺の意思でここにいるんですよ」
「キミたち、僕を無視しないでくれヨ」
一と三森の間に死神が割って入る。突然の出来事に反応出来ず、まともな防御もままならないままにまず一が蹴り飛ばされ、
「なあっ！？」
次に三森が反対側へ蹴り飛ばされた。
「さっきからキミたちはウララと僕を無視し過ぎだ！」

立ち上がろうとする一へと死神は追撃を加える。彼の顔面を狙ったローキックはアイギスによって防がれるも、次の攻撃で一の手からアイギスが零れ落ちた。
「まずはキミから壊れてもらうヨ！」
死神が真上に跳ぶ。
「くそっ……」
アイギスを拾うか、この場から逃げるか。
だが、寸暇の迷いもタラリアの前では命取りになる。
「させっかよっ！」
「ンンンンンン！？」
降りてきた死神にタイミングを合わせ、三森が背後から殴り付けた。流石に空中では方向を転換出来ず、もろに一撃をもらった死神は地面へと叩き付けられる。
「お前の意思なンか知らねェよ！」
「謝ってくれって言ってんですよ！」
「まずはてめェがっ、ありがとうございますって頭を下げンのが先だろうがァ！」
「春風を助けたくないんですか！」
「助からねェよ！　もうあいつは死神に乗っ取られてンだ、無理に決まってる」
仮に、死神に春風を殺す気があるなら、彼女はとっくに死んでいる筈だ。ゲデには目的がある。その目的を達成するまでは、春風の命は保障されている。だから、無理な話ではない。
「助かるって言ってるじゃないですか！」
「うるせェうるせえうるせー！」
三森が全身から炎を発した。立ち上る火柱は周囲の温度を上げ、融かし、焦がす。
「ガタガタ言ってっと焼き殺しちまうぞクソが！」
「そうやって人の話も聞かないで噛み付いて！　狂犬ですかあなたは！」

「無視するなあああ！」
倒れていた死神が起き上がり、中空まで飛び上がった。そのまま、回転して足を突き出す。
「う、わ、ああっ」
上段、中段、下段。最初に狙われたのはまたもや一である。彼はアイギスで防御を試みるが、防げたのは二段目までだった。
死神は空中で蹴りを二発繰り出し、接地すると同時、最後に一の足を払う。傘の届く範囲外からの攻撃に一は呆気なく地に転がされた。
「壊れろ」
「ぎい……っ！」
倒れている一の腹を、死神は容赦なく踵で打ち付ける。二度、三度。その度に一はくぐもった声を漏らし、体を跳ねさせた。
「野郎っ！」
「ンン、危ない危ない」
三森が後から殴り掛かる。が、死神はその攻撃を見ずに飛び上がった。
「……ン、そうか。ウララはこんなものも持っていたのか」
追い掛けてくる三森に、死神はボディースーツに仕込んであったモノを投げ付ける。それは薄い鉄、刃だ。強度と殺傷能力を秤に掛け、どちらもが壊れないよう、限界までその二つを高め上げたナイフである。
「そいつァ効かねェよ！」
しかし、どこまでいっても、どこまで高めても鉄は鉄だ。ましてやこの距離、ナイフを投擲するような距離からでは炎を操る三森の障害にはなり得ない。彼女は放たれた四本のナイフ悉くを炎で払った。刃は熱く燃え、熔ける。持ち手の部分は一瞬で灰にまで乾き果てた。
「知っているヨ」
しかし、死神の狙いはあくまで牽制にある。攻撃を払った分、三

森の挙動、反応は遅れてしまうのだ。その隙にゲデは彼女の懐に潜り込む。本命を繰り出す前、三森の足の甲を踏み付けて回避を難しくさせた。

「野郎っ」

三森の体がぐらつき、至近距離から数発のパンチをもらう。威力こそ大した事はないが、未だ完全に体力が回復し切っていない彼女の体調には響いていた。視界が揺れ、意識が鈍る。

攻撃が見えない。防御は出来ない。タラリアのリミッターを外した者が相手ではスピード勝負など挑めない。

「おおおおおおおおっ！」

ならばと、三森は体中から炎を噴出させる。どこから来るのか分からないなら、どこに来ても良いようにするだけ。

「ンンっ、この炎……！」

燃え盛る火焔に死神の動きが鈍った。彼は彼女の甲から足を退け、一旦の距離を取る。

「いやいや、驚いた。しかし長くは持つまいネ」

死神の宣言通り、炎はやがて掻き消えた。三森は肩で息をしながらも、必死の形相でゲデを睨み付ける。

「ンン、ウララの体と僕の心がまた一段と馴染んできたかナア」

首の骨を鳴らし、死神は一足飛びで三森に近付いた。残っていたナイフを両手に持ち、彼女の体を切り付けに掛かる。

「うぜェ！」

三森は死神の攻撃を避け、彼の右腕を取った。一息に圧し折るつもりだったが、死神は腕を掴まれた状態から飛び上がり、彼女の顎に変則的な後ろ回し蹴りを見舞う。

「が……っ！」

「僕の方が強い！　ウララの方が強い！」

死神は両足を揃えて前方に跳躍すると、たたらを踏んでいる三森の腹部へと飛び蹴りを放った。度重なる攻撃に、遂に彼女は倒れ込む。

「壊れろ三森冬！」
止めを刺さんとして走り出す死神だが、何かに引っ張られて前のめりに転んだ。
「バッタみてえに飛び回りやがって……」
死神の足首が掴まれている。
掴んでいるのは、ついさっきまで悶絶していた一だ。
「一一っ、キミが僕の足を！」
「てめえは俺の腹をやったろうが」
憎憎しげに叫ぶ死神に、一は目を反らさず睨み返してやる。彼は死神の足首を掴んだまま立ち上がった。
「やっと、捕まえた」
一は死神の右足首を握ったまま、臀部に圧し掛かる。もがくゲデの背中を裏拳で叩き、傍に落ちてあったアイギスを左手で掴んだ。
まずは動きを止める。そう判断した一であったが、詰めが甘かった。死神にはまだ左の足が残されている。
「僕のウララに触るナアア！」
死神は左足の踵で一の腹部を蹴り上げ、拘束が緩んだところを逃げ出した。距離を取り、片膝を付いて呼吸を繰り返す。
一は腹を摩りながら、倒れている三森の傍まで近付いていった。
「くっ、キミたちは本当に不愉快だヨ、不愉快極まりない存在だヨ！」
死神が喚いているが、こちらへ攻撃する気配はない。何せ体は春風のものなのだ。死神にダメージはないが、彼女の体はダメージを受けている。人間の体である以上は動きも鈍くもなり、必ず隙は出来る。
「三森さん、起きて下さい」
「……起きてるっつーの」
三森は寝転がって仰向けの姿勢になった。
「このままじゃジリ貧です。二人ともマジで殺されるかもしれませんね」

「何が、言いてェンだよ」
「春風を助けたいと言ってください。俺に協力してください」
一はアイギスを畳み、呼吸を整える。
「あなたに春風を殺す気があったなら、あいつの体はとっくに燃えてますよね？」
「……どうだかなっと」
三森はふらつきながらも立ち上がり、苦笑を浮かべた。自嘲めいた、複雑な表情である。
「助ける助けるって頭悪いオウムみてェに繰り返してるけどよ、野郎が春風ン中から出てかねェ限りは無理だぞ」
「分かってます。だけど、どこかに付け入る隙はあります」
「ねェよ」
「あります」
一は迷いなく言い切った。
「あいつの狙いは俺たちを殺す事です。でも、最終的な目的はそうじゃない。死体になった俺たちを春風に見せ付ける事なんです」
「つまり何か、私らが死ぬまでは春風に手を出さねェって事か？」
「ええ。だから、まだチャンスは残っている筈」
「はっ、なるほどなるほど。私らが死ぬ前に、死神を春風から追い出せば良いだけの話って訳だ」
三森は一の肩に手を置き、無理矢理に笑みを浮かべる。
「だから、その方法がねェってンだよ。お前は、あいつをどうやって助けるって言うんだ？　あ？　聞かせてみろよ」
「……あー、ありません。いた、いたっ、痛い痛い力入れないでくださいって」
「好き放題言って結局は何もねェのかよ！」
そう言われても、ない袖は振れない。一は三森の魔手から逃れ、死神を見遣った。
「……とりあえず、春風から死神を引き剥がさなきゃいけませんね」
「……どうやって？」

「時間を稼ぎましょう。幸いと言うか、春風の体を使ってる以上、死神は接近戦しかないですから」
先程のナイフを投げてこない事から、もう死神に得物は残っていないと一は踏んだ。
「距離取って、時間稼ぐか。けどよ、あいつの足は半端ねェぞ」
「普通に走って逃げても、一秒ぐらいしか稼げませんね」
春風を助けるどころか、その方法すら思い付かない。方法を考える時間すら与えられない。
それでも、一は手詰まりとは思っていない。
まだアイギスが残っている。
まだ三森の炎が残っている。
死神への憎悪が残っている。
何よりも、春風に対する怒りが残っている。
この気持ちが萎えない限り、心が折られない限りはこの場に残り続ける。
戦い、続ける。

冬来たりなば春遠からじ

時刻は午後十時を回り、冬空は街並みを、人々を闇に誘い、溶かそうとしていた。月は雲に覆われ、一切の光明をもたらさない。

しかし、駒台の河川敷グラウンドで光を掴まんとしている者がいる。ソレと戦い、ソレを殺し、ソレに殺される為の勤務外店員である一と三森の二人だ。彼らは僅かに差し込んだか細い光へと必死に縋り付こうとしている。

「……火だ」

「あ？」

死神に肉体を乗っ取られた者には死が訪れる。死神が、死を運ぶ。春風は死神――ゲデ――に肉体を我が物とされていたが、ゲデは一らを殺すまでは春風に手を出さない。まだチャンスは残っていた。

一たちが死ぬのが早いか、それとも、それまでに春風の体から死神を追い出すのが早いか。目下のところ話は纏まっている。要はやるか、やられるかなのだ。

しかし、実際に『やる』段階まで来たとして、一たちには手段がない。方法がない。春風を救う術が何一つ思い付いていない。時間が必要なのだ。

その時間を稼ぐには距離を取る必要がある。ゲデが春風の体を乗っ取り、彼女自身の能力で戦っている以上、接近戦、肉弾戦を挑んでくるのは明白だ。その為に距離を取り、時間を稼ぎたい。だが、タラリアを装備している春風から逃れられる可能性は限りなく低い。限りなく零に近い。一はタラリアについては何一つ、名前すら知っていないが、彼女の足が自分たちより速いと、比べるのも馬鹿らしくなるほど速いと理解している。

そこで一が目を付けたのが三森の能力だった。距離を取るには二つ方法があると彼は考えている。まず、自分たちが相手から離れる。

しかしこれは不可能に近い。ならばと思い付いたのが、相手から離れていってもらう方法だ。
「三森さんの火なら何とかなります」
「……私の？　いや、けどよ」
「時間さえ稼げりゃ何とかなります。最悪、あいつの動きが鈍くなるだけでも良いんですよ」
「だから、どうやってだよ？」
長々と説明している暇はない。死神は片膝を着いていた状態から脱し、一たちの様子を窺っている。今すぐに仕掛けられてもおかしくはないのだ。
「歌代の――俺と戦った時、火の玉を投げてたでしょ。アレで牽制してください」
「言っとくけど、威力はねェぞ。当たるとちっと火傷するくれーだからな」
「構いません。ただし、絶対に近付けさせないでください」
「はァ？　てめー頭沸騰してンのか？　第一よ、ありゃ疲れるし、狙って投げんのが面倒なんだよな。そんなの無理に――」
三森が駄々をこねようとした時、風が一たちの間を通り抜けていく。
来る。
死神の姿を確認する余裕もなく、一はただアイギスを広げて前方に突き出した。
「馬鹿野郎っ、後ろだ！」
三森に頭を押さえ付けられ、一は地面に倒される。そのすぐ上を、音と風が駆け抜けていった。
「火っ、火っ、早く投げてくださいよ！」
「どこに投げろってンだよ！」
死神の姿は見えない。的もないのに玉は投げられない。だが、三森は半狂乱になりながらも掌から炎を生み出す。その炎は形を成し、歪な球体へと作り変えられていく。

「とりあえず右にっ」
「知らねェぞ！」
三森は火の玉を握り締めると、誰もいない方角へ放り投げた。当然、火の玉は次第に勢いを失い、やがては消えていく。
「意味ねェじゃねーかよ！」
「連発です連発！」
当たらなくても良い。せめて、死神が炎に意識を奪われ、鈍くなってくれさえすれば望みはある。
「これは疲れるって言ってンだろうが」
三森は両の掌を叩き合わせ、二つの炎を作り出した。何も分からないまま、言われるがままに火の玉を放つ。放てば新たに火を生み、また放つ。放つ、放つ、放つ。
「……来た」
静かな夜に、風の音は聞こえ過ぎる。だが、一々確認する猶予はない。一はアイギスをしっかりと握ると、死神の来るであろう方角に構えた。
「ンン！？」
「く……っ！」
まず、風が吹く。一の両腕に重い感触が伝わり、次に死神の驚愕の声が聞こえた。受け止められるとは思っていなかった一撃に、死神の動きが僅かに鈍る。
「出やがったなァ！」
業（ごう）と音が跳ね、三森の体から熱が発せられた。速やかな離脱に失敗した死神は火の雨に晒される。
「しつこいんだよキミたちはっ」
死神は火の玉を掻い潜ると、左方へと走り抜けた。
その間に三森は炎を生み、中空に停滞させる。彼女の周囲には火の玉が九つ並べられていた。
「……てめェの狙いが読めたぜ。野郎がどっから来るか分かンねーなら、こっちで来る方向を決めちまえば良いって事か」

「流石、こういう事に関しちゃ鋭いですね」
ひとまず、一の狙い通り三森の炎である程度の距離を取り、ある程度の時間を稼ぐのには成功している。そしてもう一つ、彼の狙いは死神の出現位置の予測だった。
死神はどこから来るのか分からない。死角、死角に回り込んで奇襲を掛けるのだ。
「右に火があれば左から、前に火があれば後から。死角から来るなら、こっちで死角を作ってしまえば良いんです」
「そうと分かってりゃさっさと言えってンだよ」
確証はなかった。何しろ、あまりにも稚拙な策なのである。
「ンじゃ、とりあえず野郎が消えた方へ投げとくぜ」
一はゆっくりと呼吸しながら頷いた。今は上手くいったが、次も上手くいくとは限らない。そもそも、上手くいっているのかどうかすら分からない。
「……出来れば、もっと弾幕を厚くしてもらえませんか」
「良いように人を使いやがって」
憎まれ口を叩く三森だが、彼女は一の指示通りに火の玉を広範囲に散らせていく。
「おい、あいつが来るタイミングは分かってンのか？」
「ええ、風が吹くんです。ほら、今日は静かだから」
「……静か？　ま、盾はお前だ。お前が分かってンならそれで良い」
三森は死神の消えた方角から向かって右に炎を集中させていた。
「来ます……！」
なら、死神が仕掛けてくる方角は――。
風が、
「――左っ！」
「ンンンン！？　キミはあああ！」
吹く。
死神はアイギスに足を乗せ、体重を掛けながら醜く顔を歪ませた。
「降りやがれえええええ！」

一も負けじと叫び、気勢で押し返す。
そして膠着は長く続かない。三森が一の肩を踏み台代わりに跳躍し、死神に肉薄する。
「畜生っ、人間風情が！」
死神は三森の攻撃を避ける為、アイギスから飛び退く。死神はそのまま一に仕掛けようとするが炎によって阻まれた。
「退いてろっ」
一は後方に退き、その間に三森が飛び込む。
三森と死神の間には炎があり、お互いの視界は遮られていた。
だが、炎は三森の行動までは阻まない。彼女が生み出した炎で、彼女自身が焼かれる事はない。
「ンン、忌々しいネ」
三森の拳は空を切り、死神は空を舞う。彼女は短く舌打ちし、追撃の火の玉を投擲した。
「あはははははっ、僕には、ウララにはそんなもの当たらない、当たらないんだヨ！」
死神は三森の放つ火の玉を避けながら高笑いを上げる。
「いい加減に諦めたらどうなんだい？　キミたちじゃあ何年経っても追い付けないヨ」
三森の炎である程度は戦えるようになっていたが、未だ一たちの戦況は不利だった。死神にはまだ有効な攻撃を加えられていない。
一は歯噛みする。悔しいのだ。高が死神に好き勝手されるのが悔しくてたまらない。
「当たらない、当たらない、当たらないっ、当たらないヨ！」
死神は炎を避け続ける。三森は何も言わないで淡々と、作業めいた攻撃を繰り返していた。
「三森さん、このままじゃやばいです……」
「やけに喋りやがるな」
「え？」
三森は死神から視線を外さない。

「死神だよ。逃げねェで喋りまくるのはなンでだ。とっとと姿消すなり仕掛けるなりすりゃ良いってのによ」
言われてみればその通りだ。死神は何をするでもなくこの場に残り、攻撃を回避し降伏を勧告する。一に攻撃が二回とも防御されたとして、三度目がどうなるかは分からない。仕掛け続ければ、いつかは一にも、アイギスにも綻びが生じると言うのにだ。
「何か狙いがあるんじゃ……？」
「分かンねェけど、一つだけ言える事があるぜ」
不安そうな表情の一とは対照的に、三森は獰猛な笑みを見せる。
「野郎、動きが鈍くなってやがる」
「……本当ですか？」
「つーか、疲れてンじゃねェか？　見ろ、笑ってやがるが顔色は良くねェ」
一は確かめてみたが、いつもの春風と区別が付かなかった。だが、自分よりも彼女との付き合いが長い三森が言うのだから、間違いはないと判断する。
「でも、どうしていきなり？」
「さァな。ま、これで少しは勝ちも見えてくる」

一同様、三森もタラリアの事を知らない。だが、彼女の読みは当たっていた。
タラリアのリミッターを外している為に春風の体には負荷が掛かっている。死神が何も感じていなくても、彼女の疲労は溜まり、ダメージも積み重なる。なまじ、気付かないからこそ取り返しが付き辛い。
死神が距離を詰めたのは余裕の現れではない。一たちを殺さない限り、春風の体を必要以上に痛め付けるのは本意ではないのだ。無駄に場へ留まり、負けを認めろと訴えたのは、負荷の掛かるタラリアを使えず、すり減る体力を意識した上で取れる最善の手段だった

のである。
そしてもう一つ、ゲデには致命的な欠陥があった。一と三森はまだ気付いていないが、戦闘が長引くのなら気付くのも時間の問題だろう。

三森が右へ火の玉を投げれば死神は左へ避ける。前方に火力を集中させれば死神は後方に飛び退いた。
「ンンンンっ！」
一の予測した方向から死神は攻撃を仕掛ける。動きが鈍っているとはいえ、確かに速い。捉えきれない。
だが、どこから来るのか分かっていれば防ぐのは困難ではない。一は確信する。死神は決して強くはない。ただ速いだけなのだと。
同時に、三森も確信し始めていた。そして彼女が気付いた事実こそが、最後に残った死神の欠陥なのである。
――強くない。
欠陥――死神は、戦闘に関しては素人も同然なのだ。
タラリアと春風の身体能力に頼り、死角から攻撃を繰り出すだけ。何も考えず走り回り、危なくなれば恐れをなして逃げ回る。しかも、三森だけでなく一にまで意図を操られる始末だ。
しかし仕方のない話ではある。そも、ゲデは死神なのだ。この世の誰よりも、何よりも死を司り、死を操り、死を理解し、死を享受する存在。死の神だ。今までにゲデは人間を殺しただろう。春風の家族だけでなく、数えるのも馬鹿らしくなるほどの人間を殺しただろう。
では、どうやって殺したのだろう。剣を取り、勇ましい声を上げて戦ったのだろうか。
否、違う。有り得ない。
剣を取る事すら出来ない者を相手取り、厭らしい笑みを浮かべて殺したのだ。

戦闘ではない。ゲデは戦闘を知らない。神が人間を相手に戦闘など行う筈もない。ゲデは、今までに戦った事がない。闘争を知らず、ただ人間を玩具にして遊び抜いたに過ぎない。

「くそっ、どうしてっ、どうしてだ！　どうしてこうなるんだヨ！？」

ゲデの顔には明らかな焦りが浮かんでいた。喚き、汗を飛び散らせ、髪を振り乱して駆けずり回る。攻撃は全て一に防御され、三森の拳と火炎が恐怖を加速させる。

――何かの間違いだ！

こんな事は今までになかった。人間とはもっと醜く、弱く、脆い筈。悦楽の対象にしか成り得ない筈。

「三森さんっ」

蹴り出す足をアイギスに阻まれてゲデはバランスを崩す。その隙を三森に衝かれ蹴り飛ばされた。

「ぐううううっ！？」

地面を無様に転がる。尚も息つく暇はない。動こうとしたところで火の玉が周囲の地面を穿ち、焦がしていく。

「ひっ……！」

動けず、ゲデは目を瞑った。瞬間、顔のすぐ近くで熱いものが弾ける。もうここにいられない。意味を成さない声を上げると、ゲデは立ち上がって駆け出した。

とにかく逃げなければならない。恐ろしくてたまらない。何かの間違いであって欲しい。神である自分が人間である彼らに背を向けるなど――。

「おい、逃げンのかよ？」

嘲笑する声。

「……三森冬」

――背を向けるなど、許されない。

「ケリ付けようぜって言ってンだよ」

三森は煙草を口に銜えて笑う。

「三度目の正直って奴だ。てめェにゃそろそろ地獄に行ってもらうぜ」
「く、くく、その言葉は知っているヨ。でもネ、二度あることは三度あるって言葉もあるんだ」
今度こそ、ではない。今度もまた、殺せば良い。
もはや春風の体の心配をする余裕はなかった。タラリアを最大限に解放し、二人纏めてとどめを刺す。そうしないと、ゲデは自分を許せそうになかった。
「……っ、野郎」
三森は舌打ちし、空を見上げる。ゲデの消えた方向を強く睨む。
決着は、次の攻防で決まる。
三森も、ゲデも、この戦いを見守る情報部二人も、一でさえもそう確信していた。

「いやあ、随分と疲れていますね」
緊急の呼び出しを受けた堀が北駒台店に到着したのは、午後の十時を少し回ってからの事であった。
「お前にそう見えるのなら、そうなのかもしれないな」
店長は表面上、いつもと変わらない様子で煙草に火を点ける。
「死神が出たんですってね。そしてあなたは一君を死地に送った、と」
「聞こえが悪い言い方をするな。見込みがあったから教えただけだ」
「見込みとは、勝つ見込みですか？　生きて帰れる見込みですか？　それとも――」
「どうした堀。今日はいつになく突っ掛かるじゃないか。何か嫌な事でもあったのか？」
堀はずれてもいないのに眼鏡の位置を押し上げた。
「三度目、ですよ。我々が死神を見つけられず手を拱いている間に、三度目の事件が起きた。店長、死神は紛れもなく強敵です。正直な

話、何故一君を現場にやったのか納得出来ないんですよ。糸原さんでも、ジェーンさんでもなく、何故彼なのですか？」

「あいつだけじゃない、三森もいる。悪い方には転がらんさ」

店長が根拠のない発言をするのは今に始まった事ではない。だが、それでも堀には理解出来ないのである。死神はオンリーワン近畿支部の社員が血眼になって探しても見つけられず、いざ戦闘になっても大したダメージすら負わせられない存在だ。どうして一が出張る。彼が初めて勤務外として出勤した頃から比べると、確かに成長はした。ここまで生き残ってきた。その事は認める。評価する。だが、どうして一なのだ。

「人選を誤ったのではないかと、そう思いますけどね」

「この上なく最高の人選だと思うがな」

堀と店長はしばし視線を交錯させる。間違っているのはお前だと、目で訴え合う。

「……ま、良いでしょう。話は一君たちが帰ってきてからでも遅くはない。ヘルプとして呼ばれた以上は、きっちり仕事をこなすとしましょうか」

先に折れたのは堀だった。彼は柔和そうな笑みを浮かべると、モップを手に取り店長から背を向ける。

「店長、あなたには一体何が見えているんでしょうね。いえ、あなたの目は、何を見ているんでしょうね」

何が起こったのか、すぐには分からなかった。

一は地に這い蹲り、呻きながら視線を上げる。

「ンン、愉快だヨ、痛快だヨ。やっと壊れてくれたんだネ」

ゲデが笑っていた。

立ち上がろうとするが、体が痛くて言う事を聞いてくれない。三森の姿を探すと、まずい事に彼女はゲデのすぐ傍に倒れていた。

自分たちは先の攻防で倒されてしまったのだ。その事に気付くと、

何故か一の口角はつり上がる。おかしくて仕方がないのだ。滑稽で滑稽で、笑うしかなかったのだ。

一は自分の体に手を遣る。思ったよりも手酷くやられていた。が、まだ動く。アイギスを握った右腕も、対象を見据える両の目も、命令を下すこの口も、全て動く。条件は整っている。

「さて、それじゃあ三森冬から壊そうかナ」

「待てよ……！」

「ンン、まだ立ち上がれるのかい？」

しかし、一は膝を着くので精一杯の様子だった。まだ戦闘への意欲は失われていないが、まともに戦える状態ではない。

「なんだ、立ち上がれないのかい。それじゃキミはそこで見ていると良いヨ」

ゲデは三森へと近付いていく。それだけは許せない。一は片腕でアイギスを突き出し、対象へと狙いを定めた。

「……ああ、確かアイギスと言うのだったかナ。知ってるヨ、やれるものならやってみると良い。だけど、僕を止められるかナ？　止められたとして、キミにはそこが限界ではないのかナ、ンン？」

「知ってんなら話は早いよな」

「で？　それで僕をいつまで止められる？　一時間？　一分？　いやいや、そんなには持たないだろう？　知っているんだヨ、何せ今の僕はゲデでもあり、ウララでもあるんだからネ」

ゲデは嫌らしい笑みを浮かべる。彼は知っているのだ。春風の記憶を通し、アイギスの能力を理解している。だから、余裕の笑みを浮かべられるのだ。

「そうかよ」

「ふん、気に入らない目だネ。そこでくたばっていろ」

一を脅威とは見なしていないのか、ゲデは警戒した様子も見せずに三森へと歩を進める。

「……随分と壊れているナア」

三森の髪の毛を引っ張って無理矢理起こそうとするが、いやに重

い。反応すら見せない。
「ンン、もしかして、もう完全に壊れ――」
ふと、ゲデは強烈な重圧を感じた。振り返る事も出来ず、そのまの姿勢で耳をそばだてる。
「馬鹿が、絶好のチャンスだよ。――止まれ」
光が背後から注がれた。

何が起こったのか、すぐには分からなかった。
光に包まれたゲデは思わず三森を取り落としてしまう。
「ン、これがアイギスか……」
対象の動きを止めるという、アテナの神具。恐ろしい力だ。
不発さえ、していなければ。春風の記憶が正しいなら、アイギスは対象の動きを止めるという。
なら、これはどうした事だ。ゲデはくるりと回転する。もう笑いが堪えきれない。
「……嘘、だろ」
一が呆然とした様子でこちらを見上げていた。最後の力を使いきったのか、彼の腕はだらりと伸び、悔しそうに俯く。一は震えていた。恐怖しているのだろう。これから起こる事を想像して泣いているのかもしれなかった。
「いやいや、驚いたヨ。正直に言おう、今日は驚いてばかりだヨ。だけど、ここまでだネ」
三森の体に触れてみても、彼女は何一つ反応を返さない。まだ温かいが、心なしか冷えていくような感じを受ける。まるで死んだように冷たく、動かない。
否、死んでいるのだ。
間違いない――三森冬は、死んでいる。
ゲデは笑った。勝利とはこんなにも甘美だったかと、狂ったように笑い続ける。

「……くくっ、もう用はないネ。さて、ウララに見せ付けるとするか」

ゲデは三森の体を地面に投げる。周囲を見回してから一つ息を吐いた。

瞬間、『春風』の体が大きく震える。力が、何かが抜けたように膝から崩れ落ちていった。

「……あ、これ、は……？」

激しく咳き込んだ後、春風が意識を取り戻す。

「ンン、ウララ、お久しぶりだネ」

「貴様……っ」

ゲデは彼女の怒りに満ちた瞳を見、嬉しそうに微笑んだ。

春風の瞳はどこまでも虚ろであった。

どうして、自分は解放されたのか。ゲデに体を乗っ取られてからも、おぼろげながらではあるが意識は残っていたのである。何が起こったのか、分かっていたのである。

どうして、自分は解放されたのか。

答えはそこに転がってある。

一も、三森も動かない。倒れたまま、ぴくりともしない。

「ンン、ウララ、実に良い顔をしているヨ？」

どんな顔をしているのか自分では分からないが、酷い顔になっているのだろうと、春風はぼんやりと思った。

「……殺したのか」

「ン？　ンン、三森冬は壊れてるヨ。案外呆気なかったから驚いたかナ。ああ、そっちの、キミの弟に似ている男は生きているよ。まだ、だけどネ」

三森が、死んだ。

すぐ傍に彼女は、彼女だったものが転がっている。手を伸ばしそうとしたが、届かない。届いてはいけない。事実だけを淡々と受け

止め処理しなければならない。自分には、もう触れる権利がないのだ。

「なら、私も殺せ。殺せば良い」

「そうはいかないヨ。壊すのは三森冬だけじゃない。一一が壊れるところも、ウララにはしっかりと見届けてもらわなきゃネ。その上で、キミにも壊れてもらう」

ゲデが一へと向かう。その歩みを止められなかった。彼はまだ生きている。助けられる筈なのに、どうしても体は動いてくれなかった。

「ンン、本当に素晴らしい顔だヨ、ウララ」

一体、何をしに来たのだろう。

今まで、何をしていたのだろう。

ただ殺される為だけに、ゲデの欲求を満たす為だけに、ここへ来たのだろうか。

もしもそうなら、その為に自身だけでなく二人を巻き込んだ。

そしてもう、償えない。贖えない。謝ることすら出来ない。もう、何も出来ない。なのに涙一つ浮かんではこない。悲しい筈なのに、悔しい筈なのに、心はもう空っぽで。

奇跡など起こらない。

死は誰にでも、いつでも、どこでも、常に平等に訪れる。死神の鎌からは誰も逃れられず、ただ刈り取られるのを座して待つしかないのだ。

ソレと戦う勤務外ならば、死と常に隣り合わせなのだと、死は常に自身の影に潜んでいるものだと理解している。だから、覚悟をしている。誰に殺されても、いつ殺されても、どこで殺されても文句は言えない。自身が命を奪う存在であるならば同時に、命を奪われる存在であることも強く意識しなければならない。

だが、自ら望んで殺されたいと、死にたいと思う者がどこにいる。

今日不幸せだと思っても、明日が幸せになるんだと、そう思う者はどこにもいないのか。

いる。

いる筈だ。

だからこそ、勤務外は命を賭けられる。

生き延びる為に腕を磨き、考えを巡らせる。

ソレとの戦闘で奇跡など起こらない。偶然誰かが通り掛かってはくれない。そこにいた自分たちだけでどうにかするしかないのだ。

自分の命は、自分で守る。

「……馬鹿ナ」

その為に出来る事は全て試す。全てやり尽くす。手があるなら、策が残されているなら、生き抜く為に何かあるなら――。

奇跡など起こらない。

偶然など、そう簡単には起こらない。

「獲物を前に舌なめずりってのは、良いよな。たまんねえぜ、実際」

だから、今起きているのは奇跡ではないのだ。

勤務外が、一が、三森が起こした必然なのである。

「……嘘」

立ち上がり、不敵な笑みを浮かべるのは一だ。

「っと、畜生、体が痛ェなあ、おい」

彼に呼応するかのように立ち上がる者がまた一人。

さしたる苦もなく立ち上がったのは、先程まで死んでいた筈の三森である。

「てめェ、ミスってたらどうするつもりだったンだよ?」

「さあ、そのまま固まってたんじゃないんですかね。ま、大丈夫とは思ってましたよ。人間を止めんのは三森さんが初めてじゃないですし」

そして、彼らは笑うのだ。絶望とは無縁の顔で、まるで、勝利を確信したかのような、そんな笑みを浮かべるのだ。

「……キミ、たち、は……」

「へえ、口開けんのかよ。でもさ、喋るだけでもしんどいだろ、死神さん。なあ、てめえしっかり止まってくれてんだろうな？」
「そンじゃま、とりあえず一本もらっとくわ」
動きの止まったゲデに、三森は悠々と近付いていく。振り上げた拳は紅蓮の炎を纏い、ゲデの右腕を叩き、瞬時の内に融解させた。血液は沸点を軽々と超えて辺りに霧散する。皮と肉は焼き焦げ、芳ばしい臭いを撒き散らして地面に転がり落ちた。
「――――――ッッッッ！」
「おーおー、痛過ぎて声も出ねェってか。そいつァ良いな、料理した甲斐があるってもンだぜ」
げはは、と、三森は下品に笑う。
「ンじゃま、お次は足の方に致しましょうかお客様。おらっ」
ゲデは体を、動きをアイギスによって止められている為、体をのた打ち回らせて苦痛を紛らわす事も出来ない。そんな状態のゲデを、三森は躊躇なく背中から蹴飛ばした。
「好きな死に方を選ばせてやンよ。ウェル、ウェルダン、ヴェリーウェルダン。どれが良い？」
「――ッッ、キッ、キミハァァ……！」
「あァ？　聞こえねェぞ、何にもな。何にも聞こえねェ。仕方ねーなー、シャイなお客様にはシェフオススメの焼き方でいっといてやるよ」
一はゲデを見て思う。天国から地獄へ叩き落される気分はどんなものなのだろうかと。
「……あー、焼く前に言っとくわ。私さ、不器用なンだわ。だからよ、まあ、なんつーか、しっかりきっかりこーんがり焼けてくれや」
「やっ、やめっ……！」
「やめねェよバーカ！」
ただ、一つ分かった事がある。人間とは悲しい時にも笑えるモノなのだが、死神も、やはりそうなのだと。

ごめんなさいが言えなくて

「何と言うか、良くやるよ。馬鹿だなあ。本当に馬鹿だ。僕にはとてもじゃないが真似出来ないね」
「楽しそうですね」
「いやいや、僕は内心怒っているんだよ？　命を粗末にしちゃいけないってね」
　言葉とは裏腹に、旅の表情は明るいものであった。
「随分と時間が掛かりましたが、とにかく終わりましたね。……ふう、少しばかり生きた心地がしませんでしたよ」
「あれあれ？　いっつもクールな木麻君にしては珍しい台詞だね」
「たまには、です。それよりも旅さん、一たちはどうやってゲデを倒したのですか？」
　木麻の問いに、旅は首を傾げる。
「倒したと言うか、騙したと言うか。……ゲデが実体に戻るには一君たちが死ぬ必要があったんだ。春風君を追い詰めたかったからね」
「それは分かっています」
「だったら答えは簡単さ」
　ちっちっ、と、旅は軽快に指を振った。
「……死んだフリ、ですか。しかし、まさか死神がそんな方法に引っ掛かる筈が……」
「確かに、普通ならね。でも、ゲデは大分参っていたし、冷静さを欠いていた筈だよ。そして、普通の死んだフリじゃあない。アイギスで三森君を止めていたのなら、そう簡単には見破れないと思うよ」
　だが、偶然ではない。あの結果は奇跡ではない。一たちが必死にしがみ付き、引き寄せたものなのである。

「……まだ、生きてるんですか？」
ゲデの体には炎が未だ燻っていた。その光景に目を背けながら、一は三森に尋ねる。
「まだ生かしてンだよ。こいつをヤるのは私じゃねェ」
三森はジャージのポケットからナイフを取り出した。
「それは、私の……」
「ああ、さっき投げられた時に一本借りといたぜ。――やりな」
動けない春風にナイフを握らせると、三森は煙草に火を点ける。
春風は最後の力を振り絞り、ナイフの柄を杖代わりにして立ち上がった。彼女の体はふらつき、今にも倒れてしまいそうである。瞳の奥に宿った憎悪だけが春風を動かしていた。
「何年待ったと思ってる。この為だろうがよ、一番美味しいところ譲ってやるって言ってンだ。どうした、やれよ」
「……私は」
だが、春風はその場から動かない。ゲデを見下ろしたまま動かない。
「この期に及ンでガタガタ抜かすんじゃねェぞ。そいつがどれだけの人間殺したと思ってやがる。あ、いや、殺したとこで、死んじまった奴は帰ってこねえってのは分かってる。けどよ、生かしとく理由はねェだろ？」
「ああ、その通りだ」
「だったら！」
「だが、私は背負いたくない。もう、嫌なんだ。これ以上こんなのに縛られるのは……」
うな垂れる春風に、初めから関わり合いにもなれない一はおろか、三森でさえ何も言えないでいる。
だから、気付かなかったのだ。
「ンン……」
時に感傷は、同情は取り返しのつかない悪夢を産むと言う事に。

ゲデは片腕と片足を失っていた。だが、腐っても、焼かれていたとしても神は神なのである。三森たちはその事実を失念していた訳ではないが、弛緩し切っていた。

「――――っ！」

「しまった……！」

自身でも理解している。もう、先は長くないと。だから、だからこそ道連れが欲しい。神の執念、怨念。ゲデが選んだのは、選べたのは一番近くにいた一であった。

触れた瞬間、火花が残っていた視界に降り注ぐ。

霊体に変化してもダメージは癒えない。死は免れない。だが、最後に残った力で地獄の王に贄を供するのも悪くはない。

一の中は、ゲデが思っていたよりも心地が良かった。

ゲデの、体を乗っ取る行為と言うのは、自身を霊体に変化させ、対象の精神と自身の精神を同居させるようなものである。だが、あくまで主導権はゲデにあるのだ。乗っ取られたものはただ、そこにいるだけである。何も出来ない。何も言えないのだ。

そして、ゲデは対象者の記憶を探る。探ると言っても、記憶は脳に蓄積されている。体を動かす権利はゲデが握っているのだから、自由自在に記憶を引き出せる寸法なのだ。

――さて、と。

記憶を探ると、一番最初に現れたのはゲデ本人の姿である。一の記憶の中では一番新しく、一番感情に訴え掛けたモノなのだろう。だが、ゲデは自分の姿など今更見たくはなかった。もっと違うものが見たい。彼の弱さを知りたい。弱みを握りたい。一が抱く他者への嫉妬を、憎悪を、憤怒を。泥のように臭く、血のように甘く、どこまでも薄汚れた感情が見たい。

ゲデは深く、記憶の海へ潜っていく。

名前、性別、年齢、身長、体重、誕生日、星座、血液型、趣味、

特技、職業……。

流れる情報に目を通していく。取捨選択の果て、ゲデは一つの風景と出会った。

――ンン、これは？

そこは、公園だった。

滑り台。ブランコ。シーソー。ベンチ。広場に点在する遊具。

太陽は青空の天辺に位置し、蝉が鳴いていた。その鳴き声に、公園の傍を通りかかる人々は皆耳を手で塞ぎ、顔を顰めている。全ての人へと平等に降りかかる容赦のない光。

雑草と石が散りばめられた広場。

そこで子供たちが声を張り上げて草野球に興じている。体の大きさや顔付きからして、せいぜい小学校は低学年ぐらいの年頃だろう。流れる汗や、襲い掛かる紫外線など物ともせずに、彼らはただただ白い球を追いかけている。

しっかりしろよ、そんな声が外野、内野問わず上がっていた。

子供の人数は、そう多くない。野球本来の九対九でなく、その半分ほどだろうか。

ゲデはしばし、その光景に目を奪われる。彼はいつの間にか一の記憶の中の風景の、一登場人物として実体化していた。

――少し、楽しむとしようかナ。

やがて試合も進み、どうやら終盤に差し掛かった頃、一人の少年がバッターボックスに立った。一球目、二球目ともに空振り。

三球目。ゲデが目を離した瞬間、高い音が響く。見ると、金属バットがボールを捉えていた。真っ直ぐな打球が外野に飛んでいく。

ベンチからは歓声。

ピッチャーは溜息。

バッターは叫んだ。

叫んで、喜びを体全体で表現するかのように、大きく飛び跳ね、塁を回る。打球の行方を外野が追うが、それも無駄な徒労に終わるだろう。公園の一番端、低い並木が連ねる公園のフェンスの、更に

向こうへとボールは消えた。

一方で、生還したランナーをベンチの子供達がホームベース上で迎え入れている。未だ響き渡る歓声に応えるように、小さな英雄が大きく手を掲げた。

刹那、ゲデの視界が暗転、反転する。

真夏、真昼の公園は姿を消し、真っ青だった空は夕闇の曇天に覆われた。遊具は辛うじて原型を留める程度にまで変わり果て、広場にはぽっかりと、大きな穴が穿たれている。

――これが。

周囲の景色も一変していた。傍に立っていたマンションは鉄筋を残すのみで、瓦礫の山を築き上げている。野球をしていた子供たちも、彼らを見守っていた人たちも、誰も彼もが姿を消していた。

ここには、もう何もない。

――これが、一一の記憶……！

ゲデは笑った。

そうだ。そうだとも。

ゲデは一の記憶を辿っていったが釈然としないものを感じていたのである。思い出は全てここ数年、一が駒台に来てからのものが殆どだ。いや、それしかないと言っても良い。それ以前のものがない。楽しい、嬉しい感情でだけ占められたアルバムは、ゲデの心に黒く、暗い影を落とす。どうにも彼の経歴、記憶はうそ臭い。胡散臭い。真実を奥底に隠している。その読みは当たっていた。

この先に何かがある。

手を伸ばせば、すぐそこにある。

ゲデが意識を集中したところで、背後から気配を感じた。振り返れば髪の長い女がいる。どうやら一の記憶に残る女らしい。廃墟に佇む女をこれ以上気にも留めず、ゲデは一の記憶を掘り起こそうと試みた。

「あなたは誰なの？」

「――――！」

ゲデの背筋が凍る。声の主、背後の女は彼の肩に手を置いていた。

本来なら有り得ない。この女はあくまで記憶の筈で、ゲデは実体化しているが、一の記憶上には存在しない筈なのだ。言わば、一の記憶は映画、ゲデは観客で、女はスクリーンの女優である。観客が女優に触れられるなど、また、その逆も有り得ない。有り得てはいけない。

「おっ、お前は……！？」

ゲデは女の手を振り払い、穴の開いた公園へと逃げ込んだ。

「あなたは、主さまの友達なの？」

「何なんだっ、誰なんだお前は！？　どうして僕に触れられるっ！？」

女は答えない。ゲデへと一歩ずつ近付いていく。歩く度、彼女の輪郭が周囲の景色と同化し、曖昧となっていく。

「そう……違うのね」

髪の長い女は悲しそうに、寂しそうに呟いた。

「こっちへ、こっちへ来るんじゃあない！」

「違うのなら、あなたは主の敵なのね？　そうなのね？」

恐怖が加速していく。ゲデの心臓は破裂しそうなほど高鳴り、冷や汗が全身から噴き出ていた。死神、神ともあろう存在が、である。

「うっ、うおおおおおおお！」

「じゃあ――止まってちょうだい？」

死ぬ。本当に死んでしまう。ここに留まっていれば死ぬ。だが、一の体から出ても死ぬ。なら、どちらかを選ぶしかない。

ゲデは――。

ゲデが選んだのは、一の体から抜け出す事であった。

得体の知れない髪の長い女の、あの目。あの目と目が合う寸前で

ゲデは脱出を選んだ。選ばざるを得なかったのである。
「……くっ、そぉ……」
だが、どうやら間に合わなかったらしい。
残っていた腕と足が全く動かない。どうにか顔を動かして確認すると、
「くそおお……！」
体が、石になっていた。辛うじて動くのは膝から上の一部分だけである。何が起こったのか、起こっているのか理解出来ない。どうして、記憶の中の人間にこんな真似が出来るのか皆目見当が付かない。が、はっきりと分かった事もある。
自分はもう、逃げられない。
「……やってくれるじゃねェか」
ゲデに振り向く余力は残っていなかった。絡み付く殺意。背後から堪え切れない熱を感じる。直接見なくても分かっていた。
迫るのは三森冬。彼女の全身からは火炎が立ち上っている。
だが、その炎はどこか異様だった。三森から発せられている炎は一定の高度以上には上らない。どろりと、粘性のある水のように地面へと流れ落ちていく。しかし決して触れたものを焦がさない。溶かさない。意思を持たない火である筈なのに、まるで燃焼させるものを選別しているのかのような――。
「てめェはよ、やっちゃなンねー事をやったんだよ。私の目の前でな」
三森が歩く度、彼女の足元に溜まった火も移動を開始し始めた。ゆっくりと、しかし確実に。意思を持っているかの如く進んでいく。
やがて、散らばっていた炎はひとりでに集まり、何かの形を成すかのように蠢き、作り変わっていく。
「てめェだけは跡形も残さねェ」
三森がゲデを睨み付けて低く呟いた瞬間、火勢が激しさを増した。炎はどろどろとした形状を保ったまま移動を始める。
「……三森冬、それは……」

その、炎の意味を理解した春風が声を震わせた。
液状のようだった炎は一つの形に生まれ変わる。
「うっ、くっ、あああああっ……」
怯え、情けない声を上げるゲデにはその正体が掴めない。
三森の炎から産声を上げるモノが見えていない。
――トカゲの姿をした炎がまるで見えていない。
四つの足で地を焦がし、溶かし、眼前の障害を悉く嘗め尽くす暴虐が見えていない。
見えないからこそ恐ろしい。恐怖は意思を止め、萎えさせる。
ゲデは必死に逃走を試みていた。
しかし、
「『舐めろ』」
「うぎいいいいいいいいいいいいいいいいいっっっっ！？」
石化していた足が掴まれてしまう。石化していた為、直接の部位からは痛みが伝わらない。だが、熱はすぐに信号として全身に駆け巡る。
トカゲの姿をした炎は苦しみ悶えるゲデを気にする筈もなく、淡々と己の職務をこなそうとしていた。三森の怒りを具現化した存在は、ただ標的を焼き尽くさんと紅蓮の舌をゲデに這わす。
「ひ、やめっ、やめてっ、やめてくれえええええええっ！」
炎の触れた部位から溶け始め、数秒と掛からない内に焼け爛れる。血液は沸騰して体内からゲデの体を痛め抜く。骨は炎に舐められると、一瞬でこの世から姿を消した。
ゲデに残ったのはもはや胸から上だけの部位になっている。それでも、意識があるのだ。痛みを感じれば、恐怖から叫ぶ事も出来る。気が狂う事も許されず、少しずつ己の体が溶かされていくのを感じなければならない。
「あああああああああっ、あつ、あつっ、あつい！　お、おおお願い！　頼むからもう殺して、殺してくれ殺して殺してころし――」
気の遠くなるような責め苦の果て、遂に悲鳴が消えた。そして、

まだ終わってはいない。まだ、ゲデの発声器官が焼かれただけなのだから。

木麻は常々思っていた。異を唱えていた。

勤務外で最も強いのは三森冬。そう、誰もが口を揃えて言う。納得が出来なかったのだ。そも、強いとは何を以って指すのか。確たる判断材料もなく、皆が盲目的に述べる事実を信じられなかった。

「……これが、三森の力ですか」

しかし、アレを見ては信じざるを得ない。

圧倒的な暴力。絶対的な暴虐。全てを燃やし、焦がし、溶かし、舐め尽す業火。力強く、何よりこの世のものとは思えないほどに美しい。

火鼠。蜥蜴人間（サラマンダー）。赤鬼。そのどれもが戦闘部時代の三森を指す二つ名である。そう呼ばれるほどに彼女は強かった。

その意味を、木麻はようやく理解する。

「と言うより、彼女に宿った――巣食ったモノの力だよ」

旅がつまらなさそうに口を開いた。

「これで本当に決着だね。ゲデはもう、どこにもいない。多分天国にも地獄にも、煉獄にもいないだろうね。この世から、完全に消えて失せたのさ」

「旅さん、どこへ？」

「漣君に報告してくるよ。彼は、この世のどこかにはいるだろうからね。うん、ま、いるのなら天国が良いな。好きな子を守ったんだ。神様だって分かってくれてるよ」

鉄塔から飛び降りようとする旅を木麻は引き止めなかった。

確かに皆の言う通りである。三森は強く、そして恐ろしい。

だが、木麻は何故だろうか、三森より一の方が気になっていた。

あの時、ゲデは一の体を乗っ取った筈。しかし、すぐにほうほうの体で抜け出してきた。何か、恐ろしいモノでも見たかのような、そ

んな表情で。

全てが終わったと気付いたのは、雲間から覗いた月に照らし出された時である。

一は重くなった体を上半身だけ起こし、空を見上げた。

「……あー」

少しの間意識が飛んでいたようだが、何とか生きている。自分はまだ生きている。しかし、大した実感は湧かなかった。体中の力が抜けたようにだるく、気持ちが悪い。

三森と春風も生きていてくれた。ひとまず、一は安堵の息を吐く。後はこの二人に心の底から謝ってもらえば、今日はもう終わるのだ。

だが、どうにもそんな話題を切り出せる雰囲気ではない。折角生き延びたと言うのに、女性二人はお互い向かい合って座り込み、陰鬱とした見えないモノを纏っている。

巻き込まれたくない。

そう思い、一は再び寝転んだ。このまま寝たふりでもしていれば、話が自動的に進んでくれるのではないかと期待して。

「……終わったンだよな」

「ああ、終わったらしいな」

「はっ、だよな。ンじゃま、やってくれや」

三森が笑った。それでも、張り詰めた空気はそのままである。

「こんなものを握らせて、私に何をやらせるつもりだ。三森冬、貴様も疲れただろう。帰って休んでおけ」

「春風、てめェはさっきから何を抜かしてやがンだよ。今、目の前に身内の仇がいるんだぜ。そいつが殺せって言ってンだ。だったらやらねェでどうするよ？」

「……やめろ。私は貴様を殺す資格などない。むしろ三森冬、貴様が私を殺したい筈だ」

春風は握らされていたナイフを三森の傍に放る。

「死神に乗り移られていたとは言え、私が貴様を殺そうとしたのは事実だ。そして、私自身そんな気持ちがなかったとは言い切れん」
「だから続きをやれってンだ。もう、良いんだよ。良いじゃねェか。私を殺せば、お前の復讐は終わりだ。もうしんどい思いしなくて済む。違うのかよ」
「違うっ、死ぬのは私だけで良い。貴様ら北駒台には、私怨で迷惑を掛けた。関係のない一一も、部下も巻き込んだ。だから、だからっ」
寝たふりすら出来ない。一の耳をつんざくのは悲痛な声だ。可哀相で可哀相で仕方がない。
そして、馬鹿だと思う。
殺してくれ、殺してくれ。三森も春風も口では言っているが、とてもそうには聞こえなかった。
二人とも意地を張っている。少なくとも一にはそう思えた。
助けてと、許してと、少なくとも一にはそう聞こえている。
「あのー……」
しかし、本人たちに真っ向から真っ正直に馬鹿だと言い出すのは躊躇われた。一はとりあえず遠慮がちに声を掛けてみる。
「黙ってろ」
「一一、貴様には関係ない」
予想通り冷たい反応が返ってきた。だが、一は挫けない。
「ヤ、です。俺は二人に死なれちゃ困るんです。と言う訳で、一旦帰りませんか？」
「……口出しすンじゃねェよ。お前なんかに私らの何が分かるってンだ」
「じゃあ、早く死ねば良いじゃないですか」
一は保険としてアイギスを拾っておいた。
「あァ？」
「聞いてて苛々するから早く死ねって言ってるんですよ」
三森が敵意を剥き出しにして一を見据え付ける。

「関係ねェってンだ。引っ込みやがれ下っ端が」
「死にたいならお互いがとっとと自殺でもしたらどうです？　結局口だけなんだ。あなたたちは死にたいと思っていない。まして殺されたいとも思っていない」
「……好き放題言ってくれるじゃねェかよ。そこまでご大層に吠えたンだ。覚悟は出来てンだろーな？」
「何の覚悟ですかね。野良犬にでも噛まれる覚悟ですか？」
「上等じゃねェか！」
立ち上がる三森だったが、彼女は春風に制される。
「邪魔すンな。てめェだってこいつに好き勝手言われてんだぞ」
「やめろ。一一の言う通りだ」
「なっ、てめェ！？」
春風は済まなさそうに一を見つめ、やがて躊躇いがちに言葉を紡ぐ。
「一一、よもや貴様に見抜かれるとはな。落ちたよ、私も。私は……許されたかったんだ。三森冬を恨みはした。だが、殺したいなどと思えなかったんだ……」
一は何も言わず、ただ続きを待った。彼女たちの、続きを。
「――っ、でもっ、私はお前の弟を！」
「ああ、殺したよ。ゲデに体を乗っ取られ、助かる見込みがなかったとはいえ、貴様は夏樹を殺した。殺した。殺したんだ。だから私は、貴様とは距離を取り、二ノ美屋店長にも迷惑を掛けた。……だけど、だけど、恨める筈がないじゃないか、殺したいなんて、思える筈ないじゃないか……！」
「どうしてだよ！？　恨めよ！　呪えよ！　憎いって思えよ、殺したいって言ってくれよっ！　じゃねェと、私っ、私がっ」
「出来ないっ、だって、だって私たちは友達じゃないか……！」
一も、三森も言葉を失った。春風の声には確かな感情が込められている。無感情とは程遠い、聞いた者の胸を張り裂かんばかりの悲痛な叫びだった。

「冬は言ってくれたじゃないかっ、私とは年が違うけど、友達になろうって！　嬉しかったのに、なのに、そんなの嫌だっ、私は冬を殺したくなんかない！」

そして、無表情とも程遠い。春風は顔をくしゃくしゃにして泣いている。大粒の涙を零し、駄々をこねる子供のように泣き喚く。

「それとも、もっ、もう冬は私を友達だと、思ってはくれないのか？」

嗚咽混じりの声は、確かに三森の耳朶を打ったらしい。彼女は力が抜けたのかその場に座り込む。

「……あ、ちっ、違う、私、私は……くそっ、なンだよ、なんだよもうっ」

感極まった三森の目からも涙が止め処なく溢れていた。幾ら袖で拭っても、次から次へ温かな雫は流れ落ちる。

「くそっ、いきなり泣いてンじゃねェぞ。ずりィじゃねーかよ、私だって恨んじゃいねェ。う、麗と、その、仲直りしたかったよ……」

一は照れ臭くなって背中を向けた。

彼女たちの事情を知ってから、遅かれ早かれこうなるだろうと予測していたのである。そもそも、両者共にソレとの戦闘能力を有している化け物なのだ。もしもどちらかが、本当に誰かを殺したいと思えば実行に移すのは容易い。そうしなかったのは法だとか、罪だとか、倫理だとか、高尚な理由ではない。ただ単に殺したいなんて思っていなかった。もっとシンプルに、仲直りしたかったのだ。

ただ、三年の間距離を開けてしまった。どちらもずっと謝れなかった。何も話そうとしなかった。時間がお互いの溝を広げ、傷跡を治りにくくしていたのである。出来たかさぶたを剥がすのに、後もう少しだった。喧嘩を覚えたばかりの子供のような、馬鹿げた意地の張り合いはもう終わる。

自分はもう邪魔な存在だと一は気付いた。もう少し休みたかったが、不粋な真似はしたくない。

ただ、最後に一つだけ。

三森も春風も強い人間だ。力に物を言わせる類の喧嘩では普通の人間では彼女らに勝てないだろう。だが、そうではない場合もある。

今が、その時だ。

時には言葉が力よりもモノを言う時もある。一は三森たちより弱い。だからこそ、術を知っている。

「……仲直りしたいなら、先にやる事があるでしょう」

一はなるべく三森たちを見ずに言い放った。

「また知ったような口を利きやがって」

「それだけです。俺がいたら邪魔でしょうからね」

「なっ、お、おいこら！」

三森の顔は一切見ずに。彼女の泣き顔はもう忘れようと努めて。

一はその場を立ち去った。立ち去るだけで精一杯だった。

店までの途中、一は電信柱にもたれ掛かって息を吐いた。もう一歩たりとも歩きたくない。

「……はあ」

今日を振り返れば溜め息しか出てこない。

異常に憑かれ、非常に疲れ。結局、一が今日やったのは三森と春風の仲直りを手伝った事である。

とんだ道化だ。とんだ狂言回しだ。とんだ役回りだ。

だが、一はいつもと変わらない事に気付いて苦笑する。思えば、いつだって自分のやる事はこんなものだ。何か成し遂げたとは言い難く、何をしたのかと問われれば答えに窮する。

「ま、それもアリか？」

握ったアイギスは、相変わらず何も答えてはくれなかった。

別れを告げるなら麗らかな日和に

「はあ？」
聞き返す、と言うよりも相手を小ばかにしたような口調で一は尋ねた。
「だから、台風一家は台風一家で合ってんのって聞いてんの！」
「いや、まあ、台風一過は台風一過だろ。合ってんじゃねえの？」
「やっぱりっ、やっぱり！　だろうと思った！　私は馬鹿じゃない、馬鹿じゃないぞー！」
「うん、そうだね」
一は缶コーヒーを啜りながら適当に聞き流す。
そして、溜め息を吐いた。アルバイトのシフトまで一時間以上はあったが、一はつい先日まで病院のベッドで眠っていたので、体の感覚を取り戻す為に店まで散歩がてら、遠回りで行こうと思っていたのだが、だが。
「さっすが、私ってばモテカワスリムで乙女気質の愛されガール♪」
運悪く、南駒台店の勤務外店員、シルトに絡まれてしまった。どうにかして撒こうとしたのだが、彼女は今もしつこく付きまとってきている。
「その喋り方やめろ、無性に腹が立つ」
「はああ？　あんたに言われる筋合いないんですけどー？　ブサメンのくせに指図しないでよねー、あー、ウザ、朝から気分悪い」
「……絡んできたのはそっちじゃねえかよ」
「そんなん知らないし、あーお腹空いたー」
もしも自分に力があれば、せめて目の前の女をぶちのめせる力があれば、一はそう夢想した。
「ねー、私お腹空いたからお・ご・っ・て？」
「こんな時間まで遊び回ってるからだろ。家帰って何か食べれば？」

「ケチ臭……なーんかファッションセンスも絶望的だし、基本的恋愛権すら持ってなさそうだし。あ、ドーテー？」

ちょっとコンビニ寄って良い？　みたいな気軽さで男の尊厳を傷つけられた。一はまだ中身が少し残っている缶コーヒーをシルトの足元に落とす。

「うきゃあっ！　なっ、ちょっ、ちょい待ちなよ！　靴に掛かったんだけど、ベンショーしてよね、ベンショー」

「ごめんごめん手が滑っただけだから気にしないで」

シルトは中身の零れ切った缶を蹴り飛ばす。

「絶対わざとじゃん！　図星言い当てられたからキレたんでしょ！？」

「ちっ、違う」

「ドーテー！　ドーテー！　ドーテードーテードーテードーテードーテードーテー！」

「どどどどど童貞ちゃうわ！」

顔を真っ赤にしてどもりながら反論しても、むしろ逆効果だった。

「はいはい、ドーテー君は大人しく黙っときましょうねー」

好事家のようにニヤニヤと笑うシルト。

「……ハゲのくせに」

「はあああぁぁ！？　意味分かんねーし、意味分かんねーし！　ハゲてないっつーの、見なよすっごいキューティクルなん生えてるから！」

シルトはニット帽を取ると、一へ見せ付けるようにずいっと距離を詰める。

「やめてー、そんなの見たら眩しくて目が潰れちゃうよー」

「キショイから目ぇ瞑らないでよ！　ちゃんとこっち見ろ！」

一はわざとらしく両手で顔を覆い隠していた。シルトは彼の手を引き剥がそうとしてしばし揉み合いになる。

「見ろって言ってんじゃんか、素直にこっち見ろっつーの。それとも、あれ、照れてんの？」

「……あ、本当に生えてる」
「タンパクな反応……もっとなんかないの？　きれいな髪だねーとかさ」
　一は改めてシルトの毛髪に目を遣る。やっと人に見せられるレベルまで伸びてきたのだろう、ずっと前に見た彼女の髪型とはかなり違っていたが、とりあえず髪型と呼べるところまでは復活していた。
「真っ茶だなあ。俺、髪染めてるのって好きじゃないんだよな」
「は？　抹茶？　つーか趣味なんて聞いてないしー、別にお前なんかに喜んでもらおうなんて思ってないから」
「なあ、ヒルデさんって地毛だよな。染めたりしてないよな？」
「ん？　あー、そう言われれば。ヒルデさん、髪染めたりとかイヤリングとか、あんまり興味ないの」
　一は内心でガッツポーズを作る。
「あー、ヒルデさん最高だわ。やっぱどこぞの馬鹿女とは違うな」
「は？　はぁ？　何それ、もしかして私の事言ってんの？」
「さあ、バイト頑張るか」
「うぜー！　超うぜー、無視すんなよ馬鹿じゃねーの！？」
　シルトは一に掴み掛かる勢いである。
「朝っぱらから欝陶しい奴だな。もう俺を見掛けても声掛けてくるなよ。誰かに知り合いと思われたら嫌だからな」
「じゃあそっちだってシカトしろよなっ。あ、いや、お前見つけたらぜってー声掛ける。死ぬほど付きまとってやるもん」
　悪戯っぽく、小悪魔的（笑）に笑うと、シルトはくるりと一に背を向けた。
「じゃあね、北駒台」
「あ、そうだ。こないだの野球はありがとな、マジで助かった」
「……べっ、別に？　ヒルデさんが行くって言ったからだし？」
「ま、何にせよ助かったんだ。ありがとう、そしてさようなら南駒台」
「……っ、うっせー、うぜー死ね馬鹿」

午前六時から午前九時までが、オンリーワン北駒台店の早朝勤務の時間帯である。
「お疲れさまでーす」
この日この時間、一に相方はいない。早朝で仕事も少ないだろうから、そもそもこんな時間に入ってくれる人員もいない事から、こんな寂しいシフトになっているのであった。
「一、新しく入った惣菜パンはどうだ？」
「売り上げですか？　味ですか？」
「両方だ」
「芳しくありませんね、両方」
だから、仕事が終わった一をバックルームで迎えてくれるのも店長だけで、
「じゃ、お疲れさまです」
「最近はとみに寒くなってきたな。カイロぐらい持っているのか？」
「持ってなかったらくれるんですか？」
「良かったな、在庫が余ってるから今は一つ三十八円だ」
仕事の終わった一をバックルームから送り出してくれるのも店長だけだった。
その筈なのだが、一は突如伸びてきた手によって仮眠室へ引きずり込まれてしまう。
「えっ、な、何が起こったんですか？」
「ガタガタうるせェ奴だな、男だったらもっとビッとしやがれ」
一を引きずり込んだのは三森である。
「あれ、いつの間に来てたんですか？」
「さっきだ」
「シフト、入ってましたっけ？」
「変わったンだよ。うっせェ奴だな」
三森がついさっき店に来たのは理解出来る。シフトを交替してや

って来たのも理解出来る。だが、どうして仮眠室に呼ばれたのかが一には理解出来なかった。

「あ、そうだったんですか。じゃあ俺は帰りますね」

そそくさと立ち去ろうとする一だが、彼の肩を三森は掴む。逃がさないように、しっかりと。

「あ、あの？」

「……お前さ、そ、その、朝飯とか食った、か？」

一は首を横に振る。今朝は早く起きて家を出たが、面倒な奴に時間を取られていたのだ。食事どころか、遅刻ぎりぎりだったのである。

「そ、そっか。そりゃ良かった。あ、のさ、腹減ってるか？」

「減ってます、けど」

「……じゃ、や、やるよ」

三森は後ろ手に持っていたものを一に渡そうとする。

「これは？」

「う、あ、その、これはだな」

これ。花柄のナフキンに、箱状の何かが包まれていた。一見すると、まるで。

一はまさかとは思いつつ、中身を確認すべく包みを開く。

「って、うわ馬鹿、今開けンなよ！」

もう遅かった。現れたのはやはり小さな箱である。

「これって……」

「……っ、あ、朝飯だ」

しばらくは、何が自分の身に起こったのかが信じられなかった。つまり、三森がお弁当を持ってきてくれたのである。他ならぬ、一に。その事実が飲み込めた瞬間、彼は感動のあまり弁当箱を三森に突き返した。

「……あ？」

「あ、その、つい」

動揺している。一はとりあえずソファに座ってテレビの電源を入

れた。
「これ、本当に俺に？」
「あァ、そうだよ」
「手作り、ですか？」
「……悪いかよ」
「三森さんが、俺の為に、手作りのお弁当を？」
「……るっせェな」
自然と溢れてくる笑みを誤魔化すのに一は必死である。
「今食べて良いですよね？」
「う。い、今か？　今じゃないと駄目か？」
家に持って帰ると糸原に食べられてしまうかもしれないので、一は頷いた。
「……分かった。分かったけど、その」
「あ、箸がないです」
「カウンターから取ってくりゃ良いじゃねェか」
「取ってきてください」
三森は何か言い掛けたが、結局立ち上がる。
「あ、ついでに何か飲み物もお願いします。でも、出来ればお茶が良いなあ」
「取ってくりゃ良いンだろ！」
「ちゃんとレジ通してきてくださいね」
ドアを乱暴に開け放つと、三森はわざとらしく足音を立てながらフロアへと向かっていく。
手持ち無沙汰になった一は何気なく弁当箱の蓋を開けてみた。
「おお……」
意外にもちゃんとしたものが入っていたので驚く。
ご飯とおかずは味が移らないように仕切りで分けられて、鶏の唐揚げ、玉子焼き、アスパラのベーコン巻き、ミートボール、コロッケなどなど定番のメニューが並んでいた。
「すげえ、ウインナーがタコになってる」

しかも八本足。凝ってるなあ、などと思いつつ、一はじろじろと弁当を眺める。

「悪ィ、待たせ――勝手に開けてンじゃねーよ！」

三森は持っていた割り箸とペットボトルのお茶をテーブルに置くと、一の頭を叩いた。

「どうせ開けるんだから良いじゃないですか……」

「うっ、うるせェ！　私が駄目って言ってンだから駄目に決まってんだろ！」

面倒くさい人だと思いながら、一は割り箸を二つに割る。

「じゃ、いただきます」

「あ、あのよ。なンか、思ったりしねェ？」

「……思う？」

「べっ、弁当を見てだよ」

一は改めて手作りの弁当を眺めてみた。

「どのおかずも均等に焦げてます。いや、でも特に玉子焼きが良い感じに黒くなってて……」

三森は無言で一の手から箸を取り上げる。その箸を、彼の目に、突き刺す。

「ぎゃあああ！」

「不器用で悪かったな」

「いや、悪くないですけど……三森さんって、体から火を出したり口から火を噴いたりするのに火加減とか分からないんですか？」

箸は何とか瞼で挟んでいたので致命傷にはならなかった。一は割り箸を改めて持ち直し、玉子焼きを口に入れる。少し焦げていたが、程よく甘い。口触りも存外悪くなかった。有り体に言えば、美味しかった。

「火ィ噴いた事なンてねーよ、ボケ。アレだよ、加減ってのがさっぱりだ。ほら、その、私って大雑把っつーか、燃やせば良いだろ？　みたいな感じでやってっからさ」

「ああ、確かに確かに」

「……否定しろよ」
「ふぁい？」
コロッケを口に含んだまま返事して、三森に嫌な顔をされる。
「ま、そンだけ食ってくれりゃあ感想はいらねェな」
「感想？　ああ、味ですか？　焦げてるけどすごく美味しいですよ」
「ぐ……そういう事スパッと言うンじゃねェっつーの」
三森は髪の毛をくしゃくしゃと掻き、ソファにダイブして顔を埋めた。
「いや、自分以外の手作りの料理って久しぶりに食べたんですよ。だから、余計に美味しく感じられました」
「あいつは？　あのデカ女は料理作らねェのか？」
「糸原さんは料理どころか家事全般からっきしなんで。お米を洗ってと頼んだらクリーニングに持っていこうとするぐらいのダメットさんですよ」
「そっか。……そっか」
呟き、三森はもう一度ソファに顔を埋める。足をばたばたさせている彼女は何だか不気味だと一は思った。最後に残った玉子焼きとご飯を口に入れると、弁当箱は綺麗さっぱり空っぽになる。
「ごちそうさまでした。美味しかったです。それと、容器は洗って返した方が良いですか？」
「いや、良い。その辺置いとけ」
「あの、ところでどうしてまたお弁当を？」
食べ終わってもまだ、それだけが気掛かりだった。不気味と言うか、何か裏があるようで恐ろしい。
「……悪かったな」
「え？」
急に罰の悪そうな顔になり、決まりが悪そうに口を開く三森に一は少しだけ驚いた。彼女の殊勝な態度はいつ見ても気持ちがおかしくなる。
「こないだの事だよ。その、今まで、私はお前を変な目で見てたか

もしンねェ。春風の弟に似てるってので、こいつだけは守らなきゃ駄目だって、そう思ってた」

一はぐっと息を呑む。失望はしなかった。やはり、そうなのだろうと確認するだけ。

「でも、これからはっつーか、今からは違う」

三森は一度言葉を区切り、照れくさそうに視線を反らした。

「お前がビビるような思いは二度とさせねェ。私が全部何とかする。――お前だけを守る。だから、その……」

「――――っ」

それは、いつか聞いた言葉。

あの時の言葉は一の胸を強く打った。

そしてまた、彼女の言葉は一を――。

「弁当なンかで許してくれとは言わねェ。不器用だからって言い訳もしたくねェ。でも、私にはこれぐらいしか思い浮かばなくてさ、ごめんな」

三森は誤魔化すような笑みを浮かべる。その事が一には許せなかった。

「……俺も、守ります」

弾かれるように三森が一の方へと向き直る。彼女は火を点けようとしていた煙草を取り落として、目を丸くさせた。

「俺なんかじゃ頼りにならないと思います。けど、あの時の、ソレに怯えていただけの俺じゃなくなりました。三森さんと肩を並べて戦うのは無理だけど、でも、あなたの背中なら守れます」

「くっ、ははっ、バーカ」

蛙の潰れたような声が一の口から零れる。

「カッコ付けてンじゃねェよ。……ありがとな、愛してンぜ」

「……俺もです」

やっぱり、三森にはそれが良く似合っていた。一の小さな悩みなど、この世全てのしがらみなど全て吹き飛ばしてしまいそうな、屈託のない笑顔が。

お腹も満たされて心も満たされて。一は久しぶりに充足感を感じていた。最近の流行歌など知らないが、何か歌でも口ずさみながら歩きたい気分に陥っている。

「随分とご機嫌のようだな、一一」

「ひっ……！」

突然耳元に息を吹き掛けられて一の力が抜けた。

「何か良い事でもあったらしいな」

「くっ、てめえは毎度毎度人の死角からきやがって……」

一は耳を押さえたまま振り返り、彼女を睨み付ける。

「元気そうじゃねえかよ、春風」

「まあな」

そう答えるのは春風麗だ。

折れそうなほど長い手足。腰まで届いた髪の毛は飾り気もなく垂れ下がっている。ダークスーツに身を包むのは、一の知る限り彼女の常であった。

が、いつもと違うところもある。春風はその細い腕に不釣合いな、大きな鞄を抱えていた。

「……旅行にでも行くのか？」

春風は抱えた鞄に目を落としてから頷く。

「有給が溜まっているんだ、上司から早く使えと。ちょうど、良いとも思っていたしな」

「一区切り付いたってところか。羨ましい限りだよ」

旅行なんてもう何年も行っていない。いや、それよりも一は春風の立ち直りの早さが羨ましかった。あんな事があったというのに、彼女はいつもと変わらない様子である。

それとも、春風は強がっているのだろうか。何にせよ一には判断が付かなかった。

「で、どこに行くんだ？」

「決めていない」
春風は鞄を抱え直して、まっすぐに一を見つめた。
「……時に一一、貴様はどこか行ってみたいところはあるのか？」
「えー、いきなり言われてもなあ、うーん」
一は電信柱に背を預けて腕を組む。
「どっか遠く。どうせ行くならここからは離れた、美味いものがあるところに行きたいかな。桃源郷みたいな感じの」
「ふ、桃源郷か。案外、電車に乗って行ける距離にあるかも知れないぞ」
「かもな」
「ああ、そうだとも」
それから、春風は言葉一つ話すのにも考える素振りを見せた。無駄口を叩くのが好きな彼女にしては珍しい間、である。

春風は考えなければならなかった。
一には迷惑を掛けた。償いきれない事をしてしまった。自分が彼と会うのはお互いの為にならない。終わったとはいえ、一度は死神に憑かれた女なのだ。だから、今、この時が、一と話す最後の機会になると決めている。そして長々と会話を続ける気はなかった。未練は、ここで断ち切る。
彼は、言葉を待っている。自分の謝罪を待っている。
「一一、済まなかった」
だから、まずは何を話すにしても謝ろうと思った。
「え、何……？」
しかし、一は不思議そうにこちらを見つめている。
「先日の……いや、初めて会った時からの事を含めて、済まないと思っている」
「あー、まさか本当に謝ってくれるとは思ってなかった。ま、あれだ、そんな気にすんなよ」

一は軽く告げた。これでも意を決して、それこそ清水の舞台から飛び降りる気分で頭を下げたのだから、もっと気にしてくれても良かったのにと春風は思う。

「お前の泣いてる顔なんか滅多に見れないだろうしな。はっはっは、これで喜怒哀楽の内、喜以外は見られたな」

「下種め。同じ事を三森冬にも言ったのか？」

「こんな事言ったら殴られちまうよ」

苦笑して、一は頭を掻いた。

目に焼き付けておこう。春風は一に気付かれないように何度も瞬きを繰り返す。彼の顔はもう二度と見られない。彼の声は二度と聞けない。だから、最後に。

「精々仲良くしてやれ。あいつはああ見えて寂しがりなんだ」

春風は一に背を向けて歩き出す。

「あ？　もう行くのか？」

「ああ」

「んじゃ、ちょっと待ってくれ」

仕方なく春風は足を止めた。追い掛けてきた一の顔をなるべく見ないようにして。

「荷物増やすようで悪いんだけどさ、これだけは返しときたかったんだ」

「……っ」

一がポケットから取り出したのは煙草の箱だった。

「それは夏樹の……」

「あ、ライターはもらっといたぜ」

「まだ、持っていたのか」

「お前が忘れていったんだろうが」

本当は一に対する嫌がらせと、この銘柄を吸っている彼を見たかったからわざと置いていったのだが。流石に面と向かっては言えない。

「……なあ、お前の弟と俺って本当に似てたのか？」

「ああ。最初に貴様を見た時は驚いた。正直に言うと、嬉しかった。同時に、自分を責めた。嫌悪した」
「どうして？」
春風は一度鞄を地面に下ろす。肉体的だけでなく、精神的にも荷が下りた気分だった。
「夏樹が死んで、一度は割り切った筈だったからだ。割り切り、忘れ去り、もう終わったと諦めていた。だから、夏樹の面影がある貴様を見て、喜んでしまった自分が許せなかったんだ」
「そんな事しなくても良いじゃん」
「貴様は……」
あっけらかんと言い放つ一が無性に憎い。無表情かもしれない。無感情かもしれない。それでも自分は必死だったのだ。必死で割り切ろうと、忘れ去ろうと、諦めようとしたのだ。
「家族の事だろ。一生付いて回る問題だ。割り切ったり、忘れようとしたりしても無駄だと思うけど、つーか、完全に忘れんのは無理だよ」
「まるで自分が経験したかのような口振りだな」
「さあ、どうだろうな」
一ははぐらかそうとしているのか、曖昧に答えを返す。
「ま、誰かと重ねられんのはごめんだけど」
「一一、貴様は意地の悪い奴だ。ふ、まあ良い。許してもらおうとは思っていないからな」
「ああ、お前の事は嫌いだよ。一生嫌いだ。死ぬまで嫌ってやる」
それで良い。それが良い。期待はしない。とっくに諦めている。自分は他者に好かれるような人間ではない。いてはならない。一の言った事が嘘でも本心でも構わない。本心だと、真実だと自分が思えば、それで終わるのだ。
「ところで、どこに行くのかは決めたのか？」
「さて、な」
春風のもらった有給は一週間。本来なら年末年始までゆっくりと

過ごせるぐらい溜まっていたのだが、年末が忙しいとの事で一週間しか受理されなかったのだ。尤も、その気になれば仕事なんて忘れて、この街なんて投げ出して、目の前の男なんて二度と思い出さなくて良いようになるまで、好きに世界を回ろうとも思っている。

そして、出来うる限り遠くへ。可能な限り駒台へは戻りたくなかった。

「ブラジルにでも行こうかと思っている」

「日本とは真逆だな。良いんじゃねえの？　当分はお前の顔見なくて済みそうだし」

一は笑う。本当に気付いていないのだろうか。

本当は笑って欲しくなんてないのに。

本当は引き留めて欲しいのに。

本当は嫌いじゃないと、行かないでくれと、嘘でも良いから言って欲しいのに。

「それはこちらの台詞だ。一一、貴様の顔を見ないで済むのだと思うと嬉しくて涙が出てくる」

「は、そうかよ」

これで、最後。いつもと変わらない話をして、それでおしまい。

だから、これで最後だと思ってしまったら、一つだけ欲が出てきてしまった。もう二度と会わないのならば、もう二度と――。

「一一、私と貴様は当分顔を合わせない事になる」

「ん？　ああ、まあ、そうなるな」

「だから、一つ頼みがある」

「はあ？」

一は露骨に嫌な顔をする。だが、春風は見ていないふりをして続けた。

「一度だけだ。一度だけで良い。『姉さん』と、呼んではくれないだろうか？」

「……お前、お前さあ……」

こめかみに指を当て、一は心底呆れたように溜め息を吐く。

「春風さん、あなたさっき俺に謝りましたよね？」
「分かっている。分かっている上で頼んでいる。言ってくれれば、もう、本当に全部忘れられるんだ。だから……」
「嫌だ」
一言一句区切るように、言い聞かせるように一ははっきりと言い切った。
「いい加減にしろよ。俺はお前に喜んでもらう為にこんな顔で産まれてきたんじゃねえんだ。誰が、好き好んでてめえの知らない奴と似ようなんて思うかよ」
全く以ってその通り。言い返す事など出来る筈もなく、春風はただただ俯いて黙り込む。
「ちっ、折角良い気分だったのによ。全部台無しにされちまった」
「……済まない」
「マジで済まねえよ。良いよもう馬鹿。馬鹿。さっさと旅行行って楽しんでくりゃ良いだろ」
最後の最後で怒らせてしまった。もう、何もかも嫌になる。
「さっきも言ったじゃねえかよ。無理なんだって。割り切るとか、忘れるとかさ」
否定は出来ない。だが、割り切りたいのだ。忘れたい、諦めたいのだ。そうじゃないと、辛くて辛くて仕方がない。
「やっぱりムカつくんだよな、お前。……お前だけが、三森さんに……」
「え？」
「何でもねえよ」
これ以上この場に留まり続けても、何も起こらない。終わったのだ。
一一と、春風麗の関係は終わった。
春風はそうやって割り切り、忘れ去りたいと思い、無理矢理諦めようと自身を納得させる。
「ふ、まあ良い。ではな、一一」

「ああ、じゃあな」
「精々息災でいろ」
鞄がやけに重かった。両腕では抱え切れないくらいに、重い。
歩き出そうとするが、さっきまでとは違って足が重く感じられる。
「おい、土産は食べ物にしろよ」
「――っ」
もう、帰ってこないと、戻ってこないと、会わないと思ったばかりなのに。
一はこちらの事を何も考えず、ある種無神経に言い放つのだ。
「……黙れ。貴様には何もやらん」
その、彼女の背中があまりにも侘しく、寂しいものに見えたのだろうか。
「いってらっしゃい。……気ぃ付けろよ、姉ちゃん」
一の同情だったのかもしれない。『姉さん』と言ってくれなかったのは、彼の嫌がらせだったのかもしれない。
だが、春風には充分だった。未練を一つ断ち切るには、未練を一つ、増やすには充分だったのである。
旅は、楽しいものになるだろうと春風は思った。
一への土産を考えるだけで、彼の反応を想像するだけで、
――夏樹、漣、済まない。今は、済まない。今は……。
「ああ、いってくる」
残しておいた、飛び切りの笑顔を見せ付けるのを思うだけで。

別れを告げるなら麗らかな日和に（後書き）

ゲデ編、終わりです。
色々と思うところがあるかもしれませんが、終わりです。
もう一度言います、終わりです。

今回のお話では、死神を悪い奴として扱わせていただきました。
皆さん死神に対してあまり良くないイメージをお持ちだと思います。
やれ不吉だとか、不安だとか、不審だとか。
が、本編でも少し触れたように、死神には『最高神に仕える農夫』という異名もあります。この場合の死神は、死を迎える予定の人物が魂のみの姿で現世に彷徨い続け悪霊化するのを防ぐ為、冥府へと導いていくという役目を持っている、とされます。
つまり意外と良い奴なんですね。
宣伝になってしまいますが、僕のもう一つの「そこにカイロスはいるか？」　でも死神は登場します。快楽主義の楽しい人です。
皆さん、死神は実は気の良い奴なんですよ。そんなに怖がらずに、もっと親しみを持って接しましょう。人類皆友達。
まあ、僕のところには絶対に来て欲しくないですけどね、死神。

梟の鳴く日は（前書き）

各話ごとに前書きをやたらめったら挿入するのはどうなんだろうと思わないでもないですが、章が変わった時や、終わった時ぐらいは良いですよね。

今回から新しい章に入ります。ご感想、ご意見、ご苦情などございましたら、気兼ねなく感想欄、もしくはメッセージにお寄せください。初めての方もどうかご心配なく、僕の感想欄は良い意味で変態さんばかりです。

梟の鳴く日は

上にある天は名付けられておらず、下にある地にもまた名がなかった時の事。

甘い水を体現する神があり、全てが生まれ出た。

混沌を表す、苦い水を意味する原初の女神もまた、全てを生み出す母であった。

水は互いに混ざり合っており、野は形がなく、湿った場所も見られなかった。

神々の中で、生まれているものは誰もいなかった。

やがて知恵の神、その兄弟など様々な神々が女神の体から生まれ出る。が、原初の、二人の神にとっては聊か騒がし過ぎたのだ。なまじ、静かな時間が長過ぎた。

甘い水を意味する神は知恵の神をはじめ、彼らを滅ぼそうと企てるも、計画は露呈し、滅ぼすべきだった筈の知恵の神によって自らが滅ぼされた。

知恵の神は神々の王となり、妃との間に自身よりも強大な一子をもうける。この子は戯れ程度に嵐を呼び、その嵐は原初の女神、塩水の体を掻き回した。彼女の中に棲む神々には眠れない日々が続く。

後、女神は伴侶の死への復讐の意を胸に、知恵の神々へと立ち向かった。女神はその時十一の怪物を創造し、戦いに臨む。

だが、勝利したのは知恵の神であった。原初の女神を打ち破ったのは、知恵の神の子であった。

勝利者である知恵の神の子は、世界創造の為に原初の女神の体を利用した。

彼女の上半身は押し上げられて天空に。

残った半身は地下の水を隔てる大地に。

彼女の両眼はチグリスとユーフラテスと呼ばれる二大河川に。

そして最後に残った尾の部分は天の結び目に繋がれた。
この後、知恵の神の子は一年の十二の月に名を与え、それぞれに三つ星座を置いて神々の居場所を作った。天の内側には時を刻む為の月神を置き、夜を飾った。
天地創造の後、子は神々の労役を肩代わりさせる者を生み出す。原初の女神に味方した悪神の血液と土をこね合わせ、人間と呼ばれる者を生み出した。
人々は神の指示に従い、多くの神殿とジッグラトを完成させる。神は、そこをバーブ・イル――神の門（バビロン）と名付けて信仰の中心地とした。

この物語は世界最古の神話、バビロニア神話における創世記叙事詩である。
文献の名を、そのとき上にと呼んだ。（エヌマエリシュ）

世界は神によって天と地、地下の水界との間にはっきりとした境界を生じさせられた。復讐に狂った原初の女神は遺骸と成り果てた。神々は人間を生み、安穏とした日々を送る。
だが、本当に原初の女神はこの世界から消え失せたのだろうか。無論、彼女の体は世界の基盤となっている。だが、それだけだ。もう、動かない。動けない。
しかし、女神の意思はまだどこかに残っているのではないか。彼女自身が動けないとして、遺志は受け継がれたのではないだろうか。そして、残っていたとするなら、その意思は、その遺志は、この世界を許そうと思うのだろうか。

夏は暑く、冬は寒い。
火は熱く、水は冷たい。
冬場の水仕事は誰もが忌避したがる仕事の内の一つだろう。

「じゃんけんにしよう」
オンリーワン北駒台店。ここには、日々、人類を脅かすソレの対処に明け暮れる者――勤務外――が集う。
ソレを殺し、ソレに殺され、ソレを死なせ、ソレに死なされる人外どもの巣窟である。
「……はじめ君がやってくれないの？」
「俺はね、立花さんに意地悪してるつもりはないんだ。君に成長してもらいたいから、決して自分が逃げようとしている訳じゃないんだ。だからここは、公平にじゃんけんでいこう」
その筈なのだが、ここの店員である一一と立花真は、とある仕事を前にして、お互いがどうにかして相手にその仕事をなすり付けようと思案を続けていた。
その仕事とは、おでんの鍋の洗い物、である。
今は冬。つまり、水仕事が辛い時期なのだ。
「……やってくれないの？」
「駄目。駄目だよ、そんなに目をうるうるさせても駄目だから」
一は立花に背を向けて腰に両手を当てる。
「じゃんけん、一回勝負だよ」
「けん君はやってくれたのに」
思わず笑みが零れた。確かに、立花が必死に哀願している表情を見てしまえばお願いには逆らえないだろう。神野はまだ甘い。だが、自分は違う。こうして彼女から視線を外していれば、少なくともまだ戦えるのだ。一は萎えていく気持ちを奮い立たせて心を鬼にしようと決心する。
「じゃんけんなら文句はないでしょ。さあ、勝負だ」
「あ、後出しは駄目だからね」
「勿論っ」
一はくるりと振り返った。
「ちなみに、俺はパーを出すから」
「え？」

「パーを、出すから」
「え？　え、え？」
立花は瞳を忙しなく動かして一の顔を何度も見返す。
「それじゃ、やろうか。じゃーんけーん……」
「わっ、わっ、待って待って待って！」
にやりと、一の口角が嫌らしくつり上がった。
「ぱ、パーを出すんだよね？　じゃあ、ボクはチョキを出せば勝てるんだよね？」
「俺が嘘を吐いていなければね」
「はじめ君、嘘を吐いてるの……？」
一は何も言わず、ただ黙って微笑む。
「うっ、嘘吐きは泥棒の始まりだよっ、閻魔様に舌を抜かれちゃうんだよ！」
泥棒と罵られようが、舌を抜かれようが、手がかじかまずに済むなら安いものだと、一は内心でせせら笑った。
立花はどうにかして彼の真意を読み取ろうとするのだが、いかんせん年季が違う。違い過ぎる。彼女はソレとの戦闘に関しては一と比べるまでもなく強い。が、こういった心理戦、駆け引きに関してはずぶの素人も裸足で追い掛けてくるほどに弱い。慣れていない。純真無垢な立花では、日夜糸原に遊ばれながらも鍛えられている一相手では勝ち目がない。つまりカモ。
「もう良いかな？　じゃーんけーん……」
「まっ、待って！　待って……ボクは、チョキを出すよ」
ピースサインを作り、立花は意味ありげに笑った。
「分かった。それじゃ、じゃーん……」
「もっと反応してくれても良いじゃないかあっ！　ボクがチョキを出したらはじめ君は負けちゃうんだよ？　もっと考えた方が良いんじゃないかな？」
「考えた。じゃーんけーん」
「う、ううっ、もうっ」

ぽーん。一の気の抜けた声のすぐ後、立花が大きな溜め息を吐いた。

「冷たい、冷たいよぅ。水も、はじめ君も冷たいよぅ」

立花の泣き言は黙殺して、一は箒とちりとりを持って店の外に出た。気温こそ低いが、風はない。陽が照っている為か過ごしやすいように彼は感じる。

一つ伸びをして、周囲の掃除を始めた。と言っても、目立ったごみを拾うぐらいで他にやる事はない。立花を一人店に残すのが不安でもあり、いつもより清掃の範囲を狭める。

足元に目を遣りながら歩いていると、

「おや、珍奇な歩き方。小銭でも探しているんですか？　尤も、あなたには冒涜的なまでにお似合いの格好ですけれど」

声を掛けられた。と言うか悪口だった。

「……話し掛けるんじゃねえよ」

一は声の主を見ずに呟く。掃除の手は止めず、足早にその場を立ち去ろうと試みた。

「そんな事を言って良いんですか？　その制服は伊達ではないでしょう。本部にちくりますよ。北駒台店のペド店員の態度が悪い、と」

「誰がペドだ！」

そうして、一はつい顔を上げてしまう。視線の先には白い眼帯を付けた少女。彼女はセーラー服の上にダッフルコートを羽織っていた。

「見ないでください。純白で清廉なあたしの体が汚れてしまいます」

殴勲無礼な彼女――黄衣ナコトは一の視線に気が付くと、被っているハンチング帽の位置を直した。

「……分かったから。用事があるなら言え、ないなら帰れよ。つーか店に戻らせてくれ」

「用事がなければあなたに会えないんですか？」

「お前に言われても一ミリも嬉しくない」
　一は空き缶を拾い上げ、ちりとりの上へと器用に乗せる。
「あたしみたいな可愛らしい女の子が折角フラグを立てに来てあげたと言うのに、どうしてあなたはつれないんでしょうか」
「自分で可愛いってんなら世話ないな。んな奴のフラグなんかいらねえよ」
「フラグと言っても死亡フラグなんですけどね……この中に犯人がいるかもしれないんだろ！　殺人犯と一緒に寝られるか、俺は部屋に戻る！　みたいな」
「尚更いらんわ」
　そのパターンだと密室殺人にまで発展しそうだった。
「……つーか、本当に何しに来たんだよ。図書館の仕事は？　わざわざバス乗ってここまで来たのか？」
「今はお昼休みです。あたしはさしずめ、餌を求めて人里に下りてきた子ぐまですかね」
「子ぐまねえ……」
「がおー、餌をください。具体的に言うとお昼ご飯をおごってください。あ、そんなに高いものでなくて結構ですよ」
　一は無視して店内に戻る。
「あ、おかえりはじめ君」
「ただいまー」
　ナコトは彼の後ろにぴったりと付いてきていた。
「い、いらっしゃいませー」
「付いてくんじゃねえよ！」
　立花が一の大声にびくりと体を震わせる。
「ああ、可哀相に。罪のないいたいけな女子を恐がらせてしまうとは。本当、あなたは根っからの鬼畜ですね」
「たっ、立花さん違うからね！　俺はこっちのチビに言っただけだから！」
「う、うん……」

「あなたも他人を小さいと呼べるほど大きくないでしょう。むしろ成人男性の平均身長より低いのではないですか、チビ？」

ナコトは雑誌に目を通しながら、さらりと言い放つ。

「ちっ」

すぐ傍にいるナコトに聞こえるように舌打ちをすると、一は一旦掃除道具を片付けにバックルームへ戻った。

時間にして、一分も経っていない。が、その短い時間でフロアの空気は目に見えて悪くなっていた。

原因は分かり切っている。睨み合う立花とナコトのせいだった。

一は何が何だか分からず、事態の行く末を見守る事にした。人はそれを臆病と呼ぶ。

「……先程からメンチ切ってくれていらっしゃいますが、何かあたしにご用ですか？　なければ視線を外してください。鬱陶しいです」

口火を切ったのはナコトだ。彼女の方が立花より背は低いのだが、視線だけは他者を見下す怜悧なそれである。

「よ、用ならあるよ。はじめ君をいじめないで。君は、意地悪だ」

「いじめてません。あたしなりの愛情表現です」

立花は短く呻いた後、顔を真っ赤にして反論する。

「あっ、あ、愛なんかじゃないよっ、はじめ君は嫌がってたじゃないか！」

「嫌がってません。一さんなりの照れ隠しです」

「はじめ君は嫌がってるもん、君の事を合法的万引き犯だって言ってたもん」

「何を根拠に……」

言ってました言いました。一は心中で立花に同意する。

「とにかく帰ってよ、君は、その、嫌いだ」

「……嫌です。あなたはあたしの嗜虐心に火を点けました。誰かに尽くそうとする犬みたいな獣臭さが鼻に付きます」

「なっ、ナコトちゃんの馬鹿っ！　酷いや、ボク犬じゃないし臭くないもん」

「あなたがあたしを嫌いなように、あたしもあなたが嫌いです」
そうして、二人の少女は再び睨み合う。
胃が痛くなってきたので、一は彼女らの間に入った。
「もうその辺にしときなよ。お互い年も近いんだし、喧嘩なんか……」
やめた方が良いと言おうとしたところで、一は二対の視線に晒される。
「はじめ君は――」
「あなたは……」
「――黙っててよ」
「……黙っていてください」
一はもう頷くしかなかった。
一触即発。触れれば割れる。取り扱いを誤れば爆発する。
が、その時バックルームから店長が姿を見せる。彼女はフロアの様子を見て何か言いたげだったが、すぐに気を取り直して煙草に火を点けた。
「店長、ここは禁煙です」
「立花、仕事だぞ」
「ふぇ？」
立花がきょとんと小首を傾げる。
「ボク、もうお仕事してるんだけど」
「そうじゃなくてだな、ソレが出た。真昼間からお盛んな事だ。……立花、すぐにでも現場に向かってくれ」
ソレ。
不穏な単語に人外たちしかいないフロアの空気が固まった。特に、一の肩にそれは重く圧し掛かる。
「うん、分かった。店長さん、相手と場所は？」
「分からん。駅前で目撃されたらしいがな」
「ちょっと待ってください。分からないって、どういう事ですか？」
一が疑問を口にする。情報部が動いている筈なのに、敵の正体は

おろか場所さえも掴めていないのは、現場に向かう勤務外にとっては死活問題だ。
「仕方ないだろう。今、二課はまともに機能していないからな。春風ほど有能な人材もそうはいないと言う事だ」
「……あー」
オンリーワン近畿支部情報部二課実働所属春風麗、ただいま休暇をお楽しみ中である。
「しかし、駅前ですか。もしかして犠牲者も出てるんじゃあ……？」
「いや、今のところは出ていない。が、時間の問題だろうな。それよりも相手の正体だが、現場にいた情報部の話によると、どうにも見た事のない、訳が分からない生物だったらしい」
「見た事が、ない？」
「恐らく、キマイラか鵺。合成獣の類だろうな」
そう言われても、一には何が何だか分からない。
「とにかく行ってみなければ始まらん。立花、準備をしてこい」
立花は頷くと、バックルームへと足早に駆けていく。
「大変な事になりましたね」
「ん、ああ、まあな」
さっきまで沈黙を守っていたナコトが、心底どうでも良さそうに口を開いた。
「店長、俺は行かなくて良いんですよね？」
「敵の正体が掴めていない以上、お前は足手纏いだからな。念の為にナナを呼んでおく。二人で留守番しておけ」
一の持つアイギスは相手、対象の動きを止める能力を持つ。しかし、能力を発動するには幾つかの条件、制限をクリアしていなければならない。その内の一つ、動きを止めたい対象の名前を知っている事が、今回はクリアされていない。彼を行かせないのは、それを見越した上での店長の判断だった。
「はーい」
やる気なさげに一が手を上げる。

「んじゃま、黄衣。お前も帰った方が良いんじゃないか。つーか、帰れよ」
「……いえ、あたしも行きます」
「は？」
「あたしもソレと戦いに行きます」
ナコトはコートから自前の得物を取り出した。じゃらり、と、無骨な鉄鎖が鈍く光る。
「いや、だから、何でだよ。お前がソレと戦う理由なんかないじゃんか」
一がそう言うと、ナコトは帽子を深く被り直して咳払いを一つ。
「彼女に負けたくありませんから。腐ってもあたしは『図書館』です。所詮勤務外、戦いにおける年季の違いを思い知らせてやりましょう。……それに最近、負け癖が付いていますからね」
「まあ、『魔女』の時も良いところあんまりなかったし、アイネにはボロカスに負けてたもんな」
「……認めざるを得ない発言ですが、死ぬほど癇に障ります。特に、あなたに言われると」
ざまあみろだ。一はナコトに一杯食わせた事を内心で死ぬほど喜んでいた。
「ま、良いところ、見せたいですしね」
「誰に？」
「ふふん、内緒です」
「……？　ま、無理すんなよな。立花さんは強いから心配いらないけど、こう、なんつーかお前は不安だ」
元ではあるが、ナコトもフリーランスとして活動していた。が、一には彼女の実力が心もとなく感じている。そもそも、ナコトの『図書館』での役割は既に無力化した相手にとどめを刺す事だったのだ。
それでも、少なくとも自分よりも戦えるだろうと思い、一はこれ以上の口出しを控える。ソレと戦うのなら戦力は多いに越した事は

ない。
「心配は無用です。危ないと思ったら全てをかなぐり捨ててでも逃げ出しますから」
「その時捨てられるのは立花さんだよな？」
「命とは投げ捨てるもの……」
「馬鹿じゃねえのお前？　店長、こいつはこう言ってますけど、良いんですか？」
　店長はナコトに一瞥をくれた後、
「黄衣はうちの人間ではないからな。行くな、行けなどと強制は出来ん。素直に戦力か、盾が増えたのを喜ばしいと思うべきだろう」
　大した興味も無さそうに言い放つ。
「まあ、俺にも何とも言えないんですけど」
「と言うか、あなたに何か言われる筋合いはありませんから」
「……じゃあ勝手にしろよ」
「ええ、勝手にします」

　立花とナコトが現場に向かった後、一はヘルプとしてやって来たナナと一緒にフロアの掃除を始めていた。
「またソレが出たんですね」
　ナナはドアのガラスを丁寧に拭きながら、傍で雑誌のフェイスを整えていた一に話し掛ける。
「ああ、何か、相手の正体が分からないらしいけどな。訳が分からないっつーか、変な感じだってさ。店長は鵺とか、キマイラかもしれないって言ってたけど」
「なるほど、確かにキマイラですね」
「へ？　なるほどって、本当にキマイラなのか？」
「いえ、キマイラとは獅子の頭と山羊の胴体、そして蛇の尻尾を持つ形容し難い怪物です。ですから、訳の分からない物事をキマイラと、そう例える事もあるのです」

一は得心した。訳が分からないソレが本当にキマイラだとしたら、皮肉っぽく、喜劇っぽくもある。
「ですが、私は安心しました」
「安心？」
ソレが出た。なのに安心とは全く意味が分からない。一は訝しげにナナを見遣った。
「一さんが出張らなくて済んだようなので、です。やはり一さんにはこうしてお留守番しているのが似合っています。勤務外は、一さんには似合っていません」
ナナはガラスを拭く手を止めず、淡々と声を発する。
「俺の事を心配してくれてんなら嬉しい台詞なんだけどなあ」
「前にも言いましたが、私には配る心が備わっていませんから」
「まーたそんな事言う。ナナには心があるって。人間より人間らしく、だろ」
ぴたりと、ナナは掃除の手を止めて一を見据えた。
「……あるのですか？」
「え？」
「私にも、本当に心があるのでしょうか？」
その、彼女の瞳があまりにも真剣そうなものに見えたから、
「ナナは、あって欲しいと思うのか？」
一ははっきりとした答えを出してしまうのを恐れた。
ナナは一の思惑に気付く様子もなく、深刻そうに俯く。眼鏡の位置がずり下がっていくが、彼女は気にするような素振りを見せない。
「私には分かりません。でも、私は心が欲しいと思っているのかもしれません」
「分からないのにか？」
「たまに、なのですが。一さんたちを見ていたら、思考にノイズが走る時があるんです。でも、でも、もしかしたら、私がノイズと捉えているものが……」
ナナの言い掛けた言葉の続きが、一には分かる。彼女に人間と同

じような心があったとして、人間ではない。人形としてのナナが、人間としての心を異物として捉えている。何ら不自然ではなく、むしろ自然な事だと一は思った。

「ま、いきなりは分からないよな」

「一さんは私を馬鹿にしている節があります。私を甘く見ないでもらいたいですね」

「眼鏡、落ちるぞ」

「あ、あっ」

ずり落ちそうになった眼鏡の位置を慌てて直すと、ナナは髪の毛をかき上げ、何事もなかったかのように振舞う。

「……何か？」

「いや、別に」

彼女の拳が震えているのを見て、一は週刊誌をきっちりと揃え始めた。ナナは恥ずかしくて震えているのではない。怒りを、今にも彼を殴ってしまいそうになる衝動を必死に堪えるべく震えているのだ。

「そういや、趣味の方はどう？　ほら、前に言ってた溶接、とか」

「すこぶる！　すこぶる順調です！」

水を得た魚。ナナは逃げ場を見つけたと言わんばかりに喜色を満面に湛えて、一の用意した逃げ場所へと飛び込んでいく。

「へえ、順調、なんだ」

「ええ、とても。どうでしょうか、前にも一さんにはおすすめしましたが、この機会に溶接の世界へ飛び込んでみると言うのは？」

「いや、遠慮しとくよ。名前忘れたけどさ、難しそうな感じだし。プラズマサンダー溶接だっけ？」

「それはネオの方の必殺技です。私が前に言ったのはプラズマアーク溶接です。ちなみに、今のトレンドは巡り巡ってはんだ付けですね」

流石ロボと言うべきなのか。そもそも本当に目の前のメイドはロボなのかどうか、一は疑わしくなってきた。

「溶接は素晴らしいです。心が洗われますよ」
「心がないって言ったばかりじゃないか」
「失敗しました」
ナナは笑って誤魔化す事などせず、淡々と音を発した。
「私は洗う心を持ち合わせてはおりませんが、一さんが溶接をしたならば、素晴らしい結果を得られると思います」
「ま、洗うほど汚れていないから大丈夫だよ。色々と気に掛けてくれるのは嬉しいけどな」
「……本当にそうでしょうか」
否定されるのには慣れている。だが、一はナナの呟きに戸惑いを隠せなかった。
「勤務外は肉体的にも精神的にも過酷な仕事です。いつ、どこで現れるかもしれないソレの対処に当たらなくてはなりません。対処と言えばまだ選択肢が残されているように聞こえますが、結局はソレとの交戦が殆どです。一度出勤してしまえば、後は殺すか、殺されるか。何よりも終わりが見えないんです。いつまで、どこまで戦えば良いのか、誰にも分かりません」
「ナナ、そりゃ今更過ぎるよ」
「しかし事実でしょう。一さん、あなたはソレを何匹殺しましたか？　何回殺しましたか？　何度殺され掛けましたか？　そのような目に遭って、本当に自分の心が汚れていないと、磨り減っていないと言い切れるのですか？」
ナナが言ったのは事実だ。それが全てでもある。ソレと戦闘する以上、肉体的な損傷、損害だけでは済まない。重圧は精神をもすり減らし、傷付ける。
「そんなの分かってるよ。けどさ、俺は辞めない」
「何故ですか？」
「やらなきゃならないからだよ。誰かが貧乏くじ引かなきゃ世界は、いや、この街は終わっちまう」
「一さんがやる必要はないと思われます。勤務外の代わりなんて幾

らでもいます」
　一はそれでも頷かない。従わない。断固として意志を曲げない。
「勤務外ならな。けど、俺の代わりはいない。悪いけど、俺にはやりたい事がある。それまでは辞めないし、死ぬつもりもないよ」
「……やりたい事とは、そんなに大切なんですか？　体を傷付けて、心をすり減らして、ずたぼろに薄汚れてまで、そんな状態になってでもやりたい事なんですか？」
「いや、好き好んで痛い目に遭いたくないけどさ、多分、そうでもしなきゃ、そこまでやらなきゃ無理な事なんだと思う」
　ナナはドアを押し開け、反対側のガラスを拭き始める。
「良く分かりませんが、一さんみたいな方を世間では馬鹿と呼ぶのでしょうね」
「あれ、もしかしてナナ怒ってる？　腹立ててるムカついてる？」
「一さんが私を怒らせようとしているのは分かります。やっぱり、一さんは意地悪です」
「悪い悪い。まあ、ナナと俺が一緒に戦う時は頼むな」
「頼む、とは？」
　ナナは小首を傾げた。プログラミングされた機能なのだろうが、妙に似合っている。
「俺が死なないよう守ってくれよって事」
「知ってます。今のような発言を虫が良いと言うのでしょうね。……残念ながら、一さんは私のマスターではないので確約しかねます。勿論、努力はしますが」
「ああ、手の空いた時で良いよ」
　そんな、おでんの鍋でも洗っといてくれ、とでも言うような気軽さで一は笑う。ナナは笑わなかった。
「……んん？」
　そうして店内、店外の窓を拭き終えた一は走ってくる人影を認める。その人物には見覚えがあった。
「アレは……私のデータベースに照らし合わせると……どうやら黄

衣ナコトさんのようですね」
やはりかと、一は溜め息を吐いた。
「間違いないよな？」
「私のデータベースは完全、完璧、完膚なきまでに正確です。ふふふ、私の辞書に間違いという文字は載っていませんからね」
「それはそれで欠陥っぽいけどな」
だが、やはり店に向かって息急き切って駆けてくるのはナコトで間違いなさそうだった。彼女はドアを乱暴に開け放つと、カウンターまで辿り着き、おでんの鍋を指差す。
「がんも一つ」
「……逃げ帰ってきやがったな、黄衣」
ナコトの負け癖が治る日は遠い。そう思いながらも、一は客の要求に応えるべくおでんの容器とトングを手に取った。

キマイラ的な彼女

ナコトが逃げ帰ってくる数十分前の事――。

立花、ナコト両名はまともに会話を交わさないまま、ソレが出たという駒台の駅前にまで辿り着いていた。

ソレが現れた。だと言うのに、駅前は音をなくしてしまったかのように静まり返っている。

「……いない……？」

「あるいは、もう終わってしまったのかもしれませんね」

「そんなっ……」。

「ですが、特に何かがあった跡は見受けられませんね」

ナコトは周囲を注意深く見回しながら呟く。ソレが出現したならば、犠牲者も出る。しかし、この場に血痕など虐殺の跡は見られない。

「キマイラか鵺。なら、痕跡を気にして獲物を丸呑みにはしないでしょう」

「じゃあ、まだ何も起こってないのかな」

「さあ、どうでしょうね」

良かったとは思わない。犠牲が何人出ようが関係ない。ナコトは肩透かしを食らったのだから。

彼女には勝算があったのだ。立花にも、ソレにも。現れたのがキマイラか鵺なら、対処法は知っている。ナコトは以前それらと対峙し、退治した経験があるのだ。二体とも、凡そ知性と呼べるものは備わっていない。獲物を前にすればただ引き裂き、ただ切り裂き、ただ食らうだけ。

だからこそ、この状況は想定外であった。駒台の一般人がよほど危機回避能力に長けているか、あるいはソレが愚鈍だったのか。

「……おいしいところを頂く予定だったんですが……」

「え？　ナコトちゃん、何か言った？」
「いいえ、何も。……しかし、これではオンリーワンの情報部を疑うしかないですね。本当に信用出来るのですか？」
「うーん、ボクは良く分からないんだけど、今まではこんな事なかったかな」
ガセを掴まされた。騙された。ナコトがそんな思いに囚われ始めた、その時である。
「――っ！」
物陰、彼女らの死角から何かが飛び出してきたのは。
何かは立花、ナコトの間に飛び込んだ。二人は相手の正体を確かめる事も出来ないまま、咄嗟にその場から退き、ようやくになってそれぞれの獲物を構える。
「――――――ッッ！」
咆哮。感情のこもっていない目玉が立花を捉えていた。
その姿、確かに形容し難かった。一見すれば馬ほどの体躯を持つ巨大なトカゲだが、所々何かが違う。鱗に覆われた胴体に、前脚は獣のようで、後脚は鳥のようであった。背中には翼が生え、尾の先端は鋭く尖り、まるでサソリのそれを思わせる。
「出たなっ」
だが、怯まない。立花は刀を鞘から抜き、ソレと睨み合う。そして、仕掛けた。ソレの武器が前足の爪による攻撃だと判断して、一足で踏み込む。
「くっ……」
近付いたものへと反射的に出した攻撃なのだろう。ソレの繰り出した爪は立花の艶掛かった髪を数本持っていく。
彼女の筋肉が強張り、寸暇ながら動きが鈍った。予想よりも早い反応に立花は恐怖する。
「う、あああああっ」
予想より少し早い。その程度ならば止まらない。頭を下げたまま、彼女は刀の切っ先をソレの腹部目掛けて突き刺す。相手は自分より

も大きい、それだけでなく人間ではない。目に見えて分かりやすい急所より、まずは徐々にダメージを奪い、戦意を削いでいく。

「――そんな！？」

しかし、ソレは立花の攻撃を意に介さず再び爪を振り上げた。堪らず、彼女は今一度距離を取る。

「……甘いですね。自分よりも巨大な相手に長期戦を挑むとは。素直に目でも狙っておけば有利になれたのに」

何もしていなかったナコトの口は達者だった。彼女は鎖をくるくる回しながら、立花を馬鹿にしたような目付きで見遣る。

「だったらナコトちゃんがやりなよ。言うは易し、なんだから」

「そのつもりです。役立たずは引っ込んでいてください」

「なっ……！」

ナコトは立花の刀を指差して冷笑を浮かべる。

「刃が欠けていますよ」

立花は弾かれるように箇所に視線を遣った。確かに、切っ先が欠けている。ソレの体を貫いた感触はなかったが、まさか刀を駄目にされるとは思っていなかった。

「点ではなく面を攻める。斬撃より打撃。硬い相手には一点を狙って貫くよりも、装甲の上から衝撃を与えるのが賢いやり方です。脳筋には難しい話でしたか？」

「……うるさいな」

ナコトは心底愉しげに口角をつり上げると、鎖の先端に付いた分銅を回転させる。回るごとに、風が切り裂かれ、圧が掛かっていく。

それを脅威と感じたのか、様子を窺っていたソレがナコトに向かって駆けた。後ろ足がコンクリートを踏みならし、爪が浅く食い込む。飛び散る破片は進行に影響を及ばさない。ソレはただ、向かうのみだ。

「来たっ」

「回転は充分に稼ぎましたっ！」

弾き出された鉄塊が空気の壁を切り裂きながら突き進む。ナコト

の放った一撃は、勢いを殺さぬまま、真っ正面を向いたソレの鼻先にぶち当たり、そしてあっけなく砕けた。
「――――ッッッッ！」
僅かな抵抗にすら怒りを覚えたのか、ソレは天に向かって息を迸らせる。
「ぎゃあああああああ！」
女子とは思えない叫びを上げ、ナコトは逃げ出した。
「ちょ、ちょっと！　置いてかないでったら！」
続いて、戦意を喪失した立花が彼女の後を追い掛ける。
「付いてこないでっ、あなたはアレと戦っていれば良いでしょう！」

「……と言うお話だったのさ」
「おい」
おでんのダシを飲み干したナコトが妙に悟ったような口調で言い放った。
「いや、霊験あらたかなお話でしたね。しかし本当に危なかった。九死に一生を得ましたよ」
一は制服から私服に着替えながら溜め息を吐く。ナコトが生きて戻ったのは喜ばしい事だが、立花はまだ戻らない。へたれのワリを食った形なのだろうが。
「一、とっととそいつを追い出せ。バックルームは部外者立入禁止だぞ」
「おやおや、協力者にそんな口を利いても良いんですかー？」
「黙れ獅子身中の虫め」
露骨に煙たがる店長を軽くあしらい、ナコトはおでんのお代わりを要求する。
「辛子多めで。あ、それとピザまん一つ」
「信じらんねえ。厚顔無恥にもほどがあるぞお前」
「労働に見合う対価を要求して何が悪いんですか。あなたはぬくぬ

くとした店内で突っ立っていただけだというのに、そんな口を利かないでください。あなたはあたしの雇用主ですか？　違いますよね？」

「俺だってお前を雇ったつもりはねえよ」

一はロッカーを乱暴に閉めると、パイプ椅子にふんぞり返っているナコトの頭を叩いた。

「痛いっ、訴えますよ。そして勝ちますよ」

「おい、立花さんは無事なんだろうな。あの子に何かあったら許さねえぞ」

ナコトは面白くなさそうに割り箸を折ると、帽子を被り直す。

「知りませんよ。あたしは後ろを見ないで必死に逃げてきましたから」

「お前が見た限り怪我とかはしてなかったんだな？」

「……ええ。刀は折れちゃいましたけどね」

一は髪の毛を掻き、店長に視線を注ぐ。こうなっては彼女の指示を仰ぐしかない。

「そうイラつくな。見てるこっちがイラついてくる。立花だって死ぬほど馬鹿じゃない。武器がないなら退くだろう。大人しく待つんだな」

「そうは言っても……」

「だったら何か、立花と黄衣を以てしてもどうにもならない相手に、お前一人で立ち向かうつもりか？」

一は黙った。

「家に帰るのももうしばらく様子見だ。ソレの正体と出方が分からない以上、住民への避難勧告も出し辛い。この街にはまだ化け物が潜んでやがる。良いか、絶対に勝手な真似はやめろ」

「……じゃあ、どうするつもりですか？　一人ずつ行っても殺されるかもしれない。そんな相手に、誰がどうやって対処しろって言うんですか？」

「それを今から考えるんだ」

一は頭を抱えてナコトの隣に腰を下ろす。
「黄衣、ソレの正体は分かるか？」
「……あたしは初めて見るソレでした。ただ、やはり系統的には鵺やキマイラと似ていましたね」
「そうか……」
「せめて、名前さえ分かればアイギスを使えるのに、ですか？」
思わず息を呑み、目を見開いた。一は内心を言い当てられた動揺を隠そうとして無理に笑う。
「いや、正体さえ分かれば打つ手もあんだろってな」
「あたしには隠さなくて良いんですよ？」
「はっ、隠すって何を？」
「い、ろ、い、ろ、です」
悪戯っぽく微笑むと、ナコトは椅子から立ち上がった。
と、同時、バックルームの扉が開け放たれる。けたたましい音を立て、扉が壁にぶつかってゆらゆら揺れた。
入ってきたのは立花である。彼女は汗で髪を濡らし、息も絶え絶えといった有様だ。
「はっ、は、はじめくぅーん！」
「おっと」
飛び掛かってきた立花を躱すと、一はとりあえず胸を撫で下ろす。この様子だと、彼女はどうやら怪我をしていないらしい。
一方、立花はパイプ椅子に顔を埋めてめそめそと泣いていた。
「ひっ、ひどい。ひどいやはじめ君。ボクはあんな辛い思いをしてきたのに……ナコトちゃんはボクを置いて逃げちゃうし……恐かった、恐かったよぅ……」
「あー、ごめんごめん。びっくりしちゃって、つい。許して、ね？」
「……じゃあ、慰めて」
「は？」
立花は椅子から顔を上げて駄々をこね始める。
「慰めて慰めて慰めてくれなきゃやだーっ、もうやだーっ」

「落ち着きなよ、ほら、鼻かんで。女の子が鼻水垂らすのはどうかと思うんだ」
　一の差し出したティッシュペーパーを受け取ると、立花はちーんっと豪快に鼻をかむ。その光景を見て、ナコトは盛大に笑っていた。
「ほらほらー、痛いの痛いのとんでけー」
「ボクは子供じゃないよ！」
「鼻垂らしてた人がどの口ほざきますか。と言いますか、あなたはアレが仕事でしょう。タラタラタラタラ文句言う筋合いがどこにあると？」
「うるさいなあっ、ナコトちゃんは何もしなかったのに！　ゆうきゃんに戦ったボクに口出ししないでよ！」
「は？　は？　今何と？　ゆう、きゃん？　勇敢の間違いではありませんか？　つーか噛んでる！　一さん、この人噛んでますよー！」
　ゆうきゃんゆうきゃん、ゆうきゃんふらーい！」
「うわあああああっ」
　立花はナコトに襲い掛かるが、簡単に避けられて再びパイプ椅子に顔を埋める始末だった。
「おいクソガキども、お遊びはそこまでだ」
「だったらここからボク本気出すからっ！」
「黙れ」
　顔を上げた立花を三度沈めると、店長は深く息を吐いた。
「立花、黄衣、ソレの正体は本当に分からなかったんだな？」
「何度も言わせないでください。あなたはボケてるんですか？　違いますよね？　だったらあたしに……」
「いや、その人ボケ掛かってるから」
「殺すぞ一」
　店長は煙草に火を点け、胸いっぱい紫煙を吸い込む。
「ならば話は早い。相手の正体も、殆ど何も分からないなら搦め手は通用しないだろう。力比べだ。要はどっちが強いか、それだけの話だろう」

「い、いや、ちょっと待ってください。立花さんでも無理なら、誰が行くってんですか？」
「……一、戦いにおける力とはな、何も腕力や膂力だけを指している訳じゃない。数だ。個々の質で敵わないなら量を増やせば良い」
「えーと、つまり？」
店長は嫌らしい笑みを浮かべる。
「今回は『魔女』の時とは違う。相手は罠を仕掛けるだけの頭を持たないただの獣だ。つまりだな、北駒台店の勤務外全員で袋叩きって話だよ」
そう言うと、店長は美味そうに煙を吸い込んだ。

仕掛けるのは午後五時。作戦――と呼べるかどうか怪しい――開始まで数時間。
一はナコトを送るついでに、図書館まで足を伸ばしていた。何か、ソレに関するものが得られるのではないかと、そう思ったのである。
「……平和だよなあ」
バスから見える街並には、ソレに怯えているような気配が欠片もない。人々はいつもと変わらぬ一日を過ごしている。
目を車内に向けると空席が目立っていた。乗客は一とナコト以外には一人、二人しかいない。
「駅前から離れたといっても、ソレの脅威がなくなった訳ではないんですけどね」
「一般の人たちはさ、最低限の事しか教えられてないんだよ。俺だって勤務外になる前はそうだったしな」
「危険に慣れているのか、よほど平和ボケしているのか。後者なら、凄く腹が立ちますけど。あたしたちが死ぬ思いをしている間、こいつらはのほほんとしているんですからね」
ナコトの言い分も理解出来るつもりだが、一は、何も知らない者に対しては特に強く何も思わなかった。知らなくて良い事の方が世

の中には沢山ある。ソレに関してなどその際たるものだ。知らなくて済むのなら、知らないまま終わるのなら、それで――。

「あたしにはバスの外の世界が、あなたとあたし以外の周囲の空気が遠いものに感じられて仕方がないんです。まるで、異世界に迷い込んでいるみたいな、そんな気がしています」

「知らないか、知っているか、違いってのは多分、それだけだよ。どうせ辛い目にも死ぬような目にも遭うのに変わりはないんだ」

「でも、率先して死ぬのはあなたじゃないですか。悔しいとか、憎いとか思わないんですか？　どうして俺だけなんだよって、そうは思わないんですか？」

今日のナコトはいつもより気が立っている。一は彼女を無理に宥めようとして、やはり止めておいた。

「早いか遅いか、それだけだよ。俺はさ、嫌いなもんは先に食べるタイプなんだ」

「……うわ、ここに馬鹿がいますね」

「馬鹿じゃねえよ」

「いいえ、馬鹿です」

やがてバスは目的の停留所に停まる。一たちは口喧嘩を中断し、バスを降りた。

つくも図書館。ここは一の所属するゼミの教授である九十九敬太郎が私財を投げ打ってまで開設した私立の図書館で、ナコトの職場兼家でもある。

その入り口まで来たところで、一の足は止まっていた。

「どうしたんですか、顔だけでなく頭やお腹まで悪くなってしまったんですか？」

「……あのさ、今日、先生いる？」

「はい？」

ナコトのハンチング帽が心なしかずり落ちる。

「いや、俺さ、こないだもまたゼミ休んじゃったんだよね」
「ゼミ、とは、大学の？」
一は首肯で答えた。ぎこちない動きであった。
「で、もし先生がいたら絶対に何か言われるじゃん？」
「じゃん？　じゃありません。自業自得ではないですか。むしろ怒られた方が良いんじゃないんですか？」
「それが嫌だからお前に聞いてんだろ！？」
「しかも怒ってるし。救いようがないと言いますか、ゲスの極みと言いますか……」
本当にこの男は自分よりも年上なのだろうかとナコトは呆れてしまう。
「なあ、どうなんだ？」
「……安心してください。館長は帰りが遅いようです。何でも、出張で県外の大学まで行くとか」
「良し、行くか」
「急に勇ましく……」
と言うか厚かましかった。
「なんかさ、親が出掛けてて今はいないって言う彼女の家にこっそり上がり込む気分だぜ」
「かの、じょ？」
今度はナコトの足が止まる。
「あの、つかぬ事をお聞きするんですけど。あなたには異性と付き合った経験がおありなのですか？」
「は？　おいおい、俺だってもう二十歳なんだよ？　良い大人を捕まえて付き合った事があるんですかーなんてお笑い種だぜ黄衣ナコト」
「では、答えはイエスだと？」
「教えない」
一は一言一句区切って言うと、一足先に館内へと足を踏み入れた。
「……っ、いい気にならないでくださいよ。何か勘違いなさってい

るようですが、今のは単に興味が湧いたから、あなたを弄る材料を増やしたかったから聞いただけなんですからね」
「うん、知ってる知ってる」
「調子に乗るな！」
図書館ではお静かにのフレーズがこだまするのは、これから一分と経たない先の事である。

「いや、あの人怖かったなあ……」
一は本を抱えたままきょろきょろと視線を動かす。
「ああ、どうしよう、先輩を怒らせてしまった……」
とっくに昼休みの終わっていたナコトは、先輩の司書に急かされ、どやされ、エプロン姿に着替えて机に突っ伏していた。
「さーて、んじゃ早速調べていこうかな」
「あなたのせいですからね」
「何がだよ」
ナコトは顔を上げると、恨みがましい目付きで一を睨む。
「あたしが先輩に怒られたのが、です。どうしてくれるんですか、明日から三時のおやつが抜きになってしまったら……！　ああ、想像しただけでも胸が張り裂けそう」
「知るかよ。騒いでたお前が悪い。遅れてきたお前が悪い」
「誰のせいだと思っているんですかっ」
「だから、全部お前が好き勝手にやってたせいだろ」
一は彼女に取り合わず本に視線を落とした。
「とにかくさ、仕事だって言ってここに座ってんだからちょっとは手伝えよ。こんな量、俺だけじゃ追い付かねえって」
「ああ、明日は先輩お手製のカップケーキだったのに……」
「うるせえなあ、もう良いよ。邪魔すんだったらどっか行け」
「嫌です。せめて邪魔してやる。どーだー」
ナコトは両手を机一杯に広げる。彼女の目は死んでいた。

「後で謝っとけば済む話だろうが」
「一緒に来てくれますか？」
「死んでも嫌だ」
「じゃあ死んでくださいよ！」
「うっぜー……お、こいつが鵺か」
一は本を持ち直して顔を近付ける。
「あたしが見たのは鵺じゃないですし、キマイラでもありませんよ」
「そんな事言ったって他にヒントがないんだからしょうがねえだろ。なあ、本当にコレじゃなかったのか？　見間違えってのは有り得ないか？」
「有り得ませんね」
「逃げるのに必死で間違ってましたーってのは？」
「有り得ません。あなたがスーパーで万引きをしなかった時ぐらい有り得ません」
本を閉じる。
「おい、それじゃあ俺がいつもいつも万引きしてるみたいじゃねえか。つーか、した事ねえよ！」
「おやおや、必死になって否定しちゃって。知っていますか、蜘蛛の糸はもがけばもがくほど絡まって取れなくなるんですよ」
「必死にもなるわ！」
もう警察のお世話になるのはごめんだった。
「いつまで拗ねてんだよ、ガキじゃねえんだから仕事だけはきっちりやれよな。自分だって立花さんにそう言ってただろ」
「また……立花さん立花さんと、あなたは立花村の出身ですか」
「はあ？　お前さ、マジで何言ってんの？」
見得を切って逃げ帰る。先輩に怒られる。ショックが大き過ぎて、ナコトが遂におかしくなってしまったのかと一は心配になった。
「べっつにー？」
「キャラ崩壊起こすんじゃねえよ。なあ、お前の力が必要なんだって」

「……あたしの力が？」
「そうそう、何て言ったっけ、腸炎マニアの実力を……」
「そっちのビブリオじゃありません！」
ナコトは席を立ち上がった後、乱暴に椅子へ座り直す。そして、一の読んでいた本を横合いから掻っ攫った。
「あなたはそこでゆっくり違う本でも読んでおいてください。ほら、これなんかおすすめですよ」
彼女が差し出したのは分厚いハードカバーの本である。一はその本を手に取り、表紙を確認した。
「『猿でも分かる』……お前、このシリーズ好きだよな」
「ええ、しっかり読み込んで勉強してください。『猿でも分かる！上司への謝り方編』を」
「お前が読めよ」
言いながら、一はその本を読み始める。ナコトが情報を収集してくれるというのなら、彼女に全て任せた方が上手くいくと思ったのだ。
窓の外を何となく見遣れば、晴れ。耳を澄ませば、階下で本を探しているであろう子供たちの声が聞こえる。ありきたりだが、やはり平和だと素直に思えた。
「あ、これです」
「ん？」
ナコトがページを捲る手を止めたので、一の注意は彼女に向く。
「これって、何が？」
「あたしが見たソレ――つまり、あなたたちが戦うべき相手が、です」
「本当か？」
一は席を立ち上がり、ナコトの見ている本に顔を寄せた。彼女はその顔に平手を喰らわせる。
「なんでっ！？」
「あ、ごめんなさい、つい……」

「ついで殴られちゃ堪んねえぞ」
仕方なく、一は元の位置に戻った。
「で、見つかったのは本当か？」
「ええ、こいつです」
ナコトは本を広げ、机の上に載せる。本は挿絵付きの解説書のようで、彼女はその中の一枚を指差していた。
「こいつが……？」
「間違いありません。蛇の頭、獅子の前足、鷲の後ろ足、サソリの尻尾、鱗に覆われた胴体には翼が生えている。あたしが見たソレは、こいつです」
一は改めて挿絵に目を通す。彼の見る限り、確かに鵺やキマイラと良く似ていた。そして何より、恐ろしい。この絵を描いた者の技量が高いのか、あるいはこの怪物自体が端からこうなのかは分からないが、見る者に威圧感を与える、グロテスクなものであった。
「ムシュフシュと呼ばれるソレ、ですね」
「むしゅふしゅ？　変わった名前だな」
「シュメール語で『怒れる蛇』という意味らしいですね」
――蛇。
その単語に、一の心が少なからず動いた。
「こいつは、有名なソレなのか？　例えば、アラクネとか、ヤマタノオロチぐらい」
「いえ、どうでしょう。少なくとも、日本ではヤマタノオロチよりは知られていないでしょうね。ムシュフシュはバビロニア神話に登場する怪物ですから」
「バビロニア？」
「聞いた事がないんですか？　馬鹿ですか？　死ぬんですか？」
一は堪える。死ぬつもりはないが、馬鹿については否定出来ない自分がいたからだ。
「言わば世界最古の神話です。一応、今あたしたちが知っている形になるまではシュメール神話、次にアッカド神話が元になっていま

すね。アッカド神話は大きく分けてバビロニア、アッシリア神話の二つに。これらの神話を総称してメソポタミア神話とも、古代オリエント神話とも呼び……どうしました？」

「いや、頭が痛くなってきて……分かりやすく説明してくれると助かるんだけど」

ナコトは用が済んだとばかりに本を閉じる。

「呼び方に差異はあれ、基本的な中身は変わりません。つまり、ムシュフシュは世界最古の神話に登場する、世界でもトップクラスに出自が古い怪物って事です」

「何か、弱点とかないのか？」

「その前に、あなたはエヌマエリシュをご存知ですか？」

一は天井を仰いで嘆息した。

「なあ、勘弁してくれよ。俺はさ、その、ムーシューって奴の弱点を知りたいだけなんだよ」

「勝手に名前を縮めないでください。ムーシューだと茶目っ気たっぷりの守り神になってしまいます。良いですか？　ただ弱点を教えるのは簡単です。けど、あなたには色々と考えてもらいたいんですよ。そうでないと、困ります」

「お前がスパーっと教えてくれりゃあ良いんだよ」

「あたしがいなかったら、いなくなったらどうするつもりですか？」

「……それは……」

強く射竦められ、一は言葉に詰まってしまう。そんな、考えた事も、出来れば考えたくもない話に、嫌でも思考は止まっていた。

「あたしだってフリーランスを辞めて一線を退いたとはいえ、何が起こるか分かりません。こう見えて、色々と恨みも買っている身なんですよ」

「まあ、そうだろうな」

「否定してくださいよっ」

「面倒な奴だなあ！」

こほんと咳払いしてナコトは話を戻す。

「もしもの話ですがね。しかし、そうなっては知識面であなたは誰に頼ると言うんですか？　頼れる人なんて、あたし以上に優れた人間なんて殆どいない筈です。あなたは自分一人でどうにかするしかないんですよ？」
「……分かってるよ」
「あたしはこのポジションを悪くないと思っていますけど」
一は口を挟まず、彼女の続きを待った。
「どう形容すればいいのか、この、駄目探偵の超有能な助手的ポジションと言いますか。週刊少年誌的な、お約束のテンプレート展開と言いますか……」
「えっと、どういう意味？」
「ですから、何か事件が起こって、その事件を解決する為に主人公であるあなたは頼れるあたしのところにやってくる訳です。糸口を掴んだあなたは事件を無事解決！　みたいな」
「ああ、なるほどね。俺にとっちゃ地獄のような展開だ」
何か起こる度にナコトと顔を合わせていては身が持ちそうになかった。
「助かってるっちゃ助かってる。そんで、お前がさっき言った事も分かってたつもりだよ」
「それは何より」
「でも、いなくなるならいなくなるで、せめて一声掛けてくれよな。勝手にどっか行かれちゃムカつくし、少しは寂しくなる」
「……ふーん、あたしの事、少しは考えたり思ったりしてくれてるんですね」
「ああ、少しな」
「少し、ですか」
二人は、視線を交わらせなかった。
「それでは授業を始めましょうか」
「えっ？　このタイミングで？　俺絶対良い事言ったよな？　もうあのまま終わるべきだったよな？」

「はい終わりませーん。それと、自分で良い事言ったとか有り得ませーん」

遅きに失する。地獄のような展開になっている事に一はようやく気付いたのだ。

あなたはきっとムシュフシュのように首を長くして

「何度言ったら分かるんですか？　あなたは馬鹿ですか？　違いますよね？　あれ、馬鹿でしたっけ？　仕方ありません、不出来で世話の掛かる人は死ぬほど、殺したいほど嫌いなのですがもう一度だけ教えてあげましょう。ムシュフシュとは、つまりオリエント圏のキメラなんですよ。ここまでは理解出来ましたよね。では一さん、ムシュフシュの登場する、バビロニア神話における創世記叙事詩の名前をお聞かせ願えますか？」

「……エヌマエリシュ」

「はいっ、良く出来ました！　偉いですねえ、賢いですねえ、あ、飴食べます？　ふーん、そうですか。では次にいきましょう。ムシュフシュの身体的特徴を述べなさい。述べなさいと言っているんです。早く、考える時間はさっきから山ほど沢山しこたまあげているでしょう？」

「……蛇の頭に……」

「遅いっ、スロウリィ！　そんな事では陽が暮れてしまいます。良いですか、速さとは時に全てを凌駕します。だからあたしは新聞の編集者を尊敬しているんです。分かりますか？　月刊、週刊よりも日刊です。あの人たちは毎日毎日締め切りに追われながら生活しているんです。あなたのような愚鈍極まりない方には向いていませんね。つまり、あたしはあなたを絶対に尊敬などしないという事になりますねえ、はっ。それではムシュフシュの話に戻りましょう。ムシュフシュは時代とともに姿を変えてきた珍しいソレと言えます。そも、このソレに関する伝承は多く残されておらず、色々とあやふや且つ適当な部分があったんですね。ですから、最初期は蛇の頭ではなく獅子の頭を持っていたんです。また、翼や角、尻尾に関して

も文献によってはバラバラです。生えている場合もあればその逆もしかり。なるほど、やはりキマイラ的なソレではありますね」

一は帰りたくて仕方がなかった。時刻は三時を回ったところ、図書館に着いてから一時間しか経っていなかったのだが、彼はその小一時間足らずで人格を否定されるような暴言を何度も浴びせ掛けられている。

「なあ、もう勘弁してくれないかな……？」

「勘弁、とは？　あたしはこれから戦う敵の事について懇切丁寧に説明してあげているんですよ。なのに、勘弁？　正直な話あなたの態度に勘弁です。話を続けます。ムシュフシュを産んだ神様の名を答えてください。さん、にぃ、いち、はいざんねーん、超遅いです。正解はティアマト、ですね。彼女がマルドゥクとの戦いの為に生み出した十一の怪物の一体がムシュフシュだったのは覚えていますか？　覚えてないんですか？　覚えてないんですね、この愚図がっ」

「ああもうっ、うるさいな！　覚えてるって！」

「でしたら、十一の怪物を全て答えてください」

ナコトはニヤニヤとした笑みを隠し切れていない。彼女が、司書の先輩に怒られた鬱憤を一で晴らそうとしているのは誰にだって分かった。

「……えーと、まず、えーと」

「はあ、もう良いです。あなたにはがっくり残念失望です。七岐の大蛇ムシュマッヘ。竜、ウシュムガル。毒蛇ウシュム。蠍尾竜ムシュフシュ。海魔ラハム。獅子ウガルルム。狂犬ウリディシム。蠍人間ギルタブリル。嵐の魔物ウム・ダブルチュ。魚人クルール。有翼の牡牛クサリク。しかし、この十一体に限らず諸説はあるようですがね。さて、覚えました？」

覚える気もない。一はあくびを噛み殺し、嵐が過ぎ去るのを待つ。

「しかし、戦いを生き延びたのは十一の中でムシュフシュ一体のみです。他の怪物は全て殺されてしまいます」

「……ムシュフシュだけ助かったのか？」

「そこが面白いところではありますね。ムシュフシュはただの怪物とは違う風に伝えられているんですよ」
少しばかり興味が湧いたので、一は楽しげに喋るナコトへと向き直った。
「イシュタル門をご存知ですか？」
「いしゅ……いや、知らない」
ナコトはこれ見よがしに溜め息を吐く。実にわざとらしく、鼻に付く所作であった。
「イシュタルとは古代メソポタミアにおいて戦、金星、性愛の女神として広く崇拝された有名な神です。シュメール語ではイナンナとも呼びますが、やっぱり中身は殆ど同じですね。イシュタルについてはギルガメシュ叙事詩など大いに語るべき、語りたいところがありますが長くなるので割愛しましょう。あ、今ホッとしましたね？」
「してねえよ」
一はホッとしていた。
「イシュタル門とはイシュタルやドラゴンなどの浅浮き彫りなどが描かれており、重要な場所として見られています。ま、崇拝地としての機能を備えていたのではないでしょうか」
「……あのさ、ムシュフシュとイシュタル門とどう繋がるんだよ。関係ない話ばっかしてんじゃねえっつーの」
「話は最後まで聞いてください。そのイシュタル門にムシュフシュが描かれているんですよ。これがどういう意味なのか、分かりますよね？」
「いや、ちっとも」
「馬鹿っ」
急に怒鳴られた。さっきからナコトはこんな調子なので、一はさして驚きもしなかったのだが。
「ヤマタノオロチの時もそうでしたが、あなたはもっと考える事を覚えるべきです。成り行き任せ風任せではいつか破綻しますよ。さ、考えてみてください。怪物の筈のムシュフシュが何故イシュタル門

に描かれているのかを」
「うーん、気分だったんじゃねえ？　ほら、怪物なんて見栄えが良いしさ。彫ってる奴も気分転換になるんじゃ――ってうおお！　辞書投げんじゃねえよ！」
　辞書は一のすぐ後の本棚に激突する。
「本好きの、と言うか人間の風上にも置けない行動だな」
「そこの辞書の出版社は好きじゃないんですよ。しかし、意外と良いところを突いていますね」
「だったら投げるな！」
「ムシュフシュはただの怪物、魔物じゃないんです。こいつは守護獣としての側面も持ち合わせているんですよ」
「急に話を――って、え、守護……？　でも、こいつ人を襲うんじゃねえの？　魔物として生み出されたんだろ？」
　ナコトは自分で投げた辞書を拾い直しに行き、その埃を叩く。
「確かにそうです。が、ムシュフシュはティアマト討伐後、マルドゥクに下り、彼の乗り物として仕えるようになるんです。更にムシュフシュはティシュパク、ニンギシュジダ、アヌなど名立たる神の下を渡り歩きます」
「世渡りの上手い奴だな」
「獣以下の人生を送っているあなたは見習ったらどうですか？」
　一は何も言わず目だけで訴えた。勘弁してくれ、と。
「マルドゥクの乗獣となってから、ムシュフシュはただの怪物から守護者としての属性に変わったんでしょうね。はい、ではここでもう一度問いましょう。どうして、ムシュフシュはイシュタル門に描かれているんですか？」
　そこまでヒント、どころか答えが出ている状況では一にも分かる。
「門番って事か？」
「……ああ、うん、正解です」
「正解したんだからさあ！　もっと嬉しそうに言えよ！」
　ナコトは長く、大きく息を吐いた。

「いえ、あなたが嬉しそうにしているのを見たら、ついサディズムが。ま、良いでしょう。正解です。ぱちぱち」
「口で拍手するな。けどさ、さっきも言ったけど守護する奴にしては怖過ぎるよな」
「はい馬鹿はっけーん。門番が怖くなくてどうするんですか。チワワのいる家とドーベルマンのいる家。いつものあなたならどちらの家へ盗みに入りますか？」
「黄衣さん、その言い方だと一さんがいつもいつもどなたかのお宅へ盗みに入っているように聞こえますよ」
訂正を暗に求めたが、軽々と無視されてしまう。
「言いたい事は分かったよ。ムシュフシュってのは怪物から、守護者としての役割になっていったソレなんだな」
「性質だけでなく、時とともに姿も変化していった稀有なソレです」
ここまでの話は納得出来た。が、一つだけ一には分からない事がある。
「でもさ、そんな良いモンがどうして人を襲うソレになってんだ？」
「……さあ、そこまでは。ただ、これはあたしの見解になるんですけど、ムシュフシュはあくまで神に仕える聖なる獣。あたしたち人間に対してはかなりどうでも良く思っているのではないでしょうか？」
「そうかあ？」
「さあ？」
ナコトの対応はかなり適当だった。そろそろ喋るのにも飽きてきているのだろう。
「ふうん、いや、でもタメになったよ。それじゃ、そろそろ弱点とか教えてくれよ」
「……そうですね。しかし、ムシュフシュですか。百獣の王の前足。猛禽類の中でも最強との呼び声が高い大空の雄、鷲の後ろ足、そして翼。サソリの毒を持ち合わせた凶悪なスペックのソレ。まるで『ぼくが考えたさいきょうのモンスター』ですね」

ナコトは他人事のように呟き、手近な本を開いた。
「でも、そういうのに限ってつまらない弱点があるもんだろ？　脛が弱いとか、熱に弱いとかさ」
「いえ、ないですね」
すっぱりきっぱりさっぱりざっくり。
「おい、おいおいちょっと待てよ。冗談きついぜ、そりゃねえだろ、こっちは弱点が教えてもらえると思ってお前のつまんない話我慢して黙って聞いてたんだぞ」
「なっ……！　つ、つ、つ、つまらないですって……！？」
「話長いんだもん」
「話の長さは話の面白さと関係ないでしょう！」
「ご尤も。だけどこの時間は苦痛だったと言っておく。良いか黄衣、人間には飴と鞭が必要なんだ。弱点という飴がもらえなかった俺は、ただお前の長い話という鞭をひたすらに受けていたに過ぎないんだよ！」
一は立ち上がり、肩を回して体を伸ばした。
「あー、疲れた」
「くっ、本当に腹の立つ方ですね。こっちが大人しく下手に出ていればいい気になって……」
「いつお前が下手に出てたよ！？　嘘吐いてたくせに図に乗ってんじゃねえ！」
「あーはいはい分かりました分かりましたよ。弱点を教えれば良いんでしょう。あのですね、ムシュフシュの弱点は肩の後ろの二本の角の真ん中のとさかの下の鱗の右でーす。はい、これで良いんですか？」
「絶対嘘だ！」
結局、これといった成果を得られぬまま一は北駒台店に戻った。

オンリーワン北駒台店、前。

陽は既に暮れ掛け、ここに佇む勤務外たちの横顔を淡く照らしていた。
「十六時五十二分。全員、集まったな」
捲くっていた袖を戻してから、店長が集まっている勤務外に視線を向ける。一一、三森冬、糸原四乃、ジェーン＝ゴーウェスト、立花真、神野剣、ナナ。勤務外、その数七名。北駒台店が保有する戦力が全て、今ここに集結していた。
「やる事は一つだ。馬鹿なお前らには丁度良い数だろう。ソレを叩いて砕け。それだけだ。質問はあるか？」
「はーい。足はどうするんですかー？」
糸原がきょろきょろと視線を動かす。現場に向かう為の車がない事を不思議がっているのだろう。
「何を言っている。そこに付いてるだろう。自分たちで歩いていけ」
「はああ！？　ソレと戦うまでに疲れさせてどうするつもりなのよ」
「知らん。ウォーミングアップとでも思え」
「糸原さん、諦めましょう」
「うるさい。あー、もうやる気なくなっちゃったなー」
その場にへたり込むと、糸原は一の靴紐を解き始めた。
「ボス、確認ネ。ターゲットはムシュフシュってので間違いナイのかしら？」
「ああ、間違いない。そうだな、一？」
一は糸原を払い除けて首肯する。
「ついでに言うと、ムシュフシュは聖獣、守護獣としての役割も持っているそうです」
「……はっ、関係ねェよンなもん。相手が神様だろーがなんだろーが、ヤレってンならヤるだけだ」
「三森さんの仰る通りです。殺せと言うなら殺す。私たちはそういうモノとしてここにいるのですから」
「血の気の多い人たちだなあ……」
神野は持っていた竹刀で肩を叩くと、苦笑を浮かべた。

「はじめ君、聖なるって良い子だって事だよね？」
「ん？　ああ、まあ、そうなるの、かな」
「じゃあボク、一つ気になってる事があるんだけど……」
立花が何か言い掛けた時、飛行機が真上を飛ぶ。声はより大きな音に掻き消され、彼女は恥ずかしそうに頬を朱に染めた。
「えっと、立花さん何か言った？」
「う、ううん！　良いんだ、また後で言うよ」
「それより立花、来てもらってこんな事を言うのはアレだが、いけるのか？」
店長は恐らく、数時間前の失態について言っている。ソレを前にして逃げ帰り、文字通り歯が立たなかった立花がまた戦えるのかどうか聞いているのだ。
「……う、えっと……」
「正直に言ってしまえばだな、私はお前の心配をしているつもりはない。他の奴の足を引っ張るぐらいならここに残れと、そう言っている」
立花は俯き、肩を震わせる。
「店長、何もそこまで」
「一、お前は立花に甘過ぎる。お前らも忘れるな、いつかどこかで弱者を切り捨てる時が来る。必ずだ。今日がその時かもしれんな。……良いか、その時になってから迷うな」
誰もが予想していて、誰もが口に出さなかった事を平然と言ってのける店長が、一には気に食わない。
「何も今言う事じゃないでしょう。俺たちは今から戦いに行くんですよ」
「それがどうした。一、何ならお前も残るか？」
「――っ、どうしてあなたは……！」
一が店長を睨み付けたその時、立花が彼の袖をぎゅっと握り締める。
「……立花さん？」

「ごめん、はじめ君。ごめんなさい店長さん。ボク、ちゃんと戦えるから」
「戦えるんだな？」
「か、刀は折れちゃったけど、他にもいっぱい持ってるし、その、ボク……」
店長は煙を吐き出し、短くなった煙草を指で弾き飛ばした。
「戦えるんだな？」
立花は息を呑み、一の袖から手を離す。
「――戦えるよ」
店長は喉の奥でくつくつと笑い、二本目の煙草に火を点け始めた。
「現場での指揮はゴーウェストが執れ。ここに残る私ではどうしようもないからな」
「Ｙｅｓ，ｓｉｒ。全員きっちりアタシに従いなさいよネ」
「てめェなンかに務まるのかよ？」
「三森、お前が他人に指図出来るタマか？　大人しく駒になって暴れておけ」
「へーへー、分かりました。ンじゃま、そろそろ行こうぜ」
「ちょっと！　アタシのオーダーなしに動かないでヨ！」
がなるジェーンを無視し、三森はだらだらとした動作で歩く。彼女に続き、他のメンバーも進み始めた。
「ヘイ！　ヘイ！　先頭はアタシなんだってば！」
「……遠足にでも行く気か。ああ、一、ちょっと待て」
最後尾の一を手招きして呼び寄せると、店長は少しばかり声を潜める。
「なんですか？」
「そう拗ねるな。一、もしもの話だがな、ゴーウェストが指揮を取れない状況に追い遣られた場合はお前が代わりを果たせ」
「……俺が？」
あのメンバーを纏めなければならない事を考え、一の気持ちは深く沈んだ。のみならず、ジェーンにもしもの事があるなんて考えた

くもない。
「三森は他人に目を配れるがそれだけだ。率先して人を使おうとはしない。そもそも、あいつには誰かと一緒に戦った経験がないからな。柄じゃないとでも言って笑い飛ばされるのがオチだ。同じような理由で糸原にも頼み辛い」
「立花さんや神野君ならどうなんですか？」
「馬鹿か。お前は高校生に責任を押し付ける気か」
「じゃあ、ナナは……」
言い掛けて、一は今自分が死ぬほど格好悪い奴だと気付く。
「悪くないが、ナナはまだ経験が足りていない。ソレを殺す事にならば上手くお前らを扱うだろうがな、全員が生きて帰れるかどうかは別問題だぞ。良いか、適役なのはお前なんだ。お前しかいない」
「消去法でしょうに」
「消去法も立派な方法だ。ほら、置いていかれるぞ。早く行け」
呼び止めたのはそっちだろう。とは一には言えなかった。彼は渋々走り出す。
戦場へ。戦場へ。戦場へ。
敵の待つ戦場へ。死が香る戦場へ。命を終わらせる為に、あるいは、命を終えさせられる為の戦場へ。

深い深い地の底の、暗い暗い闇の中。一筋の光も届かない、ひとさじの希望も存在しない世界。
ここを奈落（タルタロス）と呼ぶ。
ソレに関する犯罪者、あるいはソレそのものが収容されているとされる刑務所、のようなものだ。
らしい。される。ようなもの。
何せ、タルタロスに関してはっきりとした、確固とした事実を知っている、持っている者が少ないのだからしょうがない。タルタロスの存在すら知らない者が殆どで、知っている者は、その名程度し

か知っていない。誰も、何も知らない。
誰もがあやふやなまま、曖昧なまま、その存在を誤魔化したままにして過ごしている。
一方で、タルタロスに関わる者も地上の事について同様であった。
誰もがあやふやなまま、曖昧なまま、地上への知識、意味、意義、その全てを誤魔化したままにして過ごしている。
深遠にして深淵。奈落と称されるほどの広大な世界にて女が一人。世界の隅っこの小さな部屋で、一人で女性向けの雑誌を読んでいた。誰も知らない。知る必要などなかった。彼女はただ、常にこうして時を刻んでいる。
「……このモデル鼻大きいわね」
そう言って独りを楽しむのは、室内だと言うのにフードを深く被った――以前、一にエレンと名乗った――女だ。黒いローブを身に纏っている彼女の顔も、表情も確認出来ない。閉ざされた空間に何を思うのか、荒れ果てた空間に何を考えるのか、何も分からない。フードからは、鮮やかな赤で彩られた唇だけが薄っすらとそれを覗かせている。
透き通るように白く、細い指がページを繰った。男を誘うような、強かな手付きでもある。
「あら？」
エレンが雑誌から顔を上げた。その刹那、赤錆びたドアが重い音を立てて開く。現れたのは、右腕に仰々しいばかりの包帯を巻いた女性であった。
「今日は誰も招いていないのだけれど」
「客ってのは、大体が招かれざるモノよ」
包帯の女性はエレンの対面の椅子を引くと、乱暴にそこへ腰掛ける。
「何か用でもあるのかしら。私は今、雑誌に目を通すので忙しいの」
「その本、あの子が持ってきたって奴？　男を落とす肉食系女子へ、ねえ。へえ、人間の男のくせに分かってるじゃない。あんたにはお

似合いよ、それ」
「……私は構わないけれどね、この場にいないあの子を馬鹿にするのはやめにして頂戴。底が知れるわよ。私は構わないけれど」
エレンはくすりと笑い、雑誌を机の上に置いた。
「話がないのなら出て行って」
「あるわよ。飛びっきりのつまらない話がね」
「やっぱり帰って頂戴」
風も吹いていないのに、独りでに扉が開く。その事実に女性二人は驚く様子すら見せなかった。
「駄目よ、駄目駄目。嫌いなものばかり遠ざけて好きなものに囲まれていちゃあ駄目よ。そりゃあ気持ちの良い生活になるでしょうけど、毎日毎日イイ事ばかり経験していたらいつか麻痺しちゃうわよ」
「結構よ。嫌いなものに近付くくらいなら死んだ方がマシだもの」
「人生を面白くするのに必要なのは一握りのスパイスよ。たまには不味いものを食べるのも良いんじゃない？」
そう言ってから包帯の女は椅子に深く座り直す。本題に入るつもりなのだろう。
「あなたの嗜好はともかくとして。ムシュフシュが地上に現れたらしいわ」
「ふうん、そうなの」
ムシュフシュと聞いた瞬間、僅かにエレンの声音が強張った。思うところがあるのか、彼女は苛立たしげに指で机を叩く。
「へえ、あの女が……」
「ふふ、早く続きを話せって顔してるわよ？」
「分かっているのなら早く話した方が身の為よ」
「ついさっきの話ね。オンリーワンの情報部がムシュフシュを捉えたそうよ」
エレンは唇を強く噛み締めていた。
「……殺したの？」
「いいえ、まだ。尤も、勤務外が動いているらしいけどね。何でも、

今までにないくらいの戦力で挑むらしいわ。そ、あなたのお気に入りの坊やも一緒に」

包帯を巻いた女はけらけらと笑う。

「きっと殺されちゃうわね。流石に相手が悪いもの。きっと殺されちゃうわ、あの子たち」

「私、あなたの事は好きじゃないのよ」

「……何ですって？」

開いていた扉が独りでに閉まる。けたたましく音を立て、言い知れぬ余韻が室内をじわじわと満たしていく。

「あなたもここを束ねる神であり、女王なのでしょうけれど私には敵わない。ここをクルヌギアに変えられたくないのならもっと頭を使う事ね」

「面白い事を言うじゃない。本当に、あなた風情が私に勝てるとでも？」

「試してみても良いのよ。その時には、あなたは骨を通り越して塵になっているでしょうけれど」

刺すような沈黙が包帯の女を襲う。彼女は視線だけは反らさないでいられたが、結局それ以上の事はしなかった。出来なかったと言い換えても良い。彼女とエレンは似たような立場ではあるが、力の差が歴然としていたのである。

「ま、仲間同士でやり合うのも面白くないわね」

包帯を巻いた女は興味を失った風に装って軽く言い捨てた。

「私はそう思っていないわ。あくまで同じ土地に住んでいるってだけ。領土は隅の方で充分だから、必要以上に干渉して欲しくないのよね」

「同郷の誼と思いなさいよ。それとも、私以外の、ここの全てを敵に回せるとでも思っているのかしら？」

それは脅しだった。包帯の女は意趣返しのつもりだったのだろうが、しかしエレンは薄く笑むだけである。

「あら、私は別に気にしないけれど？　あなたたちを敵に回しても

構わなくてよ」
「……っ！　敵に回しても、五体満足で済むとは思っていないでしょうね。思い上がるのもいい加減にした方が身の為よ？」
「そう？　では、大人しくするとしましょう。あなたたちの身が心配だもの」
くすくすと笑い続けるエレンに、女は苛立ちを覚えた。力では敵わない。ならば言い負かすぐらいは遣って退けたい。そう思ったのが間違いであった。
「あなたがそんなだから、妹さんにも嫌われてしまったのではないのかしらね」
女がそう言って扉を開けようとした瞬間、右腕に鋭い痛みが走る。
「――ッッ！？」
痛みに耐えかね膝を着いた女の傍に、エレンが近付いた。
「その腕、レージングの女にやられたのですってね。どうかしら、まだ、痛むのかしら？」
「あなた、こんな事をして……！」
睨み付けるも涼しげに受け流されてしまう。エレンは躊躇せず、痛々しげな女の右腕を愛しげに摩った。
「あら、責任を押し付ける気？　忌まわしい獣の名を出されただけでも私は腹に据えかねていたの。そんな折、あの子の事を出されたら……ねえ、どうなると思うのかしら？　あなたは、どうなっても良いと思ったのかしら？」
右腕を締め付ける力は増すばかりである。このままでは本当に千切れてしまう。それを恐れ、女はただひたすらに謝った。
「塵になる代償を腕一本で払えると言うのにね。良いわ、この場は助けておきましょう。あなたの声、とても耳障りだもの」
エレンは愉しげに笑ってから、女の耳元に顔を近付ける。
「それにしてもあなた、イイ声で鳴くのね」
囁いたそれは、硝子のように脆く、美しい声であった。

ライデン！

彼女のいない世界を許しはしない。

最初に出遭ってしまったのは三森だった。彼女が何気なく路地裏を覗き込んだ時、風を切る音と共に爪が見えてしまう。肉を削ぎ、骨をも砕く無骨で鋭い獅子の爪が。

飛び出してきた馬ほどもある巨大なトカゲが奇声を発する。三森は一般人の悲鳴を背に、炎を生み出した。

雑居ビルとビルの間、今まで誰にも気付かれずにいた鬱憤を晴らす為だろうか、トカゲは狂ったように頭を振って暴れ出す。

「こいつが……っ！」

「――――――！」

手近にあったごみ箱を吹き飛ばし、トカゲは突進を開始した。三森はその攻撃を避けて背後を取るも、ソレの尻尾に脅威を感じて後方へ飛び退く。濡れた路面に足を取られるも、彼女は必死で持ち直した。

「三森さん！」

先行していた一たちが戻ってくるが、既に三森とはソレを挟んで分断させられている。

「幅が狭ェ、同士討ちだけはすンな！」

「任せなさいっ」

レージングを構えた糸原が腕を振り上げた。銀色の閃きが幾つもの筋を路地裏に描いていく。

「――――ッ！」

糸はソレの体を切り刻むが致命傷には至らない。表皮だけが剥が

れ落ち、僅かばかりの血飛沫が上がるのみだ。
　標的を糸原に定めたソレはレージングを巻き付けたまま二足で走りだす。
「何なのよこいつ！」
「しのちゃん糸を引いてっ」
　このままではソレの勢いに糸ごと指を持っていかれない。糸原は舌打ちの後レージングを戻した。その間隙を埋める為、立花が彼女の前に躍り出る。
「アッ……」
「わわわあっ！？」
　躍り出るも、立花のすぐ傍を火薬の弾ける音と鉛の玉が通り抜けた。彼女は咄嗟に身を屈めて難を逃れたが、あと一歩反応が遅れていれば体に穴が開いている。
「どきなさいタチバナっ」
「ボクを殺す気！？」
　ジェーンは構わず残弾を撃ち込んだ。しかし、ソレの固い鱗を貫くのは叶わない。勢いを失った弾は乾いた音を立てて地面に転がっていく。
　ソレは爪を振り上げてジェーンたちに迫った。振るわれた前脚は立花が無理矢理割り込んで受け止める。だが、力比べはソレに軍配が上がった。刀は少しずつ押し戻されていく。
　それでも立花は諦めない。彼女は必死に食らい付いていた。見かねた、否、今まで見ているだけだった一が立花よりも前に出る。彼女の刀に合わせてアイギスを広げて押し戻し始めた。
「……ううっ」
　情けない呻きを漏らしたのは一である。
　――こいつが、ムシュフシュ……！
　蛇の頭。獅子の前脚。鷲の後脚、翼。蠍の尾。
　図書館で確認したソレに間違いない。一は力を込めて最古のキメラに挑む。

が、力の差は歴然であった。ムシュフシュは片足だけで一と立花を押さえている。その後は自明の理、ソレは残りの足で攻撃を繰り出した。しかし、彼らを吹き飛ばそうとした横からの衝撃は途中で阻まれる。

「けん君っ」

「前向いてろ！」

ソレの攻撃は神野が竹刀で受け止めているのだが、彼の得物はミシミシとしなっている。今にも砕け散ってしまいそうな感触が神野の背に冷や汗を流させた。

防戦一方の勤務外たちに新たな攻撃が放たれる。ムシュフシュの尾がビルの壁面を削りながら迫ったのだ。

「ジェーン！」

「ダメっ、狙えナイ！」

尾は不可解な軌道で動き回る。当てるのすら難しく、また、一たちがいるせいで誤射の可能性も高まっていた。そも、先の攻防から、命中したとして銃撃でソレの動きを完全に止めるのは困難だと思われた。

同様に、糸原のレージングも細かい狙いを付けるのは難しい。彼女の武器は多くの敵を一度に掃討するのに向いている。それも近過ぎては駄目で、遠過ぎても効果を発揮し辛い。丁度良い中間距離から、更に障害物もないような場面でないと最大限威力が出ないのだ。

「誰も動くな！　そいつは私が止める！」

機を窺っていた三森だが、仕方なくムシュフシュの尾を止めるべく足を踏み出す。ソレの胴体に足を置いて回り込んだ彼女は、のたうち回っていた尾の先端を両手で掴むと炎を生み出した。掌から発せられた熱はムシュフシュから苦悶の叫びを得る事に成功する。

だが、生半可な攻撃は逆鱗に触れかねない。ムシュフシュは更に力を増し、憤怒の表情で神野を睨み付ける。

神野の体が一瞬強張り、竹刀が折られてしまった。彼は飛び退いたが、学ランの生地を爪で引き裂かれる。

「無理だ一旦引け！」
一は三森の指示に従うも、立花は最後まで均衡を保とうとした。
彼女の持つ刀が鈍い音を立て始める。
「立花さんっ」
「ボクはまだ、戦えるんだ！」
刀身にひびが入ったか否かのタイミングで神野が飛び出した。彼は立花の胴体を無理矢理抱いて地に伏す。瞬間、刀はさらさらと割れ、破片がソレに降り注いだ。
神野たちに対する追撃を防ぐべくジェーンが狙いも付けずに銃を乱射した。ソレは僅かだが怯み、その隙に三森がメンバーのいる方へ抜け出し、一がアイギスを掲げて神野と立花が脱出する為の時間を稼ぐ。
「怪我は？」
「ないよ。しのちゃん、そこの袋取って」
心配する糸原に短く返すと、立花は用意していた二本目の刀を取り出した。
「けん君はこっち使って」
「ちょっ、って、俺こんなの振った事ないぞ」
差し出された刀、本物の凶器を受け取れず、神野は狼狽する。
「使うんだ。使わなきゃ、ボクたち皆殺されちゃう。それに、けん君はもう武器がない筈だよ」
神野は一人でソレを食い止めている一を見遣った。もう、迷っている時間も選んでいる余裕もないらしい。
「……分かった。立花、剣はあと何本残ってる？」
「五本持ってきてたから、えと、あと一本ずつ」
「充分！　一さん、どれくらい耐えられますか！？」
「もう無理だって！　ジェーン指示を出せ、このままじゃ死んじまう！」
銃撃を止め、ジェーンは糸原を睨んだ。
「お兄ちゃんはもうちょっとファイト！　イトハラ、ソレの片足を

何とかして」
　糸原は頷き、細心の注意を払ってレージングを操作する。さっきは小手調べ程度の力だったが、次はムシュフシュの足を引き千切る勢いで放った。
　ソレの動きは止まるが、そこが限界。腕を引き千切る事は出来ない。それでも、一の負担は軽くなる。
「で、どうすんのよ？」
「ウェウェウェウェイ！　考えてるんダカラ！」
「ジェーン！」
　ムシュフシュの鱗が固い事も作用していたが、単純に攻め手に欠けていた。自分の銃も、糸原の糸も、刀もソレの身には届かない。防ぐだけなら一のアイギスが機能しているが、やはりそこで止まってしまう。三森の炎ならば、あるいは、ナナの拳ならば。
「……ナナ？」
　そこで彼女は気付いた。先程からナナだけが戦闘に参加していない。周りを見渡せば、彼女は涼しげに一らを見つめている。
「ダメイド！　何一人だけサボってるノ！？」
「いえ、命令がありませんでしたので。ジェーンさんの指示に従えと、マスターからはそう言われていましたから」
「口答えキンシー！　その場その場でシチュエーションを判断して動きなサイ！」
「分かりました」
　ナナはやる気なさげに呟くと、眼鏡の位置を押し上げた。
「では、私独自の判断で動かせていただきます。まずはお時間を頂きましょうか」
　ふわりと、ナナの髪とスカートがたなびく。
「ロード開始、プログラム展開、最適な兵装を検索、モード八極、起動」
「な、ナナ……？」
　一は困惑する。ナナは何事かを呟きながら接近していた。

「各部チェック。腕部、肩部、胸部、問題なし。続いて右、左脚部も問題なし。ブースター始動を確認。オール、グリーン」
「ナナっ、危ない！」
ムシュフシュの腕がナナに伸びる。しかし、彼女はその腕を易々と払い除けてソレの懐に入り込んだ。
「目標のパターン検索、スペック算出、一さん失礼します、最適行動再確認、クリア。行きます」
「うわあああああっ！？」
「一っ！」
何を思ったか、ナナは一の襟を掴み、糸原に向かって投げ飛ばした。
糸原はムシュフシュに巻き付けていたレージングを回収し、間に合わずに放棄した。彼女は飛んでくる一をしっかりと抱き留める。
そして、完全に自由になったソレとナナが対峙した。
歓喜と憤怒に叫ぶムシュフシュを受け流し、ナナは地を強く踏み締める。その衝撃に空気が波と化した。強い音は誰しもの耳朶を打つ。彼女は再びソレの腕を弾き返し、両の腕を上げさせた。そのまま、足を地に着けたまま半身になる。
瞬間、がら空きになっていたムシュフシュの胴体に肩からぶつかっていった。
震脚、密着からの体当たり。是、八極拳の基礎中の基礎――。
「これが私の鉄山靠です」
――鈍（どん）、と。
肉を貫き叩く音。鈍く重く内に浸透する衝撃。さしものソレもあっけなく宙を舞っていく。ビルを削りながら、狭苦しい路地裏を抜け出していく。やがて、向こう側の路地にムシュフシュは背中から追突した。地を割るような轟音と、全てを塵に還すような風圧を背にナナは眼鏡の位置を直す。
「すっ、げえ！　ナナ、やったのか！？」
「いえ、やってません。微々たるダメージを与えたに過ぎません。

が、ソレは簡単には起き上がれないでしょうね、時間は稼げました」
　ナナは勤務外の誰も成し得なかった先の一撃を誇ろうともせず、淡々と結果を口にする。
「ダカラ、時間って何の？」
「……皆さんが落ち着くまでの時間です」
　冷たい冷たい、感情のこもらない瞳でナナは全員を見回した。
「正直に申し上げますと、皆さん一人残らず迷惑です。足を引っ張りに来たのなら戻るか、即座に死んでもらった方が助かります」
「なっ、てめェ良い気になってンじゃねーぞ！」
　歯に衣着せぬ物言いに三森が激昂するも、ナナは全く気にしていない。
「私一人でも任務は達成出来ます。皆さん、本当に分かっていないのですか」
「何がだよ！？」
「……三森さんには少しばかり期待していたのですが。出立前、マスターは数で押せ、袋叩きにしろと仰っていました。なのにあの体たらく、獣に対して獣――それ以下のやり方で挑むとは愚の骨頂だと申し上げたのです」
　ナナは深々とお辞儀をすると、路地裏を出て表の通りまで歩いていく。通りには人々の姿はなく、無人になった車が数台停まっていた。
「あそこで、あんな狭いところで戦っていても数の利は得られません。どころか、ソレに地の利を貢献していましたね」
　誰も言い返せなかった。ただ、俯くだけである。
「事実、皆さんは防戦に撤していました。味方の武器が味方を傷付けるのを恐れて半端な攻撃を繰り返すだけでした。ならばと一人ずつで乗り込んでいたら各個撃破されていたでしょう」
「仕方ないじゃないノ……ソレはもうそこにいたんだし」
「ならば何故広い場所におびき寄せなかったのですか。ジェーンさん、どうして有効な指示を出さなかったのですか。あなたは、皆さ

んを殺すつもりだったのですか」
「――ッ、ちがう！　あた、アタシは！」
「違いません。ジェーンさん、もしも先の攻防で、この中から犠牲者が出ていたらどうしていましたか？　違うと、言えましたか？」
ジェーンはしゃがみ込んで金切り声を上げる。
「知らナイ、知らナイ知らナイ知らナイ！　アンタなんかに言われたくナイ！　何が分かるって言うの、アンタなんか、タダの人形のくせして……！」
「――っ、そうです。私は人形です。ですが、これは事実なのです」
「うるさい！　アンタなんか、アンタなんか！」
「ジェーン、やめろ」
ジェーンがびくりと震えた。一が彼女の頭に手を置いたのである。
「……言い過ぎだ」
「……だって」
「ナナに謝れ。それから、ナナもちょっと言い方がきつかったと思う」
「私が、ですか？　しかし一さん、ジェーンさんは我々の進退を握る立場にいたのですよ。指示を出す者が無能では困ります」
「分かってる。だけど、こいつは社員なんて立場にいるけどさ、まだ子供なんだよ。それが仕事だって言われても、急に皆を引っ張るなんて無理だ」
妹だから庇っているつもりは、一にはなかった。ここは戦場で、ナナの言う事に間違いもなかった。だが、仲違いをして戦闘どころではない、そんな事態を避けたかったのである。
「だから、仲直りしよう。な、ジェーン。謝れるよな？」
ジェーンは一を潤んだ瞳で見上げた後、すぐに袖で涙を拭いた。
「うん。クールじゃなかったわネ。ナナ、ゴメンナサイ、アタシが悪かったワ」
「……どうやら、私はジェーンさんの気分を害してしまったようですね」

ナナは深く、綺麗な角度で頭を下げる。
「申し訳ありませんでした。ここで我々がバラバラになっては戦いどころではないですしね」
「一言多いけど、はい、仲直りな」
一は苦笑し、他のメンバーにも目を向ける。
「頭、冷えましたよね。それじゃ、本気出しましょうか」
「おいおい、本気って言われてもよ。なンか上手いやり方でも考えたってのか？」
「俺は何も考えてません。でも、ナナ。お前には何かあるんだろ？」
「私任せですか？」
言い当てられ、一は誤魔化すように笑った。
「……ですが、どうやら私しかいないようですね。ではジェーンさん、作戦の立案についてですが」
「あ、待った。選手交代だ。皆、今から俺とナナが指示を出します」
全員から不満げな声が零れる。
「あんたが？　つーか、私はあんたに命令されなきゃなんない訳？」
「だったら糸原さんがやりますか？」
「……やーよ」
「俺とナナがやる。反対なら早いとこ言ってくれ」
「ダメっ、お兄ちゃんは社員じゃあないんだカラ……」
一はジェーンの頭を鷲掴みして髪の毛をくしゃくしゃにする。
「アアアッ、何するの！？　お兄ちゃんにもやって良いコトと悪いコトがあるんだからネ！」
「ごめんな、責任ってのは大人が取るんだよ。だから、お前に任しちまって、ごめん」
「……お兄ちゃん」
「俺に、兄ちゃんに任せろ。なんて、ずるい言い方か？」
「……ずるい」
しかし、ジェーンはそれ以上拒否するような素振りを見せなかった。

「皆も、良い、かな？」
「うん。ボク、はじめ君になら任せられるよ」
「俺もです。一さん、お願いします」
「ま、しゃあないわね。私らの命預けんだから、しゃんとしなさいよ」
三森は何も言わなかったが、一には彼女の意志が分かっている。
「ナナ、どう見る？」
「そう、ですね。皆さんとムシュフシュの攻防を見たところ、真っ向からやり合って手傷を負わせられそうなのは三森さんと私だけのようです」
「じゃ、じゃあボクたちは……？」
ナナは表情を変えないまま続けた。
「ご安心を。あの固い鱗を狙いさえしなければ有効なダメージは通ります。例えば、柔らかな目。関節もそこまで固くはないでしょう。尾や翼の付け根を狙うのも悪くありませんね。リスクは高まりますが、口の中から直接ぶち込むのもいかがでしょう」
「あー、言われてみりゃあそうだよな。くそ、あンだよ、マジに私らどうかしてたみてェだな」
気楽そうに言うと、三森は煙草に火を点けて愉しげに笑う。
「集団で戦闘に臨む際の高揚感がいき過ぎた。路地裏から仕掛けられた奇襲、焦り。さて、私たちはムシュフシュにいっぱい食わされたのでしょうか」
「だとしたらムカつくわね。あんなトカゲに意図を操られたってんなら、人間辞めた方が良いかもしんない」
「私は違うぞ。辞めンならてめェだけ辞めてろ。いっぱい食わされたんなら、いっぱい食わすだけだ。腹ン中いっぱいにぶち込みまくってやらァ」
「単細胞」
「あァ！？」
「ご歓談はそこまでに。どうやら、ソレが起き上がってくるようで

すね。では皆さん、こちらへ」
　ナナに促され、メンバー全員が得物を手に提げ歩き出した。息を整えながらゆっくりと、ゆっくりと歩く。
　ムシュフシュの低く唸る声が街にこだましていた。その声は自らを貶めた勤務外だけでなく、この世全てを憎んでいるかのように強く、響く。
「一さん、何か思い付きましたか？　何もないのなら、私が代わりに……」
「いや――」
　一はナナの言葉を遮り、深く息を吸い、吐いた。
「――役割を決めよう。各自、ソレの部位を分担して攻撃。分担は、ナナに任せる」
「了解しました。では、初手はジェーンさん、目を狙ってもらえますか。出来るなら二つ。こちらにやって来るまでに最悪でも片目はもらっておいてください。目を奪ったなら、その後は牽制、他の方のフォローに。ムシュフシュ接近後は私がソレの動きを止めます」
　ジェーンは頷くが、一は首を縦に振らなかった。
「俺も止める方に回るよ」
「……む。まあ、良いでしょう。立花さんと神野さんにはそれぞれ翼を。糸原さんにはソレの脚を。出来れば関節部を狙ってください。最後に三森さん、尾をお願いします。止めは余力のある方にお任せしましょう。誰もいなければ、私が仕留めます。よろしいですか？」
「な、何だか難しそう。ちゃんと出来るかな……」
「ふふん、簡単よ。要はね、一とナナ子があいつを止めてる間、好き勝手にやりまくれって事なんだから。でしょ？」
　身も蓋もない言われようだったが一は笑っておく。

　店長が自分の了解もなしに勝手な行動を取るのは今に始まった事ではない。彼女が自分の意見を仰ぎもせずに、更にその行為が全く

意味の分からないものだったのにも慣れている。
「全員参加、ですか。いやあ、全く全く。私には難しい話ですねえ」
ただ、今回は輪を掛けて意味が分からなかった。堀は眼鏡の位置を直しながら、必死に笑みを作る。
「どうして、とはもはや聞きませんよ。何か算段があっての事でしょうしね」
レジ前のホットドリンクを補充しながら堀は言う。理由を聞かせろと暗に訴える。
「怒るなよ、堀。お前に怒られたら流石に焦る。第一だな、分かっちゃいるんだろう？」
「……分かってはいるつもりですがね」
「納得は出来ないか。だが、いつかはやらなければならなかった。そしていつかまではもう時間がないんだよ。恨むなら恨め。呪うなら呪え。そうして行動に起こさない以上は安いものだ」
店長が言っているのは、年末に向けての大規模な戦闘についてだろう。それぐらいは堀にだって理解出来ていた。
「戦力は上げておくに越した事はないでしょうね。練度が低いよりは断然に良い。一対一、一対多、多対多、多対一。様々な戦闘行為を経験させておきたいのは私も同じです」
「ん？　なら文句はないだろう」
「ええ、全員を送り出したのに文句はありません。そもそもあなたに文句はないのですが、私が気になっているのは送り出した相手ですよ」
話なら、話にしか聞いていなかった最古の怪物、ムシュフシュ。ここの勤務外たちのレベルアップに宛がうには少しばかり相手が悪いと思っていたのだ。
「ムシュフシュ……バビロニア神話のキメラか。堀、お前はどう見る？　あいつらに勝ちの目はあるか？」
「正直、分はあまり良くないですね。日本におけるムシュフシュの知名度は高くない。ですが、その力は本物です。原初の女神に生み

出された殺戮の為の魔物。彼らが今までに戦ったソレの中でもトップクラス、いえ、あるいは最強の相手かもしれません。が、何を今更。あなたは勝算もなしに彼らを送り出さないでしょう」

その答えに店長は笑みを隠しきれなかった。

「分は良くない。だが悪くもない。全員が全員生還出来る可能性は充分にある。その鍵は……」

「簡単に言えば、チームワークですか。今までに考えられなかった力ではありますね」

「ああ、ここ最近はまともに人数も揃わなかった。三森一人に負担を掛けてしまっていたがな、ようやくになってというところか」

チームワーク結構。ただ、堀には一抹の不安があった。

「上手くいけばの話ですがね。確かに、計算上では一足す一は二になります。が、実際にはそうならない。メンバーの息が合わなければ足し算ではなく引き算にもなります」

「掛け算にもなるがな」

「割り算にもなります。店長だって見たでしょう。この間の草野球、結局試合にはなりませんでした。今の段階で彼らに協力する心が芽生えているとは……」

「いや、芽生えちゃいるさ。目に見えて分からない程度にな」

何がおかしいのか、店長は喉の奥でくつくつと笑う。

「なあ堀、ただのソレとの小競り合いじゃあ何も要らない。力だ、それさえあれば問題ない。優秀な兵か、駒さえあれば詰む事はない」

堀は頷いた。そう、力の強い兵さえいれば全て片が付く。だが、戦闘ではなく、もっと大きな戦いならば。

「この先は兵だけじゃ回らん。将がいる。兵はただ前に進み、目の前のモノと戦うだけだからな」

「力を上手く使える頭が必要、ですか。しかし、それなら店長がいるのでは？」

だが、店長は首を振る。

「無論、出張れるところは私が出張る。だがな、現場に行かなけれ

ば臨機対応に指示は出せない。私の目の届かない場面で、少なくとも後一人。私以外にあいつらを任せられる奴が欲しい」

「……なるほど。では、あなたの後継者とやらが今日決まるのですね」

「は、そんな大層なものじゃあないさ。大体だな、私の代わりに命を預けられる者だぞ？　簡単には決まらん」

「またまた、前々から目は掛けていたんでしょう。それで、どうなんですか。草野球なんて茶番を仕組んだ甲斐はあったんですか？」

会話が止まる。空気が重く、居心地が少しばかり悪くなる。堀は補充の手を止めなかった。

「さて、何の事だかな」

「いやあ、はぐらかしますねえ」

「くっくっ、お前と腹の探り合いをするつもりはないんだがな。何せ性感帯が腹なんだ。触れられると気持ち良過ぎて、殺したくなるじゃないか」

「……ま、良いでしょう」

どうせ、自分が何を言おうが戦闘は始まっている。その結果で誰かが死んでも、あるいは全滅したとして仕方がない。所詮、彼らがここまでのモノだったという事である。

それに、ここで死ねた方が楽かもしれないのだ。この先はもっと厳しく、辛い戦いが待っている。

だが、堀は思うのだ。願ってしまうのだ。生きて、帰ってきて欲しいと。

飛んでいた。

翼を広げ飛んでいた。

地を舐めるように、それでも確実に飛んでいる。

「Ｄｕｍｎ　ｉｔ！」

ジェーンは路地裏から飛び出してきたソレに照準を合わせるが、

ムシュフシュは頭を振っていて目などという小さな的は狙えない。
「慌てないでください、飛んでいるだけです」
ナナは躊躇するメンバーの誰よりも先んじてソレに突っ込む。
「――――ッッ！」
「くっ……」
腕を掴もうとするが、ソレはナナの脇をするりと抜けて雑居ビルの壁に足を着けた。じろりと、勤務外の面々をねめつけた後に降下する。
「糸原さん！」
「知ってるわよ！」
目を付けられたのは糸原だった。急降下するムシュフシュを避ける為、彼女は地面を転がる。風が走り、音が走り、そのすぐ上をソレが過ぎ去っていった。
「あああああっ、私のスーツがっ！　よくもやってくれたわね……」
「俺の金で買ったくせに」
「人間様に逆らってんじゃないわよ！」
レージングが夜を裂いていく。奔る銀の閃光がムシュフシュの後ろ足に絡み付く。ソレは必死に糸から逃れようとするが、遅い。
「失礼します」
糸原はレージングを両手で握り締め、ソレの行動を妨げている。
「重っ……」
跳躍したナナが、糸原とムシュフシュとの間にぴんと張られた糸を掴み、ぐるりと回った。その反動を使って更に上へと飛び上がる。
「糸原さん、糸を！」
「やっちゃいなさい！」
糸原がレージングを回収し終えた瞬間、ナナはムシュフシュの背中に飛び移っていた。ソレは彼女を振り落とそうとして体を揺するが、
「これが私の、スレッジハンマーです」
ナナは組んだ両腕をムシュフシュの背中へ高々と振り上げ、下ろ

す。
「――――――――！」
奇声を上げながらソレは落ちていった。衝撃が周囲に展開していく。
無様に四肢を伸ばしながらも、ムシュフシュはどうにか顔を上げた。
「Ｈｅｌｌｏ，ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ？」
にやりと笑うジェーンと目が合った瞬間、マズルフラッシュがソレの視界を覆った。

ソレの叫びが轟き渡る。炸裂した銃弾によってムシュフシュの眼球は破裂し、周囲に飛び散っていた。苦痛から逃れようと頭を振るが、ジェーンは情けを掛けない。容赦しない。乾いた音の後、残っていた眼球も血と一緒に飛沫を上げた。

視力を失ったムシュフシュは前へ前へと走り出す。前方にはジェーンがいたが、彼女の前に一が割り込んだ。

「お、おおおおおおおっ！」

広げたアイギスにソレの爪が、腕が襲い掛かる。その全てを弾き返しながらも、しつこい攻撃に少しずつ一は押され始めた。体重差があり過ぎる。

「――――――ッッ！」

ムシュフシュの顔が更なる苦悶により歪んだ。ソレの背中に、ナナが再び降り立ったのだ。

「一さん、私は頭を押さえます」

「……頼むっ……！」

ナナは躊躇せずソレの頭を自分の両手で掴み、その後頭部に自分の右膝を押し付ける。押し付けたまま前に飛び、ムシュフシュの頭を地面に叩き付けた。

ムシュフシュは尚も暴れ続ける。

「このままじゃ……」

他のメンバーが攻撃に移れない。視界は塞いだ筈だが、闇雲に動き回られては厄介だった。

一は覚悟を決める。

時間は掛けない。ここで終わらせる。

握り締めたアイギスが光を帯びる。

「止まれ、ムシュフシュっ！」
光が周囲を包み込んだ次の瞬間、ムシュフシュは嘘のようにその動きを止めてしまっていた。
否、メドゥーサによって止められていたのだ。
「一さん、これが……」
ナナの瞳が揺れ動く。
これがアイギス。
これがメドゥーサ。
これが、一。
「お願いします！」
「待ちくたびれたわ」
一の呼び掛けにまずは糸原が答えた。彼女の伸ばした糸はソレの右足に絡み付く。糸原の真っ白い指が僅かに動き、ムシュフシュの足が両断された。がくん、と、支えを失ったソレの体が崩れ落ちる。
「よっしゃあ！」
既に炎を作り上げていた三森が走りより、ソレの尾を掴み上げた。彼女の拳から赤い光がちろちろと覗く。風に煽られ火の粉が飛び散る。熱が運ばれ、一の髪を生暖かい風が揺らした。彼が見上げた時にはもう、尾はこの世から消えてなくなっている。
続いて、立花と神野が刀を振るった。動けなくなったムシュフシュの翼を切り上げ、切り下ろす。
――限界だ。
「皆、離れて！」
一が叫び、仕事を終えた全員がソレから離れていった。
「――――――ッッッッ！」
メドゥーサの制限時間が過ぎ、時間を取り戻したソレは悲痛な叫びを上げる。切断された箇所からは鮮血が噴出し、辺り一面朱に染めていく。噴水のように上がる血を見ると一は思うのだ。
「……アイギスが傘で良かった」
「何か仰いましたか？」

「いや、何も」
血塗れになったナナから目を反らし、一はゆっくりと力を抜いていく。もう、ムシュフシュからも力が抜けつつあったのだ。
「一さん、止めはどなたが？」
ナナに問われ、一は思わず三森の姿を探してしまう。
「なるほど。跡形もなく燃やしてしまおうという事ですね」
そうではなく、本当はただ、一はあの炎を見たかったのだが曖昧に頷いておいた。
「三森さん、止めを」
「げ、私かよ。……ま、良いや。リーダーのご指名ならしょうがねェ」
三森は煙を燻らせながら一歩一歩進んでいく。
敵を捉える両目を失い、敵に近付く翼を失い、敵に追い付く脚を失い、敵を仕留める尾を失ったソレに止めを刺す為に。

勤務外たちがムシュフシュと出遭う一時間前、つくも図書館の司書である公口由梨（こうぐちゆり）は後輩の司書である黄衣ナコトを探していた。
少し目を離していた隙に彼女が仕事場からいなくなっていたのだ。ナコトと公口はまだ短い付き合いではあったが、ナコトが理由もなしに、しかも無断で職務を放棄する人間だとは思えなかった。
「……ナコトちゃん」
公口は今年が二十代最後の年である。来年から自他共に認めざるを得ない三十路になる。だから、とは決して言わないが、ナコトに対してちょっとしたコンプレックスを抱いていた。
それでも、彼女には決して酷い事をしなかった。むしろ年の離れた妹が出来たと喜び、手作りのお菓子を振舞うなどして可愛がっている。そのナコトが良く分からない男を連れてきたのが気に入らなかったのかもしれない。仕事の時間に遅れて、更に神聖な図書館で大きな声を上げたナコトを怒鳴りつけてしまった。

「拗ねちゃったのかしら……」

今日は館長である九十九の帰りが遅い。その為、いつもより早くに図書館を閉めても良いと言われていたのだ。ナコトはここに住まわせてもらっているが、公口は別に自宅がある。家事の危ういナコトに晩御飯を作ってから帰宅しようと思っていたのだが、彼女は一体どこに行ってしまったのだろう。

と。

公口は図書館の入り口から妙な気配を感じた。肌寒くなるような、気味の悪い空気が流れてきたような、そんな錯覚を覚える。

「ナコトちゃん？」

心細くなり、探し人の名を高く呼ぶ。館内にいた人間は全て帰っていた。しかし、いつもより早い時間に『閉館』のプレートを提げているので、誰かが入り口で困っているのかもしれない。そう思うのだが、不安な気持ちは一向に拭えない。

一歩、また一歩と近付くにつれて足取りは重くなる。

「……ナコトちゃん？」

意を決して覗いてみると、入り口のガラス戸が割れていた。肌寒かったのはこのせいだと思いたかった。

その、割れたガラスに突き刺さっていたものを見て、公口は腰を抜かし、その場にへたり込む。

勤務外たちがムシュフシュと出遭う一時間前、オンリーワン南駒台店勤務外店員のヒルデはとある人物を駅前の喫茶店で待っていた。

「遅いっすね、あいつ。ヒルデさーん、もう帰っちゃいましょうよー」

「……ん、私は待つよ」

「シルト、お前だけ帰れば良いじゃないか」

「はあ？　何言ってんのシュー。帰りたいなら帰れば良いじゃん。ヒルデさんがここに残るんなら私だって残るに決まってるし」

「……二人とも、静かにした方が良いと思う」
ヒルデは溜め息を吐く。
彼女の待つとある人物とはフリーランス『神社』、山田栞であった。山田は今日、退院する筈だったので、その快気祝いをしようとヒルデは持ち掛けていたのである。
が、もう約束の時間から三十分は過ぎていた。山田は豪快且つ男勝りでがさつではあるが、決して約束を破らない性質だ。だからこそヒルデはこうして待ち続けているのだが。
「あー、ウザ。ヒルデさん待たせるとかあのゴリラマジに意味わかんねーっつーの。様子見に行ったルルからも連絡こねーしさー」
「病院に連絡を入れた方が良いかもしれないな。シルト、電話を貸してくれ」
「はあ!?　はああ!?　馬鹿、あんた馬鹿？　なんで私のケータイ使わなきゃなんないのよ、自分の使えば良いじゃん」
「充電が切れ掛けている。見ろ、あと一本しかない」
「……うっざいなあ、もう」
言いつつ、シルトはテーブルに置いていた携帯に手を伸ばす。
「ん」
と、騒がしいメロディが店内に響き渡った。
「あー、ルルからだ」
「……早く出た方が良いと思うよ」
ヒルデは他の客の視線から逃れる為、顔を真っ赤にしながら俯く。
「マナーモードにしておけとアレほど言っていたじゃないか」
「あー、おっそーい。早く連絡入れてよ、え、何？　何よ？　何々、聞こえないってば。は、何それジョーダンでしょ？」
「……シルト？」
少しシルトの様子がおかしい。ヒルデは不安になって顔を上げてみる。
「……あー、分かった分かった。伝えとくから。とりあえず、弾丸そっちに行っから」

「シルト、何かあったのか？」
「んー」
シルトは過度にデコレーションされた携帯電話をテーブルに置くと、クリームソーダを飲み干した。
「ヒルデさん、今から病院に行かなきゃなんないみたいです」
「……え？」
「なんか、あのゴリラが怪我して病院に運ばれたって言ってました」

勤務外たちがムシュフシュと出遭う一時間前、中内荘の住人である歌代チアキは買い物袋を両手に提げてとぼとぼと歩いていた。
彼女は時折舌打ちしながら罪のない通行人を睨み付けていく。完全に八つ当たりだった。
「重……」
この荷物はチアキのものだけではない。ついでにと、一たちの分も頼まれていたのである。安請け合いしてしまったのは自分だが、それでも彼女は他者に怒りの矛先を向けてしまうのだ。
しかし、この苦行ももうすぐ終わる。目の前の角を曲がれば、もうすぐ我が家に辿り着く。帰ったらテレビを点けて、お気に入りのCDを聴いて、一たちの帰りを待ちながら鼻歌でも口ずさもう。
楽しげな想像で荷物の重さを気を紛らわせ、チアキは歩く。
と。
彼女は不穏な気配を感じた。尤も、チアキに特別な力は宿っていない。せいぜい、彼女には歌が上手い程度の能力しか備わっていないのだ。だから、あくまで予感。目に見えない何かに急かされるようにしてチアキは走る。角を曲がり、中内荘の敷地内に辿り着く。
「アイネ！」
チアキは荷物を投げ出して倒れている人物へと走りよる。
アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。
アイネはチアキたちと同じく中内荘に住むフリーランス『貴族主

義』であり、チアキの隣人、友人でもある。
「おいコラしっかりしぃや！」
嫌な予感は当たっていた。アイネが自室の前で倒れている理由は分からないが、とにかく救急車、医者を呼ばなければならない。
「……う、く……」
「気ぃ付いたんか？　おい、こら、おーい」
チアキはアイネの頬っぺたをぺしぺしと叩く。抓る。引っ張る。その内にアイネは意識を取り戻していった。
「……たい」
「お。起きよった」
「痛い、です……」
アイネの背をドアに預けると、チアキは置いていった荷物のところまで走り、また戻ってくる。
「ほら、水」
「……ありがとう存じます」
アイネは蓋の開いたミネラルウォーターを受け取ると、躊躇う様子も見せずに頭から引っ被った。
「うわ、冷たないん？」
「冷たいなどと。私は、悔しいのです。あんな、あんな失態を……」
彼女が何を言っているのかチアキには分からなかったが、とにかくアイネが無事で良かったと、胸を撫で下ろし、ずぶ濡れになった彼女の隣に腰を下ろす。
「濡れてしまいますわ」
「ん、せやな」
すぐ近くにいるからだろう、アイネの震えがチアキに伝わる。寒いからだろうか、恐かったのだろうか。本当に、悔しいのだろうか。分からないから、ただ、隣に座る。
「……なあ、誰にやられたん？　一応、あんたもフリーランスやん。そこらの奴には負けへんやろ、普通」
アイネは俯き、唇を噛み締めていた。加減を知らないのか、皮の

裂けた唇からは血が溢れている。
「アレは人間ではなかったように存じます。少なくとも、私にはそう……」
「まさか、ソレにやられたん？」
「いいえ、アレは、アレは――」

ぱちぱちと、ごうごうと、火の粉が弾けて獣が燃える。少しずつ、少しずつ灰になっていく。風に舞い上げられたそれは煙と一緒に天へと上る。帰ろうとしているのかもしれなかった。溶け往く肉と血液は母なる大地へ。灰になった体は母なる天空へ。
もしも、もしもこの世界が原初の女神ティアマトの遺骸から創られていたならば、子であるムシュフシュにとっては当然にして必然の帰還なのかもしれない。
ただ、子が母の許に帰るだけ。そんな光景を勤務外たちはぼんやりと眺めていた。ある者は地面に大の字になって、座り込んで、放心した様子で立ち尽くして。
「俺たち、勝ったんですよね」
神野の声は裏返っていた。彼は刀を握ったまま、ずっと離せないでいる。
「こっちは全員生きてて、ソレはこんがり焼き上がった、と。これが勝ちじゃなかったら私人間をやめてやるわ」
「……あー、疲れた。早く帰って寝たい」
「でも、ボクもう動けないかも」
一と立花は背中を向け合ってへたり込んでいる。
「皆さんお疲れさまでした。これにて本日の作戦行動は終了になります。一刻も早く店に戻り、報告を終えましょう」
「ムリー、ナナァ、アタシだけでもおんぶして帰ってヨ」
「汚ェぞチビ！」
疲れ切って誰も動けない。それでも、彼らは確かな充足を感じて

いた。いつもと変わらぬ賑わいの中、立花は一に体重を預ける。
「へへー、疲れたねー」
「今までで一番しんどかったかもね。いや、本当お疲れさま」
「ボク、頑張ったかな？」
「うん。頑張った頑張った」
立花は戦えていたが、彼女一人が貢献した訳ではない。全員がきっちり仕事をこなしたのである。誰か一人でも欠けていれば、こうして笑い合う事は叶わなかったかもしれない。
「ずっとこうだったら良いね」
「こう、って？」
「うん。皆でこうやって戦って、皆揃って笑うんだ。辛いし、苦しいけど、ボクは皆と一緒に、最後には笑いたい」
「……うん、そうだね。そりゃ良いや」
そうなったなら、どんなに素晴らしいか。
「あ、そういえば立花さんさ、出掛けに何か言おうとしてなかった？　ほら、飛行機に邪魔されたけどさ」
「あ、と、えと、大した事じゃないんだけどね。お昼にソレと遭った時、あのムシュフシュってそんなに悪い子じゃないのかもって思ったんだ」
「……人を襲うのに？」
「で、でも、子供を襲わなかったんだ。……ナコトちゃんに置いてかれた後、駅前に女の子が出てきちゃったんだけど、あのソレは何もしないで逃げたんだよ」
聖なる獣。神の門を守護する竜。殺戮の為に産み出されながら、様々な神に仕え属性を変えたソレ。
「ま、良い奴ほど早く死んじゃうもんだよ」
「そ、そうなの？　そんなのやだな。はじめ君、早く死んじゃうじゃないか」
「あ、はは……」
一は苦笑する。多分、長生きは出来ないし、するつもりもなかっ

た。無論、自分が良い奴だとも思っちゃいない。
「さ、帰ろう。長居しちゃ風邪引いちゃうよ」
「……もう少しだけ、こうしてようよ」
「寒くない？」
「あ、温かいよ？」
立ち上がろうとしていた一は仕方なく座り直す。ふと顔を上げれば、ナナにしがみ付くジェーンが見えた。
その奥、一番向こうにいる神野の更に奥、小さな人影が目に入る。
「あーっ！」
こんな時、こんな場所に一体誰だろうと一が思うより先、立花が大声を出して立ち上がった。その声に全員の目が彼女に向く。
「知り合い？」
「ほら、ボクが言ってた女の子だよ！　ソレに遭っても助かった子！」
「そうなの？　いや、運が良いのか悪いのか……」
日に二度もこんな場面に出くわしてしまった女の子に一は同情する。
「迷子かも。ボク、行ってくるね」
立花は女の子に向かって駆け出した。背中越しに感じていた温もりを失い、一はしばし立ち尽くす。
「……あの少女、何者でしょうか」
「おわっ、びっくりした。て、え、何？」
背後から現れたナナに身構えつつ、一は彼女の発言を聞き返した。
「ですから、あの少女です」
「迷子じゃないのか？」
一は目を凝らして前方の女の子を観察する。
小さい。ジェーンよりも背が低く、小学校に入ったばかりか、もしくはそれ以下の年齢にしか見えない。猫のような耳の付いたニット帽を目深に被り、赤いダウンジャケットは丈が合わず袖から手が出ていなかった。それだけでなく、ジャケットが大き過ぎて足も殆

ど見えていない。
「ただのガキだろ」
「ただの子供がこんなところに居合わせますか？　夜遊びするには早い年頃だと思います」
「最近の子はませてるぜ。俺なんかよりよっぽど……」
その続きは言えないまま終わる。
「一さん！」
ナナが叫び、何事かと一が思った瞬間だった。
「タチバナ！」
女の子に近付いた立花の体が崩れ落ちる。彼女は四肢を投げ出して地に伏した。その事実を全員が受け止め、頭の中で反芻するより先、呻き声と共に大きな衝撃音が響く。神野がビルの壁に叩き付けられていた。彼は身動き一つ取れないままに、ゆっくりと、倒れる。
「一さん敵です！」
「……敵って、そんな……」
ムシュフシュを倒した今、一たちの敵になるようなモノは――
「誰が……」
「しっかりしてください！」
――あの、少女だけだ。
「散れっ、あのガキ消えやがっ――」
三森が背後から強烈な一撃を食らった。見えない敵によってコンクリートに叩き付けられ、尚も威力が余ったのか、彼女はスーパーボールのようにバウンドし、やがて動かなくなる。
「うそ、だろ」
「アイギスを、握ってください！」
一の手から落ちたアイギスを拾い、ナナは彼の前に立った。
「お兄ちゃん、どうすればいいの!?」
「固まったらやばいわ、一人ずつやられる！」
「一さん退きましょう！　相手の正体が見えないままではどうにも出来ません！」

どうしろと言うのならこっちが聞きたかった。立花、神野、三森。瞬く間に三人もの勤務外がやられてしまったのである。何も分からないまま、何も出来ないままに、だ。

残った四人は戦々恐々としながら四方向を確認する。だが、敵は見つからない。どこにもいない。何も見えやしなかった。ただ、不様に伸びた三人が見えるだけ。

「糸で網を張るわ。あいつが引っ掛かって方向が割れたら教える。ちっちゃいの、そしたらその鉛玉撃ち込んで」

「……効くノ？　ホントに、ダイジョーブ、なの？」

「っ、知らないわよ！」

「糸原さん、落ち着いてください」

「落ち着ける訳ないでしょうが！」

怒鳴り散らす糸原の気持ちは一も良く分かる。彼がこうして黙っているのは冷静になれたからではない。事態に頭が付いていかず、ただただ茫然としているだけなのだ。

糸原の指がぴくりと跳ねる。

「――っ、右！」

刹那、彼女の体が宙に浮いた。

「なっ……！」

「きゃ……あ、あっ」

仕掛けていた糸を何かに引っ張られている。それも、人間一人を浮かせるほどの力で。糸原は必死に抵抗するがもう遅い。

「糸原さん！」

糸原はレージングを掴んで落ちないでいるのに精一杯だった。

「――ひ、やっ……！」

そして、やはり地面に叩き落とされる。彼女は肩から墜落し、その衝撃で遂にレージングを手放した。

糸原や他のメンバーが生きているのか、死んでいるのか、確かめに行く勇気は誰にもなかった。動けば、次にああなるのは自分かもしれないのだ。

「……一さん、やはり一度退いた方が良いと思います」
一は思わず頷きかける。その意見には賛成である。が、倒れている者を見捨ててまでは逃げたくなかった。
「つーか、逃げられるんなら逃げたいけどな」
「エスケープは、させてくれないでしょうネ」
そも、逃がしてもらえるとは思っていない。到底思えない。先程の戦闘とは打って変わって、狩る側から狩られる側になってしまった。ここはもう戦場ではなく、あの少女の狩場に成り果てている。
「あの子は、何なんだ？　ソレなのか？」
「分かりかねます。ただ、あのようなソレは私のデータベースには記録されていませ……いました！」
ナナが咄嗟に身構えた。
赤いダウンジャケットの少女は、ビルの壁面に足を着けていたのである。
「まるでシノビね」
「……俺が前に出る。心底嫌だけど」
一はアイギスを広げ、ビニール越しに少女を睨み付けた。目を反らせば死ぬ。体の内から押し寄せる強迫観念に囚われて、今は瞬きすら恐ろしい。
「来ます」
難攻不落。不壊の盾にして抜く事も貫く事も不能な絶対防御。アイギスが破られない限り、身に危険は及ばない。
「……あ？」
油断はなかった。
「お兄ちゃんどいて！」
放たれた矢のように、打ち出された弾丸のように、身を貫く疾風のように。少女が拳を振り上げて、傘にずぶりと穴が開く。女神の盾が、壊れゆく。
「ぐが、あっ……！」
一の肩に鈍く、尾を引く痛みが走った。彼は絶対の自信と絶大な

武器を失った事に気付かないまま意識を閉ざす。
「コイツっ、よくも！」
「いけませんっ」
銃口は震え、狙いが定まっていない。それでもジェーンは眼前の敵に向かって引き金を――。
「ジェーンさん、くっ……」
引けなかった。
彼女が指を置くよりも少女の方が素早かったのである。腹部にアッパー気味のパンチを叩き込まれ、ジェーンは声すら出せず失神した。
残ったのは、ナナ一人。最後まで逃げようと訴えていた彼女だが、ことここに来てそういう訳にはいかないのだと判断する。
「……排除します」
ナナがスカートを翻すと、その中から何かが転がった。少女は意に介さず突っ込んでくるが、強烈な閃光と爆音が襲い掛かる。
スタングレネードの効果に紛れ、ナナは腕に仕込んでいたブレードで切り掛かる。が、手応えはない。背後から気配を感じ、地面を思い切り踏み付ける。半身になり、後方へと肩からぶつかった。確かに何かが触れるのを感じて、彼女は勝利を確信する。
「これが私の全力全開、鉄山靠です」
ムシュフシュの体躯すら吹き飛ばした渾身の一撃だった。これ以上なく力を込めた。エネルギーは予備含め全て使い果たしてしまった。肩からはショートしたパーツが火花を起こしている。
それでも尚、ターゲットは立っていた。少女は微動だにせず、ナナを見上げている。
「……真っ向から受け止められましたか」
ナナの口調には諦めが混じっていた。
立花や神野は刀を抜く暇すら与えられず、三森は炎を放つよりも早くに止められてしまった。少女は糸原よりも強かで、ジェーンの銃よりも早く、一の盾すらも軽々と砕く。

「……っ、機能、てい、し……」

そして、ナナの一撃を受け止めて返す。

勤務外は数でソレに挑んだ。戦いでは数が物を言う。事実、彼らはムシュフシュに勝利した。だが、この世には道理を蹂躙する、理不尽を具現化したようなモノも存在する。

例えその数が七ではなく百、千、万であっても関係なく、たった一つの質で押し返すモノも存在する。

力で、力で、力だけで全ての矛を打ち砕き、全ての盾を引き裂いてしまうようなモノも存在する。

少女こそが、正しくそれなのだ。

勤務外ではなく、ソレでもない。

最硬、最高、最巧、最大、最速、最優、最知、最悪、最長、最重。どれも彼女には敵わない、及ばない、届かない、通じない、足りない、太刀打ち出来ない、歯が立たない、勝負にならない、手も足も出ない、どうしようもない。何よりも、圧倒的に似合わない。

そう、この少女には正しく最強こそが相応しい。

「映画はお好きですか？」
「ああ、好きだよ。少なくともお前よりかはな」
「……クソみたいな映画がお好きなあなたなら知っているとは思いますが、むやみやたらに人が死ぬ映画、あったでしょう。ああ、この映画を作っている人たちはどうして死ぬのかよりも、どうやって死ぬのかを楽しんでやっているんだろうなあって映画」
「そんな映画は山ほど見たからな。お前がどれを指しているか分からないし、これ以上話を続ける気も……」
「あの、３Ｄメガネを掛けて見る奴ですよ」
「ああ、アレな！　アレはさー、どうかと思うんだよね俺は。だってメガネとか邪魔じゃん。立体的に見られるのはちょっと、いや、かなり心惹かれるんだけど。メガネって邪魔じゃん」
「あたしに喧嘩を売ってるんですか？」
「その前までの三つは全部見たけどさ、ありゃホラーっつーかコメディだよなあ。んでさ、俺は２が好きなんだよ、２が。一人一人が死ぬのもパズルっぽくて良いけどさ、その前の白昼夢で派手に事故が起きる方が好きなんだよね。丸太がぶわーって落っこちてくるところとかマジに大爆笑」
「……あの映画で笑える人の神経を疑いますね」
「バーカ、あの手の映画の楽しみ方ってのはな、登場人物に感情移入するんじゃないの。例えば、そうだな、プテラノドンが暴れ回るって映画があるとするだろ？」
「実際にありますよ」
「え、あんの！？　うわー、すっげー見てえ！」
「この間先輩と一緒に見たんですけど、ストーリーも、肝心のプテラノドンのＣＧも全てが雑で荒かったですね。レンタルとは言え、あんな映画にお金を払ったのが非常に悔しいです」

「は？　プテラノドンが動き回って人食ったりして好き放題暴れ回ってる姿を見られるんだぞ？　俺なら一万まで出すね。大体さ、そんなもんタイトルで中身も分かるじゃん。ごちゃごちゃと意味分からない事言うな」
「悪趣味」
「誰にも迷惑掛けてねえんだから良いだろ」
「それで？　あなたの大好きなお馬鹿映画を楽しむコツというのは？」
「ああ、それね。だからさ、ボッコボコにやられちまう人間じゃなくて、暴れ回る化け物の視点で映画を見るんだ」
「……やっぱり悪趣味じゃないですか」
「お前だって見てるじゃんか。そんなに俺のムービーセンスを貶そうとするならさ、おすすめの映画ってのを教えてくれよ、ああ？」
「あたし、映画ってそもそも好きじゃないんですよね。ただ、じっと眺めるしか出来ませんから。やはり本が一番です」
「本だって眺めてるだけじゃねえか」
「本は自分の手で読み進められます。気になればページを繰れば良い。嫌なら、それ以上を拒むのなら本を閉じれば良いんです」
「そうかあ？　映画だって同じだろ。嫌になれば目を瞑って、耳を塞いで、何なら映画館から出れば良いんだしさ」
「うるさいですね。ごちゃごちゃとあたしに楯突かないでください。あなたはあたしの母親ですか？　違いますよね。だったら、そんな事をしないでください。あなたに話し掛けられるぐらいなら、虫と酢を合わせたモノを飲む方がマシなくらいあなたの事が嫌いです」
「俺はさ、世界中の人間を味方に回してもお前だけは敵に回したい」
「その一言にあなたの人となりが集約されていると言っても過言ではありませんね。唇が紫な小学生もびっくりするぐらいの卑怯者……っ」
「おい、大丈夫か？　どっか痛むのか？　つーか、幾らなんでも喋り過ぎじゃないか？」

「……あなたみたいなゲス相手でも、話をしていれば少しは気が紛れるんです。良いから大人しく不細工な声を聞かせてくださいよ」
「やだね。俺はもう眠い。寝るからお前も大人しくしてろよ」
「まさか、あたしを心配しているだなんて気、持ち、悪い事言うつもりじゃないでしょうね」
「誰が言うか。あと、気持ち悪いを分けて言うな。俺は純粋に眠いんだ」
「ふん、そこまで言うのならもう話し掛けてあげません。ああ、そうです、良く眠れるように歌って差し上げましょう」
「いらんわ。……なあ、今更だけどさ、どうして映画の話なんか振ったんだ？」
「映画と言いますか、人間が呆気なく大量に死んでいくような作品なら何でも良かったんですけどね。ふと、思ってしまったんですよ」
「何を？」
「映画や漫画の中で呆気なく、見せ場もなく意味もなく、何もなく殺され、死んでいく脇役にもならないモブキャラクターたち。まるで、あたしたちみたいだなって」
「……ああ、そういう事」
「あたしたちは主役にも脇役にもなれない背景なんですよ。こうして生きていられるのが不思議なくらい。そう、思いませんか？」

病院のベッドで眠るのはもう何度目だろう。
一はぼんやりとした意識の中で、そんな事を考えていた。何しろ、他にやる事がないのだから仕方ない。横になって、取り留めのない事を考えるぐらいしかないのだ。
寝返りを打つと、隣のベッドの住人である黄衣ナコトがハードカバーのＳＦ小説を読み耽っているのが見える。
「……はあ」
三日前の事を思い出し、一は溜め息を吐いた。

あの日、北駒台店全員でムシュフシュを倒した後、突如として現れた正体不明の少女に全員が倒された。何も出来ないままに、呆気なく、見せ場もなく、意味もなく、倒された。意識を失っていた彼が目覚めると、ここ、即ち病室にいたという次第である。

そして、襲撃を受けたのが自分たちだけではないと気付いた。ベッドが足りないから相部屋に回してしまったと、そう謝る看護士に尋ねるより先、彼は横たわるナコトの存在に気付いたのだ。

伝え聞く限り、勤務外以外にも『元』だろうが関係なく、駒台にいたフリーランスは軒並み襲われていたらしい。『図書館』黄衣ナコト、『神社』山田栞、『貴族主義』アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。彼女らの名を聞いた時、一の気は遠くなったのだが、幸い、皆命に関わるような事態は免れたそうだ。

勤務外にも重傷者は出ていないようだが、すぐには退院出来ないとも一は聞いている。

「溜め息が鬱陶しいです」

「だったらカーテンを閉めろ。前から言ってるだろうが。第一だな、俺までカーテンを開けろってなどういう事だよ」

「こっそり怪しい行為に耽られていてはたまったものじゃないですからね。監視ですよ、監視」

舌打ちをしてから、一は再度寝返りを打った。

店はちゃんと回っているだろうか。いや、アルバイトが全員病院送りになったのだ。あの店長と堀だけでは回るまい。どうしようもない事しか浮かんでこない。

「そんなに心配でしたらお見舞いに行けば良いじゃないですか。皆さんここに入院しているんでしょう？」

「あー、いや、まあそうなんだけどさ」

ナナだけはオンリーワン近畿支部の技術部に預けられている。面会謝絶というほどでもない。誰かに会おうと思えば昨日の内にでも会いに行けた筈なのだ。

「多分、会うのが怖いんだよ」

「皆さんに会うのが？　何故ですか、生還出来た喜びを噛み締め合うべきだと思いますがね」
「会って喋ったら、あの時を思い出しちまうかもしれない」
あの、赤い少女を。何も出来ずに失神させられた屈辱を。暴虐の化身に蹂躙された恐怖を思い出すかもしれない。傷を舐め合うならマシだ。だが、傷が余計に広がる可能性も充分に考えられる。
もう、戦いたくない。
もう、勤務外でいられない。
そんな言葉を誰かから聞くのはごめんだった。
「正直な、俺はもう嫌になってるんだよ。綱渡りだったけどよ、今までは何とかやってこれた。生き延びてこれた。けど、けどさ、あんな化け物ともう一度やり合えなんて無理だ。それに、もう……」
一はベッドの下を見ようとして視線を落とす。
「アイギスは、帰ってこない」
言葉にして初めて、今が絶望的な状況なのだと確認出来た。
ギリシャ神話、世界でも最高にして最も硬い盾。何者をも阻み、何者でさえも抜く事は叶わない。女神の遣わした勇者の盾。それが、正体不明のモノに砕かれた。抜かれた。大きく穴を開けられた。
もう戦えない。
もう勤務外でいられない。
一は目覚めた瞬間から気付いていたのだ。自分には優れた身体能力など備わっていない。アイギスを持って初めて戦える。アイギスを以って初めて勤務外でいられるのだ、と。
「無理ですよ。どれだけ威力のある武器を持っていても、どれだけ厚い防具を以ってしても戦えません。アレは、あたしたちの次元とは違う域にあるモノなんですから」
ナコトは枕元に本を置き、ゆっくりと横になる。
「あなたは地震や雷と戦えますか？　無理でしょう。アレは、災害と同じレベルなんです。ただ、結果だけを残してどこかに行ってしまう。出遭ってしまえば、巻き込まれてしまえば後は祈るのみです。

アレが過ぎ去った後、生きているか死んでいるかは運任せ。あたしたちが介入する余地はないんですよ」
「俺たちは運が良かったのかな……」
「さあ、どうでしょうね。あの時殺されていればこんな風に悩まなくても、考えなくても良かった。苦しむ必要なんかなかった。案外、運が良かったとは言えないかもしれません」
一は布団を頭から被り、強く目を瞑った。

爪を噛もうとして、咄嗟に手を引っ込めた。悪い癖だと言われ続けていたのを思い出して、店長は代わりに缶の中身を呷る。
「三日か」
「……ええ、三日経ちましたね。まだ三日なのか、もう三日なのか、私には分かりかねますが」
傍らにいた堀が答えた。彼はいつものようなにこやかな表情を作ってはいたが、髪はぼさぼさで目の下には薄っすらと隈も出来ている。昨晩からほぼ休みなしにフロアに立ち続けていた。アルバイト全員が病院送りになったせいで、堀の負担は計り知れないほどに大きい。
「皆さん、重傷ではないと聞いていたのですが」
「重症なんだよ。怪我も大した事はなかった。体に受けたダメージはとっくに治っているだろうさ」
「問題は心、ですか。いやあ、何ともセンチメンタルな話ですねえ」
笑って言う堀だが、彼の表情には翳りが見え始めていた。
「突然現れたガキに何もさせてもらえないまま全員がボコボコにされた。そして、そいつはまだ生きている。この街のどこかに潜んでいる。次に遭えば、今度はどうなるか分からん。そんな状況下に望んで進みたがる奴はいない」
「何者なんでしょうね。勤務外でもない。オンリーワンの社員でもない。フリーランス、と言う可能性はありますが、『図書館』も『

神社』も、『貴族主義』でさえも正体を知らなかったと聞いています」

「ならばソレ、か？　いや、違う気がするな」

「人間とは思えない戦闘能力だと思いますよ。仮に、その少女が人間だとしたら笑い話ですけどね」

店長は缶コーヒーをゴミ箱に投げ捨てて煙草に火を点ける。

「確かに笑えるな」

「いやあ、実際この後どうするかって話ですよ。幸い、ムシュフシュ以降は街も大人しくなりましたが、次にいつソレが現れるか分からないですからね」

アルバイトの面々には充分に休息を取らせたつもりだが、聊かその時間が長過ぎたのかもしれない。いっそ、考える時間を与えなければ良かった。店長はどうしようもない事に頭を悩ませ、不味そうに紫煙を吐き出す。

「いつまでも本部に頼る訳にもいかないな。と言うか、あいつらがいると息が詰まる。はっきり言うと邪魔だ」

店長は防犯カメラに移る人影を睨み付けた。今、フロアには増援としてやってきた社員が立っている。助かったとは思うのだが、感謝はしていない。

「では、誰かを呼び戻すと？」

「適任は一だな。あいつが一番ダメージが少ない。逆に、三森と糸原、ゴーウェストはまだ駄目だ。下手に粘ったか知らんが、他のメンバーよりも傷が深い」

「確かに一君になら一人でもフロアを任せられます。しかし、彼の戦闘能力は……」

堀は眼鏡の位置を直し、言いよどんだ。彼が何を言おうとしているのか、店長にも分かっている。

「アイギスはもう、ない。知っているさ、一には戦う力がないって事はな。それでも、戻ってもらう」

「ですが、ソレが出現した場合はどうするんですか。まさか、一君

を戦場に送り出すなんて事はしないでしょうね」
　場合によっては、無力と化した一にもソレと相対してもらうつもりだ。アイギスを失ったと言えど、彼には今まで培った経験がある。暇を見つけて新たな武器でも持たせ、使い方を覚えさせれば良い。精々盾にはなるだろう。
「状況によるが、私だって死ぬと決まっている人間を送りはしないさ」
　だが、正直に胸の内を明かすほど店長も馬鹿ではない。ここでそんな事を言えば堀の逆鱗に触れてしまうのは、火を見るよりも明らかだ。
「その言葉、信じていますよ」
「ああ、そうしてくれ。心配するな、一を戻した後は立花と神野も呼ぶ。あの二人は比較的ダメージが軽い。ナナも調整が済み次第戻ってくる。そうだな、あいつには一日、長くても二日乗り切ってもらえば済む話だ」
「……見舞いには行きましたか？」
「ん？　ああ、あいつらのか。いや、行っていないな。堀、お前は行ったのか？」
　堀は少しだけ店長を見据えた後、気を取り直したかのように視線を反らす。
「ええ、ナナさんには会えませんでしたが」
「そうか。……それで、何が言いたいんだ？」
「少々、甘く見てはいないでしょうか」
　煙草を灰皿に強く押し付けると、店長は堀の表情を観察し始めた。彼の感情を察すると同時、ああ、と。思わず息を漏らしそうになる。
「あなたは上に立つ者としては悪くない資質をお持ちだ。だが、少しばかり他人を、人間を見下しているきらいがある。将として、兵を駒と見る考え方は実に素晴らしく思います」
「だが、時代にそぐわない。勤務外といえどあいつらをもっと人間らしく扱え、か？」

「分かっているなら、どうして改めないのですかっ？　彼らは人間だ。年端も行かない子供らも預かっていると、あなたはもっと自覚すべきなんです。彼らにも意思がある、感情がある。駒じゃなく人間なんだ、あなたは、本当に分かっているのですか……？」

言われずとも。今更言われなくても分かっている。だから彼女は――。

「一を呼び戻すぞ」

ナコトが眠ってしまい、話し相手がいなくなった。退屈になった一はベッドから下り、売店で雑誌でも買おうかと思い付く。思い立ったが吉日。シャツの上にジャージとコートを羽織り、スリッパで床をぺたぺたと鳴らしながら病室をこっそりと抜け出した。廊下に出ると、薄っすらと消毒剤の臭いが鼻を突く。後、どれだけこの臭いと付き合わなければいけないのだろう。少しばかり気が重くなりながらも、彼はゆっくりと歩き出した。

勝手知ったる、とまではいかないがもう何度も来た事のある建物である。さして迷う事もなく、彼は売店まで辿り着いた。

「……あ」

「あ……」

雑誌の立ち読みをしていた人物と目が合う。その人物は、いつものスーツではなくジャージを着ていた。服装こそ野暮ったいのだが、背が高いのと、スタイルが良い事もあってか周りの注目を集めている。

「その、お久しぶりです」

「ん、ご無沙汰」

糸原四乃。

彼女はぎこちない笑みを浮かべると、雑誌を元の位置に戻した。

「買わないんですか？」

「んん、じゃ、買おうかな。ちょい待ってて」

一は頷き、売店の外に出る。髪の毛をくしゃくしゃと掻き、失敗したなと内心で呟いた。

何の準備も出来ないまま、出会ってしまった。気の利いた事を言える性質ではないと自分で分かってはいるのだが、もっとまともな事は言えなかっただろうかと煩悶する。

「何頭抱えてんのよ」

「……いえ、別に」

「ふーん？　それより、はい。熱いから早く持ってよ」

差し出された缶コーヒーを受け取ると、一は微妙な表情を浮かべた。

「あんたって甘いのが好きなんじゃなかったっけ？」

「好きですけど、その、おごり、ですか？　糸原さんがおごってくれるんですか？」

「どういう意味よ」

「裏があるんじゃないかと思って」

糸原は無言で一を叩く。

「やっぱ、あんたの頭は良い音を奏でてくれるわね。中身空っぽなせいかしら」

「頭空っぽの方が夢を……と、外は寒そうですね。俺か、糸原さん、どっちの病室で話します？」

「私んとこは嫌よ。ヤンキーとの相部屋だかんね」

こっちだって、あのナコトとの相部屋なのだ。一は考えに窮し、中庭に視線を遣る。

「ああ、でも良い天気ですね。散歩してる人もいるし、あそこのベンチなら陽が当たっていますし」

「し？　何よ。言いたい事があるなら早く言いなさい。言ってみなさい。言えるものならね」

「外で話しませんか――――ってうおおお！」

言った瞬間、一の顔のすぐ傍を雑誌が通り抜けた。

「何するんですかっ！？」

「座り込んでないで中庭に行くわよ。ほら、皆さんのご迷惑になるじゃないの」
「行くんなら本投げなくても良いでしょうに……」
「あ、その本拾っといてー」
拒否すれば次は何が飛んでくるか分からない。一は渋々雑誌を拾い上げ、糸原の元まで持っていく。
彼女と並んで少し歩き、中庭へと通じる扉を開けた。風は冷たいが、我慢出来ないほどでもない。口から出任せ程度の発言だったのだが、外は存外に暖かかった。
「あーーっ、空気が美味い！」
「そうですか？」
「だって、病院って独特の臭いがするんだもん。しかも病人ばっかりだしさ、あれじゃあ何しに病院に来てるか分からないわ。病気になりに行くようなもんよ」
それはそうなのだが、何も声を大きくして言う事ではないだろうと、ちくちくと刺さる視線を気にしながら一は思う。
「ま、まずはあれよね」
糸原はベンチに腰掛けると、自身の隣をぽんぽんと叩いた。
「元気してた？」
「……どう見えますか？」
一は彼女の隣に座り、缶のプルタブを押し開ける。
「思ってたよりかは元気そう、かな」
「糸原さんは元気そうですね。もっと大人しくしてくれた方が助かりました」
「あら、そう？　でも、こう見えて結構へこんでんのよ、私」
微笑を浮かべると、糸原は雑誌を膝の上に乗せた。それに視線を向け、少し声を落とす。
「どれくらいかって言うと、もう、勤務外なんて辞めようかなーって思ってるぐらい」
予想はしていた。彼女と顔を合わせて、彼女が口を開けば、こう

なる事ぐらいは。愚痴と弱音なら幾らでも聞ける。聞こうと思う。しかし、つられてしまうのが怖い。

「冗談でしょう」

「は、その台詞が冗談だっつーの。あんたって死にたがりな訳？」

一は首を振る。望んで死のうだなんて、誰が思うのか。

「私だってね、あんたとは比べ物になんないぐらいの、そりゃもうやばいってぐらいの死線を潜ってきたわ。フリーランスになって、勤務外になって、ソレや同業者ともやり合った。死んじゃうかもって、そう思った事も何度かあったわ。けど、アレは別物よ」

手に持った缶コーヒーが少しずつ冷えていく。

「分かる？　今私はこう思ってる。どうしてまだ生きてるんだろうってね。……化け物の相手なら幾らでもしてやるわよ。それこそ、土蜘蛛何千匹とだって。けど、アレは嫌。アレだけは嫌なの。あんなのと戦うくらいなら、ソレの群れん中に突き飛ばされる方がよっぽどマシ」

一にはあの少女の恐ろしさがはっきりと分かっていない。だが、自分よりも経験豊富且つ、力のある糸原がこうまで言い切り、こうまで怯えているのだ。

「……本当に、辞めちゃうんですか」

「むしろ、今まで続けてこれたのが奇跡ね」

そう言って糸原は雑誌に手を伸ばす。一は何も言えず、彼女がページを繰るのを暫くの間眺めるしかなかった。

「面白いですか？」

「全然。何でもかんでも頭にヤングって付けりゃあ良いってもんじゃないわよね。後で読む？」

「面白くないって断言したのを薦めますか普通」

「あ、ちょっとコーヒー取って」

「……？　はあ、良いですけど」

糸原の缶コーヒーは彼女の手元に近い。しかし、自分で取れと一には言えないので、彼は手を伸ばして缶を掴んだ。

「はい、どうぞ」
「ん」
と、糸原が手を伸ばして缶を受け取ろうとした時、彼女の手から雑誌が落ちる。
「あーあー、何やってんですか」
「あ……ごめ――――」
「うおっ」
からん、と。乾いた音が響いた。缶はコンクリートの上を転がり、まだ中身の入ったそれは地面を濡らしながら回り続ける。
「……嫌がらせですか？」
「えへへー。好きな子の気を惹きたくて意地悪する小学生みたい？」
「馬鹿じゃねえの」
一は転がった缶と雑誌を拾い、缶をゴミ箱に捨てた。
「本、まだ読みますか？」
「ん、いい。読まない」
何か、糸原の様子がおかしい。失礼かもしれないと思いつつ、一は注意深く彼女を観察し始めた。
「なーに見てんのよ。目の保養でもしたいのかしら。そうね、何ならポーズでも付けた方が良い？」
「結構です」
どうして気付かなかったのだろう。
「……糸原さん」
今日は、今は寒い訳ではない。そう、手が小刻みに震えるほど冷たい事はない筈だ。ならばと一は自身に問い掛ける。
「何よ」
「そんなに寒いですか」
「……っ」
糸原は何食わぬ顔で両手を引っ込めた。ジャージの袖を伸ばし、一からは見えないようにする。
「あー、ちょい寒いかな。ん、そろそろ戻ろっか」

「隠さないでください。何が、あったんですか？」
「シンナーとか吸いまくった。ひっひっひっ、マジにぶっ飛びそうだぜぇー、髪型をモヒカンにしそうなくらいに飛びそうだぁー」
「嘘吐け！」
けらけらと笑い、糸原はベンチに寝転がる。
「バレたからには仕方ない。つーか、まあ、言おうとは思ってたんだけどね」
「手の事をですか？」
「それもあるかな。……この手さ、意識してなきゃずっと震えてるのよ。は、みっともない話ね」
彼女はまた笑ったが、どうにもぎこちないそれだった。一は立ち尽くしたまま動けない。
「あの日目覚めてから、ずっと」
「どうして、医者は何か言わなかったんですか？」
「さあ？　ま、多分こいつはビビってんのよ。もう糸なんか握りたくないよー、戦いたくなんかないよーってね。全身ガタガタ震えるよかマシだと思うけど」
ごくりと唾を飲む。
「治るんですか？」
「……私の手はチアキの喉と同じなんですって。特に、指。先っぽに行けば行くほど言う事を聞いてくんないの」
「そんな……」
崩れ落ちそうになり、一は必死で踏み止まった。
チアキの喉はあの事件以来未だ完治していない。その兆しすら見せていない。炉辺が言うには外傷こそ治ったが、心にはまだ傷が残っている。問題は、重要なのは精神にあるのだと。いつ癒えるか、癒えるのかどうかすら定かではない。
しかし彼女の場合、日常生活には支障をきたさない。だが、糸原は違う。手なのだ。現に雑誌や缶コーヒーすら落としてしまう有様である。

少なくとも、今までと同じようには過ごせない。生きていけない。
「……捨てないでね」
一の肩がびくりと震える。
「捨てるってそんな、犬猫の話をしているんじゃないんですよ。俺を、俺を馬鹿にしないでください」
「ごめん。ごめん。でも、それぐらい不安なのよ。だって、もう……」
「言いましたよね、糸原さん。俺たちは確かに歪だけど、家族なんです。俺は、家族を見捨てない」
彼女の弱音が突き刺さる。多分、当分は耳から離れないだろうと確信していた。
「ご飯食べさせてくれんの？」
「勿論です」
「必然的にあーんって体勢になるけど、本当に良いの？　ファミレスとかでもあーんってしてくれる？」
「……勿論です」
自信はあまりなかったが。
正直、一は勤務外を辞めたかった。逃げたかった。ここからいなくなりたかった。だが、続けなければならない理由もある。
「……ねえ、前にした話覚えてる？　一緒にどこかへ行こうって奴」
「ええ、覚えてますよ」
嫌なタイミングで切り出されたものだと、一は頭に手を遣る。今となっては、その話が酷く魅力的だった。

皆、幸せだった。
三人ともが美貌を称え合いながら仲睦まじく暮らしているだけだった。
ああ、なのにあの女は。
美しくて、何が悪い。

ベッドの上で過ごすと言うのは非常に退屈である。相部屋の住人がいなくなっただけで、静けさが耳を痛いくらいに刺していた。
「……お」
だから、物音一つにさえ過敏に反応する。起こった変化には必要以上に食い付いてしまう。
「よう、どこ行ってたンだ?」
「……関係ないでしょ」
三森は体を起こし、カーテンを開けた。拒絶の言葉を喰らうが、糸原との会話ではそれが普通だったので彼女は挫けない。
「どうせ売店だろ? 雑誌とか買ってねェのかよ。退屈で退屈でさ、死にそうったらねーよ」
「死ねば良いじゃない」
「何か冷たくね?」
「優しくしてやる義理はないわ。疲れてるの。話し掛けないでよね」
糸原はそれだけ言うと、カーテンを閉めてベッドに寝転がる。
「なァ、いつンなったら退院出来るんだろうな」
「怪我が治ったらでしょ」
「治ったっつーの。精密検査だとか何とか理由付けやがってよゥ。

あーあーあーあー、やァだやだ」
「良いじゃない。怪我が治ったんだから」
「……？　そっちだって治ってンじゃねェの？」
運び込まれた時はどうなるものか分からなかったが、お互い大した怪我はなかった筈である。三森は小首を傾げ、ベッドから下りる。
「言っとくけど、開けたら殺すかんね」
釘を刺されたが無視してカーテンを開けてやった。糸原は布団を頭から被り、何事かを喚く。
「開けるなって言ったじゃないのー！」
「モゴモゴ何言ってっか分かンねェ」
三森はベッドの端へと強引に腰を下ろし、足をぶらぶらとさせた。
「ま、当分はここで過ごすンだからよ、仲良くやろうぜ。な？」
「な？　じゃないわよボケ」

暫くの間、一はベンチから立ち上がれないでいた。
原因は糸原の体調にある。彼女の体はこの先どうなるか分からない。戦う事がどれだけ悪影響を及ぼすのか、今になって一は分かり始めている。
「……はあ」
缶コーヒーはすっかり冷えてしまった。彼の意気はすっかり萎え、すぐそこにあるゴミ箱へ捨てに行くのも億劫な有様である。一は長い息を吐きながらベンチに横になり、曇り空を見上げた。
本当に、この街から――。
だが、全てを置いて逃げられるとは思えない。駒台では色々なものを残し過ぎた。自分一人だけ戦いから逃げ出そうなどとは、もう思えない。
「あら、ごきげんよう、ウーノ。こんなところでお目に掛かるとは……運命を感じざるを得ませんわね」
一は突然話し掛けられた驚きを隠しつつ、ゆっくりと体を起き上

がらせる。
「ああ、久しぶり。具合はもう良いのか？」
「ふふ、バッチリですわ」
そう言って笑みを浮かべるのはフリーランス『貴族主義』、アイネだ。彼女は上下黒のジャージ、瓶底眼鏡、髪の毛は括ろうともせず垂らしっ放しと野暮ったい風体である。
「……ま、病院だもんな」
「何かおっしゃいまして？」
「いや、何も。……あ、隣座るか？」
「恐れ入ります」
アイネは少し一と間隔を取ってベンチに座った。
「アイネは結構平気そうだよな」
「どういった意味でしょうか？」
「いや、アイネもさ、アレと遭ったんだろ。その割にはあんまりへこんでないって言うか、いつもと変わらないなあって」
「さようでございましたか。……そうでございますねえ、やはり鍛え方が違いますから。私もフリーランスと畏怖される存在、伊達には名乗っておりません。他のフリーランスがどんな修羅場を潜ってらしたのかは存じ上げませんが、私と肩を並べられるような方は殆どいらっしゃらない筈です」
えへん、と、アイネは胸を張って誇らしげに言う。
ネガティブなくせに打たれ強くはあるんだな、と、一は彼女を羨ましく思った。
「そうおっしゃるウーノも平気そうに見受けられますが。アレと、遭ってしまったのでしょう？」
一は頷く。遭った。出遭った。アレ――――赤い、赤いダウンジャケットを羽織った少女と。
「平気そうに見える、か。いや、こう見えてズッタズタなんだぜ。全然普通じゃない。アイネは、強いんだな」
「……強いか弱いかなどと、あなたは意味のない事をおっしゃるの

ですね」
「意味が、ない？」
「ええ、おっしゃる通りですわ。だって、そうではなくって？　私たちはどこまで行っても所詮は人間ですもの。人間である以上、人を超えた存在には抗えません。百の鬼を、千の魔を、万のソレを殺戮せしめたとして、たった一発の銃弾で死んでしまいかねません。私たちはソレと戦うモノです。果たして、人間同士が定めた強弱に意味はあるのでしょうか」
　そんな言い方をされては否定出来ない。一は黙り込み、冷たい缶の中身を飲み干した。
「悪いな、アイネ。お前の事を何も分かってないのに勝手な事言っちゃってさ」
「まだ、私たちはお友達になったばかりです。これから、その、もっと仲良くなっていけばよろしいと存じます」
「ん、ああ、そうだな」
「……薄いですわ」
「は？」
　アイネは立ち上がり、両手で顔を覆い隠す。
「薄いですわあっ！」
「は、え、と、何？」
　突然の奇行に一は戸惑いを隠せない。彼の困惑した様子などどうでも良いのか、アイネは呻きながら体をくねくねとさせる。
「い、いや、落ち着けよ。全然薄くねえから、むしろ濃いからお前」
「薄いのはあなたのリアクションです！」
「俺のっ！？」
　訳が分からない。周囲の視線が痛い痛い。どうにかしてアイネを落ち着かせてやりたいが、近寄る事は困難に思われた。
「先刻の発言はなけなしのっ、精一杯の勇気を振り絞って申し上げたのに！　ああ、ああっ、あなたと私の友情とはそのようなレベルのものだったのですね！」

「え、そうだったのか？」
「酷い、惨い、余りにもな所業ですわぁ！　やっぱり私にはぼっちがお似合いなのですね！」
　友達どころか知り合いすら辞めたい。そう思うのは間違いじゃない。
「……頼むから冷静になってくれないか」
「落ち着いていられますか！　この世界には敵しかいないのです！」
「俺と、アイネは、友達だってば。お・れ・は・み・か・た・だ」
　一言一句しっかり区切って言い放つと、アイネはぴたりと動きを止める。
「本当、ですの？」
「本当本当、それ以上おかしな挙動を取られたら断言出来なかったかもしれないけど」
「良かった……それでは、あなたと私は親友で相違ないのですね」
「え、親友？」
　うーん、そこまでは。ほら、だってまだ知り合ったばっかりじゃん？　みたいな気持ちを見抜かれてしまったのか、アイネは再びわっと喚いた。
「うわーっ、ごめんごめんごめんってば！」
　誰か助けてくれ！
　一の祈りが届いたのか、それとも中庭で騒がしくしている事を言い付けられたのか、とにかくこちらに看護士が駆け寄ってくる。その姿を見て、彼はほっと胸を撫で下ろした。見知った人物だったので何とかなると安心したのである。
「はじめちゃーーん！」
「……しまった。そういう人だった……」
　下の名前を呼ばれ、恥ずかしくなった一は俯いた。
「喧嘩はダメだよー！」
　手をぶんぶんと振り回しながら、彼の名を構わず叫ぶのは炉辺である。彼女はまだ喚いているアイネに力いっぱい抱き着いて頭を撫

でた。
「はじめちゃんってば、女の子を泣かすなんて最っ低だよ！」
びしっと指を突き付けられ、一は頭を下げる。
「ほらほら泣かないの。どしたのアイネちゃん、はじめちゃんに色んなトコ触られちゃったの？」
「触らないですよ！」
「はじめちゃんはいっつも女の子と一緒にいるよね。もう、女泣かせなんだからー」
あどけない笑顔で言われても困るだけだった。一は頭を掻きながら、ベンチに体を預ける。
「色々と、ごめんなさい。騒がしかったですか？」
「うん」
あっさり。ばっさり。
「……ごめんなさい」
「よろしい。さ、アイネちゃんにも謝りなさい」
「う。あ、アイネ、ごめんな」
もう成人を迎えたと言うのに、炉辺に掛かればまるで子供だ。一は気恥ずかしくなりながらも、これ以上事を荒立てたくない気持ちから謝罪の言葉を口にする。
アイネは炉辺の胸に顔を埋めながら口を動かした。
「あは、くすぐったい。……ん、うんうん。はじめちゃん、良かったね、アイネちゃん許してくれるって」
「そりゃ、良かった……」
「ただしジェットボックスシュウマイを買ってくれ、だって」
「もう売ってねえよ」
しかもここは近畿である。
「あ、そうだ。はじめちゃんにお客さんが来てるんだった」
「お客？　あ、小さい女とでかい男の二人組だったら帰ってもらってください」
「んーん、残念でした。お客は堀君だよ」

「堀さんが？」
堀には二日前にも見舞いに来てもらっていた。だから、一は溜め息を吐く。
「良い予感はしませんね」
「んーん、残念それもハズレ。なんと、はじめちゃんは今日を以って退院出来るのでしたー！　わー、ぱちぱち」
いつもなら許せる炉辺の能天気さが一を苛立たせる。彼は何か言おうとして口を開き掛けたが、結局何も言わなかった。
「……堀さんはどこに？」
「駐車場で待ってるんだって。さあ、退院の準備をしようね。本当ならパーティーの一つでも開いてあげたいんだけど……ごめんね？」
戦場に送り出されるのを素直に喜ぶ馬鹿はいない。一は曖昧に笑ってその場を濁し、炉辺よりも一足先に病室へと向かった。

退院の準備と言っても、一がする事は特にない。オンリーワンが手を回していたのだろう、アイネと炉辺に見送られながら、彼は少ない荷物だけを手に病院の裏口から出て行った。
荷物とは、一が運び込まれた時に近くにあった、穴の開いた傘だけである。彼はそれを握り締めたまま、深く息を吐いた。
「……ふう」
こうして自分が呼び出されたのは、他の勤務外よりもダメージが少なかったからだろうと一は推測している。支部から応援は来ているのだろうが、もう店が回らなくなりつつあるのだ。そして、必要とあらばソレとの戦闘にも駆り出される事を覚悟している。覚悟しているが、死にたくはない。
駐車場の近くまで差し掛かると、黒いワゴンが見えた。その車のボンネットに背を預けている男が一人。
「堀さん」
「……ああ、一君。どうもすみませんね」

声を掛けると、堀はばつが悪そうに笑う。退院おめでとうなどとは、間違っても口にしないのが一にとってせめてもの救いであった。
「他の方への挨拶は済みましたか？」
「いや、それがまだなんです。どうにも顔を合わせ辛いって言うか、会っても、何を話して良いのか分からなくなりそうでしたから」
「なるほど。ま、心配は必要ないでしょう。一週間もすれば、全員と店で顔を合わせる事になりますよ」
一週間で糸原の状態が良くなるとは思わない。一は否定も肯定もせず、曖昧にして場を流した。
「やっぱり、このままバイトに直行って感じですかね」
「申し訳ない。応援の社員が疲労のピークに来ていましてね。と、言い訳は止しておきましょう」
「構いません。そろそろ、入院にも飽きてましたから」
一は苦笑し、助手席のドアを開けようとする。
「ああ、ちょっと待ってもらえませんか」
「……？　何を、ですか？」
「一君、私はオンリーワンの社員です」
そんな事は知っていた。一は頷きはするも、堀の意図を読めないでいる。
「ですが、その前に一人の男でもある。社員としてではなく、堀と言う個人の意見として聞いてもらいたい。一君、君はこの車に乗らなくても良い」
堀は眼鏡の位置を押し上げ、一を見据えた。
「乗ってしまえば、戦う事を余儀なくされる。店に戻れば、私はもう手助け出来ません。店長は君をソレとの戦闘には出さないと言っていましたが、実際はどうなるか分からない。少なくとも、後二日は一君だけの状況が続くんです」
「……でしょうね」
「ここで選んでください。乗るか、乗らないか」
戦うか、戦わないか。

逃げるか、逃げ出さないか。
堀は決して強要している訳ではない。あくまで、一に選択権を与えているのだ。傲慢かもしれないが、彼の立場からしてみればぎりぎりの妥協点である。
「乗ります」
呟き、一は助手席側のドアを開けた。
「……乗りますか。一君、理由を尋ねても構いませんか？」
「店に戻る理由ですか？　正直、楽観的に見ている部分はありますね。都合悪くソレが出るとも限りませんし、出なけりゃ店でレジを打つだけですから。それに、俺が一人なのは長くて二日なんでしょう」
「ええ、恐らく明後日にはナナさんが戻ります。次に神野君と立花さんが戻る、筈です」
堀も運転席側のドアを開けて車に乗り込む。
「しかし、また正体不明の少女が出現するかもしれません。その時はどうするんですか？」
「その時に考えますよ。それより、堀さんたちでもアレの正体が掴めていないんですね」
「君に後を任せる身としては、お恥ずかしい話です。が、今の今まで何も考えなかった訳ではありません。私見となってしまいますが、少なからず思い付いた事もあります」
「聞いても？」
勿論だと、そう言わんばかりに堀は頷いた。
「まずはアレをどう捉えるかです。人間なのか、ソレなのか、もっと別のモノなのか。話を聞く限り、一応は人間の姿をしているとの事でしたね」
「あくまで、形は、ですけど」
「充分です。次に、君たちを襲った理由。襲われたのはオンリーワンの勤務外、そしてフリーランスが三人でしたね。それ以外に被害に遭ったという話は聞いていませんから、これで全員でしょう」

一は曖昧に頷く。この段階では堀が何を言おうとしているのかが分からない。

「恐らく、その少女とやらは戦闘能力のある者に対して襲い掛かっていたのでしょうね。それもある程度条件付けをされて」

「能力って……こいつは勤務外だとか、フリーランスだとかって、どうやって見分けるんですか？」

「何者かが少女に吹き込めば簡単な事ですよ。一君たちは駒台で戦っていたでしょう？　顔だとか、特徴だとか、その時の情報を握っている者がいてもおかしくはない筈です」

気付かない内に自分の情報を知られていると言うのは気持ちの良いものではない。が、そうだとしても確かにおかしくはなかった。

「条件ってのは何なんですか？」

「例えばですが、駒台にいる勤務外とフリーランスを襲えといった類の指示があったのではないか。そう、私は睨んでいます」

「つまり、条件ってのが『この街にいる』って事ですね。でも、それなら変じゃないですか？　ここにはまだ勤務外が残っているじゃないですか。北駒台だけじゃなく、南駒台店の勤務外も。もしかしたら、まだまだ別のフリーランスもいるかもしれない」

「いえ、実はそうではないんですよ」

「……そうじゃ、ない？」

堀はキーを挿し、エンジンを掛ける。心地悪い振動が腰から伝わり、一は僅かに身震いした。

「南の方々はその日、全員が非番でした。もとより、まだオープンしていませんからね。何と言いますか、つまり、南駒台店の勤務外はその日、勤務外ではなかった、と言う事になるんです」

偶然だ。一は心の中でそう断じ、話の続きを待つ。

「フリーランスについてはハッキリと分かっていません。もしかしたら、私たちの知らないモノが潜伏しているかもしれません。が、確認している限り『図書館』、『神社』、『貴族主義』以外のフリーランスは駒台にいなかったという報告があります。例えば『騎士

団』は別の地域でソレを狩っていたとか……」
「……じゃあ、まさか本当に……？」
本当に、少女が動き出した時に駒台に存在していた勤務外とフリーランスが襲撃された、とでも言うのか。偶然も許されるのは何度目までか。信じられない事実に、一は驚きを隠し切れない。
「一般に被害は出ていません。勤務外と、フリーランスだけが狙われた。ソレに関係しているのではないか。そう疑うのも無理はありませんね。そもそも、おかしいとは思いませんか？」
「いや、おかしい事は山ほどあるんですけど」
「ああ、いやあ失礼しました。私が言いたいのはですね、勤務外だから、フリーランスだからなんて関係なく、意味もなく、突然襲うなんて輩が何者だと言いたいのです」
「まあ、普通に考えりゃ社会で生きていくには危うすぎる性格と言うか、性質と言うか……」
あんな力を持つ者が何者にも縛られず生きていく事が可能なのか。
――いや……。
「少女の行動からは理性を感じられません。一君が思うように、日常生活すら危ぶまれるほどの獣性。そんなモノが、果たして標的を定めて動けるでしょうか。その標的についての情報を収集出来るでしょうか」
「思い辛い、ですね」
「ならば、答えは一つです」
「一つ、ですか」
堀はそれ以上何も言わなかった。一社員としての領分を越えたと思っているのか、はたまた、口にも出したくない事なのだろうか。
恐らくはその両方だと、一は思う。
あの少女は、何者かの庇護を受けている。力でしか自身を誇示出来ない、その存在を示す事の出来ないモノが満足に『普通』を演じられる筈がないのだ。
そして、七名の勤務外、三名のフリーランスを易々と撃破しての

けた存在を飼い慣らすモノなど一つしか思い付かない。
――――円卓。
「さて、そろそろ出しましょうか。あまり時間を食ってしまうと店長に怒られてしまいますからね」
「ええ、お願いします」
車は駐車場を抜けて、オンリーワン北駒台店へと急ぐ。一を、戦場に連れて行く為に。

「本当にここで良いんですか？　店の前まで送っていけますけど」
「いえ、ここで良いんです。それじゃあ堀さん、ありがとうございました」
「いやあ、お礼を言うのはこちらの方でしょう。それでは一君、二日間よろしくお願いしますね」
車から降り、堀に別れを告げたのは北駒台店の五百メートル程手前の道だった。
ずっと病院のベッドで眠っていたせいで体が鈍い。慣らしておきたかったし、少し、考えたい事もある。
堀の手前だったので本音は言えなかったが、正直、理由などなかった。
――――店に戻る理由ですか？
多分、彼が聞きたかったのはそんな理由ではない。気付いていながらも、一は本心を隠したままにしておいた。
「……聞きたかったのは、多分……」
「独り言か。いやいや、寂しいものじゃな」
「っ！」
背後から鈴のように高く、甘い声。振り向くと、そこには楽しそうな顔をした少女がいた。その少女――座敷童子の槐は大量のストラップが付いた携帯電話を袖の中へとしまうと、にいいと歯を見せて笑う。

「他人の独り言を盗み聞きとは趣味が悪いな」
「ふうむ、許せ。何せ昔からわしの姿を認められる者は少なかったのでな。ついつい気配を消して聞き耳を立ててしまうのじゃ」
「悲しい癖だな」
「だから許せと言っておる」
全く悪びれた素振りを見せずに槐は言ってのけた。
「して、充分な休息は得られたのかのう？」
「……ああ、知ってたのか」
「ま、粗方はな。衛や早紀は連絡の一つも欲しかったと嘆いておったぞ」
「そりゃ悪い事をしたな。で、そっちは何か用事でもあったのか？こんなところをうろついてたら怖いおじさんに攫われちまうぞ」
槐は不機嫌そうに眉根を寄せて一をジト目で睨む。
「わしを子供扱いするでない。このような形をしているが、わしは主よりも年上のお姉さんだというのを忘れるな」
「三百過ぎてんだから姉さんじゃなくて婆さんだろ」
「不幸になっちゃえー！」
「やめろ、お前が言ったら本当に不幸になっちまうだろ」
何て恐ろしい事を言うんだと、一は心底から戦いた。ただでさえ幸運とは呼べない人生なのである。これ以上不幸になったら死にたくなる事請け合いだった。
「誰がババアか。折角主へ忠告をしに来てやったと言うに」
「忠告？」
「うむ、忠告じゃ。一、この街の名を知っておるかの？」
一瞬馬鹿にされているのかと考えながらも、
「駒台。くるくる回る駒に、物を置く台で駒台」
一応は答えておく。
「正解じゃ。ま、半分くらいはの」
「半分？」
「主は駒台の地の由来を知っておるか？」

そこの住人だ。名前ぐらいなら当然だが、由来までは気が回らない。むしろ興味がないので知ろうと思っていなかった。
「……あれか、将棋の駒台から来てるのか？」
「たわけ。それではそのまんまではないか。駒台とはな、降魔から来ておるのじゃ」
「ごうま？」
聞いた事のない単語に一は首を捻る。
「魔が降りると書いて降魔じゃ」
「何だか物騒なネーミングセンスだな。大体、魔ってなんだよ、魔って」
「要するに悪い奴じゃな」
ざっくりとした説明だが、実に分かり易かった。
「降魔とはその字面の通り、仏教においては魔を降す、魔に勝利する意味合いを持っておる」
「へえ、そうなのか。てっきりもっとえげつない事だと思っちまった」
「いや、あながち間違いではない。この地で魔を降す為にはどうしても必要不可欠のモノがあるからのう」
「不可欠？」
槐は意味ありげに口角をつり上げる。
「魔じゃよ。降す対象の魔がおらんでは、降魔にならないではないか。この街にはそういったモノが多過ぎる。そうは思わんか？　魔が降りる。魔が降る。どちらでも降魔に変わりはないといったところかの」
「……心当たりがない訳じゃあないけど」
ソレ。勤務外。フリーランス。前々から思っていた事だが、駒台には確かに魔と呼べるようなものが多過ぎる。だが、地名の由来と結び付けるには聊か乱暴ではないだろうか。しかし、否定するだけの材料が今の一にはない。
「そういや、前にも言われたな。魔が降りているとか」

「忘れっぽい奴め。今からそんなではお主の将来が心配になるわ」
「うるせえよ。それより、そんな事をお前がどうして知ってるんだ？」
「わしがどこに住んでいるか忘れたか？　あの楯列の家じゃぞ。この街の事なぞソファで寝そべりながらゲームのレベル上げしながら深夜アニメを見ながらお菓子を頬張りながらでも勝手に入ってくるに決まっておるじゃろう」
　堕落し過ぎだった。でもとても羨ましかった。
「結局何が言いたいんだ？　忠告って、俺に何か起こるとでも言いたいのかよ」
「そんなところじゃ。そんな由来を持つ地じゃからの、何が起こっても不思議ではない。あんな事があったばかりじゃ、主には少しばかり気を張ってもらわねば、そう思ってな」
「精々気を付けるよ」
　アイギスは、ない。今手に持っているのは穴の開いた傘でしかないのだ。何かが起こってからではもう遅い。
「では一、頭を下げろ」
「は？」
「実はな、主に与えた運気の残りが少なくなりつつあるのじゃ。この先は何が起こるか分からん。そこでＭＹＷ、マジで優しいわしとしては……」
「嫌だ。往来で小さい子に頭撫でられるなんて屈辱の極みだ」
　一は背を向け、店に向かって歩き出す。
「なっ、主っ、わしの誠意を無下にしようと言うのか！」
「押し付けがましいのは誠意とは言わない」
「良いから頭を下げんか！」
「もう帰って終わったゲームのレベルでも上げてろよ」
「とっくに上げとるわ！」

ちゃんと、目を見て話して？

「来るのが遅いから死ね」

一と顔を合わせた店長の第一声はこれだった。

「……退院おめでとうぐらいは言って欲しかったんですけどね」

「言って欲しかったのか？」

「まさか」

煙を手で払い除けながら、一は久方ぶりに制服へ袖を通す。制服を着たからといって何かが変わる訳ではないが、それでも何か感慨深いものはあった。

「店はどんな感じでした？」

「とりあえず応援は来たがな、芳しいとは言えん。納品と客の対応に追われて掃除なんて殆どやっていないな」

「掃除からやっていけば良いですかね。今は……二時前ですし、お客さんもあまり来ないでしょう」

「最初から客の来る店じゃないけどな」

笑えない。一は煙の来ない位置の壁を背にして一息吐く。

「一、見舞いに来て欲しかったか？」

「来たかったんですか？」

「行きたい筈ないだろう。誰が好き好んで病院に行くか。私が聞いているのはお前の気持ちだ。お前は、私に来て欲しかったのかどうか。そこを聞いている」

予想していなかった質問に一は困ってしまった。『あの』店長にしては殊勝過ぎる質問だったのである。

「他の人はどうか知りませんが、俺に限って言えば来て欲しくなか

ったですね。入院してる時にまでバイトの事は考えたくありませんし」

「……やっぱりな」

「何か言いました？」

「いや、やはり私は正しいのだと確認しただけだ」

「そりゃよござんすね」

それ以上店長が何も言ってこないのを確認し、一はダスタークロスとモップ、それからちり取りを持ってフロアに向かった。

空を飛んでいる。宙に浮いている。どう形容しても構わないのだろうが、人間には凡そ不可能なベクトルで動いているモノがいた。

強い風が吹き抜けていく。緑一色の帽子を被り直したソレは、半袖半ズボンながらも風の冷たさを気にした素振りを見せない。

――嫌な風だ。

駒台の街並みを見下ろしながら、そう思うだけである。

「本当に、嫌な風だな」

呟くのは、風の精霊シルフだ。彼、あるいは彼女はとある経緯から駒台に居ついている。とは言え、大した理由はない。ふらりと立ち寄った街で、興味のある人間と出会っただけの事だ。それも、その人間とちょっとした契約を結んでいるからに過ぎない。

お菓子をもらう代わりに、人間に危害を加えない。

ただ、それだけの事だ。契約と呼ぶには少しばかり幼い内容でもある。が、その人間は律儀にそれを守り、シルフもそれを守っていた。

駒台にいてもいなくても構わない存在なのだが、シルフは誰に頼まれた訳でもなく、この街の風を見張っている。

そのシルフが、先ほど吹いた風を嫌だと形容した。

「……この風は……」

シルフは眼下を強く睨み付ける。間違いない。ソレが、来る。そ

れも並大抵のモノじゃない。今までにないくらいの、魔だ。
しかし、ソレが来ると分かっていながらシルフには出来る事が少ない。この街に迫る脅威を目前にして、風の精霊は――。

フロアの掃除と商品のフェイスアップを終えた一は一息入れる為にバックルームへ戻った。店長からは『勝手に入ってくるな』という視線を注がれてしまうが気にしない。今はどうせ立ち読み客すらいないのだ。
「……四時か」
まだ二時間しか経っていない。恐ろしい事に、今日は何時まで働けば良いのか分からないのである。堀からは二日間よろしく頼むと言われていたが、まさか本当に二日、四十八時間連続で働けと言う訳ではあるまい。ある筈はないのだが、不安でしょうがない。
「おい、椅子に座るな。早く表に出ろ」
「客が来ないんですからいてもしょうがないでしょう」
「だったら呼び込め」
「居酒屋じゃないんだから……と、店長、電話ですよ」
けたたましい音によって会話は中断する。が、店長は鳴り続ける電話を無視して煙草に火を点けた。
「電話ですよー」
「うるさい奴らだな」
無機物と一緒にされてしまい、一は溜め息を漏らす。
「退いてください。俺が出ますよ」
店長は椅子に座ったまま移動した。一もニもなく飛び退くように動いた様子から、どうやらこの結果を狙っていたらしい。
「……お待たせしました。毎度ありがとうございます、オンリーワン北駒台店の一でございます……ああ、どうも、お世話になっております」
『いいえ、こちらこそ。早速で申し訳ないのですが、いつものよう

にお使いをお願いしたいのですけれど……』
　電話口の相手は一の知る人物であった。タルタロスで警備をしている、馴染みの者からの電話である。
『大丈夫、ですかね？』
　どうにも歯切れが悪い。何故だろうと思う前、一は自分がついさっきまで入院していたのを思い出した。
「えと、大丈夫、ですよ？」
『大丈夫、ですか？』
「勿論です。持っていくものは何かありますか？　エレンさんから何かリクエストとかありませんか」
『そう、ですね。パチンコの雑誌が見てみたいと言っていましたっけ』
　一は首を傾げる。パチンコなどとは、とてもではないがエレンからは想像出来ない。
『何だか派手で見ていて面白そう、だとか』
「……なるほど。んじゃ、適当に持って行きます。時間は、今からって事で良いんですかね？」
『ええ、お願いします』
「分かりました。それでは、失礼します」
「誰からだった？」
　受話器を置き、一は伸びを一つ。
「タルタロスから、いつものです」
　店長は露骨に顔をしかめる。
「帰ってきたばかりの戦力を取られるとは……」
「店から適当に雑誌持っていっても大丈夫ですよね」
　一は内心、ラッキーだとガッツポーズを作っていた。タルタロスまで行くのは面倒だが、エレンと話しているだけでも時給は計算されるのだ。
「駄目だ。返本しようとしてた奴があったろ。違う違う、ああ、そっちのダンボールの中だ」

「エロ本しかないんですけど」
「じゃあそれで良いだろう」
「良いわけないでしょう」
雑誌の山を掻き分けていくと、奥の方に何冊かパチンコのそれが隠れていた。何を持っていけば良いのか分からないので全部持っていく事にする。
「ついでに返本作業もしといてくれ」
「はいはい」
どうせ一旦出てしまえば当分は戻ってこないつもりなのだ。それぐらいお安い御用だと、一は腰を上げる。
「返本終わったらゴミ出しとけよ」
「……はいはい」
急に腰が重くなったが、仕方がない。

駒台の街を見下ろすのは久しぶりだった。お気に入りの屋根の上からの景色は格別で、そこに自分以外の誰かがいても大して気にはならないぐらいに清清しい。
「やはり、ここは良い街だと見ます」
「そうかなあ。シルフ様は他にももっと良さそうな街を知ってるぞ」
「その割にはここに拘っているように見えますが。あなたも、わたしがいない間ずっとここにいたのでしょう？」
「う？　うるさいな、たまたまだいっ」
駒台大学の裏山、そこの中腹にある洋館の屋根の上が、ガーゴイルのお気に入りの場所である。今日はここで静かに、ゆっくりと落ちる陽を眺めようとしていたのだが、先客がいた。
「それよりさ、ノームの話、早く続きを聞かせてよ。お前あいつに会ったんだろ？　あいつ何してた？　生きてたのか？」
「ええ、ノームさんは――――」
先客とはシルフである。彼、あるいは彼女はガーゴイルが来た時

からずっと、屋根の上でぼんやりと雲の流れを見つめていた。
「……降りそうですね」
「ん、ちょっと曇ってきたかも。つーか、降るよ」
「風が教えてくれるのですか？」
「まあね。あー、雨か。雨はうっとーしーよなー。お前は濡れるの好きか？」
ガーゴイルは首を横に振る。
「錆びてしまいますからね」
「ああ、ちょーごーきんって奴じゃないんだな。お前って何製なの？　オリハルコン？　ヒヒイロカネ？」
「さあ、自分の事にはあまり興味がありませんから」
「ふーん？　じゃ、早く雨が止めば良いなっ」
シルフは無邪気に笑うが、ガーゴイルはまたしても首を横に振った。
「とは言え、わたしの存在する意味がなくなってしまいますからね。雨は降るに越した事はないのではと、そう見ています」
「存在？　難しい事はキライだな」
「……要するに、雨がなければガーゴイルに意味はない、と言う事です」
分かったような分からないような、曖昧な表情を浮かべてシルフは寝転がる。不安定な姿勢だが、風の精霊には問題ないスタイルなのだろう。
「あいつも雨はキライなのかな」
「あいつ？　ああ、一さんの事ですか」
「うん。あいつ、いつも傘持ってるけど雨が好きなのかな」
「聞いてみればよろしいのでは？」
「どーしてシルフ様がそんな事しなきゃならないのさ。ニンゲンにこびへら、こびへつうら、こびふぇ……」
「媚びへつらう、ですか？」
「そうっ、それ！」

シルフは満面の笑みを浮かべ、くるくると宙を舞う。
「ま、暇だからあいつにお菓子をもらうついでに話してやるのも良いかもしれないなっ」
「……そうですね」
ガーゴイルは雲行きが怪しくなり始めた空を見上げた。
――分かって、いるのでしょうか。
何を話すにしても、一は勤務外で自分たちはソレだと言う事に。
自分たちは違う。一を、人間を襲うつもりはない。だが、今この街に訪れようとしているモノは違う。純粋に、本能に従い、自らの欲望に従い人間を貪るかもしれないのだ。そんな魔が眼前に迫っていたとして、自分たちはどうするのか。
一に、何をどう伝えるのか。
伝えるのか？
自分はソレで、一は人間。そして一を襲おうとするものは自分たちと同じくソレと呼称される同一の存在なのである。
「……位置を、見定める時なのかもしれませんね」
「ん？　あいつがなんだって？」
「いえ、独り言です。気にしないでください」
傍観者に徹してきた。理由などない。今までがそうだったから、そうしてきただけの事なのである。一歩踏み出せば、何かが変わってしまうのは明白だ。今までの自分は、もうそこにいない。そこからいなくなる。
「んー、良い景色だな。シルフ様もここが気に入ったぞ」
「それは良かったと見ます。わたしも、ここは気に入っていますから」
果たして、どうするべきなのだろうか。どう、なるべきなのだろうか。
本を閉じる音に、一の意識は深いところから呼び起こされる。ど

うやら自分は眠っていたらしい。そう気付いた時、彼の顔は羞恥から朱に染まった。
「疲れているようね、ハジメ」
「……そうみたいですね」
一に薄く微笑み掛けるのは、室内だと言うのに顔が見えないほど深くフードを被ったエレンである。彼女は表紙の派手な雑誌をひらひらと弄びながら、退屈そうに頬杖を突いた。
「どうでした、それ」
「パチンコ……響きは好きなのだけれど、思っていたよりも退屈ね。あなたたちはこういうの好きなのかしら？」
「さあ、俺はギャンブルが苦手なもので。ただ、まあ、はまっちゃう人ははまっちゃうらしいですね」
一はぼんやりと糸原を思い出す。それと、同じアパートの住人である北の事も。
「飲む打つ買うはやらないに越した事はないと思いますけどね」
「それじゃあつまらなさそうね」
「刺激なら他から得ていますから。それに、つまらないってのも良いものですよ」
と言うか、地下に篭りっぱなしの人間には言われたくなかったのだが。
「本当にやらないの？　お酒は飲まないの？　博打も打たないの？　女も買わないのかしら？」
「……全く飲まないって事はないんですけど、最近は特に飲みたいとは思いませんし、博打も俺は弱いですから」
「女は？　買うよりも飼う方が……もしくは飼われたい性質なのかしらね？」
「ノーコメントです」
最近になって一は気付いたのだが、エレンはどうやら下世話なネタで自分を追い詰めるのが好きらしい。
「そう言えば、あなた煙草はやめたと言っていたかしら」

「ええ、前にも言いませんでしたっけ？」
「……前には、聞かなかったのよね」
エレンは物憂げに息を吐く。その仕草が妙に艶かしく一には見えた。
「ハジメ、力を使うと世界が変わると言ったのは覚えてる？」
「ええ、自分でもそう感じる事がありましたからね。なるべく控えるようにしています。尤も、使いたくても使えない状態なんですけどね」
「あら、そうなの？　ま、その話は興味深いのだけど後に回しましょうか。問題は、あなたの世界の方なのだから」
「世界って、つまりは俺の中、って認識で良いんですか？」
世界とは余りにも便利で大雑把な言葉だと一は思う。
「良いわよ、結局はハジメに降り掛かる事なのですもの。……私、一つ言い忘れていた事があるの」
「言い忘れていた事、ですか？」
「ええ。ハジメの世界が変わる前兆として、嗜好が変わると言ったわよね？　あれ、もう遅いらしいわ」
「……遅い？」
嫌な予感が一の全身を駆ける。いつの間にか手には汗を握り、僅かながら声も震えていた。
「前は聞き流してしまったのだけれど、ハジメ、あなた煙草を吸わなくなったと言っていたわよね？」
言った。確かに言っていた。だから、一の鼓動は早まっていく。
「何故かしら？　どうして煙草を断ったの？　理由があるのかしら。もしもないなら、ハジメの世界はとっくに書き換えられている可能性があるわね」
理由などない。煙草は、ある日突然止めていたに過ぎないのだ。
「あなたの中にいるメドゥーサが、あなたを変えた。違う？」
「分かりません……」
「煙草をやめたのはいつ？」

「もう、随分前だと思います」
「なら、それぐらいの時期からハジメは……」
変わっていた。否、変えられていた。変化は明確には感じられない。だからこそ、恐怖する。
「……盾は、どうして使えなくなったのかしら」
話は変わったようで変わっていない。本当なら言いたくない事ではあったのだが、自身に関わるそれを避けては通れない。一は渇いた喉の通りを良くしようと唾を飲む。
「壊されちゃったんです。アイギスに穴が開いちゃって」
「壊された？」
「見ず知らずの女の子にやられちゃいました」
「その台詞だけ聞くと、何だかとても淫靡だわ」
エレンはくすくすと笑った。一からすれば笑い事ではないのだが。
「だから、もしかしたら俺がここに来られるのは今日が最後かもしれません」
「あら、どうして？　私が嫌いになったのかしら？」
「茶化さないでください。……アイギスは、アレは、俺が勤務外でいられる証だったんです」
「だから？」
「俺は、まだ勤務外って事になってます。だけど、アイギスのない俺は勤務外じゃない。いつ戦いで死ぬのか分かりません。今日か、明日か、いつか必ず死にます」
死ぬ。自分で口に出すと、やはり実感が湧いてしまう。
「でも、死は平等よ。アイギスがあろうとなかろうと、勤務外であろうとなかろうと、死はいつか、必ず訪れるわ」
「それでも、勤務外だから俺はソレと戦わなきゃならないんですよ。普通の人より早く死んじゃうと思います」
「戦わなければ良いんじゃない？」
「戦わなきゃ、いけないんだと思いますから」
この街でソレと戦える者は少ない。多分、自分しかいないのだと

一は覚悟している。武器はない。身を守るモノはない。だが、アイギスがなくてもその身を盾にする事は出来る。それでも、やはり死にたくない。

「戦いたくはないけど、行かなきゃならない、ね。ヒーロー、と言う奴かしら」

「ピンと来る言葉ではないですけど、そうなのかもしれませんね」

「……そう、私は、またハジメと会いたいわ。だから、イイ事を教えてあげる」

――また、か。

エレンはこうしてアドバイスをくれるのだが、一は自分が見透かされている気がして気持ちの良いものには感じられなかった。

「英雄に会いなさい。そうすれば、ハジメの命は延びるかもしれないわ」

「……英雄？」

「そ、英雄。古より存在する、星になった英雄、北の英雄を探しなさい、ハジメ」

そんなモノ、この世に存在するのだろうか。

「英雄から学びなさい。女神の盾を知りなさい。ハジメ、あなた自身を分かりなさい。そうすれば、あなたはもっと強くなれるわ」

「努力、します」

言ってはみたが、英雄なんて規格外の、ある種反則的な存在を探し出せる筈などない。一はエレンの曖昧とした言葉に辟易としていた。

「もう一つ、ハジメ、あなたはとてもとても酷い誤解をしているわ」

一の態度に気付いているのか、いないのか。エレンは口元に微笑を湛え、優しげな声音で彼を窘める。

「あの盾は、絶対に壊れないわ。忌々しいぐらいに、丈夫なのよ」

その時一は思った。エレンが顔を、目を隠していてくれて良かった、と。

タルタロスを出ると、既に陽は沈んでいた。顔見知りである守衛と挨拶を交わし、一は店までの道を歩く。

「……寒いな」

ぽつりと呟くと、口からは白い息が漏れた。

今日だけで事が起こり過ぎている。壊れたアイギス。壊れていないと言い張るエレン。英雄に会えと、学べと言われた。入院し、退院して勤務外に戻った。たった一人で戦わなければならないのだと漠然とは思った。

だが、どうしても糸原の手が脳裏をちらつく。

守りたい。この生活を、この日常を維持したい。それでも、勤務外である以上死は必ず付き纏う。

「寒いな」

怖いのだ。怖くて怖くて、逃げ出したくて堪らない。誰かと話している間はみっともない醜態を晒さずに済む。こうして、一人でいる間が一番怖い。本当に、自分は店までの道を歩いているのか、駅まで行って、どこか遠いところに行こうとしているのではないかと不安になる。

「寒い」

溜め息、一息。

暗くなった空が心を押し潰そうとしているように、一には見えた。

「遅かったな、死ね」

帰ってきた一と顔を合わせた店長の第一声はこれだった。

一は溜め息を隠さず、コートをハンガーに掛ける。

「死にません。お疲れ様とか、労いの言葉はないんですか」

「言って欲しいのか？」

「まさか」

だろうな。そう呟き、店長は紫煙を天井に向けて吐き出した。

「一、お仕事だ」
「分かってますよ」
「どうやら、ソレが出たらしい」
心臓が、喉から飛び出しそうになる。早まる鼓動に落ち着けと言い聞かせながら、一は制服に着替えた。
「ソレ、ですか」
「まだ確定はしていないがな。情報部が死体を見つけてくれたらしい」
「死体？」
死体が見つかっただけならソレの仕業とは限らない。一は一縷の望みを掛けて聞き返してみる。
「十中八九、人の仕業とは思えんやり方だったらしい。何でも、体中に穴が開きまくっていたらしくてな」
「穴、ですか」
「それだけじゃなく、現場には蛇が残っていたらしい」
――――蛇。
「ソレの正体を絞り込むのは難しいが、蛇に関係する奴であるのに間違いはないだろうな。……一、心当たりはあるか？」
まるで、自分が咎められているような錯覚に一は陥った。何も知らない。何も分からない。その筈なのに、頭の中から声がする。
「いいえ、ありませんね。蛇ってのは、どうにも気になりますけど」
「だろうな。だが、気にする事はない。元々蛇に関わる化け物は多い。とりあえず、お前には現場まで様子を見に行ってもらいたい」
「様子見、だけで良いんですか？」
「無論、ソレと出遭ったならそれ相応の対処をしてもらう。もらう、が」
店長は言葉を区切り、一の様子を観察し始めた。
「今のお前には何もない事ぐらい把握している。今のお前には何も期待していない」
「……そりゃ助かりますよ」

「だが、こちらとしては支部にポーズの一つでも見せておきたいからな。何とかしようとしています、と。得物の一つでも持って行った方が良さそうだ」
「武器と言われても……」
一は途方に暮れる。アイギスがないのなら、自分には何もないのだ。何かあったとして、それを使いこなして戦えるとは思わない。
「ポーズだと言ったろう」
店長はだるそうに椅子から立ち上がってロッカーを開け放った。そこは彼女のではなく、立花のロッカーだったのだが。
「ほら、これを持っていけ」
「……えーと」
一が渡されたのは立花が置いていった予備の得物である。竹刀袋に入ってはいるが中身は竹刀ではない。純然な、純粋な凶器。ずしりとした重みが確かな証拠だ。
「こんなの使えませんよ」
「立花に悪いか？　気にするな、武器は使ってナンボだぞ」
「じゃなくて、俺は刀なんか握った事なくて……」
「簡単だ。私が教えてやろう。刀を鞘から抜いて、刺す。突く。斬る。どうだ、簡単だろう？」
そういう意味ではない。一は、一度は受け取った刀を壁に立て掛ける。
「仮に、これを持って行ったとしてソレとは戦えないって言ってるんです」
「構わんと言っているだろう。あくまでそれは見せかけ、ハッタリだ。やばくなれば逃げ帰ってくれれば良い。行って帰って来い。私はそれ以上を望まん」
「……分かりましたよ」
行くだけ。様子を見に行くだけ。それだけならと、一の気持ちはやっと軽くなった。制服の上からコートを羽織り、彼は刀を握り締める。

「場所はどこなんですか？」
「店を出て右に曲がってまっすぐだ」
大雑把過ぎる説明だった。その上、店長はそれ以上何も言おうとしない。
「目印とかないんですか？」
「血とか、肉とかが近くに飛び散っているんじゃないのか？」
「……とりあえず、行ってきます」
「一」
バックルームを出て行こうとする一を店長は呼び止めた。彼は振り向かず、ただ立ち止まって続きを待つ。
「そろそろ降りそうだ。傘は持っていかないのか？」
「ええ、邪魔になりますから」
「そうか。じゃあな、凄く気を付けて行って来い」
頷き、一は今度こそバックルームを出て行った。

ぽつぽつと。ひたひたと。
水音がどこからか聞こえていた。
「あら」
「あら」
「雨が降りそう」
「雨が降りそう」
同じ音。同じタイミング。女の声が重なって聞こえる。
雨はまだ降っていない。それでも、何か上から滴るような音がし続けていた。
「あら」
「あら」
「声がしなくなったわ」
「声がしなくなったわ」
女が掴んでいたものを地面に落とす。ぐしゃりと、果実の潰れる

ような音が周囲に響いた。が、聞きとがめる者はいない。ここには女が二人しかいない。
「動かなくもなったわ」
「動かなくもなったわ」
「つまり」
「つまり」
「死んだのね」
「死んだのね」
それを見下ろしたまま、二人の女は舌なめずりする。
「本当に来るのかしら」
「勤務外が？」
「本当に来るのかしら」
「人を殺したのだもの」
「来るに決まっているわ」
「来るに決まっているわ」
感情の篭らない声、目。一切の温度を感じさせない、まるで、それは――。
「早く会いたいわ」
「あの子に会いたいわ」
目と目を合わせる。手と手を絡め合う。
「あの子の顔が見たい」
「あの子の声が聞きたい」
厚い雲が空を覆い、夜の深まった駒台の路地裏。同じ背丈、同じ顔をした女は血の香が立ち込める狭い空間で体を寄せ合った。
「ああ、あの子を抱き締めたい」
「ああ、あの子を抱き締めたい」
「ああ、あの子に抱いて欲しい」
「ああ、あの子に抱いて欲しい」
『ああ、早くあの子と……』
――その目は、まるで蛇のようだった。

雨が降ってきたような気がする

雨が降りそうだ。曇り空を見上げながら一は思う。だが、足を速めようとは思えなかった。何せこれから彼が向かうのは戦場に成り得るかもしれない場所なのだ。

「……っ」

そんな筈はないのだが、すれ違う人たちが皆全てを知っているかのような疑心に苛まれる。向こうから歩いてくる者は、向こうへ歩く自分を笑っているのではないかと、そう思ってしまう。

益体もない考えは、通行人が減るにつれて消えていった。店長から聞いていた役に立たない現場までの道のりだったが、勤務外としての勘か、それともっと別の何かに呼ばれているのか、それでも何となく一には分かっている。少なくとも彼はそんな気がしている。立ち止まる事はしない。一歩一歩、少しずつ目的地に向かっているのだと言う感覚はあった。進むにつれ、少しずつ人とすれ違わなくなり、出会わなくなる。そうして歩き続けていると、頭の上に何かが当たった。

雨が降ってきたのである。まだ小降りだが、この先はどうなるか分からない。一は小走りになりながら雨宿り出来そうな場所を探す。

「と……」

吸い込まれるように、そうでなければ、本当に吸い込まれていたのかもしれない。屋根を探しながら、一は長くくねった路地を進んでいく。表に出れば幾らでも雨を凌げる場所はあった。だが、彼はそうしない。ソレがいるかもしれない。他者を巻き込みたくない。何よりも、囁くのだ。頭の中から、進んで、と。声がし続ける。一を導き続ける。

「まるで……」

曲がりくねった道は、まるで――――。
いつしか、一の頭からは雨宿りの事など消え去っていた。ただ、進むだけだ。声に従い、道から道へ、路地から路地へ進んでいく。
「あら」
「あら」
声が聞こえた。
「まさか」
「まさか」
影も見えた。目を凝らせば、その、声の正体が二人の女だった事に一は気付く。
「あなたが」
「あなたが」
二人共が声を発している筈なのに、一には一人分の声にしか聞こえない。
「勤務外なの？」
「勤務外なの？」
地面にまで垂れてしまいそうなほど長い黒髪。病的なまでに透き通った白い肌。瑞々しい肌が雨を弾く。薄暗く、薄汚れた路地裏にその存在は浮き過ぎる。毒とも言える。陳腐極まりないが、彼女らには美しいと言う言葉が似合っていた。いや、彼女らにこそ、その言葉が相応しいと言うべきか。同性、異性問わず屈服するであろうその美に、一は、
「あ、う……」
逃げ出した。
みっともなく喚きながら、背を向けて走り出す。
何も、彼女らの足元に血を流した男が転がっているのが見えた訳ではない。もっと別の恐怖を感じたのだ。
「あら」
「あら」
二人の女は顔を合わせた後、ちろりと赤い舌を突き出す。

「逃げちゃったわね」
「逃げちゃったわね」
そう言って、一の背中を追って歩き始めた。
――――嘘だ。
全部、嘘だ。恐怖に押し潰されないよう喚きながら、一は涙を堪えた。
「ソレが……いたじゃねえかよ！」
一目見て分かったのである。あんなに綺麗なモノは、人間ではないと。
様子見だけで済むと思っていた。店長の口振りから、そう思わざるを得なかった。彼女は自分を騙したのだ。何よりも、許せないのは自分である。
覚悟していた、筈だった。
誰かの盾になれるのならと、皆を守れるのならと、そう思っていた。
嘘だった。全部、何もかも。ソレの存在を実感した瞬間、理解する。何もないまま戦う事がどれだけ恐ろしく、馬鹿げた事なのか。
何かが追ってくる。確かにやってくる。気配を感じながら、一は必死で大通りを目指した。
「あら」
「あら」
声が出ない。
一は振り向く事すら出来ず、肩を掴んでいる腕を払い除けられず固まった。
「捕まえちゃったわ」
「捕まえちゃったわ」
――――嫌だ。
全てが嘘で、全てが嫌になる。戦うのも、死ぬのも、何もかも。
「がああああああああああああ！」
理性では太刀打ち出来ない状況に、一の喉は彼の意思とは無関係

に震える。大声を上げて、握り締めていた袋から得物を取り出した。
「あら」
「あら」
その大声に驚いたのか、女二人は一の肩から手を離す。
刀どころか、まともな武器すら握った事のない一である。だが、使うしかなかった。死なない為には、こうするしかない。
「おおおおおおおおおおっ！」
正しい刀の握り方、振り方ではない。一は力任せ、がむしゃらにそれを振り回すだけだ。
「あらあら」
「あらあら」
同じタイミング、同じ動作で女は後ろへ下がる。一の攻撃を回避したのではない。下がっただけだ。そも、彼のそれは攻撃とは呼べるものではなく、今の状況は戦いとは似て非なるものなのだから。
「まるで鼠ね」
「まるで鼠ね」
雨が強くなる。天水と濡れた髪が視界を塞ぐが、一は構わず刀を振り回す。時折壁に当たって自身が振り回されるが、その都度叫び、また振り回した。
「鼠には」
「鼠には」
女が手を伸ばすと、暴れ回っていた刀が止まる。
女が手を伸ばすと、暴れ回っていた刀が折れる。
「うっ、あああああああああああああ！」
「丸呑みがお似合いかしら」
「丸呑みがお似合いかしら」
女が手を伸ばす。一を掴む為に。
女が手を伸ばす。一を壊す為に。
戦意、意思は最初から存在しない。尚も、武器を失い、命を失おうとしている。分かっていながら、一は動けなかった。刀身を失っ

た鞘を握り締めて女の顔を見つめるだけである。
「それじゃ」
「それじゃ」
「いただきます」
「いただきます」
そして、一は失った。

少々と言うか、かなり荒療治だったかもしれない。なんて思いつつ、店長は椅子に座ったままで伸びをした。肩からは疲れを感じさせる音が鳴り、彼女は肩に手を遣ろうとして、反射的に引っ込める。
「……まだババアじゃないぞ」
言い聞かせるように。
店長は煙草に火を点け、一の顔を思い出してみた。あの、情けない顔を。
口車に乗せられ、情報の真偽すら確かめようとせず、自分の甘言に乗った一。馬鹿だなあと、哀れに思うと同時、妙に可愛い奴だとも思った。
一に言ったのは、殆どが嘘だった。
ソレは確実に出ている。人の仕業ではない死体だって転がっている。現場に残っていた蛇とは痕跡ではない。ソレ、そのものを指しているのだ。おまけに、店長には正体について心当たりがある。無論、一とソレが出遭う事も織り込み済みだ。様子見など有り得ない。目と目が合えば敵同士、殺し合うだけである。そうしてもらわなければ困るのだ。
「早かった、か？」
あの日の采配を間違いだとは思わない。ムシュフシュを殺し切ったのは確かなのだ。ただ、イレギュラーの存在を予想出来ていなかっただけ。それだけなのである。イレギュラーの出現する可能性を想像していなかった訳ではない。問題はあの少女が強過ぎた事にあ

る。強過ぎた。勤務外の武器を折り、骨を折り、心を折った。彼らが回復するまでに新たな敵が出ない、筈がない。ソレは出る。現れる。こちらの都合などお構いなしに好き勝手暴れ回るのだ。そして、勤務外が回復し退院したとして、彼らが勤務外を続けるとは限らない。むしろ今まで逃げ出さず、投げ出さなかった方が奇跡に近いのだ。

では、どうする。どうすれば、勤務外を逃がさずに済む。答えはない。が、鍵は見つけてあった。他ならぬ、あの情けない男の存在である。

ナナが北駒台店のメンバーとして加入した後、幾度かミーティングと称したお遊びを開いた。勤務外同士の結束を高めるのも狙いの一つではあったが、店長にはもっと重要な狙いがあった。

誰が、中心になっているのか、である。

人心を掴むに必要なのはソレを燃やし尽くす圧倒的な力ではなかった。

他者を騙し切る強かさでもなければ、甘い声と幼い容姿でもない。他者の保護欲に付け込む雰囲気でもなければ、勇気ある若者でもない。まして、人形には心を掴む事は不可能だろう。

必要なのは無能さだ。

力はいらない。技術も声も、何もいらない。そこそこの常識と、そこそこの欠点を持つ力のない者こそが勤務外――――人外どもを束ねられる。一に何かがないからこそ、中心に立っていられる。そして何よりその事が彼の異常さを雄弁と物語っていた。

実に素晴らしい。勤務外、フリーランス、ソレ。店長は、アレらを掌握する一の愚鈍さを手放しで賞賛したい気分だった。だが、足りない。物足りない。足りている。足り過ぎている。もっと力を削ぎ落とせば、何かを根こそぎ殺いでいけば、一はもっと、壊れてくれるのだ。彼にはもっと苦しんでもらわなければならない。辛い思いを味わってもらわなければならない。生きる事を悩み、嘆き、諦めてもらいたい。どうしようもない絶望を認識してもらいたい。

ソレと一人きりで相対する。
言わばテストだ。因縁のあるソレと出遭った一がどうしてくれるのか。取って置きの、これ以上ないシチュエーションではないか。
店長はくつくつと喉の奥で笑った。
「馬鹿め」
それから、自身を精一杯恥じる。殺してやりたいとも思う。だが、決してそうはしない。命など、誰にもやるものか。あいつ以外にやるものか。
殆ど、嘘だ。嘘しか言っていない。
だが、店長は一に対して、一つだけ本心から真実を口にしていた。
今の一には何もない。何も、期待していない、と。
逆境を乗り越えた人間は強くなる。吐き気を催すほどの修羅場を潜れば潜るほど、人間は強くなる。
いつしか、一は本当に強くなるのだろう。壊れたまま、抱えたまま、背負ったままで。惜しむらくは時間だ。時間さえあれば、彼にはもっと別のやり方で辿り着いて欲しかった。だが、時間はない。
血反吐をぶちまけるぐらいしなければ、ここまでは来れない。自分の許までは上って来られない。
「……嫌だなあ」
そんな日が来なければ良い。どうせなら、出会わなければ良かった。店長は溜め息を吐くと、目を閉じて、祈る。そんなモノはいないと信じているのに。分かっているのに。

『呼んでください』

「あらあらあら」
「あらあらあら」
悔しそうな、口惜しそうな、そんな印象は全く抱かせない。

「逃げられてしまったわ」
「逃げられてしまったわ」
何故なら、人を襲い、一を襲った女たちには凡そ感情と呼べるようなものがなかったからである。彼女らは降りしきる雨を気にせず、一が飛んでいった方角を見つめ続けていた。
獲物に逃げられるのは大した事ではない。彼女らにとって重要なのは、逃げられたのが目当てのモノだったかもしれない、と言う一点だ。
「さっきの風」
「さっきの魔」
「アレは何なのかしら」
「アレは何なのかしら」
一は自らの意思、自らの能力で先の状況を脱した訳ではない。女の指が掛かる寸前に吹いた強風と、彼を抱えて飛び去っていった悪魔のような影に救われたに過ぎないのだ。
「あら」
「あら」
「目が」
「目が」
ずるりと、右側にいた女が自らの眼球に指を突き入れる。
「そう言えば」
「さっきのが刺さったままだったわ」
何も考えずに砕いた刀の破片が、女の柔らかなそこに突き刺さっていたのだ。だと言うのに、二人からは何の動揺も見られない。邪魔だったから、使えなくなったから。そのような理由で女は目玉を引き抜いたのだ。
「かわいそうな妹」
「かわいそうな私」
妹と、そう呼ばれた方の女は右の瞼を何度も擦る。
「でも」

「でも」
「あの子はもっとかわいそう」
「あの子はもっとかわいそう」
「早く助けてあげなくちゃ」
「早く助けてあげなくちゃ」
「だから、新しいのを探さなきゃ」
「だから、新しいのを探さなきゃ」
何事もなかったかのように、女は同じタイミング、同じスピードで人通りのある道に向かって歩き始めた。

駒台の空に雨が降る。
駒台の空に風が吹く。
駒台の空に何かいる。
「やってしまいましたね」
「ああしなきゃ、こいつは死んだぞ」
空を飛んでいるのはシルフと、一を背に乗せたガーゴイルだ。彼らが、一を助けたのである。
「そうだろうと見ていますよ」
あの場面で自分たちが手を出さなければ、間違いなく、問題なく一は死んでいただろう。殺されていただろう。
ガーゴイルは、迷っていた。恐らく、シルフが突っ込んで行かなければガーゴイルは動かなかっただろう。彼の死を見届けていただろう。
「しかし、わたしたちはソレです」
「知ってる」
一を見殺しにはしたくない。だが、手を貸したと言う事は、あのソレと敵対した事になる。ずっとそうだった。誰かの味方にも、敵にも回りたくない。だから傍観者でい続け、自分さえも客観的に眺め続けていたのである。

「一さんを助けた。一さんの味方になったと言う事は、あのソレの敵に回ったと言えるんですよ」
「じゃあ、お前はこいつを見捨てろって言うのか？　シルフ様はそんな事しない。良いさ、アレを敵に回したって」
「しかし……」
シルフはくるりと振り向き、ガーゴイルの目を見つめた。強く、見据えた。
「お前はこいつがキライか？」
「……いいえ」
「じゃあ、こいつが死んでも良かったのか？」
そこが分からない。一の事は嫌いではない。だが、死は誰にでも訪れる。好悪も、善悪も関係ない。人間である以上、一でさえ例外ではない。必ず、死ぬ。
「殺されても良かったと思ってるのか？」
「それは、わたしは……」
それが分からない。他者の死、運命に介入した。自らの意思を以って。意思を持って。
「……う」
「っ！　おい、ニンゲン！」
温度は感じない。無機物で出来た体では、温かみを感じられない。それでも、雨に濡れる一の体からは今も熱が失われ続けている。
「急ぎましょうか」
「急ぐって、アテはあるのか？」
「わたしはそこ以外に一さんを運べる場所はないと見ています」
「……よし、任せたぞ」
道案内を？
否、シルフに任されたのは、きっと彼の命だろう。理解出来たから、ガーゴイルは確かに頷いて返した。

虫の知らせを信じてはいない。虫に知らされる程度の事など高が知れているし、知らされてもきっと無視するだろう。だから、これはきっと自分の意思で、自らを信じたからこその行動だ。

店長が重い腰を上げて、客のいないフロアに出たのは何者かの意思が介在したからではない。全て、自分で選んだからだ。

「お前らは……」

出入り口のドアは開け放たれ、滑り止めのマットに倒れこんでいる一。自力で帰ってきたのかと思えばそうではない。彼を心配そうに見つめる瞳が二対、ある。

「シルフと、ガーゴイル、か？」

「……あなたが店長だと見ます。一さんを、よろしくお願いします」

そう言って頭を下げたのはガーゴイルだ。店長は決して鈍くない。状況こそ不可解極まりないが、彼女は理解した。一を助け、ここまで連れてきたのはシルフとガーゴイルなのだと。

「無論、うちの従業員をよろしくするのは私の仕事だ。やぶさかではない。が、お前らは何故ここにいる？　何故ここに来た？　ここがどういう場所なのか、まさか理解していない筈はない。だろう？」

「勿論です。しかし、わたしたちのような存在が思い付くのはここしかなかったんです」

店長は息を吐き、煙草に火を点ける。

ここが、どういう場所なのか。ここはオンリーワンで、言わば勤務外の巣窟だ。ソレを殺す為、殺される為に集まる場所なのである。そんな場所に、ソレがいる。ソレが来る。

「殺されても構わないのか？」

「そんな訳ないだろ！　お前らが何かするってんならシルフ様はテイコーするぞ！　テッテーコーセンだ！　どうだ、強そうだろう！」

「シルフさん落ち着いてください。今は、一さんが心配です」

尚も収まらないのかシルフは中空で地団駄を踏んでいた。が、一が心配なのはガーゴイルと同じ気持ちなのだろう。やがて、シルフは店長をじっとりとねめつけるだけに留まる。

「……早くそいつを持ってけ」
「言われなくてもそうするさ。こんなところに倒れられちゃ客が寄ってこない。おい、起きろ。私の制服を濡らす気か」
店長は気を失っている一の頬を何度も叩く。何度も叩く。
「お、おい、やり過ぎじゃないのか？」
「早く起きろ愚図が」
一向に一は目覚める気配を見せない。仕方なく、店長は彼の襟元を掴んだ。
「つかぬ事をお聞きしますが、まさかあなた、一さんを引きずっていくつもりでは……」
「言われなくてもそうするさ」
ずりずりと、店長はバックルームまで一を引きずっていく。
「うわあ……」
彼女は足でドアを開けると、開きっ放しの仮眠室へ一を放り込んだ。
「タオルはどこにあったかな……」
床に散らばったままの雑誌を蹴飛ばしながら店長は部屋中を歩き始める。
「ああ、あったあった」
見つけたタオルをソファの上でうつ伏せになった一の頭に掛けてやると、彼女は少しだけ考え、フロアに戻った。
「おい、あいつは無事なのか？　無事なんだろうな？」
「心配するな、気絶してるだけだ。もう暫くすれば目を覚ますだろう」
シルフに答えると、店長はレジ前のホットケースから缶コーヒーを一本取り出す。次に入り口の近くに陳列してあったビニール傘を抜き取り、包装を乱暴に取り払った。
「……何、それ？」
シルフは差し出された缶と傘、それと店長の顔を交互に見遣る。
「缶コーヒーとビニール傘だ。知らないのか？」

「知ってるよ！　シルフ様はどうしてそいつをくれるのかって聞いてんだ！」
「さあな。要らないならその辺に捨てるぞ、重くてしょうがないんだ」
「すっ、捨てるくらいならもらってやる。でも良いか、シルフ様は風のせーれーなんだ。ニンゲンごときの施しでシルフ様をどうにかしようなんて事は……熱いっ！」
うるさいので、店長は缶コーヒーをシルフにさっさと押し付けた。
「ほら、お前も使え。その体、錆びてしまうには惜しそうだ」
「ありがとうございます」
「いや、礼を言う必要はない。何故なら、私はお前らに対して絶対に礼を言わないからだ。一を助けろと頼んだ覚えもないしな、全てお前らが勝手にやった事だ」
言い放つと、店長は開いていたドアに背を預ける。
「では、傘を譲ってくれたのは？」
「……線だ」
「線？」
店長は店の中と外を指差した。
「お前らは決して店に入ろうとしなかったな。……ソレであるお前らは、オンリーワンの領域には入らなかったな。それは、お前らが弁えているからではないのか？」
ガーゴイルはシルフに傘を広げてもらい、その柄をしっかりと指で包み込む。
「仰る通りだと、わたしは見ます。我々は一さんを助けた。一さんの味方に回ったのでしょう。しかし、我々はあくまで一さんの側にいるだけです」
「他の勤務外、他の人間の味方に回った訳ではないと？」
「それだけではなく、逆もまたしかりでしょう。我々が一さんの味方だとして、あなたまで我々の味方ではない。わたしたちはソレで、あなたはソレじゃない」

だから、ここが線なのだ。
敵と味方。
ソレと人間。
殺すモノと殺されるモノ。
死なされるモノと死なすモノ。
店の外と中は、そこを分かつ最後の境界線なのである。
「分かっているじゃあないかガーゴイル。その傘は礼ではなく褒美として受け取っておけ」
「褒美、ですか」
「ああ。出来る子にはご褒美を与えるものだろう？」
ガーゴイルは笑った。
「わたしたちを子供扱いするニンゲンがいるとは、いや全く、世界とはまだまだ広いものだと見ますね」
「お前らが何を話してるか分からないけど、やい偉そうなニンゲン、あのニンゲンはいつになったら目を覚ますんだ」
「偉そうじゃなくて、私は偉いんだ。一がいつ目を覚ますかなんて知らん。心配ならその辺で待っておけば良いだろう」
「しかし、それでは他のお客の迷惑になるのでは？」
店長は店内を見回し、店の外にも一瞥をくれる。客どころか、人一人さえ周囲にはいない様子であった。
「なら屋根の上ででも待っているんだな。くれぐれも大人しく、騒いだりするなよ」
「シルフ様を馬鹿にするなっ、大人しく待つさ！　それより、目ぇ覚ましたらちゃんと教えろよ」
そう言うと、シルフはガーゴイルよりも一足先に上へと飛んでいく。
「どうした、行かないのか？」
「……一つだけお尋ねしてもよろしいでしょうか？」
「良いだろう。一つだけならな」
「何故、あなたは我々を見逃すのですか？　我々はソレで、あなた

方は勤務外です。なのに、どうしてですか？」
「なんだ、そんな事か。簡単だ、殺す理由がないからな。オンリーワンの見解ではシルフ、ガーゴイル共に無害と判断している。私らは正義だのなんだの振りかざすつもりはない。上から命令が来ない限り……つまりお前らが何かやらかさない限り、こちらがお前らに手出しする事はない」
嘘ではない。店長が言ったのは全て本当の事だ。
「ま、他の勤務外が相手だとどうなるかは分からんかったがな。だが安心しろ、そもそも、私にはお前らを殺せるような力はない」
「ほう……？」
「意外だったか？　それより質問がないならそろそろ行ってくれ。こんなところを支部の奴らに見つかれば滅俸じゃ済まないからな。ほら、こんな雨の夜なんだ。今夜はガーゴイル冥利に尽きる、だろう？」
「仰る通りで」
ガーゴイルは翼をはためかせ、店長の視界から姿を消す。少ししてから、彼女は店のドアを閉めた。

「さて、と」
仮眠室のドアを閉め、店長は一の対面にあるソファに腰掛けた。
「私は熊じゃないが聖人君子でもない。死んだふり寝たふりは止めておけ。それから、戦場でそういう真似はするなよ。私なら嬉々として殴りまくるからな」
タオルが動く。
「……鬼ですか」
「鬼とはまた、随分と可愛らしい表現をしてくれるじゃないか」
一はゆっくりと体を起こし、タオルを頭に被せた。髪の毛も体も、服も濡れていたが、拭く気にはなれなかった。
「店長、俺……」

言いたい事がある。もう駄目だと、もう無理だと、もう嫌だと告げたい事がある。
「疲れたか？」
「は？　ええ、まあ」
「そうか、邪魔したな。少し休め、ソレはまだこの街にいるのだからな」
また、戦えと。まだ、戦えと。
「俺はっ」
「眠れ。話を聞くのは、それからだ」
「……っ」
店長はソファから立ち上がると、仮眠室を出て扉を閉める。取り残された一は眠る事すら出来ず、ただ、歯を食い縛って蹲るしかする事を知らなかった。

I Need Somebody

時間が経つにつれ、雨はやがて篠突くようなものに変わっていく。
「なあ！　なあ！」
「なんですか？」
「聞こえないってばもっとはっきりおっきな声で話してくれよう！」
「はあ……」
こんな雨では会話すらままならない。ガーゴイルは暴れ回るシルフを横目に、雲の流れを見つめていた。
「雨は、上がりそうにありませんね」
「えーっ！？　なんか言ったか？　なんか言ったのか？」
明けない夜はない。止まない雨はない。だが、人の心はどうなるのだろう。時の経過は傷を癒す。傷を負った事件を忘れさせる。しかし傷を負ったと言う事実が消える事はない。癒され、忘れたところで消えはしない。いつまでも残り続けるのだ。
「……どう、転びますかね」
「だーかーらーっ！」

仮眠室の扉が開いた。店長は様子を窺う事もせず、悠然として煙草に火を点ける。
「店長」
「話なら……」
「五分だけ寝ました」
店長はゆっくりと煙を吐く。屁理屈をこねられるのは好きではない。が、駄々をこねられるよりよっぽど可愛らしいと感じた。
「楽しい話ではなさそうだが、聞こうか」

「辞めます」
「即答だな。そんなに私が嫌いか」
一は眉根を寄せ、店長を睨み付ける。
「ええ。でも、それ以上に俺は死ぬのが嫌いです。戦うのも、苦しい目に遭うのも嫌いなんです」
「好き好んでいる人間はいないだろうがな」
「……嘘を吐きましたね」
「何……？」
思わず噴出してしまいそうになるのを堪え、店長は驚いた風に声を出した。
「何が様子見ですか。あなたは、俺を殺すつもりだったんですか？」
「まさか」
「ソレが、いたんですよ？　俺は本当なら死んでた」
だろうな、と。店長は同意する。シルフとガーゴイルがいなければ一は確実に死んでいただろう。
「ソレはどうなった？」
「知りませんよっ」
自分の問い掛けを無視され、一は声を荒らげた。
「ならば、お前はソレを無視し、逃走した。そう捉えても良いんだな」
「勝手にしたらどうですか。あなたはいつだってそうしてきた筈だ」
「いつだって、とは、まるで私の伴侶のような口振りだな。驕った口を利くのは良いが、忘れてはいないだろうな」
「何を？」
店長は煙草の煙を一に吹き掛ける。彼が目を瞑って咳き込んだ隙を見計らい、襟元を掴んで壁に叩き付けた。一の瞳を覗き込むと、驚愕から恐怖、そして、憤怒へと変化していく様子が見て取れた。
「お前は一体何様のつもりだ。忘れるなよ、お前ら勤務外は金をもらって化け物を殺す人外でしかない。人を外れない為に化生を殺し、人でい続ける為に異形と対峙する異常者だ。お前ら勤務外は、私た

ちのお陰で生きていられる」
「あんたは……っ！」
壁に押し付けられたままの状態で一が手を伸ばす。店長はその手を見送り、自らの襟元を差し出してやった。
「様子見をしろと言ったのは事実だ。だが、その後の行動は全てお前の責任だと知れ。お前の尻を拭く者は、お前以外にはこの世に存在しないと理解しろ。てめえのミスを私に押し付けるなと言っている」
「俺に、俺にどうしろって言うんだ！　分かってただろうがっ、俺にはもうアイギスはないんだぞ！？　どうやってソレとやり合えってんだ！」
「武器を渡したぞ」
「あんなもん使えるかよ！」
「は、だろうな」
制服を破かんばかりの勢いで一が力を込める。
「……ぶっ殺してやる」
「無駄だ。そうやって脅しても、お前に人を殺した経験がない限り、全くの無駄だ。犬が吠えているのと何も変わらんぞ」
「今じゃなくても良い。いつか必ず、殺してやる」
「……ああ、想像しただけでゾクゾクするよ」
店長は一から手を離し、彼もまた、彼女から手を離した。
「だが、その為にはお前は生き延びねばならんな。さて、どうする？　ソレを無視するか？　生きる為に、他の命を犠牲にするか？」
一は押し黙る。彼は他人より、少しばかり賢しいが為に、少しばかり空気を読めるが為に、己に課せられた役割を理解していた。
「俺がどうすれば良いのか、あなたは知っているんでしょうね」
「お前がどうしたいのかなら知っている。だが、教えん。そして何より、お前は私の教えを請わない」
「……シルフとガーゴイルは？」
「外にいる。そうだな、まずは礼でも言ってみたらどうだ。こんな

お前でも助けてくれたんだからな」
店長は椅子に座り、一を外へ行くように促す。彼はこれ以上この場に留まりたくなかったのか、
「そうします」
短く答え、バックルームを後にした。

どうしたいのか。どうなりたいのか。
答えはとっくに出ている。腹ならば、もう括れている。
「……ガーゴイル？」
外は酷い雨だった。ただでさえ少ない客足も遠のいている事だろうと、一は溜め息を吐く。
バックルームから持ち出した傘を差し、屋根を見上げてみると、そこには同じく傘を差したガーゴイルと、
「お、おう！　もう体は大丈夫なのかニンゲン！」
嬉しそうにこちらへ飛び寄ってくるシルフが見えた。
「うん。ありがとうな」
「ま、お前が死んだらお菓子もらえなくなっちゃうからな。良いか、シルフ様はお前みたいな奴を心配したんじゃないぞ。お菓子の心配をしてお前を助けてやったんだからな！」
「分かってるよ。ガーゴイルも、ありがとう。本当、助かった」
「お気になさらずに」
ガーゴイルは傘を手放さないように気を付けながら、一の傍に降り立つ。
「本当に体の調子は？」
「ああ、問題ないよ」
問題があるのは、体ではないのだから。
「では一さん、これからどうするのか、何か考えていますか？」
「これから、ね」
考える事は、考えなくてはならない事は色々とある。だが、ガー

ゴイルが指しているのはただ一つ。先ほど接触したソレに関してについて、だろう。
「正直、逃げ出したいよ」
「でしょうね。しかし、あなたはそうしないのだとわたしは見ていますよ」
「……は、はっはっは。はあ」
一は溜め息を吐いた後、空を睨んだ。
「相手の正体が知りたいな」
「ほう、正体ですか」
ソレの正体を知ったところで、今の一にとって大した意味はない。アイギスを失った彼が敵の情報を得たところで何かに活かせるとは限らない。
「店長は蛇だとか言ってたっけ」
それでも、出来る事はこれぐらいしか思い付かないのだ。
「それも双子。双子の蛇ではないかと見ます」
「ガーゴイル、心当たりはないか？」
「いえ、何も思い付きませんね。もっと別の視点からの意見があれば、あるいは……」
一はシルフを見遣るが、溜め息を吐くだけに留まる。精霊とはいえ、所詮は風の精霊。気紛れで、子供っぽく飽きっぽい。シルフには期待しないでおこうと判断した。
「一さんはアレをどうにかしたいのでしょう。なら、その為には準備が必要な筈だと見ます」
武器もない。知識もない。自分以外の戦力もない。
「……もう一つ、心当たりがあった」
だが、一は受け取っている。彼は確かに知っていた。
「北の英雄だ」
地下深く、塵と荒野の闇の中、そこに住まう女からの言葉を。

雨は止むどころか、勢いが強くなってきていた。弾く、と言うよりかはむしろ穿つような鋭さで一の傘に突き刺さる。
「この雨だ、まともに打たれりゃ目上の人間に殺すだなんて抜かすスッカスカな頭も冷えるだろう」
「もう冷えてますよ」
一は店長の嫌味を受け流し、皮肉っぽく笑ってみせる。
「何も持っていかないのか？」
「え？」
一が持つのは穴の空いた傘と、本当にただのビニール傘。傘が二つ。それだけである。それ以外には何も、何もない。
「立花の刀はまだあるが」
「ああ、あんなんじゃ駄目なんです。ただの付け焼き刃にもならない。良く分かりましたよ。俺には結局のところ、これしかないんです」
「使えるかどうかも分からんのにか。いや、しかし戦場では使い慣れた武具が物を言うのかもな」
使った。触った。握った。広げた。拾った。頼った。
一はぐっと力を込める。掴んだ柄は、刀のそれとは比べものにならないくらいにしっくりときていた。
「……北の英雄か。心当たりはあるのか？　残念だが、私にはない。英雄なんて呼ばれている奴なんか知らないぞ」
「俺にもありませんよ」
だが、彼女は言ったのだ。北の英雄に会えと。ならばここにいる筈だ。そして、アイギスはまだ壊れていない。否、壊れないとも。
生きている、生きている。
「でも、探します」
蛇は動く。刻限などない。約束など出来ようもない。彼女らはあるがままに人を喰らう。ならば、一刻を争う状況には違いない。望みは薄く、敵は強大だ。味方はなく、好材料は殆どない。
だが、生きている。

最後の勤務外、ソレに対する力は生きている。精一杯あがき、もがき、それでも軽く吹き飛ぶ紙のような存在が。

一切の音が掻き消されてしまいそうな雨の中、
「一さん」
悪魔じみた低い声が聞こえた。
一は立ち止まり、振り返る。
「ガーゴイル、どうしたんだよ？」
「お供しましょう。先程の蛇と戦うのでしたら、少しでも頭数が欲しいのでは、と見ます」
「……いや、でもな」
気持ちは嬉しかった。不安に押し潰されそうで、恐怖から逃げ出してしまいそうで、背負ったものを分け合えるのならばと、そう思った。
「わたしに戦闘能力はありません」
言わんとした事をその当人に取られてしまい、一は黙り込む。全く、その通りだった。ガーゴイルは悪魔を模した姿をしているが、中身はまるで聖人とも言うべき穏やかさで、彼が苛烈に戦う場面など、とてもではないが想像出来ない。
「しかし、一さんの盾にはなれると見ます。こう見えてわたしは頑丈に作られていますからね」
「……第三者でいるんじゃあなかったのか？」
ガーゴイルは見上げる。空を、雲を、雨を、その更に上を。
「いつものわたしなら、ここにいなかったのだろうと見ます。一さん、わたしが第三者でいられるのには色々と理由があるのです」
「理由？」
「わたしが表には出ない事が、です。わたし以外の何かを見るのがわたしですから。だから、第三者以外のモノがなくなってしまっては困るのです。何より、あなたのお陰なんですよ。あなたがいなけ

れば、わたしはフリーランスにこの首を刎ねられていたと見ます」
　まさか、ある意味自分以上の日和見主義から繰り出された台詞だとは思えず、一はしばし言葉をなくす。
「わたしはこの街が好きだと、そう見ていますから。今までタダで見せてもらっていたのです。だから、たまには体を張っても良いでしょう」
「……ま、そこまで言うなら、な。でも良いか、俺はお前が思ってるよりも弱いぞ。正直言っちまえば俺は自分以外を守れるとは思わねえからな。だから、やばくなったら勝手に逃げてくれ」
　ガーゴイルは喉の奥で笑い、頷いた。
「ふーん、話はまとまったみたいだな。それじゃ行くぞっ、シルフ様に付いて来いっ」
　水が中空で跳ね、風が緩やかに流れていく。一はつまらなさそうにそれを見つめた。
「なんだ、シルフもいたのか」
「なんだとはなんなのさ！　シルフ様だって付いていくからなっ、第一、風のせーれー様はすごい強いぞ！　強いんだぞ！」
「……まあ、そうだけどなあ」
　確かに、シルフは人の領域を軽々と越え、その遥か彼方に位置している存在である。自分よりも、ガーゴイルよりも高次の何かであるのには違いないのだが、どうにも信用しきれない部分もあった。が、四の五のわがままを言っている状況ではないのも確かではある。
「さっきも言ったけど、自分の事は自分で何とかしてくれよ」
「わーかってるってー。要はさ、さっきの奴らを吹っ飛ばしちゃえば良いんだろ？　任せろよニンゲン」
「は、任せたぞ精霊。じゃ、とりあえずは情報収集といこう」
　一は歩き出すが、ガーゴイルは首を傾げて立ち止まったままである。
「行くとは？」
「考えたんだけど、図書館しかないな」

エレンがもう一度ヒントをくれるとは思えない。他の人間も皆病院で、余計な負担や心配を掛けたくなかった。しかし、一がぎりぎりの瀬戸際で唯一頼れる者が一人いる。
「俺の先生だ。つくも図書館まで行くぞ」

図書館は駒台の郊外に位置している。平時ならばバスを利用するのだが、今の時間では流石に動いていない。
「なあ、なあニンゲン。飛んでった方が早くないかあ？」
なので、徒歩である。シルフとガーゴイルは飛んだ方が早いと主張したのだが、一は反対した。夜間とは言え、人の目はどこにあるか分からない。目立ちたくなかった。材料がないままでソレに見つかりたくなかったのだ。
「道は何となく覚えてるけど、バスから見た景色だからなあ」
「ふむ。ではわたしたちが先に向かいましょうか。その上で一さんを誘導する。いかがでしょう？」
「そうだな……」
目立ちたくないと言うのなら、今ですら危うい。何せ動く悪魔の銅像と、宙に浮く子供を引き連れているのだから。
「頼む。けど、くれぐれも目立つなよ」
一が自分でも無理とは思う注文に、ガーゴイルは頷いた。
「図書館ってアレだろ。本がいっぱいあるところを見つければ良いんだな？」
「外からは見えねえよ」
「シルフ様にバンジー任せろっ、行くぞガーゴイル！」
風が吹き荒れ、シルフの周囲から雨が弾き出される。凄まじい速度で上方へと飛び出すと、あっという間にその姿は見えなくなった。
「追い付けますかね……」
「中身はガキだからな。しっかり手綱握っといてくれよ」
「その前に綱すら掛けられないと見ますが」

言いながら、ガーゴイルも翼を広げて飛び立った。残った一はゆっくりとした動作で歩き始める。

ソレが出現した。その知らせを堀が耳にしたのは、支部の仮眠室から数時間ぶりに出たところであった。彼は自分の持ち場である戦闘部へと戻る途中で話を聞き、その戦闘部にて顔見知りを見つけた瞬間、叫んでいた。

「藤原(ふじはら)さん！」

「おーう、起きてきたのか」

「駒台にソレが現れたのは本当なんですか？」

堀に詰め寄られた不精髭で中年の男、藤原はたじろぎ、尚も迫る彼を手で制す。

「ああ、それも二匹だ。北駒台店には連絡を入れた筈って情報部が言っていたし、お前もそう聞いてるんじゃないのか」

「寝て、ましたから」

「……まあ、最近は忙しかったしな。気にするな、堀。お前の責任じゃない。つーか、誰かが負うべき責任なんてどこにもないんだよ」

藤原は書類や雑誌で散らかっているデスクに寝そべり、そのままの体勢で堀を手招きする。

「まあ、食えや。腹減ってるだろ？　ん？」

「いえ。今はそれよりも、どうなっているかを教えてください」

「ああー？　先輩のポテチが食えないってのか」

堀はちらりと、藤原の太鼓腹を見遣った。逡巡して、彼が差し出したスナック菓子の袋に渋々と手を伸ばす。藤原は決して悪い人間ではないのだが、少しばかり押しが強いのと、少しばかり自分に甘い。そこが堀にとっては気に入らなくて、同時に、羨ましいとも思えた。

「どうだ、美味いか？」

「ええ、まあ」

愛想笑いもオンリーワンに来てから上手くなった。そう、堀は自覚している。

「そうかあ？　俺はこれ嫌いだわ。たこ焼き味なんて言ってるけどよ、見てみろよ裏。原材料にたこ入ってないんだぜ。ただのソース味のポテトチップスじゃねえかよ。お前味覚おかしいんじゃねえか？」

ただ、どこでどう笑えば良いのか。そして藤原に対してどう接すれば良いのかはまだ分からなかった。

「出現したソレと言うのは？」

「……かってえ野郎だな。あー、その、何だ。まだ分かっていないそうだ。けどよ、俺の読みじゃあ大物だな」

「大物、ですか」

「ああ、大物だ。こりゃあオフレコにしといて欲しいんだがよ、円卓じゃねえかって踏んでる奴もいるらしい」

円卓。その言葉を聞き、堀の背筋に嫌なものが走った。今、駒台にいる勤務外は一しかいない。幾らなんでも彼には荷が重過ぎる。そうでなくても一の生命線であるアイギスは今、不安定だ。もしも一とソレが出遭ってしまえば――。

「確証はあるのですか？」

「んなもんねえよ。俺もお前と一緒でフィーリングで動くからな。勘だよ、勘」

藤原はおどけて言うが、堀は彼の実力を認めている。ソレと戦うべく創立されたオンリーワン。ここはその第一線である戦闘部なのだ。伊達に勤まる筈もない。

「……なるほど、ありがとうございます」

杞憂かもしれない。だが、過ぎてしまっては遅いのだ。堀は藤原に頭を下げ、彼から背を向ける。

「おい、堀」

「なんですか？」

「北駒台はお前の担当だったな。確か、今は一ってガキしかいない

んだっけか」
「……ええ」
分かっていて聞いているのだろう。気付いていて、引き止めているのだろう。
「やめとけ。相手がマジに円卓だったらどうするんだよ。それこそ、英雄でも連れてこないと勝ち目なんてねえぞ」
「英雄、ですか」
「あ？　何か俺変な事言ったか？」
「いえ。確かにそうですね、英雄と呼ばれるような存在でなければ、神話級のソレは殺し切れないでしょう。ですが、今、この世界に英雄はいません。違いますか？」
堀は振り向き、にこやかに笑う。
「違わないわな。じゃあ分かってんだろ。勤務外一人、高が知れてるじゃねえか。大体、今のご時世人間一人を助けたってしょうがねえぞ。何をしたって死んじまう奴は死んじまうし、何もしなくても図太く生き延びる奴だっていやがるんだからな」
「藤原さんは合理的なのかそうでないのか、分かりませんね」
「てめえ、そりゃ俺の腹ぁ見て言ってんのか？　いや、言ったよな？」
「さあ？　……それでも放ってはおけない。そう言ったら、止めますか？」
藤原はスナック菓子を頬張り、ばりばりと音を立てて噛み砕いた。
「止めねえ。これ以上は面倒だしな。ま、頑張れや。精々死なないようにな。残された奴がケツ拭かなきゃいけねえんだからよ」
「恩に着ます」
「着るんじゃねえよ。あ、でも帰りに何か買って来いよな」
「たこ焼き味のスナック菓子でも構いませんか？」
「ふざけんじゃねえぞ！」
藤原の扱い方を覚えられたような気がして、堀は笑った。

足音も、呼吸する音も聞こえない。ただ、水の弾ける音だけが一の耳に届いていた。それ以外には何も聞こえず、その音に耳を傾けていると、次第に自分が雨と一緒になっていくかのような奇妙な一体感を覚え始める。

そうしている内、声が聞こえ始めた。外からではない。一の、自分自身の内から響く声である。自分から、自分ではないモノの声が聞こえる。気持ち悪いと言う感情があってもおかしくはないのだが、何故か彼はそう思わなかった。まるで昔からそうあるのが当たり前だったかのように、声は体の中に深深と染み渡っていく。

『会いたい』

何度も、何度だって繰り返される言葉。誰に会いたいのかと問うても、声はそれしかものを知らないのか、ひたすらに一を無視した。

『会いたい』

ならば会わせてやりたい。声がうるさいからではなく、一は本心からそうしてやりたいと思う。そうなれば良いのにと願う。

きっと、声の主には何度も助けられたのだろうから。これからも助けられるのだろうから、少しぐらいの恩を、それも自分のような人間に返せるようなものならば、返してやりたい。

「一さん、見つけましたよ」

「……ん、あ、ああ」

ガーゴイルが一の傍に降り立ち、成果を告げる。少しの間その意味が分からなくて、彼は頭を振った。

「方角はこのままで問題ありません。道も複雑には分かれていませんから、一さんの足なら十分掛かるか掛からないぐらいだろうと見ます」

「あいつは？」

「シルフさんなら図書館の周りを飛んでいますよ。見張りだとか何とか……」

余計な真似は止めて欲しかった。

「急ごうか」
「ええ」
声に応えたいが、何をすれば良いのか分からない。出来る事を一つ一つ積み重ねるしかないのだと、一は自分に言い聞かせた。

最初は意味が分からなかった。事態の把握には、一が図書館に着いてからそれを見て、たっぷり一分は要しただろう。
「一さん、あれは……」
ガーゴイルも戸惑っていた。それも仕方ない。あるいは当然である。
「はーなーせーっ、離せったら離せって言ってんじゃんか！」
「親はどこにいる？　連絡先を言いなさい。子供が一人で出歩いても良い時間ではないぞ」
まさか、自分たちよりも遥か高みにいるような存在が、甚平を着流す老人に頭から鷲掴みにされてもがいているとは、夢にも思わなかっただろうから。
「……警察を呼ぶしかないか」
「ちょっ、ちょっと待ってください！」
慌てて一が走り寄る。彼の声を受け、シルフを掴んだままで老人――九十九敬太郎――が振り返った。
「一、か？　こんな時間にお前までどうした。いかんぞ、まだ学生の身分だろう。学校にも来ないで夜遊びと言うのはな」
「いや、それには理由があって……」
「おおお遅い！　ニンゲンの分際でいつまでシルフ様を待たせるのさ！？」
一を認めた瞬間にがなり出すシルフを見遣り、九十九は不審そうに眉根を寄せる。
「……どうやら、お前は知らない間にグローバルな交友関係を展開していたらしいな。なるほど、並の講師ではお前の興味を引く事は

適わんか。これでは大学に顔を出さないのも無理からぬ事だ」
「えー、と。いや、あの、先生……」
「何、私はソレと付き合うな、などと言うほど固い頭を持っておらんよ。一、お前が選んだ友人だ。黄衣もそうだが、人を見る目はあるようだからな。あるいは、お前自身が出来た者に見初められたか、か」
九十九は皆まで言うなと言わんばかりな様子で頷いていた。
「わたしたちが恐くはないんですか？」
「君は？　私は九十九敬太郎。駒台大学に教授、講師として籍を置く者だ。そこにいる一を指導する立場にある」
ガーゴイルに臆するどころか、九十九は朗々とした声で、むしろ誇るように自己紹介を始める。
「は、はあ。ご丁寧な挨拶、痛み入ります。わたしはガーゴイル。あなたたちがソレと呼ぶモノで、そうですね、一さんの友人だと名乗っておきましょう」
「結構、礼儀正しくて何よりだ。……ガーゴイル、恐怖を感じるのはどんな時だと思うね？　私は、生命の危機に瀕した時がそれではないかと考えている。私以外の大多数の者もまずはそう思うだろう。では、こちらからも尋ねよう。私は、今現在生命の危機に瀕しているか？」
ガーゴイルは首を横に振り、否定の意を示した。
「しかし、わたしの見てくれがこう、ですから。大多数の方は恐怖するのではないでしょうか」
「かもしれん。だがな、老いとは怖いものだ。パッと見ただけでその人物の何たるかを判断出来てしまうほど、感覚が鋭くなくなってしまったのだよ。それに、一の友人なのだろう？　ならば問題はない。私とて一を全面的に信頼している訳ではないが、こやつが何か悪さをしようと企むだけの度量がない事を信頼している」
「先生、それは信頼と呼ぶのでしょうか？」
「かっかっか。さて、ではこちらの者にも挨拶願おうか」

一を無視して、九十九はシルフに目を向ける。
「な、なんだ？　やっ、やるか？」
「やらん。私は九十九敬太郎と言う。君の名前も聞かせてくれたまえ」
シルフは九十九を睨み付けていたが、やがて、根負けした。
「……シルフだ。風のせーれー、シルフ様だよ」
「風の……？」
「あ、先生。実はですね」
「いや、まあ待て。話が長くなりそうだ。雨で体も冷えているだろう。何か拭くものでも持ってくる。その後で中に入ると良い」
九十九はシルフから手を離し、図書館の中へと入っていく。一たちは呆気にとられ、その後姿を眺めるしか出来なかった。
「なんつーか、あいつとんでもないニンゲンだな」
「わたしたちに驚くどころか、まさかこちらが驚く破目になるとは……」
「俺も今更ながらびっくりだよ」

Come on, monster

九十九からタオルを借り、シルフとガーゴイルの体を拭ってやり、図書館に入ったところで一は気付いた。どうして明かりが点いていたのだろう。どうして九十九がいたのだろう、と。

「開いているとは、正直思ってなかったんですけどね」

その言葉を聞いて九十九は笑う。

「許可なく踏み入るつもりだったか？」

「事後承諾ってホントにドキドキしますよね」

「たわけが」

「それより、先生こそこんな時間にどうして……」

一が言い掛けた時、室内だと言うのに彼のすぐ傍を一陣の風が吹き抜けた。

「すっげー！　本がいっぱいじゃん！　漫画ないの！？　漫画！？」

「し、シルフさん、勝手に飛び回っては……」

シルフが階段を使わずに二階まで飛んでいく。そのすぐ後をガーゴイルが追い掛けていった。

「……すいません」

「気にする事はない。が、しまったな」

「しまった？」

一拍置いて、

「きゃあああああああああああああっ！？」

女性の悲鳴が館内にこだまする。九十九は禿頭をぽりぽりと指で掻き、困った風な顔を見せた。

「紹介が遅れてしまったな。上には司書の公口がいる。実は、私たちは調べものをしていたんだが」

「あー……」

「仕方ない。一服したかったのだが後回しだな」
公口にとっては今までにない緊急事態だろうに、九十九は落ち着いた様子で階段を一段ずつ上っていく。
「戦前生まれはすげえわ」
一は呟き、九十九の背を追った。

「紹介しよう。一、彼女は公口由梨。うちの職員で、司書をやってもらっている」
「あ、えっと、どうも」
一はとりあえず頭を下げる。
「こっ、こちら、こそ？　あの、公口です。ええと、一君、だよね？」
一は改めて公口を見遣ったが、髪の毛はぼさぼさ。眼鏡の下には大きな隈が出来ている。以前にも何度か見た事がある黄衣の先輩だ。厳しそうで、怖い司書。しかし、今は見る影もない。彼女は疲れを隠し切れず、ソレに遭った驚きを隠し切れず、人見知りの童女のようにおどおどとしていた。
「ええ、何度かお世話になっていたと思います」
「あ、ああっ、ええと、あの時は怒鳴っちゃってごめんなさい」
「いや、悪いのは俺と黄衣ですから」
と、言い終わってから気付いてしまう。今この場で、つくも図書館の面々に対しての黄衣はタブーなのではないか。一は九十九の様子を盗み見るが、彼は表情一つ変えずに目を瞑ったままである。
「うーん？　なーに黙り合ってんのさ。それよりさ、ダメニンゲン。漫画ないの、漫画？」
「ダ、メ……？　え、それって、もしかして私の事？」
シルフに指差された公口が、改めて自身を指差した。
「見た感じそれっぽいじゃん」
「……漫画なら、後で読ませてあげる」

公口が溜め息を吐いて顔を伏せる。
「えー？　今で良いじゃん良いじゃん」
「シルフ、ちょっと黙っててくれないか」
「はーっ！？　なんだよ良いじゃん、バカ。ケチ。バカ」
見かねた一が助け舟を出した。シルフは膨れっ面を大いに見せ付けてから天井付近に陣取る。
「ねえ、アレって、本当に精霊なの？」
「ええ、まあ」
「ふうん。案外普通って言うか、人間っぽいのね」
公口はぼんやりとシルフを眺めていた。一にとっては、実に有難い展開である。正直な話、人間の子供らしい外見のシルフはともかく、ガーゴイルを見た彼女が錯乱しないか心配だったのだ。シルフとガーゴイルが人を襲わないと分かっている者ならばともかく、一般人の公口にとっては、ソレを間近で目にするなんて経験は初めてだったに違いないだろうから。
「ふむ。全員の紹介は済んだか。……公口、茶でも煎れてきてはくれないか？」
「あ、はい、分かりました。えっと、皆さん何かリクエストはあります？」
「シルフ様コーラが良い！」
いの一番にシルフが発言するが、公口は苦笑いで返していた。
「わたしは結構です。像ですから」
「は、はあ……。一君は？」
「俺は何でも良いですよ」
「分かりました。それじゃあ、少し待っててくださいね」
九十九は公口が階段を下りていくのを確認すると、重々しく口を開く。
「調べものをしていたと言ったな。アレはな、黄衣を襲った者の事についてだ」
やはりそうだったか、と。一は内心で得心し、話の続きを待つ。

「うちの職員が襲われた。目には目を、と言う話ではないが、犯人ぐらいは割り出したいと思ってな。しかし……」
「犯人は、人間ではないのかもしれない、ですか」
「その通りだ。だからこそ、警察に頼らずここで、自分たちで調べている。黄衣も以前は命をやり取りする場に身を置いていた者だ。並の人間では彼女に傷を付ける事すら難しいだろう。それに、だ。一、どうやら、お前たちも手酷く痛め付けられてしまったらしいな」
どうして知っているのか、とは問わない。目の前の男ならば、自分のほくろの位置を全て言い当ててもおかしくはないと一は思っている。
「お前が何をやっているのか、何者なのかなどとは問うまい。だが、正直私の方も手詰まりでな。実際に出遭った者の口から聞いておきたい。糸口のようなものさえ欲しいのが現状だ」
勤務外を病院送りにしたモノについて、勤務外の口から聞きたい。直接的ではないが、九十九は一にそう聞いている。
ばれてしまったか。あるいは、とっくにばれていたか、だ。一は頭を掻き、天井を見上げた。
「申し訳ないですけど、そいつの正体については一切分かってないんです。出来る事なら、俺が知りたいぐらいですよ」
「……それは、部外者の私には話せないという意味か？」
見えない何かが肩にずしりと圧し掛かった。そんな気がして、一は首の骨を鳴らす。
「違います。第一、先生は勤務外について勘違いしていますね。ぶっちゃけてしまえば、あいつらはただのコンビニのアルバイト店員なんですよ。下っ端の下っ端。現場の人間には最低限の情報しか与えられないってのが本当のところです」
「ふ、そうか。仕方あるまい。ただし、何か分かったら私にも教えろ。良いな？　それから、ぶっちゃけは止めろ」
「……はい」
何も解決していないのだが、一は安心した。黄衣には帰られる場

所がある。ちゃんと心配されているのだ。
「では、そちらの番だな」
「はい？」
「用事もなく、こんな時間に、こんな辺鄙な場所に来る者がいるか。一、お前は何を求めて図書館にやって来たのだ」
「それは……」
ここに来て一は迷う。巻き込みたくない。しかし、巻き込もうとしたのは自分なのだ。悪い癖だとは思いつつも、彼は心の中で答えの出ない自問自答を繰り返す。
「一、私たちの事なら気にするな。自分の身ぐらい、自分で守る。お前が気にするような事は一つもない。第一、そうしないと駒台が危ないのではないか、んん？」
「……です、か。うん、そうですね。実は、蛇の怪物について知りたいんです。それも、双子の蛇について」
「双子の蛇か。一、一応聞いておくのだが、これはまた別件のソレなのか？」
「ええ、別件です。その、残念ながら」
九十九は額に手を当てて唸った。
「う、すまん。今はどうしても気になってしまってな。……話を戻すが、双子の蛇、蛇か。蛇だけならば思い当たるモノは、あり過ぎるくらいなんだがな」
「あり過ぎるくらい、ですか」
「蛇と言うのはな……」
多分、この話は長い。そう思った一は、
「あ、蛇が神聖視されている事についてなら、以前黄衣から聞きましたよ」
勇気を振り絞った。
「……そうか。ならば説明を省くが、蛇の怪物は多い。それこそ枚挙に暇がない。清姫、やまたのおろち、ヨルムンガンド、バジリスク、エキドナ、ウロボロス、七歩蛇、ククルカン、ラミア、虹蛇、

ああ、沼御前もいたか。それに……」
「ええと、数が多いのは分かりました。けど、双子って言うと……」
九十九は再び唸る。
「アンフィスバエナと呼ばれる怪物がいる。ギリシャ語で両方を意味するアンフィス。行くを意味するバイネインを組み合わせたのが名前の由来だ。体の両端に蛇、竜のような頭が二つ付いている。近いのはこれぐらいしか思い付かんな」
近いが、遠い。一が遭ったそれは蛇の頭をしていたのでもなければ、竜の体を持っていたのでもない。彼女らは人間の形をしていたのである。
「具体的に言うと、蛇のような双子、かもしれませんね」
「ふむ。そうだな、少し調べてみようか。……その前に一息入れてはどうだ？」
九十九の視線の先を追うと、危なっかしい足取りでトレイを運んでくる公口が見えた。
「図書館は飲食禁止なのだが、館長の私が率先して茶を欲しがったのだから良かろう。何、気後れする事はない。アダムとイヴの林檎然り、禁忌と言うのは実に美味いものだと思うぞ」
「皆さん、お待たせしましたー」
「……高そうな皿ですね」
机の上に置かれたカップとソーサーを見て、一はぼんやりと呟いてしまう。
「ふふっ、高そうじゃなくて、高いのよ、それ」
「あ、はは、そ、ですか」
恥ずかしくなって目を逸らした。一は紅茶の香りを楽しもうともせず、一息で飲み干す。体が温まったのは、紅茶のせいではない筈だと思った。
「し、シルフ君？　それとも、シルフちゃん？」
「うーん、別にどっちでも良いよ。それよりダメニンゲン、それ、コーラじゃないぞ」

「えーと、コーチャ？」
「言い方だろそれ！　もう良いよ！　何かそれもおいしそうだし！」
公口はどうやらシルフが苦手らしい。本当なら弛緩出来るような状況ではないのだろうが、他愛もない事を考え、一は少しだけ余裕を持てた気がした。
「はい、あなたもどうぞ」
「……？」
差し出されたカップを見てガーゴイルは首を捻る。
「わたしは飲めないのですが」
「気分、気分。ほら、一人だけ用意しないって言うのも嫌じゃない。ここに置いとくから、そうね、飲んだ気分だけでも味わってちょうだい」
「……ありがとうございます」
微笑み、公口は席に座った。彼女が紅茶を一口飲んだのを確認してから、一は口を開く。
「あの、公口さん」
「ん、何かな？」
「双子の蛇について何か知りませんか？　もしくは、蛇のような双子、とか」
「んんん？」
何を聞いているのか判然としない質問だとは一も分かっていた。それでも、公口は何か考えていてくれているようである。
しばらくして、
「ゴルゴン、じゃないかしら」
ぽつりと、彼女は呟いた。
「ゴルゴン……？」
「ええ、ギリシャ神話に登場する、三姉妹から成る魔物よ。長女のステンノ、次女のエウリュアレ、三女のメドゥーサ。グライアイ三姉妹の姉に当たり、毒牙を持ち、髪の毛の代わりに頭からは蛇が生えているって怪物」

――――メドゥーサ……！

「うん、流石にゴルゴンは有名だからね、知っていたかしら。ただ、ホメロスのオデュッセイアではゴルゴンは下界の魔物とされ、ヘシオドスの神統記では海神の娘たちとされているの」

「作品によって全く違うモノになっているんですね」

「最終的には神統記のゴルゴンも魔物になっちゃうんだけどね。姉妹の三女、メドゥーサが『私の髪は女神よりも美しい』なんて言っちゃうもんだから、オリュンポス十二神のアテナによって醜い魔物に姿を変えられてしまったの」

「ふむ、博識だな公口。だが一が探しているのは双子の蛇。蛇のような双子であって三姉妹ではないぞ」

九十九の指摘を受け、公口は顎に指を置く。

「そもそも、その前提が間違っているかもしれないですね。一君が見たのは双子ではなく、二人だった。本当は三人なんだけど一人足りていなかった、とか」

『会いたい』

「双子ではなく三姉妹。ならば、ゴルゴンは一の探しているソレに当てはまるか」

多分、いや、確実にそいつなのだと、一は直観的に理解した。

「公口さん、ゴルゴンについてもっと教えてくれませんか？」

「良いけど、良いのかな？」

公口はシルフとガーゴイルを見遣る。

「あー、シルフならもう寝てます」

「あ、そう？」

「わたしについてもどうかお気になさらず。退屈だからではなく、口を挟もうと思えないくらいに興味深い話でしたから」

「そっ、そう？　じゃあ、お姉さんもうちょっと頑張っちゃおうかな」

ソレに煽てられて喜ぶ女がいた。
「……えーと、まず長女のステンノなんだけど。彼女の名前の由来は『強い女』。力をイメージしているんだと思う。次女のエウリュアレは『広く彷徨う』ね。長女と次女に関して私が教えられる事はこれぐらい。けど、メドゥーサは凄いわよ」
「凄い、ですか」
「そりゃ、超有名だからね。一君だってそこそこは知っているんじゃないの？」
「いや、俺はそういうのに疎くて」
「え、そうなの？」
公口は思わず九十九に視線を遣った。彼は咳払いを一つ。
「公口、君が詳し過ぎる。まあ、助けにはなるだろう。その調子で頼む。私は、当分の間黙っているとしよう」
「は、はいっ、任されました。それじゃあ一君、どんな事が知りたい？」
そう聞かれても、一はメドゥーサについて名前程度しか把握していないのである。
「任せます。どんな事でも構わないので」
「うーん、それじゃあ、まずはメドゥーサの名前、その由来についてからだね。実はね、メドゥーサはギリシャ神話に組み込まれる前、その前身となったモノがあるの」
公口はこほんと喉の調子を整える。
「メドゥーサの語源は『女王』、『女支配者』って感じね。大抵の人が知っているメドゥーサは怪物だけど、ギリシャ神話に組み込まれるまでは神様として、ええと、地母神って言うんだけどね。ギリシャの先住民族に崇められていたの」
「神様、だったんですか？」
「神話って遠い遠い昔から、色んな人たちが作ってきたからね。齟齬とか矛盾とか、色々と出来てしまうものなんだと思うわ」
一は足元のアイギスに目を向けた。何度も助けられたのに、その

相手の事を知らないのは不実なのだと思い直す。
「それでね、メドゥーサってのは一言では言い表せないぐらい複雑な神様だったのよ。色々と語りたいって部分はあるんだけど、えーと、時間はなさそうだよね。うん、とにかくすごい神様だったの」
「……はあ」
「古代の人にとって蛇とは再生であったり、女性であったり、海を象徴していたの。ほら、何度も脱皮するでしょ？　アレが昔の人には意味が分からなかったんじゃないのかな。だから蛇は、再生、不死、季節が循環していくってのを表す生き物になってたんだと思う。それがまた大地や地下と結び付く。不死の象徴ってのが今度は女性と関係してくるの」
「へえ、どうしてですか？」
「ほら、け、経血。不死ってところがアレとちょっと似てるの。傷もないし、痛みもないのに血が出るし、月の満ち欠けと同時進行するから、あ、はは、男の人たちにとっては怖かったんじゃないのかな。そ、それでね、ここからがメドゥーサが怪物になる重要なところなんだけど」
　流石黄衣の先輩と言うところか、公口は淀みなく、説明するのが楽しくて仕方ないと言った様子で話を続けていた。一は感心、納得し、ここに来て良かったかもしれないと改めて思う。
「メドゥーサはアテナの怒りを買ったから怪物に変えられたんじゃないの。噛み砕いて言えば、ギリシャ人がメドゥーサを怪物に変えてしまったのよ」
「人が、メドゥーサを？」
「ええ。先住民たちは、後から来たギリシャ人によって飲み込まれてしまったの。それは人だけではなく、土地も、文化も、信仰していた対象だって例外ではなかったわ。それまで世界は聖なる母、女神から誕生していたんだけど、ギリシャの父権制が始まる事によって状況は一変するの。父権制ってのは、言っちゃえばザ・男尊女卑の社会ね。そんな社会、世界になっちゃうと、メドゥーサの立場は

どうなると思う？」
　黄衣ナコト。九十九敬太郎。公口由梨。つくも図書館の面々には、正直言って勝てないと一は気付いた。この面子とは相性が悪過ぎるだろ、と。
「えーと……」
「少し難しかったかな？　メドゥーサは、言わば女性の知恵と力を象徴するものだったのに、男性社会になってしまったら、彼女の存在はちょっとズレてるよね。実際、メドゥーサを奉ったモノは殆ど壊され、汚され、切り開かれてしまったわ」
「だから、怪物にしたんですか」
「……古代の宗教には特徴があってね、新しい信者を取り込めるように、その土地の、えーと、土着信仰を取り入れるのが当たり前だったの。やっぱり、メドゥーサほど大きな存在のモノを簡単に失くす訳にはいかなかったのね」
　元々、メドゥーサは神であった。その土地に住む住人の変化、権力の推移。様々な要因が絡み合い、彼女は神の座から落ちた。髪の毛を掴まれ、叩き落とされたのだ。
「でも、メドゥーサをそのまま神として扱うのは難しかった。ほら、ギリシャ神話には他にもたくさんいるでしょ。ヘラとか、アルテミス、アテナ。有り体に言えば、メドゥーサとは被っちゃうんだよね。でも、その名は残したい。だから、メドゥーサは怪物になった。怪物として、ギリシャ神話に組み入れられてしまったの。メドゥーサだけじゃないわ。エキドナ、スフィンクス、パイア、デルピュネ、キマイラ、スキュラ、セイレーン、ハーピー、ラミア……ね、ギリシャの怪物には女性が多いでしょ？　男性が女性を支配する。その為には男の英雄と女の怪物を用意して、分かりやすく『どうだ、男の方が強いだろ。女は黙って支配されるのだー』って言いたかったのよ」
　何故だか、一は男である事に申し訳なくなってしまった。
「極め付けはメドゥーサの討伐ね。彼女は首を狩られ、殺された。

メドゥーサほどの存在が英雄的存在の男性に殺害される事で、男性が全女性を支配、屈服させたのを示したのね。……こんなところかしら。どう、少しは参考になったかな？」

「参考になり過ぎて、ちょっと頭が付いていかないって言うか……」

「ちょっと熱が入っちゃったかも。ごめんね、最近はこういうのに凝ってるんだ。あ、何か聞いておきたい事、あるかな？」

「……それじゃあ、メドゥーサを殺したって英雄について聞かせてもらえますか？」

「うん、お安い御用だよ。えっとね――」

公口が話を始めた瞬間、先ほどまで目を瞑り、微動だにしなかったシルフが跳ね起きる。

「う、え、え？」

「シルフ、急にどうしたんだよ？」

シルフは窓の外を見遣り、不安げな表情を浮かべた。

「風が、嫌な感じになった」

「……風？　おいシルフ、意味分かんない事言ってないで……」

一は立ち上がり、何の気なしにアイギスを拾い上げる。

刹那、ここにいてはいけないと気付いた。アイギスが鳴いている。メドゥーサが呼んでいるのだ。

「二人ともどうしたと言うんだ。一、座れ。事情を説明しろ」

まともに説明している時間などない。

「先生たちは隠れててください」

「え、一君どうしたの？」

「ソレが来ます」

シルフとガーゴイルは既に階下へと降り立っていた。一も後を追うが、彼の肩を九十九が掴む。

「このタイミング、計っていたとしか思えんな。メドゥーサか？」

「その姉ちゃんですよ。先生、絶対に出てこないでください。俺たちが引き付けて、どこかに誘導します」

だから、早く行かせて欲しい。ソレを連れてきてしまったのは一

の、彼の持つアイギスなのだから。
「……公口、館長室へ行くぞ。あそこの扉は厚くしてある。何かあってもしばらくは持ち堪えられる筈だ」
ソレ相手では何の気休めにもならない。公口だってそれぐらいは理解している。しかし、彼女はただ頷き、階段を下りる前に一を見て、頭を下げた。
「一、勝算はあるのか？」
「ソレを倒す勝算ですか？」
「違う。五体満足で生還出来るかどうかだ。……怪我でもしてこれ以上欠席すれば、確実に落第だぞ」
一は階段を下り始め、九十九もその後を追った。
「逃げるだけですから、心配ないですよ」
言ってやりたかった。怒鳴り散らしてやりたかった。何も知らない部外者が口を出すんじゃない、と。ソレとの戦いに赴く中で、勝算があった例など一度だってなかった。絶対など信じられず、偶然にだけ助けられてきたのである。
「ふむ、気を付けると良い。外は雨が降っている。滑るなよ」
「……先生こそ」
だが、満足な礼も出来なかった。巻き込んでしまった事に対して、詫びすら入れられなかった。だから、必ず戻ってこようと思う。握ったアイギスは妙に軽くて、しかしそれを恐ろしいとは感じなかった。

「行っちゃいましたね」
「慌ただしい事だ。若さと勢い、やはり私は老いてしまったようだな」
明かりの落ちたつくも図書館。九十九たちは館長室にこもり、スタンドライトの僅かな照明だけを頼りに紅茶を飲んでいた。
「あの、館長。私たちも外に逃げた方が良い気がするんですけど」

「公口、こういった場面ではな、策もなく、案もなく、恐怖に駆られて下手に動いた者から死ぬ。果報は寝て待て。待てば海路の日和ありとも言うだろう」
「先手必勝だとも言いますが」
「ぬうう、口が減らなくなってきたな。黄衣の影響か？」
「かもしれないですね。……彼、大丈夫でしょうか」
公口はカップを取ろうとしたが諦めてしまう。手が震えてしまい、しっかりと握れなかったのだ。
「無論だ。私たちが死ねば黄衣の居場所はなくなってしまう。が、一が死んでも黄衣は居場所を失う。ならば、我々が死ぬ道理はなかろう」
「でも、現れたソレが本当にゴルゴンだったら……そんな怪物をどうにかするなんて考えられないです」
「信じるしかあるまい。一は、ああやってソレをどうにかして来た筈だ。生き抜き、勝ち抜き、ここにいた。何も知らない我々が口を挟むべき問題ではなかったのだろう」
九十九は平然とした様子で茶を飲んでいる。いつもと変わらぬ上司の様子を見て、公口も少しずつ落ち着きを取り戻し始めた。
「蛇、か。確か、一はメドゥーサの首を刈ったモノを聞こうとしていたな」
「あ、はい。一君は何か思い付いていたのでしょうか」
「あるいは何かを思い付く為に尋ねたか、だ。ふむ、折角の機会だ。公口、蛇の女王を殺し切った英雄について聞かせてもらおうか」
「わっ、私が館長に、ですか？」
「私とて森羅万象を知り尽くしている訳ではない。君のような若者から教えられる事は広大無辺だ。知恵を授けてはくれんか」
若者。その言を確認した途端、公口の頬がだらしなく緩む。
「えっとですね、メドゥーサの首刈りと言うのは……」
「そこは先程も聞いた。……そうだな、英雄英雄と言っておったが、彼の名を教えてもらおうか。ふむ、私でも知っている名前かね？」

「勿論です。名前だけなら誰だって知っていると思いますよ。見たものを石に変えてしまう邪眼を有する怪物。その首を刈るのは何よりも困難で、誰よりも勇敢な者にしか勤まりません」
公口はカップを手に取り、窓の外に目を向けた。
「メドゥーサを討伐した英雄の名は、ペルセウス。ほら、星座の名前になっていますから」
「ペルセウス、か。そうか、なるほどな。よもや一が英雄になれるとは思えんが……」
「……どうして、英雄はいないんでしょう。世界にはこんなにも、あんなにも怪物がいると言うのに」
九十九は、その問いに答える事が出来なかった。

雨は未だ強く。風は更に激しく。

「ニンゲン、跳ぶぞ。文句は言わせないからな」

一は、アイギスではない、店から持ってきていたビニール傘を投げ捨てた。この状況、傘を差せるほど悠長なものではないと彼も認識している。

「頼む。こっちが先に見つけるぞ。図書館まで来させちゃあまずい」

「一さん、見つけた後はどうするのですか？」

「……注意を引き付けて図書館から引き離す。とりあえず、戻るしかないな」

まだ人がいるであろう街の中心部にソレを近付けたくはない。しかし、英雄に会わなくてはならないのだ。何かヒントを得るには人と会わざるを得ないのだと一は思っている。それに、狙われるのはアイギス、あるいはその中にいるメドゥーサなのだ。自分にさえ注意を引き付ければ、ソレは関係のない人間を襲わないだろう。そう考えれば、罪悪感もある程度は薄れてしまう。自信はない。所詮は自身の行動を正当化する為の言い訳、詭弁でしかないのだ。

「行ってくれ、シルフ」

「任せろよニンゲン」

シルフは口の端をつり上げ、悪戯っぽく笑む。瞬間、彼らの周囲に降り注ぐ雨が飛び散った。遅れて、風がびゅうと唸りを上げる。一は手で顔を覆い、目を瞑った。

「ふむ、これは……」

ガーゴイルが低く呟く。一が目を開けた時には、彼は彼女に変わっていた。

「跳ぶんならこれでなくっちゃな。なあ、ニンゲン？　オマエだっ

てこっちのがイイんだろう？」
　一は頭を掻いて視線を逸らす。やはり、気恥ずかしいのだ。さっきまでぶかぶかだったTシャツは、今は彼女の体型にぴったりとフィットして、胸元を強調させている。シルフは柳のように細い手足がぱたぱたと動かした。
「……わざわざ女にならなくても良いじゃないかよ」
「でっかくなると疲れるんだけどさー、やっぱしチビん時よりこっちのが良いじゃん」
　風の精霊であるシルフには年齢がない。姿、性別などが不定なのだ。男の子の姿をしているのが常なのだが、シルフはこうやって女性にも姿を変えられる。
「ははあ、驚きましたね。精霊というのは、やはりわたしなどでは想像も付かない事をやってのけるのだと見ます」
「へっへー、だろ？　そうだろ？　うんうん、そいじゃあ気分も乗ったところで跳ぶとしようかな」
　シルフはぴょんと跳ねると、一の背後に回った。そして、一切の躊躇を見せずに彼を抱きすくめる。
「……っ！　あ、あのな、シルフ……」
「ごちゃごちゃ言うなよ、時間はないんだろ」
　一は溜め息を吐いた。決して嬉しくない、事はない。しかし、どうしたって恥ずかしいのである。
「どうせ飛んでいくんならガーゴイルに乗せてもらいたいんだけど」
「オマエ、ニンゲンのくせにシルフ様を裏切るのか？」
　シルフは更に一を抱き、締めた。彼女が風の精霊というのもあって、彼はシルフの体重を殆ど感じていない。が、距離は断然近くなる。
「これ以上はやめろっ、なあ、ガーゴイル？」
　助けてくれと言外に訴えられているようで、ガーゴイルは困ってしまった。
「……一さん、勿論、わたしの背に乗せても構わないのですが、一

つ問題があるのです」
　まるで人間みたいに咳払いをしてから、ガーゴイルは申し訳なさそうに口を開く。
「わたしはあまり早く動けないので、やはり、シルフさんに助けてもらった方がよろしいかと」
「こいつ無茶苦茶しやがるんだよ。酔って戦いどころじゃなくなったらどうすんだっての」
「安心しろニンゲン、こないだのでコツは覚えたから。良いからもう、勝手に行くぞ」
「は？　あ、おい、お、ちょ、ちょ……」

　風邪を引かないだろうかと、一はぼんやりと考えた。強い風、強い雨。彼の全身に隈なく容赦なく降り掛かっている。
「まだ見えないか」
「近いとは思う。さっきよりもヤな感じがしてきてるからな」
　情けない格好だと一は思った。線の細い女性の姿となったシルフに後ろから抱き締められ、空を跳んでいる。
「一さん、ゴルゴンを見つけたらどうするのですか？　注意を引き付けるとは仰っていましたが、具体的には」
「……ガーゴイルは降りずに見といてくれ。逃げる事になるだろうから、俺らとはなるべく距離を取るようにな。注意を引き付けるのは、まあ、何とかなるだろ」
　アイギスを持っている限り、必ずこちらに向かってくる。一はそう信じている。
「一さん、あなたは何かを分かっていますね」
「何かって、何をだよ？」
「何かです」
　要領を得ない質問だったので一は答えなかった。しかし、ガーゴイルが敵の正体だけでなく、一の持つアイギスとメドゥーサについ

て疑問を抱いているのを感じる。
しばらくの間、慣れない浮遊感に身を委ねていると、見えた。
「見えましたね」
ガーゴイルが呟き、一が頷く。
だだっ広い道路の真ん中を、傘も差さずに悠然と歩く二人の女を一は捉えた。
「……狂ってやがる」
初めて出遭った時は極度の興奮状態に陥っていて分からなかったのだが、彼女らは服と呼べるようなものを纏ってはいない。惜しげもなく自らの肌を露出させていた。辛うじて、下着のような、そんな頼りない布切れで局部を隠しているだけである。
「おい、ニンゲン？」
人間の常識を理解し、弁えようとする素振りすら見せていない。そんなモノに、今から声を掛けようと言うのだ。
「やれるさ」
震えない方が、どうかしている。
「ガーゴイル、捕まるなよ」
「一さんたちこそ。これ以上なく、お気を付けて」
互いに頷き合い、一の体が少しずつ降下していく。シルフは降り立つ場所、距離を測りかねているらしく、彼女にしては慎重な立ち回りであった。
「いつでも逃げられるような位置にしとけよ」
「誰に指図してんのさ。このままオマエだけ叩き落とすぞ」
軽口を叩くシルフだが、その表情はやはり固い。
少しずつ距離を詰めていくと、ソレが立ち止まるのが見えた。ゴルゴン、彼女らも一を捉えたのである。
距離にして、五メートル。そこがシルフの限界だった。
「あら」
「あら」
ソレが揃って首を傾げる。

「やっぱり、そこにいたのね」
「やっぱり、そこにいたのね」
ソレの声が揃って聞こえる。
「会いたかったわ」
「会いたかったわ」
ソレの視線が一に向く。会いたかったと、絶世の美女からそう言われても彼はちっとも嬉しくなかった。彼女らの視線は、正確には一でなく、彼の持つアイギスのみに注がれている。あの美しさは毒であると、この世に存在してはならないものだと一は思った。
「ゴルゴンって言うんだってな、あんたら」
言葉はきっと届かない。分かっていたが、何かしていないと気が触れてしまいそうだった。
「どっちがステンノで、どっちがエウリュアレなのか教えてくれよ」
「待っててね」
「姉さんたちが」
「あなたを」
「救ってあげるから」
ふと、一は前回とは違うところに気が付く。ゴルゴンの片割れ、彼から向かって右側に立つ女には片目がなかったのだ。
「なあ、シルフ。あいつはどうして片目なんだ？」
「覚えてないのかよ。アレはオマエがやったようなもんだぜ。ほら、剣でさ、こうグサーっと」
「俺すげえ！　いつの間にそんな事を……」
「アホだなオマエ。あいつらに折られた破片が勝手に突き刺さってただけだよ」
そんな事だろうとは思った。が、これで見分けが付く。アイギスがまだ壊れておらず、ソレの名前さえ確認出来れば、一にも勝機が見えてくる。
「はーいステンノさんは手ぇ上げてー」
「あら」

「あら」
ソレが同時に足を踏み出した。
「忘れていたわ」
「忘れていたわ」
「鼠はまだ」
「生きていたのね」
飛べ。一がそう指示するより早くシルフは地面を蹴っている。風が舞い上がり、雨が弾け飛ぶ。
「ガーゴイルっ！」
既にガーゴイルは一たちよりも離れたところを飛んでいた。とてもじゃないが、戦おうなんて気は起きない。ソレの注意を自分に向けて図書館から引き離す。ひとまずの目的は果たしたのだ。今はここで満足しておかなければならないだろうと判断する。
「あら」
「あら」
距離は離した。一たちは飛んでいる。空中は彼らにとって安全な場所だ。
「逃がさないわよ」
「逃がさないわよ」
だと言うのに、一はアイギスをソレに向けている。距離を離して、ソレの手が届かない場所にいたところで少しも安心出来ないのだ。どちらがステンノで、どちらがエウリュアレか判断は付かない。それでも、アイギスが生きているのなら、どちらかの動きは止まる筈なのだ。
「ステンノ、止まれ！」
雨が降り、風が吹いている為にいつもよりも声を張り上げて宣言する。
「ニンゲン、オマエさあ」
しかし、アイギスは一切の反応を見せなかった。
「バカ？」

アイギスを何とかしてくれるなら馬鹿でも良い。一は諦め、それでも、今となっては穴の空いた安っぽい傘に成り下がったアイギスを手放そうとは思わなかった。

一はうな垂れ、眼下に立つゴルゴンに視線を向ける。彼女らは微動だにせず、視線だけを送り返してきた。

「ニンゲン、とりあえず街に戻れば良いんだな？」

「ん、ああ。そうだな、まずはガーゴイルと……」

目を離した一瞬の隙だった。ゴルゴンが、いない。その片割れが消えていたのだ。一は何事か叫び、シルフは風を集めて速度を上げる。何が何だか分からないまま、彼らはただ、恐怖と焦燥に駆られて逃げた。

「どうなってんだよ！？」

「シルフ様が知るもんか！　それより、何だかまずいぞ」

落とさないようにアイギスを握り込み、一は振り返る。

ソレが、いた。翼のない、人型のソレが空を飛んでいる。当たり前のように、一らの後ろにぴったりと付けていた。

「……嘘だろ」

「漫画みたいだな」

自身を棚に上げて、シルフが気楽そうに呟く。

「気のせいか、向こうの方が速い気がするんだが」

「こっちは二人乗りみたいなもんだからしょうがないじゃん。シルフ様だけだったらあんなのブッチギリさ」

このままでは追い付かれてしまう。一の読みは完全に狂った。彼は、飛行している限りは安全で、のらりくらりと時間を稼げると踏んでいたのである。

アイギスは力を発揮しない。敵の正体、名前を知ったところでそれだけではどうしようもない。

「……武器がなさ過ぎる」

「うわあああっ、やばいやばいやばいなあもうシルフ様だけでも逃げて良いだろ！？」

目を瞑り、覚悟する。
「一さんっ」
自分を呼ぶ声が聞こえ、一は弾かれるように顔を上げた。再度振り向いた瞬間、真っ黒な影が目前に迫っていたソレを中空で踏み潰す。
「逃げてください！」
「ガーゴイルっ！」
シルフが片手を伸ばすが、その手をガーゴイルは掴まなかった。ソレを足蹴にしたまま、凄まじい速度で落下していく。
一は迷った。ガーゴイルはシルフよりも足が遅い。彼を守る為に飛んでいては、いずれはソレに追い付かれてしまう。ならば、どこかで決断しなければならない。ガーゴイルを切り捨てて逃げるのか、ソレと戦うのか、そのどちらかを。
ガーゴイルもその事を理解していたのだろう。理解しているからこそ、ああやって行動に移した。彼は、一たちの足枷になりたくなかったのである。
だから、選ばなければならない。
「ニンゲンっ、どうすんのさぁ！？」
答えはとうに出ていた。一は、
「……っ、決まってんだろ」
借りは返す主義なのだから。

路面を砕く音と女の短い呻き声を聞きながら、ガーゴイルは空を見上げた。まだ迷っているようだが、一たちには逃げてもらわなければならない。自分ではこれ以上はやれないのだ。ここまでが限界で、この場所で最後なのだと分かっている。こうなるのは分かっていた。分かっていて、一に付いていった。
街を守りたい。
そんなぼんやりとした思いではあったが、第三者の立場を貫いて

きた自分にしては大いなる変化だろうとガーゴイルは納得している。この結末を見届けられない為に、満足していると言えば嘘になるが、一を逃がせたのならそれで構わない。この街を守るのは自分ではない。彼なのだ。少し頼りなく、あまりにも普通過ぎる彼こそが――――。

「あら、あら」

「……もう起き上がりますか。流石はゴルゴン、ギリシャ神話の蛇神だと見ますね」

「上からだなんて、そんな……」

容赦など、躊躇など出来ない。相手はガーゴイルよりも遥かに格上で、神にも近しい存在なのだ。奇襲が成功したのは正しく奇跡。だからこそ逃す訳にはいかない。例えこの身が粉々に打ち砕かれようとも、一分、一秒、それより短い時間でも稼いでやる。そう決意し、血の通わない脚に力を込めた。

「魔が、魔に歯向かうのね」

「見てくれだけで判断されるのには慣れています。が、自らを魔と誇称するあなたよりは……っ」

「あの子の元へ行かないと」

砕けたコンクリートに、更にひびが入っていく。踏み付け、起き上がる。相反する力と力の余波は周囲の地面にも影響を与えていた。

「早く、行かないと」

行かせるつもりはない。一秒でも長く、この魔をここに留め続けてやるのだと、ガーゴイルは低く唸りながら耐えていた。

「……あ、ああ」

「むう……？」

空気が変わる。無表情だったソレが顔を明るくさせて、何かを見ようと首を巡らせた。

「会いたかった……」

絞り出すような声。縋るようなソレの視線の先には、

「退けえガーゴイル！」

逃がした筈の、逃げた筈の一がいた。

きっと、ガーゴイルは落胆するだろう。決意と行動を無駄にされたと激昂するかもしれない。

「うおおおぉっ！」

それでも、彼を見捨てる訳にはいかなかった。ガーゴイルはあの時自分を助けてくれたのだ。第一、友人の犠牲から成り立つ生還には興味がない。

だから、一はアイギスを突き立てる。急降下した風は砕けていたコンクリートを巻き上げた。

「あああっ……」

風が止み、巻き上げられたものは落下物となって辺りに降り注ぐ。ソレは長い息を吐き、背に掛かる衝撃を受け入れていた。

「一さん、どうしてっ」

「話は……」

アイギスに向かって伸ばされていた、抜け目のないソレの腕を弾く。

「後だ！」

強い衝撃を感じて、折れてしまったかと思われたアイギスはまだ顕在していた。この世に、その力を顕現させたままである。

「ああ、触れさせて」

ソレが立ち上がり、再び手を伸ばす。一は彼女の骨を砕くつもりで払った。衝撃はある。だが、確信した。相手を止める能力こそ失われたものの、ギリシャ神話にて讃えられた最硬の盾としての力は残っているのだと。

「……は、何だよ」

「ニンゲン、オマエはあいつの攻撃だけに集中しろ！　避けるのはシルフ様がやってやる！」

「一さん、飛行していた事から見ても、彼女は恐らく飛翔のエウリ

ュアレでしょう。ステンノが来る前に離脱を！」
エウリュアレが覚束ない足取りで一に迫る。
「何だよ、おい」
人知れず、一は笑っていた。嬉しくて嬉しくて、ソレと対等に渡り合えるのが楽しくてしょうがない。
「使えるじゃねえかよ」
喜悦を殺し切れないで、思わず噴き出してしまう。
「こうだよなあっ、やっぱこうだよ！　アイギスっ、今まで何やってたんだ俺はさあ！」
ソレが考えなしに伸ばす手を、シルフが風を使って回避し、一が真っ向から防いで反撃する。
「しっかり使えてるんじゃねえかよう！」
「ああ、ああ、邪魔。鼠は邪魔」
エウリュアレは攻防に焦れたのか、予備動作もなく、ふわりと宙に浮いた。瞬間、彼女の長い毛髪が蠢く。まるで生きているかのように――――否、それは確かに生きていた。絡み合い、細い髪は段々と太くなっていく。やがてエウリュアレは、生命を得たかの如く蠢く毛髪を一に向けた。
それは、毒々しい色の蛇である。黄と赤の警戒色で表皮を覆った蛇。彼女は自らの髪を蛇へと変化させたのだ。
「鼠は丸呑みにしなくちゃ駄目！」
二十センチほどもある五匹の蛇が大口を開け、牙を見せ付ける。ちろちろと覗く二俣に分かれた舌が獲物を捉えていた。
「してみろってんだよ！」
一はアイギスを広げて身を防ぐ。降下してくる蛇の内、三匹を弾き返した。穴の空いた箇所からの侵入を試みた残り二匹はシルフの風に吹き飛ばされる。
「一さん、このまま戦っても！」
「いや、いける。シルフ、頼んだ」
「頼まれた！」

轟(ごう)と、風が唸った。シルフは一を抱きすくめたままで高く飛び上がる。飛翔(エウリュアレ)は毛髪から蛇を生み出して、彼らを迎え撃った。

シルフは向かってくる蛇を全て吹き飛ばして上昇していく。

「雑魚はどけどけーっ！」

「鬱陶しい風……」

エウリュアレの真上を取った一は、アイギスを彼女の後頭部に振り下ろした。捻りのない攻撃をエウリュアレは苦もなく避ける。空中では踏張れず、バランスを崩した一の体が斜め下方向に流れてしまった。

「もう一度っ」

エウリュアレの右腕を跳ね除けると、一は再びシルフの風によって上昇していく。

戦える。

対等に戦えているではないか。尚も笑みを堪えられずに笑う。

「一さん、まずいです！」

ガーゴイルの悲鳴じみた声に、何事かと一の動きが止まった。

「ステンノが来ました！」

「あら、お姉さま」

エウリュアレが怪しげに微笑むその先には、片目の潰れた、彼女に瓜二つの女がいる。

「やばいぞ、どうするのさニンゲン。追い付かれちまった」

二対一では分が悪い。注意を引き付ける事には充分成功している。十全とはいかずとも、アイギスが使える事実も判明した。仕事ならとっくに終わっている。そう判断した一はガーゴイルに視線を向けた。

「シルフ、退くぞ」

一の意図を察し、ガーゴイルは既にこの場からの逃走を図っている。

エウリュアレはステンノを見つめたままだ。今の内にと、シルフは自らの両足に風を集め始める。

「あら」
「あら」
「どこへ行くのかしら」
「どこへ行くのかしら」
「あの子を連れて」
「駆け落ちかしら」
「それはとっても」
「素敵な事ね」
まだ全開とはいかなかったが、シルフは今、この場から少しでも早く、少しでも遠くへの離脱を試みた。
「う、わっ」
が、何かが絡み付くような感触に驚いて足がもつれてしまう。彼女の動きを封じたのはエウリュアレの撃ち出した蛇だったが、気付けたところでどうしようもない。中空で崩したバランスは中々立て直せず、シルフは地面に激突する寸前になってようやく体勢を整える。
瞬間、シルフの集めた風が霧散した。いつの間にか接近していたステンノが彼女を殴り飛ばしたのである。
同時に、支えと風の力を失った一も成す術なく転がっていった。
「シルフっ」
一は顔だけを上げてシルフを呼ぶが、彼女の姿はどこにも見えず、返事すらなかった。
「あら」
「く、お、うあああっ！」
他人の心配をしている暇はない。ステンノが倒れている一の顔を目掛けて緩やかな蹴りを放っている。彼はアイギスを広げられず、その強度だけに頼って咄嗟に前へと突き出した。気味の悪い音が鳴り、衝撃を殺し切れなかった一は背中から吹き飛ぶ。
アイギスを手放すものかと歯を食い縛る。意識を手放したくても、コンクリートを転がる際の摩擦熱で脳は痛みを訴え、泣き叫ぶ。

「あら」
「あら」
「シルフ！　シルフっ！」
ここから逃れるには彼女の、風の力を借りるしかない。彼は何度も呼ぶのだが、シルフからの反応はなかった。
「ちっくしょう……」
一は片膝を付き、肩で息を繰り返す。無茶をし過ぎたと悟ったが、そうしたところで体力は戻らない。ただ、ゴルゴンを強く見据えるのみだ。
この場に留まって戦うしかない。今から背を向けて逃げたとして、捕まるのは自明の理なのだ。幸いにもガーゴイルはこの場を逃げ切ったらしい。人語を解する彼なら助けを求めるのも可能だろう。問題は、誰に助けを求めるのか、求められるような人物が駒台にいるのか、だ。来るかどうか定かではない助けを待つ。どちらにせよ、機動力のない自分ではここらが限界だ。一は深く息を吐き出して、アイギスを構える。ガーゴイルとは先程と立場が逆転してしまったが、彼は嘆かない。
「……シルフは、死んでない」
勢いを増す雨に打たれ、一の体で濡れていない箇所はなかった。水を吸って重くなっている体で、足を大きく踏み出す。
「精霊だからな。あんたみたいな化け物に殺される筈はないんだ」
「あら？」
「あら？」
空気が変わったのを感じ、ゴルゴンは首を傾げた。
「来るなら来いよ、化け物。俺が相手してやる。右か、左か、上か、下か、それとも正面か、後ろからか？　来いって言ってんだ。全部、防ぎ切ってみせるからよ」
一とゴルゴンとの距離は二メートルあるかないか。ソレがその気になれば、一秒掛からず詰められる。
しかし、動かない。ゴルゴンはまるで、石にでもされたかのよう

に固まっているのだ。空気が変わった。変わっている。それは何も、ここに留まると、覚悟を決めた一が変えたものではない。ゴルゴンが彼に怯えているなど有り得ない。単純に、周囲が冷えているのだ。何かあると、そう見ていたのだろうか。それでもゴルゴンは足を踏み出す。

「――っ！」

「――っ！」

「よくもっ、やりやがったなあああっ！」

風が憤っているかのように轟いた。一は耳を塞ぎ、目を瞑る。ゴルゴンに対して、真上から叩き付ける暴風が吹いていた。自然界の法則を無視しているようなそれは、風を操り、風を司り、風と共にあるシルフだから成し得る技である。一点に集中した風の勢いはもはや叩くでは生温い。対象を押し潰す勢いで吹き荒れ、歓喜に啼いている。

「ニンゲンっ、無事か！？」

この音の中では何も答えられない。一はアイギスを握っている片手を上げて、返答の代わりとした。

流石のゴルゴンも自由に動けない様子である。形を持たない風は先刻のガーゴイルとは違い、簡単には退けられないのだ。

「どうしたのさ蛇女！　そんなんでシルフ様に喧嘩吹っかけたってのかよ！」

俄然テンションの上がっているシルフ。高笑いが実に気持ち良さそうである。

が、この状況がいつまで続くか分からない。風は防げない。返せない。ゴルゴンを地に縫い付けたままだ。しかし、それだけなのだ。ダメージは一切ない。時折、コンクリートの欠片がソレの体に当たるのだが、彼女らがそれを気にした素振りはない。

「ジリ貧だな」

負けていない。死んでいない。一たちはゴルゴン相手に一歩も退いていない。一方で、勝てない。殺せない。一歩も退かせられない。

決定打がないのだ。ソレを打倒し得る一手がない。
「……やるしかないんだろうけど」
「ほらほらニンゲンっ、ぼさっとしてないでオマエも手伝えよ！」
暴風へ突っ込めと一には聞こえた。しかし、そうでもしなければゴルゴンに痛手を与えられないのではと思い、溜め息を吐く。
「手、か」
本当に、無力だ。
勤務外はソレに対抗出来る。打倒し得る。筈なのだ。その筈なのに、やはり、自分一人ではどうしようもない。現に、こうしてシルフやガーゴイルが助けてくれなければ、とっくに死んでいた。殺されていた。
「……？」
ちかちかと、向こうの闇に映るものがある。
それは、光だ。光が見えた。
一が捉えたのは、濡れた路面だと言うのに構わず走る無骨なシルエットである。見覚えのあるそれは爆音を引き連れ、雨と風を切り裂いてこちらに向かってきていた。
「シルフっ、ギリギリまでそいつらを止めるんだ！」
「ぎっ、ギリギリって……？」
シルフが呟く。その一瞬間後、ワゴン車がゴルゴンを吹き飛ばしていた。
と言うか思い切り、これでもかと言わんばかりに轢いていた。高速で接近する鉄の塊は、多少なりとも効果があったらしい。ゴルゴンは地面を転がっていき、転がり終わった後も動けないでいる。
「一君、無事ですか？」
ボンネットが凹んだ事に顔をしかめながら、眼鏡を掛けた優男、堀が運転席から降りて来た。見られないと思っていた顔だけに、堀と対面した一は胸を撫で下ろす。
「ええ、何とか、と言った具合ですけれど」
「命があるなら充分でしょう。……ガーゴイルは先に街の方へ行っ

ています。一君たちも急いでください」
「あの、堀さんがどうして？」
「……ガーゴイルを見掛けましてね」
「は、い？」
何もありません、と。そう言い切り、堀は車の中から槍を一本持ってくる。
「それより、一君はどうしてこんなところにいるんですか」
「いや、その、実は図書館に」
「図書館？　ああ、いえ、なるほど。一君には何か策があるんですね？」
「模索中だったり、します」
一はえへへと苦笑い。堀はやれやれと、髪の毛を掻いて溜め息を吐いた。
「ちょっとずつ分かり掛けてはいるんですけどね。堀さん、北の英雄について何か心当たりはありませんか？」
「北の……？」
堀はゴルゴンが倒れているのを確認してから、眼鏡の位置を指で押し上げる。
「イリヤ・ムーロミェツ……いや、違いますか」
「とある人から言われたんです。北の英雄に会えって。それで本当にどうにかなるとは限らないですけど、けど、もうそれしか……」
「一君は、その言葉を――――その人を信じているんですね？」
一は逡巡する。それでも、はっきりと頷いた。
「では、街に戻ってください。少なくとも、それまでは私がアレを受け持ちます」
「一人で、ですか？」
「ご心配なく」
堀は慣れた手つきで槍を振り回す。彼は穂先をゴルゴンに向けて、にこやかな笑みを浮かべた。
「こう見えても私、強いんですよ」

ソレがいる。ここは戦場で、自分は戦士だ。戦うモノなのだと理解している。自覚している。

しかし、彼は違う。違う筈なのだ。一には戦場など似合わない。戦士とは程遠い。レジ打ちが良く似合い、このような場所で戦ってはいけない種類の人間である。

「……全く」

では、送ったのは誰だと自問する。一を戦場に送り出したのは店長かもしれない。彼を戦士にしたのはアラクネが遠因だったのかもしれない。だが、あえて悪だと断じるのならば、何よりも、誰よりも悪いのは自分たちなのだろう。堀は歯噛みし、ゆっくりと息を吐き出していく。

堀は起き上がろうとするゴルゴンを見下げた。

「さて、ゴルゴンだとお見受けします。あなた方に戦意はまだ残っていますか？」

ステンノとエウリュアレは答えない。立ち上がり、堀の、その先に虚ろな視線を向けるだけだ。

「……狙いは一君の持つアイギスですか。それはあなた方の意思ですか？　それとも、円卓の目的なのですか？」

返答はない。ゴルゴンは足並みを揃えて進み始める。声を揃えて敵意を、殺意を明確にする。

「邪魔をしないで」

「邪魔をしないで」

彼女らの髪の毛が生命を持ったかのように蠢いていた。それらは中空に向かって伸びていき、絡み合っていく。細い毛髪は縄のように太く、厚く、形を変貌させた。

「鼠は」

「丸呑みに」
　撃ち出された毛髪は毒々しい色の蛇と化している。口を開け、牙を覗かせて敵を威圧する。
「……なるほど」
　堀は呟き、腕だけを動かした。風切り音が鳴り終わらぬ間に、彼の目前まで迫った蛇の頭が槍の先端で串刺しにされている。
「児戯にも等しい攻撃ですね。時間を稼げるのは願ってもない事ですが、まさか、今ので終わりだとは言いませんよね？」
　堀はにこやかに笑み、穂先に突き刺さった蛇を払う。ゴルゴンは表情一つ変えずに再び歩き始めた。
　同時に、十を超える数の蛇が堀に飛来する。その全てを、彼は槍で突き刺していった。自身の得物をくるりと回転させ、蛇を抜き取る。返り血は雨が拭ってくれるだろうと、堀は他愛のない事を思った。
「次は何をしますか？」
　右手に槍を持ち、左手で眼鏡の位置を押し上げる。強い雨で視界は塞がれていた。が、彼は決して眼鏡を外さない。
「あなた」
「あなた」
「強いのね」
「強いのね」
「でも」
「それだけじゃなさそうね」
　ようやくこちらを見たかと、堀は喉の奥で笑った。僅かながらもこちらに興味を示したのなら、簡単には一を追わないだろう。自分を逃がしはしないだろう。彼は、これで役割を果たせると歓喜した。これで戦えるのだと心中で喝采を上げた。
「先に言っておきます。生憎と、私は女性の扱いには不慣れなものでして。申し訳ありませんが、紳士的に振る舞う事を期待しないでください」

「あら」
「あら」
ゴルゴンは両手を広げて堀に近付く。どこからどう見ても無防備な様子だが、堀は手を出さなかった。
「それじゃあ」
「それじゃあ」
「あなたは獣のように」
「あなたは獣のように」
「求めてくれるの？」
「求めてくれるの？」
望むと言うのなら獣にもなろう。望んでいるのだから獣にもなれる。時間稼ぎとは言わない。ここで、ソレを確実に殺してみせる。
堀が槍を向けた瞬間、エウリュアレが消えた。彼は突き出した槍を咄嗟に引っ込める。
――――ブラフだ。
これがゴルゴンの戦法なのだと堀は気付く。双子ならではのコンビネーション。エウリュアレが機動力を生かして、攻撃の糸口を無理矢理に作り出す。
消えたように見えたのはエウリュアレの飛翔によるものだ。
「あら」
「あら」
飛翔したエウリュアレに気を取られている隙にステンノが潜り込む。が、堀はステンノの足を狙って槍を突き出していた。彼女は立ち止まり、薄く微笑む。初めて見せたその表情は、酷く愉快そうだった。
「素敵ね、あなた」
「素敵ね、あなた」
上方からエウリュアレが降下してくるのが見えている。空中では逃げられない。堀は迷わずに得物を突き上げた。
が、当たらない。掠りもしていない。エウリュアレは空中で強引

に旋回し、軌道を変える。彼女はそのままステンノの隣に降り立ち、今一度距離を取った。

「……そういうのもアリですか」

苦笑し、堀は槍を引く。彼はゴルゴンをただの怪物だと思っていたのだが、こと戦闘に関しては知恵が回るらしい。相手を甘く見ていた自分を強く恥じ、思考を切り替える。

数の上ではこちらが不利。ペースを握らせてしまっては泥沼に入り込んでしまう。ならばと、堀は自ら仕掛けた。

狙うべきは片目の女、ステンノ。ゴルゴンのコンビネーションから察するに、エウリュアレに機動力はあれど一撃で戦況を変えるほどの打撃力はないと見極める。勝負を掛けるのは、変えるのはあくまでステンノの膂力なのだ。

「あら」

「あら」

腕を突き出し風を切る。

ステンノの笑みを横目に、堀は舌打ちして槍を引き戻した。エウリュアレが飛ぶのが見えるが、今は無視する。得物を持っている分リーチの差ではこちらが有利と判断しつつ、こんな、ただの槍ではいつか折られてしまう。壊されてしまうとも彼は認識していた。

「早いのね」

「どうも」

短く答え、ステンノの喉を目掛けて突きを繰り出す。彼女は右手で穂先を払い、一歩踏み出した。堀は体を回転させながら槍を横に薙ぐ。今度は柄の部分を左手で弾かれた。ステンノから視線を外さないまま後退し、上空から拳を繰り出していたエウリュアレの奇襲を回避する。

目の前のコンクリートがエウリュアレによって抉られ、砕かれて破片が舞い上がった。

しまった、と、堀は認識の甘さを噛み締める。膂力があるのはステンノだけではない。エウリュアレにも備わっていたのだ。

逃がすまいと攻撃を放つが、舞い上がっている破片に遮られて突きの速度が充分には達しない。エウリュアレは悠々と退避し、ステンノの隣に舞い戻る。
「あなたの力はそこまでなの？」
「あなたの力はそこまでなの？」
堀は挑発的な言葉に面食らい、髪をかき上げた。
「まさか」と呟き、堀は両手を高く上げて槍を回す。風を切り、雨を弾きながら彼は前進していく。
「故あって全力を出せない身ではありますが、もう暫く私の相手をしてもらいます」
「あら」
「あら」
ゴルゴンは揃って薄い笑みを浮かべ、
「素敵ね、あなた」
「素敵ね、あなた」
揃って、足を踏み出した。

何も考えなかった。
何も考えられなかった。
堀に全てを預けて、あの場から逃げ出した。ガーゴイルと合流した後も、まともな会話は出来なかった。
一はシルフに抱えられたまま、風雨に打たれているしか出来なかった。
「おい、どこに行けば良いのさ？」
シルフが苛立たしげに声を掛けるが、一は暫くの間何も答えられないでいる。
「おいってば！」
「……アパート」
「アパート？　ああ、オマエの住んでるとこだな」

アパートに戻ると言っても、一には何も考えがなかった。雨に打たれてぐしゃぐしゃに濡れた服を変えたかっただけである。

「一さん、大丈夫ですか？」

前を飛ぶガーゴイルが心配そうに声を掛けてきた。何が大丈夫なのだろうかと、大丈夫な事があるのだろうかと、一は視線を虚空に向ける。

結局のところ、何も変わらない。堀が来なければ自分は死んでいた。

死んでいた。

シルフが来なければ、ガーゴイルが来なければ、死んでいた。

つくづく無力だと思い知らされながらも、前に進まなければならないのだと知っている。その手に握るアイギスを伊達には出来ない。唯一無二、自分にしか扱えない盾なのだ。ならば、前に進み、前に出て、後ろにいる者を守らなければならない。

「おい、ここで良いんだろ？」

「あ、ああ。降ろしてくれ、そう、あの部屋の前」

「では、わたしは屋根の上にいます。あの出入口からでは入れないと見ますから」

ガーゴイルを残し、一は鍵を使って扉を開けた。びしょ濡れの体で畳の上に行くのを躊躇い、彼は玄関でコートを脱ぎ、シャツを脱ぎ捨てる。そしてジーンズに手を掛けたところで、

「……おい」

「ん、何さ？」

シルフの存在に気が付いた。

「出ろ」

「は、なんでさ？」

「俺は今から着替えるんだよ」

「着替えたら良いじゃん」

一は知っている。シルフに性別はない。羞恥心の欠片だって見当たらない。しかし、目の前にいるのは確かに女性の形をした何かな

のだ。
「頼むから出てくれよ」
「あー、やだなー、そんな言い方されたら出る気なくしちゃうよな。絶対やだ。オマエの着替えを見てやる」
「だったら見ろ！　絶対に見ろよ！　俺の着替えをっ、俺の裸体を余すところなくじっくりとな！」
「何怒ってんのさ」
それは一にも分からなかった。
彼は息を吐いてジーンズを脱ぎ捨てる。玄関には既に小さな水溜まりが出来ていた。一は生まれたままの姿ギリギリ、パンツのみで部屋をうろついてタオルを頭から被る。
「……どこ行くのさ？」
「トイレ」
やっぱり、恥ずかしい。
一はトイレで手早く着替えを済ませると、何食わぬ顔でシルフの前に現れた。
「どうせまた濡れるのに。ニンゲンってのは面倒な生きものだよな」
うるさい黙れボケナスと反論しようとしたところで一は気付いてしまう。もう嫌だと彼は嘆いた。
「……何さ？」
「分かってて聞くんだけどさ、お前って服とかどうしてんの？」
「もらった」
「代え、あるか？」
「ない」
一は頭を抱えてその場に座り込む。
「別に服ぐらい良いだろ。そんなに気になるなら脱ぐし」
「ノー！　……分かった。今度買ってやる。だから、何とかならないか？」
「だから、何がさ」
「お前、下着付けてないだろ」

シルフはきょとんとした顔で頷き、それの何が悪いとふんぞり返る。一からすれば、その体勢も止めて欲しかった。目の毒と言う他ない。

部屋から現れた二人を見遣り、ガーゴイルは楽しげに口を開いた。
「お着替えは済んだと見ますね」
「どっかの犬よりてこずらせてくれたよ」
「シルフ様をバカにしてるのか？」
一は長袖のシャツとジーンズ、だけである。シルフの意見を認めるのに抵抗はあったが、どうせ濡れてしまうのだ。彼はファーの付いた焦げ茶色のコートをシルフに貸し与えている。と言うか、無理矢理羽織らせた。
「シルフ様が着ても意味ないと思うんだけどな。まあ、どうしてもってんだから仕方ない。着てやる」
「そりゃどうも」
一の顔は引きつっている。
「では一さん、次はどこに参りますか？」
「うーん、英雄のいそうな場所」
「コロッセオにでも向かいますか？」
全く思い当たらない。が、エレンの言葉を嘘だとは思えなかった。彼女の言葉にしか頼れないのなら、嘘だとは思いたくなかった。
「闇雲に動いても仕方がない。少し考えるか」
「ふむ。一さん、堀と仰る御方は信用出来るのですか？　具体的に、どの程度ゴルゴンを足止め出来る力量をお持ちなのでしょうか」
「その点に関しちゃ心配ない。足止めどころか、今頃は倒しちゃってるかもしんないぐらいだ」
「しかし、考える時間はあっても何か浮かぶとは……」
「痛いところを突いてくるね、ガーゴイル君」
実際、その通りである。時間はあってもエレンの言っていたモノ

と出会えるかどうかは分からない。もしかしたら駒台にはいないのかもしれないし、そもそもこの世に存在するかどうかあやふやなのだ。

「支部に行くとかな。少なくとも、俺らよりは何か持ってるだろ」

と、一たちがああだこうだと話し合っていた時、扉の軋む音が聞こえた。はっとした時にはもう遅い。彼らは失念していたのである。ここは既に街で、自分たち以外にも誰かがいるという事に。

「あー？　坊主、帰ってたのか？」

「……まずい、北さんだ」

一は視線をさ迷わせた。このままではシルフたちが見つかってしまう。彼女だけなら誤魔化せるかもしれないが、一般人相手にガーゴイルの存在を説明するのは困難に思われた。

「ちょうど良いや、おい、酒持ってねえか？　なかったら金を貸してくれ」

かんかんと、北は軽快に階段を上がってくる。

「かっ、隠れろ」

「隠れるってどこにさ？」

「ふむ、間に合わないと見ます」

「だっ、駄目です北さんこっちに来たら！」

「……お？」

目が合った。

目が合った。

目が合ってしまった。

北は、一、シルフ、ガーゴイルを確かに見遣り、ぽりぽりと頭を掻く。

「俺はまだ酔っ払ってるらしいな」

風切り音が鳴り止まない。

一撃たりとも当たらない。

三者は攻撃を繰り出し、避け、あるいは防ぐ。ゴルゴンと堀、二対一の攻防は既に十分以上経過していた。疲労を感じていないのか、彼らの一挙手一投足に翳りは見られない。戦闘が始まった頃と変わらぬ動きを見せている。ゴルゴンがギリシャ神話の怪物ならば、彼女らに付いていく堀もまた怪物なのだろう。無表情だったゴルゴンからは、溢れんばかりの殺意が見え隠れしている。

しかし、決して焦らない。ステンノもエウリュアレもペースを崩さない。

自身の力量を見切られているのだと堀は気付いていた。ソレはこちらが焦れ、崩れた隙を見計らっている。それまでは不毛とも思えるような戦いが続くのだ。

「全く、困りますね」

時間は稼いでいる。それとも稼がされていると言うべきか。ともかく、堀は現状に満足していない。

――――ひりつくような。

「あら」

「あら」

ゴルゴンの動きが鈍る。否、止まる。彼女らは視線を一点に注いでいた。

一が戻ってきたのかと堀は思ったが、その予想は外れていたらしい。ちかちかと、闇に光が明滅している。排気音を巻き上げ、濡れた路面を厭わずやってくるモノが堀にも見えた。

あの車種には見覚えがある。知った者が乗っている。

「堀ぃぃぃぃ！　そいつを止めろっ！」

「藤原さんっ」

ブレーキを掛けずに突っ込んでくる藤原を見て、無茶をするなと苦笑いしつつ、他人の事は言えないなと堀は自戒した。

考えている時間は残されていない。空に逃げたエウリュアレを無視して、堀はステンノ一人に的を絞る。

車に気を取られていたステンノの背に槍を突き立てると、

「失礼っ」
穂先を抉るように回転させ、胸を貫いた。ステンノの青白い肌に鮮血が滴り落ちていく。苦悶の声があったところで気には病むまい。
堀はステンノに刺した槍に体重を掛けて地を蹴った。彼女の体は崩れ落ち、うつ伏せに倒れる。反動を使って槍を引き抜き、転がるように横っ飛び。瞬間、倒れているステンノに大型の四輪駆動車が一切の躊躇を見せずに衝突した。
「はっはーっ！」
藤原は窓から身を乗り出してガッツポーズを作る。
「あら、鼠が増えたわ」
「堀ぃ、蝿は任せたぞ！」
言われる前に堀は飛び出していた。上空を旋回していたエウリュアレは降下を始めている。ステンノの援護に向かうつもりなのだろう。そうはさせないと、彼はコンクリートの破片を槍で弾く。当たりはしないが、彼女の動作が僅かに鈍った。
「おお……っ！」
その隙に距離を詰め、堀はエウリュアレの真下へ滑り込む。狙いを付けて槍を放つと、彼女は顎を仰け反らせてそれを回避した。顛末を見届けないで、堀はまたもや走り出す。向かった先は自分が乗り捨てたワゴン車だ。トランクを開け、目的の得物を取り出す。
穿たれて土が剥き出しになった箇所に槍を刺す。また刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。刺す。
計十二本の槍が堀の周囲に突き刺さった。彼は再び降下してくるエウリュアレを見据え、両手に槍を握る。回避されるのを見越して一本を投擲し、案の定こちらに軌道を変えて接近してくるエウリュアレの喉を狙い、突く。避けられ、もう一本牽制として放った。
「う、おおっ！？」
藤原が上げた叫び声に振り向くと、自動車が浮いているのが見えた。
いや、持ち上げられていたのである。藤原が轢いた筈のステンノ

が、その膂力を以て車体を持ち上げていた。前輪は空回りを続け、情けない悲鳴を上げ続けている。

「藤原さん、降りてください！」

「車検通ったばっかなんだぞ！？」

しかし命には換えられまい。藤原は奇声を上げて運転席から飛び降りた。彼が地面に立つと同時、主を失った自動車が、完全に宙に浮く。

ステンノは藤原を見遣り、薄く微笑んだ。

「……てめえ、まさか……」

――――愛車だった。

彼女とはもう何年の付き合いになるだろう。五年、十年、生まれてからずっと傍で寄り添っていてくれていた気もしている。少しでも汚れが気になれば丁寧に洗車をして、調子が悪くなれば自らの手で修理を繰り返した。

今ならはっきりと言える。愛していた。

「うおおおぉぉおおぉっ！」

叫びながら藤原は走る。現実から背を向けて走る。背後で聞こえてはならない音が聞こえた。

昨日も丹念に磨いたボディは肌だ。パーツは骨。ガソリンは血。その全てがみしりと砕け、垂れ流され、壊れていく。

ステンノはスクラップと成り果てた自動車を両手で持ち上げ、ぞんざいに放り投げた。

潰れる。音。

藤原を狙ったその一投、彼には当たらなかったが、彼の心は深く、痛く傷付いている。

何かしらの部品を撒き散らしながら地面を転がり、乾いた音を立てて尚も損壊していくそれは、もはや原型を留めていなかった。

「俺のランクル……」

藤原は見るも無残に変わり果てた愛車の骸にふらふらと近付いていく。

「いけない！」
堀が叫ぶと、車からは破裂音、爆発音がした。次いで煙が上がり、とどめだと言わんばかりに炎も上がっていく。雨が降っているから大事にはならないだろう。
「俺のランクルがあああああああぁぁぁぁぁっ！」
藤原の慟哭が雨音を掻き消さんと響き渡る。
「あら」
「あら」
「少し重かったわ」
「少し重かった？」
ステンノはエウリュアレと背中を合わせ、くすくすと愉快そうに笑っている。
「許さねえ……」
「藤原さん……？」
藤原は車の残骸から、それを拾っていた。
手甲、である。
中世の騎士が身に着けていたような洗練されたものではない。金属を張り合わせ繋ぎ合わせた少々不恰好で、それでいて威圧的でもある無骨な手甲だ。
藤原はスーツを脱ぎ捨てて、自身の得物を、目の前の獲物を狩る為の武具を装着し、
「てめえらあああ！」
「一人で！？」
堀が止めるのも聞かずに、ゴルゴン目掛けて走り出した。
「堀ぃ、援護しろ！」
走る前に言って欲しい。堀は藤原に当たらないでくれと祈り、槍を投げまくる。
「あら」
「あら」
「勇ましいのね」

「勇ましいのね」
ゴルゴンは踊るように槍を避け、誘うように笑んだ。
「砕けやがれぇ！」
藤原はその体格に見合わないスピードの持ち主であった。堀の投げた槍を牽制代わりに、あっという間にステンノの眼前に踏み込み、拳を放つ。
「大……胆ね」
避けられてしまったが気にしてはいない。当たるまで放つだけだと一心不乱に拳を振り回す。
右を打つと回り込み、左を打つと後ろに下がる。
前に出ると前に出て、後ろに下がると前に出る。
変幻自在好き放題なステンノの動きに戸惑いながらも、
「そこしかねえだろ！」
捉えた。
藤原は倒れ込むような姿勢で、回り込んだステンノの脛を裏拳で叩く。次いで腹に一撃、顎に一撃。彼女の長い髪の毛を引っ掴んで地面に押し倒した。
「今だやれ！」
エウリュアレが藤原に襲い掛かるも、堀の投げた槍が邪魔をする。
残りは二本。堀は投擲を止め、槍を両手に持って地面を蹴った。
柄を長く持っている為に穂先がコンクリートを削っていく。
「その首、貰い受けました！」
掬い上げるような軌跡を描いた堀の槍は、ステンノの首をいとも容易く切断させていた。彼女の首は中空を舞い、雨に打たれ、風に吹かれて地に落ちる。ころころと転がり、やがて、止まった。
「はっはーっ！　仇は討ったぜマミコーっ！」
藤原は立ち上がり、天に向かって吠える。
「……誰ですか、その方は」
「俺の愛車だ！」
これで残っているのはエウリュアレのみである。空中で飛び回ら

れては手の出しようがないが、全く無理と言う話ではない。あちらが肉弾戦に頼るなら降りてきたところを捕まえれば良いのだし、蛇を飛ばされたところで脅威にはなり得ない。必要ならば援軍を待てば良い。時間さえ掛ければ打倒し得る。

が、あまりにも簡単過ぎる。

「しかしよ、奴ら何者だ？」

「ゴルゴン、だそうですよ」

「ギリシャの……？　にしては、案外あっけなかったじゃねえか」

「面白い話ではありませんが、本気ではなかったのでしょう。遊ばれていた、とまでは言いませんが、彼女らには別に目的があるようですからね」

少しは堀の力に興味を持っていたようだが、ゴルゴンの狙いは最初から最後まで一の持つアイギスにあったらしい。そうでもなければ、藤原と二人掛りであっても一分持つか、持たないかと言ったところだった。

「仕留めたのはこっちだ。自業自得ってもんじゃねえかよ」

「そうですね。……っ！」

「おいおい、逃げられてんじゃねえか」

藤原は髪の毛を掻きながら退屈そうに言ってのける。飛び去っていくエウリュアレを追い掛ける気力は残っていないのか、彼はその場にしゃがみ込んだ。

「車とスーツでソレ一匹か。ギリギリ割に合わねえ」

「……いや、ギリギリではありませんね」

「あ？」

堀は槍を持ち上げる。先端にはステンノの首、だったものが刺さっていた。

「何だあ、こりゃ？」

首だった。そこに血は通っておらず肉も付いていない。今はただの皮と成り果てている。

「上手く逃げられましたね。人の形をしていたので忘れていました

が、アレもまた蛇だったと言う事ですか」
「あー、つまり、俺らは二匹とも逃がしちまったのか？」
「いやあ、脱皮ですか。あるいはトカゲの尻尾きり。してやられましたね」
藤原は未だ煙を上げて燻っている車と、使い物にならないくらい濡れているスーツに視線を遣った。
「割に合わねえ」
力が抜けたのか、藤原は地面に両手を付いて嘆いた。
「あとは一君に任せますか」
三十分程度は稼いだだろうか。出来るならば片方だけでも仕留めておきたかったのだが、過ぎた事は仕方がない。
流石に、神話級の怪物を相手にするのは疲れる。堀は槍を杖代わりにして、溜め息を吐いた。

「あー、これはー、そのー」
北は廊下に座り込み、興味深そうにガーゴイルを眺めていた。
「はあー、驚いたなこりゃ。こういうもんには関わらないと決めてたんだがよ」
「いや、実はそいつは銅像でして……」
一は何とか誤魔化そうとしているが、その努力は既に水泡に帰している。
「坊主の知り合いなんだろ？　なあ、お前ら別に俺を取って食おうって訳じゃなさそうだしな」
「わたしは物を食べません」
「シルフ様もおっさんには興味なーい」
「は、だってよ？」
北は笑い、煙草に火を点けた。流れた煙は雨に打たれて消えていく。
「しかし何だ、随分と忙しそうじゃねえか。駄目だぜ坊主、金策に

走り回っているようじゃあな。チャンスってのはダラダラと寝て待つもんだ」

「金策じゃありませんよ。はあ、まずったなあ、もう」

「だったらこんな天気の日に楽しそうに遊び回ってんのか？　若いってのはずるいよな、俺にも分けてくれよ」

「……ところで一さん、この御方は一体どなたなのでしょう？」

一は北を見遣る。よれよれのシャツと薄汚れたズボンを着た中年。不精髭を生やした、ただのおっさんだ。紹介する価値は、意味は、時間はあるのだろうかと自問する。

「この人は俺と同じ、ここに住んでるおっさんだよ。酒飲みで煙草吸って勝てない博打を繰り返す。それ以上でも以下でもない」

「てめえ本人目の前にしてよくもまあ口が回るじゃねえか」

真実なのだから仕方ないだろう。

「ははあ、そうでしたか。ふむ、お名前を伺っても？」

北は短くなった煙草を階下の中庭に投げ捨てる。

「俺の名前は北英雄だ」

彼の名を聞いたガーゴイルは低く唸った。

「どうしたんだよ、ガーゴイル？」

「一さん、もしかして。もしかして、なのですが」

「だから、どうした？」

「わたしたちが探していた英雄と言うのは、まさか……」

「……え、あ、いや、まさか？」

そんな、馬鹿な。

だとすれば、一はとんでもない遠回りをしていた事になる。初めから答えを知っていたのに、分からないと嘆いて答えを出すのを先延ばしていたのだ。

「……きた、ひでお」

「呼び捨てにすんじゃねえ」

北の英雄。北英雄（きたひでお）。

考えてみれば、正解であれ不正解であれもっと早くに彼へ行き着

いていても不思議ではなかったのだ。
「良く分からないけどよ、何か面白そうだなお前ら」
話に付いていけない北は二本目の煙草に火を点けて、不機嫌そうに煙を吐き出した。

Advice

「英雄ねえ」
一たちから粗方の話を聞き終わると、北は立ち上がって頭を掻いた。
「お前ら、英雄を探してるのか」
「……ええ、まあ」
一は頷くが、探し物はほぼ見付かったのである。十中八九、北こそが自分たちの捜し求めていた人物なのだと。
前々から一は思っていた、北は異質なのではないか、と。チアキが中内荘に引っ越して来た時もそうだが、彼は勤務外に対して、異質なモノに対してあまりにも普通過ぎたのである。警戒して然るべき、嫌悪して、侮蔑して当然の自分たちにどうして溶け込めたのか。中にはそういう一般の者もいるが、北は勤務外だけでなく、シルフたちを見ても大して驚かなかった。
――――あるいは、そういう人なのかもしれないけど。
「馬鹿らしい話じゃねえか。坊主、止めとけ。英雄なんて都合の良いもんはな、この世に居やしねえんだ」
北は立ち上がり、一たちに背中を向ける。
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！」
「待たねえ」
北が英雄である証拠などない。彼が本当に一般人ならば、この状況はどうしようもなく邪魔でしかない。しかし、一はここで北を引き止めなければならない気がしていた。
「お願いです、もう少し、せめて話だけでも聞いてください、聞かせてください」
「だからよ、悪いが俺は何も知らねえんだ。てめえだって言ってた

ろ、俺はただのおっさんなんだ。他、当たってくれや」
「けどっ」
一を見遣った後、北は頭を掻いて歩き出す。
が、
「おお？」
ガーゴイルが彼の進路を塞いだ。
「何だ、やるってのか？」
「北さんと仰いましたね。わたしたちは英雄を探しているのです。そして、残された時間は殆どありません」
「だから、何だってんだ？」
「はっきりと仰ってください。あなたが英雄なのか、そうでないのかを」
一にはガーゴイルの言っている意味が理解出来ない。北がこの場を立ち去りたいと思うのなら、英雄だと答える筈がないのだ。
しかし、北はすぐに答えない。黙ったまま、ガーゴイルを強く見据え付けるだけ、である。
「あなたが一度でも英雄と呼ばれた者ならば答えられる筈です。一度でもその身に賞賛を浴びたのなら、弱き者を守り、強き者を挫くと決意したのなら、答えられる。違いますか？」
ガーゴイルの口調はいつになく強い。責めるような、そんな厳しさと激しさが声音に含まれていた。
「北、さん……？」
「話だけだ」
北はその場にどっかりと座り込み、一を睨み付ける。
「話を聞くだけだからな。おら、言えよ坊主。てめえは今、どういう状況に置かれてやがるんだ。どうして、英雄なんてクソみたいなモンを探してんだよ」
心変わりした理由は、一には分からない。
「やっぱり、北さんは？」
「いえ」

一の言葉を遮ったのは北本人ではなく、ガーゴイルだった。
「北さんは否定しませんでした。が、まだ認めてもいません。話を聞くと言っただけで英雄だと決め付けるのは早計。あるいは乱暴だと、わたしはそう見ます」
「そういう訳だ。で、今この街で何が起こってんだ？」
「……さっきはぼかして言いましたけど、今までの事、包み隠さず話します」
雨はまだ降り止まない。
この話は長くなりそうだと、この場にいる者が――――
「うーん、うーん……」
――――シルフ以外は、そう思っていた。

それは神代の物語。
ギリシャ神話、アルゴス王には見目麗しい娘、ダナエがいた。しかし、王には息子がいなかったのである。
世継ぎを望んだ王は使者を遣わして神託を求めた。
『息子は産まれず、王は孫に殺される』
恐ろしい神託に王は慄き、それならばとダナエを部屋に閉じ込めてしまう。しかし、彼女の元に黄金の雨が現れた。ダナエはその雨と関係を持ち、やがて時が経ち、息子、ペルセウスを産んだダナエは、自ら娘と孫を手に掛けるのは忍びないと、そう思った父の手によって箱に閉じ込められ、海に流された。
ダナエらの乗った箱は運良くセリポス島に漂着し、母子は漁師のディクテュスに救われて平穏な暮らしを送る。
ペルセウスはセリポス島で順調に成長したのだが、一つ、問題があった。
ディクテュスの兄であり、セリポス島の領主であるポリュデクテスの存在である。
ポリュデクテスはダナエに恋慕の情を抱いていたのだが、当の彼

女にその気はなかった。また、ペルセウスも母の手助けをし、ポリュデクテスから邪魔者扱いされていたのである。

そこでポリュデクテスはピーサの王女ヒッポダメイアに求婚すると称し、贈物として馬を寄付するよう呼び掛けた。が、ペルセウスにだけは馬ではなく、ゴルゴンの首を持ってくるように命じたのである。明らかに罠であった。ペルセウスをダナエから遠ざけ、その間に彼女をどうにかしようとしているのは明らかであり、あわよくばペルセウスを亡き者にしようとも思っていたに違いない。しかし、ペルセウスは逆らえない。この場で噛み付いてしまえば、ポリュデクテスは領主と言う立場を無理矢理に使い、母を手篭めにするだろうと思われたのだ。

ゴルゴン三姉妹のメドゥーサは見た者を石に変える力を持っており、彼女らを退治しようとした者はいたのだが、戻ってきた者は一人たりともいなかった。

誰の目にも、ペルセウスが死んでしまうのは明らかであった。だが、彼はただの人間ではない。そも、ある意味人間ではなかったのである。母、ダナエを孕ませた黄金の雨と言うのがギリシャ神話の最高神、雷を意のままに操るゼウスであったからだ。

ゼウスは死地に行こうとするペルセウスを助けるべく、アテナ、ヘルメスの二神を彼の元に送ったのである。

アテナからは盾と助言を。ヘルメスからは翼の付いた靴と、鎌のように湾曲し、弧を描いた刀身の内側に刃を持つ刀、それ以外にも多くの道具を受け取った。

こうして神々の助力を得たペルセウスは、アテナに案内されながら、ゴルゴンの居場所を知ると言うグライアイの住処に向かう。

グライアイ三姉妹はゴルゴンの妹にあたる老婆だ。彼女らだけがゴルゴンの居場所を知っており、ペルセウスは力で脅して情報を手に入れ、ゴルゴンの住処に辿り着いた。

ゴルゴン三姉妹の内、長女と次女は不死身であったが、三女のメドゥーサだけが不死身ではなかったので、ペルセウスは彼女に標的

を定める。
　ペルセウスは自分の姿を隠すハデスの兜を被ってゴルゴンに近付き、青銅の盾にメドゥーサを映して確認すると、ヘルメスから受け取った三日月のような形をした刀で彼女の首を切り落とした。その首を袋に入れると、彼は空飛ぶ靴で脱出し、無事にセリポス島へと戻ったのである。

　話を終えた北は煙草に火を点け、ゆっくりと煙を吐いていく。
　一たちは暫くの間口を開けなかった。まるで自分の事について話すような北の口振りに心を奪われていたのである。
「ゴルゴンを倒した英雄の話ってのはこんなところだ。何か、聞きたい事はあるか？」
「あ、えと、その後ペルセウスはどうなったんですか」
「ポリュデクテスを殺して、恩のあった弟の方を領主に据えた。ペルセウスはアルゴスに戻り、その噂を聞いた王は逃亡した。ペルセウスは王になり、幸せに暮らしましたと、さ」
　投げ遣りな口調に一は戸惑った。
「北さん、その……」
「……あ、悪い。部屋から煙草持ってくるわ」
　立ち上がった北は、至極面倒くさそうに歩き始める。その後姿を見届け、一はガーゴイルに視線を遣った。
「今の話ってさ」
「ペルセウス、星になった英雄ですか。ふむ、少し思い出しましたよ」
「思い出した？」
　ガーゴイルは頷く。
「こう見えてわたしは長く生きていますから。物忘れも酷いのですよ。……北さんはペルセウスについて全てを語ってはいませんでしたね」

「全て？」
「ええ、所々を隠していたような、そんな印象が見受けられました」
「ガーゴイルがそう言うなら、そうなのかもな」
見る事に掛けて、ガーゴイルほどの能力を持っているモノはいないだろうと一は考えていた。しかし、北が語ろうとしなかった事を聞きたいとは思わない。
「そういうのはさ、本人が言いたくないから言わなかったんだと思う。だから、やっぱり聞くのやめとく」
「ふむ、そうですか。ではやめておきましょう」
「ああ、そうしてくれ」
エレンの言っていた英雄とは北で間違いない。そして、その英雄の正体とはペルセウスで間違いないのだろう。だが、一は口にしない。そうなのだろうとは言えなかった。
「おう、待たせたな。つっても、これ以上何か話せるとは限らねえけどよ」
戻ってきた北の手には缶ビールが収まっている。素面ではいられないと判断したのだろうか、などと、一はくだらない考えを断ち切った。そして、聞きたい事がないのだと気付く。英雄にさえ会えれば、後は上手くいくとだけ思っていたのだ。
「あ？　何もないのかよ？」
「いや、会う事だけを考えていましたから」
「いやいや、俺が英雄だと決まった訳じゃないぜ。ただの神話好きのおっさんって可能性も捨てるんじゃねえぞ」
北は皮肉っぽく笑い、缶の中身を呷る。
「なあ坊主、英雄に会ったところで何も変わらないぜ。ソレをどうにかするのは別の奴でも良いんじゃねえか？　この街にゃ化け物ばかりじゃねえかよ、勤務外、フリーランスなんでもござれってなもんだ」
「でも、俺にだってやれる事がある筈なんです」
「へえ、例えば？」

一は唾を飲み込み、北を見据える。
「皆を守れます。英雄になれるとは思ってない、けど、盾にはなれます」
「てめえを犠牲にしてでもか？」
「……はいっ」
「じゃあ駄目だな。坊主、お前は何も出来ないし、何にもなれねえよ」
空いた缶を名残惜しそうに見つめ、北は煙草に火を点けた。
「何も分かってねえんだ。何も見ていないし、知ってもいない。英雄なんかくだらねえぜ。ならなくて良いし、なれなくて充分だ。出来るなら、なりたくないってな感じだよな」
「俺は確かに、まだまだ未熟です。けど、俺は……」
死ぬのは恐い。戦うのは嫌だ。しかし、後ろで臥せっている者を捨てて逃げ出すのはそれ以上に嫌だった。
「皆を守りたいってか。良いねえ、ヒロイズム。だがよ、皆って誰だ？　守るにしても、ソレと戦うより先に出来る事があるんじゃねえか？」
答えられない一を知ってか知らずか、北は話を続ける。
「守りたいって奴らは坊主が守らなきゃならないぐらい弱いのか？　俺には何一つ分からねえんだ。なあ、誰を守る？　何の前に立つ？　守りたいのはこの世界か？　星か？　国か？　街の奴らか？　ただ守るって言いやがる、坊主が何をしたいのかが俺には分からねえのさ」
「……俺は」
何を守りたかったのだろう。本当は誰を守りたかったのだろう。戯言にしか聞こえない言葉を繰り返して、盲目的に自己犠牲を唱えて。
「もっと視野を狭くしろよ。俺たちは、結局どこまでいってもそうなんだ。神様なんかにゃなれねえ。地球上全部の命守ろうなんて気概は捨てるのが分相応だろ。秤に掛けても良い。どっちかを見捨て

てどっちかを拾い上げる方がらしいじゃねえか。坊主はよ、ちっとばかり綺麗過ぎるわな」

北は笑い、尚も続ける。

「盾になるとも言ったけどよ、それじゃあ英雄止まりなのさ。英雄じゃあいけねえ。坊主は人間だ。だろ？　だったら死ぬまで人間でいなくちゃ駄目だ。誰かを助ける為に自分が死んでちゃしょうがねえ」

一はただ、眼前の男の話に聞き入っていた。口を挟もうとは、到底思えない。

「坊主が死んだら残された奴はどうなる？　人間はな、自分が思ってる以上によ、誰かに大切に思われてるもんだ。だからよ、英雄だの盾になるだのってのは止めとけ。心構えとしちゃあ、まあ悪くないかもしれないけどよ」

もう一度聞くぞと前置きしてから、北は一を見つめる。

「坊主、お前は何を守る？」

「……俺の好きな人だけを」

「守る為にはどうするべきだ？」

「まずは、自分を守る事から考えます」

「まあまあだ」と、北は頷き、一の傍に置いてあったアイギスを掴む。春風がアイギスに触れた時の事を思い出し、一はあっと声を上げるが、何も起こらなかった。

「ソレを何とかしたいか？」

その為に雨に打たれ、死ぬような目にも遭った。一も二もなく一は頷く。

「一つ聞いとくけどよ、まさか英雄様に戦えだなんて言わないよな？」

「俺の代わりに戦ってくれるなら、そりゃ願ってもない事ですけどね」

「殊勝だねえ、ペルセウスも喜ぶと思うぜ」

アイギスを一に返すと、北は空き缶に吸い殻を入れた。彼は頭を

掻き、何か言おうとしては口を閉ざす。やがて意を決したのか、
「まあ、ペルセウスは弱いんだけどな。弱いから、坊主の力にはなれねえよ」
そんな事を言い放った。
が、一には信じられない。ペルセウスは話を伝え聞く限り英雄で、実際にゴルゴンの討伐に成功しているのだ。そのような傑物が弱いなどと、まかり間違っても口にしてはならないのではないか。
「確かに半分は神の血を引いていて、普通の人間よりかは力もあったろうな。だがよ、それとこれと話は別なんだ。第一な、ペルセウスはゴルゴンを殺しちゃいねえ」
「いや、メドゥーサの首を刈ったんでしょう？」
「だけ、だ。三姉妹の内、残り二匹からは命からがら逃げ出したって感じなんだよ。俺が……あ、いや、ペルセウスが殺したのはメドゥーサだけで、しかも身を隠して策を弄した意地汚い奇襲だよ」
ヤマタノオロチを殺したスサノオだって似たようなものだがなと北は言う。しかし、一にとっては奇襲だろうが不意打ちだろうが何だろうが、それをやってのけただけでも称賛されて然るべき行為なのだと思えた。
「俺の知る英雄ってのはもっとこう、かっこ良いんだよな。てめえの力だけで怪物と戦う。武器も数は持たないで、信頼に足るもの一つ、それを相棒代わりに難行を成し遂げちまう。理由なんざ端からねえ、親兄弟じゃなくても、誰かが困っていれば体が動いちまう。きっとな、そんな奴が英雄になれるのさ」
「……ペルセウスは違ったんですか？　彼だって、母親を助ける為にゴルゴンへ挑んだんじゃあないんですか？」
一の問いに北は目を丸くして、誤魔化すように俯いた。
「さあ、どうだろうな。本人にでも聞かない限り、そりゃ永遠の謎ってもんだぜ」
「はぐらかしますね」
「知らないもんは仕方ねえだろ。……坊主、お前の武器はそれだけ

か？」
　北の視線の先にはアイギスがある。一は頷き、申し訳なさそうな笑みを作った。
「少ないですかね」
「いや、武器は一つありゃあ良い。多いに越した事はないって奴もいるだろうが、そりゃあそいつの力量が高ければって話だ。いざ戦闘になっちまえば、選択肢があるってのは恐い。迷えば、その隙を衝かれちまうからな。たった一つ、どんな場面でもこれなら何とかなるってものを磨いちまえば良い」
「はあ……」
　気のない返事に北の力が抜けていく。
「坊主よう、もうちっとやる気出せや」
「いや、だって、まさか北さんの口からそんな真面目な言葉が聞けるとは思っていませんでしたから」
　口を開けば酒。顔を合わせば煙草。何かにつけては賭博。それが一の知る北の全てであった。
「どういう意味だ。いや、やっぱ良い。ああ、だからよ、その点で言えばペルセウスってのは駄目だ。まるで駄目、てんで弱い。何たって道具に頼っていたからな」
「別に構わないんじゃ？　道具に頼ってもやる事やってれば良いんですし」
「ペルセウスは……アイギスに頼り、ハルペーに頼み、ハデスの兜を過信した。キビシスに溺れて、タラリアに飲まれちまったのさ」
「……ガーゴイル、あの人何言ってんだ？」
「今出た固有名詞は、ペルセウスが借り受けたアイテムの名前だと見ます」
「目の前にいるのに『あの』はねえだろ。せめて『この』にしとけ」
　魔を退ける盾アイギス。メドゥーサの首を刈ったハルペー。被った者の姿を隠すハデスの兜。メドゥーサの首を運ぶ為の袋キビシス。履けば空を駆ける事が可能な靴タラリア。

「五つも武器と言うか、道具を持ってたんですね」
「ああ、最低だろ。拳句道具に飲まれちまったんだ。坊主、人間ってのは弱いよな」
「弱い、ですかね」
「ああ、弱い」
断言して、北は続けた。
「だが、聡い。てめえらが弱いってのを知っているからな。人間ってのは本当すげえよ、酒も煙草もギャンブルも、全部作っちまった。さっき言ってた道具はまた別だがよ、人間は色々な武具を作ってきた。弱いのを知ってるから、だよ。弱いから道具で補うのさ」
自分でも気付かぬ内に、一はアイギスを強く握り締めていた。
「武器さえあれば自分よりも大きな獣とだって戦える。だがよ、道具に溺れちゃ仕方ねえ。道具は人を強くさせる。が、弱くもさせちまうんだ」
「弱くも、ですか？」
「武器さえあれば、防具さえあれば。じゃあ、なくなったら？　武器がなけりゃ、防具がなけりゃ何とも戦えなくなる。目の前の戦いから逃げ続けなくちゃならねえのさ」
――――きっと、彼は。
「青臭い話になっちまうがな、結局のところ大事なのは気持ちなんだ。それさえありゃ、誰にだって誰とだって立ち向かえる。戦うのは道具じゃねえ。道具を使う人間だ。それさえ分かってりゃ、どんな奴が相手だって問題ねえさ」
一は全て見透かされて、何もかも言い当てられた気がした。自分が勤務外を続けるには、戦う者であり続けるにはアイギスが必要なのだと、そう信じていたのである。
「……でも、俺のアイギスは、もう……」
「壊れねえよ。アイギスは壊れないんだ。何があったか知らないけどよ、それだけは有り得ねえな」
拳一つで穴が開いた。その事実は変わらない。捻じ曲げられない。

「……坊主、何か勘違いしてるぜ。それもかなり根本的な部分でな」
北は一からアイギスを奪い取り、広げた。
「ああ、こりゃあ確かに使い物にならねえわな。こんな傘捨てちまうに限る。……坊主、理解しろよ。これはな、アイギスじゃない。穴が開いた傘でしかねえのさ」
「は？」
一はアイギスを注視する。誰が何を言おうと、これは神代の盾、アイギスでしかない。彼はこれで自らを救い、誰かを救ってきたのである。
「だからよ、これはアイギスじゃねえって。坊主、女神様から話を聞いてなかったのか？」
「聞いたと、思います」
「記憶が抜け落ちてるとしか思えねえぞ。そもそもだな、アイギスってのは何なのか答えてみろ」
天地がひっくり返っていくような事態に困惑しながらも、一は答えた。それは盾だと、自らの武器だと。
「違う。アイギスは盾じゃねえ」
「じゃあ、何だって言うんですか。盾じゃないなら鎧、とでも言うんですか？」
「鎧じゃない。兜でもない。篭手でもなけりゃ具足でも胸当てでもない」
身を守る道具でなければ何だと言うのだ。一は北の発言に眉根を寄せて不信感を露わにさせる。
「アイギスってのは言わば概念なんだ。現れる時代、所持者によって形を変えちまう。盾や胸当てってのはその一部に過ぎねえ」
「がい、ねん？　いや、でも、俺には傘が……」
「坊主よ、守ると聞いてお前は何を思い浮べた？　傘を思い浮べたんじゃないのか？」
正直なところ、一はアテナからアイギスを受け取った際の記憶を殆ど覚えていない。笑えてしまうほどに真っ白い世界。戦装束に身

を包んだ女神。それと、二三尋ねられた事についてしか思い出せないのだ。

「アイギスは何かを守るって概念、思いなのさ。女神様は坊主の思いを分かりやすく形にしただけなんだよ」

「それが、傘？」

「ま、この時代の人間じゃあ盾なんか出てこないだろうからな」

身を守る。

雨から、空から降るものに対しての防衛本能でも働いたのだろうか。それとも、あの日をまだ引きずっているのだろうかと、一はアイギスを見つめて、思う。

「その傘はアイギスの力を持っている。けどな、あくまで代用品でしかない。本物が壊れる筈ねえんだ。アイギスは坊主の中にあるんだからよ。壊れるってんなら、そりゃあ坊主が死ぬ時ぐらいさ」

溜め息を吐く一を見て、北は笑う。

「まだ信じられねえか？」

「混乱はしていますよ。今のがただのおっさんの話なら、信じないんですけどね」

「まあ、先達の言う事にゃ耳を貸しとくべきだと思うぜ」

星になった英雄。その正体はアパートに住んでいただらしない中年の男、北だった。彼はまだ否定も肯定もしていないが、半ば以上ペルセウスと呼ばれる英雄であるのだ。神々の助けを受け、様々な道具を扱い、強大な力を持つゴルゴン三姉妹のメドゥーサを打倒してみせた。紛れもなく、エレンが言った英雄なのだろう。

そして、ペルセウスの用いた道具にはアイギスも含まれている。一よりも先にアイギスを使っていた彼が言ったのだ。だから、信じるしかない。

「アイギスがそういうモノだって、北さんが言うなら信じます。けど、実際に傘は破れた。アイギスの代用品が壊れたって言うなら、新しい代用品、もしくは本物が欲しいんです」

道具は多過ぎても仕方がないとは理解出来る。道具は人の強弱を

左右するというのも納得した。しかし、今の自分には道具が一つもないのである。

「ああ、そんな事か。じゃあ、そうだな……坊主、この煙草の箱がアイギスだ」

「ふざけてるんですか？」

「睨むんじゃねえよ。いや、実際そういう事なんだって。さっきも言ったが、要は気持ち、心の持ちようって話なんだ」

「……え、つまり、それは？」

北はぷかあと煙を吐き出し、口の端をつり上げた。

「思い込みだな」

一の気が遠くなっていく。

「坊主が出来ると思えば、アイギスは応える。信じてみろよ」

「俺が、これをアイギスだって思えば……」

煙草の箱を掴み、一は息を呑んだ。

「これは、アイギスになる」

「おう、そういうこった。けど、流石にいきなりは無理だよな。坊主、その傘はどこで手に入れた？」

「オンリーワンで売られてるものですけど。あの、それが何か？」

北は顎鬚を摩り、思案するような素振りを見せる。

「これがアイギスだと、そう思っても最初は怖いに決まってる。敵を目の前にして煙草の箱向けるなんて頼りねえしな。だからよ、ほぼ同じもので代用するんだ。坊主の中じゃあ、そのビニール傘イコールアイギスって図式が出来上がっちまってる」

「ああ、そう言う事ですか。それなら、まあ、何とかなるかな」

「何とかならなくちゃ、何ともならねえ。良いか坊主、お前が相手にしてるのはペルセウスですら倒せなかった怪物なんだ。アイギスを使いこなさなけりゃ無理なんだよ」

今更になって、一はゴルゴンの恐ろしさを思い知った。稀代の英雄ですら逃げ帰った怪物を相手にしなければならないのである。

「倒せるん、ですかね」

北は、その問いに答えなかった。
「来たっ！」
「うおおっ！？」
今まで眠りこけていたシルフが起き上がり、一に飛び付く。
「来たって、ゴルゴンか……？」
「もう街の中にまで入り込んでる。多分、ここもばれてるぞ」
「嬢ちゃん、分かるのか？」
シルフは胸をどんと叩き、当たり前だろと偉ぶった。
「……坊主、その傘を手に入れた店に戻るんだ。いつまでもゴミを持ってたままじゃ戦えないだろ？」
「でも、戻って、新しいアイギスを手に入れたって、ゴルゴンをどうやって倒せば良いのか……」
「とにかく戻れ。ここには歌代の嬢ちゃんも残ってる。忘れたのか？」
それはお前の守りたいものだろう。そう言われた気がして、一は立ち上がる。
「風の嬢ちゃんよ、まだ時間はあるか？」
「うーん、分かんない。けど、まだ大丈夫だとは思う」
「よっしゃ。坊主、ちっと待ってろ」
北は走り出し、階段を足早に下りていく。
「どうして認めてくれないのでしょうか」
「あー。まあ、確かにあそこまで喋っちまえば、もう正体バレバレなんだけどなあ」
「ふむ、何かまだ、自分が英雄だと名乗り出られない理由があるのだと見ます。もしくは、名乗り出たくない、とか」
「む、シルフ様抜きで何話してんのさ！」
「お前には分からない話だよ」
「分かるさ！」
その内、一たちは北が部屋を出たのを見計らい、手すりから中空に躍り出た。

持って行けと、そう言って北が手渡したのは三つの道具だった。
「ありがとうございます」
「ああ、早く行け。俺も……」
「……？」
何とも言えない表情で頭を下げ、一はシルフに抱かれて飛び立っていく。
「俺も、何だってんだ？」
一人残った北は髪の毛を掻き毟り、天を仰いだ。

No Surrender

ペルセウスがメドゥーサの首をキビシスに入れて飛行していると、波が押し寄せている岩場に縛り付けられている女性を見つけた。

その女性の名は、アンドロメダ。彼女はエチオピアの王女であるが、母、カッシオペイアが自らの美しさは神にも勝ると豪語し、海神ポセイドンの怒りを買った為に怪物の生贄とされかかっていたのだ。

見捨ててはおけないと、ペルセウスはハルペーを使って海の怪物を倒そうと試みる。長い戦いの末、力尽きた怪物は海にゆっくりと沈んでいった。

ペルセウスはアンドロメダを救い、彼女と婚姻の儀を結ぶ。

一方で、ポリュデクテスはペルセウスがいない間にダナエに乱暴しようとしていたが、彼女はディクトゥスと共に祭壇へと逃れていた。

焦れたポリュデクテスは不可侵の掟を破って神殿を包囲する。絶体絶命のその時、ペルセウスが天から現れた。状況を理解したペルセウスはキビシスからメドゥーサの首を取り出す。

『これが約束の品だ』

メドゥーサの視線を浴びたポリュデクテスは成す術もなく石と化した。

ペルセウスは恩義あるディクトゥスを新たな領主に据えると、ダナエとアンドロメダを連れて故郷、アルゴスへと戻ったのである。

その報を受けたアルゴス王アクリシオスはペルセウスを恐れて国外へと逃亡し、ペルセウスは晴れてアルゴスの王となった。

ある時、ペルセウスはラリサの街で競技会に出場する。種目は円盤投げ、彼がえいやと円盤を投げたところ、その円盤は老人に当た

ってしまった。その老人こそ、前アルゴス王であり、ペルセウスの祖父でもあるアクリシオスだった。こうして、神託は現実のものとなったのである。

ペルセウスは殺してしまった祖父の国土を継承するのを恥じ、ティリンスの王メガペンテースを説得して国土の交換を行った。

そして、死後、ペルセウスはアテナによって天に上げられペルセウス座となる。

これで良かったのだろうか。

あれで正しかったのだろうか。

自分は、英雄と呼ばれても良かったのだろうか。

メドゥーサの首を刈ったのは、母親を救う為だったのだろうか。

海の怪物を倒したのは、アンドロメダを救う為だったのだろうか。

ポリュデクテスにメドゥーサの首を向けたのは？

祖父を殺した時、自分は本当に恥じていたのか？

「……くだらねえ」

そこに私情を挟まなかったか？

名声を得たいと思わなかったか？

賞賛を浴びたいと思わなかったか？

「くだらねえ」

一体、自分はどの口で偉そうに語っていたのだろう。一に掛けた言葉は自分にもそのまま返ってくると言うのに、だ。

ペルセウスは英雄ではない。

この世界にはソレがいる。怪物と呼ばれ、妖怪と蔑まれ、幻獣だと畏怖され、神様だと非難されるモノがいる。

しかし、何もしてこなかったのだ。何かから逃げるように、安っぽいアパートで酒を呷り、紫煙に酔う。得体の知れないモノから逃れる為に賭け事にのめり込む。ただ、それだけを繰り返す。

この世界にはダナエがいない。アンドロメダがいない。家族がい

なければ、恩を受けた人間もいない。
だから、どうした？
だからどうしたと頭を抱えた時期もあった。だから、何もしないのか、と。普通の人間より力はある筈なのだ。武器もある。ハルペーも、キビシスも、タラリアも、ハデスの兜も持っている。なのに、何もしなかった。戦いから逃げ続けてきた。確かに、誰かと戦う義理も誰かを助ける理由もない。誰に頼まれた訳でもなければ、強要された覚えもない。
それでも一度は英雄と呼ばれた存在なのだ。
――――アイギスだけが、なかった。
戦わなかったのは、逃げ続けてきたのは、きっと、そうなのだ。アテナはここに降り立たず、一の元へと降り立ったのである。自分にではなく、彼にアイギスを授けたのだ。この街には、ペルセウスがいたのにも関わらず、女神は英雄にではなく、ただの人間にアイギスを与えたのである。屈辱だった。しかし同時に安堵もした。もう、縛られずに済むのかと。
『英雄を――――』
まっすぐな目で見つめられた。
久しぶりに、気持ちが良かった。血が滾ったのも確かである。自分にはまだ、出来る事があるのではないかと。その為に、ここにいたのではないかとも思った。
「くだらねえってんだ」
煙草に火を点けた瞬間、火種が雨に打たれて飛び散った。

「これ、何なんだろうな」
差し出されたのだから受け取らない訳にもいかないだろう。そう思っていた一だったが、これはどうしても邪魔でしかなかった。
北から受け取ったのは黒いニット帽、唐草模様の布、それと、
「しっかし、随分物騒なもん渡してくれたな」

三日月型の刀、である。
一はそれらを抱えたまま、シルフに後ろから抱きすくめられ空に浮いていた。
「恐らく、ペルセウスが使っていたと言う道具ではないかと見ます」
「これが、かあ？」
刀はともかく、他の二つはただの帽子と布にしか見えない。
「がらくたを押し付けるような事はしないと見ますよ。その帽子は、ハデスの兜なのではないでしょうか」
「ただのニット帽じゃ……被った奴の姿を隠すってものだっけか」
一は言い掛けて止める。これがただのニット帽なら、今まで自分はただのビニール傘を持って戦っていた事になるのだ。
「そちらの布はキビシスだと見ます。メドゥーサの首を包む為のものでしょう」
「包むだけなら何でも良いと思うけどな」
「お忘れですか。メドゥーサの視線には見た者を石に変えてしまう魔力が宿っていたのですよ。たとえ死んで首だけになってしまったとしても、力は失われなかった筈です」
一らの隣を飛ぶガーゴイルは背後に視線を移す。
「更に言えば、血でしょうね。メドゥーサの血は毒と同じです。ただの布だとあっという間に腐り落ちてしまうのだと見ます」
「……マジかよ」
「他にも、メドゥーサの血にはこんな話がありますね。メドゥーサの首から滴り落ちた血が海に落ちて赤い珊瑚となり、砂漠に落ちた血はサソリとなった、と。ご存知でしたか？」
「ご存じなかった。へえ、じゃあ、この剣は？」
「ハルペーでしょう。これでゴルゴンの首を刈れますね」
気軽に言うが、実行するのは一なのだ。彼は今日何度目になるか分からない溜め息を吐いて眼下の建物を見遣る。
「着いたぞニンゲン」
オンリーワン北駒台店。

北はアイギスを手に入れた場所に戻れと言った。代用品を手に入れる為に、ここに戻れと。
ここは一にとっては始まりの場所なのだ。女神と出会い、アイギスを手に入れ、勤務外となった場所なのである。

「ソレはどうした？」
店に入ると店長がフロアにいた。珍しい事もあるものだと、一はぼんやりと思った。
「こっちに向かってます」
短く答えて、一は出入口付近に並べてあったビニール傘を一本掴む。
「何を言っているかさっぱり分からんな。ソレがここに来るのか？」
店長はレジ前の什器を開けて肉まんを一つ取り出した。噛り付き、眉根を寄せる。
「……おい、傘をどうするつもりだ。まさか、今更濡れるのが嫌だなんて言わないだろうな」
「言いませんよ」
一は新しい傘を触ったり、睨んだり、振ったりして遊んでいた。少なくとも店長にはそう見える。
「今、何がどうなっているんだ。どうしてここに戻ってきた？」
「英雄にそう言われたんですよ」
「……見つけたのか」
「ええ、まあ」
一は閉じたままの傘を店長に向ける。何の真似だと彼女が口を開くより先、
「これはアイギスです」
間の抜けた声で頭の悪い事を言われた。
「店長、これはアイギスなんです」
「あー、分かったから黙れ。さっきから頭が痛い」

「だから、一つお願いがあります」
日本語を学び直せと言いたかったが、一は真剣だった。決してふざけている訳ではないのだと分かると、店長は腕を組んで彼を見据える。
「高くつくぞ」
「立花さんの刀、まだ残ってましたよね。そいつで、こいつを突き刺してください」
「何……？」
何がやりたいのかが理解出来ない。確かに刀はまだ残っているが、一が持っているのは本当に、ただのビニール傘なのだ。わざわざそんな事をしなくても結果は見えている。
「意味はあるのか？」
「俺は正常ですよ。時間がないんです。お願いします」
迷ったが、店長はバックルームに戻って刀を持ち出してきた。彼女は鞘を抜き、剥き出しになった凶器を一に見せ付ける。
「前にも言ったような気がするが、私は刀なんか使った事はない。失敗しても恨むなよ」
「失敗するほど難しい事じゃあないですよ」
一は傘を広げて前方に突き出した。
「ここに刀を突き刺していってください。出来れば、ゆっくりと」
「分かった」
店長は刀の切っ先を傘に向ける。構えも握りも無茶苦茶だったが、一は少しだけ気圧されていた。
「いくぞ」

信じれば、応えてくれる。信じていれば、それはアイギスとなる。
ビニールに刀が触れた瞬間、一は信じ切る事が出来なかった。女神を、アイギスを、何よりも自分を。彼が持っているのは、ただのビニール傘でしかない。

「売り物を駄目にしてまでやりたかったのは、これか？」
店長は刺すような視線を一に浴びせる。彼は押し黙り、傘を畳んだ。
「……買い取ります」
「別に構わん。どうしてもと言うのなら勝手にしろ。なあ一、何か理由があったんだろう？」
頷き、一は外に目を向ける。時間はない。もうすぐゴルゴンがここに来る。それまでにアイギスを万全なものと取り替えておきたかったのだが、それは失敗に終わった。一が信じられなかったから、アイギスは応えてくれなかったのだ。
「……一、客だぞ」
振り返ると、扉をノックしているシルフが見える。一は扉を開けて何事かと尋ねた。
「来た。あいつらだ」
どくんと、大きく心臓が跳ねる。新しいアイギスはまだ手に入っていない。穴の開いた不完全なものしかないのである。
「……来た？　ソレが来たのか？」
「ソレは俺を狙っています。店長、出てこないでください」
「お前を、か？」
「俺をです」
アイギスを握り、一は雨を睨んだ。この雨を裂いて、風を切って、この空の向こうからソレはやってくる。
――――アイギスを渡せば。
ゴルゴンはアイギスを、メドゥーサを狙っている。それを渡せば、どこかへ大人しく消えてくれるのではないかと期待した。しかし、アイギスは一の中にある。渡したくても渡し方が分からない。仮にそうでなくとも、自分はアイギスを手放さないのだろうという確信もあった。これがなければ、勤務外ではなくなってしまう。言わばアイギスとは彼にとっての存在理由なのだ。自分を手放すような真似を誰がするものか。一は一層強く降る雨を、その向こうからやっ

てくるであろうソレを睨み付ける。
「ニンゲン、どうするんだよ？」
未だアイギスを信じられないまま、不死であるゴルゴンを相手に戦うのか、それとも逃げ出すのか。
「……予定通りにいく。頼むぜ」
シルフは心配そうな表情を浮かべていたが、一の言葉を聞いて満面の笑みを浮かべる。
「オマエの為なら」
「ありがとな。……店長、店の前でやり合います。被害は最小限に抑えたいんですが」
「分かった、情報部にそう伝えておく」
一は頷き、店を出た。その後ろ姿を見届けた店長はバックルームに引っ込んで電話を掛ける。コールが止んだ瞬間には口から言葉が溢れ出ていた。

「あら」
「あら」
どんなに遠くへ離れても、姉妹の絆は途切れない。
どんなものに姿を変えても、姉妹の絆は壊れない。
「やっと見つけたわ」
「やっと見つけたわ」
腕を組んで自分たちを迎える男を見て、ステンノとエウリュアレは薄く笑った。彼の後ろには風の精霊がいて、こちらを強くねめつけている。
しつこい鼠だと、彼女らは思った。鼠には丸呑みが似合っている。黒々とした口の中、赤々とした舌の上で、きいきい鳴くのが最高に素晴らしい。美しい蛇に抵抗するなど以ての外なのだ。小汚い手でメドゥーサを掴むモノとは、これで三度目の出会いになる。一度目と二度目では途中で邪魔が入ったが、今度は逃がさない。追い立て

るのにも飽いている。
「すぐに助けてあげるから」
「すぐに助けてあげるから」
「もう少しだけ我慢してね」
「もう少しだけ我慢してね」
ゴルゴンが地を蹴った。

どういう事だと、一は我が目を疑った。ステンノは片目を失っていた筈なのに、今の彼女にはそれがある。不死の意味とはこれなのかとも思ったが、ステンノの胸には穴が開いていた。雨のせいで血は流れていたが、肌には僅かに跡が残っている。不死とは言えど怪我はする。血も流れる。

堀が与えた傷だろう。彼はきっちりと仕事をこなしてくれたのだ。が、ゴルゴンがここにいる事実が一を不安にさせる。堀は無事なのかが気掛かりだった。

と。一が目を逸らした瞬間、ゴルゴンはコンクリートを砕かんばかりの勢いで飛び出している。

「シルフっ」

シルフは一の体を浮かせるが、それよりもステンノが早い。

「わあああああっ!?」

広げていたアイギスにステンノの拳は阻まれる。しかし衝撃は凄まじかった。シルフの集めていた風が散らばり、彼らの体を上方へと押し上げる。

バランスを保てず、錐揉みになって回転する一たち目掛けてエウリュアレが飛翔した。彼女は毛髪を蛇に変えて放つ。

「こうなったらぁ！」

シルフは風を下に向けて放った。体勢こそどうしようもなく無茶苦茶ではあったが、更に上へと逃げる事によって蛇を躱す事に成功する。彼女は歯を食い縛りながら、両足に風を収束させて空中で立

ち止まった。
「……あっぶなー。あ、ニンゲン大丈夫か？」
「……おう」
サムズアップする一の顔面は蒼白である。ついでに言うなら、鼻水と涙でぐちゃぐちゃになっていた。
「……我ながら、アイギスを離さなかった事を讃えてやりたい」
「シルフ様だってオマエを離さなかったぞ」
「オマエが離したら俺が死んでるわ！」
一は長く息を吐き、眼下を睨み付ける。
「二回目までとは動きが違うな。なりふり構わずって感じだ」
「みたいだな」
呟き、シルフがゆっくりと降下を始めた。一はアイギスを畳んで接近戦に備える。エウリュアレが飛び上がってくるのが見えたのだ。
「付き合うのか？」
「ここならお前に分があるからな」
不敵に笑う一に倣い、シルフも、にいいと愉しそうに口の端をつり上げる。
エウリュアレの撃ち出した蛇を確認し、シルフは風を纏った。
「正面突破だ。ニンゲン、面倒なのはオマエに任せるからな」
一の返事を待たずに、シルフがエウリュアレに向かってまっ逆さまに落ちていく。一はアイギスを広げて、眼前に迫る蛇を弾き返した。
「あら」
蛇の雨を抜け、エウリュアレに迫る。一はアイギスを畳み、ソレを睨み付けた。風が吹き荒ぶ中空で、飛翔の名を冠するモノと風の精霊が交差する。
シルフは縦横無尽に空を疾駆し、エウリュアレを捉えようとしていた。
エウリュアレは蛇を放ちながら距離を保ち、隙を見つけては一の持つアイギスに手を伸ばす。

速度ではシルフに軍配が上がったが、放たれる蛇のせいで上手く近付けない。
「面倒だぞ！」
一は何もないところに視線を遣った後、
「じゃあ、始めるか」
独りごちてアイギスを真上に放り投げる。
「あら？」
エウリュアレがアイギスに注意を向けた瞬間、シルフは彼女に向かって全速で迫っていた。
「しっかりやれよニンゲンっ」
一はエウリュアレの髪の毛を片手で掴み、自由になっているもう片方の手をシルフに向けてみせる。シルフはコートのポケットから唐草模様の布を取り出して、彼の手に握らせた。
エウリュアレは逃れようと体をくねらせるが、一に掴まれ、落下していく風の衝撃で上手くいかなかった。彼女は一の肩を鷲掴んで力を込める。
「っのヤロ……！」
一の顔が苦痛に歪んだ。エウリュアレは髪の毛を蛇に変質させていく。
「ニンゲンっ」
「分かってら！」
唐草模様の布をエウリュアレの頭部を覆い隠すように広げると、今まで蠢いた彼女の髪の毛の動きが止まる。一は布を被せたままエウリュアレの髪を掴み直した。
「しっかり捕まってろよ蛇女」
逃れられず、蛇も出せず。エウリュアレは成す術なく急降下していく。
「おお……っ！」
一は彼女の頭を地面に叩き付けた。霧散し、吹き抜けていく風の音が、骨の砕ける音に被さって聞こえる。彼が手を離すと、エウリ

ュアレは頭だけで地面に逆立ちになったような体勢の後、ゆっくりと崩れ落ちた。
　ステンノは一たちが地上に着いたタイミングを見計らって駆け出している。
　だが、繰り出した拳は何も掴めずに、誰も砕けずに終わった。ステンノの上から見えない何かが圧し掛かっているかのように、彼女は身動きを取れないで地面に縫い付けられている。
　息を吐いて、一はシルフから三日月の形をした剣を受け取った。彼は動けないステンノに近寄り、躊躇なく彼女の首を切り落とす。血飛沫が一の顔を濡らしたが、彼はただ、首のなくなったステンノを見つめていた。
「やりましたね、一さん」
「ああ、とりあえずはな」
　何もないところから悪魔のように低い声がする。だが、一はそれに驚かないで当たり前のように返事をした。
「シルフ、アイギスを拾っといてくれ」
「シルフ様がぁ？　……まあ良いや、さっきのオマエ、少しかっこよかったぞ。漫画の主人公みたいだった」
「ふむ、わたしもそう見ますね」
「ガーゴイル、お前も漫画見るのか？」
「当然です」と、ステンノの近くから声がした。
　一は頭を掻いて何もない筈の空間に手を伸ばす。しかし、彼の手には固い感触があり、そろそろと、掌を上の方へずらしていくと毛糸のようなものに触れた。
「まさか、こんな上手くいくとはな」
　呟き、一はそれを引っ張り上げる。瞬間、何もなかったところからガーゴイルが現れた。
　何の事はない。道具と、それを扱うモノが揃っていただけの話な

のだ。
　一がアイギスとキビシス、それからハルペーを。ガーゴイルがハデスの兜を被り、姿を隠して隙を衝いただけの話なのである。が、ゴルゴンには通用した。そも、北から預かった道具はメドゥーサ討伐の際に使用したものである。彼女の姉妹に通用しない筈がないのだ。
　一はシルフからアイギスを受け取り、キビシスとハルペーを彼女に返した。
「これで終わりなら良いんですけどね」
「今の内にこいつらどっか捨てちゃおうよ。シルフ様が遠くまで運んでやるぞ」
「いや、駄目だ」
　一は首を横に振り、横たわったゴルゴンを見下げる。
「完璧に殺しとかなきゃ、こいつらは死ぬまで俺を……いや、アイギスを追い掛けてくる」
「その通りだ」
　振り向くと、傘を差した店長が煙草を吸っているのが見えた。彼女は一たちの傍まで歩き、短くなった煙草をステンノに向けて、指で弾き飛ばす。
「店長、出てこないでって言ったじゃないですか」
「堀から連絡があった。車は壊れたが、奴は何とか無事だそうだ」
　一は胸を撫で下ろした。安心したが、その場にへたり込みそうになるのを堪える。
「ソレを逃がしてしまって申し訳ない、とも言っていた。それから……」
　店長が何か言おうとした瞬間、二つの影がゆらりと立ち上る。一たちは武器を構えて振り向いた。
「……それから、ソレは強い再生能力を持っているらしい。確かに伝えたぞ」
「意味ないけどな！」

起き上がったゴルゴンの五体は満足に揃っていた。二度と起き上がられなくて当然のダメージを負っていたのが、まるで嘘のように。
「あら」
「あら」
「それを見たのは久しぶりね」
「それを見たのは久しぶりね」
ゴルゴンは揃って足を踏み出して、
「本当に」
「本当に」
声を揃えてアイギスへと手を伸ばす。
「憎らしい」
「憎らしい」
「来るぞ！」
一はハデスの兜をガーゴイルに被せる。シルフが一を抱えて上空に飛んだ。向かってきたステンノは標的を失う。
「姉さん、任せてちょうだい」
「あら、お願いするわ」
エウリュアレは上昇して一たちを追い掛けた。残ったステンノと店長の目が合うが、
「私は関係ないからな」
店長は煙草に火を点けて言い放つ。ステンノは暫くの間、物珍しそうに紫煙を見つめていた。

首を折っても、首を狩っても立ち上がる。強い再生能力を持っているのは知っていた。不死のソレを相手に何をやっても無意味だとは気付いている。いっそ、ゴルゴンの五体を徹底的に切り刻んでやろうとも考えたが、徒労に終わりそうなので実行には移すまい。一は撃ち出される蛇をアイギスで弾きながら考える。何をすれば良いのか。どうすればソレを殺せるのか。

「……違うか」
分かっていても、出来るとは限らない。アイギスは応えてくれるが、さっきまでうるさいくらいだったメドゥーサは黙ったままである。
「もっぺん叩き落としてやるのか？」
シルフが問い掛けるが、一は答えに窮した。同じ手が通じるとは思えないし、通じたところで結果は同じなのである。何度殺したところで、ゴルゴンは何度も甦る筈なのだから。
「このまま黙って……なんてのはナシだからな、ニンゲン」
「けどなあ……」
一はエウリュアレを改めて見遣った。本当に、先程の彼女らと何一つ変わらない動きに戦慄する。せめて再生する度にリスクを負っていればと思うのだが、そんな様子は見られなかった。
中空に漂い、時には走る。シルフはエウリュアレへの接近を試みるが、先刻よりも蛇の数が多い。一だけでは全てを防げず、その場を離脱しなければ攻撃を受けてしまうのだ。そうして、いつまで経っても近付けない。
「ガーゴイルに頼るか。いや、でも片方だけ仕留めたところで……」
思考は堂々巡りに。一の迷いがシルフにも嫌な形で伝わったのか、彼女の動きも鈍くなる。集めた風を上手く使えず、移動する度にバランスを崩して不安定に揺れるのだ。息遣いも荒く、耳元に掛かるそれを聞いて、一は眉根を寄せる。
風の精霊とはいえ、長時間能力を行使するのは苦しいのだろう。だが、分かったところで一にはどうする事も出来ない。シルフが限界を迎えれば、機動力を失った彼らはそこで人生を終えるのだ。
「……やばいか？」
「やばくない……気にすんなよニンゲン。シルフ様はやりたくてやってるのさ」
「でも」と一が言い掛けるが、シルフは彼の話を遮る。
「なら、シルフ様がもう駄目って言ったらどうするのさ？　オマエ

はこっから地面まで落ちるつもりなのか？　あいつらを倒せなくて良いのかよ？」

シルフとてこの状況を理解していた。彼女は深く息を吐き、一をぎゅっと抱き締める。

「ガーゴイルの奴だって、ずっとチャンスを待ってる。シルフ様だってずっと待ってるんだ。だから、オマエだって頑張れよ」

何を待つというのだろう。

チャンスは果たして、本当に訪れるのだろうか。

相手は不死のゴルゴンである。アイギスは破れたままで、メドゥーサは姿を見せない、声を聞かせないどころか力すら発揮してくれない。このまま時間だけを無為に消費して、そして、いつか息絶えるだけなのではないか。

迫る蛇を回避しながら、シルフは空を泳ぐ。髪の毛を変質させて蛇を撃ち出したエウリュアレは、それに紛れて一たちに接近していた。畳んだアイギスを振り回し、必死でソレから逃げ惑う。

――――英雄に会いなさい。

もう会った。会って、話を聞いて、この様なのだ。確かに有益な話は聞けたのだろう。道具も借り受けて、意気も上がった。しかし、ゴルゴンを倒す方法を聞いていない。完璧な状態のアイギスを取り戻すには時間が足りない。覚悟が足りない。

「ニンゲン、逃げてるだけじゃいつまで経っても終わらないぞ」

しかし立ち向かったところで終わるとは限らない。終わるというのなら、自分たちのそれが終わる方が先なのだとしか思えない。

逃げ場所を探した一の目が捉えたのは、隠れていろと言ったのに店の前で煙草を吸う店長だった。彼女はどこも見ていない。ステンノも、エウリュアレも、シルフも、一も。何も見ていない。強いて言うならば、彼女はきっと前だけを見ていて、先の事だけを考えている。

笑えてきた。

自分がこんなにも苦労して、死ぬような目に遭っているのに、彼

女はそんな事気にも留めていないのだ。あるいは、心配をしていない。

「……ちっ」

ふっと見上げた冷たい視線が一の視線と交錯する。さっさと終わらせろと、そう言われている気がした。

「あら」

気を取られた一に向かってエウリュアレが飛翔する。彼女は彼の頭に手を伸ばそうとして、その手が、地面に落ちていった。

「あら？」

エウリュアレは失った右手首を見遣り、小首を傾げる。間、髪を入れず、彼女の顔面に一の持つハルペーが突き刺さった。

「あらら？」

血が噴き出して、今も顔面を切り裂かれていると言うのにエウリュアレは動じない。残った左手を一に伸ばそうとしていた。

ハルペーなんて物騒な武器は自分には合わないと思いつつも、何故だかその使い方が分かる。彼は笑いを堪えて、エウリュアレの首を刎ね飛ばした。

「……に、ニンゲン？」

「どうせ死ぬんなら、精一杯足掻かなきゃな。……シルフ、次はステンノだ。いけるか？」

シルフは口の端をつり上げて笑う。きっと、ガーゴイルも笑っているだろう。

「ただじゃくたばってやらねえからな」

そう思い、一はアイギスとハルペーを構えた。

ファイティングポーズ

何回首を撥ねたか、何度殺したか。一はもう数えるのを止めてしまっている。

「あら」

「あら」

「まだ続けるの？」

「まだ続けるの？」

水を吸ったシャツが邪魔で、一はそれを脱ぎ捨てた。全身がだるく、重い。

「ガーゴイル、もっかい行くぞ」

姿を隠しているが、近くにいるであろうガーゴイルに声を掛け、一は向かってくるステンノの攻撃をアイギスで防いだ。体はもう衝撃に耐えられない。地面が濡れているせいもあるが、体力も殆ど尽きている。彼は足を踏ん張れずに滑り、アスファルトに上半身を擦った。

追撃を試みるステンノはガーゴイルが上から圧し掛かる。一とエウリュアレ、一対一の状況に持ち込むが、既にシルフは戦線を離脱していた。彼女は店の前に座り込み、辛そうに呼吸を繰り返している。

したがって、空中から襲い掛かるエウリュアレに対して、一は何一つ有効な策を持っていない事になる。良いように攻撃されて反撃すら出来なかった。

「一さんっ」

ガーゴイルの声が聞こえたと同時、一の体は再び地面を転がっている。ステンノがガーゴイルから逃れて、エウリュアレに気を取られている一を横合いから殴り付けたのだ。尤も、彼はアイギスで防いで致命傷だけは避けている。

「あら」
「あら」
呼吸が荒い。息を吸おうとして、しこたま雨を飲んでしまった。
一はむせて、肺に残っていた空気を全て吐き出してしまう。
「もうおしまい？」
「もうおしまい？」
苦しかった。ここで立ち上がらずに寝てしまいたい。どうせ死んでしまうなら、結局殺されてしまうなら、潔く諦めるのが一番だ。
そう思いつつも、一の体は生還の道を探している。アイギスを広げながら、更に後ろへと下がっていた。足掻き、もがき、喘ぎながら生きようとする。
そんな一を、ステンノは一撃で終わらせた。彼の手からはアイギスが離れ、彼の体は冷たい地面にくっ付いてしまう。

――殺せ。
その声に従い、首を刎ねた。
――殺せ。
その声に従い、胴を薙いだ。
――殺せ。
その声に従い、剣を振った。
――殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。
――お前は英雄になりたかったんだろう？
その通りだと返して、縋り付く者を蹴り殺した。
――英雄になる為にはどうすれば良い？
敵を殺す事だと答えて、背を向けた者を斬り殺した。
殺せば殺すほど英雄に近付ける。だから、彼は剣を振るった。味方だった者、家族だった者も関係ない。一度敵に回れば殺すしかない。

殺して、殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して、それでようやく、英雄になれる。

傘を差した男が戦場に現れる。すぐそこを通り掛かったからと言うような気軽さで、倒れている一に向かって手を上げた。

あまりにも、似つかわしくない。彼は半そでのよれたシャツに、汚れたズボンを着ている。髪も髭もぼさぼさで、ともすれば路上生活者のような風采の上がらない雰囲気を持っている。

「……北、さん……」

「元気ねえじゃねえか、坊主」

一を見下ろすゴルゴンたちには目もくれず、北は彼の傍へと近付いた。

「あら」

「あら」

ゴルゴンが北に手を伸ばすが、彼はもうそこにはいない。いつの間にか店長の隣に立ち、煙草を口に銜えていた。

「……なんだ、お前？」

店長が北を強く見据えるが、彼はその視線を涼しい顔で受け流す。

「通りすがりの元英雄だ。嬢ちゃん、火ぃ貸してくれるか？」

「お前が、北の英雄なのか？」

「どうだろうな？」

ライターを貸してくれなかったので、北は仕方なく自前のものを使った。格好が付かなくなったので、彼は俯いてしまう。

「あら」

「あら」

「あなた」

「あなた」

「前にもどこかで」

「会わなかったかしら？」

ゴルゴンは一から視線を外して、北を見つめた。彼は紫煙を吐き、口の端をつり上げる。
「綺麗な姉ちゃんにそういう事言われんのは、嬉しいね。俺もまだまだイケるって事かぁ？　なあ、嬢ちゃんよ」
「……私は嬢ちゃんと呼ばれるような歳じゃあない」
店長は北を睨み付けた。
「俺から見りゃあまだまだ嬢ちゃんだがな」
「何しに来たんだお前は」と、店長は北の正体に気付いても尚、彼に対する口調と態度を改めない。鬱陶しそうに言い放ち、さっさと帰れと言わんばかりの視線を送る。
「坊主、随分と殺したな」
強い雨に流されていたが、それでも一の上半身にはゴルゴンの返り血が残っていた。北は彼の様子を確認して、無茶をしたものだと溜め息を吐く。
ゴルゴンの血は、毒なのだ。彼女らの血を浴びても一が平気でいられるのは、彼の中に巣食ったメドゥーサの為である。蛇姫が、姉たちの毒を中和させているのだ。しかし、手放しでは喜べない。何故なら、その事実は一がメドゥーサに食われつつある事に他ならないのだから。
「ハルペーを渡した甲斐があるってもんだぜ。どうだい、使い心地は？」
一はごろりと寝転がる。
「……最悪ですね」
「頑張った方だとは思うがな。どれ、貸してみな」
そう言った次の瞬間、北は一の傍に立っていた。その場にいた全員が目を見開く。
一が持っていたハルペーを強引に奪い取り、北は彼を見つめた。
「坊主、先に言っとくがな、俺じゃあゴルゴンを倒せねえ。倒せるのはお前だけだ。アイギスを使え。メドゥーサを呼び出せ」
右手にハルペー。左手にキビシス。足にはタラリア。ハデスの兜

は必要ない。もとより姿を隠すつもりはないのだ。北は煙草を吐き捨てて大きく伸びをする。

「俺はアレに勝てねえが、殺されもしねえ。坊主の気が済むまで、アイギスを使いこなせるようになるまでは時間を稼いでやるよ」

「……でも、俺は」

「英雄ですら殺せなかった不死のゴルゴン。どうにか出来るのは……一一、お前ぐらいなんだぜ？」

力強い。北の言葉には有無を言わさぬ説得力があった。アパートで話していた時とは違う。何かを吹っ切ったような、清々しい力に満ち満ちていた。

「ほうら、あちらさんも辛抱効かなくなっちまったらしい。見ろよあの目、俺を欲しがってやがる」

口の端をつり上げて、妖艶に笑むのは二体の蛇姫。遠い昔に遠いどこかで、女神にその美貌をやっかまれた姉妹。彼女らに負けじと、星になった英雄も笑う。

「ようやく思い出したわ」

「ああ、憎らしい」

「あなた、ペルセウスね」

「ああ、呪わしい」

「は、やろうか」

短く告げ、英雄が夜を裂く。夜を往く。右手に携えた三日月が、銀色に光り輝いた。

「くっ、はぁ、畜生……」

一はシルフの隣に腰を下ろして弱々しく毒づいた。もう動きたくない。が、そうもいかない。アイギスを見つめ、胸に手を当てる。答えてくれと祈りを捧ぐ。

「一、アイギスは……」

一は力なく首を横に振った。店長は彼に傘を差してやろうかと迷

ったが、今更過ぎると気付く。何もしてやれない自身が歯痒く感じられて、銜えた煙草を強く噛み締めた。
「ゴルゴンを倒せるのはお前だけだと奴は言ったな。何故だ？」
「ゴルゴンは不死です。だから、殺せない。なら、ずっと止めてりゃあ良い。石になって一生固まってれば……」
「メドゥーサの石化……そうか、ヤマタノオロチのアレか。確かに、お前にしか使えない、成し得ないだろうな。だが、可能なのか？」
自分の意思でメドゥーサを呼び出せるのか？
一は唇を噛み締めて、アイギスを見つめる。
「……時間はまだある。あの英雄とやらがソレの注意を引き付けているからな」
しかし長くは持たないだろう。早くアイギスを、メドゥーサを使えるようにならなければ。
――――本当に使えるのか？
一は北を見遣る。彼は英雄だ。紛れもなく、本物の勇者である。
では、自分は？　英雄か？　勇者か？　主人公か？　違う。ただの大学生だ。たまたま女神に出会い、ソレの血が混ざった異端者に過ぎない。この土壇場で、秘められた力が沸き上がる筈がない。都合良く展開するとは思えない。助けはもう来ない。自分の力だけでこの場を切り抜けなければ、死ぬ。
「……店長、シルフを連れて逃げてください」
「何故だ？」
「それから、店の皆にはごめんなさいと伝えてください」
「くだらん。遺言のつもりか？　ふざけるなよ、まだやる事が残っているだろう」
「知っています。もしもの話ですよ」と、一は自虐めいた笑みを浮かべる。
「私は逃げない。逃げる理由がないからな」
そう言うと、店長は一の隣に座った。
「濡れますよ」

「店員を置いて逃げ出す店長がいるか。ほら、早く何とかしろ」
「……ありがとうとは言いませんから」
「当然だ。言うなら、ありがとうございますだろうが」

飛び回るエウリュアレに、地を駆け回るステンノ。彼女らを相手にしながら、北は気持ちが高ぶるのを感じていた。酷く興奮している。楽しいのだ。戦える事が嬉しい。敵意を剥き出しにされるのが、こんなにも心地良い。握った武器は懐かしくて、涙が出そうになるほどしっくりときていた。
「あら」
「あら」
同時に聞こえる同じ声。北は傘を投げ捨てて、両手を広げる。彼は降りしきる雨を、降って湧いたこの状況を受け止めていた。
「英雄さん」
「英雄さん」
「今度はあの子を」
「やらせはしない」
「この場であなたを」
「必ず殺すわ」
ハルペーを構えて、ステンノへと意識を向ける。北は一つ嘘を吐いた。時間稼ぎをするなんて、嘘だ。彼は殺すつもりでいる。自身が殺されようとも、ここで命を落とそうとも、ゴルゴンを仕留められたならそれで良い。もう一度戦えるのなら、満足出来る。
「どこまでいっても、英雄ってのは英雄でしかねえみてえだな」
くつくつと笑い、北は右手を振るった。彼の虚を衝いたつもりのステンノが地面に崩れ落ちていく。
一はまだアイギスを、メドゥーサを――――否、道具と言うものを理解していないらしい。当たり前だが、道具には意思がない。持つ者の意志によって動き、意図の通りに動く。使って、扱って、扱

き使ってやるのが道具の為だ。
　北はタラリアを使って飛翔する。雨を縫い、夜の闇を裂くように飛び上がった。情報部の人間が持つような神具のコピー、レプリカの類ではない。彼が持つのは正真正銘のオリジナル。伝令の神から賜った飛翔の靴だ。
　飛翔。その名を由来とするエウリュアレよりも速く空を駆ける。北の動きは常人どころか人外にすら追えなかった。彼はソレの真上を取り、右腕を振り下ろす。エウリュアレの首に赤い筋が走っていた。彼女は空中に静止したのかと思えば、次の瞬間には地上に向かって落ちていく。胴体から頭部が離れていき、北はそれを見送った。どうせ、首はまた数分もしないで生えてくる。尽きない命を盾にしているせいか、ゴルゴンの動きは鈍いように感じた。
「……楽しいが、こりゃあ……」
　やはり、自分ではゴルゴンを殺せない。彼女らをどうにか出来るのは石化の力を備えたメドゥーサだけだ。稀代の怪物である彼女を従わせられる一にしか、一だけが――――。
　ならば、自分はどうしてここにいる。北は他ならぬ自分自身に問い掛ける。分かり切った問いに、何度も答える。決まっていた。生まれた時から、雷神である父親の血を引き継いだ、受け継いだその瞬間から決まっていた。
　――――英雄。
　理由は一つで良い。たった一つで理由になり得る。自分が半神である限り、北英雄は英雄（ペルセウス）であり続ける。英雄と呼ばれる為に一の前に出たのではない。英雄であろうとする為に剣を取ったのではない。英雄だから、ここにいる。もう、それだけで良い。
「……あら、強いのね」
「意外だったかい？」
「ええ、あなた、ネズミみたいにコソコソしていたから。もっと好きにやれば良いのに」
「はっは、そうかい」

起き上がったステンノを見て、北はハルペーを握り直した。

アイギスの力は凄まじい。それは類い稀な防御力だけではない。能力を発動するには条件があるが、一度クリアしてしまえば、対象の動きを止められるのだ。更に、一はその先へいこうとしている。石化、だ。アイギスにはめ込まれたメドゥーサの力を使い、一時的な動きの停止ではなく、永続的な停止を狙っている。

「……駄目だ。何をどうすりゃ良いのか分からない」

しかし、当の一はメドゥーサどころかアイギスすら満足に扱えないらしかった。彼は深刻そうな表情で悔しがる。

「一、ヤマタノオロチを石化させた時を思い出してみろ」

「……駄目なんです。メドゥーサが出てきた、と思う時は思い出せるんです。けど、それだけです。同じ風に思えって言われても、無理だ、そんなの」

しかし、一が上手くいかないと全員が死ぬ。不死のゴルゴンに対抗しうる力を持っている者が、果たしてこの世に残っているのだろうか。

「ピンポイント過ぎる……」

「俺もそう思いますよ」

「しかし一、お前が持つのは道具だ。道具でしかない。アイギスに意志があるか、それは分からん。しかしだ、お願いしますと下手に出ても仕方がないだろう。命令しろ」

店長は続ける。未だ進展のない事態に焦っているのかもしれなかった。

「私の知る、多くの道具、武具を操る者がそう教わっていたらしい。使え、扱え、扱き使え、と」

誰が言ったか知らないが、その通りだと店長は思った。しかし、一は納得した様子を見せない。

「いつまでもそうしているつもりか？　良いか、道具は応えない。

答えを持っている筈がない。無理矢理に引きずって従わせろ。お前が所持者なんだ。誰にも文句は言えん。だから……」

「……ああ、だから」

一は頷き、畳んでいたアイギスを広げた。

「そうか。だから、俺は……」

アイギスを愛しげに撫でて、一は得心したように笑う。この世全ての理を分かったかのような、見る者を不安にさせる顔だった。

「店長、それじゃあ駄目なんですよ。少なくとも、俺とアイギスは……いや、俺とメドゥーサに限ってはそうじゃない」

「一……？」

「信じろって。俺はそう言われたんです。今、信じるのはアイギスじゃない。アイギスを使う自分でもない。信じるのは、メドゥーサだった」

絶望が間近に迫った状況下で、憑き物が落ちたような晴れ晴れとした表情を浮かべる一に、店長は戦慄した。

「俺が信じるのは道具じゃない。信じるなら、使わない。扱えない。扱き使うなんて言ったら殺されちまう。ずっと、最初からそうだったんだ」

一はアイギスを真上に投げ捨てる。

「俺が信じるべきで――――」

英雄じゃなくても良い。

英雄になれなくても良い。

そう思った、そう言われた彼は知らない。

ヒーローとは、最初から死ぬ為に存在する。誰かの為に死ぬからこそ英雄なのだ。自己犠牲を美徳で塗り固めた、誰かの偽りによって押し付けられた存在なのだと。

ギリシャ神話の主神ゼウスの妻にして姉であるヘラ。ヒーローの語源、意義とはヘラに捧げられた男性。即ち彼女の供物、贄なのだ。

捧げられた命だけが英雄と称される。
しかし、彼は選んだ。決断に成功した。誰かを守って、誰かの為に死ぬのではない。誰かを守りたいなら、何を差し置いても一番に守らねばならないものがある。それはきっと、英雄には叶わない行為。英雄でないからこそ叶う事なのだ。

――――俺が信じるべきだったのは……！
一の投げ捨てた傘が地に落ちる。刹那、風が吹いた。北や店長が店の前に広げて置いていたビニール傘が宙に舞う。
――――呼ぶべきだった名前はっ！
「シルフ、最後の仕事だぜ」
「……風使いの荒い奴」
シルフはもはや立ち上がられないほどに疲弊しきっていた。彼女は座ったまま、一の周囲を、ビニールの傘を見据える。
「一っ、これは……！？」
店長が目を見開いて叫んだ。一の周囲に停滞する風が、数本のビニール傘を彼の周囲に浮かび上がらせている。
北が何事かを叫んだ。復活したエウリュアレが一に向けて蛇を放っていたのである。牙を剥き、赤い舌を覗かせる数匹の蛇が彼に飛び掛かっていた。

守りたいと思った。
自分と関わった全ての人を、自分が関わった全てのモノを守りたい。その気持ちに偽りはない。いつだって変わらない。手の中から一度でも零れたモノは拾えない。いつだって、なくしてからでは遅いのだ。
守りたい。
護りたい。
人間も、ソレも、勤務外も、フリーランスも、何もかも。何もか

も関係ない。好きな人だけ守りたい。だって自分は、英雄ではないのだから。そして彼女は道具ではない。今までずっと自分を、周囲の人間を守ってきてくれていたのだ。使え、扱え、扱き使え？　有り得ない。彼女と自分は対等なのである。共に戦う、隣に並ぶモノなのだと、ようやくになって気付いた。

だから。

割れる。割れる。世界が音を立ててひび割れていく。

崩れる。崩れる。世界が唸りを上げ崩れ落ちていく。

『主』と、声が聞こえた。自分の内から響く、儚げな声。

揺れる。揺れる。世界が世界を揺らしていく。

壊れる。壊れる。世界が世界を壊して、いく。

『私の主、可愛い主』あの日も聞いた、あの声。

光る。光る。世界が光に満ち満ちていく。

生まれる。生まれる。世界が新しく生まれ変わっていく。

守りたい。その一心、ひたすらに思う一の意志に彼の――――が答える。

アイギスが、発動する。

彼女が答える。

耳鳴りと頭痛。一は目を瞑り、それらに耐えようと歯を食い縛った。

アイギスを握っている腕から力が抜け落ちていく。

頭から、何か大切なものが零れ落ちていく。

瞼の奥に、白い光が迸る。世界が白に染まっていく。塗り替えられる世界が、二つに割れていく。

白い世界の中、一はまた、白い女を確かに見た。
そしてまた一つ、一は世界を理解する。
『あなたが、守りたいのは？』
声がした。一は答える。
「皆を。でも、自分も守りたい」
『……主を？』
一は頷いた。
「俺を守ってくれ、メドゥーサ。俺も、お前を守りたい」
髪の長い、身の毛もよだつような美貌の女は声にならない声を発する。彼女は嬉しくて嬉しくて、仕方がないのだ。
「今まで、俺たちを守ってくれてありがとう」
一の隣の空間が歪んでいく。
「これからは、俺も一緒に戦いたい。足手まといかもしれない。迷惑かもしれない。けど……」
『もう一度、呼んで』
声がする。
一は息を吸い、ゆっくりと告げた。
声がする。内からではない。外から、すぐ、隣から聞こえた。

宙に停滞していたビニール傘八本が一を取り囲む。彼を守るように、外へと向けて広がった。放たれた蛇は全て防がれ、地面に叩き落されて、消えていく。
「あら？」
「あら？」
雰囲気の変わった一を見て、ゴルゴンが小首を傾げていた。彼女らだけでなく、返り血に塗れた北も動きを止めている。
「坊主、まさか……」
「ああ……」
「ああ……」
「そこに、そこにいるのは」

「あの子が、ここに来ているのね」
ゴルゴンが北に背を向けて、一に向き直る。彼女らは忘我の表情でうわ言を呟いた。
「あの子がそこに」
「すぐ傍に」
「私たちの」
「手の届くところに」
一は何もない、誰もいない筈の隣を見遣り、腕を上げる。すると、浮いていた傘がひとりでに動き始めた。彼を守るべく、ゴルゴンの視界から阻むべく。
ステンノが駆け出して、手を伸ばした。その手が掴もうとしているのは一ではなく、アイギスでもない。そして彼女は何も掴めなかった。ぴたりと、不自然な体勢で動きを止めている。
「……あ、ああっ、やっ、ぱり、やっぱりぃ」
泣いていた。アイギスの壁に阻まれたステンノは幼子のように涙を流して、咽び泣いている。
「会いたかったんだ？」
一が優しげな声で問い掛けた。彼はステンノに尋ねたのではない。自らのパートナーに問うたのである。
「お願い、妹を、返して……？」
泣き笑いの表情でステンノが口を開いた。一は無言で首を振り、彼女を指差す。瞬間、全てのアイギスが光を放ち、ステンノを吹き飛ばした。
エウリュアレの傍まで飛ばされたステンノは立ち上がり、悪鬼をも震え上がらせるような形相で怒号を轟かせる。それでも一は動じない。彼の上げた腕を合図に傘が動いた。ゴルゴンたちを取り囲み、ゆらゆらと宙に留まり続ける。
何が行なわれようとしているのか、最初に気付いたのはステンノで、彼女の様子を見た北も直感した。彼はこの場から逃げ出そうとするステンノの前に回り込み、ハルペーを突き出す。

「へっへっ、あんたもおしまいだなあ」
「ここに残れば英雄さん、あなたも死ぬわ。いいえ、死ぬも同然かしら」
「俺はもう良いのさ、充分こっちで遊んだからなあ。だが、あんたをこっから逃がす訳にゃあいかねえぜ。なあ、坊主！」
一は苦虫を噛み潰すような表情で北を見る。今から自分がやろうとしているのはゴルゴンを止める、その一点に全てを注ぐ事だ。しかし、メドゥーサの力は強過ぎる。ましてや、一度目。その力を制御出来るとは思えない。
「北さんっ、そこから……！」
北は振り向かない。そこに残れば、ゴルゴン諸共石化すると言うのに。だが同時に、彼がステンノを引き付けておかなければ、全てが水泡に帰す。
「一、お前は……お前は何をしようと……！？」
店長が喚いていた。一は答えられない。これ以上意識を乱せば、集中を切らせば、どうなるか分からない。
眩い光がこの場に存在する全てのビニール傘――――アイギスから放たれる。不浄を焼き尽くす清浄な輝きを受けて、夜が切り裂かれていった。魔を払い、敵を退ける女神の力が膨張していく。
「そうだ、やれっ」
「ぐ、ぐううっ！　ペル、セウスぅぅ、またしても私たちをっ、私たちを引き裂くのぉぉ！」
北がステンノを押さえ付けている。が、事態を飲み込んだエウリュアレは一を睨み付けた。彼さえ倒せば何とかなると、足を踏み出す。
まずいと、店長は一に視線を向けた。しかし、彼にエウリュアレを止める術はない。シルフは動けず、北はステンノを押さえるのに必死である。襲われれば一巻の終わりだ。覚悟を決めろと、自身に言い聞かせる。
「……一、私が一秒ぐらいは持たせる」

一は目を見開くが、口は開けなかった。彼は泣きそうな顔で店長を見つめる。
「姉様、私がっ」
「おねが――――！」
ステンノの喉が掻き切られた。北は彼女を地面に叩きつけてエウリュアレを追う。
「あの子は返してもらうわ！」
アイギスを失った一の前に両手を広げた店長が立ちはだかる。彼女は決して目を閉じない。しっかりと、向かってくるソレを瞳に焼き付ける。
辛うじて動く部位を使って一は歯噛みした。準備さえ整えば、ゴルゴンが二体ともアイギスに囲まれていれば、すぐにでも力を解き放てる。しかし、今はどうする事も出来なかった。ここでどちらかを逃がすような半端な真似をすれば、もう二度と好機は訪れない。誰かを、自分を守る為に誰かを犠牲にしなければ――――。
「ご安心ください」
低い声が、何もない空間から響く。ばさりと、何かが翼を広げたような音がして、店長に腕を伸ばしていたエウリュアレが、見えない何かに押し潰されるようにして地面に沈んだ。
「あぁあっ、こっ、れは……」
「一さん、この好機を逃してはなりませんよ」
「ガ……ゴイ……」
倒れていたエウリュアレが体を起こされる。そして、アイギスの包囲している場所へと押し戻され始めた。彼女は必死に抵抗していたが、姿の見えない相手にはまともな反撃も難しい。
「でかしたぜガーゴイル。そんで、悪いな」
「いえ、お気になさらず」
北は、近くまで移動させられたエウリュアレの髪の毛を引っ掴み、ステンノの上に打ち捨てる。
「坊主……！」

やるなら今だ。力を使うのは今しかない。不死の怪物を打倒するのは、今をおいて他にない。しかし、それでは北とガーゴイルまで巻き込んでしまう。

「一さん、わたしたちは覚悟していましたっ、だから！」

力は今にも溢れ出しそうだった。一の意識を越え、彼の手を離れてしまう。

「皆死んじまっても良いってのか！　やれ、俺たちは人間じゃねえんだ！」

「信じて」

誰を？　そう問い掛ける前に、彼女は笑っていた。

「信じて」

何を？　喚きたくなる気持ちを押さえたのは、優しげに笑む彼女だ。

「信じて」と三度口を開く。一は頷き、彼女に手を差し伸べた。

アイギスに囲まれているゴルゴンを、北とガーゴイルが押さえていた。

彼らを囲むアイギスから放たれた輝きが徐々に弱くなっていく。白い光は辺りの闇に溶かされていき、やがて、掻き消えた。夜が強まり、闇が濃くなる。次の瞬間、アイギスの表面に何かが映り込んだ。

「これ、は……」

誰かが呟き、全員が気付いた。これは、目なのだと。何者かの瞳が、こちらを、こちら側の世界を覗き込むようにして映っている。その目はきっと人のものではない。その視線は人外だけが持ち得る重圧を放っている。

「あ……メ、ドゥ……」

喉に作られた傷口からは血が泡立ち、黒い血を吐きながらでステンノは弱々しい声を発した。懐かしいその目に、二度と会えないと思っていたから、彼女は再び涙を流す。

一は苦しそうに喘ぎ、地面に膝を着いた。それでも、ゴルゴンを睨み付ける。敵を、障害となるモノをしっかりと捉えていた。

信じてと、彼女は繰り返した。だから、信じようと思う。自分が信じなければ、誰が彼女を信じると言うのだと、一は内心で苦笑した。

「開け」

声は自然と零れてくる。彼の声に従い、アイギスに映っていた全ての目が見開いた。

何を言えば彼女に届くのか、何をすれば彼女が応えるのか。今の一には全て分かっている。明日には、目を瞑って次に開いた時には

忘れてしまうかもしれない。それでも、充分だった。
ぐるりと瞳が回転して、己が標的を見定める。主の敵を射竦める。
「ああ」
「ああ」
その視線を受けて、ゴルゴンは笑った。その笑みは、他者を甚振る嗜虐的なものではない。見る者を狂わせる蠱惑的なものでもない。
「せめて」
「せめて」
「あなただけは……」
「あなただけは……」
彼女たちの笑顔は、姉が妹に向ける、極々一般的な、朗らかなそれであった。

足元に転がったゴルゴンの石像を見遣って、北は息を吐いた。どうして自分はまだ生きていられるのか、その理由が分からなくて彼はその場に座り込み、ただ、笑う。気でも触れたのかと、自分でもそう思いつつ、それでも笑うのだ。英雄ですら倒せなかった怪物を一が終わらせた。それが嬉しかったのかもしれないし、悔しかったのかもしれない。
今は、そのどちらでも構わない。北はステンノの石像に腰掛けて、力の使い過ぎで失神した一へ視線を送る。本来なら有り得ない。この世ならざるモノを自らの意思で顕現させた。彼はメドゥーサを呼び出したせいで、精神力を使い果たしてしまったのだろう。
「ざまあみろ」
英雄であるのを拒否しながら、英雄以上の事をやってのけた。そんな人間がいる事に、北は嬉しくなっている。
強かった雨は弱まりつつあり、厚かった雲は少しずつ晴れていった。
「おいっ、起きろよニンゲン！」

気を失っている一の傍で、シルフが泣きそうな顔で喚いている。
その近くにはガーゴイルもおり、彼もまた、心配そうに一を見ていた。心配は要らないと声を掛けようとして、北はやっぱり、やめておいた。
「お疲れ様だな、英雄」
「……よう、嬢ちゃん」
店長は傘を北に差し出すような事はせず、冷たい目で彼を見下ろしている。
「嬢ちゃんではないし、生憎と、嬢ちゃんと言われて喜ぶような歳でもないんでな」
「そうかい。で、どうした嬢ちゃん。坊主んところに行かなくて良いのかよ？」
「私が行って一が目覚めるなら、少し迷ってやっても良かったが」
「ドライだねえ」と、北は喉の奥でくつくつと笑った。一頻り笑った後、彼は一に目を遣り、店長に意地悪そうな笑みを向ける。
「一晩ぐっすり眠れば、明日の昼には目が覚めてるだろうよ」
「分かるのか？」
「分かるのさ。ま、風邪ぐらいは引いてるかもしれないけどな」
「ほう、その程度でアレを呼び出せるのか」
店長は口の端をつり上げ、物言わぬ石となったエウリュアレの頭に、足を掛けた。
「しかし、こいつらは何だったんだ。不死、自らの特性に飽かせていたのかもしれんが、幾らなんでも緩過ぎる。その気になれば、この街の人間を皆殺しに出来ていただろうに」
「そりゃ、その気がなかったからに決まってるじゃねえか」
「力はある。しかし目的がないのにここへ来たと言うのか？」
「目的ならあったと思うぜ」
北はステンノから退き、体を伸ばす。関節の節々から音が鳴り、彼は困ったように苦笑した。
「妹に会いに来たんだろうよ」

「妹に……？　理由はあるのか？」
メドゥーサは、どう思っていたのだろう。
あの時、北は彼女と目が合った。メドゥーサは、確かに彼を見ていた。一度殺したモノを。自分を殺したモノを。復讐したかっただろう。
復讐、されたかったのかもしれない。だから、北は覚悟を決めたのである。ここでこの場で、石となるのを一度は選んだ。尤も、彼女は、彼女の主はそうならない事を望んだらしいが。同時に、ステンノとエウリュアレも自分を殺したかったのだと北は思う。
「身内に会うのに、理由ってのが必要なのかい」
人間にとっては害でしかない。益にはなる筈がない。しかし、それでも、ソレにも家族がいるのだ。
「さて、どうだろうな」
店長は、少しずつ顔を見せ始めた月を見上げて、煙草に火を点ける。全て見透かしたような彼女の目を見て、北は舌打ちした。

駒台からは遠く離れたどこかで、一羽の梟が鳴いていた。純白の羽をばさりと広げて、雨上がりの空を眺める。
「化けたみたいね」
梟の嘴から、女の声が聞こえた。
「化けた？」
「そう、化けたの」
傍らにいる童女に向かって、梟は微笑みかける。まるで聖母のような、女神のような、そんな慈愛をもって。
「私が力を貸してあげた勇者が、化けたのよ」
「ふうん」と、女の子は興味深そうに呟いた。
「あの怪物を従え、かの英雄を引き連れ、さも当然のように怪物を倒してしまった。……ニケ、ゴルゴンが何者だったのか知っているでしょう？」

ニケと呼ばれた女の子ははっきりと頷く。彼女は梟の羽に手を伸ばし、愛しげに指を這わせた。
「ゴルゴンは、円卓」
「そう。円卓の三席、ゴルゴン。彼女らが破れた事でバランスが崩れてしまうでしょうね」
「バランス？」
小首を傾げるニケを、梟はじっと見つめる。
「バランスが崩れれば、バランスを元に戻そうとして何かが動くの。誰かが、必ず。あるいは、そこに益を見出してバランスを保とうとする者も現れるでしょう。もっと、バランスを崩そうとする者も」
「つまり？」
梟は薄く笑み、羽を広げて低く空を飛んだ。
「もう、引き返せないって事よ」

守れただろうか。
守りたかったものを。守らなければならないものを。
ぐっと握り締めた拳も、強く閉じた瞼も、何もかもが曖昧で、ここに自分がいるのか、どこに自分が立っているのか分からない。
それでも、前に進むのだ。きっと睨み付けて、手繰り寄せて、時には無理矢理にでも押し倒す。覚悟がなければ、ここにはいられない。どこにも立っていられない。
目を開けば、そこは、見覚えのある場所だった。思い出すまでもない。何をしても、何をしたところでずっと消えない場所で、癒えない傷で、許してくれない景色だ。
どこに立っているのかが分かり、そして今、自分が生きている事に気付く。
「ありがとう」
だから、一はお礼を言った。
髪の長い女が一に背を向けている。彼女は顔を伏せたまま、こく

りと小さく頷いた。
「そんで、ごめんな。姉さんたちに会いたかったのに、その……」
殺した。殺せと命じた。一は頭に手を当てて、苦しそうに息を吐く。
「……ごめんって、謝るのはずるいよな」
誰かを守る為に、自分を守る為に、共に戦うと言っておきながら、実際に手を下したのは自分ではない。人に仇なすソレ。しかし、ソレにも守るべきがあった。会いたいと、そう願うモノがいた。それら全てを踏み躙ってここに立っている。
「あなたは」
だから、許してもらおうとは思っていない。彼女が望むのであれば、石になるのも構わない。
「私の主だから」
彼女が振り返り、柔らかな笑みを一に見せる。
「だから、命じて。名前を呼んで。それだけで、私は……」
その笑みを見た瞬間、一の体は、まるで石にでもなったかのように固まってしまった。

BOYS BE LOCKSMITH.（後書き）

最後だけ文字数が少ないのは仕様です。
相変わらず、各人の思惑だったり、どうしてこれが起こったのかという動機やら理由など、全部を書かないのも仕様です。なんて。

話が一区切りしたので、久しぶりに後書きです。次章から、と言うか今回の章からはお話が動きます。具体的に言えば、置き去りにしていたモノを回収にしにいきます。

ヤマタノオロチの辺りから、章ごとに統一してみようって思い立ってから早二年。今回のサブタイトルは、バレバレですかね。

ゴルゴンなんて割かしメジャーな怪物を題材にするのは難しいですね。手垢付いてるし。しかも有名どころが。な、訳で、次も同じギリシャ枠ですけれど、少しだけマイナー？どころなのが出てきます。予想が当たったら願い事一つだけ聞いちゃうよ！ただし「その願いは叶えられない、私の力を超えている」で誤魔化しちゃうかもよ。

ななクッキング

上がるのは産声。流れるのは神の血。生まれた理由なら、既にこの身に刻まれている。主を敵から守り抜く為に。それだけの為に、ここにいる。

他には何も考えない。考える頭がない。心がない。プログラミングされた行動だけを頼りに、それは動く。

「成功だな」

「ああ」と、白衣の男が答える。彼の目には深い隈が出来ており、髪の毛もぼさぼさであった。しかし、瞳だけは爛々とした光を宿している。体の内から沸き上がる歓喜を堪えきれないのか、口元は歪んでいた。

「これで完成したのは二体目になるな。老人を黙らせるには充分だろう」

「さて、あの人は研究室にこもりきりだ。何を作ろうとしているか見当もつかんよ。……また、妙なベッドを作っているんじゃあないか？」

くつくつと、もう一人の男も笑う。二人ともが似たような顔をしており、ぎらついた光を瞳に宿していた。

薄暗い室内には電源の点いた大型のコンピュータが数台。どこに繋がっているか分からないほどに長く、絡まり合ったケーブルが床、壁を問わず所々に根を張っている。

「ああ、乗った瞬間に拘束されるって言うあのベッドか。全く、予算を無駄に遣う事に掛けては、うちの部署は天下一品だな」

「違いない。しかし、汚名を着せられるのも今日までだ。試作七号機が成果を上げている中、こいつのお陰で、また彼女を援護出来る」

「実験は今のところオールクリアだ。何一つ問題ない。くっくっ、

七号様様じゃないか」
「起動実験は明日に回すとして」
男は様々な器具が並んだ棚から、缶のビールを二つ手に取った。
「今は、俺たちの娘に乾杯だ」
「……いまひとつしまらないがな」
缶の中身を呷る二人は気付いていない。自分たちが丹精を込めて作り上げ、祈りをもって生み出したモノが人々に仇なす事を。そして、起動していない筈のそれの目に見つめられている事を。

ゴルゴンが駒台から、この世から消えた翌日。時刻は午後の十二時を回った頃、一は自室で目を覚ました。
「……う」
体を起こそうとして、断念する。頭が重く、体の節々が痛い。極め付けに熱っぽい。早い話が、一は風邪を引いているのであった。彼は昨夜の行為を思い出して、当然と言えば当然かと自身に言い聞かせる。
湿った布団から這い出して、こたつの電源を入れた。何もしたくなくて、一はこたつに足を突っ込み、畳に顔をくっつける。
昨夜に起きた事はあまり覚えていなかった。ゴルゴンと戦い、メドゥーサが答えた。力が発動してソレは石に成り果てる。北とガーゴイルを巻き込まなかったところまでは辛うじて記憶に残っていた。そこから、今目覚めたところまでの記憶が抜け落ちている。
「……あ、いや……」
推察するに、どうやら自分は気を失っていたのだろう。記憶が抜け落ちたのではなく、そもそも何も記憶していなかったのだ。そう気付いた一は、今になって、今更になって安堵の息を吐く。
あの後、一体何が起こったのだろう。何も起こらないで、誰も酷い目に遭わないで済んだのだろうか。
そんな事を考えていると、ドアをノックする音が聞こえた。一が

答える前に、ドアノブがえげつない勢いで回され、ドアが開け放たれる。
「おっはよう！　今日はええ天気やで、師匠、ほらほら、カタツムリみたいにひきこもっとらんと外に出た方がええで」
部屋に入ってきたのは階下の住人、歌代チアキである。彼女はジャケットを脱ぎ捨てて、一を指差して笑った。
「あー、やっぱ風邪引いとる。あはは、弱ってる師匠やー」
「……てめえ、病人見て笑うか普通」
チアキは一の顔の近くに座り込み、卓の上に置いてあったみかんに手を伸ばす。
「元気そうやから、ま、大丈夫やろ。少しは心配してたけど、その分ならまだまだ死なへんやろなあ」
「……死んで欲しいのかよ」
「やーん、冗談に決まってるやんか。ほい師匠、口開けて」
一は言われるがままに口を開けた。弱っているせいか、今なら何でも聞き入れてしまいそうで恐い。
チアキは一の口にみかんを一房入れる。彼はもごもごと口を動かして、目を瞑った。
「皮、剥かなくて良かったのに」
「へ？　師匠、これこのまま食べんの？」
「違う。ほら、その白い皮だよ」
「こんなんどっちでもええやんか。取らんかったら、何や気色悪いし」
言って、チアキは残りのみかんを自分の口に押し込む。一はそれを見て低く呻いた。
「俺にももう少しくれよ。……つーか俺んちのじゃねえか」
「んー」と、チアキは一に唇を近付けていく。彼は寝たままの体勢で容赦なく彼女の頬を叩いた。小気味よい音が部屋に響く。
「んんんん！？」
チアキは立ち上がって流し台に顔を向けた。吐き出すか吐き出さ

ないか迷って、プライドを選んだ。彼女は目の端に涙を浮かべて口内に入っていたものを飲み下す。
「なっ、なっ……何すんねん！　ドアホ！　アホ！　師匠のアホ！　アホの師匠！」
「お前が変な事するからだろ」
「はああ？　変な事ちゃうやろ、ご褒美やん、ご褒美」
一は眉根を寄せた。不愉快だと、そう言わんばかりの雰囲気を漲らせている。
「ご褒美、だあ？」
「せや、北のおっちゃんから聞いたで。師匠、なんや、ごっつカッコ良かったらしいやん。やから、ご褒美あげよ思てな」
「罰ゲームの間違いだろ」
「死んでしまえばええんや」
「みかん食わせてくれたら死んでも良い」
チアキは一の額を叩き、先ほどと同じ位置に腰を下ろした。
「ほい、口開けて」
「丸ごと入れようとするのは良いけど、せめて皮は剥いてくれ」
「なー、ししょー」
「語尾は伸ばすな。で、何だよ？」
「……んー、やっぱええわ」と、チアキは笑って誤魔化す。
「ふうん？　あ、そうだ。昨日の事さ、何か聞いてないか？」
「あんまし聞いとらん。北さんも、朝はように出掛けてもうたしな」
一はみかんを頬張りながら、北について考えた。ギリシャ神話の英雄について思いを馳せる。
「ゴルフバッグを二つも抱えて、こそこそっと。別に、気にする奴なんかおれへんのになあ」
ゴルフバッグを、二つ。その中には恐らく、ドライバーやサンドウェッジは入っていない。中身について察しの付いた一だが、北が石化したゴルゴンをどこに持っていくのかまでは分からなかった。
「あ、つーか歌代さ、お前何しに来たの？」

「見舞いに決まってるやんか。師匠の部屋なんかな、よっぽどな理由がないと行かへんし」
「じゃあもう帰れよ」
「帰ってええの？」
「もう少しだけ……」と、一は情けない声を漏らす。
「くふふ、しゃあないなあ。けど、ウチもそろそろ行かなアカンねん」
「牛乳切れ掛かってたから買っといてくれ」
「買い物ちゃうわ。アイネが退院するから、迎えに行くの」
それは実に喜ばしい。が、一は置いていかれる事に対して不安になった。
「……俺の世話は誰がするんだよ」
チアキは何も言わずに微笑を浮かべる。彼女は立ち上がってジャケットを羽織ると、
「帰ってきたら相手したるわ。それまでは大人しくええ子にしときや、師匠」
愉しげに笑い、一の部屋を後にした。

オンリーワン北駒台店、この店のバックルームには、技術部から戻ってきたナナと、不味そうに煙草を吹かす店長がいた。
「では、本日より通常業務、及び勤務外に復帰します」
ヴィクトリアンスタイルのメイド服に身を包んだ自動人形が、綺麗な角度で頭を下げる。
「ああ、よろしく頼む。何せ、今この店にはお前しかいないんだからな」
顔を上げたナナは小首を傾げた。
「二ノ美屋店長もいらっしゃいますが」
「私は働かないからな。労働力はナナ、お前しかいない」
「はあ……」

ナナは壁に貼り付けられた手書きのシフト表を見遣る。このシフト表は一が作ったものだが、まともに機能していた時期がない。勝手にシフトを書き換えられ、誰も予定通りに動かなかったのである。ただ、一とナナだけがシフト表通りに動いていた。

「一さんが正午から来ている筈ですけれど」

「ああ、そうか。まだ伝えていなかったな。あいつは休みだ」

「お風邪でも召されたのでしょうか」

「上半身裸で雨に打たれていれば、誰だって風邪を引く」

店長は忌々しげに呟く。短くなった煙草を灰皿に押し付けて、椅子に座ったまま体を伸ばした。

「知りませんでした。一さんは心の病に罹っておられたのですね」

「……奴をフォローするつもりはないが、昨日、ソレが出た。一はソレと戦っていただけだ」

「何と、そうでしたか。上半身裸になるほどまでに追い詰められたのですか。申し訳ございません、調整さえ終わっていれば助けに馳せ参じたものを……」

「いや、裸になったのは一の趣味だ。ソレは……大した怪物でもなかったからな。あいつが倒せる程度のソレなんて知れている。だろう？」

これ以上助け舟を出す気がなかったので、店長は適当に笑っておいた。

「趣味、でしたか」と、ナナは眼鏡の位置を指で押し上げる。

「人間とは難しいものですね」

「度し難いだけだ。……ああ、そうだ。ナナ、納品が終わって暇になったら、一の様子を見に行ってはくれないか？」

「畏まりました。しかし、様子を見に行くだけでよろしいのですか？」

「いや、そこはＴＰＯに合わせてだな……」

言い掛けた店長だが、ナナに期待するのは間違いだと気付いた。彼女はソレとの戦闘や勤務外業務においてならば殆ど問題がない。

北駒台店でも屈指のスペシャリストなのである。が、それ以外の事に関しては問題点しか見当たらない。
「……メモを書いておく。それを持っていって対応してくれ」
「承りました」
ナナは頷き、ダスタークロスを持ってフロアに出て行った。

「あ、お忙しいところすいません、一と申しますけれど、あの、九十九先生はいらっしゃいますか？」
『……』
「……あの？」
チアキが出て行った後、一は体を休めなくてはとも思ったのだが、今しがた起きたばかりではどうにも眠れない。暇潰し、ではないのだが、昨日の顛末について九十九に説明しようと思い立った。以前、九十九からもらった図書館の電話番号に掛けてみたのだが、
「あのー」
電話に出た何者かは何も答えない。掛け間違えたのかと不安になっていた時、
『……先に言うべき事があると思うんですけど』
やけに不機嫌な声が一の耳に届く。その声は九十九のものではない。つくも図書館の司書、公口由梨のものであった。
「おはよう、ございます？」
『違うでしょう！』
きいんと、鼓膜が震えて耳が痛くなる。
「え、えっと……？」
『昨日、あの後！　何があったんですか！　一君は無事なんですか！？』
「ぶ、無事、です。あ、はは、今は風邪引いて寝てますけど」
『ああ、だから声が。でもそれぐらいなら良かったですね』
全然良くねえよと、一は内心で呟いた。

『確かに、先に館長に説明しなきゃって、そう思う気持ちは分かります。でも、私だって巻き込まれていたんですし、君の事を心配だってしていたんですよ？　何も蔑ろにしなくたって良いじゃないですか』

「いや、そういうつもりは……」

『なかったと言い切れますか？　館長と私、同じ説明するのは二度手間だなあ、って、一度でも思いませんでしたか？』

「思いました」

『オブラートに！』

ペースを握られてしまっている。ナコトを思い出させる公口のゴリ押しに一は戦慄した。

『それで、何があったんですか？』

「えーっと、それは、ですね」

何を言えと、どう説明しろと言うのだろう。一は軽いパニックを起こしていた。

「だ、大団円です。大団円でした」

『はあ、もう結構です。説明する気はないんですね。一君ってそんな人だったんだ、不誠実』

「……話せるような事を覚えていないんですよ。ただ、誰も怪我をしていないですし、襲ってきたソレについては心配いりません。だから、その」

長い沈黙の後、電話口から短い溜め息が聞こえてくる。

『一君が無事なら、それで良いです』

「公口さんやばいですよ、今凄くヒロインっぽいです」

『私もそんな気がしていました。けど、その役目はナコトちゃんに譲りましょう』

「ええ、あんなのに譲らないでくださいよ」

『風邪が治ったら、ナコトちゃんのお見舞いに行ってあげてくださいね。あの子、寂しがり屋さんだから』

一にはそうは思えない。が、病院にはナコトだけでなく他のメン

バーもいるのだ。苦しい戦いを生き抜いたのを自慢するのも悪くない。皆に会うのも悪くはない。そう思い、彼の頬は僅かに緩んだ。
『お返事は？』
「行ったら行ったですげえ暴言吐かれると思うんですけど」
『それはナコトちゃんの照れ隠しです』
「本当ですか？」
返事はなかった。
『さて、この時期は忙しくなりますから。そろそろ電話切りますね』
「へー知らなかった。図書館も忙しくなる時期ってあったんですね。で、先生はいないんですか？」
『館長は大学で講義を……って、一君はどうせ館長のいない時間を狙っていたんでしょう？』
「はてさて、何の事だかさっぱり」
『ナコトちゃんがこないだ口を滑らしていましたよ。トリプルアクセルを決めそうな勢いで』
「満面の笑みで告げ口していた訳ですね」
ナコトを絶対に許さない。そして一は当分の間、ゼミに顔を出すのは止めようと誓っておく。
「やっぱり見舞いに行くのは考えさせてもらいます」
『館長に言い付けますよ』
「黄衣もそうですけど、切り札的な感じで先生を持ち出すのはどうかと思いますよ。第一、俺はそこまで先生に脅威を感じていませんからね」
『では、言い付けておいても？』
「いや、それとこれとは話が別で……お見舞いの件は前向きに善処します」
『政治家的な。いけません、男の子ならイエスかノーか半分かで答えないと』
「子供って変なところで小賢しいですよね」
ごほんと、わざとらしい咳払いが聞こえた。

『ああ、いけない。暇だったからついつい口が軽くなってしまいます』
「……忙しいって言ってませんでしたっけ？」
『え、言ってませんよ。それより、そろそろ飽きて……忙しいので失礼しますね。館長にも、色々と伝えておきますので安心してください』
「あ、ちょ……！」
一にとっては全然安心出来ない言葉を吐いた後、公口は電話を切ってしまう。
「俺、どうして電話なんかしたんだろ」

時刻は、午後の一時前。一は時計を見て、腹を摩った。みかんだけでは満たされない空腹感が喉元まで押し寄せていたのである。何か食べたい。しっかりしたものが食べたい。けれど動きたくない。わがままな欲求だけが悶々と彼の内を駆け巡っている。いやそもそも欲求とはわがままなものではなかろうか、なんて事を考えながら一は枕に顔を埋めた。
「歌代帰ってこねえかなー」
しかしチアキが帰ってくると言う事は、同時にアイネも帰ってくると言う事である。つまり、面倒。満腹感と更なる心労、疲労を手に入れるのか、それともこのまま空腹を覚え続けるのか。
「究極の選択だ……」
更に言えば、一に選択肢はない。自分から動かない限り、ただ、ここで誰かが来るのを待つだけなのである。
「腹減ったなあ」
「肉食いてえなあ、柔らかいの」
「頭いてえなあ」
「働かなくても金が欲しいなあ」
「学校に行かなくても単位が欲しいなあ」

「雨の日は学校行かなくても良いって法律出来ないかなあ」
「留年したらやばいよなあ」
「こんな事してたら駄目だよなあ」
独り言が増えてきた一は布団の上を転がり、天井を見上げた。
「……いーち、にい、さん、よん、ごー、ろく……」
天井の染みを数えながら、自分は何をやっているんだろうとは思わない。思考能力が低下しているのである。
「なな、はち、きゅー……」
と、誰かがアパートの階段を上る音が聞こえてきた。やる事のない一は耳を済ませて、その足音がどこで止まるのかを確認する。
「……？」
足音は、ここで止まった。一の部屋の前に、何者かが立っている。彼は頭を上げて、訝しげな視線をそこに送った。瞬間、ドアがけたたましい音を立ててノックされる。
「……乱暴な奴だな」
無用心かもしれないが、鍵なら開けていた。
「はい、今開けますよ」
だるそうに起き上がり、一は頭を掻きながらドアを開ける。
「お」と、一は思わず声を漏らした。珍しい来客者に、暫くの間目が点になる。
「おはようございます」
そう言ってお辞儀をするのは、北駒台店の勤務外、一の同僚のナナだった。

割と元気そうだ。少なくとも、起き上がれるくらいには体調が回復しているらしい。一の様子を見て、そう判断したナナはポケットからメモ用紙を取り出した。
「えっと、どうしたんだ？　何か、用？」
メモ用紙には店長の手書きの字が所狭しと並んでいる。ナナに与

えられた指示はフローチャート式になっていた。
「一さん、元気ですか？」
「……はっ？　いや、まあ、風邪引いてんだけど……」
「では、元気ではないのですか？」
「少しくらいは元気だけどさ。いや、ナナ？　あの、何しに来たんだよ」
割と元気から少し元気に情報を修正して、メモを見直す。
「一さん」
「ん？」
「働いてください」
「……ん？」
一の顔がひきつった。
「ですから、働いてください」
「俺、風邪引いてるんだけど」
「元気ではないのですか？」
「働けるほど元気じゃあないんだよ」
ナナは再びメモに目を落とした。
「なあ、ナナ、その紙は？」
誤差を加えて情報を更に修正。
「では休んでいてください」
「最初からそのつもりだったんですけど……」
「さ、早く横になってください」
言われるがまま、一はこたつに入って横になる。
「いけません一さん、そんなところでお休みになると風邪を引いてしまいますよ」
「もう引いてるよ。……何か、やっぱり変じゃないか？」
「何が、でしょう？」
一はこたつから這い出ると、ナナを指差した。
「私は正常です。メンテナンスも済んでいますし、パーツにだって不備はありません」

「第一、何しに来たんだ？」
「二ノ美屋店長から、一さんの様子を見に行くようにと命令を承りましたので。ナナは現在任務遂行中なのです」
「ああ、見舞いに来てくれた訳ね。俺は大丈夫だから帰って良いよ」
「しかし、私はまだ何も……」
「何かやる前に帰って欲しいんだけど」
ナナは探るような目付きで一を見つめる。
「一さんは私に期待していないご様子。良いでしょう、少々お待ちいただけますか」
一の返答は待たずに、ナナはメモに目を通した。彼を見舞うと言うのなら、彼に尽くさなければなるまい。根幹に埋め込まれたプログラムに後押しされ、彼女は一つの結論に辿り着く。
「お粥を作ります」
ナナは握り拳を作って宣言した。
「……お粥ぅ？」
「別のものが召し上がりたいのでしたらリクエストを承りますが」
「じゃなくて、作れるのかなあって」
「失敬な」と、ナナはフルリムの眼鏡のつるに指を添える。
「私は完全に、完璧に、完膚なきまでにメイドなのです。主人が望むならこの場で生きた牛を捌き、こんがりと焼いて差し上げる事も厭わないでしょう」
「それ料理なの？　……まあ、とにかく、いや信用してない訳じゃあないけどさ、遠慮しとくよ」
「……そうですか」と、ナナは悲しそうに俯いた。
「差し出がましい真似をして申し訳ございません、マスター」
頭を下げ、ナナは一をじっと見つめる。その瞳はまるで、許しを乞うかのように媚びた色を秘めていた。
「……え、何だって？」
「申し訳ございません、マスター」
「マスター……」

一は目を泳がせて、それを隠す為に両手で顔を覆った。
「いかがなさいました、マスター」
「マスターって、俺が……？」
「仕えるべき主人なれば、そうお呼びするのは当然かと」
「ナナ、もっぺん言って」
ナナは立ち上がり、スカートの裾を摘みながらお辞儀する。
「失礼いたしました。マスターにお許しをいただけるまで、私は頭を下げ続ける次第です。どうかお許しを、マスター」
一は布団の上を転がり、全身で喜びを噛み締める。生まれてきて良かったと、この日の為に自分は生まれてきたのだと思ったり。
「最初から怒ってなんかなかったけど、もう何もかも許そうじゃないか」
「感謝の極み。ではマスター、改めてお尋ねします。マスターは何を召し上がりたいのでしょうか」
問われて一は唸った。彼は冷蔵庫を一瞥して溜め息を吐く。
「……お粥が食べたい」
「かしこまりました。あの、何を使っても構いませんか？」
「ああ、何をと言うほどウチにはものがないけどね。うん、好きに使ってくれて構わないよ」
「では、調理に取り掛かります」
ナナは眼鏡の位置を押し上げて冷蔵庫の戸を開けた。彼女は中身を見て、暫らくの間は何も言わなかった。言えなかったのである。
「……お買物に出掛けた方がよろしいかと思いますが」
「良いよ勿体ない。あるものを適当にぶち込んでくれれば」
「しかし、それでは栄養に不足が生じますね。体調を崩しておられるのですから、せめて野菜があれば」
「野菜、嫌いなんだ」
「好き嫌いは万病の元ですよ」
「嫌いなものを食うぐらいなら病気になったって良いよ」
一はへらへらと笑い、寝返りを打つ。

「……マスターの意向に沿うのがメイドの役目とは言え、マスターの体に悪影響を及ぼすような命に唯々諾々と従うのは……」
「えー？　俺のメイドさんなら俺の嫌がるような事はしないと思うけどなー」
さりげなく俺のと言っておくあたり、一は今の状況が楽しくて仕方ないのだろう。
「マスター、それは大いなる偏見と言うものです。メイドとは……あ、いえ、何でもありません」
「そう？」
「ええ、そうです。さ、マスターは休んでいてください」
「ありがと、そうさせてもらうよ」
食材を並べながら、ナナは目を瞑った。少し、体が重いような気がしている。
今、自分は何を言おうとしていたのか。何を伝えようとしていたのか。
――――人形。
誰かに、そう言われたのを思い出す。
そう、出来ている。自分は自動人形。メイドだろうが勤務外だろうが、人間ではない。人間にはなれない。人形として紛い物の生を受けたのだから、諦める事を選ぶのすらおこがましい。
人形とは違う。ナナは、一にそう言おうとしていた。メイドたる自分には人形と違って意思がある。愚かにも、そんな言葉を紡ごうとしていた。
「……いけませんね」
人間よりも人間らしく。だが、どこまでいっても最終的には、いつまで経っても究極的には人形なのだ。意思があろうとなかろうと、自動で動こうが、動かなくても、結局は――――。
「えっ、何か失敗したのか？」
「とんでもない。私のデータベースには失敗の二文字、ひらがなにすれば四文字の言葉など登録されておりません。マスターはどうぞ

舌鼓を打つ心構えを用意しておいてください」
「あ、そう？」
「そうです」とナナは頷いた。誤魔化し方も、自分にはプログラムされている。頭が回り口からするりと出ていく台詞に、彼女は嫌悪感を抱いた。何もかもが誰かに作られ、自分の意思はここにない。己の内で生まれたものは一つとして存在しない。
「『お粥を作る』後は、ええと……」
店長から渡されたメモ用紙。これがなければ何も出来ない。普通の人間なら、誰かに指示されなくても思った通りに動ける筈だ。人間なら、誰かの指示には従わない。自らの考えを持ち、信念を背負い、心を握り締めている。
「……ああ」
羨ましいと恨んだのはいつからだろう。人形である自分に疑問を抱いたのは何故だろう。人間になりたいと、そう望んだのは誰のせいだろう。
「ん、どうしたんだ？」
「……いいえ、何もありません」
更新されていく情報が憎い。いっそ、何も知らなければ良かった。何も見なければ、聞かなければ済んだ。思う機能をどうして搭載したのだろうと、ナナは初めて技術部の人間を――――。
「……ナナ？」
――――人間を恨んだ。

「ご満足いただけましたか？」
「ああ、正直驚いたよ」
空になった椀を眺め、一は注がれたお茶をゆっくりと飲み干した。
「料理、出来たんだね」
「失敬な」と、ナナは拗ねたように一を見遣る。
「私は言わばメイドの中のメイドなのです。メイドオブオールワークオブメイドオブオールワークなのです」
「……メイドオブオールワーク？」
「家中の全ての仕事をこなすエキスパートです」
メイドも奥が深いんだなと思いつつ、一は腹を摩った。彼はまだ口寂しかったのだが、わがままを言うのはどうかと判断したので黙っておく事にする。
「ところで一さ……マスター」
「あ、はは、呼びやすい方で良いよ」
と言うより、ナナが突然、自分をマスターと呼んだのか一には分かっていない。
「では、一さん」
「うん」少し残念だった。
「二ノ美屋店長にははぐらかされてしまったのですが、本当の事を教えていただきたいのです。昨日出現したソレの正体とは、一体何でしたのでしょう」
一は少しだけ目を細める。店長がはぐらかすような事を自分が教えても良いのかどうか迷ったのだ。
「ゴルゴンだよ」
しかし、店長の意を汲むつもりはない。一は口の端をつり上げて、何でもない風に口を開く。

「ゴルゴン……？　あの、ギリシャ神話の、ですか？」
「そ。蛇のアレね。ナナも知ってたのか？」
「私のデータベースにはソレのデータが詰まっているのです。いえ、データベースを参照しなくてもゴルゴンなんて有名な怪物を知らない方がどうかと……それよりも、本当ですか？」
「何が？」
「一さんがゴルゴンを倒したのが、です。正直な話、俄かには信じられないと言うのが本心です」
「自分でも信じられないけどさ、これが本当なんだよね」
　ナナは疑り深く一の全身を見回した。彼は居心地悪そうに視線を逸らす。
「どのようにソレを倒したのか、詳しくお聞かせ願えますか？」
「えー、もうそういう話は良いじゃんか。勘弁してくれ」
「これも次の戦闘に活かす為、明日を生きる為なのだと思って、どうかお願いします。……マスター」
「ナナ、ジャンケンって知ってるだろ？」
　小手先、口先の技だが一は易々と、嬉々として引っ掛かる。
「はい、勿論です。グーで殴ってチョキで目潰し、パーで平手打ちを繰り出す変幻自在の拳法ですね」
「……まあ、通じるか。とにかく、俺とゴルゴンとの戦闘はジャンケンみたいなものだったんだよ」
　ナナは小首を傾げた。
「と、言いますと？」
「俺がグーでゴルゴンがチョキだっただけだよ。ただ、運が悪かったんだ。俺は他の奴と当たったらパーを出されて死んでたし、ゴルゴンも俺以外の相手なら負ける事はなかった。相性が良かったんだと思う」
「少し分かりにくい例えですが、なるほど、納得しました。しかし相性や運で片付けるのはどうかと思いますよ」
　ナナはチョキの形を作って一に見せ付けた。

「私のチョキは石をも砕きますからね。相性が悪くても、他者を圧倒するパワーを有してさえいれば、打倒するのも難しくはないでしょう」

「……ああ、そうだな」

一の脳裏を過るのはあの日、暴君とでも呼ぶべき力の権化に蹂躙されたあの時。まだ、あの絶望は網膜に、鮮明に焼き付いている。

「ま、勝ちは勝ちだよ。風邪を引いちまったけど、俺はこうして生きてんだからさ」

「仰る通りです。……では、私はそろそろ戻るとしましょう」

ナナは食器を持って立ち上がる。

「え、もう帰っちゃうのか？」

「二ノ美屋店長の指示とは言え、これでも勤務中ですので」

「……ああ、そうだったのか。それは、ごめん。悪い事しちゃったな」

「とんでもない」と、ナナは流しに食器を置き、水を張った。

「オートマータの意義は人に使われる事、メイドの意味は人に仕える事ですから。一さんは気にせず、せめて今日ぐらいはゆっくりしていらしてください」

「ナ……いや、うん、ありがとう」

一は力なく微笑み、布団の上に戻る。ナナは頭を下げると、振り返らずに部屋を出ていった。

走る、走る。

息はすぐに切れてしまった。顎を上げると、伸びた舌が湿っぽい空気を舐めとった。

「急げ、総員第一種戦闘配備だ！」

「いっ、言いたいだけでしょう……！」

オンリーワン近畿支部技術部に、かつてない危機が襲い掛かろうとしていた。

否、既に、そこにいる。
「被害はどう、なってるん、ですか？」
地上へと続くエレベータ。そこに続く薄暗く、長い廊下を白衣を着た男たちが走り抜けていく。
「社員が一人骨を折られたらしい！」
「一般には？」
「一般の被害はゼロだ！」
「ならばよし！」

支部のロビーは閑散としており、そこには技術部の者が息を潜めて集まっている。
「遅いぞ」と、背の高い男が遅れてきた者たちを一瞥した。
「済まない。状況は？」
「負傷した社員が泣きながら医療部に運ばれていったよ。それ以外には何も変わっていない」
「タロウは？」
「素晴らしいね、プログラム通りに動いているよ。僕たちの命令を無視するってところ以外はね。涙が出そうだ」
「ん、おいっ、戦闘部は誰も出ていないじゃないか」
一人の男が外を指差す。彼だけでなく、ここにいる者の殆どが焦りを覚えていた。
「相変わらず別件に駆り出されてるよ。昨日出たソレに関しての事後処理にも追われているってさ」
「飛び回るのは良いが、留守を狙われてちゃ話にならないね。ここを落とされたら終わりだって分かってるのか？」
「頭使えないから体張っているんだろ。それより、今、どうするか、だ。上に話を通してるのか？」
「いや、情報部は勝手に動いてるだろうし、医療部は非戦闘員を安全な場所に逃がしたらしいけど」

「僕たちだって戦闘員じゃないぞ！？　加治さんは何をやってるんだっ」
　男は床に拳を叩きつけようとして、やはり止めた。喚き、苛立ちを声に出すに留める。
「戦闘部もいない。上に話が通らない。どうするんだよ、かなりやばいんじゃないのか？」
「……まあ、確かに。今、俺たちは相当やばい状況に立たされていると思って間違いない」
「どういう事だ？　ここから顔を出さなきゃ襲われる心配だってないだろう」
「まだ気付いてないのか君は。命なんかどうでも良いよ。問題は、誰が責任を取るかってところだ。タロウを作ったのは他でもない僕たち技術部なんだから」
「……やばいじゃないか」
「やばいんだよ！」
　技術部の者たちは輪になって頭を抱えた。
「やはり、壊すしか……？」
「……誰がやるんだ？　アレは僕たちが心血注いだ今までで最高の発明品じゃないか。戦闘部にもタロウを壊せる奴なんて、いや、戦える奴なんていやしない」
「全く、厄介なモノを作ってくれたよ」
「右手作ったのはお前だろっ、さりげなく責任逃れするんじゃない！」
「しかし、壊すにはあまりに惜しい出来栄えだぞ。もう一度手直しして調整を加えれば、強力な味方になる」
「その力で僕たち大ピンチな訳だけど」
「じゃあ壊せば良いじゃないか！　勝手にしろよもう！」
「ああ、また楢崎が壊れた」
「ハートが弱いんだよな。これだから公立出の奴は駄目なんだよ」
　楢崎と呼ばれ蔑まれた男は白衣が汚れるのも構わずに床に大の字

になって暴れ回った。
「僕たちだけじゃどうしようもない。タロウを壊すのも、止めるのも」
「……勤務外。北駒台に頼るしかないか」
「しかし、あそこは今まともに機能していないと聞いたぞ。……あ、いや、待てよ」
「そうだ、忘れてた。今朝送り出したばかりだったが……」
「もはやそれしかないだろう。試作七号機、僕たちの可愛い娘を呼び戻すぞ」

褒めて欲しい。声を掛けて欲しい。主人を呼ぼうと口を開いても、そこからは歪な音が漏れるだけ。
どうして、どうして僕は。
「……あ、お、おぉ……」
足りないのだ。まだ、主人が満たされるような事を成し遂げていない。まだ、侵入者をたった一人撃退したに過ぎない。
ならば、もっと。もっとだ。敵を倒さなければ。殺さなければ。

嫌な予感は当たるものだ。
店に掛かってくる電話の内容は大きく三つに分けられる。一つは一般からのクレーム。一つはアルバイトからシフトについて。もう一つは、情報部から掛かってくるソレ出現の一報である。店長は長い経験から、今掛かっている電話が最後の三つ目、情報部のものからだと感付いた。
電話は切れない。早く出ろ受話器を取れと急かしている。店長は煙草を銜えながらで受話器を取った。
『ソレが出ました。場所は……』
「またか」

自分が誰かも名乗らずに用件を切り出してくる。心当たりは一人、一つしかない。
『正確には、ソレではないのかもしれませんが』
「何だ、それは？」
『非常に腹立たしい事なのですが、現れたモノというのは技術部の発明品でして』
「……これだから前線に出てこない奴は嫌いなんだ。こそこそと、くだらん事に取り組みやがる」
『自虐ですか。それとも我々への嫌味ですか』
「どっちもだ」と言い掛けて、店長ははたと気付く。
「随分と余裕があるように感じるが」
『ああ、実はルールさえ守れば襲われない事に気付きまして。どうもそいつは侵入者を撃退する為に作られた門番、見張りのような役目を与えられたモノとして作られたらしく。基本的には支部の回りをうろうろしているだけなんですよ』
「支部？　支部にソレがいるのか？　いや、そうか。最初からそこにいたと言うべき、か」
『残念ながら』と、無機質な声が返ってきた。
「……なるほど。門番なら、支部から出なければ襲われないか」
『外から来るモノには容赦ないですけどね。社員が一人やられましたし。周囲に誰も近付けさせないよう警戒していますが、安全な距離ってのがイマイチ分かっていません。どこまで動くのか、それは奴の視認可能な範囲なのか、見たモノをどこまでも追い掛けるのか、自分に、あるいは支部に近付いたモノに襲い掛かるのか。何一つ』
「ソレから離れていれば問題ないだろう。遠距離からしこたま撃ち込んでやれば良い」
『駄目ですね。装甲が厚過ぎるんです。その辺の銃火器じゃびくともしません』
「では動かなくなるのを待つか。言ってみれば、そいつも自動人形に近いモノの筈だ。永久機関なんて笑い話が実現していない以上、

いつかは止まる。だろう？」
『……では百六十八時間ほど待ちますか？　どうやら、そいつは試作七号機とは違って単純な事しか出来ないらしいんですけれど……』
　店長は短くなった煙草を恨めしそうに見つめ、灰皿で火種を揉み消した。
「その分バッテリーは持つ、か。……もう一週間待った方が良いような気がしてきたな」
『ただでさえまともに機能していない支部を潰すつもりですか。技術部が作ったモノだとして、彼らの命令に背くのであればソレと変わりありません。さあ、二ノ美屋店長』
「待て。ナナを行かせるのは良いとして、勝算はあるのか？　彼女が倒れれば、うちから勤務外がいなくなる」
『問題ないでしょう。アレは人間ではなく人形なのですから。壊れたって修理すれば良い。第一、もう技術部とは話が付いているんですよ。あなたは横合いから口を出せる立場じゃあないんです。それとも、まさか、支部の人間に逆らうつもりでも？』
「は、まさか」
　二本目の煙草に火を点けたところで、バックルームの扉が開いたのを横目で確認する。
『どうしました？』
「ナナが戻ってきた。どうする、直接伝えるか？」
『それこそまさか、ですよ。人形とお喋りなんて、想像するだけでおぞましい。では、よろしくお願いしますよ』
　通話が終わり、店長はゆっくりと息を吐き出した。
「お疲れのようですね。肩でもお揉みしましょうか？」
「有難いが、またの機会に頼む。それよりも、済まないが仕事だ。お前には支部に行ってもらう」
「支部、ですか。……支部にソレが出たのですか？」
「詳しい話は向こうで頼む。技術部がお前を待っているそうだ。ああ、裏口から入るようにとの事らしい」

「畏まりました。それでは行って参ります」
ナナはお辞儀をして、バックルームを出て行こうとする。
「ああ、そうだ。一はどうだった？」
「ここに来られるほど元気ではないご様子でした」
「……そうか、では連れてきてくれ。私が電話をしても逃げられてしまうだろうからな。ナナ、お前が直接伝えてくれ」
「あの、ですから……」
振り向いたナナは店長の視線に射竦められてしまった。
「お前がいなくなると、レジを打つ奴がいなくなるからな。体調が万全ではないとしても、一なら一通りの一般業務をこなせるだろう。それに、万が一の時はお前の盾にもなる人材で、遊ばせておくには惜しい状況だ。だろう？」
「あの……」
「ん、何か言いたい事でもあるのか？」
「いいえ、では行って参ります」
ナナは首を横に振り、今度こそバックルームを後にする。

まどろんでいる時が一番気持ち良い。自覚しながらだと尚更だ。一はだらだらとした時間を目一杯堪能している。どうせ、明日には店に呼び出されてしまうのかもしれない。ならばせめて今日だけでも惰眠を貪るべきで、意味のない時間を過ごすべきなのだ。自分に言い聞かせて、自堕落な時を満喫する。
「最高じゃないか」
呟くと、気分は落ち込んだ。
もう一眠りして、チアキたちが帰ってくるのを待とうと思い、一は枕に頭を預ける。瞬間、ドアがノックされた。
「……はーい」
のろのろと起き上がり、玄関に向かう。扉を開けると、そこには店に戻ると言って出て行ったばかりのナナがいた。

「あ、れ？　どうしたんだ、忘れ物？」
ナナは俯き、それから、一の顔をじっと見つめる。
「あ、いえ、忘れ物、では……」
「何か用事？」
「その……」
口を開き掛け、閉じる。その動作を何度も繰り返して、ナナは微笑んだ。一は向けられた笑みを見て、僅かに怯む。
「ナナ……？」
「体、しっかり休めてくださいね、と。二ノ美屋店長が仰っていました」
わざわざそれだけを伝えに？　一は注意深くナナの様子を観察するが、何も分からなかった。何も、見えなかった。
「あ、おいっ」
「失礼します」

マスターの命令に従えなかった。
マスターの期待に応えられなかった。
マスターを、裏切ってしまった。
生まれて初めて、この世に生まれた意義を見失った。
どうして、彼をあの部屋から連れ出せなかったのだろう。
どうして、何も言えなかったのだろう。
無理矢理にでも引きずれば、力ずくで言う事を聞かせれば良かった筈なのに。
「……私は……」
何故、動いている。
人形ではない自分は、人間に従うのが当然じゃないか。
今まで、そうしてきた筈じゃないか。
自身に問うても答えは返ってこない。その答えを持っていないから、人形なのである。

ナナは俯き、それでも下されたもう一つの命令を実行する為に歩き出した。

オンリーワン近畿支部の建物が見えたところで、ナナは足を止める。良くないものを感じ、そして、見えた。

正面玄関の辺りをうろつく、二メートルを優に超える体躯を持つ大男が。剥き出しになった上半身、肌は浅黒く、恵まれた肉体を惜しげもなく披露している。ジーンズを穿いているが、そこにもはちきれんばかりの筋肉が確認出来た。彼はしきりに首を巡らして、周囲に視線を配り続けていた。

「裏口からとは、こういう事でしたか」

姿かたちが人間でも、アレは違う。ナナは確信した。支部にソレが出現したのだと。何故に支部を襲わないのかが理解出来なかったが、好都合でもある。彼女はこっそりと裏口に回って、技術部の者たちがいるロビーに向かった。

「おお、七号！」

「良く来てくれた！」

疲れた様子の生みの親たちを見遣って、ナナは頭を下げる。

「行ったり来たりさせてごめんな、七号」

「いやあ、やっぱり可愛いなあ。眼鏡は良い。メイドも良い。眼鏡を掛けたメイドは癒しの象徴だよ」

「ありがとうございます。あの、状況の説明をお願いしたいのですが」

「ああ」と、一人の男が咳払いをした。彼の姿を認めたナナは、先よりも深い角度で頭を下げる。

「天津（あまつ）さん、お久しぶりです。確か、私の起動実験の時以来ですね」

天津と呼ばれた痩身の男は両手を上げた。青白く、細長い腕が袖

から覗いている。
「……勤務外はどうだい？」
「はい、北駒台店の皆さんはよくしてくれるので、何も問題はありません」
「そう、か。……それじゃあ状況を説明するよ」
天津は外に目を遣り、疲れた風に息を吐いた。
「オンリーワン近畿支部にソレが現れた。見ての通りだけどね」
「何故、あのソレはここを襲わないのでしょうか？　先ほどから支部の周囲を徘徊しているだけで、こちらを見向きすらしません」
「そういう風に作られているからね。まあ、そのお陰で被害は皆無に近いよ。ただし、やはり危険な存在であるのに間違いはないんだ」
「では……？」
「七号、君には勤務外としてアレを倒してもらうよ。動きを止めるんだ。完全に、完璧に、完膚なきまでに」
「畏まりました」と、ナナは頷く。
「では、裏口から外に回り、交戦を開始します」
「ああ、ちょっと待って」
歩き掛けたナナを天津が呼び止めた。彼だけではなく、他の技術部の者も何か言いたげな様子である。
「充分に気を付けて欲しいんだ。彼のスペックは君とほぼ同等なのだからね」
思考は止まらない。何かがおかしいとは気付いていた。ソレがいる。すぐ目の前に存在している。だと言うのに、支部の者たちの落ち着きようはなんだ？
「スペック、ですか？」
「うん。正確に言えば、アレはソレじゃあないからね。七号、君と同じオートマータだ」
「私と、同じ……」
「そうだ」と天津は首肯する。
「ただ、アレは失敗作だけどね。暴走しちゃって、僕たちの命令を

聞かないんだ。あのままではいつか一般人にも被害が出る。人間の役に立たない人形はもう、ソレなんだよ」

　自動人形。自分以外にも作られている事には気付いていたが、まさか、アレがそうだとは思いもしなかった。ナナは眼鏡の位置を押し上げて、情報を咀嚼する。

「七号、思考する必要はないよ。君はただ、アレを破壊してくれれば良いんだ。それ以外には何も考えず、何もしなくて良い。分かったね？」

「いえ、しかし……」

「そうじゃないだろ。七号、復唱はどうしたいんだい？　君は、何をするべきなんだ？」

「……承りました。私は、ソレを撃破します」

「それで良い。さ、行くんだ」

　ナナがロビーから立ち去った。瞬間、天津はその場に座り込む。

「ずるいんじゃないの？」

「え、何がです？　それより主任、可哀想に。七号に嫌われちゃいましたね」

「君たちのせいじゃないか！　僕だって好きで嫌われたんじゃないよっ」

　天津は技術部の人間を手当たり次第に睨み付けるが、誰も取り合ってはくれない。

「くそう、主任になんてなるんじゃなかった……」

「そのお陰でメイド服プラス眼鏡を押し通せたくせに何を言ってるんですか」

「チャイナドレスの下にスクール水着よりはマシだよ。ここには変態しかいないのかい」

「どうでしょうね。それより、七号に殆ど何も伝えないで良かったんですか？」

問われて、天津は難しい顔をしてみせる。
「彼女にしてみれば相手は同じ自動人形だからね。思うところがない、って訳にもいかないだろうさ。それに、七号には自我が芽生え始めているんだろう？」
「ええ、まあ」
「僕たちは技術部だが、ここにいる皆、情報とはとても大切なものだと思っている筈だよ。でも、言わなくても良い、知らなくても良いって事もあるとも思っている筈さ。違うかい？」
「……恨まれるかもしれませんよ？」
天津は一瞬言葉に詰まったが、すぐに気を取り直した。
「人間を恨む人形、か。技術者としては本望だよ。だけど、親としては悲しいかもね。とにかく、七号には余計な事を知って欲しくなかったんだ」
「アレがオートマータだって事をばらさなければ良かったのでは？」
「僕も今そう思ったところだけど、けど、あの子にはなるべく嘘を吐きたくなかったし、出来るなら隠し事もしたくないとも思ってる。矛盾だってのは承知しているけど……失敗だったかな」
「でしょうね。ま、俺たちはあの子の帰りを待ちましょう」
天津の部下は軽い口調で言い放つ。
何もしないで。何も言わないで。天津には、そう聞こえた。

相手が人間であろうと、自分と同じ自動人形であろうと、関係ない。倒せと、壊せと、叩き潰せと言われたのなら、それを実行するだけだ。
「……ほぼ、同じスペック」
ナナは物陰からソレを覗く。
人間と変わらない姿は、自分と違わない。短い黒髪も、ぎょろぎょろとした目玉も、落ち着きなく動く男は人間にしか見えない。だが、人形なのだ。そして、命令に従わないモノはソレでしかない。

援護はない。必要ない。ナナは物陰から飛び出して、コンクリートを砕く勢いで踏み抜く。

姿を見せたナナを侵入者と、敵と認識したのだろう。ソレは低く唸り、拳を振り上げた。

「失礼します」

ナナは頭を下げて振り回された拳を回避。踊るようなステップを踏み、ソレの腹部に正拳突きを放った。が、固い。自分とほぼ同じスペックだと言うのを実際に体験し、理解する。貫けない装甲ではないが、その分こちらの装甲もただでは済むまい。ならばと、ナナは距離を取って右腕を振る。金属の擦れるような音が鳴り、メイド服の袖口からは抜き身になったブレードが飛び出した。

「今剣の破片（いまのつるぎ）を再構成した業物ならばっ」

「ぼ、おぉっ」

鈍重な大振りの攻撃を避け、ナナはそれの突き出した腕を切り付ける。しかし、手応えはない。上がった火花を横目で一瞥し、彼女はソレの背後に回った。

ソレが叫び、裏拳気味に拳を薙ぐ。風が起こり、ナナの髪を後方に巻き上げた。

「拳も刀も通じない……」

ナナは左腕を振る。袖口から飛び出すのは小型化されたガトリング砲のようなものである。弾丸がぶら下がっており、それを腕にはめて、彼女はトリッガーを引いた。けたたましい駆動音が轟き、無数とも思える弾幕が形成されていく。空薬莢が地面に落ち、乾いた音を立てていた。

「……無駄ですか」

それでも、ソレにダメージが通った様子はない。そも、ナナも、ソレも自動人形である。彼らに痛覚は存在しない。戦闘においてマイナス要素となり得るありとあらゆる無駄な要素は省かれている。

動きを止めるなら、破壊するなら、最初からやる事は決まっていたのだ。

足を奪い、腕をもぎ、最終的には四肢を断裂させなければ終わらない。人形同士の戦闘は中途半端には終わらない。退却は許されていない。どちらかが完全に機能を停止するまで、この戦いは続くのである。

「私の全てをもって、お相手いたしましょう」

この先も人形であり続けたいのなら、下された命令は完遂せねばならない。

ナナは今ある装備を外し、また腕を振る。戦いはまだ始まったばかりなのだ。

緋緋色コミュニケイション

命令を下されて戦う。
命令がなくても分かる。戦えと言われている。
自分が自分である為に。
主人の命を、主人の命令を守る為に。
彼女と彼は、自分を守る為に戦っている。
でも、どっちも人形なんだろう？

オンリーワン近畿支部、正面玄関前の地面には、ナナが使った多数の武器、装備が散らばっていた。そのどれもが、ソレには通じていない。そも、通じる筈がなかったのである。
ソレは、正確を記するならばソレではない。オンリーワン近畿支部の技術部が作り上げた自動人形なのだ。ナナと同スペックの装甲を有しているのだから、彼女に通じない武器が通じないのは当然とも言える。
ナナに取れる手段と言えば、玉砕覚悟の肉弾戦しかなかった。腕を一本持っていかれたとして、相手の腕をもぎ取れば良い。足をやる代わりに足をもらう。四肢をねじ切るのだから、四肢をちぎられるのも構わない。どうせ自分は人形なのだ。悲愴感を覚えるのすら馬鹿らしくなる。彼女は眼鏡越しにソレを睨み付けた。
ソレは首を不自然に巡らせて、両腕をだらりと下げている。白目の割合が多い眼球でナナを見つめていた。そして、動く。彼に装備はない。拳を振り上げ足を振り下ろすだけだ。
「壊れていただきますっ」
ナナは確信する。ハードが同じでもソフトは違うのだ。生まれた

ばかりの自動人形と、多少なりとも経験を積んできた自分とでは差があり過ぎる。

「お、ぼ……」

装甲に同じ素材が使われていても、自分とソレで体格が違うのだから、重量にも違いが生じる筈だ。まずは足場を切り崩す。ナナはそう判断して、ソレの攻撃を斜めに受け流した。そのまま、強く地面を踏み締める。コンクリートにひびが入り、小さなクレーターが出来上がった。彼女はそこにソレの体を押し込む。が、まだ足りない。一つや二つ程度の穴ではソレのバランスを崩すに至らない。鈍い動きのソレは、まだ体を動かすのに慣れていないのだ。後、穴だらけの道路は修理費も掛かるし外観も損なわれてしまうが、誰だって命には換えられまい。

――――人間は生きるのが好きな生きものですから。

「たああっ！」

ソレの攻撃を回避しながら、ナナは周囲の地面に穴を開けていく。やがて、ナナの目論み通りにソレの足が、彼女の開けた穴に引っ掛かった。

「ぼ、く。は……」

ソレが低い呻き声を上げる。何か意味を持ったような声であったが、ナナは無視して敵の背中に回り込んだ。前のめりになったソレの背に飛び乗り、体重を掛けて蹴り飛ばす。ソレは空いた両手を受け身に使うでもなく、顔面から地面に倒れた。

どこを狙うのか考えるまでもない。最初に頭を潰す。それでも動こうとするなら足を。次に腕を潰す。ナナは両腕を組み、ソレの頭部に振り下ろした。金属同士がぶつかって、鈍く、それでいて甲高い音が周囲に響き渡る。しかし派手なのは音だけで、ソレの頭部は先と何も変わっていない。両腕部と頭部との交換なら充分お釣りがくる。一発で駄目なら二発三発続けてぶち込むだけだと、彼女は再度腕を振り上げた。

「……ここで見ているだけで良いんでしょうか？」
ぽつりと漏れた誰かの言葉に、天津は酷く胸を打たれた。
「オートマータは対ソレとの戦闘に関して、並の勤務外とは比較にならないぐらいの性能を誇るんだ。人間以上の思考を持ち、痛みを感じないから獣と同程度の無茶も効く。言わば、化け物だよ」
天津は言葉を区切り、座り込む部下たちを見遣った。
「化け物同士の戦いに、勤務外でも戦闘部でもない僕たちが首を突っ込んだところで、何が出来るって言うんだい」
「しかし主任、今回の件は全て我々技術部に責があるのでは？　……何も出来ないのは分かっています。正直、何もしたくないって気持ちもあります」
「では君は、全員でときの声を上げて突っ込みたいのかな？」
「……あの子の助けになると言うのなら」
馬鹿なと、天津は長い息を吐く。
「それで七号が喜ぶとでも？」
「いいえ」と、また、誰かが首を振った。
「七号は俺たちが何をしたところで喜ばないし、何をしても悲しみませんよ。人形、ですからね」
「責任は、技術部にある。だから自己満足で死ぬと言うのかい？」
「主任、あなたは本当に、七号にタロウが破壊出来ると思っているんですか？」
天津は不思議そうに、発言した者を見る。主任である彼は別の現場に掛かり切りだったので、タロウについては殆ど何も知らない。しかし、話を聞く限りタロウとナナとのスペックに違いはないのである。だからこそ、彼女にソレを破壊するよう伝えた。責任を、押し付けた。
「まさか、タロウにはまだ何か武装があるのかい？」
「……そういう事ではないんですよ、主任。七号には自我が芽生え掛けてる。北駒台店に送って、そこで僕たちの目論み通り、いえ、

あるいは幸か不幸か、彼女は人間を知ったんです。感情を、心を。あなたは起動実験以来七号を見ていなかった。でも、僕たちはあの子を見てきたんです。あの子が変わっていくのを、より人間に近く、成長していくのをっ」

喉の奥から絞り出すような声を聞き、天津は暫くの間、何も言えなかった。

「全部、僕たちが悪い。そんなの分かってます。でも七号の相手は自動人形なんですよ？　あの子は自分以外にも人形が作られているのを知っていた。けど、生まれて初めて見た筈だ。自分と同じモノを。人間ではなく、ソレでもなく、他ならない、オートマータを」

「……では、七号はタロウを破壊するのを躊躇うと、そう言いたいのかい？」

「躊躇ってもおかしくはないでしょう。それどころか、タロウに同調したっておかしくないんです。何が起こるか分からないし、何が起こっても不思議じゃないんです」

天津は短く呻いた。頭を抱えたくなったが、示しというものがあるので何とか堪える。

「お忘れですか、主任」

「何をだい」

「オートマータを作ったのは僕たちじゃない。……神様からもたらされた技術が、いや、神様が僕たちに作らせたんですよ。最初から、僕たちは良く分からないモノを作っていたんです」

「……それは」

それは良く分かっていた。何故なら、神の技術を受け入れ、神の存在を受け入れ、神を引き入れたのは他ならぬ天津、彼自身なのだから。

「……それでも、僕たちは技術部だ。他人の知識に頼ったとして、実際に七号を作ったのは僕たちなんだ。だからっ」

しん、と。ロビーが静まり返る。全員が押し黙る。皆、分かり始めていたのだ。責任を取るのは自分たちなのだと。ここでじっとし

ている為にナナを呼んだのではない、と。

　入院とは思っていたよりも退屈ではない。体調が回復するにつれ、病院の敷地内という制限はあるが、自由に歩き回れる。売店の品揃えも良く、退屈はしない。だが今一つ物足りない。一人、ここに足りない。

「……足りナイ」

「えっ？　ジェーンちゃん、まだお菓子食べたいの？」

「ノウッ、そうじゃなくて、足りナイの。お兄ちゃんが」

　ジェーンと立花は同じ病室に入院している。二人とも入院着に身を包み、ベッドの上で仲の良い姉妹のようにくっ付いていた。

「近いッ」

「わああ！？」

　ジェーンに押されて、立花はベッドの上から転がり落ちる。

「ハア、お兄ちゃん、オミマイに来てくれなかったナア……」

「ジェーンちゃん、い、今のボクには、けっ、獣が宿っているかもしれないんだけれど！？」

「ドッグ？」

「違うよっ。いきなり何するんだよ、酷いじゃないか！」

　立花は起き上がり、その場に座り込んだ。

「だって近かったんだモノ。それよりタチバナ、マサカお兄ちゃん、アナタのところには行ってないでしょうネ？」

「来てないよ。……残念だけど」

「それはグッドニュースね。ハア、タッチしたい。なめマワしたい。スイートバイトしたい」

「スイー……？　何それ？」

「やっぱりお兄ちゃんじゃないとハリアイないワ」

　ジェーンはスナック菓子を口の中に流し込み、つまらなさそうに立花を見つめる。

「早くココから出たい……」
「あれ、ジェーンちゃんはまだ出られないの？」
「ダカラ、何？」
「う、や、やだなあ、そんな目で見ないでよ。あ、そ、それよりさ、他の皆はどうしたのかな？」
　露骨に話題を変えようとする立花だが、ジェーンは気にしなかった。彼女は、手玉に取れる年上が可愛くて仕方ないのである。
「ミツモリは元気そうだったカシラ。あ、ナナはリペアが終わったって聞いたワ。ンー、イトハラは一回も見てないケド」
「けん君も元気だよ。ボクたちは、明日か明後日には退院出来るんだって。えへへ、はじめ君に会いに行こうかなあ……いたっ！　どうして叩くのっ！？」
「モスキートがいたのヨ」
「あー、そっかあ。ありがとジェーンちゃん」
　ジェーンは口の端をつり上げて、意地悪そうに笑った。
「うーん、そしたら、ボクたち皆元気だね。良かった良かった、また皆で一緒に働いたり、遊んだり出来るよ。やったねジェーンちゃん！」
「Ｎｏｔ　ｆｏｒ　ｍｅ、アナタたちは死ぬまでベッドの上にいればいいノ」
「いやだよっ、退屈なんだもん。あ、そう言えば、フリーランスの人たちも入院してるって聞いたよ？」
「ダレから？」
「おとめちゃん」
「おと……アア、ロバタね」
　そう言って、ジェーンは渋い顔を作る。
「フリーランスって、『神社』とか、カシラ？」
「『図書館』のナコトちゃんや、『貴族主義』のアイネちゃんも入院してたんだって！　あ、でも、アイネちゃんはついさっき退院したって聞いたかも」

「……フゥン。ま、どーでも良いケド」
ジェーンは四肢を伸ばして、憂鬱そうに息を吐いた。

コレはもはや、人形ではない。
今、自分が攻撃を加えているモノはソレなのだ。人類に害を及ぼす敵なのである。
命令を無視して、己がままに動くオートマータなど、破壊されてしかるべきなのだ。
「ぼ、く、ぼく……」
では、自分はどうなのだ？
自分も、いつかこうなるのか？
命令を無視すれば、破棄されるのか。処分されてしまうのか。そう言えばと、ナナは思い出す。店長の命令に従わなかった事を。ならば、明日は我が身か？
ナナは恐怖したのではない。ただ、疑問に思っただけだ。自身とは、人形とは何なのか、と。それだけで僅かに動きが鈍くなる。攻撃の手を緩めてしまう。
「ま、スター、ど……して？」
同時に、今まで無視していた声を捉えてしまった。
「マスたー、ぼ、く、は、ここを……」
「マスター……？」
「まも、マ、マモらなきゃ」
「何を……っ！」
振り上げた拳がソレの頭部に食い込む。しかし、ソレは体を揺すり、両手を振り回して暴れた。ナナはその抵抗を肩に食らってしまい、後方に吹き飛ぶ。
「しまっ……」
強かに背部を打ち付けて、ナナは目を丸くさせた。ソレの位置を確認しようと顔を上げた瞬間、痛烈な強打を顔面にもらってしまう。

突き刺さったソレの膝。ナナの掛けている眼鏡のフレームが歪み、折れる。レンズが砕け、破片が散らばった。
「ぼクはぁぁぁ、マスたーにぃぃい」
「この……っ」
ナナはソレの膝を両腕で掴み、一息に押し上げる。僅かに出来た空間に体を肩から押し込み、
「あなたはぁっ！」
ソレの体を引っ繰り返した。不様にも腹を見せるソレを見下ろし、ナナは自身の目の辺りを確かめる。
「マスターなどと、妄言を……」
「ぼ、ぼくばぁ……」
思考が追い付かない。ノイズが入り交じり、ナナの頭を苛んでいる。どうしても、正常に機能しない。
「あなたにマスターはいません。これ以上の抵抗は無意味です」
言葉は通じない。ソレはぶつぶつと何事かを呟き、体を起こそうとした。が、ナナが阻む。彼女は起き上がったソレの上半身を蹴り飛ばして、再び元の体勢を取らせた。
何度も、何度も。ソレが起き上がろうとする度に攻撃を加える。お互い、愚直に。学習能力のないソレは何度倒されようとも起き上がるのを諦めない。……諦めるのを知らないのである。ナナは何も思わず、考えなかった。
やがて、ソレの動きが先よりもずっと緩慢としたものになる。好機だと判断したナナが力を込めて拳を振り上げた。刹那、彼女に埋め込まれたセンサーが異常を察知する。
「……これは……！？」
周囲の気温が緩やかに上昇していく。コンクリートが焼けていく。ソレの体が真っ赤になっている事に気付いたナナが、一も二もなくその場から飛び退いた。
「あのオートマータの武装ですか」
「ぼくが、ぼくボクボクが、ますターを……」

「熱を操作する……？　いえ、もっと単純な、自身の装甲を発熱させる機能ですか」

ナナはソレとの距離を離していく。発熱。能力としてはシンプルだが効果はあった。ソレの状態を見る限り、ソレ自身の装甲を溶かすほどの熱は発せられていない。だが、こちらは危うい。接近、捕獲されて長時間あの熱を当てられればオートマータとはいえひとたまりもない。外側は平気でも、熱暴走を起こして内側から壊されてしまう。不用意に近付いて捕まっては勝ち目がない。そして、ナナには策がない。

その事を知ってか知らずか、ソレはナナに近付いてくる。彼女は距離を離して、隙を見つけようと必死になっていた。

「……隙だらけ、ですね」

ソレの動きは鈍い。攻撃を加えようと思えばいつでも当てにいける。だが、生半可な飛び道具は通用しない。手持ちの装備ではダメージはおろか装甲に傷を付けるので精一杯なのだ。つまり肉弾戦。拳一つで立ち向かうしかない。しかし近付けば捕まり、近付いたとして厚い装甲を抜ける一撃は望めなかった。八方塞がり手詰まりの状況にナナは初めて焦りを覚える。命令を完遂出来なければ、自分だって目の前のモノと変わらない存在なのである。

そして、思った。

あのオートマータは、命令を遂行しようとしているだけなのだ、と。彼は決して命令に背き、マスターに逆らっている訳ではない。恐らくは、技術部によって根幹に組み込まれたプログラムを忠実に実行しているだけなのだ。ソレになろうとは思っていない筈で、彼もまた、己に課せられた責を果たそうと、人形としての役を守ろうとしているに過ぎない。

「……あ」

そう悟った時、ナナは動きを止めた。アレもまた、自分なのである、と。遠い未来、いつか必ず訪れる場面なのだ。あのオートマータは自分よりも少し早く、ああなっただけなのだ。

「マズ、タァっ……！」
ソレの一撃を避けようともせず、防ごうともせず、ナナは腹部にアッパー気味のパンチを受けて中空を舞い上がる。
ソレは中空に浮いたナナの足を掴み、地面に叩きつけた。彼女の体からは火花が上がり、凄まじい衝撃音が響き、握られた箇所には熱が伝わる。それでも尚、ナナはぴくりともしない。人形としての運命を呪うでもなく、助けを求めるでもなく、ただ、動かない。
「ますた、ボく、ぼっ、やっだ、やっだ」
「七号に当てるな！」
支部の入り口から聞こえた声にソレが反応する。彼はナナを捕まえたまま、首を動かした。
「建物の外には出るなっ、良し、撃て、撃てっ！」

弾丸ならある。武器ならある。人員も揃っている。万が一に備えて医療部も呼んでいる。後は、前に踏み出す勇気だけ。
「外に出なければ襲われません。タロウは、そういう風に出来ていますから」
「主任、やはり、俺たちも何かすべきだと思うんです。役に立たなくても、それでも動きましょう」
注がれる視線を一身に受けて、天津は息を呑んだ。
ナナが、技術部が生み出した娘だと言うのなら、タロウだって技術部の息子なのである。自分たちの都合で作り、必要がなくなれば壊す。身勝手だとは知っていた。それでも、
「それでも……」
それでも、戦う。
作り上げたのが自分たちなら、壊すのも自分たちでなければならないのだ。責任の所在を突き止めていながら、そして親である自分たちに責任があるなら、娘だけに全てを背負わせてはならない。
「皆、今日、この事はオンリーワン近畿支部技術部の責任だよ。良

いかい、僕たちは一生忘れちゃあ駄目なんだ」
低い声、高い声が入り交じる。そのどれもが、今日を恥じていた。
「タロウを作ったのは僕たちだ。殺すのも僕たちだ。僕たちは理由なく子を殺す。僕たちは畜生以下だと心するんだっ」
後ろには医療部の長、炉辺が控えている。彼女は痛ましい表情を浮かべ、何か言いたげな様子であった。
天津は一度目を伏せ、
「構えてくれ」
技術部の面々を見回して、告げる。
「七号には当てちゃ駄目だ。良いね？」
すっと手を上げ、天津は電源の落とされた自動ドアを開けた。彼は射線軸から退き、タロウを見つめる。幾ら謝っても、済まない。そも、彼は謝られる意味にすら気付かないのだから、全ての言葉は無駄にしかならない。
「撃て」
瞬間、天津の視界を光が覆い、聴覚は一種類の音だけを捉えた。炸裂する火薬、放たれる弾丸、床を叩く空薬莢。
「ダメージは通らないっ、ソレの目を狙って七号を助けるんだ！怯ませろっ」
技術部の人間も射撃訓練は受けている。玄関からソレまでの距離は五メートル。放たれた弾丸の命中率は七割を超えているように天津には見えた。
しかし、幾ら弾が当たろうが、ソレの装甲を弾くだけに留まっている。拳銃程度では効果はない。しかし牽制にはなり、ソレの注意を引き付ける事は可能だ。何より、これは本命ではない。
撃たれているソレは煩わしそうに、空いている手をめちゃくちゃに振った。そして、天津と目が合う。彼は決して目を逸らさなかった。
「……くっ」
ソレは何故自分が攻撃を受けているのか分からないといった様子

で、戸惑いの表情を見せる。
「主任、七号が動きません！」
「……強く叩きつけられたから、どこかやられたのかもしれないな」
「どうするんですかっ？」
天津は目を瞑って考える。衝撃はあったが、動けないほどの攻撃をもらったとは思えない。まだナナの機能は停止していない筈なのだ。彼女は、自分たち技術部が脱出の隙を作ろうとしているのも分かっている。
「自我、か」
動けないのではなく、動かないのだ。そう結論づけた天津は手を上げる。
「撃ち続けてくれ、直に準備も終わる」
ソレの注意はこちらに向いていた。支部の中からの銃撃を不思議がっている。守るべき筈の者たちから攻撃を受けているのかが分かっていないのだろう。逃げるなら今だ。しかし、ナナはずっと動かない。
「準備って、やっぱりアレを出すんですか？」
「それしかないだろう。七号を除けば、アレは僕たちの持ち得る最強の武器なんだから。情報部に周囲二キロの人払いをやってもらっているところだ。後、少し」
「お遊びが過ぎると怒鳴られましたが、役に立つ機会が巡ってきて良かったですね」
「良くないよっ、あんなの持ち出すなんて、とんでもなくやばい機会じゃないか」

やはり、気になる。どうしてナナは自分の前に姿を見せたのか、何かがある。何かが起こっている。そう決め付けた一は布団を跳ね除けて、電話までのろのろと這っていった。
「店の番号は……」

電話の傍に置いたメモ帳を捲り、北駒台店の電話番号を確認し、掛ける。
「……出ねえし」
一はもう一度、いや、出るまで掛け続けてやると思い直し、再度電話番号をプッシュした。三度目のコールで、
『あー、オンリーワン北駒台店、です』
不機嫌そうな声が受話器から漏れる。
「俺が客だったらどうするつもりだったんですか」
『ん、ああ、何だ、一か。くそ、敬語なんか使って損したな』
一は溜め息を吐き、受話器を持ち直した。
「店長、聞きたい事があるんですけど」
『今忙しいんだ、後にしろ』
「えっ、そうなんですか？」
『すまん、嘘を吐いた』
店長は全然申し訳なさそうである。と言うか笑っていた。
『一、今、家にいるのか？』
「そうですけど、えと、何か？」
『は、なるほど。お前がそこにいると言う事は……いや、なるほどな』
「一人で納得しないでくださいよ。あの、何があったんですか？」
一の言葉を聞いた店長は喉の奥でくつくつと笑う。人の神経を逆撫でする、不快な笑い声だった。
『何か、じゃあなくて、何が、か。何だ一、エスパーにでもなったつもりか』
「茶化さないでくださいよ」
『ふん、口だけは達者のくせして。今日は随分と可哀想な声をしているじゃあないか』
「そう思うんなら余計な事喋らせないでくださいよ」
一はわざとらしく咳き込んでみせる。それを聞いて、店長はまた笑った。

『ソレが出たんだ。お前は昨日頑張ったからな。ウチで使える勤務外はナナしかいない』
「ナナを……？　ソレはいつ出たんですか？」
『ついさっきだ』
「……ついさっき、ナナが俺のところに来たんですよ」
『ああ、私が頼んだからな』と、店長は何でもない風に言い放つ。
風邪のせいでめぐりの悪くなっている思考が、更に混沌としてきた。一はこめかみに指を当てて、鈍痛を噛み殺す。
「頼んだって、お見舞いを、ですか？」
『見舞いと言うか様子見だがな。動けそうなら店に連れて来るように伝えていた』
「鬼ですか」
『そこに悪魔を足しても良い』
それだけじゃ足らんわと、一はばれないように舌打ちした。
「じゃあ、二回目は？」
『ん、二回目？　二回もナナが来たのか？』
どうやら、何か話が噛み合っていないらしい。一は頭を掻き、目を瞑った。
「ええ、けど、何もしないで帰っちゃいました」
『ん、確かに、私はナナに一を連れてくるように頼んだな。……一度ナナが帰ってきてな、その後ソレが出たんだ。そして、もう一度お前を連れてくるように頼んだ』
「は？　いや、だって、ナナは一度目で風邪を引いた俺を見てる訳ですし、あっ、つーか店長だって俺が風邪だって知ってたでしょう」
『ああ』
一、思わず歯軋り。
『レジ打ちくらいは出来るだろうと思ってな。状態を見て、いけそうならナナの盾代わりにでもしてやろうと』
「ろくな死に方しませんよ」
『私は死なないから大丈夫だ。それより一、ナナが二度も来たと言

うのは本当なのか？』
「本当ですよ。俺は糸原さんじゃないんですから、つまらない嘘を吐きません」
『……では、何故お前はそこにいる』
「何故と言われても、いるからいるんでしょうに」
『ナナは、お前のところに行ったんだろう？』
遂に店長はボケてしまったのだろうかと、一は不安になる。
『お前、何かくだらない事を考えているだろう。違うぞ、良いか、私が、ナナに頼んだんだ。命令を下した。一を店に連れて来いとな』
「それが、何か？」
『気付かんのか。二度目は有無を言わさず連れて来いと言ったんだ。お前が風邪だろうが何だろうが。しかし、お前は今も部屋にいる。店に来ていない。ナナは、私の命令を無視したんだ』
「命令を……？」
決してそんな事はしないが、自分が命令して無視されるならまだしも、今までの経験から言ってナナが店長の命令を無視するとは考え難い。一は最後に見た彼女の姿、顔を思い出す。何か言いたげな、けれどその全てを押し殺して笑んだ彼女を。
『こういう言い方は好きではないが、ナナは人形だ、人間じゃない。だから、今までに彼女が、マスターである私の指示に従わなかった事はない。そう、定められているし、そう作られている。……なあ一、どうしてだろうな？』
そんな事は、一が聞きたかった。どうして、自分を連れて行かなかったのか。ナナなら、力ずくで部屋から引きずり出すのも不可能ではなかった筈である。
「店長、今からそっちに行きます」
『風邪だろう、休んでなくて良いのか？』
「何を今更……」
『レジでも打ってくれるのか？』
まさかと、一は内心で呟く。吐き捨てるように、強く。

「傘はそっちにありますから」
『今日も雨が降るんだっけか』
「いいえ、すこぶる良い天気らしいですよ」
『は、そうか。頭のおかしな奴だ』
全くだと、一は喉の奥でくつくつと笑った。

アナログｃｐｕ

オートマータはオンリーワン近畿支部技術部の、技術の粋を集めた最高傑作である。人間より人間らしくをモットーに作り上げられた究極の発明品だ。

天津は、後悔している。

そのオートマータを自らの手によって、壊さねばならない事を。

「主任、情報部から連絡来ました」

「首尾はどうだい？」

「二キロ周囲の安全確認、支部周囲の人払い、終わったようです」

「僕たちの首尾は？」

問われた技術部の男が、口角をつり上げる。

「完全、完璧、完膚なきまでに、です」

天津は頷き、タロウと、彼に囚われたままのナナに視線を遣った。

「……通用するかな」

「主任、アンチマテリアルライフルの準備出来ました！　いつでもいけますよ」

そちらに目を向けると、巨大な銃が視界に飛び込んでくる。全長は二千ミリメートルを超え、外見は無骨で、複雑そのもの。

「これで駄目なら、もうどうしようもないって代物だね」

――――対物（アンチマテリアル）ライフル。

かつては対戦車ライフルとも呼ばれた大型の銃だ。対物ライフルは大口径弾を使用する。大口径弾は重く、風の影響を受けない。優れた弾道直進性を活かして、一般の小銃弾を使用する狙撃銃を上回る距離で狙撃を行えるのだ。また、大口径弾の貫通力を活かして車両への攻撃にも使われ、土嚢や壁などの障害物に隠れる敵の殺傷も可能である。尤も、今回に限って難しい狙撃は必要ない。ただ、ト

リッガーを引くだけだ。何せ、ターゲットはすぐそこにいるのである。重要なのは、その火力、貫通力。

「心配いりませんよ、主任」

バイポッドで支えられたボルトアクションの対物ライフル。伏せ撃ちの体勢に入っていた技術部が気楽そうに笑う。

「有効射程は二千三百メートル。十四、五ミリ口径からぶっ飛ぶ弾を喰らって平気な奴はいないでしょうよ」

「ショックアブソーバーを内蔵した、化け物よりも化け物らしいライフルです。問題ありませんよ、さあ、主任」

早く撃たせてくれと急かされ、天津は目を瞑った。

「体のどこにでも良い、とにかく当てるんだ。連射はしないでくれよ、弾の行方を情報部が確認した後、二射目の合図は僕が出す」

「主任、七号の救出とタロウの破壊、どちらを優先するんですか？」

「無論、ソレの破壊だよ。隙さえ作れば、七号も自分で脱出するだろうと思うし」

思う、と言うよりは願いである。天津は、ナナが動かない事を何となく察していたのだ。

「全員、イヤマフ付けて。……撃つんだっ」

天津が手を上げた瞬間、振動と轟音がロビーを覆う。

オンリーワン近畿支部の屋上にドレッドヘアー、グレースーツの男が立っている。名を氷高（ひだか）、情報部の彼は感情の宿らない瞳で眼下を見下ろしていた。が、耳を塞ぎたくなるような音と僅かな振動に顔をしかめる。技術部が対物ライフルを遂に使ったのだ。

「嘘だろ」

超射程、高威力。対物ライフルがどんなものなのか、氷高は知っている。しかし、実物どころか、それが実際に使用されているのを見るのは生まれて初めてだった。……確かに、技術部の作ったオートマータはとんでもない代物だろう。それでも、あの武器ならば。

そう思ったのが間違いで、技術部の力を見誤っていたのだと気付いたのは、直撃を受けたように見えたソレが、何事もなく立っているのを確認した時だった。

「どうなってんですかぁ!?　アレは!?」
「二射目用意急いでっ」
「弾はっ!?」
天津はイヤマフを外すのも忘れて叫んだ。ソレの肩に命中した弾が後方に弾かれていったのも確認している。ソレが僅かにたじろいだだけなのも見えていた。それでも、信じられなくて叫ぶ。
「七号動きません！　主任、指示をっ」
「情報部から通達、支部前方の道路に着弾っ、人的被害はなしです！」
とんでもないモノを作ってしまったと悔やむ暇はない。天津はようやくになってイヤマフを外し、床に投げ捨てる。
「ダメージはないのか?」
「……少なくとも、私にはそう見えています。ソレ、依然として健在です」
何一つ変わらない。虎の子の対物ライフルを持ち出し、あまつさえソレはその攻撃を受けたと言うのに、状況は変わっていない。
「やはり、無理なのか……?　いや、待てよ」
天津は腕を組み、右往左往する部下たちを見回した。
「誰かっ、タロウを作った者はいるかい！」
すると、肩を震わせて俯く者が見える。それも二人だ。彼らはロビーの隅で所在なさげに突っ立っていた。天津はその二人の傍まで近付き、彼らをきつく睨み付ける。
「君たちだな。アレは、どういう事だ?」
「あ、い、いや、俺たちは……」
「どういう事だと聞いているんだっ」

半ば八つ当りに近い事だと、天津は自身の行為を内心で恥じている。しかし、これは異常だ。事前に渡された資料を読んで把握している限り、タロウがあの攻撃を受けて全くの無傷というのは有り得ない。ならば、虚偽の報告をされていたに違いない。そう思った彼は、ぼさぼさの髪、汚れた白衣を着た、深い隈を作った二人に詰め寄る。

「明らかにオーバースペックだ。実戦に出ている七号ならともかく、起動したばかりのタロウが、どうしてなんだ!?」

「そ、それは……」

「答えてくれ、どうせ、責任は僕ら技術部全員にある。そして責任を取るのは僕だ。……このままじゃ、皆危ない。僕に責任を取らせてくれよ。だから、答えてくれ」

天津に頭を下げられた二人は顔を見合わせ、口を開く。

「……あの、実は、加治さんが……」

――――加治が？

「昨夜、起動の前に来て、その、少しだけで良いからいじらせてくれって……」

「あの老人は……」

この二人がこの場を逃れたいが為に嘘を吐いたのでなければ、確かに納得出来た。加治がタロウに何かしらの手を加えたのなら、対物ライフルを通さない装甲になっているのも頷けた。技術部の長である彼ならば、人知を越えた未知の物質を所持していても不思議ではない。ミスリル銀、賢者の石、ヒヒイロカネ、あるいはオリハルコンですらも。

「納得したよ。なら、僕たちの優先すべき事柄は変わってくる」

「タロウを、破壊しないのですか？」

「いや」と、天津は首を横に振る。

「アレはもはや人類の敵だよ。破壊しなくてはならない。けど、加治さんが手を加えたのなら、人間である僕たちには荷が重い。七号の救出を最優先、目には目を、だよ」

人形には人形を。ソレを打倒しうるのは、彼女しかいない。
「あちらが神の息子なら、こちらには僕たちの娘がいる。七号を助けるぞ、人間の叡智を馬鹿にされたままでは引っ込めないからね」

オンリーワン北駒台店に向かうべく、一は部屋を出て歩いていた。が、風邪のせいか体が鈍い。思うように動いてくれない。息はすぐに上がり、顔が熱い。
「……や、べえ」
一は塀に背を預けて息を吐く。もう歩けない。動きたくない。ずきずきと痛む頭に手を遣り、彼は遂に、その場に座り込んでしまった。
このままでは店へ着く前に全ての片が着いてしまう。何も知らないまま、何も出来ないまま。もう、嫌だった。自分の目が届くところでならまだしも、知った者が目の届かない、手の届かないところで苦しむのは。
「俺は……」
あの絶望は忘れられない。たった一つの暴力に、勤務外全員が地に伏した瞬間は、一の脳裏に焼き付いて、彼の網膜から離れない。
強い風が吹き、一は目を瞑る。
「ようニンゲン、もう動いて大丈夫なのか？」
「……あ」
顔を上げると、中空に胡坐をかいたモノがいた。彼女は無警戒な、人懐こい笑みを一に向けている。風の精霊、シルフがそこにいた。
「ん？　なんだよ、まだしんどそうじゃんか。何やってんのさ、遊びにでも行くつもり？　シルフ様も混ぜろよー、混ぜてー、混ぜろったら混ぜろ！」
「いや、遊びに行くんじゃなくて……」
「あははは っ、オマエっ、すげー声変だぞ」
「うるせえな」

シルフは一の真上に陣取り、彼の頭に腰を下ろす。
「退けよ、邪魔くせえな」
「えー、良いじゃんか。別に重くないだろ？　それよりさ、どこ行くのさ、なあ、なあっ」
「店だよ」と、一はシルフを退かして立ち上がる。
「店……？　買い物？　じゃあさじゃあさ、シルフ様お菓子食べたいなー」
「違う。働きに、だよ」
「むうー、オマエ、びょーにんじゃん。知ってるぞ、ニンゲンってのはしんどかったら寝てるだけで良いんだ」
一は薄く笑い、ゆっくりとした足取りで歩き始めた。
「なあおい、無理すんなよニンゲン」
「は、心配してくれてんのか？」
「……だって」
シルフは一の前に着地して、彼の顔をじっと見つめる。
「オマエは昨日、あんなにがんばってたじゃん。ぶっ倒れるまで戦ってさ。だから、もうがんばんなよ」
「……かも、しんない。だけどさ、じっとしてられないんだ」
「じっとしてろよっ、ほら、オマエふらふらじゃんか！　そんなんじゃ何も出来ないに決まってる！」
店に行ったところで、フロアに立つどころか何も出来ないかもしれない。店長から話を聞いてナナの元に向かったところで、役に立つどころか足を引っ張るだけかもしれない。それでも、何か出来るかもしれない。せめて、一つの終わりを見届けたい。だから、一は歩く。
「お、おいっ。……うう、ううううっ、ああ、もう！」
「なんだよ」
「見てらんないって言ってんのさ！」
「言ってねえじゃん」
「言ったもん！」

シルフは一の腕を強引に掴み、引っ張り上げた。
「う、おっ」
「ほら行くぞ、あの店まで飛べば良いんだろ？」
宙に浮いていく感覚にはもう慣れている。一はさして取り乱すでもなく、遠くなる地面を見下ろした。
「……ああ、その、なんつーか、悪いな」
「ふん、シルフ様はただ、ふらふらしてるオマエを見てイライラしただけだよ」

ソレを倒す為の頼みの綱はナナしかいない。しかし、彼女は今にも切れてしまいそうな、危うい状況にある。
「皆も分かったと思うけど、アンチマテリアルライフルでソレは倒せない。僕たちに残された手は、七号だけだ」
天津は技術部の面々を見回して、一度言葉を区切った。
「でも、七号は動けない。いや、動くつもりがないんだ」
「……動くつもりが？　しかし主任、七号はまだ機能停止に陥るほどの損傷を受けた訳では……」
「うん、だからだよ。現に七号はずっと、ああしている。何か理由があるんだとは思うけど。けど、ここであの子を失っては駄目なんだ」
「それでは、どうするのですか？」
部下に尋ねられ、天津は外に目を向ける。ソレは動かなくなったナナに興味を失い、再び支部の正面玄関付近を徘徊していた。
「七号を助ける。いや、連れ戻すと言った方が正しいかな」
「七号は動かないのに？」
「だから、こっちから出向いて引っ張ってくるしかないね」
天津の発言を受け、場が俄かにざわめく。
「……まあ、言いたい事は分かるけどね。誰も死にたくはないだろうし」

「まさか、外に出ろ、と？」
「僕たちでは倒せない。だけど隙を作る事は出来る。誰かがソレの気を引いて、誰かが外に出て七号を引っ張ってくる、と。全く捻りがないけれど、これでいこう」
「って、誰が行くって言うんですか？」
どこか他人事のように言ってのける天津に非難の視線が降り掛かる。が、彼には決してそのようなつもりなどなかった。
「ライフルだけじゃ心許ないからね、僕が囮になるよ。ソレを引き付けておくから、七号を頼む」
「なっ、馬鹿な！　主任、あなたは自分の立場を分かっているんですか！？」
「……分かっているから行くんだよ。何度も言うけど、僕たちに責任がある。僕たちが何とかしなきゃならない。だったら、ここで引きこもるのは嘘だろう。ここで命ぐらい懸けないで何が出来るって言うんだい」
「主任がやらなくても、囮なら情報部に頼んだ方が……」
「彼らだってそこまではしてくれないだろうし、させる訳にはいかないよ」
「しかし……」
食い下がる部下を見遣った天津は首を横に振り、諦めたかのように微笑んだ。
「七号を引っ張ってきてくれる人はいないかな？」
返答はない。天津の言う通り、技術部の者たちは自分たちに責任があり、何らかの方法で責任を取らなければならないのだとは理解している。しかし、死ぬのは恐い。上司が率先して死地に行こうとしているのに、どうしても足が進まない。声が出せない。圧倒的に覚悟が足りていない。
「私が行く」
「な……、いや、あなたは……」
その場にいた全員が目を剥く。

「私がナナちゃんを助けるから」
手を上げたのは技術部の人間ではない。サポートとして待機していた医療部の長、炉辺である。
天津は髪の毛を掻き、困った風な顔を作った。
「いや、流石にそれは……」
「そっ、そうです。炉辺さんが行くくらいなら私たちが行きますから」
医療部の者たちに囲まれながらも、炉辺は前を見据える。
「だって、誰かが行かなきゃ始まらないんなら」
「あなたは医療部だ。これは技術部の問題です。したがって……」
「……っ！　誰も手を上げないっ、誰も、何も言わないのに？　あなたたちは本当にナナちゃんを助ける気があるのっ！？」
涙声の炉辺から視線を逸らした天津は、案外痛いところを突く女性だと、彼女についての評価を改める。そして、感謝した。
「……俺、行きます」
おずおずと手を上げる者が一人、
「わ、私も行きましょう」
また一人。
無関係の炉辺が命を張ると言っている。なのに、自分たちが何もしなくて良い筈がない。技術部の人間は我先にと手を挙げ声を上げ、勇気を奮って立ち上がる。
――――いや、勇気じゃあない。
これは、自棄だ。皆、投げ遣りになっている。生きるのに、責任を取るのに。しかし、これで良い。これが良いのだと天津は思った。
「アンチマテリアルライフルで口火を切るよ。その射撃に乗じて囮が飛び出すから、残った者は七号の救出と後方から援護を。何、大丈夫さ、建物に入ればソレは追ってこない」
銃を手に取り、天津は皆を気負わせないように笑う。その笑みが少しぎこちなくなっている事に大半の者が気付いていたが、誰も、何も言わなかった。

「遅かったじゃないか、一」
バックルームに来た一を見遣り、店長は薄笑いを浮かべた。
「これでも、かなり飛ばしてきたんですけどね」
「そうか。それじゃあ、早速働いてもらうとしよう。レジくらいなら打てるな？」
何を今更。一は店長を無視して自分に割り当てられたロッカーを開ける。
「ソレはどこに出たんですか？」
「それを聞いてどうするつもりだ？」
一はロッカーに立て掛けてあるビニール傘を引っ掴み、店長を見つめた。
「店長が言ったんですよ、ナナの盾になれって」
「病人を戦場に送るつもりはない。一、何かしたいと言うのなら店にいろ。お前の出番はない」
店長は紫煙を燻らせ、一を見据える。反論は許さないと、その目が言っていた。
「ソレとの戦闘に関して、お前がナナよりも優れているところがあるとは思えん。それに、あいつは人形だ。人間じゃない。任せておけば良いんだ」
「……ナナが人形だろうと何だろうと、あいつは、俺を心配してくれた。助けてくれたんです」
「だから？　助けになってやりたいと？」
「いけませんか？」
「心配するのは勝手だが、今のお前がナナの助けになれるとは思えないな」
一は病み上がりどころか未だ病んでいる最中なのだ。店長の言う通りに大人しくしているのが一番である。彼だって頭のどこかではそう思い、分かってもいた。

「行ってみなくちゃ分からないでしょう」
「分かり切ってる。くだらん事を言うな。……それとも何か、お前、調子に乗っているのか？　たかがソレを、たかがギリシャ神話の怪物を、たかが不死身の蛇姫を倒したくらいで、自分が英雄にでもなったつもりでいるのか？」
「まさか。俺は英雄になんてなれないし、なれたとしてもごめんこうむりますよ。……俺はただ、この話の顛末を見届けたいだけなんです。それで、ついでにナナの助けになれればラッキーって、その程度の考えしか持っていないんですよ」
「ふざけるなよ」と店長は苦笑し、「ふざけてませんよ」と一が返した。
　お互いがお互いを馬鹿にしたような素振りの会話に、店長は目を瞑って頭を押さえる。
「どうしても行くのか？」
「ええ、行きたいですね」
「一つ、約束しろ」
「生きて帰れ、ですか」
　店長は冷ややかな視線を一に送った。
「死ね」
「ヤ、です」
「……だったらナナの邪魔だけはするな。死にたくないなら、そうしろ」
「勿論。……ソレはどこに出たんですか？」
　短くなった煙草を灰皿で揉み消し、店長は眉根を寄せる。
「支部だ。オンリーワンの近畿支部にソレはいる。いや、最初からいたと言うべきか」
「どういう、意味ですか？　ソレが支部にいたって、んな馬鹿な」
「正確に言うなら、ソレはソレじゃない。今現在我々が敵として見定めているのは、技術部の作った自動人形だ。そいつが暴走して、支部の周囲で暴れ回っている」

一は思わず息を呑む。
「……自動人形って、そんな、それじゃあナナは……」
「お仲間、いや、家族のようなモノと戦っている訳だ」
「そんなの……」
そんな話があってなるものか。一は唇を強く噛み、ナナを思った。
「可哀相だと思うか？　思うな。同情するなよ、それがナナの仕事で、作られた理由でもあるんだからな」
「でもっ」
「遅いんだ、馬鹿者が。起こってしまった事は仕方ない。一、お前は時間を巻き戻せるか、巻き戻した上で、ナナが悲しまないような世界に作り替えられるのか？」
出来ない。出来る筈がない。一は俯き、傘の柄を強く握り締めた。
「……まあ、しかし、お前にしか出来ない事もあるかもな」
店長は机の上に置いてあった紙の束を手に取る。
「アイギス、メドゥーサの力が心を持たない無機物に通じるかは分からん。が、何も持っていかないのでは心許ないだろう」
「……それは？」
「タロス。ギリシャ神話において、鍛冶神ヘパイストスに作られた自動人形。これが、お前らの相手だ」
「ギリシャ神話の、自動人形……」
「オリジナルではないが、暴走した自動人形のモデルとなったモノらしい。ご丁寧にも、情報部が資料を送ってきたんだ」
店長は紙束の中から数枚を抜き取った。
「クレタ島を知っているか？」
一は首を横に振る。
「私も知らなかったが、ギリシャ神話の主神がとある人間の女に一目惚れした。その女の名はエウロペ。ヨーロッパの語源となった女だ」
「はあ、それで」
「その神様がエウロペを連れて行ったのがクレタ島だ。そこで、神

はその島と、その女を守る為にタロスを置いていったんだろう」
「はあ、つまり、番人って奴ですか」
「少々攻撃的過ぎるきらいはあるがな。島に近付く船には岩を投げ付けて破壊し、近付く人間には、体から高熱を発して、抱き着いて焼き殺すそうだ。……タロスとは、クレタの言葉で太陽を意味するらしい。現地の人間が、タロスが侵入者を焼き殺す様子を見て、そう名づけたのかもしれないな」
そこで、一は首を傾げた。
「島の人間には攻撃をしなかったんですかね」
「知らんが、そうじゃないのか。あくまで侵入者、外敵に対してのみ攻撃を加えるよう言われていたのだろう。所詮は人形、ガキの使い以上の事は出来なかったと考えるのが自然だな」
「言われた事以外をやっちゃう人よりマシだとは思いますけどね。店長、タロスに弱点はないんですか？」
「そんな都合の良いものが……、あ、いや、あるな」
「本当ですか？」
「ああ」と頷き、店長は資料に目を落とす。
「タロスには神の血、イーコールと呼ばれる液体がその体に流れている。言ってみればガソリンだな」
「ガソリン……」
「車と同じだ。ガソリンがなければポンコツに成り下がる。同じように、タロスから神の血とやらを抜き取れば良い」
「いや、けど、どうやって？」
相手は車と違い、好き勝手に動き回り暴れ回るのだ。液体を抜き取る方法がないのなら、意味はない。
「抜き取る方法ならある。タロスの体内には一本の管が埋め込まれているんだ。その中を血が流れている訳だな」
「人間でいうと血管ですか。芸が細かいっつーか、無駄に凝ってるっつーのか」
「タロスの踵には栓がしているらしくてな、そいつを抜けば、体内

の血が抜けてしまうそうだ」
「……栓が？　俺たちからすれば有り難いですけど、作った人はどうして弱点まで作ったんでしょうね」
「ここを狙えば勝てるぞと、明確な弱点ではないのだろう。製作者自身の為に栓を付けたのだろうな」
　店長は新しい煙草に火を点けて、資料を机の上に放った。
「スイッチだ。もしも人形が命令を無視したりして勝手な行動をした場合、あるいは邪魔になったから機能なりを停止させたい場合の為に、栓を付けたんだろう」
「……電源のオン、オフを切り替えるような感じなんでしょうか」
「そんなところだ。余談になるが、オートマータと同じく人に作られる巨人、ゴーレムというモノもある。こいつにもタロスの栓と同様に、その動きを止める為のスイッチがあるんだ」
　ゴーレムなら聞いた事がある。一は想像力を働かせて、石と泥で出来た巨人を頭の中に描いた。
「ｅｍｅｔｈ（真理）。ゴーレムには、そう書かれた羊皮紙が額に貼り付いている。あるいは直接書かれ、刻まれているのが普通だ。動きを止めたい、壊したい時はその文字を削る。エメスのｅを削ってｍｅｔｈ（死ん）（だ）と。死を刻むという訳だな」
「店長、博識なんですね。見直しました」
「資料に書いてたんだけどな。まあ、タロスについてはこんなところか」
「つまり、踵にある栓を狙えば良いんですね」
　店長は喉の奥でくつくつと、殺しきれない笑みを漏らした。
「甘いな。今、私が話したのはギリシャ神話のタロスについて、だ」
「えーと……？」
「技術部はタロスをモデルにした自動人形を作った。が、そっくりそのままタロスをコピーしようとするかな？　現に、どうしてソレは動きを止めない？　まだ破壊されていない？　踵に付いた栓を抜けば良いんじゃないか？」

「栓を抜くのに手こずっているんじゃあないんですか？」
「……まあ、栓なんてないんだけどな」
何食わぬ顔で言い放つ。一は店長を睨み付けようとして、逆に睨まれて目を逸らした。
「少なくとも、私は技術部の連中から『栓がある』なんて話を聞いていないし、情報部も同じく『栓がある』なんて話を聞いていないらしい」
「手の打ちようがない気がするんですけど」
「そう悲観的になるな。モノである以上は壊れるようになっている。作られたモノなら、然り、だろう？　大体だな、今までに打てる手を用意して戦場に臨んだ事があるか」
ほぼ、ない。今まで考えなしに戦って、よくぞこうして生きていられるものだと一は思った。
「向こうにはナナがいる。技術部の連中もいる。お前が考えなくとも、誰かが何か思いつく。駒になって言われるがまま動けば良いんだ」
「……しかし、よくもまあ楽観的っつーか、都合の良いような事を考えられますよね」
「それは私を褒めているんだろうな？」
鋭い視線を向けられては、そうでなくてもそうだと言わざるを得ない。
「まあ、良い。怪我さえしなけりゃ明日からも……いや、戻ってきてからも働けるんだからな」
「あはは、鬼」
「笑うな天の邪鬼」
「じゃ、行ってきます。最近はこの店も静かになってきましたね。留守番、寂しくないですか？」
「寂しいからさっさと帰ってこいとレジが言ってたぞ」
一筋縄ではいかない奴だと思いつつ、一はバックルームを抜け出した。

「遅いっ」
「悪い悪い、さ、次はオンリーワンの支部だってよ」
全く悪びれた様子を見せない一に、シルフは気を悪くした。
「オマエさ、シルフ様に悪いなーとか思ってないのかよ」
「へ？　思ってるよ」
「おっ、思ってるなら、何かあるんじゃないのか」
何かとは何だろうサムシング。一は首を傾げて、シルフを訝しげに見遣った。
「ごめんなさいの印だよ。シルフ様はすっげーエライ風のせーれーなんだぜ」
「はあ、つまり何かよこせとおっしゃいますか」
「おっしゃる！　お菓子で良いよ、お菓子で」
「安っぽい奴だな」
ぼそりと呟く一を、シルフはぎらりと睨み付ける。
「……シルフ様はお菓子で良いって言ってんだ。オマエが悪いって思ってる、その気持ちを物に変えるのが、いやっ、違うな、変えようって気持ちが大事なんじゃないのかよ」
「じゃあお菓子じゃなくても良いんだな？」
「うっ、いや、そーゆーわけじゃないような……」
目を泳がせるシルフを見て、一は腕を組む。思えば、彼女には随分と世話になっていた。果たして菓子程度の物で許されるのだろうか、許されても良いのかと、彼は考えてみる。
「悪いけど、今は我慢してくれ。終わったら、そうだな、何かやるよ」
「何かって何さ？」

「……まあ、楽しみにしててくれ」
「ケーキとかが良いなー！」

天津の号令に応じて対物ライフルが振動し、凶暴な咆哮を上げる。建物内の人間は耳を塞ぎ、サポートに来ていた医療部の者は身をも震わせた。

弾丸はソレの額に当たり、しかしソレが頭を上げた直後に上空へと弾き返されてしまう。恐るべき性能で、こんなものを野放しにしている自分たちを、天津は強く恥じた。

しかし、予想通り。悲しいかな予定通り。

「ソレの右を狙ってっ」

ソレの注意を引き付ける囮を買って出た天津。彼が建物の外に飛び出すより先、技術部の人間数名が拳銃の引き金を引く。尤も、彼らの標的はソレではない。そのすぐ傍の地面である。

ソレが、着弾した音に気を取られたのを確認して天津が駆け出した。

「ぼ、く、ガ……」

外にいる人間。つまりは外敵、侵入者。ソレは天津の姿を認め、掴んだままのナナを一瞥する。手を離せと、その様子を見ていた者たちは祈った。

果たして、その祈りが通じたのか定かではない。祈りを聞き届ける神がいるかどうか定かではないのだ。しかし、ソレはナナを手放している。彼女を捨てたのは移動の、新たな侵入者を捕獲するのに邪魔になったからだろう。あるいは、動かないナナからは脅威を感じなかったのかもしれない。

「分かっているね！」

近付いてくるソレから距離を取り、天津は待機している者たちに向かって叫んだ。

ソレは首を巡らし、猫背になって歩き出す。天津はソレとナナと

の間隔を開ける為、更に後方へと下がっていった。
「タロウっ、どうした、君の任務は侵入者の排除だろう！？」
「まず、タア……？」
「そうだ、僕を捕まえてみせろ」
天津はソレの後ろ、うつ伏せで倒れているナナに目を向ける。距離はもう充分に稼いだ。ならば――――。
ナナの救出に当たっていた技術部の三名が、遂に覚悟を決めた。彼らはソレに気付かれないように、足音を殺して外に出ていく。ソレとの距離は十メートル弱。これ以上待てばソレを挟んで孤立している天津の帰還は難しくなり、ソレがここから離れてしまうかもしれないのだ。ソレがオンリーワンの者しかいない支部の周辺を離れ、一般に被害を与えるような事は許されない。
「七号、起きてくれっ」
「駄目だ、先に中へ運ぶんだよ」
「……重……っ」
頭、胴、足。三人がかりでナナを持ち上げて運ぼうとするが、素早くは移動出来ない。
「主任は？」
問われ、ナナの足を持っていた男が天津の様子を確認する。
「まだ無事だよ。タロウの足が遅いお陰だな」
「……何だかんだで起動したばかりだ。体の動かし方を分かっていないんだろう。急ごう、それもいつまで続くか分からない」

体が持ち上がった感覚にナナは目を開ける。閉じていた瞼は妙に重く、開いた時、陽光がやけに眩しく感じられた。
自分を運んでいるのは三人の男、生みの親の技術部の人間である。そう認識した瞬間、ナナの体から力が抜けた。一体、自分は何をやっているのだろう、と。ソレを打倒するべく生まれ、人を守護し、人に奉仕する為に作られたモノが人に救われている。彼女は自由に

なっていた両腕をだらりとぶら下げ、僅かに首の位置を動かした。
「七号……？　目が覚めたのか？」
目なら最初から覚めている。人形の自分が眠る事などない。死ぬ事もない。本来なら、命令を無視して倒れたままというのも有り得ない。
――――そう作ったのはあなたたちでしょう。
「……申し訳、ございません」
「良いから、気にしないで」
「ほら、支部の中は安全だから」
ようやくになってナナが下ろされたのは、ロビーの床だ。そこには彼女の帰還を待ち望んでいた者が多くおり、喝采を上げ、あるいは安堵の息を漏らす者もいる。それら全ての人間を見回し、ナナは俯いた。
「ナナちゃん、怪我はない？　大丈夫？」
「私はオートマータですから怪我をしません。問題、ありません」
駆け寄ってきた炉辺を一瞥し、ナナは素っ気なく返答する。
「まだ、戦うの？」
それが任務だ。それが意義だ。それだけが許可されているのだ。
ナナは立ち上がり、支部の外を見遣る。
「当然です。私はその為に作られましたから。……それより、何故天津さんが外におられるのですか」
「君を助ける為、引いては、自分たちが助かる為だよ。七号、本当に戦えるのかい？」
「整備、調整は不要です。このまま行きます。このままで行けます」
背を向けるナナに、彼女を運んできた技術部の男は疑いの視線を向ける。
「じゃあ、どうして倒れていたんだ。どうして動かなかった。何か不都合があったんじゃないのかい？」
「……スラスター。脚部に、違和感を覚えました」
「そう、なのか。今は？」

「何一つ問題ありません。では、ナナは任務に復帰します」
嘘を吐いた。どうしてなのか、ナナには分からない。そも、どうして動かなかったのか、抵抗しなかったのか、それすらも分からないのだから。
「……済まない、七号。こんな事になってしまって」
「お気になさらず」
「君に与えられる策も武器もない。許してくれ、僕たちは……」
「お気になさらず」
そう、彼らは、人間は無力だ。しかし人間は無知ではない。自分たちが無力だと知っていたから、力のあるモノを作った。自分を、生んだ。人間には出来ない、やりたくない事をさせる為に。ソレと戦わせる為に。ソレを殺す為に。ソレに壊されても構わないように、人形を作ったのである。
恨みはしていない。呪いはしていない。嫉みも、嫉みも、辛みも苦しみも。全て出来ない。自分には許されていないのだから。
人形である為に人形を壊す。自身の存在を確かめる為に他者の存在をこの世から――――。

「何か、出来ないのか」
呟き、男は座り込む。ソレに向かうナナの背を見て、彼は涙を堪えた。……あまりにも、その後ろ姿が悲しいものに見えてしまう。
ナナは人形だ。しかし、男にはどうしてもそう思えないのである。
「何か、他に装備はなかったか……？」
「七号は手持ちを使い切ってるし、ソレには効果もなかった。無理だよ、他のアタッチメントにも、奴の装甲を貫けそうなものなんか……」
――――本当に何もないのか？
ならば、自分たちはどうしようもない役立たずでしかない。ソレに対抗する為に作ったモノが、ソレよりも厄介なモノになっている。

「俺たちは、何をやってたんだ。何を作ってきたんだよっ！」
男は叫ぶ。自分たちは人間を苦しめる為に技術部を名乗っているのではない、と。
「違うだろ！　そうじゃない、俺たちにはまだ何か残ってる！　倉庫掻き回してっ、それでも何もないなら何か作るんだよ！」
「……けど、今からじゃあ……」
「――――そんな事分かってるんだよ！」
倉庫を探しても何も見つからないだろう。もう遅い。何を叫んだところで時間は戻らない。遊びでやってきた訳ではなかった。しかし、何も思いつかないのである。男にはもう、声を荒げる事しか残っていなかった。
「いや、あるんじゃないか」
口を開いた者を全員が注視する。まるで、神様でも見るような、胡散臭い目付きで。
「確か、七号の開発初期に凍結させた装備があった筈だ。……使い物にならないって理由でな」
「使い物にって……」
「使いどころが見つからなかったんだよ。七号の汎用性とは掛け離れたアタッチメントだったからな」
「そんなものあったのか？」
皆が顔を見合わせる中、思い出したように手を打つ男が一人。
「……そうだ、主任だ」
「主任、だって？　まさか、あの人勝手に……」
「ああっ」と、別の男が声を上げる。彼はしてやられたとでも言いたげに拳を握り締めた。
「開発費だよっ。ほら、やけに金が飛んでった月があったじゃないか。しかも用途不明だって上からめちゃめちゃ怒られたアレ」
一同がその日を思い出す。実に理不尽で唐突な災難を。
「そうか、あの金は主任が趣味に使っていたのか……あの野郎」
「ま、まあ、そのお陰でどうにかなるかもしれないんだし」

「しかし開発はどこまで進んでいるんだ？　既に完成しているんだろうな。と言うか、そんなものどこに隠してあるんだ？」
「主任を呼び戻すしかないみたいだね。……どうしようか」

天津に気を取られているソレの背後に立つのは容易だ。問題はそのあと、いかにダメージを与えるかである。ナナにはソレに通用する武装がない。
「……やはり、やる事は一つですか」
さっきから何一つとして変わっていない。この拳を以て、壊し壊されるしかないのだ。
「七号っ」
天津が叫び、ナナは駆け出す。ソレの頭部に飛び掛かり、全体重を両膝に乗せた。それでも、敵はびくともしない。
「お、マエ……」
ソレが腕を振り回す。ナナは意に介さず、ソレの頭髪を掴んだまま膝を叩き込み続けた。不安定な姿勢ながら、彼女は尚も攻撃を止めようとしない。
「七号無事なのか！？」
「私は問題ありません。天津さんは早く支部にっ」
天津は頷き、ソレの脇を抜けようとする。が、
「……っ、いけません！」
ソレはナナを振りほどき、天津を追った。さっきまでの鈍重な動きとは違う。ぎこちなかった動作は消え失せ、それが本来の動きだと言わんばかりに、軽やかに。
「伏せてくださいっ」
ナナの指示に従い、天津はその場に倒れ込む。瞬間、彼の頭上を凄まじい音と風圧が通り抜けた。ソレが天津を払おうと腕を振ったのである。
尚も、ソレは止まらない。

「しンにゅシャ、ここ、だメ」
「タロウ……！」
天津が自分を生み出した者だと気付いてはいないのだろう。ソレは腕を大きく振り上げ、下ろす。
「あなたはぁぁあ！」
ナナが天津を庇うべく彼の前に立ち、下ろされた腕を受け止めた。衝撃で彼女の足元にあるコンクリートがひび割れる。
「か、完全に起動しつつあるんだ。これがタロウの、本当の……」
「早く逃げてください！」
しかし、天津は立ち上がらない。自分たちが生み出したモノの力に見惚れてしまっている。無力な自分は、強力なモノを作れるのだと、そう思ってしまった。
「……持た、ない」
既にナナの頭は下がりつつある。彼女の力なら押し退けるのは簡単だ。だが、天津がいる。彼を逃がすまではこの状況を維持し続ける必要があった。
「オマえ、にてる」
ソレが不意に口を開く。ナナはその意味を捉えられない。
「オまエ、ボクと、そっくリ」
顔を上げると、笑っていた。ソレは、にいいと口角を上げて目を細めている。
「ちっ、ちが……」
ソレが力を込める。ナナはその力に付いていけず、膝を曲げる事でどうにか耐えていた。
「ボクとおナじ、オマえ、ニンゲンジャアない」
「ちが……」
「おマエ、ぼクの、なかマ」
「違うっ」
力を込める。押し退けろ。ぶち壊せ。自らが壊れても構わない、動けなくなっても知るものか。ナナはソレの拳を少しずつ持ち上げ

ていく。
「私とあなたは違う……っ！」
「オナじ……」
「私はあなたとは違う！」
ソレの巨躯が宙に浮いた。ナナは彼の腹部に強烈な掌底を両の手で見舞う。短く呻き、ソレは地面を転がった。
ナナは、惚けていた天津の手を取って無理矢理に立ち上がらせる。
「早く、中へ」
「あ、ああ……」
走り出す天津とソレの間に立ち、ナナは起き上がろうとする敵を見据えた。ダメージなどない。ただ、吹き飛んだだけなのである。しかし、これで誰かを気にしないで済む。何も気にせず、戦闘にだけ集中出来るのだ。
「スペックは互角、でしたか。……どうやら本当に、仕掛けるなら自滅承知の、超マジなアタックしかないようですね」
両足を地に、踏み均すように、踏み砕くように叩きつける。両腕を上げ、ソレの姿を正面に捉えた。

戻ってきた天津にはささやかな罵声と非難が待っていた。彼は訳が分からず、部下たちに囲まれて弁解を試みる。
「いっ、いきなり何を！　君たちは！」
「さっさと出してくださいよっ、あなたがこそこそと遊んでたのは知ってるんだから！」
「何をだっ」
「こっちがそれを聞いてるんです！」
噛み合わない会話に辟易としながらも、天津は囲みを抜け出した。
「何を出せと言うんだ……」
「七号の武器ですよ。あるんでしょう」
はてと天津は首を傾げる。

「この期に及んでっ、しらばっくれ出来る場面ではないでしょうが！」

「凍結させてた七号のアタッチメント！　その開発費で俺たちがキレられたのを忘れてんのかコラ！」

迫られて、天津はようやく思い出した。

「あー、そういえば……」

「てめえふざけんなや！」

「だっ、だってあの頃は加治さんのヘンタイな発明に付き合わされて……ええいっ、忘れていたんだから仕方がないじゃないか！」

「逆切れしてんじゃないぞ！　このクズが！」

「そうだネクラ！」

「早く主任を辞めろ！」

どさくさ紛れのただの悪口にも触れられないで、天津は段々と壁際に追い遣られていく。

「分かったっ、分かったよ！　持ってくるから！　だからもう責めないでくれ！」

「完成してるんだろうな！」

「あ、いや、まだ調整とか……」

「ノロマがっ」

「そんなだから結婚出来ないんだぞ！」

「僕は技術と結婚するんだっ」

「技術どころかネジにすら嫌われてんだよあんたは！」

「給料泥棒！」

炉辺が止めに入るまで、天津は罵られ続けていたという。

火花が散る。視界を横切るそれは標的の顔を一瞬間だけ隠した。攻撃を繰り出すのに声を放つ必要はない。ただ、人間なら思いを乗せて、届かせる為に、貫く為に叫ぶのだろう。だから、自分には必要ない。

ソレの繰り出す拳に合わせて、自らの拳をぶつけていく。がきりと音が鳴り、聴覚を騒がせた。お互いにダメージはない。黙々と攻撃を交換して少しずつ装甲を削っていく。並のソレなら、普通の人間ならとっくに息絶えていてもおかしくない攻防は尚も続いた。両者は決定打を与えられないまま、足をその場に縫い付けるかのように、立ち止まって攻撃を繰り返す。防御はしない。回避はしない。愚直に、機械的に、悪魔的に淡々とした殴り合い。ペースは乱れず、常に一定の速度で攻撃を続ける。

ナナは一度だけ支部に視線を遣った。これが望みなのだろうと、技術部の者を見遣った。彼らはこの為に、これだけの為に自分を、自分たち人形を作ったのである。戦っている間は、自分でいられるのかもしれない。彼女はソレを見つめて、相手の腹を殴り付けた。その後、頭部を殴り付けられる。見ているだけで気が狂いそうになる戦闘をナナたちは止めなかった。止められないのである。

敵を倒せと、組み込まれた、埋め込まれた何かが騒ぐのだ。そうしろと、そうしなければ、自分ではないのだと。

右腕で腹を、返す刀で頬を殴り付ける。甲高い音が響き、ソレの装甲が僅かに削られた。

重い一撃を額で受け止める形になり、ナナはソレを睨み付ける。彼女は相手の顎を下から打ち上げた。ソレの顔が跳ね上がり、向こうの攻撃が止まる。

ナナは一歩踏み出し、ソレの胸元を、後退りする標的の腹部を叩いた。

ソレは片膝を着き、ナナを見る。彼女は腕を振り上げてその顔面を打ち下ろした。

何度も、何度も、何度も。

一気呵成に攻め立てるナナだが、彼女はソレの不可解な行動を認めて動きを止めた。

ソレは反撃を試みずに、コンクリートに手を当てている。指を立て、力を込めている。何をとは問うまい。ソレが腕を上げ指を引き

抜くと、彼の五指には刳り貫かれたコンクリートが突き刺さっていた。

それを、投げる。

ソレの狙いはナナではない。支部だ。苦し紛れに繰り出した攻撃なのか、それとも計算して割り出した攻撃なのかは定かではない。

が、見過ごせない。敵の目論みに気付いた彼女は体を投げ出す。

ソレが投げ付けたコンクリートの塊を真正面から食らい、ナナは地面を転がった。砕けたコンクリートが降り注ぎ、彼女を容赦なく打ちのめす。次いで、ソレが走り出す。彼は足を高く上げ、倒れているナナを踏み付けた。

「この……っ」

脱出しようともがくが、体重差はいかんともしがたい。

「ボく……うれシい、ながま、でキタ」

「違う、違うっ」

踏み付けられ、歪んだ顔で微笑み掛けられる。何が仲間だ。ナナは頭を振り、両腕で地面に突っ張った。

「ちがワナい」

ソレは体勢を低くし、地面を殴り付ける。彼が腕を、指を引き上げると、先と同じようにコンクリートの塊が引き抜かれていた。

「……あなた、まさか……」

ナナの問いに答えず、ソレは無造作に腕を振る。

そこには、親がいる筈だ。自身を生み出したモノがいる。だと言うのに、ソレは一切の躊躇なく、支部に向かってコンクリートを投擲した。

「皆無事かっ!?」

ロビーにいた者たちは投げ込まれたコンクリートに戸惑い、逃げ惑う。技術部の誰かが叫び、全員の無事を確認した。しかし、

「これを狙っていたのか……？」

放たれたコンクリートの塊は対物ライフルに命中している。下敷きになったそれはもう使えない。
「だとすれば、タロウは俺たちの計算通りに学習している事になるな。……今となっては喜ばしくない事だけど」
「高かったのに、これ。主任が戻ったら泣くかも」
粉々になったライフルを見つめ、技術部は溜め息を吐いた。
「……主任は？」
「まだ掛かるって。それに、七号がいなきゃ取り付けと調整が終わらないそうだよ」
「いや、それは……」
起動してから徐々に自身の能力を発揮しつつあるソレ。踏み付けられ逃れられないナナ。先刻と似た状況だが、寸分違わず同じではない。悪化しているのだ。
「タロウの動きが速くなっている、か。くそ、さっきと同じ手がそのまま使えるとは思えないな」
「使ったとして、犠牲者が出ないとも……いや、確実に出るだろうなあ。囮はすぐ捕まりそうだし、気を引かせるライフルもない」
「……けど、七号を戻さなきゃどうにもなんないよ」
やる事は変わらない。変わるのは難易度、その一点。犠牲を払わなければナナを救出出来ない。
「覚悟なら、出来てる、かな」
「まだやりてえ事とかあったんだけどなあ」
「死ぬと決まった訳じゃない。まだ僕たちにも使えそうな装備はあったろ、集められるだけ集めて……」
「どんなもの持ってきたところで、アレの前じゃあ紙に等しいけどな」
「水を差すなよ。つーか、今更死にたくないなんてナシだろ」
仕方ない。やらなきゃ駄目。ぶつぶつと呟きながら男たちは歩き出す。
「まあ、体張る機会なんてそうはないよな」

「たまには僕たちもソレと戦わなきゃ陰口叩かれるし」
「いやー、もう遅いだろ。知ってるか、戦闘部の奴らは俺らを嫌ってんだぜ」
「ははっ、何それ、お互い様じゃないか。肝心な時に働かないくせに」
「じゃあ吠え面かかせてやろう。あいつらの内、誰かが戻ったら見せてやるんだ。ぶっ壊したソレの上に乗ってさ、『遅かったな』って」
男たちは走り出す。医療部の制止を振り切って、無茶はしないでと言う炉辺の声を聞き流して。
「『またくだらんもの作ったのか』とか言われるのがオチと見たね」
「うわーっ、ムカつくなそれ！」
「死にたくねえーっ」
「どうせ七号が駄目なら僕らも死んじゃうんだし、そうでなくとも責任取らされて死ぬような目に遭うかもしんない」
「じゃあ格好良く死のうってか？」
彼らの目はぎらぎらと輝き、異様な雰囲気を漲らせている。皆、戦いの空気にあてられていた。実際にソレとの戦闘に赴かない技術部にとっては初めて触れたモノなのである。だから、狂った。楽しくなってきた。知っていた。聞いていた。ただ、彼らが見ていないだけで、今までずっとそうだったのに、この異常を、この世界を初めて理解した。そんな気分に浸り、酔っている。
「格好悪いよ。自分らの作ったものに殺されるんだから、ある意味自殺だよね」
「結局何したって駄目じゃん！」
「何もしないより死んだ方が良いだろ」
「死にたくねーって！」
「じゃあついてくるな！」
オンリーワン近畿支部技術部、今日、ここに居合わせた、居合わせてしまった者全員が走っている。役に立たない装備を持ち出す為

に、何も出来ないと分かっていながらソレに立ち向かう為に、だからといって立ち止まれないから死ぬ、その為だけに。

屋根から屋根へと乗り移る。人目を避けて飛び移る。風が吹き、視界が上下に揺さ振られ、一の三半器官は揺さ振られた。

「……あの、もっとゆっくり」

「はあーっ！？」

一を後ろから抱きすくめるシルフは彼を睨む。

「ちんたら跳んでられないっつーの。つーかさ、オマエそろそろ慣れろよ」

「いや、無理だろ……」

人間の体は飛ぶようには出来ていない。空中で生きられるように作られていないのだから、そりゃ、こうなる。むしろ酔ってしかるべきなのだと一は言いたかった。

「へへっ、気持ち良いだろ。オマエってすごい運が良いんだぜ」

しかし言ったところでどうしようもない。一の生死を握っているのはシルフであり、彼女の機嫌を損ねる事は躊躇われた。

「だって、俺ただでさえ風邪引いてやばいってのに……」

「じゃあ行かなきゃ良いじゃん」

「けどさあ」

「行くって言ったのはオマエだろっ、つべこべうるさい」

このワガママっ、と付け足され、一は反論する気さえ失う。

「シルフ様を乗り物代わりに使いやがって。罰当たりめ。あーあー、昔は良かったなあ」

「昔？」

「魔術師とか錬金術師とか、昔のニンゲンはさ、シルフ様を超敬って奉ってた訳」

「へー、信じらんねえ。……こんなのに会いたいとか、どうかしてたんだな、昔は」

ぴたりとシルフの動きが止まる。つまり、一も空中で立ち止まる形になった。
「……落とすぞ」
「ごめん」
「今のニンゲンにはシルフ様への感謝？　とか、そーゆーのが足りないと思うんだよなー」
「俺は感謝してるよ」
シルフは一の顔を覗き込もうとして、咄嗟に顔を逸らす。
「嘘だ」
「嘘じゃねえよ、馬鹿じゃねえの？」
「シルフ様さー、たまに思うんだよな。どうしてオマエみたいな奴の言う事聞いてんのかなーって」
「嫌だったら断れば良いだろ。……と言うか、今回に限っては頼んでねえし」
「は？　頼んだだろ」
頼んだ覚えはないが一は黙る。
「まあ、アレじゃねえ、友達だからじゃないのか」
「シルフ様と、オマエが？　ふん、馬鹿だなオマエ。せーれーってのはすごいんだから、すごくないニンゲンなんかと友達になる訳ないじゃないのさ」
「じゃあ下僕とか」
「ふーん。誰が、誰の？」
「……あー、俺がシルフの、です」
「命拾いしたな」と、シルフは嬉しそうに呟いた。彼女は遠くを見つめ、一をちらりと見遣る。
「やっぱし戦うんだよなーオマエ」
「状況によりけりだよ。俺だって好き好んで死のうとは思わないからな」
「でも、オマエは馬鹿だから」
「悪かったな」

「だから、まあ、シルフ様が付いててやらないと死んじゃうかもしんないし。そしたらお菓子食べられなくなっちゃうし」
シルフは一の頭に顎を乗せ、目を細めた。
「もうちょっとだけ、助けてやるよ」

人間と触れ合い、彼らを知った。
人間になりたい、彼らを羨んだ。
人間でありたいと望んだ。彼らに近付きたいと、そう望んだのは嘘ではない。だが、人形である自分が笑えたとして、泣けたとして、結局のところ何も変わらない。模倣でしかなく、ある種その行為は彼らに対する冒涜でしかない。
――――それでも、私は。
せめて、心を。
心を欲する事が叶わぬと言うのなら、この身には適わぬ思いだと言うのなら、せめて、心を知りたい。人間を知りたい。そうさせたのは、彼だ。

「いつまでもっ、私を足蹴には……！」
ソレの体が浮き上がり始めた。ナナは両腕に先よりも力を込め、圧し掛かった足を体全体で押し上げる。
「ウウうウっ、オまエ……」
「この身を自由に出来るのはあなたではありません！」
跳ね上げたソレの足を掴み、ナナは体を捻る。
「これが私のっ、ドラゴンスクリューです！」
腹の底まで響く轟音。ソレは地に這い蹲り、腕を上げた。その仕草はまるで、誰かに助けを求めているようにも見える。
ナナは立ち上がり、スカートに付いた埃を払った。眼鏡の位置を直そうとした指が、所在なさげに空を切る。彼女は目を細めて支部の様子を見遣った。どうやら、死傷者は出ていないらしい。その事

に安堵し、両手を上げて構える。
「七号っ！」
「……？」
ナナが振り向くと、支部からは技術部の男たちが姿を覗かせていた。何故か、彼らは物々しい装備に身を包んでいる。とは言え、大層なものではない。自分やソレに比べれば、同情してしまうほどに貧相なものではあるが、彼女の目を引くのは全員が手にした大きな盾だ。
「ライオットシールド……？　何故、ですか」
「七号、君は支部に戻るんだ！」
「ここは俺たちが引き受けるから！」
どこを誰が引き受けられる。
「そんな、駄目。駄目です、早く戻ってくださいっ」
技術部が走る。既に彼らの目はナナを捉えていない。熱に浮かされた彼らが見ているのは、ソレだけだ。
「何をやっているんですか！？」
ナナには理解出来ない。正真正銘、ただの人間である技術部が何人集まろうと、犠牲者を増やす事にしかならない。ソレと戦える筈がない。
なのに、彼らは走る。
一目散に死へと。一直線に終わりへと。

死ぬのは恐い。穴蔵のような地下にこもり続けていたせいか、この世全てが敵に思えて仕方がなかった。陽光に目を細め、睨み返して突き進む。盾に身を隠しながらソレに向かう。
「あ、あア、しんにュうしャ、いっパイ……」
「やめてっ、やめてください！」
彼女をこんな目に遭わせているのは自分たちだ。救いのない世界に産み落とし、代わりに死ねと強要した。許されないと知っていな

がら、知っているからこそ、
「おおおぉぉお！　押さえろうっ！」
走る。
立ち上がったソレは腕を払った。それだけで、盾もろとも弾き飛ばされる。
倒れ、吹き飛び、転がる仲間に声を掛けずに目もくれずに、追い付いた者たちはソレに食らい付く。持ち上がった腕に怯える事はない。
「がああああぁっ！」
数人掛かりで盾をかざす。ソレの攻撃を受け切れずに、また一人弾かれる。その穴を埋めるかのように後続の者が盾をかざして割り込んだ。
「七号！　君は支部にっ、主任のところに戻れ！」
「置いていけません！」
ナナはソレの腕を蹴り上げ、技術部を援護する。が、彼らはそれを求めていない。
「主任は待ってる！　君に与えられる最後の武器を持っているんだ！」
「それでは本末転倒でしょう。ソレから皆さんを守るのが私の役目です」
ソレが両腕を振り回す。近くにいた者から、呆気なく吹き飛んだ。中には盾の壊れた者もいる。血を流し、動かない者もいる。
「違う！　お前の役目はソレを破壊する事だっ、僕たちは気にするんじゃあない！」
ナナはソレの右腕を押さえ、残った者たちが必死になって左腕を押し止めた。
「君が行かなきゃ意味がないんだぞ！」
「死にたくねえけど、無駄死にすんのはもっとやだからな！」
「……せめて、動けない方を連れていくだけでも」
「動けない奴なんかいないっ、早く戻ってくれ七号！」

血を流していた者の足はふらついていて。それでも爛々とした瞳でソレを強く見据えている。とても、戦える状態ではなかった。それどころかまともに動けるようにも見えない。

「ここまでする必要性を感じられません。私一人でも……」

「無理だよ。七号、君が一番分かっている筈さ」

「無理ではありません」

蛮声が四方から上がる。ソレは首を巡らして、盾を構えた男たちを認めた。

「押し問答をするつもりはないぞ。七号、僕らは君の親なんだ。親の言う事は聞くものだろう」

ナナの傍まで来た男はそう言って、陣に加わった。瞬間、また誰かが崩れ落ちる。

「全員で掛かるな！　五人ずつで回してくんだっ」

「……っ、どうして人間たちが出張るのですか！」

ナナの隣に盾が並ぶ。彼女を押し退けようとしているのだ。一人、また一人、無謀にもソレに力比べを挑んでいく。

「退いてください、危険だと分からないのですか！」

しかし、退かない。

技術部の者たちは倒されても立ち上がり、盾を失えば別の者に手を貸した。押し負けそうになれば手の空いた者が割り込み、再び押し返そうとする。決して倒せはしないのに、いつか必ず破綻する状況を継続させようとしていた。

「ぼっ、僕たちを死なせたくないんなら、早く主任のところに……」

全ては喜劇。彼らの行為は勇猛ではなく勇敢でもなく滑稽でしかない。

「私が抜ければっ、数秒と持たないんです！　第一、あなた方がここに来る必要なんて！」

――――ない。

全員が己の浅はかさ、無力さを良く知っていた。必要はない。ただ、ここに来たかっただけなのである。責任を取る為だと誤魔化し

て、命を捨てようとしているだけだ。
「……七号、済まなかった」
「俺たちは、君に何もかも押し付けようとしている」
「それが私の作られた理由ですっ」
今更謝るな。多くの者にはそう聞こえた。
「頼む……！　こいつをやれるのはお前だけなんだ……」
「無理です！」
「わがままな……」
「わがままを言ってるのはそちらじゃないですかっ」

ああ、と、シルフは呟いた。ぼんやりと思った。
風を感じられる自分には分かる。風が運んでくる空気の肌ざわり、重さが変わった。この街に来てから何度も触れた種類のそれである。
「ん、シルフ、どうした？」
「何でもないよ」
戦場の臭いが鼻を突いていた。果たして、万全でない一をそこに連れていっても良いのだろうかと、彼女は柄にもないと自覚しながら悩む。
「おーいスピード落ちてんぞ」
「うるさいな馬鹿。……なあ、オマエはさ、どうして戦うのさ」
「言わなかったっけ？」
「シルフ様、聞いてない」
「ああ、そう」と呟き、一は暫くの間、口を閉ざした。
「首を、さ」
やがて、一はぽつりと漏らす。何を喋って良いのか分からないのだと、彼の口調から、シルフはそのように捉えた。
「首を突っ込み過ぎたんだと思う。駄目なんだよな、やっぱり。人間だからさ、世捨て人や仙人みたいには生きられないんだ」
「良く分かんない」

「今になって思えば、寂しかったんだよ。一人が嫌だから、誰かと関わりたくて。で、失敗した。欲張っちまった」
「良く分かんない」
もっと分かりやすく言え、と。シルフは一をじっと見つめるが、彼がその視線に気付く事はない。
「俺たち勤務外がボッコボコにやられたの、知ってるだろ」
「ああ、オマエらみぃんな、チビにやられたんだってな」
「そん時思ったんだよ。『うわ、絶対死にたくねえ』って。そんで、『誰にも死んで欲しくない』って思った」
「そりゃ無理だろ。オマエらはニンゲンなんだし」
「分かってるよ」と、一は拗ねた風に言い放つ。
「でもさ、じゃあせめて、俺がどうにか出来る範囲で誰かが助かるなら、何とかしたいって、そうも思ったんだ」
シルフは息を吐き、一から視線を外した。
「だから、戦うのか？」
「俺がでしゃばって、誰かが助かるんなら」
「弱いくせに」
「アイギスがあるんだから、まあ何とかなるよ。それに、お前がいるしな。俺は弱いけど、痛い攻撃にさえ当たらなけりゃ良いんだし、最悪、こいつで防げる」
アイギスを示して、一は笑う。作り笑いだとシルフは見抜いた。
「シルフ様をあてにし過ぎじゃないのか。良いのかよ、風ってのは気紛れなんだぜ。オマエに飽きたら、どっかに行っちゃうかもしんないぞ」
「その時はその時」
「……その時が来たら、オマエはどうすんのさ」
「その時は、まあ、気長に待つよ。また風が吹くのを」
思わず、笑む。シルフは緩んだ頬を戻そうとして、無理に難しそうな顔を作った。

『私だ』
「ああ、お前か」
私物の携帯電話を持ち替えて、店長は煙草に火を点けた。
「元気でやっているようだな。安心したよ」
『ほう、二ノ美屋店長の口からそのような言葉が聞けるとは』
「安心しろ、社交辞令だ。それよりも何か用か？」
『せせこましい日本に腰を落ち着かせる気分はどうかと尋ねたくなったもので』
「そうか。案外、悪くないぞ。時間に追われるのも、尻の軽い女だと思われるよりは幾分かマシだ」
通話口からくぐもった笑い声が聞こえてくる。久しぶりに耳にした彼女のそれに、店長は少しだけ安堵した。
「今はどこにいるんだ」
『暑くて、うるさい街だ。スーツでは流石に辛い。が、休暇と言うのも悪くないな』
「鈍るぞ」
『それも悪くない。何かから解放されたのは久方ぶりなんだ』
こちらは困る。紫煙を吐き出し、店長は眉根を寄せた。
『……平和な街も、まだあったのだな。離れてみると、駒台は悉くどうしようもないところなのだと思い知らされる』
「帰りたくない、か？」
『まさか。私を誰だと思っているつもりか。オンリーワン近畿支部……』
店長は携帯電話を机上に置き、ぼんやりと煙を眺める。声が途絶えたのを確認してから、再び電話を手に取った。
「で、掛けてきた本当の理由は？」
『ホームシックだ。少しだけ、駒台の人間と話したくなった』
「……私の立場を知っていての発言だろうな。忙しいんだよ、私は。三森に相手してもらえ」

『毎日電話を掛けていたので、飽きた。いや、と言うか奴は電話に出なくなった』
そら出なくなるわ。三森の嫌そうな顔を想像し、店長の口角がつり上がる。
『三森冬には対人コミュニケーション能力が著しく欠如しているらしい。二ノ美屋店長、人の上に立つ者ならば、下の者はしっかりと教育するべきだぞ』
「全く、くだらん」
『ああ尤もだ。……良くない話を聞いた。何でも、北駒台の勤務外が腹を抱えて笑えるぐらい叩きのめされたという話だ』
「どこから仕入れてくるんだ」
『私を誰だと思っている。オンリーワン……』
心から思う。面倒臭いと。そして三森の口の軽さを恨む。
『む、聞いているのか二ノ美屋店長』
「ああ、聞いている。で、そうか、なるほど。お前は一の容体を知りたいらしいな」
『何故そうなる』
「知りたくないなら良いが」
『いや待ってくれ。私は一一に借りがある。恩を返せないまま奴が死ぬのはつまらない。そうは思わないか？』
店長は少し楽しくなってきている。
「まあ、一に何かあったなら三森の反応で分かるだろう。特に何もないし、何も聞いていないんだろう？」
『では、無事なんだな。いや、そうか、つまらないトリビアを聞かせてもらった。何せ、三森冬は一一の話題になると、要領を得ない話し方になり、挙句話を逸らそうとするのでな』
「心配しなくても今は無事だよ」
『今は？　……そうか、ソレが出たのか』
「そうだ」と言い放ち、店長は短くなった煙草を灰皿に押し付けた。
『二ノ美屋店長から見て、今回のソレは一一で対処出来そうなのか

？』

問われ、店長は考える。技術部の自動人形が相手なのだ、一では到底敵うまい。尤も、今回に限って言えば、彼はあくまでおまけなのだ。目には目を。ナナが先行しているのだから、彼女に任せるのが上策である。そして、ナナでも暴走した自動人形を倒せないのなら、その時は諦めるしかなかった。

「いや、無理だな」

『なっ……！　二ノ美屋店長、あなたは一一を殺す気なのか？』

うんと頷いてやろうとも思ったが、相当面倒な事になりそうだったので、店長は堪える。

「問題ない。一はそもそも蚊帳の外だし、何とか首を突っ込めたとしてナナの援護ぐらいしかする事がないからな」

『ならば良し。では切るぞ』

「おい」幾らなんでも分かりやす過ぎて自分勝手過ぎる。

『どうしたのだ二ノ美屋店長、私は忙しい』

「切るのは構わんが、一つだけ質問に答えてくれ」

『む、まあ、良いだろう』

何だか無性に腹が立ったので、一が戻ってきたら弄ってやろうと店長は思った。

「人間と人形に違いはあると思うか？」

『……無論、ある。あって当然だと思うが。それは、私と三森冬に違いはあるかと聞いているのに等しい』

「うん、そうだな。人間は人間、人形は人形だ。人形は、人間になれない」

『人間は人形になれるがな。そも、興味のない話題だ。もっと言えば意味などない。人間同士ですらそうなのだから、人間と人形との間に差異があるのは当たり前だ』

新しい煙草に火を点けようとして、店長は動きを止める。

『人間よりも人間らしい人形がいて、人形よりも人形らしい人間だっているんだ。神魔が入り交じり、人とそうでないモノの境界線が

曖昧になってきた世界だぞ、二ノ美屋店長。今更過ぎる話だとは思わないか』

「そうだな。すまん、余計な時間を取らせた」

『む、素直なあなたは気持ちが悪いな。まあ、良い。息災でな。私はもう暫く、一人でいるのを楽しむ事にする』

通話が切れ、店長は携帯電話を机の上に戻した。

地鳴りのような声がナナに届く。びりびりと、彼女の体は芯から震わされた。しかし退く理由にはならない。同様に、技術部の者たちも。

「退くなっ、死ぬまで退くな！」

「盾が壊れたらっ、体で止めるんだよ！」

――――無理だ。

ナナは彼らを見ながら、そう思った。もう持たない。今までに死人が出ていないのが奇跡なのである。それも時間の問題だ。半数は地に伏したままで動かない。彼女がソレの片腕を押さえてはいるが、もう片方を押さえる人間の数は減り始めている。かと言って、ナナは自由に動けない。彼女がここを放棄すれば、総崩れになってしまうのだ。

「……私は、どうして……」

ソレを倒せず、人間を守れず、人形としての責務を果たせないまま、終わる。

人間の、せいで。

人間がそうあれと望んでおいて邪魔をする。余計な手出しも、気遣いも、この身には過ぎたもので酷く煩わしいのだ。

「うっ、く……」

ナナは目を開く。眼前のソレを、周囲の人間を、自分以外の世界を睨み付ける為に。

「あああぁぁあぁぁっ！」

吠えたところで込めるものも、乗せるものも、届けるに値するものもない。ナナの口から発せられるのは声ではなく、音なのだ。

誰に届くでもなく、音は鳴り続ける。しかし彼女は叫び続けた。

誰にも届かない。どこにも届かない。

ただ、ナナが思っている以上に世界と言うものは広く、圧倒的に、狭い。彼女の世界に隣り合うモノは確かにあって、歩み寄ろうとするモノは確かにいる。届かない。意味を為さない一方通行の音を聞き届ける者だっている。彼女のそれを自分勝手に都合良く解釈する者だっているのだ。

ソレが両腕を引き戻し、再度振り下ろす。ナナは辛うじて堪え、受け止めたが、人間にはあまりにも重過ぎる攻撃だった。彼らは散り散りになって、紙のように葉のように吹き飛ばされていく。

「あ……」

ぼろぼろになった彼らを風が撫でた。優しく、しかし少しずつ強く、鮮烈な。

もう駄目だと覚悟したナナの髪をふわりと揺らし、ぞわりと巻き上げる。

ソレは頭を上げ、吹き荒れるそれを見た。

状況は分からない。誰がどうして、何がどうなっているのかは理解出来ない。

「行くぞ」

「ん、頼む」

風が荒れ、集まり、高く鳴いた。真下に向かい、落ちていく。

――――泣いてた。

彼女が泣いていた。自分の良く知る者が助けを求めている。

自分勝手、自己満足で構わない。好きにやると決めたのだから、理由ならそれで充分である。それだけで一は、ソレの拳を受け止められる。

「ニンゲンっ、こいつが！」
アイギスが一に衝撃を伝えた。強く、重い一撃。彼は堪えられずに後方に吹き飛ぶ。
「一さん！」
シルフは足で地面を叩いて風を集める。一は彼女の動きに合わせて力を抜いた。シルフは衝撃を逃がし、飛翔する。ぐるりと中空で弧を描き、
「……うえぇ」
一は吐き気を催した。
「何してんのさ！」
「だって……」
空中からソレを見下ろし、一は眉根を寄せる。
ソレは空いた手で地面に指を突き刺していた。引き抜かれた五指にはコンクリートの塊が張り付いている。
「何してんだ、あいつ？」
瞬間、ソレが腕を振りかぶった。
「マジっ、かよ」
「吐くなよっ」
急旋回。一の体は引き上げられる。強い風のせいで目が開けられない。彼は音だけで、何か大きなものがすぐ横を抜けていくのを感じた。
「野郎あんな真似も出来んのかよ」
「でっかいくせに器用な奴だな」
「言ってる場合じゃねえぞ」
一たちはソレの腕を掻い潜って再び降下する。地に足を着けたと同時、一はアイギスをかざした。
何も変わらず、何も起こらず、つまりアイギスは発動せず、状況は依然として動かず。
「楽はさせてくれねえなあ」
「一さん、あなたは何を！」

「ナナ、あの人たちを避難させよう」
ナナはソレの腕を離し、掌底で敵の腹部を叩いた。甲高い音が鳴り、衝撃の波が辺りを揺らす。ソレは膝から崩れ落ち、ぐらぐらと首を揺らした。
「勝手な事を言わないでくださいっ、早く一さんも逃げて！」
「怪我人逃がすのが先だろ。俺が注意を引き付ける。ナナは……」
「どうしてここにいるのですか！？」
「え、うおっ」
一に詰め寄ったナナは彼の顔に指を突き付けた。驚いたシルフは、素知らぬ顔で逃げてしまう。
「……店長から聞いたんだよ。それより……」
「いいえいけませんっ、危険です。病み上がりの一さんでは役に立ちません。そうでなくともあなたは北駒台で一番弱い勤務外なのですから」
「だから、言ってる場合じゃないって。早く運んでやれよ」
「一さんが逃げてからです」
「そりゃ、無理だ。ナナの言う事は聞けない」
腰は引いていたが、一は決してナナから視線を外さない。
「何故ですか！　……私が人形だからですか？」
「はあ？　何言ってんだよ、こんな時に」
「私が人形だから人間の一さんは言う事を聞いてくれないんですね」
早口でまくし立てるナナに、一はうんざりした。
「お前は人間だよ。少なくともその辺の奴よりもな。心配してもらったって借りがある。ここは退かないぞ」
「配る心など私にはありませんから」
「店長から話を聞いたって言ったろ。気ぃ遣ってくれて、ありがとな」
「……一さんが感謝する事なんかありません」
「あるね」
アイギスをソレに向けて、一は断言する。

「あるんだよ。ナナ、どっちにしろ今はやばいんだろ。こんな状況じゃあ戦えない」
起き上がろうとするソレを認め、一はシルフを呼んだ。彼女に後ろから抱えられ、彼はナナに目を向ける。
「話はこいつを倒した後でも遅くない筈だ」
「ですがっ」
「ナナに一度は拾ってもらった命だ。簡単には捨てないよ。それに、俺は弱いし臆病なんだ。いざとなりゃ尻尾巻いて逃げるよ」
「……その言葉を信用してもよろしいのですか？」
「よろしいよ」一は頷き、笑顔を作った。
ナナは一とソレを見比べた後、近くに倒れていた技術部の男を抱える。
「皆さんを支部まで逃がすまで、この場をお願いします」
「任せろ」
「結局こうなるんじゃんか……」
シルフが呆れた風に息を吐き、一を半眼で睨んだ。
「時間稼ぎは俺の仕事なんだよ。付き合ってくれ」
一の言葉を鼻で笑い飛ばして、シルフは風を集めた。足元に集約された風が、爆発する。
「知ってるよ！」
一直線にソレへと向かう。反射的に繰り出された攻撃は散漫だ。シルフは中空で急停止、やり過ごしてから、再び加速する。
すれ違いざま、一は畳んでいたアイギスでソレの顔面を振り抜いた。
「かっ……」
が、固い装甲に跳ね返される。アイギスを掴むのに必死の一はソレの行動が見えていない。ソレは技術部が落とした盾の残骸を彼に向けて投げ放っている。
尤も、一が視認していない攻撃というのは殆ど意味はない。彼は全ての回避行動を風の精霊に一任しているのだから。

上昇して、ソレの放った盾を躱す。高度が上がるにつれ、一の顔色は少しずつ悪くなっていた。
「もっと、ゆっくり飛んで、くれって……」
「バッカだなあ！　あんなのに当たったら死んじゃうぞ」
ソレに向き直り、一は咄嗟にアイギスを広げた。再度放たれていた盾を防御し、彼は息を吐く。ゴルゴンと比べれば、基本的には鈍いソレの攻撃だ。直撃をもらわない自信はあったが、衝撃だけはどうしようもない。手は痺れ、体に走る振動のせいで頭に鈍痛が走る。
長時間は戦えない。ソレは動き回る一たちに気を取られていて、彼は、ナナが早く戦闘に復帰するのを祈った。
彼女はと言うと、両脇に負傷した者を抱えて、支部とこちらとを行き来している。建物の方に目を遣れば、炉辺が忙しそうに動き、指示を出している姿が見えた。
「……戦ってんだな」
「は？　今更何言ってんのさ」
近付いてくるソレに向けてアイギスを広げる。一は歯を食い縛り、振り下ろされた拳を受け止めた。が、彼の体はゆっくりと中空で後退していく。少しずつ押され、一は舌打ちした。
「今のオマエじゃ無理だな」
見かねたシルフは、一を逃がすべく右に跳躍する。一瞬遅れて、ソレの腕が地面を抉った。
「ありゃ昨日の俺でも無理だよ。死なないだけで精一杯だ」
「……じゃあどうすんのさ。シルフ様はやだぞ、ここまできて逃げ帰るなんてのは」
同感だが、いざとなれば撤退するのも仕方ない。一は鈍くなりつつある頭を働かせ、ソレからは離れた場所に降り立つ。
「俺がやれなくても、ナナがやるさ」
「あいつが？　でも、さっきまでやられてたっぽいぞ」
「技術部の人たちがいたからだろ。……多分、何かあるんだ」
人間は弱い。ソレと戦えない。だから道具を作り武器を取り、よ

うやくソレに立ち向かおうとする気持ちが湧いてくる。それだけでは足りないから、ナナを作った。そんな彼らが、無策にもソレに立ち向かおうとはしない筈である。そう、一は考えていた。

対ソレのスペシャリストであるナナがここにいると言うのに、わざわざ戦場にやってくる理由はない。あるとすれば、自分と同じく、技術部は彼女の代わりにソレの注意を引き付けたかったのだ。

「ナナを支部に戻したかったんじゃないか？」

「なんでさ」と、シルフはソレから視線を外さないまま問い掛ける。

「さあ？　何か作戦とかあるんじゃねえの？」

「……ふーん。じゃ、そこらに転がってる奴らは弱いくせに、邪魔になるってのに出てきたんだ」

確かにそうかもしれない。シルフの言う事は正しく、起こった事は覆せない。技術部の人間はナナにとっては弱者でしかなく、邪魔者でしかない。

「精霊様には分からないと思うけどさ、人間にも意地があるんだよ」

投擲された盾を、アイギスで斜め方向に受け流す。一は痺れた腕を我慢しつつ、柄を握り締めた。

「特に、男にはさ」

「バッカじゃん。知ってるぜ、意地じゃどうにもならないんだ」

「それでも譲れないのが男の意地ってもんなんだ」

身を滅ぼすモノだとは知っている。しかし、時には感情に流され愚策に己を賭けるのが人間なのだ。一はそう、信じている。

一人一途

ナナによって、支部の床へと横にされた技術部の男が顔を上げた。彼の目に映るのは、ソレと相対し、自由自在に場を駆ける男である。

「彼が、アイギスの……」

「あっ、こら無理はしない」

炉辺が男の傍にしゃがみ込み、指を一本立てた。

「……はじめちゃん、来てくれたんだ」

「僕たちは……」

男は一をじっと見つめる。勤務外と一言で言うのは易い。それが彼らの仕事であり、存在理由だと断ずるのはあまりにも容易い。しかし、彼は見てしまった。改めて理解したのだ、自分たちを守っていたのは、あんなにも小さく、若い人間だと。

「無駄だったみたいだ」

勤務外が来ると知っていれば、自分たちの代わりをやってくれると分かっていれば、怪我などしなくても済んだのだろうか。ナナの足を引っ張らずに済んだのだろうか。考えると、惨めで空しくて、知らずの内に涙が出てきてしまう。

「無駄じゃないよ。無茶だったかもしれないけど、きっと、ナナちゃんだって分かってくれる」

「……慰めるのが上手いですね」

炉辺が何を言ったところで、自分たちの行為が良い結果を招くとは言い難い。男は目を瞑り、ゆっくりと頭を床に置いた。

「私はホントの事を言っただけだよ」

やはり、慰めるのが上手いではないか。男は苦笑し、風の精霊を味方にする一に、後を託すと決める。

「……皆、無事ですか？」

「うん、怪我はしてるけどね」
それだけを聞くと、男は両手を伸ばす。何も得られず、何も掴めなかった腕を見遣り、嗚咽した。

そこらに散らばった空薬莢。抉れた地面。戦いの跡を認め、一は息を吐いた。
「ニンゲン、邪魔な奴らはいなくなったぞ。みぃんな、あいつが連れてった」
シルフはつまらなさそうに周囲を見回して、ソレに鋭い視線を向ける。
「何も出来ないなら、最初から出てこなきゃ良いのにな」
「あの盾、見ろよ」
「何さ？」
一が指差しているのは、四つに砕けたライオットシールドである。
「アレはアイギスみたいな盾とは違う。もっと、かっこいいものなんだ」
「……どこが。オマエの持ってるヤツのがすげえじゃん」
「こんな、でたらめなものとは違うんだよ。アレは人間だけが持てる、良いものなんだ」
シルフには、一が何を言いたいかが分からない。
「あの人たちは俺とは違う。人間のままでソレに向かっていったんだ」
「だから、何さ」
「羨ましいのさ」
アイギスの力は素晴らしい。これを持っているから、勤務外でいられる。しかし、アイギスを持つ以上はただの人間ではいられない。人を外れるのを望み、自ら手にした力なのだから、一は既に諦めている。だからこそ、技術部の者たちが羨ましい。
「気付いたよ、俺は卑怯者なんだって」

「オマエはそういうんじゃない。今だって、しんどいのに戦ってる」
「アイギスで身を隠して、避けるのはお前に任して。それでも、戦ってるって言えるのかな」
今更だ。それでも頼り、縋るしかない。こうしないと、自分一人ですら守れないのだ。
「……悪い。面白くないよな、こんなのは」
「何だよ、ニンゲンなんて、そんな良いものじゃないぜ」
「かもな」
なら、どうしてシルフは自分を助けてくれる。一は疑問を呑み込み、瞬きを繰り返した。何もかも、今更過ぎる。歩んできた道が、選んできた答えが全て正しいとは思っていない。だが、退かない。間違っていたとして、後戻りは出来ないのだから。自分に出来るのは、技術部の思いを、人であろうとした彼らの願いを繋ぐ事である。
一は決意し、長い息を吐き出した。
「昨日は頑張ったよな、俺。でも、今日の主役はナナなんだよ」
「ふん、シルフ様はあいつ、嫌いだけどな」
シルフは一の体をぎゅっと抱き締める。
「あいつからは風を感じない。生きてるって感じがしないんだ」
「それは……」
「ニンゲンじゃないんだもんな。知ってるよ。けど、やっぱり、ヤダ」
一には、ナナを嫌いにならないでくれ、好きになってくれとは言えなかった。もともと、彼女とシルフは相容れない存在なのである。
「ナナが、人形だからか？」
「違うよ。ニンゲンとかニンゲンじゃないとか関係ない。なんつーか、あー、ううん……嫌いなものは嫌いなの！」

一が戦っている。全員を支部に運び終えたナナは、彼の姿を確認した。

「七号っ、どこに……」
「一さんを放ってはおけません」
技術部の男に答えると、ナナは関節の動きを確かめる。
「主任が呼んでる。タロウを破壊するには、今の七号の装備では無理なんだよ」
「把握しています」
「だったら……！」
「だったら、何ですか」
「……七号？」
ナナの態度に違和を感じた男は、不思議そうに彼女を見つめた。
「一さんではソレから逃げ回るのでやっとでしょう。私が行かなければならないのです」
「でも、ソレは倒せないよ。二人して逃げ回るのか？」
「一さんを安全な場所に送り届けてから、私だけで戦えば済む話です」
「戦ったところでタロウを破壊出来なければっ」
「優先すべきは一さんの救出でしょう。破壊出来るかどうか、それから考えても問題ないのでは？」
ナナは頑として言い分を聞かない。今まででは考えられなかった彼女の非合理的な言葉に、男は困惑した。
「何もないのでしたら、私は行きます」
「七号……」
ナナを止められる力も、言葉も持ち合わせていない。男は彼女の服を掴もうとして、
「待ちたまえ七号」
振り向く。
そこには息を切らした天津がおり、ナナをじっと見据えていた。
「今、君が行っても仕方がないんだ。新しい武器を用意している。彼を助けたいと望むなら、こちらに来るんだ」
「……ですが、時間が」

「そうだね、こうして話している間にもあの青年は危機に晒されている。無駄だと思うなら、僕の言う事を聞くんだ」
ナナは床に視線を落とし、縋るように天津を見つめる。行かせてくれと、訴えていた。
「人形、だからですか？」
「……何だって？」
「私が人形だから、そう仰るのですか？」
しん、と、ロビーが静まり返る。ナナの口から発せられた悲痛な音が突き刺さり、天津以下、技術部の人間は口をつぐんだ。
「私たちが心を持ってはいけないから、意思を以て動いてはいけないから、だから、天津さんは……」
天津はしばし声を失う。確かに、彼女が自我を持つのを待ち望んでいた。人間よりも人間らしく、そうあれと願っていた。
「七号、それは違う。違うんだよ。……僕たちは君を人形のように扱おうなんて思っちゃいない」
「私にはそう見えません。言葉を尽くし、重ねたところで私が人形だと言う事実は消えないのですから」
「……その通りだ。だが、君は、僕たちの子供なんだよ。皆、娘のように思っている」
ナナは顔をしかめた。天津の言葉が信じられず、ただ、彼の続きを待つ。
「七号、君は不満を口にせず僕たちのわがままを聞き続けてくれたね。手の掛からない、本当に、良い子だ。そんな君が、ああ、そうか。僕たちを無視して一一君を助けたいと。うん、君が口にした、生まれて初めてのお願いなんだ」
「お願い……？」
「ああ」と、天津は首肯する。
「合理的じゃない、凡そ人形らしくない、わがままな願いだよ」
ふっと微笑み、天津は皆を見回した。
「仮に、それが私の願いだとして、いけない事なのでしょうか？」

「まさか。今日は技術部にとって悪夢のような、最悪の一日になると思っていたが、全部帳消しにしてくれる喜ばしい出来事があったのだから」
「何をおっしゃって……」
「おめでとう七号、君はもう人形なんかじゃない。そしてありがとう、君は僕たちが作った……いや、生み出した中でも最高の、娘だ」
ナナは目を見開き、天津を見つめる。ふと、周囲にも目を向けると、誰も彼もが彼女を見つめていた。嬉しそうに、慈愛に満ちたそれを。
「人間でありたいと望むのなら、時には合理的でない選択にも迷うだろう。当然だ、人間ってのはいつだって迷って、間違って、苦しんで、諦めてしまう生き物なんだから」
言葉を尽くしても、重ねても、所詮は言葉。口先だけで、聞き心地の良いものでしかない。しかし、それに救われる者もいる。時には、思いのひとかけら程度は伝わるのだ。
「でも、人間は最後の最後まで諦めない生き物でもある。誰だって苦しむだけじゃ終われない。彼だって、諦めようとしてソレに立ち向かっている訳じゃないんだ。七号、僕たちはまだ終われない、諦めたくない。君に、助けて欲しい」
「天津さん、私は……」
「恨んで良い。妬んで良い。羨んで良い。呪って良い。いつか、僕を、僕たち人間を殺してやりたいと願い、思い、実行に移してくれても構わない。だけど、君も人間になりたいと、そうありたいと望むのならお願いだ。こっちに来てくれ。……歩いて、くれ」
「私は、皆さんの娘だと思っても良いんですか。人間のようになりたいと思っても、許されるのですか？」
絞り出すような声を、ナナは聞き届けた。彼女はソレの攻撃を避ける一を見た後、低頭する。
「お父様、私に力をください」
「……ああ、ああっ、勿論だ。先に研究室へ行ってくれ」

ナナはお辞儀して、駆けた。振り向かずに、真っすぐに。彼女の後ろ姿が消えるのを見届け、天津は炉辺に視線を遣る。

「……後を、お願いします」

「天津君、私は止めるからね」

「構いません」

天津は横たわる部下たちの真ん中に立ち、ソレを見つめた。彼に倣い、技術部全員がソレに視線を向ける。

「君たち、聞いたね？」

「ええ、当たり前です」

「ではいざという時には……」

「死ねば良いんでしょう。全く、何が喜ばしい事なんだか」

「うん、僕も死ぬのは嫌だ。あれだけ覚悟どうのと口にしていたのにね。見てくれ、震えが止まらない」

苦笑し、天津は自分の膝を強く叩いた。

「しかし、可愛い娘の頼みを聞かない訳にはいかない。何せ僕たちはお父さまなのだから」

「あの勤務外を死なせたら、俺たち七号に顔向け出来ないな」

技術部の男たちは笑い合い、一人、また一人と怪我を押して体を起こす。

「僕は七号に装備を渡さなきゃいけない。済まないが、その時が来たら君たちから死んでくれ」

「しゅにーん、後を追ってくれるんですか？」

天津は笑って誤魔化し、彼らに背を向けた。

一には、人間が人形の為に命を投げ出せるとは思えない。だから、技術部の人間はナナを人形とは思っておらず、また、自分だってそうなのだ。彼女は誰よりも人間なのである。

「っ、とっ……」

躱し損ねたソレの拳が頭上を通り過ぎていった。懐に飛び込んだ

ところで堅固な装甲を貫けるとは思えない。一はソレの股を抜け、シルフは彼の意を汲み中空に舞い上がる。
「……頭ぁ痛くなってきた」
「じゃ、帰って甘いもの食べようよ。シルフ様、パフェ食べたい。いーっぱいクリーム乗ったヤツ」
「虫歯になるぞ」
「はっはー、せーれーは虫歯になんかならないもんねー」
ソレはコンクリートの破片を掴み、一に向かって投げ付ける。彼は広げておいたアイギスで破片を防ぎ、息を吐いた。
「揺れる……」
「つーか、いつまで付き合えば良いのさ？　あのデカイの、懲りないのかよ」
「懲りないんじゃなくて諦めてねえんだろ」
アレはどちらかが死ぬまで侵入者を狙い続ける。もはや、自動人形とも言えない。虫や幽鬼に近い存在と成り果てたのだ。
「仕事終わるまでは帰らねえんだ。誰かさんに見習って欲しいところだよ」
一は呟き、地面に降りるようシルフに指示する。彼は着地と同時にふらついた足を見て、誤魔化すように笑った。

天津よりも一足先に彼の研究室へ到着したナナは、部屋の中央の机に置かれたモノを認めた。
それは、巨大な銃に見える。が、そうではない。銃身の先からは金属製の長い杭、のようなものが飛び出している。見た事のない武器に、ナナは眉根を寄せた。
「銃剣……？　いえ、これは……」
「全長二千ミリ。重量は三十キロ。アンチマテリアルライフルを改造した、技術部最後の希望だよ」
部屋に入ってきた天津に目を向け、ナナは再びそれを見つめる。

「銃、なのですか？」
「銃ではない。これは、そうだな、浪漫だよ。男のね」
「浪漫、ですか」
「浪漫だ」と、天津は頷いた。
「仕組みとしては単純だ。この、金属製の杭を液体火薬によって高速射出し、相手の装甲を打ち抜く近接用の武装だよ。勿論、威力は申し分ない」
天津は机の上の武器を見て、苦笑する。
「尤も、使いどころは殆どないけどね」
「そうなのですか？」
「ああ。……微妙過ぎるんだよ、これ。そもそも、こいつには元ネタがあってね。ああ、いや、それは良いんだけど。んん、これは対個人に使うような兵器じゃなく、普通の人間には扱えない代物なんだ」
「……では、どなたが扱う筈だったのですか？」
ナナの問いに困ったような顔を浮かべ、天津は髪の毛を掻いた。
「誰も使えないから、今まで陽の目を見なかったんだよ。近接用の武装だから射程は短い。だが、実は威力はそこまで高くないんだ。さっき言ったと思うけど、この武器を使う目的は『相手の装甲を貫く』って一点にある。相手の装甲によって威力は変わるだろうけど、つまり、装甲を貫ける程度の威力しかないって事にもなるんだ」
「それでは意味がありません。ソレを破壊出来なければ……」
「ああ、その点については問題ないよ。こいつに限っては威力だけを重視し、火力だけに特化させたガラクタだからね。だから、浪漫なのさ」
自虐的に笑むと、天津はナナに目を向ける。
「このアタッチメント、信用出来るのですか？」
「勿論。……と、言いたいところだけど、あくまで試作。使い手がいなかったと言え、一度も試し打ちしていないんだ」
「……しかし使えれば必殺に成り得ると。天津さん、実際、私たち

はコレに頼らざるを得ませんよ」
「だから調整さ。少し時間は掛かるが、火薬の量、杭の重量、君が持った際の反応、運動をシミュレートしてから……」
ナナは首を振り、話を遮った。
「調整は不要です。間に合いませんから。一さんは今も戦っているのです」
「だが、不安定なものに賭ける訳にはいかないよ。僕にもプライドがある。自分でも良く分からないものを無理に使うなんて、許されない」
「ですから、間に合わないと言っているのです。構いません、可能な限り最大の火薬を。考えられる限り最高の威力を期待出来るようにセットしてください」
「いや、だからね」
「――――お願いします」
とても、お願いしているような目付きではない。ナナは天津をじっと見据えて、掌をゆっくり閉じ、開く。
「試作品と言うのなら私も同じです。お父さまにとっては、命運を託すには足らないかも知れませんが」
「……君は」
思わず言葉に詰まった。天津はナナから視線を逸らし、俯く。
「お願いします。……早くしないと、一さんが死んじゃう。もしそうなったら、私は……」
あなたたちを許さない。そう言われた気がして、天津は、諦めた。
「今は、無理をする場面だったか」
彼は机の引き出しからケースを取り出す。蓋を開け、中に入っていたものをナナに手渡した。
「天津さん、時間がないんです」
「七号、僕たちのモットーは？」
「……常に全力。完全に、完璧に、完膚なきまでに」
「その通り。君はオートマータである事に誇りを持ち、メイドであ

る事に拘りを持つのを忘れては駄目だ。……さあ、掛けてくれ。それで君は完璧なのだから」

ナナは言われた通りに、渡されたフルリムの眼鏡を装着する。視界に変化はないが、何か、身が引き締まる思いを感じた。

「七号、こいつにはまだ名前がない」

「はい」

「どんな事になるか分からない。途中で銃身が砕け、反動で君自身が砕けるかもしれない」

「はい」

「しかし、必ず無事に帰ってきなさい。そして、こいつに名前を付けてやってくれ。分かったね？」

「了解しました」

「……うん。持っていきなさい、使い方は分かるかい？」

ナナは頷き、新たな力に手を伸ばす。重量はあるが、彼女にとって大した問題にはならない。

「正直、君がそう言うと思ってセッティングはしておいた。さあ、行っておいで」

「行って参ります」

またもナナの背中を見送り、天津は机の上に腰を下ろす。

「……お父様、か」

果たして、本心から出た言葉なのか、取り繕い誤魔化す為に口にしたのか。しかし、どちらでも構わない。重要なのはナナがそう言ったのだと、それだけなのである。

「一一、彼が、変えたんだね」

親鳥が雛を見送るような、あるいは、父親が娘を嫁にやるような、複雑な感情に胸を支配されて、天津は頭を掻いた。

攻撃を避けるのは簡単だ。そして、大して面白みもない。昨日のゴルゴンの方が早く、重く、恐ろしい相手だったのだとシルフは思う。

どうにも、つまらない。一はと言えば逃げ回る指示しか出さない。積極的に戦おうとしないのだ。何よりも気に入らないのは、彼がナナの為にここへ来た事である。

人間は弱く、脆い。ネズミのように数を増やして放っておけばいつの間にか死んでいる。攻撃を食らえば怪我もするし雨に打たれれば病気にもなり、やはり死んでしまうか弱い生き物なのだ。それでも、シルフは人間を毛嫌いはしていないし、構って欲しいと思う時もある。

一は人間で、ナナは人間ではない。なのに、彼は人間よりも強く、怪我もせず、病にもかからない頑丈な彼女の盾になろうとしている。シルフにはこれっぽっちも理解出来ない行動だった。

そして、シルフはナナが嫌いである。単純な理由だ。ナナからは風を感じない。生きている以上、人間である以上は何らかの動作を伴う。歩き、走り、食べ、眠る時でさえも、風の精霊であるシルフは、それらの動きから風を感じるのだ。激しく、静かに、時には凪いで。個人差はあれ、必ず風はある。しかし、ナナからは何も感じないのだ。シルフにとってはソレが気味悪く、恐ろしく感じる。

「……そろそろやべえな」

ソレの攻撃を受けた一がふらつき、アイギスを手放してしまう。彼の顔面は蒼白で、今にも倒れてしまいそうだった。シルフは風を集めて空中に逃れようとしたが、ソレがコンクリートの破片を掴むのを見て躊躇う。

空中に行ってしまえば、ソレはコンクリートを投げ付けてくるだろう。シルフとてそれを躱す自信はあったが万が一も有り得る。アイギスを持たない一では、雑な攻撃ですら致命傷になりかねないのだ。

「拾えよバカっ」

一は手を伸ばそうとするが、がくりと膝を着き、申し訳なさそうな表情を作る。
「……っ、そんな顔すんなよ！」
ソレは一たちを見下ろし、腕を振り上げた。
瞬間、シルフは弾かれたように支部に向き直る。
「風が、吹いてる」
彼女にしか感じられない風、まっすぐなそれが吹いていた。

ナナは走る。真っすぐに、自分の思いを伝える為に。
研究室を飛び出し、廊下を抜けてロビーに躍り出る。誰もが彼女に視線を送り、声を送った。頑張れと、負けるなと、声は波のようにナナへと押し寄せる。
彼女は駆けた。思いを貫く為に。その為の武器は持っている。迷う事はもうなかった。床を踏み締め、砕き、支部の外へ飛び出す。
一にソレが迫っているのを確認したナナは、叫んだ。それはもはや音ではない。自らの意志を届ける為の声となり、同時に、彼女が人間であるのを望み、人間に近付いたのを証明する産声となっている。
――――名前を。
思いを込め、貫く。自分の気持ちを伝えてくれる力。名前なら、既に決まっている。
「一さんからっ、離れろ！」
地面を蹴り、ソレに肉薄する。一はこちらに顔を向けて安心したように目を瞑った。
ナナはソレの腹部に杭を突き立てる。装甲にひびが入り、ソレの顔が歪んだ。苦痛からではない。その表情からは困惑の色が見て取れる。
「ナガま、なノに……」
確かに、オートマータ同士通じる部分はあった。だが、同じモノ

だからと言って仲間になれるとは限らないのである。
「一緒にしないでください！」
一度では貫けないならと、ナナは再度杭を打ち込む。
シルフは一の体を抱いて真上に飛び立った。ナナがそれを確認してからレバーを引くと、耳をつんざくような爆発音が轟く。甚大な負荷、想像を絶する反動が彼女の外部内部問わず痛め付けた。最初に両肩から火花が散り、発生した風圧によって装甲が剥がれて飛んでいく。
火薬が炸裂した際の力で、杭が打ち出される。銃身は焼け焦げ砕け散っていた。ナナから、彼女の周囲からも蒸気のような、熱を持った煙が立ち上る。彼女のメイド服は大半が弾け飛び、焼けてしまっていた。
「お、あ、アあッ……」
打ち込まれた杭はソレの腹に風穴を開け、遥か後方に着弾し、砕けている。
ソレの腹からは琥珀色の液体がとめどなく流れていた。彼に埋め込まれた管から、惜し気もなく。それは、命だ。ただの金属の塊を自動人形に足らしめたモノが、だくだくと溢れている。地面に流れ、水溜まりを形成していく。
「……ぼっ、ボくの、のっ」
ソレは開いた腹を両手で押さえた。しかし、意味はない。むしろ、液体が落ちていくペースは上がっていく。ナナはその光景をじっと見つめていた。バッテリーが上がり、ショート寸前の彼女はもう動けないのである。ただ、一つの終わりを見るしか出来ないでいた。
その筈だった。しかし、ナナは動こうとする。機能が停止しかけている足を引きずり、熱の残る腕を上げ、拳を握り込んだ。ヴィクトリアンスタイルのメイド服はぼろ切れ同然に成り果てて、彼女の肌を晒している。フルリムの眼鏡は歪み、レンズは割れてフレームのみとなっていた。ナナが眼鏡の位置を押し上げようとすると、どろりと溶けてしまう。

ナナはゆっくりと顔を上げて、疲弊しきっている一を見遣った。
「……完全に」
人形でも構わない。人間の意のままに動くだけの存在でも構わなかった。
「完璧に」
だが、いつからか彼女も人間である事を望んだ。
――――きっと、あなたのせいだと思います。
全てが新鮮に映り、眩しく見えたのは錯覚ではない。短い時間ではあるが、北駒台店の勤務外として、駒台の住人として得たものは多く、今にして思えば何と素晴らしい日々なのだろう。
「完膚なきまでに」
放った拳はソレの腹部を突き上げ、中にあった管を掴む。残った力を振り絞り、ナナは管をねじ切り、引きずり出した。
僅かな残滓すら許されず、神の血は人形から全て垂れ流された。ソレは異常な速度で瞬きを繰り返しながらナナを見る。やがて、瞬きは緩やかになり、止まった。その瞼はもう二度と開く事はなく、その瞳はもう何も捉える事は出来ない。
「……きっと、きっと……」
ナナはゆっくりと腕を下ろし、動きを止める。
――――きっと、良い名前だと言ってくれますよね？
砕けた武器を見下ろして、ナナを目を瞑った。ありがとうと感謝を込めて。また会いましょうと再会を願って。
「……いち、ず」
彼女は自らが付けた武器の名を呼び、満足そうに微笑んだ。

それでも彼を思っている

ノックを四度しなければ神経質な上司は怒りを露わにする。くだらないと思いつつ、それでも上司の機嫌を損ねる意味はない。天津は息を吐き、ドアを叩いた。返事はないが、彼はきっとてぐすね引いて待ち構えているのだろう。

「失礼します」

形だけの言葉だが、これも口にしなければ彼は怒る。オンリーワン近畿支部、技術部の長である神経質な老人が。

「そろそろ来ると思っていたよ」

車椅子に乗った大柄な老人が笑みを作る。しわがれた声が天津の耳の内にじっとりと絡み付いた。

「加治さん、実は……」

「いや、大体なら分かっているよ」

加治と呼ばれた老人はくつくつと笑い、傍らの秘書らしき女性に顔を向ける。

秘書、らしき、である。女性の格好は公の場には相応しくないものであった。メイド服を着た彼女に、天津は気付かれないように嫌悪する。

メイド服はメイド服でも、女性の着ているものはフレンチメイドと呼ばれる種類のそれであった。ノースリーブにマイクロミニ。機能性よりもデザインを追求したものであり、天津から言わせればこれはメイドであってメイドではない。

何よりも、これは加治の趣味が悪いと天津は睨んでいる。いい年をした老人が若い女性を侍らすようにしているのは、見ていて気持ちの良いものではなかった。

「アレが暴走したのだろう。いや、良く治めてくれた」

加治は執務机に手を乗せて、天津をじっと見据える。
「全く、予想通りではあるが」
「予想通り、ですか？」
「予定通りかな。似たような意味だから、どちらを取ってもらっても構わんがね」
背筋に嫌なものが伝った。天津は唾を飲み下し、加治を見返す。
「アレを破壊する事によって、技術部の声も通りやすくなるだろう。しかし気付かなかったかな、この加治が手を加えたと知ったなら、アレの踵を狙えば良かったものを」
「どういう意味ですか？」
「君ほどの聡明な男が気付いていない筈はあるまい。誤解を恐れず単刀直入に言えば、アレの暴走は仕組まれたものだったのだよ」
何が、誤解だ。天津は俯き、歯を食い縛る。
「誰が仕組んだものとは言えんが、既にアレはギリシャ神話のタロスとなり掛けていたのだろうなあ。勿体ない。あるいは、君たちが良くやったと言うべきか」
「ええ、本当に。流石はお姉さま」
くすくすと、加治の傍に立つ女性が笑った。
「おお、パァラもそう思うかね」
「ええ、マスター」
パァラと呼ばれた明るい茶髪の女性は、一頻り笑ってから天津に視線を向ける。彼はその視線を受ける事なく、加治を見据えた。
「つまり、あなたの仕業だと？」
「あなたとは。この加治に対して、随分と他人行儀じゃないか」
「茶化さないでもらえませんか。今の話が本当なら、あなたは全て仕組んでいて、分かっていて黙って見ていた事になる」
自分たちの行為は、とんでもなく馬鹿げたものになる。技術部だけでなく、医療部や何も知らない勤務外までもを巻き込んだ茶番劇だ。開幕を告げたのが他ならぬ自身の上司だと言うのなら、これ以上の屈辱はない。

「いやいや、私ではないよ。誰もそんな事を口にしておらんではないか。滅多な事を口にしては、何が起こるか分からんよ、天津君」
「加治さん、あなたは……っ！」
「――――天津君」
加治は目を細めて、天津を見遣った。
「君はこの加治を敵に回すつもりかね？」
瞬間、パァラが懐に手を入れる。彼女の視線は天津を捉え続けており、室内には剣呑な雰囲気が立ち込めた。
ぴんと張り詰めた空気の中で、天津はゆっくりと息を吐く。
「……いえ、まさか」
「うん、だろうね。部下からすれば、上司は神にも等しい存在だ。発言には充分気を払いたまえ」
天津は低頭し、彼に背を向けた。

加治の部屋を出た後、天津はロビーに向かった。そこには、片付けられていないコンクリートの破片や、対物ライフルの残骸が散らばったままである。ソレが破壊されてから数時間、陽は暮れ掛けて、橙色の光がここには差し込んでいた。
「主任、どうでした？」
声を掛けられて振り向くと、額に大袈裟とも言える絆創膏を貼られた男がいる。彼は技術部の者で、先の戦闘で一番軽傷で済んだ者でもあった。
「どうって、何がだい？」
「加治さんのところに行ってたんでしょ。あの爺さん、何か言ってました？」
「……仮にも上司で。仮にも僕たちは社会人なんだから、言葉遣いには気を付けようよ」
「あー、つい」と、男は悪びれた様子を見せずに笑む。
「で、どうなんですか」

「特には何も。これからも頑張ってくれ、だってさ」
「なんすか、そりゃ」
天津は苦笑し、転がっていた一人掛けのソファを起こし、そこに座った。
「それより、皆はちゃんと病院に行ったんだろうね？」
「炉辺さん率いる医療部に睨まれちゃあ行かざるを得ませんよ」
「ああ、あの人は案外押しが強いから」
ふと、天津は部下の絆創膏に目を向ける。
「君さあ、まだ病院に行ってないだろ。と、言うか、他の奴も行ってないと見たね」
「は、いや、まさか。主任にはこの絆創膏が目に入らないんですか」
目に入るからこそ、どうにもわざとらしく思えて仕方がない。
「ふうん。ああ、そう言えば七号はどうなったんだい？」
「医療部んところです」
「医療部の？」　と、天津は目を丸くさせた。
「ほら、あの勤務外が倒れちゃって。七号は彼の見舞いに」
随分と変わったものである。男児よりも女児の成長の方が早いとは聞くが、と。天津は的外れな事を考えて苦笑、
「……見舞いだって？」
しなかった。彼は眉根を寄せて、男を睨む。
「何かおかしいところでも？」
おかしいところしかない。ソレを破壊した後のナナは、他者を見舞えるほどの状態ではなかった。一刻も早い修理が必要だったのである。察した天津は、ソファに体を預けて、力なく笑った。
「まあ、皆が無事ならそれで良いさ」
今は神を敵に回す事は出来ない。だが、自分たちを弄んだ報いは、いつか必ず受けてもらう。受けさせる。だから、今だけは、ゆっくりと休みたい。

真っ白い壁に、天井。汚れ一つないシーツに、枕。
目を開けた一は、ここはどこだと体を起こす。
「お目覚めになりましたか、マスター」
未だ寝ぼけ眼の一に声を掛けるのは、ベッドの傍の丸椅子に座るナナだ。彼女はフルリムの眼鏡の位置を押し上げて、静かに微笑む。
「……ナナ？　ここ、どこ？」
「支部の中にある医療部の一室です。マスターが倒れてしまいましたから、ここにお連れしました」
どうやら、本当に自分はナナの足を引っ張っただけで終わったらしい。一は溜め息を吐いて、もう一度枕に後頭部を預ける。
「悪い。結局、邪魔しただけだったな」
「いいえ、マスターがいなければ、私も、技術部の皆さんも無事ではいられなかったでしょう。全て、あなたのお陰です」
「言い過ぎ。あ、それより、シルフは？」
「……風の精霊なら」
一は不思議そうに目を細める。何故だか、シルフの話題を出した途端、ナナの機嫌が悪くなったように思えたからだ。
「マスターの無事を確認した後、どこかへ飛び立ってしまいました。申し訳ございません、お引止めしていれば……」
「ああ、良いよ良いよ。多分、あいつはそういうの嫌がりそうだし」
満足に礼も言えないまま、今度はいつ、どこでシルフと出会えるのか。一の気はますます重くなってしまう。
「やはり、まだ、お体の調子が……？」
「あ、いいや、思ってたよりも良いかな。動いたから汗かいて、熱が引いちゃったのかもしんない」
「そうですか？」
ナナは顔を近付けて、一の目をじっと覗き込んだ。彼は驚いて、しかし身動きが取れないので彼女のなすがままである。
「なるほど、嘘を吐いているようには見えませんね」
「えっ、分かるのか？」

「いいえ」と、ナナは口元を緩める。
「冗談です。ですが、先よりも顔色は良くなっているように見受けられます」
くすくすと、ころころと、表情を変えるナナは、まるで童女のようだった。一は思わず、彼女の笑顔に見とれてしまう。
「何か、ナナ……」言い掛けて、一は止めた。しかし、ナナは彼の続きを予想していたようで、ゆっくりと口を開く。
「人間みたい、でしたか？」
見事に言い当てられて、一は困ったような顔になった。
「構いません。私が何者であろうと、ソレを倒す事さえ出来れば……」
「……俺は、そういうつもりで言おうとしたんじゃなくて……」
「……それから」
ナナは言葉を区切り、微笑む。
「マスターの傍にいられるのなら、人形でも構いません」
言葉に詰まった。一は何も言えず、ただ目を泳がせる。まっすぐに見つめられ、まっすぐに向けられた気持ちが心地悪く、恥ずかしく、それでいて妙に気分が良かった。
「あ、あのさ。さっきから気になってたんだけど」
「はい」
「マスターって、もしかして。ああ、いや、勘違いだったらごめん。マスターって、俺の事？」
「はい」
即答され、一は頭に手を遣る。
「当然です。一さんは、ナナのマスターですから」
「当然、なんだ」
「それはもう」
「あー、でもさ、昼に会った時はそうでもなかったような……」
「ご迷惑ですか？」
――――ずっ……！

「一さんは、私がマスターと呼ぶのを迷惑に思っているのでしょうか？」
「全然」
――――ずるくねえ！？
「全然迷惑じゃないよ。ただ、驚いただけだから」
「良かった」と、ナナは心底から安堵したように呟いた。彼女の変わりように一は目を丸くさせて、目を泳がせて、それでも流されてしまうのだろうと思った。
「あ、マスター、一つ、お尋ねしてもよろしいでしょうか」
「……あっ、ああ、良いけど」
一は間を空けて答える。自分がマスターだと呼ばれている事実を改めて確認、自覚していても、まだこそばゆい。いつになったら慣れるのだろうと思うより先、いつになったらナナが飽きるのだろうと、そう思う。
「私がソレを破壊したところをご覧になりましたか？」
残念ながら見ていない。あの時、ナナが何か物騒なものを手に姿を見せたと同時、一は意識を手放してしまったのだ。
「かっこ良かったよ」
「ふふ、マスターは嘘吐きです。実は、新しいアタッチメントを天津さん……技術部の主任を務めている方から頂いたのです」
「ああ、そいつを使ってやっつけたのか。何か、でっかい銃みたいな奴で」
「見た目だけはそれらしいのですけれど。銃のようで、銃ではないのです。アレは、男の浪漫だそうですよ」
男の浪漫なら既に見ている。感じている。一は満足げに頷いた。
「今は壊れてしまって、技術部の方たちが新しいものに作り変えているとおっしゃっていました。名前は、一途と言います」
「一途……？　えっと、武器の名前？」
「はい」と、何故か、ナナは嬉しそうに相槌を打つ。
「一途です」

「あ、ああ、そうなんだ。一途、なんだ」
「はい、一途ですから」
噛み合っているようで、実はどこかちぐはぐな会話だと一は心のどこかで思った。が、あえて口にはすまい。と言うか口にするのが怖かった。
「ん。んん、じゃ、俺はそろそろ帰るよ」
「そうですね。陽も落ちてきましたから」
「あ、店長には何て言おう。店に行った方が良いのかな」
「ご心配なく。既に私が報告を済ませておきました。『ご苦労。堀が来たからお前らは休んで良し』との事です」
手回しの良い事だと感心しながら、一は体を起こしてベッドから降りる。
「ナナはどうするんだ？」
「勿論、マスターが帰られるのなら私も帰ります」
「そっか。じゃあ、また今度な」
知らない場所だが、適当にうろつけば帰れるだろう。少し不安になりながらも、一はドアに向かって歩き出す。ナナが後ろから付いてくるのが見えたのだが、彼女も途中まで一緒に行くのだろうと、彼は特に気にしなかった。
が、ドアを開け、廊下に出て、階段を下り、右往左往してロビーに出て、ナナが技術部の者と会話して、自分と一緒に外へ出てくるところで、一はようやく気が付いたのである。
「……気のせいか、俺に付いてきてないか？」
「いえ、誰も私たちの後を付ける者はいません」
「たちって。いや、じゃなくて。ナナが、俺に付いてきてるって事を尋ねたんだけど」
「マスター、何故そのような事を尋ねるのでしょうか？　ナナには良く分かりません」
一は頭を抱えた。嫌な予感と言うものは、やはり往々にして的中するものである。

「分かった。じゃあ改めて聞く。どうして、俺に付いて来るんだ？」
「一さんがマスターで、私がメイドだからです。メイドたるものが主人の傍に控えていないで、どうして奉仕出来ましょうか」
「いや、大丈夫。しなくて良い」
「いえ、します」
きらりと、ナナの眼が光った。ように、一には見えた。
「まさか家まで来る気か？」
「行きます」
「……来なくて良い」
「行きます」
一言一句はっきりしっかり区切って声を発したナナは、眼鏡の位置を押し上げる。
「マスターは病み上がりなのですから、誰かが傍に付いていないと危険なのです」
「本当に大丈夫だからっ」
「心配なんです」
「なっ……！」
まさか、ナナからその言葉が聞けるとは。一は絶句し、彼女の顔をまじまじと見つめた。
「何か、おかしな事でも？」
「あ、いや、別に」
「では参りましょう」
「参らない。それとこれとは話が別だ」
一は早足で歩き出す。が、ナナは悠々と彼の隣に並んだ。
「マスター、私とマスターでは身体能力のスペックに大きな差が開いています。それはもう、改めてお教えする事はないかと思いますが。それでも申し上げるなら蟻と象。いえ、月とすっぽん。いえ、量産型モビルスーツと黒歴史のアレぐらいの差が……とにかく、マスターが私を振り切る事は不可能でしょう。そして、力ずくで逃走を図るのも諦めた方が合理的かと。何と言ってもマスターは貧弱極

まりないのですから。それとも、歴然とした力の差を理解した上で私をお止めになりますか？」
「なるよ！」
「では私は乙女になります」
「うわあ！　ナナが壊れちゃった！」
「む。幾らマスターと言えども聞き捨てなりません。さあ、私が速やかな奉仕を行えるように鍵をお渡しください」
　ナナが差し伸べた手を無視して、一は立ち止まる。
「……どこが、メイドだ」
「私に到らないところがございましたら、すぐに、何なりとお申し付けください。カイゼンは日本の誇る技術のモットーですから」
「到り過ぎてて至らない」
「申し訳ございませんマスター。マスターのおっしゃっている事が良く分かりません」
　笑顔で告げるナナに、一は苦笑いで返した。
「はあ、なるほど。今まで気付かなかったよ、随分とまあ、良い性格じゃねえか」
「お褒め頂き、光栄です。身に余る……」
「ああ、もう。とにかく、駄目。駄目だからな」
「頑なですね」
「お前もな」
　一とナナは暫くの間、お互いを見つめ――――睨み合う。
が、先に折れたのはナナの方だった。彼女は眼鏡のつるに手を当てて、やれやれと言った風に、やけに人間臭い所作で息を吐く。
「では、せめて夕食だけでも作らせてはいただけないでしょうか。……それが聞き届けられないのであれば、私は……」
「おい。おい、止めろ。掌を閉じたり開いたりするな。分かった、分かったよ。晩御飯だけだぞ。それだけだからな」
「ありがとうございます」
　綺麗な角度でお辞儀すると、ナナは幸せそうな笑みを見せた。

「さあ一さん、まいりましょー」
言いつつ、ナナは一の後ろを歩き続ける。さっきまではそんな素振りを一切見せなかったというのに、マスターの隣に並ぶ事を遠慮しているのだろうか。彼はその、いかにもな態度が気に入らなくて、あまりにもいじらしく思えて、
「ほら、メイドなんだから、ご主人の手ぇぐらい握ってエスコートしろよ」
「……それは、メイドの領分ではないのですが」
彼女に、手を差し出した。

それでも彼を思っている（後書き）

まずは、やれば出来るものですね。８日間連続で更新出来たのは初めてではないでしょうか。その間、多くの方がこいつを読んでくださったらしく、非常に嬉しく、有難く思っております。ありがとうございます。

サブタイトルはもっとメイドっぽいモノから持ってこようと思ったのですが、タイトルがどうしようもないモノが多かったので、使いづらかったのが悔やまれます。

銃火器を上手く書ける人は素直に尊敬出来ます。と言うかします。いや、実に難しい。なんて言い訳ではないですけれど。

前話で終わらせても良いかと思ったのですが、割といけたので最後の更新完了です。次章は泣き虫の女子高校生がメインになるかと思います。出来ましたらまた、お付き合いください。

墓石すら斛をする頃に

時は来たれり。

彼女は手荷物を纏めて、世話になった人間に別れを告げる。ジェーンたちには悪いが、自分だってそろそろ我慢の限界なのだ。基本、寝たきりの生活にも嫌気が差していたし、自由に動きたい。

病院の外に出ると、烏の濡れ羽色をしたセーラー服に、太陽の日差しが降り注いだ。実に心地が良く、伸びをすると、今までの入院生活が嘘だったかのように錯覚する。

「自由って素晴らしいね！」

「……楽しそうで何よりだよ」

満面の笑みを浮かべる立花の隣を、彼女と同じく、退院した神野が歩いていた。彼の表情は立花とは対照的に暗いものであったのだが。

「けん君は退院嬉しくないの？」

「いや、嬉しいっちゃ嬉しいけどさ。……帰ったら、妹がうるさいんだろうなって思ったらなあ」

「ひめちゃんだって嬉しいに決まってるよ」

「どうだか。見舞いに来た時だって、憎まれ口叩いて帰りやがったからな。……なあ、立花はこの後予定、あるか。なかったら、そんで良かったら、どっか寄り道しないか？」

立ち止まり、ううんと唸ってから立花は何も考えていなさそうに良いよと返答する。

「何か食べようよ。ボク、病院のご飯は飽きちゃってさ」

「菓子食いまくってたくせによく言うぜ」

「そっ、それとこれとは話が別だもん。それに……」

言い掛けるが、結局、立花は何も言わなかった。

「まあ良いか、んじゃ駅前まで行こう」
頷き、二人は再び歩き始める。駒台を自由に動けるという幸せを噛み締める事もないままに。

自分の体は思っていたよりも丈夫なのだと確認して、布団を退ける。熱はなく、喉も痛くない。だるさは薄れて心なしか疲れも取れているように感じた。
「ふ、あ……」
大きなあくびをして、一は身を起こす。空っぽだと訴える腹をなだめすかして身仕度を終えると、彼は食料を求めて外へ出た。目的地は階下の住人、歌代チアキの部屋である。
一は階段を軽快に駆け下りると、チアキの部屋の前に立ち、一切の躊躇を見せずにドアノブを捻った。
「ん？」
しかし扉は開かない。一は諦めずに何度も何度もノブを回し続ける。がちゃがちゃと耳障りな音を立てながら、彼はチアキの名を呼んだ。
「おらっ、出てこいよ歌代！　一様が来てやったぞ！」
「……何をなさっておられるのでしょう」
振り向くと、そこには一と同じアパートに住むアイネがいた。瓶底眼鏡に青いジャージ。だらりと流したゴールデンブロンドは美しかったが、彼女の野暮ったい格好で相殺されている。アイネは朝っぱらから楽しげにしている一に訝しげな視線を注いでいた。
「おはよう、アイネ」
「えっ、ええ、おはようございます、ウーノ」
「買い物へ行ってたのか？」
「ええ、退院して家に帰ってみれば、殆どの食材が傷んでおりましたの。まことに残念だと存じます」
どうやら、アイネが提げているビニール袋の中には食べ物が詰ま

っているらしい。とは言え、彼女にたかるのはどうかと悩み、一は卑しい考えを頭の外に追い出した。
「ところで、朝食はもう召し上がって？」
「いや、まだだよ。だから歌代にたかろうと思って」
「……さようでございますの。あの、よろしければ、私が……」
アイネは恥ずかしそうに俯き、ぼそぼそと呟く。が、一は聞き逃していない。
「ありがとうアイネ様！　是非っ、ご馳走になります！」
「そ、その、様、などと。わ、私とウーノの仲ではありませんか。あなたも、そうは存じませんこと？」
「うんうん、その通りっ。で、早速なんだけど、何を召し上がらせていただけるのでしょうか、アイネ嬢」
「では、水炊きを」
一はがくりとうな垂れる。アイネは彼の様子を見て、不思議そうに首を傾げた。
「簡単で、安価。お鍋はこれ以上なく素晴らしいものだと存じます」
「まあ、そうなんだけどさ。でも折角だから、こう、もっと良いもんが……」
「さようでございますか。……ウーノは私の素晴らしいお友達。で、あれば、あなたの頼みを無下に断るのはよろしくありませんね」
「おおっ、良いのか？」
「ふふ、よろしくってよ。では、ウーノの部屋に参りましょう」
アイネは先んじて階段に向かうが、
「なんやねん、もう。人の部屋の前でぶつぶつと……」
ドアを開けたチアキが顔を覗かせる。
「師匠、ウチの事が好きなんは分かってんねんけどー、ちょっとうっさい」
「あ？」
「うわ、ちょっ、マジに睨まんといてや！」
「朝からうるせえ奴だな。何か食べさせろ」

「もうちょい考えて喋った方がええと思うで」チアキは呆れた風に肩をすくめて、寝癖の付いた頭に手を置いた。
「ん。あ、おはようさん、アイネ」
「……ごきげんよう」
声を掛けられたアイネは少し躊躇ってから返答する。
「ありゃ、どないしたん？　なんや、機嫌が悪ぅ見えるような。ま、ええか。腹でも膨れたら機嫌だってようなるわ」
「さようでございますね」と、アイネは不機嫌そうに口を開いた。

お腹がいっぱいになったので、幸せになりました。めでたし。
そんな単純な話があっても良い。一はそう思いつつ、チアキのベッドの上にごろりと寝転がる。
「勝手に使うなやドアホ！」
「余は眠い。そして満腹である。アイネ、褒めてつかわすぞ」
「まことにありがとう存じます」
「お礼なんて言わんでええねんて、あの人ちょっと頭がアレなトコあるから」
ここでズボンを脱いでやろうか。
「んじゃ、部屋に戻るかな」
「はよ行けボケ、師匠」
「語尾に師匠を付ければ許してもらえると思うなよ。……アイネはこの後、どうするんだ？」
「この後は、特には何もございませんの」
一はベッドから下りて、チアキの尻を軽く蹴飛ばしてから靴を履く。
「じゃ、俺の部屋でお茶でも飲んでいかないか」
「ええ、いただきます」
「えー、ウチも行くー」
「ん。じゃあなチアキ、お前は散らかった部屋の片付けでもしとけ

よ」
「散らかしたんは師匠やろ！」
無視して、一とアイネは部屋を出た。二階に上がるための階段に差し掛かったところで、
「『アレ』についてお聞きになりたいのでしょう？」
彼女は寂しげに笑む。
「半分は。もう半分は心からアイネとお茶を飲みたかったんだよ。ま、うちで出せる茶ぁなんて知れてるけど」
「さようでございますか。ところで、ウーノ」
「ん？」　部屋の前に着いたところで、アイネは警戒した様子で、扉を睨み付けた。
「少々無用心かと存じますが。鍵は掛けない主義でいらっしゃるのですか？」
一は眉根を寄せる。鍵なら掛けてきた筈で、鍵なら今も手の中に収まっているのだ。汗ばんだ手でノブを握ると、
「……おかしいな」
それは抵抗を見せずにゆっくりと回り始める。
「何者かが潜んでいる。そう考えるのが自然だと存じます」
「何者かって、何だよ？　自慢じゃないが、家に金目のものなんかないぞ」
「……本人にお聞きになるのが一番かと」
そう言うと、アイネは一の手に自分の手を添えて、一息にノブを回す。開ききったドアから体を滑り込ませると、彼女は侵入者を認めた。
その、侵入者は、はたきを持ったまま一の部屋を興味深そうに歩き回っている。ヴィクトリアンスタイルのメイド服という珍妙な格好で、である。
「お帰りなさいませ、マスター」
「マスター……？」
アイネは不審そうに彼女を見据えた。一は頭を抱えていた。

「どうして、俺の部屋にいるんだ……」
「メイドですから」と、何事もない風に断言したのはナナである。
彼女は笑顔を絶やさぬまま一に駆け寄った。
「お召し物をお預かりします」
「いや、ないから。っておい脱がそうとすんじゃねえよ！」
「……ウーノ、この方は？」
「あー」と、一は心底面倒くさそうに息を吐く。
「初めまして、私はマスターのメイドです」
一が何か言う前にナナは自ら頭を下げた。そして、アイネを見て不敵に笑う。
「どうぞお引取りください」
「なっ、あなた、メイドの分際で……！　私はウーノのお誘いを受けて……」
「ナナはあなたがいらっしゃるなどと聞いておりませんから。それよりマスター、今日はシフトに入っているのをお忘れですか？」
「忘れてないけど、まだ時間はあるじゃないか。大体だな、俺はナナが来るってのを聞いてないぞ」
「私がマスターの傍にいる。そんな当たり前の事をわざわざ申し上げる必要はないと判断しました」
お腹がいっぱいどころか胸焼けがしてきた。一は靴を脱ぎ、部屋の中央で胡坐をかく。
「どうやって部屋に入った？」
「勿論、鍵を使ってですが」
「鍵はここにあるんだけど……？」
「ナナも持っています」
ナナはポケットから鍵を取り出した。一は目を丸くさせる。
「マスターの部屋の鍵穴の形状など、全て把握しておりましたので、技術部の皆さんに頼んで合鍵を作ってもらいました」
「もっとマシなもん作れよ！」
「では、この次はマスターと私の家を建ててもらいましょうか」

「ふざけんな！」
「失礼致しました。今のは冗談です」
ナナはお辞儀をしてから、はたきをアイネに突きつけた。
「それよりも。アポイントメントがない方を、マスターと会わせる訳にはいきません」
「だーかーらー、アイネを誘ったのは俺なの。んで、俺はナナを家に上げた覚えはない。言いたい事が分かるか？」
「申し訳ございませんマスター。ナナには何も分かりません」
「ウーノ、このメイドは一刻も早く解雇なさるのをお勧めしますわ」
雇った覚えはない。一は溜め息を吐くのも面倒くさくなって、大の字になって寝転がった。

結局、アイネとは話が出来ないままで終わった。一はナナに半ば無理矢理に連れられて、アルバイトの始まる三十分も前に店へ到着してしまっている。
『どうせなら働け』
店長にそう告げられ、一は仕方なしにカウンターに立っている訳であった。
「さあマスター、今日も元気に働きましょう」
「マスターを働かせるメイドってのはどうなんだろうな……」
ナナは楽しそうにカウンター周りの消耗品の補充を始めている。
「マスターはおでんの鍋を洗ってくださいね」
「俺がっ！？　……いや、まあ洗うけどさ」
文句を言いつつも、一は袖をまくって電気式のおでん鍋の電源を落とした。流し台に置いてあるボールにざるを重ねて持ち、トングを使って具を放り込んでいく。
「玉子が残ってんなあ。思い切って次は減らしちまうか」
「そう言えば、デイリーの発注はマスターでしたね」
「デイリーどころか殆どが俺だよ。ナナ、何か一つぐらい受け持っ

てくれないかな」
「しかし、私にはまだその手のノウハウがありません。私がマスターの後任では、不安材料が残るのでは？」
一は具を詰め込んだボールの上にキッチンペーパーを被せた。
「そういうのは経験だよ。最初は難しくて時間も掛かるけど、慣れれば大丈夫。困ったら俺に聞いてくれれば良いし」
「マスターがそうおっしゃるのなら。では、ナナは何を担当すれば良いでしょうか」
「煙草とお酒が簡単で良いかな」
ナナは顎に指を当てて、考えるような素振りを見せる。
「かしこまりました。では、ナナがそちらを担当しましょう。マスターにはご迷惑をおかけしてしまうかもしれませんが……」
「新人は迷惑を掛けるのが仕事なんだよ。ま、俺もどうこう言えないし、迷惑掛けちゃうと思うけど。だから、アレだ。お互い様って奴だな」
「ふふ、マスターは優しいですね」
自分は優しくない。だから、一は照れた振りをしてはにかんだ。
「んじゃ、コレをウォークにしまってくるから」
「はい、いってらっしゃいませ」
「……お客さんがいる時にはしないでね、それ」

店内に戻った一は我が目を疑った。彼は、一度心を落ち着かせようと、もう一度バックルームに戻る。
「おい一、何をやっている。早く仕事をしろ」
俄かには信じられない。気付くと頬は緩み、口元はにやけてしまう。一は気合を入れ直して、再び店内に戻った。
「いらっしゃいませー」
いつもより、声を大きく。願わくは、この声が彼女に届くのを期待して。

「お帰りなさいませ、マスター」
「ああ、ただいま」
カウンターへと戻ってきた一にナナが挨拶をするが、彼はどこか落ち着かない様子で視線をうろうろとさせていた。
「あの、マスター？」
「ん？」　返事だけはするが、一の視線は決してナナを捉えようとしない。彼の視線は、店内を興味深そうに見て回る女性のみに注がれていた。
「店長と何かあったのですか？　その、ご気分が優れないように見えます」
むしろ一の気分は良かった。と言うより確実に良い。この世に生を受けてから、初めての高揚を味わっているのかもしれないのである。
「店長に何かされたのでしたら隠さずにおっしゃってください。マスターを傷付けた報いは、きっちりと、それはもう完全に、完璧に、完膚なきまでに受けていただきますから」
「いや、その心配はいらないよ」
一がじっと見つめているのは、和装の喪服を着た女性だ。妙齢の女性にも見えるが、落ち着いた佇まい、物憂げな横顔は若い者が出せる雰囲気ではないと彼は判断する。彼女は布製の鞄を片腕で抱きながら、カウンターの方へ歩いてきた。
「ん、んんっ」
「マスター？」
咳払いを始めた一を怪訝そうに見遣るナナだが、客が商品をカウンターに置いたので、それ以上は何も聞かなかった。
「――――いらっしゃいませ」
三森か糸原がいれば失笑していたかもしれない。作った一の声に女性は気付いておらず、ナナは誰にもばれないように眉根を寄せる。いつもよりも気の入った彼の接客態度が妙に腹立たしく思え、彼女は死角になったところで拳を握り込んだ。

「ありがとうございました」
「……もっと声を張られてはいかがでしょうか」
「え？　ナナ、何か言った？」
「いえ、何も」
心なしか、ぶすっとした顔のナナを不思議に思ったが、一は深く追求しなかった。今現在、彼の心を占めているのは先ほどの美女の事である。
シニヨンでまとめた落ち着いた髪形。そこから僅かに覗く、雪のように白い――――
「うなじ」
「マスター、今何とおっしゃられましたか」
「うなじ」
「何と言う事でしょう。マスターがトチ狂ってしまわれました」
言いつつ、ナナは表情を変えない。
「そう言えばマスター、お聞きになりましたか？」
「いや、お聞きになってない」
「今日、立花さんと神野さんが退院されたようですよ。下手をすれば、明日から復帰なさるかもしれません」
何か引っ掛かる言い方ではあったが、一は聞き流しておいた。
「へえ、そりゃ助かるな。俺たち二人だけじゃあどうしようもなかったし」
「何をおっしゃいますかマスター。私たちだけで充分です。私もマスターも二十四時間休憩なしで働ける逸材ではありませんか」
「無理。無理だから。お前はともかく、俺は普通の人間なんだよ」
「まあ酷いっ、それではまるで、私が普通の人間ではないと言っているようなものではありませんか！」
「ふってぶてしい……」
初めて会った時と比べれば、微笑ましいくらいに変わったものだ

と一は苦笑する。良い傾向か、悪い傾向なのかどうかは分からない。それでも、悪くない。彼はそう思い、頭をかいた。

家にまでついてくると言い出したナナを説得するのは骨が折れた。彼女は全く納得していない様子であったが、一は半ばナナを撒くつもりで店を出た。気疲れした彼はまっすぐ家に帰ろうとせず、駅前にまで足を伸ばしている。アパートとは逆方向ではあるが、向こうに着けば着いたらで不機嫌なアイネが待ち受けているのは容易に想像が付いた。

「ふう……」

缶コーヒーを一口飲むと、急に口寂しくなってくる。鳴りを潜めていた欲求が鎌首をもたげ始めた。分かりやすく言うならば、煙草が吸いたい、である。とんとんと、自分の膝を何度も叩くと、一は強く目を瞑った。

「あれっ？」

間の抜けた声に目を開けると、一の顔を覗き込もうとしている者がいる。彼は少しだけ驚き、その事実を隠そうとして何事もなかった風に缶の縁に口をつけた。

「や、久しぶり」

「う、うん」

その人物は、立花真。彼女は一が最後に見た姿のままでそこに立っている。立花は烏の濡れ羽色をしたセーラー服を身に纏い、長い竹刀袋を携えていた。

「ほっ、本当に、久しぶりだね。あ、あのさはじめ君！　そこ、ボクも座って良い？」

「うん、勿論」

「ありがとうっ」

立花は一の隣へ、飛び込むように座る。木製のベンチが少し揺れて、彼は顔をしかめた。彼女の嬉しそうな顔を見ては、何も言えな

かったのである。
「えへへ、あのさ、元気にしてた？」
「何とかね。立花さんこそ、今日退院したばかりだって聞いたけど、どこかへ行ってたの？」
「お散歩。何だかずーっと寝てばっかりだったから、とにかく歩きたくて仕方がなかったの」
ぎゅっと握り締めた竹刀袋の先端が一の頭を小突いた。
「あっ、ごめんね。その、何だか今日は、持ってないと落ち着かないんだ」
「良いよ良いよ、別に気にしてな……」言い掛けた一だが、彼の頬に再び袋の先が押し当てられる。
「……気にしてないから」
「ごっ、ごごごごめん！」
「そう言えば、神野君は元気だった？」
話題を変えようとして、一は当たり障りのない事を尋ねる。
「うんっ、あ、でも、帰ったらひめちゃんに怒られるかもって言ってた」
「ひめちゃん？　……ああ、神野君の妹さん、だったっけ」
うん、と、立花は勢い良く首肯した。ぶん、と、彼女のポニーテールが揺れる。
「早く会いたいなあ、皆と。学校、始まってくれないかな」
「そう、だね」
一は立花の顔を見られなかった。
学校が始まれば良いだなんて、どの口が言ったのだろう。本当に、学校が始まっても良いのだろうか。彼女は、始まると、元通りになると思っているのだろうか。あの惨劇を見なかった生徒も、見た生徒も総じて理解している。惨劇があった事を。あの場所で、友人が、教師が死んだのを知っている。知っていて、そこに行きたいと思う者は、願う者は果たしているのだろうか。いたとして、それは、果たして――――。

「ねえねえはじめ君、この後、暇っ、かな？」
問われて考えてみるが、一にはこの後の予定などない。強いて言えば、寂しくなった冷蔵庫の中身を埋める為にスーパーへ買い出しに行く程度だろうか。彼は静かに微笑み、素直に答える。
「あっ、あのさ、じゃあさ、ボクと一緒に歩かない？」
「でも、そろそろ暗くなってくるよ」
「う、すっ、少しだけだからっ」
「そう言われてもなあ……」
確かに用事はなかったが、立花を連れて出歩くには遅い時間に思えて、一は返事を躊躇った。が、目に涙を湛えた彼女を見てしまい、
「……だめ？」
挙句、止めを刺される。
一はたっぷり迷って、立花から目を逸らした。
「少しだけだよ。それと、あんまり遠くまでは行かないからね」
「うん！　うんっ、やった！　えへへ、ありがと、はじめ君」
オンリーワンでアルバイトを始めてから、女性に振り回されてばかりいる気がする。今更ながらにそう思い、一は溜め息を吐いた。

「ほらほらはじめ君、早くしないと陽が暮れちゃうよー」
川沿いを歩いている内、一は、大型犬を連れて散歩する子供を見掛けた。自分よりも大きな体の犬に振り回され、引きずられる飼い主をぼんやりと眺めて、何故か自分とダブらせて見てしまう。
目的地もないのに、意味などないのに、ただ歩くだけであんなにも楽しげに出来るものだろうか。一は半ば呆れ、もう半分は羨ましいという気持ちで立花の背中を追い掛ける。
「公園に、駅前。次はどこに行くの？」
「うーん。あっ、はじめ君の学校に行きたい！」
「俺の学校って、大学の事？」
「そうっ」と、立花は振り向き、満面の笑みを浮かべた。

「いや、流石にそれは。あと、こっからだと結構掛かっちゃうよ」
「えー、じゃあ、はじめ君はどこに行きたいの？」
「そろそろ帰りたい」
「そっ、それは駄目だよ！」
しかし、一は既に一時間以上も立花に付き合わされている。用事がないのは確かだが、彼は明日も、朝からアルバイトに行かなければならない。出来るなら早く買い物を済ませて、家に帰って家事を終えて早く眠りたいのである。
「結構歩き回ったからお腹も減ったし」
「あ、ボクもお腹空いたかも」
「うん、じゃあ解散！」
「だっ、駄目だってば！」
何が駄目だと言うのだ。一は立ち止まり、電信柱に背を預けて、流れの緩やかな川を眺める。
「お腹が減ったなら、帰ってご飯を食べるのが一番だと思うけどな」
「……でも、ボク……」
ああ、と。一は喉元まで込み上げてきた呻きを堪えた。九州で暮らしていた立花は慣れ親しんだ故郷を、親元を離れてここにいる。たった、一人で。
――――たった一体の。
たった一体のソレによって、退治屋『立花』は終わらせられた。
「晩御飯、一緒に食べる？」
「え……？」
「立花さんが良ければ、だけど」
「良いの？　ほっ、ホントに？」
一緒に食事をするだけで、隣を歩いてやるだけで立花の心を埋められるとは思わない。親類を殺され、生まれた地を追い出されるようにして、殆ど何も分からないままここに来て、刀を振るう生活を強要された。彼女が失ったものはあまりにも多く、大きいのだから。それでも、一は彼女の泣き顔が見たくなくて、頷く。

「やったあ！　はっじめ君の、手っ料理ー」
立花は調子外れの、即興で作ったであろう歌を口ずさみながら歩き出した。一は彼女の背中と、揺れる黒髪を見つめる。
「けど、立花さんにも手伝ってもらうよ」
「え、えーと。ぼ、ボクも？」
「料理、出来るようになったんじゃないの？　ほら、あの大きなカボチャで」
「あ、あはは。えへへへへ……駄目でした」
「駄目だったか……」
一は立花の隣に並び、追い抜いていく。
「じゃ、俺で良ければ教えるよ。まあ、俺だってあんまり得意な方じゃないんだけど」
「本当！？　何だか、今日はすっごく良い日かも」
「そうかなあ」
「退院出来たし、はじめ君と遊べたんだもん」
剥き出しになった無垢な瞳を向けられて、一は目を逸らしてしまった。彼女のそれはどうにも、まっすぐで、眩し過ぎる。
「ねえねえ、何を作るの？」
「何にしようかなあ。スーパーに行ってから決めようか」
並んで歩く二人の姿は仲の良い兄妹のようで、しかし、どこかぎこちなかった。

燕舞、鳥刺し

翼を広げて空を往く巨大な鳥。
その鳴き声は雷鳴を思わせて、広がった羽の色は雷を強く連想させた。
「降りてくるかな」
「いずれは」
自分たちよりも高い場所を進むソレを見上げ、背の低い少年は呟く。白いパーカーと、青いジーンズという出で立ちの、利発そうな顔立ちの彼は、金色の髪をかき上げて傍らの男に視線を向けた。
「何だかんだでこの街に戻ってきちゃったね」
「ええ、全く」と、物憂げに口を開くのは背の高い男である。彼の髪は腰まで伸びている程の長さではあったが、汚らしさは皆無だった。男は茶色のファーコートを羽織り、黒のカーゴパンツ、ベルト付きのスタッズチェーンミュールを履きこなしている。
白と黒。対照的な二人の男は、上空のソレを見上げながら、逃げ惑う人々の間を縫うように悠然と歩いていた。
「ねえディル。あいつ、何て名前だったっけ？」
「サンダーバードです」
ディルと呼ばれた背の高い男が即答する。
「分かりやすい名前だね。思わず同情しちゃうよ」
「所詮は鳥です。名前があるだけ有難いと思うべきでしょう」
「まあ、もうすぐ死んじゃうんだけどね」
少年は楽しそうに言い放ち、ソレを強く見据えた。

買い物を済ませて、夕食を立花と一緒に作り、食べてゆっくりし

ていると、いつの間にか九時を回っていた。
「ああ、もうこんな時間だ」
わざとらしく言うと、一は立花を見遣る。彼女はこたつに入り、毒にも薬にもならないようなテレビ番組を楽しそうに見つめていた。
「立花さん、今日はもう遅いし、送っていくよ」
「え、う、えーと、その。あ、あとちょっとだけ」
「駄目」一がきっぱりと言うと、立花はテレビと彼とを見比べて、観念したように立ち上がる。
「はじめ君の意地悪」
「……じゃあ、良いよ別に、もう少しいても」
立花が目を輝かせた。
「でも、もう二度と家に呼ばない」
「やっぱり意地悪だぁ！」
「意地悪で結構。明日も早いんだし、今日はこの辺で。あー、ほら、泣かない泣かない。また今度、一緒にご飯食べよう」
「今度って、いつ？」
社交辞令を真に受けられて、一は焦ってしまう。
「いつかって約束してくんなきゃ、ボク、ヤだよ」
「俺にも用事があるし、確約は出来ないよ。それにさ、約束をしてないから、また会おうって気になるんだと思う」
「……でも、寂しいな」
鼻を啜り、立花がこたつから這って出た。彼女は傍に置いてあった竹刀袋を掴み、セーラー服の袖口で目を擦る。
「ううん、ごめん。誰かの作った料理なんて久しぶりだったから、つい、甘えたくなっちゃったんだ」
「そっか。……立花さんのお母さんは、もう……いや、ごめん。余計な事を」
「……？　母さんか。会いたいなあ」
もう二度と会えない。本当に、いらない事を口走ったと、一は己を戒めた。

「送っていくよ。うん、今度は立花さんの好きなものを作るから」
「本当？　じゃあ、ボク、ごまだしうどんとねー……」
「頑張るよ……」
聞いた事のない料理（で、あろう）の名前を上げていく立花に背を向けて、一は玄関の扉を開いた。

それはあまりにも鮮やかに、軽やかと形容するのも躊躇われるほどの剣を振るった。『立花』と謳われた彼女ですら、それの刀の動きを追うのでやっとの有様だ。
それが剣を一振りすれば、人の壁がいとも容易く崩れてしまう。
二振りすれば、赤い飛沫が舞い上がる。
三度剣が振るわれる前に、座していた男たちが刀を手に取り立ち上がった。その都度、大広間の畳の上には首が転がっていく。
彼女は立ち上がる事が出来なかった。愛刀に手を置いたまま、傍若無人に、縦横無尽に振るわれる剣をじっと眺めている。その内、娘を逃がそうとした夫が倒れた。肩口からばっさりと、ぱっくりと開いた傷口を認めて、情けない男だと心のどこかで思った。
『母様、父様が……』
縋り付く娘には目もくれないで、彼女はただ、それを見続ける。他を寄せ付けない美しさ。肩を並べる事すら許されない圧倒的な強さ。呆然として立ち上がれなかったのではない。恐怖で動けなかったのではない。それに、ソレに見蕩れていた。そこには、彼女の求めたモノがある。欲しいと、強く思った。
『母様っ！』
やがて、娘の金切り声を最後に意識は途絶える。ここで、彼女の記憶は終わる。
――――何故、抜かぬ。
やがて、彼女は目覚める。少しでも気を抜くと、立ったままでもこうなってしまうのだ。目をゆっくりと開けて、体の感触を確かめ

る。ほっとしたように息を吐き、顔を上げた。視線の先で、ビルの谷間を何かが横切っていく。やけに大きな鳥だと彼女は認識した。

来た時と同じように、変わらない足取りで二人は歩く。ただ、立花の気分は落ち着いているようだった。口を開かずに歩を進め、黙々と時間を消費する。

「……はじめ君。今日は、ありがとう」

ぽつりと、立花は前を向いたままで呟いた。

「いやいや、気にしないで。……ああ、そろそろ着くね」

マンションが見えてきたので一は歩調を速める。

「ねえ、はじめ君。はじめ君は……」

立花は何か言い掛けて、それから、足を止めた。何事だろうと一が振り向くと、彼女は一点を注視している。その視線の先を追うと、

「……何だ、アレ……」

翼を広げた巨大な猛禽類が、今まさに地上へ降り立とうとしていた。

「まさか、ソレ……」

「はじめ君、ボク、行ってくる」

「えっ、いや、ちょっと待って！」

「大丈夫だよ！」

一の言葉を最後まで聞かずに立花は駆け出す。今、自分の手に武器はない。店に連絡をする必要もあるだろう。だが、彼は少しだけ迷ってから、放っておけないと、彼女の背中を追い掛ける。

剣を鞘に収めると、色白の少年は退屈そうにソレを見遣った。さっきまで動き回っていた巨大な鳥、サンダーバードは既に息絶えている。口からは長い舌を突き出して、白目を剥いていた。哀れな最期を認めると、彼は喉の奥で意地悪そうに笑む。

「やっぱり名前通りの力を使ってきたね」
「……肝が冷えました。自分から雷に飛び込むような真似は、もう二度としないでください」
ディルは乱れた髪を手櫛で直しながら少年に声を掛けた。
「良いじゃないか。たまには僕だって暴れたいんだよ」
ビルとビルの間、大通りで死骸と化したソレ。引き返していく車両や、遠巻きに眺める人々を見回して、少年は獰猛な笑みを浮かべる。
「無闇な干渉は控えた方がよろしいかと」
「別に何もしていないじゃないか。それより、行こうか。血の臭いを嗅ぎ付けて、辛気臭い奴らが来るだろうし」
「タルタロスの葬儀屋、ですか」
「腕は悪くない。どころか、正直『騎士団』にスカウトしたいぐらいの力量はあるんだけど、彼、やる気がないからね」
少年が歩き出すと、その後ろをディルが付き従う。
「……ああ」
「何か？」
「いや、面白そうな子を見つけたんだけど。ま、良いや」

鳥が降り立ったであろう場所に向かうと、人が集まっている通りを見つけた。一が目を凝らすと、二車線の道路のちょうど真ん中に、大きな鳥が転がっているのが見える。どうやら、もう動かない、死んでいるらしかった。
「ナナがやったのか……？」
「ううん、違うと思うよ」
立花が真剣な目付きで言う。
「あの傷口を見てよはじめ君。アレはきっと剣で出来たものだよ。そいで、多分、凄い強い人がやったんだと思う」
「……そんなの分かるの？」

「うん。だって、綺麗な切り口だもん」
改めて見ても、一には何も分からない。それよりも、誰がやったのか、である。一も立花もナナもやっていないのなら、誰がソレを殺したと言うのか。
「はじめ君、どうしよっか。店長さんに言った方が良いのかな」
「いや、俺たちが言わなくても情報部が動いてると思う。……うん、帰ろうか」
ソレに対処する勤務外だと言っても、結局は戦う事しか出来ないのである。そうでなくとも、わざわざ死体を処理する気もなかった。これ以上ここに留まり続ける意味はない。
「ちょっと、興味があったんだけどなあ」
立花が竹刀袋を抱き締める。彼女は先ほどからずっと、ソレの死体に目が釘付けになっていた。
「……斬り合いたい」
「ん？　何か言った？」
「えっ、う、ううん。何もっ」
一は訝しげに立花を見遣ったが、彼女の様子に変化は見られない。気のせいだろうと思い直して、息を吐く。
「それじゃ改めて……」
振り返り掛けた一が、その動きを止めた。背中で受けて、体全体で感じる異様な雰囲気。黒いバンが通り過ぎるのを横目で確認すると、彼は唾を飲み下す。
黒のバンが停まった瞬間、重々しく、物悲しい雰囲気が立ち込めた。その場にいた者の多くは立ち去り、残った者はそれを指し、まるで霊柩車のようだと錯覚する。その車の助手席から現れたのは男だった。上半身は裸で、下半身には辛うじてぼろきれを身に纏い、髪はぼさぼさで猫背。全体的にだらしなさを漂わせる、そんな男。この場にはそぐわないであろう気だるい雰囲気を連れ込み、彼は少しだけ目を見開いた。
「ああ？　何だよ、すげえなコレ。すげえでけえなこの鳥」

ぶつぶつと呟きながら、男は持っていた鞘から刀を引き抜く。
「来た」
立花は、熱に浮かされたように、ぼうっと口を開いた。月明かりに照らされる、透き通った刀身。不精な男には似合わない、綺麗な得物。
「ちゃっちゃと終わらせるか」
男は片手に刀を持ち、相変わらずの猫背でソレの死体に近付く。
「アレが葬儀屋、なのか？」
以前にジェーンから聞かされた事を思い出して、一は呻くように声を出した。早くこの場から立ち去りたい。そう思って立花を見るのだが、彼女はふらふらとした足取りで歩き出し、竹刀袋から日本刀を抜き取った。何が起こっているのか分からなくて、彼は声を掛ける事が出来ないでいる。その内、立花は確固とした意思を持って走り出す。鯉口を切り、刀の切っ先をあの男に向けた。

どうして走っているのか。
どうして切り掛かっているのか。
それはきっと、自分が人形だからだ。生まれてから今まで『立花』であれと、呪いのように囁かれ続けていた。花を愛でる事すら許されず、ひたすらに刀を振るった。それが当然だと思っていたのである。だから、不思議には思わなかった。疑問を抱かなかった。
だから、これで良い。
理由は要らない。ただ、言われたままにやれば良い。
「いざっ！」
大上段に構えた刀を振り下ろす。男は何も言わず、振り向かないままで立花の攻撃を弾いた。彼は返す刀でソレの死体を刻む。
「よう、また会ったな嬢ちゃん」
「こちらを向いてもらいます！」
背を向けた男に刀を振るう。躊躇いなど一切ない。渾身の突きを、

男は横に一歩動くだけで回避した。空を切る刀はソレの体に深々と突き刺さる。ならばと、立花はソレの体を鞘代わりに、刀を無理矢理に引き抜いた。

その間にも、男は解体作業を進めていく。見る見るうちにソレの死体は二つに、四つに、八つに、十六、三十二、六十四。百二十八。意味を成さないパーツに分かれていく。寸断、分断、断裂、分解分別分離分割。頭を、肩を、胴を、腰を足を羽を脚を。男の剣筋は早く、肉を断つ音も、骨を裂く音も、何も。何も音がしなかった。

横に薙いだ立花の刀はまたも空を切る。男はしゃがんだままでソレを切り続ける。

全く相手にされていない。そう認識するも、やる事は変わらない。立花は首を刎ねるつもりで得物を振り下ろしたが、男はその斬撃を弾き返して立ち上がった。

「獣だねえ」

「あなたを切れるのなら獣で結構！」

「獣じゃあ切れねえさ」

男の太刀筋は見えないほどに早く、切られたソレの死体から血液が飛び散らない。彼は立花の攻撃を避け、時には受け止め、弾き返しながらでも、決して作業の手を止めなかった。

「ボクを、ボクを見ろっ！」

「いやー、そろそろ終わるし」

言うと、男はくるりと回転する。ソレの死体はとっくのとうに原形を留めておらず、幾万もの肉片と化していた。

「さーて帰ろ」

「帰すものかっ」

立花は男の前方に立ちはだかる。ようやく、彼と目が合った。彼女はにっと口の端をつり上げて、好戦的な笑みを浮かべた。

「車に戻りたければ、あなたはボクを切る他にない」

「んなこたぁないと思うけど」

男はぼさぼさの髪の毛を掻き毟り、面倒くさそうにあくびをする。

「つーか、なして切られにゃならんのかねえ」
「前にも言った筈です。あなたの腕が悪い。ボクの前で刀を振るうから、こうなる」
「こっちも仕事でね。生きてく為にゃあ働かなきゃなんねえのさ。言いたい事が分かるよな、嬢ちゃん」
「ボクと戦ってもらいます」
「働くからにゃ、生きてたいって事なんだよ。良いだろ、ほっといてくれや」
歩き出す男に、立花は刀を向けた。

アレは誰だと、一は二人の剣士を訝しげに見つめた。
泣き虫で、人懐こい笑みを浮かべる彼女はそこにいない。名前を呼ぶ事すら叶わない。獣じみた剣戟が、往来で繰り広げられている。
「立花さん……」
一の目から見る限り、立花と正体不明の男の力量には差がある。剣や刀に関しては門外漢の彼でもそれは分かった。その差がどれくらい広がっているかまでは分からない。それでも、常の立花ならば子供のようにあしらわれる事はなかった筈だ。彼女は今、冷静さを欠いている。しかし、何故かしっくりと来ていた。まるで、アレが本当の立花の姿みたいで、彼女がとても遠いところにいるように思えた。
「真面目にやってください！」
「真面目ねえ……」
男は自分から手を出さない。立花の繰り出す攻撃を避け、受けながら一歩ずつバンへと歩を進めていく。
「いい加減にしてくんねえかな」
「あなたの方が！」
刀が振るわれたのだと認識したのは、立花が男の攻撃を受け止めたのを見てからだ。一は彼の行動が全く視認出来なかったのである。

「そら、退きな」
男の太刀筋は燕のように早く、鋭い。立花は彼の攻撃を捉えられず、防ぐのでやっとの有様だった。
「立花さん！」
差はある。しかし届かないレベルではない。が、今日退院したばかりの立花にはあまりにも荷が重いのだ。一は叫ぶが、何も出来ない。ここで彼女の名を呼ぶか、あるいは立花が切られるのを見ているしかないのである。
男は刀を振るペースを落とさず、むしろその動きを早めていく。
「今の嬢ちゃんには見えねえよ」
「くっ、ううっ……」
少しずつ後退していく立花に、一は安堵した。どうやら、男に彼女を殺すつもりはないらしい。立花が無理に前進し、攻撃を仕掛けなければそれで済む。
「真っ、受け太刀するな！」
「なっ……？」
突如、誰とも知れぬ、稲妻のように鋭い声が響いた。一は信じられないといった表情で声の主を見つめる。
「退くなっ、前に出なさい！」
立花に向かって死ねと叫ぶのは喪服を着た女性である。一の対面にいた彼女は道路に足を踏み出した。
「……あの人は」
今朝、店へ買い物に来ていた女性だと、一はすぐに気付く。しかし、今の彼女は別人にしか見えない。儚げで物憂げで、寂しげだった印象は消え失せて、鬼ですら後退りしてしまうような剣幕で声を放っている。
「目を開けなさい真！」
おそらくは立花の知り合いなのだろうが、一体何のつもりなのか。前に出ろと、戦えとけしかける女性に、一は僅かな嫌悪感を覚える。
しかし、立花は女性の声を受けてその場に止まる。言われた通り

に太刀で刀を受け止めず、上体を逸らして攻撃を避けていた。
――――危険過ぎる。
「駄目だ立花さん！　君はまだ……」
「――――黙って」
視線が交錯する。立花は感情が宿っていないような、冷たい目でこちらを睨んでいた。彼女の視線に気圧され、一は口をつぐんでしまう。
「教えた通りにやれ真！　太刀で受ければ反撃が遅れるっ」
「はい」
呟き、立花は反撃に転じた。男の刀を避ける動きを無駄にしないで、最小限の動作で刀を横に薙ぐ。
「……めんどくせぇ」
何かが違う。何かがおかしい。違和感を覚えながらも、一は確信めいたモノをはっきりと感じていた。
そうだ。アレが、立花なのだと。
「無駄口叩かなくて良いのかよ。……あー、そーかい」
形勢は逆転しつつある。立花の動きは数分前とは明らかに違っていた。人が変わったのではないかと、そんな気さえ起こさせる。触れれば間違いなく裂かれる。彼女は、そんな、刀による攻撃を紙一重で回避し続けていた。女性の指示通りにぎりぎりの攻防を積み重ねていく。
一は思うように呼吸が出来ず、胸を押さえて立花を見つめていた。
「こりゃ、ちぃとまずいか」
劣勢だと判断した男は今までにない速度で斬撃を放つ。頭を低くする事でその攻撃を躱した立花に、男は片手で掌打を突き出した。刀ばかりの攻防が続いたせいで咄嗟に反応出来なかったのだろう、彼女は目を瞑ってしまう。時間にすれば一秒にも満たない。だが、瀬戸際では玉響ですら命取りとなる。
「やるじゃんかよ」
目測を誤った立花の攻撃を避けると、男は脇目も振らずに駆け出

した。開きっぱなしだったバンのドアから車内に身を滑り込ませると同時、黒い車は走り去ってしまう。
　取り残された立花は腕をだらりと下げて、棒立ちの一へと顔を向けようとした。次の瞬間、乾いた音が何度も周囲に響く。喪服の女性が彼女の頬を引っ叩いたのだ。
「『立花』を舐めるな、真」
「はい」
「私が教えた事をもう忘れたのですか？」
「いいえ」
　喪服の女性が、再度立花の頬を打つ。
「恥を知りなさい」
「はい」
　しばし呆然としていた一だが、戦いを終えた立花に対してあのような仕打ちはないだろうと思い、女性を止めるべく二人に向かって歩き出す。
「何も手を上げる事はないでしょう。あなたは立花さんの何なんですか？」
「部外者が口を出す問題ではありません。あなたこそ真の……」
　言い掛けて、喪服の女性は一に射るような眼差しを向けた。
「……あら、あなたは今朝出会った店員さん」
「覚えていてもらって嬉しいですよ」
　女性は薄く笑み、両手を組む。
「あそこにいたという事は、店員さんは真の同僚で、勤務外だという事ですか」
「そんなところです。それより、やり過ぎじゃあないですか」
「ウチの教育方針に口を挟まないでくださる？　これは家族の問題です」
「家族って……」
　立花の家族はソレに殺された筈だ。一は強気の姿勢を崩さずに、じっと女性を見据える。

「馬鹿な、『立花』は壊滅したって聞きましたよ」
「どうやら、店員さんはきちんとした事を教えてもらっていない様子なのね。……あなた、真とは仲が良いのかしら」
「……は？」
そんなもの、本人の口から聞けば良いだろうと思うのだが、立花は俯いたきり何も話そうとはしなかった。
「こうして一緒に出歩いているのですから、仲が悪いとは言わせませんが。よろしい、こちらでの真の暮らしぶりも聞いてみたいと思ってましたし、店員さんも聞きたい事があるのでしょう？」
「ええ、まあ……」
「落ち着いた場所でお話がしたいわ。どこか、案内してくださる？」
立花を怒鳴りつけていた激しさはどこへやら。喪服の女性は楚々とした雰囲気で一に微笑み掛ける。
「それは構いませんが、あなたは何者なんです？」
「あら、まだ気付いていないの？」
言うと、女性は細めていた目をゆっくりと開けた。瞬間、一の全身が強張る。
烏の濡羽色。青みを帯びた艶やかな髪。一よりも背は高く、目が合ったものを、そのまま視線だけで殺してしまいそうなほどの強い意志を持ち合わせた鋭い切れ長の瞳。全身から立ち上る異様な雰囲気。そう、それはまるで抜き身の刀だった。自分からは何もしないが、近寄ったものを容赦なく切り捨てる敵意が彼女の体全体から溢れている。
ああ、どうして気付けなかったのだろう。
「初めまして、私は立花新（あらた）。『立花』の五代目であり、真の母です」
とんだ厄日だ。人付き合いの苦手な男にとって、古い顔に会うのは苦痛でしかない。
「危ないところでしたね」

「うーん」
壮年の男性運転手に話し掛けられて、男は目を瞑った。
「『立花』とやり合うのは二度目でしたか？」
「いやー、確か、えーと、三度目くらいじゃなかったかな。全く、怖いったらないねえ、アレばっかりは」
「あんな子供なのに、まるで化け物ですね。いや、ウチにも反抗期の娘がいるんですが、彼女に比べればまだまだ可愛いものに見えますよ」
家族やら結婚やら、よくもまあ面倒な事を背負い込めるものだと、男は心の中で嘲笑する。
「しかし、本当のところはどうなんですか芦屋（あしや）さん」
「んー、何が？」
「あのままだと、どうなっていたんでしょうね」
「さあ、どっちかは死んでたんじゃないのかな。まあ、俺がやってたと思うけどさ」
「本当ですかあ」
「うん。マジマジ」
立花の変貌には驚いたが、それだけで殺されてやるほど自分は甘くない。弱くはない。ただし、あのまま切り結べば五体満足で帰って来れなかったのは事実である。芦屋と呼ばれた男が逃げ出したのは余計な怪我を負いたくなかったのと、それ以上に面倒くさくなったからだ。
「しかし、相手は『立花』なんでしょう」
「つってもさ、なーんか怖いって感じなかったんだよね。俺が怖かったのは、あの喪服の方だよ」
「喪服の？　いましたっけ？」
どっちでも良いのと、これ以上口を開くのが面倒なのとで芦屋は黙り込む。運転手も彼の性質をある程度理解しているからか、それきり話し掛ける事はなかった。
バンはタルタロスまでの道を進んでいく。ある角を曲がった刹那、

運転手の体が車両ごと横に寸断された。乗り手を失った車は惰性によりゆっくりと前に進み、ガードレールにぶつかる。
車から飛び出していた芦屋は切断された筈のそれを確認した。確かに、車が斬られたという感覚はある。実際に運転手も胴体を断ち切られて絶命していた。だが、車には何の変哲もない。彼は何が起こったのか分からないまま、本能に急かされて鞘から刀を抜く。
「今日は良い日だ。で、ござる」
声のした方に目を遣れば、そこには男が一人立っていた。彼の手には一振りの得物が握られている。刀ではない。一般的に長剣と称される、代わり映えのしない剣である。
「変な喋り方のお兄さん、あんたがそいつで斬ったのかい？」
「うむ、その通り。拙者がやった」
古風、と言うよりは珍妙な話し言葉を使う男に芦屋は最大限の注意を払った。先刻やり合った立花とは比べ物にならないぐらいの使い手だと一瞬で見抜いたのである。
「まさかたぁ思うが、侍のつもりかよ」
「サムラァイは拙者の目指すべき生き様でござる。まだまだ、拙者など未熟者なれば」
対峙する男はまだ若い。青い瞳に、ブロンドの髪を結った髷と真っ赤な着流しにロングソードは似合わない。組み合わせが無茶苦茶で、どころか、今の世にはそぐわない奇天烈な格好。だが、佇まいや身に纏った威圧感は本物だった。恐らく、彼は自分の数倍、数十倍、あるいはそれ以上の数のモノを切り、殺している。
「厄日だ」
「そうでござるか？」
「あー、そーさ」
芦屋は言い捨て、刀の切っ先を男に向けた。向けてから、しまったと思った。
「むう、やはり剣士の間に言葉は無粋か。いや、失敬、許されよ」
男はロングソードを鞘にしまい、柄に手をかけた状態で腰を落と

す。その仕草、構えはまるで抜刀術のようにも見えた。
「兄ちゃん、色々と舐めてんだろ」
「拙者は本気でござる」
そうだろうなと、芦屋は諦めた風に息を吐く。
「さあ、参られよ」
背中を向けた瞬間に斬られる。逃走の意思を見せた瞬間には斬りかかられているだろう。生き延びたいなら、ここでこの男を仕留める他ない。全く面倒だと呟いてから、芦屋は一歩、彼の間合いに向かって踏み出した。

刈られた芦は首の座に

一が立花親子を連れて入ったのは、近くにあったファーストフード店である。込み入った話をするには不釣合いな場所かとも思ったのが、今の時間に開いている店は少なかったし、新が興味深そうに店の前で立ち止まるものだから、仕方なく入ったのだ。好奇心が旺盛なところは、やはり親子なのだろうかと、彼は今更ながらに思う。

「私から話を聞いてもよろしいですか」

「ええ、構いません」

真っ黒で目立つ二人を隠す為に隅の席を取った一だが、ちくちくと、針のように刺す視線を背中に受けて、効果はなかったのだと嘆息する。対面に座る立花親子に目を向けて、彼は気圧されまいと己に言い聞かせた。尤も、立花は店に入ってから黙りっぱなしである。注文の際も、常の彼女なら信じられないと言った具合に静かなままだった。疲労しているのか、再会出来たばかりの母親に打たれたのをショックに感じているのか、今の一には立花の心情を推し量る事は難しかったのだが。

「真は元気にやっていますか？」

「……え、ええ」

そこに本人がいると言うのに、どうしてそんな事を尋ねるのか一には分からない。

「お店でも、良く働いてくれてますし」

まるで、出来の悪い教師と親との面談である。

「良かった。では、オンリーワンでの真について……」

「あ、いや、待ってください」

「何か？」

訝しげ、と言うよりか不機嫌な雰囲気を隠すつもりもなく、新は

一を睨み付ける。
「次は俺の番って事で」
「……何故でしょう」
「フェアじゃないでしょう。申し訳ないんですけど、俺はあなたを信用してないんです。聞くだけ聞いてはいさよならってのは嫌ですからね」
「あら、私は嫌われてしまったのでしょうか。若い子に敵意を向けられるのはとても悲しいわ」
ハンバーガーに噛り付いておきながら言う台詞かと、一は眉根を寄せた。
「よろしい、では店員さんの質問にお答えしましょうか」
「どうも。……『立花』は壊滅したと聞きました。あなたは、何なんですか？」
「先も言った通り立花新、真の母ですわ。店員さんは勘違いしているようですが、壊滅しただけで全滅はしておりませんの。確かに親類、構成員の殆どは殺されてしまいましたけれど」
「あなたが『立花』の生き残りだと？」
新はシェイクを飲み干してからポテトに手を伸ばす。
「情けない話ですけれどね」
「その、ソレの正体ってのは……」
「アップルパイ」
「は？」
「私、アップルパイが食べたいわ」
にっこりと。微笑む新はメニューを一に見せ付けた。彼は財布の中身を思い出して椅子から立ち上がる。
「立花さんは何か欲しい？」
「では、追加でストロベリーシェイクを」
お前じゃねえよと、喉元まで出掛かった言葉を飲み下した。
「……良いの？」
「うん、ボクは大丈夫、だから」

目を合わせないで頷く立花をどこかおかしいと感じながらも、一は追求しないでカウンターに向かった。
注文を済ませて戻ってくると、新はまだメニューを見つめていた。
「商品が来るまで話さないって事はないでしょうね」
「ちゃあんとお話しますよ。『立花』を壊滅の憂き目に遭わせたソレ。それは、とても強い御方でしたわ」
「……御方？」
「強者に敬意を払うのは当然でしょう？」
一は直観的に違うと感じる。周囲の人間を悉く殺したモノに向けているのは敬意ではない。新がソレに向けているのは、好意だ。
「名前は知りませんが、名の知れた剣士なのだと思います。『立花』を赤子の手を捻るように撫で切りにしたのですからね」
「剣士……？」
「まさか、私たちがただの怪物に良いようにやられたなどとは思っていませんね」
「違うんですか」
一はてっきり、鯨やゴリラを合わせたような巨大な化け物を想像していたのである。
「違います。一応は人の形をしていましたが、神か魔か。あれほどの力量を持ったモノを私は知りません」
「失礼します」
「あら、ありがとう」
店員が持ってきたパイの包みを開けると、新は一に目を向けた。
「今度は私の番かしら」
「……何か、俺だけ損してませんか」
「ああ、ごめんなさいね、私みたいなおばさんが相手で」
「そういう意味じゃなくって……ああ、もう良いです」
「店員さん、あなたは剣か刀を使うのかしら？」
「いいえ」と一は否定する。ゴルゴンが出現した際に一度だけ握ったが、使ったと呼べるようなものではなかったからだ。

「では、使う方をご存じ？」
「立花さん以外だと、うーん、俺たちの店にいる勤務外に一人いますね」
「強いのかしら？」
少なくとも自分より神野の方が勤務外らしい。だが、彼はまだ高校生だ。新は何か期待しているようだが、彼女のそれには応えられない気がしている。
「立花さんから見て、神野君はどうかな？」
「……え、ボク……？」
立花はたっぷり間を空けてから遠慮がちに自分を指差す。
「神野君の事なら、俺よりも立花さんの方が知ってるんじゃないかな」
「でも……」彼女はおどおどとしながら、新に視線を向けた。
「話して、良いですか？」
「構いません」と新が答える。立花は頷き、やはり遠慮がちに口を開いた。
一連のやり取りを見て、ぎこちない、おかしいと一は感じた。
「その、ボクの方が強い、です」
「では意味がありませんね。店員さん、他にはいないのですか？」
「……勤務外では、もういません。フリーランスなら『騎士団』、ですかね」
「ああ、『騎士団』。その方々なら知っていますわ。二人組の剣士でしょう？　それ以外にはご存じないのですか」
一はアイスコーヒーを喉に流し込みながら考える。剣を扱う者や剣士、と言われても、そもそもこの現代では該当する人物すら少ないのだ。
「残念ですけど、俺が知ってるのは彼らぐらいですね」
「そうでしたか。……ふう、これ、美味しいですわね」
「あの、どうしてそんな事を尋ねるんですか？」
「あら、チキンナゲットも美味しそう」

そう言って、新はにっこりと笑う。
「……それだけで良いんですか？」
「では、サラダも。栄養が偏ってはいけませんからね」
あれだけジャンクフードを食べておいた口が言う事か。一は頭をかきながら、再びカウンターに向かう。店員は先と変わらぬスマイルで応対するが、彼の心は何故かささくれ立った。
注文を済ませて戻ってくると、新はまだメニューと睨めっこしている。一は見なかった事にして口を開いた。
「で、どうして剣士を探しているんですか？」
「剣士でなくても、腕に覚えのある方であれば構いませんの。要は、強いかどうか、それだけですわ。ただ、剣を使う者なら、強いかどうかは一目見て分かりますから、手間が省けますの」
新はメニューを膝の上に置いて、立花を一瞥する。
「強い方でなければ、この子の婿には相応しくありませんからね」
聞き慣れない言葉に一の頭の中は真っ白になった。彼は「ええと」だの「うーん」だの呟いた後、
「お待たせしましたぁ」
「あら、ありがとう」
とりあえず、店員が持ってきたシェイクに手を伸ばす。その時に新に睨まれてしまったが、これは自分の分なので何も言わなかった。それどころか、譲るものかと睨み返してやる。
「私の分ではないのですか。……ああ、そうですか。ところで、ナゲットにはマスタードとケチャップのどちらを掛ければ良いのでしょう」
「どちらでも、お好きに。婿ってのは、アレですか、つまり立花さんの結婚相手って奴ですか」
「ええ、『立花』には強い殿方でないと。新たに強い『立花』を迎えるには強い男女に子を作らせるのが当然。特に今は。そうでないと、私たちは群雄割拠の今を生き延びる事が出来ません。影で、時には日向でソレと戦ってきた『立花』を六代で終わらせるのは偲び

ませんから」
「強い剣士を立花さんと結婚させて、『立花』を復興させる、ですか」
「飲み込みが早くていらっしゃるのね」
その話なら、おしゃべりな情報部から既に聞いていた。半信半疑だったものは、真実を語る新によって確信に変わり始めている。
「……ねえ立花さん、君は全部知っていて駒台に来たの？」
立花は答えない。
「お母さんに言われるがままにここへ来たの？」
「店員さん、子が親に従うのは当然でしょう」
立花は答えない。
「さっきの話、そこに君の意志はあるのかって聞いてるんだけど」
「真の意志の有無は関係ありませんわ。それに、この子だって家を守りたいに決まっていますもの」
立花は、答えない。
――――気持ち悪いな、おい。
一は俯いたままの彼女から視線を外さなかった。まるで意志を持たない、糸の切れたマリオネットである。芽生えた嫌悪感に戸惑う事もなく、彼は立花を見据え続けた。
「俺の事をそういう目で見てたのかって聞いてんだけど」
「……っ、ちがっ、ボク……！」
顔を上げた立花だったが、新が彼女を手で制した。
「店員さん、随分な口の利き方ではありませんか。こちらの事情を知りもしないで……いえ、知ったところであなたは所詮部外者。部外者が勝手な口出しをしないでくださいな。それとも何か、あなたは真の男なのですか？」
「どうしてそうなるんですか……」
「他者に踏み込む時はもっと気を払いなさいな。間合いとは、何も剣士だけが測れるものではありませんよ」
先に踏み込んできたのはそちらが先だろう。一はストローの先を

噛み、叫びだしそうになる自分を抑える。
「行儀が悪いですわよ。……まあ、ここに来て正解でしたわ。この子一人では満足に、自分の婿を探す事すら出来ないんですもの」
「娘さん思いでいらっしゃる」
「あら、うふふ、ありがとう」
皮肉も軽く流されてしまった。立花はまた俯いてしまい、一を見ようとはしない。これ以上ここにいても腹が立つだけである。彼はシェイクを飲み干そうとして、ふと、新が気に入るかもしれない人物を思い出した。
「強い剣士ってんなら、さっきの人はどうですか？」
「さっきの……ああ、芦屋の事ですか」
「あしや？　さっきの人を知っているんですか？」
新は分からない程度に頷く。
「以前に切り結んだ事があります。そこそこにお強い方でした。しかし、ムラがある方でしたので」
「アレで、そこそこと言いますか」
一の目からは芦屋と呼ばれた男も充分に強く、化け物に見えていた。それをそこそこと言ってのける新を、彼は信じられないといった様子で見る。
「では、私たちはお暇しましょう。店員さん、ごちそうさまでした」
「……どういたしまして」
「私はもう暫らくこの街に滞在します。機会があればまたお会いする事になるでしょう」
出来る事なら二度と会いたくない。しかし、その願いは叶わぬものになるだろうと一は予感していた。

地面に転がった腕を一瞥して芦屋は息を吐いた。右腕が切り取られた箇所からは血液が滴り、ピンク色の肉と骨が見えている。苦痛に耐えかねて、彼は力なく笑った。

「流石は掃除屋。あの一撃を受けて片腕だけで済ませるとは……いや、感服いたした」
「何を言ってんのかねえ……」
ふざけた格好と話し方をしているが、正体不明の男の実力は本物だった。
「ま、これであんたと同じ土俵に立ったって感じか」
まさか、男が隻腕でここまでやってのけるとは思いもしなかったのである。左腕だけで、圧倒された。ハンデを背負っていてこの剣力。彼が万全の状態なら、数合と持たなかっただろうと推測する。
「あんたの腕を持っていった奴が羨ましくて、同時に感謝してるよ」
「感謝？　それは何とも奇怪な、でござる」
「片腕でそれなら、全部揃ってた時のあんたは……いや、想像出来ねえなあ」
真っ赤な着流しの男は目を瞑り、不敵に笑む。
「何か、勘違いしているようでござるな」
男は剣を鞘に納めて、柄に手を遣った。芦屋は彼の指を注視する。
「であれば、貴殿の命運もそこまででござる。白刃が鞘から放たれたと同時、刈り取らせていただく」
「何をだい？」
「参る」
次の瞬間には男の剣が首元にまで迫っている。芦屋はそれを刀の腹で受けた。
「……あ？」
斬られる。予感し、実感した。斬られる。否、それはまるで空間ごと断つような人間離れした斬撃だった。刀の腹、自分の首、そして、その後方にある空気と空間。
「良い死合でござった」
ちん、と、男の剣が鞘に納まった。芦屋は後ろから倒れ込む。刀は真っ二つに。彼の首はころころと血の跡を残していく。
「出来るなら、ヴァルハラにてまた死合おう、で、ござる」

早朝のシフトに入っていた一は、勤務の始まる十分前にバックルームへ入った。
「おはようございます、一さん！」
「……んん、おはよう神野君」
朝から元気な神野と挨拶を交わして、一はロッカーを開ける。
「一君、君はまだとても大切な人に挨拶をしていない気がするんだが？」
煙草を吹かす店長を見遣ってから、一は制服の袖を通した。
「おはようございます。楽しそうで何よりですよ。こっちまで口元がつり上がってくるくらいです」
「どんなアホでも挨拶くらいはしっかり出来るものだ」
暗にアホだと、アホ以下だと言われて一は苛立つ。
「ええ、店長を見習いますよ。どんなに無能でも挨拶さえ出来れば椅子に座ってるだけで金がもらえるんだって」
「よしきた、お前そこに跪け。蹴りをくれてやる」
「さーて働くかー」
一は店長を無視して掃除道具を手に取った。
「生意気な奴め。お前も殺されれば良いんだ」
「……俺、も？」
「ああ、一さん、実は昨夜、辻斬りが出たらしいんですよ」
「辻斬りぃ？」
神野は真剣な眼差しで一を見返す。
「はい、ですよね店長」
「馬鹿馬鹿しい話だが、実際死んでる奴がいるしな。しかも、死んだのはタルタロスの者らしい」
「……へえ、そりゃまた」
店長は煙を吐き出して、床に吸い殻を落とす。一はすかさず、ちりとりと箒で片付けた。

「床に落とさないでください」
「お前が掃除してくれると信じていた」
「……で、辻斬りってのはどうして？　犯人は捕まったんですか？」
「いや、まだだ。凶器と、犯人の目星はついたらしいがな」
「どうしてそんな事知ってるんです。警察が教えてくれたんですか？」
　首を横に振り、店長は新しい煙草に火を点けた。
「ウチの情報部から聞いた。多分、警察の手に負える相手じゃない。と言うか管轄外だ」
「まさか、ソレが出たんですか？」
「そこまでは分からん。だが、化け物に近い相手なのは確かだ。……凶器は刀か、剣。長い刃物だそうだ」
　一は得心する。神野たちが辻斬りと呼んだのは凶器がそれだったせいだろう。
「じゃあ、犯人は人間って事ですか」
「それはどうだろうな。何しろ、タルタロスの腕利きを切り捨てたんだ。一般人やそんじょそこらの勤務外が出来る事じゃない」
「腕利き……」一は箒に体重を預けて黙考した。タルタロス。腕利き。嫌な予感が彼の全身を駆け巡る。
「殺されたのはタルタロスの掃除屋。葬儀屋、死体処理係とも呼ばれていた男だ。ついでに、運転手と乗っていた車もバッサリやられていたらしい」
　瞬間、一の脳裏に、妙にやる気のなさそうな、倦怠感を常にまとった男が浮かび上がる。昨夜、ソレの死体を切り刻み、立花と切り結び、芦屋と呼ばれた者が。
「ん、どうした一、心当たりでもあるのか？」
「……いや、ないです」
「そうか。お前はタルタロスに出入りしているし無駄に顔が広い。いや、変な奴と無駄に関わるからな、てっきり、掃除屋とは知り合いだと思っていた」

「知り合いじゃないけど、まあ、穏やかな気分じゃあいられないですね」
「ま、そうだろうな。今もこの近くに殺人犯がうろついてるかも知れないんだ」
その割に、店長の表情は楽しそうなものだった。
「ああ、一応聞いておくが、犯人について心当たりはないか？」
一はすぐに首を横に振る。神野は少しの間黙っていたが、言葉を選ぶようにして遠慮がちに口を開いた。
「掃除屋って人がどれだけ強いのかは分かりません。けど、んな事やれそうな人って、限られてくるんじゃないかって思います」
一も心中で同意する。犯人は既に割り出されているのではないか、とも思った。
「正直、俺はこんな事言いたくないけど、けど……」
「刀剣を得物とし、尚且つ腕の良い剣士を殺してのけるモノか。なるほど、いや、私の考えが足りなかったと見るべきだな。心当たりとは言ったが、お前らの思いつく奴は知れている」
名前が出なかっただけでもマシだと考えたのか、それでも神野は苦い顔をして、一に助けを求めるような視線を送った。
「うーん、まあ、神野君が考えているような事は起こってないと思うよ」
「そう、ですかね？　いや、やっぱし、そうですよね。理由なんかなしに、あいつは、そんな事出来るようなタマじゃないっす」
「その通り、さあ学生諸君、ぼさっと突っ立ってないで勉学に励み勤労に勤しめ」
店長に急かされて、神野はフロアに飛び出していく。
「おい、一、お前も神野を見習え。駆け足用意」
立花を疑うのはあまりにも容易い。しかし、一には、明るく、子供っぽくて泣き虫な彼女が人を殺せるとは思えない。まして彼女にはそんな事をする理由もなく、道理もないのである。
が、それはあくまで、昨日までの話だ。神野も店長も、立花の二

面性、立花の母、新について知らない。彼女らが壊滅した『立花』の復興の為に、強者を探して、立花の婿に迎えようとしているのを知らないのだ。

一は昨夜の立花を思い出す。口を閉ざし、感情を殺し、新の影に隠れ、怯え、人形のように押し黙る彼女を。今になって、ようやく分かった。彼女が芦屋に切り掛かったのは何の為なのか。

「店長、強い人って、そう簡単に見分けが付くんですかね」

「そんなもの知るか。まあ、一流は一流を知るとは言うが、人は見かけによらないものでもある。実際、そいつの実績だとか経歴だとかを知らない事にはな。後は、もう直接戦ってみるしかないんじゃないか」

立花が芦屋に切り掛かったのは、実際に戦って、剣士である彼の強さを確かめる為ではないのか。そして、彼女には芦屋と戦う理由が、彼を殺す理由がある。否、結果的に殺してしまったと言うべきか。

『ボクは……』

自分の意思ではない。自動的なそれは陳腐で、

『母様に言われたから』

あまりにも無責任過ぎる。

「それじゃ、先に休憩に入るね」

「はいっ、お疲れ様です」

「暫くしたら堀さんが出てくると思うから、そしたら神野君も休憩に入っちゃって」

「分かりました」

神野が頷いたのを確認してから、一はバックルームに戻った。

「いやあ、お疲れ様です」

「お疲れ様です。堀さん、引継ぎに関してはメモを残してあるんで、神野君から受け取っておいてください」

眼鏡の位置を指で押し上げ、堀は柔和そうな笑みを浮かべる。
「流石は一君、ありがとうございます」
「いえいえ、そいじゃ、俺は学校にでも行ってくるんで、後はよろしくお願いします」
「任せてください。あ、少しだけ時間をもらっても？」
勤怠の登録を済ませた一は、不思議そうに堀の顔を見遣った。
「店長から話は聞いていると思いますが……店長、ちゃんと一君たちに話しましたよね？」
「話した話した。そう念を押すなよ」
店長は煩わしそうに手を振り、面倒くさそうに煙を吐き出す。堀はやれやれと呟き、一に向き直った。
「一君、辻斬りが出たのは知っていますね。実は、その事についてお話が」
「ああ、それなら朝に神野君も一緒に聞いていた筈ですけど、二人まとめて話を聞く、じゃあ駄目なんですか？」
堀は困ったような表情を浮かべてから、店長にお伺いを立てるように視線を向ける。
「駄目だ。今から話す事を神野の耳には入れるなよ、一」
「……犯人が分かったんですか？」
「いえ、そうではなく、ある程度絞ったと言う感じです。まだ、犯人は判明していませんよ」
「そう言う事だ」と、店長は一をじっと見据えた。
「確認なんですが、殺されたのはタルタロスの葬儀屋、芦屋と呼ばれた男です。凶器は刀剣類。芦屋さんがかなりの使い手だったという話は聞いてますから、犯人も彼と同等か、あるいはそれ以上の使い手と見られていますね。そして、犯人は十中八九、剣の扱いに慣れ、長けた者です」
「それは事実なんですか？」
一はささやかな抵抗を試みる。
「ええ、まあ、残念ながら。ケースがケースで、被害者が被害者で

す。並大抵の人間に殺されてしまうほどタルタロスの人間も甘くないでしょう。つまり勤務外、フリーランス、もしくは、もっと別の何か。とにかく、腕の立つ者が怪しいのは確かです。そして、犯行に及んだ者だって自分が怪しまれると理解しているでしょうね。駒台には他の街よりも多くの勤務外、フリーランスがいます。しかし、数は限られている。それも、剣を使う者となれば更に限られるでしょう」

堀は一度言葉を区切る為にミネラルウォーターを口にした。

「失礼。……剣士の犯行に見せ掛ける為のカモフラージュ、という線もありましたが、今までに剣を使った事のない人間が熟練の剣士にそれを用いて勝てるとは思えません」

「あー、確かに」と、一は頭に手を遣る。店長は彼の様子を見て口元を歪ませた。

「実は、私も死体を見ました。付けられた傷口は二つ。それはあまりにも、綺麗でしたよ。並の使い手が魅せられるレベルの話ではないです。アレは正直、恐ろしいくらいだ」

堀ですらそこまで口にする。それだけの事を、本当に立花がやったのだろうか。

「ここまで言えば分かるだろうが、疑われているのは立花だ。ウチの勤務外、立花真。あいつがやったんじゃないかって言われてる」

店長はくだらないとでも言いたげに両手を軽く上げる。

「それだけではなく、その、神野君も疑われてるんですよね。いやあ、困った事に」

「神野君まで!?」

言って、一は口を塞いだ。頭では無駄な行為だと分かっていたが、咄嗟に手が動いたのである。

「オンリーワンがそうではないかと睨んでいるのは、立花さんと神野君。フリーランス『騎士団』。それから、その、『立花』の五代目、だと」

「……五代目、ですか」

「ええ、情報部が確認しました。『立花』の五代目、立花新……ええと、つまり、いやあ、その、立花さんの母親が駒台にいるのを。どうやら、九州で鬼を切ったその足でこっちに来たらしいんですよ」

鬼を切ったに、一は突っ込むつもりがない。彼女ならば、それぐらい出来て当然なのだと思えたからだ。

「急だったとは言え、『立花』に関する情報に齟齬があったらしい。当たり前だが、立花本人は母親が生きているのを知っていたようだがな。それでも、こちらとしては寝耳に水だ。死んでいたと思われた五代目が動き回っているんだから」

「そして、恐らくは娘である立花さんと合流している筈です。退治屋と知られた彼女がこの街で何をするのか、あるいは、もうしたのか。とにかく、何かは起こるでしょうね。いやあ、こんな事ならもっと早い段階で立花さんに話を聞くべきでしたね」

「幸いな事に、立花は今日の夕方のシフトに入っている。その時に聞けば済む話だ。それまでは、誰にも言うなよ」

店長は一を睨み付ける。彼は目を逸らして、もう遅いかもしれないなと、ぼんやりと思った。

稚児の剣法、彼の一分

一度家に戻り、大学へ行く用意をしてから家を出る。だが、頭の中を占めるのは立花の事だ。今日の夕方、自分と神野と立花とで顔を合わせるのだが、それまではどうしようもない。そして、もしも彼女が真実を語り、最悪の結果を聞かされたとしたら――――。

一は頭を振り、今は忘れろと自分に言い聞かせる。

「おお、先輩ではないか！」

大学までの坂道の途中、一は後ろから声を掛けられた。振り向くと、向日葵のような笑顔を向ける小柄な少女と、仏頂面をした少女が見える。後輩の早田と、座敷童子の槐だ。

槐は早田に無理矢理手を引かれて、よたよたと歩いている。対照的に、早田は酷く楽しそうで、嬉しそうだった。

「こんなところで会うとは奇遇だな先輩。運命を感じる！　赤い糸とやらの存在、信じざるを得ないようだ！」

「こんなところも何も、学校までの道だろうが。それに、講義同じの入れてんだから時間だってそりゃ合うだろ」

「はっはっは！　先輩は恥ずかしがり屋さんだなあ、セックスしよう！」

通り過ぎていく学生の視線にはもう慣れている。一は溜め息を吐く事すら煩わしくなって、彼女を見返した。

「……一（はじめ）、助けてくれ」

「俺の台詞だ」と槐に返し、一は改めて彼女らを観察するように見つめる。

「早田はともかく、どうして槐がここにいるんだよ？」

「うむ、槐ちゃんがこの近くを歩いていたのでな、私が連れてきた。まるで仲睦まじい姉妹のようだろう」

「幼女拉致監禁って感じだよ。学校に連れて行ってもしょうがねえだろ、放してやれよ」
槐は何度も頷いた。
「いや、それは出来ない」
「何故じゃあ！？」
「槐ちゃんが可愛いのだから仕方がない。私は、このキュートな槐ちゃんを大講義室で大勢の人に見せびらかしてやりたいのだ。ふふふ、この子に触れて良いのは私だけなのだと、な」
「はじめぇ……」
がっくりとうな垂れる槐に、一は掛ける言葉を知らない。
「あー、その、アレだ、槐が嫌がってんだろ」
「その顔もまたオツなものだ。これだけで十回はイケる」
「何が……いや、やっぱ良い。それより、槐にも用事があるんだろうからさ」
「ん？　いや、わしは暇だったから適当にぶらついておっただけじゃぞ。特に用事はない」
助け舟を自らの手で潰す者を見た。一は馬鹿らしくなり、早田たちに背中を向けて歩き出す。
「先輩先輩、置いていかないでくれ。寂しくて枕を……いや、股を濡らしてしまうではないか」
「言い直すな！」
「股を濡らしてしまうではないか」
「繰り返すな！」
「濡れるッ！」
「そこだけ言うな！」
槐は力を抜き、流れに身を任せるのを決意した。

夕方のシフトまで休憩をもらった神野は、一度家に戻ると告げ、店を出た。とは言え、家には妹の姫がいる。彼女は、神野が退院し

た昨日の今日でアルバイトに行くのを頑なに拒み、責めていた。戻れば、また叱責され冷たい視線を浴びせられる破目になるのだろうと、彼は憂鬱な気分に陥る。

「はあ……」

「もし」

溜め息を吐いた瞬間に声を掛けられてしまい、神野の体が強張った。

「あの、一つお尋ねしたい事があるのですが」

「え、ええと」

振り向いた神野は思わず目を見開く。和装の喪服を着た女性は、少なくとも自分の周りにいるタイプの人間ではない。彼女を綺麗だと認識した途端、しどろもどろになって、頭の中が真っ白になった。

「み、道、ですか？」

「いいえ、尋ねたいのは人ですの」

女性は優しげに目を細めると、

「オンリーワンの勤務外、神野剣、と言う方を」

白々しい笑みと、言葉を神野に向けた。

講義が終わると、学生の殆どが教室を出て行く。出入り口に群がる者たちを見てから、一は机の上に突っ伏した。

「む、どうした先輩、お疲れのように見えるが。何なら揉んでやろうか、肩とか」

「……肩だけで良い」

「遠慮しないで良い。ほら、チャックを……」

一は跳ね起き、早田の額を小突く。彼女はにやにやとした笑みを隠さなかった。

「全く、ぬしらは元気じゃのう。わしはもう、何だか疲れた」

早田の膝の上に座っていた槐は息を吐き出して、彼女の背中に頭を預ける。

「疲れたのか。良し槐ちゃん、ベッドに行こう。お姉さんが優しく、時には淫らな娼婦のように体を弄繰り回してあげよう」
「ベッドなんかねえよ」
一は立ち上がり、肩に鞄を掛けた。
「一、早くわしを助けんか」
がっちりロックされている槐を見遣って、一は諦めろと呟く。
「なっ、わしの純潔が散らされても良いと言うのか！　見損なったぞ一、不幸になってしまえ！」
「くそ、お前に言われるとシャレじゃ済まないんだよ……」
一は犯罪者一歩手前である後輩の頭を叩き、槐を魔の手から救出した。彼女は早田の膝を踏み台代わりに跳躍。机を飛び越えて、一の足元に縋り付く。
「ああっ、良いなあ先輩、私もそういう風に槐ちゃんに懐かれたい」
「だったらもっと可愛がってやれよ」
「愛を注いだつもりだ！」
「……ぬしら、わしはペットではないぞ。まあ良い、一、途中まで送っていけ」
槐は一のズボンの裾をぐいぐいと引っ張った。
「なら、先輩の忠実なイヌである私もお供しよう。ワンワンっ、先輩、雌犬とお呼びください！」
「お前は部活があるだろうが」
「あんなもん先輩と一緒に帰宅出来る幸せに比べればカスだ」
言い放ち、早田は机に手を掛けて、跳躍する。彼女は一の隣に降り立ち、どうだとでも言いたそうな表情を浮かべた。
「さあ先輩、二人の愛の巣へ行こうではないか！」
「一人で行ってろ」
「あああぁぁぁ……そんなっ、やっ、一人でイッてろなんて……」
その場にへたり込む早田を無視して、一と槐は講義室を出て行く。
彼らの表情には凡そ感情と呼べるような色がなかった。

坂道を下っている途中、一は上ってくる学生、通り過ぎていく人々の注目の的だった。原因は分かり切っている。隣を歩く槐の存在がそうさせているのだ。

「はあ、もっと考えるべきだった」

「む、どうしたのじゃ？」

「分からないなら分からないで良いよ」

「ぬしの年で子持ちと言うのは珍しくないと思うがの。まあ、最近では授かり婚だとかまたにてぃうぇでぃんぐと呼ぶらしいではないか。あまり気にするでない」

「てめえ、分かってんじゃねえか」

一は槐を睨み付けるが、彼女はわざとらしい素振りで視線を逸らす。

「ぬしだって、わしみたいな可愛い座敷童子と逢い引き出来て嬉しい。じゃろ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、槐は一を見上げた。

「人目は忍んでないけどな。それより、どこまで送ってけば気が済むんだよ」

「無論、家まで。と、言いたいところじゃが、ぬしにはあるばいとやらがあったか。うむ、坂を下るまでで良い」

「そんなとこまでで良いのか？　別に、急いでないから送ってってやるぞ」

「……ぬしは、相変わらず優しいのかそうでないのか分からんな。全く、そんなだから早紀も勘違いするんじゃ。もっと自分の言動には気をつけい」

溜め息を吐き、一は大袈裟に肩をすくめる。

「そういうつもりはないんだけどな」

「たらし、め。いつか痛い目を見るぞ、一」

「どうして俺が痛い目を見なきゃならねえんだよ。そんなつもりねえってば。第一、俺がたらしならもっと幸せに暮らしてるね」

むしろ、女性に振り回されているのは自分なのだ。一はまた溜め息を吐き、槐に脛を小突かれる。

「幾らわしが隣にいてやってもな、そうやって溜め息を吐いてばかりでは幸せが逃げてしまうぞ」

「ご心配なく、幸せならもうどっかに行っちまったよ。ひらひらーっとね」

「馬鹿者。今の生活を幸福と呼ばないで何を幸福と呼ぶのじゃ。少なくとも、わしのような美少女の隣を歩けるだけでも有難く思わんか」

「自分で美少女って言っちゃう奴の隣ねえ。あ、しかもお前少女じゃないし。幼女じゃん」

槐は一の向こう脛を思い切り蹴飛ばした。彼は声にならない声を発して、その場にしゃがみ込む。恨みがましい目付きを彼女に向けて、一は歯を食い縛った。

「おうおう、恐ろしい顔じゃなあ。そんな顔をしていては女子も寄っては来ないのう」

「……お前がさせたんだろうが……」

「まあ、そうなったらわしが責任を取ってやろう。ふふん、喜べ。ぬしと祝言を挙げてやっても良いぞ」

「何ぃ……？」

「そう照れるでない。わしがいれば家内安全無病息災、学業成就に心身健全大漁満足と来たものじゃ」

一の肩を叩き、槐はころころと笑う。本気か冗談なのか、彼には判断出来なくて、少しだけ戸惑ってしまった。

「結婚するなら楯列としてやれよ」

「あやつは弟のようなものじゃ。そういった感情は、あやつに対して持ち合わせておらんよ」

「あいつを義兄さんと呼ぶなんてごめんだ。そうでなくても、お前みたいなちんちくりんと結婚したら陰口を叩かれるに決まってる」

「……ほう？　何と叩かれるのじゃ？」

「決まってんだろ、ペドフィリアだ」
「せめてロリコンにせんか！」
「どっちでも変わんねえよ！」

「ん、どうした一、ズボンの裾が破れているぞ。何かあったのか？」
「いえ、別に」
むすっとした顔でバックルームに入ってきた一を見て、店長は訝しげな顔をした。
「それより、先に言う事があるんじゃあないのか」
「……おはようございます」
「それもそうだが、遅れてすみません、だろう。言い訳してみろ、納得いくような説明なら見逃してやっても良い」
一は少しだけ考え、
「座敷童子と喧嘩してたら、遅くなりました」
正直に告げる。馬鹿正直とはこの事だと、内心で思った。
「言い訳するならもっとマシな事を言え」
「本当ですってば。ほら、ここが破けてるのは……」
「言い訳するなっ、私は遅刻した事について怒ってるんじゃない。お前が嘘を吐いた事に対して怒っているんだ！」
「横暴だ！」
「良いから、ほら、さっさとフロアに出ろ。立花と神野が待ってるぞ」
一は制服に着替えて、店長をじっと見つめた。
「何だ、私に惚れたのか？」
「生憎と視力は良い方なんで。そうじゃなくて、立花さん、どうなったのかなって」
「あー……」店長はつむじの辺りを指でかき、罰が悪そうな顔を作る。
「本人に聞いてみろ」

「人を殺したかって？　冗談でしょう」
「話せば分かる。……分からん事がな」
遂にボケたか。一は店長を可哀相なものを見るような目付きで一瞥してからフロアに出た。
「あっ、遅いよはじめ君！」
駆け寄ってきた立花に、一は面食らってしまう。彼女は人懐こい笑みを浮かべて、飼い主の帰宅を喜ぶ子犬のように、彼の腕を掴んだ。
「えっ、あ、うん。その、ごめん」
一には何が何だか分からない。昨夜の出来事が嘘だったかのように、立花は無邪気に笑うのだ。
「はじめ君がいない間、ボクとけん君で頑張ってたんだよー」
「ごめんごめん」言いつつ、一はカウンター前で所在なげに立っていた神野に視線を送る。神野は何も言わず、首を横に振った後で申し訳なさそうに俯いた。
「どこまで終わったの？」
「えっとねー、掃除でしょ、フェイスアップでしょ、それからっ、えーと……」
「仮点検は？」
「それは、はじめ君のお仕事っ」
「……はいはい。それじゃ、少しの間、レジは任せたよ。毎回言ってるけど、間に合わないと思ったり、お客さんがたくさん並んだ時は呼んでね。大声出すんじゃなくて、レジについてるボタンを……」
「もうっ、大丈夫、ボクはちゃんと分かってるよう……」
「じゃ、よろしくね。あ、立花さん、雑誌が少し乱れてる」そう言って、一は立花を雑誌コーナーに向かわせる。彼はカウンターに入り、仮点検を行なう為にレジを止めてドロワーを抜いた。
「……来てからあんな感じ？」
「……はい。あいつ、普段と何も変わってないですよ」
一と神野は声を潜めて、本人には気付かれないように立花を見た。

彼女は鼻歌を歌いながら、乱れていた週刊誌の列を整えていく。
「うーん、まあ、それならそれで、何もないなら良かったよ」
「……ですね」
「……？　じゃ、少し中に入ってるから」
立花に対する疑いの念は晴れたというのに、神野の表情は曇っている。しかし、一は何も言わずにバックルームへ入っていった。彼は休憩室の机で作業しようと思ったのだが、店長に手招きされて、仕方なく彼女の隣の椅子を引く。
「机の上、片付けてくださいよ」
「あいよ」と、店長は書類やファイル、筆記用具や封筒などを机の隅に積み上げていった。
「どうだ、綺麗になったろう」
「……どうも」
一は机の上にドロワーを置き、引き出しから電卓と、コインカウンターを取り出す。
「店長の言った通り、分からない事が分かりましたよ」
「ああ、立花に不審な点は見受けられん。見えん。と言うか、読めん。正直、何を考えているのかが分からん」
店長は背もたれに体重を預けて、不安定な体勢で伸びをした。一は気にせず、札を慎重に数え始める。
「まあ、疑いが晴れて良かったじゃないですか」
「疑いが晴れた？　何を言ってるんだ一、分からないからこそ疑う必要がある。言っておくが、理由もなく人を殺す奴なんかウチにはいらない。欲しいのは腕の良い剣士だ。別に、そいつが泣き虫でも仕事が出来なくても構わん」
「俺は信じてますよ」
かなり、際どいラインではあるが、とは付け足さない。
「そうか。なら、お前は信じてやれ」
「店長は信じてあげないんですか？」
「私の仕事は最悪の事態を避ける為に疑う事だ。……憎まれ役は一

人で良い。だろう？」
「時々、あなたが良い人に見えます」
「言ってろ」
店長は煙草に火を点けて、コインカウンターに百円玉を並べていた一へ煙を吹き掛けた。

ドロワーを持ってフロアに出ると、一の背筋がぞわりと冷えた。見ると、カウンターの傍に見覚えのある女性が立っている。和装の喪服を着た、三十代後半程度の年齢であろう女性だ。
「あら、こんにちは、店員さん」
彼女に笑い掛けられて、一はただ、頷いて返す。それから、何をしにきたんだと、強く見据える事で訴えた。
神野はどうしていいのか戸惑っている様子で、立花は昨夜と同じく、俯いて黙っている。一は大袈裟に足音を立てながらカウンターに入り、レジを開けてドロワーを元の位置に戻した。
「お話、聞いていると思いますけれど」
「話……？」
静かに微笑む新を見遣り、一は不審そうに眉根を寄せる。
「聞いていないのですか、そちらの方にはお伝えした筈なのですけど。ねえ、神野さん」
びくりと、神野の肩が僅かに震えた。彼は一言「すみません」とだけ発する。一か新か、どちらに向けた言葉なのか、定かではなかったが。
「俺は何も聞いてません。それよりも、そこにいられると迷惑なんですけど」
「他にお客さまは見えていないようですけれど」
「……減らず口を」
「あなたこそ、お客に対する口の利き方がなっていないようですね。まあ、良いでしょう」

新は抱いていた鞄から扇子を取出す。片手で器用に広げてから、それで口元を隠した。
「百聞は一見に如かず。あなた方の実力、とくと拝見しましょう」
「何を言ってるんですか？」
「少々荒っぽいかもしれませんが、芦屋が死んだ事で焦っていますの。お許しになってね。……真、やりなさい」
「はい」頷いた立花が、カウンターの奥に立て掛けていた箒を握る。
「……ちょっと、立花さん……？」
「一さん、すみません。けどっ、俺……！」
謝りながらも、神野はカウンターの下に隠しておいた竹刀を手にしていた。一には何が起ころうとしているのか分からない。否、分かりかけているからこそ、この状況が分からないのだ。
「真剣でないから真剣にはなれないという事はありません。生死のやり取りにはなりえませんが、『立花』の力を肌で知る良い機会でしょう。さあ、お二方、どうか私の期待に応えてくださいな」
立花がカウンターに足を掛けて、フロアに向かって跳躍する。神野もその後を追い掛けるようにして、足を踏み出した。一は暫くの間放心していたが、すぐに気を取り直す。
「いきませんの？」
「あんたって人は……！　店長っ、店長！」
一はバックルームに通じる呼び出しブザーを連打し、新を睨み付ける。
「あなたは、あの子の婿になりたくはないのですか？」
「まさか……！」
全て理解した。神野の様子がおかしかったのは、新に何か吹き込まれたからなのだと一の直感が働く。そうだ、自分が今まで気付かなかったのが悪い。彼はきっと、立花を――――。
「弄びやがって」
「選んだのは神野さん自身、ですわよ？」
激しい物音がした方へ目を向けると、棚のスナック菓子が天井近

くを舞っていた。
　商品棚を挟んで立花と神野が向かい合う。彼女は無言で箒の柄を突き出し、神野は竹刀でそれを払った。その度に、菓子の袋が棚から零れ落ち、跳ね上がる。
　彼らは無言で得物を交えていた。剣に触れた者が持つせいか、一には、箒や竹刀もそれと変わらないように見える。
　遊びの延長線上のようでいて、ある種滑稽とも思える光景だが、二人の目は真剣そのものだった。切っ先を避け、突きを繰り出す。棚の一番上にある商品を薙ぎ倒し、足を運んでいく。二人はドリンクコーナーの前の開けた空間で立ち止まり、相手の出方を窺っていた。
　そこに、店長が現れる。バックルームから姿を見せた彼女は神野たちを瞥見して、一の方へと歩きだした。
「止めさせろ」
　店長は銜えていた煙草を吐き捨てて、新を強く睨み付ける。
「あら、どうしてかしら？」
　新が扇子を閉じる。瞬間、立花は大きな掛け声を上げて突きを繰り出した。神野は竹刀で受け、その一撃を真横に流す。と、流れた箒の柄が、ドリンク棚のガラスにぶち当たった。割れこそしなかったが、けたたましい音に店長は苛立つ。
「お前ら店を潰す気か！」
「……そういう問題じゃあ……」
「そういう問題だ！」
　店長は新に詰め寄り、彼女に顔を近付ける。間近で睨まれていると言うのに、新の表情は涼しげなものであった。
「どこのどいつか知らんが、けしかけたのはお前だな？」
「あなた、お客さまに対して失礼ではなくて？」
「客なら何をしても良い訳ないだろう。免罪符代わりに客だ客だと抜かしやがって、恥を知らないらしいな。……客商売をやってるがな、こちらとしても売られた喧嘩は買わせてもらうぞ」

「まるで、鷹の目。凄まじいわね。あなた、女でいるのが勿体ないわ」

店長は新から視線を外さないで、一に告げる。

「一、あの二人を止めろ」

告げられた一は露骨に嫌そうな顔を作り、首を横に振った。

「無理っす」

「止めろ。何を使っても、何をやっても構わん。正直、私は腹が立っている。三人まとめて病院送りにしてやれ」

「……三人って？」

「言わなきゃ分からんか？」

「乱暴な方ねえ」

逃げ出したいが、逃げ出せない。店長の殺気と迫力に脅され、一はカウンターを出る。

「店員さん、あなたの力を見させてもらうわよ」

「言ってろい」

一は入り口近くに陳列してあるビニール傘を一本抜き取った。彼は包装を破り捨て、店長に顔を向ける。

「どうなっても知らないですよ」

「やれ」

一は目の前の攻防を観察した。

週刊誌は床に散らばり、トイレのドアには穴が開いている。神野たちは雑誌を踏み付けながら互いの隙を狙っていた。

「ふっ……！」　息を吐き、立花が一歩踏み込む。神野は彼女の頭部を目掛けて竹刀を振るっていた。立花は床へと沈み込むように身を低くし、彼の足元へ箒を薙ぐ。

神野の竹刀は床を叩き、立花の攻撃は彼の脛へと食い込んだ。彼女は神野の背後へと回って背中に肘鉄を二発食らわせる。ぐっと痛みを堪え、彼は立花の髪を掴もうと腕を伸ばした。

「こっ……の！」

しかし、その腕は空を切る。立花は神野のこめかみを掌で押し、

雑誌の詰まった棚へと強引に突き飛ばした。体勢を崩した彼は武器を手放してしまい、両手両足で踏張ろうとする。が、叶わない。咄嗟に両腕を交差して庇ったものの、立花が振り下ろす容赦のない攻撃に歯を食い縛る。

「やり過ぎだってば！」

割って入る余地などなかったが、これ以上は黙っていられない。一は立花を止めるべく彼女の元へと駆け寄った。しかし、彼の存在に気が付いた立花は箒の柄を向けて、彼を冷たい瞳で見据え付ける。

邪魔をするなと言われた気がして、一は箒の柄を傘で退かした。

「もう良いじゃないか。この辺でやめときなよ」

立花は答えず、退けられた柄を数秒ほど見つめた後、一の右目を狙って、突く。

「……立花さん」

その攻撃は寸止めではあったが、一瞬の躊躇すら見せなかった彼女の態度に、一は恐怖を覚えた。

「いい加減にしなよ」

それと、僅かな怒りを。

言葉は通じない。そも、立花はまともに言葉を交わすつもりがないのだ。そう認識した一は目の前の柄を握り、力を込める。

「俺は君たちについて何も知らない。『立花』に興味だってないしね。けど、理由があったとしても……」

立花は更に力を込めて無理矢理に突きを放った。

「うおおっ！？」

一は箒から手を離して尻餅をつく。立花は彼の膝に向けて柄を振るった。ぎゃあと悲鳴を上げ、一は打たれた箇所を押さえてのたうち回る。

「やりやがったなちくしょう！」

手近にあった化粧品の棚から香水の瓶を掴み、一は立花に向かって投げ付けた。投げてからしまったとも思ったのだが、易々と避けられてその思考も霧散する。瓶は正面のトイレのドアに当たり、物

悲しい音を立ててあっけなく割れた。中身は周囲に垂れ流しになり、柑橘系の香りがそこらに漂う。

「一、天引きしとくからな」

「何使っても良いって言った！」

店長に向かって叫ぶ一だが、歩いてくる立花から逃れる為、ゴキブリのようにかさかさと這って移動する。

その後を追おうとした立花の肩を神野が掴んだ。彼は彼女を無理矢理引き寄せて、体全体でぶつかっていく。よろけた立花は神野によって位置を入れ替えられてしまった。

「一さんばっかり見てんじゃねえよ」

呟き、神野は竹刀を向ける。切っ先を柄で退かし、立花は箒の柄を手元に戻さないまま、突きを放った。

神野が首を捻ってそれを回避したのを確認し、柄を横に薙ぐ。再びかわされた柄は外側に面した窓に激突して砕けた。

「もらった！」

好機だと言わんばかりに、神野が立花へと肉薄する。彼女は短くなった得物を一瞥し、体をぐるりと捻らせた。回転し、跳び上がって蹴りを放つ。両手で防いだものの、神野はたたらを踏んでしまった。

一回、二回、三回。立花は踊るように回転し、神野をドリンク棚まで追い遣る。円の力を使い、再び跳躍。跳び上がった際に右足で蹴りを放ち、箒の穂先で彼の顔面を撫でるようにして払った。降り際には左足で彼の足を払い、余った片手を使って着地。手を床にくっ付けた反動を利用して、バランスを崩した神野の顎に掌を打ち込む。ぐらりと崩れ落ちる彼の腹に柄を突き立てた。

神野はよろよろと後退りして、窓側に後頭部を付けたかと思えば、背中を預けたまま動かなくなる。

「そこまでだっ」

一瞬の隙を衝き、一が後ろから立花に抱き付いた。彼は彼女の体をドリンク棚に押し遣り、身動きが出来ないような状況に追い込む。

立花は吐息を漏らし、両腕を自由にさせようとしてもがいた。しかし、腕力だけなら一には敵わない。

「二人とも、今日はきっちり掃除するまでは――――」

言い掛けて、一は絶句する。

立花はドリンク棚のガラスに足を置き、面を駆けた。

上半身は一に抱かれたままで、立花は、だんと、ガラスを蹴り飛ばす。彼女の視界は反転し、真っ黒なスカートが翻った。立花の両足は天井にまで近付き、一の負担が途端に増す。彼は彼女を支え切れなくなり、思わず手を離してしまった。次の瞬間、立花は解放された両手で一の制服の襟を掴み、自身の体を捻らせて狙いを定める。自由落下する一人分の体重が、彼女の両膝を通して一の胸部に圧し掛かった。

「――――っ！」

満足に声を上げられないで、一は立花に押し倒される。その時に彼は、後頭部を強かにぶつけた。痛みに目を瞑り、開いた次の瞬間には、彼女の顔が間近に迫っている。思わず、唾を飲んだ。

「そこまでで充分でしょう」

退屈そうに新が言うと、立花は一の上から退いてスカートの埃を払う。

「もう少し楽しませていただけるのかと期待していたのですが、とんだ見込み違いでしたわね」

新は鞄から真っ黒いケースを取り出して、そこから小さな厚紙を一枚だけ抜き出した。彼女はカウンターの上にそれを置き、何とも言えない表情を浮かべていた店長に笑みを見せる。

「名刺ですわ。『立花』にご用命の際は是非、こちらにお掛け下さいな。ふふ、そうですね、今なら、特別料金で承りますわよ？」

店長は何か言いたそうにしていたが、無言でそれを受け取った。

血煙駒台ビル

駒台の北部に位置する商店街を抜けてまっすぐ進めば、それは見えてくる。今ではもう使われていない、建設途中のビルが連立する地区が。

そのビルの一つに、大勢の人間がたむろしている。埃舞い、薄汚れ、蜘蛛の巣さえ張られていない廃ビルの中に充満する熱気。

彼らの名は、新興のフリーランス集団、『道場』。

「今日は我らの新しい門出の日となる。同時に、良き日にも」

男たちに囲まれた、大柄で髭面の男が芝居がかった口調で断言した。彼は腰に日本刀を提げており、周囲を見回して、鞘から刀身を抜き放つ。それを天に向けて掲げると、声を張り上げた。

「苦節十数年、我らが師事し、あるいは指南していた道場から摘み出されたのはっ、我らの力が及ばなかったからでは、断じてっ、ない！　彼奴らめが軟弱だっただけの事よ」

彼らは知らない。以前、この近くにヤマタノオロチと呼ばれ恐れられたソレが出現した事を。

おお、と、髭面の男に呼応して声を上げるは九名の男たちだ。格好はばらばらだが、彼らは皆、腰に刀を提げており、全員がそれを抜く。

「この街にはソレが多量に現れると聞く。『道場』の名を売るには良い街だ。そうは思わんか、同士諸君！」

「『道場』、最近出来たフリーランス集団ですね」

『道場』がいる向かいの廃ビルの屋上に、少年と青年が立っていた。

『騎士団』と呼ばれるフリーランスであり、昨夜、サンダーバード

を絶命せしめた二人である。
「おっとこ臭いなあ、あの人たち。見ているだけで胸焼けがしてくるよ」
白いパーカーを羽織った少年は、嫌そうに目を背け、その場に寝転がった。隣に立つ、黒を基調にした服装をしている青年、ディルは目を細め、『道場』の様子を注意深く探る。
「で、どうなの？　強いの、あの人たち」
「髭を生やした大男、名を中山（なかやま）。彼は駒台へ来るまでに何匹かのソレを仕留めてはいるようです。『道場』全体で数えれば、二桁程度でしょうか。個人個人の力量は全く、不明です」
「ふうん、新しく出来たにしては、まあやる方じゃないの？　尤も、何を仕留めたかによるけどね」
「彼らも、我々と同じ獲物を追っているんでしょうね」
ディルは煩わしげに呟いた。
「困るよねえ、ホント。どうするのディル、確かめてみるの？」
「何をですか」
「個人個人の力量、とやらをだよ」
少年は足の力だけで立ち上がり、向かいのビルを見る。
「全部で何人いるんだっけ？」
「調べたところでは、十名ですね。『道場』の主導権は中山が握っているようです」
「……いや、十一人いる」
「そんな筈は」と、ディルは『道場』の者たちを凝視した。もう一度数えなおすと、確かに十一人、そこにいる。ビルの一室が刀を持った男たちに埋め尽くされている。
「相手はルーキーかもしれないけど、舐めてかかり過ぎなんじゃないのかな、ディル君？」
「……これは、面目ないですね」
素直に頭を下げるディルを茶化すように笑っていた少年だったが、すぐに表情を変える。

「どうしました？」
「……いや、今度は減ってる。八人になってるよ」
「何ですって？」
ディルは弾かれるように頭を上げ、向かいのビルに目を向けた。

「ソレが出た」
電話を取りに行った店長は、フロアに戻ってくるなり苦々しい顔つきで口を開いた。
何となくではあるが、予想がついていたので一は驚かない。
「あら、それは良い事を聞きましたわ」
「……ヤマタノオロチが出た場所は覚えているな？　駒台商店街を抜けた先の、廃ビルが連なった地区だ。そこにソレはいる」
店長が、部外者の新がこの場にいるのに話をしたのは時間を惜しんでいるからだろう。一はそう判断して口を開く。
「ソレの種類と、被害はどうなっていますか？」
「犠牲者は既に出ている。が、殺されたのはフリーランスだ。最近作られた『道場』と呼ばれる集団らしい。気に病む必要はないな、言わば自殺なのだから」
店長は新を一瞥して、更に話を続ける。
「『道場』についての情報はほぼない。ただ、属する者の全員が全員、刀を武器にしているらしい」
「まあ、剣客集団とは。少し興味がありますわね」
新は嬉しそうに微笑み、扇子を広げて口元を覆った。
「尤も、今頃どうなっているかまでは知らん。群れていた連中が図に乗ってフリーランスを名乗ったようなレベルでは、全滅していてもおかしくはない」
「……現れたソレってのは？」
気の毒な話だが、一には同情している暇はない。店で暴れ回り、騒ぎを起こした神野は気を失っていたままで、立花はどうにも危う

い。だから、店長は自分に行けと命じるだろうと思ったのだ。
「分からん。少なくとも駒台で初めて目撃されたタイプのソレだ」
「まさか、また蛇の化け物じゃあないでしょうね」
「一応は人の姿をしていたらしい。しかし、その力は軽々と人を外れている。……同時に、葬儀屋殺しの新しい容疑者が増えたそうだ」
「……？　ええと、つまり、葬儀屋を殺したのが『道場』だと？」
店長は首を横に振り、胸ポケットに手を遣った。彼女は慣れた手つきで煙草を取り出す。
「プラスアルファ、出現したソレにも疑いが掛かっている。ロングソードを得物に、真っ赤な着流しを着た金髪の侍がな」
「侍？　そいつがソレだって言うんですか？」
「何もおかしくはないだろう。ゴルゴンだって人の形をしていた。要は、そいつがどれだけイカれてるかって事に尽きる。何にせよ、まともじゃないのが相手だ」
煙草に火を点けようとした店長だが、彼女の銜えていた煙草に、扇が突き付けられる。
「……何のつもりだ、退治屋」
「腕は」
新は扇子を突き付けたままで、幾分か興奮した様子で言った。
「現れたソレと言うのは、隻腕の男でしたか？」
「ああ、そうだ。しかし、何故お前が知っている」
「縁、ですわ。失礼ながら、私どもはお暇させていただきます。……真っ」
立花は僅かに身を竦ませて、それでも新に返事をした。店の外へ出ようとした彼女らだったが、店長が立花親子に声を掛ける。
「立花はウチの勤務外で、まだシフトの途中でもある。母親だろうが何だろうが、勝手に連れていく事は許さん」
「結構、あなたの許可など不要です」
「まあ待て、立花。どうせ、最初からお前に行かせるつもりだったんだ。きっちり始末してこい」

立花は頷き掛けたが、店長の目を見返すだけに留まる。
「お話はそれだけですの、店長さん」
「それから、立花、お前はウチの勤務外だ。……その意味を良く理解しておけ」
「……行くわよ」
立花は新に連れられて、店を出ていってしまう。彼女らの姿が見えなくなった頃、一は口を開いた。
「結局、訳が分からないまま行っちゃいましたね。立花さん、何も言わずに」
「下手すりゃ穴が開くな、シフトに」
紫煙を吐き出す店長は、何でもない風に言ってのけた。
「しかし、上手い具合に踊ってくれたものだ。縁とか言っていたが、やりやすくて助かったな」
「何の話ですか？」
「『立花』だよ。ウチの代わりに、ソレを殺しに行ってくれて助かった。正直、今回の相手はやばそうだからな」
「ああ、だから、あの人がいるのに居場所だのどうのベラベラ喋っていたんですね」
「剣士に興味があると言っていたからな。おあつらえ向きの相手で何よりだよ。ま、立花は死ぬかもしれんが」
何となくではあるが予想していたので、一は特に驚かない。
「出現したソレって、もしかして、円卓のメンバーだったりしますか」
「恐らくは、な。何にせよ、ウチからぶつけられるのは立花しかいない訳だが」
「どうして何も言わなかったんですか。そんな、あの子を切り捨てるような真似……」
「確かめたかったんだよ。お前も不安には思っていただろう、立花の変貌ぶりを。店を無茶苦茶にされただけじゃない。それが刀でなかったにせよ、お前にも神野にも躊躇なく得物を振るいやがった。

この先、あいつを預かっておいても平気なのかどうか、確かめるには今しかない」

そう言われては黙るしかなかった。一はカウンターに体を預けて、息を一つ吐く。

「どうするんですか、マジで」

「どうもこうもない。結果待ちだ。だが、あいつの様子がおかしくなった、母親が来てからってのはどう見たって分かる。それしかない。それが事実なんだ」

「あの人がいなくならない以上、立花さんはあのままって事ですか」

「その言い方もどうだかな。そもそも、今までの立花が嘘だったに過ぎない。アレが、奴の本当なんだろう」

新の意のままに動く、人形のような立花こそが、彼女の真実。一はあまりにも悲しい気がして、それでも、口出しは出来ないのだと諦めている。

「私たちは所詮、部外者だ。家族の問題で片付けられればそれでおしまい。どうしたって、子は子で親は親。子にとって、親という存在は絶対。親からすれば絶対でなくてはならんものだ」

「……じゃあ、やっぱり何も出来ないんですね。いや、しちゃいけないのか」

「さて、どうだかな。……一、お前はどうしたい？」

問われて、一は押し黙る。どうしたいもこうしたいもない問題なのだと言った傍から聞かれたもので、彼はすぐには何も答えられなかった。

「確かに私たちは部外者だ。立花に対して、容易には口出し出来ないだろう。しかしだ、説明ぐらいはあっても良いんじゃないか？」

店長は短くなった煙草を床に捨てて、靴の裏で思い切り踏み付ける。何度も、何度も。

「どうしてこうなった。どうしてそうなった。どうしてああなった。ここまでされておいて、なあ。それぐらい聞く権利はあるだろう。そう、思うよな？」

「えーと……」
「私は寛容だからな、言い訳ぐらいは聞いてやるさ。納得出来るかどうかはさておき、私にも、お前にも、話を聞く権利くらいはあるだろう」
頷けよ。そう言われた気がして、一は観念するかのようにゆっくりと首を動かした。
「……神野、とっくに目が覚めているんだろう。罰だ。罰を与える。お前は留守番だ、一人でこの有様をどうにかしろ。その間、傍でねちねちと責め抜いてやる」
神野は何も言わずに、ただ、済まなさそうに首肯した。
「それと、言い訳ぐらいなら聞いてやる。何、時間なら死ぬほどあるんだ。なあ、私を納得させてみろよ。ん？」
自分が言われた訳じゃないのに一はぞっとした。
「一、すぐにあいつらを追い掛けろ。店の事は気にしなくて良い。ソレの事も考えなくて良い。お前は、立花を捕まえて口を割らせろ」
「……はーい」
素直じゃないなと思いつつ、店長がぶち切れているのも本当なのである。一は逆らわず、準備を整える為、バックルームへと逃げるように引っ込んだ。

足音を立てる事なく、十名の人間にその気配すら感じ取らせず、それはそこにいた。
「何だ……？」
当たり前のようにそこに立っていた真っ赤な着流しを羽織る外国人に、『道場』の首魁、中山は視線を送る。何者だと尋ねる前に、高く、音が鳴った。
中山を囲んでいた男たちが声を上げる前に、二つの首が宙を舞う。遅れて、血飛沫が立ち上った。埃っぽい室内に、錆びた鉄を粉々に砕いて撒いたような臭気が立ち込める。首をなくした『道場』の剣

士二名はコンクリートに倒れ込む。何が起こったのか、彼には分からなかった。

「中山殿っ！」

メンバーの一人に呼び掛けられて、中山はようやく我に返る。その間にも、また一人誰かが悲鳴を上げて死んでいた。

「貴君らの剣力、堪能させてもらう、で、ござる」

いつの間に抜いていたのか、着流しの男がロングソードを鞘に収めて、柄に手を掛ける。抜け、と、中山は声を張り上げたが、その叫びはひきつれていた。

残った七名の剣士は着流しの男を取り囲むように移動を開始する。誰もが、まだ今の状況を完全には理解出来ないまま、半ば自動的に動いていた。その中で、七人の視線を一身に受ける着流しの男だけが口元に笑みを浮かべている。

今になって、中山は気付いた。血の香を引き連れてきた目の前の男と自分たちの力量は恐ろしいほどに、比較しようとも思わないほどに開いている。良く観察すると、彼は隻腕であり、それでも、付け入る隙など一欠けらも見せなかった。

「おおっ」

「はああっ」

ぐるぐると円を描くように動き続ける『道場』の面々を見回して、中山は息を止める。呼気を鼻腔から僅かに押し出し、勝機を探った。個人としての力なら、着流しの男に並ぶ筈もない。しかし、残った者全員で掛かればどうにかなるだろう。

――――それでも、一人残れば良い方だ。

「おおおっ！」

だが、血気に逸ったか恐怖に駆られたか、一人の男が先走る。

「っ、続け！」

誰かの声に反応して、残りの六人が着流しの男に切り掛かった。

白刃が閃く。

最初に切り掛かった男の両腕が寸断された。

六つの刃全てが空を切る。そこにいた筈の男が消えたと『道場』の全員が認識した瞬間、新たな断末魔が上がった。三人が胴を薙がれた者に視線を遣り、二人が顔面を裂かれて絶命する。背中を向けて逃げ出した者は両足を切断されて頭から床に突っ込んだ。

残ったのは二人で、彼らはその間、着流しの男の太刀筋どころか姿さえも視認出来ないでいる。

「数に頼めば腕は自然と鈍るもの」

「何者かあっ」

声のした方に中山が顔を向けた。足を切られた者の傍に着流しの男がぼうと立っている。真っ赤なそれが、彼の目に焼き付いたようになって離れない。

「心構えが足りなかったでござるな」

「名乗らんかあっ」

半狂乱になって中山は叫ぶ。着流しの男は傍に倒れていた男の首に剣を突き立てて、彼を見据えた。

「貴君ら、サムラァイには程遠い。弱き者を切り捨てる趣味など持たぬが、拙者、それを持つ者には容赦出来ぬ性質にて」

目の前の景色が歪んだと認識した次の瞬間、中山の隣にいた男の首は断たれている。

中山は怒声を張り上げながら走り、壁を背にして刀を構える。

「せめて一太刀っ、無傷では帰さぬぞ！」

「心意気は見事なり、でござる」

「おお――――！」

声を放ち、眼前に現れた敵に向かって刀を振り下ろした。がきん、と甲高い音が響き、ずぶりと鈍く低い音が鳴る。中山の口からはごぽりと血が泡立ち、着流しの男はかちりと納刀を終えていた。

「何、アレ？」

着流しの男が『道場』を破った顛末を見届けると、少年は苦笑し

ながら指を差す。
　ディルは懐に手を入れて、我知らず得物を握っていた。
「多数を相手にした際、死角死角に回り込むのは常道ですが、それにしたって速過ぎる。動きに付いていくので精一杯ですよ」
「実際、彼を前に剣が抜けるかって話だね」
「どうするんですか？」
「決まってるじゃないか。幾ら何でも相手が悪いよ。にげ――――」
　言い掛けて、少年は動きを止める。いつの間にか流れていた冷や汗が、乾いたコンクリートをじっとりと濡らした。
「……見つかったかな？」
「ばっちり、見られてましたね。着流しの彼の方が我々よりも下にいます。ここから下りたところで鉢合わせになるか、背中を捉えられるか。逃げるには厳しい位置ですね」
「冷静じゃないか、ディル」
　皮肉っぽく笑い、少年は向かいのビル、着流しの男を見下ろす。彼からは動く気配が見当たらないが、こちらが動けばそれに反応するだろうとは分かった。
「とりあえず、あっちを向くまで睨めっこだね。……全く、あんなのが出るって知ってたら……」
　少年はぼそりと漏らし、その場に寝そべった。

　剣を振るのは当たり前だった。起きている間も、寝る間だって手放す事はなかった。許されなかったのである。血反吐を吐くまで素振りを強要され、時には自分よりも格上の者と打ち合わされた。胃の中が空になるまで吐き続けても休めなかった。風通しの悪い道場の真ん中、ぎらりと光った目に睨まれるのはいつもと変わらない。少しでも動きが鈍れば母の怒号が鼓膜をつんざき、膝をつくような事があれば無理矢理引き起こされ、頬を叩かれた。それだけを繰り返す。それだけしか知らない。だから、渡されたものを持ち続け、

命じられた事に心血を注ぎ続けた。

『真、斬りなさい』

家を出る事は許されなかった。ただ、外を見るのは許されていた。部屋の中から覗く景色はやけに眩しくて、いやに恐ろしく、それでも、近くを通る人の声が新鮮に聞こえたのを覚えている。自室の窓、格子からは腕が出せなくて、隙間からは指だけをそっと外気に晒した。触れた空気は家の中と変わらない筈なのに、妙に暖かった。

『真、斬りなさい』

数えた年が十を超えた頃、彼女の元に新たな家族が現れる。娘の情操教育を心配した父親が連れてきたのは、一匹の犬だった。雌の中型犬で、名をチヨと言い、初めはおっかなびっくりだった少女も、いつしかチヨに対して心を開く事となる。その頃から、少女は少しずつではあるが、周りの者に笑顔を見せ始めた。彼女はどんなに些細な事柄であろうと興味を示し、楽しそうに話を聞いた。水族館。学校。遊園地。会社。動物園。少女が外の世界に考えを巡らせ始めるのは至極当然の帰結だろう。

少女が、もっと普通の家にさえ生まれていれば、それも許されただろう。しかし、彼女には許されない。『立花』として生きるように定められ、生まれてきた少女には何一つ許されないのである。

一切の自由を取り上げられ、刀を手足のように扱えるまで振るのだと強制された。感情は不必要だと叱責を受け、少しでも抵抗の意志を見せようものなら制裁される。眠りに就く寸前まで耳元で囁かれる言葉は、彼女を縛る鎖となり、彼女を殺す楔となり、彼女を蝕む呪となった。

だが、少女には分からなかった。一般的には不幸だとされてしまう己の境遇が、彼女にとっては当たり前だったのである。比較すべき対象もおらず、慰めてくれる者もおらず、それどころか、自分には友人が――――チヨがいるから幸せなのだと、そう信じていた。

『斬りなさい』

少女が十五歳になった翌日、彼女は母親に庭へと呼び出された。

刀を渡され、にこりと微笑まれ、母の笑みが夕陽に照らされて凄絶なモノに見えたのを、彼女は忘れないだろう。

彼女は忘れないだろう。チヨを斬れと事もなげに告げられた日を。嫌だと喚き首を振り、頬を張られて泣き叫んでも譲らなかった日を。生まれて初めて激昂し、母に逆らい、切り掛かった日を。初めて出来た友人を失った日を彼女は忘れない。

「真、斬りなさい」

はっとして、立花は首肯した。新は彼女を不満そうに見遣る。

「オンリーワンの店長が言っていた事と食い違ってきてはいますが、ここに何かがいるのは事実」

「はい」

「殺してしまっても、死んでしまっても構いません。『立花』に相応しいモノなのかどうか、あなたの目で確かめるのです」

促され、立花は廃ビルへと足を踏み入れた。瞬間、大きな物音が聞こえて、彼女は鯉口を切る。

先に動いたのは意外にも着流しの男であった。目を離したつもりはなかったのだが、少年は彼が消えたのを確認した後、得物を抜いて神経を研ぎ澄ませる。

「駄目だ、やっぱり逃げられない」

「最初から分かっていましたけどね」

ディルは長剣、短剣を一本ずつ抜き、溜め息を吐いた。

「どこで迎え撃ちますか」

「下に開けたとこがあったじゃない？　あそこにしよう」言いながら少年は駆け出す。その後ろにディルが続き、二人は階段を駆け下りていった。足音が響いているが、居場所など最初からばれている。彼らは気にせずに戦場を目指した。

「本気で行くんですか？」
「それで勝てるならね。でも厳しいよ、アレは、僕たちとは違う世界に生きてて、違うものを見、感じてる」
ビルの二階、殆どの壁が取り払われた空間に出た後、少年は周囲を確認。ディルに背を預けながら階段を注視する。
「逃げるのを一番に」
「ただし誇りは捨てるな、と」
「こんな寂しいとこで死ぬ訳にはいかないからね」
足音は聞こえない。空気が動く気配すら感じられない。それでも、血の臭いが少年の鼻に届いた。
「来たっ」
叫び、駆け出すと、少年の後方にあった空間が切り裂かれている。ディルは舌打ちし、二刀を構えた。
「流石でござる」
声の聞こえた方向を頼りにはしない。ディルは全神経を研ぎ澄ませると剣を交差させて着流しの男の一撃を受け止める。
少年は出口、階段に向かって走っていた。着流しの男は僅かに眉根を寄せてディルから飛び退く。
「そっちに行きますっ」
「知ってるよう！」
背後から迫るのは自分よりも力量のある剣士だ。少年は見通しが甘かった事を認識させられながらも、生存を諦めない。彼は方向を転換し、コンクリートを滑るように右方向へと走り込む。目の前にあった壁を蹴り、中空へと跳躍した。
「む……！」
着流しの男が足を止め、剣の柄に手を掛ける。彼は寸暇迷って抜剣し、少年の足を狙って得物を振り上げた。が、読まれていたらしく剣同士がぶつかって火花を散らす。ならばと着地の隙を衝こうとするのだが、後ろからディルが迫っていた。着流しの男は追撃を諦めて駆け出し、階段前で反転、二人を確認後、腰を落として構え直

す。
　少年は着流しの男を見遣り、してやられたとでも言いたげな、自嘲的な笑みを浮かべる。
「早いじゃん」
「それは拙者の台詞でもある。数に頼らぬ姿勢は好ましいが、死合う気が見受けられないのは気のせいでござるか？」
「気のせい気のせい」
「ふむ」
　顎に手を遣り、着流しの男は値踏みするような視線を少年とディルに送る。
「逃げの一手を打つほどの腕には見えないでござるが……」
「それは見誤っていますよ。口にするのは気に入りませんが、私たちはあなたの下にいる。逃げたくなるのも当然でしょう」
「謙遜は不要。貴君らはもっと早くなる筈、で、ござる」
　答えは返ってこなかったが、着流しの男は気にせずに柄へと手を伸ばした。
「拙者も、もっと早くなる」
「……そりゃ凄いや」
　少年は鼻で笑い、手に持った剣の握りを確かめる。感覚は既に麻痺し始めていた。

一は制服を脱いでコートを羽織り、ロッカールームからアイギスを持ち出す。ぎゅっと握った柄からは何も感じられないが、彼の内からは誰かの声が響いた。その声を聞いて一は安心し、目を瞑る。
「準備が出来たんなら、さっさと行ってこい」
「はいはい、すぐに行きますよ。……でも、俺が行ったところで、何も出来ないとは思いますよ」
「そうか？」
頷き、一は後頭部を摩った。
「話をしてくれるかどうかも分からないですし、荒事になったら俺の出る幕はありませんよ」
「そこには期待していない。私が期待しているのは、あー、そうだな、お前が、私の代わりに確かめてくれる事だ」
「何をです？」
「さてな」と店長は嘯く。彼女は煙草に火を点け、不味そうに煙を吸い込んだ。
「やばくなったら逃げて良い。一、今回はお前の判断に任せる。その事に関しての責任は私が負うから、何も気にするな」
「……はあ。つまり、何をすれば良いんですか」
「好きにしろ」
なるほどと一は得心する。つまり、いつも通りにやれば良いのか。そう判断して、彼はバックルームを出た。フロアで後片付けをしている神野へ声を掛けようか迷ったが、結局、一は何も言わずに店を出る。
どうか、安心して欲しいと一は思った。自分は、立花に対して特別な感情を抱いていない。どうか、余計な事に気を取られないで、

神野らしくあってくれと願う。

一が出て行ってから暫く経った後、店長は煙草を銜えたままフロアに姿を見せる。彼女は、嵐が過ぎ去ったような店内の参上を見て眉をつり上げた。

「全然片付いていないじゃないか」

睨まれる神野だが、自分がしでかした事なので何も言えない。尤も、彼が掃除を始めてから十五分と経っていないのだが。

「さてさて、何から聞こうか。何から聞いて欲しい？」

「……何でも答えますよ」

香水の瓶の欠片を拾いながら、神野はぼそりと呟く。店長は手を貸す素振りすら見せずに彼を見下ろした。

「立花はやはり強いな」

「はい。俺なんかじゃ、全然……」

「お前が弱い訳じゃあない。分かっているだろうが、相手が悪かったんだ。なのに」

店長は一度言葉を区切り、ドリンク棚から缶ビールを取り出す。

「どうして、こんな事になったんだかな」

「新さんに言われたんです。立花には、強い男が相応しいって……」

欠片をちり取りに詰め込み、神野は息を吐いた。

「俺は……立花に、あいつに見合う男になりたかったんです。チャンス、だったんだ」

「吹き込まれたか。全く、少しは考えろ。馬鹿者が」

「……本当、馬鹿です」

壁に立て掛けておいたモップを掴むと、神野は香水を拭き取るべく床を擦り付ける。

「でも、ここしかないって、今しかないんだって、思いました」

「焦る事はない筈だ。お前は若い。それに、都合の良い男だって立花の前には現れんだろうさ」

「そんなの、分からないっすよ」
「……一に取られると思ったのか？」
作業の手は止まらなかったが、神野の動きが僅かに鈍るのを店長は見逃さなかった。
「取らんよ。あいつはそんな奴じゃない。大体だな、立花は一を異性として見ているかどうか怪しいぞ」
「分かるんですか」
「伊達に年は取ってない。立花が一に向けているのは、確かに好意ではあるが。アレは、そうだな、ペットにでも向けるようなそれに見える」
「……ペット」
「ペットだ」と店長は断言する。
「神野、それでもお前が嫉妬するのは分かる。だが、やはりやり方がまずかったな」
神野は床に視線を落としたまま、決して顔を上げようとはしなかった。
「焦る気持ちは分かるよ。若いんだ、大いに恋愛したまえ青少年。……ま、正直なところ、職場内ってのは勘弁して欲しいがな。あれこれ面倒ではある」
「……店長、俺……」
「辞めるのは構わんが、何も解決はしないぞ。お前の気持ちが楽になって、救われたと勘違いするだけだ」
「分かるんですね」と、神野は諦めたように苦笑する。
「ワンパターンなのさ、お前も。神野、何か気に病んでいるようなら、気にするな。この世はお前が思っているよりもちょろいんだから」
店長は缶ビールを半分程度飲み下していった。
「辞めたら、本当に取られるかもしれんぞ。それが嫌なら……」
「でも、俺は何を言えば良いんですか。分かっていたとはいえ、立花に手を上げちまったし、一さんにも迷惑を掛けて……」

神野は作業の手を止めて、今にも泣き出しそうな声を漏らした。
「やりたい事をやって、自分だけが得をする為に自分の我を通した。まさかとは思うが、許されたいのか、お前」
「……っ！」
「欲しかったんだろうが。認められたかったんだろうが。ボコボコにされて、まだ立花を諦められないって言うんなら、他の奴の事を考えるのはよしておけ。手に入れるまでは針のむしろに座り続けろ」
まだ自分の中に甘えがあったのかと、神野は歯を食い縛って堪える。
「やっちまったんだから、あまり言い訳はするなよ。……手、止めるな」
「あ……」神野は再び床を拭き始めたが、その動きはどこかぎこちない。
「それに、甘い。立花が好きなら最初から他人なんか気にするな。あいつ本人にその気がなくても、立花の母親が出しゃばってきても関係のない話だろう。『立花』がどうした。肩書きでビビるようなら手を出すなって話なんだよ」
店長はビールを飲み干し、空いた缶を床に転がす。
「半端な真似はやめろ。どうせなら、そうだな、ゴーウェスト辺りを見習え。人間、あそこまで盲目になれれば勝ちだ。好きな奴以外見えないなら何も恐くないんだからな」
「いや、あそこまでは……」
「気概だけでも見習え」
神野は困った顔で頷く。
「……俺、謝ります。立花と一さんに」
「馬鹿が、何を謝る事がある。それじゃあ、本当に居辛くなるぞ」
「じゃあ、何を言えば良いんですか」
「知らん。自分で考えろ」
「ひでえ……いや、その通りっす」
俯き、それから、神野は外に目を向けた。

「俺、何か、最低っすね」
「……そういや、お前がミスらしいミスをしたのは初めてだったか」
「いや、そんな事は……」
「少なくとも、私はお前に対して怒った記憶がない。その分、一が面倒を見ていたんだろうがな」
自分の立場、役職を理解しているのかどうか。店長は煙草に火を点けて、ぼんやりと窓の外を見遣る。
「良かったよ。ようやく大人らしい事が言えた」
「ようやくだなんて事はないっすよ」
「そうか？　なら、ついでに良い事を教えてやろう。失敗も後悔も、若い内なら取り返せる。もう一度やり直したいなら、帰ってきた一たちに掛ける言葉は一つだ」
神野はまっすぐに店長を見つめる。
「たった一つで良い。何食わぬ顔でおかえりと、それだけ言えれば構わないんだよ」
「それだけ、ですか」
「簡単だろう？」
くつくつと笑う店長につられて、呆気に取られていた神野も笑った。

店があんな事になったのはどうしてだ。立花が笑わなくなったのは何故なんだ。どうして、神野が苦しまなければならなかった。
自問自答を繰り返すまでもない。全て、彼女が現れてから。立花新が駒台にやってきてからだ。全てが新のせいではない。彼女にも事情があり、立花にも、神野にも理由がある。いつか必ず訪れたであろう歪みが、今になってまとめてやってきたに過ぎないのだ。新は、あくまで糸口、切っ掛けでしかない。
しかし、新が現れなければ、いなければ、回避出来たかもしれない問題なのである。と、一はそこまで考えて頭を振った。

「……都合が良過ぎるか」

一は自戒する。巻き込まれた全員に選択肢は用意されていたのだ。立花が新に逆らえば、神野が新の誘いに乗らなければ、自分がもっと強い意志を以てして立ち向かえていれば良かった。結局のところ、これは甘えなのである。流れに抵抗せず、楽な方へと身を任せたからこうなる。責任の所在を誰かに見いだすなど、自分勝手極まりない行為なのだ。

それでも、やるせない。

誰かのせいにして進まなければ、この足はもう動かなくなる。それが分かっているから、一は歩けていた。新に罪はない。だが、立花は笑わなくなった。神野は笑えなくなるかもしれない。二人から笑顔を奪ったモノは、何だ。

――――一人勝ちさせてたまるかよ。

好きにやれと言われている。後を気にするつもりはなかった。立ちはだかると言うのなら、せめて新の目論み通りに動いてやるものか。一は前をしっかと見据えて歩を進める。相手は『立花』、不足はない筈だ。

振り切れ。振り切れ。振り切れ。

「おおっ……！」

忘れろ。忘れろ。忘れろ。

何度も、何度だって言い聞かせる。友人を、親しい人を、親しくしたい人を切り捨てる覚悟がなければ戦えない。自分ではいられない。それが嫌だと思っても、体に根付く呪いからは逃れられないのだから。

だから、全てを忘れて、目に映るものを切り払う。そうしないと自分でいられない。代価を支払ったつもりはない。学校になんか行かなければ良かった。人と出会うのではなかった。ずっと、あの家に閉じ込められたままならば知らなくて済んだのである。『立花』

に囚われたままなら、どんなに幸せだったろうと、今になって思うのだ。同年代の者と比べれば、自分はなんと可哀相だったのだろうと、嫌でも気付かされる。言葉を知らず、他者との接し方を知らず、ただ、甘えた。縋るような笑みを向けた。取り戻したくてもどうすれば良いのかが分からない。誰かが誰かと笑い合っていた時に自分は何をしていたと、彼女は歯を食い縛る。欲するのは自由だ。しかし、実際には手に出来ない。何かを得るには何かを捨てる必要がある。ならば、支払うべき代価は何だ。幾ら払えば、どれだけ捨てれば。否、はたして、自分の中に払えるモノ、捨てるモノがあるのか。

全てを忘れ、失った時、残るのはこれしかない。これしかなくて、これだけが唯一頼れるモノなのである。

「あああああっ！」

刀を振るう度に自分が消え、刀を振るう度に自分が戻る。研ぎ澄まされていく感覚と、込み上げてくる感情をコントロール出来なくて、叫んだ。立花は大いに叫んだ。

腕には自信があった。剣を握ってからどれだけの時間が経っただろう。数えきれないくらいにそれを振るい、危機を乗り越えてきた。だから笑うしかない。自信はあるが、自分よりも高みに位置するモノの存在は認めなければならない。だが、同じ日、同じ時に自分よりも力量のあるモノ、二人と出会うだなんて思いもしなかった。年端もいかない女子に遅れを取るなどと、想像出来なかった。

――――出会うか、ここで。

ディルは双剣を構えて着流しの男と、割って入った者を見る。

逃げる事が第一だが、着流しの男に隙があれば切り掛かる気概は持ち合わせていた。階段前に陣取られ、背中を見せれば殺される。気が遠くなる睨み合いの末、事態は思わぬ方へと転がった。乱入者、である。闇に溶け込みそうなほどの黒いセーラー服を着た女、立花真。彼女は抜き身の刀を手に階段を駆け上がり、着流しの男にそれ

を振り下ろした。彼も立花に対応し、攻撃を全て防いでいったのである。寸断なく、間断なくやり取りされる剥き出しの攻防。

後悔している。

その間、ディルも少年も、一歩たりとも動けなかったのだ。風よりも速く、嵐よりも激しい剣の舞に、ただ見惚れるしかなかったのである。

全て受け、全て躱す。

着流しの男と立花、斬り合う二人は掠り傷ですら負っていなかった。

立花は息を止め、その場に足を止めて突きを放つ。足を運ぶのが煩わしくて、着流しの男の手首を蹴り上げた。軌道が変わり、彼女の首筋近くを刃風が過ぎていく。立花は刀を横に薙ぎ、彼が床へ膝立ちになって剣の腹で受けた。

薄暗い室内に火花が散り、刃が欠ける。飛び散った破片は互いの額や、素肌に刺さっていった。

僅かに息苦しくなり、立花が後方へと退く。着流しの男は彼女を追わずに、剣を鞘に納めた。

「……貴様は、何でござるか？」

的を射ない男の問いを受けて立花は息を吐く。

「『立花』」

「それは名前か。いや、獣に名など不要」

「……獣？」

「然り」男は頷き、つまらなさそうに立花を見遣った。

「人で非ず、サムラァイでもないのなら、貴様は餓えた獣でしかないのでござる」

「獣じゃない。ボクは……」

「ぎらついている。そんなに腹が減っていたか。……やはり獣よ、獣以下よ。貴様に誇りはない。渇きを、餓えを満たす為、いたずら

に振るうそれでは拙者に届かぬ」
立花は無言で切っ先を向ける。男は鼻で笑い、柄に手を掛けた。
「拙者、イヌを斬る趣味は持たぬ。切り捨てるつもりも毛頭ござらん」
「何を。あなたの剣だってボクには届いていないぞ」
「……イヌにはイヌの剣を。人の身ならざるモノには相応の剣を、でござる」
男が腰を深く落とし、つり下げた鞘の先端が高く上がった。
「だったらイヌに食われてしまえっ」
立花が駆け出す。瞬間、彼女に向かってコンクリートの破片が飛んでいた。刀の腹で受け止めると、破片は真っ二つに割れて背後の壁へと流れていく。
「……ふむ」
着流しの男は柄から一度手を離し、立花へ向かうディルを見送った。
「邪魔をするなっ」
答えず、ディルは長剣を振り下ろした。立花は横に回避し反撃を試みる。だが、彼は短剣で突きを繰り出して彼女の出鼻を挫いた。
呼気を吐き出し、ディルは短剣で突きを再度放つ。立花は彼の左へ回ろうとして、
「――――っ」
何とか押し留まった。僅かに光る長剣が、彼女の動きを牽制している。ディルはわざとらしく右手を動かしながら、左手に持つ短剣で素早く、何度も切り、薙ぎ、突く。
「一時休戦といかない？」
着流しの男の傍らに少年が立つ。やけに無警戒で、いやに人懐こそうな笑みを浮かべて。
「……三対一の利を捨ててまで、で、ござるか？」
「それはあの子を御せるならの話だよ。僕には無理だし、数に頼んでもあなたを殺せるとは限らない。危ない橋を渡るのは愚か者のす

る事だ」
片目を瞑り、着流しの男は少年を流し見た。彼から戦意を感じ取れず、男は柄から手を離す。
「死合いを邪魔されるのもつまらない話でござるか。あい分かった、貴殿らに付き合おう」
「助かるよ、ホント」
「しかし、あの獣との戦闘に乗じて逃げる気でござろう？」
「そんなつもりないけどなー」舌を出し、少年は愛嬌を振りまく。
「貴殿らを逃がすつもりはない。背中から斬り殺すのも興醒めでござる。やるなら上手く逃げて欲しいもの」
「そうするよ。……で、仕掛けるの？」
「拙者は詰めに回ろう。階下、開いたところまで追い詰め、囲むが上策」
「同感」
少年は短く口笛を吹き、コンクリートを蹴った。ディルは長剣を大振り、立花を見据える。
立花は作られた隙に反応して刀を振るっていた。その攻撃を少年が受け止め、ディルが彼女の腹を蹴飛ばす。
「くっ……」
刀を戻し、階段近くまで後退すると、立花は構える事なく更に下がった。飛び掛かる少年は隙だらけだが、間を詰めるディルを確認して段を飛ぶ。踊り場に着地した瞬間に刀を構えれば、がぎん、と音が鳴って得物が軋んだ。それを跳ね退けて更に引く。立花は壁に背を預けて少年を、段をゆっくりと下りてくるディルを一瞥した。
追い込まれると分かっていても、尻尾を巻いて逃げる事は許されない。否、立花が『立花』である以上はあり得ないのだ。
だから、
「おお……っ！」
踏み込む。
狭い踊り場、立花は突きを放って声を荒げた。少年は剣の切っ先

でそれを逸らし、右へと足を滑らせる。僅かに空いた床にディルが立ち、彼女に剣を突き付けた。
「なるほど、イヌか」
「ボクはイヌじゃない」
「じゃ、イヌ以下だ」と、少年は口の端をつり上げる。
「手負いの獣も時には退く。噛み付いてみなよ、君の牙じゃ届かないからさ」
「言ったな……！」
立花はもう一度刀を突き出そうとするが、ディルの剣に遮られてほぞを噛む。彼女は段差を少しずつ下りていき、階下にて彼らを待ち受けた。
「来ないのかい？」
「卑怯だ」
「奇襲を掛けたあなたに言われたくありません。全く、激情しそうだ」
言って、ディルは段を飛び下りる。着地後、即座に立花へ切り掛かった。彼女は半身になってそれを躱し、刀を彼の下半身に向かって薙ぐ。短剣を盾に立花の攻撃を防ぐと、お返しとばかりに長剣で彼女の足元を払おうとした。
「はしこいっ！」
立花は刀を手元に戻さないまま低く地を跳ぶ。無防備になったところを狙われるも、得物を盾代わりにして防いだ。彼女は回転して刀を振るう。ディルは二本の剣を交差させて受け止めた。が、立花はお構いなしに力を込める。刀を受け止めさせたまま体を捻り、彼の体躯を弾き飛ばした。床を滑るディルを追撃するべく、彼女はくるりと回り、首元への斬撃を放つ。ひゅっと音が鳴り、彼は身を低くした。
「追い込むよ」
少年が走り寄る。立花は背後からの突きを回避して、足元からの切り払いを刀を床へ突き刺すようにして受けた。

少年は立花の側面に回り込み、脇腹を狙って剣を突き出した。彼女はディルの得物を止めたまま、柄を握って右方向へと流れるように跳躍する。自由になった刀で少年の剣を払い除け、立花は返す刀で立ち上がっていたディルを切り付けた。

「はーーーーっ」

息を吐き出しながら振るった立花の刀は再び防がれる。散った火花を視線が追い掛けた刹那、少年の姿が視界から消えた。どこだと思考し即座に決断。彼女の背中を狙っていた突きは、

「うわ……」

彼女自身の足で蹴り上げられる。剣を寝かせた事が仇となり、傷を負わせられなくて少年は舌打ちした。

立花は腰を落とす。ディルと少年は間を置かずに得物を横に薙ぐ。風切り音が重なって聞こえたやいなや、二人はその場から後退した。視線を下げると、立花が円を描くような軌道で刀を払っていたのが見える。

息を吐かせるつもりはないのだろう。今まで傍観に撤していた着流しの男が階段を駆け下り、勢いを殺さぬまま地を蹴った。左手一本で抜剣し、立花の真上を宙返り、曲線の軌道で彼女を襲う。

「今だっ」

立花は床を転がるようにしてそれを躱した。体勢を立て直して片膝をつき状況を確認する。

と、階段の踊り場に『騎士団』が、自分を挟んだ反対側に着流しの男が位置していた。

「ごめんね」

少年は楽しそうに笑う。着流しの男はしてやられたとでも言いたげな笑みを浮かべた。

「やはり、数に頼むのは好かないでござるな。まだまだ、拙者には修業が足りぬ」

「それ以上強くなられたら、君の相手は誰がするのさ？」

答えず、あるいは答えを持っていないのか、着流しの男は鞘に剣

を納める。
「……ま、良いや。そいじゃね、イヌならイヌなりに、しっかり番を務めてよ」
立花は己の立ち位置を再確認し、少年たちを視界から外した。足音が遠ざかっていき、廃ビルから彼らの気配が消えたのを認識すると、
「二人きりだね」
凄絶な笑みを浮かべる。
「……生憎と、拙者も、貴様も人ではないでござる。この場に残るは二匹の何かよ」
「それでも構わない。あなたと斬り合えるなら、ボクは何にだってなれるよ」
「死合う相手に向ける顔ではない。やはり、貴様はサムラァイではないでござる」
立花は頬をつねり、難しそうな顔を作った。
「どんな顔をすれば良いのかな」
「……やはり獣かっ」
腰を深く落とし、着流しの男は立花を強く睨み付ける。彼女は一つ息を吐き、床の感触を爪先で確かめた。

誰も使わない。誰も覚えていない。既に終わり、忘れ去られたビルが立ち連ねる場所に一は立つ。彼は傘の柄を握り直して歩き始めた。目指すは、立花のいるところである。
会って何をするのか、何を話せば良いのか、一には分からない。そもそも、自分が口を挟める余地はないのかもしれなかった。家族の問題で、部外者には関係ないと新は言っていた。正しくその通りだと彼は思う。打開策、解決の糸口すら用意しないで、いたずらに首を突っ込まれては誰も良い気はしないのだから。
それでも、決して歩みを止める事はない。立花の背負ったものを

なくせるとは思わないが、こちらには言いたい事がある。どう転ぼうが、どうなろうが知った事ではないのである。
「……あら」
一が足を止めると、とある廃ビルの入り口前に立つ人影が見えた。彼は再び歩きだして、それに答える。
「お久しぶりね、店員さん。もう会えないかと思っていました」
新は胡散臭い笑みを一に向けた。
「立花さんはこの中に？」
「ええ、まだいると思います」
「……あなたは何を？　見ていないで良いんですか？」
「私が見ていたところで何も変わりません。ただ、ここで待つだけですわ」
一は新の脇を通り抜けようとして、足を止める。鼻先に突き付けられた扇子が、やけに鋭いものに見えていた。
「何のつもりですか？」
「それは私の台詞です。しのぎを削る方々の邪魔をなさるおつもりで？」
「仕事ですから」一は扇子を退かそうとするが、ぴたりと動かない。新はふっと笑み、彼を見据える。
「店員さん、あなたは真には不釣り合いな方だと分かっています。『立花』と並ぶものを有さないのでは……」
「通るぞ、『立花』」
無理矢理に扇子を退かして足を踏み出そうとした瞬間、そこに地面はなかった。一の視界はぐるりと回り、上下左右不覚になって背中から倒れてしまう。何が起こったのか理解出来ないでいると、上から声が降ってきた。
「なんて不様。口だけは達者ですのね、店員さんは」
「……はあ、なるほど」
投げ飛ばされたのだと気付いて一は頭を掻く。立ち上がり、傘を拾った。

「ここは既に我らの狩場、『立花』の名、伊達ではないと知りなさい」
「……入っちゃ駄目なら、せめて話だけでもしましょうか」
「戦意旺盛、敵意を漲らせたままでお話を？」
「刺激的じゃないですか」
新は一の真意をはかりかねていた様子だったが、彼自体に脅威を感じなかったのだろう。渋る事もなく、静かに首肯した。
「良いでしょう。手持ちぶさたなのは確かですし。ふふ、それに、若い子と話すのは嫌いではありません」
「こちらこそ」と、一は恭しく頭を下げる。
「じゃ、早速。あなたがここに来た理由、教えてください」
「色気のない……、それに、言いませんでしたか。私がここに来たのは……」
「立花さんの婿探し、だけじゃあないですよね」
新は何も言わず、扇子を閉じる。
「『立花』を復興させる為には強い者を立花さんにあてがうのが一番だ」
「その通りですわ」
「だと思ってたんですけど、ちょっとばかりやり方が荒過ぎませんか？」
「剣を交えてこそ強者が分かる。店員さんからすれば、そう見えるのも仕方のない事かもしれませんね」
「強い人にぶつけて、立花さんが死んでしまうとは考えなかったんですか」
一は傘の柄をぐっと握り、新を見つめる。
「死ねばそこまで。真はその程度の器だったと諦めます」
「彼女が死ねば、誰が『立花』を立て直すんですか。……あなた、やっぱりどこかが抜けてるんだ。人間として、親として大事なものが」
「何が言いたいのですか、店員さんは」

「全部うそっぱちなんでしょう。どうにも、あなたはむちゃくちゃなんだ。あなたは、立花さんを何とも思っちゃいない」
「娘、ですよ。何も思わない筈が……」
「『立花』の名、継がせる気がないんでしょう」
新は一を見返し、口元を歪ませた。
「強い者を探していたのは立花さんじゃない、あなただ。あなたは立花さんを使って、この街にいた……いや、来たモノの力を計ってたんだ」
「憶測ですわ」
「おかしいと思ってたんだ。立花さんが死ねばあなたたちに未来はない。なのに、立花さんは自分から死のうとしてるように見えたし、あなたは……立花さんを殺そうとしてるように見えた」
「憶測ですわ」
一は長い息を吐き出して、俯いてしまう。
「ですが、面白い話ではありますね。続き、伺いましょう」
新は好戦的な態度で一に臨んでいた。彼はそれが嬉しくて、同時に、無性に空しかった。

突っ込んだ首、元の位置に収まると考えてはいないでしょうね。
そう問われているような気がして、一は真一文字に口元を結んだ。
すぐそこに立花はいる。おそらくは隻腕の剣士と刃を交えているのだろう。終わった建物の中で息絶えるには早い命で、そうさせてはならないのだと一は決意した。
「……言わば、物差しなんでしょう」
慎重に言葉を選んだつもりだが、語気までは誤魔化せない。いつの間にか、一は新に対する敵意を強めていた。
「あなたの目的は『立花』を甦らせる事で間違いない」
「まだ、死んではいませんけれどね」
横槍を入れられたが、一は話を続ける。
「だけど、過程が違う。立花さんを利用するのは違いないけど、あなたは、自分に相応しい者を探していたんだ」
「と、言いますと？」
「あなたは自分の婿を探していたんでしょう。立花さんではなく、自分が『立花』であり続ける為に」
新はくすくすと笑い、否定も、肯定もしなかった。
「強者を探していると言いましたね。……あなたにとっての基準を教えてくださいよ。どうあれば強いのか、どうすれば強いと分かるのか」
「少なくとも、店員さんは基準から大きく外れますわ」
「俺が、弱いからですか？」
首肯し、新は廃ビルへと視線を移す。
「見れば、ある程度は分かりますわ。人は見た目によるものですから」

「なら、強者を探すのに戦う必要はない筈です」
「いいえ、実際に相対しませんと分からない部分もありますから」
「……本当に、戦わなきゃ分からないものなんですか？」
一は傘の石突きを柔らかな土の上に突き立てた。柄に体重を掛けて、ぐっと深く。
「第一、一回や二回戦ったぐらいでその人の力が全て把握出来るとは限らないでしょう。爪を隠す方だっているでしょうし、その時体調が万全ではなかったら？　出会い頭の立ち会いでは計れない事もあるでしょう。勝負事はときの運も絡んできますし」
「運を味方に出来ない者に先はありません。何があろうと、どんな状態でいようと切り抜けられる力は必ずあり、それを持つ者もいるのですよ」
「戦わせた結果、立花さんが死んでも。将来の婿になるかもしれない相手が死んでも。あなたは、そう言うんですか」
「死んだ者に『立花』は救えません。最後に残った生者だけが物を言えます。死者は何も成せませんよ？」
強い意志を宿した瞳が一を射抜く。彼は唾を飲み下して口を開いた。
「……話を少し変えます。『立花』を襲ったのは、そこにいるかもしれないって言う片腕の剣士、なんですか？」
「隠す必要はないですから、そうだと言っておきますわ。ええ、彼こそが、私を斬った……」
「――――そこなんですよね」
「そこ？」
新は不思議そうに眉根を寄せた。扇子を取り出して、落ち着かなさそうに自身を扇ぎ始める。
「この間話していた時もそうでした。憎い、仇でしょう。何故、そいつを語るあなたは嬉しそうなのか、俺には理解出来なかった」
頬をつねる新はやはり、嬉しそうに口元を歪めたままだった。
「強い方に敬意を払うのは……」

「払えねえだろ、普通。家族を殺されてるんでしょうが。流石に、そりゃないでしょう」
「価値観を押し付けるのはいかがなものかと思いますが」
お前が言うな。一は寸前まで出掛かった言葉を押し殺す。
「こんな話をするのはあなたのせいでもあるんです。あなたが、そんな顔を見せなければ、俺はこんな事を考えずに済んだ」
「あらあら、本当、随分と嫌われてしまったわね」
「あなた、母親の顔をしていないんですよ」
「そんなもの、分かるものですか」
「『立花』を襲撃した片腕の剣士をあなたが追っているのは確かでしょう。でも、それは仇を討つ為じゃあない」
ちりちりと、肌に突き刺すような敵意が一の精神をすり減らしていく。
「そいつをあなたの伴侶として迎え入れる為ではないんですか。考えりゃ、これ以上なくうってつけの逸材ですからね」
「あまり面白い話とは言えませんね。人の神経を逆撫でする事にかけては、店員さんは光るものをお持ちですけど」
「立花さんは言わば擬似餌で、物差し。俺には分からないけど、片腕の剣士をおびき寄せる方法をあなたは知っていた。……いや、分かっていたって感じですかね」
駒台には魔が降りる。人ならざるモノが徒党を組んで訪れる。類は友を、友は新たな類を呼び、同類は同類とひかれ合う。求道者は強者を求め、強者は戦場を欲してここへ来る。全ては必然なのだ。
一はそう思い始めている。
「ただ、邪魔なんだ。『立花』を再起させるにゃ立花さんがいる。あなたは退かなければ駄目な存在で、片腕の剣士に相応しいのはあなたじゃない」
「……だから？　だから、私が真を殺すと？」
口調が変わり、目付きも変わる。切れ長の瞳に見据えられ、一は空気が重くなるのを感じた。

「好きな人を取られるのに心中穏やかな人間はいませんよ。例え、争う相手が実の娘だとしても」
「与太を」
「しかしあなたもれっきとした大人で、『立花』の五代目です。家を潰すような真似はしないだろうし、家を壊滅に追い込んだ男を連れてくるのも難しい。全ては六代目、立花真にかかっている訳ですよ」
「店員さん、あなたは……っ」
身が竦むが、口だけは動かし続ける。それこそ、突っ込んだ首が落とされようともだ。
「でも、立花さんがいなければ。死んでしまえば。跡取りは？　次代の『立花』は？　あなたが、やるしかないんでしょう？」
わざとらしいほどに嫌らしく、一は口の端をつり上げる。
「全ては憶測、俺の妄想です。ただ、そう思わせる隙があなたにはあった。あなたのやっている事は嘘臭すぎるんですよ」
「覚悟がおありなのですね。『立花』に足を踏み入れた事を後悔するには遅過ぎますわよ」
頷く。自分の言った事が間違いで構わない。一はただ、首を突っ込むに足る理由が欲しかったのだ。でっちあげでも揚げ足取りでも、自分が、自分だけが納得出来ればそれで良い。
「立花さんに会わせてもらいます」
「……どうぞ、入り口はあちらですわ」
足を踏み出した瞬間、一の体が宙を舞った。

課せられた使命を運命と呼ぶのは、おかしな事だろうか。
立花は階段の踊り場に駆け上がり、着流しの男を迎え撃つ。彼は躊躇せずに間を詰めた。段の中腹にて足を止め、剣を抜く。
それは光だ。空を滑るように往く燕よりも早く、風すらを切り裂いてしまうほどに鋭い剣閃であった。だが、立花はそれを紙一重で

避ける。前に進み、懐に飛び込んだ。
　着流しの男は僅かに眉を潜める。恐怖心に打ち克っているのか、はたまた、欠けているのか。受け太刀をすれば次の手が遅れる。受け太刀をしないで済むと言うのはある種、理想的かもしれない。しかし、異常だ。命を省みない、獣のごとき立ち回りを見せる立花を人間とは思えなかった。
　彼は剣を戻し、段から飛び降りる。追い掛けてきた立花の腰を薙ごうとするも、彼女は体を沈ませてそれを躱した。
「おおぉ――――っ！」
　切り上げた刀は空を裂くに留まる。着流しの男は後方に下がり、鞘に得物を納めて次の機会を見極めようと目を見開いた。
　立花はまた間を詰める。一足飛びで男に追い縋り、刀を上段から振り下ろした。彼はそれを剣で受け、彼女の腕を蹴り上げる。
　鈍い音がしたと思うと、立花の手からは刀が抜けていた。天井に向かっていくそれを瞥見する事もなく、男は彼女の手首を狙って掬い上げるように剣を振るう。立花は両腕を広げて体を後ろに反らせる。二の太刀、頭部に向かって振り下ろされた剣はそのまま寝転がって何とか避ける事に成功した。
　立花の股の間、コンクリートに衝突した剣を見て、男は床ごと彼女の体を切り裂こうと一歩踏み込む。その行動を察知した立花は起き上がりざま、爪先で剣の腹を蹴飛ばした。彼女は空手のままで着流しの男に飛び掛かり、喉を目がけて手刀を放つ。彼は上半身を捻ってそれを回避し、右足で立花の体を押した。きん、と高い音が鳴り、男は顔をしかめる。立花は落ちてきた刀の柄を片手で握り、切っ先を下げた。
　両者はふっと息を吐き出して、地を蹴る。先に仕掛けたのは着流しの男で、彼は立花の脇を擦り抜けざまに剣を払った。さしもの彼女も刀で受け止めて、火花が散る。
　立花は男が振り返るより先に仕掛けていた。体勢を低くして、両手で刀を払う。両の足を狙った一撃は転身した彼に防がれた。が、

彼女は刃の向きを変えて刀を逃がす。曲げていた膝を伸ばし、男の右腕を狙って振り上げた。

「くっ」

男は短く呻き、その攻撃をも受ける。

伸び切った膝を再び曲げると、立花は男の視界から消えていた。地を這うかのような姿勢で払った刀を、彼は低く跳躍して躱す。瞬間、男の腹部に衝撃が走る。立花が無理な体勢から繰り出した回し蹴りでも、充分にダメージは通っていた。後方へと弾かれた彼は剣を構えて、くるくると足を運ぶ彼女を認める。上方から下ろされた刀を弾き返しても、また新しい斬撃が男を襲った。

階段まで追いやられ、男は歯噛みする。刀を受け、ありったけの力で立花を押し退けた。前に出ようとした瞬間、顎に彼女の足が横合いからぶつかる。意識の外からの攻撃に、しばし男の思考が散逸した。彼が顔を逸らしたのは本能に急かされての事である。立花の放った突きに反応したからではない。頬に当たった風が男の意識を呼び起こす。彼は頭を下げて、そのすぐ上、何かが通り過ぎていく音を聞いた。

前方をねめつけると、楽しそうな表情を浮かべた立花が見える。男は苛立ち、大音声で彼女を怒鳴り付けた。立花は耳を塞ぎながら数歩退き、片目を瞑る。

「……びっくりしたあ」

「貴様、何のつもりでござるか」

「何のって、何の？」

「殺意も、敵意もない。少なくとも拙者には向けられていない。死合っているつもりなら、相応の感情をぶつけてもらいたい、で、ござる」

立花は小首を傾げて着流しの男を見遣る。

「何をぶつければ良いのかな。あなたを、殺したいと。そう思えば？」

「……目的もなく拙者に襲い掛かり、あの者たちとの立ち会いを邪

魔したと言うのか」
「僕はただ、母様にそう言われたから。だから、あなたを斬る事に対しては何も思えない」
男は剣を鞘に戻し、呆れた風に息を吐いた。
「イヌでもなければ、貴様は人形か」
「さあ、分からない。でも、ボクはあなたを斬らなくちゃならない」
「……せめて、焦がれて欲しいものでござる」
「こが……？」
「然り」と、着流しの男は首肯する。
「拙者、サムラァイに焦がれ、強者と死合う事に焦がれる身でござる。どこまで上り詰められるのか、自分の限界をどうしても知りたい。そういった気持ちが、貴様にはないのか？」
立花は呼吸を整えながら、不思議そうに男を見る。急に回り始めた彼の舌に警戒心を覚えたが、自分に対する純粋な敵意が薄れたのも感じたのだ。
「何かに焦がれた者同士、意志と意志とをぶつかり合わせる事で己の意志を高めていく。生き残れば生き残るほど、また一つ高みにいけると、そうは思わないのでござるか？　……貴様からは、執着を感じない。何故、持たぬ」
問われても、立花は答えられない。何を言っているのかが分からないのである。それでも、男が何かを自分に分かって欲しくて言葉を掛けているのだとは理解出来た。
「あなたは優しい人だ。……イヌにまで声を掛けてくれるんだから」
微笑む立花を直視し、着流しの男は目を見開く。
「あなたが求めているものをボクは持ってない。あなたは、ボクと戦う事を求めていない。けど、ボクにはこうするしかない。これしか知らないんだ」
「若い身空で何を悟るか、しのびない。……正直に申せば、貴様ほどの力量を持つ者とはもっと別の形で死合いたかったでござる」
柄に手を掛け、男は腰を落とす。

「イヌと蔑んだ無礼は詫びよう。貴様は、獣にしてはあまりにも空し過ぎた」
「構わない。ボクが何であろうと」
刀を上段に構えて、立花は息を吐きだした。
「まだ未熟な身なれど、拙者の剣、存分に堪能すると良い。そして、恋い焦がれて欲しいものだ」
「恋……？」
「然り。強者との死合いは、正しく恋でござる」

「……恋、ですって？」
「ええ、恋です。私はあの方に、あの方の剣に焦がれていますの」
一は背中の痛みを堪えながら上半身を起こした。
「いけません？　こんなおばさんが恋をしては」
「その前に、あなたは母親でしょう。する事が他にあるんじゃないんですか」
「その前に、私も一人の女ですから」
当たり前のように新は言う。一は立ち上がろうとしたが、痛みに邪魔されて顔をしかめた。
「あの子にも早く分かって欲しいのですけれど。こんなにも素敵な気持ちにさせてくれるのですから」
「何を、ですか」
「何かに焦がれるという感情を、行為を、恋を、ですわ。私がこんなにも手を尽くそうとしているのに、あの子ときたら……」
「手を？　違う、そんなのはきっと、恋なんかじゃない」
「では、何だと？」
見下ろされて、一は少しだけ悔しくなる。彼は立ち上がったが、新の方が背は高い。
「知りません。けど、第三者が関係してきた時点で、そうじゃなくなる。恋ってのは、一対一、当人たちの問題でなくちゃいけないん

ですよ」
「そうまで言うのなら、店員さんはよほど素敵な恋をしてきて、今もしているのでしょうね」
アイギスを握り締めて、一は自嘲気味な笑みを浮かべた。
「残念ですが、俺には許されていない行為でして。ただ、あなたの言っている事は否定出来る」
「出来ませんわ。私はあなたに否定されるいわれ、ありませんもの」
「……立花さんに恋をして欲しいなら、どうして、もっと……」
言葉に詰まり、一は俯く。立花は言っていた。自分は学校にも行けず、友人と呼べるような者も殆どいなかったと。そんな状況で、どうして恋が出来ようか、どうして、何かに焦がれる事が出来るのか。その状況を作ったのは他でもない、新なのだ。
「あなたが、言いますか」
「……？　何を言いたいのですか」
「あなたは、立花さんの親でしょう。なのに、どうして。どうして……」
恋、何とも気恥ずかしい言葉で、あまり口にしたくない類のそれが、一の中にぐるぐると踊る。
「打算とか、そんなのを抜きに誰かを好きになるって、幸せな事だと思うんです」
「……そうですね。しかし、人が人を好きになるのは子を成すのを求めているからでしょう。決して逃れられない、いわば、呪いのような本能が訴えているのです」
新は扇子を開き、ビルを見上げた。
「真も、少しは分かったでしょう。『立花』の名を守る為、強者と共に子を作る幸せというものを」
「幸せを、あなたが語りますか」
「いけませんか？　私はあの子の為を思って……」
「幸せな人間はあんな顔をしませんよ」
表情の消えた顔を俯かせて、感情を忘れたかのように、ただ頷く。

それが幸せと呼べたなら、どんなに幸せな事だろう。
「感情と幸福は別物です。人間とは悲しい時にも笑える生き物なのですから」
「詭弁にもなりゃしないんですよ。人間は幸せだから笑えるんです。笑えないのなら、幸せじゃあない」
新が立花にしてきた事は、自分では想像もつかないほどに厳しいものだったのだろう。笑顔はいらないと断じて、幸福の在り方を押しつけて、彼女から大切なものを奪い続けたのだろう。しかし、それは彼女たちの問題で、今更になって蒸し返し、掘り返すような真似をする権利など誰にもない。
彼女らの過去を暴く事は出来ない。だから、今からは口を出せる。首を突っ込める。
「俺はあなたがやってきた事に何も言えません。けど、これ以上はもう、見過ごせない」
「いいえ、これからもあなたは『立花』には何も言えないのです」
「恋は、幸せだと言いましたね。立花さんも幸せだと、そう、言ったな……！」
新はつまらなさそうに一を見返す。口だけでは何も出来ないと、馬鹿にしているようにも見えた。
「幸せな人間があんな顔をする筈ない。して良い筈がない」
娘を死地に送るのも、自分だけが幸せを掴もうとするのも新の勝手だ。彼女の行動を止めようとは思わない。
だが、立花真は一人の人間で、彼女にも意志があり、選択肢が用意されていなければならない。彼女からは何も奪えない。奪ってはならない。
同様に、神野だってそうなのだ。立花と彼との間には誰も立たせてはならない。
恋は幸せだと新は言った。ならば、立花と神野の幸せを壊し、奪おうとしたのも新なのだ。
「あなたは、俺の後輩を好き勝手に弄びやがった。結局、それだけ

で充分なんですよ」
「『立花』に刃を向けると？」
「……っ！　あんたがそこを退かないんならな！」
おお、と声を上げ、一はアイギスを振るう。先端が届くより先、彼の体は縦に回転していた。背中を強かに打ちつけて、くぐもった呻きを漏らす。
「あら、その程度ですの。お笑い草ですわね」
一は立ち上がり、再び新に向かう。振り下ろしたアイギスは呆気なく避けられて、足を払われ、腹に掌打を叩き込まれた。彼はたたらを踏み、転倒するのを堪える。
「無駄だとお分り？」
「わっかんねえよ！」
「あなたの力では『立花』に踏み込むのは叶わぬ夢。お願いですから、もう私たちに関わらないでくださる？」
「知るかっ」
今度は横に薙ぐ。しかし、その攻撃も躱されてしまい、一は三度地に伏した。彼は立ち上がるが、すぐさま新の追撃を食らう。一は額を押されて、後頭部を地面にぶつけた。
「あと少し、そこでじっとしてもらえれば助かるのですけれど」
それは出来ないと返し、一は頭を振り、四肢に力を込めて起き上がる。
「……あなた、真の何なのですか。あの子とは知り合ったばかりでしょうに。恋人でもなく、ただの……」
「後輩だ。俺の後輩たち泣かせといて、ただで済むとは思うなよ」
「それだけで、あなたは？」
「それだけでだよっ、あんたが、あの子たちを泣かすから！　母親だったらやる事があるだろうって、俺はさっきから言ってんだ！」
新は溜め息を吐き、一を細目で見つめる。
「あなたの価値観を私に押しつけないでください。私は、『立花』はあなたとは違うのです」

「違うもんかよ、親はどこまでいっても親なんだ。産んだってんなら、あなたには責任がある。あの子を幸せにする義務がある。そうでもなきゃ、あんまりだ」
「……真が女でなければ、それも叶ったでしょうね。しかし、『立花』の女として生まれてしまったあの子には義務が、責任があるのです」
「それを立花さんが望んだのかよ！？」
力なく、新は首を横に振る。
「望もうが、そうでなかろうが、女として生まれたからには『立花』でいつづける必要があるのです」
「あなたはっ、親の言う事ですか！」
「親だから言えるのです。それに、あの子は私の言い付けには逆らえませんから」
一の頭へ、更に血が流れ込む。
「人間なんですよっ、立花さんは！」
「何を当たり前の事を」
「だったらあ！」
地を蹴り、一は新にアイギスを振り下ろした。彼女は僅かに驚いたような表情を見せると、持っていた扇子の先で彼の攻撃を受け止める。
「……勤務外を名乗るだけはありますわね。そのような傘、ここでは普通に売っているのですか？」
「答えろっ、答えてくださいよ！　立花さんの幸せを思うならっ」
一は力を込めるが、扇子は一ミリだって動かせなかった。
「あなたのやってる事は何なんだ！」
「しつこいですわね、あなたも」
「神野君まで巻き込んで！　家を守るなら何をやっても良いのかよっ」
新が身を引くと、一の体勢が前に崩れる。彼女は一の背後に回り込んで背中を強く叩いた。倒れ、咳き込む彼を見て、新は疲れた風

に息を吐く。
「伴いませんわね、店員さん。言葉だけでは何も成せませんよ」
呼吸を整えると、一はアイギスを杖代わりに立ち上がった。
「力だけでも、何も出来ません。俺はただ、立花さんから話を聞きたいだけなんだ。何もなくたって構わないでしょう」
「今のあの子が、あなたなんかに口を利くとは思えませんが。何を、聞きたいと言うのです」
「何をしたいのかって、それだけです。立花さんがこうなるのを望んでたって言うなら、仕方ないって諦めますよ」
「あの子はそう言うでしょう」
「まあ、そんなの言わせませんけど」一は嫌らしく笑って、咳払いを繰り返した。
「それから、もう一つ言いたい事があるんですよ」
「ここまでお付き合いしたのですもの、伺いましょう」
新は余裕たっぷりに微笑む。一はアイギスを広げると、何気ない動作で、それを彼女に向けた。
「俺はね、『立花新、止まれ』って」
「――――っ!?」
それは刹那の幻か。アイギスが光輝を纏ったと新が認識した次の瞬間には、首筋に冷えた何かが触れている。横目で見たそれの顔は美しく、思わず、彼女は見惚れた。
新は体を動かそうとするが、まるで石にでもなったように固まったままだった。口をぱくぱくと開閉させるも、次第に息が苦しくなっていく。
「さてと」
一は新へと歩み寄り、彼女の襟を掴んで地面に押し倒した。
「失礼」馬乗りになり、畳んだ傘の石突き部分を新の喉に少しだけ触れさせる。
「まだ息は大丈夫ですよね。あ、今から動けるようになりますけど暴れないでくださいね」

新は頷く事も、返事も出来ないのに気付いて、一は頭に手を遣った。彼は困ったような顔を作るが、まあ良いかと呟いて、傘の柄を優しく握る。

「か――――はっ、はぁ、はっ……」

体が思い通りに動いたと分かった途端、新は酸素を取り込もうとして苦しそうに喘いだ。

「あー、大丈夫ですか？」

「けほっ、ばっ、かな……！　あなた、何を……」

「おっと、こいつに触らないでくださいね。怒られちゃうから」

アイギスに手を伸ばそうとした新を制し、一は苦笑する。

「はっは、気分はどうですか、『立花』さん」

新はゆっくりと呼吸を繰り返して、少しずつ落ち着きを取り戻し始めた。

「……へんたい」

「は？」

「はあ、はあっ、こんなおばさんをいじめて、どうするつもりなのかしら……？」

目の端に涙を溜め、新は死にそうな声で呟く。

今更になって罪悪感を覚える一だが、後戻りは出来ない。

「どうされたいですか？」

「どうせならめちゃくちゃにして頂戴。ここまでされて、『立花』の恥よ、もう」

「まあ、しませんけど。手荒な真似してごめんなさい。でも、こうしなきゃ通してくれませんよね」

「何をしても通しませんわ。殺すか、動けなくするまで痛めつけるのをおすすめしておきます」

「……そうしたいのは山々なんですが」

一はアイギスを後ろ手に隠して、頭を掻いた。

「立花さんが悲しみますよ？　あの子は、あなたに会いたがっていました」

「私、に？」
信じられないとでも言い出しそうな表情になった新を見て、一は虚しくなる。
「どうしてか分かりますか？」
「……」
「……冗談でしょ。……あなたが母親だからに決まってるじゃないですか」
新は視線を逸らして、拗ねたように口を開く。
「それは理由ではありません」
「家族と会うのに理由はいりませんからね。俺から見れば最低最悪、クズの極みみたいな奴でも、立花さんにとっては、たった一人のお母さんなんです」
「お退きなさい」
「ヤ、です」
一は内心で安堵する。新が本気になれば、自分を殺してでも退かそうとするだろう。そうしないのは、彼女が諦めたからに違いない、と。
「あの子に謝れとも、俺たちに謝れとも言いません。今更、間違いでしたと頭を下げられても困るし、どうせ、そんな事言ってくれないでしょうし」
「当然ですね」
「だから、これからは立花さんにもう少しだけで良いんです。お願いですから、優しくしてあげてください」
「……今更、私がですか？　第一、優しくしろなどと言われても」
「本当に、母親ですかあなたは。……じゃあ、こうしましょう。戻ってきた立花さんに、声を掛けてあげてください」
新は目を丸くさせて、厭世的な笑みを浮かべる。
「何を言えばよろしいのですか？」
「んなもん自分で考えてくださいよ」
突き放すように言って、一は新から退く。

「じゃ、ここ通らせてもらいますね」
「あっ……」
何か言いたそうな新に背を向けて、一は後ろから襲われないよな、なんて考えつつビルの入り口まで駆け出した。

腕一本で充分だ。

ぐにゃりと目の前の空間が歪む。

ぐらりと足元がふらつく。

「どうしたでござるか？」

刀を両手で握り直して、立花は何度も頭を振った。額からは汗が滲み、彼女の前髪を濡らしている。

「何を……？」

「何を、とは？」

声が震える。足が震える。着流しの男をまともに見る事が出来ない。立花は俯きながら、それでも刀を彼に向けた。

「まさか、竦んでいるのでござるか？」

男の声が耳に纏わりついて離れない。先刻までとはまるで違う。対峙しているだけで、ただただ恐ろしい。

「切っ先が定まっておらぬ。足元も、視線も、どうした、こちらを向いてみせるでござる」

男がにじり寄り、立花は短い悲鳴を上げた。彼はそれが気に入らなかったのか、不満そうに鼻を鳴らす。

「拙者の力を見たかったのではなかったのか。やはり、骨がない。昨夜の剣士との死合いは心が踊ったぞ、イヌめ」

強烈な重圧、質量を伴った殺意によって周囲の空間ごと塗り込められていく。立花は声すら出せないでいた。

「その程度で拙者の前に立とうとしたのか。見ているこちらが哀れむほどの力でっ」

腰を深く落として、男は剣の柄を指で叩いた。立花との距離は三メートル弱。だが、彼はそこから動かない。そこからでは届かない筈だと言うのに、立ち上る殺意を一層強める。

「抗う事もしないまま……良い。そっ首、切り落とすでござる」

抜かれる。剣を抜かれる。動けないから、死ぬ。切られて死ぬ。首を落とされて死ぬ。分かっていても立花は動けない。死にたくないと、涙を流したまま。

ビルに入ってすぐに立花は見つかった。彼女の前方には隻腕の、着流しの男が腰を低く落として構えている。何をすべきなのか直感で理解した。

「立花さんっ」

立花は動かない。呼び掛けにも反応しないで震えている。俯き、刀を下ろしている。相対する男からは武器を、殺意を収めるつもりはないように思えた。

一はアイギスを広げながら駆け出した。着流しの男と目が合い、射抜かれるような、切り捨てられるような視線を注がれる。無視して、彼は立花と並んだ。

着流しの男が体を身じろぎさせる。一は次の一歩で立花の前に立った。彼女を庇うようにしてアイギスを掲げる。瞬間、彼らの横を疾風が吹き抜け、盾を通して一の両腕に微弱な衝撃が走った。一も立花も目を瞑り、それから着流しの男を見遣る。

「……ううむ」

鎮(ちん)、と音が鳴り、男は剣を鞘に収めた。彼は片目を瞑り、難しそうな顔で一を見返す。

一は片手でアイギスを構え、もう片方の腕で立花を抱き寄せた。彼女はされるがままにされ、床に視線を落とす。

「貴殿、名乗られよ」

「……俺の？　は、嫌だね」

「残念でござる。拙者のアレを、無傷で受け止めたのは貴殿が初めてだ」
　嬉しくも何ともなかった。一は警戒の姿勢を崩さないで男を睨み付ける。
「サムラァイではござらんようだが異国の戦士、貴殿が持つのは傘ではあるまい。自慢ではないが拙者、天空をも切り裂けると自負しているのでござる。先の一振り、貴殿諸共そこのイヌを切るつもりでござった」
　しかしと付け足し、着流しの男は息を吐く。
「阻まれてしまった。その傘、一体……？」
「悪いけど教えられないな、侍」
　侍と呼ばれて、男は残念そうに首を振った。
「拙者、サムラァイではござらん。そう呼ばれるのは拙者が腕を上げ、強者の域を少しでも垣間見る事が出来たなら……」
「……謙虚な辻斬りもいたもんだ。で、どうするんだよ。俺たちを帰してくれんのか」
「そこのイヌによって既に興は削がれている、でござる。貴殿と死合いたい気持ちがあるのも確かだが、拙者の力が及ばなかったと諦めよう」
　着流しの男は柄から手を離し、ふう、と、一つ息を吐く。
「もう一度問うが、貴殿の名は？」
「人に名前を聞く時は自分から名乗るのが礼儀じゃないか」
「失礼した。では、改めて名乗らせていただこう。拙者は円卓の奇士が第七席、テュールと申す」
「円卓の……！」
　一と立花が構え、一歩退いた。着流しの男は何も言わず、顎をしゃくって一を指す。
「佐藤」
「サトウ？　サトウ。謙虚な名だ。覚えておく、で、ござる」
　男は一たちに背を向けて歩き始めた。彼が向かう先には階段があ

り、どこから建物を抜けるのかが気になったが、一は何も言わなかった。
　得体のしれない圧迫感から解放されて、一は安堵の息を吐き出す。彼に抱き寄せられたままだった立花は息苦しそうに呻いた。
「あ、ああ、ごめんね」
　立花は何も言わないで俯く。彼女の掌から抜き身の刀が零れ落ち、高く、耳障りな音を放った。
「立花さん？」
「どうして、来たの？」
　拒絶の言葉ではないのだと知ると、一は胸を撫で下ろす。今の立花は自分の知る、彼女なのだと思い知る。
「どうしてって、まあ、アレだよ。仕事だから」
「お仕事？」
「そうだよ」と一は首肯した。
「勤務外だからね。それに、立花さんが心配だったから」
「……ボクが？」
「そうじゃなきゃここまで来ないよ。俺も店長も……神野君も。皆が心配してる」
　少し露骨な言い方だったろうかと思ったが、鈍い立花にはこれくらいが丁度良いのだと一は思い直した。
「ボク、はじめ君やけん君に酷い事しちゃった……」
「気にしてないよ。それより、その、いつもの立花さんに戻ったみたいで嬉しい」
「いつもの？」
　きょとんした顔で、立花は一を見る。その距離が存外に近く、彼はようやくになって彼女から手を離した。
「笑わなくなったじゃないか。新さんの前でずっと俯いてさ」
「あ。ん、うん。お母さんに、そう言われてたから。……嫌、だった？」
「いきなりでびっくりしたけど、でも、理由があるんならもう良い

よ」

「良かった。はじめ君に嫌われなくて」と、立花は笑う。居たたまれなくて、一は目線を逸らした。

「……聞きたい事があるんだ。多分、色々とあったんだとは思うけど、一つだけ聞かせてくれないかな？」

立花は頷き、まっすぐに一を見つめる。

「立花さんは、全部知っていたの？」

「……全部って？」

新に利用されていたのか。着流しの男が『立花』の仇だと知っていたのか。話したい事、聞きたい事が浮かんでは消えていく。

「はじめ君が言っている全部、多分、ボクは分かってる」

「……君は」

その笑みはあまりにも儚げで、今にも壊れてしまいそうな危うさを孕んでいた。一は立花に触れようとして腕を伸ばしかけるも、必死で堪える。

「ボクに聞きたい事って？」

――――どうして、どうして、どうして！

十七かそこらの人間にこんな顔が出来るものなのか。そんな顔をさせる環境なんて存在しても良いものなのか。喉から、腹の底から何かが込み上げてくる。それでも尚、何も言えない自分が憎かった。一は拳を握り締めて、涙を流すまいと歯を食い縛る。

「ごめんね。はじめ君はボクの事考えてくれてるのに、ボクは、こうなんだ。だから……」

「……立花さんはどうしたいの？」

「どう、したい？」

「君は、『立花』でありたいの？　お母さんの言われるままに従って、刀を振るって戦って、好きでもない相手と結婚したいのか？」

「分からない。ボクには、そんなの……」

立花は一から顔を背けて、逃げるように背を向ける。

「もし、もしも立花さんが『立花』から逃げたいって言うのなら、

全部投げ捨てたいって言うのなら、俺は手を貸すよ。俺だけじゃない、きっと、皆助けてくれる」

何を言っているのか自分でも良く分からない。しかし、溢れてくる言葉を止められない。一は縋るような声を絞りだした。

「君はイヌでも人形でもない、人間なんだ。何をしたって構わない、誰かの命令に従わなくったって……！」

「でも」

「押し付けがましいよね。けど、ごめん。ごめん、お願いだから、何か、言ってくれよ。じゃないと、そんなの」

「……ありがとう、はじめ君」

立花は振り向き、刀を拾い上げる。

「でも、ボクは立花真なんだ。『立花』の六代目で、家を、皆を守らなきゃ。それにボクは、ボクは……お母さんが、好きだから」

「立花さん、でもっ」

「ご飯が、食べたいな」

一は不思議そうに立花を見遣った。彼女は恥ずかしそうに頬を掻き、視線を逃がす。

「お腹減っちゃったよ、ボク。えへへ、だめ、かな？」

「ううん、俺で良ければ、腕を奮うよ」

それぐらいなら、彼も許してくれるだろう。一はゆっくりと頷き、おどけてみせた。

廃ビルを抜けると、入り口のすぐ傍に新が立っていた。彼女は所在なげに手元を遊ばせている。

「どうも」と、一が声を掛けると、新は凛とした表情を作った。彼女は立花を鋭く睨み付ける。

「あ、おかあさ――――じゃ、なくて、母様、そのう……」

立花は刀を握ったままもじもじとしていた。ふと我に返った一は、彼女から少し離れて新をじっと見つめる。

「ボ、ボク、言われた事、ちゃんと出来なくて、あの、その……」
早く言え。一は新を強く見据え付けた。
新は立花に近付き、そっと手を上げる。びくりと、立花の肩が震えた。
その手は何かを掴もうとして不自然な動きを見せる。迷っているのだと一は気付いた。
「ごっ、ごめんなさ――――」
「――――お帰りなさい」
掌は立花の頭をぎこちなく撫でる。彼女は弾かれるように顔を上げ、戸惑いがちに新を見つめた。
「お母さん……？」
新は何食わぬ表情を作っていたが、立花の視線から逃れようとして目を逸らしている。
「お腹、空いてる？」
「うっ、うん」
「何か食べたいものはある、かしら？」
「お母さんが作ってくれるの！？」
「たまには良いでしょう？　腕を鈍らせるのもつまらないから」
顔は合わせない。視線さえも交わさない。親子にしてはぎこちない会話で、それでも、二人は心を通わせようとしていた。一は彼女たちを眩しそうに見遣る。
「ボク、お母さんが作ってくれるんなら何でも良いよ！」
「そ、そう？」
「そうだ、はじめ君もおいでよっ」
「……え？　いや、俺は……」
水入らず、水を差すのは流石に躊躇われる。一は考える振りをしてやんわりと申し出を断った。
「えー、お母さんの料理、美味しいのにー」
「あーと、じゃあ、それはまたの機会に。この後、予定があるんだ」
「そうなの？」

「そうなんだ。残念な事に。また、誘ってね。楽しみにしとくから」
恐らく、立花は勤務外として店を出たのを忘れている。この後彼女は店に戻らないだろう。ならば、店長たちに事情を説明しなければならない。『立花』の事、円卓と名乗った男の事を。
「今日はもう、ゆっくり休みなよ」
「うんっ、そうするね」
「それじゃあ、俺はここで」
「ああ、真、先にあなたは帰っていなさい」
言い掛け、立ち去ろうとした一は足を止める。
「え？　どうして？」
「私にはまだ用事が残っています。あなたはあの小汚い部屋を掃除しておきなさい」
「え、えへへ、やだなあ、掃除なら……」
「物を押し入れに詰め込むのは掃除と呼べません。私の目を誤魔化せたと思っているの？」
立花はこの世の終わりを迎えたかのような悲壮な表情を浮かべて、がくりと頭を下げる。彼女のポニーテールがだらりと、哀しげに揺れていた。
「は、はじめ君、それじゃあ、また、明日ね」
「あ、うん。気を付けて帰りなよ？」
「真っ、鞘と袋！」
「え、あ、わあっ！」
刀身を見せびらかしながら帰るつもりだったのか、はたまたそんな事にも気付かないくらいにぼんやりとしていたのか。まあ、間違いなく後者だろうなと一は思った。

立花が去った後、先に口を開いたのは一だった。
「用事って、俺にですか？」
「ええ、まあ」

歯切れ悪く言うと、新は目を瞑る。
「アレで、ご満足いただけました？」
「は？」
「真に掛けた言葉です。店員さんはどう思われましたか」
「聞きますか普通、そんな事」
一は呆れた風に溜め息を吐いた。
「店員さんと私の普通は、違いますから」
「ですね。でも言いませんよ。あなたはそうやって死ぬまで悩んでいれば良いんだ」
「あら、私の事をまだお嫌いなのですか。あんなにも情熱的に押し倒したと言うのに」
「用事ってのはそれだけですか」
アイギスを杖代わりに、一はその場にしゃがみ込む。
「……あの方と出会ったのですね」
「あなた、まだそんな事を言いますか」
「そうではなく、よく、生きて戻ってこれたものだと。それも、真も店員さん、二人ともが無傷で」
一は着流しの男とのやり取りを思い出す。今頃になって彼が異常なのだと認識して肝が冷えた。
「運が良かったんでしょうね。割って入られたのが気に入らなかったのか、特に何もなく帰っていきましたよ」
「そうでしたか」
新の横顔からは、彼女が何を考えているのか読み取れなかった。
一は無闇に追求するのを避け、別の話題を探す。
「店員さんの目から見て、あの方はどう映りましたか」
「俺の意見なんか聞いたって仕方ないですよ」
「そうですか？」
「そうです」と頷き、一は立ち上がって伸びをする。
「でも、アレを立花さんと結婚させるってのはどうかと思いますよ。まあ、あっちにはその気がなさそうですし」

「あの子への嫉妬かしら？」
「俺にもその気はありませんよ」
その気があったところで、少なくとも今は許されない身なのだ。
とは言わないが。
「食事の誘いぐらいは受けてくださると思っていたのですけれど」
「部外者ですから」一が意地悪く言うと、新は扇子を広げて口元を覆い隠す。
「あら、近い将来に三人で食卓を囲むかもしれませんのに。もう、予行演習だと思っていただければ」
「三人？」
新は無言で一を指差した。
「やーめーてーくーだーさーいー。第一、俺は立花さんに見合わないし、似合わないんでしょ」
「あの方と出会って戻ってこれた。私を押し倒した。及第点ぐらいは差し上げますわ、候補は多くても困りませんもの」
「俺は困ります」
「それに、あの子は店員さんを好いているみたいですし。あなただって、好意を向けられて悪い気はしないでしょう？」
「悪い気なら死ぬほどしますし、立花さんは俺をそういう風には見てませんよ」
きっと、飼い犬にでも向けるようなそれなのだ。一はそう納得してわざとらしく頷いてみせる。
「冗談を言い合う仲じゃないと思うんですけどね」
「はい？　……ああ、ええ、全く」
「……？　じゃ、もう行って良いですか？」
「用事は済んでいませんから、もう暫くおばさんに付き合ってくださいな」
楚々として笑む新に毒気を抜かれ、騙されていると気付きながらも一は動けなかった。
が、新は何も話そうとしない。ビルを見上げて、扇子を開いたり

閉じたりして時間を食い潰している。業を煮やした一が何か言おうとするが、
「料理はお上手ですの？」
ぽつりと、彼女は呟いた。
「俺、ですか？　ですよね。作れないって事はないですけど、あんまり上手くはないですよ」
「私は、こう言ってはなんですが、下手なのだと思います」
「あれ、でもさっき立花さんは……」
「私があの子に何か作ってやったのは、数えられる程度なのです。刀の扱いは上手くても、包丁など殆ど握った事がないんですよ」
自嘲気味に微笑むと、新は頬をつねって凛とした顔を作る。
「ほんの気紛れに作った料理を、あの子はまだ覚えていたのですね。それも、美味しいだなんて……」
「嬉しかったんじゃないんですかね」
「ふ。ふふ、何を作ったのか聞いても笑わないでくださいね。……私が初めてあの子に食べさせたのは握り飯と、味噌汁だけですよ？　飾り気のない、歪な。女中が作った方があの子も喜んだでしょうね」
「味や形なんて関係ないと思いますけどね。あなたが作ってくれたから、立花さんは嬉しいと思ったんですよ」
フォローする訳ではないですがと前置きして、一は話を続ける。
「親子って味覚が似通うもんだって聞きますし。塩加減とか、微妙なところもそうでしょう。小さい頃に母親の料理を嫌っていた娘が成長して料理を作ってみれば、不思議な事に母親の味を再現していた、みたいな話も聞きます。うん、例えば、俺があなたの作った料理を食べて吐き出したとしましょう」
「酷い例えね」
「でも、立花さんは美味しいと言うでしょう。料理ってのはそんなもんなんですよ。一緒にご飯を食べる人によって変わりますしね。気分とか雰囲気とか、割と曖昧なものに左右されます。そう思いま

せん？」
　新は少しの間考えて、眉根を寄せて呟く。
「つまり、私の料理は下手で、あの子の舌が馬鹿なのだと？」
「それは否定しません。……あなたも、否定しないでくださいね」
「……何を、ですか」
「今までやってきた事をです。俺は、間違ってたんだと思いますよ。やっぱり」
　一は頭に手を遣り、申し訳なさそうに俯いた。
「究極的には、俺はやっぱり部外者でしたよ。立花さんはあなたを好きで、あなたも立花さんを好きなんだなって、そう思いましたから」
「どうして、そう思いますの？」
「あはは、死ぬまで悩んでください」
「では、二人で仲睦まじく悩みましょう」
「……はあ、どうぞご勝手に？」
　妙な言い回しに引っ掛かったが、一は適当に流しておいた。
「さて、それじゃあ今度こそ俺は帰ります」
「本題がまだなのですが。もう少しだけ、あなたのお時間を頂いても？」
「まだあるんですか」
　不満げな顔は隠さない。一は気だるそうに体を伸ばした。
「ええ、あなた、私と子を作るつもりはありませんか」
「ありません」
「何も『立花』はあの子だけではありませんよ。そろそろ一線を退く私だって『立花』なのです。不自由はさせませんわ。そう、色んな意味で」
　肌が粟立つ感覚を受けて一は身震いする。新の白い指先から視線が離れてくれない。
「私とあなたで子を成せば済む話だと思いませんか。そうすれば、真だって先程のような目に遭わなくなります」

「度が過ぎれば冗談も冗談じゃ済まされませんよ」
「あら、私は本気で言っているのですけれど」
にこりと笑む新だが、その目は決して笑っていなかった。
「俺は『立花』に相応しくないんでしょうに。勘弁してくださいよ」
「かもしれませんが、あなたの事は個人的に気に入ったのです。ここまで首を突っ込んでくれる方はいませんでしたから。お節介焼きは良い父親になれると思いますよ」
「い、いや、それはちょっと……」
一歩引くが、一歩詰められる。
「悪くはしません。『立花』が隆盛した暁には、あなたが望むもの何もかも、いかなる手段を用いてでも差し出しましょう」
「なっ、どうしてそんな。さっきまでとは態度が全然！」
「生まれて初めて押し倒されたのですもの。こんなおばさんに火を点けるあなたが悪いのではなくて？」
「知るかっ」
一は逃げ出そうとするが、コートの襟をしっかりと掴まれてしまう。
「旦那さんがいるんでしょう！」
「この喪服が見えませんか？　夫に先立たれてしまった私を慰めようとは欠片も思わないのですか？　……まあ、いたとしても構いませんが。若いツバメを囲うのも『立花』の甲斐性ですし」
「いやだあっ」
「いやよいやよも好きの内。式は和、洋、どちらがよろしいですか。でも、私みたいな女がウェディングドレスというのも恥ずかしいですわね」
聞こえる。一をパパと呼ぶ立花の声が。彼は頭を振って奇声を上げる。新から逃れようとして振り向けば、彼女の真っ白いうなじが朱に染まっていたのが見えて何だかもうどんとこいだった。でもどんときたら取り返しがつかないんだろうなと思い直すのに成功する。
「さっ、さっきの片腕の人が好きだって言ってたじゃないですか！」

「ええ、強い殿方は好きですわ。だからこそ、あなたに焦がれているのです」
「焦がれんでええわ！　嫌だったら嫌です！」
「でしたら本気で抵抗すれば良いのです。先の奇妙な力を使えば、私から逃れるのは容易い筈です」
　そんな事にアイギスを利用すればメドゥーサに殺されそうな気がして、しかし、一は長い間悩み抜く。
「そうしないと言う事は、期待してもよろしいんですね」
「よろしくねぇーよ！　意味が分かんねえ、何だよこれ悪い夢でも見てんのか！」
「夢とはいつも悪いもの。人をこんなにも狂おしい気持ちにさせ、狂わせてしまうのですから。流石、あなたは詩人なのですね」
「あなたのニュアンスが怖い！」
　このままでは本当にどうにかなってしまいそうだったので一は一計を案じた。
「分かったから、とりあえず離してくださいよ。コートが駄目になっちまう」
「好都合ですわ。こんな安物よりもっと良いものを差し上げましょう」
「……何が好都合なのかは知りたくないですけど。これは父親の形見なんですよ」
「あら、それは……」
　新は思わずコートから手を離した。一はまっすぐに走りだす。
「あっ……」
　安全な距離を確保したところで立ち止まり、一はコートを示すように叩いた。
「そろそろ買い替え時かもしれませんね、これ」
「小賢しい方。素敵ですわよ」
「今日のところは、立花さんとごゆっくり。そっちが何もしないってんなら、また今度ごちそうしてもらいますよ。構いませんか？」

「勿論です」と、新は鷹揚に頷く。
「是非、二人きりで」
「あー、いや、それは」
「何もしませんわ。絶対に手を出しませんから」
「信じらんねえ……」
一は手を振り、一目散にその場を脱した。残された新が意味ありげな笑みをしていたのに、彼は気付かない。
ともかく、終わったのだ。今日はもう終わった。一は今回を振り返る。お節介だと言われて、言い返せなかった事を思い出す。全く、素直じゃない人間が多過ぎなのだと責任を転嫁した。結局、自分がやったのは何だったのか。誰が幸せで、誰が死んで、誰が悲しんで、誰が生き残って、誰が誰に焦がれて、恋をして。
「つまりは、アレだ」
恋なんかなくなってしまえ。恋をする奴なんか死んでしまえ。

黄金ライン

ならば、あなたは恋をするなと縛るのか。
ならば、あなたはどこにも行くなと声を荒らげるのか。
ならば、わたしは死者を運ぶだけの存在なのか。
口答えは許されない。神に逆らう愚か者には神罰が下る。下って当然なのだと後ろ指を差されて嘲笑の的になった。
神性を奪われて、彼女は燃え盛る炎の中で眠りに落ちる。
それは、いつ覚めるかも分からない。ひたすらに眠り続けなければならない。あるいは、幸せなのかもしれない。永遠、夢を眺める事が出来るのだから。
そう、彼女は眠り続ける。恐れる事を知らない男が現れる、その時まで。

体を休める暇もない。ここ数日は勤務外として出勤する毎日である。ソレが人間の都合を考える筈もないのだが、少しはこちらの身にもなってくれと、一は仕方のない事を思った。
思って、上半身を起こす。不思議と疲れは感じていない。以前の自分に比べれば驚くべき事なのだが、決して悪くはない変化なので気にはしなかった。
一はあくびをしながら起き上がる。二度寝したかったが、今日も午前中はアルバイトなので彼は暖かい布団へ潜り込む誘惑を断ち切った。偉いぞと自分を宥めながら冷水で顔を洗う。ぐええと呻き、タオルを顔に当てたまま、ぼうっと立ち尽くした。
「……行きたくねえなあ」
三森たちが未だ入院している為、穴ぼこだらけのシフトを残った

メンバーで埋めなければならない。分かっていても、真冬の朝は一からやる気を奪おうとする。たかがバイトじゃんサボっちまえ辞めちまえよと悪魔が耳元で囁いている。悪魔に全面的に同意しながらも、彼は溜め息一つで気持ちを切り替えた。こんな日は外をぶらつくのに限る。散歩していればくだらない気分も眠気もどこかへ吹き飛ぶだろうと、そう思って。

アパートを出ると、知った顔が見えた。なので一は彼女を無視する。

「ちょ、おい！　おいっ、はあ!?　無視っ、無視ですか!?」

声を掛けられたが、お腹が減っていたので先に何か買ってくるのを優先させようと一は判断した。が、コートの襟を思い切り引っ張られてしまう。

「だっ、やめろボケ、これは親父の形見のコートなんだぞ」

「はああ？　そんなん知らないし、つーかあんたって親子で趣味悪かったんだ」

「笑うな」と一は振り返った。厚手の真っ白いニット帽を被った女がげらげらと笑っている。駒台の駅前や中心街に行けばそこらに転がっていそうな格好をした女は彼を指差してまだ笑っていた。

一頻り笑って満足したのか、オンリーワン南駒台店の勤務外店員、戦乙女のシルトは大きなサングラスを外して一の肩に手を置く。

「だっせーのは父親譲りだったんだね。うっ、同情するよ、あんたの父親に」

「黙ってろよ小娘が。そんな事より、俺たちの縄張りに何の用だ」

「縄……？　うわ、エロっ！」

「エロくねえよやっぱ馬鹿だなお前」

どうにも、シルトに対しては強く出てしまう。一は口の悪さを自戒しながらも、矯正しようとは思わなかった。

「南駒台の勤務外め。ここは北駒台の領土だぞ」

「何それ？　バッカじゃん。つーかヒルデさんとかちょくちょくこっちに来てんだけどー」
「ああ、ヒルデさんは良いんだよ」
一はにっこりと笑う。
「差別だー！　知ってるぞ北駒台、センミンシソーは良くないってヒルデさんが言ってたもんね！」
「差別じゃないよ。俺の嫌いなものは差別とニット帽を被った女だからな」
「あ、ああ、そっか。それなら」言って、シルトは自分の頭に手を当てた。
「私じゃん！」
哀れむような、悲しむような色を浮かべた一の瞳はシルトを捉えない。彼は、彼女の頭の中と同じくらいに晴れやかな空を見上げた。雲一つない、馬鹿みたいに良い天気である。
「この辺うろついてたって事は何か、もしかして俺に用事でもあったのか」
「んなわけないじゃん。あんましチョーシ乗ってっと痛い目見っからね北駒台」
「あっそ、嬉しい限りだよ。うぜえからさっさと消えろよ」
一は歩きだした。シルトは彼の後ろを歩く。
「……ついてくんなよ」
「私の前を歩かないでくれない？　マジうざい。死んじゃえよ。つーか、っつーか死なすっ、コロス！」
「だったらオルァ、先に行けよ」立ち止まり、一は前方を指差す。
「は？　誰に指図してんの？　そっちがどっか行けば良いじゃん。あったま悪くね、あんた？」
「てめえに言われたくねえよっ」
アルバイトまでは時間がある。来た道を戻って遠回りで店まで行けば良い。こんな脳みそ海綿状の女と話していてはこっちまで馬鹿になってしまう。そう考えた一は大股で歩き始めた。

が、シルトは方向を転換して歩く。つまり、一の後ろをてくてくと。

暫らくはシルトを無視していた一だが、彼女が石や空き缶を蹴ってぶつけてくるので我慢出来なくなる。

「お前は頭が悪いから皮肉は通じない。だから簡単に言うぞ。死んでくれ」

小石が一の顔面、すぐ真横を飛んでいく。

「……死ね、じゃなくて、死んでくれ、と、これでも譲歩したつもりなんだけどな」

「はああ？　ジョーホって何？　ブランド？　つーかマジにムカつくんだけど。そのイライラする話し方、やめてくんない？」

「やめて欲しいのか？　はっ、絶対やだね。勝手にイライラしてろやストーカーが」

「だっ、誰が！」

お前だよ。一は顔が真っ赤になったシルトを指差す。

「俺とお前は仲良しこよしじゃねえんだ。誰がどこからどう見ても、お前は俺のあとをつける不審者でしかない。これくらいは分かるだろ」

「私馬鹿だからわかんなーい」

「よっしゃ、そこの電信柱に頭百回打ちつけろ」

「なんでっ！？」

「したら死ねるぜ」

一の靴、その爪先に小石がぶつかった。彼は転がっていく小石を見送らずにシルトを睨む。

「つーか、つーかさ、どうしてそんな冷たいワケ？　フツーさあ、私みたいなかーわいい子には優しくしてあげようとか思うっしょ」

にっと、シルトは笑んだ。一は睨んだ。

「どの口で言うか。大体だな、第一印象が最悪だったんだよ」

「第一印象？」

オウム返しするシルトに、こいつ脳みそ詰まってんのかと疑いな

がらも、一は初めて彼女と出会った時を思い出す。
「出会っただけで、それだけで、三対一でボコられた」
「そんな事あったっけ」
「誤魔化そうとしても無駄だぞ。お前がハゲたのは、その時糸原さんにやられたからじゃねえか」
「ハゲてねえし！」
シルトはニット帽を外して、長く伸びた髪の毛を一に見せつけようとした。彼はそれを無視した。
「あーあーあー！　覚えてますよー今でもっ、あの化け物！　私らがまるで子供みたいにやられちゃったんでしたねー」
「化け物？　ああ、糸原さんに言いつけてやろう。南がまた喧嘩売ってきたって」
「ちょっ、マジ勘弁してよ。私やシューはともかく、ルルはトラウマ？　ウマ、シカ？　タカトラ、バッタ？　なんだって」
「ウマシカはお前だよ。はあ、と言うか、何と言うか」
ある意味、流石は糸原か。一は少しだけ彼女らに同情する。
「あん時の借りならカトブレパスで返したじゃん。めっちゃくちゃに泣いてたあんたを助けてやったのはどこのどなた様か言ってみればー？」
「ヒルデ様」断言。
「私も助けたもんね！　あっ、それだけじゃないし、野球ん時も助けてやったじゃん！」
一は腕を組み、難しい顔を作った。そして、心底嫌そうに頭を下げる。
「あの時はありがとう」
「ぎゅ……っ！」
「ぎゅ？」
奇声が気になって頭を上げようとするが、一の頭はシルトによって再び下げられてしまった。
「急にフツーになってお礼なんか言わないでよ。キショイ」

「お礼を言ってキショイと言われるとは思ってなかった。で、気色悪い奴に何か用事か？」
「だから、用事なんか……」
「わざわざこんな時間、こんなところに来ないだろうが。借りなら返すけど、金なら貸さねえぞ」
ズボンのポケットから薄っぺらい財布を取り出して、一は二、三回それを振る。悲しくなるほど見事なまでに空っぽだった。
「……だっさー。恵んであげよっか、ほら、十円」
「いらんわ。せめてその十倍持ってこい。俺に頼み事があるならその一万倍は持ってこい」
「一万……？　えーと、十の十倍が百でー、百の十倍がー」
「冗談だよ。そんな計算お前には出来ないだろうからな」
「はあああ！？　出来るし！　バッカじゃん、お前」
一は顔をしかめて、近付いてくるシルトから離れる。
「朝からうるせえなあ。全くよう、良いご身分じゃねえの。こっちはバイトだってのに、そっちは遊んでられるんだもんな。良いよなあ、まだオープンしてねえくせに遊ぶ金はもらえるんだから」
「なっ……！　私はっ」
シルトは言い掛けて、うな垂れた。
「私は、何だよ？」
「うるせえっ、とっととくたばれ勤務外！　北駒台なんかとっとと潰れろ！」
顔を上げたと思ったら、すぐにどこかへ走り出す。朝から元気な女だと、シルトの背中を眺めつつ、一は溜め息を吐いた。

「朝飯だあ？」
睨み、凄みを利かす店長から視線を逸らしつつ、一は頷いた。
「ほーう。なるほどな、朝ごはんをくださいと言うのかお前の口は。ならば私はお前の母か？　お前の女か？」

「や、やだなあ店長、そんな気持ちの悪い事を言わないでくださいよ」
「だったら言わせるな。……仮にお前の母なら、産んだ直後にお前を殺す。お前の女には死んでもならん。お前に食べさせるものはない。帰れ」
「帰れって、そろそろシフトなんですけど、俺」
「じゃあ残れ」
一はパイプ椅子を組み立てて、力なく腰を下ろす。
「お腹空いたなあ。こんなじゃ力が出ないなあ」
「自分の顔でもちぎって食ってろ」
「……猟奇的な。ん？　いや、待てよ。店長、俺はこの店のものに手をつけても問題ないんじゃ？　だってほら、かなり前ですけど、三森さんがお金払わずに色々と持ってったり食べてたりしてましたよね」
店長は煙草に火を点けると、座ったままの体勢から椅子を器用に回転させた。
「その権利を放棄したのはお前だ。金を払うのが当たり前だと言ったのはお前だ。それに、今は三森だって金を払ってるぞ」
「へ？　そうなんですか？　へー」
「そうだ。何だ一、三森の事には興味がないのか」
「今、俺の脳内を占めるのは炭水化物、たんぱく質だけです。それ以外の何かが入り込む余地はありません」
恨めしげに店長を見遣る一だが、彼女は微動だにしない。
「金、金、金。商品が欲しいなら金をよこせ」
「えー、消費期限切れてるんだから良いじゃないですか」
「知っているか一、鳩が増える原因と言うのはだな、人間が奴らに餌をやるから、なのだそうだ。鳩どもの餌の八割近くは人間が与えるものらしい。人間は餌をくれる生き物だと知っているから、奴らは人に集ってきやがる。充分な餌を与えられて鳩の数は増える。人間は懲りずに餌をばら撒く」

一は首を傾げる。
「何が言いたいのか分かるか？」
「あー、つまり、俺は鳩だと？」
「いや、そこまでは考えてなかった。しかし、まあ、そうだ」
気を取り直した風に呟くと、店長は熱せられた火種を一に向けた。
「金さえ払えば文句はない。お前一人にやって、別の者にやらない訳にもいかんだろう。ほら、言い出すとキリがない。諦めろ」
「俺は諦めてるんですけど、お腹の虫がぐうぐうと」
「無視しろ。さっさと働け。働けば気も紛れる。働けば金も手に入る。一石二鳥だろう」
取りつく島もない。一は本格的に諦めて椅子から立ち上がる。
「金、金、金。嫌な世の中ですね全く。お金よりも大事なものは山ほどあるでしょうに」
「ないな」
「でしょうね」
皮肉っぽく笑み、一はロッカーから制服を取り出した。
「しかし、意外と金遣いが荒いんだな。ウチの給料、そう安くはないと思うんだが」
「額だけ見りゃそうでしょうね。けど、一応命を張ってますから」
「それぐらいもらって当然だと？」
「そこまで傲慢にはなれませんけど」
制服に着替え終わった一は弱々しい笑みを見せる。
「給料には満足してますよ。それから、金遣いも荒くはないと思います。……俺は」
「ああ、厄介な同居人がいるんだったな。追い出せば良いんじゃないか？」
「出来たらとっくに追い出してます」
その返事を聞くと、店長は愉しそうに、嫌らしそうに口角をつり上げた。
「本当は糸原を追い出したくないんだろう？」

「俺にも堪忍袋ってのがありますからね。はあ、お腹減った」
「しつこいぞ」店長は短くなった煙草を灰皿に押しつける。吸殻で山盛りになっていたので、溢れた灰が机に飛び散った。
「そういや、ナナが来ていないな。珍しい、あいつでも遅刻をするんだな」
一は時計を見遣ってから頷く。
「遅刻なんて初めてじゃないですか？」
「糸原や立花ならいざ知らず、何かあったのかもな。面倒だが、技術部に連絡を入れてみるか」
店長が受話器に手を伸ばし掛けた瞬間、バックルームのドアが勢い良く開かれた。
「マスターは無事ですかっ！？」
いつになく焦った様子のナナがバックルームに飛び込んでくる。が、彼女はそこにいた一を認めて安心したように胸を撫で下ろした。
「あ、えーと。まあ、俺は無事？　だけど」
「良かった。マスターに何かあってはメイド失格ですからね」
「おい、ナナ。それよりも私に一言あるんじゃないのか」
ナナは店長を一瞥してから、スカートの裾を摘んでお辞儀をする。
「本日もご機嫌麗しゅう」
「違う。遅れてすいません、だろう。これからは遅れるなら遅れるで連絡を入れろ」
「申し訳ございません。マスターの家に寄っていたものですから」
「え？」
「そうか。それじゃ、シフトに入れ」
「かしこまりました」
「おぉい！　っておい！　おかしいだろ！」
うるさい一を店長とナナが見つめた。
「どうしました、マスター。まさか、お体が優れないのでは……？」
「じゃなくて、どうして俺の家に寄るんだよ」
「メイドですから」

事もなげに言い放つナナに、一はしばし呆気に取られてしまう。
「勝手に部屋へ上がり込んだんじゃないだろうな？」
「今日は天気が良かったので、お布団を干しておきました。お仕事が終わったら取り込みますね」
「ありがとう！　もうありがとう！」
「お礼など勿体ない。この身に余る光栄でございます」
皮肉すら通じない。
「それよりもマスター、お出かけになるのでしたら私に一声お掛けください。全く、私がどれほど心配したとお思いでいらっしゃるのですか」
「ああ、その、アレだな、一。囲うのは構わんが、もう少し財力に余裕を持ってだな……」
「囲ってねえよ！　むしろ囲まれてるって感じです！」
「おっしゃる通り。ナナはマスターを愛で包み込むようにして、お仕えさせていただいています」
むしろ樽の中に押し込まれて外側は鎖でぐるんぐるん。
「ところでマスター、冷蔵庫が空でしたが、朝食はもう召し上がってしまわれたのですか？」
「いや、まだだけど」
「ではっ、すぐにっ、何か持ってきます！」
言うが早いがナナはバックルームを飛び出した。その後姿を、店長が呆けた顔で見送る。
「まるで別人だな」
「誰が一番驚いて、誰が一番困っているか分かりますか？」
「困っているならそれらしい態度を見せたらどうだ。本当に、口だけは達者だなお前は」
「それより飯食って良いですよね」
ちゃっかり店長の隣に座り、机の上を片付けている一がいた。
「念の為に言っておくが、勤怠登録してるよな、お前」
「マスターお待たせしました！」

ナナが両手いっぱいに商品を持ち帰ってくる。彼女は机の上にそれらを広げて、何故だか申し訳なさそうに俯いた。
「こんなものしかありませんでした。マスターのお気に召すかどうか……」
「大丈夫、我慢するよ」
「流石はマスター、海よりも深く山よりも高く空よりも広く獅子よりも気高い心をお持ちですね」
店長は新しい煙草に火を点けようとしたが、手首をナナに掴まれる。
「いけません、マスターのお食事中にお煙草はご遠慮願えますか」
「……分かったから離せ。私の手首を折る気か」
「必要とあらば。あるいは、マスターがそう命令すれば、どなたの手首であろうとも折ってご覧に入れましょう」
一は我関せず、ツナマヨネーズのおにぎりを平らげた。

空腹の満たされた一はきっちりと交代の時間近くまで働いた。尤も、それは当たり前であり、当たり前にこなすべき仕事なのである。それでも彼は満足げだった。
「いやー、今日も殆ど客が来なかったなあ」
「お陰で殆ど二人きりでしたね、マスター」
「あっはっは、この店どうなっちゃうんだろ」
「仮にもオンリーワンの支店です。潰れる事はないと思われますが」
ナナは何気なく窓の外に目を向ける。
「南駒台店がオープンしてしまえば、どうなるか分かりませんね。いざとなると、売り上げの低いこちらが吸収されてしまうかもしれません」
「それはそれで良いんじゃないのかな。人も増えるし時給も上がるし」
「そう、なのですか？　人員に関してはともかく、時給が上がると

は聞いた事がありませんけれど」
　しまった、と一は内心で頭を抱えた。南駒台店の時給について知っているのは、引き抜きを打診された自分だけなのである。
「ま、まあ、オープニングスタッフってのは時給が高いもんなんだよ。経験者だから、こっちよりも優遇されたり」
「なるほど。ですが、私は、このままでも充分だと思います」
「そうかあ？　だってさ、しんどくないか？　待遇だって、人数だって中々に辛いものがあると思うんだけど」
「人が増えれば、その分マスターと一緒にいる時間が少なくなってしまいます。それはナナにとって、あまり嬉しい事ではありません」
　ナナはきっぱりと言い切り、今、良い事を言ったでしょうと言わんばかりに胸を張った。
「俺に何を期待しているのかは知らないけど、色々と買い被り過ぎ。勿体ねえよ、他の人に仕えた方が良いと思うけどな。いや、仕えさせてるつもりもねえけど」
「今更何を仰いますか。マスターはマスターです。それで充分なのです」
「……極端な奴」
　一は呟き、店内に入ってきた人物を見て、顔を引きつらせる。
　立花真。
　神野剣。
「あら」
　それから、
「店員さん、こんにちは」
　立花新。
　そろそろ交代だから、立花と神野が店に来るのは当然で、二人が連れ立ってきたのは非常に喜ばしい事で、しかし、どうしてここに新がいるのか一には分からない。彼はナナの背中に隠れて知らない振りで通そうとした。
「はじめ君、ナナちゃん、おはようっ、ございます！」

「おはよう立花さん。神野君もおはよう」
「お二方、おはようございます。本日は良いお日柄ですね」
駆け寄る立花から少しだけ距離を取り、一は神野に声を掛ける。
「……おはようございます」
会釈し、神野はバックルームへと向かった。何だか針のむしろに座っているようで、むしろ座らせて欲しい気分に一は陥ってしまう。どうやら、彼はまだ勘違いしているようだった。
――――ま、誤解ならいつでも、どうにでもなるだろ。
楽観的に考えて、一は立花を見送る。
「店員さん？　私に挨拶を返してはくれないのですか？」
「マスター、こちらの方とお知り合いなのですか？」
「えー。まあ、知り合いっちゃあ知り合いだよ。立花さんのお母さんだからさ」
「そうでしたか」
ナナは新に向き直り、丁寧にお辞儀をした。
「申し遅れました。私はナナ、立花さんとは同僚の間柄、でございます」
物珍しそうな視線を送った後、新は口元に手を当てて微笑む。
「まあ、可愛らしいメイドさんですね」
「あ、メイドだって分かってるんですね」
「失礼ですね、店員さんは。それくらい私にだって分かりますわよ」
新は笑いながらカウンターへと近付き始めた。彼女はカウンターの中にいる一へと手を伸ばそうとして、その手をナナに掴まれる。
「あら？」
「カウンターに身を乗り出すのはおやめください。危険ですので」
「ふふ、誰が？」
「そうですね。今はあなたが危険ですよ」
ナナが力を込めようとした瞬間、新がするりとそこから逃れた。
一は再び顔を引きつらせている。
「恐ろしいメイドさんですこと。私はただ、未来の旦那様にご挨拶

をしたいだけなのに」
「……旦那様？」
「ええ。その方は『立花』の現当主にして『立花』五代目、即ちこの私、立花新の旦那様ですの」
にっこりと新が微笑んだ。ナナは微笑んで返す。
「ありえません」
ナナはカウンターから出ると、新を押し留めるように両手を突き出した。
「仕事の邪魔になります。どうぞお引き取りを」
「では店員さんを引き取らせていただきますわね」
「減らず口をっ」
ナナの気勢を涼しげな顔で受け流し、新は一に目を向ける。
「式場はどうしましょうか？」
「……お好きに。俺は関係ないですから」
一はこれ以上付き合っていられないとばかりにバックルームに向かって歩き始めた。
「マスター、この方を殴り飛ばしてもよろしいでしょうか」
「流石に駄目だろ。ほら、交代だからナナも戻るぞ」
「ですが許せません。マスターを侮辱するばかりか、あまつさえ……」
ナナは新を睨みつけるも、当の彼女はレジ前のおでん鍋をじっと見つめている。
「侮辱などとは失敬な。『立花』の一員になれるのですから、むしろ誇ってもよろしいくらいですよ。あ、店員さん、おでんをくださいな」
「お客さま、おでんはセルフサービスとなっております。どうぞお引き取りを」
「良いよ良いよ、俺がやるから。ナナ、レジ打ってくれ」
半ば諦めながら、一はカウンターに戻って空の容器を手に取った。
彼はトングをかちかちと鳴らして無言の催促をする。

「迷いますね。何かおすすめはありますか？」
「こちらの大根はいかがでしょう。煮込み過ぎて不細工に崩れていますが、あなたにはお似合いだと判断します」
「ではその大根はメイドさんに譲りましょう。店員さん、ダシは少なめでお願いします」
「かしこまりました。おすすめは、あー、厚揚げなんかは染みておいしそうではありますね」
そろそろ廃棄処分になりそうでもある。そんな事はおくびにも出さずに、一は何食わぬ顔で厚揚げを掴んだ。
「いただきましょう。……小桜はないんですね」
「あ、そういや前に立花さんも同じような事を言ってましたね」
「あら、あの子が？　……なるほど、ここにいない娘について話す。夫婦ですわね」
「どこが」
「ナナ、勝手に水増しするな。ちゃんとレジを打ちなさい」
いつの間にか金額がおでんだけで五桁になっている。一はレジの液晶と、それからナナの横顔を見遣った。
「仕事は仕事。お客さまはお客さま。割り切りたまえナナ君」
「はい、確かに割り、切り、殴り、蹴り、嬲りたいですね」
「全部聞こえてますわよ。ん、辛子は一つだけで」

「神野君を？」
「ああ、注意しろよ」
話があるからとバックルームに残された一とナナは揃って首を傾げた。店長は紫煙を吐き出しながら、監視カメラの映像モニターを指で叩く。そこにはモップをかける神野が映っていた。
「注意って、何を注意すれば良いんですか？」
「神野の精神状態は芳しくない。危ういと言っても良いだろうな」
誰もいないと分かっているのに、一は振り返って周囲の様子を確認する。
「昨日の、立花さんの件があってからですか。……やっぱ、きちんと言った方が良いですかね」
「立花の事は何とも思っていない。だから安心して彼女を好きでいろ。とでも言うつもりか？」
「……いや、そんな言い方は」
「やめておけ。お前が何を言ってもあいつにはそうとしか聞こえん」
中途半端に弁解したところで神野のプライドを傷つけるかもしれない。あるいは立花を。ならばと一は思い直す。自分がしっかりとさえしていれば問題なく、何も起こらない、誰も怒らない話なのだ。
「あの、マスター。私には何の事か分からないのですが。知っておいた方が良いのでしょうか？」
「ううん、大丈夫」ナナを巻き込む必要はない。そう思って一は首を振る。
「深刻に悩む問題でもないしな。しかし、勤務外として出すにはどうだろうな」
「何だか、最近は連日出てきますもんね、ソレ」

今はこうして話せているが、ふと我に返れば今までの出来事が恐ろしく現実離れしていて、自分の命があまりにも安く思えて、一は自身の神経が、何かが麻痺していくのを感じていた。

「その点については私も憂慮しておりました。私たちがたった一人の、いえ、たった一つの暴力によって壊滅させられたあの日からずっと。私たちには圧倒的に力が足りないのです」

「そんな事言ったってさ、漫画じゃないんだから簡単にはパワーアップなんか出来ないだろ。手持ちでやり繰りするしかないんじゃないのか」

「ご安心ください。実は、以前から技術部の方々に頼んでいたものがあるのです」

店長は興味深そうに目を細める。

「ほう、ナナ、それはお前の判断か？」

「いいえ。発端は神野さんです。彼に頼まれたのです。力が、武器が欲しいと」

「武器、か」

一は腕を組み、ロッカーを、ロッカーの中にある筈のモノを見据えた。

「まあ、今更トレーニングやったところで効果があるもんじゃないだろうし。うん、新しい武器の方が確実だよな」

「タロスのせいで滞っていましたが、神野さんの武器は間もなく完成するそうです」

「ちなみに、神野君が頼んだのはどんな武器なんだ？」

「申し訳ありません。ナナも詳しくは……。しかし、神野さんに相応しいものだとは伺っています」

「ようやく、勤務外らしくなってきたと言うところか」

椅子に座ったまま、店長は落ち着かなさそうに、楽しそうにその場でくるくると回る。煙が揺れてそこら中に四散して、一は顔をしかめた。

「ようやくって、どういう事ですか？」

「足りていないと言ったな。間違いなく確かだ。が、神野には圧倒的に、確実に不足していたものがあった。一、お前らにあって奴にはなかったものだよ」

少しだけ考え、一は口を開く。

「経験ですか？」

「覚悟だよ。神野の得物は竹刀だったな？　アレで何かを殺せるか？　骨の剣士を砕くので精一杯だろうよ。とてもじゃないが私には無理だ。ソレに対処するのに、あんなものではな」

好き好んでソレと戦い、ソレを殺す必要はない。だが、相手は何も気にしないのだ。ただ、あるがままに襲い、殺す。

「竹刀じゃソレは殺せない。だと言うのに竹刀を握るのは、相手に殺されたくないからだ。戦いに臨む際、武器の一つで気持ちも変わる。握ったものが命を奪うに適していればいるほど、重たいものを背負う事になる。時にはそいつが足を止め、動きを鈍らせて邪魔に感じるだろうが、必ず力になるんだよ。軽い気持ちで行くよりも、絶対に良い」

「かと言って、俺に覚悟があるとは断言出来ないですけどね」

「は、あるさ。あるだろう？」

否定も肯定もしない。一は頭に手を遣り、誤魔化すように笑顔を作った。

「危ういが、良い傾向かもしれないな。神野をフォロー出来る部分は出来る限りにしていくぞ」

一たちは頷き、それではと手を上げてバックルームを抜ける。

何も言わず隣を歩くナナを確認して、一は溜め息を吐いた。

「あのさ、まさか、また俺の家に来るつもりなの？」

「はい？　ええ、そのつもりですが。お布団、取り込まないといけませんし。マスターの部屋には清掃の余地も残されています」

家事をやってくれるのは助かるのだが、こんな関係がずるずると

続くのはごめんである。一はどうやって断ろうかと頭を悩ませた。
「……ん？」
ふと、視界の端に見知った顔が飛び込んでくる。しかし、その人物は彼の視線から逃れるようにして、その場を足早に立ち去っていった。
「どうしたのですかマスター」
「南駒台の勤務外がいた」
ナナも一の視線を追うが、そこには誰もいない。
「名前は忘れたけど、ヒルデさんと一緒にいる人たちだったよ」
一が見たのはシューとルル。南駒台店の戦乙女と呼ばれる勤務外である。彼も何度か見、話もした事があったので間違いはない筈だった。
「ソレが出たとは聞いていませんね。オープンもしていませんし、単にこの辺りを徘徊していただけなのでは？」
「徘徊って……。まあ、かもしんないな」
ただ、朝に出会ったシルトの事が気になった。彼女らがこの辺りにいたのは単なる偶然なのだろうか。一はぼんやりと立ち尽くし、眼前を通り過ぎようとする自転車にベルを鳴らされて、飛び上がるほどに驚いた。
「マスター？　あの、お体が優れないのでしたら……」
「あ、ああ、いやいや大丈夫。ちょっと考え事してただけだから」
「南の人たちですが、今思い返せば、ナナはあまり好きではないのです」
「え？　そうなの？」
ナナは頷き、ベルを鳴らした自転車をぼうっとした表情で見つめる。
「好印象を抱く方が難しいと思います」
そう言えばと一は小さく唸った。ヒルデたちと親しい彼ならともかく、ナナと南駒台店勤務外との接点、関係はセイレーンの際に出会った者たちなのである。野獣と呼ばれた、あの男たちだけ。

「話してみると分かるけど、案外良い人たちだよ。ナナが出会ったのは、ほら、ちょっと特殊なケースって言うか」
「それが、嫌なのです」
「は？」
「ナナのマスターは気が多いようで困ります」
ふいと顔を逸らすと、ナナは一を置き去りにして歩き始めた。彼は、彼女が怒っている理由が分からなくて、不思議そうに眉根を寄せる。

自宅に戻り、ナナが家事に取り掛かる。一はその間こたつに入ってテレビ番組をぼうっと眺め続けていた。部屋中を忙しそうに歩き回る彼女の足音を聞き、眠る。目が覚めれば夕食が準備されており、ナナは静かに微笑んで一の反応を楽しむのだった。
ナナは飲食出来ないが、共に食卓を囲むだけで幸せなのかもしれないと、一はそう思う。彼女が技術部に帰った後、音がなくなり、誰もいなくなった部屋を彼は物足りなく思った。

大学の図書館から借りてきたファンタジー小説を読み耽っていると、電話の音で現実の世界に引き戻される。一は栞の代わりにデリバリーピザのちらしを挟んで受話器を取った。時計に目を遣れば、いつの間にか午後十時を回っている。ナナが帰ってから、二時間以上も本特有の世界に浸っていたらしい。
「もしもし」と問えば、『私だ』の声が返ってくる。相手は店長だった。
『今から来れるか？』
「何かあったんですか？」
『ソレが出たらしい。確定はしていないが、確実にな。立花たちが待機しているが、高校生を出す訳にはいかないだろう』

一は改めて時計を見た。
「ですね。分かりました、そっちに行きます。二十分は見ておいてもらえますか？」
『駄目だ。来るならもう少し早く来い。様子見だけになるだろうが、用心に越した事はないぞ』
「……良いところだったんですよ。王子さまがお姫さまを助けに行くって場面で」
『帰ってから読め。ナナもこっちに来る手筈だ。二人で様子見、簡単なお仕事だろう』
「はあ、分かりましたよ」
電話口からはまだ何か聞こえていたが、一は受話器を置いて黙殺する。彼は立ち上がると、コートを羽織って気だるげな体に鞭を打った。

店の前には立花と神野がいた。一を待っていたのだろう、彼を見つけた二人は大きく手を振る。一も手を振って答えて彼らに駆け寄った。
「ソレが出たって聞いたけど」
「百パーセントそうだとは言い切れないらしいっすよ。店長が難しい顔してました」
店長が難しい顔をしているのはいつもの事だと、一は内心で笑った。
「はじめ君、ごめんね。本当ならボクたちが行かなきゃならないのに」
「ルールには逆らえないよ。二人は気にしないで、ほら、家に帰った方が良い」
「ううん、待つよ」
立花は目の端に涙を浮かべている。何を悲しむ必要が、涙を流す理由があるのだろう。一はゆっくりと首を横に振り、彼女の申し出

を拒否した。
「心配ないよ、様子見で終わりそうだし、ナナもいる。……神野君」
声を掛けられた神野は視線だけを一に寄越す。
「立花さんを送ってあげて。それから、気を付けてね」
「……分かりました」
気を付けて。一が伝えたかった、本当の意味に気付く筈はない。
神野は頷き、立花を促す。彼女は暫らくの間は渋り、その場を離れようとしなかったが、一が店内に入った事で諦めがついたらしかった。
少しだけ、本当に少しだけ罪悪感が芽生える。一の胸が針を刺したように痛んだが、所詮、その程度の痛みだった。
バックルームに入ると、店長とナナが何か話し込んでいるのが見える。一はわざと大きな足音を立てた。
「ああ、遅かったじゃないか」
「これでも飛ばしてきたんですけどね」
「可哀相に。立花たちが待っていてくれたろう？　先に帰れと言ったんだが聞く耳を持たなくてな。せめて中で待てとも言ったんだが、困ったものだな」
正確に言えば、ぐずる立花に神野が付き合ったという形だろう。
一は彼に申し訳ないと思った。
「ソレはどこに出たんですか？」
「あー……」店長は困ったように頭へと手を遣る。火の点いていない煙草を銜えながら、彼女はあらぬ方角へ目を向けた。
「分からん」
「分からない？　移動でもしてるんですか？」
「分からん。いや、私をそんな目で見るな。実は、情報部からの連絡じゃない。一般からのタレコミなんだ」
刹那、一の脳裏を過ったのはマナナンガルと呼ばれた魔女と遭った日の事である。彼はナナに視線を遣ると、唾を飲み下す。
「若い女の声だったが、要領の悪い話し方でな。とにかくソレが出

たから何とかしろとの一点張り。場所は？　どんな奴だ？　被害は？　何を聞いても、良いから勤務外を出せ、と」
「はあ」
「ムカつくから切ってやった」
「はあっ？」
「まあ、無視する訳にもいかんだろう。最近のペースを考えれば、ソレが出ても何ら不自然ではない」
煙草に火を点けると、店長は不味そうに煙を吐き出した。
「現場が分からんので堀を……車を呼んでおいた。その辺を適当に走って、異常がなければそのまま帰っても構わん」
「へえ、店長にしては気が利いてますね」
「何ならお前だけ徒歩でも良いんだぞ」
「でしたら、私もマスターにお供します。夜のお散歩なんて心が踊りますね。ね、マスター」
「堀の来る意味がなくなるだろうが。良いから無駄口叩かずきっちり仕事しろ。……全く、ナナまでこんなになるとは……」
聞こえていたが、一は聞こえない振りをした。

車に乗り込んですぐ、堀は神野についての話を切り出した。助手席に座る一は彼の横顔を見るも、その感情は読み取れない。
「少し、心配ですね」
「神野さん、ですか？　しかし、こと戦闘面に関してはマスターよりも問題ないと思われますが」
「ええ、技術部からある程度の話は聞いていますよ。尤も、彼らは秘密主義が過ぎるきらいはあるので、何とも掴みがたい印象を受けましたが」
「秘密兵器というのは全人類のロマンだと伺っていますから。安心してください、技術部は仕事に手を抜きません。完全に、完璧に、完膚なきまでに、神野さんに相応しい、素晴らしいウェポンを授け

てくれるでしょう」
　その完璧な仕事のせいで酷い目に遭った一だが、溜め息を吐くだけで何も言わなかった。
「いえ、武器が良いに越した事はありませんが、武器は武器。使い手が十全でなければ意味はありません。私が言っているのは、神野君の精神面についてですよ」
「店長も同じ事を言ってましたよ。つまり、堀さんは何を心配してるんですか？」
「いやあ、神野君は立花さんが好きなんですよね。甘酸っぱい、羨ましい話です」
　一は、和やかな口調で相好を崩す堀に面食らう。
「ですが、立花さんは一君を気にしている素振りがある。一君がどう思っているかはいざ知らず、ですけどね」
「俺は……」
「そんな事ないですよね、マスター」
　ナナが出したのは助け舟か、果たして新たな大波か。一は決めかねて沈黙を貫いた。
「恋愛と言うのは障害が多ければ多いほど燃え上がるものですよ」
「あはは……はあ。障害ってのは、俺ですか」
「いやあ、まあ、良いんじゃないですかね。私は見ていて楽しいですし」
　身も蓋もない言い方に一の心はちくりと痛む。
「神野君は負けん気が強そうですしね。だから、心配なんですよ」
「えっと、どういう事ですか？」
「いやあ、一君も男なら分かってくれると思いますが、男なんてのは古今東西、好きな人の前では格好付けたい生き物なんですよ。リレーで早く走りたい。テストで一番を取りたい。そして」
「そして、ソレを倒したい。ですか」
　堀の後はナナが続ける。彼は頷き、彼女は退屈そうに目を瞑った。
「私には、まだ分からない感情ではありますね」

「では、あなたが一君に尽くす理由とはなんでしょうか？」
「マスター、だからです。他意はありません」
「はっは、いやあ、そうでしたか。ま、何にせよ神野君は立花さんに良いところを見せたいと思っていても不思議ではありません。ソレ相手に先走ってしまうかもしれませんから、私たちでフォローしていきましょう。何せ、まだ十七の高校生ですからね」
一は頷かなかった。勿論、神野をフォローする意味では全面的に同意している。彼が頷かなかったのは、堀の何気ない言葉だ。
まだ、十七。
果たして、本当にそうなのだろうか。十七歳にもなれば充分に誰かに恋し、愛せる。
「……マスター？」
充分に、誰かを憎める。

混ざり合う。
真実と虚構が入り乱れ、船乗りが、吟遊詩人が好き勝手に話を紡いだ。士気を高める為に、愛を求める為に。それぞれに。
ああ、英雄よ剣を取れ。
財宝を守る悪竜を切れ。
竜の血を浴びて不死身に、竜の心臓を喰らえば鳥の声を耳にする。
英雄よ裏切り者を切れ。
さあ、旅立て英雄よ。
ヒンダルフィヨルの山の上、炎に包まれた館の中で、盾の垣を越えていけ。
眠り姫が夢から覚めれば、ああ、ああ、めでたしめでたし。
めでたし、めでたし。

「マスター、どうしますか？」

「ん」
暖かい車内と心地良い揺れ。一は助手席で身動ぎし、ゆっくりと目を開けた。どうやら眠ってしまっていたらしい事に気付くと、彼は頭を振って眠気を追い払おうとする。
「いやあ、もう日を跨いじゃいましたからね。眠くなるのも仕方のない話でしょう」
「あ、すみません。何かありましたか？」
「何もありませんでした。ですからマスターの指示を仰ごうと判断したのです」
「……俺じゃなくて、堀さんに聞けば」
言い掛けて、一は様子見すらこなせていない、情けない自分を認識した。
「一君、店長は何と？」
「特に、何もなければ帰って良いって言ってました」
「そうでしたか。では、一度店に戻っても？　少し待っていただければ、その後、お二人を家までお送りしますよ」
異存はない。一は頷き、肯定の意を伝えた。
勤務外たちを乗せたワゴンは駒台の中心部を抜けていく。流れていく風景を見つめながら、一はあくびを噛み殺した。
また、睡魔が一を犯していく。抗おうとも思わない、緩やかな侵略が心地よい。
「すみませんっ」
聞き返す間もなく急ブレーキが掛かり、一の体が前のめりになる。フロントガラスが間近に迫り背筋が凍った。路面を削るけたたましい騒音と突然の振動が、彼から眠気を遠ざけて、奪う。
「……ほ、堀さん？」
堀はハンドルを強く握り締めて前方を見据えつけていた。彼に倣い、一もそちらに視線を送る。
「マスター、アイギスを」
二車線の道路の真ん中に、何かが二つ立っていた。ヘッドライト

が眩しいのか、彼らは顔を手で覆い隠している。
「……ソレ、なのか？」
大柄な男と線の細い女。一には、ただの人間にしか見えない。
形だけならば。
ブロンドヘアを逆立たせた男の格好は異質であった。西洋の騎士が装備するような、無骨な甲冑を着込み、自身の身長ほどもある大剣を苦にした様子もなく肩に担いでいる。
「ソレでなければ仮装パーティの参列者でしょうか。その可能性は限りなく低そうですけれど」
細身の女も、男に負けず劣らずの格好だった。肌の所々が見えた薄手の鎧に――――。
「――――鎌ですか。戦闘には向かないように思われますが」
ナナは言葉を区切る。女が持つ規格外の鎌は、まるで死神のそれだ。見る者の不安感を煽り、見るだけで不吉だと思わせる。
「いやあ、威圧感が半端ないですね。……さて、どうしましょうか」
言いつつ、堀の顔からはいつもの笑みが消えていた。好戦的に口角をつり上げている。
ナナも、いつ飛び出しても構わないと言った具合に二人組の男女をじっと見つめている。
一だけが、まだ事態を把握しきれないでいた。把握、したくなかったのである。
「堀さん、バックオーライってのはどうですかね」
「そうしたいのは山々ですが、見てください。誰か倒れています」
男の足元に何かが転がっていた。それはぴくりとも動かないままだったが、彼らの足元を染める鮮血が事態の剣呑さを物語っている。
「ここからでは分かりませんが、まだ助かる可能性は残されています」
「ですね。ナナさん、先陣を切っていただけますか。私もすぐに続きます」
「マスターはナナの後ろに」

運転席、後部座席のドアが同時に開く。ナナは低く地を駆け女に狙いを定めた。

堀は後部座席の後ろ、物置になったスペースから短い槍を持ち出している。一は動いていなかった。アイギスだけは握っていたが、シートベルトを外そうとはしない。

「一君っ」

呼び掛けられて、一の肩が震えた。彼はようやくになってシートベルトを外して、助手席のドアを開ける。

「その方から離れてくださいっ」

一足先に女へと肉薄していたナナが拳を繰り出した。が、単調な正拳は横から割って入った男の大剣によって阻まれる。高鳴る金属音に、彼は不思議そうに目を細めた。

「……その子は人間じゃない」

「そうか」

短く答えると、男は上段から大剣を振り下ろす。ナナは右に避け、大剣はコンクリートを抉った。

迫る堀に気付いた女が大きく後退し、男が彼女を庇いながら後退りしていく。

「一君、怪我人を」

一はアイギスを広げて、血溜りの中に足を踏み入れた。負傷しているのは女性で、腹部からは未だ血が流れている。だが、生きている。苦しそうに喘ぎ、その度に胸が上下に揺れていた。彼女は虚空に手を伸ばしている。助けを求めているのか。それとも――――。

まだ生きているが、この傷では長くない。恐らく、あの大剣に貫かれたのだろう。医者に診せなければならない。

「……ぁ、あぁ……」

「喋らないでください。傷が、あ……」

「……ひ、る……さん」

愕然とした。何故、気付かなかったのだろう。すぐそこで死にかけているのは、一の知る人物だった。南駒台店の勤務外、戦乙女の

一人、ルルと呼ばれていた女性である。彼女は虚ろな目で一を見上げた。

「……っ、堀さん医者だ！　病院に連れていかなきゃ！」

負傷したルルを一目見た堀にだってそれくらいは分かっている。しかし、正体不明のソレを見逃す訳にもいかない。更に言えば、勤務外に怪我を負わせるほどの力量を持つ者が簡単に逃がしてくれるとも思わない。車を動かせるのは自分だけだが、一たちにこの場を任せるのは難しいだろうとも判断している。

「ナナが食い止めます。マスターには指一本だって触れさせません」

「……一君、車に私の携帯があります。店長に連絡を」

「間に合いませんよ！？」

堀は歯を食い縛る。それも分かっていた。しかし、南駒台の人間と一たちを秤に掛ければ答えは一つ。彼女には悪いが、目の前の敵を退かせるまではどうにも出来ない。

大剣が横に薙がれる。重量のある武器だというのに、男はそれを軽々と振るい続けていた。堀が持つ短槍では限界が来る。

「私が男の相手をっ」

迫った大剣を、ナナが力ずくで弾き返した。彼女は大きく腕を振り、袖からブレードを伸ばす。

「お願いします」

男の脇を擦り抜けて、堀が槍を突き出した。その先端を女は苦もなく避ける。彼女は雑に鎌を振るって距離を離した。消極的な女の姿勢に堀は訝しむが、考える余地はない。

「おおおっ！」

獣を思わせる、獣すら震わせるであろう男の叫びは空気を切り裂いた。ナナは動じず、大剣を右手で防ぎ、鎧の隙間を狙ってブレードを突き出す。が、彼は剣から片手を離し、その腕、ガントレットで攻撃を防いだ。

しかし均衡は崩れる。ナナが力で男を押していた。

「やるじゃないか」

「……何を」
男の体が深く沈み込む。優勢だったにも関わらず、ナナは咄嗟に下がった。だから、難を逃れた。無理な体勢からとはいえ、男の大剣が空を切り上げている。刃風が彼女の髪を僅かに揺らしていた。
「……シグルズ」
女の呼び掛けに答えると、男はナナたちに背中を向けて走りだす。女も彼に続き、脱兎のごとくこの場からの逃走を図った。
追い掛けようとしたナナを堀が制止する。何故、今になって彼らが逃げ出したのかが分かったからだ。
「……アレは、南の」
「ひとまずは助かりましたか」
負傷したルルに駆け寄るのは、彼女と同じく南駒台店の勤務外、シルトとシューである。彼女らは一を押し退けて、悲痛な声で仲間の名を呼び続けていた。
助かったのは確かだが、あまりにもタイミングが良過ぎる。何か裏があるのだ。
「後に回しますか」
考えるのはルルを病院に連れていってからだ。堀は駆け出し、一に指示を飛ばす。シルトたちがルルを後部座席へと慎重に運んでいたのを確認し、運転席に滑り込む。
「誰か付き添いをお願いします」
「……私が行こう」
シューが助手席に乗り込み、残った一たちに視線を遣った。
「後のことはお任せください」
「お任せします」
ウインドウが閉まると車はすぐに発進した。一はまだ、血溜りの上に立ち続けていた。

間違いない。

顔こそはっきりとは確かめられなかったが、癖のある赤毛、幾度も見た鎌、何よりも、見間違える筈がない。

体が揺さぶられている。

何度も、何度も、何度も。それでも、一はその場から動けなかった。靴はとっくに血塗れで、靴下までじっとりと濡れてしまっている。

「マスターっ！」

どうして、彼女が。

どうして、彼女が。

どうして、ここにいて、自分たちに武器を向けたのか。

何も分からず、知りたくなくて、一は真っ黒に塗り込められた空を見上げる。星一つ見えないそこは、暗い海の底を思わせた。

「おい」

「なっ……！」

乾いた音と同時に、一の頬が熱を持ち始める。痛みはなかったが、その衝撃で目が覚めたように感じられた。

ふと視線を下ろすと、苛立っている様子のシルトが拳を強く握っている。

「いつまで突っ立ってるつもり？　あんたバカじゃないの？」

「あなた、よくもマスターに……」

「はあ？　何、あんたらバカなの？」

ナナとシルトの言い争いを聞いている内、一は状況を理解しようと、事態を呑み込もうとし始めた。ぼんやりと霞みかかった頭ではあったのだが。

「ナナ、良いんだ。ぼうっとしてた俺が悪い。店に戻ろう」
「しかし……」
「お前がこいつを嫌ってるってのは分かってる。俺だって南の連中は好きじゃないしな」
「……おい。その、南を目の前にして言うなよ」
シルトが突っ込むが、一は無視した。
「都合良く出てきたじゃねえかよ南駒台。お前ら、何を考えてやがる」
「あ。何だよ、その目。何だよ。私らは、そんなんじゃ……」
一の頭に血が上る。八つ当たりしても意味はない。声を荒らげても何一つ解決しない。
「だったらさあ！　どうしてヒルデさんがいたんだ!?　どうしてっ、あの人があんな事をしたって言うんだよ!?」
それでも、止められない。掴み掛かるのだけは必死に我慢して、一は感情のままに怒号を轟かせる。
「そういや、朝からこの辺うろついてたよな？　あの二人も見たぜ。……何をしやがった」
「違うっ、私は、私たちは！」
「違う違うじゃ話が伝わんねえよ！」
「マ、ス、ター」
「あたっ」
頭を三度も小突かれ、一はつんのめった。振り返ると、ナナが今までにないくらいに深く頭を下げている。
「申し訳ございません。メイドでしかない私がマスターに手を上げるなど。ナナは、あとでどんな罰でも受けましょう」
「いや、今更過ぎるような気がする」
「ありがとうございます。では、まずは落ち着いてください。そして店に戻る事を考えましょう。話なら歩きながらでも出来ます」
シルトはずり下がっていたニット帽の位置を直して、不承不承ながら頷いた。

「では行きましょうか。……あなたは、さっさと口を開いたらどうですか」
「……う。あ、いや、分かったっつーの」
一を先頭にして三人が歩き始める。
「何から話せば良いのか分かんないけど、けど、ごめん。これだけ一番最初に言っとく」
「ごめん？」
「巻き込んでごめん。多分、あんたらの店に連絡がいったろ。ソレが出たから、勤務外を出せって」
どうして知っているのか。なんてくだらない事は聞くまい。一は溜め息を吐く。
「お前が電話したのか。あの男の人を止める為にか？」
一は、あえて、ヒルデをとは言わなかった。
「って言うより、私らはヒルデさんを止めたいの。あんな奴、死のうがどうなろうが知らないしー」
「ん？　じゃあ、どうしてヒルデさんはさ、そんなどうでも良い奴と一緒にいるんだよ」
「あー、ヒルデさんの男だし。つーか、ヒルデさんがあいつの女っつーか」
「は？」
立ち止まり、大口を開けて一は固まる。しばし固まる。
「は？　じゃなくて。言ってる意味分かる？　ヒルデさんとあの男はー、付き合ってんのー」
「は？」
「いや、はあ、じゃなくて」
「は？」
「……何、こいつ」
すっと、ナナが一歩前に出た。彼女は悲しげな表情を浮かべている。
「マスターは、現実を認めたくないのでしょう。ああやって何も知

らない、分からない、聞いていない振りをしているのです。マスター、あの方は売約済みらしいですよ。忘れちゃいましょう」
「な、な、な、なんでやねん！？」
「なんで関西弁よ？」
「マスターはたまにああなります」
一はその場に崩れ落ちた。しかもちょっと泣いていた。
「なんでヒルデさんが男と付き合ってんねん！」
「いやー、そりゃヒルデさんも女だしさー。私らだってあーゆータイプはどうかと思ったんだけどー。まー、顔だけ見れば全然イケてんじゃん？　抱かれても良いって感じに」
「ふざけんなよ！」
「あんたよりマシじゃん」
信じない。信じてなるものか。一は立ち上がり、コートの袖で涙を拭いた。
「マスター、これで鼻をおかみください。鼻水が垂れてきています」
差し出されたティッシュペーパーを素直に受け取り、一は盛大な音を鳴らす。
「ありがとう、ナナ。……じゃあ、アレか。あの男はソレじゃなくて人間なのか」
「は？　なんで？」
シルトは小ばかにしたように笑った。それが腹立たしくて、一は（使用済み）ティッシュペーパーを彼女に向かって投げつける。
「あっ、あ……！　コロス！　コロスゾ！」
「ひゃひゃひゃ、おら、良いから答えろよ。さっきの時代錯誤甲冑野郎は何者なんだ」
一に殴り掛かろうとしたシルトだが、ナナが先ほどからブレードを出したりしまったりしているのを見て、冷静になる。
「くっ。あいつは、ソレだよ。こっちの言葉で言うならだけど」
「うわ、マジでソレなのか。じゃあ尚更だ、ヒルデさんは、どうしてそんな奴と……」

そこまで一が言い掛けたところで、ナナが不思議そうに首を傾げた。
「あの、マスター、もしかしてなのですが、気付いていないのですか？」
「何が？」
「先ほどの方たちも、その方も、人間ではありません」
「……何だって？」
大剣を持った男も、ヒルデも、シルトも、シューも、怪我をしたルルも。誰もが。
「私らは人間じゃない。ソレなの。あんた、ワルキューレって知らない？」

ワルキューレ。
戦乙女と呼ばれる彼女たちは、戦場においては戦士の死を定め、勝敗の行く末を決定づける存在である。その戦で息絶えた勇士を選り分け、ヴァルハラへと迎え入れて彼らをもてなすのが、ワルキューレの役割だ。
戦場で横たわる死体を選ぶ女。
主神の命を受け、鎧と兜で身を固めて戦場を駆ける。時には天女のような羽衣を着て勇士に食事を振舞う。
戦場に出る者は誰もが夢を見る。自分が、自分こそが勇士なのだと信じて命を賭ける。戦乙女に見初められ、死後もまた戦う為に。

ワルキューレについての説明を聞き終えたナナはぽつりと漏らした。
「使い走り」
シルトは眉根を寄せて、ナナをじとりとねめつける。
「あんただってメイドじゃん。同じじゃん」

「メイドとパシリを同列に並べられては困ります。いえ、憤慨ものですね。あなたたちは誰かの命令を受けなければ動かない。動けない。仕事だと割り切るあなた方に意思は皆無です。私は、私の意志を以ってマスターに仕えているのですから」
「はあ？　ムッカつく。人形のくせにがたがたと言っちゃってさ」
「おい」
　ナナとシルトの間に一が無理矢理割って入った。彼はシルトを強く見据えつける。
「喧嘩すんのは良いけどよ、俺がどっちの味方するのか考えてしろよ」
「高が人間が脅してるつもりかっつーの。あんたみたいなのが一人や二人増えたってカンケーないしー」
「だったら二対一でやんのかよ。なあ」
「マスターは手出し無用です。この程度、私の片手で充分ですから」
　シルトは舌打ちし、一たちから背を向けて歩きだす。
「言いたい事があんなら聞くぜ」
「そっちこそ聞きたい事があるんじゃないの？」
「意地張んなよめんどくせえな。……ワルキューレって本当かよ。お前も、ヒルデさんも」
「嘘吐いてもしょうがねーし。マジマジ、ソンケーしなよ人間」
　出会った時から色々な意味で人間離れしているとは思っていたが、本当に人間ではなかったとは。一は混乱していたが、何を今更と開き直る。自分だって、とうの昔にそれを諦めているのだから。
「私もシューもルルもワルキューレだよ。けど、ヒルデさんは違う。あの人は別格。マジ、すっごい、超やばい」
「頭悪い説明……にもなってないぞ。つまり、ヒルデさんって何者なんだよ」
「んー、リーダー？　みたいな感じ。私らはさ、いつも何人かで動かなきゃなんないの」
「お前らグループのリーダーか。はあ、なるほど」

「ちっげーし。ヒルデさんは私ら全体のリーダーだから」
またもや要領を得ない話である。一はシルトのこういうところが嫌いだった。
「察するところ、ヒルデさんはワルキューレという種を統括する…噛み砕いてしまえば一番偉い方、ですか」
「はあ？　あー、なんか難しいけど、多分そんな感じ」
理解はした。が、ならば尚更納得出来ない。ワルキューレのトップであるヒルデが、何故あの男と連れ立って、ルルを負傷させたのか。
「ヒルデさんが天使なのは分かった。なら、あいつは誰で、どうしてお前らの仲間がやられなきゃならないんだ」
「……それは、その、分かんない。ヒルデさんがあいつと一緒にいて、どうしてルルがあんな目に遭っちゃったのか、分かんない」
だから。だから、一と会ってしまった。シルトたちは朝早くから、この辺りを捜し回っていたのだろう。ヒルデを、ずっと捜していたに違いない。
「ヒルデさんはお前らには何も言わないで、勝手に出ていったって事なのか」
「うん。マジで、もう、意味が……」
「では、彼女といた男とは何者なのでしょうか。ソレとおっしゃいましたが、あの身のこなし、膂力、只者ではないように見受けられました」
シルトは言いにくそうに口を小さく開け、俯く。しかし、彼女は意を決して一を見つめた。
「シグルズ」
「……ナナ、知ってるか？　俺は知らない」
「無論です。私のデータベースに敗北の二文字、ひらがなにすれば四文字の言葉は記載されていません」
ナナはえへんと胸を張るが、視線は宙を泳いでいた。
「シグルズってのが、さっきの男の名前なのか？」

「そうだよ。話の流れで分かるじゃん」
「そうか」一はアイギスを握る手に力を込める。何があろうと、何が起ころうとも、敵になりうる相手の名前さえ把握すればこちらに分がある。
「そいつが、ヒルデさんの……」
「男」
一はシルトを睨みつけた。分かっていても、何度も言うな。
「俺は出会った時から遊ばれていたのか」
口に出して言うと何とも情けない。
「んー、ヒルデさんにはそんなつもりなかったと思うけど」
「そりゃあ、ヒルデさんは本物だから。『私ってー、天然なところがあってー』とか抜かす馬鹿女なんかじゃあなく、『天然なんかじゃないよー』ってちょっとむきになって反論してくるタイプだから。しかもほっぺた膨らませてるから。無自覚に男を勘違いさせる……ああ、ヒルデさん、あなたは天使だ」
「膨らませてねーよ。男ってマジにバカ。バーカ。じゃなくてさ、シグルズが出てきたのはつい最近なんだよ。多分、三日も経ってない。いきなり来たんだと思う」
一は疑わしげな目つきをシルトに向ける。
「昔のって言ったじゃん。あの二人はとっくに別れてんの。ここにだって来ない筈で、いない筈だったし」
「ですが、いる、と。なるほど、あなたたちは上司をかどわかした男を、あるいは自分たちを見捨てた女を追っている訳ですね」
「見捨てられてなんか……！」
シルトは何か言い返そうとするが、力なくうな垂れた。
「事情は呑み込めてきました。しかし、何故北駒台店に連絡を入れたのですか？」
「ルルが、あいつがヒルデさんを見つけたって先に行っちゃって。私とシューだけじゃ捜せなくて、それで……」
「我々に助力を請うた訳ですか。合点はいきました。ですが、それ

ならはっきりと伝えればよろしかったのでは？　店長も困っておられましたよ」
「それは、ダメ。言えなかった。言ったら、ヒルデさんが」
そこで言葉を区切ると、シルトはもう何も語ろうとしなかった。ただ、彼女の顔色は青ざめている。良く見ると、シルトは化粧をしていなかった。それだけ慌てていて、必死だったのだろうと一は認識する。
「言えよ。店長には黙っておくから。なあ、ナナ、何を聞いたってあの人に報告はしないよな？」
「勿論、マスターのご命令には全力で従います」
「だ、そうだ。話してくれ」
「けど、あんたらだって上には逆らえない。すげーめんどうな奴を敵に回すかも」
大剣を軽々と振り回す、甲冑を着込んだ男は面倒以外の何者でもない。が、だからと言って退く理由にはならない。
「あいつが人を襲うソレなら見過ごせない。今更だよ、気にしないで話してくれ」
「そっ、そう？　あんた、案外良いトコあんじゃん。えーと、ヒルデさんは、とにかく理由もなしに南駒台店を出てっちゃった」
一は首を振る事で相槌を打つ。
「だから追っ手がかかっちゃったんだよねー。やばいくらいヤッカイなヤツでさ、多分、もうとっくに動いてんじゃないかな」
「追っ手って、もしかして、南の勤務外？」
「はあ？　そうに決まってんじゃんバーカ」
一とナナは顔を見合わせ、声を潜めた。
「また、南を敵に回すのかよ」
「問題ありません。いざとなれば店長に告げ口しちゃいましょう。ワルキューレがどうなろうとマスターとナナのしったこっちゃないのです」
「そうしよう。とりあえず、気にすべきはあの野郎だな」

「ちょー、こそこそしないでよねー。つーか北駒台ってどっちだっけー？」
「ああ、悪い悪い。こっちだよ、おら、俺の尻を眺めながら歩け」
「コーロース！」

バーサーカー。
彼、鹿賀徹夫（かがてつお）はそう呼ばれていた。尤も、北欧の神話に登場するような神代のモノではない。れっきとした人間である。そう、一応は。
恵まれた体躯に、希有な身体能力。それだけでも勤務外としては及第点だろうが、鹿賀にはもう一つ、卓越した才があった。技術部が開発した、肉体を変化させ、能力を向上させる薬との相性が抜群に良かったのである。
気付けば、彼はその名にひけをとらない風に呼ばれていた。
鹿賀の目的はただ一つ。店長に次いで南駒台店の勤務外を束ねていたヒルデの口封じだ。戦乙女。野獣。狂戦士の長である彼女がその気になれば、南駒台店どころかオンリーワン全体にすら害を与えかねない。生死問わず。鹿賀の目的は、ヒルデを止める事だ。
が、仮にもバーサーカーと呼称される存在が、生死を確認、認識出来るレベルでの戦闘を行なえるのか。あるがまま、狂ったように戦いに身を投じ、戦いに興じるのではないか。考えるまでもない。答えは否で、是である。

不機嫌だ。私は機嫌が悪いぞー。とでも言うかのように、店長はハイペースで煙草を消費していた。
「もう一度言うが、そいつを追い出せ」
「はあ？　だからあ、どうして私が追い出されなきゃなんないワケ？　連れてきたのはそっちじゃん」

「あ？　一、本当か？」
　めちゃくちゃ睨まれたので、一は素早く視線を逃がす。
「あー、堀さんから聞いてませんか？　何か、こいつが事情に明るいんじゃないかと思って。ほら、一応はその場にいましたから」
「聞いたとも。は、偶然にも。偶然にもそこに出くわしたとな。偶然。偶然ときたか。素晴らしいなあ」
　全く信じていない。店長は自分以外を全て疑っているようだった。
「うっざー。だから北の連中は嫌いなの。かったるー、オバサンってのはどいつもこいつも」
「黙れ糞ガキ。文句があるなら消え失せろ。それとも何か、お前は嫌いな連中に用でもあるのか？」
「ねーし！」
「では、何故ウチに連絡を入れた？」
　その場が一瞬間凍りつく。それだけで、店長の溜飲はいくらか下がった様子であった。
「見くびるなよ。声を聞けば誰にだって同一人物だと分かる。伊達にクレーム処理はこなしていないんだ」
「大概無視してるじゃないですか」
「おい、一」
「なんですか店長」
「死ね。それで？　南駒台さんがこんなところまで何かお困りか？　死ぬまで困れバーカ」
　大人気なかった。店長はくるりと椅子を回転させて、一たちから背を向ける。
「お前が死ね！　もう良いし、こんなババアに何が出来るっつーの。ほら、行こう」
「……え？　行こうって、俺に言ってんのかアーパー」
「アー……何それ？　つーか、つーかさ、そうに決まってんじゃん。話聞いたんだから手伝ってくれるんでしょ」
　一は困ったように、と言うか困っていた。ヒルデの事が気になる

のは確かだが、こんな状態の店長から逃れる術を持ってはいないのである。あとでどんな酷い目に遭うか分かったものではなかった。
「オッケー、行けたら行くわ」
「来る気ねえんじゃん！」
「マスター、そろそろ本気でつまみ出したほうがよろしいのでは？」
「うーん。じゃあ」
「じゃあって言うな！　イウナヨー！」
わざとらしい動作で耳を塞ぎ、店長は短くなった煙草をぺっと床に吐き捨てる。瞬間、一がちりとりと箒を引っ張り出して吸殻を片付けた。
「流石はマスター、惚れ惚れする清掃技術です」
「うん、いや、お前はこの為だけに生きてるって感じがするな。私もポイ捨てする甲斐があるというものだ」
「ありがとうございます」
恭しく頭を下げる一の後ろで、シルトが苦々しい表情を作っている。空中ブランコで死者が出る。ゾウの火の輪くぐりでピエロが死んで、猛獣が観客席で暴れ回る。最低のサーカスを見終わったあとでも、こんな顔はしないように思われた。
「仕事しろっつーの！」
「半分ニートのくせに何言ってやがる」
「はあああっ！？」
その時、シルトの声に重なるようにして電話が鳴る。
「やかましいぞお前ら」
「電話と一緒にすんなババア！」
店長はディスプレイに表示された番号を確認した後、憂鬱そうに息を吐いた。
「ふざけるのもそこまでだ。戻ってきて早々だが、悪いな、仕事だ」
ソレが現れた。ただ、今までにはないパターンだったので一は驚

く。
「さっきの奴らじゃないんですか？」
「お前らが見たのは一応は人間の形をしていたんだろう？　なら違う。また、別のソレだ」
「マジかよ……」一は両手で顔を覆い隠し、その場にしゃがみ込んだ。
「店長、それは確かなのですか？」
落ち着き払った様子のナナに頷いて返し、店長は煙草を銜える。
「馬鹿でかい猪が現れたそうだ。場所は、駒台デパート前の駐車場。全く情報部め、いつの間にいやがったのか、なんて抜かしやがる」
「被害はどうなのですか。この時間では殆ど人がいないとはいえ、ゼロとは限らないでしょう」
「人的被害はなしだ。駐車場のフェンスが破られたぐらいで、ソレはそこから一歩も動いていないらしい。ただ、その時間まで残っていたデパートの関係者が逃げられない」
ナナはカチューシャをこんこんと指で叩いた。
「猪というのは確か、動くものに襲い掛かるのでしたか。神経質で、警戒心も強い。尤も、自ら人里に降りてきているようですけれど」
「いや、関係者が竦んで動けないってところだろう。……巨大な猪か。まあ、所詮は獣。適当にやってやれ」
「はあ？　何言ってんの？　これだから北駒台の連中ってのはさー」
今まで黙っていたシルトが口を開けたので、店長は嫌そうに眉根を寄せる。
「まだいたのか」
「いたら悪い？　つーか、なんつーか、ソレを舐め過ぎだと思うんですけど？」
「は、お前のような者が私に説くつもりか。たかが猪、仕留められないようでは勤務外としては生きていられれん」
「心構えくらいは持ったらどうって言ってんだけど？　猪の怪物が多いって言っても、何かあるんじゃん？　バッカ正直に突っ込むだ

けじゃホントにバカだよ」
　一は意外に思った。それは、シルトが『もっと頭を使え』と言っている事ではなく、北駒台店の人間を助けようとする姿勢に、である。
「あのう、店長。俺だってこいつに味方する訳じゃないですけど、情報があるならあるだけ教えて欲しいです」
「……情報部の見間違いかもしれないが、猪の体毛が光って見えたらしい」
　光る猪。さっぱり見当もつかないので、一は黙り込んだ。
「ふーん。もしかしたら、えっげつないヤツかもしんない」
「お前、知ってんのか？」
「多分、グリンブルスティっての。水ん中や空を馬なんかより早く走るって言われてる」
「ナナ驚きです。猪にはそんな力も備わっていたのですね」
　備わっていない。
「へえ、意外だな。詳しいじゃんか」
「勤務外。勤務外だから。あんた、ソレについてもっと知っといた方が良いんじゃない？」
　暗にバカだと言われているようだったが、さっきから何度も聞いた台詞だったので一は気にしなかった。
「仮にグリンブルスティと呼ばれるソレだとして、ウチの勤務外では相手にならないレベルなのか？」
「さあ？　私バカだからわかんなーい」
「良し、行け」
「何が良しなんですかっ、厄介な奴なんでしょうに！」
　一は立ち上がり、死にたくないと喚いた。腹を括るまでは逃げ腰の彼に、店長はげんなりとする。
「厄介じゃないソレがどこにいる。でかいとはいえ、猪は猪。的もでかいんだから横合いからガッと行け、ガッと」
「……うわ、マジで言ってんの？　あんたらさ、こんなヤツの下で

よく生きてこれたねー。私ならこんな店、即辞めてるし」
「嫌だあっ、立て続け過ぎる！　俺のキャパを超えた！　もう無理っ、いつか死んじまう今日死んじまう！」
「がたがた抜かす暇があるならさっさと行け。足がないんだから、こっからだと時間が掛かるぞ」
店長は煩わしそうに手を振った。
「今日はもう駄目だ、駄目なんです。必死で耐えてきたけど、やっぱりダメージがでかかったんだあっ。何もかも信じられない、裏切られた俺の心をこれ以上傷つけないでくださいよう！」
割に、良く回る口である。一以外の者は彼を無視しつつ、準備を始めた。
「あー、もう。しょうがないから私も行ってあげる。感謝しろよな北駒台。……って、おい、聞けよ、聞けって、聞けってば！」
「ついてくるのは構いません。しかし空手で戦うつもりですか？　あ、いえ、囮になってくださるのでしたら色々な意味で助かりますが」
「はあ？　誰が囮なんかに、なるかっつーの。バーカ。ワルキューレ舐めんな」
「そうですか。マスター、この方をぶっ飛ばす許可をください」
「駄目だ」一は力強く断言する。シルトの前に立ち、彼女をナナから庇うようにして。
「わざわざついてきてくれるってんだから、いざとなりゃ盾にでも囮にでも捨て駒にも出来るだろ？　ここでぶっ飛ばすのは勿体ない」
「ああ、流石はマスター、おみそれしました」
「馬鹿とハサミは何とやら。立ってる者は馬鹿でも使え。馬鹿にも五分の魂、だ。どうしようもない頭空っぽな奴でも、使い方次第でどうにでも……」
「こっ、ころ、ブッコロス！　調子乗り過ぎブッコロス！」
「うわあああっ、やめろっ、どこから槍なんて出しやがった！」
「さっさと行かんか馬鹿どもが！」

シルトシュパルテリンは盾を割る

世界は汚い。

汚濁に満ちて、大気は汚染され、目に見えるほどの不浄がこの身を包み、飲み込もうとしている。

人間は醜い。

一枚の金貨を巡って裏切り、罵り合う。爛れた欲望をぎらぎらと垂れ流し、他者を喜色満面で踏みつける。何年経っても、何世紀が過ぎても変わらない。

鳥たちは止まり木を失い、力尽きるまで翼をはためかせる。地上に楽園はない。綺麗なものはもう、消え失せてしまったのだ。自分たちを助けてくれと、奴らを殺してくれと嘯る彼らの鳴き声が耳に痛い。

竜の血を浴びたのはこの為なのだと理解する。人の道を外れたのは、人を罰する為なのだと。

真に美しいものだけが、この世界に残れば良い。隣に立つ彼女を見て、男は、シグルズはそう思った。

堀がルルを病院に運んでいる為に、駒台デパートまでは歩いていかなければならない。車があったとして、免許がない。免許があったとして車がない。何たる仕打ちだと、一は勤務外に対する扱いの悪さを恨んだ。誰を恨めば良いのか分からないので、自然、憤りの矛先はかねてから気に食わないシルトに向く。

「シグルズってのは、どんな奴なんだ？」

「……教えてやっても良いけどさ、なんでそんな機嫌悪いの？」

「悪くねえよ」

ぶっきらぼうに答える一を瞥見し、シルトは舌打ちした。

「私に当たらないでよ。マジ、最悪。なんつーの、ちっちゃいっつ

ーかさ」
「マスターを侮辱するのなら容赦はしません。問われているのですから、シグルズについて答えてはいかがですか？」
「揃いも揃って……。ふん、シグルズは英雄。そう呼ばれてる。あんたと違って、カッコイイ男って感じ」
――――英雄。
最近では聞き慣れて、どうにも安っぽく思えてしまう。一はシルトの言を鼻で笑った。
「ハンパなく強い。ヒルデさんが絡んでなきゃ近づきたくないくらい」
「ワルキューレとしては、強者の存在は喜ばしいのでは？」
「強過ぎるってのもなんだかなあって話。何考えてるか分からないし」
「漠然としてるな。強いって言っても、どのくらい強いのかが聞きたいんだよ」
今度は、一の言をシルトが鼻で笑ってみせる。
「聞いたら逃げたくなるかもよ？」
何を聞いたところで逃げたくなるのだから仕方がない。一は気にしていない風に装い、話の続きを促した。
「じゃあ、あんたは竜を殺せる？」
「竜ぅ？　そんなもん……」いないと言おうとした一の動きが止まる。
「いてもおかしくはない世界ですが、竜というのはいささか飛躍している気もしますね」
一とて竜の存在を全面的に信じている訳ではない。が、こんな世の中だ。現れたとして、すぐにその現実に適応してしまうだろう。
「シグルズは竜を殺してる。そん時に、竜の血を浴びて、竜の心臓を食べたって聞いた」
「はん、血がなんだってんだよ。鳥を食っても飛べねえし、魚を食っても泳げねえんだ。だからどうしたって話だよ」

シルトは残念そうに一を見遣って、首を横に振る。
「鳥と魚と一緒にすんなよバーカ。竜ってのは、でかいトカゲじゃないんだっつーの。竜には魔力が宿ってる。すげー力が手に入っても不思議じゃないし」
「ナナ、どう思う？」
問われ、ナナは目を瞑って思考した。やがて彼女は遠慮がちに口を開く。
「戦闘の際、特別な能力を行使しているようには見えませんでした。大剣を容易く振るう腕力、身のこなしには瞠目すべきですが、それ以上となると……」
「隠し球持ってもおかしくないか。なあ、もっとさあ、何か知らないのかよ？」
「はあ？　つーか、教えてくださいって態度じゃなくない？」
「ちっ」これ見よがしに溜め息を吐くと、一は面倒くさそうに頭を下げた。
「どうか、この哀れな豚めに英雄のお話を教えてくださいワルキューレ様」
棒読みの台詞を聞かされてシルトは一瞬手が出そうになる。が、ここで争っていても仕方がないと、どうにかこうにか怒りを自制した。
「……不死身。シグルズは死なないんだってさ」
「信じられませんね。人間として、生物として誕生したからには寿命がつき物。死からは逃れられません。シグルズは、機械の体をくれる星にでも行ったのですか？」
自動人形のナナが言えばもっともらしく聞こえる。が、一は不死の存在を信じるに足るモノを既に見てしまっていた。ありえない話ではない。
「不死って、マジなのか？」
「試した事ないから知らなーい。つーか、あいつの体ハンパなく硬いらしいんだよね。だから、殺そうと思っても殺せないってのがホ

ントっぽい」
「竜の血液を浴びた事により身体を硬化する魔法、のようなものが掛かっているのでしょうか」
「馬鹿げてやがる」
一はそうして吐き捨てるが、内心ではどこか納得もしていた。
「私が知ってるのはそれくらい。あとはもう、本人に聞くか……」
一つ、溜め息。
「ヒルデさんに聞くしかないと思うけど？」
聞けるものなら聞いてみろと、シルトは厭世的に笑む。
「そうかよ。ありがとう」
まだ自分は諦めていないのか。情けなくて、小さな奴だと、一の胸が勝手に痛んだ。

体長は五、六メートル、体高は二から三メートルといったところだろうか。動物園で昔見た象とどちらが大きいか比べて、無駄な事だと一は思い直した。
物陰から覗くと、巨大な猪は駒台デパートの駐車場のど真ん中、身動きせずに前方を見据えている。何もしないのか。あるいは、何かを待っているのか。
「随分とお行儀が良いのですね」
「死んでんじゃねえの？」
「バッカじゃないの？　死んでるワケないじゃん」
願望を口にしただけで罵られる。なんてふざけた世の中で、なんてふざけた女だと一は嘆いた。
「で、どうやって仕掛けんの？」
「俺に聞くな」アイギスを握り、一は頭をかく。
「ではシルトさんが囮になってソレを引きつけておいてください。その間、マスターと私で出来る限り頑張ります」
「出来る限りって何!?　何なのバカなのっ？」

「でけえ声出すなよ。気付かれたらどうすんだ」
一はちらりと猪、グリンブルスティの様子を盗み見る。
勘違い、見間違いではない。ソレの体毛は確かに、夜を切り裂くように黄金色に輝いていた。微動だにしないその佇まいからは神聖なものを感じる。
「三方から同時に仕掛けましょう。我々の手持ちの武器では近接戦闘しか考えられません」
「俺も行くのか……」
「あんたも勤務外なら覚悟を決めろっつーの。いち、にのさんで仕掛ける」
シルトが足音を立てないように、ソレの左側面へと回り込んだ。
ナナは右に行き、残った一はソレの背後を陣取――――。
「……ミスった」
――――ろうとしたら、思い切り石を蹴飛ばしていた。物音に気付き、巨大な猪がぐるりと体を捻らせる。目が合った一の鳥肌が立ち、見下ろされた彼の腰が抜けそうになった。
ソレの鼻から呼気が上がる。寒々とした空気を強い敵意が熱していく。嫌でも目立つソレの牙が、一の視線から離れない。
「マスターっ！」
ナナが飛び出す。ソレの注意を引きつけようとしたのだろうがもう遅い。グリンブルスティと呼ばれる猪は一に向かって駆け出していた。
「わあああああああああああっ！？」
一は慌ててアイギスを広げる。向かってくるソレからは逃げられないと判断して、両足を踏ん張ってアイギスを前方に向けた。その間、シルトがソレの脇腹に槍を突き刺す。しかし深くは刺さらない。僅かに肉を抉るだけに留まり、彼女は得物ごと弾き飛ばされてしまった。
瞬間、鈍い音が駐車場に響く。一は何事かを叫び、後方へと吹き飛ばされていった。アイギスを落とさない事には成功したが、彼の

頭の中は混濁して、彼の体は何度も何度もコンクリートにぶつかって転がる。

尚も、ソレは闘志を漲らせている。転倒した一に向かって狙いを定めた。が、追いついたナナがソレの鼻先に拳を繰り出す。呻き声が聞こえたが、彼女は全てを無視して攻撃を加え続けた。

「よくもっ、マスターを！」

転がった槍を拾い上げたシルトも戦闘に戻ろうとするが、握った得物を頼りなく感じる。技術部が新たに開発した、携行可能なギミックのついた短槍だ。槍の柄、その半分だけが基本の状態であり、簡単な操作でもう半分の柄と、槍頭が飛び出す仕組みになっている。が、可変機構の武器と言うのは不安だった。武器はもっと単純で良い。構造が単純であればあるほど強度にも期待出来る。

――――文句は言えないか。

側面に回ったシルトがソレの体に槍を突き立てる。傷口からは血液が噴出するも、ソレは動きを止めない。体が大きいからか、ある程度の痛みには鈍いのだ。

「マスター！　マスターご無事ですか！？」

殴りながらでナナが振り返る。一は立ち上がろうといていたが、衝撃が強過ぎた。まだ、意識が定まっていない。ふらふらとしながら、膝をついて苦しそうに呻いた。

「――――――ッッ！」

咆哮が一たちの耳をつんざく。ナナに正面から打たれ、シルトには横合いから攻撃を繰り返される。ソレは怒りのままに顔を振るい、牙でナナを突こうとした。

だが、怒りに身を震わせているのはソレだけではない。ナナは片腕で牙を押さえ、残った腕でグリンブルスティの顔面を殴り抜く。

「……マジで」

ナナの凄まじい戦闘能力にシルトは戦慄した。これではどちらが獣なのか分からない。

「ご主人様とは違うね、やるじゃんメイド」

「その牙、叩き折ってみせましょうっ」
ナナは両手を振り上げてソレの牙に固めた拳を力任せにぶつける。が、びくともしない。逆に、反動で体勢の崩れた彼女の腹部にソレの頭突きがめりこんだ。宙を浮くナナを見上げてシルトは舌打ちする。
地面に衝突したナナの体から甲高い音が響いた。その音で定まっていなかった一の瞳の焦点が合う。
「う、ナナ……っ」
一は無理矢理に体を動かして立ち上がった。ソレは無傷ではないものの、中途半端にダメージをもらったせいか、我を忘れて暴れ回っている。不用意に近づけば手痛い反撃を食らうのは必至だった。
「使えないぞ北駒台！」
シルトはソレの攻撃を巧みに避けて槍での刺突を試みる。だが、そのどれもが致命傷には至らない。ソレの怒りを買うだけに留まっていた。
「……どうしろってんだ」
メドゥーサで動きを止めたところで、一たちには火力というものが圧倒的に不足している。ソレの分厚い皮と肉の前では、ナナの打撃もシルトの槍もいま少し頼りなかった。勿論、時間さえ掛ければ打倒しうるだろうが、巨体から繰り出される一撃は何度も耐えられるものではない。早期に決着をつけなければなるまい。
一はアイギスの柄を強く握る。メドゥーサの能力を最大限に発揮させて、ソレを石化させる。もう、これしか残っていないように思った。問題は、ゴルゴン戦のように上手く彼女を呼べるかどうかだ。あの日あの時の召喚はまぐれに近い。メドゥーサが一の呼び掛けに応えたのは、ゴルゴンという外的要因があったればこそなのだから。
「あああああっ、もう！　あんたらいつまでサボってんのよ！」
「うるせえ」
まだ、呼べない。最後の最後、ぎりぎりまでメドゥーサは取っておく。それまでは少しずつで構わない。ソレの皮を、血を、肉を削

り、奪う。
「ナナいけるか？」
「問題ありません。戦闘行動を継続します。が、相手を過小評価していたようですね。マスター、指示を」
「指示って……」
「では独断で戦闘を開始します。積み重ねれば、鈍重な相手にもいつかは通ずるでしょうから」
牙を避け、ナナがソレの顎を打ち上げる。僅かに上がったグリンブルスティの頬にシルトの槍が突き刺さった。
「あぶねえぞっ」
ソレが首をめちゃくちゃに振る。一はシルトを庇う為に、アイギスでその攻撃を受け止めた。
「やっと出てきたなカメヤロウ。どんだけびびりゃ気が済むんだっつーの」
「さっさと止めろよこいつをよう！」

グリンブルスティと、それに群がる勤務外を認めて、シグルズは息を吐いた。背負った大剣を片手で掴み、大きく振るう。鋭い剣筋で空気が裂けた。
「この辺りにも鳥はいないんだな」
シグルズの傍に立つヒルデはゆるゆるとした動作で空を見上げると、悲しそうに頷いた。
「醜い世界だ。ここに、かの聖獣は似合わない。一刻も早く切り捨てて、豊穣神のもとに帰してやらないとな」
シグルズが歩く度にかしゃかしゃと音が鳴る。甲冑を着ているのにも関わらず、その足取りは場違いなほどにどこか軽快だった。
「……待って」
「猶予はない。あのように荒れた姿を曝すのも本意ではない筈だ」
「そうじゃないの。もう、あの子たちには手を出さないで」

シグルズは肩に担いだ大剣の位置を直して、未だこちらに気付いていない一たちを見遣った。
「さっきの事を言ってるのか？　誤解だ。向こうから仕掛けてきたのだから、俺としては払うほかなかった」
「……お願いだから」
縋るような、媚びた瞳でヒルデは訴える。
「……分かっている。お前の美しい瞳が曇るのは、俺にとって望むところではない」
言うと、シグルズは再び歩を進めた。大剣を肩に担ぎ直す。目線は前に。視線は神の乗獣に。そう、勤務外たちには目もくれず。
距離を詰めていくと、こちらの動きにナナが気付いた。彼女はグリンブルスティの牙を払い除けて、何事かを叫ぶ。釣られて、一たちもシグルズを視認した。
同時に、シグルズの後ろにいるヒルデにも気が付いたらしい。それが、彼にとっては気に入らない。見目麗しいだけではない。心根までも美しい彼女に、触れるな。汚い目で、汚れた目で、濁った目で、澱んだ目で、醜い者がこの世界だけでなく彼女までもを犯そうとするならば。
「駄目っ」
ヒルデが叫ぶ。シグルズは止まらない。大剣を後ろに大きく振り被る。上下の歯を強く噛み締めると、獣の如き咆哮が彼の喉から迸り出た。
死にたくなければ突っ伏せ愚者よ。かかる火の粉であるならば、ここで払うが後で払うも同じ事。刃風に散るならそれまでだ。戦乙女の期待に応えられる器ならば、せめてこの場は生き抜いて見せろ。
もはや、それは剣技ではなかった。剣術でもない。そこに技巧といった類のものはない。ただ、力任せに振るうだけだ。
「マスター駄目ですっ！」
巻き起こる風が周囲の者を吹き抜けて揺らす。最高速度に達した剣先がグリンブルスティ、右の牙と衝突し、砕いた。ナナが一に向

けて手を伸ばすも届かない。足がもつれた彼女は倒れ込み、悲痛な声を上げる。

大剣は勢いを殺さないまま空気を切り裂き、ソレの肉に届いた。顔の真ん中に食い込んだシグルズの得物に慈悲はない。鈍い音を立て、鮮血が夜空に赤い花を咲かせる。そのまま、剣は残った牙へと標的を変えていた。

砕かれる牙。尚も剣は止まらない。余勢を残して、それは、棒立ちのシルトを捉えていた。彼女は既に掌から槍を落として、じっとヒルデを見つめている。

「やめて……！」

もう遅い。シグルズに剣を止める気はなかった。だからきっとシルトは死んでしまう。冷えた刃先が彼女の頭蓋に叩き込まれて付着していたソレの血と混ざり合い、壊れた蛇口から放たれる水のように脳漿が撒き散らされる。痛みを感じるのは一瞬間あるかないか、それだけが救いで、それだけしか救いがない。切断と言うよりもむしろ分断されたシルトの顔上半分はきっとどこかに飛んでいく。宙を泳いで地面に叩きつけられれば内容物を吐き出すだろう。首から上を失った胴体からも血しぶきが噴き出して辺りを朱に染める筈だ。痙攣を繰り返して自らを沈める血の海の中、彼女は何を思うのだろうか。だからきっと、戦乙女がまた一人、死んでしまったのだろう。

恐れを知らない者が、飛び出さなければ。

シグルズは目を大きく見開いた。彼が持つのは紛れもない凶器で、竜の鱗すら容易く貫く暴力の権化なのである。その前に、立ちはだかる者が信じられない。大きく広げた傘を盾に、シルトよりも先んじて大剣に我が身を晒す男が信じられない。

「俺の前に……！」

「マスターっ、やめてえ！」

覚悟なんて決まらない。一はただアイギスを構え、両足を踏ん張

って耐えるだけだ。もう、それ以外は考えない。考えられない。
「……ううっ！」
盾に剣が触れた。それだけでとてつもない衝撃が伝わる。シグルズは憤怒の形相でこちらを睨みつけていた。力と力がぶつかった瞬間、双方が苦痛に顔を歪める。すぐ後ろにはシルトがいる。退くまいと、一は歯を食い縛った。
「何やってんだ……！　早く退けよっ！」
「ヒルデさんが……」
一向に動こうとしないシルトに苛立ちながらも、視線はシグルズから逸らさない。力の差は歴然だった。一分どころか今を持たせるのに必死である。腕はとっくに痺れて両膝はがくがくと情けなく震えていた。一はアイギスから片手を離して、その場に倒れ込む。その際にシルトを引き倒した。地面に頭をぶつけようが死ぬよりはましだと決め付けて。
一という支えを失ったシグルズは不恰好な動作で大剣を振り抜く。凄まじい音がすぐ下にいる一たちの鼓膜を襲った。
「があぁぁぁぁあああっ！」
そのまま、一に攻撃を防がれた怒りを露にしてシグルズは得物を振り回す。グリンブルスティは八つ当りじみた攻撃をまともに受けた。既に牙は砕かれ、顔面を真っ二つに裂かれているソレに戦闘の続行は不可能だった。しかし、シグルズはソレを切り続ける。痛みに喘ぎ、苦しみに呻くモノに尚も襲い掛かるのだ。
ナナはその隙に身を屈め、一とシルトを脇に抱えてこの場を逃れている。彼女は一だけを大事そうに抱えて、シルトを地面に落とした。しかし、シルトから抗議の言葉は発せられない。彼女はじっと、さっきからずっと一点を見つめて動かない。
「……どう、して」
シルトはただ、答えて欲しかった。こちらを見て欲しかった。
「ヒルデさん、どうしてっ！？」
ヒルデは答えない。見ない。シルトの事を認識していないかのよ

うに。
「答えてっ、答えてください！　どうして、どうして、どうして！　どうして黙って行ったんですか！」
問い詰めるようなシルトの剣幕に反応したのはシグルズだ。彼はようやくになってソレに対する攻撃を止め、一たちを睨み付ける。
「黙れワルキューレ。貴様のようなモノが彼女の名を呼ぶなど、自惚れるのにもほどがある」
「うるさいっ、お前は黙れ！　お前がヒルデさんを……！」
「吠えるな。ブリュンヒルトが俺の隣に立つのは、他ならぬ彼女が決めた事だ」
「黙れっ、お前は喋るな！　私はヒルデさんに聞いてるんだからあ！」
恥も外聞もなくシルトは泣き叫ぶ。一は何も言えず、何も出来ずに立ち尽くす。
「どうしてルルがあんな目に遭わなければっ！？」
ヒルデは俯いた。それが、罪悪感によってシルトから視線を逃がす行為だったのかは誰にも分からない。一に分かったのは、もう、ヒルデが以前のようには笑ってくれない、遠い世界の住人になったのだという事だけだ。
「……南は、ヒルデさんに追っ手も差し向けてます。せめて、せめて理由だけでも教えてください」
「口を開くな、彼女に貴様のようなモノの声を聞かせるなっ」
「そうじゃないと誰も納得出来ません！」
痺れを切らしたシグルズがシルトに視線を定める。
「悪いが、約束は守れそうにないぞ。お前の瞳を涙で濡らすのは忍びない。だが、悲しみに濡れた瞳というのも美しくはある。気にするな、誰が死のうとお前の美は損なわれない。腐敗し、汚れきった世界に輝くのはお前だけで良い」
「答えてっ、答えてっ！」
ここに居残っても仕方がない。ヒルデはシルトの話を聞いていな

い。シグルズは完全に、自分たちを殺すつもりでいる。一はアイギスを握り直して、ナナを見遣った。
「握力が戻らねえ。そこの馬鹿を頼む」
「マスター、アレと戦闘するおつもりですか。ならばナナはその命令を受諾する訳には参りません」
「そんなつもりはないよ。足は動く。なら、逃げるしかない」
ナナは安心したように、口から空気を吐き出す。
「私のご主人さまが弱虫で良かったです」
「その分働けるからか？」
「マスターが生きている限り、私はマスターのメイドでいられますから。だから、危険な橋は渡らないでもらえると助かります」
言われるまでもない。一は深呼吸を繰り返して、こちらに歩いてくるシグルズを見据えた。
「行くぞ」
ナナがシルトを抱き抱える。シルトは抵抗したが、自動人形の力には逆らえない。
「離せ、離してよ！　まだヒルデさんがっ」
疾駆し、ナナは駐車場の端、ソレが破ったであろうフェンスに向かった。一は彼女を追い掛けるようにして逃げる。
背後からは甲冑の軋む音と、何かが地面に擦れるような不快な金属音が聞こえてくる。
「来てる来てる来てる来てる……！」
一足先にフェンスを抜けたナナが振り返り、左腕の袖から何かを取り出した。
「マスター、頭を下げてっ」
言われるがままに頭を下げ、一はフェンスを抜けようとする。瞬間、目の前が真っ白に染まった。前後不覚に陥りふらつく彼をナナが捕まえる。
「独断ではありましたが、閃光弾を使用しました。マスター、お許しを」

何も見えない。何も答えられない。抱き抱えられたと認識して、何も見えないと分かっていながらも一は振り向く。悲しそうに俯くヒルデが見えたような気がした。

「ここまでくれば安全でしょう」

ナナが一たちを解放したのは、北駒台店前に着いてからの事だった。買い物を終えた客が物珍しそうに、メイド服を着たナナに跪く一たちを見て、それから足早に去っていく。

「マスター、視界は良好ですか？」

「……ああ、良く見えるよ。潰れるかと思ったけどな、目」

良く見える。閃光弾による影響は徐々に薄れつつあった。満足気にしているナナと、泣き腫らした顔を今になって隠そうとするシルトが、一には見えている。

「歯が浮くような台詞を素面で並べて、おっかないもの振り回してよう、狂ってやがる」

一の網膜に、記憶にはまだ鮮明に焼き付いている。憤怒の形相をした、甲冑を着込んだ男が。

「アレが英雄ってかい。吹くじゃねえのワルキューレさんよ」

皮肉たっぷりに口を開いても、シルトはまともな反応を見せない。

「何か言えよ。俺らは殺されそうになったんだぜ」

シグルズに。否、ヒルデと一緒にいた男に、である。彼女が傍にいて、何故、自分たちが殺されかけなければならないのか。

「だんまりかよ」

「……そんなの」

「なんだよ」

「そんなの、私が知りたい。私が知りたかったのは……！」

再び泣き始めるシルトの動きが、一にはやけにゆっくりに見える。だから、自分の胸に泣きついてこようとした彼女から逃げる為に、

「ナナ、後は任せて良いか？」

立ち上がった。
まだ、ここで立ち止まる訳にはいかなかった。
「勿論です。万事、仔細に抜かりなく。マスターが望むままに。…
…お休みなさいませ、マスター」
「ありがとう」
今はゆっくりと休みたい。前へ進む為に。この先を、見届けたい
が為に。

シグルズは怒りを振り上げる

一は自分の寝つきが良くない事を知っている。決して悪いとも言い切れないのだが、糸原と比べれば、決して良いとも言い切れない。彼女のそれは正に、眠りに落ちるのだ。布団に入った途端に、すとんと、驚くべき早さで。時には笑ってしまうぐらいに。

だから、寝る前には何か考え事をするのが一の常だった。疲れてはいるが、まだ体は昂ぶっている。シグルズの事も、ヒルデの事も、シルトたちの事も、何もかもが気になって仕方がない。

考えていては頭が回って目が冴えて眠れない。明日も朝からアルバイトなのだから体を休めなければ。とも思うのだが、どうせすぐには眠れない。一は開き直り、ずぶずぶと思考の沼に身を沈ませていく。

「……くそ」

ヒルデが何を考えているのかが分からない。彼女が昔の男に連れられてどこかに行くならば、まだ、納得出来る。しかし、シルトの話が本当なら、ヒルデは南駒台店の者には何も告げないで出て行ってしまった。なのに、ここにいる。追っ手がかかるのを知っているだろうに、駒台に留まっている。目的が見えてこない。あるいは彼女に目的などないのか。シグルズに、彼の目的に付き合わされているのか。それも、彼女が何も言わないのだからどうしようもない。

ルルを傷つけたのはヒルデ、シグルズのどちらなのか。シグルズがグリンブルスティを倒したのは何故なのか。果たして、本当に彼らに理由があるのか。

「わっかんねえ」

寝返りを打ち、頭の中で積み上げ、組み上げたものを崩していく。昔、ヒルデがシグルズと交際していたのは確かなのだろう。昔と

いうからには、円満であろうがなんであろうが、二人が一度は別れた事に違いない。にも拘らずシグルズは戻ってきた。彼女の前に再び現れた。そして、また、二人でいる。ヒルデがあちらで、自分がこちら。一にとっては未だに信じたくない立ち位置だった。

しかし、一には気になる事が一つある。ヒルデの顔だ。彼女は何故、あんなに悲しそうにしていたのだろうか、と。何も言わずに出て行った事か。自分がいながらルルを傷つけてしまった事か。シルトに答えられなかった事か。俯いたのは罪悪感からか。それとも自分たちなんかを見たくなかったからか。……どうせなら、嬉々として鎌を振るってくれれば良かった。本気でヒルデに襲われたのなら、こんなに思い悩む事はないのである。彼はそう思った。そう思い、考えている内に瞼が重くなる。泥に沈むかのように、ずぶずぶと体が重くなっていく。ずぶずぶとした、気持ちの悪い眠りに沈んでいく。

駒台デパートの駐車場に横たわる、切り刻まれたグリンブルスティの骸を見つめながら、ヒルデは小さく漏らした。

「……手を出さないって」

「俺を責めるのは筋違いだ。責めるなら、お前の部下にしておけ」

シグルズは大剣の血振りを済ませて、悪びれずに言い放つ。

「それに、俺の目的が成就したなら関係なくなる。早いか遅いかの違いに過ぎん」

「……出来ると思っているの？」

「は、ならば、何故お前は俺についてきた。出来ると、信じているからだろう」

断言し、シグルズは得物を片腕で素振りする。

「見ていろ、この世界を美しく変えてみせる。……しかし、その為にはあの男が邪魔になる。人が悪くなったな、ブリュンヒルデ。どうして、奴の事を黙っていた？」

ヒルデは俯き、両腕で大鎌を心細そうにかき抱いた。
「存在を知らなかったとは言わせん。お前も、短い間ではあるが俗世に塗れていたのだからな」
「……教える必要は、ないと思ったの」
「それは、俺を高く評価しているのか？　それとも、奴らを庇っているのか？」
否定も肯定もしない。ヒルデはただ俯くだけだ。シグルズは何も言わず、溜め息を吐く。
「無謀な男だ。この俺の前に立ちはだかろうとするとはな」
「……気付いて、ないの？」
「何？」
緩々とした動作で首を傾げるヒルデを見て、シグルズは訝しげに眉根を寄せた。
「……ううん、良いの」
「そうか。お前がそう言うなら、気にはすまい。塒に戻るとしよう」
頷き、ヒルデはシグルズの後を追い掛ける。闇夜に、彼女の持つ鎌の刃先が閃いて見えた。

朝。
紛れもなく朝である。朝なのだから起きなければならない。
一はゆっくりと体を起こして、調子を確かめた。残念ながら、快調だった。少しでも体調を崩しているなら、アルバイトを休む理由が出来たのにと、くだらない事を考えながら冷水で顔を洗う。
ナナは上手く言っておいてくれただろうか。出来るなら、もう一度布団の中で目を瞑っていたい。そんな誘惑に駆られながらも一は身支度を済ませていく。あくびを一つ。時計を確認して、ドアを開けた。アパートの前の道に見知った顔がうろうろとしているのは予想の範囲内だった。彼は白い息を吐きつつ、階段をゆっくりと下りていく。

「よう、ストーカー」声を掛けられたシルトはわざとらしいぐらいに無反応を通した。
　シルトは、昨夜と同じ格好をしている。化粧もしていない。泣き腫らした顔もそのままである。
「……うるさい」
　声にも張りがなく、少し擦れていた。一晩中、ヒルデを探し回って、彼女の名を呼び続けていたのだろうか。
「寝てないのか？」
「だったら？　つーか、気軽に話し掛けないでくれる？」
「話し掛けてくれと言わんばかりの態度だったのにか」
「ちっげーし。死ねよ。あー、うざい」
「そういや、お前んとこの、その、ルルってのは無事だったのか？」
「……まあ、一応」
　シルトは塀に背を預けて、ずるずると座り込む。
「ただ、暫くは勤務外なんかできねーってさ」
「そりゃ、災難だ。……いや、災難でもねえのか。ああ、ところでヒルデさん、見つかったのか」
「見つけたら、こんなトコにこねーし」
「少し休めば？　……正直さ、今会ってもどうにもならないと思うぞ」
　ヒルデの傍にはシグルズがいる筈だ。彼女と何か話そうと思っても、竜殺しが邪魔をするのは目に見えている。
「ルルは怪我で、シューは付き添い。だから、私がやらなきゃダメだから」
「殺されちまうぞ」
「……あんた、心配してんの？　もしそうなら、マジで、気色悪い」
「気色悪くて、悪かったな」
　一がそう言うと、シルトは意外そうに目を細めた。彼女は口の端を歪ませる。
「私の事、嫌いなんじゃん。何、凹んでる時に声掛けたら落ちるっ

て？　落ちねーよバァカ。女舐めんな、クズ」
「誰が誰を落とすかボケが。確かに、俺はお前が嫌いだよ。いや、嫌いじゃないな。大嫌いだ。お前みたいな女は痛い目に遭えば良い。変な男に引っ掛かって騙されろ。この気持ちに嘘はない」
「はあ？　何それ」
「大っ嫌いだよ。けどさ、死んで欲しいとまでは思ってない。お前だって分かってるだろ。のこのこ出て行ったって、ヒルデさんは話をしてくれない」
　反論せずにシルトは黙り込んでしまう。彼女も、一の言っている事が分かってはいたのだろう。
「でも、家には帰れない。絶対、張り込まれてる」
「あー、そうか。ヒルデさんの部下だもんな」
　一は頭に手を遣り、視線を泳がせる。昨日のシルトを見ていた彼には、彼女がヒルデと通じているようには思えない。だが、詳しい事情を知らない南駒台店の人間にはそうは思えないのだろう。
「じゃあ、俺の部屋使って良いよ」
「……は？」
「いや、そりゃそんな綺麗じゃないけどさ、その辺で寝るよりマシだろ。隙間風だってそうは入ってこないし」
　シルトは一の様子をじっと観察する。今の今まで自分を嫌いだと言っていた男が、部屋を貸すなどと、何かしらの魂胆が見え見えだった。
「どうせ、俺は今からバイトだしな。昼過ぎには戻ってくるけど、それまでは好きに使ってて良い」
「言っとくけど、あんたなんかに金は出さない。体も出さない。見返りが欲しいならもっと軽そうな女狙えば？」
「そんなもんいらんわ。一応、お前にはまだ借りがある。そいつをチャラにしてくれるだけで良い。そうすりゃ、俺は遠慮なしにお前をこき下ろせる」
「今まで遠慮してたの、アレで？」

一の吐き出した数々の暴言を思い出して、シルトは呆気に取られた。
「まあな。で、どうするよ？」
これ見よがしに、部屋の鍵を取り出す一。
「……使う」
「二〇二号室な」
鍵を投げて遣し、一はシルトに背を向けた。彼女は礼を言わなかったが、それで良いのだと彼は思った。

カウンターに立ってから数分、ナナの言った言葉が理解出来なくて、一は彼女を見つめ返した。
「それで良いのですか、マスター」
「何がだよ」
「ワルキューレを追い掛けるのだと思っていましたから」
追い掛けて、見つけて、捕まえたところで話は出来ない。お供の英雄に切り殺されるだけだろう。一は苦笑し、割り箸の補充を始めた。
「マスターは、ヒルデというワルキューレに絶大な信頼を寄せています。否定は結構、反論は必要ありません。少なくとも、私にはそう見えますから」
ナナは水道の蛇口を捻る。流れていた冷水が止まり、静寂が戻った。
「あの日、セイレーンが『棺』に納められそうになった日、マスターはヒルデさんと逃げましたね。二人で支え合いながら、三森さんを、南の勤務外を、私を、敵に回しながら。……今となっては羨望の対象で、私自身を叱責してしまいたい話です」
「……ナナ、ヒルデさんは、きっと……」
「根本的には、あの日から、ナナに変化はないのでしょう。心や命と繰り返したところで、実際にそれらは宿っていません。私はオー

トマータ。腕を切り落とされても苦痛はないのです。のみならず、修理さえすれば元通りに。ですが、マスターは違います」

　否定はすまい。ナナがそう望んでいない。一はぐっと堪えて、彼女の話を待つ。

「マスターは、ヒルデさんと会えなくなったら、きっと寂しくなると思います。ヒルデさんが死んでしまったら悲しくて、ヒルデさんが笑えば楽しくて、ヒルデさんが悲しければ怒りだすのでしょう。マスターは、自分以外の人の為に動ける方ですから」

「情けは人の為ならずって言うだろ。買い被り過ぎだよ」

「ふふ、マスターが、ナナのマスターで良かった。……アイギス、持ってきているのでしょう？」

　持ってきたと言うよりも、昨夜返すのを忘れていただけで。だから今日返そうと思っていただけで。……本当にそうか？　自分の中に答えを探すが、馬鹿らしくなって一は笑った。行ってみなければ分からない。やってみなければ何も見えない。ヒルデは自分と話したいのか。会いたいのか。関係、ない。思うままに動く。そうでないと後悔する。それに、一にそうしろと言ったのは他でもない彼女なのだ。

「良いのか？」

「後の事はナナに任せてあるのでは？　マスターは何も気にせずお進みください」

「ありがとうな。……行ってくる」

「いってらっしゃいませ、マイマスター」

　動かなければ始まらない。ヒルデが何をしているのか、何をしたいのか。会って、話して、確かめてみるまでは何も始まらない。

　シグルズも放っておけない。グリンブルスティを倒してくれたのは有り難いが、アレは、英雄ではない。少なくとも、一には彼が英雄には見えないのだ。私情のままに、私欲のままに剣を振るう姿は

まるで魔物である。世界が汚れていると言ってのけ、ヒルデに対する執着心と他者に対する敵愾心を隠そうともしていない。

『――――英雄だあ？』

彼なら、蛇姫の首を刎ね、海の怪物を石化せしめた北の英雄なら、何と言うだろうか。それも一つの英雄の形なのだと真面目な顔で言い放つだろうか。知らねえと笑い飛ばすだろうか。何にせよ、一人で良い。この世には、英雄なんて面白おかしい存在は一人だけ、北英雄だけで充分なのだ。

ヒルデがいそうな場所の心当たりが、一には一つだけある。否、一つしかないというべきか。駒台の中央に位置する自然公園だ。駒台山の洋館も思い当たったが、夜通し彼女を探し回っていたシルトが行っていない筈はないだろう。もしかしたら、シルトは駒台を隈なく走り回り、ヒルデの姿を探したのかもしれない。それでも、出会えるような気がしていた。確信めいた予感に急かされ、一は歩き出す。

芝生の上を転々とするビニールのボールに目を奪われる。それを追い掛ける子供と、ビニールシートから我が子を見つめる母親。我に返って周囲を見渡せば、誰も彼もが幸せそうに、楽しそうに笑っていた。

ここに来るな。

そう、言われているようで、一は逃げるように広場を後にした。人目を避けて、人通りの少ない道を選び続ける。やがて、疲労感を覚え始めた彼は空席のベンチを見つけた。ゆっくりとそこに向かい、ベンチに積もる落ち葉を払った。

「ふう……」

白い呼気が立ち上る。一はそれを眺めながらベンチに腰を落ち着かせた。また溜め息を吐きそうになったので、何とか堪える。尻が冷たいので、自販機を探して缶コーヒーでも買ってこようかと悩ん

でいた時だった。世界が、歪んで見えたのは。
それは雪の精霊か、はたまた真白い幽鬼か。いつか見たコートに、暖かそうな色をしたマフラー。トグルボタンのついたファーブーツも、いつかここで見た彼女の格好で、一の心が締めつけられた。
「……ヒルデさん」
ヒルデは覚束ない足取りでこちらに向かってくる。シグルズはどこにも見当たらない。今、彼女は一人らしい。何故だと考えるより先、一の口は開いていた。
「良く似合ってますよ」
笑顔を作って手を振ると、ヒルデは優しく微笑む。
「……嘘吐き」
「嘘じゃないですよ。あ、ここ座りますよね？」
一は立ち上がり、ベンチに散らかった落ち葉を片付けた。
「……ありがとう」ヒルデは遠慮がちにそこへ座る。一の態度が柔らかくて、彼女は不思議そうに小首を傾げた。
「今日はお一人なんですね」
「……ん。君も」
「ええ、一人ですね」
何となく気まずくて、話を広げられない。聞きたい事はあるのに、どう切り出して良いのかが分からない。
「……何か、聞きたいんじゃないの？」
だから、ヒルデからそう言われても、一は暫くの間は何も言えなかった。
「一つだけ、聞かせてください。全部、ヒルデさんが望んでやった事なんですか？」
「……全部って？」
「ルルって人を傷つけたのも、皆に黙って出て行ってしまったのも、あの怖い男の人と一緒にいるのも、です」
一は出来るだけ責めるような口調を避けたつもりだが、ヒルデは俯いてしまう。

「もしそうなら、理由を、目的を教えて欲しいってのが本音です。俺に言いたくないんなら、せめて、シルトには言ってあげてください」
「……君は、良いの？」
「俺は、部外者ですから。南駒台の人間でもないし、ワルキューレでもない。本当なら、ヒルデさんの隣に座るべき奴じゃあないのかもしれません」
「ワルキューレって、知って……」
「シルトから聞きました」
遮り、断言する。
「……ん、気に、しないで。教える。でも、一つだけ、お願いがあるの」
「何でも言ってください」
「ん」ヒルデはゆっくりと頷き、
「……もう、関わらないで欲しい」
落ちる枯葉を見つめて、言った。
それを承服するのは話の内容次第だ。だが、頷かなければ話は進まない。一は彼女の意向を無視する形になるのを予想しながらも、首を縦に振る。
「君は人間で、私は、人間じゃない。だから、ん、これ以上は……」
「俺も人間じゃあないんですけどね。でも、ヒルデさんがそう言うなら」
「……そう」
ヒルデが悲しげに目を伏せたのは何故だろう。自分は言う事を聞いたのに。一は分からなくなり、口を噤んだ。
「……彼の、シグルズの目的はね、世界を綺麗にする事、なんだって」
「綺麗に？　ああ、いや、言ってましたか、そんな事を」
世界中を箒で掃いてくれるなら、どれだけ有難いか。しかし、シグルズの様子を見ていればそんな事をするモノとは到底思えず、見

えない。
「……シグルズは、この世界が好きなの」
ヒルデは肩に落ちてきた葉を手に取り、大事そうに掌の上へ乗せた。
「葉も、草も、木も、森も、水も、土も、石も、太陽も、月も、空気も、空も、山も、海も、鳥も、鹿も、熊も、犬も、何もかもを愛してる。でも……」
饒舌なヒルデを見て、彼女にここまで語らせるシグルズの存在が妙に腹立たしく思える。子供じみた感情すら殺せないのかと、一は死にたくなった。
「でも、人間は嫌い、ですか」
「……ん。人間は汚いって」
一は頭をかいた。否定するつもりはない。むしろ、その意見には全面的に同意である。汚くない人間など、人間ではない。裏切り、騙し、騙り、死に追い遣って時には自らの手で殺す。それが人間だと、胸を張って言い切ってやっても構わない。
「だから皆殺しに？　乱暴な話ですね。それに、無謀だ。人間全部を殺せたなら、人間以外の生き物は喜ぶとは思いますけど。けど、流石に無理でしょう」
疑念があった。シグルズが『円卓』に所属している可能性について、である。しかし、人嫌い、どころか自分とヒルデ以外を嫌っている彼はどうやら単独で動いているらしかった。それでは、いくらなんでも無理があり過ぎる。確かに、英雄の名、竜殺しの力は伊達ではない。それでも、彼は一人だ。ヒルデが協力したとして、二人。たった二人で何が出来るか。
「俺はあなたたちを止められない。でも、俺以外の誰かがあなたたちを止めるでしょうね」
「……ん、分かってる」
「分かってるなら……」
「……シグルズはもう、誰にも止められないから」

なんとも悲痛、悲壮な決意だと、一は鼻で笑いそうになる。
「だから、せめて、私だけはあの人の傍にいてあげないと」
「追っ手がかかっているみたいですよ」
「……狂戦士、だよ、ね？　ん、知ってる」
「先、誰が見てもなさそうですよ」
ヒルデは薄く笑んだ。
「……ん、知ってる」
「そんなに、あの人の事が好きなんですか」
言ってから、一はしまったと思った。
「うん」
返事なんて、欲しくなかったのに。彼女の口から聞きたくなかった。決定的な何かが崩れて、明確な線が引かれたような気がして、一の目の前が一瞬、真っ暗になる。
「この街の人を殺すんですね」
だが、忘れてはならない。自分は勤務外で、隣に座る女は敵なのだと、気持ちを誤魔化して無理矢理に押しつけて黙らせる。
「……最初は、南の人たちを狙うんだって、言ってた」
だから、その言い方が気に入らない。他人事のように言ってのけるヒルデが、気に食わない。
「何も思っていないんですか。部下も、仲間もいるんでしょうに」
ルルは剣に貫かれた。だが、貫かれても尚、残ったシルトも、シューも、まだヒルデの事を思って、探しているのだ。
「……ん、あの、ごめ――――」
「――――俺なんかに謝らないでください。謝ったら、俺、ヒルデさんを軽蔑します」
謝る相手はここにいない。ヒルデが頭を下げるのは今ではない筈なのだ。
「シルトは、今、俺の部屋で寝てる筈です。謝るなら、今からにでも……」
ヒルデは緩々と首を振る。

「……駄目、なの。もう遅いから」
「だったら、ヒルデさんも殺すんですか？」
「それ、は……」
「無理だって分かってるのに、惚れた男に付き合って、殺されるまで、殺し続けるって言うんですか？　そんなの、あんまりだ」
「……でも、でも……」
苛々して立ち上がった一の目が、何かを捉えた。向こうから近付くそれは、あまりにも現実離れしている。ヒルデも彼の存在に気付き、焦燥した様子で立ち上がった。
「逃げてっ」
白昼堂々、甲冑を着込んだ男が闊歩する。大剣を担いだ男が悠然と。
アイギスを持ってきていて正解だったと、一は口の端をつり上げる。
「貴様、昨夜の……！　貴様そこから、いや、良い。そこでじっとしていろ」
シグルズが大剣を振るうと風が起こり、既に散った葉が舞い上がった。木々がざわめき、鳥がそこかしこから飛び立っていく。
一は笑った。これではまるで間男ではないかと。
「また会ったな、英雄」
「汚れた目で彼女を見たな。汚い声で彼女に話し掛けたな。腐った心で彼女を思ったな。それだけで、充分だ。充分だとも」
「綺麗好きなんだなあ、シグルズさんよう」
「貴様っ」
一は余裕ぶってアイギスを広げる。ヒルデはおろおろとしていたが、彼にはもう関係なかった。
そう、どうにだって出来る。シグルズ、その名前さえ知っていればアイギスは発動出来るのだ。ヒルデがいるので攻撃にはまず転じられそうにないが、逃げるぐらいは、英雄とやらを怒らせて一泡吹かせるぐらいは充分可能である。そう、判断していた。女々しい嫉

妬と意地汚い嫌がらせだとも分かっている。
「……ま、待って」
ヒルデが、一とシグルズの間に割り込んだ。
「退け。もはや、聞く耳など持てんぞ」
「駄目。手を出さないって……」
途端、シグルズの頭に血が上る。激昂した彼はヒルデの肩に手を置いた。抑えられない情動が彼の指に力を加えていき、整った彼女の顔が苦痛に歪む。
「お前……お前までっ、お前まで俺を裏切るつもりなのか！？」
「……何、を？」
「俺の目を盗んで人間とっ！　お前だけは！　俺はお前だけを信じているんだぞ！？」
「ちが、私は……」
「ならば退け！」
ヒルデを押し退けると、シグルズは一に切っ先を向けた。
「名乗らずとも良い。ただ、死ね」
「はっは、そうかよ。だったら『止まれ、シグルズ』」
「おおおおおおおおっ！」
シグルズが突きを放つ。
――――あれ？
「うおおおおお！？」
シグルズへ無造作に向けていたアイギスに衝撃が伝わった。一は叫び、両足で地面に踏ん張ろうとする。落ちていた枯葉を踏んでしまっているのか、ずるずると滑って後ろに下がり続けるのみだ。
「てめえっ」
「これは何だ！　俺の剣を受け止めるか貴様！」
一は両腕に全ての力を注ぎ込む。少しでも気を抜けば突き飛ばされ、剣を突き立てられるのは明白だった。
「なんで、なんで止まらねえんだよ！？」
どうして止まらない。きちんと、手順は踏んだ筈。アイギスが発

動する、その為に必要なルールは守った筈だ。なのに、止まらない。シグルズは動き続け、自分は今にも殺されそうで。
混濁する思考を繋ぎ止め、一はそれでも叫び続ける。
「『止まれシグルズ！　止まれって言ってんだろうがシグルズぅ！』」
「黙れっ」
「てめえが黙れ！」
「シグルズシグルズと！」
シグルズが得物を一度引き寄せた。肩で息をつく一を見て、彼は嫌らしく口角をつり上げる。
「さっきから何を言っている。今際に吐くならマシな事を選ぶと良い」
「……あ？」
両腕が痛い。否、あまり痛くない。また麻痺しかかっているのだ。
「止まれと言われたところで聞き入れるつもりもないが、そもそも、俺の名はシグルズではない」
目の前の男が何を言っているのか、一にはすぐに理解出来なかった。それは、ヒルデも同様で、彼女はシグルズを、シグルズの筈である男を疑わしげに見つめている。
「なんだ、そりゃ。どういう事だよ」
「答える義理も、名乗る理由もない。貴様は土に還る定めなのだからな」
意味が分からない。が、それならば納得がいく。アイギスが発動しなかったのは、対象の名前を間違えていたからなのだ。だが、シグルズで合っている筈なのである。ついさっきまで、ヒルデもそう呼んでいたのだ。
「……てめえ、イカれてんのか」
「おおおおおおおっ！」
一の言葉を無視して、シグルズ、だった男は大剣を突き出す。
アイギスをかざすも、もう一度防げるかどうかは分からない。そ

れでも、経験と本能から一は――――。
「何やってんだよっ」
横合いから突き飛ばされて、宙に浮く感覚を一は認識した。上下左右好き勝手に流れていく景色の中、一は誰かに抱えられている事も認識する。
「……シルトっ」
ヒルデの声が後方から聞こえた。それでも、シルトは一を抱えたまま止まらない。
「……呼んでるぜ」
「うるさいっ、うぜーっつーの！」
どうやら、自分はシルトに助けられたらしい。休んでいろ、なんて格好付けた事が何だか恥ずかしくなって、一は少しだけ力を抜いた。

山の囁き

何が何だか分からない。アイギスを持つ自分は、圧倒的に優位だった。相手の名前さえ知っていれば問答無用で動きを、時を、命を止められる。なのに、シグルズは止まらなかった。殺される。その一歩手前まで追い詰められた。

「あー、だる。あんたなんかシカトしとけば良かった」

シルトが来てくれなければ、確実に殺されていた。

公園を脱出してからも、人目につかない裏路地に着いてからも、ぐるぐると頭は廻り続けている。混濁した思考回路、焼き切れていてもおかしくはなかった。

「……おい」

薄汚れたコンクリートの壁に背を預けた一は、息を整える事すら忘れている。

「ハメやがったなてめえ」

「は？　何、急にエロい事言わないでよ。気持ち悪い」

「シグルズじゃ、ねえじゃんかよ」

シルトは目を丸くして、それから大袈裟に肩をすくめた。

「あんたバカ？　何の話してんの？」

もはや反論する気力が湧かない湧いてこない。

「名前だよ。あいつの名前、シグルズで合ってんのか？」

「それ、私をバカにし過ぎじゃね？」

「マジかよ……」

一はその場にしゃがみ込み、頭を抱えた。

「野郎、俺はシグルズじゃないなんて抜かしやがった。……だったら、なんなんだよ」

「名前、そんな大事？　どうせやり合うだけじゃん。名前がどうと

か、意味なくない？」
　意味ならある。名を知らない限りはやり合おうとも思えないのだから。
「ヒルデさんも戸惑ってたみたいだ。シグルズって、確かにそう呼んでたのに」
「へっ、そうなの？　は？　あれ、じゃあさ、あいつって誰なワケ？」
「俺が聞きたい。色々と事情が変わってくる、ような気がするし」
　シルトは腕を組んで、人差し指の節で顎に触れる。
「あっ、つーかあんたヒルデさんと何か話したんじゃない？」
「あー、いや、お前さ、助けてもらっといてこう言うのもアレだけど。なんでここにいんの？」
「はあああっ！？」
　声が大きい。一は耳を塞いでしかめっ面を作った。
「寝てたんじゃあないのか？」
「あんなトコで寝られるワケないじゃん。それに、何か嫌な感じがしたから」
「だからあの公園まで来たのか？　恐ろしいなお前」
「へっへー、ヒルデさんへの愛とかソンケーとかの成せる技だ！」
　だったらその技を最初から出しとけ。一は溜め息を吐き、アイギスの柄をぎゅっと握った。
「……ヒルデさんは、シグルズ……じゃなかった、あいつの目的に付き合うつもりなんだ。止めなきゃ、マジにやばい」
「目的って何」
「早い話が全人類皆殺し計画だよ。手始めに、お前ら南駒台店の奴から殺すそうだ」
「は、マジで。それ、ヒルデさんが言ったの？　笑えないんだけど」
　笑えないのはお互い様だ。ヒルデから話を聞いていなければ、一だってシルトと同じような反応を見せていただろう。
「野郎は信じてんだよ。全部殺せるってな。無理無理、誰が考えた

って試したって」
「まあ、でも、この街の半分くらいはいけんじゃないの」
「だろうなあ。だから、止めなきゃ」
「どうやってよ？」
「知るか。だけど、ここにいたって何も出来ない」
破綻するのが分かっていて、殺されるのを織り込み済みで行動するなんて、一には彼らが理解出来ない。人間ではないからと線を引かれたって納得いかない。
「なあ、ヒルデさんは、あいつの事が本当に好きなのかな」
「さあ？　でも、そういうレベルの話じゃなくね？　大体さ、あんたって単純なんだよね。好きなら好き、嫌いなら嫌いで割り切れるもんじゃないっしょ。あの二人は、長いし特別。長く付き合えば付き合うほどさー、もうどうにもならないって時もあんじゃん？」
かもしれない。恋愛沙汰に関しては鈍く、疎く、誰よりも遠い存在なのを一は自覚している。
「でも、ヒルデさんは悲しそうだった。良いのかよ、あんな顔させといてさ」
「私に、言わないでよ。シグルズが悪いんじゃん。それに、そろそろ、ダメかも」
シルトは諦めたかのように、自嘲気味な笑みを作る。隈は深く、顔色も悪い。疲れているのは体だけではないらしかった。
「バーサーカーには鼻が利くウールヴヘジンもついてる。ヒルデさんがいつ見つかってもおかしくないよ」
「良いのかよ、それで。聞きたい事があるんだろ。そんな、くだらない事を止めたいんだろ」
「……っ、勝手言うよなあんたってさ！　どうやって止めればっ、どうやって話せばっ、丸く収まるっての!?　何も知らない北駒台のくせに、口出ししてくんなバカ！」
一は頭をかいて長い息を吐く。
「巻き込んだのはお前だろ。……教えてくれ。お前はどう思うんだ

よ。お前は、何がしたいんだ。ヒルデさんが殺されても、罪のない誰かを殺しても良いってのか」

「良いワケねーじゃん。でも、あの人が選んだ道なんだよ。私らが口出しする権利なんか……」

「いや、あるね。あの人が言ったんだからな。だから、俺に理由をくれ。俺は確かに関係ねえよ。ヒルデさんの部下でもなけりゃ同僚でもない。あの人の恋人なんて、それこそ絶対ない話なんだよ」

だから。一は言葉を区切り、白い息を吐き出した。

「関係ない俺でも動けるような理由をくれ。一言で良い、それだけで、俺はお前の盾になれる」

「……あんた、マジで竜殺しとやり合おうっての？　は、あは、バカだ。マジ、バカで、どうしようもないし」

「あの野郎、ヒルデさんは泣いてても綺麗だとか言ってたな。確かにそうだよ。ヒルデさんはどんな時だって綺麗だ。けど、俺はあの人には笑ってて欲しい」

その笑顔が自分に向けられていなくても良い。だから、せめて悲しまないで欲しい。その結果、ヒルデに嫌われても構わない。敵に回したとしても諦めがつく。そうしても良いと、彼女が言ったのだ。見たい。もう一度、本当の笑顔を。

「そのついでにお前も笑えりゃ万万歳。どうだ、それって良いだろ」

「だ、ダメだよ。あんた、弱いもん。さっきだって私が助けなきゃ死んでたじゃん。そんなヤツ、信じらんない」

「何もあいつと一対一で戦う必要はないんだよ。まともにぶつかりゃこっちがやられんのは目に見えてるしな。要は、ヒルデさんから話を……本音を聞けりゃ良いんだ。あいつが邪魔なら俺がどうにかする。手はあんだ。後はお前次第なんだよ」

「ヒルデさんが何も言ってくれなかったら……？」

面倒くさいくらいに心配性な奴だと思ったが、シルトにとって、ヒルデとはそれほどまでに大切なものなのだろうと一は思い直した。

「言うまで待てよ。その間、俺がお前の盾になる。誰にも邪魔はさ

せねえよ」
「……あんた、マジで言ってんの？」
「頭数、せめて後一人欲しい。俺ともう一人、二対一で野郎を押し込める。ずるいけど、ヒルデさんにはお前が当たれ。流石に、あの人は本気で殺しにかかってはこないだろうからな。のらりくらりと立ち回って本音を聞き出してくれ」
「もし」
シルトは心細そうに声を絞りだす。道に迷った子供みたいに、今にも泣きだしてしまいそうだった。
「もしも、ヒルデさんが本気だったら？　本気で人間を殺そうとしてたら？　シグルズの言う通りだって、そう言ったら？　ほ、本気で私らと戦おうとしてたら？」
その可能性もゼロではない。しかし、ここで恐れて立ち止まっても何も変わらないのだ。
「俺は、ヒルデさんがそんな馬鹿げた事をする人とは思えない。だから、あの人の望みは出来るだけ叶えてあげたい。……けど、俺は勤務外だ。ヒルデさんの望みが誰かを傷つけるようなものだったら」
アイギスを握る。メドゥーサに呼び掛ける。どうか、わがままなパートナーに力を貸してくれと。
「俺は……」
「心配ないし。ヒルデさんは、ヒルデさんだから。やるよ、うん、私、やる。シューを呼ぶけど、あんたは誰も呼ばないで。これは私らの問題だから」
続きを聞きたくなかったのか、シルトは一の話を遮るかのように立ち上がり、宣言する。
「あ、そう……？」
立ち直り、切り替えたシルトに一は面食らう。
「あんたは、最低最悪。で、バカ。あと弱い。ぶっちゃけるとあんたには何一つ期待してないから。私とシューだけでも片付く問題だしー」

「言うじゃねえか」
「でも、力、貸して」
可愛げなんてどこにも見当たらない。もう少しだけ素直になってくれれば、気持ち良く力を貸せると言うのに。
「ヒルデさんが正しいのか、私らが間違ってるか、そんなの分かんない。だって私バカだし。でも、あは、でもさ、私、ヒルデさんを好きなんだ。好きなんだから、だから……」
せめて、ヒルデに対する態度、彼女を思う気持ち、その十分の一をこちらに回してもらえれば。
「耐えらんない……！　ヒルデさんがいなくなったら私らはダメなのっ、だから、だからだからだからお願い！　たす――――」
「――――ありがとうな」
これで、ようやく関われる。おっかなびっくり、触れても良いのか分からなくて恐がって、ヒルデたちから逃げていた。だが、心が決まった。
ふわふわと、ゆらゆらと。ワルキューレの長はどこかに行ってしまった。彼女ともう一度出会う為になら、炎の山に足を運ぶのも恐くない。何せ、こちらにもワルキューレがいるのだ。竜殺しの騎士とだって、全知の神とだって戦える。

開け放っておいた窓から身を乗り出すと、小鳥が目に入った。ちち、ちち、その鳴き声に耳を済ませて、男は、
「……ジーク？」
「ああ。そうだったな。ジーク。俺は、ジークフリートだった、か」
ジークフリートは振り向く。
シグルズ。ジークフリート。二つの名で、一つの体。どちらも、結局は同じモノだが、彼はまだ名前に縛られ、記憶を取り戻してはいなかった。
「お前の部下が来たらしいな」

「……そう」
甲冑を着込むジークフリートとは違い、ヒルデは戦装束には身を包んでいない。
「あの三人を殺して、下りるぞ。片端から殺して廻る。なあ、ブリュンヒルト、少しずつ元に戻そう。……ああ、見ろよ、こいつらを」
ジークフリートは屈託のない笑みを浮かべて、自分の腕に止まった小鳥を自慢げに、愉しげに見せびらかす。
「とても、良い。命というのはこうでなくてはな。美しく、気高い」
「……ジーク、あなたは……」
「汚れきった世界、俺たちで変えていこう」

「ごめん」
一とシルトは坂道を上り、駒台大学を通り過ぎ、山道に入るところでシューと合流した。そこで、シルトが突然頭を下げたのである。
「私、ちょっとびびってた」
「……シルト？　いきなり何を言っているんだ」
来たばかりで、何故一がここにいるのかも把握出来ていないシューは不思議がるばかりだ。
「ここ、探したって言ったよね？　ごめん、アレ、嘘」
てっきり、ここはいの一番にシルトが探していると、一はそう思い込んでいたので少しばかり驚く。
「ヒルデさんに会うのが、怖かったんだと思う」
「どうでも良いからさっさと行こうぜ」
「ちょ！　私っ、今結構な勇気振り絞ったんですけど!?」
「……と言うかシルト」
シューは腕を組み、一を睨みつけた。あろう事か指を差して唾を吐き捨てた。
「何、これ」
「あー、これは……」

「これって言うな」と、一は憤慨した様子で鼻を鳴らす。
「……ヒルデさんをどうにかするって聞いてここまで来てみれば、それ、北駒台の勤務外じゃないか」
その通り。自分はオンリーワン北駒台店の一だ。一は説明するのが面倒だったので、木の幹に背を預けて目を瞑る。
「……シルト、説明しろ。私は、こんなのに背中を預けなければならないのか」
「あー、なんつーの？　その、こいつは北のヤツだけど、私らのプレーン的な……」
「確かにプレーンって感じだけど。で、こいつが何なんだ？」
ブレインな。と、一は心の中で突っ込んだ。説明するのが面倒だったので、一はお前に任せるという意味を込めて手を振る。シルトはニット帽を目深に被った。
「こいつは、あー、んー。あ、そう、盾」
「盾？」
「そうっ、こいつは私の盾！　盾だから、良いじゃん。あんま気にしないでっつーかシカトしてて良いよ」
言うと、シルトは何故だか楽しげに一の肩を叩く。何度も叩く。ばしばしと。
「……ふ、あははっ。ははっ、盾か。……なるほど、お前の盾か。良いよ、分かった。私はもう何も言わない」
シューはコートのポケットから棒状のものを数本取り出す。それは、シルトが持っていたのと同じタイプの槍だった。
「割り裂くなよ、シルト」
「はーい、分かってまーす」
すっかり蚊帳の外である。一は洋館のある方角に目を向けた。
「……こっちに来る前、技術部からもらってきた。三本ずつだ。それ以外に得物はないぞ」
「技術部が？　なんで、私らに武器なんかくれんの？」
「……それは」シューに見られて、一は困ったように自身を指差す。

「……技術部が北駒台の自動人形から頼まれていたらしい。『マスターの事をくれぐれもよろしく』だ、そうだ」
納得して、一は恥ずかしそうに視線を逃がした。
「……ところでシルト、本題だ。どうやってヒルデさんを助けるんだ？」
助ける。
助ける、か。一は異を唱えたくなったが、ワルキューレたちの機嫌を損ねるのはやめておいた。そも、この場所にヒルデがいるという確証はない。ただ、何となく、と。それでも、ふわふわとした彼女と出会うのだから、これくらいで良いのだとも思っていた。
「それは、それはー、あー、どうするんだっけ？」
小鳥がどこかで鳴いている。一はその鳴き声を聞きながら、もう一度目を瞑った。

戦場は、洋館の建つ開けた空間になるというのが一たちの大方の予想だった。
そこに着くまでの道すがら、一は考えていた事をシルトたちに話す。それは事態を打開する為の作戦でもなくて、これしかないと言う妥協案にも満たない、ある種苦渋の選択にも近かった。
大前提として、ヒルデは助けられない。何故なら、彼女がそれを望んでいるとは限らないからだ。助けて欲しいなら、シグルズから逃れたいのなら、あの時、一に打ち明けていた筈なのである。あの時だけではない。いつだって、彼女は誰かに助けを求める事が出来た。シルトたちはまだ何か勘違いしている。ヒルデが唆されて、騙されているのだと、心のどこかでは期待しているのだ。それは違う。少なくとも、彼女は今、自分の意思でシグルズの隣に立っている。だから、一たちの行為は、行動は、自分たちの都合だけによっている。
それでも尚、一たちは足を止めない。彼らはヒルデから話を聞い

て、諦めたいのだ。何も知らないまま、戦いたくないのである。

邪魔なのは、シグルズだ。

一は昨夜の戦闘と、今日のヒルデを思い出す。彼女は戦闘を望んでいない。積極的には鎌を振ろうとしなかった。話なら、ヒルデの本心を聞きだす程度の余地なら残されている。

シグルズを無力化させればどうにかなる話なのだ。その為に、一は覚悟を決めている。盾になると言った、あの言葉は嘘偽りではない。お為ごかしの都合の良い言葉ではない。メドゥーサの能力が発揮されなくても、大剣による攻撃は充分防げる。シルトたちには明らかにしていないが、最後の手段、切り札も用意していた。

ヒルデはきっと、本気で仕掛けては来ない。彼女の相手はシルトとシューに任せ、一はシグルズを一人で押さえ込む。その間、シルトたちはヒルデの説得にあたり、返答如何によってその後の展開を変えるのが一たちの目論見だった。

『あんたじゃ無理』

シルトはそう言ったが、一は、彼女にも、シューにもシグルズの相手をする事は難しいと告げている。アイギスならば、致命傷だけは防げるのだ。しかし、彼女らには武器しかない。一度でもあの大剣を受けてしまえば戦闘の続行はほぼ不可能になるだろう。一人でも欠ければ、後は端から殺されるのを待つだけだ。

説得。説得とは、何とも自分勝手な手段だと一は思う。結局のところ、ヒルデに全てを委ねるのだ。シグルズにつくか、こちらにつくか。殺すか、殺されるか。自分たちの運命すら彼女に任せる。助けると息巻いているが、何とも残酷で、独善的でさえある。

そんな事は、口が裂けても言えなかった。シルトたちはただ、ヒルデから話を聞きたいだけで、彼女の思いを聞き届けたいだけなのだから。

森がざわめく。鳥たちが木々の枝葉を抜けて空に舞い上がった。

「嘘だろ」
土を踏む音、金属の軋む音が聞こえてくる。坂道を下る男を確認した瞬間、一たちの思考が停止した。いち早く持ち直したのはシューで、彼女は携行用の短槍を取り出してスイッチを押す。彼女は柄を握り締めて前に出た。
「北駒台っ！」
我に返った一は視線をシグルズの奥に向ける。ヒルデは、どこにもいない。ここにいるのはシグルズだけだ。好都合だと思い直してアイギスを広げる。
「やる事は変わらねえんだっ」
シューを押し退ける形で一が前に出た。彼は視線を定めて両足に力を込める。どこからでも来いと、歯を食い縛る。
草木生い茂る山道の中ほどで、一とシグルズが向かい合う。肩に担いでいた大剣を両手で握ると、シグルズは突きの体勢を取ったまま坂を駆け下りてきた。切っ先と一の持つアイギスが衝突する。双方に衝撃が伝わった。が、前回と同じではない。上と下、一は腰を深く落として耐えていたが、勢いのついた攻撃を防ぎ切る事は出来なかった。彼は弾き飛ばされて坂道を転がってしまう。
シグルズの追撃を阻止しようとしてシルトとシューが前に出る。彼は立ち止まり、大剣を構えた。その間、一は体勢を整えようと立ち上がる。
不利だ。シグルズは地の利を活かそうとしている。そう判断した一たちは横道に逸れた。二手に分かれ、草むらを掻き分けながら洋館を目指す。
奇襲を受けたのは想定外だったが、一にとって好都合でもあった。シグルズだけが突出する今の展開は有難い。彼が狙うのは、恐らく自分だろう。シルトたちはその隙にヒルデから話を聞き出せば良い。草むらを掻き分け、無茶苦茶に進みながら、彼は振り返る。誰も、いなかった。反対の方角からはがちゃがちゃと不快な音と、シルトたちの声が聞こえてくる。

「……おい。おいおいおい」
二分の一、ありえない数字ではない。シグルズがシルトたちを追うのに不自然さは感じられない。しかし、一は奥歯にものが挟まっているかのような気持ちの悪さを感じていた。
「……っ、おいっ、おおいクソが！　俺を忘れてんじゃねえぞ！」
来た道を引き返しながら一は声を荒らげる。踏まれて背の低くなった草むらを抜けて山道に戻った。シルトたちとは随分と離れてしまっている。察するに、彼女らは当初の予定通り上へ、洋館へ向かっているらしかった。
このまま坂道を上れば合流を図れるだろう。一は一つ息を吐き、顔を上げた。ヒルデがいる。先刻、公園で出会った時と変わらない。ただ一点、鎌を持っているのを除けば。
一は畳んでいたアイギスに手を伸ばしかける。ヒルデがここにいる理由を考える。彼女が、何故鎌を持っているのか。
「……ごめんね、そうは、させない」
「させない？」
その一言で一の疑問は氷解する。洋館前ではなく、山道で襲撃を受けた理由。シグルズだけが現れ、自分ではなくシルトたちを追い掛けた理由。つまり、ばれていた。一たちの狙いは読まれていたのである。
「……あなたは、やっぱりあいつの味方って訳ですか」
「……そう言ったよね。私は、君の敵だよ」
一は唇を噛み締める。彼女の言葉を強く受け止める。
「敵ときましたか。って事は、あなたは殺すんですね。俺たちを始末したその足で、街の人間を……」
ヒルデはゆるゆると頷いた。彼女の表情からは何も読み取れない。わざと、無表情を作っているのかもしれなかった。一は苛立つ。何を押し殺す必要があるのか。敵に回ると口にしたなら、構って欲しそうに立ち振る舞うなと更に苛立つ。
「どうせなら笑ってくださいよ」

広げたアイギスを突き出して、一は目を伏せた。
「笑いながら俺を殺してください。そんな、泣きそうな顔されたら、死んでも死にきれない」
「違う。私は……」
「俺はあなたに勝てない。最初から、戦えると思っちゃいないんですから」
言って、一は駆け出した。草が生い茂り、木々が立ち並ぶ山中へ。ヒルデも彼の後を追い掛ける。
「だからっ、あなたは無視しますよ！　悪いけど、あなたの恋人は見過ごせない！」
「……う、待って」
「俺はヒルデさんと戦わない。だけどあいつとは戦える！　安心してください、ボッコボコにしてお返ししますよ！」
石を飛び越え、一は斜面を駆け上がっていく。足はヒルデの方が早いが、一には追いつかれない自信があった。仮に追いつかれても、彼女は何もしないと踏んだのである。
「知ってますかヒルデさん！」
ヒルデは一の通ったポイントを辿りながら、不思議そうに顔を上げた。
「レディファーストってのは良い意味じゃあないんですよ！　男が先に道を譲って、先に危険があるかどうか確かめる方便なんです！」
「……だからっ？」
「意味はありません！　ところでっ、知ってますかヒルデさん、俺はあなたが好きなんですよ！　良い意味で！」
一は振り向かずに木々の間を駆け抜ける。ヒルデの息遣いが近くなってきた。確実に、距離は詰められてきている。
「人間として、あなたは最高だ！　いや、人間じゃなかったんでしたっけ！？」
「……っ！　君は……！」
「天使だ！　ワルキューレだ！　なんだって良いっ、誰だって構わ

ない！　俺はあなたが好きなんだ！」
　鎌を振るなら振るってみろ。一の息遣いは荒くなるが、彼自信は苦痛とは感じていない。話せば話すほど、舌が回れば回るほど興奮していく。
「……どうして、邪魔をするのっ」
「あなたが言ったんだ！　忘れたとは言わせない。人間も、ソレも関係ないって！　好きにしろってそう言った！」
　背中越し、ヒルデが息を呑むのが分かった。一は邪魔な枝をアイギスで折り、進む。シルトたちの安否が気になる。早く合流しなければならないが、無計画に突っ込んでも新たな混乱を招くだけだ。英雄が相手だとしても、彼女たちなら生き残る事に注力すれば問題ない筈だと判断する。
「よくも馬鹿な男を弄んだな。とは言いませんよ！　あなたは無自覚に男を……垂らし込んで落としめるっ、そんな人なんだ！　踊る奴が悪いっ、違いますか！？」
　風切り音。一は咄嗟に頭を下げる。彼は、近くの木の幹に鎌の刃先が食い込んだのを確認して、転がるように走りだした。
「図星ですか！　ヒルデさんでも怒る事があるんですね！　ラッキー良いもん見れたぜはっはー！」
「……君は悪い子だったんだね」
「良く言われますよっ」
「……少し、黙って！」
　ヒルデが鎌を横薙ぎに振るう。一は太い木の後ろに飛び込んだ。空を切り、彼女の得物は幹に食らいつく。
「どうしましたあヒルデさん！」
　一はわざとらしく問い掛け、再び走った。
「手加減してくれてるんですか！？　ありがとうございます！」
「……そう」
　ヒルデはようやくになって気付く。ここでは、自由に鎌を振るえない。比較的サイズの大きい彼女の得物、充分な空間がなければ力

も入らない。木に邪魔されて、それを切断可能な速度にも達しない。
並の攻撃では一の防御を、アイギスを突破するのは難しかった。
「……誘ったんだね」
「人聞き悪いなあ！　ああそうだ、知ってますかヒルデさん！」
人が変わったように喋る一。頭に血を上らせて正常な判断をさせないようにする挑発か。それとも私怨からの悪口、暴言か。少なくとも、今のヒルデには判断出来なかった。

シュペールシュロイデリンは槍を投げる

走る。走る。追いつかれないように、殺されないように。
背後から迫る狂気と重圧。今にも足は竦んで立ち止まってしまいそうになる。
「ワル、キュウウウゥゥゥゥレエエエエエエエエ！」
殺気と悪寒を同時に受けて、シルトは走りながら身を屈めた。不安定な体勢で転びそうになるも、シューが彼女を支える。すぐ近くにあった木が軋み、みしみしと不吉な音を立てて、両断された。甲冑を着込んだ男は倒れた木など意にも介さず、ワルキューレを追い詰める。
重装備で山中の荒れた道を、一直線にこちらに向かって走り続ける。恐ろしくて、あまりにも話が違っていた。
「あいつぅ、盾になるとか言ったくせに！」
「……運が悪かったな」
言いながら、シューは疑問に思う。果たして、シグルズがこちらに向かってきたのは五十パーセントの運否天賦なのだろうか、と。
「ぼさっとすんなよシュー」
「……分かっている」
シグルズの進撃は凄まじい。木々の連立するこの場所は、大剣を振るのに邪魔な筈だ。だが、彼は全てを無視している。剣を振れば、障害物を周囲の空間ごと切り裂き吹き飛ばす。力任せの大雑把な攻撃だが、風切り音を聞くだけでも背筋が凍るというものだ。
「……北駒台と合流するのか？」
牽制目的で手ごろな大きさの石を投擲するも、シグルズの着込む分厚い甲冑の前では蚊に等しい。生半な嫌がらせは彼の怒りを買うだけである。

「んー、あー。アレ、つーか、今合流しても無意味じゃん？　とりあえず、あいつをヒルデさん家の前まで引っ張ってかない？」
「……そう、だな。奴も上へ向かっているだろう。先ほどの手は、そこで打てば良い」
「オッケ。じゃ、死なないようにしよっか」
急いては事を仕損じる。だが、シューは何か嫌なものを感じていた。こちらの手の内を読まれているような気味の悪い感覚である。すぐ傍にある脅威だけではなく、南駒台店からの追っ手も忘れてはならない。バーサーカーがいつ追いつくかが、今後の展開を左右するとも言えた。

南駒台店の勤務外店員、戦乙女のメンバーであるルルが目覚めたのは、堀が様子を見に来たのとほぼ同時だった。彼は広げようとしていた経済新聞を畳むと、少し、驚いたように目を見開く。
ルルは覚醒しない意識のまま、ゆっくりと、堀に顔を向けた。
「ここは」
「安心してください、病院ですよ。あなたはちゃんと生きてます」
パイプ椅子を掴み、足で蹴って組み立てると、堀はそこに座ってにこやかに笑む。
「ああ、他のワルキューレの方々も心配はいりません。負傷したのは今のところあなただけですよ、ゲイレルル」
ルルの表情が僅かに曇った。彼女は寝返りを打ち、堀に顔を背ける。
「あっそ。知ってるのね」
「いやあ、これでも社員ですからね。あなた方アルバイトの情報ってのは、嫌でも耳に入ってくるんですよ」
「私も、知ってる」
「ほう」
「あなたの、正体を」

「ほう？」
　堀は口角をつり上げ、新聞を広げた。活字は、目に入らない。何も読み取れない。
「英雄さん、でしょう？　そんな人がどうしてこんなところにいるのかは、知らないけど」
「名前だけが一人歩きしているようですね。私は、そんなに良いものではありませんよ。……いやあ、最近はそればかりな気がしますね」
「ヒルデさんたちは、どうなったの？」
　新聞を畳み、缶コーヒーのプルタブを指で押し開ける。堀は温くなった中身に苦い表情を浮かべた。
「ついさっき、一君、シルトさん、シューさんの三名が山に入ったとの報せを受けました」
「……一？　何故、あの子がそこにいるの」
「いやあ、それに関してはこちらが聞きたいくらいでして」
「サイアク」短く吐き捨てて、ルルは上半身を起こそうとする。瞬間、堀がナースコールに手を伸ばした。
「何よ」
「炉辺さんからきつく言われてまして。あなたが動こうとするなら鎮静剤でも何でも打って大人しくさせるんだと」
「北駒台の頼りない奴が来たってシルトたちの足を、引っ張る、だけ」
　ルルの額に汗が滲んでいる。腹を貫かれたのだ。生きているのが不思議なくらいで、まともに動くどころか戦闘なんてもってのほかである。
「竜殺し、戦乙女の長に好かれた英雄が相手。私も行かなきゃ」
「その状態で、ですか。足を引っ張るのは誰なのか、火を見るより明らかでは？　事情は、詳しく知らない身ではありますが、一君がいるなら任せても大丈夫ですよ」
「無理。シグルズは英雄、アレが敵に回っているなら……」

英雄、英雄と、壊れたテープみたいに繰り返す。堀は眼鏡の位置を押し上げて、ルルに言い聞かせるような口振りで話を始めた。

「竜を殺せるなら誰もが英雄になれたでしょう。力のある女に好かれたなら、英雄なんてものはこの世に溢れていたでしょう」

「……あなた、何を」

「つまるところあなたは知らないんですよ。英雄の何たるかを、一君の勇気を」

竜なら竜を殺せる。竜以上の化け物にも竜を殺せる。しかしそれらは決して英雄とは呼称されないであろう。

「私なら、頼まれたって盾だけを手に戦場には行きませんよ。他人を守る為だけに自分の体を投げ出すなんて、恐ろしいとしか思えません」

「命知らずは身を滅ぼす。自分も、周囲にいる者も巻き込む」

「いいえ、彼は恐怖を知らないんです。忘れた、割り切ったとも言うべきでしょうか。……多分、あなた方の上司、ブリュンヒルトこそが、その事を良く分かっている筈ですよ」

確かに、一はまだまだ未熟だ。いつ死んでも、殺されてもおかしくはない。それは周囲の人間だけではなく、彼自身が一番分かっている事だろう。なのに、彼は行くのだ。他人の問題に首を突っ込み、己を擲ってでも救おうとする。

英雄ではない。一はきっと、人々が自分勝手に誉め讃え作り出した英雄を望まない。彼はきっと諦めない。自分と他者を無理矢理にでも生かそうとする。

「縛られ過ぎたのでしょう。英雄、シグルズも元は人間だ。ですが、ここは全知の神が支配する北欧の地ではないんです。ただの人間が支配する世界だと弁えずに我意を通すなら、相応の報いを受けるのが筋でしょう」

「なら、あなたは弁えているのね」

「人間だけがこの世を謳歌する。旧いモノが手を貸すならともかく、邪魔をするのはどうかと思った。それだけですよ」

静かに笑って、堀は経済新聞を再び広げる。どうやら、明日も天気は良いらしかった。

山中を獣の如く疾駆する。まるで自分がそこと一体になったような気がした一の鼻に枝がぶち当たった。

「……止まって」

ヒルデは無闇に鎌を振るわなくなった分、一に追いつく事だけに集中している。彼を捕まえてから後の事を考えるらしかった。

「嫌です！」

一は声を張り上げ視線を前方に向ける。洋館まではもうすぐだった。

「いい加減に……！」

「ヒルデさんには言いたい事がまだあります！　シルトたちが言えない事をっ、たくさん！」

恐らく、シルトたちは洋館前でシグルズと交戦している。隙を見て彼女らと交替するのが一の狙いだった。だが、その前に出来る限りヒルデを揺さ振っておきたかった。彼女に対して、シルトたちは強く出られないだろう。会話すら難しいかもしれない。それでは、意味がない。命を張って、盾になるべく体を投げ出す理由がなくなってしまう。だからこそ、自分が言うのだ。怒らせてでも、何をされても。

「そろそろ言ってくださいよ！　ヒルデさんっ、あなたは何をどうしたいんですか！」

「……君はうるさくなったっ」

「あなたがそうさせた！」

ヒルデが駒台に住む者を皆殺し、この世界に巣食う者を皆殺しにしたいとは思えない。昔の男がどうした、竜を仕留めた英雄がなんだと言うのだ。彼女は苦しんで、悲しんでいる。一にはそう見える。そう思わせてしまった時点で、シグルズは充分敵に値する。もしも

ヒルデが本心を隠し続けると言うのなら、首に縄をかけてでも、傘で動きを止めてでも阻止せねばならない。
「俺を敵に回すんだと！　シルトたちを置いて行くくんだと言うなら！　本気で殺してくださいよ！　のろのろ立ち回ってっ、本当は止めて欲しいんじゃないんですか！？」
「……自惚れないで、君なんか、私は！」
付け込む隙も、立ち入る余地もまだある。まだ残されている。一は自分を、何よりもヒルデを信じていた。
「本気になりゃ俺みたいな人間なんか瞬殺だろうがワルキューレ！　やってみろってんですよ！」
「……うるさい！」
一は立ち止まって振り返る。畳んでいたアイギスを広げた刹那、ヒルデの鎌と激突し、弾いた。お互いが肩で息をしながら視線を交換する。一は嫌らしく口角をつり上げた。
「今のが本気なら、あなたはきっと誰も殺せない」
「……殺せる」
いいや殺せない。一は馬鹿にしたように笑って、アイギスを畳んだ。
「お願いですから、言ってください。俺はヒルデさんに、こんな事言いたくないんだ」
「……君には言った筈だよ」
「俺はまた、ヒルデさんと話したいんです。歌代の喉が治ったら、あいつの歌を一緒に聞きたいです。栞さんも呼んで、皆で遊びたい。それは、無理なお願いなんですか……？」
ヒルデは答えず、得物を構えた。
「もうっ、叶わないんですか！？」
「……もう、駄目だから。君にも、シルトにも、シューにも、皆も、ルルにもっ、私は許されない事をしたんだよ……！」
構えたまま、ヒルデはうなだれる。
「そう、ですか」

一は諦めた風に息を吐き出した。
「もし、もしも叶うなら。あなたが望むなら。こんな事にならなけりゃ、さっき言ったの、一緒にやってくれましたか？」
「……ん」ヒルデはたっぷりと間を取った後、ゆっくりと、しかし確かに頷いた。
「ごめん、ね。私も、本当は……」
頷いたのである。叶えたいと、望みたいと、許されたいと。一はアイギスを広げて、ヒルデに向かって跳躍した。彼女は面食らって鎌を手から離してしまう。咄嗟に、両手で彼の体を受け止めようとして、地面に倒れ込む。勢い余って滑り落ちていくが、ヒルデは木の幹に背中を預けてそれ以上落ちるのだけは避けた。
大丈夫と、一に声を掛けようとしたヒルデは、今になって彼の目論みに気が付いた。一は、してやったりという表情を隠さないで、むしろ露にしていたのである。
「……ん、君」
一はすうっと、胸いっぱいに空気を吸い込んだ。
「シルトォ――――！　こっちだ！　ヒルデさんはここにいる！」
このままでは一たちの思うままに事を運ばれてしまう。ヒルデは一の口を塞ごうとして手を伸ばすが、彼はその手を振り払った。圧し掛かられた体勢では力を込められない。
「早くしろ――――！　間に合わなくなっても知らねえぞ――――！」
ヒルデの鼓膜がびりびりと震える。
「……君は、諦めたんじゃないの？」
「諦める筈ないでしょう」言うと、一はヒルデの体から退いた。彼女にアイギスの石突き部分を突き付けて、申し訳なさそうに目を逸らす。
「あの人が、あなたにとって大切な人だって、そんなの分かってます。だけど、俺は、俺なら、あなたにそんな顔をさせない。させたくない」

「……ん」
ヒルデは薄く笑って目を瞑る。改めて、自分はなんと酷い女なんだと思って、それでも口を開いた。
「……私は敵だよ。忘れないで。でも」
そうか、と。
自分が目覚めた理由を思い出して、ヒルデは気付く。どうして、竜殺しの彼だけでなく、一に惹かれたのか。
恐れを知らない者だけが、夢の世界から、炎の山から自分を救ってくれる。
シグルズはきっと恐れを知らない。彼は自らの夢を叶える為に恐怖を乗り越えた。
ならば、一は？　彼は、彼もそうなのか。シグルズと同じなのか。
……否、違う。今なら分かる。一はきっと彼とは違う。だから、なのかもしれない。
「……死んだら、駄目だよ」
一はヒルデを見なかった。アイギスを手元に戻して、こちらに向かって斜面を下りてくるシルトを見つめる。
「あなたの為なら、死んだって良い」
そう、嘯いた。

洋館前、シルトとシューは開けた空間でシグルズを迎え撃つ。短槍を構えて草木を薙ぎ倒す男を見定める。四肢を犠牲にしても、勝てるビジョンは浮かばなかった。だが、ある程度は戦わねばならない。
「……北駒台は？」
「わっかんない！　逃げたんじゃないの！？」
そう言うシルトの表情からは悲愴感が見受けられない。戦闘の空気にあてられて、やや昂ぶっているように、シューには見えた。
一をどこまで信じて良いのかは分からない。だが、シルトは信じ

ている。ヒルデを『救う』為に必要な者なのだと、信じきっている。盾を割り裂く女が信じた男なのだ。ならば、自分だって信じるのが筋と言うものだろう。

「……奴が戻るまで時間を稼ぐ。まともにやり合えば持たないぞ」

「んなもん……」

シグルズが大剣を振るいながら現れる。離れた場所にいるというのに刃風が届いた。

「見れば分かるっつーの！」

シルトとシューは二手に分かれて攻撃を避ける。充分に距離を取りつつ隙を探した。

シグルズはシルトたちはそれぞれ瞥見した後、物憂げに溜め息を吐く。

「貴様らはブリュンヒルトの部下だろう。何故、俺に楯突くような真似をする。理解に苦しむな」

「はあ？　バッカじゃん、あんた。私らはヒルデさんの部下だけど、あんたの部下じゃない！　勘違いしないでよ。マジうぜえ」

「分からないのか？　貴様らが彼女を苦しめている事に」

「そっちがくだんない事言ってっからじゃん！」

シューはシルトを強く見据えつけた。時間を稼ぐという意味ではシグルズに付き合うのも悪い選択ではない。だが、必要以上に反抗的な態度を取るには、恐ろしい相手なのだ。

「一応は、貴様らを殺すなと彼女に止められている。だが、俺は世界の浄化、その大望を背負った身だ。寸暇を惜しむ状況なのも理解はしているな？」

「だから？」

「殺されても文句は言うなと忠告している。ワルキューレよ、死ぬのが恐ろしければここで俺に頭を垂れろ。俺に忠誠を誓え。この場限りの約束ではあるが、命だけは助けてやろう」

これが最後通牒だとシューは直感する。ぎりぎりまで返答を引き延ばすしかない。

「てっめえに助けられる命なんかあるかっつうの！　勝手に言ってろバーカ！」
「……馬鹿はお前だ」
「はあああ！？」
シグルズは大剣を肩に担ぎ直す。
「では、戦死者を運ぶ任もここまでだ。淫婦に泣きつくか、ここで土に還るか。貴様らが選ぶのはこのどちらかだ」
交渉、とも呼べない恫喝もここまでだ。シューは諦めて、槍を持ち直す。
「どっちも選ばねーし！　死ぬのはそっちだ！」
「使い走りが吠えると言うのか！」
シルトがシグルズに向かって槍を構え、駆け出した。彼は大剣を力任せに横へ薙ぐ。彼女は身を低くしてそれを回避し、手首を捻って穂先を突き出した。肩を狙った一撃だが、分厚い鎧に傷を付ける事しか出来ない。
「……下がれシルト！」
シューの呼びかけに反応して、シルトがバックステップ。彼女の前髪をシグルズの腕が掠めそうになる。間一髪、シルトの背筋が凍りついた。
「っぶねえ。死ぬかと思った」
「熱くなるな。私たちの相手はアレじゃないんだからな」
距離を詰めてきたシグルズを確認して、二人は更に後ろへ下がる。
「左」
「はいよー」
シューが左側から、シルトが右側からシグルズに走り込む。
突き出された二つの槍。シグルズは大剣を振り上げてシューの得物を切り砕く。だが、シルトが剥き出しになった彼の眼球に穂先を突き立てていた。
まるで、岩と変わらない。手応えなど皆無に等しい。シルトの腕に痺れが走り、彼女は槍を引いてシグルズの脇をそのまま抜けた。

彼女の傍までシューも退き、二人して欠けた槍の穂先を認める。
「くっ、くっくっ。どうした戦乙女、戦意が萎んでいるぞ。生憎と、互いに命が残っている状況だ。続けよう」
舌打ちして、シルトは使えなくなった短槍を投げ捨てる。新しい得物を用意してシューに視線を遣った。
「……お手上げだ。どうやら、奴が不死身ってのは間違いではないらしい」
目玉を槍で突かれても平気な人間をシューは知らない。はたして、彼が人間なのかどうかですら。
「竜の血を浴びれば竜の鱗と同等の頑強さを。竜の臓を食らえば竜と同等の聡明さを。竜を殺した俺は既に人を外れている。貴様らでは俺に傷をつける事すら適わん。くくっ、理解したか小娘。俺を殺したいのなら竜を超える化け物を連れてくるんだな」
「うっぜーよ！　気持ち良く喋ってんじゃねーっつーの」
「不快だよワルキューレ。貴様が口を開く度に世界が汚染されていく。見ろ、この空を。この山を、木々を、鳥たちを。悲鳴を上げているのが聞こえないのか」
「バカかお前、浸ってんじゃねーよ！」
シューは、一人だけで仕掛けようとするシルトの肩を掴んで押し止めた。
「……浸らせろ。どの道、私たちに取れる手段は限られている」
不死身。それを端から信じるつもりはない。戦死者を運ぶ者が不死者を信じては仕事が成り立たなくなる。何かトリックが、どこかに穴がある筈なのだ。
――――見破る時間はなさそうだがな。
「この際だ、一度下山を考えても」
「ヒルデさんがいるんだよ！？　逃げられるワケねーじゃん。私一人でも、あいつブッ殺してやる」
意気は買うが、気持ちだけではどうしようもない。ここで命を落とすのか。シューが覚悟を決めた瞬間、背後の山中から声が聞こえ

てくる。大きな声だ。希望に満ち満ちていて、それでいて、どこか嫌味たらしい。

「あいつだっ」その声に対して一番最初に反応したのはシルトだった。

「行くよシュー！」

彼女は一切の躊躇を見せずに斜面を駆け下りていく。貧乏くじを引かされたと、シューはやはり覚悟を決めた。二人ともがシグルズに背中を向ける訳にはいかない。彼の足止めを引き受けるしかない。

案の定、シグルズはシルトを追い掛けようとしていた。シューは両手に武器を持ち、彼の前に立ちはだかる。

「ヒルデが捕まったらしいな。あるいは、動けなくなったか、だ」

「……何？」

「ん、ああ、いや、そうか。あの男が……」

シグルズはまるで、自分の目で見たような事を言う。シューにはただ、一がこちらに向かって呼び掛けた事しか分からないのにだ。

「……何故」

「何故分かるのか、か？　教えたところでどうにもなるまい」

大剣の刃が鈍く輝く。数多の命を食い、血を吸い続けたであろう得物がシューを見つめていた。

「彼女に危機が迫っている。捨て置かれたとして、貴様にはブリュンヒルトに対する忠誠心がないのか」

対するシューの得物は短槍が二本。技術部から受け取った携行可能なそれだ。人間が相手でも、並大抵のソレに対しても充分に過ぎる。しかし、相手は不可思議な能力でもっていかなる攻撃をも防ぎ、弾く肌を所持していた。正しく竜の鱗、そう言って差し支えない。

「不安か？　安心しろ、すぐに何も感じなくなる」

目の前で大剣が振り上げられる。槍で受けても防げない。避けようとしても逃げられないだろう。しかし、黙して諦める訳にはいかなかった。シューは二槍を十字に構える。防げなくても逃げられなくてもせめて一太刀。シグルズの一撃を受け止めれば、一秒、その

分の時間は稼げる。
「……ヒルデさん」

斜面を駆け下りてくるシルトを認めて、一は息を吐く。
「ヒルデさあああん！」
「後、頼む！」
シューがいない。恐らくシグルズの足止めに残ったのだろう。一は重くなりつつある足腰に鞭を入れる。土を踏み締め斜面を駆け上っていく。
「あっ、おい！」
「ヒルデさんは任せたっ、俺は野郎の相手に戻る！」
「……っ、くそっ、バカ、ありがとうっ！」
シルトはまだ何か言いたげだったが、遠くなった一の背中を見て諦めた。
一のペースが上がる。洋館はもう目の前だった。アイギスを広げて邪魔な枝葉を折り、砕く。
深い木々の隙間を縫って陽光が照り注いだ。シグルズがいる。彼は一を認めて嫌そうな顔をした。一は目を細めて、
「……ヒルデさん」
呟くシューを押し退ける。瞬間、アイギスにシグルズの大剣が振り下ろされた。
「人間風情が割り込む、なあああああっ！」
一段と重くなる大剣を睨んで、一は歯を食い縛る。両腕には甚大な負荷がかかっていたが、不思議と痺れてはいなかった。
「ぼさっと見てんなや南駒台！」
「……っ、指図するな」
シューがシグルズの背後に回り込む。彼女は跳躍して、短槍の柄でシグルズの後頭部を殴りぬいた。ダメージは通らない。不死身の英雄には通じない筈なのだ。しかし、バランスは崩れた。一はその

隙を衝いて一気に大剣を押し上げる。
「……そうか！」
「調子くれてんじゃねえぞ英雄よお！」
シューはもう一度、今度は背中を狙い、柄を使って殴打した。そして確信する。斬撃、刺突は通らない。細く、鋭い槍の穂先や剣の切っ先ではシグルズには通用しない。だが、打撃なら通じる。繰り出すのなら装甲の上から中身を揺さ振るような、鈍く、大雑把な攻撃だ。
一はアイギスで無理矢理にシグルズを押し込んだ。たたらを踏んで後ろに下がる彼は歯軋りを繰り返す。シューが離脱したのを確認して、一はアイギスを大きく横に振った。
「貴、様……！　邪魔をするなっ」
「怪我はないかよ、南」
「……南ではない。シューだ、北」
「北じゃねえ、一一だ」
距離を取りつつ、一とシューは山の斜面を背に立つ。
「シュー、あんたもシルトを追い掛けろよ」
「……馬鹿を言え、お前だけでアレを止められるのか？　それに、ヒルデさんにはシルトがついていれば心配いらない」
シューは無用の長物となっていた短槍の穂先を戻した。
「……ヒルデさんを一番強く慕っていたのはあいつだからな」
「あ、そ。なあ、あいつの名前を知らないか？　シグルズじゃない方の」
「おおおお――――！」
風が巻き起こり乾いた砂が一の真横を擦り抜ける。触れれば即、死に繋がる攻撃だ。だが、振りが大きい為に、身を守るだけなら易い攻撃でもある。彼はアイギスで受け止めて、シューがシグルズの側面に移動するまで凌ごうと判断した。
「蝿がっ」
吐き捨てるように言うと、シグルズは一を押し潰さんばかりに力

を込める。その間に、シューはシグルズの背部に連撃を叩き込んでいた。

「――――――――――！」

シグルズの表情にある変化が訪れる。それは不安だ。焦燥、そして苦痛に色を変えていく。初めて見せた彼のネガティブな感情だった。一はほくそ笑んだ。

「なんだ、もしかして、痛がってんのかよ？」

「黙れっ」

「やだね！」

大剣を斜めに受け流し、一はシグルズから距離を取る。シューも彼に呼応して距離を取った。

のらりくらりと立ち回る一たちにシグルズは痺れを切らして怒号を上げる。

「……名前？　奴はシグルズではないのか？」

「違うらしい。何か思いつかないか？」

シューはシグルズから目を離さないで、何かを思い出そうとしていた。

「……ジーク。ジーク、フリート」

「ジークフリート？　マジか？」

「シグルズでないのならジークフリートだろう。しかし、何の意味が？」

英雄だろうが怪物だろうが、名前さえ分かれば怖いものなどない。一はアイギスをシグルズに、否、ジークフリートに向けた。

「こういう意味だよ！　『止まれ、ジークフリート』！」

ジークフリートは戦士を殺す

洋館前における一とシュー、ジークフリートとの戦闘は決して有利とは言えないが、絶望的に不利だとも言えない。

一がジークフリートの大剣を受け止めて、その隙にシューが打撃を積み重ねていく。

ジークフリートが初めて見せた苦痛の表情に、一は暗い喜びを感じていた。通じる。通じるのだ。竜を殺して不死身になった男を、少しずつ追い詰めていく。

竜殺しが何だと言うのだ。不死の存在がどうした。そんなもの、今更ではないか。今更、不死がどうだの言われたところで折れる心は持ち合わせていない。

「……これは」

シューが呆然と呟く。一はアイギスを畳んで、動かなくなったジークフリートを冷めた瞳で見遣った。

「名前さえ分かればこんなもんなんだよ」

「がっ、な……ぜ！　うご……！」

息苦しそうに喘ぐジークフリートだが、膝をつく事はしない。仁王立ちになってこちらに敵意のこもった視線をぶつけてくる。そこは、素直に褒めておこうと一は思った。

「……何故、最初からこの能力を使わなかった？」

「企業秘密。さーて、どうしよっかな」

余裕ぶる一だが、ジークフリートの自由を奪えるのにも限界が近づいている。呼吸困難、窒息死にでもなってくれれば話は早いのだが、どうにも、彼には効きが悪かった。英雄としての矜持か、竜の血肉を取り入れた事でメドゥーサに対する抵抗力が他者よりも強力なのかは判然としない。そも、ここでジークフリートを殺してしま

えばヒルデは少なからず悲しむだろう。一とて、彼の命を背負う気にはならなかった。

重要なのは、アイギスがいかに恐ろしいか。そのイメージをジークフリートに植えつける事である。少しでも彼の動きが鈍ってくれれば、無駄な思考に気を回してくれれば。と、言うのが一の考えだった。

「……このまま殺すのか、一」

「いや、出来るんならそうしてるよ。つーか」

一は声を潜めて続きを口にする。

「悪い、もう持たない」

「何？　それでは意味が……」

「がああああああああああ！」

ない。

意味がない。アイギスを使い、メドゥーサに頼み込んだ結果がこれだ。シューは肩を落として短槍を構える。一に失望しているのかもしれなかった。

激しい呼吸を繰り返して、ジークフリートを息を吹き返す。未だ瞳の焦点は定まっていないが、大剣を一に向けて、憤怒の形相を顔面に貼りつけていた。

「俺をっ、俺を！　俺をおおおおおおおお！」

「……逆鱗に触れてしまったな。奴の体は竜の鱗、竜の頭脳と魔力を手に入れた英雄に、私たちのような者が太刀打ち出来ると思ったのが間違い、か」

「野郎の顔色は変わってきてる。不死身だろうが何だろうが死ぬ時は簡単に死ぬんだよ。竜の頭脳が何だってんだ。でかいトカゲを殺したからって、それがどうしたってんだよ」

言わずもがな虚勢である。

ジークフリートが大音声を上げながら突きを繰り出した。一はアイギスでそれを受け、斜めに受け流す。真っ向から力比べしても、今のジークフリートに勝てるとは思えなかった。

「何、やってんだ！」
「……しかし」
シューは動けない。一とジークフリートとの間に割り込めないのである。一撃、一撃が重く、強過ぎた。巻き込まれれば驚くほど呆気なく、粉々になってしまうだろう。そのイメージが彼女を躊躇わせている。
「くたばれえええええ！」
「うるっせえ！」
アイギスと大剣がぶつかる度、凄まじい音が周囲に轟き双方の体が後方に弾かれる。弾かれればすぐに体勢を立て直して、新たな攻撃をジークフリートが放った。それを一が防ぐ。シューの目には、どちらも化け物に映っていた。

覚悟を決めたように、ヒルデは目を瞑って四肢を投げ出していた。目の前にいる筈のシルトは何も言わず、ただ、彼女の息遣いだけが周囲に音を発している。
「……何も、言わないの？」
シルトは肩を震わせた。溢れていた涙を袖で拭って、言葉を慎重に選ぶ。
捨てた。捨てられた。
置いていった。置いていかれた。
裏切った。裏切られた。
どう取り繕おうと、それは既に結果だ。ヒルデが、シルトたちに何も言わずに置いていった。その事実は消えない。ずっと、残り続ける。
「ヒルデさんは、私らを巻き込みたくなかったんですよね……？」
「……シル、ト？」
「何か考えがあったんですよね、きっと。皆殺しなんて、そっ、そんなの嘘ですよね？」

感極まったシルトはぽろぽろと涙を零している。俯くのを堪えて、ヒルデをまっすぐに見つめていた。

「私っ、私は、バカ、ですからっ。ヒルデさんが、あ、ヒルデさん……！」

つられてしまったのだろう。ヒルデの頬に温かいものが伝っていく。

「ヒルデさんを、信じて、ますから」

シルトも分かっていたのだろう。自分が捨てられて、置いていかれて、裏切られた事を。それでも尚、彼女は信じると口にした。信じさせてくれと、言っている。ヒルデはただ頷くだけで良い。それだけで、シルトは全てを忘れて、水に流す。

「……ごめんね」

「え、あ、あは。何言ってんですか、ヒルデさん」

「私は、あなたたちを見捨てた。ルルを守ってあげられなかった」

一に止められなければ、ジークフリートと共に駒台の住人を手にかけていたかもしれない。

「……ごめん、ね」

「なっ、ああ、ヒルデさんが泣かなくて良いんです！　ヒルデさんは何もっ、何も悪くないんだから！」

「私、止められなかった。私……何も出来なかった」

シルトは、ヒルデの泣き顔を初めて見た。ジークフリートは言っていた。悲しみに濡れた瞳も美しいのだと。ふざけるな。美しい筈がない。こんなにも痛ましい。胸を締めつけられて、今にも引き裂かれてしまいそうで、出来る事なら彼女の悲しみを代わりに背負ってやりたい。

「……でも、でも」

まるで、童女だ。大鎌を構え、戦死者の魂を掻っ攫う戦乙女の長には到底見えない。思わず、シルトはヒルデを抱きしめていた。後で怒られても構わない。今はただ、そうしたかった。

「シルト、シルトぉ……」

自分が慕っていた人は、こんなにも細く、か弱い存在だったのか。
今、自分は頼られている。甘えられている。ならばヒルデの好きにさせてあげたい。彼女を抱きしめる力を弱めて、シルトは――――。

『そんなの、私が知りたい。私が知りたかったのは……！』

一を思い出す。泣いている自分を突き放すかのように立ち上がり、前を見据えた男を。

気に食わない奴だった。どこまでも気に入らなかった。自分とは違う。相性が悪過ぎる。口が悪く、自分の趣味からは遠くかけ離れている。嫌いで嫌いで、たまらない。なのに、あの時の彼の行動が忘れられない。あの背中は鮮烈に焼きついている。どうしたって、離れない。

「ヒルデさん、行きましょう」

しゃくり上げるヒルデから、シルトはゆっくりと離れていく。柔らかくて、温かい。まだ、両の掌には温もりが残っていた。

「あいつを止めるんです」

「……んーん。無理、だよ」

緩々とした動作で、ヒルデは首を横に振る。

「無理じゃないです。止められるのは、もう、ヒルデさんだけなんです」

「……でも」

「止めて、ください。ヒルデさんがそう望んでるんなら！　いえ、望んでなくても！　あいつを止めるのがあなたの役割なんです」

「シルト……」

ヒルデは涙を拭いて立ち上がった。

「もう駄目なんて、そんな事ないんです」

落ちていた鎌を拾うと、シルトはヒルデに向けてそっと差し出す。

ヒルデはじっと、己の得物を見つめた。もう随分と長い間連れ添った、相棒のような存在を愛しげに撫でる。

「まだ、間に合います」
「……ありがとう、シルトシュパルテリン」
瞬間、シルトは腰が砕けそうになった。これだ。これなのだ。自分が焦がれ、追い求めた者がそこにいる。まっすぐに標的を見定める、戦乙女の瞳。ブリュンヒルトが帰ってきたのだと、シルトは嬉しそうに微笑んだ。

山がざわめいていた。木々が風に揺らされて、鳥が洋館前に集まり始める。
「俺がああああああああっ！」
「てめえがあああああああ！」
数羽、数十羽と増えつつある鳥たちは、一とジークフリートを見下ろし、彼らの真上を飛び交っていた。羽音と鳴き声が侵食を開始し、空はそれらに埋め尽くされていく。
ジークフリートに鳥の鳴き声は聞こえない。完全に血が上った頭では、目の前の敵を滅ぼす事しか考えられない。
「人間にっ、この俺が止められると思ったのか！」
一撃毎に攻撃は重くなる。剣が振り下ろされる度に死を予感する。一は身の竦むような恐怖を怒りでもって打ち消していた。この世全てを呪うようなジークフリートの声と、上空で泣き喚く鳥たちの声に精神が磨耗していく。両腕は軋み、今にも骨が砕けてしまいそうだった。徐々に削られる体力が一を内部から引きずり回す。諦めてくれと嘆いている。
うるさい。うるさい。うるさい。
「黙ってろ！」
馬鹿の一つ覚え、繰り返される攻防に一の苛立ちが募った。
「焼いて食っちまうぞ！」
「おおおおおおおおおおおお！」
どこまで続くのか、いつまで続ければ良いのか。終わりがあるよ

うで、双方が折れるまでは決して終わらない戦いの最中、
「……ジークっ！」
ヒルデが、姿を見せた。
「ブリュンヒルト！？」
ジークフリートは大剣を手元に戻して一から距離を取る。ヒルデの傍にはシルトがおり、ジークフリートは強く歯を噛み合わせた。
「何故だっ、何故止める！　何故、そいつを傍に置いているんだ！？」
「……聞いて、ジークフリート」
肩で息をしながら、一は片膝をつく。アイギスを強く握り締めていたせいか、もはや自分に握力が残されているのかどうかすら分からない。一度切れてしまった集中も、もう取り戻せそうになかった。
「もう、止めて。やっぱり、駄目なんだよ」
「何を、言っているんだ……？」
ジークフリートはよろよろと後退りして、大剣を地面に、深く突き刺す。それを杖代わりにして、彼は座り込むのを堪えた。
「いきなり、何を。何を言っている。忘れたのか、いや、忘れたとは言わせんぞ。世界を、元に戻すと誓った筈だ！　穢れた世界にした何もかもをっ、汚した人間どもを殺してっ、殺していくと誓っただろう！」
「……あなたは、変わってしまった」
「変わったのはお前だ！　この世界に落とされて、お前はっ、お前はあ！」
ヒルデは悲しそうに俯き、シルトに肩を支えられる。
「お前……は。そう、か。そうだったのか」ジークフリートはシルト、シュー、一を見比べた後、くつくつと喉の奥で笑い出す。やがてその声は高く、大きくなり、鳥たちの鳴き声を掻き消すほどに膨れ上がった。
「そいつらに吹き込まれたんだな。ブリュンヒルト、お前は騙されているんだ」

「違う。そうじゃない」
「そうにっ、決まっているだろう！」
話が通じていない。ジークフリートの心は強過ぎる。一は舌打ちして、体の感覚を確かめた。
「違うっ、聞いて！」
「卑劣！　卑劣極まりない所業だな、そうだろう！　人間とはここまで堕ちたか！」
大剣を地面から引き抜き、ジークフリートは一に切っ先を突きつける。
「貴様らのような人間がいるからっ、世界は、彼女があ！」
「そうかよ」
アイギスはまだ握れる。心はまだ折れていない。ならば、何度でも受け止めるだけだ。一は覚悟し、ヒルデとシルトは叫ぶ。ジークフリートが地を蹴り、シューが、あらぬ方角を見遣った。

狂戦士とは、北欧の神話、伝承に登場する戦士である。
ノルウェーの言葉ではベルセルク、アイスランドの言葉ではベルセルクル、英語ではバーサーカーと呼ばれる、狂った戦士だ。その語源、熊の毛で作った上着を着た者。あるいは何も着ない者。この二つの説がある。
呼び名も語源も分かれているが、それだけだ。それだけで、後は全て同じ。
軍神の神通力を受けた戦士は、身に危険が及ぶと獣になりきり忘我状態となる。鬼神の如く戦う彼らは正しく戦士の鑑と言えるだろう。
但し、彼らは決して敬われなかった。誰からも恐怖され、距離を置かれた。何故なら、忘我状態に陥ったバーサーカーには見境がなかったからである。動くものとあらば友人、肉親、恋人も関係ない。ただ、襲う。有り余る戦闘能力を御する事は誰にも出来ず、戦闘時

には、彼らと他の兵士は可能な限り離して配備し、バーサーカーを護衛にする者は誰もいなかった。

オンリーワン南駒台店、勤務外店員の鹿賀徹夫は自身がそう呼ばれているのも、そう呼ばれるのに相応しいモノだとも理解している。一般からは忌み嫌われる勤務外に成り果てたのだ。もはや、肉親にすら後ろ髪は引かれない。自分を拾ってくれた上司の為に力を振るうだけだ。それだけで生きていくには事足りる。

殺せ。命令されたのなら実行するだけだ。元より、それ以外に能はない。ターゲットを確認して、特製の錠剤を口に含む。これより先、自分は狂うのだ。これから先の記憶は一切なくなる。次に意識を取り戻した時、自分の周囲には多くの死体が転がっている事だろう。がりりと錠剤を噛み砕き、躊躇わずに咀嚼する。

鹿賀の視界に入るのは鬱蒼と生い茂る木々と、忙しなく飛び回る無数の鳥。狂う前に見るには、あまりにもな景色だった。あと、何秒持つか。心の中でカウントを始めて、彼は目を瞑る。これが、自身の最期に見たものだとは思わずに。今日が、彼の最期になるとは思わずに。

忘れていた訳ではなかった。ただ、あまりにも都合が悪くて、あまりにも間が良過ぎたのである。

それに、一番最初に気付いたのは、洋館に続く道を正面に捉えていたジークフリートだった。彼は一に対する攻撃を中断して、数瞬、躊躇ってしまう。

誰もが時を奪われていた。

「バーサーカー！」

誰かが叫び、全員がそちらに目を向ける。

大男が大口を開けて涎を垂らし、四つんばいになって地を駆けていた。武器は持っていない。だが、恵まれ、鍛え抜かれた体躯を見ればそんなものはむしろ邪魔にしかならないのだと分かった。彼は、

その拳一つで人体を破壊し得る。人間を簡単に殺せてしまう。
「ヒルデさんっ」一は叫んだ。バーサーカーと呼ばれた男の狙いが、ヒルデであると気付いたからだ。彼女を庇うようにシルトが前に出る。
「ブリュンヒルトっ」
ジークフリートよりも一の方が近い。彼はアイギスでバーサーカーを止めようとするも、名前が分からないのでメドゥーサは発動出来なかった。前に出て、物理的に止めるしかない。
だが、間に合わない。
一も、ジークフリートも追いつけない。バーサーカーは彼らよりも早く動く。シルトは短槍を構えているが、無駄だと分かっている。触れられれば、死ぬのは自分なのだと覚悟してヒルデの前に立っている。
「退いてシルトっ」
「ヒルデさんは逃げて！」
退けない。逃げられない。もう遅い。バーサーカーは四つんばいから二足の歩行に戻し、拳を振り上げている。
「ヒルデさん……！」
あろう事か、シルトは戦闘中に目を瞑ってしまった。辛うじて槍だけは構えていたが、手ごたえは感じられない。肉を貫く鈍い音と、血液が噴き出し、飛び散る音だけを聞いた。
「……あ」
どうして痛みを感じないのか。どうして自分が生きているのか。
シルトの疑問に気付いていたのは、彼女以外の者たちだった。彼女以外の者は、全員がその姿を認めていたのである。ヒルデの前に立つシルト。バーサーカーとシルトの間に割り込んだ者を。
「……早く、離れろ」
「う、がああああああああああああああ！」
バーサーカーが叫ぶ。獲物を仕留めた歓喜によって、ではない。戦闘を邪魔された、憤怒によって、である。

「あ、ああ……」
彼女が口を開いた時、水音が聞こえた。口内からは血液が溢れ、滴り落ちて地面に染みを作っている。
「シュー……なん、で？」
「早、ぐっ、離れろ……！」
バーサーカーの拳が貫いたのは、シューの腹だった。だが、バーサーカーもまた腹部を槍によって貫かれている。彼女は片腕で槍を突き刺し、残った腕で彼の腕をしっかりと握り締めていた。その為、バーサーカーは身動きが取れずにいる。
しかし、シューの行為は自らの傷口を広げる事になるのだ。バーサーカーは腕に力を込めて、彼女の内臓を引きずり出し始めている。血が止まらない。むしろ流れる勢いは増すばかりだった。
「何やってんのよシュー！？」
「……シルトっ」ヒルデがシルトの襟を掴み、後方に投げ飛ばした。彼女は尚も放心しているらしく、尻餅をついたまま動こうとしない。
「……シュー、退いて」
「来ないで……！」
ヒルデがシューに近付こうとするも、彼女は唸るような声を放った。
「何してくれてんだてめえええ！」
バーサーカーを横合いから吹き飛ばそうと一が駆ける。
が、彼よりも先に、自身の間合いへ到達した者がいた。
「だめえ！」
ジークフリートのやらんとしている事に気付いたヒルデが叫ぶも、彼は止まらない。ばりりと歯を噛み合せて大きく剣を振り被り、眼前の敵に向かって叩えていた。
「あ」
大きく、横に薙ぐ。

ジークフリートの剣は右側から振るわれる。
まず、シューの柔らかな背中に無骨な刃先が食い込んだ。その一撃は彼女の骨など容易に断ち、シューの胴体を切断し終える前に、彼女の意識は完全に断たれていた。次いで、大剣はバーサーカーにも襲い掛かる。狂った戦士は何とか逃れようとするが、寸前までシューに動きを封じられていたせいで次の動作に移るのが遅れていた。容赦なく、ずぶりと肉が切り裂かれていく。
一のすぐ目の前で、命が終わった。彼には見えている。シューの満足げな最期の顔が。ヒルデを庇えた事が、そんなにも幸せだったのだろうか。ヒルデは、彼女の一生を捧げるに値する主だったのだろうか。一には分からなかった。
「おおおおおおおおおおっ！」
一閃。バーサーカーの上半身が斜面を転がり落ちていく。半身を失った下半身、傷口からは噴水のような勢いで血が飛び出し続けていた。
「ひ、う、あ……」
「……どう、して」
ヒルデが得物を取り落とす。呆然とした表情で、胴体を寸断されたシューの死体を見つめた。
「役立つものだな」
血振りを終えて、ジークフリートは大剣を肩に担ぐ。近くに転がってきたバーサーカーの下半身を洋館の方へ蹴飛ばすと、その遺体にはすぐさま烏が群がり始めた。
ジークフリートは何気なく口を開く。
「汚れてしまったこの世界に相応しい最期だとは思わないか。ブリュンヒルト、こいつらの醜い死に様こそ、俺がこの世界の人間を殺すに足る理由なんだ。分かって、くれるか？」
「……あなたは……！」
「よせ、俺をそんな目で……」
「うっ、あああっ、あああああああああああああああああ

！」

シルトが声を上げて泣いていた。

「シュー！　シュウウ！　どう、して！　なんで！？　そんな、そんな……」

ヒルデが声を殺して泣いていた。

「やだあっ、やだよ！　私を置いてかないでよっ！」

たがが外れるとは、今のような状態を指すのだろうか。血液が全身を駆け巡り、燃えるように熱い。この体を突き動かそうとして心臓が強く鼓動している。しかし、どこか冷め切っていた。体の内側だけが熱く、表面上はすっかり冷え込んでいるように思える。空虚で、どこまでもニュートラルな気持ちで一はシューの顔を見つめた。思えば、彼女とは短く、薄っぺらな付き合いだった。初対面では三人がかりで襲われて、シルトと一緒にいたせいか、何となく気に入らない女だと思っていた。――――醜い死に様だとは、到底思えなかった。

仇を取るつもりはない。ただ、憎い。憎いのだ。シルトの涙に後押しされた訳ではない。ただひたすらに、目の前の男が気に入らなくて、殺してやりたい。

「やりやがったな……！」

「貴様はあああ！」

畳んでいたアイギスを力の限り振り下ろす。万感の思いを込めて、ジークフリートの肩口に叩き込む。高く乾いた音がして、一は次の瞬間、ヒルデに押し倒されていた。目の前を大剣が通り過ぎていくのが見えて、彼はけたけたと、狂ったように笑う。弾かれたアイギスは、高く宙を舞っていた。

高く舞い上がるアイギスを見て、ジークフリートは思った。

自分は、何者なのだろうと。

時折、記憶が混濁するのを感じていた。この世界に産み落とされ

た時から、ずっと。
シグルズ。ジークフリート。何故、名前が二つもあるのか。何故、二つともを自分の名前だと思っていたのか。
ブリュンヒルトは自分の恋人の筈なのに、彼女は自分を知らないような素振りを見せる。話を合わされているような、歯車の噛み合わない、出来の悪い演劇めいた日々。
果たして、自分は何者なのだ？
今になって、実感する。自覚する。そして確認して決意する。
自分は、シグルズでも、ジークフリートでもないのだ。何者かが生み出した、冗談じみた、幻のような存在だったのである、と。
ニーベルング。
かつて自身が滅ぼした筈の、小人の一族。
ニーベルング。
霧のように、儚く滅びていくもの。
竜の血を浴びて不死身となった。
竜の肉を喰らって鳥の声を聞いた。
竜を殺して、英雄となった。
だが、どこかしっくりと来ない。成し遂げた筈なのに、この体には何も残っていないような気がしている。
霧。幻。夢。どれでも構わない。何でも構わない。こんな世界だ、意味など、きっとない。どこにも理由なんて存在しない。
良いじゃないか。幻のような自分が、この世界を食らってやろう。夢のような存在が、現実をどこまでも侵してやろう。好きなだけ、貪り、殺す。もう何も考えられない。
「は、ははは！」
殺す。まずは殺す。一番最初に一番目障りな奴を殺す。何度も邪魔をしてきた、穢れた世界の穢れた人間を殺す。
が、シグルズは――――否、ジークフリートは――――否、もはや、夢幻に等しい存在となった男は逡巡した。
一は、邪魔だ。だが、彼が恐ろしい訳ではない。一をこの場に立

たせているモノは他にある。あの傘だ。アレさえなければ、どうと言う事はない。

破壊するのは勿体ない。道具は使われる為にある。名剣グラムにあの盾を加えた自分は、もう誰にも止められないだろう。力ずくで、力任せに、力だけでこの世界を塗り替えられる。元に戻せる。汚れを一掃出来るのだ。

「……ジーク、もうやめて」

「黙れ裏切り者！　それに、俺はもうジークフリートでもなければ、シグルズでもない！」

アイギスが落ちてくる。手を伸ばせば、もうすぐ届く。これさえ手にすれば、もう関係ない。

「皆殺しだ。貴様らも、アレの後を追わせてやろう」

「くっ……！」

一はもう笑っていなかった。彼はただ、アイギスの行方をじっと見つめている。ただ、その瞳には感情が宿っていない。

「掴んだぞ」

男がアイギスの柄を握り締める。笑みを殺しきれずに、くつくつと底意地の悪そうな声を漏らした。

ブリュンヒルトは彼の甲冑となる

アイギスは万能ではない。

物理的な攻撃、衝撃に対しては絶大な真価を発揮するも、身を守るだけで終わってしまう。攻撃に転ずる事はほぼ皆無だ。

しかし、アイギスには稀代の怪物、メドゥーサが埋め込まれている。彼女が力を行使すれば有象無象の区別なく、万物はその動きを縫い止められ、時には石と化せられる。

だが、メドゥーサとて絶対ではない。その力をアイギスの持ち主が行使するにはいくつかの条件をクリアしなくてはならない。

一つ、声を出せる状態である事。

一つ、視界が良好である事。

一つ、対象の名前を知っている事。

その三つを満たしていない限り、メドゥーサは力を使えない。また、全て満たしたとしても対象の相手によって効力にはムラが出来る。

では、条件を満たさない限りメドゥーサは力を使わないのだろうか。

一は思い出していた。シグルズに対して発動出来なかった力。その理由を。過去にも、何度か失敗した事はあった。だが、今回は違う。全て満たしていた筈なのに、メドゥーサが力を貸さなかった。声は？　視界は？　名前は？　全て問題なかった。考えて考えて、必要ないのだと気付く。

何故なら、メドゥーサは条件を満たさなくても力を使うからだ。

「掴んだぞ」

男がアイギスをしっかりと握り締めたのを見て、一は口角をつり上げた。きっと、彼はアイギスを掴むのだと信じていたのである。男が恐れていたのは一一ではなく、アイギスだ。敵に回したくないモノほど味方につけば頼もしい。力に驕り、力に浸り、力に溺れる者ならきっと欲しがる筈だった。

愉悦に歪んでいた男の顔色が変わっていく。アイギスを掴んだ左腕から、それは巻きついていく。

「……何だ、これは」

男には見えていない。ぼとりぼとりと、アイギスから大小問わず、古今を問わず、東西を問わない蛇が涌きだしているのが。蛇は男の左腕に噛みつき絡みつく。彼は異常を察知してアイギスを手放そうとするが、既にアイギスの柄と男の腕は蛇たちによって繋ぎ止められていた。

蛇姫の怒りは未だ収まらない。蛇は甲冑の隙間という隙間から入り込み、男の体に食らいつく。地面に落ちた蛇は足を、腰を、下半身を締め上げる。

一はヒルデを退かして立ち上がった。自分に近づいてきた蛇を認め、地面を強く踏み付ける。その音に驚いた蛇は男の方へと戻っていった。

「……何が、起きてるの？」

ヒルデにも、シルトにも、男の身に何が起きているのか分からない。彼女らには、一以外には蛇が見えていないのだ。不可視の何かが男に襲い掛かっている。そんな風にしか捉えられない。

「がっ、おおおお……」

男は戒めから逃れようとして体を動かすが、剥がれていく蛇は殆どいなかった。彼にまとわりつく蛇の数は増えていくばかりで、どこまでも切りがない。

一だけが全てを理解し、把握している。ここは既に彼の掌握した世界だ。一だけが口を開ける。

「触れたな、色男」

「貴様あああああっ」
メドゥーサは力を使う。使うのだ。アイギスに触れて良いのは女神に選ばれた汚れを知らない者。それ以外のモノが触れれば、こうなる。
逆鱗という言葉がある。竜の八十一枚の鱗の内、それに触れれば激怒を買う。竜ならたった一枚だが、メドゥーサは違う。彼女にとっては全身が逆鱗なのだ。主以外の男が触れる事は叶わない。
「そいつは執念深くて嫉妬深い。悪いけど、逃げられねえぜ」
締めつける力は強まっていく。男の両腕は淡い紫に変色してだらりと垂れ下がっていた。力を込めたくても血液の流れを塞き止められている。両足も地に屈し、彼の呼吸はか細いものに変わり始めていた。
だが、終わらない。
『ああ、主。主様』
声が響く。一にだけ届く儚い声だ。彼は胸を押さえて、済まなさそうに目を瞑る。
『私を捨てるの？　私を裏切るの？』
アイギスが光輝を帯びた。それから、鈍く、暗い輝きを放つ。瞬間、男の背中に今までとは比にならない圧がかかった。
『私を汚れた男に遣るの？』
これだ。だから使いたくなかった。相手の名前を知らなくてもアイギスに触れた対象が汚れていれば問答無用に発動する、言わば、ルールを無視した力の行使。最後の最後に取っておいた切り札である。
「捨てるかよ。悪かったな、メドゥーサ」
顕現が始まった。一にしか見えない。一にだけ見える力の具現。それは、あるいは、哀れな姫の必死なアプローチなのかもしれなかった。
男の背後に、紗幕を通したような輪郭が浮かび上がる。長い髪の毛が風もないのに浮き上がり、彼女の細い指先が彼の首を這ってい

く。

『……ああ、良かった』

喉に五指、十指が這い、食い込んだ。男は窒息し、その場に顔から倒れこむ。メドゥーサは一に微笑むが、彼は咄嗟に目を逸らした。

倒れて動かない男を見遣って、ヒルデは息を吐く。バーサーカーも、シューも死んでしまった。胸にぽっかりと穴が開いている。それを埋める方法を彼女は知らない。

「……あなたが招いたんだ。あなたがこれを望んだ。そう言われても文句は言えませんよ」

一の言葉は深く胸に突き刺さる。その通りだと断じたヒルデは何も言えなかった。

「あんた、そんな言い方って……」

「……良いの。シルト、これは、私がやった事だから」

こんな自分を庇ってくれようとしている。シルトの気遣いは有り難かったが、その優しさに甘えたくはなかった。

「……彼は、シグルズじゃなかった」

「誰だったって言うんです？」

ヒルデはゆるゆると首を振る。

「分からないの。ただ、私の知る人だったのは、確か」

男が姿を見せた時、ヒルデの心臓は強く高鳴った。もう会えない、二度と見られない筈だった顔を見られて、単純に嬉しかったのを覚えている。

ただ、同じなのは姿だけで、何か噛み合わないようなところもあった。彼はシグルズでもあり、ジークフリートでもあり、そのどちらでもなかった。夢のように甘く、霧のように儚い存在だった。それは、自分が思い続けていたから現れたのかもしれない。一時、幻でも構わないと、そう願ったから。だから、この世界に生きる自分を追い掛けてきたのかもしれなかった。

「……私が弱かったから、皆、死んだのね。んん、違う。私が、皆を殺したんだ」

彼が何者なのか疑問に感じていたのに、追求しなかった。流されずに、もっとしっかりしていれば、誰も傷つかずに済んだ。ルルは怪我をせず、シューたちは死ぬ必要などなかった。悪いのは自分で、罪を背負い、罰を受けなければならないのは自分である。これは全て、甘く、弱い自分が引き起こした事なのだ。

「……私、どうして、死んでないんだろう」

「ヒルデさん、そんな、冗談でも、そんなの、ダメです」

涙が溢れてくる。ぽろぽろと地面に滴り落ち、頬を濡らす。

一は、何も言えなかった。ヒルデが何を思い、考えていたのか。昔の男、その面影に縋っていた彼女に、今を生きる自分では何もしてやれないと思ったからである。結果が、過程がヒルデを苦しめていた。最後の最後で自分を取り戻しても、何一つ実を結ばない。そんな現実に直面した彼女の精神は、もう耐えられないだろう。本人ではない。しかし本物でもあった。愛した男に死なれ、自分を慕っていた者も死んだ。勝手ながら、一は今のヒルデの状況を地獄だと感じる。

「ヒルデさん、今日は、その、良ければ、なんですけど。私の部屋に泊まってってください。……後の事は私に任せて、ゆっくり休んでください」

「……ごめんね、シルト」

甘えだと、ヒルデも良く分かっていた。それでも、今はただゆっくりと眠りたい。全てを忘れるのは無理だろうが、思いは薄れる。月日が経てば、今日は明日に紛れて風化する。彼女は鎌を掴んで立ち上がった。

「シルト」

「うっ、おあ、何？」

一に名前を呼ばれたシルトは軽くうろたえる。

「お前もヒルデさんと山、下りとけよ。後始末は俺がやっとく。ん

で、ケータイでさ、ウチの店に連絡させてもらっても良いか？」
「あー、つーか、その、良いの？」
「良い」
シルトは視線をあちこちに向けて躊躇っていた様子だが、決してシューの死体を見ようとしない。仲の良い、その一言では片付けられない間柄だろうに、シルトは気丈に振る舞っている。そんな彼女を、一はこれ以上見ていられなかったのだ。
「じゃあ、お願い」
そう言って、シルトは一に携帯電話を差し出す。
「サンキュー。……あれ、これ、どうやって電話掛けんだ？」
「はあああっ！？　フツー分かるじゃんそんなの！　うっそ、ケータイ持ってないの？　うーわ、ないわ、それ」
「うるせえな、良いから教えろよ」
「だっせー！　バーカ、バーカ！」
シルトは一の傍にしゃがみ込み、あれこれと指示を出したり罵声を浴びせたりしている。ヒルデは彼らを優しげに見つめて、目を見開いた。
金属の軋む音が聞こえて、一は首をめぐらせる。倒れた筈の、動けない筈の男が立ち上がっていた。彼は大剣を杖代わりにしてどうにか起き上がったという有様だが、その表情は憎悪に彩られ、悪魔めいた笑みを浮かべている。
男は一を瞥見した後、大剣を振り上げる。
「マジかよ……」
一は座り込んだまま動けなかった。間近に迫る凶器と殺意を捉えてはいたが、何かしようという気にはなれなかった。彼を庇おうとして、シルトが一の体に覆いかぶさる。
「うおお――――――――ご……」
シルトの背中に、ぽつぽつと赤い染みが作られていく。
大剣を構えたままで、男は目を見開いた。
「また、うら、ぎるのか……」

「……最初から、こうしておけば良かったのに」
男の腹から鎌の刃先が飛び出している。ヒルデは柄を握り、傷口を抉るように動かした。
「ヒルデさん……」
「……私がこうして、私だけが嫌な思いをすれば良かった」
一たちの側面に立つヒルデは、男を見ようとしない。
「が、わったな、ブリュンヒル、ド……」
「ん、変わった。世界も、人間も。変わってないのは、あなただけだった」
一はヒルデの顔を見られなかった。彼女は一体、どんな気持ちで鎌を手にし、愛した男を貫いているのだろう。
「ぶ、りゅ……」
男は背中を貫かれながらも得物を振り上げようとする。ヒルデは、鎌を一息に引き抜き、彼の甲冑、肩当てを削ぎ落とした。瞬間、シルトが槍を両手に構えて跳躍する。
「もうっ、死んどけよ！」
露わになった男の肩口に、一本、また一本、槍の穂先を突き立て、深く沈めていく。
「お前なんかが今更出てくるから！　シューも！　ヒルデさんも！」
竜の鱗と同等の頑強さを持つ筈だった男の肩に、ずぶずぶと槍が刺さっていく。血が噴き出して、男が苦しそうに呻いても尚、シルトは攻撃の手を緩めなかった。
「お前なんかがっ！」
槍の穂先が根元から離れていく。力を入れ過ぎて折れてしまったのだろう。シルトが男から離れたのを確認して、ヒルデは得物を振るう。
「……世界は、汚れてなんかない」
最初から、始まった時からそうなのだ。不正、非道、裏切り、堕落、腐敗、醜悪、悪徳、背徳、悪。それらが栄えたためしはないが、根絶やしにされたためしもない。いつだって、この世界にはそれが

あった。汚れたと言うのなら、最初から汚れていたのだろう。
だが。
ヒルデは決して、世界が汚れていると思わない。
「私が生きる世界は、私の好きな人たちが生きる世界は、決して汚れてなんかない」
男の背中、同じ場所に鎌の刃先が突き刺さっていく。
「……だから」
「お、ぶ、っ……」
深々と突き立てられた鎌が、再び引き抜かれた。
「さようなら」

世界はきっと汚れている。
一はそう思う。自分も、自分が立つ地も、見上げる空も、取り巻く何もかもは汚れているのだ。綺麗だと、誰が言い切れる。
今日、ここで死んだ者たちも汚れていたに決まっている。なのに、彼女がそう言うだけで、いつの間にか気持ちは変わっていた。
「……ごめんね」
ヒルデはそっと、シューの瞼を閉じる。亡骸となったモノに語り掛け、謝って、涙を流す。
一は、一歩も動く事が出来なかった。ヒルデがシューの亡骸を両腕で掻き抱き、眼下の街を見下ろしている。戦死者を運ぶ者。彼女の姿は、正にそれだった。
「……う、あ、ああっ」
戦乙女の慟哭が一の胸を打つ。
「あああああ――――――――――っ！」
その涙は、汚れたと断じられた世界を浄化する尊いものに感じられた。
山がざわめき、木々が揺れる。鳥たちは一斉に空へと舞い上がり、街へ向かって、駒台を越えて飛び立っていく。自分たちの声を聞き

届けた英雄の死を、世界に喧伝する為だろうか。それとも、戦乙女の声に胸を打たれて、いてもたってもいられなくなったのだろうか。
世界は美しくない。汚れてもいない。ただ、彼女だけが美しく見えた。

「店長、お電話が鳴っております」
「出てくれ」
「かしこまりました。……お待たせいたしました。オンリーワン北駒台店でございます」
店長は煙草を吹かして、缶コーヒーを喉奥に流し込む。今頃、一は死んでいるだろうか。どうせ、生きて戻ってくるのだろう。
「店長、店長に代わってくれと」
「ん」ナナから受話器を受け取ると、店長は面倒くさそうに口を開く。電話口の声を聞いているのかいないのか、椅子をぐるぐると回転させて適当な相槌を繰り返していた。
所在なげに立っていたナナはフロアに戻り、何気なく窓の外を見遣る。
「……あれは」
鳥が空を飛んでいた。数え切れない、多様な種類の鳥たちが駒台の空を抜けていく。
「地震でも来るのでしょうか」
早く一が帰ってきますように。そう思って、ナナは両手を組み合わせた。

死者を洋館に運んだ後、一たちは壁に背を預けて、鳥たちを見送っていた。数十分もすれば、オンリーワンの近畿支部から応援が来るらしい。死体を運ぶ応援、である。
もう、何もする気が起きなかった。静寂の戻ってきた空間で、誰

一人口を開くことはない。
体力的にも精神的にも限界だった。ここで目を瞑り、眠る事すら考え始めている。そんな自分に気が付いた時、一はゆっくりと口を開いていた。
「名前、何だったんですかね」
「は、名前？　誰の？」
「あいつの。シグルズでも、ジークフリートでもなかったんだろ」
「……んーん。シグルズでも、ジークフリートでもあったんだと思う」
「そう言う事だから黙っててよ」
ヒルデに聞き返そうとした一だが、シルトに睨まれてしまう。
「あの人は竜を殺してその力を得ていた。鳥の声を聞いていた。私の事も、ちょっとだけ覚えていたみたいなの。ただ、記憶が混ざっていたんだと思う」
「記憶が？」
「……ん」
一は知らない。
男が鳥の声を聞いていた為に、自分たちの狙いを把握していたと言う事を。
シルトは知らない。
不死身の肉体を持つ男の唯一の弱点を。彼が竜の血を浴びた際、菩提樹の葉が張り付いていた為に、背中のある一点のみが硬くならなかった事を。
ヒルデは知らない。
男が、果たして何者だったのかを。
全員が分かっていた。それで良いのだと。
「ま、良いか。……良いんですよねー」
一はごろりと寝転がる。知らず、口元には笑みが浮かんでいた。
「何笑ってんの。キモイ。何かウザイ」
「だってさ、あいつ、ヒルデさんの恋人って訳じゃあなかったんだ

ろ」
「……ん？」
ヒルデは小首を傾げる。
「……ん、でも、ええと」
「じゃあ、なかったんですよね！？　そう言ってくださいよ！」
「う、えと。……ん」
一の気勢に圧されてヒルデは頷いてしまった。彼は両手を上げて喜びを全身で表現している。
ヒルデもつられて笑ってしまった。そして思う。何故、一は自分を思ってくれているのだろうかと。シルトも、ルルも、シューも。皆、何故、こんな奴を慕ってくれるのだろう、と。
「ヒルデさん、ヒルデさん、今日は私の部屋に泊まっていってくれるんですよね？」
目が覚めた時の世界は、目を瞑った時の世界と大きく様変わりしていた。それでも、変わらないものもある。
「……明日もじゃ、駄目、かな？」
「へ？」
「もう、目は覚めたから。夢を見るのは、おしまいなの」
シルトはきょとんとした顔になる。その後、難しい顔を作って、喜色満面になった。
「大っ歓っ迎っです！　ずっと、ずうっと！　私の部屋に、いつまでもいてください！」
「ん、ありがとう」
「そんな！　お礼なんてっ、ああ、ヒルデさん！」
ぎゅっと抱きしめられる。ヒルデはシルトの頭を撫でて、恨めしそうに彼女を見る一と目が合った。彼は恥ずかしそうに目線を逸らして、再び寝転がる。
何故、一が自分を好いてくれるのかは分からない。だが、一に惹かれている理由は分かる。呪いをかけられたこの身、恐れを知らない者だけがその呪いから解放してくれるのだ。それまでは、ひたす

らに夢を見続けなければならない。
　一が、その呪いを解いてくれた。シグルズも、その呪いを解いてくれた。しかし、両者は似ているようで全く違う。恐れを知らない、その点は確かに同じだ。だが、質が違う。
　シグルズは、恐れを知らない。自らを高める為に危険を顧みず、炎の中をも進んでいく者なのだ。
　一は恐れを忘れる事が出来る。自らの危険を顧みず、炎の中に取り残された誰かを救える者なのだ。

あなたは、俺を助けてくれた。
人間。勤務外。ソレ。
その全ての狭間で揺らいだ自分に、道を指し示してくれた。
だから、こうしてここにいられる。

あなたは、私を助けてくれた。
夢。幻。霧。影。
とらわれていた自分を、もう一度目覚めさせてくれた。
だから、こうしてここにいられる。

縄に繋がれているのなら、それを解こう。
鎖に縛られているのなら、それを外そう。
檻に囚われているのなら、それを壊そう。
あなたがそこから助けてくれた。
だから、あなたを助けてあげたい。

「……ヒルデはね、本当の名前じゃないの」
「ブリュンヒルト、でしたっけ」
ヒルデは緩々とした動作で頷いた。

「良い名前ですよね。何か、意味はあるんですか」
「ん、甲冑」
一は眉根を寄せる。仰々しい響きと、嫌なものを思い出したのだ。
「……心配、ないよ？」
「別に、してませんよ」
「もう、私は大丈夫だから」
「そうですか」と、一はここにいたって気のない風に装う。
「何て呼べば、良いんですかね」
そっぽを向いたままで一は言った。
「……ん、好きに、呼んで」
「えっ？　じゃ、じゃあ……」
「くだんない事言ったらぶっ飛ばすから」
シルトに釘を刺されてしまい、一は舌打ちする。
「ところでさー、私も本当の名前を隠してるんだよねー。知りたい？　知りたいっ？」
「うぜー、このテンション。嬉しそうな顔すんなよ、そのツラ見てたら張り倒したくなる」
「おぉい！　もっと食いついてよ！」
「お前の名前なんか心底どうでも良いわ」
「ケータイ貸してやったじゃん！　色々、その、何か助けてやったじゃん！」
シルトは立ち上がって一に詰め寄る。彼は動かず、面倒くさそうに手を振って追い返そうとした。
「聞けよっ、聞かなきゃコロス！」
「ヒルデさーん、こいつこんな事言ってますよ。助けてください、俺殺されちゃいますー」
「へらへらすんなっ、あああもう！　ムカつく！」
「……ん、シルト、駄目だよ」
「だってこいつが！　……う、わ、分かりました」
ヒルデに叱られたシルトはしゅんとうな垂れる。少し可哀想にな

ったので、一は彼女にちょっかいを掛ける事にした。
「なあ、お前の名前教えてくれよ」
「はあ、何それ？　今更聞きたいの？　ふーん、じゃ、頭下げろ」
「じゃあ良い。二度と聞かない」一はアイギスをバットに見立てて素振りを始める。
「いっ、言う。言うから、ちょ、ちょい、ちょっ、こっち向けよバカ！」
ぎゃあぎゃあと喚くシルトを見つめると、彼女は何故か視線を逸らした。馬鹿にされたのかと思って、一はシルトの尻をアイギスで叩く。
「てめえマジでコロ……コロしちゃうぞ」
「……言い直しても駄目」
「良いから言えよ。俺はもう家帰って寝たいんだ」
シルトはニット帽の位置を直して、ぼそぼそと呟いた。
「あ？」
「シルトシュパルテリン。はい言ったー」
「言い辛い。……ヒルデさん、こいつの名前には意味があるんですか？」
「……ん、えーと。シルト、言っても良いの？」
「どぞ」短く答え、シルトはじっと一の様子を窺う。
ヒルデは羨ましそうにシルトを見遣ってから、ゆっくりと口を開いた。
「盾を割り裂く者。シルトシュパルテリンには、そういう意味があるの」
「盾を……ああ」
山に入る前のシルトとシューのやり取りを思い出して、一は得心する。どうだと言わんばかりのシルトを見て、彼は納得する。だから、こいつが嫌いなのだと。名は体を現す。シルトシュパルテリンは、自分にとって天敵だったのだ。
「死ね」

「なんでっ！？」

言い争う二人を眺めながら、ヒルデは鎌の柄を握り締めていた事に気付く。

自分にはその資格がない。そうしてはならないと分かっているのに、羨ましくて、焦がれていた。彼らが許してくれたとして、自分は、自分を許せない。それでも、いつか時間が経って、己を許容出来るほどに成長すれば、彼の隣に立てるのだろうか。

一度は滅ぼそうとした世界と、殺そうとした人たち。

その全てを守ろうと、ヒルデは誓う。今はただ、彼らを守る甲冑になる。それだけで充分で、その先、周りの人たちが笑ってくれれば幸せなのだと思えた。

旅立て勇者よ。

艱難辛苦を乗り越えて、眠れる姫を助けに行こう。

黄金を守る悪い竜を打ち滅ぼして、ヒンダルフィヨルの山を越え、炎に包まれた館の中、盾の垣に囚われた彼女を救おうではないか。

見事に姫を夢から起こし、両の腕にてかき抱けば、城に帰って式を挙げよう。

勇者と姫。二人はお似合いなのだから、きっと誰もが祝福するだろう。

この物語は後世まで語り継がれる。船乗りが東西を越えて、吟遊詩人が古今を越えて永遠に紡ぎ続ける、ああ、何と素敵なお話だろう！

その後、勇者と姫に何が起ころうとも、どんな苦難が降りかかろうとも、目を背けたくなる最期が待っていたとしても、めでたしと、そう締め括るのが、人の常というものである。

ああ、めでたし、めでたし。

チェリーボーイ（前書き）

前書きです。ごめんなさい。
最近は鋭角で突っ込んでくる質問、感想をもらえて嬉しい限りです。
何だか試されているような気さえしてきます。お話の中ではないので深くはお答えできないような質問もありますけれど、皆さんありがとうっ。でも感想欄でのネタバレだけは勘弁な！　ちょっとだけでもボカしてもらえると感涙ものです。
前書きでした。ごめんなさい。そんな訳で、どうぞ、ごゆっくり。

チェリーボーイ

最近、兄は変わったように思う。

朝は一人で起きられるようになったし、子供っぽい事を口にしなくなった。目を離せばすぐにどこかへ行ってしまう。遅い時間に汗だくになって帰ってきたかと思えば、そのまま一言も口を利かない日もあった。彼の顔つきは、いつの間にか大人びているように、ひと皮剥けたようにも感じる。

変わって、しまった。否、変えられてしまった。

その原因を知っている。分かっている。兄が変わったのは、あいつのせいだ。許さない。

兄が勤務外店員だなんて危険なアルバイトをしている事を両親は知らない。彼が入院した時だって、見舞いに来たのは最初の一日だけ。知っているのは自分だけだ。何度も辞めてと訴えた。その度に、兄は辛そうに目を伏せる。誤魔化すように笑って、心配ないと嘘を吐くのだ。

気付けば、鏡の前の自分が恐ろしい形相になっている。睨み付けるような、自分でも目を背けたくなるような、獣のような目だった。

「……兄さん」

神野姫は目を瞑る。百歩譲って、変わってしまったのは仕方がない。兄が無事に帰ってくれればそれで良い。……兄を変えた、あいつが許せない。あいつさえいなければ、あいつさえ駒台に来なければ、彼女が、兄と出会わなければ――――。

「相変わらず、寂しい部屋なんですね」

馴染みの警備員と挨拶を交わし、気が狂いそうになるほどの長い

階段を下り、そこに辿り着く。エレンの部屋に入るなり、一はそう告げた。

エレンは室内だと言うのにフードを目深に被っており、彼女の顔は殆ど隠れて見えない。エレンの整った鼻梁と艶やかな唇が覗くだけだ。

「あら、酷い事を言うのね。なら、ハジメがこの部屋を華やかにしてちょうだい」

「俺に華を求めますか」

ビニール袋を机の上に置くと、一は無造作に椅子を引く。コートを脱ぎ、椅子の後ろにかけた。

「ハジメの周りにはたくさんあるじゃない。最近のあなたの活躍ときたら、目覚しいものがあるわね」

「知ってるんですか？」

「聞いたのよ。その後、どうかしら、体の調子は？」

尋ねられているのは身体的な事ではない。メドゥーサの事を聞かれているのだろう。そう思った一は少しだけ考えて、相好を崩す。

「良いと思います。……それから、大した事じゃないと思うんですけど」

「聞かせてくれるかしら？」

エレンの相槌は心地良い。ついつい、一は彼女の反応を確かめてしまうのだ。

「煙草を、その、吸いたくなった時があったんです。と言うか、今もちょっと」

「……煙草を？」

ふうんと、興味深そうに呟くと、エレンは白魚のような指を宙に泳がせて、両手を胸の前で組んだ。

「譲歩してくれたのかしら」

「譲歩って、メドゥーサが、ですか？」

「煙草を吸っても良いですと、ハジメを主として、いいえ、パートナーとして認めてくれたのかもしれないわね。飲み込んで吸収する

のではなく、共に歩みたいと思っているのかも。いじらしいじゃない」

「うーん？　そう、なんですかね」

嬉しいような、嬉しくないような。複雑な気持ちだった。持て余した感情が一の中で揺れ続ける。

「本人に聞いてみたらどうかしら？」

「そんな簡単に……。とりあえず、悪くはないって事で良いんですかね」

「ええ、心配はいらないようね。私も肩の荷が下りたわ」

「心配してくれてたんですか？」

エレンは愉しげに口元を歪ませてから一を見遣った。

「いけない？」

「まさか、光栄ですよ。それより、エレンさんのお陰で、またここに来れました」

彼女の助言がなければ、自分は死んでいたのだろう。一は頭を下げて、つまらなさそうに頬杖を突くエレンを見る。彼は落胆した。

「そういう話は結構よ。もっと面白い話をしてちょうだい」

「ゴルゴンの話は？」

「蛇は飽きたわ。その次は、大きな人形が暴れたって話だったわね」

エレンにかかれば、太陽と呼ばれたタロスすら人形扱いである。

「だったら、『円卓』って知ってます？」

「まあるいテーブルの事かしら？　ふふ、違うわね、ハジメが聞きたいのはもっと別の『円卓』なのだから」

知っていたか。一は頭に手を遣って、目の前の女が何者なのか考える。この部屋に来る度、いつも。その度に、無駄だと思い知るのだ。

「でも、私の口からは言えないわね。私は助言者であって預言者ではないんだもの。だから、済んだ事については教えてあげましょう」

机の上に置かれた女性誌に値踏みするような視線を向けると、エレンはさんざ迷ってからティーンズ向けのファッション雑誌を手に

取った。
「ハジメは既に『円卓』のメンバーと出会っている筈よ。気付いていないのかしら」
「気付いてますよ。自分が『円卓』だって言う侍と出会いましたから」
「ああ、テュールね」事もなげにエレンは言い放つ。
「でも、彼だけじゃないでしょう？」
一は物言いたげな表情を作るも、話の続きを待った。
「ハジメは青髭には会っていないけれど、彼の関与した事件に巻き込まれている」
「青髭って言うと……ああ」ヤマタノオロチ。そこで、山田が出会ったと言う老人である。青髭はテュールと同じく、自身を『円卓』のメンバーだと言っていたそうだ。
「それから、ゴルゴンね」
「……は？」
「あら、まだ知らなかったの？　そうよ、ゴルゴンは『円卓』の第三席。名乗らなかったのかしら」
聞いてない。一は頭を抱えて、自分が何を相手にしていたのか改めて思い知る。
「生きてて良かった……」
「あなた、とんでもない事をやってのけたのよ？　もっと別の反応があっても良いと思うわ。まあ、そこがあなたらしいと思うのだけれど」
エレンはクッキーの包み紙を開けて、一つ、口の中に入れる。それを胃に収めた後、彼女は何でもない風に口を開いた。
「あと、三人。少なくとも出会っている筈だけど」
「何ですって？」
「三、人。ハジメは『円卓』のメンバーを三人、知っている、見ている筈よ」
三。その数ははたして多いのか少ないのか。混乱した頭で思考を

始めるも、まともな回答は得られそうにない。
「それは、誰なんですか？」
「ふふ、秘密」
「命に関わる事だと思うんですけど……」
「あら、私には関わらない事だもの」
一は憂鬱そうに溜め息を吐き、何か思いついたかのような表情を浮かべる。
「俺が死んだら、エレンさんに差し入れする人がいなくなりますよ」
「大丈夫よ。ハジメはそんな事で死なないもの」
「だったら、せめてヒントだけでも」
「最初からヒントを欲しがるなんて、必死なのね。可愛らしいわ」
だから命が掛かっているのだ。必死にもなる。一はそれでも口ごたえを我慢した。
「ヒント、ヒント。『円卓』に関するヒントが欲しいのかしら？」
「何でも良いです！　とにかく、俺は今後どうすれば良いのかって」
「ふふ、欲しいのね。ほら、言いなさい。お口に出していっちゃいなさい」
「あっ、ああ……ほ、欲しいです！　いっちゃいます！　ってエロイよ！」
エレンは手の甲を口元に当ててくすくすと笑う。
「何言ってんですか、もう。良いです、今日は帰ります」
「えー、帰るのー？」
「急に子供っぽくならないでくださいよ」
一は椅子から立ち上がってコートを羽織った。
「……私からは、とにかく気を付けてとしか言えないわ」
「あなたは、『円卓』なんですか？」
奇襲をかけたつもりだった。不意を衝いた質問で、エレンがどんな反応をするのか見たかったのである。
「ふふ、内緒よ」
やはり敵わなかった。

タルタロスを辞してすぐ、こちらに向けて頭を下げ、手を振る人が見えた。一は手を振って返そうか迷って、結局は何もせず小走りで近づいていく。

「お帰りなさいませ、マスター」

「……何やってんだ？」

ナナは一の体を舐め回すように見た後、薄く笑んだ。

「マスターがこちらにいらっしゃると聞いたものですから、お迎えに上がろうかと」

「ずっと、そこにいたのか？」

「ええ、あちらの警備の方たちとお話を……はっ、まさか嫉妬してくださるのですか？　ご安心を、私は一途なメイドですから」

一はちらりと後ろを見る。タルタロスの警備員が一たちに手を振っていた。

「……お疲れさま。ナナ、今日はバイト休みだったっけ」

「午前中はマスターと同じでお休みをいただいております。午後からは、神野さんたちと私たちが交代ですね」

「ふーん。じゃあな、俺は一旦帰るから」

「お供します」しなくて良い。一は嫌そうに手を振って追い払おうとするも、ナナはにこにことして全く動じていなかった。

「マスターのお昼ご飯を作らせてください」

「えー、一人でゆっくりさせてくれよ」

「私の事は空気とお思いください。でも本当に無視されると辛いので、たまには構ってください」

存在感のある空気宣言である。

「ところでマスター、南駒台の方々はどうなったのですか。あれから、私は事の顛末を聞いていないのです」

「あー、ヒルデさんとシルトは謹慎処分になったんだってさ。別に、それ以外は変化なし」

「温い処分では？　磔刑にして火炙りの後、斬首をしてもまだまだ生温いと思いますが」
「おお、こわいこわい」
　処分と言うか処刑だった。ナナの物騒な発言を聞き流して、一は手と手を擦り合わせる。
「南の戦力はまたもやダウンですね。この調子で潰れてくれないものでしょうか」
「つーか、オープンしてないのに問題が起こり過ぎ。他人事ながら心配になってくるよ」
「それに比べて私たちには戦力アップときたものです。実は、神野さんの武器が完成したのですよ」
「そうなのか。そりゃあ、良かった」
　そう言う一はどこか不安げである。ナナは彼の表情に目ざとく、心配そうに一を見つめた。
「何かご不満な点でもありましたか？」
「いや、ただ……」
　武器は覚悟だ。戦場に行き、そこで敵を打ち倒す。神野はその資格を手にしてしまったのだ。もう、後戻りは出来なくなる。
「……ただ、アレだ。羨ましいだけだよ。新しい武器なんて、かっこいいじゃないか」
「マスターにも、後々プレゼントをお渡しする機会があるかと思います。それまでは我慢してくださいね」
「ああ」
　武器を望んだのは、覚悟を決めたのは、戦場を選んだのは神野自身なのだ。何を言ったところで、過ぎた事は終わった事である。
「楽しみにしとくよ」
　新たな武器が神野の力になってくれれば良い。どうか慢心せず、道具を扱うのは人間なのだと、それを忘れないで欲しい。一はただ、それだけを願った。

さく。ぐさ。ずば。ざくり。
物を切る時に生ずる音は様々だ。聞く者によってそれは変わる。
十人十色、多種多様にごった返すものなのだ。
「布都御魂（ふつのみたま）、知ってるかい？」
「……聞いた事ぐらいは」
神野はオンリーワン北駒台店の店先で、初対面の男から長々と話を聞かされていた。
その男はオンリーワン近畿支部の技術部、天津と名乗っている。
ナナの生みの親との事だが、彼女を訪ねるならともかく、自分を、それも突然尋ねてきた理由が神野には分からない。
「日本神話において、建御雷神（たけみかづちのかみ）が葦原中国を平定した時に用いた霊剣だよ。その後、高倉下が新武天皇に渡したとされる……素晴らしい力を秘めた剣だね」
前置きは殆どない。
『君が神野君？』
『はい、そうですけど、えっと、あなたは』
『僕は天津。ナナの父親だよ。オンリーワンの技術部に勤めてる。で、君はフツノミタマって知ってるかい？』
いきなり、いつの間にか始まっていたのである。神野はただただ頷くしかない。
「なら、経津主神（ふつぬしのかみ）は？」
「聞いた事もないです。って、あの、これって何の話なんですか？」
「まあまあ、若い内から焦っていても仕方がないよ。話を聞いてくれたまえ。で、フツヌシノカミってのはね、刀剣の威力を神格化した神なのさ」
刀剣と聞かされれば、少しは興味が湧く。神野は天津の続きをじっと待った。
「フツ。これ、何の事か分かるかい？」
「ふつ、ですか？　……仏様？」

「んー、残念。正解はね」
天津はスーツの内ポケットからカッターナイフを取り出す。どうしてそんなものを持っているのか神野が尋ねる前、
「こう」
彼は、カッターナイフで宙を切り裂いた。が、何が切れるわけでもない。何かを切ったという、その動作を真似ただけである。
「こういう事。フツってのは、刀剣で物がぷっつりと断ち切られる様を表しているんだ。つまり、フツヌシノカミは刀剣の神様でもあるし、そもそもが、フツノミタマを神格化したものとも言われている。だから、フツノミタマは神様と同格なのさ。分かる？」
「は、はい。何となく、凄いって事が」
「神話、伝承の刀剣って、数が多いよね。僕も迷ったんだよ」
「迷ったって……？」
天津はカッターナイフを懐にしまうと、困ったように頭を掻いた。
「君、覚えていないのかい？　僕たちにお願いしただろう？」
めぐりの悪かった頭に血が廻り始める。神野は息を呑み、縋るように天津を見つめた。
「察しがついたようだね。そう、君に頼まれていた君の武器、完成したよ」
「本当ですかっ？」
「ああ、僕たちは仕事に対して嘘を吐けないからね。それで……ああ、もう釘付けって感じだね。うん、このジュラルミンケースに、君の武器が入っているんだ」
天津は足元に置いてあったケースに視線を向ける。
「やはり、日本人には日本の剣が似合うと思ってね。フツノミタマ、それが君の新しい力さ。一つ、勘違いして欲しくないのはオリジナルではないってところだけど」
「オリジナル？」
「まあ、鹿島神宮から持ち出す訳にはいかないし、アレは既に骨董品の域にある。実際に武器としては使えないよ。心配しなくても良

い。本物ではないけど、本物以上だよ」
　ケースを開く。そこからは、黒い箱のようなものが現れた。剣とはいささか離れ過ぎではないか。そんな、不安げな神野を見て天津は薄く笑む。
「心配しなくても良いと言ったじゃないか」天津は、箱についた取っ手のような部分を握った。それを持ち上げると、グリップのついたロープがだらりと垂れ下がる。
「君、死霊のはらわた、悪魔のいけにえは見た事ある？」
　名前だけで判断するに昔のホラー映画だろうか。見た事がなかったので、神野は素直に頷いた。
「そうかい。残念。でも、チェーンソーは知ってるだろ？」
「……あ」
　どこかで見た事があると思ったら、天津が持っているのはチェーンソーの、柄に当たる部分である。
「まさか、俺の武器って……」
「ははっ、いやいや、それはないよ。実際、チェーンソーなんかじゃ人間は切れないからね。……見ててくれ」
　天津はグリップを強く引っ張る。
「……あれ？　っと、一度じゃ……このっ」
　何度もグリップを引っ張る内、甲高い駆動音が轟いた。神野は思わず耳を塞ぎ、周囲を確認する。
「うん、成功だ。こうやってグリップを引っ張ると、クランクシャフトが回転してエンジンが始動する訳だね。勿論、スターターとクランクシャフトはワンウェイクラッチを介して結合済みだよ。これは当たり前かな。で、こうやって何度も引っ張る。その度に出てくるから。伸び切るまで引っ張って。あ、音は我慢してよ。ああ、引っ張り過ぎには要注意だ。いっぱいまで引っ張っちゃうと、ロープが戻る時、危ないからね。ゆっくり、そっと戻してくれたまえ」
　説明は聞こえていない。
　グリップが引っ張られ、エンジンが駆動する度に、柄の部分から

姿を覗かせるものに、神野の心は奪われていた。
　それは、鋸などではない。一切の反りが見られない、まっすぐな刀身だ。
「刀身だけで二メートルはあるから、出し切るまでにちょっと時間は掛かるけど。威力は、申し分ない」
「かなり重いんじゃないですか？　それ、思うように振れないと思うんですけど」
「いや、まあ、重いけど、それでも出来る限りの軽量化はしてある。強度重視で作ったから、そりゃ普通の得物よりは重量あるよ。でも、君なら振れそうだね」
　天津の手はぷるぷると震え始めている。
「ここが、技術屋の限界体力さ」格好付けて言うも、神野はリアクション出来なかった。
「仮に上手く振れなかったとして、多少の誤差は関係ないね。当たれば、まず致命傷は避けられないだろうから。見てみなよ、この刀身。凄いよ。肉を抉るのは当たり前、骨までかるーく持ってくよ」
　見れば分かる。ある種冗談だろう。これは果たして武器と呼べるのか。刀剣と呼べるのか。危うい域にまで達している。
「ウチのミスのせいで完成が遅れたけど、その分、技術部の粋を集めたつもりだ。こうして、一応はそこの長たる僕が出張ってきたのも分かるだろう？　見たいんだよ、自分たちの作ったものを託す、その人間ってのをね」
　にっこりと微笑まれる。神野はフツノミタマを見遣り、手を伸ばし掛けた。
「……本当に、こんなものをもらっても良いんですか？」
「ん？　勿論だよ。僕たちはこういうのを作るのが仕事だ。そして、これを使うのが君たち勤務外の仕事だろう。はい、持ってみたらどうだい」
　差し出されたフツノミタマを凝視して、神野は手を伸ばす。
「この剣、またの名を平国剣（ことむけのつるぎ）というんだけどね。一振りすれば国中

を平和にするって、そういう意味が込められてる。……君にも、この国を平和に出来ると良いね」

神野は頷き、フツノミタマを掴んだ。しっかりと、その手中に収めたのだ。

ご飯を作ってくれるのも、掃除をしてくれるのにも不満はない。だが、やはり落ち着かない。居候の糸原は家事など滅多にしない。と言うかしない。なので、一以外の誰かが彼の部屋で働いている事が、一にストレスを与えている。こたつで寝転がるだけのくせに、ナナがいては気が休まらないとも思ってしまうのだ。

「ちょっと出てくる」

「……では、お早いお帰りを期待しております。あと少しで、シフトに入らなくてはなりませんから。遠出はご遠慮くださいね」

「あいよ」

ナナは一緒に行きたいと言おうとしていたのだろうが、目の前の家事を投げ出すのを躊躇ったのである。尤も、一はそこに付け込んだのだが。

ともあれ、一は僅かに自由な時間を得られた。少しばかり気が軽くなるも、行く当てはない。彼はアルバイトに間に合うように、その辺りをぶらつこうと思った。

そして、彼と出会った。

路地裏に座り込んだ彼は口にソーセージを銜えている。どこで手に入れたのか、美味そうにそれを食んでいた。

「……よう」

「ん。ああ……」

食事を邪魔されたせいか、物憂げに顔を上げるのは灰色の毛をした犬である。否、彼は犬ではなかった。コヨーテである。久しぶりの再会に、一の頬が緩んだ。

「良いもん持ってんじゃねえか」

「欲しいのかい？」
「いらねえ」
コヨーテは残りの肉を丸呑みして、満足そうに喉を鳴らした。
「久しぶりだなリトルボーイ。どうだい、その後嬢ちゃんとは？」
「いや、それがだな……」
コヨーテはまだ知らなかったらしい。一は暴力を具現化したような少女の話をする。コヨーテは目を瞑って口を挟まずに話を聞いていた。
「ミーが新しい餌場を探している間にそんな事が起きていたって訳かい。随分とスリリングな経験をしたものじゃあないか。エレクトリカルなパレードよりも楽しそうだ」
「アトラクションで済むならそれで良いよ。こっちはマジ、リアルに殺されそうだったんだからよ」
「ま、嬢ちゃんが無事なようで何よりだ。……しかし、とんでもないモンスターだな。狼男が可愛く見えるぜ」
「全くだよ」一は溜め息を吐いてみせる。
コヨーテはゆっくりと寝そべり、ぱたぱたと、尻尾で体を叩いた。
「そいつに比べりゃ、ミーのキャッチしたソレなんざ大した事ないな。クラッカーでも鳴らして歓迎してやりたい気分だぜ」
「……ソレがいるのか？」
「ん、ああ、気付いてなかったのか。これだから人間ってのは困る。今後の為にも鼻を鍛えた方が良い」
「壁にしこたま打ち付けろってか」
「は、そりゃあ良いな。是非そうしてくれ、ペーストされたユーの顔を見て、ミーは腹を抱えて笑うとしよう」
犬のくせに自分よりも舌が回る奴だ。一は返す言葉に窮して、動き続ける尻尾に視線を遣る。
「……お前、さっきから何やってんだ」
「家賃を払わない不届きものを追い出してるのさ」
「ただの蚤だろ。つーか、犬だよな」

コヨーテはぴくりと眉をつり上げ、一を見据える。
「ミーは犬じゃない。誇り高きコヨーテだ。勘違いしてたら痛い目に遭うぜ」
「痒い目に遭ってる奴が言うか。風呂っつーか、水浴びくらいしろよ。どっかあるだろ。水溜まりとかさ」
「ミーを何だと思っていやがる」
「獣が何を言うか。つーか、何、マジでソレが出たの？」
あくびして、退屈そうにコヨーテは首肯する。一はがっくりとうなだれた。
「出過ぎ。ついこないだも出たんだぜ。神様ってのはえげつねえよ」
「神の与えたもうた試練だと思いな。ハレルヤ、アーメン。尤も、ミーは無神論者だけど」
「へらず口を。で、どんなんが出たんだよ。何か、弱っちいソレなら助かる」
「さあ、知らないな。ただ、臭うぜ。酷く臭う」
お前が風呂入ってないだけじゃないのか。野暮な突っ込みを入れようとして、一はやっぱりやめておく。
「獣の臭いだ。それも、かなり強い。隠そうとしても無駄、いや、隠していないらしい。気をつけろよリトルボーイ、相手は愚鈍な馬鹿か、よほどの力自慢らしい」
「……近いのか？」
コヨーテは鼻を鳴らして口角をつり上げた。
「まだ遠い。この街には、今晩にでも来るんじゃないか」
「近いじゃねえかよ。うわ、マジか。俺の命も今日限りなのか……コヨーテ、手伝ってくれよ」
「ごめんだね。リトルボーイに付き合うなら、ハムを括り付けてサファリバスから降りた方がマシだ」
「人でなし！」
「ミーは人じゃない。ま、頑張りな。ナイターでも見ながらだが、心から応援するよ」

一は舌打ちしてポケットから煙草の箱を取り出す。
「……吸うのかい？」
「副流煙を食らえ」ライターで火を点けて、たっぷりと紫煙を吸い込んだ。久方ぶりの能動的な喫煙に、一は少しだけくらりとする。
「ああ、うまいわ」
「キャンディでもしゃぶっていた方が健康的だと思うぜ」
「この歳でか？　……ふう。何か久しぶり」
思っていたよりも辛くない。むしろ、今まで吸わなかった事が不思議でしょうがない。一は肺の隅々まで行き渡るようにイメージしながら煙草を吸った。
「逃げるかい？」
「何で？　別に逃げねえよ」
「何だか、少し見ない間に変わったじゃないか。良い事でもあったのか？」
「煙草がうまい」
「はっは、そりゃあ良い事だな！」
笑い、コヨーテは四肢を伸ばす。蚤が痒くて、彼は地面に転がった。

天津から受け取ったジュラルミンケースの中には、新たな武器、フツノミタマが入っている。使い方も全て教わった。心構えも済んでいる。後は、出番を待つだけなのだ。

我知らず、神野の口元は歪んでいる。バックルーム、自分に宛がわれたロッカーの前にケースを置くと、彼はようやくになって笑っていた事に気付いた。

「神野、さっきの技術部はお前に何の用事があったんだ」

こちらを向かないで、店長はパソコンのディスプレイを見つめたままである。

「俺に渡したいものがあったんで、あ、これっす」

ケースを持ち上げてみせると、店長は興味深そうにそれへ視線を遣った。

「それが、お前の武器なのか」

「フツノミタマって名前らしいです」

「ほう」店長は呟き、くつくつと喉の奥で笑う。

「良く出来た話だな」

何が店長のツボを刺激したのか分からなくて、神野は曖昧に笑っておいた。

「神野、お前に相応しいモノらしい。大事にして、なくしたりするなよ？」

「当然っすよ」

「そういう事なら、遅れたのも仕方がないな。しかし立花が一人で不安がっている。早くフロアに出てやれ」

頷き、神野は手早く制服を着て、バックルームを辞す。立花がレジカウンターから手を振るのが見えた。

「けん君、遅刻」
「悪い悪い。でも、ちゃんとした理由があるんだって」
「あ、もしかしてさっきお店に来てた人？」
「おう、そうなんだ」
自然と笑みが零れてしまう。神野は気を引き締めようとして、自らの頬を両手で挟むようにして叩いた。
「立花、俺も戦えるからな」
「……？　えーと、どういう、意味？」
「ま、楽しみにしてろよ」
これで、立花と肩を並べられる。彼女がこちらを見てくれる。それを思うだけで神野の胸は躍った。今までは、勤務外としての肩書きがやけに重たく感じられていたのである。他の人たちに守られて、殆ど何もしていなかった自分が、歯痒くて仕方なかった。だが、フツノミタマを手に入れた。アレさえあれば、どんな魔物とだって戦える。胸を張って、言える筈だ。
「うん、分かった、楽しみにしとくね！」
自分はこんなにも、汚かったのか。こんなにも、欲が張っていたのか。立花の笑顔を独り占めにしたい。誰にも、奪われたくなかった。

午後になってやってきた一たちと交代して、神野と立花は休憩をもらった。夕方からは一を含めた三人でシフトに入るらしい。少しだけ、神野の気は重くなった。
「一が嫌いか？」
店長に尋ねられたが、神野は強く否定した。それとこれとは別問題である。一の仕事ぶりや同情を買わない方がおかしい私生活から考えても、彼を嫌う事はありえない。嫌いなのはきっと、自分自身だ。卑しく、小さく、情けない自分を嫌っている。
「それじゃあ、また後でね」

母親と出掛けると告げた立花と分かれ、神野は一人帰路に就く。早く、チャンスが欲しかった。フツノミタマを振るって、立花に少しでも認められたい。

思えば、彼女の太刀筋を初めて見た時から、焦がれ、憧れていたのだ。人間離れした動きは微塵も捉えられなくて、気付いた時にソレは死んでいた。こんな人間がいるのかと、自分の世界が塗り替えられたのである。剣さえ握れば誰よりも強いと思っていた神野剣は、あの日に殺されてしまった。だから、部活を辞めた。剣道を続けていれば、得るものはもっとあったろう。しかし、それでは追いつけない。もっと先へ。もっと前へ。もっと、ずっと向こうへ。立花真に並びたい。出来るなら、彼女を守りたい。せめて、立花に背中を預けられると思わせるくらいには信頼されたい。

「……兄さん？」

顔を上げると、向かいの道から心配そうにこちらを見つめる者がいた。神野の一つ下の妹、姫である。彼女は学校の制服の上から黒いコートを羽織っていた。神野が去年、お下がりとして姫に渡したものである。

「アルバイトの休憩ですか？」

「ああ、姫は……塾の帰りか」

「いえ、私も休憩です。兄さんが戻ってくると思ったので。お昼、まだですよね」

「作ってくれるのか？」

「洋食で良ければ、ですけど」

「オッケオッケ、文句なんかないよ」

神野と姫は並んで歩き始める。

姫は、高校が休校になってからは駅前の私塾に通い、マンツーマンでのレッスンを受けている。神野は兄として少なからず心配したものだが、先の事を考えて勉学に励む妹はやはり自分よりもしっかりしているのだと気付いて落ち込んだ。

「学校、来年から始まるらしいな」

「ええ、そうみたいですね」
『館』の襲撃を受けて、生徒だけでなく教師も大勢死んでいる。最近の駒台と言えばソレの被害が多く評判が悪い。教師の数が揃わず、また、生徒数も減少の傾向にある。また、同じ事が起こらないとも限らないのだし、陰惨な事件のあった地から離れていった者もいた。
「ま、始まったら始まったでどうにかなるか」
神野たちはこの話題について深く、長くは触れない。彼らの目の前で級友たちは死んでいった。まだ、全てを忘れられる筈がない。傷は未だ癒えず、剥き出しになった傷口はふとした弾みに広がり、熱を帯びてしまう。
「そいや、塾ってのはどんなだ？」
「塾は塾ですよ。お勉強するところです。兄さんにはあまり縁のないところかもしれませんね」
「そういうんじゃなくて、先生は良い人なのか？　だって、一対一なんだろ。変な奴だったらさあ」
姫はくすくすと笑って、右手に持った鞄を大きく振る。それを口元に持っていき、悪戯っぽく神野を見た。
「可愛い妹が心配ですか？」
「……心配だ」
「ふふ、講師は女の人ですよ。少し口は悪くて面倒くさがりですけど、優しい人です」
「でも、そういう趣味の女だって……うおっ」
真っ赤になって鞄を振り上げた姫から逃れ、神野は息を吐いた。
「変態っ、兄さんはアホですか！」
「っと、うわ危ないな！　冗談だって！」
姫は落ち着こうと何度も息を吸い、吐く。その行為を繰り返すうち、立ち上った真っ白い呼気も消えていった。
「もう、先生はおばあちゃんですよ。私なんか孫みたいに扱われてます」
「そりゃ良かった。……挨拶とか行かなくても大丈夫か？」

「心配性ですね。大丈夫ですよ。それより、私は兄さんが心配ですから」
　また始まった。神野は表情には決して出さず、げんなりとする。
「勤務外なんて危険なアルバイトは辞めてください。即刻、今すぐ。父さんたちに黙っていられるのも限度があります」
「分かってるよ」
「何がですか。本当なら、兄さんが入院した日に全て言おうと思ってたのに。兄さんがあんまりにもうるさいから、お情けで黙っててあげたんですよ」
　それも分かっている。神野は溜め息を一つ吐いた。
「いつ死んでしまうともしれない。そんなところに家族のいる、私の気持ちが分かるって言うんですか」
「……辞めるつもりはない。俺は、もう、嫌なんだよ」
　守れなかった。がしゃどくろから発せられた怨嗟の声はまだ耳に残っている。皆を守りたかった。握った竹刀は、やはり軽かったのだろう。命を掛けるには、命を賭すには、命を奪うには、あまりにも軽かった。
「誰かがやらなきゃ駄目なんだよ。矢面に立たなきゃ、誰も守れない。皆、死んじまう」
「兄さんがやらなくったって代わりは見つかります。兄さんがやる必要はないんですよ」
「俺は俺だ。代わりがいてたまるか。……俺は、お前も守ってやりたい。危険だけどさ、でもな」
　頭を撫でられた姫は俯き、肩を震わせる。
「兄さん、兄さんは誰に守られているんですか」
「……え」
「兄さんの事は、誰が守ってくれるんですか。そんなの、納得いきません。兄さんだけが危ない目に遭う必要なんか……！」
「……心配ないって。俺より凄い人もいるし」
　言い掛けて、神野は息を呑んだ。フツノミタマを手に入れた。し

かし、武器をもらった、などと口にすれば姫は尚更怒るだろう。往来だからこそ声を押さえているが、臨界点を越えた彼女は烈火よりも凄まじい。

「まだまだやりたい事はある。死ぬつもりはないよ。そうだな、姫が結婚して、俺は式場で祝辞読んで泣くの。それまでは死ねないな」

「じゃあ、私が死ぬまで死ねませんね」

「はあ？　お前、まさか結婚する気ないのかよ」

「高校一年生を捕まえて……。あ、いえ、でも、もう結婚は出来るんでした」

神野は満足そうに頷く。

「兄に晴れ姿を見せてくれ」

「兄さんが結婚する方が先でしょう。それまでは心配で心配で、そんな事考えられませんね」

「何言ってんだよ、自分の事だけ考えてりゃ良いんだ。好きな奴とかいないのか？　とりあえず顔見せろ連れてこいよ、ぶっ飛ばすから」

笑顔で物騒な事を言い放つ神野に、姫は呆れるしかない。

「そんな人いません。いたとして殴るのを前提の兄に紹介する筈ないでしょう。それよりも、頼りない兄さんである事を自覚して欲しいですね。そうすれば、私だって色々と考えられますから」

「大丈夫だって」

「じゃあ、お昼ご飯は兄さんにお任せします。食事の用意だって、大丈夫ですよね？」

「……いや、それとこれとは話が違うんじゃないか」

「同じです」きっぱりと断言し、姫は神野を強く睨みつける。彼はぐうの音も出なくなり、後はもう折れるタイミングを見計らうしかなかった。

神野たちと交代してフロアに立ってから一時間が経過した。一は

ふと、忙しそうにモップを掛けるナナを見た。彼女はその視線に気付いてにっこりと微笑む。
　穏やかだった。
　何事もなく、何も考えず、思わず。ただ時間だけが漫然と過ぎていく。これが普通で、日常で、あるべき幸せの形なのだろうか。そんな事を思った時点で、一の穏やかな時間を終わった。
「マスター、マスター」
「なーにー？」
　店内には一たち以外に誰もいない。少しばかりうるさく声を張り上げても咎める者などいなかった。
「神野さんの武器、ご覧になりましたか？」
「武器って、前に言ってた新しい奴の事か？　いや、見てない。もう出来たの？」
「当然です。オンリーワン技術部の科学力は駒台一ですからね。その武器、中々のスペックを誇るらしいですよ。どうですかマスター、これを機に勤務外を辞退するというのは」
「……まだ言うか」
　モップを掛ける手を止め、ナナは静々と頷く。
「マスターが勤務外を止めれば、私の心労は一つ減るのです。神野さんに後を託して、私たちは二人仲良くレジを打っていましょう、そうしましょう」
「俺はともかく、ナナは戦闘に駆り出されるだろ」
「拒否します。その為ならナナは戦闘行為も辞さないつもりです」
「戦うのが嫌なのに戦うのか？　元も子もねえじゃん」
「内向的なロボットアニメの主人公しかり、ですね」
「最近はそればっかな気がするけどな」
「では、マスターが熱血になりますか」
　嫌だった。一はおでん鍋の蓋を開けて、立ち上る湯気を顔で受ける。
「熱いより冷たい方が良い」

ナナは作業に戻りながらも、一の話に耳を傾けていた。
「夏はお嫌いなのですか？」
「夏っつーか、夏の太陽が。無駄にぎらぎらしやがってさ、盛ってんじゃねえっつーの」
「では、十万馬力のナナがロケットを抱えて太陽を打ち砕いてきます」
「うん、よろしくー」
言いながら、一はあくびを噛み殺す。仕事の殆どをナナが奪ってしまったので、彼には目下する事がない。相手をする客も中々やってこないのである。しかし、自ら何かしようという気にもなれなかった。する事がないなら店周辺の掃除にでも行けば良いのだろうが、激務が続いたせいかのんびりとしていたいとも、彼は思う。
「ソレ、もうちょっと考えてくれれば良いのにな。こっちの都合関係ないんだな、本当」
「はあ、しかしマスター、お言葉を返すようなのですが、マスターが首を突っ込まなければよろしいのでは？」
「性分なんだよ、多分」
「文句を言うのはどうかと思いますけれど」
「それは間違いなく性分」
文句を言って弱音を吐いて愚痴を垂れ流す。そうでもしなければやり切れなくて、そうしない人間は果たして人間なのだろうかと一は思った。
「不平不満を口にしないでどうすんだよ。ナナだって何かあるんじゃないか。店長に言いたい事とかさ」
「いいえ、私はありません。こうしていられるだけで幸福なのですから、不平不満などとは、神罰が下ってしまうでしょう」
「下せるもんなら下してみろってんだ」
昼食を食べ終わった後、神野は椅子に座ったままぼんやりとして

いた。テレビを点けてはいるが、何も頭に入ってこない。姫が洗い物の為に水を流す音しか入ってこない。

学校が始まるまではこんな日々が続いていくのだろう。アルバイトでレジを打ち、時にはソレを討ち、それ以外には殆ど何もしない。……戻れないかもしれないと、神野はうっすらと感じていた。あまりにも刺激が強過ぎる。血の香は、肉を切断した感触は、圧倒的な殺意と敵意と戦場の空気は、強烈過ぎた。既にあてられている。非日常に足を突っ込み首を突っ込んだ。それは彼の日常に溶け込んでいる。学校が始まったところで、古い日常に埋没出来るだろうか。もう、物足りなくなっているのかもしれない。

「兄さん、夕方からもアルバイトへ行くんですか」

「ん、ああ、そうだよ。晩飯、適当に食っといてくれ。帰りは十時回るし」

「私も塾がありますから、帰りは十時より少し前になると思います。構いませんよ、兄さんの分も用意しておきます」

姫は洗い物を終えてエプロンを脱ぐ。彼女は冷蔵庫の中身を確認して、納得したように頷いた。

「悪いよ、疲れてるだろ」

「一人分も二人分も手間は変わりませんよ」

「そうか？　じゃあ、悪いけど頼むな」

「ええ、頼まれました。……兄さん、アルバイトは忙しいんですか？」

神野はテレビの音量を落として、ううんと低く唸った。

「あんまり。お客さんも多くは来ないし、今日は三人シフトだしな。むしろ仕事の奪い合いになるかもしれない」

「ふうん、そうなんですか。兄さんは仕事、出来るんですか？」

「馬鹿にしやがって」

「だって、家にいる兄さんを見ていたら、とてもじゃないけど真面目に働いているなんて……」

くすくすと笑い、姫は神野の対面にある椅子を引く。

「しっかりやってる、つもりだよ。まあ、こないだはすげーミスしちまったけど」
「人間は失敗を繰り返して成長するのです。同じ失敗を繰り返すのはどうかと思いますけど」
「言うようになったじゃないか」
「先生の影響かもしれませんね」
ふうんと呟き、神野は頭に手を遣りながら立ち上がった。
「仮眠してくる。五時前になったら起こしてくれないか？」
「睡眠するつもりじゃないですか。……ええ、ええ、ちゃんと起こしてあげますよ。その代わり、一発で起きてくださいね」
何を一発なのだろう。聞くのは躊躇われて、神野は礼だけ言って自室に戻った。

下せるものなら下してみろとは言った。しかし、売り言葉に買い言葉を返すのがいささか早過ぎではないだろうか。これが天罰なのか、あるいは自分たちを成長させる為の試練なのか。どちらでも大した違いはないので、二度とくだらない事は口にすまいと一は誓った。
「ソレが出たそうだ。犠牲者は二人、年のいった夫婦らしい。良かったじゃないか、どうせ老い先も短いんだから」
「ひでえ」
「真理を口にしたまでだ」
バックルームに集められた一、立花、神野の三名は店長の話を聞いて締まりのなかった表情を引き締める。
「店長さん、今度のソレは？　どんな奴なの？」
立花の問いを受け、店長は情報部から送られてきているレポートに目を向けた。
「牛人間、だそうだ」
「猪の次は牛ですか。なんでしょう、鍋ものばっかですね」

「だったら次は鴨か、豚か……うーん、私は鴨派だな」
「ネギ背負ってたら大笑いですね」
一と店長には余裕があるように見えて、ない。少なくとも一には欠けらだってなかった。彼が軽口を叩くのは半ば自棄になっているからである。
「ま、牛頭か、ミノタウロスってところだろうな」
「ごず？　ねえねえ、けん君、ごずって何だろね」
「……さあなあ」
立花は年齢の割に無防備だった。彼女は神野に顔を近づけて無邪気に笑っている。良いぞ、もっとやれと一は内心で応援していた。
「牛の頭で牛頭だ。馬の頭に馬頭もいる。二匹揃って地獄の獄卒だ。片方だけ出てくるってのは珍しい。得物から考えても、やはりミノだろうな、ミノ」
「んな牛肉の部位みたいに。って、ソレが得物持ってんですか」
「半分は人間だからな」
店長は煙草に火を点けて紫煙を吐き出す。
「剣とかかなあ？」
何気ない立花の呟きに神野がぴくりと反応していた。
「両刃の斧だ。……ミノタウロスはギリシャの怪物だ。クレタ島の迷宮、ラビュリントスの最奥に閉じ込められている。そいつを食わせる為に生け贄も捧げられていたらしい。ま、最後には殺されるんだが」
「迷宮ねえ。その牛男は駒台のどこに現われたんですか？」
「目につくものを手当たり次第に壊しながら、北部の商店街へと向かっているそうだ。住民の避難は間もなく完了する」
「……あの辺、結構入り組んでますね。物陰から鉢合わせなんてごめんですよ」
一は思う。迷宮から出てこられたというのに、わざわざ入り組んだ場所に進むソレを。帰巣本能とでも呼ぶのだろうか。長く迷宮にいたせいで、ミノタウロスは似たような環境を探しているのかもし

れない。何にせよ、皮肉っぽい話ではある。
「心配するな、破壊された看板やらが道しるべになっているだろうよ」
「あの、店長」神野が遠慮がちに口を開いた。店長は彼に目を遣る。
「今回は、誰が行くんすかね」
「……誰が行きたいのかは分かっているがな」
罰が悪そうな表情で神野は俯いた。
「誰が行きたくないのかも分かってまーす」
一は手を上げ、自信ありげに言う。
「……立花、お前はどうしたい？」
「えっ、ボク？　えーと」
立花は少し考え、にっこりと笑って一の腕を掴む。
「三人で行こうよ！　皆がいた方が心細くならないよ、絶対」
「えー、俺はやだなー」
「えーっ！？　行こうよ行こうよ行こーよー」
一は、無責任ながら戦いたくなかった。どうせなら立花と神野に任せて、二人の仲が進展するのを陰から応援していたいのである。
それに、三人全員を出動させるのは店長が許してくれないだろう。
「じゃあ三人で行ってこい」
「はーいっ、やったあ、皆一緒ね！」
一は驚きを隠しきれなかった。と言うか今にも店長に詰め寄ろうとしていた。
「ぜっ、全滅したらまずいじゃないですか。それに、レジは誰が打つと……」
「ナナが残ってるから、別に良い。レジも堀を呼ぶから構わん。それよりも、お前ら油断はするなよ。もう一度入院したいってんなら別だがな」
「マジっすか！？　マジっすか店長！　マジっすかー！」
混乱と落胆とが入り交じった一のボキャブラリーは著しく乏しくなっていた。

「相手は武器を持った狂暴な牛男。ぶちのめすイメージはしっかりな。はい、準備急げ。急いで出勤だ」
店長は手を叩いて一たちを煽る。立花と神野は制服を脱いで、各々の得物をしっかりと握り締めた。
「……うわっ、けん君の武器が箱になってる！」
「箱じゃねえって。楽しみにしとけって言ったけど、早速機会が来るとはな」
「良し、十時までに片をつけろよ。一、お前は少しだけ残れ」
「マジっすかー」一の頭に空き缶が命中する。
「だらだらするな馬鹿が！　お前らもさっさと行け！」
「いっ、いってきまーす！」
とばっちりを恐れた立花たちは駆け足でバックルームを飛び出していく。
「……で、何でしょうか」
一は制服をハンガーに掛けてコートを羽織った。既に、彼の手にはアイギスが握られている。
「全員を行かせたのは、仲良くだらだらさせる為じゃないぞ」
「分かってますよ。でも、俺はあくまでフォローって事で良いんでしょう？」
「良く見といてやってくれ。あれからまだ一週間と経ってないんだ。剣が上手く使えるとはいえ、まだ十代のガキだからな。いつ折れてもおかしくはない」
「十代舐めてるとえらい目に遭いますよ、店長」
店長は喉の奥で笑みを噛み殺した。一は苦い顔でそれを受け止める。
「それより、ミノタウロスについてもっと何か、こう、ないんですか」
「何かとは何だ。抽象的に喋るな、もっと具体的に言え」
「弱点ですよ、弱点」
「知るか。第一、まだミノタウロスだと確定した訳ではない。余計

な情報を与えて混乱するのも馬鹿らしい話だ。その場その場、臨機応変に動いてナンボの勤務外だろうが」

一理あるが、面倒くさがっているだけではないのだろうか。一は疑いの眼差しを店長に向けるが、彼女はその視線を涼しげに受け流す。

「やばくなったら逃げ帰ってきても良い。とにかく、まずは相手の正体を確かめろ。出来るなら、確かめるまでもなく殺せ。それが一番手っ取り早い」

「分かりましたよ。そんじゃ、行ってきます」

「ああ、行ってこい」

店を出た一は先行した立花たちに追いつこうと早足で商店街へと向かっていた。が、彼女たちは少し先で一を待っている。嬉しいが、後で店長に怒られないかが心配だった。

「はじめくーん、店長さんと何をお話してたの？」

「大した事じゃあないよ。それよりも待たせたみたいでごめんね、二人とも」

「問題ないっす。それより一さん、商店街でやり合うんすかね」

神野の問いに、一は腕を組んで思考する。

「どうだろ、完璧、向こうの出方次第だと思うけど。ただ、被害がでかくなるのは避けたいね」

「狭いところで戦っても、前の奴みたいな事になると思うんですよ」

「ああ、なるほど」神野が言っているのは、ムシュフシュ戦での失敗の事だろう。一たちにしてみれば、数の利を活かせず、地の利を活かされた苦い戦闘だった。

「路地の奥まで入り込まれてちゃあ面倒だね。広いところまで引っ張ってこられりゃ良いんだけど」

三人は歩きながら、待ち構えているであろうソレについて話し合う。

「牛男って、何なんだろうね。斧を持ってるって言ってたけど。……強いのかな？」

ソレに殺されたのは老人が二人。相手の強さを計るには頼りない物差しである。

「実際、見てみないと分からないか。二人とも、無理は駄目だからね。誰か一人でもやばいって思ったら、その時点で逃げに移るよ」

「でも一さん、俺たちがソレを何とかしなきゃ、街の人たちは……」

「気持ちは分かるけど、俺たちだってその街の人間だよ。生きてりゃどうにかなるんだし、命を大事に。うん、これでいこう」

慎重なくらいが丁度良いと一は思っていた。何せ、本人が分かっていないくらいに神野は浮かれている。否、浮かされているのだろう。彼が手に入れたという、新しい力に。頼もしいが、過信は出来ない。道具ではなく、使う者に不安があったのだ。

同じ月を見てたのに

大した準備も出来ないままに避難させられたのだろう。商店街に近づくにつれて通行人の数は減り、耳を蝕むような静寂さが一たちを包み込み始めた。そのくせ、人家に明かりだけは点いたままなのである。さっきまでそこに人がいたのだ。そして、今はソレがいる。

「あ、はじめ君、あそこの壁が壊れてるよ」

「うわ、ざっくりいってんな」

神野が顔をしかめた。一たちはソレの痕跡を辿りながら、少しずつ歩を進めている。道中、看板が真っ二つにされ、ブロック塀が破壊され尽くしているのも見てきた。

「接近戦は避けたいけど……」

一は立花たちの得物に視線を遣る。

「神野君、それって、飛び道具？」

「俺は剣しか使えないっすよ」

「まあ、仕方ないか」

しかし、一は悲観的にはなっても絶望的にはならない、と。そう、高をくくっていた。何せこちらはソレの名前を知っている。人身牛頭のソレならば、ミノタウロスか、牛頭か。そのどちらかだろうと店長は言っていた。必要なら両方試せば良いだけである。動きさえ止めれば、どんなパワーファイターだろうと脅威は感じられない。メドゥーサで止めて、剣士二人が切り刻めば済む話なのだ。

「あっ、猫だ！　おいでおいでー、ああっ、逃げられちゃった……」

緊張感の欠けらすら見受けられない。が、一はその事について心配はしていない。立花も、神野も、戦闘となれば自分よりも頼りになる。いざ戦うとなれば、即座に気持ちを切り替えてくれるだろう。その時、あたふたとしているのは年長の自分だけかもしれない。そ

う考えると、彼の気分は少しだけ沈む。
「ボクお腹空いてきたなあ」
「立花、お前さっきから自由過ぎないか？　もっと真面目にやれよ」
「お腹が空いてたら戦えないよ？」
「腹パンパンになるまで食っても戦えないだろ」
「そっ、そんなに食べないもん！　意地悪。けん君は意地悪だ」
「そっちは食い意地が張ってるよな」
「ばかーっ！」
　一は薙ぎ倒されたフェンスを確認して、ソレが進んだであろう道を選んで歩き続ける。生々しい道しるべに辟易としながらも、同時に感謝していた。どうやら、ソレは使う頭を持ち合わせていないらしい。
「はじめ君、けん君がボクをいじめるんだー。何とか言ってよ、ボク、ストレスで死んじゃう」
「立花さんは難しい言葉を知ってるなあ、偉いぞ」
「え、へ、そっ、そうかな？　えへへー」
　適当にあしらって、一は明るくなってきた方に目を向けた。
「……アーケード、電気がそのままだ」
　嫌でも目に入る。自分たちがそうなのだから、行く当てのないソレの気が引かれるのも無理はないだろう。
「いますかね」
　声を潜めて神野が言う。一はゆっくりと首を横に振った。
「分からない。だからこそ慎重に行こう」
　それぞれが得物を握り締め、息を殺して進む。先頭の一は物陰に身を隠しながら、顔だけをそっと覗かせた。煌々と照らされたアーケード、シャッターが閉まっている店が殆どではあるが、営業中の札を提げたままになっている店もある。通りには倒れた自転車と背の高い観葉植物があるだけで、他には何も存在していなかった。
「はじめ君、何もいないんじゃないの？」
「多分。ソレは、どこだ」

商店街には荒らされた形跡がない。一たちを導いてきた、ソレの作った目印がここにはなかった。
「気配っつーか、嫌なもんは感じられないっすね」
「路地に隠れてんのか？」
「どれか、お店に隠れてるかもしれないよ？」
物音は立てられない。アーケードは見通しが良過ぎる。何かが動けば、すぐに気付く、気付かれてしまうだろう。
「釣りますか？」
神野が手頃な大きさの石を拾い上げる。それをなるだけ遠くに投げ、近くに潜んでいるであろうモノを引っ張りだそうと言うのだ。
「……でもさ、いきなり出てきたらすげえ怖くないかな？」
「ほ、ホラー映画だねっ」
「けど、ここでじっとしてたってしょうがないっすよ」
その通りだが、一にも心の準備というものが必要だった。彼は長く息を吐き出し、前方にあるアーケードの出口を睨み付ける。
「良し、やってくれ」
「了解っす。真ん中らへんに投げ込むんで」
石を握り、神野は物陰から僅かに身を曝け出す。オーバースローから放たれた石はアーケードのほぼ真ん中、書店とアクアリウムショップの間に落ちていった。瞬間、高く乾いた音が一たちの耳をつんざく。心臓が跳ね上がり、全身が強ばった。石は床を滑りながらからからと音を引いていく。しかし、静謐が戻ってきて暫くしても、反応は返ってこなかった。
「……びびったあ」
一がほっと息を吐く。いつの間にか立花がしがみつくように体を預けてきていたので、彼は無言で彼女をひっぺがした。
「直接確かめるしかないっすかね」
「焦らしやがって。これじゃあマジにホラーじゃんか」
アイギスを振って、一は物陰から出る。覚悟を決めてアーケードに足を踏み入れた。高い天井と眩い照明に目が眩みかける。

「抜いといた方が良いかな。けん君、本当にその箱で戦えるの？」
「箱じゃねえって」
立花は肩から提げていた竹刀袋を外して、日本刀を鞘から抜いた。上方からの人工的な光を受け、刃はきらきらとそれを反射する。神野もフツノミタマの刀身を伸ばそうかと考えたが、この状況で響くエンジンの駆動音が心臓に悪そうだったので、やめておいた。
一はアーケード右側、一つ目の路地に向かって歩いていく。正直、そこを覗くのが恐ろしくて仕方がなかった。
生唾を飲み下して、そっと身を乗り出す。アーケードからの照明が届かない為に、先は暗くて見通しが利かない。赤い提灯がぽつぽつと見える。居酒屋が立ち並んでいるらしく、鳥肉の焼けるような匂いがして一の鼻孔をくすぐった。
「駄目だ、まるで分からない」
「暗いけど、先に進むの？」
「それは嫌だなあ……とりあえず、他の場所を全部見回してから――」
「――――――――――！」
背筋が凍る。鼓膜が震える。心臓は早鐘を打つ。頭の中が空っぽになって思考がからからと回り始める。
全員がその声を聞いた。けだものの鳴き声は未だ尾を引いている。足が竦む。全員がその姿を見た。痺れを切らして出てきたのか、獲物の臭いを嗅ぎつけたのか、アーケードの出口、深い闇と濃い影が歪んでいるのを。離れているのに、強烈な重圧を感じる。人外の存在が場を侵食して埋め尽くそうとしていた。
「出やがった」
ライトに照らされたソレの姿が明らかになる。首から下は確かに人だが、まともな体格をしていない。妙に発達した筋肉と二メートルにも達する巨躯。頭は更に歪だ。魔の証明、そこからは二本の角

が生えている。そして、ぬっと伸びる長いモノが目を嫌でも引きつけた。両刃の斧が鈍く輝く。てらてらとしたぬめりは先刻吸った犠牲者の血である事は間違いない。

牛男とは、随分と可愛らしい言い回しだと一は思った。パーティグッズの牛型のマスクを想像していたのだが、アレは違う。完全に皮膚と同化しているのだ。ソレの黒黒とした毛並みが、荒い呼吸で小刻みに揺れていた。牛の頭が人の頭と挿げ代わっていると言うよりも、狂暴な牡牛が二本足で立っている、そう言われた方がしっくりとくるだろう。距離感が完全にずれていた。ソレが斧を振るえば今にも両断されてしまいそうな殺気を感じている。

「はじめ君、どうするの？」

ミノタウロスか、牛頭か、それともっと別の何かか。往くのか退くのか、誰が先頭に立つのか、ここで戦っても良いのか別の場所に誘導すべきではないのか戻って指示を仰ぐのはどうか戦うのならどこまでだ誰かが怪我をしたら退くのか誰かが動けなくなるまで殺し合うのか「一さん！」神野が叫び、一の前に立つ。

「やるしかないんすよ！」

フツノミタマから伸びたグリップを引っ掴み、神野はソレを見据えた。

「……っ、前には俺が出る」

言い聞かせるように、一は口にする。アイギスを広げて、ソレを見遣った。

どるん、どるん、どるん、音がする。神野がグリップを引く度にエンジンが駆動する。フツノミタマの刀身、真の姿を見せ始める。

「それが……」

一と立花は息を呑んだ。大きく、長く、分厚い、剣と言うよりかは鉄の塊のような直刀が現れていく。顕現する。フツノミタマ、神の剣が。

「おおおおおおおおおおっ！」

「ブモオオオオオオ、オオオオオオオオッ！」
神野の叫びに呼応するかのようにソレが足を踏み出した。動きは鈍重で、それだけが救いだと一は思う。
「一さん、俺が行きます」
「なっ、ちょっと待って！」
行かせても良いものか、一瞬の判断を迷った。神野は自らよりも巨大な剣を両手に握り、ソレに向かって駆ける。その後ろを立花が追った。

ソレの動きは重い。触れればただでは済まない、両刃の斧は恐ろしく見えるがこけおどしに過ぎないだろう。
当たれば死ぬのはお互い様だ。こちらにはフツノミタマ、神の剣、自身に相応しい新たな力が備わっている。互いに二の太刀は必要ない。先に斬った方が勝ちで、斬られた方は屍を晒す。
「おおっ」
フツノミタマを試すには打ってつけの相手だと、神野は内心で喜んでいた。丁度良い。これで立花も認識を改めるだろう。一は嫌いではない。だが、彼は積極性に欠けている。背負っている者、守るべき者を思えばここで退く事は出来ない筈なのだ。土壇場になり、慌てふためいていては何も出来ない。誰も守れない。
だから、自分を見ろ。神野は立花を一瞥し、前方に目を向けた。
ソレはもう、眼前にまで迫っている。
「下がれ神野君！」
一の声は聞こえていた。しかし、背中を見せる余裕はない。何より、一番に駆け出した自分が彼女の前でおめおめと引き下がれるものか。
判断、行動。この一撃に全てを賭ける。

ソレの動きは決して遅くなかった。徐々に速度を上げていたのである。そうして、先陣を切った神野に肉薄した。

フツノミタマが振り上げられる。両刃の斧が風を切る。二つの得物は衝突せずに、肉の切り裂かれる音がやけに大きく聞こえた。一は立ち止まり、アイギスをソレに向ける。

「うっ、ああっ！　『止まれミノタウロス』！」

止まらない。ミノタウロスと呼ばれたソレは止まらない。神野の胴に斧が食い込み両断される。鮮血がすぐ後ろにいた立花の視界を赤く染めた。彼女はふと、アーケードの天井に目を遣る。そこを、神野の上半身が浮いていた。ソレが吠える。雨が降る。真っ赤な水が彼らを濡らす。水音、鈍い音、潰れる音、壊れる音、終わる音。鳴り止まず、彼らを満たす。

「戻れっ」ソレが次の獲物を見定める。ふらふらと、足元も視線も覚束ない愚か者を確認する。斧が横薙ぎに振るわれた。が、立花は落ちてきた臓器を拾い上げようとして身を屈める。その上を斧が一瞬遅れて通過していった。

「立花さん！」

立花を庇うように一が出る。彼はソレの攻撃を受け止めるも、何かに足を滑らせて転んでしまった。それは人間の腸である。認識した瞬間、彼は顔を引きつらせた。頭の中が真っ白になって、簡単に吹き飛ばされる。商店街の床を転がりアイギスを手放した。

「ブモッ、ブモ――――！」

血を浴びて肉を浴びたソレは興奮して斧を振り下ろした。甲高い音を立てて床が砕け散る。立花はゆっくりとした動作で首をめぐらせた。立ち上がった一がアイギスを掴むのが見える。そこで彼女は、自分がいつの間にか刀を手放していた事に気付いた。

刀はどこだろうと立花は視線を動かす。辺りには血溜り。二つに分かれた神野の体。散らかる内容物。転がるフツノミタマに寄り添うようにして、彼女の得物があった。

「あ、取らなきゃ。取らなきゃ」

立ち上がった立花の頭を一が押さえる。二人は床に伏せる形でソレの攻撃を躱した。服は血塗れになって、少しずつ、ゆっくりと染み渡っていく。

「あ、は。はじめくぅん、見てよ」

立花は庇われたままであらぬ方角を指差した。彼女はこの場に相応しくない、とろけたような、弛緩しきった表情である。

「けん君が二つになっちゃった」

一は思わず目を瞑った。ここでこのままこうしていたい。全てを忘れて見てみぬ振りを通したかった。だが、背後に迫るソレの気配からは逃れられない。

「ぐっ、あ、おおおおっ！」

酸鼻極まる状況下、血の香が一の体中を充たしている。

「あああああ――――――――――！」

一は座ったままで、ソレは両刃の斧を振り下ろす。彼はアイギスで直撃を防いだが、どうにも体勢が悪かった。両肩に圧が掛かり、全身が苦痛で軋んだ。それでも逃げられない。ソレは狂ったように斧を押し当て続けるのだ。

「『止まれ牛頭！　止まれミノタウロス！』」

せめて立花が動いてくれればどうにかなる。しかし彼女は動かない。刀を拾った後は、不気味に笑むだけだ。一に何度も話し掛け、とっくに絶命している神野に呼び掛け続ける。

壊れているのだ。

立花の心は今、壊れてしまっている。まともに機能していない。

否。一は思う。壊れているのは自分なのかもしれないと。ついさっきまで生きていた同僚が、友人が死んだのだ。立花の反応はむしろ当然ではないか？　身を守ろうと冷静に立ち回る自分の精神が頑丈なのか、欠陥品であるのかが分からない。死を悼む間も、ソレを憎む間も、絶望する間もない。

「いっ……てえ」

壊れられたなら、狂えたなら。一は尚も執着し続ける。生きたい

のだと足掻き続ける。
　ソレが斧を再び振り上げた。チャンスだと、一は渾身の力、最後に残った力を体中から集約させる。立花を抱いて地面を転がり、足腰を踏張って一息に立ち上がった。風が背中を切る。ソレの攻撃が空振ったのか確かめる暇はない。
「走って！」
「う、あ……」
　立花の瞳に感情は宿っていない。しかし短い言葉、一の必死な気持ちが伝わったのか彼女はよたよたと走りだす。
「ブモォオオ――――！」
　アイギスを拾う余裕はなかった。一は立花の背中を押して逃げる。ソレが追い掛けようとしているのは分かっていた。死が、すぐそこに迫っている。強烈な嘔吐感が喉元まで込み上げていた。彼はぐっと堪えて、
「そのまま、走って」
　立花の背を軽く押す。彼女は振り返る事なく走り続けた。
　死ぬ。死ぬ。殺される。ソレに殺されて自分は死ぬ。立ち向かう事も諦めて、不様に背中を見せ続けて。
　だからどうした。神野は既に死んでいる。一はコートのポケットから煙草の箱を取り出した。ライターを取り出そうとするが、手が震えて上手く摘み出せない。彼は諦めて、ソレに向き直る。両刃の得物、ソレが斧を振り下ろした。
「……なんだよ」
　呆気ない。ここで死ぬのか。一は口の端をつり上げて、何となく腕を掲げた。それは何かに突き動かされて取った行動ではない。ただ、そうしなくてはならないと、漠然と感じたのである。斧と煙草の箱がぴったりと重なる。一秒と経たない内、一は頭から切断されるだろう。
「――――――――――！？」
　だが、そうはならなかった。斧は一どころか、煙草の箱すら切断

出来ていない。彼とソレ、双方に衝撃が走る。腕を通して伝わる重圧に一は目を見開いた。瞬間、ソレの体が後方によろめく。振り下ろされていた斧は僅かに跳ね上がり、一は軽々と弾かれた。冷たい地面に火照った頬がぴたりと張りつく。

「……あ？」

何が起こった。死を覚悟していた筈の一は呆気に取られてしまう。だが、結論は一つだ。信じられない事ではあるが、彼を守ったのは小さな煙草の箱なのである。ソレは一を警戒しているのか、すぐには動かなかった。鼻息を荒くして彼をねめつけている。

一はふらつきながらも立ち上がり、忘我の表情で歩き始める。持っていた箱は、彼が強く握り締めたせいでぐしゃぐしゃに潰れていた。

「アイ、ギス……？」

アイギスは一の手元にない。血溜りの中にある。だから、彼が握っているのはただの箱、その筈だった。しかし、一には分かる。これもアイギスなのだと。これがアイギスになっていたのだと。

北は言っていた。アイギスとは概念に近いものであり、特定の、決まった形を持っていないのだ。使用者の精神によってその姿を変える。アイギスはあくまで一の中にあるのだ、と。

その事実を改めて確認したところで、何も変わらない。ソレは死なず、自分は死なず、立花は死なず、神野は死んだ。今更どこに向かうと言うのか。それでも、一は歩くのをやめない。彼がアーケードを抜けても、ソレは追い掛けようとはしなかった。一にはもう、どうでも良かった。

誰もいない街の中、一と立花は再び出会った。

彼女は愚直に走り続けていたのである。一はその背中を見つけて、立花が転倒するまで追い掛けた。彼女に手を差し伸べるが、その手を掴まれる事はなかった。

「風邪、引くよ」
立花は地面に倒れたまま、身じろぎ一つしない。一は見兼ねて起き上がらせようとした。彼女はその手を払い除ける。
「……けん君、死んじゃったの？」
一の胸が締め付けられた。言葉が出ない。声すら出せない。尋ねるまでもないだろう。答えるまでもないだろう。体を切断され、血液を、臓器を撒き散らして生きていられる者などいないのだから。
「答えて。教えてよ」
立花がまともになったのかどうか、今の一では判断がつかなかった。
「はじめ君、何か、言ってよ」
よろよろとしながら立花は起き上がる。彼女は刀を捨てて一に詰め寄った。
「けん君は、死んだの？」
いたたまれない。早くここから消え去りたい。一は立花の顔を見られずに俯く。彼女は何を望んでいるのだろう。何を欲しているのだろう。無慈悲な事実を告げられたいのか、酷薄な嘘に慰められたいのか。
「店に帰ろう」
多分、何を言っても無駄なのだろう。

情報部からの報告を虚偽とも真実とも受け取れなかった。だが、血塗れになった一たちの服とここにいない神野を確認して店長は全てを理解する。
一はアイギスを持っておらず、立花の刀は真新しい。戦う前に逃げ出したのだろう。ソレの強さが予想を越えていたのもあるが、神野の死が彼らから意欲を奪ったに違いない。脱け殻のようになった二人を見て、店長は何を言うべきか迷う。
「……情報部から、ある程度の報告は聞いている。お前らは帰って

も良い」
「店長……」
「何も言わなくて良い。立花、帰られそうか？」
一はまだ冷静だが、立花は危うい。話し掛けても反応はない。ぼんやりと、彼女は足元に視線を落としている。
「一、立花を中に。立花新を呼ぶ。流石に、迎えには来るだろう」
頷き、一は立花の背を優しく押した。促された彼女はゆっくりと、何かを確かめるようにして足を進めていく。バックルームに入った瞬間、立花は糸が切れたように、その場にへたり込んだ。
「立花さん、椅子があるから」
「良い。それより刀を取り上げとけ」
店長の指示に従い、一は立花の手から刀をそっと外す。彼の手に、ずしりとした重みが加わった。
「新さん、どうやって呼ぶんですか」
「……名刺をもらっている。お前も、もう戻って休め」
「いや、何だか気が抜けてて。立花さんたちが帰るまではいますよ」
「そうか」短く言って、店長は受話器を取り上げる。彼女は机の引き出しから名刺を出して、少しだけ躊躇う。
――――決定的だな。
もう二度と出すまいと思っていた死者が、出してしまった死者が両肩に圧し掛かっているような気がした。

「店員さんは悲しくありませんの？」
無論、悲しい。悲しいに決まっている。当たり前の問い掛けに答えるつもりなどなく、一は口を閉ざした。
「やはり、お強いのですね。あなたは真とは違います。涙一つ流さずに、前だけを見据えているんです」
やる事は、考える事はある。停滞は諦めを呼び込む。苦しくても辛くても、あがいて、もがき続けなければならない。

また、アイギスが通じなかった。ミノタウロスでも牛頭でもないのか。もっと別の条件か。ソレはまだ生きている。アーケードに陣取ったままなのか、とっくに迷宮のような場所を抜け出しているのか。

「では、後の事はお任せしますわ」

新は立花を連れていった。忘れていた疲労感に身を苛まれ、一もアパートに戻った。血に汚れた服はクリーニングに出しづらい。彼は着替えて、着替えを持ってすぐに部屋を出る。誰にも会いたくなかった。コインランドリーに行き、丸椅子に座って回る洗濯物をひたすらに見つめる。

客は自分以外に誰もいなかった。誰かが置いていった雑誌を手に取るも、ページを開く気にはなれない。早く、風呂に入って、眠りたい。起きたら、起きたら、何をすれば良い？　また、店に行くのか。また、ソレと戦うのか。また、誰か死ぬのか。

気は昂ぶったまま、ちっとも休まらない。頭の中はやけに冷め切っていて、一はようやく、神野剣が死んだのだと理解する。胴体を裂かれて、死んだのだ。

死は平等である。

誰にでも、いつか必ず訪れる。その点に関しては間違いなく平等だと言えた。

死は平等ではない。

遠い異国で誰かが死んでも、それは自分からは外れた話で、取るに足りない、心の片隅にだって留めないような事だろう。だが、自分に近しい、より近しい者が死ねば話は別である。親しければ親しいほど、その人間の死は重く圧し掛かる。感情が、思考が奪われていく。

何もかもを投げ出して、逃げ出した。あのアーケードには、あまりにも多く、重いものを置き去りにしてしまっている。悲観にくれる暇はない。立花があの様子では、明日に立ち直る事は不可能だろう。自分がやらなくては。そんな思いが一の内を占めていく。鉄の

ように熱く、どろどろとした血が流れるのを彼は感じていた。
何故、泣けないのだろう。大切な同僚が死んだ。自分より若い者が逝った。なのに、涙一つ流せない一一という男は、なんて不孝なのだろう。
一たちは神野に何を残したのだろうか。
神野は一たちに何を遺したのだろうか。
彼は、死の間際に何を思っていたのだろう。山ほど見てきた筈の誰かの死が、一の胸につっかえたままだった。

かよわきハートビート

誰もいない街の上、陽が差し込み始めた夜明けすぐ、件のアーケードを見下ろす場所に彼はいた。ドレッドヘアーの情報部、氷室である。彼は携帯電話片手に、路地裏に進んでいくソレを見ていた。

「ソレは駒台北部の商店街付近から動かないみたいだな。奥へ奥へ、袋小路をめざしてるみたいだ」

氷室はソレから、アーケードへと目を移す。

「死体の回収もそろそろ良いだろ。早く運んでやらなきゃ、今度は残らないぜ。遺族に下げる面もなくなるってもんだ。……あ、俺？　関係ねえもん」

開かれた惨劇は未だ幕が下ろされていない。何もかもが昨夜から、そのままなのだ。吹き曝しになった死体の片足はソレに食われている。氷室とて出来るなら助けてやりたかったが、ソレと一戦交えるつもりはなかった。ようやくになって、ソレはこの場から立ち去ったのである。

「避難はさせたままだ。悪いが、当分はすし詰めの体育館で雑魚寝だよ。は、死ぬよりマシだろ？　……へえ、勤務外は北から出るのか。ま、後はよろしくって感じだけど」

彼が死んだ事については残念だと、氷室は思う。前途のある若い人間がこんな目に遭う世界を呪う。だが、無理に首を突っ込む事もなかっただろうに。彼は選べた筈なのだ。勤務外に関わらない事を。戦闘から逃走するのを。結局、自業自得なのだ。

「神野剣の遺族に連絡を。葬式は、まあ、今晩か。……は、俺？　だから関係ないっての」

眠れるし、腹も減る。生きていれば当たり前だ。身震いする。早朝の冷たさか、間近に迫った恐怖を思い出しての事か。

とにかく、一は今日も生きている。彼は布団を跳ね退けて、長い息を吐き出した。戦わねばならない。ソレの脅威は、今、この瞬間にも駒台を覆っているのだから。

目下、一が必要としていたのはソレの情報である。メドゥーサが力を発動しなかった理由を解明するのが生存への近道なのだ。

それから、神野の家族が少しだけ気になった。彼には確か妹もいた筈である。だが、自分が何か出来るのかどうか、そう問われては何も言えないのが真実だった。神野を生き返らせる事など不可能であり、遺族に頭を下げるのも筋が違っている気もする。精々、神野の家族の、行き場のない憤りのはけ口となる事ぐらいしか思いつかなかった。非生産的であり、殴られ、罵られる趣味もない。店長に今後どうするのか尋ねた方が良いだろう。そう判断した一は出掛ける準備を始めた。

「マスター……、おはよう、ございます」

「ああ、おはよう」

自動人形のナナからは疲れた様子を感じられない。しかし、昨夜から今までずっとフロアに立ち続けてくれたのだろう。

「大丈夫か？」

「あ、そんな、ありがとうございます。でも、ナナよりも、マスターはどうなのですか？」

「怪我ならしてないよ」

ナナは僅かに顔を伏せる。一も分かっていた。彼女はそんな言葉を求めていない。ただ、大丈夫だと言いたくなかった。自分でも驚くくらいに、いつもと変わらないのである。それが何だか腹立たしくて、悲しかった。

「店長に話を聞きに来たんだ。悪いけど、まだ手伝えそうにない。

ごめんな」
「勿体ないお言葉です。マスターのお気持ちだけ受け取らせていただきます。それから、その気持ちでナナはあと十年は戦えますっ」
ナナは神野の死をどう受け止めているのだろうか。悲しんで、悼んでくれているのだろうか。少しでも、感傷に浸ってくれればと一は思う。
「頑張ってくれ。……俺も頑張るから」
「……？　はいっ、がんばります！」

バックルームの空気が重たく感じられて、一は俯いてしまう。店長は彼を認めて、煙草を箱から摘み上げた。ライターを手で弄び、
「神野を遺族の許に帰した」
そう、告げる。
一は暫くの間、何も言えなかった。夢か幻か、そんな現実に縋っていた自分に気付いてショックを受けたのである。
「あんなもの見せて誰が喜ぶんだろうな。……一、神野の足な、ソレに食われていたそうだ」
まだ、これ以上の衝撃があったのか。底辺まで落ち込んでいなかった心を奮い立たせ、一は店長を見返す。
「神野君の家族は、何か言っていましたか？」
「さあな。実際に会ったのは私じゃあない。第一、あいつの家族が何を言うか、私たちに何を言うか、分かるだろう」
身内がソレに殺された。恨み辛みをぶつける相手は近くにいない。ぶつけたとして、ソレに言葉は通じない。やり場がない。
「……妹さんは、何か」
「いや、知らないな。本人に会って確かめるしかないんだろうが、その必要はない」
店長はゆっくりと紫煙を吸い込み、不味そうに吐き出す。
「神野の家族には近づくな。痛い目を見るだけだ。誰もがな」

「……式にも、ですか」
「どの面下げてだ？　勤務外、同僚としてか？　止めろ、誰も望んじゃいない。私らの位置を忘れるなよ。つまるところ、遺族にとっちゃ神野を殺したソレも、ソレを殺す勤務外も同じなんだ」
人を外れた身で、のこのこと何をするつもりだ。それでも、一には何一つ納得出来ない。
「病院にいる三森たちにも伝えている。神野の死は、勤務外やフリーランスにも広まっただろうな」
一はおもむろに煙草を取り出した。ぐしゃぐしゃになった箱から、無事だった一本を摘んで火を点ける。
「禁煙してたんじゃないのか」
「許しをもらえたんで。……とにかく、納得はいってないけど、分かりましたよ。今は神野君の家族とは関わりません」
店長は眦をつり上げる。
「今は？」
「いつかは向き合わなきゃいけない問題じゃあないんですか」
「お互い、一生顔を合わせない方が良い。そうに決まっているだろう」
「逃げてるだけじゃないんですか」
紫煙を吐き出し、一はそれを通して店長を見遣った。
「痛い目見るのから、嫌な目に遭うのから逃げてるだけでしょう」
「黙れ。オンリーワンの親心が分からんのか」
「大抵は、子は知らないんですよ、それ」
「何をしに来たんだ、お前は」
尤もである。一は短くなった煙草を店長の足元に落とした。彼女は嫌がらせに対して何も言わず、彼もまた何も言わなかった。
「ソレの名前、分かりませんか」
「……ミノタウロスか牛頭だと言った筈だ」店長はどこか投げ遣りに言う。
「牛の怪物、他に思い当たる奴はいませんか」

「知るか」
瞬間、一の頭に血が上った。
「言い方ってもんがあるんじゃないんすか？　仮にも店長なんだし、ソレの情報くらい集めといてくださいよ」
「知らんと言っている。気になるならお前が自分で調べろ」
ここでソレに関しての情報が得られないなら他を当たるつもりでいたのである。しかし、一は店長の態度が気に食わない。どうにも、気に入らない。
「その怠慢が神野君を殺したんだとは考えないんですか？」
「現場にいたお前が言える口か？」
店長もまた、一の態度が気に食わない。最初から気に入らない。だから二人は煙を挟んで睨み合う。
「出るな。関わるな。会うな。それは全部そっちの都合でしょうが」
「お前らの為でもあるんだぞ」
「そっちからすりゃあ俺たちは消耗品だろうとは思いますけどね。あんたの都合で動く駒じゃないんだって話ですよ」
「だったら偉くなってから物を言え。雇われの分際でかい口を叩くな」
「何とも思ってないんですか」
「主語を抜いて喋るな」
「神野君が死んだってのに、あなたはどうして……！」
「お前だってそうだろうが」
店長は短くなった煙草を一の足元に放り投げる。
「神野の為に泣いてやれ？　じゃあ、まずはお前が泣いてみろ」
泣けなかった。一は神野の死を悲しむよりも、ソレに対しての怒りよりも、その場を切り抜けて生き延びる事を考えていた。
「夕方からは一、お前がシフトに入れ。ご主人様なんだろ、メイドを休ませてやれ」
一は何か言いたげだったが、諦めたように息を吐き、分かりましたと頷いた。彼はバックルームを出て行き、その直後、電話が鳴る。

店長はすぐに受話器を取り、耳を傾けた。
『ウチの真を見ていませんか？』
「……知るか」

目覚め、何かに突き動かされるようにして予備のセーラー服に着替えた立花は新の目を盗んで、こっそりと部屋を抜け出していた。彼女は定まらない視線のまま、ぶつぶつと何事かを呟きながら歩く。勤務外専用のマンションの階段を一段ずつゆっくりと下っていく。
「……けん君、死んだから」
括っていないので、目の中にちらちらと髪の毛が入ってくる。それでも立花は気にした様子もなく、下っていく。
「お葬式、行かなきゃ」
テュールが『立花』の人間を切り捨てていったあの日、優しかった父親も、良くしてくれた親戚も、皆焼かれて灰になった。その時、自分は泣いていなかったかもしれない。母親は慰める事もしてくれず、ただ、炎に魅入られていたように思う。
「けん君、けん君」
彼は何を言いたかったのだろうか。
彼は何を思っていたのだろうか。
彼は自分に何を遺して、逝ったのだろうか。

神野姫がその報せを受けたのは、いつものように塾で女性講師からの授業を受けている時だった。彼女はそこから飛び出して、ひたすらに走った。通行人と肩がぶつかっても、信号を無視して、息を切らして必死に駆ける。もう、何もかも済んでしまった後だと言うのに、まだ信じられなくて、信じられる筈がなくて。
どうして、帰ってこなかったのか。連絡の一つもなしに兄が消えたとは思えなかった。

だから、家の前にいた見知らぬスーツの男と、泣き崩れる両親を見た瞬間、聡い彼女は全てを理解する。何故、兄が帰ってこなかったのかを。誰に殺されてしまったのかを。

恐らくは、あのスーツの男はオンリーワンの人間で、両親は彼によって仕事から呼び戻されたのだろう。朝出て行ったのと同じ格好をしていた父親は、オンリーワンの男の胸倉を掴み上げて喚き散らしていた。その気持ちは痛いほど分かる。だが、彼に罪はない。責任はないのだ。

「お父さんっ！」

「……姫」

姫の父親は男から手を離し、彼女の顔を見つめて、済まなさそうに頭を下げる。姫は、父親の白髪が交じった短い頭髪に老いを感じる事は今までになかった。だが、今になって初めてそれを思う。

「私は、何も知らなかった……！」

こんな事になるのなら、兄が勤務外になっていたのをもっと早くに報告すべきだったのだ。そうすれば、無理矢理にでも辞めさせられた。死ぬ事はなかった。誰一人、悲しまずに済んだのである。

「全て、私の責任だ」

「お父さん、お父さんは何も悪くないよ……」

誰に責がある。誰に罪がある。誰を責められる。誰を責めれば気が楽になる。神野を殺したのは言葉の通じない、感情の伝わらないソレなのだ。どれだけ恨んでも、いくら呪っても、その思いが届く事はない。きっと、この先行き場のない憤りを抱えて生きていく。打ち込まれた楔は家族に決定的な亀裂をもたらすのだろう。

「あっ、ああ……！　剣っ、剣！」

母親が兄の名を呼ぶ。その声に答える筈の人はもういなくて、それが分かって、姫は全身から力が抜けていくのを感じた。

勤務外に関わらなければ。

ソレがここに現れなければ。

「けん、君……？」

「……あなたは」
あの女さえ、いなければ。
烏の濡れ羽色をしたセーラー服と艶やかな髪。彼女の瞳に感情は宿っていないけれど、切れ長のそれは強い意志を有していたように思う。忘れるものか。いつしか、姫の四肢には力が戻り始めていた。どろどろとした熱に浮かされて、黒い感情に心が支配されていく。抗う事はしない。身を任せて、この身を捧げる。
「あなたが」
誰を責めれば。誰を恨めば。誰を呪えば。誰に、気持ちをぶつければ。
「あなたさえ、いなければ……！」
「え……？」
神野剣。
兄の身を失わせたのも、心を奪ったのも、何もかも、立花真のせいなのだ。
「姫……？」
母親がこちらを見ている。父親が呼び掛ける。オンリーワンの男は既にこの場から退散していた。存外、賢しいものだと思って内心で笑う。そして、立花が自分を見つめていた。何故、自分が睨まれているのかも分からなくて、媚びるような視線を向けている。その目で、兄を篭絡したと言うのか。
「ひめ、ちゃん？　え、あの、ボク……」
「呼ばないでください」
遮る。
「私の名前は、あなたに呼ばれる為にあるんじゃない。消えてください」
「どう、して？」
家族の手前、強くは出られない。沸々と煮え滾るものは内に流れている筈なのに、冷静にこの場面を見ている自分も中にはいて、姫の目頭が熱くなる。

「どうして？　あなたこそ、どうしてここに顔を出せるんですか？　どうして、平気な顔をしていられるんですか？　どうして、どうして、まだ生きているんですか？」

「姫！　いきなり何を言い出すんだっ、それに、この子は……」

思えば、両親の前で感情を露わにするのは初めてだったかもしれない。今までわがままを言わずにいられて、良い子を演じられてきたのは兄のお陰なのだ。彼の前でだけ、己を曝け出せたのである。もう隠さなくても良い。偽らなくても良い。平穏は壊れてしまったのだから野となれ山となれ。

「消えろと言っているんですよ？　あなた、言葉が通じないんですか？」

「あ、あれ？　あの、ひめちゃ――――」

「――――人殺し」

立花は伸ばし掛けた手を引っ込めて、凍りついた。

「あなたがソレを殺さないから、兄さんは殺された。あなたがこの街に来なければ、兄さんが危ない目に遭う事もなかった。あなたのせいで、兄さんは死んだ」

「ちっ、ちが……」

「違いません。あなたのせいで兄さんは死にました。あなたが兄さんを、殺した」

立花は何度も首を横に振る。違う。ボクじゃない。悪いのはソレだよ、と。そうかもしれない。いや、そうなのだろう。

姫は立花の頬を張り、とびきりの笑みを作った。暗く歪んだ、極上の憎悪を込めて。

「必ず、殺してあげますから」

両親に取り押さえられるまで、姫は立花を睨み続けた。立花は目すら逸らせず、まっすぐに向けられた敵意に震えていた。

手土産はいらないだろう。見舞いの花などもってのほかであり、

こうして顔を見せただけでも、むしろ向こうが礼を言うべきなのだ。
「ありがとうは？」
「ありませんよ」
ベッドの上でそっけなく返すのは黄衣ナコトである。彼女は一を瞥見した後、つまらなさそうに本のページを繰った。分厚い洋書を暫く見つめてから、
「何か用があるんでしょう？　勿体ぶらずにさっさと言ってはどうですか。時は金なり。あなたごとき人間があたしの一秒、ましてや一分を潰す権利はありませんよ」
本を閉じる。
「退院はいつになるんだ？」
「上から目線ですね。流石、一足先に娑婆に出た方は言う事が違う」
「娑婆言うな。別に、いつまでだらだらしてられんのか聞いただけだよ」
「あたしの勝手でしょう。あなたはあたしの母親ですか？　違いますよね、だったら勝手な物言いは避けていただきたいものです。著しくデリカシーに欠けていますよ」
今日も良く回る舌だと感心して、一はパイプ椅子を組み立ててそこに座る。
「あたしの許可を得ずに椅子を使わないでください」
「どこに座れってんだよ」
「空気なら、まあよしとしますか」
「中学の部活じゃねえんだぞ」
言って、一は懐からガムを取り出した。
「あ、あたしにも一つください。甘いもの、ここにいたら中々食べられないんですよ」
「そうなのか？　ああ、分かったから袖を引っ張るな」
奪い取ったガムをナコトは口に入れる。嫌そうな顔をして、彼女はすぐさま包み紙に吐いた。
「甘くねえじゃん！」

「ブラックだし」
「中学生じゃないんだからかっこつけないでくださいよ。もっと甘味を、甘味を口にしてはどうですか。ブラックなんか味がないのにっ、味がない食べ物は存在価値ゼロなんです。あなたみたいに」
「眠気覚ましだよ。俺だって味はある方が良い。甘いもんなら尚更そっちのが食いたい」
噛む度に嫌気が差してくる。そのお陰か、眠気は今の今まで訪れてはいない。ナコトの話を聞くなら、これくらいの対策は必要だろうと一は判断していたのだ。
「出ましたね寝てないアピール。『俺昨日は二時間しか寝てなくてさー、二時間だけしか寝れないってマジきっついよー、えー、それどこ情報よー？　俺が二時間しか寝てないってどこ情報よー？』って奴ですか」
「長い」ばっさり。
「長くないです」きっぱり。
「クソまずい病院食しか口にしていないあたしの身にもなってください。食べ物の差し入れはデフォでしょう。ああ、先輩の作ったクッキーと紅茶が懐かしい……」
「そんな甘いもの好きだったっけ？」
ナコトは小さく首肯する。
「読書は頭を使いますから。疲労した脳を回復させるには甘いものを摂るのが一番なんです。ちなみに、あなたの事はさっきのガムよりも好きですよ」
「わーい嬉しいなあ。……疲れるなら本読まなきゃ良いじゃん」
「あたしにとって本は空気と同じです。あなたは空気なしに生きられますか？　無理でしょう？　そういう事ですよ、低能」
一、歯軋り。
「もう良いや。黄衣、聞きたい事があるんだけど」
「……変態！」
「まだ何も言ってねえだろ」

「『もう良いや。黄衣、聞きたい事があるんだけど』」
「それだけで変態扱い！？」
ナコトは大きく首肯した。
「本来ならここに来た時点で通報ものですよ。ガンジーですら助走して通報するレベルの変態です」
「助走いらねえじゃん」
「いーりーまーすー。助走いりますよ。まああなたは女装して喜んでますけどね。除草剤散布されてナパーム弾投下されてもおかしくないド変態ですから」
「エコロジーの真逆をいく女だな」
「二酸化炭素を無駄に生産して資源を食い潰すクズをこの世から消すんですよ？　これがエコロジーでなくて何になりますか」
そろそろ一は頭が痛くなってきた。年下の小理屈は聞いていて面白いものではない。
「黄衣、そういう話なら次の機会に聞いてやる。今日は、マジで違うんだ。聞いてくれ、いや、聞かせてくれ」
「ふうん。なるほど、そっち方面の話ですか。あたしを便利な図鑑みたいに扱っているのは気に入りませんけど？　切羽詰まっているようなので、助けてあげても良いかなあ。なんて」
「ミノタウロス、知ってるよな？」
ナコトは目を丸くさせた後、ゆっくりと瞑って、一を馬鹿にするような笑みを見せる。
「知らない人がいるんですか？　分かりやすい怪物ですから、ゲームや漫画と引っ張りだこの存在じゃあないですか。ギリシャでもまだメジャーな名前ですよ」
話が早くて助かる。やはり、彼女のところに来たのは正解だと一は思った。
「そんな事をわざわざ聞きにくるなんて。拍子抜けすると同時にあなたには落胆です。本当にあたしより年上なんですか？　脳の皺の数で言うなら、あなた幼児と変わらないですよ」

やっぱり不正解だったと思い直す。面倒でも図書館まで出向いた方が良かった。
「教えてくれるのかくれないのかどっちなんだよ。時間がねえんだ、無理なら無理ではっきり言ってくれ」
「……あたしよりも優れた解説役がどこにいると？　よござんす、ミノタウロスについて余すところなくお教えしましょう」
ナコトはベッドから起き上がって一を指差す。彼女は得意気だったが、言ってて悲しくなるような台詞だと気付いているのだろうか。
「何から聞きたいのですか。とは言いません、今までの経験から考えてみても、あなたは駄目な学生の見本ですからね。まともな質問は用意していない筈です」
一は頷き掛けたが、ちっぽけなプライドが邪魔をした。
「まずミノタウロスとは……」
「あ、悪い。あんまり深くは話さなくて良い。欲しいのはさ、弱点か、名前くらいなんだ」
「えー、喋らせてくださいよー。あたし、話ながらじゃないと考えがまとまらないタイプなんです」
「まあ、そういう事なら。でも、なるべく手短にお願いします」
一は頭を下げる。ナコトは彼の後頭部を叩きそうになった。
「……あ？」
「すいません、つい。話を続けましょうか」
「始まってすらいないけどな」
茶々を入れる一を一睨みして、ナコトはこほんとわざとらしい咳払いをする。
「忘れてました。あたしにソレについての話を聞きたいって事は、ソレが出たって事で良いんですよね？」
「あれ、聞いてなかったのか」
「基本的にベッドの上から一歩も動かない生活ですからね。看護士、特に炉辺という方は良く話し掛けてくれますが、そういった事に関しては口が堅くなりますし」

「あー」一は納得した。駒台に来たばかりで、しかも無駄に攻撃的なナコトに友人がいるとは思えない。
「今、何か余計な事を考えませんでしたか」
「いや、でもアレだな。もっとお前には優しくした方が良いような気がしてきたわ」
「余計なお世話です！」
本を投げつけようとしたナコトだが、結局は枕を一に投げつける。彼はその枕を避けて、壁に蹴飛ばした。
「ゴォォォル！」
「もう一度入院してはいかがですか？　今度は脳外科……精神病院あたりに」
「いや、遠慮しとく。俺ナースより喪服派なんだよね」
蹴飛ばした枕を拾い上げてナコトに放り投げる。一は椅子に座って、困ったように頭をかいた。
「ソレは出たよ。まだ生きてる」
「まだ？　その言い方だと、一度は交戦したように聞こえますが」
「したよ」
戦ったと言うよりも、殺され掛けただけの話ではある。実際、殺された者もいる。逃げ出して、捨て置いて。
「神野君って覚えてるか？　確か、カトブレパスん時も、『館』の時もいたろ」
「いたような、いなかったような。殆ど、顔すら合わせなかったような気もしますが」
「ああ、そうか」
ナコトは覚えていないのだ。街の人間も、彼の存在すら知らない。ソレと戦った者を、街を守ろうとした者を、誰も、覚えていない。
「ああ、そうか」
「その、神野さんがどうかしたんですか？」
「殺されたんだよ」
言ってから、投げ遣りな口調になっていたのに気付く。一は何だ

か虚しくなり、そうなったのは自分のせいなのに、誰かのせいにしたくなった。
「お気の毒にと言っておきましょう。勤務外になったのなら、覚悟はしていた筈ですから」
殺す覚悟も殺される覚悟もしていたと言うのか。一は何も言えず、長い息を吐く。
「仇を取るおつもりですか」
「ソレは放っておけないしな」
「……妙に冷めていますね。あなたにしては珍しい。それとも、一晩経って頭が冷えましたか。何にせよ、無駄に熱血するよりは良い事です。冷静さを欠いたまま戦っても、後を追うだけですから」
「そのつもりはねえよ。だから、こうしてお前に頭を下げてんだ」
「いつ下げました？」
ついさっき。
「そう言う事なら協力は惜しみません。あたしはあなたに借りがありますからね」
「だったら最初から素直に返してくれれば良いのに。つーか、もうそんなん気にしなくて良いぞ」
「します。時間は、まだ大丈夫なのですか？」
一は頷く。夕刻まではまだ余裕があった。
「少し長くなるかもしれませんね。あなたにとってはつまらない話になるかもしれません。が、掛かっている事の重大さを理解していれば充分に我慢の出来る問題です。文句を言わず、余計な茶々を挟まず、しっかりと学んでくださいね。……返事は？」

VISTA

クレタ島の王、ミノス。

ミノスは王位継承の証として、海神に雄牛を海から送るように祈った。その牛は後日生贄として捧げる事を誓い、その祈りは聞き届けられた。しかし、送られた白い雄牛はあまりにも美しかったのである。ミノスはその牛を生贄に捧げるのを躊躇い、別の牛を代わりに差し出した。

無論、海神に見抜けぬ筈はない。激怒した神はミノス王の妻、パシパエに呪いをかけた。呪いをかけられた結果、彼女は件の白い雄牛に強烈な恋心を抱いてしまう。

人と牛。一切通じず、合切が伝わらない、何一つ実らない恋だ。

パシパエは稀代の工匠、ダイダロスに相談する。彼は大きく頷いた。その思い、見事遂げさせてみせましょう、と。

ダイダロスは牝牛の木像を作成し、その中を空洞にした。牝牛の皮が張りつけられたその像の中にパシパエが入り、彼女は雄牛と交わる事に成功した。その結果、パシパエは身ごもり、牛頭人身の怪物、ミノタウロスが生まれた。生まれてしまったのである。

ミノタウロスは成長するにつれて乱暴になり、誰の手にも負えなくなった。ミノス王はダイダロスに命じて迷宮、ラビュリントスを建造させる。

ミノス王はミノタウロスの食料としてアテナイから九年毎に七人の少年少女を送らせる事にした。三度目の時、アテナイの英雄、テセウスが立ち上がる。彼は自ら生贄を志願してクレタに到着した。

テセウスは、そこでミノス王の娘、アリアドネと出会う。彼女は英雄に一目惚れして、彼を死なせたくないが為に、脱出不可能とされた大迷宮の脱出方法をダイダロスに尋ねた。

方法とは単純なものである。アリアドネはテセウスに短剣と魔法の毛糸を持たせた。迷宮の入り口にいる彼女が毛糸の端を持ち、片側の端をテセウスが持つ。ミノタウロスを隠し持っていた短剣で倒した彼は、魔法の毛糸を手繰り寄せて迷宮を脱出する事が出来たのだ。

「簡単に言ってしまえば、ミノタウロスに関するお話はこんな感じでしょうか」

話し終えたナコトはふうと息を吐き、一の感想を待った。

「牛とヤったって、すげえ話だよな」

「……あなた、やばいですね。びっくりするくらい最悪です」

「まあ、俺も言おうか言うまいか迷ったけどな」

ナコトの反応が見てみたかったとは言えまい。一は何食わぬ顔でガムを噛む。

「何か、もっと他に思った事はないんですか」

「んー。じゃあ、なんでミノタウロスに生贄なんかやったんだろうな」

「ほう。あなたにしては面白い質問ですね」

「だってさ、脱出不可能な迷宮なんだろ？　そこに閉じ込めたんなら、別に怖くも何ともないじゃん。乱暴で手がつけられないって言っても、ミノタウロスが餓死するの待てば良いんだしさ」

わざわざ生贄を送る意味が一には分からない。

「では、あなたはどう考えていますか？」

「アレかな、父親としての情って奴？」

「違います。全く、センチメンタリズムに溢れたお方ですねあなたは。ミノス王は、ミノタウロスを処刑の道具として利用したのですよ。何かおかしいと思いませんでしたか、どうして、自国から生贄を集めなかったのかを」

「そりゃ、自分の国の奴を生贄として使うには気が引けるもんじゃ

ねえの？」
　ナコトは首を振る。それから、にやりと口角をつり上げた。
「王たるもの、一々民の事を考えてられませんよ。……クレタはその時期に戦争を仕掛けているんです。世界史、取ってませんでした？　クレタは報復として、アテナイに攻め込んでいたのです」
「報復？　何かされたのか？」
「ミノス王の息子がアテナイで殺されたんですよ。戦争で勝利したミノス王は賠償、と言いますか見せしめとしてミノタウロスの食料になる少年少女を要求したんです」
「確か、九年毎だったっけ？　……足りるのか？　九年で十四人だろ、やっぱり餓死しちゃうんじゃないのか？」
　じっと一を見つめて、ナコトは呆れたように溜め息を吐く。
「さっきから疑問符ばかりですね。まあ良いでしょう。出来の悪い人間に教えるのも、また勉強になりますし。九年毎というのは、古代の人が九年を一つの周期として考えていたからでしょう。第一餓死とかどうとか、神話、伝説に整合性を求めてはいけません。話を変えて、クレタの人たちにとって、牛と言うのがどんな存在なのかを考えましょう。はい、一君、答えてください」
「先生、考える時間をください。え、えーと、怖い、かな」
「はい残念、ぐどーん。ミノス王は牛を海神にねだったんですよ？　クレタでは古くから牛を聖なるものとして信仰していたんです。同時に、斧を重視していたとも思われますね。さっき言った神話上のラビュリントスというのはですね、クノッソス宮殿を参考に造られていたとも、あるいはクノッソスこそがミノタウロスを閉じ込めた迷宮だとも言われています」
「……クノッソス？　そんなの出てきてたっけ？」
「一般常識です。言わなくても普通知ってるでしょう。あ、普通じゃないんでしたっけ。勤務外はイヌと同じですからねー、わんわんっ」
　一はナコトにガムを投げつけた。

「とにかく、ラビュリントスのモデルとなったのがクノッソス宮殿だと、あなたにはそれくらいの認識で充分でしょう。で、クノッソス……つまりラビュリントスには両刃の斧の館という意味があるんです。両刃の斧、つまりラブリュスが語源となっている訳ですね」

あのソレも両刃の斧を得物として扱っていた。どうやら、正体は牛頭ではなくミノタウロスで間違いないらしい。だが、そうなるとメドゥーサが動かなかった理由が説明出来ないのも確かである。一と彼女は一心同体、メドゥーサとて彼に不利益を与える事はしない筈なのだ。

「ラブリュスは宗教上、最も重要且つ神聖なシンボルだったんです。神官が様々な儀式に使っていましたし、レリーフとしても遺されています。特に、ラブリュスと雄牛は密接な結びつけがなされていますね」

「牛と斧が関係あるのか」

「ええ、両方、クレタ文明にも関わりがあります。そも、雄牛というのはギリシャ神話の主神、ゼウスの象徴なんですよ。ゼウスは雷神であり、彼もそうですが、他の神話の雷神も雷を起こすのにラブリュスを使っていたんです。また、とある場所にあるとある絵には、ラブリュスと共にジグザグな線が描かれているそうです。この事から、両刃斧というのは雷、稲妻を示しているのだと分かりますね。分かりますよね。分かってますよね？」

一は何度も頷く。話は半分程度しか頭に入っていなかった。

「古代ギリシャでは動物を生贄として捧げる場面を描く際、ラブリュスも一緒に描いていた事もあります。特に、雄牛を殺す際の武器として描かれるのが多いとも聞きます。つまり、牛と斧はクレタにとって非常に重要な、アイテムなんですよ」

「……あ、だからミノタウロスみたいなのが出てきたのか。牛と斧を重視してたトコからなら、まあ、出てきてもおかしくない話だし」

「それだけでなく、当時のクレタは地中海でも強国でした。近隣の国々から大層恐れられていた事でしょうし、だからこそ、荒々しい

牛頭人身の怪物が登場したんだと思いますよ」
なるほどと呟き、一は懐から煙草を出そうとする。病院は禁煙だと気付いて、その手を情けなく下ろした。
「次はテセウスとミノタウロスについて語りましょうか。んー、そうですね。では、雄牛は男らしさ、力を意味します。あなたからは涙が出ちゃうくらいにかけ離れた言葉ですね」
「そうだね」
「テセウスのミノタウロス討伐。これが意味するもの、分かりますか？」
問われて、一は考える。以前なら全く分からず、そもそも思考するのですら放棄していただろう。だが、これに似たパターン、話を聞いた事があった。
「牛、力ってのはミノタウロス。テセウスがどんな意味なのかは知らねえけど、多分、アテナイを示してんじゃねえのかな」
「……お」
「お？」
「おお、主よ……！　すごい、すごいです神様。一さんみたいなお馬鹿な方にもあなたは知恵をお貸しになられるのですねマイゴッド！」
ナコトは興奮しているらしかったが、一はすっかり冷め切っている。結局、馬鹿にされているのに違いはないのだ。
「大方その通りです。当時、ギリシャ人は力よりも知性を重視していたんです。テセウスはアリアドネが授けた策でミノタウロスを打倒する。ミノタウロスはクレタ、テセウスはアテナイを表しているのはもうお分かりですよね。ミノタウロス討伐は、アテナイがクレタからの支配を脱した、クレタを終わらせたのを意味しているんです。知恵と勇気でバビンバーンと！」
やはり、ミノタウロスの話はゴルゴンのそれと似ている。同じギリシャ神話であるのを思い出し、一は口に出さず、心中で納得した。余計な事を言えば、ゴルゴンについてもナコトが喋り始めるかもし

れないから、である。
「でも、つまらないですね。簡単に答えが出ちゃったから、喋り足らない感じです」
「いやー、充分喋ってるだろ。もう当分はお前の話も声も聞かなくて良さそうだし、顔も見ないで済みそうだわ」
「まーたまたー、そんな事言っちゃってー。照れてるんでしょう？」
「触るな」自分の頬に触れようとしたナコトの手を叩き、一は短く返した。
「う、酷い。酷いっ、ああ、さめざめと泣いちゃいます！」
ぶん殴ってやりたかったが、今日くらいは年下に優しくしようと一は決意する。
「あ、無視ですか。そうですか。……じゃあ、名残惜しいですが最後に一つ問題です。ミノタウロスの神話が登場した理由を考えてみてください」
「ん？　いや、さっき言ったじゃん。牛と斧がクレタとの関わりが深いから……」
「は？　違いますよ？　話を作ったのはギリシャ人ですから。ギリシャ神話って名前ついてるでしょ？　そもそも、牛を重視するクレタ人がミノタウロスなんてモノ考えると思います？　結局殺されてるのに。あたしがクレタの人間なら、もっとこう、テセウスがなんぼのもんじゃいってぐらいに人をガンガン食べまくって殺しまくるような話を考えますけどね」
水を得たように一を馬鹿にするナコト。彼は一言、そうだねと返して眉間に寄せた皺を見られないように俯いた。
「しかし、あなたには時間がないんでしたね。ヒントを差し上げましょう。クノッソスでは、人骨が多数出土しているんですよ」
「人骨ぅ？　それがどうしたよ。骨の千本や二千本、見つかっても不思議じゃねえぞ」
「……人骨は殆どが少年少女、子供のものだったんです。その上、骨の一部にはそこから肉が削ぎ落とされたような痕跡が確認されて

いるんです」
「え？　じゃあ、神話じゃなくて、マジでミノタウロスって実在してたのか？」
　実在も何も、一はその目で見てきたのだ。だが、神話に登場する怪物だとしか思っていなかったので驚いてしまう。ナコトは鼻で笑っていた。
「違います。あたしが言いたいのはそういう事じゃありません。神話ではなく、生きていた人間が、実際に人肉を食べていた痕跡なんですよ、それは」
「カニバリズムって奴か。けど、そこまで珍しい話じゃなくねえ？」
「あなたは、どう思いましたか？」
　一は思わず聞き返す。
「ですから、今の話を聞いてどう思いました？」
「いや、そりゃ、まあ良い感じはしないよ。気持ち悪いとか、えげつねえとか」
「それです。誰だって普通の神経、精神をしてればそう思うでしょう。ヒント終わり」
「わっかんねえよ！」
　ナコトはわざとらしく肩をすくめた。
「答えられるまで帰られませんよ。あ、ＰＴＡとお母さんには先生が悪いって言っちゃ駄目だからね」
「小学生かよ。絶対チクられるわお前みたいなスパルタ教師」
「文句ばっかり言ってたら家に帰ってアニメ見られないですよー。魔法少女が全裸になる変身シーン見逃しちゃいますよー」
　ここで帰ってしまっても良いのだが、ナコトはまだミノタウロスの弱点と名前、一が本当に知りたい事を出し惜しみしている。飴を握られたまま、鞭でばしばしと遠慮なく叩かれているのだ。
「……駄目だ。マジで分かんない。なあ、頼むよ。もう座りっぱなしでケツが痛いんだよ」
「椅子から立てば良いじゃないですか」

「話が長いって言ってんだよ！」
「そんなに怒らなくても良いじゃないですか。仕方ないですね、あなたを苛々させるのは本意ではありません。お教えしましょう」
　咳払いを一つ。ナコトはベッドの縁に座って、一に人差し指を向けた。
「人間を食べるなんて最低最悪の行為ですよね、基本的には。『あいつマジ最悪だよなー』ってな具合に話を広めて、ギリシャ人はクレタ人を悪人に仕立て上げた訳です。怪物ミノタウロス、迷宮ラビュリントス、周期毎に捧げなければならない生贄はクレタによる恐怖政治や支配下国の苦しみを表しています。神話とは、戦争に勝利した国の都合によって作り変えられるものです。『俺たちギリシャってあったま良いよなー！　でもクレタって脳みそ筋肉で出来てるんじゃないかってぐらい馬鹿だよなー』と言いたいが為に、広めたいが為に伝えたいが為に、ミノタウロスは作られたのです」
「プロパガンダって訳か」
「お、難しい言葉知っていますね一さん。褒めて差し上げます」
「あはは、ありがとう」
「うんうん、こう考えてみると、ミノタウロスも被害者だって、そういう側面もあるんですね」
　やっぱりぶん殴ってやろうか。ここで全部ぶちまけてやろうか。暗い衝動に駆られたが、一はどうにかして堪えた。ミノタウロスが誰に利用されようが、どんな扱いを受けていようが、関係ない。ミノタウロスはモノを壊しモノを殺すだけの存在でしかない。殺すか殺されるか、ただの敵でしかないのだ。
「話もまとまったところで、飴、欲しいんだけど」
「売店なら……」
「ミノタウロスの弱点だよ。あんだけべらべら話せてたんだから、流石に何かあるだろ」
「ないですね」
「そっかー」そんな気はしていた。

一は椅子から立ち上がり、大きく伸びをする。
「帰るわ。前も言ったけど、死ぬほど無駄な時間を過ごした」
「失敬な」
「弱点と名前を聞きたいって言ったろ。知らないんなら最初に言えよ。お前の暇潰しに付き合う暇は……」
「知ってますよ。名前なら」
一は椅子に座り直して大きく頭を下げる。
「教えてあげても良いんですけど、一つだけ条件があります。と、言いますか、確認と言うか約束と言うか」
「確認？」
「ヤマタノオロチの時も、こういう風に話をしましたね。その時、あたしが最後に言った事、覚えていますか？」
「『さっ、触らないで下さいっ』じゃなかったっけ？」
ナコトはにっこりと微笑んで、枕を一の顔面に叩きつけた。
「なんですかその記憶力の良さは。――――なんて、無意味」
「冗談だよ。アレだろ、俺は英雄じゃないとか、どうとか」
「しっかり覚えているくせに。そうですよ、あなたはペルセウスでも聖ゲオルギウスでもスサノオでも、ましてやテセウスでもないんですから」
一は知っている。自分は英雄になれない。そして、ならないと思ったのだから。英雄なんて損な真似、ペルセウスが一人でやっていればそれで良いのだ。
「あたしはあなたに借りを返していません。だから、勝手に死なないでくださいよ。それだけです」
「はいはい、言われるまでもないね。俺だって死にたくねえよ」
「……あたしは、アリアドネじゃありませんから」
ナコトは俯き、枕をぎゅっと両腕で抱きしめる。
「は？」
「あなたはテセウスじゃないんです。……だから、その……」
「あー、何が言いたいのかは知らんけど、お前を置いて死んだりし

ねえよ」
「う、あ、はあっ！？」
一は首を傾げた。ナコトの頬が朱に染まったのを見て、気味が悪いなと、ぼんやり思う。
「だから置いてったりしないって。俺が死ぬ時はお前が死ぬ時だ。お前が死ぬ時が、俺が死ぬ時なのかもしれない」
「に、一さん。あ、あたし……」
「ふっ、当然だろう。お前を殺すのはこの俺だからな！　それまでは誰にも殺されるなよ。お前だけはこの手で捻り潰してくれるわ」
一の顔のすぐ横を辞書が飛んでいった。

ナコトからミノタウロスについての話を聞いた後、一は北駒台店に戻っていた。そこで彼は、店長から立花がいなくなった事を聞かされる。
「立花が神野の家に行ったそうだ」
そして、事態が最悪の方向に進んでいるのだと思い知らされた。
「その場にいた情報部からの報告だ。間違いない」
立っているのが辛い。一は店長の隣の椅子を引き、よろよろと座り込む。
「正直、動ける状態だとは思っていなかった。家に閉じこもっているので精一杯と見ていたんだが」
「立花さん、大丈夫なんですかね」
「ん、大丈夫、とは？」
「店長が言ったんじゃないですか。神野君の家族とは関わるなって」
のこのこと出向いて関われば誰も彼もが痛い目を見る。誰一人得をしない。そう言ったのは店長だ。だから、彼女は不味そうに煙草を吹かす。
「聞いたんなら、大丈夫と思える筈がないだろう。神野の妹に強く詰られたらしい。ただでさえ参っているところに、は、とどめだな」

紫煙が立ち上る。室内を満たす安っぽい臭いに一は顔をしかめて、煙草に火を点けた。

「完全に折られてしまっただろう。立花は、戦闘に関しては光るものを持っている。ウチどころか国内においてもトップクラスの能力はあるだろう。だが、やはり精神面が、な。若過ぎるし、今までが今までだったんだ」

「今後、勤務外として続けていくには、その」

一は言葉を探し、選ぼうとするが、都合の良いものは思い浮かばなかった。

「勤務外どころか、普通にレジ打たすのだって無理だろう。第一、ここは学校でも病院でもない。あいつの手助けをするほどの余裕はないんだぞ」

「クビ、ですか」

「妥当だな。本人から話を聞かない事には進められないが、ほぼ決まりだ。それに、そっちのがお互いの為になるだろう」

立花にとっては、駒台での経験は殆どが初めてのものだったに違いないだろう。それは彼女の心を豊かにし、貧しくもした。喜怒哀楽を体験して、立花は成長もしたのだろう。ただ、今回の出来事に耐え切れるほど育っていなかっただけだ。

店長は灰皿で火種を揉み消して、ポケットから一枚の紙を取り出す。

「一、お前はどう思う」

「人事に関しちゃ、バイトの俺が口を挟む余地はありませんよ。堀さんかジェーンに聞いた方が良いと思いますけどね」

「分かっていて聞いているつもりだ。私も、人間だからな。投げっぱなしじゃ気分が悪くもなるさ」

「……店長は王様にはなれないですね」

「それは人の上に立つ資質を言っているのか、私が女だと言う事に疑問を抱いているのか。後者なら原型を留めないくらいに殴るけどな」

何をだ。とは問うまい。一は声を上げて笑い、誤魔化した。
「大体だな、お前は高がコンビニの店長に何を求めると言うんだ」
「とりあえず、真面目に働いてさえくれれば」
「一、これを見ろ」店長は一の話を聞き流して、持っていたものを彼に渡す。それは、彼女が新から受け取っていた名刺であった。
「新さんの名刺がどうかしたんですか」
言って、一は名刺の裏を見る。筆で書かれたような、端正な字が並べられていた。『娘に何かあったら、お伝えください』、と。彼は乾いた声で笑う。
「親バカ」
「結局、自分の子供は可愛いんだろ。他人のガキを預かる身にもなって欲しいものだがな」
「お別れですね、立花さんとは」
「ああ、そうだな」
二人は同時に煙を吐き出した。新はきっと、立花を連れて帰るだろう。これ以上娘が傷つくのを見ていたくないのなら、当然の判断だ。
だから、もうさよならなんだ。一は短くなった煙草を床に落として、受話器を手に取った。

電話を切った新はフローリングで横になっている立花を見遣った。せめてベッドに行けば良いのに、しかし、そうしろと言えない自分もいて、彼女は自身を情けなく思う。
疲れて、傷ついた娘に掛ける言葉を知らない。そも、あんな状態になった立花を新は知らなかった。
「……真、私は少し出掛けてきます。しっかりと留守を守るのですよ」
立花は返事をしない。こちらを見ようともしない。僅かに首を動かしただけだ。九州の実家にいた頃なら平手の一つでも打っていた

のだろうと、新は少しだけ甘くなった事に気付く。
一との待ち合わせまでは時間がない。新は鞄と、それから、竹刀袋を一つ携える。
今まで、ずっと、『立花』であれば良いのだと思っていた。刀さえ上手く使えれば、ソレさえ殺せれば何もいらないと信じていた。強ければ、力があれば。だが、打ちのめされた立花を見て、新は願う。もっと別に得るものがあって、与えるものがあって、それを欲する事を、心から。

新に指定された待ち合わせ場所に向かう。店内を見回すと、奥の席でアップルパイを持ったままでこちらに小さく手を振る彼女が見えた。何も知らない者には、新は楚々とした美女にしか見えないだろう。自分もそうでありたかった。余計な事など知りたくなかった。
「もっと良い場所はあったと思うんですけどね」
「私、ここしか知りませんもの」
対面へ座った一に笑い掛け、新はアップルパイを平らげる。
「こうして二人きりで会話出来るなんて、夢のようですわね」
「……立花さんの様子は、どうでしたか？」
「ああ、その話でしたか」
「その話以外に何をするって言うんですか」
新が余裕ぶっているのか、無理矢理に笑っているのか、一には判断出来ない。
「神野君が死んで、神野君の妹に酷い事を言われて……俺は、立花さんは元気ですかと聞いているんじゃないんです。彼女がどうしたいのかを聞いてるんですよ」
「あら、それなら私ではなく真に尋ねてはどうでしょうか」
「あなたが名刺に余計な事を書かなければ、そうしてたかもしれませんね」
テーブルの上に名刺を置くと、新は「それが何か？」と扇子で

口元を隠した。
　視線をどこかへ逃がそうとしている新を見て、一は溜め息を吐く。
「案外、分かりやすい人だったんですね」
「何の事やら。……店員さんは、真をどう思っているのですか」
　一は答えに窮した。新がどんな答えを求めているのか、それに応えられなかったなら、彼女は――――。
「真とはただの同僚で、恋愛感情を持っていないと言いましたね。しかし、私には分からないのです。ただの同僚の為に、あそこまで命を張れるものなのでしょうか」
「張れるんじゃないんですかね。実際、神野君は俺たちの為に死んでしまった」
　神野は、一が前へ出なかった為に、立花を守ろうとした為に死んだ。ならば、自分はどうなのだろうか。一一は、立花真の為に何が出来る。何故、何かしてやりたいと思える。
「店員さんはどうなのかを聞いているんですけれど」
「さあ、どうなんでしょうね。ただ、立花さんがいなくなったら寂しいとは思います」
「……ああ、お気づきでしたか。そうですね、私は、真を連れて帰ろうと思います。この街はあの子にとって、刺激が強過ぎたのかもしれません」
　無垢な立花がこの街で暮らすには酷だったのかもしれない。ソレも、人間も、何もかもが汚くて、彼女はあまりにも綺麗過ぎた。一は頷き、少しだけ寂しそうに笑う。そうですかと、口から出たのはどうでも良い台詞だった。

「お待たせいたしました。ごゆっくりどうぞ」
注文したホットコーヒーに口を付け、一は新を睨んだ。
「……あら、どうしました店員さん。何か気に入らない事でも？私が何かしましたか？　それとも、あの子を連れ帰る事にご不満でも？　もしかして、私が帰る事が気に食わないのですか。嬉しいですわね。では、店員さんも一緒に帰りましょう。部屋ならいくらでも空いていますが、寝室だけは共にしましょうね」
「あなたたちが九州に帰る事に不満はありませんよ、一切。ただ、あなたの一存で決めてしまうのはどうかって、そう思ったんです」
「つまり、真に選ばせろと、そうおっしゃりたいのですか？」
一は小さく首肯する。当然だろうと、彼の目はそう訴えていた。
「しかし、選ばせる必要もないかと思いますよ。正直、私にはどうして良いのか分かりませんから。真が辛そうにしているのに真正面から向き合う事は、私も辛いのです」
「それでも、ちゃんと話してあげてください。立花さんに選ばせるのがあなたの役目なんです」
新は視線を下げ、近くの壁に立て掛けてある竹刀袋を見遣った。
「……そう、ですか。やはり、真はもう必要ないのですね」
自嘲する新に、一は何も言えない。
「引き止めてくださるとも思っていたのですが、店員さんがその様子では、駒台に真の居場所はないのだと思い知らされます」
「引き止めたところで、立花さんにはまた辛い思いをさせてしまうかもしれません。何度も言いますけど、選ぶのは彼女じゃないといけません」
「初めて出会った人たち、友人も、好きな人も出来たでしょう。あ

の子にとっては喜ばしい事ですが、初めて失ったものもある筈です。私が言うのは筋違いなのでしょうが、今までに何も与えられなかったせいで、あの子の心は折れてしまったのだと思います」

ぎゅっと、新は竹刀袋をかき抱く。一はその中身について見当がついていた。今後立花がどうなるのか、その鍵なのだ、と。

「勿論、選ぶのは真です。ですが……」新は続きを躊躇う。次に彼女の口から出た言葉を聞き、一は逡巡の理由を理解した。

「母親としては、やはり一緒に帰って欲しいという気持ちが強いのです。帰ったとして、私はあの子に大きな喜びを与えられないでしょう。ですが、悲しませるつもりもありません」

「……変わりましたね、新さん。まるで立花さんの母親みたいです」

「店員さんのお陰ですわ。出来れば、あなたとは今後とも深いお付き合いを期待したいところですわね。……苗字、変えたいとは思いませんこと？」

一の皮肉を受け流して新は微笑む。

「生憎、自分の名前が好きなものですから」

「残念ですわね」

「全くです」

二人は作り笑いで互いを見つめあった。しかし、新はふっと表情を沈ませる。

「もし、もしも、真がここに残ると言った時は、あの子をよろしくお願いします」

「新さんは、帰るんですか？」

「『立花』は今も苦境に立たされています。本来なら、こうしているのは許されないのです。ソレを狩り、名を上げねばなりません。ですから、ちょうど良いと言えば、そうなのでしょうね」

「お休みは終わりですか」

新は寂しそうに頷いた。彼女については、未だに信用出来ない部分もある。だが、どうしたって嫌いになれないところもあって、つまり、一は少しだけ寂しくなった。

「居心地が良かったものですから。あの子も、そう思っているのかもしれませんね」
「帰るとして、いつになるんですか？」
「駒台を立つのは、今日にでも、と。幸い、荷物は少ないですからね」
　随分と急な話だが一は驚かない。行動的な新なら、むしろ当然だとも思える。
「お店には迷惑を掛けてしまいますが、ご寛恕くださいな」
「今更、何を言いますか」
「あなたと私の仲ですものね」
　そういう意味ではない。が、訂正する意味もない。一は黙ってストローの先を齧った。
「……店員さん、一つ、頼まれてはくれないでしょうか」
「無理なお願いじゃないなら。最後になるかもしれないんだし、出来る限りの事はしますよ」
「ふふ、やっぱりあなたは優しい方ね。それなら、お願いします。今の話、私からではなく店員さんから真に伝えて欲しいのです」
「俺から？　いや、でも」
　テーブルに置いていた一の手に、新は自らの両手を重ねる。
「分かっています。責任から逃れようと、あなたに甘えようとしているのは。ですが、自信がないのです」
「立花さんと向き合う自信が、ですか？」
「いいえ、選ばせる自信が、です。これ以上あの子を見ていても……無理矢理に引きずっていきそうな自分が容易に想像出来るんです。張り倒して気を失わせてでも、私はあの子を連れて帰ってしまいそうで」
　それは一にも容易に想像出来る。立花が何を言っても、いや、有無すら言わせる前に手を出す新が。
「じゃあ、携帯を貸してください。今、伝えます」
「いいえ、考える時間を与えたくありません。私は一度あの子の部

屋に戻り、それから真を店に送り出します。あなたたちはまた、ソレと戦うのでしょう？　その直前に、お願いします」
「……マジでぎりぎりじゃないですか」
「真は優柔不断ですから。追い詰められないと、選べないと思います」
「良く知っていますね。なんだかんだできっちり親子やってるじゃないですか」
　一は新の両手を引き剥がそうとする。だが、彼女はそれを拒んだ。彼が逃げる素振りを見せると、両の手、十指を余さず使い、蜘蛛の糸のようにねっとりと絡み付かせる。
「あの子は私と弱い部分が似ていますから」
「誰のどこが弱いですって？」
「私は常に追い詰められているのです。本当の私はもっと儚く、たおやかな大和撫子なのですよ？」
　絶対嘘だ。一は更に力を込める。逃れられない。もがけばもがくほど新の指が離れない。
「気付いていらっしゃったとは思いますが、その話を伝える時、あの子に渡して欲しいものがあるのです」
　一の視線が、それに向く。
「……中身は刀、ですか？」
「はい、歴代の『立花』だけが振るうのを許された家宝です」
「じゃあ、立花さんはまだ……」
「半人前ですし、五代目の私が健在ですから。でも、もしもあの子が戦う事を望み、何かを見いだし、駒台に残ると言ったなら、私は『立花』の名を譲ろうと思います」
　新は袋の結びを解き、中身を一に見えるようにした。
「雷切（らいきり）。それがこの刀の名です」
　少しだけ覗いた柄、刀身は鞘に納められているが、徐々にその姿を現していく。ソレと戦っている訳でもない。ここは公衆の面前で、こんなものを見せる場ではない。なのに、一は何も言えなかった。

刀が纏う一種の魔力に取りつかれている。そんな気がしていた。
「似ていますね、立花さんがいつも使っている刀と」
「目が利きますね。真の使っているものは、言わば雷切のコピー、レプリカなのです。それでも並の日本刀と比べれば、充分に出来は良いのですけれど」
新は雷切の鞘に指を這わせる。
「やはり、本物には敵いません。触れただけで違うのだと分かります」
「……それを立花さんに渡せば良いんですか」
「ええ、それから、私の思いを」
雷切を袋に戻すと、新は再び一の手を取ろうとした。彼は両手をテーブルから逃がす。
「『立花』は抜き身の刀です。戦う以外には能のない女、魑魅魍魎が跋扈する今だからこそ必要とされる場面もありますが、殿方の心を射止めるにはあまりにも武器がないのです。あの子にも、ろくなモノを与えられませんでした」
「抜き身の……」
一は思い出した。初めて立花と出会った時の事を。周囲の視線をひきつけておきながら、それら全てを傷つけるのも厭わない、鋭い空気を。
「それでも、あなたが、この街の誰かが真を必要としてくれるのなら、真の居場所を与えてくれるのなら。誰かが、あの子の鞘になってくれたなら、私は満足です」
「はあ……どうして、最初からそういう事を言ってくれなかったのかなあ、と。そう思いますよ」
「ですから、あなたのお陰なのですよ。本当、一一さん、あなたとはもっと早く、そうね、十五年も前に出会いたかったものですわ」
「それは、ちょっとばかり早過ぎやしませんか」
と言うか犯罪だった。
「この刀と、先の話と、私の思いを。どうか店員さん、真に届けて

ください。あの子が苦しむのは見たくありません。ですが、私の娘が真に『立花』を理解し、真の『立花』になる事を、心のどこかでは願ってもいます。勝手な話かしら？」

勝手な話である。つい先日までは立花を道具のように利用し、北駒台店の人間を引っ掻き回した張本人が何を言うのか。しかし、一は首を縦に振る。新は人よりも不器用で、人との付き合い方を知らなかったのだろう。彼女もまた、彼女の母親に剣を握るのを強制され、愛情を注がれずに年だけ重ねてきたのだろう。

「届けますよ、絶対に」

「ああ、やはり、あなたは手放したくありませんわね」新は笑った。その笑みはまるで童女のようで、本当の彼女が見せるものなのかもしれなかった。

「もののついでに、こんなおばさんでよろしければ、もらっていってくれませんか？」

「結構です」

「え、結婚……？」

「図太過ぎるわ！」

新と別れて、一は店へと向かう。もう暫くすれば陽も落ちる。託された雷切を握り直して、彼は足を速めた。

立花が戦えなくても、もう二度と彼女と会えなくても仕方がない。自分ひとりでもミノタウロスの前へと再び立つ。戦い、殺す。

店の前に辿り着いた一は覚悟を決めた。この扉を潜ればもう戻れない。自分が選べる場面はない。一直線にソレへと進むだけなのだ。

「マスター、お帰りなさいませ」

ナナが扉を開けて、箒とちり取りを軽く揺らす。

「……あー」

「どうかなさいましたか？　お体が優れないのでしたら、仮眠室で横になっては……」

「いや、良いよ良いよ。なんつーか、出鼻を挫かれたって言うか」
人生とは概ねこんなものなのだろう。一は頷き、暖かい店内に入った。
「マスター、店長が呼んでいます。ソレの事について話があるそうですよ。……あの、マスター、その荷物は？」
「ああ、これは。これは、お届けものだよ」
「では、ナナが代わりにやっておきましょう。マスターはゆっくりとお休みになっていてください」
一は首を横に振る。そういう訳にはいかない。これは、自分が頼まれ、託されたのだから。
「大丈夫、俺の仕事だからさ。それよか、立花さんはいつ来るか、連絡あった？」
「はい、立花新さんからの連絡を取り次ぎました。三十分以内にはこちらに向かうそうです」
「そっか。じゃ、店長の話は立花さんが来てから聞こうかな。ナナ、俺も何か手伝うよ」
「いえ、そのような……」
「良いって良いって、俺がそうしたいんだから」
ナナから箒とちり取りを取り上げて、一は代わりに竹刀袋を預けた。
「マスター、店長と会いたくないのですか」
「どっちかと言われりゃあそうなるかな。休みたくても、ぐちぐち言ってきそうだし」
「ならば私が盾となりましょう。マスターは立花さんがいらっしゃるまで仮眠室でお休みください。蟻の一匹すら、中には入れません」
「いや、仕事を……」一の言葉をナナは手で遮る。
「二ノ美屋店長がここの長と言えども、ナナのご主人様はあなただけです。番はしっかりと果たします。ご心配なさらず。さあっ」
促されて、一は歩き出した。彼の背中を楽しげにナナが押す。バックルームに入った瞬間、彼らと店長の視線が交錯した。

「……お前ら、遊んでいるなら」
「マスターっ、ここはお任せを！　さあ、早く仮眠室へ！」
どうでも良くなって、一はわざとらしく頷く。
「任せたぞナナ！」
「阿呆かお前ら」
一々口に出さずとも、彼らはそれだった。

店にやってきた立花を見て、一は少なからず安堵する。最後に会った時とは違い、彼女の表情にはおおよそ感情と呼べるであろう色が宿っていたのだ。
店長も一と同じ気持ちだったのか、難しい顔をする事もなく話を切り出す。
「何を言われるのか、大体分かっているだろう。そう、簡単な話だったんだよな」
紫煙が室内を泳ぎ始めた。それらは天井に向かい、壁に向かい、一の顔に向かう。
「ソレをどうにかしろ。これだけの話だった。結果は、もう言うまでもないがな」
「回りくどいですね」
「なら、行けるな？」
一は頷いた。立花は無言のまま、さっきから俯いたままである。
「立花、無理ならそう言え」
無理だと言えばその瞬間、立花は見限られる。彼女は何も言わず、一は助け舟を出すのをぐっと堪えた。が、立花は何も言えない。答えられない。
時間がない。先に折れた店長は息を吐き、一に視線を遣る。
「……立花さん、実は、預かっているものがあるんだ」
「ボク、に？」
「うん」一は仮眠室に引っ込み、それを握って戻ってきた。彼が持

っているのが竹刀袋だと分かり、立花は僅かに目を見開く。
「新さんから、預かったものだよ。中身は、立花さんなら見れば分かると思う」
「お母さんが……」
呟き、立花はそれに手を伸ばそうとする。一は彼女の動きを制した。
「渡す前に、伝えなきゃいけない事があるんだ」
一は立花の目をじっと見つめる。
「新さんは今日、九州に帰る」
「う、え、なんで？　ボク、そんなの一言も聞いてないよ」
「君に考える時間を与えたくなかったって、そう言ってた。それで、立花さんも一緒に帰るんだ」
未だ飲み込めていないのか、立花は瞬きを繰り返した。
「ボクも、お母さんと一緒に九州へ、帰る、の？　え、あの、また、駒台に戻るん、だよね？」
「いいや、駒台には戻らない。君は元の生活に戻るんだよ」
「そっ、そんなの！　そんなの急過ぎるよ！　勝手だ、お母さんが勝手に決めた事じゃないか！」
目の端に涙を浮かべて、立花は一に掴み掛かろうとする。正直、彼は驚いていた。彼女が新に従わない事も、こうして声を荒らげている事も俄かには信じられない。
「だから、選んで欲しい」
一は立花の両肩を掴み、ゆっくりと自分から引き離していく。
「この街に残るか、九州へ帰るか」
「そっ、そんなのすぐには選べないよ！」
追い討ちをかけるようで気が引けたが、一は一言一句区切るように話を続けた。
「新さんは駅で君が来るのを待ってる」
「ちょっと、ちょっと待って！　やめてよっ、ボクはっ、ボクには……！」

「これを持って、君がどこに行くのかも自由だ。君が選んで、君が決めてくれ」
雷切を立花に握らせ、一は彼女から離れる。
「酷いっ、こんなの、酷いじゃないかあ……」
「新さんは君を心配してる。出来るなら、一緒に帰って欲しいとも言ってた。でも、君が真の『立花』になる事も願ってた。自分勝手だって、そうも思ってた筈だ」
一は立花に背を向けて、店長を見た。
「一人で行くのか、一」
神野は、頼りない自分のせいで、一人でソレに立ち向かった。だから、一は頷く。一人でも戦う。今度は逃げないと誓った。
「待って、はじめ君、はじめ君！　考えてよっ、ボク、ボクはどうしたら良いの！？」
「……立花さん、前にも聞いたよね。君はどうしたいのかって」
「わ、分からないから聞いてるのにっ！　教えてよ、はじめ君はボクがどうすれば良いのか知ってるんだよね！？」
バックルームを出ようとする一の服を立花が掴む。彼はその手を、ゆっくりと解いていった。
「はじめ君、待って、待ってよ！」
「いい加減にしろ」店長は立花を振り向かせて、彼女の頬に手を伸ばす。立花は目を瞑って肩を震わせた。瞬間、
「一とお前の母親がここまでお膳立てしたんだ。お前の為にな」
立花の頬を強く、抓る。
「ひだっ！　ひっ、ひだい……っ！」
「選べ立花。……一っ、さっさと行け！　お前がそこにいると、立花は甘えるぞ」
「う、じゃ、じゃあ、後のことは……」
店長は蚊でも追い払うかのような風に、鬱陶しそうに手を振った。
バックルームを出ると、ナナがカウンターの中から恭しく頭を下げるのが見える。一は出入り口近くまで歩いていく。

「本当は私も付いて行きたいのですが、店長がとてもうるさいので諦めました。なので、ナナはここでマスターの帰りをお待ちしております」

新品のビニール傘を一本抜き取り、一はそれを片手に握り込んだ。

「いってらっしゃいませ、マイマスター」

「……ナナさん、お客様がいる時は勘弁してください」

好機の視線に晒されながら、一は扉を開ける。外の空気が余計に冷たく感じられたのは、気のせいではないのだろう。

すべき事はもう見当たらない。ソレの情報を得て、立花にも話を伝えた。後はミノタウロスを倒すだけである。が、好材料は少ない。ソレの名前が分かったところで殺せるとは限らない。シグルズのように、やはりメドゥーサが通じない可能性もある。前回は戦って負けたのではなく、ただ逃げ帰っただけだ。真っ向から立ち向かうとしても、そこに好機を見いだせるほど一は楽観的ではない。むしろ、悲観的になる。人間の体をいとも容易く両断してしまう力の持ち主が相手なのだ。一対一でどこまで死なずに済むか。

「やるしかねえけど」

白い息と独り言を確認する者はここにはいない。件のアーケード周辺からは人の気配が感じられなかった。

――――どうして。

ふと、一の足が止まる。戦場になりうる場所はすぐそこなのに体が動かない。怯えているのではなかった。その筈なのに、

――――どうして、どうして、どうして。

一はアーケードを見つめたまま動けなかった。

「あ」

口を開けたところに、温かなものが伝って落ちる。舐めると、妙に塩辛かった。

ああ、と。ああ、と。一の視界がぼやけていく。どうして、と。

どうして、と。一の思考がぼやけていく。

どうして、神野は死んだのだろう。何故、彼のような者が殺されなければならなかったのだろう。寄せては返す波のように、彼の記憶が甦る。勇気に満ちて、希望に溢れて、彼がそこにいるだけで元気を得られた。素直でまっすぐで、人外には似合わない場所で声を張り上げていた。見てみぬふりも出来た筈なのに勤務外を志願した。きっと、この街に住む誰よりも、駒台を愛していたのだろう。ここに暮らす人たちを、身近な人たちを守りたいと思っていたのだろう。自らを犠牲にしても、ソレの脅威を退けたかったに違いない。

自分は英雄ではない。分かり切っていた。きっと、それは自分のような臆病者ではない。誰が何を言おうが、譲らない。彼がミノタウロスに向かっていった時、何を思っていたのかも関係ない。利己心だろうが虚栄心だろうが関係ない。彼がソレに立ち向かったのは事実で、その行為は真実なのだから。

だから、神野剣は英雄に違いなかった。

「……あ、あ」

涙が、嗚咽が止まらない。一は顔を上げて鼻水を啜る。風が通り抜けると、頬に流れていた涙が少しだけ乾いた。

どうして、神野が死ななくてはならなかった？　どうしてまだソレが生きている。神野のような若者が死に、クズと呼ばれてしかるべきモノたちが生き続けている。死は平等で、理不尽だ。何もかもが許せない。許さない。許してやるものか。一は足を踏み出して、アーケードを、そこにいるであろう敵を睨み付ける。何よりも許せないのは、神野を、彼に関わりのある者たちを無慈悲に切り払ったソレだ。神野の家族は、友人は、ソレに対して何も出来ないだろう。この怒り、正しい矛先にそれを向けられるのは自分だけなのだ。仇を取ったと触れ回るつもりは毛頭ない。だが、ミノタウロスを生かしておくべき理由もないのである。

「ぐ、うっ、ああ……」

息が苦しくても、一は進んだ。アイギスを握る手に力を込めて、

アスファルトを踏む足に力を込めて、前のめりになって前進する。
一が今になって神野の死を思い、悼める事が出来たのは、ここにきて、考える必要をなくしたせいだ。必死に逃げ回り、疲れた体を休めながらソレについて考えた。立花を思い、新に託され、決意して店を出た。今になって、彼は解放されたのである。余裕の出来た頭は、ようやく、一に人間としての感情を思い出させた。
「あっ、ああ――――――！」
一は駆け出す。涙を拭うのは諦めた。流れるまま、溢れるままに全て委ねる。泣き叫んで、戦場に向かう。
ソレは今も、新たな獲物が訪れるのを待っている。迷宮の奥で荒い呼吸を繰り返している。一は強く歯を噛み合わせた。
「おおっ、おお――――――！」
アーケードは昨夜と変わらない。神野の遺体は運び出されていたが、それ以外はそのままだ。抉られた床も、固まった血も、捨て置かれたビニール傘も。それら全てが、紛れもない現実なのだと示している。覚めない悪夢でも、覚めた夢の続きでもない。諦めろと、容赦のない真実が一に突き刺さる。
「ぐっ、はあ、ちくしょう舐めてんじゃねえぞ！」
アーケードを駆け抜ける。ソレに向かって呼び掛ける。言葉が通じなくても感情を理解されなくても構わない。新たな獲物がここにいるのをアピール出来れば良い。
「にっ、人間を、人間舐めてんじゃねえぞ！　てめえみたいなバケモンはなあっ、ブッ殺される為にいんだろうがよ！？」
一は分かっていた。自分には何もない事を。
テセウスのような知性はない。
アリアドネのような女性も味方していない。
ミノタウロスのような力もない。
一一には何もない。
「腹減ってんだろうがよっ、あああ！？　大物ぶってんじゃねえっつーの！　それともアレかっ待たせてごめんなさいってか！」

ここには、多くのものを置いてきてしまった。奪われ、捨てたものもある。なくしたもの全部は取り戻せない。

「ブモォ――――――――――！」

「おっ、おあ、あっ……来たじゃねえかよ。俺はここだっ、食ってみろよ！　殺してみろよ！」

だが、拾えるものは拾っていく。返してもらえるものは返してもらう。

正面から姿を見せたミノタウロスを確認して、一のボルテージは勝手に上がっていく。自分だけで盛り上がり、彼は再び涙を流した。

……一には何もない。ここで根こそぎ持っていかれた。だから、彼に残ったのは、一つだけだ。神野が彼に遺した、たった一つの向こう見ずな勇気だけ。それだけを胸に、一は昂ぶった。これ以上何を失うものがあろうかと、嬉々としてソレに向かっていく。

ミノタウロスも一に向かって速度を上げた。ラブリュスを振り上げて、獲物に狙いを定める。二者がぶつかった地点は、偶然にも、神野とミノタウロスが激突した場所であった。

トワイライト

それは、何年も何年も、何遍も何遍も、ずっと繰り返され、積み重ねられてきた。彼女に染み付いたそれは簡単には消え去らない。拭えず、抗えない。それは鎖だ。それは楔だ。それは呪だ。縛り、殺し、蝕む毒なのである。しかし、彼女にはどうする事も出来ない。長く付き合ってきた為に、縁の切り方が分からないのだ。涙を流して、髪の毛を振り乱して頭を振っても、逃れられない定めなのだ。

どうしたいと問われても、分かる筈がない。答えられる筈がない。一が出て行った後も、立花は考えられなかった。指示に従い、決めるのを選ぶ事すら放棄していたのである。

「いつまで悩んでいるつもりだ」

「……店長さん、お願い、教えてよ」

「自分で考えろ。……私は、前に言ったな。お前は勤務外なのだと、少なくともここにいる内は、お前はお前だ。立花真としてここに立っている。それを忘れるな」

店長の言葉は立花にとっては少しばかり難しい。迂遠な物言いが彼女には中々伝わらなかった。

「わかんない……」

「立花、一は好きか？」

「え、う、うん。はじめ君は好きだよ」

短くなった煙草の火種を灰皿で揉み消すと、店長は疲れた風に、呆れたように息を吐く。

「三森は、糸原は、ゴーウェストは、ナナは、堀は好きか？」

「皆好きだよ。もちろん店長さんの事も」

駒台で初めて出来た友人たちだ。嫌いになれる筈がない。

こんな自分に優しくしてくれる一が好きだ。三森は怒ると恐いし、

その上ちょっとした事で怒る。でも、笑うと可愛い。糸原は自分の知らない事を色々と教えてくれる。ジェーンは口うるさいし、年下のくせに自分よりもお姉さんぶろうとする。一の事で喧嘩をした時もあったが、彼女は許してくれた。ナナも堀も店長も面倒を見てくれる。初めて、楽しいと思えた。人と付き合うのは嬉しくて、触れ合うのは恐くて、ぶつかれば悲しくて、怒って。

「ボクは、皆が好きだよ」

ずっと続けば良いのに、そう願った。皆が笑って、その輪の中に自分もいれば満足で、これ以上ない幸福なのかもしれなかった。

「神野も好きだったか？」

問われて、しかし立花はすぐに頷けない。神野は好きだ。分かり切っている。なのに、胸に何かがつかえているみたいに苦しかった。

神野剣。最初見た時は恐かったのを覚えている。凛とした顔つきも、どんな壁も乗り越えてしまいそうな意志の強さが羨ましく見えていた。彼が自分の背を追い掛けていたのには気付いていた。神野がいつしか自分の隣に並ぼうとし、彼に背を預けても構わないと思った。フツノミタマを手に入れた神野が頼もしく見えて、胸が高鳴ったのは錯覚ではないのだろう。もっと、彼と一緒に過ごしたかった。明日も、明後日も、来年も、その次の年も、ずっと。

「ボクはけん君が好きだ。好きだった。多分、本当に」

「なら、選べる筈だ」

ミノタウロスは恐ろしくなかった。立花を追い詰めたのはソレではなく、神野の、親しい人の死である。目の前で散った命を確認して死にたくないと震えた。殺されたくなくて、まだ生きていたいと祈った。

だから、

死んで欲しくないとも思った。一にも、誰にも。もう二度と失いたくない。自分を置いていって欲しくなかった。逃げたいとも思う。痛い目、辛い目苦しい目に遭いたくない。誰にも嫌われたくなくて、恨まれたくなくて、憎まれたくなくて――――九州に帰れば、人と

付き合わずに済む。笑えないかもしれないが、悲しむ事もなくなるだろう。二度と得られないが二度と失わない。ただ剣を振る、何もない日々に戻れるのだ。

「……店長さん、ボクは……」

想像よりも一撃が重い。早い。攻撃を受ける度に一の体が軋む。斜めに受け流したミノタウロスの振り下ろし、彼は歯を食い縛りながら次の行動に移った。

両刃の斧は地面に深く突き刺さっている。一はソレの太股にビニール傘の石突きを突き立てた。見た目こそただの傘だが、その実、最硬の盾なのである。強度に飽かせた一撃は充分に通じていた。ミノタウロスは苦痛に口を開け、悲痛な声を上げる。

追撃を仕掛けようとする一に対してソレが動いた。得物を横薙ぎに払う。一はアイギスを抜き取った状態で無防備極まりなかった。

「『止まれアステリオス』」

だが、ソレは動かない。否、動けない。その隙に、一はアイギスをもう一度突き刺した。

「……効きが悪いじゃねえか」

距離を取る一を、動けるようになったソレが追い掛けてくる。

ミノタウロスには、付けられた名がもう一つ存在する。生まれたばかりの彼に授けられた真の名だ。アステリオス、ナコトから聞いた通りでメドゥーサも通じている。ただ、本人がその名を忘れているのかもしれなかった。認識出来ていないから効果も薄い。

巨大な両刃の斧は悪い冗談としか捉えられない。だが、紛れもない現実なのである。傷つけられて怒り狂うミノタウロスからはそれ以上一歩も退かず、一は広げたアイギスを前方に突き出した。粉々になってもおかしくない衝撃が全身に伝わる。

「キレてんのはこっちもなんだよっ」

再び床を抉った斧の柄を掻い潜り、一はアイギスを畳んだ。ソレ

の脇腹を狙って得物を振り上げる。ミノタウロスは斧を地面から引き抜き、一に三度それを振るおうとした。

「『止まってろよ』」

呟くと、またもソレの動きが固まる。石突き部分がソレの肉を食い破った。瞬間、一は姿勢を低くしながらアイギスを引き抜く。彼の頭、そのすぐ上を斧が横切っていった。

「ブモッ、モッ、モォ――――！」

ミノタウロスは肩を上下させ、血走った両目で一を睨み付ける。荒い鼻息が彼の鼓膜にまとわりつこうとしていた。

一はアイギスの石突きを見遣る。……短かった。もっと長さがあれば、ソレの内蔵にまで届く。相手がもっと小さければ、充分な傷を負わせられる。しかしミノタウロスの恵まれた肉体には致命傷を与えるのが難しい。分厚い皮と発達した筋肉が盾となっているのだ。傷口から流れだす血液も微々たるもので、出血死を待つよりも先に一が死ぬ方が早い。

――――竜殺しよりマシだろ……！

シグルズよりも軽い。彼よりも少しだけ早い。捉えられない速度ではなかった。なら、こうして時間を掛けさえすればどうにかなる。殺せる。その筈なのだ。

「ブモォ――――ッ！」

ミノタウロスの背中にアイギスが突き立てられる。一はメドゥーサを使ってその場を離れる。息を整え機会を見極める。斧を斜めに受け流し、隙を作ってそこを衝く。相手がただの怪物で良かったと、一は口元を歪めた。ワンパターンの作業に付き合う程度の頭なら、倒れるまで繰り返せば良い。

「俺かてめえかっ！」

ソレが足を踏み出した。

「どっちかは道連れだ！」

一は勇気を振り絞る。

「死ぬまで付き合ってくれるんだろ！？」

ラブリュスが振り下ろされて、アイギスが追い掛けるように振り上げられた。ぶつかる衝撃、弾ける轟音、ソレは叫び、一の鼻からは血が一筋、流れた。

陽は暮れていく。時は過ぎていく。輝きを見せ始める星の下、今日も人は行き交っていく。その波を見ながら立花を待つ新は、駅前のベンチに、静かに座っていた。物憂げな横顔からは苛烈な『立花』の本性など見て取れない。彼女はふと顔を上げて、こちらに向かってくる人影に微笑み掛ける。

「こっちには来ないと思っていたのですが。やはり、私と一緒に帰りたかったのですか？」

「……挨拶ナシで帰ろうかと思ったんですが、あんたの顔を見つけてしまったもので。まあ、この街には何もありゃしませんわ」

疲れた顔で溜め息を吐くのは、漆黒色のセーラー服を着た、若い女だ。まだ幼さが残る顔つきからは相反するような、凛とした瞳も備わっている。彼女はスカートをくるりと翻し、ボブカットの黒髪を揺らした。

「やっぱり、あんたって人はとんでもねえ女ですよ」

「使用人風情が、口の利き方を弁えていないようですわね」

「あんたに仕えた覚えはないんですけどね。で、首尾はどうなんですか。雷切を持ってこいなんて言うから、九州からこっち飛びっぱなしですよ」

新は指を口元に持っていく。

「烏天狗をパシリに使う女なんて、地球上を探してもあんたぐらいのもんですよ……そういや、お嬢様がいないようですが。まだ来てないんですか」

「来ないわよ？　あの子、選んじゃったみたいですもの」

セーラー服の女は口を大きく開けて天を仰いだ。彼女の名は由布（ゆふ）梶（みじ）。立花真に仕える、正真正銘の、烏天狗の末裔である。神通力は

使えないが、彼女には誰にも負けない能力が備わっていた。移動能力である。九州から近畿までの距離を、由布は短い時間で走破し、飛んで来られるのだ。その能力を活かして、彼女は新の使い走りや伝令役をも任されている。と言うか半ば以上無理矢理だった。

「ああっ不幸！　あんなに頑張ったのに報われないなんて！　烏なだけにもみじちゃんってば苦労性！　……あ、クロウと苦労がかかっているんですけど」

「うるさいわよ」

尤も、主は椛の存在すら知らない。彼女はあくまで陰から立花を支え、時には助け、見守り続けてきたのである。

「また機会があれば会えるでしょうに」

「その機会を根こそぎ奪ってきたのはあんたでしょうに。お嬢様はイヌでも人形でもないんですよ？」

「分かっているわ」

椛はこれ見よがしに舌打ちした。

「あんた分かっちゃいないんですよ。どうして烏天狗が『立花』に仕えているのかを」

「負けたからでしょう？」

「それもあるけど、一族は『立花』の強さに惹かれたんです。機械のように刀を振るう姿勢じゃなく、人間としての純粋な強さに。あんた、お嬢様に感謝すべきなんですよ」

扇子を口元に当てて、新はぼうっと空を見上げる。

「お嬢様は優しい方だ。あんたみたいな人の事を好いていらっしゃる。だから、お嬢様はここまで来れて、あすこまで行けたんですよ」

「……ふう、分かっています。椛、少しばかり遅かったようですわね」

「は？　何がです」

「その事なら、とっくに教えられましたわ」

ただのコンビニの店員に、嫌と言うほど。新は目を瞑って彼を思った。

「今日のところは帰ります。娘の成長を喜べるほど、私は母親を出来ませんでした。ですから、次代の『立花』に、将来の旦那様に後を託しましょう」

「旦那って、あんた、また男漁ってたんですか。色魔」

「失敬な、私の目は高くてよ。『立花』の相手が務まるほどの男は、そうはいないと知りなさい」

「知りませんっての」椛は吐き捨てて、屈伸を始める。

夕暮れが街を橙に染めていく。新は思わず目を細めた。

「じゃ、帰ります。あんたも精々気をつけてってくださいよ」

「あら、一緒に帰らないの？　切符、一枚余っているのですけど」

「……どういう風の吹き回しなんですか？」

疑い深そうに見つめられて、新は困ったように頬に手を遣る。

「椛、私にとってはあなたも娘のようなものですからね。たまには良いでしょう、二人でゆっくり語らうと言うのも」

「うわ鳥肌が……烏天狗だけに。と言うか、あんた変わりましたか？　前みたいに鋭くない」

「礼を言うのね、私をただの女たらしめた殿方に」

椛は鼻を鳴らして、周囲を、駒台を眺めた。この街のどこかにいるであろう、『立花』に見初められた可哀想な男を。

「ま、たまには電車に乗るのも悪くはないですね。爺ちゃんに内緒にしてくれるなら、付き合うのもやぶさかじゃあないですよ」

「勿論、では、行きましょう」

――――真を、どうぞよろしくお願いします。

新は駅へと向かう。その後、彼女は一度も振り向かずに街を出た。

音が消えていく。

クラクションも、人も、どうでも良くなっていく。切る風は冷たく、吐く息は白い。前へ進む度、景色が変わっていく。立花の目から涙が零れた。神野が守りたかったもの、守ろうとしたものが彼女

の世界を塗り替えていく。
「これが、ボクの街」
　呟き、速度を上げた。一が待っている。誰かの盾になろうと、ソレに立ち向かっている。立花は、自分が誰かを守れるとは思っていない。一本の刀のように、ただ外敵と切り結び切り殺すだけなのだ。
　駒台の街が茜色に燃え上がる。何度も見た光景なのに、それは強く立花の胸を打った。もう、この街に神野はいない。どこにも彼はいないけれど、彼の思いは残っている。空っぽだった立花に注がれていた。
　立花は涙を拭う。自分は誰かを守れないけれど、神野の思いだけは守ろうと誓った。この切っ先がソレの脅威を排除出来たなら、それはきっと彼の望みでもあるのだから。だから、戦う。選び、決めた。ミノタウロスを屠ると、神にではない。彼女は、神野剣に誓った。
　興奮し過ぎたのか、突然流れた鼻血に戸惑った一はミノタウロスから離れようとする。
「お、おおっ？」
　出血の勢いが強い。床を朱が染めていく。手で押さえても鼻を啜っても血はすぐに止まらない。気のせいか、体からもそれと一緒に力が抜けていくようだった。頭がふらつき、神経が衰弱している。
　ソレは叫び、両刃の斧を力任せに振るった。観葉植物とその鉢が倒れていく。一は頭を冷やそうとして呼吸を繰り返した。逃げながら体勢を整える。鼻血が止まってから、彼はミノタウロスの攻撃をアイギスで防いだ。瞬間、その衝撃で一の口内に血の香が広がる。むせて、彼は転がるようにして逃げた。
　疲労は覚えていたが、こんな事は初めてだった。鼻血が出るほどボルテージが上がっていたのだとは思えなくて、一は頭を振る。
「ブモォ――――、オォォ！」

「この……！　……くそう」
一は叫ぼうとするが諦めた。顔が火照って、特に鼻が熱い。熱を持ったそこからまた血が出るのは避けたかったのである。
ソレの攻撃を完全に回避出来るくらいには、一は素早くない。アイギスを広げて、衝突に合わせて力を込める。ミノタウロスは斧を振り上げ、一はアイギスを構え直した。
「――――っ！」
まっすぐに振り下ろされる筈の斧が中空で停止した。ミノタウロスは前蹴りでアイギスを揺らし、一のバランスを崩す。
「てっ、めえ……！」
たたらを踏む一に、今度こそ振り下ろしの衝撃が加わった。彼はアイギスを咄嗟に掲げて直撃を避ける。だが、状況は悪い。一は片膝をついてソレを見上げていた。
「小賢しいじゃねえかよ」
ミノタウロスが一を踏み付けようと足を出す。彼はアイギスでそれを受け止めて、
「『止まれ』」
停止したミノタウロスの心臓目がけて石突き部分を突き立てた。が、やはり届かない。
一は再びメドゥーサに宣言し、動きの止まったソレから距離を取る。彼が息を吐こうとして俯いたと同時、凄まじい勢いで鼻血が滴り落ちてきた。呼吸困難になり、一は口の中に流れ込んできた血にむせ、咳き込む。
ソレは進撃する。体を大きく捻らせて、斧ごとぐるりと回転した。そこから繰り出された攻撃はアイギスの防御など関係ない。一の体を閉まった店のシャッターまで飛ばし、叩きつける。
「がっ、ぎ……」
起き上がろうとして、一はその場に引っ繰り返った。力が一切入らない。転がったアイギスに手を伸ばすが、空を掻いて、だらりと床に垂れ下がる。

メドゥーサの使い過ぎであった。異能の力を行使するにおいて、重要なのはそれに飲み込まれまいとする精神力である。一は今までにメドゥーサを、自身を酷使してきた。今日だけで回数は二桁に上っており、また、ゴルゴン戦からインターバルは殆どない。連日ソレと戦い、彼が思っている以上に心身が疲弊し切っていた。何かと戦うという行為は肉体に、精神に多大なる負荷を与える。死が間近に迫り過ぎていた。その為、一は自分がソレと戦うのに慣れたと勘違いしていたのである。実際、麻痺し、忘却していただけで、疲労やストレスは想像を絶するほどに蓄積されていた。

流血は、言わば警告。これ以上メドゥーサを使用すればどうなるか分からないというサインなのだ。一はその事をようやく理解し、吐血する。

ミノタウロスの足音がすぐそこまで迫っていた。一はアイギスは何とか掴み、上半身を起こし、その場にあぐらをかく。

視線を上げれば両刃の斧。一はメドゥーサに宣言して横に転がった。数瞬後、床が砕ける音を聞く。飛び散った破片が彼の頬に当たった。ミノタウロスは再び斧を振り上げる。

「『と……』」一は声を出せなかった。息苦しさに喘ぎ、それでもアイギスを両手で握り締める。次を受けてもその次がある。もう駄目かもしれない、分かっていてもあがき続けた。

「ブモォ――――！　ブモッ、ブモ――――！」

こいつを殺したら焼肉を食ってやる。給料全てをはたいてでも良い。美味いものが食いたかった。最後に口に入れたのが自分の血だけなんて、そんなの耐えきれない。

弾（だん）、と、誰かが地を蹴る音がする。振り向く事は出来なかった。その必要もない。自分以外でここに来られるのは、彼女だけなのだ。

「はじめ君っ！」

ミノタウロスが首をめぐらせる。烏が風に揺らめいた。抜いた刀は鞘から離れ空を閃く。照明を受けてぎらりと輝く。裂帛の気合いから放たれた一閃がソレの肩口へと侵入した。血煙が上り、ミノタ

ウロスは敵を睨み付ける。
「お前の相手はボクがする」
構えた刀、名は雷切。構える剣士、その名は立花真。己を縛り、殺し、蝕む『立花』から解き放たれた一人の人間が宣言する。お前はもうここまでなのだと。

立花はまず、ソレの注意を一から自分に向けるのを選んだ。少しずつ足を運び、彼から離れた場所におびき寄せる。
ミノタウロスは動けなくなった一からは興味を失い、立花を脅威と判断したらしい。得物の刃の部分を地面に擦りながら、ゆっくりと彼女を追い掛ける。
「……そうだ、こっちへ」
充分に距離を取ったところで立花が身を沈ませた。床を蹴り、ソレの足を掬い上げるように雷切を振るう。が、
「――――っ！？」
立花の体勢が崩れた。つんのめるようにして、それでも彼女はミノタウロスの反撃を躱す。空を切った刀を見つめ、立花は納得のいっていないような表情になった。
考える暇はない。次いで先手を打ったのはソレだ。巨大な斧を軽々と振り回し振り下ろす。立花はソレの側面から脇腹を突き刺した。自分よりも背の高いモノが相手だから、首から上への攻撃が通りにくい。確実な箇所へダメージを蓄積させて膝を折らせる。それが彼女の目論みだった。
刀を引き抜き後ろに跳ぶ。ソレの動きを観察するが、鈍くなるどころか鋭く、激しくなっていた。一が付けた傷口に、自分が付けた二つのそれからは血液が溢れている。
切って回れば問題なし。そう判断した立花は刀を構えて一歩踏み出した。腕を切り落とそうと振り上げた雷切は、とっくに振り切りあまつさえソレの目の前で空振っている。

「なっ、なんで!?」
立花の伸び切った両腕を狙って、ソレが斧を横に薙いだ。彼女は回避を選ぼうとするが間に合わない。振り切った刀を戻すが間に合わないだろう。覚悟を決めるが痛みはない。金属同士が激突する音を聞き、散った火花をしかと確認する。見れば、雷切はラブリュスの刃を受け止めていた。
自分がやった事を信じられなくて、それでも立花は受け止めた体勢から刀の刃を滑らせるように逃がす。同時に、自身もその方向に逃れた。振り向き、もう一度攻撃を受け止める。相手の力を散らすようにして後方へと下がった。
「あれ、これって」
立花は雷切を片手で振り、感触を確認する。そこで違和感の正体を突き止めた。
「軽いんだ……」
雷切はあまりにも軽過ぎる。確かに握った筈なのに、羽のような重みしか感じられなかった。今まで使っていた刀とは全く違う。そのくせ、強い。折れず曲がらず良く斬れるを基本理念とする日本刀から決して外れていない。強度と軽量、どちらもが犠牲になっておらず、どちらもが、彼女の知る限り最高のものに仕上がっていた。奇跡のような一振りで同じものは二つと作れない。『立花』が握るに相応しいものだと体で理解する。
「ブモォ――――!」
雷切がどんな刀なのか良く分かった。しかし、扱いに慣れるには時間がかかりそうだった。立花は得物を振るう。意識して放った一撃だが、予測よりも早く、その手前を掠めていった。
ミノタウロスが斧を振り下ろす。立花はあえて刀で受けた。刀身はびくともしない。ただ、美しくそこにある。
「雷切……」名を呼ぶ。与えられた新たな力を、『立花』の証明を胸の奥に刻み付ける。

疲れた。もう動けない。動きたくない。一は四肢を伸ばして冷たい床に背中を預ける。立花が来たのだから、ここまで戦ったのだからもう良いだろうと目を瞑る。だが、雷切に振り回されている彼女を見て、彼は最後の力を振り絞る。

「ぐっ、げほっ！　っ、あー、あー……」

声の調子を整えながら座り込み、広げたアイギスをソレに向けた。立花なら、一瞬の隙さえあれば仕事をこなしてくれるだろうと信じている。なりたてだとしても、既に彼女は真の『立花』なのだ。だから、その名前が伊達ではないと証明してくれる筈だ。

『アステリオス、それがミノタウロスの真の名前です。一般的に知られているミノタウロスはミノス王の牛という意味だったりします』

『ふーん』

『気のない返事ですね。死んだらどうですか。……アステリオス、その名前の意味は――――』

この結果は最初から決まっていたのだろう。

「『止まれ、雷光（アステリオス）』」

雷切。それを立花が手にした瞬間から、アステリオスの運命は決まっていたに違いない。

アイギスが光を帯び、ソレの動きが完全に停止する。効果は一瞬間、だが、やはりその隙を見逃す立花ではない。

まず、ソレの両腕が切り落とされる。ラブリュスは音を立てて床に落ちた。立花は何かを確かめるようにしながら、丁寧に刀を振る。四肢の切断されたソレは、頭から床に倒れ込もうとした。彼女は雷切を、弧を描くようにして切り上げる。怪物の証明、牛の頭がアーケードを舞った。立花は返り血一滴浴びる事なく、絶命したソレに背を向ける。

「……はあーっ」

息詰まる戦闘が終わり、一は今度こそと、その場に寝転がった。
「はじめ君」
立花は鞘に雷切を納めて、一に近づいていく。
やっと終わった。仇が討てた。ソレが死に、自分たちは生き残る。
血を流した（鼻から）甲斐はあったが、流石に、もう駄目だった。
暫く休んで、それから店に戻ろうと一はぼんやり思う。
「はじめ君」
「ん、お疲れさま」
一は咳払いをした。まだ声が出し辛い。口内は鉄臭くて、鼻で息を吸ったら頭がくらくらしてきた。
「はじめ君」
「ん？」
立花の様子がおかしいと気付いたのは、彼女が自分へ馬乗りになってからの事である。一は素っ頓狂な声を上げて、立花を見つめた。
「はじめ君」
呟いて、立花は一の頭、そのすぐ横の床に刀を突き刺す。彼は情けない悲鳴を上げた。一体、何がどうなっているのか、さっぱりである。ソレを倒して神野の仇も討てた筈。これ以上、何が起こると言うのだ。無論、その問いに彼女は答えない。

一緒に帰ろう

女子高生が自分の上に跨っている。
男としては喜ばない方がおかしい状況だが、人としてそれはどうなのだろうと一は自分に問うた。勿論答えは返ってこない。
「た、立花さん……何、やってんの？」
立花に問い掛けても、彼女は身動ぎ一つしなかった。ただ、黙って一を見つめている。
「はじめ君」
「は、はい」
「はじめ君は、いなくならないよね？」
「え？」
思考が上手く纏まらない。冷たい感触がすぐ傍にある。寝返りを打てば顔面が裂かれてしまうだろうと思われた。
「はじめ君は死なないよね？」
一は、頭を鈍器でしこたま殴られたような衝撃を受ける。上気した顔と濡れた瞳。立花が何を言いたいか、彼には分かっていた。
「……うん、死なないよ」
人間はどうせいずれ死ぬ。いつか死ぬ。必ず死ぬ。真っ赤な嘘だが、立花が望んでいるのは陳腐な言葉なのだ。彼女は安心したような顔になり、一の胸に手を置く。
「ボク、はじめ君を好きだよ」
「うん」
「ボク、けん君を好きだったよ」
「うん」
「ボクは……！」
立花の涙が一の頬に当たった。彼は目を瞑り、小さく息を吐く。

辛い目に遭ったろう。苦しい思いをしただろう。剣を上手く使えても、ソレを上手に殺せても、彼女だって人間なのだ。誰にも嫌われたくなくて、恨まれたくなくて、憎まれたくなくて。駒台に残れば、今よりも、今日よりも酷い光景を目にするかもしれない。今度死ぬのは自分で、また、友人が殺されるかもしれない。純粋な彼女にとってこの街は毒だ。それでも、立花は残った。自分の意思で、母親から離れて、『立花』の呪縛を振り切って、ここにいる事を決めたのである。

「ごめんね」

「……どうして、はじめ君が謝るの？」

「俺は逃げたんだよ」

神野の家族と会う事を、一は結局、選ばなかった。店長に強く言われたからではない。自分が傷つきたくなかったのだ。立花だけを辛い目に遭わせてしまった。だから、一は謝ったのである。

「ボクから逃げるの？」

「えっ、いや、そういう意味じゃなくて」立花は刀の柄に手を伸ばす。何をするつもりだと問う前に、彼女は一の顔をじっと覗き込んだ。

「ヤだよ、はじめ君がいなくなるなんて。ちゃんと、ボクの傍にいてよ」

「分かったから、その、退いてくれないかな」

「ボク、『立花』なんだ」

立花が真顔で言うので、一はますます意味が分からなくなった。

「お母さんの事がちょっとだけ分かった気がする。欲しいものは手に入れなくちゃ嘘なんだ。だから、はじめ君はボクのものになってよ」

流石親子と言うべきか。押しの強さと駆け引きの妙はしっかりと受け継がれている。一は眉間に皺を寄せて、必死に頭を回転させた。この場から逃れられるなら悪魔に魂を売り渡そうと構わない。

「ねえ、ちょうだい？」

媚びるように、縋るように。立花は甘い声で一を誘った。彼女本人が狙ってやった事なのか、それとも血に組み込まれた女としての本能なのか。どちらにせよ、一は理性を保つので精一杯である。
「はじめ君をちょうだい。ボク、そうじゃないと駄目なんだ。君が傍にいないと我慢出来ない」
「落ち着いて話をしよう」
「落ち着いてるよっ！」
「せめてこれを退かして……」
全然落ち着いていなかった。
「嫌だ。ちゃんと答えてくれないと、ずっとこのままでいるから。逃げようとしたら、怒るよ」
ぐりぐりと、立花は雷切で床を深く抉り始める。一は生きた心地がしなかった。と言うか殺されてしまう。
「はじめ君がボクのものになるなら、ボクをはじめ君にあげる。何でもする。だから……」
「そんな事言っちゃ駄目だよ。お願いだから、離して。店に帰ろうよ」
「答えて」
「……立花さん、疲れてるんだよ」
「答えてよ」
見下ろされた一は視線を横に逃がす。
「ボクのものになるのかならないのか言ってよ！」
「ならない」間髪を入れず一は答えた。
「ならない。俺は君のものになるつもりはないよ」
「う、ううっ、なんで、なんで？　なってよ、ボクのものに」
ならないと、一はもう一度、さっきよりも語気を強める。
「俺は誰のものにもなりたくないよ。人間だからさ、イヌや人形みたいに扱って欲しくない」
「ぼっ、ボクのものにならないなら……！」
地面から雷切が引き抜かれた。立花は柄を短く持ち、切っ先を一

に向ける。
「ボクはもう、あんな思いをしたくない。はじめ君には死んで欲しくないんだ」
「矛盾してるよ」
「手に入らないんなら、いっそボクの手でって！　はじめ君が悪いんだ、皆がボクに優しくするから！」
一はばらばらになったソレを見遣る。ああなるのかもしれないと、諦めたように笑った。
「どうしたいのかって聞いたよね。答えは、出たの？」
「……楽しくやりたい。誰も嫌な思いをしないように、皆で、仲良く」
刀を向けたまま、立花は口を開く。
「ボクは皆を守れない。でも、皆の為に戦える。盾にはなれないけど、剣になら、なれる」
「良いよ」
一は両手をだらりと伸ばした。
「俺を殺して立花さんが楽しくやれるなら、殺してくれて良い。言ったよね、味方になるって。だから、君の願いを叶えてあげたい」
雷切が立花の手から落ちる。甲高い音が響いて、一の胸に温かいものが零れ落ちた。
「君が剣になるなら、俺は盾になれる。戦う事で君が街を守るなら、俺は君を守るよ」
二人で、二人だけでも街を守ろう。それが神野の願いなら、彼が遺した思いなら。一は手を伸ばして、アイギスを握った。
「ボク、ボクね……！」
「うん」
「けっ、けん君……皆、うっ……うあ」
一は目を瞑る。
「うあああああああああっ！」
立花の泣き顔を見たくなくて、ただ、彼女が泣き止むまで待ち続

けた。そうして、一頻り泣いて落ち着いた立花に声を掛ける。帰ろうと、一言だけ。彼女は頷き、一の胸に顔を埋めた。

受話器を置き、店長は煙草に火を点けた。紫煙を吐き出し、所在なげに立っているナナに目を向ける。

「終わったそうだ」

ナナは両手を組み、探るような目付きで店長を見た。

「ソレの死亡を確認、勤務外二名の生存を確認、だ、そうだ」

「私はマスターを信じていましたから」

その割に、今日のナナは落ち着きがなかった。搬入された商品を段ボールごと落としたり、むちゃくちゃな陳列にしていたりとミスを連発していたのである。

「ひとまずは肩の荷が下りた気がするよ。実際、危なかったがな」

「神野さんと立花さん、お二人ともが抜けてしまえばシフトは回りませんし、大幅な戦力ダウンですからね。立花さんだけでも残留してくださったので、良かったですね」

なんだかとっても見も蓋もなかった。その通りと言えばその通りなのだが、自動人形のナナに繊細な人間の機微を理解させるには当分先の事になりそうである。

「……まあ良いか。ミノタウロス死んだし」

「さあ、お二人を迎える準備をしませんと」

「準備？」

ナナは大きく頷く。心なしか、彼女は嬉しそうにしていた。

「お疲れになっている筈ですから、まずはお食事を召し上がっていただきましょう。と言う訳でナナはお買物に行ってきます」

「ふざけるな！　いらんいらん、何もしなくて良い。黙って仕事してろ」

「マスターが餓えても構わないとおっしゃるのですか！？」

ナナの扱いが日を追うごとに面倒臭くなってくる。誰よりも簡単

だった彼女の操縦の成否は、今や誰よりも面倒な一にかかっていた。
「ああ、そうだ。情報部が聞きたい事があるんだと」
「私にですか？」
「と言うか技術部に、だな」
ナナは小首を傾げてみせる。
「でしたら、私を通さず直接お聞きになった方が……」
「大人のプライドという奴だ。情報部ってのはそういう連中の集まりだからな、素直に頭を下げられる者など皆無に等しい。情けない話だろ」
「はあ、で、その方は何について尋ねたのでしょうか」
「お前ら技術部が神野に渡したフツノミタマ、それに変わった機能はあるかどうかを聞きたがっていた」
「フツノミタマですか」ナナは目を瞑り、顎に指を遣る。
「詳しいスペックについては聞かされておりませんが、特別な機能は備わっていないと思います。あくまで、アレは剣ですから」
店長は煙草を銜えたまま椅子を回転させた。
「それが現場からなくなっていたらしい。ミノタウロスが持ち去ったのかと予想されていたが、結局、どこにも見当たらなかったそうだ」
「妙な話ですね。誰が、いつ持ち去ったのでしょうか」
「フツノミタマが消える場面を情報部は確認していない。つまり、一たちがソレと戦闘し、ウチの社員が神野の死体を回収する間に消えたと見るのが自然だろう」
「しかし、一さんたちがアーケードを辞した後もミノタウロスは残っていた筈ですし、情報部だってその場を見張っていたのでしょう？」
その通りだと店長は頷く。自然だが、不自然だ。フツノミタマがひとりでに消える要素はない。ならば何者かが拾っていったのが自然だろう。……ミノタウロスと情報部の目を掻い潜って、という点を除けばの話だが。

「そもそも、フツノミタマを持ち去る利点が見えませんね。ソレに狙われるリスクを背負ってまで武器が欲しかったのでしょうか」
「しかし、アレはウチの技術部が作り出したものだろう。どこぞの企業か、あるいはソレに関わる者が欲しがったとして不思議ではない」
「そこが不思議だと思います。何故なら、フツノミタマの存在は殆ど知られていませんでしたから」
眉根を寄せて、缶コーヒーを一口。店長はそれから新しい煙草に手を伸ばした。
「フツノミタマは神野さんの、つまり社外からの依頼でしたから、天津さん筆頭に暇な人たちがこっそりと作ったものなんです」
「……こそこそとやる理由があるのか」
「先日の失敗により、技術部は様々なところから目を光らせられているそうなのです。ですから内密に。つまり、フツノミタマが技術部の作ったものである事を、また、フツノミタマの存在自体を知る方は殆どいません」
「技術部が誰かにリークしたとは考えられないか？　……いや、薄いか」
「身内贔屓になりますが、技術部の方々はそういった事に対しては興味をそそられないと思いますよ。基本的に、モノを作るのが好きな人たちですから」
そう言えばと店長は思い出す。神野にフツノミタマを渡したのは、技術部の長、天津ではなかったか、と。わざわざ彼が出張ってきたのは、別の者には任せられない、あるいは知られたくない理由があったから、ではないのかと。
「実際、消えてしまった訳だがな」
「まるで魔法のようですね」
「魔法……？」
「ええ、魔法のようですね、と」
ナナは不思議そうに店長を見つめる。

「まさか、な」
その言葉を聞いた時から嫌な予感がしていた。店長は不安をかき消すように煙草の煙を払う。だが、煙の元は彼女が銜えた先にある。結局、そういう事らしかった。

勤務外も、情報部も、ソレも、誰もいなくなったアーケード。そこに、二つの影がぬらりと揺らめいた。背の高い影と低い影、それは寄り添うようにしてゆっくりと動き始める。
「良かったのかい？」
声を放ったのは背の高い方だった。全身黒ずくめで三角帽子を被り、その手にはモップを握っている。まるで、魔女のような――――。

「何がですか？」
答えたのは背の低い方、駒台高校の制服を着た少女である。彼女は苛立ちを内包した表情で、隣にいる女を強く見据えた。
「仇をあの子らに取らせた事だよ。本当は、あんたがミノタウロスを殺したかったんじゃないのかい？」
「アレは私の仇じゃありませんから。私が殺したいのは、あんなものより数段上の怪物です」
「復讐ってかい。良いもんじゃないってのは、こないだ身に染みて分かっただろうに」
少女は首を横に振る。
「重みが違います。前回は、私の中ではあくまで任務で、義務でしたから。お師匠たちに認めてもらえるよう、信じてもらえるように」
「じゃ、今回は違うってのかい」
「人生です。私の全てをかけてでも、投げ出してでも遣り遂げる意味があります。やらなきゃ、私が生きてる意味はないんです」
魔女の格好をした女は呆れたように息を吐く。
「あんたじゃ勝てないよ。向かっても殺されちまうし、そもそも相

手をしてくれないと思うけどね」
「お師匠、手伝ってくれるんですよね？」
にっこりと少女は笑う。さっきまでの刺のある表情からは想像もつかないようなそれだった。
「充分助けてやってるじゃないか。殆どタダで魔法について教えてやってんだし、昨日だって、それ、拾っといてやったし」
「私に黙ってですよね」
「そりゃ、あんたにはショック与えたくなかったからじゃないか」
「いずれ分かる事実だとしても、ですか？」
女は黙る。三角帽子の位置を直して、恨みがましい目付きを少女に向けた。
「その辺の魔女より怖いね、あんた」
「その辺に魔女がごろごろしているような事を言うんですね、お師匠は」
「……それ、何なんだい？」
女は、少女が先ほどから持っている、箱のようなものを指差した。
「兄さんの形見である事は確かですね」
「ま、あんたの兄貴が持ってたもんだ。勤務外なんかに渡すよりは、あんたが持ってた方がよっぽど良いと思ってね」
「お師匠、たまには素晴らしい事をするんですね。見直しました。お師匠と出会ってから初めて」
「ホント、出会った時にはこんな奴だとは思いもしなかったよ」
呟き、女は少女の横顔を見つめる。……魔女よりも、ある意味恐ろしかった。誰かを殺すと言ってのけ、どうして笑顔でいられるのか。彼女が傍にいるだけで、空気が張り詰め、凝固していく。そんな気すらしていた。
「何か考えがあるんだろうね」
「はい。ヴィヴィアンさんに助けを求めます。あの人なら、どうにでも場を用意してくれるでしょうから」
眩暈がする。女は額に手を遣り、少女の怖いもの知らずさを嘆い

た。
「あの人が力を貸してくれる筈ないよ。貸してくれたとして、魂まで根こそぎ持っていかれちまう」
「頭を下げなきゃ始まりません。それに、アレを殺せるんなら私の魂ぐらい捧げてみせますよ」
「……魂ぐらい、ねえ。まあ、良いさ。あたしもあの人には用がある。頼みごとならついでにしといてやるよ」
少女は訝しげに女を見る。
「お師匠が？　でも、これは私の……」
「よしときな、一対一であの人と話そうなんて、あんたにはまだ早い。それに、弟子の仇はあたしの仇でもある。心配しないでも、ちゃんと手伝ってあげるよ」
「ありがとう、ございます？」
「どうして疑問系なんだい」
「日頃の行いですよ」と、少女は屈託のない笑みを浮かべた。
二人はそれきり黙って、ミノタウロスの死体を眺める。
「一応言っとくけどさ、もう、戻れないんだよ？」
「覚悟は出来ています。でも……」
少女は、
「……兄さんの仇を、あの女を殺せるなら、私は――――」
フリーランス『魔女の館』の住人は、
「――――魔女にだって、何にだってなります」
神野姫は、拳を握り締めた。

呼び声

それは襤褸を纏った老婆だ。それは年端もいかぬ童女だ。それは瑞々しい肉体を誇る美女にもなる。

彼女は千の顔を持ち万の年月を歩いてきた。この世の理に通じ、知らないものは絶無に近い。天候すら、人の意図すらも操れる。全ては彼女の前にかしずき跪き、支配されるのが当然だった。

だが、彼女は常に嘆いていたのである。こんなにも上手くいく人生を、意のままに操れる世界を、つまらないと、一言で切って捨てた。

溢れるのは知りたいという欲望。既知を掻き分け未知なるものを、切り開かれた場所ではない、前人未到の道を渇望する。師事した者から全てを奪い、血肉にして生き長らえる。まだ知らないものが、興味をそそられるものが残っているのではないかと、血眼になって世界を這って回るのだ。

堕落するのは簡単だ。怠惰に耽るのも同等だ。日がな一日ベッドの上で目を瞑っていれば良い。気が向けば枕元の書物を読み、面白かったと呟くのだ。生産性からかけ離れた生活は身体だけでなく精神をも鈍らせ、錆付かせる。輝きを失った心は深く、長く停滞を求めた。一度はまれば抜け出せない底なし沼に足を浸して腰を浸からせ首元までどっぷりと沈んでいると気付きながらも焦燥感には変わらない。むしろ居心地が良いとすら思えたのだ。泥濘に拘泥し、更なる愉悦を、新たな倦怠を望んだのも確かである。しかし、彼女は立ち上がった。沼から抜け出し、錆付いた心身に鞭を打った。

噛み砕いて言ってしまえば、本日、黄衣ナコトは退院した。が、

ナコトはだらけきった表情を隠し通せないまま病院を後にしたのである。本音を言えば、彼女はまだまだだらけていたかったのだ。働かなくても生きていける環境を賛美し、甘美したかったのである。

『えー、ナコトちゃんは退院が嬉しくないのー？』

炉辺の困惑した表情は見物だとナコトは思った。また来ますと告げた時の表情ときたら、暗い笑みを殺すのに必死だった。

「……今日から、お仕事ですか」

病院の駐車場、その一角にナコトは座り込む。暫くすれば、公口が車で迎えに来るのだ。彼女は手に持ったコーンスープの缶を一瞥する。

「最後の晩餐……」それを一息に呷り、ごみ箱へ投げ捨てた。見当違いの方向へ転がった缶にいらつき、ナコトはコートの前留めを外す。セーラー服に巻き付いた鎖で空き缶を潰そうとするが、結局、やめる。溜め息を吐き、病院の外観を睨んだ。

「……お前らのせいだー」

公口にクラクションを鳴らされるまで、ナコトは八つ当りとしか思えない恨み辛みをねちねちとぶつけていた。

助手席でシートベルトを締めたナコトは、暖房の効いた車内に人心地をついたように感じた。公口は彼女を見遣ってから小さな笑みを漏らす。

「思っていたよりも元気そうで良かった」

「え、ええ、まあ」ナコトは言い淀んだ。怪我ならとっくに治っていて、休みたいが為に退院を引き伸ばしていた事は黙っておこうと決意する。

「ごめんね、中々お見舞いにいけなくって」

「先輩が気にする必要はないです。むしろ、あたしの方こそ入院しちゃってごめんなさい」

「えっ？」

「とにかく、ご迷惑をおかけしました。今日からまた働かせていただきますので」
　ナコトがそう言うと、公口は首を横に振った。
「ナコトちゃんは働かなくて良いのよ」
　瞬間、黄衣ナコトの灰色（自己申告）の脳細胞が急速に活性化し始める。これクビ？　クビって事？　ああ、明日から寝床はどうしよう。もう図書館には行きづらくなるし本はどこで調達すれば良いの。もしかして入荷希望アンケート、あたしの工作がばれちゃったとか。先輩のクッキーが食べたかった。紅茶飲みたい。サボりがばれてしまった？　館長に嫌われちゃったのかな。うあああ嫌だなあ誰か助けて。何も考えたくないよう。と、思考回路は凄まじい勢いで動いていたが大半は弱音だった。
「そうですか」表面上はクールに装うが、目は泳ぎまくっていた。
「今日はナコトちゃん、退院したばかりだからお休みね。館長が会いたがっていたし、色々と準備もあるでしょう？　とりあえず図書館に行くわね」
　全身から力が抜けていく。ナコトは突っ伏して息を吐き、フロントガラスを曇らせた。
「……クビになるかと思いました」
「あはは、なる訳ないって！　ナコトちゃんがいなくなったら寂しいもの。館長だってそう思ってるわ」
「そう、ですか？」
　ナコトは九十九を思い出してみるが、特に優しくされた覚えも可愛がられた覚えもなかった。少なくとも、彼女からすれば。
「あの人はそういうの苦手だからね。でも、優しいし、人が出来ているのは事実。だって、あなたを二つ返事で預かると決めたんだもの」
「そう、でした」
　頭をシートに預けて、ナコトはハンチング帽を被り直す。
「一君にも感謝しなきゃね。そもそも、彼が頼んでくれたんだから。

預かってくださいって、頭下げまくって」
「……あたしはあの人の所有物ではないんですけどね」
公口は何も言わず、にやにやとした意地の悪そうな笑みを浮かべた。

駒台大学。
一はその門を久方ぶりに潜った。今日はゼミと二つの講義が出席日数ぎりぎりだったので、仕方がないと朝からやってきたのである。自業自得だった。
教務課前の掲示板で休講情報などを確認していると、馴れ馴れしく肩を叩かれる。一はその手を払わずに無視した。
「冷たいじゃないか一君。朝一番に僕の顔を見られるなんて幸運なんだよ。そうは思わないかい？」
「思わない」
「どうせゼミで顔を合わせるんだからさ」
「その時間までは合わせたくない」
ブランドのスーツに身を固めた楯列は肩をすくめた。大袈裟な素振りだが、日本人離れした、整い過ぎた彼のルックスには似合っている。
「……あれ？」
「どうしたんだい？」
一が指差す方へ楯列が目を凝らす。二人はやがて顔を見合わせ息を吐いた。

つくも図書館の入り口前には段ボール箱が山積みになっていた。ナコトと公口は顔を見合わせて不思議がる。
「遅かったな」
その山の向こうから現れたのは甚平を羽織った禿頭の老人、九十

九である。
「……館長、これはいったい……？」
公口の問い掛けに、九十九はゆっくりと頷いた。
「注文していた本が届いた。それと、以前から頼んでいたものも見つかったそうなので一緒に送らせた次第だ」
「それにしたってこの量は多過ぎるのでは……私たち三人じゃあ丸一日かかりますよ、これ」
「公口、心配はない。図書館も今日は休みにしておいた」
「きっ、聞いてないんですけど！？」
「今伝えたからな」
九十九は落ち着き払った様子で答える。それから、躊躇いがちにナコトへ視線を遣った。
「黄衣」
「……はい」
「よく戻った。ん、んん、おかえり、だ」
「た、ただいま、戻りました」
ナコトは照れ臭そうに帽子の上から頭をかいた。

大学の食堂は一時限目が始まった事もあってか、席についている者はまばらだった。一と楯列は入り口すぐの席、周辺を占領する。周辺も、である。何故なら、彼らに近付こうとする学生は稀だからだ。好き好んで楯列の傍に寄ろうとする者はいない。
「……お前さ、消えてくんねえ？」
「はっはっはっ、嫌だなあ一君、意味が分からないよ」
楯列は楽しそうに笑う。一はテーブルの上に鞄を置き、溜め息を吐く。
「いっつも思ってたんだけどさ、鞄って持ってきてないのか？」
手ぶらの友人を見遣り、一は不思議そうな顔を浮かべた。
「僕には鞄を持ってくる理由が分からないんだけど」

「いや、筆記用具とかさあ」
「筆記用具を何に使うんだい？」
「ノート取ったり……ノートもないじゃん！」
今更だなあと、楯列は退屈そうに髪の毛を弄る。
「今まで僕の何を見てきたんだ、一君は」
「なるべくお前は見ないようにしてきたからな。つーか、ノートも取らずにどうやって講義受けるんだよ」
「受けるだけなら話を聞くだけでも良いじゃないか。ここの大学の講師程度のレベルなら、聞いてるだけでも大体分かるからね」
「ちっ、勉強だけは出来るんだからよ、性質が悪いぜ」
椅子に深く腰掛けて、一は不機嫌そうに眉根を寄せた。
「座敷童子の加護があるからね」
「ああ、槐とは上手くやってんのか」
「昨日は久しぶりに姿を見せてくれたよ」
それは果たして上手くやれているのだろうか。避けられているだけではないのか。そう思っていても、一は何も言わない。
「はあ、二時限までお前と差し向かいでいなきゃなんないとはな」
「至福の時だよ。そうだ一君、どうせなら図書館で本でも読むというのは。教養を深める君を眺めるのも、それはそれは素晴らしい時間だと思うんだけど」
「酷いではないか！」
食堂の自動ドアが開く。活発そうな女がくるくると宙に舞う。日焼けした肌、白い歯。無視する一。
「私を蔑ろにしてっ二人だけで話し込むなどとは不届き千万！　ゼミが休講だったのなら伝えてくれれば良かったではないか！？」
楯列を力ずくで押し退け、早田は一の対面にどっかりと座り込む。
「体力が余ってんなら部活にでも行ってこいよ」
「別の使い方もあるとは思わないか？　んん？」
「その手は食わねえ。お前のペースに乗ってたらきりがないからな」
「素っ気ない先輩も素敵だ……！　カメラカメラ、先輩フォルダが

また更新されてしまう。嬉しい悲鳴だな」
　早田は鞄の中からデジタルカメラを探し当てる。それを見た楯列は馬鹿にしたように笑った。
「機械に頼るなんて、早田君もまだまだだね。僕はそんなものを使わなくてもばっちり一君を焼き付けられる」
「黙れ成り上がりが。……それより、九十九先生がゼミを休講にするとはな。先週、そんな事を言っていた覚えはないが」
「俺は行ってないから知らない」
「初耳だよ。しかし九十九先生の事だ。やむをえない理由があったんだと思うよ」
　確かにそうだと、一は頷いた。
「あの先生に限って、面倒臭いとか、私的な理由で休む筈ないしな」
「さっきから館長、くしゃみばかりしていますね」
「そうね、風邪かしら。あ、また」
　階上から聞こえてくる九十九のくしゃみに、ナコトは心配そうな表情を浮かべる。
「お年を召されていますし、大した事がなければ良いんですけど」
　段ボールに詰まった本を、リストから照らし合わせて一冊一冊確認する。この作業を始めてから三十分過ぎたが、まだまだかかりそうだった。
「でも、館長にも困ったものね。こんな事になるなら前もって言ってくれれば良かったのに。大学まで休んじゃって平気なのかしら」
「え、そうなんですか？」
「そうなの。だから、ちょっとびっくり。……ナコトちゃんに会いたかったのかしら」
「館長に限ってそんな事は……」
　くしゃみが聞こえてきたが、二人は知らない振りを通した。
「ナコトちゃん、お手伝いはお昼までで良いわよ。本当ならお休み

もらってるんだし」
「あ、い、いいえ、久しぶりに図書館って空気に触れられますし、好きでやっていますから」
罪悪感がナコトの小さな胸をちくちくと刺す。
「そう？」
「そうです。さあ、頑張って片付けちゃいましょう！」
「いや、黄衣、その必要はない」
振り向くと、段ボール箱を抱えた九十九が立っている。彼は床にそれを置き、大義そうに腰を叩いた。
「舞い上がっていてな、お前が今日休みだと忘れていた。済まない。しかし、言ってくれれば良かったんだぞ」
「体が鈍っていましたから。少しでも勘を取り戻さなくちゃって、だから、気にしないでください」
「……では昼まで頼む。それから、これに目を通してくれんか」
指し示された箱には分厚い本や、風変わりな装丁の本が詰まっている。ナコトは興味深そうな視線を送った。
「あっ、館長ったらまたこんなのに手を出して！」
「そう目くじらを立てるな。老い先短い私の、唯一の道楽だ、見逃してくれ」
ナコトの目の色が変わる。興奮を隠せず、瞳にはぎらついた光が宿った。久しく忘れていた感覚が押し寄せ、彼女は身震いする。
「魔導書……！」
「大半はレプリカや出所不明の粗悪品だが、お前なら気に入ると思ってな。それに、中には掘り出し物も混じっているかもしれん。快気祝いだ、どれでも好きなものを一冊選ぶと良い」
「出所不明って、どこから注文したって言うんですか……」
「この歳になってくるとな、自然と顔も広くなる」
レプリカだとしても、ここまでの数を揃えられる九十九は何者なのだろう。全国を巡っても、魔導書の充実した図書館なんてここにしかない筈だ。ナコトは急かされるようにして背表紙を確認してい

く。もしかしたら、そう思って、必死に目を凝らした。
「気に入ってくれたのなら嬉しいが、黄衣、本は逃げないぞ」
「魔導書って、そんなに良いものなんですか？」
「当然だ。だから公口、贋物とは言えども、魔導書に持ち出し厳禁のスタンプを押すのはやめて欲しい」
「だって貴重なものなんでしょう？」
「むうう、しかしだな、貴重だからこそ……」
九十九と公口はナコトから一歩、距離を置く。
「暫く、放って置いてやるか」
「そうですね、楽しそうですし」
黄衣ナコト。彼女の秘めるモノに、潜んだ闇に、九十九たちが気付く事はなかった。

三時限目が終わったその足で、一はオンリーワン北駒台店へ向かう。本来なら、今日はシフトには関わらない筈だったのだが。彼は、仕方ないかと頭を振る。冷たい風が吹いてきて、一は目を瞑った。次に目を開けた瞬間、眼前には女の顔がある。
「うおおおお！？」
「うわああっ！？　なっ、何さ！？」
女が飛び退く。文字通り、風に舞って飛んで退く。彼女は落ちそうになった羽根付きの帽子を手で押さえた。
「いきなり出てくるんじゃねえよ！」
叫び、一は女を見上げる。彼女は細長い手足を目一杯伸ばしてから彼を見返した。風の精霊シルフは、ご機嫌斜めのようである。
「シルフ様が声を掛けてやったってのになんだよその態度！　ニンゲンのくせに生意気だぞ」
「もっと普通に顔見せりゃ良いだろ。つーか下りろよ目立つから」
「指図すんなっ」言いつつ、シルフは一の傍に音もなく着地した。
「ま、元気だったかダメニンゲン？」

喜色満面のシルフを直視出来ず、一は目を逸らす。
「ああ、元気だよ。マジに、びっくりするくらいな」
「そうかあ？　何か、変な風だぞ、オマエ」
「……変な？」
風に変もそうでもないものもあるのだろうか。あったとして、その違いを感じ取る事が可能なのか。問う必要はない。シルフこそが、風なのだから。
「ちょっと元気ないって感じ。何だよ、嫌な事でもあったのか？　そんな時はお菓子を食べてぼーっとするのが一番だ。お菓子をよこせ」
「菓子はお前が食いたいだけだろ」
「オマエ、いつも持ってんじゃんか。ほら、早く出せよー」
一は困った。菓子を携帯していたのは突発的に遭遇するシルフを餌付けする為なのと、煙草の代わりに何か口にしていなければ気持ちが悪かったから、である。今、彼は再び喫煙を再開した。なので菓子は持っていない。
「あー、今度で良いか？」
「えーっ！？　はああっ！？　やだやだっ、シルフ様は今食べたいのー！」
「その辺に空気あるじゃん」
「だから？」
ねめつけられ、一は押し黙る。シルフは彼の首に両腕を巻きつけて喚いた。
「あーもー、くっついてくんなよ邪魔くせえなあ」
「良いじゃんか、軽いんだし」
「軽々しいって言ってんだ。とにかく菓子なんて今は持ってないっつーの」
「ちぇ、けち。あーあーあー、シルフ様可哀想だよなー、構ってくれる奴、この街には少な過ぎるー」
中空をぐるぐると飛び回り、シルフは空を見上げる。

「ガーゴイルと遊んでろよ」
「あいつ、どっか行っちゃったみたいだぞ。最近見てないもん」
「へ、そうなのか？」
シルフは退屈そうに頷いた。否、実際、退屈しているのだろう。
「あの蛇女をぶっ飛ばした後から見てない。だからオマエが構ってくれなきゃシルフ様死んじゃうじゃん」
「その辺の奴に絡んだらどうだ？」
「シルフ様はー、オマエに遊んで欲しいんだよ。他のニンゲンじゃつまんない」
一は面映い気持ちを感じたが、良く考えれば、精神年齢が子供のシルフと付き合う同レベルなのである。つまり子供。遠回しにガキだと言われているようで、彼は溜め息を吐いた。
「ま、悪さはしないって約束は守ってくれてるもんな。分かったよ、バイトが終わったら相手してやるし、何か持ってきてやるから」
「ホントだな！？　良し、じゃあシルフ様はテキトーに暇潰ししとくから、終わったら迎えに行ってやるぞ」
「終わったらって、分かるのか？」
「わかんない！」
言い切って、シルフは風を伝って空に上っていく。一は彼女の背中を見上げながら、店まで連れて行ってもらえばよかったと、そんな事を考えた。

オンリーワン北駒台店のバックルームには、現時点で行動可能な勤務外が全て揃っていた。とは言え、そのメンバーは一、立花、ナナの三人だけである。
「では、これより第二回オンリーワン北駒台店ミーティングを始める」
「……第二回とか、いります？」
「いる」と断言したのは銜え煙草の店長だ。彼女は勤務外三人をじ

ろりと見回し、文句はあるかと目だけで訴える。
満足そうに頷くと、店長は一を指差した。
「何か気になる事はないか」
「え、あー、いや、特にはないですね」
「立花は？」
立花は難しそうに唸るが、すぐには回答が出てきそうにない。店長は諦め、ナナを見遣る。
「私からも発案はありません」
「では、解散」
「早え！　早過ぎるっつーか他に話す事はないんですか？」
すっかりやる気を失った店長は不味そうに煙草を吹かした。
「私からは特にない。いつも通りにやってくれ」
「じゃあ、どうしてミーティングだって俺たちを集めたんですか？　わざわざ呼びつけられる堀さんが可哀想ですよ」
「堀が、ミーティングでもやってみればどうですかと勧めてきたんだ。私に罪はない」
「堀さんが？　何か、話でもあったんですかね」
店長はさあな、と、一言で返す。
「まあ、大方お前らを心配してるんだろ」
ああと、一は漏らした。
空いたロッカーが、ここに神野がいない事を示していた。バックルームは何一つ変わっていない筈なのに、何故だかぽっかりとした空洞があるように感じる。ミノタウロスを討伐してからまだ一週間も経っていない。慣れてきたと思っていたが、やはり、所々で痛感する。人の死を、遺された思いを。
「それなら、俺はもう大丈夫ですよ」
「は、強がらなくても良い。ただ、いつも通りに仕事をこなしてくれればな」
「あ」と、先ほどからずっと考え込んでいた様子の立花が声を放つ。
「店長さん、この後、誰が残るの？」

店長は眉根を寄せた。やがて、立花が何について話しているのかを理解する。
「休憩に入るのは一と立花で良いんじゃないか？」
「異議ありです。店長はもっとオートマータの福利厚生を考慮すべきだと私は主張します」
「じゃ、立花とナナが休憩しろ」
「大いに異議ありです。俺はまだまともなものを食べていません。俺の健康とやる気をもっと考えてください」
屁理屈をこねる一に辟易としながらも、店長は妥協案を口にした。
「一とナナが休憩。これで文句はないだろう」
「ぼっ、ボクもお腹、空いてるよ？　ボクも休憩したいなあ？」
「じゃあ、三人同時に休憩って事で。かいさーん」
立ち上がって伸びをする一だが、背後から強烈な視線を感じる。
「ふざけるな、私にレジを打たせるつもりか」
「たまには俺たちの見てるところで働いてくださいよ」
「駄目だ駄目だ。三人一緒に抜けるなど有り得ん。と言うか許さん。じゃんけんでも何でも良いから、犠牲になる奴をどうにかして選べ」
なんて言い草だろうか。一は反論の余地を探すが、店長からは一分の隙も見出せない。
「……じゃんけんで決めます。良いよね？」
「異論ありません」
ナナは頷くが、立花は助けを求めるような視線を一に向けていた。
「ぼ、ボク、あの、じゃんけんって苦手なんだよね」
「あ、そっか。そう言えば、立花さんってじゃんけん弱かったよね」
「なるほど、良い事を聞きました。さあ、始めましょう」
「ちょ、ちょっと待ってよ！　じゃんけんはやめて違う方法で決めない？」
一は内心で舌打ちする。
「では、立花さんの代案をお聞かせ願えますか？」
「す、素振り百回、とか。誰が一番最初に百回振れるかって競争は

？」

「ずるいし、時間掛かっちゃうじゃないか。却下」

「酷いや！」

自分の土俵に持ち込もうとする立花の気概は認めるが、あまりにも露骨過ぎた。

「代案がないなら、じゃんけん一回勝負で」

「せめて三回！　三本先取にしようよ！」

「往生際が悪いですよ立花さん。ほら、マスターの顔をご覧になってください。……死ぬほど苛々していらっしゃいます。触る者の心臓をぎざぎざのナイフで傷つけて子守唄を捧げてしまうくらいに苛々しています」

「してないから」

受け流し、一は無意味にグー、チョキ、パーを作って遊ぶ。

「良いからお前らさっさと決めろ」

「良し、一回勝負ね。あ、立花さん、俺グー出すから」

「やっ、やめてってば！」

「グーを出すと！　マスターはグーを出すとおっしゃったではないですか！？　ナナを騙したんですね。酷い仕打ちを受けて、ナナの心はぎざぎざです」

引っ掛かったのはナナだった。

「あはは、ナナちゃんは馬鹿だなあ」

指差して笑う立花をナナは無視する。

「決まったか。じゃ、一と立花が休憩な。ナナ、堀と交代だ」

「はじめ君、ご飯食べに行こうよ」

「料理するって話はどうなったの？」

「ほ、保留」

「良いけどさあ。……あ、じゃあ、前に行ったところまで食べに行こうか」

「えへへー、あそこのお店の親子丼、おいしかったなあ……」
楽しそうにする二人を見て、ナナは店長に詰め寄った。
「私だってマスターと一緒に食事へ出かけたいのです！」
「お前、ものを食べられないじゃないか」
「マスターの愛でお腹いっぱいになります！　なってみせます！」
結構です。一は制服をハンガーに掛けてコートを羽織る。
「諦めろ。勝負の世界とは非情なものだ。恨むなら自分の運のなさを恨むんだな」
「ならばボイコットです。私を行かせてくれない限り、働きません」
「ダメイドが」
ナナは誇らしげに胸をそらした。
「ダメイドと罵られようがポンコツの謗りを受けようが構いません。マスターと一緒にいられれば、それ以外の有象無象のモノからの評価は気になりませんから。人間どもめ、好きなだけ口を開けば良いのです」
「ロボット三原則とやらはプログラムされていないようだな」
「アシモフは足をもふもふされて死にました」
「お前の頭にはプリンでも詰まっているのか」
「あ、見ます？」
ナナは力を込めて自らの頭頂部を押さえる。こじ開けようとしているようにも見えた。
「誰が見るか。全く、悪い影響を受け過ぎだぞ。一度メンテナンスを受けた方が良い。そして一の記憶を消去してもらえ」
「そんな事態になったら死ぬほど……ああ、いえ、殺すほど抵抗します」
「そんなに一が大事か？」
「勿論です」と、ナナは仰々しくお辞儀する。
「……大事なマスターとやらはさっさといなくなってしまったようだが」
はっと顔を上げ、ナナはバックルーム中を見回した。

ドリームランドに連れてって

「風邪、引いてしまいますよ？」
優しい声だった。
この世を恨む。皆、死んでしまえば良い。しかし現世を捨て去れない。そんな思いが自分の根源なのだ。魔女と蔑まれ、疎まれ、人を呪った。運命を呪った。不毛だと、心のどこかでは理解していたのかもしれない。ただ、怖かった。今まで自分と言う存在を形成していたのは、正にそれなのだ。捨て去った瞬間、形を失い、現世から消えてしまうのが恐ろしかった。
だから、彼女は『館』を作ったのである。似たような境遇の女を集め、助け、魔を授けた。名を捨てさせて、新たな名を与えた。同情かもしれない。久しく得られなかった何かに餓えていたのかもしれない。
「聞こえていますか？」
差し出された傘を見遣って、厭世的に笑む。こんな自分に声を掛けた事を後悔させてやろうかと。
「……ちゃあんと、耳は付いてるよ」
傘を差し出したその少女は、美しかった。彼女は濡れた前髪に片手を添えて、ずっと微笑んでいる。こちらに笑みを向けている。憐憫、ではない。自己満足も感じられない。少女は演じているのだ。深く、暗い闇が彼女の中に潜み、だからこそ、美しく思えたのである。
「素質なら、ピカイチかもね」
「あの、頭、大丈夫ですか？」
失礼な奴だと、女は笑った。

あの日から、あの時から、あの女の顔を見た瞬間から、沸々と煮え滾っている。自分の姿が映るものからは逃げていた。今の顔はきっと、誰にも見せられない。自分でも見たくない。どす黒い感情に突き動かされて、強く拳を握り込む。このままでは狂ってしまうかと思われた。

「……姫、どうしても付いてくるのかい？」

神野姫は『館』の先達、自らの師を見遣って、頷く。もう、帰るべき場所などない。あの家に未練はない。彼のいなくなった世界など、滅びてしまっても構わない。だが、その前にすべき事がある。

「私の戦いですから」

姫の師、ランダは三角帽子を被り直して溜め息を吐いた。

「今から会う人は本物だよ。あたしなんかとは比べ物になんないぐらいの、本当の魔女。何をされても文句は言えないし、何をされたって不思議じゃない。分かってんのかい」

もう戻れない。否、とっくに戻れなくなっていたのだ。だから、姫はもう一度頷く。

ランダは辛そうに目を伏せた。今更だと自分を戒めるも、姫の深くなった隈と鋭くなった目付きを見て、やはり後悔する。自分の気まぐれがこんな事態を引き起こす事になるとは思っていなかったが、それでも。

「お名前、伺っていませんでしたね」

「ヴィヴィアン。大体、そう通ってた筈さね」

「案外、可愛らしい名前。もっと仰々しいものを想像していました」

名前自体に強い意味はない。ランダは何も言わず、分かれ道の前で足を止めた。

「お師匠よりも魔女らしい魔女、なんですよね。どんな魔法を使えるんですか？」

「あのね、今みたいな質問をヴィヴィアンにぶつけるんじゃないよ」

「ああ、お師匠よりも凄いんですね、その方は」

「そうだけど、言い方が悪い……しっかし、アレだね。あの人が『館』を抜けてから会うのは初めてだよ」
「今、何をなさっているんですか？」
「この辺りで辻占をやってるって聞いたけどねえ」
姫は小首を傾げる。駒台で辻占を見る事自体珍しい。その上、ここで占い師を見かけた覚えもなかったのだ。
「あの人の姿が見られるのは、あの人に選ばれた者だけなんだよ。あたしなら、無理矢理にでも結界なり何なりぶっ壊せるんだけど、そうしたら、機嫌が、さあ……」
「お師匠の考えナシ」
「でも、その心配はなさそうだね」
前方の景色がぐにゃりと歪む。姫は目を見開いた。先まで、そこには何もなく、誰もいなかった筈だと言うのに、襤褸を纏った老婆がこちらを見ている。年齢のせいか、背筋は大分曲がっていたが、その視線はまっすぐで、逃れられないと姫は直感した。
「……久しぶりじゃないか、ヴィヴィアン」
ランダが声を掛けるも、ヴィヴィアンと呼ばれた老婆は反応を見せない。彼女は、姫だけをじっと見つめていた。
「あなたが、ヴィヴィアン、さん？」
「神野姫あなたの未来を見させてあなたが何を選ぶのか教えて欲しい私はあなたの未来に興味がある」
最初、姫は老婆が何を言っているのかが聞き取れなかった。一息に言い切る独特な話し方に戸惑ったのである。それから、声だ。年相応にしわがれた声ではなく、若い女の、張りのある声音にも驚いた。
「私の未来を……？　あの、そうじゃなくって、私は……」
占いなど必要ないと姫は内心で憤る。自分がどうなるかなんて、分かっている。必要なのはヴィヴィアンの力なのだ。
「姫、ご機嫌でも取っときな。あんたの未来が気に入れば、ヴィヴィアンは力を貸してくれる筈さ」

未来なんて、ない。立花真をこの手にかけるだけの人生だ。それを選んだのである。その為にここにいて、兄のいなくなった世界を生き延びているのだ。

「構いません。どうぞ、お好きに」

ヴィヴィアンは口元を歪ませて低く、引き付けを起こしたように不気味な声で笑う。姫は彼女を冷めた目で見据えていた。

心配していたのだが、どうやら立花は大丈夫らしい。少なくとも表面上は、ではあるが。

「美味しかったね。ね、ね、また二人で来ようよ」

「ん、そうだね、機会があれば、また」

立花に腹芸が出来ると、一は思っていない。彼女はいつだってまっすぐに感情を露にする。だから、今はきっと心から笑っているのだろう。神野の死を乗り越えた訳でもない。忘れる必要はないのだ。折れた刀は甦る。芯に通ったものが本物なのだから、立花に関しては心配ない。

心配なのは自分なのだと、一は俯く。ミノタウロスと戦った際に気付いた異常が彼の心を苛んでいた。一つは、煙草の箱がアイギスになった事である。傘以外のものが神具となったのは心強い。また、新たな何かを得たのだと喜べる。だが、いよいよ人外じみてきた。北が言っていた事を実践出来る程度には人を外れている。その気になれば、葉っぱ一枚、あるいは空気をアイギスにするのも、そうなのだと思い込むのも可能なのだろう。尤も、一にその気はなかった。追い詰められたからこその変化であったのだと彼は認識している。

もう一つは、メドゥーサからの警告についてだ。力を酷使すれば鼻血程度では済まなくなるのだろう。連続、連日で彼女に力を借りていては身が持たない。メドゥーサは最も近しく、頼りになるパートナーだが、見誤れば彼女に殺される。身に宿ったアイギス。それに囚われているのはか弱い姫ではないのだ。檻を食い破らんとする

怪物であるのを忘れてはならない。
　今まで通り、アイギスを盾として扱うのは問題ないだろうが、メドゥーサに頼るのは暫く時間を置いた方が良いかもしれないと、一は立花を見て思った。新から彼女に受け継がれた雷切、その力、『立花』の名は、やはり伊達ではない。自分よりもソレを殺す事に長けている。立花は自身を剣だと言った。ならば、攻撃の一切を彼女に任せて、防御は自分が担えば良い。
「はじめ君はさー、お母さんが帰って寂しかった？」
　幼く見えていた立花が、少しだけ大人びたように感じていた。心境の変化は、あったのだろう。怒濤のように起こった事物が、彼女を良い方向へと押したに違いない。
「新さん？　あー、まあ、正直に言うとほっとしてるけどね」
「やっぱり、苦手だったの？」
「押しが強くて……あ、でも、嫌いじゃあなかったと思う。アレだね、ちょっと不器用なだけ、だったんだと思うよ」
「……はじめ君は強引に来られるの、嫌い？」
　一は言い淀む。
「うーん、ほら、あの、ジェーンが、ね？　あいつがあんなだから、どっちかと言うと控え目な感じの人のが良いかなあって」
「肉食系って奴だね。ジェーンちゃん、アメリカ人だし」
「関係あるのかなあ？　まあ、肉ばっか食ってたら馬鹿になっちゃうってのは確かだね」
「ボク、馬鹿になっちゃうのかな……お肉、好きだから」
　鳥肉はセーフかなあ、などとのたまう立花から、一は視線をずらしてフェンス越しの線路を見遣る。
「立花さんは、家に帰りたいって思わない？」
「え？」
　立花のポニーテールが揺れた。一は、駒台を過ぎていく列車を羨ましそうに見つめる。列車が完全に彼らの視界から消えた後、彼女は躊躇いがちに口を開いた。

「思うよ。はじめ君は、お母さんの事を好きじゃないかもしれない。けど、ボクは、さ、ボクにとっては、たった一人のお母さんだから」
「後悔、してる？」
「ううん、ボクはここに残って良かったんだって、思ってる」
微笑み、立花は目を細める。彼女がそう言うのなら、これ以上は何も言うまい。一は線路から視線を外して、立花に目を向けた。
「けん君が守ろうとした街だから、あのね？　はじめ君、二人で、守ろうよ」
「二人だけで？」
「ふ、二人だけでもだよっ」
一は苦笑する。立花もまた、自分と似たような事を考えていたらしい。ヒーローにはなれないけれど、なりたいとも思わないけれど、彼女と一緒なら、ヒーローの真似事ぐらいは出来るだろうとも考えられた。

結局、魔導書を選ぶ事は出来なかった。探し求めていた本がそこにあった。なのに、手を伸ばす事が出来なかった。恐かったのだ。『図書館』になると決めた日から、ずっと追い続けてきたもの。ナコトにとっては目的で、全てだ。存在する理由の一つで、それしか残っていない。
魔導書は選ばれた者にしか閲覧出来ない。本を見つけても、ページを繰っても意味はない。その魔導書に選ばれなければ、魔術師にはなりえない。黄衣ナコトは確かにそれを求めていた。だが、もしも読めなければ？　選ばれなかったなら？　これから先、何を信じて生きていけば良い。
考える時間が欲しかった。願わくは、本を開く勇気も。
「駄目駄目です」昼になると、九十九たちから半ば追い出されるようにして図書館から出てきた。駒台の街に行き場はない。どこに行っても、誰と会っても、何をしたって頭からは魔導書が離れないだ

ろう。それでも、たった一人だけ心当たりがある。会いたいと思う者がいる。

一と立花が、二人で歩いていた。

「……本当に」

以前は、一は立花を遠ざけようとしていたように思う。でも、二人の距離は何だか近くて、彼らだけの世界を形成しているように思えた。躊躇う事はない。自分だって一に用がある。話したいと、会いたいと。足が動かない。

――――馬鹿みたい。

黄衣ナコトは気付かれないように息を潜めて、一たちを見送った。

殺してやりたい。

今すぐにでも、兄の恨みを晴らしてやりたい。だが、あまりにも早過ぎやしないだろうか。覚悟は決まっていた筈なのに、ヴィヴィアンからもたらされた案を実行する段階に至って、神野姫は少しだけ揺れていた。

本物の魔女、『館』の元住人、ヴィヴィアン。彼女に、姫は自分のペースを乱されている。流されるままに、まるで、そこに自分の意志が介在していないように思われた。

「久方ぶりに人の業に触れた神野姫あなたには期待しているどうか私を楽しませて欲しい」

「……お好きに」

姫は楽しそうに微笑む童女を見下ろす。ランダはやれやれとでも言いたげに頭を振った。どこにでもいそうな、小さな女の子。彼女こそが、今のヴィヴィアンだ。

ランダの言によると、ヴィヴィアンは自分の姿を自由に変えられるらしい。姫は、彼女が襤褸を着た老婆から童女に、一瞬で姿を変えた時には絶句した。これだけでも充分に驚異的だというのに、ヴィヴィアンが所有する魔法の、ほんの序の口だと言う。

「姫、チャンスってのはいつ飛び込んでくるか分からないもんだよ。ヴィヴィアンはあんたにそいつを与えた。……あいつを、殺したいんだろ？」

「ええ」

「……そうかい」

まるで、答えが欲しくなかったような反応を見せると、ランダは三角帽子を深く被った。

姫はヴィヴィアンの使い魔の視界を通して、前方にいる立花と、一を静かに見据えている。戦闘を行うにあたって、ヴィヴィアンから授けられたものは何もない。だが、彼女が立花真に理由を与えてくれる。

神野姫は神野剣の実妹であり、立花にとっては友人の妹だ。だから、立花は自分と戦わない。そう、姫は睨んでいる。きっと、彼女は逃げの一手を打つだろう。話し合いで解決しようとするだろう。

させるものか。

姫は歯を食い縛る。ただ殺すだけでは済まさない。立花の力も、感情も、全てを引き出してから、絶望の只中へ落としてみせる。……兄はそれを望んではいないだろう。望んでいるのは、自分だけだ。当然である。何故なら、死者は何も望まない。思わないのだから。

影が頭上を覆う。高架下に差し掛かった一は立ち止まった。立花も彼に倣い、足を止める。列車が真上を走っている為に、二人は声を発しない。揺れる地面に視界がぶれて、世界が歪んだ気がしても、言葉を紡げない。

前方に、黒い女が見えた。モップを持った女は三角帽子を目深に被り、漆黒色のマントを翻す。彼女を、一はどこかで見たような気がしていた。

「はじめ君、後ろに」

立花が提げていた竹刀袋を肩から外す。

「……まさか、ソレなのか？」
「『館』の魔女だ。けん君が言ってた奴に似てる」
似ているだけでソレ扱いされる女はたまったものではないだろうが、一は立花に従う。格好だけでもそうだと言うのに、身に纏う雰囲気は尋常のものではない。常人では放つ事など許されない、魔性のそれを漂わせている。
しまった、と。一は自らの甘さを悔いる。立花はこうして得物を持ってきていたのに、自分はアイギスになりうるものを所持していない。煙草の箱はポケットにあるが、ちっぽけなものに自分と、立花の身を託すつもりはなかった。
「逃げよう。俺が足手まといになる」
振り向けば、そこにももう一人。見覚えのある少女がこちらを見つめていた。北駒台高校の制服を着た彼女の相貌が一の心を揺さぶる。
「姫、ちゃん……？」
立花が呟き、列車が完全に過ぎ去っていった。静けさが返り、ようやくになって口を開く者が一人。
「逃げようなんて考えない事だよ、勤務外」
魔女が口を開く。帽子のつばに手を遣り、彼女は愉快そうに一たちを見た。
「『館』の生き残りかよ」
「ご名答だよ、ぼうや。あたしはランダ。あの時は出会わなかったけどさ、あんたのお仲間には煮え湯を飲まされたねえ」
「自業自得じゃねえか。何か、復讐にでも来たってのか？」
フリーランス『館』。そこに住む者たちの結束は固いと、一は聞いている。だからこそ、襲われた。関係のない人間が大勢死んだ。
「んにゃ、今日はそっちの用じゃない。尤も、あたしゃ最初からその気はなかったけどねえ」
「だったら……」
立花が息を呑む。彼女はランダではなく、姫から視線を逸らせな

いでいた。
「そっちのお嬢ちゃんは分かってるみたいだね。そう、今日の狙いは立花真、あんただよ」
「なっ、待てよ！　立花さんは魔女を殺してない！」
「――――ええ、殺したのは魔女ではなく、私の兄ですから」
ようやくになって喋ったと思えば、それか。一は歯噛みし、姫に視線を向ける。
「殺した、だって？」
「一さんとおっしゃいましたか、確か。はい、その女は兄を殺した。あなたも、その場にいた筈だと思いますけれど？」
勘違いしているらしい。神野を両断したのは立花ではない。ミノタウロスだ。その場にいたからこそ分かる。言ってやれる。
「神野君を殺したのは、ソレだよ」
一が声を絞り出すと、姫はきょとんした顔になり、それから、腹を抱えて哄笑した。狂気じみた彼女の笑い声に彼は震える。
「あはははははははっ！　面白い事を言うんですね、あなたもっ。知っていますよそんなの！」
正気とは思えない。立花の顔色は少し、青くなっていた。一はランダよりも姫を脅威だと感じる。
「だから？　だからなんですか？　ソレも、勤務外も、大して違いはないでしょう。命を奪う存在が怖気づかないでくださいよ。殺すんだから、殺されたって構わないじゃないですか」
「あのさ、言いたくないけど、君の兄さんだって勤務外だったんだぜ？」
「言いましたよね？　だから？　と」
話は通じない。姫は本気で立花を殺そうとしている。だが、一に戦うつもりはなかった。姫は神野の妹で、恐らくは一般人。彼が死んでしまったところを『館』の魔女に唆されたのだろう。
「何さ。おいおい、あたしをそんな目で見ないでおくれよ。と言うか、あたしはむしろ……」

「お師匠、余計な事を言わないでください」
「はいはい」ランダは肩を竦める。
聞き捨てならない言葉を聞いて、一は眉根を寄せた。今、姫は魔女を師と呼んだ。ランダが姫を操縦しているのではないのか。先ほどから気になってはいたのだが、何か、おかしい。何故、『館』のモノとこうまで普通に接しているのか。
とにかく、一度逃げた方が良いだろう。一はそう判断して、立花の肩に手を置く。彼女はびくりと震えたが、彼の顔を見て、安心したように目を瞑った。
「あ、逃げようとしていますね。そうはいきません。そうはいきませんから、一つ、面白い話をしましょう」
「悪いけど、今は興味ないんだ」
姫はくすくすと、手の甲を口元に当てて微笑む。
「火祭愛美。馬越泰江。嵐山明衣」
「……それが、何？」
立花はお伺いを立てるようにして姫に話し掛けた。一は、体中から力が抜けるのを感じていた。何故、その名前を知っている。情報部でもない、勤務外でもない姫が知っている。どうして、愉しそうにしていられるのだ。
「そこの、頭の回転が鈍い女は気付いていないみたいですけど。流石は一さん、兄が言っていた通り、頼りがいのあるお兄ちゃんですね」
「まさか……そんなっ」
一は思い出す。内部犯がいると、口の軽い情報部は言っていた。
「では、改めましてこんにちは。私は『館』のレヤックと申します」
問い質す時間すら与えられない。立花は何も言わず、雷切の柄をぐっと握り締める。
「どうしました？　あなたたち勤務外にとって、私は憎い仇なのでしょう？」

「かた、き？」
「ええ、だって学校に『館』を招き入れたのは私なんですから」
脳裏に、あの日の光景が蘇った。グラウンドで野晒しになった死体。豚になった女生徒。錆びた剣に、蠢く骨。何よりも、哄笑する魔女！　腹を揺すって死体を指差す魔女が、一の脳裏により強く、鮮明に浮かび上がる。信じられない。信じたくない。駒台を守ろうとした神野の妹がフリーランスで、よりによって『館』のメンバーだったなど、そんな事を、誰が信じられる。誰が信じたいと思うのだ。
「まだ信じられないのなら、もっと面白い事を聞いてみますか？」
「……やめてくれ」
「何なら、ここでスパルトイを召喚しても良いんですけど」
全て、納得出来る。神野姫が『館』の住人なら、魔女が起こしたあの事件の謎、その殆どは解決するのだ。
「やめてくれっ、どうして、君なんだ。どうして、神野君の妹の君が……」
「甘っちょろい人ですね、あなた。兄さんの言っていた通りで想像通り。でも、迷っていると殺されちゃいますよ？」
空気が重くなる。一はそれでも戦えない。あまりにも、救いがなさ過ぎる。神野が守りたかった者に、殺されるのだとしても。
「無理だよ、姫ちゃん」
「っ、あなたが私の名前を呼ばないでくださいよ」
「姫ちゃんには無理だ。ボクは、はじめ君を殺させない」
雷切が鞘から解き放たれる。立花は切っ先を下げたままではあるが、切れ長の瞳で姫を見据えた。
「兄さんを殺したのに、その人は殺さないと？」
「ボクはけん君を殺してなんかない」
「いいえ、殺したんです。あなたは、私の知る兄を殺した」
ランダがモップを構える。姫は腕を組み、鼻を鳴らした。
「次は私を殺しますか？　『館』に入り、招き入れた憎い仇を。あ

なたたちの邪魔をするフリーランスを、その刀で」
「殺さない。……ボクは、姫ちゃんを殺せないよ。学校を襲ったのは悪い事だ。けど、殺したいとは思わない」
「綺麗事を。間接的とは言え、私は人を殺しました。あなたの大事な日常を壊し尽くした。憎いと、どうして思えないのですか。私が神野剣の妹だからですか？」
一は押し黙る。姫が『館』のメンバーである事に驚いたからではない。その事実は信じ難いが、徐々に飲み込み、理解し始めている。彼が不自然に思ったのは、姫が長々と話をしている事だ。
「ボクには、そういうのが分からないから」
「あっ、そうですか。そうですよね。化け物だもの、人間の気持ちが分からなくて当然ですよね」
「う、この……っ」
こうなった経緯は一にはまだ分かっていない。が、立花は姫にとっての仇、憎悪をぶつけるに値する敵らしい。その相手を前にして、立ち止まる。冷静になって話を始める事が分からない。我を忘れて飛び掛かるのが、むしろ自然ではないだろうか。北駒台高校を襲った魔女で、一が知る限り死んだのは三人。人間を豚に変えるキルケ。体から虫を沸かせるパシパエ。モノを隠すカリュプソ。
神野は以前、モップを使う魔女と戦ったと言っていた。ならば、姫に師と呼ばれた女がそうなのだろう。スパルトイを召喚した内通者が姫なら、『館』の構成員はこれで全て、五人の筈だ。魔女の力は割れている。手の内を暴かれている。なのに、姫には余裕があった。敵前で我が身を晒し、立花に挑発的な態度を取っている。まだ隠し玉があるのか。何か他に意図があるのか。何にせよ、ペースに乗るのはまずい。
「立花さん、妹さんの方へ逃げよう」
一は声を潜めて立花に話し掛ける。逃走を図るなら、やはり姫を狙うのが常道だろう。ランダの力は未知数だ。モップで戦うだけなら魔女とは呼ばれまい。彼女にはまだ、何かある。仮にも師と呼ば

れる者なのだ。穴があるならそこに付け込む。
……また、生き延びようとしていた。
神野が殺された時も、今も。足を止めたくて、思考を止めたくて仕方がない話を聞いた筈なのに、一にはそうする事が出来なかった。
「姫、そっちに行くよ」
「分かっています」
走り出した一たちをランダが追い掛ける。モップによる振り下ろしは立花に避けられ、固いコンクリートを穿った。
「お師匠の馬鹿」
「うるさいねっ」
一は内心で『館』を嘲笑する。追い詰めたいなら、何故姫を連れてきたのかと。挟撃するには彼女はあまりにも頼りない。立花が雷切を横に薙ぐ。姫はそれを下がって回避した。ほら見ろと、一は彼女の脇をすり抜けていく。
立花と姫の視線が交錯した。
彼女は笑う。
「やっぱり、私ですよね」
立花の前を走っていた筈の一が、彼女の視界から消える。
「はじめ君っ」
一はその場に、前のめりになって倒れ込んだ。彼は呻き声すら発さないまま、冷たい地面に顔を預ける。立花の呼び掛けにも答えられないで、ぴくりともしなかった。
「ほら、後ろが空いていますよ」
「う、わあああああっ!?」
大きな衝撃を受けて、立花の体がフェンスにまで弾き飛ばされる。背中を強打し、それでも彼女は雷切を離さない。明滅する視界が、僅かにぶれる。姫とランダの傍に立つ、若い女を確かに認めた。

「はじめ君に、何を……」

フェンスに背を預けたまま、立花は立ち並ぶ魔女を睨み付けた。動かない一の傍に駆け寄ってやりたいが、そうはさせてくれないだろうとも分かっていたのである。

「へえ、そんな顔も出来るんですね。やっぱり、ヴィヴィアンさんにお願いして良かった」

ヴィヴィアン。初めて聞く名前だが、姫が話し掛ける妙齢の美女がそうなのだろうと当たりをつけた。

「何をしたのかって聞いてるんだ！」

姫は煩そうに耳を塞ぐ。わざとらしい仕草だが、単純な立花の反感を煽った。

「効果覿面じゃないですか。……兄さんが、浮かばれない」

「答えてよっ」

呼吸を整えた立花が地面を蹴る。彼女が狙ったのはヴィヴィアンだが、その前にランダが躍り出た。モップの柄を切ろうとするが、思っていたものとは違う衝撃が返ってくる。

「かた……！？」

「舐め過ぎだよ」

ランダが柄を突き出す。立花は半歩動いてそれを回避。再度横に薙ぐも受け止められる。ただのモップが雷切の強度に付いてこられる現実に、立花は頭の中が真っ白になった。

「ただの魔女だと思ってもらっちゃ困るねえ」

肩への振り下ろしを立花は弾き、ランダの喉元に突きを放つ。彼女はモップを戻し、すんでのところで攻撃を受け止めた。

「あんたはパシパエの仇になるってのを忘れるんじゃないよ」

「仕掛けたのはそっちじゃないか！」

「それでも、だよっ」
雷切を使いこなせていないのを自覚し、立花は唇を噛み締める。
ランダの棒術、その技量は高い。が、『立花』にしてみれば所詮は手遊びの領域だ。雷切さえものになれば、立花の敵ではない。
「へえ、やっぱりモノが違うね。やるじゃないのさ」
距離を取り、ランダは口元を歪める。
「お師匠、かっこ悪いです」
「うるさいねえ。あんたこそ、いつまで遊ぶつもりなのさ」
「遊ぶ、だって？」
姫はくすくすと笑みを零した。
「予想以上に引き出せたものですから。ふふ、そうですね。楽しみは後に回しましょう」
「はじめ君を返してよっ」
「別に取ったりしませんよ。一さんは死んでませんし、ただ、夢を見ているだけです」
何気なく言うと、姫はヴィヴィアンに視線を遣る。
「覚めない悪夢、いつまで心が耐え切れるかは知りませんけど」
「眠ってる、だけなの……？」
肩にモップを担ぎ、ランダは一を指差した。彼女の表情からは僅かな翳りが見えるが、立花は気付いていない。
「一生起きないなら、死んでるのと変わりないと思うけどね」
「彼を助けたいのなら」
姫はポケットから、一枚の折り畳まれたルーズリーフを指で摘む。ヴィヴィアンが何事かを呟くと、畳まれた紙が独りでに飛んでいき、立花の足元に落ちた。
「私と殺し合う事ですね。一さんにかけられた魔法を解けるのはヴィヴィアンさんだけです」
「そっ、そんなの出来ない！」
「だったら、一生、このままですけど？　何なら、諦めて彼にキスでもしますか？」

立花の頬が一瞬にして朱に染まる。彼女は雷切でヴィヴィアンに切り掛かるも、彼女の姿は靄となって消えてしまった。

「また、会いましょう」

魔法のように。否、それは魔法だ。ヴィヴィアンに続き、姫とランダの姿も掻き消えていく。残された立花は落ちた紙を拾い上げてから、眠りこける一を確認して、ひとまずは安堵の息を吐いた。

遠慮する事はない。

一は自分にとって命の恩人だ。もう二度と手に入らないと思っていた温かいものを与えてくれたのである。彼がいなければ、うつむく者の毒は片目で済まなかっただろう。

だからと言って、一に話し掛けるのを遠慮しているのは違うと思ったのだ。彼が誰と歩いていようが、例えばその相手が仲睦まじい恋人だとしても、である。一は自分の世界を壊してしまった。息を吹き掛ければ飛んでいってしまうような、ちっぽけな世界から抜け出させてくれた。だから、彼だって自身の世界を壊されても良い筈なのである。

「うん、あたしは何も悪くない」

黄衣ナコトはそう言い聞かせて、オンリーワン北駒台店の扉を開けた。

「いらっしゃいませ」出迎えるのはメイド服を着た店員である。趣味が悪い。ナコトは店員のナナに一瞥くれると、店内を見回した。

一はいない。まだ立花と街を歩いているのだろうか。良い度胸である。ならば、店で待たせてもらおうではないか。口角をつり上げ、ナコトはカウンターに向かう。

「一さんはいらっしゃいますか？」

「……あなたは、黄衣さん、でしたか。マスターに何か用があるのなら、出直してください。マスターはただ今……」

「中で待たせてもらいます。質素な椅子しかありませんが、寒風吹

き荒ぶ外よりは幾らかマシでしょうからね」
「あっ、あの！　いけません！」
引き止めようとするナナの腕をかわし、ナコトはバックルームへと足を進めた。扉に手を当て、一息に開ける。
「……あれ？」
仮眠室から出てきた立花と目が合い、ナコトは彼女を睨み付けた。
「一さんを探しているのですが」
「あ、その」立花の視線が店長に向く。助けを求めているようにも見えて、ナコトの心がささくれ立った。
店長は相変わらず不味そうに煙草を吹かしながら、椅子を器用に回転させてこちらに目を遣る。招かれざる訪問者である事を自覚しながらも、ナコトは決して引くまいと思った。
「黄衣、またか。部外者は帰れ。それとも、ウチにアルバイトの面接にでも来たのか？　だったら、話を聞いてやらんでもない」
「自ら好んでイヌに成り下がるつもりはありません。それよりも、あたしはお客様ですよ？　客の要望には素直に答えたらどうですか？」
「要望？」
鸚鵡返しする店長をじろりと見てから、ナコトは咳払いをする。
「一さんに用があるのです。奴を出してください」
「一ならここにはいない」
「では、来るまで待たせてもらいます。もしくは一さんをさっさと呼んでください。美少女があなたを待ってますとでも言えば、頭の悪い人ですからすぐに飛んでくるでしょう」
「帰れと言っているんだ」
何か、様子がおかしい。
つくも図書館の司書として安穏とした生活を送りつつあるナコトだが、かつては数多のソレを叩いて砕き、ソレから恐れられた『図書館』なのだ。元フリーランスの血が騒いでいる。何か起こっているのだと。

「また、ソレでも出ましたか」
今度は、店長は何も答えない。だが、立花の様子を見れば手に取るように事態は分かる。狼狽した彼女は、先ほどからちらちらと仮眠室に目を遣っていた。
「都合が悪くなればだんまりなのは良いと思いますよ。美徳です。下手に話せばぼろが出ますからね。ええ、それはもうぼろぼろと。で、一さんはどこですか」
「立花、追い出せ」
「え、えっ、う、あ、でも……」
「立花、二度は言わんぞ」
立花は店長とナコトを何度も見比べる。やがて、諦めたように目を瞑った。
「……ボクたちじゃ、どうする事も出来ないのに？」
やはり、何かが起こっている。それも勤務外だけでは解決出来ない厄介な事が。
「力ずくの得意なあなたたちでは無理、つまり、あたしのような卓越した頭脳の持ち主ではないと解決出来ない事が起こっているのですね」
「あっ、あの、ナコトちゃん」
馴れ馴れしいと切って捨てようかとも考えたが、ナコトは堪える。
「立花、止めろ。私たちだけで終わらせられる問題だ」
「だったら！　店長さんがはじめ君を何とかしてよっ！」
一の身に何かが起こっていた。その事実を理解した途端、ナコトは立花に詰め寄る。
「はじめ君を、助けて」

父さんと叫んだ。
母さんと泣いた。
燃える家からは何かの焦げた匂いが漂ってくる。赤い炎と黒い煙

が世界を染め上げていく。それを見て、薄く、高く笑う女がいた。
女たちは、自らを『館』の魔女だと告げたのである。確かに、こんな芸当魔女にしか出来ない。こんなの、人間の為せる所業ではない。
女学生のような制服を着た女は告げる。呪文を唱えるような早口で聞き取りづらかったが、彼女が魔導書と呼ばれるものを求めていたのは分かった。フリーランスがこんな片田舎にやってきた理由はそれなのである。
父は珍しい本を集めるのが好きだった。新しい本を手に入れては、子供のような笑みを見せてそれを自慢していたのを覚えている。忘れられる筈がない。
「ヴィヴィアン、あったのかい？」
声を発したのは、一人だけ何もしなかった魔女だ。だからと言って許す気にはなれないが、彼女は少しだけ、他の女とは違う気がした。
ヴィヴィアン、そう呼ばれた女は首を振る。残念そうに、俯くのだ。人を殺しておいて、人の家を焼いておいて、悲しむ。
忘れるものか。絶対に、許さない。少女は魔女たちの顔を強く、心に刻み込む。どれだけ時間が掛かろうとも構わない。いつか必ず、この手で奴らを。

仮眠室の扉を閉めると、店長は自分の椅子に座って煙草に火を点けた。ゆっくりと煙を吐き出して、パイプ椅子に座るナコトを見遣る。
「一と立花を襲ったのは間違いなく『館』の連中なんだな？」
「確認するまでもないでしょう。本人たちがそう名乗っていたのですから。それよりも、あたしが知りたいのはヴィヴィアンと名乗る女が本当にいたのかどうか、です」
「いたって言ってるじゃないか」

立花はむっとした風に答えた。
「綺麗な女の人だったって、そう言ってるのに」
「……そうですか」
「それより、はじめ君はどうなるの？　ちゃんと、目が覚めるんだよね？」
ナコトは押し黙る。一が何らかの魔力により、強制的に眠らされているのは確かだ。一時的な覚醒を繰り返しているらしいが、すぐにまた眠ってしまう。彼もまた、抗おうと必死なのだろう。
「一さんには魔術の素養が備わっていますが、それでも、魔女のかけた魔法を解く事は不可能に近いでしょう。ヴィヴィアンが自ら魔法を解かない限りは……」
「結局、『館』の挑発に乗るしかないんだな」
姫が立花に渡した紙、そこに書かれていたのはとある場所を示したメモだ。店長はくしゃくしゃになったそれを見遣り、息を吐いた。
「神野姫、彼女の狙いが復讐ならば一さんは人質です。従わないと、魔法を解かないぞ、と」
「同じ手を食うとはな。してやられた」
「場には罠が張り巡らされているかもしれません。正直、勝てる気はしませんね。わざわざ『館』が姿を見せたのですから、相応の策を用意している筈でしょう」
「いや、そうか？」
店長は眉間に指を当て、煙草の火を灰皿の上で揉み消す。
「何か違うような気がする。立花を殺したいと言った神野姫の気持ちは本当だろう。だが、何故、殺さなかった？　その時一はアイギスを持っていなかった。三対一という圧倒的に有利な条件を捨ててまで、奴らは何をしたかったんだ？」
ナコトは腕を組み、偉そうに立花を見つめた。店長の言に一から十まで賛同したくはないが、確かにその通りである。復讐する相手、絶好の機会を自らの手で逃してまで、また、誘き寄せる。何を狙っているのか、ナコトには少ししか分からない。

「恐らく、復讐する為でしょうね」
「え、でも？」
「あなたのような人には分からないと思います。殺したいほど憎んでいる奴がいて、果たして、ただ殺してしまうだけで気持ちが晴れるでしょうか」
そう言って、ナコトは店長に流し目を送る。
「徹底的に痛め抜いて、もう許してくださいと頭を下げるまで、それでも許さずその頭を踏み付ける。感情全部吐き出させて、死の寸前まで生きた事を後悔させてやりたい。そう思っていても不思議ではないでしょう」
立花は暗い表情になる。姫に憎まれる理由が分からなくて、今にも泣きだしそうだった。
「『館』の、いえ、神野姫の狙いはあなたです。……だから、他の魔女は積極的にあなたを殺そうとはしないと思います」
「へっ、な、なんで？」
「立花真を殺したいのは神野姫。ですから、他の魔女はフォローに回る筈です。三対一という構図は崩れませんが、そこに付け入る隙はあります」
新しい煙草に火を点け、店長は忌々しいと言わんばかりに表情を険しくさせる。
「舐められている訳か」
「奴ら、基本的には性悪ですからね。魔女はただの人間を下に見ています。負ける筈がない、こちらの計画が狂う筈がないと高を括っているんです」
「一度破られたにも関わらずか？」
「だから魔女と呼ばれているんですよ」
断言し、ナコトは帽子の位置を直した。
「伸びた鼻っ柱、叩き折るのも面白いか。だがな黄衣、こちらには打てる手立てがない。現状、立花とナナしかウチにはいないんだ」
勤務外の全滅は許されない。これ以上の被害は店の存続にも関わ

ってくる。
「分かっていて聞いているのでしょう。性格の悪さはあの人に引けをとりませんね」
「光栄だな」
「『館』のアトバンテージは三対一という状況にあります。この前提を崩す事が出来れば、自ずと機会も巡ってくるでしょう」
店長はナコトに対しては何も言わない。行けとも、行くなとも。だから、彼女は頷いた。
「借りがあります。あたしが手助けしましょう」
「ほっ、本当に？」
「ええ、勿論。……場所の指定はありますが、時間の指定はありません。強いて言うなら、一さんが持つかどうか、その間があたしたちに与えられた猶予でしょうか」
しかし、時間をかけるつもりはない。今すぐにでも、一を助けだしてやりたい。ナコトは仮眠室を見て、迷いを断ち切るように目を瞑った。
「少しだけ、あたしに時間をください。準備があるんです」
「ああ、分かった。お前が戻りしだい仕掛けよう」
「では、後ほど」
バックルームを辞したナコトは、待ち構えていたナナに袖口を掴まれる。
「ある程度のお話は伺っております。『館』に、あなたと立花さんが仕掛ける、と」
「それが何か？」
振りほどこうとするが、ナナの力は凄まじい。無理に引っ張れば袖口が破れてしまいそうだった。
「マスターを救うのは私の役目です。しかし、しかしっ、託されたのはあなたたちです。正直、期待はしていません」
自動人形だと聞いていたが、やけに人間臭いナナを見てナコトは瞠目した。

「特に、ムシュフシュから逃げ出した黄衣ナコトさん、あなたには何一つ期待しておりません。むしろ、立花さんの足を引っ張るだけでしょう」
「話がそれだけなら離してください」
「ならば、せめて約束してください。期待させてください」
一を魔女の手に掛からせてはならない。ナコトはいつになく真剣な表情で、ナナを見返した。
「フリーランス『図書館』、黄衣ナコトが、この命を賭けて、一さんを助けると誓いましょう」
ナナは最後の最後までナコトを信じられなかったらしいが、頭を下げた。
「マスターが助からなければ、あなたの命をいただきます」
「ご勝手に」
短く返して、ナコトは店を出る。
一を守りたい。助けたい。その気持ちは本当だ。嘘偽りない。が、それだけではない。ナコトにはもう一つ目的がある。北駒台高校で起こった事件と同じく、彼女が動くには理由があった。今もまだ、あの日の光景は焼き付いていた。胸を焦がす感情に突き動かされている。黒い欲望に顔が薄らと歪んだ。

ナコトが去った後、バックルームには彼女と入れ違いになる形でナナが立っていた。
「やはり、私が行った方がよろしいのでは？」
「駄目だ。『館』の目的は立花だろう。奴らの機嫌を損ねれば、一がどうなるか分からん。お前が付いていくのもなしだ。第一、お前までやられては本当に終わりなんだぞ」
「しかし……」
ナナは躊躇いがちに立花へと顔を向ける。さっきから口を開かないで俯く彼女を。

「ご指名だ。魔女の招待には答えられるんだろうな？」
立花は無言で雷切を握る。
「神野の妹だろうが、喧嘩吹っかけられて黙っているつもりはないぞ。神野姫を殺せるのかと聞いているんだ」
「ボクは、姫ちゃんを殺せない」
「……のこのこと顔を出して大人しく殺されるつもりか」
首を横に振り、立花はまっすぐに店長を見返した。その瞳からは怯えや恐れといった類の感情は見受けられない。
「殺さない。だけど、許さない。あの人たちは、ボクを苦しめる為だけにはじめ君を巻き込んだんだ……！」
店長は僅かに目を見開く。感情を剥き出しにする立花を初めて見て、彼女の変化を感じた。期待する。その剣が魔女の脅威すら払い除ける事を。
「任せるぞ、立花。……ナナ、『館』についての情報を集める。黄衣にもらったものと照らし合わせていく」
「かしこまりました。少しでも、お二人の助けになるように」
「……三度はないぞ、魔女め」

つくも図書館に戻ったナコトは目的のものを見つける。リュックサックにそれを詰めようとして、
「まるで盗人だな」
段ボールに囲まれた倉庫の明かりが点いた。しわがれた声が彼女の耳から染み込んでいく。
「戻ったなら声くらいかけたらどうだ。明かりも点けずに、何をしていた？」
「探し物を」
振り向き、ナコトは九十九と対面した。
「決めたのか」
ナコトが持っていた本に目を遣り、興味深そうに九十九が呟く。

「お言葉に甘えます。では、あたしにはまだやる事がありますから」
「『黄衣(こうえ)の王』」
歩きだそうとしていたナコトが固まった。何故、その名を知っている。否、違う。何故、見えている。
「見えてはおらんよ。私には魔術の才がなかった。ただ、知っているだけだ」
「……館長も、魔術に興味が」言い掛けて、ナコトは口ごもる。興味がなければ、魔導書なんて厄介なものを収集しないだろう。
「魔術というよりも、私は魔女に興味があった」
大儀そうに壁へ背中を預けると、九十九はゆっくりと話し始める。
「五十年も前か、魔女に会ったのは」
「魔女に……？　本当、なんですか？」
「自らを魔女だと、そう呼んでいた。何とも不思議な、形容しがたい力を使っていた。力だけでなく、彼女自身も掴み所がなくてな」
九十九は目を伏せ、少しだけ笑む。
「するりと、いつのまにか消えてしまった。だが、まだ覚えている。あの時に起こった事を忘れられる筈はない」
「信じているんですか。魔女の存在を」
「信じられるようになったのは最近の事だ。ソレが我々の前に姿を見せるようになってからだな。魔女がいても不自然ではない。違うか？」
「違い、ません」
一が魔女に襲われ、自分たちは魔女に挑もうとしている。ナコトは隠し通そうと決意した。
「魔導書を集めて、魔に触れていれば、また会えると思ってな。それだけ、若い胸に衝撃を与えていたのだろうが。何、年寄りのつまらぬ生き甲斐だ。若いお前は笑って良い」
「魔女に、何もされなかったんですか」
九十九は禿頭を撫で、難しそうに唸る。
「……知り尽くした筈の山だったんだがな、幼い頃の私は遭難して

しまった。故郷の村までは離れていない、だが、夜の山に呑まれてしまった。何も見えず、歩きだせずにいた。風の音に腰を抜かして、その場に座り込んでしまった。今にして思えば、異界にでも迷い込んだのかもしれないな」

失礼ながら、あるいは残念ながら、ナコトには九十九の若い頃が想像出来なかった。

「そこで、魔女と出会ったんですか？」

何も言わないで九十九は頷く。

「貴婦人と、そう呼ぶのが正しいと思えるような女性だった。彼女は道に迷った私をあやすように、ある力を見せてくれた」

「それは？」

「彼女は闇を照らした、文字通りにな。気付けば、私の目は満天の星空を映していた。これで家に帰られる。だが、何が起こったのか分からない。混乱しきった耳朶を打ったのは、世にも恐ろしい、優しげな声だったよ」

「それだけ、ですか？　本当に、何も？」

もう一度頷き、九十九は息を吐いた。

「出会いとは、そんなものだ。同じ人物でも、憎らしく思える者もいれば愛しく思える者もいる」

「館長は、どこまで分かっているんですか」

「何も、だ。何も分かっていない。黄衣、覚えておけ。年を経れば体が動かない分、口だけは上手くなる。尤もらしく喋るのは老人の特権だ」

ナコトは『黄衣の王』を見つめて、九十九に視線を移す。

「持って行くと良い。今のお前には必要なものなのだろう？」

「館長、あたし、もう……」

「ナコトちゃん！？」

けたたましい足音が聞こえたと思えば、公口が室内に飛び込んでくる。九十九は困ったように頭を掻き、彼女からは顔を背けた。

「もう、帰ってきてたんならちゃんとご挨拶！」

「あ、先輩、その」
「行っちゃ駄目だからね」
「公口、そこを退け」
九十九が諫めようとするも、公口は入り口に立ち塞がったままである。彼女は両手を広げて、縋るようにナコトを見つめていた。
「先輩、あたしは行かなくちゃ」
「私には、ナコトちゃんがどこに行くのか分からないけど、何となく分かるよ。また、戦いに行くんだよね？」
ナコトは答えない。ただ、見つめるだけだ。
「もう良いじゃない。今まで痛い思いも、辛い思いもしてきたんだよ？　こないだだって、あんな事になったんだし、ナコトちゃんが危ない目に遭う必要はないよ。誰かが、代わりに戦ってくれるよ」
「公口、黄衣を行かせてやれ」
「館長はっ、またナコトちゃんが怪我しても構わないって言うんですか！？」
誰かが、代わりに。叶うなら、そうしていたかもしれない。ここでの生活はナコトに温かさを取り戻させた。出来るなら、このまま。このまま、静かに、何事もなく暮らしたい。だが、今、彼女を守る者はいない。今まで守ってくれていた一、彼を代わりに守れるのは自分だけしかいないのである。
「ごめんなさい」
「行かせないから」
ぎゅっと、包み込まれる。公口の体は柔らかくて、温かくて、ナコトはありし日の家族を思い出した。母などと言うと、彼女は怒ってしまうだろうか。
「黄衣が決めた事だ。黙って送り出してやれ」
「……ナコトちゃんが他人だから、そんな事を言えるんですね」
「身内だから言える事だ。信じて、待つのもまた信頼の証だろう。閉じ込めたままでは黄衣の可能性は潰れてしまう」
「戦わなきゃいけない可能性なんていらないでしょう！」

公口は泣いている。彼女に涙を流させているのは自分で、公口は自分の為に泣いてくれていた。ナコトは力を抜いて、全てを忘れる。

「何もしなくて良い、ここにいて良いんだからね……！」

「黄衣、魔導書について私から教えられる事はない。『黄衣の王』についても、お前の方が詳しいだろう」

「ナコトちゃんは戦わないで、お願い」

「戦うなとは言わん。死んで咲かせる花実もある。だが、お前がここを帰るべき場所と思っているのなら、必ずだ。必ず戻れ。老人よりも先に逝くな」

ナコトは頷く。見失っていたものがあったのに気付く。この命は、無駄に捨てる訳にはいかないのだ、と。

すんすんと鼻を鳴らして出入り口の前にへたり込んだ公口を見下ろすと、九十九は物憂げに息を吐いた。
「いい加減起き上がったらどうだ」
「ナコトちゃんに押し倒されるなんて。あんなに止めたのに、う、私、私」
時折、九十九は公口が素面なのかどうか判断に困る時がある。
「お前は黄衣に対して過保護だ。アレも、元はといえフリーランス。ソレに立ち向かい苛烈な戦場に身を置き続けてきた者だ。生半な意思では止められん」
「止める気もなかったくせに、良く言えますね」
「手厳しいな。お前も、黄衣が来て変わったようだ」
九十九は公口の頭に手を置き、それから、彼女に背を向けた。
「『黄衣の王』、か。アレには相応しい。実物ではないが、フランス語版のオリジナルに迫るモノだったらしい。助けになってくれるのを祈るしかあるまい」
「……館長は、どうして、私を雇ってくれたんですか？」
「む」立ち止まり、九十九は禿頭に手を遣る。
「理由が欲しいのか？」
躊躇ってから、公口は口を開いた。
「今は、欲しいです」
「ラヴクラフトを好かんと言ったな」
「は？　はあ、言いました、けど。あの」
「私は、アレは好きだ。特に、彼の海産物が嫌いなところが好ましい」
納得のいかないといった表情を浮かべ、公口はゆっくりと立ち上

がる。
「何、この歳になるとな、敵に回る者も少なくなるのだよ。こちらに遠慮してか、はたまた畏怖して、か。だから、強く批判されたのは久しぶりだった。公口、お前を雇ったのはな、それだけの話だ」
「もしかして、あの時の事をまだ気にしてます？」
「気にはしていないが、一生忘れる事はないだろうな」
「……何を言いましたっけ、私」
それは、墓の下まで持っていくつもりだ。九十九は喉の奥で笑みを噛み殺した。

仮眠室のソファに横たわる一の寝顔を見つめて、ナコトはリュックサックから『黄衣の王』を取り出した。
表紙には何かを模した、シンボルのような黄色の印が記されている。蛇の皮で装丁された不気味な魔導書――――否、魔導書とはえてして不気味なものなのだ。
ナコトは、その魔導書と向き合っている。新たな力を得る為には魔の力を借りるしかなかった。しかし、彼女には踏ん切りがつかない。
『黄衣の王』は湧き出る泉にも似た澄み切った言葉と、毒々しいダイヤモンドのように煌めく言葉で埋め尽くされた、一種の詩劇、戯曲集であり、正確には魔導書ではない。しかし、読む者を狂気へと誘い、その内容全てを知ってしまった者には恐ろしい運命が待ち受ける。
表紙を開くのを躊躇っているのは、我が身に破滅が待ち受けているからではない。そも、読めなければどうしようもないのだ。表紙に浮かび上がる黄色の印、掠れたタイトルは読み取れる。だが、もしも読めなければ？　魔導書に選ばれていなければ？　もう、自分には力がない。魔女に立ち向かう為の武器がない。一を夢の国から解放出来ない。だから、この期に及んで手が震えている。

「……オキナ」

胸中を過ぎるはかつての相棒、『図書館』の片割れ、黄衣オキナ。

『ナコト写本』に選ばれ、ソレの知識を蓄え、風と共に生きた男。

彼なら、どうするだろうか。彼なら、何を言ってくれるだろうか。

背中を押して、共に戦ってくれただろうか。

ナコトは自身の掌を見つめる。その手に、自分に力がない事は理解していた。『図書館』と呼ばれていたが、オキナがいなければ何も出来なかった、嫌と言うほど、身に沁みている。

名前を捨てて、新たな名を得た。共に歩もうと、共に仇を討とうと故郷を出た。ソレとの戦いに身を投じ、魔導書を探し求めた。そうする内、『館』に当たると思ったからである。旅路は、閉ざされてしまったが。

「オキナ……っ！」

残った片目は頼りない。世界を見るには、この世を知るには心細かった。

「……また、泣いてんのか」

俯いていたナコトは弾かれたように顔を上げる。彼の前では二度と、そうしないと決めたのだから。

「一、さん？　目が……」

「今だけ、らしい」

一の目は開ききっていない。彼は眠気を覚まそうと、頭をテーブルにぶつけて、ソファの上にあぐらをかいた。

「お前ってさ、独り言が多いよな」

「なっ……！　きっ、聞いてたんですか！？」

頷き、一は手の甲を抓る。気を抜くと、今すぐにでも眠ってしまいそうだったのだ。

「……どうなってるか、いま、いちわかんねえけど。『館』と、戦うのか？」

「その、つもりです」

「悪いな」目を瞑りそうになった一の頬を、ナコトが力強く叩く。

「痛いな」
「まだ、寝ないでください」
ナコトは抱えていた『黄衣の王』をテーブルの上に置いた。一はそれを不思議そうに見遣ってから、納得したような笑みを見せる。
「見つかったんだな、お前の、本」
「決まった訳じゃあないんです。まだ、読んでませんから」
「……なんて、書いてるんだ？」
「読めないんですか？　『アルアジフ』は読めたのに？」
一はあくびを噛み殺して、本をもう一度見た。
「見えねえんだ。ちょっと、やべえ。眠過ぎて、さ、ぼやけてる」
「ああ、そう言う事でしたか。これは『黄衣の王』、黄色い衣の王様で、黄衣の王」
「そう、か。……ああ、そう言う事か」
「勘違いしないでくださいよ」
釘を刺され、一は黙る。黄衣ナコト、その名の由来を。恐らく、彼女が名前を捨てた事を彼は理解したのだろう。
「良い、名前じゃんか」
あの日、毒の回ったナコトの体を一はメドゥーサで止めた。黄衣ナコトと、そう叫んで、止めたのである。だから、それで良いのだと彼は思った。
「ええ、そうです。あたしは黄衣ナコト。それ以外に、名前はありません」
強い意志で、そう訴える。ナコトは一を横目で見、彼の頭を魔導書の角で殴った。
「寝てないってば」
「一さん、お願いがあります。一緒に読んでください」
差し出された魔導書。ナコトの手は微かに震えていた。
「これ、読んだら狂っちゃうかもしれないんです。本物ではないですけど、限りなく近い力を持っています。正直、どうなるか、分かりません」

「お前、俺を道連れに、する気、なのかよ」
「あたしの命を拾ったのはあなたです。だから、責任を持って落ちてくれませんか？」
仮に、一が『黄衣の王』を知らなかったとして、その全てを理解していたとして、彼はこう言った筈だ。
「仕方ないな」と。
一はふらつきながら、ナコトの隣に腰を下ろす。
「狂ってやるよ、一緒に」
ナコトは何も言わず、ただ微笑んだ。彼女は表紙に手を掛け、一はその手に自らの手を重ねる。開かれた魔への道、二人はそこに足を踏み入れた。

駒台駅前の雑居ビルの五階に、それはいた。魔女と呼ばれるモノたちは、小さな窓から眼下を見下ろす。
「まばらになってきたねえ」
ランダは机の上に座り、行き交う人々を楽しそうに眺めていた。ヴィヴィアンは部屋の真ん中の机に座り、何も考えていなさそうに天井を見つめている。
『館』が占拠している部屋、元は、塾として使われていた場所だ。現在は、ランダが真っ当な手段で借り、塒として利用している。
「お師匠、私、勝てるんでしょうか」
心細そうに姫が呟いた。彼女も、先日からはここの住人となっている。姫が家を出てから一週間と経っていないが、捜索願いが出ている事には気付いていた。尤も、ここにいる限りは誰にも見つからない。ランダの張った結界は、人をここから遠ざける。魔女の庇護下にある限り、彼女は人の手から、目から逃れられるのだ。
「勝てないね。あんたはあの子に勝てない。当然じゃないか」
姫がランダの師事を受けたのは、神野が勤務外になり始めた頃の話である。正真正銘、彼女は純粋な人間だ。ただ、魔術の素養が備

わっており、彼女自身が魔に興味を示したに過ぎない。
「あんたには魔導書なんて便利なもんもないし、あったとして読ませるつもりはないよ」
ランダは窓から視線を外す。
「出来ると言えば、あたしの真似事ぐらいのもんだ。立花とか言ったっけ？　昨日今日の付け焼き刃じゃあ無理さ。戦いにもなりゃしない。……魔法抜きなら、あたしら全員一分と経たずに殺されちまう」
実際に立花の力を受け止めたランダはつまらなさそうに告げた。更に言えば、立花の底はまだ見えていない。新しく手に入れた刀に振り回されていた様子でもあったし、一に気を取られて集中していないようにも見えた。十全ではない。その状態ですら圧倒されてしまいそうだった。
「でも、私たちには魔法があります。刀がなんだと言うんですか」
「あたしゃ、そんなもんに溺れて欲しくはないんだけどね。ま、そうさ。あんたと立花、一対一じゃ到底勝ち目がない」
くるりと、ランダは手の中でモップの柄を回した。
「けど、あたしらがいる。ヴィヴィアンは戦闘に集中出来ないけど、あたしとあんたでじわじわとなぶり殺せるよ。気に入らないやり方だけどね」
「……私は後衛に回れ、と」
「チャンスが見えるまでは絶対に前へ出るんじゃないよ」
姫は納得する。つまり、チャンスさえあればこの手で立花を殺せるのだ。
「さて、何人連れてきてくれるかねえ」
「皆さんの仇、まとめて取れると良いんですけど」
ランダは頷く。その為に、人数の指定はしなかったのだ。だが、望みは薄い。キルケを切った立花はともかく、パシパエを焼いた三森は別の何かによって病院送りになったと聞いている。
「盾の坊やはヴィヴィアンの魔法でぐっすり眠っちまってる筈さ。

気にせず、立花真を仕留めるだけ、あんたは考えとくんだね」
「……増援の線、あると思いますけど。一さんという方は兄さん以外にも慕われているらしいですし」
「ああ、そういや……」
何とも言えない表情を作り、ランダは寂しそうに目を伏せる。
「『図書館』が来てたっけ、前は」
ヴィヴィアンに目を向けるが、彼女はランダの視線に答えなかった。
「ま、誰が来たってヴィヴィアンが片手間にやっちまうよ」
「そう、ですね」姫は胸に手を当てる。疼いているのだろうと、ランダは息を吐いた。
「苦しいかい？」
「あ、少し」
照れ臭そうにして、姫は胸から手を退かす。
「慣れるまでは我慢するんだね。……痛かったら言うんだよ。こっちは時間まで指定しなかったんだ。あんたが無理だって言うなら、使い魔を飛ばしてやっても……」
「お師匠、優しい。ふふ、私には兄しかいませんでしたが、お姉さんみたい」
「馬鹿言うんじゃないよ」
「年齢から考えるとお婆ちゃんになるんでしょうけど」
余計な口を叩けるなら大丈夫だろう。ランダは姫の頭を小突いて、帽子を深く被り直す。
「それに、今日中には来るでしょうね。その為の人質ですから」
ヴィヴィアンが一に魔法をかけたのは、確実に、立花を誘き寄せる為だった。仲間を助けたいなら、必ずこちらに牙を剥く。彼女が拒んでも状況が許さない。逃げ回られてはつまらない。しかし、効き過ぎの感はあった。
「あんな顔を見られるなんて、思わなかったんですけどね。へらへらと、男に媚びるような……あの女から暗いモノを引き出せると分

かっただけでも、一さんには犠牲になってもらった甲斐があるというものです」
「まだ死んじゃいない筈だよ？」
「ヴィヴィアンさんが解かない限りは。けど、本物の魔女に本気を出させるなんて、人間には無理ですから」
「……姫、そいつらの死は付いて回るよ。あんたが生きてる間はずっとね」
姫は答えない。何故なら、今の彼女にとって、ランダの言葉は起こりえない事だからだ。立花の死を見届けたなら、生きる理由はない。姫はそう、決意していた。

「目標は『館』、可能なら生き残りの三名を全て仕留めろ」
「姫ちゃんは駄目だって言ってるのに」
「可能ならばと言ったろう」
「しかし、魔女の仕掛けた場所へと飛び込むのです。相手かこちら、どちらかが全滅するまでは戦闘は続行されるでしょう」
「あるいは学校の時と同じように、『館』がごめんなさいと言うまで叩き続けるか、ですね」
「策はない。とことんまで付き合って、最後に立っていれば良い訳だからな」
「流石脳筋勤務外、あたしは嫌ですからね。もっとスマートに」
「スマートに？」
「スマートにボコります」
「そういう事だ。働けイヌども」
わんと鳴き、立花が椅子から立ち上がる。
「クリオネのように、天使のように美しいあたしも行くとしましょうか。ナコトちゃんマジ天使」
「クリオネの補食シーンは悪魔を思わせますが」
「せめて綺麗な薔薇には……にしておくべきだったな」

うるさいですよと喚き、ナコトが椅子から立ち上がる。
二人はそれぞれの得物を携えて、顔を見合わせた。
「駅周辺の人払いは間もなく完了する。が、電車は動いているから、余計な被害は出さないように」
「止めれば良いのに……」
「金が掛かる」
息を吐き、立花は仮眠室を見遣る。
「行ってきます」
「あたしの足を引っ張らないでくださいね」
「それはボクの台詞だよ。前みたいにすぐ逃げないでよね」
「吠え面をかかせてやりますよ」
足並みを揃えないまま、二人はバックルームを去っていく。
「大丈夫でしょうか。ナナ、不安です」
「さて、どうだかな。……しかし、『館』の計算を狂わせられるかもしれん。あの手のタイプは想定外の事態に弱いと相場が決まっている」
「油断してくださるのなら、魔女を壊滅出来る可能性もあります。策士策に溺れてくれれば助かるのですが」
店長は煙草に火を点け、難しそうに唸る。
「学習して、手を変えてくるか。否、変えないだろうな」
「『館』とは馬鹿なのですか？」
「魔女であるなら、人間を舐めてなんぼだろう。力比べになるなら、分はあるんだが……さっぱり分からん」
無責任に言い放ち、店長は天井を見上げた。

駅前に着くまでの間、ナコトは立花に自分の考えを伝えていた。
「姫ちゃんは戦わないの？」
「前回の『館』戦、神野姫は姿を見せませんでした。正体が露見するのを恐れていたのかもしれませんが、力がなかったのでしょう。

一対一に持ち込めるならあなたが負ける筈はありません」
「じゃあ、ボクたちはどうやって戦おうか」
「あたしに良いプランがあります」
指を一本立てて、ナコトは笑う。気味の悪いそれだったが立花は気付かなかった。
「数で不利なのはこちらです。向こうには乗らず、掻き回していきましょう。基本的に、あたしが隙を作るので、散開した敵をあなたが各個撃破していく、というのはどうでしょう」
「う、うん、それでいこうよ！　ナコトちゃんはすごいなあ、ボクには考えらんないよ」
「いえいえ、とんでもない。……あ、見えてきましたよ。アレが件のビルでは？」
駅前に人影はない。立花たちは立ち並ぶ雑居ビルの一つに入り、注意深く周囲を見回す。
「五階……最上階ですね。馬鹿と煙は高いところを好むを地でいっているようで」
「エスカレーターで行こうよ」
立花はエレベーターの前に立ち、物珍しそうにそれを見つめていた。
「区別がついていないんですか？　それはエレベーターです。と言うか、使いませんよ」
「ええっ、なんで？」
戦闘に入るまでは落ち着きのない、考えなしの憎たらしい子供である。ナコトは立花にそんな印象を受けた。
「罠が仕掛けられていたらどうするんです。密室がどれだけ恐ろしいものか、もっと考えて行動してはどうですか」
「じゃあ、階段？」
「空を飛べるなら外からどうぞ。全く、これだから勤務外は嫌いなんです。応用が利かない力馬鹿」
「……頭でっかち」

「まさか、あたしを指してそうだと？」
予想していなかった反撃にうろたえるも、ナコトは立花を睨み付ける。
「本ばかり読んでるから目と意地が悪いんだ」
立花は憤慨した様子で、先んじて階段を上り始めた。
「あなたは頭が悪いでしょう！」
先に進む立花の後を追い掛け、ナコトは叫ぶ。
「う、うるさいなあ。ほっといてよ。掛け算ぐらい出来るもん」
「そんなものアシカにだって出来ますから。掛け算ぐらいで何を偉そうに」
「九かける九は！？」
「救えませんね本当に！」
階段を上りながら言い争う二人だが、ここに罠が仕掛けられているという可能性については、完全に頭から抜けていた。
「ボク、君の事は嫌いだ！」
「あなたに好かれるぐらいならゴリラのメスに会話を試みた方がマシです」
「ぼっ、ボクがゴリラだって言うの！？」
「心配しなくても、あなたは霊長類以下ですよ。蟻の巣に木の枝を突っ込むチンパンジーを見て感銘を受けていたらどうですか」
一階、二階、三階、四階、そして、五階。二人は流石に黙り込み、フロアに足を踏み入れる。
「く、暗い……」
電灯が切れているらしく、廊下には積み上げられた段ボールや足の折れた長椅子が多数。そのせいで窓からは光が入ってこない。
「一番奥でしょうか」
薄暗い廊下を進み、ナコトは最奥の扉に手を掛ける。緊張し、手が震えそうになるが、自分よりも情けない醜態を晒す立花を見てどうにか落ち着いた。
「袖を掴まないでくださいよ、チキン」

「とっ、鳥肉は関係ないじゃないか……」
ノブを回し、ゆっくりと押し開ける。瞬間、
「……うそ」
世界が白一色に染まった。乾いた風が吹いて目を瞑る。足元から固い床の感触がなくなる。目を開ければ、広大な空と砂が敷き詰められていた。室内だった筈なのに、ここには太陽がある。
「な、どっ、どこ？　ボクはどこにいるの？」
扉は掻き消え、背後にも砂漠しか見えなかった。だだっ広い空間には太陽と砂、空以外には何もない。ナコトは目眩を起こして片膝をつく。砂を握り込んでみたが、その感触は確かに本物だ。幻ではない。
「ヴィヴィアン……」
何か仕掛けられるとは思っていたが、想像を遥かに超えていた。この砂漠は作られたものではない。繋げられたものだ。地球上か、あるいは異世界か。スケールが違い過ぎる。ナコトには分かっていた。魔女の狙いはこちらの戦意を挫く事ではない。ただ、見せたかったのだろう。こんな事も出来るのだと自慢したかったのだろう。
「こっから、出られるのかな……」
「あたしたちの意志で脱出するのは不可能でしょう。魔女が法を改めない限りは、ここで乾くのを待つだけです」
ナコトには、空間同士を結合、召喚させる魔法に心当たりはない。だが、これだけ大掛りなものならば、どこかに魔法陣が仕掛けられている筈だ。……尤も、それを探し当てるよりも自分たちが朽ち果てる方が早いのは目に見えている。
「なんだ、『館』を倒せば良いんだね」
立花は雷切を解き放った。
「いきなりでびっくりしちゃったけど、やる事は変わらない」
「……ま、考えたって仕方ない事もありますか」
ナコトは立ち上がり、『黄衣の王』を取り出す。表紙を撫で、前方を見据えた。

景色が歪み、揺らめく。蜃気楼ではない。『館』のお出ましだ。
三人の魔女が姿を見せ、訪問客に恭しく頭を下げる。
「意外と早かったねえ。今生の別れは済ませちまったのかい？」
ランダが帽子のつばを上げ、挑発的に笑う。
「おーや、まーたあんたかい『図書館』。つくづく、縁があるねえ」
「ええ、本当に」
「姫ー、言う事はないのかい？」
立花が身構えるが、姫はあらぬ方に視線を向けていた。
「今は、何も」
「あっそ。淡泊な子だねえ」
モップ――――魔法で硬質化させたもの――――を構え、ランダは立花たちを強く見据えた。
「その縁、どこまで続くもんかね」
「勿論」
ナコトは、一度も口を開かないヴィヴィアンを睨み付ける。
「ここで断ち切ります！」

静けさを取り戻したバックルーム。仮眠室で寝息を立てる一、店長は彼の対面のソファに身を沈ませる。
「……寝ながら働いてくれれば良いのに」
一が口を開けば文句と愚痴だ。黙ってさえいれば有能なんだがと、店長は溜め息を吐く。
そろそろ、『館』との戦闘が始まっただろうか。店長は一の体に毛布を掛け直す。今は、今だけはゆっくり休んでいれば良い。誰かの盾になろうとする彼に、魔女から与えられた休息の時なのだ。強引ではあるが、首を突っ込みたがる一には丁度合っている。こんな状況にならなければ、彼も立花たちに付いていっていただろう。
「たまには守られてみるんだな」
煙草に火を点け、店長は美味そうに煙を吸い込む。

フリーランス『館』。立花が恨みを買った相手は悪い。神野姫がなりたてのそれだとして、ただでさえ厄介な魔女が三人もいる。普通にやり合えば、立花の勝ちはない。彼女は強いが、頭を働かせる事には弱い。搦め手を使われれば脆い。

だから、黄衣ナコトが鍵となる。『館』にとって計算から外のイレギュラー。彼女がどれだけ場を掻き回し、魔女の裏をかき意表を衝くかが生死の分かれ目となる筈だ。尤も、ムシュフシュ戦のままのナコトでは当てにならない。鎖だけが得物のフリーランスは必要ない。鍵となるなら、相応の戦闘能力が不可欠になる。

「魔導書か」

店長は魔導書について、殆ど何も知らない。魔法使いを量産させる悪魔の道具としか捉えていない。しかし、その力は本物だろう。魔術の素養がある、選ばれた者だけに行使できるとはいえ、人知を軽々と超えたモノを使役出来るのだ。ナコトは新たな力を手に入れたと言っていた。その言、どこまで信用可能なものか。

店長は一に向かって煙を吐く。これで起きるならしめたものだと思ったのだが、彼は寝返りを打つだけに留まった。

黄衣ナコトの力は信じられない。だが、彼女の、一を助けたいという思いは信じられる。そして、その先にある思いを。隠し通そうとする思いをも、店長は信じている。

初弾は何処に

それは、羊飼いたちの神とも、恵み深い神とも言われている。
それは、星か、あるいは都市か。
それは、強大な力を持った旧支配者とも呼ばれ、四大元素の一つ、風を支配する。
古代都市の黒き湖に幽閉されたその者は、
「いあ！　いあ！」
「……っ！　不味いね、こりゃ。ヴィヴィアン！」
「はすたあ！」
名状し難いものと呼ばれる。
魔導書に選ばれし者の新たな力、黄衣ナコトの呼び掛けに応じて、風が奔った。風は数多の音を掻き消し、幾多の砂を巻き上げて前進する。魔女の姿が砂塵の中に掻き消えた。
砂煙に向かって立花が駆ける。ナコトと示し合わせていた通り、『館』を各個撃破する為だ。雷切を構えて、彼女は敵を見定める。影が三つ、二つは右に、一つは左に分かれていった。狙うは一人、立花が左へ方向転換するが、不測の事態が起こる。
ナコトが左に向かって走っていた。
立花は一瞬立ち止まる。思考が停止する。
しかし、ナコトにとっては不測ではない。これを最初から狙っていたからだ。彼女の狙いはただ一人、ヴィヴィアンのみである。
だから、立花は叫んだ。
「ぼっ、ボクを裏切ったな！」
「最初っから！　あなたなど味方ではありません！　あたしの駒なんですよ！」
「絶対に許すもんかあ！」

砂が口に入るのも構わずに、立花は吠え続ける。
ゆらりと、晴れていく煙の中に影が蠢いた。その影は一つ、二つ、三つ。乾いた音を立てて彼女に迫る。三つの剣が立花に襲い掛かった。
「うっ、うわ！？」
間一髪、立花を身を低くしてそれから距離を取る。完全に晴れた砂煙、その中から現れたのは姫とランダ、三体の骸骨だ。
「こいつらは……」見覚えがある。否、忘れる筈がないのだ。学校を襲った骸骨剣士は彼女に窪んだ眼窩を合わせて骨を鳴らす。けたけたと、笑っているように思えた。
雷切の切っ先を向け、立花は姫を強く見据える。
「……本当に、姫ちゃんがやったんだね」
「お師匠、手筈通りにいきます」
「あいよ」
無視されて、立花の頭に血が上った。襲い掛かる骸骨剣士の腕、その得物ごと、彼女は切り払う。高く舞い上がった骨に気を取られる事もなく、残った二体のスパルトイが立花に走り寄った。
「姫、三匹を維持しな。それ以上は増やさなくて良い。邪魔になるからね」
「分かっています」
雷切の重量にはまだ慣れていない。それでも、充分だった。立花は頭を下げて剣をやり過ごし、出来た隙に刀の腹を叩き込む。勢いは止まらず、傍にいたもう一体のスパルトイの体も巻き込まれ、骨は呆気なく砕けて砂の中に埋もれていった。
「次は君たちだっ」
「調子に乗るんじゃないよ！」
ランダが姫の前に立ち、向かってきた立花にモップを突きつける。姫はその場にしゃがみ込み、砂地に両手を添えた。彼女の体が淡い光を帯び、光は色を変えていく。やがて、光は赤に。砂の上に形容し難い、幾何学模様にも似た図形が出現する。そこから、新たな

骸骨が姿を見せた。
　今、姫が使ったのは簡易の召喚陣である。複雑な工程を必要としないが、低級の怪物しか呼び寄せられない。ランダが以前、神野との戦いで見せたものと同じ魔法だった。
　押し寄せるスパルトイから距離を取り、立花は苛立たしげに刀を振るう。
「そんなのじゃボクを倒せないよ」
「さあ、やってみなければ分かりませんよ？」
　スパルトイが地を蹴った。三体ともが刃が欠け錆びた剣を振り上げる。立花は僅かに目を見開いた。単純な動きしか出来なかった筈の骸骨が、自分を取り囲むように散開したからである。
「集中、切らすんじゃないよ」
　ランダがにじり寄ってきた。少しでも隙を見せれば、彼女も飛び掛かるつもりである。
　単純な動作しか命じられないスパルトイ。しかし、以前に立花と戦った彼らと今の彼らとでは大きな違いがあった。姫は骸骨を自分の意志で操れる。その数に限りはあるが、百を越えたとて問題はない。が、百と三では割ける容量に違いが出てくるのも当然だった。更に、彼女は学校を襲った骸骨に、戦闘以外にもある命令を下していたのである。『扉を開けるな』、と。その制約から解き放たれたスパルトイは動きが違う。細かい動きをも指示出来るようになっているのだ。
「高が骨っ」
「追い詰められろ勤務外」
　立花は右のスパルトイの頭部を狙って横に薙ぐ。が、骸骨は身を低くしてその攻撃を回避した。
「この……！」
　間隙を見計らい、残りの骸骨が剣を振り下ろす。立花は雷切を流した方に回転し、その場を逃れた。が、甘い。ランダが彼女の足元に得物を払っている。

足を取られた立花は砂を食みながらも転がって逃げた。姫はその様子を満足そうに見つめる。立花は距離を取り、近寄ってきたスパルトイを一体ずつ仕留めた。囲まれれば辛いが、一対一になれば彼女の独壇場である。三体全て壊されたのを確認して、姫は再び魔法を発動する。立花がそれを阻止しようと彼女を狙うが、ランダに再び阻まれた。

「しつこい！」

「今謝れば許してやるよ、あたしはね！」

ランダは立花と自身の力量を良く理解している。魔法なしでは、自分が圧倒的に劣っているのを理解していた。しかし、防御に徹すれば何とかなる。そして、魔法を使って攻勢に転ずる気はない。立花真と戦うのは姫でなければ意味がないのだ。

「あなたじゃボクに勝てない」

「は、生意気なガキだね」

同様に、立花も理解している。近接戦闘、その一点だけを見れば、ランダよりも自分が圧倒的に優れている事を。しかし、彼女は魔法の存在を恐れていた。無理に攻め込めば何が起こるか分からない。魔女とは、こんなにもやり辛い相手だったのかと内心で恐怖していた。

「お師匠っ」

「あいよ」ランダが退き、彼女のいなくなったスペースにスパルトイが割り込んでくる。立花は雷切を振るいながら後退を始めた。

「はすたあ！」

ナコトの唱えた呪文が再び砂粒を巻き上げた。まっすぐに向かう風、その先には襤褸を纏った老婆がいる。

「面白い人の身で『黄衣の王』を扱うか小娘」

老婆が呟くと、音が弾けて風が霧散した。ナコトは驚かない。目

の前の魔女ならば造作もない事だと分かっていた。言葉を交わすつもりはない。心を研ぎ澄ませ、内にある精神力を練り上げる。魔導書が光を放ち、

「いあ、いあ、はすたあ！」

三度、風が荒れ狂う。

ヴィヴィアンは老婆の姿から、あどけない童女に姿を変えた。その行動に意味はない。彼女は姿を変える魔法を無意識的に使っているだけである。

「防げますかっ」

答えず、ヴィヴィアンは片手を翳した。ハスターの風はそこへ吸い込まれるようにして消えていく。ナコトは怯まない。既に振り回していた鎖の先端を投擲している。ヴィヴィアンは鎖を排除しようとするが、そこに括りつけられているモノを見て手が止まった。『黄衣の王』である。ナコトは魔導書を鎖に括って放っていたのだ。

ヴィヴィアンの動きが鈍ったのを確認して、ナコトは大きく口を開く。

「アラオザルより来たれ、忌まわしき双子！」

ナコトの訴えに応じるかのように、『黄衣の王』から二つの光が放たれた。すぐに掻き消えてしまうが、彼女にはそれが見えている。

「ロイガーとツァールか忌々しい」

ヴィヴィアンがふわりと宙に浮かんだ。ナコトは鎖を手元に戻し、魔導書を戒めから解く。彼女の傍の景色が歪んでいた。目を凝らせば左右に二つの何かが浮いているのが分かる。

ロイガー、ツァール。

ハスターの眷属、風の双子だ。彼らは一度放たれたが最後、目標に着弾するまでは止まらない。敵を捉えて押さえ込み、風の力を爆発させる。

ナコトは口角をつり上げた。風が二つ、周囲の空気を切り裂きながらヴィヴィアンに迫る。

魔女が空を翔けた。ヴィヴィアンは中空に停止し、真下に片手を

向ける。ロイガーが間近に見えるが、彼女との間へ割り込むようにして、砂の柱が立ち上った。それはヴィヴィアンの盾になり、代わりに攻撃を受けて元の砂へと還っていく。

「ツァール！」

「甘い娘あなたはまだ若過ぎる」

大量の砂が宙へと高速で浮き始めた。ツァールが着弾するより先、ヴィヴィアンの周囲を砂が覆う。風と砂が衝突し、周囲には乾いた雨が降った。ナコトは鎖を頭上で振り回し、落ちてきた砂をどこかへと弾き飛ばす。

ヴィヴィアンが砂石で作られた繭から姿を見せた。彼女の姿は童女から妙齢の美女に変わっており、流れていく風が、黒いローブと艶やかな黒髪を揺らしている。ふと、ヴィヴィアンは何かを思いついたような表情を浮かべ、掌から真っ黒なクローシュを取り出した。それを被り、満足そうな笑みを見せる。

「余裕綽々……」

「お返し」

砂が舞い上がった。ナコトはそれを目で追うしか出来ない。ヴィヴィアンはついと指を動かす。ばらばらに散らばっていた砂粒が、幾つかに分かれて独りでに丸まり始めた。即席の弾丸が、ナコトに向かって飛来する。

「魔女にしては安っぽい……！」

ナコトは、向かってくる砂の弾丸を鎖で打ち落としていく。一つ、二つ、三つ……数えるのも馬鹿らしい。数は次第に増え始めていた。ヴィヴィアンは無表情にそれを投下し続ける。埒が明かないと判断したのか、ナコトは魔導書を瞥見して声を荒らげた。

「いあっ、いあっ、はすたあ！」

一陣の風が砂の弾丸を粒に変えていく。ハスターの力、その奔流がヴィヴィアンの魔法を相殺した。ナコトの髪の毛が四方に揺れ、彼女は目を疑う。

「お返し」

ヴィヴィアンが人差し指をくるくると動かした。それだけで、ナコトのすぐ近くに竜巻が発生する。彼女は咄嗟に飛び退き、再びハスターを呼んだ。凄まじい風同士が衝突し、轟音を掻き鳴らす。余波が周囲一帯の砂地ごと飛散した。ナコトの軽い体は地面から僅かに浮く。飛び散る砂から身を守ろうと、両腕で顔面をカバーし、その隙間から微動だにしないヴィヴィアンを確認する。

これが魔法。

これが魔女。

魔導書を持って魔術を以って牙を剥くには、あまりにも無謀な相手なのだ。

だが、ナコトの心は折れていない。まだ戦える。まだ、自分には手がある。取って置きの、打ってつけの切り札が残されているのだ。

「おすそ分け」

「な……っ！？」

砂の弾丸が飛来する。その狙いはナコトではなかった。

立花が倒したスパルトイの数は十二にまで達していた。即ち、それは、四度同じ事が繰り返されたに他ならない。骸骨の群れを抜けても姫には届かない。ランダが雷切を防ぐのだ。そうしている内に、新たな骨が呼び寄せられてしまう。

スパルトイに切られる筈はない。ランダに突かれるつもりもない。立花の身を苛むのは安定しない砂の足場と経過する時間のみ。彼女の心を溶かしていくのは『館』への憎悪のみ。二つの不安を抱えたままでは十全に戦えない。時間の経過が彼女をじっくりと死地へと誘っていく。

「ボクを殺したいって言うなら前に出て来い！」

「よそ見していて良いのかい？」

「良いっ！」

ランダのモップが下段から弾き返された。彼女は舌打ちし、スパ

ルトイと交代する。
「お師匠、平気ですか」
「誰に口を利いてるつもりだよ、この子は。あんたこそ、こんなもんじゃないんだからね」
スパルトイは尽きない。姫の精神力、体力が限界に達するまでは無限に召喚出来る。我慢比べと言うわけだ。立花と自分、どちらが先に力尽きるか、それだけを姫は待っている。一対一でなら勝てるイメージは浮かばない。しかし、持久戦を続けていれば倒れるのは立花だ。
姫は確信する。自分の勝利は揺らがないと。ランダもいる。ヴィヴィアンもいる。『館』が揃っていて、一介の剣士に負ける筈がないのだ、と。彼女は見誤っている。諸手を上げて招き入れた魔女が、獅子身中の虫になりうるかもしれない可能性を見落としていた。
ナコトとヴィヴィアンの戦闘の余波、轟音は立花たちの耳にも届いている。魔術と魔法がぶつかり合い、熾烈を極めている。
「あいつは……！」
ランダが砂を蹴飛ばした。ヴィヴィアンが気まぐれに放った砂の弾丸を見て、彼女は姫の前に立つ。
「……そんな、嘘。どうして、ですか？」
「言ったじゃないか、魔女ってのは何をしたっておかしくないって」
立花はスパルトイから更に距離を取った。初弾が砂地に落ちる。波紋のように砂は広がり、周囲の者たちに覆い被さろうとしていた。続いて、二発目。それは骸骨剣士の頭部を掠めていく。骨が散らばっていくのもつかの間、立花を目掛けて弾丸が落下していた。
まず回避。次に切り上げ。途切れる事のない砂の弾丸を避け、裂きながら踊る。以前に使っていた日本刀では付いてこられなかったであろう立花の動き、それよりも早く、雷切は空間を疾駆する。
「きゃあああああああっ！？」
ランダが宙を撫で回した。彼女が触れた場所は、モップに掛けた魔法と同じように硬く、固まる。間に合わせの障壁ではあったが、

砂の弾丸を全て防ぎ切った。ランダの後ろで蹲っていた姫に怪我はない。視線を上げると、無傷の立花がこちらに切っ先を向けているのが見えた。

「姫、骨どもを出しな！」

間に合わない。ランダはモップをひっくり返して握る。先端部分で砂を巻き上げた。目を晦ませる、あるいは一時でも潰すつもりだったのだが立花には通じない。ここを抜かれれば姫が危うい。

「通さないよ」

「押し通る！」

モップを振り下ろす。雷切が切り上げられる。金属音が尾を引き、立花、ランダ、両者の視線が交わった。脇をすり抜けようとする立花の動きを読み切り、ランダが得物を振り回す。

立花が刀で受け止め、身を低くして地を駆けた。が、スパルトイの召喚は済んでいる。三体の骸骨が顎の骨を鳴らしながら、でたらめな動きで走った。彼女は急停止し、ランダに飛び掛かる。

「おおおお――――！」

雷切が閃き、ランダの両腕が下がった。彼女にとって、立花の攻撃をすんでのところで受け止められたのは僥倖だが後がない。腕力でも、ランダは立花に劣っている。鍔迫り合いでじりじりと押されていく。

「お師匠から離れてよ！」

スパルトイが立花の背中を切りつけようと剣を振り上げた。彼女はランダの足を踏み、バランスを崩したところで肩からぶつかる。ランダが倒れたのを確認もしないで、立花は振り向きざまに刀を薙いだ。骨がばらばらと崩れ落ち、彼女は残った骸骨との戦闘に移る。地に突っ伏したランダは立ち上がり、立花の脇を抜けて姫の傍に戻った。ずり落ちかけた三角帽子を戻し、長い息を吐く。

「つっ、かれたあ。年寄りを働かせんじゃないよう、もう」

「やっぱり、無理みたいですね」

「休憩。骨の数増やして持ち応えておくれよ、あたしゃ、もう、へ

とへと」
　頷き、姫は両手に意識を集中させた。赤い光が彼女の体から漏れ出て、新たなスパルトイを呼び寄せる。立花に向かって、五体のソレが飛び掛かった。
　姫は爪を噛む。悪い癖だと兄に窘められたのを思い出して躊躇うが、甘い気分に浸る余裕はない。一筋縄ではいかないと思っていたが、立花の力は予想以上だった。人海戦術も、ランダという盾がいないのでは自身の消耗が早まる。
「お師匠、魔法は使えないんですか」
「ヤだね。あんたが望んだ事だろ、あたしは必要以上にしんどい目に遭いたくない。……骨ぐらいなら出してやっても良いけど、あいつの前じゃあ、文字通り無駄骨さね」
「もう一手……ヴィヴィアンさんに賭けるしかありません、か」

　自分の味方まで一切の躊躇いを見せずに攻撃するヴィヴィアンに驚愕したが、ナコトはすぐに平常心を取り戻す。魔術を行使するなら、落ち着いた心でなければいけない。魔導書の持つ闇に呑み込まれてしまうからだ。
『黄衣の王』が光り輝く。初めて読んで、初めて使う魔導書だというのに、溢れる力、その全てを掌握しているような気持ちになれていた。まるで導かれているかのように、ナコトは呪文を唱える。ハスターの名を崇める。
　顕現した風の力が魔女を食らい付こうと奔る。ヴィヴィアンは片手を広げて微笑んだ。ハスターが方向を転換する。ナコトへと向かって逆流していた。彼女は慌てず、忌まわしき双子を呼ぶ。二つの風が反射された風にぶつかり掻き消えた。衝撃の余波で周囲には爆風めいた凄まじいそれが吹き荒ぶ。
「色々持ってやがりますね」
　セーラー服に付着した砂埃を払い落としながら、ナコトは呆れた

風に息を吐いた。ヴィヴィアンは音もなく着地する。彼女の足元の砂がざわめいた。

「クトゥルフの魔に力を借りるのは人間として尤も手早く尤も愚か所詮は魔術の域を脱しない」

狂暴な笑みを放ち、ナコトは吠える。それがどうした、これが自分の力だと。ヴィヴィアンは彼女に掌を向ける。前兆も予兆もない。ただ、放たれる一撃。それを予感して、ナコトは『黄衣の王』を両腕でかき抱いた。

「名状しがたきものよ私の呼び掛けに応えるが良い我が名はヴィヴィアン湖の貴婦人と呼ばれし神代の魔女」

風が収束する。

「私は崇めない私は尊ばないただ力を貸せば良いただ声に耳を貸せば良い出でよハスター討て魔術士を」

ヴィヴィアンが呼び出したのも、またハスター。魔女は魔導書に頼らない。言わば、彼女自身が魔導書。それ以上の魔力を宿している。

ナコトの呼び出した風よりも大きく、強く、速い。触れれば肉体は刻まれて、巻き込まれれば骨まで砕ける。暴虐めいた、一片の慈悲すら見当たらないそれが砂漠を貫通した。空間が振動、地にある砂は空を汚し、その余波は太陽をも冒涜せんとする。悲鳴は刹那にて消失し、やがて後には何も残らない。砂の山が崩れ、波のように寄せては引き返す。

「やってくれるじゃないですか」

真上からの声に反応した。ヴィヴィアンは空を仰ぎ、楽しそうに口元を歪める。彼女はその正体を知っていた。

この世に存在する生物とは考えられない。地球上に生まれ出たモノとは思えない。化け物、強いて言うならばエイが最も近いだろうか。体長は二メートルを超えており、その胴体にはコウモリのような羽根が二枚、生えている。ナコトはその上で鎖を振り回していた。

「行きなさい」

「……無駄」

その生きもの、名をバイアクヘーと言う。ハスターの眷属であり、召喚した者を望むところへと運ぶモノだ。だが、ナコトの命令には従わないだろうとヴィヴィアンは見抜いている。それを呼ぶには正式な手順が必須であり、ハスターを讃える呪文と、黄金の蜂蜜酒を飲む事、石笛を吹く事が定められていた。この三つを満たさない限り、バイアクヘーが召喚に応じたとしても充分な能力を発揮出来ない。のみならず、術者にも従わない。筈だった。

「行きなさい、バイアクヘー」

しかし、バイアクヘーはナコトの意に沿って動いているようにも見えた。彼女を背中に乗せたまま高空を滑り、陣風纏って突進してくる。ヴィヴィアンは竜巻を起こしてその中に身を潜めた。それを見たバイアクヘーは名状しがたい鳴き声を上げて中空に停止する。いやだいやだと拒んでいるようだった。

「行け」ナコトがバイアクヘーの頭、らしき部位を踏み付ける。彼女は鎖で魔翼を持つ怪物を縛り上げた。

「神に唱える名はありません。いあいあたし。呼び出したのはあたしでしょうが」

ヴィヴィアンは瞠目する。まさか、魔物を恫喝して力ずくで従わせているのかと、信じられない思いだった。瞬間、口元がつり上がったのに気付く。楽しんでいるのだと自覚する。

体の自由を奪われたバイアクヘーはきゅうと情けなく鳴いた。ナコトは魔導書を見せびらかすようにして魔物を尚も踏み付ける。

「飛べ」

「――――――――――！」

耳障りな声を上げ、バイアクヘーが突撃を再開した。竜巻と衝突する寸前、高度が低くなった瞬間、ナコトはそこから飛び降りる。

「来たれ双子、同胞と共に迎え撃て！」

迎え撃つと言うよりも、むしろ突撃だった。二つの風が空気を切り裂きながらヴィヴィアンに向かう。竜巻はバイアクヘーの通過し

た衝撃によって相殺し、無防備な魔女へとロイガー、ツァール、忌まわしき双子が迫る。
「角度角度っ、大事なのは角度です！」
無責任に言い放ち、ナコトは鎖の先端についた分銅をヴィヴィアンに飛ばした。彼女は迫る風を防ぎ、躱すので精一杯である。前方からは鎖が、後方からはバイアクヘーが戻っていた。
ヴィヴィアンは鎖を受ける。分銅が彼女の肩に直撃し、苦痛に顔を歪めた。久しくなかったダメージに驚き、魔女はまたも笑む。
バイアクヘーが魔女の頭上を抜けていった。それはナコトの足元に降り立ち、誇らしげに羽根を広げる。
「ミスってんじゃないですか。しっかりしなさい」
踏み付けられたバイアクヘーの円らな瞳が少しだけ濡れた。
ヴィヴィアンはナコトを真正面に捉え、興味深そうな視線を送る。魔女に一撃を与えたのだ。そして、何世紀も味わっていなかった痛みに、ヴィヴィアンは舌なめずりする。
「素晴らしいあなたの名前を聞かせてちょうだい私はヴィヴィアン湖の貴婦人王の守り人騎士の恋人あなたの名前を聞かせてちょうだい」
「知っていますよ」
ナコトはその名を知っていた。他の全てを忘れたとしても、その名だけは――――。
「……黄衣ナコト。あなたの異端を裁く者だとお思いください」
「所詮人に魔女は裁けない」
「いいえ、魔女を裁けるのは人だけです」
ヴィヴィアンが掌を掲げる。先ほどとは比べ物にならない規模の風が巻き起こり、砂石が彼女の体を覆い隠していく。ナコトはバイアクヘーを前に立たせた。有翼の怪物は頭（らしき部位）を振って泣き喚く。
「ハスターとはこう使う良く見ておきなさい黄衣ナコト魔女と対峙するなら魔女を退治するならこれぐらいはやってみせて」

世界から音が消えた。自分の声が聞こえない。見えない。世界から色が消えた。空が砂に埋め尽くされる。前にいたバイアクヘーが遥か後方にまで吹き飛んでいった。ナコトは身を伏せて目を瞑る。魔導書を腹の下に入れ、嵐が過ぎ去るのを待つしかない。ハンチング帽はとっくにどこかへ飛ばされた。風の音が強過ぎて、近過ぎて聞こえない。何も聞こえない。

ヴィヴィアンは笑っていた。暴風が彼女を避けて渦を巻く。くるくると舞い、ごうごうと唸る。ひらひらと踊り、どうどうと廻る。

魔女の繋げた世界が名状しがたい風に蹂躙されていた。そして、それを望んだのは彼女である。

「裁いてみせろ黄衣ナコト！」

砂塵に巻かれてナコトの姿は見えない。それでも、ヴィヴィアンは彼女の名を呼び続けた。

行き止まりｓａｎｉｔｙ　ｐｏｉｎｔ

ランダがその場に倒れ込む。魔力を使い過ぎてしまったのだ。ヴィヴィアンが放ったハスターの風は彼女たちの戦場にも届いていたのである。ランダは自身と姫を守る為、大量の魔力を使用して障壁を展開していた。運が悪い事に、立花の方へは風が逸れていたのを確認している。立つ位置さえ違っていれば、そこで仕留められた。ランダは強く、唇を噛み締める。

「姫っ」

巻き起こる煙、砂の山が崩れ天地問わず周囲に散らばっていた。

「分かっています」

立花の姿は見えない。姫はスパルトイを再召喚して彼女を探させる。骸骨たちは目が見えない。鼻が利かない。ただ、生者の反応には敏感だった。

姫が駆ける。スパルトイが煙の中に消え、崩れていくのを感じた。立花はそこにいる。溜めに溜めた。待ち続けた。堪えて、抑えて、もう、我慢出来ない。胸に渦巻く憎悪を、体の隅々にまで行き渡った感情を解き放つ時を。その時だけを。

立花はスパルトイを切り裂きながら、先の風は何だったのだろうと推察する。

ヴィヴィアンがハスターを呼び出した時、立花は雷切を砂地に突き立てて、体が浮くのだけは堪えたが、あちこちが痛くなっていた。この視界では姫たちもおいそれと攻撃を仕掛けては来ないだろう。骸骨がこちらにやってきたのはたまたまだと、立花はそう判断していた。

だから、
「なん、でっ……！？」
影が揺らめくのに気付かない。砂煙を切り裂くようにして、その姿を覗かせた姫を見て、立花は驚愕する。まず、何故彼女が前に出てきたのかを。そして次に、彼女の腕を見て意表を突かれる。
「立花ぁ……！」
「う、うわっ」
姫が振り上げたのは腕だ。が、彼女のそれは、肩から先が西洋の剣、レイピアに変質している。立花は姫の拙い攻撃を避け、彼女から距離を取った。構わず、姫は追撃する。
「何っ、何だよそれえ！？」
レヤック。
ランダに仕える魔女とされ、魔術を使い、生き物や物体に変身する事が出来る。
そも、『館』のメンバーで本物なのは既にそこを抜けているヴィヴィアンと、長を務めるランダだけだ。パシパエも、キルケも、カリュプソも、能力だけを与えられた、魔術の素養があった人間である。『館』を名乗れるのは全て、そうなのだ。
立花は、姫がレヤックと名乗っていたのを忘れていた。彼女もまた、魔女に準ずる存在だったのを忘れていたのである。
「お前がっ、お前がっ！」
だが、姫はあくまで魔女見習い。つい先日までは一般人で、ただの女子高校生に過ぎなかった。彼女の繰り出す攻撃は滅茶苦茶である。レイピアを使う上での基本は、相手を突く事なのだ。刀身が細過ぎる為に、斬りつければ曲がり、折れる。にも関わらず、姫はレイピアと化した腕を振り回し続けた。斬り、時には突きも混ぜるが立花には届かない。
立花は手が出せなかった。姫の、稚拙ながらも鬼気とした攻勢に弱っていたのではない。彼女を傷つける事を恐れていたのだ。雷切は未だ使いこなせていない。目測よりも遠く、予測よりも早く、動

く。手加減など出来ない。隙だらけの姫を切るのは容易い。しかし、それでは彼女の命まで奪ってしまいそうだった。

避け、受け、弾く。立花は後退しながら、姫に対して呼びかけた。

「どうしてこんな事するんだよっ」

「どの口で言うのかと思えばっ」

姫の全身が赤い光を帯びる。彼女の腕は元に戻り、次に爪が変化し始めた。左右十指の爪が細長く、硬い針に姿を変える。

「ボクはけん君を殺してなんかいないのに！」

止むを得ず、立花は針の先端を狙って雷切を払った。十本全ての針が両断され、砂の上に落ちていく。姫は苦悶の表情を浮かべ、その場から立ち退いた。彼女の周囲を赤い、淡い光が包んだ瞬間、針、だったものは彼女の爪に変わっていく。

これが、姫の能力の正体だった。

身体の一部を変化させる魔の法である。彼女がやってみせたように、腕は剣に、爪は針に。単純だが、その分攻撃には使い易い。何せ得物は自らの肉体なのだ。が、効果が切れれば変化した部位は元に戻る。その際に剣が砕ければ、針が折られれば、その部位にも反動が返ってくる。尚且つ、精密な機械や複雑な仕組みのものには形を変えられない。それでも、充分に人を外れていた。

彼女は本物の魔女ではない。魔術の素養があったとして、魔導書も、力を得る為に積み重ねた経験もない。姫が魔法を行使出来るのは、体に刻まれた魔法の式のお陰だった。言わば、彼女は自らに魔導書のページを刻んでいる。無論、代償はあった。式を刻まれる際には並々ならぬ苦痛が襲う。失神と覚醒を繰り返し、絶叫で喉が嗄れた。全ては立花を葬る為、姫は人の規を捨てたのだ。

「その刀を振るったらどうなんですか！」

防戦一方の立花に苛立ち、姫が叫ぶ。距離を取る彼女に対し、姫は再び能力を発動した。

姫は一切の躊躇いを見せずに髪の毛を数本、引き抜く。淡い光がそれを包み、果物ナイフに変異した。投擲されたナイフは立花に全

て切り払われる。
「ボクには勝てないんだよ!?」
「勝てなくてもっ」
砂地に手を入れ、姫は立花を睨みすえた。背後から、スパルトイが駆け寄ってくる。その後ろでは、ランダが蒼い光を放っていた。
「私が死んでもっ、あなたを殺せれば！　それで！」
スパルトイに注意を払っていた立花、彼女の足首が強い力で引っ張られる。目を落とせば、そこには五本のロープが絡まっていた。姫が自らの指を変化させていたのである。
「それだけで！」
気付いた時にはもう遅い。更に、姫は余った五指をもロープに変化させた。自らの手で立花のバランスを崩し、彼女に地を舐めさせる。スパルトイが姫の脇を駆け抜けると、彼女は魔法を解いた。
ランダの意思に従い、五体のスパルトイが倒れた立花に剣を振り下ろす。彼女は不安定な姿勢ながらも、それら全てを返してみせた。立ち上がり、最も近い場所にいた骸骨の頭部を刎ねる。
「詰めが……」
立花を仕留めるなら、スパルトイを正面に並べるのではなく囲むべきだった。ランダは舌打ちし、再度、骨の剣士を召喚する。
「お師匠っ」
「あいよう！」
スパルトイをランダが七、姫が十体召喚した。残っていた四体に加えて、計二十一のソレが立花目掛けて走り出す。更に加えて、ランダも地を蹴った。
赤い光が魔術式を通して姫の体に流れ込む。彼女の背には堕天使を思わせる、黒い羽が一対生えた。否、姫は背中の肉を羽に変化させたのである。彼女は中空に舞い、毛髪を刃物に変質させた。
骨が舞い散る。砂に埋もれて消えていく。立花が雷切を振るう度、スパルトイがその数を減らしていった。が、いつまでも攻撃を続けられない。徐々に包囲は狭まりつつある。前後、左右から間断なく

容赦なくスパルトイは反撃に転じていた。
「そうらっ！　あたしの相手もしてくれないかい！」
骸骨に紛れてランダが得物を突き出す。その一撃は立花の背を捉えて、彼女の息が一瞬止まった。姫が放った刃は立花には当たらないが、それでも立花から怯えの表情を引き出す。
逃げ腰になった立花へ、スパルトイが二体、同時に攻撃を仕掛けた。右から、左から。彼女はその斬撃の片方を雷切の腹で受け止め、弾き、もう片方を足を上げ、靴の裏で払う。息を吐く暇はない。次いで、前後から同時に剣が迫る。立花は動きを止めないまま前方に宙返り、砂に足を取られて両膝で着地した。スパルトイの剣は空を切る。骨たちの勢いは止まらない。四方から立花の首を狙い、それぞれの得物が振るわれた。彼女は咄嗟に寝転がり、四体の骸骨、その下肢部分を順々に切り捨てていく。立ち上がり、振り返らずに駆け出した。追い付いたモノから相手をし、どうにか一対一の状況を作ろうとする。
「姫、下がらせるんだよ！」
スパルトイの行進が止まった。残った数は十と一。半数近くも減らされた事に気付いて、ランダは面倒くさそうに息を吐く。内訳は彼女の骨が四、姫が七。
ランダがその場に留まり、姫が中空から立花の背後に着地する。彼女らはまた、囲みを形成するらしかった。
立花は止めていた息を吐き、雷切を杖代わりに肩で息を繰り返す。動きづらい砂の上というのもあって、疲労が蓄積されつつあった。足が重く、心臓が早鐘を打ち続ける。今までとは違い、彼女の精神も酷く磨耗していた。死にたくないと、恐怖と焦燥が少しずつ心を削っていく。
「そんな調子で、いつまで刀を振れますか？」
「……姫ちゃんが、諦めるまでは」
「もしくは、一さんが死んじゃうまで、ですか？」
姫は羽を戻し、髪の毛をナイフに変えた。

「随分頑張るんですね。そんなにあの人が大事なんですか」
立花は答えない。背後のスパルトイたちに注意を払いながら、姫をじっと見据える。
「だったら、気を抜かないでくださいね。あなたが死ねば、魔法は解けない。一さんも眠り続ける事になり、そのまま死に至ります」
「そんな事は……」
「ええ、させませんよ」
姫は無造作にナイフを放った。殆どが狙いとは違う方へと逸れていき、立花は近くまで飛んできた一本だけを切り落とす。
「そんな優しい死に方は認めませんから」
「姫、あんまり挑発すんじゃないよ」
「本当に、兄さんが救われない。浮かばれない。兄さんはずっとあなたを見てきたのに、あなたは、兄さんを見ていなかった。あなたは別の男をずっと見てきた。兄さんは、何なんですか」
俯き、姫は呪いのような言葉を紡ぐ。
「兄さんが可哀想。あなたのような女と出遭った兄さんはっ、兄さんは！」
「……君が何を言っているのか、ボクには分からないよ」
「分からなくても！　いいえっ、分かられるものですか！　あなたを引き裂いた後はっ、一さんを目覚めさせて、ゆーっくりと、嬲り殺しにして差し上げます。立花真、あなたのせいで彼は死ぬ。殺されちゃうんですよ？」
ああと息を漏らし、
「それは、分かった」
雷切を引き抜く。立花は鈍い動作で歩き始めた。
「ボクは、分かった」
日脚が伸びて刀を照らす。陽光を反射した刀身は、立花の横顔を映した。
烏が、跳ぶ。
姫は背中の肉を翼に変えて、何も考えずに上空へと逃げた。気付

けば、額から冷や汗が流れている。彼女はそれを拭い、鼓動が早まるのを感じた。見下ろせば、立花に向かったスパルトイが次々と骨を散らせている。

ランダは動けない。スパルトイに新たな指示を下すのすら忘れていた。骸骨に交じれば、確実に殺される事を理解していたのである。

「はじめ君は殺させない」

頭蓋骨が高く、高く舞い上がった。それは姫のすぐ横を過ぎ、地へと落ちていく。

「もう、手加減なんかしない。はじめ君を殺すって言うなら、ボクは……」

十一のスパルトイが地に伏した。倒れ、動く事はない。

「君を殺してでも……！」

これが『立花』。これが、彼女の本性。否、新たに得た感情なのだ。姫はそう認識して、腹を揺すって笑う。愉しくて愉しくて、嬉しくて嬉しくて仕方がない。

「まだ、まだそんな顔を隠してたんですね！？」

「許さないっ、許すもんか！　ボクは君をっ！」

「あなたが言える立場ですか！」

ランダの止める声も聞かず、姫は一直線に立花へと降下する。瞬間、彼女らは音を聞いた。

ヴィヴィアンが笑う。指を差す。アレを見ろと、楽しそうに。

ナコトは目を開けて、立ち上がってそれを見た。砂漠が割れている。つい先程まで存在していた砂の山は崩れ、今も尚、巻き上げられた砂が空から降っていた。

ハスターの力を、自分よりも確かに顕わせた魔女を一瞥し、ナコトは長い息を吐く。ヴィヴィアンが自分ではなく、立花たちのいる方へと撃った理由が分かって、

「あたしを狙わなかった事、あなたは、いつか必ず悔いますよ」

好戦的な笑みを浮かべた。
「それも面白いありえるならば面白い私が悔いるなんてイメージしただけでも胸が踊りそうだもの」
ヴィヴィアンは自慢したかったのである。ナコトが行使した風の支配者を、より強く、より大きく、より上手く使えるのだと示したのだ。
「……頭は冷えましたか」
呟き、ナコトは砂を払い落とす。飛ばされていった帽子を探したが、どこにも見当たらなかった。
ヴィヴィアンは踊るように歩を進め、ナコトに向かって手を伸ばす。老婆、童女、若い女に姿を変える。
「次は何を何をしてくれるのかしら黄衣ナコトまだ残っているのでしょう手が打つ手が策が魔女を捕らえる妙案が」
ハスター、ロイガー、ツァール、バイアクヘー、鎖、全てを出した。手を打ち尽くして、やっとダメージが通った。ヴィヴィアンが油断し、慢心していたからこその結果である。それでも、やはり、仕留められない。落ち着かれればナコトに勝ち目はなかった。一度構えられてしまえば、繰り出す攻撃は全て防がれるだろう。力の差は歴然としていた。
魔導書が光る。ナコトの傍に、砂を被ったバイアクヘーが降り立った。彼女は乱暴な動作でそれに乗り、ヴィヴィアンをねめつける。最後に残った手段、命を燃やす時が来たのだと決意した。反転し、魔女に背を向ける。
「あなたの魔術は魔法にも及ぶかもしれない私には劣るけど強い心を持っている次はおいかけっこありきたりでつまらないけれど付き合うわ」
バイアクヘーが風を切る。向かう先には一人の剣士。ナコトはしかと前を見据え、鎖を放った。
「ふあ？」
立花の胴体に鎖が巻き付く。バイアクヘーが高度を下げ、彼女の

体が低く浮いた。両足は砂に埋まりかけたままで、立花は引きずられていく。

残された姫とランダは、こちらに向かってゆっくりと歩いてくるヴィヴィアンを見つめた。

魔女たちから離れたところでバイアクヘーが緩やかに速度を落とす。ナコトは鎖を戻し、立花は頭から砂に突っ込んだ。

「うっ、うう？　ボク、空を飛んで……口の中がじゃりじゃりするう！」

雷切を振り回し、立花は砂を吐く。ナコトは何事もなかったように彼女へと笑いかけた。

「まだ死んでなかったんですね。健康って素晴らしい。羨ましいですよ、正直」

「訳わかんない！　何なんだようっ、もう！」

立花は叫び、バイアクヘーを見てもう一度叫んだ。

「おっきいカレイだ！？」

「あなたの頭にはお花畑が咲き誇っているんでしょうね。あたしにも植えさせてくださいよ、すずらんとか」

「こっ、これ？　これが飛んでたの？」

指を差されたバイアクヘーはきゅうと鳴く。

「ええ、あたしのしもべです。……黄金の蜂蜜酒も石笛もありませんから、完全には力を使えないんですけど」

「ふーん？　ボクには分からないけど、その子、味方って事で良いんだよね」

「はい。それより、困りました。もう、出来る事がありません」

あっけらかんと、空っぽな笑みでナコトは言い放つ。

「うわ、全然困ってなさそう。……あ、邪魔しないでよね。やっと、捕まえられそうだったのに」

立花が雷切を握り締めた。彼女の纏う殺気を見抜き、ナコトはや

れやれといった風に溜め息を洩らす。
「何か、勘違いしていますね。とは言え、さっきまではあたしも流されていたんですけど。んっんー、あたしたちの目的、忘れてませんよね？」
「姫ちゃんを……えっ、なんで叩くの？」
「それはついでです。あたしたちは『館』を潰しに来たのではありません。一さんを起こす為に来たのです」
「う」と、立花は言葉に詰まる。詰ってやろうかとナコトは考えたが、その資格がないと気付いていた。
「神野姫の復讐に付き合わなくても結構です。全く、あなたはいつまで遊んでいるのですか」
謝りかけた立花だが、姫との戦闘になったのはナコトが裏切ったからなのだと思いだす。
「元はと言えばそっちのせいじゃないか。何だよ、魔女にこてんぱんにやられちゃってるくせに」
「いやいや、やられてませんから。何を言ってるんですか、捏造しないでくださいよ。腹立たしい。そっちこそ、小娘相手に苦戦していたみたいですけど？」
「二対一だし、骨出してくるんだもん。仕方ないじゃんか。ボクを悪く言うのは止めてよ」
「はー、出た。出ましたよ言い訳。潔く己の非を認めないからこうなるんです。ふざけないでくださいよ、砂漠なんぞに連れてこられて帽子まで飛ばされちゃったって言うのに」
ナコトはわざとらしく肩を落とした。
「ここ、どこなんだろうね。あの、ヴィヴィアンって人が作ったのかなあ」
「さあ、作ったのか繋げたのか……それはどうでも良いんです。とにかく、あたしたちには出来る事がなくなってきてるってのが重要なんですから」
この世界からは逃げられない。主であるヴィヴィアンをどうにか

しない限り、自分たちはここで終わる。喉の渇きが辛い。体力と精神力はもう持たない。
「どうすれば良いんだろう」
「手はあります。あなたには時間稼ぎをお願いしたいのです」
「まさか、ボク一人で『館』を相手にしろって言うの？」
ナコトは舌を出して親指を立てる。どこまでも人を舐め切っていた。
「一さんを起こす。この世界から抜け出す。この二つを達成しない限り、あたしたちに意味はありません。ここまで来たのも、戦ったのも。方法は一つ、ヴィヴィアンの魔力を枯渇させる事です」
「魔力？　えーと、魔力って？」
「精神力、心の力のようなものです。……一さんに掛けた、永続的な睡眠を促す魔法。そしてこの世界、作成したのか、召喚したのか、どちらとも取れますが、大掛かりなものに違いはありません。彼女が積極的に戦闘に参加せず、一気呵成、攻勢に転じなかった理由はここにあると見て間違いないでしょう」
「……う、うーん？　えと、もう魔力を使っちゃってる、から？」
頷き、ナコトはバイアクヘーの頭部を踏みつける。そこに意味はない。
「ええ、ヴィヴィアンにどれだけの余力があるのかは分かりませんが」
「だったら、魔法を使わせまくっちゃえば良いんだね」
「しかし、あたしたちでは耐え切れないでしょう」
ヴィヴィアンは魔女だ。人間のナコトたちを侮っている。その為に、無駄とも言える魔法を使ってきた。砂漠の世界を用意して、ナコトの魔術を様々な魔法で防ぐ。最後には顕現したハスターの力を誇示し、せせら笑った。
「無駄に魔力を使ってくれるのは有難いのですが、先のアレを見たでしょう。一撃でも食らえば、ただでは済みません。戦闘の続行はおろか……まあ、普通に死んじゃうでしょうね。普通に」

立花は今更ながらに震える。自分が相手をしているモノの力、肌で感じてしまったのだ。
「どうしよう？」
「攻撃にではなく、防御に魔力を回させます」
ナコトは『黄衣の王』を目で示す。
「あたしに任せてください。それまでは、あなたに任せます」
「魔女、三人……」
体が震えた。武者震いだと強がるつもりはない。立花は、死ぬのが怖かった。
「うん、分かった」
だが、それ以上にここで諦めるのが怖い。一を失うのが怖い。
「ボクに任せて」
立花は手を広げて、掲げる。ナコトはそれを見て、不思議そうに小首を傾げた。
「……あれ、知らない？　ハイタッチ。しようよ」
「知っています馬鹿にしないでくださいそれぐらいあたしだって知っていますあたしが知りたいのは何故今ここでハイタッチが出てくるのかって事ですよ」
「早口で良く聞こえなかったけど、こういう時はそうするんじゃないの？」
ナコトは立花を睨む。それが気に食わなくて、立花はナコトを強く見据える。
黄衣ナコトは立花真が気に入らないが、彼女の刀を振る才能、モノを切る能力は認めている。自分では倒せないモノですら、立花は何も思わず、何も感じずに切り捨てるのだろう。犬のように媚びた瞳で、誰よりもまっすぐに気持ちを届けられるのだろう。羨ましくて、でも、決して欲しくない。自分は自分なのだから、他人と違って当然だった。
立花真は黄衣ナコトが気に入らないが、彼女の魔を操る才能、モノを考える能力は認めている。自分では敵わないモノにすら、ナコ

トは鼻歌交じりでやってのけるのだろう。尖った空気で、言葉で、でも、不器用で。だから、誰に対してでもまっすぐな気持ちを届けられるのだろう。少しだけ妬ましくて、眩しくて。

「じゃあ、後にとっとこうか」

「気が向いたら、手、貸してあげますよ」

正反対。対照的。凸凹。表裏。白と黒のセーラー服が、同じ方向を向いた。

姫は頭を抱える。結局、魔女はどこまでいっても魔女なのだ。相手を侮る事で、またも窮地に立たされている。

立花を呼ぶ際、人数に関しての指定は行わなかった。それは協力者、ヴィヴィアンの指示であり、逆らえなかったのである。姫も苦戦するとは思っていなかった。どんな勤務外がやってこようと、湖の貴婦人に触れる事さえ許されない。掻き回されるにしても想定の範囲内、充分に戦況を展開出来る。そう思っていたのだ。が、立花の協力者を甘く見過ぎていた。

黄衣ナコト。彼女の力を見誤っていた。学校に現れた時とは違う。魔導書を手にし、魔術を行使し、あまつさえヴィヴィアンにダメージを与えた。彼女に、触れたのである。

「……話が違うじゃないですか」

ぼそりと、まるで恨み言のように姫は呟いた。ヴィヴィアンは何も言わず、彼女を見ず、バイアクヘーが去っていった方を見つめている。

「うーん、『図書館』が予想以上だったかねえ。魔導書持ちなんて、ありゃ詐欺だよ、詐欺」

「本当に、あいつを殺せるんですか」

「ヴィヴィアンには期待しちゃ駄目だよ。あの人はもう……ま、どっちにしろ『図書館』の嬢ちゃんを任せる手筈さ。あたしらは立花を仕留めりゃあ良い。何も変わっちゃいない。だろ？」

既に、ヴィヴィアンは姫の未来に、姫自体から興味をなくしていた。彼女がどうなろうと、湖の貴婦人は何も思わない。ヴィヴィアンは『黄衣の王』を持つナコトに強い興味を示している。その事実が姫を苛立たせていた。

「馬鹿だねえ、焦らなくて良いんだよ。あたしらは魔女さ、構えてりゃ良い。あの子たちも疲れてる、骨どもはまだ出せるんだろ」

代わり映えのしない人海戦術、ヴィヴィアンはあてに出来ない。姫が焦るのも無理はないと言えよう。が、ランダは気楽そうに口を開いた。

「あんたが望んだ戦いだよ。あたしらがしゃしゃり出たって仕方ない。『館』に招き入れたのがあんたなら、締め出すのも自分で決めるんだね」

姫は頷く。納得いかない部分もあったが、やる事は変わらない。

「ああ、おいでなすった」

ランダが砂地に手を触れる。姫もそれに倣い、青と赤、二つの色が光輝を放った。

黄衣の王

バイアクヘーから飛び降りる。有翼の魔物はヴィヴィアンの放った風によって後方へと吹き飛ばされた。ナコトは着地し、魔導書を片腕で抱き締める。バイアクヘーを戻す余裕はない。人語を解するアレなら、勝手に戻ってくるだろうと判断。

「来るよっ」

迫るは七体のスパルトイ。ナコトは頭を切り替えた。まずはアレを地に還す。片手で鎖を操り、分銅のついた先端を投げた。骸骨の足は早い。立花は目を見開き、刀を構える。鎖は避けられ、それを飛び越えるようにしてスパルトイは前進していた。

姫は呼び出した四体のスパルトイへ細かな指示を与える。刻々と移り変わる戦況を見ながら、その都度骨どもに意思を伝える。先までとは力の入れ具合が違った。精神力を温存するつもりはない。ここでの決着を彼女は望んでいる。

同様に、ランダも骨を操っていた。姫よりも少ない数だが、指示に割ける容量と魔女としての経験を加味しても、ランダのスパルトイの方が嫌らしく動いていた。

「あたしが牽制を、近い奴からあなたが」

立花は頷き、頭を下げる。その上を風が切っていった。鎖が切っていった。スパルトイはナコトの得物を躱すが、雷切の餌食となる。胴体部分の骨が砕かれ、やかましい音を慣らしながら埋もれていった。

接近戦、近接戦闘に関しては『館』よりも立花たちが優位に事を進めていた。

「ヴィヴィアンにも注意を。他の魔女とあたしたちの射線を合わせていきます」

魔法が絡めば話は別である。たった一発のそれで戦況は変わる。趨勢は『館』に傾く。ナコトはヴィヴィアンの魔法を警戒していたが、味方など構わず撃つ時は撃つのだろうとも覚悟していた。

しかし、ヴィヴィアンは既に興味をなくしている。この戦闘の行方には関係ないのだと言わんばかりに、ただ、砂をいじっていた。

ナコトはヴィヴィアンの様子を確認して、一歩踏み出す。チャンスだと、そう思った。瞬間、足元に違和感。そこから飛び退くと間もなく、砂の柱が瞬く間に立ち上がる。

「魔女め……」

「いい加減諦めなっ、あんたらに勝機なんかないんだよ！」

ランダは言うが、彼女の操る骨が崩れ落ちた。立花は近づく二体に睨みを利かせる。膠着した隙を衝き、ナコトがその二体の頭を潰した。スパルトイは残り四。

「お師匠、追加を」

姫が急かすが、ランダはスパルトイを補充しない。残った二体に指示を与える。

砂の上を駆け出した骨を見て、ナコトが鎖を放った。その後を立花が追う。スパルトイは鎖を避けるが、雷切に下肢を切られていた。姫はランダの手持ちがなくなったのに気付いて、自身のそれを向かわせる。

ナコトが鎖を戻す間を狙い、スパルトイが彼女に向かって走りだす。ランダが焦った風に地を蹴った。彼女の行為、その真意を計る暇はない。立花は一体を仕留めるが、もう一体はナコトに剣を振り下ろす。その名を唱え、名状しがたい風が、彼女の持つ『黄衣の王』から奔った。スパルトイは遥か上空にまで弾き飛ばされて中空で分解される。

まずいと、ナコトはバイアクヘーを呼び寄せた。ランダが姫を抱えて走っている。彼女は何かを呟きながら、こちらを一瞥した。射線が空いている。ヴィヴィアンとナコトの視線が交じった。ランダが唱えたのは、先刻と同じく対象物を硬化させる魔法である。

「こいつの上に！」
してやられた。ナコトは悔やむより先、行動する。バイアクヘーの背に乗り、立花の腕を掴んだ。
ヴィヴィアンの両手から、何かの鳴き声が聞こえ始める。魔女は笑み、それを解き放った。凄まじい風が、砂を、この世界に食らい付く。疾い風が突き、烈しい風が暴れていた。誰の声も聞こえない。音をなくした場所で砂粒が巻き上げられる。ヴィヴィアンの呼んだ風は誰かの命を奪おうと、まるで、意思を持っているかのようだった。

太陽に近づきすぎたイカロスは、蝋の翼が溶けて死んだという。
「……だから？」
乱れた髪を直す気はなかった。立花は溜め息を吐き、ナコトを睨む。鎖にぶら下げられ、バイアクヘーにつり下げられた状態の彼女は、しっかりと雷切の柄を握り締めていた。
「飛ばされるかと思った！　死ぬかと思った！」
「喚いていると落ちますよ」
立花は下を見ない。足を閉じ、少しでも振動をなくそうとしていた。
「早く下ろしてよう」
「いえ、まだ下の様子が把握出来ませんから」
ナコトはバイアクヘーの上から、下を見る。砂煙が全てを覆い隠していた。姫もランダもヴィヴィアンも、誰の姿も確認出来ない。
「まるで砂の海ですね」
「えっ、すごい何それ。……う、うああ、はっ、離しちゃ駄目だからね！　と言うかボクを上げてよう！」
「土下座してください」
「無理だってば！」
必死な立花を見下し、ナコトは酷薄な笑みを顔に張りつけた。

「じゃあ、そのままですね。もう暫くは快適な空の旅を堪能してもらいますよ」
「全然快適じゃないよ！　馬鹿！　ハイジャックされちゃえ！」
「はいはい。……あ」
ナコトの目がそれを捉えた。煙に揺らめく影を確認し、彼女は目眩を起こす。
「なっ、何？　ナコトちゃん大丈夫？　鎖が緩んでる気がするよっ？」
「……しっかり掴んでますよ。全く、うるさいイヌですね」
「イヌじゃないもん、ボクはボクだっ」
「吠えますね。真下を見ても威勢を保ってられますか？」
立花はおそるおそる、下を見る。
影が揺らめいていた。一つや二つではない。十や二十でもない。もっと多い。何かが蠢いている。
それは骨だ。百に届く数のスパルトイが剣を掲げる。あの日に起こったグラウンドでの風景を思い出して、立花は歯を食い縛った。
「神野姫、えげつない子ですね」
ナコトは息を吐く。あの数相手では、流石に下りる気がしなかった。が、いつまでもここに留まっていられない。ヴィヴィアンに狙い撃ちされてしまう可能性があった。
「ナコトちゃん、言ってた奴、やろう。もう、それしかないよ」
「しかし、時間が掛かります」
魔導書、『黄衣の王』。一部に目を通した現段階、その力を最大限に発揮すれば魔女に一泡吹かせられるかも知れない。悩み、迷う暇はなかった。ナコトたちにはもう、それしか残されていない。黄の印を以って、王の名を呼び、その力の一部分だけでも顕現させる。だが、逃げながらでは集中出来ないのだ。
「ボクに任せてって言ったでしょ。ナコトちゃんには指一本触れさせない」
ナコトは逡巡する。スパルトイの群れが相手では、立花でも流石

に厳しい。バイアクヘーを貸せば何とかなるだろうが、今度は自分の身が危うくなる。

「……ボクに考えがあるんだ。大丈夫、あいつらは、ボクしか狙ってこない」

「あなたが？　よりにもよってあなたの考えを信じろと？」

「信じて」

吊らされながら、ぶら下げられながら、それでも、立花はナコトの瞳をまっすぐに射抜いた。

「あなたの考えを全て信じた訳ではありません。あたしにも、確証はありませんが、何とかなるような気がしています。材料、意外と揃っているのかもしれませんね」

ナコトはバイアクヘーの頭を踏みつけ、しゃがみ込む。

「離れたところにあたしはいます。あなたは、誰も近付かせないでください。……下りろ、しもべ」

きゅうと鳴き、バイアクヘーはゆっくりと降下を開始した。

骨の群れのど真ん中、姫はそこにいた。首を巡らし、視線を前後左右に忙しなく動かす。辺り一面骨だらけ。呼び出したスパルトイと、ランダしかいない。

ランダは姫に話し掛ける事はしなかった。召喚したスパルトイは百と四。今の姫の精神力では限界いっぱいの数字である。彼女の集中を乱せば、ここで終わってしまう。手助けしてやりたくもあったが、自分に残った魔力は少ない。もしもの時に備えがないようでは困るのだ。

晴れていく砂煙、ランダは目を細めてそれを見る。ヴィヴィアンはどこに行ったのか、どうせなら、何もしないで欲しかった。何せ、彼女の行動が読めない。そのくせ力は持っている。この世界から抜け出す為にもご機嫌は取っておいたほうが良いだろうと判断し、ヴィヴィアンを探すのは止めた。どうせ、彼女の狙いは黄衣ナコトな

のである、と。
「その通り私はもう何もしないわ面白い事が起こりそうだもの」
「……勝手にあたしの思考を読むんじゃないよ」
「だったらランダあなたも私の考えを読めば良いじゃないそれでおあいこ」
「んな事出来るんならやってるよ。頼むから、余計な手出しはしないどくれよ。今は、姫の時間なんだ」
ヴィヴィアンは素直に頷く。ランダは不気味に思ったが、何も言わなかった。
「私の今の目的は黄衣ナコトだもの神野姫には悪いけどあの子の方が面白そういったいぜんたい次は何をしてくれるのかしら魔女を裁くと言ってたわあの子本当に嬉しいそんな人間久しぶり」
ナコトが何を仕掛けようとも、ヴィヴィアンが止めるだろう。姫が見限られたのは師であるランダとしては悔しいが、好都合である。事実上の邪魔者が消えたのなら、後は立花と姫との戦闘を見守っていれば良い。
だから、煙を掻き分けてきた立花を見て、ランダは哂った。

雷切が振り下ろされる。スパルトイが両断され、左右に骨が散らばった。立花は骨どもの内には食い込まず、寄ってくる者だけを順に相手していく。
姫はまともな指示を下せない。どころか、正常な判断力さえ失っていた。立花への執念だけが、彼女の意識を繋ぎ止めている。その様子を見て、ランダがひしめき合うスパルトイの間をすり抜けていく。骸骨だけでは立花の足止めが精一杯、ヴィヴィアンが彼女に対して何もしないのなら、もう一手打つ必要があった。
「師匠を走らせるんじゃないよ、ったく」
硬質化させたモップの柄を握り、ランダは立花に迫る。
立花からはスパルトイの中心にいる姫が見えない。が、ランダの

姿は確認出来た。一度骸骨たちから距離を取り、様子を窺う。
ランダからはスパルトイの外側にいる立花しか見えない。ナコトもどこかにいるだろうと思っていたのだ。が、ここで彼女は気付く。黄衣ナコトが来ているのなら、近くにいるのならヴィヴィアンが動く筈なのだ。が、彼女は動こうとしていない。姫の傍で髪の毛を弄くっているだけである。二手に分かれているのかとも考えたが、物音は他にない。
動きの止まったランダを見て、立花は声を上げる。まだ、気付かれる訳にはいかなかった。
「ボクはここだっ、見えないのか魔女のくせに！」
立花を無視して、ランダはスパルトイを先に行かせる。立花は向かってくる敵を相手にするしかなかった。
ランダは考える。何故、ここにナコトがいないのかを。思い至って、その姿を探した。彼女が所持し、行使していたのは『黄衣の王』。ハスターの眷属、バイアクヘーを駆っていた事からも間違いない。が、バイアクヘーの力は十全ではなかった。ナコトは黄金の蜂蜜酒を飲んでおらず、石笛を吹いていない。彼女が目に見えて狂っていた訳でもないのなら、『黄衣の王』の二部を読んでいない可能性が高いと、ランダは見ていた。ならば、狙いは一つ。
「待てよ待てよ」
モップで砂地を叩き、ランダは思考を始めた。
ナコトたちの狙いは『館』の殲滅ではない。一に掛けられた魔法を解く事だ。掛けたのはヴィヴィアン。だから、姫とランダを相手にする必要はなかった。ヴィヴィアンさえ倒せば、ナコトたちは目的を達成出来る。魔術の素養があり、『館』と面識のあるフリーランスならばその事実に気付いている筈だ。しかし、それだけでは足りない。この世界からは抜け出せない。一の魔法を解くのとここからの脱出、その二つを成功させるには――――。
「姫っ！　立花じゃない！」
立花は一度俯き、表情を隠す。

「黄衣ナコトだっ、骨どもを『図書館』へ向かわせるんだよ！」
――――ヴィヴィアンの魔力を枯渇させる事。
二つを果たすには、方法はそれしかない。しかし、ランダはそれを最初から除外していた。ヴィヴィアンの魔力は桁違いである。並の人間、魔術師、魔女程度では及ばない。湖の貴婦人の心は強靭で、ある種狂っている。精神力の強さ、高さはそのまま魔力に繋がる。だから、立花にもナコトにも、ヴィヴィアンを空っぽにさせる事は不可能だと思っていたのだ。
だが、ナコトには『黄衣の王』がある。全てを読んでいなくても、充分過ぎる力を得られ、呼び出せる。ヴィヴィアンの魔力を使い切らせるほどの何かを、ナコトは呼び出せるのだ。その事実に気付いた時、ランダは彼女がここにいない理由に辿り着いた。否、それは繋がっていたのである。
「詠唱を止めるっ、姫！　姫っ！」
「……う、お、師匠……？」
姫の反応は鈍い。ランダは舌打ちし、自分で骨を出そうとするが躊躇う。もし、もしも、ナコトが召喚に成功した時、ヴィヴィアンは助けてくれないだろう。現に、彼女は今も、何もしていない。むしろ、ナコトの成功に期待しているようでもあった。なら、身を守る為に力は温存するべきである。
「姫、黄衣を狙うんだよ！」
ランダを見遣り、姫はゆっくりと息を吐いた。スパルトイの動きが一斉に止まり、立花ではなく、ナコトがいるであろう方角へと窪んだ眼窩を向ける。音がなくなり、緩やかな風が砂を引き剥がしていった。
「逃げるんだね？」
スパルトイがナコトの方を向く為に移動し、割れている。中心にいる姫が目を見開いた。切っ先が彼女を指している。立花と姫の目

が合った。
　姫の意識を繋ぎ止めているのは立花への憎悪である。
「ボクはここにいるのに、お前はボクを見ないのか、神野姫」
「……た、ち」
「姫、違う！　立花じゃないんだよっ」
　姫の視界がぼやけていく。焦点を合わせようと目を凝らし、瞬きを繰り返す。捉えた。正面、いる。もう、彼女には何も見えていない。ランダの声は届かない。
「たちばなあああああああっ！　あああああああああ！」
　スパルトイが駆け出した。立花は苦い顔を浮かべたが、すぐに立ち直る。雷切で薙ぎ、骸骨の骨を弾いて砕いた。
　ランダはモップを構え、立花を目指す。こうなってはナコトをヴィヴィアンに任せ、姫の復讐を果たしてやるのが良い。たとえ彼女の行為が八つ当りだとしても、他の者からすれば意味を持たない事であろうとも、姫にはもう、何も残されていないのだ。間違っていると分かっていても、それが彼女の願いなら、叶えてやりたい。
「姫！　呑まれんじゃないよっ」
　憎しみで良い。恨みでも良い。姫が生きるにはもう、これだけなのだ。魔女にでも、何にでもなると彼女は決意している。平穏な日常を生きた神野姫を、人である事を捨てたのは彼女自身。『館』に住まう魔女、レヤックとして生きるのを選んだのは姫なのだ。
　スパルトイが姫の叫びに応えて走る。策はない。ただ、立花に剣を振るだけだ。端から砕けていく。彼女の間合いに侵入したモノから散っていく。しかし、数が違う。立花とて人間だ。ここにきて、蓄積された疲労が彼女の全てを鈍くする。刀を握る腕、振る速度、足の運び、一瞬の判断、回避、攻撃、防御、精彩さを欠いていく。
　スパルトイは細かい指示を受けていないが、切り、突き、払うだけでも充分だった。立花はその場に踏み留まり、敵の数を減らしていく。
　錆び、欠けた剣に混じってモップが振り下ろされた。ランダは陰

から立花を狙う。
「立花あああああああっ、真ぉぉおおおお！」
膝が抜けた。立花は姿勢を低くし、この場からの脱出を試みる。しかし、四方は既に囲まれていた。
風が唸りを上げる。衝撃波を引きつれて、それはやってきた。スパルトイは風、その余波にばらばらと崩れていく。ランダは蹲り、顔だけを上げた。
バイアクヘーが立花を背に乗せ、舞う。骨の包囲を抜けて姫へと進み始めた。
「いい子……」立花はバイアクヘーの頭部を撫でる。人の言葉が通じる、有翼の魔物は嬉しそうに鳴いた。
「『図書館』の指示かい、余計な事してくれちゃって」
姫の真上に浮遊するバイアクヘー。立花は立ち上がり、身を乗り出して彼女を見下ろす。
「……何、を……」
姫は見上げた。立花を睨み付け、歯を食い縛る。上と下、力の差を、立っている位置を明確にされた気がして、彼女は憤った。
「何を見て……っ！」
「お願い、手伝ってね」
バイアクヘーが高度を下げ、立花が姫の前に飛び降りる。刹那、スパルトイが列を成し、主を守るかのようにした。
残ったスパルトイが二手に別れ始める。姫の盾になるものと、立花を包囲するもの。雷切を見つめた。立花は刀を下段に構えて視界を広げる。いつまで時間を稼げば良いのか、もう忘れた。目の前の敵を倒し、姫の感情を受け入れる覚悟は出来ている。
立花が最前列のスパルトイに切り込んだ。バイアクヘーは周りを囲むモノたちを体当たりで吹き飛ばしていく。ランダはバイアクヘーは止められないと判断、立花の進撃を阻もうとするが、思わず立ち止まった。溜め息を漏らし、彼女の剣戟に見惚れる。人間の身でありながら、そこまでの域に辿り着けるのか。魔法すら使わず己の

腕だけを以てそこまでの高みに行けるのか。素直に、羨ましく思える。

探し求めていた。選ばれたいのだと願い続けていた。その出会いは突然で、しかし、出会いとはそのようなものなのである。

ナコトは『黄衣の王』を抱き締めて、目を瞑った。戦いには慣れている。魔女は恐ろしくない。最後の一手、彼女がそれを打つのを躊躇っているのは、自らの死だ。もう二度と彼と出会えない。話せない。それだけが怖くて、何よりも嫌だった。情けない自分に力を貸してくれただけじゃない。黄衣オキナの仇を討ち、カトブレパスの呪いから助けてくれた。一に借りを返す。だが、それだけではない。

「いあ！　いあ！　はすたあ！」

決めた筈だと自らを奮い立たせる。この命を燃やし尽くしたとして悔いはない。一が助かるのなら、彼を守れるのなら、惜しくはない。

「はすたあ　くふあやく　ぶるぐとむ」

だから、ナコトは目を開けた。呼び出すべきモノの名を思い、唱える。

「ぶぐとらぐるん　ぶるぐとむ」

――――異界の都市より来たれ。黒き湖より来たれ。

「あい！　あい！　はすたあ！」

ナコトの抱えた『黄衣の王』、表紙に描かれた黄色の印が鈍く、光を放った。

魔女の世界が揺れる。

砂が割れ、空が落ち、太陽が嬌声を上げた。周囲は白く染まり、黒く塗り潰される。

「あああ黄衣ナコト素晴らしいあなたは素晴らしい私にも出来ない事をやってのけた人の身でありながら魔術の域を超えるか魔法の域に達するか」

魔女が賞賛する。

「……ヴィヴィアン？」

ランダも、立花も、姫も動きを止めた。狂ったように笑い続ける本物を見て、彼女らは戦慄する。

「世界が狂った世界が壊れた黄衣ナコトあなたがやってのけた」

立花は雷切を握り締め、周囲を見回した。

ヴィヴィアンの見たものは全て幻だ。世界は揺れず、砂は割れず、空は落ちず、太陽は微動だにしない。黒白はこの世界にあらず、何一つ変わらない。

ただ、それはいた。

眼下の者たちを見下すモノがそこにいる。黄色の襤褸切れを身に纏い、蒼白い仮面を被ったモノが世界を見下ろしていた。

ヴィヴィアンが哄笑し、一陣の風が吹く。優しい、柔らかな風だ。

瞬間、

「あ、れ？」

立花は目を丸くする。

消えていた。何もかもが消え失せている。

踏みつけていた砂も、抜けるような青空も、太陽も、バイアクへーもスパルトイも、何もかもがなくなり、いなくなっていた。

「ここ、は……？」

そこは部屋だ。薄暗く、椅子と机と窓がある、ただの部屋に立花は立っている。何が起こったのか分からず、雷切を握ったまま周囲を見回した。

ヴィヴィアンは窓の傍に立ち、ぼうっと外の景色を見つめている。ナコトは机と机の間に倒れており、彼女の被っていた帽子がすぐ近くに落ちている。ランダは姫を庇うかのように蹲っていた。が、彼女の体には異変が生じている。手が、枯れていた。枯れ枝のように

やせ細っていた。
「お師匠？　お師匠？」
姫がランダに呼び掛ける。ランダは低く呻き、しわがれた声で心配ないと呟いた。
立花はナコトに駆け寄り、彼女に息があるかを確認する。顔を近付けようとするが、
「うえっ？」
「……近いです」
拒まれた。ナコトは立ち上がろうとするが、力が入らず、結局、立花に体を預ける。
「ナコトちゃん、大丈夫？」
「力、使い過ぎちゃったみたいです」
「当然よ」
ヴィヴィアンは幾分か愉しそうに口を開いた。
「『黄衣の王』を全て読まずにアレを召喚したんだもの命を取られなかっただけマシと思う事ね黄衣ナコトお陰で私の魔力は空っぽよ神に挑んだけれどまだまだ届かないそれが分かっただけでもあなたと出会えて良かったと素直に思えるわ」
ナコトは舌打ちする。
「殺せなかったか……」
「黄衣ナコトあなた魔女にならないかしら『館』に入らないかしらあなたが弟子になるなら少しは楽しめそう退屈凌ぎにあなたを人の法から外してあげる何でも出来る何にでもなれるわよ」
返答はない。ナコトは立花の胸に顔を埋めて、ゆっくりと目を瞑る。
「あら残念」と、ヴィヴィアンは嬉しそうに言った。
立花は状況を確認する。足りない頭を必死で使う。
どうやら、ナコトの策は上手くいったらしかった。魔力が空になった、ヴィヴィアンが言ったのは本当かどうか分からないが、あの世界が消えてなくなったのが何よりの証拠であると、立花は断ずる。

ランダが老いた理由も、恐らくは同じ。姫の身を守る為に魔力を使い果たしてしまったのだろう。

「ヴィヴィアン、さん？」

呼び掛けられたヴィヴィアンは顔だけを立花に向けた。

「……はじめ君は、どうなったの？」

「はじめと言えばアイギスの子かしらあああの子魔法を掛けた男の子あの子ならとっくにお目覚めよ私の魔法は切れてしまったもの」

その言葉の真偽を判断出来るほど立花は聡くない。が、ナコトは小さな声で大丈夫だと思いますと漏らした。ヴィヴィアンは信じられないが、ナコトは信じられる。立花は頷き、彼女の体をゆっくりと床に寝かせた。

目的は既に果たしている。しかし、立花は傍に落ちている竹刀袋と鞘を拾わなかった。彼女は姫をまっすぐに見つめる。

姫は何も言わず、立花を睨み返した。

「続けるの？」

「まだ、私たちは生きてますから」

姫はランダの体を丁寧に退かし、床に置く。彼女は立ち上がり、魔法を発動しようとする。が、反応はない。スパルトイを大量に召喚した事で、彼女の魔力も既に切れていたのだ。

「続けるの？」

雷切の切っ先を向け、立花はもう一度問う。姫は空手だったが、戦意は喪失していなかった。

「ボクは姫ちゃんを殺さないよ。だけど、覚悟はしてもらうから」

命までは取らない。しかし、四肢の内、どれかはもらう。立花は強い敵意を込めて姫を見る。彼女は怖じず、動じず、立花を見返していた。

魔女の世界は黄衣の王が消し去った。
雑居ビルの一室に立つのは、雷切を構えた立花と、空手の姫である。彼女らは向かい合い、互いを強くねめつけていた。しかし、誰が見ても勝敗は明らかだった。第三者の援助がない以上、二人は自らに備わった力のみで戦うのを強いられる。
姫にはもう魔力が残されていない。骨を出せず、体を変化させる事は不可能だ。彼女にはもう力が残されていない。
立花もそれを分かっているから、戦闘を躊躇っていた。
「躊躇う必要は、ありません。ここで『館』を潰さなきゃ……」
見逃せば、『館』は、姫はまた襲ってくる。今度はなりふり構わず、もっと多くの犠牲者が出るかもしれない。立花は息を呑み、姫を見据える。彼女は退く素振りを見せなかった。
「……待って、おくれ」
緊迫し、膠着した状況下、ランダが辛そうに口を開く。立花は平伏した彼女に視線を遣った。
「姫を、殺さないで……」
「なっ、お師匠!?」
姫は屈み、信じられないといった様子でランダを見る。
「あんただって分かるだろ。もう、勝ち目はないんだよ……」
「魔女が頭を下げるなんて、そんなっ」
「まさか、見逃せと？　今までに……今までやってきた事を水に流してくれなんて、虫が良過ぎます。虫酸が走ります」
「ああ、ああ、だから、タダで見逃せなんて言わないよ。『館』はもう、あんたらには関わらない」
ナコトは鼻で笑う。舐めるなと、その目が言っていた。

「飲めませんね。あたしはあなたたちを裁く為にフリーランスになったんです。さようならなんて寂しいじゃないですか」
「お師匠、私も無理です。仇を討てないんなら、ここで殺される方がずっと良いです」
「……魔力の回復にはどれくらいの時間が掛かるの？」
立花が問う。彼女は決めかねていた。まだ、簡単には選べない。
「……あたしも、姫も、時間は掛かる。三日はこのままさ」
自嘲気味に笑い、ランダは痩せ細った腕を上げてみせる。
「私は一日も掛からないわ半日ゆっくり眠っていれば十割といかなくても六割は回復出来る」
「化け物め」ナコトは毒づき、ヴィヴィアンを睨んだ。
「姫を助けてくれるなら、あたしの命を差し出しても良い。だから、この子には……」
「お師匠やめてっ、こんな、この女に情けを掛けられるぐらいなら！」
雷切を握る手に力が入った。立花は改めて理解する。この場を掌握しているのは自分なのだと。
「立花さん、迷う必要はありません。その二人を始末するべきです」
「でっ、でも」
「また一さんが巻き込まれても？　一さんがこいつらに殺されても構わないって言うんですか？」
「ボクは……けど、ボクは……」
選び、決めろ。腹の底から声が聞こえてくる。今までの自分を消して、呪縛から解放された自分が声を荒げていた。
「……はじめ君を二度と巻き込まないで欲しい」
ナコトは目を見開いた。立花が言わんとしているのは『館』への譲歩。彼女は眼前の敵を見逃したいと思っている。
「分かった。あの坊やは二度と巻き込まないよ」
「他の皆もだよ。ボクの友達に手を出したら、次は本当に許さない」
ランダは頷くが、ナコトは納得出来なかった。

「甘い真似をっ。そんなの、一さんだけで充分です。ここでやらなきゃあなたがやられるんですよ」
「良いんだ」
立花は姫を見下ろしてから、鞘を拾う。
「ボクが気に入らないなら、ボクだけ狙いなよ」
「……必ず、殺してやりますから」
暗く、鋭い眼差しが立花を射抜いた。姫はランダに肩を貸して立ち上がる。
「約束して。『館』はボク以外を狙わないって」
「ああ、分かったよ。姫、良いね？」
「お師匠のばか」
「どっちが。ここで死んでもしょうがないだろ。プライドだけ高くても……」
「分かりましたから、無理に話さないでください」
話が済んだと見るやいなや、ヴィヴィアンが歩きだす。彼女はランダと姫の肩に手を置いた。二人の魔女の姿が消える。転移魔法で逃がしたのだとナコトは気付いた。
「まだ、残ってるじゃないですか……」
ヴィヴィアンは微笑む。
「でもあと一回分しか使えないそれで本当にさようならもう当分会う事はないでしょうね」
つまり、ヴィヴィアンはいつでも逃げられるのだ。ナコトも立花も戦意を失い、その場に座り込む。
「何故、すぐに逃がさなかったんですか。『館』が不利になるような交渉を持ちかけられる前に」
「黄衣ナコトと立花真二人の頑張りに免じて人間なのにあんな戦いを見せてくれたんだものそれにあの二人は腑甲斐なかったわペナルティを与えたくなるくらいにね」
「あ、ありがとう」
「何を礼なんか言ってるんですか」

最初から最後まで、ヴィヴィアン以外の者は、彼女の掌でいいようにに踊らされていたのだ。ナコトはつまらなさそうに息を吐く。
「頑張りなさい黄衣ナコトあなたが魔女を裁くと言うのなら私の望みはそれだものそれだけだから死に物狂いで私を殺してちょうだい」
「……言われずとも」
「そう良かった」
ヴィヴィアンは窓の傍まで歩いていく。彼女は若い女から老婆に、童女に、最後に、ナコトに姿を変えた。
「またね」手を振り、魔女の体が掻き消える。残された二人は息を吐き出し、顔を見合わせた。
「似てたね」
「あたしの方が倍可愛いですから。と言うか、やってくれましたね」
じろりと、ナコトは目の前のお人好しをねめつける。
「だって、やっぱり無理だもん。それにボクだけを狙うって約束してくれたじゃないか」
「相手は魔女ですよ？　口約束がどこまで信じられるか。明日にでも、何かしでかすかもしれません」
「そしたら、斬るよ。もう躊躇わないって決めたんだ」
「……まあ、神野姫に襲われるのはあなたですから。好きになさってください」
ナコトは立ち上がり、帽子を拾い上げた。扉を開け、立花を促す。
「ただ、ヴィヴィアンが来たら教えてくださいね」
「助けてくれるの？」
抱きつこうとする立花に肘鉄を放つが避けられる。ナコトは彼女を押し退ける力は残っておらず、なすがままにされた。
「あたしの目的はあいつですから。あなたは適当に斬っててください」
「ナコトちゃんって、あの人を知ってたよね。何かあったの？」
「デリカシーのない……別に、魔女だなんて調子に乗ったモノが気に食わないだけですよ。神野姫も、ランダも、何だかムカつきまし

た」
　立花は小首を傾げる。
「あの二人、あたしとキャラが被ってます」
「えー、そうかなあ？」
「そうなんです。それよりも、早く一さんの間抜け面を見に行きましょう」
「うん、そうだね！　えへへ、ボク頑張ったんだーって褒めてもらおうっと」
「じゃあ、あたしは何か買ってもらうとしましょう」
　手が出ない高価な本を買ってもらおう。新しい帽子も良いかもしれない。ナコトは頭の中でめぼしいものをリストアップしていく。
「じゃ、じゃあボクははじめ君とデートするもん」
「張り合っているつもりですか？　どうぞどうぞ、メリーゴーランドではしゃいでてください」
「遊園地かあ、それも良いなあ……」
「付き合いきれませんね」

「お師匠」
　ランダは顔だけを上げる。
「ここ、どこですか」
　姫は辺りを見回した。真っ暗で、月はおろか星の光りさえ存在しない。風も吹かず、地面の感触がない。地に立っているのか浮いているのか判然としない。唯一、蛍のようなか細い明かりがぽつぽつと漂っていた。
「ヴィヴィアンの作った世界さね」
「日本？　いえ、地球ですか？」
「さて、ね。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」
　ランダは臆せず、その場に寝転がった。姫は立ち尽くし、先の見えない闇を見通そうとする。だが、見えない。距離感の狂いそうな

漆黒の世界。まるで、今の自分と同じだと、彼女は諦めたように笑った。

「おい、馬鹿弟子」

「はい、なんですか」

「魔力が回復するまではこっから出られない」

「回復したらあの女を襲える訳ですね」

ランダは眉根を寄せる。

「ゆっくり休みな。ついでに頭を冷やしながらね」

「冗談ですよ。……今の私じゃ、立花真には勝てません。それどころか勤務外にも、フリーランスにも、誰にも」

「言っとくけど、あたしゃもうヤだよ。馬鹿の面倒を見るのは疲れる。あんなの一度きりでこれっきりだからね」

「手伝ってくれるんじゃないんですか」

姫は瞳を潤ませてランダに媚びた視線を送る。

「男なら引っ掛かるんだろうけどねえ」

「兄さんは引っ掛かりませんでしたよ」

「賢い子だ」呟き、ランダは姫から顔を背ける。

「せめて、私に魔法を教えてください」

「藁人形と五寸釘買ってきな」

「丑の刻参りなんて地味なの嫌です。労せず奴を殺せるのを教えてください。お師匠、そういうの得意でしょう」

「あんたじゃ無理だよ」

姫はランダの腰に指を添えた。

「お客さん、凝ってますね。もういいお年でしょう。魔女なんか引退して、弟子に全てを譲ってはどうですか」

「二百年早い。あんたには魔法以外に教える事が山ほどあるんだよ」

「私、学業は優秀だったんですけど」

「はん、お勉強出来るからって魔女にはなれないよ。もっとイイ女になりなって言ってんだ。ちんちくりんのくせに一丁前の口を……っだっ、いだっ！」

指に力を込め、姫は笑みを作る。
「お師匠の馬鹿！　若作りナイスバディ！」
「やめろってば揉み返す！　揉み返すから！」

夢を見ていた。
砂と空が広がり、他には何もない世界。暑くも、寒くもない。何も感じられない。そこに自分が所在なげに立っている夢だった。
何もしていない。ただ、突っ立っているだけだ。
「もう何もしなくて良いのよ」
柔らかな感触が背中越しに伝わる。だが、冷たい。女の体は氷のように冷たかった。
「あなたはここで何もないこの世界で何もしなくても良いの」
女の声は甘く、胸の内にずぶずぶと沈んでいく。
いつまで、そのままでいただろうか。遠くの方に人影が二つ、見えた。誰だろう。そう思い、足を踏み出すも、女がそれを拒んだ。
「行かなくて良い見なくて良い考えなくて良い思わなくて良いあなたはもう二度と動かなくて良いの」
「……いや、行かなきゃ」
何故だろう。その二人には会って、伝えるべき事があるのだと確信していた。女は首元に腕を巻きつかせるが、それを払う。
守ってくれていたのだと、思った。

「……ん」
目覚めると、仮眠室の天井が目に入ってきた。随分長い間眠っていた気がする。体がやけに重い。一はぼんやりとした頭で、状況を確認する。頭を掻こうとして、腕が上がらないのに気付いた。というより、何かに掴まれているような感覚である。彼は視線を下げ、黒と白のセーラー服を確認した。心地良さそうに寝息を立てる、二

人の女の子を確かに認めた。
「ああ、起きたか」
仮眠室の扉がノックもなしに開かれる。一はそちらに目を遣った。煙草を銜えた店長が、冷めた目でこちらを見下ろしている。
「これ、どういう状況なんですか……？」
自分でも覚えていない内に、仮眠室のソファで眠っていたらしく、しかも、起きた時には立花とナコトが寄り添うようにして寝息を立てている。一の頭はパンク寸前だった。
「説明が欲しいか。給料よりもか」
「面倒くさいなら面倒くさいって言ったらどうなんですか」
「睨むなよ。……そいつらに感謝しろよ。お前を起こしてやったんだ」
「起こしたって、もしかして」
店長は立花の頭を撫で、彼女らとは反対側のソファに座る。
「出番がなくて残念だったな。ま、働き詰めだったんだ。たまには寝ているだけってのも良いだろう。私が許す」
「マジで、戦ってたんですね」
「黄衣と話をしたんじゃないのか？」
「正直、あんまり覚えていないんですよ。寝てたのか起きてたのか、いまいち……」
苦笑し、一は腕の痺れを感じた。
「『館』のメンバーは逃がしてしまったらしいが、大した怪我もなかった。今は死ぬほど疲れて眠ってる。そのまま、両手の花を離すなよ」
安堵の息を吐きそうになるが、一は堪える。神野の妹、姫は死なずに済んだ。彼女は立花を殺さずに済んだ。誰も、死ななくて済んだ。姫は魔女で、自分たちと敵対している。それでも、彼女が死んで嬉しがる事はないのだろうと確信していた。
「痺れてるんですけど」
「その二人は命の恩人だぞ。一人につき腕一本ぐらい払ってみせろ」

「……煙草、吸いたいな」
一は店長をちらっと見る。分かりやすい所作だったので、彼女は煙草の箱をちらつかせた。
「吸わせて欲しいのか？」
「是非」店長は煙草の箱を胸ポケットにしまう。
「お前が喜ぶような真似を私がすると思ったか」
思っていない。一は落胆した様子もなく、むしろ自然な流れに満足していた。
「こいつ、足引っ張ってなかったですかね」
「黄衣か？　いや、立花はむしろ、黄衣がいなければ駄目だったと言っていたぞ。嘘を吐けない奴だからな、信じてやっても良いだろう」
「へえ、こいつが」
スパルトイの時も、ムシュフシュの時も頼りなかったナコトが、そんな風に言われているのが不思議で、何故だか誇らしい。
「魔導書ってのを上手く使えたんでしょうね」
「黄衣が持っていたもの、アレは本物なのか？」
「えーと、いや、限りなく本物に近いモノって言ってましたね。あー、多分」
「頼りないな」
「ええ、全く」
店長が頼りないと言ったのは魔導書ではなく、一の不明瞭な発言について、である。尤も、彼本人は気付いていなかった。適当に相槌を打っている。
「しかし、中身に興味はあるな。『人間辞めましょう』とでも書いてあったのか」
「さあ、案外そんな感じじゃあないですかね」
「……お前は読んでいないのか？」
「いや、一緒に読まされましたよ？」
二人は視線を交わす。内心ではお互いを馬鹿にしていた。

「からかっているのか、一」
「そうじゃなくて、俺には読めなかったんですよ。魔導書ってのは、読む奴が選ぶんじゃない。魔導書が、読ませる奴を決めるらしいんです。だから、俺は選ばれなくて、黄衣は選ばれたんです」
「分かっていて、黄衣はお前と一緒に読んだのか？」
一はナコトを見遣る。黙っていれば、少しは見られるところもあるじゃないかと思った。奇しくも、同じような事を店長に思われていたのを彼は知らない。
「本人に聞いてくださいよ」
「察しはついてるが、そいつが当たりなら……話してはくれないだろうな」
「へえ、教えてくださいよ」
「本人に聞けば良いだろう」
二人を視線を交わす。内心ではお互いを罵倒していた。
「ところで一、気分はどうだ」
「あんまし良くないです」
「花が二輪じゃ足りないとでも言うつもりか」
「いや、なんつーか」
一は立花とナコトを見て、困ったような顔を浮かべる。
「二人が揃うと、葬式みたいだなって」

雨止み番外地

ここで何をしているのかと問われれば、彼女はこう答えるであろう。

「雨宿り」

今は雨が降っていないではないかと訝しげにされれば、彼女はこう答えるであろう。

「降ってんだよ」

尋ねた者がいなくなってから、彼女はこう思うであろう。

自分は何をやっているのか、と。

魔女との戦闘が終わった翌日、一は自分の部屋で目が覚めた。まだ、腕に痺れが残っているような気がする。時計を確認すると、午前の七時を回ったばかりである。折角早くに起きられたのだから大学に行こうかと思いつつ、彼は大口を開けてあくびをした。すると、一が目覚めたのを見計らっていたかのようなタイミングで扉が叩かれる。早朝の来客、彼は何も考えずに扉を開けた。

「よう一、元気でやってたかよ」

チアキかアイネだと思っていたのだが、その予想は外れてしまう。袖の破れた巫女装束を着た、銀髪の女が立っていた。フリーランス『神社』、山田栞である。一は珍しい客に驚いたが、すぐに気を取り直した。

「お久しぶりですね。栞さん、退院してたんですか」

「心配してたか？」

一は頷く。あの少女によって病院送りにされたのだ。心配しない方がおかしいとすら、彼は思う。

「なら、見舞いの一つにでも来て欲しかったな」
「俺も入院してましたし、忙しかったものですから」
山田は不機嫌そうに眉根を寄せるが、まあ良いかと呟き、髪を撫で付けた。
「こんな朝早くに何かあったんですか？　……あ、中にどうぞ。散らかってるし、お茶もすぐには出ませんけど」
「おう、悪いな。じゃ、上がらせてもらうぜ」

山田に温かいお茶を出し、簡単に部屋を片付けて顔を洗ったところで、一もこたつに足を入れた。
「いきなりで悪かったな」
「や、それは全然構いませんよ」
茶を啜り、山田は言いづらそうに頬を掻く。
「そういや、一の部屋に来たのはヤマタノオロチ以来か。すげえ久しぶりな気がする。……同居人は、まだ入院してるんだったか」
「ええ、糸原さんと会いました？」
「何か、病室にいる時、出会い頭に謝られてさっさとどっか行っちまった。まるで間女だな、今のオレ」
「別にあの人とは何もありませんよ。あ、みかん食べます？」
一は小さなかごからみかんを一つ差し出すが、山田は首を振った。
「なあ、今日、暇か？」
「夜にバイト入ってますけど、それまでは暇ですよ」
「……学校、行かなくて良いのか？」
講義は入っているが、行くつもりは最初から大して、ない。一は山田を心配させないように笑顔を作った。
「酒でも付き合ってくれねえかな。こっち来てからは殆どベッドの上にいてよ、全然飲めなかったんだ」
「栞さんがすぐに暴れるからですよ」
「悪いかよ。いや、悪いか」

一は何も言わず、みかんを口に放った。
「付き合いますよ。けど、俺とサシで良いんですか？」
「一しかいねえしな。ヒルデはあんまり飲まないし、今は、何か誘いづらい」
「……ああ、そう、ですね」
山田は神野の事を知らないのだろうか。一は、今日だけでも、その事については黙っておこうと決意する。今から飲むのだから、湿っぽい話は不粋だろう。
「家には何もないし、まだこんな時間なんで、どっか買いに行きましょうか」
「スーパーは、まだやってねえか」
「じゃ、コンビニですか」
「一の店で良いんじゃねえのか」
一はこたつから足を出し、ゆっくりと四肢を伸ばす。
「ちょっと歩きますよ？　もう一軒、近くに普通のコンビニがありますけど」
「歩こうぜ。道すがら、話したい事もあるしよ」
「素面でですか」
頷き、山田は立ち上がった。
「退院したしよ、オレ、帰ろうかと思ってんだ」
「帰るって……」
「家だよ家」
どうしてと尋ねる必要はない。山田が駒台に来たのはヤマタノオロチを討滅する為で、彼女の大切な人を見つけるのが目的だった。既に、それは果たされ、終わっている。山田がここに残ったのは怪我の治療、入退院を繰り返していたからだ。だから、もう、彼女が駒台に留まる理由はない。
「帰っちゃうんですか」
「おう。ま、まあまあ面白かったぜ」
引き止める理由もない。山田がそうしたいのなら、手を振り、笑

顔で見送るのが彼女の為だろう。一はその先の言葉を飲み込み、立ち上がった。

並んで、行く。一と山田、二人は何も言いださなかったが、示し合わせたかのように彼らの歩幅は狭く、ゆっくりと歩いていた。

「前から聞こうと思ってたんですけど、寒くないですか、その格好」

「気合いでどうにかならあ」

かははと笑い、山田は一の肩を叩く。

「一、今度はお前がオレんとこに来いよ。歓迎すっからよ」

「栞さんって、どこ住んでるんでしたっけ」

「島根。出雲って聞いた事あるか」

「一応」

知っている。だから、一は困ったような笑みを作った。

「結構、遠いですね」

「泊まり掛けで来いよ。学生は一月しないで冬休みじゃねえか。何なら、オレが交通費も出すしよ。向こう着いたら、金の心配はいらなくなるぜ」

至れり尽くせりではないか。一はその待遇に驚く。そこまでして自分にしてくれる理由が分からなかった。

「あ、でも年末年始は一も実家に帰るのか？」

「いや、俺はここで年越しですね。ゆっくりと年を越せるかどうかは分からないですけど」

「へえ、だったらオレの地元で年越そうぜ」

積極的に誘ってくれるのは有難かった。一は山田の好意を嬉しく思う。

「考えときますよ」

だが、断った。

「おう、色の良い返事、聞かせてくれよな」

一は頭に手を遣り、山田の真っ正直な部分を羨ましく感じた。駆

け引きが通じないのか、そもそも最初から無視しているのか、これもまた彼女の揺さぶりなのか。

オンリーワン北駒台店。

この日、ナナは一人でシフトに入っていた。早朝から、夕刻までである。長時間だが、彼女にとっては何ら辛い事ではない。疲労を感じる体ではないからだ。それでも、一つ不満があるなら、マスターと呼び、慕う一がいない事である。

客も大してやって来ない。ナナは退屈な時間を持て余していた。

「……いらっしゃいませ」

扉が開いたのを背中越しに確認し、それでも、ナナは振り向かずに挨拶をする。足音はこちらに近づき、立ち止まった。不審に思って振り返ると、小さく手を上げた一が立っていた。

「はあああっ、マスター！？　も、申し訳ございません、まさかマスターがいらっしゃるとは思いもよらず！」

「そ、そんな勢いで謝らなくても。いや、ちょっと買い物に来ただけだからさ」

「そうでしたか。では、僭越ながらナナが……」

ナナは一の後ろに立つ山田を認める。彼女は買い物かごをぶらぶらとさせて、退屈そうにあくびをしていた。

「確か、そちらの方は……」

「フリーランスの『神社』、やま――――」

「――――言ったら怒るぞ」

一は固まり、唸り、

「こちらの方は栞さんと言います」

無難な方向に逃げる。ナナは頷き、それから、山田に向かってお辞儀をした。

「お初にお目にかかります。私はナナ、ここで勤務外をやっています。それから、マスターの忠実なメイドでございます」

「お、おう？　すげえな一、メイドなんかいたのかよ」
一は答えられなかった。乾いた笑いでお茶を濁そうとする。
「それじゃあ、適当に買っていきましょうか」
ナナは訝しげに一を見遣る。その視線に気付いた彼は何でもないように言った。
「ああ、今から栞さんと飲むんだよ」
「……飲む、とは？」
「お酒だけど？」
「マスターは夜からシフトに入っている筈です」
詰め寄られ、一はたじろぐ。
「夜までだから大丈夫だって」
「おーい一、お前も好きなの選べよ」
「あ、はいっ。じゃ、そういう事だから」
何がどういう事なのかナナには分からない。彼女は、楽しそうに買い物をする二人をねめつけていた。
「日本酒、少ねえな。奥に置いてねえのか」
「コンビニですからね。栞さんは度数きつい方が好きなんですか？」
「弱いのはいくら飲んだって酔えねえな。オレにとっちゃ酒なんか水と同じだよ」
「へえ、やっぱり慣れてるんですかね。ほら、杜氏の人たちってお酒強そうですし」
「さあ、どうなんだろうな。けどオレの周りはうわばみばっかだったぜ」
山田はかごに瓶、缶、紙パック問わず、目につく酒を入れていく。
一はその様子を呆然としながら眺めていた。
「お？　かご、もう一個取ってきてくれよ」
「飲む前からこう言うのも何ですけど、飲み過ぎです」
「一の分だってあるんだぜ？　すぐになくなっちまうよ」
「おつまみとかどうしますか」
山田はきょろきょろと店内を見回した。

「本当ならオレが作ってやりたかったんだけどよう。まあ、適当で良いぜ。あ、でもあんまし腹が膨れるのはなしな」
「料理、おいしかったですもんね。また、次の機会にお願いします」
「お、おうっ、ありがとな。じゃ、次は食べたいもん言えよ。前もって教えてくれりゃあ、頑張って覚えるからよ」
肩を叩かれ、それでも一は楽しそうに笑っていた。ナナはさっきまでやっていたフェイスアップなど忘れて、親の仇でも見るかのような目つきで山田を凝視している。
「酒は、こんなもんでいっか。足りるかな？」
「充分ですよ。あ、おつまみも選んでおきました。こんな感じで良いですかね」
「上出来上出来、レジ持ってこうぜ」
酒が詰まった二つのかごを軽々と持ち上げ、山田はナナの待つカウンターへと向かった。
「メイドさん、よろしくな」
「……いらっしゃいませ」
ナナは軽く会釈し、無表情にバーコードを読み取っていく。
「ごめんな、ナナ」
「別に良いです」
「……何か機嫌悪くねえか？」
「……今日は雨が降るかも知れませんよ」
「降りませんよ」ぶっきら棒にナナは言う。
商品が多く、全て読み取るには時間が掛かった。袋は酒だけで四つにもなる。
「あ、悪いけど袋は二重にしといてくれ」
「はあ、分かりました」
ナナの対応は適当になっていたが、一は恐ろしくて何も言えなかった。彼女は機械的に作業をこなし、最後に合計金額を読み上げる。
「割り勘で良いですか？」
「いや、オレが誘ったんだ。こっちが全部持つ」

「流石に全額ってのは、半分は出させてくださいよ」
「オレのプライドが許さねえ。一は一円だって出さなくて良いからな」
「じゃあ、せめて四分の一……」
「駄目だってんだろ」
「さっさと決めてください！」
ナナがカウンターに両手を叩きつける。一は小さく悲鳴を漏らした。
「そちらの方が出すとおっしゃっているのですから、マスターは黙っていてください。精算時に揉めるくらいなら、最初に結論を出しておいてください！」
一と山田はこくこくと頷き、彼女が万札を三枚出す。ナナはそれを引ったくるようにして、お釣りを山田に渡した。
「あっ、ありがとうございました！」
何故か一が頭を下げていた。

帰り道、二人はまだ先の出来事を引きずっていた。
「あのメイドすげえ恐いな。メイド喫茶ってのも、あんな感じなのか……」
「いや、さっきのは例外だと思います」
一は、ナナが怒っていた理由が全く分かっていなかった。
「もたついてたからって、あんなキレなくたって……まさか、他のお客さんの時にもあの対応を……？」
「オレらが悪かったんだと思うけどな。おい、それよかふらふらしてんぞ。やっぱりもう一つ持つって」
「これ以上されたら俺のプライドが粉々になりますよ。だ、大丈夫ですから」
一は酒の入った袋を四つ、受け持っている。彼は、荷物持ちくらいさせて欲しかったのだ。

「プライドなんて気にすんなよ。オレなんかこんぐらいしか出来ねえんだから」
「充分、色々と出来てますよ。……栞さんには、借りを作りっぱなしです」
「……オレも、一には借りがあっからよ」
ナコトにも同じような事を言われていたのを思い出す。一は、自分が何かしたなんて思っていない。ある意味、不気味だった。
「オレはさ、殴ってぶっ壊す事しか能がねえからよ。一には、何か、色んなもんをもらった気がするんだ」
「それは、気のせいですよ」
温かい食事をもらった。家で帰りを待ってもらった。廃ビルで、病院で、共に戦った。一は、自分こそ山田に色々なものをもらっているのだと思う。
「栞さんと会えて良かった」
もう二度と会えないかもしれないから。だから、素面でいられる今、一は言いたかった。
「ありがとうございます」
「……ああ」
山田は頭に手を遣り、一の思いにようやく気付く。
「ありがとな」
もう二度と会えないかもしれない。だから、彼女は笑った。

湿っぽい話は終わりだとばかりに、山田は飲んだ。飲み続けた。一は彼女のペースにはついていけず、誤魔化しながら飲む。
「もっと飲めよう、男だろ」
「では、いただきます」
救いなのは、山田の様子が酒を飲む以前と変化していない事だった。気持ちの良い飲み方をする人だと、彼は感心する。
「……マジで酔わないんですね」

「気分は良いけどな。ほら、ほっぺたもちっと赤くなってるだろ」
指差すので、一は山田の頬をじっと見つめる。
「あ、あんまし見んなよ」
理不尽だった。一は空いた缶を卓から退かして片付ける。時間を確認すると、昼を回っていた。既に二時間もこの調子である。そして、この後も続くのだろう。どこまで山田に付き合えるか、一は不安になった。
「でも、一も思ってたより強いんだな。潰れちまうんじゃないかって心配してたんだぜ」
「結構ぎりぎりだと思いますよ。こんなに長い間飲んでたのは、初めてかもしれないですね」
「……あんまし、酒は飲まないんだっけ？」
「まず、周りにお酒飲む人が少ないですしね」
一の相手をしてくれるのは楯列ぐらいのものである。
「糸原ってのはやらねえのか」
「寝酒に、嗜む程度って奴です。俺もあんまり付き合おうと思いませんし」
「ふうん、勿体ねえなあ。何割か損してるぜ」
また一つ缶が空いた。山田のペースは全く変わらない。
「栞さんがこうやって相手してくれるなら、お酒を飲む機会も増えるかも」
「かはは、何だよ何だよー、嬉しい事言ってくれんじゃん。良いぜ、オレで良けりゃいつでも、いつまでも付き合ってやるよ」
山田が溜め息を吐く。その仕草が妙に色っぽく見えて、一は視線を逃がしてしまった。
「オレも久しぶりに飲めたからよ、何かすげえ酔ってる感じだ」
「え、全然、いつもと変わらないように見えるんですけど」
「んー？」
相好を崩し、山田はふらりと立ち上がる。熱に浮かされたような彼女は、一の傍に腰を下ろした。

「もっと飲めよう、一。オレばっか飲んでる気がするぞー」
「あはは、駄目ですよ。無理矢理絡み酒装ったって、酔ってないんでしょう」
「何言ってんだ、酔ってるってんだろ。オレが、オーレーがー、酔ってるって言ってんだから酔ってんだよう。お前ももっと飲め！」
一は訝しげに山田を見遣る。少しだけ嫌な予感がした。彼女の吐息が顔に掛かって顔をしかめる。
「……俺もそうだと思うけど、すげえ酒臭いっすよ」
「オレの酒が飲めねえってのか！？」
「テンプレじゃないですか」
アレほど酒に強いと言っていた山田だ。これは演技だろうと一は判断する。しかし、もしかしたら、マジで？　えっ、私のアセトアルデヒド脱水素酵素低過ぎ……みたいな気持ちが捨て切れないのも事実だった。
「のーめーよー。なあ、飲めってばー」
肩をばんばん叩かれ、パックのお酒をぐいぐい口元に押しつけられ、
「あの、離れてもらえませんか？」
柔らかな体をぐいぐい押しつけられている。中身は男どころか完全におっさんだったが、山田はれっきとした女だ。一は死にそうな顔で訴える。
山田は虚ろな目を一に向けてから、へらっと笑った。
「むり」
「おおおおいっ！　冗談きついっすよ！」
胸に頭を押しつけられて、両腕はしっかりと体に巻きついている。一は山田の拘束から抜け出そうともがくが、彼女の膂力に逆らえる筈もない。
――――援軍だ。
このままでは良くない結果を招く。そう考えた一は階下にいるであろうチアキとアイネを呼ぶのを思いついた。

「しっ、栞さん。お酒は皆で飲んだ方が良いと思いませんか？　一人よりも二人。二人よりも三人。三人よりももっと大勢。悲しみと喜びは分かち合った方がよりよい人生になる事間違いありません」
「んん……？」
「有り体に言えば、俺の知り合いを誘っても良いですか？」
ぎゅっと、山田の腕に力がこもる。折られると、一は観念した。
「一はさ」
「はい？」
「オレと飲むのが嫌なのか？」
「そんな事ないです」
拘束が緩む。今だと、今しかないと一が力を込めた瞬間、山田は彼を逃すまいと強く抱き締める。
「オレとサシで飲むのが嫌かって聞いてんだよう！　おらあっ」
声すら出せなかった。一は山田の肩を叩く。タップである。しかし彼女は聞き入れない。
「わ、分かりましたから……」
山田の力が緩むが、反応がない。不思議に思って彼女の顔を覗き込んでみると、目を瞑って規則的な寝息を立てていた。好き勝手に騒いで、眠ってしまっている。
「……えー、マジかよ」
酒が強いなんて嘘ではないか。一は自分の髪の毛を掻き、山田を引き剥がそうとする。が、下手に動けば彼女を起こしてしまうかもしれない。目が覚めた山田はまた絡んでくるだろう。そう思うと、やはり彼は躊躇ってしまう。
気持ち良さそうにしている山田を見て、一は諦めた。

胡坐をかいたままでまどろんでいると、随分と時間が過ぎているのに気付く。一は焦燥感に駆られた。そろそろアルバイトに行かなければ。酒気を少しでも抜いて、まずは顔も洗いたい。

「栞さーん、起きてくださーい」
山田の体を揺すぶってみるも、彼女からは一向に目覚める気配がなかった。仕方ないのでもう良いやと割り切り、一は山田を退かして立ち上がる。それでも尚、彼女は起きなかった。
「……どうすっかなあ」
眠っているだけなので、充分な留守番をしてもらうとはいかないが、無理に起こすのも可哀想だった。山田を一人で残していくのも不安である。
「栞さん、朝ですよー。嘘だけどー」
「……ん。んー」
山田が身動ぎした。彼女は目を擦りながらゆっくりと起き上がる。
「あの、俺、今からバイトなんですよ」
こくんと、山田は小さく頷いた。
「その、どうしますか？」
「待ってて、良いか？」
「……え、ええ、勿論。待っててくれますか」
一は身支度を済ませていく。彼は安堵していた。どうやら、山田の酔いは覚めているらしい。今はただ、眠たいだけなのだろう。
「結構、遅くなりますけど。十時は回っちゃいますよ」
「おう」と、返答し、山田は冷蔵庫に向かう。缶ビールを一本取り出し、蓋を開けた。
「アレだったら、電話入れるんで」
「あんまし気にしなくて良いぜ。どうせ、オレは暇だしな」
コートを羽織り、一は玄関で靴を履く。鍵を持っていこうかと考えたが、山田が待っているのならとやめておいた。
「……あの」
「ん？　どうしたよ？」
「あ、いや、そいじゃいってきます」
「おう、いってらっしゃい。しっかり働いてこいよー」
扉を開ける。寒風が身に突き刺さり、一は身震いした。聞けば良

かったのだろうかと、階段を下りながらぼんやりと思う。

どうやら、ばれていたらしい。そうでなくても、勘付かれていた。それはそうだろうと、自分の行いを回想して身悶える。畳の上をごろごろと転がって、呻き声を漏らした。

「……やっちまった」

山田は一の部屋で大の字になり、目を瞑る。

ヤマタノオロチでは、一の世話になった。結局、あの時は何も出来なかった。全て終わってしまった後で、自分がやった事と言えば、殴られて、殴って、病院に運ばれた。それぐらいのものである。駒台に来て何か掴めたか、何が掴めたのか。やはり、潮時なのだろう。

フリーランス『神社』。ヤマタノオロチを倒した八塩折の酒。山田も、幼い頃からそうであれと教育を受けてきた。杜氏を辞め、人外と渡り合うフリーランスを続けてきたのは、一族の使命を全うする為である。それも終わり、追い続けてきた男も殺されていた。大蛇の血を引く彼はもう、この世にいない。青髭と名乗るモノにより、彼女の人生はある意味、終わらせられてしまったのである。

駒台に留まる理由はなかった。

山田が病院にいたのは、押しの強い看護士、炉辺のせいである。それから、ヒルデ。彼女には妙に懐かれてしまった。妹と呼ぶには幼くない。友人と呼ぶには気恥ずかしい間柄だが、楽しい思いをさせてもらっていたのは確かである。

駒台に留まる理由を探していたのかもしれない。

今日、一の部屋に来たのは、それを確認したかったからだ。

「期待しちまってたなあ」

この街を出ると言った時、一には自分を引き止めて欲しいと思っていた。けれど、彼は笑顔で返した。分かりましたと納得していた。ソレを殺す為、昔の相棒を殺す為、一と協力した日を覚えている。彼は勤務外だが、弱くて、頼りなくて、情けなくて。しかし、信じ

られた。信じてくれた。何を、誰を信じれば良いのか分からなかった時に、今にして思えば、彼と出会えたのは僥倖だったのだろう。

一が店に入ると、バックルームの扉が勢い良く開かれた。彼は何事だろうとそちらに目を向ける。オンリーワンの制服を着た立花が走ってきて、あまつさえ抱き着こうとしたので、一は咄嗟に体を反らした。

「どうして避けるのっ！？」

「いや、そりゃ避けるでしょ」

立花は一を見据える。その視線を欝陶しく感じたのか、彼は何となく目を逸らした。

「褒めてくれたって良いじゃないかー、ボク、今日は一人で頑張ったんだよ」

「一人でシフト入ったのって、初めてだったっけ？」

「うん！」

元気いっぱいに頷いたので、立花のポニーテールがぶんぶんと揺れた。

一は改めて立花を見る。思う。ミノタウロス戦の後、彼女には変化が見られた。泣き言を漏らさなくなったし、少し、幼さが抜けたような気がする。それを成長と呼ぶのかは分からないが、悪い変化ではない筈だ。

「あ、フェイスアップが出来てないよ」

「あ、あとでやるよ。……はじめ君は厳しいなあ。母さまみたい」

「でも、頑張ったね。うんうん、これからは俺も楽が出来る」

「ホントっ？」

やはり、相変わらず分かりやすい。立花は喜怒哀楽を隠さずにぶつけてくる。その裏のなさが、彼女の魅力なのだと思えた。一は首肯し、立花は笑みを深める。

「そういえば、今日はナナちゃんの機嫌が悪かったような気がする

よ。何だか、ボクたちと同じみたい」
「あ、はは、そっか」
まだ怒っていたのか。一は内心で溜め息を漏らす。
「それじゃ、着替えてくるから。俺が来たら上がりね」
「はーい。ゆっくりで良いよー」
まさか、自分が働いている時にやってこないだろうな。ナナが来た場合、完全に逃げ場を失ってしまう。一は考えたが、それはもしかして想像してはいけない事なのではと、頭を振った。

優しい。

だから、気味が悪い。

ソレを殺し、殺される為に生まれて、生きてきた。

人外になった自分に声を掛けて、笑い掛けてくれる一が、気持ち悪くて、でも、嬉しかった。

一は不思議だ。勤務外なのに、ソレと戦っているのに、普通なのである。だからこそ、人に優しく出来るのかもしれない。もう二度と、彼のような者とは会えないかもしれない。

「……振られちまってるもんなあ」

山田は卓の上の缶ビールを空けて、一息に飲み干した。幾ら飲んでも、酔えない。使命からは解放された。だが、この後何をすれば良い。先の事を考えれば気が重くなる。酒には逃げられない。彼女は虚ろな目を天井に向けた。

「ありがとうございましたー」

レジを閉め、一は溜め息を吐く。時刻は午後、九時四十分。もう少しでアルバイトも終わる。山田が待っているから、今日は寄り道せずに帰ろう。そう思って、店に入ってきた者に声を掛けた。

いらっしゃいませと頭を下げれば、メイド服の女が手を振っている。ナナだ。一の顔面が蒼白になる。

「……マスターに頭を下げてもらうというのも、中々に良いものですね」

にっこりと微笑み、ナナはカウンターに向かってきた。一は視線を忙しなく動かす。何もしていない筈なのに、ここから逃げないと

駄目な気がしていた。
「あ、あれ？　ナナさん、シフトの時間には十時間ほど早い気がするんですが？」
「気のせいではありませんよ」
ナナは酒のコーナーまでつかつかと歩いていき、そこで立ち止まる。商品をじっと眺めた後、一升瓶を手に取る。鬼をも殺せそうな瓶だった。一の膝が少し震えた。
「これをいただきましょうか」
「お酒、飲めるの？」
「いいえ。飲むのはナナではありませんから」
「は、はあ」
一はバーコードリーダーを持ち、酒瓶のバーコードを探す。
「飲むのはマスターです」
「はあ？」
ナナは柔和な笑みを見せた。見せつけていた。これでもかと言わんばかりに。
「まさか、『神社』のお酒が飲めて、私のお酒が飲めないなんておっしゃいませんよね？　ええ、お酒に違いはありませんもの。ご満足いただけるまで、浴びるほど飲んでいただきます。完全に、完璧に、完膚なきまでに。マスターの喜ぶ顔が目に浮かぶようです。ああ、メイドとしてこれ以上の幸福は存在しません」
やられた。一は己の浅はかさを呪う。そして思う。俺が一体何をしたのか、と。
「あのさ、何で怒ってるの……？」
ナナは不思議そうに小首を傾げる。
「私は怒ってませんよ。何せオートマータですから。……そうですね、仮に私が怒っているとするならば、私が怒っている理由に気付かないマスターが悪いのではないでしょうか。仮の話ですから、マスターは何も気にしないでくださいね」
「……怒ってじゃん」

「怒ってませんからさっさと私の酒を飲んでください。今すぐに」
「そっ、そんな乱暴な言葉遣いを！」
口元に手を当てると、ナナは取り繕うような素振りを見せた。
「失礼致しました。ですが、マスターはもう少しナナに優しくしてくれても良いのではないでしょうか」
「優しくって言われてもなあ。具体的には何をしたら良いんだろう」
「それを考えるのがマスターのお役目ではないでしょうか」
一は、ナナからマスターと呼ばれるのは諦めている。しかし、身も心も彼女のご主人様になったつもりはない。少なくとも今のところは。
「じゃあ、今度ナナと一緒にお酒を飲もう。とは言っても、そっちは見てるだけだろうけど」
「では、ナナがおつまみを作りましょう」
「うん、よろしく。えーと、納得、してくれました？」
ナナは唇に指を当てて、わざとらしく唸る。
「勿論です。マスターがおっしゃる事に逆らうなんて有り得ません。納得しました」
「……そりゃ、どうも」

小さい。
小さな世界だ。
男は見下ろし、目に映るもの全てを嘲笑う。無理もない。男の体躯は並の人間では有り得ないものなのだ。身には帷子を纏っている。巨人の兵士はくつくつと笑った。風が吹き、汚らしく伸びた髪が流れていく。
その身長、三メートル。身に着けた帷子は五十キログラム。
旧約聖書に登場する、巨大な男だ。それが今、駒台にいる。この街を、この街の人間を笑っていた。
「おいおい……」

オンリーワン近畿支部情報部、氷室はソレを確認する。出現場所は駒台の住宅街だ。住民の避難は殆ど間に合わない。何せ気付いた時には、目の前にソレがいるのだから。

電話が鳴った後、一はバックルームに呼ばれた。時刻は午後の九時五十五分。あと、五分。たった五分さえ過ぎれば、今日は終わりだったのである。

「ん、何を不機嫌な顔をしているんだ」

「いえ、別に」

「構って欲しそうな顔をしやがって。……分かっていると思うが、ソレが出たぞ」

一は溜め息を吐いた。またか、と。また出たのか、と。また戦うのか、と。

「今度は何が出たんですか」

牛。魔女。もう何でもこいだった。

「巨人だ」

「……巨人？　巨人って、でかい人間って事ですか？」

店長は小さく頷き、煙草に火を点ける。

「それ以外に何がある」

「漢方医学で言う内分泌系や免疫機能の低下により起こる症状ですね」

「それは腎虚だ。ん？　ナナ、どうしてお前がここにいる？」

当たり前のようにそこにいるナナを見て、店長は僅かに目を見開いた。

「マスターに用事がありましたもので。ソレが出現したのは、本当なのですか？」

「ああ、間違いない。情報部から今しがた連絡が来た。現れたソレは、一言で言えば、巨人、だそうだ」

「また適当な……他に特徴を教えてくださいよ」

店長は面倒くさそうにして、送られてきた書類に目を遣る。命が掛かっていると言うのにその態度。何て奴だ。一はそう思ったが、決して口にはしない。

「あー、そうだな。そいつは、鎧を着ているそうだ。兵士のような、そんな感じに見えたらしい」

「兵士、ですか。巨人の兵士……」

ナナは考え込む様子を見せた。

「知っているのからいで……ナナ」

「幾つかはデータベースに該当するモノがいます。巨人と言えば、枚挙に暇がありませんからね。アトラス、エウリュトス、ギガス、グレンデル、トロル、大入道、だいだらぼっち、フンババ、ゴリアテ、盤古、ヘカトンケイルにスプリガン。他にもおりますが」

一は首を振る。とてもじゃないが覚え切れそうにない。

「被害は出ているんですか？」

「出現場所が住宅街だから、家が何軒か潰されているみたいだな。人的被害は今のところ聞いていない」

「うーん、何も分からないのに、行きたくないですね」

「そうだな、私としても送り出したくはない相手だ」

「えっ」と、一は目を丸くする。まさか、店長が自分を守ってくれるような事を言うとは、思いもしなかったからだ。

「相手が悪い。巨人なんて、言ってしまえば力馬鹿だ。ミノタウロスの時もそうだったが、単純な相手にお前は弱い。力の差だけで言えば、一。お前が勝てる相手など限られている」

その通りだと一は頷く。少しだけ情けなかった。

「あ、だったらナナ、手伝ってくれない、かな？」

「私がですか？　勿論、私はマスターに付いて行くつもりでしたが……」

ナナは伏し目がちに店長の様子を窺う。煙草の火を揉み消した店長は、腕を組んで椅子をくるくると回転させた。

「実はな、ナナのバッテリーが切れ掛けているらしい」

「ええっ？　本当、ですか」
「嘘は言わん。……ナナ、充電はもう済んでいるのか？　いや、その顔は済んでいないな。まさか、勝手に抜け出してきたのか？」
「いいえ、技術部の方に、きちんと許可をいただいてきました。私も、技術部も、ソレが出るとは思っていなかったものですから」
　ううんと唸り、一は困ったようにうな垂れる。ソレとの戦闘、しかも相手との相性が悪いとなればナナの助けが必要だ。しかし、十全ではない彼女を戦場に連れて行くのは躊躇われる。
「どれくらい持ちそうなんだ？」
　店長に問われて、ナナは自らの胸に手を当てた。
「明朝までは持つと言われていましたが、ソレとの戦闘ともなれば消耗は激しくなります」
「厳しいな。仕方がない、一、とりあえず様子だけでも見て来い。最悪、立花か堀を呼ぶ」
「立花さんって、十時回ってますよ？」
　時計を見て、店長は新しい煙草に火を点ける。
「立花には、勤務外してではなく、善良な一般市民として戦ってもらうか」
「きったねえ」
「お前が頼りないからこうなるんだ。汚い真似が嫌いだったら筋肉の一つでも付けてみせろ」
「ヤですよ面倒くさい」
　睨み合い、今にも掴み掛からんとする二人を見て、ナナは遠慮がちに口を開いた。
「あの、やはり私が行きます。今の状況でソレの正体を見極められるのは私だけですし、猶予も残されていない筈ですから」
「いや、でも……」
「マスターを一人では行かせられません」
　それでも渋る一の手をナナが握り締める。
「心配は不要です。私が、マスターを守りますから」

「……分かった。でも、まずは逃げるの優先だからな」
「認めよう。では、一とナナでソレの対処に当たれ。全て任せる。責任は誰かが取る。好きにやってくれ」
「せめて責任は私が取る！　ぐらいは言って欲しかったんですけど」
「責任は私が取る！」
「似合わねえ」
一は店長に頭を叩かれて文句を言った。が、睨み返されてすぐに出掛ける準備を始める。残念ながら、彼は、不安げなナナの表情に気付いていなかった。

店を出た一とナナは、住宅街までの道を黙々と進んでいた。言葉を交わさないのは、ナナの機嫌が悪いからではない。彼女が、無駄なエネルギーを使わないようにと提案したのだ。そこで、一も気付いてしまう。ナナは明朝どころか、ソレとまともに戦えないのではないか、と。声を掛けても、返事は望めないだろう。信じるしかない。
厚い雲が空を覆っていた。星一つ見えず、嫌でも心細くなる。ナナが倒れれば、一対一で相手をしなくてはならない。溜め息は止まらなかった。

「ひゃっ、ひゃあああああ！？」
ソレは乗用車の天井を叩き、大穴を開けた。中には運転手が一人。若い男である。掛けていた眼鏡はずり下がり、見下ろす巨人と目が合い、情けない悲鳴を上げた。
「逃げ遅れたなぁ、間抜け」
低く、太い声が男の鼓膜にまとわりつく。ソレはにいっと口の端をつり上げた。
「うわっ、わあっ、うわあああああっ！」

ドアを開けようとするが、ロックが掛かっているのに気付かない。男が慌てふためく様を見て、巨人は笑みを深めた。

ソレは外から車を揺すり、げらげらと笑った。

ようやくドアが開く。男は震える両足をむちゃくちゃに動かして走った。刹那、ソレに頭を掴まれる。一際高い悲鳴が男の口内から迸った。

「楽しいよなぁ」

男の体が宙に浮く。ソレは片腕だけで掴んだモノを、車のフロントガラスに叩きつけた。ガラスにひびが入り、けたたましい音とともにそれが砕けていく。巨人は男を引き抜き、おもちゃのように振り回した。

男の顔面にはガラスの破片がいくつも突き刺さり、おびただしく流血している。ぼたぼたと、コンクリートには赤い染みが作られていた。

「……や、やめ……」

「聞こえねぇなあ」

ソレが、今度は男を地面に落とした。その衝撃で、男の腰骨が砕ける。耳汚い絶叫を聞いて、巨人はうるさそうに顔をしかめた。その時、向こうから別の人間がやってきたのが見える。新しい獲物の出現を喜び、舌なめずり。ソレは品のない笑みを零した。

確かめる必要はない。全身を青銅の装備で固めている、人並み外れた体躯の男が笑っていた。近くにはその男に壊されたであろう車があり、

「いっ、いで、でぇぇ……」

若い男が倒れている。

まだ息があった。一は舌打ちする。ソレがやったのだろうが、どうにも趣味が悪い。

「面倒ですね」

ナナが口を開いた。彼女は怪我をした男を見てから、一に目を向ける。
「戦闘の邪魔です」
「え？　いや、助けないと」
「あの巨人には知能が備わっているようです。少なくとも、獲物をいたぶって弄ぶ程度には、ですが」
ソレは一たちを見て、倒れた男を足で転がす。
「助け出すのは難しいでしょうね」
「……ソレの名前、分からないか？」
名前さえ分かればメドゥーサを使えるのだ。隙さえ出来ればどうにかなる。まだ、目の前には生きている者が残っていた。だが、ナナは申し訳なさそうに首を振る。
「一度、退きますか？」
ナナの声は男にも届いていた。彼は縋るような目付きで彼女に視線を送る。
「見捨てるのは後味悪いぞ」
「救出の算段がつかないです。ナナはマスターの安全を優先します」
「た、たすけてくれ……！」
助けてやりたいのは本当だが、一だって死ぬつもりはないし絶対に死にたくなかった。
「げっへへ、こいつの次はお前らだぜぇ。逃げなくて良いのかぁ」
「うお、喋れんのかよ」
「巨大とはいえ人間ですから」
ソレは男を摘み上げ、指に力を込める。男の顔が苦痛に歪んだ。痛々しいほどの悲鳴が一の耳をつんざく。
「おが――――っ、ぎっ、ひ、ひぃいいいい！」
「だっ、おい！　ちょっと待てって！」
言葉が話せるのならと、一がソレに呼び掛けた。
「殺すのは待った！　タンマっ、ストップ！　助けてやってくれって！」

「あぁ？」
「ぎいいいいいいいいっ！　いいいいいいっ！」
一は思わず両耳を塞ぐ。
「……何とかなんないか？」
「なりませんね」
ならないか。一は目を瞑り、アイギスを強く、握り締めた。割り切れ。捨て去れ。自身に言い聞かせて、誤魔化そうとする。吐息を一つ。白い呼気はすぐに掻き消え、彼はゆっくりと目を開いた。
「じゃあ、せめて仇だけは取ってやるか」
「……よろしいのですか？　てっきり、マスターは自身を省みずにあの方を助けると思っていたのですが」
以前の自分ならそうしていただろうと、一は思う。自分は英雄ではない。なれないと分かり、ならないと誓った。身の程を弁えずに動けば、夢の国に運ばれるだけでは済まない。立花との約束を早速破ってしまったが、死んでしまうよりは良いだろう。
男の悲鳴を聞きながら、一は口を開く。
「それに、ありゃあもう助からないだろ。下手に突っ込んで怪我すんのもヤだし」
「あら、マスターにしては珍しい意見ですね。全面的に同意します」
「とりあえず、ある程度は戦ってみるか。やばくなったらすたこらさっさで」
「あいあいさー」
悲鳴がぷっつりと途切れた。ソレは流れる血を顔に受け、滴り落ちたそれを美味そうに舐める。死体と成り果てた男を捨てて、物珍しそうに一たちを見遣った。
「お前ら、何だ？」
問われて、一とナナは顔を見合わせる。
「名乗らせるつもりなら、てめえが先に名乗れよ巨人ザジャイアント」
「マスター、意味が少し被っています」

ソレは大声で笑い、事切れていた男を踏みつけた。足を退かせば、赤い花がコンクリートの上に咲いている。
「小さいけどぉ、ただの人間じゃないなぁ」
「ナナ、やっぱこいつの正体は分かんないか？」
「攻撃パターンなど、幾つかの情報が欲しいです。現状で割り出すのは非常に困難かと」
「無視っ、すんなぁ！」
豪腕が迫っていた。一は背を向けて逃げ出し、ソレの振り下ろした腕をナナが受け止める。
片腕と両腕。腕力ではソレに軍配が上がっていた。
「しゃあっ、掛かって来い木偶の坊が！」
「お前ぇ！　好き勝手ぇ！」
「隙だらけです」
ソレが一に気を取られた瞬間、ナナが両腕で巨人の腕を弾く。彼女は腕を大きく振り被り、ソレの右足、そこの脛当てを破壊した。次いで、剥き出しになった場所に攻撃を仕掛けようとするが、
「おおお――――！」
戻ってきたソレの腕が彼女の胸部を捉える。
ナナの体が一瞬間重力から解放されて、地に落ちた。衝撃を殺し切れずに、彼女の足はアスファルトを削っていく。一がナナの後ろに回り込み、アイギスで彼女を受け止めた。
「……マスターの両手で受け止めて欲しかったのですけれど」
「そりゃごめん」言い、一はソレの追撃を防ぐ。
「のわ……っ!?」
が、重い。今にも潰れてしまいそうだった。両足に力を込めて地面を踏み締める。歯を食い縛り、敵を見上げた。
「お前ら、人間なのかぁ」
ソレが不思議そうに呟き、一は唾を吐き捨てる。
「てめえよりかよっぽど人間やってんだろうが」
ナナがソレの腕をアッパー気味に殴り飛ばした。巨体が怯み、彼

女は一の前に立つ。
　ソレは何度も腕を回し、ダメージを確かめていた。
「いけそう？」
「予測数値以下です。恵まれた体とは言え人間、ナナの敵ではありません。前に出ます。マスターはフォローを」
「あいよ」
　広げたアイギスをソレに向け、一は頷く。ナナは足を一歩踏み出し、糸が切れたかのようにくず折れた。

　山田は頭を掻き毟る。彼女は時計を見ては、落ち着かなさそうに部屋の中を歩き回っていた。十時を回っても一が戻ってこないのだ。気が早いと自覚している山田は、仕事が立て込んでいるのだと自身を納得させる。第一、彼は遅くなるなら連絡を入れると言っていた。一が約束を違えるとは思えなかったので、結局、待つしかない。
　酒気に浸された部屋の中央に腰を下ろし、山田は日本酒の瓶とグラスを置いた。一献傾けた後、彼女は何気なく窓を見遣る。気付けば、胸の内がざわついていた。フリーランスとしての勘が、何かが起こったのだと騒いでいる。
「……出やがったか」
　ソレが出現した。山田は勘だけで、そう決めつける。一の帰りが遅いのはソレの対応に当たっているからだろう。納得のいく答えを見つけて、彼女は安堵する。助けに行ってやろうかとも思ったが、彼は待っていてくれと言っていた。それに、もう『神社』の役目は終わっている。フリーランスとして戦う必要もないのだ。開けられた穴は酷く大きいが、故郷に戻り、少しずつ元の形に戻していく。役目が残されているのなら、きっと、それなのだ。
　山田栞の出番は終わっている。
　駒台で出来る事はなくなってしまった。大蛇の血も途絶え、男の影も見えなくなっている。青髭と名乗った老人を仕留められなかっ

たのは心残りだったが、全て終わり、もう気にならなくなった。この街に残った者に任せれば、きっと上手くいく。そう、山田は信じていた。

満足そうに目を瞑っていると、扉がノックされる。一が帰ってきたのだろうかと、山田は返事をしてから扉を開けた。前に立っていたのは、真っ黒なジャージを着た女である。彼女は髪の毛をだらしなく伸ばしており、分厚い眼鏡を掛けていた。一言で言えば野暮ったい。

「どちら様だ？」

「……相変わらず、はっきりしてらっしゃる方ですこと」

「お前、オレとどっかで会ったか？」

しかし、山田には心当たりがなかった。

「私を覚えておられないとおっしゃるのですか？」

「何だ、新手のナンパか？」

女は苛立たしい様子で眼鏡を取る。これで分かるだろうと言わんばかりの態度であった。山田は首を傾げる。

「だから誰だよ。用がないんなら閉めるぞ。留守番任されてるからな」

山田は扉を閉めようとするが、女がそれを阻んだ。

「『神社』」

「……てめえ、やる気か」

「やりませんわっ。ああっ、どうして覚えていてくれないのでしょうか！　私悲しみの涙で溺れてしまいそうです！」

そこでようやく気が付いたのか、山田は扉から手を離し、女を指差す。

「『貴族主義』？」

「おっしゃる通りでございます。もう、悪意はおありにならないのでしょうけど……」

フリーランス『貴族主義』、アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。

山田が彼女と出会ったのは、とある国でソレの討伐を行っていた時

である。その時は、獲物を取り合う形になってしまったのだが。
「すげえ落ちぶれたな」
アイネは何も言わず、静かに微笑んだ。
「お前、どうしてここにいやがる。つーか、ここが誰の部屋か知ってて来たのか？　やめとけよ、お前にゃ合わねえ相手だぜ」
「そういうお考えもありますのね。……私、先日からここに住んでおりますの。そして、ここは私の大事なお友達のお部屋ですわ。友人を訪ねるのに、理由が必要でしょうか」
「なっ……！」
頭がこんがらがる。山田の知る限り、アイネは誰とも話そうとせず、誰にも心を開かない、閉じた人間だった。何を問うても静かに微笑むのが彼女の常だったのである。こうして、嬉しそうに『友達』などと言うような人間ではなかった。
「てめえ偽者だろ！」
「本当にはっきりしてらっしゃる方ですこと！　私は本物ですわ！」
「何で一とお前が知り合いなんだよ」
「はじめ……下の名前で……」
アイネは眉間に皺を寄せたが、それも一瞬のことである。彼女は平静を装い、髪の毛をかき上げた。
「知り合いではございません。お友達、ですわ」
「そんで図々しくこのアパートで暮らしてるってか」
「誘ったのはウーノですわ」
聞き慣れない言葉に山田は眉根を寄せる。
「あの方のあだ名です。私とウーノはあだ名で呼び合う仲なのですよ？」
アイネは何故か勝ち誇るような顔をしてみせた。
「お前は一に何て呼ばれてんだよ？」
「……え？」
「え、じゃねえ。別に、少し気になっただけだ」
そして、山田は少しだけ羨ましかった。知らない間に、知らない

者と仲良くしているのだろう。一が、少しだけ憎らしくなった。
「ク……」
「あ？」
「く、クーちゃん、と、あの方はお呼びになります……わ」
冷めた目でアイネを見下ろし、山田は扉を閉めようとする。
「お、お待ちになって」
「どしたよクーちゃん。一に何か用事でもあったのか？」
「用事がなくても、私とウーノは会える仲ですから。それよりも、何事ですかこの臭いは」
酒臭い室内に気付き、アイネは僅かに顔を曇らせた。
「さっきまで酒盛りしてた。もしかして、お前も混ぜて欲しかったのか？　あー、そりゃ無理な相談だぜ。俺と一はサシで飲んでたからな。邪魔者が入る余地はなかったってもんだ」
かはは、と、山田は豪快に笑う。アイネはぐぬぬ、と悔しそうに彼女を睨んだ。
「はっは、冗談だよ。あいつならお仕事だ、当分は戻ってこねえよ」
「……さようで」
「折角だから、二人で一緒に待ってようぜ。退屈してたんだ」
山田は部屋に戻るが、アイネは不思議そうに彼女を見つめている。何か言いたい事でもあるのだろうかと、山田は見返した。
「ソレが現れ、ウーノが戦っておられる。なのに、あなたは何をなさっているのですか？」
「留守番だよ。見て分からねえか？」
「さようでございますか」
「ん、おいおい、どこに行こうってんだよ」
アイネの視線は暗く、冷たい。
「ごめんあそばせ。私、誇りを捨てた方とは話す舌を持ち合わせておりませんの」
「てめえっ」
「おつむがよくっていらっしゃる。……今のあなたとは、お友達に

なれませんわ」

それだけ言うと、アイネはわざとらしく、ゆっくりと歩き去っていく。山田は彼女の背中を追い掛けられず、掛ける言葉すら見つからなかった。

ジャイアントキリング

膝をついたナナにソレの腕が迫った。一は彼女の前に身を躍らせて、アイギスで攻撃を受け止める。強く、重い衝撃が彼の両腕に伝わった。

「マス、タ……」

まさか。まさか。まさかまさかまさかまさか。一の頭を最悪の想像が駆け巡る。まだ早いのではないか。しかし戦闘を行って消耗したのは事実だ。信じたくない事実。認められない展開を振り払う為に、彼は喚いて頭の中から追い出そうとする。だが、事実は動かない。ナナのエネルギーは切れ掛かっていた。

ソレは一を不思議そうに見下ろす。自分よりも小さい体で、どうして攻撃を受けられるのかが分からない。巨人は辺りをきょろきょろと見回し、口の端を歪めて歩いていく。

「ナナっ」

その隙に、一はナナに駆け寄った。彼女の瞳からは光が失われつつある。動かそうとしているのだろうが、その腕は上がらない。

「……申し訳、ありません」

「逃げられそうか？」

「いえ、もう、エネルギーが。……それより、伝えたい事があります。ソレの正体、現時点で最も可能性が高い名前を……伏せてマスター！」

ナナが一を押し倒す。彼らのすぐ上を、通学路を示す道路標識が通り過ぎていった。

「マスターっ、ソレの名前はゴリアー――――」

返す刀、ソレは標識を力任せにスイングしてナナの体を弾き飛ばす。彼女は黙したまま宙に浮き、地面を転がった。それきり、動か

ない。
「ナナ、ナナっ！」
「あははぁ、命中ぅ……」
「ゴリア、なんだよ！？　その続きは！？」
半狂乱になった一はエネルギーが切れて完全に沈黙したナナへ呼び掛ける。
「お前ぇ、俺の名前が知りたいのかぁ？」
「野郎……！」
「じゃあ、教えてやらねえぇぇ」
ソレは引き抜いた標識を得物とし、一に向かって振り被った。彼はそれをかわし、背中を見せてみっともなく逃げる。まともに戦っても勝ち目なんて見えなかった。
が、ソレは一を追い掛ける。鈍い足音を引き連れて、巨人の兵士はアスファルトを踏みしだく。
「だっ、おい！　走れんのかよ！？」
歩幅が違う。速度が違う。一はすぐに追いつかれ、ソレは標識をまっすぐに振り下ろした。一は右方向に避け、柵を越えて民家の中に逃げ込もうとする。だが、ドアの鍵も窓の鍵も閉まっていた。
「うおおおおっ！？　ばっちりしてんじゃねえぞ！」
ソレが己の腕を振り上げる。一は塀を飛び越えて隣家の庭に逃げ込んだ。彼の背後から破砕音がする。扉は壊されて、破片を散らせていた。そして、逃げ込んだ先の家の戸締りも完璧だった。
一は諦めて道路に飛び出す。ソレは得物を横に薙いだ。一は避けきれないと判断して、アイギスで攻撃を受けようとする。だが、ナナをも吹き飛ばすほどの攻撃だ。生身の人間では完全には受け切れない。彼の体は易々と宙に浮かされ、後方へと飛ばされてしまう。
一は背中から地面に激突し、呼吸困難に陥る。
「小せえええぇぇ、やっぱ、お前らは小せえよなぁ」
逃げるか、防ぐか、それとも運に任せてメドゥーサを使うか。一は自身の状態を確かめる。逃げるのも防ぐのも、当分の間は難しそ

うだった。
「ご、ゴリア……」
アイギスを握る。喉からはひゅうひゅうと音が鳴っていた。だが、何とか声は出る。ナナが告げようとした名前は何だったのか。ゴリアの次の文字は？　アか、イか、ウか、エか、オか、カかキかクかケかコかサかシかスか……果たして何文字なのか？　四文字か、五文字か、六文字か、七文字か八文字か九文字か十文字か……そもそもその名前が合っているのか？　ソレが迫る。彼は思考を中断して、声を発した。
「『止まれゴリアン』！」　止まらない。
ソレは標識を振り下ろした。一は身を捩って何とか回避する。そのまま、残った力を使って彼は立ち上がった。すぐそこにある民家に逃げると、扉は開いていた。一も二もなく飛び込む。扉を背にしてへたり込もうとするが、背筋に嫌なものを感じた。飛び退き、土足のまま外へと通じる場所を探す。瞬間、巨人の大音声と共にものが砕けた。
「『止まれゴリアイ』！」　止まらない。
きっと、壊れたのは扉だろう。このまま屋内に留まっていても逃げ場がなくなる。一は見も知らぬ他人の家のリビング、そこの窓を開けた。寒風が吹き荒む外へと逃げ出し、彼は心中で謝罪を繰り返す。
一は走りながら考える。ナナを残している為に遠くへは逃げられない。死なない、初めから生きていないオートマータとはいえ、ソレが彼女を粉々に壊してしまう可能性もあった。ここでソレを仕留めたい。だが、彼ではソレを倒せない。鍵であるメドゥーサを発動させる為には、巨人の名前を割り出すしかなかった。が、動きながらでは殆ど何も思い浮かばない。
「見えてるぞぉ、チビぃ」
「やべえやべえやべえ……」
髪の毛を掻き毟りながら、一は電信柱に背中を預ける。息を吐き、

目を瞑った。

暗く、寒い。身を切るような風の中、戦っている者がいる。強く、歯を食い縛る。

「丸くなった、だ……？」

舐められていた。アイネの目を思い出す度、怒りに震える。彼女が自分の何を知っていると言うのか。課せられた使命も、焦がれていた男も消え失せた。そんな自分に何を望むと言うのか。

山田は駆ける。脳裏には、網膜には、消えない雨が焼き付いていた。止まないそれから逃れようとして、駒台に立ち止まっていた。浴びるほど酒を飲んだって、深く酔えない。忘れたいのに忘れられない。

あの日、どうしていれば止められたのだろう。男は裏切った。否、最初から利用するつもりで近づいたのだろう。オロチを甦らせる為に、八塩折の酒に邪魔されない為に、振りをしていただけなのだ。馬鹿な女が引っ掛かっただけで、犠牲になったのはお人好したちなのだ。それだけの話だろう。

だから、涙を流す必要なんかない。分かっているのに、頬を伝うものがある。温かくて、全てを忘れてしまいそうだった。過去を振り切ろうとしてもいつかは追いつかれる。胸の中ではまだ、雨が降り続けている。曇天が晴れるのを望んだ。無理だと分かったから、せめて、傘を欲した。一時の雨宿りだけを、彼女は求めた。

「舐めやがって、舐めやがって……！」

走りながら、拳を握る。もう、待っているだけでは駄目なのだ。あの日、あの夕暮れ時、出来た事はあった筈で、行かないでくれと、彼の手を一度でも握っていたなら――――。

自分らしくとは何だ。アイネ＝クライネ＝ナハトムジークが、山田琹の何を知っている。結局、こうするしかない。自分には殴り、壊すしかない。優しく包んでやる事も、温かなものを与えてもやれ

ない。だから、行く。一が戦っている。このしみったれた街で繋がった絆が引き裂かれようとしている。考えるな、走れ。全細胞に命令を下す。殴って、壊して、道が開ける事もある。その先で得られるものもある。ただ、口を開けて待つだけでは何も掴めない。世界は自分の為に動かない。動くのは、いつだって自分からだった。臆病になるのは、自分らしくない。過去を振り切れ。昔日を切り捨て、失敗を恐れずに割り切れ。それが無理ならば、全て背に負い引きずって走るまでだ。

振られたから、どうした。一度や二度の失敗で諦められるのか。山田は頭を振る。無理だと断じて足を速める。何故なら、一はまだ生きていた。待っているだけで手に入るものなら、とうの昔に得ていた筈である。彼の気持ちを無視してでも、欲しい。取り戻したいものがある。

ソレが新たな標識を引き抜き、人家の扉を砕く。室内に潜んでいた一は声を出すまいと堪えた。二階に上がる階段に目を遣るが、上へ行けば追い詰められた際、逃げ場がなくなる。彼はリビングの隅に腰を下ろした。

全く、敵わない。力押しのソレは確かに相性が悪かった。基本的にアイギスは防ぐしか能がない。メドゥーサも動きを止められるだけで次に繋げるには協力者が不可欠だ。

「……童貞、だよな、多分」

巨大なソレの相手を出来る者がいるとは考えられないが、万が一もある。アイギスを手放すのは恐ろしい。

一はソレの名前を五十音順、上から一つずつ確かめていた。今はナナを信じるしかない。ゴリア。この後に続くものを見つければ、隙は作り出せるのだ。ア、カ、サ行は試して、失敗に終わっている。鬼ごっことかくれんぼの繰り返しに、彼はすっかり疲弊し切っていた。

「次、何だっけ……」
「おおぉーいぃ」
一の全身が強張った。動くか、様子を見るか、ソレは屋内に侵入している。声が聞こえてきた方角から考えると、玄関から律儀に来たらしい。大きな音が立ち、一は物陰から顔を覗かせる。
「おぉ、いるいるぅ」
姿勢を低くしていたソレの顔が、そこにあった。目が合い、一は短く叫ぶ。
「見つけたぁ！」
ソレが腕を伸ばした。一は窓に向かって逃げ出している。が、巨人の手からは逃れられない。彼の体は掴まれ、
「うっ、お……！？」
窓に放たれた。窓ガラスが砕け、一は庭に投げ出される。背中を地面に打ち付けたが、それ以外に目立った外傷はない。彼は咄嗟にアイギスを広げて、破片からは身を守った。が、突き破った際に、コートの所々は裂けてしまっている。
「逃げるのも終わりかぁ？」
息が出来る。声は出せる。まだ体は動く。一は塀に足を掛けて、三角飛びの要領で真横に逃げた。飛び出していたソレは、彼が足を掛けていた場所を殴り壊している。破砕音を聞きながら、一は建物と塀の間をするすると抜けていた。
ソレは一を追おうとするが、隙間に巨体が突っ掛かる。が、巨人は塀をぶち壊して無理矢理に前進を開始した。
「クソっ」道路に出た一はアイギスを広げて、深く息を吸う。
「『止まれゴリアタ』！」　止まらない。
ソレは叫びながら両手を組み、振り下ろした。一はその攻撃の回避には成功するも、横に流れてきた攻撃は受け止めるしかなかった。
アイギスにソレの両拳が接触し、強烈な衝撃が一の両腕に伝わる。彼は踏ん張って堪えようとしたが、いとも容易く弾き飛ばされた。低く地から離れたまま、一の体は後方に。ソレは落ちていた標識を

拾い、走った。
「しぃ、ねぇ……！」
一の両足が地面に着く。彼は勢いを殺せずに転び、転がった。アイギスを手放してしまい、起き上がってすぐ、拾いに向かう。
ソレは得物を振り下ろした。
「がああぁぁあああっ！」
紙一重、一はアイギスを掲げてソレの両腕を阻む。膝が折れそうになるのを我慢して、歯を食い縛った。斜めに受け流して、その場を脱する。彼は巨人の脇をすり抜けて、そのまま振り向かずに駆けていく。ソレの足音が腹の底にまで響いてきた。立ち止まればそこで終わる。掴まって、殺されて、踏み潰されて、まともな死体も残らない。
「はっ、はあっ……！」
緊張と恐怖で呼吸が、鼓動が早まる。足を出しているのか腕を振っているのか判然としない。立ち上る白く薄い煙、一は振り返りざまにアイギスを突き出した。ソレの腕は彼の得物を捉える。声も発さないで、一はアスファルトを転がった。体中が痛くて、擦った場所は熱を持ち、涙が零れる。
「楽しかったぜぇ、じゃあなあぁ」
ソレが足を上げた。金属の擦れる音がして、一は目を瞑る。先刻踏み潰された男を思い出して、彼はぼんやりと、嫌だなあと嘆いた。最後、約束を守れなかったのは心残りになる。一は四肢に力を込めた。

「――――花は桜木」

影が揺らめく。それは一歩ずつ、焦った様子もなく、堂々と足を進めた。
「人は武士、柱ぁ桧で酒は八塩折、女がオレなら男は一人」
「あぁぁぁあぁ？」

ソレが一の傍に足を下ろす。彼は情けない悲鳴を上げた。
「オレの男足蹴にしてんじゃねえぞ、木偶の坊」
袖の破れた白い小袖。緋袴。短い銀髪。何よりも、頼りがいのある声。
下げていた瓢箪から酒を呷り、彼女はソレを見上げる。睨み付け、拳を固めた。
「たっ、助けて……！」
「ったりめえだろ、じっとしてろよ一。こいつぶっ飛ばしたら飲み直しだ」
豪快に笑う。フリーランス『神社』が、己の敵を見定めた。彼女は身を低くしてソレの左足を狙う。巨人はその速度についていけず、がむしゃらに腕を振るう。
「おおぉらあっ――――！」
一は目を見開いた。山田の一撃が、ソレの左足、その鎧を破壊したのである。オートマータのナナと同レベルの破壊力を有した人間なんて、果たして、人間と呼んでも差し支えないのだろうか、と。
砕け散る青銅。それを認めて山田は口元を歪める。
彼女は再び拳を固めて、むき出しになったソレの素肌へ重い一撃を叩き込んだ。ソレは呻き、片膝をつく。膝を狙い、まっすぐに突きを放つ。一発、二発、山田が鋭い声を上げた。
ソレは腕を振り回し、山田から逃れようとする。彼女は巨人の腕を殴って弾いた。
「ぐひいぃ、何だぁお前ぇ！」
「かははっ、マジかよ！　でけえなてめえっ、効いてんのかオレの拳はよう！」
一はゆっくりと立ち上がり、その場から少し離れた。何度も呼吸し、アイギスの柄を握り締める。流れは変わっていた。やるなら今しかない。
「止まれゴリアチ」止まらない。ならば次だと呼吸を整える。
ソレは山田を振り切り一に向かっていた。メドゥーサを脅威と捉

えているのではない。巨人は一の方が与し易いと判断したのである。
彼は小さく笑んだ。
「背中向けてられんのかよ」
アイギスに衝撃が伝わる。重く、強い攻撃だ。が、次の瞬間にはソレの膝が崩れ落ちている。巨人の踵に山田の拳がめり込んでいた。手応えありだと判断した彼女はもう一度打ち込む。ソレが顎を上げた。苦痛から逃れようとして醜く呻く。
いけると一は確信した。しかし、山田が表情を歪めているのに気付き、彼は歯を噛み合わせる。
山田はナナと同程度の打撃が可能だ。青銅の鎧を壊し、素手のみでソレにダメージを与えられる。だが、彼女はあくまで人間だ。オートマータの装甲には適わない。打てば傷つく。壊せば痛む。山田の手の皮は剥けて、鮮血が滴り落ちていた。あの状態から、活きたパンチが何発打てるか。そも、拳を作れるのか。
「栞さん……」
山田は一の視線に気が付くと、何でもなさそうに笑う。
「いっ、でえぇ……！　ちぎしょっ、くそおぉ……」
「タフじゃねえか。まだまだ楽しませてくれるってのか」
後、何発食らえばソレは倒れる。このままでは山田が持たない。一は思考をめぐらせ続ける。巨人の急所は人体と変わらない筈だ。しかし、届かない。ソレが膝をついた状態でも、山田の攻撃は足までだ。体に飛び付き、取りつけばどうにでも出来る。問題は、両腕が健在のソレが許してくれるかどうかで、巨人はきっと許さない。必要なのは一撃でソレを倒せる箇所、そこに攻撃を打ち込む隙だ。
一の考えている事は、山田にも想像がついている。ただ、無闇には仕掛けられないのだ。捕まれば二度目はない。絶対且つ必中の一撃、狙うのはそんな、馬鹿げたものだった。
どこまでやれる。どこまで防げる。どこまで山田はソレを阻んでいられる。
メドゥーサには頼っていられない。発動するかどうか分からない、

不確定で不安定なモノには頼れない。一はソレを擦り抜けて山田の傍に立つ。
「強がりはいりませんから」
「あ？」
「後、何回いけますか」
「あいつが死ぬまで」
山田は拳を合わせて力強く宣言した。一は顔をしかめる。
「冗談きついですよ。相討ち狙ってんなら、それだけは勘弁してくださいね」
「だったらお前がやれんのか」
「一発で仕留めるなら、どこを殴りますか」
「……やっぱ頭だな。けど、どうしたって届かねえよ」
一は視線をさ迷わせる。電信柱が視界に入ったが、そこからでは高度は足りても充分な助走、反動は付けられないだろう。もっと足場が、ゆとりのある空間が必要だ。尚且つ、ソレの頭部に届く場所。そして、彼はそれを捉える。
「ああ……屋根だ。そこからなら、届きますよね」
山田が一の視線を追う。住宅の屋根からなら、確かに届きそうだと彼女は判断する。
「けどよ、オレだってバッタじゃねえんだ。そこまでおびき寄せなきゃ話にならねえぞ」
「俺が引き受けます。ソレを良い位置まで持ってきますよ」
「……一人で囮か？　そりゃ、無理だろ。一にやばい真似はさせらんねえ」
「……ヤマタノオロチ。あの時にも似たような事を言ってましたよね、俺たち」
静かに頷き、山田は目を細める。
「任せろって言いたいのか？」
「時間はないです。……決めてくれよ、相棒。スサノオはどこにもいないけど、俺とあなたとならやれる筈だから」

ソレが首をめぐらせる。その形相は苦痛と、それを覆い隠さんばかりの憤怒とで歪んでいた。
「アレだ。あそこの、真っ赤な屋根が良い。ここらで一番高いし、何より色が良い」
「あそこなら、鍵は……いや、見りゃ分かりますか」
山田が指すのは、一がついぞ侵入した人家だ。ソレによって、鍵もろとも扉は壊されている。
「ぎりぎりまで寄せます。そっちのタイミングに任せますから」
「おうよ」
それだけ言うと、山田は人家に向かって駆ける。ソレは、彼女の姿を見送るが、不思議そうにしていた。
周囲には砕かれたアスファルトが転がっている。一は手頃な大きさの破片を掴んだ。
「おいゴリアツ、さっさと止まりやがれってんだ」
「おぉれは、そんな名前じゃねぇぇ」
「さいですか」
一は破片を真上に投げる。畳んだアイギスで、落ちてきたそれを打った。破片はソレの頭上を越えて、後方の道路に落下し、再度砕けてしまう。
「いくぞー」気だるげに言って、一は新しい破片を拾った。
それを再び、打つ。ソレの肩に当たる。打つ。手前で落ちる。打つ。ソレが顔を上げる。叫ぶ。打つ。外れる。打つ。外れる。打つ。
「お前ぇ、いつま――――うぅっ！？」
ソレの額に、破片が命中した。
「おー、結構当たるもんだな」
「うううっ、お、おおお……！」
額を押さえ、ソレは蹲る。一はアイギスで肩を叩き、立ち上がる巨人を見上げた。
ソレの注意を自分に引きつければ、その分山田は動きやすくなる。怒らせれば怒らせるほど、自分を追いかけてくるだろう。

「おおおおおおおおおおおぉぉぉぉ！」
「石ぶつけただけじゃねえか」
少しばかり怒らせ過ぎた気もするが。一は困ったように唸り、アイギスを広げた。山田はまだ姿を現さない。もう少し、ソレに付き合う必要がある。
ソレは走り出し、拳を振り上げた。一は逃げずにその場に留まる。最悪の想像が頭を過ぎった。頭を振って不吉なイメージを打ち消す。アイギスを突き出し、巨人の振り下ろしが炸裂。一は苦痛を誤魔化す為に絶叫した。両腕から嫌な音が鳴る。折れてはいないが時間の問題だろう。長く耐え切れるものではない。彼はシグルズとの戦闘と同じく、ソレの攻撃を斜めに受け流そうとする。
「潰れろ！　潰れろっ！　潰れろぉぉ！」
ソレの拳がアスファルトを砕いた。破片が一の横を抜けていく。彼は距離を取り、民家の庭に侵入した。その後ろを巨人が追い掛ける。数秒後、庭は、家人が二目と見られないほどに踏み荒らされていた。
一は距離を取り、時間を稼ぎながら山田の姿を確認する。彼女は屋根に上がると、その場に座り込んで酒を呷り始めた。いい気なものだと、彼は口の端をつり上げる。
「おぉっ、おおっ、ふっ、ざけやがってぇ。絶対に逃がさないぃ」
後はおびき寄せるだけだ。山田の待つ人家は二軒先にある。一は物陰から飛び出した。姿勢を低くして、塀に向かって跳躍する。アイギスを庭先に放り投げ、両手両足を使って上り切った。瞬間、コンクリートで作られた塀が粉々になる。すぐそこにソレがいる。耳を塞ぐ暇はない。一は走りながらでアイギスを拾う。後、一軒。そこを越えれば目的の家まではすぐだ。
ソレはブロック塀を一に向かって投げ飛ばす。彼はアイギスを広げて、それを防いだ。まっすぐに目的地を目指す。頭に血が上っている巨人は、山田の存在に気が付いていない。
「つかまえっ、つかまえたぁ！」

振り下ろした両腕が、一が乗り越えたばかりの柵を破壊する。彼は再度振り向き、アイギスを構えた。玄関先の狭いスペース、ソレは自身が圧倒的優位に立っているのを悟る。

一は視線を上に向けてから後退りを始める。しかし、背中は壁とぶつかった。

「終わりだぞ、チビぃぃ……」

叫びたくなるのを堪える。山田の名を呼びたくなるが、ソレに感付かれては一巻の終わりだった。

まだか、まだか、まだなのか。この土壇場で山田は怖気付いたのか。早くしないと殺されてしまう。一の中を焦燥感が満たしていく。ソレを睨み付ける事で、戦意を掻き集めて、逃げ出すのを我慢した。そこで、彼は気付く。巨人は僅かに身を屈めているだけだ。山田は狙いをつけられないのだろう。

仕留められるかもしれない。だが、機を逃すかもしれない。可能性、確率を少しでも高められるのならば――――。

一は家を背にするようにして向き直る。ソレが手を伸ばせば、彼の体はその、掌の中に隠れてしまうだろう。

「打ってこいよ」

ソレは一を見下ろす。

「受け止めてやっから、さっさと殴れ」

「……おぉ」

腕が振り上げられた。一の頭よりも大きなソレの腕である。

「お前、頭悪いんだなぁ」

勢いのついた攻撃は重く、鋭かった。アイギスの中心へと的確に突き刺さる。

「頭ぁ！　悪いのはお互いっ様だろうが！」

一からすれば、ソレの攻撃は雑だった。何故、まっすぐに拳を振るう事しかしないのか、彼には理解出来なくて、有り難い。馬鹿正直にアイギスを狙う必要はない。殴らずに、その手で包んで、覆って、奪ってしまえば良い。盾だけを退かせる手段なら一にも幾つか

思いつく。だと言うのに、ソレは殴るだけだ。その拳は他の人間よりも強靱で、頑丈だろう。しかし、アイギスに打撃を加え続けていた為に皮はめくれてしまっている。

ソレが力を込めようとして、頭を下げる。一は叫んだ。彼女の出番はここしかない。ここをおいて他にない。

「そいつを待ってたぁ！」

山田が屋根から飛び降りる。彼女は、下がり切ったソレの後頭部を両足で踏み付けた。その攻撃を受けて巨人の力が弛む。一はアイギスを引き抜くようにしてその場から脱した。

「おっ、おぉぉ……！」

ソレが闇雲に腕を振り回す。山田は巨人の髪の毛を片手で掴み、反動をつけた。

一は見た。山田の拳が、ソレの首にめり込むのを。巨体が前のめりに、ゆっくりと倒れていく。

青空に遠く酒浸り

小さな世界。小さな人間。
男の体躯はここには狭く、どこにも行けない。
「さあ、来い。お前の肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう」
対峙する少年を嘲り、男は自らの得物を掲げた。
「お前は……」
「あ？」
少年が口の端をつり上げる。
「剣と槍を持って向かってくるが、私は、お前が嬲った戦陣の神、万軍の主の御名によってお前に立ち向かう」
だからどうした。男は苛立つ。臆する事のないままに口を開く少年をねめつけた。
「今日、主はお前を私の手に渡される。お前を打ち、頭を胴体から離し、お前らの陣営の屍を空の鳥、地の獣に与える。全ての国は、我々の国に神がおられる事を知るであろう。この戦いは主の戦いだ。主はお前たちを、我々の手に渡される」
これ以上は喋らせておくものか。男は少年を迎え撃つべく歩き出す。
少年は戦場を素早く駆け、袋から石を取り出した。
「そんな、そんなもので俺を！」

小さな世界。小さな人間。人間など、路傍の石に過ぎない存在なのだ。
男の体躯が崩れ落ちる。前のめりに、ゆっくりと。
「……お、おぉ……」

男と、一の視線が交錯する。男の記憶が混濁する。薄れ行く意識の中、もう二度とは見られないであろう景色が滲む。

一の姿と、あの少年の姿が被って見えた。

男は悔やむ。どうして、忘れてしまっていたのだろう。この身を打ち滅ぼしたのは、小さな世界の、小さな人間であった事を。たった一つの石ころで、大きく運命を変えられてしまったのを、どうして、思い出せなかったのだろう。

倒れたソレを確認すると、一は息を吐き出した。

「……死んでますか、こいつ」

「仕留めたって手ごたえはあったぜ」

山田はソレの頭を蹴飛ばす。反応は一切ない。既に、巨人は事切れているのだから。

「けど、念を入れとくか」

ぐるぐると腕を回して、山田は事もなげに言い放つ。

「もう良いじゃないですか。オンリーワンの情報部が後片付けをしてくれますって」

「そうかあ？」

「それより、その、手。何とかならないんですか？」

山田の拳は皮がずる剥けて、血が滴っていた。一は目を逸らしながら、それを指差す。

「ってもなあ、オレにはこれしかねえし」

「せめて晒を巻くとか」

「唾でもつけりゃあすぐ治るって」

「栞さんの手は綺麗なんだから、もっと大切にした方が良いですよ」

言ってから、一は気恥ずかしそうに俯いた。

「そういや、前にもそんな事言ってたよな。フェチって奴か？」

「俺は手じゃなくて……そうじゃなくて、勿体ないなって。そう思っただけですよ」

「ふうん？　ま、考えとく」
「それよりも」と切り出して、一は頭を掻く。
「こいつの名前、何だったんだろう」
「名前なんかどうでも良いじゃねえか。オレらが立ってて、こいつは死んだ。そんだけで充分」
「名前は大事だと思いますけど？」
意地悪く一が言うと、山田は眦をつり上げた。
「……あんだよその顔。言いたい事でもあんのか」
「いやいや別に。ただ、自分の名前とは死ぬまで付き合うもんなんだなあ、と」
「だっせえ苗字で悪かったな！　んだよ、突っ掛かるなあ」
一はアイギスで肩を叩く。視線をさ迷わせて、俯いた。
「……どうして、来ちゃったのかなあって」
「オレが、か？」
来てくれたではなく、来てしまったと一は言う。山田は不満げに彼を見据えた。
「オレは……心配だったからじゃねえ。いてもたってもいられなくなったから。待ってるだけってのは性に合ってねえのさ」
山田が来なければ、こうして立っていたのはソレなのだろう。分かっていて、一は口を開く。
「俺は、待ってて欲しかったんです」
「……オレにか？」
「いえ、誰でも良かったのかもしれません。ただ、いて欲しかった」
扉を開ければ、お帰りと声を掛けてくれる人が。一はいつの間にか、自分が寂しがりになったのに気付いていたのである。
「糸原さんが出てった時、部屋ががらんとして、一人きりじゃあ寒かった。どうしても、それが忘れられないんです」
「トラウマって奴か」
「そこまでではないと思うんですけど」
「かははっ、良い歳してガキみてえだな」

一は苦笑し、彼女の言葉を甘んじて受け入れる。
「分からないでもないけどよ、ちっとばかし勝手な話でもあるよな。てめえは好き勝手外に行くけど、誰かには家で待ってて欲しいって言いやがる」
「立つ瀬がないなあ」
「だから、オレに突っ掛かったのか。ふうん、可愛げあるじゃねえかよ」
山田は一の肩を叩き、ぐっと顔を近付ける。にやついたままだが、彼女はそれを隠そうともしない。
「そっちだって、待つのが嫌だって……お互い様じゃないですか」
「独りぼっち同士、仲良くしようぜ」
頷きかけて、一は山田が駒台からいなくなるのを思い出した。
「とりあえず、帰りましょうか」
一は白い息を吐きながら、ゆっくりと歩く。一歩、一歩を、踏み締めるようにして。彼はやがて立ち止まる。機能停止したナナの傍にしゃがみ、彼女の髪の毛を撫でた。
「悪いな、駄目なご主人様で」
ナナから得た情報を活かせなかった。どうせなら自分を見限って欲しいと一は思う。
「あ、こいつは……そうか。運んでくのか？」
「連れてくんです」
一はナナを背負おうとするが、
「重っ！　うわあ何だこれ！？」
彼女がオートマータであるのを失念していた。
「ああ、オレが背負ってってやるよ」
迷ったが、一は首を横に振る。自分がやらなければ、意味がないと感じたのだ。
「でも、持ち上がらないんで、背中に上手い事乗せてやってください」
「意地張んなよなあ」

「これでも男ですから」
山田は目を瞬かせて、静かに笑んだ。
「知ってるよ。おら、気合い入れろよ」
「おわあ!?　何食ったらこんな……食えないんだった。……重い」
一は全身に力を込めて歩き始める。ナナの腰辺りに手を添えて、よたよたと。
「ふらふらしてんなよ。酔っ払ってんのか？　羨ましいぜ」
「……酔ってなかったでしょ。あの時」
「んー、かはは、バレてたか」
「と言うかバラしたんでしょうが」
酔わないのではなく、酔えない。酒に溺れず逃げられず、一は少しだけ、同情する。してしまう。
「なのに、飲むんですね。酔えないのに」
「本当はさ、一緒に飲んでる奴が酔ってんのを見るのが好きなんだ。オレの分まで楽しんでんなあって、こっちまで楽しくなっからよ」
その言葉が強がりなのか、本心なのか、一には分からない。山田は豪快に笑って、ただ、それだけで。
「サシで飲むのが良い。潰れた奴を介抱すんのも嫌いじゃねえ。雰囲気に酔えるからな」
「また、飲めたら良いですね」
「飲むさ」言い切って、山田は前を向く。
「借りは返してもらうからな」
「何でも言ってください。必ず叶えます」
「じゃあ、名前をくれよ」
一は山田を見ようとするが、おぶったナナが重くてまともに顔を上げられない。
「オレはよ、お前の苗字が好きなんだ」
「名前をくれって言われても。はいどうぞで上げられるものじゃあ……」
「鈍い奴だなあ。だからよ、名前をもらうっつーか、あー……オレ

をもらってくれりゃ良いんだ。簡単な話だろ？」
　一は山田の顔を見られない。だから、気付いていない。彼女も自分の顔を見られないという事に。
「そんな、良いものじゃあないと思いますけどね」
「だったら、お前が山田になるか？」
「……その手の話は前にもやられたんで、勘弁してくださいよ」
「オレはしてねえぞ。誰だ、言えっ。誰にんな話持ちかけられた！？」
　プライバシーを守るというのは、自分を守る事に繋がるのだ。一は余計な口を利かぬように押し黙る。
「勝手によそんちの子になんなよな。オレに相談してからだ。許可はしねえけど」
「あなたは俺の母親ですか。違いますよね、だったら……」
「違うな。オレは女だよ。知らなかったか？」
「……知ってますよ」
　わがままなくせに、まっすぐな奴だ。一は苦笑して、山田を見ないようにする。
「ま、借りを返せとは言ったけどよ、もっと簡単に返してもらえそうなもんにするぜ」
「そうしてもらえると助かりますね。お酒とかどうですか？」
「オレを満足させるような酒を出せるとは思えねえなあ。あー、物はいらねえんだ」
「はあ、じゃあ、どうしたら良いですかね」
「デートしようぜ」
　肩の力が抜ける。一は慌ててナナを担ぎ直した。
「俺と、ですか？」
「他に誰がいんだよ」
「自慢じゃないですが、女性を楽しませる事なんか出来ないですよ。つまらない思いさせちゃうかもしんないです。いや、そっちのが可能性高いですよ」

山田は難しそうな顔を作った。
「オレが引っ張るから気にすんな。一はさ、一緒にいてくれりゃあ良い」
「そんなんで良いなら……」
「ありがとうよ」
一は山田の横顔を盗み見る。満足そうな笑みを浮かべていた。悔いなんか、もうないのだと、そう言っているように、彼には見える。
「俺は一旦店に戻りますけど、どうしますか？」
「ついてく。まっすぐ帰るんだろ？」
「そのつもりです」
「そっか」
それきり、二人は一言も発さなかった。暗い道をゆっくりと歩く。吹く風が血の香を連れ去っていって、一の鼻を酒気がくすぐった。

店の前にはワゴンが二台停まっていた。きちんと駐車しておらず、乗り付けたようになっている。
「おっ、おおっ……！」
一は目を見開く。ワゴンの中から、陰から、大勢の男が姿を覗かせたからだ。山田は反射的に身構える。
「一君っ、ナナは無事かい！？」
「あ、あなたたちは……」
男たちがオンリーワン技術部の者だと気付いて、一は安堵した。しゃがんで、ナナが彼らに見えるようにする。
「エネルギーが切れちゃったらしくて。酷い怪我はしてないと思うんですけど」
「……あ、ああ、そうか。そうか、怪我か」
「あの……？」
「いや、何でもないよ。さあ、ナナを連れていくぞ。全員、今日は枕とは会えないと思いたまえ！」

技術部の人間がナナを抱えていく。一の体が軽くなり、彼は寂しさのような気持ちを覚えた。
「一君、娘を助けてくれてありがとう。本当、君にはお世話になってばかりだ。……色んな意味でね」
「は、はあ。気にしないでもらえると助かりますが」
一は天津から目を逸らした。
「それじゃあ、またね。……あ、いや、一つ良いかな？」
頷き、一はそれとなく続きを促す。
「フツノミタマ、君は見ていないかな」
その話なら店長から聞いていた。神野の遺品なのだから、見つけてやりたいという気持ちはある。しかし、一はフツノミタマの行方を知らなかった。
「申し訳ないんですけど、やっぱり、俺の知らない内に……」
「そう、か。うん、それじゃあ、何か分かったら連絡してくれないか。と、店長さんにもよろしく頼むよ」
それだけ言って、天津はワゴンに乗り込む。一たちは二台ともが走り去るのをぼんやりと眺めていた。
「……良いよな」
山田がぽつりと言う。
「人形だとか、そんなの関係ないんだな。親がちゃんといてよ、心配されてる」
「答え辛い事、聞いて良いですか？」
「親なら死んじまった。言わなかったっけか、だから、ここに来たんだよ」
山田栞は鬼を、蛇を追って駒台に来た。蛇を殺すのを定められ、愛した鬼を殺す為に、彼女は拳を握り締めた。
一は俯き、やっぱり聞かなければ良かったと後悔する。
「いや、お前がそんな顔すんなよ。別に割り切っちゃねえけど、済んだ事だしな。うん、全部終わってっから」
「強いんですね」

「強くはねえよ。ヤマタノオロチを倒した、鬼は死んでた。やった、オレは自由だ！　もう何も気にしなくて良いんだ！　って、よ。そういう風に誤魔化してんだ。そんだけ」

かははと笑ってから、山田は決まりが悪そうに頭を掻く。

「ただ、さあ。結婚式とか、そういう時が来たら、オレの相手には申し訳ねえなあとか思っちまうんだろうな。呼べる人がいねえからガランとしてよ、すげえ寂しいもん」

「そういうのを気にしない人と結婚すれば良いんじゃないですか？」

「誰でも良いって訳じゃねえんだぞ。オレにだって選ぶ権利はある。と、思う」

「栞さんは美人さんですから、選ぶ側に回れますね」

一は煙草を取り出して、火を点ける。

「へえ？　じゃ、煙草を吸わない奴を選ぶとするか」

「ありゃ、それは残念です」

「だあっ、バーカ嘘だって。そこはお前『じゃあ煙草止めます』とか言えよ」

山田は一から煙草を取り上げようとするが、彼はそれをするりと避けた。

「栞さんは気にしてましたけど、このご時世です。親兄弟が皆死んじまったなんて、そう珍しくもない話でしょう」

「お前と結婚したら、一ん家の人らは来てくれんのかな」

「さあ、どうでしょう。家族とは折り合いが悪いんで、来てくれないかもしれませんね」

「かはは、じゃ、オレとお前だけで式挙げるか」

勝手に話が進んでいるが、こういった展開には慣れていたので一は聞き流す。山田よりも、もっと面倒な相手をやり過ごしているのだ。彼には、そんな自信があった。そんな自信があった事に気付いて、少し悲しくなる。

「あ、そういや、宿はどうするんです？」

「悪いけどよ、泊めてくんねえか？　宿泊料は言い値で払うぜ」

「栞さんからはお金を取れませんよ。第一、お金を取れるほどの部屋じゃあないですから」

そっかと呟き、山田は笑った。一もつられて笑い、それから、音が消える。何となく話し辛い雰囲気に包まれて、二人は黙々と歩いていた。だが、決して居心地が悪い訳ではない。少なくとも、一はそう思っている。この時間が終わるのを心のどこかでは惜しんでいた。

ふと、思う。もう山田とは会えないのか、と。今までろくに見舞いにも行かなかったくせに、今になって思うのだ。彼女が駒台からいなくなってしまったら、寂しくなるのだろうと。

「……嫌だなあ」

都合の良い自分が、とても嫌に思えた。一は俯き、何となく足を止める。アパートはもう目の前だった。

「帰らないのか？」

「あ、そう、ですね」アパートに着く。階段を上って、鍵を取り出す。

「……あの？」

鍵を、山田に掠め取られた。一は困った顔になって彼女を見つめる。

「約束破って、ごめんな」

山田は鍵と、扉を開けた。彼女は一を押し留めたままで先に部屋の中に入り、明かりを点ける。振り返り、彼に笑顔を向けた。

「――――お帰り」

ああ、と。一は息を漏らす。彼は何も言えず、その場に立ち尽くした。糸原は元気でやっているのだろうかと、ぼんやりと思う。

「おい、ただいまはどうしたんだよ？」

目を覚ます。

こたつから這い出ると、卓の上が無茶苦茶になっているのに気付

いた。空いた瓶、缶、グラス、袋。昨夜の酒盛りを思い出して、一の頭がずきりと痛む。水を飲みたくて立ち上がると、部屋には自分しかいないのだと分かった。

「……ああ、そっか」

山田は帰ると言っていた。湿っぽいのは苦手な彼女だから、自分に気付かれない間に部屋を出たのだろう。一は自身を納得させて、落胆する。せめて、挨拶ぐらいはして欲しかったのだ。駒台に『神社』はいない。山田栞はここから去った。

『オレらしいって、何だろうな？』

昨夜、山田はそんな事を問い掛けていた。一は答えられなかった。

『良く分からなくなる時ってあるよなぁ』

何を言って欲しかったのだろう。何か言って欲しかったのだろうか。一は覚醒しつつある頭を振り、無理矢理に笑みを浮かべる。山田はきっと、笑顔で見送って欲しかったのだろうから。

「おー、起きてんじゃん」

「……んん？」

急に扉が開いたかと思えば、赤ら顔の山田が顔を覗かせる。彼女は酒瓶を振りながら、部屋に入ろうとした。

「ちょ、あ、あのっ、な、なんで？」

「あー？　減るもんじゃねえんだしよ、入ったって良いじゃねえか」

「そりゃそうですけど、駒台を出るんじゃなかったん、ですか」

山田は卓の上に瓶を置き、どっかりと腰を下ろす。

「酷い言い草だなあ、一はさあ、もっと近所付き合いってのを大切にした方が良いぜ。オレんとこじゃ……」

「近所……？」

一は首を傾げた。まだ、上手く頭が回っていないのだろうかと目をしばたたかせる。

「同じアパートに住むんだからご近所だろ」

耳がおかしくなってしまったらしい。一は立ち上がって、グラスに水道水を注いだ。それを一息に呷り、山田を見る。

「ここに？　いや、だって……」
「あー、実家に帰るのは止めた、やめ。オレは今日から駒台市民になる。大家とも話がついたしな。いや、部屋が空いてて良かったぜ」
　山田は豪快に笑い飛ばして、瓶を持つ。一分と掛からず、ラッパ飲みで中身を空にした。
「今日は色々と忙しくなるな。市役所とか、買い物とか、あ、電話貸してくれよ。荷物送ってもらうように頼むからよ」
「……突然、ですね」
「何かあったのかって？　かはは、別にねえよ。ただなんとなーく、な。ま、今日からもよろしく頼むぜ」
　困惑していたが、状況を理解し、飲み込むにつれて一の頬が緩んでいく。山田がこの街に住む事が嬉しくてしょうがなかった。
「引っ越し蕎麦とかねえんだよなあ。出前頼むか。なあ、ついでに他の奴らも紹介してくれよ。縦ロール頭の奴は知ってるけどな」
「ああ、アイネを知ってたんですか」
「随分と仲良くしてるみたいじゃねえか。妬いちまうぜ」
「仲良くしてくださいね。あいつ、気難しいから」言って、一はこたつに足を入れる。
「酒、まだ残ってたよな」
「冷蔵庫に何本か。缶しかないですよ」
「飲めりゃあ良いよ。開けて良いか？」
　首肯し、一は冷蔵庫を指し示した。山田はそこを開けて、数本の缶ビールを抱えてくる。
「アイネたち、下にいると思いますけど、呼んできましょうか？」
「もう少し、独り占めさせとけよ」蓋を開けて、山田は口の端をつり上げた。
「はい？　いや、つーか俺も飲むんですか？」
「二日酔いには迎え酒だろ普通」
「えーと……」
　無言の圧力に屈し、一は諦めて缶を掴む。

「じゃ、オレの新しい生活に乾杯って事で」
「そうっすね。そういや、表札とかどうすんですか？」
「表札だあ？　んなもん後回しで良いじゃねえかよ」
一は忘れていない。山田には自分の名前を勝手に使われているのだ。
「色々と面倒臭いから、ちゃんと自分の名前使ってくださいよ山田さん」
「あっ、てめえ今なんつった。喧嘩売ってんだな、買うぞ」
「聞こえてるし。だから、自分の名前使ったら良いんですよ」
「嫌だってんだろ！　あーもうっ、酒がまずくなる！」
山田は卓に、缶を叩きつけるようにして置いた。中身が飛び散り、一は眉根を寄せる。
「お前の借りるからな」
「俺は好きですけどね、栞さんの名前も、勿論苗字も」
「おべっか使うなよ」
「良い名前なのになあ」
「へ、ありがとうよ」

ここで何をしているのかと問われれば、彼女はこう答えるであろう。
「雨宿り」
今は雨が降っていないではないかと訝しげにされれば、彼女はこう答えるであろう。
「……ああ、そういや止んでるな」
雲はない。虹もない。あるのはただ、抜けるような青空だけだ。
差し出された傘を払い除けて、彼女は彼の手を握る。
雨なんか、最初から降っていなかったのだと気付いて、彼女は豪快に笑ってみせた。

HIT IN THE USA

星を見るのが好きだった。
夜空に浮かぶささやかな光は、嫌な事も、どんな悩みだって忘れさせてくれた。
今でも、夢に見る。
風の出てきたあの日、彼と共に空を見上げた日、いつもの屋根が、いつもとは違う風に感じられた日、星と月は自分だけのものではないと気付いた日。
星を見るのが好きだった。
空を見るのが好きだった。
月を、見るのが好きだった。
だが、もう叶わない。十五夜の月は味方ではなくなってしまった。この身を変えて、血を騒がせ、心を狂わせる魔性のそれとなり果てている。だからもう、星空と、月夜を見上げる事はないのだろう。

出ているから、逃れられない。

路地裏の薄闇に、ぽつぽつと灯りがちらつく。すぐにそれは消えて、橙色の光源が代わりに浮かび上がった。紫煙が幾つか立ち昇る。声変わりが始まったばかりであろう、少年たちの声が小さく聞こえた。
「明日どうする？」
「学校？　いや、行けば良いじゃん」
「えー、めんどい。宿題やってねえし」

学生服を着た少年たちはそれぞれゴミバケツの上に座ったり、汚らしい壁に背中を押し付けている。彼らは駒台中学校の生徒で、未成年なのは言うまでもない。ここは先日、ムシュフシュと呼ばれたソレが出現した近くのビルとビルの間であり、見咎める者も、そもそも通り掛かる者すらおらず、少年たちにとってはうるさい大人のいない、ある種、楽園のようなところであった。

「あーあーあー、義務教育ってのは誰が考えたんだろな。学校なんか行かなくても死にゃあしないってのに」

「どうせならさあ、ソレが、こう、国会議事堂的なところに出てくれば良いのにな」

「だったら小倉ん家に出てきて欲しいよな」

「あいつ俺ら目ぇつけてんだぜ。マジうぜえ、そう思うよな？　つーか、お前も吸えよ」

差し出された煙草を一目見て、大人しそうな少年は首を横に振る。

「僕は良いよ。……もう、塾に行かなくちゃいけないんだけど」

「はー？　んなのサボっちまえって。高校なんか行かなくても楽しくやってられるっつの」

「やっててよ」

冷めた目をした少年は雑踏に足を向けた。だが、彼は肩を思い切り掴まれてしまう。

「お前さ、最近付き合い悪くね？　つか完全調子乗ってんじゃん。寒いんだよ、マジで」

「……ほっといてよ」

「ああっ？」

拳が振り上がる。大人しそうな少年は目を瞑った。くぐもった呻き。場違いな水音。それはやけに粘度を帯びた音であり、妙に生臭い。恐る恐る瞼を開ければ、眼前にいた筈の友人が宙に浮いていた。否、浮かされていたと言うべきか。

「……あ、が」声が零れる。血が漏れる。落ちた煙草にそれが滴り火種が消えた。

少年は瞬きも出来ないまま、広がるそれへ視線が釘付けになる。視線が、体が、思考が、固められるものの殆どが固められている。

「くくく、暴力はいかん。人間だものなあ、ルールに縛られなければけだものと何ら変わりはないと言うに」

耳元まで這いずるような足音が聞こえて、少年は背後に意識を向けた。

「飲酒、喫煙結構だろうが、この国では二十歳未満がそれをやるには早いのではなかったかな？　それに、若い内からの酒と煙草は体を腐らせる。臭いがな、きつくなるんじゃよ。そうは思わんか、若いの」

血が滴り落ちる。黒く、太い影がそそり立っている。それは少年の友人たちを串刺しにして、今も尚鮮血を吸い出していた。白目を剥いたモノと目が合ったような気がして、唯一生き残った少年の膝が笑いだす。

「ん？　礼も言えんか？　わしは助けてやった。若いのは助けてもらった。いやいや、今更、神だの倫理、道徳など説くつもりも、説ける資格もありはしない身じゃが」

「……何、これ……？」

少年の肩にしわくちゃの手が置かれる。影の中から老人が姿を現した。口元は醜く歪んでおり、目は血走っている。髭は青々と、好き放題に伸びていた。

「これとは、串刺しになったモノを指しておるのか？　それとも、この杭そのものか？　あるいは、この状況を言っておるつもりか？」

少年は答えられない。非日常に叩き落とされたせいか、正常な判断を下せない。

「それは死体じゃよ、とっくに命が失われた、もはや肉塊でしかない。友人だったか？　わしにはそうは見えんかったがの。ならば悪い事をした。が、まあ、杭に貫かれたのだから諦めてもらうしかない。ほっほ、ある意味、そうなるのは必然とも言えたがなあ」

白い外套を羽織った老人は冗舌だった。彼は目を細めて死体を見

遣る。
「最後の質問じゃが、この状況をどう取るかは各人に委ねるとするかの。……さて、そろそろ連れていっても？」
どこに連れていくと言うのか。少年は体を震わせる。
「ふむ、ところで、兄弟はいるかの？　若いの、お主が長男なら喜ばしいのじゃが。何せ、チェックメイトまで後一手に迫っているのでな」
得体の知れない、淀んだ雰囲気に圧されてしまい、少年は首を横に振る。老人は少しだけ残念そうに息を吐いた。
「では、良いところに連れていこう。最初は苦しいかもしれんが、すぐにイイ思いをさせてやるからなあ……」
老人の瞳はぎらついている。宿した光は凶暴で、歓喜にも満ちていた。
杭状の影が引っ込むと、多量の血液を失った、からからに乾いた死体が地に落ちる。ぬめる水溜まりが跳ねた。少年は何も考えられないまま、老人の後ろをふらふらと追い掛ける。誰もいない。助けは来ない。そこをそう呼ぶのなら蹂躙された楽園、ここから抜け出せるのなら悪魔の手引きだろうと構わなかったのだ。尤も、青髭と共に行く先は新たなユートピアではない。どうあがいても結末は変わらない、彼の向かう先はゲヘナでしかないのだから。

「ハーイ、ファインだったカシラ、ボス？」
『……ゴーウェストか。どうした、お前の退院はまだ先の筈だと聞いていたが』
ブロンドをツーテールに括った少女、ジェーン＝ゴーウェストは携帯電話をくるりと回した。彼女は今、駒台病院の入り口前にいる。傍にはオンリーワン医療部の炉辺が、困ったような顔をして立っていた。
「アタシがいなくてサーミッシイだろうカラ、ベッドから下りてき

たのヨ。今日から仕事に戻るわ」
『こちらとしては拒む理由もないが、具合は良いのか？』
「トゥー、バッド。お兄ちゃんに会えなかったもの。そろそろリミット。と、言うワケで」
『お前がそう言うのなら構わんがな。では、店で待つ』
「ウェイウェイウェイ。ボス、お兄ちゃんをこっちによこして。電話、つながらないの」
炉辺はジェーンの肩をつつく。
『何故私がそこまでしなくてはならないんだ。出るまで掛けろ』
「お兄ちゃんってば、アタシからだとシャイがって出ないノ。こっちもかけるけど、そっちからもかけてチョーダイ。それくらいオッケイでしょ？」
『まあ、暇があったらな』
「オーウェイズヒマじゃナイ」
電話は向こうから切られてしまう。ジェーンは不満げな表情を浮かべると、炉辺の存在にようやく気が付いた。
「ジェーンちゃん、退院はまだ早いと思うんだけど」
「トゥーレイト。ノープロブレム」
「怪我は大丈夫だけど。けど、だってそろそろ……」
ジェーンは首を振り、その続きを遮った。炉辺の言いたい事は誰よりも、自分が良く分かっている。
「ティアドロップしたって、上を向いて歩かなければ良いだけヨ」
「でも……」炉辺は食い下がろうとする。
「なら、止めてみる？　アタシを止められるかしら？」
ジェーンは挑発的に笑んだ。まだ幼さの残る顔つきだが、意志の強さは歳に似合わず確かなものである。炉辺は諦めて、相好を崩した。
「寂しいからすぐに戻ってきてね。私、待ってるから」
「エンギでもないわネ……」

かしましい声が部屋の中から聞こえてくる。扉を背にしながら、一は何度目になるか分からない溜め息を吐いた。

「……いつまで掛かるんだか」呟きは嬌声に掻き消されてしまう。一は煙草に火を点けようとして、やはり思い直した。

一が立っているのは、中内荘の新たな住居人、山田栞の部屋の前である。中にいるのは山田、アイネ、チアキの三人だ。

まだ、現実味が湧いてこない。昨日の今日の約束を果たすとは思いもしなかった。約束と言うのは山田と一が交わしたもので、その内容は――――。

「……デート、ねえ」口に出しても、相変わらずふわふわとした現実である。午前十時の空の下、一はあくびを噛み殺した。こうして待たされてから、既に三十分は回っている。

「師匠師匠、もうちょい待ってな」

扉が僅かに開き、チアキが楽しそうに口を開いた。

「もう三度目だよ、その台詞は。つーかお前らだけで盛り上がってんなよ？　栞さん、嫌がってないか？」

「くふふ、それがそれがまんざらでもないっちゅう感じやねんなあ。ほら、いっつも巫女巫女ナースやん？　女の子やもん、色々と着てみたかったんとちゃう？」

「ナースは違うだろ」

「ほほほ、ナースはお嫌いですかな？」

一は口元を歪めた。馬鹿らしいとでも言いたげに。

「まあ、男って制服が好きやからなあ」

「俺は何も言ってねえぞ」

「目ぇは口ほどに物を言うねんで。……ま、あとちょーっとだけ。な？」

もとより、待つしかない。一は頷き、あっちへ行けとジェスチャーを見せた。

それからもう十分経つと、扉が完全に開く。一は苛立ちから少し

だけ眉をつり上げた。が、すぐにその感情は消え去っていく。驚いて、思わず目を見開いた。

「あら、何を恥ずかしがっていますの？　今のあなたは立派なレディです」

アイネに手を引かれて現れたのは山田栞その人である。だが、一はすぐには彼女だと認識出来なかった。いつもの巫女装束とは違う。フェイクファーのついた黒のコート。チェックのミニスカート。ブラックとブラウンでまとめた、彼女は実にそれらしい格好をしていたのだ。

「みっ、見んなよ減るじゃねえか！」

山田は俯き、それから、一の様子をじっと窺う。彼は困ったように頬を掻いているだけだった。

「あ、はは、やっぱ変だよな。っつーか！　何だよこのグラサン！」

「ああっ、お止めになって！」

正気を失ったかのように暴れ回ろうとする山田を見て、一はどう声を掛ければ良いのか、余計に分からなくなる。そんな彼の背中を、チアキは小さく叩いた。

「ししょー、はよ何か言ったりぃや」

「……何かって、何を言えば良いんだろうな？」

チアキは呆れた風に息を吐く。一は仕方なく、素直な気持ちを言葉にしようと思った。

「栞さん」

「なっ、何だよ？」

「かっこいいですよ」

「……お？　あ、ありがとよ」

「かっこいいはないやろ」

「そうですわねえ、でも、女心を知り尽くしたペルフェットなウーノは想像出来ませんわ」

何と言われようとも、一には山田が格好良いとしか思えない。可愛いは当てはまらないだろうし、勿論、彼女は綺麗だが、最初に思

ったのはそういう事だった。
「そんじゃ、そろそろ行ってきい。結構時間食ってもうたしなあ」
「なっ、お前らがオレを好き勝手にいじりやがるから……」
「んんー？　迷惑やったん？　えー、うちにはそうは見えへんかったけどなあ。『なあなあ、一はこういうの好きだと思うか』『オレには似合わない』とか言いながら乗り気で……」
「一っ！　行くぞ！」
「どこに」
「居酒屋」山田は一の手首を掴み、ずんずんと歩き始める。チアキたちは意地悪い笑みを浮かべて手を振っていた。

電話は通じない。何度掛けても誰も出ない。結局、一は見舞いにすら来てくれなかったのを思い出す。もしかして、もう二度と会えないのかもしれない。そんな不安がジェーンの頭を過った。
「何よ妹、中に入って待てば良いのに」
「シャラップ」
ジェーンの隣に立つ糸原は、スーツの上から借り物のコートを羽織っている。彼女は目の前で揺れるツーテールをくいくいと引っ張った。
「一、まだ電話に出ないの？」
小さく頷き、ジェーンは携帯電話の蓋を閉じる。
「どっか行ってんじゃないの？　あいつ、知り合い多いし。厄介な事に巻き込まれてたりね。もしくは、誰かとデートに、とかね」
「……ヨユウ、あるじゃない。お兄ちゃんが取られちゃってもイイの？」
問われて、糸原は意味ありげに微笑む。
「ま、お子様には分からないかもねー。私みたく良い女なら、そんな心配いらないのよ」
眉根を寄せてつり上げて。ジェーンは足で床を踏み付ける。

「とっておきのおしおきを用意しちゃうんダカラ」
「あんまり縛っちゃ可哀相だと思うけどー？　がちがちに固めたってこっち向いてくんないとさあ」
「うるさいっ、ペイ下げちゃうんだから！」

中内荘を出発してから二時間。目的地はなかったが、中心街をぶらついて、それっぽくはなったのではなかろうか。と、一は隣を歩く山田に目を遣る。パンプスを履いたのは初めてだったのか、彼女は歩きづらそうにしていた。
そも、一は山田にプランを投げていたので、平静を失った彼女からは何も聞き出せなかったのである。さっきからの山田といえば、恥ずかしそうに俯くのが常で、話し掛けても大した返事はしなかった。
「お腹減ってきちゃいましたね。どっか、適当なところ入りましょうか」
「ん、あ、頼む」
「……そういや、さっきはコート見てもらって助かりました。いや、前のはぼろぼろにされましたからね」
「お」山田は少しだけ顔を上げる。自分にはサングラスなんか似合わないと断言していたが、今の彼女は何故かそれをつけていた。
「おお、似合うと思うぜ。もっとさ、かっこいいもん着ろって」
「栞さんと釣り合い取れてませんしね」
「そういうんじゃなくてだな。一にはそういうのも似合うって言ってんだよ」
「努力してみますよ」
一は握った袋を引き寄せる。少しばかり高い買い物だったが、山田が選んでくれたものなので気にしないように努めた。
「あの、それより、体調でも悪いんですか？」
「いや、別に。悪くねえよ。気分はむしろ良いぜ」

その割には挙動不審である。どこか落ち着きがなく、サングラス越しにも山田の目は泳いでいるように一には思えた。
「……何か、すげえ見られてる気がする」
「ああ、栞さん、背ぇ高いし、銀髪ですし、美人だから」
一は先程から、小さな優越感を覚えていたのである。山田をブランドのバッグみたく扱うのは気が引けたのだが。
「なあ」山田は申し訳なさそうに一を見る。
「オレ、無駄にでかくってごめんな。……どうせなら、アイネか、チアキみてえな女の子と歩きたかっただろ？」
「疲れてますね？」
「あー、実は。慣れてねえんだ、こういうのは。やっぱし、いつもの格好のが気が楽だ」
「俺に言った台詞、丸々返されちゃいますよ。心配しなくても、俺は楽しんでますから」
本心から、一は言う。それが伝わったのか、山田は弛緩しきった笑みを浮かべた。
「お前がそう言ってくれたんなら、この服も捨てたもんじゃねえな」
「借り物でしょ」
「買う。で、またこういう風にしような」
「俺なんかが相手で良ければ。で、お昼はどうしましょう」
「酒飲みたい」山田はきっぱりと言い放った。
「いや、流石にそれは……じゃあ食べた後は？　映画見たいとか、どっか行きたいとか」
サングラスを外して、じっと一を見つめた後、山田は瞳を潤ませる。
「お酒飲みたいよう」
「ああ、心が折れてる……」
「正直限界だ。デートは楽しいけど、オレの体とかがついてこられねえ。帰って着替えたい」
「着替えちゃうんですか？　……歌代、カメラ持ってたかな」

「やっ、止めろよ！　オレの弱み握ったって良い事ねえぞ！」
「いや、ただ額に入れて飾ろうかな、と」
「うわあああ！？」
あまり良い意味ではない注目を浴び始めたので、一は頭を掻いた。詰め寄る山田を引き剥がして、すまなさそうに口を開く。
「冗談ですって。じゃ、名残惜しいけど帰りましょうか」
「……割に、あっさりだよな」
だったらどうすれば良いのだ。一は乾いた笑いを顔に張りつけた。

「ありゃ？」
一と山田の姿を認めたチアキは、意外そうな声を漏らす。アパートの二階、一の部屋の前に立つ彼女は、そこから大きく手を振った。
「おーおー、はしゃいじゃって」一は小さく手を振り返す。
「もう帰ってきたーん！？」
「……下りてきて話せば良いのに」
チアキの喉は完治していない。そも、完全に治る見込みすらないのだ。声を発するのに苦はないらしいが、擦れ切ったそれは、以前の透き通るような、清廉な声と比べれば……。一は手招きする。大声を出させるのは良くないと思ったのだ。
「ししょー」
「語尾を伸ばすなよ」
一向に下りてきそうにないので、焦れた一は山田を置いて駆け出す。階段を上って、チアキを指差した。
「電話、さっきからずーっと鳴っとるみたいやで」

戻ってきたばかりではあったが、店長からの電話を受けて、一は病院へと急いだ。ジェーンが退院して、今も入り口前で待ち惚けを食らっているという。大人しく中で待っていれば良いのにと思う反

面、一度も見舞いに行ってやれなかった、罪悪感めいた気持ちが彼の足を速めていた。

途中、一は花でも買っていってやろうかと考えたが、これ以上待たせれば何を言われるか分からない。まっすぐに目的地を目指す。二十分は歩いただろうか、病院が見えて、彼は息を吐き出した。一月も経っていないが、久しぶりに顔を見るなあと、少しだけ感慨深くなる。

歩き始めて目を向ければ、小さな人影が視界に入ってきた。向こうも気付いたのか、大きく手を振ってくる。陽光を受けて、ブロンドのツーテールが輝いて見えた。

待ちきれなくなったのか、ジェーンが走りよってくる。一はどんな顔をして良いのか決めかねたまま、彼女を受け入れた。

「おっそーい。ロスならチコクはデスペナルティなんだから」

「嘘吐け。元気だったか？」

今し方退院した者に掛ける言葉ではないかもしれない。一は言ってから後悔する。

「お兄ちゃんに会えたから、今は元気なう」

「そりゃ良かった。……荷物、少なくないか？」

「タッキュービンで送っておいたの」

「荷物持ちくらいなら俺がやったのに」

ジェーンは一の横に並び、彼の手を意味ありげに見遣る。

「お兄ちゃんの手がふさがっちゃうじゃナイ。こっちは、アタシの手をぎゅってしてくれなきゃ、ダメ」

「……どれだけ物を持ち込んでたんだ」両手いっぱいの荷を想像して、一はげんなりとした。

「で、家に戻るのか？」

「ボスにあいさつしたいから、お店にゴー、ね」

「あいよ」

返答し、一は手を差し出す。握ってきたジェーンのそれは小さかった。細く、柔らかい。入院生活のせいなのか、前と比べて酷く頼

りなくて、か弱かった。
「……なあ、本当に大丈夫なのか」
「もっと入院しててくれって聞こえるんだケド？」
一は空を見上げる。まだ、はっきりと見えてはいない。だが、それは常にある。逃げ場などない。
「元気になったのは嬉しい。だけど、お前には危ない目に遭って欲しくないんだ」
「お兄ちゃん、アタシはここへ観光しに来たんじゃない。戦いに来たの」
「勤務外を辞めるってのは無理か？」
「パートタイマーじゃないんだから。アタシ、お兄ちゃんよりも立場が上なのヨ」
ジェーンが手に力を込める。一は負けじと握り返した。
「アタシのが強いし。お兄ちゃんこそやめれば？」
「やだね。……なあ、続ける意味はあるのか？　だって、お前の目的は……」
「バッドバグが多いんだもん。お兄ちゃんが取られちゃうのは、ヤだ」
誰かに取られるつもりはないが、そう言ったところでジェーンは納得しないだろうと思われた。一はどう言い包めたものかと考える。
「でも、お前はまだ子供なんだし」
「――――ガキじゃない」
手が離れた。温かさを失って、一は立ち止まる。
ジェーンは一を強く見据えていた。感情を殺そうとしているものの、目の端には光るものがある。
「アタシはお兄ちゃんの妹だけど、子供なんかじゃナイ」
「何泣いてんだよ……」
「泣いてなんかっ」
「そういうところが子供だってんだよ。泣いてわがままが通るなんて思ってないだろうな」

頬に赤みが差す。ジェーンは涙を零して、それでも一から視線を外さなかった。
「どうして分かってくれないのっ」
「何を分かれってんだ」
「アタシに決まってる！」
「分かってるよ」言って、一はジェーンの手を握る。その力が強かったせいか、彼女は拒む素振りを見せた。
「ほら、行くぞ」
ジェーンを引っ張るようにして、一は歩き始める。
「……分かってないよ」
呟いた声は風に流された。

オンリーワン北駒台店に着くと、カウンターからナナが手を振るのが見えた。一はジェーンの手を離して、彼女に向かって手を上げる。
「マスター、おはようございます。あら、ジェーンさんではないですか。お体の具合はよろしいのですか？」
問われて、ジェーンは小さく笑う。
「それはようございました。マスター、外は寒かったでしょう。何か温かいものをご用意させていただきます」
ジェーンは訝しげにナナを見つめた。
「いや、俺はすぐに帰るから」
「折角いらしたのですからごゆっくりしていってくださいな。ナナも、マスターのご来訪を心よりお待ちしておりました」
ナナは一のコートを脱がそうとする。彼はそれを強く拒まなかった。
「買ったばかりだから大切に扱って欲しいんだけど」
「存じております。ああ、マスターのにほひ……」
「嗅覚ねえだろが」

疑惑は強まる。ジェーンが口を開き掛けた瞬間「あっ、はじめ君だ！　ジェーンちゃんもいる！」　バックルームから立花が姿を見せた。彼女は身を低くして、タックルのように一へと飛び掛かる。彼は腰を低くして、それを切った。
「今日も元気だね」
「触らせてくれても良いじゃないかっ」
「何だか、つい」
一は立ち上がり、立花から離れようとする。しかし、彼女は食べ物をもらった子犬のように彼へついていった。
「はじめ君、アルバイト？　お客さん？」
「今はお客さんかな。また後でバイトに来るけど」
「いらっしゃい！　何にしましょう！」
「威勢が良いね。なら、おすすめを一ついただこうか」
「軍手です！」
一はナナを見る。彼女はバックルームを指差した。
「……店長め、発注の数間違えたな」
「ねえねえジェーンちゃん、軍手いらない？　店長さん一押しなんだって」
差し出された軍手を一瞥する事もなく、ジェーンは立花とナナを睨んだ。
「ニアい」
「二……？」
「ニアいっ、お兄ちゃんに近寄らないで！」
「多分、近いって意味だと思う」一が頭を掻く。
立花とナナは顔を見合わせる。
「そうかなあ？」
「いつもと同じ距離を保っていると思いますが」
「いつ……！？　アタシがいない間に……！」
「何を怒ってんだよ」
「ガキじゃナイっ」まだ何も言っていなかった。一は困ったように

ジェーンを見る。
「分かったから、店長に挨拶しとこうな」
「ジェーンさん、カルシウムが足りないのなら牛乳を」
「ヨーグルトもいっぱいあるよー。店長さんの二押しだってさ」
「店長――――！」
一がバックルームに駆け込んでいく。残されたジェーンは二人を押し退けるようにして彼の後を追った。

「お兄ちゃんなんか大っキライ！」
「ちょ、おい……！」
バックルームから飛び出していくジェーンを追えず、一はその場に立ち尽くした。何故、彼女が怒っているのか、彼は未だに分かっていない。
「……喧嘩するなら外でやれ」
「もう遅いですよ」
紫煙を吹き掛けられて、一は手でそれを扇いだ。
「退院したばかりだと言うのに。で、何を言ったんだ？」
「店長も聞いてたでしょう。何も、ですよ。さっぱり分かりません。あの年頃の女の子ってのは、もう、本当に」
癇癪を起こして、好き勝手に喚いて、膝まで蹴られた。一は痛む箇所を摩り、扉を見つめる。
「どの年頃の女だろうと、理解は出来ないさ。勿論、同性にだってな」
「じゃあどうしようもないですね」
「謝るぐらいは出来るだろう」
理由もないのに、あったとして、その理由が分からないのに謝罪は出来ない。一は壁に背を預けて、辛そうに息を吐き出した。
「怒らせたのがお前なら、謝るのもお前にしか出来ない。とは、思うがな」
「良く分からないまま頭を下げるのは不誠実だと思いますけど」
「既に不誠実な事をやっている分際で何を言う」
一は煙草に火を点ける。店長が相手なら特に気を遣う必要も、遣うつもりもないので、その点で言えば彼女は一番楽な相手だった。

「話ってのは何ですか？」
「……ああ、立花とナナには伝えたんだが。お前には、特に伝えておこうと思ってな」
「俺に、特に？」
「ああ」と店長は頷く。彼女は椅子をくるりと回して一に向き直った。
「影を覚えているか？」
鸚鵡返しして、一は紫煙を吐き出す。
「ガキがいなくなる事件が立て続けに起こっているんだ」
「まさか、また……？」
「さあな。だが、何かが起きているのは確かだ。あの時の影は逃げ出してしまったんだろう？　生き延びたソレの仕業なのか、それともももっと別の何か、か」
風の精霊まで犠牲になりかけたのだから、一般人の、それもただの子供が抗える筈もない。
「何人やられたんですか」
「確認している限りでは五人だったかな。だが、これから先も犠牲者は増えていくだろう」
「誰も、動いちゃいないんですか？」
「前にも言ったが、ソレの仕業なのだと言い切れない状況だ。まだ動けない。動くにしろ、目標がいないのではな」
憂鬱そうに言うと、店長は灰皿で煙草の火を揉み消す。
「ソレだと思いますけどね」
「まあ、頭の片隅にでも置いておけ」
一は煙草を灰皿に捨ててから、ふと思った。ジェーンは無事だろうか、と。自分よりも能力の高い彼女だが、何が起こるか分からないのが世の常だ。嫌がるだろうが、ジェーンも充分『ガキ』に分類される。気を揉まない方がおかしいのだと、彼は自身を納得させた。
「ん？　ゴーウェストが心配か？」
「ええ、まあ。一応、子供ですし」

「心配はいらない。今のところはな」
「……今のところは？」
喉の奥で噛み殺す、不快な笑み。店長は新しい煙草を取り出して、底意地の悪い笑顔を一に向けた。

どうして分かってくれないのだろう。
どうして語ってくれないのだろう。
積み重なった苛立ちを爆発させて、仕事を放り投げて店を飛び出した。自分のせいじゃない。悪いのは全て自分以外の誰かなのだ。そうやって、誤魔化す。納得させる。
目を動かす。心を這わす。
駒台。どこにも、行く場所はない。逃げ場所などない。知らない者が知らない事を話している。目に付く人が無性に腹立たしく思える。
ない。
何もない。ここまで逃げてきて、ここが終わりなのだから。生まれ育った国から出たのは、一に、『兄』に会いたかったからではない。彼しかいなかったからだ。
どうして分かってくれないの？
どうして話してくれないの？
人狼の現れた夜、ソレが死んだ夜、一の肩口に噛み付いたのを覚えている。舌に広がる鉄の味。咽るかと夢想した血の香を覚えている。血よりも確かで、不確かな繋がり。今も、この身に流れ続けている。生き続ける限り、縁は切れない。その筈なのに……その筈だからこそ、彼の態度が、言動が気に食わなかった。
「……Ｄａ――――うう……」
思わず口を付いて出た言葉を押し留める。気分を変えようと、近くにある自動販売機を見遣った。ジェーンは頭を振り、ポケットから財布を取り出そうとする。が、財布を店に置いてきたのを思い出

して、自販機をねめつけた。ままならない、と言うよりも、どうにもならない事がこの世には多過ぎる。

俯き、そこから去ろうとした瞬間、ジェーンの脇を女が通った。彼女は自動販売機の前で立ち止まり、難しそうにそれを見つめる。

「……？」

白いワンピースに、青いスカート。首元にはやけに長いマフラーを巻いている。淡いオレンジ色のマフラーには何か文字が編み上げられていた。その字を読み取ろうとして、ジェーンは目を細める。

「ん」

「あ」

振り返った女と、ジェーンの視線がぶつかった。予想だにしていなかったので、ジェーンは少しだけたじろぐ。

長いマフラーの女の鼻筋は通っており、丸い目がジェーンを捉えていた。蒼い眼、自分と同じだと、ジェーンは咄嗟に思う。

「これ」

黒髪がふわりと揺れた。女が身体を向き直したのである。ジェーンと比べると彼女の背は高い。

「……何？」

ジェーンは不機嫌そうに女を見返した。口元を覆っているマフラーをずり下げると、少女は自動販売機を指差す。ジェーンは眉根を寄せた。

「飲みたい」

少女が何を言っているのかが分からなくて、ジェーンは目を丸くさせる。今まさに、財布を忘れた自分に対して飲み物が欲しいと言っているのだと理解して、ふざけるなと、それしか思いつかなかった。

「勝手に飲めば？」

「分からない」

「ハア？　ベンダー、知らないノ？」

ジェーンの問い掛けに、少女はこくこくと何度も頷く。その仕草

は大柄な体に見合わず、どこか幼かった。
「マネー、持ってる？」
「持ってる」少女はポケットから大量の札束を取り出す。無造作に掴みあげたせいか、何枚かは落としてしまい、風に飛ばされていった。ジェーンは散らばった札を目で追ったが、彼女の行動に呆れてしまい、実際に追いかけるのは出来なかった。
「Ｕｎｂｅｌｉｅｖａｂｌｅ……」
「いっちゃった」
「……貸して。何が飲みたいの？」
ジェーンは少女の手から、千円札を一枚抜き取る。それを自販機に入れて、彼女を強く見据えた。
「紅茶」
ジェーンはホットの紅茶を買ってやり、少女に渡す。しかし、彼女は不満げな表情を見せた。
「冷たい方が良い」
気を利かしてやったのに。ジェーンは口内で何事かを呟き、改めて自販機に小銭を投入する。寒い時期に冷たいものを飲む神経が彼女には理解出来なかった。
「はい」ぶっきら棒に言って渡すと、少女は嬉しそうに缶を握り締める。
「こっち、良かったらあげる」
差し出された紅茶の缶と少女の顔を見比べて、ジェーンは缶を受け取った。お礼を言うのが筋なのだろうが、何故か、素直に口に出すのは躊躇われる。少女を見ると、プルタブをかちかちと指で擦っていた。
「……開けて？」
「オゥ……」

新しい煙草に火を点けた店長は一を横目で見た。

「いなくなったガキには共通点がある。全員が、男だと言う事だ」
「男、ですか」
「と言うよりも、少年、と言った方が近いか。十代の男児だけが犠牲者になっている」
まだ死んでいるかどうかも分からないが、店長の言い方は自然に聞こえる。一はパイプ椅子を組み立ててそこに座った。
「だからジェーンは心配ないと？」
「だから今のところはな。少なくとも、影よりかは節操があるらしい」
「目的っぽいのが見えてる分、影よりタチ悪いかもしれませんね」
「かもな」店長は笑って、天井に向かって息を吐く。
「警察が動いているらしいが、果たして手に負える相手かな」
負ってもらわなければ自分たちが困る。一は店長を見遣った。
「話は終わりですか？」
「ああ、帰ってよし」
「……偉そうに」実際、偉いのはどちらかと追求されれば困るので、一はそれ以上は毒づかずにバックルームを辞した。

缶をごみ箱に入れると、少女は踊るようにしてジェーンへと振り向いた。
「ごちそうさま」
「あなたのマネーで買ったのよ？」
少女は小首を傾げる。
「ジャネット」ジェーンは紅茶を飲み干すと、不思議そうに少女を見つめた。
「私、ジャネット」
「アア、名前。ジャネットっていうのネ」
「あなたはジェーン。だよね？」
全身に緊張が走る。思わず、ジェーンはホルスターに手を伸ばし

ていた。独特の空気を漂わせた、ジャネットと名乗る少女に警戒心を抱いていた覚えはない。しかし、名を名乗った覚えもなかった。

「怖がらないで」

ジャネットは、全てを見透かしたような瞳をジェーンに向ける。

「あなたの名前、天使様から聞いたの」

「エンジェルが何ですって？」

「私、天使様の声が聞けるの」

ジェーンは瞬きを繰り返した。敵か味方か。思案し、警戒し、ジャネットをねめつける。

「悪いけどアタシ、知り合いにドクターはいないの。紅茶、ありがと。ｂｕｔ、これ以上……」

「お医者さま？　私、病気してない」

「あなた、何者なの？」

尋ねられて、ジャネットは悪戯っぽく笑む。

「名前と誕生日、あとはキュートな笑顔さえあれば他には何もいらないって、そうは思わない？」

人間か、ソレか、勤務外か、フリーランスか。ジェーンの頭の中はぐるぐると回り続けている。

「私たち、似てる。だから仲良くしよ？　天使様もそう言ってる」

「電波……」

「それ悪口？」

「……う」まっすぐな視線をぶつけられ、ジェーンは僅かに怯んだ。

「ジェーンの話、聞きたい」

拒むのは簡単で、付き合う理由は見当たらない。だが、百二十円分くらいは付き合ってやっても構わないだろう。ジャネットのペースに乗せられ、巻き込まれているのを自覚しながら、ジェーンは何から話せば良いか考え始めた。

ジェーンの事は心配だったが、下手に突けば怒らせてしまうかも

しれない。ほとぼりが冷めるまでは放っておくのが無難だろう。一はそう考えて、家路に就いた。夕食を食べて、それからアルバイトに戻らなければならない。今の内に体を休めておきたかった。

連日、昼夜を問わず場所を弁えずに現れるソレ。いなくなった子供というのは、恐らく無関係ではない。何かが起こっている。また、動く必要があるのかもしれない。人知れず拳を握り締めて長い息を吐き出していく。

買ったばかりの真新しいコートを汚すのは避けたいなと、どこか場違いな事を思った。

「よう、お帰り」

見上げると、アパートの二階から山田が手を振っている。彼女はいつもの巫女装束に着替えていたので、一は少しがっかりした。

「ただいま戻りました。あの、何やってるんですか」

山田は階下を一瞥して、疲れた風に笑う。

「着せ替え人形みてえにされてたんだよ。流石に限界だ」

どうやら山田は避難してきたらしい。すぐに捕まってしまいそうな場所に、ではあるが。

「部屋、入りますか？」

「おっ、飲むか」飲みませんと、一は断る。

「今日な、晩飯一緒に食わねえか？　鍋やるとかさ、アイネとチアキに誘われてんだ」

「俺も行って良いんですか」

鍵を取り出しながら一は言う。

「アイネがな、一を誘っといてくれって。自分で切り出しゃあ良いのにな」

「じゃあ、お呼ばれしようかな。あ、誰の部屋でやるんですか？」

「一」と、山田は一を指差した。彼は苦笑し、扉を開ける。

「ロハで食べさせてくれんのかなあ……」

「アイネが出すって。一が帰ってきたし、後で鍋とか持ってくるんじゃねえかな」

避難の意味がない。一はあえて何も言わず、部屋に入ってこたつの電源を入れた。

陽が暮れていく。いつの間に、こんなにも時間が過ぎていたのだろう。空腹すら忘れて、ただ話していた。立ちっぱなしだと言うのに、全て忘れられた。

「良いな」

「何が？」

隣に、あるいは対面に、目の前に。落ち着かなさそうにしているジャネットだが、ジェーンの傍からは離れようとしなかった。

「お兄ちゃん」

ジェーンは言葉に詰まる。話していた内容の殆どは、一に対する不満や愚痴だったのだ。

「どこが。アタシのコト、まるで分かってないのに」

「ジェーンは悪くない。だけど、お兄ちゃんって人を嫌いじゃないんでしょ？」

「だいっきらい」

ジャネットは小さく微笑む。ジェーンはやりづらそうにそっぽを向いた。彼女には色々と話し過ぎたかもしれないと思う。

「……ジャネット。あなた、本当に何なのかしら」

「私は私」

自分の正体を話したくないのはやましい事があるからだろうか。しかし、ジェーンにはそう思えない。ジャネットの言葉は正しく聞こえる。彼女の声は清水のように透き通っていて、染み渡る。白を黒だと強制するような激しさは感じられない。ただ、神聖なものを感じさせた。

「アタシ、そろそろ行くね」

月が己の存在を主張し始める。前回のように暴走するつもりはなかったが、月光の下、無防備でいたくはなかった。

「残念」
「また、会えるカシラ？」
ジャネットは目を細める。
「ん、また会える」
「じゃあ、その、また明日……」
「また明日」
互いが手を振り、歩き始める。名残惜しくて、ジェーンはずっと手を振っていた。

相変わらず客は少ない。立ち読みする者がいるだけでも、まだましだと言えた。一は掃除用具をバックルームに戻して、所在なげにカウンターの中で立ち尽くしている。商品搬入、業者のトラックが来るまではもうやる事がない。溜め息しか出なかった。バックルームで煙草でも吹かそうかと考えていると、店の扉が開く。何気なく目を向ければ、機嫌の良さそうなジェーンが入ってきた。
「遅かったな」
じろりと睨まれる。ジェーンは仏頂面を作って、一言も発さずにバックルームへ入っていった。
「……俺が何をしたってんだ」
妹だなんだと言ったところで所詮、他人でしかない。胸が痛む。体中がざわつく。流れる狼の血がそれを否定する。一はカウンターに手を置き、目を瞑った。心配しているだけなのに、何故、ジェーンは不機嫌なのだろう。
助けを求めて顔を上げれば、制服に着替えたジェーンがバックルームから出てくる。彼女は店内を見回した後、カウンターへと歩いていく。思わず、一は身構えた。
「ディスプレイ、品出し、おソージ。終わったのかしら？」
「業者が来るまでは暇で暇でしようがねえよ」
「外のゴミでもピックアップしていったら？」

喧嘩を売られているのだろうか。一はジェーンを見返す。
「さっきまでどこに行ってたんだよ。探してたんだぜ」
「ライアーね。……フレンドと話してたの。だれかさんといる時とは違って、とっても楽しかったワ」
「友達ぃ？　猫か、犬か、それとも……」
睨み付けられて、一は口をつぐんだ。
「女の子よ」
「へえ」
「うそ。男」
「ふーん」
「……うそ。女の子。ちょっとおかしなコトを言うけど」
一は、だからどうしたとでも言いたげに口の端をつり上げる。
「こんな時間まで遊んでちゃ危ないぞ」
「また子供扱いして……」
「そうじゃなくて、ソレがだな。あ、いや、ソレじゃないかもしれなくて。あー、とにかく危ないんだよ」
「Ｂｅ　ｐｏｉｎｔｌｅｓｓ。今日のお兄ちゃんって、ホント、イヤ」
直接的、直線的に飛び込んでくる言葉は、一の胸を深く抉った。
「嫌とか言うな。俺はな、お前を心配してやって……」
「押しつけがましー。そんな心配ならいらないもん」
「心配なんて押しつけがましいもんだよ。されてる内が華だと思え」
「……マウスうるさい」
「ガキが」吐き捨てるように一が言うので、ジェーンの頭には血が上った。
ジェーンは一の向こう脛を蹴り飛ばそうとしたが、彼はおでん鍋の蓋でその攻撃を防ぐ。
「見え見えだっつーの。良いから仕事してろよな。ほら、外掃除してこい」
「そっちが行けば？」

「行かねえよバーカ」
ジェーンは無言で銃を抜いた。一は一瞬、何が起こったのか分からなかった。メタリックシルバーが鈍く光り、彼は数歩後退りする。
「やり過ぎだぞ」
「ドゲザ。好きでしょ、お兄ちゃん」
「誰がっ。良いからしまえよそんな危ないもん。当たったら死ぬぞ」
しかし銃口は下ろされない。黒い穴が一を見つめ続けている。
「あやまって。じゃないと下ろさない」
「何を謝れってんだ。理由もなしに頭下げられるか。謝って欲しいならな、きちんと説明しろ。納得出来たらごめんなさいしてやる」
「ハ？　ニホンゴムズカシクテワカラナイ」
「片言なんなよ」
いつの間にか、立ち読み客はいなくなっていた。正しく、賢い判断だと一は思う。
「ハリー、ハリー、ハリー。ハートブレイクなショットしちゃうよ？」
「死んじゃうだろ！」
「死なないでよ！」
「無茶言うなっ」
言い争いは深夜にまで及び、朝方になっても二人は険悪なままだった。

翌朝、一はふらふらになりながらバックルームに戻った。仕事が忙しくて疲れているのではなく、ジェーンの相手をしていたせいである。
「店で喧嘩をするなと、何度言えば分かるんだお前らは」
「吹っ掛けてんのはあいつですよ」
「軽くあしらうのも出来ないのか。学習しない人間は猿以下だぞ」
「店長からも言ってやってくださいよ」

「私を巻き込もうとするな」
店長は心底から迷惑そうに言い放った。さっさと帰ろうと、一は決意する。ジェーンはまだフロアにいるので、これ以上絡まれない内に退散するのが賢いと思われた。彼は手早く着替えを済ませて、コートの前ボタンを留めながらバックルームを出ようとする。
「挨拶はどうした。客はともかく私には愛想を振りまけ」
うるせえ馬鹿と内心で毒づき、一は今度こそバックルームを出た。と、カウンターでジェーンが誰かと話しているのが見える。今、自分には見せない笑顔を浮かべ、楽しそうにしていた。その相手は誰なのだろうと、商品棚の陰に隠れて観察する。
白いワンピース。青いスカート。淡いオレンジの、長いマフラー。ジェーンよりも背は高く、大柄な少女だった。体格はしっかりしているが、地に足がついていないような、ふわふわとした女の子だと、一は何となく思う。
会話の内容が聞こえなくて、一は聞き耳を立てた。満月が近づいているせいか、身体能力が上がっている、ような気がしている。力の無駄遣いだった。
「……やっぱやめとこ」
立ち上がって、カウンターを避けるようにして移動する。少女が手を振り、店から出て行った。一はジェーンに声を掛けられないのを祈る。背中越しに受ける視線が心地悪かった。思い切り睨まれている。このまま立ち去っては舐められてしまう。そんな気がして、彼は何でもないような顔で振り返った。
ジェーンは一が帰り支度を整えているのを確認すると、彼に対して、軽蔑するような視線を送る。ふっと鼻で笑い、彼女は腕を組んだ。
「エスケープするつもり？」
「帰るんだよ」
「アタシを待ってくれないんだ。いつも、待っててくれてたのに。ま、別にイイケドー？」

含みのある言い方に一は苛立つ。
「待ってて欲しいんならそう言えよ。口利かなかったのはお前じゃねえか」
「ダカラ、待っててほしいなんて言ってないし」
「じゃあ余計な事言うなよ」
一はジェーンを強く見据えた。彼女は負けじと睨み返してくる。その瞳にははっきりとした敵意が込められていて、彼はどことなく居心地が悪くなっていた。
「……いい加減にしてくれ。俺はエスパーでも何でもないんだからさ、ちゃんと言ってくれないと分からないって事もある」
「でも、お兄ちゃんじゃない」
「何？」
「エスパーじゃないけど、お兄ちゃんでしょ。妹の言いたいコトくらい、分かってよ」
無茶を言われて一は溜め息を吐く。厄介なのは、その無茶をジェーンが押し通そうとしているのがありありと見て取れた事だ。彼女はもう納得しないだろう。
「じゃあ、妹は兄の言いたい事が分かるんだな？」
「妹は分からなくてもイイの」
「わっがまま……通す訳ねえだろ」
「あっそ」ジェーンは一から視線を外して、つまらなさそうに窓の外を見つめる。
「おい、一」
呼び掛けられて、一は大儀そうに振り向いた。バックルームから店長が手招きしている。応じなければ後でうるさいだろう。彼は適当に返事をして、ゆっくりと歩き始める。
「駆け足っ」
「脛が痛くて走れませーん」
ジェーンが舌打ちしたのを、一は聞き逃さなかった。

――――反抗期だろうか。
益体もない事を考えていると、店長が難しそうな顔で口を開いた。
一は壁に背を預けて床に視線を落とす。
「ついさっきの話なんだがな、また、フリーランスが駒台で確認されたらしい」
「……また、ですか」
ソレを追い、刈る。怪物の首で生計を立てているモノが来たと言うのは、新たな戦いを呼ぶ事に他ならない。一は煙草の箱を取り出して、火を点けようか迷う。
「ソレも出たって事なんですかね」
「いや、ソレは確認されていない。が、遅かれ早かれ、現れるのに違いはないだろう。もしかしたら、とっくに現れているのかもしれないな」
「フリーランスって、どんな奴ですか？」
既に、この街には多くのフリーランスが滞在している。これ以上増えてもおかしくはないが、厄介事を引き入れてくる可能性は高い。
「『広場』と言う。八名で構成されているフリーランス集団だな。……その筋じゃあ有名らしい」
「俺は初耳ですけど」同業者について話したがらない連中とはいえ、ナコトからも、山田からも、アイネからも、『広場』と呼ばれるモノの話は聞いた事がない。
「めちゃくちゃ強いとか、そんなんですか？」
「電波集団と呼ばれているらしいな」
「……電波？」
「ああ、つまりキチ――――」
一は店長の言葉を慌てた様子で遮った。
「止めるなよ」
「止めますよ」
「まあ、良い評判は聞かない連中らしいな。神様だとか天使の声を

聞ける、なんて抜かしやがる奴らだ。『広場』に妄想押しつけられたって奴の話も聞く」
「神様、ねえ」
店長はくつくつと、喉の奥で嫌らしく笑む。
「お前はよっぽど神様を嫌っていると見える」
「そうですか？　まあ、神様の声が聞こえるなんて胡散臭いにもほどがあるでしょう」
「胡散臭さの極みだな。……実際、神様なんてのが姿を見せたところで『ソレ』だと一括りにされるのがオチだろう。そうなればお前らの出番だな」
「神様に喧嘩を売れって言うんですか」
死ねと同義語だった。
「啖呵切って見せろ」
「で。その、『広場』って奴らが何かしたんですか？」
「まだ何も。だが、注意するに越した事はない」
「注意しろったって……何か、ないんですか。一目見て、こいつが『広場』だって分かるものとか」
店長はううんと唸る。そこそこに長い付き合いなので、一は、彼女が考えている振りをしているのに気付いた。
「特にないな」
期待していなかったので、一は落胆しない。何も思わない。
「そおですか。じゃ、帰ります」
「ああ、ゴーウェストにも伝えておいてくれ」
「ヤですよ。あいつ、今は俺を貶す事しか考えてませんから」
「……さっき来ていた女だが」
店長は煙草を床に落として、靴の裏で踏みつける。
「雰囲気が妙だったな。俗世から浮いているような、地に足がついていないような、そんな印象を受けた」
「見てたんですか？」
「監視カメラでな。……何だ、その目は」

別に、と返して、一は考え込む。
「店長は、あの子が『広場』だって、そう言いたいんですか？」
「別に」と返して、店長は新しい煙草に火を点けた。一は顔をしかめる。
「まあ、言うだけ言ってみますよ」
「うん、よろしく頼む」
面倒な用事を押しつけられたものだと、一は溜め息を吐くのを堪えた。

連れ去られた子供。『広場』が関与しているかどうかは分からないが、伝えておくべき事は伝えておくべきだと判断した。が、どうにも気が進まなかった。一は頭を掻いて、視線を逸らす。

「ジェーン、さっきの子なんだけどさ」

「……アア、見てたんだ」

ジェーンはカウンターから出てこない。そこから、彼女は一に値踏みするような視線を送る。「昨日言ってた友達か？」

「だったら？」

険のある言い方だが、一は咎めない。

「なんつーか、ふわふわ？　してる感じの子だったな」

ジェーンは何も言わないで一を見ている。

「……気ぃ悪くすんなよ？　一応、さっきの子に気を付けといて欲しいんだ。また、子供がいなくなるって事件が起きてて」

「アタシが何も知らないって、そう思ってるんだ。……知ってるカラ」

嫌な汗が背中を伝う。一の鼓動は早まっていた。

「キッドナップとジャネットがカンケーしてるかもって、そう言いたいんでしょ？」

ジェーンは小さく息を吐く。やりきれない感情を断ち切るような、そんな思いが見て取れた。

「答えは一つヨ。ほっといて。フレンドくらい自分でチョイス出来るわ」

「そうじゃなくって……」

「どうだって言うの？　ジャネットをうたがってるくせにっ。きら

い。だいっきらい。あなたなんか、顔も見たくない」
　一は絶句する。我が身に降り掛かったのは災難なのか、当然の天罰なのか、思考が、心が千々に乱れた。彼はまさか、ジェーンからとびっきりの敵意を向けられるとは思いもしなかったのである。自惚れているつもりはなかったが、一は強いショックを受けた。
「あな、た……？」
　甘い声で兄と呼ばれない。それだけで、血の絆が薄まるような思いがした。
「不満かしら、ニノマエ」
「……別に。不満なんかないですよ」
　一の敬語に、ジェーンは眉根を寄せたように見えた。彼は背を向けて歩き始める。どうにでもなれと、扉を押す腕に力がこもった。

　深夜勤務は苦手だった。朝早く起きるのは苦痛ではないが、夜通し店にいなければならないのは、肌に悪いし、何よりすぐに眠たくなってしまう。一との険悪な雰囲気もあってか、やけに体がだるかった。仕事からの解放感もあったが、やはり、倦怠感がそれに勝っている。ジェーンは目を擦りながら、店の扉を開けた。そこには、友人がいる。彼女の顔を認めた途端、両肩に圧し掛かっていた疲労がどこかへ飛んでいったように思えた。
「お待たせ」
「そんなに待ってない」
　ジャネットとは昨日出会ったばかりだと言うのに、もう何年もの付き合いがあるように錯覚している。ジェーンの頬は自然と緩んだ。駒台に来てから、『友達』と呼べる初めての存在。経験。嬉しくて嬉しくて、仕方がなかった。
「昨日は言ってなかったと思うケド、お店の場所、分かったの？」
「うん」
「エンジェルから聞いたのかしら」

侮蔑の意は含まれていない。ジェーンは、ジャネットを少しだけ困らせてみたかったのだ。

「ううん。これ」ジャネットがポケットから出したのは、アイボリーホワイトの携帯電話である。

「……エンジェル？」

「そう見える？」

見えなかったので、ジェーンはふるふると首を横に振った。

「道が分かるから、便利」

「オゥ、Ｉ　ｓｅｅ」

「ここ、案内してくれるんでしょ？」

「イエース。何もないトコだけどね」

「嬉しい」

目を細めるジャネット。ジェーンは思わず見蕩れてしまう。

三森や立花、店長、堀、一と話している時とも違う。仕事も、利害も、何も関係ない。ジャネットは自分にとって対等だと思える相手だった。ただ、楽しい。一緒にいられるだけで良い。心底からそう思える。

「さっきの、あの人がジェーンのお兄ちゃん？」

「そう、だケド……」

「……血」ジャネットは躊躇いがちに口を開いた。

「繋がってないんだね」

アメリカ人の自分、日本人の一を見れば分かる話なので、ジェーンは首肯する。隠していても仕方がないと判断したのだ。

「あんな人、ブラザーでも何でもないけどネ」

「強がり」

「強がってなんか……」

「お兄さんと本気で喧嘩、した事ないでしょ」

一と喧嘩？　ジェーンは考え込む。アメリカにいた時こそなかったが、ここにいる時には一度だけあった。満月の晩、狼が吠える夜、薄暗い森の中で戦った。

「あるもん」
「それなら気にしなくて良いね」
何を。そう聞きたかったが、ジャネットは先に歩き出してしまう。
「ルートっ、分かるの？」
「あ、分かんない」

アパートに戻った一は、畳の上でごろごろと転がりながら唸った後、部屋を出て、山田の部屋、その扉を叩いた。ジェーンの事が心配だった訳ではない。ただ、自分が話を聞きたいだけなのだと言い聞かせて。
「よう一、お帰り」
瞼を擦りながら山田が扉を開く。悪い事をしたかな、と、一は申し訳なさそうな顔を作った。
「寝てましたか？」
「いや、今から寝ようかなって。おいアイネ、さっさと帰れよ！」
「アイネ、いるんですか？」
山田は困ったような、照れたような笑みを浮かべる。
「寂しいとか言うからよ」
「なっ、決してそのような……！　ウーノっ、『神社』の申し上げた事はでたらめです！」
どっちでも良いが、それを口に出すほど一は馬鹿ではなかった。
「好都合ですね。あの、二人に聞きたい事があるんです」
「ん？　おう、何でも聞けよ。とりあえず部屋上がんな」
「あ、お邪魔します。……お邪魔して良いんですかね？」
「何言ってんだお前」
言いつつも、一は靴を脱いでいる。山田の部屋が広く感じられて、彼はきょろきょろと中を見回した。家具が少ないと気付き、なるほどと納得する。中央に置かれたちゃぶ台に、電気式のストーブ、小型の冷蔵庫、敷いたままの布団、その上で正座しているアイネ、無

造作に置かれた酒瓶、くらいのものだった。
「荷物、まだ届いてないんですか？」
「いや？　大体届いてるぜ。あんまり重いもんは実家に置きっぱなしだけどよ」
「少なくないですか……？」
「そうかあ？」
山田は首を捻る。
「テレビくらいお買いになってはどうですか？　いつまでも私の部屋でご覧になるくらいでしたら」
「お前だってオレの部屋に居ついてんじゃねえかよ」
「……あの、それで本題なんですけど」
「おう、悪い悪い。で、何だよ？　……まあ、オレたちに聞きたいって事は、あんまり楽しい話じゃねえんだろうけどな」
フリーランスに尋ねたい事柄など決まりきっている。一はちゃぶ台を挟んで山田の対面に腰を下ろした。アイネはしれっとした顔で彼の傍に陣取る。
「もったいぶっても仕方ないですから単刀直入に聞きます。『広場』ってフリーランスを知っていますか？」
溜め息が漏れた。山田からも、アイネからも、である。
「マジでつまんねえ話じゃねえかよ。はーあ、酒、酒」
「そんな、やばい連中なのか……」
「第一印象、見た目からですと、まともにお見えになるんですけれど。……あまり、良くおっしゃる方もいらっしゃらないと存じます」
フリーランス『広場』、同業者からの評判はイマイチだった。
「具体的には、どういう感じで」
「神様だよ、神様。あいつらは神様だの、天使の声が聞こえるって言い張ってんだ」
「そりゃあやばいですね。……え？　本当に？　そう言ってるんですか？」
アイネが頷く。何か言おうとするが、すぐに俯いてしまった。彼

女は慎重に言葉を選んでいるらしい。
「正確に申し上げますと、声を聞けるのは『広場』でもただ一人、そう、うかがっています」
「一人、か。じゃあ、そいつの言ってる事が嘘か本当か分からないじゃないか」
「それでも信じてやがんだよ。だから厄介で、やばい。一はさ、どうして飯を食う？　どうして水を飲む？」
その質問は、どうしてお前は生きているのかと、同じレベルのものだった。一は目を瞑り、低く唸る。
「どうしてって、お腹が空いたから、喉が渇いたから、でしょう」
「『広場』ってのはそうじゃねえんだ。神様がそう言ってたから、そうするんだよ。誰かを殺せと言われりゃ殺すし、死ねと言われたら喜んで死ぬだろうな。極論でも誇張表現でもなく、マジでそうなんだから手に負えねえ。何かを信じるのは勝手だけどよ、いき過ぎだぜ」
「信仰心が篤いと言えば聞こえがよろしいのでしょうけど、私たちは『広場』を電波、などとお呼びしています」
殺せと言われれば殺す。
死ねと言われれば死ぬ。
ならば、子供をさらえと言われればさらう？
一は降って湧いた考えを、くだらないとは切って捨てられなかった。
「誰だったかな、何て言ったっけあのガキ。確か、『広場』の女が天使の声を聞けるとか抜かしてやがったな」
「実際、神様だとかの声って、マジに聞けるんですかね」
「巫病という言葉をお聞きになった事はおありですか？」
「ふびょう？　いや、何それ？」
アイネは瓶底眼鏡の位置を人差し指で押し上げる。外せば良いのにと一は思った。
「呪術者がシャーマンになる過程において罹患する心身の異常状態

です」
「……はあ？　シャーマン？　シャーマンって、イタコみたいな奴の事か？」
「そのようなものです。巫病は思春期に発症するのが殆どで、発熱、幻聴、神様の現れる夢、昏睡や異常行動が症状として現れますの。シャーマンでなくとも、世界中で患者が散見される症例ですわ」
「へえ、神様の……」
　一は何となく山田を見てしまう。
「オレはシャーマンじゃねえぞ」
「でも、巫女ですよね」
「関係ねえよ、病気なんだろ？　なる奴はなるし、ならねえ奴はならねえ」
　男らしい発言だった。と言うか巫女かどうかも分からなかった。
「まあ、言っちまえばアレか。宗教的な、本当か嘘か分かんないって奴だろ」
「巫病は医学的にも病例として取り上げられていますわ。ノイローゼ、てんかんといった精神症の一種と考えられております」
「へえ、アイネは物知りだな」
「ありがとう存じます。……ウーノは、ジャンヌダルクをご存知ですか？」
　一は乾いた笑みを浮かべる。どうやら、自分は相当に物を知らない人間だと思われているらしいと、少しだけ悲しくなった。
「オルレアンの乙女だろ。百年戦争で活躍したって、フランスの英雄じゃんか」
「へえ、一、良く知ってたな」
「はっはっは、俺を誰だと思っているんですか」
「……そう言えば、この間ジャンヌダルクを取り扱った映画がテレビで……」
「アイネ、しっ！　……で、ジャンヌダルクが巫病とどう関係するんだ？」

言ってから、一ははたと気付く。
「もしかして、ジャンヌは巫病、だったのか？」
ジャンヌダルクはオルレアン解放に貢献し、シャルル七世をランスで戴冠させ、フランスに勝利をもたらしたと、そう言われている。宗教裁判では異端者と断罪されて火刑になったが、それでも、彼女は聖女の、大天使の声を聞いたと言い張った。その声に従った事で、一介の村娘が救国の英雄となったのである。
「彼女は脳疾患患者だったとおっしゃる方もいらっしゃいますわ。声を聞いたなどは、幻覚症状のみの、てんかんによるものだと。原因、考察、報告、様々なものが確認されておりますが、やはりジャンヌダルクは健常だった、とは申し上げられないと存じます」
話を聞いていた山田が、酒瓶を持ち上げた。
「側頭葉てんかんだったら、更にありえる話だな」一は山田に視線を送る。
「側頭葉には神の回路ってなもんがあって、そこを刺激されたら神がかり的な言動で、すっげえ事やっちまうんだーって話。聞いた事ねえか？」
「博学ですわね『神社』。補足程度に申し上げるなら、自律的なジャンヌは時として人が変わったかのように攻撃的になるという、典型的なてんかん気質だったそうですわ」
一は腕を組んで思考に耽った。神の声を聞くというのも、全くありえない話ではないのだろうか、と。
「……『広場』の、天使の声を聞けるって奴も、もしかしたら」
「かはは、マジだったにしろそうでなかったにしろ、ややこしいってのに変わりはねえっつーの。色んな意味で世界は一つじゃねえ。私の神とオレの神、どちらが正しいか比べてみましょうなんて、存在すんのかどうか、存在したとして姿見せねえもんなんか、比べようもねえって話だ。信仰心にうるさい奴なんか鬱陶しいだけなんだよ。関わらないのが一番だ」
「ウーノ、もしかして『広場』と……？」

「いやいやいや」一は首を振り、手を振った。
「今日、店でそいつらの話を聞いてさ、別に、それだけだよ」
「噂をすれば何とやら、じゃねえの？」
「やめてくださいよ、そういうの……」

駅前の裏路地、そこに停めた自転車を確認して、少年は安堵した。鍵を掛け忘れていたので、盗まれるかどうか、気が気でなかったのである。ついさっきまで遊び回っていた友人と分かれ、後は帰るだけだ。彼は歩くペースを落として、人波を擦り抜けていく。路地に近づくと、奥の方から人影がぬっと現れるのが見えた。沈む陽を背にしたそれ。目を凝らすと、外套を羽織った老人なのだと気付けた。少年は特に怪しむ様子もなく、自転車のハンドルに手を伸ばす。
「若いの」
少年は暫くしてから振り向いた。彼のきょとんとした顔を見て、老人は愉しげに口の端を歪める。少年はその笑みに嫌悪感を覚えた。
「兄弟はおるかの？」
知らない人に声を掛けられる。返事をしてはいけないと教えられたのはいつの事だったか。少年は考えてから、答える。
「……いないよ」
「ほう、そうかっ」
老人は笑みを深めた。少年は困惑する。
「あの、何？　何か用でもあんの？」
「おうおう、焦らなくても良い。さ、ついてこい」
老人は駅前には出ようとせず、路地の向こうに歩を進める。
「はあ？　いや行かねえし。勝手にしろよジジイ」
サドルに跨ろうとする少年だったが、老人に肩を掴まれた。存外に強く、年老いた者の力とは思えなかった。
「いかんなあ。目上、年上の者には敬意を払わんと」
「……っ、離せよ！」

変質者だ。少年は通行人に助けを求めようとする。声を出し、足を踏み出そうとした瞬間、掴まれていた肩に爪が食い込む。老人は素早い動きで彼の首を締め上げた。

少年は苦しそうに呻いた。空気を取り込もうとして、逃れようとして必死にあがく。だが、時間が経つにつれて大人しくなり始めた。やがて、彼は動きを止める。老人の傍らに影が立った。漆黒色の外套を羽織った男である。突然の出現にも関わらず、老人は動じなかった。

「くびり殺したのですか？」

低い声が尋ねる。老人は男と知り合いだったらしく、軽口を叩いた。

「かっ、馬鹿な。こんな、そそる声の持ち主を簡単には殺さんよ」

その言葉を聞き、男は哀れむような視線を少年に送る。

「いずれ死する運命にあるなら、ここで逝かせてやるのも……」

「いやいや、わしと出会った時点で生殺与奪は握られておる。残念じゃが、恨むなら己を恨んでもらわんと。……この期に及んで、殺人を忌避するような妄言は吐くまいな？」

男は獰猛な笑みを見せる。ひとしきり笑った後、彼は老人を見下ろした。

「血を吸う鬼に何を尋ねるかと思えば。失礼ですが、あなたよりも多くの人間の血を啜ってきたつもりですよ」

「ほっほ、愚問じゃったな。陽も落ちる。儀式には良い頃合いじゃなあ」

「では、戻るとしましょう。我らが祭壇に」

老人は頷き、少年を男に任せた。

駒台。何と禍々しい気が充満した街か。ビルの屋上から見下ろす街並。反吐が出そうだった。風が髪を撫でていく。その音に紛れて、背後に誰かが立った。

「青髭を捉えました」
「ご苦労」振り向かずに言う。答えたのは、フリーランス集団『広場』をまとめる男、ジャンである。彼らが駒台にやってきたのは、青髭と呼ばれるモノを殺害する為だ。
「ジャン隊長、神は何と……？」
「声は彼女にしか聞こえない。呼び戻さなくてはならないな」
先行させたメンバーを思い浮べて、ジャンは苦笑する。
「しかし、働かないお人だ。今頃は何をしているのやら」
「……ご自分が副隊長だと理解していらっしゃるのでしょうか。正直、戦闘力、判断力から考えても、ジェイルの方が優れているのでは……」
「では、ジェイルに神の声が聞けるのか？　無理だろう。我々は、あの人抜きでは成り立たない。成り立たせる意味がない」
自分たち『広場』は、神に従い、神の為に動く。神はいつか、ソレが出現した混迷極まる世界を救済する筈だ。彼の声を聞くには、彼女が必要だった。ジャンは遠くを見つめる。下った命、完遂するまでは死ぬのを許されない。
「青髭は？」
「コマダイの中心部からは離れた鉄塔に祭壇を用意しています。生け贄も揃っているようでした」
「儀式の始まる瞬間に仕掛ける。少しは弛緩しているだろうからな。その前に準備を終えたい」
「揃っています。ただ、一人を除いて」
「ならばあの人抜きで仕掛ける。……戦場には似合わない方だ。声を聞いているのだから、仕事は終わっている」
青と白。二色を基調とした服は、『広場』のメンバーが着用する制服である。彼らの腰には西洋の剣が提げられていた。全員が同じ服、同じ武器を持つ事で統一感が生まれる。仲間意識は強まり、絆が芽生える。『広場』には神が、神の声を聞き届ける巫女がいる。
ジャンは抜剣し、天を示した。

「向かうぞ戦場。我らには神の加護がある。恐れる心はここに置いていけ」

逢魔が時。『広場』は戦場を目指す。標的が神に捧げる供物なれば、退く事はありえない。

夕闇が周囲を染め上げる。『広場』の構成員、七名が駒台を駆け抜ける。人々は悲鳴を上げた。見慣れない服装をした男女が剣を掲げ、構えている。道は空き、人波が割れた。

目的の地へ向かうにつれ、人気はなくなりつつある。件の鉄塔が見えて、メンバーに緊張が走る。長であるジャンはそれを感じ取り、口を開いた。

「恐れるな諸君、我らは一騎当千の強者だ。神がついている。破れる筈がない」

言葉は安い。しかし、神の名を聞いて『広場』の面々からは笑みが零れる。一時的とは言え、絶対の自信が、彼らをストレスから解き放っていた。

次の瞬間、それが崩れる。鉄塔の前に、炎が立ち上っていた。何かが焼け焦げる臭気、揺らめく景色。牡牛を模した、どこか悪趣味な祭壇が視界に入る。火炙りになっているのは、その祭壇だった。

「これは……!?」

「……儀式はもう始まっていたのか？」

驚愕の声が上がる。『広場』の七名は散開を始めた。注意深く、じりじりと歩を進める。肝心の青髭の姿が見当たらない。火の粉が爆ぜる。陽炎の向こうから泣き声が聞こえた気がして、ジャンは思わず足を止めた。彼だけでなく、全員が祭壇を注視する。巨大なそれから、やはり何かが音を立てているのだ。想像を巡らせて、結論に辿り着く。分かっていて犠牲にした。それでも罪悪感が身を苛む。

「子供の声だ……」

誰かが呟いた。助けを求める声は大きくなる。

「ジャン、子供を、子供を助けなきゃ」
「ならない」ジャンは逸る者を押し留めた。生け贄について伝えていた筈だったが、実際、その場に出くわせば揺らぐ。動揺が広がるのを理解しつつも、彼は伝播を止める術を知らなかった。ジャン本人も、未だ迷っている。奇襲を仕掛けたつもりだが、失敗に終わった。次に打つ手が思いつかない。
「ジャン！」
呼び掛けられて気を取り直す。仲間が指差した、鉄塔に備え付けられた階段の踊り場、そこに、敵がいた。
外套を羽織った、背の低い老人である。笑みを浮かべるその姿、一見すると髭を蓄えた好々爺だが、この場には相応しくなかった。少年の悲鳴、肉を焦がす臭い、立ち込める暗い闇。獣じみた笑みは人間の顔ではない。
「青髭……！」
声に応えるかのように、青髭が両手を広げた。
「ようきなすった、ここはゲヘナ。悪魔を呼び出すには格好の、絶好の場所じゃろう」
「戯言を」悪魔を召喚する。青髭の発言を受け、『広場』は彼を嘲笑した。精神に異常をきたした、行き着くところまで行ったサタニストだ、と。
気付いていない。
誰一人として気付かない。悪魔の存在を、青髭の所業を笑う彼らが信じるモノも、それに近しいモノだという事を。
「ほっほ、笑うが良い。慣れておる。それよりも残念じゃなあ、お主らには、魔が降臨するその瞬間を見せる事が叶わんとは」
青髭は諦めたようにうな垂れる。『広場』の一人が足を一歩踏み出した。背の高い黒髪の女性である。彼女は祭壇、それから、青髭に視線を移した。
「子供を助けるわよ」
女性メンバーの鋭い視線を認めて、青髭は顎を擦った。

「むう、事ここに及んでは仕方あるまい。まだ息はあるじゃろうて、許そう」
「てめえは許さねえけどな」大柄な男が青髭を睨み付ける。
「かかか、好きにすると良い」
二人が祭壇へと向かった。残った五名はジャンを先頭に青髭のいる階段を目指す。
「気付かぬかなあ」
ぽつりと青髭が漏らした。声量が小さかったせいか、誰にも聞こえていない。
「現世はやりやすくて仕方ない。愚図と無能が蔓延りよるわ。鬼には些かつまらんかもしれんなあ」
鉄塔前から影が伸びる。祭壇へと向かう、動くそれを気に留める者はいなかった。
「のう、ドラクリヤよ」
影が、祭壇の周囲に広がる。『広場』の二人は制服を脱ぎ、それで炎を消そうとしていた。
「全くその通りで」
真下から声が聞こえた事により、ようやくになって二人は異常に気付く。しかし、あまりにも遅い。生死を掛けるフリーランスとしては致命的なまでの鈍重さだった。
「おおおっ！？」
男がその場から飛び退こうとするが、彼の行動が終わるよりも先に影が現れる。長く、太い。それはまるで――――。
鮮血が迸った。男の腹部には、杭状になった影が深々と突き刺さっている。喀血し、彼が顔を下げたと同時、別の影が立ち上った。避ける事は不可能で、一切の慈悲もなく眼球を貫き、脳にまで達する。尚も頭蓋を貫いて、杭の先端が脳漿を巻き込み、外気に触れた。
一瞬遅れて、祭壇からパニックが伝染する。青髭に向かっていた者は足を止め、仲間だったモノを忘我に近い表情で見つめた。
「……っ、ジューン！　早く逃げろ！」

ジャンの声に、ジューンと呼ばれた女が反応する。彼女の顔面にはおびただしい量の血液が付着していた。女は影から逃れようとするが、

「血化粧とは何とも」

足の甲に激痛が走る。男を貫いたものよりも細長い、串のような影が、女に突き刺さっていた。その串は長く、引き抜くのは困難極まる。地面に縫い止められた彼女は低い唸り声と共に顎を反らした。

他の『広場』が女を助けようとして走り出すが、ジャンは彼らを制止する。

「全滅する気か！？」

「ほっほう！　さぞかし痛いじゃろうなあ！　ほれっ、早く助けに行ってやらんと！」

死ねと、青髭は『広場』を煽った。ジャンたちは動けない。仲間はまだ死んでいない。足を刺されただけだ。しかし、正体不明の相手に向かえるほど士気は高まっていなかったのである。次は誰の番だと慄いていた。

「違えるなっ、『広場』は神の声に従い、青髭を優先する！」

「ですがっ」

「青髭は目の前なんだぞ！？」

仲間を失い、激情に駆られたジャンは大声を上げる。

「見捨てられるか！」

男が一人が飛び出した。残りの者は彼を追えずに、かと言って青髭にも迫れずに立ち尽くす。

女のもとへ駆け寄る男は勇ましい声を放ち、剣を振り上げた。どろどろと蠢く影に向かって、得物を振り下ろす。だが、影は一瞬にして形を変えた。切り付けられそうになった部分は霧状になり、周囲に散っていく。

「ジューン、今助ける……！」

その隙に串を引き抜く為、男は影の切断を試みた。短くなれば、何とか引き抜けるだろうと考えたのである。細く、長く、鋭い影に

剣の腹を当てた。
瞬間、四方八方の空間から串が出現する。霧状になっていた影が、いつの間にか『広場』の二人を取り囲んでいたのだ。……逃れられる筈はない。数十を超える串が檻となっている。
ジャンは惨劇から目を逸らす。だから言ったのにと、内心で犠牲者を軽蔑していた。
「撒き餌に集るのは雑魚の習性じゃなあ！　ほれどうしたっ、わしを殺すのではなかったか！？」
「外道が……！」
「かかっ、吠えろ若造。それが主らの精一杯じゃろう？」
見下され、それ以上何も言えない。ジャンは長い息を吐くと、号令も掛けずに単身で青髭に向かった。そも、残ったメンバーには戦意が残っていない。根こそぎ刈り取られてしまったのだ。

BIG TIME BALK

気が重い。アルバイトに向かう、その足が酷く重い。一は溜め息を吐きながら、ゆっくりと店へ歩いていた。その理由はジェーンである。彼女の機嫌が悪くなった理由も分からなければ、ご機嫌を取る理由だってないように思われた。兄の立場にある自分が気を揉む必要などないのだと、必死で言い聞かせる。己を騙して、それでも、彼女の事が気に掛かって。

「……畜生」

子供がいなくなった。『広場』が現れた。関係はあるのか、ないのか。考えても詮ない事ばかりで、それでも思考は止まらない。ジェーンの友人が『広場』だったなら自分はどうするのか。どうすれば良いのか。縁を切れと、どんな顔で言うつもりなのだろう。一は歯を食い縛る。店の扉を開けると、虫でも見るかのような目付きを向けられた。ジェーンはレジ前の空間でモップに体重を預けている。

「おはよう」挨拶をしない訳にもいかない。一はそう思ったのだが、ジェーンは彼を無視していた。一は彼女を睨み付けるようにして見てしまう。

「……何か言いたいなら言えば？」

ジェーンの物言いに腹を立てた一は彼女を無視してバックルームへと向かった。舐められてたまるか。ちっぽけな自尊心に背中を押され、彼は舌打ちをする。頼まれて、泣いて頭を下げてくるまでは許さないと、そう決意した。

「まだやってるのか？　外野からすれば欝陶しい事この上ないぞ。さっさとどっちかが折れろ」

しかし、その決意は六十秒と経たないうちに揺らぐ。

「俺は折れませんから」

「業務に支障をきたさないと言い切れるなら好きにしろ。出来ないなら一、お前が折れろ」
「あいつが謝れば良いんですよ」
「バイトの分際で」
吐き捨てるように店長は言う。一はただでさえ気が立っているのだ。彼女の言葉は、彼にとっては火に油を注がれた形になる。
「バイト以下の仕事しか出来ねえくせに」
「出来ないんじゃない。やらないんだ」
「ガッ……キ！　マジで子供みてえな！　たまには大人らしい事を言ってみせたらどうなんですか」
店長は椅子の向きを変えて、吸い掛けの煙草を一に差し出した。
「……何すか？」
「吸えば落ち着くんじゃあないかと思ってな。それに、口に何か入れときゃその分は黙るだろう？」
「きゃっ、間接キス」
「光栄だろう」いらねえよ。一は呟き、自分の煙草を取り出す。
「そもそも、大人、大人とお前は言うがな、大人とは何を指す？何をすればガキじゃなくなる？」
「俺はー、子供だから分かりません」
「思考を放棄するな馬鹿者が。……それが分からないのに、私に大人であるのを強要するな」
火を点けて、紫煙を胸いっぱいに吸い込む。仄かに甘い臭いが一の鼻を突き刺した。
「じゃあ、店長は大人って何だと思います？」
「くだらん。年を食えば自然と……いや、最近はそうでもないか」
独りごちて、店長は苦笑した。
「そうだな、疲れた顔で溜め息の一つでも吐いてみろ。大人になれるぞ。……ああ、そうそう、その顔だ」
「うわー、ずっと子供でいたーい。大人なんかになりたくなーい」
「良いから働け。ゴーウェストと顔を合わせたくないからって無駄

口ばかり叩くな。時間を稼いでるつもりか」
言い当てられて、一はへらへらと笑う。笑うしかなかった。
「店長、あなたの事を愛してるから今日はもう帰って良いですか」
「私を愛しているなら骨になるまで働いてくれ」
一は無言で制服に着替える。
「……あ、そういや『広場』の件、どうなりました？」
「さあな。情報部も人間だからな、常に万全でもなければ、万能でもない。基本的に、ウチは後処理に回るのが普通だ。後手に後手に、それがオンリーワンのモットーだ」
「嘘吐け。……神様の声を聞けるんでしたっけ」
「『広場』か？　何を聞いたか知らん。信じるのはお前の勝手だがな」
空いていたコーヒーの缶に短くなった煙草を入れると、店長は椅子に座ったままで体を伸ばす。
「知り合いのフリーランスから話でも聞いたか？」
「エスパーかよ」
「少し考えれば分かる。人をエスパー呼ばわりするな。私はいたってノーマル、レベルゼロの無能力者だ」
「まあ、確かに色々と聞きましたよ。腐っても兄ですから、あいつが心配です」
店長はゆっくりと息を吐き出す。
「仮に、ゴーウェストの友人が『広場』に属する者だったとして、お前は何を言うつもりだ？」
痛いところを的確に突かれて、一は誤魔化すように紫煙を吐いた。
「家族ってのは厄介なもんだよ。一生ついて回る問題だからな。どこまで口出しして良いのか、されたくないのか。最近のガキは小難しい。子殺し親殺し、増えてもおかしくはないだろうよ」
「……殺されろって？」
「誰もそんな事言ってない。尤も、死にたくないなら必死で考えた方が良い。妹なんだろ？」

どう接するのか。それくらい自分で考えろ。侮蔑混じりに突き放されたような気がして、一は煙草を灰皿に押しつける。

「とにも、かくにも、働かなきゃいけませんね」

「ぐだぐだ抜かすよりかは生産的だな」

一は笑って、覚悟を決めた。

店内は静かだった。客はいない。有線からは小煩い曲が流れている。早口のボーカル、歌詞が聞き取れなくて、一はそこから意識を外した。代わりに、雑誌コーナーでフェイスアップをしているジェーンに視線を遣る。彼女とはフロアに出てからまだ一言も口を利いていない。既に一時間が経っているのにも関わらずだ。思っていたよりも辛いんだな、と、一はぼんやりと考える。仲違いした、明確な原因も分からない。ずるずると、嫌な雰囲気を引きずったままだ。頭を下げれば収まる話でもない。彼女が求めるのは謝罪ではないからだ。

「……せめて話くらいしてくれよな」ぼそりと呟く。ジェーンがぴくりと動いた。

今日は満月の晩、人狼であるジェーンの身体能力が上がっている為に聞こえたのだろう。ぴくぴくと動く彼女の耳は、何の音を、誰の声を探しているのだろうか。一が溜め息を吐くと、ジェーンは嫌そうに顔をしかめた。

――――満月か。

嫌でも思い出してしまう。公園での戦闘を、月夜に踊る彼女の姿を。血に急かされ、支配され、獣の本能に身を任せる。人間の規を超越した、美しい命の煌めき。吠え声は耳朶を打ち、心の奥底を揺さ振った。そんな血が自分にも流れているのを、一は確認する。確かめたかった。ジェーンと同じモノだと、もう一度。実感すると、昂ぶったような錯覚に陥る。彼女と比べれば薄いが、確かに流れ、繋がっているのだ。

そっと、以前、噛まれたところに指を這わせる。傷は治っていたが、熱を帯びているような気がした。一は何気なく窓の外に目を向ける。満月の夜、猛るのは何も狼だけではない。ソレも、人間も程度の差はあれ血に飢える。何かが起きるなら、きっとこんな夜だろう。彼が目を瞑ると、バックルームの扉が開いた。見ると、難しそうな顔をした店長が手招きしている。始まったのかと諦めて、一はジェーンを見る。彼女と視線がぶつかったが、自分からは目を逸らさなかった。

「ソレが出た」と、店長は言い慣れた台詞を口にする。聞き飽きた台詞を耳にして、一の体がじわりと痛んだ。

「昔使われていた電波塔の近くに出たそうだ。数は二、正体は不明、犠牲者は多数」

「多数……？」

「確認は出来ていないが、いなくなったガキだろうな。巨大な祭壇のようなモノがあって、そこに閉じ込められ、外から焼かれている」

吐き気がした。一の顔が険しくなる。彼から距離を取っているジェーンの表情も暗かった。

「……何の為に、そんな事を」

「分かりやすい怪物じゃあない。情報部がソレだと断じたのは人間の形をした奴らだ。手が込んでいるし、犠牲者はそれだけじゃない」

ジェーンが俯く。一は直感した。

「殺されたのはフリーランス『広場』。影に貫かれて息絶えたらしい」

「影？　いや、問題は……」

問題はそこじゃない。一は唾を飲み込む。意味の有無はともかく、巨大な祭壇を仕掛け、フリーランス集団を殺し切る力を持つソレがこの街にいる。そして、心当たりは一つしかない。

「ラウンドオブナイツ……」呟いたジェーンの顔は青ざめていた。

「次から次へと……！」
「『円卓』相手では分が悪い。しかし、応援に回せる戦力もない。立花とナナを呼んでも良いが、『広場』を仕留めた能力というのも未知数だ。多人数を相手するのを想定した得物なら全滅は免れん」
「俺たちだけでやれってんですか！？」
店長はうるさそうに目を瞑った。
「死んでくれるか？」
「ふざけんな！」
「――――悪くナイわ」
いつの間にか、ジェーンはまっすぐに店長を見つめている。
「自暴自棄って訳でもないな。ゴーウェスト、何か好材料でも見つかったのか」
「シャドウに貫かれたって言ったヨね？　アタシ、そいつを知ってるの」
「前にどっかで会ったのか？」
ジェーンは一を見ずに口を開く。
「ステイツにいた時に戦ったのよ。シャドウを使うソレと。……ヴラド・ツェペシュと」
「……串刺し公か。なるほど、相手としちゃ申し分ない。最悪だな」
一には二人が何を言っているのかが分からない。
「学が浅いなお前は。串刺し公と言えばドラキュラのモデルになった人物だろうが。お前だって吸血鬼くらいなら知ってるだろう？」
「えっ？　ドラキュラって、あの？」
「……そういうムービーばっかり見てたくせに」
「んなもん知らなくても仕方ないだろ！」
「ゴーウェスト、以前戦った時と言ったな。その時は逃がしたのか？　それともお前が逃げたのか？」
挑発的に笑むと、ジェーンはリボルバーをホルスターから抜いた。
その動作は素早く、一には捉えられなかった。
「アタシが負けるワケない。杭じゃないけど、シルバーバレットな

らたっぷりゴチソウしたつもりよ」
「なら、何らかの原因で蘇った可能性はあるな。しかし、確かに悪くない。油断は禁物だが、ある程度の能力を把握しているというのは心強いな」
「……ドラキュラかあ」ソレだとは知っている。不謹慎だとも思うが、一はどこか夢見がちに漏らした。
「そんなに好きなのか？」
「好きっつーか、俺が知ってるくらい有名な奴ですし。なあジェーン、アレか、ドラキュラってやっぱりベラ・ルゴシに似てるのか？」
ジェーンは暫くの間黙り込み、店長にぼそぼそと耳打ちする。
「ん？　ああ、そうか。一、『全然似てないわ』だそうだ」
「直接言えよ！」
また、ジェーンは店長に耳打ちした。一は怒りのあまり死にそうになる。
「『プラン9・フロム・アウタースペースでも見てれば？』　との事だ」
「それはもう飽きるほど見たよ」
「ええい、もうドラキュラはどうでも良い。出会ったら殺せ！　それだけだ」
「乱暴だなあ」
「映画の話はやめろと言ってるだろう」
「は？」
話が反れてきたので、ジェーンが一を睨んだ。無言で。
「……えーと。もう片方のソレの正体ってのは？」
「……ああ、外套を羽織った老人らしい。そいつが『円卓』なら、思い当たるのは一人だ」
一の頭に血が上り、一瞬にして引いていく。
「青ヒゲ」ジェーンが呟き、一は身震いする。彼はジェーンを見られなかった。押し殺し、研ぎ澄まされた殺気が彼女から放たれている。一は確信した。山田が出遭い、コヨーテが追われていたモノ。

ジェーン＝ゴーウェストを、人狼に変えたモノの正体を。
「ああ、話はそこまでで良いです」
「何だと？」
理由が出来たと一は喜ぶ。歓喜に打ち震える。
「お前も良いよな？」
ジェーンは答えず、ただ、頷いた。一は笑みを噛み殺す。必ず殺してやると、他ならぬ自分に誓った。

串刺しになった『広場』を見つめる男がいた。無慈悲で恐ろしげな表情は、見た者を凍りつかせる。高く筋の通った鼻、膨らんだ鼻腔、大きく見開かれた緑眼と黒々とした眉毛のある細長い顔面、赤みを帯びた肌。威圧的な風貌で、髪は縮れて肩まで垂れ下がっていた。黒い外套を纏った彼は口髭を弄び、それから視線を外す。
男の名はヴラド・ツェペシュ。彼は十五世紀ルーマニア、ワラキアの領主であった。通称はドラキュラ公、串刺し公。尤も、ヴラド自身はドラクリヤ――竜の息子――の名を好んで用いている。
「ほっほ、カズィクル・ベイ。その名に相応しい所業じゃなあ」
「……青髭、私がその名を好んでいない事はご存知でしょう」
「むう、すまんすまん」
ヴラドの隣に立つのは青髭と呼ばれる老人だ。彼は『円卓』のメンバーである。
「じゃがのう、こう、見せつけられてはついつい……」
「戦意を削ぐには丁度良い見せしめです。オスマンの弱卒はともかく、ここに来るであろう勤務外もそうなるとは限りませんが」
青髭は醜悪な笑みを浮かべた。
「怨敵か。その為に生き長らえたものなあ、のう、ヴラドよ」
「感謝の念に堪えません。この身を銀の弾丸で撃ち貫いたモノの存在を、私は許せない」
「しかし、今となっても眉唾じゃなあ。首を切り落とし、心臓に杭

を打ち、それでも死なぬ吸血鬼をわしは知っておるが」
「吸血鬼にも格差はあります。私は、純粋なそれではありませんから。言わばプロパガンダ、吸血鬼に仕立て上げられたと言う方が正しいでしょう」
笑みを深めて、青髭はヴラドの肩に手を置く。
「いやいや、やはり、充分に吸血鬼をしておる。わしよりも数段上、数倍の血を吸っておるではないか」
「あなたは、これから多くの血を啜る。悪魔を呼び出し、この街を血で染める。どうぞ、私を扱き使ってください。及ばずながら力になりましょう」
「主がいれば万の兵より頼もしい。ここまでわしを運んでくれた礼を言う」
「……ご冗談を。返報が私の何よりも望むところではあります。儀式が終わるまでは使命を……」
首を横に振り、青髭は遠くに視線を遣った。
「ジェーン＝ゴーウェストじゃったか、確か。真に主が返礼をしたいのは、あの娘じゃろう」
「弁えておりますよ」
「構わん。アレは、わしにとっても興味深い対象でな。主には話したが、人狼に変化する処置を施したのよ」
ヴラドは何も言わず、青髭と同じ方向に目を向ける。
「縁か、業か。主には申し訳ないとも思っておる。しかしな、いずれ巡り巡るその時まで、わしはわしを辞めんつもりじゃ」
青髭がジェーンを人狼に変え、ヴラドは彼女に敗北した。瀕死のヴラドを救ったのが青髭であり、彼はその事を言っている。
「最後の仕上げじゃ。観客がいないと悪魔も冷める。勤務外には特等席を用意してやろうではないか」
血を吸う鬼が、静かに笑った。

黙々と歩く。ただ歩く。一とジェーンは声を発しないどころか互いに目すら合わせなかった。仲違いしたままの二人。出現したソレが『円卓』の青髭だと聞かされた彼女が殺気立っているのも手伝って、一は口を開くのすら恐れていた。目的地まではまだ遠い。少なくとも、後、十分以上はこの状況が続く。

――――青髭。

ただ、身を焦がすような憎悪が一の足を動かしていた。ジェーンから何もかもを奪ったモノを許すつもりはない。彼女が何も望んでいなくとも構わない。出会えば殺す。それで良いのだと彼は思っていた。

一と同じように、ジェーンの思考も、感情も黒く塗り潰されていた。自身を貶め、ソレと呼ばれる存在に落とした青髭を許せる筈がない。彼女は一と喧嘩していた事を忘れつつある。彼に対する怒りよりも、もっと強い衝動が全身を駆け巡っていた。

ふと、どちらともなく二人は夜空を見上げる。分厚い雲に覆われた月。見え隠れするそれが心を狂わせていた。彼らは後先どころか何も考えていない。ただ出遭い、ただ殺す事だけを思っている。復讐心に身を委ねるのはとても、とても気持ちが良かったからだ。

ここで感情を昂ぶらせるのは良くない。ジェーンは視線を下げて前を見据える。見知った者が立っており、彼女の姿を認めた瞬間、研ぎ澄ませて、凝らせていた殺意が霧散した。

「顔が怖い」

一もその人物に目を遣る。暗がりだったので最初は分からなかったが、やがて、店に来ていたジェーンの友人だと気付いた。

「……ジャネット」ジェーンが呼び掛けると、ジャネットは静かに微笑む。

「夜のお散歩？　ううん、違うよね」

一は警戒を強めた。ここで出会うのは、都合が良過ぎる。ジャネットという少女の正体が明らかでない以上、笑顔を見せる必要はないと思ったのだ。

「ジェーン、どこに？　この先に行くの？」
「あなたこそ、こんな時間に何を。用があったんじゃナイの？」
「私はジェーンに会いに。あなたに伝えたい事があったから」
ジェーンは眉根を寄せる。彼女はジャネットの真意を推し量っていた。
「私が『広場』だって事はもう言ったよね」一は瞠目する。つまり、ジェーンは『広場』に関する、ある程度の真相を掴んでいたのだ。
「私たちは……ううん、私は、この先に行く」
「君は……」言い淀んだが、一はジャネットを見つめて、口を開く。
「知ってるのか。『広場』がどうなったのかを」
「知ってたの。……あなたが、ジェーンのお兄ちゃん？」
問われたが、一は、すぐには答えられなかった。
「話に聞いてた通り。かっこいい感じ」
「……あ、ありがとう」一は思わずジェーンを見てしまう。彼女は恨みがましい目付きでジャネットを睨んでいた。
「お兄さん、私以外の『広場』は殺された。青髭に、影を操る吸血鬼に」
一は何も言えず、俯く。
「ジャネット、あなたはどこまで知ってるの？　何をしようとしてるの？」
「ジェーン、帰って」
「……え？」
「辛い事が起こるから。帰った方が良いと思う」
ジェーンは目を瞑った。思考が乱れに乱れている。現れた仇。フリーランスの友人。満月。一。そのどれもが、今は煩わしかった。
「悪いけど、俺たちは行くよ」
「そう」と呟き、ジャネットは近くの電信柱に歩いていく。そこに立て掛けられていた長い棒を掴むと、それを大きく回転させた。
「……フラッグ？」
「私、友達に憧れてた」

空気が変わる。変わっていく。一はビニール傘を持つ手に力を込めた。

「対等な関係が心地よかった。……ジェーン、一つだけ聞かせて？」

ジャネットが持っているのは旗である。真っ白な布地には蛍光ペンで何か書かれていた。

「私たち、友達なんだよね？」

息を呑む。一はジェーンを見た。彼女は悲しそうな、辛そうな表情を浮かべている。

「言わない。そんなの、バカみたい」

「……全部知りたいなら私をその気にさせて。その上で先に進みたいなら、私を――――」

「――――手は出さないで」

上目遣いで睨まれる。一は頷き掛けたが、ジェーンを見返した。

「危ないと思ったら出す。お前が何を言おうが関係ないからな」

「好きにすれば。……タイムイズマネー、ジャネット、アタシにも理由があるから」

「うん」ジャネットが旗を揺らした。ジェーンの意識が動く布に向かったと同時、柄の部分による鋭い突きが風を貫いていく。

「Ｇｅｔ　ｏｕｔ　ｏｆ　ｍｙ　ｗａｙ！」

身を沈ませたジェーンが、ジャネットの突き出した旗よりも低い位置を駆けた。

一たちが勤務外の仕事を果たす為に店を出た。その穴埋め要員として、ナナが呼ばれていた。彼女はバックルームにいるのが店長だけだと分かり、物憂げに溜め息を吐く。

「お前は随分と人間臭くなってきたな。一がいない事は電話で伝えていたろうが」

「もしかしたら。万が一。この網膜で確認するまではマスターの存在を信じるのがメイドたる者のお役目です」

「……早速で悪いが、レジに客が並んでいてな」
ナナは深い息を吐き出した。
「情報は既に入手済みです。マスターたちの相手が青髭と串刺し公だと、そううかがって――――ああっ、心配で心配で胸部パーツが張り裂けてしまいそうです」
「ドラキュラの方は、ゴーウェストが何とかなりそうだと言っていたぞ」
「問題は青髭ですね」
「そうか？　情報部からの報告では、戦闘に参加していたのはドラキュラだけだと聞いている」
それだけではなく、店長は以前、山田から話を聞いていた。ヤマタノオロチが出現した際、彼女は青髭と遭遇している。自らを『円卓』のメンバーだと名乗った老人だが、実質、戦いと呼べるものにはならなかったらしい、とも。恐らく、青髭を守っていたのはヴラドなのだ。つまり、青髭自身に戦闘能力はない。少なくとも積極的に力を奮う意志はない。そう、店長は判断していた。
「それでも『円卓』ですから。……青髭と言えば、シャルル・ペローの童話ですね」
「眠れる森の美女を書いた奴か」
「他に有名な作品ですと、長靴をはいた猫もペローです。青髭、どのような話かご存知ですか？」
「いや、知らないな」店長はどうでも良いと言わんばかりである。ナナは彼女の様子に気付かなかったので、得意そうに胸に手を当てた。
「昔々とある国のとある場所、お金持ちの男がいました。その男は青い髭を生やしており、青髭と呼ばれて恐れられていました」
了承も得ずにナナは話を始める。止めるのも面倒なので、店長は適当に聞いていた。
「青髭はある女性と結婚します。彼は妻となった女性に鍵束を渡してこう言いました。『家の一切を任せるよ。だが、ある部屋にだけ

は絶対に入らないで欲しい』と。青髭は妻に言いつけた後、出掛けていきました」ナナは律儀にも、台詞の部分の声色を変えている。

「しかし、入るなと言われれば入りたくなるもの。禁止されると余計にしたくなりますよね？　これをカリギュラ効果と言います。ローマ皇帝のカリグラを題材にしたアメリカの映画『カリギュラ』が語源となっているそうです。その内容は筆舌に尽くし難い、いわゆるハードコアなポルノでした。過激だったので一部の地域で公開が禁止になったのです。この事で『カリギュラ』は注目を浴び、カリギュラ効果というような言葉が生まれたのです。テレビ番組の自主規制音やモザイクもカリギュラ効果ですね！」

「話が逸れてるぞ」

「失礼しました。ええと、結局、妻は開けてはいけない部屋に入ってしまいます。そこで、青髭の先妻の死体を発見してしまうのです！　彼女にとっては最悪のタイミングで戻ってきた青髭！　妻は青髭に殺されそうになりますが、間一髪！　駆けつけてきた兄たちによって青髭は倒されます、ばばーんっ！　妻は青髭の遺産を手に入れて大金持ちになりました。めでたし、めでたし」

　困ったような、呆れたような顔をした店長は、何か言いたげにナナを見つめていた。

「ちなみに、青髭には幾つかのバリエーションがあります。部屋に入ってしまったのを見つかった後、妻が救援を待つパターン、妻は殺されてしまい、新しい妻がやってくるパターン、青髭から妻が逃走するパターンの三つですね」

「……詳しいな」

「ご希望とあらば眠れる森の美女も……」

「いや、結構だ。それよりも、お前は『円卓』の青髭が童話の青髭だと言いたいのか？」

　ナナは小首を傾げる。

「そこまでは。青髭と名乗る人物が、シャルル・ペローの童話を参考にしたのかもしれませんし。ただ、まだ話し足りない事があるの

です」
「言ってみろ」
「青髭のモデルとなった人物について、です」
「そっちの方が幾分か楽しそうだな」
店長は椅子を回転させてナナに向き直った。

FOLLOW ME

満月を見たら狼に？　へえ、じゃあボールとか見たらどうなんの？　……あっ、そう。

地を這うジェーンに対して、ジャネットが後退した。尚も、ジェーンは彼女を追いかける。ジャネットは旗を回した。はためく布が注意を引きつけ視界を奪う。

「Ｔｈｅ　ｃｈｅｅｋ！」

ジェーンはリボルバーを抜いていない。この先へ進む、進んでやる。その意思は確かにある。だが、心のどこかでは友人を相手に出来ないとも思っていたのだ。抜けば弾散る銀の銃。飛び出す弾丸に手心は加えられない。当たれば、確実に命を奪う。彼女は徒手空拳でジャネットに立ち向かっていた。

ジャネットが持つ旗は一メートルと七十五センチ。旗竿は鉄で作られており、竿の先端に付いた布には拙い字で、

「世界平和ときたもんだ」一は旗に書かれた字を読み取って顔をしかめた。

一からは、ジャネットに特別な能力が備わっているように見えない。彼女の操る旗は棒術の類なのだろうが、彼にはその巧拙が判断出来ない。一方のジェーンは果敢にも肉弾戦を挑んでいた。目にも止まらぬ速度で竿の突きを掻い潜り、揺れる布に姿が隠れる。ジャネットは後退し、彼女の攻撃をいなし、躱し続けていた。

ジャネットの異常さに一が気付いたのは、戦いが始まって数分の事である。当たらないのだ。彼女はまだ一度たりとも攻撃を食らっていない。ジェーンはいわば放たれた矢、意志を持って疾走する弾

丸なのだ。華奢な体付きとはいえ手数も多く、その全てを捉えられるとは思えない。しかし、やはり、当たらない。

実際、ジェーンは死角から、フェイントを織り交ぜた連係を組み立てていた。単調で読みやすいと、以前、『騎士団』のディルに指摘された欠点である。だから読まれるのはともかく、見える筈がないのだ。

ジャネットは視線を固定させたままである。彼女はずっとジェーンの目を追っていた。だと言うのに攻撃を避けている。

「聞こえる？」

体勢を整えようとジェーンが距離を取った時、そのタイミングを見透かしたようにジャネットが口を開いた。

「見える？　私には聞こえる。見える。天使様がこうしろって教えてくれるの」

「エンジェルってのはあなたのストーカーなのかしら」

「悪く言わないで」

ジャネットが突きを繰り出す。ジェーンは右に回避するが、

「やっぱり！」

空を切った旗竿が右に流れた。ジャネットがその方向に体を回転させたのである。彼女の得物は、完全に避け切れたと思っていたジェーンのこめかみに激突する。旗とはいえ、ぶつかったのは鉄の棒と変わらない。彼女は苦痛に顔を歪めて飛び退いた。その表情には困惑の色も混じっている。

「言った通りだった！　聞こえるって言ったじゃない！　天使様が正しいって言ったよね！？」

ジャネットは興奮した様子で大声を放つ。彼女の頬は上気していた。夢心地な、惚けたようでもある。

「ジェーン、行ったらもっと痛い思いをする。もっと辛い思いをするよ。私を信じなくても良い。でも、天使様を信じて？」

「絶対にノー。アタシはゴッドもブッダも信じない。信じてるのは……」ジェーンは一を一瞥するが、彼には何も言わなかった。

「じゃあせめて全部が終わるまではっ」
ジャネットはジェーンを失神させるつもりで旗を振りかぶる。甘い。ジェーンは痛む頭に鞭打って、空いたスペースに飛び込んだ。懐に潜り込み、顎を蹴り上げるつもりだった。
「ノエル！」
「――――！？」
蹴り上げた足が掴まれる。旗が地面に落ち、高く、乾いた音を立てた。ジャネットはジェーンの足を持ったまま、彼女に笑い掛ける。ジェーンは自らの得物に手を伸ばしていた。

「青髭のモデルとなった人物、か」
「はいっ」と、ナナは楽しそうに頷いた。
「店長はご存じですか？」
「ご存じない。……しかし、モデルというと、それは実在した者なのか」
ナナは両手を組み、俯く。笑うのを堪えようとしているらしかった。
「私と話すのがそんなに嬉しいのか？」
「……話をするのが嬉しいのです。マスターはこうした話がお好きではないので。取得した知識は披露したいと思うのが普通だと思うのですが、おかしいでしょうか」
おかしくない。ただ、ナナがオートマータという事に目を瞑れば。店長は煙草に火を点けた。
「モデルとは有名な奴なのか？」
「無論です。青髭のモデルとなったのは、何を隠そう、あのジル・ド・レイなのですから」
「知らないな」
ばっさりと切られて、ナナは泣くような真似をしてみせた。
「おっと、目にオイルが……本当にご存じないのですか？　百

年戦争ですよ？　ジャンヌ・ダルクの右腕的存在ですよ？」
「ジャンヌ・ダルクなら知っている。この前テレビで映画をやっていた」
「ジルはジャンヌの仲間です。オルレアンの私生児ことジャン・ド・デュノワやラ・イールと同様に」
「フランスを救った英雄か。……だが、ジャンヌ・ダルクたちはオルレアン奪還以外はパッとしなかったな。結局焼かれるし」
「その点について質問があるのですが、何故、ジャンヌたちは勝利出来たのでしょうか？　確かに彼女は兵士の士気を高揚させましたが、戦略や戦術の一つすら所持しておらず、挙句、戦場では旗しか持たなかったそうではないですか」
　店長はナナの質問を真摯に受け止めようとしたが、また話が逸れているのに気付いてしまう。
「その当時は大した作戦が必要ではなかっただけだ。物量で力押しが一番強く分かりやすい。が、だからこそ士気が重要だったかもしれん。必ず勝つ、殺す。大した事をやってなかったから、精神論が効いていたんだろうな」
「根性ですね」
「ジャンヌ・ダルクが今出てきて何か喚いても遠くから撃ち殺せば終わりだな」
「ロマンがないですね」
「オートマータが何を言うか」
　ナナの口が達者になってきた。彼女と話していると一の姿がダブって見える時がある。不愉快だった。
「しかし分からんな。何故、ジル・ド・レイが青髭になる。あの話の青髭はまるで悪役だぞ。英雄と呼ばれた男が悪役になるものか？」
「なるのです。ジルの晩年を知れば考えも変化します。何せ、彼の所業は青髭よりも惨たらしいのですから」
　眼鏡の位置を丁寧に押し上げると、ナナは真剣な顔つきになる。
「ジルはジャンヌ・ダルクを敬愛していました。いえ、あるいはも

っと。彼女を信仰する、敬虔な信者と呼べるくらいに。彼はジャンヌ自身に神を、救済を見出だしたのかもしれません」

他者に救われたい。そう願うのは不思議ではない。店長は黙して話の続きを促した。

「しかし、ジャンヌは異端者として処刑されてしまいます。この辺りには語りたい事が山ほどあるのですが……」ナナは探るようにして店長に視線を送る。

「またの機会に頼む」

「はあ、仕方ありません。ジル・ド・レイについて、だけ話しましょう。……信じていたモノを異端として焼かれ、失ってしまった彼の情緒は不安定になります。精神的な支えをなくしたのだから当然かもしれませんね。私で言えばマスターを失うという事に、ああっ、想像しただけで！」

「良いから続きを話せ」

「分かっています。それからジルは錬金術にのめり込むのです。フランソワ・プレラーティに唆されて、黒魔術にも興味を示したと言われていますね」

「待て」と、店長はナナの話を遮った。彼女は短くなった煙草を灰皿の上で揉み消す。

「フランソワ・プレラーティとは誰だ」

ああ、と。ナナは小さく漏らした。

「魔術師ですよ。尤も、ただの詐欺師に過ぎないとも言われていますが。魔導書の一つ、ルルイエ異本の一部をイタリア語に翻訳した事でも知られていますね」

「黒魔術に錬金術、か。人間とは変わるものだな」

「ジルは数百人もの幼い少年たちを拉致し、殺害しました」

「黒魔術に必要だったのか？」

「半分は、でしょうね」

ナナは眉根を寄せる。吐き気でも堪えているかのような、苦しそうな表情をしていた。

「もう半分はジルの趣味でしょう。彼は男色でしたから、殺害する前に充分愉しんだと思います」
「なるほど、充分悪役してるじゃないか」
「その後は告発されて、絞首刑の後、死体を火刑に処されます」
戦場で血を浴び続け、戦いが終わっても尚それを求めた。凄まじい人生だと、店長は思う。
「……駒台では子供がいなくなっていたな。それも、幼い少年と呼べる年頃の者ばかりが」
「『円卓』の青髭、その正体がジル・ド・レイだとおっしゃりたいのですか？」
「そう思ってもおかしくはないだろう。結びつけない方がどうかしている」
「では、仮に青髭の正体がジルだとして、子供をさらっているのは？」
答えなら既に出ている。店長は喉の奥で笑った。
「愉しむ為じゃないのか」
「黒魔術の線はいかがでしょう」
「だが、いなくなった子供の数は数百どころか十にも及ばんぞ」
「そもそも、青髭がジル・ド・レイではないのかもしれませんし」
「面倒な話だ。ジャンヌ・ダルクがいてくれれば、ジル・ド・レイを止めてくれるのかもな」
「ジャンヌが現れても狙撃されて終わりなのでは？」
そうだった。店長は笑って、溜め息を吐いた。

ジェーンの引き抜いたリボルバー、その銃口がジャネットの額に向いていた。引き金に置く指。それを少し動かせば、簡単に命を刈り取れる。
「撃てないよ」
ジャネットは笑んだ。頭にきたジェーンは、

「そこまで」
やはり、引けなかった。一が間に入る形で、ジャネットからジェーンを解放する。
「……ジャマするなって言ったじゃナイ」
「手ぇ出すって言ったろ。そいつを抜いちゃあ止めるしかない」
一はジェーンから銃を取り上げた。予想以上に重くて、彼女はいつもこんなものを持ち歩いているのかと、複雑な気持ちになる。
「お兄さん、私の勝ち？」
「ん」ジャネットに肩をつつかれて、一は困ったように笑った。
「ああ、君の勝ちで良いよ」
「ふふっ、じゃあ、ここでさようなら」
いやいやと、一は首を横に振る。
「行くから。先に。悪いけど、ジェーンを止めるなら次は俺も相手になるよ」
「……約束が違う」
「約束とパイの皮は破る為にあるって誰かが言ってたっけなあ」
ジャネットは地面を足で踏みつけた。
「大人気ないっ」
「大人じゃないしー？　ほらジェーン、行くぞ」
一はジェーンの手を握る。彼女はぼうっとしていたが、焦った様子で彼を振り解いた。
「返してよ」
「はいはい」銃を差し出すと、ジェーンはそれを元の位置に戻す。
「それがお兄さんのやり方なんだ。行けば辛い目に遭うのに、ジェーンを連れて行くんだ？」
ジャネットは旗を一に向けようとして、腕をゆっくりと下ろした。
「そう、天使とやらが言ってたのか？」
声が聞こえるのだとジャネットは言う。ジェーンの攻撃を回避し続けられたのは『そいつ』のお陰だと。本当かもしれない。だが、一は信じない。読みが鋭い、あるいは勘。何か他に理由が、力があ

る。そうやって自分を納得させる。
「伝えといてくれよ。お前の事は大嫌いだって」
「罰当たり。……私は、天使様とは話せない。声を聞いて、従うだけ」
「従うだけ？」
「そう」と頷き、ジャネットは一たちを見つめる。
「『広場』は神に、天使に従うしもべなの。だから、青髭を追ってる。そいつを殺す為に私たちは……」
「それ、だけ……？」
一が何か言う前に、ジェーンが声を発した。震えて、か細いそれは確かに届く。
「それだけで、あなたたちは何かを殺すノ？　だれかに言われただけで？　……ウソだよ、そんなの」
「天使様が言っている。理由ならそれだけで良い。それだけが良いの」
「ジャネットは！　あなたは、アタシを殺せって言われても、そうするの……？」
そこで初めて、ジャネットの表情が歪む。苦渋の決断を強いられているような、そんな顔をしていた。
「『広場』がやってるのはそういうコトなんだよ？　そんなの、おかしい。おかしいよっ」
「……おかしく、ない。青髭は子供たちをさらった。天使様が命じなくても、誰かがやらなきゃいけないの」
「は？　青髭が子供をさらったのか？」
一が素っ頓狂な声を上げたので、ジャネットは彼に向き直った。
「ん、そう。どうしてかは天使様も教えてくれなかったけど、悪い事でしょ」
「そう、だったのか」
一は散々迷った後、「ごめん」と頭を下げる。ジャネットは何故謝られたのかが分からなくて、彼をじっと見つめていた。

「誤解してたんだ。君たちの事」
話が噛み合わない。神を信じるモノたちと反りが合う筈がない。
一は『広場』の行動理念を知った。否、行動と呼ぶにはあまりにも他動的で、まるで操り人形のようだった。しかし、ただ一点、彼らが子供に手を出すようなモノではなかったのだと知り、理由が出来る。この先、『広場』は子供を、人間すら殺すかもしれない。だが、今だけは違う。まだ間に合う。そう思ったから、彼は頭を下げた。
「……？　お兄さんはどうして謝るの？　病気？」
「まあね」一は苦笑する。お前に言われたくないとも思ったが、妹を必要以上に心配するのは病気に近いものがあるのだろう、とも考えた。
ジャネットは一に対して柔らかな笑みを見せる。
「良く分からないけど、許す。……『広場』は青髭を追ってる。天使様に言われたから、ね。うん、この街にそいつがいると知って、私は先遣隊？　みたいなものとしてやってきた」
「そこでアタシと出会ったのネ」
「だから、仕事はぜーんぜん出来てないんだけどね。ジェーンと遊んでばかりだったから」
「おいおい、良いのかよ？」
「うん。はじめっから、私はそういうの期待されてない」
一は頭を掻く。きっと、ジャネットの仕事は神の声とやらを聞いた段階で終わっていたのだろう。
「お話はそこで終わり。後は、自分の目で確かめて」
「止めないのカシラ？」
「止めても、気絶させても、ジェーンたちはやっぱり行くんでしょ。だから、もう良い。それに、友達だから……」
照れ臭そうにジャネットは言う。友人だから、もう戦いたくないとでも言い出しそうだった。彼女は得物と、ジェーンの頭にちらちらと視線を送っている。一は何だか馬鹿らしくなってきた。

目的地に向かう途中、一はジャネットからソレに関する話を聞き出そうとした。しかし、彼女は青髭について何も知らないと断言し、ジェーンと他愛のないお喋りに興じていたのである。

一は頭の中で情報を整理し始めた。筋道立てたところで戦う事に変わりないが、何も分からぬまま命を晒すのは耐えられなかったのだ。

まず、『広場』は子供の失踪とは関係がなかった。ジャネットの話が本当なら、さらったのは『円卓』のメンバー、青髭である。そして『広場』は神の声に従い、青髭を殺す為に動いているらしかった。……ジャネットの話を信じるならば、である。一にはまだ判断がつかない。誰を信じるのか、誰と戦うのか。ただ、彼女は嘘を吐いていないのだと思える。ジャネットの発言には真実みが感じられた。

ソレの数は二。青髭とヴラド・ツェペシュ。だが、戦闘に参加したのはヴラドだけらしい。影を操る、底知れない力を持っているようだが、ジェーンはアメリカにいた頃、彼と交戦し、打ち負かしている。油断は禁物だが、自分とジャネットを加えれば、実質、『円卓』相手とはいえ三対一なのだ。戦いに関する不安要素は取り除かれている。一はそう考えていた。

「そろそろ」

「ん、ああ」ジャネットが前方を指差す。鉄塔自体は先程から見えていたのだが、建物が少なくなり、視界が開けたのだ。

そこに、元凶がいる。ジェーンを狂わせたモノがいる。一の体は強張っていた。復讐とは何と甘美なものか。鮮烈に焼きついた記憶と感情が胸の内から溢れ、暴れ出しそうだった。

間違えてなるものか。一は意志を固める。誰が相手であろうとも、どんな理由があろうとも、そこに何が待ち受けていたとしても、自分は勤務外なのだ。結局、やる事は変わらない。いつもと同じで、可能なら見せ場を作り、そいつを譲るだけだった。

「ジェーン、帰るなら今の内だぞ」
「まさか。そっちこそ、テール巻いて帰れば？」
「そりゃ残念だ」
ジェーンを止めるのは不可能だった。しかし、彼女の手を汚させるつもりはない。青髭を殺すのは自分だ。一は彼女をじっと見つめる。顔を逸らされて、彼は口元を緩めた。
少しずつ距離は縮まる。鉄塔前、開けた空間を確認した三人は目眩を起こしそうになった。揺らめく炎と影。店長から聞いていた通り、巨大な祭壇が置かれている。牡牛を模したそれは火に晒されていた。ミノタウロスを思い出した一は顔をしかめる。
「燃えてる」
「いや、燃やしてるんだ。誰かがね」
青髭が用意したものだと、すぐに察しがついた。しかし、一はその名前を口にするのを躊躇った。
「ジャネット、アレは何？」
「……言ったよ。確かめろって。それから、嫌な目にも遭うって」
ジャネットがそう言うと、ジェーンは押し黙る。それでも彼らは歩くのを、進むのを止めなかった。
視線を逸らそうとするが、どうしても炎に目が向いてしまう。一は俯き、自分の爪先を見ながら歩いていた。
「……ヘンなの」
ジェーンは周囲に目を向ける。雲は月を隠して、辺りには暗がりが広がっていた。離れた場所に枯れ木のようなものが連なって立っているのを見ると、彼女も祭壇に視線を戻す。
風が吹き、炎の勢いが強まった。が、次の瞬間には何者かの意志が介入したみたいに、それは徐々に弱くなる。俄然、一たちの注意は引きつけられた。
「中、何か入ってる」祭壇の内部は鉄板で仕切られている。小さな部屋が幾つもあり、そこには何かが乗せられていた。
「真っ黒こげじゃナイ。何かなんて、そんなの……」

一は目を凝らす。長い時間炎に包まれ、熱されたそれは元の形を辛うじて留めているに過ぎない。彼は牡牛の祭壇に近づいていく。

ジェーンは一に何か言おうとしたが、声は出なかった。その時、彼女はジャネットが自分たちとは別の方角、違うものを見ているのに気付く。

「ジャネット？」

「皆だ」ジャネットの瞳には光が宿っていなかった。ただ、それを見つめている。彼女が見ているのが枯れ木だと分かると、不思議そうにしながらも、ジェーンはジャネットと同じ方に目を向けた。

刹那、ジェーンは理解する。自分が枯れ木だと思っていたものが、串刺しにされた何者かの死体だという事を。串刺しにされたから死んだのか、あるいは……そんな事はどうでも良かった。黒く、鋭い影のようなものに突き刺さった死体は、皆同じ服を着ている。青と白を基調にしたそれは、ジャネットの格好とも一致していると思えた。彼女が呟いた、その意味をジェーンは理解する。死んだのは、否、殺されたのは『広場』の人間たちなのだと。

杭状の影は全部で七本、祭壇から少し離れた位置に立っていた。死体はからからに乾いており、血液、その痕跡すら見当たらない。体中の液体を吸い取られているみたいで、だからこそ、ジェーンはそれらが枯れ木に見えたのだ。

「……ジャン。ジョシュア。ジェイル。ジューン。ジョウガサキ。ジョルノ。ジョーイ」

ジャネットは死体を指差しながら、物言わぬモノの名前を呼んでいく。彼女にはミイラとなった彼らの区別がついているらしかった。

「おいジェーン、お前ら何やって……」言い掛けた一の傍まで走り寄ると、ジェーンは彼を強く睨みつける。

「……あの子、何やってんだ？」

「……よく見なヨ、お兄ちゃん？」

ジェーンは嫌味たらしく言ったつもりだが、一は気付いていない。やがて、彼は息を呑む。ジャネットが見ているものの正体を悟った

のだ。
「アレが『広場』か。全滅、したって言ってたっけ」
「まだジャネットがいる」
ジェーンは目を瞑る。
「ジャネットがいるんだから、ダカラ……」
「アレ、ヴラドってのがやったのか」
「メイビー、そう。シャドウの、前にも見た」
「……いるのか、ここにも」
――――相変わらず、鈍い。
一は妙なところは鋭いくせに、基本的には鈍いのだ。溜め息を吐くと、ジェーンは哀れむように彼を見る。
「アタシもヴラド・ツェペシュのゼンブを知らない。あいつが何かする前にボコボコにしたカラ」
「影、か。……本人がただの、ちょっとイカれた人間だとしても、吸血鬼のモデルになった奴だ。他にも色々持ってそうだな」
「イチイチ言わなくても分かるわよ」
「……突っ掛かりやがって」
一は舌打ちする。ジェーンもやり返した。不毛なやり取りを続けた後、彼女はジャネットのところに戻る。
「へーき？」
「ん」振り向いたジャネットは薄く笑った。心配掛けまいと思ったのだろうが、この状況では逆効果だった。
「聞いて、知ってたから。でも、実際に目にするのとは違う」
「手」
ジャネットは小首を傾げる。
「ふるえてる」
「寒いんじゃナイよね」ジェーンはジャネットの手を、自分の五指を絡ませるようにして握った。
「あったかい」
「アタシにおまかせ、ノープロブレムなんだから」

少女たちは笑い合う。影の杭、乾いた死体の下で。
「あ、そいえば、あそこには何があるの？」
ジェーンは祭壇を指差す。そこでは一がおっかなびっくり手を伸ばしていた。火勢は弱まり消えてしまいそうだが、熱がこもっている。彼は腕を組んでから、ビニール傘で何かを突いていた。
「Ｃｈｉｃｋｅｎ」
「あそこには……」
ジャネットは一度言葉を区切り、躊躇いがちに言う。
「悪魔への生け贄が」
「サクリファイス？　それって」
「青髭は、子供をたくさんさらったけど、その、嫡子？　えーと、長男の子だけを狙っていたの」
「……ほわい？」
長男だろうが次男だろうが少年には違いない。どうしてそんな事をするのだろうかと、ジェーンは再度、祭壇に視線を遣った。中にあるのが――――だと気付き、彼女の表情は青ざめる。
「青髭がその家で一番上の子を狙ったのは、ある悪魔を呼ぶ為」
「エンジェルの次はデビル？　ジョークにしては……」
「冗談じゃないよ」
しっかりと捉えられた。射抜かれるようにして、まっすぐに瞳を。
ジェーンは言葉に詰まった。
「悪魔は来る」
ジャネットがそう言えば、そうなる。そう聞こえるのだから仕方がないと、ジェーンは自身を納得させた。
ふと、ジェーンは一に目を向ける。いつまで遊んでいるのかと、非難がましい目つきだった。が、彼の絶叫を聞き、咄嗟に銃を抜く。あの様子だと、一は祭壇の中身を知ってしまったらしい。半狂乱にある彼はその場に蹲り、叫び続けている。
「ジェーンっ、お兄さんが！」
杭の形を留めていた影が消え始めた。突き刺さった死体はゆっく

りと地面に下ろされていく。影は消え、次に、中空で一箇所に集まった。霧状になったそれはふらふらとしながらも、一を目指している。

「バカ！　お兄ちゃん！」

引き金を引く。オンリーワン技術部が作製した銀の弾丸が空気を切り裂いていった。霧に命中するも、影を少し散しただけに終わる。

「何やってんの！？」

一はようやくになって立ち上がったが、すぐ傍にまで影が迫っていた。

FIRESTARTER

鉄塔前に来た時から嫌なものは感じていた。空気はぬめったように纏わりついて重く、死臭が漂っていたのである。

気になっていた牡牛を模した祭壇。その中に入れられていたモノを確認し、認識した瞬間、一の喉からは叫び声が迸っていた。力が抜けて蹲る。祭壇は七つの部屋に分かれており、その全てにきちんと乗せられていた。いなくなった子供がばらばらにされて、そこにいる。もはや何人分のパーツなのかも分からない。焼け焦げて、異臭を放つそれは人間の体とは思えなかった。

一は動けない。辛い目に遭うと釘を刺されていた。だが、彼は嘆く。あんまりだと。救いがなさ過ぎると絶叫する。悲鳴を上げる。悲しいだけではない。恐ろしいだけではない。ジェーンを人狼に仕立て上げた青髭の所業が、腹立たしく、憎いのだ。体が燃えているかのように熱い。耐えられなかった。熱を逃がす為に声を放ち、また熱がこもる。ここから逃がして欲しかった。誰かに助けて欲しかった。

「バカ！　お兄ちゃん！」

ジェーンの声が聞こえる。『お兄ちゃん』と、久しく聞いていなかったその言葉が一を覚醒させた。立ち上がらなくてはいけない。銃声が数発聞こえた。彼女がリボルバーを撃ったのだ。撃った。何を。誰を。何の為に。

「何やってんの！？」

急いで立ち上がると、目の前に黒いモノが広がっていた。中空に散らばるのは霧状になった――――。

「……影？」

まずい。そう判断する前に体は動いていた。その場から逃れるよ

うに横へ跳び、背中で銃声を聞く。立ち上がりながらビニール傘を開いた。振り向き、呼吸を整える。何が起こったのか把握し切れていない。ただ、それはいた。

黒い外套が宙で翻り、男が地面に降り立つ。彼は口髭を弄びながら、一に視線を送った。

「お前がヴラド――――」

「――――その先はおすすめしない」

低い声に遮られ、一は思わず口を閉ざす。男を挟んで、向こうにはジェーンとジャネットがいた。

「私はヴラド・ドラクリヤ。お前たちは勤務外か」

ヴラドは視線をずらしていく。一からジャネットへ、彼女から、ジェーンへ。

「機運に恵まれているらしい。君、この祭壇に手を出さないと誓うなら、見逃しても良い」

ヴラドはジェーンから視線を外さない。彼女もまた、目を逸らす事はない。

「私の目的はジェーン＝ゴーウェスト。アレを葬り去る為、ここにいる。だが恩義にも応えたい。彼女を置いて下がりたまえ」

一は無言で足を踏みだす。彼の爪先の一センチ先、地面から影が飛び出した。細く、鋭利な影の針である。

「聞こえなかったのか？」

ヴラド・ツェペシュ。彼を倒せば全てが始まる。終わる為に始まる。青髭まで辿り着くには邪魔な存在だ。それ以前に、ヴラドの申し出は受け入れられない。一は息を吐き出す。緊張と恐怖を忘れていく。アイギスを握る手だけに力を込める。

「聞こえてるよ」

ヴラドが空気に溶け込むようにして消えていく。一の足元で影が蠢いた。彼は危険を察知し、ジェーンたちの方へと走る。地面から、影が煙のように立ち上った。霧状になり、一の背後で揺らめく。

ジェーンが発砲を繰り返した。霧になった影は一に向かって針を

伸ばしていたが、弾丸がそれを噛み砕いていく。
「お兄さん、右」
ジャネットの指示に従い、一が右に向かってアイギスを突き出した。一瞬間後、彼の腕へ衝撃が伝わる。杭と化した数本の影、その先端が盾にぶつかり折れ曲がっていた。舌打ちを耳にし、ジェーンは上方へ逃れようとする霧に銃弾を撃ち込む。散った影、そこからヴラドの顔が覗いていた。
「効いてねえのかよ！」
一はジェーンの前に立ち、声を荒げた。

ヴラドは獲物を見定めた。彼の狙いはジェーンだけだったが、戦闘になれば一とジャネットも邪魔になる。二人の力はまだ不明だが、ジェーンの武器、戦法は痛いほど身に染みていた。
傘を持った一。旗を持ったジャネット。どちらがうるさくなるのか、それは交戦中に見極めようと判断した。
ヴラドは影を操れる。付け加えるなら、彼は己の肉体を影に変化させられるのだ。その影は針にも、杭にも、霧にも、コウモリにも変えられる。青髭からもたらされた異能、ヴラドは既に自分のものとしていた。
尤も、その能力自体は初めから彼に備わっていた。青髭はそれを強化しただけに過ぎない。
動く。ヴラドは影に身を沈めていく。銃弾に撃たれるが、既に肉体は実体をなくしていた。ダメージは受けていない。
「下、注意して！」
ジェーンが叫んだ。一とジャネットは周囲を忙しなく見回している。ヴラドはほくそ笑んだ。溶かした体を影に変えて伸ばしていく。闇の中ではその動きも見えづらい筈だ。狙うのは一。彼を串刺しにして戦意を削ぐ。
「お兄さん、そっち」

「俺ぇ！？」
一がその場から飛び退いた。彼は注意深く地面を観察する。僅かに蠢くモノを確認して、顔色を変えた。
ヴラドは驚愕する。動きを捉えられた事に対してではない。ジャネットはこちらを見ていなかった。別の方に顔を向けたまま指示を出したのである。勘が優れている、読みが鋭い、だけでは説明がつかなかった。だが、やり方は他にもある。
「もぐら叩きじゃねえんだぞっ、さっさと出てこい！」
標的を変更する。一つから二つに増やすのだ。一とジャネットを同時に攻撃すれば、彼女も予測が難しくなる。右手を杭に。左手を杭に。それぞれ二人に向けて伸ばしていく。だが、
「お兄さん、ジェーンの方に」
「またかよ」
また、読まれてしまう。それでも、ヴラドは杭を突き立てた。ジャネットはその場から一歩だけ後退する。必要最小限の動作だった。二本の杭は空を裂く。ヴラドが、これは厄介な相手だと認識した途端、彼女は何を思ったか、旗を振りかぶった。彼は急いで影を戻す。ジャネットのフルスイングは空振りに終わったが、ヴラドは異様なものを感じ取っていた。

「……ラグがあったわね」
ジェーンはリロードを済ませると、消えていく影をじっと見つめていた。
「二本同時とかあんなん反則だろ。どうすりゃ良いんだ」
「私がいるよ？」
ジャネットは不思議そうに一を見遣る。彼は低く唸った。
「見えてんのか？」
「んー、それもあるし、聞こえてるの」
一は追求を避ける。事実、ジャネットの指示は正確で、二度も救

われているのだ。
「ねえ」ジェーンが無防備に歩いてくる。
「馬鹿、危ないって」
「シャラップ。ジャネット、アナタ、知ってたの？」
「ん？」
「フラッグでアタックしてた」
ああ、と。一はジャネットの行動を思い返す。
「避けられちゃったけど」
「……シャドウはヴラドなの。だから、シャドウにはアタックが出来る」
「はあ？　や、それってアレか、体を影に変えられるって事か？」
「アラ、ニノマエにしては物分かりがいいじゃない」
一は僅かに顔をしかめた。
「前、立花さんたちが『館』の魔女と戦ったんだけど、似たような力を使う奴がいたんだってさ。その子は、体を刃物や縄に変えられた」
「ヴラドもマジックを使うのカシラ」
「さあな。つーか、そんなん知ってたんなら先に言えよ。前に戦ったんだろうが」
責めるように一は言う。ジェーンは睨み返そうとしたが、その表情は曇っていた。
「合ってるかワカンナイし、あんまり覚えてないもん」
「ああ？」
「……月が、出てたから」
今度は一の表情が曇った。彼は謝罪の言葉すら口に出せなかった。
「それより、アタリっぽいヨ。見てなかった？　さっきのクイ、ジャネットのフラッグからエスケープしたみたいだった」
「タイミングの問題じゃねえのか？」
「二本同時に消えたならそうかも。けど、お兄さんを狙った影はすぐには消えなかった」

一は考え込む。どちらにせよ、やれる事はないに等しかった。
「殴っても良さそうだったな。試してみよう」
「言われなくてもそうするワ」
「あー、そうかい」

ジャネットが指示を飛ばす。一とジェーンは彼女に従い、攻撃を回避していた。しかし、ヴラドは杭を出さない。突き出しても、すぐに消してしまう。一たちが気付いたように、彼も自らの弱点に気付いているのだ。

ヴラドの能力は肉体を影に変え、その影を別のものに変えるという、二つの行程を要している。霧やコウモリになれば攻撃は殆ど食らわない。だが、彼もその状態では攻撃出来ない。ヴラドの攻撃手段は、変化を影の段階で止めて、それを針や杭状に固めて相手を貫くというものだ。ただし、影は実体。相手に触れて攻撃する。即ち、相手もヴラドを攻撃出来るのだ。

「あっち」「こっち」に一たちは移動を繰り返す。彼らはまだ確証を得られていなかった。

ジェーンは少ない記憶を掻き集める。自分が、いかにしてヴラドを退けたのかを。満月の晩、間断なく放たれる影の杭。断片的には映像が甦る。しかし繋がらない。嬲り殺しにされるのはごめんだと、背後から突き出ていた影に銃口を向ける。影は霧と化し、掻き消えた。

「次はっ」

一が問うとジャネットは首を横に振る。ヴラドが間を空けてきたらしい事に気付き、彼は考えをめぐらせた。何故、ヴラドは一息に仕掛けてこないのか。杭や針は一度の攻撃で一本だけしか出せない、事はない。彼がその気になればもっと多くの杭を出せるのだろう。そうしないのは、自分たちの予想が当たっているからではないか。

一は口の端を歪める。

「お兄さん後ろにっ」返答する暇はなかった。ジャネットの声に弾かれるようにして、一は地面を転がる。微かに、漆黒色の霧が視界に入った。立ち上がりながら振り向くと、霧が蠢き別の何かに姿を変えようとしている。彼はアイギスを広げた。中空から、十を超える数の針が飛び出す。それらは強固な盾にぶつかり、先端から砕けて折れた。ばらばらになった破片は地面に溶け、杭となる。次々と出現する黒い杭は、後退りする一を追い掛けた。

「きたっ」ジャネットが、旗を掬い上げるようにして振るった。一を狙っていた杭にひびが入る。もう一発、彼女は得物を逆さに持ち、ひびが入った箇所へ叩きつけた。固まった影は砕け散り、残りの影も逃れるように霧となる。しかし、ジェーンが銃弾を撃ち込んでいたため、何本かは霧になる前に壊れている。

「通ってる！」

一はヴラドのものであろう呻き声を聞いた。やはり、通る。攻撃は通るのだ。影は消えて、一たちは三人で固まり、祭壇と向かい合う。それぞれが違う方を見て警戒を怠らない。

「ほっほ、流石。わしが手を施す前とはいえ、一度はヴラドを敗っただけはある」

鉄塔から、男がゆっくりと歩いてくる。白い外套を羽織った老人は、

「お前が……っ！」

年端もいかぬ少年の首に刃物を触れさせていた。彼は場に凝る異様な空気と、突き付けられた冷たい感触に怯え切っている。

「そこのは初めましてじゃな。そして狼のお嬢さん、お久しぶりと言っておこうか。わしの名は……」

「青髭」ジャネットが割り込んだ。青髭は不機嫌そうに顔をしかめる。

「名乗るのすら待てんか、粗暴な輩め。頭の悪い女子は嫌いではないがなあ」

「お礼を言うワ。アタシの前に来てくれてありがとう」

ジェーンは青髭に銃口を向けるが、彼は少年を盾にする。
「ここで命をくれてやるのもやぶさかではないが、年寄りの話には付き合って損がないぞ」
「……話だと？」
青髭は何度も頷いた。彼の前に、霧が現れる。ヴラドが二重の盾となったのだ。ジェーンは銃こそ下ろさなかったが、どこか諦めたような目をしている。
「さよう。ここでやる事も一段落つくのでな。わしの、一先ずの結果、集大成を御覧に入れたい」
ジャネットが一歩前に出る。
「天使様はおっしゃった。あなたを生かしておくのは良くないと」
「む、そうか。先の者たちの連れ合いか。急かずともよいよい、後は追わせてやるからのう」
一は押し黙る。目の前の老人が青髭で、すぐにでも殺してやりたい相手だと言うのに、彼は動けなかった。少年が人質に取られているからではない。青髭から放たれる重圧に呑まれ、押されていたのだ。同様に、ジェーンも行動に移せていない。唇を噛み締め、青髭を睨みつけるだけだ。
「どこから話したものかなあ。『円卓』に籍を置いてから、ジェーン＝ゴーウェストを狼にし、ヴラドをいじり、ここに来た。いや、中々にスムーズな、今となってはそんな気がするなあ」
取り留めもない話。尤も、と、青髭は前置きする。
「大して意味のない事柄ではあったが」
ジェーンが声を上げた。獣のようなそれは悲痛極まるものである。マズルフラッシュ。人質を無視した発砲は、ヴラドが作った杭によって防がれた。
「ほう、激情を伏せておっただけか。所詮、けだもの。つまらんわ」
今にも飛び出していきそうなジェーンを、ジャネットが押さえる。
「今宵は満月。しかし、目を見張るような成果は得られそうにないのう。娘、そこで死ぬのを許す」

「それは困りますね」
「かっか、そうじゃった。ヴラド、わしへの義理は果たしたぞ。好きに仕掛けい」
「いえ、ゲヘナから王が来たるまでは」
ゲヘナ。王。一は思惟する。何か、嫌な予感がしていた。いなくなった子供。殺された『広場』。まだ、何も始まっていないような気さえしてくる。
「わしら以外に観客がいないようでは締まらんし、つまらん。事が終わるまでは生かしてやる。だから、黙って見ていた方が賢い。そうは思わぬか、若いの」
「……あんた、何をするつもりなんだ……？」
「じき、分かる」
青髭は手に持った得物を見つめた。西洋の剣、レイピアである。それを片手に握り締めたまま、懐から書物を取り出した。一は呻くように漏らす。
「魔導書……！？」
黄衣が所持していたものとは違うが、一は、青髭の本からも同種の異質な気配を感じ取っていた。
「ほう、一目で。その目が曇らぬのを願うばかりじゃなあ。……ツテがあってな、古今東西の魔導書は読み終わり、その内容はここに入っておる」
青髭は自分の頭を指差す。場にそぐわない、おどけた仕草だった。
「これは『ルルイエ異本』。旧い知人からの贈り物でな、今回の召喚には使えんが、お守りのようなものとして持っておる」
召喚。王。ゲヘナ。一は困惑する。青髭のやろうとしている事を想像し始めているのだが、信じたくない気持ちも残っていた。
「ヴラド、近づかせるなよ」
「……全く。面倒な人ですね、あなたは」
霧が晴れ、影が蠢く。ヴラドが姿を見せて、静かに笑っていた。
「おい」言い知れぬ悪寒。一は足を踏み出す。

「止めなきゃ」
「……お兄さん、どうしたの？」
アイギスを広げて、一は駆け出した。自分の意志かどうかも分からない。
ヴラドが右腕だけを霧に変える。杭のように固まったそれは一を狙って投擲された。彼はアイギスで攻撃を防いだが、体勢を崩してしまう。立ち止まった彼は的にしかならない。ジェーンとジャネットはヴラドの意識を散らす為に疾走する。
ろくに狙いもつけられないまま、ジェーンが青髭へ銃撃。ヴラドは彼の盾となるべく、影の柱を後方に作った。その内の一本に流れ弾が当たる。
「Ｄｏｎ'ｔ　ｍｏｖｅ！　何やってんのバカっ！」
「俺は良いからあいつを！」
青髭が何気ない動作で腕を振るった。少年の首が裂け、温かな血液が噴き出す。彼は虚空に手を伸ばし、助けを求めようとして口を開いた。漏れたのは声ではなく、血である。ごぼごぼと、気味悪い音を立てていた。
一たちにそれを止める時間はない。少年を救う手立てはない。彼の生命は今も尚、地面に流れ、滴り落ちている。
「ほれ、これが欲しいんじゃろう」
青髭が少年の髪の毛を掴み、祭壇に押しつけた。彼の神経は痛みと、熱によって焼き切られようとしている。口内から迸る絶叫と泡立つ血液。その血が、牡牛を模した祭壇に伝わり、流れ、染み込んでいく。
「足りぬか悪魔よ！　いやさヘブライの王よ！　どうした、はようゲヘナから来たれっ！」
「邪魔だ退けっ」
一が眼前にそびえ立つ影に向けてアイギスを振るった。影がひび割れて、ジャネットがそこに追撃を仕掛ける。黒い杭は完全に砕け散り、ヴラドは短く呻いた。空いた隙間にジェーンが飛び込むが、

彼女の前方に新たな杭が現れる。一たちと祭壇まで、もう距離はない。後少しで手が届く。

「ジェーン右から行って！」

「おおっ人狼の娘よ、私を無視すると言うのか」

「青ヒゲ――――っ！」

影の杭、その間を擦り抜けたジェーンは祭壇が弾け飛ぶのをいち早く目撃した。

牡牛を模した祭壇が弾けていく。未だ熱を持った破片は周囲に散っていく。誰が上げたか悲鳴が聞こえる。そして聞こえる、青髭の嬌笑が。

炎が揺らめく。その下から、異様な気配を纏った何かが顕現する。瞬間、今まで絶えなかった火が掻き消えた。辺りは一面の闇に閉ざされる。しんと静まり返った空間が圧縮されていくような感覚を受け、一はその場に蹲っていた。

「おう、おおう……」

「これが……」

炎が、吹き上がる。煌々とした、暗い輝き。ジャネットが目を見開く。ジェーンは少しずつ後退りしていた。彼女は展開された状況を信じられないでいる。一は既に声すら上げられなかった。

それは、地獄の底から現れた。その姿、王冠を被った牡牛である。上半身の筋肉は発達しており、二足歩行の牛頭人身。だが、下半身は見えない。腰から下は炎が包んでいる。それでも、苦痛に感じる素振りを見せていない。上半身だけだが、牛頭人身の怪物は一よりも、ヴラドよりも大きかった。

「――――――――！」

この世のものとは思えぬ声が放たれる。周囲に響き渡るそれは産声か、あるいは怨嗟か。ぎょろりとした目を動かし、それは再び口を開く。

『我を呼び出したのは、貴様か』
腹の底まで響くような、それでいて不快な声だった。一は耳を塞いで、怪物と青髭に目を向ける。
青髭は怪物の問いに対して大きく、ゆっくりと頷いた。彼は涙を流している。ない混ぜになった感情が、青髭の顔を醜く歪めていた。
「王よ、涙の国の君主よ、わしの願いを、どうか、どうか……」
王と、そう呼ばれた怪物は腕を組む。
「……は、ぐっ……」
押し潰されそうな圧迫感、一は思い出したかのように息を吸う。
その時、ジェーンと目が合った。彼女は自らの得物を握れてはいたが、その手は小刻みに震えている。
「やるなら、今しかない」
ジャネットは唾を飲み込み、歩きだそうとした。が、彼女の周囲には薄い霧が立ちこめている。
「動けば殺す。今はただ、あの方の夢が叶う瞬間を黙って見ていろ」
「ジェーン」ジャネットは旗を持っている側の手を少しずつ下ろし始めた。
「撃って」
ジェーンは答えなかった。
「今やらなきゃ、私たち……」
――――殺されるのか。
一は目を瞑る。動けば死ぬ。だが、今動かなければ、取り返しがつかない、そんな事態に陥るのだとも分かっていた。
「……何故、何故答えない」
一たちの存在は、青髭の視界、意識からは外れている。彼は怪物に縋るように、媚びるような視線を向けていた。
『……足りぬ。見ろ、我を。このような姿を完全とは言えまい』
「ぬう、やはり血が薄いか。ならば、食らわせてやろう。浴びさせてやろう。下賤と言えど千の肉を食らえば、万の血を浴びれば完全体となりうる筈じゃあ……」

『そこまでして何を望むか』
青髭は両手を広げ、天を見上げる。
「神は死んだ。このような世界見たくもない」
『世界を？　過ぎた夢を持てば潰されるが必定。……しかし、召喚者に従うも我の定め』
「では殺せ、幕は下りた。居残る客は無粋の極み」
狂った双眸が一たちを捉えた。怪物は頷く。
『契約は成った。この身が完全になった暁には、我の力で貴様の世界を焼くとする』
「ほっ、ほっほう！　ヴラド、ヴラドっ、見たか成ったぞわしの悲願が！」
影を回収したヴラドは感慨深そうに、胸に手を当てた。
「では、私も私の為に動くとしましょう。……そういう事だ、勤務外。勤務外、ジェーン＝ゴーウェスト。貴様の肢体、貫く時が来たらしい」
「なっ……！？　てめえやらせるかよ！」
一の体に力が戻る。怒りを糧にしたそれは、彼の四肢を奮い立たせていた。
しかし、一が動く前に事態は進展していく。青髭が鉄塔へと引き返し、ヴラドと怪物が一たちの行く手を遮ろうとして立ちはだかっていた。
「ジェーン、やるんだろうが！」
ジャネットに寄り添っていたジェーンは、彼女から離れて一を見返す。
「やるから、下がってニノマエ」
「ああっ？」
「下がれって！　言ってんの！」
ジャネットは困ったように頭に手を遣る。
青髭はまだ何かするつもりで場を退いた。追わなければならないが、ジェーンを狙うヴラドと、青髭に呼び出された怪物がそれを防

ごうとするだろう。ジャネットが目的を達するには彼らを避けるか、退けるか選ぶ必要がある。

「……青髭を殺さなきゃ」

その言葉には一が反応した。

「ちょい待てって、こいつらだってほっとけない」

「私は青髭を……」

「後ろからざっくりだぞ！？」

「お兄さんがどうにかして」

「無理だろそれ！」

「ひっこんでてよニノマエっ、社員命令！」

「ふざけんなよてめえら！」

王冠を被った牛の頭に、全身を炎で燃やした怪物は目を瞑り、そして、一たちを見下ろした。青髭の召喚に応じたそれは、モロクと呼ばれる悪魔である。ヘブライ語では王を意味するその名前、しかし、悪魔となったモロクに王たる器はない。悪魔の中でも最も残忍とされるモロクは涙の国の君主とも、母親の涙と子供たちの血に塗れた魔王とも呼ばれている。

モロクは、王たる者に魔力を以って農耕の収穫を保証し、力を与えた。だが、モロクの魔力の源は人間の命と、血液である。悪魔は利益を守るその代わりに生贄を要求するのだ。生贄として求められたのは有象無象の輩ではない。王権を継ぐ者の第一子である。

生贄の儀式ではシンバルやトランペット、太鼓などが盛大に打ち鳴らされ、親たちは子供を猛火の中に投げ入れる。子供たちの泣き叫ぶ声は、周囲の大音響によって掻き消された。

儀式が行われていたのはエルサレム郊外に位置するヒンノムの谷、ヘブライ語でゲーヒンノームと呼ばれた地である。この地で生贄を捧げる習慣がなくなった後、モロクを祭った祭壇は捨てられ、忘れられ、荒れ果てていった。やがてここでは罪人や浮浪者の死体がご

みとともに燃やされるようになり、そこから立ち込める悪臭と煙が地獄のイメージを掻き立てたのである。

ゲヘナ。

その名が地獄と同義語に扱われるのに、さほど時間は掛からなかった。

悪魔は確かに、駒台の地に召喚された。未だ不完全ではあるが、一たちにとっては脅威となるだろう。

――――ここは、ゲヘナか。

モロクは己に問い掛ける。まだそうでなくても、ここを地獄と化す為に呼び出されたのだ。いずれはそうなるのだろう。彼は獲物を見定めて、軽く拳を振るった。

何が何だか分からないままに戦うのはいつもの事だ。
誰が敵で誰が味方なのか判断するのはいつもの事だ。
神がどうした。天使がなんだ。悪魔が来たって口笛を吹いてみせる。
「……そうしてきたじゃねえかよ」
一は自分に言い聞かせるようにして呟いた。
青髭。ヴラド。モロク。ジェーン。ジャネット。誰もが動く。好きに動く。一はふざけるなと声を上げそうになる。誰を優先すべきか、必死で頭を働かせる。鉄塔に戻る青髭か、ジェーンを狙うヴラドか、正体の分からないモロクか、ジェーンを助けるのか、ジャネットを守るのか。
堂々巡りの思考は、モロクの一発によって吹き飛ばされる。
「お兄さんっ」
アイギスを広げていたが、攻撃を受け止める自信はなかった。風切り音。一は急いで距離を取る。破砕音を耳にして、アスファルトが溶けるのを確認する。モロクの拳には炎が纏っていた。ソレは気だるげに顔を上げ、一を見据える。
狙うべきは青髭か。一は息を吐き出してジャネットを見遣る。
「俺がこいつを。ジェーンがヴラドを押さえる」
「分かった」
選択肢は他になかった。自分が何を言ったところで、指示に従う彼女たちではない。一はモロクを睨み返した。
ジャネットが地を蹴った。その動きを、ヴラドとモロクが認める。

モロクの下半身は顕現していないが移動に支障はない。ソレが彼女に迫るが、一がアイギスを突き出しながら割り込む。彼はモロクの振り下ろした拳を防ぎ、ジャネットの前進を援ける。

しかし、簡単には進めない。モロクを避けても、ジャネットの前方には次々と影が現れていく。彼女はその攻撃を全て回避していたが、後方からモロクが追いついてきた事に気付いた。

『ここが地獄か』

振り返ったジャネットは、一が膝をついているのを確認する。

ジャネットは、一の持つビニール傘が女神から受け取ったアイギスだと知らない。モロクの攻撃をどうやって防いだのか、何故、彼がまだ生きていられるのかを知らない。一の死について、神は何も言わない。だから、考えない。今はただ、青髭を追う事だけを考えようと努めた。

迫るモロクは右腕を掲げる。その腕に、炎が意思を持ったかのように巻きついていった。ジャネットは得物に目を落とす。彼女がそれを上手く扱えても、ただの旗で炎は防げない。

「地獄なんて、この世にない」

炎が、モロクの腕から放出される。更に、ソレは自らも炎の後に続いた。

熱を伴った風を受けて、ジャネットは目を閉じる。逃れられないからと腹を括ったのではない。彼女は、旗を振ったのだ。瞬間、突風が巻き起こる。ジャネットに飛来していた炎はそれに巻き込まれ、飲み込まれる形で呆気なく消失してしまった。

異常な事態を目にし、モロクは足を止める。風が消え、火傷一つすら負わなかったジャネットがそこに立っていた。

そう、防げない。ただの旗では防げない。

『貴様、何をした』

「私の旗は聖なる御旗。悪魔の炎では私を焼けない。私には、神様も、天使様もついているから」

だからどうした。そう言わんばかりにモロクが距離を詰める。ジ

ャネットは身構えたが、彼女に攻撃が届くよりも早く、一が再び割り込んだ。彼は頼りなさそうなビニール傘で、悪魔の拳を受け止める。その衝撃で鈍い音が鳴り、火の粉が飛び散った。

「お兄さん、それ……」

「良いから行けって！」

『動くな』

モロクが左腕を掲げる。動き出そうとしていたジャネットの横を巨大な火の玉が擦り抜けた。着弾したそれはアスファルトを溶かしながら緩やかに消えていく。

一がアイギスを手元に戻した。モロクは僅かに体勢を崩し、彼はジャネットの前に立つ。

「どうして、そんなので防げるの？」

「はあ？　や、これはただの傘と違って……言ってる場合かよ。さ、早く――――うおお！？」

火炎の弾がアイギスに降り注ぐ。しかし、一はそれを全て防いでいた。後ろ髪を引かれる思いだったが、ジャネットは鉄塔に向かって足を踏み出した。

ヴラドはジェーンの銃弾を、霧になる事で躱していた。同時に、ジャネットに向けて影で作った杭を放つ。彼女は立ち止まり、それをやり過ごした。

「ぐっ……！？」

注意が逸れたところに、ジェーンの的確な射撃が突き刺さる。ヴラドが変化させていない箇所に銀の弾丸が命中していた。彼は傷を負いながらも、杭を飛ばして反撃してみせる。

「我ながら義理堅い……！」

モロクが召喚された今、ヴラドには青髭を助ける理由はない。ジェーンだけに集中していれば良かった。しかし、彼はそれを選ばない。

付け入る隙は充分に残されている。ジェーンはヴラドを無力化させてから青髭を追うのを選んでいた。彼女とて青髭が憎い。すぐにでも殺してやりたいと思っていた。だが、ヴラドを放っておけば背中から杭を突き立てられるだろう。それだけでなく、影を操る彼を野放しにすれば、自分だけでなく一たちにも危害が及んでしまう。未だのぼせ上がった頭だが、ジェーンなりに考えた末の事だった。

ヴラドが霧になって姿を隠す。影と化し、地に溶けたのだろう。ジェーンは息を一つ吐き、走りながら弾を込めていく。一の情けない叫びを聞き、そちらに目を向ければ、彼のすぐ近くにジャネットがいた。どうやら、一は彼女を守っているらしい。自分よりも、彼女を優先したらしい。そう認識した途端、ジェーンの胸は痛む。自分から、下がれ、来るな、と、一に言ったのにも関わらず、だ。

戦闘から意識が逸れそうになる。ジェーンは周囲の空気がぬめり、重くなったと錯覚した。彼女は身を低くして地面を転がる。そのすぐ上を影で作られた杭が掠めた。不安定な体勢から、ジェーンは影を狙って引き金を引く。舌打ちしてファニング。立ち上がって追いかけてくる霧から逃れた。

「……どうやって、勝ったんだろ」ぼそりと呟く。

ジェーンは、以前にヴラドと戦った時の事を思い出せない。何故なら、その時の彼女は月に狂った狼と化していたのだ。本能と衝動に任せて、彼が行動を開始する前、不意打ちが成功したに過ぎない。どうやって戦い、どのように勝ったのか。仮に覚えていたとしても参考にはならなかったのである。

「しぃーっと」

周囲を睨みつけながらジェーンは足を止めた。影の杭が地面から突き出る。が、それは彼女を狙ったものではない。前方にいた、鉄塔に向かおうとするジャネットを狙ったものだ。ジェーンは片目を瞑り、その杭目掛けて発砲する。六発の弾丸の内、半分が命中して影は掻き消えた。一とジャネットはモロクに気を払いながらも少しずつ鉄塔へと近づいている。

青髭が呼び寄せたであろう悪魔、正体こそ分からないが、敵だとは分かっている。すべき事は変わらない。全て、殺すだけだ。

ジェーンはポケットをまさぐって弾を掴んだ。指が少し痛むが、気にしないようにする。今日は体の調子が良い。良過ぎるくらいだった。理由は分かり切っている。月が出ているからだ。気を抜けば、心が持っていかれそうで――――。

掌から弾が落ちる。それが地面を叩いた瞬間、ジェーンは後方へとステップした。影の杭が彼女の目の前に出現し、新たな杭が、ジェーンを追い掛けるように突き上がってくる。彼女は影に対して背中を向けず、銃を構えながら距離を取り続けた。

――――また牛か。

一は両足に力を込めて踏ん張った。モロクの膂力は凄まじいが、全く防げない、敵わないという訳でもない。それはきっと、月が丸いせいだろう。ジェーンと同じく、彼の中でも狼が騒いでいるのだ。声を上げてアイギスを引く。ジャネットを行かせる為に、一は逃げたくなる気持ちを必死で押し殺した。際限なく膨れ上がる恐怖心を掻き消したくて、声を絞りだす。叫んで、再びモロクの攻撃を受け止めた。

一がモロクの攻撃を凌げるのは、青髭の召喚が不完全だったからだ。涙の国の君主と呼ばれるソレの力は、完全な状態の半分以下になっていたのである。それでも、並大抵のソレとは比べものにならない。

「おっ、もてえぇ……！」

振り下ろされるモロクの両腕。だが、一には届かない。アイギスを抜かない限り、彼が致命傷を負う事はないのである。ソレも、一の持つアイギスの力に気付きつつあった。

『ここまで頑丈な人間がいるとは』

モロクは一から少しだけ離れて、火球を生み出す。両の掌から放

たれたそれは空気を燃やしながら対象へと迫った。が、やはり通らない。アイギスにぶつかった炎は形を失い、霧消していく。

『人間も変わったものだ』

「……悪魔に言われたくねえっつの」

言葉が通じる相手なら、会話が可能だ。一は気付かれないように息を整える。細い呼気が中空に立ち上った。

「畜生、いきなり出てきやがって」

モロクさえ現れなければ、自分たちが有利だった。とんだ隠し玉だと、一はソレを睨み付ける。

「地獄に帰れよ、お前」

『そうしたい気持ちもあるにはある。が、呼ばれれば従うのが我の定め。あの男が貴様らの屍を望む以上は……』

一は顔を上げる。その目からはまだ、諦めの色は見て取れない。

「だったら何か、あいつとの契約が切れれば消えてくれんのかよ」

その問いにモロクは反応しなかった。新たに火球を作り出し、無造作に腕を振る。一の足元を狙ったが、彼は腰を落としてアイギスを構えた。火球はまたも消えていく。

一がモロクを押さえているが、ヴラドの影がジャネットの前進を阻んでいた。ジェーンだけでは彼の能力全てを押さえられないのである。

『……慢心』

「あ？」

『なかったと言えば嘘になる。貴様のような者がいるとは想像すらしなかった』

だから。そう呟き、モロクはゆっくりと首をめぐらせる。視線は、ジャネットを捉えていた。ソレの意図に気付いた一は駆け出す。

『貴様は盾だ。守るべき者を背にしているからこそ、貴様は手強い』

ジャネットは杭を避けながらも前に進もうとしていた。先のように旗を振れれば風が起き、炎は防げる。しかし、影の杭が立ち連ねており、彼女の空間を奪っていた。

『それは弱点でもある。盾の意義を失えば、貴様は脆くなる』
「逃げろ――――！」
火球が空を裂いていく。一はそれを見送るしか出来なかった。

ジェーンは見ていた。
一が叫び、モロクが炎を放ったのを。
ジャネットは影の林に囚われて、自由に身動きが取れない様子である。尋常ならざる力で攻撃を避け続けてきたが、あの状況では回避は難しい。炎に包まれれば、彼女とて無傷ではいられない。命すら危ぶまれる。
ジェーンは見ていた。自分が助けに行っても間に合わない。一も間に合わない。しかし、自分たちよりもずっと前に、もっと早く飛び出していた者がいる。
「何だ、あいつは」ヴラドは驚きの声を漏らしていた。
火球に向かって飛び出した者は、ジェーンには見覚えがある。彼とは、一と共に月夜を踊った日に出会った。だが、それよりももっと前に出会ったような、そんな気もしていたのだ。

何とも頼りない。
どうにもぎこちない。
溜め息を吐き、飛び出す時を見計らった。出来るなら、一にはもう少し頑張って欲しいとも思ったのだが、悪魔が現れた以上多くは望めなかった。
「『広場』だったか。嬢ちゃんも交友関係に気を遣えば良いのに」
フリーランスの少女を助ける理由はない。
悪魔と対峙する理由もない。
しかし、そうしないと彼女が痛い目を見る。また、悲しいと涙を流す。こんな、ちっぽけな自分が少しだけ格好つける事で彼女が、

あの子が救われるかもしれないのならば、
「兄貴譲りじゃないか。良く似てる」
理由ならある。その筈だった。だから歌う。月に吠え、牙を突き立てる意味はある。

間に合わない。
一はジャネットに向かって走っていたが、飛び出してきた影に気付いて足を止める。驚きはなかった。ジェーンが出張っていたのだから、やっと来たかと、そんな思いでいっぱいだった。
モロクの放った火球と、ジャネットとの間に割り込んだのは灰色の毛並みをした四足歩行の獣である。一は、彼の名を叫んだ。コヨーテと、その名を呼んだ。
「――――――ッッ！」
唸り声、後、耳をつんざく咆哮が轟く。コヨーテから放たれたそれは火球を消し去った。彼の声には魔力が伴っていたのである。
コヨーテは体を震わせて、低く唸った。それから、月に向かって吠える。彼の勇ましい声に、モロクは動きを止めた。
「……犬……？」
信じられないといった表情を浮かべて、ジャネットはコヨーテを見つめる。彼は、彼女の言葉に耳をぴくぴくと動かす。コヨーテは振り向き、歯を見せた。
「違うね」コヨーテが言う。尤も、彼が何を喋っているのか、ジャネットには分からない。
「ミーは犬じゃない。誇り高きコヨーテさ」
それでも、コヨーテは口を開くのだ。
「お……ニノマエっ、そっちに！」
霧になったヴラドが一たちを擦り抜けて、鉄塔前に立つ。モロクは鼻を鳴らして、拳を振り上げた。アスファルトが砕けて、その音に全員の注意が向く。その隙に、ソレはヴラドの横に並んだ。

「仕切り直しだぜリトルボーイ、下がった方が良い」
「だな」頷き、一はジャネットの手を引いて下がり始めた。ジェーンが彼らに合流し、一の手をジャネットから乱暴に振り解く。
「さわんない方が。変なモノが移っちゃうヨ？」
「ジェーン、怪我は？」
「ン、オールオッケー。そっちこそ、問題ない？」
ジャネットは小さく頷いた。
仕切り直し。
一は、青髭の盾であるヴラドとモロクを見据えた。コヨーテが参戦して、数の上では有利に立てている。これからだ。ここからだ。息を整えて、アイギスを握り直す。
「……お兄さん、この犬、何？」
「へ？」
ジャネットは、自分たちよりも前に出ているコヨーテを指差した。彼は不満そうに鼻を鳴らす。
「ヘイ、リトルボーイ。そっちの嬢ちゃんに教えてやったらどうだい。ミーは犬じゃなく、最高にクールなコヨーテだって事をさ」
「ああ、こいつは、通りすがりの野良犬だよ。暇だから助けてくれるんだってさ」
「がるるるるっ、おいこらっ」
「すごい。お兄さん、犬と話せるの？」
「神様の声は聞けないけどね」
尚も、コヨーテは文句を言い続けた。わんわんわん。
「……カィ、ううん。ニノマエ、その子って、あの時の」
まだ、ぎこちない。ジェーンの口から一と聞かされる事に、彼はまだ慣れていなかった。
「覚えてたか」
「おのろけナガラ」
「おぼろげだろ。……そうか、覚えてたか」
「何か言ったカシラ？」

一は首を横に振り、二人と一匹に視線を遣った。
「さあ――――どうしようか？」
二人と一匹は冷めた目で一を見つめる。
「アタシは青ヒゲを狙うワ」
「私も青髭を」
「ミーは嬢ちゃんを助けに来ただけだからな。任せるよ」
協調性のない奴らめ、と。一は溜め息を吐き、状況が、先ほどと何も変わっていない事に気付いた。
「あいつらのやり方を考えたら、俺が悪魔と当たるのは確定だと思う」
「ヴラドには誰が行くの？」
一は言葉に詰まるが、済まなさそうにジェーンを見る。
「……ジェーン、頼む。一度戦ってるし、だから」ジェーンが青髭に復讐したいと思っているのを、一は知っていた。しかし、彼と戦わせたくない気持ちがある。十中八九、どちらかは死ぬのだろう。
ジェーンは、青髭を殺すだろう。
「アタシに命令？　バイトのくせに」
「……リトルボーイ、嬢ちゃんはご立腹だぜ。ちゃんとエスコート出来なかったのか？　良いか、男ってのはな」
「俺たちが青髭を狙うのは、邪魔者を退かしてからだ」
「……たち？」
ジェーンは小首を傾げる。
「ジャネットが先に青髭を。俺たちはそれを助ける」
「良いの？」
「君は俺の……いや、人の言う事なんか聞かない。だろう？」
何も言わず、ただ、ジャネットは微笑む。その笑みが何故だか寂しそうなものに見えて、一は頭を振った。
「文句はないよな」
「アタシ見ながら言わないでよ」
「気のせいだ。じゃ、やろう。ジャネットは後ろに。モロクは俺が。

ヴラドはジェーンが。皆、影には気を付けて」
頷き、ジャネットはジェーンの後ろに。一が前に出ると、彼の隣にコヨーテが並んだ。
「……ヘイヘイ、ミー、意外と馴染んじまったな」
「確かにな」小声で話し掛けられたので、一も同じようにして返した。
「でも、説明してる暇はない。つー訳で、久しぶりに助けてもらうぜ」
「あくまで、ミーは嬢ちゃんを助けるのが目的だ」
「じゃあ、お前はヴラドをやるんだな」
いや、と。コヨーテは首を振る。
「見誤ってるぜリトルボーイ。ヴラドって陰気野郎は嬢ちゃんだけでも事足りる。ほら、だってこんなに月が丸くて、良い夜なんだ」
「やばいのは、あいつか」
「……悪魔、か。ミーも本気出さなきゃ、食われちまいそうだよ。ユー一人じゃ荷が重い相手だ」
いつも軽口ばかりのコヨーテが真剣に言うので、一は心細くなる。
「ま、始まったらなるようになるさ」
「気楽な。もっとさあ」
「おっと、それ、広げな」
轟音と熱が迫っていた。広げたアイギスで火球を防ぐと、一は声を荒げる。が、彼が何か言うよりも先に、他の者は行動を開始していた。

自重気味に笑う。ジェーンたちと共闘するのは成り行きだ。本来なら、ジャネットは彼女を戦闘に巻き込むつもりはなかったのである。この状況を、神は教えてくれなかった。しかし、結果は変わらない。神が見せた結末は動かない。
「勝手に動くなよ！」

一が何か喚いている。ジャネットは彼の命令に従う気はない。彼女に指図出来るのは、語り掛ける天使の声だけなのだから。だから、ジャネットは火球を掻い潜り、影の杭を避けながら進む。時折、銃声が耳をつんざいた。

「邪魔をする」ヴラドはジャネットに的を絞っている。彼女が影を避ける為に動きが止まったところを、モロクが襲い掛かった。

「後ろって！」

一がジャネットを下がらせる。彼はアイギスでモロクの腕を受け止めた。はた目で見ていても、ソレの腕力は凄まじい。まともに食らえばただでは済まないだろう。それでも、一は退かなかった。

「隙は作るっ、俺らが押さえる！」

「下がったら進めない」

「二歩下がって三歩進めば！」

一がモロクの攻撃を斜めに受け流す。ソレは空いていた腕で炎を生み出すが、飛び掛かってきたコヨーテを躱そうとして後ろに下がった。

「右から行かせろリトルボーイっ」

「おっしゃ」一が指示するよりも早く、ジャネットは空いたところへと、身を滑らせるようにして駆ける。炎の渦が見えたが、コヨーテの声がそれを消し去った。

「声、すごい」

「ジャネット！」

ジェーンが走ってくる。彼女の前を霧が漂っていた。一瞬、そこからヴラドが顔を覗かせる。十を超える串が飛来するのを見て、ジャネットは旗を振るった。すると、モロクの火を掻き消した時と同じく、どこからか突風が巻き起こる。

「鬼に私は裁けない」

串は勢いを失い、次々と地面に落下していった。ジェーンがジャネットを庇うように立ち、即座に発砲する。霧は散らばり、アスファルトへ染み込むようにして溶け始めた。

「下から」
ジャネットがジェーンを突き飛ばす。刹那、彼女らのいた場所の真下から、影の杭が生えてきた。
「サンクス」
「あ、右」ジェーンは慌ててその場から飛び退く。
「しつっこい！」
「ならば貫かれろ」
体勢を崩したジェーンへと、漆黒の杭が襲い掛かった。頭を狙ったそれを、彼女は身を低くして回避する。続け様に放たれた串は、地面を転がる事でどうにか躱せていた。
「ジェーン、立って」
「先に行っててっ」
思案する。放っておけなかった。ジャネットはジェーンの柔らかな手を掴み、強引に立ち上がらせる。それから、彼女の手を引いて走りだした。
「アタシはだいじょぶだからっ」
「服、汚れてる」
「ソーユー場合じゃ……」
ジャネットは急に立ち止まる。ジェーンは彼女の背中に鼻をぶつけた。ジャネットが立ち止まったのは、モロクの火球が迫ってきていたせいである。彼女はそれを旗で防ごうとしたが、
「うわ」
離れたところで、一が横っ飛びで突っ込んでいた。ジャネットたちを狙った攻撃は、彼がアイギスで防御している。一はすぐさま立ち上がり、コヨーテに続いてソレに向かっていった。
「何よアレ。クールじゃない」
「嘘ばっかり」
微笑ましい。羨ましくもある。ジェーンたちを傷つけたくない。
一刻も早く、終わらせる必要があった。ジャネットはマフラーを口元に持っていく。

一たちは必死でモロクとヴラドを押さえていた。しかし、炎と影、その全てを防げる訳ではない。ある程度はこちらにも向かってくる。青髭までは、酷く遠かった。

「ジェーン、お兄さんの方に」

ジャネットはジェーンの手を離す。

「そんな、一人じゃ危ない……」

「平気。聖女様もついてるから。それより、そこ危ない」

一が防げなかった火球が飛んできていた。ジェーンは距離を取り、離れた位置からそれを見送る。ジャネットは動かず、ぼそぼそと、何事かを呟いていた。

「聖カタリナ、アレクサンドリアのカタリナ様。どうか私に道を、道を示してください……！」

「ジャネット！？　何やってるの！？」

ジャネットは目を瞑り、手を組んでその場に跪いている。ジェーンが叫ぶのも無理はない。ヴラドの放った杭と、モロクの炎がジャネットに接近していたのだ。

「道を、道を見せて！」

瞼をより強く閉じる。ジャネットの脳裏に強烈なイメージが浮かび上がった。壊れた車輪、剣、足下の王冠、霰、花嫁のヴェールと指輪、鳩、鞭、本、何者かと論争する女性。焼きついたモノが彼女の真っ暗な視界を奪い尽くす。目を開ければ、釘打ちされた中世の車輪が独りでに転がっていた。

「あ、これが」

ジャネットは立ち上がり、車輪の後をふらふらとした足取りで追い掛ける。彼女の背中を火球が掠めて、杭は空を切り裂いていった。

「道。私の、道」危なげな歩みだが、ジャネットは決して止まらない。そして、何者にも阻まれない。車輪が右へ揺れれば、彼女も体を右に反らす。前を行く車輪が速度を上げれば、ジャネットもそれを追い掛けようとして走り出す。そうして、全ての攻撃を避け続けていた。が、彼女には何も分かっていない。自分を導くように転が

る車輪しか見えていなかったのである。
　このままでは鉄塔まで、青髭まで辿り着かせてしまう。ヴラドとモロクがジャネットを追ったが、一とコヨーテがモロクを。ジェーンがヴラドの足を止めさせた。
「……抜けた」
「ぬう……」青髭がジャネットの姿を認める。彼はヴラドたちを叱責するべきか迷ったが、怒りの矛先は彼女に向けようと思い直した。レイピアを握り、踊り場でジャネットを待ち構える。
　ジャネットが青髭を見上げた。視線をずらせば、彼女の視界からは車輪が消えていた。

MIGHTY BLOW

鉄塔に備え付けられた階段を上るジャネットを見て、一は思った。最初からそうしろ、と。

「ありゃ、何だ？」

「……ミーにはさっぱりだけど、あの嬢ちゃん、何か見えてたみたいだな」

「何かって、何だよ？」

コヨーテは首を横に振る。

「さてね。けど、まずは目的達成ってところか」

「あの子、青髭を殺してくれるのかな」

「ん？　何だって？」

「何でもない」と言い切り、一はヴラドと、モロクに目を向けた。ジャネットは青髭に辿り着いたが、自分たちは、まだだ。彼らを倒さない限り、前には進めないのだろう。

ジェーンは頭に手を遣り、困ったように笑う。

「何笑ってんだよ」いつの間にか傍にいた彼女に、一はぶっきら棒な口を利いた。

「笑ってナイ。それより、あのデビルはよろしく。アタシは……」

言い掛けるより先、ヴラドが影の杭を放った。一たちは左右に分かれて攻撃を避け、それぞれの標的に向かって走りだす。

一はアイギスを広げながらモロクに向かう。コヨーテは彼のすぐ後ろにつけていた。ソレは火球を飛ばすが、一が立ち止まって防ぐ。

「はっ、はぁ！」

コヨーテの前の地面が爆ぜた。彼はじぐざぐに走って的を散らす。モロクは近づいてきたコヨーテに対して拳を振るった。しかし、その攻撃は空振りに終わる。

「遅いぜノロマっ」
　爪で切り裂こうとして、コヨーテは地を蹴った。モロクに飛び掛かるが、ソレは後ろに引いて躱す。着地したコヨーテはすぐさま反転、再び飛び掛かる。モロクは彼を払い除けようとして腕を振るったが、一が横合いから割り込んだ。凄まじい衝撃が彼の全身を突き抜ける。それでも一は踏み止まり、アイギスがソレの攻撃を受け止めている。
　コヨーテがモロクの腕に噛み付いた。ソレは彼を振り解こうとして、むちゃくちゃに腕を回す。一はその隙に距離を取る。
　コヨーテの牙がモロクから引き抜かれた。彼は宙で弧を描き、一の傍へ四つん這いになって降り立つ。
「慌てるなよ、まだ始まったばかりじゃないか」
「予定が押してる。野郎を招待した覚えはねえんだ」
「へえ？　お茶会の席は埋まってるらしい。なら、ジャバウォックにはお帰り願おうじゃないか」
　言うと、コヨーテは体を震わせる。
「失せな。半身だけでミーたちをやれると思わない方が良い」
『我を誰だと思っている。この体でも充分だ』
「名前を聞き出せ」一が囁き、コヨーテは我が意を得たとばかりに頷いた。彼は一よりも前に出て、口の端をつり上げる。
「はっは、低級の悪魔が吠えるなよ。こっちの世界は初めてかい？　緊張しなくても良いんだぜ」
　軽口には答えず、モロクは掌に炎を集め始めた。コヨーテが吠えると、その炎は微かに震えて、散々になっていく。
「チープなライターだ。ユー、何のつもりだい」
『けだものめ。我を嘲るか』
「黙りなネームレス」鼻で笑うと、コヨーテはモロクを見据えた。
「いや、名前があったとしても聞きたくないね。安い名前なんだろ？　時間の無駄だぜ、そう思わないか、リトルボーイ」
　一は何も言わない。だが、モロクを煽るように小さく笑っていた。

『哀れだな』
モロクは両腕を掲げる。その間から、新たな炎が生まれていく。
熱気を感じて、一は後ろに下がった。
『格と差を弁えろ』
先刻よりも巨大な火球が現れる。それを消し去るのは無理だと悟ったのか、コヨーテは何もしなかった。
「頼むぜリトルボーイ」
「煽るだけ煽りやがって。あんなの、三森さんよりも……」
受け切れるか。いや、否はない。食らった時点で骨まで燃える。
アイギスに託すしかなかった。
『我が名はモロク、その名、冥府の渡し守にでも聞かせてやると良い』
「そうかよ、ありがとう！」
放たれる。コヨーテが一の後ろに回り、一はアイギスを突き出した。
力がぶつかる。衝撃は大した事がなかった。問題なのは熱である。一は炎を受け、後方へと流すようにして動いた。長時間は耐えられない。
「おおっ……！」
地面に転がるようにしながら、一は火球を受け流す。顔だけを上げると、圧縮された炎が遥か後ろに消えていった。爆発音が聞こえたが、気にしない事にする。
そして、その隙にコヨーテが飛び掛かっていた。が、タイミングが早い。一はまだ、メドゥーサを発動していなかった。
『――――――――！』
異形の咆哮が耳をつんざく。何かが潰れる音がして、一は目を見開いた。モロクの腕がアスファルトを砕いている。コヨーテの姿はどこにもなかった。
「……なっ」否、あった。コヨーテは、モロクの腕とアスファルトの間にいる。押し潰されていたのだ。

「おっ、おあ、マジかよ！　何やってんだ！？」
呼び掛けても返答はない。ただ、攻撃から逃れる事の出来た、コヨーテの尻尾だけが風に揺らされている。一には、彼がどうなったのか、見なくても分かった。

目を瞑れば、いつでも思い出せる。それはいつだって鮮明だ。

まさか、この自分が夜襲を仕掛けられるとは思わなかった。油断していた、慢心していた。それでも、殺し続けてきた。地に這い蹲る姿は滑稽だろう。ヴラドは笑みを漏らした。
「……銀の弾丸か……」
そうでなくても、元は人間であっても、吸血鬼と呼ばれ、知られ、いつしかそれに近しい存在となった身に、銀製の武器は効果覿面だったらしい。ヴラドは土の上に転がる弾丸を見て、諦めたように目を瞑る。まだ、体には弾が残っていた。もう長くはない。血を吸う鬼、串刺し公と恐れられた竜の息子もここまでか。
ヴラドは口の端をつり上げる。ここまで？　違う。自分は既に生を終えていた。何の因果か、運命か。再び現世に呼び出されたに過ぎないのである。だから、二度目の終わりには恐怖を感じなかった。今の今まで好きにやってこれたのだから、ここで終わっても構わない。何も成し遂げてはおらず、気の向くままに血を求めただけだが、それでも良かった。
「ほう、あの娘を見掛けたと思えば。お主、難儀しておるようじゃなあ」
しわがれた声が耳に届いた。
「失礼するぞ。……おうおう、随分と好き放題にされておるのう」
体をまさぐられ、不快感を覚える。しかし、ヴラドには抵抗する

力が残っていなかった。
「……触れるな」
「瀕死の身で何を。しかし、面白い。影を操るとは」
一方的な戦闘を見られていたらしい。ヴラドは目を開ける。そこには、汚らしい顎髭を弄ぶ老人が立っていた。
「このままでは保たんな。しかし、わしに任せてみんか？」
「何、を」辛うじて口を利く。ヴラドは苦痛に耐えかねて目を瞑った。
「主の全てを」
どうせこのまま死に絶える。好きにしろと、ヴラドは呟いた。

「人狼よ、いつまで避け切れる！？」
放たれた杭を、ジェーンは身を屈めてやり過ごす。銃口を向けるが、ヴラドは霧状になっていた。一方的に攻撃されている。しかし、遮二無二撃っても当たらないものは当たらない。チャンスを待つのだと自分に言い聞かせ、彼女は的を散らす為に動き続けた。
雲が月を覆う。影は闇に紛れ、ジェーンは舌打ちした。魔は夜に動くものと分かってはいたのだが、これでは勝ち目などないに等しい。
「ふん、血を吸う趣味などないが、貴様のそれは酷く魅力的に思える」
「アンタなんかにやるもんかっ、アタシは……」言い掛けて、ジェーンは口をつぐむ。姿の見えないヴラドは小さく笑った。
「ならば奪うまで。そら、行くぞ」
霧が消える。瞬間、地面から杭が、中空からは串がジェーンを襲った。彼女は飛び退き、右に駆ける。串を回避しながらも、杭を狙って発砲した。しかし、走りながらでは照準が定まらない。
闇に身を潜めたヴラドは笑う。彼は絶対的に有利であると、自身の立場を理解していた。

「クールじゃ、ナイっ」
放った銃弾が杭を掠める。ヴラドは呻き、霧に姿を換えた。弾丸は地面に落ち、乾いた音を立てる。ジェーンはまだ諦めていない。諦められなかった。青髭はもう、目の前にいる。強い怒りと暗い憎しみが彼女を突き動かしていた。
「オマエは、ジャマ……！」
引き金、力を込めなくても良い。ただ、少しだけ。それだけで――――。
「おお……っ！」
「――――これは」
闇が、焼かれる。ジェーンたちからは離れた場所にいるモロクの両腕から、小さな太陽が生まれていた。
炎から発せられる強い輝きがヴラドの姿を暴いていた。が、ジェーンは気付いていなかった。彼女の瞳は一に対して向けられていたのである。彼は、モロクの放った巨大な火球を受け止めていた。
「おにい――――」
致命的な隙である。ヴラドは霧の変化を解き、地上に降り立つ。地面に手を当て、ジェーンを見据えた。
「屍を晒せ」
ヴラドの手が影を生み、生まれたそれは膨らんでいく。破裂寸前の風船を思わせるような影に、無数の穴が開き始めた。ジェーンは今更になって気付いたが、もう遅い。大量の杭が彼女に向かって飛来していたのである。声を上げる暇はなかった。
「あちらも、片がつくか」
ヴラドの目は、モロクに押し潰されたコヨーテを捉えていた。彼は次に、杭で作られた檻を見る。十を超える影の凶器がジェーンの姿を隠していた。逃げ場などない。
「……少し、疲れたか」雲の切れ間から月が顔を覗かせている。彼女がどうなったのかは、未だ月しか知らないのだろう。
それでも、ヴラドは雪辱を晴らしたであろうと、そう確信してい

た。

踊り場に陣取る青髭と、そこに上ろうとするジャネットとの戦闘は一時の膠着状態に陥っていた。

一対一の戦いでは地形も勝敗に関わる。一般的には、高い場所にいる者が有利だ。青髭もそれを分かっていてジャネットを阻んでいた。彼の武器はレイピアであり、振り下ろすように、間断なく突きを繰り返していた。青髭は老体とは思えない体力と膂力を持っている。戦いが始まってから数分、彼はまだ息を切らしていないのである。だが、青髭は一度も攻撃を当てられていない。

ジャネットは踊り場よりも、幾らか下の段に踏み止まっていた。狭い空間では払いや、切るようには得物を使えない。彼女は突きを軸に攻撃を組み立てていた。青髭の刺突を避け、時には受けながら自分の攻めを押しつけようとしている。しかし、攻勢に転じた瞬間に青髭は引くのだ。そこを狙って踏み込もうとすれば、再び突きが襲ってくる。彼は実に老練だった。虚実を織り交ぜて、ジャネットを巧みに翻弄していく。

「……どこかで」青髭が呟く。彼はレイピアを引き、ジャネットを見つめた。彼女は不思議そうに彼を見上げる。

「わしは、会ったか？」

「私と？」

「むう……」顎髭を擦りながら、青髭は難しそうに唸った。彼は、隙を作ろうとした訳ではない。リズムを変えようと思ったのでもない。ただ、気になった。ジャネットを、青髭はどこかで見たような気がしている。

「まあ、良い。それよりも当たらん。老いたとはいったものの」

ジャネットは今の内に打ち込もうか迷ったが、ゆっくりと腕を下ろした。

「私も当たらない」

「これでは受けれんからな」
細いレイピアで受けようとしても棒に折られるか、砕かれるのが関の山だろう。互いが互いを認め始めていた。が、いつかは当たる。いつかは終わる。どちらかは必ずここで死ぬ。
「『広場』。わしを狙うのは誰の差し金じゃ。オンリーワンか？あるいは……」
「神様。神様が、あなたを殺せと言った」
「建前はいらぬ。わしが知りたいのは真実よ」
「皆、言ってなかった？」
皆とは、ジャネット以外の『広場』を指している。青髭は彼らの発言を、彼らの末期を覚えていた。
「声が聞こえた、だからわしを殺すのだと抜かしおった。死ぬまで叫んでおったわ、おりもせん神の名を」
「いるよ」
「いやせんよ。もし、もしもおったなら、あんな事には」
「あんな事？」
青髭は目を見開く。自分が何を口走ったのかが分からなかったのだ。あんな事とは、何か。自分ですら分からない事を、何故、口にしたのか。
「……いじり過ぎたか……？」
腹を押さえ、青髭は頭を振った。
青髭の常人離れした力は、自らの肉体を弄んだ事による副産物である。彼は悪魔の召喚だけでなく、様々な事に興味を持ち続けた。少女を人狼に変える事であり、人間はどこまで肉体を刻まれても生きていられるのかであり、吸血鬼を強靱な存在に変える事であり、非人道的であり、愚劣極まる所業であった。人体をいじくり回す。その対象が自らに及んだだけの話だと、青髭は思っている。
「は、話は終わりじゃ。神がおるなら証明してみせい」
「……？　勿論」
「ほっほ、吠えよる。じゃが、あやつらは終わったようじゃなあ」

青髭が一歩退き、空間を作る。踊り場からも、ジャネットの立つ場所からも、それは見えていた。モロクがコヨーテを潰し、ヴラドがジェーンを貫いたのも、何もかもが見えていた。
「今からなら、お友達に追いつくかもしれんなあ？」
「それはおかしい」ジャネットは旗を持ち直す。
「ジェーンたちの死を、神様は教えてくれてないから。だから、まだ大丈夫」
「……わしが言うのもどうかとは思うがな、狂っておるぞ」
「そう言われるのは慣れてる」
予備動作もなく、ジャネットは旗の先端を突き出した。青髭は左腕でそれを防ぐ。
「神に狂うか小娘っ」
「神様が狂えと言うなら」
旗が弾かれた瞬間、ジャネットは跳躍し、踊り場に着地した。

思考しろ。この状況を脱する為に考えろ。言い聞かせるが、どうしても無理だった。そこから目が離せない。モロクの腕に押し潰されたものから、離れてくれない。
「ど……して」
『吠えるのは獣の特権か。人間よ、次は誰の番だ。答えてみろ』
モロクの目が一に向く。濁り切ったそれからは、感情を読み取れない。ただ、殺すモノなのだと分かって、一の体は震えた。
「てめえ、よくも……」
『着飾れ。虚勢を張るのは貴様らの特権だろう』
ゆっくりと、モロクは両腕を動かす。ソレは頭上に腕を掲げた。露になったのは、平べったくなったコヨーテである。一は視線を逸らした。
逸らしてから、一は違和感を覚えた。コヨーテの死に様が、何か引っ掛かる。

『精々、逃げ惑え』
炎が生まれていく。圧縮されて、球の形を成していく。だが、一はそっちを見ていなかった。コヨーテは押し潰されている。それは間違いなかった。彼は確かに、モロクの攻撃を受けてしまったのである。しかし、あまりにも妙だった。平べったくなったコヨーテは、分かりやす過ぎる。コミックのような、滑稽な姿だった。肉が潰された訳でもない、骨が砕けてひしゃげた訳でもない。血液、その一滴すら見当たらなかった。一はもっと、グロテスクな光景を想像していたのである。
「おい。おいおい、まさか」
絨毯のような姿になったコヨーテの尻尾が動く。風が吹き、ぺらぺらになった彼は宙に舞い上がった。そこでようやくモロクも気付いたのだろう。コヨーテの口から、舌が伸びていた事に。だらりと突き出されたそれは、見る者を馬鹿にしているようだった。
「おあつらえ向きじゃないか」
『……何？』
コヨーテの口が動いている。一は驚いたが、それよりも先に呆れてしまっていた。
「ビーフと炎だぜ、あんた。はっ、そりゃ食ってくれって事なのかい？　用意が良いな」
ひらひらと空を泳ぐ。コヨーテは大きく口を開けると、腹いっぱいに空気を飲み込んだ。彼が空気を飲み込み続けると、風船のように体が膨らんでいく。まずは手足。次に腹。最後に顔が元の形に戻り、地面に降り立った。体を大きく震わせると、コヨーテは毛並みを確認する。
「おっと済まないな、前よりも男前になっちまった」
何事もなかった風にコヨーテは笑い飛ばした。
「……どうなってんだお前。ギャグ漫画か？」
「ワイリーなミーなら造作もない事さ。何たって、ミーはトリックスターだからね。怪物の腹ん中にいた時だってあるし、さっきみた

いになるのは茶飯事さ。ああ、何ならその辺の石を金にだって変えられるぜ？」
「漫画だ……」
「さてと、こっちの番だっけ。覚悟は良いかな、モロク君」
コヨーテが口の端をつり上げる。一は納得がいかない様子だったが、アイギスを構えた。
『燃やし尽くすしかないようだな』
「やってみろよ『モロク、止まって見えるぜ』」
メドゥーサが声を発する。一の内から漏れたそれは、彼の耳にしか届かなかった。アイギスは光輝を帯び、驚異を感じたモロクが腕を伸ばす。しかし、遅い。蛇姫の力は既に発動している。コヨーテは地を蹴り、爪を立てて飛び掛かった。宙を舞い、ソレの左目に己の得物を突き立てる。
「何秒保つんだっ！？」
「もう動いてる！」
モロクが伸ばした腕は空を切っていた。コヨーテは爪を引き抜き、ソレの眼球は地面に零れる。
『――――おっ、オオオっ！？』
コヨーテはモロクの頭に上り、ソレの右耳を食い千切った。これ以上は無理だと判断し、そこから飛び降りて一の後ろまで下がる。
『ガアア――――！？　貴様らっ、何を！　我に傷を！？』
「おーおー、怒ってやがる。コヨーテさんよ、謝った方が良いんじゃねえの？」
「こっちはディナーまで決めてるんだぜ。そう簡単には引き下がれないさ」
「食うのかよ、あいつ」
「しかしゲテモノだな」
コヨーテは噛み千切ったモロクの耳を吐き捨てる。
「グルメだねえ」
一はアイギスを構え直した。反撃は成った。既に立場は変わって

いる。今からは、自分たちが攻める番なのだ。

コヨーテが復活し、モロクがダメージを受けたのを、ヴラドはその目で確認していた。何か良くない事が起こっている。彼はジェーンの死を改めようとして、杭を数本、影に戻した。そして我が目を疑う。

「馬鹿な、何故……」

「あら、どうかしたの？　顔色が悪いわよ」

ジェーンは死んでいない。彼女は杭に背中を預けて、片足を影の柱に乗せていた。掠り傷一つ負っていない。それどころか、余裕の笑みすら浮かべている。

「ゴーストでも見たって顔してるわ。おっかしい」

「……アレを避けたと言うのか。馬鹿な、人間業では……」

「ええ、頼っちゃったから」

ジェーンはヴラドをじっと見つめる。それで彼は気付いた。瞳が違う。彼女の目は先程のものとは明らかに変わっていた。

「そうか、狼の……！」

弾かれたように、ヴラドは空を見上げた。雲の切れ間、月が、僅かに姿を見せている。

ジェーンは笑みを深めた。勝ち誇ったそれではなく、自らを嘲け笑っていたのである。彼女が危機を乗り越えられたのは、人狼の力を行使したからだ。与えられた、呪いにも等しいそれである。皮肉だと、ジェーンは顔から笑みを消した。

「前は無理だったケド、今なら使える。クールになればこんなものよ」

ジェーンは肉体の一部だけを狼のそれに変化させていたのである。満月の晩、身体能力は向上していたが、人間の範疇は越えられない。ヴラドの攻撃を一目見て、獣の勘と本能に頼った。急激に高まった視力と反射神経によって、飛来した杭を全て回避したのである。し

かし、間一髪でもあった。月が出ていなければ、人狼には変身出来なかったからだ。

「Ｇｏｄ'ｓ　ｄｉｓｐｅｎｓａｔｉｏｎってヤツかしら」

「ぐっ……」ヴラドが動こうとする。それよりも早く、ジェーンはリボルバーを抜いていた。発砲音が六発。銀の弾丸は吸血鬼の体に命中していた。右足、右肩、右腕の三ヶ所に二発ずつ、である。彼女は僅かに首を傾げた。

「外されちゃったカシラ」

そう言って、ジェーンは杭の檻から抜け出す。弾を込め直しながらも、ヴラドから視線を外さない。

「ぐっ、うおお……また、これを受けるとは……っ！」

ヴラドは霧になろうとするが、負傷した箇所は上手く変化させられないようだった。装填の終わったジェーンは彼に銃口を向ける。この距離で、この状態で外すほど愚かでも、腕がない訳でもない。まずは血を吸う鬼を滅ぼす。そう決めて、彼女は指を――――。

「ほらね」

ジャネットは勝ち誇ったように告げた。青髭は少しだけ悔しそうに、短く唸る。

「私より先に、皆が死ぬ事はない」

「言いよるわ。では娘、お前から逝くと良い」

突きを繰り出す。旗が翻り、レイピアは空を切る。空を切ったレイピアが鉄の棒に弾かれそうになる。突き、受ける。受けて、突く。避け、突く。突き、避ける。突く。突く。突く。

踊り場でステップを踏むようにして、ジャネットは身を反らした。立ち止まらず、狭い空間で動き続ける。青髭は動かず、彼女の攻撃を受け流し続けた。どちらも一撃が通らない。一発が遠い。精神を磨耗しながら、互いの魂を削るようにしていた。

「むうっ」青髭のレイピアが弾かれる。衝撃に揺らされて、彼の両

腕は不自由になった。その隙を衝いて、ジャネットが得物を振り被る。頭部を狙ったその一撃、通れば『円卓』の肩書きも何も関係ない。砕けて、その中身を撒き散らすだけだ。

だが、

「――――そう」

青髭は、旗を掴んでいる。両腕は使えない筈にも関わらずだ。ジャネットは驚いた様子も見せずに、呟く。全てを悟り切ったような表情だった。

「これを使うとはなあ」

形容し難い、異形の何かが青髭の腹部から伸びている。それは腕のようにも見えた。第三の腕が、彼の腹から生えている。青髭はその腕でジャネットの武器を受け止めていたのだ。

ジャネットはあがこうとしない。そこから動こうともしなかった。踊り場から眼下の光景を見下ろしている。一とコヨーテがモロクを、ジェーンがヴラドにダメージを与えていた。ジャネットは目を瞑る。神に、天使に言われていた。知っていた。だから、この結末は恐ろしく――――。

「……ジェーン」

――――なかった、筈だった。

ジャネットは知ってしまった。切っ掛けとしては神に与えられ、天使に教えられたのかもしれない。しかし、実際に自分自身で見、触れ、知ってしまったのである。『広場』として戦いに身を置く事だけではなかった。ラ・ピュセルとしてのあり方を貫くだけではなかった。もっと、違った生き方も出来た。ジェーンが変えてしまった。全てを投げ捨てて、彼女と笑い合えるような、そんな生活を送れたのではないか。

「ごめんね」

苦痛が、ジャネットの身を焼く。青髭はレイピアを引き戻して、彼女の両肩を突き刺した。次いで、深く、腹に刺し込んでいく。臓腑を抉られ、内部を掻き回されて、ジャネットは血を吐き出した。

「ほっ、神に謝るにしては随分と馴れ馴れしい」
青髭は手を止めない。ジャネットの全身を隈なく突いていく。傷口からは血が溢れ、彼女はがっくりとうな垂れた。ジャネットは何も言わなかった。声を発さなかった。痛いとも、苦しいとも、何も。
「仲間のように神の名を叫べ。後はもう、祈るしか出来ないじゃろう」
「……ふ、ふふ」
ジャネットは自分の最期を知っていた。どこで、どのように死ぬのかも見えていた。ここで死ぬのだと神に命じられ、天使に告げられていたから、理解していたのである。そして、微笑む。青髭が得物を引き抜くと、彼女はよたよたとしながらも手すりに捕まった。辛うじて顔を上げると、ジェーンが何か叫んでいるのが見える。彼女の顔を見られて良かったと、最後の最後に、そう思った。神様でもない。天使でもない。ジェーン＝ゴーウェストと出会えて良かったと、そう思った。
「だい、じょ……ジェーンに、なら……」
仰いだ空は、暗い。厚い雲が自分たちを包んでいるようにも見える。それでも、僅かに月が覗いている。あれが、ジェーンたちを導く光になるのだと、そう願って、ジャネットは、
「さよ、なら」
青髭に突き落とされた。

MEMENTO

落ちていく。
堕ちていく。
聖女と呼ばれた存在が、まっさかさまに地面へと。体中は穴だらけ。服は血塗れ。汚されて、彼女は生を終えた。
青髭は声を荒らげた。ジャネットの存在が許せなかった。戦闘の最中も、死んでからも、自分を苛める彼女を。だから、彼はモロクに命じる。
「おっ、おお！　モロクっ、焼けいっ、跡形もなくあやつを！」
モロクは一たちに放とうとしていた火球を見遣ってから、無造作にそれを投げた。

落ちていく。
堕ちていく。
ジャネットが踊り場から突き落とされて、地面へと。彼女が落とされる寸前、一には見えていた。ジャネットは抵抗しなかったのである。分かっているような、諦めているかのような、そんな風に、彼女は殺された。
殺された。
一にとっては、それだけだった。無論、辛い。勿論、悲しい。圧し掛かる死、しかしまだ、耐え切れる。だが、彼女は違うだろう。ジェーンにとって、ジャネットの死はもっと重い。

『――――行けば辛い目に遭うのに』

気付いてしまう。一は思わず口に手を当てた。声にならない声が、彼のそこから漏れていく。ジャネットはきっと知っていたのだ。自分の最期を。全て分かっていて、ジェーンを行かせまいとしたのだ。

「あ、く、見るなっ、見るなあああああっ！」

一はあらん限りに声を振り絞った。だが、無駄である。ジェーンは固まったかのように動かない。一点を見つめて、声すら出せなかった。彼女は銃を落として、膝から崩れていく。

業火が飛ぶ。ジャネットの死体を目掛けて。雲間から月輪が現れる。銀色の光が下界を照らす。

「……間に合わねえか」コヨーテは諦めて頭を振った。

轟音の後、赤光が破裂する。ジェーンは目を瞑りたくなかった。せめて、ジャネットが消えてしまうまでは我慢しようと思ったのである。視界に明滅する地獄の炎が、この世全てを焼いていくような気がした。焼いてくれと、強く望んだ。

白く染まる視界。頭の中が真っ白になり、ジェーンは本能のままに叫んだ。否、吠えた。我が身を焦がさんばかりの怒りが体内を駆け巡る。ここから出せと、青髭への憎悪が奥底で暴れ始めていた。月と業火に照らされた彼女の横顔は、獣のそれと変わらない。溢れ出す思いを隠さずに、低く唸る。逆流する感情が臓腑を突き抜けて喉から飛び出る。音が消える。世界が消える。視力と聴力が強くなり過ぎて、一瞬、何も聞こえなくなる。ジェーンは自身の声すら聞こえなかった。

だが、変化は既に始まっている。

ジェーンの瞳は血走り、ぎらつく。肉体に異常を感じて、脳が警告を訴える。それを無視して、彼女は高らかに叫んだ。

そして、ジェーンの意識はぶつりと途切れた。

モロクの炎が消失した後も、一は暫くの間ものを考えることが出来なかった。コヨーテの指示に従い、ソレの攻撃を防いでいただけ

である。
「おいっ、おい！　ヘイっ、ボーイ！　聞いてるのか!?」
吠えるコヨーテをうるさく思った時、一の意識はおぼろげながらも帰ってきた。
「……ああ、聞いてる」
「だったら前を見てろっ」
アイギスに衝撃が伝わる。一は自らの得物を握り締めた。モロクは鼻を鳴らして腕を戻す。火球が見えたが、それはコヨーテが掻き消した。
一は辺りを見回す。鉄塔前の人数が減っているのに気付き、彼はコヨーテに尋ねた。
「ヴラドはどこ行った?」
「聞いてないじゃないか。奴なら、青髭の守りについてる。ミーたちの敵はモロクだけさ」
今のところはねと付け足し、コヨーテは身を低くする。
「『広場』の嬢ちゃんが死んだのは分かってるな?」
一は頷き掛けたが、苦しそうに目を瞑った。
ジャネットは死んだ。それは決して覆せない事実である。彼女は青髭に殺され、その死体をモロクに焼かれたのだ。一も、その時の光景をしっかりと見ていた。思い出して、今度こそ頷く。
「だったら、嬢ちゃんが気ぃ失ったのも分かってるな」
ジェーンは、一たちとは遠く離れた場所に倒れていた。一にとっては、ヴラドが青髭の近くに移動したのが唯一の救いだった。
「……どうして、倒れちまったんだよ」
敵からは目を逸らさないまま、一は口を開く。
「多分、ショックがでか過ぎたんだ。あの光と音の中、ミーだけは嬢ちゃんの声を聞いてた」
俯き、コヨーテは躊躇いがちに言葉を紡いだ。
「とてもじゃないが言い表せない。そんぐらいの感情が、嬢ちゃんから放たれてたよ」

「また、暴走したってのか」
「前回の比じゃないかもしれないぜ。……あの子、友達だったんだろ」
出会ってからの時間は関係ないのだろう。確かに、ジャネットはジェーンの友人だった。一は小さく首を振る。だが、彼女の死を悼む暇もない。もはや、戦えるのは自分たちだけなのだ。コヨーテと共にどこまでやれるか。
「どこまで、生きられるかって話だよな」乾いた笑いが一から漏れる。
モロクが前進する。ソレは拳を作り、凄まじい速度で振り抜いた。受け切れないと判断した一は頭を低くして地面に倒れ込む。音が止んだのを合図に、振り向かないで走った。だが、背中に強い熱を感じる。
「シールド出しなっ」
コヨーテが一の背後に回り込む。一はアイギスを突き出すようにした。炎がぶつかり、火の粉を散らしながら掻き消えていく。
「走れ走れ！」
「どうすんだよっ、畜生！」
体力は底を突き掛けていた。メドゥーサの発動も無限ではない。使えば使うほど限界が早くなる。一の頼みの綱はコヨーテだけだった。
「頼むぜリトルボーイ」
「あ？」
「ミーはもう限界だ。いや、まさか潰されるとは思ってなかったぜ。アレで余計な力を使っちまった。だからさ、頼む」
「……あ？」
信じられなくて、一はコヨーテを二度見する。目が合って、互いが同じような表情を浮かべた。
「なっ、ふざ、ふざけんじゃねえぞ！？」
「ミーたちしかいないんだぞっ」

走り回っていた一たちだが、炎に足止めを喰らって、遂にモロクに捕まってしまう。

一はアイギスでモロクの両腕を受け止めたが、コヨーテは舌をだらりと伸ばしている。疲弊した体では攻め切れないと考えたのだろう。だが、彼が行かなければ誰も行かない。一は無為に力を消費している事になる。何も考えられないで逃げ回る。素晴らしいアイデアなど、何一つ浮かばなかった。

「くそっ、くそ！　畜生が！」

叫んでも状況は変わらない。

「どうしろってんだよ！？」

泣いても形勢は替わらない。

そうする事で、また無駄な体力を使ってしまうだけだった。

握力が弱まるのが分かる。一は必死で歯を食い縛った。モロクは力を込めていく。ソレは笑みを浮かべた。彼は今更になって恐怖を覚える。手を離したくて、離せば死んでしまうのが目に見えていて、吐き気を催した。

コヨーテが吠える。彼は無理をしてモロクに襲い掛かった。腕に食らいついたが、ソレは決して力を緩めない。

『絶念しろ、人間！』

モロクは咆哮し、払い除けるようにしてアイギスを弾き飛ばした。その際、コヨーテも飛ばされてしまう。彼はアスファルトに体を擦られて高く鳴いた。盾を失った一は、泣き笑いのような表情を張りつける。ソレが一を見下ろす。恐怖が聳え立っていた。足が震えて、彼は小さく口を開ける。何を言おうとしたのか、それは誰にも分からなかった。

モロクに吹き飛ばされたコヨーテは四肢に力を送ろうとした。だが、どうしても動かない。体は言う事を聞いてくれない。どこかが駄目になっているのかもしれない。それでも、自分が立ち上がらな

ければ、一は殺されてしまうだろう。彼が死ねば、次は自分が死ぬ。自分が死ねば、最後に死ぬのは？

「……う、がっ……」

それだけは止める。たとえ自分が死のうとも、あるいは一が殺されようとも、彼女がそうなる事だけは避けたかった。

「……こんな、時に」羽音が聞こえる。どこからか、ハトが飛んで来ているらしかった。

この場には似つかわしくない音を聞き、コヨーテは薄っすらとした笑みを浮かべる。少し、力が戻ったような気がしていた。慌ただしい音が近づき、彼は顔だけを上げる。予想していた通り、ハトが飛んでいるのが見えた。だが、鳥たちはやけに低い位置を飛んでいる。それも一羽だけではない。縦一列に並んだ八羽の白いハトが、コヨーテの頭上を擦り抜けていった。

白いハトは縦列を保ったまま速度を上げる。地面すれすれの位置から舞い上がり、宙で旋回して、

「何の、冗談だってんだ」

モロクへと向かった。

信じられないモノを見て、コヨーテは息を呑む。ハトたちがどこから現れたのか。何故、ソレに向かっているのか。何一つ分からないまま、彼は鳥たちの行動を見つめている。

『ぐっ、おお!?』

モロクは自らの肉体に炎を纏わせている。しかし、ハトは一羽たりとも動じた様子を見せず、羽根の一枚だって燃えていなかった。八羽の白ハトはソレの視界を遮るように羽ばたき、残っている目玉に嘴を突き立てようとしている。

「……んだ、こりゃ」

一は尻餅をついていた。そのまま、彼はゆっくりと後退りする。まさか、鳥に助けられるとは思ってもいなかったのだ。

「死んだのか、俺は」アイギスを拾って、よろよろとしながらも立ち上がる。ハトはまだ、モロクの周りを飛び続けていた。

「いいや、どうやらここはゲヘナじゃあないらしい」
「無事だったかよ役立たず」
「そっちこそ平気かよ、腰抜け」
「……今の内に体勢整える」
八羽いたハト、その内の一羽が場を抜ける。高く上昇し、ハトは、倒れているジェーンの傍に降り立った。
モロクは両腕を振り回してハトを退けようとする。だが、鳥たちは纏わりついて離れない。諦めたソレは、逃げようとしていた一たちに目を向ける。
「あ、くそっ。整える暇もないってか」
「来るぞリトルボーイっ」

――――パパ、ママ。今日、友達が死にました。ついさっき、友達が殺されました。

ぼんやりとした意識。浮かび上がるのは彼女の、ジャネットの最期だった。彼女は死体になった後も、炎に焼かれて灰にされた。あまりにも、あまりにも酷い終わりではないか。
ジェーンは目を開けようとする。だが、幾ら目を凝らしても見えるのは一面の闇だった。一筋の光すら差し込まない、完全な暗黒である。彼女は諦めて、瞼を閉じた。
強い怒りと憎しみが今も体を支配していた。青髭も、ヴラドも、モロクも。思いつくモノ全てを八つ裂きにしてやりたかった。

――――パパ、ママ。生んでくれてありがとう。ごめんなさい。

友達だった。
ジャネットとは出会ったばかりで、互いの事を良く知らなかった。思い出だって皆無に等しい。会話の内容は今だって覚えている。そ

れだけ、触れ合っていた時間が少なかったのだ。第三者に問われれば、答えに窮してしまうかもしれない。本当に友達だった？　二人の関係を崩すには、その一言で充分なのかもしれない。

「ジャネット……」

呼び掛けても答えはない。

探しても、もう見えない。

それでも、ジェーンは呼び続けた。怯えながらも目を開けて、彼女の姿を探し続けた。

伝えたかった。

たった一言、伝えたい。

他の誰が何を言ったとしても関係ない。

自分たちは、

「ジャネット、アタシたちは」

「友達」

友達で、

「楽しかった」

「うん」

話すのが楽しくて、嬉しくて、

「会えて、良かった」

「ん、えへへ」

出会えて良かったと、伝えたかった。

聞こえない筈の声が聞こえて、見えない筈の姿が見えて、ジェーンは大袈裟に笑ってしまう。きっと自分はおかしくなっていて、ここは夢幻か地獄なのだと思い込んだ。

「言葉にするのって恥ずかしい」

幻だと分かっていても、ジャネットの息遣いを感じてしまう。

「でも、それよりも怖い。友達だよねって聞くのは怖いの」

「そう、カシラ」

「だって、初めてだから」

ジャネットは照れ臭そうに笑った。ジェーンの目から涙が零れる。

落ちた滴は、どこかに消えていった。
「私、初めて許されたの。今まで頑張ってたから、神様がご褒美をくれたのかも」
「……ねえ、話したいコト、いっぱいあるの」
「私も」
「一緒に行きたい場所とか、やりたいコトとか……いっぱい、いっぱい……」
「私も」
ジェーンは縋るようにジャネットを見つめる。
「だって、会ったばかりじゃナイ」
「……ごめんね。私じゃ、もう駄目なの」
「そんなっ、そんなコト！　アタシはっ、アタシはっ」
困ったように笑むと、ジャネットはマフラーで口を覆い隠した。
「大事にしてくれる人も、対等に見てくれる人も、すぐ傍にいるから」
ここはどこだろう。本物か偽物か分からないままだった。なのに涙が止まらない。
「ジェーンは可愛いから、キュートな笑顔で挨拶するの。そしたら」
「聞きたくない！　どうして、どうしてそんな、まるで、バイバイって言うみたいに……」
「……だって、私はもう」
「やめて――――！」
ジェーンは耳を押さえて、何もかもを拒むように首を振った。
「どうして!?　どうしてアタシがっ、アタシたちが！」
「目、開けよう」
「なんでいつもこんな目にあうの!?　アタシが何をしたの!?　何もしてないのにっ、なんでよ、なんでよ！」
「大丈夫だから」
「会えたのに！　これからだったのに！　何も、まだ何もっ」
ジャネットはしゃがみ込み、ジェーンの肩に、そっと手を置いた。

「……ごめんね。私と出会わなければ、私が、声を掛けちゃったから」
「ちがうっ、ちがうちがうちがう！　悪いのはジャネットじゃないもん、悪いのは全部っ、全部！」
「ん、ジェーンは強いから、大丈夫。さ、目を開けて」
しゃくり上げながらも、ジェーンは恐る恐る目を開けた。そこは相変わらず真っ暗で、ジャネット以外には何も見えない。
「……何も、ナイよ」
「ちゃんと目を開けて？　そしたら、変わるから」
「何、が」問い掛けに対して、ジャネットは首を振るだけだった。
「ほら、行かなきゃ」
ジャネットは指を差す。その先には道しるべすらない。彼女は闇を示している。
「お兄さん、好きなんでしょ？　私たちも、そろそろ行かなきゃ駄目だから」
「ね、ねえ、何を言ってるの……？」
「ここから先がどうなるのかは私にも分からない。自分で探して、見つけなきゃ」
ジャネットはゆっくりとした足取りで歩きだす。ジェーンは彼女を追い掛けた。しかし、その差は一向に縮まらない。むしろ離れていく一方だった。
「ね、ジェーン」立ち止まらず、振り返らず、ジャネットは問う。
「私たち、友達だったのかな？」
「……っ、う、うう……！」
ジェーンは涙を堪えようとした。歯を食い縛って、必死で足を動かした。
「だった、じゃ、ない……」ジャネットの背中が遠くなる。
「アタシたちはっ、ずっと、ずっと！　これから先も、死ぬまで――――」
ありがとう、と。そう聞こえた気がした。見えなくても分かる。

彼女はきっと、笑っているのだ。

フロアでの仕事を片付けたナナは、鼻歌交じりでバックルームに戻った。店長は嫌そうに顔をしかめる。

「手が空いたので、お話でもしましょう」

「……嫌だ」

ナナは不満そうに頬を膨らませた。どういうメカニズムなのだろうかと、店長は彼女の顔をまじまじと見つめてしまう。

「もう仕事は終わってしまいましたので」

「ナナ、仕事とは与えられるものじゃない。自分で探すものだ」

「ですから探してもないのです。よいしょ」言って、ナナはパイプ椅子に腰掛けた。

「ジャンヌ・ダルクの最期についてお話しましょうか」

「私の話を聞け！」

ナナは楽しそうに目を細める。

「何をお話してくれるのですか？」

店長は紫煙を吐き出した。それだけの存在になろうと決めた。

「……話をするのも嫌。話を聞くのも嫌、ですか。では、私もマスターのところへ行ってもよろしいでしょうか」

「なっ、お前まさか、私を脅しているつもりなのか……」

「まさか」眼鏡の位置を指で押し上げると、ナナは柔和な笑みを浮かべる。

暫くの間、沈黙が場を支配していた。長い長い静寂の後、店長はうな垂れる。

「好きにしろ」

「ジャンヌ・ダルクはですね」

ナナが椅子から立ち上がった。

「ルーアン市内のヴィエ・マルシェ広場で火刑にされました。火刑というのはですね、中世ヨーロッパのキリスト教的世界では最も厳

しい処罰だったのです」
「ふーん、熱いからか？」
気のない返事をものともせず、ナナは水を得た魚のように活き活きとし始める。
「火刑自体も残酷ですが、それよりも重要なのは死体が灰になってしまう事でしょうね。当時の埋葬方法は土葬が基本で、キリスト教のカトリックならば、誰もが死後には土葬を望んだそうです」
「最後の審判か」
ナナは小さく頷く。
「おっしゃる通りです。遺体が燃やされて灰になってしまえば、最後の審判の際に復活すべき体がなくなってしまいますからね」
「宗教的だな。……一が嫌いそうだ」
「何か？」
「何も」
店長は短くなった煙草を灰皿に押しつけて、新しい煙草を取り出すかどうか迷った。
「話を続けますね。火刑は肉体的だけではなく、精神的な絶望感すら与える一石二鳥な処刑方法だった訳です」
「ジャンヌ・ダルクはそうして死んでいった訳だな」店長は話をまとめようとする。
「燃やされたジャンヌ、亡骸の灰は、セーヌ川に流されたそうです。灰すらも残さず、決して土に返さないという処遇においても、彼女が受けた刑罰は、当時としては最も苛烈なものだったのですね」
やれやれとでも言いたげに、ナナは椅子に座り直した。店長はほっと息を吐く。
「そう言えば、店長は映画を見たそうですね」
「ん、ああ、見たぞ」
「内容は、史実に沿ったものでしたか？」
店長は腕を組み、くるくると椅子を回転させた。やがて、ぴたりと、その動きが止まる。

「どうだかな。私はジャンヌ・ダルクについて明るい訳でもない。まあ、お前に聞いた話と似たようなものだったよ」
「白いハトになりましたか？」
「……ハト？」
「火刑の際、群衆の中の一人が見たそうです。火炎の中から飛び立つ、白いハトを」
　映画の内容を思い出そうとするが、店長はううんと唸るしか出来なかった。
「そのハトが、ジャンヌ・ダルクだと言いたいのか？」
「彼女の魂だと、そういう話もどこかであったそうです。……史実に、そのような記述はありませんでしたけれど」
「史実が真実を語るとは限らん。何を信じるのか、自分で考えるんだな」
「私はマスターを信じています」
「今は関係ないだろう」
　言いつつ、店長は苦笑する。
「ただ、私が見た映画はな、ジャンヌ・ダルクをただの少女として描いていたよ」
　店長は迷った末、新しい煙草に火を点けた。
「何の恨みがあったのか、ジャンヌの行動を間違ったものとしていた。彼女は神の使いではないと、そういう風に」
「監督がジャンヌ・ダルクを信じていなかったのでは？」
「だから、お前も好きにしろ」
「信じるか、信じないか、ですか」
　ジャンヌが神の声を聞けたのかどうか。彼女は本当に神の使いだったのか。ナナには分からない。だが、それで良いのだと思った。
「信じます」
「そうか」
「そっちの方が浪漫があると思いますから。って、マスターも言いそうです」

「さて」店長は煙を吐き出していく。
「どうだかな」

寒い。背中が冷たい。頬が冷たい。風が吹いている。寝返りを打つと、誰かが叫ぶのが聞こえた。やけに瞼が重くて、体はだるかった。ジェーンはそのままの状態で自分の体を確かめる。気を失う前は人狼になりかけていたが、今は何ともなかった。
「……どう、なってるのかな」
意識が戻ると記憶も戻る。鉄塔前に目を向けると、ジャネットの最期が脳裏に浮かび上がってきた。彼女が焼かれた、その跡がありありと残っている。そっと、頬に指を這わせる。冷たいと感じていたのは、涙が乾いていたからだった。
戦いは終わっていない。この世界はまだ焼かれていない。ジャネットがいなくなった後も、地球は回り続ける。自分たちは生き続ける。
「……アタシの」
目覚める前に見たものは夢だったのだろうか。あの声も、息遣いも、笑顔も、全て幻だったのだろうか。……行かなくてはならないと、ジェーンは思った。手探りで銃を探す。中々見つからなくて、彼女は顔を上げた。月下、自分は薄汚れている。考える事は山ほどあった。
――――だけど。
すべき事は、たった一つだけだった。
「おおお――――！」
一はモロクの攻撃を受け止めていた。だが、彼が攻撃に転じる事はない。
冷たく、震える指が固いものに触れる。ジェーンはそれを掲げた。反撃の狼煙を上げたくて、これがラストチャンスだと決意する。
故郷を、家族を、友人を、多くを奪われてきた。これ以上大切な

ものを失いたくない。これ以上、やらせてたまるものか。引き金を引くと、銃声が高らかに響き渡る。天に向かって放たれた弾丸の行く先は見えなかった。

『……地獄に戻るか』モロクが呟く。

ジェーンはホルスターに銃を戻すと、ゆっくり立ち上がった。彼女は靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ捨てた。裸足になると、ジェーンは一を見遣る。それだけで、全てが通じ、伝わったのだと分かった。

白いハトはいつの間にかいなくなっていた。コヨーテは一の後ろに隠れながら、辺りを見回す。さっきまでの光景が嘘のようで、自分たちがどこで何をしているのかが怪しくなる。現状の認識があやふやになり、地に足がついているのか不安になった。

「……このままじゃまずいぜ」

一は答えない。彼もまた、先のハトについて何か考えているらしかった。だが、モロクは火球を放ち、時には拳を振り上げて、一たちの思考を粉砕する。

「おおお――――！」

メドゥーサは残り何回使えるのか。アイギスで後、何度防げるのか。少なくなった力、どこで使いきれば良いのか。せめて切っ掛けがあれば。危うい糸口で構わない。一は息を吐き出す。

――――俺は誰を。何を待ってるんだ。

その疑問に至った時、一発の銃声が轟き、この場を支配する。一は呼ばれたような気がして振り向いた。立ち上がり、裸足になったジェーンがいる。視線がぶつかり、彼は瞠目した。彼女は鉄塔に顔を向ける。もう、一からは興味を失ったようだった。

自分が何を守っていたのか、誰を待っていたのか、何をすべきなのか、一は即座に理解する。彼は、飛来する火球をアイギスで受け、払った。

地を蹴り疾駆する。ジェーンは鉄塔へ、青髭へ、脇目も振らずに駆け出した。彼女が動いて、全員が行動を開始する。

「……どうやら、一先ずは狼の血に打ち勝ったようじゃな」

青髭は踊り場から、更に上へと進む。ヴラドは何も言わず、霧になってジェーンの方に向かった。

ジェーンよりも後方にいるモロクは、彼女を狙って火球を撃ち出す。だが、一が前に飛び出してそれを阻んだ。彼はソレの両腕を受け止める。歯を食い縛って、メドゥーサに命じた。

「行けえ！」

アイギスが輝き、モロクの動きが止まる。一は得物を畳み、ソレの鼻先を思い切り叩きつけた。それと同時に、メドゥーサの効果が切れる。彼は再びアイギスを広げると、ジェーンの進路を確認する。霧になったヴラドが見えて歯噛みした。

『またか……貴様、何をした？』

悪魔の右腕は地を叩き、左腕は炎を生み出す。一は距離を取ってアイギスを構えた。モロクは火球を放ち、自らもその後に続いた。

「『止まれぇぇ――――！』」

火球がアイギスに衝突し、形をなくす。モロクが静止している隙に、一はソレの後ろに回り込んだ。そのまま、傘の石突き部分をモロクの背中に突き立てる。

『ぐっ、おっ、お――――！』

モロクは自分が足止めする。限界を越えたって構わない。メドゥーサを酷使してでも、この場を死守する。そう決意した一は大きく口を開けた。

「何やってんだよ!?　ジェーンに謝るんだろうが！　何とかしろよコヨーテ！」

今、ジェーンをヴラドから守れるのは彼しかいない。彼女の道を切り開いてやれるのは、コヨーテだけなのだ。

呼び掛けに応えるべく、コヨーテは吠える。一よりも後ろで休んでいた彼は、最後に残った力を振り絞った。スピードは落ちていたが、それでも射られた矢のようにまっすぐに走る。

「獣がっ」吐き捨てるようにヴラドは言った。彼は霧の変化を解き、踊り場から標的を定めようとする。ジェーンに向けて影の杭を飛ばしたが、遠間では当たる気がしなかった。彼女に続き、コヨーテまで近づいてきている。

ジェーンはリボルバーを抜いている。狭い踊り場で立ち止まれば狙い撃ちにされるだろう。そう考えたヴラドは、地面から杭を生やしながら霧に姿を変える。地上に降り立ち、今度は十を超える串を放った。だが、そのどれもが空を切る。

「差し違えるか勤務外！」

ヴラドは前方に杭を伸ばす。銃撃を防ぐ為の盾としてだ。彼の視界は自らの影によって塞がれる。しかし、ジェーンがどこから来て、どこに向かうのかは分かっていた。何故なら、階段に通じる空間は自分が支配しているからだ。ここを抜かない限り、彼女は青髭には辿り着けないのである。

「そこか」

影の杭に守られたヴラドは乾いた音を聞く。アスファルトを蹴り、自分目がけて飛んでくるモノを認識したのだ。そこに向かって杭を投擲する。だが、彼は一驚を喫した。そこにいたのはジェーンではなく、コヨーテだったのだ。

「何故貴様が！？」

我が身を守ろうなどと考えたのを叱責するよりも先、視界を確保しようとして影を解く。コヨーテに向けて追加の杭を放ったと同時、ヴラドはジェーンの姿を認めた。彼女は階段には向かわず、鉄塔の方へと駆けて、落ちていたものを拾い上げる。

ジェーンが拾ったのは、ジャネットが持っていた旗の一部だった。

モロクの業火によって焼かれた彼女が遺した、唯一のものである。
ジャネットが死の間際に取り落としたせいだろうか、直撃は免れたものの旗は焼け焦げてしまい、棒の部分は融けてしまい、半分程度にまで短くなっていた。
「正気かよ！？」
跳躍していたコヨーテは、放たれた杭に前足をかけ、その上を駆けていく。追撃として飛来していた影の杭を、更に高く飛び上がる事で回避に成功していた。彼はよそ見していたヴラドに爪を振り下ろす。ソレの頬に赤い線が走る。ヴラドは霧になって逃れようとしたが、コヨーテは哮る。
「体が……」コヨーテの声によって、ヴラドの変化は中途半端なものになっていた。体の一部分だけが霧になり、下肢部分は人間のままだったのである。
そこを、噛みつかれた。
コヨーテはヴラドの足へ必死に食らいつく。噛み千切ろうとして、頭を、首を何度も振っていた。
「ごっ、ぐうううううう！？」
変化が上手くいかず、ヴラドは苦痛の声を上げる。ジェーンは青髭を睨みつけていた。彼女を遮るものは、今、何もない。誰もいない。覚悟を決めろと、ヴラドは霧状の右腕を影の杭に変化させる。それを、自分の下から突き出させた。
「ぐが、あああああああああああ――――！」
察したのか、コヨーテはヴラドの足を諦めて飛び退いていた。ソレの腰に杭が突き刺さっているのが見えて、彼は嫌そうに呟いた。
「道連れにしようってのかよ……」ヴラドは答えられる状態ではない。彼は杭を戻して、途切れ途切れになる精神力を掻き集めた。霧になり、階段に向かおうとしていたジェーンへと迫る。
「待てっ」
追ってきたコヨーテを見られず、ヴラドはろくに狙いも定めないままで杭を飛ばした。が、コヨーテの体力が尽き掛けていたのもあ

って充分な牽制となったのだろう、彼の足は止まっていた。
ジェーンは銃を抜き、拾った旗をベルトに挟み込む。彼女は再び駆け出した。
その姿を、青髭は見ている。彼は階段を上りながらでレイピアを抜いた。彼女がここに辿り着くまでは時間が掛かる。ヴラドもジェーンを追い掛けており、一度だけの盾にはなる。それまでに魔導書の力を行使すれば、勤務外を全滅させられる筈だ。
だが、そうはならない事を青髭は察知する。
「狂ったか！？」
ジェーンは階段に向かわず、直接、塔へと向かっていた。そして青髭は分かっている。彼女が狂ったのではない事を。
「お前が、お前がっ……！」
速度は落ちない。ジェーンは止まらない。
ジェーンが靴を脱いだのは、早く走る為ではない。一に買ってもらった、お気に入りの靴を潰さない為だった。
彼女は跳躍し、鉄塔の鋼管に足を掛ける。そのまま、次の鋼管へと跳んだ。
青髭は瞠目する。ジェーンの足は人狼のそれに変化していたのだ。爪は長く伸びて、華奢だった彼女の足は逞しいものに変わっている。だが、そこ以外の部分に変わった様子は見られない。つまり、ジェーンは両足だけを人狼化させているのだ。
「血を支配しただと……」既にジェーンは瞳だけを変化させる事に成功している。だが、その時は彼女の精神状態が安定しており、変化させる箇所も小さかったからだ。月に狂えば狼の血が騒ぐ。一方で、極度の興奮状態にならなければ、人狼にはなれない。全身を変化させるには強い衝動が不可欠だ。だが、強過ぎれば肉体と精神が追いつかない。その為に、ジャネットの最期を見たジェーンは暴走し、人狼への変化に耐え切れず失神している。
では、今は何が起こっているのだ。
青髭は自らに問い掛ける。自分が処置を施した筈だった。ジェー

ン＝ゴーウェストを人狼に成り果てさせた筈だった。彼女の能力は全て把握している、筈、だった。覆された状況に、彼の思考は追いつかないで、ぐるぐると廻り続けている。

跳ぶ。跳ぶ。跳ぶ。跳ぶ。青髭までの最短距離を駆け抜ける。ジェーンは銃口を向けて、片目を瞑った。

「けだものではなかったのかあ！？」

銃声が六つ。青髭へと銀の弾丸が迫っている。しかし、霧状の影が追いついていた。彼の盾になろうとして、ヴラドが変化を解く。両腕を広げて、全ての銃弾を受け止める。既に、その身はぼろぼろだった。彼は、先に受けたジェーンの銃撃、コヨーテの攻撃、自らの杭によって、今にも息絶えてしまいそうな有様だった。そこに六発の銃撃を浴びて、

「……ほ、しかった」

落下していく。

「ほっ、ほう！　ほっほ、ドラクリヤ、ヴラド・ドラクリヤよ！良くやった、貴様はやりよったぞ！」

ジェーンは別の場所に飛び移った。ヴラドは塔の鋼管に全身をぶつけながら、地面に向かって落ちていく。もはや、霧や影に変化出来る状態ではなかった。

何かが潰れるような音がしたが、ジェーンはそちらに目を向けなかった。そして、リボルバーをホルスターに戻す。

「血に打ち勝ったのは褒めてやろう！　じゃがな……」

青髭は続きを言えなかった。ジェーンは今までよりも高く跳び上がり、彼の眼前にいたのである。

「馬鹿な」ジェーンの腕は人狼化しており、その腕は太く、その爪は酷く、長かった。

今、戦いはどうなっているのか、一にはまるで掴めていなかった。彼はモロクを抑えるのに精一杯だったのである。

『人間よ』
「ああっ！？」
だから、モロクが攻撃を止め、腕を引いたのかが分からなかった。
モロクは一から少しだけ離れて、鉄塔を見上げる。彼もそれに倣ったが、誰が何をして、何が起こっているのかまでは見えなかった。と言うより、踊り場には誰もいないように見える。
『ここまでのようだ。我の召喚者は世界を焼けぬ定めにあったらしい』
「何言ってんだ……？」
一はこれ以上距離を取らず、アイギスを下ろした。
『最期まで奴に付き合う義理はない。過ぎた望みを持った報いだ』
「……な、お前……！」
炎が揺らめく。モロクの立つ地面がどす黒く染まっていく。一は数歩、後退りした。理解する。そこが、それが地獄の入り口なのか、と。
「……そう、か。帰ってくれんのか」
『人の世も中々に面白かった。また、来よう』
「ふざけんなよ、今度こそ世界を焼こうってのか？」
『否』
黒くなり、闇と炎で境界が判然としない地面に、モロクは沈んでいく。ソレの胸が消え、頭まで達した。
『次は物見に』
それだけ告げると、モロクは地面に頭まで浸かった。とぷんと、跳ねたような音がする。色は戻り、炎が消えて熱が失せる。一は恐る恐る、ソレのいた場所を足で踏んづけた。いつもと変わらない、アスファルトの感触しかなかった。
「……悪魔って」一は頭を掻く。
「マジなのかよ」
息を吐き、一はもう一度鉄塔を見上げた。モロクの言が確かなら、青髭は終わりらしい。恐らくはジェーンがやったのだろう。ここか

らでは何も見えない。彼はゆっくりと歩き始める。火照った体に、冷たい風が心地良かった。アイギスを畳み、鉄塔前に近づいていく。

「え」一の足が止まった。思考が固まり、その場から逃れられなくなる。

「何、やってんだ……」

一が見たのは、鉄塔から落ちそうになっている青髭と、ジェーンだった。

奪われたから奪う。

殺されたから殺す。

因果応報の螺旋の中、月夜に狼が吠えた。ジェーンは青髭の腹部に腕を伸ばす。長く、鋭い爪が彼の肉を抉った。

ジェーンは階段の手摺りに着地し、その場で小さく跳ぶ。後ろ回し蹴りが青髭のこめかみを捉えた。よろけた彼は足を踏み外しそうになる。

「小娘ぇ……！」

追撃を免れようとして、青髭はレイピアを突き出した。必死で手摺りを掴み、落ちそうになる体を支えた。ジェーンは鋼管に飛び移り、新たなチャンスを待つ。

「お、おお、よくも、よくもやりおったな」青髭は階段を上り始めた。激昂し、興奮した様子の彼はまともにものを考えられないでいる。

ヴラドは青髭を庇って死に、モロクは青髭を見限って帰った。既に趨勢は決している。青髭もまた、奪われ、殺されたのだ。

「何も、聞かないから」

「黙れぃ！」

「ジャネットと同じトコには行かせないっ」

「ぬうう、来るなっ、来るなあ！」

ジェーンは踊り場に飛び込み、青髭を追った。彼は後ろを振り返

りながら、ほうほうの体で階段を上る。しかし、最後の踊り場に追い詰められてしまった。

青髭がレイピアをジェーンに向けて、突く。彼女は狭い場所にも関わらず、臆せず地を蹴った。鈍い音がして足場が揺れる。ジェーンは一瞬で彼の懐に入り込み、心臓を狙って腕を振り上げた。肉を叩き、貫く感触。彼女は眉根を寄せる。

「……お、おお」

青髭の体がよろめき、彼の背中が手摺りにぶつかった。ジェーンは腕を戻す。彼女の爪には何かが刺さっていた。

「……グリモワール」

舌打ちする。青髭が魔導書、『ルルイエ異本』を懐に忍ばせていたので、ジェーンの攻撃は心臓まで届かず、致命傷には至らなかったのだ。

「お前はあ、わしから奪うのかあ……」

背を向けた青髭は、手摺りを飛び越えて、鉄塔部分の不安定な鉄筋に乗る。ジェーンから逃れようとしているのか、ふらふらと歩いていく。その先に、逃げ場などないというのに。

「あああっ！」

一も二もない。ジェーンは青髭の後を追い掛ける。待ち望んだ結末を、もう少しで手繰り寄せられるのだ。彼女は銃を抜こうとして、一瞬躊躇う。一種の恐慌に陥りながらも、青髭はジェーンの逡巡を見抜いた。

「く、かかっ、ば、馬鹿め。所詮、獣。弾の残りも数えられなかったか」

ジェーンはまた一歩、足を踏みだす。青髭は後ろに下がろうとするが、背に冷たく、固いものがぶつかった。

「Ｎｏ　ｗａｙ　ｏｕｔね」

「わしを殺すか？　やってみると良い」

レイピアを向けられて、ジェーンは薄く笑う。彼女は狭い足場をものともせずに駆けた。左腕を振り上げる。青髭は得物を突き出し

た。ジェーンは右腕でレイピアの軌道を反らして、弾く。胸を狙った一撃だが、彼に読まれていたのだろう。青髭は腕で防御していた。肉が割れ、傷口からは止め処なく血が溢れている。青髭は笑った。

「このわしが捨て身とは」青髭はジェーンの左腕を掴む。そのまま、彼は体勢を崩した。上半身が支えを失い、空を目指す。

ジェーンは逃れようとするが、青髭の力は存外強かった。彼は自ら落ちようとする。がくんと、彼女の体が揺れた。腹這いになり、低く呻く。

「ほ、ほほう！　わしとて『円卓』の端くれよ！　魔導書を失ったが、獣一匹道連れに出来んでどうする！？」

追い詰められたと判断した青髭は、最初からこうなるのを狙っていた。ジェーンが銃を使わないのではなく、使えないと知った。自分を殺す為に、彼女は近づく必要があった。捕まえればこちらのものだとほくそえむ。が、もはやこれまで。彼は既に生を諦めている。

「はなせっ」

「一人では逝かんぞ！」

ジェーンの抵抗を鬱陶しく感じた青髭は、第三の腕を出す事に決めた。彼はぶら下がった状態から、ジェーンに向けて腹を見せようとする。彼女はその行動を奇異に感じたが、左腕が掴まれて、右腕も彼には届きそうになかった。

「落ちろ、落ちろっ」

「ふほっ、嫌がらずとも！　わしと共に往こうではないかあ」

「落ちろ！」

ジェーンの右腕が、あるものに触れた。旗、である。先は尖っており、刺さると痛そうだった。彼女はそれを握ろうとする。しかし、

「――――アッ」力が弛んでしまった。ジェーンは浮遊感を覚える。下を見ると、醜悪な笑みが目に入った。

死ぬかもしれない。

そう思った瞬間、ジェーンは決意する。ここで青髭と落ち、共に死んでしまうのなら、それよりも先に殺してやろうと考えたのだ。

青髭が腹から腕を伸ばそうとする。ジェーンは自ら、中空に体を踊らせた。
「潔いぞ！」
生憎だが、このまま落ちてやるつもりはない。ジェーンは旗を抜き取り、青髭の腹に、
「……おお？」
突き刺し、入れた。
「がっ、は……！」
青髭は血を吐く。ひしゃげた鉄の棒が肉を貫き、内臓を傷めていく。彼女にとっては幸運な事に、突き刺した箇所は第三の腕が生える筈の部分だった。
「これまでか、あ……」
力が抜けていく。青髭はジェーンの腕を離そうとはしなかったが、体は命令を聞かなかった。ゆっくりと、二人の距離が遠くなる。
ジェーンは目を瞑った。浮遊感はとっくに消失している。後はもう、落ちるだけだ。重力には逆らえない。運命には抗えない。彼女は手を伸ばす。月が遠くなり、気が遠くなる。ジェーンの手を掴んでくれる者は、どこにもいなかった。

何が出来る。何をすれば良い。
自問しながら一は駆ける。鉄塔前に近づくと、コヨーテが向こうから歩いてくるのが見えた。彼は一の顔を確認するなり、助けてくれと叫ぶ。あの子を救ってくれと必死に吠える。
「お前は無事だな！？」
「ミーは！　嬢ちゃんを、頼む！　頼むからっ」
立ち止まらずに走り抜けた。一は惨状を目にする。死体の損傷度合から見て、ヴラドは塔の上から落ちて死んだらしい。
――――ジェーンも、ああなるのか？
最悪の想像、最低の結果を振り払おうとする。一はようやく立ち

止まり、顔を上げた。
「あ、あ……」
膝をつく。もう、間に合わないと悟った。知らずに涙が零れる。
何が出来る。何をすれば良い。
何も出来ない。どうする事も出来ない。
無意味だ。あまりにも無駄過ぎる。何の為に、自分は生きている。
何の為に、ここに来たのだ。ジェーンの全てを奪った青髭。彼を殺そうと、一度は覚悟を決めた筈だった。そう、一度は。一はジャネットと出会い、揺らいでしまったのである。そして、全てを押しつけた。『妹』に何もかもを押しつけて、自分は何もしなかった。悔やんでも悔やんでも、悔やみ切れない。出来うるなら、自分を殺してやりたかった。彼に出来るのは、名前を叫ぶ事だけである。その声は一種無常に、周囲に響き渡った。

真っ白だった世界に色が戻る。
薄れかかった意識が急速に覚醒していく。
手を伸ばす。
落ちながら空を掴み、逆さまになりながらも何かを求める。
まだ、死ぬ訳にはいかなかった。諦める事も選べなかった。何と無様で、見苦しいのだろう。分かっていた。それでも彼女は手を伸ばす。
「あっ、アア……！」
彼が叫んでいた。
彼が吠えていた。
彼が今にも泣きだしそうな声を上げていた。
彼が、自分の名前を呼んでいた。
「アアアァァアア――――！」
血よ騒げ。月夜に狂え。呪われた力だろうと関係ない。もう一度、会いたかった。顔を見たい。声を聞きたい。わがままを言って困ら

せた事を謝りたい。その為なら、悪魔に魂を売ったって構わない。
右腕が熱く、燃え上がるようだった。咆哮が天を穿つ。ジェーン＝ゴーウェストが腕を伸ばす。銀の弾丸は、まだ勢いを失い切っていない。届け届けと声を荒げる。体を揺らし、彼女は鋼管に爪を立てた。落下速度が僅かに緩み、次の鋼管に爪を、腕を伸ばす。
掴んだ。認識した瞬間、彼女の体躯が大きく軋む。右腕が砕けそうだと錯覚した。離すものかと歯を食い縛る。近くなった地面を見下ろすと、意識が朦朧とし始めた。左腕を突き出し、両手で命を繋ぐ。ジェーンは踊り場に向かって、雲梯の要領でゆっくりと移動を始めた。
「あ、ああ……ジェーン……」強い力に引き寄せられる。無事、足のつく場所に辿り着けたのかどうかは分からない。ただ、暖かいものに包み込まれているのは分かった。
「お兄ちゃん……？」
「良かった……良かった……！」
啜り泣いているのは誰だろう。自分か、それとも一か。
ジェーンには分からない。一に抱き締められているのに気付いて、彼女は初めて生きているのを実感する。
「ごめん、ごめんなあ、俺、何も……！」
一の涙で服が濡れていた。ジェーンの頬は緩んでしまう。
「何も出来なかったっ、お前を、助けられなかった！」
「アタシ、生きてるんだね」
「あの子を見殺しにしたんだ！　お前の友達、だったのに！」
「……生きてる」そっと、手を伸ばす。ジェーンは一の頭を撫でてやった。自分も泣いているのに気付いて、彼女は息を漏らす。
「生きてる、よ？」
ジャネットは死んだ。だけど、自分は生きている。一は泣き止まなかった。
「ごめ、ごめんっ、俺は……！」
「も、いいから。お兄ちゃんは悪くない」

「……俺は、お前を諦めたんだ。分かってたのに、動けなかった」

泣くのを堪えようとしているのか、一はジェーンを強く抱き締める。彼女は抵抗せずに、受け入れようと思った。

「でも、呼んでくれた」

力を抜いていく。待ち焦がれていたものが、こんなにも近くにあって、ジェーンは夢を見ているのかと、気が狂いそうになった。

「お兄ちゃんの声が聞こえたカラ、がんばれた」

「そんな、そんなので」

「……アタシ、ガキで、ごめんなさい。でも、好きなの。いっぱい甘えたかったの」

「う、あっ……馬鹿。馬鹿だなあ。駄目な兄ちゃんで、ごめんな。本当は、本当はもっと俺が、しっかりしなきゃいけないのに……！」

最初からこうしていれば良かった。素直に言いたい事を言って、気持ちを伝えていれば良かった。喧嘩も下手で、仲直りにも時間が掛かる。自分たちは駄目なヤツだと、ジェーンは小さく笑った。

「お兄ちゃんの妹で、いいんだよね？　お兄ちゃんって呼んでもいいんだよね？」

一は言葉に詰まり、必死で頷く。

ジェーンは自分の腕を見つめた。狼の血が混じった、人外のそれを。

「アタシね、これでよかったと思う。イヤなコトいっぱいある。けど、お兄ちゃんがいてくれるんなら、こうなってもよかったって……」

もう、血に屈する事はない。力に負けるような真似もしない。この身に流れるモノと向き合い続ける。そうしていつか、胸を張れるようになろう。彼女にがっかりされないように生きていこう。彼に相応しい自分になろう。そう、ジェーンは誓う。神にではない。天使にではない。誰よりも誇らしい、自分に。

「ちょっと、ねむい」

「……ああ、後は任せて」
「……お兄ちゃん、おんぶ」
「ああ、分かった。ジェーン、お休み」

一はジェーンを背負い、ゆっくりと階段を下りていく。彼はアイギスを強く、強く握り締めていた。
階段を下り切ると、一は足を止める。まだ、全ては終わっていないのだ。
「よう、生きてんだろ」
一は青髭を見据えている。返事はない。だが、彼は僅かに身動ぎした。
「……ぐっ、ぎ……」
「『円卓』について話す気はあるか？　今回の事、謝る気はあるか？　俺の妹に何か言う事はあるか？」
青髭は手を伸ばそうとしている。その先には何もない。救いも、助けも。ただ、鮮血が広がっているだけだ。
「……ないよな」一は足を踏みだす。
「わ、しを……」一は足を止める。
「たすけ、ろ。……ひ、わしが、死ねば、むすめは、死ぬまでそのままだ……」
一は青髭の腹に突き刺さっているものを認めた。
「も……どせるのは、わっ、わし……わしだけじゃあ……」
「端っからさ、お前が死んでも、お前が奪ったもんは戻ってこなかったんだよな」
「わし、わしが……」
「だからせめて、そこで、そのままでいてくれ」
一はアイギスを地面に投げる。ジェーンを片手で支えて、彼女のホルスターから抜いておいた銃を構えた。

Give It Up

一発の銃声が響いて、コヨーテは目を瞑ったまま耳を動かした。
全身が痛んでいて、起き上がれる状態ではない。幸い、致命傷は負っていなかった。後ろ足を引きずりながら、鉄塔に向かう。
誰が撃ったのか。誰を撃ったのか。響いた銃声が示すものは何だろう。白いハトはもういない。ジェーンを背負った一が見えるだけだ。
「嬢ちゃんは……？」
一は小さく微笑む。
「寝てる」
「そうかい」コヨーテはほっとしたように息を吐いた。
「ボーイ、奴らはどうなった？」
ああ、と。一は声を漏らす。
「モロクは、倒せなかった。青髭がやばいからって勝手に帰っちまったよ」
「ヴラドはそこでぐっすりと眠ってる。良い夢か悪い夢かは知らないけど、二度と目を開けないだろうさ」
「だと良いけどな」パニックムービーならもう一波乱あるかもしれないと、一は苦笑する。
「青髭は誰がやったんだい？　ボーイか？　それとも……」
一は首を横に振った。
「当たらなかったよ」
「……最後のアレは、ユーが撃ったのか」
「ああ。弾、一発しか残ってなかった。野郎なら勝手に死んでるよ」
風が吹き抜けていく。一の表情からは、真実が読み取れなかった。
コヨーテはふっと笑みを漏らす。

「勿論、地獄行きだろうね」
「だろうな。あ、いや、ミスったな。悪魔が好きなんだから、向こうが天国に思えてるかもしれないぜ」
「死は死さ。青髭は終わった。それだけは確かなんだ。それ以上、ユーは何を望むんだい？」
「望みか」一はジェーンを見遣った。それだけで、コヨーテは理解する。
ジェーンに伝えるべき言葉がある。通すべき筋がある。コヨーテは悲しそうに鳴いた。彼の言葉は、彼女には通じない。
「リトルボーイ、起こしてくれないか。悪いが」
それでも、コヨーテは声を発するのを決める。一は彼の覚悟を汲んでやろうと思った。
「何を言うつもりなんだ？」
「ミーは、謝りたいって、それだけなんだよ」
だから。そう前置きして、コヨーテは俯く。
「許されるとか、そんなのは求めちゃあいない。嬢ちゃんが欲しいなら、ミーの命もここで……」
「……俺が伝えてやろうか？　まあ、信じてくれるかは分からないけどさ」
「いや……良いんだ」
一は溜め息を吐き、ジェーンを背中から下ろした。彼女は身動ぎを繰り返し、眠たそうな声を出す。
「ん、んん、ぐっ、もーにん？」
「悪いけどさ。ちょっとだけ、目ぇ覚ましてくれないか？」
ジェーンとコヨーテの視線がぶつかった。
「お兄ちゃん、犬がいる」
「犬じゃなくてコヨーテってんだ。ほら、良いから少しだけ降りてくれよ」
「少しだけだよ？」
コヨーテの前にジェーンが立つ。彼女は状況を把握していないら

しかった。あるいは、今も夢を見ていると勘違いしているのかもしれない。

ジェーンは目を擦った。コヨーテが、すぐそこでちょこんと座っている。今になって考えれば、彼は何者なのだろう。一はコヨーテの事を良く知っているらしいが、彼女はコヨーテについて何も知らないに等しかった。

「……お兄ちゃん？」

一は何も言わない。ただ、事態の行く末を見守ろうとしている。何が起こるのだろうと、ジェーンは不思議に思った。やがて、コヨーテが口を開く。彼は細く、長く鳴いた。

彼女は自然と目を瞑る。言葉では言い表せない、何がしかの力を秘めた声である事には気付いた。だが、コヨーテが何を言っているのか、何を言いたいのかは分からない。

コヨーテは鳴き続ける。戦闘時とは程遠い、頼りなげな声だった。ジェーンはゆっくりと瞼を開けて、彼の頭に手を置こうとする。

「かまないかな」

「噛むもんか」一は寂しそうに言った。

「あっ」

ジェーンの手を避けるかのように、コヨーテは頭を振る。彼女は不満そうに彼を見据えた。

「ね、お兄ちゃん。この子、何か言いたいのカナ」

「……うん。お前に……」一は言い掛けて、口を閉ざす。

「話、聞いてやったか？」

ジェーンは頷いた。尤も、コヨーテが何を伝えたいのかも分からなかったのだが。

「ほら、かーむひあ？」

手招きされて、コヨーテはうろうろとし始める。

「こわくないってば」

コヨーテはやがて、ジェーンの傍に歩み寄った。彼は躊躇いがちに顔を上げる。
温かなものが、コヨーテの頭の上に置かれた。
「よーしよし。ふふ、ねえお兄ちゃん」
ジェーンはコヨーテの頭を撫でながら目を細める。
「この子、なんだか泣いてるみたい」
瞬間、コヨーテはジェーンから後退りした。彼は背を向け、足を引きずったままで駆け出してしまう。
「あっ……行っちゃった」
ジェーンはその場に座り込んだ。見上げれば、あんなに恐ろしく思えた月が、今は妙に小さく感じられる。彼女は一に微笑みかけた。
「あ、鳴いてる」コヨーテが吠え声を上げている。
「ああ、泣いてるな」
また、いつか会えるだろうか。生き残った者同士、喜びを分かち合えるだろうか。そんな事を考えながら、ジェーンは再び尋ねてきた睡魔に身を委ねた。

「昨晩はお疲れ様でした」
耳元で囁かれて、一は寝返りを打った。
「八面六臂の活躍をなさったマスターが撃滅したのは、『円卓』のメンバーだったそうではないですか。今日はお祝いですね。マスターの好きなものを作ります！　ですから、召し上がっていただけると嬉しいです。ナナはとっても喜びます」
まくし立てられて、一は布団を被った。
「あら？　マスター、朝ですよ。後二時間でアルバイトなんですよ？　私と一緒に働きましょうよう」
「……うるせえなあ」言ってから、侵入者の存在に気付く。一は跳ね起きて、布団から立ち上がった。
「おはようございます」

三つ指突いて頭を下げるのは、平然とした様子のナナである。彼女はたっぷりとした間を取った後、にっこりとした笑みを一に向けた。

「また、鍵こじ開けたのか？」

「いいえ。最初から開いておりました」

「そう、だっけ？」

昨夜、家に帰ってからの記憶はあやふやだった。一は頭を掻きながら、その場に座り込む。

「粗茶ですが」

卓の上に置かれたマグカップを見て、一はナナを睨んだ。

「俺んちのだぞ？」

「つまり私の家のものでもある訳ですね」

「すっかり口が達者になっちまって。誰に教えられたんだ、誰に」

ナナは何も言わずに、ただ微笑んでいる。一はカップを手に取った。

「マスター、私、昨夜に起こった事の殆どを耳にしています」

「あー、そうなのか。いや、大変だった。と、思う」

「幾つか気になる事があったので、マスターにお伝えしておこうと思ったのです。あの後、マスターたちがいなくなった鉄塔前で何があったのか」

「……何かあったのか？」

様々な想像が一の頭を駆け巡る。まさか、青髭は生きている？それともヴラドが？　彼は縋るような思いでナナを見つめた。

「ご心配なさらず。青髭とヴラド・ツェペシュの死亡は確認されています。情報部からの確かな報告です。死体は、タルタロスが処分したと、そう聞いています」

「そ、か。そっか。ああ、心臓が止まったかと……」

「ですが、『広場』の死体は見つかりませんでした」

マグカップの中身が買い置きのコーヒーだったのに気付き、一は黒い水面に目を遣る。

「……それは、ジャネットはモロクに……」
「モロクに跡形もなく焼かれてしまった少女の報告なら受けています。彼女以外の死体が、どこにも見当たらなかったそうなのです」
「いや、おかしいぞ、それ。俺は見たんだ」
記憶があやふやになる前、一は確かに見ていた。『広場』の死体が七つ、ヴラドの影によって串刺しにされていたのを。ジェーンも、ジャネットも見ていたから間違いない筈だった。だが、一つの可能性に思い至る。寝起きだった彼の、精一杯の答えだった。
「ヴラドが死んで影が消えた。死体は薄っぺらだった。だから、どっかに飛ばされちまったんじゃないのかな」
「いえ、ですから探しても何も見つからなかったのです」
「俺の正気を疑うってんなら……」
「私がマスターを疑う筈がありません。ただ、死体が見つからなかったのは事実です。そして、死体があったのも事実なのです。だから、気になってしまって」
気まずい静寂が部屋の中に立ち込める。朝っぱらから嫌な空気だと感じた一は話題を変えようとした。
「コーヒー淹れんのさ、上手くなったな」
「そう、ですか？　私、自分では確かめられないから……マスターにそう言ってもらえると、嬉しい」
「大袈裟なヤツ。……あのさ、棒みたいなんって、見つからなかった？」
ナナは小首を傾げる。
「青髭に刺さってたと思うんだけど」
「あ、申し訳ありません。私は、そこまでは聞いてなくて。いっ、今から情報部に行ってきましょう！」
「そっ、そこまでしなくて良いって！」
一はナナを押し留めて、元の場所に座らせた。
「大事なもの、だったのでしょうか」
「俺にとってはただの棒だよ。それ、ジャネット……ああ、『広場』

の女の子でさ、その、ジェーンの、友達だった子が持ってたものなんだ」
「情報部に！」
「だから良いってば！」
ナナはうな垂れる。最近、彼女はますます人間っぽくなってきた。悪い変化ではないと思ったので、一は何も言わなかった。
「でも、そうか、なかったのか」
「ジェーンさん、悲しむでしょうか」
「や、それはないと思う」
ナナを慰める為ではない。一は本当に、そう思ったのである。
「……ジャネットさん、ですか」
「うん、ジャネット。死んだ奴の悪口なんか言うつもりはないけどさ、まあ、変わった子だったよ。でも、何だろう」
一は言い淀んだ。ジャネットをどう形容していいものか分からなかったのである。暫くの間、言葉を止めて、やがて、一つの答えに辿り着く。
「うん、良い子だったよ。俺はそう思う」
「私、気付いた事があるんです。きっと、マスターも気付いていると思うんですけれど」
「ああ、もしかして、名前？」
ナナははっきりと頷いた。
「ジャネットというのは、ジャンヌ・ダルクが生まれ育った場所、ドンレミ村での、彼女の呼び名ではありませんでしたか？」
「映画じゃあどうだったかな……」一は顔を逸らす。
「でも、ジャネットにはさ、ジャネットって名前のが似合ってたと思うんだよ。肩肘張ってなくてさ、良い名前じゃないか。うん、だから、それで良いんだと思う」
「浪漫ですか？」
「浪漫だね」
一は誤魔化すように笑って、マグカップに口をつけた。

仇を取ったから、何かが変わるでもない。昨日は昨日、今日は今日、明日は明日で時間は過ぎて世界は回っていくのだろう。
「はじめくーん、何か難しそうな事考えてる？」
「え？」
一は目を丸くさせた。モップを掛け終わった立花が、意地悪そうに笑っている。
「ボクで良かったら相談に乗るよ？」
「立花さんが？」
「うん、立花さんが」えへへと、立花はもう一度笑った。
立花はぺたぺたと床を踏んでいく。カウンターまで近づくと、一の胸をモップの先でつついた。
「ざっくりばっさり、何でも解決しちゃうよ？」
「……暇なんでしょ？」
「うん」素直に頷く。
カウンター周りの消耗品の補充を終えた一は、ゆっくりと体を伸ばしていく。
「じゃあ、聞いてくれるかな」
「うんっ、どうぞ！」
「バーチ・スウィンナートン＝ダイアー予想についてなんだけど」
「そう言えば、ボクさっき犬を見たんだよ」
立花は上手く話を反らせたと思っているようだったが、彼女の目は泳いでいた。
「へえ、犬？」
「ほら、前に見たもふもふした子。店の近くにいたから、捕まえようと思ったけど逃げられちゃった」
「じゃあ、またいつか会えるかもね」
「だと良いね！」
さてと、と。立花は不自然に呟き、一に背を向けて歩き始める。

が、彼女はドアの開いた音に反応して、商品棚から顔を覗かせた。
「あっ、ジェーンちゃんだ！　おはよう！　じゃなくて、ぐっもーにん！　……かな？」
声を掛けられたジェーンは足を止めて、戸惑ったような素振りを見せる。一は助け舟を出してやろうとしたが、
「……お、おはよう」
彼女はそれよりも先にぎこちない笑みを浮かべていた。
「うんっ、今日も頑張ってお仕事しようね」
「ン、うん」
「今日のおすすめはさー」
一はそっと、カウンターから抜け出す。バックルームまで気付かれずに戻ると、一つ、息を吐いた。
「安心したか、『お兄ちゃん』？」
底意地の悪い笑みを浮かべているのは店長である。彼女はわざわざ椅子から立ち上がり、一を見下ろしていた。
「俺に恨みでもあるんですか」
「あったらどうする」
「いっそ殺せ」
「だったらそうする」
「すんなすんな！　しなくて良いですから！」
店長は舌打ちした後、定位置である椅子に座った。
「ふう、さっきは言いそびれたが、昨日はお疲れ様だったな。ああ、情報部から話は聞いている」
「『円卓』、倒せたんですよね」
「じゃなくて、お前らの仇だろ。『円卓』って肩書きはそいつのおまけだ。……面食らうな、馬鹿者が」
「いや、そんな風に言うとは思ってなかったもんですから」
一はパイプ椅子に座ろうとするが、店長はそれを許さなかった。
「私は鬼でも悪魔でもない。まあ、ラッキーだとは思っているよ。あの蛇女どもに続いて、これで二人目を仕留められたんだからな」

店長は煙草に火を点けて、美味そうに煙を吸い込む。
「全く、分かんない奴らですよね」
「後は、お前らが見たテュールとかいう侍が残ってるな」
「そいつだけじゃないとは思いますけど」
「ま、私たちが全部を相手にする必要はないと思うがな。都合良く駒台に現れるとも思えん」
紫煙が場を充たす。一は自分も吸いたくなってきた。
「ともかくだ、ゆっくり体を休めておけ」
「え、じゃあ上がらせてくれるんですか？」
「はあ？」
「えー……じゃあんな事言うなよな」
「ぶつぶつ言ってないで働け！」
横暴である。矛盾を具現化した存在が目の前にいる。一は諦めて、バックルームを出ようとした。
「お」
「あ」
扉が開く。ジェーンは扉を押さえたまま、一に先へ行くように促した。
「何それ？」
「買ったの。今日のおすすめ、だって」
ジェーンはビニール袋を少しだけ持ち上げる。
「それよりもほら、仕事」
「分かってるって」
「……がんばってね」
「……ん」
扉が閉まる。一はこそばゆい気持ちを抱えたままフロアに出た。
今日も月は丸い。明日もまだ丸い。人を狂わせ、血を騒がせるモノだ。目を背けようとしても、逃れようとしても、月はいつも、自分たちを見下ろしている。最初から、人間がどうこうと出来る存在ではない。

だが、今日からは違う。今夜の月はいつもよりも小さく見えるのだろう。一はそんな気がしていた。

現実に於いて

幸せとはなんだろう。

お腹いっぱいになって、暖かいベッドで眠りに就く事だろうか。恋人と甘い時間を過ごす事だろうか。それとも、何者にも脅かされない世界を手に入れる事だろうか。お金さえあれば、誰もいないところに逃げ込めるのだろうか。

そんな事を、少女は十の頃に考えた。

幸せとはなんでしょう。

そう、尋ねた事があった。答えは明確だった。『主に仕える事が至上の喜びなのです』と、神父は言った。十を過ぎた少女は納得して、安心して、祈りの言葉を唱えた。

――――主よ、感謝します。

幸せの象徴が何も言わず、語らず、黙したままだと気付くには、暫くの年月を要した。

ポケットの携帯電話が震える。こんな時に出られる筈もない。前方の標的を見据えながら少女は走る。ガンベルトからリボルバーを抜き、銃口を向けた。

「ジェーンさん、向かってきます！」

「オッケイ」頷いて返すと、ジェーンは引き金を二回引く。ソレは頭を振って銃弾を避ける。彼女は続けざまに発砲した。

弾丸がソレの体に食い込み、貫こうとする。虎に似た体の怪物は体勢を崩し、足を滑らせて転倒した。

メイド服を着た女が跳躍する。高く、高く跳び上がり、彼女は倒れているソレに向けて、両膝を突き出すようにして落下し始めた。

「ゴーっ、ナナ！」
「これが私のダイビング・ニー・アタックっ、です」
肉が砕けて骨がひしゃげる。ナナの一撃を背中に喰らったソレは断末魔の叫びを上げると、活動を停止した。ナナはスカートの埃を払い、眼鏡の位置を押し上げる。
「やったじゃナイ、クールだったわよ」
「恐れ入ります。ジェーンさん、お怪我はありませんか？」
ジェーンは心配ないと小さく笑った。
「では、店に戻りましょう」
「ん」頷いてから、ジェーンは携帯電話を確認する。店から掛かってきていたので、彼女は眉をひそめた。
「ボスからだ。もう、コンセントレーションがなくなったらどうするつもりなのかしら。……モンク言ってやる」

「先輩先輩」
「んん？」
一はホワイトボードから視線を外した。シャープペンシルを机に置き、少しだけ面倒くさそうに、隣に座る早田を見遣る。
早田はルーズリーフをペンで叩いた。
「学生と生徒の違いとは何だろう」
「藪から棒に」講師が話を止めたので、一は口を閉ざす。自分たちが教室の前の方に座っているのは、お喋りをする為ではないのだと言い聞かせる。
「……なんだよ。学生と生徒？」
小さく頷き、早田は前を向いた。
「気になって夜も慰められないのだ」
「じゃ、疑問は解消しなくても良いな」
「私は疑問も性欲も解消したい」
一も前を向く。彼は隣に誰も座っていないと思い込み、ホワイト

ボードの文字をルーズリーフに書き写し始めた。
「あー、ムラムラする。ここでシてしまおうかと思うんだが、どう思う先輩。個人的な意見としては、衆目の視線に晒されている方が羞恥心も増し、気持ち良くなれる筈だ」
早田はちらちらと一を見る。相手にされなくて暇そうだった。
「先輩先輩、授業と講義の違いとは何だろう」
「……少なくとも、お前は学生じゃなく生徒で、講義じゃなく授業がお似合いだよ」
「あははっ、良く分からないけど褒められた」
「うん、お前はそのままでいてくれれば良いと思う」
講師がちらちらとこちらを見ている。一は咄嗟に視線を逸らした。
「先輩は昼休み、ゼミ室に行くのか？」
「そうするつもり。メシは買ってあるし」
「ならば私もお供しよう」
一は露骨に嫌そうな顔をする。早田は歯を見せて笑った。
「楽しみだなあ、先輩とご飯。先輩のご飯。先輩をご飯。先輩をオカズに」
「なあ、お前病院で診てもらえよ」
「私は健康優良児だぞ。ところで人間ドッグってエロく聞こえないだろうか」
「ドッグじゃなくてドックな」そろそろ講義も終わる。今日は何事もなく終わってくれるだろうか。一はぼんやりと考えた。

教室を出た一と早田は並んで歩く。彼はゼミ室までの距離を妙に遠く感じていた。
「先輩、コンビニに寄りたいのだが」
「行ってこいよ」
「一緒に行こう」
一は無言で首を振る。

「一人で行けよ」
「私は、先輩と一緒にイキたいのだ！」
「お、楯列じゃん。よう、お前もゼミんトコで食うのか？」
声を掛けると、前を歩いていた男が立ち止まった。人波が少しだけ割れて、そこに取り残された彼は振り返り、整った顔立ちを一に向ける。
「やあ、一君。今日も素敵だね。うん、君がそうするなら、僕もそうしようかな」
「じゃあ、俺は違うところで食べるわ」
「何故だ先輩っ！？」
「いや、どっちか片方だけならまだ我慢出来るけど、両方ってなると……」
早田は楯列を睨みつけて中指を立てた。
「消えろ、ぶっとばされんうちにな」
「それ負けフラグだからな」
「ふっ、早田君は首から上も鍛えているようで何よりだよ。じゃ、行こうか一君。彼女は家に帰るそうだから」
楯列が一の肩に手を置こうとする。瞬間、早田が楯列に飛び蹴りを放った。こめかみに衝撃を喰らった彼は宙に浮いて吹き飛び、冷たく、固い床に頭を打ちつける。その光景を見ていた他の学生はそそくさとその場を立ち去るが、中には携帯電話で写真を撮っている者もいた。
「顔は写すなよ……ピースしてんじゃねえ早田！　ただでさえ馬鹿なのに余計に馬鹿に思われるぞ」
「恥辱の極みだ」
「嬉しそうに言うな。おい楯列起きろよ、服に皺が寄るぞ」
「それは困るね」楯列は何事もなかったかのように立ち上がり、ゼミ室に向かって歩き始めた。
「……頑丈な奴だ」
「一言で済ませるにはどうかと思うがな。今の蹴り、私は奴を殺す

気で放ったのだ」
「その台詞もどうかと思うけどな」

九十九のゼミ室は昼休みでも、講義中であっても開放されている。学生たちはそこへ自由に出入り出来るのだ。尤も、九十九ゼミの学生は一、楯列、早田の三人しかいない。彼らには教室の鍵が貸与されている。
「……開いてる」
だが、今日は様子が違った。一はドアノブをゆっくりと回す。早田に視線を遣ると、彼女も不思議そうに首を傾げた。
「先生ではないのか？」
閉まっている筈の鍵が開いている。自分たちではないとすると、中にいるのは九十九本人しかないだろう。早田は部屋の中を覗き込もうとした。が、一は彼女を押し留める。
「いや、先生は来ない。図書館……あ、いや、ちゃんと確認してきたからな」
「小言を聞かされるのが嫌なら毎日学校に来れば良いんだよ。その方が僕も嬉しい」
「うるせえな。……つー訳で、ここには今、九十九ゼミの人間じゃあない奴がいる」
「実際に確かめてみれば良いではないか」
『あ、もしもしー？』
三人は顔を見合わせた。部屋の中から、妙に高く、甘い女の声がする。
『うん、うん、えー？　マジで？　はああ、何それありえねー』
「一人ではないのか？」
「電話で誰かと話しているんだと思うよ。けど、九十九先生ではないね」
そりゃそうだろと一は楯列を見遣った。

「若い女だな。もしかして、新しいゼミ生ではないか」
「聞いてねえぞ、そんなの」
『そんなメンドイならブッチしちゃえば良いんじゃん？　つーか、バイトなんかテキトーで。そそそ、テキトーテキトー、社員と違ってやる気なんかあるワケないじゃんねー。働いて欲しいならもっと時給上げろっつーの』
　一は溜め息を吐く。
「一生掛かっても友達になれなさそうな子だな」
「自慢ではないが、私はただでさえ友達を作るのが下手なのだ。正直、気まずいぞ」
「お前でも、気まずいとか思う事があるんだな」一は素直に感心した。
「僕も同じだよ。……だけど、聞き覚えのある声のような、そんな気がする」
　楯列は腰に手を当てる。ううんと、難しそうに唸った。
「……違うところで食うか」
「しかし、今から学食と言うのは。もう殆ど席は埋まっているだろう。無論、先輩がやれと言うなら、席の一つや二つ奪い取ってみせるが」
「どちらにせよ、いずれは対面しなきゃならないんだ。一君、覚悟を決めようじゃないか」
　言いつつ、楯列はドアノブに手を掛け、一息に回した。
「ん？」
　室内にいた者が、一たちの存在に気付く。
「なっ……！　てめえ……」
「あー、何か、ちょっとウザい事なりそうだから切るねー。うん、ごめんごめん、またねー……っと」
　携帯電話をちゃぶ台に置くと、彼女は大儀そうに顔を上げた。
「どうしてここにいやがる！？」
　一は靴を脱ぎ、畳の上をずかずかと進む。彼に指差された少女は

やれやれと言った風に息を吐いた。
少女は黒い着物に身を包んでいる。襟や袖口にフリルの付いた、少し変わったものであった。
「おお、槐ちゃんではないか」
少女の名は槐。彼女は人間ではない。座敷童子と呼ばれる、ソレである。
「久しいな、早紀」
「俺の質問に答えろやオカッパ」
槐は一を見上げると、わざとらしく顔を背けた。早田と楯列は畳の上に座り込む。一だけが突っ立ったままだった。
「埃が立つ。座らんか、一」
「……どうやってここに入った？」
鞄を置き、一はその場にどっかりと座り込む。
「目くじらを立てんでも良いではないか。ほれ、これで扉を開けたのじゃ」
槐は着物の袖口から鍵を取り出した。それは、九十九ゼミに在籍する学生に貸し出されるものであった。
「そうかー、槐ちゃんも大学生になったんだなー」
一は無言で楯列を睨みつける。
「やだなあ、僕は何もしていないよ」
「構内はともかく、ここは部外者立ち入り禁止だぞ」
「何もしていないって。ただ、鍵をどこかで落としたかもしれないなあ」
「ほら見ろ。……おい、さっさと帰れよ」
「……何故じゃ？」
そうだぞと、早田が槐を抱き抱えた。
「以前にも、槐ちゃんを連れてきた事があったではないか。その時は先輩、何も言わなかった筈だ」
「前はな。でも、ここは違うだろ。後で怒られたらどうすんだよ」
楯列はなるほどと笑う。

「そっちが本音だね。そう言えば、最近は前の方で講義を受けるよね、一君」
「ふん、小さい男じゃ。点数を稼ごうとしているのが見え見えで、見てるこっちが痛い」
「あーあー、うっせえうっせえ」
鞄からビニール袋を取り出して、一は菓子パンの包みを開いた。
「知らないぞ、先生が来ても」
「来ないと言ったのは先輩だろう」
三方から攻撃を受けてふて腐れた一は、無言でパンを齧る。
「ところで槐ちゃん、今日はどうしたのだ？」
「うむ、暇だから遊びに来た」早田の膝の上で、槐はどこか誇らしげに言った。
「だってさ」
「どうして俺に言うんだよ。つーか、暇ならお前が潰してやれよ」
一がそう言うと、楯列は驚いたように目を見開く。
「そうだね。うん、そうだ」
「そうだっつーの」
「ところで一よ、お主、それだけで足りるのか？」
槐に尋ねられて、一は鬱陶しそうに目を瞑った。
「ここには食堂もあると聞いておる。そちらの方が、こう、がっつりと食べられるのではないのか？」
「その通りだよ。けどな」一は早田と楯列を見遣ってから、深く息を吐く。
「変人に見られるのに、俺は慣れちゃいないんだ」
「はっはっは、どうしてそこで僕たちを見るんだろうね」
「うむ、先輩は時々良く分からない事をする」
二人は顔を見合わせて笑った。こういう時だけはやけに息が合っている。
「一人で行けば良いではないか」
「無理矢理ついてくんだから仕方がねえだろ。……母親面かよ、っ

たくよう」
「そう思うのはお主が子供だからじゃ。心に疚しい事がなければ……」
「早田、お茶淹れてくれよ」
「了解した」
早田は立ち上がるが、槐は彼女の袖を引いた。
「茶ぐらい自分で淹れぬか。早紀を小間使いのように扱うな」
「私としては、むしろ豚のように扱ってくれて構わない」一は無視する。
「じゃあお前がやってくれよ」
「どうしてわしが……お主の嫁でもないのにそのような事を」
「じゃあもう嫁に来いよ」
一はごろりと寝転がった。
「あほう」言いつつも、槐は立ち上がってお茶を淹れる準備を始めた。
「果報者だなあ、一君は」
「どこが」
「ああ、そうじゃ。忘れるところだった。実はケーキを買ってきておる。食べたい者はおるか？」
全員が手を上げる。一は槐に背を向けたまま、ではあったが。
「では男衆、ケーキに合うような飲み物を買って来い」
「ああ？　茶ぁ淹れてんだからそれで良いじゃねえかよ。つーか、先に言ってくれよ」
「ええい、つべこべと。行かんとやらんぞ。早紀と二人で分ける」
一は至極面倒くさそうに腰を上げる。楯列は楽しそうにしていた。
「紅茶で良いよな？」
「先輩が買ってくるものなら唾だろうと何だろうと！」
「どこで売ってんだよ、んなもん。槐は？　それで良いよな？」
「うむ。ああ、一、お主は茶も飲めよ？　わしが淹れてやるんじゃからな。心して飲むと良い」

「ありがたく頂戴しますよ」
手を振り、靴を履いて一はゼミ室を出て行く。楯列は彼の背中を追いかけるようにして部屋を出た。

「シキョー？」
初めて聞いた言葉に、ジェーンは小首を傾げた。
『ああ、そうだ。四凶』電話口から漏れるのは店長の声である。『虎に似た体、人の頭、猪のように長い牙、長い尻尾。ほぼ間違いなく、檮杌（とうこつ）？だな』
ジェーンは改めてソレの死体を見遣った。確かに特徴は合致している。店長が自信満々に断言し、ナナも間違いないと太鼓判を押していた。つまり、自分たちが倒したのは四凶のトウコツと呼ばれる怪物なのだろう。
「で、シキョーのトーコツって？」
『……説明を求めるならナナに頼む。一度、情報部と連絡を取ってみるから、また後で掛けてくれ』
通話が切れ、携帯電話をポケットに戻す。会話の内容が聞こえていたのだろうか、ナナはにこやかに微笑んでいた。
「ご説明、致しましょうか？」
「ノーセンキューって言ってもするんでしょ。ご勝手に」
「それでは、お店までの道すがら」
ナナはこほんと、咳払いをして喉の調子を確かめる、ような仕草をする。
「四凶とは、古代中国の舜帝によって四方に流された、四柱の悪神なのです」
「へえ、チャイナの」
「トウコツとは、四凶、その内の一体を指します。特徴としては、先ほど店長がおっしゃっていた事が挙げられます。加えて、難訓という別名もありますね」

「ボールはフレンド？」
「それは南葛です」
「グワァラゴワガキーン？」
「それは明訓です」
「ちっちゃくなっちゃった！」
「それは南くんです」
どれも違いますと、ナナは眼鏡の位置を直した。
「教え難い、と言う意味です。トウコツは尊大で頑固な性格をしています。好き勝手に暴れ回り、戦う時は退却するのを知らずに、死ぬまで戦う、と。そのような性質を持っていますから」
「さっきはガン逃げだったけど？」
「ええと……ああ、ジェーンさん。私、大変な事に気が付いてしまいました。四凶というからには、残り三匹の怪物がこの街にいるかもしれません」
ジェーンは、急に話を逸らしたナナを一瞥する。
「どうカシラ？」
肩を竦めて、ジェーンは小さく笑った。
「ジェーンさん、携帯、震えていますよ」
「……耳、イイのね」ジェーンは携帯電話を取り出し、不審そうに眉をひそめた。
「ボスからだわ。ちょっと、ごめん。……ハーイ、ナニかしら？」
一瞬、間を置いて。
『お前ら、店には戻らなくて良いぞ』
「Ｆｉｒｅ！？」
『Ｎｏだ。ソレが出た。いや、出ていたと言うべきか。四凶はきっちり出現していたらしい。つまり、あと三匹。仕事はまだ終わっていない』
ジェーンはがっくりと肩を落とした。
「お兄ちゃんと遊びたかったのに……」
『ああ、遊べるかもしれんぞ』

「どーいうコト？」
『三匹の内、二匹は駒台大学で目撃されたらしい』

ゼミ室を出て、一と楯列は同時に溜め息を吐き出した。
「……珍しい。何か憂鬱な事でもあったのか？」
「……僕にだって、失敗したなあと思う事だってあるさ」
楯列は先に歩き始める。一は彼の後ろを追いかけた。
「迷惑だったかい？」
「槐の事か？」
一は、楯列の顔を見ない。
「寂しがっていたからね」
楯列も、一の顔を見ていない。
「件の旅館からこっちに来たのは良いけれど、最近の槐君は殆ど部屋に引きこもっていてね。これじゃあ、昔と変わらない」
「昔？　東北の旅館にいた頃か？」
「いや、それよりも前、楯列の家にいた頃さ。今じゃ、槐君を囲おうとする者はいなくなったけど」
一は何故か、楯列の発した言葉に寒気を覚えた。
「それでも、僕は……もっと、彼女には自由になってもらいたいんだよ。そう、幸せになって欲しい。そう言い換えても良いと思う。縛られず、囚われず、自由なのは、幸せって事だと思うからね」
「でもさ、あいつ、ちょこちょこ街で見掛けた気がするんだけど」
「僕が無理矢理に追い出すのさ。家にいたって、僕の家が栄えるだけだからね」
「良いじゃねえか。……なあ、槐、一晩くらい俺んちに泊まっていかないかな？」
邪な笑みを浮かべる一をちらりと見遣って、楯列は苦笑する。
「君が言えば、二つ返事で了承するさ。でも、君はそうはしない。違う？」

「どうだかな。で、お前は鍵を置いていったって訳か」
「落としたのさ」
「あっそ。ま、切っ掛けくらいにゃなったんじゃねえの？」
「かもしれないね」二人は階段を下りて、角を曲がる。一ははたと足を止めた。
「何か今日さ、静かじゃねえか？」
一に倣い、楯列も足を止める。彼は周りを見渡し、腕を組んだ。
「いつもよりは静かだね。ほら、君と僕の声しか聞こえない。素晴らしい幸福空間だ。いつまでもここでこうしていたいよ」
「何が幸福だ。そんな空間、ゲヘナと良い勝負だな。……ま、もうすぐ冬休みだし、サボりも多くなるわな」
「君はサボらないのかい？」
「サボれないの。もう出席の貯金は使い切っちまった」
楯列は大仰な仕草で肩を竦める。
「君が毎日学校に来てくれるのなら、僕としては喜ばしいけれど。ふうん、でも、一時限目も人は少なかったかな。なるほど、僕たちは真面目だね」
一は答えずに歩き出す。昼休みのコンビニは常ならば混雑している。買い物をするには好都合だった。

「遅い」槐に指を差されて、一はしかめっ面を作った。
「労えよババア」
ちゃぶ台にビニール袋を置くと、一は槐の横に腰を下ろす。誰よりも先んじて、早田が袋に手を伸ばした。
「先輩は何が飲みたいんだ!?　私が死守しよう！」
「早田さん、全部同じのだから大人しくしててくださいね」
「うわあ先輩が冷たい！」
「何で笑顔なの？」
早田はペットボトルの蓋を開けて、一の口元にそれを持っていく。

「先輩先輩、断れば口移しで飲ませるぞ」
「だあああ鬱陶しいなあ。槐、ケーキケーキ。こいつは何か口に入れたら黙るから」
「分かっておる。衛」
楯列は小さく頷き、槐の持ってきたであろうケーキの箱をちゃぶ台の上に置く。彼は蓋を開けると、甘い香りに目を細めた。
「あ、皿どうするよ？」
「九十九先生のを借りようか。洗って返せば何も言わないよ、きっと」
言って、楯列は戸棚から皿を取り出す。
「どーれーにーしーよーうーかーなー、あ、先輩の乳首を突いてしまったぞー」
「殺すぞ。ん、槐から選べよ」
「ふふ、気を遣わずとも、好きなものを選ぶと良い」
一は立ち上がり、箱の中身に視線を落とす。邪魔だったので、早田の頭を退かした。
苺が乗ったショートケーキ。モンブラン。チーズケーキ。ミルフィーユ。エクレア……。一は思わず顔を反らした。
「見てるだけで甘い。こんな買ってきても余っちまうだろ」
「お主が食べられなくても早紀とわしがおる」
「はいはい、甘いものは何とやらだな。うーん、どうしよっかなあ。なあ、ザッハトルテとかねえの？」
見兼ねた槐がチーズケーキに手を伸ばす。
「あ、こら手で取んなよ」
「男がうじうじとするでない。ほれ、これなら甘くない筈じゃ」
槐は皿の上にケーキを置いて指を口に含んだ。
「下品ですよお婆様」
「わしはババアではない」
「その一人称でババアじゃないってのはねえよ」
早田は一の言葉に頷き、モンブランを丸ごと口の中に入れる。

「なら槐君、一君に気に入られる為にも一人称を変えてみてはどうだろう」
「私とかボクとかあたしとかアタシとかウチとかオレとかはナシな」
「何故、わしがキャラを変えんといかんのじゃ」
「つーかお前そのキャラ作ってんだろ。さっき電話ですげえ感じで喋ってたじゃん」
「ああ」と、槐は声を漏らす。彼女はショートケーキをフォークで突いた。
「つられてしまうんじゃ。地方に行けば、その土地の喋り方が移ったりするではないか。あれと同じじゃ」
一はいまいち納得出来ていなかった。
「槐ちゃん槐ちゃん、わっちはどうだ？」
「うわもう食ったのかよお前。もう少し味わえよな」
「わっち！　わっち！　ありんす！　ありんす！」
「むう、悪くないが、それは既に駄目な気がするぞ」
早田は残念そうな顔をしてエクレアを頬張る。
「自分の名前はどうだい？　槐君なら『槐はー』みたいに」
「あ、それは駄目だ」一が遮った。
「何故じゃ？」
「ムカつくから」槐は憤った。
「どうしろと言うのじゃ、お主は」
ケーキを平らげた一はちゃぶ台を指で叩く。
「まあ、自分を大事にするのが一番じゃないのか？」
「先輩はニコチンが足りなくなると受け答えが適当になる」
「ここで吸ったら九十九先生に殺されるかもしれないね」
「うん。そろそろ出るわ。次、講義あるし」
一は立ち上がり、鞄を掴んだ。
「私も行こう。槐ちゃん、ケーキごちそうさま。とても美味しかった、次は私が何か持ってくるとしよう」
「じゃ、僕も」楯列が立ち上がろうとするのを、一は手で制した。

「後片付けは誰がするんだ？」
三人は顔を見合わせる。三時限目が始まるまで、五分を切っていた。
「じゃんけんで決めよう。早田、俺はグーを出すからお前はチョキを出せ」
「断る。民主主義国家らしくエッチな事で決めようじゃないか」
「僕は乗ったよ」
「乗んなよ！　槐、お前が決めてくれ。俺たちがどれで！　どのように！　決着をつけるのかを！」
槐は携帯電話で時刻を確認し、一たちを追い払うように手を振った。
「わしがやっておく。お主らはごちゃごちゃとうるさくて敵わん。衛、鍵は後で返しておけば良いんじゃろ？」
「ううん、良いのかい？　講義が終わった後なら僕が……」
「学生の本分は勉強じゃ。ほれ、さっさと行かんか」
急かされ、一たちはゼミ室を追い出される形で出て行く。扉を閉められ、彼らは槐に対して申し訳ないという気持ちを抱いた。
「まあ、先輩だけは内心ラッキーと思っているがな」
「色々と無視すんじゃねえよ。お前さ、最近やり口が汚くなってきたぞ」
「心配要らない。先輩の為に下の口は綺麗にしてある」
「おい楯列、明日からあいつの事無視しようぜ！」

依存症

教室に行くと、やけに人数が少なかった。大教室で行われる講義だと言うのに、着席している学生は二桁にも満たない。がらんとした空間では音が存在していない。息遣いも、文庫本のページを繰る音も、何もかもが静寂に掻き消されているようだった。

「……サボり過ぎだろ」

訝しげにしながらも、一は出入り口に近い席に腰を落ち着ける。暫くの間、彼は講師を待ち続けていたが、教室からは次第に人が減っていく。それでも辛抱強く待つ。が、十分程経ったところで「今日、休講らしいですよ」と見知らぬ男に声を掛けられて、一は溜め息を吐いた。持つべき者を持っていない、作れていなかった自分を恨みながら、彼は席から立ち上がる。

講義がなくなって幸運だとは思わない。一は四時限目も講義が入っているので、九十分近くの時間を持て余す事になる。食堂か、図書館か、それともここで眠ってしまうか。迷った末、彼はゼミ室に戻るのを選んだ。

「ここがお兄ちゃんのスクール……」

駒台大学の駐車場に、カウガールが立っていた。その横にはメイド服を着た女もいる。学生たちは彼女たちを遠巻きにして眺めていた。

「ナナ、大学には初めて来ました」

「でも、何だかちっさいわネ。ふふ、お兄ちゃんを見つけるにはコーツゴウ。ナナ、行くわよ」

「マスターとお会いしたいのは山々ですが、我々には目的があるの

をお忘れですか？」
　ジェーンは立ち止まり、周囲を見回した。
「分かってる。でも、ここに？　ホントにいるの？　ヒナンだってまだ終わってないじゃない」
「……情報部も手を尽くしたのでしょうが。それにしても、ここの方々は無防備ですね」
「一発うっちゃえばビビって逃げるかも」
「なるべくなら人的被害は出したくありません。場合によっては射殺もやむなしでしょうか」
　冗談で言ったのだが、ナナにそれが通じているのかどうか分からない。故に、ジェーンは黙り込んでしまう。
「こ、ここにいるってシキョーはどんなヤツなのかしら」
「恐らくは、饕餮（とうてつ）でしょうね。羊の体、曲がった角と虎の牙。人の爪に人の顔をした怪物なら、それしか該当しないでしょう」
「トウ、テツ？　何だか、同じような、ややこしい名前ネ」
「や、が一つ多いです。……饕は財産を貪る。餮は食物を貪るという意味があります。何でも食べる、意地汚い怪物ですね」
　ナナは学生たちをじろりと見回す。彼女には人だかりが少しずつ、大きくなっているように思えた。
「ただ、何でも食べ、魔すら喰らう事から、トウテツには魔除けの意味もあるようです」
「マンイーターなのに？」
「ええ、正に人を食ったような話ですね」どうだと言わんばかりの顔だったが、ジェーンはナナを見ていない。
　ジェーンは空を見上げて目を細める。
「お兄ちゃんのハンドをわずらわせるワケにはいかない。ちゃあんと勉強して、シューショクして、アタシを養ってもらわなきゃ」
「マスターが働かなくても、私が働きますが？」
「どうしてナナが出てくるの？　アタシとお兄ちゃんのライフプランにアナタはジャマ」

びしっと指を差されて、ナナは静かに微笑んだ。余裕ありげな彼女の笑みに、ジェーンは苛立つ。
「トニカク！　お兄ちゃんはがんばってるんだからっ、ソレなんかにジャマされてたまるもんか！」

一はゼミ室で寝転がっていた。彼はコンビニで買ってきた週刊の漫画雑誌をめくっている。
「茶が入ったぞ」
「ん」一はゆっくりと起き上がり、ちゃぶ台に置かれた湯飲みに手を伸ばした。
「サボりではなかろうな？」
そう言って一を睨むのは槐である。彼女は後片付けを終えて帰ろうとしていたのだが、そこに暇を潰そうとした一がやって来たのだ。
「休講だよ、休講。疑うなら掲示板見に行けって」
「前もって確認しておけば良かったのに。一、お主はそういうところが甘いんじゃ」
「うるせえなあ」
槐に対して、さっさと帰れよと思いつつ、一は雑誌に目を落とす。が、同時に楯列の言っていた事も思い出す。ここで邪険にし、追い返すのは簡単だ。駕籠の中の鳥ではないが、彼女は座敷童子として同じ場所に留まり、窮屈な思いをしてきたに違いない。そう考えると、
「……まあ、お茶は美味いけどな」
優しい言葉ぐらい、掛けてやろうとも思うのだ。
「お主に繊細な茶の味が分かるものか」
「今すぐ消えろよ」
槐は言い返さず、お茶を啜る。
「後から来たくせに何を言うておる。……主、何を読んでおるのじゃ？」

「ん、ああ、漫画」
「それは分かっておる。タイトルを聞いてるというのに」
「どこにでもあるようなバトル漫画だよ。トーナメントとか、四天王とか出てきやがった。今更っつーか、こんな展開、まだ受けんのな」
言いつつも、一は雑誌から目を離さない。
「四天王か。何度聞いても良い響きじゃな」
「そうかあ？　じゃあ、槐にはパワータイプ四天王の称号を与えてやろう」
「一番最初に死ねと言う事か？」
「まあ、歳からいっても……」
失敬な。槐は遮り、一の横に横に座る。
「近いぞ」
「ほれ、早くページをめくらんか」
「……はいはい」

駐車場からは野次馬が消えていた。それもその筈だ。トウテツと呼ばれるソレが現れ、銃声が何発も轟いているのだから。
「ナナっ、そっち！」
「了解です」
羊の体をした怪物が、ナナの攻撃によって吹き飛ぶ。停まっていた車両にぶつかり、ボンネットに乗り上げる。ジェーンが発砲した弾丸はソレの体に命中し、フロントガラスをも砕いた。だが、彼女たちはそんな事を気にしていない。
ソレはボンネットからずり落ちる。血を流し、アスファルトの上で悶えた。
「バレットがもったいないから、あとはヨロシク」
「かしこまりました」
頷き、ナナはソレにとどめを刺す。トウテツが動かなくなったの

を確認し、彼女は眼鏡の位置を指で押し上げた。
「イージーオペレーションね。あと、二つ」
「窮奇と渾沌ですね。大学内にいるかもしれません、捜索を続けましょう」
「オッケイ。……お兄ちゃんと会えるカモしれないしー」

「何かさ、今すげえ嫌な予感がしたんだけど」
槐は一をねめつける。
「わしとおるのに、か？　ふん、一、お主は座敷童子とおるんじゃぞ。幸福しか寄ってこぬわ」
「そうかあ？　っと、そろそろ四限が始まるな……」
「うむ、励むが良い。若い内に学ぶのは良い事じゃ」
しかし、一は動かなかった。お茶を啜り、対面の槐をぼうっと見つめている。
「何を見ておる。早く動かぬか」
「……やっぱ、めんどい」一はごろりと横になった。
「駄目じゃ。ほれ、早く行かんと遅れてしまうぞ」
槐は一を揺さぶるが、彼は頑として動かない。あまつさえ目を瞑って眠ろうとしている。
「何か落ち着くんだよな。畳だし。お婆ちゃんの家にいるような感じがする」
「誰がババアかっ」
「んな事言ってねえだろ。良いじゃんかよ、たまには」
「あくびをするでない！」
槐は一の頭を叩こうとして、手を振り上げた。が、彼と自分の手を交互に見つめた後、諦めたようにその手を下ろす。
「不良め」
「四限終わったら起こして。多分、楯列と早田もこっち来るだろうから」

「起こしてもらえば良いではないか」
一は顔をしかめた。
「奴らに寝顔を見せたくない。何をされるか分からないからな」
「ほう、わしは良いのか？」
「何かするつもりなのか？」
「……戯けめ」

体を揺さぶられている感覚を受け、一は目を覚ました。彼はゼミ室のちゃぶ台に突っ伏して眠っていた事に気付き、大儀そうに体を伸ばす。
「くあ……今、何時？」
問い掛けるのと同時、一は目を見開いた。槐の顔が間近に迫っていたからである。だが、彼女は気にした素振りを見せなかった。
「少し前に鐘が鳴った。ほれ、早くせぬと寝顔を見られてしまうぞ？」
「ああ、そうだな。つーか、近いんだけど」
「む？　ああ、照れておるのか？」
一は槐の頭を叩く。あくまで軽く。
「俺はノーマルだ」
「どういう意味じゃ。しかし、衛も早紀も姿を見せんのう」
「ふーん。じゃあ、帰ろうかな」
立ち上がり、一は鞄を掴み上げた。
「二人を待たぬのか？」
「別に約束とかしてねえし。何なら二人で帰るか？」
「……良いのか？」
一は自分から言い出しておきながら、少し迷って、頷く。
「何じゃ、今の間は」
「いや、もう何も怖くないかなあ、と」
そういう目で見られるのには慣れたのだ。慣らされたと言うべき

か。とにかく一は、気にしない事にしたのである。

一と槐はゼミ室の鍵を閉めて、喫煙所に向かっていた。

「煙草は止めた方が良い。百害あって……」

「聞き飽きたよ。俺からこれを取り上げたいんなら、もっと違う事を言えってんだ」

煙草の箱を弄び、一はそれをコートのポケットにしまい込む。槐は溜め息を吐いた。

「人間の寿命は長いようで短い。それを縮めるのは摂理に反しているとは思わんか、一よ。加えず、減らさず、あるがまま生きるのが人間ではないのか？」

「じゃあお前もケーキとか食うなよ。めちゃくちゃ増えてんじゃないのか」

「何が増えているというのじゃ」

「何じゃろな」

廊下を歩き、階段を下り、駐輪場付近に設置されたスタンド灰皿を見つけると、一は煙草を取り出して、それを口に銜えた。

「ほれ見ぃ。お主以外に誰も吸っておらんではないか。良いか、副流煙というのはじゃな」

一は槐を無視して煙草に火を点ける。彼女が風下に立っていたので、彼は何気なく移動した。これ以上うるさく言われてはかなわないと思ったのである。

「あんましガタガタ言うなよ。良いじゃんか、俺の唯一の嗜好品だよ」

「趣味はないのか？」

「のめり込めるもんはないな。そっちは、何かあるのか？」

槐はベンチに座ると、携帯電話を袖から取り出した。

「携帯の無料ゲームを」

「中学生かお前は。コマーシャルに踊らされやがって。……課金と

か、そういうのに手を出しているんじゃないだろうな」
「ふん、そんなものに引っ掛かるわしではない」
相変わらずごてごてしている槐の携帯電話を見て、一は不味そうに紫煙を吐き出す。
「しかしレアアイテムが欲し過ぎて迷っておる。一、話があるんじゃが」
「やだよ」
「だって皆持ってるんじゃぞ!?　アヤもさっちんも持ってるのに、わしだけ持ってない!」
「誰だよそいつら」
俗な座敷童子もいたものだと、一は槐を冷たく見遣った。その時、彼の視界の端に何かが映り込む。
「……今、何かいなかったか？」
「買って買って買って買ってー！」
槐は駄々をこねていた。
「そういうのは楯列に言え。それから歳を考えろ」
「失礼な。で、何が見えたんじゃ？」
「さあ、何かあっちの方で犬みたいなもんが……」
もさもさしていた。一は目を凝らすが、連なる木々の影には何も見えない。気のせいだろうかと思い直そうとした時、また、何かが動く。
「あ、やっぱいるわ。槐、ちょっと見てきてくれよ」
「何故わしが」
「いや、本当に犬だったら怖いじゃん」
「だったら何故わしを行かせる!?　お主は男じゃ。男子たるもの……」
一は短くなった煙草を灰皿に落とし、鞄からペットボトルのお茶を取り出す。彼はベンチに座り、槐をベンチから立たせた。
「……見上げた根性じゃな。お主のような人間を、どうして衛や早紀が気に入っておるのかが分からん。催眠術でも使ったのではある

まいな」
「そんな変てこな術が使えるなら、もっと普通の奴を傍に置くわ」
「とにかく、わしは行かんぞ。どうしてもと言うのなら、一も一緒に来るのじゃ。死なば諸共という言葉もあるじゃろう？」
　このタイミングでその言葉を持ち出してくる槐の神経を疑いつつも、一はベンチから立ち上がる。何が見えたのか、そこに何がいるのか、もはやどうでも良くなっている部分もあったのだが。
　一は槐を置いて歩き出し、件の木に近づく。その影に、犬がいた。犬に、似ているモノが座っている。毛は長く、爪のない脚は熊のそれと酷似していた。それは自分の尻尾を口に咥えている。そうして、空を見て薄く笑っていた。
「……げえ、何だこれ。犬か？　薄気味悪いな」
「ほう、珍しい」
「知っているのか、槐」
　槐は腰に手を当てて、犬らしきモノを見遣った。
「渾沌と呼ばれるソレじゃよ。四凶という名に聞き覚えはないか？」
「えっ、これ、ソレなのか？」　一は一歩退く。ソレは自分の尾を咥えたまま、その場でぐるぐると回り始めた。奇怪極まりない動きであり、彼は更に距離を取る。
「目はあるが見えず、耳もあるが聞こえない。善人を嫌い、悪に媚びるソレじゃ。しかし、何故ここにいるのじゃ？」
「危険な奴なのか？」
「いや、害はない。ちょっと不気味なだけじゃ。放っておけば、この学校の者がどうにかするじゃろう」
　決意する。帰ろう、と。見て見ぬ振りを貫くのだと、一は渾沌から背を向けた。
「ん？　……って、あ」
　黒いベール。黒いワンピース。振り向いた先には、修道服を着た女が、二人。一は槐を連れて逃げ出そうとするが、少しだけ遅かった。渾沌の額に釘が突き刺さっている。叫び声を上げる事もなく、

ソレの動きは少しずつ鈍くなる。
「はぁい、神のご加護はいかが？」
「一っ、逃げろ！」
「ちょーっと、逃がす訳ないでしょう！」
シスターは一の前に回り込み、釘を構えた。それは彼女の得物、聖なる釘、エレナである。
「お久しぶりね勤務外。私の事、覚えてる？」
「……『教会』……！」
フリーランス『教会』。
槐を手に入れる為に駒台へやってきた三姉妹からなるフリーランスである。
「せいかーい。じゃ、早速殺されてみる？　主もそう仰っている事だし」
「一人減ってんじゃねえか」
「うっさいわね。灯、そこの座敷童子を確保しなさい。そっちの勤務外、抵抗したらどうなるか分かってるわよね？」
釘を突きつけられ、一は身動きが取れない。
――――傘さえあれば。
名前なら知っている。一は目を瞑った。今、釘を突きつけているのは聖と呼ばれた『教会』の長女。彼女の後ろにいる気弱そうなシスターは三女の灯の筈だ。そこまで分かっていて、何も出来ない。アイギスさえあれば、この状況を脱するのは容易である。
「あ、あの、動かないでくださいね」
「お主らっ、一に手を出してみろ。決して許さんぞ」
「はん、座敷童子に何が出来るって言うの？」
「また切り刻まれたいのか？」
「ぐっ、うるさいわね。主も仰っているわ。『黙れ』って」
油断していた。いや、どう注意しろと言うのか。一は誰を責め、誰に責を求めるのかを考え始める。一度は駒台を去ったであろう『教会』。彼女らが戻ってきて、その上大学の構内で出くわすなんて、

想像すら出来なかったのである。
「なあ」
「何よ。と言うか口を開かないでくれる？」
聖に睨まれるも、一は退かなかった。
「お前ら、槐を狙ってるんだろ。事情は知らないけどさ」
「だから何？」
「俺は見逃しても良いんじゃないかなーって」
「なっ、なあっ！？　はっ、一！　お主はわしを置いていくと言うのかっ」
耳の穴に指を入れ、一はうるさそうに目を瞑る。
「言ってみただけだって。こいつの目、見ろよ。絶対俺の事を嫌ってるって感じがするだろ」
「へらへらと。余裕ぶれるだけの材料があるのかしら。それとも、とっくに諦めているのかしらね。どっちにしろ気味が悪いし、余計に腹が立つだけ」
聖は一に釘を見せ付ける。彼はそれを見たが、すぐに視線を逸らした。
「座敷童子が欲しいのは確かだけど、だけど。私は、あんたが嫌いなの。主も仰っているわ。『右の頬を張られたら両の頬を張り返せ』ってね」
釘が光る。一は時間を稼ぐ必要性を感じ、自分はそればかりだなと、内心で苦笑した。
「なあ、槐。俺がやられたらこいつらにやり返してくれよ」
「……言われるまでもないわ。第一、そうはならんし、させん」
「そうなるっての！　灯、しっかり座敷童子を見てなさい」
「見るだけで良いのか？」
聖は足を止め、槐を見遣る。
「わしをしっかり押さえておけよ、小娘。一に手を出した瞬間、お主を斬る。斬れば、わしは座敷童子ではなくなるからのう、かっかっか」

「な、何を言っているのですか？」
「灯、はったりよ。所詮はソレの妄言。私たちは主の声だけを聞けば良い。他に耳を貸す必要はないわ」
「はったりじゃねえって、気付けよ」一は馬鹿にした風に言い、煙草を取り出した。
「火ぃ持ってる？」
「こっ……！　主よ！　ああっ主よ！　こいつぶっ殺しても良いですよね！？」
聖は天を仰ぎ、釘で地面を叩く。
「お主ら、わしを追っているくせにわしの事を知らんのか？　座敷童子はな、人に危害を加えて徳を失えば、たたりもっけに堕ちるのよ。そうなるのは、お主らの望むところではないじゃろ？　ん？」
「でたらめを」
「でたらめでもはったりでもないと言っておろうが。わしだってたたりもっけにはなりたくない。が、お主がその腕を振り下ろすとなれば話は別じゃ。喜んで堕ちよう。わしは喜んで、お前を殺すぞ。かかっ、どうする？　誰も得をせんじゃろ。諦めろ、わしは『教会』には行かん」
一と槐の発言の真偽を確かめる時間も、方法も、『教会』にはない。ここで彼らを見逃すか。一を殺して槐を無理矢理連れ去るかのどちらかだ。だが、選べない。『教会』には選べなかったのである。
時間だけが無為に過ぎ、『教会』は勤務外と出会った。

駒台大学に入り込んだ『教会』が渾沌を仕留めた今、四凶の内、残ったのは窮奇と呼ばれる怪物だ。しかし、彼女たちはその事を知らない。
「はあっ、あの後姿はマスターではないですか！」
ナナが指差した先には、煙草を銜える一がいる。だが、彼は修道服に身を包んだ女に何かを突きつけられていた。傍には和装の少女

もいる。
「……ダレ、アレ？　と、というかっ、というか！　お兄ちゃんって、いっつもこうナノ！？」
　また女に絡まれている。ジェーンは憤り、リボルバーに手を掛けた。
「落ち着いてください。何か、様子がおかしいです」ナナは袖を振り、ブレードを露出させている。
　一たちはジェーンたちに気付いていない。彼女たちは各々の得物を構え、地を蹴った。
　ジェーンは『教会』だと気付いていない。ナナは『教会』を知っているが気付いていない。ただ、『一に近づく不届き者だ』と判断した末の行動である。
「……っ、聖姉さん！」
　だが、今回は二人の短絡的な行動が一と槐を救った。『教会』は武器を持たない一よりも、向かってくる勤務外に脅威を感じたらしい。すかさず、戦闘態勢に移る。
「エレナで牽制！」
　拘束から逃れた一は槐を連れ、教室棟目掛けて駆け出していた。

　聖釘エレナが放たれる。ナナはジェーンの前に立ち、造作もなく、それを手で払った。
「……勤務外ね」
「あなた方は」言い掛けて、ナナはジェーンを見遣る。
「『教会』ですね」
　ジェーンは小首を傾げた。彼女の仕草を見て、聖は眉根を寄せる。
「ちょっと、そっちのちっさいのは私たちを知っているでしょう。どうしてそんな顔をしていられる訳？」
「アタシ、お兄ちゃんのコト以外にキョーミないから。それから、神サマなんか信じてないし。……あんまり」

「あんまりなのはどっちよ！　ああっ、もう、勤務外って皆こうなのかしら！」
聖は釘を構え、ジェーンを睨みつけた。
「ああ主よ！　どうかこの哀れな子羊たちに鉄槌を下す許可を！」
再び釘が放たれる。ナナに向かった五本の釘は全て彼女に命中し、先端が欠けて地面に落ちた。金属音が尾を引いている。聖は転がった釘とナナを見比べ、瞬きを繰り返した。
「……当たったわよね」
「は、はい。全部命中です。けど」
ナナは眼鏡の位置を押し上げ、『教会』の二人を見つめる。
「残念ですが、私にはこういった分かりやすいものは通用しないと思われます。私の自動人形硬度は十ですから」
「ダイヤモンドは砕けないって訳？　上等よ。灯、マンディリオンを」
灯が広げたのは、単なる布切れではない。聖骸布と呼ばれる異物である。聖骸布に触れた者は体力を奪われ、動けなくなるのだ。それを覚えていたから、ジェーンはリボルバーを構える。
「そのマントは覚えてるワ。ハードな相手よ、ナナ。アレには気を付けて」
「どのような能力を所持しているのですか？」
「当たれば分かるわよっ」
マンディリオンが大きく翻った。その影から釘が投げ放たれる。ナナはジェーンの前に立ち、釘を防ぐ。しかし、その隙に詰め寄った灯からは逃れられそうになかった。ナナはマンディリオンに包まれ、
「こういう事よ勤務外！」
聖は歓喜の雄叫びを上げる。ナナはマンディリオンに包まれたまま、灯を殴り飛ばした。
「そっ……な……！？」
「どういう事ですか？」

鬱陶しそうに布を払い除けると、ナナは聖を見遣り、蹲る灯に目を向けた。

「その布は、目晦ましのつもりだったのですか？　それならば無駄です。その釘では私の装甲を貫通出来ません。視界を奪ったところで、火力に劣るあなたたちに勝ち目はありません」

「ど、どういう事よ？　何なの、あんた。本当に人間なの？」

「いいえ。私は人間ではありません。オンリーワン北駒台店の勤務外店員、オートマータのナナと申します」

恭しく頭を下げる人外に、聖は一歩、退く。

「人間じゃあ、ない、ですって……？」

「驚かれましたか？」

信じられない。

聖はナナの言葉を真実だとは思えない。だが、沈黙したマンディリオンが物語っている。『これは、生者ではない』のだと。

マンディリオンの能力は、生きている者の力を奪う事である。人間だけでなく、ソレの力すら奪える。力と言うと曖昧に聞こえるが、実際、『教会』にもマンディリオンの仕組みは分かっていない。ただ、奪うのは生命力に近しいものだと認識しているのだ。……だから、嫌でも分かる。聖骸布に包まれ、触れた人間が何事もなかったかのように立っていられる筈がない。掠った程度ならやせ我慢も出来ようが、ナナは完全に、頭からすっぽりと包まれていたのである。

「……主よ。世界はこんなにも広いのですね。あなたのお力、遍くと言う訳にはいかなかったようです。これも、全て私の力不足が原因。信仰を。祈りが足りないのなら、更に祈れば良い。灯、動けるわね？」

呼びかけられた灯は無言で起き上がった。泣き言は漏らさないが、腹部を押さえ、歯を食い縛る彼女の姿は痛ましい。

「私たちの標的は『教会』ではありませんが、邪魔をするのなら話は別です。のみならず、マスターに危害を加えようとしていたのなら答えは一つです。『お覚悟を』」

決して、決して弱くはない。『教会』とてフリーランスを名乗り、ソレを抹殺する人外なのだ。ただ、相手が悪かった。相性が悪過ぎた。

足がもつれそうになる。一は槐の手を握ったまま、講義棟に戻り、別の道から駐車場へと向かっていた。

槐は携帯電話を袖の中に戻し、短刀を取り出す。彼女は窓から『教会』たちの様子を覗こうとしたのだが、一がそうはさせなかった。彼は、一刻も早くここから逃げ出したかったのである。

「……衛と早紀も車へ向かっておる。焦らずとも良い」

講義中ともあり、学生の姿は殆ど見えなかった。一たちは廊下を疾駆し、階段を一足飛びで駆け下りていく。

「あいつらを巻き込むのかよ」

「逃げ出すだけじゃ。問題ない。それに、あの二人も既に巻き込まれておるようなものじゃろう」

一は早田と楯列を『教会』から遠ざけたかった。だが、望むが望むまいが、『教会』がその気になれば、一般人である二人にまで手を伸ばすかもしれない。だったら、自分の手が、目が届く範囲で二人を守りたかった。

それに、と。一は思い直す。ジェーンとナナが来ているのだ。『教会』の相手は彼女らに任せておけば良い。少なくとも、自分よりは確実だろう。

「……逃げるだけなのか？」

「その通りじゃ」

「じゃあ駄目だ」

一は立ち止まり、壁に手を付き、肩で息をする。

「何を言っておるっ」

槐は一のズボンの裾を掴んだ。

「何が駄目なんじゃ、駄々をこねるでない！　ここから、奴らから

逃げ出す事が……」
　ここから離れたい。『教会』から逃げ出したい。しかし、それでは変わらない。終わらないのだと一は分かっていたのだ。
「あいつら、また来るぞ。中途半端に逃げたって、払ったって、追いかけてくるに決まってる」
「ならば、どうしろと？　殺すか？　それとも殺されるのか？　……わしに、行けと言うのか？」
　槐の顔が歪む。彼女は裾を握る力を強めた。
「あのフリーランスは、わしを狙っておる。確かに、わしが行けば、もう、お主らに迷惑は、だから……」
「早合点すんなよ。殺さなくたって、殺されなくたって、お前が行かなくたって、何か方法はある筈だ。第一な、お前が『教会』に持っていかれるくらいなら、俺はあいつらを殺す。の、を、選ぶと思う」
「阿呆。そんな真似、お主にさせられるか」
「俺だってしたくねえよ。だから、逃げるのは止めとこうぜ」
　逃げ出したい。全てを見捨てて逃げ出したい。全て振り切って逃げ出したい。自分だけでも楽をして、生きていたい。頭の中は自己の保身でいっぱいだった。一は小刻みに震えていた手を隠す。どれだけ戦いを重ねても、怖いものは怖い。相手が化け物だろうと、人間だろうと、関係はなかった。
「話せば分かるさ」

　まさか、こんな事になろうとは。
　聖は駐車場に逃げ込み、周囲を確認した後、灯と共に軽自動車の影に隠れた。二人は暫くの間、口が利けなかった。疲労と、驚愕の為に、である。
　フリーランス『教会』にとって、誤算が二つあった。まず、座敷童子の確保はついでであった。元々、彼女らは駒台大学周辺に出現

したソレを狩るべく、動いていたのである。そこで、一たちと出会った。これは、『教会』にしてみれば嬉しい誤算とも言えた。槐がいたのもそうだが、一がいた事も大きかった。

ソレを仕留め、また、座敷童子を確保出来る。浮かれていた『教会』に、二つ目の誤算があった。勤務外、ナナの出現である。彼女らにとって、勤務外と出くわすのは誤算に当たらない。ソレが現れ、フリーランスが動いているのだから、勤務外が動くのも当然なのである。誤算は、ナナだった。彼女には、エレナも、マンディリオンも通用しなかったのである。生きているモノに対して、絶大な効果を発揮する筈の聖遺物が、がらくたも同然と成り果ててしまった。……ナナが、生きていないからである。彼女は自動人形で、生命がない。

「……トリック、でしょうか」

「やってらんないわ。ああ、主よ。どうかお助け」

その事実に、『教会』はまだ辿り着いていない。だからナナたちに背を見せ、無闇に、無様に逃げ回ったのである。

「何なのよ、あのメイド。頭おかしいんじゃないの？」

「ど、どうしましょう、聖姉さま。とてもとても、勝ち目がありません」

聖は灯に反論したかったが、材料が見当たらなかった。ジェーンはともかく、ナナを盾に近づいてくる以上、自分たちに武器は残されていないのである。得物が効かないならば徒手空拳で、とも考えたが、釘をも受け付けないナナの頑丈さを思い出し、彼女は結局、溜め息を吐き出すしかなかった。

「でも、ここにはあの座敷童子もいるのよ。明日のパンの為、ソレだって見逃せないわ。それに、また失敗したらどうするつもり？もう、教会にはいられなくなってしまうわ」

灯にも聖の言い分が分かっている。だが、状況を打破する妙案は浮かんでこない。気分だけが落ち込んでいくばかりだ。

現時点で、勤務外とは戦えない。聖は舌打ちを繰り返し、もう一

度、周囲に視線を配った。
「さっきの勤務外は駄目ね。主もおっしゃっているわ。『逃げるが勝ち』と。だからこうしましょう。今のところ、座敷童子はメイドたちと合流していない筈よ。あいつらが合流するより先、座敷童子を見つけ出して捕まえる。どう？」
「さ、先に、私たちがメイドさんに見つかってしまったら……？」
「逃げるっきゃあないわね。で、逃げ回りながら座敷童子を探すの。そっちには役立たずの男しか付いていないみたいだったし、ついでに、ニ、三発殴ってやりましょう」
聖はサディスティックな笑みを見せる。灯は、この状況下でも一に対する復讐を忘れていないのかと、少しだけ呆れてしまった。
「ふ、ふふ、絶対許さないんだから」
「俺をか？」
背後から降ってきたような声に、『教会』は振り向く。そこには、ビニール傘を持った一と、短刀を握る槐がいた。
――――僥倖。聖は釘を構えるが、一は動じず、前方を指差す。駐車場。車の間を抜けていくジェーンとナナの姿があった。
「動くんじゃねえ。大声出すぞ」
一は聖の傍に屈み、声を潜める。
「……ネギを背負ったカモが何を。主も仰っているわ。『見敵必殺』と」
「お前、俺の話を聞いてたのか？　知ってるぜ、『教会』とナナ……あのメイドは相性がとても良いんだってな」
「そういう事じゃ。お主ら、死にたくなければ大人しくしていろ。わしらの狙いは『教会』の命ではない。二度と、わしらに関わらないと誓うのなら、見逃してやらんでもない」
聖は顔を歪めた。舐めきられている。一たちの態度が気に食わなかったのだ。
「私が手を伸ばせば、あんたは死ぬ。分かっているの？　取引を持ちかけるには近過ぎたわね」

「お前が俺を殺せば、槐がお前を殺す。あそこにいる勤務外も、お前らを見逃さない。手詰まりなんだよ、お前ら」
灯は何も言えなかった。聖も一を睨みつけるだけで、実際に行動には移さない。彼女らにも分かっていたのである。
「……早く言えよ」
口約束でこの場を切り抜ける事も考えた。しかし、聖のプライドは高かった。振りとは言え、一度でも一に屈するのを良しとしなかったのである。
「聖姉さん、あの、ここは」
「分かってる。分かってるわよ」
灯は頭を抱えたくなった。聖はまるで分かってくれていない。
「つーか、お前ら、どうして槐を狙ってんだよ？」
「は、決まってるじゃない。座敷童子は幸せを運ぶモノなんでしょう？　幸せを望まない奴がどこにいるって言うの？」
僅かに顔をしかめたが、一は小さく笑って聖を見つめる。
「確かにそうかもな。だったら何か、あんたらは四凶ってのを狙って来た訳じゃないんだな」
「あ、そうじゃないんです。『教会』は神父様の依頼を受けて四凶を殺しに来たんですけど、そこで座敷童子さんを見掛けたのは偶然で」
「ちょっと灯、そんな事言わなくて良いじゃない」
「じゃ、槐を追ってんのは『教会』の仕事じゃなくて、個人的に、なのか？」
灯は聖のご機嫌を伺うようにして、小さく頷いた。
「だったら退いてくれよ」
「退く訳ないでしょう。本当に殺すわよ、あんた。主もおっしゃっているわ。『そろそろ我慢の限界だ』と。右の頬を張られたままで済むと思わない事ね」
「俺がいつ頬を張ったよ。……なあ、マジで考えてくれよ。どうしたら、お前らは槐を諦めてくれるんだ？」

「舐めた真似を……！」
立ち上がりかけた聖を、灯が必死に押し留める。ここで勤務外に見つかってはどうしようもないのだ。今日の彼女は頭に血が上り過ぎていて、姉の役目をこなし過ぎるきらいがある。灯は溜め息を吐き、一をじっと見た。
「あの、全てお話します」
「聖っ」
「この人は、話せば分かってくれる人です」
聖は灯を睨み続けていたが、強情な妹に折れ、顔を逸らす。そうして、勝手にすればとその場に座り込んだ。

僥倖だ。
一は『教会』には気付かれないように口の端をつり上げる。彼の狙いは、『教会』が槐から手を引く事だった。その為にはジェーンたちが邪魔だった。戦闘になれば話し合いの余地はない。大抵のフリーランスは勤務外を嫌っているし、勤務外もまたフリーランスを嫌っているのだ。だから、ジェーンたちよりも先に『教会』と接触出来たのは幸運だったのである。
「ん、どうした、一よ」
「いや、何でもない」
また、逃げ道も用意していた。アイギスを発動させる為に構内のコンビニでビニール傘を購入し、槐に頼んで楯列の協力を得ている。『教会』が何か仕掛けてきても、彼の車で逃げると言う寸法だった。おまけに、駐車場にはジェーンとナナがうろついている。声を上げればすぐに気付いてくれるだろう。後は、灯の話から糸口を見つけて、そこに付け込むのみだった。
灯は息を一つ吐き、地面に目を落とす。
「……実は、私と姉さんは『教会』を追い出されるかもしれないんです」

「『教会』を？　教会って、あんたたち三人……じゃなくて、二人の事じゃないのか？」
「その、他にも控えがいるものですから」
　一には今ひとつ分かっていなかったが、とにかく『教会』が多くのフリーランスを抱えている事だけは理解した。
「前回、座敷童子を連れて帰れなかった事で、私たちの地位は危うくなっているんです。このままだと、私たち……」
　まさか、同情を買おうとしているのだろうか。一は頭をかき、灯から視線を逸らす。
「でも、さ、今日は四凶があんたたちの相手だろ？　俺らは四凶に手を出さないから、とりあえず大人しく帰ってくれよ」
「駄目よ」聖が一を睨みつける。
「知らないの？　勤務外は既に四凶の内、二体を殺している筈。残り一体を奪い合ったって仕方ないって事よ」
　一は同僚の優秀さを恨んだ。もとより存在すら怪しかった交渉の材料が一つなくなったのである。
「もう、座敷童子を連れ帰るしかないの。分かる？」
「『教会』を追い出されたら、私たちみたいなフリーランスは生きていけないんです。あの、ですから……」
「駄目だ。槐は渡せない。そこだけは曲げられないな」
　確かに可哀想な話ではある。『教会』の気持ちも分かる。人の道を外れかけているのはお互い様なのだ。しかし、譲る訳にはいかなかった。
「は、だったら最初から話なんか必要なかったんじゃない。やっぱり、ここで殺し合うしか……」
「分からない人だな、あんた。……『教会』を追い出されても生きていけるなら、槐は必要ないのか？」
「それは、その……そうかもしれませんが、追い出される前提で話を進めるのは……」
「座敷童子を連れて帰る事が出来なけりゃ追い出されるんだろ？

だったら、確定だ。俺は、絶対に槐を渡さない」
「阿呆」
槐が一の頭を叩く。彼は声を荒らげようとしたが、前方にナナの姿を認めて、堪えた。息を殺している内、彼女はジェーンと合流し、駐車場から立ち去ろうとしている。また一つ、不利になってしまった。
「お主はわしの何じゃ。わしは自分で決めておる。お主に決められんでも、こやつらのもとには行かんよ」
「……さいですか。まあ、そういう訳だから諦めて追い出されてくれ」
「そ、そんな、あの、どうにかなりませんか？」
「どうにかしてあげたいけどなあ。あ、そうだ。槐、この二人に幸せを」
「ならぬ」
言い切り、槐は一をじいっと見据える。彼女のそれは拗ねているような所作でもあった。
「された事を忘れたか。たとえお主が許しても、わしは許さぬ。一は、少しばかり甘過ぎるんじゃ」
「そうでもしなきゃ帰ってくれないぞ」
「そこまでされなくても結構よ。勝手に持っていくから」
「わしは物ではないっ」
聖は槐の言葉を鼻で笑い、肩をすくめる。
「ソレが何を言うかと思えば。あんた、ここに来る前だってめちゃくちゃに使われてたんじゃない？　居ついた場所に幸福をもたらす。それがあんたの役目でしょう」
「使われてなど……！」
「座敷童子、あんたがどう思っていたってね、私たちからすれば、そういうモノなの。分かる？」
「分かるものかっ」
短刀を抜いた。一がそう認識した時にはもう、槐は聖に襲い掛か

ろうとしている。彼は小さな槻を羽交い絞めにして彼女を止めた。
じたばたと、槻は中空でもがき続ける。
「ええい、離せっ。後生じゃからこいつを斬らせぬか！」
「落ち着けって。あんな、お前も怒らせるんじゃねえよ」
「私に指図？　主が許しても私が許しはしないわよ」
主が許したら許せよ。一は口答えするのを我慢して、向こうにある講義棟を見据えた。

大学の駐車場から一番近い講義棟の二階。廊下の窓を開け放し、薄ら寒い笑みを浮かべているのは早田早紀だった。彼女の視線は一点を捉え、決して離れず、動かない。
「ふ、ふふ、先輩が私を見ている」
『気のせいだと思うよ。君はいつだって都合が良い女だね』
「黙れ」
早田は携帯電話を握り潰そうかと思案したが、それでは一の指示に、期待に背く事となる。我慢して、耳元に当てているそれの存在を許容した。だが、聞こえてくる声だけは別だった。
『ところで、僕の方からは何も見えないんだけど？　逐一状況を報告するように言ったじゃないか』
通話口から聞こえてくるのは槻列の声である。早田は舌打ちした。
「先輩たちは『教会』とやらと話をしている」
「上手くいくと良いんだけどね。一君たちに危ない橋を渡らせるのはごめんだよ」
「……だが、何か揉めているようにも見えるな」
「だったら、君のやる事は分かっているね？」
上から目線の槻列に、早田は苛立つ。
「『教会』を倒せば良いんだろう。それくらい、私にだって分かっている」
「倒すって……まあ、そうなんだけど。けど、本当に分かっている

のかどうか僕は不安だよ。相手はフリーランスなんだ。失敗すれば命だって危ういって言うのに」

「先輩の役に立てないなら死んだ方がマシだ。私が飛び込めば、あの二人を倒せなくても隙くらいは作れるだろう。後は先輩が上手くやってくれる」

相手は分かりやすい怪物ではない。人を外れた、人の形をしたモノなのだ。早田は『教会』がどのような連中なのかを知っている。実際、殺され掛けている。一人きりでは立ち向かうのを考える事すら恐ろしい。しかし、一がいる。早田は、彼なら、自分が致命的なミスを犯してしまってもどうにかしてくれるのだろうと、心底から信じていた。

やる事は簡単だった。

一に頼まれたのは、『教会』を誘導するから上から叩け、である。もし無理そうなら手は出さず、誰かに助けを求めるようにも言われていた。

早田は目を瞑り、長い息を吐き出す。そうして目を開け、取られてたまるかと、見えるもの全てを睨みつけた。

座敷童子は幸福をもたらす。だが、その幸福を巡って争いが起こる。果たして、それは幸せなのだろうか。良い事を得る為に、他者を蹴落とし、他者に蹴飛ばされる。座敷童子が去った時、手元に残るのは何だろうか。幸せなんてものは、形になってくれるのだろうか。

歩きながら、一は考える。

槐は、自分たちに幸福をもたらすモノなのだろうか、と。

「一、やるんじゃな？」

「……交渉は決裂だからな」

聖は自分たちに敵愾心を持っている。灯はまだ御しやすそうだが、姉の言いなりになるだろう。話し合いだけでは、やはりフリーラン

スを止められないのだ。
「こそこそと。それより、どこに連れて行くつもりよ？」
「ああ、あそこじゃ落ち着いて話が出来ないだろ。ゼミの人間以外は入れない場所がある。そこに行こう」
「ゼミ？　……まあ、良いわ。早く案内してちょうだい」
一は視線を上げる。講義棟二階の窓からは早田の姿が消えていた。が、恐らくは息を殺して待っている。飛び出す時を、今か今かと。
「ダメな先輩だな、俺は」
「何の話じゃ」隣を歩く槐が、一の顔を見上げる。
「結局、巻き込んじまった」
頼りにならない先輩で、早田はさぞやがっかりしただろう。が、それでも一は頼らなくてはならない。ここで『教会』の追撃から逃れるには、それしかなかった。
「……仕掛けは？」
「早田に任せてある。後は任せるしかねえ」
「誰にじゃ」
「運を、天に」
神様なんか信じてねえけど。そう付け足し、一はアイギスを強く握り締めた。

どうやら、四凶は最後の一匹を残すのみとなったらしい。一と『教会』を追い掛けていたジェーンは一息吐く為にベンチに座った。
「ナナ、そいつは？」
「渾沌と呼ばれるソレですね。先ほど交戦した時には確認出来ませんでしたが、間違いありません。眉間を一突きにされています。即死でしょうね」
「『教会』がやったのカシラ」
「恐らくは。……はあ、こういう時、マスターが携帯電話の一つや二つ持っていたらと思います」

ジェーンは即座に頷く。
「アタシが買ってあげようかな。そしたら、そしたらお兄ちゃんと……えへへへ」
「涎が」
「オゥ、ソーリー」
「残った四凶。『教会』。それらの脅威からマスターをお守りしたいのですが、あの方はどこにいらっしゃるのでしょうか」
ナナが何気なく空を見上げた時、ソレはいた。最後の四凶、翼を持った虎、窮奇である。怪物は上空から獲物を探しているのだろう。狩られる事も知らず、ただ安穏と。
ホルスターから自身の得物を抜き、ジェーンは口角をつり上げる。邪魔をするのなら容赦はしない。勤務外の仕事でなくても関係ない。そも、誰が、何が相手であろうと興味はない。

聖は一たちの背中を見、それから、講義棟に目を遣る。彼らが何か企んでいるのは気づいていた。頭に血が上っていた彼女でもそれくらいには気が回る。話をしたいと彼はのたまっていたが、彼女にそのつもりはない。チャンスさえあれば槐を捕獲し、一を切り刻んでやりたいと思っている。いや、それしか思っていないのだ。
「聖姉さん」
「何よ」
灯は聖を止めようとしている。それが、聖には気に入らない。彼女は分かっていないのだ。『教会』として生まれ、フリーランスとしてしか生きていけない事に。灯は、自分たちが真っ当な人生を歩めると信じている。まともな幸福を獲得出来ると信じている。違うのだ。得られない。信じられない。ソレを殺す事でしか、自分たちはここに立てないのだ。だから、幸福なんて曖昧なものは奪うしかない。ただ息をしているだけでは何も訪れない。
「……あ、その、いいえ、何でも」

「そう」短く返し、聖は一の背中を睨みつける。
どうして、座敷童子と共に歩けるのかが分からない。幸福の象徴をすぐ傍に置きながら、何もしない理由が分からないのだ。これだから勤務外が嫌いで、一般人が憎くて、一という男が気に食わない。
「ふ、ふふ、何を始めてくれるのかしら」
「ああ、そうだ」
一は立ち止まり、振り返る。
「さっきから気になってたんだけどさ」
講義棟のすぐ下、立ち止まった一に気を取られた聖だったが、すぐに事態を察知し、懐から聖釘を取り出す。
「姉さんっ」
言われなくても気付いている。上から、降りてくる者があった。その姿には見覚えがある。以前、自分たちに歯向かい、『教会』への誘いをすげなく蹴った女だ。
「やっぱり……！」
何が話し合いだ。結局、こうなる。だが、喜ばしくもあった。これでようやく、一たちを殺せる。自分を下に見た者を、今度は見下ろしてやれるのだ。

二階の窓から躊躇なく飛び降りた早田は、聖を狙っている。フリーランスである彼女は得物であるエレナを突き出そうとしたが、それは一に阻まれた。能力を使われては面倒だと、聖は早田の着地点から逃れ、
「お前が……！」
一に向かって釘を突き出す。
が、その釘は真下から弾かれて宙を舞った。聖の攻撃を防いだのは槐である。彼女は小刀を持ち、小さく跳んだ。
聖が反撃に出ようとした瞬間、背後から強烈な一撃を見舞われる。

早田の放った回し蹴りが背中に突き刺さったのだ。息が出来なくなり、聖は自分を蹴り飛ばした者をねめつける。そして、妹を睨みつけた。灯はまだ動けていなかったのである。

姉の視線に竦んだのも一瞬の事だった。灯は茨の鞭、ピラトを取り出そうとする。聖を囲むのは一、槐、早田の三名だ。中でも、厄介なのは一だろう。次いで素早い槐だ。一般人としては恐ろしい身体能力を持つ早田だが、一対一なら分はこちらにある。そう判断し、灯はピラトを――――。

「見くびられたものだ」

「なっ……！？」

ピラトを構えた時にはもう、早田がすぐ目の前まで来ている。地面を蹴った瞬間すら視認出来なかった。スピードだけなら、彼女はこの場にいる誰よりも優れている。その事実を認識するよりも、腹を蹴られる方が早かった。

聖と灯が倒れたのを見計らい、一は『教会』の二人が視界に入る位置に立つ。どちらかが動けば、アイギスを発動する腹積もりなのだろう。

「そこまでだ『教会』。動いたら、動けなくするからな」

「あああああああああああっ！　主よ、主よっ！」

聖は一をねめつけ、感情に任せたまま声を放った。

「舐め過ぎたなお前ら。俺の後輩はめちゃくちゃ頼もしいんだぜ」

「ふふん、その通りだ」

怪我一つしていない早田を見て、一は心から安堵する。……そして、思っていたよりも落ち着いていられる事に感謝していた。

一はムシュフシュ戦以後、様々なソレと相対している。それらを全て退け、今日を生きているのだ。今までの敵を思えば、まだ『教会』などマシな部類だと言えた。

「交渉の続きだ。これから仲間を呼ぶ。痛い目見たくなけりゃあここで誓え。もう、槐に手は出さないと」

「誰がああああっ」

「ねっ、姉さん！　ここは」
「従えってえの!?　ふざけないでっ、ふざけるな！」
聖は冷静さを欠いている。一は灯に目を向けた。どちらかと言えば、まだ妹の方が扱いやすいと判断したのだろう。
「あんたが決めろ。そっちのは話が通じねえからな」
「……先輩」
「何だよ？」
一が早田を見遣ったと同時、上空から何かが降ってきた。その場にいた全員が驚愕の声を上げ、目を見開く。
轟音と共に落ちてきたのは、翼を持った大型の猛獣だ。四凶の生き残り、窮奇である。咆哮を放つ窮奇の全身には銃創が見受けられた。
「あいつらかっ」
ジェーンとナナがやったのだ。気付いた時にはもう遅い。自分たちにとっては間が悪いが、『教会』にとっては降って湧いた幸運だろう。
先んじて動いたのは聖だった。彼女は釘の先端を一に向け、暴れ回る窮奇をすり抜けている。
一はアイギスを構えて、聖の攻撃を受けた。彼女を止めるべく、槐と早田が動こうとするが、灯がピラトを持って睨んでいる。仕方なく、槐はそちらへ回った。
「形勢逆転……！　主よ、感謝します！」
聖は片手で十字を切り、片手で一を追い詰める。
「這い蹲りなさい、勤務外っ」
「そこまで槐が欲しいのかよ！」
「アレじゃない！　私たちは幸せが欲しいの！」
その為には誰かの幸せを踏みにじっても構わない。聖の目は、そう物語っていた。

幸福論

幸せなら手を叩こう。

眼前に迫った脅威、『教会』の聖を認めた瞬間、一はアイギスを、メドゥーサの能力を発動させていた。

一はメドゥーサを最後の手段として捉えている。可能なら、彼女の力を行使せずに話を進めたかったのだ。それは、メドゥーサを使えば自らが傷つくからという点だけではなく、最後の手段を破られた場合を想像するのが恐ろしかったからだった。

「『止まれっ』」

聖の釘を防ぎながら、一は声を荒らげる。彼は、窮奇がここに逃げ込んできた以上、時間さえ稼げばジェーンたちと合流出来ると考えていた。

「『聖』！」

能力発動の条件はクリアしている。声は出る。目も見える。対象の名前も押さえている。

「……っ、止まれ！　止まれよ！」

だが、そうはならなかった。聖は止まらず、アイギスは反応を見せず、メドゥーサは声すら発さなかった。

ならばと、一は自らに問い掛ける。一体、目の前の女は何者なのだろうかと。確かに止まった筈なのだ。前回は、これでどうにかなった筈なのだ。

「ふ、ふふっ」

聖が笑う。彼女は、一の問いに対する答えを持っていた。彼女は彼を嘲笑い、両腕に力を込める。一は腰を低く落として堪えようと

するが、思考が現状に追いつかず、そのせいで集中出来ないでいた。
「ふっ、おっかしい！　どうしたのかしら、ねっ！　急に叫んだりして！」
すぐに一も気付いた。何か、やられたのだと。
「あんたの力なら、こっちだって気付いてるのよ！　主はおっしゃったわ、私たちに知恵を授けてくださった！」
「貴様っ」
早田が飛び掛かるが、一は彼女を制した。聖が、片方の手に釘を握り込んだのが見えたのである。もう一歩でも踏み込めば、それは早田に向かって放たれていただろう。
「先輩を傷つけてみろっ、五体満足では帰さん」
「やってみなさいよ。その前にあんたも傷つけてやるわ」
「てめえ、何しやがった……！」
苦渋に満ちた一の表情を見遣ると、聖は満足そうに微笑んだ。
「そうっ、それ！　その顔が見たかったの！　舐めるな勤務外！　私たちを何だと思っていたの！？　やり合えると思った！？　話が出来るとでも！？」
一の手から力が抜けていく。それでも、彼は持ちこたえようと必死だった。
「出来ないわよ！　『教会』は主の言葉だけ！　主の声だけを聞くモノなの！　あんたみたいなヤツの話っ、誰が！」
このままではジェーンたちが来る前に殺されてしまう。一は槐に助けを求めようとしたが、彼女もまた、灯によってその場から釘付けにされていた。
そこで、一は気付く。聖と灯の顔を見比べ、彼女らの声を思い出す。そうして、ようやくになってアイギスが発動しなかった理由に思い至ったのだ。
目の前の女は『教会』の聖ではない。
「ちゃちな手ぇ使いやがって」
「……あら、気付いたのかしら。でも、遅いわっ」

聖ではなく、灯。
灯ではなく、聖。
一の能力に気付いた二人は最初から、あるいは途中から入れ替わっていたのだ。『教会』の顔は他人には見分けが付かないほどに酷似しており、また、一を騙せるくらいには演技力があった。彼は精々、気の強い方が聖、くらいにしか認識していなかったのだろう。
「保険のつもりだったんだけど、こうまで上手くいくとはね！　主よ、感謝します！」
「タネが割れりゃあ……！」
「やらせるか！」
聖の声に応えるかのように、ピラトを振るっていた灯が槐をなぎ払った。短い悲鳴を上げ、槐は地に這い蹲る。打ち据えられた痛みからか、彼女は立ち上がる事が出来なかった。
その瞬間、早田は一と槐を交互に見遣る。どちらを助ければ良いのか迷ってしまう。そうして、彼女が何も出来ない間に『教会』は行動を開始していた。聖の振りをしていた灯が一を押さえたままで、灯の振りをしていた聖が槐を押さえる。
「はーい、そこまで」
槐の首根っこを掴んだ聖が、嗜虐的な笑みを見せた。
「座敷童子の命が惜しければ、抵抗を止めなさい。ほら、止めろってば」
「槐ちゃん！　……外道か、貴様ら」
「あ、その、ごめんなさい」
謝る灯だが、彼女の腕には力が込められたままである。一は小さく舌打ちした。彼女らには、本性と呼べるようなものが存在していないように思えたのである。
「槐を離せ」
「無理無理。絶対駄目よ。だって、コレは私たちの幸せなんだもの」

生きていく為には何でもした。何でもすると思っていた。苦汁を舐めた。辛酸も嘗めた。媚びへつらった。

聖と灯はこの世に生まれ落ちた瞬間から『教会』だった訳ではない。だが、生まれてすぐ、その道を選ばされていた。他でもない、実の親にである。彼女らは実の姉妹ではない。血が繋がっていないのだ。彼女たちを繋いでいるのは『教会』に属する人間だという点のみである。それさえ除けば他人と同じなのだ。それでも、二人は逃れられない。鏡を見る度に思い出す。同じ顔である事に、『教会』を感じざるを得ないのだ。

作られた顔。借り物の名前。己が人生は操られ、偽物の生を終える。『教会』のメンバーは使い捨てなのだ。傷つけば疎まれ、壊れれば捨てられ、また、新たな『聖』が生まれるだけだ。

だから、聖は抜け出したいと思っている。一度でも疑問を覚えてしまうと、もう駄目だった。自分を生んだ者は？　捨てた者は？　本当の家族は？　今日はどうすれば良い。明日はどうなる。これから先、生き続ける限り、自分は『教会』の『聖』なのか？　……嫌だった。途轍もなく恐ろしかった。本当の自分を知る事もないまま死ぬのが、嫌で嫌でたまらなかった。

本当の自分を知りたい。

しかし、分かってもいた。本当の自分など、どこにもない事を。生まれた時に捨てられて『教会』となった。だから、それ以外に記憶はない。聖も灯も、ある意味初めから『教会』だったのである。取り戻せるモノはない。思い出も、家族も、最初から存在しない。

「槐を離せ」

それでも、手放せる筈がなかった。掴んでいるのは確かに、自分たちに幸福を招くモノなのだろうから。

「いいや、槐君を離したまえ」

「……何、あんた？」

聖の濁った瞳が、新たな登場人物を捉える。髪の毛をかき上げた彼は、楯列衛その人だった。

楯列の登場に、一と早田は溜め息を吐く。彼らは、どうしたって彼の手に余る状況だと踏んでいたのだった。

「そして、一君から離れたまえ」

「あー、あのな、楯列」

「どうしてここにいるのかって？　はっはっは、君たちが僕を置いてけぼりにするからじゃないか。いつまで経っても、どれだけ待っても誰も来ないから、僕の方から出向いたって訳だよ」

「そういう意味じゃない」

一からは、力が完全に抜けつつある。僅かながら、灯からも気が抜けていた。

「些事だよ、そんな事は。とにかくだね、それ以上、僕の身内に危害を加えないでもらいたい」

「身内ぃ？」　聖が楯列をねめつける。

「そう、身内さ。『教会』だったかな？　あなたたちが手を引かないというのなら、僕にもそれなりの考えがある」

思わず、聖は噴出していた。目の前の一般人に何が出来るものかと、そう思ったのだ。

「やってみなさいよ」

「では、『教会』ごとあなたたちを潰そうじゃないか。つまるところ、社会的に殺しきってみせる」

「やってみなさいよ。むしろ……」

やってくれ。そう言おうとしたが、聖はなけなしの自制心でその続きを飲み込んだ。

「金持ちを舐めているね？　楯列の財力に物を言わせれば、フリーランスの一つや二つは造作もないんだ。赤子の手を捻るよりも、さ」

「外道め」

「……早田君。僕は君のような駄目な人間も助けてあげようとしているんだけど？」

「黙れ。貴様に助けられるくらいなら、私は舌を噛み切って死ぬ」
こんな時にまで喧嘩しないでくれと、一は灯の攻撃を凌ぎながら思った。
「だから、舐めてるの？」
「あなたたちも所詮は人間だよ」
楯列は肩を竦めてみせる。
「ソレを殺せると言っても、怪我をすれば病にもかかる。食事をしないと餓えて死ぬ。結局のところ、人間だ。人から外れたモノを持っていたとして、根本的には、構造的には人と変わらない。人間社会から隔絶された時、あなたたちはどうなるだろうね」
聖には楯列の言葉が真実なのかどうかが分からない。彼がそのような事をやってのける能力を、精神を有しているのかどうか判断が付かない。ただ、笑って済ませるには出来ないくらいに追い込まれているのだと気付いていた。直に、他の勤務外が駆けつけてくるだろう。そうなれば、力押しで片付けられてしまう。
「やってみなさいよ」
「僕は本気だよ？」
至極真面目な顔でまともじゃない意志を突きつける。楯列という男は、一同様、相応にイカれていた。そう認識し、聖の神経がささくれ立つ。
「離れたまえ。さもないと……」
「はッ、さもないと？　どうなるっていうのかしら？」
主に問うまでもない。殺される前に殺すだけだ。聖は槐から放すと、地面に落ちた彼女の背中を踏みつけて、両手に聖釘を構える。
一も楯列も早田も、目障りなら黙らせてしまえば良い。
「僕を殺すつもりかい？」
「あんただけじゃないわよ。安心しなさい」
「……なあ、あんた」
「――――ッ！」
灯は目を見開いた。顔を伏せる一のすぐ傍に、何かが寄り添って

いるように見えたのである。
「頼むから、退け」
「ねっ、姉さん！　だめっ、ダメです！」
彼を怒らせれば、自分たちにとって良くない事が起きる。灯は聖に訴えるが、
「うるっ……さい！」
聖は妹の話を聞き入れるつもりはなかった。

不思議と、憎くはなかった。爆発した感情が伝わり、むしろ哀れに思えた。
一が灯を睨みつけている。彼は、早田や楯列が傷つけられれば力を振るうだろう。
早田も楯列も、一や自分が傷つけられれば自身を顧みずに動くだろう。
『教会』の二人は、勤務外に追い込まれつつある。何をするか分からない。
だが、自分が何もしなければ誰かが傷つく。誰かは傷つく。もう、ごめんだった。馬鹿げている。こんな自分が、幸福の象徴の筈がない。
「……手を出すでない」
「あ？　何よ、座敷童子。あんたが指図出来る状況じゃあ……」
「主らに従おう」
一が叫び、早田も喚いた。だが、彼女は、槐は――――。
素直に哀れだと思えた。自分たちの幸福を得る為に他者を蹴落とす『教会』が、可哀想なモノに思えてしようがない。だが、彼女らとて楯列が言ったように人間なのだ。座敷童子として長く生きてきた槐にとっては、今の聖は幼子にしか見えない。言わば、庇護の対象なのだ。自分が出れば丸く収まる。幸福を与えられるかは本人次

第だが、怪我人を出さずに済む。
「わしがお主らに付いていけば良いんじゃな？　それで、満足するんじゃな？」
「それだけじゃ駄目よ。ちゃんと、幸せにしてくれなきゃ困るんだから」
聖は前を向いたままで言う。幸せになりたいと、そう言ったのだ。
「それは、主次第じゃ。……衛、早紀、一、もう良い。わしが悪かった。あの時、わしが大人しく捕まっておればこんな事にはならなかった」
「っ、槐ちゃんが捕まる必要はない。少しだけ待ってくれ。私がこいつらを……」
言い掛けた早田だが、槐は諦めたかのように首を振る。彼女は、それを望んでいない。だから、自らを差し出そうと決めたのだ。
「妹を一から離れさせよ」
「あんた、隙でも作ろうとしてるんじゃないわよね」
「抵抗するつもりなら、とっくに失せたわ」
槐は目を瞑る。彼女は諦めたのだ。
「いや、駄目だって」
「……一、わしは、もう良いと」
「そんなの駄目だ。俺は納得出来ねえぞ」
だが、まだ諦めていない者がいる。槐は、こうなるだろうと思っていた。一だけが、最後まで付き合うのを拒否する事を。

座敷童子とは何だ。
幸せを運ぶモノか。幸運を与えるモノか。運気を上げるモノか。
きっと、どれもそうなのだ。座敷童子は幸せに関わっている。誰もがそう信じてやまない。だから、それで良い。
だが、一は既に知ってしまった。出会ってしまった。
「そんなの駄目だ。俺は納得出来ねえぞ」

座敷童子は、槐は、道具ではない。確固とした個なのだ。彼女だって物を考え、物を言う。漫画を読んで笑う。つまらない冗談で怒る。寂しければ悲しみ、辛ければ涙を流す。

だから、嫌だった。

確かに、槐を差し出さなければ怪我人が出るだろう。特に、一は『教会』に強く恨まれている。むしろ、このまま戦えば『教会』の思う壺なのだ。一たちは手酷く痛め付けられ、槐を奪われてしまう。

「わしはっ、お主らが傷つけられるくらいなら！　だから！」

槐の気持ちはありがたく思う。だが、その気持ちは受け取れない。一は、誰かを踏みつけにして手に入れた幸せなんて欲しくなかった。

「お前がいないと早田が悲しむ。楯列も、俺だって寂しく思う。だから、駄目だ。槐、お前は自分の事をもう少し考えとけ」

「ふざけるでない！　ここでわしが出ねば、お主らが退かねばどうなるか！」

「……足蹴にされてよくもまあ吠えるわね、座敷童子。さて、どうするの勤務外？　差し出す？　逃げ出す？　早く選びなさい」

どちらも選ばない。一は灯を見据えて、息を吸う。

「だったらてめえが『灯』なんだな？　『止まってろ』」

「よさぬか、一！」

アイギスが光輝を帯びた。その瞬間、灯は一の傍に佇むモノを間近で見てしまう。彼女は息が出来なくなり、指一本すら動かせなくなる。聖釘を取り落とし、喉に手を伸ばそうとしていた。

一が能力を使った。聖は歯噛みし、楯列に向かってエレナを放つ。が、彼の前に一が立ち、投擲はアイギスに防がれてしまった。

その隙に、早田が聖へと迫っている。彼女は苦し紛れに釘を投げたが、早田はその全てを回避していた。

「――――――ッッッッ！」

窮奇が咆哮を上げる。『教会』にとっては絶妙なタイミング。ソレが暴れて、早田の進路を塞ぐ形になる。

「む、退いていろ」

「なあああああっ！？」
驚愕の声を上げたのは一だった。早田のフォローに回ろうとしていた彼は、彼女が窮奇の腹に蹴りを繰り出したのを見ていたのである。
「早紀、くっ、ああっもう！　阿呆！」
窮奇は、ジェーンたちの攻撃を受けて瀕死だった。酷く弱っていた。それでも、恐ろしい怪物である事に変わりはない。だが、早田はソレを蹴り飛ばす。路傍の石をそうするかのような風に、である。
ソレは、低く呻き、ゆっくりと地面に倒れていった。聖は早田の接近を認め、槐から足を退かせる。
「楯列っ」一の声に頷き、楯列はメドゥーサに囚われている灯の武器を奪った。
一は聖をしっかりと見据えて、アイギスを構える。光を帯び、放たれる力。最後の『教会』は蛇姫に絡みつかれて、それでも、敵を睨みつけていた。

座敷童子とは何だろう。
それは、幸せをもたらすモノか。
だが、一は槐と出会って考えていた事がある。
果たして、座敷童子の幸せとは何なのだろうか、と。
動かなくなった――――否、動く気をなくした『教会』を見て、一は息を吐いた。窮奇は息絶え、自分たちを害するモノがいなくなる。その事実を、彼はまだ上手く飲み込めないでいた。
槐は早田に抱き締められている。その様子を、楯列は黙って見つめていた。聖と灯は武器を取り上げられて、駆けつけてきたジェーンに銃口を突きつけられている。これで終わりだ。そう、思って良い筈だ。
「マスター、お疲れ様です」
「うん」

「後始末を終えたら、すぐに夕食の準備をします。今日はお肉が良いですね。たくさん動かれた事でしょうし」

ソレの死体はタルタロスがどうにかするだろう。ならば、一のする事は何一つとして、ない。いや、本来なら最初からなかった筈なのだ。彼は今、勤務外として動いていないのだから。

「ナナは『教会』を知ってたのか」

「今日、初めて知りました。ですが、マスターよりも多くの知識を所有していると自認しております」

一の隣に立つナナは、得意げな顔で口を開いた。その話の全てを、彼は聞き流した。どちらにせよ、『教会』の行く末は、勤務外の取る手段は、一つきりなのである。ここで殺すか、殺されるか、だ。一の出会ったフリーランスには、勤務外に対して比較的友好的な、特殊なモノが殆どだったが、大抵は、後ろを見せれば得物を向ける間柄なのだ。

「ジェーンさん、どうなさいますか」

「決まってるじゃない。テキトーに痛めつけて、お兄ちゃんにあやまらせるノ」

「と言うかナナは殺害をオススメします。強く」

ほら、始まった。一は溜め息を吐き出して、聖と灯に視線を遣る。二人は逃げ出す素振りすら見せない。座り込み、蹲っているだけだ。しかし、再び戦闘が始まれば生死の保障は出来ない。ジェーンたちを制止出来る保障も出来ない。好感情こそ抱いていないが、彼は二人の命くらいどうにかしてやりたいと思っている。が、その手段は思いつかない。

「ああ、待ちたまえ。彼女らはフリーランスではないよ」

そんな中、楯列がにこやかに口を開いた。彼の言っている意味が分からず、ジェーンは小首を傾げる。

「『教会』デショ？」

「ついさっきまではね。この二人は僕が雇った小間使いとなっている。そういう訳だから、手出しはしないでもらいたい」

「おい。何を言っている、楯列。お前は……」
早田が楯列に掴みかかろうとしたが、槐が彼女を止めた。
「その通りじゃ。一般人を殺すか、勤務外よ」
「……不可解な。マスター、彼らの発言の真偽を問いたいのですが」
「あー」ナナにじっとりとねめつけられ、一は槐に助けを求める。
槐は、口元だけで笑っていた。一はそれだけで彼女の気持ちを察する。
「槐。良いんだな？」
「うむ。わしからすれば、可愛い悪戯に過ぎぬからのう。かっかっか」
また襲われるぞ。また狙われる。殺されかける。ここで許すのか。本当に構わないんだな。それら全てを、一は飲み込んだ。必死で堪えた。
「それが座敷童子（おまえ）の幸せなのか？」
問われた槐は少しだけ、目を見開く。そうして、緩々と首を振った。
「一、衛、お主らがわしの事を考えてくれているのはな、素直に嬉しい。じゃがな、わしのそれは、わしが見つける。わしが掴む。だから、自分の事を考えるのじゃ、主らもな」
そうか。それだけ言って、一はナナに顔を向ける。
「悪いけどさ、終わりだよ。ナナたちは帰ってくれないか？」
「しかし、危険です。『教会』はまだ戦闘可能の筈です。ここで完全に、完璧に、完膚なきまでに負傷させておかないとマスターが危険なのです」
「だからさ、こいつらはもう『教会』じゃあないんだって。な、ジェーン？　お前なら分かってくれるよな？」
振り向いたジェーンの顔には『ずるい』という色が貼りつけられていた。彼女は知っている。ここで自分が意地を、勤務外の本分を通そうとしても、彼の機嫌を損ねてしまうと言う事に。また、ジェーンは一の頑固さを知っている。最後に、彼女は『良い妹』であろ

うとするのだ。
「お店で待ってる」
「……ああ、必ず行くよ」
だから、一は謝るのを選ばなかった。

ジェーンたちがいなくなった後、一たちは駐車場にある楯列の車へと移動していた。
ボンネットに腰掛けた一は、目の前で立ち尽くす『教会』を見つめる。彼女らはまだ、一言も声を発していなかった。
「楯列、どういうつもりだ。何故、こいつらを助けた。あのまま勤務外に引き渡していれば丸く収まったではないか」
「駄目だなあ、早田君は」楯列はキーをくるくると回しながら、髪の毛をかき上げた。
「丸くは収まらないよ。ただ、そこの二人が嫌な思いをするだけじゃないか。僕たちはそれを望んでいたかもしれない。でも、槐君はそれを望んでいなかった。だったら、分かるよね？」
早田は、縋るような視線を槐に送る。だが、彼女は申し訳なさそうに微笑むだけだった。
一にはある程度の察しがついている。推測どころか、妄想にも近い考えだが。だが、槐はきっと、自分のせいで誰かが傷つくのが耐えられなかったのだろう。それが、自分に危害を加えようとするものであっても、である。
「……助けたと、私たちに恩を売れたと思っているの？」
吐き捨てるように、聖が言った。彼女は一でもなく、楯列でもなく、槐を睨みつけていた。
「そう思うのならそれでも構わん」
「ッッ！　ソレの分際で、私を……！」
一はアイギスを握る。何かあれば、容赦なくメドゥーサを使おうと決意していた。

「ふん。確かに、主らは気に食わん。わしだけでなく、わしの身内を傷つけようとした」
「なら！　ならどうして!?　哀れみ？　ふざけないでっ」
一息に吐き出して、聖は祈るようにして膝を折る。
「哀れみか。それもある。しかしな、それ以上に、わしはお主らが思うている以上に座敷童子なんじゃ。……囲われ、囚われていた時期もあった。だが、わしは、やはり人間（おぬしら）を嫌いではない」
槐は早田が止めるのも構わず、聖に近づき、座り込んでいた彼女の頭に掌を置いた。
「幸せが欲しいと願う者を見捨てる気にはな、なれんかった」
「あ……」灯が、自分よりも小さな槐の手を見て、一筋の涙を流す。何か、彼女の心の琴線に触れるものがあったのだろうか。
聖は自らの分身とも言えるべき妹を見て、槐にされるがままでいた。
「もう、わしを狙うなとは言わん。後生だから、わし以外の者には手を出さんでくれ。頼む」
「うっ、う、く……あんたなんか、あんたなんか……」
されるがまま頭を撫でられて、聖はただ、童女のように泣き続けた。
遠い昔、彼女が神様の存在を信じていたような、そんな純真さが僅かに見えた気がして、一は思わず目を逸らした。

「……話、出来たじゃないか」
楯列が一の耳元に顔を近づける。一は煙草に火を点けて、彼から距離を取った。
「幸せが欲しいって、そう思うのは人間である証明だよ。この二人だって、ただの人間なんだ」
「楯列」
「何だい？」

一は考える。ならば、ただの人間を、ただの人間から外れさせたのは何だったのか。あるいは、誰だったのかを。
「さっき言ってたよな。『教会』を潰せるって。ありゃ、マジだったのか？」
「嘘偽りはないよ。それも、君が望むなら絶対だ」
「そっか。だったら、最悪、そういうのも考えなきゃな」
「へえ？　君も、『教会』を助ける気でいるのかい？」
紫煙を押し出すように吐き、一は首を振る。
「じゃなくて、二人はお前んとこの小間使いだろ？　だったら、まあ、取れる手は色々考えときゃなあ、な」
「嬉しいな」
「は？　何が？」
「君が、僕を巻き込もうとしているのが、だよ」
楯列が顔を近づけてくるので、一はボンネットから逃げるようにして降りた。
「槐がそうしたいって思ってるからだよ」
「そうかい？　そうかい。じゃあ、そうだね」
「さっきから」
「うお！？」
ずい、と。早田が一の真正面に立つ。
「私を無視してこんな奴と話してもらっては困るぞ、先輩。第一、本当にどうするのだ？」
「あの二人か？　まあ、何とかなるんじゃないのかな」
「そうだね。何とかなるよ」
「……二人だけで分かったような顔を」

生まれた時からずっと駕籠の中で生きてきた鳥に、手助けは必要だろうか。逃がしてやる事は、鳥にとっての幸福となるだろうか。
無論、鍵さえ開ければ、扉さえ開ければ、鳥は知らずの内に飛び立

っていくだろう。しかし、ただ外に追い出すだけではどうなるだろうか。翼の広げ方と、飛び方を教えてやらねば、鳥はやはり、知らずの内に息絶える。そも、駕籠の中の鳥は、外へ行くのを心の底から望んでいるのだろうか？

　幸せとは、与えられるものではない。自らが探し、見つけ、掴むものなのかもしれなかった。それでもと、一は思う。もしも助けを求められたなら、その時は自分の出来うる限り、そいつの幸せ探しに付き合って、手伝ってやろう、と。

焼却キャンディハウス

血と、火だ。
焼かれた物は今でも思い出せる。
死んだ者はいつまでも忘れられない。
怨嗟の如く押し寄せる声に急かされて、背を押されて、やがて耐え切れずに父が死んだ。彼だけではない。母も、親戚も、皆死んだ。皆食われたのだ。ソレに殺されて、食われた。食われて、殺された。
ただ一人、生き延びた。
何もかも許せず、また、何もかもが諦められなかった。復讐してやる。その思いだけを支えに今まで生きてきた。憎悪の対象は、国を潰したソレではない。街を焼いたソレではない。家族を飲み込んだソレではない。自身の尊厳を踏み躙った人間たち。……だった。
それが義務だと、彼は確かに言ったのだ。生きろと、そう言われていた。だから、この街で頑張ろうと思う。
だが、もしも、現れたら？
もしも、あの時のソレが現れたら？
もしも、あの時の生き残りがいたら？
その時、自分はどうするのだろうか。復讐と言う甘美な熱に身を任せるのか。それとも、この街で灯した明かりを手にただただ逃げ惑うのか。
まだ、分からない。アイネ＝クライネ＝ナハトムジークは目を瞑り、昔日の光景を今一度、網膜に焼き付けるのだった。

中内荘には、変な人たちしかいない。
自分の住むアパートを指して、歌代チアキはそう思った。常々、

そう思っている。

類は友を呼ぶとも言うが、果たして友を呼んだ類は誰なのか。その答えだけは何となく分かっていた。言わずもがな、一一である。彼がいたからこそ、ここには変人の類が集うのだ。

一一は、歌代チアキを助けた。彼女も、その点については一に感謝している。だが、彼こそが類なのだ。変人たちの核とも言える。チアキからすれば、一は普通なのに勤務外を選んだ変態でしかない。普通で、一般人でいられた筈なのだ。なのに、首を突っ込んで変人たちと関わりを持つ。勿論、自分を含めて、だ。恐らく、それは彼の性分なのだろう。自分の限界を越えたところまで顔を出そうとする野次馬根性だ。非常に、性質が悪い。

北英雄。彼は、一が来るよりもずっと前から中内荘に住んでいたらしい。何年前からここにいるのかは知らないが、北が古株なのはチアキにも分かっている。しかし、彼の正体は分からないのだ。酒を飲み、煙草を呑み、賭博に明け暮れる男なのは知っている。賭け事に弱く、糸原にカモにされているのも知っている。夜中出歩き、朝に眠る。だから、定職に就いていないのも察しがつく。……しかし、一に尊敬されている理由が分からない。彼が北を語る時、『ろくでなし』と言うのはいつもの事だ。だが、本心からはそう思っていない事を感じる。北英雄とは、一体、何者なのだろうか。

糸原四乃。一の同居人である。いや、押しかけの居候と呼ぶべきか。チアキは迷って、どちらでも良いかと思い直す。糸原は現在、駒台の病院に入院しているのだから。彼女がどのような傷を負ったかは分からない。あの、悪魔のような……悪魔をも弄ぶような女が弱っているというのは、チアキには想像出来なかったが。

アイネ＝クライネ＝ナハトムジーク。彼女とは良い関係を築いているのではなかろうか、と、チアキは思った。フリーランスは危ない人なのだと一から聞いていたが、アイネは、彼の言うフリーランスとは違うような気がする。どうでも良いところでのネガティブな思考が目立つが、基本的には毅然としているのだ。どうにも、一が

絡むとアイネは駄目になる。
　山田栞。すごい酒飲み。中内荘で最も豪快で一よりも男らしいが、少しばかりまっすぐ過ぎる。
　と。チアキは自分を棚上げして、隣人たちの事をぼうっとしながら考えた。

「……あいつは、素直に物が言えないのか」
　堀は苦笑する。店長は苛立たしげに煙草に火を点けた。バックルームには紫煙がこもり、それでも、彼は薄い笑みを浮かべ続ける。
「いやあ、それはお互い様かと。尤も、お疲れ様です、くらいで目くじらを立てる事はないと思いますが」
「駄目だ。私は店長だぞ。ヤツからすれば天上の民にも等しい存在だ。挨拶をしない。挙句私を無視して帰ろうとする。許されるような行為ではない」
「一君に尊敬されるような大人にならないといけないですね」
　じろりと睨まれて、堀は店長から目を逸らす。
「第一、少々の傲慢くらいは良いでしょう。彼がいなければ店は回らない。そして、なかったかもしれない。一君は北駒台店に貢献していると思いますよ」
　それでも、堀は一が驕る事はないのだと思えた。彼が店長に対して生意気なのは、単純に、彼女が気に食わない存在だからなのだ。
「三森たちが戻ってくれれば、大きな顔はさせん」
「ああ、あの二人は、一君にとっての天敵ですからね」
「鳥なき里の蝙蝠だな。全く、のびのびとしている。ゴーウェストも立花も、あのナナも、いつの間にやらあいつを持ち上げる太鼓持ちじゃあないか。人たらしめ」
　たらし。なるほどと、堀は内心で頷いた。一は、勤務外だけでなく、フリーランスやソレにまで気に入られている。その理由は、彼が普通だからだ。優れた者はより優れた者を求める。足りない部分

を補う為に何かを求める。普通でないモノは、そうであるモノを欲しがるものだ。

「三森さんたちの復帰はいつ頃になりそうですか」

「すぐにでも。と、言いたいところだが、いつになるかな。三森には休みが必要だろう。今まで一人でやってきてたんだ。たまには他の奴に任せても良いか、そう思わせるにはちょうど良い」

「……糸原さんは、どうなんでしょうね」

「怪我は治ったと聞いているが」

店長はその続きを口に出さなかった。堀には分かっている。彼は、炉辺から糸原の状態について聞いていたのだ。……手が震える。そう、聞いていた。恐らく、あの少女のせいだろう。糸原は、暴君とも呼ぶべき、巨大な力に飲み込まれたのだ。打たれ強そうに見えた彼女の精神は、誰よりも繊細だったのである。

切っ掛けさえあれば。

そう、炉辺は言っていた。精神的なものなら、ふとした切っ掛けで治るかもしれない、と。

「間に合いますかね」

「どうだろうな。恐怖に打ち克てるのは、自分だけだ。他人の言葉では心を癒せない」

だが。店長は付け足してから、短くなった煙草を灰皿の上で揉み消した。

「あちらさんは待ってくれない。いつだって、こちらの都合などお構いなしだ」

「ソレですか？」

「ソレもある」

ならば、円卓か。堀は眼鏡の位置を押し上げて、店長を見遣る。彼女の表情からは何も読み取れなかった。

「都合良くこの街には来ない。一にはそう言ったが、正直、不安だ」

「ゴルゴン、青髭にテュール、でしたか」

「それだけではないだろう？　おっと、そう睨むな。……今後、新

たな円卓の出現にも気を配らなければ、な。現状で太刀打ち出来ないなら、三森たちを呼ぶしかない」

それでも駄目なら、この店は、この街は終わりだ。圧倒的な力に飲み込まれて、誰も彼もが無残に殺される。理由など、ないに等しい。円卓がどういう目的で動くモノか分からない以上、そう判断せざるを得ない。

「今のところ、ソレが出現したという話は聞いていませんが」

「一秒後、どうなるかは分からん。私たちの命は、いつだって与り知らぬところで、際どいところで存在しているに過ぎん。向こうがその気になれば、いつ訪れるか分からない機が来れば、笑えるくらいに終わるだろう」

「笑えて終われるなら良いと思いますがね」

その終わりの先に、自分の命があろうと、なかろうと。堀は口元が歪みかけるのを堪えて、目の前にいる女を見据えた。

「どうして素直に物が言えないんだろうな、あの人は」

「誰の事だい？」

「お前の事じゃないよ」

一は温くなったコーヒーを流し込み、溜め息を吐く。

サックスのうるさいＢＧＭがかかった喫茶店は、程よい室温に保たれていた。

「それで、呼び出したからには何かあったんだろ？」

「まあね」曖昧に返すと、一の対面に座る楯列は、窓を見つめる。外には、忙しそうにそこを通り過ぎる男女の姿があった。

「先日、と言ってもまだ二日しか経っていないんだけど」

先日。そう言われて、一は思い出す。大学の構内で『教会』に襲われ、四凶と呼ばれるソレと出遭った日を。

「その後について、話そうと思ってね」

空になったカップを見遣り、一はメニューを手に取った。

「『教会』の二人は楯列の使用人となった。表向きはね。彼女らは、こっちで監視すると同時、制約を与えないでいる。自由にやってくれ、と言うわけだよ」
「……自由に？」
「そう。それが槐君の頼み、と言うか、望みでもあるからね。槐君は、自分のせいで誰かが不幸になるのを嫌っている。たとえ自分を襲おうとした者であっても、その思いは変わらない」
難儀な話だと、一は空になったカップを、何気なく持ち上げた。
「それは良いんだけどさ、良いのか？　あいつら、また槐をどうにかしようって思ってるんじゃないか？」
「思っているだろうね。でも、実行には移さない。あの二人も根っから悪人じゃあないんだと思うよ。とりあえずは大人しく過ごしてくれている。……尤も、家は騒がしくなったけど」
困ったように笑う楯列を見て、一は苦笑する。
「灯君は家事の手伝いなんかを申し出てね、でも、存外に下手くそらしい。聖君の方は、だらだらとしているよ。カウチポテトって言葉があれ程似合う人も珍しい。思うに、あれも一つの幸せなのかもしれない。彼女が望んだ、一つの理想なんだ」
「ソファでだらけるのが、か」
「そうしたくても出来ない人がいる。そして、聖君は出来なかった人なんだ。何故か？　そう問うのは、また別の話だけどね」
まだ安心は出来ない。人の心は移り変わるものだと一は知っている。今は表面上、大人しくしているだけかもしれない。
「槐の様子はどうなんだ？」
「何も変わりないよ。強いて言えば、新しい遊び相手が出来て喜んでいる、くらいかな」
遊び相手にしては、少しばかり特殊な相手ではないだろうか。一は槐の度量を呆れると同時に、羨むばかりである。
「年の功だな」
「そうじゃなくて、槐君は僕たちの事が大好きなのさ」

槐が座敷童子だからではなく、自分たちが人間だから。だから、彼女は。

「槐君が、一君にお礼を言いたいそうだよ。また今度、会ってくれると嬉しいな」

「お礼なんていらないけどさ、また会いに行くよ。うん、必ず」

「それは良かった。……名残惜しいけど、少し用事があってね、僕はそろそろ」

楯列は伝票を持って立ち上がろうとするが、一がそれを制した。

「あのさ、マジで大丈夫なのか。フリーランスと一つ屋根の下にいるんだぜ？」

「あの二人は『教会』を抜け出したも同然、らしいね。彼女らはそう言っていた。だから、こちらには打つ手があるんだよ。僕たちにそのつもりはないけど、あちらからすれば、追い出されれば終わりなんだ」

「……『教会』を潰すってのは？」

「それも槐君が望めば、だよ。あの二人は『教会』に狙われる可能性が高い。フリーランスを敵に回すのは苦しいけれど、それでもどうにかしなくちゃあね」

甲斐甲斐しいな。一はそう言おうとして口を噤む。楯列が槐の為に動くのは、罪滅ぼしのつもりなのかもしれなかった。彼は何もしていない。ただ、受け入れただけだ。彼の親が、彼の一族が座敷童子を連れて、囲った。駕籠の中に押し入れた。楯列はその行為を強く恥じている。

「言えよ」

「ん、何がだい？」

「何かあったらだよ。俺に出来る事なら、まあ、手伝ってやるよ」

一も席を立ち、楯列の手から伝票を奪った。

「自分のは払う。槐が言ってたのは、つまるところ、そういう意味だろうからな」

慣れると大した事はなかった。それに、幼い頃からここには良く来ていた。怪我をする度、ここで叱られて、慰められた。時間を潰す方法は知っている。問題は、それを良しと受け止めるかどうかだった。

「なァ」

隣のベッドの住人は滅多に口を利かなくなった。糸原四乃は布団から出てこない。ベッドから降りない。食事ですらあまり手をつけない。だから三森は頭を掻き、彼女のご機嫌を伺うのだ。何も糸原の身を心底から心配している訳ではない。ただ、つまらないだけだ。憎まれ口を叩く女がだんまりと言うのは、どこか調子が狂わされる。そんな気がしていた。

「今日はメシ食えよ。あの人、心配してンぞ。つーか、治るもんも治らねェ」

カーテン越しの糸原は口を開かない。眠ってはいないのだろうが、最近はこの調子である。そして、彼女の怪我は既に治っているのだ。問題は心にある。

真っ赤な少女。

彼女の力が糸原に恐れを抱かせていた。三森にもそれくらい分かっている。だが、どうしようもない。ここで立ち上がらなければ、二度とは動くまい。再びアレが牙を剥けば、もはや座して死を待つしかないのだ。頑なな彼女の心を癒すのは何か。あるいは、誰か。

「食えよ。また半泣きで帰っちまうからよ」

三森の言うあの人とは、炉辺の事である。彼女はオンリーワン近畿支部医療部、部長だ。その立場を知ってか知らずか、この病院では自由奔放にしている。特に、彼女は三森たちのような勤務外やフリーランスにちょっかいをかける事が多い。

「……見舞いにでも来りゃあ良いのによ」

諦めて、三森は枕元の本を手に取った。ごろりと横になり、ページをめくる。彼女が考えるのは、一についてである。彼は結局、今

までに一度も顔を見せなかった。一と自分は取り立てて仲が良いとは思っていないが、それでも長い付き合いといえば長い付き合いである。何にせよ、彼の第一の同僚は自分なのだ。間違いなく、れっきとした、純然たる事実である。あんな事があったのだ。『大丈夫でしたか』『お元気ですか』なんて声を掛けてくれても罰は当たらないだろう。

それに。と、三森は目を瞑る。……守ると言ったのだ。軽口ではあったが、愛していると言った。春風夏樹の代わりではない。一一を守ると、そう誓った。そして、彼もまた自分を守ると言ったのである。そういう関係なのだ。だからこそ、こういう時だからこそ、見舞いの一つや二つ、あって当然ではないか。と言うか来るべきである。

「あーあ、つまんねェの」

退院したい。が、糸原を放置したままでは気持ちが悪い。放っておけないのだ。それは、三森がお人よしだから、ではない。神野剣。彼の死が心のそこここに引っ掛かって、抜けないのだ。勤務外を選んだ者が死ぬ。それ自体に対しては何も思わない。自己責任、自業自得なのである。だが、神野の死は北駒台に何かを遺した筈だ。良い事悪い事、全てひっくるめて、である。

良い奴だった。神野とは、バイトでしか関わらなかった。特別仲が良いわけでもない。でも、決して死んでも良いような人間ではなかった。自分よりも若く、前途ある者だった。……彼だけではない。三森はオンリーワンの戦闘部として、勤務外として、他の者よりも長く非日常に身を置き続けている。いつソレに殺されるか分からない。自身ではなく、他者が死ぬ。理由などないまま、意味など知らされないままにこの世からいなくなる。だから、必要以上に誰かと関わるのを避けていた。彼女は怖かったのだ。別れが。何よりも出会うのが。

今後、どうするのか。何をしたいのか。ここを出て、ソレを殺し続けるのか。こんな生活がいつから始まったのか、それは分かる。

嫌でも分かる。しかしゴールが見えないのだ。いつになれば？　どうすれば終わるのか。でも、少しだけ光が差し込んでいる。そんな気がしていた。今、自分は一人ではないと、三森は認識している。仲間と呼ぶにはあまりにも薄い関係だが、それでも、同じ場所で、目的を同じとする者がいる。……耐えられるだろうか。越えられるだろうか。まだ狂わず、人間のままでいられるだろうか。

楯列と別れた後、一はあてどなく街を歩いていた。久しぶりの休みである。店にはナナに加えて、立花とジェーンが戻ってきた。彼女らが戻るまでの間、一は一人で北駒台店を支えてきたのである（望もうが望むまいが、結果的に）。休みは、彼にとっては喜ばしい事だった。が、何をすれば良いのか分からない。突然、日常の中に放り出されたのだ。今まで自分が何をしていたのか、彼は分からなくなりつつある。

とりあえず、一は目に入った古書店を冷やかそうと思った。足を向けた瞬間、背後から声を掛けられる。

「そこのお店はやめた方が良いですよ。ああ、入るのも、ですが、営業を止めた方が良いとも思います。接客態度がなっていないんですよ。店員が商品の位置を把握していないんです。ナコトシュランでは星一つ分の価値もない店です」

ハンチング帽の位置を直し、薄く微笑む少女を確認して、一は背を向けた。

「あらあらあら、良いんですか？　星、欲しくないんですか？」

「いらねえ」

「無視するんですか？　呟いちゃいますよ、『不審者なう』って。あたしのフォロワーが物凄い勢いで拡散しちゃいますから。数は戦力です。そうしたら、と言うか今すぐにでもあなたみたいな排泄物製造機は……」

黄衣ナコトは、今日も一を苛めるのが楽しくて仕方がないようだ

った。
「ふう、それにしても寒いです。立ち話をするには厳しい冷え込みですからね、そこの喫茶店にでも入りましょうか」
「俺はお前と話をする気はないぞ。つーか、さっきまでそこの店にいたしな」
「知りません。あたしには関係ありませんよ」
強気に出て来られていても、一にはナコトを手酷く扱う事は出来なかった。彼女には借りがある。黄衣ナコトは一一の命の恩人なのである。
「まあ、なんだ。俺と話がしたいってんなら」
「どうして上から目線なんですか。それよりも、あなたの方があたしに、何かあるんじゃあないんですか？　と言うか、あるでしょう。あるに決まっています」
「何があるんだよ」
「お礼です」
ああ、と、一は得心する。
「助かったよ、ありがとな。そんじゃ、俺は行くから」
「ちょっと待ってください。何ですかその『あ、こないだは電車賃貸してくれてサンキュー』みたいな軽さは。本来なら、あなたはあたしに対しては常に頭を下げなければならない身ですよ。ありえないっ」
「分かった、分かったって。じゃあそこの自販機で好きなものを買ってやるから」
一は自動販売機を指し示し、面倒くさそうに財布を取り出した。
「あ、小銭ねえわ。なあ、ちょっと貸してくんない？」
「訳が分かりません。あの、本当に感謝しているんですか？　あたし、かなり危ない目に遭ったんですよ？」
「じゃあ、何が欲しいんだよ」
「な、何がって」
何故かナコトはうろたえる。一は財布を戻し、その場にしゃがみ

込んだ。
「ゆっくり考えておきます。……あのイヌは元気にやっていますか？」
「イヌ？」
「立花真です」
一は眉根を寄せる。
「イヌって言うな。まあ、元気だよ。アレから『館』の連中も見えないし」
「でも、いつか必ず、また来ますよ。神野姫……いえ、今はレヤックでしたか。彼女の憎悪には目を見張るものがありました。絶対に諦めないでしょうね。立花を殺すまで、彼女は止まらない。そう、あたしは確信しています」
「……どうして、だろうな」
どうしてこんな事になってしまうのだろう。姫の気持ちも少しは分かる。しかし、一は立花を殺させるつもりはなかった。
「レヤックは自身に式を刻んでいました。彼女は今、人を外れつつあります。バックには二人の魔女もいますし、時間が経てば経つほど手の付けられない存在になると思いますよ。力を手に入れた復讐者は、非常にしつこいですから」
ナコトは自嘲気味に笑む。
「式を刻むって？」
「あなたも魔法陣を見た事がありましたよね？　アレを体に刻むんです。刺青みたいなもの、でしょうか。式を刻めば、地面に書いたりして、わざわざ陣を構築しなくても魔法が発動出来ます」
「便利じゃん」
「では、あなたもそうしますか？　幸い、素養は備わっているんですし」
が、そう言うナコトの口元は歪んでいた。
「ただし、想像を絶する激痛を十数回は耐える必要があるでしょうね。強靭な精神力がなければ式を施す途中でショック死するでしょ

う。そこまでのリスクを負って、ようやく手に入れられるモノなんです」

そこまでして。そこまでして、神野姫は力を得たかったのか。そこまでして、立花を殺したかったのか。

「でも、あたしには分かりますよ」

「……何がだ」

「神野姫の気持ちが。復讐とはネガティブな動機だと思われますか？　でも、それがなければ生きられない。生きてはいけないモノを殺す為にしか生きていけないんです。怒りは明日への活力に、憎しみはその先へ進む為の原動力になり得ます。そういう人間もいるんです。安穏とした日々を送るあなたには分からないと思いますけど」

「分かるよ」

一は財布を取り出して、自動販売機に小銭を入れ始める。ナコトは驚いたように彼を見つめた。

「俺にも分かる。でも、認めたくはないんだよな。復讐するってのは、別に良い。でもさ、終わったらどうなるんだ？　生きていく理由がそれなら、その理由がなくなったら？」

きっと、死ぬ。復讐者がそうでなくなった時、その時に何も残っていなかったら、生きるに値する理由が失せれば、どうなるか。一にはその事が良く分かっていた。

「そこまでなんだよ」

「では、復讐なんて馬鹿な真似はよせ、と。あなたはそう言いたいんですか」

「まさか。勝手にやりゃあ良いよ。俺に関係のないところでな」

缶コーヒーを二つ持ち、一は片方をナコトに渡した。

「あたしは紅茶の方が好きなんです」

「先に言え。じゃあ、新しいの買ってやるから」

「結構です。別に、これも飲めないって訳じゃないですから」

「そうか？」

「コーヒーはまだ好きじゃありませんけど、頑張って覚えます」

あっそ。一はコーヒーに口を付けて、煙草を取り出す。
「そんなものを良く吸えますね」
「健康に悪いとか言うんだろ」
「あなたの健康なんて幾らでも害されてしまえば良いんですが、副流煙を知っていますか？　あなたのくだらない嗜好の為に周囲の人たちの健康を害するのはどうかと思います。土下座しながら吸ってくださいよ。涙を流しながら吸ってくださいよ」
「泣きながら煙草吸ってたら、煙たがってるだけだと思われそうだなあ」
「減らず口を」
お前がそれを言うか。一は火を点けて、煙を吸い込む。吐き出す。
「良いんだよ。俺の僅かな楽しみのせいで、俺以外の誰かの寿命が短くなっても」
「あのう、あたしが見えていませんか？」
「ようく見えてるよ。今、俺の目にはお前しか映ってない」
ナコトは舌打ちして、缶コーヒーのプルタブを押し開けた。
「それっぽい台詞の筈なのに、全然嬉しくないですね」
「あのさ」
「何ですか」
「俺も素直じゃないんだよ」
「……『も』って。それじゃあ、あたしも素直じゃないように聞こえますけど」
違うのか。一が聞けば、ナコトは違いますと返した。
「ありがとうな、助けてくれて」
「最初からそう言っていれば良いんですよ。ねえ、これで少しは借りを返せましたか？」
「お釣りが来るよ。だからさ、黄衣。お前も、別に俺に対して気ぃとか遣わなくて良いんだぞ」
「そうですか？」
一は頷いて返す。

「これでも、あたしはあなたに対しては素直なんですけどね」
「それでかよ」
「これでですよ。ああ、お腹が空きましたね」
じいっと、ナコトは一を見つめた。彼は笑って、携帯灰皿に吸殻を入れる。
「ファミレスで良いか？」
「ええ、構いません」

酩酊カサノバスネイク

食べる事は生きる事だ。生きる為に、人は何かを口にする。
食事を取るタイミング、回数、種類、調理法、あるいは作法。食事には文化や宗教が反映される。また、ただ栄養を摂るだけではなく、料理の味を楽しむ為など、様々な目的や意味が込められている。
中には、食べる為に生きる者もいる。
「端から端まで」
「……はい？」
「聞こえなかったか。ここのメニューに書かれたもの全てと言ったのだ」
この男こそ、正にそうなのだろう。
ピークタイムの過ぎたファミリーレストラン。そこのアルバイト店員は、ふと、そんな事を思った。
「い、良いんですか」
「良い」
店員の男は、目の前に座る男性客を観察する。日本語は堪能そうだが、純粋な日本人には見えない。中東系だろうと、店員はあたりをつけた。
メニューを端から端まで全て持ってこい、そんな冗談じみた事を口にしたのは痩せっぽちの、壮年の男である。彼は白髪の混じった短い髪の毛を弄りながら、メニューに目を通していた。背は百七十センチを少し越えた辺りにしか見えない。顎は尖り、頬のこけた神経質そうな顔立ち。男の服装に特徴は見られない。茶色の長袖のシャツと、長ズボンを着用していた。
「どうした」
「あ、いえ」

何よりも尊大さが目立った。男はまるで、王様のように振舞うのだ。そして、似合っている。と言うよりも自然だった。そうあるのが当たり前のようでもある。

「早くしろ。我輩は腹が空いている」

聞き慣れない一人称だったが、馬鹿にしようとは思えなかった。蛇のように、じっとりと絡み付く視線を背に感じながら、店員はキッチンにいる人たちにどう説明したらいいものかと、思案するのだった。

ファミリーレストランに着いた一とナコトだったが、店内は慌しかった。料理を持った店員が、ひっきりなしに行ったり来たりを続けている。

「妙な時間に忙しそうですね」

「ここは止めとくか」

入店したと言うのに、誰も応対へ来そうになかった。一は壁に背を預けて、店内を眺める。

「あれ？　客、そんな入ってないよな」

「ええ。ですが」

空席が目立つ店内だが、忙しそうにしている理由は分かった。ナコトの指差す先には、一つのテーブルがあり、一人の男がおり、数多の料理が並べられていたのである。一人で食べるには多過ぎる……否、不可能と思える数だった。

「あの人の注文に追われているようですね」

ナコトはつまらなさそうに言って、溜め息を吐き出す。

「嫌がらせか？」

だが、見える皿は全て空になっていた。綺麗さっぱり平らげられている。

一人の、痩せぎすの男の食事に、一の目は釘付けになっていた。

彼はがむしゃらに食らいついている訳ではなく、むしろゆったりとしたペースで食事を進めている。気品のようなものを感じられて、一は不思議そうに首を傾げた。
「アレか、フードファイターって奴か」
「誰と戦っているんですか？」
「自分と？」
「宇宙のような胃袋を持っているのは結構ですが、他のお客の事も考えてもらいたいですね。まあ、食べ方が綺麗なのが唯一の救いですか」
シーフードドリアを食べ切った中東系の男は、コーラを一気飲みして、次の料理に取り掛かる。見ている方が満腹になりそうな食べっぷりに、一は頭を振った。
「……なあ、ハンバーガーで良いか？」
「いえ、やっぱり今日は止めておきましょう。先輩の淹れてくれるお茶が飲みたい気分です」
ナコトが店を出て、一もその後に続こうとする。が、不意に何者かの視線を感じた。咄嗟に振り向くが、こちらを見ている者は誰もいない。釈然としなかったが、彼も外に出た。

そこそこに美味い。
男は多種多様な料理を腹に収めながら、そう思った。この世には、まだ知らないモノが多い。未知が自分を呼んでいる。呼ばれなくても出向いて食ってやろうと決意する。やはり、正解だった。この街に来たのは正しかったのだ。
――――何と、美味そうな。
まだ知らない。まだ足りない。まだ飽き足らず食い足りない。求めるモノは他にある。求めたモノはここにある。嗅いだ事のある美酒美肴。鼻を頼りに足を運んだ甲斐があった。次の獲物はそこにある。

「あ、あの」
話し掛けられて、痩身の男は顔を上げる。心配そうな、呆れたような、そんな表情を浮かべた店員が伝票を差し出そうとしていた。
「すごいっスね。その、ええと」
「……ああ」
男は思い出し、気付く。店員とやらは、自分の体を気遣っているのではなく、金の事を気にしているのだと。
「金か。問題ない」
「あ、ああ、そうですか、そ、それじゃあ、ごゆっくり」
自分を誰だと思っているのか。食事中でなければ、頭から被りついているところだった。男は気を取り直して、冷めかけのスパゲティに狙いを定めた。
こんなものは、前菜に過ぎない。メインディッシュを追いかけたい。早く捕まえて、一口で。

ナコトと別れた一はスーパーマーケットに向かっていた。ファミリーレストランにいた男の食べっぷりを見ている内、自宅の冷蔵庫が空に近い状況だったのを思い出したのである。
ぼうっとしながら鮮魚コーナーの近くを歩いていると、前の方から若い女が来るのが見えた。スキニーデニムにブーツ。毛皮のコートを羽織った女である。一は思わず顔をしかめた。
食い入るようにして鮭の切り身を見つめている女から距離を取ろうとした時、あっ、と、一は呼び止められた。
「えー、何、あんたも買い物？」
大きなサングラスをした女は、南駒台店の勤務外、戦乙女のシルトである。彼女は親しげに一に話しかけるが、彼は心を閉ざしている風にも見えた。
「あのさー、魚って全部同じに見えるんだよね。これとか。サバってサンマと何が違うの？　どっちも、こう、何かさ、青いじゃん」

「馬鹿過ぎて答える気にならねえ」
「いや、バカじゃないから。つーかさ、普通挨拶くらいしない？」
「しない。俺はでかいサングラスを掛けた女には心を閉ざす事で対応している」
シルトの顔が一瞬、歪む。が、彼女はサングラスを取り、これでどうだと言わんばかりに一へと顔を向けた。
「あんまし調子乗んな、北駒台」
「お前さ、料理とか出来るの？」
「最近覚えた」
「へえ。米を洗剤で研いだりするのか」
「はああ？　つーか、米とか食べないし。って言うか、そんな奴いないっつーの」
いや、いる。一は口を開きかけたが、何か嫌な予感がして言葉を飲み下した。
「ヒルデさんに美味しいもの食べさせてあげたいんだよねー」
「あー、今、一緒に住んでるんだっけか」羨ましい。一はシルトを睨みつける。
「何見てんの？　目ぇ怖いんだけど」
別に。一は呟き、パックの鱈を手に取った。
「ヒルデさんってば、何を食べても美味しいって言ってくれるから作り甲斐があるし」
「何が作れるんだ？」
「めんどい時はカップ麺とか」
「殺すぞ」
「えっ」
シルトは弾かれたようにして一を見るが、彼に別段、変わった様子は見られなかった。
「今さ、何か言った？」
「ヒルデさんがさ、バカ女の作ったクソまずいインスタントのラーメンを前にして、笑顔を作っている様子が想像出来た。って言うか

お前、やっぱ料理出来ねえんじゃん」
「殺すとか言わなかった？　言ったよね？　絶対言ったよね？」
一は目だけで全てを訴える。理解させる。シルトは短い悲鳴を上げ、彼から一歩距離を取る。
「なんでキレてんの？　意味分かんないんだけど」
「俺がお前なら不甲斐なさで自殺してるところだぞ。もう良い。俺がヒルデさんにご飯を作る」
「は？　はあ？　いや無理。絶対ウチに入れないから」
「じゃあ呼ぶ。ヒルデさんに来てもらう」
「フザケンナ！」
大きな声を出したので、シルトは他の買い物客からの視線を浴びる。彼女は一をねめつけ、口を開いた。
「私の邪魔したら、いくらあんたでも容赦しないから」
「だったら料理覚えろよ。死ぬ気で。あ、死んでも良いぞ」
「ヒルデさん取る気でしょ、あんた。させないっつーの。私が目を白黒させてる内は、ヒルデさんには指一本触れさせないからっ」
「一人で勝手に苦しんでろ」
ここに来たのは間違いだったのかもしれない。シルトシュパルテリン。盾を割り裂く者。神代に揮った盾を持ち、己の役割を理解する一にとって、彼女は天敵とも言えた。……そう言えば聞こえは良いが、要は相性が悪いだけ、でもある。
「あーもうなんだよナンダヨー。こっちは、少しは友好的に接してやろうとしてるってのにさー」
拗ねたようにシルトが言う。
「別に、俺はお前と友達になれなくても良い」
「段階すっ飛ばして彼女にしたいって事？」
「階段からすっ飛ばしてえ。お前さ、マジで頭の中どうなってんだ？　プリンとか詰まってんの？」
「何それ、だったら超便利じゃん！」
プリンだった。

「俺が悪かったから、しっかり勉強してくれよ。ヒルデさんの具合が悪くなったらどうにかしてお前をボコるからな」
「あのさ、私、女なんだけど？」
「だから何だよ。俺は婦女子相手でも本気でぶん殴れる男だぞ」
クズ発言だった。
「……どうしてこんなんに助けられたんだろ」
「あ？」
「こっち見んな短小」
「俺のを見た事あんのかよ！？　てめえ見もしないくせに適当抜かしやがって！　ここで脱ぐぞ」
「ぎゃーっセクハラだ、やめてよマジでこっち来ないでよ！」
一はシルトのうろたえぶりを鼻で笑い、ジーンズのベルトを意味もなく見せつけた。
「そこまで言うんならさ、教えてよ」
「え」一は自身の下半身に目を遣る。
「そっちじゃないから。料理だから、料理。ホント気持ち悪い。あんたみたいな奴をヒルデさんに近付けたくない」
「ああ、そっちね」
とは言え、一も大したものは作れないのだ。一人暮らし（この時、一は糸原の事は除外していた）の男の料理など、高が知れている。彼はそう思っていた。
「焼き飯くらいなら」
「もっと違うのにしてよ。何その男臭い響き」
「だったら何が良いんだよ。……いや待てよ。そうか、ヒルデさんに似合っているものを教えれば良いのか」
「は？」
必死で思考を巡らせるが、一のレパートリーの中にヒルデと合致するものは見つからない。こんな事なら、糸原がもっと可憐であれば練習台になって良かったのにと、彼は心中で赤い色の涙を流した。
「グラタンで許してくださいヒルデさん！」

「私！　私だから！　謝る相手が違わなくない！？」
「俺が三ツ星レストランのシェフだったら、ヒルデさんにこんな惨めな思いをさせないのに……」
「今、私をバカにしてるんだよね？」
「うん、してる。まあアレだよ、ムニエルみたいな響きの料理を練習したまえ」
　ムニエルの意味は分からなかったので、一は曖昧な表情を浮かべた。
「焼くのが一番楽なんだけどなー」
「どうして俺の周りにはがさつな女しかいないんだ」
　がさつ筆頭の同居人を思い出し、一の気分は滅入ってくる。
「とりあえず、今度家に呼べよ。ヒルデさんのプライベートなところ見たいから」
「あんたさ、ヒルデさんに幻想抱き過ぎじゃない？　あの人だってさ、寝ぼけて壁に頭ぶつけたり、トイレにも行くんだよ？」
「いかねえよ！　頭涌いてんじゃねえのお前」
「気持ち悪い」
「で、呼ぶのか、呼ばないのか？」
「いや、だから呼ぶワケないじゃん。まあ、私があんたんところに行くのは良いけどね」
　一は心底から嫌そうな顔になる。
「だっ、だから、私が料理覚えれば良いんでしょ？　あんたが教えれば良いんじゃない。でも、私の家には入れたくない。だから、私が、あんたの家に行く。あっ、すごい完璧じゃん」
「そうだな。完璧だな。ただ、俺がお前を家に入れたくないという事を考えなければの話だけど」
「今から行って良い？」
「話聞いてんのかお前。あっこら、俺のかごに入れんじゃねえよ」

結局、昼過ぎまで眠っていたらしい。鈍い痛みのする頭を振り、アイネはベッドから体を起こす。小さな冷蔵庫を開けて、ペットボトルのミネラルウォーターを取り出す。キャップを開けようとして、手が震えているのに気付いた。

疲れている訳ではない。むしろ、体は鈍っているくらいだった。中内荘に来てからは、フリーランス『貴族主義』としての活動は皆無に近い。軽いトレーニングこそすれど、ソレとの戦闘は経験していない。鈍っているのは体ではなく、心なのかもしれない。尖り続けていたそれは、今はもう見る影もない。

ここでの暮らしに文句はない。ある筈がない。ようやくにして掴んだ、温かなものがここにはある。それでも、と。考えてしまうのだ。この街の灯、その一つになりたい。だけど、復讐したいという気持ちが完全になくなった訳ではない。目の前に仇が現れれば、その感情は再燃し、暗い喜びに身は焦がれる筈だ。……その可能性は限りなくゼロに近かったが。

もう死んでしまった。

既に殺されてしまった。

とうの昔にこの世から、消えている。

憎悪をぶつける相手は現世には存在していないのだ。だから、アイネはほっとしたように胸を撫で下ろす。暗い部屋にこもっていては、暗い気持ちに囚われるのも当然だった。彼女は身支度を済ませて、買い物にでも行こうかと思い立つ。美味しいものを食べて、こんな気持ちは忘れよう。一を誘えば良い。チアキを誘うのも良い。誰かと囲む食卓は、あんなにも温かな、幸せなものだったのだから。

部屋を出ようとして、ドアノブに手を掛ける。瞬間、腕に痺れが走った。静電気ではない。これは、嫌なものだ。殺気だとか、そういったものに近い。外には何かがある。何かがいる。いてはならない何者かが。そして、恐らく、それは。

得物を掴み、アイネは一息にドアを開け、外に躍り出る。

「うん？」

アイネは、アパートの敷地内に入ろうとしていた一人の男と目が合った。中東系の、痩せぎすの男である。彼はアイネを見遣り、顎に手を遣った。

「肉付きは良くないが、スパイスが効いている。我輩の舌を満足させるには程遠いが」

「……あ、アッ……」

レイピアを取り落とす。瞳が動かない。視線が釘付けになる。足が動かない。地面に釘付けになる。

「そ、そッ、そんな……」

声が震える。体が震える。察した。きっと、この身だけは気付いていたのだろう。この男の存在を。

蘇るのは、血と、火だ。

網膜を焼き、胸を焦がし、今も燻り続けるモノがある。その中で、一際強く燃え上がるものがあった。

「どうして……」

アイネは胸を押さえる。

自身を襲った男たち。彼らは全て息絶えた。食い殺されたのだ。

一つの力に。一人の、男に。ソレと呼ばれるモノに、アイネは命を救われた。その男が目の前に立っている現実を信じられなくて、彼女はただ、己に問うた。答えが出ないのを分かっていて、そこにある答えから目を背けて。

男はアイネを見る。だが、その目には感慨というものが宿っていない。どう食えば美味いか。どこから食えば美味いか。それしか考えていなかった。情などない。そして、彼は何よりも――――。

「アイネー、なんや音聞こえたけど」

アイネと男の視線が、開いた扉に向かう。そこにいたのは、頭をかきながら現れた歌代チアキであった。彼女は見知らぬ外国人に訝しげな視線を送る。が、彼は値踏みするようなそれをチアキに返しただけである。

「ん、誰？」

チアキは状況を理解しようとした。男の正体は分からない。だが、アイネはショックを受けているようにも見える。レイピアを取り落として、体を震わせている。胸を潰さんばかりに押さえて、苦しそうに呼吸を繰り返していた。……良くないモノだ。

「……なんや、自分。アイネに何したんや」

「ほう、珍しい。話には聞いていたが」

「無視すんなや！　何やねん、お前！」

視線に絡め取られる。まるで蛇に睨まれた蛙の気分だ。ここにいては駄目だと、この男と話しては駄目だと、心では分かっているのに体が思うように動いてくれない。それに、アイネを放っておける筈がなかった。

「女、セイレーンの血を引いているな」

チアキには答える事が出来なかった。男は彼女の沈黙を肯定と受け取ったのだろう。満足そうに喉を鳴らして笑った。

「道理で芳しい。まだ若いが、我輩を満足させるかもしれぬな。……しかし、その声は？　しわがれた声では今ひとつ食欲が……」

「あんたには関係ないやろ」

「優れた食材には優れた管理が必要だ。そう思わぬか」

男が何を言っているのか、チアキには理解出来ない。先ほどから、彼女は殆ど状況を飲み込めていないのだ。

「ふうむ、他の住人は？　ここにはまだある筈だぞ」

いる、ではなく、あると表す。男は人を人と見ていない。そんな気がして、チアキの肌があわ立った。そして、思い至る。彼が襲い掛かってきた場合、どうしようもないのだと。確かに、自分はセイレーンの血を引いている。しかし戦闘能力は殆どない。戦えないのだ。いつもなら頼れる『貴族主義』も様子がおかしい。力を振るわれてしまえば、抗う術はない。

「まあ良い。我輩の為、存分に歌うが良い、娘」

「あッ、し、ししょ……」

「てめえ何してやがんだ」

「む？」

振り向いた男の顔面に、拳が叩き込まれた。

ただの男に『貴族主義』が怯える筈がない。何よりも、ただの男に『神社』が恐怖を抱く筈はない。だから判断する。そして頭で決めるよりも先に、体が動いている。中内荘に戻った山田栞は、気付いた時にはもう、拳を振るっていた。手ごたえはある。感触はある。だが、やけに重く、固かった。

「……名乗らずに仕掛けるたあ悪かったな」

「……何、面白い。しかし、我輩に手を上げるとは」

相手は、人ではない。山田は腹に力を込め、呑まれまいと強く、相手を見据える。

「『神社』の山田栞ってもんだ。どうだ、痛かったかよ？」

「いや、あいにくと」

「だろうな」

山田は苦笑し、右の拳に目を落とした。一発打った。それだけで既に痛んでいる。男の頑強さが、自身のそれより勝っているのだ。

「で、てめえはどこのどなた様だ？　オレの知り合いに手ぇ上げようとしたんだ。そんじょそこらのお大尽さまじゃねえんだろ」

「大臣？　面白い。我輩は王だぞ？」

「ああ？」

男は自らを王だと呼称する。彼が至極真面目に、当然のように言うので、山田は笑い飛ばす事が出来なかった。

「それよりも美味そうだな。……この香りは何だ？　ああ、そうか。酒か」

「なっ……！？」

「噂には聞いている。確か、八塩折の酒だったか。なるほど、島国には珍しいものが多い。我輩の舌を楽しませるくらいには豊かなそれなのだろうな」

どうして、その名を知っている。

どうして、自分がそうなのだと知っている。鼻が利く。それだけでは済まない。

山田は瞠目し、男を見据える。だが、彼女の目には先ほどまでの力がなかった。自分が八塩折の関係者だと気付かれてしまったからではない。男の歯牙が、もうそこまで迫っている事に気付いたからだ。

どうして？　大した理由はないのだろう。男にとっては、山田が美味そうか否か、それだけの話なのだ。それだけの理由で、彼は彼女を殺せる。

「だが、我輩を酔わせられるかな。くくっ、かと言って、首を刎ねたところで死なない身ではあるが」

舌の上で転がされているような、そんな、おぞましい感覚。男の中では、自分たちは既に胃の腑に収められているのだろうか。想像を頭の隅に押し遣り、山田はアイネに視線を向ける。

アイネ＝クライネ＝ナハトムジークからは、動こうとする意志が一切感じられなかった。咎めようとは思わない。少しでも気を抜けば、自分だってああなっていたかもしれないのだから。山田は『貴族主義』には期待出来ないと判断し、この場を切り抜ける方法を模索する。ここにはチアキもいる。一人で脱するには容易いが、その場合、動かないアイネと動けないチアキ、二人を犠牲にするのが前提となる。それは、嫌だった。

「ハナっから考えるこたあねえよな」

この男が何者なのか知らない。ただ、自分よりも格上、どころか、高次の存在にさえ思える。対峙しただけでこの有様だ。次の瞬間、命を失っていてもおかしくない。しかし、一対一だ。要するに、こ

れは喧嘩なのだ。逃げるのが難しいなら戦えば良い。戦って、勝てば済む話だ。山田は口の端をつり上げ、拳を固める。決意を固める。
「てめえが誰だか興味はねえよ。やるか、やられるかだ。合ってるよな？」
「くだらぬな」
「お前ら下がってろ！」
男が動こうとする。山田は彼の正面に立ち、腰を少しだけ落とした。
「あまり動いてくれるな。零れるのは惜しい」
「そっちこそ動くんじゃねえぞ。オレはちっとばかし乱暴だからな、狙いが逸れると良くねえ」
「ッ！　ほう！？」
「からなあああああ！」
地を蹴った山田が男に迫る。彼女は右の拳を振り下ろす。男は受け止めようとしたが、得体の知れぬ悪寒に従い、攻撃を避けた。山田は構わず、戻した拳を振り上げる。無理な体勢の掌底だが、空気が割れる。一瞬間、風が起き、男の髪を揺らす。
「どうしたあっ、手ぇ出さねえのかよっ」
巫女が舞う。男は僅かに目を見開き、山田から距離を取った。
「だっ、あ、ちょ！　やま――――栞さん、やばいって！」
「何がだよ！」
チアキは山田を心配するが、『神社』である彼女の意気は上がっている。動く前に物を考えたからいけなかったのだ。山田は、動けば動くほど調子が良くなるのを感じている。
「そう暴れるな美酒よ。思わず手が出そうになったぞ」
「ああっ！？　出せよ！　ふざけた事抜かしてんじゃねえぞ！」
男は困ったように髪の毛をかき、眉根を寄せた。
「分かっておらん。我輩は踊り食いにしたいのだ。であるから、動くな」
「オレを誰だと思ってやがんだ！　動くに決まってんだろっ、てめ

えが動くな！」
「そうか」
恐怖を塗り潰す。上塗りするのは汲めども尽きぬ戦意だ。山田は男を追撃するべく、身を低くして前へ踏み出す。
「では、そうするか」
「うっ、おおおおおお！？」
山田は足を止めようとしたが、勢い込んだ体は急に止まれない。尻餅をつく形で無理矢理に倒れて、すぐさま元の位置に後退する。彼女の様子を見て、男は不思議そうな顔をした。
「動いて欲しくなかったのだろう？　では、来ると良い。我輩はそろそろ腹が空いてきていてな。空きっ腹ゆえ、酔いが回るが早いが、何、そこまでの美酒よ。どちらにせよ酩酊するに変わりない」
これは相手が悪過ぎるのではないか。今更ながら、山田は男の力量をはかろうとする。見誤れば命はない。
――――いや、違うか。
そも、山田は男に相手にされていない。力量差は考えるだけ無駄に近い。何せ、人として、敵として見られていないのだ。男は彼女を、餌として捉えている。彼の傲慢だとして、その驕りを通せるだけのモノが備わっているのだ。それはもはや、純然たる事実である。
だが、山田は一つのイメージに辿り着いた。他の者では思いつく事すら難しい、彼女だからこその想像である。
「……てめえ、蛇だな？」
「ほう？」
「臭いがしやがるぜ。気味悪い視線といい、間違いねえな」
「分かったところで、どうするのだ？」
山田は笑う。どうしようもないのだ。戦うしかない。しかし、出来る事なら近づきたくない。勝算がない状況で、男に寄るのは自殺行為に等しかった。

撒く事は叶わなかった。

一は上機嫌なシルトを連れ、中内荘に向かっていた。彼の足取りは酷く思い。何せ、天敵も同然である女を家に上げないといけないのだ。

「ねえねえ、何食べさせてくれんの？」

「……料理、教わりに行くんだろうが。ああ？」

「あんたさ、私ん時は強く出るよね。何？　好きなん？　私の事気になってんの？　つり合わないからやめといた方が良いと思うけどなー」

ああ、何から何まで腹が立つ。一は苛立ちで人を殺せるならと。殺せるならと！　強く思った。

「料理なら教えてやっから、したらすぐに帰れよ」

「あー、まあ」

「何だよ、その煮え切らない返事は」

「……あんたさ」

シルトは気恥ずかしそうに視線を逸らす。

「私で手、打たない？」

「はあ？」

「だからさ、あんたってヒルデさんが好きなんでしょ」

ここで頷かない道理はない。恥ずかしがる必要もない。一は即座に首肯する。

「可能なら結婚を前提に……」

「む・り！　ヒルデさんを、あんたみたいな奴に渡さないから。だからさ、私で我慢しない？」

「お前が何を言っているのか分からん」

「ヒルデさんは諦めて、私に乗り換えろってんの。……あ、まだ乗ってないんだっけ。一生乗れなさそうだけど」
一は舌打ちした。
「やっぱり分からん。お前、正気じゃないぜ。ヒルデさんの身代わりになるってのか？」
「えー、あー、まあ、そんな感じ？」
「ふざけんな、俺は悪役か。生贄要求してんじゃねえんだぞ。大体だな、そういうのは無理なんだよ」
「はあ？　そういうのって、どういうの？」
どうしてここまで頭の回りが鈍いのだと、一は溜め息を吐く。
「そういうのだよ。特に、ヒルデさんは、こう、無理だ。近づくのも恐れ多いっつーか」
「家に来たいって言ったじゃん」
「近づけないけど少しくらいは近づきたいっていう男心だよ！」
シルトは耳を塞いで一を見遣った。少しばかり、彼を馬鹿にしているような目つきである。
「そんじゃ、まあ、心配する事はないか」
「何を心配すんだよ」
「ヒルデさん、取られたくないから。なんかさ、他の奴には無理だと思うけど、あんたなら、ヒルデさんも良いんじゃないかって思ったんだ。だったら、先に違う子に目ぇいってた方が」
「……お前ってさ、そっちのケ、ないよな？」
「毛、毛って……！　あっ、あんた！　言えるワケないじゃん！？」
そりゃそうだ。一は腕を組み、小さく頷く。
「第一、こういうのはヒルデさんの気持ちが大事だろ。外野が勝手に動いても、あの人が迷惑するだけだ」
「じゃあ、ヒルデさんが他の誰かと付き合うのは良いんだ？」
「いいわけねえだろおおおおおお！？」
「顔っ近づけんなバカ！」
想像しただけで死にたくなったので、一は思わず叫んでしまった。

「メンタル弱過ぎ」
「否定は出来ん。……それに、身代わりとかそういうのはな、やめた方が良いと思うぞ」
「なんで？」
「いや何でって、だってお前、好きでもない奴と付き合ってもしようがないじゃんか。自分を犠牲にし過ぎんのもつまらん話だしな」
「へえー」シルトは一の肩を気安く叩き、意地悪そうな笑みを浮かべる。
「あんたさ、私の事気にしてんじゃん、やっぱ。へー、そっかそっか。でもさ、私だって相手選ぶよ？　ま、まあ？　あんただから別に良いかなーっていうのもあるんだし」
「へー」
一は煙草に火を点けた。
「……嬉しがれよ。どうしてこう、普通よ？」
「だって俺お前嫌いだし。天敵としてもナンバーツー、いや、スリーかフォーくらいだな」
「せめてワンにしてよ！」
一の天敵ナンバーワンこと、黄衣ナコトの地位は不動である。彼の精神を脅かすには、シルトには語彙力が足りなかった。
「あ、馬鹿話もここまでな」
「ちょ、話はまだ」
「ほら、あそこが俺んち。あ、そういや知ってたか」
「うん。で、なんでよ？　もっと話そうよー」
「だからさ、アパートには俺の知り合いがいるじゃん？　お前来るじゃん？　で、俺とお前が喋ってたらなんか勘違いされちゃうじゃん？　だから黙れ。これから先、家に入るまで一切の音を立てるな」
シルトは無言で一の頭を殴った。
「ってえなバカ！」
そして、彼女は一に持たせていたバッグから自身の得物を取り出す。伸縮式の、小型の槍である。

「え？　あ、あの、そこまでする必要はないですよね？」
「おい」
「すっ、すいませんでした！　何でもしますから命だけはっ」
「違うって。何かやばそうなのがいるんだけど」
既にいる。目の前に。だが一は余計な口を利かないで、中内荘に目を向けた。
「……ああ、言ってなかったか。あそこにはフリーランスが二人と、弟子が一人と、ギャンブル好きのおっさんが一人いてな」
「そういうんじゃないって。マジで気付かないの？　あそこ、ソレがいる……っておい！？」
判断するのが早かった。中内荘にはチアキがいる。ソレが出たというのなら、山田とアイネならともかく、チアキ一人でどうにかなる問題ではない。
一はスーパーの袋を持ったまま駆け出し、角を曲がる。中内荘の敷地内には、見知らぬ男が立っていた。彼と対峙するのは山田である。まず、一はそこで安堵の息を吐いた。次いで、最悪の事態を理解する。やはり、ソレだ。敵だ。何かが、ここに立っている。
「し、師匠……！」
「無事か！？」
こくこくと頷くが、今にも泣き出しそうなチアキ。そして、呆然と立ち尽くすアイネ。
――――何が起こった？　それとも、これからなのか。
「ほう、またも珍味が。いや、これは極上の……？」
男に見られるも、一は動じなかった。彼は自分の役割を理解している。
「は、はは、よう、一。助かったぜ」
山田の言葉に偽りはない。彼女が追い詰められるほどのモノが相手になるらしい。
「……説明は後ですね」
「おう。ま、オレが帰ってきた時もこんなんだ。話せるほどのもん

はねえよ」
「歌代、傘投げろ」
「りょ、了解」
チアキが、自分の部屋の玄関先に立て掛けておいたビニール傘を一に向かって放り投げる。彼は目の前に落ちたそれを拾い上げ、男を睨んだ。
「なんですか、あんたは」
男は答えず、一の全身を嘗め回すようにして見ている。
「……あんた」
気付いた。この男は、ファミリーレストランの珍客である。信じられない量の料理を平らげていた、異常な男だった筈だ。そいつが、何故、ここにいる？　一は息を吐く。どうやら、相手は答えてくれそうにない。
「ここに何の用だ？」
「用？　腹が減れば満たすが道理。であるなら、より美味いものを食いたいと思うは摂理。ここには我輩の求めるものが揃っていた。それだけよ」
つまり、自分たちは男の食事だと、そう見られているらしい。全くもって不愉快で、恐ろしさよりも憎さが勝る。
「混ざり物とはいえ、セイレーン。八塩折の酒。……そして、メインディッシュも現れた。ここで食ってやらん方が、食材に失礼だと、そうは思わぬか？」
気付かれていた。男の正体は分からないが、駒台に住むフリーランスや、それに近しいモノの情報を掴んでいる。
「なあ、アイギスの所持者よ」
「……誰の事だ？」
「誤魔化そうとしても臭いは消えん。いや、やはり面白い街だな。我輩の食欲を満たす為にあるような……」
バレているなら力を惜しむ必要はない。否、出し惜しみすれば殺される。麻痺しかかっている神経が危険を訴えていた。この男は、

今までのソレとは違い、あるモノたちと一致している。目的のモノ以外には興味がなく、それ以外を踏み潰す。そして、踏み潰した事にすら気付かない。一は言葉ではなく感覚で理解する。

「『円卓』かよ」

「知っているなら話が早い。円卓の晩餐となるなら光栄だろう？」

「へえ？　あんた、名前は？」

アイギスを発動させる為、一は探りを入れた。が、男は小さく笑い、手を振る。

「答えられんよ。いや、名乗ってやりたいのは山々で、第一、アイギスとやらが発動したところで我輩には通じないとも思っているが。まあ、たまには他人のアドバイスを聞いておくのも良かろう」

既にアイギスについても割れている？　情報を流したのは誰だ？　いつ、いつから見られていた？　一一という人物は、どこまで知られている？

「誰から聞いた？」

「聞いても仕方あるまい。が、これだけは答えよう。我輩は円卓の九席に座るものだ」

名前が分からないならメドゥーサは使えない。アイギスは正真正銘の盾にしかなり得ない。だが、今はそれで充分だ。一の隣には、蛇姫に引けを取らない拳がある。

「……栞さん」

「何だ？」

「どう思いますか？」

山田は名乗ろうとしない男から目を逸らさないで、一に答える。

「帰りてえな」

「家はここですけど」

「はっ、そういやそうだった。……真っ向からやり合える相手じゃねえし、向こうもそういうのは望んでねえだろうな。オレらを食うとか言ってんだ、生け捕りにする気満々だぜ。殺す気なら、とっくにオレらぁ殺されてる」

「だったらどうします？」
拳を突き出す。腰を落とす。獰猛な笑みを浮かべる。
「オレに出来る事は一個だよ」
「……お互い、一つずつでいきましょうか」
「おうよッ」
「来るか」

山田が一足飛びで男の懐に入る。彼は片手を突き出し、彼女の攻撃を受け止めた。瞬間、山田の背筋に悪寒が走る。ここにいてはならないと、全身が、全細胞が警告している。
「まずは美酒から」
「うっ、うあ、こっ、この野郎が！」
男が、空いた手を山田に向けた。それと同時、横合いから一が飛び出す。盾を前に、体当たりする形で男にぶつかっていく。が、びくともしない。
「その傘がアイギスか？」
「どうして動かねえんだ！？」
「なるほど、実に美味そうだ」
一が男に近寄った隙に山田が逃れる。
鳥肌が立つ。男が料理を喰らう。平らげていく。イメージが頭を侵し、一は恐怖に塗り潰される。
――――喰われる。
一の喉から叫び声が迸る。男の腕がアイギスに伸びる。が、彼はそれだけは阻止した。無理矢理に盾を引き戻し、男から距離を取る。メドゥーサでは敵わないかもしれない。虎の子が破られれば戦う術を失ってしまう。だが、このままでは食われてしまう。
「畜生がっ、おいコラ『貴族』！　てめえ何突っ立ってやがんだよ！　このままじゃ皆やられちまう！」
山田がアイネに呼びかけるが、彼女はぴくりともしなかった。う

な垂れ、蹲っている。
「目ぇ覚ませってんだよ！」
「生け簀の魚が跳ねても無駄よ。食われる定めは変わらん。大人しくしていろ、これ以上暴れられても、楽しいとは思えんからな」
「誰が魚だっ」
口は動く。口だけはまだ回る。一は頭を働かせるも、今の材料でこの状況を逃れる手段が思いつかない。
「しんどそうじゃねえか、坊主」
今の、材料では。

久方ぶりの駒台である。中内荘に戻った北は、帰ってきて早々、厄介事に巻き込まれたのだと理解した。
中内荘には、変わった者が住んでいる。勤務外店員であり、自分に代わってアイギスに、アテナに選ばれた一。セイレーンの血を引いた歌代。フリーランス『神社』の山田と、『貴族主義』のアイネ。とんでもない連中が集まったものだと、北は常から思っていた。
「お前らが弄ばれてるってのは、すげえな」
一、山田、アイネを物ともしないこの男は、何だ？　北は神経質そうな男を見据え、めんどくさそうに息を吐き出す。
「それで、あんたは誰だ？　お客様か？」
「……ほう、素晴らしいな。貴様、人ではない。何だ？　嗅いだ事のない匂いだ」
一目で見抜かれる。信じられないのと同時、今更か、遅過ぎる、とも思った。
「なるほどな、あんたこっち側かい」
「北さん、近づいちゃあやばい！」
「みたいだな」
一に返すと、北は自分が空手である事に気付く。もし、一に何かあれば、彼が道具を勝手に使ってくれるだろうと思い、ハルペーな

どを置いてきていたのだ。
「で、なんだ。あんた、やるのかい？」
男は見るからに異質だった。人間の皮を被っている。そんな印象が拭えない。彼は今にも、そこから抜け出そうとしている。内には恐ろしいモノを飼っている。あるいは、男が飼われているか、だ。
「化け物か。が、ちっと分が悪いと思うぜ？　今退くんなら、俺ぁ見逃してやっても良い」
「我輩を、見逃す？」
「言い方が気に入らなかったか？」
男もまた、北を観察する。彼は顎に手を当て、くつくつと喉の奥で笑った。
「いや、構わぬ。時間を掛け過ぎたか。食うに逸した。次の機会で貴様から喰らおう、英雄」
「あんがとよ」
一たちを見回し、男は歩く。彼は北の横をすり抜け、ついにその姿は見えなくなった。瞬間、北以外の全員から力が抜ける。緊張から解き放たれるも、安堵の息すら吐くに吐けなかった。
「あー、お前ら、平気か？」
「これが平気に見えますか？」
「命はあんだろ。だったら充分だ」
誰も怪我をしていない。切り抜けられたのは僥倖だろう。男の気まぐれで、自分たちは助かったのだ。だが、一人だけ様子がおかしい者がいる。
「……そっちの嬢ちゃん、どうかしたのか？」
問われて、一もアイネに目を向けた。しかし、彼は事情を知らない。済まなさそうに首を振るだけだった。
「歌代の嬢ちゃんよ、部屋に連れてってやんな」
「わ、分かった。その、おっちゃん、ありがとうな？」
「良いって事よ。つーか、何もしてねえしな。ああ、そこの酒飲み嬢ちゃんも休んでな」

「いや、オレなら……」
立ち上がろうとする山田だが、彼女の膝は震えたままである。
「恥ずかしがる必要はねえよ。ありゃあ、そんじょそこらのソレじゃあなさそうだ」
「……悪いな。一、情けなくって、ごめんな」
「俺も、似たようなもんですから。今は、その、休んどきましょう」
頷き、山田も部屋に戻った。一は彼女が扉を閉めたのを確認し、煙草に火を点ける。
「北さん、お帰りなさい」
「おう。で、何があったよ？」
「分からないんです。ただ、あいつがやばいってのは分かります」
「だな」

脅威は去ったが、鼻先に、常にある。あの男が気まぐれを起こせば、次はどうなるか分からない。そして、確実に次はあるのだ。
「そういや、頭の悪そうな女を見ませんでしたか？」
「その辺にうじゃうじゃと。けどな、女ってなあ頭が良いよか悪い方が可愛げがあって……」
一は頭を振る。まさか、シルトがやられた？　そう言えば、彼女は先刻から姿を見せていない。自分の後を追いかけてきていたと思っていたが。
「連れがいたんですよ。さっきのに、やられてなきゃ良いけど」
「その女ってのは、一般人なのか？」
「いえ、南の……ええと、とにかく勤務外ですね。簡単には死なないと思いますけど、相手が相手ですから」
「心配しても仕方ねえだろ。後で探しに行きな。それよりも、だな、まずはてめえの心配しなきゃ始まらねえ」
素直に頷き、一は胸いっぱいに紫煙を吸い込む。
「アイギスは使えなかったのか？」

「名前が分かりませんし、いや、そもそもあいつは『名乗らない』と言ってましたね」
「どういうこった、そりゃ。奴さん、アイギスについて知ってるのかよ」
「みたいですね。……前にゴルゴンが出たじゃないですか。アレと同じで、あの男も円卓のメンバーだと言ってました」
北は円卓について明るくないが、それでも、とんでもない能力を持った者の集まりだとは認識している。
「円卓……仲間から坊主の力について聞いてた訳だな。が、解せねえぜ。坊主が『アイギスを持ってる』って事は誰にでも分かる。けどよ、『アイギスの発動条件』まで知ってる奴はそういねえ」
「調べれば分かりますよ。実際、ウチの店長や『図書館』ってフリーランスは殆ど気付いてます」
「厄介だな。他には？　何かねえのか、さっきの野郎について」
「堅かった。重かった。何より、死ぬほど怖かったですよ。……実は、さっきの男を見るのは二度目なんです」
短くなった煙草を地面に落とし、一はゆっくりと息を吐き出していく。
「一度目は数時間前に駒台のファミレスで。あいつ、めちゃくちゃ食ってました」
「人をか？」
「違います。料理、ですよ。あれは、何人前とか、そういう次元を超えてました」
初見でなくて良かったと、一は思った。男の、ファミリーレストランでの行為を見ていたからこそ、食われてしまうとイメージ出来て、アイギスを引き抜けたのである。
「俺に分かるのはこれくらいです。北さんは、さっきのを知ってましたか？」
「いいや、初めて見た。けど、怪物だってのは分かる。それも蛇の怪物に間違いねえ」

「……蛇？　どうして分かるんですか？」
「雰囲気」
「んな馬鹿な」
適当に言っているように見えて、北はその実、適当に言っている。が、彼の言葉ならほぼ間違いではないだろうと一は思っている。
「だからと言って、どうしようもねえがな。メドゥーサが使えねえなら力ずくでいくしかねえだろう。坊主は盾に回って、俺と酒飲みの嬢ちゃんでやるしかねえな」
「手伝ってくれるんですか？」
「見ちまったもんは仕方ねえ。第一、ここは俺のねぐらだぜ。あんなのがまた来るなんて分かってりゃ、おちおち昼寝もしてられねえ」
昼寝、か。一は二本目の煙草に火を点ける。
「心強いです」
「おだてても何も出ねえぜ。……名前さえ分かればどうにかなりそうなんだがな。これぱっかりは仕方ねえか。相手のポロリに期待するとしようか」おっさん臭いが、実際おっさんなので、一は何も言わなかった。
「それより、今までどこに行ってたんですか？　……ゴルフバッグに、ステンノとエウリュアレを詰め込んで」
「ま、坊主にゃ隠す事なかったか。俺はな、ちっとばかし女神様に挨拶しに行ってたのよ」
白い梟が脳裏を過ぎり、一は一瞬、嫌そうな顔を浮かべた。
「会えたんですか？」
「まあな。そんで、引き渡してきた。石になっても始末がめんどくせえったらねえぜ」
「引き渡すって、その石はどうなったんですか」
「さあな。ま、俺よりか上手くやってくれたと思うけどよ。下手に砕くのも怖かったしな」
北にも怖いものがあったのかと、一は少しだけ驚く。

「他に何か言ってなかったんですか。その、アイギスの使い方とか」
「いんや。何も。ま、言いたい事があんならあっちから顔を出すだろうよ。で、だ。とりあえずな、俺も少しは休みたい。坊主は、貴族の嬢ちゃんでも看てやんな」
「って、何も決まってない気がするんですけど？」
「決まるような事はねえよ。名前割り出すにゃ時間が掛かる。それまで向こうが待ってくれるとも思えねえ。なら、ここのメンバーでどうにかするっきゃねえんだが」
アイネの部屋を見て、北は頭をかいた。
「どうにかなるかねえ」
「あいつ、何かされたんじゃあ？」
「や、そうは見えなかったが。……あの蛇みてえな男、貴族の嬢ちゃんには興味がなさそうだったし」
「ああ、確かに」
幸運なのかどうかは、まだ分からない。ただ、一は、アイネは男の意識からは外れていたように思う。アイギス、セイレーン、八塩折には食欲をそそられたらしいが、彼女の事は一言も口にしなかった。口にするつもりは、あるかもしれないが。
「めちゃくちゃやばい相手ですよ、さっきのは。だけど、それだけでアイネが取り乱すっつーか、ビビって棒立ちだったってのは、その、思えません。俺は、フリーランスとしての『貴族主義』はそんなに知らないけど、それでも、あいつはここまで生きてきたんだ。俺だって少しは動けたくらいですからね。フリーランスのアイネが何も出来ないってのは、ちょっと考えられません」
「関係があるのかもな」
「あの男と？」
「そうでもなきゃ話にならんぜ。が、やり方は見えたかもしれねえ。案外、嬢ちゃんの昔の男だったりするかもな」
一は鼻で笑ってしまう。そんな甘酸っぱい話は、もうごめんだった。

「後で話を聞いてみますよ。あの、北さん、あいつが来るまで、どれくらい掛かりますかね」
「今すぐかもしれねえし、明日か、来年かもしれねえな」
「分からないって事ですよね？」
「そうとも言うが、そりゃあ奴さんの胸三寸だろうよ。なんなら、探し出してこっちから仕掛けてみるか？」
「逃げる方がマシです」
「蛇ってのはしつこいぜ。坊主も、ようく分かってるだろ」
ゴルゴンの事を言っているのだろう。それに、何よりも、誰よりも執念深いモノがこの身には宿っている。
「死ぬまで逃げるか、戦って殺すか。結局、ソレが相手だったら取れる手は限られてます。それにあいつは円卓だって言ってました。幾つか、借りが残ってますしね……でも、はあ。どうにかしなきゃ、皆が食われる。歌代だけでも逃がす訳にはいかない、ですかね」
「いや、俺らはバラけるよか固まった方が良い。奴さん、随分と鼻が利くらしいからな。それよりも、助けは呼べねえのか？」
「勤務外に、ですか？」
「そっちじゃなくても、他に色々いんだろうが」
どこまで知っているのやら。一は誤魔化す為に笑い、煙を吸い込む。苦い味が広がり、隅々まで染み込む。
「店には電話を掛けてみるつもりです。円卓が出たんなら、誰かは動いてくれるでしょう。けど、誰が来てくれたってさっきの男に勝てるかどうかは、やっぱり、難しいと思いますよ」
そも、一はジェーンたちを危険に晒す気はなかった。巻き込まれたのが、狙われたのが中内荘の連中なら、自分たちだけでどうにかするのが筋だと思えたのである。
「まあ、なるようになるわな。とりあえず、寝てくる。なんかあったら起こせよな」
北はだらだらとした所作で部屋に戻ろうとした。……英雄には見えないな、と、一は独りごちる。

「北さん」
「寝るって言ったところだろうが」
「ペルセウスは、今後どうするつもりなんでしょうか」
背を向けたまま立ち止まり、北は煙草を取り出した。
「さあて、困った奴を無償で助けちまうような奴じゃあないってのは確かだからな」
「お金なら払いますよ？」
「馬鹿野郎、命に値段は付けられねえよ。……まあ、半分神様で半分人間なんだ。詰めは甘いが身内にも甘い。そんでもってここは俺の家だ。一つ屋根の下で生活してる奴らを見殺しにするほど、俺は人間が出来ちゃいねえってのも確かだな」
「それさえ聞ければ充分ですよ」
「……英雄を扱き使うかね、てめえは。俺ぁ道具じゃねえぞ。物みてえに使ったり扱ったり扱き使ったりすんな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0680d/

24時間戦う人たち

2011年10月20日22時32分発行